

S O U L R E G A L
I A

秋水

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『やがて火は消え闇だけが残る』

遠い昔、そう予言された『時代』に生まれた。

『お前さんは、あの朽ち果てた門へ辿り着く。望もうが望むまいが……』

その予言のままに、新たな巡礼に挑んだ。

『王たちに玉座なし』

三度目の巡礼はその予言の意味を確かめるためのものだった。

そして――

『今一度、神の枷をはずせ』

火の無い時代の片隅で、四度目の巡礼の旅が始まる。

今作は『ダークソウル』シリーズと『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』シリーズのクロスオーバーとなります。

主人公は多少原作と異なる部分もあるものの、大枠として無印からダークソウル3まで踏破し、『火継ぎの終わり』ENDを迎えた不死人となりますが、ダンまち主人公であるベル君やヘステイア・ファミリアの皆さんにも時折は地獄巡りに付き合ってもらいます。

世界観もクロスさせる都合上、一部設定を変更し、全体的にダークソウル世界は原作より多少ソフトに、ダンまち世界は原作より多少ダークなものとなっています。

また『独自設定や拡大解釈を含む』ものとなっていますので、ご了承ください。

基本的に『不死人』冒険者』という力関係となっていますのでご注意ください。

それに加えて、もう一つのタイトル候補が、

『不死人最初の薪の王がハーレムを築くのは間違っているだろうか』

だったりしたので、その辺りが苦手な方、ダークソウルらしいダークでドライで硬派な主人公をお求めの方とはご縁が悪いと思われるます。

クロスオーバー作品ですので、冒険者側にもダークソウル流の洗礼を受けてもらう予定です。その際には、オラリオ有数の大派閥の皆さんがその筆頭になりますので、

『もう一つの主人公陣営であるロキ・ファミリアは何だかんだ言って最強だし、主人公とは和気藹々としていないとおかしい』

『そうは言ってもオラリオの神々は人間の味方だろうか？』

と、思う方にも不向きかと思われまので、心当たりがある方は閲覧の際にご注意ください。基本的に一人称で進む予定なので、視点によっては『アンチ・ヘイト』と取られる表現もあるかと思えます。また、『ダークソウル』シリーズとのクロスオーバーなので、特に不死人と敵対した場合には、理由は何であれ『ちよつとアレなこと』になります。

話の大きな流れとしてはダンまち原作に沿って行く予定なので、主人公勢も活躍します。

上記項目全て問題ない、設定変更上等、という方は楽しんでいただけたら幸いです。

目次

第一部：巡礼あるいは英雄譚の始まり	
プロローグ 消された／知られざる英	
雄譚	1
第一章 王の帰還	
第一節 悪夢再び	10
第二節 夜明けはもうすぐ	110
第三節 神の宴	215
第四節 怪物たちの宴	313
第五節 英雄譚の始まり	418
第二章 火無き時代の人と神	
第一節 美女■野獣	526
第二節 白髭と■の羊	644
第三節 ■の王様と■かぶり姫	748
第四節 狐と栗鼠■厄災の■	865
第五節 月の夜の■	976
第三章 英雄不在	
第一節 厄災の先触れ	109
第二節 傲慢なる者たち	121
第三節 過去からの侵略者	131
第四節 覚醒前夜	143
第五節 未完の英雄	149
エピローグ そして、因果は動き出す	166
第二部：目覚めの鐘が鳴り響く	

プロローグ 今はまだ、微睡の途中

1678

第一章 未完の英雄譚

第一節 神会（デナトウス）。神の手の

内、人の掌

第二節 遠征。異常事態（イレギユ

ラー）発生中

第三節 惨劇。神々の戯れ

第四節 激戦。結末はまだ遠く

2026

第五節 邂逅。死を超える者たち

2142

第二章 鐘の音が聞こえるか？

第一節 火の陰にあるモノ

第二節 今一度、誰も知らない伝説を

第三節 其れは闇よりも暗く

第四節 最初の死線

第五節 未知へと挑め

第三章 嵐だけが大樹を倒す

第一節 火の粉を集めよ

第二節 深淵を覗く時……

第三節 ……深淵もまた、汝を見つ

第四節 跳んで火にいる兎と妖精

3146

める

3273

30042875

2753263425012383

2259

第五節 無法者たちの宴

——

3415

第六節 巨人殺し（ジャイアントキリ

ング）

——

3553

第四章 太陽を撃ち落とす日

第一節 夕日に染まる帰り道

——

3717

第二節 いつか陽の当たる場所へ

3829

第一部：巡礼あるいは英雄譚の始まり

プロローグ 消された／知られざる英雄譚

1

「遠い昔。まだ神々すら存在しなかった古い時代……」

南東の果て。古き時代の遺跡が多く眠る森林の片隅。使い込まれた幕舎の中。家畜の乾燥糞を燃料とする篝火が照らす中に老婆の聲が響く。

「世界はまだ分かれず、霧に覆われていたという。あるのは、灰色の岩と大樹ばかり。そして、世界の王は朽ちぬ古竜だった……」

古びたローブに包まれた小柄な老婆は、よく知った物語を紡いでいく。

「だが、ある時その世界に聖火が熾った。熱と冷たさ。光と闇。生と死。そう言った差異はその火によってもたらされたのだ……」

聖火。いや、最初の火。とある時代の根幹をなす炎。

その火がもたらした差異の一つが人と神でもある。

そして――

「元より神は闇に生まれ、その火に惹かれた者達の一人ではかない」

老婆の向かいに胡坐をかきながら、呟く。

「いかにも。その聖火の中から『神の力』を見出だした幾匹かが後に神と呼ばれるようになったにすぎないのさ」

と、そう言つて老婆は小さく喉を鳴らした。

「ならば、その後の時代も知つていよう?」

「ああ。神どもは『王のソウル』——『神の力』アルカナムを用いて、古竜達を滅ぼし、自分たちの時代を始めたんだ」

それこそが『火の時代』。最初の火に支えられた神々の時代。

すでに終わった……いや、この手で終わらせたいはずの時代。

「だが、火はいずれ陰るものだ。いかな聖火とて例外ではない」

青白い炎を宿す篝火に目を細めながら、老婆は囁いた。

その通りだ。

いや……。おそらく、だが。

最初の火はあの時既に役割を終えていたのではないか。

世界を分かち、差異をもたらして、そしてごく当たり前に消えようとしただけなのでなかったのか。

だが――

「それを良しとしなかったのがグウイン。神々の王だった男だ」

神々は恐れた。自分たちの時代が終わる事を。

「ほほう。その名を知るか、お若いの」

この老婆の歳など知らないが……おそらくこの老婆は俺よりも年下だろう。

……もつとも、『生きていた』時間で見ればまた別の話かもしれないが。

「そう。神グウイン。この古き神達の王は、時代の流れに抗おうとしたのさ。消えかけた聖火に薪を焚べてね……」

火継ぎの儀。数多の巡礼者を飲み込んだ神々の策略。

「火継ぎの王。その偉業を成し遂げた英雄達はそう呼ばれたともいう」

あるいは薪の王。その名の通り、自らを最初の火に焚べた者たち。

英雄などではない。体のいいただの生贄だ。

「だが、いかな英雄と言えど時の砂までは止められない。消える事も出来ず、燃え上がる事も出来ず。いつしか聖火は世界を焦がしていった」

生も死も、光も闇も曖昧となった世界。それこそ見慣れた巡礼地の光景だった。

「『火は陰り、王達に玉座なし』。お若いの、この予言の意味を知っているかの？」

濁り酒を啜りながら、老婆が問いかけて来る。

「ああ。王達は玉座を捨てるのさ。最初の火……聖火が消えかけ、新たに火継ぎを求められたとしてもな」

それを真似て、濁り酒を喉に流し込む。

いまさら酒になど酔えもしないが……それでも、腹に広がる熱はどこか心地よい。

「貴公らは、『火の時代』を知っているのか？」

すでに忘れられた——いや、禁じられた時代の事を。

「だからこそ、訪ねてこられたのではないかの？」

それはそうだが。

「お若いのに、これを見るといい。もし、本当にお前さんが『王』ならばその意味も知っていたよう」

渡されたのは古びた布切れ。いや、軍旗の類だろうか。

刺繍されたその紋章は——

「これは……」

それをよく知っていた。

「生きていたのか……」

遠い昔。まさに神々と古竜が争っていたその時代に存在した英雄の紋章。

まさかここで目にする事になるとは。

「やはり、貴公らは……」

「そうさね。私たちの祖先は西の果てから流れ着いたのさ……」

再び濁り酒を啜りながら、老婆が言った。

「人としての矜持を胸に、英雄と共にあの地を去つてからね。私達の部族は英雄達と別れて久しいが、今も僅かばかりその力を残している」

傍らの杖を構え、よく知った詠唱を老婆は囁いた。

同時、青白い光の玉が幕舎を照らしだす。

「お若いの。いや、始まりと終わりの王よ」

居住まいを正し、老婆はそう言った。

「もし、本物であるなら、どうかここにその証を示していただきたい」

「どうすればいい？」

頷くと、老婆は背後から長い木箱を取り出し、差し出してくる。

受け取つてから、念のため許可を取つて蓋を開ける。

「これは……」

布に包まれ納められていたのは、捻じれた刀身を持つ赤褐色の剣。

「これこそよく知つたものだ。」

柄を握り、持ち上げる。と、刀身に炎熱が宿つた。

「おお……！ まさしくそれこそ火継ぎの王の証。ついに目覚められたか……」

それほど大げさなものでもない。

この程度の事は、巡礼者なら誰でもできるはずだ。

いや、この螺旋の剣が抜かれていること自体が極めて稀だが。

「これをどうで？」

「大いなる誓約が眠る巡礼地。その入り口がある大地。我らが祖先が神々によつて滅ぼされた祭祀場より持ち出されたもの」

それは、つまり――

「かつて我らが祖先達が至り、その多くを飲み込んだ墓所。今や世界の中心などと誉めそやされる因果の吹き溜まり」

やはり、全ての因果はあの地に収束するか。

「そこはオラリオ。大樹の洞に生じた聖火は、今や大地の洞の奥底にあるのです……」

2

「二年位前の事ですけれど」

ある日の夕食の時のこと。

「英雄に会ったことがあるんです」

と、ボクのたった一人の眷属は言った。

「英雄だつて？」

「はい。まあ、僕がそう呼んでるだけなんですけど」

ボクが聞き返すとはにかんだように、その子は付け加えた。

「ふんふん。詳しく話してくれるかい」

「二年前、僕の村にモンスターの大群が迫ってきました……」

モンスターがうろついているのはダンジョンだけではない。

古代にダンジョンから抜け出し、各地に散つていったモンスターはすっかり野生化して地上に住み着いている。

まあ、ダンジョンの中のモンスターよりはずっと弱いらしい。でも、『恩恵』を持たない普通の子供たちにとっては充分に危険な存在だった。

「まあ、コボルトの群れだったので、冒険者が一人か二人いてくれれば何とでもなつたでしょうけど、田舎ですから。神様も住んでませんし、『神の恩恵』^{フアルナ}なんて誰も受けていませんでしたから」

それは絶望的な状況に違いない。

「僕はもつと昔にゴブリンに襲われた事もあつたので、なおさら怖かつたですよ」

思い出しただけでもゾツとしたのか、少しだけ肩がこわばつた。

今のこの子なら、ゴ布林くらいなら何とでもなるだろうけど、それはそれ。

「それで？ 君が今ここにいるんだから、乗り切ったんだらう？」

「乗り切ったといいますか、今まさにコボルトたちが村の柵を乗り越えて来るって時に通りかかったんです」

決死の覚悟で鍬だの鋤だのを構えた村中の男達と、一体今までどこに潜んでいたのか一〇〇匹を超すコボルトの群れが激突する直前。

その『英雄』はふらりとやってきたらしい。

「大剣……クレイモアってやつですね。それを片手に、コボルトの群れに飛び込んでいって——」

右手に大剣を。左手に竜の紋章が刻まれた盾を携え、黒衣を翻して群れに突貫したその『英雄』はさらに雷と炎まで操り、瞬く間に……そして、たった一人でその全てを討伐したらしい。

「それって、冒険者だったんじゃないかい？」

というか、他に考えられないんだけど。一匹二匹くらいなら、『神の恩恵』^{フアルナ}を得ていない子供達でもなんとかなるけど、群れを一掃するのはかなり難しい。

それに、どうやらその『英雄』はヒューマンらしい。そうでありながら雷と炎——つまりは魔法を扱っている以上は、まず間違いなく冒険者のはずなんだけど……。

「いえ、それが違うみたいなんです。だって、その人、すごく神様嫌いなんですよ」
神の使いっ走りなんてごめん——って、口癖みたいに言っていましたよ。

「ううむ……。それはまた複雑な」

そんな言葉を聞いて、思わず唖っていた。

「まあ、いいや。それで、その人に憧れてるのかい？」

「少しだけ。まあ、その人からは俺になんて憧れるなんて言われてますけどね。俺なんかよりももつと凄い奴になってくれって」

「ふくん。意外と謙虚なんだねえ。それで、なんて子なんだい？」

「クオンさんって言うんです」

「クオンか。うん、もしオラリオに来たらボクのファミリアにスカウトしてみようかな」

もちろん、本当に『神の恩恵』^{ファミリア}を受けていないなら、だけど。

その神嫌いと言うのが気になるどころだけど……この子がいるなら、話を聞いてくれる可能性も少しくらいはあるはずだ。

「いいですね！ 神様は良い方ですし、クオンさんが入ってくれば百人力ですよ！」

「うんうん。ベル君が言うなら間違いないだろうね！」

でも、そうなるベル君と二人っきりの生活も終わりか。

それはそれでちよつとなあ、なんて。そんな事を思ったりもしたけど。

第一章 王の帰還

第一節 悪夢再び

1

おや、お前さん。見かけねえ顔だな。新入りかい？

入団希望だあ？ 馬鹿言っちゃいけねえぜ。ここにやお偉い神様なんざいやしないよ。

つたく。今日はなんて日だ。さつきも白髪頭の兎みてえな小僧が迷い込んできやがったしよ。それとも、この枯れた爺が神にでも見えるつてのかい？

ここはしがない情報屋さ。……おいおい、そんな顔をするもんじやない。お前さんも冒険者になりたいんだらう？ なら、情報は黄金より大切にしな。何しろ、お前さんの命を左右するかもしれない代物だからな。

何？ 必要な情報ならギルドに行けばいい？ おいおい、馬鹿言っちゃいけねえ。連中の持つてるようなカビの生えた情報だけじゃ長生きできねえぞ。ちよいと力のある「ファミリア」の連中には頭も上がらねえんだ。本当に必要な情報なんざ教えちやくれねえよ。

よしよし。素直なのは良いことだ。長生きするぜ、お前さん。

なら、未来のお得意さんに特別サービスだ。何か知りたいことはあるかい？

そうさ。ここは冒険者の楽園。力さえあれば金も名声も女も思うが儘さ。お前さんも、それを望んできたんだらう？

そうさな。有力どころなら、「ロキ・ファミリア」か「フレイヤ・ファミリア」だな。

何しろオラリオを二分する大派閥だ。連中に睨まれるような真似はしない方がいいぜ。

睨まれちゃならないと言えば、「ガネーシャ・ファミリア」もだな。大派閥だから？

それもあるが、連中はオラリオの治安維持を担ってる。いわば衛兵ってやつだな。まあ、後ろ暗い事さえしなけりや睨まれることはないだらうさ。

オレかい？ もちろん、真つ当さ。「ガネーシャ・ファミリア」に睨まれてなんざないね。情報屋は信用第一だぜ？

何？ 「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」のどつちが強いかって？

おいおい、それは禁断の質問ってやつだぜ。長生きしたいなら口にするもんじゃねえ。

まあ、冒険者に限らずオラリオの住人なら気になって当然だがな。だが、連中がぶつかり合うような事になりや、オラリオ中が戦場になつちまう。突かないでいい藪はそつとしくのが長生きするコツってやつだ。

なら、代わりにオラリオ最強を教えてください？

そりや、「フレイヤ・ファミリア」団長オツタルだろうさ。「おうじや猛者」オツタル。麗しの女神フレイヤ様に仕える忠僕にしてオラリオ唯一のLv. 7。「ロキ・ファミリア」にもやれ「ブルバ勇者」だの「ナイン・ヘル九魔姫」だの「エルガム重傑」だの……あとは、かの有名な「ス劍姫」だっているがね。だが、その中にだってLv. 7は一人もいやしないのさ。

なら、「フレイヤ・ファミリア」の方が強いんじゃないかって？ だからそういう物騒なことを口にするんじゃない。本気でオラリオが灰になっちまうぜ。

あくまでも冒険者の中で最強を一人挙げるなら、つてだけの話さ。これはそれ以外の何物でもねえ。

何？ その言い方だと冒険者『以外』に強い奴がいるように聞こえる？ チツ、間の抜けたツラしてる癖に勘だけはいいな……

おいおい、勘弁してくれよ。「ロキ・ファミリア」やら「フレイヤ・ファミリア」の連中の耳に入ったりしたら睨まれちまうじやねえか。

……ああ、分かった分かった。しつけえ奴だ。お前さんの言う通りさ。

オラリオ最強の『冒険者』なら、オツタルと言つときや間違いない。だが、『オラリオ最強』なら話は別さ。

いるんだよ。冒険者でもない癖にオツタルと互角に渡り合った男が一人な。おっと、

詳しく教えてくれたってのはなしだ。何しろそいつは神々も認める「イレギュラー正体不明」だからな。神ならぬオレにそれ以上を求められちや困る。教えられることといや、そいつがギルド公認のLv. 0だつてことくらいなものだ。だからこそ、そいつは冒険者全員にとつて『悪夢』なのさ。

そいつは今どこにいるつて？ 知らねえよ。四年前にオラリオを出てつちまった。理由？ そいつも知らねえな。ああ、別に追われた訳じゃねえ。そんなことできる奴はいねえだろうさ。噂くらいなら聞いちゃいるが、確かな情報じゃねえんだ。

噂で良い？ 馬鹿言つちやいけねえ。それじゃ井戸端会議と大差ねえじゃねえか。

つたく、仕方ねえな。いいか、あくまでも噂だぞ。それ以上の何物でもねえ。いいな。そいつはな、『後継者』を探しに行ったんだそうだ。奴のお眼鏡に叶うような奴はこのオラリオにはいなかったつてことだ。冒険者にとつちや正に『悪夢』つてやつさ。テメエらの矜持を根こそぎ否定されたんだからよ。流石に同情するぜ。

だから噂だつて言つてるだろ。少なくともまだオラリオには戻つてきちゃいない。奴が帰つてきたなら、すぐにだつて噂になるからな。

下手にちよつかい出すのはやめた方がいいぜ。劍の切つ先よりも死に近い危険な奴だ。

お前さんみたいなのひよつこじゃ瞬殺どころの騒ぎじゃねえ。

探している『後継者』はどんな奴だあ？ それこそ知らねえよ。だが、あの化物に選ばれたんだ。きつと階層主だって裸足で逃げだすような化物なんだろうさ。

つと、サービスはここまでだ。次はまともに客としてきな。店の特売日から意中の女神のスリーサイズまで、お望みとあれば何でも仕入れとくぜ。

なに、お前さんを入れてくれるファミリアを知りたい？ 仕方ねえな……
じゃあ、まずは予算の相談から始めようか。一体いくらで買う？

2

「思いの外早く帰ってきちまったな」

夕暮れに染まるオラリオの街を歩きながら小さく呟く。

旅立つてから三年程過ぎたか。旅立つ時はもつと長くかかるものと思っていたが、実際はそんなものだった。まあ、不死人の身体だからこそできる強行軍のおかげでもあるが。

もつとも、この街で過ごした時間は精々が一年程度。帰ってきたというほど長く過ごしている訳でもない。実際、こうして街中を歩いていたところで懐かしさも感じなければ、変わったという感慨も湧かなかった。何が変わったのかも分からないほどだ。

もつとも——

(場所によるか)

まず顔を出そうと思うくらいには馴染んだ場所もある。

幸いにしてその辺りは変わっていない。あとはお目当ての店がまだ潰れていなければいいのだが……。

「ちよつとアンタ、クオンよね?!」

そんな危惧を抱きながら進むと、店の看板を照らす魔石灯が光っているのが見えた。

安堵する暇もなく、すぐ下に立つ女性が声を上げる。

「こおの薄情者！ 手紙くらい寄せつてのー!」

端正な顔立ちに似合わない荒っぽい口調だった。

黒に近い紺色の長い髪を一本に結った美女が有無も言わせず飛びつき、腕で頭を締め上げて来る。多少は痛いですが、それよりも柔らかな胸の感触の方が気になる。

「悪かったって」

霞・アンジェリック。

四年前、このオラリオで『目覚めて』から——その直後、記憶の無いころから一年ほどの間を共に過ごした女だ。

種族はハーフェルフ——と、言ってもエルフとハーフェルフの間に生まれたそうで、ほぼエルフと言えるらしい。だが、オラリオ生まれのオラリオ育ちのせいかな、良くも悪

くもエルフらしくない。

エルフとは己の認めた者以外の肌の接触を嫌い、肌の露出の少ない服を好む。

と、とあるお姫様は言うのだが、彼女は出会った時から気楽に触れて来るし、身体の線が露わになるような服を着ている事が多い。まあ、これは仕事着——何しろこの酒場の看板娘にして唯一の踊子だ——とも言えるだろう。

他に目立つのは愛用の黒いソフト帽か。首から下の大胆で女性らしい装いから一転して渋く男らしい装いだが、不思議とよく似あっていた。男勝りのじゃじゃ馬な性格のおかげなのかもしれない。

「おや？ 戻ったのかい、クオン」

ともあれ、霞に店内に連れ込まれると、カウンターテーブルの向こう側でグラスを磨く髭面の男が少しばかり驚いたような声を上げた

「よう、マスター。まだ潰れてないようで安心したぞ」

この男が酒場——『酒夢猫亭』シヤムネコの店主だった。名をアルドラ・ドライス。種族はドワーフで、昔は冒険者だったそうだ。ただ、ドワーフの中では華奢な身体つきらしく、戦闘も苦手だったらしい。そのせいで冒険者稼業から足を洗い、こうして場末の酒場で店主をしているわけだ。

もつとも。華奢と言ってもそれはドワーフの中での話。傍から見れば充分に巖のよ

うな体をしてている訳だが。

「ハハハッ。酷いな、クオン。これでもそこそこ客はいるんだ。まあ、今では霞目当ての客も多いがね」

とはいえ、その顔つきは穏やかでいつそ好々爺といった雰囲気纏っている。もちろん、爺さんと呼ぶにはまだ早い歳のはずだが。

「このはねっ返りを口説くような骨のある奴はいるのか？」

「今のところ、目の前にいる奴だけだな。あとは本人の手で返り討ちだ」

「当然でしょ。エルフは貞淑なの。誰かさんと違ってね」

霞は腰に手を当て、胸を張る。

しかし……何というか、それについては反論しがたいと言うかできないと言うか……。

返事に困り、アルドラに酒を注文する。どうせ酒になど酔えないが、まったく楽しめない訳でもない。

「しかし、三年ぶりか……。収穫はあったのかい？」

発酵蒸留酒フエッラシデンデーが注がれたグラスを差し出しながら、アルドラが言った。

「そりゃな。だから戻ってきたんだ」

グラスに口をつけると、まるでエストを呷ったかのように胃の腑から熱が広がる。

その熱を鼻から吐き出すと、濃厚で華やかな香り——白葡萄酒の香りと、熟成樽の匂いが嗅覚を満たしていく。

例え酔えなくとも、酒を楽しむことはできる。この街で目覚めてから、この店主にそう教わったのだ。

「その割には一人のようだが？」

「ああ。どうやら先にこの街に来てにいるらしい。ま、しばらくは様子見だな」

肴として出されたドライフルーツを口に放り込みながら告げる。

「どうやら何かあつたらしく、少しばかり留守にしている間に一人でオラリオに向つてしまつたらしい。」

もつとも、別にオラリオへ行こうという約束をしていた訳ではない。興味はありそうだったが、それだけだ。

ある意味性急ともいえる心変わりの理由も分かつているが……さて、その『真偽』についてはどうだか。いや、裏があるのは明らかだ。

（つたく。あの爺さん、一体何を考えているんだか……）

まさか自分が死んだことにするなど。相変わらず連中は悪趣味極まりない。

「つてことは、これからはオラリオにいるの？」

勝手にドライフルーツを摘まみながら、霞が顔を輝かせる。

「そうだな。あまり気は進まないが、そうなる」

いや、霞達がいるのだから全く気が進まない訳でもないが。しかし、今も神どもが蠢くこの街は正直あまり心地のいい場所とは言い難い。

「それはそれは。また冒険者達には肩身の狭い日々が続くな」

アルドラが豪快に笑った。

「別にどうこうするつもりもないんだがな」

もはや冒険者にそこまで興味はない。ダンジョンを進むというなら好きにすればいい。そこで勝手に死ぬ分にも——まあ、馬鹿な連中だとは思うが。

『^{ファ}神の^ル恩恵^ナ』を持たないお前に、誰一人として頭が上がらないんだ。いるだけで気が気じゃないだろうさ」

「そんなもんかね」

まあ、それならそれで、平和な時代ということなのだろう。

何しろあの頃——火の時代においては、俺など凡庸な名もなき不死でしかなかった。俺よりも遥かに優れた不死人はそれこそいくらでもいたのだ。

しかし、不思議なもので、そういう連中から道半ばで斃れ——気づけば三度に渡り『玉座』にたどり着く羽目になった。まったく、解せない話だ。

「しかし、様子見というと、お前さんのお眼鏡にかなった『冒険者』と同じ【ファミリア】

にでも所属するつもりなのかい？」

「まさか。いや、繋がりは持つておくつもりだが、あまり派手に知られてもそれはそれで面倒ごとにはしかならない。しばらくは遠くから見守る程度だよ。本人もまだ駆け出しだしな。それに——」

「神の使いつ走りはもうごめんだ、か？」

「神の使いつ走りはもうごめんだ、ね？」

異口同音。アルドラと霞が口を揃えて言った。

「そういうことだ」

台詞を取られ、肩をすくめる。

それに。心情的な問題とは別に、もう一つ理由がある。

(今さら『神フアルナの恩恵』と言われてもな……)

体内を奔るソウルの流れに意識を向ける。

まだ至る所で凝り、『本来の力』の半分も出せればいい程度の有様だが——

『灰の方、もはや私ではこれ以上あなたのソウルを育てることはできません』

取り戻した記憶の中で、金髪の美女——ロスリックの火防女が囁く。

三度の巡礼の果てに『ソウルの業』は極まり、俺のソウルはその深奥に至つたらしい。

望むがままに覇者にも賢者にも聖者にもなれる。彼女はそう言っていた。

無論、今さらそのどれにもなるつもりはない。……いや、それ以前の話か。実際のところ、どこまで言っても平凡な放浪者から抜け出せていない。

間の抜けた話だが、得た力を普段から十全には使いこなせていないのだ。

一言で言えばむらつ気が酷い。

遠い昔、ロードランを彷徨っていた頃から恩師達に指摘されている。

その悪癖は今もこうして健在という訳だ。

だが、ソウルが深奥に至っているのは今も動かしがたい事実だ。火防女ですらこれ以上はソウルを強化できないと言った以上は——そして、事実としてあの『邪法』すらも通じなかった以上は『神の恩恵』^{フアルナ}を受け入れる余地などありえない。

首輪をつけられない以上、この街に住まう神も亡者どもが俺を手元に置こうとするはずもなかった。

(ま、あの爺さんくらいなものだな。そんな度量があるのは)

今も祭祀場に引きこもっているであろうあの物好きな老神を思い浮かべる。

いや、物好きではなく単に苦渋の決断か。連中にとつては正しく死活問題なのだから。

「なら、明日はどうするの?」

「しばらくはダンジョンだな。何にしても先立つものが必要だ」

ロードランやらドラングレイグやらロスリックやらとは違い、面倒だが生きていくには金が必要だった。いやはや、そんなことを気にするのは北の不死院送りにされる前まで遡らなければならない。

もつとも。あの頃と比べれば、遙かに稼ぎやすいわけだが。

「それに、中の様子も気になるしな。『深層』 辺りまで適当に潜ってみるさ」

二五階層辺りで適当に物資を回収すれば、簡単に何百万ヴァリスと手に入る。五〇階層を過ぎればさらに効率は跳ね上がるのだ。

しかも、徘徊する敵——モンスターは基本的に巡礼地のそれよりも遥かに弱いのだろうか。実にいい商売だった。

だからこそ、誰もが一獲千金を目指してあの穴倉に飛び込んでいくのだろう。

「気が向いたらまた七〇階層辺りまで行ってもいい。そうすればしばらく左団扇だ」

「そういう事を気軽に言うから、冒険者たちは肩身が狭くなるのさ」

やれやれ——と、アルドラが肩をすくめた。

「今現在、最大派閥の「ロキ・ファミリア」ですら、未だ五八階層より下には至っていない。つまり、六〇階層より下は神々ですら知らない『未知』のはずなんだ。それより下を気軽に語られちゃ冒険者たちは形無しだろうよ」

「何だ。まだそんなところで止まっているのか？」

やれやれ。そろそろ七〇階層辺りまで到達してもよさそうなものなのだが。

この分では、やはり他に『資格』を持つ者は現れていないらしい。

「ふうん。それじゃ、今夜は遠征前の壮行会ってわけね？」

「大げさだな。ちよつとした野掛ビクニックだけだよ」

霞の言葉に、軽く肩をすくめて返す。

「一人でピクニックとはさもない話だな」

と、アルドラが笑った。……いや、確かに。そう言われると反論しがたい。

「そんな顔しないの。今日はたっぷり慰めてあげるから」

アナタの館、ちゃんと掃除してるのよ？——と、唯一合鍵を渡してある霞が、艶やかな声で囁いてくる。

「クオン」

「クオン」

そこで、アルドラが真剣な声で言った。

「何だ？」

「今さらうるさい事は言わない。だが、認知だけはしっかりしてやってくれよ」

その言葉に、霞が声を上げて笑う。

「この甲斐性なしじゃ期待薄ね」

誰が甲斐性なしか。もし何かの間違いでそうなったら、責任を取るくらいの甲斐性は

流石にあるつもりだ。

……いや、いつまでこの『世界』にとどまれるかも定かではないのが不安の種だが。

「あのな……」

色々と言いたいことはあるが、言い返せるわけではない。

できる事と言えば、精々がグラスに残った酒を一気に啣るくらいなものだった。

……

開けて翌日。といっても、朝というよりはすでに昼に近いが。

「本当に掃除してくれてたんだな」

汗を流し、もう『一仕事』終えてから部屋に戻ってすぐ。

戻り際に淹れてきた珈琲を啜りながら呟いた。

ダイダロス通りの奥深くにある隠れ家——ちよつとした伝手で手に入れた割と立派

な造りの館なのだが——は、三年ほど放っておいたにも拘らず綺麗なものだった。

少なくとも、自室と定めた部屋やら厨房周りやら生活に必要な範囲は。空き部屋の方

は知らないが、使っていないから空き部屋なのだ。従って、荒れ果てても問題ない。

「当然でしょ？ 昨日も言ったけど、エルフは一途なの」

ベッドに座ったまま、霞が裸の胸を張る。見事な造形だが、相変わらずエルフらしい
憤みとは無縁らしい。

「起きたか？」

「ええ。おはよう」

「ああ。おはよう。珈琲飲むか？」

「アンタが淹れたのは苦すぎるからイヤよ」

それは仕方ない。不死人の朽ちかけた舌には、ほとんど味覚すら残っていないのだ。

おかげで味を濃くしないとさっぱり分からない。

「ちよつと待つて。ご飯作つてあげるから」

「味は濃い目で頼む」

「はいはい。二人分作るのももう慣れたわ」

そのせいで、同じメニユーでも作り分けないと悲惨な事になる。

とはいえ、これでも以前より——それこそロスリックにいた頃よりはるかに味覚も戻つてきているはずだ。……いや、それもこれも霞達のおかげなのだが。

(ここ三年ばかりまた例によつてほとんど飲まず食わずだったがな)

不死人には、基本的に食事や睡眠も不要だ。多くの不死人はそんな人間らしさすら『喪失』している。それは俺も例外ではなく、食事や酒も嗜好品以外の何物でもなかった。

いや、この街で過ごした一年で、ようやく『嗜好品』と言える程度まで回復したとい

うべきか。だが、それでも『必需品』にはもはや二度となりえない。

(まあ、便利だからいいけどな)

胸元を撫でながら独り言ちる。

呪われた不死の刻印『ダークリング』

俺のは胸の中央——ちょうど心臓の真上辺りに浮かんでいる。

まあ、慣れれば不死人も悪くない——と、昔誰かに言つて呆れられた覚えがあつた。

そんなことを言える相手だ。おそらく火防女の誰かだろう。

(シヤナロットだったか?)

それとも猫のシヤラゴアだっただろうか。今や……いや、もはや記憶は曖昧だ。

これも呪いのせい——と、不死人なら嘆くだろう。だが、

(まあ、人間なんざ忘れる生き物だしな)

別に不死人に限らず、人は忘れながら生きていくものだ。

ささやかな日常的一幕を一つも欠かさず覚えていられる人間はいない。例え大切な

記憶であつても時が過ぎれば色褪せていく。そういうものだ。

不死人だけが特殊なのではない。ただ強制的に忘れさせられる事もあるというだけ

だ。

いや——

(死んでも忘れるが、死ななくてもやっぱり忘れるよな)

不死人はその名の通り不死なのだ。殺されない限り死なない。生きていれば、記憶は積み重なり、細かな部分は忘れていく。それは人として当たり前だった。

全てが全て呪いによる『喪失』ではない。そこを間違えてはいけないのだ。

そして。呪いに屈しない限り、ある程度は取り戻す事もできる。

「おう。食えるようになったじゃないか」

こうして、食事を『楽しむ』事ができる程度には。

「うっさい。アンタに言われたくないわ。この壊滅的味覚音痴」

いや、味と言うか。焦げたり炭化しかかかってたり、逆に半生だったり生だったりしないという意味なのだ。

ちなみに朝食——いや、昼食か?——の献立は、パンにベーコンエッグにオニオンスープ。それとサラダである。まあ、昨日買った食材からすれば予想はできていたが。

しかし——

「カリカリを通り越してガリガリだったベーコンを齧っていた頃が懐かしいな」

あと、熱々を通り越して沸騰寸前のスープを飲まされた事もあったか。本当に不死人で良かった。あの時はしみじみとそう思ったものだ。

「そういうアンタは、確かに火加減だけは得意よね」

「あのな。俺はこれでも呪術師だぞ。火を畏れるのは当然だろうが」

火を畏れる——とは、我が師の教えだった。いや、別に料理の教えではないのだが。しかし、何であれ火加減は大切である。

「ところで、シヤクティたちのトコには顔出したの？」

師匠に聞かれれば小言を頂戴しそうな馬鹿話をしばらくしてから。

ふと霞が言った。

「いいや。今のところお前達しか知らないはずだ」

この街で知人と言えるのは、霞とアルドラの他に数人しかいない。

何しろ、人目を避けるのが不死人の嗜みだ。

いや、色々あつた結果、俺の名は方々に知れ渡っているらしいのだが——俺自身が顔と名前を一致できているのはごく僅かだった。

それなりに良好な関係を保っている相手に限定すれば、それこそ一〇人にも満たない。

……まあ、そんなのはいつもの事だが。

「相変わらず薄情な奴よね」

「誰より先にお前に会いに行つたんだよ」

「はいはい。嬉しい嬉しい」

まるつきりさつぱり信用していない様子で霞はサラダをつつく。

……いやまあ、それは全くもって自業自得だが。

「どうせしばらくはダンジョンにこもるんだ。それが終わってからでもいいだろうさ」

というか、シャクティに帰還を知られればまた面倒ごとが持ち込まれかねない。

あいつといいあいつの主神といい、俺を便利屋か何かと勘違いしているのだ。

「ま、アンタがそう言うならそれでいいけど」

一口珈琲を啜ってから、霞が言った。

「それで、実際どこまで潜るつもり？」

「どうせ金策だしな。五一階層辺りで水汲みとトカゲ狩りってところか」

それが一番楽だ。何しろ一つの区画にとどまっていればいいだけなのだから。

「そこから先は気分次第かな」

あるいは状況次第と言うべきだろうか。

……

「ただいま」

「ああ、おかえり」

クオンを見送つてから、『酒夢猫亭』^{シヤムネコ}に戻る。

まだ昼下がりだというのに、マスターはすでに着の仕込みを始めていた。

「クオンはもうダンジョンか？」

「ええ。ひとまず五一階層だつてさ」

「五一階層か……」

ふうむと唸つてから、マスターは言った。

「時に霞。今、彼らが遠征中だと伝えたのか？」

「あ」

四年前にちよつと色々あつて、割と本気で殺し合いになりかけた【ファミリア】の1つが今ちよつと遠征中らしい。目的地からしても遭遇する可能性は極めて高いはずだ。

「あつちやゝ。すっかり忘れてたわ」

愛用のソフト帽子をずり下げ、適当に顔を隠そうとする。

何かを誤魔化したい時の癖だ。まあ、意味がある訳もないけど。

「まあ、大丈夫じゃない？ ダンジョンの中なんだし……」

もし最悪の事態が起こっても、ダンジョンの中なら真偽を確かめる術もないはず。

「大体、遠征ならあのお姫様もついて行つてるんだから、途中で止めるでしょ」

「まあ、そうだといいがな」

それにあの時は何だかんだと半分くらいは誤解だった訳だし。

ダンジョンの中なら主神が一緒つて事もないはず。なら、まあどうにかなる。と、自

分に言い聞かせる。

「まあ、どうせまたすぐに噂になっちゃうでしょうけどね」

「そりゃ違うない」

アイツがいつまでもじっとしている訳がない。あの女たらしは、その実この街の誰よりも——いや、劍の切っ先よりも死に近い危険な男だ。

死にたかりが屯するこの街では、まさに火と油。

それなら、今何もなくても、どうせそのうち火の気が上がるに決まっていた。

3

ダンジョン五一階層。『深層』領域において、さらに奥まった領域。

私達「ロキ・ファミリア」の到達階層が五八階層だから、今のオラリオが到達可能な範囲の中では、ほぼ最下層と言っているのがこの場所だった。

「何かさあ、今回あんまりモンスターと出くわさないよね〜」

「これから未到達階層に挑むのよ？ 戦わないで済むなら願ったり叶ったりだわ」

テイオナの少し不満そうな言葉を、テイオネがバツサリと切り捨てた。

早朝——もちろん、地上の時間で——に五〇階層……『深層』における安全階層を出

発してからここまで、モンスターと遭遇したのはたったの数回だった。

テイオネの言う通り、これから五九階層進出を目指す事を考えれば、消耗は少ないほどいい。なら、今の状況は幸運と言っていていいはずだ。

「でもさ、階層主バロールがいなかったのってちよつと気にならない？」

四九階層に出現する階層主バロール。遠征前の予定では、討伐して進む予定だった。

でも、実際にはすでに何者かによって討伐されていた。おかげで素通りできたのも幸運と言えない事はない。ただ……。

「私達以外の『ファミリア』で、ここまで来れるのは『フレイヤ・ファミリア』くらいだ
と思うけど……」

オラリオ唯一のLv. 7が所属する大派閥だ。彼らであれば『深層』攻略も問題ない。

「でも、『フレイヤ・ファミリア』が遠征に行ったって話は聞かないよ？」

「わざわざ私達と被せて来るわけ……ないとも言い難いわね、あの女神様なら」

テイオナの言葉に、テイオネがまるで頭痛でも感じたように額を指先で掻いた。

「あく……でも、『猛者おうじゃ』が単独でバロールを仕留めたって話は有名だし、案外また相手に来てたのかもね」

一人だけなら私達に気づかれずに素通りだってできるだろうし——と、テイオネが肩をすくめた。

「……………」

あながちあり得ないとも言い難い。オラリオ最強の『冒険者』の名を欲しいままにする武勇にはそれだけの説得力がある。

「まあ、ちよつと癪だけど……この際いいじゃない？　今大切なのは『遠征』を成功させることよ」

「そりやそうだけどさく」

ティオナはまだ不満そうに唸る。

「ほら、むくれてる場合じゃないわよ。そろそろ『泉』が近いんだから」

「うん。気を付けないとさすがに危ないね」

私達が行っている五一階層探索は、『遠征』とは別の理由によるものだ。

『カドモスの泉』かあ。相変わらず『ディアンケヒト・ファミリア』は面倒な冒険者依頼をしてくるよねえ……」

五一階層に存在する『カドモスの泉』から泉水を回収する。

そんな冒険者依頼を達成するためである。

もちろん、私達の本命は五九階層進出なので、あまりこの依頼で消耗はしたくない。

だから今はこうして少数精鋭で、しかも二つの班に分かれて行動中だった。

「仕方ないでしょ。派閥間の付き合いもあるって団長も言ってたじゃない」

団長であるフィンは、二班を率いて別の『泉』に向っているはずだ。

一班は私達——つまり、私とアイズティオナ、ティオネ、レフイーヤの四人。

二班はフィンにガレス、ベートさんにラウルさんの四人だった。

「そりやそうだけどさ〜」

やっぱりティオナな不満そうだった。

それも仕方ない。実際に手間のかかる依頼なのだ。泉水を集めるにしても、湧き出る量が少ないため、必要量が溜まるには時間がかかる。それに——

「強竜カドモスですか……。どんなモンスターなんですか？」

五一階層攻略には初参加のレフイーヤがおずおずと訪ねて来る。

「すごく強いよ」

「うん。力だけならウダイオスより上かなー」

「か、階層主よりもですか?！」

階層主。ギルドでの正式名称は『迷宮モンスターレックスの弧王』

その名の通り、モンスターたちの王。迷宮攻略における最難関であり、通常は複数の冒険者達が力を終結して討伐する存在だ。

そして、ウダイオスが出現するのは『深層』である三七階層。ギルドによる潜在能力（ポテンシャル）判定ではLv. 6相当と定められている。

「や、やり過ぎすとかはできないんですか？」

L v. 5の私達でも単独で相手にするのは危険な相手だ。L v. 3のレフィーヤが息をのむのも仕方がない。

「無理ね。そんなこと考えていると死ぬわよ」

「あたし、前に吹っ飛ばされて体中ぐちゃぐちゃになっちゃったしねー」

ぼつさり切り捨てたティオネと、けらけらと笑いながら話すティオナの様子に、レフィーヤの顔から血の気が奪われていく。

「まずは強竜^{カドモス}を仕留めて安全確保。泉水の回収はその後よ」

「わ、分かりました……」

ティオネの宣言に、レフィーヤが恐る恐ると言った様子で頷く。

「それで、ティオネ。作戦は？」

先ほどから指示を出している通り、私達一班の指揮官はティオネだった。

「やっぱり定石通りね。私達が総がかりで抑え込む。レフィーヤはそこにデカイ魔法^{やっ}を撃ち込んでちょうだい。それで、怯んだところを私達が一気に畳みかけるわ。いいわね？」

「は、はいー！」

杖を握り締め、レフィーヤが真剣な顔で頷く。

「さて。それじゃそろそろ行きましようか——」

その様子に満足そうに頷いてからティオネが言いかけた時、

『ガアアアアアアアアアッ!』

その先——まさに『カドモスの泉』があるはずの区画から、強竜の咆哮が響き渡った。

「うえ?! 気づくの早くない?!」

「違うわよ馬鹿ティオナ! これは——」

誰かが強竜と戦っているのだ。地響きにも似た振動が断続的にダンジョン内の空気を揺らし続けている。

それに混ざって、苦悶の声も聞こえる。もちろん、強竜のものだ。

「あ、ちよつとアイズ! 待ちなさい!」

ティオネの制止を振り切って、『泉』のある区画に飛び込む。

「あの人は——!」

そこにいたのは、黒衣を纏った一人の男性。

右手には大剣——クレイモア。左手には竜の紋章が施されたブルーシールド。

そして、右手の大剣は黄金に輝く雷を纏っていた。

『ガアアアアアアア——!』

満身創痍の状態の強竜は威嚇とも悲鳴ともとれる『咆哮^{ハウル}』を放つ。

しかし。その直撃を受けたはずの黒衣の男は、それでも一切動じなかった。

「むしろ、劍を構えたまま無造作に——無造作に見える動きで強竜に近づいていく。強竜は巨大な顎を限界まで開き、その男を食いちぎろうとする。しかし、遅かった。黒衣の男はほんの僅か横に逸れ顎を交わし——ついでに、大劍を横薙ぎに振るった。雷を纏うその刃は、強竜の顎を軽々と上下に分断していく。」

『——アアアア、ア、ア、ア……』

胴体の半ばまで劍が達する頃には、強竜はすでに息絶えていた。

そのまま無造作に刀身を振じり、その男は強竜の魔石を抉り出す。

魔石を失った強竜の巨体は、たちまちのうちに灰の山と化した。

「ほう。皮膜か……。儲けたな」

目深く被ったフードの向こう側で、その男が小さく笑った。

それと同時に、抉り出された巨大な魔石と、『カドモスの皮膜』が青白い燐光となつて消えていく。

間違いない。彼は——

「クオン……！」

テイオネが呻くように叫んだ。

聞こえなかったはずはない。が、彼は気にもせず『泉』に向つていく。

そこには、何とワイン用の酒樽が一つ置かれていた。

「よしよし。こつちも溜まったな」

樽を覗き込み、満足そうに頷くと再びそれが燐光となつて消える。

と、それと入れ替わるように新しい酒樽がそこ出現した。

それを再び泉水がにじみ出す壁の亀裂に添えると、彼は近くの木の根元に腰を下ろした。

「あんた、戻つてたの？」

武器を構えたまま、ティオネが彼を睨みつける。

そこでようやくやく、彼はフード越しにこちらを見た。

「誰だ？」

返答は、ごくあっさりしたものだつた。

実に気楽な様子で彼は首を傾げて見せる。

「【ロキ・ファミリア】のティオネ・ヒリユテよ。忘れたとは言わせないわ」

いつそ殺気にも似た気配を放つティオネだったが、やはり彼の反応は鈍いものだつた。

「【ロキ・ファミリア】……」

まるで未知の単語でも眩くようにしてからしばらくして、彼はポンと手を打った。

「ああ、確かあの糸目の小僧の飼犬だな。俺に何か用なのか？」

「あんた、こんなところで何してるわけ？」

「見て分からないか？ ちよつとした小遣い稼ぎだ。何しろ水汲んでトカゲ捌くだけでしばらく左団扇だからな」

まったく楽な商売だよな、冒険者つてのは——と、彼はあつけらかんと笑った。

「そつちこそ何の用だ。まさか四年も前の事を未だに根に持つてるのか？」

「お生憎様。そこまで暇じゃないわ。私達もその泉に用があるのよ」

「そうか。なら他をあたれ。ここは俺が今使用中だ。天下の「ロキ・ファミア」がか弱い一般市民の食い扶持を取るな」

しっしっ、と。それこそまるで野良犬でも追い払うように彼は手を振った。

「誰がか弱いですつて？」

「そう睨むなよ。お強いL.V. 5様に睨まれちゃ生きた心地がしないんだ」
全く動じずに——むしろからかうように言い返してくる。

「あ、あの。アイズさん……」

はらはらしながら見守っていると、レフィーヤが小声で問いかけてきた。

「あのヒューマン、何者なんですか？」

「クオン。【イレギュラー正体不明】クオン。知らない？」

結構有名だったはずなんだけど。

「【イレギュラー正体不明】……………?」

「四年前に【おうじや猛者】と闘技場で『正式』に立ち会った有名な『剣闘士』なんだよ。あ、でもその頃、レフィーヤはオラリオに來たばっかりだったっけ?」

剣闘士というのは、闘技場で賭け試合——『賭博剣闘』に挑む『冒険者』達のことだ。死人が出る事も少なくないため、ギルドは禁止している。……のだけれど。

例えば繁華街では今も大々的に行われていると聞いている。繁華街以外でも非公式に行われているとも。

「で、でも剣闘士って……」

レフィーヤが怪訝そうな顔をする。それも当然だった。

そもそも『剣闘士』とは冒険者崩れの者達……つまり、ダンジョン攻略から落ちぶれた者たちだというのが、オラリオにおける認識だ。

名声や富が欲しいなら、ダンジョンに挑む方が確実に見返りも大きい。それを分かっているながら、ダンジョンに向わないのは冒険者として落ちぶれているからだ——と、大體そんな理由らしい。

「やっぱりピンキリらしいよ。アタシはそういうの好きじゃないから詳しくないけどね」

と、テイオナがいつになく醒めた声で呟いた。

必ずしも出洩らしばかりとは限らない。けど、あんまりそちらが盛んになっても治安悪化に繋がりがかねないし、万が一ダンジョン攻略が疎かになれば、オラリオの基幹産業である魔石製品製造にも影響を及ぼす事になる。何より『来歴』に問題があるせいで、ギルドが意図的に貶めている節がある——と、ロキは言っていた。

「まあ、元々は決闘代行者の流れを汲んでいるそうだし、昔はそれなりのものだったのかもね。今はどうだか知らないけど」

同じく醒めた声で、クオンの傍から戻ってきたテイオネが付け足した。

「その決闘代行者って何ですか？」

「もうずいぶん前に廃れた職業よ。【ロキ・ファミリア】が結成された頃にはまだ残っていたらしいけどね。その名の通り、『一騎打ち』形式の『戦争遊戯』^{ウォーゲーム}で、代役を務める冒険者がそう呼ばれていたらしいわ」

不吉でも払うような仕草をしてから、テイオネが続けた。

ギルドと神会公認の元で、事前にルールを定めて行われる派閥間の決闘を『戦争遊戯』^{ウォーゲーム}と呼ぶ。具体的な勝負形式はいくつかあるけど、そのうちの一つに『一騎打ち』がある。今では自派閥の最大戦力をあてがうのが通例だけど、かつてはそれを代行する『決闘代行者』^{デュエリスト}という存在がいたらしい。

『戦争遊戯』が「ファミリア」の命運をかけた戦いである以上、それを任される決闘代理人は極めて高い実力を求められたのは言うまでもないでしょ？ でも、そっちが盛んになると今度はファミリア同士、ひいては神同士の戦争であるはずの『戦争遊戯』が単に決闘代理人同士の争いになったらしいわ。要するに決闘代理人同士が決着をつけるために、手頃な「ファミリア」同士を『戦争遊戯』に駆り立てたってわけ」

神々の代理戦争——そういう名目はまさに名目となり下がったという事だ。

それに、

「非公式の『一騎打ち』が横行したってフィンは言ってたよ」

本来『戦争遊戯』は神会で事前に承認を受けなければならぬ。

有体に言って手間のかかる手段だった。だからこそ、その結果も重視される訳だけど

……

「言い方は悪いけど、『一騎打ち』は勝負形式の中で一番手軽だから。神会の承認なしでもやろうと思えばどこでもすぐに行える」

というか、喧嘩レベルなら毎日どこかで起こっている。

多分、今夜も街のどこかで冒険者同士が殴り合っているはずだ。

「そうそう。で、さすがにこれはマズいってんで、『戦争遊戯』において決闘代理人の雇用は禁止となったの。まあ、実際には『助っ人制度』って特別ルールに名前を変えて細々

と残っているらしいけどね」

決闘代理人デュエリストの全盛期に比べれば、本当にささやかなものみたいね——と、ティオネが肩をすくめた。

「それで、めでたく仕事にあぶれた決闘代理人達が始めたのが、純粋な賭博である『剣闘』つてわけ。まあ、本当に腕の立つ連中なら素直に冒険者業に復帰したでしょうから、残った『剣闘士』にはやっぱり出廻らしが多かっただろうけど」

ロキが『来歴』に問題があるというのはつまりそういう事だった。

そして、そんな理由もあって本来であれば日の目を見る職種ではない。

そんな『剣闘士』がよりによって取り締まるはずのギルドの——さらには神会公認の元で試合をするなんて、まさに前代未聞の出来事だった。

「そう言えばそんな事もあったような……。あれ？ でもそれって結局実現しなかったんじゃない……。あんまり話題にならなかったですよね？」

ティオナの言葉で、ようやく思い出したのはレフイーヤが領いた。

「ううん。実現してるよ。ただ単に勝敗が有耶無耶になっただけ」

「そうそう。ちよつと派手な乱入があつてね」

そして、その直後に彼がオラリオを去った事もあつて、あまり話題にならなかった。

……でも、実際に話題にならなかったのは、その『結果』が『期待外れ』だったから

だ——と、ロキは言っていた。

「で、でも。相手はあの【猛者】おうじやですよ？ 中断したって勝敗は明らかだったんじゃ

……」

何しろ【猛者】おうじやはオラリオ唯一のLv. 7だ。勝敗は明らか——と、レフィーヤが思うのも当然だった。でも、

「どうかな。あのまま続けていたら、ひよつとしたら……」

「——あああああああああああああああああつっ！」

いきなりだった。

臓腑の底から引きずり出されたような悲鳴がダンジョンに響き渡る。

嫌でも事の重大さを理解させて来る凄惨な悲鳴。入り組んだ迷宮の中で反響し、あらゆる方向から何度も鼓膜を打ち据える。

「今の声は……!」

「ラウル!」

聞き覚えのある声に、レフィーヤとティオナが顔を見合わせた。

「まさか団長に何か……?!」

尋常ならざる悲鳴に、ティオネもまた悲鳴めいた声を上げた。

何であれ、二班が異常事態に巻き込まれたのは間違いない。

「行くわよ、あんた達！」

言いながら、ティオネは再びルームの奥——泉水の傍……というか、クオンの傍に突進していった、

「待て。何で俺の腕まで掴む？」

「うっさいわね！ 団長が危ないのよ！」

彼の腕をがっちり掴み、引つ張り始める。

「俺が知るかそんなこと!？」

しかし。ティオネはすでにクオンを引きずって悲鳴の元へ向かって走り出していた。私達も慌ててその後を追う。

「あ、あの！ あの人連れてく意味があるんでしょうか?！」

「まあ、腕は立つよねー。カドモスを一人で倒せるんだし」

あつさりと頷くティオナに、レフィーヤが言葉を詰まらせた。

「と、言いますか！ 何であの人、ティオネさんとあんなに険悪だったんですか?！」

「四年前に、ちよつと色々あつて危うく本気で殺し合いになりかけたんだよね、私達」

「はああああつ?! ど、どういう事なんですか!？」

「ロキとかベートがちよつかい出したせいでさ。それに何か奇妙な誤解も重なつてね。危うく全面戦争になるとこだったんだよねー」

幸い首脳陣が一戦交えるだけで済んだわけだけど。

ただ、あの一戦がオツタルとの立ち合いに繋がる大きな要因ではあったはずだ。

「まあ、その代わりフィン達がいぶ苦戦してたからね。テイオネが根に持つてるのはそういうわけだよ」

……実は私自身も原因の一つなのでその話はかなり気まずい。

「だ、団長が?! それってあのヒューマンはL.V. 6って事なんですか?! 剣闘士なの
に?!!」

「ううん。あれ、レフィーヤってばホントに知らない? 【イレギュラー正体不明】のこと」

「あの人は『神フアルナの恩恵』を受けていない。ギルド公認のL.V. 0だよ」

ポツリと呟くと、レフィーヤの絶叫がダンジョンに響き渡った。

……

「まさかここにきて新種とはね……」

無数の芋虫に追われながら、思わず呻いていた。

「やれやれだわい」

深手を負ったラウルを担ぎながら、傍らのガレスもまた肩をすくめる。

「面倒な相手だのう」

「そうだね……」

『カドモスの泉』が存在する区画にたどり着き、強竜を討伐する。そこまでは何の問題もなかった。その後、僕らだけでもクエスト達成に必要なだけの泉水を回収できたのはむしろ幸運と言ってもいい。だが、その帰り道に問題が発生した。

それが、今僕らを追い回してくる新種——芋虫型のモンスターの襲撃だった。

「これもまたダンジョンの『未知』という事かな」

「そりゃいいが、どうすんだよ!? 逃げてるだけじゃ埒があかねえぞ!」

「ンー…。仕留めるのは可能だろうけど。問題は武器かな」

あの新種の主な攻撃手段は腐食液だ。それも、超強力な。

吐き出してくるだけならまだ対処は可能だが……。

「まさか体液そのものまでがそうだとはのう」

「まったくだ」

厄介なのは体液そのものが腐食液だという事だ。

簡単に言えば、斬りつけた時点で武器もまた溶ける。

実際、僕の槍もガレスの斧もそれで失われた。未到達階層攻略を見据える上ではかなり手痛い消耗だった。かと言って――

「素手じゃもつとマズいからね」

ベートの足甲は健在だが、攻撃を仕掛けようものなら結果は同じだ。むしろ最悪腐食

液が身体にまで及びかねない。そうなればラウルの二の舞だ。

「つとー！ これはマズい——！」

そうこうしていると、近くの横道からも新種の大群が姿を現した。

すでに腐食液を射出する態勢に入っている。

一撃加えて斜線を逸らさなければ。と、残った最後のナイフを構えるが——

「やあああああつ！」

それよりも早く、褐色肌の女戦士が斬りかかる。

今この階層にいるであろうアマゾネス。しかもあの独特の形状の武器は——

「止せ、ティオナ！」

制止の声を上げるが、すでに遅かった。

ティオナはすでに接敵し、愛用の大双刃ウルガを振るって新種を両断した。

「団長！……無事ですか!？」

続けてティオナが駆け寄ってくる。そして——

「えつ……?？」

大双刃ウルガを見て、姉妹揃って絶句した。

「大双刃ウルガが溶けたあ!？」

ティオナが悲鳴を上げた。

まあ、それはそうだろう。専用武器オーダーメイドは基本的に高価である。

(しかも超硬金属製だしね)

一億ヴァリス以上は固いはずだ。

いや、それはそうとして――

(超硬金属アマダンタイトの塊ともいえる大双刃ウルガでもあの様か……)

これはいよいよ面倒なことになってきた。

「何で教えてくれなかったのー!？」

「フィンが止めただろうが、この馬鹿女ー!」

「つて、まだいるしー!？」

新たに追いついてきた新種を見て、ティオナが悲鳴を上げる。

「マズい! 全員撤――!」

撤退の号令を出すより早く。収束する劫火に飲まれ、その新種は焼滅した。

「何……?」

レフィーヤの魔法ではないのは明らかだった。

振り返るより早く、その術者は僕らの傍らを通り過ぎていく。

「ほう。もうここまで上がってきたか……」

新種の魔石を拾い上げながら、小さく呟いたのは軽鎧の上に黒いサーコート羽織を羽織つ

た男だった。それは、僕ら冒険者にとって共通の『悪夢』。

「クオン!？」

ギルド公認のLv. 0。そうでありながら、僕ら冒険者をあざ笑うように平然と『深層』を突き進み、Lv. 7と互角以上の戦いを演じた——さらに、あの『古王』すらも退けた正真正銘の「イレギュラー正体不明」。

「フン。一応分別つてのはついているのか？」

右手に火を宿したまま、彼はさらに集まっていた新種を睥睨した。

そういえば、新種の動きは止まっている。まるで何かを恐れているかのように。

いや、それは錯覚だったのだろう。一匹が悲鳴じみた鳴き声を上げると、残りも一斉にこちららに向って突進してきた。

「チツ、所詮蟲は蟲か」

舌打ちをすると同時、火を宿したクオンの右手に青白い輝きが宿る。

「——」

聞き取れない言語を用いた超短文詠唱。そして、青白い極光がその右手から放たれた。

「まあ、こんなところか」

魔石も残さず消し飛んだ新種を——いや、新種がいたはずの通路を見やって、彼は軽

く肩をすくめる。

「相変わらずでたらめだね」

本当にこれがL.V. 0の戦闘能力か。いや、ヒューマンでありながら『恩恵』もなく『魔法』を使える時点で規格外れだ。

「ひとまず礼を言っておこうか」

嘆息してから、声をかける。

「そうして欲しいね。お前の手下のせいで酒樽を一つ無駄にしちまった」

「酒樽？ ひよつとして君も『カドモスの泉』に用があつたのかい？」

「でなけりや、こんなところをうろうろしてる訳がないだろう？」

「それはそうだろうけど……。急にどうしたんだい？」

いや、そもそもオラリオに戻ってきているとは。

「別に深い理由はない。ちよつとした小遣い稼ぎだよ。水汲んでトカゲを捌くだけで何百万ヴァリスにもなるんだしな。他じや考えられないほど楽な商売だよ」

カドモスをトカゲ扱い。しかも楽な商売か。もはやため息も出ない。

「それで、どうしてここに？ まさか助けに来てくれたつてわけでもないだろう？」

いくつもの誤解や行き違いが影響したとはいえ、それこそ一時は本気で殺し合う寸前まで行った相手だ。

「その胸のある方の褐色小娘に強引に連れてこられたんだよ。まったく、お強いし、6の冒険者様がか弱い一般人に助けを求めて来るなよ」

「シー……。一体どこから突っ込もうかな」

本当にか弱い一般人だったら『中層』どころか『上層』……それこそどころか水棲のモンスターが住み着いて問題になっているオラリオ内の地下水路でも危ない。

いや、そんな当たり前前の指摘よりも、やはりまずは感謝すべきなのか。どうやら本当にテイオネが無理やり連れてきたようだし。

「それより見ない顔ばかりだが、リヴェリアはどうした？」

「いや、見ない顔って……。君と面識がないのはレフィーヤくらいのはずだけど」

この場において、あの時のいざこざには巻き込まれていないのは、彼がオラリオを去ってから入団したレフィーヤだけだ。

「そうだったか？」

どうでも良さそうにクオンは言った。

さて。ベートの殺気が頂点に達しそうなので、そろそろ話題を変えなくては。

「それよりも、リヴェリアに何か用事でもあるのかい？」

「いや、用事と言うか……。あの芋虫どもを相手にするなら、あのお姫様に焼き払ってもらうか氷漬けにしてもらうのが一番楽だぞ。でないと、武器が傷んで仕方ない」

「傷むと言うか手持ちの武器はほぼ壊滅したけどね……」

手にしたナイフに視線を落としながら肩をすくめた。

「それはご愁傷様。じゃあ、頑張つてな」

あつさりと言つて、クオンは立ち去ろうとする。が、そこで――

「お？ 何だ、誰かと思えばラウルじゃないか」

そこでガレスが担いだままのラウルを見て声を上げた。

「しばらく見ないうちに、ずいぶんと男前になつちまったな。おかげで分からなかった。

まあ、元気そうで何よりだ」

「い、いや。死にかけてるっすけど……」

腐食液の直撃を浴びたラウルは、パツと見るだけでは人相すら怪しいほどだ。

確かにクオンが気づかなかつたとしても無理はない。

「大丈夫だ。人間つてのは意外としぶとい。余計なものが混ざ神つてるお前達ならなおさ

らな」

「うう……」

安心していいのか悪いのか。

それを判断しかねたのか、それとも単に傷が痛んだのか。ラウルは呻き声を上げた。

――

そのラウルに火を宿した右手をかざし、やはり聞き取れない言語を用いて、クオンは『物語』を口ずさんだ。

聞き取れずとも、それと分かる。これは実に奇妙な感覚だった。

その『物語』に呼応して黄金の魔法円が浮かび、ラウルの身体が元の形に戻っていく。「ま、こんなところか」

『物語』を紡ぎ終えると、クオンは満足そうに頷く。

こんなところも何も、身体の傷はほぼ完全に癒えていた。それこそ、溶けた防具やら何やらがそのままなのでよく分かる。

「おお!? た、助かったっスー」

身体の調子を確かめながら、ラウルが歓声を上げた。

僕ら「ロキ・フアミリア」とは色々と因縁があり、流石に良好な関係とは言い難い相手だが……何事にも例外というのはあり得る。

それがリヴェリアとラウルだった。

特にラウルとは全面戦争が回避されてから、クオンがオラリオを去るまでの間——實際のところ、数ヶ月というごく短い期間だが、ちよくちよくと顔を合わせていた。

一応、諜報という名目を与えて黙認していた——いや、実際に情報を求めていた訳だが……が、まあ、実際のところ酒場で酒を飲んだり、クオンの古巣とも言える繁華街で

豪遊したり、益体もない話で盛り上がったたりしてただけで、有益な情報は何もなかった。

分かった事と言えば――

「うう……。クオンさん、助かったっス」

「気にするなつて。ままならない凡人同士仲良くやろうじゃないか」

あつけらかんとクオンは笑った。

そう。分かった事と言えばそれだ。

ままならない凡人。クオンは自身をそう評価している。

一方でラウルだが……極々稀に『やんちゃ』もするが、基本的に真面目な性格だ。それが仇となるのか、ファミリア内では貧乏くじを引かされてしまう事が多い青年である。

欠点と言えば、何より自分に自信がない事か。そのせいか、神が与えたのは【超凡夫^{ハイ・ノービス}】という二つ名だった。

（信頼してるんだけどね）

さすがに『深層』ではサポーターの役回りだが、『中層』辺りまでは充分に指揮官を任せられる。ステイタスもLv. 4と高く、近々『下層』でも指揮官を任せるつもりだ。

と、僕らの内部事情はともかくとして。

同じ凡人同士。少なくともそう思っている者同士。

この二人はそんな縁で繋がっているらしい。

「チツ……………」

背後から殺気のコもった舌打ちが聞こえる。

うんうん。舌打ちだけで堪えてくれて僕は嬉しいよ、ベート。

「しっかし……………」

ラウルが自分で立ち上がる頃。不意にクオンが唸った。

その右手に武骨ながらも見事な拵えの斧槍を『出現』させながら。

「いつまでもここに居るわけには行かないらしいな」

「そのようだね……………」

迫ってくるのは見慣れたモンスターの群れ。

ブラックライノス。前傾二足歩行を取るサイ型のモンスター。『深層』に出没するだけあって、その戦闘能力は申し分ない。今の状態…………素手同然の有様ではさすがに分が悪かった。いや——

「つて、ちよつと！ あの新種、ブラックライノスまで襲ってるよ!？」

その背後に迫っていた新種は、僕らではなくブラックライノスに襲い掛かる。

「今のうちに逃げるぞ。あいつらはモンスターを優先して襲うからな」

言うが早いか、クオンは背を向けて走り出した。

反論の余地はない。ティオネ達から予備の武器を受け取ったとはいえ、あの新種に攻撃できるわけもない。攻撃してしまえば、この武器も失う事になる。

……いや、武器を失わずに済ます方法がまるでないとも言わないが。

「詳しいね？」

「むしろ、あれをまだ新種と呼んでいる方が驚きだな。三年間も何をやってきた？」
並走しながら問いかけると、彼はあっさりとその返してよこした。

その言葉に、彼が持つ非公式記録アナザーレコードを思い浮かべる。

到達階層七〇階層以上。こまめに数えていなかったらしく、曖昧だが——彼が持ち帰ったドロップアイテムのいくつかは未だに未知のモンスターのものだと聞く。今もまだギルドの保管庫に厳重に保管されているとも。

(なるほど、知っていてもおかしくはないのか)

もうここまで上がってきたか——と、彼はそう言った。

つまり、ここより下の階層では当たり前存在するモンスターという事だろう。

気になるのは『上がってきた』という言葉そのものだ。

(神蓋パベルの封印が通じていない?)

古代においてモンスターはダンジョンを抜け出して地上に溢れた。各地に残る野生

のモンスターはその子孫達である。

その後、神々が降臨し、バベルが建築されてからはダンジョンからモンスターが外に出て来る事はなくなった。それどころか階層間の移動すらほとんどないというのが通例だ。

だからこそ、ギルドは到達基準を定め、冒険者もそれに従って探索する事ができている。無論、異常事態はいつだって起こりえるものだが……。

(彼の言いようだと、まるでこの新種は常に地上を目指しているようだね。そして、他のモンスターを優先して襲う習性を持っている)

異常事態ではなく、それこそがこの新種の正しい生態である。

彼の言葉を誠実に解釈するなら、おそらくそう言う事になる。

どちらも厄介な生態だった。

いや、正しく言えば前者——つまり、棲息域より上部階層に出現するモンスターが他にいない訳ではない。しかし、そちらは移動しても精々が八階層程度だ。

(この新種がどこを棲息域にしているかは分からないけど……)

気まぐれに上部階層に上がってくる程度なら、『もうここまで』という言い回しはしないだろう。つまり、この新種はバベルの封印をものともせず、地上を——少なくとも上部階層を目指しているという事になる。

（この潜在能力ならありえるだろうけど……。厄介だな）

いずれにせよ、まだ攻撃が通じるだけマシだ——が、そこに後者の習性が加われれば話はまた変わってくる。

モンスター同士の共食い。滅多に起こる事はないが、もし何かの弾みで行われた場合……特に、魔石を喰らった場合、そのモンスターは『強化種』と呼ばれるようになる。

その名の通り、通常のものよりも能力が強化されており——例えば『血濡れのトロール』は討伐に向かった精鋭パーティを返り討ちにし、五〇名以上を殺害したという。

ギルドがその存在を把握するまで……。その後「フレイヤ・ファミア」に討伐されるまでの間に犠牲となった冒険者の数は今もはっきりしないが、おそらく一〇〇名を下回る事はあるまい。だからこそ、ここ一〇年ばかりの間、最大の被害を出した最悪の『強化種』として冒険者に恐れられ続けているのだ。

モンスターが他のモンスターを喰らうというのはそれほどの危機をもたらす行為なのだ。それを常とするモンスターなど悪夢でしかない。しかも、それが上部階層に向かってくるなど、悪夢どころの騒ぎですらなかった。

「おっとー」

先回り——と言うより、別動隊か。ともあれ、進路上に数体の新種が姿を現す。

「面倒な連中だ……。――」

クオンが火を宿した左手の指先で斧槍の刀身を撫でる。と、その火が燃え移るように斧槍が炎に包まれた。そして、大薙ぎの一閃が放たれる。

「なるほど、そういう手もあるか……」

両断されると同時、新種はそのまま燃え上がる。

一方のクオンの斧槍は溶ける事はない。

「溶かされる前に腐食液を蒸発させればよい。道理と言えば道理だね」

「真似できる魔導士がおれば、の」

それが最大の問題だとも言える。

そもそも属性付与系エンチャントの魔法自体が希少だった。

ガレスと言葉を交わしている間に、クオンの手によつて行く手を塞いだ新種は一掃されていた。

「しかし、相変わらず酷い臭いだな。身体に悪そうだ」

腐食液が蒸発したせいだろう。口腔に得体のしれない酸味すら錯覚させる、何とも言えない不快な臭いが通路に充満していた。

野外なら——いや、せめて広場なら良かったのだろうが、生憎と狭い通路ではどうにもならない。ダンジョンの中では風も期待できなかった。

「まあ、何にしても体に良い事はないだろうね」

クオンが最後に付け足した冗談——だろう、おそらく——に、肩をすくめて返す。

実際、狼^{ウエアウルフ}人のベートは今にも吐きそうな顔色をしている。……意地でも表情には出さないつもりらしいが。

ちなみに。その傍らで、それこそ吐きそうなくらいラウルが咽こんでいる。どうやら、まともに吸い込んでしまったらしい。

「あながち冗談でもないかな……？」

錯覚なのかどうなのか。喉の奥が焼けるような痛みが走った気がした。もつとも、今のところ風邪の引き始めのようなものだが……いや、迂闊に無視すると大事になるのはどちらも同じか。

「目覚めよ」^{テンベスト}

ラウルの様子を見かねたのか。それとも、僕と同様に身体に違和感を覚えたのか。あるいは、単純に臭いに辟易したただけかもしれないが。

ともあれ。アイズが小さく呟き、風を纏った。そのおかげで立ち込めていた臭いが霧散していき——ベートがこっそりと大きく息をついた。

「……ああ、なるほど。お前、あの時のチビ助か」

その風——いや、その魔法を見て、クオンがポンと手を打った。

どうやら、ようやく思い至ったらしい。

まあ、当時アイズは一二歳だ。チビ助と言われても仕方ないと言えば仕方ないが。

「相変わらず殺し方しか知らないらしいな」

これはまた手厳しい。殺し方ばかり教えたか——とは、四年前にも言われた言葉だ。

（これでも入団当初よりはだいぶマシになったんだけどね）

もつとも、『人形姫』などと揶揄されるのは相変わらずだ。

「そろそろ少しは色気を身につけないと、嫁の貰い手がないぞ。リヴェリアならまだしも、お前さんはそうもいかないだろう」

「……余計なお世話です」

ぷう、とアイズが膨れる。

「ほう？　少しはマシになったか」

それを見て、クオンは声を上げて笑った。

そのせいで、ついにアイズはそっぽを向く。そして——まあ、あえて誰のものとは言わないが、背後から伝わってくる殺気が増大した。

いや、それにしても——

（なんで二人分なんだ？）

ああいや、彼女もアイズには絶大な憧れを寄せている訳だし当然なのか。

……何というか、ロキの悪い影響を受けているのでなければいいのだけど。

「まあ、いい。さつきと行くぞ。どうせリヴェリアは五〇階層にいるんだろう?」

こちらの殺気を感じていない訳もないだろう。しかし、まったく歯牙にもかけず、斧槍を肩に担いでクオンは走り出した。

確かに今はリヴェリア——もつと言えば、魔導士達との合流を優先すべきだ。背後からはブラックライノスのものと思しき断末魔の悲鳴が聞こえて来る。加えて言えば、それは徐々に近づいてきていた。どうやら、あの新種はまだこの辺りに巣くっているらしい。

しかし——

「五〇階層までついてきてくれるのかい? 今日はずいぶんと気前がいいね」

「何を馬鹿な事を。迷子の小娘共を保護者のところに送り届けるのは当然だろう?」

「……それはどうもご親切に」

それはあながち『皮肉』ですらなさそうだったが。

しかし、今の状況で彼の助力を蹴るとするのは、全員の命を預かる団長としては好ましくない決断だった。何しろ——

(親指の疼きが止まらない……)

まだ何か厄介事が続く。

冒険者になってから今まで、この勘に従って生き延びてきたのだ。無視などとてもで

きたものではない。なら、この男には最後まで付き合ってもらわなければならない。

もつとも――

（彼と出くわした事そのものが厄介事なのかもしれないけどね）

だから親指の疼きが止まらないのだ、と。

そう言われたところで反論はできそうにないが。

4

（しかし、もう五〇階層まで上がってきていたか……）

チビ助……から、多少成長した小娘共を連れて迷宮内を走りながら、胸中でぼやく。

この連中の様子では、未だ六〇階層より先に到達しているとは思えない。だから、あの芋虫どもを『新種』などと呼ぶのだ。

（もう三年と言わなければならない……）

それともまだ三年と言わなければならないか。

何とも判断に困るところだが、どうやらあの連中は今も真面目に頑張っているらしい。

（子どもがどうなったところで興味もないがな）

しかし、時折見る『■』を考慮すれば、事態はそう単純ではない。

俺達の『時代』を生きた何者かがこの地で暗躍しているはずだ。

(大体、今にして思えばお膳立てが良すぎたんだ)

四年前、このオラリオで過ごした日々を思い出す。

この連中と出くわした頃は、控えめに言つて日替わりで違う【ファミリア】連中に追いつかれていた。

背後の小娘共との一件もその一つでしかない。そして、あの一件だけに注目しても、あまりに『出来すぎて』いた。

結論から言つて、誰かが殺し合わせようと画策していたとしか思えない。

(一つだけなら、まだ不幸な誤解だった済ませられるのかもしれないがな)

例えば。うっかり出くわしてしまった不運な——せっかく芋虫どもに喰われずに済んだというのに——モンスター達を次々に斬り捨てているこの小娘について。

この戦闘狂が俺に興味を持つ——と、そこまでだったらまだ可能性としてはあり得なくもない。いきなり斬りかかってくる——と、いうのも当時の小娘だったら、あり得ると言うよりない。だが、それなりに周囲に警戒を払っていた俺の居場所を突き止め、本人だという確信を持っていた、となると話は変わる。

何しろ、あの糸目の小僧が俺の周りを嗅ぎまわり始めたのは、この小娘との初戦を終えた後の事なのだから。

(あの時はまだそこまで『有名』じゃなかったはずだからな)

この小娘共との一件が起こったのは、霞の『仇討ち』を済ませ、その事後処理——その仇の下で甘い汁を啜り、ならず者集団と化したいくつかの小規模【ファミリア】との『抗争』がようやく終わった直後だった。

それなりに派手に暴れた以上、その界限でなら名は知れていただろう。だが、オラリ才を二分する大派閥と持て囃されるこの連中の耳に入る程ではなかったはずだ。

実際、主な『戦場』となった繁華街を牛耳るあの『女』の手下どもは見向きもしなかった。……少なくとも、この頃はまだ。

(大体、言うほど派手に暴れたわけでもないしな)

暗黒期を一年余計に延長させた元凶——なんて毒づかれる事もあるらしいが、『専門家』には残党狩りの総仕上げになったと言われている。

まあ、彼女達が行えば立派な治安維持活動だが、俺がやれば単なる私闘でしかない。前者の言い分も否定などできはしない。

……だが、やりすぎたせいで危険人物呼ばわりされる羽目になった、どこぞの酒場の女店員ほど派手に暴れた訳でもないのもまた事実だった。

もしそうなら、俺も危険人物一覧に名を残しているはずだ。……いや、今なら記されていたとしても驚きもしないが。

俺が蹴散らしたのは、その女店員はおろか、ギルドの連中ですら……ああいや。今はどうだか知らないが、当時は袖の下を掴まされているのがまだ相当数生き残っていたと聞いている。ひとまずあの連中は除外するとして、それでも『専門家』——【ガネーシャ・ファミリア】の彼女達ですら目をこぼしたような木っ端ものでしかない。

どう考えても、この小娘共が俺にちよつかいを出してくる理由が思いつかなかった。あの老神ですら、この時点では俺が『何者』なのか把握していなかったというのに。

「おっと……」

階層を繋ぐ階段——とは名ばかりの険しい坂道を駆け上がり、五〇階層へと飛び出す。その先に広がる光景を見て、小さく呟いていた。

五〇階層は冒険者達が安全階層セーフティポイントと呼ぶ階層だ。簡単に言えば、モンスターが『生まれない』階層なのだが……

「これはまた悲惨だな……」

生まれただけで、存在しない訳ではない。

食料や水を求めて上下の階層からモンスターが集まってくる階層。モンスター達の楽地という方がより現実に即している。『安全』というのはあくまで他の階層に比べて、という程度のものだ。

従って、この五〇階層にもモンスターが存在するのは言うまでもない。見かけたとし

ても驚くには値しない。

「先を越されたな」

そして。魔石を求めて蠢くあの芋虫どもがこの階層のモンスターを片っ端から食い漁っていたとしても、それはなるべくしてなった結果であり、その際に割と凄惨な光景が生み出されていたとしても、それは致し方ない事だった。

「先を越されたというより、むしろ本隊はこっちだったんだらうね」

傍らで小人が——この連中を束ねる団長が呻いた。

「だろ。これは無駄足だったか？」

久しぶりにリヴェリアの美貌でも拝見しようかと思つたが……この有様では、最悪死体が残っているかどうかから心配した方がいいかもしれない。

「みんな……！」

風を纏つて、小娘が芋虫の群れに突貫する。

「あ、ちよつと待て」

彼女が手にするあの鈍らは切れ味が鈍い代わりに絶対に溶けない。さらにあの魔法は腐食液から守ってくれるだろう。……まあ、本人だけは。

「な——っ！」

止める暇もあればこそ。一番近いところにいた芋虫が数匹、あつさりと両断され——

そして、『爆発』した。その絶対的な溶解力をもつ体液を周囲にまき散らしながら。「やれやれ……。だから待って言っただろ？」

こちらも絶対の強度を誇る大盾——来歴不明の石碑を用いて造られた《ゲルムの大盾》を掲げながら、小さく肩をすくめた。

「もつと早く言ってくれ……」

慌てて飛び退いたらしく、心なし土にまみれた小人が毒づく。

「倒せば倒したで爆発するとは、つくづく厄介じゃのう」

「やっぱり、火で焼くのが一番か」

ドワーフの唸り声に、小人が頷く。

「火なんかつければ余計に燃えそうな気もするんだがな」

理屈で言えば油壺に火を放っているようなもののだが、何故だか爆発しない。

いや、よく燃えすぎるあまり爆発する暇もなく燃え尽きているだけなのか。

(まあ、爆発しないならそれに越した事はないか)

エレニアス絵画で出くわした鬱血亡者と同じ——と、それで納得しておくとしよう。

ため息をつきながら、愛用の黒弓をソウルから取り出す。

《狩人の黒弓》——またの名を《ファリスの黒弓》。後の世では狩りの神エブラナ

と同一視された弓の英雄ファリスが愛用した弓である。

それに矢を三本まとめて番えて弓弦を引き絞る。狙いを定める必要はない。的は大きく、動きは遅く、数は多い。それこそ目を瞑っていてもどれかには中る。

……もつとも、あまり手前の芋虫に中てる訳にはいかないが。

弓弦が震え、空気を裂いて矢が疾る。それはそれぞれ別の芋虫に深々と突き刺さり――そして、まとめて爆発させた。

流石に自分の酸には耐性があるのか、他のモンスター程よく溶ける訳ではないが、至近距离からまともに浴びた何匹かは苦悶の声を上げ、でたらめに周囲に腐食液を吐き出し、それよりも間近で喰らった数匹は『誘爆』して、周囲へと被害を拡大させていく。三本の矢で与えられる損傷としてはなかなかのものだった。

それを数回程も繰り返せば、だいぶ見通しもよくなる。

「さて、と。さっさと保護者に押し付けに行くとしようか」

大盾はそのままに、改めて斧槍に炎を付加させてから一気に群れの綻びに飛び込む。全てを相手にする必要はない。少なくとも、リヴェリアの死亡が確認できるまでは。

彼女の魔法は詠唱こそ長すぎるが、大半の呪術や魔術を上回る範囲を誇る。この数を相手にするなら、ぜひともあのお姫様の助力が欲しいところだ。

「目覚めよ」
テンペスト

風を纏い先行した小娘が芋虫どもを斬り刻んでいく。

景気よく爆発する芋虫の群れを、大盾を構えて強行突破する。

「アイズ、半分で良い。風をそれ寄せ」

シアンスローフ

ウエアウルフ

犬人——いや、狼人の方か？——の小僧が小娘に声をかける。

それに応じて小娘の方が何事か囁くと、風——というか、魔力の流れ——が小僧の足共に向かう。正しくは、小僧の身に着ける足甲に埋め込まれた黄玉に。

「ありがとよ」

同時、小僧は他の子どもが見たらトラウマになりそうな笑みを浮かべた。

「蹴り殺してやるぜえええええええ！」

勇ましい事だ。武器が傷むのも嫌だし、当面は小娘と小僧に任せるとしよう。

しかし——

「魔法を取り込むとは珍しい武器だな」

これでも珍品奇品の類は多く知っているつもりなのだが。

同じような効果を持つ武器は生憎と手持ちにはない……はずだ。パツと思いつかない。

(もしここで死んだら失敬しよう)

長い旅路の中ですっかり染みついた収集魂に火が灯った。

流石に殺して奪い取る気はないが、死んだら貰おう。どうせ死人には無用の長物だ。

「それより、キャンプの場所は分かっているのかい？」

隣を並走しながら、小人が問いかけて来る。

確かに四〇階層を超えたあたりから、階層の広さはオラリオそのものと同等かそれ以上になっている。だが、

「四九階層から五一階層に続く道の中、お前らみたいな大所帯が陣取れる場所なんざそんなに多くないだろう？ その中でいざという時に防衛しやすい地形。そこに水源の位置を加えれば大体見当がつくさ」

この連中は不死人ではない。生きていくには食料や水が必要だ。食料も現地調達できらならそれに越した事はないだろう。その条件を満たし、かつ複数の幕舎を立てられ、モンスターへの襲撃を受けても守りやすい地形。これだけ手掛かりがあれば、いかにだだっ広いこの五〇階層でも場所は絞り込める。

「それはそうだけどね。冒険者じゃないのに詳しいね？」

「俺は元々放浪者だぞ？ こんなのは知ってて当然の知識だ」

ただの放浪者だった頃——水やら食料にも気を配らなければならなかった頃に得た知恵と経験は今も健在だ。……記憶としてはもうほとんど残っていないが。

それに——

「大体、特定する必要はない。生き残りがいるなら、近づけば嫌でも分かるさ」

まあ、分からない程度の生き残りしかいないなら話は変わるが。

リヴェリアもいる訳だし、そこまで間抜けではないはずだ。

「矢を放て！」

「ですが、もうこれが最後です！」

「構わん、撃て！」

ほどなくして、戦場の喧騒に混ざって凜とした声が聞こえてきた。

それと、悲鳴交じりの氣勢も。

「ほらな」

あまりに予想通りの場所に陣取っていたせいで、思わず笑い声がこぼれる。

「やれやれ……。包囲されてないだけまだマシか」

相変わらず猪突猛進な芋虫どもで助かった。隊列を組み、愚直に坂道を攻め上がるその姿に肩をすくめる。

「このまま挟撃する。あのお姫様がいるならそれで充分だろう？」

「もちろんさ」

小人が頷いてくるのを確認してから、大盾を《呪術の火》に切り替える。

正しくは《曙光の火》。恩師達が生み出したまさに万能の触媒。これだけあれば呪

術は言うに及ばず、魔術や闇術、奇跡すらも発動させられる。

古き竜の言葉を用いて詠唱を行う。

その魔術の名を「降り注ぐソウル」。

狙いは群れの上空。ソウルの極光はその名の通り、無数に裂け地面に降り注ぐ。

「よしよし。これでお姫様も気づいただろうさ」

敵を始末するのはついだ。主な狙いはそちらだった。

「まず間違はなくね。烽火にしては派手すぎる」

「景気づけにはちょうどいいだろう？」

小さく笑い返してから、大盾に戻してその場に陣取る。

あまり突貫してリヴェリアの魔法に巻き込まれては目も当てられない。

その頃には、上から武器の詰め合わせがいくつか飛んできた。相変わらずいい仕事をするお姫様だ。

「俺達はこの後方の奴らを釣りながら、周りの連中を足止め。リヴェリアが詠唱する時間を稼ぐ。そんなところか？」

「妥当だね。幸い、こちらにも魔導士はいる。敵の群れを二分すれば殲滅も容易だ」

小人が、山吹色の髪をしたエルフのお嬢さんに視線を向けた。

「僕らが敵の足を止める。レフィーヤは、詠唱を始めろ。この戦闘は君にかかっている。急げ」

「は、はい！」

頷くと同時、そのお嬢さんは杖を構える——が、まだ詠唱できるほど周囲の状況が安定しない。このお嬢さんはお姫様のように動きながら詠唱とはいかないらしい。

まずは足止めをしなければ。

「で、その僕らつてのに俺も含まれてるのか？」

「もちろん、腐食液を気にせず戦えるのは君とアイズとベートだけだからね」

その小娘共は後ろ——芋虫の進路方向——で、派手にはしやぎまわっていて、こちらなど気にもしていないようだ。

「人使いが荒いな。しかも他人を巻き込むなよ」

「礼はするとも。無事に生き残れたなら、ね」

「どうだか……」

どうにも信用しかねる。まあ、あの売女の一昧よりはいくらかマシ……いや、それもどうだか。

あの女や糸目の小僧を信じられるなら、どこぞの王妃様や世界蛇だって信じられそう
だ。

「貸してやる。その代わりさっさと突っ込め」

ソウルから斧槍を一本取りだして放り投げる。

「結構な値打物みたいだけど、溶けてもいいのかい？」

「やってみろよ」

銘を《サンティの槍》。正確には斧槍だが——動く巨像サンティを仕留めたという伝説の名槍だ。

いや、より正しく言えば——

「それじゃ遠慮なく」

小人が槍を振るう。その切れ味は芋虫の身体を容易く両断して見せた。

「これも不壊属性デユランダ? でも、切れ味が良すぎる……」

より正しく言えば、『不壊』の名槍だ。

屈強な巨人の身体すら溶かす強酸の海で振るっても刃毀れ一つしない。俺が持つ武器の中でも特に希少な一振りである。

「ほら、それで勇氣一〇〇倍だろう。さっさと突っ込め」

武器破壊さえ防げるなら、そこまで面倒な相手ではない。……まあ、一匹一匹は。

だが、数というのはただそれだけで厄介な代物である。エルフのお嬢さんを守りながらこれだけの数を相手にするというのは、決して容易なものではない。

「確かに。これなら何ともなるね」

言うが早いか小人は四方を囲む群れの一角に飛び込んでいった。連中が行きたい方向では小娘と小僧がはしやいでいる。

あとは――

「斧はないのかの？」

「あの槍みたいなの斧っていう意味ならないな」

ドワーフのおっさんの問いかけに、肩をすくめて見せる。

「なら、仕方ないのう！」

言うが早いか、ドワーフのおっさんは上の連中が投げて寄こした戦斧を地面に突き立てて――

「ぬうん！」

そのまま豪快に地面を抉り飛ばした。

即席の投石器とでも言えはいいのか。その礫は芋虫の身体をぶち抜き、爆発させた。「ま、こんなもんかの」

あの様子なら、小人の反対側は任せても大丈夫そうだ。

肩をすくめてから、残る一角――五一階層に続く方向に陣取る。

この分なら、思ったよりは楽ができそうだった。

「?!」

そう思った矢先。首筋の産毛が不意に逆立った。

長い旅路の中でしみついた直感。あるいは死の気配をかぎ取る嗅覚。

それが認識より早く、意識よりも早く、身体を動かした。

見上げたのは頭上。天井から降ってくる数匹の芋虫の姿がそこにあった。

「——」
左手に火を宿し、詠唱を行う。

魔術の名を「ファランの矢雨」。一撃の威力ではなく、弾数の多さが脅威となる魔術。

無数のソウルの輝きが矢のように芋虫どもに突き刺さる——が、

(やはり軽いか……！)

込める魔力が足りなかった。

何匹かは生きたまま地上に降り立つ。間の悪い事に、あのお嬢さんの近くにも。

傍に居るのはラウルと、褐色小娘二人。まあ、それなら——

(あれくらいなら放っておくか)

背後は気にせず、目前の芋虫どもに「火球」を叩きつけ、斧槍で貫き、薙ぎ払う。

その頃には——

「——面倒くせえ」

この派閥の火炎壺が……まあ、そのうちの 하나가勝手に爆ぜた。

思わず振り返ると、胸のある方の褐色娘が後先考えずに特攻し、素手で魔石を抉り出すのが見えた。当然のように腐食液を全身に浴びるが、気にもせず新たな獲物へと飛びかかっていく。

見れたのはそこまでだが——まあ、あの様子なら少しくらい放っておいても死にはしないか。

(しまったな。面倒な事になるか?)

それよりも、あの魔石がこの連中の手に渡ってしまった事の方が気になる。

「——雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え！」

舌打ちする頃には、お嬢さんの詠唱が終わったらしい。

「撃ちますー！」

その叫びに応じて、その場から飛び退く。

「【ヒュゼレイド・ファラーリカ】！」

景気よく放たれた無数の火線が雨のように降り注ぐ。やはり魔法が誇る範囲は脅威だとしか言いようがない。この真似ができる呪術や魔術はそう多くはなかった。

「上も下も派手にやったな」

「うむ。ここまでやればいつそスカッとするわい」

火の雨が収まる頃には、上の騒ぎも収まっていた。

いや、むしろ上からの流れ弾——もしくは援護射撃か——も混ざっていたのか。とにかく、地上に蠢いていた芋虫どもはまとめて消し飛んでいった。

「やったね、レフィーヤ！」

「すごいっす！」

「い、いえ！ ありつたけの精神力マインドを注ぎ込んだので……！」

喝采を上げる胸なし褐色娘とラウルを前に、エルフのお嬢さんが慌てた様子で応じる。

一方で、

「ティオネー！」

素手で天井から降ってきた芋虫どもを皆殺しにした結果、どことなくイルシールの地下牢を徘徊していた『なりそこない』を思い出させるような——まあ、連中と違って全体的にどす黒いが——有様になった胸あり褐色娘を見て、小人が険しい顔をした。

「レフィーヤ、万能薬エリクサーは残っているか？」

「は、はい！」

エルフのお嬢さんが腰のポーチから小型のボトルを取り出し中身をぶちまけた。数本ほど空にしてようやく身体が原型を取り戻しかける。

「無茶をするな」

「あ……」

そこで、小人が自分の腰巻をほどき押し付けるように手渡した。

まあ、身体の原型が失われるほど酸を浴びれば装備だつてとつくに溶け切っている訳だから、当然と言えば当然だが。

「話は全員の無事を確認してからだ。覚悟しておけ」

と、威厳たつぷりに言つたのだが――

「はあいつ……」

胸あり褐色娘はまるつきり恋する乙女のような目を注ぐばかり。

深々と嘆息しているのが、坂を駆け上がる背中を見るだけで分かる。

「あの小娘や小僧と言い、お前のところには戦闘狂しかないのか?」

今の時代だったら、殺し方以外にも教えられることは色々あるだろうに。

半端な形になってしまったとは言え、せめて活用できる部分は活用して欲しいものだ。

(まったく、どいつもこいつも……)

これでは火を消した甲斐がないにも程がある。

「……黙秘するっス」

ともあれ。

思わず隣に来ていたラウルにぼやくものの、彼は賢明にも沈黙を守って見せた。

「ほう？」

気分を入れ替えてから。坂を上り、連中の野営地にたどり着く。

備品はほとんど壊滅しているが、どうやら死人は出ていない様子だった。

まあ、方々に若干身体の形が『崩れた』連中が転がっているが、それでもあの胸あり褐色娘ほどではない。これなら、放っておいてもよさそうだ。

「よう、お姫様。相変わらず性質の悪い連中に捕まつてるようだな？」

誰に咎められるでもなく、野営地——いや、もはや野営地跡と呼ぶべきか——を適当にぶらついていると、ようやくお目当ての美女の姿を発見した。

翡翠色の艶やかな髪。白磁の肌。神ですら嫉妬すると称される美貌。生まれ持った王者の気品を知的な雰囲気包み込む。

「クオンか」

リヴェリア・リヨス・アールヴ。

俺が顔と名前と所属する「ファミリア」を——あとは、二つ名とやらを一致させている数少ない冒険者の一人だった。

「あの光はやはりお前の仕業だったか」

「まあな。烽火としてはちやうど良かっただろう?」

「ああ。モンスターどもだけでなく、魔導士としての自信まで削り取ってくれた」
「オラリオ最強の魔導士がよく言う」

四年前の時点で彼女はオラリオ最強の魔導士と言われていた。

もし彼女に詠唱を終えられてしまえば、俺ごときがただで済む道理はない。

「フン。そんな称号もの、その気になればいつでもお前のものになるだろうが」

「何を言ってるんだか。俺は魔導士じゃないって言っているだろう?」

それは本当だ。オラリオで言う『魔法』など一つとして使えはしない。

呪術師を名乗る事はできる。それでも開祖より直接教えを賜った身だ。その程度の自負は持っていて然るべきだろう。

闇術師を名乗ったとしても文句は言われない。こちらもある意味『開祖』の直系に教えを賜っている。まあ、闇術師はそもそも闇に潜む者達なのだから、同業者くらいにしか名乗る機会もないだろうが。

魔術師と名乗っても……まあ、本場のお偉いさん連中を除けば誰に咎められる事もないはずだ。いや、下手に名乗ると厄介ごとに巻き込まれると師であり戦友でもある男からは言われているが。

聖職者は……名乗るつもりもないし、流石に名乗れもしない。だが、奇跡を扱える以

上、そのフリくらいはできる。ついでに言えば……まあ、敬意を払う神が一人もいないという訳でもない。

だが、魔導士となると、大前提となる魔法を何一つ使えない時点で振りすらできない。いや、詠唱の長さは魔法によって大きく変動するらしく、呪術やら魔術やらを魔法と誤解する輩はいくらでもいる。それを考えれば振りだけならできそうだが……。

「魔法の一つも使えないのにそう名乗るのは、流石に不義理だろう？」

と、いうか。今までの経験上、そういう真似をすると潜らなくていい死線を潜る羽目になりそうでゾツとしない。

ヴァインハイムにしてもリンデルトにしても白教にしても青教にしても——話を聞限り、魔術師や聖職者という連中は基本的に生粋の権威主義者の集まりなのだ。

呪術師もまた本場と名高い大沼辺りまで行くと色々面倒だという噂を聞く。そのせいなのか、複数の術式を修める術者であっても本業として名乗るのは一つだけだ。他は芸の足し、新たな探究への足掛かり——と、少なくともそういう名目らしい。

(まあ、そんなものか)

俺だつて何だかんだ言つて、他の術式を修める上で軸となつてるのは呪術である。と、それはともかくとして。

呪術にしても魔術にしても性質がはつきり分かれるため、『フリ』をするのはおよそ不

可能だが……もし、本場の連中に偽装している事がばれようものなら確実に肅正される。……いや、実際に自分の足で本場を訪れた事はないが、道中で会った同胞達の話も聞く限りそれくらいは覚悟はしておいて然るべきだろう。

「そんなもの違いに拘るのはお前だけだ」

もつとも、時代は変わったという事か。リヴェリアはあつさり切り捨てて来る。

「一口に魔法と言つても、その中には呪詛カースや妖術と呼ばれるものも含まれる。お前の言う呪術や魔術とて同じだろう」

それはどうだか——とは思つたが、今のところそれを証明する事例はない。

ひとまず肩をすくめるにとどめておく。

「まあいい。それで、何の用だ？」

「つれないな。せつかく迷子を届けてやったのに」

迷子——要するにあの金髪小娘……確か、アイズとか言つたか。このお姫様はその『母親』としても有名だった。

「誰だが母親ママだ」

「何も言つてないだろう？」

いやはや、女の勘というのは恐ろしい。

「まあ、懐かしい顔を見に来たつてところかな」

「そう面白いものでもないだろう?」

「何を言ってるんだか。女神ですら嫉妬する美貌なんて言われてるくせに」

実際、どこぞの売女などより遥かに美人だと言えた。

「フン……」

照れた——というには、あまりに色気も素っ気もない返答が返ってくる。

「あとは迷惑料を分捕りにな。褐色娘どもに無理やり引きずり回されたせいで巻き込まれなくていい騒動に巻き込まれた。それと、『カドモスの泉』の泉水を酒樽一つ分無駄にする羽目にもなったからな」

どこで売り捌くかにもよるが、あれだけでも数億ヴァリスになるのは間違いない。道中で使った矢はともかく、その分だけでも回収しなければ流石に割に合わなかった。

……大体、酒樽自体が結構高いのだ。それに、カドモスの泉から汲みやすいように細工してもらおう必要もある。

「さ、酒樽一つ分だと? 樽の大きさは?」

「もちろん、ワイン用の酒樽に決まっている」

と、他に回収した酒樽をソウルから取り出して見せる。

一瓶はおおむね七五〇ml程度。それでも一千万ヴァリスは固いのだ。

一方で一樽には二二五〇klほど入る。正規の回収瓶に換算すれば、おおよそ三〇〇

本分。

ざっと計算して三〇億ヴァリスにはなる——と、元より色白なりヴェリアが顔を青ざめさせた。

しかし、改めて計算すると、我ながら派手にやったものだ。

(ただ単にちまちま瓶に詰めるのが面倒だっただけなんだが……)

もつとも、樽だと一つ満たすだけでもずいぶんと時間がかかったが。

しかし、無事に回収できた一樽分でもしばらく遊んで暮らせるらしい。

いや、一度に捌くと値崩れしかねないから、売る際には瓶に取り分けるとしよう。酒樽ならそういう作業も楽に行えるはずだ。

「ま、待て。フィンと相談する——」

リヴェリアが言いかけた時、轟音が響いた。木々をまとめてへし折る破壊音だ。

それに混ざって巨大な何かが蠢く感触——大地の揺れや大気の震えが伝わってくる。そして、それなりの威圧感も。

どちらも馴染んだものだ。尋常ならざる敵が迫りつつある。ただそれだけの事だった。

にわかには野営地が騒然となる。

「人型、だと……!?!」

迫りくるのは無貌の異形だった。

背丈は六メートルほど。下半身は芋虫のそれ。上半身は、リヴェリアが呻いた通りの『人型』だった。

まあ、頭があつて胸らしきところから腕らしきものが二本生えているものであれば、概ね『人型』に見えるだろう。……もつとも、その異形の腕は二対四本あるが。

「いつもの『外征』ではなく、『侵入』の方だったか？」

「何の事だ？」

「いや、気にするな」

『外征』にしても『侵入』にしても、俺が勝手にそう言い分けているだけだ。

それに、どのみち特に深く考えて付けた呼び方でもない。理解を得るにはどうあつても詳しく説明する手間がかかる。それは面倒だ。

(しかし、それはそうと……)

これで連中は地上まで五〇階層に迫った訳だ。

「そろそろ本気で尻に火が付くんじやないか？」

おそらくこの街で唯一『火の時代』について——ひいては、今この世界に蠢く『因果』についての知識を有する爺さん達を思い浮かべる。

その爺さん——あの老神はどこぞの都にいた神の娘のように、今もこの穴倉を封じて

いるはずだ。が、その祈祷では連中を止める事は叶わない。

(いや、俺にしてもまるつきり他人事って訳でもないが……)

五〇階層まで『侵出』してきたとなると、ここから下ではもう何体もの『育成』が進んでいるはずだ。そうなれば、必然的に最下層への道は険しさを増している。

(面倒な事だな)

四年前。初めてダンジョンに挑んだあの時は、おそらく七〇階層を超えるかどうかと言った辺りで力尽きた。あの頃よりはソウルの凝りも改善され、篝火の当てでもできた——つまりはエステの補給も可能となったが……。

(足りるか?)

体内のソウルの流れに意識を向ける。あの『邂逅』を経て、失われた記憶についてはほぼ取り戻した。

同時に、ソウルの凝りもいくらか解消されたが……。

(高く見積もつても精々が四割といったところか……)

ロスリックで『最初の火の炉』に辿り着いた時から見ればその程度だ。

(あれだな。ロートレクの手下と同じくらいか)

あるいはシバの配下の透明忍者か。一概には言い難いが、概ねその辺りだろう。

手下や配下だとはいえ、それぞれが腕の立つ——『不死の英雄』と名乗るに値する力

量の持ち主だった。が、それでも未だ『玉座』には程遠い。

そんな状態で、果たして最下層まで辿り着けるのか？——と、問われれば流石に返事に困るところだ。

ここまでだったら、『ソウルの業』がそれなりに成熟した不死人であれば、どうにでもなる。それこそ、まだロードランをうろついていた頃のあの禿丸でもよほどハマさえしなければ問題なく来れる筈だ。

だが、流石に七〇階層を超えればその限りではなくなってくる。そろそろ本格的に『巡礼地』らしさが出て来るのだ。そこそこの腕を持った不死人でも油断すればあっさり篝火に戻される。……あるいは、そのまま亡者になり果てるだろう。

「まあ、いい」

俺の——いや、俺達の旅路など、元よりそういうものだ。

まるで火に誘われる哀れな蛾のように。苦難を求めるときのように。人間性を捧げ、絶望を焚べて。遙か遠き『玉座』へと突き進む。それ故に『巡礼者』などと呼ばれるのだ。

「肩慣らしと行こうか」

今さらあの程度の相手に膝を屈する訳もない。

右手の武器を愛用のクレイモアに切り替え、炎を宿す。

必要な準備はそれだけだ。

今さら恐れなどなく。感慨すらもありはしない。

四本の腕による連撃を掻い潜り、間合いを詰める。

両手で構えたクレイモアを一閃。腐食液もろともにその身体を斬り裂いた。

割鐘めいた耳障りな声が響き、でたらめに振り回される腕からは鱗粉がばら撒かれる。

生憎と。その類の攻撃はこれまで散々見てきた。

左手に火を宿し、ごく短い物語を口ずさむ。

その名を「フォース」。ただ単に衝撃波を発するだけの奇跡。

その衝撃波そのものに人を殺せるだけの威力はない。精々突き飛ばせる程度だ。

が、それだけの威力があれば飛んでくる矢くらいは払い除けられる。それより軽い鱗粉など言うに及ばない。

強引に活路を切り開き、振り下ろされた腕の一本を両断する。噴き出る体液——腐食液は無視し、下半身——鈍重な芋虫部分を駆け上がる。

狙うべきは胸だ。いずれにしても『モンスタ』である限り、その致命的な弱点はそこにある。もつとも、肝心の『胸』は図体相応に広い。仕方なく、大体の見当だけを頼りに——そして、当たるを幸い斬り刻む。

どうやら、幸運は味方してくれなかったらしい。どれも精々深手止まり。致命の一撃たり得なかった。加えて、相手も流星石に只者ではない。

身震いして俺を払い落とすと同時、腕の一本を振り回す。狙いの方も見事だった。

とはいえ、盾を砕くほどではない。が、踏ん張りも効かず、大きく吹き飛ばされる。受け身を取り——それでも勢いを殺しきれず、しばらく地面を転がって。

その間に思い浮かべていた炎の情景を解き放つ。

『!?!』

曰く【炎の嵐】。その名に恥じぬ業炎は、俺を叩き潰すべく頭上に迫っていた腕をそのまま焼き尽くした。

『!』

残る腕は二本。その両方を振り回し、鱗粉をまき散らす。

だが、もう遅い。手品の種は見えていた。

『!』

それが爆発するまで僅かだが時間を要する。

その間三秒。詠唱を一つ終えるには充分だった。

火を宿す右手を起点に吹雪が吹き荒れる。

曰く【瞬間冷凍】。とある野心家の魔術師が若き頃に故郷に捨てていった魔術。

その効果は名が示す通りだった。

吹雪が収まると、巨大な氷像となつた異形がそこにあつた。

「――」

勇猛な物語を――我が友が得意とした『奇跡』を口ずさむ。

その名を【雷の槍】。大王グウィンとその息子の物語の一部。

それでも威力には申し分ない。投擲した雷槍は狙い違わずその胸部に突き刺さり――

――その衝撃は凍り付いた巨体を粉々に打ち砕いた。

「こんなものか」

季節外れの粉雪の中。

転がる魔石を取り込み、同時に流れ込んできたソウルに意識を向けながら呟く。

やはりまだ『寄生』されたばかりらしく、凡百のモンスターとのソウルと大差ない。そ

れは実にあっけなく俺のソウルの中に溶けて消えた。

「あの……」

と、そこで背後に人らしき——ああいや、人の気配がした。

それだけで誰だか分かるが——と、こちらも訂正。分かるからこそ振り返る。

「どうかしたか？」

金髪金眼の小娘——アイズだった。抜き身の剣を持って背後に立たれては、それだけで落ち着かない。

「平気？」

「見ての通りだ」

傷らしい傷はない。しいて言えば魔力の消耗か。もつとも、篝火を得た以上は灰瓶も補給できている。当面は問題ない。

「また一人で飛び出してきたのか？」

そうなると、またリヴェリアに文句を言われそうだが。

いつも思うが、何故俺に文句を言うのか。

「ううん。フィンの命令。それが一番、被害が少ないって」

「相変わらず薄情な男だ」

まあ、確かに妥当な判断でもあるが。

腐食液——それと、鱗粉もか——を防ぎつつ攻撃できるとすれば、確かにこの小娘くらいしかない。ついでに言えば、他の連中は武器すら使い潰している。

英断と言えば英断だろうなのだろう。だが――

「消耗するのが嫌なら、さっさと尻まくって逃げれば良かっただろうに」

胸中に浮かんだ言葉とは別の言葉を告げる。

三年を経て――どうやら、連中の力はそこまで高まっではいないらしい。

やはり噂に聞く「ゼウス・ファミリア」やら「ヘラ・ファミリア」の代わりには程遠いという事なのだろうか。

「距離を開く前にあなたが倒したら、爆発するから」

「……後先考えずに爆発させるとでも思っていたのか？」

いや、確かに一人だったら爆発させていたかもしれないが。《ゲルムの大盾》があれば大概の炎や爆発の類は恐れるに値しない。

だが、近くに誰かいるなら――いや、他の連中だけならまだしも、一応リヴェリアやラウルもいる訳だし――そこまで向こう見ずな真似は流石にしない。

もつとも、

（信用ならないのはお互い様だな）

それもまた自明の理だった。

なら、保険の一つもかけておくだろう。それに、全滅するくらいなら一人の死人で済んだ方が良いというのも道理だ。

最悪の事態を想定しなければ——と、あの小人ならそんな事を言うだろう。

「やあ、相変わらず見事な腕だね」

ともあれ。まだ用事が済んでいないので、小娘と一緒に野営跡地に戻る。

と、相変わらず胡散臭い笑みを浮かべた小人が出迎えてくれた。

「よく言う。後先考えずに爆発させると思っていたんだらう？」

「悪く思わないでくれ。団長としては最悪の事態を想定しなければならんだ」

思った通りの返答に、フンと鼻を鳴らす。

「まずは槍を返せ」

何はさておき、これだけは回収しておかなければならない。

「ああ。そうだったね」

小人が《サンティの槍》を手渡してくる。

それをソウルに取り込んでいると、小人が言った。

「それと、これを。できればこれで泉水の分を帳消しして欲しい」

差し出されたのは小さなバックバック。中を開けるといくらかの携行食料と水筒、それと万能薬が五瓶入っていた。「ロキ・ファミリア」御用達なら、それだけで一級品だろう。……嫌がらせのための低級品を常に持ち歩いていない限りは。

(いや、あり得そうだな……)

あの糸目の小僧ならやりかねない。もつとも、持ち運べる量に限界があるこの連中にそんな馬鹿な事をする余裕があるかどうかはまた別問題だが。

「ずいぶん足元を見てくるな」

食料と水は俺にとつてはあまり意味がない。万能薬は——まあ、最高品質だと五〇万ヴァリスはする。が、カドモスの泉水は瓶一本でこれ二〇本分の値段に化けるのだ。

その相場を知らないわけでもないだろう。ダンジョン内であることを考慮しても、随分と安く買い叩くつもりでいるらしい。

「不満なら全額返済しよう。ただ、そのためには少なくとも地上までついてきてもらわないとならないけどね」

こちらの内心を見透かすように言ってから、肩をすくめて見せる。

「それに、今僕らが出せる最大の誠意がそれなんだ。何しろ見ての通りの有様だからね」
「それもそうか」

リヴェリアが顔を青ざめさせる程度には損害が出ているのは間違いない。

「それとも一緒に来るかい？」

「お前たちはもう戻るのか？」

「本意ながらね。本当なら五九階層を目指すつもりだったけど、この状態じゃそうも言っていない」

「五九階層、か……」

そう言えばアルドラも「ロキ・ファミリア」ですらまだ五八階層までしか到達していないと話していたか。

「君はどうするんだい？ まだ五一階層に留まるつもりなのかな？」

束の間黙考していると、小人が問いかけてくる。

「いや、気が変わった」

告げる。

「もう少し下まで降りてみるとしよう。少し気になる事ができた」

おそらく一〇階層も降りずに済むはずだ。

あの爺さんにとっては——いや、オラリオの連中にとつては不運な事に。

(最悪、霞達だけでもどうかしなれないとならないしな)

そのためにも、どこまで危険が差し迫っているのか確認しておかなければならない。

「気になる事だつて？」

「さっきの異形についてだが——」

小人の問いかけは聞き流し、代わりに告げておく。

「もし、あいつ相手に『非情な決断』になったと言うなら、悪い事は言わない。これ以上進むのはやめておけ。どうせ死ぬだけだ」

「五九階層から先は、あのレベルのモンスターが当たり前に出て来ると?」

それをこれから確かめに行くつもりだった。だが――

「まあ、そう思っておいて損はないだろう」

それだけ言い残してから、俺は早々に野营地跡を後にした。

(ひとまずは六〇階層を目指すか)

大して困難な道のりではない。

まずは五二階層へ。そこからは一気に五八階層までたどり着ける。五八階層は構造が極めて単純。そのおかげで五九階層まで迷わず駆け抜けられる。六〇階層までなら、そう時間をかけずともたどり着けるはずだ。

……もちろん、四年前と構造が変化していない限りは、だが。

5

「いや、勝ち目がないなら逃げるのも英断だぞ?」

記憶の中で、村を救ってくれた英雄――師匠は肩をすくめて見せた。

いや、師匠と言っても三ヶ月の間だし、剣術なんて基礎の基礎の入門編の最初の頁くらいの事しか教わってないけど。

「生きていればいずれ殺せ……ええと、何だ。ぶちのめす機会もそのうち巡ってくるか

もしれないからな」

その教えの正しさを今になって改めて思い知る。

けど！ だけど!!

(その機会、今すぐ巡ってきてええええええ!!)

そのうちだと間に合いません！ 今すぐにでも僕の命は終わりそうなんです師匠！

「ほああああああああああああつ?!」

間の抜けた悲鳴を上げながら、ダンジョン内を全力疾走する。

背後に迫るのは一匹のモンスター。もう少し具体的に言うと、牛頭人体のモンスター。さらに具体的に言うなら、『ミノタウロス』である。

そして致命的な事を言うのであれば、それは『中層』——今僕が走っている五階層から遥かに深い一五階層に出現するモンスターだった。

簡単に言えばLv. 1、しかも冒険者になってまだ半月という駆け出しでは倒すどころか一切ダメージが与えられないくらいに化物だ。

(ええと！ ええと!?)

この状況を覆せそうな教えを記憶の奥底から引つ張り出す。

師匠でもエイナさんでも——この際『迷宮神聖譚』ダンジョン・オラトリアの逸話でもいい。

何かないだろうか。

劇的な大逆転なんて贅沢は言わない。何とか逃げ切れる手段で良い。

『ヴウムウンツ!!』

しかし、現実是非情だった。

無慈悲な蹄の一撃は、直撃こそしなかったものの地面を盛大に揺らし、僕の足をもつれさせる。

「でえ?!」

さらに、地面に入っていた亀裂に躓き、すつ転ぶ。

詰んだ。間違いなく、詰んだ。

『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか?』

最後の悪あがきとして地面を転がりながら——ふとそんな事を思い浮かべていた。

より正しくは、ダンジョンにハーレムを求めるのは間違っているだろうか?——だ。

酒場の可愛い店員さんだったり、野蛮な同業者に襲われるエルフの少女だったり、伸び悩むアマゾネスの戦士だったり……そんな出会い。無垢な子どもから少しだけ成長し、英雄譚に憧れる男だったら誰でも憧れるはずだ。

可愛い女の子と仲良くしたい。綺麗な異種族の女性と交流したい。これはやっぱり若い男の性だと思えます、師匠!?

「あ……。うん、何だ。応援するぞ、俺は?」

何で視線が泳いでいるんですか師匠!?——じゃなくて!

今はそんな事を思い出し出している場合じゃない。

(あ、死んだな……)

今さらこんな事を思い出すのは走馬燈というやつに違いない。

脳幹の血が凍りつく感覚にそんな事を思う。

「御大層な剣術よりもだな——」

いや、待てよ。師匠は、ちゃんと教えてくれている。

この状況を覆せるかもしれない方法を——

「うわああああ?!」

醒めた頭が再び沸騰する。せつかくまとまりかけた考えが霧散した。

手には愛用の——と、言っても、実際に使っているのはこの半月の間だけだけど——

ショートソードを握っている。

(あれ? いつ抜いたんだっけ?)

なんて考えている暇はもうない。ミノタウロスの荒い鼻息は聞こえるを通り越して、

もう肌を感じられるほどだった。

(ああ、死んでしまった……)

壁際に追い詰められ、人生三度目の諦観が胸中を満たす。

一度目はゴブリンに襲われた時。二度目は村がコボルトの大群に襲われかけた時。

そう。あの時、師匠が僕らを助けてくれたのだ。まるで英雄譚から抜け出してきた英雄のように。剣で斬り払い、炎を操り、雷を放つて――

(そのどれか一つでもあればなあ……)

いや、ある。少なくとも剣だけは。この剣は師匠から貰ったものだ。

「安物だけだな」

いいや、聞こえない！ 全く何にも聞こえない！ それは師匠が謙遜しただけだ！

「うわああああああっ！」

お世辞にも勇ましい叫びとは言い難かったと思う。

でも、その雄たけびと共に、僕はその剣を両手で構えて飛びかかっていた。

『ヴォオツ！』

その一撃は思いのほか遅かった。いや、それでも今の僕に見切れるはずもないけど。当たらなかったのは、単にミノタウロスが侮っていたおかげだ。それは分かっている。でも。

それでも、『思いのほか遅い』という思いは消えなかった。

『ヴォオオオオオオオオオオオツ！』

格下相手に攻撃を躲されたのがよっぽど苛立ったのか、ミノタウロスが全力で吼え

た。

強烈な『咆哮』^{ハウル}生物の心と体に恐怖を刻み付ける威嚇。モンスターのスキルとも言える代物。

「――」
L v. 1の僕は抗う暇もなく強制停止^{リストレイト}に追い込まれた。

意思が折れた。気力も、本能も。心の全てが消え去って――

『ヴォオオオッ!!』

ミノタウロスの腕が迫る。

死ぬ。これにあたれば僕は死ぬ。

（死ぬ？ 当たる？）

いや。そんなはずはない。この程度なら――

『ヴォオオオオオ!!』

ミノタウロスの雄たけびが遠のく。

安物の――冒険者の防具としては最底辺の性能しか持たないプレートがブリキ缶のようにあつさり凹み、身体は壁に叩きつけられた。

「ゲホ、ゲホッ！」

涙目になって激しくせき込む。

まだ生きている。まだ生きてるけど——

(剣が……)

ない。どこかに弾き飛ばされてしまったらしい。

うん、詰んだ。今度こそ完全に詰んだ。

——ああ、結局女の子との出会いはなかったなあ、なんて。

自分を死に追いやった考えを性懲りもなく思い浮かべていると、

『ヴォオオオオオ！』

何故だかやたらと興奮したミノタウロスが全力で右腕を振り下ろしてくる。

でも、それより早く——

「えっ？」

『ヴォ？』

その屈強な上半身——その胴体に紅い一線が走った。

続けて、分厚い胸、振り下ろす途中の左腕、右の大腿部、左下肢——そして、最後に首筋へ。最後の一瞬だけ、ようやく微かな銀閃を見て取ることができた。

視界が赤く染まる。噴き出した血によるものだ。反射的に目元を拭うと、肉塊となって崩れ落ちる怪物の姿が見えた。

「……大丈夫ですか？」

怪物の代わりに現れたのは、女神様と見紛うばかりの少女だった。

(…………あ)

オラリオにきて半月の僕でも知っている。

蒼い装備を纏った金髪金眼の女剣士。

オラリオ最強の一角と称される【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン——！

「あの、大丈夫ですか？」

大丈夫じゃない。全然さっぱりこれっぽっちも大丈夫じゃないです！

理屈も道理も丸つきり無視して、僕の心はこの時奪われた。

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？

——否。僕は間違っていない。そうですね、師匠!?

……

(間に合わなかった!?)

ミノタウロスの『咆哮』^{ハウル}が聞こえてから、もう数十秒が過ぎている。

Lv. 1の冒険者が命を落とすには充分すぎる時間だった。

ミノタウロスの身体を斬り裂いたが——果たして冒険者は無事なのか。

「…………大丈夫ですか？」

問いかける。気になるのは胸のプレート——確かギルドからの支給品——が大きく

凹んでいる事だった。いや、ミノタウロスの一撃を受けたなら凹む程度で済むはずもない。なら、これは他のモンスターの仕事のはずだ。

全身血まみれなのは……ええと、多分ミノタウロスの返り血だと思いたい。それはそれで何となく気まずいけど。

「あの、立てますか？」

改めて声をかけると、

「だ——」

「だ?」

「だあああああああああああああああつ!」

その少年は悲鳴を上げて逃げ出してしまった。

「……………」

ぼかんと、思わずその背中を見送る。

(まあ、あれだけ走れるなら大丈夫、かな?)

あの装備からしてLv. 1。それもまだ初心者。五階層にいるのは……まあ、初心者にありがちな無茶でもしたのだろう。それに關してはあまり人の事はとやかく言えない。

少年が消えた先をしばらく見つめていると、後ろから奇妙な声が出た。

「……………つ、……………つ、……………くくつ！」

振り向くと、ベートが震える身体を抱きしめ、必死に笑いをこらえていた。

「アイズー！」

キツと睨みつけていると、ティオナたちが追いついてくる。

「どうだった？ 平気？ 間に合った？」

「……………多分」

あれだけ走れるなら、きつと。

釈然としない思いのまま、ティオナに頷く。

「良かったー。間に合わなかったら夢見が悪いもんね」

「うん」

「あ、魔石無事じゃん。どうせだし貰ってこうよ。武器とかたくさん壊れちゃったしさ」

ティオナがミノタウロスの死体の一部に残っていた魔石を引っこ抜く。それと同時に、他の部位もまとめて灰になった。

「え？」

と、そこで。灰の上に何か硬質な物が落ちるような音が響く。

視線を向けると、そこに一振りのショートソードが灰に埋もれていた。

「どうしたの、それ？」

「忘れ物。さつき襲われてた冒険者の……」

「ふうん。まあ、さすがにこんな普通のショートソードじゃミノタウロスの相手はできないよねえ」

年季こそ入っているようだけど、よく手入れのされた一振りだった。

短剣より長く、直剣より短い。軽くて使いやすい剣だと思う……けど、それは確かに平凡な剣だった。少なくともそう見える。

「うん……」

頷きながら、奇妙な違和感を覚えた。

何かが引つかかる。そう、おかしい事があったのだ。例えば――

「ま、無事だったんならそれでいいよね。さ、早く帰ろ、アイズ。もう五階層だし早く帰ってお肉食べようよ」

「う、うん」

テイオナに背中を押され、ダンジョンを歩きだす。

その頃には掴みかけていた違和感はすっかりどこかに消え去ってしまった。

第二節 夜明けはもうすぐ

1

地上に——いや、住み慣れた本拠地ホームに戻ってからしばらくして。

一息つき、旅の埃を払ってから団長室でロキに報告を済ます。

「ホンマか?」

いつも笑っているように見える細い目を見開き、ロキが険しい声を出した。

遠征失敗——五九階層に到達できず——の報告が原因……ではない。

「ホンマにあの『イレギュラー正体不明』が戻ってきた言うんやな?」

ある意味において、それ以上に深刻な問題によるものだった。

「ああ、本当さ。相変わらずでたらめなものだったよ」

武器や防具を一瞬で切り替える『スキル』

いや、切り替えているだけではない。長大な斧槍や巨大な大盾、果てはアイテムの類

までをどこかに『格納』しているはずだ。

リヴェリアの魔法に匹敵する威力を有した超短文詠唱『魔法』

こちらは下手をすれば無詠唱なのかもしれない。何しろ、彼が詠唱に用いる言葉は

共通語ではない。相変わらず全く聞き取れなかった。

ギルド公認のLv. 0でありながら……神々の『恩恵』を授からずとも一人『深層』を進むだけの圧倒的な力。それこそが「正体不明」という二つ名の最大の理由でもある。

「マジかー。また面倒な事になるなあ」

心底嫌そうにロキが呻いた。

「下手に刺激しなければ少しは安全なんじゃないかな？」

「甘い。甘いでフィン！ アレは剣の切っ先よりも死に近い奴や。油断しとつたらその

まま一突きにされるで?！」

「彼がその気になったら、油断しなくてもそうなりそうだけどね」

それは別に皮肉を言い返したわけではない。無論、自虐でもなかった。

僕自身、心から不本意だ。が、知りうる限りの情報をもとに、彼我を比較すればそう

いう結論にならざるを得ない。

【正体不明】クオン。

ギルド公認のLv. 0。しかし、少なくとも四年前のオラリオにおいて最強だった存在。

そもそも二つ名はLv. 2以上の冒険者が神会で神々より賜う称号だ。

多くの冒険者はLv. 2へのランクアップ——すなわち、神々すら認める偉業を成し

遂げて初めて他派閥の神々にもその名を知られる事になる。二つ名とはその証とも言えよう。

その称号をL.V. 0のクオンが有している時点で異例だと言わざるを得ない。

「前から言うけれど、そらしゃあないやろ。四年前、アレが初めて神会で話題になった時にはまだ名前の方はあんまり知られとらんかったからな。皆して正体不明正体不明言つとつたらそのまま定着してもうた。真正正銘の二つ名^{あだ}つてやつや」と、ロキは笑い飛ばす。

しかし、そもそもL.V. 0が神会で話題になるという時点で極めて稀な事だった。(でもまあ、その程度だったら確かに笑い飛ばせる範囲だけだね)

大仰な二つ名を持っていても、実力が伴わないなんて場合はいくらでもある。

だが、彼は実力を示したので。

「今だって【古王^{スルト}】を相手にできる自信はないよ」

「あんなん反則^{チート}や反則^{チート}」

五年前——クオンが姿を現すほんの少し前。未だ暗黒期の狂乱が消え去らぬ間に姿を現したもう一人の『正体不明』。

確かに言えるのは、五年前に突如として姿を現し、ダンジョンの中から街中まで神出鬼没に現れてはオラリオ中の名だたる冒険者達に戦いを挑み、その全てを打ち倒し——

四年前にクオンと剣を交えたのを最後に目撃されなくなったという事だけだ。

打ち倒された冒険者の中には、もちろん……そして遺憾ながら僕自身や、「ロキ・ファミリア」の主力陣も含まれている。

それと剣を交え、退けた唯一の存在。それこそがクオンだった。

いや、そうでなくとも――

「オツタルと互角に渡り合った。それだけ見ても分が悪い相手さ」

【おうじや猛者】オツタル。

オラリオ唯一のLv. 7。オラリオ最強の冒険者として名高い武人。

それと真つ向から互角に切り結べる時点で、クオンもまた尋常ならざる実力の持ち主だと言わざるを得ない。

「あく……。あれはなあ……」

アンファイテートルム円形闘技場を貸し切つての立ち合い。

これもまた異例の事ではあった。

何しろクオンはその名こそオラリオに知れ渡っていたとはいえ、実際にはギルドが禁止している賭博闘闘の闘士でしかなかったのだから。

それがギルド公認の元でオツタルと立ち会う。それは異例と言わざるを得ない。

もつとも――

「まあ、悪趣味だとは思ったけどね」

その意図は分かっていた。

要は見せしめだ。

彼に手酷く叩きのめされたいくつかの「ファミリア」がギルドに圧力をかけたのだ。冒険者の地位失墜は、ひいては統括者であるギルドの権威失墜である——と、大体そんなところだろう。

ギルドの事実上のトップであるロイマンを唆すならそんな論法で攻めるのが一番楽だ。彼の拜金主義、権威主義はあまりに有名だった。

いくら粋がったところで冒険者には勝てない——と、立ち合い前に、関係した「ファミリア」の主神達や眷属達は声高に言いまわっていた。

まあ、その迷惑を読み取れた者達の中では、あのオツタルがそんな茶番への参加を承諾した事を驚く声もあつたが……これは驚くところではない。

何しろクオンは生粋の神嫌いだ。僕らが危うく全面戦争になりかけた原因はロキが不用意にちよつかいを出したせいだった。いや、流石にロキだけのせいとは言わないが、大きな理由の一つなのは本神だつて否定しないだろう。

他にも蛇蝎の如く嫌われている神は何柱なんにんかいるが……その中の一柱ひとりが神フレイヤだ。

あの売女が——なんて、クオンが吐き捨てているのを僕も聞いた事がある。僕より

ずっと付き合いが深いラウルなんてその度に生きた気がしないらしい。流石にリヴェリア同じ女性の前ではそういう言葉は使わないようだ。

ともあれ。それがオツタルの耳に入れば、それはもう全面戦争待ったなしだろう。

実際、「フレイヤ・ファミリア」全体に全面戦争を仕掛ける機運が高まっていたとも聞
く。

それを考えればあれは『一騎打ち』形式の『戦争遊戯』ウォーゲームだったと言っているのかもしれない。

オラリオ最強の冒険者を引つ張り出した時点で、各「ファミリア」は全てが自分達の
思惑通りに進む事を疑わなかった。

これで生意気なLv. 0を公開処刑できる、と。

だが――

「結果は最悪やったな。思惑は丸潰れくらいやつたらまだ笑い話で済むやろけど、こ
らもう完つ壁に逆効果や。さすがのうちも顔中引きつりまくって愛想笑いすらできへん」
「まったくだね」

クオンはオツタルと真つ向から斬り合い、互角に渡り合っ
て見せた。その時点で、思惑はほぼ完全に破綻したと言える。

だが、それだけではなかった。

突如として乱入してきた【古王】^{スルト}を退けて見せたのだ。

これはオラリオで彼だけが成し遂げた偉業だ。つまり、彼はある意味においてオツタルを上回ったとも言える。

その時から、クオンはオラリオ中の冒険者にとって共通の『悪夢』となった。

冒険者にとっては己の矜持を踏み躪る厄災であり、神にとってはその『恩恵』を嘲笑う背信者である。

この『神時代』そのものを否定し、嘲笑する『灰色の悪夢』^{アッシュユオラ、シンダー}。それこそがクオンを示すもう一つの二つ名だった。

「まさに『悪夢』再び、いうところやな」

「いや、『悪夢』は終わってないよ」

ロキの言葉を否定する。

（『後継者』を探しに行った、か……）

彼がオラリオを去った理由とされているもの。

ダンジョンの中ではついに聞けなかったが——まったく、これほど馬鹿げた話はない。

彼はオツタルと立ち会ったのだ。そのうえで、その【猛者】^{おっしや}ですら自身の『後継者』たり得ないと判断した。

オラリオの冒険者に見込みはない。それはもはやそう告げられたに等しい。
 (まったく、酷い悪夢だ。性質が悪すぎる)

その『噂』を耳にした時から、その『悪夢』は今も続いている。まるで呪いのようだ。
 その『噂』を否定できない。

否定するには——この『悪夢』から抜け出すには、【古王】^{スルト}を討伐するか。もしくは、
 彼が持つ非公式記録である『七〇階層突破』を上回るか。あるいは【猛者】^{おうじや} オツタルを
 圧倒するか。

彼は判断を誤った——そう証明するには……この『悪夢』から抜け出すには、せめて
 そのどれか一つを達成するしかない。

「遠いな、まだ」

『悪夢』の出口まで最も近くてあと一二階層以上。夜明けはまだ遙か遠かった。

2

(ま、今の状態ならこんなものだろうがな)

拠点の地下室で——正しくはそこに設置した篝火の前で、声にせず呻いた。

篝火の熱が身体中に広がり、傷と消耗を癒し——さらにはエスト瓶と灰瓶を満たす。

その感覚に身を委ねながら、毒づいた。

「さて、偶然か。それとも必然なのか……」

何であれ、最下層への道は、思つた以上に険しくなっている。少なくとも、六〇階層辺りからこうして篝火に逃げ帰ってくる羽目になる程度には。

嘆息と共に右手にある『螺旋剣の破片』をソウルに取り込み、立ち上がる。

（気は進まないが、あの爺さんのところに顔を出すか）

そろそろ腹を括つて——せめてその準備くらいは始めてもらった方が良さそうだ。

呻く頃には、あらゆる傷と消耗が完全に癒えていた。

それを確かめてから、篝火を後にする。

（自分の家に篝火か。俺も偉くなつたものだ）

唯一の篝火がある場所。そこは、他ならぬ拠点の地下室だつた。

篝火の確保は、三年間の放浪における成果の一つだ。とにかくエスト瓶と灰瓶の補給ができるようになったのがあるがたい。

それに、こうして寄る辺があるだけで安心できるといふものだ。

拠点——館を出ると、辺りはすっかり日が沈んでいた。

魔石灯が広く普及したオラリオにおいて、ある意味一番賑やかな時間帯だと言えよう。

今日の稼ぎを終えた冒険者達が至る所で命の対価を酒に——あるいは女に変えてい

る。景気のいい笑い声と、客引きを行う看板娘たちの声。酔っ払い同士の罵声。時に殴り合う音。そういった類のものが雑多に入り混じっている。

(まずはギルドに行くか……)

一杯ひっかけたらそのまま帰って寝たくなる。気は進まないが、まずは挨拶しに行くのが優先だ。ため息をつき、気だるい気分ですぐを歩く。

挨拶はともかく、魔石やら何やらを換金しなければならぬ。市場価値での買取になるが、バベルかギルド本部にある公式換金所を利用するのが一番楽であり、安全だった。(何故か俺は方々の「ファミリア」から目の敵にされてるからな)

確かにいくつかの派閥と揉め事を起こしたのは事実だが。

しかし、基本的に身に振る火の粉を払っただけで、恨まれる筋合いはない。そもそも、そこまで数が多い訳でもなかった。当事者どもならまだしも、無関係の連中にまで睨まれるのはどうにも納得しがたい。

と、それはともかく。

オラリオは中央に立つ白亜の巨塔——ダンジョンの入り口たる『バベル』を中心に、円形に広がっている。そして、それを等分するように八本の大通り——メインストリートが通っていた。簡単に言えば八等分されたパンケーキのような街だ。

そして、そのメインストリートを中心に、北を起点としてそれぞれ第一地区から第八

地区と呼ばれている。

俺が拠点を構えるのは第四地区——つまり、南東のメインストリート周辺。爺さん達がいるのは第八地区。北西のメインストリート周辺だ。

まあ、周辺と言うにはいくらか範囲が広すぎる気がしてならないが、住んでいる当事者たちが納得している以上、俺がとやかく言うのは筋違いというものだろう。ともあれ。

第八地区に行くなら一度中央広場に出るか、第五、第六、第七地区を経由していくかの二者択一だ。距離を考えれば前者の方が圧倒的に近いが……

(まあ、それなりに良好な関係のところもあるからな。それで良しとしておくか)

ため息をついてから、それなりに友好的な関係を保っていたはずの「ファミリア」の本拠地に足を運ぶことにした。……のだが。

「あれ？」

オラリオ第七地区の一角。

その「ファミリア」の本拠地があった場所には別の建物が建っていた。

「記憶違いか？ それとも引越したか？」

オラリオで目覚めてからまだ一度しか『死んで』いない。ならば、この街での記憶を失う理由はなかった。

つまり、記憶違いはほぼあり得ない。……いや、必ずしも古い記憶から失われるとは限らないのも事実だが。

だが、記憶を失ったわけではないのはほぼ間違いない。何度か足を運んでいるため、この辺りの街並みには覚えがある。となると、やはり後者か。

俺がオラリオを出る前から中堅の「ファミリア」として結構順風満帆だったと記憶している。

荒事上等の探索系派閥ではなく、冒険者に限らず全ての住人の命綱である医療系派閥だから血腥い派閥間抗争とは基本的に縁がない。加えて極めて珍しい事に主神が人格者のため、逆恨み以外の恨みを買う事はほぼあり得ない。三年の間に規模が拡大し、人手が増えたか何かしてもっと広い場所に引っ越しでもした——と、そんなところか。

「まあ、いいか」

どうせこれからギルドに顔を出すのだ。そこで転居先を聞けばいい。

(いや、この時間では換金所くらいしか開いていないか?)

なら、換金ごと明日に回してしまおうか。今ある手持ちだけでも歓楽街に顔を出せる程度はある。今夜一晚を乗り切る分には何の問題もない。

だが、ここはすでに第七地区。ここから手ぶらで引き返すのも間の抜けた話だ。

(どうするか……)

何となく決めかね、意味もなく辺りをぶらついていると――

「師匠!」

何やら耳に馴染んだ声がした。

反射的に振り向くと、これまた見慣れた白髪頭と深紅の眼。これで耳でも生えていれば立派な兎ヒョムバニ人だった。

「ベル?」

ベル・クラネル。去年の今頃からおよそ三ヶ月ほど滞在した北の山奥にある小さな村で出会い、申し訳程度とは言え剣の扱い方を教えた少年だった。

もつと言うなら。彼がオラリオに向かったと聞いたからこそ、俺もまたこうしてオラリオに戻ってきたのだ。

「師匠はやめろって。そんな大した事はしていないんだ」

確かに剣の握り方と振り方くらいは教えたが、それだつて精々がチャンバラごっこに毛が生えた程度のものでしかない。

それで師匠と呼ばれてるなんて事を俺の師匠に聞かれたら、盛大に呆れられるに決まっている。

まあ、その三ヶ月の間に急成長して一介の農民の少年から一端の巡礼者――せめて、ロードランの祭祀場で心折れていたあの戦士くらいまで急成長させられたならまだそ

う名乗つてもいいだろうが、実際は凡庸な放浪者程度——不死人になる前の俺自身程度にも育ててやる事はできなかつた。

「まあ、いいか。久しぶりだな、ベル」

「はい！ 師匠……クオンさん！」

俺が彼の故郷を離れてからおおよそ一年ほど。どことなく精悍さが増したようにも見える。

いや、むしろ——

「その様子だどうやら冒険者になったようだな？」

伝わってくるソウルの強さが違う。それに、少しばかり余計なものが混ざっていた。

この感覚は間違いなく冒険者のものだ。

「はい！ 分かりますか？」

「流石にな」

ソウルの気配云々を差し引いても身体つきや動きがこちら寄りになっている。

「それで、どこの【ファミリア】に入団したんだ？」

どうか【フレイヤ・ファミリア】やら【イケロス・ファミリア】やら【ソーマ・ファミリア】なんて名前が出てきませんように。

そこさえ——いや、他にも性質の悪い派閥はいくらでもあるが——避けてくれている

なら、この際「ロキ・ファミリア」でもいい。

他だと、「ミアハ・ファミリア」や「ヘファイストス・ファミリア」辺りは安心だが……この二つは探索系ではなく医療系と鍛冶系の派閥だ。従って、主に求められるのは戦闘技術ではなく、それぞれの領域の専門知識とそれに伴う技術となる。

（探索系なら「ガネーシャ・ファミリア」か……。ああいや、あそこも普通の探索系とは言い難いか）

何かと縁がある「ガネーシャ・ファミリア」は探索系派閥で、所属する上級冒険者の人数だけで論ずればオラリオ最大の派閥と言える。『遠征』の成功率も悪くなく、糸目ロキの小僧キやあの女フレイヤに次ぐ階層まで進出している。が、それ以上にオラリオの治安維持に貢献する「ファミリア」として名高い。

冒険もできて、人に感謝もされる。この少年の『夢』を考慮すればこの「ファミリア」に所属するのが最も無難なはずだ。

「ヘステイア・ファミリア」です」

しかし、ベルが口にしたのは全く違う派閥名だった。

「ヘステイア・ファミリア」……？」

よく知っている——つまり、性質の悪い派閥ではない……と思いたい。何しろ全く聞き覚えの無い名前だった。

(主神の名前はヘスティアか……)

そちらも聞き覚えの無い名前だった。

となると、俺が街を離れていた間に新しく姿を現した神か。

「今のところ僕しかいないんで、名前を知らないのも無理ないと思います。でも、とっても良い神様ですよ。クオンさんもどうですか?」

「あ……。いや、俺は遠慮しておこう」

どのみち『神の恩恵』^{フルナ}など、もはや何の効果もない。

所属する利点は何もなく……連中だつてわざわざ俺を抱き込もうとは思わないだろう。

「だが、いずれ機を見て挨拶くらいはさせてもらおうさ」

まずは身元を調べなくては。のこのこと顔を出して、万が一ベルまで追い出されるような事になれば目も当てられない。

「これからホームに戻るのか?」

「いえ、これから夕ご飯です。ちよつと誘われてるところがありました……」

「ほう? 無事に夢に向かつて進んでいるのか?」

「うえ?! ええと、それは——」

「『師匠! 僕、強くなって美女を右に左に侍らせたいです!』とか、キラツキラした純

粹無垢な目で言われた俺が一体どれだけ返事に困ったことか……」

そして我が身を顧みれば、窘める言葉すらどこを捻つても出てきやしない。もしや、この世とは悲劇なのか？

「そ、そこまで直接的な言い方はしてないですよっ!？」

そうだったか？ 八割方原文通りだったはずだが。

「で、記念すべき第一号は誰なんだ？」

「い、いえ！ だから違いますって！ ただお店の売り込みで……」

「歓楽街へ？ あそこはある意味ダンジョンより物騒だぞ」

あそこは正に狩獵場とでも言うべき場所だ。普通の人間の場合、油断すれば色々と干乾びるまで搾り取られかねない。

「か、歓楽街?! やっぱりオラリオみたい大きな街にはそういうのも本当にあるんですね……じゃなくて!？」

慄いたように呻いてから、ベルは叫んだ。

「ごく普通のお店です！ いえ、行った事はまだないですけど！ 『豊穰の女主人』ってお店で……」

「ああ、あそこか」

有名な店だった。そして、それなりに縁もあつて顔見知りもいる……が、正直なところ

ろ自分から好き好んで近づきたい場所ではない。

「知ってるんですか？」

その内心を悟られないよう、ベルの言葉に頷いて見せる。

「それは有名だからな。飯も酒も美味いし、店員も美女揃いだ」

そして、怖い怖い女主人がいる事でも。

まあ、それはともかく。

実際にいい店だ。朽ちた不死人の舌でも分かるくらい質のいいものを出してよこすのは間違いない。そういう店はオラリオ広しといえど、他にそういくつも知らない。

あえて欠点を言えば、あの女の影がちらつく事だ。……いや、それこそが最大の欠点なのだが。

「そ、そうなんですか。あ、そうだ。クオンさんも一緒にどうですか？」

「馬に蹴られるのはなあ」

ドラングレイグで散々蹴られている。普通の人間なら一生分は蹴られたはずだ。

「だから違いますって!？」

顔を真っ赤にしてベルが叫ぶ。相変わらず素直な奴だ。

「まあ、そうだな。今回はご一緒させてもらおうか。あの店、味はいいが値段もいいから。駆け出し冒険者にとっては特に。ツケも利かないしな」

「う……。それ、本当ですか？」

「ハハハッ。心配するな、今回は俺が財布を持つてやろう」

高めの料金設定だが、ぼったくりではない。品書き通りの値段を払えば問題ない。

三〇〇〇ヴァリス……ああいや、二人なら六〇〇〇ヴァリスもあれば腹を満たすには充分だ。それくらいの手持ちはまだ残っている。

「それで、突然ミノタウロスが現れて——」

店に向いながら、ベルから近況を聞く。

何でも、今日は災難に見舞われたらしい。五階層でミノタウロスに襲われるとは、不運にも程がある。

あの爺さんが祈祷を捧げている今、モンスターが階層間を移動するのは稀だ。いや、正しく言えば、数階層ほど移動するのは別段珍しくない。

だが、ミノタウロスが出現するのは一五階層——ギルドや冒険者が『中層』と呼ぶ領域だ。一方の五階層は『上層』。『中層』のモンスターが『上層』にまで登ってくるというのは現代において基本的にあり得ない。まあ、ダンジョンの中で異常事態が起こるのは日常茶飯事だが……。

(どこの馬鹿の作業だ?)

その異常事態が、本当に偶発的な物とは限らない。

一五階層のモンスターが五階層にいたとすれば、むしろ人為的なものを疑った方がいい。

例えば『怪物進呈』^{バス・パレード}。

危機回避の最終手段として黙認される一方で、悪意を持つて行う輩にも事欠かない。

まあ、駆け出し冒険者を狙つてわざわざ一五階層から連れていくような奴がいたら、そいつの人間性は限界を乗り越し、もはや形容しがたい何かに変化しているに違いないが。

あとは――

(まあ、どっかの馬鹿が取り逃がしたつてところか)

獲物の横取りは禁止が原則である。それとて状況次第だが……明らかに『戦闘中』だと分かる状況で、他所の派閥の団員が下手に手出しすれば確実に面倒な事になる。

その『戦闘中』と言うのが厄介で、交戦だけではなく追撃も含まれる。モンスターの中には石守のように危険を察知して逃げる種類も稀にいる。そういうモンスターに限って希少なアイテムを落とすのも石守と同じだ。従つて、明らかに『追われている』モンスターにも手出しは無用だった。

(それはまた間の抜けた話だな)

猛牛系などと呼ばれるミノタウロスが遁走するか？――と、いう疑問はさておき。

一五階層から五階層まで仕留められなかった冒険者なんてのがいるなら、そいつは相
当な間抜けだ。ミノタウロスは決して素早いモンスターではない。まあ、それでも仕留
めきれずに取り逃がすだけなら別段珍しくもないだろう。何しろ割としぶとい相手だ。

だが、一〇階層の間つかず離れずの距離を保って追いかけてこしたとなると……わ
ざとやっているのではないなら、相当間抜けな光景だったに違いない。目撃した他の冒険
者達もさぞかし反応に困っただろう。

もつとも、巻き込まれた人間には悪夢でしかなかっただろうが。

「そ、それでですね……」

「うん？」

「その、もらった剣をどこかに落としちやつて……」

「ああ、あれか」

村から離れる際に、ショートソードを一本渡してあったのを思い出す。

素振りの練習には充分だし、それなりに手を加えてあるので切れ味も悪くない。

……が、ただそれだけだ。別にそこまで大した代物ではなかった。

「なら、代わりのをやろう」

と、言つても。流石に塊や原盤で強化された武器は希少だ。それらを用いて強化した
ショートソードは流石に持ち合わせがない……はずだった。

所持している武器や防具の目録を作ろうと思いはじめて幾星霜。未だに進捗は芳しくない……というか、そもそも作業を開始してすらいなかった。

「性能は下がるが、そこは大目に見てくれ」

「い、いえ！ いただけません！ あの剣だつて凄かったのに……！」

「そうは言つても丸腰で潜る訳にはいかないだろう？」

「そ、それはそうですけど……」

「まあ、何なら『貸して』やる。あとで好きなものを選ぶといい」

ここで武器を広げては露天商かと思われる。

露天商にまで睨まれるのは流石に避けたいところだ。物資補給ができなくなるのは流石に厄介すぎる。

「それより、あの店のいったい誰に誘われたんだ？」

アーニヤ辺りが強引に押し切った——と、言つたところか。何かしらきつかけがあればそれくらいやりかねない。

「ええと、シルさんです。シル・フローヴァさん」

それはまた反応に困る名前が出てきたものだ。

いや、あの店で反応に困らないで済むのは実際一人しかいないが、彼女に賭けるにはあまりに『大穴』過ぎた。実際、こうして外れた訳だが。

「ああ、あの子か」

一方であのちやつかり娘は確かに『本命』というべき存在だ。

常連客を適当に捕まえて、看板娘を一人選べと言えば、結構な確率であの子が選ばれるのではないだろうか。それくらい基本的には善良で人当たりのいい店員でもある。

と、ここまでなら別に何ら問題はないのだが。

（あの子はなあ……）

どうにも裏がありそうというか……少なくとも、その周辺にあの女の影がちらついている。

いや、あの店自体、元——とも言い難い——眷属が切り盛りしているのだから、やむを得ないと言えばその通りだが……それとは別口だ。

下手に探りを入れると面倒な事になりそうなので放置していたが、そろそろ本腰を入れるべき時期が来たのだろうか。

（ま、隠し子だつて言われたところで驚きもしないがな）

むしろ他に何人いるかの方が気になる。

「念のため言っておくが、あの子はその実かなり手強いぞ？」

でなければ、あの店の店員なんて務まりはしない。

「だから違いますって!？」

ベルの言い訳を笑って聞き流していると――

「……?」

ふいに視線を感じた。

反射的にそれを辿ると、その先には女が立っていた。

紫黒のローブを着こみ、口元にはフェイスベール。異国の占い師か呪い師を思わせる

意匠を纏った美女。

雑踏の片隅。薄暗い路地への入り口に立つには相応しくない。

見覚えのない女だった。

いや――

「!？」

薄暗い闇。仄かに光る水晶と、見慣れた篝火。

その前に座し、来るべき時を待つのは『■■■■■■』として顕在したもう一人の■。

その傍らに待るのが――

「クオンさん？」

ベルの声で、束の間の白昼夢が終わる。もつとも、今はすっかり夜だが。

くだらない冗談を思っていると、その女は路地へと消えていった。

「悪い、ベル。少し用事ができた。先に行っていてくれ。すぐに追いつくから先に食べ

始めてていいぞ」

「え？ あ、ちよつと師匠!？」

ベルの声を背中に聞きながら、その路地へと走る。

探す必要はなかった。すぐ先の横道から女がこちらを窺っている。

(誘われてるだど?)

俺が追っているのを確かめるとすぐに、彼女はその横道に消えていく。

それを追つて横道を進むと、さらに別の路地に女の姿が——と、そんなやり取りを何度か続けてから。

「フフツ。よく追ってきてくださいましたわ」

深まった路地のさらに奥底。街の中にある死角。そこに彼女はいた。

「お前みたいな美人に誘われればな」

「その割には物騒ですわね?」

女が妖しく笑う。

背負ったクレイモアの柄に右手をかけている。左手にはもう盾を装備していた。

記憶にない。『俺』は彼女を知らない。だが、その瞳を知っている。

蛇を思わせるその緑の瞳を。そして——

「どうか武器を下ろしてくださいな、我が君。この時代を築いた偉大なる【闇の王】」

彼女は俺を知っている。

「心配は無用ですわ。どのみち、あなたに抗えるほどの力は私にはありませんもの」
妖艶に微笑みながら、彼女が言う。

「それとも、すっかり取り払って身の潔白を証明した方がいいかしら？」

ローブの胸元を撫でながら、彼女は艶然と笑う。

どうにも怪しいが、他に何者か潜んでいる気配もない。

（敵対の意思はないという事か）

認め、剣から手を離す。まあ、警戒まで解く真似はしないが。

「何の用だ？ 逢引ならもう少し色気のある場所がいいだろう？」

「あなたが望むならいかようにでも。ですが、今日は先約もあつたようなので、ご挨拶だけで失礼いたしますわね」

「それはご親切に」

言葉に多少の険しさがあつたのは否定できない。

「あらあら。やっと戻っていらしたので急ぎご挨拶にと思つたのですけど……逆効果でしたかしら？」

別にそういう訳でもないが。ただ、ダンジョンの中で色々あつたせいで、少しばかり気が立っているのは事実だ。

「戻ってきた、か。耳の早い事だな」

知っているとすれば霞達か「ロキ・ファミリア」の連中だけ。だが、どちらとも繋がりがあろうには思えない。いや、後者ならまだ皆無とまでは言わないが。

「二日千秋の想いで待つていたのですから、当然ですわ」

笑いながら、彼女は見事な拵えの杖を『取り出した』。

（『ソウルの業』だと？）

それはもはや失われた業だ。しかも——

（この詠唱は……）

古い竜の言葉を用いて紡がれる詠唱。

詠唱が完成すると同時、陽炎のように彼女の姿が消えていく。

その魔術の名を「見えない体」。効果はその名の通りだ。

「今日のところはこれで失礼いたしますわね。また近いうちに改めてご挨拶に伺いますわ、我が君」

ただそれだけを告げると、姿どころか気配すら消えた。これは——

（転送？ 一体どこに？）

どこにといふ事はない。他に篝火があるとすればそこは——

「せめて何しに来たかくらい言っ行って行けよな」

どこかへと消えた彼女に向けてぼやく。

まさか本当に挨拶だけという事もないだろうに。

しかし、今さらどうなるものでもない。嘆息してから、俺もその路地を後にした。

…

酒場『豊穰の女主人』。

酒場や食堂が多く軒を連ねる第七地区でも、ひととき大きな造りの酒場である。

ベルに言った通り、酒も食事も店員も——特に店員は色々な意味で——高水準で、その分値段も高い。どちらかと言えば冒険者向けの酒場と言える。

荒くれぞろいの冒険者相手に女ばかりの店がやっていけている時点で、どんな人材が揃っているかが察せられる訳だが……まあ、押しなべて評判のいい名店だ。

連日連夜大入御礼。店の雰囲気は明るい。

店員は美人揃いだが——別に、歓楽街や繁華街にあるそういう店ではなく、ごく真つ当に酒と食事を楽しむための酒場だ。

まあ、そうは言っても男の客の方が多いが、いくつかの理由から安心して飲めると女の客にも評判だった。

……と、言うのは無論四年前の評判だが。

この様子では変わっていないらしい。むしろより盛況になっているようだ。

「いらつしやいませ——うえ?!」

出迎えてくれたのは黒髪の女店員。名前は確カルノアだったか。

他にも見知った顔ばかりだ。が、肝心のベルの姿がない。

(おかしいな?)

もうとつくについていなければおかしいのだが。

「クオンさん、戻っていたんですね」

視線だけで周囲を探っていると、リユーが声をかけて来る。

お堅いエルフの美女に名前を覚えてもらっているとは嬉しい話だ。

「ああ。半月前にな。まあ、それからすぐにダンジョンにこもっていたが」

「なるほど。道理で噂を聞かないはずだ」

「酷いな。それじゃまるで俺が騒ぎの元凶のようじゃないか」

「中心にいる事は多いでしょう。彼女に目をつけられる程には」

ほんの僅かに口元をほころばせる。

「何故だかやたらと絡まれるのさ。ただのLv. 0に絡んで何が楽しいか知らないがな」

リユーの言葉に肩をすくめながら、ひとまずカウンター席に向う。

「よう、ミア。相変わらずいい体してるな」

ドワーフの鏡のように遅く、屈強な——という意味でだが。

「馬鹿なこと言ってるんじゃないよ。相変わらずスカした野郎だね」

それは向こうも織り込み済み。品書きを投げつけて来る。

だが、食い物を注文するのはベルと合流してからでいい。

「ウイスキーをストレートで」

「あいよ」

言うが早いか、肉厚十角の見事なグラスが置かれた。それと、山盛りのナッツも。

口をつけると胃の腑に熱が広がり、香草の香りが立ち込める。

「急にいなくなっただけと思ったら、急に戻ってくるとは相変わらず気まぐれな奴だねえ」

「旅の便りでも出した方が良かったか？」

ナッツを口に放り込みながら笑う。

いや、霞辺りに言えば出せと返されそうだが。

「それで、三年もどこに行ってたんだい？」

「どこと言うか……。まあ、人探しだな。他に調べ物もあったが」

「人探し？ 誰を探してたんだい？」

「さて。ここは格好をつけて『後継者』とでも言っておくかな」

「後継者？ あんたのかい？」

「まあ、そんなところだ」

正しくは俺達の、だ。

かつて火防女が予見した、『闇の時代』に灯るといふ『王たちの残り火』。それを『継ぐ者』を探していた。

「そういう噂なら聞いていたけど……オツタルじゃ不満だったってかい？」

「オツタル？ あいつは論外だ。女の趣味が悪すぎる」

あの男が『玉座』に至つたら元の木阿弥——いや、それよりも性質の悪い事態になる。もしたどり着くなら、それより先に殺す。確実に。俺が持つ総てを費やしてでも、だ。……まあ、そうでないなら別にどうする気もないが。

「そりや奇遇だ。向こうもあんたの事をそう言ってるだろうよ。ふしだらすぎるってね」

「あんなむさい男と両思いでも嬉しくないな」

心から吐き捨ててグラスの残りを呷ると、ミアがボトルを差し出してくる。

「だからって外に探しに行つたのかい？」

「仕方ないだろう。この街にはいないんだ。なら、外に探しに行くしかない」

新しく注がれた酒をグラスの中で回しながら、

「あてでもあつたのかい？」

「噂に聞く『ゼウス・ファミリア』か『ヘラ・ファミリア』の生き残りならあるいは、とは思っていたけどな」

連中がこの街を去ったのは一五年前だと聞く。当時新人だった『冒険者』やその子どもたちならあるいは……と、その程度のものだが。

「見つかったのかい？」

「それがさっぱり。一体どこに雲隠れしたんだか」

見つかったのは片方の主神とその『孫』のみ。

……いや、ある意味狙い通りだったと言えるか。

「それで、改めてここで『後継者』探してことかい？」

「いや。それは違うぞ、ミア」

グラスに口をつけてから、告げる。

「『後継者』なら見つけた。一足先にオラリオに来ている。だから俺も戻ってきたんだ」
珍しい。ミアが目を見開いて絶句している。

「……その割には一人じゃないか？」

「後継者と言つても、俺と同じ選択をするんじゃない意味がない」

それなら、俺自身が今一度『玉座』を目指せばそれで済む話だ。

「可能な限り手助けはするつもりだが、基本的には自力で追い付いてきてもらおうさ」

もつとも、それも時間が許す限りだが。

どうやら事態は俺やあの爺さんが思っているよりも深刻で、差し迫りつつある。

「どんな化物なんだい？ それらしい奴の噂は聞かないけどね」

「それは仕方ない。流石にまだ駆け出しだろうからな」

グラスに口をつけながら、笑って見せる。

実際、あの『火』はまだ吹けば消える程に弱々しい。ここからどれほど燃え上がるのかは分からない。燃え上がったとして、俺達のように自分自身がその炎に焼かれて消えるに留まるかも知れない。だが――

(それを継いで、『新たな時代』を拓く可能性もあるだろう)

未だ因果が蠢き『時代』が定まりきらぬこの『世界』なら。

火でも闇でもない『新たな時代』が訪れる可能性だつてどこかにあるだろう。

「それに、必要なのは必ずしも力じゃない。いやまあ、辿り着いて欲しい場所が場所だからそれなりに強くなつてもらわないと困るのは確かだが」

ダンジョン最下層。

そこに至る道が四年前よりも遥かに過酷になつているのはもはや明らかだった。

「大体、最強だ何だなんて肩書は『ファミリア』の広告に書き込むくらいの役にしか立たないだろう？ そんなものはギルドの査定表にでも書いておけば充分だ」

ダンジョンを進み、この街の基幹産業に用いられる大量の魔石や、ダンジョン由来の各種資源を持ち帰り、この街を潤す。

それに関して言えば——つまり、人の営みの中にあるなら——あの男は申し分ない。

この平和な時代に、死ねば終わりのただの人がよくぞあの域に達したと賞賛もしよう。

だが——

「ただの冒険者に用はないのさ」

求めているのは冒険者でない。それでは足りない。

『ええ。そうですとも、我が君』

この『時代』の『最強』程度では到底抗い切れない——かつて神々ですら抗えなかった『■■■』が、すでにこの地の底には蠢いている。

入り混じる『時代』の因果。

その隙間から抜け出し、己の性である■■■に命じられるがままに。

まだ抗えよう。まだあの■■■は消えはしない。だが、このまま奴が力を増すなら、残された時は決して長くはない。

その刹那。『闇ひとの時代』を終わらせようとする脅威を退ける『■■■■■■■■』の姿を幻

視した。

「それはそうと、ミア——」

柄にもなく酔いでも回ったか。束の間、鈍い頭痛に似た眩暈を覚えた。

与太話は打ち切つて、本題に入る——

「黙つて聞いてりや言つてくれるじゃねえか……」

前に、酔つ払いが絡んできた。

「実は人と待ち合わせをしてるんだが……」

まあ、酔つ払いは放つておくに限る。

しばらく放つておけば、またふらふらとどこかへ行くだろう。酔つ払いとはそういう

ものだ。

「はあ？ あんたの女なら来てないよ」

それはいったい誰を指しているのか——いや、やめておこう。

藪蛇すぎる。突いてもないのにあの息の臭い蛇どもが出てきかねない。

「いや、そうじゃなくてだな——」

「無視してんじやねえぞクオン!!」

酔つ払いが拳を放つ——前に、その拳を押しさえつける。

充分に威力が乗る前なら座つたままでも造作もない。それより——

「俺の名前つてのはこんな駆け出しにも知れ渡ってるのか？」

シァンスローフ

犬人——いや、狼ウエアウルフの方か？——の若造の面を一瞥してから、ミアに問いかける。

心当たりがなかった。……いや、ないはずだが。なかったような気がする。

……しかし、何気に近くのテーブルにリヴェリアがいるので若干不安だ。ひよつとしたら彼女の関係者なのかもしれない。

いや、彼女なら自分のところの酔っ払いが無関係の客に絡むのは良しとしないはずだ。

勝手に爆発する火炎壺

問題 兎揃いで大変かもしれないが、信じているぞ母親ママ。

「あんたの名前は、むしろ忘れたい部類だろうさ。冒険者連中にとっちゃ特にな」

「ほう？ 別に冒険者に知り合いなんてほとんどいないんだがな……」

ああいや、むしろ知り合いの何割かは冒険者が占めているのか？

そういう繋がりで知り合ったわけではないのでどうにも忘れがちだが。

「俺は駆け出しじゃねえ！」

嘆息していると、その新米は抑えたままの拳を強引に突き出そうとしてくる。

座ったまま抗うのは面倒だ。その力を適当に流して軽くいなす。『受け流しパ』の技術リイの応用だ。

「駆け出し新米はみんなそう言うんだ」

自分の力に振り回され、たたらを踏んだ新米に忠告してやる。

「大体、よりによつてこの酒場で酔つて暴れる時点で素人丸出しだぞ坊主。〔ファミリア〕の先輩は教えてくれなかつたのか？」

いや、これも新人に対する試練なのか。新人いびりという奴なのか。酔つて気が大きくなつているところで喉けられたのか。だとしたら、流石に少しばかり同情する。

「だから、いつまでも見下してんじゃねエぞこの灰野郎がア!」

なかなか堂に入った蹴りだった。どうやら筋は悪くないらしい。

椅子から飛びのき、立ち上がる。——待て、ミア。俺まで睨むな。

「くたばりやがれええええええッ!」

すぐ終わらせるから。

降つてきた踵を頭一つ分だけ横に退いて躲し、続く左の上段蹴りを左腕で迎え撃ち—

—そのまま『受け流し』てやる。

盾はないが……酔いのまわつた鈍重な蹴りなら、手甲だけで充分すぎる。

「があ——ッ!」

前のめりに崩れてきたその胴体——鳩尾に拳を埋める。

致命の一撃……と、呼ぶほどの力は込めていない。ちゃんと手加減はしてある。

まあ、同情すると言つた手前だ。

それに、ここで色々と吐き出されでもしたらリユー達も迷惑だろう。

「まったく……。早く酒の飲み方を覚えろよ坊主」

うまい具合に空いていた——いや、そこにいた客が慌てて逃げただけなのだ——椅子に向つて、その新米の身体を軽く押しやる。

背もたれにぶつかり上手いこと座り込むのを見届けてから、席に戻り改めて問いかける。

「女じゃなくて少年なんだ。知り合いの孫だね。ついさつきそこで再会したんだ。何でも冒険者になつたつて言うんで乾杯でもしようかと思つたんだが……」

「……特徴は？」

「白髪で目の赤い兎みたいな少年だよ。まあ、冒険者には見えないかもな。それと、確かにシルに誘われたとか言つていたが……」

そういえば、そのシルの姿も見えないが。

「……そうかい」

そして、この微妙な反応は一体何なのか。

「その坊主なら確かに来たよ。出てつちまつただけだね」

「はあ？」

まさかシルと二人で宿屋にでもしけこんだと言うのか。

「酔っ払いにミノタウロスから逃げたのを笑われてね。馬鹿なもんさ。冒険者なんざ最後まで二本の足で立ってた奴が一番なのね」

ミノタウロス。その名前に、何か繋がる感触がした。

「まったくだな。それで。参考までに、その酔っ払いはどんな奴だったんだ？」

別にどうしようとは思わないが。……うん、多分何もしないはず。おそらく。きつと。

「そこで項垂れてるよ」

ため息を吐くミアの視線の先にいたのはきつきの新米だった。

どうやらベルにも絡んでいたらしい。

「駆け出し同士で何やってんだか……」

今の様なら、どうせ似たり寄ったりだろうに。

(いや、だがこの様子だと……)

一〇階層の間、ミノタウロスを取り逃がした大間抜けというのはつまり――

「まあいいさ。あんたがあ坊主の知り合いなら都合だ」

と、言つてミアは何か突きつけて来る。

「うん？」

伝票だった。

パスタと醸造酒^{エール}で、お値段三〇〇ヴァリスと少し。

高いと見るか安いと見るかは人それぞれだろう。

「ツケは利かないよ」

「いや、それは良いんだが」

幸い今の俺にとつてこれくらい痛くもないが——しかし、そういう事なら素直に払うのも何となく癪だ。さて……。

「相変わらずやりたい放題やってくれるやないか」

と、そこで。神の亡者の気配がした。

王を失い、火が潰え、ただ傲慢さだけが残った醜悪な獣の匂い。

人の死すらも娯楽と嗤う忌まわしき亡者ども。

『火の時代』の燃え滓。

「よう、小僧。まだ生きていたのか？」

赤い髪をした糸目の小僧。「ロキ・ファミリア」の首魁。

「うちは小僧やない。女神や」

「ああ、男神として生まれて女神として育てられたんだったか？」

あのグウインドリンと同じだったか。

「生まれも育ちも女や」

「冗談は顔だけにしろよ。女つてのは程度の差はあれ、胸が膨らむもんだぜ？」

まあ、もはや成長すでに未来を失ったしない神々には無縁の話だが。

「本気で潰したるか？」

その言葉に思わず笑い声を上げていた。

「四年前、這いつくばって命乞いした連中が言うにすれば面白い冗談だな」

「デタラメ言うなや!？」

まあ、確かにそれは嘘だが。

実際のところ、あの一件を仲裁したのはこの小僧ではなくリヴェリアだ。

無論、這いつくばって命乞いしたわけではない。文字通りに仲裁しただけだ。

(ああ、思い出した)

そこでようやく思い出した。さっきの新米——いや、

「いつまでも見下してんじやねえつつてんだろうがあああああア！」

今飛びかかってきている小僧は、あの時も真つ先に絡んできた奴だ。

……まあ、その結果真つ先に倒れた奴でもあるが。

「

やれやれ。相変わらず躰のなつてない犬だ。いや、飼い主に似ただけか。

ソウルから取り出した『それ』でまずはその鼻面を一撃。

動きを止めたところで、さらに数回ほど振るう。

「て、めえ……?!」

「少しは男前になつたな、小僧」

まだ倒れなかった。少し加減が過ぎたか。

「ふぎげ——」

最後まで聞くつもりもない。大声を上げさせたところで他の客の迷惑だ。

鳩尾に突きを入れて強引に黙らせてから、そのまま上に振り上げる。顎を直撃した衝撃が脳まで揺さぶつたのか、悲鳴もなく昏倒し倒れ込んできたその駄犬をひとまず受け止めてやる。まあ、少しばかり用事があるのだから。

「なんや、それ……?」

そこでようやく糸目の小僧が呻いた。

「見て分らないか?」

ドラングレイグで手に入れた《家政婦のおたま》だ。

「酒場で剣を振り回すほど野蛮じゃないんだ。お前やこの飼い犬と違ってな」

まあ、原盤強化まで済ませ、その気になれば巨人だろうがドラゴンだろうが——いや、神すらも撲殺できるのであろう自慢の一本。鍛冶師として以外はほぼ完全な亡者になり果てていたあのレニガツツすら呆れかえった大業物のおたまではあるのだが。

これに倒されたなら、この狂犬だっていくらでも言い訳がきくだらう。

「そう睨むなよ。今日のところは素直に退くつもりなんだ。どうやら新人の歓迎会を邪魔しちまつたらしいからな」

「新人やて？」

「こいつさ。違うのか？ 軽く『おたま』で叩かれただけで気を失っちゃったんだが」

まあ、その『おたま』は史上最強の『おたま』だが。しかし、手加減したのは事実だ。「まあ、新人いびりも程々にしておけよ。でないと、没落して今度はお前達が寝首を掻かれるぞ。いや、そうなつたところで文句も言えないか？ 昨日の我が身だからな」

「言つてくれるやないか……」

「だから睨むなつて。俺はか弱いL.V. 0だぜ。天下の「ロキ・ファミア」の主神に睨まれたら怖くて震えちまう」

というか、そんなものよりもミアが怖い。ここでこれ以上揉めるのは愚行にすぎる。

否。俺とてつるはし使いの端くれ。スコップマスターの彼女とはいずれ雌雄を決せねばならない——が、今はまだその時ではなかった。

ともあれ。軽く笑い飛ばしてから、その駄犬の身体を放つてやった。

「じゃあな。小僧」

支えきれず崩れ落ちた小僧に告げてから、

「ああ、そうだ」

ふと思い出して、小人に告げた。

「ダンジョンでの言葉だが、訂正しておこう。ひとまずはミノタウロスを満足に倒せるようになるべきだ。……悪かったな、無理を言つて」

それ以上言うべき事はない。背を向けて店の外に向かう。

「クロエ、会計だ」

途中で駄犬から頂いた迷惑料財布をそのまま放つてやった。

だいぶため込んでいるようだが、どうせ犬に小判だ。これも利益還元とやらである。

「釣りはいらんぞ。お前達へのチップだ。もめずにみんなで仲良く分けろよ」

「毎度ありニヤァー！　またのご来店をお待ちしますニヤァー!!」

割と重かった財布を抱きしめ、猫なのに全力で尻尾を振つて見せるクロエに見送られて、俺は酒場を後にした。

(さて――)

充分に酒場から離れたところで。

(ヤバイヤバいだろヤバいつて!?)

もはや気取つてる場合ではない。一も二もなく『パベル』に向かつて走り出す。

何か気づけば外は土砂降りの大雨だが、今さらそんな事は気にもならない。

あの少年はああ見えて負けず嫌いで頑固者だ。何かもう、今頃は絶対にダンジョンに突撃かましているに決まっている。こんなところで死なれては目も当てられないし、寝覚めも悪すぎる。加えて言えば、勢い余ってうっかりあの糸目の小僧どもを殺しかねない。

一階層。いない。

二階層。いない。

三階層。いない。

四階層。いない。

五階層。……いない。

(クソツ、見落としたか?!)

上に戻るべきか。それとも——焦りを押さえ、とある物語を口ずさむ。

その名を「導きの言葉」。迷える者達の微かな望みとなり続けた奇跡。

「

その物語に呼応して、いくつかの『言葉』と『幻影』が浮かび上がる。

その中に、探し人らしき幻影を見つけた。

「……本気か？」

その幻影は六階層へ通じる階段を駆け下りていった。

そこで幻影は途絶える。ただ単に想起される時間が過ぎただけのはずだが……。

「上等。生きていけば文句は言わないさ」

まあ、俺だって駆け出しの頃に飛竜ヘルカイトに喧嘩売って、散々に焼き尽くされた身だ。それに比べれば、この程度の無茶は可愛いものか。

笑い飛ばして、俺も六階層へと駆け下りて行った。

3

何とも座りの悪い空気のまま『黄昏の館』に戻ってから。

「うっがああああああ！　む・か・つ・く・わあああああつー！」

何となく会議室——いや、多目的室と言うべきか——に集まると、ロキが吼えた。

「なあにか弱いLv. 0や！　ホンマにか弱いならきつちりすつきりベートに蹴り殺されとけや!？」

「そうは言っても、あれで実際ギルド公認のLv. 0だからねえ……」

嘆息していると、背後からおおすと声が上がった。

「あ、あの、団長。それって本当に本当なんですか？　だって、あのヒューマンは『深層』に……」

三年前に入団したレフイーヤなら、噂話すらロクに知らなくても無理はない。

ミアではないが、冒険者にとって彼の名はどちらかと言えば忘れてしまいたい部類だ。

「ああ、それは本当だ。ギルドに問い合わせてもいい」

何しろギルドが総力を挙げて調査し——最終的に本人を招聘、神ガネーシャ立ち合いの元でご禁制の『開錠薬』ステイタス・シフまで用いた結果だ。もはや疑う余地はどこにも残されていない。

「彼はギルドも認めた正真正銘のLv. 0だよ」

「で、でもそんな事って……!」

「あり得ない。誰もがそう思ったとも。でも、現実にはあの通りだ」

ギルドが本来極秘事項である「ステイタス」をあそこまで徹底的に調査したこと自体が異例と言える。それほどまでに彼は規格外だった。

「ベートさんは酔ってましたよ!」

その言葉に肩をすくめる。

ベートは今も気絶中。ラウルも酔い潰れてダウンしている。いや、ラウルはただ単にロキのやけ酒に巻き込まれただけなんだけど。

「ベートの件はそれでもいいけど。でも、彼がたった一人で五一階層にたどり着き、新種……最後に現れた『人型』すら単独で撃破した事実は揺るがない」

あの『人型』の撃破は言うに及ばず、五一階層到達ですら偶然や幸運だけで成り立つ事ではない。

(だから厄介なんだ)

出来れば関わりたくはないが、放っておくには危険すぎる。

彼はそういう相手だ。

「で、でも……」

「レフィーヤ。君が認められないのは分かるよ。僕らもそうだった。いや、オラリオ中の冒険者が認められなかった。だから彼は『アッシュ・オブ・シンダー灰色の悪夢』とも呼ばれている」

彼の前では冒険者が持つ名声も栄誉も矜持も全ては灰色に色褪せる——と、まさにそれを^神実演されたわけだ。

「うちらがつけたわけやないのに、そっちもすっかり定着してもうたなあ」

まあ、『灰』言うのはお似合いやけど——と、ロキは嗤う。

そう。それは神々が与えた——いや、^{デナトウス}神会に由来する二つ名ではない。アイズの『戦姫』のように非公式の二つ名だ。

もつとも、知名度で言えばほぼ同じだろう。

何しろ、それこそが冒険者の偽らざる本音なのだから。

「しかし、『後継者』とはのう。あの時の噂は本当じゃったか」

苦々しくもどこか興味深げにガレスが呟いた。

「でも、そんな噂聞かないよね？ ロキは何か知ってる？」

「少なくとも前の神会デナトウスではそんな噂なかったなあ。まあ、あの頃はアレがオラリオに戻ってんかったんやし当然やけど」

まだ飲み足りないのか、厨房から新しく持ってきた酒を呷りながらロキが言った。

「オラリオの外、か。可能性がありそうなのは魔法大国アルテナか……」

「まあ、ラキア王国なら可能性くらいはあるかの」

リヴェリアとガレスが無難な候補を口にして、

「もしくはテルスキュラ……」

呪いの言葉でも呟くように、テイオネが言った。

「まあ、そこはないなあ」

「ふはー、とわざとらしく息をついてから、ロキが言った。

「テルスキュラが滅んだ言う話はまだ聞かん。なら、アレはまだあの『ファミリア』と関わつたらん」

「滅んだ、ですか？ と、ういかテルスキュラって……」

レフィーヤが首を傾げる。その問いかけに頷いてから、ロキは言った。

「ラキアと同じ王国系の派閥や。で、あの『ファミリア』は間違いなくアレと相性最悪や。

出くわせば確実に殺し合いになる。それは間違いない」

「まあ、そうだろうね。何しろ彼は神嫌いだ。いや、憎んでいると言ってもいい」
特に人を狂わせる、唆す、危害を加える類の神は。

話聞くテルスキュラの『国策』は確実に彼の逆鱗に触れるだろう。

いかに女戦士アマソネスの聖地、血と鬪争の国と言われようと、死と殺戮の化身のようなあの男には勝てはしない。

「ならば、ラキアもないか。滅んだという話は聞かん」

「ノー……。どうだろうね」

リヴェリアの言葉に唖る。確かにエルフにとつては怨敵だろうけど……。

「あそこは内政の悪評はあまり聞かないからね」

侵略戦争を繰り返す軍事国家であり、周辺諸国からは恐れられ、あるいは疎まれていく。オラリオも過去に五回ほど侵攻を受けていた。が、一方で国内の不満は聞かない。

元々緑豊かで肥沃な大地を有し、最盛期からは大きく衰退したとはいえ未だに——オラリオを除けば——世界有数の軍事力を誇るため、諸外国に脅かされる事もない。

戦争以外の国交も比較的盛んかつ開放的で、国民が現国王を愚王と笑っても問題ない程度には寛大な統治が敷かれていると聞く。いや、むしろ王国軍内部ですら軽んじられている節があるとも聞いている。

話半分に聞くとして、それでもテルスキュラよりは大らかな治世に違いない。

「国内やと何でか人気らしいいなあ、あの脳筋」

あれか。見栄えがええからか？——と、ロキがぼやく。

「アルテナも、のう。話を聞く限り別の意味で合わなそうな気がするんじやが……」
「魔導士も嫌っている……というか、何か奇妙な偏見を持っている節があるからね」

魔導士なら極悪非道な人体実験くらいしていて当然——と、そんな事を思っている節がある。

エルフ——生来の魔法種族^{マジックユーズ}——に対する偏見にしても、度が過ぎていた。それこそ、ドワーフだってあれほどの偏見は持っていないはずだ。

いや、彼がそこまでエルフを嫌っているとは思えない。実際、僕らの中でラウルと並んで真つ当な関係が続いているのがリヴェリアなのだから。

「それより、団長。これからどうしますか？」

「月並みだけど、手出し無用だね。確かにベートの財布は盗られたけど、それだけで全面戦争っていうのは流石に割に合わない。それに、先に手を出したのはこつちだしね」

下手に手を出せば今度こそそうなる。

それに酔って喧嘩して負けた方が財布を奪われる——なんて事は、冒険者にとつて割と日常茶飯事だ。明らかに悪質だと判断できる場合なら、多少の望みはあるが……。

「ギルドに訴えるのも冴えない話やしなあ」

「まあね」

今回に関して言えば、L v. 5がL v. 0に酔って喧嘩を売った挙句、返り討ちにあって財布を奪われました——と、そうギルドに訴える事になるわけだ。いくらあのクオンが相手でも、流石にそれは躊躇われる。

いや、それ以前の話だ。

「今さらつまらない意地だとは思うけど」

手に負えないから庇護してくれ——と、ギルドにそう訴えるのはもはや冒険者として敗北を認めるに等しい。まして僕らがそれをするのは全ての冒険者に対する背信となる。

例え、四年前に事実として手に負えなかったとしても、だ。

「大派閥いうのも面倒なもんやなあ」

ロキのぼやきに、小さく苦笑を返す。

「それにもう一つ。ダンジョンの中で『泉水』の埋め合わせはひとまずしたけど、お世辞にも充分じゃない。そこに加えて助力の方の『お礼』はしてないからね。その状態で喧嘩を売ったって言うのはどうにも座りが悪い」

う……、とテイオネが呻いた。

しかし、彼女の選択のおかげで団員を不要な危険に晒さずに済んだのは事実だ。

いくら何でも団員の命と派閥の面子を天秤にかける真似はしない。

従って、その判断を咎めるつもりは一切なかった。

……まあ、この状況では頭痛の種なものも確かだが。

「助けてくれた『お礼』として、今回の一件は水に流す。そんなところかな」

言つてから、心からのため息をつく。

「まあ、負け惜しみでしかないのは認めるけどね」

何しろ、この一件、どう言い繕つても酔っぱらつた団員が——顔見知りだとは言え——無関係の客に喧嘩を売つた以上の事にはならない。

いや、どうももう少し面倒な事態になつていそうだが……それでも、クオンとの直接的な関係は変わらない。

その直前に大きな借りを作つていふ事実も含めて、だ。

この流れで全面戦争は絶対にありえない。そして、言うまでもなく普通だったら歯止めがきく。

だが、今回の相手はあのクオンだ。ただそれだけで団員が暴走する可能性は皆無ではない。

そして、そうなつてしまえば確実に甚大が被害が出る。

それを避けるには、道化でも小物でも演じるのが団長の役目だ。
 (ああ、それにしても……)

せめてあの言葉さえなければここまでしなくて済んだのだが。

「あのアホ、余計なデタラメ言いよって……」

這いつくばって命乞いした。そんな事実はない。それは女神フィアナに誓って言う。
 る。

だが、あの場にいた他の冒険者は一体どちらを信じただろうか。

「明日には噂になつとるやろなあ」

その答えが、だ。

【イレギュラー正体不明】クオンが帰還したという噂と共にオラリオを駆け巡っているのは想像に難くない。

そして、それを耳にした団員が殺気立つのも避けられない。

せめてここにいる団員達だけでも意思を統一しておかなければ。

「まあ、噂は噂さ。気にする事はない」

心底嫌そうなロキの姿に、こぼれかけた嘆息を飲み込んで告げる。

「僕らがやるべき事は何も変わらない。さっそく次の遠征準備に移ろう」

放っておくのは危険だが……実際のところ、関わらないのが一番安全でもある。

こちらが何かしない限り、向こうから関わってくる事はほとんどない。

監視と言うか警戒と言うか……その辺りは、リヴェリアカラウルに任せておくのが無難だ。

「そうなのう。今回は不完全燃焼もいいところじゃ」

「ああ。当面の課題はあの新種か。対処法も分かってはいるが……」

『不壊属性』^{デュランダ}か。せめて僕ら主力陣の分だけでも確保したいところだ。となると、当面は金策かな」

「お金は大切やけど、何かパツとせんなあ。もつとこうパツと派手なのがええのに」

ロキのぼやきに、小さく笑いがこぼれた。

「さあ、今日はこれで解散だ。明日からまたよろしく頼むよ」

「覇氣の戻った返事が返ってくる。それに領いて——そこで、解散となった。

……

「そんで？ 何を気にしとるん？」

廊下を歩いていると、ふらふらとロキがついてくる。

まさに千鳥足と言うべき有様だが、頭の冴えだけはまだ健在らしい。

『新種』の話はしただろう？」

「武器を溶かす芋虫……いや、『人型』の方やな？」

「ああ。あれを相手に『非情な選択』が必要になるようなら、これ以上進むべきじゃない。彼にはそう言われたよ。……ダンジョンの中では、ね」

今やそれすら訂正された始末だが……まあ、それはそれとして。

（あの程度であれば、余力を持つて討伐できなければならぬ。そうでないなら先はない。そういう事なんだろうけど……）

改めて、あの時の状況を思い描く。

ミノタウロスの時は、確かに慢心があった。

ダンジョンとは異常事態イレギュラーが起こる場所なのだ。ならば、『怪物の宴』モンスター・パーティーが起こった挙句、

一斉に逃げだしたせい——などという言い訳原も意味をなさぬ。

強烈な苦言は謹んで拝聴しておこう。

しかし、あの新種や『人型』の時は違う。全員に慢心はなかったはずだ。

（さて、あの状況で他にどんな手段があった？）

手持ちの武器やアイテムは乏しく、団員の多くが傷を負い疲弊しきっていた。

その状況で武器破壊と広域への攻撃を主体とし、倒したら倒したで自爆する相手を前に、それと単独で迎え撃てるアイズを単独であてがう以外に無事に切り抜けるような選択はあったか？

（いや、違うか）

（いや、違うか）

そもそもそういう状況に追いやられた事自体が失策なのだ。

必要なのは平準的な能力の強化。個々人の「ステイタス」に限らず、連携や命令系統と言ったもの全てを底上げしなければ、余力を持つてあの状況を切り抜ける事はできない。

無論、リヴェリアが言うように装備の充実というのもその一つだ。

(あるいは――)

非情な選択としてではなく、ごく平凡な選択として単独撃破を想定できるだけの力を得ろ。そういう事かもしれないが。

「どちらにしても先は長いと思ってるね」

オラリオでは『後継者』を見つけれなかった――その言葉が重い。

猛者も勇者も彼の前では足りないのだ。

(いや、どうなんだろうね?)

最強とかそういう肩書には興味もなさそうだった。

まあ、だからこそベートが反応した――いや、アイズが普段通りだったなら、彼女も危なかっただろうけど――訳だが。

(そもそも、彼自身が自分の強さをあまり認めてないからね)

ままならない凡人――というのは、謙遜ではない。

おそらく実感。だが、それなら――

「彼がオラリオに来る前の経歴が知りたいところだね」

「急にどうしたん？」

「いや、ふと気になったんだ。あの力をどうやって得たのか」

そして、それでもなお凡庸だと認識するに至ったのか。

「そーやなあ。確かに気にはなる。……けど、自分が気になつとるんはそれだけやないやろ？」

やはり酔っていたところで神の眼は欺けないか。

「ああ」

四年前――いや、正しくは五年前か。彼は突如としてオラリオに現れた。

だが、それ以前の経歴は一切不明だ。そもそもオラリオへ『訪れた』記録すらない。

まさに忽然と現れ、そして去り、また戻ってきた。

「そもそも、彼は何を求めてオラリオに来たんだろうね？」

望めば地位も名声も思うまま手に入るはず。

世界の中心と謳われるこのオラリオの頂点に君臨するすら可能だろう。

(彼ほどの力があれば、僕の願ねがいはすでに叶っているかもしれない)

苛立ちを通り越し、切望にも似た感情が胸を焦がす。

ベートではないが、それらしく振舞ってくれば、このまま素直に嫉妬するなり敬意や畏怖を抱くなりできるだろう。

だというのに、彼の立ち振る舞いはそれすら許さない。

彼に凡庸と名乗られては立つ瀬がない。それに憧れるなど、自らの矜持勇者たる名の否定でしかない。

(理不尽な話だ)

名声を渴望する僕と違い、クオンはそんなものにはほとんど興味を示していない。

色々と思う事はあるが——最後に残るのは、結局その疑問だ。

一体何を求める？ 何を欲している？ 何を願う？

(ギルドとの密約か……)

そういう噂はある。だが、一体それは何なのか。

あのクオンを従わせるほどの対価をギルドは用意できるのか？

(分からないな)

まるで勝手が違う。オラリオの常識が通じない。

だから持て余している。駆け引きすら成立しない。

(まったく、正体不明イレギュラーとはよく言ったものだね)

今分かっているのは、おそらくはこの先も頭痛の種になり続けるだろうという事だけ

だった。

4

それはきつと、英雄譚の一節にすらならない出来事だったんだと思う。

「ひよつとして助けが必要か？」

あまりに頼りない木の柵越しに、武器ともいえない農具を握り締めてコボルトの大群と睨み合う僕らに、ふらりと現れたその人はそう問いかけてきたのだ。

今にして思えばあんまりな質問だった。『神の恩恵』^{ファールナ}を持たない僕らにとってはまさに決死の状況だったのだから。

「そうか。それもそうだな」

見て分らないのか?!——半ば怒鳴り返す様に頷く村の皆に、その人は小さく肩をすくめて見せた。

それで、僕らの村は救われた。英雄譚の舞台にある生贄を求められる村のように。

いや、それよりもあつさり。

何しろ、相手は伝説の怪物なんかではなかったのだから。

「数だけだったな」

雷を放ち、炎を操り、その剣ですべてを斬り倒してから。

いや、その数が一番怖いが——と、その人は小さなため息をこぼした。

あつけないものだった。英雄譚の一節にもなりはしない。

ああ。でも、いつか。いつか、僕もあんな英雄に——

「よせよせ。俺は英雄なんて御大層なものじゃない」

蜂蜜を求めて入った森の中で一緒に熊に追い回されたり（いや、かなり洒落になつてないけど）沢で釣りしてたら水棲モンスターが釣れて酷い目にあつたり（これだつて立派な命の危機だった）しながら一緒に過ごしたせいで、最初に抱いていた憧れはどこかに溶けて消えてしまったけど……。

ああ、最初からあの人はそう言つて笑つていたつけ。

「——」
うつすらと目を開く。

見覚えのない天井だった。村の家でもないし、神様の教会でもない。

そして、ダンジョンでも。

（あれ？ 僕は……）

ダンジョンにいたはずだ。

ウオーシャドワウの群れと対峙して、それで——

（……）

広く上等な寝台。傍らの床頭台には光を押しえられた魔石灯が一つ。いや、それは常夜灯の類なのか。

天井にも大型の魔石灯が設置されている。

薄闇に慣れた目には他にもいくつかの家具の影が見えた。

神様の教会よりもずいぶん立派な部屋だった。どう見てもダンジョンには見えない。

「起きたか」

そこで耳に馴染んだ声があった。

視線を動かすと、近くの椅子に人影が座っていた。

「師匠!？」

武装を解き、楽な格好をしているけど間違いない。

反射的に跳ね起きて——その直後、体中が不満の声を上げた。

倒れ込みそうになるのを必死に自制しながら、慌てて傷の具合を確かめて——

「あれ?」

ない。傷は一つもなかった。いや、そもそも服が変わっている。

質素なシャツは僕の身体には少し大きい。師匠——クオンさんのものだろう。

「傷なら治してある。まあ、奇跡による回復に慣れてないと痛みだけが残る事があるらしいが……。なに、すぐに消えるさ」

治っている。その自覚が行き渡ると同時、痛みは急激に薄らいでいった。

「だが、疲労まで癒せない。もう少し寝ている」

痛みが消えれば、鉛のような疲労だけが残った。

落下するように寝台上に倒れ込む。

「あの、僕は一体……？ それにここは？」

「ここは俺の家だ。六階層で行き倒れているところを拾ってきた」

「そう、ですか……」

自棄になってダンジョンに向って、結局この有様らしい。

情けない。

「ま、生きてるだけで上等だ。ダンジョンで死ぬのは誰でもできるからな。何があつても生還できるつてのはそれだけで得難い力だぞ？」

それを見透かしたように、師匠は言った。

「でも、僕は……」

もつと。もつと強くなりたい。あの人の隣にいられるように。

「まあ、夜明けまではまだもう少しある。今はゆっくり寝ている」

夜明け。カーテンの隙間から見える外はまだ黎明前だった。

あんなに大雨だったのにもう止んでしまったのか。静かな夜だった。

「あ……！」

体を起こす。痛みは……最初ほどじゃない。疲労は変わらず。だけど――

「帰らないと！ 神様が……」

心配してる――と、言うより先に身体が崩れた。

「それなら無茶は程々にな」

床に転げ落ちる前に、師匠が受け止めてくれた。

「まあ、俺が言えた義理じゃないがな。俺も駆け出しの頃はしなくていい無茶して散々死ん……いや、返り討ちにあつて師匠達に呆れられたもんだ」

「師匠の師匠？」

そう言えば時々口に使っていた。

「そういえば、どんな人なんですか？」

「いい女さ」

あつさりとした返事だった。

ああ、そういえば……。お祖父ちゃんと男の浪漫について盛り上がっていたっけ。

そういう意味でも『英雄』らしい人だった。

「それで、お前のホームはどこなんだ？」

「え？」

「どうせ宥めても帰るだろう？　この頑固者め」

すっかり見透かされてる。

「第七地区の——」

観念してから簡単に説明すると、師匠はあっさりと頷いた。

「大体分かった。連れてってやるからしばらく寝てろ」

いつもの『スキル』で一瞬にして見慣れた黒衣に着替えると、そのまま器用に僕を背負う。

久しぶりだった。

村の外で冒険の訓練と称しては森に踏み込み、師匠と一緒にあれこれと馬鹿をして、疲れ果てていた時以来か。

慣れ親しんだ——旅装束だと言うのに恐ろしく上質だと分かる——布地の感触に、再び気が緩んだらしい。

夜明け前の澄んだ空気の中で、再び僕は眠りに落ちていた。

……

(いくらなんでも遅すぎる……！)

色々とあつてへそを曲げ、ベル君を残してバイトの飲み会に行つてからもうすぐ一夜が明ける。

飲み会から帰ってきてても出迎えがなかったことにふてくされてベッドに飛び込んでから今に至るまでベルは帰ってこない。

深夜を超えた頃にはいら立ちはずつかり不安へと変わり、慌てて探しに飛び出したものの、成果はゼロ。

目印の白髪は街のどこにも見当たらなかった。

一縷の希望に賭けて、こうして隠し部屋に戻ってきたもの——やはり、戻ってはいなかった。

(まさかダンジョンに……?)

いや、それはあり得ないはず。

だって、部屋の隅には胸元が少し凹んだプレートが丁寧に置かれたままなのだから。

(なら、何か事件に……)

再び身を焦がすような焦燥に駆られる。

それに突き動かされて、再び教会を飛び出そうとして——

「ベル君?!」

教会の扉があいた。

思わず歓声を上げるもの……入ってきたのは別の誰かだった。

黒の長衣を着こみ、フードを目深く被っている。

その姿はどこか物語に出て来る死の運び手を思わせ、嫌でも不吉な予感を煽る。

「お前がヘステイアか？」

「ふえ?!」

ここオラリオでは神も人に交じって生活している。なので、割とフランクな関係なのも珍しくはなかった。

実際、ボクもバイト先じゃマスコット代わりにされている節がある。

ただ、ここまで愛想の欠片もない声で敬称もなく呼びかけられるとなると流石に珍しかった。

というか、初めての経験かもしれない。

「そ、そうだよ。そういう君はどこ誰だい？」

「クオンだ。生憎と所属している派閥はない」

「クオン……?」

聞き覚えがある名前だった。

ええと——と、しばらく記憶を漁ってから。

「ひよつとしてベル君の師匠君の?!」

「師匠君って……。いや、そもそも師匠ってわけじゃないんだが……」

肩をこけさせながら、その師匠君は言った。

「まあ、いいか。行き倒れを一人届けに来たんだが」

そこで彼が誰かを背負っているのに気づいた。

黒衣の肩口にあるせいで余計に目立つその白髪頭は――

「ベル君!」

間違いなくベル君だった。大声を上げても反応がない。

ゾツとしていると――

「ああいや、生きてるぞ。ついでに言えば傷の手当ても済んでいる」

近くの長椅子にベルを横たえながら彼は言った。

「傷の手当だって?!」

「ああ。行き倒れていたって言っただろう?　ほとんど丸腰でダンジョンの六階層まで

突っ込めばそりゃそうなるさ」

「ダンジョン六階層?!」

L.V. 1――それもまだ半月の冒険者では、十分な準備をしても危険極まりない。

「証拠になるかは知らないが……」

どこからか何かを取り出して放ってくる。

反射的に受け取ると――

「これは、ベル君の……」

ベル君が着ていた服だった。至る所が引き裂かれ襤褸切れ同然。それにまだ完全に乾ききっていない血が染みついている。

いや、それでも——半月の新米冒険者にしては消耗が少なすぎるのではないだろうか。

「詳しく話を聞かせてくれるかい？」

「そうしたいのは山々なんだが、実は俺も詳しくは知らないんだ」

「この頑固者の口を割らせるのは骨だからな——と、肩をすくめた。

それはまあ、その通りだけど。

「いや、実際は見当くらいならついでに聞けるけどな」

「オイ?!」

なんかさつきから違和感を感じる。いつもと何か勝手が違うような——

「まあ、年頃の男に野暮な事は聞くな。どうしても知りたいのなら、本人に直接聞け」

「ぐ……。何と言う正論」

年頃の男——と言うのは無視できない言葉だった。

何しろ、ベル君はお祖父さんから『男のロマン』という名の英才教育を受けている。

あ、ボクにもちよつとだけ事情が見えてきたぞ。

「さてはヴァレン何某のせいだなっ?!」

あの小娘と何かあつたに違いない。

「ヴァレン何某？」

「あ、いや。こつちの話だよ」

危ない危ない。ボクも下手は事は言えない。

いや、彼が話に聞く師匠君ならベル君に悪い事はしないだろうけど、念には念を入れておいて損はない。

それにヴァレン何某への想いなんて説明したくない！

「しかし、本当にベルしかいないんだな？」

「う……」

教会を見渡し、彼は言った。

確かに新人一人というのはあまり褒められたものじゃない。誰かが戦い方を教えてくれる訳でもないし、一緒にダンジョンに潜ってくれるわけでもないのだから。

「これは好都合だ」

咎められるかと思つたけど、むしろ逆だった。

「どうだろう。しばらく俺をここに置かないか？」

「ここにつて、君もボクの『ファミリア』に入つてくれるのかい？」

「あ……。いや、それでもいいが、その場合多分面倒事が天井知らずに増えるぞ？」

「どういう意味だい?」

不吉な言い回しに、思わず半眼になる。

それって、ひよつとして今のベル君の有様にも関係してるんじゃないかい?

「何でか知らないが、割と方々の『ファミリア』連中に目をつけられてるからな。下手に所属すると、とぼつちりが行くはずだ」

「……何したんだい?」

「いや、別に何も後ろめたい事は。ほら、『ガネーシャ・ファミリア』にも知り合いはいるし」

「……それ、君を捕まえたって縁で始まった関係なんだろう?」

「……お前、見た目に寄らず賢いな」

「そうだろうそうだろう。……ってどういう意味だい!?!」

うん。ちよつとこの子とは念入りに話し合わないといけないらしい。

神の力を思い知らせてやろーじゃないか!

「つてなわけで、しばらく世話になるぞ」

「ふみゆう……」

さつくり返り討ちにあいました。

必殺のドロップキックを躲され、逆に何かやたら複雑な関節技を仕掛けられた。

「君、ちよつと神に対する畏敬とか何とか足りないんじゃないか!?」
タツプして、伸びていたところから復活し、叫び返す。

「ンなもん初めからあるか。糞団子ぶつけるぞ」

「なんかもう色々酷いっ!?!」

「この子、ベル君とは正反対だ!?!」

「フンだ。そんなこと言うなら、『神の恩恵』^{ファルナ}も刻んであげないぞ!」

「構わないぞ。どうせ必要ない。というか、おそろく刻めない」

「?」 他の誰かに恩恵を受けているのかい?」

「そういえば魔法を使えるとか何とかベル君は言つてたつけ。

「いいや。ただ単にそういう余計なものを詰める隙間はもうないはずだ」

「?」 よく分からないんだけど……」

「それならそれで構わないさ。なに、今のままでもサポーターの真似事くらいはできる」

「まあ、そりやそうかも知れないけど……」

しばらくベル君のサポーターを担当してくれる。それがクオン君の申し出だった。

まあ、外のモンスターとは言えコボルトの大群を相手に一人で戦えるくらいのはあるみたいだし、今のベル君が行ける範囲でサポーターをする分には問題ないと思うけど。

「本当に大丈夫なんだろうね？」

「心配するなつて。巨人殺しも竜殺しも神ご——いや、まあ、何だ。色々経験済みだ」
「最後言いかけたやつが不吉すぎる!! 一体何をしたんだく!!」

この子、本当に大丈夫なのかな……。神の勤的に非常に危ない気がするんだけど。
(う〜ん……)

でも。その一方で寵の神としての本能が、そこにとても『暖かな火』の気配を——そして、『どこまでも深い闇』にも負けずに燃え上がる『力強い炎』の気配を伝えて来る。

そう。それはまるで天界に伝わる聖火のように——
「う……」

そこで、長椅子に横たわるベル君が小さく唸った。

「ベル君!! 大丈夫かい?」

「神、様……?」

「そうだよベル君! どこか痛むところはないかい?」

「大丈夫ですよ、神様……」

「何が大丈夫なもんか! まったく!」

視界の片隅には、ボロボロで血に染まった服が置いてある。

下手をすれば——いや、下手をしなくて死んでいて不思議ではない。

「ああもう！ 何かしてほしい事はあるかい?! 食べたいものとか!」

この際、多少の無理は押し通そう。最悪へファイストスに頼み込んで――

「神様……」

「うん。何だい、ベル君」

「……僕、強くなりたいです」

それだけ言い残して、ベル君は再び眠りに落ちた。

さつきより心なし穏やかな寝息が聞こえて来る。

「うん、わかったよ。ベル君」

なら、そのためにできることを。

まずは――

「クオン君、だったね」

迷わない。今、ベル君に必要なのは経験であり導き手だ。

ダンジョンの闇の中でも迷わず導いてくれる、そんな存在だった。

「ああ」

「ベル君をお願いするよ」

「ああ。任せておけ。強くなれるかは知らないが、生き残れるようにはしてやれるさ」

多分、この世の誰よりも死に方を知っているからな――と、彼は小さく笑った。

5

ベルが目を覚ましたのは、昼下りを過ぎ、そろそろ夕時に近くなってからだった。

まあ、生者が死にかけたにしては随分と早い回復だと言える。

どうやら神の血とやらもあれでなかなか侮れない代物らしい。

「さて、と……」

とはいえ。流石にまだ本調子には程遠いので、ひとまず反省会という事になった。

三人揃って礼拝堂で適当に座って話し合う。

「当面の問題は武器だな。真つ当な代物が欲しい」

武器も防具もギルドからの支給品。最低限のものしか持っていない。

ひとまず魔術で『修復』しておいたが、元々の鑄鉄が甘いらしく傷みも酷い。

「まあ、俺だって駆け出しの時は折れた直剣とか普通に使ってたけどな」

何なら直剣の柄で殴りました。

だが、楔石の欠片すらないこの時代ではそうも言っていられない。

「で、でも。もらった剣は落としましたし……」

「あの剣の代わり、か……」

気まずそうなベルと、何事か考え込み続けているヘステイアに肩をすくめる。

「武器なんて消耗品だしな。それに、あれは言う程大した代物じゃないんだ。炎派生こそしているが、楔石の大欠片をいくらか刻み込んだだけの代物だ。

悪くはないが、巡礼地を進むにはいくらか心もとない。

「まあ、ひとまずこれを貸しておく」

ソウルから同じようなショートソードを取り出して放つてやる。

派生など一切していないごく平凡な代物だ。精々楔石の欠片がいくらか刻み込んであるだけでしかない。

「いいんですか？」

「それこそ安物だからな。だが、この短刀よりはいくらかマシだ」

もつとも、この短刀ももうしばらくは予備として活躍してもらおう事になるだろうが。

「まあ、換金ついでにバベルに行つてしっかりと買い込むのも悪くはないが……」

確かバベルの五階から八階にはあの女鍛冶師の店があつたはずだ。

「い、いえ!?! 流石にそこまでしてもらおう訳には……!」

「遠慮するな。というか、武器も防具もなしによくもまあ……」

「う……。でも、やつと今使つてる武器とか防具の借金を返したところですし……」

「相変わらずギルドの連中は足元見やがるな」

金蔓ならせめてもう少し大切にしろ。ああいや、下手に崇めると糸目の小僧やあの女

の手下どもみたいになるのか。それはそれで問題だった。

いや、だがせめてもう少しまともな物を支給しろ。いきなり死装束を売りつけるな。

「まあ、まずは本当の意味で初心者用の装備を整えよう。防具だけなら一万ヴァリスもあれば何とでもなるだろう」

「防具だけで一万ヴァリスですか……」

「まあ、この際値段は気にするな。まだ換金してないが、しばらくダンジョンに籠つていたから懐はそれなりに温かいんだ」

「でも、君つて恩恵無しなんだろ？ それならベル君と大差ないんじゃない？」

「さて。それはどうか？」

ベルが五一階層で稼げると言うのなら、俺が教えるような事はもう何も無いはずだが。

だが、まあそれは黙っておく。別に言い触らすような事でもないのだから。

「明日ダンジョンに行く前に適当に覗いてみるか。その辺の武器屋ならそう高いものでも……ああいや——」

ベルの特性は把握しているつもりだ。

それを殺さないためには、防具の選択には慎重であるべきだった。

「軽くて丈夫な鎧か……」

その身軽さを生かすには重甲冑は明らかに不向きだ。が、軽くて丈夫なのは鎧の

理想形の一つである。

そんなもの俺だつて欲しい。

(いや、この黒衣はそうなんだが……)

恩師達が仕立ててくれたこの巡礼衣はその理想を体现している。

黒騎士の鎧の残骸を集めて鑄潰し、黒鉄と混ぜて作った特殊合金を用いアンドレイが打ち上げた軽鎧と、恩師達が纏う黒金糸のローブと同じ製法で作られた長衣からなるこの巡礼衣は、軽さと防御力を両立させている。それに、炎や魔力に対する耐性も。

その後の巡礼でもこれに勝る防具は見つからなかった。

……いや、単純に防御力というなら、《ハベルの鎧》をはじめ、いくらもある。

それでも、これを変える気にはなれなかった。

武器なんて消耗品——と、そう言った矢先になんだが。

(感傷というやつか)

まあ、そういう事もある。

ともあれ。そんなものがその辺で売っていたら誰も苦勞はしない。

(相談してみるかな……)

餅は餅屋。武器は武器屋だ。

幸い手土産もいくらかある事だし、顔を出してみるのもいいだろう。

「まあ、いきなり高望みしても始まらないしな。まずは「ステイタス」と相談するか」
動きを妨げない範囲に収まればひとまずは問題ない。いや、装備の選択はいつだって
そういうものだが。

「そうだね。せっかくだから更新もしちゃおうか?」

「あ、お願いします」

ヘステイアの言葉に、ベルが頷き上着を脱いだ。

そのまま背中をこちらに向ける。

(……そういう方針なのか?)

何故だかベルの背中 of 「ステイタス」はむき出しのままだった。

首を傾げていると、ヘステイアが一滴その背中に血を垂らす。

「お……?」

それでもそれなりに奇跡も学んでいる身だ。

オラリオで——いや、この時代に用いられている簡易体の神聖文字ヒエログリフくらいなら苦も無

く読める。

流石に古代神聖文字——グウィンやその一族に仕えた直属の聖女達が使っていたよ
うな『本物』になると手に負えないが。

何しろ、あれはただ『読む』のにすら『資格』が必要になるような代物だ。

ともあれ。

ベルの背中の「ステイタス」を読み取る程度なら何の問題もない。

ベル・クラネル

L v. 1

力 : H 1 2 0 ↓ G 2 2 1

耐久 : I 4 2 ↓ H 1 0 1

器用 : H 1 3 9 ↓ G 2 3 2

敏捷 : G 2 2 5 ↓ F 3 1 3

魔力 : I 0

《魔法》

【

《スキル》

...

「凄いな、これは」

他にも見るべきところはあるが、まず何より驚くのは熟練度だ。何しろ総合で三四〇以上の上昇が見られる。

あまり詳しくはないが……昔、あの小娘から遠征で連日連夜死ぬほど戦っても総合で

二〇も上がらなかつた、なんて話を聞いた事がある。

ランクの違いを考慮したとして、それでも規格外れな上昇率。いや、規格外れどころの騒ぎではない。飛躍と言う言葉でもあるいは足りない。

話を聞く限り『神の恩恵』^{フアルナ}とやらも死にかければ爆発的に強くなる——なんて便利な代物ではないはずだ。

万が一そうだったら、あの小娘は連日連夜飽きもせず懲りもせず死にかけている。

(あく……。その場合は先にリヴェリアが心労で死ぬな、きつと)

日々血まみれになって帰ってくる小娘と、その姿を見て日々憔悴していくリヴェリア。

あまりに明確に想像できるその地獄絵図を追い払ってからため息を吐いた。

「後ろから刺されても文句は言えないぞ、お前」

それこそあの小娘あたりに。

「ええっ?!」

自覚がなかつたのかベルが悲鳴を上げた。

「つていうか、クオン君。まさか君、神聖文字^{ヒエログリフ}が読めるのかいつ?!」

続けてヘステティアも。

「簡易体なら普通にな。流石に『本物』は辛いが」

慌てた様子でベルの背中を隠すヘスティアに肩をすくめて見せる。

どうせ読めないと高をくくって目の前で更新していたのだから。

「これを簡易体って……。ならその本物つてのに翻訳してみてくれよ」

羊皮紙とペンを突き出しながら、ヘスティアが言った。

「だから苦手だつて言ってるだろう？」

そして融通が利くほど理解している訳ではない。

まあ、力や魔力や敏捷速さという単語なら何とかなるが。

分かる範囲で翻訳しなおすと、ヘスティアが呻いた。

「うわ、これ古字だ?! 今時『天界』でだつて滅多に見かけない代物じゃないか!」

「古字? 何か違うんですか?」

背中を向けたまま肩越しに振り返ったベルが言った。

「うん。『天界』のすつごく年代物の古書やお堅い……。それこそ、場合によっては『読む』ために『資格』が必要になる程お堅い歴史書やら何やらに使われてる代物だよ。結構読書好きなボクだつて読み解くのには苦勞する時があるのに……。こんなの、一体どこで学んだんだい?」

「いや、どいと言おうか……」

頬を搔いてから呻く。

「昔知り合つた聖女様にちよつとな」

何しろ寝物語に『奇跡』の物語を物語るような生粋の聖女様だつた。

「い、今時こんな古字を知つてる信徒なんてそれこそ絶滅種なんじや……。特に勤勉なエルフ君達ですら普通の神聖文字を読み解くのがやつとだつて言うのに」

それは良い事だ。どこぞの禿丸ではないが、絶滅してしまえ、そんなのは。

「でも！ それなら、君自身はどうして欠片も信仰心がないんだいっ!」

「そりやお前らの事をよく知つてるからに決まつてるだろう?」

「くう?! 何ていう圧倒的な説得力……っ!!」

どうやら彼女には自覚があるらしい。

うねうねと触手——もとい、黒髪をうねらせ慄くヘステイアを半眼で見やる。

……まあ、この少女自身はかなり善良な存在のようだが。

「あ、あのー。神様、師匠?」

「あ、ああ。ええと、うん」

咳払いをしてから、ヘステイアは真剣な顔で言つた。

「今日は口頭で『ステイタス』の内容を伝えてもいいかい?」

「え、はい。僕は構いませんけど……」

もつとも、もつたいぶつて告げるほど長い内容でもない。

「と、まあ簡単に言えば凄い勢いで熟練度が伸びてるってわけさ」

他の連中が聞いたら発狂しかねない事を、実にあっさりとはステイアは告げた。

「は、はあ……」

対するベルの反応もいま一つパツとしない。まあ、他に比較すべき相手も知らないだろうから仕方がないと言えば仕方がないのだろうが。

「理由ははつきりしないけど、今の君は成長する速度が恐ろしく早い。言っちゃえば成長期ってやつだ」

なるほど。そういう事になっているのか。

気づかれないよう——いや、気づかないはずもないが——ちらりと視線を送ってくるヘステイアに、そこまでは読み取れなかった振りをして見せる。

「これはボクの個神的な見解だけど、きつと君には冒険者としての素質がある。それに、下地もあつたんじやないかな」

ベルの視線に肩をすくめて見せる。

まあ、覚えの良さ、呑み込みの早さは俺よりよほどいいだろう。

「君はきつと強くなる。そして、君自身もそれを望んでいる」

「……はい」

頷くベルに頷き返し、ヘステイアは続けた。

「ボクはその意思を尊重する。応援も、手伝いも、力だつて貸そう」
だから、と彼女は言った。

「約束して欲しい。今日みたいな無茶はもうしないつて。そう誓つて欲しい」

それは神命ではなく、むしろ見た目通りの少女が発する懇願そのものだった。

「……お願いだから、ボクを一人にしないでおくれ」

『馬鹿弟子が。亡者になつてなるんじゃないぞ』

遠い昔、幾度となく耳にした恩師の声がそれに重なつた。

(なるほど、まともなものもいるじゃないか)

いや……師匠達だつて神の一員と言えるか。何しろ、魔女イザリスの娘達なのだから。

そういう真つ当な神は、このオラリオにもごく僅かに存在する。

行方知れずの——いや、転居先を教わつたが——ミアハだったり、暑苦しい仮面の男だったり、美人の鍛冶師だったり……まあ、どいつも大体一癖あるが、それでもかなりまともな存在だ。そして、どうやらこの少女もその一員のようだった。

(ま、滅びを知らないからだと言われればそれまでだがな)

もしこの時代が終わるとして——それでもあの連中が変わらないかどうかは知れたものではない。だが、

(当たりを引いたな。珍しく幸運が続くじゃないか)

ひとまずベルを任せるに値する女神ではありそうだ。これならあの爺さんにも言い訳ができる。

旅の果てに、もしもベルが俺と同じ選択をしたとしても、だ。

「……はいっ」

ベルが頷いた。

お世辞にも精悍とは言い難いが……嘘偽りのないその笑顔は、ヘステイアに対する信頼を千の言葉よりも雄弁に物語っている。

「無茶はもうしません。頑張つて、必死に強くなっていきますけど、絶対に神様を一人にしません。約束します」

(それは俺にはできなかつたな)

ベルの宣誓に、小さく肩をすくめた。

恩師達はあれからどうしただろうか？

いや、どうやって生きたのだろう。その最期に何を思ったのだろう。

もはや時は過ぎ去り、神ならぬ俺に知る術はない。

恩師達は死に、あの時薪として燃え尽きたはずの俺は今もこうして彷徨っている。

鈍い痛みが消える頃には主従のやり取りも終わつたらしい。

「さて、それじゃ少し身体でも動かしてみるか？」

「そうですね。これからダンジョンに行くのはちよつとあれですし」

無茶はしないって約束したばかりですから——と、ベルははにかんだ。

よしよし。身体の具合を把握できているのは良い事だ。

「まあ、ボクとしては君のお手並み拝見つてところだけどね」

上着を着直したベルと共に廃教会の外に向うと、テテテと軽快な足音と共にヘステイアがついて来た。

「あくまで慣らし運動だぞ？」

それと、今のベルの状態を把握しておきたい。

防具を選ぶうえで参考になる。いや、この成長速度だとすぐにズレてしまいそうだが。

「よし、今日はこれくらいにしておこう」

それから時間にして一刻ほど。軽い運動を終えてから告げた。

「は、はい。ありがとうございます！」

本当に軽い代物だ。今のベルなら軽く汗ばむ程度で済んでいる。

「本ツ当に君は恩恵を刻んでないのかい？」

のだが。入り口に座り込んだままのヘステイアが半眼で呻いた。

「当たり前だ。ギルド公認のLv. 0だぞ」

「むしろギルドがLv. 0だって公認しなきゃいけない時点でなんかおかしいだろ……」

そんな事を俺に言われても困る。連中が勝手に盛り上がっていただけだ。むしろ、最終的に見世物にされた俺は被害者だと言えよう。

「まあ、いいさ。大体具合も分かった」

と言うより、村にいた頃と基本的に変動はない。

素早さと連撃を軸とした技術型。ならばやはり防具は軽鎧を選択すべきか。

(いつそ精霊の護符をベースにしてもいいか?)

とも思ったが、そもそもその恩恵を得られるのが中層以降だった。

上層なら丈夫な革鎧の方が遥かに有益だ。

「あとはいっつかり飯食って寝ちまえ。そうすれば明日には回復してるだろうさ」

「はいっ!」

頷くベルに頷き返してから、

「なら、飯でも買ってくるか。お前は——」

「ついでいきます!?!」

即答だった。

「いや、寝てていいぞ?」

「いえ、行きます!」

今度は即答どころか被せ気味だった。

「ベル君? せっかくだし、クオン君の好意に甘えたつて……」

「ダメです神様っ! 師匠は偏食家なんです! 任せたら激甘とか激辛とかそういう極端な物ばかりになつちやいますよ!」

「よし行こうベル君! ボクもついて行くとも!」

「偏食じゃなくて味覚がほとんど残ってないだけだつて言ってるだろうが……」

呻くが、二人とも聞いちゃいない。

ちなみにだが。味覚については怪我の後遺症によるもの——と、ベルには……いや、

この時代ではそういう言い訳をしている。

例外は事情を知る霞達くらいなものだ。

「いざ今日の飯を求めて!」

ビシツと何故だか夕陽を指さしてヘスティアが号令をかける。

お前はもしや太陽に由来のある神なのか。

太陽の戦士達は俺達不死人にとって心強い味方だが、太陽に關係する神はどちらも洒落にならなかつたのだが。

呻く俺など見向きもせず、その主従は街に繰り出していく。

(まあ、馴染みの店に案内するのが一番楽か)

特に何も言わずとも霞の時と同じく、俺の分だけ味を濃くしてくれるはずだ。

…

それからしばらくして。

食事を終えてベルが早々に眠りについてから。

「さて、ヘスティア。少し俺と話をしようじゃないか」

俺はヘスティアを連れて礼拝堂にいた。

「それは良いけど！ その手に持つてるものは何なんだ？！」

「見ての通り《焼き饅》だが？」

何気にしつかり原盤強化済みだ。これなら神にだって通じるはずだった。

「何でさも当然のように?!」

「ここは礼拝堂だ。礼拝堂と言えば聖職者。聖職者と言えば凄惨な拷問。拷問と言えば

《焼き饅》は入門編だろう？ 何かおかしな事があるか？」

「いやいやいや!! 聖職者イコール拷問ってどうなんだい?!」

「否定できるなら聞くが？」

するのもしられるのも専門だろう。

何なら、自分で自分を鞭打ったりする奴もいるくらいだ。

「……あ、あれ？ ヤだな。なんかこう、不思議と否定できない気がしてきたぞ……？」
分かればよろしい。

「ま、訊きたい事を素直に答えてくれればそれでいい」

「な、何が訊きたいんだい？」

「【情景一途】リアリス・フレイゼ。あれ、お前の仕業か？」

ベルの「ステイタス」で最も気になったのはそのスキルだった。

ビクウ——と、ヘステイアは肩をすくませる。

「にやにやにやにやんのことかな？」

全力で視線をそらし、へたくそな口笛を吹き始めたヘステイアを前に、ただ黙って《
焼き鏝》にソウルを注ぎ込む。

赤熱したそれを見てヘステイアの顔が引きつった。それを見届けてから続ける。

「ベルの成長速度は明らかにあのスキルの効果によるものだ。まあ、それだけならいいんだが、『想いが続く限り効果持続』、さらに『その丈で効果上昇』というのが解せない」

どう考えても、それには相手が必要だ。文言からして、おそらく相手は女。

「まさか『魅了』でもしたか？」

どこぞのアバズレの十八番だ。

「違うって！　むしろそうだったらどれだけ良かったか！」

うっがー！——とでも言いだしそうな勢いでヘスティアが吼えた。

「おのれヴァレン何某!?　ボクの、ボクのベル君に色仕掛けなんて……！」

「ヴァレン何某？」

「何でもミノタウロスに襲われた時に助けてくれたんだって。一目惚れってやつさ。ボクというものがありませんが——」

この二人の関係はともかく——いや、そもそも我が身を振り返れば口出しなんてできるはずもない——として、

「そのヴァレン何某ってのはなんだ？」

嫌な予感——という程でもないが。ともあれ、確認することにした。

「【劍姫】って言われてる化物みたいな冒険者さ」

……まあ、ミノタウロス云々の辺りでほぼ確信していたが。

このだだっ広い街で、よりによってそこを狙い撃ちにする事もないだろうに。

「そうか……。ああいうのが趣味だったか……」

ベルよ。お前の趣味は年上のエルフじゃなかったのか。

いや、確かにリヴェリアに負けない程に綺麗な顔立ちをしているのは認めるが。

「知ってるのかい？」

「知つてると言うか、昔ちよつと殺し合いになりかけた。……いや、あの小娘とじゃなくて保護者連中と」

いや、あの小娘——当時はチビ助だったが——とも散々に斬り合つてはいるが。

しかし、あれはあくまでも『訓練』という事になっている。……最初の一回目は辻斬り以外の何物でもなかったとしても、だ。

無論、言うまでもなく仕掛けられたのは俺の方だ。そのまま返り討ちにはしたが。

それからしばらくして、あの糸目の小僧がちよつかい出してきたせいで——それと、何だか都合よく誤解が積み重なった結果——殺し合い寸前……いや、あの小人とその直属の手下どもとは実際に斬り合っている。

殺し合いにならなかつたのは、その直前に小娘から事情を聞き、その他諸々の事情を精査したりヴェリアが仲裁に入ったからにすぎない。

「君つて本当に一体何者なんだい？」

「ただの放浪者だよ。今も昔もな」

旅から旅への根無し草だ。

呪いの刻印ダークリングが浮かぶ前からそうだった。……もうその頃の記憶などほとんど残つてもないが。

「まあ、俺の事はともかく」

今はベルの事だ。

できればベルの初恋の邪魔などしたくないが……そうになると、下手に関われないうか何というか。リユーかせめてシル辺りだったならこんな悩まなくても済んだのだが。

いや、この際アーニヤカルノア……いつそ、クロエでも良かった。

(まあ、あいつらも懐は深いよな)

それにクロエの特殊性癖も、あるいはベルと噛み合うだろうし。

あとは……ギルドにいるはずのエイナ辺りも年上のエルフのはずだが。

いや、それはさておくとして。

「あのスキルを秘密にしている理由はそれか？」

要するに嫉妬によるものか？——という意味だが。

「む。まあ、それは否定しないけど。確かにボクの口からヴァレン何某への想いがどうこうなんて説明したくもない！」

むくれてからヘステイアは言った。

「でも、それ以前の問題さ。あのスキルは明らかにレアスキル。神なんてそういう特別な単語にアホみたいに弱いんだ。ばれたら絶対ちよっかい出されるに決まってる！」

地団太でも踏むようにしてヘステイアは言った。

「ベル君は嘘なんてつけないし、そもそもボクらに嘘は通じない。だから、いくらベル君が強くなりたいうって言ってもこれだけは教えられない。アホ共の玩具にされちゃたまらないからね！」

まあ、嫉妬もだいぶ混ざってはいるようだが……それはヘステイアの本心らしい。

「なるほど」

純粹にベルのために彼女は沈黙を守っているのだ。

小さく笑う。

ああ、まったく。何故『火の時代』にはこういう神が台頭してこなかったのか。

「ま、黙っておくつてのは賛成だな」

肩をすくめて頷いてやる。懸念は消化できた事だし、そういう理由なら所属している訳でもない俺が主神の方針に逆らう道理もない。

「想いの強さだ想いの丈だつてのは何とも抽象的だが……。まあ、自覚しちまえばそこまでのような気がするし」

「あく……。それも確かに」

「特にあいつ、基本的にはクソ真面目だからな。ハーレム作りたとか大真面目に言い出す癖に」

「……それ、本当に本気だったのかい？」

「ああ。純粹無垢に目をキラツキラ輝かせながら『師匠！ 僕、強くなつて可愛い女の子達とたくさん知り合いになりたいです！』つて言われた時の俺の心境が分かるか？」

我が身を振り返れば居た堪れないにも程がある。

「う……。それは（こ）愁傷さまとしか……」

明かりの落ちた礼拝堂に、俺とヘステイアのため息が零れ落ちた。

6

明けて翌日。

「そら。注文通りに仕上げたぞ。……つと、ベル坊はまだ戻らんか」

まずは手頃な店で簡素なレザーアーマーを購入。加えてグローブとブーツも。

その足で初心者御用達の整備屋である『雛鳥の鉄床』に。整備代に多少色をつけて渡し、予めベルが持っていたプレートを組み合わせてもらった。

その調整を行ってもらっている間、ベルは会計もせずに飛び出した事を『豊穰の女主人』に謝罪に行っている。

いや、実際のところ支払いは俺が代わりに済ませてあるのでそこまで小言は言われな
いとは思うのだが。

「師匠！」

店の片隅で待たせてもらっていると、ベルが戻ってきた。

「よう。良く生きて戻ったな」

「あはは……」

冗談を言うと、ベルは苦笑にも似た笑顔を浮かべる。

「この様子なら——」

「問題なかったらしいな」

「ええ。皆さんに応援してもらいました」

そういうベルの手にはまた弁当箱が。まさか本気でシルが熱を上げているのだろうか。

いや、あの子自身は別に——多分——いい子だとは思うのだが……。

ともあれ、

「ベル坊、具合はどうだ？」

早速調整を終えた革鎧を身に着ける。

「いい感じですよ。思ったより軽いですね」

「まあ、ただの革だからな」

ダンジョンの何階層に出て来るこれこれこういったモンスターの皮をなめして——なんてものではなく、ごく平凡に牛皮をなめし重ね合わせた代物だ。楔石の欠片もない

この時代では正に平凡なものだが……まあ、それでも長年用いられるだけあつて軽さと防御力を兼ね備えた代物ではある。

ひとまず、値段相応には。

「まあ、本格的な物はまた今度だな」

店を後にしてから肩をすくめた。

いや、別にあの店が悪いという訳ではない。

ただ単に、こちらの手持ちが心許なかつただけだ。

……主に昨夜、景気づけだと言つて強行されたヘステイア主催の宴の影響で。

(ついでに餌付けしてしまつた……)

ベルと一緒になつて喜びまくってくれるせいでつい色々と買い込んでしまつた。

何であれ、今日こそは換金を済ませなければならぬだろう。これだから神は恐ろし

い。

「いえ、これでも充分ですよ。今までよりだいぶん頼もしいですし」

「それは単に今までが貧弱すぎただけだ。あれで五階層に行くなんてな……」

「い、いやまあ、あれはちよつと魔がさしたとか何というか……」

もつとも、防具もつけずに六階層に突貫した事を思えば、あの安物だけでも身に着け

ていただけまだマシか。

それでもおそろく周りの冒険者は奇異の眼を向けていただろうが。

そんなやり取りをしていると、バベルの前に辿りついた。

「ところでクオンさん。何でいつもの黒衣じゃないんですか？」

そのままダンジョンを進んでいると、ベルが言った。

「目立つからな」

今の格好は革製のコートやらグローブやら……まあ、ただの放浪者の頃から愛用していた《放浪のマント》一式だった。

一見して年季の入った装備だがその分だけ愛着もあり、実は原盤強化まで済んでいる。上層のモンスターへの攻撃など通じはしない。

武器もそれに合わせてシミターとカイトシールド。

無論、どれも原盤強化が施されているが……見た目は上層に留まる駆け出し冒険者と大差ない。少なくとも、ベルと一緒にいたとしてもそこまで目立ちほしくないはずだ。

まあ、今回は援護に徹するつもりなのでその場についたら武器はクロスボウ——愛用の《アヴェリン》に切り替えるつもりでいる。ボルト代はベル次第だ。

「悪目立ちしても良い事はない。地味にやるさ。サポーターだしな」

俺の立場だが、名目上は専属のサポーターとなる。

先ほどギルドに寄った際にはエイナ——案の定と言うか、ベルは彼女を専属アドバイザー

ザーに選んだらしい——が口元を引きつらせていた。

四年前の新人はすっかり垢抜けて大人の女性に変わりつつある。そして鬼教官になり果てたようだがそれはともかく。

ベルよ。何故エイナで年上のエルフは……いや、こういうのは本人の気持ちが一番優先か。これ以上野暮なことは言うまい。もはや、なるべく邪魔をしないように立ち回るくらいしか俺にできる事はないのだ。

(まあ、そうは言ってもあのリヴェリアの友人の娘だしなあ)

エイナでも多少ならず面倒なことになるかも知れない。

(いや、それにしても……)

友人の娘という話だが……見た目的にはリヴェリアも大差ない。姉妹でも余裕で通じる。

エルフ恐るべし。不死人俺達並みに外見から年齢が判断できない。

(待てよ？ 確かりヴェリアってあの小人やドワーフのおっさんと同期だよな?)
風の噂だが、あの小人は四十路を超えていると聞いた事がある。

つまり同期のリヴェリアも——

「!？」

背筋を圧倒的な悪寒が駆け上った。反射的に武器と盾を構え、辺りを見回す。

「どうしたんですか?」

「い、いや……」

今いるのは六階層の正規ルートから少し外れた場所だ。第一級の冒険者——オラリ才最強と名高い魔導士の彼女がいるような場所ではない。

正規ルートからも外れている以上、通りかかる事すらないはずだった。

(ま、まあ、何だ。女に歳の話なんて振るもんじゃないな)

それはもう、火薬樽が方々に転がる中で炎派生した武器を振り回すに等しい愚行だ。爆死したくなければ、これ以上深く考えるべきではない。

そうでなくともどこにどんな罫があるか分からないのが巡礼地なのだ。わざわざ自分から即死トラップに突っ込む事はない。

「まあ、それはともかくだな」

咳払いしてから仕切り直す。そうこうしているうちにすでに目的地——六階層に到達している。

そして、

「最初の獲物だ。まずはお手並み拝見だな」

都合よくウオーシャドウの群れを見つけた。数は三体。肩慣らしにはちようどいい。

「危なくなったら援護する。いつも通りやってみろ」

「はー！」

新しく貸したショートソードと短刀を構え、ベルが突貫する。

その立ち回りは教えた通りだった。

と、言っても、実際のところ大した事は教えていない。

俺達にとつては最も基本となる立ち回り——つまりは、集団の解体だ。

単独行動が基本となる俺達にとつて、一対多数はただそれだけで致命的な状況となる。故に集団を分断し、各個撃破できるか否か、その立ち回りを体得しているか否かは、不死人不死人がその先生人間性を保てるに残れるかどうかを大きく左右する。

それでも俺達不死人なら少なくとも数十回は学ぶ『機会』もある。が、ベルただの生者はそうはいかない。許される機会いのちは一度きりだ。

さて、そのベルだが。

立ち回りこそまだ危なっかしいが、それでも速さで引つ掻き回しては一対一を繰り返している。程なく最初の一体が剣で斜めに斬り裂かれ、続けて二体目の身体に短刀が突き刺さった。

「やあああああつー！」

深々と刺さった短刀を迷いなく手放し、両手で構えたショートソードを横薙ぎに一閃。

それで最後の一体も灰となる。即座に魔石ではなく短刀を回収するのも好評価だ。

「ふう……。何とかなつた」

周囲から敵の気配が消えたのを確かめてから、ベルが魔石を拾う。

まあ、ウォーシヤドゥは影と言うだけあつてか基本的に死体が残らない。倒せさえすれば魔石の回収は楽なモンスターだった。

捌く手間がない分、余計な隙を生まないのも有難い。ドロップアイテムもこの階層で見ればそこそこの値段になる。何なら先日のベルがやったように即席の武器としてもいい。

稼ぐついでに訓練するにはちよūdい相手と言えよう。

「よしよし。死にかけた甲斐はありそうだな」

三ヶ月で唯一仕込んだと言えるのは『生き残り方』だった。

危険を嗅ぎ分け、それが迫れば咄嗟に身体が動く。まあ、完全に物にならないうちは暴発して自分から崖下に——なんて事もざらにあるが、そこはそれ。流石にモンスターでこそないが、一緒に森の中で熊や猪に散々追い回された甲斐があるというものだ。

(あいつら下手なモンスターより危ないからな)

いくら『外』の生まれとは言え、ゴブリンが野生の熊の張り手をくらつて一撃で死んだのには流石に驚いた。

いや、両者の体格差を加味すれば当然と言えるだろうが。

ちなみに猪も鎧なんて着こんでいない真つ当な野生の猪である。それでも場合によつては『外』のゴブリンを轢き殺す事がある以上、普通の少年には充分な脅威となる。さらに閑話だが。

その熊やら猪はその後で、俺達の……というか、村の糧になつてもらつた。人を襲う事を覚えた獣を野放しにしておくほど悪趣味ではない。

まあ、狩りのついでに訓練した、と言つた方がより現実に近いだろう。

……ある意味では今も同じようなものだが。

「教えがちゃんと物になつてるようで嬉しいよ」

「あはは……。エイナさんに村での訓練の話をしたら驚かれましたけどね」

それはまあ、あのお嬢ちゃんならそうだろうが。

「安全第一つて方針は俺も賛成だ。無茶して死ぬのは誰にでもできるが、そこから生き返れる奴となると、な」

いや、『生き返つてしまう』からこそその悲劇だったとも言えるか。

「死人になつてなるんじゃないぞ。かけた時間が無駄になる」

と、言つてから。肩をすくめて見せる。

「それが俺の師匠の口癖だね。事あるごとに言われたものさ」

正しくは『亡者になんて——』だが。幸い、ベルにはなれと言う方が無理な話だ。

「はい、師匠！」

ベルが頷く頃には新手が現れた。

「さて。安全かつ速やかに堅実に行こうか」

「はい！」

真剣な顔で頷くと同時、ベルが突貫する。

俺も改めて《アヴェリン》を構えるが——まあ、この様子ならまだ出番はないか。

（呆けると自分のために使う羽目になりかねないな）

死角から忍び寄ってきていたウォーシャドウを盾で殴り飛ばし、短剣に切り替え一突きにしながら肩をすくめる。

まあ、ダンジョンは元よりこういう場所だ。

あまり呆けていると、俺自身が足元をすくわれかねない。

「つと、次が来たな」

「うおおおおおっ！」

俺が言うより早く、ベルは咆哮を上げて斬りかかる。

激突。そう呼ぶには少しばかり一方に偏った戦いがそこにあった。

第三節 神の宴

1

「はああああつー！」

早朝の教会前に裂帛の音が響く。

ベル君——ボクの大切な眷属の声だ。冒険者になつてまだ半月。ここしばらく急激な成長が続いているとはいへ、まだLv. 1。でも、その動きは『恩恵』を持たない子供達の比ではない——

「まだ甘いな」

はずなんだけど。

「うわあ——!?!」

迎え撃つくオン君は、ベル君の突進を容易く受け流した。

「——あああ——?!」

完全に無防備になつた背中に向つて突き出された木剣を、ベル君は反射的に地面に倒れ込んで——と言うかほとんど地面に激突するようにして——ギリギリ躲した。

「あああああー！」

そのままゴロゴロ転がって間合いを開く。

この間、ずつと裂帛の声——改め、悲鳴は続いていた。

「ふおうあつ!？」

ようやくベル君が跳ね起きる——より早く、クオン君の木剣が振り下ろされる。

訓練だつて言うのに、割と容赦ない。ぶつちやけ、僕にも分かるくらいの殺気が宿っている。

けど——

「おおっ!？」

思わず歓声を上げていた。

ベル君は片手に持った木剣でそれをギリギリ受け流し——まあ、耐え切れずに弾かれたけど——その隙に、今度こそしっかり立ち上がった。

今さらだけど、ベル君は愛用のショートソードくらいの大きさの木剣と短刀大の木剣を左右に構えてる……ああいや、短刀の方は弾かれたから構えていたと言うべきか。

クオン君は普通の剣と同じくらいの長さの木剣を一本だけ構えている。

「よしよし。だいぶ身体が反応するようになったな」

「いや、師匠の一撃つて本気ですから。木剣のはずなのに当たつたらそのまま斬られそうですし……」

「だから訓練になるんだよ」

「それはそうですけど……」

ベル君が呻く頃には、クオン君が距離を詰めていた。

「うわっ！」

短い悲鳴と共に、木剣同士がぶつかる音が響く。

それと同時に、ベル君が少しだけ後ろに吹き飛ばされた。けど、木剣は手放していない。とつさに両手で構えたおかげだろうか。

（いや、そのベル君を片手の一撃で押し返すクオン君って一体……？）

もし本当にロキのところの眷属ともめたって言うなら、Lv. 5かLv. 6くらいの力がないと命が危ない。逆に言えば、それくらいの力があれば今のベル君を片手で拭き取ばす事だって可能だろう。

（でも、本人はギルド公認のLv. 0だって言うし……）

それが本当なら、それこそ『古代』の英雄達の生き残りだと言われても驚かない。

まあ、そもそも極秘情報の「ステイタス」をギルドがそこまで調査するというのも変な話なんだけど。

（う〜ん……）

気になる事はいくつもある。いや、気になる事しかないと言うべきか。

例えば――

(この劍……)

鞘に入れられたまま傍らに置かれている劍を撫でる。

ベル君がオラリオに来た時から持っていた劍――と、同じような造りの別の劍。紆余曲折在った末にベル君が借りた劍だ。別にクオン君はくれると言っていたけど……。

(どことなくボクらの力を感じる……)

ボク自身は戦いとは直接的には何の縁のない神だ。けど、鍛冶の方は少しだけ知っている。竈……焔の女神という事もあるけど、それとは別に。

天界一の名匠と名高い鍛冶の女神へファイストス。彼女が天界で打った武器をいくつかこの目で見た事がある。まあ、劍の良し悪しなんてさっぱりだけど……この劍は素人のボクから見てもまだ遥かに鈍らだ。いや、それは当然なだけだ。

でも、この劍は彼女が生み出した武器を確かに思い起こさせる。それはつまり、地上においては『伝説の武器』と称された数多の名劍や聖劍の類に連なるという意味だった。

一見する限りどこにでもありそうな平凡なショートソードなのに、だ。

(前の劍もそうだったけどね)

あれも見た目は平凡なショートソードだった。竈の女神の感覚がなければ炎属性効果を秘めているなんて思いもしなかっただろう。

オラリオで買えば一体いくらするか分かったものじゃない。そんなものをポンと気前よくくれるなんて——

(「いや、そもそも……」)

クオン君自身が明らかに異質だった。

そりゃ、ベル君以外の眷属を持たないボクだ。冒険者について詳しいとはとても言えない。

でも——

(あの『スキル』も『魔法』も『神の恩恵』がもたらすものじゃない)

武器や盾をどこかに『格納』する『スキル』も、正しい発音で神聖文字を読み上げ紡がれる聞き覚えの無い『神話』から生じる『魔法』も一切聞いた事がない。

それでも『スキル』の方は、ベル君と同じ『レアスキル』で説明できるかもしれない。

でも、『魔法』の方は——

(「これじゃまるで『神の恩恵』じゃなくて『神の力』そのものを分け与えたみたいじゃないか……」)

いや、それも違うか。どちらかと言えば模倣と言った方がそれに近い。

神々の力を人の身でありながら扱う。

敬虔な信徒が、己の主神が持つ『神話』を自分の魔法として再現する——と、考えれ

ば可能性が出てこない事も無い。けど、

(どう考えたって敬虔な信徒だとは思えないからね！)

むしろこの子は神への信仰心はさっぱり持ち合わせていない。だからこそおかしいのだ。まだ二日目なので昔の話を聞いていないという事もあるけど、これじゃまるつきり

正体不明——

(あれ？ そういえばちよつと前にヘファイストスがそんなようなこと言ってたっけ？)

何でも【イレギュラー正体不明】がどうか。それも割と懐かしそうに。

むむむ——と、唸りながら記憶をひっくり返してみるものの……そもそもそこまで気にもしていなかったたので、それ以上はさっぱり思い出せない。

「さて。今日はこれくらいにおこうか。疲れ切った状態でダンジョンに行くのもなんだからな」

「はい、師匠！」

そうこうしてらうちに、今日の訓練は終わったらしい。

ベル君はタオルで汗を拭い、予め用意してあった水筒から水を呷っている。一方でクオン君は全く平然としていた。やっぱりどう見てもLv. 0には見えない。

「それじゃ神様、行ってきます！」

それからしばらくして。ベル君達は今日も元気にダンジョンへと向かっていった。

……

その日の夕方。

「五〇〇〇ヴァリス?!」

大体いつも通りの時間に戻ってきた二人は、今まで見た事もない大金を抱えていた。

「ななな何があつたんだい?! まさかクオン君、変な事に手を出したんじゃない?!? 具体的には「ガネーシャ・ファミリア」のお世話になりそうな事を?!」

「何で俺のせいなんだ?」

切実な危機感を前に慌てふためくボクを半眼で見やって、クオン君は肩をすくめた。

「今日はちよつと運が良かったんだよ」

「いえ、むしろ悪かつたんじゃない?」

疲れ果てた様子で、今度はベル君が肩を落とす。

「本当に何があつたんだい?!」

『モンスターパーティー怪物の宴』。上層であれだけ湧いて出るのは珍しいな」

「見渡す限りウォーシャドウとか。今度こそ死ぬかと思いましたがよ……」

ミノタウロスの時と違って圧倒的じゃないですけど、現実的で堅実な危機感って言うか——と、ベル君が呻く。

「うわあ……」

いくら冒険者に詳しくないボクでも『怪物の宴』モンスターパーティーくらいは知っている。簡単に言えば、モンスターの大量発生。ダンジョンでよく起こる異常事態イレギュラーの一つだ。ベル君の様子からしてよほど大量に生まれらしい。

「ベル君、よく無事だったねえ……」

「はい……。クオンさんがいなくなつたらさすがにちよつと危なかつたですよ……」

そもそも、今のベル君がウオーシャドウに挑むというのは、それだけで結構ギリギリのはず。そこに加えて大量発生はちよつと洒落になつてない。

「まあ、ベルが結構な数の魔石を砕いちまつたから儲けも減つたがな。全部上手いこと解体できていればもつと稼げていたはずだ」

「いや、それよりも命あつてこそだよ」

無念そうなくオン君を半眼で見やる。

「任せるとは言つたけど……あんまり危険な真似をして欲しくないなあ」

「事故だよ事故。流石に狙つて起こせるものじゃない」

「そりやそうだろうけどさ」

「俺だつて泡食つて飛び出したクチなんだ。まあ、少しばかり『慌てすぎた』らしいが」

「そうなのかい？」

「ああ。三割ほど少なければベル一人で切り抜けただろうさ。流石に一人で全部は倒せなかっただろうし、魔石の量ももう少し減っていたかもしれないが」

うむむ……。やっぱベル君の成長は著しいらしい。おのれヴァレン何某。
いや、そうじゃなくて――

「いや、師匠がいてくれるから安心して飛び込めたっていうのもありますよ」

「それはそれであまり褒められたものでもないんだがなあ……」

いつまでも傍にいるとは限らないんだ――と、クオン君は肩をすくめて見せた。
でも、それは確かに。何しろ、彼は正式にはボクの眷属ではないんだから。

(うん！ 決めた！)

昨日からずっと考えてきた事について決断した。

(ボクだってベル君の力になるんだ！)

見つけるだけ見つけておいたその『お知らせ』を握り締める。

「ベル君、クオン君」

「はい。何ですか、神様？」

「急で悪いんだけど、ボクは今夜……ううん、何日か留守にするよ。構わないかな？」
「えっ？ 何かあったんですか？」

「いや、実は友人のパーティに参加しようと思ってね。久しぶりに皆の顔を見たくなっ

「たんだ」

「まあ、今会いたいのはたった一柱なんだけど。その一柱は毎日忙しくしているから、こういう機会じゃないと会うだけでも一苦労だった。」

「だったら遠慮なく行つてきてください。友達は大切ですから」

笑つて見送つてくれるベル君に、少しの後ろめたさを感じつつ……それと同時に、何が何でもやり遂げるといふ勇気をもろう。

頷いてから、念のため用意してあつたバッグをひつつかみ、教会を後にする。

まずはバイト先に。長期戦になるのは疑いないし、しばらくシフトを代わつてもらわないと。いや、昼間のうちに念のため話はしてあるから最後の許可を取るだけだけど。

（待つてておくれ、ベル君！）

気合充分に、ボクはオラリオの街を走り抜けた。

……

「しかし、友人のパーティねえ」

「ヘスティアが置いていったその『お知らせ』を見やり、小さく唸つた。」

それは『神の宴』の招待状だ。御大層な名前がついているが……まあ、実際はその名の通りオラリオに棲む神どもが集まって騒ぐただの宴会だった。正直、これまで一体何度会場ごと焼き払つてやろうかと思つた事か。

(まあ、流石に今回はな……)

ヘステイアが出向いた事を差し引いても、今回は手出し無用だった。何しろ主催者はあの仮面の男だ。

「そうか。もうそんな時期か」

この時期にあの男が『神の宴』を開くとすると、目的は単なる暇つぶしだけではない。まあ、それにヘステイアが関与しているとも思えないが……。

「どうかしたんですか?」

「いや、気にするな。それより、俺達も少し良い物でも食いに行こうか。まあ、『神の宴』に出るような料理には届かないかもしれないがな」

特にあの仮面の男が用意する物なら、どれをとつても逸品なのは疑いない。

そういうえば台所から密閉容器タッパの類がいくらかなくなっているが……まさかあいつはヘステイアお持ち帰りをしてくるつもりだろうか?

(まあ、それならそれで)

食費も浮くし、冷めて日が経っていたとしても、そこらの屋台で買える物よりは美味いに違いない。……傷んでいなければの話だが。

(その辺りはヘステイアの目利きに期待だな)

まあ、それはそうと。今日の糧を求めて俺達は夜のオラリオへと踏み出していった。

2

友人のパーティー——と、言うのはあながち嘘ではない。

今回『神の宴』を主催する神とも面識はある。というか、無視できない程度には暑苦しい神だった。まあ、下界に降りてきてからはお互いの派閥の規模が違いすぎる事もあつてあまり接点はないんだけど……。

「本日はよく集まってくれた皆の者！ 俺がガネーシャである！ 今回の宴もこれほど多くの者に出席して頂き、ガネーシャ超感激！ お前達愛してるゾウ！」

言葉ごと謎のポーズを決めながら、自前の大声で叫ぶ仮面の神。それがガネーシャだった。変わり者だけど……まあ、悪い神ではない。変わり者だけど。

どれくらい変わり者かと言えば、例えばこの建物。他ならぬ「ガネーシャ・ファミリア」の本拠地であり、オラリオの『観光名所』の一つだった。

うん、確かに目立つし、何とも言えない感情を抱かせる建物だった。

何しろ白亜の壁に囲まれただっ広い敷地の中心に、像の頭をした巨人像がドーンと胡坐をかいている。その大きさは実に三〇M以上。

威風堂々としたその姿は、確かに壮観かもしれない。

今も無数の大型魔石灯に照らされている訳だし。

でも、本当に恐るべきはそれが単なる彫像ではなく建物だという事だ。何を思ったか【ファミリア】の貯金をはたいて建築した巨大施設。それこそがここ『アイアム・ガネーシャ』だった。ちなみに、眷属達からは概ね不評らしい。(そりやそうだろうなあ)

だつて入り口とかよりによつて股間の中心にあるし。

さすがのボクだつてちよつと入るのを躊躇つた程だ。毎日出入りする眷属の心境はまさに泣く泣くといったところなのではないだろうか。

まあ、それはともかく。

「給仕君！ 踏み台を持ってきてくれたまえ、早くー！」

外觀と反して落ち着いた内装の大広間には純白の被覆布に包まれた元卓が並び、その上には色とりどりの料理や、瑞々しい果物が置かれている。

これが大派閥の実力と言わんばかりだ。

いや、当然か。何しろ、オラリオ中の神に招待状を配れるほどの規模を有しているのが【ガネーシャ・ファミリア】なのだから。

「あれ？ ロリ巨乳来てるじゃん」

「つていうか、生きてたんだ？」

「バツカ、あいつはバイト頑張ってたぞ？」

「マジでか?」

「おう。この前、客に頭撫でられてた」

「さすがロリ女神……!」

まわりのアホ共が何か言っているけど、さっくり無視する。

見渡す限りの料理や果物の中で日持ちしそうなものは持参したタッパーに。そうでもないものは自分の口に詰め込む作業が待っているのだ。

何しろ立食形式^{タダメシ}。遠慮する必要なんてどこにもない。

「何やってんのよ、あんた……」

「むぐつ?」

呆れたような声に振り返ると、そこには燃えるような赤い髪をした女神が立っていた。身に着けたドレスも真紅。線が細いながらも鋭角的な顔立ちはその意思の強さを雄弁に現し、耳に煌く黄金のイヤリングは炎のような美貌に力負けしていた。

その美貌と同じくらい目を引くのは顔の右半分を覆う黒布の眼帯。そんな麗人——いや、麗神がそこに立っていた。

「ヘファイストス!」

鍛冶の女神ヘファイストス。ベル君と出会う前——それこそ天界からの付き合いの神友。まさに親友と言える相手で……今日、誰よりも会いたかった相手だった。

ただ――

「あら、ヘスティア。久しぶりね」

その隣には何故だかボクの苦手なフレイヤと――

「おーい！ ファイトん、フレイヤ、ドビチー!!」

フレイヤなんかよりもっと大っ嫌いなロキまで集まってきて何だか散々だったけど。

……

「まあ、ともかく。「ファミリア」結成おめでどう」

紆余曲折在った末にロキとフレイヤを追い払ってから。

会場の隅つこのテーブルにヘファイストスと二柱で陣取ると、彼女はそう言った。

「へへへっ。ありがとう、ヘファイストス!!」

「一時はどうなる事かと思っただけど……。まあ、これで当面は行き倒れる心配はないかしら。」

「当然さ！ 何てったってボクのベル君はとってもいい子なんだから！」

「まあ、あなたの世話を甲斐甲斐しく見てる時点でよくできた子なのは間違いないでしょうけど。でも、まだLv. 1の新人なんですよ？ あなたのところは他に眷属もいないんだし、無理させるんじゃないわよ」

「分かってるって！ とりあえずサポーターをやってくれる子はできまし、しばらくはその子に戦い方も教わるつもりだよ」

「サポーターに戦い方を？ あんた、そんな大派閥と繋がりなんていつ作ったの？」

サポーターに戦い方を教わる。そう言えば、神も子供たちも大体はヘアリストと同じように思うだろう。つまり、大派閥の二軍としてサポーター『役』を務めている冒険者に手ほどきを受ける、と。

そもそもサポーターとはぶっちゃけて言えば荷物持ちだ。中規模以下の「ファミリア」でサポーターをやっているのは未だLv. 1に留まる平凡の冒険者か、もしくは冒険者としての素質に恵まれない専門のサポーターだ。どっちもベル君とそう大きく変わらぬ——とも言いがたい。今のベル君だったらなおさら。

まあ、戦い方を教わるという意味ではまず向かない。けど、大派閥——それこそガネーシャのところとか、さつき出くわした二柱のところとかだと、場合によっては中堅以上の冒険者でもサポーター役を務める事があるらしい。具体的に言うとな『深層』に挑む時なんかは。

あんまり詳しくないけど、ヘアリストが言うには『深層』だと、サポーターでもそれくらいLv. がないと命が危ないどころの騒ぎではなくなるそうだ。

とはいえ、『下層』や『深層』に挑めるような実力者なら、普通の冒険者から見れば文

句なく一人前。戦い方を教わるにしても申し分ない相手となる。

「ううん。無所属だつて。本当の意味で」

とまあ、今回は全く関係ない話なんだけど。

「はあ？ 無所属ならLv. 0でしょ？ 教わる意味あるの……つていうか、種族にもよるけど、サポーターとしても危ないんじゃない？」

「いやあ、ボクも最初はそう思っただけだよ。これがめっちゃくちゃ強い子でね。今日もウォーシヤドウの群れを蹴散らしたんだつて。それに、魔法だつて使えるんだぜ？

エルフじゃないのに」

「んんっ?」

ベル君の怪我はもちろん、傷んだ武器まで直してくれるんだぜ——なんて言うと、ヘアリストスがなんか変な声を上げた。

あ、そうか。鍛冶師のヘアリストスにとっては武器を魔法で直されたら困るのか。あ、でも。やっぱり専門家に手入れしてもらった方がいいとも言つてたよ」

いや、これは言い訳とかじゃなくて本当に。

「自分の大剣……クレイモアつて言つてたかな。それ見てそろそろ研ぎに出すかとか言つてたからね」

「ク、クレイモアですつて……?」

あれ？ おつかしいな。ヘファイストスの顔が微妙に引きつってるんだけど。

何か気に障るようなこと言ったかな？

「あんまり聞きたくないけど……。ヘステイア。試しにその子の名前を言ってみなさい。可能な限り小声で」

言いながら、ヘファイストスは身体を乗り出し、イヤリングに飾られた耳をこちらに向けて来る。

「？ 良いけど……」

ボクも身体を乗り出して、そつと耳打ちする。

「クオン君って言うんだけど……」

あ、あれ？ 何でそんな眩暈を覚えたような顔するのさ？

「その子、いつも軽鎧の上から黒い長衣を着て、竜の紋章が施された盾を持つてる？」

「うん。あれ？ ヘファイストスの知り合いなのかい？」

「まあ、あんまり大きな声では言えないけど、顧客の一人ではあるわね」

変な言い回しだった。ヘファイストスの「ファミリア」はオラリオ最大の鍛冶系派閥だし、顧客は沢山いる。クオン君がその中の一人だったとしても別に驚かないけど……。

(いや、むしろこれはチャンスなのではっ?)

これからするつもり、我ながらちよつと『無茶なお願い』の足掛かりになるかも――

（いやいや！ これ以上クオン君の力を借りてどうする?!）

ボクだつてベル君の力になりたいんだ。これ以上クオン君に頼るのはいけない。

「あんた、あの【イレキョウラ正体不明】をどうやって捕まえたのよ？ しかも、サポーター役をやるなんて……」

なんて葛藤するボクをよそに、ヘファイストスが呻いた。

「有名なのかい？」

「思いつきりね。ギルド公認のLv. 0。そうでありながら、「ロキ・ファミリア」の首脳陣と渡り合い、「フレイヤ・ファミリア」団長オツタルと互角に切り結び、果てはあの【スルト古王】を退けたつていうとびつきりよ。まあ、他にギルドの非公式記録として七〇階層突破したり、ゴロツキ揃いの【ファミリア】をいくつかのしたり……とにかく話題には事欠かないわ」

もしロキやフレイヤ達にその事が知られたら確実に面倒な事になるわよ――と、ヘファイストスが怖い目をして言った。

「ロキのところともめたつてのは本当だつたんだ……」

「もめたつて言うか、危うく全面戦争になるところだつたみたいね。ロキのところとも

フレイヤのところとも」

「フレイヤのところとも?」

「もう気づいているかもしれないけど、彼は神嫌いなよ。特に子供達を唆したり、誑かしたり、狂わせたり、害したりする神はね」

「あー…。なるほど、そりゃフレイヤともダメだね」

何しろフレイヤは美の女神。子供たちなら一目見ただけで骨の髄まで『魅了』^{狂わ}されてしまう。特にフレイヤはその力を使って、他の「ファミリア」から気に入つた団員を引き抜くなんて事もしょっちゅうやっている。場合によっては派閥抗争も厭わないとも。

「そう。ロキの方とは何か誤解とかすれ違いとか色々重なつてたみたいで、まだギリギリのところまで踏みとどまつたけど。フレイヤのところとはすつかりこじれちゃつてオツタルと一騎打ちする羽目になつたつてわけ」

「そりゃあ、クオン君も災難だつたねえ」

「どうかしら。本当に災難だつたのはむしろ【猛者】^{おうじや}……というか、冒険者だつたと思うけどね」

「何でだい?」

「最初に言つたでしょ。彼はね、【猛者】^{おうじや}と互角に切り結んだのよ。ギルドが公認するし

v. 0がオラリオ最強のLv. 7と互角に渡り合っちゃ、他の子供は立つ瀬がないじゃない？ ……まあ、彼にのされた「ファミリア」の連中が腹いせにギルドに圧力をかけたつても立ち合いが実現した理由の一つだし、そういう意味じゃ自業自得なんだけどね」

「何だか陰険だなあ……」

「そりゃ否定しないけど……。まあ、それでも結果だけを見ればどっちが見せしめにされたんだか分からないわね」

嘆息してから、ヘファイストスはワインを一口呷る。

「互角に渡り合うくらいならまだ良かったんだけど、あれじゃね」

「まだ何かあったのかい？」

「あんた、うちにいたくせに本当に知らないの？ ……まあ、いいけど。彼と【おうじや猛者】の立ち合いは決着がつかなかったのよ。乱入があったせいでね」

「それはまた物好きがいたもんだね」

それとも、フレイヤのところの他の子供が見るに見かねて飛び込んだりしたのだろうか。

「物好きが先走ったくらいじゃ問題にならないわよ」

そんなことを考えていると、ヘファイストスが呆れたように言った。

「乱入したのはさつきも言った『古王』^{スルト}。こっちは知ってる？」

「『終炎の王』^{スルト}？ それならちゃんと知ってるよ。天界に伝わる『伝説』の一つじゃないか」

終炎^{しゆうえん}の王。その名をスルト。

「いざ天界を焼き尽くすとも言われている……所謂『終末譚』に記された存在だった。いや、それは間違っちゃないけど……。そっちじゃなくて、五年前にオラリオで暴れまわった謎の怪人よ」

「謎の怪人？ 冒険者じゃなくて？」

「人かどうかすら怪しいわね」

「ヘファイストスが言うにはその古王君は五年前に突如として現れ、有力な冒険者達に片っ端から喧嘩を売っては叩きのめしたらしい。」

「骸骨めいた騎士甲冑と『神ですら抗えない炎』を纏った怪人。まあ、暗黒期に斃れた冒険者や巻き込まれた住人、あるいは神々の怨霊なんて話も出たわね」

まあ、私達は地上で『死んだ』としても天界に送還されるだけだから、怨霊になんてなりようがないんだけど——とヘファイストスは小さく呟く。

そっちはともかくとして、

「ボクらでも抗えないって……そりゃ、そうだろ。だって『神の力』^{アルカナム}はすっかり封印して

るんだし」

ボクなんてそれこそ降りてきてすぐ、よりによって竈の火で火傷したくらいだ。

「いえ、例え天界でも結果は同じはず。私だって火の神よ。それくらい今でも分かるわ」

「……………」

へファイストスの言葉に、思わず息をのんだ。

「ま、そんな炎ものを纏もつてる時点で戦いにすらならないわね。実際、名だたる一級冒険者の

誰もが満足に切り結ぶ事すらままならなかった」

それでついた名前が「古王スルト」ってわけ。誰が最初に呼んだかは知らないけどね——と

へファイストスは肩をすくめて見せた。

「まあ、それが本当ならそうだろうね」

火へファイストスの神が『神の力アルカナム』を用いてなお抗えない炎なんて、それこそ終末譚に出て来る『終

焉の炎』そのものだ。いくら『神の恩恵フアルナ』を得たところで、子供達がどうにかできるも

のではない。

「それで、その古王君が乱入したせいで立ち合いは有耶無耶になったって事かい？」

「立ち合いが有耶無耶になったのは事実だけど、勝敗はある意味明示されたわね」

またしても話が見えない。首を傾げていると、へファイストスはあつさり言った。

「彼はね。『古王スルト』を退けたのよ。その炎に焼かれる事もなくね。勝敗としてこれ以上の

ものはないわよ」

なるほど、それはそうかも——と、生ハムメロンにフォークを刺しながら納得する。

「まあ、ギリギリ面目を保ったのは【猛者】おうじや本人くらいじゃない？ 彼はまだ【古王】スルトと

対峙する前だったはずだから」

「ふうん」

その辺りはあんまり興味もない。何となくベル君が抱いている純粹に強くなりた
いって想いとは違うような気がするし。

「それで、ヘファイストスは何で知り合いなのさ？」

「あんだ、私の仕事忘れてない？」

「あ、なるほど。でも、どういう繋がりなんだい。あの子、【ファミア】に入っていない
んだろ？」

ヘファイストスの【ファミア】は鍛冶系派閥の最大手だ。だから……まあ、ぶっちゃ
けた話、その製品はどれも高額だし、研ぎに出すだけでも結構な額がかかる。だから、お
客さんもそれなり以上に腕の立つ冒険者がほとんどだ。

まあ、それに見劣りしないだけの実力者らしいけど……主神であるヘファイストスと
直接知り合うだけの伝手になるかと言われるとちよつと疑問だった。

「それこそロキとの一件のおかげとしか言いようがないわね。まあ、他の顧客からも話

は聞いてたけど」

「それで？」

「気づいてないの？ 彼の武器はどれも『伝説の武器』私作品並みよ。あんなのを手入れできるのは、オラリオでも私かゴブニユくらいなものだわ」

「う……。やっぱりそうか」

まあ、ベル君にくれた剣も貸してくれた剣も少しとは言えその鱗片が見える訳だし、クオン君自身を使う物がそれ以上でも驚くほどではないのかもしれない。

「でも、なんか不満そうだね？」

珍しい。オラリオの中でも屈指の神格者と言えるヘファイストスだけど、最初は地上の鍛冶師鍛冶に興味を覚えて降りてきたはずだ。そんな武器が地上にあるなら目を輝かせてもおかしくないはずだけど……。

「見ごたえもやりがいもあるけど……。私が選ばれた理由ってのがどうもね」
「どんな理由なんだい？」

「『どうせ神に任せるならせめて美人の方がいい』ですって。失礼しちゃうわ」

職人気質なヘファイストスは鍛冶の腕とは関係ないところで選ばれたのが不満らしい。

「あ……。うん、それは言いそうだね」

神嫌いと言うのを差し引いても。だって、ゴブニュはそれこそ職人気質がそのまま形になった渋い男神だし。

うん、ベル君に英才教育せんのうを施したのはお祖父さんだけじゃなく、クオン君も一枚囃んでいる気がしてきたぞ。

(でも、イメージ的には「ゴブニュ・ファミリア」の武器の方が好きそうだけどなあ)

ボクとしてはヘファイストスのものが一番だと思うけど……まあ、それはともかく。

知名度や派閥規模こそ劣るものの、「ゴブニュ・ファミリア」製の武器の品質は「ヘファイストス・ファミリア」製に勝るとも劣らないと評判だった。そして、その多くが主神と同じく質実剛健、実用性一点張りの武骨で通好みの代物だと聞いている。そのせいかな——あと、多分単純にお値段的な意味でも——主な客層は熟練の冒険者に多いとも。

一方で「ヘファイストス・ファミリア」は優れた実用性はそのままだに、どこことなく芸術品めいた美しさを有しているものが多い。こっちもお値段的な理由で客層とは言い難いけど、駆け出し冒険者達が憧憬の眼差しでショーウィンドウを眺めているというのは珍しくなかった。……実はベル君もその一人なんだけど。

まあ、そうは言っても。

もちろん、必ずしも当てはまるものじゃない。

何となくそういう傾向があるような気がするな、くらいのものだ。

それを踏まえて。そういう差を感じるのがヘフアイストスとゴブニユ女神の違いなのかな？——と、いうのがボクの個神的な感想だった。

で、クオン君はそういう武骨な武器の方が好きそうなイメージがある。剣なんてよく切ればそれでいい、くらいの事は言いそうだし。

「それで、いったい彼をどうやって捕まえたわけ？ もめた派閥も多いけど、勧誘しようとした派閥も多いのよ。まあ、全部袖にされた訳だけど」

「いや、捕まえたって言うか……」

一応言葉を探しては見ただけど、やっぱり他に言いようがない。

「何かね、ベル君の村の救世主みたいなんだ。コボルトの群れから救ってくれたとか言ってたよ」

「まあ、『外』のコボルトなんて相手にもならないでしょうけど……」

「うん。で、それからしばらく一緒に過ごしたらしくてね。一昨日たまたま再会して、そのまましばらく面倒見てくれる事になったんだ」

「一昨日、ね。そりゃまた意味深だわ」

「何でだい？」

「一昨日、酒場でロキのところとまたもめたらしいわよ。詳しくは知らないけど、絡んできたL.V. 5を軽々叩きのめしたとか」

「うわあ……。それは何て言うか……」

ベル君と無関係じゃなさそうな感じ。

「そんなに仲が悪いのかい？」

「ロキとの相性はお世辞にも良いとは言えないわね。まあ、天界にいた頃だったらフレイヤに匹敵するくらい最悪だったでしょうけど」

ロキはあれで随分と丸くなつたらしい。天界にいた頃は退屈しのぎに他の神に殺し合いを仕掛けたりしたとか何とか。

「他の子達とは？ 例えばヴァレン何某とか」

いや、別に味方につけられるかもと思つてないよ。ただ純粹に心配してるだけだよ。

本当だとも。ボクカミサマダモノウソトカツカナイヨ。

「【劍姫】と？ まあ、原因の一つだったらしいけど、今はそんなに悪い関係でもないみたいよ。あの子はうちの顧客じゃないからあまり詳しくは知らないけど、何か一方的に目標にされてるみたいね。彼は辟易してたけど」

「チツ！」

「……あんた、さつきからどうしたの？」

「ほ、他の子とはどうなんだい?!」

「あんまり他所の派閥の内情を教える訳にはいかないんだけど……。まあ、ここで黙つてて何かあつても寝覚めが悪いし、少しだけよ」

そんな前置きをしてから、ヘファイストスは改めて声を潜めて続けた。

「他に良好と言つても良い関係を保っているのは、『九魔姫』……副団長のリヴェリアと、L.V. 4のラウルつて子みたいね。特にラウルつて子とは二人で飲みに行つたり、繁華街で豪遊したりしてみたい。『九魔姫』は……。まあ、面倒事を^{伸裁}払いのけてくれた恩人だつて彼は言つてたけど」

「確か美人なんだよね？」

「まあ、^{ハイエルフ}王族だしね。神々も羨む美貌つてのは伊達じゃないわ」

絶対それが理由だと思ふ。例え言葉になんてしなくても、ヘファイストスも同じ事を思っているのが分かる。

「逆に相性が悪いのは『凶狼』^{ヴァナルガンド}辺りね。あくまで私の予想だけど、一昨日彼に絡んだつていうL.V. 5はこの子なんじゃないかしら」

「何かあつたのかい？」

「この子だけと特別何かあつたつて話は聞かないけど……。まあ、何かとトラブルを起ししやすい子だし、その辺りが影響してるのかもね」

「喧嘩っ早いってやつなのかな？」

「さあ。悪い子じやないってロキは言つてたけどね」

「ふうん。他には？」

「あとはヨルムンガンド【怒蛇】辺りには気を付けておいた方がいいかもね。団長にぞつこんらしくて

……」

「あー…。恋する女の子つてやつだね？」

うん。それは危ない。恋する乙女は神だつて殺しかねない。いや、そういう物語を読んだ事があるだけなんだけど。

「まあ、そんなところよ。肝心の団長は……どうかしらね？ 彼個人がどう思っているかはともかく、派閥としてちよつかいを出す気はないんじゃないかしら」

こう言つちやなんだけど、割に合わないでしょうからね——と、小さく呟く。

「あとは、古参メンバーのエルガルトム【重傑】だけど、彼も表立つて険悪な関係つて訳じやなさそうよ。もちろん、『いずれ一矢報いてやる』くらいの事は思つてるでしょうけど。【アマゾン大切断】もそんな感じみたいね」

むしろそれくらいの気概がなければ、大派閥の第一級冒険者なんてやつてられないわ——と、ヘアリストスは肩をすくめた。

「まあ、こんなところね。知り合いつてだけの理由であんたの眷属に絡むとは思えないけど、一応注意だけはしておきなさい。ロキのところの子供達ならまだそう言う分別も

あるでしょうけど、そうじゃない「ファミリア」も多いわよ」

「うむむ……。そこまで悪い子じゃないと思うんだけどなあ」

いや、ボクらに敬意とかはこれっぽっちも抱いてないけど。ボクに対して凄く奥手なベル君と足して二で割ればちょうどよくなりそうな感じだ。

「そりゃ、否定しないけどね。でなければ流石に剣を研いだりしないわ。でも——」

だいぶ深刻に訳アリよ、彼は——と、ヘファイストスは言った。

「ま、私から言えるのはこんなところね。興味があるならギルドに行くか、ガネーシャにでも聞きなさい」

「ガネーシャに?」

「治安維持を請け負ってる派閥よ。知らない訳ないじゃない。むしろ個人的に繋がりを持って、トラブルコントロールクター厄介事請負人的な扱いをしてたくらいだし」

「そういえば、ガネーシャのところに知り合いがいるって言ってたっけ……」

やっぱり追われたせいでできた縁じゃないか。いや、確かに否定しなかったけど。「そういえばガネーシャのところの団長も綺麗な子らしいね?」

「ええ。そうね」

皆まで言うまい。

でも、ベル君の英才教育せんのかうにクオン君が一枚噛んでいるのはもはや疑いなかった。

「ま、別の意味での心配には事欠かないけど、戦い方を教わる分には申し分ないでしょ。どうせならしつかり鍛えてもらいなさい」

そう言うのとヘファイストスは残ったワインを一息にあおった。

話はここまで。そういう事だろう。

「それで、あんたはこれからどうするの？ もう帰る？」

残るなら、久しぶりに飲みに行かない？——と、ヘファイストスのそんな言葉に、最後の覚悟を決めた。

「実はヘファイストスに頼みたいことがあるんだ」

とうとう——と、ばかりに神友のタケミカツチから教わった『最終奥義』土下座を発動する。

「ベル君に武器を作って欲しいんだっ！」

そしてここから、ボクの長い戦いが始まった。

3

「神様、今日は帰ってきますかねえ」

「さあて。どうだろうかなあ」

ヘステイアが『神の宴』に行つて二日目。

本日の稼ぎを終えた俺達は、のんびりと地上に向かつて歩いていった。

まだダンジョン部分ではあるが——まあ、どのみち出口は一つだ。この辺りまで来れば、同じく稼ぎを終えた冒険者達が方々からぞろぞろと集まってくる。

モンスターどもは狂暴かもしれないが、かといって死にたがりではない。これだけ人が集まっている——しかも、この辺りに出現するモンスターよりは腕の立つ者が多い——場所へのこのこと近づいてくるのは稀だ。

大体、一階層の広さはそこまででもない。今この瞬間で言えば、下手をするとモンスターよりも人間の方が多くこの階層に存在している事すらあり得た。そんな状況なら街中を歩いていて馬車に轢かれぬように気を付ける程度の警戒で済む。

それこそ、気の早い冒険者達は今夜飲みに行く店の相談を始めているほどだった。

その流れに乗って進むと、程なくバベルの最下層に到達する。

(あく……。なるほど)

道理でいつもに増して混んでいる訳だ。そこに広がっていた光景を見て納得する。

ダンジョンの入り口となる大穴。その脇にはいくつものカーゴが置かれていた。

まあ、それだけならどこぞの「ファミリア」が遠征に行っていたというだけの話なのだが……。

「うわ?!」

同じようにカーゴを眺めていたベルが小さく悲鳴を上げた。

「今、あのカーゴ動きましたよ!」

「そりや動くだろ。中身はモンスターだろうし」

「モンスター!?! 何でこんなところに……」

「そろそろ怪物祭の時期だからな」

モンスターファイア
「怪物祭?」

答えてやると、ベルが首を傾げた。

「ヘスティアから聞いてないか? オラリオで毎年やつてる祭りなんだ。それもかなり大規模な」

「お祭りとモンスターにどんな関係があるんですか?」

「それはもちろん、祭りに使うからだよ」

肩をすくめてから、説明を続ける。

「と言つても、俺もこの街で過ごしたのは精々一年程度。全ては受け売りの知識でしかないが。」

「使うつて……。闘技でもするんですか?」

「そういうのが見たければ繁華街に行け。あそこなら対人から対モンスターまで一通りやつてる。うまく目利きができれば小遣い稼ぎにもなるぞ」

俺もここで『目覚めて』すぐは随分と世話になった。……まあ、賭けるのではなく実

際に戦う側だったが。

「とはいえ、闘技というのも全く間違いじゃないな。簡単に言えば、ああやって捕まえてきたモンスターを調教ティムして見せるのさ」

「調教つてモンスターを？ そんな事ができるんですか？」

「俺も詳しくはないが、技術として確立しているらしい。いや、素質に依存する部分も多いらしいがな」

そういう意味では、まだ発展途上の技術だとも言えよう。

「理屈で言えば、自分の方が『格上』だと認識させることで従順にさせる……まあ、普通の獣使いと同じだな」

「獣使いつてサーカスの？ いえ、そっちも直接は見た事はないですけど」

お祖父ちゃんに聞いただけで——と、ベル。

まあ、あの爺さんだったら知っているだろうが。あるいは、こちらについても。

「俺もあまり縁がないな」

何しろ不死人だ。人が集まるような場所になんてのこのこと近づいたら、良くて不死院送り、悪ければバラバラにされて無理やり埋葬される。そして、そうなる前は旅から旅への放浪者だ。精々、旅の途中で出くわした事があつたかどうか。

「ただ、普通のサーカスとは少し違うだろうな。普通のサーカスの獣使いは事前に調教

を済ませているはずだ」

「その怪物祭つて言うのでは違うんですか?」

「ああ。こっちは調教そのものを見せるのさ。つまり、モンスターが人に従順になつていく様を」

「ああ、だからある意味闘技なんですね?」

「そういう事だ。例外もあるらしいが、基本的には取っ組み合わない事には始まらない」
まあ、聞く限りだとごく稀だが純粹に懐かせる人間もいるらしい。素質云々という話はその辺りからも来ているのかもしれない。

「でも、危なくないです?」

「主催している『ガネーシャ・ファミリア』の連中は腕がいいからな。今のところ死人が出るような大事故はないらしい」

今のところ、と言つても始まってまだ五年しか経っていないそうだが。

五年と言えば、俺がこの時代に迷い込んでから過ぎた期間と同じだ。もつとも、俺の場合、目覚めた時点で年の瀬間際だったので、ほぼ四年と言うべきだろうが。

「ちなみに調教テイムという技術は『ガネーシャ・ファミリア』の特権つて訳じゃない。他の派閥にもできる奴はあるそうだが……まあ、地上のモンスターを相手にするのが一般的らしい。それこそ、危ないからな。それをダンジョン生まれの、それも『中層』やら『下

層』のモンスター相手に成功させ、あまつさえその過程を見世物シヨウモノにできるって時点で【ガ
ネーシャ・ファミリア】の技量が群を抜いている証左になるだろう」

「はあ……。でも、モンスターをわざわざ地上に連れ出すなんて……」

「気にするな。ギルドも公認の催し物だよ。ほら」

カーゴの周りをうろついている連中を指さしてやる。

「あ、エイナさん……」

象の紋章を刻んだ装備を纏う冒険者に混ざってギルド職員もうろろしている。

エイナも目録と思しき書類を片手に団員と言葉を交わしていた。

「でも、何だってこんな催しをするんでしょうね？」

「それはこの街の構造上の問題だな」

いや、それを最大限に活用している俺が指摘するのもなんだが。

「構造上の問題？」

「要するに、この街じゃ最終的に腕つぶしが物を言うのさ。加えて、それが許容される地
盤がある」

そのおかげで、俺も割と自由にやらせてもらっている。

いや、その対価にあの爺さんやら仮面の男に面倒ごとを持ち込まれましたが。

「許容される地盤、ですか？」

「ああ。この街の基幹産業は言うまでもなく魔石製品だ。それを各地に売りつける事で莫大な利益を生み出している。と、これは言うまでもないな」

「はい。街中に魔石灯があつて夜も明るいから驚きましたよ」

それは確かにそうだろう。ここだと捨て値で取引されているような安物の魔石製品ですら、ベルの故郷では高価な貴重品になる。

「ああ。では、その原材料はどこから来るか。これも言わなくても分かるな」

「ダンジョン、ですよね？」

魔石に限らず加工するための特殊な素材の多くがダンジョンで産出されている。

「となると、今度はそれを誰が採取してくるかだが……」

「それはもちろん冒険者ですよね」

「ああ。俺達もその一員だ」

今日の稼ぎが詰まった布袋を一つソウルから取り出して、軽くお手玉する。

「基幹産業の根っこを支えている冒険者は腕つぶしも立つし、ギルドからも目こぼしきれやすい。公的なものとも言い難いが、支配階層にいますと言つていいだろう。冒険者の街つてのはそういう構造を皮肉つてもいるのさ」

「はあ……。で、でもギルドって【ファミリア】の管理もやってるんじゃない？」

「確かにやってはいる」

ベルの言葉に頷いてから、問いかけた。

「ところで、魔石製品の輸出を取り仕切っているのはどこかだか知っているか？」

「それは、ええつと……。商会、ですか？」

「実際に捌いているのはそこだが、魔石原材料と採取地ダンジョンを押さえているのはギルドだ。さらに、採取要員である冒険者もな。迷宮都市という特権の恩恵を一番受けているのは、何の事はない。ギルドの連中なのさ」

「はあ……？」

いまいちピンとこないらしく、ベルが曖昧に呟く。

いや、俺の説明が悪いのか。教師師の真似事をするのも楽ではないらしい。

「ギルドが受け持つのは主にオラリオの都市運営、冒険者および迷宮の管理、魔石の売買の三つ。この中でギルドを潤しているのが冒険者、正しくは「ファミリア」からの徴税と魔石の売却による利益だ。お前の愛しのエイナちゃんの給与もここから捻出されている」

「い、愛しのつて！　そ、そりやエイナさんにはこの街に来てからずっとお世話にはなってますけど、別に僕はそういう訳じゃ……?!」

「釣った魚にもちゃんと餌をやらないと駄目だぞ？」

「だから違いますって?!」

ひとしきりベルを弄り倒してから、話を続ける。

「まあ、何が問題かと言え、ギルドは金の出所を冒険者に依存してるって事だ。管理するなんて言ったところで、言葉ほど強気には出れないのさ」

実際、「ファミリア」間——もつと言え、冒険者同士の問題に関して、ギルドはほとんど介入しない。するとすれば、それは都市機能や都市運営に大きな影響を及ぼすと判断した時だけだ。

「は、はあ。それは何となく分かりますが……」

「さて、そうなる問題となるのは冒険者だ。冒険者と言え、耳触りは良いが、実際はならず者や無法者どもが大半さ。お前だって思い当たる節くらいはあるだろう？」

それそこへスティアに拾われるまで、あちこちの「ファミリア」を巡ったという。性質の悪い連中の一人や二人は見ているだろう。

実際、気まずそうにベルは視線を泳がせた。

「そういう連中がギルドが強気になれないのを良い事に住民相手に威張り散らしてる。そのせいで、冒険者に対する不満は割と慢性的に蔓延している訳だ。威張り散らしているだけならまだしも、実害も出るからな。しかも、それに下手に文句を言おうものなら物理的な報復すらもあり得る」

詳しくは知らないが、何でもどこかの花屋を突然壊滅させた事もあるらしい。やらか

したのは「ソーマ・ファミリア」だったか。

連中とは何度かやりあつた事がある。いや、その派閥そのものではなく、他の派閥に金で雇われた数合わせとしてだが。

「まあ、普通ならそこそこのギルドが取り締まるべきなんだが……ギルドとしては大事な金づるを手放したくはない。住人と冒険者がもめた場合、便宜を図られるのは概ね冒険者の方なのさ。冒険者連中は街の守護者気取りだが……さて、実際はどうだか」

カーゴを見て、馬鹿な催し物だと嘲笑つている冒険者共を見やりながら告げる。

神の血に酔つた愚か者ども。名声を得て、賞賛を浴びる者がいるのは事実だが、悪名を流し、憎悪をかき集めている者も多い。それもまた厳然とした事実だ。

「ま、そうなれば治安への不満が高まるのは言うまでもない。都市の運営も担うギルドとしてはまるつきり無視もできなくなってくる。冒険者の街なんて言われたところで恩恵を持たない市民の数は人口の半数近くを占めているんだ。そこに恩恵を受けていても『冒険者』とは言い難い連中も足せば、な」

「冒険者とは言い難い連中、ですか？」

「二口に『ファミリア』と言つても、中身は千差万別だ。分かりやすいところで言えば、お前もよく知る「ヘファイストス・ファミリア」は鍛冶系派閥、「ミアハ・ファミリア」は医療系だろう？　まあ、この辺りは素材欲しさにダンジョンに向かう連中もいるか

ら、武闘派もそれなりに在籍しているだろうが……まあ、基本的に地上だけで完結する農業系派閥辺りになるとどうしても、な。身体能力はともかく戦闘経験の差は大きい」
連中が相手にしているのは、基本的に外のモンスターだ。だから、そこそ腕に自信がある『冒険者』が敵となった場合、あるいはL.V. 差すら超えてねじ伏せられかねない。

……と、一部では言われているものの。

少なくとも『火の時代』において、敗軍の兵士達が最も恐れたのは周辺の農民達だった。

日々の農作業で鍛えられた農民は、その気になればあの時代の騎士達を殺して装備を剥ぐ事すらも可能なのだ。この時代でも『神の恩恵』^{フアルナ}を得ている以上、下手に侮ると思わぬ敗北を味わう羽目にもなるのではないだろうか。

こう、ざつくりと耕かされたりとか。

……俺が昔、輝石街ジェルドラ辺りでやられたように。

「だが、この辺は市民生活とより密着している。まあ、例えば葡萄酒^{ワイン}みたいに日持ちする形に加工した後ならともかく、そうでないものはオラリオ内で消費されている量の方が多い。ヘスティアがバイトしている屋台で使ってるじゃが芋も、元を辿ればどこかの農業系派閥に行きつくはずだ」

可能性としては最大手の「デルメル・ファミリア」辺りか。主神のデルメルも悪い噂は聞かない。……いや、神の悪い噂と言うのはよほどの事がない限り派閥内から流れて来る事はないので、あまり当てにはならないが。

ただ、ヘファイストスやミアハ、ガネーシャたちは揃ってデメテルという神を神格者だと評価していた。ならば、それなりに善良な神なのだろう。

「ま、冒険者だって人の子だ。この辺りにそっぽ向かれたらたちまち干上るはずなんだが、暴れる連中はその辺りの事をほとんど考えていない」

冒険者が愛用する携行食料も、その大半は農業系派閥から卸された食材をもとに一般市民が生産している。もしも総出でそっぽ向かれれば補給すらままならなくなる。

俺には——回復薬系に波及しない限り——関係ない話だ。

しかし。冒険者連中にとつては文字通りの死活問題となるはずなのだ……。

(まあ、遠征と言えるほど深く潜れない連中ばかりなのかもな)

とはいえ。そうでなくとも、普段から口に行っている食料も彼らが関係している。

冒険者^{戦国馬鹿}だけが残ったところで、この街そのものが立ち行かなくなるのは明白だった。

「話を戻すが。ギルドだって都市運営を司ると謳っている以上、そういう連中の不満は放っておけない。しかし、大切な金づるの冒険者を締め上げてそっぽ向かれるのも困る。で、派手な催し物を開いてガス抜きすると共に多少の特需を生み出し、都市運営へ

の不満から目を逸らさせようとしている。いわばパンと見世物つてわけだ」

その辺の冒険者が吐き捨てた言葉をそのまま利用させてもらう。

「と、ここまでが建前……いや、一般的な見方だな」

「え？　じゃあ違うんですか？」

「この街の構造上の問題やら何やらについてに聞いているなら、否定しておく。が、怪物祭の目的……いや、これが持つ意味って事ならその通りさ」

「じゃあ、どんな目的なんですか？」

「そいつは秘密だ。まあ、お前ならいずれ触れる機会も巡ってくるかもな」

「は、はあ……？」

「そんな顔するなって。何も意地悪をしようってんじゃない。まだその時じゃないってだけだ」

不満そうな顔をするベルの頭に手を乗せてから続ける。

「今言えるとしたら……そうだな。主催しているのは「ガネーシャ・ファミリア」だつて事だ。つまり、主神であるガネーシャの意向でもある」

「ガネーシャ様の、ですか？」

「ああ。どういう神か知っているか？」

「【群衆の主】って呼ばれてるとてもいい神様なんですよね。あと、オラリオの治安維持

にも務めているって聞いてます」

「ああ。大層な変わり者でもあるがな」

苦笑と共に頷いてから、

「じゃあ、あの男が言う『群衆』ってのはいったい何処までが含まれるんだろうな？」
それだけを告げる。

「えっ？」

きよとんとするベルに小さく笑って見せてから、

「それはそうと。お前、どうして『ガネーシャ・ファミア』には入らなかつたんだ？」
話を変えた。

これ以上はベルにはまだ少しばかり早い話だった。

特にまだ駆け出しのベルにとっては致命的な『猛毒』になりかねない。

「えっ？」

「いや、ヘステイアが悪いって言いたいわけじゃないんだが……」
怪訝そうな顔を浮かべたベルに、先にそれだけは告げてから、

「確かにあそこは治安維持活動の方が目立つが、ここで一番多くの上級冒険者を抱えた大派閥だ。ダンジョンの攻略にも相応に力を入れている。冒険もできるし、人にも感謝されやすい派閥だからお前向きだったんじゃないかと思っただけだ。それに、お前だつ

たら門前払いされる事もないはずだが……」

あそこが有無を言わさず門前払いするとも思えないし、ベルの善良かつ純朴な性格なら受けもいはずなのだが。

「いえ、僕も勧められたので一応ホームは探してみたんですけど……」

少し落ち込んだ様子でベルは言った。

「教わった場所にホームがなくて。いえ、立派な彫像はあつたんですけど……」

「あゝ……」

今度は俺が居た堪れない気分になる番だった。

「それってあれだ。象の顔して胡坐かいた巨人像だろ？」

「ええ。何でも有名な観光名所みたいで……」

「いや、そこがホームだ」

「はい？」

「その彫像つぼいのが連中のホームだ。あれ、ああ見えて建物なんだ。恐ろしい事に」

さらに恐ろしい事に出入口は何と股間にある。

お前、どつちかと言えば出し入れする方だろうが、とは流石に口が裂けても言えない。

「ええええつ!!? あ、あの立派な巨人像が建物なんですかっ!!?」

「ああ。何でもあの男の趣味らしいんだが……」

相変わらず神の考える事はよく分からない。その一点に関して言えばあの仮面の男も例外ではなかった。

「ちなみに。色々縁があつて何度か中に入った事があるが、内装の方はかなりまともだった。そこは安心していい」

もちろん全域を見回したわけでもないが——見た範囲では落ち着いた造りで、俺から見ても上等だと分かる代物だった。

……いや、留守にしている間に代わっている可能性も充分にあり得るが。

「は、はあ……」

驚愕の表情を浮かべたまま、ベルが曖昧に唸った。

「しかし……。そうか、ヘスティアはあの男の趣味に救われたのか……」

帰ってきたら教えてやろう。きっと微妙な顔をするに違いない。

それこそ、今のベルのような。

「ま、まあ。おかげで神様に会えましたし、今さら後悔なんてしませんけど……」

だが、釈然としない思いも少しくらいはあるらしい。微妙な顔のままベルは言った。

「ま、後悔していいならそれでいいだろう？」

「そうですね」

軽く笑いあつてから、地上に戻る。

「さて、さっさと換金して帰るとしようか」

「はい！ クオンさん！」

…

「さて、と。それじゃ買う物を買って帰るとするか」

「そうですね」

今日も——実はエイナさんの言いつけを破って——六階層を探索。ウォーシャドウの群れを相手にしたおかげで、結構な額を稼ぐ事ができた。

「ヘステイアが戻ってきて「ステイタス」の更新ができればそろそろ七階層が見えて来るんだがな」

「な、七階層ですか……」

「ああ。あそこの蟻どもは探す手間が省けるからそれはそれで楽だ」

七階層の蟻。エイナさんにモンスター図鑑を精読させられたおかげで、何を指しているかはすぐに分かった。

『キラアアント』。その名の通り蟻型のモンスター。

その外殻は鎧のように堅く、ゴブリンのような低級モンスターとは比べものにならない攻撃力も併せ持つ。そのため冒険者の間では『新米殺し』と呼ばれている。

何より恐ろしいのは、ピンチに陥るとフェロモンを発し仲間を呼ぶ事だ。素早く確實

に仕留めなくては、あつという間に取り囲まれてしまう。

「この稼業を長く続ける気なら、集団相手の生き残り方は早めに身に着けておいた方がいいぞ。」

つまり、生き残るには『新米』を卒業できるだけの十分な実力が要求されるわけだ。

「そうですね。やってみます」

今はクオンさんがいるおかげで割と後先考えずに突っ込んで行けているけど、いつまでもそれに頼り切りという訳にはいかない。

(今のところクオンさん以外とパーティは組めないしなあ)

何しろ神様の眷属は僕しかない。

かと言って——今のところは何も言わないけど——クオンさんも何かこの街でやる事があるみたいだし、いつまでも頼り切りではいられない。

「ま、武器だな。まずは」

「う……」

新しく借りているショートソードは、無くしてしまった剣と比べてもそこまで見劣りしない。けど、僕自身が持っている武器は相変わらずギルド支給の短刀のみ。さすがにこれでキラアアントと戦うのは辛そうだった。

「整備費分貯蓄に回せてるんだ。もうじき新しいやつが買えるだろうさ」

「そ、そうですね」

武器や防具の整備はクオンさんの『魔法』に任せていた。そのおかげで、その分だけ貯蓄に回せている。まだ新しい武器を買うには心もとないけど、このまま貯められるならそう遠くないうちに新しい武器が買えるかもしれない。

まあ、このショートソード並みの切れ味がある武器を、とは言えないだろうけど。

と、そこで――

(いいいなあ……)

武器が飾られているショーウィンドウが目にとまった。飾られているのは一振りの短刀。まだ売れていないことにちよつとだけ安堵を覚える。

最初に見かけた時から気になっているけど――まあ、多分僕が買えるようになる前に誰かに買われてしまうのは間違いない。

だって、お値段八〇〇万ヴァリス。今の僕の収入だと、毎日欠かさずダンジョンに行つて、さらに全額丸々貯蓄できたとしても四年以上かかる。

うん、無理だ。

「おお、ベルではないか!」

ちよつと凹んでいると、誰かに名前を呼ばれた。

「あつ、神様!」

と、言っても神様——ヘステイア様じゃない。

群青色の髪に美麗な目鼻立ち。僕よりずっと高い目線。灰色の質素なローブを着ていてなお貴公子然としたそのお方はミアハ様。

バベルでクオンさんが例に挙げた医療系派閥「ミアハ・ファミア」の主神で、ヘステイア様とも仲がいい。そのご縁で、僕も親交がある神様だった。

「こんばんは、ミアハ様。お買い物ですか？」

ミアハ様は大きな紙袋を抱えていた。中身は調剤の材料だろうか。

「うむ。夕餉の買い出しだ。ベルはどうした？」

「僕はダンジョンの帰りです。あと、ちよつとお店を見ました。……まあ、お金がないので本当に見てるだけですけど」

「ふははっ！ お互い零細「ファミア」だと苦労するな」

ミアハ様は気持ちよく笑う。

明朗な人柄——いや、神柄もさることながら、その笑顔だけ見ても魅力的で、同じ男である僕でも思わず見惚れてしまいそうだ。

「ところで、ミアハ様。ヘステイア様をご存じありませんか？ 二日前に友人のパーティに出席されてから帰ってきていないんです」

「ヘステイアが？ ふむ、そのパーティというのはガネーシャが開いた『神の宴』である

うが……ううむ。すまない。私は参加していなくてな。顔を出していれば何か分かったかもしれないが。力になれなくてすまんな」

「いえ！ そんなことは！」

その言葉に慌てて手を振っていると――

「ベル、どうかしたか？」

クオンさんが戻ってきた。

そう言えば、つい見とれて立ち尽くしたままだった。

「つて、ミアハじゃないか」

「おお、その声はもしやクオンか。戻ってきているとは聞いていたが……」

「ああ。半月ばかり前にな」

深く被っていたフードを外し、クオンさんは笑って見せた。

どうやら顔見知りみたいだけど……いつもの黒衣じゃない上に、いつも通り目深くフードを被っていたからか、流石の神様も分からなかったらしい。

「あれ？ 師匠、ミアハ様とお知り合いですか？」

ちよつと意外かも。だってクオンさん、神様嫌いだし。

「ダンジョンを進むなら回復薬の一つもなければやってられないからな。それはもちろん世話になったとも。……それに何故だか俺を目の敵にする【ファミア】が多くてな。

商売にに応じてくれるところはそれだけで希少なんだ」

「あ〜……」

うん、何となく分かるかも。

あのエイナさんですらクオンさんを紹介した時は顔を引きつらせていたし。

何でも【イレギュラー「正体不明」】がどうか。

「なに、代わりに珍しい素材を分けてもらった。お互い様という奴だ。しかし、ベルの師匠とは？」

「いや、そんな大きなものじゃない。ベルは知り合いの孫でね。今、少しばかりサポーターの真似事をしてるんだ」

「ほう？　かの高名な【イレギュラー「正体不明」】がサポーターとは……。よほど将来有望と見えるな、ベル」

「い、いえ。そんな……」

いや、クオンさんがオラリオで有名らしいのはもう分かっていたけど——この分だと、思っている以上に有名人なのかもしれない。

……今度エイナさんにゆっくり聞いてみよう。

「ああ。乞うご期待つてところだ」

心に決めていると、クオンさんまでがそんな事を言い出した。

いやまあ、もっと早く強くなりたいたいと思っっているのは確かだけど……そんな風に言われると、つい尻込みしてしまう小心者な僕だった。

「ところで、引越したそうだが何かあったのか？」

「うむ。少し、な……」

クオンさんが問いかけると、ミアハ様が言葉を濁した。

「まあ、深くは聞かないが……。ああ、そうだ」

言いながら、クオンさんは右手をかざすと、そこには瓶が一本現れる。いつもの『スキル』だった。中身は水のようにだけど……、

「まあ、何はともあれ転居祝いだ。好きに使ってくれ」

「これは？」

「カドモスの泉水。お前ならいくらでも使い道はあるだろう？」

「カドモスの……！ 本当に良いのか、こんな高価なものを？」

どうやらただの水ではなく、迷宮資源のようだった。

「構わないさ。どうせ俺が持つていても水割りに使うくらいしか使い道がないからな。その代わり、これからもベルを御鼻根に頼む」

「ふははつ。それは言われるまでもない。何しろヘステイアともども良き隣人だ」

うむ、と頷いてから、ミアハ様は懐から深海のように濃い青色の溶液に満ちた二本の

試験官を取り出した。

「では早速だが、調査したてのポジションだ。これの代金にもならないがな」

クオンさんが渡した瓶を掲げながら、ミアハ様が笑う。

その『カドモスの泉水』って言うのの値段はよく分からないけど――

「ええっ?! そんな、僕は何もしてませんし!」

「なに、将来の大得意だ。今のうちに胡麻をすって置いて損はあるまい?」

うわあ?! 何だかすっごく責任重大になった予感がする?!

「つと、いかん。積もる話はあるが、あまり油を売っていてはナーザーに怒られる。何分、私が戻らなくては夕餉の支度も始められないからな」

得体のしれない予感に怯いていると、紙袋を掲げながらミアハ様が苦笑した。

「そうだな。まあ、食べ物への恨みは怖いと聞く。積もる話はまた今度だ」

「うむ。それではなクオン、ベル。今後とも我が「ファミア」をよろしく頼むぞ」

そう言って笑うと、ミアハ様は雑踏の中に消えていった。

(あ、あとでエイナさんにそのカドモスの泉水って言うのの値段も聞いておかないと)

その背中を見送ってから、ひとまず心に止めておく。

(ま、まあ、目標はヴァレンシユタインさんだけど……)

それとは別に、今の僕がどれくらい期待されているのかを知っておくのもきつと大切

なはずだ。

……そして、その値段を聞いたばかりに、悲鳴も上げられないまま凍り付く事になるのだけど、神様でもない僕はこの時知る由もなかった。

4

開けて翌日。神様不在のまま迎えた三日目の朝。

「今日はどうする？ ダンジョンに行くか？ それとも怪物祭でも見に行くか？」

日課の早朝訓練を終えると、クオンさんが言った。

「うーん。興味はありますけど……」

どうやら、その怪物祭と言うのは今日らしい。

興味は、ある。けど、今は少しでもダンジョンで経験を積んで、少しでも早くあの人に追い付きたいとも思う。

「ちなみに、怪物祭に出て来るのは『中層』や『下層』のモンスターが多い。今後の参考にくらいはなるんじゃないか？」

「う……。それは確かに」

モンスターについてはエイナさんに教わっているけど、実際に動いているところを見て初めて分かる事も多い。それを安全なところからゆっくり見れるって言うなら、それ

だけでも貴重な経験なのかも。

まあ、今の僕には『下層』どころか『中層』だってまだ遠いけど……。

「それに単純に息抜きするのも大切だぞ？」

「ええと……」

確かにあの日から休息らしい休息はとってない。それでも今のところ体に疲労は残ってないはずだ。……まあ、師匠の『魔法』のおかげでもあるんだけど。

「ま、覗いてみてつまらなかつたらダンジョンに行くつて手もあるな」

それで結局。

僕はひとまずその『怪物祭』モンスターフェリアに行つてみる事にした。

強くなりたいたいという思いは変わらないけど、折角オラリオにいるんだから、色々見てみたいという思いがないわけでもない。あと、師匠の言うようにモンスターの勉強になるかも知れないし。

それに――

「ちよつと興味はあります」

まあ、それも本音だった。だつて、故郷の村だとお祭りなんて豊穰祭とか収穫祭とかくらいしかないし、しかも普段よりちよつとだけ豪華な料理が並ぶくらいだった。

オラリオみたいな大きな街のお祭りと聞けば流石にワクワクする。

「素直でよろしい」

けらけらと笑うクオンさんに連れられて、いつも通りまずは中央広場を目指す。

会場となるのは『アンファイテートルム円形闘技場』という施設。そこを丸一日貸し切って、モンスターの調教を行うのだとか。それに、そのお客さんを目当てに周辺にはいくつもの屋台が立ち並んでいるらしい。

その闘技場は都市の東端——つまり、第三地区にある。僕らのホームがあるのが第七地区だから、いつも通り一度中央広場に出るのが一番早くて近い。

なので、今のところ見慣れた景色が続いている。でも、お祭りがあると聞くと何となく普段よりも人が多くなっているような気もしてくるから不思議だった。

「おーい！ その白髪頭ちよつと待つニヤ！ あと、隣の謎の革マントもー」

白髪頭という単語に反応し、振り返ってしまった。……この前『豊穰の女主人』に謝りに行った時に言われたから、つい。

あと、隣に最近見慣れてきた革製のコート姿のクオンさんもいるし。

「アーニヤか？」

怪訝そうな声でクオンさんが呻いた。

あ、確かに。気づけば『豊穰の女主人』の前にいた。今まで気づかないとか、思ったより浮かんでいるのかもしれない。

「ニヤんだクオンか。いめちえんってやつかニヤ？」

「何でか知らないが、方々から目をつけられてるからな。変装の一つもするさ」

「うんうん。その自覚のなさっぷり、間違ひなく本人だニヤ」

腕組をして全力で頷いてから、アーニヤさんが言った。

「おはようございます、ニヤ。いきなり呼び止めて悪かったニヤ」

「あ、いえ。おはようございます」

あまりに見事なお辞儀だったので、僕もついできる限りの丁寧なお辞儀を返す。

その横で師匠も、ああ、おはよう——と、返していた。

「それで、何か用か？」

「おお！ それニヤ。ちよつと面倒な事を頼みたいニヤ」

「お前らが言う面倒な事だと……？」

心底嫌そうな顔で師匠が呻いた。

「糸目の小僧の首でも取ってこいとか言うんじやないだろうな？」

「ミャー達のお得意様を殺されちゃ敵わないニヤー」

糸目の小僧って誰だろう？——首を傾げる僕を他所に、師匠とアーニヤさんは半眼で見つめあう。うん、甘酸っぱい感じはどこを捻っても出てきそうにない。

「そうじゃニヤくて。はい、コレ」

「へっ?」

アーニヤさんはそう言つて何かを手渡してくる。

反射的に受け取つてから、僕は首を傾げた。

「何ですか? これ」

「ニヤ? 見て分からないかニヤ?」

「いえ、そうじゃなくて……」

渡されたのはこの頃よく見かけるようになったお財布。どこかの派閥のエンブレムが刺繍された『がま口』だった。

紫色の布地を基本としたそれは、小ぢんまりと置いて可愛らしい。

「ええと、これをどうすれば……?」

持った感じ、結構入つてそう……それこそ僕の財布より重い気がする。

「白髪頭はシルのマブダチニヤ。だから、それを渡して欲しいニヤ」

「シルさんに、ですか?」

「アーニヤ。それでは説明不足です。クラネルさん達も困っています」

首を傾げていると、綺麗で落ち着いた——でも、今はどこか呆れたような——声が。

それと共に店の中から、今度はエルフの店員さんが現れる。

「よう、リユー。おはよう」

「ええ。おはようございます、クオンさん、クラネルさん」

名前を呼ばれた事に場違いながらも感動を覚えてしまった。

お祖父ちゃん、僕、エルフの女の人に名前を覚えてもらったよ。

「リユーはアホニャー。仕事サボってフィリア祭見に行つたシルに財布を届けて欲しいなんて言わニャくても分かるニャー」

「と、いう訳です。言葉足らずで申し訳ありません」

「あ、いえ。よく分かりました」

ペコりとリユーさんが頭を下げるので、つい反射的に僕も頭を下げていた。

その隣で、アーニャさんはやれやれと言わんばかりの顔をしている。

「彼女は気にしないでください。それで、どうか頼まれてもらえないでしょうか？ 私達は店の準備で手が離せないのです。今日もダンジョンに向かうのであれば、申し訳ないのですが……」

「あ、いえ。僕らもそのフィリア祭つて言うのを見に行くつもりなのでそれは構わないんですけど……」

リユーさんに慌てて手を振ってから、ちよつと気になった事を訊いた。

「それより、シルさんが仕事をサボつたつて本当なんですか？」

ちよつと想像できないというか何というか……。

「サボるといふ表現は適切ではありません。シルはここに住み込みではないですし、予め休暇も申請していませんから」

ええと、つまりはごく普通のお休みということか。で、それを利用して怪物祭に——というか、そのお祭りを見に行くためにお休みを取ったのかな。

「しかし、届けろと言われてもな」

師匠が困ったように呻いた。

「記憶にある限り、かなり混雑するだろう。見つけられる保証はしないぞ?」

「それは仕方ありません」

クオンさんのもつともな言葉に、リユースさんも肩をすくめた。

「ですが、シルも今しがた出かけて行ったばかりなので、すぐに追いつけるかと」

「なるほど。まあ、出て行ったばかりなら最悪は闘技場の入り口で待ってれば合流できる可能性もあるか」

どうせ料金を払う時に気づくだろうし——と、クオンさんは肩をすくめた。

「なら、ほら」

クオンさんが布袋を取り出し、リユースさんに放った。

「これは?」

「行き違いになった時の保険だ。もし行き違いになったらそれを渡してやってくれ」

それと、俺達がスられた時の代金もかねて——と、クオンさん。

「あなたから財布を盗める相手がいるとも思えませんが……」

それは確かに。あの『スキル』を使えば、そもそもどこにあるのかも分からない。

だって、大剣とか大盾とか斧槍とかクロスボウとかどこからか次々出て来るし。

「冒険者依頼の発注を受けたのはベルだからな」

クエストと言うのは、エイナさんから聞いた事がある。詳しい話はまだ聞いていないけど……何だか、急に気合が満ちてきた。

「そういう事なら」

と、リユーさんも少しだけ笑ってその布袋をポケットにしまった。

まあ、流石に今回のこれがクエストって言うのは冗談だろうけど。でも、お財布を預かったのは確かなんだから、ちゃんと届けなくちゃいけないのは変わらない。

「お土産期待してるニヤァー！」

アーニヤさんのそんな言葉——あと、何かが叩かれるような音——に見送られながら、僕らは改めて闘技場に向って歩き出した。

それからしばらくして——

「うわあ。本当にすごい人込み……」

しかも東のメインストリートに近づく事に、密度は増していく。

初めてオラリオに来た時も驚いたけど、まさかまた同じ驚きを覚えるなんて。

(何かいいなあ、こういうの)

ワイワイと、今にも踊り出しそうな声で大通りは溢れている。

その両脇には——時にはど真ん中にも——数えきれなくらいの出店が並び、美味しそうな匂いと、ジュウジュウと何かを焼く音が盛んに振りまかれている。

そんな中にいるだけで、僕も何だかワクワクしてきた。

「ここからシルを探せ、か……。リユーもまた難しい事を言ってくれろ」

結構急いだはずだけど、残念ながらシルさんには追い付けなかった。

と、なるとクオンさんが言う通り、この人ごみの中から見つけ出さないといけない。

確かにこれは大変そうだった。

「まだ少し早いけど、ひとまず一気に闘技場の入り口まで行くか?」

「そうですね。まずはシルさんを探しましょう」

自然と浮かれそうになる心を宥めつつ、クオンさんの言葉に頷いた。

出店は闘技場に繋がる大通りに面して並んでいる。シルさんがどこで気づくかにもよるけど、このまま入り口に向かうのが一番出会える確率が高いはずだ。

「ま、そこまで急ぐ事もない。出店にシルが並んでいないか覗きながら行くとしようか」

「はいー」

クオンさんの言葉に頷いてから、僕ははいよいよその人ごみの中に踏み込んでいった。

……

ちようどその頃、とある工房で一振りの作品が生まれ落ちていた。

無論、神ならぬベルはそれを知る由もなく。神と言えど力を封じている彼女もまた、彼が今何をしているかなど知りもしなかつたが。

「――」

最後の一研ぎを終え、その刃を明かりにかざす。

我ながら会心の出来だと言える。あとは、施した『細工』を仕上げれば完成だ。

(作っちゃったわね……)

しばし余韻に浸ってから、ふと我に返り嘆息する。

ガネーシヤの宴から三日。いや、もう夜が明けたから四日目か。

ボクの眷属に武器を作つて欲しい——そう言つたヘステイアはあれからずっと私に付きまといつていた。

最初の頃こそ突っぱねていたものの……。いつになく粘るヘステイアに業を煮やして放置する事を決め、仮眠明けにもまだいた——というか、タケミカツチから教わつたというドゲザなる体勢を保ち続けていた——ヘステイアに驚いてベッドから転げ落ちそうになり……。それでも無視して事務仕事に打ち込んでいたもの——その辺りで心

が折れた。

「……ヘステイア、教えてちょうだい。どうしてあんたがそこまでするの?」

そう問いかけた時点で、おそらく私の負けは決まったのだろう。

ヘステイアの眷属に対する想いの丈をぶつけられ……まあ、今のヘステイアになら力を貸してもいいかと思いついて始めている自分に気づき——こうして約一日工房にこもり、このナイフを打ち上げたわけだ。

(……ま、客の要望には応えないとね)

駆け出しにあまりに威力が高い武器を駆け出しに持たせては冒険者として腐る。それが私の信条だった。

しかし、今回求められたのは『駆け出しの冒険者に持たせる一級品装備』。

信念と要望の板挟みを解消するために取った手段は、鍛冶師にとっては邪道極まるものだった。

……が。まあ、実際のところ、そう経験できない分だけ面白い仕事だったというのも確かだ。

それに、

(ヘステイアは自覚してないでしょうけど……)

ヘステイアの嘆願の中には、実はとんでもない殺し文句が仕込まれていた。

クオン君がくれたショートソードにも負けない武器が欲しい。

ヘステイアは彼におんぶに抱っこなのは嫌なんだと訴えていたし、彼女にとってはその以上の意味はなかっただろうけど——

(彼が持っている武器に見劣りしない武器、か)

鍛冶師としては、それだけでも挑み甲斐はある。

いや、冷静に考えて彼自身が愛用している武器ほどではないはずだ。それに、もう紛失してしまつたらしいが。惜しいと思う気持ちが半分、凶らずも私の信条が守られた事に安堵する気持ちが半分といったところか。

と、それはともかく。

そのショートソードがどれほどのものだったかは定かではないが、このナイフなら『条件さえ整えば』決して見劣りしない——いえ、場合によっては上回れるはず。

もつとも、今は数打ちの短刀にも劣る鈍らだ。ここからどう化けるかは全てヘステイアの眷属次第だった。

(ま、せつかく作つたんだからちゃんと思いこなして欲しいわね)

熱が冷めないうちに鞆を作り、しっかりと自分のサイン——そして、ファミリアのブランド名でもある「Hφαλστος」のロゴを施し、納刀してから受け渡し用の小さなケースに収める。

いや、まだ最後の『細工』が残っているからすぐに出す事にはなるけど。

「あんたも頑張りなさいよ?」

そのケースを軽く叩き、小さく笑いかけてから。

今か今かと待ちわびているヘステアの元へとそれを届けに向かった。

5

「それじゃ行つてきまゝすつ!」

まさに元氣瀧刺と言つた声を残して、テイオナが——そして、彼女に連れられてテイオネとレフィーヤが飛び出していく。

「ああ、気をつけてな」

三人の背中を見送つてから、中庭に設置されたカフェテラスに向かう。

もつとも、カフェテラスとは名ばかりで、店員がいるわけではない。だからこうして自分でティーセットや茶菓子を持つていく必要がある。

無論、他の団員に頼めば持つてきてくれるだろうが、私的な理由でそういった事をさせるつもりはなかった。

(フィリア祭か……)

少し前に何故だか——いや、理由は何となく察しているが——ぼろぼろになったロキ

を引き連れて……もとい、ロキに連れられてアイズも出かけていった。

ロキはデートだデートだとはしゃいでいたが……まあ、遠征明けだというのにダンジョンにこもつてばかりのアイズを心配しているのも事実だろう。

私自身はああいつた騒がしい場所はどうにも苦手だが、ロキも一緒ならアイズにとっては気分転換になるはずだ。

(まったく、アイズめ……)

遠征を終えてから——いや、酒場で、図らずもとある少年を傷つけた事で、しばらくふさぎ込み。ティオナやレフィーヤ達と買い物に行つて立ち直ったかと思えばすぐさまダンジョンへ。

あれで以前に比べれば少しはマシになったのだが、相変わらず危なっかしい事に変わりはない。見ている方は気が気ではないのだが、その辺りは果たしてどれくらい伝わっているものやら。

(クオンの帰還も無関係ではないのだろうか……)

クオンと言えば、アイズが助けた——のはいいとして。

その後、ベートが嘲笑した少年は、よりによって彼の知り合いの孫らしい。

それを結果として殺しかけ、さらに嘲笑つた以上、報復もあり得るかと思構えていたが、幸いにして今のところ音沙汰がなかった。

いつまでも時間をかける手合いでもない。図らずも貶めた張本人を叩きのめしたので、それで満足したのでらう。

(まあ、ベートにとつても今回の一件は相当に堪えただろうかな)

自業自得とは言え……そして、相手がクオンだったとはいえ——あの男が使ったのはよりによつて『おたま』だ。

その事實は、第一級冒険者の矜持をへし折るには充分すぎる。

まったく『灰色の悪夢』の面目躍如というよりない。

実際、ベートは翌日からダンジョンにこもりっぱなしだった。……いや、これもアイズに悪い影響を及ぼしている可能性は高いが、流石に今回ばかりは宥める言葉もない。

もし同じ状況に置かれたなら、私とておそらくは同じ事をするはずだ。

しかし、それはそうとして——

(まったく。相変わらず趣味の悪い男だ)

どうせならあのまま素手で戦ってくれば良かったものを。普段ならいざ知らず、酔いのまわつたベートなど充分に圧倒できはずだ。

それとも、よほど腹に据えかねたのだろうか。まあ、それは充分にあり得る話だ。そして、そうだとするなら命があつただけまだ幸運だったと言うよりないが。

最後の『置き土産』も順調に街の噂になつていよう、しばらくは頭の痛い日々が

続きそうだった。

「ヤッ……」

気分を入れ替え、手にした書類に目を落とす。

次の遠征に向けての準備——ではなく、最近話題となっている冒険者……所謂『期待の新人』達の一覧だった。

遠征の準備もしなければならぬが、クオンの言う『後継者』も気になる——と、フィンの……そして、ロキの指示もあつて、ここ数日の間に集められた情報がそこにはまとめられている。

条件は二つ。

少なくとも四年前にオラリオにいなかったこと。そして、クオンがオラリオを離れている三年の間に接点を持った可能性があること。

いくら世界各地から一攫千金を夢見て、あるいは未知の興奮を求めて人や神が集まるオラリオとさえ、この時点である程度まで絞り込まれてしまう。

さらに言えば、ギルドが他所の派閥の情報を流してくれるはずもない——少なくともそういう事になっている——ので、団員達が集めてきた噂話程度のものでしかない。

他に『神の宴』でロキが聞き集めてきた者も含まれているが、どの程度の精度があるかは知れたものではなかった。

それは分かっているが……しかし、このまま何もしないというのも落ち着かない。

まあ、休日の余暇を潰すくらいのもので、と割り切つて目を通す。

(さて。目ぼしい者と言えば……)

流し読みしていると、一人の女冒険者に目が留まる。

名前をヤマト・命。所属は「タケミカツチ・ファミリア」と記されている。

団員六名と小規模な派閥だが、彼女以外の団員も含めて成長速度はなかなかのものだ。

何しろ「タケミカツチ・ファミリア」がオラリオに訪れたのが二年前。そうでありながら、団長のカシマ・桜花はすでにL.v. 2に到達している。そして、彼女もまた近々ランクアップするのではないかと噂だった。

(さすがは武神と言う事か)

主神タケミカツチは武神である。いくらその力を封じているとはいえ、技術までが消える訳ではない。

例えば神ヘファイストスが今も名匠であるように、神タケミカツチもまた優れた武者なのだ。

その薫陶を受けている眷属達なら、オラリオに来て二年でL.v. 2と言うのもあり得ない話ではない。どちらもアイズの持つ一年という最短記録には一歩及ばないものの、

飛び抜けて『速く』ランクアップした、あるいはすると云つていい。

そして、オラリオに來たのが二年前と云うのであれば、どこかでクオンと接触していた可能性も充分にあり得る。

(それに、極東の生まれというのも無視できないな)

やや彫りの浅い顔立ちに黒髪。時折口にする——あるいは仕草として現れる——風習や習慣、慣用句らしきものから察するに、クオンは極東生まれのはずである。

同郷の者だから優遇するか——と言われると少々怪しいが、それでも接点は持ちやすいはずだ。

さらに重要な事として——

(神タケミカヅチは、子供思いの神格者だと書かれているが……)

主神との相性だ。神嫌いであるあの男とまともな関係を築けなければ意味がない。

では、タケミカヅチという神はどうか。

懇意派閥という訳ではないので私自身が詳しく知っている事はないのだが……そもそも「タケミカヅチ・ファミリア」自体が極東の孤児院——書類には『社』と記されている——に端を発しているらしい。当てのない孤児達に恩恵を与え、自分の『子供』にした事が始まり——と、そういう事のようにだ。

武芸の教えを施しているとはいえ、例えば戦争奴隷や傭兵にするつもりがあつた訳で

はなく、子供たちの健やかな成長を促すための運動から始まっているらしい。武芸が選ばれたのは、単に神タケミカツチが武神だからだろう。

(あるいは、自衛という意味合いもあったのか……)

皮肉な事に迷宮都市ではほぼ無縁だが、モンスターや戦災という災禍は今も各地を悩ませている。身を守る術があるに越した事はない。

ともあれ。

彼らがオラリオに來たのも国元にいる他の神やその眷属達……つまりは社の者達に仕送りをするのが目的なのだとか。

それらが事実なら、クオンとの相性も決して悪くはないと言える。と言えるが……。

(しかし、この少女が【おうじや猛者】を超える逸材かと言われるとな……)

このまま伸びれば、いずれオラリオに名を馳せる第一級冒険者の中に加わってくるのは間違いないと思う。

だが、その先に至れるのか？——と、問われれば、流石に首を傾げざるを得ない。

いや、手持ちの情報だけで判じようとする事と自体、些か傲慢に過ぎるのも確かだが。(もつとも、奴が一体どんな基準で選んでいるかも定かではないがな)

オツタルの事を女の趣味が悪いから論外などと言っていたが——まさかあれが本気でもあるまい。しかし、所謂『冒険者としての強さ』を基準としているとも考えづらい。

(そこから手詰まりなら、いくら情報を集めても無駄かもしれない)

ため息をつきつつ、流し読みを続ける。

が、やはりと言うべきか。これと言つて確かな収穫はなかった。精々、将来有望そうな存在を何人か知る事ができたくらいか。

(ふむ……)

それはそれで有益ではある。少なくとも休日の余暇の過ごし方としては。

しかし、書類の下の方——ここ一年あまりのところまで読み進むと、流石にそうとも言い難い。

いや、見所がないという訳ではない。あまりに情報が少なくてその見当すらつけられなかった。玉石混合と言えば多少は聞こえもいいが……。

「——ッ?!」

カチャン、と。そんな音を立てて、持ち上げたティーカップが落ちた。手を滑らせたわけではない。突如として持ち手が取れたのだ。

「——」

愛用のものではなく、食堂から持ってきた共有のものだ。ロキの趣味もあつて物は悪くないが、扱いの方はお世辞にも丁寧とは言い難い。傷んでいたとしても、何らおかしくはないが——

「おや、リヴェリア。君も出かけるのかい？」

「ああ。少しな」

あまりにありきたりだが、妙な胸騒ぎをした。

手早くティーセットを片付け部屋に戻ると、その足で玄関ホールに向かう。

「杖を持って？」

その途中で出会ったフィンが首を傾げた。

ほとんど意識していなかったが、愛用の杖を携えている。

「……いや、少し気になる部分があつてな。調整してもらおうかと」

とつさに嘘を吐いたのは……単に、自分でも説明ができなかったからにすぎない。

だが、私自身が持つ冒険者としての勘だ。気楽に無視していいものでもなかった。

(フィンほどではないがな)

平然としているフィンの様子に、我ながら神経質になりすぎているのかもしれないと

内心で嘆息する。

「そうか。まあ、第八地区なら今日もいつも通りだろうしね」

「そういう事だ。では、行ってくる」

「ああ。気を付けて」

それは単なるいつも通りの社交辞令でしかない。

しかし、今ばかりは幾ばくかの緊張感を与えるものであった。

6

闘技場の前でエイナさん——今日は、ギルドの仕事でお客さんの誘導係を任されているらしい——と出会い、シルさんへの言伝……というか、見かけたら待っていてもらうようお願いしてから、改めてシルさんの捜索に戻る。

「さて、それじゃ出店を冷やかしに行くか」

いやまあ、確かにそういう目的もあるけど。

ちやんと朝ご飯を食べたはずなのに、ここまでいい匂いを嗅いできたせいか少しお腹が鳴ったような気がした。

「ところでベル。シルの好きなものとか知ってるか？」

そちらに気を取られている間に、師匠に問われて。

「人が好きって言うてましたよ？」

そのまま深く考えずにそう答えたけど……

「……人肉ってどこかで売ってたのか？」

「えっ？」

思わぬ言葉にぎよっとしてから——やっとな悟った。

「わあ!! 違います! そういう意味じゃなくてっ?!」

「そうだよ、クオンさんはシルさんが行きそうな出店に心当たりがあるかって意味で聞いたに決まってるじゃないか!」

「人肉は言うまでもなく、人だつて売つてたら大問題だつて?! さつきヒヨコを売つてるのは見たけどっ!」

「ええと、好きな食べ物とかはちよつと聞いた事がないです!」

「だよな。そんな猟奇的な趣味だったのかと思つて流石の俺も焦つたぞ」

「ミルドレッドと同じかと思つた——と、クオンさん。」

「実際、少し口元が引きつっている。」

「……ところで、ミルドレッドさんつてどなたですか? というか、同じつて……。」

「いや、やめよう」

「深入りはしない事に決めて、別の事を問いかけた。」

「ええと、クオンさんの方が付き合ひが長いんじゃないですか?」

「まあ、さつきのリユーさん達とのやり取りからそう思つただけだけど。」

「いや、俺もそこまでは。少なくとも食べ物の好みを知るような関係じゃないな」

「ふむ、と唸りながらクオンさんは言った。」

「今買うとしたら自分のための飲み物とか食い物だとは思うんだが……」

「ですよね。まだ催しが始まってないのに、いきなりお土産は買わないでしょうし」

師匠の『スキル』があれば話は変わるだろうけど、普通は荷物になるだけだし。

果汁の出店と……サンドイッチ系の出店を中心に覗いていくか」

「ですね」

まあ、朝からお酒は飲まないだろうし、串焼きよりサンドイッチの方が女の人らしい趣味かなっていう漠然とした感覚でしかないけど。いや、単なる思い込みなのかな。

僕としてはむしろ香ばしい匂いがする串焼きの方に意識を惹かれてながら、出店に並ぶ人の中にシルさんが混じっていないかを探す。

「ほら」

「ありがとうございます」

クオンさんが差し出してきた牛肉の串焼き——今の僕だとちよつと手が出せない高級品——を、反射的に受け取ってしまう。

「今のところそれらしいのは見かけないな」

少し塩辛いくらいの牛肉を噛みしめていると、師匠が言った。

「そうですね」

何しろ時間を増す事に人も増えていく。来る時はまだ反対側の出店の様子も見えただけ、今はもう人に紛れてしまつてほとんど分からない。

「いつそ二手に分かれるか。エイナのところで待ち合わせにすれば何とかなるだろう」
「そうするしかないですね」

この調子で人が増えていくようなら、こうして並んで歩いていても見つけれない。
待ち合わせ場所がちゃんと決まっていれば、はぐれたきり合流できないって事にもならないだろうし。

「あら、クオンじゃない」

じゃあ、ひとまず催しが始まるまで——と、具体的な話をしていると、誰かが師匠の名前を呼んだ。

今日も師匠はいつもの黒衣ではなく、革製のコートを着こんでいる。この状態で師匠を師匠だと見分けられるなんて……と、驚きながら振り返ると、そこにはエルフの女の人が立っていた。

男勝りってどうか、まあ気の強そうな顔立ちだけど、エルフラしくとても綺麗な人だ。

お尻まで届くほど長い黒紫の髪をうなじより少し下で軽く結って、その上から黒——より少しだけ灰色寄りのソフト帽を被っている。多分男物なんだろうけど、凜とした顔立ちのおかげなのかよく似合っていた。

「……………」

のだけど。近くの横道から姿を現したその人から、つい目をそらしてしまった。

いや、何て言うか、それ以外の格好が大胆なのだ。アマゾネスの人ほどではないけど、エルフにしては過激すぎる服装だった。

どこことなく戦闘衣を思わせるその服は形のいいお尻だとか、細くくびれた腰だとか、とにかく体の線がはつきり分かる。加えて肩から上と、脚の付け根から下はむき出しで、上は豊かな胸周りが生み出す深い谷間が、下はすらりとした脚が目を引きつけた。その上から黒い前開きの短衣を羽織り、足は太ももの中ほどまである長くて少し地肌が見えるくらいに薄手の靴下——ええと、タイツっていうのかな？——で、包まれている。

首元には大きな紅玉ルビーで飾られた首飾りアマキュレット。両腕には金色の大きめの腕輪。足には光沢をもつ黒いハイヒールを履いている。

大胆な格好だけど、妖艶さはなく、やっぱり凛とした雰囲気を纏っている。けど、目のやりどころに困るのも事実だった。

「霞か。珍しいな」

「そういうアンタは相変わらずね、この浮気者が」

責め立てると言うよりはからかう——あと、ちよつと呆れてる？——感じで、その女の……霞さんかな、は言った。

「まあた新しい女を引っかけたわけ？」

あれ？ 今師匠の隣には僕しかいないんだけど。これはまさか——

「こいつ、男だぞ?」

やっぱり。ミアさんと同じだ。

「あら? ごめんなさいね。可愛い顔しているからつい」

ほっとけよ。

再びふてくされていると、霞さんは師匠の腕にしがみついた。

「ついに男の子にも手を出したの?」

「そんな訳あるかよ。知り合いの孫でな、今少し面倒を見てるんだ」

「ふうん。それでダンジョンに行ったきり半月も音沙汰なしだったわけね? 店にも顔

を出さないし、夜も家にいないし」

あっさりした言葉だったけど、年頃の男の子の嗅覚が反応した。

具体的に言うくと、夜に家。

「そういえばしばらく戻ってなかったな」

「ええ、そうでしょうとも相変わらず一人寝の淋しい日々が続いているもの」

ガーン!——と、自分でもよく分からない衝撃を覚えた。

こう、村の同い年の友達に先に恋人を作ったんだぜ的な自慢をされた時に感じるであろう衝撃を何倍にも増幅させたような……。

「だから、悪かったって。……って、ベル? お前街灯になんて抱き着いてどうした?」

「し、師匠って大人だったんですねっ?!」

たまたま傍にあつた魔石灯にしがみつきガクガクと衝撃に打ち震えながら叫んだ。

そ、そんな綺麗なエルフの女の人と……その、ええと、一緒に過ごすなんて!?

「い、いや。確かにお前よりいくらか長生きしているが……」

「アンタね。その子は、そういう事言ってるわけじゃないと思うんだけど……」

そのエルフの女の人は嘆息してから、すつと手を差し出してきた。

「私は霞・アンジエリック。アナタは？」

思わずその手を見つめてしまった。

自分が認めた者以外の肌の接触を嫌う——と、言うのが一般的に知られているエルフ全体の傾向だった。いやまあ、加えて言えば肌の露出の少ない服を好むのもそうだけど。

だから、こんな風に気さくに手を差し伸べられると驚いてしまう。

(いや、エレナさんだつて結構気さくだけど)

冒険者になつてからずつとお世話になつているハーフエルフのエイナさんを思い出しつつ、抱きしめていた魔石灯から離れた。

「僕はベル・クラネルって言います」

何だか初めて神様に出会つた時のように緊張しながら握手をする。

「ベル君ね。よろしく」

またエルフの女の人に名前を覚えてもらったよ——と、本日二度目の報告を胸の中のお祖父ちゃんに届ける。

「よろしくお願ひします、アンジェリックさん」

「霞で良いわよ」

鈴の鳴るような笑い声が返ってきた。

「ええと、それじゃ霞さん」

うう……。クオンさんの、こ、恋人だと思ふと何だか今までにない緊張感を覚える。

「それで、男二人で何してるのよ？」

「社会見学と人探し」

「……今度はどんな女を引っかけたわけ？」

「いや、引っかけたのは俺じゃなくてだな……」

霞さんと師匠がそんなやり取りを交わし——

「いえ、引っかけた訳じゃないですよ!？」

と、慌てて否定しようとして——

「ベルくううん!」

突如として背後からの強襲。

「うわ?!」

「きゃ?!」

完全に不意を突かれてつんのめり、そのまま目の前にいる霞さんに激突——と、いうかその、胸元に飛び込んでしまった。

(僕、師匠に斬り殺されるんじゃないや……?)

なんて恐怖を覚える暇もなく、頭の前と後ろを柔らかくも張りのある感触に挟まれて
いる事に気づいてしまった。

訂正。これは強襲バックアタックではなく致命の一撃バックスタブだ。

(これはもしかしなくても……っ?!)

その正体に思い至る前に、僕は全力で思い出していた。

そう、あの日出会ってしまったミノタウロス。あの時浴びたその『咆哮ハウル』を。

今も耳に残るそれを全力で再生する。

なんかもう、今だけは自ら進んで強制停止リストレイトしてしまいたい。

(ここで死ぬならいつそ本望かも)

さあ、思う存分に叫んでくれミノタウロス。今日だけは君が救世主だ。

何かもう、暴走し始めたこのお馬鹿な思考を根こそぎ止めちやつて欲しい。

「よおくぞやったベル！ それでこそ儂の孫じゃああああああっ!!」

意識を手放す直前。

ミノタウロスの咆哮に混ざって、お祖父ちゃんの喝采を聞いた気がした。

……

で、それからしばらくして。

「それで、そのエルフ君は何者なんだい？」

お祖父ちゃんとう束の間の再会を済ませ、意識を取り戻して下界に戻ってきてから。

神様や霞さんが出てきた横道に引つ込み、どことなく……いや、明らかに不機嫌そうな神様の前で、必死の弁明を行う僕がいた。

「この人は霞さんって言って、師匠のこ、恋人の方なんです!？」

「クオン君の恋人だってえ?!」

神様の背後に稲妻が奔る!

まあ、神様と言えど『神の力』アルカナムを封じているはずなので、ただの幻覚だろうけど。

「い、いや! それは後で改めて驚くとして! ベル君とその恋人君がなんで抱き合ってるんだい!？」

「それはお前が後ろから押したからだろう」

なかなか言いづらかった事を師匠が代弁してくれた。

うっ、と神様も言葉に詰まる。

「ご、ごめんよ。ベル君を見つけたから、ちよつと嬉しくなっちゃって」
「い、いえ。気にしないでください」

ちよつと天国めいた地獄と言うか、地獄めいた天国というか……まあ、そんな世界を垣間見ただけなので。

「それに、僕も久しぶりに神様に会えて嬉しいです」

「これも本当。今まで三日も離れ離れになつた事はなかつたし。

「ベルくん!」

「わふっ!」

再び神様のダイブ。

慌てて受け止めていると、

「ところでアンタ、師匠って何やってるわけ?」

「今はサポーターの真似事をやってる。冒険者だからな」

「ふうん。女の誑し込み方じゃなくて?」

「そんなもの、まずは俺が教わりたい——いつてえ?!」

「うわっ?! ヒールの部分で思いっきり足踏まれてるっ?!」

「ええと、君も悪かったね。ちよつとはしゃいじゃって……」

恐れ戦いていると、神様が霞さんに頭を下げる。理由はともかく胸元に飛び込ん

じゃった事に変わりはないので、僕も慌てて頭を下げた。

「いいえ、気になさらず女神様。ベル君も、ね」

クスリと、霞さんは笑って許してくれた。

その傍らで師匠が足を押さえて蹲っている。よっぽど効いたらしい。

「それでは改めて。私は霞・アンジェリックと申します。お見知りおきを、女神様」

霞さんはソフト帽を脱ぎ、どことなく芝居がかつた……ええと、悪い意味じゃなくて、演劇の一幕のように綺麗な動きで一礼した。

「僕はヘスティア。ベル君の主神さー!」

神様はそう言つて、まるで宝物でも自慢するように胸を張つた。

うん、ちよつと照れる。

「と、ところでヘスティア。こんなところでどうしたんだ? まさか会場整備のバイトでも始めたか?」

まだダメージを引きずりつつも、クオンさんが問いかけた。

「違つて! ベル君に会いたくなつてね! こうして探してきたつて訳さ!」

会いたいと思つたら本当に会えちゃうなんて素晴らしいね! やつぱり僕とベル君はただならぬ絆で結ばれてるんだよ!——と、神様はすごく上機嫌に笑う。

「君達もここにいてるつて事はフィリア祭を見に来たんだろう? なら。早速行こうじゃ

ないか。そろそろショーも始まるだろう？ それとも、出店を冷やかしているのかい？」

「あ、いえ。実はその前に——」

僕の手を取って今にも走り出さんばかりの神様に、慌ててシルさんを探している事を伝えた。

「ふうん。やっぱり女の尻を追いかけてるんじゃない」

「断じて違う。俺はあくまで手伝っているだけだ」

「あら、じゃあベル君が探してるの？ こんなに可愛らしい神様がいるのに」

そして、その間に交わされた師匠達の不穏な会話は、あつさり飛び火してくる。

「むむつ？ そうなのかいベル君?！」

「ち、違いますよ?! いえ、シルさんを探しているのは本当ですけど、それはリユーさん達にお使いを頼まれたからで……!」

「リユーさんって誰だい?」

「ええと……」

しまった。なんだか墓穴を掘ってしまった気がしてならない。

い、いや。神様なら嘘じゃない事も分かってくれるはず!

「シルさんと同じ酒場で働いてる店員さんなんです! この前、色々と迷惑をかけたの

でこれくらいはと思ひまして……！」

何一つ嘘は言っていない。あとは肅々と神判を待つだけだ。

「むむ。確かに嘘は言っていないみたいだね」

流石です神様！ ホツとしていると、霞さんが呟いた。

「あく……。これはまさに類は友を呼んじやったわね……」

「言わないでくれ霞君……」

見つめ合い、ため息をつきあう霞さんと神様。

あれ、何で僕はこんなに居た堪れない気分になつていんだろう？

「ベル君つてばお祖父さんとクオン君に英才教育（せんのう）されちゃつてるからねー」

「女神様も大変なんですねー。コイツもちよつと目を離すと次から次へと……」

「あー……。そうみたいだねえ。いや、ボクもちよつと小耳に挟んだくらいだけど、武器を

任せる相手も美人かどうかで選んだつて……」

「そう。そうなんですよ。どつちかつて言えば神ゴブニユの作る武器の方が好みの癖

に」

「やつぱりかい？ ボクもそんな気がしたんだ」

そして、すっかり打ち解けた感じの神様と霞さん。

いや、打ち解けたと言うか、何だか同じ苦勞を分かち合う戦友みたいな……。

「僭越ですが、女神様。手綱は早めにしっかりと握っておいの方がよろしいかと」

「うん。肝に銘じておくよ。君も……」

「いえ、こっちはもう手遅れですから」

「うん。ごめんよ……」

再び沈痛なため息が重なった。

「……師匠、一体何やったんですか？」

「気にするな」

いや、そんなこと言われても。

しかし、きつぱりと断言してくるクオンさんにそれ以上問いかける事も出来ず、僕も

またため息を吐いた。

「ま、いいや。ベル君、デートしようぜ！」

と、そこで神様が腕を絡めて来る。

「で、デート?!」

「そうさ! こんなに盛り上がってるだぜ! ボくらだって楽しまなきや損だろ?」

「いや、でもっ、デートって!」

畏れ多いんじゃないだろうか、と懐いていると、

「じゃあ、こっちのお邪魔虫は私が回収していきますね、女神様」

霞さんがクオンさんに腕を絡めて笑った。

「うんうん。君達も楽しんでくるといいよっ!」

「い、いえ、まずはシルさんを探さないと!」

そろそろ催しも始まっちゃうし、入場料がないとシルさんが困ってしまうのでは……?
?

「なら、ベル。お前達はメインストリート沿いを探せ。俺達は少し外れた所を見て来る」
そこでクオンさんが言った。

「外れた所、ですか?」

「元々この区画は屋台が多いけど、普段は同じ場所に同じ出店や屋台が並んでるわ。でも、今日みたいに特別な催し物がある時の場所取りは別枠なの」

首を傾げていると、霞さんが教えてくれた。

「別枠、ですか?」

「ええ。特需って言うのかしら。催し物がある時だけ出店してくる出店や屋台が多いからね。基本的に先着順……といっても、大体みんな同じような時期に申請してくるから、実際は抽選になるんだけど。あと、何より伝手ね。ギルドに顔が利くといい場所を融通してもらえるってわけ。この辺りはギルド直轄の施設が多いからおさらね」

「ってことは、この出店はみんなどこかの『ファミリア』のものなんですか?」

「出資を受けている出店はあるでしょうけど、基本的には無所属の市民がやつてる店の方が多いはずよ。……まあ、あまり大きな声では言えないけど、このお祭りは一般市民のガス抜きのための催しだって言うのが一般的だから、ね」

「そういうえば師匠もこの前そう言っていたっけ。その後で何だか含みのある事も言っていたけど。」

「ええと……。つまり、フィリア祭の間は市民の方優先って事なんですネ？」

「そう。いわば利益還元ってところかしら。……まあ、このお祭りがちゃんと利益が出てるかどうかは知らないけど」

「そうなんですか？」

「まあ、他の催し物と比べると、入場料が結構安いからね。規模を考えると利益どころか元が取れているかどうか……」

「そ、それは確かに。ダンジョンでモンスターを捕まえて、地上に運び出して……ええと、多分餌とかも必要だろう。」

「でも、モンスターを倒している訳じゃないから魔石もドロップアイテムもない。冒険者の言えれば完全なタダ働きだ。餌を考えればむしろ赤字……。」

「まあ、野暮な話はそれくらいにして。話を戻すと、その抽選から外れた店が少し離れた場所に店を並べてる事があるの。こっちはいつも通りの手続きで済むからなんだけど、

客足が遠い事もあってメインストリートに並んでいるお店より少し安かったり、物が良かったりするのよ。あとは、普段からこの辺りにいる出店が場所を変えて商売してたりもね。だから、知っている人ならそっちにいる可能性も充分にあるってわけ」

「ああ、なるほど」

シルさん、その辺り意外と抜け目なさそうだし、それも充分にありそうかな。

「詳しいんだねえ、霞君は。ハーフエルフ君はともかく、エルフ君はこういうお祭りにはあんまり来ないイメージがあつたんだけど」

まあ、自分が認めた者以外の肌の接触を嫌う——と、言うイメージを持っているのは神様も同じだったらしい。

「あら、女神様。私はこれでもハーフエルフですよ？」

「うえ?!」

神様と驚きの声が重なった。

ハーフエルフと言えばエイナさんだけど、エイナさんよりも耳の長さが長い。

それこそエルフのリューさんと同じだと思っただけど……。

「あ、あれ? でも嘘を言っている訳じゃないね……?」

神様も目を瞬かせている。

「ええ。エルフとハーフエルフの間に生まれたせいかな、普通のハーフよりは血が濃いみ

たいなんですよ」

「ああ、なるほど。それならあり得る話だね。ごめんよ、疑っちゃって」

(そ、そう言われて見るとリユーさんよりちよつとだけ耳が短いような……?)

頷いてから頭を下げる神様の横で、リユーさんの顔を思い出しながら首を捻る。

エイナさんとリユーさんが左右に並んでくれればもう少し分かりやすいのかな。

「いえ、よく驚かれますから。まあ、オラリオ生まれオラリオ育ちですし、森生まれのエルフよりははしたないせいかもしれませんね。それに、こうして悪い男にも捕まってしまうましたし」

霞さんはクスクスと笑ってから、横目で師匠を見やった。

「馬鹿言え。お前は出会った時からそんな調子だっただろうが。どこの誰とも知れない男にのこのことついてくる程度には」

「あら、おかげで助かったでしょ? ファイフスさん?」

「ファイフス?」

神様と二人で首を傾げていると、霞さんは言った。

「ええ。出会った時、コイツったら記憶を失っててね。しばらく自分の名前すら分からなくて。で、出会ったのが繁華街……つまり、第五地区だったから、しばらくファイフスって呼んでたのよ。まあ、割とすぐに名前だけは思い出したからごく短い間だけだね」

賭博場カジノでイカサマがバレて用心棒バウンサーに殴られすぎたのかと思っただわ——と、霞さんは笑った。

「お前な。仮にも命の恩人に言う台詞か？」

その言葉に、クオンさんはため息をついて言った。

「命の恩人だつて？」

「ああ。と言つても、その繁華街の路地裏でゴロツキに絡まれてるところを助けただけだから大したものでもないが」

クオンさんはなんでもなさそうに肩をすくめるけど、

「あー…。あそこのゴロツキ君達は特に危ないつて聞くなあ。L v. 2とか、場合によつてはL v. 3もいるつて聞くし」

「れ、L v. 3!? そんなに強いならダンジョンに行きましょうよ……」

いや、神様に言つても仕方ないんだけど。

「それはその通りなんだけど……。基本的にダンジョンの中で心折れた連中なのよ」

そこで霞さんが苦笑した。それにクオンさんと神様も続く。

「ああ。だが、他に力の使い道も思いつかないから、あそこに吹き溜まつてるんだ」

「うんうん。それで、元々の主神が真面目だったりと、日夜通い詰めて本人に更生を促したり、足抜けさせようと元締めのところ到手勢連れて乗り込んだりしてるらしい

よ」

「う、うわあ……」

ちよつといい話のようできて、何だか物凄く切ない話を聞いてしまった。

「いや、襲つてくる時は本気だからな。ほっこりしていると殺されるぞっ!」

「殺されなくても身ぐるみはがされちゃうわよ?」

そしてそれ以上に物騒な話だった。いや、ほっこりしてるつもりはないんですけど。

「そもそもベル君がカジノとか行ったら、イカサマに引つかかって身ぐるみはがされる姿しか想像できないよ……」

「か、神様までっ?!」

そりゃ確かに賭け事とかやった事ありませんけどっ!?

「繁華街って怖いところなんですな……」

僕の中ではダンジョンと同じくらい危険な場所となった。

いや、ダンジョンの方はエイナさんが色々教えてくれるから、ひよつとしたらもつと危ないのかもしれない。

「ええと……。場所さえ選ばばちゃんと安全に楽しめるわよ? 貴族向けの店も多いか

ら、全体を見れば治安だつて決して悪くないし」

慄いていると、慌てた様子で霞さんが言った。

「そうだね。お洒落なお店とかたくさんあるって聞いてるよ。他に大劇場シアターなんかも有名なだね」

「大劇場シアター、ですか……?」

神様、本を読むの好きだし、演劇とかにも興味があるのかな?

(そう言えば、村に旅の演劇団が来た時は僕もお祖父ちゃんにせがんだっけ)

まあ、演目が英雄譚だったからって事もあるけど。

うん。それなら――

「じゃあ、いつか一緒に行きましよう神様。……まあ、今すぐには無理ですけど」

貴族御用達の店なんて、今ある貯蓄を全部つぎ込んで手が出ないだろうし。

でも、あの人に近づけばいずれ自然とそれくらいの余裕も出て来るはずだ。

それと、エイナさんに相談して近づいちゃいけない危険な場所だけはしっかり教わっておこう。

「うんうん! 楽しみにしてるぜ、ベル君っ!」

ぱあつと神様が顔をほころばせた。

「まあ、大劇場シアターはまた今度。今はフィリア祭を楽しもうぜっ!」

そして、今度こそ僕は神様に手を引かれて、フィリア祭に向かっていた。

第四節 怪物たちの宴

1

ベル達と別れてからしばらくして。

俺達はメインストリートを少しばかり外れた路地を歩いていた。

「しつかし、シルねー。確か私の商売敵じゃない？」

「まあ、同じ酒場の看板娘だと言えはその通りだが……」

しかし、『酒夢猫亭』と『豊穰の女主人』^{シヤムネコ}とでは毛並みが違う。

大人数での宴会にだって充分に対応するのが『豊穰の女主人』なら、『酒夢猫亭』^{シヤムネコ}は少人数で静かに飲むための店と言える。

客の奪い合いになるか、と言われると少なからず疑問だった。

「面識があるのか？」

「いいえ。たまにお客さんから名前を聞くくらいね」

そんなものか。

まあ、シル——というか、彼女の周りや背後にいる連中が霞やあの店に目をつけられたら面倒だ。

もしシルを見つけたとしても、互いに深く関わらないうちに終わりにしてしまおう。

「どこから覗いてみる?」

果汁かサンドイッチ系を扱ってる店が狙い目だとは思うんだが……」

いや、ここは同じ女の霞に案内してもらった方が出会える確率が上がるのではないだろうか。ふと思いついたそれを読み取ったかのように、霞が唸った。

「ジュースはともかく……サンドイッチよりもクレープとかそういうお店の方がいいんじゃない? この時間ならもう朝食は済ませているでしょ?」

「なるほど。そういう発想はなかったな」

だが、言われてみれば確かに。

しかし、ああ見えて甘いものが苦手なベルと、そもそも食事が嗜好品でしかない俺からはなかなか出てこない発想でもあった。

「まったく。まあ、いいわ。出店ってわけじゃないけど、この辺りに美味しいクレープ屋さんがあるの。まずはそこに行ってみましょう」

それは単にお前が食べたいからなんじゃないのか?——と、喉まで出かかった言葉はなんとか飲み込む。またヒールの洗礼を受けるのはご免だった。

「ハッ、ちよ」

いくらメインストリートから外れたとはいえ、そこに向かおうとする者たちによって

道はそれなりに混雑している。

とはいえ、そこは霞も慣れたもの。横道や裏道を組み合わせて流れるように進んでいく。

……のだが。

「ッ!？」

「どうかした？」

「いや、今何か視線が……?！」

気のせいかな。今も放浪者のロープを纏っている。いつもの黒衣ならまだしも、この格好で俺が誰かを察せる者はまだそれほど多くないはずだった。

「んー……。私には分からないけど……」

霞も『冒険者』ではないとはいえ、それなりに荒事に慣れている身だが……。

「いや、もう感じない」

勘が鈍ったかしら?——そうばやく霞に、肩をすくめて見せる。

(勘が鈍ったのはむしろ俺の方か?)

今ひとつ釈然としないまま、再びいくつか路地を縫って歩き、霞おススメのクレープ屋とやらにたどり着く。

「当てが外れたわねー」

きつちりクレープを買わせながら、霞はあつさりと言った。

「まあ、いいけどな……」

生クリームやらジャムやらがたつぷり詰まった——まあ、不死人の朽ちた舌でも充分に甘みを感じられるような代物を二人して齧りながら、次の目的地を目指す。

半月ばかりダンジョンにこもった後だ。クレープの一つや二つ、あるいは果汁ジュースの一杯や二杯で懐具合が揺らぐはずもない……いや、より正しく言えば、今の手持ちなら、それなりの家がいくつか買える。普段から使っている——オラリオで目覚めてから使い始めた財布の中身はともかく、ソウルの中にはそれくらいあった。

（まあ、金庫に入れておくより安全だしな）

とはいえ、『何かあった時』のために、館の金庫にもいくらか残してあるが。流石にそれくらいの義理……というか、甲斐性くらいはあるつもりだ。

「そつちはどんな味なの？」

「甘いぞ」

一体何が違うのやら。

正直、不死人の舌でなくても分からない気がしてならないのだが。

「そー言う事じゃなくて……。まあ、いいわ」

言うが早い、霞は俺の手にあるクレープに齧りついた。

「んー。こつちもいいわねー」

どうやら、普通の生者には違いが分かるらしい。

これが人間の限界という奴なのか。

と、そこで――

「ツ!?!」

再び視線。いや、明らかに何者かの気配が死角から迫る。

霞に片腕を取られていた分だけ、反応が遅れた。もはや剣の間合いではない。

舌打ちする間もなく、護身のためにそのまま装備していた短刀を引き抜いて――

「おっとー!」

馴染んだ匂いに動きが鈍った。その隙に腕を取られる……と、言うより腕ごと抱きす

くめられたというべきか。

「ふうん。やっぱりあんたかい。久しぶりだねえ」

フードが払われると同時。

麝香の匂いと、柔らかな女の体温を感じていると、霞がその女の名前を呼んだ。

「あら、アイシヤじゃない。久しぶりね」

アイシヤ・ベルカ。

四年前から何かと縁のあるアマゾネス……バレーベラ戦闘娼婦だった。

その姿を確認して、短刀を鞘に戻す。

「あんたと乳繰り合ってるから、誰かと思つたよ。まさか本人とはねえ」

「当然でしょ？ エルフは慎重深いのよ」

「そりや身を捧げた相手が悪かつたね。こいつは女を買いに来るような奴さ」
「ええ。それは本当にね」

アイシヤの言葉に、霞が嘆息した。

……確かにその縁と言うのが主に客としての縁なのは否定しがたいが。

しかし、事の発端には霞自身も大いに絡んでいる。それに、
「買いに行くというより、押し売られてるんだが……」

「何か言つたかい？」

締め上げるように身体を絡めて来るアイシヤに沈黙を保つ事にした。

この間合いで迂闊な事を言おうものなら文字通りに『締め上げ』られかねない。

何しろ、体術に関して言えば彼女の方が引き出しが多いのだ。下手に動くとなんか返し技が返ってくるか分かつたものではない。

「というか、霞。あんたも薄情だね。帰ってるなら教えてくれりゃいいのに」

「あら、だつてあなた最近店に來ないじゃない。そんなに忙しいの？」

「そりや夜は稼ぎ時さ。それにロクな男がいなくても、私達は巡回しなけりゃならない

からね。まさか「ガネーシャ・ファミリア」に押し付ける訳にもいかないんだ」

「あ……。治外法権も楽じゃないわねえ」

「まったくさ」

さて。そもそも戦闘娼婦バトルベラとは読んで字の如く、戦闘もこなす娼婦である。冒険者を兼業している娼婦、と言えば一番理解が早いだろう。

鍛冶系派閥には戦える鍛冶師……つまり、自分でダンジョンに潜って鍛冶素材を回収してくる連中がいるが、それと似たようなものだ。

実にオラリオらしい存在だと言えよう。いや、アマゾネスらしいと言うべきなのか。

かく言う彼女も、女らしい身体の曲線はそのままに、まるで猫科の肉食獣のように無駄なくしなやかな身体つきをしている。

……いや、肉食と言うのもまさにその通りなのだが。

オラリオで得た無駄知識を思い出し、小さく嘆息する。

「あんたが歓楽街に来てくれればいいじゃないか。こつちにだつて酒場くらいあるよ？」

「イヤよ。この前行って、危うく押し倒されそうになったもの」

「よく知ってるよ。助けたのは私だからね」

彼女達が拠点としているのは歓楽街。簡単に言えば色町、風俗街だ。

俺と霞の古巣と言つていい繁華街と同じく……と、言つてもこちらは事実上の、と先につけるべきだろうが、治外法権が敷かれた区画である。

いや、オラリオ外から出資を受けた店が並ぶ繁華街と違い、歓楽街はある「ファミリア」が取り仕切つていると聞く。従つて、自治区と言つた方が正しいのかもしれない。いずれにしても特権のように聞こえるし、実際間違つてもいい。……が、それは何かあつた時には自分達で対処しなければならぬという意味でもある。

「最近じゃ幹部の一人に目されちまつたからなおさらさ」

つまり、腕の立つ戦鬪娼婦が客引きついでに衛兵の真似事をするのも止む無しという事だ。彼女くらいの腕があれば特に重宝されるだろう。

もつとも、アイシヤが所属する「ファミリア」を本人から聞いた事はない。お互いに込み入つた身の上話ほしくないというのがいつの間にか暗黙の了解となつている。

(……まあ、そうは言つても)

目覚めたばかりの頃ならいざ知らず、ここまで聞けば、自ずとどこの「ファミリア」かは特定できているが。

「ほう。それは随分と出世したな、あの小娘が」

今年で確か二二歳か。その美貌はますます磨きがかかつていけると言える。

「その幼気な小娘の身体に散々盛つたのはどこの誰だつたかねえ？」

いや、幼気いたいけなどとは一言も言っていないが。

むしろ四年前から野性的な色気は有り余るほどあった。チビ助から無事に成長したどこぞの金髪小娘に少し分けてやるといい。

「本当に幼気いたいけな小娘だったら強襲も夜襲もかけてこないだろうよ」

路地裏でいきなり斬りつけられる——と、そもその出会い方がそれだった。いや、それについてはあのチビ助も同じだったが。

その当時、すでにいくつかの派閥ともめていた俺達は、その一員かと思つて返り討ちにし、どうやら無関係らしいと知つて慌てて近くの宿に担ぎ込み、手当てをして……すつかり回復した彼女の『夜襲』を受けたわけだ。

……まあ、そつちも返り討ちにしておいたが、深くは言わないが、不死人の強靱さと底なしの体力を侮つたのが全ての敗因だとだけ言つておこう。

と、それはともかく。

そんなこんなで縁が結ばれ、時々俺達を狙う派閥の情報を流してくれたりもした結果、今もこうして関係が続いているわけだ。

……そして、この二人は割と最初からこんな調子である。まあ、お互いに竹を割つたようなさつぱりした性格だからこそだろう。少なくとも、俺はそう理解している。

下手に突くと蛇が……それも、どこぞの臭い世界蛇並みの飛び出してきたかねな

いので、深く探索しない事に決めていた。

「ずいぶん甘ったるいもの食べてるじゃないか」

沈黙を保っていると、アイシャは腕を絡めたまま器用に、俺の——というか、さつき身構えた時に放り投げたはずの——クレープを齧ってそう言った。

あの一瞬でそこまでこなせるとは。この三年ばかりの間に随分と腕を上げたらしい。

（一回か二回はランクアップとやらをしているのかもな）

確か四年前はLv. 2の半ば頃だったはず。もし二回ランクアップしているなら、この時代においてはなかなかの成長速度と言えるのではないだろうか。

とまあ、それはさておき。

「そう言うお前はこんな朝からどうしたんだ？ 日の光を浴びてるなんて珍しいじゃないか」

仕事柄、アイシャの主な活動時間は日が沈んでからのはずだ。こんな朝っぱらから見かけるなんて、ベルが深夜に街を徘徊しているようなものである。

「私は吸血鬼か何かかい？」

「どちらかと言えば夢魔サキユバスの類だろうな」

「なら、あんたは夢魔の王かなんだね。散々返り討ちにしてくれてまあ……」
個人的に王とつく称号はこれ以上いらぬのだが。

「酒場で〔ロキ・ファミリア〕相手に暴れた奴がいたって聞いてね。もしかしてと探してたのさ。何しろ上得意だからねえ」

赤く艶めかしい舌で唇を舐めながらアイシヤが笑う。

何と言うかこう、蛇に丸のみにされる蛙の気分だった。

……いや、その時は返り討ちにするつもりだが。

「それで、こんな朝早くからわざわざファイリア祭まで？」

危険はないと判断したらしく、霞がアイシヤと反対側の腕に絡みついてくる。

「騒ぎが起こりそうな場所に行けばいるだろうと思つたのさ」

「なるほど。そういう意味じゃ見つけやすい男よねー」

「人を騒ぎの元凶のように言いやがって……」

呻くが、二人とも綺麗に無視して話を続けていく。

「だろう？ いや、正直いくらモンスター絡みと言つてもファイリア祭は無理があるかとも思つちやいたけど……まあ、見つけたんだから問題ないね」

「そう言われると、これから何か起こりそうな気がしてくるわね……」

「そりや確かに。ま、モンスターの脱走くらいは覚悟しとくべきかね？」

「ちよつと、不吉な事を言わないでよ。アナタ達と違って、か弱い私には死活問題なんだから」

「その時はちゃんと守ってやるさ。何しろ長い夜には欠かせない戦友だからね」

アイシヤが艶然と笑うと同時、

「ツ!？」

今度こそ明確な殺気を感じた。

それはアイシヤも同じらしく、咄嗟に腕を解放してくれる。

「くツ!？」

おかげでギリギリ反応が間に合った。ソウルから取り出した盾を構える。

〔「ソウルの矢」?!〕

その一瞬、青白い閃光が目には焼き付く。

いや、詠唱を聞き漏らしたせいだ判別できないが、この重さからして「強いソウルの矢」か「強いソウルの太矢」だろう。そうでないなら、今の俺などよりもはるかに格上の不死人としか言いようがなくなる。

最悪の事態を想定し、防具を恩師達から与えられた《巡礼の長衣》に切り替え、愛用のクレイモアを抜き身の状態でソウルから取り出す。

霞は最悪アイシヤに任せるしかない。覚悟を決めて盾を構えるが――

「お前は……?？」

姿を現したのは先日見かけた蛇の眼をした魔女だった。

「どういうつもりだ？」

彼女に攻撃を仕掛けられたという事実に、自分でも驚くほどの動揺を覚えていた。そう思う程度には俺は彼女を『知って』いるらしい。

いや、それは当然だ。彼女は――

「……見ない顔だね。あんたは知ってるかい？」

「いいえ。ひよつとして外で引っかけてきたんじゃない？」

一方で、後ろの二人はと言えば実に暢気な様子でそんな事を言いあっている。

「お前ら……」

この濃厚な殺気の中だと言うのに何故そこまで暢気なのか。

アイシャは言うに及ばず、霞にだって伝わっているはずなのだが。

「だって、あんたが女に刺されたって別に驚かないし」

心が折れそうだ。

いや、自業自得と言われれば確かに反論する言葉なんてどこを捻っても出てこないが。

「いいえ。私には貴方様を害する気などありませんわ、我が君」

そして、彼女は彼女で言動が一致していない。

たった今、脳天ぶち抜かれそうになったばかりだと言うのに。

「……ええ。側室や寵姫を侍らせるのは王の嗜みと聞いております。何の問題がありません。何の問題がありません。」

いや、俺は所謂本物の王族ではないのだが。血筋も凡庸なものでしかないはずだ。

……まあ、その辺りはもう全くと言っていいほど記憶にないので、可能性としてない訳でもない。……のかもしれない。雀の涙よりも遥かに少ないだろうが。

「いえ、ですが……。正室は一体どなたなのでしょう？」

「さあ？ 何しろことある事に違ふ女の名前を口にするような奴だし」

「私が言うのもただ……。冷静に考えると、最低の男だねえ」

「あら、アイシャ。そんなの今さらじゃない」

「違うないね」

三人のため息が重なった。

今すぐ『螺旋剣の破片』を使って篝火に戻りたくなくなったが、辛うじて踏みとどまる。

「それで、一体何の用なんだ？」

気づけば殺気も霧散している。

この隙に色々話を聞きだしておくべきだろう。ここでは他の巡礼地よりもそういったやり取りがより重要となる。そんな事はすでに学んでいた。

「急ぎお探してください。貴方様と因縁のある女神とその下僕を」

表情を改め、蛇眼の魔女は言った。

「女神と下僕だど？」

気になったのは下僕という表現。そう表現するなら、糸目の小僧の方ではない。

あの小僧は建前上、小人どもを下僕扱いはしていない。

因縁という言葉からしてヘステイアやあの女鍛冶師でもない。

つまり――

「神フレイヤとオツタルってところかしら？」

霞が問いかけると、その魔女は微かに頷いた。

「あの動く呪い壺か……。それはまあ、確かにいつまでも野放しにはしておけないが」

あの女神は、人間にとって存在自体が害悪だ。

ただそこにいるだけで周りを狂わせる。存在そのものが呪い。つまり、あの王妃と同じだった。

じだった。

まったく、この時代の連中は何故あんなものをいつまでも野放しにしているのか。理

解に苦しむところだ。

とはいえ――

(下手に手を出すとあの爺さん達がうるさいんだがな……)

あの爺さん達とはある種の契約を結んでいる。

そこまで強制力がある訳でもないが……まあ、連中は今のところかなり誠実に守ってくれている。俺が一方的に蹴る訳にもいかない。つまりは——

「殺せと言うなら、それなりの理由が欲しいな」

そういう事だ。あの爺さん達を納得させられる……いや、あの爺さん達が周りを何とか宥められる程度の理由が必要だった。

「この催し。モンスターファイヤー怪物祭と言うのですね？」

「ああ。そうだな」

「人とモンスターの友愛の祭。ですが、このまま放っておけばその名の通りの惨劇となるでしょう。理由……義理立てとしてはそれで充分では？」

「何……?」

束の間、言葉を失っていた。

惨劇という言葉に対する衝撃などではない。そんなものはとうの昔に見慣れてしまった。

だが、

(友愛だと?)

仮面の男とあの爺さん達の真意。それを一体何故彼女は知っている?

無論、義理立てという言葉も聞き流せない。

「重ねて申します、我が君。どうかお急ぎください」

「待て！ お前は一体——」

呼び止める暇もなく、彼女は「見えない体」の詠唱を呟く。

姿を見失ったのは一瞬だが、その直後に彼女の気配は再び消えた。

「それで、どうするんだい？」

舌打ちしていると、アイシヤが言った。

彼女の言葉をどこまで理解したかは定かではないが——惨劇という響きだけでも緊張感を煽るには充分だろう。

「探すしかないだろう？ 放っておけばお前達の妄言が現実になりかねない」

彼女の問いかけに、肩をすくめて見せる。

「でも、アンタまたフレイヤ様のところともめたの？」

「さて。戻ってきてからは顔も見ちやいないがな」

「あの決着じや納得いかなかったんじゃないかい？」

「そんな事を言われても困るな」

もつとも、そうだとしてもまさに自業自得としか言いようがないが。

「しかし、そうだとしてみんな人込みにモンスターを放つ理由にはならないだろう？」

「どうだか。あんたのせいにする算段でもついているんじゃないか？」

「それはそれで確かにゾツとしないがな」

そしてすつかり『呪い』に蝕まれているあの連中ならやりかねないところでもある。

「ところでさつきの人には信じられるの？ 探す事自体が罨の入り口だったりしたら目も

当てられないわよ？」

霞の疑問はもつともだが……

「いや……」

彼女を疑うという発想がどうにも出てこない。

すでに『魅了』でも掛けられているのかと思ひもするが……しかし、思い当たる瞬間がない。

いや、そうではないか。

「」

それはそもそも。初めから疑う理由がないだけの話なのだから。

「いや、それはないな」

「えらくあつさり断言するわね？」

「何か根拠でもあるのかい？」

二人に問いかけられ、肩をすくめて見せる。

根拠なら、まるでないわけではない。

「それなりにな」

こうして餌として使ってきた以上、あの売女が正式に怪物祭の真意を知らされているとは思えない。蛇眼の魔女が一体どこから情報を得たかは定かではないが……そうである以上、少なくともあの売女から聞いたという事は少々考え難い。

(正式な手段ではない方法で知った可能性は充分にあり得るが……)

その辺りはあの女の十八番だ。

(しかし……)

それにもう一つ。彼女は明らかに『ソウルの業』を修めている。

あの女が俺が留守の間の三年間にあの女がその知識を得たとして、完全に失伝し、篝火はなく、何より火防女すらもないこのオラリオで、たった三年の間にあの域にまで育てられるとは思えない。

(『ソウルの業』に精通した誰かの後押しがあれば話はいくらか変わるだろうが……)

今、この世界でその業を知る者はごく僅かだ。

南東の果てで出会ったあの老婆達のように、かつてあの男に率いられていた者達の末裔か、あるいは俺と同じくこの地に迷い込んだ不死人か……。

(それだって凡百の不死人じゃどうにもならないだろうが……)

しかし。

あの男なら—— ■ ■ ■ すら蘇らせたあの ■ ■ ■ なら、それも可能だろう。

いくらあの魔女が ■ ■ ■ だとしても——

「どうかしたの？」

霞の声に、先ほどから続く眩暈にも似た鈍い頭痛が消える。

「いや、何でもない」

軽く頭を振ってその残滓を追い払ってから、肩をすくめた。

「根拠の方は一応ある。どれくらい確かかと言われれば返事に困るが……なに、あのアバズレよりは信用できるだろうさ」

「まあ、あんたがそう言うならそれでいいさ」

アイシヤはあっさりと言いつつ頷いてから、

「四年前の決着が見れるってんなら悪い話じゃないからねえ」

確かにあの売女を殺すなら、いずれオツタルも立ちはだかるのは疑いない。

ならば、四年前の決着もここでつく事になるか。

「別にそう面白いものでもないと思うがな」

体内を奔るソウルに意識を向けながら、答えた。

まだ至る所で凝っている。この様では、本来の力の四割がいいところか。

だが――

(まあ、四年前ならいざ知らず、な……)

戦えば勝つだろう。

慢心でも過信でもなく、ただ静かな確信だけがそこにあった。

2

「少し出かけて来るわ」

と、我が主神が言い出したのは今朝方の事だった。

珍しい――と、そう思ったのが偽らざる本心であった。何しろ、あの御方は『美の神』

ゆえに、外出する際には色々と苦勞が伴うのだ。

まして今日はフィリア祭。オラリオ外からも数多の人間が集まっており、いつもに増

して街中が騒がしい。

もつとも、我が主神は風のような御方だ。急に思い立ってフィリア祭を見に行くとし

ても別に驚くほどでもない。

それに、ここ数日余りあの御方は何か楽しげだった。むしろ、今日もそちらの『用件』

で外出されているのかもしれない。

(神口キと、【劍姫】か)

つい先ほど喫茶店で会われていた一柱と一人を思い浮かべる。

神ロキとは天界の頃からの付き合いと聞いているが、【剣姫】がいた以上、お一柱ひとりで対談なさるといふのは少しばかり不用心ではないか……と、主神に対する不満めいた想いを振り払う。

(神経質になつてゐるな)

こうして半ば強引に同行している時点で、それを自覚せずにはいられなかった。

(戻つてきたか)

クオン。あの【古王】スルトを唯一退けた正体不明のLv. 0。

およそ四年前、『暗黒期』が終わったばかりのオラリオに、【古王】スルトと入れ違うように現れたもう一人の異端者イレギュラー。

神殺しすら厭わない悪逆の輩。

今頃はフィリア祭で盛り上がつているのであろうあの円形闘技場アンファイテアトルムで、俺と……そして【古王】スルトと戦つてからしばらくして突如オラリオを去つた。

噂で良ければいくらか耳にしているが……理由は定かではない。

ついにギルドによつて追放されたなどという者もいるそうだが……それこそあり得ない。同じ噂なら、むしろギルドから何かしらの密命を受けて旅立つたという方がまだ信憑性がある。

そう思わせる程度には、ギルドはあの男を重用していた。

いずれにしても、あの男は再びオラリオに戻ってきたという。

ミアの店で「ロキ・ファミア」の「凶^{ツアルガンド}狼」を叩きのめした事はすでにオラリオの噂になつてゐる。もつとも、その後の足取りは定かではないが――

「行きましよう、オツタル」

「はっ」

細い路地を抜けて、フレイヤ様は街を進む。

実のところを言えば、どこに向かわれてゐるのかは聞いていない。ただ、この位置から考えておそらく円形闘技場アンファイテアトルムだろうと当たりはつけてゐる。

人目を忍ぶように進むも『美の神』の宿命であろう。もつとも――

(何かしらお考えではあるのだろうか)

例えて言えば、ワクワクとした気配を纏つておられる。それが何かは神ならぬ我が身には察せないが……

「チツ、本当にいるとはな」

そこで一切の熱を宿さない冷えた灰のような声が出た。

感じるのは純粹な嫌悪……いや、むしろ憎悪と言うべきか。

反射的に剣を引き抜き振り返ると、そこにはあの男がいた。

「クオン……」

「久しぶり、とても言っておこうか？」

それもまた、感情の無い声だった。

相変わらず得体の知れない存在だった。これならいつそ、ダンジョンに巣くうモンスターの方がまだ可愛げがある。

「フフツ。あなたから会いに来てくれるなんて嬉しいわね」

いったいこの男のどこを気に入られているのか。

我が主神は心底嬉しそうに微笑んだ。それを真正面から見据え、

「それは来るとも。その男の守りを抜いてヘッドショットが狙えると思うほど、俺は自分の弓の腕を信用していないからな」

何一つ揺らぐ事もなく、その男はそこに在った。

突如として夜の帳が降りたかのように、一瞬だけあたりが暗く染まる。

いや、それは錯覚だ。クオンの殺気が——いや、殺意が見せた幻でしかない。

燃え上がる炎ではなく、凍てつく氷でもなく。全てを包み閉ざすような闇の殺意。
(相変わらず、人間を相手にしている気がせんな)

事実、それは本当に人間なのか。未だに判じ切れてはいない。

「道を開ける。無益な殺生は好まない」

そんな言葉に頷いているようではこの御方の護衛など……いや、冒険者などやっていられない。フレイヤ様を飲み込まんとする闇を祓い退けるべく、身体に気迫を満たす。

「あら、せつかちなのね。いきなり殺しに来るなんて。何かしたかしら？」

しかし、それより先にフレイヤ様がお声をかける。

「ぬかせ。貴様らはただ居るだけで呪いをばら撒く厄災だ。そんなものを野放しにしておくこの時代の人間の気が知れない」

辺りを包む闇が、その密度を増した。

「酷い言われようね。でも、仕方ないじゃない。私はそういうものなのよ」

「言えた義理か。貴様は狙ってやっているだろうが」

「フツ。そんなことはないわ。ただ少しだけ微笑んでいるだけよ」

背に庇った状態で見えるはずもないのだが、フレイヤ様が微笑んだのが分かる。

ただそれだけで全身が高揚し、身体の隅々にまで新たな気迫が満ちていく。

「それで、一体何を企んでいる？」

それを鼻で笑ってから、クオンは言った。

「あら、何の事かしら？」

「白々しいな。こんな場所にいる理由を聞いている」

「見て分からない？ モンスターフィリアを観に来たの。こうして『魅了』しないように

気を使って、ね。年に一度のお祭りだもの」

「そんな柄か。まあ、答える気がないならそれでいい。あきらめて巣穴に戻るならそれでもいい。だが、そうでないなら覚悟してもらおうか」

「オツタル……」

「御意に」

もはや言葉は必要ない。

クオンが剣を抜くより先に剣を振りかざし、一息に間合いを詰める。

「ぬうっ!？」

先手を取り放った渾身の突進は、しかしあつさりと迎え撃たれ、鏝迫り合いにもつれ込んだ。

しかも——

(押し負けるだどっ?!)

四年前は力に関しても俺の方が有利だったはず。

それがどうだ。今は互角に切り結ぶどころか気を抜けば押し返されかねない。

なるほど、非公式記録アナザレコードは伊達ではないという事か。

(これはいかん……!)

この男は剛力で鳴らす手合いではない。かといって、技巧派とも言い難い。

技巧の未熟を力で埋め合わせ、力の不足を技巧で補ってくる。そういう手合いだ。この状況なら――

「チッ！」

体捌き一つで力を逸らされた。が、それでも一瞬だけ俺の方が早い。

体勢を崩される前に仕切り直し、横薙ぎに払う。しかし、

(早い……)

それもまた空振りに終わった。

認めざるを得ない。この男は、三年の間に確実に腕を上げている。

力だけでなく、技巧も。とてもオラリオの外にいたとは思えない。

「腕を上げたな」

「お前が変わらないだけだ」

「言ってくれるっ！」

言葉と共に単純な前蹴りを放つ。それだけで下層程度のモンスターなら文字通り一撃で蹴散らせる自負があつた。無論、L.V. 6程度の冒険者なら、仕留められないとしても致命打に近いダメージを与えられる。

……もつとも。確かに中ればの話でしかないが。

クオンは素早く横に跳ぶ。それだけで蹴りは獲物を見失つた。こうなつては蹴りと

いう選択は悪手だと言わざるを得ない。

脚を地面に戻すまでの一瞬、どうしても動きが滞る——

「ふんっ!!」

と、凡百の冒険者ならそうだろうが。

フレイヤ様より「**猛者**」（わっしや）という称号（な）を与えられた身だ。そのような凡庸な真似は許されない。

地面を蹴り砕く勢いで空を切る脚を振り下ろし、そのまま踏み込む。技巧を力で補うのは何もこの男の特権ではない。

（俺としてまだ未熟な身だからなっ！）

あの時——五年前に刻まれた敗北の傷が疼く。

クオンは確かに手練れだ。地上にいる誰よりも。そう言っている。

だが、それだけだ。

（所詮は路傍の石にすぎんっ！）

L v. 7に上り詰め、オラリオ最強などと持て囃されるようになった頃。不意に姿を見せたあの男に比べれば——あの頂にはまだ遠い。

横薙ぎの一撃は、瞬時に左腕に『現れた』盾に阻まれた。

相変わらず丈夫な盾だ——と、火花が散る中で毒づく。

それに、この『スキル』も相変わらず厄介ではある。だが、

(下らんやつ！)

所詮はこけおどしにすぎん。

この男の剣技は精々高く見積もって一流止まり。

他にも斧槍を扱うようだが、そちらに至っては一流に届くかどうか。

得物の違いを考慮に入れて、それでも【勇者】^{プレイヤー}と並べるかどうか……いや、純粋な槍術という視点で論ずればおそろく劣る。

槍だろうが剣だろうが、その武器が宿す性能こそ問題なく発揮してくる。しかし、端的に言つてそこに含蓄がない。

足りない技巧——含蓄と研鑽を『スキル』により武器を瞬時に切り替える事で繰り出される『不意打ち』で補っているだけだ。加えて言えば、武器を切り替える際には一瞬——いや、それにも満たない刹那だけ無防備にすらなる。

もつとも——

(【勇者】^{プレイヤー}よりも遥かに戦い慣れているがなつ！)

戦闘経験——それに裏打ちされた駆け引きという視点で見れば、この男の方が遥かに上だ。拙い技巧を拙いまま使いこなしてくる。

単純に『自分』という武器の性能を余す事無く熟知しつくしているのだ。

あらゆるものを継ぎ接ぎし、寄せ集め、正道定石を捨て、外道邪法を許容し、相手の長所を短所に貶めて、勝利をもぎ取っていく。

四年前、ついに最後まで押し切れなかったのはそのせいだった。

隙が生じるのはこの男とて織り込み済み。そこを容易く狙えるはずもない。

剣戟を打ち鳴らすこと十数回。状況は未だ拮抗していた。

力で言えば奴。技で言えばまだ俺にいくらか分があると見えよう。もつとも、それ一本を頼りにしては足元をすくわれる。

無論、互いだ。

(足りんな)

Lv. 7という『器』。磨き上げた「ステイタス」。

この男のように、俺はそれを十全に使いこなせているか？

冒険者には「ステイタス」に頼り切った者が多い。多くの第一級冒険者がそう言っ

晒う。

だが、果たして俺^{第一級冒険者}達は使いこなしていると言えるのか？

(まだ届かん)

否。断じて否。

斬られた事すら気づけない程に……斬られてなお見惚れる程に鮮やかな剣閃には遠く及ばない。遙か遠き、武の頂には——

「フンッ！」

再び陥った鏢迫り合いの最中、再度蹴りを放つ。いや、蹴りと言うよりは足払いか。……もつとも、払うだけではなく足首を蹴り砕くつもりだったが。

しかし、思った通りそれもまた空を切る。クオンは後方に跳んでいた。さらに踏み込んで剣を横薙ぎに一閃。クオンはさらに後方に跳び——それで間合いが開いた。

距離はおよそ一〇M。

「オオオオオオオッ！」

突進の力を込めたぶちかまし。筋力の不足を補うには充分——とも言い難いが。

「——」

クオンもまた無言で剣を構える。

東方の剣術で言うところの八相——いや、そのまま刀身を肩に水平に。そのまま真正面から踏み込んでくる。狙いは明らかだった。

距離は残り二M。そして——

「待てっ！」

激突する直前、別の誰かの声が割って入った。

いや、声だけではない。数本の投擲用のナイフも、だ。

それぞれの鼻先を掠めるようにして放たれたそのせいで、互いに最後の一步が踏み込めなかった。

決着の一瞬は霧散し、舌打ちと共に改めて間合いを開く。

「街中で剣を抜くとは尋常ではないな」

嘆息するように告げたのは、見事な仕立ての舞台衣装をまとった女だった。

【象神ア、ン、ク、ン、シ、ヤの杖】……】

「シヤクテイ……」

普段と装束が違うとはいえ、見間違えはしない。

我ら【フレイヤ・ファミリア】。フレイヤ【勇者】率いる【ロキ・ファミリア】に次ぐ大派閥【ガ

ネーシヤ・ファミリア】の団長。名をシヤクテイ・ヴァルマ。

「二人とも剣を下げろ。それとも拘束されて拘置所送りを望むか？」

「拘束だと？」

「無論、私一人でお前達を捕えるのは不可能だろう。それくらいは分かっている」

肩をすくめてから、彼女は言った。

「だが、今回は協力者に恵まれた。既にお前達を狙っている」

「何……？」

気配を探るが、それらしいものは感じられない。

(となると、弓か魔法による狙撃か……)

身を潜めるには都合の良さそうな何ヶ所かに視線を飛ばすが、影はおろか気配すら読み取れない。いや、気配については目の前の男の影響で十全に読み切れていないというものもあるだろうが……相応な手練れなのか、それとも単なる虚言か。

(弓なら問題にはならんが……もし魔法による狙撃なら、流石に無視はできんか)

この状況で気配を察しきれないなら、Lv. 3以上は確実だった。

俺達に白兵戦を挑むなら、Lv. 3程度では話にならない。

それこそ【勇者】^{フレイバー}や【重傑】^{エルガルトム}……端的に言つて、「ロキ・ファミリア」の主力陣をま

とめて連れ出してくる必要がある。

しかし、魔法なら……特に長文詠唱以上の代物なら、「ステイタス」において格下であつても決して侮れない。だからこそ魔法、ひいては魔導士は重宝されているのだ。

(フレイヤ様は……)

すでに近くにはおられない様子。ならば、最悪は――

「強行突破を企むならやめておけ」

見透かした様子で、【象神の杖】^{アンクेश}は告げた。

「いくらLv. 7とはいえ、一瞬だけなら足止めもできる。そして、その一瞬をその男が

見逃すとは思っていないだろうか？」

「……この男を嚇けたのはお前達か？」

四年前の時点で、ギルドも「ガネーシャ・ファミリア」もこの男と何かしらの繋がりを持つていたはずだ。それこそ、クオンがオラリオを去ったのはギルドから何かしらの密命を与えられたからだという噂が立つ程度には。

「まさか。その男が逃げ出そうとしても同じだ。もつとも、お前が後ろから斬るかどうかは定かではないからな。動き出した時点で撃つように頼んである」

「……………」

あながち虚言でもなさそうだった。

となると、流石に迂闊な真似はできない。

魔法を耐え凌げたとして、この男を前に隙を晒せば、それだけで命に関わる。

「シャクティ」

そこで、クオンが口を開いた。

「これは善意からの助言だが、邪魔をするな。半日と経たないうちに後悔するぞ」

「それは何か根拠があつて言っているのか？」

「そんなもの、あの女が表を出歩いているだけで充分だろうか」

「……。それだけでは私達もギルドも動けない」

「なら、密告があつた。あの女がモンスターどもを野に放つと」

「何者だ？ いや、今どこにいる？」

「どちらも知らないな」

「……それなら同じだ」

嘆息してから【象神の杖】^{アングリースャ}が問いかけてくる。

「【猛者】^{おうじや}、そちらには何か言い分はあるか？」

「我が主神フレイヤ様の神意は俺も知らん。が、あの御方がフィリア祭をご覧になられたとしても問題はない。そうではないか、【象神の杖】^{アングリースャ}？」

「それは無論だとも」

「街中で剣を抜いた事についてだが、主神を守るのは眷属の務めだ。凡百の相手ならまだしも、その男相手では流石に素手では分が悪い。非礼は承知の上だが、謝罪はせん」

「先に剣を抜いたのは貴様だがな」

それは確かに否定できない——が、ここは沈黙を守る。下手な事を言つて、万が一あとで神の前で証言させられるような事になれば面倒だ。

「そして、その類の流言になら事欠かない。そちらも、程度の差はあれど似たようなものなのではないか？」

それは大派閥の、ひいては第一級冒険者の宿命と言つていい。

いかに治安維持に携わる「ガネーシャ・ファミリア」と言えど……いや、むしろだからこそ、流言飛語の類からは逃れられまい。

そこに加えてギルドの中でも賛否あるこの怪物祭を主催している。

こう言つては何だが、火種の多さでも、俺達や「ロキ・ファミリア」に劣りはしない。「……。神フレイヤはおられないようだが?」

彼女の返答は沈黙であり、すぐに話題を変えた。

「いつまでもこのような危険な場所に留まられるはずもない。これから探しにいくつもりだ。もし何かのはずみでフードが剥がれようものなら、本当に騒ぎになりかねん」それは何であれ、あり得る事だ。何しろ今日この辺りは人ごみであふれている。

ローブを着こみ、常より神威を抑え込んでいるあの御方は、その弊害として神と認識され辛いのだ。人の流れの中で、何かの弾みでフードが外れようものなら、確かに騒ぎとなるだろう。

それに関しては流石に否定しがたい。

「この辺りで良いか? 俺は急ぎあの御方と合流しなければならぬ」

「……………」構わぬ。今お前達を拘束するだけの余力がないのはこちらと同じだ。それに、それだけの理由もなさそうだからな」

その言葉に頷いてから、その場を立ち去る。

「ではな。四年前の決着はまた今度だ」

「ああ。今度はどうせ半日も必要ない」

(かもしれない)

その予感は、確かにあった。

3

「どういうつもりだ？」

「それは私の台詞だ。帰ってきたという噂は聞いていたが……」

オツタルがいなくなつてから、乱入者に毒づく。

藍色の髪の麗人、シャクティ・ヴァルマ。四年前に俺達を追い回した派閥の一つである【ガネーシャ・ファミリア】の団長。

まあ、この派閥はオラリオにおける事実上の治安維持機関だ。他の連中と違って気ままに蹴散らすわけにもいかず……結局、免罪という名目で幾つか厄介事を持ち込まれ、そのせいで潜らないで良い死線を潜る羽目になった。

「まったく、こんな街中でお前達が暴れるなど迷惑極まる」

「あの女を野放しにしておいたら、もっと騒ぎになるぞ」

「……さっきの話は本当なのか？」

「ああ。あの女を野放しにすればこの祭りはその名の通りになるそうだ」

そして、今回もどうやら余計な死線を潜らなければならぬらしい。

「……。仕方ない。警備を強化させよう」

「暢気な話だねえ」

と、そこで近くの屋根から霞を抱えたアイシャが飛び降りて来る。

アンテイアネイラ
「麗 傑」……」

オツタルやシャクテイに勘づかれなかったところを見ると、二人に貸した指輪はちゃんと効果を發揮してくれたらしい。

「神相手に……。それも『美の神』相手に守りを固めたところで意味なんざないね」

それをこちらに放つてよこしながら、アイシャは言った。

「何人集めたところでまとめて『魅了』されて終わりだよ」

霞を降ろしながら、吐き捨てるようにアイシャが告げる。

「それはそうかもしれないが……」

真に迫ったその言葉に、シャクテイが言葉を濁す。

やはりそういう事か——と、俺も内心で嘆息していた。

しかし、それはそうとして……

「やれやれ。相変わらずお前の周りは騒がしいな」

「お前らの方が遥かに物騒な事を考えていたんだろうが」

次に姿を現したのはリヴェリアだった。しかもご丁寧に愛用の杖まで携えている。下手を打てば辺り一面火の海になっていたか、それとも氷漬けになっていたのか。いずれにしても俺達が斬り合うのと、どちらがマシだか分かったものではない。

「仕方あるまい。私は魔導士だ。まして未だLv. 6。お前達と切り結ぶなどできん」
「仕方ないで街を火の海にしようとするなよ……」

「お前達が大人しくしていればそれで済んだ話だ」

「あの女どもと一括りにするな」

何故俺が咎めるような目で見られなければならないのか。

毒づいていると、シャクティが霞に問いかけた。

「それより、クオンが言っているのは確かなのか？」

「神フレイヤがモンスターを逃がすって話？　そういうタレコミがあつたのは事実よ。何ならガネーシャ様の神前で証言してもいいわ。ねえ、アイシヤ」

「ああ。……まあ、別の意味でゾツとしないけどね。別の派閥の主神の前でなんてのは。二人の言葉に目を細めて、リヴェリアが問いかけて来る。

「それで、その情報提供者は一体何者なんだ？」

「さて。それが良く分からない。どこかで会ったはずだが……」

会ったというのは正しくない。いや、会っているというなら、それは――

「なるほど。女か」

「女だな」

「ええ。女よ」

「女だったね」

ええい、そこで分かり合うな。

女だ女だと言うなら、お前らだって女だろうが。

恨みがましい目で見ていると、目の前にいる女どもは口々に言った。

「そもそもオラリオにいるお前の知り合いの男など、神々を含めても数える程度だろう

？ 例えばガネーシヤや――」

「うちのラウルだな。他には――」

「霞のいる店の店主だろ。アルドラだったかね、あのドワーフは」

「あとは、ミアハ様と、トマスお爺さん。それと、さつき会った男の子ね。他に誰かいた

かしら？」

いや、確かに概ねそれで全員だが。後はあの爺さん達くらいなものだろう。

だが。言わせてもらうなら、女の知り合いだって別に多い訳ではない。

それこそ、今日の前に全員いると言ってもいい程に。

「まあ、いい。ところで【九魔姫】^{ナイン・ヘル}。すまないが、もう少しだけその男どもの監視を任せていいだろうか？」

しかし、抗議するより先にシャクティがため息一つ吐いてから言った。
「仕方あるまい。この男を野放しにしても良い事はない」

深々としたため息と共にリヴェリアまでが頷く。

「それに実際【猛者】^{おうじや}までが動いているなら、あながち無視もできまい」

「分かっている。確かに神フレイヤの『魅了』に抗える団員がいるとは思えないが、備えるだけは備えておこう」

「お前は？」

「私は残念だが、ショーの時間が近い。そうも言っていられない」

「なるほど。確かに今日この日に団長が留守という訳にはいかないか」

「……お前ら、派閥間で貸し借りを作ると面倒な事になるんじゃないのか？」

トントン拍子に進む話には、今度は俺が溜息をつく番だった。

「それもオラリオがあつてこそその話だ」

助けてくれ……。

誰にでもなく、そんなメッセージを送る。

「特等席とも言い難いが、団員用の席なら私が用意できる。一般開放されている席より

は人気ひとけもない。それに、そこならモンスターの檻にも近いが……」

「そうか。それは正直ありがたいな。それにいざという時に動きやすいのもいい」
しかし、誰かに届く事もないまま、話はどんどんと進んでいく。

……仮にも当事者である俺を置き去りにしたまま。

「私らの都合は訊かないってのかい？」

「……クオンについてくるのではないのか？」

「当たり前のように言われるのも、何となく釈然としないだけだね」

いつそ戸惑った様子のリヴェリアを、アイシャが半眼で見やる。

「何かあったら報酬は貰えるんでしょうね？　っていうか、そもそも入場料は？」

「報酬はともかく、入場料くらいなら私が立て替えておこう」

「飲み物とかおつまみの類は？」

「……割引クーポンでよければ。もちろん、全員分出そう」

「商談成立ね」

そして相変わらず意外と商魂逞しい霞だった。

まあ、そうでなくては剣闘士のマネージャーなど務まりはしないだろうが。

【象神アシカシヤの杖】の奴、私らをずいぶん安く買い叩く気だね」

「何事も起こらなければ好待遇だろう。ただでフィリア祭が見物できるのだから」

「ずいぶんと慎ましいね。エルフのお姫様が」

「今の私はお前達と同じただの冒険者だからな」

そして、アイシャとリヴェリアの話も概ねまとまったらしい。

「しかし、【九魔姫】^{ナイン・ヘル}。それに【象神の杖】^{アンクラーシヤ}も」

「何だ？」

「あんたらだつて本気で思つてるわけじゃないだろう？ 何事も起こらないなんて」

「……まあ、それは、な」

二人の声が重なった。

一言だけ言わせてもらおう。だったら止めるな、まったく。

……

「へえ。結構いい席じゃない？」

シヤクテイに案内された席を見て、霞が呟いた。

この闘技場の構造には明るくないが……主賓席の下、文字通りの闘技場として用いられる場合には審判か解説役が詰めている場所のようだ。

そこまで広くはないが、四人程度なら問題ない。

加えて臨場感という視点で論ずるなら、本来の席よりも近く迫力があるといえる。

「迫力はあるけど……本当に舞台裏じゃないか。こんな場所に他所の派閥の人間を案内

するなんて不用心だねえ」

一方で、アイシヤは肩をすくめる。

実際、この祭りの『裏側』を知るにはちようにいい場所だった。

いや、おかしな意味ではなくアイシヤの言う通り、そして言葉通りに『舞台裏』が見られるだけだ。

しかし、オラリオ最高とも言われる調教技術テイムとなれば、一端の機密情報だと言えよう。いくら団長が同伴しているとはいえ、ここまで素通りとなるとアイシヤの言う通り、少々不用心に過ぎるように思える。

「それだけ信用されているという事なのだろう」

最後に言ったのはリヴェリアだった。

この奇妙俺な一団達に、もし信用があるとすれば、それはひとえに彼女のおかげに違いない。先ほどから男女問わずエルフの団員が驚愕の表情でこちらを見てくる。

まあ、お堅いエルフ——しかも王女様——と、他所パーの派閥ベのアマゾネスラと一緒にいればそれも当然だろうが。

「お前のせいでもある」

と、こちらの内心を見透かしたかのようにシャクテイが言った。

「三年も経つてのに忘れられていない事に驚いているよ、俺は」

ちなみに、だが。

どうせベルは傍にいないので今も愛用の黒衣を纏っている。この状況では変装用……という訳でもないのだが、おそらく今後も多用するであろう《放浪のコート》一式を見られる方が面倒だった。

本題である——と、言っても、道中で霞に指摘されるまですっかり忘れかけていたが——シルの搜索についてもシャクティに協力を取り付けてある。

もつとも、シャクティ達とてこの状況で人手が余っている訳もない。

望み薄なのは相変わらずだが、そればかりは仕方がない。

ひとまずエイナへの伝言だけは頼んでおいたので、多少はマシだろう。

それでも流星に後ろめたい気分は残っているが……。

「私達の控室はそこ。そして、その先にモンスター達の檻がある」

アイシャの言葉通り、ここは舞台裏。シャクティをはじめとした調教師の控室とモンスターの檻は彼女の言う通りであり、加えて頭上にはおそらく彼女達の主神である仮面の男がいる。……今も大声が響いてきているので間違いない。

「見張りの人数は増やしておいたが、総じて『ステイタス』はそこまで高くない。オツタルに強襲されでもしたら、なす術もないだろうな」

「騒ぎだけでも起こしてくれればそれでいいさ。あとは俺が始末する」

もつとも、そんな派手な真似をするとは思えないが。

「できれば流血沙汰は避けてほしいんだがな」

「それは連中次第だな」

仕掛けてこないなら、今日のところはそのまま引き下がってもいい。

どのみちシャクティとリヴェリアの監視があつては簡単に仕掛ける事も出来ない。

まして、【ガネーシャ・ファミリア】の『お膝元』にいるのでは。

「では、私はもう行く。この部屋では自由にしてくれていいが、出歩くのは可能な限り避けてほしい」

「そりやそうだろうね」

「心得ている」

主に他派閥の構成員に向けられたであろうその言葉に、アイシャとリヴェリアがそれぞれ頷いた。

「それと自由にしていいが、あまり羽目を外すぎないように。ここには【九魔姫】ナイン・ヘルもいるのだからな。万が一『粗相』でもした日には、オラリオ中のエルフを敵に回す事になるぞ?。」

どこまで本気か知らないが、シャクティはそう言った。

「分かっている」

魔導士の集団から波状攻撃でも受けようものなら、命が……もとい、人間性がどれだけあっても足りない。今の俺ならなおさらだ。

そして、アイシャが舌打ちしたのは聞こえなかった事にしておく。

「ま、両手に花でも余りあるんだ。何事もなければ大人しくしているさ」
もつとも、何事もないなどあり得るはずもないが。

…

「アンタ達、よくやるわよねー」

何匹かの調教が終わってから、霞が微かな戦慄と共に呟いた。

通常席よりも闘技場——実際に立ち会う武舞台——に近いというのは、要するにダンジョン内の光景に近いという意味でもある。

つまり、俺達にとってはむしろ新鮮味を欠く光景だ。が、基本的に一般人である霞にとっては別だったらしい。

「ダンジョンの中って、ああいうのがそこから襲ってくる訳でしょ?」

特別席にすれば受けが良さそうなものだが——と、霞の反応を見て思ったりもしたが……まあ、そこは安全面を考慮しているのだろう。

モンスターに近いというのは、それだけ危険だという意味でもある。

「まあね。とはいえ、私らが辿り着ける辺りならまだ高が知れてるだろうさ。そこです

まし顔しているお姫様にとつてはね」

「ええと、リヴェリア様。【ロキ・ファミリア】の到達階層は六〇階層でしたか？」

霞が珍しくも若干躊躇った様子でリヴェリアに声をかける。

オラリオ生まれオラリオ育ち、しかもハーフェルフであるじゃじゃ馬娘でも流石に王族では分が悪いらしい。

「いや、残念だが私達はまだ五九階層を目指している途中だ。今のオラリオで六〇階層より先を知っているのはその男くらいなものだろう」

「五二階層まで行ければ、五八階層まで辿り着いたも同然なんだけどな」

リヴェリアに睨まれたので、肩をすくめて見せる。

「何ですよ？」

「五八階層に棲む親切なドラゴンが下から床に穴を開けてくれるんだ。あとは上手いこと飛び降りればそれで済む」

そのおかげで、実は五二階層から五七階層の間はあまり詳しくない。

「……【九魔姫^{ナイン・ヘル}】。今のはどれくらいマジな話なんだい？」

そういえば、『深層』……特に五〇階層より下についてはあまり話すなどギルドの連中に釘を刺されていたか。アイシャの言葉に、今さらながらにそんな事を思い出す。

まあ、別に緘口令という訳でもなければ、守秘義務がある訳でもないが……何でも『心

が折れかねない』から情報規制をかけているらしい。

(……あれで心折られていたら廃都イザリスやら守り竜の巢やらはうろつけないがな)

まあ、『時代』が変わったという事か。それなら、別に悪い気はしない。

「ドラゴンについては否定しない。……だが、そういう事を平然と言えるのはその男くらしいものだ」

「炎耐性さえしつかり高めておけば別に問題ないだろう?」

あとは落下ダメージにさえ注意すれば。

つまり、『ゲルムの大盾』と『隠密』の魔術で事は足りる。加えて言えば、この黒衣はイザリスの娘達が中心となって仕立てただけあって、特に炎耐性は群を抜いていた。

「……『アッシュ・オブ・シンダー灰色の悪夢』とはよく言ったもんだね」

「ああ。そう言うことだ」

冒険者二人は何やら深刻そうにため息をつく。

「どうやらその灰色の何とやらも俺の事らしい。しかし——
【イレギュラー「正体不明」ってのはどこに行った?」

そう呼ばれているのは流星に知っている。

まあ、今までも『不死の英雄』だの『絶望を焚べる者』だの『王の探索者』だのと方々で好き勝手呼ばれていたのだ。今さら呼び方が増えたところで別に気にもならないが。

「こっちは通り名つてやつさ。【劍姫】が他に『戦姫』だの『人形姫』だの言われてると同じだよ。……つと、これは失言だったかね？」

「……アイズがそう呼ばれているのは事実だからな」

アイシャの言葉に、リヴェリアが小さく呻いた。

いや、むしろあの小娘はいつそ『狂戦士』とでも呼んだ方が分かりやすいのではないだろうか。……と、流石にリヴェリアの前では口が裂けても言えないが。

「ま、『灰』つてのは間違っちゃいないがな」

いや、それもどうだろうか。

自分の身体の『状態』を思い浮かべながら嘆息する。

(火の無い灰とも言い難いな……)

今の状態はむしろ生者のそれだった。が、斃れても亡者化は進まず、単に『灰』になるのみ。加えて言えば、『人の像』を用いるか篝火に人間性を焚べる事で再び生者に戻る。

つまり、不死人と火の無い灰が入り混じった状態にあるらしい。

たとえ死んでも亡者化しない——外見の変容がほとんどないのはありがたいが……。

(問題は……)

問題はその変容がどのような影響を及ぼしているのかだ。今のところ特にこれと

言った不具合はないが……。

(ま、この身体なんて目覚める度に変容しているけどな)

ロスリックは言うに及ばず。ドラングレイグでもロードランと同じとはいかなかった。

もつとも、ドラングレイグの場合はあの王妃が『呪い』を強めていたせいで、身体が変容していた訳では――

(いや、変容していたな)

ある意味、ロスリックで目覚めた時以上に。

そうでなければ、火の無い灰になどなってはいないはずだ。

実際にドラングレイグの一件がなければ、ロスリックで蘇ったとしても、それは「薪の王」の一人としてだっただろう。

(ロスリックと言えば、『残り火』がなくなっているのも気になるな)

ロスリックで火継ぎを終わらせた際にも、いくつか『残り火』を有していたはずだ。しかし、オラリオで目覚めた時点でそれらは全て失われていた。

もつとも、それに関しては大本である『最初の火』がすでにないからだと言われればそれまでだが……。

「火継ぎの終わり、か……」

火防女の手の中で消えていく最初の火は、今も明確に思い出せる。

世界が原初の闇に包まれる中で、火防女の言葉に見送られ——そして、気づいたらこの街で目覚めていたのだから当然だ。

「今、何か言った?」

真正面から響くモンスターの咆哮と、周囲を満たす群衆の歓声。それに頭上から響いてくる仮面の男の声にかき消されると思ったが、隣の霞には流石に聞こえていたらしい。

「いや、気にするな。昔の話だ」

「お前の昔の話なら興味はあるな」

霞に応じると、思わぬところに飛び火した。

「お前の使う『魔法』には前から興味がある。一体どこで学んだのかも気になるところだ。それに、魔法は最大三スロットまでという原則を真つ向から無視できる理由もな」
リヴェリアの言葉に、アイシャも言葉にこそしないが興味ありそうな表情を浮かべた。

「お前だって九種類だか使えるんだろう?」

もつとも、だからと言って九スロットある訳ではないようだが。

確か詠唱連結がどうこう言っていたような気がする。話を聞く限り、追加詠唱とはま

た違う技術のようだ。

「それは否定しないが、二つ名の由来になる程度には希少な技術だというのも忘れないでもらいたいな」

それなら俺だつて魔女の娘達から直々に仕込まれているのだ。いくら非才の身とは言え、これくらいはできなければ顔向けできない。

「つと。そろそろシャクティの出番なんじゃないか?」

予定表……一般向けではなく、内部書類——つまりは、どの調教師テイマがいつ舞台に立つかが書かれたそれに視線を落として、話を変えた。

我ながら露骨すぎたが……師匠について聞かれるのはともかく、あまり過去の話を掘り返されても良い事はない。

「そろそろつて、あと三つも先じゃないか」

隣——霞とは反対側からそれを覗き込み、アイシャが呆れたように言う。

「激励しに行くにはちようどいいだろう?」

何しろ本日最初の出番のはずだ。

「あまり出歩くなと言われているのだがな」

肩をすくめると、少し離れたところに座っているリヴェリアが呟いた。

「すぐその部屋だろう?」

シャクティだつてそこまでなら想定の範囲内のはずだ。

まあ、なんだ。……案内板を見た限り、最寄りの厠はその先にあるわけだし。

と、これは流石に女相手には言いづらい話だが。

「俺と霞なら問題ないだろう？ 無所属なんだ」

「いや、お前から目を離す方が問題だ。どうせ抜け出して【猛者】おっしや達を探す気だろうか？」

ともあれ、リヴェエリアにあつさり切り捨てられた。

……これだから女の勘つてやつは。いや、それとも冒険者としての勘だろうか。

単に行動が読まれているだけだ——という内心の囁きは黙殺する事に決めた。

「へえ。あれはダンジョン生まれのライガーファンングじゃないか」

そうこうしているうちに、シャクティの順番が回ってくる。

相対するのはアイシャの言う通り虎に似た姿のモンスター。

「確かに本物ね、この感じは……」

それを見て、霞も眩いた。

ダンジョンにこそ潜った事はないが、剣闘士のマナージャーだ。剣闘士の興行は何も対人戦だけではない。違法だが——いや、賭博剣闘自体がそもそも違法なのだが——対モンスター戦もありえる。

従つて、彼女も『中層』のモンスターまでなら『見たこと』くらいはある。

(結構配当がいいんだよな)

名声や富が欲しいなら、ダンジョンに挑む方が確実に見返りも大きい。それを分かっているながら、ダンジョンに向わないのは冒険者として落ちぶれているからだ——などと冒険者は言うが……実際のところ、モンスター一体辺りの単価で見れば剣闘士の興業の方が実入りが良い事もある。

さらに『中層』のモンスター……特にシャクティにじやれついているライガーファングや、ベルのトラウマになったミノタウロス辺りは見た目にも迫力があるおかげか観客受けが良く、配当金は魔石一つ分の売値の数倍……いや、時にはそれ以上にもなる。ダンジョン生まれのモンスターならなおさらだ。

一対一でも確実に勝てる自信さえあるなら、実はダンジョンに潜るより短時間で楽に稼ぐ事ができる。加えて言えば、表立って誇れるものでないにしてもそれなりの名声も手に入る。それが剣闘士の実情だった。

(ま、それだけ『中層』のモンスターに勝てる剣闘士が少ないって意味だがな)

ライガーファングやミノタウロスと単独で渡り合うにはLv. 2の中堅程度の実力は必要だ。さらに剣闘として見せる戦いをするなら、もう少し上の実力が求められる。しかし、言うまでもなくその域に達している剣闘士は少ない。

それも当然か。冒険者の半数はLv. 1のままだという。元より少数派の剣闘士が

その例から漏れるはずもない。

(ま、中堅派閥の冒険者が正体を隠して、なんてのはざらにある話だがな)

むしろ上級剣闘士はそういう連中ばかりなのではないだろうか。実際、仮面やフルフェイスの兜は剣闘士の正装と言って過言ではない。

「流石ねー」

過去の想い出に浸っていると、シャクティが調教を終えたらしい。

感嘆の声と共に霞が拍手を送る。いや、彼女だけではなく、会場が万雷の喝采に満たされている。それに一通り応じてから、シャクティは手懐けたばかりのモンスターを伴って舞台を降りた。

「わお。今度はドラゴン?」

「そうだけど……。ありや、都市外のモンスターだね」

「だろうな」

「ああ。だが、竜種ならダンジョン生まれでなくともそこまで見劣りしないだろう」

アイシャの言葉に頷いていると、リヴェリアも言った。

「ダンジョン生まれかそうでないかって、見ただけですぐに分かるものなの?」

ようやく檻から這い出したばかりのドラゴンを見て霞が首を傾げた。

いくら『見た事』があるとは言え、対峙したことはある訳ではない。俺達自身も言葉

にしづらいこの『感覚』を理解しろという方が無理だろう。

もつとも、今回に限って言えばダンジョン——いや、バベルの地下一階に行つた事があれば見分けられるだろうが。

「そりやある程度はね。けど、あれはそれ以前の問題さ」

まったくもつてその通り。何しろ全長が七m以上ある。

となると、カーゴはおよそ一〇m程の大きさが必要となるだろう。いや、充分な強度を保証するならそれ以上必要になるかも知れない。

「ダンジョン生まれの奴だと捕まえられないってこと？」

「いや、捕まえるのはまだ可能だろう。だが、問題はその後だ」

霞の問いかけに、リヴェリアが応じる。続けて、アイシャも頷いた。

「ああ。あれじゃ詰まるだろうね」

アイシャの言う通り、そんな大きさではまず間違いなくダンジョンの出入り口で引っかかる。ダンジョン内部はともかく、出入り口は『人が使用する』事を前提に作られているのだ。遠征用の大型カーゴを搬入するリフトはあるが、それとて出し入れできる大きさには限度がある。

それに、ダンジョン内部も常に広い訳ではない。最悪は運搬中に通路で引っかかる。

「ああ、なるほど」

霞が頷くのを見届けてから、立ち上がる。

「どうしたの？」

「なに、そろそろ出番らしい」

「どういう事だ？」

霞の問いかけに肩をすくめると、今度はリヴェリアが問いかけてきた。

「あの女どもが仕掛けてきたのさ」

証拠ならいくらある。

例えば、シャクティがいきなり見栄えのいいライガーファングを相手にしたこと。

そして、どう考えても大トリであろうドラゴンがいきなり登場したこと。

何より――

「クオン！」

舞台衣装を着こんだまま、シャクティがこうして血相変えて飛び込んできたのだ。

これ以上はもう必要ないだろう。

4

「まったく、言わんこつちやない」

シャクティに案内され、モンスター達の『控室』に辿り着いてすぐ。

片隅で呆けている数名の団員を見てアイシャが吐き捨てた。
「こりや全員『魅了』されちまってるね」

彼女の視線の先にいる団員は、誰もが魂でも抜かれたような顔をしている。あるいは
酩酊状態とも言えればいいだろうか。

「ほら見ろ。半日と経たず後悔すると言っただろうが」

何であれ、あのアバズレの作業なのはおおよそ間違いない。

シャクティとリヴェリアを見やり、肩をすくめてやる。

「……。それで、具体的な被害は？」

流石に反論の余地はなかったのか、その言葉には応じないまま、リヴェリアはシャク
ティに問いかけた。

「二三体。『下層』から『中層』……一番浅くても一〇階層以下に棲むモンスターばかり
解放されている」

「冗談だろうか？ 下手な冒険者でも手を焼く連中ばかりじゃないか」
あまり詳しくはないが、L v. 1の中で上位に食い込む冒険者でも単独だと一〇階層
辺りからは苦戦を強いられるのが一般的らしい。

そして『中層』に初めて進出するには、アビリティ評価H以上のL v. 2が最低一人
は居る三人一組のパーティを組む事が必須だと聞く。
スリーマンセル

オラリオの冒険者の半数がL.V. 1であること。そして、街中であり、かつバベルから距離のあるここで武装している物好きはそう多くない事を加味すれば……。

「今年の怪物祭はふれあい体験もできそうね……」

「その前に死体の山ができるだろうね」

まあ、そういう事だ。

「冗談を言っている場合ではない。急いで追わなくては」

「そうだな」

もつとも、すでに出遅れている。外に血の海が広がっていても驚きはしないが。

「それで、ガネーシャは何と言っている?」

まさか主神より先に俺のところへ報告に来るとは思えない。

「お前達に協力を仰ぎたいと。いや、お前達だけではなく周囲にいる冒険者全てにだが。

それと、混乱を避けるためフィリア祭はこのまま続行する」

「この状況では仕方あるまい。……まあ、私達にも責任の一端はあるのだからな」

シャクテイの言葉に、リヴェリアが肩をすくめた。

だから止めるなど言っただろうに。いや、今さら蒸し返しても仕方がないが。

「モンスターどもは俺達が追う。お前はオツタルとあの女を探させろ。なに、場所さえ教えてくれれば俺が始末する」

「始末はともかく、確かにあの二人を相手取れるのはお前だけだな。……分かった。手配しよう」

領き、シャクティは指示を出すべく走り去る。

「霞。お前は……」

「あの子達を探しておくわ。まだ駆け出しのLv. 1なんでしょ？」

「それは、そうだが……」

「神フレイヤの狙いが分からないなら、どこにいても危険でしょ？」

いや、狙いは見当がつかないでもない。

問題は誰を狙っているのか、だ。

（俺じゃないだろうがな）

どういう手順かは知らないが、あのアバズレがここまでするなら、また誰かを『狂わせる』つもりだろう。

その標的にベルがされていらないとは限らない。いや、されていても驚きはしない。

（だとすれば、いよいよ始末しなけりやならないな……）

あの爺さん達との契約以前に、俺個人として見過ごすのはあまりに気分が悪い。

「言い合ってるより、さっさとモンスターどもを追いかけて始末した方が早いんじゃないか？ まだそこまで散らばっちゃいないだろうからね」

そこで、アイシヤが言った。

「それもそうだな」

ここから出口まではほぼ一本道。窓の類もない以上、檻から出てすぐに散らばって動き回っているとは考えづらい。散らばるとすれば外に出てからだ。

「霞。もしあいつらを探すなら、正門から出る。向こうなら街の状況が分かるはずだ。騒ぎになっていたら、くれぐれも無理はするな」

「分かつてるわ。私だってモンスターの群れに飛び込むような真似はしたくないもの」

霞の言葉に頷き返してから、

「アイシヤ。お前にはこれを貸しておく」

言いながら、大曲剣を一振りソウルから取り出す。

銘を《ムラクモ》。

狩猟団長シバや放浪騎士アルバなど名だたる不死人達が愛用した業物であり、俺自身も長く使用している。

刀の鋭さと鈍以上の重さを兼ねてたその刃を振るうには筋力が必須であり、さらに威力を発揮するには相応の技術も求められるが……まあ、彼女なら問題ないはずだ。

「そりゃ助かるね。あんたの持つてる武器なら外れはないだろうしさ」

いや、それはどうだろう。奇品珍品も結構な数あるのだが。

だが、その大曲剣に限って言えば文句ない代物だ。何しろ原盤まで用いて強化してあるのだ。例え相手が神でも問題なく斬れる。

「お前は……自前の使いなれた杖があるし良いよな？」

「そうだな。お前の持つている杖にも興味はあるが」

いや、正直なところ杖の類はあまり持つていなければ手も加えていないのだが。何しろ、恩師達くれた万能の触媒があるのだから。

（まあ、『魔法』は『魔術』と互換性があるようだがな）

呪術や奇跡ほど術式に差がないのだろう。あるいは闇術のように派生した代物なのかも。されない。が、それを探究するのは今ではない。

「さて。それでは手早く済ませるとしようか」

敵は僅か一三体のモンスターだ。仕留めるだけなら物の数ではない。

左手に火を宿し、とある物語を口ずさむ。

その名を【敵意の察知】。効果はその名が示す通りだ。

燐光が集まり、魔物の瞳を思わせる光球となる。それはふわりと宙に浮き、最寄りの敵意を放つ存在の元へ漂っていく。

闘技場から離れる事およそ三〇m。巨大な熊に似たモンスターを背後から両断する。まずは一体。

「いいっはいいねー！」

その近くにいた他のモンスターをアイシャが斬り捨て……《ムラクモ》の切れ味に歓声を上げていた。

これで二体。

「少しばかり重いのが気になるけど……返さなきやダメかい？」

「ああ。できればそれは返して欲しいな」

もつとも、同じ型の大曲剣なら他にも数本ある。

「気に入ったなら他のをやるさ。まあ、切れ味は多少落ちるがな」

他の物はあくまで予備であり、原盤強化までは行っていないので仕方がない。

流石に大曲剣で二刀流をやる気はしなかった。……いや、できない事はないだろうが。

胸中で眩きながら、次のモンスターを斬り捨てる。

これで三体。

「多少落ちたって第一等級武装なのは変わらないだろうね！」

笑いながらアイシャも四体目のモンスターを斬り倒す。

これで残り九体。

問題は、それらが見える範囲にはもういない事だ。

「やれやれ。前衛が優秀だと魔導士の出番はないな」

リヴェリアは小さくため息をついてから、表情を改めて言った。

「しかし、思った以上にばらけるのが早かったらしいな。それとも、私達が気づくのが遅すぎたのか……」

「だつたらもつと騒ぎになっていてもよさそうなんだけどね」

二人の言葉はどちらも正しい。まだ闘技場の敷地内と言える範囲に残っていたのは一三体の群れのうち、わずか四体のみ。

単純に考えれば俺達が来るのが遅すぎただけだが……それなら、大通りから悲鳴が聞こえてきてもいいはずだ。

「悲鳴を上げる奴も残っちゃいないのかもな」

そこまで手際よく殺戮が行えたとも思えないが。

「笑えない冗談はよせ」

小さく笑うと、リヴェリアが睨んでくる。

それに肩をすくめてから、再び「敵意の察知」の物語を口ずさむ。

燐光に導かれ、さらに三体のモンスターを始末する頃には大通りが見えてきた。

それと同時に、悲鳴と歓声も。

「どうやら他の冒険者も動いているらしいね」

「ああ」

それにしても、歓声の割合の方が多い気がする。

闘技場のそれと混ざっているのかも思ったが、発生源は明らかに大通りだ。

もし市民までが歓声を上げて見ていられる余裕があるとすれば、戦っているのはそれなりに腕の立つ冒険者という事になる。

一体何者なのか。それを把握する前に逃げてきたらしい豚頭の巨体が前に立ちはだかった。無論、その程度の相手なら両断するのも容易い。が――

「ッ!?!」

その途中で筋肉や骨格、魔石とは異なる硬質な感触が伝わってくる。

そして、その巨体の『背後』からほんの僅かな動揺も。

どうやら、向こう側から同時に誰かが斬りつけたらしい。

「クオンさん……っ?!」

巨体が灰となつて消えると、その向こう側には私服――いや、余所行き用の服を着こんだ金髪小娘がいた。それでも剣を――いつもの得物とは違うが――帯びている辺りは流石と言うべきか。

この小娘なら寝る時にぬいぐるみよろしく抱いていても……いや、風呂桶の中に持ち込んでいたとしても驚きはしない。

「小僧、やはり貴様も一枚噛んでいたか」

小娘は無視して、その背後にいる糸目の小僧に視線を向ける。

「よほど血の匂いに飢えていたらしいな」

多少小奇麗に装つてはいるが、この神の本質はそこにある。

戦乱も惨劇も、娯楽の一つでしかない。俺達が須らく『闇のソウル』を持って生まれるように、この小僧はそういう性を持って生まれている。

悪神の名は伊達ではない。『美の神』がただ在るだけで人を狂わせるように、これは謀を巡らせずにはいられない。ただそれだけの話だ。いや、それ以前か。

「アホ抜かせ。うちはこんな悪趣味やない」

それはどうか。

ここまでは上手いこと誤魔化してきたらしいが、ついに堪えが利かなくなつたとしても驚きはしない。所詮、ダンジョンに蔓延る殺戮すらも娯楽と嗤う神の一人なのだから。

「それより、うちも一枚言う事はこの騒ぎの黒幕を知つとるんか？」

「白々しいな。貴様の同類の仕業に決まっているだろうが」

いや、これ以上言葉は不要か。探して狩り出す手間が省けた。

「待てっ！」

そこで再びリヴェリアが割り込んできた。

「まずは私が話をする。だから早まるな」

モンスターならばらく「麗アンティファネイラ傑」が受け持つ——と、小さな声で告げてから、彼女は俺と小僧の間に立つ。

「この騒ぎに神フレイヤ……少なくとも、『美の神』が関与しているのは間違いない。カーゴを警備していた『ガネーシャ・ファミリア』の団員は全員『魅了』されている。加えて言えば、この近くで【わうじや猛者】を連れだした神フレイヤと出会ってもいる」

「リヴェリア達も？」

その言葉に反応したのは小娘の方だった。

「お前達も出会っていたのか？」

その反応を受けて、リヴェリアの言葉に少なからぬ焦りが混じった。

「えっと。ここ最近、あれこれ動き回ってるのが気になるからってロキが……。一〇分もないくらいの間だけ」

それを察したらしく、小娘も少し慌てた様子で付け足す。

「神フレイヤが？」

「うん。また誰かを狙っているんじゃないかってロキは言ってたけど……」

「そや。興味なんてない言うとした『神の宴』にも参加しとったしな」

「ここ最近の『神の宴』と言えば、ヘステイアも参加したものだろうか。」

「ひしひしと嫌な予感が募るが……まあ、今さらと言えば今さらか。」

「いずれそうなるのは分かってた。思った以上に早かったが、ただそれだけの話だ。」

「お前を疑う訳ではないが、確かか？」

「何なら、あとで神ガネーシャの前で証言してもいい」

リヴェリアの問いかけに、小娘は力強く頷いて見せた。

「この時代の人間は神の前では『嘘』はつけないらしい。」

「まったく、『首輪』までつけていくとは念の入った事だ。」

（それも織り込み済み、という可能性はあり得るが……）

「残念な事に謀の類は得意ではない。ここで小娘共を問い詰めたとしても、真相に至る事はできないだろう。」

「まあいい。ところで何体仕留めた？」

「さっきので四体。あなた達は？ ううん、まず何体逃げたの？」

「逃げたのは全部で一三体。ここまでするのに七体仕留めた。さっきのを抜いてな」

「なら、残りは二体だけ」

これはアイシヤがすでに終わらせているかもしれない——などと思つた矢先、すぐ近くで悲鳴が上がる。

「これで残り一体だな」

腹の探り合いはさておき、まずはモンスターをどうにかした方がいい。

腹を決めると同時、人ごみを押しつけて姿を見せたのはりザードマンだった。

(運がいい奴だ)

小さく笑つて見せる。

このモンスターを殺す気はなかった。

どこぞの屋台の残骸らしき木材を振り回すその敵に近づき、まずは得物を両断する。

所詮はただの木材だ。クラブですらないなら、斬れない道理はない。

『ガアアアアッ!』

武器を失いつんのめつてきたその顎を蹴り上げる。

大きく仰け反っている間に、俺も武器を斧槍に切り替え、その足元を柄で払う。

いくらモンスターとは言え、人型である限り、人と同じ手法が通じる。

「――」

両手の武器を、適当な直剣に切り替え、仰向けに倒れるその蜥蜴の両肩に突き立てる。

『ギシヤアアアアアアア!』

それを手放し、再び適当な直剣を二振り。今度は両足を大地に縫い付ける。最後にもう一本直剣を取り出し、のたうつ尻尾ごと地面を貫いた。

「よし。これでいい」

石畳の上で標本のようになったモンスターを見下ろし、肩をすくめる。

「止めは刺さないの？」

追い付いてきた小娘が首を傾げる。

相変わらず物騒な事だ。大体、殺すならこんな無駄な真似はしない。

「別に加虐趣味でこんな真似をしたわけじゃない。こいつは貴重な証人だ」

嘆息を飲み込んでから、告げた。

「面倒だが、証拠は残しておく必要がある」

縫い付けられたモンスターは暴れているが……それは痛みによるものではない。むしろ痛みなど感じていないかのように、身を振っては暴れている。

まるでそれこそが目的であるかのように、だ。

いくらモンスターとは言えリザードマンは本来、こんな形でなりふり構わず暴れまわる手合いではない。

この状況でも冷静に反撃の隙を狙ってくる。彼らは本来、技巧派の戦士なのだから。

無論、時と場合にもよるだろうが……この反応が異常なのは、それなりの知識がある

者が見れば明らかだった。

「どうやら上手く行ったようだな」

そこで「ガネーシャ・ファミリア」の団員を何人か連れたりヴェリアがやってきた。

「ああ。そこにいる専門家達と違って無傷でとはいかなかったがな」

しかし、この程度では死なないのがモンスターだ。

「いえ、そこまで真似されてはいよいよ立つ瀬がありません」

団員は苦笑しながら、引きずってきた専用のカーゴに、手慣れた様子で『リザードマン』を運び入れる。

「確かにこゝら完璧に『魅了』されとるなあ」

小娘の後ろからそれを見やり、糸目の小僧が呟いた。

剣の拘束から解き放たれたリザードマンは未だ出血の止まらない傷など気にもせず、檻にしがみ付いては外に出ようと暴れ続けている。

「確かにリザードマンらしくない、かな」

その様子を見て、小娘も呟いた。

ともあれ、このまま死なれては元も子もない。団員が慌てた様子で回復薬を吹き掛け、最低限の止血を行う。もつとも、そのせいで余計に元気になり檻を破らんばかりに暴れ出し、周りから新たな悲鳴が聞こえてきたが。

……まあ、これだけ目撃者がいれば証人としては充分だろう。普通の市民はともかく、中には冒険者も混ざっているはずだ。

そのうちの数人でも、小娘と同じ感想を覚えてくれれば事は足りる。

「これであと一体か……」

目論見は阻止できたのか。それともその一体が本命か。

（おそらく後者だろうがな）

あのアバズレどもが動いたなら——加えて、俺達が後手に回った以上、その結末は避けられまい。いや、アイシャがギリギリで阻止してくれている可能性も皆無ではないが。

「何だ、あれは……?」

短くも強い地震と、リヴェリアの険しい声によって思考の海から釣り上げられた。

反射的に彼女の視線を追うと……。

（ほう、あいつらまで捕まえていたか……）

その先ではまるで蛇のように蠢く緑黄色のモンスターがのたうっている。

あの爺さん達の差し金だろうか。

だとするならば、この三年間で少しは進展しているらしい。

「また新種……?」

「ガネーシャの子ら、あんなん何処で捕まえてきたんや?」

いや、そんなはずもないか。

どちらかと言えば、向こうが本腰を入れ始めたと見るべきだった。

(まさか、あいつら手を組んだのか?)

だとしたなら……まあ、好都合か。まとめて叩き潰す口実になるだけだ。

(さて、と。まずは余計な連中に余計な事を知られないように手早く済ませるか)

特にこの小僧どもにあの『魔石』を拾われては面倒だ。

しかし――

(来るのか、奴も……)

だとするなら、少しばかり面倒な事になる。

今の俺では、あれを始末するのは流石に厄介だった。

それどころか別に下手を打たなくてもまた返り討ちにあいかねない。

「ああもう、武器を持つてくれれば良かったー!!」

「こいつの身体、打撃とは相性悪すぎる!」

シヤクテイらの誘導のおかげか、思ったよりも道は空いていた。

一気に駆け抜けていると、その先からそんな声が響いてくる。

(誰かいるのか?)

凡百の冒険者ではあのモンスターを相手にはできない。

まだ生きているなら、Lv. 3かそこらはあるのだろう。上手くすれば倒されかねない。そうなると、少しばかり面倒だった。

「弧炎よ」

戦場に飛び込む直前、炎の情景を愛用のクレイモアの刀身に宿す。

その情景の名を「カーサスの弧炎」。あるいは「炎の武器」。

「――穿て必中の矢！――!?!」

飛び込んだ先では、ちょうど女魔導士が一人詠唱を行っていた。

「――」

ならば、次の敵の動きは明白だ。

この雑草どもは魔力に対して敏感に反応する。

「レフイーヤー！」

詠唱を終えるより先に、地面を突き破って、もう二体の仇花が彼女を襲う。

概ね予想通りだった。

そいつらが小娘の身体を打ち貫く前に、炎を纏ったクレイモアを横薙ぎに叩きつける。

相手の突進の威力が加わった結果、刀身はその巨体を半ばまで両断し――文字通りの

灰に変えた。

(まずは一体)

残った『魔石』を剣先で跳ね上げ、即座に回収する。

一方で、山吹色の髪の毛の小娘も動揺したのか詠唱を途絶えさせていた。

まあ、それならそれでいい。標的がこちらに移るならむしろ好都合だとも言えた。

念を入れて、左手に火を宿し【火球】を放つ。

「あんたはっ!?!」

周りにいた他の女どもが何か言ったが、相手にするつもりもない。

ついでに言えば、流石にそこまで暇でもなかった。

『オオオオオオオオオッ!』

耳障りな声と共に花を咲かせながら、その雑草どもが突進してくる。

「うわ?! 咲いた……!?!」

「蛇じゃなくて花だつての!?!」

吼えている隙に、雑草へ一気に間合いを詰めた。

軽く外皮に触れる。それだけでいい。

思い描くは穢れを祓う儀式。野蛮なる免罪が今ここに顕在する。

『オオオオオオオオオッ!?!』

巨大な仇花が己の内側から生じる炎に包まれた。

曰く【浄火】。敵の体内にて火を育て、一気に発火させる凶悪な呪術。

いかに強固な外皮と言えど、己の内側から生じる炎には無意味だ。

炎に包まれたそいつはひとまず無視して、残る一体に接敵する。

『オオオオオオオッ!!』

残った雑草がうなり声を上げて出鱈目に暴れだした。

それを掻い潜りながら、両手でクレイモアを構え、首——いや、『花』を渾身の力で刎ねた。致命傷と言えるかは今一つ疑問だが、仮にも生物の真似事をしているならそれなりに意味があるはずだ。少なくとも、その雑草はのたうち始める。

その身体——いや、茎と言うべきなのか——に剣を突き刺し、走り抜けるようにして一気に斬り裂き止めを刺す。

と、上手い具合に傷口から『魔石』が見えていた。腕を突っ込みそのまま抉り取る。

その頃には【浄火】に焼かれのたうつていた雑草も燃え尽き——すべてが灰になった。それを見届けてから、ひとまず軽く息を吐く。

「みんな、大丈夫?」

「無事か、お前達?」

「アイズ! それにリヴェリアも?!」

と、そこでリヴェリアと小娘が追い付いてきた。

「リヴェリアはどうしてここに？」

「なに、たまたま騒ぎを聞きつけただけだ」

物は言いようだった。だが、下手に首を突っ込んでみても良い事はない。

それよりも、最後の魔石を回収しなくては――

「ッ!？」

ゾワリ、と。唐突にうなじの毛が逆立った。

(これは……!)

この感覚には覚えがある。

「クオン、ナイン・ヘル【九魔姫】。それに、【剣姫】達もか。よくやってくれた」

近づいてくるシャクティと糸目の小僧の背後で、『闇』が蠢いた。

この光景を知っている。

遠い昔、ロードランの黒い森の庭で。あるいはロスリックの不死街やアノール・ロン

ドへと至る道で見たあの――

「アイズ！ ロキ！ 後ろだ！」

「えっ?」

リヴェリアが叫ぶと同時、空間を歪めて、何かが這い出して来る。

「馬鹿な……」

思わず絶句していた。

シャクティたちの背後から姿を見せたのは――

「山羊頭のデーモン。それに、牛頭のデーモンだと……ッ！」

忌々しい山羊頭のデーモンが五体。それに、牛頭のデーモンが二体。

「全員逃げろッ！」

その叫び声に、デーモンどもの咆哮が重なる。

生半な不死人では例え一体でも脅威となる。無論、今の俺にとっても容易い相手ではない。

そんな存在が七体も現れるなど、およそ最悪の状況と言えた。

「なにっ!？」

牛頭のデーモンが手にした大斧を無造作に振り上げた。

糸目の小僧を庇ったばかりに反応が遅れたシャクティを小僧もろともに突き飛ばし、愛用の盾を掲げる。

「ぐっ！」

デーモンの大斧と《竜紋章の盾》が激突し、激しく火花を散らす。

原盤強化まで施されたその盾が今さら砕けるはずもないが、使い手である俺の方はそ

の力を大幅に失っている。踏み止まれず、盾もろともに押し返された。

『——オ!』

そこに山羊頭のデーモンが大鉈を振り上げ襲い掛かってくる。

クレイモアを叩きつけ、強引に軌跡を逸らしながら、さらに後方に跳躍する。

だが、数が多すぎる。回避に徹したが、続けざまに振るわれる大斧や大鉈を完全に避けきれず、身体の何ヶ所かが削り取られた。

「テンベスト目覚めよ!」

不意に風が吹き荒れる。

「リル・ラファールガ」

渦巻くそれは人の形となって、突進してくる牛頭のデーモンに突進した。

だが、

「なっ!?!」

分厚い胸を貫き通すにはまだ足りない。それに——

「魔石がないっ!?!」

冒険者にとっては未知の相手だろう。

せいづらには魔石などという万人にとって都合のいい急所はないのだから。

「しまった!」

胸元に剣を『浅く』突き立てられたままの牛頭のデーモンが、無造作に拳を放つ。

一方で剣を抜けずにいた小娘は確実に反応が遅れた。一撃でも直撃を許せば、彼女達にとつては致命傷となる。

「こんのおおおっ！」

褐色肌の小娘——胸の無い方——がそれより一瞬だけ早く殴りかかる。

「硬ったあ?」

それが痛撃を与えたとは思えないが、拳が放たれるのを一瞬だけ遅くしたのは確かだ。

「はあああああっ！」

その一瞬で、小娘は剣を引き抜き——さらに首筋を斬り払った。

もつとも、首を落とすには程遠く、深手にすらもなりはしない。いや、状況を好転させるにもまだ足りない。

「くっ！」

「何なのよ、くっくっはっ！」

山羊頭どもがシャクテイ達に襲い掛かっている。

防御に徹すればまだ凌げるだろうが、長くは続くまい。分断し各個撃破しなければ、このまま押し潰される。

ならば――

思い描くのは炎の情景。いや、炎を従者とする一人の女の姿。

我が師、イザリスのクラーナ。呪術の開祖たる彼女が残した奥義。

その名を「炎の大嵐」。解き放たれた劫火はその名に恥じず荒れ狂い、デーモンもろとも周囲を蹂躪した。

もつとも――

(チツ、やはりか……)

元より『混沌の炎』から生じて来るデーモンに炎は通じづらい。

だからこそ、師匠は千年もの間、ついに『苗床』を弔えずにいたのだ。

力も覚悟もない――と、その言葉の意味はまさにそれだった。覚悟はともかく、力とはその通りなのである。

それでも――

(師匠にどやされるな、これは……!)

今の奥義を放ったのがイザリスのクラーナ本人なら焼き払えたはずだ。

だというのに、俺はと言えば山羊頭でもすら燃え残している始末だ。

力が足りない。今も至る所で凝ったままの己のソウルに毒づく。

だが、戦線を仕切り直すくらいは出来たらしい。……デーモンどもの陣形を乱し、間合いを開く程度の事は。

その隙に、小娘共も陣形を立て直す。リヴェリアともう一人の女魔導士を中心とした基本的な布陣だが……どのみち武器を持たない褐色小娘どもではまともに戦えない。残るシャクティは俺の右側に。反対側にはいつもと違う剣を構えた小娘が立つ。

「こいつらは何者なんだ？」

「デーモン。『混沌の炎』から生まれる、ソウルを持つ者全てにとつての厄災だ」
もつとも、ソウルを求めて彷徨うというなら俺達不死人も同じ事だが。

「モンスターじゃない？」

「ああ。少なくとも魔石なんて都合のいい急所はない」

そして、銀騎士神々の騎士すらも返り討ちにあいかねない存在でもある。

「さて、どうするか……」

どのみち各個撃破以外の選択肢はない。

もしこの状況で乱戦に持ち込まれれば、銀騎士どころか黒騎士ですら命はないだろう。

だが、一体どうやって各個撃破可能な状況に持ち込むべきか。

「どうもこうも、逃げる訳にはいかないだろう？」

傍らのシャクティが言った。どうやら知らず咄いていたらしい。

「それはそうだが、このまままとめて相手にするのは死に行くようなものだな」

いや、俺だけなら別にそれでも問題は無いのだが。

「私達がいても？」

と、これは反対側の小娘。

「ああ。一体くらいなら任せてもいいだろうがな」

できれば牛頭のデーモンを受け持つてくれると助かる。

その隙にもう一体を手早く仕留めてから、山羊頭を各個撃破。それが最適だろうが――

「他にしばらく山羊頭どもを引き付けてくれる囹役がいるな」

それが一番の問題だった。

「なら、あたし達の誰かが……」

「本気で牛頭のデーモンを受け持つ気なら戦力を分散するのは止めておけ」

胸の無い方の褐色小娘の言葉を途中で制する。

「第一、ただの人間では囹役にもならない」

「どういう意味よ？」

今度は胸のある方の褐色小娘が問いかけてきた。

あまり悠長に話し込んでいる暇もないが、この際仕方がない。

「奴らはより強いソウルの気配に魅かれる。それなりの存在でなければ無駄に被害を拡大するだけだ」

彼女達の宿している『神ファルナの恩恵』とやらは『ソウルの業』とはまた違う。

人が神の薄皮を纏っているようなものだが……その実、ソウルの質や量が未熟すぎる。

無論、多少は強化されているが、俺達で感覚で言えば力量に対してソウルの力が釣り合っていない者が多すぎるのだ。

それはつまり不死人にとって『美味しくない』相手という意味である。

何しろ、労力に対して得られるソウルが少なすぎるのだから。その辺りはデーモンにとっても同じ事だろう。

「しかし、いつまでも睨み合っていていられる訳ではないだろう？」
背後からリヴェリアの声が聞こえる。

それもまた事実だった。実際、かき乱したはずのデーモンどもは再び群れを形成しようとしている。そうなっておしまいだ。

むしろ、今こうして行儀よく待っていてくれるだけでも奇跡の様なものである。

「ならば、俺が引き受けよう！」

と、そこで。聞き覚えのある声が響いた。

「ガネーシャ?!」

シヤクテイが悲鳴を上げた。

いや、なりふり構わず振り返らなかつたのはありがたい。そんな隙を見せれば、一気にデーモンどもが襲ってきた事だろう。

「そう、俺がガネーシャだ!」

「ええから引つ込めやドアホ!」

俺も振り返っている余裕はないが……どうやら、あの仮面の男本人らしい。

一体何をしに来たのか。いや、何だつてこんなところまで出張つてきているのか。

「強い魂ならいいのだろう? ならば、俺達の出番だ!」

「達つてなんや?!」

それはそうだが。神のソウルなら、デーモンどもにとつては文句のないご馳走だ。

特にこの神は狩りやすい。不死人にとつても非常に『美味しい』相手だった。世が世なら、今頃は乱獲されて絶滅しているのは間違いない。

……まったく、ままならないものだ。

「むんっ!」

「ちよ?! マジで神威発揮すんなや?!」

「仕方あるまい！ 奴らを野放しにしては子供達が殺される。それだけは認められん！」

「そらそうやけど!?!」

背後から伝わってくる神の気配が強まる。いや、秘められたソウル力がほんの僅かに解放されたと言うべきか。少なくとも、背を向けているのが落ち着かない程度には。

『——ッ!』

急に現れた大きなソウルの気配に、デーモンどもが歓喜の声を上げる。

「シャクティ、お前はあいつを任せる」

「言われなくとも!」

シャクティは今度こそなりふり構わず振り返る。

これで均衡が崩れ、戦場が動き出した。

雄叫びを上げて突っ込んでくる牛頭を迎え撃つべく、俺も突貫する。

「死ぬなよ」

「やってみるさ!」

その直前、最後に言葉を交わした。

「アイズ、来るよ!」

「うん!」

「武器がないんだから、無理は禁物。リヴェリア達が詠唱を終えるまで時間を稼ぐわよ」
その頃には、小娘共ももう一匹の牛頭に向かつて突撃していった。

まあ、確かにリヴェリアの魔法頼りになるだろうが……さて、ここは炎の方を選択しない事を祈っておくべきだろうか。

「いや、ちよい待ち。ひよつとしてうちも完璧に巻き込まれとる!」

糸目の小僧の悲鳴が聞こえた。

だが、知った事か。のこのこと戦場に出張ってくるからだ。

「ハハハハハッ! さあ、シヤクテイ! 全力で逃げるゾウ!」

「分かっている! 少し黙っている!」

「アଙ୍କクーシヤ象神の杖。すまないが、ロキも頼んだ」

「流石に安全の保証はしないぞ、ナイン・ヘル九魔姫!!」

「ちよ?! ガネーシヤあああああ! 後で覚えとれよおおおおおつ!!」

ともあれ。忌々しい山羊頭どもが周りからいなくなっていく。

『オ!』

ずいぶんと久しぶりに聞く牛頭のデーモンの咆哮。

それと共に突っ込んでくるそいつとすれ違う様に飛び込み、大剣を振るう。

その刃は横腹を抉った。初撃としてはまずまずの手ごたえだが——その程度で満足

している暇はない。それに、反動で体勢を崩されたのはむしろこちらだ。いつものように踏ん張りがきかない。地面を転がって勢いを殺す。

もつとも、勢いに振り回されているのは向こうも同じだ。少しばかり行き過ぎてから、ようやく戻ってきた。

続け様に叩きつけられるデーモンの大斧を横に飛び退いて躲しながら、リヴェリア達の邪魔にならないよう戦場を移動させる。

いくら凝っているとはいえ、深奥に至ったソウルそのものを失った訳ではない。ならば、囷としては充分だろう。

(そうだ。そのままついて来い)

脇目も降らず突進してくる牛頭を引き連れ、リヴェリア達から離れる。

そして、充分に距離を取ってから――

「――ッ！」

大振りの一撃の後に生じる僅かな隙。それを逃さず、渾身の力で横腹に切っ先を滑り込ませた。そして、そのまま渾身の力で抉り裂く。

『――ア?!』

デーモンが苦悶の声を上げる。

まったく、らしくない。しばらく会わない間に腑抜けたか。

我らは互いにソウルを貪る怪物だろうが。

(面倒な相手だ……)

だが、幸いデーモン遺跡にいた連中ほどではない。城下不死街で対峙した牛頭と同じか少し上程度だろう。駆け出しの不死人でもどうにか勝ち抜かれた相手なら、まだどうにでもなる。

……俺がではなく、あの小娘共が、だが。

5

「なに考えとんねんガネーシャ?!」

「無論子供達の安全だとも!」

「そー言うことやないわ?!」

ガネーシャの対応は、明らかに異常だった。

そもそも『神の力』アルカナムを封じている神が前線に飛び出してくる時点でまともではない。

だが、問題はそこではなかった。

(ガネーシャのやつ、あのモンスター……デーモンとやらを知つとつたんやないか?)

あの山羊頭が強い魂に惹かれる性質を持っている事を……いや、何よりもこういつた事態が起こりえる事を、だ。

(でなけりや、いくらこのアホでもあんな唐突に現れたりせんわ)

派閥を上げてのイベントであるフィリア祭まで投げ出して。

しかし、アレの話からするとこの一件にはあの腐れおっぱいが絡んでいるらしい。今朝方の様子からして、それは間違いないと思う。

しかし――

(ガネーシャとフレイヤが共同で……?)

いくら考えてもこの二柱ふたりが共謀する理由が思いつかない。

多少ならずお調子者なガネーシャだが……いくら唆されても、子供達を危険にさらすような事態を許容するはずがない。もしあったとすれば、それはもはやガネーシャという神の根底を根こそぎ覆すようなものだ。

いや、フレイヤが全力で『魅了』すれば可能性はゼロではないだろうが……もしそうだったとすれば、全面戦争待ったなしだ。

(ま、向こうにはオツタルがおるけど……)

真つ当に考えれば、『ガネーシャ・ファミア』の方が圧倒的に不利だ。

しかし、『ガネーシャ・ファミア』はアレと――「イレキョラ正体不明」と浅からぬ交流がある。アレが肩入れするとなれば、状況は大きく変わるだろう。

その辺りはフレイヤも分かっているはずだ。いや、分かっていたとしても自重しない

のがあの女神おんなだ。

(そーなると……)

モンスター『脱走』と、山羊頭と牛頭は別枠という事だろうか。

(あと、あれやな。アレに瞬殺された蛇もどきどももか)

普通に考えれば、いくら素手とは言えティオネとティオナが二人がかりで倒せなかつた時点で尋常な相手ではない。

丸腰だつた事を考慮しても、『深層』生まれ……最大限浅く見積もつても『下層』の後半領域生まれと言つたところだろうか。

(まあ、詳しい事は後でティオネ達に聞いてみると分かんけど)

今すぐ確認できる事と言えば――

「ガネーシヤ。あの山羊頭の前に出てきた蛇もどきはどこで捕まえたんや?」

「蛇もどき? 何の話だ?」

「おつたやろ。蛇みたいいな花みたいいな薄気味悪いモンスターが」

「いや、神口キ。我々が捕らえたモンスターの中に、そのようなものはいなかつたはずだが……」

そこで言つたのはうちらを担いで走っている【象神アンクレーシヤの杖】だつた。

神に嘘はつけない。その感覚から判断すれば、彼女の言葉は信用に足るものだ。

しかし、そうなる——

(あの蛇もどきはどこから出てきたんやろ?)

フレイヤが眷属に命じて捕まえてきた——と、それは流石に考えすぎか。

言うまでもなく、モンスターを生け捕りにすること自体が容易ではない。ノウハウのある「ガネーシャ・ファミリア」だからこそできる芸当……と、言うのは流石に言いすぎだろうが、うちの子達でも簡単に真似できる事ではない。

(まあ、『中層』くらいまでやったら力尽くでもいけるやろけど)

いや、それでも例えば『ミノタウロス』辺りは手を焼くだろう。

それに、連れ出すには専用のカーゴがある。捕まえるまでは何とかなっても、バベルから一切人目を惹かずに連れ出すのは流石に不可能だ。

(あの山羊頭どもはどっからかともなく湧いて出たけどな)

あの現象も、決して無視はできない。

あれはまるで『神の力』^{アルカナム}を行使したかのようだった。

しかし、それはあり得ない。その前兆となる神威を一切感じなかった。

当然だ。それがあれば、効果を発揮する前に天界に強制送還されている。それが神々が下界に生きる上で絶対不可侵の規則だ。

……まあ、ごく一部、ほんの僅かな例外もあるにはある。例えば、それこそ『神の恩恵』^{ファールナ}

を与える事や「ステイタス」更新も当然ながら『神の力』^{アルカナム}の一部だ。

しかし、あれはそういう次元の話ではない。

(つまり、あれは神がやったんやない)

神ではないが、神の如き力を持った何者かがあの山羊頭どもを地上に送りこんできたという事になる。

(ツツコミどころ多すぎやろ、この事件)

内心で毒づくが、しかし今はそれどころではない。

(あれはヤバイ……)

改めて、今うちらを追い回している山羊頭どもに意識を向ける。

強い魂に惹かれるというのは確かだろう。問題は、何故惹かれるかだ。

(言うまでもないなあ……)

今まで考え耽っている『フリ』をしていたのは、ひとえに背筋を舐め上げるその悪寒から意識を逸らすためだった。

(うちらを喰い殺すためやろ)

いや、モンスターだって神を喰い殺す事はある。『神の力』^{アルカナム}を封じて下界に留まる限り、この『器』は恩恵を持たない人類のそれと大差ない。

こんな状態では都市外のモンスターに出くわしただけで喰い『殺され』て、天界に強

制送還される羽目になる。そうなった神は二度と下界に降臨できないのがルールである以上、それは『死』と同義だった。

しかし――

(この感覚はそれどころやない)

今感じているのは、遙か昔、まだ『天界』でやんちゃしていた頃に何度か感じた、艶めかしい『死』の感触だった。

同義である、などと言った生ぬるい詭弁など通じない、文字通りの死滅の気配。

超越存在であるうちらが『下界』で感じる事などあるはずもないその感触が、今まさに背筋を舐め上げているのだ。これほど薄気味悪い事はない。

「なら、うちらを追っかけとる山羊頭とかは……いや、聞くまでもないか」

「ああ。あれを生け捕りにしろと言われても困る。【剣姫】の一撃を耐えられるような怪物に、そんな加減ができるものか」

それはそうだろう。何であれ倒すより生け捕りにする方が難しいのは言うまでもない。

「いや、しかしこれはあれだな。ガネーシャ超怖いいいいいいいいいいいつ!?!」

「知るかボケエエエエエエツ!?!」

い・ま・さ・ら・い・う・な!!

「うるさい。黙れ」

と、そこで。

両脇にうちらを抱えたまま疾走する【象神の杖】^{アଙ୍କレーシャ}が、本気でドスの利いた声を上げた。

「あ、はい」

頷いてから、慌てて口を両手で抑える。

いや、何かの弾みで投げ出されたりしたら、その時点でほぼバッドエンド確定だし。

「むっ！ いかん、シヤクテイ。止まれ！」

と、そこで懲りずにガネーシヤが大声を上げた。

「今度はなんだ?！」

その言葉には応じず、ガネーシヤは【象神の杖】^{アଙ୍କレーシャ}の腕を振り払い、道の片隅へと突進した。

「うむ。もう大丈夫だゾウ！」

逃げ遅れたのか、迷子なのか。ともかく物陰から獣人の少女を抱き上げ、ガネーシヤは豪快に笑って見せた。

いや、第一級冒険者の【象神の杖】^{アଙ୍କレーシャ}ですら気づかなかったその子の気配に気づいたのは流石『群衆の主』と言うべきなのだろう。

しかし――

「大丈夫とちやうわ！ はよこつちに——ッ!」

いや、もうそれすら遅い。致命的な悪寒が背筋を駆け抜けた。すでにあの山羊頭の姿はすぐそこにいる。

しかし、それも仕方がない事だった。囚役である以上、完全に引き離す訳にもいかなかったのだ。むしろここまでつかず離れずの距離を保ち続け、うちらだけを狙わせた【象神の杖】^{デンクローシヤ}の采配は賞賛に値する。

だからこそ、この状況はいただけくない。

彼女の予定と異なる場所でここまで決定的に足を止めてしまえば、追い付かれるのは自明の理だった。

『——オ!!』

山羊頭が喝采の叫び声を上げる。

「くっ！ ガネーシヤ、走れ！」

この状態では抱え直している暇もなさそうだった。

「うおおおおおおおっ！ ガネーシヤ超激走!!」

子供——いや、この場合は文字通りの意味で——を一人抱えたまま、冒険者シヤクテイと並んで走れる辺り、その筋肉はあながち飾りでもなさそうだった。

だが、それは所詮一時のものに過ぎない。

「これはいかん……いー」

すぐにガネーシヤの息が上がり始めた。

それは当然だ。体力の限界を気力で先送りにできたとして、それでも高が知れている。

むしろ、本来ならガネーシヤの体力を賞賛してもいいほどだった。

「というか。ひよつとして思うのだが、ガネーシヤが抱えているのが一番危ないのか？」

ああいや、あかんのはそつちもか。

「ああ。そら間違いないわ。うちが保証したる」

何しろ、一番に狙われているのはかなりの出力で神威を放っているガネーシヤなのだ。

公平に考えれば、その次にうちか。ただ単にまだ勘づかれていないだけなのだから。

そして、イコル神血を宿す「アンクレーシヤ象神の杖」になるはずだ。

（けど、選んで殺す訳もないやろなー）

あれがモンスターだろうがそうでなからうが、どのみちそこまで親切ではないだろう。

抱きかかえているどころか、近くにいただけも危険だった。いや、そもそも、ここに来るまで誰も襲われていないのが奇跡に近い。

これはよほどうちの魂が『美味しそう』に見えているのだろう。他の魂など目に入らない程に。

あるいは……

(ダンジョンと同じ、やろか?)

うちらが神だからこそ、なのかもしれない。

もつとも、あまりに情報が少なすぎる。こんな状況ではいくら考えても仕方がない。

それよりも――

「ちよい、シャクティたん！ 前や前!!」

このまま突つ走ると、少しばかりマズい事になる。

何しろ――

「このままやと『ダイダロス通り』に突つ込むで?!」

東と南東のメインストリートに挟まれる広域住宅街。

奇人ダイダロスが建築に携わった結果、その名を冠している訳だが……その名が有名なのは、むしろ繰り返された区画整理によって生み出された複雑怪奇なその造りのせいだ。

一度迷いこめば二度と出て来れない――

オラリオに住む者からは、そんな畏怖と共にもう一つの迷宮と称されている程であ

る。

(あ、いや。むしろそれが狙いか?)

ここまでも山羊頭どもが一斉に襲ってこないよう、細い路地を縫って進んでいた。そういう地形を求めるなら、ここ以上の場所はない。

あとは、追いかけてくるらしいアレか、追いかけてきてくれるはずのアイズ達が各個撃破してくれば万事解決のはずだ。

「くっ！ ガネーシャ!!」

「任せておけ！ ガネーシャパワーアアアアアアッ!! 全・開ッ!!」

いや、まだギリギリ規則違反にならない範囲だが。

それでもガネーシャの身体から今まで以上の神威が放たれる。

「神ロキ、許せ!!」

「のわ!」

それと同時に、体が宙を舞った。いや、放り投げられたらしい。

「神威を——!」

そんな中で、遠のくシャクテイの言葉の真意を読み取れた自分を褒めてあげたい。

大慌てで神威を可能な限り抑え込む。

今までだったらただの悪あがきだった。

しかし、今この瞬間なら。ガネーシャの膨大な神威に引き付けられているこの瞬間なら、それに紛れて身を隠す事も充分に可能だろう。

「ぶあ!?!」

空の——ついでに言えば風雨に晒され朽ちかけた——木箱を幾つか突き破ると……
「をあああああつ?!」

その先には唐突に下り坂。こういう訳の分からないところに意味の分からない仕掛けがあるのも『ダイダロス通り』の特色ではある。

「へぶつ?!」

トンネルを抜けると、そこは地下水路だった。

危うく水に落ちそうになりつつも、何とか受け身を取って踏みとどまる。

「とりや?!」

ついでに跳ね起きて身構えるが——幸い、あの山羊頭どもは追いかけてきていないらしい。ひとまずは助かったという事だろう。

「そんなら、次は急いで地上に出んとなあ」

ほうう……と、大きく息をついてから、力なく呻いた。

地下水路に水棲モンスターが住み着いているのは有名な話だ。それこそ、定期的にギルドから『掃除』^{スワイパー}の冒険者依頼^{クエスト}が出される程度には。

もつとも、ダンジョンから直接這い出している訳ではなく、普通に魔石の力を削って繁殖しているだけなので、だいぶ弱体化しているが。

ただ、一方で都市外のモンスターよりはまだ手強いという噂もある。魔石製品である浄化柱を齧っている影響だとか、魔石製品工場から出る排水に魔石の粉末が混ざっているせいだとか、それらしい理由が語られているが……実際、割と事実らしい。

魔石の粉末云々はともかく、稀に浄化柱が齧られて動作不良を起こすそう。浄化柱整備員の護衛依頼なんて冒険者依頼が定期的に届いてくるのはそのせいだという。

まあ、何であれ――

(今のうちにとつちや外のモンスターでも変わらんしな)

どのみち長居は無用だった。

地上に戻る道で一番近いのは、言うまでもなく転がり落ちてきたこの坂道だが――

(そらやめとこか)

上った先で山羊頭と対面しようものなら目も当てられない。

いや、それを言うならこの場に留まり続けるのも悪手なのだが……。

(ええと、ここは『ダイダロス通り』の入り口辺りやろ?)

趣味で覚えた地下水路の地図を思い浮かべる。

もつとも、所詮は趣味の範囲だ。そこまで詳しく知っている訳でもない。だが、現在

地が分かっているなら、まだどうにかなるはずだった。

(けど、急いだからええなあ)

山羊頭だけが問題ではない。

(あの蛇もどき、どう見ても地下から出てきおった)

もしダンジョンを直接ぶち抜いて出てきたなら、地下水路とダンジョンは繋がってしまっている。となれば、本物のモンスターが徘徊していたとしても不思議ではない。

(けど、そーやないなら、ある意味もつと問題やな)

そして、どちらかと言えばその可能性の方が高いと見るべきだった。

神蓋パベルがある限り——そして、ウラノスが祈祷を捧げている限り、モンスターがダンジョンから這い出て来る事はまずあり得ない。

例外としては、それこそフィリア祭のために連れ出されたモンスターくらいなものだ。

(そーなると、あの蛇もどきどもを地上に運び出した奴がいるいうことやけど……)

それがフレイヤだったとしてもそこまで驚きはしない。地下水路なら、隠し場所としても申し分はない。だが、どうやって連れ出し、運び込んだのかという疑問はやはり残る。

(それこそ、地下水路に直通の通路でも作らな無理やろ)

それをやったのがフレイヤだというなら……まあ、普通に驚くけど。でも、まるつきり納得できないでもない。

だが、それをギルドに——ウラノスに勘づかれずにできるか？ と、問われると首を傾げざるをえなかった。

（ま、しゃーないな。もうちよつとこの近くで様子見よか。あの山羊頭はガネーシャを追っかけとるわけやし）

今は確実に地上に戻る事が優先だった。

趣味程度の地図を頼りに、本当にダンジョンと繋がってしまったているかもしれない水路を進むというのは、あまりに無謀だ。

（ここのうちが天界に戻ると、下手するとアイズたん達も道連れにしかねんしな）

今も牛頭と戦闘中の可能性がある。そんな時に恩恵を失ってしまったえば、その先にあるのはあまりに明確な死だった。ならば、不用意な真似はできない。

（戻ったら、アイズたん達の無事を確認しないとあかんしな）

主力陣の多くが揃っているとはいえ、ほぼ全員が丸腰である。さすがに少しばかり不安を覚えずにはいられなかった。

（陰謀や何やに思いをはせるのはそれからでも充分やろ）

まずは互いに生き残る事だ。そう覚悟して、しばらく隠れていられそうな場所を探す

べく——迷わない範囲で——地下水路を歩き始めた。

第五節 英雄譚の始まり

1

「さあーねっ！」

「——？」

シルさんを探している間、何故か突然不機嫌になってしまった神様におろおろとして
いると、不意に世界が静止した。

いや、それは錯覚だ。でも、この感覚には覚えがある。

例えばクオンさんと森に入って熊が近づいていた時。猪が突進してくる直前。蜂の
巣に気づかず近づいてしまった時。……まあ、つまり危険が近づいている時のものだ。

冒険者となってさらに研ぎ澄まされた五感で、反射的に周囲を探る。

(悲鳴……?)

祭りの喧騒ではない。闘技場から響く喝采でもない。

もつと切迫した、鋭い声を確かに聞いた。

「ど、どうしたんだよベル君……？」

とつさに神様の手を掴み、もう片手を身に着けたままのショートソードに伸ばす。

その動作に、ゾツとした。

(ひよつとして、今近づいてきているのは——)

半ば護身用になった短刀ではなく、この剣が必要になる程の脅威という事なのか……？

「モ、モンスターだあああああああつ?!」

その答えは即座に示された。

人混みが割れ、その脅威が姿を示す。

「シ、シルバー、バック……っ?!」

どうしてこんなところにモンスターがいるのか。一体何が起こっているのか。そんな事を考えるより早く、エイナさんに叩き込まれた知識が、その脅威の名前を導き出す。純白の毛皮を持つ大猿。それが出現するのは一一階層に至ってから。

その一一階層の攻略難度は、基本アビリティ到達基準BとSに該当する。

シルバーバック単体を相手にするにしても、アビリティ平均Eは必要だとされる。

「べ、ベル君……!」

そこまで思い浮かべたところで、そいつと視線が交わる。

この感覚にも覚えがある。忘れもしない。あの『ミノタウロス』と遭^{エンカウンター}遇した時に感じたあの戦慄と同じだ。

そして。最後にどうしようもない情報を付け足す。

(僕のアビリティ平均は——)

ベル・クラネルのアビリティ平均はG。一番高い敏捷ですらまだFでしかない。

それが意味する事はいたって単純だ。

このまま対峙すれば、蹂躪されるのは僕の方である。

——さあ、頑張つてね？

どこからか、そんな声が聞こえたような気がした。

『ギア……!』

それと同時に、シルバーバックは微かに両膝を折り曲げる。

(来る——!)

締め上げられた心臓が悲鳴を上げると同時に、シルバーバックは迷わず僕らに飛びか

かってきた。

(速——!?)

悲鳴を上げる暇もない。

だが、身体は何とか動いてくれた。

「うわああっ!?!」

神様に飛びつき、そのまま地面を転がる。

神様は悲鳴を上げたけど、気を使っている余裕なんてすでない。

跳ね起きながら、神様を背後に庇う。それと同時にショートソードを引き抜く。いつもなら頼もしいはずのそれも、今はさっぱり頼りない。

『ウウツ……!』

突進を躲されたシルバーバックは、すでにこちらを見据えていた。

どう考えても、狙われているのは僕だった。

慌てて神様を右側に押しつけ、敵の進路から逃がす。

そして、自分の思い違いに気づいた。

(違う!?)

狙われているのは僕じゃない。神様だ。

奴の視線の先には常に神様がいる!

「うわあああああつ!?!」

こうなると、神様から距離を置いてしまったのは失策だ。

悲鳴を上げながら、再び神様に飛びつく。それより一瞬だけ遅れて、シルバーバックも動いていた。

最も高い敏捷ですら、相手には届かない。しかし、今回ばかりは距離と時間がどうか味方してくれた。

まだ身に着けたままの拘束具。そこから垂れ下がる太い鎖が僕を掠めこそしたが、神様には何一つ届かなかつた。

「うあ!？」

掠めただけだというのに、衝撃は安い革鎧を素通りしてきた。

いや、違う。減弱されてなおこの威力というだけだ。

「ベル君!」

骨まで響く激痛が動きを鈍らせる。

それを無視して立ち上がり、神様の手を引いて走り出した。

(大通りにいると捕まる!)

奴の方が早い。真つ当な方法では逃げ切れない。

それなら、地形を利用しなければ。

「ベル君!」

「うわああああああつ!」

だが、それすら遅すぎた。

跳躍したシルバークバックが僕らの行く手を遮る。

自分から間合いを詰めてしまったようなものだ。そう毒づくより早く、その太い腕が振るわれる。

(やられる——！)

もう回避は間に合わない。防御などできるわけもない。

「ソウル・レイ！」

しかし。その腕が僕らを粉碎するより一瞬だけ早く、青白い閃光がシルバーバックの胸元に突き刺さる。おかげで一瞬だけ動きが止まる。

その隙に再び神様に飛びつき、地面を転がる。転がる方向は、光が放たれた場所だ。

「師匠っ！」

そして、歓声を上げながら跳ね起きた。

何しろあの輝きは、クオンさんの魔法の一つにそっくりだった。

でも、

「残念。アイツじゃないわ」

「え？ 霞さん……？」

そこにいたのは師匠ではなく、霞さんだった。

「あっちゃー。やっぱりちよつと込める魔力が足りなかったわねー」

いつもの口調は、しかしその響きに宿る戦慄までは隠しきれしていない。

『グゴオオオ……』

恐る恐る振り返ると、シルバーバックは胸を搔き毟りもがいていた。いや、ただ単に

痛みに耐えているだけだ。もう数秒もしないうちに立ち直るだろう。

「こっちよー！」

霞さんの言葉に従い、立ち上がって走り出す。

「か、霞君も冒険者だったのかいっ?！」

「そうだったら良かったんですけどねっ!」

神様の問いかけに、霞さんは走りながら器用に肩をすくめて見せた。

「えっ? でも、今のつて魔法ですよねっ?！」

「そうよ。どう? 少しはエルフらしいところもあるでしょ?」

霞さんは笑いながら、パチリと片目を閉じて見せる。

うん、こんな時だというのにちよつときめいてしまった。

「そうか。エルフは生来の魔法種族だ。ハーフでも血が濃い君なら、恩恵無しでも魔法

が発現する可能性は充分にあるね」

ああ、なるほど。そもそも神様達が『降臨』してくる前、魔法とは基本的に精霊かエルフのものだったのだ。なら、エルフである霞さんが恩恵を持たないまま魔法を発現させていても何もおかしい事はない。

「精神力をしっかりとらめれば、どれくらいのモンスターまで倒せるんだいっ?！」

「ブラッドサウルスくらいなら。外の、ですよ」

そのブラッドサウルスというのがどういふモンスターなのかは分からないけど……外のモンスターはダンジョンの中のモンスターよりもずっと弱いと言われている。

実際、ゴブリンなんて幼い頃の僕が襲われても、お祖父ちゃんに助けてもらうまでの間、何とか生き延びれた程度の力しかない。

でも、今僕らを追いかけているあのシルバーバックが外のモンスターだとはとても思えなかった。

「ダンジョンのだとっ?!」

「確かオークくらいって言ってましたよ、アイツは」

神様達のやり取りを聞きながら、エイナさんに教わった知識を大急ぎで引っ張り出す。

(ええと、確かオークは……)

確か一〇階層から出現するモンスターだったはずだ。

それを恩恵無しで倒せるんだから、やっぱり魔法の力は凄い。

いや、そうじゃなくて。

(出現階層はシルバーバックとほぼ同列。確か、力はあるけど敏捷さに欠ける)

一方でシルバーバックにはそういう目立った弱点はなく、身体能力は総じて高い。

ただ、防御力に関して言えば、シルバーバックが最硬ではない。

(オークに通じるなら、通じるはず……！)

問題は当たるかどうかだ。敏捷さに欠けるオークと違い、シルバーバックは見ての通り素早い。恩恵の無い霞さんが魔法を当てるには動きを止めなければ……最低でも鈍らせなければならぬ。

それは、おそらく容易ではない。前衛を担うのは僕しかいないのだから。

でも、一方で少しだけ希望が見えてきていた。たった一人、どうあがいても勝ち目のないミノタウロスと遭遇した時よりはずっとマシだ。

「待った、霞君。こっちはだめだ……っ！」

と、そこで。神様の呻き声が聞こえた。

その理由はすぐに分かった。眼下——と言うほどの距離もないが——に広がるのは、よじれたような通路。壁から不自然に突き出た正方形の部屋。入り混じる数多の階段。路地を形成する人家の群れがまさに無秩序に立ち並んだ猥雑な空間。

重層的なその造りは、そろそろ通い慣れてきたダンジョンを思わせた。

『ダイダロス通り』

オラリオに存在するもう一つの迷宮。一度迷い込んだら、二度と出てこれないとまで言われる複雑怪奇な領域が行く手には広がっていた。

「霞さんー！」

「大丈夫。こんなの、私にとつては生まれ育つた遊び場よ」

それは多分、本当の事なんだとは思う。

でも、モンスターに追われているとなると話は変わるはず。

声が強張っているのは、多分そのせいだ。

「頼りにしてるよ……！」

苦渋の表情で神様は言った。

どのみち、僕らには前進する以外の選択肢はない。

(霞さんとはぐれたら終わりだ)

いや、どのみちここから逆転するには最低でも霞さんの魔法が必要なことから、状況

は悪化している訳じゃない。

覚悟を決めて——いや、そんな暇もなく、僕は地上の迷宮へと飛び込んだ。

「ええと、確かこの辺に——」

ダンジョンよりもダンジョンらしい。それが『ダイダロス通り』の感想だった。

路地の繋がりがまるで予想できない。結構広めの路地がいきなり袋小路になつてい

たり、一見すると壁しかないようなところに隠し通路めいた道や階段があつたり。

ちよつとした跳ね橋みたいな仕掛けがあつたり、本物の隠し通路があつたり。いつそ危

険な罫の類がないだけマシと言つた有様だった。

度重なる区画整理で秩序が狂った結果らしいけど、こうして中を進んでいるとむしろ最初から人を惑わせるために設計されているようにしか思えなくなってくる。

いや、惑わされるのは人だけじゃない。モンスターにも多少は効果があるようだ。

確実に僕らの……正しくは一般人と変わらない神様と、魔法こそ使えても『神の恩恵』^{フルナ}を宿さない霞さんの体力は限界に近づいている。その結果、足も重くなっているけど、まだそこまで距離は詰められていない。

それもこれも、ひとえに霞さんのルートガイドのおかげだった。複雑怪奇な『ダイダロス通り』を見事に利用してくれている。

「そろそろ走り回るのも限界ね……」

とはいえ、本当に体力が底をついてしまつてはそれまでだ。

「霞さん、お願いがあります!」

「何かしら?!」

「もう一度魔法を使えますか!」

「そりゃ使えるけど、あのお猿さんを倒すには全力で撃たないとダメよ!」

「僕が何とか足止めますっ! だから——」

「OK、頼りにしてるわよ!」

不敵に笑つてから、霞さんは少しだけ走る速さを上げた。

「それならまずいい場所を選ばないとね！」

「心当たりはあるのかい？」

「ええ。程々に広くて、程々に入り組んでいて、しつかり狙いを定められるくらいには隠れる場所もあるところが確かこの近くにあつたはずですよ」

神様の問いかけに、霞さんはそう言つて頷く。

確か。そう言いながら、その足に迷いはない。導かれるままに進むと——
(なるほど。確かにあそこなら！)

その先にあつたのは、でたらめな階段とそれを繋ぐ通路が幾重にも重なり、多層構造がひと際顕著になつた空間だった。しかも、おあつらえ向きにその中央辺りにちよつとした広場までまである。あの広場に誘導できれば、でたらめに重なる通路や階段を飛び回る事で攪乱できる。

(あとはどうにかして動きを止められれば——)

と、その時。

「えっ？」

ガコン、と何か重いものが動く音がして。

それと同時に、霞さんが踏み込んだ通路が消えた。

「しまっ!？」

いや、正しくはここも多重構造の一部だったらしい。下にある坂道に繋がっただけだ。これも隠し通路の一つなのだろう。

「誰よ、こんな時に仕掛けを動かしたのはっ!？」

その叫びが聞こえたせいなのかどうなのか。

霞さんが下まで滑り落ちると同時、もう一度その『仕掛け』が動かされた。

「嘘だろう?!」

これで、霞さんと分断されてしまった。

案内役と切り札の双方を同時に失い、神様が悲鳴を上げる。

僕はと言えば、辛うじて呻き声が絞り出せただけだった。

どこにその『仕掛け』を動かす装置があるのかも分からない僕らでは、もう一度動かして霞さんと合流する事もままならない。

もちろん、時間があるならその装置を探すことも可能だろう。

でも、今はそうじゃない。

「聞こえる!? アイツを探して連れて来るから、もうちよつとだけ頑張るなさい! いわね!」

通路の下から、霞さんの叫び声が聞こえた。

それで、ギリギリ正気に戻る。

「行きましよう、神様！」

神様の手を引き、走りだす。

追い付かれないためには霞さんがやってきたように、路地を縫って走るしかない。

ただ、まったく見知らぬこの場所で霞さんのようにうまく道を選べるはずもなかった。

そもそもちゃんと距離を取る事ができているのかどうなのか——

『ギヤアアアアアアアッ！』

突如として頭上に影が生まれ、奇怪な雄叫びが響き渡る。

「マズ——!?!」

呻くより早く、シルバーバックが空から降ってきた。

民家の屋根を伝ってきたのだろう。恐れていた事態が早速起こってしまった。

「つだあああああつ！」

なりふり構わず強引に横に跳ぶ。そんな状態では着地どころか受け身すら取れず、滅茶苦茶になって地面を転がった。

転がって、跳ね起き、いつそ近くの建物にでも逃げ込もうかと辺りを見回すと、様子を窺っていた住民らしき人影が次々に引つ込んでいく。

「ちくしょう——!」

そりやそうだ。誰だつて下手に匿つたせいでモンスターに襲われるのは嫌だろう。

『オオオオオオオッ!』

あざ笑うかのように、シルバーバックは大声を上げる。

ついに獲物を追い詰めた歓喜の雄叫びだろうか。

「う、あ………っ」

一歩だけ後ずさつた足は、もうそれ以上には動かなかつた。

息すらできない。心臓だつて止まつてしまひそうだ。

「べ、ベル君………!」

そこで、神様の声を聴いた。

震えて、今にも消えてしまひそうな細かい声を。

(逃げるな!)

折れそうな心を叱咤する。

(僕は、『男』だろう!)

勝てない。勝てる訳がない。

本能が叫ぶ。いや、冷静な理性だったのかもしれない。

それすら無視して、震える身体を動かす。

(勝てない、だつて………?)

クオンさんから借りているショートソードを。手に馴染んだ短刀を。

(まだ僕は抜いてすらいらないじゃないか——！)

一気に抜剣した。

「うああああああっっ！」

ありつたけの勇気をすべて振り絞って吠える。

そして、地を蹴った。

『ガアアアアアッ！』

シルバークバックの迎撃はごくシンプルだった。

丸太めいた腕を振りかざし、振り下ろす。クオンさんの剣劇に比べれば——いや、ミノタウロスの一撃と比較しても遅い。

だが、本人の意思とは無関係のところ脅威となるものがあつた。

腕に残された拘束具。そこに残された鎖だ。

シルバークバックを縛り付けるだけの強度を持つその太い鎖は、今や鞭となつて猛威を振るっている。

(軌跡が読めない……っ！)

いや、そもそも読めるはずがない。そこには誰の意思も宿つてはいないのだ。

実際、鎖の動きはまるでデタラメだ。いくら太くて丈夫な鎖でも十分な加速がなけれ

ば致命的な脅威にはならない。しかし、シルバーバックの剛腕は致命傷にならないはずの鎖に、突如として致命的な加速を宿させる。……本人も意図しないままに。

(飛び込めええええええっ！)

逃げ腰になりそうな自分を叱咤して、さらに加速。

鎖の内側。いや、腕の内側まで。そして、僕自身の間合いまで飛び込まなければ。

「おおおおおおっ！」

左手に構えた短刀を一閃する。

しかし――

「っっ?!」

振るった左手に鈍い痛み。そして、僕の意味に反した動きが加わる。

その剛毛を断ち切れず、弾かれたのだ。

いや、それどころか、

(刃こぼれ……っ！)

体を電撃めいた悪寒が駆け抜けるより早く、銀粉となった刃が束の間煌いては風を切る鎖に散らされていく。

この短刀ではこのモンスターには傷一つつけられない。

そのまま竜巻から吐き出されるようにして、間合いが開かれる。

(いけない。間合いを開いたら、次に狙われるのは神様だ！)

二度目の特攻は恐怖を感じている暇もなかった。

反射的に短刀を鞘に戻し、ショートソードを両手で構える。

『いい、ベル君。これから言う事は参考程度に聞いておいて——』

地を蹴る刹那、エイナさんの言葉を思い出した。

それは、ドラゴンだつて倒せるとつておきの一手。

『そう。それはどんなモンスターでも胸の中に隠し持っている——』

魔石。それさえ破壊できるなら、理論上はどんなモンスターでも一撃で倒せる。

(なら、狙うのは——！)

両手でショートソードを構え、デタラメに振り回される棍棒めいた腕と、それ以上に乱舞する鉄の鎖の嵐の中へ一気に突撃する。

「届けえええええつ!!」

そして激突。だが、

(しまった！)

死角から飛んできた鎖を避けたせいで、最後の最後で狙いがぶれた。

剣は魔石のある胸ではなく、左肩に突き刺さる。

『ギイイイイイッ!』

肩の筋肉が引き締められる。

狙ったものか。それとも痛みが生み出す生理的なものだったのか。

どちらにしても、それが剣を握り締めて離さない。

「うわあああああつ！」

再び竜巻から放り出された。

切り札であるショートソードをその肩に残したまま。

「ベル君っ！」

これで、自力での逆転の目は完全に失われた。

（それなら！）

やるべき事は一つしかない。

いや、まだできる事があるだけマシだった。

何とか受け身を取って、跳ね起きる。

「し、失礼します、神様っ！」

そして、神様を横抱きに抱きかかえて、脇目も降らず全力で逃走した。

不躰なのは百も承知。それでも他に方法はない。

こうなつては逃げ回って霞さんがクオンさんを連れてきてくれるのを待つしかない。

（どうか袋小路に行き当たりませんようにっ！）

横抱き——御伽噺で英雄達がよくやっているお姫様だっこ——をしてしている神様に全力で祈ると、何故だか神様は顔を赤く染めて、ぐぬぬっ、と唸りだした。

「すまない、ベル君っ。ボクはこんな状況なのに、心から幸せを感じてしまっているっ……!」

「もう何言ってるんですか神様あ!?!」

さっぱりその神意は読めないものの、考え込んでいる暇もない。

ひしっ、と抱き着いてくる神様をがしっ、と抱き返し、両脚に全力を注ぎ込む。

手当たり次第に路地に飛び込み、迷宮の中を縦横無尽に走り回る。

その甲斐あってか、少しずつ引き離している実感があつた。

(奇襲も、ないな……!)

凶らずも飛び出してしまった大通りを走りながら、空を確認する。

僕らも姿を隠せない反面、向こうも奇襲を仕掛けづらはずだ。少なくとも屋根の上を走り回っている様子はない。

(あんまりここにいるのも不安だけど……)

見つかる不安はあるけど、それ以外の不安はない。

まさかこんな大きな道がいきなり袋小路に繋がっているはずが——

「あるのっ!?!」

結構広いはずの道が突然途切れていた。

（確かにさつきも似たような場所があったけど！）

ここにきて、ついに運に見放されたらしい。

やっぱり神様をお姫様だっこするということ不躰の天罰が下ったのだろうか。

「急いで引き返して……！」

それでギリギリ間に合うか？

いや、無理だ。ここまで結構な距離の一本道だった。

それを引き返すのは、自分から死に行くようなものだ。

（やっぱり建物の中に――）

周りを見回すが、やはりここでも反応は同じだった。

錠が落ちる音の合唱が聞こえて来る。

（いつぞ蹴破るしかないか……？）

深刻に差し迫る焦燥と、無関係な人を巻き込む事への抵抗感が胸中で取っ組み合う。

「いや、好都合だ」

その決着がつく前に神様は凜とした眼差しで僕を見つめ、こう言った。

「ベル君。君がああのモンスターを倒すんだ」

「で、でも……！」

あのショートソードがない今、僕の攻撃は通じない。

「分かってる。でも、まだ武器がなくなった訳じゃない」

神様は、ずっと背負っていた包みをほどき、包まれていたケースを差し出す。

中に入っていたのは、一振りのナイフ。

反りの無い直刀。鞘から抜き放つと、刀身までが漆黒だった。

そして、そこには複雑な刻印が無数に施されている。

「ボクが君を勝たせてやる。勝たせてみせる」

その言葉に——そして、僕の鼓動に応じるように、刀身に紫紺の紫紺の輝きが宿った。

2

実際、そのモンスター……いや、牛頭のデーモンは難敵だった。

「硬ったあ!! カドモス並み……下手するとそれ以上だよこいつ!」

「ああもう、武器がないのが本当に痛すぎるわ!」

いくら互いに武器を持たないとはいえ、Lv. 5の冒険者であるティオナとティオネの猛攻も物ともせず突進してくる。狙いは——

「リヴェリア!」

「チッ! 意外と知恵が回るのかっ!」

魔導士であり、目下最大の戦力であるリヴェリアだった。

（多分、だけど）

知恵が回っている訳ではないのだ。

ただ、このモンスターにはリヴェリアのソウルとやらがこの中で一番『美味しそう』に見えるに違いない。

エルフだからなのか。それともL.V. 6の冒険者だからかなのかは分からないけれど。

（ただのモンスターじゃない）

全てのモンスターにとって力の……いや、命の源であるはずの魔石がない。

最弱のゴブリンから『深層』域の階層主まで、例外なく全てのモンスターが持つはずのそれがない。それはつまり、必殺を果たす手段が存在しないという事だ。

「アイズ！」

戦斧が振り下ろされる。

辛うじて避け切ったが、その一撃をまともに受けては一級冒険者でも命がない。

こうなると、『デスペレート』と愛用の鎧がない事が心から悔やまれた。

「アイズ、魔石がないって本当なの？」

「多分本当。もつと奥まで貫けばいいのかもしれないけど……」

いや、それはきつとあり得ない。

「こうなるとやはり丸腰なのが悔やまれるな」

そういうリヴェリアだけは愛用の杖を持つているけど。

この中で最も万全の状態にあるのは彼女だった。

その彼女を狙つての突進を何とか揃つて掻い潜つてから――

「階層主と丸腰でやり合うのは、さすがのあたしも初めての経験よ」

少し皮がむけたらしい拳を振りながら、ティオネが呻いた。

「いつそどこかの武器屋からこつそり借りちやおつか？」

「あんたにしちや珍しくいい案だけどね」

この辺りで普通に売られている武器で、果たして通じるだろうか。

(正直、この剣だつて……)

切れ味はともかく、強度に不安がある。一体いつまで無事でいてくれるか。

この剣は決して不壊属性デュランダルではない。いつも通りに振り続ければ確実に刀身が砕けて

しまう。

「早くしないと――」

流石のクオンさんだつて――と、とつさに彼の方を見やる。

(嘘……)

彼はこのモンスターを圧倒していた。

このモンスターを知っている——つまり、戦った経験がある事を差し引いても、たった一人で互角以上に渡り合っている。

私達を気遣って、引き離そうとする余裕がある程に。

『まとめて相手をするのは死に行くようなもの』

だが、一対一なら勝てる——と、彼の真意はそうに違いない。

なるほど、分断さえすれば各個撃破できるという確信があるのも納得だ。

「アイズ、よそ見をするな！」

一瞬のつもりが、しばらく見入っていたらしい。

【目覚めよ】
テンペスト

気づけばモンスターの戦斧の間合いには捕らわれていた。

【エアリエル】

風を纏い、大きく後ろへ飛翔する。

それでもギリギリだった。相手の動きが速いというより、私自身の反応が遅かった。リヴェリアの声がなければ、良くても手傷を負っていただろう。

しかし、己の不甲斐なさを嘆いている暇もない。

背後の壁を蹴って、今度は一息に間合いを詰める。

すれ違いざまに五度、風を纏わせて剣を振るう。しかし——
 (浅い……！)

薄皮一枚とは言わないまでも、致命傷には程遠い。

それでも、確実に削つてはいるはずだった。

「【集え、大地の息吹——我が名はアールヴ】！」

杖を構えたリヴェリアが素早く詠唱を終えた。

「【ヴェール・ブレス】！」

緑光が私達の身体を包み込む。

リヴェリアが扱う補助防御魔法。物理属性と魔力属性、両方の攻撃に対する抵抗力を上昇させ、僅かだが体の傷すら癒やしてくれる。

相手の力は強大だけど、これで鎧がない分だけは補つてくれるはずだった。

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹ゆがら。汝、弓の名手なり。狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢】！」

続けて、レフィーヤが詠唱を追える。

「【アイズさん！ 行きます！】」

レフィーヤの声に、いったん間合いを開く。

「【アルクス・レイ】！」

閃光が奔り、直撃した。

でも——

「そんな……！」

それを全く感じていないかのように、そのモンスター……デーモンは猛り続けている。

痛みを知らず。恐れを知らず。それはただ——

（私達の魂を狙っている……？）

魂を持つ者全てにとつての厄災——その言葉の意味がようやく分かってきた。

これは目につく全てを餌としか思っていない。

それを喰い尽くす事しか考えていない。

まさに厄災そのものだ。

それを認め、微かに体温が下がるのを自覚した。

かつてダンジョンのモンスターに感じたものとはまた違う恐怖。

肉体を食い千切られた冒険者の亡骸は今まで何人も見た。だが、これに喰われれば魂すら貪られる。……それは、魂を持つもの全てにとつて身体を捕食されるのと同じ、あるいはそれ以上に根深いところにある根源的な恐怖だった。

「いい加減、倒れろつてのおおお！」

ただ、レフイーヤの魔法はその動きをほんの僅かだけ止めた。その隙に、ティオナとティオネが間合いを詰め、一気に猛攻に転じる。並みのモンスターだったら、それだけで灰になつていたはずだ。でも、

『———オ！』

牛頭のデーモンは逆にティオネの足を引つ掴み、まるで武器のように振り回す。

「しま——っ!?!」

いくつかの屋台が巻き込まれ、完全に消し飛び、かすめた建物の一部はビスケットのように粉々に碎け散った。

「マズい……!?! アイズ、頼む!」

言われるまでもなかった。

せめてあの勢いで地面に叩きつけられる前にどうにかしなければ。

三度風を纏い、突撃する。

(落ち着いて——!)

焦る自分に言い聞かせる。

ティオネに当てないよう、完璧なタイミングを狙うしかない。

でなければ、最悪は私の剣が彼女を殺しかねなかった。

「やあああああつー！」

限界まで研ぎ澄ました集中力が、その一瞬を捉える。

狙うのは敵の親指。いかに痛みを感じない厄災と言えど、そこを断てば手を放すしかないはずだ。

そして、一瞬の永遠が訪れ――

「やった――！」

過ぎ去る。

狙い通り。渾身の突きはようやくそのモンスター……いや、デーモンに深手を負わせた。例えば指一本と言えども、それは変わりない。

しかし、会心の一太刀に満足している暇はない。デーモンの手から解放された――というより、正しくはすっぽ抜けて宙を舞うティオネを捕まえて再び離脱する。

どのみち、一撃離脱を繰り返すしかない相手だ。真つ向から斬り合うにはこの剣では脆すぎる。

《デスペレート》か、クオンさんのような大剣でなければ、まず間違いなく刀身が持たない。

(ううん。私の身体が持たないかも……)

これは間違いなくLv. 5以上存在だ。

階層^{格上}主殺しを得意とする「ロキ・ファミリア」に長年身を置き、そういう戦いを続けてきた自分達ですらこの状態だ。並の冒険者なら今頃はすでに殺されている。

「つたあ……」

あの状況でもとつきに防御していたのだろう。それに、リヴェリアの魔法のおかげもあつて、ティオネは今も生きています。

しかし、戦えるかどうかは別だ。どれだけ楽観視しても、今まで通りには動けない。

（スキル……）

いや、ティオネならスキルの後押しがあるか。

（でも……）

損傷の差は著しい。

向こうは指一本失っただけだ。あの程度であれば、まだ握力で補われてしまうだろう。

ティオネのスキルは強力だが、傷を癒してくれるものではない。

「ちくしょう！ あの牛頭！」

姉を傷つけられたティオナがいつにないほどに殺気立つ。

それは、あるいはモンスターでさえ怖気づくかもしれない。

しかし、それでもあの厄災には通じない。

「頭を冷やせ。あれは確実に階層主に匹敵する存在だ。武器のない今、冷静さを欠けばあつという間に殺されるぞ」

油断なく杖を構えたりヴェリアが言った。

その頬には一筋の汗が伝っている。疲労というより冷や汗だろう。

「……格上殺しはいつものこと、つて言いたいところだけどね」

苦痛を押し殺した顔で、ティオネが体を起こした。

並の冒険者なら、それだけでも驚愕に値する。

そんな状態では、やはりいつも通りの動きを期待できはしない。

「せめてどこかでポジションでも……」

ふらついたティオネを支えながら、レフイーヤが呟く。

確かに武器よりは望みがありそうだが、ポジションはポジションで各ギルドの秘伝レシピが存在する。悪く言えば、ピンキリだ。得意先の「ディアンケヒト・ファミリア」を基準に考えると痛い目を見るかもしれない。

(……でも、それでもないよりはずつといいはず)

内心で呟きながら、再びデーモンに突撃する。

いま前衛として満足に戦えるのは私しかいないのだから。

(倒れるまで斬り続ける……！)

それはむしろ自分に言い聞かせるように。

【目覚めよ】
テンペスト

可能な限りの精神力を注ぎ込む。

【エアリエル】………！

より速く。より鋭く。振り回される戦斧を。叩きつけられる剛腕を掻い潜り、目の前の敵を斬り伏せる。それでもまだ足りない。もつと。もつと。もつと——！

「しま——!?」

どこまでも加速していくはずの剣戟は、しかし突如として途絶えた。

一撃を受けた訳ではない。ただ、刀身が動きについてこれなくなっただけだ。急に無防備になった獲物を前に、牛に似た異形の顔が嗤ったような気がした。

「アイズ、避けて！」

テイオナが叫ぶ。それは、目の前に迫る戦斧の事ではない。

むしろその斜め後ろから迫りくる青い閃光——！

『——ア——』

その閃光に穿たれ、初めてそのデーモンが苦悶の声のようなものを上げた。

「嘘……」

クオンさんはすでにデーモンを倒し終わっていた。

ガネーシャ様達を助けに行くついでに援護してくれたらしい。改めて視線を向けると、すでに近くの路地に再び走り出そうとしていた。

「倒したならせめて何か武器置いてってよおお！」

テイオナが叫ぶと、再び彼は足を止めた。

「ええい、世話の焼ける……！」

言うが早いか、何かが飛んでくる。

武器が三種。それとハイ・ポジション——あるいはエリクサーが入っていたらしいボトルがテイオネの額に直撃して割れた。荒っぽい運ばれ方を前提としているはずのボトルが簡単に割れる訳がないので、あらかじめヒビでも入っていたのだろう。そう言えば、投げる前に手に入力を入れるような仕草をしていたか。

（あれはあれでいい方法なのかも……）

遠くの仲間に素早くポジションを届けるには。

私の握力でも真似できるか、あとで空きボトルに水でも入れて試してみよう。

「いったあ！ 女の子の顔に何てことすんのよ！」

額を押さえながら彼女は文句を言っているけれど——中身を浴びたおかげで傷はだいぶ癒えたらしい。やっぱいい方法のようだ。

「回復薬はともかく、武器はあとできっちり返せよ！」

テイオネの文句はさりと聞き流し。

代わりにそれだけ言い残すと、今度こそ彼はその路地へと消えていった。

どのみち、これ以上の助力は望めない。ガネーシャ様を——いや、彼が引き付けている山羊頭のデーモン達を追ってもらう必要がある。

(「こんなのが他に五体もいる……」)

むしろ、こちらでも早く片付けて後を追わなければ。

もしガネーシャ様に何かあれば治安維持に支障が出る。それより先に、今度こそあの山羊頭のデーモン達は手当たり次第に人々を襲うだろう。

そして、ロキも一緒にいる。何かあれば私達も終わりだ。

例えばどんな惨劇が目の前で起こったとしても、もう戦えない。

技と駆け引きだけで補うには流石に限界があった。

少なくとも、私はまだその域には達していない。

(急がないと!)

決意を新たに、まずは武器を回収する。

「わあ! あたし好みの武器じゃん! 意外と気が利いてる〜!」

テイオナが大双刃ツルガに似た形状——つまり柄の前後に幅広で無骨な刃のついた剣を持ち上げ、軽く振り回した。どうやら気に入ったらしい。

「こっちはまた平凡な武器ね」

ボトルが直撃した額を撫でるティオネの片手にはごく平凡なファルシオン。

「私はこれ」

最後に残っていたのはごくシンプルなエストック。

ファルシオンと同じく、実用性一点張りの無骨な造りだった。

ううん、無骨なのはみんな同じか。

ともあれ、時間を稼ぐため回避に徹し囷となってくれているリヴェリア達もそろそろ限界だった。

「あとは切れ味に期待……!?!」

ファルシオン片手に飛び込んだティオネが絶句する。

「うっそお……」

刃が通り抜けたそこには、今までのどれよりも深い傷が残されていた。

「期待以上っていうか……。平凡なファルシオンじゃないの、これ!?!」

返すのが惜しいくらいよ——と、慌てて距離を取りながら彼女は言った。

予想以上の切れ味にむしろ驚いたらしい。

「よおし、これならいけるじゃん!」

大双刃ツルガに似た剣を振り回しながらティオナは心から嬉しそうな歓声を上げる。

向こうも切れ味は負けていない。いや、むしろ向こうは叩き切るといった感じがか。「はあああああつ！」

風を纏い、何度目かの突撃を行う。

するりと切つ先がデーモンの身体へと滑り込む。

思つた以上の切れ味。それだけなら、確実に《デスペレート》以上。

何より――

（私についてきてくれる！）

危なげのない、頼もしい感触だった。

さすがに不壊属性ではないだろうけど――それでも充分。

「さて、と。それじゃ仕切り直しよ！」

ティオネが剣を構え、声高に宣言する。

ようやくまともに傷を負わせられるようになった。

「デーモンだか何だか知らないけど、「ロキ・ファミア」を舐めるつての！」

これなら、あとはいつも通り格上殺しに挑むだけだった。

「うわ?! 大双刃ウルガより良く斬れるかも!？」

「本当にこの剣何なの？ 本気で返すの惜しくなってきたんだけど……！」

ファルシオン片手にティオネが笑った。

敵の体力は確実に削っている。これなら、いける。

「一気に決めるぞ」

「はい！」

リヴェリアとレフイーヤが詠唱に入る。

それなら、あとは彼女達が詠唱を終えるまで、このデーモンを引き付けるだけだ。

「何かもうこのままあたし達だけで倒せちゃうんじゃない？」

大双刃ツルガに似た剣を自在に操りながら、テイオナが言った。

「油断しない！ 確実に削っちゃいるけど、やたらタフよ。こいつ！」

一撃でも受けければ戦況は再び悪化する。しかし、それこそいつもの事だ。

慎重に。それでも果敢に剣を振るい続ける。

「【終末の前触れよ、白き雪よ——】」

「【解き放つ一条の光、聖木の弓幹ゆがら——】」

彼女達が充分に精神力を籠められるように。

詠唱に集中できるように。

(それに……)

正直なところ、この剣の切れ味をもっと確かめたい。そんな気分もあった。

切っ先がデーモンの身体を抉り取る。この切れ味は本当に見事だった。冒険者達で

あれば、誰もが言い値で買うに違いない。

「アルクス・レイ!!」

会心の手ごたえを感じるとほぼ同時、レフィーヤの魔法が完成する。

自動追尾するその砲撃は、致命傷とは言えないまでもデーモンの動きを鈍らせた。

「吹雪け、三度の厳冬——終焉の訪れ」

そして、リヴェリアの詠唱が連結された。

「誇り高き戦士よ、森の射手隊よ——」

そして、レフィーヤもまた次の詠唱を始める。

「リル・ラフアーガ!」

風を一気に解き放つ。

防御を捨て、移動にも回さず、純粋な破壊の力として。

『——ア!!』

直撃だったはず。

それでも、倒しきれない。むしろ大斧の一撃で半ば相殺されてしまった。

「アイズさん!?!」

私の『必殺』を単純な暴力がねじ伏せる。その事実、改めて血の気が引いた。

「……んにゃろー!」

全力を注いだ攻撃直後に起こる僅かな硬直。

致命的なその隙を、ティオナが補ってくれた。

感謝しつつ、体勢を立て直す。

「レファイヤー、詠唱！」

「お、【帯びよ炎、森の灯火——】^{ともしび}」

ティオネの声に、レファイヤーが束の間途絶えていた詠唱を再開させる。そして、二人は一気に歌い切った。

「——焼きつくせ、スルトの剣——我が名はアールヴ」

「——雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え」

「よーしー！ 全員退避いいいー！」

魔法名の宣言を残すのみとなった瞬間、ティオネが叫ぶ。

「レア・ラーヴァテイン！」

「ヒュゼレイド・ファラーリカ！」

私達が近くの建物に飛び込むと同時に、業火の嵐が吹き荒れた。

それこそ太陽でも落ちてきたのかと思ったほどに。

「あちあちあちー！」

建物に飛び込み、身を屈めている私達でも肌を焼くほどの熱を感じる。

「やっと終わったわね——!?」

それが静まってから、まだ熱の残る外へと踏した途端、ティオネが絶句した。

「野郎、燃え残りやがった……!」

ティオネが毒づく。いや、慄いたのかもしれない。

いくら勇猛なアマゾネスであつたとしても、今ならあり得る。

『——オ!』

焼け爛れた——いや、未だ火の粉が燻る身体で。

しかし、それすら気にもせず雄たけびを上げるデーモンの姿がそこにあるのだから。

「逃げ——!」

悲鳴を上げる暇もなかった。

デーモンは咆哮と共に跳躍した。その巨体は、ただそれだけでも脅威となるだろう。

そこに加わるのは、巨大な戦斧。それも親指を欠いた手すら使った両手持ちの一撃だ。

「リヴェリア、レフイーヤー!」

焼かれて脆くなった石畳が砕け散り、霧のような粉塵を上げた。

デーモンの巨体すら隠すその中で、二人の姿を確認する事はできない。

ただ——

「うわー！ 建物がー！」

粉塵の向こうからデーモンの咆哮が響き、何かを追っているかのように次々と近くの建物が崩落していく。

何かを追っているというなら、それはもちろんリヴェリア達しかありえない。

「【吹き荒れる】!!」

風を纏いながら突撃した。デーモンの位置は声で大体分かる。

だが、一撃受ければそこまでだ。そんな状況では、極めて危険な選択だった。

「【エアリエル】!!」

それでもやるしかない。纏った風が、粉塵を強引に薙ぎ払う。

「このおおおおおー！」

テイオナが続いて突撃してくる。

デーモンとて深手を負っているのは間違いない。あと一押しのはずだ。

『——ア——』

それでもその厄災は止まらない。

ただひたすらに私達の魂を喰おうとする。

「リヴェリアー！ しっかりー！」

私とテイオナが引き付けている間に、テイオナが二人をひとまず安全な——安全だと

思う距離まで下がらせる。

「さすがに……全て遮断とは、いかなかったな……」

リヴィエラの口元から血が零れる。それに、右腕は折れているようだった。

杖はない。どこかに埋まっているのだろう。

「いいからじつとして。レフィーヤ、リヴィエラをお願い！」

「は、はい！」

会話だけが聞こえて来る。

そして、すぐにティオネが飛び込んできた。

「こいつだって虫の息だ。死ぬ気で殺すぞ！」

理性的な仮面は剥がれ、ヨルムンガンド「怒 蛇」と謳われる本性が現れていた。

これはこれで不安だが——しかし、死力を尽くさねばならない相手なのは間違いない。
い。

「さっさと倒れろつてのおお！」

叫びながら、それでも踊るようにその独特な形状の剣を振り回す。

もう一息なのだが。だが、その一息が今は遥かに遠い。

私と同じく風を纏っているのかと思うほどに凄まじい勢いで戦斧が繰り出される。

鎧すら着ていない今、直撃を許せばそこまでだ。きつと死んだ事すら気づかないうち

に、じゃが丸くんになる直前のジャガイモのようにされてしまう。

(……しばらく、じゃが丸くん食べれないかも)

変な想像をしてしまった自分を責めている暇もなかった。

どのみち、これを倒さなければ二度と食べる事は叶わないのだから。

3

「神威を抑えろっ!」

その声が聞こえたどうか。

「のあああああっ!?!」

神ロキの悲鳴が瞬く間に遠ざかっていく。

どうやら、あの木箱の向こう側に隠し通路か何かあったらしい。

相変わらず訳の分からないところに意味の分からない細工が施された場所だが……、

(今回ばかりは幸いなのか?)

どこに繋がっているかは定かではないが、この場に留まられるよりはいくらか安全だ
と思いたい。

「シャクテイ!」

「くっ!」

ガネーシヤの声に、反射的に腕を掲げる。

同時、身体を浮遊感が包む。愛用の拳メタルフィスト装諸共に腕が砕かれた。

(これがデーモン！　これほどのものなのか?!)

いや、それはまだ錯覚だ。しかし、そう錯覚するほどの衝撃。

私の構えが十全ではなかった事を考慮したとして、片手の一撃でこの重さ。

L v. 5 以上の膂力は固い。

(避けられん……！)

吹き飛ばされたままの状態では、飛び退く事もままならない。

それなりに丈夫に作られているこの舞台衣装でも、この大鉈を前にすれば檻縷切れ同

然だろう。

「くらいなっ！」

死を覚悟するより先に、近くの建物から誰かが飛び降りてきた。

アンテイアネイラ
「麗傑」!?

それはあの男のせいで何かと縁がある戦闘娼婦バーベラだった。

「チッ！　両断できないってのかい!？」

武骨な造りの巨大な曲剣を構え、彼女は舌打ちした。

見慣れない武器だ。

そもそも、闘技場では持つていなかった。おそらく、クオンが貸し与えたのだろう。

『——ウウ』

デーモンの持つ大鉦と大差ない重量がありそうなその大曲剣が頭頂部に叩き込まれたというのに、山羊頭のデーモンはまだ生きていた。

流石に苦悶の声らしきものこそ上げているが、致命傷にはまだ遠い。

「子供達よ、慌てるな」

神威を發揮したまま、ガナーシヤが周囲の住人に告げる。

いつもの暑苦しい……いや、騒々しい……でもない。活気ある声ではなく、落ち着いた声。団長としてそれなりに長く仕えているはずの私でも聞いた事がない『神』としての声。

「この厄災は私達が引き受ける。だから安心して、戸を閉め、窓を閉ざし、しばし我慢して欲しい」

その声に従い、周囲の扉や窓が閉ざされていく。いや、外にいた者達すらも自然と建物の中に受け入れられていく。

「遅かったな?」

その隙に【麗アンティアーネイラ傑】に声をかけた。

近くには居るだろうと思っていたが……どうせなら、もう少し早く来て欲しかった。

「あんたがあの神キを抱キかかえてたせいさ。あいつとはそれなりに因縁がある神だからね。今さらとはいえ、繋がりがあるのをわざわざ公言したくない」

なるほど。いかに戦闘娼婦バトベラと言え、あのクオンと『懇意』だと知られば、自派閥にも飛び火しかねない。ならば、それも止む無しか。

(まあ、【九魔姫ナインヘル】もその辺りは心得ているだろうから……)

それこそ彼女がいなければ、今頃【ロキ・ファミリア】は存在していなかった可能性すらあるのだ。

あの男と懇意にしている人間を悪戯に危険に晒すような愚行はしないでだろう。

(あとで念のため、団員達の口止めをしておいてやるか)

裏口周辺にいた団員は把握している。

彼女の派閥ともそれなりに因縁はあるが……この際だ、せめてそれくらいはしてやろう。

『——オオ!!』

しかし。

何であれ、全てはここを生き延びてからだ。

ガネーシヤの神威を前に『歓喜』の咆哮を上げる山羊頭のデーモンを見据え、改めて拳を構える。愛用の槍があればいいのだが、それも言っていられない。

「どうやら、クオンはすでに追つて来てくれているようだな」

神威を発したまま、ガネーシヤが言った。

「追つてくるデーモンの数が減っている。彼の話通りなら、今の私を見逃すはずがない。すでにクオンの手で討たれたと見るべきだろう」

「え、ええ」

まさに神として振る舞うガネーシヤに多少ならず戸惑いながらも頷く。

確かに見える範囲では三体しかない。まだ追い付いてきていないのか、それともすでに討伐されたのか。

「うむ！ ならばあとは逃げまくるゾウ！」

神威を少しだけ納め、いつも通りのガネーシヤに戻る。

「そりや賛成だ」

「おお！ アンテイアネイラ【麗傑】！ 相変わらず色っぽいな！」

いや、それは少し戻りすぎだが。

ええい、幼い子供の前でデレデレするな。

「そりやどうも」

「ガネーシヤ、行くぞ!!」

ガネーシヤが抱えた少女もろともに改めて担ぎ上げ、最寄りの細道に飛び込む。

やる事はこれまでと変わらない。細い路地を駆使し、向こうの群れを長く伸ばす。そうすれば、私達が集団に襲われる危険が減ると同時に、クオンが各個撃破しやすくなる。(一体程度ならまだ何とかなるだろうが……)

一太刀交えた感触としては、そんなものだった。

無論、アンティエイネイラ【麗 傑】の助力は欠かせない。正しく言えば、彼女が持つ大曲剣の助けがいる。(ああいや、やはりアンティエイネイラ【麗 傑】自身の助けもいるか)

クオンを介してだが、それなりに付き合っている。そのおかげで彼女の「ステイタス」もある程度は察していた。いや、それほど大げさなものではないが——

(致命傷を負わせられる可能性があるのは彼女の方か)

もつとも、今は逃げに徹してあの男を待つのが得策か。

彼女と二人きりならまだしも、こちらにはガネーシャと、抱えられた獣人の少女がいる。この状況で戦闘はリスクが高すぎた。

しかし、仮にもここは『迷宮』だ。こちらの都合よく事態が動くなどあり得ない。「むむ?!」これはマズいぞ、シャクテイー!

危機感を覚える程度には広い道だというのに、その先は唐突に袋小路になっていた。「相変わらず訳の分からない構造をしてるね、ここは」

「くつ、やはり本腰を入れてマッピングしておくべきだったか……!」

いや、今はそんな事を嘆いている暇はない。

幸い五Mと戻らず別の横道があった。すぐに引き返して――

「こいつはやるしかなさそうだねっ!」

などと、そんな考えは「麗 傑」アンティアーネイラが吐き捨てた言葉と共に霧散した。すでに追い付かれていた彼我の距離はおよそ一〇Mほど。

相手の素早さを考慮すれば、引き返すにはもう近づかれすぎた。

「くっ! 本当にあの男は追ってきたくれているんだろうなっ!」

毒づきながらガネーシャ達を袋小路の奥の方に押しやる。

もはや退路はない。私達が斃れればガネーシャも腕の中の少女も終わりだ。ならば、

多少なりとも戦場から離れてもらうべきだった。

……私達が全力で戦うためにも。

「麗 傑」アンティアーネイラ。私が時間を稼ぐ。止めはお前に任せた」

重心を整えながら、告げた。

「Lv. 3に期待しすぎじゃないのかい?」

確かに、通常であれば彼女の言う通りだ。何しろ相手はLv. 5の中でも最上位にいる【劍姫】の一撃を受けてなお平然としているような怪物どもである。

私も同じLv. 5だが、今の状態で彼女以上の戦いができるかと言われれば……それ

は何とも答えづらい話だ。

「その剣とお前の魔法があれば可能なはずだ。もちろん、それを当てられるお前自身の腕も欠かせないがな」

一般的に魔法とは切り札だ。上手く使えばランクの違いを超えられる。

加えて今彼女が持っているのはあのクオンが貸し与えた剣だ。あの男が愛用する大剣は神ヘファイストスですら驚愕する業物だと聞く。となれば、最低でも第一等級武装。

そんなものを平然と扱うあいつが、アンテイアネイラ「麗 傑」に貸し与えた武器だ。やはり第一等級武装に劣るとは思えない。

「信用していいのだろうか？」アンテイアネイラ「麗 傑」

そして、以前見たアンテイアネイラ「麗 傑」の魔法は、いかにも生粋の女戦士らしいものだった。

この二つがかみ合えば、まだ勝算はある。

「フン。……仕方ないね。その口車にのせられてやるよアンクレーンヤ「象神の杖」」

実際のところ、私達に選択の余地などない。

彼女一人を前衛に回したところで、数分と持ちはししないはずだ。

ならば、一撃で逆転する可能性のあるアンテイアネイラ「麗 傑」の魔法に全てを賭けるのみ。

従って、彼女が万全の状態で詠唱に専念できる……魔力を練り上げられるように時間

を稼ぐこと。それが私の役目となる。

ランクを考慮しても妥当なところだ。しかし——
「くっ!？」

遂行できるかどうかは別問題だ。

間合いを詰め、拳を放つ。渾身の踏み込みだった——が、相手の反応の方が早い。

そこに加えて間合いの広さも向こうが有利だ。

拳が届くより先に、大鉈が振るわれる。攻撃の余裕を防御に回し、衝撃を受け流すが

(拳装が保たないか……!?)

二発受けただけで、メタルフェイスト拳装が軋む。

いや、保たないというなら……、

(つくづく恐ろしい脅力だ……!)

それより先に私の身体が保たないだろう。

受けに徹してなお拳メタルフェイスト装を素通りする衝撃に腕が軋み、握力が覚束なくなる。

もう数回も打ち合えば、例え拳メタルフェイスト装が保つても腕が保たない。いや、『本気』の一撃を

喰らおうものなら『共倒れ』だ。

「来れ、蛮勇の覇者。雄々しき戦士よ——」

いつそ攻撃を捨て、回避に専念したいが、このデーモンは今もガネーシャを狙っている。迂闊に隙を見せれば私達を無視して飛び掛かりかねない。

「ふっー！」

暴風めいた勢いで振るわれる大鉈を辛うじて掻い潜り、ようやく拳を触れさせる。

だが、固い。拳は分厚い筋肉の鎧に跳ね返された。

（やはりダメか……）

加減などしていないが、十全の威力が込められたとはとても言えない。

その程度ではとても有効打とは言えない。

「がっ?!」

細い尻尾が鞭のように横腹をかすめた。

今纏っているのは舞台衣装とはいえ、モンスターと対峙する事を前提として作られている。防御力と言えば戦闘衣に見劣りするはずもない。

だというのに、その一撃で衣装は大きく引き裂かれ、皮膚までが裂けた。いや、衝撃はそのまま内臓にすら達し、口腔を苦さを伴う血の味が満たす。

仮にもLv. 5の身体に、ただの一撃でこれほどの痛撃を与えるとは、つくづく恐ろしい存在だった。

（直撃すればそのまま殺されかねないな……）

まだか。まだ詠唱は完成しないのか。

戦いが始まってまだほんの数分程度のはずだというのに、すでに数十分も対峙しているような錯覚を覚えていた。

「——我が身を満たし我が身を貫き、我が身を殺し証明せよ」
アンティアーネイラ

【麗 傑】の魔力に反応しているのか、攻撃が激化する。

こうなつてはとても攻撃などできなかった。殺されないようにするのが精いっぱいだ。

(せめて何か武器があれば——！)

だが、今はそんな思考すらも煩わしい。

「——飢える我が刃はヒツポリユテー！」

衣装は襤褸切れのようになり、決して浅くない傷をいくつも負ったあたりでようやく

呪文の末尾が聞こえた。

「行くよ【象神の杖】！」

最後の問題は、どうやって【麗 傑】の一撃を中てさせるかだ。

掠めた程度では意味がない。

理想的な一撃を然るべきところの中てなければ勝利などとても望めない。

「くそっ！」

せめて一瞬でも動きが止まれば――

と、その時。その一撃は唐突に放たれた。

「ソウル・レイ！」

ちよūdō真横辺りにある横道から、青白い閃光が放たれる。

それは反射的にそちらを向いた山羊頭のデーモンの片目に直撃した。

『ア!?』

さすがに目は相応に柔らかかつたらしい。

片方の大鉈を投げ捨ててまで、そのデーモンは片目を押さえた。

潰れたかどうかは分からないが――何であれ、千載一遇の好機だった。

「おおおおおっ！」

防御を捨て、渾身の蹴りを放つ。

狙いはデーモンの膝。脆い関節なら、あるいは――！

『ガ――ア!』

真正面から膝を蹴り抜くと、健がねじれる感触が伝わってくる。

同時、もう片方の腕が力任せに振るわれた。

まともな回避運動では間に合わない。なりふり構わず地べたに突っ伏した。

もし追撃があれば、もうどうあつても避けられない。

(だがっ！)

目前に迫っていた死は一瞬だけ先送りにできた。

背中に熱を覚えると同時、身体を捻ってその腕にしがみつく。

おかげで目を押さえていた掌が私を叩き潰そうと振り下ろされるのがはつきりと見えた。新たな死が迫るその刹那。

「麗アンテイアネラ傑」ああああああつ！」

できるのはもはや叫ぶ事だけだった。

両手とも私に向いている。これ以上の隙は用意できない。

「ヘル・カイオス」!!」

魔法名と共に紅色の衝撃波を纏った大曲剣が振り下ろされる。

それは最初の奇襲によってもたらされた頭部の深手を更に抉り——

「ああああああつ！」

それを見届けるより早く。立ち上がりもせず、腕の力だけで私も『走って』いた。

狙いは投げ捨てられた大鉈。見た目以上の重量を誇るそれを渾身の力で持ち上げ、いっそ放り投げる勢いでなりふり構わず振り回す。

『ゴ——ア?!』

横腹にめり込んだ大鉈に、デーモンの動きが一瞬だけ止まる。

「くたばりなっ！」

ぶちっ——と、鈍い音と共に何かが限界を迎えたらしい。

大量の精神力を込められた紅い斬撃波が、ついにその身体にめり込み、デーモンの身体を両断する。

それと同時に、デーモンは断末魔の悲鳴すら残さず淡い燐光となって消えた。

「チツ、本当に魔石の一つも残さないとね」

アンティアネイラ
【麗 傑】の言葉通り、あとには何も残らなかつた。

あれだけの激闘で魔石もドロップアイテムもなしとは、冒険者にとっては全く割に合わない。

……いや、私達の命が残っただけ御の字というべきか。

「ちよつと二人とも大丈夫？」

細道から飛び出してきたのは霞だった。

「見ての通りさ」

いつもの軽口もなく、アンティアネイラ
【麗 傑】が肩をすくめる。

「やれやれ。あんたもうちに入らないかい？」

「嫌よ。何度でも言うけど、エルフは身持ちが固いのよ」

「だから、その貞操を捧げた相手が悪すぎだつて」

「お互い様でしょ?」

「私は商売だよ。色んな意味で上得意なのは認めるけどね」

いや、それはどちらの言葉も全くその通りなのだが。

何というか、人間関係と言うのはいつだって複雑怪奇なものらしい。

何故あのふしだらな男を選んだのか。この二人なら相手には困らないだろうに。

「助かったぞ、霞」

ともあれ、感謝の言葉を伝える。

「あら、天下のL.V. 5にそんな事を言われると、私も頑張った甲斐があるわね」

ソフト帽の鍔を指先で軽く押し上げ、霞は小さく笑った。

「麗アンティアーネイラ傑」ではないが、私達の同志にならないか?」

それは半ば本気だった。

何しろ、たった今魔法を放った彼女は『神ファールナの恩恵』を受けていないのだから。

「堅苦しいのもちよつとね。大体、『ガネーシャ・ファミリア』に剣闘士のマネージャー

が入団したらマズいでしょ? 私はアイツみたいに飛び抜けてる訳じゃないだし」

「む……」

確かに恩恵無しで魔法を使えるというのは稀な才能だが——エルフであれば、可能性は絶無ではない。何しろ、エルフこそが生来マジックユースの魔法種族なのだ。

今の時代、魔法を体得するなら『神フェアルナの恩恵』を賜るのが一番確実だから、エルフ達もそうしているだけにすぎない。

確かに珍しいが、あの男のように無理をせずとも道理が引つ込むほどの『規格外』という訳ではなかった。

「それよりも、二人ともちよつとついてきてよ」

「どうかしたのか？」

「どうしたもこうしたも——」

と、そこで膨大な殺気が背筋を強張らせた。

「シヤクティ！ 気を抜くにはまだ早いぞっ!!」

ガネーシヤの叱咤の声を受け、反射的に霞を連れて飛び退く。

「チツ！ もう一体かい！」

霞を抱えたまま地面を転がり、跳ね起きるとそこには新たな山羊頭のデーモンが迫ってきていた。

「霞、もう一度撃てるか？」

「そりゃ撃てるけど、今の状況で意味があると思う？ 私の魔法なんて全力で撃つても

精々、ブラッドサウルスを一匹仕留めるのがやっとよ」

もちろん、都そと市外のね——と、霞。

都市外の『ブラッドサウルス』となると、精々ダンジョン内の『オーク』程度か。

恩恵を持たない彼女がダンジョン内、それも一一階層に出現するモンスターを倒せる。

なるほど。普通なら偉業と言っている程の快挙だ。

しかし、この状況では焼け石に水でしかない。

「くそっ！ 【麗傑】 もう一度だ！」

「分かつてる！ 私が途中で精神疲弊起こさない事を祈るときな！」

先ほどの魔法がなりふり構わぬ渾身の一撃だったのは疑いない。もう一度と言うのは、控えめに言ってもかなりの負担だろう。

いや、そもそももう一度彼女に詠唱に専念させる事ができるだろうか。

私自身の身体もすでに限界に近い。

（やるしかないか！）

戦慄を飲み込み、再び前衛を受け持つ――

「え？」

より早く。その山羊頭のデーモンの胸から剣の切っ先が突き出てきた。

より正しく言えば、雷を纏った剣の切っ先が、だ。

『ガ……ア——ッ！』

全身を振り回すようにして山羊頭のデーモンが大鉈を振り回す。

だが、遅い。すでに剣は引き抜かれ、その担い手は次の行動へと移っていた。

雷を帯びた黒い旋風が生じる。

その風から横薙ぎの斬撃が放たれ、片腕諸共にその身体を半ばまで斬り裂いた。

『ガアア——ッ!?!』

悲鳴を上げながら、残った大鉈を振りかざす。

しかし、それが振り下ろされるより早く、その黒い人影は跳躍し、さらに一回転。

その加速に重力が加わった斬撃は山羊頭の脳天を直撃。そのまま股間まで一直線に
奔り抜ける。それで終わりだ。

そのまま『左右』に倒れるより先に、山羊頭のデーモンは霧散して消えた。

「やれやれ、どうやら間に合ったらしいな」

「クオン……」

手にした大剣を軽く血払いするクオンを見やり、呆然と呟いた。

安堵したというのも確かだが……、

「……『灰色の悪夢』とはよく言ったもんだね」

その通りだ——と、【麗傑】の言葉に嘆息する。

【猛者】と互角に渡り合い、【古王】を撃退。さらに『非公事記録』樹立という華々しい

冒険者泣かせ

の経歴は伊達ではないという事か。

「苦戦しろとまでは言わないけど、もう少し激闘を繰り広げてくれていいんだよ？」

むしろ、せめてそれくらいしてもらわないと私達の立つ瀬がない。

しかし——

「安心しろ。それはもうだいぶ昔に済ませた」

半眼で毒づく【麗傑】アンティアーネイラに、クオンは笑って返す。

「大体、お前達が引き付けておいてくれたおかげで先手も取れたんだ。一対一ならこんなものだろう。飼い主の犬どももいないしな」

相変わらずよく分からない事を言う男だった。

「飼い主の犬？」

霞の問いかけに肩をすくめてから、クオンは続ける。

「初めてこいつと出くわした時は、ここより狭い路地だな。しかも、犬を二匹連れてたんだ。この犬どもが恐ろしく素早くてな。むしろ山羊頭よりもこいつらに散々食い散らかされたんだ」

よく分からないが……まあ、デーモンが連れている犬がただの犬のはずもない。

あの巨体で道を塞がれた挙句、その『犬』とやらに襲われた——と、そんなところか。それは確かに厄介そうだ、とひとまず納得しておく。

「うむ！ 見事だクオン！ ガネーシヤ、超感激っ!! ……というか、俺達がここにいとよく分かったなっ？」

「まあ、方法はいくらもあるからな」

「相変わらず多芸な奴だ！ それで、他のデーモンは？」

「山羊頭は今のが最後だ。牛頭は一体は俺が始末した。もう片方は糸目の小僧の手下とも戯れている。ま、武器も置いてきたんだ。上手くすれば生き残れるだろう」

「……【ロキ・ファミリア】の精鋭達でもそこまで苦戦する相手なのか」

デーモン。聞きしに勝る怪物だった。

となると、やはり今すぐにこの男を【剣姫】達の元へ戻すべきだろう。

「時に霞。何でお前までいるんだ？」

そう言われてみれば。

いくらこの男達と知り合いでも彼女は恩恵を持たない一般市民だ。この状況で避難していないどころか、自分から首を突っ込んでくるといふのは不用心に過ぎる。

まして、彼女はそれが分かる程度には荒事に慣れているはずだ。

「そう！ それよ！ ちょっとついてきて！」

言うが早い、彼女はクオンの腕をつかみ引つ張って歩き出そうとする。

「待て。どこに連れていくつもりだ？」

「どこって！ アナタ達、元々は逃げたモンスターを追ってたんでしょ!」

「あつ」

ガネーシヤはもちろんクオンとも……それどころか【麗 傑】アンテイアネイラとも声が重なった。

デーモン出現という緊急事態のせいで忘れていたが、そもそも事の発端はそれだ。さらに言えば、まだ最後の一体がどこかに残っているはず。

「仕留めてくれては……?」

「ないよ。探しちゃいたけど、真つ先に見つかったのがあんた達だったからね」

「右に同じく」

いっすがるような気分で【麗 傑】アンテイアネイラに視線を向けるが、あつさり否定された挙句、ク

オンまでが肩をすくめた。

「でしようね！ ついさつきまで私達が追い回されてたものっ!」

「それはよく無事だったな……」

いや、待て。感心している場合ではない。

「私達？ 他に誰かいたのか?」

「ハステイアっていう女神様とその眷属よ」

「女神はともかく、冒険者がいるなら何とかなるだろう?」

その言葉に【麗 傑】アンテイアネイラが肩をすくめて見せた。

しかし——

「えっ？ シルバーバックって冒険者になって半月の子でも倒せたっけ？」

結構配当金は良かったはずだけど——と。普段ならまず聞き流せない眩きを、何とか聞こえなかった事にして。

「……………」

思わず【麗アンティアーネイラ傑】と顔を見合わせていた。

『シルバーバック』

——階層から出現するモンスターで、偏りの少ない身体能力を誇る強敵だ。

いわば看板モンスターと言ったところか。

なお、——階層に進出するには、最低でもアビリティ平均Bである事が奨励されている。つまりは、最低限その基準を超えていなければシルバーバックに対する勝ち目はま
ずないという事だ。

さらに言えば、『神ファルナの恩恵』を得て半月でその基準に達する事などあり得なかった。

あの【剣姫】ですらその『階層への進出』に半年以上を要しているのだから。

「アイシャ、シャクティ。そちらは任せていいか？」

「ああ。今の私達でもシルバーバック程度なら問題ないよ」

いかに強敵とは言え、Lv. 5やLv. 3の冒険者にとっては脅威ではない。

互いに消耗しているとはいえ、たった一体ならどうにでもなる。

「お前は急いで——」

【劍姫】達の援護に向かえ——と、私はそう続けるより早く、クオンは走り始めていた。

「ああ。そろそろ元凶にはご退場願うとしよう」

最後にこう言い残して。

「うむ？ クオンはデーモンを地上に放った元凶に心当たりがあるのか？」

その背を見送ってから、ガネーシャが首を傾げた。

「確かにデーモンについて知っているのは間違いないだろうが……」

しかし、三年も留守にしていたクオンがその元凶を突き止めているとは——

「いや、最初にモンスターを脱走させた方じゃないのかい？」

「あつ」

アンティアーネイラ
【麗 傑】の呆れたような言葉に、ガネーシャともども再び間の抜けた声を返していた。

……まさか二度と同じ思い違いをするとは。

決してモンスターの脱走を甘く見ていたつもりなどないのだが……それでもなお、デーモンを討った安堵はこれほどまでに気を緩めさせていたようだ。

「もしやフレイヤ超・絶体絶命ツ?!」

「もしかしくなくてもその通りだろう、これはツ?!」

この世界であの男ほど神殺しを忌避しない者は存在しない。

さらに言えば、どれほど楽観的になったとして、それでもあの男が神フレイヤに情けをかけるとは思えなかった。

「うむ……。いくらこの騒ぎの元凶の一つとは言え、流石にフレイヤを討たせる訳にもいかん。シャクティよ。お前はシルバーバックを追え。俺はロキ達と合流しよう。何としてもクオンより先にフレイヤの身柄を押さえねばならん」

それは正論だった。しかし――

「だが、ガネーシャ。一柱でここから出れるのか？」

何しろここは『ダイダロス通り』だ。

私自身、ここから真つすぐに戻れる自信はない。

「心配無用っ！ 俺に考えがあるっ！」

ガネーシャはビシツとポーズを決めてから、こう叫んだ。

「すまんが、誰かガネーシャ達を『ダイダロス通り』の外まで案内して欲しいっ！」
すでに神威は普段通りに抑えられている。

しかし、それでも――

「あ、あの。それなら私が……」

ほどなく、一人の年配の女性が近くの扉から出てきた。

「今日は、闘技場の周りで夫が屋台を開いているはずですので……」

「何と。うむ、ではすぐに安否を確認しに行くとしようっ！ なに、心配はいらん！ 俺の超・有能な団員とギルド職員がすでに避難誘導を始めているからなっ！」

いや、確かに避難誘導の指示は出してきたが。

あの牛頭のデーモンが無事なら、今頃は闘技場まで陥落している可能性が……。

「ロキの子供達なら何とかしよう。それに、もしその場合でも子供達を危険にさらすような真似はすまい。俺とお前が育てた超・有能な団員達なのだからなっ！」

珍しく小声で、ガネーシャが耳打ちした。

そう言われれば、反論などできはしない。

例え倒せなくとも、時間を稼ぎ市民を避難させるくらいの事はできる。団長である私
がそれを疑っては何もできない。

「くれぐれも無理をなさらないでください」

「任せておけっ！」

ガネーシャとそのご婦人に一礼してから、霞に案内されて私達はシルバーバツクを
追って『ダイダロス通り』を駆け抜けた。

アイズさん達が牛頭のモンスターを引き付けている間に、負傷したりヴィエラ様を連れて後退する。

「丈夫な奴め……」

苦痛をこらえながら、リヴェリア様が毒づいた。

その細い右腕はすでに折られている。いや、並の冒険者であればすでに死んでおかしくないだけのダメージを負っているはずだった。

（私を庇ったせいで……！）

私もリヴェリア様もありったけの精神力を注いだ魔法だった。

それでも、あのモンスターは燃え残った。それに恐怖して動けなかったのは私だけ。

その私を庇ったから、リヴェリア様はこんなにも傷ついている。

「ごめん、なさい……」

この戦場で足手まといだったのは私だけだ。

憧れの人アイズさんやテイオナさんはもちろん、深手を負ったはずのテイオネさんですらまだ戦っている。【正体不明イレギュラー】に至ってはたった一人で早々にあのモンスターを仕留め、残りの山羊頭のモンスターを追って行った。

（あれでLv. 0……？）

大昔……神々の恩恵を得ないままモンスターと対峙したという『本物』の戦士達。

彼はそういう存在だ。Lv. 0である事なんて何の問題にもならない。

純粹に魔導士としても、見慣れぬ魔法を意のままに操る彼に及びはしない。

そんな事は、あの五〇階層の戦いで知っていたはずなのに、今さらになつてこんなにも打ちのめされている。

「ごめんなさい。足手まといでごめんなさい……!」

膝から力が抜ける。崩れ落ちたら、きつと立ち上がれない。

それより早く――

「足手まといなんて事はない」

リヴェリア様の左手は頬に触れる。

「間違えてるな。敵を恐れるのは正しい」

彼女の瞳に私の姿が写り込んでいた。

「勇気と蛮勇は別物だ。私とてあのモンスターは恐ろしい」

ただ、それでも――

「私達は一人で戦っている訳ではない。そして、お前の力が必要なんだ」

アイズさん達とモンスターの戦いは未だに拮抗している。

そして。魔導士の役目とは、戦況を覆す事にある。

「今の私は、もうこれ以上は戦えない」

リヴェリア様の身体はもう限界だ。今すぐにも治療しなければならぬ。そんな身体で今も意識を保っている事自体が、彼女の強靱な精神を現している。

「だからお前に託す」

心臓が跳ねた。

「任せられるか？」

彼女の代わりを——L.V. 6の冒険者。オラリオ最強の魔導士の代わりを私が務めなければならぬ。

「アイズ達を助けてやってくれ。お前にならできるだろうか？」

「は、はい——」

それでも躊躇う私に、リヴェリア様はそつと道を示してくれた。

それなら——

（わ、私は……！ このオラリオで最も強く、誇り高い、偉大な眷属の一員！）

そうであり続けるためにも、逃げる訳にはいかない。

「【ウィーシエの名のもとに願う——】」

強大な敵を見据え、高らかに歌い上げる。

「【森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ——】」

遙か遠き憧れの人の姿を見つめ、

「繋ぐ絆、楽宴の契り。円環を廻し舞い踊れ——」

共に戦う仲間たちを助けるために。

「至れ、妖精の輪。どうか——力を貸し与えてほしい」

この魔法を世界へと響かせる。

「エルフ・リング」

繋がった。私を知る限り、最高のエルフの力は今、私と共にある。

「そうだ。それでいい……」

偉大なるエルフの王女に背を押され、彼女の魔法を紡ぐ。

「終末の前触れよ、白き雪よ——」

これが私の切り札。

「黄昏を前に風を巻け——」

本来は三つしか使えないはずの魔法。その上限を無視する前代未聞の反則技。

「閉ざされる光、凍てつく大地——」

私の二つ名。『千の妖精』の元となったそれは、同胞のものに限り、詠唱および効果を

把握した魔法を己のものとして行使する。

つまり——

「吹雪け、三度の厳冬——我が名はアールヴ！」

この魔法を以て、私はここにオラリオ最高の魔導士【九魔姫】ナイン・ヘルリヴェリア・リヨス・アー
ルヴが振るう必殺を再現する。

「お前達、避けるー！」

リヴェリア様の叫び声を追って、高らかに魔法名を告げた。

「【ウイン・フィンブルヴェトル】!!」

『ガ——ア!』

吹き荒れる極寒の吹雪。

それは敵の動きを——いや、時さえも凍てつかせる無慈悲な雪波である。

その中ですら、その咆哮を上げて突進してくる。

それはもう一対一の勝負だった。

私の魔法が通じるか。それとも、届かずに終わるのか。

届かなければ、あの大斧が私を叩き潰すだろう。

吹雪の向こうに迫る巨体を睨み、ありったけの精神力をマインド注ぎ込む。

「凍り付けええええええっ！」

猛り狂う吹雪の向こう側に迫りくる足音を聞いて——

「——!」

吹雪が消え去って。目の前には巨大な氷像が立っていた。

いや、それはまだ動こうとしている——!?

「このおとおおおっ!」

戦慄が背筋を駆け抜けるより早く、アイズさんの——そして、ティオネさんとティオナさんの渾身の一撃によって粉々に碎かれる。

「勝った……?」

悪夢のようなモンスターが粉雪となつて散るのを見届けて、膝から力が抜ける。

マインドダウン
精神疲弊だ。どこかへ落ちていくような眩暈。

「つたく。つくづくしぶとい奴だったわね」

曲剣を肩に担ぎ、ティオネさんが言った。

「やったね、レフィーヤ!」

そして、ティオナさんは笑いながら抱き着いてきた。

「テ、ティオナさん……」

ふわつく意識の中で、その身体を抱き返していると、

「ありがとう、レフィーヤ。リヴェリアみたいだったよ」

アイズさんが微笑んだ。

「すごかった」

「ありがとう、ごこぎいます……!」

もちろん、それで彼女との距離が少しでも縮まった訳ではないだろうけれど。ああ。それでも——まだ私はそこを目指して歩いて行ける。

その微かな手ごたえと共に、意識を手放していた。

5

袋小路のどん詰まり。

そこにある、今ひとつ意味の分からない壁の裏側に身をひそめ、ボクはベル君の背中と向き合う。

身に着けていたレザーアーマーはその辺りに放り出されている。黒のインナーを脱ぐ暇も惜しく、生地の上から神血を染み渡らせた。

（早くっ、早くっ、早く……っ！）

喚きたてる本能を押しやって、「ステイタス」の更新に全神経を集中させる。

別に「ステイタス」の更新を目で追う必要はない。血を触媒として、ベル君が蓄積した【エッセリア経験値】をくみ上げ、「ステイタス」として顕在させる。それが「ステイタス」更新という作業の全てだった。

そうである以上、例えば布地越しとは言え、血さえ行き届くなら、そんなものはもう何の障害にもなりはしない。

『——いいい、ヘステイア。よく聞きなさい』

頭の片隅で思い浮かべるのは、最後の希望となったナイフの生みの親——神友であるヘファイストスの言葉だった。

『あんたが【神聖文字】^{ヒエログリフ}を刻めたように、このナイフは生きているの。『神の恩恵』^{ファアルナ}を授かった子供達と同じようにね。そして、【経験値】^{エクセリア}を糧に成長していく。普通の眷属と違いのは、自分のじゃなくて使い手の【経験値】^{エクセリア}が糧になるってだけよ』

その影響で、ボクの恩恵を受けた子供達でなければ使いこなせないという、ある意味致命的な欠陥を持ってしまった文字通りの専用装備^{オーダーメイド}。

『見ての通り、今のままだったらどんな武器よりも貧弱よ。でも、あんたの子……ベル・クラネルが成長していく限り、このナイフも強力になっていく』

駆け出しの冒険者に持たせるため一級装備——ヘファイストスはこのナイフを言い表した。そして——

『もし、ベル・クラネルが【正体不明】^{イレギュラー}の高みにまでたどり着けるなら、このナイフだって彼の持つどんな武器にも負けない力を発揮するでしょう』

生かすも殺すもすべては使い手次第。

もしも使い手が最強となるなら、このナイフもまた最強となる。

人の可能性を示す生粋^{スベリオルズ}の特殊武装。

『勝手に至高に辿り着く武器なんて邪道だわ。二度と作らせないでよね?』

至高に至ると、ヘアイストス神匠が保証した最高の一振り。

(問題は……)

今のベル君の「ステイタス」がどこまで成長し、その力がナイフをどこまで強化するかが未知数ということ……っ！

(なっ!?)

編纂が完了した「ステイタス」に、思わず絶句した。

ベル・クラネル

力 : G 2 6 5 ↓ E 4 8 4

耐久 : H 1 7 4 ↓ G 2 5 3

器用 : G 2 7 8 ↓ E 4 9 4

敏捷 : F 3 7 6 ↓ C 6 2 5

魔力 : I 0

全アビリティ熟練度、上昇値七〇〇オーバー。

驚くべき事に、すでにランクアップに必要な最低値をクリアしている。たった半月で。まさに天井知らず。常軌を逸した成長速度だった。

(おのれヴァレン何某!! ああいや、それともクオン君の作業なのか?!)

正しくは、その二人の影響が見事にかみ合った結果だろう。

嫉妬すればいいのか、それとも恐れ戦けばいいのか。

その辺の判断は全くさっぱりつかないけど、確信は得た。

(これなら、後はベル君次第っ！)

その確信に呼応するように、ベル君の手の中でナイフが紫紺の輝きを放つ。

「神様、来ましたっ！」

「よし！ さあ、行くんだベル君！」

万感の思いを込めて、ボクはその熱い背中を叩いた。

……

「よし！ さあ、行くんだベル君！」

神様に背中を押され、物陰から飛び出す。

三日ぶりの「ステイタス」更新。

その影響は、たったそれだけの動作でも明らかだった。

とはいえ、それでも、相手の方が格上だ。まともに戦っても勝利はない。

従って、取るべき戦術は先ほどと同じ。

一撃必殺の魔石狙い。

(本当に、僕にやれるのか……?)

三度目はない。失敗すれば、きつと神様の命もない。

『ボクが君を勝たせてやる。勝たせてみせる』

自身への不信は拭えないにしても、神様の言葉を疑う事はない。神経を研ぎ澄まし、両脚にすべての力を込める。

「——ッ！」

世界の時間が止まった。

蠢く鎖も。振り下ろされる腕の軌跡も。その全てが見えた。

もちろん、それは錯覚だ。極限に研ぎ澄まされた感覚が見せた刹那の幻でしかない。でも、それで充分。

「うおおおおおおおっ！」

その一瞬に飛び込むために、地面を蹴りつける。

受け取った力は全てナイフの切っ先に。その瞬間、僕の身体は一振りの槍となった。

ペネトレーション
突撃槍。

胸を狙うのではなく、その背中へと突き抜ける。

恐怖も自身への不信も置き去りにした永遠の一瞬。

『ガアッ!!』

紫紺の輝きを放つ漆黒の刃が、シルバーバックの胸元に滑り込む。

肉を裂く切っ先が、そのまま硬質な何かを粉碎した。

限界にまで見開かれた濁った眼に、僕自身の姿が写り込んで――

「ッ!?!」

シルバーバックが仰向けに倒れ込む。それを見送りながら、僕は宙を舞った。

何しろ、着地の事なんてまるつきり考えてもいなかったのだ。

シルバーバックがあっさり倒れたおかげで、突撃の加速力は未だ健在。そのまま、明後日の方向に向けて束の間の空の旅を堪能してから、

「ぐえっ!?!」

蟬の翼すら持たない僕は、ごくあっさりと地面に激突した。

それでも勢いを殺しきれず、地面を転がって、しばらく悶絶してから跳ね起きる。

「ツー!」

そのまま――役に立たないのは承知の上で――短刀を構えたが……、

「やった……?」

大の字に倒れたまま、シルバーバックの身体は灰となって消えた。

残ったナイフとシヨートソードがそのまま石畳に落ちて、カランと音を立てる。

それが、戦いの終わりを告げる鐘の音だった。

『――ッ!?!』

歓喜の音が、響き渡った。

固唾をのんでシルバーバックとの戦いを見守っていた周囲の住人が、興奮を爆発させたのだ。閉ざされ、錠すら落とされていたはずの窓は開け放たれ、住人達が身体を乗り出して喝采する。それは、闘技場から響いていたそれにも負けない程だった。

その喝采の中で、ようやく強張っていた頬が緩んできた。

やりましたよ、神様！——そう言つて、笑いかけようとして。

「神様っ!？」

飛び出したのは悲鳴だった。

視線の先で、神様が地に伏している。

ナイフとショートソードを拾い上げ、大急ぎで駆け寄る。

「神様！… 神様!？」

呼びかけるも、蒼白な顔をした神様から帰ってくるのは曖昧な呻き声だけ。

血が凍る思いで立ち上がり、神様を抱きかかえて疾走する。

「坊主！… そつちは右だ右!？」

「そこに近道があるぞ!？」

大歓声の祝福に交じつて、住人の皆が口々に行く先を教えてください。

それに感謝の言葉を返しながら、僕は再び地上の迷宮を走り抜けた。

「いたた……っ」

「ちよつとテイオネ、本当に大丈夫なの？」

「万全じゃないけど、これくらいならね。さすがにアイズと二人きりだけじゃ行かせられないわ。あんただつてそれくらい分かつてるでしょ？」

「そりゃそうだけどさー」

牛頭のデーモンを倒してから、私達は『ダイダロス通り』に向けて走っていた。

私達、と言つても、さすがにリヴェリアとレフイーヤはいない。二人は「ガネーシャ・ファミリア」の人達に任せてある。

「じゃ、いいわね？ 最優先はロキ達の保護。次に逃げたモンスター討伐。ただ、ロキ達を見つけても、一人で突っ込むのは絶対厳禁。まず山羊頭が周りにいないかよく確認して。言うまでもないでしょうけど、奇襲にも充分に注意しなさい」

入り口付近で、テイオネが作戦を確認する。

「ロキ達を見つけたら黄色の、山羊頭だけだったら赤の閃光弾だね？」

リヴェリア達を保護してもらった際に「ガネーシャ・ファミリア」の団員達から貰い受けた三色セットの閃光弾。それにポーチ越しに触れながら、確認する。

「ええ。でも、使いどころには気をつけなさい。他の山羊頭がそれにつられて集まってくるかもしれないからね」

「山羊頭を相手にする時は三対一が基本。最低でも二体一。一対一なら逃げる、だね?」
「それと初撃は可能な限り奇襲を狙う、だよな?」

「ええ。ついでに言えば、奇襲の勢いのままの押し切りたいわね。あの牛頭よりタフじゃない事を祈るときなさい」

「つていうか、あんなのが他に五匹もいたらさすがに体が持たないよー…」

リヴェリアとレフイーヤの魔法を一度は耐え凌いだその姿を思い出したのか、げんなりとした様子でティオナが呻いた。

「見た目は山羊頭の方が華奢だったし、多分大丈夫、かな?」

もちろん、それは単なる気休めだった。

攻撃力や耐久力がそれほど下がっているとは思えない。

それが、私達の実際の共通認識だった。

そもそも、あの体躯は華奢という言葉から程遠い。精々、牛頭のデーモンと比較して少しだけ小柄というだけだ。それでもミノタウロス並みの背丈があるのだから、華奢なんて言葉を当てはめる余地はどこにもなかった。

ただ、少しだけ小柄になった分、敏捷性が上がっている可能性はあり得る。

ダイダロス通りの入り組んだ地形を考えれば、むしろそちらの方が厄介だった。もし奇襲を受けでもしたら、ほぼ間違いなく終わりだろう。

「それじゃ散開。無理するんじゃないわよ?」

「今のテイオネがそれを言うのー?」

「まぜつかえさない! さっさと返事!」

「はあーい」

「うん」

いつもの調子で言い合ってから、私達はダイダロス通りへと突入した。

「……?」

しばらく走ると、行く手から人のざわめきが聞こえた。

最悪の事態——山羊頭のデーモンが住人を襲っていること——を想定して、警戒を高める。

しかし、

(歓声……?)

ステイダス

能力によって強化された聴覚が拾い上げたのは、どう考えても悲鳴ではなかった。

抜き身のまま持っていた剣を意識して、別の意味で慎重に路地を進む。

その先には、ちよつとした人ばかりができていた。

「あの、どうかしたんですか？」

剣を背に隠しつつ、一番近くにいた年配の女性に声をかける。

幸い、剣には気づかれなかったようであまり話を聞く事ができた。

「奥の方にいる連中が知らせてくれたんだけどね。闘技場から逃げ出したってモンスターを、男の子が仕留めてくれたらしいんだよ。路地の奥に追い詰めて、一撃でだつてさー！」

「男の子？」

今、この辺りでモンスターを探しているとすれば、クオンさんだろう。

でも、あの人を『男の子』と表現するだろうか？

「白い頭に紅い目の兎みたい少年だよ。あんたは見てなかったのかい？」

（白い頭に紅い目？）

そして、兎みたいな男の子。

その特徴を持つ冒険者に、一人だけ心当たりがあつた。

そう言えば、今朝も見かけたはず。

あの日、私のせいで傷つけてしまった、深紅の瞳を持つ、白髪の少年——
「すみません！ 通してください！」

でも、まさか。

そう思った瞬間、新たな歓声が辺りを満たした。

その冒険者が帰還したらしい。

その姿を一目見ようと、辺りから人が集まりはじめ、あつという間に人だかりはその密度を高めた。

抜き身の剣を持ったままそこに交じっては怪我をさせかねない。慌てて最後まで引き下がり……そこで、意を決して少し背伸びをした。

ちようどその時、

「——失礼します！」

人ごみをかき分けた一人の少年が、すぐ目の前を駆け抜けていった。

(この子が……)

あの日、ミノタウロスから助けた少年。見えたのは一瞬だけど、間違いない。

確かに拙さが目立つ、駆け出しの冒険者だ。それは、私から見てもそう思う。

でも、「ファミア」の同僚は明らかに言い過ぎだった。改めて、そう確信する。

(シルバーバックを倒した……?)

その驚きは、それこそ自分でも驚くほどあっさりと胸の中へと消えていった。

あの子は、駆け出しの冒険者だった。逆立ちしてもシルバーバックには勝てない。

(そっか……)

いいや、そんな事はない。

声高に叫ぶ自分を自覚して——そして、ようやくその理由に気づいた。

あの時。ミノタウロスから助けた時に感じた、ほんの些細な違和感。その正体こそが何よりの理由だった。

「おめでとう」

ふと、そんな言葉を呟いていた。

あの日、多くの者に馬鹿にされ、悔し涙を流していた少年に祝福を。

そして、その原因となつてしまった事に謝罪をしなければ。

（うん。でも、今は——）

彼の偉業を穢さぬよう、山羊頭のデーモンをすべて討伐しなければならぬ。

もちろん、油断なんてできない。けれど、どこか軽やかな気分で、私は再びもう一つ

の迷宮へと飛び込んだ。

……

「いつつー……。やっぱりもう一本、ハイ・ポーションを貰つておくべきだったかしら」

テイオナとアイズを見送つてから、未だに軋む身体に毒づいた。

走り出そうとした途端、また思い出したように痛み始めたせいで、こうして入り口付

近の壁にもたれかかる羽目になっている。

(まあ、そうは言ってもさすがに無視はできないしね)

私達の主神であるロキを救出しなければならぬのは当然として。

オラリオの治安維持を担う「ガネーシャ・ファミア」の主神に何かあれば、最悪また『暗黒期』が到来しかねない。

そこまで大げさな事を考えなくとも、あの山羊頭やモンスターの子で一般市民が犠牲になつては流石に寝覚めが悪い。

「さて、と。それじゃそろそろ——」

「あれ？ ティオネやん」

行こうかと、持たれていた壁から身体を引き離すと同時、すぐそこから唐突にロキが姿を現した。

「ロキ?! 今どっから湧いて出たの?!」

「うちはボウフラやないわ!」

思わず叫ぶと、ロキもまた叫び返してきた。

「ただ単に、そこに地下水路に繋がる隠し通路があつてな。今までそこに隠れつつたんやけど、地上も静かになつたようやから戻ってきたところや」

言われると、木箱らしきもの残骸が散らばる壁がくるくる回っていた。壁に見せかけたちやちな隠し扉らしい。

ロキの話からすると、その先は地下水路なのだろうが……

「……あ、相変わらず訳の分からないところに訳の分からない仕掛けがあるところね」
 いったい何を目的にそんな仕掛けを作ったのやら。

「ま、ええわ。自分がここにいる言うことは、牛頭の方は片付いたようなやな？」

「何とかね。リヴェリアは大怪我だし、レフィーヤは精神疲弊起こして倒れちゃったけど」

「え、マジで？　ちゃんと杖持つとるリヴェリアがおつてもそこまで苦戦したんか？」

「ええ。癪だけど【イレギュラー正体不明】から借りた武器がなかったら、ちよつと危なかったわね」
 そのファルシオンの峰で肩を叩きながら嘆息した。

武器のおかげで勝てたとまでは言わないけど、なければもつと苦戦していたのは疑いない事実だった。しかも、その武器の持ち主があつた【イレギュラー正体不明】だということもまた面白くない。……まあ、それでもこの曲剣は気に入ったけど。

「んん？　ちよい待ち。この剣で——」

ロキが眉をひそめながら、曲剣を覗き込んでくる。

まあ、どこからか珍品奇品を買い集めて来るような神だし、おかしくはないけど——
 「む？　ロキではないか。無事だったかつ！」

突如響いた大声に視線を向けると、獣人の少女の手を引き、年配の女性ヒューマンに

案内された神ガネーシヤの姿がそこにあった。

「ガネーシヤ! ……つて、あれ? 【象神アングリーシヤの杖】はどうしたん?」

「シヤクテイなら、逃げたモンスターを追つていったぞ! モンスターを見かけたという情報提供があつたのでなっ!」

「ゆーことは、あの山羊頭は——」

「シヤクテイ達が一体。残りはクオンが仕留めた」

「……………」

口元が引きつるのが分かった。

いや、予想はしていたし、それ以前にそういう『作戦』だったのも事実だけど……

「大丈夫なん?」

「うむ! だいぶ苦戦したが無事だつ! それに、残っているのはシルバーバック一匹だけ。今のシヤクテイでもまだどうにかなるだろうっ!」

そんな私をよそに、ロキと神ガネーシヤは言葉を交わす。

〔象神アングリーシヤの杖〕つて確か私と同じLv. 5よね?〕

それが——どうやら誰かの助力を得た上で——シルバーバックを『まだどうにかできる』ほどになるまで追いやられたらしい。

そんな化物を一人で四体。いや、あの牛頭を含めて五体。

まあ、おそらく予定通り各個撃破したのだからうけど、それにしたって——
(相つ変わらず冒険者をコケにしてくれるわね)

あれでギルド公認のLv. 0とか一体何の冗談なのか。
悪夢と言うにも性質が悪すぎる。

「なら、おおむね一件落着いうことか?」

「いいやつ! クオンがフレイヤを追いかけて行つたつ!」

「それ絶対アカンやつやんつ!」

ロキは絶叫し、私とは言えば思わず変な笑い声が漏れた。

いやもう、他にどうしろと。

いっそ、今すぐホームに帰って頭から毛布を被つて寝てしまいたいくらいだ。

「うむつ! フレイヤ超・絶体絶命つ!」

「言つとる場合かつ!」

「分かつているつ! だから俺もこうして急いで戻ってきたのだつ! フレイヤ自身のためにも、クオンより先に発見して身柄を押しさえねばならんつ!!」

確かに。そうしないと、「フレイヤ・ファミリア」が文字通り消滅する。

「あーの腐れおっぱい、最後の最後まで世話かけさせよつてええええええつ!!」

両手で髪を掻き筆り絶叫してから、ロキが言った。

「テイオネ！ アイズたん達は?!」

「今、ロキ達と山羊頭とモンスターを探してダイダロス通りに行きましたけど……」
と、言うか。私も行くところだったんですけど。

こうなると、いきなり身体が痛んだのは虫の知らせか何かだったのかもしれない。
「今すぐ呼び戻せるか?!」

「ええ、できますよ」

「無理やろなっ！ 分かつとる——つて、できるんかーいつ?!」

ビシツと、ロキが何かを叩くような奇妙なポーズをとった。

「ええ。ちようど『ガネーシャ・ファミリア』から貰った信号弾がありますから」

「おおっ！ それは僥倖っ！ さすが俺の団員。超・優秀っ！」

ビシツと、まるでロキに対抗するように変なポーズをとる神ガネーシャに曖昧な笑みを返してから、三色セットの閃光弾の最後の一つを放った。

しばらくして、破裂音と共に太陽にも負けない白い閃光が空を彩る。それは、『戦闘終了』を知らせる合図と念のため決めていた。

……もつとも、下手をするとこれから今日一番の激戦が待っているかもしれないけど。

「フフフツ」

上機嫌に笑うフレイヤ様の少し後ろを歩く。

それは、普段であれば心安らぐ一時だった。

だが、今回ばかりはそうも言っていられない。

(どうやら、フレイヤ様の想定外の事態が起こっている節がある)

護衛として傍にいた事もあり、さほど状況はつかめていない。

が、その任を疎かにしない程度には見かけた住人から情報を集めている。そこまでしたのはひとえにあの男が動いているからだ——

(蛇もどきと山羊頭とは?)

暴れたモンスターとして、そういった存在を上げる住人がいた。

解せない話だ。詳しく聞けば聞くほどに。

(もつとも、どこまで信じていいかは定かではないがな)

どのみち情報が錯綜しているのは疑いない事であり、仕方がない事でもある。

しかし、気になる。

(地面を突き破って現れた。神ガネーシャを追っていった)

そんなモンスターに心当たりはない。

新種、という事はあるまい。事前情報のないモンスターをいきなり調教するなど、いかに「ガネーシャ・ファミリア」の調教師テイマーと言えど無謀極まる。

「それにしても、ガネーシャはどうしたのかしら？」

随分と怒らせちやつたみたいね——と、フレイヤ様が呟く。

と、言う事はやはり途中で感じた強烈な神威は神ガネーシャが発したのだろう。

(仮に「ガネーシャ・ファミリア」と全面戦争になった場合——)

人数的には「ガネーシャ・ファミリア」が。団員の練度で言えば我々が勝る。

しかし、この騒動を理由に、治安維持を名目として「ロキ・ファミリア」が横やりを入れて来るとなると少々面倒な事になる。

(あちらの団員が数名、この騒ぎの鎮圧に加わっていると聞か……)

本来であれば、「ガネーシャ・ファミリア」が「ロキ・ファミリア」に借りを作つたという話で終わるはずだった。

しかし、あの男がすでに勤づいている以上、そう上手くはいくまい。

(あの男が動いているなら……)

もはや「ロキ・ファミリア」も「ガネーシャ・ファミリア」も問題ではない。

最大の脅威となるのは、あの男だ。

「ツ——」

そこで。ふわりとモンスターの目を思わせる燐光が漂ってきた。もはや反射的に剣を引き抜き、それを両断する。

それで、その燐光自体はあっさりと消滅した。だが――

「フレイヤ様！」

背に庇いながら、最大限に警戒する。

いや、それすら必要ない。路地の向こう側に黒い影。

右手にクレイモアを。左手には竜の紋章が施された青い盾を。

奴はすでに構えている。

「

ならば、もはや言葉は不要だった。

「オオオオオオッ！」

渾身の踏み込みから両手で剣を構えて大上段からの一撃へ。

例え『深層』のモンスターであろうと、その一撃の前には敢え無く灰と化す。

それだけの自負があつた。が――

「

それを踏みにじるからこそその『アッシュ・オウ・シンダー灰色の悪夢』。

その一撃が空を斬ると同時に、横薙ぎの一閃が返ってくる。

即座に飛び退いたが、微かに掠めた切っ先が火花を上げてプレストプレートに傷を刻む。

掠めただけでこれだ。直撃すれば容易く両断されるだろう。

「フンッ！」

袈裟切りの一撃もまた、虚空を斬るにとどまった。

それを引き戻して、奴の一撃を受け止める。

(おのれ……っ)

相変わらず、奇妙な感覚だった。

力でも技量でも優っているはず。その手ごたえがある。

だというのに、攻めきれない。むしろ、出し抜かれかねない。

(だが……！)

今はフレイヤ様を逃がすのが最優先だ。

多少強引にでも連撃し、路地の奥へと押し戻す。

その意図を汲んでくださったのか、背後のフレイヤ様が動き始めて――

「――」

それと同時に、奴もまた後ろに跳んだ。

左手の盾が工芸品めいた造りのクロスボウに『切り替わる』。

その瞬間、神託が下った。

「ぬうんっ！」

一騎に飛び込み、なりふり構わぬ大振りの一撃を放つ。

無論、そんなものが中るはずもないが——それでも、それは正しかった。

ほんのわずかに遅れてクロスボウの引き金が引かれ、三本のボルトが連射される。

「きゃ?!」

狙いは初めからフレイヤ様だった。

もう一瞬遅れていれば、あのボルトはフレイヤ様を貫いていただろう。

「貴様あああああああつ！」

激昂のままに刃を振るう。今なら階層主すら一撃の元に両断できる。

その確信は——即座に凍り付いた。

左手に再び盾が装備される。こちらの剣を迎え撃つべく構えられたそれは、まさに刃が中る瞬間に軽く振じられる。

刃が、盾の曲面を滑った。必殺の力は行くあてを失い、その標的を変える。

俺の体が崩れるその瞬間。奴は無造作にその左腕を払った。

虚脱した腕はその動きのままに払われ、体は死に体と化す。そして——

「——ッ！」

完全に無防備と化したその一瞬。奴の剣が突き出された。

8

「貴様ああああああつ！」

ボルトは標的から外れたが、目的は達成した。

激昂した敵が、力任せの一撃を放ってくる。

威力だけはありそうだった。だが、狙いが単調なら軌跡も読める。

左手の武装を《アヴェリン》から《竜紋章の盾》に戻し、その一瞬を待ち構える。

狙いは剣に最大の力が宿るその一瞬前。

その一瞬を捕え、盾をわずかに逸らす。

緩やかな弧を描く盾の表面を、刃が撫でていく。自身の力に振り回され、敵の態勢が

崩れたその瞬間、腕を払った。

いかに剛力と言えど、もはやどうにもならない。その敵は俺の前で無防備になる。

『受け流し』

致命の一撃を見舞える一瞬を生み出すべく磨いた技術。

数多の難敵、強敵を前に必殺の一瞬を生み出してきたその技は、ここに新たな獲物を

捕らえた。

切つ先をがら空きとなった心臓に突き立てる。ただの生者ならそれで完全に詰みだ。……もつとも。それも中れば、の話でしかないが。

「はあああああああつ！」

切つ先を突き出す刹那。死角から風が吹いた。

突き出すつもりだった剣で、それを薙ぎ払い——同時、左手を斧槍に切り替え、突き出す。

敵が増えた以上、一体ずつ始末するのが定石だ。

しかし、すでに真に必殺となる一瞬は通り過ぎていた。斧槍の刃はその横腹を深く斬り裂いたものの、そのソウルにまでは届かなかつた。

「テンペスト目覚めよ！」

敵のソウルが流れてこない事に舌打ちする暇もなく、新たな敵が叫ぶ。

「エアリエル!!」

突風が吹き荒れた。流石に踏みとどまれず、後退を余儀なくされる。

もつとも、仕留め損ねた方の敵も似たようなものだった。

再び左手に盾を装備し、間合いをはかる。

最初の敵は、すでに仕留めたも同然だ。不死人ならなんて事の無い傷だが、ただの生者にとっては深手である。

目の前の剣士を抜いて、まずはそちらを確実に仕留めるべきか。
大剣を構え、強引に押し通る。

「くっ！」

その敵は、思いのほかあっさりと道を開けた。

その呆気なさか、むしろ次の罠を予見させる。

「おりやあああああつ！」

三体目。両刃剣を構えたそいつは近くの屋根から飛び降りてきた。

それを、投げナイフで迎撃する。

「うわっ?!」

流石に防がれたが、そのおかげで攻撃は止まった。

空中で無防備になったそいつをそのまま両断しようとして――

「テイオナー！」

先ほどの剣士が再び割って入ってきた。

攻撃を切り止め、横に跳ぶ。その間に、四体目の敵が追加されていた。

「まさか【おっしや猛者】を助ける日が来るなんてね……！」

曲剣を装備した四体目の敵が、瀕死の敵の首根っこを引っ掴んで後退する。

それと同時に、傷口に回復薬をぶちまけた。

「ロキ!？」

「貸し一つやからなっ!」

さらに、標的の亡者の傍にもう一体亡者が追加される。

「Anima mea——」

その辺りで、流石に焦れてきた。

左手に火を宿し、禁じられた邪法を詠唱する。

その名を「ソウルの大きな共鳴」。

取り込むばかりで使う当てのなかったソウルを惜しむ事無くそこに注ぎ込んで——

「——Sive Quantum……」

「全員剣を降ろせっ!」

その闇を解き放つより早く、女の声が響き渡った。

それと同時に、周囲の路地から——いや、それどころか近くの窓から、一斉に弓矢や杖を構えた冒険者たちが姿を現す。

「クオン、ここから先は我々『ガネーシャ・ファミリア』に任せてもらおうぞ」

ポロポロになった舞台衣装の上からマントを羽織ったシャクティが告げてくる。

それと同時に、さつきからウロチヨロしていた金髪小娘と、褐色小娘共が貸した武器をオツタル達に向けて構えた。

「ちよつと、ロキ。貸しなんじゃないの？」

「アホか！ それはアレ相手に自分らの命助けた事や！ うちの子らも巻き込まれとんにそれ以上の面倒なんて見るかいっ!!」

その時点で、少なくとも闇術の発動は停止させていた。

放てばシャクテイを巻き込む。

いや、少なくとも射線にいる彼女の部下を巻き込むのは避けられない。

(……ああ、それに)

今となつてはあの金髪ベルの想い人小娘も巻き込む訳にもいかないか。

「フレイヤっ！ それに、オツタルよっ！」

糸目の小僧どもが揉め始めると同時——ついでに言えば、俺が腕を下げた頃、相変わらずの大声と共に仮面の男、ガネーシャが姿を現した。

「今回の騒ぎについて、お前達が関与しているという疑いがあるっ！ 詳しく事情を聞かせてもらおうぞっ！」

「ちなみに。言うまでもないやろけど、今回ガネーシャはマジヤで。何が目的か知らんけど、三種類も新種引つ張り出してくるのはやりすぎやて」

「新種……？」

フレイヤが虚を突かれたような表情を浮かべる。

(ふむ……)

あの反応だけで決めつけるのは早計だが……まあ、やはり、と言ったところか。少なくともデーモンについては関わってはいないようだ。

(『美の神』とやらの手に負えるようなものでもないからな)

何しろ、デーモンを生み出すのは炎の魔女ですら手に負えなかった代物なのだ。

あの亡者の手に負えるとは思えなかった。

(予想はしていた事だがな)

落胆もしなければ安堵もしない。

「……そうね。騒ぎを起こしたのは認めるわ」

小さくため息を吐いてから、その女はあっさりと言った。

「そちらの要望通り同行しましょう。今ここで何を言っても言い訳にしなければならないでしょうから」

ただ、その前にオツタルの手当だけはしてくれないかしら？——と、その言葉にガネーシヤが頷き……それで、モンスター脱走から始まった一連の騒ぎはひとまずの終焉を迎える事となった。

……

そして、その日の夜。

「いやー。今日は走ったわー。一月分くらいは走り回ったわね」

いくつかの事後処理を済ませてから、俺は『酒夢猫亭』を訪ねていた。

「それにしても。あの子ったら、一人でシルバーバックを倒しちゃうんだから驚いたわ」
「あの坊や、本当にまだ半月の駆け出しなのかい？」

いつもの席に着くと、両脇に座った霞とアイシャが口々に言った。

「どうやらあれからベルは無事に自力でシルバーバックを倒したらしい。」

「面白い奴だろう？」

小さく笑って見せる。

貸してあるシヨートソードがあれば、シルバーバックくらいは倒せる。

「そう踏んだからこそ、オツタル達の追跡を優先した訳だが……どうやら、俺の勘もまんざら捨てたものではなかったようだ。」

「で。一方のあんたはフレイヤ達を仕留め損ねたってわけだね？」

「文句はシャクティに言ってくれ……」

「からかうようなアイシャに、懽然としたまま応じる。」

「そもそも最初に見かけた時に彼女が邪魔さえしなければ、ここまでの大騒ぎには……
(ああいや、それでもないか?)」

あの女がいなくとも、蛇もどきは暴れただろう。」

そうでなくてもデーモンが現れた可能性は充分にある。

(あ、嫌な予感……)

むしろ、あの女が騒ぎを起こさなかったら被害はもつと深刻だったかもしれない。

そう思った時点で、あの女に下されるであろう沙汰にも予想がついてしまった。

(これは罰金が精々だな)

俺でも気づくような事を、あの女が気づかないはずがない。

そして、ガネーシヤとのやり取りで状況を察したなら、上手いこと言いくるめるに決まっていた。

「ま、そっちはともかく」

嘆息していると、グラスを片手に霞が笑った。

「あの子達が無事でよかったわ。女神様が倒れた時は私も焦ったもの」

そのせいで、霞達が呼び止める暇もなくベルは『ダイダロス通り』の外に向けて疾走して行ったという。

「ここまで聞いた時は、流石の俺も少し焦ったが——

「でも、倒れるほどの過労って何があつたのかしら？」

ヘステイアが倒れた要因は怪我ではなく過労らしい。

ベルを探して『豊穡の女主人』まで行った——そして、実際にベル達はそこに駆け込

んでいたらしい——霞が言うのだから間違いないだろう。

「下界の女神がモンスターと追いかけてっこなんてすりやそうだろうさ」

「ん〜…。店員さんの話からすると、そういう訳でもないみたいだったけど……」

その店員は、どうもリユーらしい。彼女の見立てならまず間違いないか。

（しかし、そうなる……）

倒れた原因は、空白の三日間にあると見るべきなのだろうか。

（本当にガネーシヤのところで開催準備のバイトでもしてたんじゃないか？）

いや、あのガネーシヤが倒れるまでこき使うとも思えないが。

しかし、出発間際の様子からして、ガネーシヤ主催の『神の宴』が関わっているのも

疑いない。

……何と言うか、予想通りにヘステイアお手製の詰め合わせセットが届いたし。

（まあ、帰ったらゆっくり訊いてみるか）

グラスに口をつけながら、のんびりと考えていると、霞が横腹をつついた。

「しっかし、相変わらず薄情な奴よねー。倒れたって聞きながら、こんなところで女を侍

らせてるんだから」

「怪我をしているならまだしも、ただの過労なら俺の出る幕はないな」

精々、緑花草を食わせてやるくらいしかできる事はない。

だが、どうも緑花草の独特の苦みは、普通の人間からは敬遠されるものらしい。

(ミアハ辺りに相談すれば何とかしてくれるだろうか?)

いや、補給する当てがない。群生地は少なく、栽培も難しいと聞く。

実際、三年間の放浪の間でも、ついに見かけなかった。

手持ちもそこまで多いわけではないし、そんな物のために、わざわざミアハ達に骨を折

らせるのも気が引けた。

大体、いくらミアハ達と言えど今すぐどうにかできるわけもない。

それなら――

「ベルと二人きりにしておいてやるのが何よりの薬だろうさ」

どちらにとつても、その方が効果があるだろう。

それに、戦い終えた英雄が次に行うのは恋物語と相場は決まっているらしい。

下手に邪魔をして馬に蹴られるのはごめんだ。

(頑張れよ、ヘスティア)

初々しいあの二人なら、それはそれはじれったい……もとい、純情な物語が展開されるだろう。

我が身を顧みた途端、居た堪れなくなるのは間違いなかった。

それに、迂闊に乱入しようものなら本物の「神の怒り」が炸裂する可能性も――

「なら、私達も『報酬』をいただこうじゃないか？」

——などと考えていると、アイシヤが腕に枝垂れかかってくる。

……その形の良い唇を舐めながら。

「アナタも元気ねー」

「おや？ あんたはこないのかい？」

「せつかくだけど、今日はやめとくわ。疲れてるし、ホントに死んじやいそう」

「あつはつはっ！ そりやまさに昇天つてやつだねえ！」

ほどよく酔いが回っているのか、アマゾネス流の冗句が炸裂した。

今は何も言うまい。

だが、アイシヤ。お前は後で絶対に泣かす。泣くまでなからす。

「なら、遠慮なく頂いていくとするよ」

その覚悟を知ってか知らずか、アイシヤは俺の腕に絡みついたまま歩き出した。

一見すると健気にしな垂れかかっているように見えるかもしれないが、彼女は生粋の

アマゾネスである。これは獲物を担いでの凱旋以外の何物でもなかった。

というか、ちよつと力の加減を間違えてないか？ 腕が痛いんだが……。

「お嬢さんや。その前にその伊達男に会計をさせてやつてくれ」

それは正論だが、アルドラ。お前って奴は……。

それで、結局。

アイシャの飲み代まで支払わされた俺は馴染みの宿に連行されるのだった。

第二章 火無き時代の人と神

第一節 美女■野獣

1

ダンジョン。

迷宮都市オラリオの地下に広がる地下迷宮。

未だその全容は誰も知らないとされる。

古代においては総てのモンスター之母胎として、恐れられたその大地の洞は、魔石の有用性と数多の資源が眠る事を知られるやいなや、オラリオに莫大な富をもたらした。

……数多の死と絶望を対価として。

だからこそ、そこに挑む冒険者達には富の他に、名声と栄誉。成功と賞賛が与えられるようになる。

その輝きに魅入られた冒険者達は、千年にも渡り自らその魔窟に踏み込み、そして消えていった。

無数の生と死。限らない希望と絶望。与えられる名声と破滅。それらが幾重にも交差するその迷宮では、いくつもの伝説が生まれては消えていく。

ダンジョン・オラトリア
 迷宮神聖譚——と。神々すら巻き込んで大仰に纏められるものばかりがダンジョンの伝説ではない。

他愛のない噂話程度のものなら、日々生まれ、忘れ去られていく。

都市伝説、とでも言えばいいだろうか。

例えば『迷宮に響く歌声』。

二七階層を進む冒険者は、稀に絶世の歌声を聞く事があるという。

モンスター^の鳴き声と聞き間違える事などに美しく、耳にした者の多くがそこが迷宮であることも忘れ、しばし聞き惚れるという。

ぜひ歌い手を知りたい——と、冒険者^{クエスト}依頼^{クエスト}が発行されるも、今に至るまでその歌い手の正体を突き止めた者はいない。

それが一層浪漫を掻き立てるのか、今もそれに挑む冒険者は決して少なくないという。

神々すら魅了する『未知』が眠るダンジョンらしい伝説^{うわさ}と言えよう。

ダンジョンの恐ろしさを示すもので言えば『彷徨える死体』。

ダンジョンを進んでいると、向こう側から同業者が一人近づいてくる。その時、少しでも様子がおかしいと思つたなら要注意だ。それは、ダンジョンに斃れた冒険者のなれの果てかもしれない。死してなおダンジョンを彷徨い、新たな『仲間』を求めているの

だ。

と、おおむねそんな噂である。

その噂が囁かれるようになったのは、六年前からだと言われている。ちようどその頃、オラリオ史にも記されるとある『惨劇』が起こった事も、その噂に信憑性をもたらしている。いや、それがあつたからこそ、そんな説が生まれたのかもしれない。

モンスターの巢で怪談話もないだろう。そう笑う冒険者は多いが——しかし、怪談めいたその噂は今も密かに囁かれ続けている。

そして、もう一つ。近年になつて囁かれる噂があつた。

それが『黄金のサインと太陽の戦士』である。

ダンジョンで窮地に陥つても諦めてはいけない。よく周りを見るといい。運が良ければ黄金のサインが見つかるかもしれない。

そう。そして——：

「ハッ！ ハッ！ ハッ！ ——ッ！」

もつれかかった足を必死に動かしながら、ダンジョンの中を走る。

些細なミスに不運が追い打ちをかけてきた。いや、ダンジョンの悪意だったのか。

初めての階層で、ルートを一歩間違えた。そこで、怪物の宴モンスターパーティーが発生した。ただそれだけだ。

ただそれだけで、窮地に立たされた。

そして、仲間とはぐれ……いや、仲間を見捨てて逃げ出して、今ここにいます。

「クソツ、クソツ！」

どのみち、一緒にいたところで全滅するだけじゃないか。

どこかで他のパーティに助けを求めなくては。

言い訳が次々と浮かんでは消えて——

「うわっ!？」

ついに足がもつれ、地面に叩きつけられる。

「何だ……?？」

その先に、奇妙なものがあつた。

黄金の光を放つ、神聖文字ヒエログリフのようなもの。

『グオオオオオオオツ!!』

そんなものに気を逸らしていたのが、致命的な隙となつた。

起き上がるより早く、モンスターの咆哮が近づいてくる。

お前はこれで終わりだ。死神の囁き声を確かに聞いた。

「クッソオオオオオオツ!!」

地面に——黄金のサインごと——地面に爪を立てて、絶叫する。

と、その時。

「なっ?!」

黄金のサインがその輝きを増し、魔法円のようなものが浮かび上がった。

そして、その中央には奇妙なポーズをとる一人の人影が。

『ガアアアアアアアッ!』

そこで、ついにモンスターどもに追いつかれた。

牙をむき飛びかかってくるそいつらを、その人影——太陽の如き黄金の輝きに包まれたその戦士は容易く両断して見せた。

「え……?」

間の抜けた声がこぼれた。

その身体を包む輝きを別とすれば、その戦士はあまりに凡庸な姿をしていたからだ。

バケツめいた兜——確グレートヘルムか大 兜という種類だつたはず——に、チェインメール。さら

に腕にはシンプルな腕輪。脚もやはりシンプルな足甲。

他の特徴と言えば、上からは羽織るサーコートに太陽を模した妙なエンブレムが描かれていた事くらいだろうか。

手にした武器もどこにでもありそうなロングソードと、ラウンドシールドだった。

オラリオではまず見かけない型の古い装備。

よほど貧窮した「ファミリア」の冒険者なのか——と、絶望混じりにそう思った。
「貴公、大丈夫か？」

しかし。その戦士は迫るモンスターをたちまちのうちに一掃してから、平然とこちらに話しかけて来る。

「あ、ああ。あんたは……？」

助かった。そんな言葉が、どこか遠くから聞こえて来る。

「俺か。俺の名は——」

いや、違う！ まだ終わっちゃいない！

「そ、それよりも助けてくれ！ まだ仲間が……っ！」

見捨ててきた仲間を助けてくれ——そんな、情けない願いにその戦士は。

「任せておけ」

こちらを嗤うこともなく、ただ真摯に頷いてくれた。

「では、行こう。貴公の仲間を救うために」

差し出されたその手を、ほんの少しだけ迷ってから握り返す。

そして、立ち上がり。その戦士と共に走り出した。

「お前ら、生きてるかあああああっ！」

来た道を駆け戻り、迷い込んだ広場へと飛び込み叫んだ。

「助け！ 助けを連れてきたぞおおおつ！！」

その叫びに、返事は――

「おせえよ馬鹿！」

「つたく、トロいわねっ！」

返事は、あつた。

全員満身創痍だが、まだ生きている……！

「さあ、行くぞ!!」

「ああつ！」

黄金の戦士と共に、仲間のいる戦場に飛び込む。

そして――

「よっしやああああつ！」

「生き残ったわね!!」

今まで経験した中でも最も激しい戦闘を追い、自分達は生き残った。

まあ、それもひとえにその戦士が一番苦しい戦場を受け持ってくれたおかげだが。

「ウワツハツハツ！ 見事な戦いだつた！」

「い、いや。それは、あんたがいてくれたから……」

「何の。貴公が危険を承知で一人助けを求めにきたからこそ、俺もこうして間に合った

のだ。そして、貴公を信じて仲間達が踏みとどまったからこそその勝利だろう?」
兜の向こうで、その戦士が笑ったのが分かった。

しかし――

「そ、それは……!」

「おうよ! ま、あの状況じゃ他に出せる指示もなかったがな!」

「うおいつ?! それでも団長かあんたは!?!」

「うるせえ! まー、もうちよつと早く来てくれると、俺らもここまでポロポロにならないで済んだんだがな!」

「そうそう!」

「つーか、そもそもお前が道間違えたのがいけねえんだろうが!」

「うっさいわね! なら、ちゃんとした地図が買えるくらい稼ぎなさいよ!」

言葉に詰まる自分を、仲間たちもみくちやにする。

「なあ、あんた。名前は――」

自分たちが問いかけるより少し早く、黄金の戦士の身体が薄れ始めた。

「うむ。残念だが、そろそろ時間らしい」

慌てる俺達をよそに、その戦士は相変わらず平然として言った。

「なに、生きていればいずれまた会えるだろう」

おそらく何かのスキルか、魔法……によるものなのだろう。

「では、しばしの別れだ。勇敢な戦士達よ！」

ウワツハツハツ！——と、最後まで快活な笑い声を残し、その戦士はどこかへと戻っていった。

……そして、それに助けを求めれば、黄金の戦士が助けに来てくれる。

そんな噂が語られていた。

ちやちな気休めだと笑う冒険者もいる。軟弱だと嘲笑う冒険者もいる。

しかし、その証拠として奇妙なメダル——誰からともなく『太陽のメダル』と呼ぶようになったそれを持つ者は、確かに存在する。

2

あの年は市民参加型だった——などと後に揶揄される事になる怪物祭から一夜明けて。

「あ、クオンさん！ お帰りなさい！」

馴染みの宿でアイシャと別れてすぐに廃教会に戻ると、まだベルがいた。

「普段ならもうダンジョンに向かっていている時間だが、今日は例外らしい。

「よう、ベル。昨日は随分と活躍したそうじゃないか。霞から聞いたぞ」

「い、いえ。むしろ霞さんと神様のおかげと言うか……」

照れたように頭を掻くベルの後ろからヘスティアが顔を出す。

「そういう君こそ、ずいぶん派手に暴れたようじゃないか。闘技場周辺は復興作業が必ずみたいだぜ？」

その苦情は俺ではなく、糸目の小僧の手下どもに言ってくれ。

というか。多分、リヴェリアが魔法を放ったのが主な原因だ。

……俺が呪術を放った時よりもさらに焼け焦げていたし。

(まあ、デーモン相手に加減はできないだろうな)

ヘスティアの言葉を適当に受け流し、肩をすくめて見せる。

「逃げたモンスターだけならまだしも、新種まで現れたんだ。あれで済んだだけ安いものだろうさ」

もつとも、俺にとってはどちらも見知った相手だったが。

「その話も本当なのかい？」

「ああ。始末したのは俺だからな」

厳密に言えば山羊頭の一匹を仕留めたのはアイシャとシャクティで、牛頭のデーモンの片割れを始末したのは金髪小娘達だが……まあ、半数以上は相手にしたのだ。始末したと言っても、文句はあるまい。

「相変わらずのL.V. 詐欺だねー」

「何を言っている。正直にL.V. 0だと答えているだろうが」

だから詐欺なんだけどなー…、などとぼやくヘスティアはひとまず放っておいて、ベルに問いかけた。

「今日はダンジョンに行くのか?」

「はい。そのつもりです」

「昨日の今日なんだし、休めばいいって言ってるんだけどねー」

頷くベルと、むくれるヘスティアに苦笑する。

なるほど。ヘスティアを説得するのに時間がかかったから、この時間という事か。

しかし、そうなると……

「ふむ……」

「何か問題でもあるのかい?」

「いや、問題と言うか……」

しばし言葉に迷ってから、そもそも迷う事もないかと思ひ直す。

「実は昨日の騒ぎの後始末を依頼されてな。しばらくしたら、そちらに行かないといけないんだ」

つまり、ダンジョンにはついていけない。ただそれだけの事である。

「後始末？」

「逃げたモンスターは全部倒されたって聞きましたけど……」

首を傾げる二人に肩をすくめて見せる。

「脱走したモンスターじゃない。新種の方さ。何しろ、連中は石畳をぶち抜いて姿を現したからな。地下水路に穴が開いてないか確かめつつ、残党狩りが必要なんだ」

「ああ、なるほど。そういうことか」

「クオンさん一人で、ですか？」

「まさか。地下水路はこの街の全域に蜘蛛の巣のように張り巡らされているんだ。一人でやったらいつ終わるか分かったものじゃない」

さらに言えば、ダイダロス通りに次いで複雑に入り組んでいるのだ。

どうあつても人手が必要となる。

「【ガネーシャ・ファミア】と合同……というか、そこの調査隊に組み込まれるだけだ。まったく、人使いの荒い連中だよ」

昨日あれだけこき使っておきながら、まだ足りない見える。

……もつとも、今回は「ガネーシャ・ファミア」ではなくギルドからの肝煎りだが。「むう。という事は、今日はベル君一人になっちゃうのか。やっぱりやめておいたら？」

「大丈夫ですって、神様」

おそらく、こんなやり取りを今まで続けていたのだろう。

ふむ。と、呟いてから口を開いた。

「なら、いつも通り軽く手合わせしてみるか？ それで様子を計ってから決めればいい」

見たところ、ヘステイアはともかくベルは特に疲労を残しているようには見えない。

死闘だった事は疑いない。が、それでも死力の限りを尽くさねばならない程ではなかったのだろう。ベル自身にすらその自覚がないとしても。

(ま、L.V. 1でも倒せる範囲ではあるらしいしな)

もつとも、そろそろランクアップが見えて来る程度の力量は必要らしいが。

後でヘステイアにでも「ステイタス」を訊いてみるとしよう。

「むうう……」

さて。そのヘステイアはと言えば。

腕を組み、しばらく唸ってから、

「判定は厳しめに頼むよ？」

結局、そう言っただけで頷いたのだった。

「はあああああつー！」

ベルの剣を捌きながら、内心で舌を巻く。

(まさかこれほどとはな)

シルバークラックを単独撃破した以上、能力が大幅に強化されたのは間違いないとは思っていたが、まさかこれほどとは。

(なるほど。これはヘステイアが妬くわけだ)

惚れた女のためだけに、ここまで能力を向上させられるとは。

俺ですら驚くのだから、憎からず思っているヘステイアの心中は察するに余りある。

(いや、しかし。これは期待以上だな)

この調子で伸びていくなら、あるいは本当に間に合うかもしれない。

微かな手ごたえと共にベルの木剣を弾き飛ばし、ひとまずの結論を口にした。

「まあ、普通の探索なら問題ないだろう。到達階層を増やすのは勧めないが」

要望通り判定を厳しくしても、大体そんなところだった。

「むむっ！」

不満そうに唸るヘステイアに、もう少しだけ妥協する。

「なら、五階層までにしてあげ」

もつとも、ベルにとってはそこそが因縁の階層だろうが。

「むー」

ヘステイアはまだ唸っているが……まあ、これ以上は言いようがない。

「ベルだってその新しいナイフを早く試してみたいんだろう？」

「腰に見慣れないナイフを装備しているのは分かっていた。

おそらく、ただのナイフでもない事も。

「それは、まあ、そうですが……」

「どこことなくソワソワしているのは、おそらくそれが原因だろう。

「分かったよ。まあ、これまでだって一人だったんだし、今さらそこまで心配するのも変な話か」

「観念したように、ヘステイアが項垂れる。

「そもそもここまで急激な成長が始まる前に、単独で五階層まで到達しているのだ。

「今のベルならよほど油断しない限り問題はない。

「その辺りはヘステイアだって分かっているはずだ。

「でも、ベル君。無理は禁物だよ?」

「はい、神様。無理はしません」

「頷くと、装備品の再確認してからベルはダンジョンに向かって行った。

「さて、と。それじゃ、俺も行くとするか」

「地下水路かい? 具体的にどこにいくのさ?」

「俺は闘技場周辺だな。ダンジョンに繋がっているなら、そこが一番可能性が高い」

「要は一番危険地帯という事だ。」

「……まあ、余計な心配なのかもしれないけど、君も無理するんじゃないぞ?」
「分かつてる」

と、言うより。俺個人としては、もうそこには何もないと考えている。
少なくとも、あの蛇もどきの生き残りがいるとは思えない。

もし他にも潜んでいるとするなら、それはむしろ別の区画にいるはずだ。

(ま、その辺りはシャクティだつて分かつてはいるだろうがな)

かといって、どこにいるか分からない相手に俺をあてがう事はできない。

団長としては一番危険がありそうな場所に置くしかないのだろう。

そこには、少なくともダンジョンへ直通の穴が開いている可能性はあるのだから。

……

「それで、あの女の沙汰はどうなった?」

場所は変わつて、第三区画地下水路。

行灯型カンテラの魔石灯を掲げて歩きながら、隣のシャクティに問いかける。

「概ねお前が予想する通りだろう」

「となると、精々が罰金か……」

「ああ。新種やデーモンは神フレイアに味方したらしい。まだ踏ん張つてはいるが、結果が大きく変わる事はないだろうな」

「どうやら本当に昨夜思い描いた通りに事態は推移しているらしい。」

「お前らが止めるから……」

「馬鹿を言え。いきなり双璧の片方が崩れた日には『暗黒期』に逆戻りしかねない」

「お前達じゃまだ足りないか？」

「さすがに試してみる程の自信はまだないな」

それは残念だ。いや、あの連中にもこれくらいの謙虚さがあれば『暗黒期』とやらに陥らなくて済んだのかもしれない。

（いや、そうでもないか？）

そもそも、二大派閥の交代劇からしてどうにもきな臭い。

糸目の小僧とあの女の手下どもは良いように踊らされているだけのよう……。

（あの爺さんもなかなか食わせ物だからな）

ギルドの真の主を思い浮かべ、小さくため息を吐いた。

（どうにも、俺が話していない事まで知っている気配があるくらいだしな）

昨夜のやり取りを思い出し、俺は小さくため息を吐いた。

……

「戻ったか、クオン」

ギルド本部の奥の間。あるいは心臓部。

祈祷の間と呼ばれるそこには、一人の巨大な老翁と、見慣れた同胞のなれの果て——と、おおむね同じような姿をした存在がいた。

「ああ。久しいな、ウラノス、フェルズ」

およそ三mほどの背丈を持つ老人。それこそがギルドの主神ウラノスだった。

そして、黒い襪履にも見える黒衣を纏った白骨が、彼の神の片腕。名前を「賢者」フェルズ。俺達とはまた違う形で『不死』となったこの時代の人間である。

「戻ったという事は、『後継者』を見つけたか？」

生者のそれとは微妙に異なった響きの声——俺にとっては懐かしいものだったが——で、フェルズが問いかけてくる。

「ああ。お前達の希望通りの相手を見つけてきたつもりだ。もつとも、成長するにはまだ時間が必要だろうか」

「それは仕方あるまい」

「たった三年でお前のようになられては、それこそ私達の立つ瀬がない」
告げると、ウラノスとフェルズが口々にそう言った。

（『ソウルの業』さえあれば、今の俺くらいにはすぐに——）

いや、そうとも言い難いか。

ベルの到達階層辺りのモンスターなら、そのソウルも微々たるものだ。

ただの生者よりはマシだが、巡礼地の入り口辺りで斃れた亡者たちにも及ばない。

(ま、そもそもどちらが優れているか簡単に比較できるものでもないか)

『ソウルの業』と『神の恩恵』。どちらも最終的に行きつく場所はおそらく同じだ。

個人的には『器』の拡張にいちいち『偉業』とやらが必要な『神の恩恵』の方が面倒だとは思いますが……しかし、『火の時代』ならむしろ楽だったか。

(ここだと迷宮の弧王とか呼ばれそうな連中が、その辺りを平然と闊歩しているからな) 何しろその辺にいる名もない平凡な騎士ですら、ここならLv. 2に相当するはずだ。

ドラングレイグで会った武人、ウーゴのバンホルトなど、『ソウルの業』が忘れられつつあったあの時代において、独力で、しかも呪いを持たぬ生者の身でそれを修め、さらには玉座にまでたどり着いて見せた。

(彼なら、そのうち自力で《月光の奔流》くらいは放ちかねないな)

白竜シースが遺した《月光の大剣》——の、贗作である《蒼の大剣》を真打だと信じていた彼を思い出し、小さく苦笑する。

ついにそれが贗作だとは伝えられなかったが、しかしドラングレイグ最後の戦いにおいて、その剣の冴えは真打を上回ったかもしれない。武器を生かすも殺すも使い手次第という事なのだろう。少なくともあの武人は、今も俺が知りうる限り最強の『生者』で

ある。

もつとも、『ソウルの業』は危険だ。

少々特異な時代だったとはいえ、マフミユランは大量のソウルを取り込み、その果てにソウルに『酔って』は我を忘れていった。

いや、あれが素の性格だったのかもしれないが……いずれにせよ、他者のソウルを取り込む事にはそれなりの危険が伴う。

それに、

(死んで覚えろって訳にもいかないからな)

戦いは死んで覚えろ——とは、不死人の中でよく言われる冗句だが……その実、真理でもあった。

尋常ならざる敵の倒し方。畏に満ちた巡礼地の進み方。亡者や異形どもが吹き溜まる難所の切り抜け方。それらは死を経験すると共に学んでいった事だ。

もちろん、その中にはソウルの育て方も含まれる。

しかし、呪い無きこの時代はそうはいかない。死ねばそこまでだ。

それに、『ダークリング』を持たない生者は、元より『ソウルの器』である不死人よりもソウルを回収しづらい傾向にある。

一方で『神の恩恵』は成長速度こそ遅いが、総じて安定しており、目立った危険も概

ねなさそうだ。

それらを考えれば、やはりどちらが優れているかは簡単に判じづらい。

(ま、誓約を交わす神を殺せばそれまでってのは致命的な欠陥だがな)

『ソウルの業』は完全に個人に帰属するが、『神の恩恵』^{ファールナ}は所詮借り物だ。

どちらかを選べというなら、少なくとも俺は『ソウルの業』を選ぶ。

が、それはあくまでも個人の好みの域を出まい。

そして、それを踏まえて言うなら、こうして『神の恩恵』^{ファールナ}が主流となったのは、多く

の者がそちらを選択した結果であると言うよりない。

(扱いやすさと広告の差、か)

まあ、そんなところだろう。

しかし、それはそうとして――

「だが、あまり時間もないようだぞ」

「何かあったのか?」

「ああ。例の連中が、五九階層で新しい『尖兵』を育てている。まだ、そこまで育つては

いないがな」

「ならば、何故討たなかった?」

「邪魔が入った」

ウラノスの言葉に、肩をすくめて見せる。

むしろ、問題となるのはその『邪魔』の方だ。

「何者だ？」

「何者かは知らない。だが、それ自体は良く知っている」

「どういう意味だ？」

「闇霊。四年前にも話しただろう？ 『火の時代』に、巡礼地にあつた脅威の一つだ」

「魂を求めて彷徨う悪霊だったな」

ウラノスの言葉に頷いてから、続ける。

「ついでに言えば、四年前に俺を殺した奴だな。装備や太刀筋が同じだった」

「待て。それはつまり——」

「同じ闇霊と二度出くわす事も別に珍しいとは言わないが……まあ、おそらく本人がこ

の世界にいるんだろう」

肩をすくめてやる。

「何であれ、今の俺よりは確実に手練れた。おかげで『尖兵』には逃げられた」

いや、四年前のように俺自身が殺されなかつただけまだマシか。

もつとも、そいつに六〇階層にまで追いやられたが。

「そんな者が奴らに与しただと？」

「別に意外じゃないだろう？　そもそも霊体を飛ばしてまで人を殺そうとする奴らがまともなはずもない」

もつとも、向こうにだってそれなりの言い分はあるのだろう。

人間性を失えば亡者となり果てる。それを補うには、結局は他者から奪うのが一番早くて確実なのだ。人間性の限界を前にしては、誰だって手段は選べない。

(といつても、あいつは愉快犯だろうがな)

あの闇霊に関して言えば、そこまで差し迫っているようには感じられなかった。

あくまで殺しを——死合を愉しむ手合いと見るべきだ。

「では、五九階層にいる『尖兵』は——」

「俺以外の誰も行っていないなら、今も健在だろうな」

ウラノスが深々と嘆息した。

「六〇階層より先は？」

「闇霊との戦闘でだいぶ消耗したからな。そこまで広く搜索できなかつた。だが、見た範囲では尖兵の姿はなかつたな。もつとも、もはやダンジョンの何階層にいるかなど問題ではないだろう？」

「確かに。すでに奴らは地上に潜んでいる」

それがあの『新種』——地下から現れた蛇もどきどもだ。

「そちらはどうなっている？」

「今のところ神フレイアが関与した証拠はない。いや、実際に彼女は無関係だろう」

「デーモンの方は？」

「それはお前の方が詳しいのではないか？」

それはまあ、色々と縁のある相手なのは認めるが。

しかし、

（混沌の炎だと？）

奴らがいるなら、どこかに必ずそれが存在するはずだ。

ロードランで俺がその『苗床』を討ち、ドラングレイグ時代には沈黙の巫女によって封じられ、ロスリックではほぼ消滅していたはずだというのに。

気になると言えば、そもそも奴らが現れたあの瞬間の光景だ。

（深みの魔術。深淵の力か）

サリヴァーンの配下が現れる前兆。あるいは、遠い昔、ロードランで滅びゆくウーラシールへと俺を連れ込んだマヌスと同じだ。

いずれにせよ、深淵に連なる力が関与している。

（混沌の炎と、深淵か……）

まるで接点がないとは言わない。

沈黙の巫女——マヌスより生じた闇の子の一人、アルシユナは凍てついたエス・ロイエルの主聖堂で、一人混沌の炎を封じ続けていた。

おそらく、彼女の献身があつたからこそ、ロスリックにおいてデーモンはほぼ滅んでいたのだろう。

(その炎が一体何故?)

彼女の身に何かあつたのか。それとも、何かがきっかけで心変わりしてしまったのか。

(……あるいは、彼女の封印を破つた何者かに篡奪されたか)

もしくは、新たに熾されたか。いずれにしても、厄介な事になりそうだった。

そして——

(デーモンという存在を、ごく当たり前に把握しているな)

デーモンについて、俺は四年前に一切話していない。

そもそも、奴らがまだ存在しているなど、つい先ほどまで完全に埒外だった。

だというのに、二人はごく当たり前のように把握している。

(さて、どこから仕入れたんだか……)

この爺さん達も独自に『火の時代』を調査している節がある。

俺以外に別の情報源を持っていても驚きはしない。『火の時代』を知るからこそ、この

爺さんにとって俺は厄災の化身そのものだろう。

「それで、そちらはどうなんだ？ 具体的には、あの女の処遇だ」

「神フレイアか……」

「今のところ、彼女がああのモンスターを地上に連れ出したとは考えづらい。無論、デーモンなど手に負えまい」

「それで？ 俺が言うのもなんだが、あれだけやつて沙汰なしか？」

「そこまでは言わない。いずれにせよ、何らかの罰則は与えらベナルティれるはずだ」

「……もつとも、流石に都市外への追放とまではいかないだろうがね」

ウラノスの言葉に、フェルズが肩をすくめた。

「奴らが動き出したのだ。今、オラリオを弱体化させるわけにはいかない」

なるほど。確かに、あの蛇もどきの飼い主どもを相手にするには、あの女の手下の力も欠かせないか。

「それはそうと。もう一つ気になる情報がある」

「何だ？」

ウラノスの言葉に、多少うんざりしながら問いかける。

「『アンデッド』だ」

「なに？」

『アンデッド』と呼ばれる存在が、ダンジョン内で目撃されている」

「……あそこなら、それくらいいても驚かないがな」

スケルトン系のモンスターなら見かけた事がある。もつとも、一度斃せばそのまま素直に灰になってくれる親切な連中だった。

「モンスターではない。かと言って、私やお前とも違うようだ」

「ほう？」

「明らかに冒険者の格好をしていた。……詳細はまだ不明だが、確かに知人だったと証言する者もいるとも聞く」

「ダンジョンのどのあたりだ？」

「そちらもはつきりしない。大枠で言えば『下層』辺りが多いが、『上層』で目撃したという報告もある。いや、正しく言えば大枠と言えるほど目撃件数も多くはないが」

「なるほど、な。一つ訊くが、俺と同じ『呪い』の噂はあるか？」

「そちらは真つ先に確認した。今のところ、発生は確認されていない。かといって、私と同じだとも思えない」

「それはそうだろうな」

しかし、そうなると――

「いや、まさかな……」

「心当たりでも？」

「まるでないわけでもないが……」

人為的に『ダークリング』とほぼ同じ力をもたらす邪法には心当たりがあった。

(『暗い穴』。ロンドールの黒教会か)

こうして俺達が入り込んでいる以上、可能性は皆無とは言えない。

しかし、あの連中が入り込んでいるとなると、いよいよオラリオの危機は高まったと言えよう。ある意味において、あの連中はデーモンよりも厄介だ。

そう思う程度には、あの『穴』の力は魅力的だった。

(今度リヴェリアと会ったら念のため教えてやるべきか……う。)

身近なところでは、あの小娘あたりが食いつきかねない。

……もつとも、ただの生者に穿てるものなのかどうかは知らないが。

(それを試した結果、という可能性もあるか?)

何であれ、もし予想通りならこの『時代』の人間にとってこの上ない脅威となる。

不死人を真に『殺す』にはそのソウルを根こそぎ奪うしかない。そのためには最低でも『ソウルの業』を修めていなければならない。

……それですら、本来は気が遠くなるほど殺し続けなければならないのだが。

「分かった。そちらは見かけたら始末しておく」

それを一度で——あるいは、ほんの数回で——成し遂げられる者を、かつては『不死の英雄』と呼んでいたのだ。

無論、俺とてこれでも【薪の王】の末席に名を連ねる身。それくらいはできる。

「しかし、デーモンに闇霊に亡者。それに今話題の『新種』か。まさに群雄割拠と言ったところだな？」

「ダンジョンの中にこもつてくれているうちはまだマシだがね」

「いや……。そうとも言い難い」

嘆息するフェルズを、重々しい口調でウラノスが窘めた。

「地上を目標されるのも厄介だが、『下』を目標されるのも問題だ」

「なるほど。ダンジョン最下層か」

再びフェルズが嘆息した。

やはり、そこそが新たな『玉座』なのだろう。

「『新たな時代』をもたらす大いなる誓約、か」

あるいは、本当の脅威は誰も彼もがそこを目標しているのだろうか。

「そちらは、今しばらく待とう。時間に余裕があるとも言いが、『時代の担い手』も揃いつつある」

なるほど。ベルの他にもいるのか。

いや、それとも最下層に近いところにいる冒険者連中を指しているだけだろうか。「それより、クオン。一つ頼まれてほしい」

「今度はなんだ？」

ウラノスの言葉に、多少警戒しながら応じる。

この爺さんからの頼み事は基本的に面倒な物ばかりなのだから。

「そう警戒する事はない。ただ、『ガネーシャ・ファミア』が行う地下水路の調査に行して欲しい」

「今から？」

「いや、明日の朝からだ。『ガネーシャ・ファミア』も当事者だからな。さすがに今夜は街を哨戒するのが限界だ」

それもそうか。シャクティ辺りにとっては、今夜は長い夜になるだろう。

「できれば奴らの魔石を外に流出させたくない。ところで、今回のものは？」

「二つは回収してある。もう一つは、間に合わなかった。それより先にデーモンが出たからな」

あの蛇もどきの魔石を二つ、フェルズに放って渡す。

「なるほど。少々面倒だな。現場から回収されたという報告はない」

「なら、デーモンどもが砕いた事を期待しておけ」

『悪魔』^{デーモン}に期待するなど、いい結果にはなりそうにないな」

やれやれと言わんばかりに、フェルズが肩を落とした。

「いつまでも隠し通せるものでもない。それに、奴らが本格的に動き出したなら、他の冒険者たちの助力も必要になってこよう。だから、そう気に病むな」

一方のウラノスは、多少の労りを混ぜて苦笑して見せた。

「今日のところはここまでにしておこう。明日は任せた」

「ああ。……まあ、地下水路にはいい思ひ出がないがな」

ネズミを追い回し、バシリスクに呪われ、闇霊に絡まれ、何か奇妙な『なりそこない』や死体蛆どもに追い回され——と、まあ他にもまだあるが。

「私はむしろ、お前がいい思ひ出のある場所を知りたいよ」

「それくらい俺にだってあるに決まっているだろう?」

「ほう? 参考までに教えてくれないか?」

「そりや——」

真つ先に思ひ付いたのは、師匠達と過ごした我らが蜘蛛^{誓約主}姫様の隠れ家だったりするわけだが。

蜘蛛の巣と虫の卵という刺激的な調度品に囲まれたあの空間も、まあ慣れてしまえばどうという事もない。

しかし、そんな事を言えば控えめに言っても大笑いされるだろう。

「まあ、海の見える街、とでも言っておこうか」

もつとも、俺がたどり着いた時点ですでに滅んでいたが。

それでも、今にして思えばあそこが一番文明的な拠点だったように思える。

廃屋とはいえ、初めて帰るべき家を持った場所でもあった。

「……意外と洒落た事を言うな」

呆気にとられたように、フェルズが呟いた。

もつとも、その実情を伝えればやはり呆れるか何かするだろうが。

「ふむ。その街に興味は尽きないが、それはまたの機会にしよう。明日は任せた」

「何か成果があるとも思えないがな」

……

と、別れ際に言ったのは確かに俺自身だったが。

「これは空振りだな」

あの蛇もどきがぶち抜いた石畳を下から見上げ、肩をすくめる。

地下水路を移動したのは間違いなさそうだが、それ以外の収穫は今のところない。

「近くに巣でもあれば話が盛り上がるんだがな」

「そう言えるのはお前くらいなものだ」

傍らのシャクティが小さくため息を吐いた。

珍しくしつかりと化粧をしているのは、クマを誤魔化すためだろうか。

いつもの拳装と愛用の槍を携え、腰には上等な直剣まで帯びている。

「それに、空振りではない。ダンジョンから直接現れた訳ではないと分かっただけでも充分な収穫だ」

確かに、今のところ水路の床に大穴が開いている様子はない。

それを踏まえて考えれば、あの蛇もどきはダンジョンから直接出てきたのではなく、どこか別の場所から外に出て、水路を伝って移動してきた——と、判断すべきだろう。

「しかし、そうなる。連中を連れ出した奴がいるという事だな」

「おそろくな。しかし、一体どうやって……」

シャクティ達のように、バベルを経由して連れ出すのは不可能だ。

いや、連れ出すだけなら可能だろうが、誰にも知られずに、とはいかない。と、なると。

「どこかにあるんだろう」

「何がだ？」

「ダンジョンへの出入り口がだ」

そうでなければ、話が合わない。

実際、どこぞの湖の底にももう一つ出入り口があるらしい。

ならば、もう一つ二つ、知られていない出入り口があったとしても驚くほどの事ではないだろう。

「……正気か？」

「ああ。まだ亡者にはなり切っていないつもりだ」

「そういう意味では……。いや、それより。ログ湖の出入り口はもう封印されているんだぞ？」

「湖の底か？ まあ、あの蛇もどきだけならそれでも出てこれそうだがな」

少なくとも、その湖の出入り口は除外できる。

あの蛇もどきが自分からその出入り口を使って外に出て、人知れずオラリオの地下水路に潜伏し、機を見計らって姿を見せた——と、考えるのはいくらなんでも無理がある。

「人でも使えるような場所が、おそらくどこかにはあるはずだ」

人か神か、それとも他の何かか。

いずれにせよ、何者かの差し金。そう考えるべきだろう。

たつた三体だけで暴れさせた意図が今ひとつ掴めないが……宣戦布告か、それとも単なる実験か。おそらく、そんなところだ。

あるいは、ただ単にヘマをして逃がしてしまっただけかもしれないが。

「モンスターを連れ出せるような出入口。それが、この千年間誰にも知られずに存在していたと?」

「さて。だが、バベルを経由しながらも、人知れずモンスターを地上に運び出す手法を考えるよりはいくらか現実的だと思わないか?」

「それは、確かにその通りだが……」

その難易度の高さは、むしろ俺などより彼女達の方が良く分かっているはずだ。

「どこにあるかは知らないが、人目の付かない水路も有力候補の一つになるだろうな」
実際、水路にもモンスターが住み着いて問題になつていると聞く。

そいつらの大本も実はダンジョンから——と、言えるかどうかはさておき、可能性としてはそれなりにあるのではないだろうか。

「それには同意しよう。……やれやれ、単なる残党狩りでは済まないか」

「残党も何も、さつきから襲つてくるのは住み着いたモンスターばかりだしな」

肩をすくめると同時に、水中から飛び出してきたそれをろくに見ないまま両断する。

どうせここまで飛び上がってこれるなら、普通の魚ではないだろう。

「新米冒険者の実地研修はここでやればいいんじゃないか?」

ちやうど迷宮めいた造りでもある。

問題点と言えば、魔石が小さすぎて実入りがなにか。

「『掃除』^{スワイパー}も兼ねてか？　なるほど、検討してみよう」

どこまで本気かは知らないが、シャクティはそう言つて笑つた。

3

さて。

一日を費やした地下水路の大冒険はまるで空振りに終わった——と、言うわけではない。

あれから何だかかんだと七体ほどあの蛇もどきを見つけ、始末している。

構成員の数で言えばオラリオ最大の「ガネーシャ・ファミア」だからこそできる人海戦術のおかげ——と、言つてやりたいのは山々だが、実際のところ今回の功労者はフェルズだった。

別動隊として動き回り、『眼晶』^{オクルス}をはじめとする魔道具や使い魔を駆使して、密かに捜索、誘導してくれなければ、こうまで効率的に始末できなかつただろう。

とはいえ、もちろん「ガネーシャ・ファミア」も手を抜いていたわけではない。

むしろ、状況を考えれば獅子奮迅の大活躍だったと言えよう。

今現在、闘技場周りの復興支援や、関係者各位へのお詫び行脚。被害者への見舞いに、あの女との法廷闘争など、彼女達がやらねばならない事は多岐に渡る。加えて、日常業

務であるオラリオの警備や巡回も欠かせない。

この状況でよくシャクテイ長が水路調査に参加できるものだと、俺も他人事ながらに思った程だった。

(もつとも、本当に水路に穴が開いていれば大ごとだがな)

言うまでもなく、生者にとって水は必要不可欠だ。ならば、地下水路はこの都市の生命線と言つてもいい。そこがダンジョンと繋がり、モンスターどもが跋扈するようになるなど悪夢でしかないだろう。

それを思えば、むしろ団長がそこに配置されたのは当然なのかもしれない。

今回の調査で言えば異常なしと結論付けられるものの、シャクテイは念を入れてしばらくの間は団員を巡回させるつもりらしい。

「あ、クオンさん。おかえりなさい」

「ああ。ただいま」

ともあれ、地上に戻る頃にはすっかり日は沈み。

シャクテイと別れ、廃教会に戻るとすでにベルもダンジョンから帰ってきていた。

「おかえり、クオン君。大丈夫だったかい？」

続けて、ヘステイアが問いかけてくる。

「ああ。地下水路に穴はなさそうだ。もつとも、俺達が見て回れた範囲の話だがな」

「じゃあ、モンスターの子残りも？」

「そちらは何かいたが、見かけたのはすべて始末した。まあ、普段から住み着いている連中以外は、だが」

「あ……。水棲モンスターが住み着いてるんだよね、確か」

「そうなんですか？」

へスティアの呻き声に、ぎよつとした様子でベルがこちらを見てくる。

「ああ。まあ、そうは言っても外のモンスターに毛が生えた程度だな」

シャクティ曰く、外にいる同種のモンスターより少し手ごわいくらいらしい。

「小さいに困ったら行ってみるのもいいかもな」

小さいが魔石だつて手に入る。加えて言えば、おそらくダンジョンより安全のはずだ。

「いや、それは割に合わないんじゃないかなー」

まあ、それは確かに。

シャクティと二人で一日彷徨つて普通の魔石は三〇〇〇ヴァリス分にも届かなかった。

確かLv. 1の冒険者が五人集まって、一日ダンジョンを彷徨うと二五〇〇〇ヴァリスほど稼げると聞く。要するに地下水路で稼げるのは一人分にも満たない額でしか

い。

(絶対数が少ないからな)

何しろ、ダンジョンのように次々に涌いてくるわけではない。

今日は至る所で大人数がうろついていたせいで向こうも気が立っていたのか、かなり頻回に襲われたが、普段はあれほどではない。

となると、普段の実入りはもつと悪いという事になる。

それなら、素直にダンジョンに行つて一階層辺りで無難にゴブリンでも追い回していた方が安全確実に小遣い稼ぎができるだろう。

例え一階層でも、一攫千金が狙える可能性は絶無ではないのだから。……無論、よほどの幸運が味方すればの話だが。

「そつちはどうだった？」

何しろ、ベルにとっては久しぶりの単独行動だ。いつもの調子で突っ込んで、多少は痛い目を見たかもしれない。

「やっぱり、クオンさんのスキルは便利だなあつて」

しかし、ベルの返答は少し予想外だった。

「バックパックが重くなると動きも鈍るし、そもそも一度に持てる量も限られてくるから、一杯になったら一度地上に戻らないといけなくて。いや、今までずっとそうだった

んですけど……」

「ああ、なるほどな」

これが『ソウルの業』が失伝した弊害だった。

確かにいちいち武器や防具、アイテム類を担いでいかなければならないのは面倒だ。

(巡礼地でそんな事をやっていたら確実に袋叩きだな)

何か必要なものがあれば、殺してでも奪い取るのがあの場所の流儀だ。

そうでなくても、そこそ腕の立つ不死人でも持ち上げられないような超重量の武器や防具が道中に遺されている事もある。放置していくには惜しいが、かといってソウルに取り込めないなら、移動そのものに支障をきたし、やはり袋叩きにされるだろう。

(そういう意味じゃ、よくやるよな。この時代の連中は……)

いや、そもそも一度死んだらそこまでの生者が自分からダンジョンに行く時点でよくやるものだと思うが。

「ふむ……」

ベルに『ソウルの業』を伝えること自体は、おそらく不可能ではないが……

(しかし、そうすると確実に面倒な事になるだろうな)

神どもが騒ぐのもそうだが……それ以前に、ベルがソウルに『酔わない』という保証がない。下手に仕込んで、狂気に吞まれてもしたらそれこそ目も当てられなかった。

「まあ、それこそサポーターでも雇うのがいいだろう。それか、真面目に団員を勧誘する
かだ。なあ、ヘステイア？」

サポーターでなくとも人出が増えれば一度に持ち運べる量は自ずと増える。

「う……。それは耳が痛いなあ」

その辺りはベルよりもむしろヘステイアの腕の見せ所なのだが。

(もつとも、俺がいるせいで人が寄り付かないって可能性もあるがな)

その辺りの事もいずれば考えなくてはならない。

「ま、まあ。それはおいおい考えるところとして、今はご飯にしようぜ！」

と、ヘステイアが露骨に話を変えてくる。

まあ、この調子なら当面は問題ないか。それこそ、ベルが名を上げるまでは。

安堵すればいいのか、嘆息すればいいのかよく分からないまま、簡易厨房に並び仲良
く料理をする主従の背中を眺めていた。

そして、翌日。

「よし。それでは、今日はここまでにしよう」

「はい、師匠！ ありがとうございます！」

日課となった早朝訓練を終える。

シルバーバックとの一戦で一皮むけたようだが、それでもまだ未熟。

訓練の指針を変えるつもりはまだなかった。

(ま、ただの生者だからな)

何よりも死なない事を最優先。

ベル最大の持ち味であり、攻撃にも撤退にも活かせる素早さを伸ばし、次いでそれを可能な限り長く維持できるような持久力を強化していく。できれば、目下一番の泣き所である耐久性の低さをどうにかしてやりたいが……、

(逃げ足の速さは大したものなんだよな、実際)

攻撃を喰らわないというのは、それはそれで生存率を大きく引き上げる。

どれほど堅牢な防御でも破れる。どれほど屈強な肉体でも、いずれ打ち倒せる。

そうやって今まで生き残ってきた。

しかし、それは攻撃を中てられるという前提の話だ。

本当に攻撃をすべて躲せるなら、それはどれほど強固な鎧にも勝る。

とはいえ、

(ま、保険をかけておくに越した事はないがな)

ただ一度避け損ねただけで致命傷を負うようではやはり危険すぎる。

耐久性を上げておかなくてはならない事に変わりはなかった。

(攻撃の方は、まあ今のままでも当面問題ないか)

対人戦を考慮するなら、不安は尽きないが——『上層』のモンスター程度なら、充分に通じる。もしくは速さで充分に補える範囲だ。

(やはり、まずは下地作りだな)

どのみちそれほど多彩な武器を持ち歩けるわけでもなし、当面は短剣を最大限に活用できる——そして、何より生還できるように育ててやるのがいいだろう。

「それじゃ、二人とも。ボクは先に出かけるよ」

と、そこで。ヘスティアが外に出てきた。

「あれ？ 神様、今日は早いですね？」

汗をぬぐい、水を飲んでいたベルが首を傾げる。

確かにいつもよりもずいぶんと早い。

「うん、ちよっとね」

はて、あの屋台の営業時間が変わったのだろうか。

どこことなく歯切れの悪いヘスティアの様子に、俺も首を傾げていた。

「君達が気にすることはないよ！ それじゃ、行ってきまーす！」

俺達の視線に耐えかねたのか、露骨に笑って誤魔化してから、ヘスティアは走り去る。

「どうしたんでしょうね？」

「さあな」

また過勞で倒れるような事がなければいいが。

その背を見送りながら、内心で小さくため息をついていた。

「ベル、今日はダンジョンじゃないのか？」

それからしばらくして。

汗を流したベルは、そのまま私服に着替えていた。

「実は、ちよつとエイナさんと約束があつて……」

「ほう？」

ついに野望の第一歩を踏み出したのか。

最初の一人がヘステイアではなかったのが少し意外だが……ああいや、むしろ過ごした時間を考慮すれば彼女の方が長いとも言えるのか。

しかし、数多の冒険者を返り討ちにしてきたと噂の——いや、俺もこの前霞から聞いたばかりだが——あの才女をこの短時間で落とすとは、なかなか末恐ろしい奴だった。

「あ、違いますよ?! 別に変な意味じゃなくて!」

わたわたとベルが言い訳を始める。

「分かつてる分かつてる。楽しんでくるといい!」

今さら俺が男女の関係でとやかく言えることなど何も無い。

「絶対分かってないですよね、師匠!？」

ただ、先達として――

「これは饞別だ。受け取っておけ」

備え付けの羊皮紙を一枚失敬して、とある住所を書き込む。さらに、それで料金に多少色を付けた金額を包み手渡してやった。

「何ですか、これ?」

「良い連れ込み宿の場所と料金だ。そういう雰囲気も大切なんだぞ?」

その点、アイシヤおスまメの宿なら何の問題ない。

流石に目が肥えているのか内装も文句なく上品だし、部屋の造りもしっかりしていて音漏れの心配もない。さらに店員の口も固い。

「だからいりませんでばあああああああつ!？」

顔どこか首筋まで真っ赤に染めたベルは、そのまま街へと疾走していった。

……ちやつかり、『お小遣い』は握りしめたまま。

帰ってきた時にそれが無傷かどうかは……まあ、九割方無傷だろうが。

「さて、と……」

ともあれ、微笑ましい気分でその背を見送ってから、独り言ちる。

(初々しいものだな)

まあ、連れ込み宿云々はないにしても、だ。

あれで一応、新調したばかりの服——ダンジョンに特攻して派手に傷んだ服を買い替えた時に一緒に買ったちよつといいもの——を着込んでいる辺り、それなりに意識しているのだろう。

……何となく、こう、ただ偶然それを手に取っただけという気もしているが。

「今日はどうするかな」

ベルがいないなら、ダンジョンに行く必要は特にならない。

地下水路の調査は……行けば何かしらこき使われるだろうが、今日はシャクティが別件で手が離せないそうなので向こうからは依頼されていない。

(アルドラの店もまだやってないな)

むしろまだ閉まっただばかりだろう。従って、霞やアイシャもまだ寝ているはずだ。

(へ？アイストスのところに矢やボルトを発注しに行くか?)

主にベルの援護のためにボルトを消費している。

雷のボルトや魔力のボルトのような特殊なボルトは無理かもしれないが、ヘビーボルトかスナイパーボルト辺りなら作ってくれるだろう。

もちろん、ここは冒険者の街。ウッドボルトやノーマルボルトくらいなら普通に売っている。品質はピンキリだが、それこそ、あの女鍛冶師の店で買えば何の問題もない。

(いや、むしろ店では見かけない大矢の類を先に手配すべきか?)

しかしそうなると、現物を渡し、打ち合わせをする必要があるかも知れない。

少々面倒だが……まあ、その分だけ時間は潰せるだろう。

『クオン、聞こえるか?』

と、そこで。コートのポケットから人の声が聞こえた。

廃教会の中に戻り、戸を閉めてからそれを取り出す。

「どうかしたか?」

シンプルな水晶が飾られた首飾りを取り出し、応じる。

これこそが『眼晶』オクルス。フェルズ謹製の魔道具だった。

その効果は片方の水晶が捉えた光景を音声と一緒に、もう片方の水晶に映し出すというもの。なかなか破格の代物だと言えよう。

『少々面倒な事になったかもしれない。手が空いているなら協力して欲しい』

「分かった」

どうやら、これで今日の予定は埋まったらしい。

……

「それで誰を探せって?」

一〇階層を進みながら『眼晶』オクルスに問いかける。

『一人はハシャーナ・ドルリア。ヒューマンの男で〔ガネーシャ・ファミアリア〕に所属するL v. 4。二つ名は〔剛拳闘士〕。こちらは知っているのではないか?』

「まあ、多分な」

直接的な交流がある団員は限られているが——L v. 4なら、どこかの騒ぎを鎮圧した時に行動を共にした可能性は高い。顔を見れば分かるだろう。

『もう一人はルルネ・ルーイ。犬シフスローフ人の女で〔ヘルメス・ファミアリア〕に所属するL v. 2。二つ名は〔泥犬マドル〕。ハシャーナには三〇階層である品物を回収してもらい、ルルネにはそれを地上まで運んでもらうつもりだったのだが……』

「二人揃って帰還しない、と?」

『ああ。その通りだ』

「で、探している物は?」

『『宝玉』だ。三〇階層にある事が確認できたので、回収に向かつてもらっていた』

「できたのか?」

あの『宝玉』があるなら、その近くには『番人』がいると聞いているが。

(下手をするとあの閻霊も、その『番人』なのかもな)

胸中で呟きながら、フェルズに問いかける。

『おそらく。秘密裏にリド達に協力を仰いでいたからな。そうあって欲しいものだ』

「要はそれも確認しろって事か……」

嘆息してから、改めて訊ねた。

「それで、どちらを優先しろと?」

『まずはハシャーナの行方を確認してほしい。何しろ神ガネーシャは貴重な協力者だ。もし可能なら何とか無事に保護したい』

「それは構わないがな。だが、この穴倉の中から帰還しないなら、誰かに殺されたか、『お宝』に目が眩んで持ち逃げしたかのどちらかだろう?」

『……まあ、荒くれ揃いの冒険者の一人だ。流石に聖人君子だとまでは言わない。だが、仮にも「ガネーシャ・ファミリア」の一員だ。依頼品を持ち逃げするとは思えない。そもそも、あれに価値を見出させるか、と言われると疑問がある。依頼する際にも、そこまで詳しくは話していないからな』

「そりやそうか」

仮にもあのガネーシャの眷属——つまりはシャクティの同僚だ。フェルズの言葉には相応の説得力がある。

『ルルネの方は……確かに主神が疑わしいのは認めよう。それに団長であれば、あれの価値に気づく可能性もある』

「ヘルメス、か。分かっているなら、依頼するなよ」

四年前に絡んできた神の一人だ。都市の外に逃がしたのは、今でも悔やまれる。

あれはある意味、あの女よりも早く始末しておかなければならない厄災だ。

『返す言葉もないな。だが、人手を選んでいる余裕がなかったのも事実だ。それに、彼女達は利用しやすい』

団員のL.V.の虚偽報告にランクアップの未申請。それに伴う脱税。叩けばいくらでも埃が出るのがあの連中だった。

主神が小銭を惜しんだばかりに命を使い潰される手下どもも哀れな事だ。

……まあ、仕える相手を誤ったとしか言いようがないのも事実だが。

「しかし、仮にルルネが持ち逃げをしたとして、ハナーシャが帰還しない理由がない。所属する「ファミリア」が異なり、今まで接点もない以上、共謀するというのも考えづらからな。さらに言えば、ルルネにハシャーナを殺せるとも思えん。「ヘルメス・ファミリア」が組織的に仕掛けたというなら話はまた変わるが……」

露見すれば間違いなく派閥抗争だ——と、フェルズ。

まあ、あり得ない話だ。あのクソ野郎ヘルメスがそんな露骨に目立つような真似をするはずがない。

「なら、『宝玉』をルルネとやらに渡す前に殺されたか、ルルネとやらが地上に戻る途中で殺されたか。あるいは、二人揃って殺されたか。いずれにしても、問題は誰が殺した

かだな」

モンスターなら、物は残っている可能性が高い。いや、最悪そのモンスターの腹の中という事態も考えられるが。

(そうになると、噂の『番人』も一八階層付近をうろついている事になりそうだな……) 　　まだ一〇階層ほど差はあるが……何かの弾みでベルにまで被害が及んでもつまらない。

早めに始末しておくべきだろう。

『ああ。しかし、ハシャーナはLv. 4だ。三〇階層ならまだしも、中層以上のモンスターに後れを取るとは思えん。ルルネも……まあ、一八階層より上で後れを取りはしない。どちらかと言うと——』

「何者かに強奪されたと考えるべき、か」

『もつとも、それも現実的とは言いがた。それがやれるとすれば、Lv. 4以上の冒険者だ。流石に限られてくる』

「Lv. 4以上の冒険者がいる派閥となれば、糸目の小僧かあの女のところか……」

あの女は、つい先日ガネーシャにしてやられている。いや、正しくは勝手に自爆しただけだが、逆恨みと言うのはどこにでもあるものだ。

『神フレイアか。いや、それはないだろう。彼女自身はもちろん、首脳陣も謹慎中だ』

「守っているのか?」

『確認できる範囲で言えば、素直にな。少なくとも、引き際は心得ているらしい』
なら、あの日俺と最初に出会った時点で大人しく巣穴に帰ってしまえ。

内心で毒づいてから、続けた。

「なら、糸目の小僧の方が?」

『神ロキか。そちらも、今のところ目立った動きはないが……』

「どうだか。連中は五〇階層で芋虫どもに襲われている。そこに加えて、蛇もどきの襲撃だ。そろそろ頼みもしないのに首を突っ込んでくる頃だろう?」

そして、なまじ切れ者が多い分だけ手出しされると極めて面倒な事になる。

『それは否定しないな。しかし、いきなり『宝玉』に辿り着けるとも思えない』

「そいつもどうか……」

何しろ、奴らのところにはあの金髪小娘がいる。

ウラノスやフェルズの予想より一手二手先を行っている可能性もあり得るだろう。

『いずれにせよ、まずはハシャーナの生死と『宝玉』の所在を確認してくれ』

「なら、まずは一八階層だな」

ダンジョン一八階層。いわゆる安全階層セーフティポイントの一つである。

そこには、他の場所にはない大きな特徴があった。

「しかし、リヴィラの街か。また面倒な話になりそうだ」

冒険者の街——いや、ならず者の街とでも言うべきか。

元々はギルドが計画したものらしいが……結局は頓挫。計画が破棄されてから、リヴィラという名前の冒険者が仲間を集って個人的に完成させたいらしい。

地上では生きづらい、脛に傷のある連中が屯している、地下の楽園だ。

『なに、ボールスならお前には逆らわんさ』

フェルズがその街の顔役の名を口にした。

「どうだか。そうやって高を括っていると、背中から刺されるぞ？」

ひとまず経験者として語っておく。

しかし、ダンジョン内で人探しなど、当てもなくやつてはられない。

ここはひとつリヴィラの顔役に助力を願うべきだろう。

「さて。できれば夕飯までには地上に戻りたい。一気に駆け抜ける」

むしろ、俺の気が変わらないうちに済ませてしまわねば。

『そうしてくれ。早く済むならこちらも助かる』

それを最後に、『オクルス眼晶』から魔力の輝きが消える。

襟の内側に水晶をねじ込んでから、宣言通りに駆け抜ける事にした。

鬱蒼とした穴倉。広大な結晶洞窟を抜けた先には、地上と見紛うばかりの森林地帯が

広がっている。天井は光を放つ水晶に埋め尽くされ、太陽の如く輝いている。

おそらく、今が『火の時代』だったら、楽園扱いされるのは間違いない。

一八階層とはそういう場所だった。

「うん？」

申し訳程度に敷かれた道を進み、リヴィラに辿りついてすぐ。

明らかな違和感を感じた。

「おい」

嘆息してから、『眼晶』^{オクルス}に小さく声をかける。

『どうした？』

「何かあったようだぞ。街の連中が妙に大人しい」

どこことなく活気がない。普段はもっと活気があるはずだが……。

『そうか……。やはり、ボールスを頼るしかないだろう』

「だらうな」

もつとも、これがハシャーナの生死と関係があるかどうかは分からないが。

いや、その辺りの事も、ボールスに聞くのが一番手取り早いかな。

『それと、言うまでもないだろうが『眼晶』^{オクルス}は隠しておいてくれ。妙なところで勘のいい

男だ。これ以上おかしな輩に嗅ぎつけられては面倒だからな』

「あいよ」

告げると、『オクルス眼晶』をソウルに取り込む。

これではほど『ソウルの業』に精通した者でない限りは嗅ぎつける事はできない。

「クオン?!」

と、そこで。背後から女の声が出た。

「リヴェリアア？」

振り返ると、翡翠色の髪をした絶世の美女がいた。

ついでに、金髪小娘——ベルの想い人と、褐色小娘が二人。蜂蜜色の髪をした少女。

……あと、胡散臭い金髪の小人まで。

(これはまた、何というか……)

これで本当に動きはないとも言えるのか?——と、内心でフェルズに毒づいていた。

4

「たまには気ままに、じっくりと探索をしておきたいし」

と、アイズ達の誘いに乗ってホームを出立してからしばらくして。

「なるほど、そういうわけだったか」

ダンジョンの片隅で、僕は小さく苦笑していた。

金策という名の——気ままというには割と現実的で切実な——理由があつたのは分かっていたけど……。

「シー……。原因がああな騒ぎだし、ギルドや【ガネーシャ・ファミリア】からもいくらか謝礼金が届いているから少しくらいは補助してあげたいところだけど——」

牛頭のデーモンとの一戦は、どうやら僕の想像以上の激闘だったようだ。

いや、アイズが剣を折るのは別に珍しくもないが……まあ、そこはそれ。

リヴェリアに深手を負わせたというのは伊達ではないという事だ。

「えー。アイズだけじゃないよー」

「アンタは自業自得でしょ？ 団長が止めるのも聞かずに斬りかかったんだから」

むくれるティオナを、ティオネが適当に押しやる。

遠征中に愛用の大双刃ツルガを溶かされたティオナはともかく、アイズが代用の剣を破損したのは、フィリア祭の事件が理由だった。

個人で所有する武器の手入れは自己負担が原則とは言え、本来なら補助申請を受け入れる状況ではあるのだが——

「前回の遠征は特に消耗が酷かったからね。そうも言っていられないんだ」

あの『新種』の腐食液のおかげで、武器や防具はおろか種々の備品にまで大打撃を被ってしまった。さらに、その『新種』対策のために少なくとも僕らの分だけの『不壊属性』デュランダール

兵装と、大量の魔剣の購入を予定している以上、当面は質素儉約が常となる。

大派閥である「ガネーシャ・ファミリア」からの謝礼金は、中堅派閥にとっては——いや、普段の僕らにとってもちよつとした収入になるほどだったが、今は状況が悪すぎた。

四千万ヴァリスを立て替えるとなると少々辛い。

もちろん、二代目大双刃ウルガの代金一億二千万ヴァリスを立て替える余裕などどこにもない。

「うん、大丈夫」

と、言いつつも少し消沈した様子の子のアイズに苦笑する。

「まあ、代わりという訳じゃないけど、今回の探索の報酬分配には少しだけ色を付けるよ。テイオネ達もそれでいいかい？」

やはり普通の冒険者クエスト依頼をいくつか受理してきて正解だったようだ。

「団長がそうおっしゃるなら、私は構いません」

「ああ。私もだ」

「私もです！ 元々アイズさんの助けになればと思つてついてきてますからっ！」

テイオネに問いかけると、続けてリヴェリアとレフィーヤが頷いた。

「ねえ、フィン。私はー？」

「シー……。まあ、昨日は頑張ってくれたみたいだし、特別に少しおまけしようかな」

いや、それを言い出すと、それこそリヴェリア達にも多めに配当しないと不公平になつてしまうのだが……。そうすると、今度はそもそも多めに配当する意味がなくなつてくる。

視線を向けると、やれやれと言わんばかりにリヴェリアが肩をすくめた。

よし。信頼できる副団長の許可が出たので、ここは押し通すことにしよう。

「やったー！ フィン、ありがとー！」

その代わり少しだけだよ？——と、歓声を上げるティオナに念を押してから、

「しかし、そうなるとやっぱりもう少し深く潜らないとならないかな」

「そうですね。まあ、この辺りのモンスターじゃ手ごたえもありませんし」

「じゃあ、一気に『下層』まで行っちゃう？」

「どちらも悪くないけど、この際、少し寄り道して宝石樹を探してみようか。いかにも冒険者つて気分になる」

門番であるドラゴンを討伐して、財宝を手に入れる。それは、誰もが思い描く『冒険』そのものでもあった。それに、見つきさえすれば現実的な見返りとしても悪くない。

また、道中で手に入るであろう迷宮資源も『水の楽園』より種類が豊富——と言うより、消耗品の材料となるものが多い。それらを『ディアンケヒト・ファミリア』に卸し、

その分だけアイテムを安く買い取らせてもらおうという事も可能だ。

そう言えば、テイオネはその「ホワイト・リーフディアンケヒト・ファミリア」から白樹の葉の調達を依頼されてきたと言っていたか。

それなら、いずれにしても当面は二四階層が目的地となる。

それに、二四階層——『中層』の最下層領域なら、『下層』の上層領域と比較しても手に入る魔石一つ当たりの単価もそこまで極端な差が生じるわけではない。

今回の探索は一週間の予定だし、本腰を言えて宝石樹を探すのも悪くない。

「まあ、まずは一八階層で少し身軽になろうか？」

ここまでで手に入れた魔石やドロップアイテムの類をリヴィラの街で売り払い、荷物に余裕を持たせつつ一息つこう。

と、そういう事になった訳だけど……

「妙だな」

リヴィラの街に着くなり、違和感を覚えた。

「そうだね。何だか妙に活気がない」

そのくせ、全体的にざわめいている。

珍しいを通り越して異常事態だった。

何しろここは——いくら安全階層とはいえ——ダンジョンの中に住み着くような荒

くれ達が集まる街なのだ。

モンスターの襲撃を受けて街が壊滅するなど日常茶飯事。時に犠牲者を出しつつも、しぶとく生き残っては街を建て直してきたこの住人がこんな反応を示すとは一体……。

「クオン?!」

と、そこで。

リヴェリアが悲鳴めいた大声を上げた。

彼女の視線の先には、上等そうな黒衣を羽織り、クレイモアを背負った一人の冒険者——ではないが。ともかく、嫌でも見慣れてきた男の姿があった。

「リヴェリア?」

「イレギュラー【正体不明】あるいは『アッシュ・オブ・シンダー灰色の悪夢』クオン。彼はこちらを見るなり、ため息をついて

見せてから、

「その様子なら、どうやらすっかり回復したようだな?」

ひとまずリヴェリアにそう声をかけた。

「ああ、おかげさまでな」

先日の一件で深手を負ったリヴェリアだったが、神フレイアの身柄を押さえて——いや、本人は殺す気だったようだが——から戻ってきたクオンの手で治療され、事なきを

得ていた。

まあ、そうでもなければダンジョンに連れてくる訳もないが。

「ところで、どうしてここに？」

「それは俺のセリフだ。小娘共には無理をするなどという割に、自分は元気だな？」

「私は別に無理も無茶もしていない。それで、一体どうした？」

「別にどうもしない。ただ少し野暮用があるだけだ」

そう言つてクオンは肩をすくめて見せた。

「それで、そっちは？」

「肩慣らしと資金稼ぎかな」

繰り返されたその問いかけに、僕もまた肩をすくめて見せる。

別に嘘は言っていない。今回の探索の主な目的は間違いなくそれだった。

「団長と副団長が自ら？ 大手のくせに、そんなに貧窮しているのか？」

「その前に僕らも冒険者だ。ダンジョンを探索するのは当然だよ」

と、肩をすくめてから、

「それに、知つての通りこの前の遠征では派手に物資を破壊されたからね。あれからずっと節約生活が続いているんだ。むしろ率先して稼ぎに行かないとね」

それもまた本当の話だ。回復薬や兵糧などの消耗品はともかく、予備の武器や防具は

過去に例を見ない程に消耗し、幕舎や携行用の調理道具、魔石灯の類までもが手広く損壊している。

いずれ改めて、派閥として大々的に資金稼小ぎ通に征乗り出さなければならぬ。

「それは」愁傷様」

と、クオンはあつさり肩をすくめてから、

「ふむ。なら、この街の様子はお前たちを畏れているか、なのか……」

いや、そんなに肝の細い住人はいないと思うけど。

「それは誤解だよ。僕らは単に宿を取りに来ただけだ」

大体、恐れられているというなら、それは僕らではなく君の方だろう。

「むしろ、あんたが何かしたんじゃないの？」

「馬鹿言うな。生憎と俺にはむやみに暴れる趣味はない」

テイオネの言葉に、クオンは実にあつさりと応じて見せた。

(……まあ、それは確かに否定しないけど)

と、内心で呻く。

実際にその通りだから——少なくとも派閥全体としては——お世辞にも友好的な関係を築いているとは言い難い僕らも、こうして暢気に話をしていられる。

それに、すっかり精査すると、噂になっている『武勇伝』の悪夢の数々多くが、そもそもの事の

発端は相手側にある事が分かる。先日酒場の件は言うに及ばず、だ。

もつとも、動き出せば叩き出される戦果は——あるいは戦禍は——他の追従を許さない。それはつまり、冒険者にとって『悪夢』である事には何ら変わりないという事だ。

(何しろ、ついにあのオツタルに深手を負わせたらしいからね)

先日の報告を思い出し、嘆息する。

その事実は、近いうちに更なる悪夢として語られるようになるだろう。

「まあ、いい。それならさつきと行つてしまえ。個人的には酒樽担いでカドモスの泉に行くのがおすすだぞ。一晩粘れば流石に一杯になる」

ああ、この様子だとテイオネが邪魔したのは二樽目だったのか。

それなら、それほどの額ではなかった——と、思いたい。

(でも、一樽でも約三〇億ヴァリスか……)

アイズとテイオナに補助金を渡しても、派閥の財政を好転させられる。具体的には『不壊属性』デュランダ武装がおおよそ三〇振りは買える。魔剣もだ。

金額だけ見ればこの上なく魅力的だが——

「シー……。もう少し手頃なプランを教えてほしいな」

それは要するに酒樽を守りながら、一晩中カドモスと連戦しろということだ。

いや、カドモスの魔石とドロップアイテムも手に入つて一石三鳥と言えなくもないけ

ど……残念ながら、強竜は本来、カドモスそれほど気楽に倒せる相手ではない。

(階層主級のモンスターと連戦は流石にね)

階層主に匹敵する戦闘能力を持ったモンスターと一晩中連戦するとすると、本気の布陣を敷く必要がある。

いや、そもそも五〇階層に行くだけで文字通りの『遠征』となる訳だけど。

「楽がしたいなら、一階層で『ジャック・バード』でも探したらいいんじゃないか。お前達なら人海戦術も可能だろう?」

それは駆け出しでも一攫千金が狙えるという、まさにダンジョンの浪漫そのもののようなモンスターだった。

しかし、

「それはそれで手頃じゃないなあ……」

何しろ、相手はダンジョン屈指の希少種だ。レアモンスター倒せば最低でも一〇〇万ヴァリスは固いが、一日かけても見つかるかどうか。

それに、一応オラリオを二分する大派閥と周知されている僕らが一階層で探索しているなど明らかに目立つし、狙いも露骨すぎる。有体に言って体裁が悪すぎた。

「……なら、素直に寶石樹でも探せ。あの辺りならお前らにとっては手頃だろう?」

「ノー……。やっぱりそこに落ち着くか」

一攫千金を求めてやってくる冒険者は数多い。

しかし、本当にダンジョンの中で一攫千金を狙おうと思うと、意外と選択肢がなく、どの選択肢を選んでも難度が高いというのが現実の悲しいところだった。

もつとも、あくまで冒険者の基準に照らし合わせての話だ。一般市民の感覚に合わせてれば、平凡なLv. 1でもまずまずの高給取りとなる。

(その分、装備や消耗品にお金がかかっているんだけどね)

武器や防具も厳密には消耗品の一部だが、消耗しすぎると赤字の原因になる。今回の僕らはまさにそうだった。

難易度に関しては……まあ、今さらか。冒険者とはそういう仕事だ。

「それで、結局君は何をしてるんだい？」

「久しぶりに戻ってきたんだ。街の顔役に挨拶に行くところだよ」

そんな殊勝な性格ではないだろうに——と、内心でため息を吐く。

(この街の状態について訊きに行く、と言ったところか)

無視して探索を続けるべきか。それとも、彼と共にボールスのところに向かうべきか。

(心情的には無視して先に進みたいところだけど……)

休暇中——とは言わないが、遠征を終えたばかりだ。

厄介事クオンに関わるのは気が乗らない。が、一方で目の前の存在の情報は何か一つでも多く知っておきたい。いや、団長として把握しておかなければならない。

「なら、こゝに一緒にさせてもらおうかな」

「お前らを連れて行くなんて、嫌がらせにしかならないんだがな」

それは君一人で行っても変わらないよ——とは、あえて言わなかった。

「げっ、【ロキ・ファミア】」

ともあれ、それがボールズの第一声だった。

そら見ろ——と、言わんばかりにため息を吐いたクオンを見て、彼は続けた。

「しかも、【イレギュラー正体不明】もだと……っ!？」

僕らの時と同じような反応である。

しかし、彼はそんな事を気にするような人間ではない。

「そう嫌そうな顔するな。ほら。ダンジョン特産、紫紺色の菓子だぞ」

「へっへっへっ。分かっているじゃねーか」

そう言つて、魔石が入っているらしい布袋を手渡すクオンに、ボールズはあつさりと手の平を返して見せた。

「つて、そーじゃねえ!」

そして、それをしつかり懐にしまい込んでから、改めて怒鳴る。

「何だつてこんな時に揃つてきやがるんだ、テメエらは……」

「そう、それだ。何かあつたのか？」

心底嫌そうに呻くその様子など歯牙にもかけず、クオンは話を続けた。

「殺しだよ。『ヴァリーの宿』でな」

「殺しだつて？」

と、僕とクオンの声が重なる。

しかし、心情までは重ならなかつたらしい。

「それつて、この街でも騒ぎになるのか……う？」

怪訝そうに、クオンが呟いた。

「なるに決まつてんだろつ?!」 イヴィルス 闇派閥どもと一緒にすんじやねえ!!」

いくらならず者の街とは言え、そこは譲れない一線らしい。

一部——と、言えるほど少人数でもないが——の素行の悪い同業者のせいだ、冒険者
 Ⅱならず者と思われているのは確かだが、実際のところ地上でそこまで羽目を外しすぎ
 る冒険者は決して多くはない。

いや、酔っぱらつては罵りあう、あるいは殴り合う、辺りまでなら日常茶飯事と言つ
 ていい。

しかし、それが発展して武器に手をかける者はそう多くないし、手をかけた時点で—

—当事者達がよほど高Lv. でもない限り——周りにいる仲間や他の冒険者達が止めに入るのが常だった。

それをすり抜けて刃傷沙汰になるのは稀であり、その果てに死人が出るのは、それこそ年に数件あるかどうかでしかない。

……もつとも、オラリオ内に限つての話でしかないが。

(ダンジョンの中での闇討ちなら、別に珍しくもないからね)

まあ、いざとなれば公然と犯罪行為ができる場所があるからこそ、地上で暴れる冒険者は少ないと言えるのかもしれない。

と、それはともかくとして。

「その様子だと、よくある『不幸な事故』ってわけでもなさそうだね？」
今だ怪訝そうなクオンはひとまず隅に押しやってから問いかける。

この場合の『不幸な事故』とは、つまり刃傷沙汰の果て——という意味だ。

いや、武器に手をかけた時点で殺す気だったと言われれば確かにそれまでだ。

「ああ。そういうんじゃないかねえ。そういうのは、しばらく前に酔っぱらった馬鹿二人が喧嘩してくれたばつて以来だ」

「……やっぱり珍しくないんじゃないか？」

「うるせえ！　しばらく前だつてんだらうが！」

半眼で見やるクオンに、再び怒鳴り返してからボールスは僕らにも声を荒げる。

「つーか、オメエは何しに来たんだ？」

「僕らはただ換金と、宿を取りに来ただけだったんだけど……」

やれやれ、と肩をすくめて見せる。

「どうやら、そうも言つてられなくなつたみたいだね？」

「ああ？」

「殺しとなると、流石に無視できないだろう？ 僕らとしても、早急に解決しておきた

い。今後のためにも、ね」

言葉こそボールスに向けたものだったが、視線はクオンに向けていた。

彼がわざわざボールスを訪ねた理由こそがこの殺人事件にある——と、そんな予感がしていた。

「遺体はまだ残っているのか？ それなら、少し興味があるな」

果たして、クオンはそう言つて肩をすくめた。

「いや、変な意味ではなく。実は今、人を探しているところなんだ。念のため確認させてもらえるかと助かる」

ボールズ達のぎよつとした視線に気づいたのか、少し慌てた様子でそう付け足す。どうやら、予想は当たつたらしい。

「ダンジョンの中で人探しだあ？ テメエも物好きだな」

喜ぶべきか嘆くべきか。そんな悩みを抱えた僕を他所に、ボールスは呆れたような声を上げる。

まあ、確かにダンジョンの中で人探しなると行方不明者捜索——概ね遺体の捜索という事になる。生きたまま発見できるのが理想だが、その多くは徒労に終わるのが現実だ。

いや、徒労に終わればまだいい方で——もちろん、依頼主にとっては最悪の結果なのは承知の上だが——無事に遺体を見つけたなら、同時に凄惨な光景を目撃する事になる。

さらに、場合によっては思いもよらない異常事態……つまりは、その冒険者を死に至らしめた原因が待ち構えている可能性もある。

総じて報酬は高額だが、敬遠されやすい冒険者依頼クエストと言えるだろう。

……もつとも、成り行きで達成してしまう事も多い訳だけど。

「俺もそう思う」

どこまで本気なのか、クオンは深々とため息をついて見せた。

ともあれ、そんなやり取りで毒気が抜かれたのか、ボールスは案外素直に僕らの同行を許可してくれた。

「これはまた……」

そして、案内された先の宿。床に横たわっていたのは、腰回りと頭辺りを白い布で覆われた裸の男だった。

誰が見ても死んでいるのは明らかだ。何しろどう見ても布の下には頭がない。

「犯人に目星はついているのかい？」

「おそらく、昨日こいつが連れ込んだ女だ」

その辺りはすでに聴取していたのか、ベッドに座りうなだれる獣人の青年——おそらく宿の主——を横目に見ながら言った。

「それはそれは。さぞかし過激な一夜だったんだろうな」

「ケツ、やりすぎだっつてんだ」

常と変わらないクオンの軽口に、ボールスが毒づく。

「それで、一体どんな女だったんだ？」

「それがさっぱり分からねえんだ」

続けてクオンが問いかけると、宿の店主は消沈した声でうめいた。

「女の方はフードで顔を隠してたし、こっちの男は鎧を着こんでいた。おかげでこの【ファミアリア】なのかも分からねえんだ」

「しかし、頭をここまで綺麗に叩き潰したんだ。それなりに騒ぎになっただろう？」

遺体の頭部辺りには、派手に血飛沫が飛び散っている。それと、骨や脳漿と思しきものも。

この様子では、布の下はさぞかし悲惨な事になっているに違いない。

「いや、それが……。こいつ、宿を貸し切りにしやがったし。それに女を連れ込んだんだぜ？　いつまでも残つてられるかよ。こう言つちやなんだがうちは安普請だしよ」

「……ああ。まあ、それもそうか」

安普請というより、天然洞をそのまま利用している。勝手に修復されると言うダンジョンの性質もあつて、ドアの代わりに布が下げられているだけだ。

そこに男女が同室で——となれば、僕だつてそうする。

「それで、そんなにいい女だったのか？」

「さつきも言った通り、顔は分からねえ。けど……まあ、いい身体はしてたな」

クオンの問いかけに、ぼそりと獣人の青年が応じる。

途端に、同行している女性陣が一斉に冷たい視線を向けるのが背中越しにも分かった。

「彼の身元の方は分からないのかい？」

下手をすと思わぬところから飛び火してきかねない。

疼く親指に素直に従つて、話を変える。

「首がねえんじや人相も改められねえだろうが。おかげで別の方法を頼るしかねえ。その手配に行つてたのさ」

「なるほど……」

ボールズが何をしようとしているのか見当がついた。

あまり褒められたものではないが、この状況ではやむなしか。

「ところで、鎧を着こんでいたそうだが、見当たらないな？」

部屋を見まわしていたクオンが誰にともなく問いかけた。

「そーいや、確かにな。……おい？」

「いや、俺はなんもいじつてねえつて！　しいて言えば……その、遺体に布をかけてやつたくらいだよ」

慌てたように獣人の青年が手と首を同時に振る。

「となると、犯人が持ち出したか……」

「値打物だったつてか？」

「確かにいい鎧だったけど、殺してまで奪い取る程だったと思えねえんだけどな」

クオンの眩きに、ボールズと青年がそれぞれ首を傾げる。

「物取りか……。確かに荷物も荒らされているな」

リヴェリアが残された鞆——強引に引き裂かれたそれを探りながら言った。

「だが解せないな。なぜ鞆をここまで裂く必要があった？ それに金品も残っている」
「金よりも欲しい物があつたんだろう」

クオンが、転がつていた羊皮紙を取り上げる。

「それ冒険者依頼の依頼書だよね！」

それを後ろから覗き込んだティオナが言った。

「なんて書いてあるんだい？」

「三〇階層で何かを回収してこい。読める範囲を要約するとそんなところだな」

呻いてから、もう一度丸めてそれをこちらに放ってくる。

「ああ、確かに」

たつぷりと血を吸い、インクは滲んでしまっているが、判読できる範囲にはおおむねそのような事が書かれていた。

「ちなみに。だが——」

そこで、クオンがボールズに肩をすくめて見せた。

「こいつの名前が分かった」

「何だつて？」

「どこの誰なんでえ!？」

「ハシャーナ・ドルリア。【ガネーシャ・ファミリア】所属のLv. 4。二つ名は【剛拳

闘士」とか言っていたか」

つまり、クオンは彼を探していたという事か。

まあ、【ガネーシャ・ファミリア】と彼が繋がりを持っているのは有名な話だ。

フィリア祭の事後処理に奔走する彼女達から、予定を過ぎても帰還しない団員の搜索依頼を受けたとしても特別おかしくはないが……。

「何だ?!」じゃあテメエはL.V. 4の冒険者が何の抵抗もできずに殺されたって言うてえのか?!」

「そうなるな。まあ、冒険者と言えど人の子だ。方法ならあるだろう? 何しろ、目下一番怪しいのは……」

「女、か。そりやまあ、可能性はあるかも知れねえが……」

それにしても殺し方が少し過激すぎる。

毒殺や単純な刺殺だったなら、まだ可能性はあるだろうけど……。

「ところでクオン。君は何でそう断言できるんだい?」

「……俺はそいつを探してたんだよ。予定を過ぎても帰還しないからってな。まったく、これで依頼は失敗だ」

と、なると。やはり概ね予想通りということか。

いや、まだ何か裏がありそうだが。

「ボールス……」

そこで、別の男が入ってきた。

その傍らにはフードとマントで全身を隠した獣人と思しき小男がいる。

「あ、ああ。来たか」

ボールスの言葉に、小男は無言で頷くと赤黒い液体が入った小瓶を取り出した。

『^{ステイタス、シープ}解除薬』だったか……」

ぼつりとクオンが呟いた。

こちららも、やはりと言ったところか。

^{イコル}神血を素材として作られ、冒険者にとつて生命線ともいえる「ステイタス」を強引に

暴く禁断の品。言うまでもなく非合法の品だが……流石はリヴェイラという事か。

「隠された「ステイタス」を無理やり暴くつもりか？」

と、リヴェイラが視線を険しくした。

「ステイタス」を盗み見するのは、冒険者として礼儀に反する。例えば、それが死者だったとしても——いや、死者だからこそなおさら、か。

「死者を冒瀆するような真似は……」

「待て。あれってそんなに大事だったのか？」

咎めるようなリヴェイラの言葉に、クオンが問いかけた。

クオンに対してギルドがそれを用いたのはあまりにも有名な話だが、一体どうやって説得したのかは誰も知らなかった。所説紛糾として、数多の説が乱れ飛んだが……、(まさかこんな真相だったとはね)

ただ単に、本人がその行為の重要性を把握していなかったただけだとは。いや、そもそも「ステイタス」がないのだから、気にする必要もなかったのか。道理と言えば道理だが、それにしても……。

「お前……」

やけに念入りに同意を求められた訳だ——と、暢気に笑うクオンに、リヴェリアが頭痛でもこらえるように額に手を当てた。

「んなこと言ってる場合かよ。ほれ、頼むぞ。そいつの言ってる事が正しいかもこれで分かるだろうが」

「まあ、外れてくれるなら俺も助かるがな」

クオンが肩をすくめるのとほぼ同時、遺体の背中に文様が浮かび上がる。

仕事を終えたフードの小男がやはり無言で傍を離れ、眼帯の男から報酬を受け取るとそのまま出て行った。

「リヴェリア……」

「……仕方あるまい。この男の無念を晴らすためだと思っておこう」

促すと、リヴェリアはため息をついてから遺体の背中をのぞき込む。

「で、どうなんでえ？」

「ハシャーナ・ドルリア。『ガネーシャ・ファミリア』所属のLv. 4。……クオンの言う通りだ」

「面倒な事になったね」

その宣言に、思わず呻いていた。

「つーことは、何か？　つまりこいつは三〇階層で何かを回収して、フードの女はそれを奪うために殺したってのか？」

「可能性は高いね。そして、それなら——」

「犯人はまだリヴェイラにいる、か」

クオンが肩をすくめた。

「馬鹿言うな！　こんだけ騒ぎになってんだぞ?!　とつくにずらかってるだろ！」

「そいつはどうか。殺してでも奪い取りたい『何か』が狙いなんだ。そして、この様子なら犯人はそれを手に入れられてはいない」

「なるほど。探したが見つからず、その八つ当たりで鞆を引き裂いた、か……」

そう言つて鞆を示すクオンに、リヴェリアが納得したように頷いた。

「そこまで執着するなら、見つからなかったから諦めて逃げ出すとも言い難い。いや、む

しろ、殺しまでやったのだ。後には引けまい」

今度こそ反論が思いつかなかつたのだろう。ボールズもまた、ゴクリと喉を鳴らす。「今すぐにも街の出入り口を封鎖すべきだね」

重苦しい沈黙が辺りを支配するより先に告げた。

僕らの予想が正しいなら、事態は一刻を争う。

「ああ。怪しいのは女。あるいは鎧を着こんだ何者か、と言つたところか」

「なるほど。持ち出された鎧か。それなら、顔も体も隠せる。変装としては上出来だね」

そして、オラリオならまだしもリヴィラの中なら鎧姿でもまず目立たない。

誰も彼もが武装しているのだから、むしろ溶け込めると言つていい。

「仕方ねえ。おい、さっさと門閉めて、街中の冒険者を広場に集めやがれ！ 逆らう奴は

二度とこの街を入れねえってな！」

「へ、へい！」

フードの小男を連れてきた男が慌てた様子で飛び出していく。

「おい、ヴァリー！ テメエ鎧の方は見てんだろ？ なら、広場行つて検めてこい！」

「あ、ああ！」

続けて獣人の青年が飛び出していく――

「あ、待った！」

より前に、彼らを呼び止める。

「それについては秘密裏に進めよう。彼女には僕らが『女を探している』と思わせておきたい。ほら、その方が隙を見せてくれるかもしれないだろう?」

明らかに遅れている以上、少しでもこちらの動きを悟られないようにすべきだった。

「チツ、相変わらず腹黒いなテムエも。おい、ヴァリー。こつそり人相書きンとこ行つてこい。誰にもばれんじゃねえぞ」

「分かった!」

「くれぐれも気を付けて。目撃者を消す、というのはお約束だからね」

「脅すなっつーの! おら行け!」

それは、脅しではなくしつかり警戒するようにという、善意からの言葉だったのだが——ボールスに尻を蹴られ、哀れな青年は部屋から飛び出していった。

「さて。いずれにしても、集まった冒険者達の身元を改めるには時間がかかる。その間に、何かもう少し手掛かりが見つかればいいんだけど……」

それを見送つてから、小さく呟く。

しかし、目ぼしいものはもう何も残つていそうにない。

治安維持を担う「ガネーシャ・ファミリア」の生きた団員か、万事において目敏い口

キ辺りがいてくれたらまた違うのかもしれないが——

「仕方がない。……上手く行くかは分からないが、試してみるか」

と、そこで。クオンが遺体の傍らに膝をつき、何かを取り出した。

「それは？」

「『灰の霧の核』。滅びたものの記憶を垣間見れるアイテムだ」

「本当に？」

「ああ。……もつとも、ただの人間に通じるかは分からないがな」

それなら一体、誰に試したのか——そんな疑問を言葉にする前に、その『霧』が渦を巻き始める。

効果を発揮した、という事なのだろう。

「一人だけなら連れていけるが、ついてくるか？ いや、俺以外の証人がいてくれないと話がこじれる。出来ればついてきて欲しいんだが」

それを見届けて、クオンはそう言った。

「もちろん」

予想とは違うが、これもまた千載一遇の好機と言えるだろう。

頷くが早いのか、彼の向かいに片膝をつく。同時、灰色の霧が僕らを包み——

「団長!?! 身体が透けて——」

テイオネの叫びが終わる前に、僕らは『記憶の世界』とやらに滑り込んでいた。

「ここが……？」

灰色がかつた世界で目が覚める。

「ああ。記憶の世界だ。もつとも、やはり無理があつたようだがな」

「やつぱりかい？」

あまりにも見晴らしが悪かつた。

ぼんやり浮かび上がる影から、ここがリヴィラの街だという事は辛うじて分かるが、それだけだ。

ほとんど霧に覆われていて三M先も見通せない。

「急ぐぞ。どのみち、ここに留まれる時間は長くない」

さらに言えば、この様子では二度目もなさそうだった。

「そうだね」

気になる事はいくらでもあるけど、今は時間が惜しい。

灰色に霞む不鮮明な世界を駆け抜け、『ヴァリーの宿』に近づく。

とはいえ、流石に飛び込む訳にはいかない。無言で頷きあい、気配を殺すと布の隙間から室内を覗き込む。

「当たりだね」

「ああ。なるほど、確かにいい女だ」

互いにギリギリ聞こえる程度の小声でやり取りを交わす。

その向こうで、ハシャーナらしき男の首を持ち上げているのは全裸の赤髪の女だった。

何しろ世界が不鮮明なせいで顔立ちすらはつきりしないが……まあ、何だ。証言通りの体つきだと言つていいだろう。

「シー……。これも色仕掛けつて言うのかな？」

「どうかな。不意を突いたのかも知れないが、あれじゃほとんど実力で殺したようなものだ」

見るべきものは見た。ひとまず隣の部屋に滑り込み、小声で言い合う。

まあ、人目のない状況を生み出すところまでは色仕掛けだったと言えるだろうが。

程なくして、隣から首の骨が砕かれる鈍い音とくぐもった断末魔の音が響き、思わず二人して顔をしかめた。

「これは……。殺してから、わざわざ頭を潰した？」

女が室内を物色する音が響き始めてから。

再び近づいて室内をのぞき込み、呟く。

女の足元に転がる死体の首は、奇妙に捻じ曲がつてこそいるがまだ繋がっていた。

「そのようだな」

女は鞆を漁り——僕らの予想通り、お目当てのものがなかったらしく、苛立ったようにそれを引き裂いた。

そして、こちらら……いや、首のへし折れたハシヤーナに再び近づいてきて——
「つと……!」

そこで『過去の世界』から追い出されたらしい。

「だ、団長! 大丈夫ですか?!

「ああ。なかなか面白い経験だった、のかな?」

白昼夢とも違う不可思議な経験だった。詳細は分からないが、下手をすると神すら知らない未知だったのかもしれない。

(これで見に行ったものが殺人現場でなければ、素直に楽しめただろうけど)

念のため体の具合を確かめながら、内心でため息を吐く。

「ああ。思ったよりも面白いものが見れたな」

一方で、クオンは小さく笑ってから遺体の首を探り始めた。

「なるほど、確かに骨が砕かれている」

その眩きに、念のため僕自身もそこに触れてみる。

なるほど、『過去の世界』で見た通り、首の骨が砕かれていた。これが実際の致命傷か。

「どう思う?」

「殺した後で頭を潰した理由かい? まあ、あの様子からすれば苛立ち紛れだったとしか言いようがないと思うけど……」

「どういう意味でえ? テメエら一体何してやがった?」

「彼が殺された現場をちよつと、ね。なかなか刺激的な光景だったよ」

と、肩をすくめてから、改めて告げた。

「犯人は赤い髪の女。素手でハシヤーナの首をへし折れるだけの実力者だよ」

「素手で首をだあ!! ふざけんな、色仕掛けじゃねえのかよ?!」

「それは連れ込んで武装を解除させるところまでだったようだな。……ああ。だが、確かにいい身体をしていたよなあ? 艶めかしいというか、とにかく色気があった」

「さて。それについての発言は避けさせてもらおうよ。さすがに首を折られるのはごめんだからね」

だからティオネ、そう殺気立つのはやめてもらいたいな。

「クソツたれ! おい、フィン! テメエらも手伝え! Lv. 4の首をへし折れる奴を相手にするなんざ冗談じゃねえぞ!」

「仕方ないね。ティオネ達もそれでいいかい?」

実際のところ、Lv. 4の冒険者をあんな殺し方ができる相手なら、ボールス達だけ

では手に余る。クオンとは無関係に、放つてはおけない。

「当然ですよ団長！」

行くわよ、あんたたち——と、言うが早いか、ティオネが外に向かって走っていく。

「ティ、ティオネさん！ 待つてくださーい！」

「あー！ ちよつとティオネー！」

慌てた様子でレフイーヤとティオナが。そして、ため息一つついてから、リヴェリアがアイズを連れて外に向かっていった。

「それで、君はどう思うんだい？」

女性陣が出て行つてから、最後に残ったクオンに問いかける。

「首の事か？」

首のない遺体。死因は首の骨を粉碎されたこと。頭が潰されたのはそのあと。L.V. 4の冒険者に対してそれを成し遂げた女の尋常ならざる力。

あの『記憶の世界』で垣間見たいくつかの情報を思い浮かべつつ、彼の言葉を待った。苛立っていたのは事実だろう。だが、それだけが理由でもなさそうだ

「他に理由があったと？」

「理由というか……。いや、お前はどうかんだ？ 何か気になる事でもあるか？」

「気になる事、とは少し違うけど。何でわざわざリヴィラの街中で犯行に及んだのかは

分かったような気がするね」

「ほう?」

血染めの依頼書を改めて広げ、報酬欄を指さす。

「すっかり滲んで読めないけど、見たところ九桁前後の報酬が約束されていたらしい。彼がこのリヴィラの街で豪勢にも宿を貸し切った事も考えれば、まず間違いない」

「ふむ。つまり、色仕掛けをする事で、羽振りの良い冒険者を探したと?」

「ノー…。それだとまだ不確定要素が多すぎるな。狙えるのは一人きりだったろうし」

ダンジョン内の中継点であるリヴィラの街を訪れる冒険者は多い。その中からたった一人を狙い撃つ手段としては、あまりに大雑把すぎる。

「むしろ、ここまでの道中であらかじめ見当をつけていて、それを確認した、と言ったところじゃないかな」

あの『色仕掛け』は最後の確認程度…。それと、精々がより殺しやすい状況を整えるためのものだったのではないだろうか。

「なるほど。そちらの方がそれらしいか。だが、予定外の事が起こった」

「ああ。ハシャーナは肝心の物を持っていなかった。それで、あの有様さ」

引き裂かれた鞆を、愛用の槍で指し示す。

「となると、その『何か』は今もこの街のどこかに隠されている。それとも別の運び屋が

いるという事になるだろうけど……」

クオン自身がその運び屋なのかもしれない。

「もしくは彼女以外にもそれを狙っていた輩がいたか、と言ったところかな」

いや、そのまだ見ぬ『強奪者』の方だろうか。

(まあ、被害者が『ガネーシャ・ファミリア』の団員だつていうのが気になるけどね)

何かしら考え込むクオンを見やり、気づかれないように息を吐く。

「首に関してだが。一つ思いついた事がある」

不意に、クオンが口を開いた。

そのまま彼は、遺体の『頭』を覆う白布を取り払った。

予想通りの凄惨な光景に思わず呻くが、彼は気にもせずその『遺体』を腑分けする。

「やはりな」

「どうかしたかい？」

「足りない」

「……何がだい？」

脳漿も頭蓋もぐちゃませになつたそれを見やる彼の真意を掴みかねた。

「時にL v. 4の冒険者と言えばそれなりに名が通っているだろう？」

しかし、それには応じず彼は再び布を被せる。

そして、僅かな時間祈るような仕草をしてからそんな事を問いかけてきた。

「ああ。【ガネーシヤ・ファミア】の【剛拳闘士】ハシャーナ・ドルリア。実力派の冒険者だつていう噂くらいは知っているよ」

これでも僕はロキと共に【ロキ・ファミア】を預かる身だ。大派閥に所属する有力な冒険者くらいは把握しておかねばならない。

もちろん、治安維持を受け持つ【ガネーシヤ・ファミア】と派閥抗争に陥るなど、よほどのことがない限りあり得ないだろうが……何が起こるか分からないのがダンジョンであり、派閥間の付き合いでもある。

「なら、ハシャーナの人相を知っているか？」

「人相？ まさか、君は……！」

足りない。その言葉の真意をその瞬間に悟った。

脳裏に焼き付いた『惨状』を改めて思い浮かべれば、確かに足りない。

以前、ゴライアスの拳の直撃を受け、体中を潰されて死んだ冒険者を見た事がある。その時の遺体は、粉々になった骨とぐちゃぐちゃになった臓腑が詰まった『革袋』となつていた。だが、

「死体の皮を被る。そういう魔術があつても俺は驚かないが、お前はと思う？」

あの白布の下にある『惨状』の中にその『皮膚』はなかった。

あるいは、痲癩を起して頭を叩き潰したのではなく——
(皮膚を奪った事を隠ぺいするために、あえて潰した?)

そう言えば、『記憶の世界』から追い出される直前に聞こえたのは、頭蓋を叩き潰す音ではなかったはず——

「……一体、どこからそういう発想が出てくるんだい?」

首を振り、それを追い払ってから嘆息交じりに問いかけた。

状況からして、あの女が持ち去ったとしか考えられない。あえて持ち去ったなら、何か使い道があったのだろう。

それなら、クオンの発想も決して突飛だとは言い難い……とは思いますが、果たして僕だけだったならその発想に至れただろうか。

今一つ確信はなく、そんな自分を恥じればいいのか誇ればいいのかも判断しかねた。

「別に驚く事か? 魔術の開祖は人体実験大好きなあの禿竜だぞ?」

「……残念だけど、その言葉の意味からして僕にはよく分からないよ」
ただ、分かった事もある。

魔法の開祖はドラゴンなのか?——なんて聞いたら、リヴェリア^エ達に締め上げられるに違いない。

リヴェイラの街の広場には、思った以上に多くの冒険者が集まっていた。

当面は女。特に赤髪の女。とはいえ、髪の色は誤魔化す手段もある。全員を身体検査しなければならぬのは避けて通れない——と、まあボールスは主張した訳だが。

「随分とモテるんだな。さすがは高位の冒険者様だ」

その結果、つい先ほどまで身体検査を希望する女冒険者達にもみくちやにされていた金髪の小人に笑いかけてやる。

「助けてくれても良かったんだけどね……」

げんなりとした様子で、その小人は呻いた。

どうやら胸のでかい方の褐色小娘は、この男に本気でホの字らしく、群がる女冒険者達を一通り蹴散らした後で、リヴェイラと一緒に身体検査に勤しんでいる。

もちろん、その様子が見える訳もない。広間に建てられた急ごしらえの幕舎に出入りするのが見えるだけだ。

「まあ、それはともかく。これで餌を撒いた訳だけど……」

「ああ。何が釣れるかな」

女冒険者を集めた裏では、『黒い鉄兜を被った』何者かを探している。

……俺達が、ではなく胸の無い方の褐色小娘が。あの眼帯の男の腹心と宿の主の青年

をつれて駆け回っている。

一応隠密で、とは言つてあるそうだが……まあ、無理な注文だったのだろう。

だが、

「適材適所、だな」

「まあね」

彼女こそが第二の餌だ。これであの女は兜を被つてはいられなくなる。

第一の餌はもちろん広場の騒ぎだ。

何しろ、質素な造りの幕舎の向こう側で女性陣が身体検査を受けているのだ。眼帯の男が睨みを利かせずとも、男どもも簡単には離れまい。見えるわけもないが……まあ、馬鹿な男の哀しい性だ。

そして、俺達は街を一望できるちよつとした高台に陣取っている。流石に全域をくまなくとはいかないが、広場と街の出口——さらに、地上に繋がる道は確認できる。

「やれやれ。これは夕飯時までには帰れそうにないな」

しかし、肝心の獲物はなかなか罠にかからない。

「おや？ 食料の手持ちがないのかい？」

「いや、そうじゃない。ただ、世話になつて連中が腹を空かせてる可能性があるだけだ。何しろお前達と違つて稼ぎが少なくてね」

「君が少ないなら、僕らはみんな大赤字だよ」

いや、ベルはまだL.V. 1で、他の団員はいないんだが——とは、あえて言わなかったが。

何かの弾みで逆恨みされても面倒だ。

とはいえ、確かにもうベルが一日休んだくらいで貧窮するような状態ではないはずだ。

ただ、エイナと何をしに行ったかによつては多少変動する可能性はあった。

(無難なところだと、防具でも買いに行ったか)

ベルは七階層進出を望んでいる。それを踏まえて、あの才女ならその辺りを気にするだろうという漠然とした予想でしかないが。

「まあ、いくら残してきているからしばらく問題はないだろうかな」

そうこうしているうちに、いよいよ天井の水晶の輝きが弱くなり始め——

「まずは一匹かかったようだよ」

ようやく獲物がかかったらしい。貸していた遠眼鏡を小人が渡してくる。

「なるほど……。どうやらあれが『運び屋』らしいな」

「そうだろうね。あの赤髪の女よりは、ずいぶん小柄だ」

小柄な人影——隣の小男と同じ種族か。それとも獣人なのか。いずれにしてもあの

赤毛の女よりずいぶんと小柄だ。ついでに、体つきも華奢である。

おそらく、あれがルルネとやらだろう。そう言えば種族は犬シアンスローブ人と言っていたか。

「アイズとレフイーヤだけで問題なきさそうだね」

それに気づき、小人の手下も動き始める。

追ったのは、金髪小娘と山吹小娘か。まあ、あの金髪小娘がいれば大体の人間は脅威にならないだろう。

「ああ。別に本命でもないしな」

と、もう一度遠眼鏡を小人に放って渡す。

あの『運び屋』には悪いが、もう少し困になつてもらおうとしよう。

「シー……。それで本命は、つと」

眩きながら、小人が遠眼鏡を操作する。

それからしばらくして。

「動いた。向こうも『運び屋』の存在に気づいたらしい」

その声は少し硬い。

「参ったな。本当に男の顔をしているよ。……包帯で固定しているだけみたいだけだね」

「魔術じゃない、ということか。それはある意味想像以上だな」

皮を剥がしてそのまま被るとは、なかなか猟奇的な趣味だ。

「さて、それじゃ行こうか。デートのお誘いをしに、ね」

「二人かかりですか？ 良い趣味だな」

「それほど」

軽口を言い合ってから、その丘を滑り降りた。

「――」

手に火を宿し、【敵意の察知】を口ずさむ。

赤く淡い燐光がふわりと漂い始めた。どうやら戦闘が始まったらしい。

「それは？」

「敵意を持つ相手を探ってくれる奇跡だ。ま、一番近くにいる相手にしか反応しないから、使いどころを見極める必要もあるがな」

「それでも便利そうだね。ところで、一体いくつ魔法を使えるだい？」

それを追って走っていると、小男が言った。

「呪術、魔術、奇跡。一通りは使える。生憎と手段を選んでいる余裕はなくてね」

それに闘術も、だが。

「……何だつて？」

その問いかけに答えている暇はない。すでに戦闘音が聞こえてきている。

「派手にやっているようだ」

「ああ」

身体に添ったスーツを纏い、大剣を振るう赤毛の女。

対峙するのはベルの想い人。その背後には蜂蜜色の髪をした少女と、『運び屋』らしき少女。おそらく、ルルネ・ルイー本人だ。

「どっちの相手をしたい？」

「僕はうちのお姫様たちを助けに行くよ」

「なら、俺はあの赤髪の女だ」

最後のやり取りを交わして、戦場に突貫した。

「チー！」

予定通り、赤髪の女に斬りかかる。

思ったより反応がいい。こちらの攻撃が凌がれるどころか、斬り返される始末だ。盾で受けながら、強引に押し返す。ひとまず、背後の連中から引き離さなければ。

「よう、綺麗なお嬢さん。いい夜だな」

強引に押し返してから、声をかける。

あながち冗談でもないつもりだ。

天井を埋め尽くすクリスタルは光を失っている。だが、地上の明かりを反射している

のか、満天の星空のように微かな煌きを宿してもいた。

相変わらず、見事な光景だと言っていていいだろう。

「何者だ？」

目前にいる女も実に魅力的だった。

蠶のような紅の髪。獣のような緑の瞳。ゾツとするほど整った顔立ちに、女らしい曲線を描く艶めかしい身体は指先までほっそりとしているが……その裏に強靭さを秘めているのは明らかである。美女で野獣とは、実に刺激的だと言えよう。

これでは、ハシヤーナが美人局に引つかかったのも致し方ない。

「さて、何者かな。興味があるならどうだろう。一晩付き合わないか？」

おそらく、彼女がフェルズやリド達が口にする『番人』なのだろう。

「生憎と興味はない」

どんな怪物かと思っていたが、いやはやこんな美人だったとは。

どうせなら四年前にも会っておきたかった。

「それは残念だ」

女が動く。鋭いが——それでも、まだオツタルほどではない。

しかし、

「何………？」

片腕を切断するつもりの一撃は——しかし、思ったように刃が通らなかつた。
「死ぬ」

痛みすら感じない様子で、女が脳天に大剣を振り下ろしてくる。
盾で受けつつ、いったん間合いを開いた。

「丈夫なんだな」

加減したのは確かだが……まるでゴーレムにでも斬りつけたような気分だ。

いや、流石にあれよりは柔らかいだろうが——何しろ、見た目との差が激しい。
「フン。……貴様には少し興味が湧いたぞ」

血の滴る傷を舌で舐め上げながら、女が言った。

「それは嬉しいね」

もつとも、油断すればハシヤーナの二の舞だろう。

流石に死にはしないだろうが……どのみち、小人どもに見られては面倒な事になる。
「……まずは邪魔者を始末するか」

女が指笛を鳴らす——と、地面が揺れた。

ワイオラス
「食人花ども。蹂躪しろ」

あの蛇もどきどもも生えてくる。いや、それはいいのだが——

「何て数だ……」

背後で小人が呻いた。二〇……いや、それ以上か。

「マズいな。このままだとリヴィラが陥落する」

それは間違いなさそうだ。連中にとっては、不意を突かれたにも程がある。

「余所見をしている場合か？」

女の大剣が迫る。盾で受け、切っ先を突き出す。

その反応速度は正に獣じみている。しかも、防御力まで高い。

(見た目は柔らかそうなんだがな)

などと、余計な事を考えている暇はなさそうだ。

足元を突き破って、新しい雑草どもが生えてくる。のたうつそいつらを掻い潜って、

女に接近した。まずは飼い主から仕留める。

この女を仕留めてから、雑草を駆除しなければならない。

「くう——!？」

両手でクレイモアを握り、身体ごと捻る横薙ぎの一閃。

剣に拒まれ直撃はしなかった……が、関係ない。このまま力尽くで押し潰す。

「貴様……。Lv. 6の冒険者か？」

ギリギリで飛び退いて見せてから、その女が毒づいた。

「いいや、ただのLv. 0だ」

「ぬかせ！」

動きが読めてきた。小技は用いず、ただ一撃必殺を求める剛剣といたところか。

だが、その割にはまだ筋力が足りない。アルトリウス……いや、いつか見たドラングレイグの守護者ドラモンドの剛剣にも――

「残念だ」

いや、オツタルにもまだ届きはしない。

力任せに振り下ろされた大剣を掻い潜り、クレイモアの切っ先を突き上げる。

「がは……ッ!？」

女の腹筋に阻まれ、貫通まではしない。

まったく、驚くべき丈夫さだ。それだけならあの男以上か。

左手に鎚——禍々しい《トゲ棍棒》を。こめかみを狙って振り下ろす。

「馬鹿にするなああああ！」

元気な事だ。並みの亡者だったら頭が無くなっているはずだというのに。

武器を大槌——《大竜牙》に切り替える。

両手で構えたそれをそのまま地面に叩きつけた。無論、途中で立つ女ごと。

「ぐ……あ」

軽く地面にめり込みながら、それでもその女は生きていた。

まったく、鎧一つ纏っていないのに驚くほどの頑丈さだ。

(人食いミルドレッドだつてここまででたらめじゃないぞ……)

転がっていた女の大剣を適当に蹴り飛ばしてから、ため息をつく。

あの人肉料理人も半裸のくせして大概丈夫だったが……あれは上手く防いでいるだけで、クレイモアの切っ先を突き刺しても貫通しないなんてでたらめな身体ではなかった。

「お、のれ……っ!」

まだ意識があるらしい。いやはや、本当に驚くばかりだ。

「さて、と。それじゃお嬢さん。少し話をしようか?」

「殺し、て……やる。殺してやるぞ……ッ!」

身動きも取れないくせに、その眼には未だ苛烈なまでの殺意が宿っている。

驚くべき丈夫さだ。

「ならばベッドにでも行こうか? 腹上死なら大歓迎だからな」

今まで散々死んできた俺だが、それは未だに経験のない『死に方』だった。

せっかくの不死人だ。一度くらい経験してみるのも悪くないだろう。

と、冗談はともかく。

(仕方ない。あの女の真似でもしてみるか)

どのみち、この類の相手の口を力尽くで割らせるのは不可能だ。ならば、搦め手を用いるしかないだろう。

「相変わらずとんでもないね、君は。仮にもアイズをあそこまで追い詰めた相手だっていうのに……」

赤髪の女の殺気が一段と濃くなる中、金髪の小人が近づいてきた。

傍らには山吹色の髪の少女に肩を借りた金髪小娘。そして、その隣には獣人の少女。「そいつはどうも。……ところで、かわいい耳のお嬢さん。君はハシヤーナ・ドルリアから何か預かっていないか？ あとで『蜂蜜入りのワイン』を一杯奢るからさ」

フェルズから教わった符号。それが『蜂蜜入りのワイン』だった。

……ひよつとして、フェルズの好物だったりするのだろうか。なら、今度差し入れてやろう。いや、そもそもあいつはあんな身体で味が分かったりするのだろうか？

「うえ?! ええと……!」

ともあれ、この様子ならこの娘が『運び屋』と見て間違いなさそうだ。

「あ、あの! 持ち逃げしようとした訳じゃなくて……!」

「ああ。この女から逃げ回っていたんだらう?」

「う、うん」

俺としては物さえ回収できればそれでいい。

彼女の言葉が事実かどうかはこの際置いておくとしよう。

「チツ……!」

瀕死だったはずの女が今さら毒づいた。

「そこにあつたか……!」

「マズ——!」

山吹色の髪をした少女が下げた鞆から魔力がにじみ出る。

いや、鞆の蓋をこじ開けて何かが飛び出してくる。

(確かにあの『宝玉』だな……)

一抱え程の水晶球の中に異形の胎児が宿った水晶球。

四年前に見かけている。そして、一度見ればそう忘れる物でもない。

いや、もう胎児とは言えないか。

目覚めた『それ』は、見る間に膨れ上がり、内側から水晶を砕き——

「何だつて……?」

飛び出しては、近くの雑草に飛びつき、それを変容させた。

『オオオオオオオオ!』

雑草のなれの果て。顔のない女のような化物が薄気味悪い咆哮を上げる。

(なるほど、あの『尖兵』が出現する絡繰りはこういうものか)

既存のモンスターを変容させているとは。

(となると、地上にあの雑草どもを連れ出しているのは——)

これをさせるためだろうか？　だとするなら——

「これはまた面倒な——」

事になりそうだ——と、呻く途中で、血の塊が喉を塞いだ。

短剣が腹を貫いている。どうやら、獣人の少女の装備を奪ったらしい。

「つくづく丈夫な奴だ……！」

血の塊を吐き捨て、毒づいた。

油断した。まさかこの短時間で動けるようになるとは。

(やはり、ただの人間ではないか……！)

その体は微かに霧にも似た燐光を纏っている。

それによって、身体の傷が癒えていくのが見て取れた。

だが、

(真つ当ではないのはお互い様だ)

こちらはまだ戦える。この程度なら不死人の『致命傷』にはまだ遠い。

「死ねッ！」

ダメージは無視して、両手に構えたクレイモアを振るう。

それでも女は受け止めたが——ナイフの方が耐えきれなかった。鏢止めが吹き飛ぶ。
「チー！」

武器を失った女は、少なからずふらつきながら——しかし、それでも死にかけていたとは思えないほどの素早さで間合いを開く。

その隙にエスト瓶を取り出して中身を一口呷る。それで、傷はおおよそ完治した。

まだ多少ソウルが滲んでいるが、戦闘には支障ない。

「なるほど。貴様が『亡者の王』か……」

「何だと……?」

こうして『番人』と顔を合わせるのは初めてのはずだが。

それとも、デーモンの飼い主と繋がりがあるのか。

(しかし、『亡者の王』だと……?)

流石に『火の篡奪者』を意味する称号なまえで呼ばれるのは心外だった。

いや、そもそもそれを一体どこで——

「ならば、流石に分が悪いか」

聞くべき事は増えたが……その間にも、雑草どもを盾にして女は後退していく。

「[Anima mea, Sive Quantum RMN]」

もはや、加減はしてられない。

左手に火を宿し、古き黄金の国の言葉で詠唱を紡ぐ。

その名を「ソウルの大きな共鳴」。膨大な量のソウルを取り込み膨れ上がった闇は、立ちふさがる雑草どもをまとめて飲み込み消滅させる――

「逃がしたか……」

が、しかし。

女の物と思しきソウルは体内に宿らない。仕留め損ねたらしい。

(……最初から殺さず捕らえようなどと思うべきではなかったか)

やはり慣れない事はすべきではないという事か。

いや、そもそもここで目覚めてから標的を仕留め損ねてばかりだ。

妙な癖がついていなければいいが。

「ハシヤーナは死に『宝玉』もあの様じゃ、本気で依頼は失敗だな……」

「彼女はひとまず置いておこう。まず、あれをどうにかしないと……」

呻いていると、金髪の小人が槍を構えたまま言った。

視線の先には『宝玉』を取り込んだ――いや、『宝玉』に取り憑かれたモンスター。

それと未だ蠢く蛇もどきども。確か食人花ヴィオラスとか呼んでいたか。

「仕方ないな」

金髪小娘ベルの想い人に肩を貸す獣人の少女に視線を向ける。

あの亡者の手下とは言え、せめて彼女だけでも生還させねば立つ瀬がない。

「ところで傷は？」

「問題ない。大体治っている」

「それは結構。いいポーシオンを持っていたようだね。いや、エリクサーかな？」

当然だ。何しろ、エスト瓶は不死の秘宝なのだから。その効果なら負けはしない。

「しかし、どうしたのか……。魔石のあるのはあの上半身だろうけど」

「そのエルフのお嬢さんの魔法で……。ともいかないか」

魔力の気配に惹かれ、食人花ワイオラスどもが殺到してくるのは明らかだ。

加えて、金髪小娘は今すぐ戦える状態ではない。彼女達を守りながら、となると少し

ばかり面倒だ。

と、なるこここは——

「リヴェリアと合流するのが一番手っ取り早いんじゃないか？」

広場に戻れば、リヴェリア以外にも冒険者が集まっている。どれほどの戦闘能力があるかは定かではないが、それでもいらないよりはマシだ。少なくとも盾にはなる。

「それはいいね。採用しよう」

盾が揃うなら、詠唱のための時間も確保できる。

ここで小人と二人、お姫様方を守りながら孤軍奮闘するよりよほど勝算があった。

武器を《グンタの斧槍》に切り替え、さらに炎を宿す。

「使え」

ついでに、小人に『灰松脂』を放ってやる。

何であれ、この雑草どもには火が有効だ。

「これは？」

「武器に塗り込んでみれば分かる」

「マジックアイテム、か……。見た事はないものだけど、これはいいな」

炎を纏った槍を見て、小人が小さく笑った。

「一気に突っ込む。お姫様方の道を確保するぞ」

「もちろん」

打撃では分が悪いが、炎と刃があればどうにでもなる相手だ。

小人の動きは流石に悪くない。この相手なら充分に戦力としてあてになる。

「リヴェリア！」

「フィンか！」

強引に敵陣を切り開き、一気に駆け戻った広場では、すでに隊列を組んだ冒険者達がモンスターと交戦していた。さすがはリヴェリア。見事な采配だ。

(こういう合戦はドラングレイグ……。巨人達の『記憶の世界』以来か)

一体多数ならロスリックでもいくらか経験しているが、集団同士の戦闘はあれ以来だ。

あまり経験がない。少なくとも、味方を巻き込まないようにしなければ。

「アイズ、どうしたの?!」

などと思っていると、胸の無い方の褐色小娘が悲鳴にも似た声を上げる。

「まさかあんた……!?!」

「だったら、仲良く戻ってくるものか」

地面から生えて来る雑草どもをまとめて両断しながら、胸のある方に言い返す。

「やはりあの親玉を仕留めない限り湧いてくるか……」

面倒な相手だ。

「しかし、近づくのには少し手間がかかりそうだね」

「だが、このまま守りを固めるのは明らかかな下策だろう?」

「分かっている。リヴェリア、レフイーヤ」

「任せておけ……と、言いたいのが——」

リヴェリアが呻くと同時に、さらなる来客が天井から降ってきた。

「牛頭のデーモン……」

しかも、またあの『歪み』だ。どうやら、本当に深淵に連なる何者かが裏で糸を引い

ているらしい。

「またあいつなの!?!」

「おいフィン! あいつら何だつてんだ!?!」

胸のある方の褐色小娘が怒鳴ると同時、眼帯の男が駆け寄ってくる。

「さあ? あつちの蛸みたいなのは新種。あの牛頭はデーモンつて存在らしいよ」

言いながら、小人こちらに視線を寄こす。

「デーモンだあ? そつちも新種じゃねえのかよ」

しかし、幸いにして眼帯の男はそれに気づかないまま小人に詰め寄った。

「まあ、それは否定しないけど。いずれにしても倒さないとならない相手だ」

「簡単に言いやがる。勝算はあるだろうな?」

「デーモンの方は少し厄介だけど、ね」

「おいおい冗談じゃねえぞ!?! テメエんとこの第一級冒険者が揃つてんだろが!?!」

言い合う男どもはひとまず放つておいて。

「いつそ同士討ちしてくれないものか……」

ソウルの量なら冒険者よりあの花女の方が遥かに多いはずだ。

花女——いや、小人に合わせて蛸女とでも呼ぶべきか——と、デーモンとで潰しあつ

てくれればそれが一番楽なのだが……。

「残念ながら、そう上手くはいかないようだな」

「ああ。……デーモンどもに選んで殺すような知恵があつたのか？」

リヴェリアの言葉に、肩をすくめる。

明らかに牛頭のデーモンはこちらに向かつてくる。

ああいや、

（そうか。俺を狙っているのか？）

ソウルの流れこそ凝っているが、量そのものが減った訳でもない。

この場にある一番大きなソウルの気配は、確かに俺か。

「俺がデーモンを引き受ける。花女は任せていいか？」

嘆息してから、リヴェリアに問いかける。

「仕方あるまい。だが、行けるか？」

雑草どもはデーモンを守るように生えてきている。

どうにも解せない。例えば俺を狙っているとはいえ、同類でもないあの雑草を全く無視

する事が果たしてあり得るのか。

（いや、考えていても仕方がないか）

どのみち、連中を始末しなければ、こちらが殺されるだけだ。

「やってみるさ」

ならば、出し惜しみはできない。

覚悟を決めて、切り札の一つを取り出した。

「おい、イレギュラー【正体不明】!! 今どっからそのクソでけえ剣取り出しやがった?!」

それは古竜を討った証。その力の一端が宿るドラゴンウエポン。

銘をして《竜の大曲剣》。両手で構え、それに眠る力を解き放つ。

「邪魔をするな!」

古竜の力。その一端が嵐の如く吹き荒れる。

ただの蠢く雑草どもなど、何の問題にもならない。

「しかも魔剣だとおっ!」

それでもしつこく生えて来る雑草どもをまとめて大曲剣で両断しながら、牛頭のデーモンへ一気に詰め寄る。

『——オ!』

大斧が振るわれる。それを剣で受け止めて——踏ん張り切れずに後退させられた。思わず舌打ちする。

この力はデーモン遺跡にうろついている輩に匹敵する……とまでは流石に言わないが。

しかし、少なくとも、怪物祭で相手にしたそれよりも強大な力を有しているのは間違

いなかった。

仮にこれが地上に現れていたなら、金髪小娘とその仲間達の中にも一人や二人の死人が出ていただろう。

(こいつら、成長している……?)

だとすれば、こいつらは一体どこでどれだけソウルを取り込んだというのか。

冒険者を喰らっただけでこれほどになるとは思えない。何しろそのソウルの量はただの人と比べて、決して多すぎはしないのだ。それだけを糧に成長したとするなら、甚大な被害が出ているはず。

ならば、噂の一つにもなっていないなければおかしい。

(六〇階層以降で、モンスターを喰らっていた……?)

いや、四年前もついでこの前も、デーモンらしき存在は見えていない。

見かけていれば、流石に無視はしなかった。

もつとも、俺とて六〇階層以下の全容を把握している訳ではない。

足を運ばなかった領域にいた可能性もあるが――

「チツ！」

振り下ろされた大斧を、大曲剣で受けながら毒づいた。

疑問は尽きないが、まずは目の前の牛頭のデーモンをどうにかしなければ。

流石に方々から雑草が突き出て来るこの状況で、このデーモン相手に乱戦するのは少しばかり厳しい。

「鬱陶しい……！」

再び古竜の力を解き放ち、デーモンもろとも周りの雑草を薙ぎ払う。

しかし、焦ってはならない。多少弱体化していたところで、デーモンの力が尋常ではない事には変わりはないのだ。それこそ、油断すれば神々でさえ容易く殺される。

今の俺では、わざわざ油断などしなくとも、単純な力量差だけで殺されかねない。

「――」

武器を切り替える。左手には《竜紋章の盾》を。

右手には大剣――使い慣れた大剣の形をしたドラゴンウエポンを携える。

あの恐るべき黒竜カラムिटドより生じた《黒竜の大剣》。

同じくドラゴンウエポンである《飛竜の剣》にも似た形状をした漆黒の大剣。

その切れ味は凡百の名剣など軽々と凌駕する。……無論、使いこなせばだが。

大斧を掻い潜り、刃を走らせる。武器にはまったく問題ない。

あとは、殺される前に殺せるかどうかだ。

『ガァ――！』

デーモンが雄たけびと共に跳躍した。

叩きつけられる大斧を避け、代わりに横腹を斬り裂いてやる。

これ以上時間などかけるつもりはない。振り向きざまに、片腕を斬り飛ばすつもりで剣を振るう——が、そこはデーモン。流石に両断には届かない。

舌打ちと共に、一度間合いを開いた。

改めて大剣を構える。刀身を肩と水平に構える八相に似た型。

『オオ——！』

裂けた腕などものともせず、両腕で大斧を振り上げ、デーモンが突進してくる。

それを真っ向から迎え撃つ。振り下ろされる大斧をギリギリで避け、勢いを殺さぬまま大剣を突き立てた。

「黒竜よ——」

その大剣に宿る竜の力——黒竜の炎を呼び覚ます。

深々と突き立つ黒曜の刀身が業火に包まれる。

それは古竜の炎だ。如何なデーモンといえどただでは済まない。

「——吼えろ！」

ましてそれが、アノール・ Rond ですら手を焼いた生粋の凶竜のものであれば。

その力はデーモンを焼き尽くすには充分すぎる。

『——オ！』

しかし、デーモンとて神すら脅かす厄災の権化。

ただその程度で斃れるはずもない。

体を内側から焼かれ——それでも、デーモンは大斧を振り回す。

最期の悪あがき——ではない。

「何……!?!」

デーモンの身体を食い破ってタールのような何かが蠢く。

蛇のようになったそれは、それ自体に意思があるかのようにのたうち襲い掛かる。

(人の膿だと……!?!)

あり得ない。これは『深み』あるいは『深淵』と呼ばれるものの一種。つまりは『闇のソウル』に由来する厄災のはずだ。それが『混沌の炎』を祖とするデーモンから生じるなどと——

(ああいや、ロスリックの飛竜からも生じたか……)

しかし、あれは飛竜から生じたというより、飛竜に取り憑いていたというべきだ。

……いや、古竜の末裔に取り憑けるならデーモンにも可能なのか。

(そうなると、やはりあの『歪み』は——)

しかし、それを考えている暇もなさそうだった。

のたうつ膿に加え、デーモン自体の動きも止まった訳ではない。むしろ、ついに見境を無くし、でたらめに暴れまわる。

迫る大斧や膿を掻い潜り、または盾で弾き、いったん仕切り直しを図る。

刀身は未だ黒竜の炎に包まれている。まともに当てられるなら、人の膿だろうがデーモンだろうが問題にはならない。

両手で構え、一気に間合いを詰める。

模倣すべきは『狼の剣技』英雄の剣戟。

横薙ぎの一撃で行く手を阻む膿を払いのける。

足元から生えて来る雑草を足場にして跳躍。空中で身体を捻り——あらゆる力を刀身に宿してデーモンの脳天に叩きつける。

黒竜の炎まで加わったその一撃は膿もろともにデーモンを両断し、焼き払った。

「やはり、か……」

身体に宿るソウルの量は、先日得たそれよりも遥かに多い。

(どうにも妙な事になっているな……)

輝きを失った水晶に埋め尽くされた天井を見やる。

デーモンを吐き出したあの『歪み』はずでにない。

『暗い穴』といいデーモンといい……。どうやら『火の時代』の名残りが未だ健在だと

いうのは間違いなさそうだな)

あるいは亡霊、だろうか。

最初の火が消えた時代。この『闇の時代』を呪う何者か。あるいは、総てを裏切った俺を呪う何者か。そういつたものが裏で糸を引いているのか。

(亡霊か……)

だとすれば皮肉な話だ。『火の時代』の亡霊なら、その最たるものが俺自身だ。

もはや最初の火もなく、時代すら変わった。しかし、それでも不死の呪いに囚われている——いや、更なる変容を遂げた得体のしれないこの身体。

「今は雑草どもを始末するか……」

未だにあの花女は薄気味悪い叫び声をあげ、雑草どもはそこら中から生えて来る。

(いや、あれが本体でこれはただの触手か)

ともあれ。連中を一掃しない事には暢気に考え事をしている暇もなさそうだった。

第二節 白髭と■■■の羊

1

「ほう……。ようやく戻ったか」

一八階層。ならずのもの街リヴィラを見やり、小さく呟いた。

デーモンと対峙するのは黒衣を纏う戦士。懐かしき亡者だった。

「そのようですが……。さて、首尾はどうだったのでしょうか？」

傍らの賢者が問いかけて来る。

「さてな。新たな王を見つけたか、それとも……」

見切りをつけたか。いずれにせよ、これで再び因果は動こう。

「我らが王はあなたと、グラットだけです」

傍らの猛将が告げる。

だけ、と言いつつもそこで王を二人上げるあたりが、この者達らしい。

この者たちでなければ不敬だと言うところだが……。この者たちの場合は、どこまでも

真摯だから扱いに困る。

(しかし、狂人と恐れられたこの私が、な……)

研究の果て、狂気に堕ちては共に研究を続けた学徒達さえ手にかけて自分が、今さらこのように純粋な信頼を寄せられるとは。もう二〇年も経つというのに、未だにむず痒い。

しかし、今ではそれに真摯に応じようと思う私もいる。どうやら、二〇年の間に自分でも驚くほど丸くなっていったらしい。

「しかし、奴が戻ったならいざれ連中も動き出そう。無論、地上に巣くう亡者共もな」

この穴倉に蠢く闇も。地上で暗躍する神の亡者も。いずれはあの亡者を求め始める。

「我らの怨敵を、あの男であれば討ち滅ぼせると？」

拳を握り締めた猛将が、血でも吐くような声で行った。

「無論。あの亡者……いや、あの灰が、腑抜けた人間と腐り果てた神共の手に負えるものかよ。あれはな、三度に渡り玉座に至った本物の怪物。神も竜も王も悉く殺して除けた生粋の殺戮者よ」

果ては火すら消し、時代まで殺して見せた。

名を禁じられた神々の王——かつて『大きなソウル』……否『王のソウル』を見出だした大王グヴィンが恐れた唯一真なる「闇の王」そのものだ。

今、地上を跋扈する神気取りの亡者どもの手に負えるものか。

「確かに。あの悍ましいデーモンを単独で討てる人間など、そういるものではありません

まへ」

影が蠢く。

「して、我らが主よ。これからいかなされるおつもりか？」

「さて、どうしたのか……」

懸念は、ある。

「まずは手並みを拝見、といったところか」

ドラングレイグで出会った時より、やはりソウルの力が弱い。

いや、凝つてでもいるらしい。四年前にも手を尽くしたが、今も解消できていない。

(もう一度奴と接触させれば、あるいは……)

しかし、あれをもう一度睨ける術はない。いや、あったとしても現状では動かせない。

やはり、直接接触するしかないだろう。

多少ならず危険だが、今はあの灰に在りし日の力を取り戻させる事こそが最優先だ。

いや、それ以前の懸念もあるが……さて、そちらはどうしたものか。

「で、なければ貴様らも納得しないであろう？」

しかし、何であれこのままでは役に立たない。

この者達にも誇りがある。

あの灰には、その上で納得させるに値するだけの力を、今一度見せてもらわねばなら

ない。

「問題はその相手だが。さて、一体どこに嫉けたものか……」

相手の質を求めらるなら、「ロキ・ファミリア」とやらか「フレイヤ・ファミリア」とやらだが……。

（あの連中を押しつける相手がいなくなつては面倒か）

どちらか片方でも残つていれば充分——とも言い難い。

この『時代』の人間にとつて、あれは充分な強敵だ。あるいは『火の時代』の脅威に迫るやもしれない。と、なれば駒は多い方がよい。

（しかし、他となると……）

他の大手となると「ガネーシャ・ファミリア」だが——ここはすでにあの灰と良好な関係を築いている。下手に騙しては、こちらが殺される事にならう。

「我らが主よ……」

傍らの影が言った。

「僭越ながら、これを理由とするのがよろしいかと……」

差し出されたのは妖しく輝く石。これは私側の……つまりは狂人の産物。

無論、この石を作ったのは私ではない。これとて試作品ではあろうが——それでも、私であれば、もう少し上手く仕上げられる。

「これの『作り方』を伝えるというのはいかがでしょうか？」

「なるほど、な」

これはソウルを扱う邪法だ。まして、これを誰が必要としているかを知れば、おそらくあの男もその気になろう。

「確かあのハイエナめが、どこぞの女に貢ぐつもりで探しているはずだな？」
「御意」

あれは亡者の中でも特に目障りだ。始末するなら早い方がよい。

「ならば、奴らに踊ってもらおうとしようか」

一人二人仲介人を用意し、あのハイエナに渡す。

そして、何食わぬ顔であの灰にそれを伝えればよい。あとは何をせずとも、あの灰は連中を殺し尽くす。

「で、あればさっそく私が——」

「いや、私が行こう。何しろ懐かしい顔だ。直々に挨拶するのも悪くはない」

「御意」

最後に揺らめくと、影は沈黙した。

「さて。これで彼奴らも動こう」

「古き時代の『英雄』、ですか？」

「うむ。互いに縁のある相手よ。あの男の名を出せば、彼奴とて否とは言うまい」

あれを動かせるなら、連中を迎え撃つにも大きく有利となる。

傍らの猛将は勇猛だが、戦場での駆け引きは不向きだ——が、彼奴であれば話は変わろう。

何しろ最古の闘争を制した英傑の一人。武勇知勇ともに極まっている。

(いや、武勇だけでも事足りるかもしれない)

何しろ彼奴は本物だ。いくらあれに敗れ、その果てに力の多くを失った今であっても、その力は今いる脆弱な冒険者共の比ではない。

まして腐り果てた今の神どもなど何の問題にもなりはしない。

(……もつとも、私とは相性が悪かろうが)

高潔な騎士と狂人とは致し方ない。

しかし、利害は一致している。それに反しない限りは敵対する事もあるまい。

「時に、件の『抜け穴』についてはいかがいたしますか?」

賢者が問いかけてくる。

「無論、そこは押さえない。そのためにも彼奴の助力が必要となる。『鍵』はまだ予備があるな?」

「はい。あの奇人程度、御身には及びせぬ」

「私は狂人だからな。片方を残した奴らの不覚よ」

己のソウルの内より、複製した『鍵』を取り出す。本来はその資格を持たぬ代物だが——要は『鍵穴』に合わせられればいい。そして、元々『似た形』ならば加工も容易い。『抜け穴』について、あの者共にはどういたしますか？ 奴らはまだ気づいていない様子。知らせてやれば、何かしらの手を打つかと」

「ふむ……。真つ当に奴らに圧力をかけられるなら、あの者共を嚇けるのが一番ではあるが……」

何しろ、そのための組織だ。しかし——

「さて。どこまで役に立つものか……」

我らが怨敵は私と同じく人ではない。ただの外道だ。

ならば、正攻法など役に立つものではない。

「連中、どうやら他の『同胞』達をあの怪人どもに嚇けたようですが……」
と、影が蠢いた。

「そのせいで『同胞』に被害が出たとも聞いております！」

影の言葉に、猛将が憤慨した様子で続ける。

「あの者共は人手が足りておらん。加えて彼奴を動かすだけの度量もない。さらにあの灰が留守にしていたのだ。その煽りを受けたのだろう。あの者共にとっては、連中の企

みも放つてはおけぬだろうからな」

たつた今あの怪人に敗れた金髪の娘は、地上における……この『時代』における最強の一角と聞いている。

それですらあの程度なら、あの連中の企みも脅威となろう。ならば、我らの『時代』より来る亡霊どもの相手など望むべくもない。

「あの者共は今しばらくは放っておく。あの灰が手を貸しているのだ。どうにでもするであろう。『抜け穴』は、まだ知らせん。あれは我らにも使い道があるからな。できれば知られずに手中に収めたい」

「確かに。あの『抜け穴』があれば同胞の悲願を叶える事も出来ますな！」

猛将が笑うが——残念ながら、事はそう単純ではない。

（あの『抜け穴』は精々が餌か砦代わりにしかならん）

この者たちが地上に出るにはまだあまりにも問題が多すぎる。

一方で、あの金髪の娘どもも『火の時代』の脅威を嚇けるには無力すぎた。最終的には共倒れしてもらおうのが理想だが……あれでは、一方的に蹂躪されるだけだ。

使い潰すにしても、それは少々惜しい。

（ならば、まだ手に負えるであろう奴らの方に嚇けるべきだ）

あの『抜け穴』はそのための餌になる。

いや、人間に知られている時点で他に使い道はない。

手に入れるのは、その『発想』だけで充分だった。

(問題は、どうやってそれに喰い付かせるかだが……)

何しろ、ごく限られた者にしか存在は知らず、無関係な者達では入るにも苦勞する。

流石に回収できた『鍵』の『材料』も有限だ。無駄にはばら撒けない。かといって、下

手に接触してはこちらに喰い付いてきかねない。これ以上煩わされるのは面倒だ。

「しかし、『亡命』ですか。確かにかの地には生き残った我らの同胞の数名が身を寄せて

はいますが。……あの方は信じられるのですか？」

賢者が問いかけてくる。

「あれは裏切り者だ。二度もあるべき場所を裏切った、な。故にこの『世界』に寄る辺のない貴様らを拒絶はしない。同類相哀れむ、とはまた違うかもしれんがな」

「ですが……」

「分かつている。あの地では貴様らの望みは叶うまい。何しろあの地は隠遁の地。この穴倉とどれほどの違いもない」

あの古き王が気を変えるなら、それもまた話が変わってくるやもしれんが。

しかし、それこそあれの矜持に関わる。あの灰以上の何かを示さねば、凡そ不可能な話だ。

生半な事では表舞台に引きずり出す事も叶うまい。

(せめてその子飼いだけなら、な……)

可能性もある。何しろ、あちらはあちらで因縁のある相手だ。

(あの様なら、あるいはそのうち勝手に痺れを切らすやもしれんな……)

デーモンを仕留めたあの灰は、まるで普通の呪われ人のようだった。

すつかり『火』が消えてしまっている。あれでは「薪の王」ですらない。

(いや、今回ばかりは助かったというべきだが、な……)

おかげで赤髪の女は無事に逃げおおせた。

別に連中に与する訳ではない。ただ、あの女が『欲しい』だけだ。あれほど丈夫なら

『素材』にするにも申し分ない。それだけでも魅力的な存在だが――

「それとは別の話か……」

つい声に出して呟いていた。

己の耳にすら届くかどうかのものだが、しかし傍らの連中の耳は誤魔化せまい。

「どうかされましたか？」

「なに。やはり何か喉けた方が良くと思ったまでよ。あんな腑抜けた様では、な……」

ようやくデーモンを仕留めた亡者を見やり、今度こそ小さく呟いた。

2

人の膿に冒されたデーモンを仕留めてからしばらくして。

リヴェリア達の活躍により、リヴェイラの街を襲う雑草どもは親玉の花女もろとも駆逐された。まだ血が猛っている者達は残党狩りに、体力が余っている者はさっそく復興作業に取り掛かっている。この辺りの強かさは流石と言うよりない。

「よう。お疲れさん」

体力は有り余っているだろうが、そのどちらにも参加していないのは小人とその手下達だけらしい。いや、顔役も広場に留まっているが。

「ああ。君もね」

そこに近づき、声をかけると小人も気楽な様子で応じた。

「あれがデーモンか。フィリア祭での出来事はアイズ達から聞いていたけど、変身までするとは知らなかったよ」

「心配するな。デーモンがああなるのは流石に俺も初めて見た」

ロスリックにおいて、デーモンはすでに絶滅寸前だった。生き残りが人の膿に冒されていたとしても、不思議だとは言えないのかもしれないが。

(しかし、まいったな。あれ、下手すればミルドレット辺りでも手こずる相手だぞ)

病み村周辺を根城にし、そこまで到達できるほどの腕を持った数多の不死人を喰らい

続けてきた人食いミルドレット。

あの半裸の人肉料理人にはソラールと二人がかりで手を焼いたものだ。

それほどに彼女の戦闘勘は尋常ではなかった。防具はぼろぼろの盾だけ。他は精々頭に被るズタ袋。体には申し訳程度のぼろ布しか纏っていないくせに、攻撃が通らないこと通らないこと。

あたり一面毒沼で、鎧の重さ分だけ俺達の方が足を取られやすかつたとはいえ、防がれ弾かれ避けられ——さらには、彼女自身は毒沼をもともせずつ突進してくる始末だ。

(そりゃ、あの足腰なら納得だがな)

人の肉とはそこまで滋養がある代物なのか。それとも日ごろの『料理』の賜物か。割と——主に下半身が——ふくよかだった彼女を思い出す。

ともあれ。その彼女であっても、さっきのデーモンには多少手を焼いただろう。

病み村までたどり着くほどの不死人を『喰える』彼女が手を焼くようでは、ただの人間にはとても手に負えない。

かく言う俺も、今回は武器に助けられたようなものだ。何しろ、もし今の俺が彼女と対峙したなら、ほぼ間違いなく喰い殺されているはずなのだから。

(デーモンどもを殺すにはソウルを奪うのが一番手つ取り早いんだが……)

黙っていてもソウルを取り込む『ダークリング』がない——のは、まあ良い事だとし

て。『ソウルの業』すら知らない人間にはただそれだけで『殺しにくい』相手だと言わざるを得ない。

(ま、例外はいるが)

しかし、目下最強のオツタルですらまだバンホルトの域には達していない。

いや、バンホルトには遠く及ばないにしても、オツタルなら倒せる可能性はまだある。何しろ身体の性能で言えば、ここで目覚めた直後の俺と大差ないのだ。あとはやり方次第という話でしかない。……が、最強でその程度なら他の連中が相手にするのは、かなり厳しいという事になる。

(まあ、数がいるから何とかなるか……?)

それこそが『火の時代』との最大の違いだと言える。

あの頃は一人が基本。精々が二人。幸運に恵まれて三人といったところか。

(名だたる『英雄』の白霊を運よく呼べた時は楽だったな)

例えばロードランにおけるタルカス然りリロイ然りビアトリス然り。……いや、格の違いを思い知らされもしたが。

ともかく。『火の時代』と比べればこの時代には多くの冒険者がいる。

だが、

(それでも限度はあるだろうがな)

被害には目を瞑るとして——それでも、どこまで対応できるものか。

あの程度ならまだしも、本物のデーモンが出てしまえばとても手に負えない。

「しかし、随分と丈夫な魔剣だね。あれだけ魔法を使ってもまだ壊れないなんて」

「魔剣？」

そういえば、結局まだ《黒竜の大剣》を携えている。さすがに使い続ければ刃も傷むが、簡単に壊れるような代物ではない。

「それだよそれ！　　そういや、最初の魔剣も何なんだ?!　　つかテメエ、あれもそれもどこに持ってやがった!？」

そう言えば、リヴィラで『ソウルの業』を見せた事はなかったか。

こういう反応も久しぶりだった。

「ああ、これか。別にこれは魔剣って訳じゃない」

四年前に武具を手入れしてもらったあの女鍛冶屋——ヘファイストスに、このオラロイにおける『魔剣』の定義を聞いている。

(要は剣の形をしたアイテムだよな)

込められた魔法を放つ事ができるが、一定回数使用すると砕け散る。また、基本的に魔術師が直に扱うものより威力は弱い——と、そういった代物だという。

ヘファイストスから教わったその定義に則れば、この《黒竜の大剣》は魔剣ではない

はずだ。無論、《竜の大曲剣》も。

俺が所持する中で一番『魔剣』に近いのは《教会守りの薄刃》だと思うが……これとて、いくら使っても壊れる事はない。しかも、魔力は自前だ。

そういう意味ではむしろ触媒に近い。

「ドラゴンウエポン。そう呼ばれる代物だ」

「ドラゴンウエポン？ ドラゴン系のモンスター素材で打たれているのかな？」

「馬鹿言うな！ いくらドラゴン系の素材を使ったってああはならねえ！ そっちの方ならまだしも、最初のデケエ剣みてえな真似は絶対に無理だ！」

「ナー……。確かに、ベートの《フロスヴィルト》みたいに特殊な力を持った武器も存在するけど、そういうのともまた違うみたいだね」

武器談議で盛り上がる二人は置いて、見回りにでも行こうと思ったのだが――

「あ、コラ逃げんじゃねえ！ 質問に答えやがれ！」

「いや、答えただろう？」

「あれだけじゃ分からねえってんだ！」

「そんな事を言われてもな……」

別に説明してやる義理もない。

「そういえば、宿で使った不思議なマジックアイテム。あれも何だったんだい？」

そして、金髪の小人も、今さらになつてそんな事を言い出す。

どうやら二人とも何としても情報を引き出したらしい。

段々と面倒になつてきた。

どのみち、このオラリオでこの類の物品が手に入る可能性は極めて低い。

古竜の生き残りがまだいるかどうかも分からない。加えて、牛頭のデーモンに手こずるようでは古竜など——いや、その血を濃く引く飛竜達にすら勝てまい。

かく言う俺自身も駆け出しの頃、ヘルカイトに散々丸焼きにされたものだ。それこそ、あそこで亡者になり果てていてもおかしくないほどに。

「遙か昔、『灰の時代』と呼ばれた頃に世界の王者だつた古竜達の生き残り。あるいはその血を濃く引く飛竜達の力を宿した希少な武具だ。『灰の霧の核』も古竜の力によつて生み出されたという意味では同じだな。もつとも、あれは貰い物だが」

何しろこれを寄こした古の竜は、ある意味においてシヤナロットの兄——ひよつとしたら姉かもしれないが——に当たる存在だ。流石に手荒な真似をする気にはならない。

「まあ、ざっくり言うなら『伝説の武器』とでも思つておけ」

「そんなもんどやつて手に入れたんでえ？」

「それはもちろん、仕留めて手に入れたに決まつてるだろう？」

無論、例外もあるが。先ほどの《竜の大曲剣》は正にそうだ。

何しろこれは記憶の世界で、すでに息絶えていた古竜の亡骸から得たものなのだから。

「竜に挑むは騎士の誉れつてな。……ま、生憎と俺は騎士なんかじゃないが」

言うだけ言うのと、さっさとそこから離れる。

留まっただけでも尋問されるだけだ。それに――

(気は進まないが……)

フェルズに連絡を入れねばならない。

そのためには、人目のない場所に行かねばならなかった。

――

念のため「見えない体」と「音消し」を続けて詠唱し、リヴィラから充分に離れる。そこでソウルから久しぶりに『眼晶』オクルスを取り出した。

『そうか。ハシャーナは……。神ガネーシャには申し訳ない事をしてしまったな』

ざっと説明すると、意気消沈した様子でフェルズが言った。

『それで『宝玉』はモンスターに寄生したのだな?』

「ああ。そちらとは直接対峙したわけではないから、どの程度のものだったかは分からないが……。まあ、リヴェリア達でも楽勝とは言いがたかったようだな」

『ナインヘル九魔姫』達だと? そちらにも「ロキ・ファミリア」が……。他に誰がいた?」

「金髪の小人と、褐色肌の小娘二人。金髪小娘と、蜂蜜色の髪をしたエルフの娘といったところか」

『金髪の小人……。フィン・ディムナか。よりによつて団長と副団長が揃っているとは。それに【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタインか。一体何をしていたのやら……』

「そちらにも、という事はギルドにも誰か行つたのか？」

独り言のように呻くフェルズに問いかける。

『ああ。神ロキが乗り込んできた』

「糸目の小僧か……」

『どうやら、我々があのモンスタを地上に放つたと疑っている節があるな。モンスターフエリアもそのために開催していると勘ぐっているようだ』

「それはご苦労な事だな」

やはりあれは猜疑をまき散らし、策略を張り巡らせずにはいられないのだ。

ヘアリストスが鍛冶師であるように、あれもそういう性からは逃れられない。やはり野放しにしておくのは少なからず面倒な存在だった。

『しかし【剣姫】を振り返りにする女か。名前は？』

「そういえば聞き忘れたな」

『まったく……。どんな女だった？』

「いい女だったぞ。美人だし、いい身体をしていた」

あの艶めかしきはアイシヤと互角かそれ以上である。

『……そういう事を聞いているわけではない』

「冗談だ。いや、いい女だったのは事実だが……。そうだな、とにかく丈夫だった。剣も刺さらない。《トゲ棍棒》でぶん殴つても死なない。《大竜牙》を叩きつけられても、割と元気に撤退していった」

生かして捕らえるため、多少ならず加減したというのは事実だが——それにしても法外な丈夫さだ。かつてハベルの戦士に散々叩き潰された身としてはいつそ羨ましいほどに。

『ふむ。お前の剣に耐えたぞ？ 人間とは思えんな』

「それと、モンスターどもを従えていたな。ほら、あの怪物祭で暴れた雑草どもだ。彼女は食人花ヴィオラスとか呼んでいたが」

『何だと？ 確かなのか？』

「ああ。あの女が指笛を鳴らすと同時、あの雑草どもが生えてきた。そのせいでリヴィラの街はまた大破したぞ」

まあ、それは特別珍しい話でもないが。

どれだけ少なくとも、数か月に一度は確実にモンスターの襲撃を受けるような街だ。

『となると、その女は調教師か。しかも、【剣姫】を倒すほどの実力者となると……』
「心当たりはない？」

『いや、ほぼ間違いなくその女が噂の『番人』だ。以前話しただろう？』
「リド達でも手を焼く調教師か。あれなら納得だな」

あの『宝玉』のある場所に姿を現す『番人』の噂は聞いている。

そう言えば、確かに赤髪の女だといっていたか。

(不死人……でもなさそうだが)

ソウルの気配がどうにも人のそれと違う。

それに、躯体の強靱さも。

さりとてモンスターかと言われると、それだけでもなさそうだ。

(まるで巨人だったな)

主にドラングレイグで何度か戦ったが……とにかく連中の身体は強靱だった。

長年封じられていた最後の巨人——瀕死のまま囚われていた巨人の王ですら、容易ならざる相手だった。まして全盛期の巨人の王や【薪の王】ヨームであれば、半端な攻撃ではかすり傷も負わせられない。

もちろん、彼女は流石にその域にまでは達していないが。

「ああ。それと——」

『どうした?』

「牛頭のデーモンが現れた」

『またか?』

「ああ。怪物祭の時と同じく、突然な。いや、それだけならいいんだが……」

『……何があつた?』

「怪物祭で暴れた連中より多少手強かった。どうやら成長しているらしい」

ひとまず、『人の膿』については伏せておく事にした。今ひとつ繋がりが見えない。大体、あれに取り憑かれていなくても厄介な存在なのは変わらないのだ。

『何だと……?』

「どうやら急いだ方がよさそうだな」

このまま野放しにしておいて、本当に『本物』のデーモンどもが現れたら——まあ、一人二人の死人では済みそうにない。

『ふむ。その調教師テイマーも追つて欲しいところだが……。デーモンが成長しているというなら、まずはそちらを優先してもらおうよりないな』

「デーモンの巣か飼い主を探せと?」

いや、その二つは同じ可能性もあるが。

『ああ。お前以外に任せられないからな』

簡単に言ってくれる。

一体どこを探せばいいのかすら見当がつかないというのに。

「ところで、亡者……お前達の言う『アンデッド』の情報は集まったか？」

『残念だが、そちらもまだ調査中だ。何分、情報が錯綜している。酒の肴として、面白半分に話をでつちあげる者もいるからな』

酒の肴で済んでいるなら、そこまで派手な被害はまだ出ていないという事か。

それとも遭遇した者達の生還率が極端に低いだけだろうか。

「もし、その『アンデッド』が、俺の想像している通りの理由で生み出されているなら、だが——」

しかし、もし事実なら放っておいていいものではない。

見方にもよるが、ある意味デーモンよりも差し迫った危機となる。

『『本当の力を引き出す』というような謳い文句で近づいてくる者がいないかを探った方が早いかもしれないな』

『どういう事だ？』

「なに、大した話じゃない。ただ、その呪いをかける連中の常套句がそれなんだ」

『なるほど……。しかし、そういう事ならより慎重に捜査しなければならないな』

「うん？」

『『本当の力を引き出してくれる存在がいるらしい』という噂が広がったら、むしろ被害が拡大しかねないだろう?』

「ああ、なるほど。それはもつともだな」

とはいえ、あの連中がそこまで安売りするかどうか。

いや、ここは警戒しておくべきか。

俺が言うのもなんだが、あの連中は目的のためなら手段を選ばない。

……まあ、最大の問題は連中がこの火のない時代で何を企んでいるのかさっぱり見当がつかない事なのだが。

「まあ、そちらは任せる」

どのみち、一人でできることなど高が知れている。

情報取収なら伝手のあるフェルズ達に任せられた方が効率的だろう。

「それで、お前はこれからどうしてほしい?」

取り急ぎ、個人的に済ませておきたい事は今のところない。

ならば、もうしばらくフェルズ達の依頼を受けてもいいだろう。

『ふむ。ならば、ハシャーナの遺体と共に一度地上に戻ってくれるか?』
「ガネーシャ・ファミリア」の眷属とあつては無碍にはできない』

「了解した」

シヤクテイの配下だというなら、流石の俺も無碍にはしづらい。

(ああいや、待てよ……?)

しかし、そうなると背負って帰らなければならぬのではないだろうか。ソウルに取り込める訳でもない——と思う。

流石に遺体を取り込んだ事はないので分からないし、できれば確かめたくもなかった。

(しかし、担いで戻るのもな……)

それはそれで陰鬱な道になりそうだった。

3

「チツ……」

奪取された『種』を回収し損ねたまま、隠れ家に戻る。

あれだけ手を焼いた挙句、回収に失敗したのもそうだが、その上でここまで消耗させられたというのも忌々しい話だった。

だが——

(あれが、『炎の篡奪者』だと?)

軋む身体を持って余しながらも自問する。

あの黒衣の男は確かに手練れだった。連れ戻し損ねた『アリア』よりもだが、

(遠い昔、古き神々の都に攻め入り、奴らの力の根源である『聖火』を篡奪した反逆者) そして、その結果人からも『不死』を奪った背信者。

奴らからはそう聞いている。しかし、それならこれは一体どういう事か。

(神々の敵。それがあの程度なのか?)

あれだけ手間をかけてなお、私を殺しきれない程度のものだったと?

いや、情報目当てに加減していたのは確かだろうが、それにしても……。

「ッ!」

もつとも。奴から受けたダメージが、私にとって深刻なものである事に変わりはない。

明滅する視界に舌打ちするより早く、体がよろめいて――

「ああ、悲しい。実に悲しいなあ」

何者かに、後ろから拘束された。

「どここの馬の骨とも知れぬ輩に先を越されるとは、正に悔恨の極み。口惜しい事よなあ」

「貴様か……」

私に気配を感じさせず、ここまで近寄れる相手は多くない。

この得体の知れない狂人は、忌々しい事にその筆頭だった。
「いかにも。よく戻られた、我が姫君」

血の気の薄い肌。彫像めいた造形の顔。黒く長い髪は、やはりその一筋まで作りものめいている。こうして拘束されていると、軟弱そうな雰囲気に対して戦士然とした、あるいは獣じみた体をしているのが嫌でも伝わってくる。

「ああ、それにしても。口惜しい。出会ってから身を粉にして尽くしているにもかかわらず、未だ閨に呼ばれない私がここにいるというのに……」

一体どこで知ったのか、私があゝの冒険者をどうやって罠に誘い込んだのかを知っているらしい。

「下らん。ただ餌に使っただけだ」

確かに、俗に『色仕掛け』と呼ばれる手段を用いたのは認めるが、そこまで大げさな事をした訳でもない。人目の付きづらい場所に誘い込むため、娼婦の真似して声をかけ油断させただけでしかない。

本当に一晩付き合ってやるつもりはなかったし、必要性もなかった。

「しかし、良くないな。嫁入り前の女子の体に傷をつけるとは……」

私の言葉を聞いているのかいないのか、その狂人はそう言った。

お前が言うか？——と、喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

この狂人に付きまとわれているのは、およそ三年ほど前に殺されたのが切欠となつて
いる。

加えて言えば、殺し合い——この狂人に合わせて言えば死合——を求められていた。
「しかし、其方をここまで追いやる相手も珍しい。何者だったのだ？」

今だ血の滲む横腹の傷を黴り、こめかみからの血が伝う頬を舐めようとするその人斬
りに舌打ちしながら、告げた。

『『亡者の王』。『炎の篡奪者』とやらだ。貴様の方が詳しいだろう？』

この狂人——この人斬りはあの男よりも確実に手練れだろう。

こいつが、あれだけ時間をかけて私を殺し損ねるなどありえない。

「ふむ。其方の主君らの話からして、四年前に出会った同胞だろうが……」

その人斬りは怪訝そうに唸った。

「確かにあ奴なら、今の其方には手に負えぬであろうが……。さて。四年前……いや、つ
い前日見かけた時の様子からすると、そこまでの大物だとも思えぬのだがなあ」

あれほど力を持った相手なら、この人斬りが見かけるだけで済ますものか。

おそらく、刃を交えている。そして、ここにいる以上はあの男の方が退いたのだろう。

「フン……」

忌々しいが……この人斬りは得体の知れない強さを秘めている。

今の私でもまだ遠く及ばない程度には。でなければ、とつくに殺している。

それができないから、こうして付きまとわれている。そして、この人斬りも死合とやらを仕掛けてこないまま付きまとってきているのだ。

「なに、もし次に見える事があれば私を連れて行くが良い。本当にそこまでの大物なのか、今一度確かめてみよう」

人斬りの顔が近づいてくる。

その唇を食い千切ってやろうとして——僅かに掠めた。

どうやら、三年前より多少力の差は縮まっているらしい。

微かに裂け、血の滲む唇を見やってから、無遠慮に乳房を弄ぶ腕を振り払い、横腹から臍を撫で、さらに下腹辺りに達していた腕を力任せに叩き落す。

「つれない。実につれないなあ」

血の滲む唇を舐めながら嘆く人斬りからわずかに距離を開き、告げた。

「食事だ」

「うむ。魔石も果実もそこに用意してある」

この人斬りがどこからか用意してきた敷き布の上には、ダンジョン由来の果実と、魔石の山が置かれていた。

適当に座り込み、ひとまず魔石に手を伸ばす。

「良い皿であろう?」

「何だと?」

確かに魔石や果実の山の下には小さな机と、その上に大皿が敷かれている。

まさか、器とはこれの事だろうか。

「よい食事には用いる食器の美しさも不可欠と聞く。少々値が張ったが、用意してみた」
時折——よりもいくらか高頻度に——思う事だが……こいつ、実は阿呆なのではないだろうか。

確かに皿は置かれているが……お世辞にも美しいとは言えない。

絵柄か文様が描かれているようだが、見える範囲からして色遣いが派手すぎて悪趣味であり、安っぽく見える。

「なかなか良い。我ながらいい買い物をした。いやはや、リヴィラなる街も、あれでなかなか捨てたものではない」

訂正。阿呆ではなく、悪趣味なだけだ。いや、阿呆な上に悪趣味なのか。

(しかも、わざわざ買ってきたのか? よりによってあの街で)

滞在したのは一日に満たない程度の時間だったが、その僅かな時間でも至る所でぼつたくりだ詐欺だという言葉を耳にしていた。

そんな街で、このガラクタをわざわざ買ってきたと言うのだろうか。

（そもそも、その金は一体どこから……）

いや、魔石狩りの際に得たドロップアイテムをこまめに集めては売り捌いてでもいるのだろう。もしくは冒険者共から奪ってでもいるのか。

どのみち、ダンジョン内で金を得るにはその二つのどちらかしか方法はない。

（そう言えば、時折奇妙な彫像やら何やらを持ち込むが……）

まさかあれらも——いや、この敷き布もわざわざ金を払って購入してきたという事なのか。……この、見るからに毒々しい凶柄の敷き布を。

（余計な事を教えたか）

武器を手入れする道具が欲しいのだが——と、言ってきた際、街を紹介したのを少しばかり後悔する。面倒だからと一人で行かせるべきではなかった。

「……何のつもりだ？」

胸中で嘆息していると、その悪趣味な人斬りは近くに横たわり、片胡坐をかく方の脚——その太もも辺りに勝手に頭を乗せた。枕代わり、と言ったところか。

「なに、忠義には報いるものが必要なのだぞ、我が姫君」

けらけらと笑う。

一体どういうつもりなのか、この人斬りは私を主と呼ぶ。

どこまで本気かは知らないが、少なくともそれを口実として他の連中の命にはまるで

応じない。……それこそ、私が仲介しない限りは。

そのせいか、これと言って何かに利用される事もなく、その暇な時間を使つては魔石や果実を集めてくるわけだ。

(確かに役には立つが……)

特に、手傷を負つた今、これほど上質の魔石が多くあるのは助かる。

ツイオラス
ツイルガ
食人花や巨蟲どもが持ち帰ってくる魔石のように濃縮されてはいないが、これだけ数があればそれも気にならない。

「勝手にしろ」

この人斬りに付きまとわれてから、一体これで何度目になるだろうか。

深々と嘆息してから、吐き捨てた。

少々煩わしいが、我慢できない程でもない。それに、今は追い払う気力すら惜しい。

「うむ。では、たんと食べて強くなると良い」

言われるまでもない。そして――

「その時は真つ先に殺してやる」

この人斬りは『アリア』と違って連れ戻す必要もない。

今はまだ届かないが、届いた時には後腐れなく念を入れて殺し尽くしてやる。

「それは良いな。うむ、斬つて良し愛でて良し。実に其方はいい女子だ。睦みあえるな

らな良いな」

その戯言は無視し、魔石を貪っていると、不意に人斬りが言った。

「いや、しかし——」

別にどうでもいい事だ。

「やはり、其方は美しいな」

しかし、この人斬りの美的感覚には深刻な欠陥があるらしい事が判明した今、その言葉は少しばかり複雑な気分を抱かせるものでもあった。

4

一夜明けて。

経帷子に包まれたハシヤーナの遺体を、ボールスから——格安とはいえ有償で——借りた背負子に乗せて、リヴィラの街を後にする。

重さで言えばそこまで大したものでもないが、鎧を着こむのと違って、重心が崩れる。まして遺体を背負ったまま転がりまわる訳にもいかない。

仕方なく、【見えない体】と【隠密】の魔術を重ね掛けし、念を入れてさらに、右手には直剣と刺剣の性質を兼ね備える《バルデルの刺突直剣》を、左手には愛用のクロスボウ——武器職人エアダイスが生み出した連射式ボウガンヴェッセルを携えていた。

装填しているのはノーマルボルト。これならオラリオでも充分に補給が利く。

『そうか。【ロキ・ファミリア】は赤髪テイマーの調教師を追ったか』

胸元にぶら下げたままの『眼晶』オクルスからフェルズの声がする。

「五人がかりなら、あの女相手でも問題ないだろうさ」

『それはそうだろうが……』

声に——それと、おそらくは死臭に——釣られ飛びかかってきたモンスターどもの脳天にボルトを撃ち込む。

それぞれが額を射貫かれ、そのモンスターどもはあっさり息絶えていく。

（元は取れるか……？）

魔石を回収しつつ、胸中で呟いた。

何しろ、この辺りのモンスター相手だと三発はかなりの頻度で過剰火力になりがちだ。無駄撃ちしたボルト分だけ赤字になりかねない。

とはいえ、いつも通り大剣や斧槍を構えて突撃する訳にもいかない以上、他の選択肢もそう多くない。例えば、呪術や魔術で焼き払うといったところか。

「つとー」

魔術が切れた途端襲い掛かってきたヘルハウンドの脳天にボルトを撃ち込み、隙をついて襲ってきたアルミラージどもを斬り払い、串刺しにする。

一通り蹴散らしてから、再び魔術を重ね掛けして——と。そんな事を何度か繰り返している、七階層まで戻ってきていた。

(あと半分か……)

この階層のキラアアントどもは仲間を呼び集める。下手に囲まれると面倒だ。もつとも、ここさえ抜けてしまえば、あとは取るに足らない。

むしろ、絡んでくる、あるいはモンスターを押し付けてくる人間の方が煩わしい。と、そこで。件の蟻どもと対峙する見知った顔を見かけた。

炎のボルトに切り替え、半死半生の蟻に撃ち込む。

仲間を呼ぶ『匂い』を放つ前に燃え尽きた蟻の魔石を拾い上げる頃には、彼も残りを一掃していた。

「だいぶ動きが良くなったな」

拾った魔石を放ってやりながら、告げる。

「クオンさん！」

見覚えのない軽鎧を着こんだ、見慣れた白い頭。

言うまでもなく、ベルだった。

「昨日は悪かったな。少しばかり用事が長引いたんだ」

念のため書置きは残してきたが、あまり詳しい事は書いていない。

「いえ、気にしないでください」

「あの、ベル様？ こちらの方は……」

と、そこで物陰から年季の入ったローブを羽織った——さらに言えば、自身の身体と同じかそれ以上のバックパックを背負った少女が姿を見せた。

「あ、リリ。この人はクオンさん。僕が昔からお世話になっっている人なんだ」と、ベルはその少女に告げてから、

「この子はリリ。リリルカ・アーデって言うんです」

「ほう？ それはそれは……」

また新しい娘を捕まえたらしい。いや、なかなか見事な手並みだ。

「あー！ 違いますからね！ 今日出会ったばかりですからー！」

などと言いつ合っていると、その少女が首を傾げた。

「昔から？ あの、そちらの方は冒険者なのでは……う？」

「いや、ただの放浪者だ」

ずれた背負子を軽く背負い直しながら告げる。

「しかし、凄い荷物だな。それで動けるのか？」

もし何かコツがあるなら教えてもらいたいところだ。

「ええ。そういうスキルもありますから」

なるほど、『ハベルの指輪』のようなものか。

「リリはサポーターなんです。……その、一昨日も言いましたけど、一人で潜るとクオンスさんのスキルのありがたみが改めて分かって……」

少女——リリルカに問いかけると、彼女より先にベルが言った。

「ああ、なるほど。それは必要だな」

いわば俺の後任か。確かにその人手を確保するのを忘れていた。

俺もそろそろベルに掛かり切りとはいかなくなりそうだし、この際この少女に引き継いでしまった方がいいのかもしれない。

「あのベル様？ この方はサポーターだったのですか？」

「うん。一週間にも満たない間だったけどね」

「で、ですが、この方はダンジョンの奥から戻ってきたようですが。それに見たところお一人ですし……」

「それはまあ、クオンさんは僕よりはるかに強いからね。……あれ？ でも珍しいですね。クオンさんが荷物を背負ってるなんて」

「ああ。流石にこれはな」

ソウルに取り込むのも気が引ける。

いや、骨片程度ならいくらでも放り込んでいる訳だが……。

「あの、ひよつとして背負われているのは冒険者のご遺体なのでは……?」

この少女はなかなか目聡い。

「ええええ?! ど、どうしたんですか?! その人!」

「いや、実はこれが頼まれ事だな。本当は生きて連れ戻るつもりだったが……行つた時にはもう手遅れだったんだ。だから、せめて遺体だけでもと思つてな」

「そ、そうだったんですね」

と、ベルが目を伏せて祈りを捧げる仕草をする。

「ところで、どこまで行つてたんですか?」

しばしの黙祷ののち、ベルは改めて言った。

「一八階層。最悪は三〇階層まで足を運ぶ必要があつたが……」

「はあああああ!?! じ、一八階層!? な、なんでサポーターが一人でそんなところまで行けたんですか?! それとも、その方があなたを雇つた方なんですか!?!」

「いや、依頼人は別だ。……あまり詳しくは言えないけどな」

というか、説明しづらい。何しろ、ギルドの本当の首魁の片腕で賢者。その上、不死の骨だし。

いや、俺達とはまた違う不死のようだが。

「は、はあ……。それはそうでしょうけど……」

曖昧に頷く少女に頷き返そうとして——反射的に武器を構えていた。蟻の牙がこちらに届くより一瞬だけ早く、その額にボルトを撃ち込む。

「ベル、来るぞー！」

炎のボルトのままだった事に舌打ちしながら、燃え上がる死骸を蹴り飛ばす。

「はいー！」

同時、周囲の壁が次々に崩れ、蟻どもが這い出して来きた。

さすがに距離が近い。前衛はベルに任せ、リルルカの前に立つ。

左手の武器を《アヴェリン》から《ゲルムの大盾》に。右手の武器を《ハイデの槍》に切り替えて、少女を背後に庇う。同時、ベルを掻い潜ってきた蟻どもを端から手早く突き殺した。

と、言ってもこちらに回ってくる数は微々たるものでしかない。

「よしよし。だいぶ様になってきたようだな」

「そ、そうですか!?!」

程なくして蟻どもの群れは一掃された。

もう少し回ってくるかと思ったが、どうやら杞憂だったらしい。

（相変わらず、すばしっこいな）

素早い立ち回りと言えば、ファランの不死隊を思い出すが……ベルの身軽さはどちら

かと言えば狼ではなく兎のそれだ。

兎が鋭い牙を持って狼に立ち向かうなら、きつとこんな様子になるに違いない。

「ところで師匠。ひよつとしてその槍って雷属性効果がついてるんじゃない？」

「うん？ ああ、そうだな」

携えている槍を掲げて見せる。

「俺も詳しくは知らないが、元々そういう代物だったらしい」

ハイデの騎士が携えていたため便宜上《ハイデの槍》と呼んでいるだけで、正しい銘は知らない。ただ、どうやら製造の段階から雷の力を宿していた……らしい。少なくとも、俺はそういう意味では手を加えていない。

おそらく、ハイデの騎士達はこういった武器を好んだのだろう。他に手に入れた《ハイデの直剣》も初めから雷の力を宿していた。

「詳しくは知らないって、どうしてなんですか？」

「それはまあ、拾い物だからとしか言いようがないんだが……」

単なる槍として見ても良質だ。しかも、雷の力を宿しているおかげで、威力がさらに水増しされている。相手によっては通じにくい事もあるが……まあ、総じて扱いやすい代物で、手に入れてからずっと愛用している。

それに槍と言えば雷だろうという個人的なトラウマ——もとい、信念もある。

「そんな強力な属性効果を持つ武器が落ちてるなんて……。『深層』に行った事でもあるのですか？」

リリルカが目を丸くした。

「まあ、何度か行っているが……。生憎と、これはオラリオに来る前に拾ったものだ」「オラリオの外で?!」　そ、そんな武器を落とすような事態が起こるなんて、一体どこを旅してきたのですか?!」

「ドラングレイグ……と、言っても通じないか。まあ、厄介な場所ではあつたな」

この階層と比較するなら、狭間の洞窟の方が危険だった。

何しろ、凡庸な亡者ばかりだと思つて油断していると、オーガの縄張りに迷い込みかねない。奴らにはいったい何度丸齧りにされた事か。

「そういう武器を見ると、師匠の話も嘘じゃないんだなつて気になりますよ」

「そもそも嘘なんてついてないんだがな」

いや、多少穩便に話しているが。

……主に散々殺されたとかそういう部分を。

「師匠……?」

「あ、うん。戦い方……というか、『冒険の仕方』を教わつた師匠なんだ」

なるほど、ベルはそういう風に認識しているのか。

教えたかったのは『生き残り方』だが……まあ、冒険するにも生きていてこそか。

「では、ベル様と同じ【ファミリア】……ではないですよね？」

さきほど、ベル様お一人の【ファミリア】だとおっしゃってましたし——と、リリル力は小首を傾げる。

「ああ。居座つてはいるが、俺は無所属だ」

「無所属……？」

さらに首を傾げてから……不意に顔を青ざめさせた。

「無所属で『深層』に到達?! そう言えば、先ほどから武器を切り替えるレアスキルか魔法も……。ま、まさかあなたが【イレギュラー正体不明】様なのですか!？」

その名前を様づけで呼ばれたのは初めての経験かもしれない。

「そうなんですか、師匠?」

「まあ、そういう風に呼ばれているらしいな」

別に自分から名乗った訳ではない。

そもそも何でそう呼ばれるようになったのかすら定かではなかった。

ただ、アイシャもシャクティもリヴェリアもそう呼ぶので、冒険者界隈ではそういう呼ばれ方をしているらしい事は把握している。

「し、知らないのですかベル様!？」

「まあ、オラリオだと有名なんだろうなーとは思ってたけど……」

サポーターをお願いするってエイナさんに言ったら顔を引きつらせてたし——と、ベルは気圧されたように続ける。

「有名どころか、悪夢です！ オラリオの冒険者にとつて悪夢そのものなんです!!」

「あ、悪夢って……。何したんですか、師匠!？」

「いや、そこまで大それた事をした覚えは……」

指先で頬を掻きながらぼやくと、リリルカは卒倒しそうな顔をしてから叫んだ。

「一体どの口がそんな事を言うのですかあああああああああつ!!」

いや、ちよつと待った。そんな大声を出すと——

「うわ!? 師匠!」

モンスター共が寄ってくるじゃないか。

「分かっている！ さつきと同じようにやるぞ!」

蟻の大群に囲まれている中で、ベルに告げた。

「はい!」

頷くより早く突貫するベル。

俺も先ほどと同じようにリリルカを庇いつつ、突破してくる蟻を迎え撃つ。

ただ、先ほどと違い、完全にこちらが後手に回っている。ベルが前線を押し返すまで

が踏ん張りどころとなるだろう。

「す、すみませんベル様!?」イレキユラ「正体不明」様!」

……いや、そこまで気負う必要はないか。

リリルカも即座にクロスボウを構え、援護射撃を行う。

先ほども思ったが、この少女の立ち回りは実に巧みだ。

強いのではなく、ダンジョンでの生き残り方を知り尽くしている。自分の持つ手札を……そして、俺とベルをもうまく使いこなし、状況を好転させていく。

正直、実に俺好みの立ち回りだった。

何というか、馬鹿正直に突貫しがちなベルの手綱を任せるにはちようどいい相手だ。

結局、多少の危うさを感じたのはほんの序盤だけ。それ以降は、実に安定して敵を駆逐し終える事ができた。

「改めて、申し訳ありませんでした。ベル様、」イレキユラ「正体不明」様」

「そんなっ! いいって。油断してたのは僕も同じだし」

戦闘が終わり、ひとまずの安全確認を終えるや否や深々と頭を下げるリリルカに、ベルが慌てた様子で応じる。

「えっと、それでリリ。師匠ってそんなに有名なの?」

話を変えるためだろうか。有耶無耶になるはずだった話題をベルが掘り返す。

「ええ、とても」

いや、そんな事は——と、言いかけた俺を制して、リリルカが力強く頷く。

「ギルド公認、正真正銘のLv. 0でありながら、闘技場で真つ向からオラリオ最強のLv. 7【おっしや猛者】様と渡り合つたのはあまりに有名です」

「な、何があつたんですか師匠?!」

「向こうが絡んできたんだよ」

腰を抜かささんばかりのベルに、げんなりとして応じた。

「いえ、フレイヤ様を罵倒したのが事のきつかけだと聞いていますが」

と、即座にリリルカが半眼でそう言ってくる。

しかし、それは誤解だ。

「その前にあの女がちよっかい出してきたんだ。下手すれば傀儡にされているところだぞ、あんなの」

流石に『アルカナム神の力』は封じているらしく、どこぞの王妃の『呪い』に比べればまだ大した事はなかった。

が。それでも、当時の俺にとつてはあまり長時間晒されるわけにはいかなかった。今でも長時間の接触には相応の危険を伴うだろう。

あの女はそれほどの『呪い』を放つ危険物である。

「ベル、お前も気をつけろよ。『美の神』ってのは『呪い壺』と同じだからな」
 むしろ、自分で動き回る分だけ余計性質が悪い。

「の、呪い壺ってなんですか？」

近づくだけで強引に亡者化を進行させられてしまう悪夢の一品である。

あんなはた迷惑なもの、一体どこの誰が作り出したのか。

「さらに、乱入してきた【古王^{スルト}】をオラリオで唯一撃退した方でもあります」

呻いていると、リリルカがさらに言葉を重ねる。

「【古王^{スルト}】って？」

「五年前、暗黒期の終わり頃に現れたもう一人の『正体不明^{イレギュラー}』です。こちらは本当に正体

不明で、人なのか神様なのかモンスターなのかも分かりません」

「えっ？ モンスターかもしれないの？」

「可能性がある、というだけです。何しろ、常に炎を纏っていたそうなので」

「炎を？」

「ええ。骸骨めいた鎧と炎をまとう謎の怪人。それが【古王^{スルト}】です。神出鬼没である事も

併せて、『暗黒期』に倒れた人々や神様の怨霊という噂もありました」

「それって、幽霊ってこと？」

「どうでしょう。幸い、リリは出会った事ありません。ですが、実体があったのは確か

だと思えますよ」

そう言つて、リリルカはこちらに視線をよこす。

「まあ、切り結べたからな」

あまり触れられたくない話題だが、こうなつては仕方ない。適当に誤魔化す事にした。

「あれ？ でも、それならなんで師匠だけしか撃退できなかったの？」

肩をすくめると、ベルは苦笑して——ふと気になつた様子でリリルカに訊ねた。

「先ほども言つたように、常に炎を纏つているのです。そのせいでまともに近づくこともままなりません。加えて、尋常ならざる強さを誇つてもいたそうです。それこそ、オラリオに名だたる冒険者様がことごとく返り討ちにあうほどに」

できればその話はそろそろ打ち止めにして欲しいのだが。

そんな思いと裏腹に、リリルカはさらに言葉を続けた。

「ですが、何故かクオン様はその炎を物ともせず、真正面から切り結び、ついには撃退したと聞いています。これはオラリオで唯一クオン様だけが成し遂げた偉業です」

「撃退したというのは言い過ぎだな。食い下がつていたら向こうが退いたんだ。もう少し続いていたら、俺が先に音を上げていただろうさ」

そもそも、あの時の俺ではまずあの■■■■には勝てなかつただろう。

いや、それは今の俺でも同じだが。

「他には七〇階層到達の非公式記録アナザレコードを打ち立てたとか、絡んできた冒険者達を「ファミアア」ごとく叩きのめしたとか、「ロキ・ファミアア」の首脳陣を返り討ちにしたとか……ああ、そう言えばその時に主神と団長が這いつくばって命乞いしていたらしいっていう噂が最近立ちましたね」

そう言えばつい最近、そんな冗談も口にしたような気もするが。

しかし、まさかあんなものまで噂になっているとは。

……ここは日々の話題に困るような街ではないはずなのだが。

「何やってるんですか、師匠おおおおおつ!？」

「あーあー。聞こえない聞こえない」

耳をふさぎ、ベルの悲鳴を聞き流す。

「あとは、「ロキ・ファミアア」の副団長ナインヘル「九魔姫」とただならぬ関係になったとか……」

「それもただの噂だな」

肩をすくめて、その言葉に応じた。

ひとまず否定できるところは否定しておかなければならない。

「ロキ・ファミアア」ともめたのは認めるが、連中が命乞いしたというのも単なる噂だ。いくつか誤解が重なっていたのをリヴェリアが突き止め、それを元に仲裁したというの

が真相だよ。『ただならぬ関係』ってのはおそらくその辺りから派生してきているんだろう。……まあ、どこかで会えば挨拶して軽く話をする程度でも『ただならぬ関係』だと言うなら、話はまた変わってくるだろうが」

実際、リヴェリアとはそんな関係だった。

むしろ、接触している回数ならシャクテイの方が遥かに多いはずだ。

……もちろん、彼女ともいわゆる『ただならぬ関係』にはなっていないが。

「大体、俺なんか彼女を『傷物』にした日には、オラリオ中のエルフを敵に回すぞ？」

冗談めかして告げる——が、それはあなたがち冗談とも言い難い。

何しろ、先日もシャクテイにそう言っただけの釘を刺されたばかりだ。

……まあ、それでも敵に回すだけの価値はあるだろうが。

「それはまあ、そうなるでしょうけど……」

眉を寄せて、リリルカが呻く。

「と、ところでクオンさん。ヴァレンシユタインさんとは……」

ベルが問いかけてくる。

もつとも、最後の方は極めて小声だったのでリリルカには聞こえなかっただろうが。

「顔見知りだが、それだけだ。大体、連中ともめたのは四年も前の話だぞ？」

その頃、あの金髪小娘はまだ胸もろくに膨らんでいないようなチビ助でしかなかった

た。いくら何でもそういう意味で手出しする訳がない。

「で、ですよねー」

ホツとした様子で、ベルが胸を撫でおろす。

まあ、あの小娘にいきなり斬りかかられ、相応に返り討ちにしたのが事の発端だが……それについては黙っておく事にしよう。

「それにしても、何故ベル様のサポーターなんてやっていたのですか？ その気になれば【ロキ・ファミリア】でもどこでも好きに【ファミリア】に入れるはずですが……」

「少し前、ベルの祖父にだいぶ世話になったからな。その礼だよ」

何だかんだ言つて、実際のところそれが一番の理由なのだが——

「いやいや！ 僕の方が絶対にお世話になってますから!!」

慌てた様子で、ベルが言った。

「もう二年近く前だけど、僕の故郷の村がゴボルトの大群に襲われかけた事があってね。その時にたまたま立ち寄ったクオンさんが助けてくれたんだ。そのお礼もかねて、しばらく僕の家に泊まってもらつて、その時に色々教えてもらったんだよ」

まあ、教えたといつてもそれは戦い方ではなく『旅の仕方』でしかないが。

危険を察知し、周囲にあるものを駆使して生き残る。そういう術だ。ベルに伝えた戦闘術はその一環、簡単な護身術程度でしかない。

(そう。せめてもう少し……。こう、駆け引きをな……。)
伝えてやりたいところだが。

戦闘術に関してはごく基本的なものしか伝えていない。『素早い動き』だけで手に負えているこの辺りのモンスターはともかく、もつと下まで潜るために必要となる駆け引きについては、まだまるで触れていなかった。

(その時間があればいいんだがな)

そうも言っていられない予感がしてきた。

「まあ、その辺の話はあとでベルにでも聞いてくれ」

ひとまず、話を終わらせることにした。

このままだと、諸々抱えている『秘密』をいくらか掘り出されかねない。

「もう少し見ていたところだが、生憎と先約がある。こいつを、早く地上に帰してやらないとならないからな」

武器を再び《バルデルの刺突直剣》と《アヴェリン》に切り替えてから、告げた。

「俺はもう行くが……。お前達も、無理してこの男の二の舞になるなよ。」

「は、はい！」

姿勢を正し、ベルが威勢よく返事を返してくる。

リリルカも小さく頷いて見せた。

「よしよし。それじゃ、またあとでな。……ああいや、ひよつとしたら今日もまた遅くなるかもしれないが」

遺体を引き渡して終わり——と、そこまで事が簡単に進むとは限らない。

「それは仕方ないですよ」

「悪いな。じゃあ、二人ともくれぐれも気をつけろよ」

「はい！ クオンさんも気をつけて！」

ベルの言葉に頷いてから、改めて地上を指す。

(しかし……)

あのリリルカなる少女を——俺の盾と槍をじつと見つめていたその姿を思い浮かべる。

どことなく、こう、懐かしい気配がしなくてもなかった。

具体的に言うとは、キラリと光る頭が目印のどこぞの禿丸を思い出させる。

(いやまあ、あいつほどかと言われるとまたあれだが……)

ロードランでもロスリックでも色々『世話』になったあの禿頭は、呼吸でもするよ
うにやらかしてくるが……あの少女はまた少し違う気がする。

それに、あの少女とて冒険者だ。良さそうな武器があれば気になるのは当然。そう言
われてしまえば、それまでだが。

「さて……」

どうしたものか。

あの少女があのままベルの相棒になってくれるなら心強いが……万が一あの禿頭と同じ部類なら話は少し面倒な事になる。

(気にはなるが、実際に手をまわしている余裕があるかどうか……)

いや、デーモンにしても『暗い穴』にしても、今は何の手掛かりもなく、探しているふりをするくらいしかできない。

それくらいなら、まだもうしばらく寄り道してもいいだろうか。

(別に今すぐ七〇階層より先に向かう羽目にはならないだろうが……)

しかし、もしダンジョン内にデーモンの巣があるとすれば、その辺りが有力候補だ。

いや、五一階層辺りも全容把握には程遠いものだから、まず手近なところから潰していくべきか……などと。徒然と考え込んでいると、ようやく地上へとたどり着いた。

「さて、気は進まないが……」

まずはギルドに報告を済ませなければならぬ。

「あら、クオン氏。どうかされましたか？」

ギルドに報告に向かうと、ベルのアドバイザーであるエイナが窓口に立っていた。

冒険者ではない俺がギルドに顔を出す理由など、本来なら換金しかない。

とはいえ、

「ああ。実はダンジョン内から遺体を連れ帰ったので、対応をお願いしたい。名前はハシャーナ・ドルリア。【ガネーシャ・ファミア】の所属となる。もう耳に挟んでいるかもしれないが、リヴィラの街で起こった殺人事件の被害者だ」

こういう事例では、俺が冒険者かどうかは関係ない。

「感謝します。では、申し訳ありませんが、少々お待ちください。確認を取ります」

エイナはいつにも増して真剣な面持ちで、一度窓口の奥の方に戻っていく。

と、別の職員がやってきてギルドの中——遺体の安置所へと案内された。

そこで背負子を下ろすと、硬直している遺体を寝台に寝かせてやる。それと同時別の職員たち数名と共に、エイナがやってきた。

遺体への対応は他の職員に任せ、彼女と共に別室に移動する。

「【ガネーシャ・ファミア】には連絡を入れました。彼らが到着するまで、詳しい話をお聞かせ願えますか？」

来客用の——というより、今回の俺と同じ役目を負った誰かのための部屋で、向き合って座ると、僅かな沈黙の後でエイナが問いかけて来た。

「ああ。先ほども言った通りリヴィラの宿で殺されていた。遺体を見てもらえば分かるが、頭部が完全に欠損していたため身元の確認には少し手間取ったが——」

身元確認の具体的な方法は明言しなかったが……まあ、そこは蛇の道は蛇というやつだ。エイナも察したらしく、詳しい事は聞いてこなかった。

とはいえ、フェルズからの依頼も身元を確認できた理由の一つだ。それを伝えると、エイナはしばらく席を外し、すぐ戻ってきて確認が取れたと伝えた。

どうやら、一応は公的な依頼だったらしい。……あるいは、連絡を入れてから慌ててねじ込んだのかもしれないが。

「ありがとうございます、クオン氏。もうじき『ガネーシャ・ファミア』の方々が引き取りにまいりますので、それまでもうしばらくお待ちいただけますか？」

「ああ。それくらいは義理はあるつもりだ」

頷くと、エイナは再び出て行って——程なく、来客用の茶と菓子を持って戻ってきた。

流石にいつだったかあの女鍛冶屋のところまで飲んだ物より匂いが弱く、例によつてもよく分からないが……折角の好意だ。ありがたく頂戴していると、思いのほか早く「ガネーシャ・ファミア」の面々がやってきた。

……もつとも、流石にまだ忙しいらしく、シャクテイの姿はなかったが。

「いいえ。それより、我が『ファミア』の仲間をよくぞ連れ戻ってくださいました。おかげで皆でハナーシャを弔う事が出来ます。改めて感謝を」

ともあれ。簡単に説明し、やむを得ずとはいえ「ステイタス」を暴いた事に謝罪する

と、彼らは首を振り——代わりに手厚い感謝の言葉を伝え、彼の遺体を連れて帰っていった。どうやら葬儀の準備はすでに進んでいるらしい。顔を出すのは少々場違いだが——これも何かの縁だ。せめて弔いの花だけでも、と伝えると快諾してもらえた。エイナと共に彼らがギルドから出ていくのを見送ってから、傍らの彼女に一声かけて俺も街へと戻る事にした。

5

「弔いの花の準備と配達をお願いしたい。場所は——」

別れ際にエイナに勧められた花屋に向かい、弔いの花の手配を済ませてから。

（さて、と。どうするか？）

昼下がりは過ぎたが、まだ夕暮れ時には遠い。

そんな中途半端な時間だった。

「昼飯でも食いに行くか」

不死人にとっては別に必要ではないが——まあ、気になる事も出来た事だ。

食事ついでにあの古狸の顔を見に行くのも悪くはないだろう。

『カーネル食堂』

共通語コイネが大きく書かれただけのシンプルな看板が目印のその食堂は、第七地区の外れ

に店を開いている。

いわゆる大衆食堂で、無所属の労働者やその家族を主な客層となっている。従つて、値段も安く、その割に量が多い。そして、料理人の腕がいい事もあつて味も確かだつた。第七地区の奥にあるせいも、あまり冒険者には知られていない、隠れた名店である。今日も——すでに昼時を過ぎていくというのに——なかなかの盛況具合だつた。

「おや、いらつしやい。戻つてたんだねえ」

見るからに愛想のよさそうな年配の女性がこちらを見るなり、笑みを浮かべた。

「ああ。つい最近な」

空いている席に座りながら、こちらにも笑い返す。

品書きは主に各地の家庭料理と呼ばれる類と、肉体労働者向けに体力の付きそうな肉料理や揚げ物、炒め物関係が二分している。どちらを選んでも外れはないが……個人的にはオラリオでは珍しい極東の家庭料理がお気に入りだつた。

何となく、だが。どこか酷く懐かしいような気分を覚えるのだ。

焼き魚と煮物の定食を頼んでから、本題に入った。

「ところで、オレック爺さんは元氣か？」

道中、あの爺さんがいつも釣り糸を垂らしている水路を覗いたが、今日はいなかつた。だからこそ、こうして義理の娘とその婿が切り盛りするこの店を訪ねた訳だが……。

「それがねえ、今寝込んでるのよ」

「……何だつて？」

あの古狸もいよいよ年波には勝てなくなったか。

生者の宿命に慄いていると、彼の娘はあつげらかと笑った。

「昨日、大物が針にかかったらしくてね。無理してぎっくり腰。今も腰に湿布貼りながらひひひ言ってるわよ」

……まあ、確かに年波には勝てなかったらしいが。しかし、思ったよりもまだ元気そうだった。

あの古狸の壮健さに慄きつつも呻く。

「あの水路にそんな大物が棲んでいるとは知らなかったな」

案外、住み着いている水棲モンスターが食いついたのかもしれない。

「そりやもう、飛び切りの大物よ。大地っていうね」

なるほど、それは確かにこの上ない大物だ。

「そうか。なら、何か見舞いの品でも持ってくればよかったな」

「いいのよ、そんなに気を使わなくて。でも、そう思うなら何か一品追加で注文してちょうだいな」

「やれやれ……。なら、この鶏のから揚げも追加だ」

飯にもダンジョンから戻ってきたばかりなのだ。活力になりそうなものを食べるのも悪くはない。……まあ、俺達の身体にも効果があるかは定かではないが。

「毎度あり。ちよつと待つててね」

それからしばらくして。

高くついたのでか安く上がったのか——ともあれ、見舞金代わりに追加した唐揚げまできつちり平らげて、俺はその店を後にした。

（しかし。この店って本当に採算が取れているのか？）

相変わらず見事な量だった。おかげで正直なところ、少し食べすぎたらしい。

まったく、不死人には贅沢な話だった。

「あら、あの子もようやく単独ソロを卒業したの？」

その日の夜。例によって『酒夢猫亭シヤムネコ』で一杯ひっかけていると、仕事の隙を縫って近

づいてきた霞が言った。

「ああ」

「良かったわねー。私も前、お客さんから例えサポーターでもいるのといないのとじゃ大違いって話を聞いた事があるわ」

と、そこで霞は小首を傾げた。

「でも、新人さんならあの子とそう大きく変わらないんじゃない？ 別にサポーターに

専念させなくたって……」

「いや、俺もあまり詳しくは知らないが、所属は別の「ファミリア」らしいな」

ベルから聞いたわけではないが、あの少女の立ち回りは素人のそれではない。『今日出会ったばかり』という言葉が、今日ヘスティアから恩恵を得たばかりという意味だとは考えづらかった。

大体、文字通りの新人を七階層にまで同行させるなど、例え神ヘスティアが許してもエイナが許しはしないだろう。

「他所の派閥？ ヘスティア様と親しい神様の眷属なのかしら……」

「どうかな。ヘスティアと親しいといえば、ヘファイストスカミアハだろうが……」

どうやらミアハのところには、今はナーザしかいないらしい。ついでに言えば、あの少女は四年前に見かけた顔ではない。

ヘファイストスのところは何分頭数が多く、全員の顔など知る訳もないので何とも言えないが……

（あの子が鍛冶師かと言われると、な）

首を傾げざるを得ない。

「何て名前の子なの？」

「確か……リリルカとか言ったかな。ローブを着込んでいて種族はよく分からなかった

が、自分の背丈ほどもあるバックバックを背負っていたのが印象的だった」
「何ですって？」

霞が急に声を険しくした。

「それ、小人族バルウムの女の子じゃないでしょうね？」

「いや、だから種族は分からないと言っただろう？」

と、前置きをしてから続けた。

「ただ、背丈からすればそうだったとしても驚かないな」

途端に、霞は険しい顔をして黙り込んでしまった。

「何か知っているのか？」

「知っているというか、ちよつと噂があつてね」

これは、あの古狸を訪ねるまでもなかつたかもしれない。

そんな事を思いつつ、先を促す。

「詳しくは知らないけど、『手癖の悪い小人族バルウム』のサポーターがいるっていう話を聞いた事があるのよ」

霞は殊更声を潜めて続けた。

「どうやら、冒険者を騙しては金品や装備を盗み取っているみたいね。今のところ、命を落とした冒険者がいるって話は聞かないけど……」

まあ、そこは死人に口なしと言う可能性もある。

ダンジョンの中で武器を失ったなら、そうなつていても何ら不思議ではない。

「所属は？」

「そつちも詳しい事は。でも、『ソーマ・ファミリア』つていう噂はあるわね」

その「ファミリア」の名前を聞き、ため息を返す。

「あそこは元々そういう話には事欠かないだろう？」

どういう訳か常に金に飢えていて、四年前の俺達にも度々絡んできた。

その都度返り討ちにしたが……まあ、どいつもこいつも派閥の意向ではなく、報酬狙いで傭兵の真似事をやっていたらしい。

「それはまあ、そうなんだけど……。でも、そのサポーターは確かにいるみたいよ？」

「ふむ……」

それなら、先手を打って「ソーマ・ファミリア」を潰してしまおうか——と、思いもしたが、それには相応の口実がいる。

だが、冒険者同士が共食いしているというだけでは、流石にウラノス達を言いくるめる事は出来そうにない。……のだが、しかし。

(惜しいんだよな、あの子の采配)

あの派閥で腐らせておくには少々惜しい逸材ではある。少なくとも、ベルの手綱を任

せるにはちょうどよきそうな相手なのは間違いないのだから。

「まあ、もう少し様子を見てみるさ。俺も明日は特にこれと言った予定はないしな」

もつとも、フェルズやシャクティあたりが面倒事を持ち込んでこない限りは、だが。

6

明けて翌日。

「二昨日、エイナさんと買い物に行った時に見つけたんです。ロゴは入ってないですけど一応「ヘファイストス・ファミア」製の防具なんですよ」

廃教会前でいつもの日課を済ませてから、見慣れない軽鎧について問いかけると、ベルは少し興奮した様子で言った。

「なるほど。そういう事か」

バベルの八階で見習いの作品を売り出しているという話をヘファイストスから聞き、興味本位で——それと、矢やボルトがあればと思い——覗いた事があった。

結局購入にこそ至らなかったが、値段と比較して優れた品が多かったと記憶している。

もつとも、それなりの目利きができないと痛い目にあう可能性もあるが……それでも、他の店で安物を買うよりはよほど安心できる。

実際、ベルの買った軽鎧は九九〇〇ヴァリスという値段でありながら、軽く、それに反してなかなかの硬度を有する、理想的な軽鎧だった。

無論、上を見れば限りはないが、今のベルでも手が出せる範囲で言えば、最上位に位置する一品だろう。

少なくとも『上層』を探索する上ではこれと言った欠点は思いつかない。

しいて言えば刻まれた銘が……まあ、何だ。やたらと愛嬌に満ちている事くらいか。

同時に刻まれている鍛冶師の名前からすると造った鍛冶師は男のように思えるのだが、案外女性だったりするのだろうか。……いや、それはそれで偏見なのかもしれないが。

「それで、そっちのプロテクターは？」

緑玉石色をした小盾——よりもさらに手甲に近いそれを見やり問いかけた。

「えっと、これはエイナさんからのプレゼントで……」

こちらはこちらでなかなかの物だ。武器の目利きまでできるとは、流石はギルドが誇る鬼教官。下手な冒険者よりも知識量は豊富そうだった。

それにしても——

「ほほっ。」

ついに女から貢がせるようになったか。いやはや、若者の成長とは早いものだ。

「あつ！ 違いますからね！ エイナさんはただ他に団員のいない僕を心配して贈ってくれただけですから!!」

いや、それはどうだろう。

配色からして、エイナの瞳を思わせる——というのは、流石に深読みのし過ぎかもしれないが、それでもそこまで気楽に贈れる品だとは言い難い。

(まあ、一〇〇〇〇ヴァリス以上はしないだろうが……)

俺が見た限り、あの店で取り扱っている武器は一番高額でも精々が五桁かそこらだった。……ような気がする。

品質としてはベルの鎧と同じか少し劣る程度か。従って軽鎧より多少安いと見積もって、大体八〇〇〇ヴァリス前後と言ったところだろう。

主に霞とアイシヤに叩き込まれたこの街の経済事情によると、一般的なLv. 1の冒険者が一日に稼げるのがおよそ二五〇〇〇ヴァリスだという。それでも、無所属の職人達——つまりはごく一般的な職業の日給より高額だとも聞いている。

そして、ギルド職員もLv. 1の冒険者に匹敵する高給取りだと聞く。いや、冒険者と違い、日給が大きく変動するとも思えないし、武器や防具、消耗品の補給も必要ない事を考えればより安定していると言えよう。

一ヶ月二〇日勤務として、月収五〇〇〇〇〇ヴァリス程だろうか。

(確かに高給取りだな)

いや、そうではなく。

その中から、一〇〇〇〇〇ヴァリス弱の代物をポンと買って贈るとは……。

(一体どちらが鈍いんだか……)

傍から聞いていればお熱い恋人同士のやり取りにしか見えないのだが……しかし、ベルはその辺りさっぱり自覚していないし、エイナもエイナで放っておけない弟分くらいにしか思っていない節がある。

(まあ、清い交際とはこういうものか)

我が身を顧みると、おおよそ縁がない世界ではあつた。

なので、この際普通はそういうものだど納得しておく事にする。

それに――

「お前も大概危なっかしい奴だからな」

エイナの心配も分らないではない。

少し冒険して五階層に行ってみれば、いるはずもないミノタウロスと出くわし。

酒場で一息つけば、紆余曲折あってほぼ丸腰のままダンジョンに突貫して死にかけ。

祭りに行けば逃げたモンスターに散々追い回された挙句に死闘を演じ。

と、そんな出来事をたった半月あまりの間に経験しているのだ。エイナでなくとも心

配になるか。

しかも、その全てが人為的なものだというからどうにも救いが無い。

(昨日は昨日でナイフを落としたらしいな)

それをリユーとシルが見つけてくれていたそうだ。

これもやはり、人為的なものなのではないだろうか。その現場に、リリルカが居合わせたと聞いています。

(あとで、リユーにでも話を聞いてみるべきか?)

昨夜、霞から聞いた話と併せて考えると樂觀視する気にはなれなかった。

が、今すぐできる事は特にない。

「だが、エイナと二人きりで出かけたんだろ。他に何か面白い事はなかったのか?」

ここは話を戻し——さらに、あえて邪推してみるとしよう。

ベルの性癖このみは大体把握している。

年上とエルフはその最たるものだ。いや、その割に本命は人間らしいが……まあ、それでもやはり年上なのは確かだった。

頑張れ、ヘスティア。年上ならお前に勝る者はきつといない。

「他ですか? 神様が他の階にある店でアルバイトしてましたよ。急に掛け持ちを始めるなんて、一体どうしたんでしょうか?」

もうすでに頑張っているらしい。……少しばかり方向性が予想と違うが。

「いや、そんな事を言われてもだな……」

というか、ヘステイアは本当に一体何をしているのか。

結成当初と比べてベルの稼ぎは劇的と言っていいほどに増加している。今さらバイトを増やす必要はないはずなのだが。

(勤労な性格ではないと思っただがな)

いや、どちらかと言えば怠惰な性格だ。それこそヘファイストスと足して二で割ればちようどいいくらいになるほどに。

(ああ、だが。俺もヘファイストスほどには働きたくないな……)

所詮は俺も放浪者。日々の糧さえどうにかなるなら、あとはフラフラとしていたい。

この街はそういう意味ではかなり理想的だった。ダンジョンでそれなりに気張れば、当面は好きに暮らせるのだから。

……まあ、何故だか次から次に面倒ごとが持ち込まれるせいで、そうも言っていられないのが現実だが。

どうやら世界とは悲劇であるらしい。

(ヘステイアも案外、何か弱みでも握られていたりしてな)

身に振る火の粉を払う度、あの爺さん達に勝手に負債を押し付けられている俺が言う

のもなんだが。

(いや、しかし。ヘステティアにとって今さらヘファイストスに絶対服従するような事になる弱みとは一体……)

話を聞く限り、現時点でヘファイストスには相当な弱点をさらけ出しているはず。今さら、一体どんな弱みを加えれば、そんな事に――

(……やめよう)

何だか恐ろしい真実が浮き彫りになりそうだ。

「まあ、いいか」

危険には近づかない。これは世界のどこでも共通のはずだった。

いや、俺達^{不死人}の場合、それを律義に守っていると祭祀場から出る事もままならなくなるが、それはともかくとして。

「そろそろ時間だ。出かけるとしようか?」

借りていたプロテクターを返しながら告げた。

「はい!」

頷くと、ベルはそれを左腕に装着し、そこに例のナイフを格納した。

「ナイフの場所を変えたんだな?」

「はい。昨日落としちゃったので……」

その構造上、少なからず抜きにくくなるのが気になる気になるところではあるが……まあ、予防策としては悪くないのか。

（いや、だが。熟練のスリ師は腕飾りすら盗むと聞くな……）

昔からちよくちよくそういう話は聞く。オラリオでも、専門家のシャクティがそう言っていた。

そして、ロスリックで世話になったグレイラット辺りなら実際にやってのけるだろう。

リルルカがその域に達しているかどうかは定かではないが――

（ま、今日はその辺りも注意してやるか）

愛用の黒衣から放浪者のコート一式に装備を切り替えながら、小さくため息をついた。

「リリ！」

「ベル様！ と、そちらの方は……？」

バベル前の噴水で、リルルカと待ち合わせ。どうやら、そういう事になっていたらしい。ベルが近づくと、彼女は表情を明るくし――次いで、こちらを見て首を傾げた。

「二日ぶりだな」

軽くフードを持ち上げ、挨拶する。

「い、イレギュラー【正体不明】様……」

いや、そんな街中でモンスターと出くわしたかのような顔をする事もないだろうに。「悪いな。今日は少し邪魔させてもらおうぞ」

「い、いえ。そんな事は……。ベル様に加えてイレギュラー【正体不明】様まで一緒なら、何が起こっても平気ですからね」

それはどうだろう。デーモンや闇霊あたりが姿を見せたらそうも言っていられない。「それじゃ、リリ。今日もよろしくね」

微妙な空気には気づかないまま、ベルは笑顔でリリルカに手を差し出す。

リリルカもおっかなびっくりそれを握り返して——ともあれ、本日のダンジョン探索は幕を開けたのだった。

「よし、次が来るぞ」

「はいー」

ダンジョン七階層。正規ルートからは少し外れたそこは、稀に迷宮資源が採掘できる穴場として一部冒険者の中では有名……。らしい。

リリルカに案内されたそこに俺達は陣取っていた。

「しかし、なかなか出ないものだな……」

前衛ベルの奮闘を横目に見ながら、近くの壁に愛用のつるはしを打ち込む。

「ここが『下層』や『深層』辺りならそろそろ大当たりがあつてもいい頃なのだが。

「そ、それはまあ、『上層』ですから……」

すぐ近くのリリルカが、引きつった顔でうめく。

と、そこでベルを抜いた蟻が何匹か近づいてきた。

「それっ！」

即座に反応したりリリルカがクロスボウを構え、次々に射止める。

「よっつと」

つるはしから直剣に武器を切替えると、リリルカの射撃を掻い潜ってきた最後の一匹の脚を落として動きを封じる。

とどめは刺さない。ダンジョンの性質上、こうして採掘している間はこの辺りではモンスターが産出されない。が、仲間を呼ぶ『匂い』を発するこの蟻がいるなら、話は別だ。

少々残酷だが、こうして『餌』を一体残しておけば、あとは向こうから勝手にやってきてくれる。『餌』の活きが悪くなれば、そのまま魔石に変えてやればいい。

「あ、あの。【正体不明】様？」

前の『餌』を楽にしてやってから、改めてつるはしを振るう——より先に、いかにもおっかなびつくりと言った様子でリリルカが声をかけてくる。

「そろそろ魔石やドロップアイテムを集めたいと思うのですが……。と、言いますか。先ほどからベル様はずっと戦いつばなしですし、そろそろ休息レストが必要なのではないかと」

「ふむ。まあ、あまり転がしておいてベルや蟻どもに踏み砕かれてももつたいないか」
「ここに陣取つてから今まで、拾い集めているほどの余裕もないまま連戦が続いてい

た。
そのおかげで、辺りには魔石とドロップアイテムの山ができています。

「よし。なら、そろそろ休憩にしよう」

足元でもがく蟻にとどめを刺してから、ベルに声をかけた。

「ベル、そいつらが終わったら一度休憩にするぞ！」

「はい、師匠!!」

その返事を聞きながら、今度こそ壁につるはしを打ち込む。

例え大当たりはなくても、休憩するならこうして壁に傷をつけておく必要がある。

「お、終わりましたー」

ようやくそれらしい鉱石が転がり出てきた頃、肩で息をしたままベルが戻ってくる。
「お疲れ。ずいぶんとやるようになったな」

こうして鉱夫の真似事をしているのも、援護の必要がないと判断したからこそだ。

「ありがとうございます」

リリルカから回復薬を受けとり、それを呷ってからベルが笑った。

「と、言いますか。ベル様のデタラメっぷりの理由が分かった気がします」

こちらをジト目で見ながら、リリルカが呻く。

「ぼ、僕ってデタラメなの?」

「はい。冒険者になつて一ヶ月にもならないのに単独ソロも同然で七階層進出はというのは、普通はあり得ません。いくらい武器を使つていてもです」

「そ、そうなんだ……?」

「ええ。ですが、こんなスパルタ教育を受けているなら、それも納得ですね」

ため息を残して、リリルカが魔石を拾い集めに向かう。

手伝おうと思つたのだが、ベル共々断られた。ベルは疲労しているかもしれないが、俺は別に疲れるような事は何もしていないのだが。

しかし、

「スパルタか?」

むしろ、安全第一で事を進めているつもりなのだが。

何しろ、俺達不死人のように死んで覚えるという訳にはいかないのだ。流星の俺とて慎重にもなる。

「どうなんでしょうね?」

新しいモンスターが近づいてきても対応できるように、せつせと魔石を拾い集めるリルルカを見守りながら、俺達は首を傾げるのだった。

それからしばらくして。

「やはりそろそろ遠距離攻撃が欲しいな」

すっかりペース配分まで面倒を見てくれるようになったリルルカの言葉に従い、俺達はダンジョンの片隅で昼食をとっていた。

俺とリルルカは、ダンジョンに潜る前にバベルの売店で買ったサンドイッチ。ベルだけはシル謹製の弁当だった。

何というか……相変わらず——おそらく、状態異常に対する耐性を高める手伝いをしてやろうという——優しさに満ちた^{あいさい}哀災^{あいさい}弁当である。

「魔法ですか!」

震えながら涙目でそれを食していたベルが、一転して顔を輝かせた。

「それはまあ、使えるようになって損はないだろうが……」

「ええ。ですが、魔法には詠唱が必要になりますし、もし発現した魔法が長文詠唱のものとなると、かえってベル様の持ち味を殺す結果になりかねません。いえ、並行詠唱を会得すれば問題ないと言えはその通りなのですが……」

「そうだな。あれを習得するのは大変らしい」

並行詠唱とは要するに近接戦を行いながら詠唱をする技術——それも、「ステイタス」によってもたらされる『スキル』とは違い、文字通りの純粋な技術である。

魔術や奇跡と違い、詠唱が長い魔法を主体とするオラリオならではの技術と言えよう。

アイシャヤリヴェリア、リユー達がやっているのを何度か見ているが——各々がものにするには苦勞したと言っている。

あの三人が口を揃えてそう言うのだ。急激に伸びているベルと言えど体得するのはおそらく容易ではない。

「かと言って、クロスボウの類は手が足りないしな」

現時点でショートソードとナイフの二刀流だ。『ソウルの業』を知らないベルがさらに武器を追加しようとするなら、腕がもう一本か二本は必要になってくる。

となると、

「投げナイフ辺りが妥当か……」

その辺りなら、クロスボウほど併用するのも難しくはないはずだ。

「ですね。それ単体ですと威力が少々心許ないですが、接近するまでの隙を補う分には申し分ないかと。まあ、使い捨ての武器は補給が高くつく欠点もありますが」

と、自身もクロスボウを愛用するリリルカが苦笑した。

「ううん……。でも、確かに間接攻撃があると心強いなあ」

しばらく唸つてから、ベルが呟いた。

「また、バベルの八階を覗いてみようかな」

「どうやら、よほどあの店が気に入つたらしい。」

まあ、駆け出しの冒険者にとってはこの上なくありがたい店ではあるだろう。

しかし――

「いえ、ベル様。あのお店は少なくとも消耗品を買うには向かないと思います」

リリルカの言う通り、安定供給という意味では少々不安がある店だった。

「え？　そんなの？」

「ええ。習作とまでは言いませんが、まだ見習いの鍛冶師達がつっているものですから。商品の入れ替わりが結構激しいんです。試行錯誤の結果とでも言えばいいでしょうか。もちろん、それ自体は悪い事ではないのですが……」

「ああ。武器としての性能は上がっていたとしても、それが自分の手に馴染むかどうかはまた別だ。もちろん、武器にあわせていくのも方法の一つだが……」

「あのお店のように切り替わりが早いところだと、それも難しいんです。馴染んだ頃にはまた変化したりしますし……上級鍛冶師になって別のお店に移動していたりする事

もありませんからね」

そうなるよ、お値段が劇的に高くなるんです——と、リルルカが肩をすくめた。

「武器や防具のように、一度買えばそれなりに長い間使える代物ならともかく、消耗品は補給先も考えて選ばないと。いざという時に出し惜しみしたくなる原因になる」

巡礼地では補給がままならない事も多々あった。それこそ投げナイフの一本、矢の一本でも場合によっては貴重品だ。

それに商人がいても、購入のためのソウルが捻出できるかどうかという問題もある。

（何をしてもソウルが必要だったからな、あそこは）

ともあれ。おかげですっかり貧乏性が染みついている訳だ。

矢を惜しんで不用心に突っ込んだばかりに罠に嵌まり、瞬く間に包囲されて篝火送りにされたのは一度や二度ではなかった。

「な、なるほど。じゃあ、やっぱりあれこれ探してみるしかないのかな」

それとも、またエイナさんに相談してみようか——と、呟くベルはともかく。

（やはりこの少女を手放すのは惜しいな）

エイナとはまた違う、実際にダンジョンの中で——あるいはオラリオで——学び取った生の知識や知恵というベルに最も欠けているものを多く有している。

このまま無難に面倒を見てくれるようになるなら、ベルにとってこの上なく頼もしい

相棒となるだろう。

しかし——

(確かにきな臭いな……)

言葉を濁してはいたが、どうやら所属は「ソーマ・ファミリア」らしい。

加えて言えば本日の主武装として用いている曲剣——《ミルの曲剣》という我ながら露骨すぎる罫にも早々に食いついてきた。隙を見せてやると抜け目なく目で追ってくる。

(武器としては平凡なんだがな、これ)

見た目は派手だが、特別優れた武器ではない。

柄に宝石がちりばめられている事もあつてか、曲剣にしては重いため、筋力があればそれなりに使えるようになる。

が、そもそも実用性よりも見栄えを優先して作られているというか……それこそヘアリストス刃りが見れば眉を顰める類の武器だった。

とはいえ、多少は楔石を刻み込んである。この街で手に入る武器と比較するなら、そこまで見劣りはしないはずだ。少なくとも、売ればちよつとした稼ぎにはなる。

(ただの拾い物なら別に今すぐ譲つてもいいんだが……)

これでも一応は感謝の印として譲り受けた代物だ。流石にそう簡単には手放せない。

……それに、今や形見の品でもある。

「さてと。それじゃ、そろそろ続きと行くか」

「そうですね。ところで、リリが教えてくれた鉱石は出たんですか？」

「まあ、気持ちだけな」

半日かけて魔石を収める布袋一袋分くらいか。

まあ、魔石より迷宮資源の方が一般的に高額で買い取ってもらえる。

それを考えれば、これでもそれなりの稼ぎにはなるはずだ。

「それは仕方ありません。ここは『上層』なので。【イレギュラー正体不明】様がいつも行かれる『深層』とは訳が違うのです」

別にいつも行っている訳でもないのだが。

ああいや、そういう類のものを稼ぎに行くなら確かに『深層』領域に行くのが常か。

しかし、リルルカが思っているほど簡単にぼろぼろと見つかる訳ではない。

「つと、噂をすれば早速だ。そら、ベル、リルルカ。出番だぞ」

「はい！」

「またリリが中衛ですか?!」

「そうしないとお前に【エクスセラ経験値】が入らないだろう?」

そして『ファルナ神の恩恵』などない俺がいくら稼いだところで無駄にしかならない。

「どうせならばベルの世話を焼いてくれる札にお前にやろうと思つてな。……何なら、バックバックは預かっておいてやるぞ?」

「このバックバックにはリリのアイテムも入っているので大丈夫です。というか、ないとリリは満足に戦えませんっ!」

それは謙遜しすぎというものだ。

相も変わらず、この少女の立ち回りは非常に俺好みである。

「それ、来るぞ。なに、即死でないならあととは何とかしてやる」

そうこうしているうちに、ベルを前衛を潜り抜けた蟻共が殺到してくる。

思つたよりも数が多い。ベルが下手を打つたというより、元々の数が多いだけだが。

「リリはただのサポーターなんですがっ!?!」

ならば、目指せ脱サポーターである。

そもそも、もしベルとリルルカの「ステイタス」が同じだったなら、彼女の方が数段優れた冒険者となるだろう。腐らせておくには少々惜しい。

「余計なおせっかいですううううううっ!」

と、言う訳で。

もつと呼び寄せるがいい——と、足元の新しい『餌』を軽く蹴飛ばす。

「きゃああああああああつ! 何かもの凄い大群じゃないですかあああああつ!」

と、増援は思ったよりも大量にやってきた。

どこかで『怪物の宴』モンスターパーティーでも起こっているのだろうか。

「べ、ベル様あああああああつ?!」

「リリいいいいいい!!」

いや、ただ単に仲間を傷つけられ義憤に駆られただけか。

理由はさておき、怒涛の勢いでうごめき殺到する蟻の大群。

それを見て悲鳴を上げるリリルカ。その声を背に受けて慌てふためくベル。

「お?、これまたずいぶんと大量に出たな」

そして、こういう時に限って大量にドロップする迷宮資源。

「暢気に採掘しないで、まずはこつちを助けてくださあああああいつ!!」

阿鼻叫喚ほのほのとしたダンジョンの日常がそこにあつた。

7

バベル内の簡易食堂に点在するテーブルの一つを陣取るベルとリリルカの元に、本日
の稼ぎを携えて戻る。

本来なら、サポーターのリリルカが行うと言って譲らなかつたのだが——何分、俺達
の中で一番消耗が激しかったのが彼女だ。

ベルと一緒に待っているように告げると、思いの外あっさりと言得する事ができた。
「い、一二〇〇〇ヴァリス……っ!？」

ヴァリスの詰まった布袋を二袋テーブルに置いてから金額なかもを伝えると、ベルのみならずリリルカまでが絶句した。

「ど、どうしよう、リリ。昨日の六〇〇〇ヴァリスでも驚いたのに……?!」

「お、落ち着きましよベル様! と、言いますか、あれだけやればさすがに……!!」

あれから結局、中衛リリルカの処理が間に合わなくなり、前衛ベルが孤立し始めた事もあって呪術——【炎の嵐】でまとめて薙ぎ払う事になった。

その後、もう少し加減しながらも、同じ布陣を保ち続けた結果がこの報酬である。

疲労困憊とした二人を担ぎ、いつもより幾分か早くダンジョンから戻った割には、なかなかの儲けだった。

慌てふためく二人を微笑ましい気分で見守りつつ、一袋ずつ差し出した。

「ほら、これが今日のお前達の取り分だ」

「え? でも、クオンさん。それだとクオンさんの分が……」

「俺は別に何もしてないしな。それに、俺にはこつちがある」

もう一つの布袋を取り出してテーブルに放ってやる。

「これはっ!」

「採掘した鉱石の売値だ。これからリリルカには情報量を分配してある」

それと、全額とは言わないまでもボルト代もいくらか。

なので、今日の配分が一番多いのは、実はリリルカだった。

「それでも手取りは三〇〇〇ヴァリスほどある。俺が今日やった事を考えれば、充分すぎるな」

今日俺がやった事と言えば、崩壊しかかった中衛を立て直し、その後で手傷を負った二人を何度か癒しただけだ。ああ、それと何度か援護射撃もしたか。

あとはひたすら愛用のつるはしでダンジョンの壁を掘っていただけである。

「いえ、あの回復魔法はそれだけでも充分にデタラメなのですが……」

詠唱が短くて、即効性があつて、しかもあんなに効果が高いなんてどれだけ——などと、リリルカが呻く。

「そんな事を言われてもな……」

しかし、今日使ったのは精々が「中回復」まで。真面目に修行を積み重ねた高位の聖職者なら、それが例えただの生者であっても、充分に修められる程度でしかない。

「くつ、これが『灰色の悪夢』^{アッシュ、オブ、シンダー}なのですね……!」

いや、そんな風に睨まれても困るのだが。

(まあ、何だ。平和な時代になった証左だろうな)

ひとまずそれで納得しておこう。

……もつとも、目の前の少女を説得する事は出来なさそうだったが。

不機嫌な女には甘い物を捧げよ——と、オラリオで学んだ知識を活かし、何とかリルカのご機嫌を取つてから。

「それじゃ、お二人さん。また明日な」

「明日はもう少しお手柔らかにお願いしたいのですが。いえ、少しと言わずしっかりと」
まだ不機嫌そうなりリルカはさておき、ベルまでが首を傾げた。

「クオンさんはどこかに行くんですか？」

「少し野暮用があつてな。今日はそんなに時間はかからないはずだ」

どのみち、帰る場所は同じなのだから。

そして、それからしばらくして。

「ヘステイアちゃん、今日はもう上がっていいよ」

「はい」

目的地付近の路地に、獣人のご婦人と女神のやり取りが響く。

「ここは北通りの露店——とどのつまりは、ヘステイアのバイト先である。

「よう、ヘステイア」

「あれ？ クオン君じゃないか。どうしたんだい？」

「なに、少し相談があつてな」

「それこそ珍しいね？」

首を傾げるヘスティアを連れ——ついでに、その露店でじやが丸君をいくつか購入してから——近くの路地を縫いながら人目を避けて帰路につく。

「それで、一体どうしたんだい？」

「ああ。単刀直入に、ベルに呪術を覚えさせたいんだが」

あえて言葉を探す必要もない。俺はあつさり和本題を切り出した。

「呪術つて、確か君が使う炎の魔法の事だよな？ 急にどうしたんだい……というか、そもそも、それつて覚えさせようとして覚えさせられるものなのかい？」

どうやら魔法というのは一人一人個性がある代物らしい。

一点物とでも言えればいいだろうか。基礎となる知識や技術は共有できるようだが、実際の運用は個々人でそれぞれ学ばねばならないらしい。

もつとも、そうは言つても多くの場合は、似たような効果を持つ魔法が存在するのも確かなので、まるで手探りという訳でもなさそうだが。

「ああ。それについては問題ない」

一方の呪術は、他者に継承させる事が可能だ。実際、俺自身も師匠——呪術の開祖であるイザリスのクラーナから直々に継承している。

むしろ、問題となるのは――

「ただ、お前の『恩恵』がどういふ影響を及ぼすか分からなくてな。それで、こうしてこつそりと相談しに来たつてわけだ」

「うーん……。君の魔法は僕にもよく分からないからなあ。でも、エルフじやない子供達も魔法が使えるようになったわけだし、多分問題ないんじゃないかな」

何とも頼りない発言だ。が、そうは言つても呪術もまた完全に失伝している以上、それも致し方ない事なのだろう。

「でも、急にどうしたんだい？」

「まあ、師匠らしい事の一つもしてやりたくなつた、とでも言つておこうか」

それも全くの嘘ではない。今までは大した事を教えてやれなかつたが……呪術であればそれなりの事を教えてやれる。

そして、もう一つは――

(やはり奪われない武器が必要だな)

残念ながら、リリルカ・アーデという少女は疑わしい。

それが今日一日を共にした結論だつた。

明確に敵対する事になるかどうかはさておき、最悪の状況は想定しておくべきだろう。

具体的には、ダンジョンの中で武器を失うような事態だ。

その点、呪術なら奪われなくて済む。

「むむつ。なんか怪しいなあ」

「なら、またおかしな事に巻き込まれる前に手を打っておきたいとでも言おうか？ そろそろそういう時期だろ？」

何しろ、それこそが大本命でもある。

それに、怪物祭が終わってもう四日目。そろそろ次の厄介事が起こってもいい時期だった。

……あながち冗談に聞こえない辺り、あいつも大概だと言えよう。

「何だか急に必要性を感じてくるのが嫌すぎる……っ！」

いつも通り触手を——もとい、結った黒髪を戦慄かせて、ヘスティアが呻く。

「うーん……。これ以上ベル君に秘密が増えるのも心配だけど、そればかり気にして危険な目にあつたんじゃ元も子もないしなあ」

気を取り直すようにじやが丸君を齧ってから。

路地から見える細い空を見上げて、ヘスティアが呟いた。

そろそろ路地も終わる。人目を避けて会話できるのもそこまでだった。

「うん。分かった。それじゃお願いするよ」

路地を抜ける直前、ヘスティアはそう告げた。

「よし、それなら——」

帰ってベルとも相談するでしょう——と、そう告げるより早く。

「ベル君?!」

ヘスティアが顔を輝かせ……そして、一気に落ち込んだ。

(あ……)

視線を辿ると、その先には確かにベルがいた。

……リリルカと仲良く手を繋ぎ、楽しそうに笑っているベルが。

(よし、決めた)

ここは撤収だ。

女の悟気になどいちいち関わってはいは人間性がどれだけあつても足りない。

速やかに気配を消し、その場を後にする。

「おや、ヘスティアではないか。どうかしたのか?」

そして。入れ違うように現れ、あえて苦難を選ぶどこかの誰かの冥福を祈る事にした。

(やれやれ。相変わらず面白い主従だな、あいつらは)

ベルとリルルカの逢引きを目撃し、愠気に吞まれたヘスティアから逃げ出してからしばらくして。

気づけば第八地区に戻ってきていた。

別に朝だろうが夜だろうが、ダンジョンの中には特に影響はないが……まあ、そこは生者の性というものか。

すつかり日が沈んだ今となつては、ダンジョンから戻ってきたと思しき者達が圧倒的に多い。

命を対価とした今日の稼ぎを担いで戻ってくるを迎え入れ、大いに賑わうメインストリートから少し外れ、多少は人気の引いた路地を進む。

もつとも、こことして『冒険者通り』の一角である。隠れ家めいた趣の酒場も多く軒を連ね、そこからの喧騒は表通りに劣る事はない。

違いとがあるとすれば、街灯の数くらいか。だが、それこそ街中の夜を恐れるような冒険者などいるはずもなかった。

あるいは、夜の闇にも物怖じしない冒険者ばかりが闊歩するこの場所こそが真に『冒険者通り』の名に相応しいのかも知れない——などと、益体もない事を思いながら、あてもなく路地を彷徨う。

(アルドラの店にでも行くかな)

廃教会に戻ったところで怪気に駆られたヘステイアが待ち構えているだけだ。かといって、隠れ家に戻って寝るにはまだ少し早い。

うまい具合にアイシャとでも出会えればそれでもいいが……。

「ツ!？」

などと、嫉妬する 嘆く女神様を放って不埒な事を考えていたのが不味かったのか。

死角から突如として槍の穂先が繰り出された。

(ま、この黒衣を着ているせいかもな)

今日はリルルカが傍にいた事もあって——それと、彼女の案内で人目につきづらい場所にいた事もあって——愛用の黒衣を着たままだった。

舌打ちする暇もなく、続けざまに殺気が迫る。

それらをことごとく盾で払いのけ、愛用のクレイモアを引き抜く。

敵は五体。槍兵が二体。他には剣と槌、そして斧を携えている。

攻防を交わしながら、敵の兵装と戦術を俯瞰した。

単体で言えば、獣人の槍兵が最も強い。が、小人と思しき四人組の連携を許せばそちらの方が厄介、と言ったところか。

ならば、やる事はいつもと変りない。分断し、各個撃破する。

慣れ親しんだ流れへと持ち込むべく、行動を開始した。

敵中に飛び込むと同時に、短い物語を口ずさむ。

その名を「フォース」。

衝撃波を放つ。ただそれだけの奇跡だ。

その衝撃波だけでは人は殺せない。だが、強引に体勢を崩させるくらいはできる。

「チッ!?!」

群れからはぐれた最初の一体——剣を装備する小人に対して間合いを詰める。

一対一なら力負けする事すらあり得ない。切り結び、そのまま強引に切り崩す。

「があ……!?!」

盾で殴りつけ、無防備となった腹を横薙ぎに払う。

流星に飛びのいて両断は避けて見せたが……だからどうなるものでもない。傷口からはすでに腸が覗いている。ただの生者にとっては十分な致命傷だ。

「貴様あああつ!」

激昂し無策に飛び込んでくる槌使いの一撃を盾で受け流すと同時、武器を切り替える。

大槌——《大竜牙》。

自分の力に振り回されたたらを踏むその小人を真正面から叩き潰した。が、まだ連携を分断しきれていなかったらしい。

完全に叩き潰す前に、小人の槍兵に接近された。

胸元を穂先が掠めるより一瞬早く飛び退き、同時に投げナイフで牽制する。

(これだから路地は……)

遠い昔、山羊頭のデーモンと犬どもに散々返り討ちにあつた時の事を思い出し、舌打ちした。

無論、あの時のように苦戦するわけではないが、分断するには少しばかり狭い。

充分に分断できないせいで、先ほどからとどめを刺し損ね続けている。

もつとも、それは斃れた敵が味わう苦痛を悪戯に長引かせているだけでしかないが。

(いや、そうでもないか?)

万能薬でも使えば、あの傷も癒せる。やはり息絶えるまでは油断できない。

と、その辺りで回りで呆けていた連中が慌て始めた。

┌

悲鳴や罵声、場違いな喝采をまとめて無視し、炎の憧憬を思い浮かべる。

その名を「炸裂火球」。拡散する火球が槍を持った小人を飲み込む。

それを見届けるより早く、武器を《ムラクモ》に。

狙うは最後の小人。

突進の勢いを殺さないまま身体を回転させ、そのまま薙ぎ払う。

武器の重量に更なる加速が加わったその一撃は斧使いの小人を得物諸共に叩き斬った。

が、武器も着込んだ甲冑も流石に安物ではなかったらしく、やはり即死とはいかなかったようだ。

だが、この際だ。もはや構うまい。

武器をクレイモアに戻し、最後の一体と向き合う。

「デメエ、こんな事してただで済むと思っただけじゃねえぞ……」

特に興味はなかった。

しかも、あちらから仕掛けられた以上、恨み言を聞く義理すらもない。

五体の中では一番手練れだったかもしれないが、それだけだ。

敵陣は完全に崩壊した。ならば、もはや何の脅威にもならない。

手早く始末して終わりにしよう。

「クレイモアを両手で構え、一気に間合いを詰める。」

「シッ!!」

流石に反応は悪くなかった。

正確に眉間を狙って、槍が突き出される。

だが、遅すぎる。

いつか対峙した、あの竜狩り。彼が繰り出す雷光そのもの槍捌きには遠く及ばない。狙いを見定めたうえで、踏み込みを半歩だけずらす。

そんな粗末な動き一つで穂先は標的を見失い、虚空を穿つに留まった。

一方、こちらの劍の切っ先は狙い違わず敵の心臓を貫く——はずだったが。

「俺達を……『フレイヤ・ファミリア』を舐めるなああああああつー」

燃え残ったらしい槍の小人がなりふり構わず特攻してくる。

そのせいでこちらにも狙いが逸れた。やはりただの生者と侮ったのが失敗だったか。

敵の左肩を貫き通したクレイモアをそのまま振り上げ、自由にすると同時、焼け爛れ

た小人を蹴り飛ばす。まずはそいつからとどめを刺そうとして——ふと気づいた。

「お前は……」

動乱が収まらない路地の奥に、一人の老翁が立っていた。

いや、老翁というのはふさわしくない。草臥れたローブの奥にある顔には灰色がかつた白髭に覆われ、覗く素肌には皺が刻まれている。

だが、こちらを見据える目は炯々と輝き、見覚えのあるローブを着込むその体はこの

場にいる誰よりも覇気に満ちていた。

（あれは《竜の学徒のローブ》か？）

多少形は違うが、それはあの狂人の館を彷徨っていた亡者達が着こんでいた装束と同じものだった。……いや、あれらよりもさらに血の匂いが染みついているように思える。

「フ、フレイヤ様……」

ほぼ両断しかけている左肩を押さええながら、獣人の槍兵が呻いた。

ああ、なるほど——と、納得する。

どうやら、俺達はまんまと踊らされたらしい。

「お前達には、そいつがああ女にでも見えているのか？」

「貴様、何を言ってる……？」

なけなしの氣勢を発するその槍兵をあざ笑うように、そいつは口を開いた。

「ああ、どうやらそのようだな」

泥でも煮込むような、暗い嗤い声と共にそいつは言った。

「こんな枯れた爺と見誤るとは、よほどの醜女しごめと見える」

その右手には杖が現れる。『ソウルの業』——いや、そもそもその杖は……。

「《日暮れの杖》か……」

「正確にはその原典だ。これは私が私自身のために作り出したものでな。どうやら他の者達には使いづらかったらしい」

トンと、その杖で肩を叩きながら、その男は言った。

「な、あ？ フ、フレイヤ様……？」

そこでようやく正しく相手を見定めたのか、槍兵どころか瀕死の小人たちまでが呻き声を発する。

もはや言うまでもない事だが、そこにいるのはあの女ではない。

ああ、そうだ。この男は――

(ヴァングラット王……)

霊廟の奥で独りソウルを変質させ、巨人めいた亡者となり果てていたあの哀れな王の顔立ちにどこか似てはいる。

だが、違う。

背丈は常人のそれと大差ない。いや、そんな事は些末な違いだ。

在りし日は名君と称えられたかの王とは纏う気配が違う。

「ふむ。さては私を忘れたか亡者よ？」

そうだ。この男は――

「アン・デイルか」

絶句していた。いや、そうではない。驚く事など何も無い。何も無いはずだ。

「いかにも。……ああ、なるほど。この形で会うのは初めてだったか」

【原罪の探究者】アン・デイル。

かつてヴァングラットと共にドラングレイグを興し、道を違えた狂人。

因果に敗れ異形となったはずの男だった。

「精強で鳴らす【フレイヤ・ファミア】も所詮はこの程度か。つまらぬ」

「本当に、アン・デイルなんだな……？」

「そうだと言っておろう？」

改めて呻く俺に対して、その男は実にあっさりと頷いて見せた。

「どういうつもりだ……。まさかあの女神に与したか？」

本人、なのだろう。

人間の姿で会おうのはこれが初めてだが——ああ、そうだ。『俺』がこうして会うのは初めてだ——今さら疑問などない。

「笑えぬ冗談だな」

フン、と鼻を鳴らしてからアン・デイルは事も無げに言った。

「これはちよつとした戯れよ。久しい顔を見たからな。挨拶代わりに少しばかり趣向を

凝らしてみた」

その言葉には、まるで子どもが悪戯を自慢するような無邪気さすら宿っていた。

「迷惑な話だ」

「許せ。何しろ都合よく間抜け面をさらした阿呆どもを見かけた故つい、な」

クツクツとアン・デイルはのどを鳴らす。

ああ、それこそ悪戯がばれて舌を出す少年のようだった。

「テメエ、ジジイ！ オレ達に何をしやがった!？」

しかし、そのせいで五人ほどが死にかけている。

……まあ、直接手を下した俺が指摘するのもお門違いだろうが。

それに、子どもの無邪気さは往々にして残酷さを伴うものもある。

「何、【魅了】の上書きをしたまでよ。元々術中にはまっている阿呆どもを騙すなど造作

もない」

それはそうだろう。

何しろこの男は、あの【ビックハット】ローガンにも匹敵する——いや、手札の多彩さで言えばそれを上回りかねない稀代の術者だ。

事実、魔術のみならず呪術や闇術にもその足跡を残している。加えて、狂気の度合いもローガンより上だ。

そして。

何より恐ろしい事にこの男は狂気に身を浸してなお決して狂ってはいない。

「しかし、まさかこれほど……。まったく、大した忠義よ。この爺と主君たる娘を見間違うとは、あの堅物ヴェルスタッドも腹を抱えて笑うだろう」

見事な才。褒めてつかわすぞ道化ども——と、アン・デールが嗤った。

いや、案外本気で称賛したつもりなのかもしれない。

(……俺がドラングレイグで出くわした道化はもつと洒落にならなかつたがな)

圧倒的な火力を誇ったあの『道化師』を思い出し、思わずゾツとした。

この連中が彼と同格だったら、今頃は灰も残っていない。

「デメエエエ!!」

獣人の槍兵——と言っても、もはや槍を握る事すらままならない様子だが——が、最後の気力を振り絞ってアン・デールに飛びかかる。

瀕死の体にしては驚くべき速さだった。しかし、それでは届かない。

「気安く触れるな下郎」

冷徹な——そして、何より致命的に無関心な声と共に、杖が振るわれる。

それには青白いソウルの輝きが宿っている。

曰く【ソウルの大剣】。

その名の通り、ソウルが模る大剣は獣人の右手首をあつさりと刎ねた。

「ぐ、おとおお!!」

両腕をほぼ失い、獣人がのたうち回る。

いや、あれは死の痙攣なのかもしれない。そう思う程度には血を失っていた。神の血を啜る冒険者はただの生者よりは死ににくいが、それにも限度がある。

「この街なら繋ぎ直せる者もいよう。疾く失せる道化ども。貴様らの出番は終わりだ」
いやはや。俺が言うのもなんだが……実に非情なものだ。連中にも連中なりに誇りがあるだろうに、それを無視してここまで徹底的に利用するとは。

ドラングレイグではある意味で導き手とも言える相手だったが——なるほど、これが狂人アン・デイルとしての姿ということか。

「それで、今さら何の用だ？」

「さて。ひとまず今宵は挨拶までだ。まあ、肩慣らしとでも思っておけ」

「肩慣らしだと？」

「近いうちに、試練に挑んでもらおうと思っっている」

「何だと？」

「何、そう身構えるな。かつてお前が経験した試練に比べれば取るに足らん見戯だ」

言うまでもない事だが、欠片も安心する事はできない。

すでに気が滅入ってきていた。

「そろそろ気づいているだろうが、この地では古い因果と新たな因果が入り交わっては蠢いている」

「デーモン共の事か？」

「その裏にいる者も察しているのではないか？」

「深淵。あるいは、闇の子か……」

まだ生き残りがいたとは驚きだが……しかし、それならあの光景にも納得がいく。

「終わった時代の亡者共が地に蔓延り、古い時代の光をばら撒いておる。だが、光が強くなれば闇もまた深くなるというもの。そして、その闇が不安定に蠢く因果を我が物としつつあるのだ」

それが深淵の現われという事なのか。

あるいは、それ以上の厄災がすでに育っているのか。

……あの、ダンジョンの奥底では。

「亡者よ。いや、もはや灰と呼ぶべきか」

その狂人はこちらを睥睨して命じた。

「今一度、在りし日の力を取り戻してもらおうぞ。時代を選定した貴様には、まだその権利と義務がある」

「なるほど、な……」

何が分かったという訳でもないが……それでも、どうやらこの男は再び導き手となりえる存在らしい。

もつとも、この狂人から簡単に情報が引き出せるとは思えないが。

「そう殺気立つな灰よ。今宵は挨拶までと言ったであろう。詳しくはいずれ話そう」
ではな——と、足元に炎を従え、アン・デイルは言った。

「待て——」

呼び止める暇もあればこそ。

アン・デイルは炎の中に消えていった。人の形をしていても、あの力は健在らしい。
「やれやれ……。大概人間をやめているな」

いや、それはお互い様か——と、人気のなくなった路地で小さく嘆息する。

ひとまず、やる事は決まった。

「——」

方々に転がっている半死人——いや、もう八割方死に絶えているが——を集め、ついでに斬り飛ばされた手首を回収してから「大回復」の物語を口ずさむ。

突然襲われたとはいえ……流石にこの流れで死なれるのは少々寝覚めが悪い。

アン・デイルの言い分なら、どうやら単に「魅了」されているだけらしい。

ならば、今回ばかりはこの連中も被害者と言つていいだろう。

「デメエ、あのジジイと知り合いか……?」

奇跡の効果が出てきたのか、朦朧としたまま獣人の槍兵が呻いた。

その生命力は驚愕に値する。『ダークリング』が浮かんでいないか不安になる程だ。

「不運な事にな。また面倒なのに目をつけられた」

せつかく『死んで』縁が切れたと思つていたのでが——と。

その強靱な生命力に免じて、譫言に応じてやる。

「まあ、なんだ。今日の事は性質の悪い野良犬にでも噛まれたと思つておけ。あの爺さん、本気で敵に回せば俺などよりも遥かに恐ろしいぞ」

蘇生した時に覚えているかどうかは限りなく怪しいが、そこまでは面倒を見きれない。

もつとも、記憶とは別に心底思い知つていそうでもあるが。

そして、あの爺さんと丁々発止とやり合ったであろうデユナシヤンドラもつくづく恐ろしい相手だったようだ。

「クソツたれが……」

獣人はぐつたりとしてようやく意識を失った。

とはいえ、流石に鍛えているらしく呼吸はまだしっかりしている。

他の連中も——まあ、この様子なら死にはしないか。手首や肩は無事に繋がりに、はみ出していた腸も元の位置に戻ったようだ。これなら、死人は出ないで済む。

「まったく……」

嘆息してから、新たに別の物語を口ずさんだ。

その名を「溢れ出る生命」。

ゆっくりとだが長時間に渡り癒しの力をもたらず奇跡だ。

あとは適当な治療院に一声かけて、収容してもらえばひとまず問題あるまい。

(しかし……)

これはいよいよ事態が動き出している。未だ全容は見えないが、確実に。

となれば——

(いつまでもあの廃教会に留まる訳にはいかない、か……)

今一度巡礼の——いや、巡礼とは名ばかりの殺戮の路へと戻らねばならない。

おそらく、だが。それを告げる狼煙は、もうどこかに用意されているのだろう。

でなければ、あの男が『挨拶』をしに姿を現す訳がない。

(いや、挨拶しに來ただけまだマシか)

ドラングレイグであの男が初めて姿を見せたのは、旅も中盤を迎えた頃だった。

それを思えば、予告があっただけ今回はまだ上等だろう。

第三節 ■の王様と■かぶり姫

1

一夜明け。

「あ、クオンさん。おはようございます」

「ぐぬぬぬ……」

多少の気まずさを抱きつつも廃教会に顔を出すと、まだ私服姿のベルと寝台で唸り声を上げるヘスティアの姿がそこにあった。

「ああ、おはよう」

ひとまず挨拶してから、ヘスティアに視線を向ける。

「それで、ヘスティアはどうしたんだ？」

「えっと、二日酔い、みたいです……。昨日の夜遅く、ミアハ様が連れてきてくださった時にはすっかり酔い潰れていたので」

神様、急にどうしたんでしょう？——と、まさか自分が原因とは思ってもいないらしいベルが首を傾げる。

（ああ、迂闊に声をかけたのはやはりミアハだったか）

そんなベルはさておき、胸中でため息を吐いた。

後で何か差し入れをしてやろう。四年前ならまだしも、今の彼らには安酒代エールも馬鹿にならないはずだ。

「あの、クオンさん。少しだけ神様をお願いできますか？」

「うん？ それは構わないが……」

別に病に伏しているわけでもなし、看待いても特別やる事はないだろうが……。

「神様がこの様子だと、ダンジョンに行く訳にも行きませんし、リリに今日は休みにして欲しいって頼んできます」

眷属の鏡だった。

私服のまま、ナイフだけ身に着けたベルはバベル——いや、待ち合わせ場所の噴水に向かつて走っていった。

「ううう……。クオンくん、いつもの魔法で何とかしておくれえ……」

シートに包まりながら、ヘスティアがか細い声で呻く。

「そんな都合のいい奇跡は心当たりがないな」

いや、解毒効果もある【治癒の涙】辺りは充分に効果がありそうだが……正直、こんな事で魔力を消費したくはない。

（まあ、中毒を起こして死にかけていると言うなら話はまた別だが……）

いや、しかし。そもそも経験上、神どもに毒は効かないはずだが。

これも『神の力』アルカナムを封じている弊害なのか。

「ベルくうん……。早く戻ってきておくれー。クオン君じゃダメなんだー」

蚊の鳴くような声で、ヘスティアがベルを呼ぶ。

よしよし。いつそ解毒効果のある苔玉でも無理やり食わせてやろうか。

（いや、落ち着け。これは補給が利かないんだ）

人間性を奮い立たせ、手の中に生じた苔玉をソウルに戻す。

「で。ベルに呪術を習得させるって話はどうなった？」

「………………。ぐう、ぐう」

よし、あとで泣かす。その頬を思う存分引っ張りまくってやろう。

露骨に寝息を立て始めたヘスティアを前に、静かに心を決める。

「ただいま戻りました」

ヘスティアの寝たふりが本物になる頃、足音を忍ばせてベルが戻ってきた。

「リリルカとは会えたか？」

「はい。また明日から一緒に潜ってくれるそうです」

「それは良かったな」

彼女くらの知識があれば、駆け出し冒険者にとっては心強い味方となるはずだ。

それこそ、引く手数多でも驚きはしないのだが——
(やはり、「ソーマ・ファミリア」の悪名のせいかな?)

それとも彼女自身の悪名だろうか。

内心の呻き声に気づくはずもなく、そのままベルは台所に向かい、ヘステイアのために林檎をすり下ろし始める。

「ところで、ベル」

その背中に、声をかけた。

「魔法……ではないが、呪術を覚えたくはないか?」

「うえ?! いったあ?!」

手を滑らせたらしく、若干血の滲んだ手を抱えて一通り悶えてから、ベルはこちらに飛びついてくる。

「お、覚えられるんですか?!」

「呪術なら、おそらくは。まあ、覚える分には一番楽だからな」

それこそ《呪術の火》を分け与えるだけで、最も初歩的な呪術は体得できる。

無論、使いこなせるかどうかはまた別の話だが。

「じ、じゃあー!」

「まあ、待て。覚える分には楽だと言ったが、俺も冒険者……というか、『神の恩恵』を

持つ者が使えるかどうかは分からなくてな。ヘスティアにも立ち会ってもらおうと思っていたんだが……」

「あー……。この様子だと、ちよつと難しいですね……」

少し落ち込んだ様子で、ベルが肩を落とす。

「まあ、今日のところはつきつきりで面倒を見てやれ」

おそらく、色々な意味でそれが一番の薬となるはずだ。

「それはもちろんそのつもりです」

何一つ迷うことなく、ベルが頷く。

それに、笑いながら頷き返して、立ち上がった。

「あれ？ クオンさんはどこかに行くんですか？」

「何、お邪魔虫は素直に退散するだけだ。また馬に蹴られるのはごめんだからな」

「何言ってるんですか、師匠。神様は神様ですよ？」

よし。今ばかりはヘスティアが寝ていてくれて助かった。

今の発言が迂闊に耳に入ると、最悪本物の「神の怒り」が炸裂しかねない。

「ベル。俺が言うのもなんだが……」

先達として、念のため伝えておく。

「女心ってやつを少しは理解しておかないと、そのうち酷い目にあうぞ？」

こう、本場の魔女の炎に包まれてみたり、魔女の微笑みに背筋を凍らせてみたり、本物の《生命狩りの鎌》がキラリと煌めくような状況に陥ったり、タリスマンを握る聖女様が女神のような微笑を浮かべるのを見て焦ったりするわけだ。
 (我ながらよく生きていたな)

いや、所詮は戯れの範疇を——そこまでは——出ていないが。

白い混沌の娘の隠れ家で過ごした賑やかな日々を思い出して、苦笑する。

それは、ほんの刹那の間だった……しがない放浪者には贅沢すぎる日々だった。

2

廃教会を後にしてから。

「はあ?」「一日酔いで休みですつてえ!?!」

ヘフバイト先の社長アイストスにヘスティアの様子を密告した俺は、その足でギルドに向かっていた。

正しくは、ギルドの奥の院。主神ウラノスが座す『祈祷の間』だ。

「おや、クオン。どうかしたか?」

上手い具合に、フェルズの姿もそこにあつた。

「ああ。少しばかり面倒な事になってきたぞ」

「何だと……?」

「お前のその言葉は本当に厄災の先触れだからな」

告げると、ウラノスとフェルズが口々に呻く。

だが、それはお互い様だ。お前達が持ち込んでくる頼み事とて似たようなものである。

「それで、何があった?」

気を取り直したフェルズが問いかけてくる。

「昔……『火の時代』で関わった男が姿を現した」

「何だと? 確かか?」

「ああ。ドラングレイグ王国の王兄アン・デイル。狂人として知られていた男だ」

「アン・デイルだと?」

フェルズとウラノスが顔を見合わせる。

正直、予想外の反応だった。まるで、知っていたかのような……。

「確かなのか?」

「ああ。……知っているのか?」

いや、この様子なら知っていたのだろう。

少なくともその名前だけは。

「ああ……」

歯切れ悪く、フェルズが頷き、再びウラノスと視線を交える。

「異端児達を知っているだろうか？」

「ああ。仮にも命の恩人だからな」

四年前、あの闇霊に殺されてから——人間性を削られつつ『下層』に戻った辺りで出会い、諸々あつて交流を持った陽気なりザードマン達を思い出す。

「リド達がどうかしたか？」

「直接関係がある訳ではないが……彼らが隠れ里に棲んでいるのは知っているだろう。そして、それはダンジョン内に複数個所ある訳だが……」

「その中に一つ、噂は聞くが実情が分からない隠れ里がある」

フェルズの言葉をウラノスが引き継いだ。

「ほう……？」

「リド達の話から察するに、それはもう『隠れ里』という規模ではなさそうさ。集落を築き、独自の文明を育みつつあるらしい」

「ダンジョンの中に、モンスター王国か。夢のある話だな」

ようやく、話が見えてきた。

「つまりは、その『国』の王がアン・デイルだど？」

今にして思えば、リド達は不死人を知っていた節がある。

あの男の入れ知恵という事なのだろう。

「いや、王という訳でもなさそうだ。あくまでも異端児^{ゼノス}達が中核を担っていると聞く」

「だが、『建国』に携わったのは間違いない。文明をもたらしたのも、な」

フェルズとウラノスの言葉に肩をすくめる。

「あの狂人がまたずいぶんと肩入れしているんだな」

在りし日のあの男は、研究のためには同僚すらも犠牲にしていたはずだ。

それとも異端児の誕生にはあの男が関わっているのだろうか。

(いや、そうじゃないな)

それは違うと、誰かが囁いた。

「そのようだな」

ウラノスが頷くと、今度はフェルズが続けた。

「念のため捕捉しておくが、少なくとも地上の基準で『国』と言えるほどの規模ではなさ

そうだ。詳細は不明だがね。ただ、定住し迷宮資源を使って鍛冶や農耕にも着手してい

ると聞く」

「ダンジョンで農耕？」

あそこは勝手に修復される性質がある。

いくら耕してもすぐに意味を失いそうだが……。

「私も疑問だが……しかし、リド達の話聞く限りダンジョンの地形に手を加える事に成功しているのは事実の様だ」

「ふむ……」

アン・デイルが絡んでいるなら、その可能性もあるか——と、内心で呟く。

何しろ、あの男はシースと同じく異形を生み出す技術を有する。

生きているダンジョンを変質させられたとしても驚きはしない。

「何であれ、異端児を保護する、私達とは全く別の勢力だ。どうやら主に『深層』領域で生まれた異端児達の集まりのようですね。『下層』にも進出してきているようだが、詳しくは分からない」

「全く繋がりはないのか？」

「いや、流石に皆無ではない。リド達を介してだが多少の情報交換と、物品のやり取りを交わしている」

ウラノスが告げた。

情報交換はともかく、物品のやり取りまでしているとは驚きだった。

それがギルドとの交易——商業の始まりを意味するなら、異端児達にとっては革新的なものとなるろう。

「これだ」

フェルズがローブから何かを取り出した。

いや、それはよく知っている。

「緑花草だと……?」

確かに巡礼地では重宝したが……この栽培は容易ではないはずだ。

無論、ダンジョンの中で自生していると場所を見た事もない。

それどころか、三年間の放浪の間でも群生地を見つけた事はできなかった。

「第四区画側のダイダロス通り入口付近に、『イーリアス』という小さな店がある。そこを覗けば、お前にとって懐かしい品が見つかるかもしれないな」

「覚えておこう」

緑花草だけでも補給できるならありがたい。

「それで、そのアン・デイルは一体何の用があつてお前の前に現れたのだ?」

「ダンジョンの奥底ではまた訳の分からない化物が蠢いているらしい。だから、俺に発破をかけに来たんだそうだ」

もう一度【超越存在殺し王狩り】たり得るだけの力を取り戻せ。

あの男はそう言ったのだ。

「発破だと?」

「近いうちに試練を与えるだとき。迷惑な話だ」

「……もしや、昨夜「フレイヤ・ファミリア」を襲ったのはそれが理由か？」

「襲った訳じゃない。俺が襲われたんだ」

それだけは告げておく。

そうでもなければ、また訳の分からない罰則を押し付けられるのは明白だ。

「やはりお前だったか」

失言だった。どうやらまず鎌をかけられていたらしい。

「女神の戦車」と「炎金の四戦士」を同時に、たった一人で瀕死に追いやれる者など

【おうじや猛者】を除けばお前くらいなものだ。いずれにしても分かり切った話でしかない」

あの派閥で顔と名前——それと、二つ名とやら——が一致しているのはオツタルだけなので、誰が誰かだよく分からなかったが……この様子なら、どうやらそれなりに大物だったようだ。

「あの連中を嚇けてきたのは、どうやら『挨拶』だったらしいな」

近いうちにまたオツタル辺りがカチコミにくるのだろうか。

それはそれで面倒な話だった。

「あれだけやって『挨拶』だと？ 性質の悪い冗談だな」

「相手は年季の入った狂人だからな。今のうちに覚悟しておくといい」

「他人事のように……」

嘆くフェルズに言つてやると、賢者はさらに深々とため息を吐いた。

「ところで、あの女の沙汰はどうなった？」

色々とあつて忘れていたが、そろそろ決まってもいい頃ではないだろうか。

「どうもこうもないな」

忌々しそうにフェルズが毒づいた。

「オラリオの大派閥の義務として地下水路の『掃除』^{スイーパー}に従事していた団員が、地下水路で蠢く新種を発見。慌てて地上に戻つたところで、お忍びでフィリア祭を見物してきた主神フレイヤと出会つた。その眷属の話を聞いたフレイヤは緊急事態と判断。同時に、新種が地上にいるなど簡単には信じてもらえないだろうとも。しかし、正規の手段でギルドに掛け合つていては手遅れになる。だからこそ苦渋の選択として、『群衆を速やかに避難させる』べくモンスターを『魅了』して檻から出した——と、大枠で言えばそういう形で収まるであろう」

フェルズを窘めてから、ウラノスが告げる。

「それはまた、物は言いようだな」

「だが、結果としてはまさにその通りだ。彼女がモンスターを放つたからこそ、『ガネーシャ・ファミリア』は迅速に避難誘導を開始した。無論、お前達への協力要請もだ」

「それで？ お咎めなしだと？」

「まさか」

と、フェルズは否定した。

「神フレイヤによる【ガネーシャ・ファミア】への公式謝罪と慰謝料の支払い。交戦により破損した闘技場周辺の復興支援と、負傷者への見舞金。まあ、そんなところだ」

否定の声に不満そうな響きが混じっていたのはそれが理由か。

いずれにしても、怪物祭の真意とはかけ離れた結果になったのだ。いくら積み重ねたところで納得はできない。

「概ね予想通りの結末で終わりそうだな」

「団員はそれすら不満そうだったがな。おそらく、そこを付け込まれたのだろう」

確かにそんな様子ではあったが。

やはり、蘇生させたのは失敗だっただろうか。

「せめてもの救いは、ガネーシャ自身の名誉はさほど貶められなかった事だろうか」
ウラノスが呟いた。

「そうなのか？」

「ああ。山羊頭の『モンスター』を引き付けるために自ら囮となり、さらに道中で巻き込まれてしまった少女を、己の身を挺して庇った。そういう話が広まっている。あるい

は、ガネーシヤ自身の名声としては高まったと言えるかもしれない」

「その辺りは、神ガネーシヤの神徳と言ったところだな。その辺りがうまく作用したのか、【ガネーシヤ・ファミリア】への風当たりも思ったほどには強くない」

「まあ、噂ではなく事実だからな」

もつとも、噂などその多くは悪意と共に広がるものだ。

そうならなかったのは、ひとえに【群衆の主】たらんとし続けてきたその姿あつての事だろう。

「ああ。加えてモンスター脱走の真相が明らかになったというのもあるだろうがな」

ため息とも苦笑ともつかない吐息を漏らしてから、フェルズは話を戻した。

「それにしても、噂に聞くアン・デイルが地上でそこまで派手に動き回っているとは」
その呟きに頷いてから、ウラノスが告げる。

「アン・デイルなる人物については、私達としても情報が欲しい。リド達にも改めて情報提供を頼むでしょう」

「それは止めないが、下手に手を出すと火傷では済まないぞ。あれはそういう怪物だ」
しかし、あの男と渡りをつけたいのは俺も同じだ。

嘆息を飲み込んで、言葉が続ける。

「だが、どうやら先日のデーモンについても何か知っている様子だった。情報が得られ

たなら教えろ。何であれ、俺が直接出向くのが一番安全だろう」

「そうさせてもらおうよ。いずれにせよ、『火の時代』の脅威は私達の手には余る」

それはそうだろう。あの時代の脅威とはすなわち、正しく超越存在みとして君臨していた神々ですら手に負えなかった……その果てに、ついには滅び去った代物だ。

神の血を少し浴びた程度の生者が抗おうとする方が無理な話だ。

あるいは、『不死の呪い』とは時代が必要としたからこそ生じたのかもしれない。

(このまま事態が悪化すれば、あるいは何もせずとも『呪い』が蘇ってくるのか?)

いや、あるいはすでに蘇っているのか。『暗い穴』ではなく、『ダークリング』そのものが亡者を——フェルズ達の言う『アンデッド』を生み出しているのだろうか。

「あまり過信されても困るが……そちらはどうにかしよう。そういう取引だからな」

その代わり、好きにやらせてもらっている。これはそういう契約だ。

「ところで『宝玉』の方はどうなった?」

「今のところ、新たなものは見つかっていない。だが、そちらはひとまず私達がどうにかしよう。あれは私達の時代が生んだ脅威だ」

「なら、急いで五九階層にいる奴を始末するんだな。あれとて下手に野放しにしておけば手に負えなくなるぞ?」

「分かっている。そちらについては、順当なところに任せるつもりだ」

となると、あの女の手下か。いや、糸目の小僧の方だろう。

あの小娘がいる以上はいっそ当事者と言ってもいい。

(ま、どういう接点があるのかは俺もよく分かっていないがな)

いずれにせよ、あれはこの時代の脅威だ。

向こうから関わってくるか、フェルズ達に押し付けられるならまだしも、こちらから積極的に手出しする気は今のところない。

(もつとも、連中がダンジョンの中で繋がっているなら話は変わってくるが……)

あの赤髪の女も、アン・デイルの『作品』なのかもしれない。

だとすれば、少々厄介だろうが——

(あれくらいは自力で乗り越えてもらおうとしようか)

いくらかの冒険者は巡礼地に挑める程度の力は有している。

あの赤髪の女と、そう大きな差はないはずだ。そして、彼女は少なくとも不死ではない。
い。

殺せば殺せる——と、言うとは何か奇妙な話に聞こえるが——存在だった。

(大体、そうでもなければ身体がいくつあっても足りない)

デーモンの相手だけでも楽ではないというのに、どうやら深淵——闇の子まで関わっているらしい。他に押し付けられるものは押し付けてしまいたいのが本音だった。

「しかし、この調子で次々に『火の時代』の脅威がやってくるなら、いつまでも底いきれない。それは分かっているだろうな？」

それどころか、現時点でもう手に負えなくなっている可能性すらあり得る。

少なくとも、二度も出くわしたあの闇霊は今の俺より強い。

他にも尋常ならざる敵が迷い込んでいるなら、一度や二度殺されるだけでは済まないだろう。

「もちろんだ。冒険者の力を底上げできるよう、いくらか手を打っている。先ほどの『イーリアス』もその一つだ。もっとも、効果は今のところ芳しくないがな。その緑花草とやらに限らず、供給がまだ安定しない」

何しろ作れる魔導師メイジが他にいないからな——と、フェルズが小さくぼやいた。

「なるほどな」

前から感じているが——どうやら、本当に俺やアン・デール以外にも『火の時代』から迷い込んだ者がいそうだ。

フェルズ達は、そいつらからも情報を……あるいは物品を得ているのだろう。

無論、それが俺が知っている顔かどうかは定かではないが。

「いらつしやいませ〜」

ギルドの奥の院をお暇してから。

その足で俺は、とある喫茶店——というか、ケーキ屋と言うか——ああいや、ミルクスタンドとやらに向かつていた。

「ご注文が決まりましたら呼んでくださいね〜」

おっとりとした牛人カウズの美人さんが品書きを持つてくる。

ひとまず無難に牛乳に果実を混ぜたと思しき飲み物を注文した。

「ごゆっくり〜」

しばらくして届いたそれに口をつける。

俺でも甘みを感じるとなると、ベルなら顔をしかめているところだろう。

「すまない。一つ訊きたいんだが……」

しばらくすると、フードを被った獣人の少女が声をかけてきた。

「特製ラング・ド・シヤによく合う付け合わせを教えてくださいませんか？」

「それは極東産の希少なカツオ節だろうな」

いや、味覚がほぼ失われている俺が言うのもなんだが、その組み合わせは——そのラング何とかが菓子である限り——絶対に不味いはずだ。が、これが『合言葉』なのだから仕方がない。

「驚いたよ。まさか本当にあの【イレギュラー正体不明】が私に用なんてね」

「それはこちらと同じだ。あの古狸が薦めてくる相手がこんな可愛らしいお嬢さんだったとはね」

先日、トマス爺さんには会えなかったが——店を出る前に、一切れのメモを渡されていた。

そこに別の情報屋の名前と、出会える場所と日時、合言葉が記されていたわけだ。

「それで、私は何を売ればいいんだ？」

「アン・デイルという名前の魔術師……魔導士について情報が欲しい」
もつとも、あの狂人が地上に足跡を残しているとは思えないが。

「昨日の夜に、『フレイヤ・ファミリア』を唆した？」

「ああ。……流石に耳が早いな」

「アンタ絡みの情報は高く売れるからね。普段は威張り散らす上級冒険者連中まで言い値で買っていくよ」

だから、これはサービスだよ——と、彼女は言った。

「でも、悪いけど私もそれ以外の事は知らないな」

「そうか。それならいいんだ」

残りを飲み干してから続けた。

「薄々感じてはいるだろうが、あの男に深入りするのは危険だからな」

あの爺さんが推挙するとはいえ、このお嬢さんではまだ未熟だろう。

下手に死なれては——いや、実験材料にでもされたら寝覚めが悪すぎる。

「そう言われると、私にも意地が出てくるんだけどね」

ため息を一つついてから、彼女は言った。

「ま、いいさ。死なない程度に探ってみるよ。ただ、その代わり報酬は奮発してもらおう」

「その時はもちろん応じるとも。内容によっては色を付けてもいい」

もし彼女が有益な情報を得られたなら、そのくらいの危険は伴っているはずだ。

「もう一つ教えて欲しい事がある」

「別料金でよければね」

「ああ。リリルカ・アーデというサポーターに関する情報は何かないか？」

「リリルカ・アーデか……」

記憶を探るような仕草を一瞬だけ見せてから、彼女は言った。

「二〇〇〇〇ヴァリス。それで、所属【ファミアリア】と大まかな経歴を教えるよ。気になった点があったら答えてもいい」

「あらかじめ用意しておいた布袋を懐から——正確には、そのふりをしてソウルから——取り出し、手渡す。」

「所属は「ソーマ・ファミリア」。団員同士の間生まれられた子どもで、種族は小人族だ」
中身を確認してから、彼女は言った。

「小人族？」

「ああ。どうやら魔法で獣人に変身しているようだけど、正体は小人族の少女だ」
なるほど。【擬態】の魔術のようなものか。

となると、霞の話も正しかった事になる。

「ああ、そうそう。【ソーマ・ファミリア】の内情も知りたいならもう一〇〇〇〇ヴァリ
ス追加料金を払ってもらおうよ」

やれやれ、すっかりした事だ。

肩をすくめて、新たな布袋を放つてやる。

「あの派閥が崇めているのは主神じゃない。酒なんだ」

「酒？」

「ああ。神酒ソーマって酒を聞いた事がないか？」

「そう言えば、知り合いの酒飲みがぼやいていたな」

まあ、アルドラの事だが。

話を聞く限り、ずいぶんと性質の悪い酒らしい。

「酒場泣かせだと聞いているが……」

「市場に出回っているのは失敗作だ。それでも、あんたの言う通り普通の酒場にとつては厄介だろうね。一度入荷すればそれ目当ての客が殺到する。そのせいで常連が去り、仕入れが追い付かなくなった途端、新しい客も去つて潰れた酒場もあるとか」

「世知辛いな。……しかし、失敗作だと?」

「そうさ。完成品は神々すら魅了する天上の美酒……つて触れ込みだけどね。私に言わせれば性質の悪い麻薬みたいなものさ」

「それは穏やかじゃないな」

「本物を一口飲めばあまりの快樂にたちまち虜になる。酔いが覚めればまた飲みたくなる。いくら大金を積んでもね。主神ソーマはその性質をうまく使つて眷属に貢がせているようだよ。あの神にとつて、人間なんてのは酒造りに必要な金を稼いでくるだけの駒に過ぎないつてことさ」

それはまた実に神らしい存在だった。

ヘステイアやガネーシヤ達のせいで調子が狂つたが、神とはかくあるべきだろう。その方が、後腐れなく殺しやすい。

「実際、あの派閥を取り仕切っているのは団長のザニスだ。主神は「ファミリア」の運営になんて欠片も興味を示しちやいないからね。おかげで、派閥内でも金銭をめぐる揉め事には事欠かない。同士討ち、抜け駆け、騙し討ち。神酒欲しさに誰も彼もが金の亡

者つてわけさ。「ステイタス」の更新にも上納金が必要になるつて言うんだから、つくづく徹底してるよ」

と、届いたミルクを一息に飲み干し、彼女は続けた。

「と、まあ、これが彼女が所属する「ファミリア」の大まかな内情だ。もちろん、彼女の両親もそうだった。ある時、ダンジョンに向かつてそれっきり。理由は定かじやない。異常事態が起こったか、仲間同士で足を引つ張りあつたか……」

「それとも無理をして適正階層を超えたか、か」

階層が深くなれば儲けも大きくなる。冒険者なら誰でも知つている常識だ。

もつとも、実力を超えた階層に進めば命を落とすのもまた同じ話だが。

「ま、そんなところだろうね。裏取りはしていないし、もうしようがないから予想の域は出ないけど」

「それで？」

「貴族の子は貴族。農民の子は農民つて事さ。彼女はそのまま「ソーマ・ファミリア」の団員となつた。けど、どうやら冒険者としての素質がなかつたらしくてね。専属のサポーターとして酷使されているそうだよ」

「あの子に素質がない？」

それは見る目がないのではないだろうか。

おそらく、彼女は誰よりも強かです。ぶとい冒険者となりえる。

華やかさとは縁が遠いかもしれないが、どんな状況でも最終的に帳尻を合わせて見せるだろう。

……もつとも、確かに今はまだその域にはいないが。

「ま、その辺りは詳しく知らないよ。『ステイタス』なんていくら私でもそう簡単に調べられるものじゃない。もし必要なら、別料金だ」

「まあ、それはいい。ということは、やはり彼女も上納金欲しさに盗賊業に手を出しているのか？」

「その辺りは知っていたんだね。でも、それはどうだろうね。確かに被害にあつた連中の数からして相当に儲けてはいるはずだけど……そもそも、彼女はあまり本拠地ホトに寄りついていないからね」

「帰っていない？ なら、どこに？」

「流石に下宿先を掴ませるようなドジは踏んでいないよ。というより、点々としているんだらうね。ただ、寄り付く場所は分かる」

「どこだ？」

『『ノームの万事屋』。その名の通りノームが店主でね、冒険者通りの片隅にある店だよ。そこで盗品を売り払っているんだ』

(さて、と)

情報屋の少女と別れてから、夕暮れに染まる街を歩く。

場合によってはその万事屋とやらまで行つて話を聞かねばならないかとも思ったが、情報屋の少女はあれからこちらの質問に丁寧に応じてくれた。

少なくとも、値段相応の情報を得た。そうになると、次にすべき事は――

(『コンバージョン改宗』、だったか。それを持ち掛けてみるか?)

リリルカは脱退金を貯めている。それが、あの情報屋の少女の結論だった。

流石にそれ自体の裏取りはできていないらしく、最後までそれを口にするのは渋ったが……彼女が揭示したいくつもの情報を素直に読み解けばその結論以外に考えられない。

今所属している派閥に辟易しているなら、その呼びかけに応じてくれる可能性は決して低くはないはずだ。

脱退金については……まあ、おそらく『下層』辺りでしたらしく気張ればどうとでもなる。

いや、この前汲んできたカドモスの泉水をいくらか売り捌けばそれでことは足りるだ

ろう。

（話を聞く限り、人間性にも大きな問題はなさそうだな）

ある種の義理堅さというか、情の厚さを感じさせる話も聞いた。

多少ならず捻くれているようだが、それは致し方ない。

それに、直接かかわった感触で言えば、どこぞの禿丸ほどではないはずだ。

（いや、その一件が致命傷になっている可能性もあるが）

逃げ出したリリルカを受け入れた花屋が、他の団員に襲われ、彼女までが追い出された事があつたらしい。

その噂そのものは四年前にも聞いている。気になるのは、それから今に至るまでその花屋には定期的にヴァリスが届けられているという事実だった。

無論、彼女はそれがリリルカの仕業だとまでは断言しなかったが、度々ローブを着込んだ小柄な人影が目撃されているのは確かなようだ。

（ヘステシアと、シャクティあたりには相談してみるか……）

いや、駄目か。ヘステシアはともかく、シャクティは不味い。

公平に考えればリリルカもただでは済まない。

どう考えても「ガネーシャ・ファミリア」やギルドを動かすのは悪手だ。

（しかし、そうなる——）

乗り込んで当たるを幸い叩きのめすしかなくなるのだが。

いや、単にそれが一番手つ取り早いというだけだが……しかし、そうすると今度は「ヘステイア・ファミリア」に飛び火する可能性もありえる。

何しろ、金づる欲しさに花屋まで叩き潰す阿呆どもだ。安全性を求めるなら、叩きのめすのではなく、根絶やしにするしかないが――

(そこまでの理由を用意できるか?)

いや、できない事はないが。

それこそ、適当に金の噂を流して向こうから襲い掛からせればいい。自衛という理由さえあれば、フェルズ達もそこまで文句は言わない。

(あるいは、これが『試練』とやらなのか?)

ふと思いついたそれを否定する。

酔っ払い集団を蹴散らす程度の事を、あの狂人が試練などと言うはずがない。

そもそも、「ソーマ・ファミリア」は探索系派閥として見るなら大したものではなかった。人数こそ多いが、ほぼ全員がLv. 1。小さな集団はあるようだが、派閥としての連携はないも同然。各個撃破しやすく、それに徹している限り敗北はまずあり得ない。

巡礼に赴く肩慣らしにしては温過ぎる。

(せめて大派閥と呼ばれるくらいでないか、な)

やはり昨夜のあればオツタルがカチコミしてくる前振りだったのだろうか。

(そちらは後回しだ。気を揉んでいたところで始まらないからな)

嘆息して、ひとまずリリルカについてに集中する事に決めた。

(彼女の事情はおおよそ分かった。あとはどうやって口説き落とすかだな)

その辺りは、それこそベルに丸投げしてもよきそうだが。

ヘステシアにだけ話を通して、あとはベルの好きなようにさせておくべきか。

(そうなるよ、やはりいざという時の武器が必要だな)

何であれ、ダンジョンの中で丸腰になるという状況だけは避けねばならない。

リリルカでも奪えない武器。

俺が与えられる武器の中で、その条件を満たすのは呪術しかなかった。

「そろそろ帰るか。いい加減ヘステシアも復活する——」

頃だろう。と、続けようとして。

「娯楽に飢えたハイエナどもめえええええええええええええええええつ!!」

「ヘステシアが逃げたぞー!!」

「逃がすなあああああつ!!」

目の前を女神の集団が激走していった。

さらに言えば、その先頭を走っていた女神と、その女神に引きずられていた白髪頭に

は非常に見覚えがあった。

「……何事だ？」

女神達の足音がすっかり遠のいてから。

彼女達が消えていった方向を見やり、ぽつりと呟いていた。

無論、それに返事などどこからも返ってこなかったが。

と、それはともかく。

時は女神達の謎の大激走を見送った日の翌朝へと移り変わり。

「改めて聞くが、術を覚える気はあるか？」

廃教会の隠し部屋で、俺はベルと向き合っていた。

「はい！ ぜひ教えてください！」

力強く頷くベルに頷き返してから、ヘスティアに視線を向ける。

「ベル君が強くなりたいと思っっているのは、ボクも知っっている。魔法に憧れているのもね。でも、落ち着いて聞いてほしい」

いつになく真剣な様子に、ベルも居住まいを正す。

「クオン君のいう呪術は、どうやらボクらが知っっている魔法とは違うもののようなんだ。いうなれば、ボク^神らも知らない未知ってやつだね」

「そ、そうなんですか？」

「うん。そして、君はボクの恩恵を受けている。問題は、そこなんだ」

目を丸くするベルに、ヘスティアはあくまでも真剣な顔で頷く。

「ボクらにとつても未知の力を『スティタス』にちゃんと反映させられるのかは、分からない。例えば、君がこれからレアスキルや魔法を発現したとして、それはあくまで君の中に眠っていた可能性を掘り起こしただけだ。言っちゃえば、君が元々持っていたものつてわけだ」

でも、とヘスティアは言葉を続ける。

「呪術は明らかに外からもたらされるものだ。どんな影響が出るか、ボクにも分からない。場合によっては危険な事なのかもしれない」

それは昨夜の内に話し合った結論だ。

この時代——神々が認識している既存の術式とは異なる代物。それを『神の恩恵』のもとで使えるかどうか。それはまさに神ですら見通せない未知であるらしい。

「それでも、君はその力に手を伸ばすかい？」

「……………」

ベルはしばらく目を伏せてから、

「……………お願ひします」

そう、答えた。

「僕は、僕は少しでも強くなりたいんです。だから、神様。クオンさん。お願いします」
言つて、彼は深々と頭を下げた。

ヘステイアと顔を見合わせ、互いに肩をすくめる。

「うん。きつとそう言うと思つていたよ」

観念したように、ヘステイアは笑つてみせた。

その様子にベルも微笑み返してから、一転して情けない声を上げる。

「あの。それで、僕でも本当に覚えられるんですか？」

今さらそれを言うのか——と、思わず苦笑してから、簡単に説明する。

「ああ。呪術を扱うには特別な資質はいらぬ。いや、あればあるだけ効率的に威力を上げられるが、何より必要なのは火への情景。あるいは畏れだ。まあ、逆に言えばそれを忘れると悲惨な事になるがな」

魔女イザリスとその娘たちのように。

そのせいで国が滅んだこともある——そう言つてやると、ベルが生唾を飲み込んだ。

もちろん、その域に辿り着ける術者の方が少ないだろう。が、早めに釘を刺しておいて損はない。

「そ、それでどうやったら？」

「この『火』を分け与えよう」

右手に《曙光の火》を灯す。

「いや、正しく言えば、これそのものは渡せない。だが、通常の《呪術の火》ならそれも可能だ」

何しろこれは恩師達の叡智が詰まった唯一無二の代物だ。

分け与える事を想定して設計されてはいない。

「《呪術の火》、ですか？」

「ああ。これは呪術師の身体の一部でな。呪術師はみんな、これを大事に育て、自分の術を高めていく。まあ、育てた力そのものまでは譲れないが、『火』を分ける事ならできる。俺のこれも師匠から分け与えてもらった」

「クオンさんの、師匠から」

ベルが右手の火を見て、小さく呟いた。

「僕が貰っても、いいんですか？」

「いいさ。まあ、師匠なら『お前のような馬鹿弟子が弟子を取るなんて百年早い』——くらしいの事は言うだろうがな」

小言を言われるのはいつもの事だ——そう言って笑うと、ベルも小さく噴き出した。

そして、

「お願ひします」

「よし。なら、まずは楽にするといい。……いや、実は俺も人に『火』を分けるは初めてだからな。楽にしていってくれると助かる」

それでも方法は師匠に教わっている。

「はー！」

緊張しているベルに苦笑してから、まずは魔術や奇跡の触媒となる力を封じ込め、純粋な《呪術の火》へと戻す。

火を宿す指先を、ベルの胸元に。

熱を伝えるように、その火を彼の身体に染み込ませていく。

「火を思い浮かべろ。今なら分かるはずだ」

「はー……！」

ベルは己の右手を静かに見つめ、火を思い描く。

伝えた熱が、そこで結実した。

「できた……!?!」

ベルの右手に《呪術の火》が宿る。

「よし。これでお前も呪術師の一員だ。大事にしてやってくれよ?」

「はい! それで、これでもう呪術を使えるんですか?!」

「一番基礎的なものならな」

正しくは呪術ですらない。刃物を握れば誰だって何かを傷つけられる。それと同じだ。

「ここでやるのは危ないからな。続きは外でやろう」

「はい！」

そして、教会前。いつもは素振りやら何やらを行うその広場に移動する。

「まずは見本だ」

念のため無粋な闖入者がいない事を確かめてから、右手に宿した『火』を高める。

これこそが最も原初の呪術。

曰く【発火】。

手に宿る火が炎と化して荒れ狂うそれは、単純ながら強力だ。

「これが【発火】。最も基礎的な呪術……というより、そうだな。ナイフでただ斬りつけているだけ、といったところか。持てば誰にでもできる。そういう代物だ」

「あ、あれがですか……?」

「いきなりあの威力は出ないだろうがな。だが、これは極めて大切な呪術だ。その『火』がどういふものなのか。これで分かるだろう?」

ただ『火』を高ぶらせただけでこれだけの威力に繋がるのだから。

「はい！」

「さて。では、実践に移る前に呪術師の心得を改めて伝えておく。ごく短いものだ。だから、忘れずに胸に刻んでおいて欲しい」

「呪術師の心得……」

「ああ。『炎を畏れろ』。その畏れを忘れた者は炎に飲まれ、全てを失う。分かるな？」

あの魔女イザリスですら、それは例外ではなかった。

……いや、それがあったからこそ師匠はそう伝えたのか。

「はい……！　忘れません！」

「よし。それでは、まず【発火】を試してみるか。その『火』を高めてみる。できるはずだ。何しろ、それはもうお前の身体の一部なのだから」

「はい！　えっと、詠唱とかは？」

「必要ない。呪術とは火を熾し、利用する、原初の命の業だ。必要なのは火への情景。あるいは畏怖。それを忘れるな。そのうえで火を求めろ」

「火を畏れる……！」

ベルは右手を突き出し、軽く目を伏せて意識を集中させていく。

程なくして右手の『火』がひときわ燃え上がり——そして、爆ぜた。

「で、できた！　やったやったやりましたよ神様！」

「おおお！　やるじゃないかベル君！　いい火だったぜ！　竈の女神であるボクが保証

するともー！」

それこそ兎よろしくピョンピョンと飛び回るベルと、それを真似るヘステイア。
(そうか。そう言えばそうだったな)

女神ヘステイアとは寵と慈愛を司る女神である——と、そう聞いている。
なるほど、縁というのはやはり馬鹿にならないものなのだろう。

「それは基礎だが、それでも魔力を消費する。景気よく撃ちすぎるとすぐに干上がるから、くれぐれも注意しろよ」

不死人ならそれでも呪術やら魔術やらが使えなくなる程度で済むが、普通の人間ならそのまま昏倒する羽目になるらしい。ダンジョンでは確実に命に関わるだろう。

「はいー」

それからしばらく。ベルの『試し撃ち』は続いた。

例のスキルのおかげなのか。寵の女神であるヘステイアの『恩恵』なのか。
あるいは、ベル自身が持って生まれた素質のなせる業か。

程なく実戦で使える程度の威力と速度へと仕上がる。

「さて、と。それじゃあ本格的に呪術を仕込みたいところだが……」

「ほ、本格的？」

「さつきも言っただろう？ それは精々ナイフを振り回しているだけだつて。呪術って

のはちやんとした技術を指す言葉だ」

「僕に使えるんでしようか？」

「今さら何を。……まあ、いきなり強大な呪術に手を出すのは流石に自殺行為だが、一般的なものなら問題ないだろう」

「ふむふむ。それで、クオン君のオススメはなんだい？」

微妙に上機嫌なヘスティアが問いかけて来る。

「俺が使えるのは基本的に戦闘用だからなあ……」

まあ、それはベルにとっても有益なものとなるだろうが。

「基礎を発展させた【大発火】か、射程を確保できる【火球】あたりが一般的な基礎だな。他には武器に火の力を宿す【カーサスの弧炎】も使い勝手がいいが……」

しかし、今回の目的は武器の確保だ。いや、【発火】だけでも目的は達成できているといえはできているはずだが。

「あとは……。身体能力を向上させられる【内なる大力】か。これは使うと反動で体にガタがくる諸刃の剣だが」

「そ、それはちよつとカッコいいような……!」

その気持ちは分かるとも。最初は俺もそう思った。

……しばらく使っていると、深刻にそれどころではなくなってくるが。

「却下！ これ以上無茶させてどうするんだい?!」

そして、あえなくヘスティアに却下された。

「あと、変わり種で傷を癒す【ぬくもりの火】というものもある。回復速度で見れば奇跡には及ばないが、一度熾せば消えるまでは仲間も恩恵に授かれる。もちろん、自分もな」
うねうねと蠢く触手——もとい、黒髪から逃れるように別の呪術の名を挙げる。

今回の目的からは外れるが、ベルの場合だと活躍する場面は特に多そうだ。

「おお！ それいいじゃないか！ 要は回復魔法って事だろう?! 何かと生傷の絶えないベル君にはぴったりだ！」

「そ、それはそうですけど……。でも、【火球】とかにもちよつと憧れが——」

「いいや！ ここはその【ぬくもりの火】つてのにしとこう！ なんか名前からしてボクがいつも見守っていられるような気分にもなる！」

「だが、奇跡の【大回復】ほどすぐには回復はしないぞ?」

効果の持続する時間を考慮すれば——そして、充分に『火』を育てているなら——最終的な回復量は見劣りもしないものの、とにかく瞬発力に欠ける。

ともあれ。それから紆余曲折あって。

「うんうん！ やっぱりボクらの【ファミリア】の指針は『命を大切にね』だからね！」
いや、明らかに『どンドン行こうぜ』だと思うが——と、どこかの誰かからメッセー

ジが届いたような気がした。ひとまず評価しておこう。

「まあ、なんだ。回復手段があるに越した事はないしな」

「そうですね。そのうち団員も増えるかもしれませんし……」

と、そんな訳で。

ベルの記念すべき最初の呪術はヘステイアの強い意向もあって【ぬくもりの火】となった。

……まあ、無茶しがちなのは確かだし、回復手段の一つも持っていて損はないか。

結局武器は【発火】だけになってしまったが、それもやむなしだ。

「では、伝えよう。基本的には先ほどと同じだ。あとは自分で育てていってくれ」

「はー」

呪術の継承。遙か昔、師匠に施してもらったそれをまさか自分がする日が来るとは。

何だかずいぶんと感慨深い。

「――」

思い描く炎の情景。いや、この呪術はあの時代にはなかったものだ。

少なくとも我が師——呪術の開祖であるイザリスのクラーナの遺したものでない。

だが、俺の中にある炎への情景は常に彼女の姿をしている。彼女であれば、この呪術

として我がものとして使いこなす。

高まった火が、ベルの燃え始めたばかりの火へと移り行く。

「……よし。これでいいはずだ」

「使えそうな、気がします。何だろう……。お祖父ちゃんに絵本を読んでもらった時、前で燃えていた暖炉の火を思い出しました」

「そうか……。炎とは力の証であると同時に、知恵と暖かさの象徴でもある。団欒の火を求めるなら、きっとそれにも応じてくれるだろう。明確に思い描ける情景があるならなおさら、な」

「はい！」

「ふっふ〜ん！ やっぱりボクのベル君にぴったりの魔法じゃないか！」

と、ヘステイアが相変わらず見事な造形の胸を張った。

「ほらほら！ 早く使ってみようぜ！」

「わわ！ あ、危ないですよ神様！」

そのまま背中に飛び乗られ、ベルが慌てて火を宿したままの右手を高く掲げる。

まあ、確かに揮発性の高い特殊な油に触ろうものなら大惨事だが——それでもない限り、触ったところで火傷もしない代物なのだが。

（ま、『火を畏れる』だからな）

扱いに慎重なのは良いことだ——と、そのやり取りを静観する事にした。

「ええと、それじゃ行きますよ」

存分にじやれ合つてから、ベルが改めて右手をかざす。

しばらくして呪術の火が静かに高まり——そして、柔らかに輝く炎を中空に灯した。

「わあ……!」

「おお!」

なるほど。確かに、ベルらしい呪術かもしれない。

ドラングレイグでもロスリックでも、使い手は少々日く付きの連中ばかりだったが—

—おそらく、本来はこう言つた代物だつたのだろう。

「どうだいクオン君! 見事なものだと思わないかい!」

「ああ。大したものだ。初めからここまで使えれば上出来だ」

やはり相性というものはどこにでもあるのか。今は拙い代物だが——この分なら、う

かうかしていると追い抜かれかねない。

(たまには真面目に修練するか)

と、静かに心に決める。

何しろ数少ない取り柄の一つだ。そして何より、呪術の開祖クラーナの弟子として、

そう簡単に後塵を拝す訳にはいかない。

「これで、僕も魔法を使えるようになったんですね。しかも、一気に二つも!」

それからしばらくして。やはり実戦で使用可能な程に慣らしたところで、ベルが顔を綻ばせた。

「ひとまずは、な。念のため確認しておこう」

「そうだね。それじゃ、ベル君。昨日できなかった「ステイタス」更新もかねて確かめるから、部屋に戻ってパパツと上着を脱いじやってくれたまえ！」

「はい！」

と、足取りも軽くベルは隠し部屋に戻っていく。

そして――

「何だっつてええええええ?!」

ほどなくしてヘステイアの悲鳴が廃教会に響いた。

「ど、どうかしたんですか神様?!」

「どうしたもこうしたも! これを見るんだ二人とも!」

ヘステイアはビシツと羊皮紙を突き付けてくる。

無論、それはベルの「ステイタス」一覧だ。

二人してぎつと流し読みして――

「あれ? 魔法は空欄のまま……?」

確かに。ベルの言う通り《魔法》という項目の下には何も書かれていない。

「もう少し下を見るんだ！」

「え？ ええええええつ?!」

言われた通り、少し下を見る。そこには――

「呪術つて魔法と別枠なんですかああああ?! え、でもスキルもいつも通り空欄ですよね?! こんなことつてあるんですか神様ああ?!」

空欄の《魔法》と、空欄という事になっている《スキル》の間に、《呪術》という項目が追加されていた。そこには確かに「ぬくもりの火」と記されている。

「し、知らないよ！ さっきも言ったけど、こんなのボクだつて初めてなんだ！ つていうか、何か色々言ったけど、ぶつちやけ妖術とかと同じで絶対魔法枠に収まると思つてたのにつ！」

「……という事は、ひよつとして魔術と奇跡も別枠扱いになるのか？」

あと闇術も。

いや、あれはあちらこちらに分割されているから話はまた変わってくるのだろうか。

「これスロット的にはどういう扱いになるでしょうか?! 確か魔法つて覚えられても三つまでですよね!」

「それこそ知るもんか！ でも、別枠ならそれぞれ最大三つずつって可能性も……!」

「うえええええ?! ほ、ほほほほ本当ですか?!」

「だから知らないってば！ ああでもクオン君ってスロットって何って勢いであれもこれも使うし、下手するとこの呪術ってのには三スロットって縛りもないのかも……!?」
 「あわわわわわわ?! そ、そんな！ そんなことが!?!」

ああ、なるほど。未知の力というのは確かに人を震え上がらせるのだなあ——などと、大混乱を起こしている主従を心情的に遠くから暖かく見守る。

「ええとだな。期待しているところ悪いが——」

で、その愉快な主従が何とか落ち着きを取り戻してから。

ひとまずはこちらの所感を告げる。

「多分、今すぐ複数の呪術を使うのは無理だ」

というか。使われたら、それこそ立つ瀬がない。

「で、ですよねー」

落ち着いたのか落ち込んだのか微妙に判断しづらい顔でベルが笑う。

「それよりも、今は《呪術の火》を育てる事だ。そうすれば威力も上がる。そのうち使える呪術も増えるかもしれない」

力の源からして『ソウルの業』と『神の恩恵』^{フェアルナ}という違いがある以上、俺達と成長が異なる可能性は大いにあり得る。どこまで使える呪術が増えるかは未知数だった。

「そ、そうですね！ あれ？ でも、呪術も一つしか……」

「さつきも言っただろう？ 【発火】はナイフを振り回しているだけだと。ナイフさえ手放さなければ使えて当然だ。ああいや、それはもうお前の身体の一部だから、拳で殴っているようなものと言った方がいいな」

「な、なるほど……」

ひとまずダンジョン内でまるつきりの丸腰になる危険はこれではなくなった。

……まあ、魔力切れを起こさない限りは、だが。

5

南東のメインストリート。

第三区画から第四区画にかけての広大な範囲には歓楽街が広がる。

その最奥にそびえる宮殿こそが、この都の主たる彼女が座す神殿そのものだった。

「さて。これは面白い事になってきたな」

その神殿の最上階。勢の限りを尽くしたその部屋で、煙管から紫煙をくゆらせながら思わず笑みを浮かべていた。

「フレイヤめ。ずいぶんと派手にしくじったようじゃないか」

怪物祭でモンスターを放ったのは、あの女だという。

新種が地上に出ている事を察し、緊急処置として——などと言ってはいるが、それは

どうか。

（もし本当にそうだったなら、その足でギルドなり【ガネーシャ・ファミリア】に自分から説明すれば済んだ話だ）

ギルドからの罰則はあつたかもしれないが、あのガネーシャなら理解の一つも示しただろうに。

だが、実際には黙つて立ち去ろうとして、あの【正体不明】に捕捉され、虎の子のオツタルまで返り討ちにされたという。

どうせ悪戯気分でモンスターを野に放つたのが、たまたま先触れの代わりになつたにすぎないはずだ。

「それにしても、また【正体不明】か。懲りない女神だ」

四年前、秘蔵つ子のオツタルをあてがい、それでもモノにできなかつた剣闘士に、またしてもしてやられたのだから哀れな話だ。

どうやら、よほど腹に据えかねたらしく、【女神の戦車】と【炎金の四戦士】を差し向け——そいつらまで半殺しにされたというのだから滑稽だつた。

（しかし、好機ではあるな）

噂ではその一戦でオツタルも深手を負つたと聞く。

そうでなくとも【女神の戦車】と【炎金の四戦士】が復帰するにはまだ時間が必要だ。

特に【女神の戦車】^{ヴァナ・フレイヤ}は両腕を切断されている。

ついに【正体不明】^{イレギュラー}は四年前の決着をつけるつもりだ——などと、気の早い冒険者共は噂し始めていた。

「おい」

あの王気取りの女神^{おんな}を始末する好機が近々訪れるのは間違いない。

だが、問題はある。

「はっ、何ででしょうか？」

部屋の隅で待っている副団長を呼ぶ。

「あの男神^{おとこ}を急がせろ。とつとあの石を持って来いとな」

計画の要の一つがまだ手元になかった。

「はっ！」

気配が遠のいてから、酒瓶に手を伸ばし、グラスに注ぐ。

(もつとも、他の二つもまだ物になったとはいいいがたい)

だが、あのオツタルに深手を負わせた——いや、あの【古王】^{スルト}を退けた【正体不明】^{イレギュラー}を

モノにできれば、事は足りる。

(幸い、奴は男だ)

ならば、どれほどの力があつたとしても私に抗えるはずもない。もちろん、女である

うが関係ないが……興が乗るのはやはり男を相手にした時だ。

とはいえ、ここで先走ってせっかくの戦火を踏み消してしまつては元も子もない。

奴らが本気なのかどうか。今しばらくはそれを見極める時間が必要となる。

「噂に聞くだけの力が本当になるのなら……」

あるいは、あの石の力だけで勝敗を決する事すらも可能となるだろう。

L v. 0でありながら【おっじゃ猛者】に手傷を負わせられるなら、L v. 1でも十分すぎる。

(もつとも、あれが恩恵のない相手にも効果があるかは未知数だがな……)

それも今のうちに試しておくべきか。

口の堅い女か、あるいは消えても目立たない誰か。それを幾人か思い浮かべながら、

ゆつくりとグラスを傾けた。

……

「さて、仕込みはまずまずと言ったところか」

「御意」

傍らに影を侍らせ、小さく呟く。

「次は程よいところであのハイエナに石を渡すでしょう」

「よろしいのですか？」

「不安なら、私にたどり着かぬよう何人か仲介させるとするか……」

もつとも、あのハイエナとその手下どもが身の程も弁えず食いついてくるのなら、そのまま殺すだけだが。あの類の輩を生かしておく利点は何も無い。

第一、灰の方にはすでに挨拶も済ませたのだ。今さら隠し立てする必要はない。何人仲介させたところで勘付くに決まっている。

「いえ、それもそうなのですが……」

影が言い淀んだ。

(まったく、これだから……)

悟られぬよう小さく笑ってから、告げてやる。

「あの灰ならどうにでもするであろうよ。それに、あの苦界から連れ出す事にもなろう」
「ならば、良いのですが……」

問者として重宝しているこの影だが、なかなかどうして人が良すぎる。

標的に対しては怪物らしい冷徹さを見せるが、無関係な相手にはこの様だ。

(異端児か。これだから、この者達は……)

人間に食い物にされるのだ。何しろ、地上に生きるには純真無垢にすぎる。

少なくとも、僅か数十年程度でこの狂人を誑し込む程度には。

(まあ、よい)

どのみち地上に巣くう亡者共が目障りなのは変わりない。

それを一掃する事と、この者たちの願いを叶える事がほぼ同義である以上、協力を惜しむ必要などありはしない。

「神が人を食い物にしようとする。今のあれをその気にさせるには、その程度のお膳立てはしておかねばならん」

知らぬ間に人が神に隷属するこの時代に慣れでもしたのか、すっかり火が消えてしまっている。

あれではとても【王狩り】たり得ない。あの様ではわざわざ召喚した意味がない。

「このまま予定通りに事を進める。くれぐれも無理をするな」

「御身の薫陶を受けた今、神の血を啜るだけの愚者に遅れはとりませぬ」

「矜持を抱くのは良い。だが、それに足元をすくわぬ様にせよ」

「御意」

頷く影に頷き返してから、今一度、淫都の主に視線を向けた。

「さて、では我が手の内で踊ってもらおうとしようか。もう充分に楽しんだであろう?」

今度は、貴様が人の糧となる番だ——告げると、影を伴いその場を後にした。

6

いつもの日課をこなし、いつも通り噴水前でリルルカと落ち合う。

「うう……。やはり今日も【イレギュラー正体不明】様がご一緒なのですね」

と、先日同様、こちらの顔を見るなりリリルカがぼやいた。

「そう邪見にするなつて。その分、実入りもいいだろう？」

またキラアートの大群が待っているんですね——と、嘆くリリルカに笑って見せる。

「それはそうですが……」

少なくとも、平均的なLv. 1の冒険者の日給は大きく上回っているはずだ。

それに、危険が伴うのは確かだが、無謀な真似はさせていない。

いざという時は二人を庇いながら、敵をまとめて始末できるように気を配っている。

その辺りを敏感に察しているからこそ、今日もこの少女は律義にここでベルを待つているのだ。

「ですが、あれはもうサポーターの仕事ではありません！」

もしも割に合わないかと判断したなら、すでに何も言わず立ち去っている。

この少女は、その程度には現実的だ。

「まあ、今月の目標は脱サポーターだからな」

なので、リリルカの抗議を適当に聞き流し、実に適当な事を実に適当に言う。

「今月!? ま、まさか昨日までのあれは準備運動的なものだったのですか……?!」

リリルカは目を大きく見開き、わなわなと慄く。

いやあ、可愛いなこの子。

むくれさせたい。拗ねさせたい。むぎーと言わせたい。何なら涙目にしてみたい。

……いかん。俺の人間性もそろそろ限界が近いようだ。

「まあまあ、リリもクオンさんもその辺で」

内心で慄いていると、ベルが苦笑しながら言った。

「クオンさんの冗談はともかく。大丈夫だよ、リリ。リリの事は僕がちゃんと守るから」

こっちはこっちで今日も朝から天然で絶好調らしい。

あの爺さんの英才教育（せんのう）の賜物なのか、それとも天賦（てんねん）の才（ねん）によるものか。いずれにしても

も相変わらず未恐ろしい奴だった。

何しろ、言ったが最後、真剣にそれを全うして見せるのだから。

少なくとも、これで今日のボルト代は安く上がるのが決定したと言えよう。

「ああ、これが飴と鞭というものなのですね……」

分かっているじゃないか。ならば、遠慮せずすると深みに嵌まるがいい。

リリルカ・アーデ。我々は君を歓迎する。

「じゃあ、行こうか。リリ、クオンさん」

「はい、ベル様」

ともあれ。今日も今日とていつも調子で、俺達はダンジョンへと潜っていった。それからしばらくして。

「リリは……リリはこの場所を教えた事を少し後悔しています」

リリルカがぐったりとした様子で回復薬をバツクパツクから取り出す。

ダンジョン七階層。リリルカお薦めの鉱脈地点に、俺達は今日も陣を敷いていた。

ここは単純に採掘地点というだけではない。

通じる通路が少なく、しかもそのどれもが狭いため一挙に雪崩れ込まれる危険が少ない——言うなれば、防衛戦に適した地形となっている。

だからこそ、リリルカはここを推したのだろう。

……まあ、加えて人目につき辛いというのもあるだろうが。何しろ、ここまでの道のは多少複雑で、まともな地図か、さもなければ案内人がいないと辿り着きづらい。

ダンジョン内で迷子という最悪の状況を避けるなら、近づかないのが一番だ。

正直、リリルカはよくこんな場所を見つけたものである。

「今日は一段と数が多い気がする……」

リリルカから受け取った回復薬を煽りながらベルがぼやいた。

しかし、そんなことを言いつつも今のところ前衛は突破されていない。

リリは僕が守るから——と、という言葉は今のところきっちり守られていた。

「確かに今日は大量だな」

ちよつとした山になった鉱石を見やって頷く。

モンスター共が大量に沸くと、迷宮資源も大量に沸いたりするのでろうか。

「どうでしょう。そういう話は聞いた事がありませんが……」

呟くと、散らばった魔石やらドロップアイテムを拾い集めているリリルカが言った。

「ただ単に長い間掘っていたせいではないでしょうか？」

「それもそうか」

ベルが突破されない限り、リリルカは自衛に回る必要はない。リリルカが安全な限りは、ベルも充分な援護を受けられる。そうなると、俺の出番はない。

となると、愛用のつるはし片手に壁を掘るくらいしかやる事はなかった。

何しろ、ベルが奮闘するあまり餌用の蟻も近づいてこない始末だ。

「むしろ、リリはちよつと余裕がある方が不思議です。元々ベル様が凄いのか、クオン様
主導の『地獄の猛特訓』^{パワレベリング}の影響なのか、今も判断しかねています」

いや、たまに近づいてくるものもあるが、リリルカが有無を言わさず仕留めてしまう。

それはもう、怨敵でも見つけたかのような勢いで。

「そんな大げさな……」

と、苦笑するベルの横でポツリとつぶやく。

「ちなみに、昨日ヘスティアはベルの『スティタス』を見て、『久しぶりに凄く伸びたねー』とか言っていたが」

とはいえ、今回は合計でもまだ二桁だった。

伸びたか？——と、一瞬思ってしまう辺り、俺の感覚もだいぶ狂ってきている。

この分なら、ヘスティアが毒されるのも時間の問題かもしれない。

「でしようね！ ええ、リリもちよつと次の更新が楽しみなくらいですから！」

「よしよし、それならちよつと目標を上方修正して脱L.V. 1にしてみるか」

いや、本当にランクアップしてしまったら今度は足抜けさせるのに苦労しそうだが。

（しかし、今回の稼ぎは一体いくらくらい上納金に回っているんだか……）

あの情報屋が相場として示した脱退金は結構な額だった。彼女が今までいくらため込んでいるかは定かではないものの、この調子だとまだもうしばらく時間がかかってしまう。

「やめてください死んでしまいます!？」

脱L.V. 1は割と善意からの提案だったのだが、リリルカは全力で断ってくる。

「ほ、本当ですか?!」

叫ぶリリルカの横で、ベルが目を輝かせていた。

「というか、ランクアップするには最低でもどれか一つはアビリティ評定がDになって

ないといけないって話を聞いた事がある」

しかし、実際のところベルはすでにその条件を達成している。その割にヘスティアからランクアップの話が出ないところを見ると、他にも何か条件がありそうだった。

いや、それともまだもう少しアビリティを伸ばした方がいいのだろうか。

「まあ、まずは手堅くアビリティ評定Sでも狙ってみるか?」

『『まず』とか『手堅く』とはそういう次元の話ではないですから、それ!」

「え、S!?! 行けるんでしょうか?!」

「何でそんなに乗り気なんですかベル様あああああつ!?!」

お前なら少なくとも敏捷はいけるはず——と、俺が応じるより先に、ついにリルカの絶叫がダンジョンに響き渡るのだった。

さて。これにて休憩時間は終わりである。

「あああああ……。リリは、リリはまたやっちゃいました……。この人でなしの策略に乗せられて、リリはまた……」

ワラワラと集まってくる蟻の大群の前に、リルカが項垂れる。

まあ、そこは大目に見てほしい。餌がないなら他の方法で呼び寄せるしかないのだ。

「だ、大丈夫! 大丈夫だってリリ!」

そして、ベルは大慌てで突貫していき——かくして新たな防衛戦が始まるのだった。

「クオン様のところにはいかせません。ええ、リリが何としてでも！」

ほんの少しでもベルの後方にたどり着きかけた蟻共に無慈悲な矢雨が降り注ぐ。

「いや、餌用の奴をだな……」

「そこです!!」

少なくとも、リリルカの射撃精度は大きく向上しているようだった。

一撃で見事に眉間やら何やらといったごく普通の急所を正確に射抜いていく。

しかし、最大の急所である魔石は一切狙わない辺りにリリルカの意地が垣間見えた。

「そろそろ今日は終わりにしようか？」

そんな調子で何度目かの防衛戦を終え、大きく息をついたベルが言った。

「ええ、そうですね。バックバックは一杯ですし、時間的にもちょうどいい頃かと」

慣れた様子で手早く回復薬を差し出ししながら、リリルカも頷く。

あれから結局、リリルカの射撃を掻い潜ってくる蟻は一匹もいなかった。

その結果、いつもより休息時間が長くなつたが……まあ、リリルカの奮闘の結果なの

か、儲けの方はこれまでと大きく変わる事はなさそうだった。

「何だか段々慣れてきてしまっている自分がちよつと怖いです」

自分も回復薬を飲み干してから、リリはため息をつく。

「うん。リリがうまく援護してくれるおかげで、僕もすごく戦いやすいよ。ありがとう」

と、『慣れてきた』という意味を誤解したのか、ベルが嬉しそうに微笑んだ。
「いえ、それは、まあ、サポーターですから……」

「どうやら、不意打ちだったらしい。もごもごとりりルカが口ごもる。

よしよし。引き抜き工作は思った以上に順調に進んでいるらしい。

やはり未恐ろしい奴だ——などと、内心で苦笑したその時。

不意に周囲の空気が変わった。

「ベル、りりルカ、構えろ」

「え？」

「何か来る」

愛用のクレイモアと盾を構え、ダンジョンの薄闇を見据える。

その視線の先に現れたのは——

「久方ぶりですわね、我が君。過日はお見事にございました」

蛇の目をした名も知らぬ魔女だった。

いや、彼女の名前は——

「クオンさんの知り合いですか？」

「冒険者様、でしょうか？」

二人の問いかけに応じられないでいるうちに、彼女が言葉を紡ぐ。

「大変に申し訳ないのですが、今日は少々ご無礼を働かせていただきます」
「何……？」

呻くよりも早く、彼女の左手に燐光が集まり、何かがそこに『取り出される』
それと同時に、彼女はそれをこちらに投げつけてきた。

「しま——！」

反射的にそれを両断して、それと同時に自らの失策を悟った。
彼女が投げつけてきたのは赤い宝玉。

名を『ひび割れた赤い瞳のオーブ』と言った。

その効果は、自らの霊体を闇霊として何処かに送り込む。あるいは——
(闇霊を呼び寄せる——！)

そのオーブに魅入られた誰かを、何処からか呼び寄せるといふものだ。
両断したはずのその瞳が蠢き、俺の姿を見定める。

赤黒い輝きが渦巻き、闇霊の姿となって顕在した。

「——」

礼儀を知る闇霊だったのは、せめてもの幸運だった。

こちらを見据え、一礼してくるその姿を見据えて告げる。

「ベル、リリルカ。ここから逃げろ」

「え？ クオンさん？」

それ以上は答えず、礼儀としてこちらに一礼を返す。

それが、開戦儀礼ともなった。

「——」
闇霊が動く。

相手は特大剣に大盾を構え、堅固な大鎧を着こんだ完全な重戦士。

真つ向からの斬りあいには分が悪い。——と、言うのが通例だが。

(どんな隠し玉を持っているか知れたものではないな)

この見た目で魔術や呪術に精通している者も別に珍しくはない。

遠い昔に対峙した聖戦士は、高位の聖職者でありながら、屈強な重戦士でもあった。

「——ッ！」

上段から叩きつけられる一撃を躲し、両手で構えたクレイモアを一閃する。

しかし、闇霊もまた巧みに大盾をかざし、それをあつさりとはじき返した。

押し返すこともままならず、舌打ちする。

その返礼は特大剣の突きだった。掠めただけで身体が持っていかれかねない。

(今の俺とほぼ互角、か……)

あるいは幸運だったのかもしれない。

本来の俺に近ければ近いほど、今の俺に勝ち目がなくなるのだから。しかし、それだけだ。油断すればたちまちに殺される。ならば。もはや、やるべき事はただ一つ。

「左肩を落とし、右肩に担ぐように大剣を構える。」

それは遠い昔、滅びゆくウーラシールで対峙した神々最大の英雄【深淵歩き】アルトリウスの構えだった。

「それを受けて、闇霊は盾を捨てた。」

「つくづく礼儀を知る闇霊だった。」

「闇霊にしておくには惜しい——と、思わず口元が歪む。」

「今は、ただ全力でこの闇霊を迎え撃つのみ。」

「……そして、互いが地を蹴る音が重なり、剣戟は高らかに鳴り響いた。」

「べ、ベル様！ あれは一体?！」

「わ、分からないよ!！」

「リリの悲鳴に、我ながら情けない声を返してしまった。」

僕らの目の前でクオンさんと対峙しているのは、見るからに堅固な鎧と、極めて長大な剣を携えた戦士だった。

いや、そもそもあれは何なのだろう。その体は赤黒い燐光で出来ている。それはダンジョンの薄闇の中でもなお暗い輝きだった。

(モンスター!?!)

だとしても、『上層』にいいものではない。

それは、ミノタウロスよりも遙かにとんでもない怪物だった。

慄く僕らなど歯牙にもかけず、その攻防は熾烈を極めていく。

逃げろ——そう言われても、もう体が動かなかった。

辺りを満たすその殺気は、決して僕らに向けられている訳でない。それでも、動けなかつた。まるで蛇に睨まれた蛙だ。

なけなしの意地を振り絞ってリリを背後に庇っているけど、もしあの戦士がこちらに向かつてきたなら、一瞬の足止めにもなれない。

例えこの体を盾としたところで、庇ったはずのリリと一緒に両断されるのがオチだ。

自身の身の丈ほどもある長大な剣を軽々と操る重戦士には、それだけの力を感じた。

一方のクオンさんは、今まで見たことのない動き——どこか狼を思わせる剣技を駆使してそれを迎え撃つ。

嵐のように刃が踊り、雷鳴じみた剣戟を鳴り響かせる。

(これが、クオンさん)

そこにいるのは、故郷の村で……そして、このオラリオと一緒に過ごした、どこか暢気で気ままな旅人ではない。

故郷を救ってくれた『英雄』ですらここまで苛烈ではなかった。

(これが……！)

オラリオ最強のLv. 7【おうじゃ猛者】オツタルとも互角に渡り合える【イレギュラー正体不明】クオンの姿——！

動けないのは、鮮烈な一騎打ちにただ魅入っているからなのかもしれない。

「べ、ベル様！」

そこでリリが腕に縋り付いてきた。

ひゅ——と、喉が鳴った。知らず、呼吸まで止まっていたらしい。

それに気づくより先に、体が反応していたのは、それこそクオンさんとの訓練のおかげだった。

近づいてくる気配に向けてナイフを構える。

視線の先にいたのは、あの戦士を呼び出した——んだと思う——魔導士の女性だった。

こんな時になんだけど、綺麗な人だった。

顔立ちは文句なく整っているし、その黒髪は満点の星空を思わせるほど艶やか。緑色の瞳は宝石、肌は白磁を思わせる。女神だと言われても納得しただろう。

普段だったなら、馬鹿みたいに見惚れていたかもしれない。

「怖がらせてしまって、ごめんなさいね」

その人は、目じりを下げてそう言った。

敵意はない。と、思う。

「えっと……」

その様子にすっかり毒気を抜かれていた。

構えていたナイフが少しだけ下がる。

「あの、あの戦士は一体……」

他にもっと聞べき事は色々あるとは思ったけど……結局、真っ先に口からこぼれたのはそんな言葉だった。

「あれは闇霊……。そうですね、他者のソウルと人間性を求めて現れる悪霊、とでも言えば分かりやすいでしょうか？」

「悪霊!?!」

それってモンスターじゃなくて幽霊ってこと!?

「も、もしかして先ほどあなたが投げたマジックアイテムは、それを呼び寄せるための物なのでは……?!」

いろんな意味で絶句する僕の後ろで、リリも悲鳴のような声を上げた。

「そうなります。私も、本来ならあんなものは使いたくなかったのですが……」

落ち込んだようにその人は肩を落とした。

この人、クオンさんと話している時は妖艶で謎めいた感じだけど、もしかして実は凄く素直で可愛い人なんじゃ……?」

「ええと……」

そんな疑問はさておいて、今度こそ別の……大切だと思ふ事を質問した。

「一体、何でそんな事をしたんですか?」

やっぱりこの人から敵意や悪意は感じられない。なら、一体どうしてそんな危険なもの呼び出したのだろう。

「我が君の周りには近いうちに『嵐』が訪れます」

表情を改めて、その人は言った。

「あ、嵐ですか?」

文字通りの意味ではない。それくらいは、僕にも分かった。

「ええ。それにあなた達が巻き込まれるのは、我が君にとつても不本意でしょう。です

から、しばらくは傍から離れるよう、こうしてお願いに上がったのです」

「一体クオンさんに何が起ころっていうんですか?!」

どうにも不穏な言葉だった。

「そう遠くないうちに分かります。あなたただけではなく、オラリオに住む誰もがそれを知るでしょう」

悲しみ。憂い。嘆き。決意。そのどれにも似て、それとも違う表情を浮かべる。

それは……そう。厳然とした神託を伝える古代の巫女のようにも思えた。

「因果の入り乱れたこの世界には……そして、今この地に蔓延る滅びに抗うには、あの方の力が必要なのです」

「滅び……?」

「そして、私達にも希望が。だからこそ——」

その切実な言葉の意味を、僕が理解できないでいるうちに、その人は言った。

「どうやら、終わったようですね。流石です、我が君」

視線を向けると、そこには剣を振り抜いたままのクオンさんと、その剣に両断され、霧散していく戦士の姿があった。モンスターが灰に還るのはちよつと違うけど……うん、どうやら本当に人間という訳じゃなかったみたいだ。

「あ、あれ?」

その光景に気を取られている一瞬の間に、その人は文字通りに消えてしまった。
「魔法?!」

「それとも、また何かのマジックアイテムでしょうか?」

拙いながらも気配を探ってみるのだが、やっぱり感じられない。

「やれやれ、酷い目にあつた」

リリと二人で困惑していると、黄金に輝く何かを煽りながらクオンさんが戻ってくる。

「彼女は?」

「えっと、何か消えちゃったみたいです」

「そうか。相変わらず神出鬼没だな」

特に落胆した様子もなく、クオンさんは肩をすくめた。

「何か言っていたか?」

「その、クオンさんの周りに『嵐』が訪れるから、しばらく傍から離れるようになって」

「なるほど、そういうことか……」

僕には意味が分からなかったその言葉も、クオンさんには心当たりがあつたらしい。

口元に手を当て、しばらく考え込んでから、こう言った。

「せっかくの忠告だ。素直に従っておくでしょう」

「クオンさん?!」

「心当たりでもあるのですか?」

驚き取り乱す僕をよそに、リリが冷静に問いかける。

「いくらかな。どういうわけだが、しつこく絡んでくる奴らには事欠かないんだ」

「ク、クオンさん。それって……」

少しだけ、嫌な予感がした。

どうか村の恩人と憧憬が争うような事だけは――

「いや、今回は「ロキ・ファミリア」絡みじゃないだろう。まあ、向こうが絡んでこない限りは、だが」

僕の恐れを見透かしたように、クオンさんは小さく笑う。

「どちらかと言えば、そっちよりも「フレイヤ・ファミリア」の方だろう」

「三日ほど前の『騒ぎ』はやはりクオン様が相手だったのですか?」

「耳が早いな」

何の話?――と、僕が首を傾げるより早く、クオンさんが苦笑した。

「だがまあ、オツタルがカチコミして来るくらいなら大した問題じゃないな」

「……そんな事を言えるのは、オラリオでクオン様だけですよ」

半眼で、呆れたように――いや、きつとそう見せかける事で恐怖を覆い隠して、リリ

が言った。

何故そう思うのか。

……それは、僕もそうだからだ。

オラリ才最強を前に、大した問題ではないと気楽に肩をすくめる姿を前にすれば、きつと誰だつてそう思うに違いない。

「そんな顔するな。少なくとも今回は奴らも動きはしないだろう」

「……どうしてです？」

「あの『騒ぎ』は裏で糸を引いていた奴がいる。俺達はまんまと踊らされただけだ。それを知つてなお、まだ踊り続けようと思うほど阿呆でもないだろう。連中にも矜持はある」

「そんな事があり得るのですか？」 「フレイヤ・ファミア」の背後にいるのは、あのフレイヤ様ですよ。その眷属を手玉に取るなんて、露見すればただではすみません。そんな度胸と度量があるのはそれこそ「ロキ・ファミア」くらいなものです」

「まあ、あの小僧どもならやりかねないのは認めるがな」

再び息が詰まるような感覚にあえぐ僕をよそに、クオンさんはあつさりと言った。

「だが、少なくともあの小人……奴らの頭目が今回動くとは思えないな」

「何故です？」

「『フレイヤ・ファミリア』が俺に襲撃をかけた理由だ。……ああいや、この場合は本当の理由ではないがな」

「……ああ、なるほど。それなら、確かに……」

「あの、リリ。どういう事なの？」

リリはクオンさんの言葉の意味が分かったようだけど、僕にはさっぱりだ。

「ええとですね」

「ホント、小さく咳払いをしてからリリは言った。

「ベル様も今年のフィリア祭の騒ぎはご存知ですよね？」

「それはもちろん知っているよ。モンスターが逃げて、しかも『新種』が三種も暴れたんだよね？」

「というか、その逃げたモンスターに散々追い回されたのは他ならぬ僕らだし。

「ええ。それで、そのモンスターの脱走に関与したのが、フレイヤ様なんです。まあ、地下水路に新種が侵入していた事に気づいたからこそその緊急処置だったのですが」

「緊急処置？」

「はい。騒ぎを起こす事で一足先に避難を開始させるとともに、『ガネーシャ・ファミリア』に迎撃準備を整えさせる一手だったそうですよ。モンスターは『魅了』する事で、観客を襲わないようにしてあったとも聞いています」

「え、そうなの？」

僕ら散々に追い回されたんだけど。

まあ、全部で十匹以上逃げ出したそうだし、一匹くらい『魅了』が充分じゃなかったモンスターがいてもおかしくないのかな。

多分、そのフレイヤ様だつてそんなに余裕があつた訳じゃないだろうし。そもそも『アルカナム神の力』だつて封じているわけだし。

「ええ。どこまで本当かは分かりませんが、少なくともギルドからの公式見解ではそういう事になりそうです」

「……でも、それなら別にクオンさんは関係ないんじゃない？」

「いえ、あります。理由は何であれ、モンスターを街中に放つたのは重大な危険行為です。それに、フィリア祭は大派閥である【ガネーシャ・ファミリア】がギルドからの勅令を受けて開催している大イベントです。理由は何であれ、ああまで騒がせた以上はただでは済みません。【ガネーシャ・ファミリア】にも面子がありますからね」

「ま、まあ、それはそうなんだろうけど……」

結果として助かつたんだから——と、そう思えるのは僕が部外者だからだろう。

実際、闘技場の周りは大変な事になっていたし、おそらく【ガネーシャ・ファミリア】は責任を問われる事になる。

「それに、フレイヤ様は自身の関与を隠し通すつもりだったという噂もあります。そして、それを暴き立てたのが——」

「ひよつとしてクオンさん？」

「まあ、そうなるな」

どことなく歯切れ悪く、クオンさんは頷いた。

（というか、あの日って確かその『新種』を迎え撃つてたんじゃ……？）

あの後『豊穡の女主人』で合流した霞さんがそう言っていたはず。

何でも居合わせたヴァレンシユタインさん達（ロキ・ファミリア）の第一級冒険者が参戦し、それでもガネーシャ様まで囮にならなきゃいけないくらいの激戦だったらしい。

（そんな戦いの中で、犯人探しまでしてたの？）

リリ達が恐れ戦く理由がちよつと分かった気がした。

「フレイヤ様の関与が明らかになった結果、「フレイヤ・ファミリア」にはギルドから罰則が与えられる事になりました。まあ、事情が事情ですので罰金ではなく、義援金という形をとるようですが、総額はかなりのものになるはずですよ。何しろ、闘技場周辺の被害は甚大ですから」

「ま、まあ、それも仕方ないと言えば仕方ない事なんじゃ……」

「それはそうなのですが……。ですが、自らギルドに赴いたのではなく、クオン様が暴いたという事実は消えません。隠ぺいするつもりだったのでは？——と、疑う声は当然出ます。それとは別に流言飛語も飛び交っていますし、しばらくの間、派閥の印象が悪くなるのは避けられないでしょう」

「流言？」

「ええ。例えばあの『新種』達を地上に連れ出したのは「フレイヤ・ファミリア」なのではないかと言ったような。まあ、普通に考えれば事実無根、滑稽夢想な話なのですが、こういう場合、信憑性は二の次になるのが常ですからね」

それはきつとりリの言う通りなんだろうけど……。

ひとまず曖昧に頷いておく。

「と、これが今「フレイヤ・ファミリア」が持つ背景です。そんな中で、首脳陣がクオン様を襲撃した。そんな話を聞いて、ベル様ならどう思われます？」

「えつと、それは……。まあ、仕返しなのかな、とは思うけど」

でも、裏事情を聞いてしまうと、そう単純な話じゃなさそうだ。

「それが重要なんです。理由は何であれ、フレイヤ様がモンスターを放ったのは事実。「フレイヤ・ファミリア」への罰則はギルド公認ベナルティで、しかも事情を斟酌して公的にはあくまでも復興支援という形をとっています。そんな中でクオン様を襲ったとなると、その

『理由』が逆恨みだったと言われても反論はできないでしょう」

リリの言葉をクオンさんが苦笑と共に補足する。

「今の状況で『フレイヤ・ファミア』の肩を持って俺を殺したところで、奴が望むほどの名声が得られるかは微妙なところだ。それに、一五年前に瀕死の『ゼウス・ファミア』と『ヘラ・ファミア』の寝首を搔いた時と違って確かな勝算がある訳でもないだろう。あの野心家が満足するだけの戦果に繋がるとは思えないな」

もつとも、いきなり仕掛けてきたとしても別に驚きもしないが——と、クオンさんは肩をすくめる。

「ずいぶんとお気楽ですね？」

その気楽な様子に、いつそ敵意すら宿してリリが言った。

「名譽欲しさに襲ってくる程度の相手なら、採算が合わなくなれば勝手に引つ込む。それよりも、裏で糸を引いている奴の方が怖い」

それはオラリオを二分する大派閥を手玉にとれる誰かという事だろうか。

(うん、それは怖いな)

というか。それ以前に途方もなさ過ぎて今一つ実感が沸かない。

「まあ、何であれ面倒は避けるに限る。しばらくはダンジョンにこもってるさ」

「ええっ?! ダンジョンの中ですか!？」

それはいくら何でも無謀なんじや、と戦く僕にクオンさんは小さく苦笑した。

「何、方法はいくらでもある。一八階層まで辿り着ければ、お前にも意味が分かるさ」

「一八階層ですか？」

思わず周りを見回してしまふ。

僕が今いる場所は七階層。まだ半分にも満たない。

「ああ、なるほど。そういう事ですか。……ですが、それは逆に危なくありませんか？」

「さて。そいつはどうかな……」

「え？ リリはクオンさんが何をしようとしているのか分かるの？」

「はい。もつとも、リリも自分でそこに行った事はありません。話を聞いた事があるだけですよ」

「話？ 何のこと？」

「それはですね——」

と、そこでリリを制してクオンさんがニヤリと笑った。

「ま、そこから先は楽しみにとっておけ。冒険の醍醐味はそういうものだろう？」

「ああ、それもそうですね。流石に一八階層進出にはまだかかりそうですね」

「リリまで?!」

そう言われると余計に気になる。

「いつそエイナさんにも聞いてしまおうか——と、そう思う反面、クオンさんの言葉に納得している自分も確かにいた。」

これはきつと、神様がいうところの『ねたばれ』というやつに違いない。

「ま、今のお前達なら食い扶持を稼げない事はないだろう。ヘステイアには適当に言い訳しておいてくれ」

「あー、ちよつとクオンさん!?!」

そこまで言うのと、クオンさんは呼び止める暇もなくダンジョンの奥——おそらく一八階層へと向かって行ってしまった。

7

柄にもなく着込んだローブが煩わしい。

苛立ちを隠しもせず、路地に転がっていた空の酒瓶を蹴飛ばす。

もちろん、苛立ちの原因はローブなどではない。

(チツ、あの馬鹿、一体何を考えてんだい?)

クオン。Lv. 2どころか『神の恩恵』すら持たないというのに、神々から【正体不明】イレギュラーという二つ名まで与えられたあの男が全ての原因だった。

「いいかい、お前達。【正体不明】イレギュラーの動向を探っておいで」

唐突に、あの女神はそんな事を言い出した。

いずれ来るだろうとは思っていた。

そう思う程度には、あの男は派手に暴れすぎている。

だが、実際に告げられた時に感じた衝撃は予想以上だった。

(よりによつて「フレイヤ・ファミリア」に手を出すなんざ……)

内心で毒づきかけてから、それがあまりに馬鹿げたものだと思つた。

むしろあの派閥とクオンは四年前から因縁が続いている。帰還が知れ渡れば、いずれ再燃しただろう。フィリア祭の騒ぎなど、所詮は単なるきつかけでしかない。

それはいいだろう。だが、四年前とはもはやその名前の重みが違う。

(ああ、そうだ)

ギルド公認のLv. 0とはいえ、それに恐れ戦き、慌てふためいたのは直接あの男と剣を交えた一部の派閥のみ。その中にはあの「ロキ・ファミリア」も含まれていたが、彼らは別段騒ぎ立てはしなかった。

正体不明の存在だったかもしれないが、それでも所詮は一介の剣闘士。多くの者達にとつて、その程度のものであった。

(あの時まで、ね)

真つ向から「おかしや猛者」と互角に渡り合い、「スルト古王」すらも退ける。あいつの名前がオラリ

才に響き渡ったのは、闘技場で起こったこの二つの戦いあつての事だ。

数多の観客の前で立て続けに成し遂げられた大偉業。

神々は例外的に【イレギュラー正体不明】の二つ名を与え、その名前は全ての冒険者にとつての『悪夢』となった。

それを忘れさせるには、三年という時間はあまりに短すぎる。

そいつが再び戻ってきたのだ。話題にならないはずがない。

そして――

（【おうじや猛者】に対するこの上ない切り札、か）

唯一あの武人を凌駕する可能性を持つ怪物だ。

ただそれだけでも、あの女神が食いつかないはずがない。

とはいえ、フィリア祭の一件だけならここまでの事にはならなかつたはずだ。

（なんだってこんな時に……）

あの女神が食指を動かし始めたのは、三日前の出来事があつたからこそだ。

【ヴァナ・フレイヤフレイヤ・ファミリア】の首脳である【女神の戦車女神の戦車】と【ブレン・ガール炎金の四戦士】を同時に相手取り、その全員を半殺しにする。

それは、多くの者達にとつて四年前の大偉業を思い起こさせると共に、因縁の復活を予見させるには充分過ぎた。

(噂がマジだったのが厄介だね)

連中が担ぎ込まれたとされる治療院の治療師に少しばかり『サービス』してやったところ、あつさりと診療記録を閲覧する事ができた。

それによれば、あの馬鹿はまたずいぶんと派手にはしゃいだらしい。あれだけやれば、全面抗争に発展しても不思議ではない。

ただ――

(噂が広がるのが早すぎやしないか?)

このオラリオほど数多の虚飾と虚栄が飛び交う場所はない。そして、それが濃縮されるのが一時の夢を売る『歓楽街』である。

客の語る『武勇伝』が虚構か事実かを見極めるのも器量のうちだ。

そして、私の『器量』を信じるなら、この『噂』はどうにもきな臭い。

確かに【イレギュラー正体不明】も【ヴァナ・フレイヤ女神の戦車】も【ブリッセンガル炎金の四戦士】も高名すぎる。その三者が殺しあつたとあれば、その話題が広がらない方がおかしい。

そう。そこまでは、いいのだ。

問題はそのあとだった。

すでに酒場ではクオンと【フレイヤ・ファミリアフレイヤ・ファミリア】の全面抗争の『噂』で持ちきりだ。

歓楽街でも他の区画でも。まるで明日にも始まると言わんばかりに。

(いや、おかしいってわけでもないけどね)

もし【女神の戦車】が【ロキ・ファミリア】の【凶狼】ヴァナルガンド辺りを半殺しにしたせいだ――

――と、いう状況であつても別に同じような噂で持ち切りになるはずだ。

(だが、今回は噂だけが独り歩きしちやいないかい?)

独り歩きというよりは先行だろうか。そんな薄気味悪さがある。

「ぎゃあああああああああつ!」

突如として響き渡つた悲鳴が、思考を中断させた。

冒険者としての本能が、とつさに五感を研ぎ澄まさせる。

「テメエ、クオ――!?!」

強引に打ち切られたその罵声に舌打ちする。

これで無視するわけにはいかなくなつたわけだ。

(武器がないつてのがね――ツ!)

護身に曲剣を下げてはいる。それなりの値打ちものだが、愛用の大朴刀に比べればあまりに貧弱だ。もちろん、素手でも充分に戦えるつもりだが――

「あんたは……!」

路地に転がる冒険者達の死体。

あと数日も経たずに新円を描く月に照らされたその惨劇の舞台に立つ、黒衣の男。

血濡れた大剣を片手にぶら下げ、ずいぶんと立派な竜の紋章が施された盾を持つ、血の匂いのする男。

「クオン……?」

それを相手にできるかと言われれば、それは流石に否定するしかなかった。

8

闇霊との一戦の後。

ベルとリルルカと別れてから、その足でリヴィラの街へ。すっかり復興した街を歩き、ボールスのところ顔を出してからの事である。

「あれからだあ? おめえらが言う赤髪の女らしいのは見かけてねえし、「ロキ・ファミリア」の連中がどうしたかはおも知らねえよ」

道中で集めた魔石の対価はそんな言葉だった。

「いや待て! マジだ。マジなんだっつーの!」

無言で布袋を回収しようとする、ボールスは慌てた様子で飛びついてくる。

「マジで「ロキ・ファミリア」の連中とはあれつきりだ。つっても、どうせくたばる訳もねえだろうから、『下層』辺りまで潜ってるんじゃないか?」

ボールスの言葉に、厄介事の種はまだ芽吹いてはいなさそうだと内心で安堵する。

まだ首脳陣がダンジョンにいるなら、襲撃を受ける可能性は低い。襲撃を受けたとしても、たった六人だけならどうにでもなる。

そんなものをあのアン・デイルが『試練』などと言うはずもない。

「赤髪の女は？」

「そつちも見ねえよ。いくらここがならず者の街だつっても、ああまで露骨に殺しをやった女をそのまま受け入れやしねえ。それにLv. 4以上の冒険者なんざ居着いた日には俺の立場がねえだろうが」

ここで唯一のLv. 3だから顔役をやつてられんだ——と、ボールス。

その言葉には、確かに一理ある。

「なら、本当にあれからは音沙汰なしだと？」

「ああ。あれからなんか変わったかつたら、精々が『ヴェリーの宿』から客足が遠のいたくらいだな」

「またあの宿で何かあったのか？」

だとするなら、流石に些か気の毒だが。

「いんや。ただ単に縁起が悪いってだけだ」

「……ここに来る客つて全員が冒険者じゃないのか？」

しかも、ここまで潜れる連中が今さら人死にに怯えるものなのだろうか。

「そりや、冒険者つっ—のは全員が生きるか死ぬかのところで踏ん張ってるからな。少しでも不運を呼び込みそうな事は避けるだろうよ」

「そういうものか」

「ああ。ここでも縁起を担ぐ奴は珍しくねえよ」

言われてみれば、巡礼地でも縁起を担ぐ同胞は珍しくなかった。

不思議なもので、騎士や戦士、剣士に傭兵など、元から荒事を生業としている連中程そういう個人的な『お守り』を持っていたような気がする。

と、まあ。それはさておくとして——

「そうか。あの宿は安くなってるのか……」

「おう。俺が言うのもなんだが、この街じゃ驚きの良心価格だぜ。それでも客足がさっぱりだがなっ！」

がっはっはっ——と、他人事のように大笑いするボールス。

まあ、ボールスに限らずこの街の住人は自分の家があるのだから、宿に泊まるはずもない。他人事なものも致し方ない事か。

(なら、ありがたく泊まらせてもらおうか)

この言い分なら、地上の宿と同じ程度の値段で泊まれるのかもしれない。

扉こそないが、それ以外の内装は何の不満もなかった。

「他に何か面白い話はないか？」

「他にだあ？ これと言つてねえよ。酔っぱらつた馬鹿どもが殴り合つてんなら日常茶飯事だしな」

それはそうだろう。その程度なら俺も知つた事ではない。

大体、地上でも『冒険者通り』辺りに行けばよく見られる光景だ。

「そうか。じゃあ、邪魔したな。といつても、しばらく滞在する予定だが」

「ああ？ そりやどういふ風の吹きまわしだ？」

「色々あつてな」

いくら何でも今のベルをアン・デイルの『試練』とやらに巻き込むつもりはない。

リリルカの援護があつたとして、それでも二人揃つて死にかねない。

「まさか……」

「いや、流石に永住するつもりはないから安心してくれ」

「ならいいんだけどよ」

「ああ。大体、もし永住したところで、俺に顔役が務まる訳ないだろう？」

いくらならず者の街とは言えど、本当に腕つぶしだけで束ねられる訳もあるまい。

あちらこちらに手をまわし、気を配る。そんな面倒な役割は頼まれたつてご免だつた。

何しろ俺は年季の入った放浪者なのだ。風の向くまま気の向くまま、旅から旅への根無し草の方が性に合っている。

「まあ、そんな感じだわな」

いつになくあつさりと同意してくるポールズに笑い返し、あの宿に向かう。なるほど、確かに驚くほどの良心価格だった。

とはいえ――

「さて、と……」

流石に三日も経てば、手持ちも心許なくなってくる。

いや、正直に自白しよう。

ただ単に、日がな一日、宿で独りごろごろするのに飽きてきただけだ。

まあ、割と鼻屑にしている道具屋のアマゾネスホから『お誘い』があつたりもしたがそこはそれ。流石にそこまで手当たり次第に手を出すわけではない。

……霞やアイシャ辺りには今さらどの口でと言われるだけだろうが。

いや、それにそもそも女店主もそこまで本気ではなかつただろう――と、まあそれはさておき。

「ヴェイラに行くかな」

あまり深く潜ったところでヴェイラでは買い叩かれるだけだ。

二四階層辺りで回復薬の材料を集めて——とも思うが、これもしヴィラではあまり意味がない。

(そう言えば、謎の歌声がどうか……)

ギルドの掲示板にそんな依頼が張り出されていたのを思い出す。

基本的に受諾できるわけではないので報酬はないが、暇つぶしには申し分ない。

道中で見つけた赤漿果ゴッドベリーの果肉を吸いながら、二三階層まで踏破する。

(妙にモンスターが多くないか……?)

そのまま二四階層も踏破するつもりだったのだが、何故だか妙にモンスターが多い。

いつもの『怪物の宴』モンスター・パーティーとは違い、普遍的に多かった。

それに加えて、道中で見かけた苦戦している冒険者達に手を貸し、対価としていくらかの魔石やドロップアイテム、迷宮資源、あるいは回復薬を分けてもらって——などとしていたせいで、踏破するまでにずいぶんと時間がかかった。

(ま、暇は潰れたな)

二五階層の入り口辺りで一息つき、貰った回復薬を煽りながら呟く。

そこから二七階層まではいつも通りだった。

「歌声は……聞こえないな」

ハーピィやマーメイドらしき声なら聞こえるが、それらはお世辞にも『美しい歌声』と

は言い難い。だが、それでも油断すると『魅了』されるのだから性質が悪いと言えよう。

武器を斧槍に切り替え、道中のモンスターを適当に薙ぎ払っていると、不意に視線を感じた。無論、モンスターの気配は常に感じる。だが、それとはやや異なっているよう
な……。

斧槍をソウルに戻し、盾を構える。

同時に愛用のクレイモアに手を伸ばして――

「うん？」

人型をした緑色の何かが遠くで動いた。

おそらくはモンスターだろうが……。

(あんなモンスター、この階層にいたか?)

あれが噂の『歌声』の主――とは思えない。

しかし、気になる。長年の勘が小さく警戒の声を上げていた。

(探してみるか……?)

再び斧槍を取り出しながら自問する。

すでにその『人影』は見当たらない。無視をするのは簡単だった。

いや、そもそも見間違えだった可能性も――

「クオン？」

不意に呼びかけられ、反射的に武器を構えていた。

「物騒だな」

馬鹿げた話だ。人語を解するモンスターがむやみに襲ってくるはずがない。

「リヴェリア？」

途中で止めた斧槍の刃を指先でつまみ、ため息を吐くのはリヴェリアだった。

ついでに言えば、傍らには妙にぼろぼろの金髪ベルの想い人小娘もいる。

「悪いな」

武器を下げ、小さく謝罪する。

「妙に驚いた様子だが、どうかしたのか？」

「いや、驚いたというか……」

ぼつの悪い気分で呻いてから、素直に問いかけた。

「この階層に歩く人型の苔ついていたか？」

「何？」

リヴェリアの形の良い眉が顰められる。

「いや、そうとしか言い難い難しいモンスターがいたような気がしたんだが……」

「人型で苔のようなモンスター……。モス・ヒュージの事か？」

いや、名前を言われても困る。ベルと違ってエイナ嬢のスパルタ教育など経験していないのだ。全てのモンスターの名前を知っているなど、口が裂けても言えない。

こちらの内心を読み取ったらしく、リヴェリアはため息を吐いた。

「レアモンスター希少種の一つで、苔巨人とも呼ばれる。その外見はお前の言うように、人型をした苔の塊だ」

そして、彼女もまたスパルタ教育なのだという話を聞いている。

……。主に、傍らにいる金髪小娘から。

手短に済む事を祈っている俺を他所に、リヴェリアは淀みなく言葉を続けた。

「攻撃を仕掛けると、魔石を持たない分身を生み出すというのが大きな特徴となる。さらに気を取られて本体を取り逃がす、というのはよく聞く話だ。実際、咄嗟に見極めるのは熟達した冒険者でも簡単ではない。加えて、擬態や待ち伏せを多用する知性を持ち合わせた厄介なモンスターだ」

ああ、なるほど——と、リヴェリアの解説に納得した。

異質に感じた理由はおそらくそれだ。モンスターらしからぬ知性の気配。

あの『視線』にはそれがあつた。

(となると、あいつも異端児か?)

いや、それも違う——と、誰かがそれを否定した。
あれは賢いだけの怪物だ。

「しかし、本当にここで見たのか？」

「さて。何しろ一瞬の事だ。見間違いだったかもな。だが、どうしてだ？」

「モス・ヒュージは『中層』、二四階層に出現するモンスターだ。もちろん、『下層』である二五階層で目撃される事が全くないわけではないが……」

「まあ、連中だつてたまには遠出したくなるんだろう。そうでなくとも、生まれてからずっとこんな穴倉の中に籠りっぱなしなんだしな」

「……地上に出てこられても困るんだがな」

と、ため息交じりに呻いてから、リヴェリアは続けた。

「先にも言った通り、よく言えば慎重、悪く言えば狡猾、あるいは臆病な性質のモンスターだ。出現階層より上に向かうならまだしも、下に向かつてくるとは思えないな」

「さつき二五階層でも見かけると言っただろう？」

モンスターが階層間を移動するのは、そこまで珍しい話ではないはずだ。

実際、オラリオに戻ってきてすぐ、五十一階層を目指す途中で、本来なら三七階層辺りに棲んでいるはずのかい蛇と三〇階層で出くわした。

「それは否定しない。だが、それよりも二三階層で見かける事の方が遥かに多い。基本

的に自分より強力なモンスターがいる場所には近づかない性質らしいな」
「そりゃいい。長生きできる性格だな」

危険には近づかないというのは、どうやらモンスター界限でも共通認識のようだ。

「ああ。だから、もし本当にこの階層にいるなら異常事態イレギュラーと言えるな」

「まあ、色々と冒険したい年頃だったんだらう」

それにしては少々剣呑すぎる気配だったが。

（いつそ追いかけてみるか？）

どのみち暇を持って余しているだけだ。

この際、追いかけてみるのも悪くはないだらう。

「それはそうと。二人だけなのか？」

他に褐色小娘が二人と、山吹色の髪のお嬢さん……それと、いつも胡散臭い笑みを浮

かべている小人が一人いたはずだが。

「ふむ。あの赤髪の美人はそこまでの手練れだったか？」

あの四人を仕留めるとは、思った以上に過激な美女だったらしい。

「馬鹿を言うな。先に戻っただけだ」

視線を陰しくして、リヴェリアが言った。

「お前達だけ置いて？ 相変わらず薄情な奴だな」

「それも違う。どちらかと言えば、アイズの我儘を受け入れた結果だ」

「……お前、また何かしたのか？」

リヴェリアの言葉を聞き、半眼で金髪小娘を見やる。

「またって……」

不満そうにむくれる小娘に露骨に嘆息してやる。

「あの小人もが俺にちよっかい出してきた原因を忘れたか？」

「……。それは、ごめんなさい」

いきなり辻斬りを仕掛けてきて、それを返り討ちにしてからは連日連夜ほぼ強引に『訓練』に突き合わされた。まあ、傍から見れば連日斬りあ^{殺し}合^合っているようにしか見えなかっただろうが……最大の問題は、それをリヴェリア達に黙っていた事だ。

そのせいで余計な因縁をつけられ……最終的に、危うく殺し合いになりかけた。

……まあ、もちろん他にも原因はいくらかあるが。

「しかし、あの小人が先に帰ったとなると、あの女の手がかりはなしか？」

「ああ。ひとまず三七階層まで進んだが、一切手掛かりなしだ。リヴェイラでは何か進展があったのか？」

「いいや。俺はまた別件で来ただけだ。お前達が欲しそうな情報は何もなし……ああいや、強いて言えば、あの宿が驚きの良心価格で泊まれるようになってるくらいだな」

何しろ、地上のごく一般的な宿と同じくらいの値段である。地上と同じ値段など、リヴェイラではまずありえない。

「……どういう事だ？」

「殺しがあつたから縁起が悪いんだとき」

「ああ、なるほど。それは確かにな」

「どうやら、リヴェイラも納得するらしい。」

「……もしや、気にならないのは単に俺の人間性が擦り切れているからなのだろうか。」

「目に見えぬ因果を恐れるのは、別に珍しい事ではあるまい？」

と、そこで。唐突に聞き覚えのある乾いた声がした。

「何者だ!？」

身構えるリヴェイラ達を制して、一歩前が出る。

彼女も素質溢れた術者だが……この男を相手にするにはまだ若すぎる。

「先日ぶりだな亡者……いや、灰よ」

蠢く炎の中から、灰色の男——狂人アン・デイルが姿を現す。

まあ、この登場の仕方ではいくら人間の姿をしていても意味などあるまい。

「ああ。また面倒な事をしてくれたな」

「何を言う。気が楽になつただろう？ 最大派閥などと謳われようと所詮はあの程度

だ」

「生憎と集団戦にはいい思い出がなくてね」

亡者の大群にズタボロにされた事はもちろん、鼠の大群に齧り殺された事もある。

一騎打ちなら巨人だろうがドラゴンだろうが神だろうがどうにかできる可能性はあるが、単純な数の暴力に抗うのは容易ではない。

「そのような弱気では困るな。【薪の王】……いや、神々の王すら恐れた本物の【闇の王】よ」

くつつくとアン・デイルは喉を鳴らした。

「単刀直入に訊くぞ。デーモン共の飼い主はお前か？」

後ろからの視線も、目の前の狂人の戯言もすべて無視して問いかける。

もし頷くなら、この瞬間からこの男は敵だ。

「まさか。私とてあのような厄災を飼う気にはならん」

と、アン・デイルは笑いを納めて呟いた。

「あれを飼っているのが誰か、貴様とて薄々見当がついているのではないか？」

「……。もう一つ。『暗い穴』を知っているか？」

「ほう？ そちらも勘付いていたか。結構な事だ」

「まさか——」

「まあ、落ち着け。私とて狂人と呼ばれた男だが、世に亡者を汜濫させるつもりはない。……そもそもそれに抗おうとしてこうなったのが私なのだがな」

それは、確かにその通りだった。

火の因果に挑み、それに敗れては異形となり果てた。それが「原罪の探究者」アン・デイルという男である。

「ロンドールの黒教会と言ったか。連中もまた勢力を拡大している。いずれ貴様を求めて姿を現そう。どうやら、あちらもこの歪な時代には思う事があるらしい」

うつすらと笑みを浮かべて、アン・デイルは言った。

その言葉は聞き流せない。今、この男は確かにロンドールの黒教会と言った。

(まさか本当に存在しているのか、オラリオに?)

俺が何かを言い返すより早く、ソウルから何かを取り出して放って寄こす。

「ひとまず、それを渡しておこう」

「何だ? 魔石とはまた違うようだが……」

『『殺生石』。そう呼ばれている。簡単に言えば、邪法の類よ』

「お前がそう言うとは。よほどの物らしいな」

「この『世界』には獣の力を持つ人間がいるのは知っていよう? その中に、狐人ルナールと呼ばれる種族がいるそうだ」

皮肉を告げるが、まったく気にもせず、アン・デイルは話を続けた。

「ふむ。それで？」

「その遺骨が、その石の材料の一つよ」

「それはそれは。お前が好きそうな話だな」

「まあ、最後まで聞け。その石を作るには、二つの石を融合させてやらねばならん。遺骨を用いるのは、『玉藻の石』と呼ばれる石だな。これは別に平凡な代物だ。その狐人^{ルナール}どもの魔力を高める。ただそれだけの石にすぎん」

「お前が邪法と言う割には大した事がないな。それとも、その石を使えば俺達の手にも負えなくなるのか？」

「まさか。人間の骨を使っただけではそれほどの力は出せん。その石だけでは流石に邪法などという狂言は口にせんとも」

背後から嫌悪感が伝わってくる。

おそらく、通常感覚で言えば遺体の骨を使う時点で邪法なのだろう。

「もう一つの材料が『鳥羽の石』……この辺りでは『月^{ルナティック・ライト} 嘆石』と呼ぶ方が良いでしょうな」

「いや、さっぱり心当たりがないんだが」

と、そこで。

「月光を浴びる事で、色を変え、また光を放つ鉱石だ。加えて魔力を帯びる事から、鍛冶師が武器の材料に用いる事もあると聞く」

背後にいるリヴェリアが静かに告げた。

「武器やアイテムの材料とする場合、月光によって硬度や威力、効果が変化し、満月の夜にこそその真価が発揮される。従って、月の明かりが届かないダンジョンでは縁のない代物だ。だから、オラリオでは出回っていなかったのだが……ある時、一人の吟遊詩人が月に絡め恋を嘆く歌を歌ってな。それがまた大いに流行つたんだ。それで、オラリオでも広く知られるようになった」

「それは、何と言うか邪法とは程遠そうな代物だが……」

むしろ、ずいぶんと平和な話だった。

「ああ。その『玉藻の石』とやらはともかく、こちらは交易所に足を運べば購入できるはずだ。件の歌が知れ渡ってからは、好事家達がそれを用いた工芸品を求めたからな。私達のホームにも確かあったはずだ。……今は倉庫に眠っているが」

ロキめ。無駄遣いするなとあれほど……——と、リヴェリアが小さく呟いた。

確かに月の明かりが必要な代物を倉庫に入れてはまさに意味がないだろうが。

「そのエルフの小娘が言う通りよ。『鳥羽の石』単体であれば、あるいは『玉藻の石』単体であれば、取るに足らん代物だ。が、その二つを足し合わせて作った『殺生石』とな

ると話は別だ」

この狂人にかかればリヴェリアも小娘扱いらしい。

金髪小娘はいつになく素直に驚き、リヴェリア自身は何とも言い難い顔をしている。

「具体的には？」

そちらはさておき、アン・デールに視線を戻す。

『殺生石』を完成させるには、もう一つの材料がある」

と、彼は講義でもするような平坦な声で言った。

「狐人ルナルのソウルだ。これを取り込ませる事で、その石は真価を発揮する。その価値は

……まあ、今は置いておこう。貴様が気になるのはそちらではあるまい？」

「ああ。つまり、その石ころを作るには生贄が必要だ？」

「概ねその認識で良い。もつとも殺すと言うよりは、ソウルを移し替えると言った方が

より実態に近いのだがな」

「移し替えるとは？」

リヴェリアが問いかけた。

「その言葉の通りだ。移し替えられたその時点では身体も死なん。また、石から身体にソウルを移せば息を吹き返すらしいな」

だが、とアン・デールは続けた。

「石は砕いて使うのが一般的だ。そして、砕かれた石からはソウルを回収しきれん。戻したとして赤子同然。いや、廃人というべきだな」

この男が何を言わんとしているのか。そして、何をさせようとしているのかは察した。

それでも、あえて問いかける。

「わざわざそんな講釈を垂れに來たのか？」

「生憎とそこまで暇ではない。それに、もう分かつていよう？」

つまり、それを作ろうとしている誰か——いや、神がいるという事か。

「解せないな。それを俺に伝えてどうするつもりだ？ まさか非道を許せないなどと寝

言を言う訳ではないだろう？」

「いかにも。私にとつては取るに足らぬ些事よ。だが、使い道はある」

と、アン・デイルは平然と言いつつ切った。

ソウルを奪い、人を廃人に変える。その程度で、この男が邪法などと言う訳がない。

方法に違いがあつたとして、それでもあの時代にはありふれた事だ。

邪法など、俺を唆すための方便にすぎない。それは分かつていた。

「デーモンどもやその飼主ども。彼奴を迎え撃とうとするなら、今の貴様はあまりに脆弱すぎる。まさかあの程度の弱兵どもを悉く殺し損ねるとはな」

「お前に嵌められたと分かれば流石に剣だつて鈍るさ」

「たわけ。その前に、あの女神とその手下を殺し損ねただろうが」

フレイヤとオツタルの事か。確かに連中を殺し損ねたのは単純に俺の失態だが。

さて。この男は一体、どこから見ているのやら。

「まあ、良い。あの女神にもまだ使い道はある。が、それとはまた別の話だ」

フント、鼻を鳴らしてからアン・デイルは宣言した。

「【薪の王】よ。【闇の王】よ。【絶望を焚べる者】よ。まずはその名にふさわしき力を取

り戻してもらおう。かつてドラングレイグでもそうであつたようにな」

有無を言わせぬそれは、まるで王命でも拝しているかのようにだつた。

いや……この男はヴァングラット王の兄なのだ。袂を分かつたとはいえ、王に連なる

存在なのは変わりない。

「それに、貴様は誘導する手間がなくて良い。放つておいても自分から首を突つ込むで

あろうよ。因果はすでに動き出したからな。加えて、貴様には女難の相がある」

愉快そうにアン・デイルが嗤う。

「放つておけ。……いや、まさか彼女達も唆したのか？」

後ろの二人こそが、目下一番手近なところにいる女だ。

「さて……」

意味深に言葉を濁してから、アン・デールは続けた。

「今のところその娘どもには別の使い道がある。それこそ放っておいても勝手に飛び込んでいくだろう」

「別の、だと？」

「貴様も知っていよう。赤髪の女だ」

「あなたは、彼女を知っているの？」

と、そこでアイズがいつになく強い語気で問いかけた。

それこそ、今にも剣を抜きかねない。

その時は止めねばならないだろう。この狂人は俺よりも容赦というものを知らない。

「存在程度ならな。ああ、ぜひ欲しい素体ではある。実に興味深い」

何と言うか……あの女も厄介な相手に目をつけられたものだ。

思わず彼女の冥福を祈った。……いや、死ぬより悲惨な目にあわされるだろうが。

「だが、あれと遊ぶのは後だ。まずはその火の無い灰を元に戻さねばならん」

そして、どうやらこれから先は俺にも厄介ごとが続くらしい。

前途多難はお互い様ということか。

「さて。では、これはまたほんの準備運動だ」

コン、とアン・デールが杖で地面を叩く。

そこには炎が沸き上がって——

「貴様……!」

「見知った顔であろう?」

姿を現したのは、ドラングレイグで散々やりあつた異形——オーガだつた。

「ああ。散々丸かじりにされたぞ、クソツたれが!」

「ではな、亡者よ。近いうちにまた会おう」

心底楽しそうな笑みを浮かべ、アン・デイルは炎の中に消えていく。

『——!』

しかし、今さらそんなものに感^{かま}じている暇はない。

目の前には忌々しい人食いカバが一体、雄叫びを上げている。

「クソツ、あの狂人が!」

効果も分からない『殺生石』よりよほど性質が悪い。

毒づきながら突っ込んでくるオーガに、クレイモアを叩きつける——が、

(硬い?!)

確かに未だにソウルは凝つたまま。ドラングレイグ時代の俺自身よりもまだ弱い。

それは動かしがたい事実だ。

だが、それを差し引いてもこのオーガの外皮は硬い。

そして――

「――ッ!？」

盾越しに伝わる衝撃に左腕が痺れた。

厄介なことに腕力の方も随分と高まっている。

……いや、全体的に能力が向上しているというべきだ。

(あの野郎、異形を生み出す腕が上がってるのか……?)

やはり異端児はあの男の『作品』なのではないだろうか。

……などと考えている余裕もなさそうだった。

(相変わらず嫌な敵だ……)

硬く強い。全てを力で粉碎する。これはそう言ったごく単純な強敵だった。

その単純さを逆手に取れば容易い――が、今の状況ではそうも言っていられない。そ

のための魔術なりアイテムを仕掛けている暇がなかった。

間合いを開こうにも、突進と共に繰り出される猛攻はそれを許さない。下手に背後に

回り込めば、こちらが痛い目を見るのは経験上よく知っている。

どのみち、この異形を相手にここまで接近を許した時点で苦戦は免れなかった。

「しま――!？」

何度かの攻防の後、間合いから逃げきれず、ついに捕まった。

流石にここで丸かじりされる訳には——

「【エアリエル】!!」

風を纏った小娘の剣が、オーガの腕を斬り裂く。

「硬い!?!」

いや、本来なら斬り落とすつもりだったのだろうが——少なくとも、拘束が緩まった。ひとまず左腕の自由が利く。ならば——

『!?!?』

オーガの口に火を宿した左腕をねじ込む。

牙は手甲もろとも腕を食い千切ろうとするが——

(遅い………!)

分厚い舌を握りしめると同時、左手に宿る火を炎へと昇華させる。

曰く【発火】。最も初歩となる呪術を解き放ち、強引に口蓋をこじ開ける。

「くたばれ………っ!」

腕は引き抜かない。むしろより奥にまでねじ込み、炎への憧憬を思い描く。

曰く【炸裂火球】。

体内ではじけ飛ぶのは一二の火球。

『!?!?!?』

声なき悲鳴が響く中、自由になった右手の武器を切り替える。

銘を《野盜の斧》。いや、元を辿ればおそらく勇猛で鳴らしたフオローザ騎士団の兵装に行きつくはずだが——ともあれ、重厚かつ鋭利な斧をオーガの頭に叩き付けた。

ずくつ——と、刃を持った鈍器は堅固なオーガの頭蓋にめり込む。

「——！」

まだ倒れない。だが、相変わらずの生命力に戦慄する暇もなかった。

続けて数回叩き付けて——ようやく頭蓋が砕け、脳漿をぶちまけた。

オーガの巨軀が仰向けに倒れていく。

しかし、今も体内で燃え上がる火球が断末魔の悲鳴すら許さなかった。

「あつっ……い！」

ソウルを失ったオーガの巨軀が燃え尽きると同時、呻いていた。

流星に自分の呪術に焼かれた訳ではない。

最初の一咬みの影響と、何より爆発の勢いで牙に出鱈目に引き裂かれたせいで、腕が焼けるように痛んだだけだ。

目に見える炎に引きずられて、身体が痛みを熱と錯覚したらしい。

(クソ、やはりソウルの量も増えているか……)

体内に宿るソウルの量も記憶にあるそれよりも増えている。

（あのデーモン共も実は本当にあいつが再現したんじゃないか？）

アン・デイルならば、おそらくはそれも可能だろう。

舌打ちと共に火を右手に宿し、「中回復」の物語を口ずさむ。

流石はオーガの顎。喰いつかれたのはわずか一瞬。しかも手甲越しだったというのに、左腕は半ば千切れかかっている——が、それでも奇跡が効果を発揮すれば、修復は容易い。

こういう時は『不死の呪い』もありがたいものだ。

「街中で呼び出さなかっただけ、まだマシか」

それとも、あの五人がいなければ街中で襲われたのだろうか。……だとすれば、あの連中は人知れず多くの人命を救った事になるが。

（見舞いの花でも手配してやろうか？）

いや、それは単なる皮肉にしかない。逆恨みを助長するような行動は慎むべきだ。

アン・デイルが言う『試練』の片手間に、オツタルの相手までするととなると流石に少々辛い。

……まあ、そんな様だから、アン・デイルがちよっかいを出してくるのだろうか。

「大丈夫か？」

左腕の感触を確かめっていると、リヴェリアが言った。

「ああ。お前の愛娘には礼を言わないとならないな。おかげで腕一本で済んだ」

下手をすればまた頭から丸かじりにされているところだ。

いくら篝火を確保してあるとはいえ、その瞬間を見られては色々と面倒な事になる。

「それで、あの男は何者だ？」

まあ、訊かれるだろうとは思っていたが。

「アン・デイル。かつて存在した大国ドラングレイグの国王ヴァングラット王の兄だ

……が、まあ、それよりも狂人としての方が名が通っていたのかもな」

「随分と曖昧だな？」

「仕方ないだろう？ 俺がそこに行きついた時にはすでに滅んでいたんだ。周辺諸国も

ろともにな。王城こそ綺麗なまま残っていたが、大体は朽ちかけていて、まともな人間

なんてほとんどいやしなかった。いたのは化物ばかりだ」

厳密に言えば、真つ当な人間など一人もいなかった。

いや、ウーゴのバンホルトは真つ当な人間だったと言えなくはないが……いや、あの

武人は不死人とは別の意味で人間をやめていたとしか思えない。

サルヴァで別れた後どうなったかは定かではないが、何となく自力で光波くらいは放

てるようになっていそうだ。

「なら、なぜあの男は生きている？」

「さあな。以前やりあった時に殺し損ねたのは事実だが……」

戦つても殺さなかつた相手なら他にも何人かいるが……俺が止めを刺す刺さない以前に、自力で生き延びたのはあの男くらいなものだ。

「何を企んでいる……と、訊くだけ野暮か」

「ああ。どうやら『試練』とやらを押し付けてくるらしいがな。一体何をやらせるつもりなんだか……」

いや、見当はついている。おそらく、どこぞの「ファミリア」を唆し喚びかけてくる気だ。あの様子なら彼女達ではなさそうだが……いや、それは今すぐではないというだけか。

「まあ、そちらも気を付ける事だ。気を付けた程度でどうにかなる相手だとも思えないが……それでも、致命傷になるところを重傷で食い止めるくらいはできるかもしれない」

「何とも物騒な話だ」

それは否定しないが、何とか自力で切り抜けてもらいたい。

糸目の小僧と金髪小男がああ**狡い**頭を振り絞れば、あの狂人相手にも一矢報いられる可能性くらいはきつとあるはずだ。

「あなたが、本来より弱くなっているというのは本当なの？」

と、そこで金髪小娘がずいぶんと殺気立った様子で言った。

「さあな」

下手に肯定して斬りかかられても面倒だ。

適当に否定しておいてから、さらに念を入れて言い訳しておく。

「……だがまあ、さっきの様ならあながち否定もしがたいか」

いや、あのカバは例え万全の状態でも決して油断ならない強敵だが。

今回はこの小娘のおかげもあって、手早く仕留められたが、もう一度あの真似をしろと言われても困る。まず確実に腕を食い千切られる。

それか普通に頭から丸かじりだ。

「弱くなつて、それでも【おうじや猛者】に勝った？」

「あれは勝つたというのか？」

四年前も先日も、ついに仕留め損ねた。

生き残つた者が勝者だとするなら、まだ決着はついていない。

もつとも、俺達不死人にとつて一度や二度の『死』なら別に終わりという訳でもない。

そういう意味で言えば、オツタルはずいぶんと不利だろうが……まあ、元より殺し合
いというのはそういうものだ。こちらとて、不死でもなければとても踏破できない場所

を旅してきたのだから。

しかし、それはそうとして。

(あいつだけは厄介なんだよな)

オツタルは今、このオラリオで唯一『神の枷』を外しかねない男だ。

いや、外す分には問題ない。むしろそれこそがあるべき人の姿だ。

(だが、奴が外すととなると……)

おそらく、あの男は『器』を持っている。枷さえ外せば、自ずとそれに目覚めるはずだ。

ならば、あとは玉座を目指すだけである。そして――

(あの男なら、そのうちこの巡礼地^{ダンジョン}を踏破する可能性もある)

あの男が『玉座』に至る。そうなれば、最悪の場合――

「どうして?」

「うん?」

「どうして、あなたはそんなに強いのか?」

……東の間、返事に困った。

そんな事を言われたのは、むしろ初めてだとさえ言える。

「いや、別に特別強いわけでは……」

困惑したまま叫いた。

「俺なんて平凡なものだぞ。あれこれ継ぎ接ぎしてようやく周りにいた化物共に食いがついていただけで」

この二人の身近にいる相手なら、それこそラウルが一番近い。

剣の腕だけなら。呪術師としてだけなら。俺よりも優れた相手はいくらでもいる。剣士には呪術で、呪術師には剣で挑んだから辛うじて勝ち抜けてきただけだ。

「お前が平凡だと？」

だというのに、リヴェリアまでが不満そうな声を上げた。

「ああ。俺より腕の立つ奴なんてさらにいたからな」

誰もが巡礼者と認められた『バーニス騎士団』においてなお最強と謳われた黒鉄のルカス。

深淵に挑んだ異端の魔女ビアトリス。

忌むべき不死人でありながら、白教が二つもの宝具を与えた稀代の聖騎士リロイ。未完の火防女との誓いに殉じた呻きの騎士ことカリムのイーゴン。

聖女と魔女に愛された知られざる英雄、放浪騎士——あるいは忌み探しのアルバ。黒教会を設立し、しかし離反して腐り逝く絵画世界に至った黒き炎エルフリーデ。

彼らと同格の——あるいは、それ以上だったかもしれない力を持ちながら、名を遺さ

なかつた数多の不死人やその名残である白霊や闇霊たち。

しかし――

「だが、おかしなものだな。そういう連中に限って大体が道半ばで斃れているんだ」

旅を終える頃。ふと見渡すとほとんどいなくなっている。しかも、そのうちの何人かは俺がこの手で殺している。……まったく解せない話だ。

類稀な才を持ち、修練を重ね、技を磨き、力を高めてきた彼らに、所詮凡庸な俺如きが及ぶはずがないのだが。

だが、まあ――

「ま、強さなんてそんなものなんだろう。お互い殺しを齎ぐ身だ。強いに越した事はないのは確かだが、思うほど役に立つ訳でもない」

そんなものだろうとも思う。

だからこそ、絶大な力を誇った古竜達は神々に。古竜を滅ぼした神々は人間に滅ぼされた。

「大体、それが絶対の基準なら、俺なんてロードランの入り口辺りで終わってるしな」

不死人だったから良かったものの、そうでなければ祭祀場からいくらかも離れないうちにあつさり殺されて屍を晒していたはずだ。

いや、実際に城下不死街にすらたどり着けないまま散々死んで師匠に呆れられた訳だ

が。

(愛用の武器がなかったからだ、と言いつつ誰かの手ほどきを受けてほしいけどな)

これでも刀術については誰かから手ほどきを受けていたらしい。

もはやそれが誰だったかの記憶すらないが……それでも、あの時だつてせめて打刀の一振りもあればもう少しマシだつた——と、思いたい。

「なら、あなたは何を頼りに先に進んだの？」

「さて。俺にも分からないが……」

ここまで『生き残れた』のは……まあ、運が良かったただけだ。

いや、悪かったのか。

自分でも忘れるほど殺され続けて——それでも結局はこうして死にきれなかったのだ。

あるいは——

「誰よりも呪われているから、と言つたところだろう」

ただ単に、この世の誰よりも不死人に向いていただけか。

殺されても死にきれず、死しても蠢き、ただソウルを求める。そういう在り方に誰よりも適応した。

ただそれだけの事かもしれない。

だからこそ、火は消え、不死の呪いも消え去ったこの世界で、今も火に囚われ、この手で終わらせたはずの『火の時代』の亡霊達に付きまとわれている。

なるほど、これが因果という奴なのだろう。

「一体何を期待しているのかよく分からないが……」

何故だか途方に暮れた様子の小娘に嘆息しつつ、己を指して告げた。

「よく見るといい。俺がお前の望むような何かを一つでも持っているように見えるか？」

そんなもの、あるはずもない。

「賞賛を浴びる事も憧憬を抱かれる事もない。権力や名声とも無縁だ。屍を積み上げ、死を巡らせた先に、何か輝くものがあつたとも思うのか？」

それでもあると信じ、その輝きに魅入られる者もいるのか。

「あるとしたら、それは己を焼き殺す炎でしかない」

いや、それに魅入られた者こそが歴代の「薪の王」達であり、俺達不死人だ。

火継ぎの真実を、あるいはその不備を知つてなお、そこに何か救いがあると信じて終わりのない巡礼を続けてきた。

（ああ、なるほど。まるで火に誘われる蛾のようだ）

いつか対峙した女神の騎士の嗤い声が聞こえるようだった。

(マズいな……)

忘れていたはずの——そのつもりだった感情に火が回る。

ああ、確かに哀れな蛾だろう。もう一度何かを変えられると信じていた俺は。

「それでも、私は……」

知らず今も薪とされ、自ら命を懸けて火を熾すべく地の底に向かう。

……その先に何があるかも知らぬまま。それを知るが故に抗った英雄達を殺してまで。

遠い昔、ロードランの地を彷徨った——自分の選択がその後どういふ影響を齎すかなど考えもしなかったどこかの愚か者と同じだ。

「私は、あなたが羨ましい」

神の王達を殺し、どこかの愚か者の後に続いてしまった王達を殺し、数多のソウルから生まれた化身を殺し——支払われた数え切れぬ犠牲の全てを裏切つて、ようやく『闇の時代』は始まった。火防女の手中で消えゆく『最初の火』を確かに俺はこの目で見届けた。

だというのに、人は今も神の奴隷でしかない。

火を消し、呪いから解放されたと思つたら、今度は自分達の手でそれを蘇らせに行く始末だ。

己の内にあるはずの『残り火』には誰も気づきもしない。

所詮、俺達の旅路は奴らを肥やすためのものでしかなかったのか？

道半ばで斃れた数多の同胞達も。積み重ねられた犠牲も。焚べられた絶望も。結局は何ら意味をなさなかったと？

「――」

忘れていた――そのつもりだった憎悪が息を吹き返す。

身を焦がすその炎を自制するのは、今だ未熟な呪術師の手には余る。

御しきれず、火の粉が舞い上がった。

（俺達を羨ましいと言うのか？ よりによってお前達が……）

俺達が支払った全ての犠牲を無意味なものにした神の眷属どもが。

第四節 狐と栗鼠 ■ 厄災の ■

1

(またおかしなことになったものだ)

アイズとクオンを連れてひとまず一八階層を目指す中、胸中でため息を吐く。

『私は、あなたが羨ましい』

アイズがそう言った時、クオンは明らかに怒り狂っていた。

いや、あれは憎悪というべきか。

とはいえ、それはほんの一瞬の事だ。今は平静を保っているように見える。

だが、それをなかつた事に来る程には、私達も鈍感ではない。

結局、今もこうしてどこかささくれだった空気が続いていた。

もちろん、クオンは「ロキ・ファミリア」の一員ではない。こうして共に行動する必要はないと言えはしないのだが……。

(まあ、あのまま別れるのは危険ではあったしな)

あのアン・ティールなる人物は、『殺生石』なる得体の知れないマジックアイテムまで持ち出して、クオンをどこかに喚けたいらしい。

いくら『殺生石』なるものに心当たりがないとはいえ、それが私達ではないという保証はどこにもなかった。

(ゴ)機嫌取りとは言わないが……ああいや、まさにその通りか)

少しでも態度を軟化させておいた方が無難ではある。それこそ、あいつ自身が言ったように致命傷を重傷で済ませられる要因になるかもしれないのだから。

それに、気になる事も一気に増えてしまった。この状況で一切情報収集をしないというのは副団長として許されない。

「何がいけなかったのかな？」

相変わらず妙にモンスターが多い二四階層を超えたあたりで、アイズが小さく呟いた。

巷では未だに『人形姫』などと呼ばれているが、実際にはそこまで感情がないわけではない。それに構う余裕も、ようやく生まれてきている。

「さてな」

しかし、アイズの問いかけは難問だった。

アイズの一言がクオンの逆鱗に触れたのは確かだ。しかし、何故なのかが分からない。い。

(クオン。四年前に忽然とオラリオに姿を現した。それ以前の経歴は全くの不明)

少し前方を進むあの男について知っているのはその程度だ。

ある日忽然と姿を現し、剣闘士として名を挙げ、何らかの要因でいくつかの性質の悪い派閥と抗争し、その全てを壊滅させる。

その後、色々理由があつて、私達「ロキ・ファミア」と全面抗争一歩手前にまで陥り、フィンやガレスをも単独で撃破して見せた。

その騒ぎを耳にしたギルドにより素性調査が行われ、正真正銘のL v. Oだと確認される。

また、それに立ち会つた「ガネーシャ・ファミア」とも関係を持ち、いくつかの騒動を鎮圧した。

その結果、神フレイヤに目を付けられ、それが「おうじや猛者」オツタルとの一騎打ちに繋がっていく。闘技場にて真つ向から「おうじや猛者」と切り結び、さらには乱入してきた「スルト古王」を撃退するという偉業にも。

その後、突如としてダンジョンに向かい、ほぼ初見のまま七〇階層踏破という前代未聞の非公式記録アナサレコードを樹立したとされる。

同時期に、L v. Oでありながら神々から正式に「イレキユラー正体不明」の二つ名を与えられた。そして、ある日突如としてオラリオを去り——三年間行方知れずだった。

これが私を知るクオンの過去の全てとなる。

しかし、それはほんの四年前、期間にして僅か一年程度の出来事ではない。過去と呼ぶにはあまりに短すぎた。

(最初にあいつに潰された派閥を考えれば、抗争の真因もある程度察せられるが……) それが関与しているのか。

胸中に浮かんだその考えを、小さく首を振って否定する。

その『理由』はアイズと直結しない。いや、まったくの無関係とも言い難いが……。 (あまりに遠すぎるな。そもそも彼らがアイズという存在を想定していたとも思えない)

大体、アイズはおそらく彼らの理想に反するものだ。完全に無関係とは言い難いが、クオンに繋がる理由がどうしても思いつかない。

(そもそもクオンがそれを知っているのかどうか……)

私とその予想を立てられたのは、王族^{ハイエルフ}として生まれ、『暗黒期』の構想に関わっているからだ。公的には『暗黒期』が終わっていた四年前に現れたクオンが、そこに至れるかどうか。

(とはいえ、アイズ自身の素性については、ある程度予測がついている節があるな)

何しろ未だに底のしれない男だ。まだ何か隠し玉があるのかもしれない。

となると、やはりそれ絡みなのだろうか。

（言葉の端々に魔導士への偏見らしきものが見え隠れしているのは確かだが……）
 人体実験。時折、クオンはそんな言葉を口にする。

そして、あのアン・デイルなる人物は躊躇わずにそれを実行できる狂人らしい。となると、そういう偏見を持つに至った原因は……少なくともその一つはあの人物だろう。

（そこに加えて、アイズの素性。それらを照らし合わせれば、誤解している可能性も皆無ではないだろうが……）

アン・デイルは見た事もないモンスターを従えていた。

もしも、あれを自分で生み出したというなら、それはもう今のオラリオ——いや、アルテナにすらない秘術（魔法）の使い手という事になる。

（だが、ドラングレイグだと？）

すでに滅んだ国のようだが……そんな国はあっただろうか？

（私達や精霊のような魔法種族（マジック・ユーズ）以外が魔法を得たのは、神々が降臨してからの事だ。それから一〇〇〇年の間に、あんな邪法を生み出した魔導士がいるなら、例え滅んだとしても噂の一つも残っていてよさそうなものだが……）

それとも、アン・デイルはエルフなのだろうか。フードを被っていたせいで耳が見えなかった以上、可能性としてはゼロではない。

そして、一〇〇〇年以上前……モンスターが跋扈していた『古代』なら、大国が滅亡したとしてもそこまで不思議ではない。

(だが、そうすると……)

クオンは何者なのか。

(どう見ても、あいつはヒューマンだ)

一〇〇〇年以上前に滅んだ国の王兄と一体どうやって接点を持ったのか。あの様子からして、単なる顔見知りではない。

むしろ、アン・デイルにとつても極めて重要な人物のはずだ。

(『薪の王』、『闇の王』。それに『絶望を焚べる者』、か)

それらすべてはクオンを意味する言葉らしい。

(そう言えば、例の赤髪の女はクオンを『亡者の王』と呼んだらしいな)

そして、アン・デイル自身もクオンを亡者と呼んだ。

となると、その『亡者の王』とやらもクオンを意味する言葉なのだろう。

(二つ名の類か？ 神々から与えられたものではなさそうだが……)

しかし、それが持つ意味はどうやら相当に重いものらしい。

加えて、お世辞にも穏やかとは言い難い。

さらに言えば、

(デーモンの飼主と言ったな)

フィリア祭で、そしてリヴィラの街でも暴れた牛頭のデーモン。

あれは誰かの意図の下で動いているという事なのだろうか。

(となると、疑わしいのはアイズ達を襲ったという赤髪の女だが……)

いや、それもおかしい。

アン・デイルは存在こそ知っていたようだが、決して重視していた訳ではない。

(それに、クオン自身も別の何者かを想定している)

一体何者なのか。そもそも、この二人と一体どういう因縁があるのか。

(やはり、すべてはここに集約するな)

クオンとは一体何者なのか。

アイズの言葉に激怒した理由すらも、ここに集約されるはずだ。

(あるはずなんだ)

この【イレギュラー正体不明】にもオラリオに来る前の過去が。

あれだけの力を得るに至った経緯や経歴が。

アン・デイルなる怪人物に目を付けられるに至った背景が。

そして、数多の二つ名と思しきものを得た理由が。

それらが存在しないはずがない。

（まずはそれを知ること、か……）

もつとも、今までそれができなかつたからこそ、こんな事態になっているわけだが。嘆息しつつ、足を速めてクオンに追いつこうとして、

「うん？」

背後から何者かが走ってくる音がした。

音からして一人。

（やれやれ、間が悪いな）

ひとまずその同業者には先に行つてもらおうか——と、そんな事を思っていると。

「くっ!？」

アイズの声と、剣戟の音が響き渡った。

「アイズ?!」

ダンジョン内での闇討ちは、確かに珍しくない。

しかし、こちらが三人——いや、クオンを除いたとしても二人いるところに、たった一人で仕掛けてくるとなると、流石に珍しい。

（平均的な前衛装備だな）

顔には質素な鉄仮面。体にはラウルのような鎧。手には大斧と大盾。

顔を隠しているのは、闇討ちを仕掛けるためか。鎧と仮面のせいで種族は分からない

が、体格からして小人族バルウムやドワーフ、アマゾネスの可能性は低い。

武装を合わせて考えれば、獣人かヒューマンといったところだろう。

そして、単独で『中層』を探索できるとなると、Lv. 3 以上は間違いない。

「はああつー！」

もつとも、何であれアイズを一人で相手にするというのは無謀に過ぎる。

(まず動きが稚拙すぎるな)

あれでは力任せに暴れているに過ぎない。

よく言われる「ステイタス」に振り回される上級冒険者の典型例だった。

あれなら、万が一Lv.5同格であってもアイズには勝てまい。

実際、アイズの剣はあっさりとその冒険者の右肩を貫いた。

命に関わるほどの傷ではないが、手当てしない限り武器を振るう事は出来ない――

「なっ?!」

はずだった。

しかし、その襲撃者はまったく痛みを感じていない様子で左手の盾を叩きつけてく

る。

「ハッ！」

多少の動揺はあつただろうが、それだけだ。

アイズは冷静に剣を引き抜き、そのまま大上段から振り下ろす。

無論、頭から一刀両断するつもりではなく、牽制と……何より警告だった。とはいえ、当たればただでは済まない。

L v. 3 以上の冒険者なら、避け切れないまでも盾で受けられるだろうが——
「ッ?!」

しかし、その襲撃者はその一撃すら無視して突進してくる。

アイズは慌てて軌跡をずらすも、鉄仮面は両断され——

「いかん！ アイズ、下がれ！」

露わとなったその顔を見て、叫んでいた。

それは人ではない。いや、人だったものと言うべきか。

干からびた死体。それが動いている。

「そいつは『アンデッド』だ！」

ダンジョン内で語られる都市伝説の一つ。

彷徨う冒険者の遺体——すなわち『アンデッド』。一般的には眉唾ものの噂だと思われるが……私は以前実際に遭遇していた。

もう少し下、二六階層で。

あの時は噂すら知らず大いに困惑した……が、それでも分かった事もある。

「剣では倒せない！」

体をいくら切り刻もうと倒せるものではない。

実際、フィングレート・フェネルの槍もガレスの斧も物ともせず襲い掛かってきた。

あの時は『巨蒼の滝』に落とす事で事なきを得たが、ここではそうもいかない。

(くっ、魔法で完全に体を破壊するしかないか……?)

せめて氷漬けにできればまだ手はある。

杖を構え、詠唱を開始する――

「下がっている」

より、早く傍らを黒い影が通り抜けていった。

言うまでもなくクオンだ。

「――」

アイズに気を取られている隙に、クオンはその『アンデッド』をあつさりとは断した。

干からびた死体のようなその体から生々しい血が噴き出すという、あまりに奇妙な光景が展開される。

上半身が地に落ちるのと、下半身が崩れ落ちるのはほぼ同時だった。

そして、もう動かない。

「倒した、のか……?’」

それも一撃で。

唾然とする私をよそに、クオンはその『死体』に近づくと、鎧を脱がし、その下のシャツの胸元辺りを斬り裂いて――

「やはりか……」

はつきりと舌打ちした。

「何かあつたのか？」

警戒を緩めないまま、その『死体』に近づく。

どうやら、見たところ魔石を摘出していたわけではないらしい。

「ああ。また面倒な事になった」

何を見てそう判じているのか、私には掴み兼ねた。

そこにあるのは、男性と思しき干からびた死体でしかない。

いや、

「痣？ いや、それにしては……」

妙に禍々しい『何か』がその胸元に穿たれていた。

「『暗い穴』。見るのは初めてか？」

「『暗い穴』？」

確かに、それは言い得て妙だった。

墨でも垂らしたかのような漆黒の何か。そこにあるのはそんなものである。痣やほくろ、刺青の類ではない。その黒は、あまりに暗い。

「その小娘の身体を後で探ってみろ。案外同じものが見つかるかもしれないぞ？」
アイズに視線をやりながら、クオンが小さく笑う。

「……どういう意味だ？」

「『本当の力を引き出してやる』。この穴を穿てる奴はそう言って近づいてくる
なるほど、と胸中で呟く。

それは確かにアイズにとっては危険な囁きとなるだろう。

「実際、こいつの力は大したものだよ」

「まさか、お前もか？」

「まさか。いや、確かに昔、勝手に一つ穿たれたが、それはもう癒してある」

「癒せるのか？」

「ロスリックで世話になった火防女がいれば可能だが……それでも代償は安くない」
「火防女？」

と、問いかけてから、それより先に訊かねばならない事があると思いなおす。

「いや、それよりもその『暗い穴』とは何なんだ？」

「不死の呪いだ。確かに力を与えてはくれる。だが、その代償としてこうなる」

クオンが、その『死体』を示して言った。

「もつとも、それなりの素質さえあればいきなり亡者にはならない。個人差はあるが、死ぬごとに少しずつ亡者化は進み、いずれ完全に亡者となり果てる。そうになると、こいつのように理性を失って見境なく人を襲い始めるんだ」

「死ぬごとくに？」

それは奇妙な言い回しだった。

言うまでもなく、死ねばそこまでだ。

いや、『不死の呪い』というなら死なないのではないか？

「ああ。この場合の『不死』は死なないのではなく、死んでも蘇ってくるという意味だ。

だが、蘇る毎に人間性を失っていき、最後にはこうなる」

その疑問を口にする前に、クオンはあっさりと言った。

「俄かには信じがたいが……」

しかし、確かに『アンデッド』は殺せなかった。

「待て。だが、そいつは死んでいるのではないのか？」

「亡者となり果て、それでも殺され続けなければいずれ動かなくなる。そういう意味では、確かに完全な不死とは言い難いかもな」

もつとも、亡者となった時点で生きているとは言えないが——と、クオンは小さく肩

をすくめる。

「殺され続ければ？ それは一体どれくらいの話なんだ？」

「さてな。それにも個人差があるらしい。十回で済むか、百回でもまだ足りないか……」
ゾツとしない話だが……しかし、それはおかしい。

「だが、お前は今一撃で仕留めただろう？」

それとも、これから『蘇って』くるというのだろうか。

「ちようどうまい具合に最後の一回だったんだろう」

気のない返事について視線が険しくなる。

「そう睨むなよ。色々とコツがあるんだ」

それ以上答える気はないらしい。いつもの『スキル』で白い布——経帷子を取り出し、その『死体』を包む。

「連れていくつもりか？」

「少なくともリヴィラまではな」

「何故だ？」

「言つたる？ 『本当の力を引き出してやる』と言つて近づいてくると」

ああ。そしてアイズにもあるかも知れないと——

「待て！ つまり、この『アンデッド』は……ッ！」

いや、それは分かっていたはずだ。

それでも、モンスター的一种だと思い込みたかただけに過ぎない。

大体、噂話でも明言されているではないか。

「お前達の同業者と考えていいだろうな」

それは、冒険者のなれの果てだと。

認めると同時、吐き気を伴う嫌悪感に襲われた。いや、人並みに恐怖しただけだろうか。

力を求めるのはアイズに限らず冒険者の性だが、これはあまりにも……。

「ああ、だが……」

口元を覆う私をよそに、クオンは小さく呟いた。

「どうせこうなるなら、いつそ『亡者の王』になるのも悪くなかったのかもな」

3

それからしばらくして、私達はリヴィラの街に到着していた。

「てめえは訳ありの死体回収が趣味なのかよ？」

「さて。そこまで悪趣味じゃないつもりなんだがな」

『アンデッド』の死体——いや、冒険者の遺体を背負ったクオンは、その足でホールスカ

ら『開錠薬』^{ステイタス・シーフ}を購入し、先日も見かけた小男の協力を取り付けた。

そして、リヴィラにある遺体安置所^{モルグ}に集まっている訳だ。

理屈で言えば、他派閥である私達が同行する理由はないのだが……クオンが特に追い払おうとはしなかったので、今もこうして一緒に行動している。

「終わった」

口数少なく、そう告げると小男は報酬を受け取り、モルグから出ていく。

「つーか、お前神聖文字^{ヒエログリフ}は読めるのかよ?」

きつちり仲介料を受け取りながらボールスが性質の悪い笑みを浮かべる。

読める相手を紹介する事でさらに稼ごうというつもりなのだろう。

だが、その思惑はあっさりと破綻した。

……クオンがあっさりと頷くことで。

「一通りな」

驚きだった。アイズと二人で思わず絶句する。

「……ケツ、可愛げのねえ奴だ」

よほど想定外だったのだろう。ボールスもしばらく呆気に取られてから、ようやくいつもの通りの憎まれ口を叩いて見せた。

「さて、と」

ボールスが出て行ってから、クオンは改めてその遺体の背中を覗き込む。

「これは……?」

確かにその背中には「ステイタス」が刻まれている。

刻まれてはいるが……

「読めない……?」

アイズもまた、それを見て首を傾げた。

この場合、読めないというのは解読できないのではなく――

「書き換えられている、のか?」

無論、全てではない。

ただ、主神の名が記されているはずの部分は完全に塗り潰されていて判別できない。

無論、それを示すエンブレムもない。「ステイタス」やスキルだけが味気なく書かれている。

「それも気になるけど、L.V.が……」

「ああ。これは一体……」

そこにはL.V. 1と記されていた。

「あれはL.V. 1の動きではなかったはずだが……」

理性を失った影響なのか、ずいぶんと粗雑な動きだった。しかし、それでもL.V. 3

相当の身体能力を發揮していたはずだ。

確かにアビリティ熟練度を見る限り、L v. 1 の中でなら上位に食い込みそうだし、当然ながらランクの差を二つも埋められる程ではない。

『穴』が二つある。そのせいだろう」

遺体を仰向けにすると、先ほど見た『穴』の少し下に同じものがあつた。

「これ一つでL v. 1分だと？」

「どうやらそういう換算になりそうだな」

まったく、性質の悪い冗談だ。

この『穴』を穿つ魔法——いや、呪詛カーズだろうか？——の行使にどれだけの力が必要かは定かではないが、効果はあまりに破格だ。しかも、クオンの説明と目の前の遺体を考えれば、ほぼ間違いなく永続する。

後の事さえ考えなければ、恐ろしく魅力的だった。

詳しく知らなければ、私自身も手を伸ばしていたかもしれない——と、思う程度には。

「こんなものの存在が知れ渡れば、被害者は一人二人では済まないだろうな」

思わず呻き——自分の言葉にゾツとした。

あるいは、もう氾濫しているのだろうか。

オラリオオの中で——あるいは、私達のホームの中でも、人知れず。

「しかし、これは……主神との繋がりが絶たれても、「ステイタス」が効果を發揮している、ということなのか？」

悪寒を振り払い、努めて事務的に疑問を口にする。

それはあり得ない。

『神の恩恵』を上回る何か。

そんなものが存在するとなれば、それはこの『神時代』——人と神の関係が根底から覆される事を意味する。

「さてな。こいつの名前を控えて、ギルドで照会できれば分かるかも知れないが……」

こういう時だけは、常と変わらないクオンの口調が頼もしい。

おかげで、私も冷静さを保っていられる。

「彼がいつから彷徨っていたかにもよるか」

幸い、名前に関しては解読できる——が、何しろ冒険者は入れ替わりが激しい。

現役の名簿ならまだしも、行方不明者の名簿などそう長い事保管している訳もない。

流石に破棄されてはいないだろうが……資料庫の奥深くに仕舞われ、忘れ去られているとしても何ら不思議ではない。そうなれば、照会するのも大仕事となる。

「さて、種明かしはこんなところだな」

遺体を再び経帷子で包み直し、祈りを捧げる仕草をしてからクオンは立ち上がった。
「種明かしと言われてもな……」

いや、都市伝説の一つである『彷徨う死体』の真偽を——それどころか、原因にすら触れられたのは大きいが。

「ところで、お前はこれからどうするつもりだ？」

「一泊して地上に戻る。無視してダンジョンにこもっていると、焦れたアン・デールが何を仕掛けてくるか分からないからな」

「大丈夫なのか？」

地上に出れば、あのアン・デールの狙い通り、『殺生石』とやらを完成させようとする何者かと敵対する事になるはずだ。

「ああ。どうやら今回の敵はお前達ではなさそうだからな」

もつとも、お前達が余計な欲を出さなければの話だが——と、クオン。

(生贄を捧げてでも欲しい代物か)

それが何かは分からないが……私達が求めるなら、やはり敵になるのだろう。

ならば、返事は決まっていた。

「分かっている。『殺生石』とやらについては、私の胸の中にしまっておこう」

「私も、誰にも言わない」

ロキやフィンもそこまで悪趣味ではないはずだが、それをクオンに信じさせるのは少々厄介だ。

……いや、そもそも私やアイズがどこまで信用されているかも定かではないが、それを気にしても始まらない。

「そうしておけ。そうすれば、アン・デイルも予定を変えたりはしないだろう」

「あの男は、私達に何をさせようとしている?」

「さあな。それが分かっていたいれば……いや、無理か。分かったところでどうせ選択肢がない」

確かにあの男はそういう手合いだ。

地上に戻れば、クオンは否応なしにどこかの派閥と敵対する事になる。少なくとも、生贄とされる誰かを見捨てない限りは。

選択肢がないというのはそういう事だ。

(もつとも、この場合どちらが不運かは分からないがな)

四年前の経験から言わせてもらうなら敵対させられる派閥の方が不運だろうか……しかし、生贄などという悪趣味な真似をしなければ良かっただけの話でもある。

(しかし、生贄だど?)

相手は闇派閥イヴァイルスの残党だろうか。

今もオラリオに潜伏しているという話は耳にしているが——
「じゃあな」

つらつらと考え込んでいる隙に、クオンも遺体安置所から出て行くこうとする。

「どこに泊まるつもりなんだ？」

「この前の宿だ。安くなつていと言っただろう？」

「それは聞いたが……」

「平気なの？」

「今さら死人の一人二人気にしても仕方ないしな」

まあ、この男はそういう奴だった。

遺体安置所から出て、アイズが三七階層で得た、とあるドロップアイテムをボールスに売りに行く頃には、リヴィラには『夜』が訪れていた。

「クオン」

「何だ？」

程よく人目が途絶えたところで、クオンに声をかける。

「お前は……お前達は何者だ？ 一体どこから来た？」

「『火の時代』の亡霊だよ。俺もアン・デイルも。因果に挑み、敗れた敗残者だ」

「何……？」

「亡者が支配する街を、亡霊が恨みつらみを抱いて彷徨うのは別におかしな事ではないだろう？」

それだけ言うと、クオンはあっさりと背を向けて立ち去って行った。

(さて……)

それから私達は少々迷ったが、クオンが泊まる『ヴァリーの宿』への宿泊を決めた。どのみち一泊するだけなので、他の宿でも良かったが、あの男から少しでも目を離すのは躊躇われたためだ。

「それじゃ、ごゆっくり」

よほど貧窮しているのか、店主の獣人は簡素ながらも食事と酒——はこちらが断つたので、代わりに赤漿果ゴッドベリーが用意された——すらも振舞ってくれた。驚くべきことに無料で。

いくらかチップを置いていくべきか。そんな事を思いつつ、それを夜食としてから。

(『火の時代』だと……?)

カップに注いだ赤漿果ゴッドベリーの果肉を飲みながら、胸中で呟く。

(確か、どこかで……)

聞いた覚えがある。だが、一体どこだったか。

(城ではないな……)

王族ハイエルフの教養として、歴史についても一通り学んでいる。

私が言うのもなんだが、エルフの歴史書——特に自らの歴史に関する物は一流だ。理由はごく単純だ。

何しろ、他の種族にとつては大昔の記録でも、長命なエルフにすれば古老達が語る昔話でしかない。実際、大きな歴史の流れ以外にも、当時の流行り歌や、芸能、演劇、事件、事故、災害、噂話など、事細かに記録されている。

とはいえ。

エルフの性とも言うべきか。他種族の歴史に関しては、そこまでの精度でないのも事実だ。

むしろ、種族間の交流に乏しかった頃の歴史書は多くの誇張や偏見が混じっている。言い訳をさせてもらうなら、他の種族もそれは同様のはずだ。……もつとも、他種族より顕著かもしれないが。

閑話休題。

時代が変わり、他種族との交流が盛んとなった昨今、王族として他種族の歴史にも精通している事を求められはしたが、元となる歴史書がそれでは流石に限度があった。

もつとも、その半端さこそが外への興味を掻き立て、出奔に繋がる要因の一つになつたとも言えるが、それはさておき。

どの種族のどんな国であれ、偏見に左右されない普遍的な出来事——例えばいつ興りいつ滅亡したかの記録、その大まかな流れに關して言えば、文句なく正確だ。

しかし、知りうる限りの知識の中にドラングレイグと言う国はなかったはずだ。

（そもそも、『火の時代』なるものは、教本や数多の資料を照らし合わせて学んだ知識ではないな）

それなら、引つ掛かりを覚える程度のはずがなかった。

「あの、リヴェリア……」

そわそわとした様子で、アイズが声をかけてくる。

あれこれと新しい話は聞けたが、結局あの時の怒りの理由は分からずじまいだ。

いや、そういうえば恨みつらみがどうこう言っていたか。しかし、それとて詳細は分からない。

「おそらく、価値観に違いがあるのだろう」

しばらく考えてから、そう結論した。

「ある意味、一番厄介な理由だな。残念だが、今すぐどうにかする事は出来ない」

告げると、アイズは肩を落とす。

価値観の違い。それは、あながち間違っているとは思えない。

おそらく、私達は根底から価値観を共有していない。

苛烈なまでの『神嫌い』も、そこに端を発しているはずだ。

(まったく、面倒な……)

これが凡百の冒険者程度なら放っておくところだが、あいつが相手ではそうも言っていられない。

何しろクオンは私達〔ロキ・ファミリア〕との全面抗争を厭わない数少ない存在だ。

そして、それが可能な戦力でもある。

何より、

(奴と対峙する事になれば、おそらく私達は負ける)

そう。それもまた価値観の違いと言えよう。

どれほどの大派閥あつても、たった一撃で戦闘不能に追いやる禁断の方法。

それを、オラリオで——いや、世界であいつだけは一切躊躇わないのだから。

もし本当にその気にさせてしまえば、確実に奴はそこを狙ってくる。

どんな手段も厭わずに、だ。

そうなれば、おそらく私達では守り切れない。

あのクオンが、常人と変わらないロキを手段を問わず殺しに来るのだ。

ラウル達を守りながら、『深層』を進むより難度が高いのは容易に想像がつく。

そして、あいつがLv. 0である以上、逆転の一手となる主神送還も通じない。

そもそも主神がいないのだから当然だ。

（あいつは少なくとも「フレイヤ・ファミリア」と同等の警戒が必要な相手だからな）
その逆鱗を把握しておかなければ、本当に「ファミリア」の命運を左右しかねない。
まったく、つくづく理不尽な相手と言えよう。

「当面は『火の時代』とやらについて調べるしかないか」
こうなると城の書庫が恋しい。

とはいえ、流石に里帰りする訳にもいかないが……。

「『火の時代』がどうかしたの？」

嘆息と共に呟くと、アイズが首を傾げた。

「知っているのか？」

「えっと、知っているというか……」

少しだけ困ったような顔をしてから、アイズは言った。

「テイオナが読んでた凄く古い英雄譚に、確か書いてあったはず……」

「それはテイオナの私物か？」

「ううん。ホームの図書館にあるよ」

「どうやら、糸口は思わぬところにあつたらしい。」

翌朝——と言っても、時計を見る限り地上ではもうじき日が沈む頃だが——クオンと共に、地上に向かう。

「ほー。あの骸骨巨人をわざわざ一人で仕留めたのか。物好きだな」

ひと眠りして、機嫌が直ったのかクオンはいつもと変わらぬ様子だった。

「お前も戦った事があるのか？」

「ああ。俺は基本的に単独行動だからな」

取り巻きどもへの対応と、剣を抜く前にどれだけダメージを与えられるかで難易度がだいぶ変わりそうだ——などと、あっさり言つてアイズを落ち込ませた辺り、あるいはきつちり根に持っている可能性もありそうだが。

(もしや、あの時バロールがいなかったのはこいつの仕業か?)

遠征時の事を思い出し、小さく嘆息する。

いや、あのオツタルと互角に渡り合える以上、バロールを単独で討伐できても不思議はないが。

「あまり焚きつけないでくれ。見ているこちらは気が気ではなかったんだ」

「保護者は大変だな」

いつもの軽口に嘆息すればいいのか安堵すればいいのか。

そうこうしているうちに、五階層に到着していた。

ここまでくれば、もはやモンスターも脅威とは言い難い。勘のいいモンスターに至っては、向こうから逃げ出すほどだ。

もつとも、油断すればあっさり足元をすくわれるのがダンジョンである。加えて言えば、つい先日その『勘のいいモンスター』達に間接的とは言えかなり『痛い目』に合わされている。

決して油断はできないが――

「ん？」

そこで、クオンが小さな声を上げた。

視線の先には人影が倒れている。

「モンスターにやられたか？」

その割には血の匂いはしないが。

ともあれ、その人影に近づくと――

「ベルじゃないか」

クオンが小さく驚きの声を上げた。

「ダンジョンの中で大の字になって寝れるとは、ずいぶんと豪気になったが……しかし、その豪気さは少し心配だな」

「馬鹿な事を言っている場合か」

相変わらず妙なところで暢気なクオンを押しつけ、傍らに膝をつく。

「外傷もなく、解毒の必要もなし。典型的な精神疲弊マインドダウンだな」

見た限りまだ未熟な下級冒険者だ。後先考えずに魔法を使ったのだろう。

こうしてモンスターに襲われる前に発見できた事と、数日に渡り寝込むほど重篤なものでななさそうなのがせめてもの幸いか。

「この子……」

私を挟んでクオンと反対側から少年を覗き込んだアイズが驚いたように言った。

「知っているのか？」

「ううん、直接話した事はないけど。この前のミノタウロスの時の……」

先ほど自戒した『勘のいいモンスター』達との一件か。

と、なると――

「……なるほど、あの馬鹿者が誹った少年か」

もつとも、当人もその直後にいくつかの意味で手酷くやられたが。

……そこまで含めて自業自得ではあるのだが、派閥としてもだいぶ『痛い目』に合わされている。

「リヴェリア。クオンさん。私、償いがしたい」

奇妙な縁を持つ少年との再会に、ついため息を吐いていると、アイズは言った。
「償い?」

「図らずもクオンと声が重なった。」

「ミノタウロスの時、怖がらせちゃったから。それに、酒場でも」

その瞬間、クオンと視線を交わした。

（私に任せておけ）

（ああ。任せた）

アイコンタクトは無事に成立する。

さつそく、アイズに耳打ちした。

「本当に、そんなことでいいの?」

「ああ。それで充分だ」

少しばかり困惑した様子のアイズに頷く。

「では、私たちは先に戻ってしよう。お前なら一人でも問題ないだろう?」

「うん。大丈夫」

この階層にいるモンスターがこの子の脅威となる事はあり得ない。

例え完全に意識を失った、無防備極まる少年を抱えていたとしても、だ。

「しかし、まさかアイズにあんな相談をされるとはな」

少し離れたところで、つい声に出して呟いていた。

長年アイズを見てきた身としては、感慨深いものがある。

しかし、それはそうと――

「ところで、彼は本当にアイズを怖がっているのか？」

そもそのきつかけを考えれば無理もないとは思うが。

そこに加えて、あの馬鹿者がわざわざ追い打ちをかけてもいる。

「まさか。あれは照れてるだけだよ。美人だからな、お前の愛娘は」

しかし、その不安をクオンは一笑に付した。

「なるほど、年相応ということか」

ならず者揃いの冒険者になるには純情すぎる気もするが。

(そういう可愛げがある者はいないな)

しいて言えば、ラウルか。

魔石の代金を着服した際、ついに彼も冒険者に染まったかと感慨深いやら哀しいやら複雑な気分を抱いたのを思い出した。……いや、実際には色欲に目が眩んだだけだったようだが。

まあ、それも含めて冒険者らしいと言えば冒険者らしいか。

「意外だな。愛娘に悪い虫がついたと知って慌てるかと思つたのに。というか、今さら

言うのもなんだが、普通の男ならまず間違はなく勘違いするぞ、あれ」
意外と悪女だな、お前——と、笑うクオンを小さく蹴りつけておく。

(まあ、異性に膝枕されるなどすればそういう可能性もあるか)

しかし、今回は謝罪という大きな目的がある。

加えて、あの二人には他派閥の団員という大きな壁があるのも事実だ。

とはいえ、今はそういう諸々は置いておくとして。

「……むしろ、未だにそういう噂の一つも聞こえてこない事を不安に思っていたくらいだがな」

少々おかしな形だが、あの子が他の誰かを気に掛けるといっなのはいい傾向だ。

確かにあの少年がどういう人物かよく知らない以上、不安もあるが……まあ、現時点ではアイズの目利きに期待しておこう。

(アイズに男の目利きか)

いかん。急に不安になってきた。

しかもこの場合、アイズ自身を心配すればいいのか、それともあの子の『判定』に晒されるあの少年を心配すればいいのか判断がつかないのが、さらに悲惨だ。

他所の派閥の構成員という大問題も、この不安に比べれば取るに足らないもののような気がしてくるが、さて——

(駆け出し故の未熟さと言えばそれまでだが——)

ダンジョンの中で精神疲弊マインド・ダウンを起こすというのは、魔法を覚えたばかりの駆け出し冒険者ありがちだ。迂闊なのは確かだが、それだけで愚かと断ずるのも流石に傲慢か。

人格という意味では……この男が関わっている時点で若干心配だが、言葉を交わした事がない今の時点で決めつけるのは早計だ。

資格——下品な言い方になるが、腕つぶしについては……今後に期待といったところか。あの少年がいつ冒険者となったかは定かではないが、クオンと知り合いとなればおそらく三年以内。

そんな短い間に単独ソロで五階層に魔法の試し打ちに来れるというなら、なかなかの成長速度と言えよう。

加えてLv. 1で魔法が発現しているとすれば、稀な素質の持ち主とも言える。

いや。本人と全く面識がない今、あれこれと考えても意味がないのは確かか。

実際、人格や品性についてはまるで判ずる事ができないのだから——

「……いいけど。お前、人の心配している余裕が——」

「何か言ったか？」

つらつらと思ひ浮かべていた事を追いやり、軽く咳払いする。

無論、詠唱の下準備だ。そして、しっかりと杖を構える。

「い、いや。別に何か最近母親を通り越して未亡人っぽいオーラが出はじめているとか
そういう事を言いたい訳では——」

ゴキーン!

「誰が未亡人だ! 言っておくがまだ私には娘はおるか伴侶もない!」
詠唱などという面倒な事はしていられなかった。

「……確かにお前よりもお前の周りにいる野郎どもを心配すべきだったな」
杖の一撃で床に沈んでいたクオンが立ち上がりながら呻く。

「何?」

また馬鹿な事を言ったなら、今度こそ魔法をお見舞いしよう。

固く心に誓いながらも、短く問いかけた。

「お前みたいな美人が傍にいながら、噂の一つも立てないととなると、やっぱり男どもも全員揃って衆道趣味なのかと……」

「……………」

馬鹿な事を言い出したのは間違いない。しかし、詠唱すべきかどうかかなり迷った。

今そういった反応を返すと肯定と取られる気がしてならないのだ。

ここで判断を誤れば【ロキ・ファミリア】の沽券に関わってくる。

「そんなわけがあるか」

その一念の元、どうか自制した。

いや、『やつぱり』などと言われている辺り、すでに手遅れなのかもしれないが。しかし、それはおそらく全てロキのせいだ。

女性の団員が多いのはロキの趣味だというのはあまりに有名すぎる。

さらに言えば――

(……。いや、気にすることでもないだろうが)

否定した途端、今度は私自身の沽券に関わってきた気がしてならない。

得体の知れないその不安に突き動かされ、言葉を重ねていた。

「フィンと同族の女性にしか興味がない。ガレスは酒と戦場があれば満足という典型的なドワーフの戦士だ。そういう関係にはなりようがない」

少々端的すぎる説明だが、背に腹はかえられない。

そもそも、これほど長い付き合いになるなどは、出会ったばかりの頃――いや、それからある程度時間がたつても、夢想だにしていなかった。

腐れ縁。おそらく、私達の関係を一言で言い表すならそれが一番正しい。

「……そこで他の若い連中を上げない辺りが母親たるゆえ――」

「【吹雪け、三度の厳冬――我が名はアールヴ】！」

もはや言葉は不要だ。

「ちよつと待て！ 何で前半丸々省略して——」

「【ウイン・フィンブルヴェトル】！」

何だか魔導士としてあるまじき所業をやってしまった気がするが——そんな細かい事は気にせず、時さえも凍てつかせる無慈悲な雪波が吹き荒れた。

「殺す気か？」

それからしばらくして。

盛大にくしゃみを一つしてから、クオンが恨みがましい視線を向けてくる。

「むしろ、何故生きている？」

「いや、そんな哲学的な事を訊かれても」

「そういう意味ではない」

いや、これ以上はやめよう。

再び不毛なやり取りに巻き込まれかねない。

切実な思いで、自制を重ねる。

「まったく」

この男と一緒にでは感慨に浸る暇もないらしい。

「ところで、リヴェリア。お前は、亡者……『アンデッド』を知っていたのか？」

そして、油断もできはしない。

冗談の延長で、冗談にならない話題を持ち出してくる。

「ああ。二年前に一度遭遇した事がある。噂なら、もう少し前から聞いていたがな」

およそ六年前——『二七階層の悪夢』と前後して生じた『噂』だ。

あれだけの惨劇が起これば、そんな噂が生まれるのも無理はない——と、当時の私は考えていたし、今も多くの冒険者がそう考えているはずだ。

「よく無事だったな？」

「場所が良かったとしか言いようがないな」

「うん？」

「二六階層だったんだ。だから、『グレート・フォールの巨蒼の滝』に落とせた」

「それは賢明な判断だな」

「苦労はしたがな。フィンとガレスがいなければ少々厄介だった」

「そうだろうな。あれはこの『時代』の人間とは相性が悪い」

クオンの言う『時代』とは一体何なのだろう。

神々の降臨によつて『古代』が終わり『神時代』が始まった。それは、それ前後で区別できる程に大きな歴史の分岐点だ。

時代とはそういった大きな転換を迎えた際に終わり、同時に生み出される。

(なるほど、価値観の違いか)

時代の変化とは価値観の変化だとも言えよう。そして、その変化の中には断絶も含まれる。

その断絶が、私達とクオンの間に横たわっているとするとするならば……。

(この男の力も、魔法も、すべては断絶された過去の時代のものなのか?)

しかし、そんな事があり得るのか。

神々が降臨する以前、『古代』とは常にモンスターの脅威に晒され続けた時代だ。

(そんな時代に『神の恩恵』すら上回れるような力が廃れる理由があるとは……)

その結論に、背筋が泡立った。

それ以上考えてはいけない。その自制を振り切つて、胸中で呟いていた。

(この力が残っていれば、『神時代』は始まっていなかったかもしれない)

少なくとも、今とは違う形になっていたはずだ。

その神と眷属。互いに利用しあう、今の形にはなり得ない。

何故なら、『神の恩恵』などなくとも、人は己の力だけで生きていけるのだから――

「――ッ！」

それは己の不敬に対するものか。

それとも、純粹な恐れか。しかし、だとするならば一体何に対する恐れだ?

知らぬ間に口元を手で覆っていると、クオンが呟いた。

「これはあくまで独り言だ」

聞き流しても構わない。そういう事だ。

しかし、この男がそう言った時に限って重要な内容だから始末に負えない。

「遠い昔。おそらくは人が知りうる最古の時代、世界はまだ分かれず、霧に覆われ、灰色の岩と大樹ばかりがあつた」

それは、『古代』に語られていたという『神話』なのだろうか。

神が天界にあつた頃、自らの起源を、英雄の導き手である精霊を遣わした者の姿を、世界の始まりを求めた者達が遺した物語。

我々は何者か。どこからきて、どこへ行くのか——それを追い求めた者達が綴つた、今はもう廃れてしまった物語。

「その世界に君臨していたのは朽ちぬ古竜だった。彼らこそが世界の王者であり、唯一絶対の存在でもあつた」

廃れた理由は、神の降臨だけが理由ではない。

禁断の疑問を誘発するからだ。

すなわち、神とは何か。彼らは一体どこから来たのか。

「分かれたていないが故に不変である世界に、滅びを知らぬ古竜。終わらないはずの時代、変化などあるはずもないその時代に、ある時、火が熾つた」

神のいない時代などありえず、あり得るとするなら、そこに世界があつてはならない。人も世界も神が生み出したものである。故に、私達は神の『子供』達なのだ。

私達が等しく『神の恩恵』を賜れるのも、全てはそのためである。

「はじめの火。あるいは『最初の火』。その火と共に、世界に差異がもたらされた。暖かさと、冷たさ。生と死。そして、光と闇」

だとするなら、クオンの語るこの『物語』は何か。

単なる戯言だと一笑に付すのは簡単だが――

「そして、その闇から生まれた幾匹かが、火に惹かれ、その中から大いなる力の源を見出した」

大いなる力。あるいは、それこそがクオンの力の源なのではないか。

「最初の死者、ニト。イザリスの魔女と、混沌の娘たち。太陽の光の王グヴェインと、彼の騎士達。そして、誰も知らぬ小人」

突如姿を見せた未知を前に、畏怖に似た予感が喉を締め上げる。

「グヴェインやニト、イザリスたちはそれを『王のソウル』と呼んだ。それは彼らに王たる力を与えたからだ。そして、彼らはその力を以つて古童達に戦いを挑んでいく」

あるいは、これは最古の英雄譚なのだろうか。

世界の覇者である怪物の王に挑む、最古の英雄たち。

「グヴェインの雷が岩のウロコを貫き、魔女の炎は嵐となり、死の瘴気がニトによつて解き放たれた。そして、ウロコのない白竜シースの裏切りにより、ついに古竜は敗れた」

英雄譚。それは間違いではない。そして、これはやはり『神話』なのだろう。

「これが『火の時代』の始まり。神々が生まれた瞬間だ」

神々の始まりを謡う禁断の『神話』。

ああ、そうだ。神々が闇より生まれたなど、一体誰が口にできるのか。

「だがな」

しかし、クオンが語る禁忌は、その程度のものではなかった。

「これは俺達人間の始まりを伝えるものでもある」

「……………」

詳細を語られていない存在は、確かにいる。

そして、クオンは確かに言った。これは『人が知りうる最古の時代』だと。

しかし、それがもしも真実だとするなら――

「そして、火とは陰るものだ。『薪』がなければ……いや、あつたとしても、いずれは消える」

私が聞いているこれは、『神時代』を根幹から破綻させる猛毒である。

これ以上は考えてはならない。

咄嗟に結論を拒絶した私をよそに、クオンはさらに言葉を重ねた。

薪——それもアン・デールが口にした言葉だった。

そして、

「火が消えた時。それを力の源としていた神々はどうなるんだろうな？」

おそらく、クオンにとって、『火の時代』とはすでに終わったものなのだろう。

……

それから先は互いに沈黙したまま、ついに地上に到達した。

天上に輝くのは常と変わらぬ月と星。

その微かな輝きは、知らず強張っていた心をほぐしてくれた。

「お前といるのはつくづく心臓に悪い」

だからこそ、ついそんな不満が言葉となつて零れ落ちる。

「おいおい、冒険者がそんな肝の細い事でどうするんだ？」

むしろ、冒険者だからこそ心臓に悪いのだが——と、毒づきかけてやめた。

とてもではないが、信じがたい話だった。

何より厄介なのは、他の誰かに相談できる内容ではないという事だ。

(ただの独り言、か)

そうだと信じて忘れ去るのも、選択肢の一つだ。

そうすべきだと、理性は囁く。

わざわざ異端となる必要はない。得体の知れない男が口にした妄言だとしておけば、それで充分だ。充分だが——

(これも冒険者の性、か……)

その先にあるはずの『未知』に惹かれている自分を自覚していた。

「じゃあな」

「ああ。リヴィラの遺体については、明日にでもギルドに報告しておく」

あれから『アンデッド』は息を吹き返すことはなかった。

無論、そうでもなければクオンとて遺体安置所モルグに置いておこうとは思わなかつただろう。

(となると——)

クオンは本当に『殺した』のだろう。

あるいは、それこそがあの冒険者にとつても最期の救いとなつたのかもしれない。

「そうしてやってくれ」

すでに種明かしが済んでいるからなのか、その手続きを私達が行う——つまり、あの冒険者に関する情報を私達が得る事に、クオンは拘泥しなかつた。

あるいは、この男なりの親切心だろうか。アイズが強さに拘っている事は、クオンと

てよく知っているのだから。

(面倒ごとが増えるのを嫌っているだけかもな)

本心は何であれ、こちらにとっても有益な情報だ。

これで、アイズに知らせずに済ませてくれたなら何一つ文句はなかったのだが。

(いや、あれを見てなお欲するとは思いたくないがな)

しかし、あの子には今もそういう危うさがある。

こうしてクオンが情報を流してよこす程度には。

「ああ、まったく」

せめて、アイズの結果報告を楽しみにさせてもらおうとしよう。

あの少年に関しては、悪い方向には転ぶまい。そう楽観視する事に決めた。

「まさか逃げられたりはしないだろう」

そう呟いて、私もホームに向かって歩き始めた。

4

「あらあら。急にどうしちゃったのかしら？」

アレン達がクオンを襲撃してから——そして、手ひどく返り討ちにあつてから一週間。

今夜も届いた『速報』に、フレイヤ様が首を傾げる。

「ずいぶんと乱暴だけど、彼らしくないわね」

「はっ」

今宵もまた、「フレイヤ・ファミリア」の同胞がクオンらしき何者かに襲われ、瀕死の重傷を負わされた。

今さら言うまでもない事だが、俺達とあの男の関係は控えめに言つて最悪だ。

その不満が爆発した結果が、アレン達の独断行動と言えるほどに。

それについては団長としての不徳を恥じるばかりだが……。

(ずいぶんと回りくどい事をする)

理由は何であれこちらから仕掛けたアレン達ならまだしも、ただ街を歩いていたら——しかもまだ入団して日が浅い——団員すら襲うとは。

それに、その団員にすらとどめを刺さないというのも気になる。

実際、アレン達を除けば傷はそこまで深くはない。すでに退院している者もいる程だ。

ただ襲うだけ。それは、どうにもあの男らしからぬ行動だった。

(アレンが意識を取り戻せば、もう少し詳しく分かるのだが……)

残念ながら、L.V. 6の身体にとつても瀕死の傷を負わされている。

ガリバー兄弟も同じだ。今も意識は朦朧としていて、満足に情報を得られない。しかし、

「彼がその気になったら、迷わずここに訪ねてくると思っていたのだけれど」

そうだ。あの男ならそうしていて然るべきだ。

「それとも、流石に過大評価だったのかしら？」

「いえ。あの男なら来ます」

バベルの最上階にある、フレイヤ様の居室。

あるいは、本拠地である『戦いの野』の最奥。

どちらにフレイヤ様がおられても、結果は変わらない。

あの男なら、来る。

「ずいぶんと彼の事を分かっているのね？ それとも、期待しているのかしら？」

「お戯れを。貴女に危険が及ぶ可能性を望むはずありません」

一点の曇りもない本心だ。が、果たしてフレイヤ様の目にはどう映っているのか。

それが、少しかけ気になった。

(もつとも、今の俺があつた男を降せるかは分からんがな)

意図せず力が満ちていく身体を宥めるように中で呟いた。

先日の一戦。

致命的に勝敗を左右したあのクロスボウの一撃がなかったとして、果たして俺は勝ち抜かれたか。その疑問の答えは、今も保留にしていた。

あるいは、それこそが答えなのだろう。

(つまらぬ意地だ)

こんな様では、再戦など望めるはずもない。まして、フレイヤ様のお命を預かった状態で挑むなど、他の誰が許したとしても俺自身が許せない。

(もつとも、本当にあの男の仕業なら是非もない事だがな)

何であれ、敵は待ってくれない。それは当然の事だ。

もし仕掛けてくるなら、その時は武人の意地にかけて全霊で仕留めるのみ。

迷いなど介入する余地はどこにもありはしない。

「でも、そうなると私達に悪戯を仕掛けているのは、一体誰なのかしら?」

「団員達に調べさせています。今しばらくお待ちください」

もつとも、元よりクオンは神出鬼没だ。

闇雲にオラリオを探し回っても、成果はあるまい。

「ええ。……じゃあ、私はそろそろ休むわ」

「はい。ここは私が死守いたします。どうぞ心安らかに」

「フフツ、頼りにしているわ。オツタル」

微笑みを一つ残して、フレイヤ様は寢室に向かわれた。

それを見送ってから、改めて気を引き締めなおす。

(やはり、ギルドか「ガネーシャ・ファミリア」を直接揺さぶるしかないか?)

このオラリオでクオンと真つ当な繋がりを持つているのは、主にその二カ所だ。

無論、普段であれば「ガネーシャ・ファミリア」が派閥抗争を仕掛けてくるなど考え辛い。

だが、今は少々時が悪かった。

今ならあり得るかもしれない——その可能性はこちらにとつても火種となる。下手をすれば、他の団員が先走つて彼らに抗争を仕掛ける事にもなりかねない。

無論、抗争になったところで——クオンの介入さえなければ——まず負けはありえない。

しかし、片手間に倒せると思う程には傲慢にはなれない。

もし、この襲撃者が「ガネーシャ・ファミリア」と無関係であれば、致命的な隙を晒す事になる。

(そして、勝てばよいという話でもないな)

仮に「ガネーシャ・ファミリア」と派閥抗争が起こり、それを勝ち抜けたとして。

その後に残るオラリオの治安維持をどうするか、という問題に対する回答は持ち合わ

せていなかった。

何しろ、抱える上級冒険者の数で言えば、「ガネーシャ・ファミリア」がオラリオ最大なのだ。

その派閥が壊滅、ないし失墜したとして、その『日常業務』を丸ごと引き受けるのは、どう考えても現実的ではない。

代案がない状態であの派閥を壊滅させては、最悪『暗黒期』に逆戻りだ。

オラリオ最大派閥の団長として、流石にそれは許容できない。

(それを逆手にとって、という神ではないがな)

少なくとも俺自身は、本当に「ガネーシャ・ファミリア」が裏で糸を引いているとは思っていない。

団員はともかく、主神ガネーシャはそういう神格ではない。そして、団員の暴走をいづまでも許す神でもなかった。無論、団長の「象神の杖」アングレーシャも同様だ。

(明日にでも、直接訪ねてみるべきか)

今までの襲撃はすべて日没後。

ならば日中なら問題あるまい——などと考えながら、夜の闇に包まれたオラリオを大窓から見下ろす。

(む………?)

と、Lv. 7の視力がとある人影を認めた。

黒衣を着込んだ男。【イレギュラー正体不明】クオン。

その男は、たった今バベルから出てきた様子だった。

さらに言えば――

【ナイン・ヘル九魔姫】？

傍らに居るのは、【ロキ・ファミア】の副団長だった。

それ自体は、そこまで不思議ではない。

俺達程ではないにしても、クオンとの関係が悪いあの派閥において、【ナイン・ヘル九魔姫】ともう

一人の冒険者だけは例外だった。

【ロキ・ファミア】と組んだか？

ちらりとそんな可能性が浮かびはしたが……すぐに首を振って否定する。

奴らにあの男を抱き込めるだけの度量があるとは思えない。

その籠絡する手段も、だ。

……いや、【ナイン・ヘル九魔姫】を『対価』にすれば可能性の一つもあるかも知れないが――

(そういう様子でもないな)

武骨者という自覚はあるが、俺とて木の股から生まれてきた訳ではない。

そういう機微がまるで分らない訳ではなかった。

そして、あの二人は遠目にもそういう機微を発している様子はない。流石に邪推しすぎだ。それに、もはやそういう問題ではなくなった。

(たつた今、ダンジョンから出てきただど?)

ならば、つい先ほど届いた襲撃の報告は一体どういう事なのか。

(やはり、あの男ではないな)

いや、どうという事もない。

アレン達以外を襲撃した者はあの男ではない——ただそれだけの話だ。

その結論は何の驚きも宿さないまま胸に収まった。

(だが、そうなるか……)

気になるのは、アレンが讒言のように呟く人名のようなものだが……

(確か、アン・デイルと言ったか)

どういう関係にあるのか今ひとつ分らないが、おそらく無視はできない。

あのアレンが、死の淵にいてなお伝えなければならぬと判じた情報なのだから。

(少々危険だが……)

覚悟を決めて、この区画に用意していただいた簡易の執務室に向かう。

「明日の早朝に、これを届けろ」

「はっ!」

書き上げた書簡を蜜蝋で封をし、バベルに詰めている中で一番高L.V.の団員に渡す。

あの団員が使者なら、あちらへの義理立てとしては充分だ。

(あとは、奴ら次第か)

奴らから情報を得られれば、ある程度状況も見えてくる。

クオンと「ロキ・ファミア」が組んだかどうかも含めて、だ。

(長い一日になるかもしれない)

胸中で呟きながら目を伏せた。

……

「団長！ リヴェリア様!!」

朝一番で、焦りを宿した大声が響き渡った。

「何事だ?」

「さあ?」

たまたま廊下で一緒になり、そのまま食堂に向かう途中だった私とフィンが顔を見合わせていると、その声の主は足音も荒くこちらに駆け寄ってくる。

「どうしたんだい?」

駆け込んできたのは、門番を担当する団員だった。

「い、これを……」

よほど慌てていたのか、すでに若干息が上がっている。

いや、単に動揺が呼吸を乱しているだけか。

ともあれ、差し出されたのは一通の書簡だった。

「このエンブレムは、『フレイヤ・ファミリア』……」

多少ならず緊張した雰囲気を感じながら、フィンの手早くそれを開封し、目を通す。

そして、言った。

「リヴェリア、君は『フレイヤ・ファミリア』に何かしたのかい？」

「何だと？」

思わぬ言葉に面食らっていると、フィンはその書簡を差し出してくる。

『本日正午、貴公らの副団長、『九魔姫』^{ナイン・ヘル}リヴェリア・リヨス・アールヴとの面会を申し

込みたい。急な話だというのは承知しているが、こちらにとつても火急の要件である。

時間についてはある程度ならそちらの都合に合わせる。また、さほど時間は取らせない

事も約束する故、配慮を願う』

——と。堅実ながらも不思議と覇気を感じさせる書体で、簡潔な文章がしたためられ

ている。

団長であるオツタルの署名^{サイン}を見て、いかにもあの『^{おうじや}猛者』らしいと妙に納得した。

しかし、それはそうと――

「それで、心当たりはあるかい？」

「いや、さっぱりだ」

あのオツタルから面談を申し込まれる理由などまるで見当がつかない。

まして、私は仮にも「ロキ・ファミア」の副団長だ。私達が面会すると知られたただけでも、ちよつとした事件になりかねない。

「……さて、どうしたものか」

理由は皆目見当がつかないが、無下にはできない。

「リヴェリアを指名する理由は分からんけど、フレイヤントコは今ちよつと厄介な事になつとるよーやし、会うだけ会ってみたらええんちやう？」

と、そこでいつの間にか近づいてきていたロキが言った。

接近に近づかないとは、思ったより動揺していたらしい。

「厄介な事だと？」

「ああ、なるほど。そういう事か」

首を傾げる私をよそに、フィンは納得した様子で言った。

「そうか。まだリヴェリアには話してなかったね」

「自分らがダンジョンに潜っている間に、フレイヤントコの子供たちが襲撃されてて

なあ。そんな中には【女神の戦車】^{ヴァーナ・フレイヤ}や【炎金の四战士】^{ブリュン・ガル}も含まれるんよ」
「何だと?」

いや、待て。そう言えば、あのアン・デールなる魔導士も、オツタルについて触れていた。

あの時に言っていた『弱兵』というのはまさか彼らの事なのか?

(殺し損ねたとも言っていたな)

早速見え隠れし始めた『狂人』の影に嘆息しながら、問いかける。

「まさか、クオン絡みか?」

「どうだろうね。少なくとも【女神の戦車】^{ヴァーナ・フレイヤ}達を返り討ちにしたのは間違いなさそうだけ
ど」

「相変わらずマジで容赦なかったっぼいしなあ。今も入院中って聞くし」

なるほど、確かに【女神の戦車】^{ヴァーナ・フレイヤ}達に関してはあいつの仕業と見てよさそうだ。

しかし――

「私達がダンジョンに潜っている間と言ったな。それはいつの話だ?」

「いつ言うか……昨日も襲われたっぼいで」

それはおかしいのではないだろうか。

あの男は、私達と出会った時点で三日間はダンジョンに滞在していたはず。

いや、あいつなら日帰りでリヴィラと地上を往復できるだろうが……。

「ノー……。その辺りに事情がありそうだね」

「そのようだな。ならば、仕方ない。会って話してみよう」

嘆息と共に、そう告げた。

別にクオンの肩を持つ訳でもないが、誤解は解いておかねばならない。

クオン関係を差し引いても、極彩色の『魔石』や、モンスターを変質させる『宝玉』、それらと関係するらしいアイズを求める正体不明の調教師テイマと、頭痛の種には事欠かないのだ。

こんな状況でさらに「フレイア・ファミリア」と雌雄を決するような事態に陥るなど、流石にご免だった。

「よし。それなら」

頷いてから、フィンはその足で執務室に向かう。

「まあ、こんなところかな」

「妥当な条件やろな」

フィン書き上げた書簡を見て、ロキも頷く。

彼が提示した条件は以下の通りだった。

『会場は第三地区にあるとある喫茶店』

『無用な混乱を避けるため、形式は密会という形で。派閥間ではなく、あくまで個人的なものとしたい』

『仮にも男女間での密会という形になる。万が一にも不要な誤解を避けるため、こちらからは団長であるフィン・デームナも同行させて欲しい』

『上記承諾を得られるなら、面会に応じる。また、時間はそちらの都合で構わない』と、このような事が程よい社交辞令を混ぜてそこにしたためられている。

無論、二項目の前半は単なる言い訳だ。

オツタルは神フレイヤを心酔している。他の女に現を抜かすわけがない。

話の肝となるのは、単純にフィンの同席を認めろという部分だけだ。

「これを届けてもらえるかな？」

「はいー！」

執務室の入り口で待たせていた門番に、蜜蠟で封をしたそれを手渡す。

「さあて。今度は何が起こるんやろなあ……」

走り去っていく門番を見送って、ロキが呟いた。

「さてね。面倒な事にならなければいいけど」

それから、一時間と待たずして、オツタルからの返信があった。

実に簡潔に、『構わない。感謝する』と。

もちろん、時間の指定もしつかりされてはいたが。

「やあ、オツタル。待たせたかな？」

「いや、問題ない」

指定の時間に約束の喫茶店に向かうと、すでにその個室にはオツタルがいた。

「珍しいね。君がそんな恰好をしているのは」

そこに座すオツタルは、半ば身体の一部と化しているような軽鎧——と、あれを呼んでいいものかは悩ましいが——を身に着けていなかった。

見える範囲には、武器すらない。

「争いに来たわけではないからな」

この武人らしい誠意の示し方ではあった。

もつとも、その体一つ、その拳一つでも下手なモンスター以上の脅威となる。

元よりその気はないが……ここで闇討ちできるとはとても思えなかった。

「【九魔姫^{ナインヘル}】。まずは急な要望に応じてもらった事に感謝する」

私とフィンが席に着くと、オツタルはそう言った。

意図しているとは思えない。ただ座しているだけだ。

——が、それでもこの男はそこにいるだけで威圧感を放つ。

「構わない。確かに驚いたのは事実だがな」

その気配に呑まれないよう気を張り直しながら応じる。

「時間は取らせんと約束していたな。早速だが、本題に入ろう」

「ああ。それで、一体私に何の用だ。あえて副団長を指名したのだ。まさか派閥間の何かではないだろうか？」

「そうだ。あくまで、こちら側の事情だ。そして、お前達の内情に関するものではないつもりだ」

クオンと繋がりが無い限り——と、言ったところか。

もつとも、万が一私達とクオンが共謀しているなら、このやり取りそのものに意味がないのだから、当然と言えば当然だが。

【九魔姫^{ナイン・ヘル}】。昨夜、クオンと共にダンジョンから出てきたな？」

やはりそうか——と、安堵にも似た感情を覚える。

想定外の厄介事に巻き込まれる可能性は、これでだいぶ低くなったはずだ。

「ああ、そうだ。二日前に二七階層で偶然出会ってな。そのまま行動を共にしていた」
派閥としての関係性はともかく、私個人としての繋がりは今も残っている。

その辺りは、公然の秘密だ。……まあ、少々『誤解』されているのも事実だが。

(あいつがふしだらなのが全ての原因だがな)

まったく迷惑な話だった。

あいつはあいつで、お前のせいで時々エルフに絡まれるなどとぼやいていたが。

「二日前、か。それ以前の事について、何か知っているか？」

「詳しい事は知らない。だが、あいつはリヴィラの街に滞在していたと言っていたな。場所は『ヴァリーの宿』……もう耳に挟んでいるだろうが、およそ一〇日前に殺人事件があつた宿だ」

「その話なら聞いている。……それ絡みか？」

その一件に私達「ロキ・ファミリア」が介入しているのは周知の事実だ。

疑われるのは仕方ない。

「いや。ただ単にその影響で大幅に値下げされているからだ」

だが、現実はそのものだった。

実際、あいつがあのだの宿で何か調査している様子はなかった。

もつとも、別に同室にいたわけではないので、絶対にないと断言する事も出来ないが。

「ずいぶんとクオンの動向を気にしているようだけど、やはり連続襲撃事件の影響かな？」

「白々しいな【勇者】」

フィンの問いかけに、オツタルはあっさりと応じた。

「だが、礼として答えておこう。その通りだ」

「そうか。まあ、君達の団員を襲えるような度胸があるのは、確かに彼くらいだろうね」
確かに白々しい——と、思わず胸中で嘆息していた。

このオラリオで「フレイヤ・ファミリア」に——ダンジョン内での襲撃ならまだしも——わざわざ地上で真つ向から喧嘩を売るようなもの好きはあいつくらいなものだろう。

しかし、この『襲撃事件』に限ればクオンはおそらく無関係だ。

それが分からないフィンではないだろうに。

(この一件、あまりにあいつらしくない)

ここに来るまでの間に、フィンとロキからその襲撃事件について聞いている。

そのうえで結論がそれだった。

あいつが本当に「フレイヤ・ファミリア」と決着をつけようとしているなら、今頃はバベルの最上階が燃えている。あるいは『戦いの野』^{フォールクヴァング}が。

……そうでもなければ、私達もここまでクオンを警戒してはいない。

「本当にそう思うか？」

どうやら、オツタルもまた同じ結論を出しているらしい。

そう。彼もまた、クオンが犯人ではないと判断している。

そして、今はその証拠を集めているのだ。

「シー……。まあ、正直クオンらしくはないとは思っているよ」

悪戯が失敗した子供のような顔で、フィンも肩をすくめた。

お互いの認識を確認しただけなのだろうが……。それにしても回りくどい。

(だから、花嫁探しがうまくいかないんだ)

いずれ機を見てそう助言してやろうと心に決める。

「だが、少なくとも【女神の戦車】^{ヴァナ・フレイヤ}達を襲ったのは彼だろうか？」

「ああ。アレン達に関しては、ほぼ間違いない」

L v. 6が一人。L v. 5が四人のパーティを一人で叩きのめせるのは、あいつくら

いなものだ。

いや、目の前にいる【猛者】^{おうじゃ}も可能だろうが。

「何があつたのかな？」

「探りを入れる気か？」

「まあね。【炎金の四戦士】^{フエリンガール}は冒険者として大成している希少な同胞だ。^{バルウム}僕でなくとも気

になると思わないかい？」

フィン、とオツタルが小さく鼻を鳴らす。

「フィリア祭での一件が原因、と言っておこう」

フィリア祭で神フレイヤがモンスターを放ったのは、新種が暴れだす前に観客達を避難させるための緊急処置である。しかし、その後の混乱の中で神ガネーシャやギルドへの報告が上手くいかず、連携をとれなかったため、混乱を拡大させる一因にもなった——と、これがギルドが出した公式発表だ。

そして、神フレイヤと团长オツタルが神ガネーシャに正式に謝罪し、被害者達にも義援金を支払う事で両派閥の和解は成立している。

「ヴァナ・フレイヤ【女神の戦車】や【ブリレン・ガル炎金の四戦士】ともあろうものが、君や主神フレイヤの意向を無視して先走ったと?」

もし今の状態で、「フレイヤ・ファミリア」の団員がクオンを襲えば、それは単なる逆恨みにしかならない。新たに相応の理由でもない限りは。

「俺の不徳を笑いたいなら、好きにしろ。だが——」

「まさか。そんなつもりはないよ」

みなまで言わず、フィンは小さく笑った。

「別の何かが関わってる。それも、君達も知らなかった何かが。そうなんじゃないか?」
ダンジョンで出会ったアン・デイルについては、すでにフィンに報告を上げている。

無論、『暗い穴』と『アンデッド』の関係についても。

ただ、『殺生石』と『火の時代』に関してはまだだった。

特に、アイズと別れてから聞いた話は。

(あればかりは扱いに困る)

無論、私とて信じているわけではないが——しかし、そこに一片でも真実が紛れているなら、それだけでも厄介な事になりかねない。扱いは慎重であるべきだ。

「何の話だ？」

一切の動揺を見せず、オツタルは言った。

「イレギュラー【正体不明】クオン。神々ですら持て余す彼に関して、他派閥間でも情報を共有しておかないと危険なんじゃないかな？」

「共有か。ならば、まずは鏡を見る事だな」

「手厳しいね」

その態度は、あまりに平然としすぎている。

いかに【おうじゃ猛者】と言えど……いや、むしろ彼こそがクオンという存在がいかに怪物めいているのかを誰よりもよく知っているはずだ。

そして、彼ほどの冒険者が情報をないがしろにするはずもない。

と、なると——

「お前達が聞きたい名前を当ててやろう」

小さく笑みを浮かべて、オツタルは言った。

「アン・デイル。違うか？」

やはりか。すでにオツタルもあの魔導士について勘付いている。

(いや、当然か)

何しろ、【女神の戦車】ヴァナ・フレイヤ達を唆した張本人だ。

当事者達が生きている以上、情報を伝えていても何ら不思議ではない。

【九魔姫】ナイン・ヘル。最後の確認だ」

ともあれ、これで互いに手札は尽きた。

「ああ」

いや、まだこちらには『暗い穴』と『ロンドールの黒教会』なる情報があるが、そこらは私達も全容が把握できていない。現時点では手札にはなり得なかった。

オツタルが別の手札を持っている可能性はあるが、どうやらここで開示するつもりはないらしい。

ならば、腹の探り合いはここまでだ。

(いや、これを腹の探り合いとは言わないか)

オツタルは余計な事を話していないだけだ。そして、おそらく虚言を弄してもいない。

これはごく単純でまっとうなやり取りでしかなかった。

「クオンは、昨日までの五日間ダンジョンにこもっていた。そう考えていいのだな？」
最後まで目の前の武人は余計な事を話そうとはしなかった。

「ああ。少なくとも昨日と一昨日に関しては、『襲撃事件』に関わっている余裕はなかったはずだ。私の目を盗み、地上と往復する手段でも隠し持っていない限りは、だがな」
「誓えるか？」

「アールヴの名に誓おう」

「分かった。感謝する」

それで、私達の面会は終わった。

……

その日の午後、『上層』から『中層』……一八階層までの間を探索していた複数の冒険者が奇妙な光景を目撃する。

「いや、マジだって。いきなりモンスターどもが吹っ飛んだんだよ。一瞬で」

「なんか通ったんだって。証拠に魔石が残ってたしよ」

モンスターが突如として消し飛んだ。

無人の野を往くが如く、群れの中を何か駆け抜けていった。

そんな噂である。

とはいえ、そんな噂になっているのを神ならぬ彼自身が知るはずもなかったが。

……
(日没までには戻らねばならん)

【九魔姫ナイン・ヘル】との面会を終えた俺は、その足でダンジョンに向かっていた。装備については別室で控えていた団員に預けておいたので何の問題もない。

もつとも、この階層にいるモンスター如き例え素手でも後れを取るつもりはないが。

目的地は言うまでもなく、リヴィラの街。そこまで一息に全力で駆け抜ける。

行く手を阻むモンスター共は、他の冒険者と戦闘中の者も含めてまとめて薙ぎ払わせてもらった。

冒険者の倫理ルールには反するのは承知の上だ。

その詫びとして魔石は砕かずに済ませている。

……この階層にいる多くの有象無象にとつては、それこそが必要なだろう。中には例外もいるだろうが。

「うわ?!」

「きやあ?!」

途中でその例外の一人——件の白髪の少年と、そのサポーターらしき少女とすれ違
う。……もつとも、向こうは気づかなかつただろう。

傍にクオンがいなかったのは気になるが、幸運でもあった。

(流石に奴の目は誤魔化せんからな)

もつとも、あの男がいたならそこで話は終わっていたかもしれないが。

「お、おうよ。確かにクオンの野郎なら五日ばかりこの街にいたぜ」

リヴィラの街に立ち寄ったのはいつ以来だったか。

それすら定かではないものの、顔役はこちらの事を忘れてはいなかったらしい。

「確かか？」

「ああ。『ヴァリーの宿』つてとこにずっと泊つてたはずだぜ」

「そして、一昨日【九魔姫】と立ち去った？」

「おう。【剣姫】もいたがな。それと、ずいぶんと年季の入った死体を背負つてたぜ」

「死体？ 冒険者のか？」

「ああ。あんなになるまでダンジョンの中に残つてたとは驚きだぜ」

顔役の話によれば、その遺体は干からびていたという。

加えて言えば、上半身と下半身が両断されていた他は、ほぼ原形を留めていたとも。

モンスター達の巣窟であるダンジョンにあつて、それはほぼあり得ない。食い散らかされ骨すら碌に残らないのが常なのだから。

(もしかや『アンデッド』か?)

俺自身が直接対峙した事はないが、報告は耳にしていた。

その外観はまるで干からびた死体のようだったと聞いている。

噂が真実だったとして、そんなものを背負ってくる理由は分からないが――

「その遺体はどうした？」

「ついさつき、ギルドから依頼を受けた連中が連れ帰ったぜ」

一歩遅かったか――と、胸中で小さくため息を吐く。

(いや、ギルドに問い合わせれば情報を得られる可能性も皆無ではない)

噂の正体も気にはなるが、今はクオンの足取りを追うのが優先だ。

「それで、クオンは昨日【九魔姫】^{ナイン・ヘル}達と地上に向かうまで、一度も地上には戻っていないのだな？」

「ああ。つっても、別に見張ってたわけじゃねえから絶対とは言えねえがな。少なくともヴァリーが言うには日がな一日ただゴロゴロしてたそうだ」

まあ、その道具屋の店主の『お誘い』^{アマゾンネス}にはのらなかつたらしいがな――と、顔役が顎で示す。

そちらに視線を向けると、ちょうどその店主とやらが顔を出したところだった。

一般論として、そのアマゾンネスは整った顔立ちをしていると言えよう。

(あいつにも、そういう分別があつたか)

微かな驚きと共に胸中で眩く。

それともよほど吹っ掛けたのか。

若干気にはなつたが、これはそこまで重要視すべき情報なのだろうか。

(判断に困るところだな)

胸中の眩きが冗談だったのかは、自分でも判じかねた。

とはいえ、あの「九魔姫」^{ナイン・ヘル}にも手を出していない——少なくとも、そういう事になっている——ので、あの男なりに何か基準があるのかもしれない。

ともあれ、ここではこれ以上の情報は得られまい。

「邪魔したな」

加えて言えば、必要な情報は概ね出揃っていた。

(「勇者」^{ブレイバー}達が、はつたりにつっかかってくれたのは助かったな)

慣れない事もたまにはして見るものだ——と、小さく苦笑しながら、最後の結論を下した。

今回の一件、鍵となるのはクオン自身ではなくアン・デイルなる何者かだ。

5

(何だつて急に……)

馴染んだホームの中を歩きながら、声にせず毒づく。

すでに日は沈んで久しい。

本来なら稼ぎ時。ここ数日で言えば、情報収集に追いやられる時間だ。だというのに。

「おい、アイシヤ。イシユタル様が呼んでるぜ」

出かけようとした私を、同僚がそう言っって呼び止めた。

それを指示した主神様からのいきなりの呼び出し。

しかもだ。

(神室に來いだって?)

それもいくつかある私室の中でも、一際上等な——主に、飛び切り『上等』な客を招く際に使う。つまりは『外に音が漏れない』——部屋に來いときた。

幹部の一人に目されている私にしても、ほとんど縁のない部屋だ。いや、頻回に出入りしているのは専属の従僕くらいなものだろう。

「よく來たな」

主神——『美の神』イシユタルは豪華なソファではなく、天蓋付きの寝台に座り、煙管をくゆらせていた。

「そりゃ、呼ばれたからね」

もつとも、できれば來たくはなかつたが。

しかし、主神の命とあつてはそうもいかない。……特に二年前からは。

「脱ぎな」

言われるがままに、愛用の戦闘衣バトルクロスに手をかけた。

冒険者用装身具アドベンチャーギアを含めたところで、さしたる量ではない。体を覆う最後の布に手をかけ、するりと脚を抜く。

「来な」

それを見届けてから、イシユタルは寝台を軽く叩いた。

半ば反射的に恐怖にも似た感情が背筋を駆け抜けたが……やはり、逆らえるものではない。いや、逆らおうとする発想すらも許されなかつた。

言われるがままに寝台に座ると、イシユタルは身体に手を這わせてくる。

「どういうつもりだい?」

「何。たまには可愛い眷属を労ってやろうと思つてな」

そんな殊勝な性格なものか——と、毒づくより早く、体が反応する。

相手は『美の神』。しかも、この淫都の主が務まる女神だ。

同性である事など、何の障害にはなり得ない。

「ん……は……あ……っ」

淀みなく注ぎ込まれる快樂は、しかしあふれ出す事だけはない。

弾け飛ぶ半歩手前で、完全に制御されている。

「どういうっ……っもり……だい……っ？」

「何、まだ夜はこれからだ。そう急ぐことはないだろう？」

「ふざ……っけるんじゃ……あ……ないよ」

白熱する寸前の快感は、水底から見上げる遠い水面に似ていた。

水面を求めて足掻いたとして、絡みつく鎖は外せない。

「そこに手紙があるだろう？」

耳元でイシユタルが囁く。

視線だけを動かすと、ナイトテーブルに一枚の紙きれが乗っている。

「読んでみる」

その間にも愛撫はやまない。

半ば私の意識を受け付けなくなった体に鞭打って、その紙切れに手を伸ばした。

「な……に……っ？」

そこに記されていたのは、ごく短い文章だった。

『イレギュラー「正体不明」クオンについて知りたいのであれば、貴公の眷属が一人、アイシャ・ベル

カに尋ねるといい。彼女とクオンは親密な関係にある』

著名は、なかった。

ただ、筆跡からしてクオン自身や霞ではない。

(クソが……ッ！)

どこのどいつだ。

この女神にだけはそれを知られないよう、気を配っていたというのに。

「これを……どこで……っ!?」

「寝ている間に誰かが置いていったのさ。この私の神室に忍んでくるとは不敬な輩もいたものだ。しかも、紙切れだけ置いて何もせずに帰るとはな」

そりゃ一体どんな化物だ——と、思わず胸中で毒づく。

ここは『歓楽街』を牛耳る「イシユタル・ファミリア」の本拠地^{ホト}だ。

娼館として開放されている区画に他派閥の団員を連れ込むのは日常茶飯事だが、それ以外への侵入は容易ではない。

まして、主神であるイシユタルの神室へなど、腕利きの盗賊^{シーフ}でも不可能のはずだ。

「それで、どうなんだい?」

「さあ……ね……っ……っあ」

「まあいい。夜は長いからなあ」

与えられるそれは、もはや快感ではなく劇毒と化していた。

それを分かっているからこそ、イシユタルは『命令』してこない。

捕らえたネズミを齧る猫のように、体を弄び続けている。

「ほう。本当だったか」

抵抗できたのは、おそらくそう長い時間ではなかったはずだ。

自分でもいつ領いたのかは定かではない。女神の手で途切れる事のない法悦が与えられるようになったのと、どちらが先だったのか。

「あ……ああ……っ」

天上の快樂によつて真つ白に焼き尽くされた理性の中では、それすら分からなかった。
た。

ぐったりと寝台の上に身体を投げ出したまま曖昧に頷く。

「好色だと言われているくせに、ここには顔を出さないのは何故かと思つていたがそういう事だったか。お前が誑かして……いや、まさかお前が誑かされていたとはなあ」

よくよくそういう運命にあるらしいな?——と、煙管片手にイシュタルが笑う。

「麗アンテイアネイラ傑」を『返り討ち』にすると、ますます面白い」

再び、イシュタルの裸身が近づいてくる。

「傍にいて欲しいだろうか?」

「何だつて……?」

「お前の男にさ」

ああ、そうだ。これを恐れていたから、私はあいつとの繋がりを隠していたのだ。

「二年前の一件はともかく、それ以外はよくやってくれているからな。褒美をやろう」
控えめに言つて性根の悪い笑みと共に、その女神は愛撫を再開する。

天上の地獄が再び始まった。

「お前が気にかけるあの小娘とは、もうじきずっと共にいれるようになる」

「まさか、アレが……」

喘ぎながら毒づいた。

「ああ。先日な」

地獄へ堕ちろ——誰とも知らぬ外道に、呪詛の言葉を吐き捨てる。

「お前の男も、あの女神には含むものがあるのだろうか？　なら、私達は同志だ。互いに協力できよう」

それを協力とは言わない。

ああ、そもそもそれ以前に——

「心配するな。お前の男なら、たまには貸してやる」

微かに抱いた違和感が形になる前に、イシユタルが嗤う。

「クオンと渡りをつける。いいな」

そして、夜が明ける頃。

煉獄めいた快樂に焼かれ、打ち捨てられた私にその女神は命じた。

6

(さて……)

相変わらぬ狂人に人食いカバを嚇けられたり、色々あつてつい金髪小娘に八つ当たりしたり、昔懐かしい亡者と再会したり、ベルの思わぬ成長を目撃したり、相変わらぬリヴェリアはリヴェリアだという事を再確認したりしながら、地上に戻ってきた訳だが。

(平和なものだな)

盛り沢山だった帰り道から一転して、何事もないまま一日が過ぎた。

いや、別にバベルを出てすぐに乱戦になる事を期待していた訳ではないが、それなりに覚悟を決めて出てきたのだ。ここまで何事もないと、それはそれで張り合いがない。

念のため『酒夢猫亭』にも顔を出していないし、面倒事が増えないように『眼晶』もソウルの奥深く……より正しく言えば『底のない木箱』に放り込んである。

(まあ、いいか)

せつかくだ。ベル達の様子でも見に行くでしょう。

流石に直接関わるのは危険だろうが、遠目に様子を窺う程度なら問題あるまい。

久方ぶりに《放浪のマント》一式を身に着けてダンジョンに向かう。

「ヴァレンシュタイン氏！」

バベルに近づくと、見覚えのあるお嬢さんと金髪小娘がいた。

「クラネル氏は、あなたにとても感謝していました！」

驚いた事に、あの無表情がごく小さく微笑んでいる。

そして、足取りも軽くダンジョンに突貫していった。

前後関係はよく分からないものの……エイナ嬢が、あの小娘に何か依頼したらしい。

（しかもクラネルと来たか）

どうやら、ベルはベルでまた何事かに巻き込まれているようだ。

（まあ、そろそろそういう時期だしな）

いや、リルルカ関係で何かしら動きがあっただけか。

いくらあいつだって本当に毎週毎週変な騒ぎに巻き込まれているはずが――

（いや、ないよな？）

何だか、急に自信がなくなってきた。

（ま、まあ、何だ。……今回はあの子絡みだろうな）

金髪小娘を追いながら、胸中で呟く。

となると、このまま小娘を追いかけても仕方がない。

(リリルカの方を見つけるべきだな)

ベルに関して言えば、あの小娘が行くだけで充分だ。

それに、リリルカの方を見つけないければ事態が把握できない。

(ベルに直接訊くわけにもいかないからな)

直接接触できるならそれも選択肢に上がってくるが、そうもいかない。

今の場所は七階層。リリルカ単独では少々危険な領域となる。

(人目につかず、最短距離で地上を目指すなら——)

選べる通路は限られてくる。

問題は、すでに行き違いになっている可能性だが……、

(その時はその時か)

向かう先には見当がつく。

加えて言えば、あの少女が狙いそうな物はそう多くない。

例え行き違いになっても、まだ打つ手はある。

「ぎゃああああああっ!?!」

と、ちょうど向こう側から断末魔の叫びらしきものが聞こえてきた。

男の物だ。だが、ベルの声ではない。

(これはまた分かりやすい構図だ)

通路の角から覗き込むと、三人の冒険者ががけ下にいる誰かを嘲笑っていた。

その誰か——おそらくリルカだろうが——に親近感を覚えている事に嘆息しつつ、手頃な場所に『誘い頭蓋』を放っておく。

崖下にいる誰かを襲うモンスターはいくらかはこちらに流れるはずだ。

あとはベルに格好よく決めてもらおうとしよう。

(あのお人好しが女を見捨てる訳もないしな)

ベル自身がどこまで事情を把握しているかは定かではないが、それはこの際関係ない。

あいつは来る。今日まであの子と共に行動していたなら、間違いなく。

「ファイアボルトオオオオオオツ!!」

それに応じるように、背後から白兔の咆哮が響き渡った。

「よう、クソ野郎ども。景気はどうだ?」

愛用の黒衣に切り替えて、その一団に声をかける。

「ああ? 何だあテメエは?」

「おいおい、つれないな。四年前には散々遊んでやったのに」

当然の帰結でも言うべきか。その一団は「ソーマ・ファミリア」だった。

無論、顔見知りではない。いや、見かけた事はあつたかもしれないが覚えていない。ただ、先に盗み聞いたリリルカとのやり取りを考えれば、およそ間違いないまい。

「あんだと？」

どこその禿丸程ではないが——何故俺はこの手の輩とは縁が切れないのか。

……ああいや、放浪者も所詮ははぐれ者なのだから類は友を呼ぶというだけの話か。

「い、いや、待てよカヌウ。四年前つったら……」

「こいつ、『イレギュラー正体不明』なんじゃ……」

内心で嘆息していると、取り巻き共が小さく呻いた。

どうやら、全員が全員酔い潰れているわけでもなさそうだ。

「ケツ、たかが『剣闘士』風情にビビってんじやねえ！」

しかし、残念ながらリーダー格らしき獣人——シアシスローフ犬人のようだ——は、そうではな

かつたらしい。

「しかも、ただのLv. 0だろうが！」

「け、けどよ。あの『おっじや猛者』と——」

「ンなもんは八百長に決まってるだろうが！」

やれやれ。どうやら深刻にやられているらしい。

（あの男が、そんな取引に応じるものか）

もしそんな事ができるほどの交渉術を持つなら、それだけで世界を支配できそうだな。俺が化けの皮を剥がしてやる！」

俺に剥がれる『化けの皮』があるとすれば、精々が『生者の皮』くらいなものだ。確かに剥がされると面倒な事にはなるだろうが。

「それで打ち止めか？」

取り巻き二人も含めて叩きのめすまで、それほど時間はかからなかった。

無論、『化けの皮』を剥がされる事もない。

「で、テメエ……。いきなり何のつもりだ？」

今さらそれを言うのか。と、思わず笑みすらこぼれた。

「先に手を出したのは貴様らだろう？」

「ンだと……？」

「そうだな。お前たちの流儀に合わせて言えば、こうなるか」

四年前に蹴散らした何とかいう「ファミリア」の団長の言葉を真似る事にした。

「『よくもうちの若いのに手を出してくれたな。どう落とし前をつける気だ？』」

所属は違うが、同じゴロツキである事に変わりはない。

おそらく通じるはずだ。

「ま、まさかあの白い頭のガキの事か?!」

そう言えば、連中はまだオラリオにいるのだろうか。

そんな事を思っていると、酔っ払いが呻いた。

「分かつてるじゃないか」

「ま、待ってくれ！ それなら、リリルカの奴が……！」

「そうだ。やったのは、あのサポーターだ。とつくに粛清した……」

慌てふためいた取り巻き達が騒ぎ出す。しかし、粛清とは笑わせる。

「そう。そちらもだ」

気は進まないが、俺に関する『噂』を一つ活用させてもらおうとしよう。

「俺の『お気に入り』に手を出しておいて、まさか生きて帰れるとも思っているのか？」

どういう訳だか俺は方々で浮名を流していると思われている節がある。

いや、確かに霞やアイシヤの事を思えば——そして、過去には師匠達もいる——全面的に否定はできないが……それでも、完全に無節操という訳ではないつもりなのだが。

とはいえ、『お気に入り』というのはまんざら嘘でもない。

もしあの少女が正しくベルの手綱を握っていてくれるというなら実に心強い。

「な……っ!?!」

何であれ、効果は抜群だった。

薄暗い七階層にあつてなお、連中の顔が青ざめていくのが分かる。

それこそ、死人のそれに近い。

「し、知らなかった！ 知らなかったんだ……っ！」

絞り出されたその言葉を無視して、頬を掠めるように大剣を壁に突き立てる。

「まずはあの子から奪ったものを返してもらおうか？」

はつきり聞こえなかったが、貸金庫がどうか言っていた。

それに、おそらくベルと稼いだであろう魔石やドロップアイテムの類もあるはずだ。

「わ、分かった。おい、お前ら……っ！」

懐から真鍮製の鍵を取り出しながら、獣人が喚きたてた。

「あ、ああー！」

取り巻きの片方が、担いでいたリリルカ愛用の大型バックパックを放り出し、もう片方が道中で拾った——つまりはベルが倒したモンスター——魔石やドロップアイテムが入っているらしき小袋を投げ出す。それに、懐中時計も。

まったく、そんなものまで投げな。壊れたらどうする。

「か、返した。返したぞ！ だから、命だけは……っ！」

「まあ、いいだろう」

ひとまずそれらをソウルに取り込む。

あとでエイナあたりに事情を説明して預ければいいだろう。

それに、そろそろ離れないと少しばかり面倒な事になる。

「二度目はない。貴様らの飼い主にもよく伝えておけ」

「分かった！ 伝える！ 伝えておく!!」

もつとも、それが守られた試しもないのだが。

（やれやれ。やはり四年前のうちに間引いておけば良かったか……）

そうすれば、あるいはリリルカにももう少し違った展開があったかもしれない。

「い、行くぞお前ら……!」

転がるようにして、獣人どもが走っていく。

その背に告げてやった。

「ああ。だが、気をつけろよ。そろそろあの蟻共が集まってくる頃だ」

道中にも『誘い頭蓋』を転がしてある。

そろそろ程よく集まっている頃合いだ。

「ヒイ!? は、話が違うじゃねえか……ッ!」

「馬鹿を言うな。ここはダンジョンだぞ。モンスターに襲われるのは俺の責じゃない」

いくら何でもそこまで面倒は見きれなかった。

「何、心配する事はない。真面目に冒険者をやっているなら切り抜けられるはずだ」

と、言った端から中途半端に傷を負わせたらしい。

モンスターの気配が集まってくる。

「く、来るなあ!？」

「バカ! 下手に刺激すんじゃないやねえ! 余計に集まって——!」

やれやれ。あの蟻共を相手にするのなら、一撃で仕留めるのが鉄則だろうに。

さて。俺の退路がなくなる前に、お暇するとしよう。

「これに懲りたなら、次からは真つ当に冒険者をやって稼ぐんだな」

最後にそう告げてから、その場を立ち去る。

(ま、三人もいれば自力でどうにかできるだろう)

万全ではないにしても、手足が動かなくなるような傷はないはずだ。

ならば、問題ない。

冒険者として充分に経験を積んでいけば——あるいは幸運が味方をすれば——生き

残れるだろう。

背中にならず者どもの悲痛な叫びを聞きながら、俺はそう結論付けた。

そして——

「女つたらし、スケベ、女の敵いいいいいい!」

蟻共のせいで多少遠回りをする羽目になったものの、何とかリル力達がいるはずの場所まで戻る。と、同時にそんな泣き声が出迎えてくれた。

「グフツ?!」

それが俺に向けられた言葉ではないのは勿論分かっている。

しかし、それでも。

つい先ほど、彼女の名誉にも関わるハツタリをかました身にとって、その切実な言葉はこの上なく深々と突き刺さった。……鷹の眼のゴーの大矢か、竜狩りオーンスタインの槍か。そういう次元の鋭さである。

YOU DIED

——と、そんな幻聴すら聞こえてきそうになったが、何とか踏みとどまる。

「や、やるな。リリルカ……」

慄きながら、意味もなくエストを一口飲んでいた。

不死人にとって欠かせない秘宝だが……残念ながら、精神的なダメージには全く効果がない。

「やれやれ……。相変わらず末恐ろしい奴だ」

深刻極まるダメージを何とかやり過ごしてから、崖下を覗き込む。

そこには、ベルに縋り付き泣きじやくる年相応の少女の姿があった。

(ま、ひとまず収まったかな?)

どのみちそういう訳にはいかないが……ここでのこのこと姿を現すと、馬に蹴られか

ねない。それも、不死刑場にいたような強烈な奴に。

それはご免なので、早々に退散する事にした。

(さて、と。帰って一杯やるかな)

ひとまず好ましい結果に落ち着いたのだ。

それくらいはしていいだろう。

いや、欲を言えば『酒夢猫亭』に足を運びたいところだが。

(しかし……)

この前、ダンジョンで寝ていた時にも思ったが、

(ベルの奴、ひよつとして『魔法』にも目覚めたのか?)

呪術の継承が何かしらの影響を及ぼしたのか、それとも例のスキルのおかげなのか。

だとしたら、またヘステイアが盛大にむくれているだろう。

(女の敵か。言い得て妙だな)

自分の事はひとまず柵に上げ、俺は小さく笑った。

8

「【フレイヤ・ファミア】の眷属だな？」

ここ数日繰り返しているように、街を彷徨っては【フレイヤ・ファミア】の眷属を

見つけ出す。

(そろそろ、警戒の一つもされようが……)

こうして標的が途絶えないのは、こちらを狩ろうとしているからか。

それとも、そろそろ仕掛けてくるか。

「イレギュラー【正体不明】か？」

今日の標的は、妙に落ち着いている。

襲撃される事を前提として巡回しているという事か。

(ならば、そろそろ潮時というものか)

普段通りに行えるならまだしも、この状況で【おうじや猛者】と対峙するのは避けたい。そろ

そろ切り上げるべきか。

「そのソウル、もらい受ける」

そろそろ馴染んできた言葉と共に、手早く済ませる事にした。

種は十分に蒔いたはずだ。あとは収穫の時を待つだけでいい。

「はあああああつー！」

それ以上の問答もなく、その標的達は武器を片手に襲い掛かってくる。

動きからしてL v. 3といったところか。

昔ならたちまちのうちに斬り殺されていただろう。

それをこうも容易くあしらえるようになるのだから、世の中何が起こるか分からな
い。

しかし、

(妙だな……)

威勢のいいのは最初だけ。あとは、妙に消極的だった。

これではまるで時間稼ぎ——

(いかん。これは罠か)

少しばかり相手の動きを侮っていたらしい。

標的——とはもはや言い難いが——の一角を切り崩し、突破をもくろむ。

が、

「チィー！」

それすら予定されていたようだ。

まさにその場所から、強烈な威圧感が飛び出してくる。

辛うじて初撃こそ凌いだが、そう何度も切り結べる相手ではなさそうだ。

このままでは身体が持たない。

(と、なるとこの人間は——)

眼前の獣人を見て舌打ちする。

これが【おうじや猛者】か。

(なるほど、これほどか)

オラリオ唯一のLv. 7とは伊達ではないらしい。

剣戟を数回に渡り響かせてから、後退して間合いを確保する。

「退いた、か」

追撃はなかった。その代わり、侮蔑するような視線をよこした。

「貴様は【イレギュラー正体不明】ではないな」

別に好きにすればいい。私は武人ではない。

あらゆるものを利用し、目的を達成する。それが、私の使命だ。

戦って死ぬなどというつまらない自己満足にかまけていられるほど暇はない。

「あの男なら、そこでは退かん」

「そいつはどうか。『俺』はお前とは違う」

かの人間も、話に聞く限り、どちらかと言えば私側だ。

逃げもする。隠れもする。不意討ちも闇討ちも厭わない。

そういう存在である。

「クオンならこの程度で打ち負ける事はない。そう言わねば伝わらないか？」

なるほど、正論だった。

「貴公、ずいぶんとあの者の肩を持つのだな」

もはやあの人間を演じる必要もない。

とはいえ、元の姿に戻る訳にはいかないが。

「この程度の相手に後れを取ったと思われるのは不本意だからな」

奴がこのオラリオで、唯一警戒している生者だ——とは、我が主の言葉だ。

なるほど、流石の慧眼である。

(流石に、私では分が悪いな)

殺せるかどうかなら殺せる。だが、この状況では不可能だ。

真つ向から斬りあうには、少々力が足りていない。

(致し方ないか)

種は充分に蒔いたはず。

ならば、この寸劇もそろそろ閉幕だ。

「アン・デイルの手の者か？」

「そう容易く、主の名を口にすると思うかね？」

「ならば、力づくで吐かせるのみだ」

そうはいかない。そして、このような些事で命を落とすつもりもなかった。

ならば、先手必勝。【擬態】の魔術——その術式を変質させた。

この身は元よりまつろわぬ影。器は如何様にでも変えられた。
「むっ!？」

腕を大蛇に【擬態】させる。

本来、この魔術にこれほどの力はない。

だが、私自身の身体が持つ『特性』がそれを別の物へと変貌させていた。

「小細工だな」

その一撃は、その獣人を仕留めるには至らない。

いや、そもそも中りすらしなかった。だが、それでいい。

狙いは別だ。

「当然だ。使えるものは何でも使うとも」

小細工？ 好きに言えばいい。それにお前達は足元をすくわれる。

一通りのたうち回らせた『大蛇』の先端。ちやうど近くの建物の屋根に届いたそれを『手』に戻し、しっかりと掴む。同時、そちらを基点に腕そのものを元に戻した。
「むっ!？」

身体がそちらに引きずられる。今や体の重さすら疑似的なものだ。

それを無に限りなく近づけてやれば、その速さはちよつとしたものになる。目の前の獣人の反応を多少上回る程度には。

「ほう……？」

多少驚いたらしい獣人と取り巻き達が次々に跳躍し、屋根へと駆け上がってくる。だが、もう遅すぎる。【擬態】をさらに変質させる。

いや、ある意味においては正しい形に戻すというべきだろう。

——魔術を、なのか。私自身を、なのかは判断に困るところだが。

「消えた、だと？」

影に戻っただけである。今が夜でなければ、それでも発見されただろう。

主のない影など目立って仕方がない。

「何者だったのでしょうか？ 変身魔法だったとしても、あまりに異質でしたが……」

元より、他の同胞に比べればあまりに脆弱な力しか持ち合わせていなかった私だ。

この程度の『変質』をやったのけなければ、とてもついていけない。

「分からん。そもそも人間だったかどうか……」

それはともかくとして。こうして踏まれているという事実は少々不快でもある。

かといつて、身じろぎすれば発見されてしまうだろう。

（この状態の私に危害を加えられるはずもないが……）

いかな剛剣であつてもただの影は斬れない。

だが、影が何かを害する事もまたできはしない。

簡潔に言えば、踏まれていたところで何の痛痒もない代わり、いくら無防備な背中を向けられてもどうしようもなかった。

「搜索を続けますか？」

「いや、すぐに戻る。警備を固めさせてはいるが、相手も得体が知れない」

「【イレギュラー正体不明】を取り巻くのは、同じ正体不明という事ですか」

「そんなところだろう」

その獣人は小さく笑ってから、散らばった団員達を呼び集める。

「全員、帰還しフレイヤ様の護衛に戻れ。敵はクオンではないが、得体が知れない事に変わりはない。気を抜くな」

「はっ！」

団員達が、次々と飛び降りていく。

そして、最後に残った獣人は言った。

「次はないと思え」

どうやら、勘付かれていたらしい。

……少なくとも、実は今もすぐ傍にいる事だけは。

(未だ未熟な身、か)

やれやれ……。こちらを正面から正視しての警告ではないのがせめてもの救いと

いったところか。

……

「では、私達に悪戯してくるのは、やはりクオンではないという事ね？」

「我らが本拠地である『戦いの野』の最奥にて、フレイヤ様に報告する。

「はい。得体の知れない相手ではありますが、クオン本人ではありません」

「いや、その体裁をとっているが、実際には周りにいる——連日の襲撃で殺気立った——団員達に対する寸劇ではない。」

あの襲撃者がクオンではないというのが、フレイヤ様の神意であり、俺自身の結論であつた。だからこそ、フレイヤ様の護衛を放棄してまであのような罫を張つたのだ。

「アレンが口にする、アン・デイルという子なのかしら？」

「いえ、本人では。おそらく、配下の一人と思われます」

あの襲撃者は何も答えなかつたが、まさか無関係という事はあるまい。

「それで、これからどうするつもりだ？」

団員を代表して、ヘグニが問いかけてくる。

「クオンへの手出しは無用だ。あの男と我々を争わせるのが狙いだらうからな」

「ここまでされて黙っている？ 少なくとも、アレン達をやつたのはあの男だらう？」

「それに、フィリア祭でも余計な真似をしてくれた。あのせいで、フレイヤ様にいらぬ疑

いがかかったのも見過ごせない」

さらに、ヘディンが語気荒く告げた。

「フィリア祭については、すでに決着がついた話だ。フレイヤ様の神意に異議を挟むつもりか？」

……もつとも、これもまた寸劇の一部でしかない。

この二人とは今宵の作戦前に言葉を交わし、意見を交換していた。

現状、最も高Lv.となるこの二人に団員の総意を代弁させたいうえで説得する——と、これはそういう寸劇である。

「そうは言わないが……」

「お前達の不満も分らないではない。だが、そこを付け込まれたのがアレン達だ」

「ならば——」

演技に少々熱が入りすぎだ。

いや、不満を感じるのは当然か。

自らを——ひいては主神であるフレイヤ様を侮られた上に、こんな茶番劇まで演じさせられているのだから。

無論、俺とて不本意だ。

しかし、敵の全容が判じきれない今の状況では致し方ない。

武器を向ける相手、攻め込む場所すら定かではないのだ。

さらに――

「この襲撃を仕掛けていている者は、俺達とクオンを争わせるのが目的だと言ったはずだ。どこの誰とも知れぬ輩の思惑に乗り、走狗となるのを望むか？」

奴らの狙いは明らかだが、その真意までは読み切れていない。

クオンと争わせ、弱体化したところで俺達を潰しに来ると言うという可能性も、現時点では皆無とは言い難い。

（まずあり得んだろうがな）

だが、ここは慎重であるべきだ。

『主神は狙わない』という原則は、奴らには通じない。

この状況で無策に強敵クオンと対峙するのは、蛮勇にすらならない。

「無論、フレイヤ様の命があるというなら、俺とてすぐにでも打って出る心算だがな」

とはいえ、どうやら俺もまだ青い。つい内心が口から零れ落ちた。

さて。俺達が揃ってボロを出す前に、この寸劇にも幕を引くでしょう。

「そうね。ここまでやられて静観するというのは面白くはないけれど、このまま誰かの思惑に乗ってあの子と争うのはもっと面白くないわ」

フレイヤ様が神意を示す。

「本当に悪戯を仕掛けてきているものを見つけて出しなさい。クオンに関して、そちらの真意がはっきりするまで手出し無用。よろしくて？」

「仰せのままに」

その場にいる全員の声为重なった。

フレイヤ様直々にお言葉をいただいた以上、先走る者は当面出まい。

もつとも、アレン達の例がある。それでも絶対とは言い難いが。

「これ以上の被害拡大を避けるため、L.V. 4以下の団員は夜間の外出を控えろ。それ以外の者も、単独では行動するな」

向こうの狙いが何であれ、「ファミリア」の戦力を落とせば他の連中までが余計な動きを見せてくる。有象無象の派閥に後れを取る気はないが、煩わしい事に変わりはなく。

「フレイヤ様には、念のためしばらくの間こちらで過ごしていただければ」

「構わないわ。あなた達と食事をとるのも久しぶりなもの」

バベルの上層階は神々の住処。その原則を、クオンが気にするはずもない。

おそらくは、あの襲撃者達も。ならば常に団員が詰めているこの本拠地の方がいくらか守りやすい。加えて、団員の士気はこの上なく高まる。

「当面はクオンを騙る襲撃者と、アン・デイルなる魔導士の正体とその所在を探る事が最優先だ」

「それが分かったらどうする?」

ヘーデンが分かり切った問いかけをしてきた。

愚問——いや、お互いに返答は分かっている。

武器を向ける相手、攻め込む場所。それがはつきりとしたのなら——

「叩き潰すのみだ」

例えその敵がクオンに連なる何かだとしても、黙っているほど腑抜けではない。

…

「つまらぬ寸劇に突き合わせてしまった無礼をお許してください」

本拠地ホトムの神室に戻られたフレイヤ様に一礼する。

「構わないわ。別にあなたの責任ではないのだから」

「いえ。団員を抑えきれなかったのは、私の力不足です」

「あら。そういう意味ではないのだけれど……」

フレイヤ様の反応は、完全に予想外だった。

「は?」

つい間の抜けた声を返してしまふほどに。

「あの子を騙る誰かの襲撃。それ自体の事よ」

「一連の襲撃が寸劇だと?」

「ええ。認めるのは癪だけれどね。無理やり付き合わせるなんて、失礼しちゃうわ」「我々とクオンを対立させる以外にも目的があったと?」

「それは今さらでしよう? 残念だけど、あの子には嫌われちゃってるわ」「流石にその言葉は否定しかねた。

むしろ、そういう土壌があつたからこそ、アレン達は敵の策に嵌まり、その事実があつてなお、団員の多くが暴発しかけたのだ。

「もし私達にあの子を嫉恨したいなら、直接あの子を刺激すればいいと思わない?」
「おっしゃる通りです」

まさにフィリア祭の一件がそうだった。

予めあの男を焚きつけた何者かがいたからこそ、ああまで素早く追撃してきたのだ。
ならば――

「なるほど。寸劇とはそういう意味ですか」

「ええ。この騒ぎは、私達以外の誰かに向けたものよ」
「ずいぶんと馬鹿にしてくれる。内心で毒づいていた。」

「ですが、一体何が目的で?」

「フフツ。そうね、やっぱりあなたには分かり辛いかしら」

「は?」

「気に病むことはないわ。おそらく、ロキのところの子供達もあなたと同じ勘違いをす
るでしょうから。いえ、ひよっとしたらガネーシャのところの子供達もね」

俺と、その二つの派閥の共通点。それはつまり――

「それは、あの男をよく知っているから、という事でしようか?」

「ええ、そうよ。あの子がその気になったなら、真っ先に私の首を狙ってこないのはおか
しい。あなたはそう思うでしょう?」

ほっそりとした白い首を撫でながら、フレイヤ様が微笑む。

「はい」

襲撃者がクオンである事に違和感を覚えたのは、それが理由だった。

あの男が仕掛けてくるには冗長すぎる。

「ロキや小人の勇者さんもそう考えているでしょうね。でも、他の神やその子供達はど
うかしら?」

「違うと?」

「ええ。そもそも、あの子はね。あなた達程知られてはいないのよ」

「知られていない? あの男の名を知らぬ冒険者の方が少ないはずですが……」

それこそ、あの男が不在の三年間に現れた新しい冒険者くらいなものだろう。

いや、それとて噂の一つ位耳にしているはずだが……。

「そうね。でも、考えてもみなさいな。あの子は、このオラリオにたつた一年しかいなかったのよ？　そして、その名前が広く知れ渡ったのは、あなたとの一騎打ちがあつてから。私達が二つ名を授けたのもその後の事よ。そして、彼もまたその後すぐにオラリオを去ってしまった」

その後すぐに——と、言つても実際には数ヶ月に渡りダンジョンに挑んでいる。

とはいえ、

「あの子がダンジョンに向かい、アナザレコード非公式記録を樹立したのを知っているのは、直接関わりがある個人か、動向を注視していたごく僅かな派閥だけよ。ほとんどの子は、あなた達と立ち会つてすぐにオラリオを去つたと思つているわ」

その通り。ダンジョンの中——しかも、前人未到の領域にいたのでは噂になるはずもない。

加えてアナザレコード非公式記録に関しては、そもそも広く知られている訳ではなかった。

これはギルドが情報制限をかけているせいだ。

とはいえ、それは別にクオンが関与しているからではない。元々『深層』——特に五〇階層より下に関する情報には規制がかかつている。ただそれだけの話だ。

それどころか、非公式というだけあつて、詳しい情報は俺達にも届いていなかった。

(それとも、俺達でも心が折れかねない世界が広がっているのか……)

可能性としては半々といったところだろう。
ともあれ。

あの男が遠征から大々的に凱旋してくる訳でもない。そもそも一人なのだからやりようがない。おそらく、凡庸な冒険者に紛れていた事だろう。

いずれにせよ、その動向に注意を払っていない限り、この数ヶ月は完全な空白期となる。この時点でオラリオを去ったと誤認されても致し方ない事だ。

むしろ、ダンジョンに挑み死んだ——と、噂されない所にあの男の規格外さが表れていると言えよう。

「それに、あの子は冒険者にとつての『悪夢』と言われているんでしよう？」

多くの冒険者にとつて、あの男の名前は忘れたい部類のものだと聞く。

冒険者の街
オラリオでそんな男の噂話をあえて聞き集める者がいるとしたら、それはよほどの物

好きか、もしくは冒険者に隔意でも抱く者か……おそらくはそんなところだろう。

なるほど。新入りの冒険者達に情報も広がらないのはむしろ当たり前か。

「名前だけが独り歩きしているという事ですか……」

ようやく合点がいった。あの男が知られていないとはそういう事か。

記憶に焼き付けられた俺達の方がむしろ少数派という事らしい。

「ええ。突如として姿を現し、あなたと互角に渡り合った正体不明の『剣闘士』。オラリ

オの一般的な認識は概ねその程度よ」

クオンの名がオラリオに広く知れ渡ったのは、闘技場での一件があつてからだ。それはフレイヤ様のお言葉通り、オラリオを去る数ヶ月前の話である。

そして、俺自身が初めてあの男の噂を聞いたのは、「ロキ・ファミリア」との一件があつてから。それでも精々が半年前でしかない。

凄腕の剣闘士という触れ込みだが、実際にクオンが剣闘士として興行していたのは、やはり数ヶ月程度の短い間だけでしかない。その頃からいくつかの派閥と抗争していたとも聞くが……何しろ、当時は『暗黒期』が終わってまだ日が浅く、イヴィルス闇派閥の残党狩りもまだぼつぼつと続いていた。あの男が起こした抗争がろくな噂にはならなかったのは、それに紛れたからとも言えよう。

(正体不明か。言い得て妙だな)

ある日突然現れ、嘘か真か分からぬ逸話だけを残して消えた謎の人物。オラリオの住人の大半にとってあの男はそういう存在という事だ。

名は体を表すとはよく言ったものだ。いや、流石は神々の慧眼とでも言うべきか。

「実際には、それすら八百長だっと思つている子もいるみたいね。でなければ、オラリオ最強のあなたがL.V. 0と引き分けるはずがないというのがその子達の言い分らしいわよ」

「八百長を演じたと思われるなら、それはそれで心外ですが……」

人気者ね——と、悪戯っぽく笑うフレイヤ様を見て、つい呻いていた。

理由は何であれ、全霊を尽くした戦いを八百長と言われるのは不快極まる。

「そして、これが大切なのだけだ」

しばらく微笑まれてから、フレイヤ様は改めておっしゃった。

「あの子が神嫌いだという事も知られていない。いえ、話だけなら知っている子もいるでしょうけど、それがあれほど苛烈だとまでは思っていないのではなくて？」

「神殺しすら厭わないとは思っていないでしょう」

俺達か、あるいは四年前に敵対したいくつかの派閥以外は。

それもまた仕方がない。

『神殺しは禁忌である』

それは、このオラリオ——いや、この世界においてあまりに当然すぎる常識なのだから。

例え互いの団員に複数の死者が出るほどの深刻な派閥抗争があったとしても、多くの場合において、主神はオラリオ追放になるのが精々。例え天界に送還となつても、それは敗北した神が自ら還るか、勝利した派閥の主神が手を下すかのどちらかだ。

だが、仮に抗争に勝利し、正当な権限で送還したとしても、場合によつてはやりすぎ

だと悪名を残す事になりかねない。

例えば、五年前に敵対派閥を悉く壊滅させた「イシユタル・ファミリア」のように。

同じく五年前に「ロキ・ファミリア」が成し遂げた邪神の一斉送還だが、あれは『暗黒期』という時代背景と、相手がその原因である閻派閥イザイルスの主神達であったこと。さらに『暗黒期』への幕引きを求めた多くのギルドの創設神ウラノス以下数多の神々の承認の下で行われ、オラリオに安寧を齎したという事実があるからこそ偉業として認められている。そして、それでさえ、閻派閥イザイルスの神々に直接手を下したのは主神ロキだった。

「ええ。だから、この一件を見ても多くの神や子供達は『ついに四年前の決着をつける気になった』としか思わないのよ」

「そのために我々の戦力を削っている。そういう事ですか」

実際には、あの襲撃者にその意図がないのは明白だ。

被害にあつた団員は重傷だが、死者は一人も出ていない。むしろ、あの襲撃者自身が治癒院に連絡を入れたとしか思えない事例もある。

しかし、それでも――

「そうよ。何しろ、私達はオラリオ最大の「ファミリア」だもの。神殺しを厭わないと知らないなら、それは当然の結論でしょう？」

襲撃者と目されたのがクオンではなく、例えば「ロキ・ファミリア」の眷属達だった

なら、俺とてそう判断していたはずだ。

『あの男が決着を望むなら、フレイヤ様を殺しに来る』

これが、俺の——あるいは、俺達のしていた『勘違い』だ。

いや、その認識は正しい。だが、そう認識できる者が少なすぎる。

つまり、多くの者にとってこれは『寸劇』などではないのだ。

(しかし、それなら一体どこに誰に向けたものなのか……)

俺達を敵視する——あるいは、俺達が消えて得をする派閥なのは間違いない。

だが、少なくとも「ロキ・ファミア」ではないだろう。奴らは引つかからない。

無論、「ガネーシャ・ファミア」も同様だ。いや、先日的一件を考えれば多少の不安は残るのは認めるが……それが原因であるなら、こんな寸劇に付き合わず、真つ向からクオンに協力を求めればいい。今なら大義もある。そして、敵が俺達ならあの男も嫌とは言うまい。

「情報の共有、か」

結果としてそれができている派閥は、おそらく除外できる。

「あら、急にどうしたの?」

と、胸中で呟いたつもりが実際の言葉になっていたらしい。

「いえ。【九魔姫】と面会した際に、【勇者】が、あの男については他派閥でも情報を共有

しておくべきだと言っていたもので」

独り言を聞かれ、少々気まずい思いで答える。

しかし、【勇者】^{フレイヤ}自身の思惑さえ考えないなら、その提言は確かに有益と言えそうだった。

「まあ、あの子達にとつても、他人事ではないでしょうからね。私やヘルメスと同じくらいロキも嫌われてるもの」

「笑い事ではありません……」

言葉とは裏腹に何やら楽しげに笑うフレイヤ様に、つい苦言を呈してしまふ。

もつとも、あの男神と女神に関しては同意できる。

どちらも食わせ物だ。

「まあ、どこの誰に向けた『寸劇』だったのかは流石に私にも分からないけれど」

しばらくして、笑いを収めたフレイヤ様は一転して、憐れむような表情を浮かべた。

「この寸劇を鵜呑みにしてあの子に食いついちゃう子がいたなら、可哀そうな事になりそうね」

第五節 月の夜の■■■■

1

(しまったな。エイナに諸々預けるのをすっかり忘れていた)

地上に戻ったその足で酒屋に行き、上物の一本と肴を購入。隠れ家に戻る途中でふともう一仕事あった事を思い出す。

(少しばかり浮かれすぎたか)

無論、リリルカの私物には一切手を付けていない。

一番『値打ち』があるであろう真鍮の鍵も含めて、すべてソウルの中に保管してある。
……いやまあ、そのせいで忘れたとも言えるが。

(バベルに戻るか。それとも、ギルドに顔を出すか)

フェルズに捕まりそうなので、できればギルドには近づきたくない。

かと言つて、この時間にまだバベルにいるのか。

(それとも、リリルカ御用達の店に届けるか?)

いや、それも危険か。その店主とやらがどこまで信用できるか定かではない。

せっかかく取り戻したのに、自分からそれをなかつたことにするのは間抜けすぎる。

(となると、あとはヘステイアの廃教会に投げ込むくらいしか……)
 方法は思いつかない。

少なくとも、ヘステイアなら着服はすまい。……おそらく、きつと、多分。

(しかし——)

何であれ、今すぐにはできそうになかった。

嘆息を飲み込み、ひよいと頭一つ分だけ右にずれる。

と、それまで頭があつたあたりを何かが通り過ぎた。

ドラングレイグ——『虚ろの影の森』で『霧の戦士』透明人間達に散々翻弄された身だ。この程度の奇襲はもう通じない。

そのまま素手で襲い掛かってくるその襲撃者を、同じく素手で迎え撃つ。

(アマゾネスか……)

アイシャと同じような格好をした、灰色短髪の女。

美女と表現するのに何ら不足ない顔立ちだが、やはりアイシャ同様に野性的——ある種の獯猛さが宿っていた。

(ま、当然か)

全力で殴り掛かってくる相手が、聖女と見紛うような微笑みを浮かべていたなら、むしろそちらの方が恐ろしい。

「な——」

何であれ、動きが甘い。

大振りの蹴りをつかみ取り、そのまま力尽くで放り投げる。

鍛えているとはいえ、細身の女だ。重量級の大槌や特大剣に比べれば軽い。

「——にー!?!」

短い悲鳴が終わる頃には、その女も短い空の旅を終えて地面に帰還していた。

流石に受け身こそとったようだが、無防備なまま地面に転がっている事に変更がない。

その女が立ち直る前に直剣を『取り出し』て、その首筋に突き付けた。

「参った参った。降参だ」

地面に座り込んだまま両手を上げながらも、その女は豪気に笑った。

「命を見逃してくれるなら、何してもいいぜ? 安くしとくからよ」

煽情的な体をこれ見よがしに見せながら、その女は笑う。

まあ、その姿は一般的に言つて魅力的ではあつた。

そして、きつちり料金を請求する気であるあたりは流石アマゾネスと云うべきだろう。

(アイシヤだと一晩一七〇〇〇ヴァリスはするからな)

平凡な冒険者——それでも一般的には高給取りになるが——だと三日以上かかる額だ。

そして、あいつはまけてくれないどころか、きっちり宿代まで払わせる。

それでも客がつくのだから大したものだと言えよう。

まあ、宿代は『歓楽街』に出向けば支払わないでいいだろうが。あそこに私娼はいないと聞いている。つまり、全員がどこかの娼館に所属しているはずだ。

例えいたとしても、戦闘娼婦であるアイシヤには関係ない話だが。

(いや、待てよ。それともあれが底値だったりするのか?)

戦闘娼婦^{バーベラ}と言えば、客を選ぶ権限もあると聞いている。

おそらく高級娼婦並みの待遇なのだろう。いや、単なる放浪者だった俺としては、漠然とした噂しか知らないのだから確かな事は分からないが。

(そう言えば、アイシヤは安売りするつもりはないが、あまりに高値を付けて相手がいなくなるのも退屈だとか言っていたような……)

となると、金額もある程度は自分で変更できるのか。『過ごし方』で変わってくるのか。それとも、そこまで含めて『客を選べる』という事なのか。

だが、いずれにせよ——

(押し売りされるには結構な額だよな)

美人局という単語がチラリと脳裏に浮かんだが……むしろ、それでこそ戦闘娼婦パルベラの面目躍如と言えるのか。

(まあ、ぼったくりではないけどな)

何であれ、それだけの価値はあるのは間違いない。

「馬鹿言ってるんじゃないよ」

などと。下世話な事を考えていると、耳に馴染んだ声でした。

さらに言うなら、麝香の匂いも。

「いいじゃねえか、アイシャ。少し味見させろよ」

「そりや止めないけどね」

嘆息してから、アイシャが言う。

「そろそろ時間だ。急がないと、文句を言われるよ」

「だからだよ。その前にちよいと味見させろって」

どうでもいいが、まずは本人に尋ねるべきではないだろうか。

流星に押し売りしてくる娼婦は一人いれば充分なのだが。

「どういうつもりだ？」

そもそも、アイシャが同僚を連れてくること自体が今までなかった。

ここ数日自分を取り巻く『状況』を併せれば不吉さしか感じない。

「悪いね。私も神の眷属なのさ」

「どうやら、予感は当たりそうだった。」

「本当にL v. 0なのかよ?」

アイシヤ達に連れ込まれたのは馴染みの宿より、さらに一つ位が高そうな宿の一室だった。念のため支払いを押し付けられない事を祈りつつ、しなだれかかってくるアマゾネスに応じる。

「ああ。何なら背中を見てみるか?」

もつとも、あくまで『神の恩恵』^{フェアルナ}とやらがL v. 0というだけの話だが。

『ソウルの業』に関して言えば、極まっている。

(……まあ、今は三割も使えていないがな)

目覚めたばかりの時は、二割にも届かなかった……いや、記憶と共に呪術や魔術を『忘れていた』事を考えれば一割にも満たなかつた事を考えれば、ずいぶんとマシになった。(よくもまあ、あの状態で七〇階層までたどり着けたものだ)

それも『ソウルの業』のない時代のおかげだ。

『火の時代』の殺し合いとは、すなわちソウルの奪い合いである。その術を持っているならば、例え駆け出しの不死人でも格上のデーモンを殺せる。

そして、その術を持たない者——殺し切るだけの力を持たない者が相手なら、不死人

はまさに『不死』の存在となり得るのだ。

だからこそ、忌避されて『北の不死院』送りにされる。

(あそこはまだマシだったかな)

今にして思えば、ずいぶんと温情ある処置だったのだ。

不死刑場に放り込まれてまさに『死ぬまで』轢殺される羽目になったり、半端な『ソ

ウルの業』の使い手達に『埋葬』され、奇妙な『籠蜘蛛』に加工された連中に比べれば。

ともあれ、冒険者にとっては致命傷でも、不死人にとってはそうではない……つまり

は、不死人の不死人たる所以に物を言わせて、強引に踏破したというのが現実である。

そして、その結果分かった事と言えば――

(『深層』を進むごとに、『ソウルの業』らしき力が増していく)

魔石の力の影響なのか、六〇階層を超えたあたりからモンスター共の攻撃がかなり

『痛く』なってきた。

直接引導を渡してきたのは名も知らぬ闇霊だったが……奴がいなくとも、時間の問題

だっただろう。今の俺が単独で進めるのは、あの辺りが限界らしい。

(いや、今ならもう少し下まで行けるかもしれないが……)

あの時と違い、エスト瓶や灰瓶が使える——と言っても、今度の巡礼地はその辺りは代替品がいくらでも手に入るの、そこまで大きな影響はないかもしれないが。

(……まあ、今は四割しか使えないがな)

目覚めたばかりの時は、三割程度しか使えなかった……いや、記憶と共に魔術や奇跡を『忘れていた』事を考えれば三割にも満たなかった事を考えれば、ずいぶんとマシになった。

しかし、尋常ならざる敵を相手にするにはまだ心許ない。

改めて自分の性能を把握しなおすと同時、新たに数人が部屋に入ってきた。

褐色肌の美女。全員が概ね同じような——つまりは、露出の多い——格好をしている。

「お前がクオンか？」

その中の一人。一際豪奢な格好をした女が、問いかけてきた。

ザワリ——と、項の毛が逆立つ。

(いっつ……)

アイシャの主神の名はイシュタル——つまり、あの女と同じく『美の神』とやらだ。

恩師達が授けてくれた《巡礼の黒衣》と、唯一弱体化していない……そして、他の同胞よりも多少は優れているといえる『人間性』が、目の前の亡者の『魅了』の侵蝕を食い止めている。

この『時代』の人間はどういう訳だが——いや、おそらくバシリスクどもがいないせ

いだろうが——『呪い』に対する耐性をまるで軽視している。

それどころか、オツタルとその手下どものように嬉々として受け入れる変人どもまでいる始末だ。

だが、俺達不死人にとっては対応すべき障害の一つでしかない。

そして、白竜シースのブレスや、渴望のデユナシヤンドラの『呪い』を相手にしてきた俺にとつてすれば、この程度はまだ余裕をもって抗える範囲だった。

(とはいえ、過信は禁物だな)

相手は腐つても神だ。油断などできるはずもない。

「ああ。そちらはどなたかな？」

念のため確認だけはしておくべきだ。

「フフツ。あの女神おんなに喧嘩を売るだけあつて豪気だな」

あの女というのがどの女か知らないが……ああいや、この言い方ならオツタルの飼い主辺りだろう。同族嫌悪というやつだろうか。

「私は『美の神』イシユタル。お前の女の主神だよ」

「そんな大物が、ただの放浪者に何の用だ？」

アイシヤの『生業』を考えれば、関係を持った事を咎められるとは思えないが。

「そう警戒するでない。お前とてあの女神おんなには手を焼いているのだろうか？ 女神として

手助けしてやろうと思っただけだ」

「手を焼いている……?」

「連日襲撃しては戦力を削っているのだろうか?」

(連日だと?)

アン・デイルに嫉けられたあの五人組以外とは関わっていないはずだが。

ああいや、「ソーマ・ファミリア」のゴロツキなら三人ばかり叩きのめしているか。

「私がお前に力をやろう。望むだけの女も、骨まで蕩ける程の快樂もな」

腐臭に代わる直前の熟した甘い匂い——その体から発せられる『魅了』^{呪い}がその密度を増していく。

「」

部屋の片隅には、無表情のアイシャがいた。

(ま、アイシャが手に入るならそれもいいか)

と。そう思わせる事こそが、この『呪い』の一番の恐ろしさかもしれない。

(いや、【魅了】の極意とはこういうものなのか)

いわゆる心の隙間を狙う。それが極意という事か。

不死人——というよりは亡者の場合、ソウルを求めるといふ唯一絶対の本能だけしかないからこそ、ああまで容易く通じるのだろうか。

(しかし、そうなる……)

あの時師匠に【魅了】されたのは、別に亡者化が進んだままだったからではなく——
(いや、今はいい)

何であれ、目前で放たれる『呪い^{魅了}』の力は通じない。何しろ、こうして他の女を思い浮かべられる程度のものでしかないのだから。

「ああ、それもいいな」

……驚いた。てつきりアイシャには——時々シャクテイやリヴェリアがするような——冷たい目で見られるとばかり思っていたのだが、

(そんな顔もするのか)

予想に反して、まるで泣きそうな顔をした。

無論、ほんの一瞬だ。薄暗い部屋が見せたただの錯覚だったのかもしれない。

どちらかと言えばその可能性の方が高そうだ。

「だから、私に従え。私のモノになれ。お前を更なる高みに連れて行ってやる。次に月が真円を描いたその夜にはな」

それでも、腹を括るには充分な刺激だった。

……ああ。それに今、この亡者は聞き捨てならない事を言った。

「月が真円か……」

満月。アン・デイルが言った『鳥羽の石』——いや、そこから生み出される『殺生石』とやらが真価を発揮する時である。

「『殺生石』だな？」

「ああ、そうだ」

つまり、この亡者こそがアン・デイルが用意した『生贄の羊』という事だ。

勝利を——『魅了』の成立を確信したらしい亡者が嗤う。

「殺せというなら、遠慮なく殺すさ——」

ソウルから《盗賊の双短刀》の片割れを取り出し——

「この『時代』に残る神。その悉くをな」

「イシユタル様!？」

——振り下ろす。

「……『魅了』が通じていない、だとッ!？」

刃は亡者の肩口を掠めるに留まった。

なるほど、『神の力』を封じたとしても神は神か。

「貴様ああああっ!」

フィリア祭でガネーシャが発していたそれと同じ気配——確か、神威とか言ったか——が放たれる。だが、そんなものに臆するような不死人はいない。

もう片方の短刀を取り出し、一気に間合いを詰める。

「や、やらせつかよー!」

急所に刃を滑り込ませるより早く、取り巻きの一人——先ほど放り投げたアマゾネスが再び突進……なりふり構わぬ体当たりをかましてくる。

(これがアイシャの同僚でなければな……)

躊躇わず、背中から心臓を刺し抜けるのだが。

そう嘆息する自分にいつそ驚いていた。

(ずいぶんと人間らしくなったじゃないか……)

だからこそ、アン・デイルがちよっかいを出しに来たのだろうか。

(上等だ)

あの狂人が殺戮を望むら——

(標的はただ一人)

——俺が殺すのはあの亡者だけだ。

思惑通りに踊るのはもう飽きた。半ば以上につまらない意地であり、ただ単に己に不利な状況を生み出すだけの愚行だが……知った事か。

呪いを纏う方、苦難を求めなさい——

いつかどこかで聞いた言葉が耳の奥に蘇る。

皮肉か。嘲笑か。……いや、ここは己の愚行を肯定してもらったと思っておくとしよう。

(ま、俺なんていつも愚行しかしていない気もするがな)

勇猛な女戦士の無謀な突進にあえて逆らわず、床を蹴った。

背後には窓。それを突き破ると同時、左手に『火』を宿す。

口ずさむ物語の名は「フォース」。

自分の周囲に衝撃波を放つ奇跡。

もつとも、その衝撃波だけでは傷を負わせる事すらできないが——

「何だとツ!？」

がっちりと抱き着いたままのアマゾネスを引きはがし、ついでに受け身の代わりにさせるには充分だった。

それでも、一瞬は仰向けで地面に転がる。

無防備な姿を見逃すほど、アイシャの同僚は親切ではないらしい。

「くたばれっ!」

ナイフを構えて飛び降りてくる敵を蹴り飛ばし、その勢いそのまま跳ね起きる。

武器は斧槍に。続けざまに襲い掛かってくる女戦士達をまとめて薙ぎ払ってから、近くの路地に飛び込む。

今さらら宿に戻ったところで、あの亡者は殺せない。

それに、『殺生石』を完成させる気なら、生贄となる誰かがいるはずだ。仮にも神が切り札と呼ぶほどの代物の要だ。狐人ルナールなら誰でもいいという訳でもあるまい。

(どういう効果だか知らないが――)

その力を求めるのはおそらくアイシヤの主神だけではない。

あの女も糸目の小僧も……オラリオにいる神とその手下の全てが求め始める可能性がある。

全員参加の争奪戦になる前に保護するなり何なりしておかなければ、流石に身が持たない。

「――」

適当な横道に飛び込むと同時、素早く詠唱を終える。

曰く「擬態」。その名の通り、その場に相応しい何かに擬態する魔術だ。

「消えた!？」

「バカ言うな。この辺にいろはずだ。探せ!」

木箱に転じた俺の前を、アマゾネス達が駆け抜けていく。

彼女たちの足音が充分に遠のき、気配も感じられなくなつてから、改めて別の魔術を詠唱する。

曰く【見えない体】。そして、【隠密】。

効果はどちらも名前の通り。体を透過させ、音を消す。【隠密】に関して言えば、加えて高所からの落下ダメージを無効化する効果もあるが……今はあまり関係ないか。

ともあれ、それに加えて夜道である。よほどの手練れが相手でもない限り、発見される可能性はほぼなくなった。

(三日……いや、四日後か)

空の月を睨み、胸中で呟く。

いずれにせよ、満月の夜までに決着をつけないければならない。

2

一夜明けて。

「よう、爺さん。腰はもういいのか?」

適当な——なるべく目立たない——防具をまとい、西地区のいつもの水路に向かう。

そこには年季の入った麦藁帽を被った犬シアンスローブ。人の老爺が簡素な折り畳み椅子に座り、水面に釣り糸を垂らしていた。

「ええ。おかげさまで」

いつものように、その隣に椅子を置き同じように釣竿を構える。

「いい天気ですねぇ」

目を細めて陽光に煌めく水面を見つめ、その老翁はおだやかに笑う。
(分からないものだな)

その姿は、どこから見ても好々爺にしか見えない。

トマス・カーネル。先日出向いた『カーネル食堂』の女主人の義父。
本名をオレック・ドーリー。

五〇年以上前からオラリオの裏社会で暗躍した凄腕の『情報屋』だという。

本人曰くすでに隠居の身だが……それでもなお、糸目の小僧の晩酌の銘柄からあの女の今夜の相手の素性まで余すことなく把握しているとまことしやかに語られている。

「また厄介な事に巻き込まれているようですね？」

「そういう星のもとに生まれたらしい」

「難儀な事ですな。霞ちゃんも気が気でないでしょう」

笑うと同時、浮きが沈む。同時に実に素早い動きで、その老翁は釣竿を動かした。
「大物ですな」

釣り糸の先では両掌程度の大きさの川魚が、激しく体をくねらせていた。

それを手早く針から外すと、水路に沈んでいる魚籠に放り込む。

見えた限り、今日の釣果はなかなかのようだ。

「今夜は骨酒で一杯か？」

「いいですねえ。いやはや、浄化柱様々です」

そのおかげで清水に満ちたこの水路には、本来清流にしか棲まない魚までが自生していた。

その反面、モンスターも巢食っているが……連中は、地下水路に引きこもっている。どごその湖ではモンスターによって漁礁が壊滅していると聞くと聞くと、オラリオの水路では何とか住み分けが成立しているようだ。

「それで、本日はどういったご用件で？」

のんびりとした口調のまま、その老爺が問いかけてくる。

「【イシユタル・ファミア】について話が聞きたい」

「おやおや。お互いの事情には深く関わらないのではなかったのですか？」

「何故知っている？」

いや、愚問か。

この老爺は半世紀以上もオラリオ屈指の『情報屋』として名を轟かせてきた——神ですら秘密を守れないと言わしめた男だ。

とはいえ、

「俺達だって、お互いに言葉にしたことはないってのに」

言葉にして申し合わせた事は一度もなかった。

それを知られているというのは、少々ゾツとしない話だ。

「いえいえ。これはただ単に年の功というやつですよ」

そういうものか。

「しかし、あなたが動くとなるといよいよ『歓楽街』も終わりですか。若かりし日の思い出の場所がなくなるのは寂しいものです」

「へえ。『歓楽街』に縁があつたのか？」

「私は元『情報屋』ですよ？ 女と酒と欲望。それにご禁制の薬。あの『街』にはそれが揃います。いえ、それこそがあの『街』の全てと言つてもいい。『繁華街』と並ぶ『情報屋』の聖地ですよ」

おそらく、それは正しいのだろう。

だが、活用できるのは、この老爺の手腕あつての事でもある。

「しかし、何だつて俺が『歓楽街』と事を構えようとしていると思うんだ？ アイシャを身請けしようとしているだけかも知れないだろう」

「戦闘娼婦を身請けですか？ なら、最低でも五〇〇万ヴアリスは固いでしよう。まして、〔麗傑〕は幹部の一人。下手をすれば、もう一桁か二桁は上かも知れませんね」

冗談を言つてやると、なかなか現実的な返答が返つてきた。

「二桁だと?」

素直に考えて五億ヴァリス。

五一階層で水汲みしつつトカゲの王様と戯れてこなくてはならない。

流石に即金では厳しいものがある。

……ああいや、この前汲んできた水を売ればどうにでもなるか。

「ええ。一介の娼婦なら五〇〇万あればまず問題ないでしょうが、戦闘娼婦は『冒険者』でもありませんからね。まあ、無所属のあなたが身請けするなら『改宗』する必要がないので、多少値引きしてもらえる可能性もありますよ」

それは要するに、いざという時は戦闘要員として借り出される事を許容しろという意味なのではないだろうか。

「なかなか豪気な買い物ですが、今回はそうではないのでしょうか?」

「……お見通しか」

「ここ数日の奇妙な出来事を加えれば、私でなくともそういう結論に至れますよ」

「奇妙な出来事?」

「ええ。ここ一〇日ばかりの間ですがね。『フレイヤ・ファミリア』をあなたが襲撃しているという噂が立っていますよ」

「何だって?」

いや、確かに昨夜の亡者もそんな事を言っていたが。

「その様子では、やはりあなたの仕事ではなさそうですね。【女神の戦車】と【炎金の四戦士】以外は、といったところでしょうか」

「その何某とやらが、一〇日前に振り返り討ちにした五人組ならその通りだよ」

そうこうしているうちに、隣の老翁は二匹目を釣り上げる。

同じ場所と同じ餌を使い、同じように糸を垂らしているのに、一体何が差を生み出しているのやら。つついそん事が気になってしまふ。

「ついにあなたが【フレイヤ・ファミリア】と決着をつける気になったというのが巷の噂ですよ。まあ、【猛者】はまるで信じていないようでしたが」

「オツタルが？」

「あなたが本当にその気になったなら、躊躇わずに神フレイヤを狙うでしょう？」

「それはな。あの女さえ殺せば、取り巻きは無力化できる」

「相変わらず怖い事を言いますね」

老翁は露骨に肩を震わせて見せる。

だが、口元の笑みは隠し切れない。神すら恐れさせた凄腕の『情報屋』は今も頭在らし。しい。

「ですが、普通は信じないでしょう。そして、実際に【フレイヤ・ファミリア】を襲撃し

ている何者がいる。だから、そんな噂が流れているのですよ」
「なるほどな」

俺がダンジョンにこもっている間も、アン・デイルは地上で暗躍し続けていたという事か。

それに踊らされたあの亡者も哀れな事だ。……もつとも、今さら情けはかけないが。

「アン・デイルですか？」

内心を見透かしたように、老爺が言った。

「知っているのか？」

「ギタから聞きましたよ」

先日、この老爺が紹介した『情報屋』の少女か。

「私もまだ詳しい話は知りませんが、どうやらギルドでは機密情報の一つらしいですね。とはいえ、オラリオでは全く話を聞きません。リヴィラの街も同様です。はてさて、一体どこに在るのやら」

一体どこまで把握しているのやら。相変わらず末恐ろしい老爺だ。

「いやはや、あなたといると本当に退屈しませんねえ」

「放っておいてくれ」

俺だつてできる事ならいい加減平穩に過ごしたいと思つているんだ。

「話を戻しますと、神イシュタルがあなたに接触したのはその『噂』のせいでしょう。神フレイヤに隔意を抱いているのは有名ですからね。女神の嫉妬とはつくづく恐ろしいものです」

同類嫌悪というやつか。それに巻き込まれた俺もいい面の皮だ。

「俺を抱き込もうというのは、アイシヤの進言なのか？」

「それはないと思いますよ」

それだけははつきりさせておかなくては——そんな問いかけに、老爺はあつさりと応じた。

「麗傑」アンティイアネイラは先ほども言った通り幹部の一人です。Lv. 4へのランクアップ目前と見

られている有力な冒険者ですし、その美貌から娼婦としても高い人気を誇ります。

まあ、生半は男では諸々搾り取られて終わりですがね」

あなたはここでも規格外ですが——と、老爺は性質の悪い笑みを浮かべた。

それこそ放っておいてくれ。それは主に不死人という特性のおかげだ。

「団長である【男殺し】アンドロクトニスは冒険者としての腕は立ちますが、娼婦としては悪い意味で有名すぎます。しかも、団員からの人望にも難があるようですね。その辺りは、副団長の

タンムズ・ベリリも似たようなものです。彼の場合は、主神への信奉が強すぎて統括者

としての自覚が薄いのでしょね」

「ふむ……」

信奉が強いというなら、オツタルも似たようなものだろう。

……もつとも、あの男はあれで統括者としても意外と有能だから厄介なのだが。

あの男がただの腕力馬鹿、突撃馬鹿だったなら、今頃とつくに決着がついている。

(加えて派閥の頭脳があの女自身だからな)

あの女の意味を、あの男が配下と共に容赦なく実行する。

派閥の結束力および足回りの良さはオラリオ最高と言つて過言ではないはずだ。

(いや、単に類が友を呼んだだけか)

全員揃つて『魅了』^{アンテイアネイラ}されているのだ。手足の如く動くのは必然とも言える。

「一方で『麗 傑』^{アンテイアネイラ}は面倒見がよく、多くのアマゾネス達から慕われています。いわゆる

姉御肌というものでしょうね。その辺りはあなたも分かっていると思います」

「ああ、そうだな」

剛胆で気前よく、憎まれ口を叩きながらも何だかんだと情に厚い。

そこに確かな実力と面倒見のいい性格が加われば、自ずと人望は生まれるだろう。

「実際、派閥の中では団長代行と言つてもいいほどの人望を集めているようですね。ただ、主神との関係はあまり良くないようです。特に二年前からは」

「二年前？」

「ええ。詳しい話は分かりませんが、主神の手で『制裁』を受けたという話を聞きます。いえ、この場合は見せしめでしょうか」

「見せしめ？」

いや、怪物祭の日——その夜の様子からして、何かあったようだとは思っていたが。

「ええ。団員が揃って震え上がったというのですから、よほどでしょうね。それ以来、アンティアーネイラ【麗 傑】自身も主神へは一切反発しなくなつたとも聞いています。これはあくまで私の勘ですが、おそらくできなくなつたんだと思いますよ」

「『魅了』か」

やはりそれは『呪い』と同義ということなのだろう。

「そんなところでしょうね。あなたが『美の神』を嫌う理由も分かるというものです」
三匹目を釣りあげてから、老爺は続けた。

いや、美の神とやらに仕えていると知った時から、あるいはと思つてはいたが……
(まさか本当にそうなっているとはな)

悪い予感ばかりよく当たるものだ。

「加えて言えば、先に言った通りアンティアーネイラ【麗 傑】は多くの若いバールベラ戦闘娼婦に慕われていますからね。迂闊な事はできないのでしょうか」

「人質か」

となると、やはり他の団員には手心を加えておく必要がありそうだ。

(殺せばアイシヤに恨まれるだろうからな)

顔見知りと殺しあうのはよくある事だが、未だに慣れない。

慣れるくらいなら、何とか回避する手段を模索すべきだろう。

まだその程度には『人間性』を保っているつもりだ。

「そうなりますね。彼女達が『フレイヤ・ファミア』との抗争という無謀にも唯々諾々と従っているのは主神への恐怖という理由もありそうです。そうですね……。昔、とある塔で火災が起きた時、不運にも逃げ遅れた方々は上層にある窓から次々に身を投げたそうです。もちろん、冒険者ではありませんから、飛び降りたらず命はありません。本人達も……少なくとも、火災が起こる前だったならそれは分かっていたでしょうが……」

「どちらにしても死が待つ。それが分かっているても、他の選択肢がない、か」

「ええ。もちろん、火災云々は例え話ですが、心境としては近いのではないのでしょうか？」

とはいえ——と、前置きをしてから、オレックは続けた。

「まあ、そこは生来勇猛な女戦士達アマソネスを多く有する派閥ですからね。そこまで消極的だとは言いい切れません。無論、神イシユタルは戦いの女神でもあります。勝算なく戦いを仕

掛ける程無謀ではないでしょう」

「まさか「フレイヤ・ファミリア」との抗争のために、俺も抱き込もうとしているとでも？」

あるいはそこに勝算を見出しているのだろうか。

「まあ、あなたを味方につければそれだけでオラリオを支配すらできそうですね。ですが、神イシュタルはあなたが来る前から準備を始めていたようですよ」

「具体的には？」

「五年前に、「イシュタル・ファミリア」がギルドを訴えた事があります」

問いかけると、老爺はそんな事を言った。

今一つ繋がらないが……この情報屋が無意味な話をするはずがない。黙って先を促す。

「これは当時「イシュタル・ファミリア」と対立していたいくつかの派閥が、L.V.を偽っていると訴えた事が始まりです。公式のL.V.より団員の力が遥かに上回っているというのがその派閥の言い分でした」

「どこかで聞いた話だな」

小さく苦笑して見せる。

「ええ。それで、ギルドもあなたと同じ対応をしたのです。いえ、実際にはもつと穏便で

神イシユタルに調査協力を申し入れただけです」

「その結果が白だったと？」

「ええ。神イシユタルは有力な団員の【ステイタス】を掲示したうえで、それを証明しました。申告しているL v. 通りだとね」

L v. を偽る。もしや『暗い穴』なのか。

ふと思いい浮かんだその考えを否定するため、問いかける。

「それはアイシヤも含まれているのか？」

五年前だとまだL v. 1 だったはず。そうなると可能性は低いだろうか——

「ええ。当時はまだL v. 1 でしたが、新進気鋭の戦闘娼婦^{パベラ}として名が知れてきていましたからね」

ならば、違う。彼女の身体には『暗い穴』は穿たれていない。

少なくとも、つい先日……怪物祭の日の夜までは。

「ともあれ、その過程でギルドに機密である【ステイタス】の詳細、『スキル』や『魔法』までが流出しました。それで、訴えた派閥とギルドを相手取って賠償金を請求したという訳です」

「払ったのか？」

「払うしかないでしょう」

それもそうか。結果として白だったのだから。

……俺もそうすれば良かった。いや、それはともかく。

「その直後、『イシユタル・ファミア』は罰則で大幅に弱体化した各派閥を壊滅させました。主神である女神達を天界に送還させるほど徹底的にね。この一件はギルドを委縮させるに充分だったようで、以降『歓楽街』に一切干渉していません」

「ふむ……」

まあ、ウラノスやフェルズはともかく、あの何とかいうエルフはそういう人間だ。

別に驚くに値しない。

「私が気になったのは『公式のL.V.より団員の力が遥かに上回っている』という訴えです。基本的に腰の重いギルドが動いたという事は、彼女達の訴えにはそれなりの根拠があったはず。ですが、実際には白だった。この矛盾は何を意味するのでしょうか？」

実に楽し気に老爺が笑う。

「まあ、妥当なところならマジックアイテムか『魔法』だろうな」

「ええ。私もそう思いましてね、ちよつと探りを入れてみたのですよ」

「結果は？」

「ちよつとその頃、身売りされてきた少女がいましたね。もちろん、オラリオで人身売買は違法ですが……まあ、そこは『歓楽街』ですから。それだけなら、珍しいとはとても

言えません」

もつとも、この街の娼婦には玉の輿を狙って自分達から集まってきた女性も多いですが——と、老爺は付け足した。

その辺りの話は、アイシヤからも聞いた事がある。商会の主や有力な冒険者の女になれば、それだけで一財産得られると。

それと冒険者は早死にするから、それまでに絞れるだけ絞っておいた方がいい、とも。「気になるのは、この少女についてずいぶんと念入りに情報を隠蔽していた事です。当然ですが、五年前はL v. 1だったのでギルドの調査の際にも「ステイタス」は公開されませんでした。おかげで、私も詳細までは調べきれなかったのですけどね」

だからこそ、気になった。そういうあたり根っからの『情報屋』なのだろう。敵に回せば恐ろしいが、味方でいるうちは心強い。

「ですが、L v. 1でも『魔法』が発現する事はあり得ます」

「まさかそこで発現したのがL v. を上げる魔法だと?」

「おそらく一時的なものなのでしょうけどね。そうであれば、矛盾が解消されます。それに、徹底的に情報が隠匿された理由もね。もし私の考え通りなら、前代未聞の希少魔法ですよ。もし情報が洩れれば、オラリオ中の「ファミリア」が彼女を求めでしょう」

「時に、その少女の種族は分かるか?」

「ええ、狐人ルナールのようです。そのおかげで、この少女が怪しいという結論に至ったのですがね」

「どういう意味だ？」

いや、見当はついていない。おそろく――

「この時期から、神イシユタルは、とあるご禁制のマジックアイテムを求め始めています」

『殺生石』か？」

「おや、どこでその名前を？」

やはりか。

「古い知り合いにちよつとな」

「それはまた博識なお知り合いのようですね。それとも物騒な、と言うべきなのでしょうか？」

その両方が正しい。何しろ、博識な狂人なのだから。

「ええ。その通りです。もうご存知かも知れませんが、『殺生石』とは取り込んだ狐人ルナールが身につけた魔法を一つ、誰でも発動させられるようになるものです。また、完成した石なら砕いたところで力を失いません。それどころか、欠片一つでも同様の効果を発揮します」

なるほど、そういう事か。

「その石があれば、派閥全員のLv. を上げられる。そういう事か」

一時的である代わりに自身に代償を残さない『暗い穴』と言ったところだろう。

露見すれば本当にオラリオがひっくり返りかねない。

「そうなりますね。もつとも、団長の【男殺し】アンドロクトノスですらLv. 5です。仮にLv. 6にな

ったとしても、まだ【猛者】おうじゃには届きません」

「それはまあ、そうだろうな」

もし同じLv. 7になったとしても、凡庸な冒険者があの男に勝てるとは思えない。

まあ、凡庸な巡礼者の俺が互角に渡り合えているのも事実だが……それは偏に身体
性能差のおかげだ。それを補われればどうなるか知れたものではない。

「ええ。ですので、他にもいくらか策を巡らしているようですね。テルスキュラに渡り
をつけたら、閥派閥イヴァイルスの残党に資金提供したり、といったところですよ」

「なりふり構わないという事か」

テルスキュラとやらは知らないが、閥派閥イヴァイルスというのは聞いた事がある。

ウラノスとガネーシャにその残党狩りを押し付けられた事があるせいだ。

ただの生者のくせに、平然と自爆特攻かましてくるイカレタ連中だった。

「ええ。つくづく女神の嫉妬とは恐ろしいものです」

そんなものと関わるとは、あの亡者もいい具合に狂っているらしい。

「そこにあなたが加われれば、盤石の布陣と言えるでしょうが……残念ながら、欲をかきすぎたようですね？」

「そうなるだろうな」

何であれ、互いに手を取り合うという展開はもはやあり得ない。

「ところで、結局何でアイシャは二年前から疎遠なんだ？」

「ああ、それはその少女の世話役だったからです。まあ、情が移ったという事でしょう」「要するにその少女を庇ったせいだど？」

「そうでしょうね。二年前に一度『殺生石』が運び込まれたようですから」

あつさりとした言葉に、思わず納得していた。

つまり、それを破壊したせいで自分が『制裁』されたという訳か。

アイシャらしいと言えばそれまでの話だが――

「そういう事は早く言えよ……」

主神を殺さないまでも、その少女を連れだすくらいの事はいくらいでもやったのに。

それとも、それすら出来なくなっているのか。

「昨夜から『歓楽街』は厳戒態勢が敷かれているようですね」

どのみち、もはや加減は無用だ。

あの女神は俺を殺しにくる。そして、その少女を殺すだろう。

ならば、あとは誰が生き残るかだ。二人死ぬよりは、一人で済ませた方がいい。

……まあ、俺の場合、例え神が相手であつてもそう簡単に死ねないが。

(それに、その少女が広く知られてしまうと話が変つてくるな)

最悪はオラリオ中の神々とその手下どもを殺し切るしかなくなる。

いや、それも所詮は遅いか早いかの問題でしかないか。

(腹を括れという事か)

……今なら、人助けという大義名分が多少の慰めくらいにはなつてくれるかもしれない。

い。

「だろうな」

嘆息してから、最後の質問を口にした。

「その少女の名前は？」

「サンジヨウノ・春姫。今年で一六歳になるようですね」

「若いな」

五年前なら一一歳か。幼いとすら言える。

「ええ、そうですね。痛ましい話です」

似たような境遇の少女を引き取り、娘として育て上げた老爺が呟いた。

「それともう一つ。数日前に『殺生石』が運び込まれたようです」

「誰の仕業だ？」

「直接運び込んだのは神ヘルメスのようです。ですが、あの男神がそれをどこから入手したかまでは……」

あるいはそれもアン・デイルの差し金なのだろう。

……もつとも、あの狂人はいずれ来たであろうその時を前倒しにただけだ。

忌々しい事に変わりはないが、それよりも——

「あのクソ野郎が……」

ヘルメス。奴を仕留め損ねた己の迂闊さを改めて呪う。

この『時代』に目覚めてから今に至るまで俺が犯した最大の失敗は、間違いなくあの時奴を殺し損ねた事だ。

（いや、待てよ。つまり、奴もここに戻ってきているのか？）

ならば、今のうちに始末することも可能となる。

一人殺すも二人殺すも、今さら大した差ではない。

「生贄の儀式とやらはどこでもできるのか？」

「いいえ、どうやら相応の祭祀場が必要のようですね。そして、間違いなく余人の目につかない場所で行うでしょう。となると——」

「本拠地か……」

確か『女主の神娼殿』とか言ったか。

直接行った事はないが、噂位なら聞いた事がある。

「ええ。実際、二年前大規模な改修工事を行っています。中心となったのは空中庭園なのですが……これがまた奇妙でしてね、依頼する派閥を頻回に変えているのです。つまり、全容を知っているのは、『イシユタル・ファミリア』のみという事ですな」

「それは怪しいな」

だが、分かりやすくいい。

「ええ。そして、次の満月まであと四日です」

「ああ、分かっている」

「……では、最後に。これが『女主の神娼殿』の見取り図です。最新版ではありませんが、空中庭園の位置に関しては間違いないはずですよ」

やれやれ。一体どこまで予見していたのか。

折りたたまれた羊皮紙を受け取りながら、内心で驚嘆の吐息をこぼす。

「オラリオにいるすべての派閥を敵に回す事になりかねませんよ？」

「それがどうかしたか？」

神殺しなど、飽きるほどしてきた。人類への背信も、既に経験している。

それに――

(どのみち、そこまで脅威じゃない)

アノール・ロンド。王城ドラングレイグ。ファランの城塞。深みの大聖堂。

それらに比べれば、地上ここに^敵いる脅威はオツタル一人だけだ。

(ま、神どもがその気にならない限りは、だがな)

椅子と釣竿をソウルに戻して立ち上がる。

(いや、今回は道中の敵を皆殺しとはいかないか)

むしろ、標的以外の殺しは厳禁となる。

流石にそれは経験した事がない戦い方だった。

ならば、念のため針鼠のように武装しておくとしよう。

幸いにして、まだ時間はあるのだから。

3

「あの男を近づけさせるな！　もし近づいてきたなら殺せっ！」

自慢の『魅了』が通じないどころか、傷まで負わされたイシユタルはホームに戻ると

同時にそう檄を飛ばした。

元々『歡樂街』は私達の島だ。ここに^{いる}娼婦の全てが目となり耳となる。

そこに厳戒態勢が敷かれたのだ。いくらあいつでも突入は容易ではない。守りの堅牢さだけなら、「フレイヤ・ファミリア」より上となる。

もちろん、化物揃いのあの派閥なら頭数に物を言わせて蹂躪してくるだろう。

だが、生憎とあいつは一人だ。いくらオツタル並みの化物でも、この数を無視してイシユタルのところまでたどり着けるはずもない。

……加えて言えば、別にそんな義理もない。

私は娼婦で、あいつは客。ただそれだけの関係だ。

(チツ、私も焼きが回ったね……)

いくらあいつでも、行き刷りの女に命を懸けるほど酔狂なはずもない。

それでも、期待している。そんな自分を自覚して、舌打ちした。

あれからもう五日。もし来るならとつくに仕掛けてきているはず。

そして、今日来なければもう意味はない。

(今夜は満月か……)

窓の外を見やり、嘆息した。

おそらく今頃イシユタルも苛立っている事だろう。

何しろ朝から日の光すら届かないほどの大雨が降り続けている。

あと数時間で日没。それまでに止むかどうか。

だが、仮に止まなかったとして一体何になるのか。

あいつが『仕掛けてこない』なら、所詮は一時の幸運に過ぎない。

「夜までに晴れてくれりや、今度はこっちから仕掛けられるようになるな」

いつの間にか近くにあったサミラが言った。

「本気でそう思ってるのかい？」

「あん？」

いや、思っているのだろう。イシユタルも。

(私達の破壊はもう決まってるんだけどね)

どう足掻いても、もはやそれは避けられない。

イシユタルの策が全て完全に成功すれば、あるいは「フレイヤ・ファミリア」を壊滅させる事はできるかもしれない。

だが、クオンに殺される。

どうせイシユタルはあいつも殺そうとするだろう。そして、そのために私達が打って出れば、その隙にあいつはイシユタルを殺す。

それは絶対だ。

「しっかし、分からねえな。『魅了』されかけたのが気に入らないにしたって、ああまで抵抗する事か？ せっかくフレイヤをぶちのめせる好機だったのに」

そりやするだろうさ——と、嘆息して見せる。

「あいつはね。フレイヤが嫌いなんじゃない。神が嫌いなんだよ」

「だから今もLv. 0 だつてか？」

サミラは茶化すように笑う。

それも仕方がない。冒険者——ダンジョンに挑む者にとつて、『神の恩恵』は不可欠

だ。万が一それがなくなれば、世界はモンスター共が跋扈する『古代』に逆戻りする。

子どもが笑えない騒ぎを起こしても許されているのは、究極的にそれが理由だった。

どれだけ傲慢に振舞われたとしても、その力の恩恵を手放す訳にはいかない。

その前提がある限り、例え『神の力』を地上で振るえなくなつていたとしても、人は

神に抗えない。

だが、あいつだけは違う。

『神の恩恵』を持たずとも、Lv. 7に匹敵する、あるいはそれ以上の力を持つあいつだ

けは、神の傲慢さに付き合う必要がない。

クオンは『神の枷』から解放されているのだ。

しかし、子どもも含めて、オラリオにいる多くの者がそれを理解していない。

……それが、どういう意味を持つているのかを。

(だからこうしてあてにしちまつてるんだけどね)

馬鹿げた話だ。

いくらその傲慢さに付き合う必要がないとはいえ、本当に神殺しなどすれば、オラリオの総てを……場合によっては世界の総てを敵に回す事になる。

それ以前に、あいつにとつて私はもう敵だ。その判断において、あいつは容赦がない。イシユタルが『魅了』するための片棒を担いだのだからそれも仕方がない話だった。

そんな娼婦のために世界を敵に回すほど、あいつだつて馬鹿ではないはずだ。

(あのヘツポコ狐が好きで御伽噺にだつて、そんな馬鹿は出てこないからね)

それでも、女々しい希望を捨てきれないのは、一〇日程前——『何者か』による「フレイヤ・ファミリア」襲撃を目撃してしまったからだ。

(あの時の襲撃者……。あいつはクオンじゃない)

姿形だけは瓜二つだったが、それだけだ。

あいつは違う。

『イシユタル・ファミリア』か……』

あいつは私を見てそう言った。

もちろん、あいつが気づいていないとは思っていない。

(ま、互いの身の上話をしなかったのは、確かだけどね)

だが、それは当然の事でしかない。

娼婦の過去など聞いたところで——アマゾネス私達のように好きでやつてる場合を除けば——概ね悲壯なものだ。あえて聞きたがる悪趣味な客がいないわけでもないが、あいつはそういう手合いではない。

そして、客の事情に深入りしないのは娼婦の嗜みだ。客に情を移した娼婦が泣きを見るのはもはや宿命と言つていい。

ちよいと付き合いが深く、そして長くなつてきてはいるが……それでも、基本的には客と娼婦の関係だ。踏み込んだところで、どうなるものでもない。

だが、それでも幾夜となく食らいあつた馴染みの……そして、上得意の客だ。だからこそ、あの一言はいただけない。

(あいつは私を知らなかった)

つまり、あの襲撃者はクオンではない。

それはあまりに単純な結論だった。

(四年前から、あいつを死地に追いやろうと暗躍している誰かがいる)

クオン自身に自覚があるかどうかは知らないが、少なくとも私はそう感じていた。

例えば「ロキ・ファミリア」ともめた時だ。霞の話を聞く限り、あまり『都合よく誤解が積み重なっている。まるで誰かが狙つたかのように。』

(あの時よりも、ずいぶんと直接的だけどね)

だが、それでもいい。

その誰かがクオンとイシユタルをぶつけようとしてくれるなら、この際何でも良かった。

(つたく。情けないったらないね)

要するに私は、その誰かがクオン自身の思惑を無視してここに飛び込ませる事を期待しているのだ。もしその何者かの思惑通りに事が進めば、最悪あいつはオラリオ中の「ファミリア」を敵に回す事になると知っていたとしても。

今や『助け』を求める事すら許されない私には、他に方法はなかった。

(「ファミリア」は血の掟、か……)

もし二年前のあの時に、クオンがいてくれたなら。

あるいは、違う結果になっていただろうか？

(バカバカしい)

吐き捨てて、私は窓辺から立ち去った。

雨は、まだ降り続いてくれている。

……

(天恵だな)

夕暮れの迫る『歓楽街』を一人歩きながら、小さく笑う。

ここはすでに「イシユタル・フアミリア」の縄張りだ。飾り窓に立つ、あるいは路地で客引きする娼婦の全てが——いや、客すらも彼女達の目となり耳となる。

言うまでもない事だが、彼女達の本拠地は『歓楽街』の最奥にある。そして、仮にもオラリ才有数の大派閥を相手にするのだ。魔力とて無駄には使えない。

さらに言えば、当然ながら厳戒態勢が敷かれていた。そんな中を勘付かれずに近づくというのは流石に限界がある。……普段なら。

（勘が鈍っていなくて何よりだ）

放浪者——あてのない旅人にとって、天候は生命を左右する要素の一つだ。

たかが雨などと侮れない。身体から体温と体力を奪い、野営できる場所を制限し、暖をとる、あるいは獣避けのための薪を得難くする。さらに場所によつては滑落を誘発させ、鉄砲水や土砂崩れの原因になり、時には落雷という驚異すら伴うのだ。しかし、干天が続けば今度は飲み水が確保できるかどうかかそのまま生命を左右する。

そんな中で旅を続けていれば、天気の一つ位は読めるようになる。
近々大雨が来る。そんな直感は、こうして見事に正鵠を射ていた。

これこそ、まさに天恵と言えるよう。

この大雨の中では如何に『歓楽街』と言えど客足は鈍り、客引きをする娼婦の数も減る。となれば、包圍網に綻びが生じるのは必然だった。

慌てず、慎重に、そして速やかに目覚めつつある夜の街を進む。

まだ日没までには時間がある。多少の遠回りを惜しむべきではない。

(急ぎすぎてもいけない)

当面の元凶を始末し、『殺生石』とやらを破壊し、祭祀場を焼き払ったとして、生贄の少女——春姫とか言ったか——を放っておいては片手落ちもいいところだ。

どのような決着を迎えるにしても、この一件がオラリオの噂になるのは間違いない。何かの弾みでその少女の情報まで流出したなら、本当にオラリオ中の神とその手下どもを殺し尽くす羽目になる。

いや、覚悟の上だが——それでも、面倒事を避けられる目があるなら、それに越した事はない。

(ウラノスカガネーシャ辺りなら、何とかしてくれると思いたいかな)

そのためには確実にその少女を奪還し、あの二人のどちらか——最悪はヘステイアかヘファイストス、ミアハ辺りでもいいが——に保護させるしかない。

連中なら、少なくとも生贄にはしないはずだ。当面はそれで良しとする。

(保護しようと思うなら——)

まずは少女の所在を知る必要がある……だが、

(去年あたりから遊郭に出ていたらしいが)

しかし、俺が亡者と出会った日からの足取りは不明だという。あの老爺ですら把握していないものを俺が一人で見つけ出せるはずもなかった。

だからこそ、あえて今夜——儀式が行われる満月の夜まで待ったのだ。

何しろ、生贄の儀式が始まる直前なら確実に祭祀場に居合わせている。これ以上確実な瞬間は他にない。

とはいえ、当然ながら危険も伴う。

(雨が上がる前に、祭祀場に到達しなければならぬ)

この風の強さからして、雨はおそらく夜には上がる。

そして、雨が上がり、月が姿を現せば、儀式が行われるのは疑いない。

いや、アン・デイルの話信じると、『砕かれる前』ならまだ問題ないという事になるだろう。だが、そこにどれほどの時間があるのやら。

大体、俺では元に戻す手段も分からない。

(遅くても早くてもいけない)

改めて考えればなかなか厄介な条件だが致し方ない。

おそらくはこれこそがアン・デイル肝煎りの『試練』なのだから。

むしろ、この程度で済んだ事に安堵すべきだろう。

(どんな隠し玉が仕込まれているか知れたものじゃないがな)

デーモンの一団程度ならいっそ安いものだ。この際、深淵の異形どもでもいい。

何しろ可能性で言えばあの亡者が『神の力』アルカナムを解放してくる事だつてあり得るのだ。

そして、もしそうなれば今の俺では苦戦どころでは済むまい。

(仕掛けてからは速攻だな)

一気に祭祀場まで攻め込み、本気を出される前に全てを始末する。

とるべき手段はただそれだけだ。

覚悟を決めると同時、今宵の戦場——『女主の神娼殿』ペーレト・バヒリが視界に入った。

(流星に警備は厳重か……)

だが、構わない。一切心は動じなかった。

当然だ。この程度、在りし日のアノール・ロンドや、ファランの城塞に比べれば取るに足らない。

手頃な場所に身を潜め、仕掛けるべき時を待つ。

雨脚は、ほんの僅かに弱まりつつあった。

……

「春姫を連れてこいだとき」

日没を迎えた頃、やってきたサミラがそう言った。

「私が？」

予想外ではあった。

警備として祭壇周辺に配置されるだろうとは思っていたが……一方で、儀式に立ち会わせはしないだろうとも思っていたからだ。

「ああ。どうせ逆らえやしないだろう？」

「そりゃそうだ」

今さら嘆息も出やしない。

「んじゃ、確かに伝えませ」

言うだけ言うと、サミラはさっさと配置に戻っていった。

何しろ今日はわざわざ『臨時休業』にしてまで、ホームの警備を固めさせている。

Lv. 3以上の戦闘娼婦^{パベラ}は、全員が祭壇に集結。それ以外も完全武装で警備についている。まあ、そうは言っても大半がアマゾネスだ。防具については普段と変わらないが……久方ぶりに『冒険者』の本拠地らしい有様になっている。

いや、『暗黒期』だつてここまで物々しい空気ではなかった。

ここが正念場だ。イシュタルがそう思っている証拠だろう。

(相変わらず悪趣味な奴だね)

通路を抜けて、春姫のいる遊郭に向かう。

いっそ連れて逃げようか——と、思う程度ならできる。

骨の髄まで『魅了』されているとはいえ、フィリア祭のモンスター共のように完全な傀儡になっていく訳でもないのだ。

だが、できない。もちろん、刻まれた恐怖というものもあるが……

(逃げられやしない)

それをすれば、今度は他のアマゾネス達が巻き込まれる。

まだ若い、妹分達が。

春姫と他の連中を天秤にかけさせられている。

それは、忠誠を試されているというよりは、単に玩具にされているだけだ。

「あ、アイシャさん」

部屋に向かうと、春姫はすでに身支度を終えていた。

サンジョウノ・春姫。

金髪碧眼。私から見ても整った顔立ちの少女だ。

その姿は娼婦見習いではなく御伽噺にでてくるお姫様を思わせる——ああいや、実際に良家の子女だったか。

それが娼婦に身をやつし、さらに生贄にされるといふのだから、つくづくこの世は悲劇に満ちているらしい。

「時間だよ」

「……はい」

少しひんやりとした空気が漂ってくるのは、水垢離をしたからか。

風呂だつて好きに使えるのだから、あえて水浴びなどする必要もないだろうに。

「……………」

春姫を連れて、来た道を引き返す。

元々辛気臭い小娘だが、今日は輪をかけて静かだ。

まあ、それも当然か。これで陽気だったら、ついに狂ったと思うところだ。

「物々しいですね」

本拠地を半ば過ぎたあたり——自身が『死ぬ』事になる祭壇まであと半分と言ったところで、不意に春姫が呟いた。

「まあね」

この時間に嬌声の一つも聞こえてこないのは、確かに違和感を覚えた。それどころか、このヘツポコにも伝わる程度には殺気立っている。

「アイシャさん。今までお世話になりました」

祭壇のある空中庭園。そこに続く扉の前で、春姫は小さく微笑んだ。

いや、少なくともそうしようとした。

差し迫る『死』を前に、唇は青ざめているし、体は小さく震えている。

「あの、どうか他の皆さんにも……」

名目上は臨時休業だ。普通の娼婦は本拠地ホキムに一人もいない。

迂闊に巻き込まれて『商売道具』に傷がついては値が下がるからだ。

「ああ。伝えとくよ」

娼婦に身をやつし——と、言つても、正しくは娼婦見習いでしかない。

いや、見習いですらないか。

今年から客が割り当てられるようにはなつたが……客の裸——しかも上半身だけ——を見た途端に卒倒するという驚異のヘツポコぶりを発揮し続けている。

何と未だに処女なのだから、そのヘツポコぶりも極まっている。

(ま、どうせ元々そっち側では期待されちゃいなかったんだらうけどね)

何しろ、今ではこのヘツポコが卒倒した後に、担当者が客を相手する体制が敷かれている。

私自身もそれを担当する一人だ。

元々世話役を押し付けられているので、当然と言えば当然だった。

もちろん、本人は全く自覚がない。どうやら卒倒している間に淫夢——いや、『悪夢』を見ているらしく、それが現実だと思ひ込んでいる。

未だ処女というのも含めて、私達担当者の中では有名な話だが、未だに春姫自身はそれを知

らない。

(それも今日までだけどね)

おそらく、あと数時間もすればそうなる。

雨脚は確実に弱まっていた。

(いつそ教えてやろうか)

未だ純潔だという事を。最後の手向けになるかも知れない。

それとも、信じないだろうか。

「そ、それと。これからも、どうか……」

「当たり前だろう。あんたは切り札になるんだからね」

このまま「フレイヤ・ファミリア」とやりあうにしても、クオンと敵対するにしても、『殺生石』の——いや、春姫の力は切り札となり得る。

(……いや、そうでもないか)

クオンが敵なら保険が精々か。

何しろ、あいつはあの【**猛者**】おっじゃに深手を負わせられる怪物だ。

そこにきてLv. が一つ上がったからどうなるものでもない。

そして、ついに空中庭園にたどり着いた。

「遅かったねえ。こっちに来なあ〜」

カエルのモンスターじみた大女——団長のフリユネが手招く。

そこはイシユタルのすぐ近く。祭壇脇であり、陣形の最奥だ。

つまり、外側からも内側からも一番突破しがたい場所だ。

「チツ、早く雨が上がらないかねえ。水も滴るいい女にも限度があるよお」

フリユネが毒づく。

ヒキガエル並みの容姿のくせに、この女は本気で自分を美女だと思っている。

まあ、本人にすればそれが幸せだろう。

……ただ、娼婦としては致命的だった。客から見た場合は特に。

それすら気にしない凶太さだけは——あるいはその妄信は——ある意味尊敬に値する。

「つーか、大げさすぎんじゃねえか？」

春姫がイシユタルの傍に連れていかれるのと入れ替わりに、サミラが近づいてくる。

「こんだけ守りを固めてあれば、いくらイレギュラー【正体不明】でも来るわけねえだろ。春姫と顔見

知りつてわけでもないんだしよ」

「さあね」

気のない返事を返しておく。

ひよつとしたら知っているのかもしれない。そう思わないでもなかった。

少なくとも『殺生石』については知っていた。おそらく、裏で糸を引いている何者かの入れ知恵だろう。それなら、春姫を知っていても驚きはしない。

もつとも、それが来る理由になるかどうかは別の話だが。

(ダメか……)

驟雨だったものは、すでに小雨に変わっていた。

薄くなった雲の向こう側に月の明かりが透けて見える。

満月がその姿を現すまで、もう時間はない。

(そりゃ、来るわけないね)

ああ、それでも――

「なッ?!」

その時、突如として爆音が響き渡った。

一度ではない。数回に渡り、連続してだ。

「何事だいいゝ?!」

本拠地が騒然となるのが、この空中庭園にまで伝わってくる。

何事もクソもあるか。

(あんの馬鹿が……ッ!)

そこまでか。あの馬鹿は。

「何笑ってんだいい、アイシヤあ〜」

「これが笑わずにいられるかい」

「どうやら、私は笑っているらしい。」

「馬鹿が来たのさ。飛び切りのね」

「まったく救い難い。一体何を考えているのやら。」

「ああ、だけど——」

（これで私達は終わりだね）

今宵、この淫都は燃え落ちる。

4

「……………」

ふと思い立って「見えない体」の詠唱を中断した。

本拠地に戻り込むのだ。その程度の小細工がいつまでも通じる訳もない。

（そうだな）

せつかくの殴り込みだ。どうせなら、派手にいくとしよう。

城と見紛うばかりの巨大な娼館を見上げ、小さく笑みを浮かべた。

「止まりな。今日は休みだよ」

近づくと、門番らしきアマゾネスが怪訝そうな目で言う。

「いえ、待つて。黒衣に大剣つて——」

もう一人が慌てた様子で身構えるが、もう遅い。

「今日は、じゃないな」

火を宿した左手を構える。

「こいつ、【イレギュラー正体不明】——！」

「今日で閉店だ」

特大の火球が、閉ざされた鉄柵を蒸発させ、石畳を溶岩に変え——さらに、『神娼殿』の名にふさわしい立派な大扉を吹き飛ばした。

曰く【混沌の大火球】。

イザリスとその娘たち——そして、彼女達の王国を焼き滅ぼした『混沌の炎』を司る大呪術。俺が持つ切り札の一つである。

「ひっ……！」

ソウルが流れ込んでこなかった以上、今の呪術に巻き込まれて死んだ者はいない。

門番二人もその場で腰を抜かしていた。

見れば、まだ若い。新人という事か。

（幸先は良いな）

二人は無視して、一気に神娼殿に突入する。

入り口付近にいた他のアマゾネス達——いや、それ以外の種族も数人混じっているようだったが——も、似たり寄ったりだった。

息を吹き返される前に、さらに内部へと駆け抜ける。

「敵襲だああああ！」

その背を、そんな絶叫だけが追ってきた。

「くそっ！ 先に行かせるなっ！」

「あんた達、ビビってんじゃないよ!!」

流石に、立て直しは早い。

すぐさま行く手に複数の女戦士が立ちはだかる。

半裸の美女に囲まれているというのに、全くさっぱり嬉しくない。

（ああ、これはあれだ）

王城ドラングレイグで、『ガーゴイル』に強襲され、慌てて逃げ込んだ先で『砂の魔術師』達が熱烈に出迎えてくれた時と同じだった。

ああいや、あの魔女達ほどの火力を持っていないだけまだマシか。

ともあれ、まとめて斧槍で薙ぎ払う。無論、刃は使わない。いわゆる『峰打ち』だ。あるいは、『石突き』側で突くか。いずれにしても死なない程度に加減している。

今のところ、上手くいつている。少なくとも、ソウルは流れ込んでこない。しかし、そうなると――

「囲め！ 奥に行かせるな!!」

回復薬一つであっさり戦線に復活してくるわけだ。

……倒したはずの敵が次々蘇っては背後から迫りくる様は、どうにもロードランの地下墓地を思い出させた。

(気が滅入るな)

何も知らずに迷い込んで、は訳も分からないまま囲まれ、そのまま術もなく惨殺された恐怖と絶望感は、それから結構長い間尾を引いた。

左手に火を宿し、鮮烈な物語を口ずさむ。

その名を「雷の槍」。太陽の戦士達が操る奇跡。

左手に生じたその『槍』を床に向けて投げつける。

竜狩りの神話が元となっている奇跡だ。背後の床を崩落させるくらいは容易い。

〔雷の杭〕が使えればなおいいんだがな……〕

今の俺では少々力が足りない。

「くそっ!」

まあ、代用できたのだから、ひとまずはそれでいいか。

それなりに大きな穴が行く手を阻む。これでひとまず背中への心配はしなくていい。飛び越えるにはそれなりの手間がかかる。その分、迎撃もしやすい。

「くたばれ！」

とはいえ、そこは相手もさるもの。

上階から縄を使い、窓を突き破って襲撃してきた。

いやはや、豪快な事だ。伊達にアイシヤの同僚ではないという事か。

「――」

そのままごく短い物語を口ずさむ。

その名を「フォース」。相変わらず、使い方さえ考えれば便利な奇跡だ。

「何っ!？」

放たれた衝撃波が彼女達をもう一度壁際に追い返す。

その隙に間合いを詰め、まとめて斧槍で殴り倒した。

「つとー！」

ついでに、そのまま窓の外に落ちそうになった戦闘娼婦^{バトル}をウィップで絡めとって引き

ずり戻してやる。

普段ならまだしも、昏倒した状態では受け身もとれまい。念には念を入れておくべき

だ。

（まったく、我ながら面倒な事を始めたものだ……）

殺さない戦いというのは思った以上に厄介だった。

しかも、相手は容易く命を落とすただの生者ときている。

（いつまで意地を張っていられる事やら）

何より厄介なのは、数が多い事だ。

この状況で数を減らせないというのは最悪の状況である。

（まだ半分と言ったところか）

ここ数日、穴が開くほど眺めた見取り図を脳裏に思い描く。

目的地の空中庭園まで、あと半分と言ったところだ。

（思ったより時間がかかるな）

少し急がなくては、月が出るまでに間に合わない。

この期に及んで間に合わないというのはあまりに間抜けすぎた。

「がっ?!」

死角から、気配を殺して近づいてきた獣人——と言っても、やはり戦闘娼婦^{バトルベラ}なのだろうが——の鼻先に盾を叩き付け、先手を強引に奪い取る。

その獣人の鳩尾を斧槍の石突きで打ち抜いてから、なげなしの『黒い火炎壺』を近く

の扉に投げつけた。

「ああっ!？」

本来ならここで挟撃するつもりだったのだろう。

扉の前に陣取っていたらしい数人が爆発に巻きこまれて倒れた。

何しろ加減の利かない武器だ。使用するには若干ならず不安はあったが……ソウルが流れ込んでこない以上は死んでいないはずだ。

「くそっ!」

とはいえ、安堵している暇はない。

爆発に巻き込まれなかった数人の戦闘娼婦^{バーベラ}達が、慌てて飛び出してきた。

流石に通路が狭い。武器を直剣に切り替えて迎撃する。

「しまった!？」

室内用の短槍の柄を両断してから、直剣の柄頭でこめかみを抉る。

駆け出しの頃に『直剣の柄』で戦った経験がこんな形で生きてくるとは思わなかったが、この際良しとしておこう。

(この戦い方もいつか役に立つのか?)

シャクテイのところまでバイトでも始めれば役立つかもしれない。

人間が相手なら、今の状況と大差ない事態に陥るのは明らかなのだから。

「剣闘士の間際で……っ！」

白目をむいて昏倒するそのエルフ——まさかエルフの戦闘娼婦までいるとは驚きだ——が倒れこむ前に、両手にナイフを構えたアマゾネスが斬りかかってくる。

少し近づかれすぎた。両手の武器を消し、素手——と、言つても手甲はつけたまままだ——でそれを迎え撃つ。

理屈としては普段と変わらない。

最初に振り下ろされた側の腕を『受け流し』して強引に隙を生み出し、その隙に拳で鳩尾を貫く。それだけだ。

(これじゃ拳闘士だな)

苦笑しながら、左手に火を宿す。

口ずさむ物語の名を「放つフォース」。カタリナの騎士達が得意とする奇跡だ。

狙いは、扉を吹き飛ばした室内。爆発の影響から立ち直りかけている残りの戦闘娼婦達に向けて、球状の衝撃波を射出する。

同系統の「フォース」と違い、衝撃波そのものにもダメージを伴う。さらに、着弾と同時に破裂し、更なる衝撃波をまき散らすという代物だ。

威力を加減しても、息を吹き返ししかけた生者をもう一度昏倒させる程度は容易い。

「……うちにいたぞー！」

やはり本拠地というだけある。敵はまるで尽きる事を知らないようだ。

(そんなはずもないがな)

馬鹿げた妄想を鼻で笑い、素早く詠唱を行う。

曰く【ソウルの閃光】。巨大な魔力の輝きが行く手を遮る戦闘娼婦達をまとめて飲み込んだ。……とはいえ、威力はだいぶ加減している。

本来であれば、敵の悉くを撃ち貫き、消し飛ばす大魔術だが——流石にこれでは形無しか。

踏みとどまったらしい数人を大剣の『腹』でまとめて薙ぎ倒して駆け抜けると、ちよつとした広場に飛び出していった。

「弓隊撃てえー！」

同時、号令の声をかき消すように弓弦が震える音が重なり合う。

「——ッ！」

とつさに盾を構えるが、流石に無傷とはいかなかった。

右の太股に突き刺さる。それを見て射手達が歓声を上げた。

「何っ!?!」

確かに生者であれば、嫌でも戦闘能力は落ちただろう。

だが、生憎とこちらは不死人だ。足を射抜かれたせいで動けなくなるような『人間ら

しき』はすでに残っていない。それどころか、ソウルさえ奪われないなら、脳天を射抜かれたところで構わず戦闘を続行できる。

「何で動けるのよ……!」

不死人だからだ。

例え腸はらわたをたれ流そうが、脳漿をまき散らそうが、その体にソウルが留まっている限り戦い続けられる。俺達不死人とはそういう怪物なのだ。

だからこそ、忌み嫌われている。

(慣れれば悪くないがな)

そう思うようになった時点で、俺は完全に人間ではなくなつたに違いない。

さらに何カ所かを矢で抉られ、あるいは貫かれながら自嘲する。

……こんな姿を見れば、普通は誰だつてああはなりたくないと思うだろう。

そう思わなくなつた時点で、俺は完全に不死人という存在になつたのだ。

(だが、それはいつの事だつた?)

弓の間合いを強引に踏破しながら、自問する。

多くの人間が抱く不死人への嫌悪を、俺は抱いた事があつただろうか。

この身に『ダークリング』が浮かんだ時ですら、俺は絶望を覚えた気がしない。

「化物が……!」

まあ、その通りだろう。

ただ、我が友ソラールや、呪術師ラレンティウスも概ね『気にしなかった』というよ
うな意味の言葉を口にしていたはずだ。

ならば、俺だけが異端ではない。……彼らの言葉は、強がりだったのかもしれないが。
手早く弓兵達を叩き伏せてから、太腿に刺さる矢を引き抜く。

「
」
そのまま黒弓に番えて、弓弦を引き絞った。

「うわ!」

その矢は物陰に身を潜め、強かに好機を狙っていたアマゾネスの右足を射抜いた。

それで、彼女の戦闘能力はほぼ失われる。

(ま、これがまっとうな生者だな)

近づき、盾で殴って昏倒させてから嘆息した。

ああ、まったく。

「ああクソ……」

一体何をやっているのか——と、場違いな疑問が胸中に浮かぶ。

今さら一人で神を目の敵にしたところで何がどうなる訳でもない。

ここは『神の枷』を甘受して——それどころか、自分達から隷属を選び、枷からの解

放を目指した英雄達を殺し、追放した連中の末裔達の街だ。

俺一人が神を目の敵にしたところでどうなるものでもない。

いや、気に食わないなら、さっさと最下層にでも行けばいい。四年前ならまだしも、篝火を得た今なら、例え幾度殺されようと足を止める理由はないのだ。

(ベルが最下層に到達できるようになるまで、本当に待つつもりか?)

それまでに、こんな馬鹿げた騒ぎがあと何回繰り返されるのか。

その度にこうやって殺し合うつもりか。

「いたぞー！ 困めえええええええー！」

……まったく、戦場で考え込むような事ではない。

(こんな様だから、アン・デイルがこんな茶番を用意するんだ)

凝ったままのソウルに舌打ちする。

いや、違うか。アン・デイルがちよっかいを出してくるのは単にソウルが凝っているからではない。

……まあ、そんな事は自分が一番自覚している事だった。

……

店に設えられたマスター自慢の大型自動琴オルゴールが、哀切ある音色を奏でていた。

物憂げながらもどこか懐かしいその調べを聞きながら、グラスの中の氷を回す。

「雨、上がってきたみたいね」

「ああ、そうだな」

朝靄が消えるのを見計らって降り始めた大雨のおかげで、今日はすっかり開店休業だった。

すっかり馴染んだ店には、お世話になっている気のいいドワーフと二人きり。

オラリオ生まれ、オラリオ育ちのハーフエルフにとつてはドワーフだからどうというものでもない。

エルフにだつてろくでもないのはいるし、ドワーフにだつていい人はいる。

それを種族生まれで括つて論じる事に意味を感じた事はなかった。

「今夜が満月、だったな」

「ええ。今頃は、もう仕掛けているんじゃない？」

一昨日の夜、久しぶりに見かけ——夜を共にした相棒の話の思い返す。

『『歓楽街』の最後、か。関わっているのがクオンでなければ……それと、トマスさんから話をきいていなければ、とても信じられんな』

いや、今でも実感が湧かんが——と、マスターは呟く。

「あら、ひよつとして馴染みの子でもいるのかしら？」

「からかうなよ。生憎と私はクオンのように女慣れしていなくてね。おかげで未だに嫁

さんもおらん」

それどころか、世話のかかる娘の方が先にできたよ——と、彼は軽やかに笑った。

「どこかにいい人がいればいいんだけどねー」

それこそ、何だかあちこちに知り合いがいるらしいトマスお爺さんにでも相談してみようかしら——と、胸中で呟く。

「それにしても、止めなくて良かったのか？」

丹念にグラスを磨く手を止めて、マスターが言った。

「クオンを？」

「ああ。四年前の表には出てこれない連中とは違う。文句なく大派閥の一つ……それも文字通り一つの『街』の支配者が相手なんだぞ？」

『街』の支配者と事を構えるのは、これが初めてじゃないわよ」

四年前、まだ彼と出会って精々二カ月程しかたっていないかった頃。

私達はいくつかの派閥と——正しくは、それを飼っていた貴族と対峙した。神様の次の次くらいには厄介な相手である。

「まあ、そりやそうだろうが……」

手に持っていたグラスを置き、マスターが嘆息する。

「大体、止められると思う？」

「お前なら止められたんじゃないか？」

「無理よ。だって、アイシヤが絡んでるんだもの」

もう四年も付き合いが続く、気の置けない友人を思い浮かべる。

まあ、確かに言われてみればちようど二年位前からこの店に来る数も減っていた。

幹部になったから——と、本人は言っていたけれど……。

(まあ、相談されても力にはなつてあげられなかつたでしょうけど)

いくら魔法が使えても、それだけだ。

あいつのように神様たちの度肝を抜くような力はない。

不満はあるけど——相談して欲しかったというのは単なる感情論だ。

「おや、ずいぶんと弱気じゃないか」

「あら、あの女たらしを独占できる訳ないじゃない？」

からかうように笑うマスターに、私も冗談——ではないけれど——を返した。

「まあ、相変わらず世話の焼ける二人よ。あいつらは」

グラスを置き、大きく背伸びをする。大雨のせいかな、何だか陰鬱な雰囲気が続いてい

た。

マスターに断つて、オルゴール自動琴の円盤を変えた。

今までの哀切な音色から一転して、軽快な音色が店内を満たす。

(アイシャも、クオンが帰ってきているのを知っているんだからさつきと泣きつけば良かったのに)

とはいえ、あの女傑が泣きつく姿はちよつと想像できないのは確かだ。

……まあ、夜だとあれで結構可愛いところがあつたりする訳だけど。

と、それはともかく。

あいつなら、嫌な顔一つせず……余計な事を聞きもせず、二つ返事で頷くのは知っているくせに。

そうすればここまで事には——うん、多分ならなかつたはず。きつと。イシユタル様が素直に話を聞いてくれさえすれば。

「クオンの奴もかい？」

椅子に戻ると、マスターが言った。

「ええ、そうよ。あいつは時々面倒くさいの」

溶けた氷で薄まったお酒を一気に飲み干す。

「どうせ腹は決まつてるくせに、うだうだ悩んでいるふりをしてるのよ」

アイシャと出会つた頃——続く抗争の中で、半端に記憶を取り戻し、一番荒んでいた頃の方がある意味扱いやすかつたかもしれない。

あの頃は自分を削り落とす危うさと、剣の切っ先より死に近い剣闘士の謳い文句を地で行く血腥さ。そして、

何より諦めの悪い男の荒々しさと強靱さがあつた。

(ま、それを鎮めちゃつたのはある意味アイシヤなんだけど)

憎悪の対象だつた冒険者と情を交わした事実は、良くも悪くもあいつに影響を与えた。

荒々しさ——殺戮へと誘う狂気を取り去り、身を焦がす憎悪を鎮めた。

そうでもなければ、今頃はオラリオ中に死体の山ができているところだ。

それくらい、あの頃のあいつは荒んでいた。

(そう言えば、そういう御伽噺を聞いた事があつたわね)

いや、英雄譚だつたか。

聖娼シヤハート。

猛り狂い暴れる英雄を鎮めた、知られざる英雄の語られざる偉業。

娼婦を中核に据えるという珍しい物語だつたので、今も記憶に残っている、

(ま、アイシヤは聖娼つて柄じゃないけどねー)

……彼女自身にその気があつたとはとても思えない。

剛胆かつ色欲に忠実なアマゾネスを思い出して苦笑した。

彼女もまた神聖さよりも野性が似合う。

ああ、それにしても——

「あーもー。妬けるわねー!」

マスターにお代わりを要求しながら、足をばたつかせる。

悪い魔女めがみに囚われたヒロインを、我が身の危険も顧みず助けに行くとか、一体どこの英雄譚なのか。

「大体、他の女を助けに行くのに、私に尻を蹴らさせるんじゃないわよバカー!!」

「ハハハッ。それは選んだ相手が悪かったな」

「マスターまでアイシヤ達と同じこと言わないでよ」

むくれて見せる。……けど、私も他人事なら同じように思っただろう。

流石にそれは否定できない。

「ところで霞。アイシヤの心配はしていないようだな?」

拗ねたふりをしてしていると、マスターが表情を改めて問いかけてくる。

「する必要があると思う?」

新しく注がれたお酒に口をつけた。

「私自慢の剣闘士が助けに行つたのよ?」

燻っているふりをしていても、本当に火が消えてしまっているわけではない。

「あいつが生贄を求める悪い魔女めがみになんて負けるはずがないじゃない?」

例え立ちはだかる相手が神だろうが、迷宮神聖譚ダンジョン・オラトリアに名高い大英雄アルバートだろう

が、あるいは彼と双壁をなして語られる狼騎士アルトリウスだったとしても負けるものか。

誰も知らない不屈の英雄は、今も健在なのだから。

……

人間、やはり慣れない事はすべきではないらしい。

ひとまず誰も殺さずにここまで来たが……おかげで予想より時間がかかった。

ついでに言えば、決して少くない手傷を負っている。

(とはいえ……)

頬を伝う血を適当に拭い、エストを煽ってから胸中で呟く。

(おかげで、体がほぐれてきたな)

もつとも、ソウルの凝りは相変わらずだが。

とはいえ、オラリオで目覚めてから、ある意味最も丁寧に戦ってきたおかげか、錆びついていた勘が戻ってきた。

(これで最低限の義理は果たしたか?)

アン・デールへの、だ。

ここから先は、余計な事は考えない。

この先に待つのは神だ。油断すれば、あっさり殺される。

「続けて灰瓶を煽つてから、とある物語を口ずさみ歩く。

程なく、祭祀場があるはずの空中庭園に続く大扉が見えてきた。

そして――

「前衛^{ウォール}壁役^ルども、気合い入れな！」

その前に陣取り、揃つて詠唱を開始する戦闘^{バトル}媚婦^{ペラ}達の姿がそこにあつた。

どうやら、ここに来るまで派手に暴れすぎたらしい。

向こうも自分の棲み処への損傷を気にしなくなつたようだ。

ひとまずは殺到する前衛を迎え撃つ。可能な限り手早く片を付けたが、流石に詠唱が

完成する方が早かつた。

「――」

右手に《オーマの大盾》。左手に《レーヴの大盾》。左右一対として使用される事を前提としたその大盾を構える。

「撃てええええええっ！」

その特殊な形状は二つの大盾を城門に変え『固く閉ざす』事を可能とした。

そして、両足に全力を注ぎこむ。

踏みとどまるためではない。

そのまま突撃するためだ。

堅牢な守りに物を言わせ、炸裂する魔法の中を強引に走破する。

そして、そのまま戦闘娼婦達に突撃した。

「正気かお前ええっ!?!」

(余計な世話だ)

正気かどうかなど知った事か。

そして、正しいかどうか関係ない。

理由が何であれ、ここでアイシヤ達を見捨てられるようなら——

(あの時、俺は火など継いでいない!)

最後の逡巡を投げ捨て、在りし日の傲慢さを蘇らせる。

身勝手なのはお互い様だ。

自らの時代を存続させるため、人間を謀り薪とした神々も。

自らの願いのためにそれに便乗し、火継ぎを完成させ——その後蘇っては、それを終わらせた俺自身も。

そして、勝手と勝手の殺し合いなら——

(あとは生き残った方が全てだ)

激突し逆巻く余波が盾の裏側にまで吹き込んでくる。

それを黒衣越しに感じながら、逃げ遅れた数人を突き飛ばし、守りを解いた。

「ひるむな！ 武器を取り出す前に——」

いや、武器なら既に持っている。

堅固かつ重量のある大盾は、そのまま鈍器となる。

「ぐおっ!？」

事実、この大盾を愛用した騎士達は武器を持たず、盾だけで敵を叩き潰したのだから。

その蛮行を、今ここで再現してやるとしよう。

……

(チツ、風が強くなってきたね……)

夜目にも雲が流れていくのが見える。

もはや雨は上がった。あと数分もすれば、月が姿を現すはずだ。

「まだ殺せないのか?!」

イシユタルの怒声が飛ぶ。

ホームから響く破壊音は途切れる事はなく、それどころかもはや震動すら感じさせる

ほどに近づいてきている。

「チッ！ 春姫、こちらに来い！」

「は、はいー！」

未だ状況を分かっていない春姫が、祭壇から降りる。

「アイシヤ、お前もだ！」

イシユタルの座る大椅子の脇に、春姫と並ぶ。

「フリユネ、分かっているだろうな？」

「分かっているよお、イシユタル様あ」

フリユネの指示で、私達を中心に陣形が組まれていく。

「おいおい、本気かよ……？」

サミラの顔から余裕が消えて久しい。

陣形こそ整然と保っているが、動揺までは覆い隠せていない。

「ええい、うろたえるな！ あの女神を仕留める前の前哨戦だ！」

イシユタルが檄を飛ばすが、あまり効果はない。

そもそもイシユタルの対「フレイヤ・ファミア」戦略は、こちらから仕掛ける事が

大前提となっている。向こうから仕掛けられたなら、「フレイヤ・ファミア」にすら私

達は勝てない。

（オツタルを降せる化物だよ、あいつは）

これは前哨戦などではない。

もし、この戦いを勝ち抜けるなら「フレリア・ファミリア」と真つ向からやりあつても勝てる。

しかし、現実にはそうではない。だから、この結末は必然だった。

「あ、あのアイシャさん……」

この場を満たすただならぬ気配に、春姫が今さら不安そうな顔をした。

「アンタって奴は最後の最後で悪運がいいのかもね」

娼婦になつても純潔を失わず、生贄になつても命を失わない。

このヘツポコ狐は、案外そういう星の元に生まれているのかもしれない。

「飛び切りの大馬鹿が、後先考えずに余計なおせっかいを焼きに来ているのさ」

「お、おせっかいでございますか？ アイシャさんのお知り合いが……？」

「理由なんて聞くんじゃないよ。私にも分からないかね」

ああ、いや気に入らないだけか。神の思い通りになる事が。

「傲慢で、荒々しく、強い。雄つてのはそういう生き物なのさ」

これだから、交わるのが止められない。

約束された破滅を前にしてなお、こうして血が滾るのだから。

そうこうしている間に、いよいよ死神の足音は近づいてくる。

この空中庭園に繋がる大扉の向こう側で、最後の防衛班の悲鳴が響く。

そして、大扉が吹き飛んだ。

「よう、いい夜だな」

漆黒の長衣を着込み、無造作に大剣を担いだ男が一人、小さく帯電する扉の残骸を踏み砕きながら、平然と祭壇に近づいてくる。

追ってくる者は、一人もいない。最後の防衛班も全滅だった。

（つくづくこの男は……）

たった一人で、この神娼殿を踏破してきやがった。

ああ、まったく。

こいつを『アッシュ・オブ・シンダー灰色の悪夢』と最初に呼んだ奴は先見性がありすぎる。

「化物が……！」

「そいつはお互い様だな」

毒づいたイシユタルを、クオンは鼻で笑った。

「お前たち、時間を稼ぎなあ！」

フリユネの号令に、サミラ達が身構える。

そして、全滅するのだろう。

（さて、私も最後の戦いと洒落こもうか）

愛用の大朴刀を担ぎ、一步踏み出そうとして、

「アイシヤ。お前は行かなくていい。そこにおれ
イシユタルがそう言った。

「はあ？」

まさかフリユネだけでどうにかなるとこの期に及んで思っているのか。
だとしたら、相当に追い詰められている。

とはいえ、逆らえるはずもない。

「さて、イシユタル。この提案は俺からの最後の善意だ」

身構えるサミラ達などまるで見えていないかのように、クオンは近づいてくる。

そして、大きな布袋を放り投げてよこした。

「アイシヤ・ベルカ……と、サンジョウウノ・春姫とかいう娘を身請けしたい。代金は二人
で合計二億ヴァリス。即金で払おう」

やたらと重い音がすると思ったら、ずいぶんと大金が詰まっているらしい。

そんな額をポンと払えるとは。

(どうりでいつでも私の一晚を買い取るわけだ)

投げられた衝撃で口紐が緩み、中からヴァリス金貨がこぼれている。

それを見やって、思わず驚嘆した。

(そーいや、七〇階層だかまで行ってるだったね)

正直、あまり信じていなかったが、どうやらこの様子なら本気なのだろう。

「足りないとは言わないだろうか？」

普通なら充分すぎる。

だが、生憎と私達は——特に春姫は普通ではない。

何より、この嫉妬深く尊大な女神が、この状況で命乞いするはずもなかった。

「そういうわけにはいかん」

そして、それが最期の失策となる。

「残念だ」

交渉は当然のように決裂した。

「それなら、仕方がない」

さして気にもせず、クオンもまた大剣を構える。

「力尽くでいただいでいくとしよう」

この期に及んで、クオンは小さく笑った。

「何でも、男が女を連れ去る時は、そうするのが礼儀らしいからな」

ああ、確かに。

『男が女を連れ去る時は、力尽くと決まっているのさ』

いつだったか私は、そいつにそう言った事がある。

「そのソウル諸共、俺が貰い受ける」

相変わらず、変なところで素直な奴だ。

「は——っ」

小さく、サミラが笑った。

「ははははははははははっ！ 身請けに二億?! オレ達をまとめて皆殺しにしてでも?! アイ

シャ、お前一体どんな『食い方』をしたんだ?! あとで教えてくれよ!!」

「そりゃ無理だね。どっちかと言えば、『食われた』方だからね」

肩をすくめてやる。それに、嘘ではない。

寝台の上でもそれ以外でも、この男に勝てた試しがない。

「はっ！ お前がか?! そりゃいいい！」

その笑い声に釣られて、他の連中まで笑い始めた。

「春姫！ 詠唱を始めな！ それくらい時間は稼いでやるからよ！」

まあ、それでこそアマゾネス。それでこそ戦闘娼婦だ。

「アイシャさん……」

「いいから始めな」

その程度の小細工で覆せるような状況では、すでにないのだから。

「——大きくなれ」

春姫の詠唱が始まると同時、役目を終えたと言わんばかりに雨が上がる。

「行くぞ、お前ら！ アイシヤの情夫おとしの味見をしてやろうじゃねえか！」

薄い雲の向こうから差し込む月光の下で、最後の激突が始まった。

…

「そりや無理だね。どつちかと言えば、『食われた』方だからね」

いや、それには異議を唱えたい。

押し売られたのはこちらであり、全ては正当防衛というやつだ。

……まあ、あの時はちょうど中途半端に記憶を取り戻したせいで一番荒んでいた時期だし、諸々世話になったのは認めざるを得ないが。

「行くぞ、お前ら！ アイシヤ情夫おとしの味見をしてやろうじゃねえか！」

まあ、アマゾネスとはこういうものか。それ以外の種族も見られるが——それこそアイシヤの同僚だ。是非もあるまい。

ため息を飲み込んで、最後の挑戦に挑む。

今のところ、不殺を貫けている。とはいえ、今度の相手は精鋭だ。ここまで来てしくじらないよう、慎重に対応しなくてはならない。

┌

苛烈な物語を口ずさむ。

その名を「神の怒り」。圧倒的な破壊力を宿す衝撃波が辺りを蹂躪する。それで、飛び込んできた連中をまとめて迎え撃つ。

「があ——!?!」

最初に飛び込んできた相手の中で、唯一灰色髪の女が踏みとどまった。

加減しすぎたか。それとも、単に彼女が手練れだという事か。

「デメエ……!」

だが、それでどうなるものでもない。

拳で鳩尾を打ち抜く。

「冒険者を舐めんじゃねえ!」

巡礼者を侮らないでもらおうか。

如何に凡庸な不死人とは言え、この程度の相手に後れを取っては、あの時殺した偉大な後輩達に申し訳が立たない。

相手の特攻を躲し、肘でこめかみを抉る。それでようやく、灰色髪の女は昏倒した。

「クソっ!」

武器を特大剣——《呪縛者の特大剣》に切り替える。

無論、その秘めた力を解放するつもりはないが——それでも渾身の力で振り抜けば、ただの生者をまとめて昏倒させるに充分な威力を発揮する。

「囲めー！」

武器を《傭兵の双刀》へ。

包围をすり抜けながら、連続して峰打ちを叩き込む。

流石に精鋭だけあって丈夫だ。一撃では昏倒させられない。

「ウチデノコツチ」

それでも八割ほど叩きのめしたあたりで、金髪の少女が詠唱を完成させた。

ひとまず盾を構える——が、特に何も飛んでこない。

と、なると——

（これが……）

いや、あの少女が——

「ゲツゲツゲツ！——これで終わりさあ！——可愛がつてやるよお」
イレギュラー【正体不明】あ!!」

今までで一番重い戦斧の一撃が襲ってきた。盾で受けつつ、後ろに飛ぶ。

（こいつは——）

そう言えば、イヴァイルス闇派閥と繋がりがあるとか言っていたか。

いったん間合いを開きながら、思わず毒づいていた。

目の前にいるそれは、さしあたって言えば、蛙のデーモンと言ったところか。

いや、アマナの祭壇で出くわした『謳うデーモン』と違って人型だ。ならば、『蛙頭の

デーモン』とでも呼んだ方がいいのかもしれない。

「遠慮する事はないよお！ アイシヤなんかよりも、私の方がいい女だからねえ！」

……どうやら、デーモンの美意識は人間と著しく乖離しているらしい。

別に他人の好みにケチをつける趣味はないが、相互理解には極めて困難を伴いそう
だ。

嘆息しながら、迫る戦斧を『受け流し』してやる。

最初の一撃を受けた時点で、把握していた。

目の前のデーモンは、今まで出くわした中で飛び抜けて非力だ。

ならば、何の問題もない。

「なあ!？」

あっさりと体勢を崩し、無防備になったその胴体にクレイモアを突き立てる。

いくら不殺とは言え、デーモンは埒外だ。

「ゴフ——ッ!? あ、あんたあ……!？」

どこぞの禿丸風に言えばノーカウントというやつである。

「フリユネが、一撃だと!？」

「春姫の魔法があるんだぞ!？」

「バカな！ 今のあいつはL v. 6相当なんだぞ!？」

まあ、そんなものか。

せめてオツタル並みの膂力があれば話はまた変わっただろうが。

軽く蹴飛ばして、剣を引き抜く。

その時点で、前座は半ば終わっていた。

切り札だったらしいデーモンを潰され、完全に浮足立った残りの連中を叩きのめすのは、さしたる手間ではなかったのだから。

「さあ、そろそろ決着をつけようか」

残りは、神一人。

どれほどのものだろうか。

(女神イシユタル。愛と美の女神。豊穰の女神。そして、戦いの女神、だったな)

戦いの女神ともなれば、どれほど低く見積もっても銀騎士以上の力はあるう。

まさか竜狩りの戦神である無名の王やオーンスタイン程ではないとは思いたいが一

(その半分でも、今の俺には手に余る)

忘れてはいけない。勘違いしてはいけない。

この神どもは『神の力』アルカナムを失っているわけではない。ただ封じているだけだ。なりふり構わないなら、いつでもその力を振るえる。

だからこそ、本気を出される前に始末しなければならぬ。

「バカな！ 今のあいつはLv. 6相当なんだぞ！」

今さら取り乱す団員に、思わず嘆息していた。

（ああ、いや。分かってたけどね）

クオンがオツタルと互角だという話は、言うほどには信じられていない事くらい。

四年前の決闘は「古王」^{スルト}の乱入によって有耶無耶になった。

だが、あのまま続けていれば、何だかんだ言つて最後にはやはりオツタルが勝つていただろうというのが、オラリオに住む多くの者達の見解だった。

それほどに「猛者」^{おうじや}の武名は圧倒的であり……そして、クオンがこの街にいた時間は短すぎた。

その結果、凄腕のLv. 6相当という過小な評価が定着して……いや、それこそ場合によってはあの決闘自体が八百長だったと決めつけている奴らすらいる。

それは私達も同じだ。

オツタルを上回る相手はいない。誰もがそう思い込んでいたはずだ。

……あるいは、イシユタルまでもが。

「さあ、そろそろ決着をつけようか」

そして、残る戦闘娼婦は私一人になった。

大朴刀を構えて、前に出る。

「お前もやる気か？」

「当然だろう？」【ファミリア】は血の掟だ。それに、今さら私一人だけ生き残るつても筋が通らない」

まあ、最期の相手がこの怪物なら申し分ない。

精々派手に戦って死ぬとしよう——と、その覚悟を嘲笑うように、

「待て、アイシャ」

イシユタルが、私の名を呼んだ。

「私が、お前を勝たせてやろう」

「はあ？」

焦りを滲ませつつ、それでもしぶとく笑みを浮かべる主神を見やる。

ついにとち狂ったか。この状況で、どこをどう捻ればそんな言葉が出てくる？

いや——

「分かっているな、アイシャ。お前が『人質』だ！」

骨の髄までしみ込んだ『魅了』が、その神意を正確に読み解く。

抗うなど考えもできないまま、私は愛用の大朴刀を自分の首筋に添わせていた。

「動くなよ？ こいつは私には絶対に逆らえない。少しでも妙な真似をしたら、自分の首を落とす」

イシユタルが狂気と紙一重の笑みを浮かべた。

「ば、馬鹿かあんたは!?!」

こんなものが通じる訳がない。あまりに馬鹿げている。

敵の命を盾にしたところで何の意味もない。

どうせ死ぬなら、せめて強敵と戦って果てたいというのに。

しかし、主神の命令には逆らえない。逆らおうと思うだけで手足が震える。しかし、神命によって倒れる事すらできない。だが――

「武器を捨てろ! イレギュラー【正体不明】!!」

狂っているというなら、クオンも同じだった。

あろう事か、主神の言葉にに応じて、手にした剣を放り投げやがった。

続けて、盾も。さらに両手を上げて見せる。

「ほう？ 言ってみるものだな。アイシャ、よく誑し込んだものだ」

あつきりと床に突き立った大剣を見やり、イシユタルが余裕を取り戻す。

「チィ!?!」

狂っているというなら、私も同じだ。

命令には逆らえない。棒立ちのクオンに向けて大朴刀を構え、一気に突進する。

クオンはと言えば、振り下ろす直前、一歩前へと踏み出してくるだけだ。どんな剣であれ、根元の方が斬りづらい。だが、その程度でどうなるものでもない。

「コンの大馬鹿があああああつ！」

ズンツ——！

会心の踏み込みと共に放たれたその斬撃は、充分すぎる手ごたえと共に左肩から右脇腹のまで斬り裂いていた。

……もちろん、間にあるはずの心臓諸共に。

……

勝算は、当然あつた。

「コンの大馬鹿があああああつ！」

余計な世話だ。そして、今のお前に馬鹿呼ばわりされる筋合いはない。

一体どうした。お前は悲劇のヒロインなど素直に演じる柄ではないだろうが。

だが、文句は後だ。

(アイシヤは『暗い穴』を穿たれていない)

そして、『ソウルの業』を知らない。

ならば——

(俺達を簡単には殺せない——！)

次の瞬間。袈裟斬りに、半ば両断されかかっていた。

確実に心臓は両断されている。相変わらずいい腕だ。

凄惨な光景に、金髪の少女——おそらく生贄の狐人——が卒倒するのが見えた。

どうやら、思った以上に擦れていないらしい。

「——ッ！」

痛みというよりは喪失感。その刹那、血に混ざってソウルが体外に流れ出ようとする。

だが、踏みとどまった。あらかじめ施しておいた『保険』すら発動していない。

「クククッ！ ハハハハハハハッ！ よくやった！ よくやったな、アイシャ!!」

(いいや、俺の勝ちだ)

高笑いする亡者に、声にできないまま吐き捨てる。

死んでいないなら、戦える。不死人とはそういうものだ。

手に馴染んだアイシャの腰を抱き上げ、走り出した。

「な——!?!」

高笑いが途切れる頃には、近くに突き立てておいたクレイモアを回収していた。

「う、動くなあああああああつ！」

神の気配が強まる。怪物祭の時のガネーシャと同じだ。

剛胆なアイシヤが、小さくもまるで生娘のような悲鳴を上げた。

——だが、今さらそんなものに臆する不死人などいない。

地面を蹴り、さらに加速する。

「あ、アイシヤあああつ！」

次の手は何となく読んでいる。

舌を突き出し、大きく口を開いたアイシヤの頭を抱き寄せ、右の首の付け根——肩の

筋肉辺り喰いつかせた。彼女が自分の舌を喰い千切る前に、だ。

首筋を喰い千切られようと、腕は動く。

腕が動くなら、目の前の亡者を殺せる。

「ひい——!?!」

引きつった悲鳴と共に、その亡者は椅子から転げ落ちる。

そこに加えて、アイシヤを抱えているという不自然な態勢のせいで、切っ先の狙いが

逸れた。心臓を狙ったはずが、左胸を斬り裂くにとどまる。

とはいえ、偶然で避けられてしまうほど、哀しい一撃ではなかったつもりだ。

なるほど、戦いの神というだけあるという事か。

「が——あ?!」

しかし、あれはもう致命傷だ。

この亡者はもはや『神の力』アルカナムを發揮しなければ死ぬ。

「何故死なない!?!」

そんな事は俺達の方が聞きたい。

何故、自分が『呪い』に選ばれたのか——そう嘆く同胞が一体何人いたと思っているのか。

「来るなああああああ!」

断末魔じみた絶叫に、項の毛が逆立った。

ついに、本気の攻撃が来る。

「しっかり捕まってる!」

首筋に喰いついたままのアイシャに叫びながら、右に飛ぶ。

同時、黄金の光が濁流となって放たれた。

「よし——!」

盾を使つて、強引に濁流を逸らす——が、腕が耐えきれなかった。

アイシャへの直撃を避けると同時、左腕がへし折れる。

盾の守りが意味を失った左腕が消し飛ばされた。

楔石の原盤まで用いて強化された《金翼紋章の盾》のみが空を舞う。

直撃したのは精々肘から先のはずだが、余波だけで肩辺りまで……いや、アイシャに
 負わされた傷口から裂け、胸の半ばまで持っていかれた。

抱えたままのアイシャが無傷だったのは、ほぼ奇跡に等しい。

……まあ、俺達^{不死人}にとって奇跡の対価が腕一本なら安いものだ。

とはいえ――

「――ッ！」

これは間違いない致命傷だった。

ソウルの流出はすでに始まっている。

次の一撃は確実に人間性を削り落とすだろう。そして、いずれは亡者となり果てる。

篝火と縁を結べた幸運な不死人ならば、そうなる前に『ダークリング』の力を解放し

て逃げ帰るのが通例となる。例えソウルを失っても、その方がまだ安全だからだ。

――そう。本来なら。

「何ッ?!」

予め仕掛けておいた『保険』が、その効果を発揮した。

消し飛んだ部分が、灰となって渦を巻いては再び肉体に戻る。

胸の傷も見た目には完全に繋がった。

……無論、完全に回復した訳ではない。

もう一撃受けければ、再び殺される。もし放たれば今度こそ防げない。だが、それで充分。致命傷を負っているのはお互い様だった。

「お前は、一体何だ……？」

ただの愚か者だ。お前達の迷惑のままに踊った愚かな放浪者でしかない。形を取り戻した左腕を添えて、両手でクレイモアを構える。

「そのソウル、貰い受ける」

突き出した剣の切っ先は、容易く亡者めがみの胸へと滑り込んだ。

同時、『ダークリング』が蠢く。

それは、相手のソウルを貪る咀嚼音だった。

目の前の神が持つ膨大なソウルを喰らい、飲み干していく感触。

あまりに慣れ親しんだ感触が身体を満たす。

これこそが、俺が【薪の王】たる証。これこそが、【薪の王】たる資格。

玉座に至る資格。血濡れた王権。王の器。

それを今一度ここに証明しよう。

……

「が——あ?!」

剣の切っ先が、乳房諸共に胸を半ば両断した。

これはもう致命傷だ。『神の力』^{アルカナム}を發揮しなければ死ぬ。だというのに——

「何故死なない!?!」

それ以上の傷を負うこの人間は、何故死んでいない?!

人間なら死なぬはずがない。即死して然るべきだ。ならば、何故——!?!

死を前に発動した『神の力』^{アルカナム}が——魂の色を見分ける『美の神』の力が、最大限に發揮され……言葉にならない悲鳴がこぼれた。

(何だ、これは……!?!)

炎に縁取られた果ての無い闇。かつて下った冥界のそれよりも遥かに暗く、底の見えない闇。それが、その男の——いや、その怪物の魂の色だった。

ああ、そうだ。神威が通じない人間などいるはずがない。

(逃げる逃げる逃げる逃げる!)

早く天界へと!——そう叫ぶ。

さもなくば——

(殺される!!)

超越存在^{わたくしたち}が下界で感じるはずのない悪寒が背筋を舐め上げる。

「来るなああああああ!」

もはや下界での規則などどうでもいい。

(天界への送還が始まるまでの時間を稼がなくては——！)

封印が解かれる中、今の状況で放てる最大の『神の力』アルカナムを槍に変え放つ。

その直前に、そいつはアイシヤを抱えて横に跳んだ。

だが、遅い。

「よし——！」

盾諸共に左腕が消し飛ぶ。それどころか、アイシヤの負わせた傷から体が裂けた。

心臓を両断され、まだこれほどの血があつたかと思うほど、派手に血がまき散らされる。

今度こそ致命傷だった。そのはずだった。

だが——

「何ッ!?!」

消し飛んだ肉体が、そのまま復元されていく。

それはまるで『神の力』アルカナムを使ったかのように。

(いや、違う。これは——！)

模倣。奇跡神の力を再現している——!?

「お前は、一体何だ?」

5

ソウルを奪い尽くされた女神の身体が、ついに灰となつて消える。

しかし、それでも流石は名のある女神ということか。奪い取り——しかし、喰らい切れなかったソウルが結晶化し、そこに漂っていた。

「あ、あんたは一体何を……?」

遺された『イシユタルのソウル』を、砕かぬまま自分のソウルに放り込んでいると、抱えたままのアイシヤが小さく呻いた。

……まあ、仕方がないか。

彼女には俺の素性を話してない。傍から見れば単なる化物だろう。

今さら忌避される事を気に病んでも仕方がないが……まあ、かといって慣れるものでもない。

嘆息しようとして——まだ中身がそのままだったことを思い出した。

奇跡【惜別の涙】は、本来死にゆく者に一時の猶予を与え、最期の別れを交わさせるためのものだ。死を超越するのではなく、あくまで先送りする。そのための奇跡ではない。

……元より死から見放されている不^{おれたち}死人が使ったのでなければ、だが。

とはいえ、流石に俺達とて致命傷を丸々無視できるわけではない。精々一步手前。

まあ、所詮は先送りだ。生者ならいざれ消える僅かな猶予だが、死を失った不死人はその猶予を保ち続けられる。ただそれだけの話でしかない。

だから、まあ……気を抜いた途端、眩暈の一つも起こしたところで何の不思議もなかった。

まだ感覚の鈍い腕の中から、アイシヤの身体がすり落ちる。

「しつかりしな！ 死ぬんじゃないよ！」

墜落感に抗っていると、アイシヤが強引に肩を貸してきた。

……いや、ほとんど抱きかかえるような形になっている。つい先ほどとは逆の状態だ。

ずっと抱えていたせいで、俺の血——他におそらくイシユタルの返り血——をたっぷりと浴びて、なかなか凄惨な事になっている。

いや、全身に化粧粧を施したその姿はいかにも勇猛な女戦士アマゾンネスらしいというべきか。

というか。それでも色気を失わない辺り、本当に大したものだと思う。

「いや、あのな——」

咽喉に詰まっていた血塊を吐き出してから、呻いた。

そんなに慌てる必要はないのだが——と、言うより早くアイシヤは携行していたらし

い万能薬をぶちまけ、また強引に飲ませてくる。

もつたない。エストならまだ残っているのに。

「いや、エストなら……ええと、万能薬なら自前であるから、落ち着け」

二本目を取り出すアイシャを制して、エストを煽る。

アイシャの一撃もさることながら、流星に神の一撃は効く。

とはいえ――

(ま、予想はできていたが……)

などと余計な事を考えていたのが悪かったのか。

「持つてるなら早く飲みな、この大馬鹿が！」

怒鳴り声と共に蹴り倒された。

一応これでも怪我人だぞ。もう少し労われ。

「悪いー！」

しかし、ついうっかり気迫負けしたせいで気づけば俺の方が謝っていた。

……それに。自白してしまうなら、常と変わらないやり取りに安堵していたというの

も事実だ。

「この馬鹿が！　大馬鹿が！　そろそろ規格外にも限度つてもんを作りな！　神に喧嘩

売って『神の力』アルカナムを使わせるのも規格外なら、吹っ飛んだ腕が勝手に生えてくるのも規

格外すぎるだろう!? ええい、クソ——」

ともあれ。それからしばらくの間、罵声を吐き出してようやく満足したのか——
「つたく……」

——いや、まだしていないのか。

何であれ、最後に苛立たしそうに舌打ちしてから、

「イシユタルは死んだのかい?」

つい先ほどまで主神が座していた玉座を見やり、アイシヤは言った。

「ああ。……仇討ちでもするか?」

この『時代』の人と神の関係は、俺にはとても凶り切れない。

……仇討ちを望むなら、一度や二度は殺されてやるべきだろう。

「まさか。生憎と、もうそんな義理もないね」

うつすらと血が滲む首筋を撫でて、アイシヤが鼻で笑った。

とはいえ、どことなく寂莫とした色を宿しているのは……まあ、あえて指摘はすまい。

「ああ、でも。仇討ちはしておかないとマズいかね。……イシユタルはともかく、他の連中のさ」

「馬鹿言え。あの亡者——あの女神以外は誰も殺してない」

もし殺して良かったなら、もう少し早くここまで到達できている。

「は？」

ポカンとした顔のアイシャに、嘆息する。

「……いや。元凶の神はともかく、お前が誇りを投げ捨ててまで守ろうとした同胞まで皆殺しにするほど、悪趣味じゃないつもりなんだが」

もつとも、最後の連中は結構危なかったが。

特に灰色髪の女は。

加減したとはいえ、まさか【神の怒り】で一掃できないとは思わなかった。

「それはそうと。お前、怪物祭の時に初めてデーモン見たんじゃないのか？」

「はあ？ 当たり前だろう？」

「なら、あの蛙頭はお前も知らなかったのか？」

「……フリユネの事かい？ だったら、あれでも一応アマゾネスだよ。ダンジョンに行くときよくちよくモンスターに間違えられてるけどね」

流石に血の気が引いた。

慌てて立ち上がり、ソウルから万能薬を取り出す。

そして、不幸な誤解から『致命の一撃』を叩き込んでしまったアイシャの同僚に、それをぶちまけてやった。念のため二本ほど。

「よし、これでノーカウントだ」

幸い、まだ息はある。流石はアイシャの同僚。主神を失って——つまり『神の恩恵』^{フルナ}を失っても、ずいぶんとしぶとい。いや、見事な生命力だ。

(よし。これなら、何の問題ない)

生きているんだからノーカウントだ。

……まさかあの禿丸と同じ発言をする日が来るとは。

「それで、あんた。一体どういうつもりだい？」

ちよつと真剣に泣きそうになっていると、アイシャが問い詰めてくる。

「神殺しなんてすれば、オラリオ中の神が黙っていないよ？」

「まあ、それはそうだろうが……」

それは所詮、遅いか早いかの違いでしかない。

「鼻屑にしている『情報屋』から、お前の事情は聞いた。理由としてはそれだけでも充分だろう？」

「ふざけんじやないよ。たかが娼婦一人のために、オラリオ中の神を敵に回すつてのかい？」

「馬鹿言え。いくら俺でもそこまでお人好しじゃない」

流石に見ず知らずの娼婦のためだけだったなら、もう少し別の方法をとったはずだ。

だが、今回は神の思惑で生贄にされる少女が絡むという大きな——そして、身をつま

まされる——理由がある。

しかも、

「俺に神殺しをさせたくて仕方がないどこぞの狂人がお膳立てしたんだ。そこまで分かっていて見殺しにしたら流石に寝覚めが悪い」

今回の『殺生石』の出どころは、間違いなくアン・デイルだ。

流石に無視はできない。が、あの男は選択を誤った。

いや、最終的に目的は達したのだから間違いではないだろうが——

「誰かの思惑だけで殺すのは癪だが……まあ、お前のおせっかいを焼くためならそれも悪くない」

生贄がどうこうという話がなくとも、いずれあの亡者とは敵対しただろう。

それが殺すかどうかまで発展したかは定かではないが……まあ、それなりに世話になっている女を痛めつけられて黙っていられるほど、俺は無抵抗主義ではなかった。

まあ、少々傲慢だったかもしれないが……それはお互い様だ。

「それより、あの子が春姫だな？」

青い顔で卒倒している少女を見やり、問いかける。

何であれ、のんびりしている余裕はない。

「ああ、そうだよ」

「なら、これを持ってその子と一緒にギルドに行け」

つい先ほど放り投げた布袋と、あらかじめしたためておいた書簡、そして『祈祷の間』に通じる隠し通路に関するメモを渡す。

「そのメモ通りに進むんだ。そこにフェルズという魔導士がいる。そいつを頼れ。あいつなら『殺生石』の意味も分かるはずだからな。事情を話せば、保護してくれるはずだ」

「ギルド？ 信用できるのかい？」

「ギルドそのものはあてにならないが、あいつなら多少はな」

何しろ、異端児セノスのために身を粉にしているようなお人好しだ。

「あんたはどうするんだい？」

「まずは『殺生石』を砕いて、あの祭祀場を焼き払う。ああ、それと資料もだ。保管されている場所が分かるなら教えてくれ」

「ああ、それなら見当がつくよ」

アイシャの言葉に頷いてから、祭祀場に向けて「混沌の大火球」を放つ。

イザリスを飲み込んだ劫火は、その祭祀場を容易く飲み込み、蒸発させ、また溶解させていく。

もちろん、その中には『殺生石』も含まれていた。

「……つちさ。ついてきな」

それを見届けてから、春姫を背負ったアイシヤが走り出す。

イシユタルが死んだ事で、『神の恩恵』とやらが失われたのだろう。

ホーム内は突入した時以上に混乱の気配で満ちていた。

その中を、アイシヤの誘導で人目につかないまま駆け抜ける。

「ハハ」だよ」

案内されたのは書庫だった。

明かりが落とされた薄暗い部屋を進むと、机の上には羊皮紙と巻物が無造作に置かれていた。

「ここで燃やすと引火しそうだな」

どこぞの大書庫のように特殊な加護を受けているとは思えない。

そして、至る所で倒れている団員達は、『神の恩恵』を失っているはずだ。

そんな状況で大火事にでもなれば、最悪死人が出る。それではこれまでの苦労が水の泡だ。

「それなんだけど、これ持ち出せないかい？」

「それはもちろん可能だが、何故だ？」

「あのね。あんたは神殺しだよ？ さつきも言ったけど、他の神々が黙ってない。けど、これがあれば、ギルドに対してある程度の大義名分は得られる。どれくらい役に立つか

は知らないけどないよりはマシさ」

「……まあ、そういうことなら」

俺はともかく、彼女達の安全をより確かなものにするためには必要になるだろう。

とはいえ、ギルドも完全には信用できない。片っ端から持ち出して、あとで渡して大丈夫かどうかを精査する——と、そういう事で話はまとまった。

「相変わらず便利なスキルだね……」

「まあな」

資料を一通りソウルに放り込み終わると、近くの水場で返り血を流してきたらしい——
——ついでに着替えも済ませた——アイシヤが呆れたように言った。

「それじゃ、行こうか」

「ああ。なら、適当に暴れて人目を集めておくから——」

その際に、その子連れて逃げろ。と、最後まで言葉にはできなかった。

「何言ってるんだい。あんたも来るんだよ」

口腔に残っていたらしい血が付いた唇を舐めながら、彼女は不敵に笑う。

「最後まであんたに丸投げしたら女が廃るってもんさ。ここから先は一蓮托生だよ」

とりあえずサミラに後の事は全部押し付けてきたからね——と、アイシヤ。

「馬鹿言え。死ぬぞ」

そして、アイシャは一度死ねばそこまでだ。

何しろ、ここから先はオラリオ中の神とその眷属が敵となり得る。

そして、殺せば殺すだけ増えていくだろう。

文明圏で人を殺すというのは、そういうことだ。

『みだりに人を殺すなよ』

戦友であり師であった男が、記憶の中で囁く。

誰の命であれ、いつか報いがあるものだ——と。

(報いか)

未だ何かと殺し合わなくてはならないのはそのせいかもしれない。

誰よりも殺されているのと同じく、おそらく誰よりも殺しているのだから。

「そういや、あんた結局何で生きてるんだい?」

「そんな哲学的な事を訊かれても……」

いつだったかと同じ冗談を返すと、素で蹴られた。

「心臓ぶった斬られた拳句、体半分ふっ飛ばされても生きてる理由を訊いてるんだよ、ご

主人様?」

いや、待て。最後の一言はどういう意味だ?

「二億……いや、このヘツポコと折半として、それでも一億ヴァリスで身請けしてくれる

「んだろうか？」

「い、いや。それは最後の忠告というかな……」

どちらかと言えば、お前達の逃走資金にするために用意してきたものなのだが。

ちなみに。これは完全に余談だが。

この二億はオラリオに戻って早々に汲んできた『カドモスの泉水』を値崩れを起こさない範囲で売り払って得たものである。

……ナア―ザに嫌味を言われながら、何とかいう大手の医療系派閥に足を運んでまで。

と、現実逃避——にもならなかったが——はこの程度にしておこう。

「次の売値は最低でも一億ヴァリス以上。流石に次の買い手はつかないだろうねえ」

身請けとはそういう制度だったのか？——いや、それよりも何がそんなに嬉しいのやら。

こんな状況だというのに上機嫌なアイシヤに、小さくため息を吐く。

ああ、だが——

(まあ、いいか)

それは、四年前に目にした陰りの無い魅力的な姿だった。

それが見ただけでも、アン・デールの思惑に乗って殺し合った甲斐はあっただろ

う。

6

翌日。

【イシユタル・ファミア】消滅——いや、女神イシユタル殺害の報はオラリオ全域に強い衝撃を響かせ走った。

神殺し。

オラリオに——いや、下界における最大の禁忌を侵され、一部の神々は怒り狂った。

特に【イシユタル・ファミア】との懇意派閥——いや、イシユタルと繋がりを持つことで甘い汁を吸っていた神々。あるいは女神イシユタルに『魅了』され、子飼いとされていた神やその眷属達は、ギルドの制止を振り切り神殺しの大罪人である【イレギュラー正体不明】クオンの討伐を断行。

「これは戦争遊戯ウォーゲームなどではない！ 断罪だ!!」

御旗となったとある神は声高にそう叫んだという。

無論、それに賛同した神ばかりではない。だが一方で、一昔前——『暗黒期』と言われた時代の刺激が戻ってきたと内心でほくそ笑んでいた神もいた。

神々の放つ熱狂は性質の悪い熱病の如くオラリオ全域に広がり、さらに七派閥の冒険

者が『神の子供の使命』と口にしてはかの神の元に集まる。

その事実はさらに熱病はオラリオを蝕んでいき、ついには自らに血を分け与えた主神の制止を振り切つて駆け付ける冒険者達までが現れ——その数はついに三〇〇人を超えた。

中堅派閥の規模を超えたそれは【神罰連合】などと名乗り、同日の夜には【正体不明】の身柄が監修されていたギルド本部『万神殿』に殺到。必死に仲裁に入るギルド職員すらも背信者と罵り、ついには刃を向けた。

白亜の神殿に無辜の民の血が流れ、いくつもの悲鳴が響き渡る。

血の匂いに昂るのは神罰の代行者と謳う三〇〇名の冒険者。

それを迎え撃つのはついに『万神殿』より現れた神々の殺戮者。

正義と狂気が錯綜し、悲鳴と罵声が入り混じる神殿前にて、両者はついに激突する。

断罪？ なるほど。確かにそうとも言えよう。

ただし、勘違いしてはいけない。

その執行者は遙か昔、ロードランの地で神の奸計に踊らされた不死人の一人。巡礼の果てに一度は炎に消えた不死人最初の【薪の王】である。

それとも、神々の王ですら恐れた唯一真なる【闇の王】というべきか。

かつて世界蛇が謳い、後のロンドールの黒教会が求めた【炎の篡奪者】——【亡者の

王」などではない。火を継いで後、再び蘇ってはさらに二度の巡礼に挑み、ついに神々の時代……『火の時代』に終止符を打ったが故に。

いや、彼の者にはよりふさわしい名がある。

三度の巡礼において、神も竜も英雄も巨人も王も——あらゆる超越存在を殺してきた彼に、とある王が与えた称号^な。

すなわち「王狩り」。

オラリオを蝕む狂気は、その再臨を告げる烽火となつてさらに燃え上がる。

王の決断は早く、そして無慈悲なものだった。

三〇〇の冒険者たちの旗印となつていた神。その眷属の長の額を貫くのは一本の矢。

ほんの束の間とは言え、弓弦の震えるかすかな音すら響くほどの静寂が神殿前に戻る。

その中で崩れ落ちるその男から「ファミリア」のエンブレムを奪い取ると、長を失つて混乱する冒険者達を無視して『万神殿』^{パンテオン}前から離脱する。

新たな冒険者を旗印に徒党を組んでは王を——あるいは、それを狩る者を——追う代行者たち。

「断罪か。奇遇だな」

しかし、すでに彼は最初の神の元にたどり着いていた。

「俺もそう思う。貴様らはやりすぎた」

そして、神殺しの刃は振り下ろされる。

「ひい……い……」

断罪だと声高に叫び御旗となった神が真つ先に討たれ、新たに一つの「ファミリア」が消える。

しかし、その熱狂はまだ醒める事はなかった。

むしろ彼らは更なる蛮行に怒り震え、更なる賛同者を求め——そして、応じる者もま
だいた。

「かの者を殺すのだ。邪魔をする者にも容赦はいらぬ」

しかし、その神までが討たれ、また一つ「ファミリア」が消え——それでようやく、彼
らの内にも幾ばくかの恐れが生まれた。

その頃には、ギルド職員にすら刃を向けたその蛮行もまた周知の事実となり果て、協
力者を求める彼らの声に応じる者は急激に減っていた。

それでも、集った神々の怒りは消えなかった。

……いや、それは本当に怒りだったのか。

「あの女神の遺産が狙いか？」

その問いかけに返答はなく。

「な、何をしている！ 大逆者を許すな！」

そしてまた一柱ひとりの神が斃れ——それでようやく、誰もがこれは遊戯ではなく、娯楽などと言つていられる相手でもない事を思い知らされた。

ああ、それでも。

「まさか本当に私達神々を皆殺しにはしないだろう」

残つた神は、それでも口々にそう言い合つてはかの王狩人を追い——また一柱ひとりが殺された。

残された神々はついに震え上がった。その頃にはもはや新たな賛同者はなく、救援を求めたとしても、それに応じる神や人は、もはやただひとりとしていなかった。

……

「ほう？」

イシユタルなる女神を唆してから。

久方ぶりに『館』で休養を取っていると、地上に残してきた影が報告に現れた。

「御意。件の女神の取り巻きだった神どもで、徒党を組んでは『神罰同盟』などと名乗つております」

「ふむ……」

それ自体は驚きもしない。

地上に巢食う亡者共は、『首輪』までつけた娯樂にんげんの駒げんに殺されるなど考えてもいなかっただろう。短絡的に報復を企んだとしても、何らおかしい事はない。

しかし、

（あの女神が、切り札の情報を流出させていたとも思えんが……）

そこまでの度量があるとは思えない。

となると――

「あのハイエナの仕業か？」

「いえ、あの男神は女神に石を渡してから再びオラリオを離れ、まだ戻ってきておりません」

ふむ――と、小さく唸る。

「時に、あの灰はいつあの女神と対峙した？」

「二昨日の夜です」

なるほど、確かに情報が流出するには、少々早すぎるようにも思える。

（となると、誰かが意図的に流したか）

しかし、一体誰なのか。

他にあの石の情報を知っているとなると、「ロキ・ファミリア」の小娘共だが……、

(エルフの小娘は多少切れ者らしいからな)

おかげで、四年前に剪定し損ねた。

もつとも、今にして思えば少々性急すぎた。

若気の至り——などとはもはや言えまいが、柄にもなく周りの激情に影響されていたらしい。

そんな折に、都合よくあの灰が姿を見せたというのも無関係ではない。

(なかなかどうして、まだ人間臭いものだ)

しかし、そのせいで貴重な手札の使いどころを誤るところであった。

あの連中の代わりを用意するのは容易ではない。

然るべき時に然るべき場所で収穫しなくては流石に惜しい。

(ふむ……)

まあ、彼奴等の事は今は置いておこう。

(動き出したか)

あの灰の重要性を知り、しかもその力を求める者となると、現状ではロンドールの黒教会が最有力となる。ロスリックでは対立していたと聞くが——

(まあ、心変わりしたのだろうか)

共に『火の時代』を生きた者ならば分かる。

一体誰があの灰の背信を責められよう。

数多の【薪の王】達が火継ぎを行ってなお一掃できなかつた『不死の呪い』が一掃されたばかりか、あの死に絶えた世界がここまで見事に息を吹き返したのだ。

例えそれが捧げられた犠牲全てに對する背信の果てにあつたとしても、この偉業を認めざるを得ない。あの時代に未来を求めていたとするなら、なおさらだ。

あるいは――

(いゝな、おそらく)

あちら側にも、切れ者が。

影の報告によれば、あの灰はイシユタルとかいう女神に『神の力』を使わせたという。

そうでなくとも、すでに少なくない数のデーモンを討っているのだ。

そろそろ、勘付く……いや、勘付いたからこそこうして探りを入れ始めたとも考えられる。

(近いうちに盤面が動くか)

目下、水面下での小競り合いはほぼ膠着状態だ。

が、あの灰が動くなら、事態も否応なく動き始める。

ならば――

(そろそろ準備を整えておくのでしょうか)

然るべき時に、最善の一手を打つために。

……

夢を見ている、という自覚があつた。

それは一〇年前……。いや、一二年前だったか。まあ、真の人である私たち不死人とつては時間の流れなど些末なものだ。こだわる事はない。

そう、およそ一〇年以上前の記憶だつた。

気づけば、私は森の中を歩いていた。

亡者や得体のしれない異形共の姿はない。

代わりに瑞々しい緑に満ち、清流が流れ、野鳥の囀りや獣の気配を感じる生きた森だ。

「……は、一体……?」

何より、緑の天蓋の隙間からは眩いばかりに日の光が差し込んでいる。

(ロスリックの周辺にこんな場所が……?)

途方に暮れながらも、記憶をたどる。

長年に渡る巡礼地^{ロスリック}での布教。

その果てに、ついに我らロンドールの王に相応しき者を見出だした。

しかし、その男は愚かにも『暗い穴』を捨てた。

不死であり、『王の器』を持ちながら、それを否定する愚か者。

失意と共にその黒衣の男と対立し、その果てに私はロスリックを離れた。
そこまでは覚えている。

(さて、それからどうしたのか)

気づけば、ただ一人この世界に辿り着いていた。

……朝と夜が巡り、天には太陽が光り輝くこの世界に。

ああ、困惑したのを覚えている——と、夢現に思い返す

しかし、本当に驚くのは近くの街にたどり着いてからだった。

「これは、一体……？」

森を抜けてたどり着いたのは、とある街だった。

豊かな森と山に抱かれた小さな平野にぼつんと存在するその街は、小さいながらも栄えていた。

豊かな森と山の恵み。小さいながらも肥沃な平原は作物の栽培にも向き、彼らに生きる糧を与えていたおかげだろう。

特に葡萄の栽培が盛んで、そこから造り出される上質な葡萄酒を求めて、一部の行商人達は街道から逸れてまで仕入れに来るほどだった。

人の行き来があるせいか、住民も決して偏屈すぎる事はなかった。

得体のしれない来訪者だったはずの私が容易く迎え入れられたのは、それが影響して

いるのだろうか。

無論、苦も無くという訳ではない。

大らかな者。善良な者。快活な者ばかりではない。

偏屈な者はいた。よそ者を嫌う者もいた。そして、悪徳をなす者も。

……いや、善良な者が時に悪徳をなし、悪徳を常とするものでも、時に善行をなす。

大げさなものではない。そこは、ごく普通の平凡な人々が生活する、ごく平凡な人の街だった。

そう。ごく平凡な生者の街だ。

誰一人として『最初の火』を知らず、『火継ぎの儀』を知らず。何より、真の人たる不
死人を知らない。

これだけ人が住まえば、真の人たる不死人が生まれないはずがないというのに、だ。

それどころか、地を旅しているであろう行商達ですらそれを知らないと言うのだ。

もはや認めざるを得なかった。

この世界には『最初の火』もなく、『不死の刻印』^{ダーククリング}を持つ者もない。

生者がただ正者として限られた生を謳歌し、そしてごく普通に死に絶えていく。

ここはそういう『世界』なのだ。

「ああ、貴公。よもや本当に……！」

思い浮かんだのはあの黒衣の男。『王の資格』を持ちながら、それを捨てた愚か者。火を奪うでも継ぐでもなく、この手で消すのだと告げた、あの背信者の姿だった。

「本当に火を消したのか!? 篡奪するのではなく?! ならば、ここが、今この時こそが——」

カアス様が謳った『闇の時代』——かつて神どもが恐れたという『人の時代』なのか。その時に抱いた衝撃は今も忘れていない。

驚愕。感動。羨望。絶望。羞恥。それらが一体となつて、身体を突き抜けた。

真の人たる不死なきこの時代において、我らロンドールの理想もまたなし。

しかし……ああ、しかしだ!

「この世界の何と美しい事か——」

人はただ人として光に満ちた朝と穏やかな闇に包まれた夜を謳歌する。

例え真なる人である我ら不死人がおらずとも、この世界は美しいのだと認めざるを得なかった。

そして、それを認めてしまえばもはや信仰に殉ずる事などできはしない。

闇こそが我らの本質。しかし、光に焦がれるのもまた人の性。所詮は私もその性からは抜け出せていなかったらしい。

「ああ、貴公。我らロンドールの……いや、我ら人の王よ。その背信、その偉業、この私

が賞賛しよう。見事だ……！」

死に絶えたあの世界が、まさかここまで見事に息を吹き返すとは。

ついに理想こそ相容れなかったが……それでも、共に『火の時代』を生きた者として、この偉業を認めない訳にはいかない。

そして、私は剣を置いた。

無論、『暗い穴』を穿ち、真なる人への目覚めを促す事はできる。

不死人こそが真の人であるという信念も未だこの胸にある。

しかし、それは行わなかった。

それこそが、最後まで『火の陰り』に抗ったあの男に捧げる最後の敬意だった。

剣を置き、信仰を隠し、ただの生者としてこの街で生きよう。そう心に誓った。

ああ、そうだな。私も姉と同じ背信者だ——と、自嘲する。

その街の名がアリアンデルだったのも奇妙な縁、数奇な偶然だと言えよう。

そして、それから二年ほどが過ぎた。

街の住人——かつて相容れなかった生者達ともどうにか打ち解け、年老いて倒れた者には聖職者として哀悼の祈りを捧げ、幼い子ども達には読み書きや算術を教え……我ながら、こんな生活がずいぶんと板についてきたと思っていた。……そう、思っていたのだ。

「おのれ——！」

夢の中の私は、炎の中を走っていた。

……炎に包まれたアリアンデルの中を、だ。

その日、私は街を留守にしていた。ほんの半日ほどだ。

数日前から、特に私に懐いてくれていた少女の母親が風邪をこじらせ寝込んでいた。

母親と、彼女を心配するその少女のために夜明けと共に森に向かい、薬草を探していた。
た。

見つかったのは昼頃だった。

そろそろ昼食の準備をするべく街中から竈の煙が立ち上っているはず。見舞いついでに焼き立てのパンでも買つていこうか——そんな事を考えながら森を抜けた私が見たのは、街を焦がす黒煙だった。

意識せず、ソウルを体中に奔らせていた。

燃える街を走る。

朝日を浴びて黄金色に輝いていた麦畑が燃えていた。

彼らが何代にも渡り育ててきた葡萄畑が燃えていた。

読み書きを教えていた小さな教会が燃えていた。

……全てが燃えていた。

陽気な農夫も。気難しい老人も。柄の悪い大男も。

私に懸想していると冷やかされていた青年も。

いつか世界一上手い葡萄酒を作ると語っていた少年も。

誰もが等しく殺されていた。

「ユリアお姉ちゃん……」

そう。等しく。

懐いてくれていた少女は私の腕の中で事切れ、母親がいたはずの家は炎に包まれていた。

自分で思う以上にその街の生者達に情が移っていたのか——と、夢現に自問する。もちろん、それもあるだろう。私とて感情の一つくらいはある。

そして、その感情のままに気づけば、禁を破り置いたはずの剣を取っていた。かつて対峙した一〇〇人の騎士に比べれば雑兵もいところだった。

街から離れさせしなれば——と、悔恨の念を抱くほどに。

斬って。斬って。斬り殺した。

オラリオなる街から落ちぶれてきた者たち。神の血に酔い、人の矜持を失った新たな呪われ人ども。

……愚かな神と、神の眷属ども。その全てを。

そして――

「未だ人の時代には程遠い」

燃え尽きた街に立ち尽くし、呟いた。

信仰が蘇っていた。あるいは、変質したのだろうか。

革命だと謳い、浄化だと笑い、神意だと騙るその凡夫どもは立つた半日の間に暴虐の限りを尽くしていた。

抗おうとした街の若者の多くが無残に殺され、女達は犯された。幼子も老人も悉くが虐げられていた。

街の大半は焼け落ちて、もはや見る影もない。

「元より神など不要」

聞けば、神どもが姿を現したのはたった一〇〇〇年前だという。

しかも、娯楽を求めてのこのことやってきたのだ。

奴らの本質は『火の時代』から何も変わってなどいない。

「神の眷属など……神の血に酔い、人の矜持を失った新たな呪われ人など、不死人たり得ず、また王の拓いた時代に相応しくはない」

我らの理想は相容れず、その果てに敗れた。

だからこそ。

「我らの理想を打ち破ったあの男の理想。それを穢されるのは、我らの理想を穢されるに等しい」

そして、私はアリアンデルを後にした。

目指すは神どもとその血に酔う凡夫が住まう忌まわしき地オラリオ。

辿り着いたそこでは、愚かにも内輪もめが続いていた。

どうやらアリアンデルを焼いたのは闇派閥イザイルスなどと嘯くならず者だったらしい。

正しく言えば、その主神——邪神などと名乗った神が、逃げ延びた先で新しく用意した眷属どもだったようだが……そんな事は些末な問題だ。

全てはこの街から始まっている。あの神は、この街での遊戯に負け追放されたのだ。

ここまでの道中で、複数の村や町が同様の被害を受けていた。

オラリオに救援を求めた場所もあったというが、意味をなさなかつたらしい。

オラリオの外へ戦力の流出を避けるため——と、その程度の理由でアリアンデルを含めて幾つもの村は見捨てられたのだ。

さもありません。

とある二つの派閥が、それ以前に覇権を握っていた二大派閥を追放した事がこの惨事の引き金となったと聞く。身の丈に合わぬ野心を抱く愚か者達なら、外とは比べ物にな

らない戦力が集まるこの街でなお危険だと判断した存在を、ただ暢気に都市外に追放するような愚行も犯すだろう。

ともあれ。手始めにその闇派閥イヴィルスなる愚か者どもを利用しつくした。

連中を唆しつつ情報を正義と驕るもう片方の勢力に情報を流し、同士討ちを促す。

ならず者共が劣勢に立った頃にはそれなりに手駒も増えていた。何より、その連中が主神と仰ぐ神のソウルが手に入ったのが幸運だった。

妹がいない今、少々てこずったが——そのソウルを元に生み出した新たな奇跡を用いて神を演じ、ギルドの目を誤魔化してついに自らの「ファミリア」を立ち上げた。

闇を騙る愚か者どもの多くが死に絶えたとして、状況は変わらない。神の血に酔う凡夫どもに虐げられる民は多く……救いを求めて私の元に集まる者は変わらず増え続けた。

そして——

「ユリア様……」

そこで、目が覚めた。

どうやら、執務中に転寝をしていたらしい。

アリアンデルで過ごした日々の中で身についた生者らしい習慣は今も健在だった。

「どうかしたか?」

眼前に立つのは腹心の部下——『白い影』の一人だった。

「イシユタル・ファミリア」が壊滅したそうです」

「ほう？」

淫都の主が潰えたか。

この街でも有数の大派閥だったはずだが。

「何者の仕業だ？」

普段なら、手駒の回収の指示を出すだけだが……今回は流石に少しばかり興味があった。

「ええ、それについて取り急ぎお耳に入れておいた方がよろしいかと思い、こうして報告に上がりました」

「ほう？」

彼女は、あの街から共にある——あの時、最愛の子どもと夫を目の前で殺され、自身も犯された女性だった。

今や三つもの『暗い穴』を得た精鋭の一人であり、最古参の団員の一人である。

その彼女が取り急ぎと言った情報は今までも重要な物ばかりだった。

「【イシユタル・ファミリア】を滅したと目される男なのですが——」

なるほど。彼女がその情報を重視した理由が分かった。

いや、彼女だからこそその情報を重視できたというべきか。

何分、今や気心の知れた仲だ。他の団員には告げていない話もいくらかしている。

その中の一つが、あの黒衣の男。我らが人の王。

「確かにクレイモアを振るい、奇跡と呪術を使い、『竜紋章の盾』を持っていた？」

あの女神を殺した男と、その特徴が合致したらしい。

「まだ確証までは……。今はギルドに身を寄せているようで、手の者を送れません。また、女神子飼いの神どもが不穏な動きを見せております。その裏では奇妙な老翁が暗躍しているとも」

ふむ——と、唸る。

そういえば、ここ最近黒衣を纏った凄腕のLv. 0が現れたという噂も届いている。

一時噂になったがすぐに消えてしまった故、さほど気にしていなかったが……

「ひとまず様子を見る。その男が本物なら、あの程度の凡夫など物の数ではない」

あるいは、という思いに今は変化していた。

そして、まだ組織が未熟で諸々が立て込んでいたあの時と違い、精査するだけの余裕もある。

「御意のままに。では、手の者を——」

「いや、私が出向く。この目で確かめたい」

愛刀を携え、教会の最奥から外へと踏み出した。

そして、その翌日――

「おお……！」

ギルドを襲った愚か者共の群れを斬り裂くその男を見て、驚嘆の声を上げていた。

「何という僥倖か！ いや、あの鐘の音。まさか貴公を目覚めさせるものだったのか？」

四年前の夜中に鳴り響いた鐘かねつぎ撞知らずの鐘の音。

よもや、あれは本当に『目覚めの鐘』だったのか。

そこにいるのは、紛れもなくあの男だった。

「ユリア様……！」

「あれこそが、我らロンドールの王たる……いや、人の王たる存在」

しかし、一体何かあったのか。その力はあまりに弱々しい。

まるで凡百の不死人と変わらなかった。

「では、早速……！」

「いや、待て。私と彼は少しばかり因縁がある。今すぐに顔を合わせても、残念ながら殺し合いにしかない」

遠い日の軽率な行動――当時ならともかく、今となつてはそう言うより他にない――に小さく肩をすくめてから、

「それに、少しばかり様子がおかしい。今しばらくは様子を見たい」

その言葉に、彼女はただ黙って頭を下げた。

それを見届け、改めて視線をあつ男へと戻す。

「今度こそ、貴公を我らの王に。そのためなら、私は全てを捧げよう」

すべては、『闇ひとの時代』を築くために。

その決意と共に、私は静かに一札を捧げていた。

第三章 英雄不在

第一節 厄災の先触れ

1

第四地区の一角。

ちようど、『歓楽街』と『繁華街』の間に私達の本拠地ホトは存在した。

盛況な二つの街に挟まれているのが嘘のように、その区画は寂れている。それが、各々の街の支配者である女神の関係性を示していた。

あえてその場所に陣取り、やや『歓楽街』に肩入れしつつも、両者の間でうまく立ち回り、彼らはこれまで甘い蜜を啜ってきた。

表向きは平凡な探索系派閥だが、『暗黒期』の混乱に乗じていくつかの派閥を取り込み、今では商業や調剤系でもそれなりの勢力を誇っている。

もつとも、その取り込んだ派閥は主に闇派閥イグザイルスの残党だ。

無論、煮ても焼いても食えぬ狂人揃いの「タナトス・ファミリア」や「イケロス・ファミリア」ほど振り切れた連中ではない。精々、リヴェラの街のならず者どもよりいくらか狂暴という程度だ。

とはいえ、それでも暴力を生業の土台に据えている冒険者の中でも特に血気盛んな連中である。

ギルドによる等級はEだが、実際にはDかC程度の戦力はあると考えていた。これでもまだ多少控えめであろう、とも。

過大評価ではない。

団長である私——パール・ブラドローはL.v. 3……と、ギルドには申請しているが、実際にはつい先だってL.v. 4に昇格している。周りを固める総勢一二人は全員が上級冒険者だ。

全員が『暗黒期』の苛烈な抗争を経験し、あるいは賭博剣闘に参加しては人を斬った経験を豊富に持っている。

複数人での闇討ちであれば、格上の冒険者でも殺せる。その程度の力量と実績を持っている。

そこに加えて、派閥の資産を考慮すれば、むしろそうなって然るべきであろう。

何しろ、あえて闇派閥イツイルスを取り込んだ理由は、単純に彼らが麻薬の調査や売買経路を持つていたからだ。

暗黒期が終わり、多少息苦しくなったが……それでも、それらがもたらす利益は莫大だった。

二柱の女神のご機嫌取りをしてなお、潤沢な資金が残る程度には。

二大派閥である「フレイヤ・ファミリア」や「ロキ・ファミリア」のように表立つて権勢をふるう事はできないにしても、ゆくゆくは「イシユタル・ファミリア」のようにオラリオの一区画を牛耳る勢力になれるであろう——と、誰もがそう思っていた。

そう、その「イシユタル・ファミリア」——『歓楽街』の支配者が潰えるまで。

『イシユタルが殺されたぞ?!』

駆け込んできた団員の報告を聞き、主神が絶句したのは記憶に新しい。

そして、予見した通り、神フレイヤが神イシユタルよりも寛大なのを良い事に『歓楽街』に肩入れしていたのが仇となりつつあった。

これから神フレイヤに取り入ったところで、かねてよりの取り巻き程の待遇は期待できない。むしろ、神イシユタルのと関わりを指摘され、制裁を受ける可能性すらあるのだ。

いや、神フレイヤ自身が動くとは思えないが、他の取り巻き達はその限りではない。いつそ主を失った『歓楽街』を乗っ取ろうという案も出たが、そちらはすでに「ガネーシャ・ファミリア」が押さえており、今すぐに手出しはできない。

何より、同じような事を企む勢力は他にもいた。片肺を失った今、派閥抗争に陥れば衰退は避けられない。奇妙な男が姿を見せたのは、そんな時だった。

『女神イシユタルの『遺産』に興味はないか?』

その男は、そう言った。

それが資産という意味であつても充分に魅力的だったが、実際にはそれどころではなかった。

『女神イシユタルが、女神フレイヤとの決戦のために用意した切り札だ』

立ち会つた幹部全員が唾を飲み込んだのを覚えている。

確かに【イシユタル・ファミア】は精強だったが、【フレイヤ・ファミア】は文字通り格が違う。

それを覆せるほどの『切り札』。そんなものが手に入るなら、この先の抗争で大いに有利となる。

無論、独占するつもりだった。だが――

『それは今、【^{イレギュラー}正体不明】が持っている』

そう言われてしまえば、流石に自派閥だけで仕掛けるのは躊躇われた。

何しろ、その剣闘士はLv. 0とはいえ、神フレイヤが無礼を許す程の力を持っている。

ならば、手頃な相手と一時的な同盟を組み、『遺産』を奪い取る。その過程の中で、他の連中が消耗してくればそれでよい――と、そんな打算を抱いていた。

つい先ほどまでは。

「クソツ、【正体不明】め。人間のくせに……！」

仮初の盟主——その後の、『遺産』争奪戦で最大の障害となると予見していた二派閥はすではない。主神を【正体不明】に殺されたからだ。おそらく『遺産』の正体を知っていたであろう幹部諸共に。

そして、盟主の座は私達の主神へと回ってきた。

（よもや、あれほどか……）

なるほど、神フレイヤが気にかけるだけの実力者は伊達ではなかったらしい。

あるいは、【猛者】との一戦もあながち八百長ではなかったのだろうか？——と、ありもしない想像を抱く程度には。

「仕方ありません。しばらくの本拠地に立てこもるべきでしょう」

苛立つ——あるいは、怯える——主神を窘める頃には、本拠地まで数百Mというところまで来ていた。

元より寂れたこの区画の中でも、特に人気のない場所だ。

設置された魔石灯も壊れ、頼りとなるのは月明かりのみ。そんな中、隊列を組みながら緩やかな階段を登っている。

私のすぐ後ろに主神と魔導士三人。私達の前に四人。主神達の四人という布陣だ。

もちろん、全員が得物を携えている。

「『殺生石』さえ手に入りやいいんですよ！」

月が雲に隠れた頃、先頭を歩く団員が努めて覇気ある声を上げた。

「そうすりや、いかに【正体不明】^{イレギュラー}といえど——」

しかし、その声は突然に途絶えた。

「そうか。お前達もそれを知っているのか」

闇が、密度を増したような気がした。それと同時に、血の匂いが辺りに漂う。

「ああ？」

突然混じってきた声——というより、突然立ち止まった先頭の団員にぶつかったすぐ後ろの団員が、怪訝そうな声を上げる。

そして、それがその団員の最後の声だった。

「うわあああああつ!?!」

上下逆様に怪訝そうな顔をこちらに向けた二番手。

彼と目が合った三番手が悲鳴を上げながら抜剣する——が、それを振るう事までは許されなかった。獲物を握る腕ごと、袈裟斬りに身体を両断され崩れ落ちる。

「て、敵襲だ!!」

生暖かい何か頬を濡らすと同時、四番手の団員が叫んだ。

そして、それが末期の言葉となる。四番手の背中から剣の切っ先が突き出していた。「詠唱始めッ！」

指示を叫びながら、大剣を構え斬りかかった。

が、それより早くすぐ後ろからぐくもった声が返ってきた。

視線だけ振り向くと、魔導士の喉元には投擲用のナイフが突き立っている。

「ひいひいひいひいっ!?!」

白目をむき息絶えた魔導士に抱き着かれた主神が、その重さに負けて階段から転がり落ちる。

「ぬう!?!」

その間に、黒い風が吹き抜ける。

それに紛れていた剣戟を辛うじて受けたが——しかし、それができたのは私だけだった。

残り二人の魔導士の首が転がり落ちる。

「い、【イレギュラ正体不明】!!」

黒い長衣を着込み、目深くフードを被ったその姿は古い伝承に語られる死神を思わせ

た。いや、違う。それは神殺しの大罪人だ。死神よりもなお忌まわしい。

「ぜあああああつー！」

愛用の大剣を振るう。

度重なる抗争で幾人も斬り捨ててきた。階層主であるゴライアスを斬った事もある。

しかし——

「なに!?!」

しかし、それは御大層な竜の紋章が施された——いつそ調度品の様にも見える盾にあつざりと弾かれる。それと同時に振るわれた切っ先が、胸元を浅く斬り裂く。

飛び退くのがもう少し遅ければ両断されていただろう。いや、Lv. 4に昇格してなれば、飛びのいていたところで間に合わず、真つ二つになっていたはずだ。

「……掃き溜めも鶴か」

ぼつりと、イレギュラー「正体不明」が呟いた。

「残念だ。『殺生石』さえ知らなければ、殺さないで済んだんだが」

自分を包囲する者達を一瞥し、小さくため息を吐く。

「殺せえええええええッ！」

息絶えた魔導士を蹴り除けながら、主神が叫び——そして、殺戮が始まった。

そして。

ほんの束の間、雲に隠れていた月が再び姿を見せる頃。

白々と差し込む月光に照らし出されたのは、路地の上、血の海に沈む一二体の遺体だけだった。

2

「シヤクテイ！ 起きているか!？」

その日は、まだ日も昇らぬうち、私を呼ぶ声で始まった。

別に珍しい事ではない。血気盛んな連中が住まうこのオラリオで、治安維持になど携わってれば日常茶飯事である。

とはいえ、好ましい事ではない。夜間帯を受け持つ団員にも相応の手練れがいる。

冒険者同士の小競り合い程度なら、彼らだけで充分に対応できる。

そんな彼らが団長である私を起こしに来た以上、控えめに言つて厄介な事が起こつてゐるのは間違いない。

いや、今回はそれどころではなかつた。

声の主はガネーシヤだ。

「ガネーシヤ、どうかしたか?」

寝台から跳ね起き、夜着を脱ぎ捨てながら訊き返した。

「そう。俺がガネーシヤだ!」

「分かつている。要件はなんだ？」

「すまんが至急、団員を率いて歓楽街へ向かってくれ！」

「歓楽街だと？」

愛用の戦闘衣バトルクロスを身に纏いながら訊き返す。

(確かに、ここ数日奇妙な動きを見せていると捜査員から報告が上がっているが……)

何分、あの区画は繁華街——特に大賭博場カジノと並んで私達が介入し辛い区画だ。

しかも、五年前からはギルドの制御も碌に利いていない。

(一体何が……?)

いや、ここ^{メタルファイト}で考え込んでいても仕方がない。

愛用の拳装と槍を携え、扉を開けた。

「一体何があつた？」

「うむ。色々と緊急事態だ!!」

ざつくりとした説明にも慣れていた。

「とにかく大急ぎで歓楽街に向かい、『女主の神娼殿』ベールト・パベリを押さええてくれっ！」

『女主の神娼殿』を押さええろだと……?」

その場所こそが歓楽街を支配する「イシユタル・ファミリア」の本拠地ホームだ。

押さええろと言われたところで押さええようが……、

「ひとまずの事はここに書いておいた！」

ガネーシャが軽く丸められた書簡を差し出してくる。

「詳しい事が分かれば追って知らせる！ 今は大急ぎで『ペーレト・バペリ女主の神娼殿』を押さえるのだ!! ここにギルドからの許可書もあるゾウ！」

「分かった」

書簡とギルドからの許可書を受け取り、頷いた。

ひとまず聞くべきことは聞いた。ならば、あとは主命を全うするのみだ。

「姉者ー」

詰所に向かうと、全員が装備を整えて待機していた。

私と同じLv. 5であるイルタ・ファーナを筆頭に総勢一八名。全員がLv. 3以上の精鋭だ。

「一体何が起こったんだ？」

おそらくガネーシャが手配したのだろうが——単に集めるだけ集めたらしい。私と同じく、まだ詳細は聞いていないらしい。

しかし——

(これほどか……。いや、当然だな)

この布陣は完全に切り込み部隊だ。通常の捕り物なら過剰戦力となりかねない。

かつて閹派閥イヴイルスへの強制捜査を行った時と比べても見劣りしないのだから。

「これより、『女主の神娼殿』を押さえる」

「はあ!？」

宣言すると、全員が驚いた声を上げた。

何しろ、あの派閥と私達はそれなりに因縁がある。

「どういう事だ姉者! まさか派閥抗争でもしようともいうのか?!」

本拠地ホムムを押さえようとするなら、確実にそうなるだろう。

……本来なら。

「いや、それはもう終わっている」

ここに来るまでに、書簡には軽く目を通してある。

「【イシユタル・ファミリア】は壊滅した」

簡条書きに書き殴られたその書簡は、ひとまず重要な項目だけを簡潔に伝えてくれた。

【正体不明】クオンイレギユラが関わっている」

それ以上の言葉は、もはや必要ななかった。

未だ朝日の気配すら感じない街を疾走する。

歓楽街は、第三区画から第四区画にかけて広がる広大な区画だ。

私達の本拠地がある第六地区からは、第四地区の入口を指すのが一番近い。

(まだ夜が明けていないのがせめてもの救いか)

広大なオラリオにおいて、複数の区画を超える移動には馬車タクシーを用いる事が多い。

オラリオ有数の大派閥である私達には専用の馬車もあるが……そこはガネーシャより『神の恩恵』を賜った私達である。

特に高位の冒険者であれば、馬に頼るより自らの脚で走った方が速い。

真に緊急を要する場合、馬車など使わないのが通例だった。

酔いつぶれ、路地に盛大に寝転がる冒険者を飛び越え、さらに加速する。

「姉者。先ほどの話は本当なのか？」

並走するイルタが、いつになく険しい顔で問いかけてくる。

「分からね。その真偽も含めて調査するのが私達の役目だ」

とはいえ、歓楽街に対しては特に腰の重い——五年前の一件以降は動いた事がないギルドが許可書まで発行したのだ。相応の根拠があるのは間違いない。

……まあ、クオン絡みである以上、ロイマンを素通りして出された指示とも考えられるが。

「それはそうだが……。いくらあの【イレギュラー正体不明】といえど、本当に神殺しなどするのか？」

返事をしかねた。答えを持ち合わせていなかったからではない。

きつかけさえあれば、躊躇いはしないだろうという確信があったからだ。

（だが、何故「イシユタル・ファミリア」なんだ？）

ここしばらくの間、あいつが襲撃していたのは「フレイヤ・ファミリア」のはずだ。

それに「イシユタル・ファミリア」はあいつと懇意にしているアイシャが所属する派閥でもある。

大体――

（あいつは歓楽街とほとんど関わりがないはずだが……）

しばしば誤解されているが、四年前にあいつが姿を見せたのは歓楽街ではなく繁華街だ。

それは本人以外にも、霞やアイシャからも聞いている。

そう。クオンと歓楽街を結ぶ唯一の接点こそが、アイシャ・ベルカだった。

（一体なぜ？）

いや、神イシユタルは神フレイヤに隔意を抱いているらしいという噂は耳にしていない。

連日の「フレイヤ・ファミリア」襲撃の噂を聞き付け、クオンと接触したとしても不

思議ではない。

例えば、その時にクオンを『魅了』しようとしたなら――

(逆鱗に触れるだろうな)

五年前の神フレイヤ同様に。

しかし、仮にそうだととして――

(何故、アイシヤは止めなかった?)

彼女は幹部の一人である。そうなる前に止める事ができたはずだ。

その疑問に答えが出ないまま、歓楽街へと到着した。

「特に異変はありませんね……?」

団員の一人が周囲を見回して呟く。

世界中の建築様式の見本市とも揶揄される街並みにはこれといって変化はなかった。

未だ夜が明けきらぬとはいえ、すでに客引きをする娼婦の姿はほとんどない。

酒でも飲んだのか、それとも搾り取られたのか、軒下で暢気に眠りこけている男がい

るのも普段通り――と、言っても、私も報告に聞くだけだが――だった。

いや……、

(男神達の様子が……?)

ここまでの道中で一番多く見かけたのは男神達だ。

普段であれば鼻の下を伸ばしている筆頭とも言える彼らだが、今は一様に険しい顔を

している。

（これは、本当なのか……）

クオンが神殺しを行ったのは。

内心で呻く頃には、城と見紛うばかりの巨大な娼館——「イシユタル・ファミリア」の本拠地である『女王の神娼殿』が見えてきた。

「これは、派手にやったようだな……」

街の様子から一転して、異変は明らかだった。

外壁の入口と建物の入口を繋ぐ石畳は抉られ、溶けては変質していた。

それをなした何かが直撃したらしい大扉と、外壁に設置されてたであろう鉄柵はどこにもない。

鉄柵と言っても、本当に『鉄』でできている訳ではない。迷宮資源を用いられているはずだ。

それが跡形もなく消し飛ばされるほどの火力がここで使われたのは間違いない。

「よう、同族。入団希望なら、ちよいと遅かったな」

建物内には凄惨な光景が広がっているに違いない——と、全員が固めたであろう覚悟は、ひとまず空振りに終わってくれた。

「そつちのヒューマンもなかなか……って、なんだ。よく見りや【象神の杖】じゃねえか」
 広大な玄関ホールに踏み込むと、灰色髪のアマゾネスに気楽な様子で出迎えられる。

「派閥抗争なら、お前らの勝ちでいいぜ。やりようがねえからな」

何なら投降の証にオレが全員相手にしてもいいぜ？——と、笑うアマゾネスに安堵すればいいのかどうなのか。

……そして、お前達男どもは動揺するな。仕事中大だ。

【イレギュラー「正体不明」と抗争したというのは事実か？」

「おうよ。耳が早いな」

あつさりと肯定してくるあたりは、豪胆なアマゾネスらしい。

いや、流星はあのアイシヤの同僚と言うべきなのか。

「噂以上の化物だなありや。普通に客として来てくれりやこつちも普通に大歓迎してたぜ」

あつさりと笑って見せるのは、実にアマゾネスらしい反応だと言えよう。

「ホーム内を搜索したいが、構わないか？ ギルドの許可書もある」

「好きにшина。さつきも言ったが、止めようがねえ。今日は客もいねえしよ」

肩をすくめるアマゾネスの言葉に領き、団員を連れて奥へと進む。

とはいえ、全員ではない。まずは本館を押さえ、守りを固めなくては。

火事場泥棒を企む不屈き者はいつだって現れるのだから。

(見事なものだな)

半数を残して先に進む途中、小さく呟いていた。

流石は大派閥の一つ「イシユタル・ファミリア」の本拠地^{ホト}だけあって、調度品はどれも豪華なものだった。

それに――

（もつと淫靡な造りになっていると思つたが……）

予想していたよりもずいぶんと上品な内装だった。

とはいえ、随所に蠱惑的な裸婦画や裸婦像が飾られている辺りは、いかにも戦闘^バ娼婦^ベの城といったところだろう。

特に裸婦像は英雄譚に語られる蛇の女怪によつて石に変えられたのかと疑うほど精巧なものだった。本当にただの石像か？――そんな疑問と共に、つい手を伸ばしてみたくなる程に。

いや、それはともかくとして……、

「本当に派手にやったものだな」

恐れ半分、呆れ半分と言つた様子でイルタが呟いた。

クオンが通り抜けたと思しき場所は、絵画も壺も盛大に破壊されている。

破壊痕を辿って行くと、いったん外に出た。

その先には、どうやら別館らしき建物がある。

その入口も、例によって派手に吹き飛ばされていった。

「これはまた……」

中に入つてすぐ、思わず呟いていた。

どうやら、ここが主戦場となつたらしい。

四〇階層以上はありそうな本館に迫る勢いで広大な別館を登りながら内心で呻いた。

破壊の痕跡は先に進むほど深くなり——しまいには床に大穴が開いているほどだ。

「一体どこに向かっているんだ？」

「空中庭園さ」

案内役として連れてきた灰色短髪のアマゾネス——サミラという名前らしい——に

問いかけると、彼女はあっさりと言った。

「何故そんな場所に？」

造りにもよるだろうが、防衛戦にはあまり向いているとはいふ難いように思うが。

いや、それとも開けた場所で物量に物を言わせて圧倒するつもりだったのか。

「色々あつてな。そろそろだぜ」

その先の広間は、今までで一番派手に破壊されていた。

どう考えても大規模な魔法が放たれたとしか思えない。調度品どころか、絨毯や壁紙

すら焼かれ、まるで廃墟の様だ。

「この防衛にあたった連中も、本当に来るとは思つてなかつたんだよ」
サミラが肩をすくめる。

私達からすれば何を暢気なところだが……まあ、これが真つ当な反応か。

(正体不明の名は伊達ではないからな)

有名な冒険者なら誰でもそういう傾向にあるが、あいつの場合は特に噂が先行している。

滑稽夢想、奇想天外、奇妙奇天烈な噂も多いが……。

(あいつの場合、実歴も規格外だからな)

L.V. 0でありながら【おうじや猛者】と互角に渡り合う——と。この時点で、常識的に考えれば滑稽夢想な話だ。私とてこの目で見ていなければ信じられなかつただろう。

そんなものが事実として成り立ってしまうのだから、あいつの噂が混沌を極めるのも無理はない。

そして、話の種として語るなら奇天烈なほど面白いというのはある種の真理だろう。

だが、そういう噂ばかりが広がると、事実すら噂となつて信憑性を失つていく。

結果として、あいつの実情はかなり曖昧にしか知られていない。

まさに正体不明という訳だ。

「(イ)が空中庭園か……」

ここの異変も明らかだった。

まずその一角が完全に焼け落ち、大穴が開いている。

「あそこには何があった？」

「さてね」

先ほどと同じく、サミラは何も話そうとしない。

小さくため息を吐いてから、視線を動かした。

もう一つの異変は、玉座にも似た立派な椅子の前にある。

こちらはあまり目立たない。

ただ、よく見るとその周辺の石畳が弧を描いて、滑らかに削り取られている。

距離にしておよそ七Mほど。魔法の痕跡に似ているが——

(術者はあの椅子の傍にいたとしか思えないな)

近くに片膝をつき、その痕跡を指先で撫でながら呟く。

その痕跡は、椅子を始点にやや右に湾曲した円錐を描いて広がっていた。

「あの椅子は誰のものだ？」

「そりゃ、もちろんイシユタル様のものさ」

当然だろ——と、言わんばかりにサミラ。

確かに豪華な椅子だ。それ自体は何の疑問もない。

だが、そうなると……、

(この痕跡は、神イシユタルが何かした結果という事にならないか?)

それはあり得ない。天界ならばまだしも、下界では如何に神と言えど人間と……それも恩恵を持たない常人と変わらないのだ。こんな真似ができるはずがない。

その痕跡は、まるで熟練の石工が丹念に磨き上げたかのように滑らかだ。

余計な傷はない。よほど高位の——それこそ、「九魔姫」^{ナインヘル}ほどの魔力とそれを御する精神力を有していたとして、果たして真似できるかどうか。

そんな事をもし神イシユタルができたとするなら、それは——

(なりふり構わず、『神の力』^{アルカナム}を使用した?)

それも場合によっては許可される『神の鏡』ではなく、攻撃の手段として。

それほどの危機感を、神であるイシユタルに抱かせたという事になる。

いくら手練れとは言え、ヒューマンであるクオンがだ。

そんな事が本当にあり得るのだろうか。

(いや、あり得るのか?)

彼の話が本当なら。

そして、実際にデーモンは姿を現した。

あれが神すら脅かす厄災であり、クオンがそれを討滅する力を持っているならば——

「ところで【象神の杖】」

戦慄していると、サミラが言った。

「何だ？」

「どうせここを漁るんなら、ついでにオレ達も守ってくれねえか？ 敵が多くてさ」
「イシユタル様がいなくなっちゃまって戦えねえんだ——と、サミラは苦笑した。

「……いいだろう。お前達には聞きたい事が山ほどある」

どのみち、その手はずは整えてある。

「拷問は勘弁だぜ？ アイシャの二の舞は勘弁だつての」

それは軽口だったのだろう。

ただ、後半の言葉を口にした時、サミラはしまったと言わんばかりの顔をした。
とはいえ、それはそこまで差し迫ったものではない。

つまりない軽口を叩いてしまった——と、その程度のものだろう。

だが、その言葉は聞き流せない。

「その話、詳しく聞かせてもらおうか？」

さっさと立ち去ろうとするサミラを追って、問いかける。

「どの話だよ？」

「アイシャ・ベルカについてだ。拷問されたとはどういうことだ？」

「あ……いや、大した話じゃねえよ。「ファミリア」内のけじめって奴で、お前には関係ない」

ほらほら、本館に戻ろうぜ——と、露骨に話を逸らそうとするサミラをさらに問い詰める事にした。

「いいや、そうとも限らん」

何しろ、アイシヤはクオンの……まあ、何だ。おそらく情婦という奴だ。

少なくとも、出会ったのは——男女の関係を持ったのは霞が先のはずだ。

(あいつらの関係性はよく分からないがな)

霞とアイシヤの仲の良さを思い出しながら、内心で首を傾げる。

「ずいぶんとアイシヤにこだわるじゃねえか。あれか。お前も【イレギュラー正体不明】の女つてのはマジだったりののかよ？」

……まあ、そういう噂が立っているのは知っているが。

同じ噂を持つ【ナイン・ヘル九魔姫】よりも頻回に顔を合わせているだろうし、それも致し方ない事だ。……もつとも、全ての原因はあの男がふしだらなせいだが。

「ちなみに、私以外は誰なんだ？」

事実無根——少なくとも私に関しては——の噂をいちいち相手にしていても仕方ないが……どうやら今は利用できそうだ。

否定も肯定もせず、ただ問いかけた。

「あん？ そりや、^{ナイン・ヘル}「九魔姫」とアイシャだろうか？」

……やはりか。

「アイシャとクオンの関係を知っているんだな？」

「……あ」

今度こそ失言を悟ったらしく、サミラは露骨に視線を逸らした。

ならば、隠し立てする必要はない。

「クオンとアイシャは確かに男女の関係にある」

以前アイシャは否定したが、あの二人は馴染みの客と娼婦というには少々親密過ぎた。

「そんなクオンが何故「イシユタル・ファミア」を襲撃したのか腑に落ちなかったが、もしアイシャ・ベルカが拷問されていたとするなら、それも説明がつく」

そう、その原因が必ずしもアイシャに非があるものではないとすれば。

そして――

「その時、直接手を下したのは神イシユタルなのではないか？」

だとすれば、可能性は充分に出てくる。

もつとも、今のところの手ごたえからして、まだもう少し裏がありそうだが。

そして、おそらくはその『裏』こそが、オラリオをひっくり返しかねない何か、という事だ。

「さーて！ レナ達の様子を見に行かねえとな！」

露骨に話を誤魔化し、サミラは空中庭園から逃げ出していく。

「やれやれ……」

イルタと他に数名を空中庭園に残し、私達も後を追った。

「流石に手際が良いな」

幸い「イシユタル・ファミリア」の関係者は、別館にあるいくつかの大部屋に揃っていた。

本館で見かけた者達は、取り急ぎ貴重品の回収を行っていたらしい。

残してきた団員にはその作業を手伝わせ、終了後はこちらに合流させてある。

……もつとも、そのせいで本当に隠さねばならない『何か』はまだ向こうに残されている可能性もあるが。

「いや、単に面倒だっただけだ」

ともあれ。私の眩きに、サミラはあっさりと肩をすくめる。

「アイシヤの奴に後の事は全部押し付けられちまったからな。本拠地ホト中に散らばられちや指示出すのも一苦労だろ？ それに、怪我人も派手にやられた奴はこっちの方が多

かったしよ」

あと、物資もこつちに集まつてたんだ——と、サミラ。

クオンの襲撃に備えて、という事だろう。

「離反者はどれくらいいる？」

「実はまだ数え切つてねえんだ。何しろ、見ての通り戦えない高級娼婦おんんなもいるからな。そつちの保護を優先してたもんでね」

確かに、一見するとか弱そうに見える女性も相当数この本拠地ホトにいる。

「けど、ヒキガエル達……団長と副団長は揃つていねえよ」

だから、オレが面倒見てるつてのもある——と、そんな言葉を聞き、ため息を吐いた。

(まあ、当然と言えば当然だろうが……)

重要な何かを知つていたであろう団長と副団長が揃つて不在とは。

あるいは、他にも重要な事を知つていた団員を離反したと言つていただけなのか。

「この別館は何のために建てられたんだ？」

「見りや分かるだろ？ 特別上等な客のための貴賓室さ」

確かに臨時の病室となつた部屋は広大で上等な造りだった。

何しろ、室内には浴室まであつた。設えられた湯舟は大人数人でもゆつたりと浸かる事が出来ただろう。しかし、部屋の広さに反して寝台は一つしかなかった。

……まあ、天蓋付きの立派なもので、一度に五人ほど横になれそうな大きさがあつたが。

「その割にはあまり使われていなかったようだが？」

「そりや、そんな上物が毎日来るわけじゃねえからな」

それはそうだろうが——しかし、それだけが理由とは思えない。

いや、別館の建築の最初の理由はサミラの言う通りだったのかもしれないが——
(気になるのは空中庭園だな)

特に、完全に焼き尽くされていた一角だ。

あれをやつたのはクオンに違いない。だが、一体何故そこまでしなくてはならなかったのか。

「空中庭園には何があつた？」

改めて、本題に移った。

「見ての通りの場所だぜ」

「何のための場所だ？」

「そりやもちろん、外でシたい客のための場所さ」

ニヤニヤと笑うサミラに、胸中で嘆息する。

どうにも埒が明かない。

(手札が少なすぎるな)

そもそもガネーシャからの指示書には『女主の神娼殿』ペーレト・パベリを押さえろとしか書かれていない。

事前情報がほぼない状況だ。普段通りに事を進めようとする方が無理がある。

(ひとまず続報を待つしかないか)

これ以上の離反者を出さず、重要な『何か』を破壊ないし隠蔽させない事を最優先とすべきだろう。

「団長!!」

これから先の人員配置を考えていると、団員の一人が飛び込んできた。

「どうした?」

「襲撃です! ガネーシャ様からの伝令がやられました!」

「何だと?!!」

「幸い伝令は生きていますが、敵はなおも攻撃を継続中です!」

「本拠地内に侵入を許したのか?」

「申し訳ありません!」

団員の返答に、流石のサミラも顔色を変えた。

だが、今はそれどころではない。

「全員を呼び戻せ。まずは別館最上階の安全を確保する」

たった一九人では別館全域の確保すら不可能だ。

それどころか、実際に守れる範囲はもっと少ない。

(空中庭園に本陣を敷くしかないか)

非戦闘員全員が集まれる場所はそこくらいなものだ。

「はっ！」

その団員が外に出ると、特定の旋律を刻む笛の音が響き渡る。

耳を澄ますと、同様の笛の音が輪唱の様に数カ所から聞こえてくる。

「心当たりはあるか？」

「ああ。ありすぎて逆に分からねえぐらいにな」

それはそうだろう。今さら嘆息する気にもならない。

(まったく、ハシャーナの仇も追わねばならないというのに……)

やっとフィリア祭の騒ぎが一段落ついたかと思っただらこの有様だ。

(今日も長い一日になりそうだ)

迫る殺気を感じながら、小さく呻いていた。

ギルドの最奥——主神ウラノスが座す『祈祷の間』。

ダンジョン封印の要であるこの部屋は、普段から陽気さとは程遠いが……

(今日は飛び抜けて酷いな)

それも当然か。

恐れていた事がついに起こってしまったのだから。

神殺し。下界における最大の禁忌をクオンは冒した。

しかも——

「……まさか神イシュタルとは」

殺されたのは、あいつと親密な関係にあるアイシャ・ベルカの主神だ。

いや、詳細を聞けば確かに納得だが——

「私はむしろ、かの女神がクオンを抱き込み、手出しできなくなる事を恐れていたよ」

繰り返すが、神イシュタルはアイシャ・ベルカを眷属としている。

ある意味において、どの派閥よりもクオンを取り込みやすかったはずだ。

とはいえ、事ここに至っては安堵する気にもなれないが。

「あの男と私達神々の確執はそう容易いものではない」

腹に鉛でも詰まっているかのように重苦しい声でウラノスは呟いた。

「クオンなら殺すだろう。必要とあらば、それが例えガネーシャやミアハであつても」

「……それほどか」

かつてまだ体があつた頃なら、鳥肌と冷や汗に悩まされた事だろう。それほどまでに、ウラノスの言葉は確信に満ちていた。

ほんの僅かな疑念すら、そこには宿っていない。

「ウラノス。改めて聞くが、本当に神イシユタルは殺されたのか？」

しばらくの沈黙の後、口を開いた。

「ああ。イシユタルは死んだ。天界に還つた訳ではない」

再び、何の疑念もない声でウラノスが頷く。

しかし、何度聞いても信じがたい。

……人間クオンが超越存在イシユタルを完全に殺せるなど。

「『ソウルの業』か。話には聞いていたが……」

まさかこれほどのものだとは。

ないはずの肌に鳥肌が立つどころか、骨まで泡立つたような気分だった。

「『火の時代』の闘争とは、魂の喰らい合いだったと聞く」

神座にもたれかかり、ウラノスは言った。

「いかに我ら神とは言え、魂を奪われては死ぬしかない。今のガネーシャなら納得するだろう」

「……それは、デーモンと対峙したからか？」

「ああ。あれもまた我らを殺しうる厄災だ。それを殺せるのであれば、私達も殺せる。いや、それができなければ生きていけなかった時代だったとも言えるだろう」

「格上殺しができなければ生きていけない時代か……」

神にも匹敵する敵を打ち倒さねば生きていけなかったとするなら——と、胸中で呟く。

なるほど、クオン達がこの時代を平和だと言うのも納得がいくというものだ。

「そして、今やその脅威がダンジョンにそれが巢食つていると？」

「おそろくな」

「……今さらなのだが、ウラノス。貴方ならダンジョンに異変があれば分かるのではないか？」

少なくとも、ダンジョン内の深刻な異変に関しては把握しているはずだ。

異端児ゼノスという飛び切りの異常事態イレギュラーにすら勘付いたのだから。

「見通せない」

「……何だつて？」

「異邦人フオリナー達の誰かが邪魔をしているのか。ダンジョン自身がそれを受け入れているのか。あるいは、取り込もうとしているのかもしれないが。いずれにしても、ある領域より

「先で何が起こっているのかはまるで分からない」

フオーリナー
異邦人。クオンをはじめとした『火の時代』から流れ着いた者達。

まだ詳細を知らなかった頃に、私達は彼らをそう呼称していた。

その後、クオンらと関わり、彼ら不死人が共存可能な存在だと分かっていたから使わなくなつて久しい。それを今、改めて使うとなると――

「不死人以外の何かが存在している?」

「ああ。それが私の祈^神禱^カを受け付けない」

「まさか神とは全く別の超越存在がいると?」

「何を以つて超越と言うのか、という問題にもなりそうだがな」

確かに、完全な神殺しをやつてのけた以上、クオンは人間を超越しているとも言えるが……。

「私が探っているのと同じく、^{フオーリナー}異邦人もこちらを探っている。今この時もだ」

思わずゾツとした。

慣れ親しんだ『祈禱の間』の薄闇が、妙に不気味に感じる。

すぐその物陰から、得体の知れない何者かの息吹が伝わってくるような……、
「覗き込めん。無理に覗き込めば、おそらく私は耐えきれない」

愚かな妄想に耽つている間に、ウラノスが言葉を続けた。

「どういう意味だ？」

「これは私達にとつての猛毒だ。もし触れれば、あとは狂うしかない」

ウラノスは、こうして詳細をはぐらかす事があった。

私にとつては長い付き合いだが、ウラノスにとつては刹那の事なのだろうか。

「許せ、フェルズ。私にも恐ろしいものがある。そして、できれば語りたくない事もだ」

それを見透かしたように、ウラノスは言った。

「語りたくない事、か……」

それは、おそらく——

「千年前。降臨した時……いや、旧バベルを破壊した時の事か？」

神が降臨し、『神時代』が幕を開けた時の事だろう。

（その時に、何かがあったはずだ）

神々は『遊びに来た』などと言うが……いや、それは事実だろう。

大半の神々が地上に娯楽を求めてきているのは間違いない。

（だが、最初に降臨した神々は本当にそうなのか？）

少なくとも、ウラノスは違うような気がしてならない。

ここで祈祷を続ける事に、一体どんな娯楽があるというのか。

私には時に懺悔しているようにも見える。

(そして、もう一つ)

こちらは心情的なものではない。

客観的に見れば——そして、探究心を僅かでも持つなら——誰でも疑問に思う事だろう。

(痕跡が少なすぎる)

『古代』についての記録がほとんどないという事だ。

いや、それは語弊がある。

それこそ迷宮神聖譚や各種の英雄譚は、『古代』の英雄達の姿や功績を伝える。あるいは、彼らが生まれた国や旅した世界についても。

気になるのは、オラリオだ。

かつて『世界の果て』と恐れられたこの地に旧オラリオが築かれたのは神々が降臨する前だ。

その旧オラリオに関する情報がほとんど残されていない。

どうせあつても粗末な小屋ばかりで、残す気にもならなかつただけだろう——と、そう言つて笑う者もいるが、私はそうは思わない。

(この地には『古代』にも文明があつたはずだ)

そうでなければ、仮にもダンジョンの蓋となつた旧バベルを建築できるはずがない。

モンスターの侵攻を防ぎつつ塔を築くには、相応の人員や物資、施設が必要となる。それを賄えるだけの都市がここにはあつたはずである。

だが――

(何故、何も残っていない?)

遺跡だろうが文書だろうが……旧オラリオを伝えるものはほとんど残されていない。

……いや、理由にも見当がつく。理由というよりは原因か。

(……【狼騎士】アルトリウス)

語られざる大英雄【狼騎士】アルトリウス。

種族を問わず数多の英雄を束ね率いて、かつて『世界の果て』と恐れられていたこの地に攻め込み平定したという大英雄。エルフもドワーフもアマゾネスも……あらゆる種族の全てを束ねたかの英雄は、まさにオラリオ――すべての種族が共存するこの都市の生みの親だ。

オラリオ開闢を成した英雄達の間には上下関係はなかったとされている。

しかし、彼が英雄同盟――『円卓の誓い』の盟主であり、中核――全軍指揮担つていたのは明らかだ。

そもそも彼無くしてその同盟が成立しなかったのは誰の目にも明らかであり……それは当事者である数多の英雄達ですら、認めるものであつたはずだ。

【狼騎士】——あるいはまた【狼王】アルトリウス。

その呼称こそが何よりも雄弁にそれを語っている。

無論、彼がオラリオの王だったという確たる証拠はない。

しかし、この英雄がいなければオラリオの始まりは数百年ほど遅れたらう。そういう歴史家は多い。

いや、ダンジョンから無限に生み出されるモンスター達に蹂躪され、神蓋建築を待たずして人類史そのものが途絶えていた——と、そう推測する者も決して少数とは言えない。

比類なき偉業を成し遂げた大英雄だが……彼について現在いまに伝わる事は少ない。

理由ははっきりしている。

(神々への反逆、か)

その英雄は『古代』の終わり、神々の降臨に際して、彼らに反逆したとされる。

理由は定かではない。少なくとも現代には伝わっていないかった。

ただ、彼が仲間の一部を率いて神に反逆したという短い記述だけが遺されているばかりだ。

(保身、とは思えないがな)

街の支配権を奪われる事を恐れたのだ——とする説はある。

戦場にあつては無双の強さを誇り、平時においても数多の種族から厚い信頼を寄せられ、至高の騎士と称賛されたその英雄と云えど、野心には勝てなかつたのだと。

理由は何であれ、かの英雄の物語はその大逆を以つて幕を閉じる。

原初の『冒険者』達に討たれたとも、オラリオを去つたとも言われるが——そもそも、生没年はおろか、どの種族だったのかも定かではない。

彼の足跡は古代史からほぼ完全に削ぎ落されている。

それでも数多の英雄譚にその痕跡を残しているが、彼自身の逸話は遺されていない。少なくとも神公認のものは。

旧オラリオと言い、旧バベルと言い、アルトリウスに関するあらゆるものを歴史から葬ろうと誰かが画策したかのように。

そして——

(そんな事を企めるとしたら、それは神々しかない)

人々の口を封じ、記録を残さないように——あるいは、その痕跡を悉く破壊するよう人々を誘導できたとすれば、それは神々しかありえない。

(だが、一体何故?)

そこまでして、一体何を隠そうとしたのか。

……それに関しても、推論はある。

古代の英雄達も、まるで『神の恩恵』を賜ったかのような人間離れした逸話を多く持っている。

もちろん、精霊の加護を得た結果——と、多くの場合は伝えられている。

実際、それもまた事実だろう。神の降臨以前、精霊が英雄の導き手だったのは歴史的にも明らかではある。

だが、クオオンの存在を……何より彼が神殺しを可能とする理由を考慮するなら——

「……まあ、語りたくないと言うならこれ以上は訊かない。すまなかつた、ウラノス」

おそらく『神時代』の幕開けは、語られるほど華々しく、祝福に満ちたものではなかつたのだろう——と、一足飛びに結論だけを呟き、思索を打ち切つた。

「……いずれ」

私が話を変えるより先に、ウラノスが呟く。

その声は、見た目通りに年老いた老爺のそれに似ていた。

「いずれ、話そう。……時が来たなら、全てを」

いや、声だけではない。

その姿は、遠い昔の何かを後悔する老人のそれだ。

ギルドの創設神であり、神蓋ハベルの要でもある偉大な老神の姿は、今そこにはなかつた。

「……分かつた」

それ以外に一体どんな言葉をかけられる？

例え過去にウラノスが何をしていたとして——それでも、この千年にわたる安寧は、彼の献身なくしてはあり得なかった。

そして、私はその姿を数百年に渡って傍で見えてきたのだ。咎める言葉など、もはや持ち合わせていない。

「それより、これからどうする？」

改めて、話を変える。

今は遠い過去よりも、すぐ先の未来の方が重要でもある。

「流石に今度は隠せない。四年前の小競り合いとは訳が違う」

実のところ、クオンが神殺しを冒すのはこれが初めてではない。

四年前——それもオラリオに迷い込んですぐに、あいつは神を殺している。

知られていないのは、その時に殺された神は閻派閥イヅイルス残党の主神だったからだ。

もつとも、事が済んでから露見した事だが……それも含めて、まだ細々と続いていた残党狩りに紛れ込み、さしたる話題にはならなかった。

(……まあ、私達が慌てて誤魔化したというのもあるが)

それが、私達がクオンの存在に勘付いた最初の原因でもある。

と、それはともかく。

何であれ今回はそうはいかない。

「イシユタル・ファミリア」ほどの大派閥が壊滅したとなれば噂になるのは避けられない」

そして、眷属達の「ステイタス」が封印されている事実もある。

ならば――

「神イシユタルがどうなったかは明らかだ」

クオンがギルド公認のLv. 0である以上、自ら手を下す以外の方法はあり得ない。「事が神殺しとなれば、ロイマンなら安易に討伐命令を出しかねない。そうなれば終わりだ。クオンと全面戦争になるどころか、アン・デールとやらも動きかねない」

最悪の場合、彼に従う異端児達までが敵に回る。

もしそうなれば、リド達とも対立する事になりかねない。

そして、今回はそれ以外にも脅威となるものがある。

下手を打てば、オラリオそのものが滅びかねない。

私達に、クオンを完全に殺し切る術はない。

遠い昔、まだ超越存在として君臨していた神々。その英傑達ですら、ついに出来なかつた事だ。

オラリオの総力を挙げれば何度か――あるいは、幾度となく殺す事はできるかもしれ

ない。だが、最後に生き残るのはまず間違はなくクオンだ。

そうでなければ、あいつは知られざるその大偉業を成し遂げる事などできはしなかっただろう。

「……クオンが持ち込んだ資料は本物か？」

ウラノスはそう問いかけてきた。

「ああ、本物だ。神イシユタルは間違いなく『殺生石』を作ろうとしていた。私が保証しよう」

これでもかつては『賢者』などと呼ばれていた身だ。

かの邪法についても嗜みとして知識を有している。

ああいや、もはや嗜みとは言い難いか。

(まさか再び関わる日が来るとはな)

遠い昔、ふとした縁で持ち込まれたあの石を思い出す。

あの時は石こそ無傷のままだったが、戻すべき肉体がすでに失われていた。

あれこれと手を尽くしたが……結局、石から魂を解放して天に還してやる事しかできなかった。

そんな苦い思いのある代物だが、まさかまた頭痛の種になるとは。

(まあ、今回は完成していない。それで良しとしておくか)

そう言つて自分を慰められるだけ、あの時よりも随分と気が楽だ。

もつとも——

「となれば、例の話も事実と見るしかない」

頭痛の種なら、まだ他にある訳だが。

「……階位昇華魔法レベル・ブーストか。五年前の一件は、ある意味正しかったようだな」

団員のL.V.を虚偽報告しているのではないか？——複数の派閥が「イシユタル・ファミリア」を告発した事から始まった一連の騒動は、『暗黒期』らしい狂奔の中でおよそ最悪の形で終わった。

訴えた神々は天界に送還され、ギルドは賠償金を支払う事に——その結果、委縮して『歓楽街』での違法行為を黙認するようになった。

(全ては神イシユタルの迷惑通り、か)

結局、神イシユタルを訴えた派閥の主神達が正しかったわけだが……今さらそれが判明したところでどうなるものでもない。

「まさかそんな魔法が存在しているとは夢にも思わなかった」

一時的には言え『神の力』アルカナムに干渉するなど。

同じ魔導士として言わせてもらえば、それだけでも卒倒ものだ。

だが、問題はもつと現実的である。

「そんな魔法が存在し、しかも誰でも使える手段がある。もしこの情報が流出すれば、オラリオ中の「ファミリア」が追い求めるだろう」

一時的にはいえ、一切の危険なくL.V.を一段階上げられる。

冒険者にとってL.V.が絶対の基準である以上、その魔法が持つ魅力は計り知れない。

まして、『発動対象は一人限定』という制限を取り払う手段まで存在しているとすれば「下手をするとその魔導士の身柄を巡って動乱が起こりかねない」

それこそ『暗黒期』の再来だ。

いや、あの時はまだギルド派閥対閥派閥イヴイルスという明確な対立構造があった。

だが、これはそうならない。

全ての派閥が各々それを狙いだしかねないのだ。

そうなれば、もはや收拾はつくまい。

乱戦に次ぐ乱戦がオラリオ中で起こるのだから。

「その魔導士を殺してしまえ。そういう過激な発想をするものが現れないとも限らない」

それもまた充分に考えられる。

動乱に幕をひくためか。それとも、自分の物にならないならいっそ——という理由かはさておき。

それを恐れたからこそ、クオンもその魔導士の身柄を別の場所に隠したのだろう。

……まあ、実を言えばどこにいるか凡その見当はついているが。

(何しろ、お互いに頼れる相手は限られているからな)

と、それはともかく。

「そうなったら、おそろくクオンも参戦する」

そして、参加する他の全てを殺すだろう。

「分かっている」

ウラノスが深々と嘆息した。

「ひとまず、ガネーシャの子供達に期待しよう」

「イヴイルス闇派閥との接点か？」

クオンはそう言っていたが……それについてはどうにも怪しいのだが。

(何しろ、幹部の一人である【麗アンティアネイラ傑】すら詳細を知らされていなかったらしいからな)

とはいえ、彼女と神イシュタルとの間に確執があったのも事実。

幹部の中で彼女だけが知らされていなかった可能性もあり得るが。

「ああ。もしそれが事実なら、それを全面に押し出す」

確かに闇派閥イウイルスの残党狩りだとすれば、多少は心証も良くなるが。

「……褒められた方法ではないが、それしかあるまい」

許せ、イシユタル——と、岩でも吐き出すような声で、ウラノスは言った。

確かに現状ではそれが最善となるだろう。

クオンと敵対するのは言うに及ばず、『殺生石』の情報が露見するのもオラリオの危機だ。

しかし——

「悪魔デーモンの次は、闇派閥イウイルスの暗躍に期待する事になるとは……」

そう言えば例の『魔石』は結局発見されなかったのだが、無事に砕かれたのだろうか。

(いや、それもどうか……)

あの直後、どこかの派閥が闘技場周辺を搜索していたと聞く。

今のところまだ確定には至っていないが、おそらく——

(【ディオニユロス・ファミリア】か)

その団長である【白巫女マイナデス】だったのではないかと、神ガネーシャは言っていた。

何でも、団員が地下水路でもそれらしい姿を見かけたらしい。

(また妙なところが動き始めたものだ)

団長の【白巫女マイナデス】こそ少々剣呑な噂があるが、それを除けば可もなく不可もなくと言っ

た平凡な派閥である——と、少なくとも一般的には認識されている。

主神であるディオニュソスは少々食わせ者だが……それを言えば、神は大体そうだった。

だが——

『食糧庫』の一件にも【白巫女】マイナデスは関わっているらしいな

それどころか、出してもいない冒険者依頼クエストについて問い合わせてきていた。

どうやら、彼女達もまたギルドを疑っているらしい。

（まさか【ロキ・ファミリア】と組んだか？）

地下水路と言えば、【ロキ・ファミリア】も大々的に搜索に乗り出してきた。

ギルドを疑っているのはあの派閥も同じだが……いや、そもそも神ディオニュソスが唆した結果と可能性もあるか。

何であれ厄介だった。

例の『魔石』だけならまだしも、異端児達ゼノノスの存在まで探り当てられようものなら、控えめに言って悲惨な事になる。

（多大な苦勞を背負うと覚悟はしていたが……）

せめてもう少し加減してもらいたいものだ——と、叶うはずもない願いを胸中で呟いた。

ようやく淫都に日の光が満ち始めた頃。

「ひとまず、物資の確保は終わったぞ。姉者」

「ああ。ご苦労だった」

空中庭園に敷いた仮初の本陣でイルタの報告に応じる。

クオン襲撃に備えていたおかげで、この別館——特に重要な拠点だったらしい空中庭園周辺には予め回復薬や武器の類が多く保管されていた。

ひとまず、その半数以上を回収できたのは幸運と言えよう。

(おかげで伝令も何とか持ち直したな)

それでもまだ、この建物内で一番の重傷者だが。

同じくまだ自分で動けない戦闘娼婦達もこちらに運び込んである。

空中庭園はいくつもの柱に守られており、本館からの狙撃はそこまで気にする必要がない。

ここに繋がる空中廊下と、おそらくクオンが突破してきた大広間には即席の阻塞を構築し、それぞれ六名の団員を配備してある。

見晴らしのいいここなら、姿を消しでもしない限り奇襲もできないはずだ。

(いや、決して油断ならないな)

ガネーシヤからの封書を見やって嘆息した。

イシユタルは生贄の儀式を企んでいたらしい!——と、最初の一行目には書かれている。

とはいえ、そちらに関してはクオンが儀式場を破壊し、生贄となるはずだった誰かと資料も持ち出しているという。

(つまり、あそこか)

徹底的に焼き尽くされた区画を見やり、胸中で呟く。

いや、この空中庭園そのものが儀式場と言われればその通りか。

もし何か残されていたら確実に確保ないし破壊するように——と、その手紙には記されている。

……もし流出したなら、それだけでオラリオがひっくり返りかねないとも。

そこまでも頭の痛い話だ。

だが、まだ続きがあつた。

「サミラ。【イシユタル・ファミリア】が閻派閥イザイルスと接点があつたというのは確かか?」

イルタ達を案内してもらっていたアマゾネスに問いかける。

「あ……」

しばらくの間、槍——護身のため、携行を許可した——で肩を叩いてから。「そうらしいな」

観念したように、彼女は髪を掻きむしった。

「けど、オレも詳しくは知らねえんだ。そっちの方はイシユタル様が自分でやってただけでね。詳しい話は何も聞いてねえ。マジだぜ？ 今さらんな嘘つくかよ」

まあ、それこそタンムズの奴だったら、何か聞いてたかも知れねえけどな——と、サミラ。

「つまりこれは口封じということか？」

「おそらくはな。サミラ達を介して自分達の情報が流出するのを嫌ったのだろう」

イルタの問いかけに、肩をすくめて返す。

と、それを見ていたサミラも流石に顔を強張らせる。

いかに勇猛なアマゾネスと言えど、「ステイタス」が封じられては常人とさほど変わらぬ。

……いや、それでもしv. 1程度なら相手にできるだけの実力者もいると聞くが——
(問題は相手だな)

それとて、連携を組まれば話は変わってくる。

いや、それ以前に肉体の強度——『器』の差は明白だ。

一度や二度なら互角に渡り合えるかもしれない。

(だが、三度目は？ 四度目は耐えられるか?)

無理だろう。確実に先に息が上がるのは彼女達の方だ。

何より、相手は闇派閥イツイルスと見ていい。

目的を達するために、どんな手段を使ってくるか知れたものではなかった。

過去には自爆特攻すら厭わなかった事実がある。

……そして、『二七階層の悪夢』という惨劇すらも引き起こしている。

「伝令はL v. 2。それも上位に食い込む実力者だ」

イルタが、改めて言った。

もちろん、私は団長だ。そんな事は心得ている。

「ならば、敵もL v. 2以上と見ていいな」

相手がL v. 1であるなら、奇襲を受けたとしてもあままで手酷くやられはしない。

少なくとも同格L v. 2。練度でも互角かそれ以上。

「今のオレ達じゃ束になっても、テメエの身を守るのが精いっぱいだろうな」

ステイタスなしじゃこんなもんだったか?——と、サミラ。

「何、自分の身を守るだけでもありがたいものだ」

これで守るべき相手が全員、完全な一般市民だったら、とつくに詰んでいる。

たった一九人でこの人数を守れると思える程には傲慢にはなれない。

「ま、確かにL.V. Oで【おっじゃ猛者】に喧嘩売る馬鹿がいるんだ。オレ達だつて多少はな」
腹を括つたかのように不敵な笑みを浮かべるサミラに、小さく笑い返してから。

「さて、では作戦会議といこう」

持ち込んだテーブルに、ガネーシャの封書に同封されていた『ペーレト・バビリ女主の神娼殿』の見取り図を広げる。

「こんなもん、どこで手に入れたんだ？」

「知らないな。興味があるなら【イレギュラー正体不明】に直接聞くといい」

少なくとも、ガネーシャはクオンから受け取っているらしい。

手紙にはそう書かれていた。

「つーか、アイシヤも絡んでるのかよ」

さらに言えば、見取り図にはアイシヤによるものと思しき添え書きがある。

どうやら、神イシユタルの私室や隠し倉庫の類の位置らしい。

欲を言えば、こうなる前に届けて欲しかった。

「道理で空中庭園まで迷いもしないで攻め上がってきた訳だ」

「その時はアイシヤの手助けはなかったようだがな」

新しい注釈はお前への詫びだ——と、クオンと思しき筆跡の走り書きもある。

お前とは私の事で、新しい注釈はアイシヤが書き込んだ分だろう。

(詫びだと思ふなら、せめて事前に……)

相談しろ——と呟きかけた言葉は、ため息に変わった。

相談されたからと言って、それに応じられたかどうか。

派閥が大きくなり、都市全域を警備できるようになったが、その反面、大派閥としてのしがらみも増え、足回りは鈍くなった。

まして相手はギルドの制御を受け付けない大派閥「イシユタル・ファミリア」だ。

クオンがいつその『生贄の儀式』について知ったかは定かではないが——いずれにしても、私達が調査を強行するだけの証拠を揃えていては間に合わなかったのだろう。

ギルドも同じだ。……いや、ロイマンなら『生贄の儀式』すらも見て見ぬふりをしかねない。

(彼女達がいてくれればな)

盟友として共にオラリのために戦った、とある派閥を思い出す。

少数精鋭だった彼女達の足回りのよきは、私達の弱点を補ってくれていた。

……今はもうない、「アストレア・ファミリア」は。

「チツ、どのみち下準備は万全だったって事だろうが」

サミラの舌打ちで、つかの間の回想は終わる。

感傷に浸っている暇はない。そして、ない物ねだりもしてられない。

今は、目の前の危機に対応しなくては。

「それはそうだろうな」

その見取り図には、クオンらしき筆跡で小さな走り書きや記号が書き込まれている。最短距離を——いくつもの防衛状況を想定した各種最短距離を模索した証だった。

「お前達がどう思っているかは知らないが——」

小さく苦笑して見せる。

「あいつはあれで意外と慎重なんだ」

敵対した相手に容赦しない苛烈さもまた、その慎重さの表れと言えよう。

確実に無力化するまでは手を止めようとしなない。

おそらく、そうしなくては自分が殺されるからだ。少なくとも、今まではそうだったに違いない。

（それも同然か）

フィリア祭の日に対峙したデーモンを思い出す。

あんな怪物といつどこで出くわすか分からないような場所を、あの男は旅し続けてきたのだ。

油断などできるはずもない。慎重すぎても足りない。だが、豪胆でなくては先に進め

ない。

そして、苛烈さがなくては生き残れない。

(その心構えは見習うべきかもしれない)

特にこういつた危機に際しては。

「ひとまず、この書き込みに対して全て対策を講じる」

この際、敵はクオオんだと想定しておく。

あいつを仮想敵に据えるなら、何を仕掛けてきたとしても驚くに値しない。

手紙ではすぐに援軍を送ると書かれている。

そして、異常事態を伝える烽火はすでに上げてあった。

編成が完了し、部隊が到着するまであと数時間守り切れればいい。

……相手に他の狙いがないなら。

「イルタ。この防衛は任せた」

だが、おそらくそんな事はない。

ここを守っているだけではオラリオを動乱に導く何かを外に流出するだろう。

それでは意味がない。打って出るしかなかった。

「心得た。だが、姉者は？」

「神イシユタルの神室を目指す。何か残されているとすれば、そこが有力だろう」

神室は別館と本館の最上階にそれぞれ存在している。

「ひとまずは別館の神室に向かう。サミラ、悪いがついてきてもらおうぞ」

襲撃者達が求める『何か』があるとしたら、どうにもきな臭いこの別館の神室の方が有力だろう。

「オレにイシユタル様の神室を荒らせつつ？」

「奴らにやられるよりはいいと思わないか？」

少しばかり意地の悪い質問を返すと、サミラは肩をすくめて見せた。

「様子はどうか？」

大広間側の阻塞バリケードに向かい、そこを守る団員に問いかける。

「相変わらずです」

その言葉に応じるように、阻塞バリケードに投げナイフやボルト、矢の類が突き刺さる。

ただ、それは散発的なものですぐに収まった。

「ひとまず、我々をここに閉じ込めておきたいらしいです」

「あちらの狙いも同じか……」

今頃は本館を家探ししている最中と言ったところだろう。

オラリオを転覆させる何か、というのとはあなたがち誇大表現ではなさそうだ。

(あるいは、闇派閥残党の拠点の手がかりなのか?)
イヴァイルス

暗黒期が終わりまだ五年。

奴らの残党は今もオラリオに潜伏しているはずだが、その拠点は不明のままだ。ダンジョンの中にもいるとも、ダイダロス通りに分散して潜んでいるとも言われているが、どちらも確たる証拠はない。

(ハシャーナ……)

ハシャーナの死にも闇派閥イヴイルス残党の関与が疑われている。

ならば――

「これより、作戦を開始する」

努めて静かに命令を下した。

私情に囚われていては、足元をすくわれる。

「了解です」

「よっしやあああああああ！」

「あいよ」

同行者はモダーカとイブリ、そしてサミラの三名。

空中庭園の防衛を考えれば、これ以上は引き抜けない。

「援護を頼む」

「了解！」

団員達が、ここで回収した弓やボウガンを構えるのを見届けてから改めて槍を構える。

「行くぞ！」

一息に阻塞バリケードを飛び越える。

同時、向こう側から襲撃者が攻撃を仕掛けてきた。

(当たる訳にはいかない)

槍を振り回し、可能な限り払いのける。

刃に毒が塗られているのは明らかだった。

掠めただけでも、場合によっては致命傷になりかねない。

特に「ステイタス」を封じられているサミラにとっては。

だが――

(悲観する事もないな)

逃げ遅れた三名にそれぞれ拳と蹴りを叩き込みながら、胸中で呟いた。

向こうも、私達の介入は想定外だったらしい。

(L v. 2. 精々がL v. 3か)

相手の「ステイタス」も決して高くはない。

間合いさえ詰めれば、無力化するのは容易かった。

だが――

「全員回避！」

物陰から最後の一人が動くのを見て、叫んでいた。

「うおおおおお！」

イブリの悲鳴をかき消すように爆音が響き渡る。

拳を触れさせた際、服の下に拳大の何かがある事に気づいていた。

そして、それが何なのかも経験として知っていた。

（やはり『火炎石』か！）

それは超硬金属アダマンタイトをはじめとした様々な迷宮資源やドロップアイテムを素材とするこ

の街の鍛冶師達が愛用する強烈な発火剤の名前だ。

その正体は『深層』領域に出現するモンスタードロップアイテムであり、その強烈

な作用から一般販売は固く禁じられているほどだ。

彼らはそんな代物を複数個も身に着けている。

理由も分かっている。

（闇派閥イヅイルスの自決装備！）

彼らは自決に毒など用いない。事切れたとしても、背中には己と己の主神の真名が刻

まれた「ステイタス」が残るからだ。

だからこそ、彼らはそれを『開錠薬』ステイタスシールで暴かれる事の無いように、己の肉体を焼くのだ。

「クソツたれ！ これだから闇派閥は！イヴァイルス 他人ひとン家で自爆すんじゃないやねえ！」

イブリに抱えられたサミラが軽く咳き込んでから毒づく。

厄介なのは、冒険者の肉体をも瞬時に焼き払うほどの火力である。

当然、巻き込まれれば私とてただでは済まない。

それを知っているからこそ、彼らは単なる自決だけではなく、自爆特攻という悪夢すらやっつてのけるのだ。

その狂気の戦法は、この装備が普及し始めた頃には特に猛威を振るった。

今もこれと言った対処法はない。自爆される前に完全に無力化して装備を引き剥がすか、こうして急いで距離をとるかのどちらかだ。

「この馬鹿野郎ども！ もっと命を大切にしろおおおおおおお！」

イブリの絶叫に、内心で同意する。

一体何が彼らをここまで駆り立てるのか。

薬品によって自我を奪われているのではないかという説も出たが——

(どうやら、そうでもなさそうだな)

自爆する直前、彼ら——あるいは彼女達——の多くが、誰かの名前を呼ぶ。

贖罪や再会を望む言葉と共に、だ。

意味は分からないが、少なくとも自我や思考がないわけではないのは明らかである。

「イブリ！ サミラは任せた！」

新手を一通り打ち倒しながら叫ぶ。

「了解です！ 闇派閥ども、幼気な乙女にはこの『ファイアー・インフェルノ・フレイム火炎爆炎火炎』が指一本触れさせねええええええ！」

「……いいけど。オレ、アマゾネスで戦闘娼婦バーベラなんだけどな」

イブリに抱えられながら、サミラが眉間を指先で搔く。

確かに幼気な乙女かどうかは議論の余地がありそうだが……あえてイブリの気合いに水を差す事もない。

「次から次へと……。装備を解除している暇がない！」

モダーカが叫ぶ。

遺憾だが、確かに彼の言う通りだ。

迂闊に足を止めれば、自爆特攻の餌食になりかねない。

「今は突破する事だけ考えろ！」

そして、団長として今優先すべきは団員の命であり、オラリオの安寧だ。

如何に恩恵を得ようと、所詮は神ならぬ身。抱えられるものには限界がある。

「り、了解！」

それから数回、襲撃と自爆を経たところで、ようやく神イシユタルの神室へと到達する。

「おい、ナントカ！ 早く鍵閉めろ！」

飛び込むと同時、サミラが叫んだ。

「モダーカだ！ いや、それより鍵ってどれだ?！」

「それだ、その細工！」

「これか!？」

モダーカが指さされた細工を弄ると、錠が落ちる音がした。

扉もかなり堅牢な造りになっていて、簡単には破られそうにない。

……それこそ自爆特攻でもされない限りは。

念のため警戒したが、待ち伏せの様子もない。

大きく息をつくくと、高級そうな香水と香の匂いが鼻をくすぐった。

「鍵が開いていたという事は、先回りできたのか?！」

「いや、終わってんじゃないかね……」

イブリの言葉に、その腕から飛び降りつつ、サミラが呻いた。

「確かにな」

豪華な室内は、明らかに荒らされていた。

生活感ではない。誰かが何かを探した痕跡だ。

(とはいえ……)

慌てて引つ掻き回したようには見えるが……何かが壊れている様子はない。

部屋の主に敬意を持った誰かの仕業と見るべきだろう。

(となると、所在不明の【男殺し】^{アソルトワトレス}の仕業か?)

いや、副団長のタナムズの方だろうか。

「搜索を開始する。サミラ、心当たりはあるか?」

何であれ、やる事は変わらない。

何か一つでも……どんな些細なものだとしても、手掛かりを得なくては。

「オレもこの部屋にはほとんど入った事がねえんだよな」

と、言いつつ胸元から紙片を取り出す。

「ええと、専属の従者の話だと、そこが衣装戸棚らしいな」^{クローゼット}

その紙片——メモを見ながら、彼女は部屋の一角を指さした。

「つてうおとおおい!? これ、部屋じゃないのかよおとおおおい!」

サミラが指さした扉を素直に開けたイブリが叫ぶ。

「い、いや。それより……何か、下着しかないような……」

「いや、それイシュタル様の普段着だぞ？」

「普段着?!」

「ああ。外出着ならもつと奥の方に——」

あるのも、やはり下着同然のものばかりだったが。

流石は淫都の主という事だろう。

(いや、神フレイヤも大胆な衣装ドレスを好まれると聞くが……)

となると、『美の神』の性と言うべきなのだろうか。

「うおおおおおおお！ おのれイレギュラー【正体不明】！ 何て事をおおおお!!」

「モダーカ、イブリ、うるさい」

「すみません団長!!」

……ひとまず、揃って絶叫する男どもを黙らせる事にした。

女神——いや、それ以前に女性の服を搔き抱きながら叫ぶな。

「イシュタル様に相手してもらうなら、まずはオレ達にたっぷり貢いでもらわないとな」

ニヤニヤとサミラが笑う。

「ち、ちなみにおいくら……いつてえ?!」

「仕事からだ」

イブリの頭を槍の柄で小突いてから、ひとまず掛けられた服の隙間に手を差し込み、

その奥にある壁を丹念に撫でていく。

こういう場所に隠し金庫が設えられているのはよくある事だ。

(しかし——)

掛けられているのが神の私物だと思つくと、妙に緊張する。

しかも、触れるだけで高価だと分かるその服は極薄の生地で作られており、メタルファイスト拳装でひっかけようものなら、容易く破けそうだ。

余計に緊張感があるのはその事実も影響しているだろう。

「ちなみにオレは一晩一七〇〇〇ヴァリスからだな」

「高つかあああああああいつ!?」

「イブリ、うるせえ!」

「カッコいいところ見せてくれたら、少し安くしてもいいぜ?」

「マジで?!」

「うるせえ、ナントカ!」

「モダーカだ!」

「全員真面目にやれ!!」

この状況でも平常心を保てるその精神力は認めるが、どうにも方向性に難がある。

「あつた!」

それからしばらくして。

衣装戸棚クローゼットだけではなく、神室全体——設えられていた浴室まで——を搜索していると、モダー力が歓声を上げた。

視線を向けると、ひと際見事な裸婦像——あるいは、神イシユタル自身を模したものかもしれない——を撫でまわしている。その裸婦像に何かしらの仕掛けがあつたらしいが……

「あつた……のはいいけど……」

どうにも齒切れが悪い。

「何が見つかつた?」

「いえ、シヤクテイ団長。それが……」

裸婦像の土台の一部が開き、ちよつとした金庫——いや、寶石箱になっている。

飛び切り育ちのいい寶石樹アクセサリでも見つけられない限り手に入らなそうな大粒の寶石で飾られた首環や耳飾りなどの装飾品が保管されている。

そして——

「やはり遅かつたのかもしれない」

その中心に、小さくぼみだけが残る小さな台座があつた。

ここに何か置かれていたのは確かだろう。

あるいはこれこそが、探し物だったのか。

「かもしれない」

とはいえ、その何かは直径一〇C程度のも物だったはずだ。

金銭的な価値を求めてそれを持ち出したとは考えづらい。

それなら、他の装飾品アクセサリーを置いていく理由がない。この隠し金庫を空にするだけで、

ちよつとした財産を築く事ができるほどのだから。

となると――

「魔道具マジックアイテムの類か？」

これそのものに代替不能な意味があつたと見るべきか。

「ああ。それか、鍵か何かかもな」

サミラが呟いた。

「鍵の形には見えないが……」

「いや、あり得るな」

モダーカの言葉に、そう応じた。

「鍵として機能する魔道具マジックアイテムという可能性はあり得る」

そして、その先にこそ神イシユタルが隠したかった何かがあるのかもしれない。

「まさか。それなら普通の鍵でいいじゃないですか？」

「そうですよ。そんな大げさな鍵をつけたって、蹴破られたらそこまですし。そりやまあ、分厚い超硬金属製の扉だっていうなら話は別ですけど。あんなもの、ギルド本部か超大手の保管庫……それか最大賭博場にでも行かなきゃお目にかかれませんよ。それに、少なくともギルド本部の奴は魔道具じゃありませんし」

確かにイブリとモダーカの言う通りだ。

ギルドの大金庫の扉に用いられているのは『深層』で採掘された超高純度の超硬金属だ。その強度は相当なもので、設計者曰く「猛者」の剣戟だろうが「九魔姫」の魔法だろうが耐え凌げるらしい。

それがどこまで本当かはさておき、それだけの物を作ろうとしたなら、その費用も莫大なものとなる。世界最高位の財力を誇るオラリオにおいて、その経済の中核を担うギルドの融資があるからこそ、各ギルド支部に設置できているのだ。

いや、それとてギルド本部の大金庫程ではないと言われている。

……有体に言えば、その分だけ安い訳だ。

（派閥単体で考えれば、「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」でもどれほどのものが造れるか）

さらに言えば、完成した時に入れるべき中身が残っているかどうかという問題もある。

少なくとも私達の派閥にはそこまで大きな金庫は……

(まあ、ないとは言わないが)

治安維持に関する機密情報のための保管庫はギルドから融資を受けて作られていた。

とはいえ、それもギルド本部の奥にある大金庫と比較すれば圧倒的に狭く、何より脆いと聞いている。

もつとも、これについては常に複数の冒険者が詰めている私達の本拠地ホトと、恩恵を持たない職員しかいないギルド本部の違いを考慮すれば当然と言えよう。

「サミラ。心当たりはあるか？」

経済力という視点で論ずれば、歓楽街を支配下に置く「イシユタル・ファミリア」はオラリオでも最上位に君臨する勢力の一つだった。

表沙汰にできる資産だけでも、下手をすると「ロキ・ファミリア」に匹敵——あるいは上回りかねない。それこそ繁華街をはじめオラリオの至る所に太い人脈を有する「フレイヤ・ファミリア」に続く程の勢いがあつたはずだ。

とはいえ——

(まあ、あそこはそれに加えて探索系派閥としても大成しているからな)

一方で「フレイヤ・ファミリア」はオラリオの年間予算に迫る勢いだと聞く。

バベルの最上階を貸し切れる程なのだから、あながち単なる噂でもないだろう。

「確かに隠し部屋の類はいくつかあるけど。オレが知ってるのはどれも、そこまで大きな扉じゃねえよ。保管庫や宝物庫の鍵だつてそんな特殊なもんじゃねえ。んな事する必要がねえからな」

それはその通りだつた。

派閥の本拠地ホトムに押し入る盗人なり強盗なりがいるとしたら、同じ冒険者でしかない。仕掛ければ派閥抗争の始まりだ。そして、仮に勝つたとして元が取れるかどうか。

(争うとしたら等級ランクが近い派閥同士だからな)

ごく単純に資産狙いで派閥抗争を仕掛けると仮定して。

等級が下の派閥を狙つては本当に赤字になりかねない。いや、よほど差があるなら問題ないだろうが……その場合は、わざわざ抗争を仕掛ける意味がない。実入りは少なく、ただ悪評だけが残るのだ。あるいは、ギルドからの罰則ペナルティが課せられる事もありえる。かといって、上の派閥を狙えば自派閥が消滅するという最悪の事態に陥りかねない。そして、眷属が『血の契約』である以上、身内の造反もよほどの事がない限りは起らない。加えて、神には嘘がつけないのだから、精々魔石売買の際に端数を着服できるかどうかと言つたところだ。

堅牢な金庫が必要となるとすれば、まさに今【イシユタル・ファミリア】が陥つていゝるこの状況になつた時くらいなものだろう。

「となると、これこそが闇派閥の狙いなのか……う？」

とはいえ、サミラのこの様子なら——そして、クオンから届いた見取り図を見る限り——本当に大仰な隠し金庫はなさそうだが。

「さて……ね……ツ？」

呟くと、サミラが突如としてその場に片膝をついた。

「どうした?!」

「分かんねえ。急に……眠気……が……」

「眠気だと？」

反射的に嗅覚を研ぎ澄まし、舌打ちした。

「ぬかった……!」

部屋に立ち込める香水と香の匂いに混じって気づかなかった。

(この甘い匂いは——!)

眠りの香のものだ。

その言葉が思い浮かぶ頃には、大窓に近くの椅子を投げつけて叩き割っていた。

「警戒しろ!」

外気を入れた事で部屋に満ちた香は薄まっただろうが、身体に回った分は打ち消せない。

一体どこに潜んでいたのか。モダーカとイブリにも別の刺客が襲い掛かる。

(いや、狙いはサミラか)

辛うじて意識は保っているようだが、それ以上の事は望めない。

だが、あちらはあの二人に任せておけばいい。

まずは目の前の敵を無力化する。

「フ——ッ！」

いかに熟達した暗殺者と言えどもLv. 3なのは変わらない。

相手の動きは充分に見えていた。

左右から迫るダガーを躲し、逸らし、受け流しながら大窓へと押し返す。

こんな場所で自爆でもされたら流石に面倒だ。

「シャア！」

こちらの思惑を察知したのか、相手は左のダガーを投げつけてきた。

投擲に向けた拵えには見えなかったが……流石と言うべきか。

それには驚くべき速さと鋭さがあった。そして、何より距離が回避を許さない。

「チッ！」

両手を掲げ、直撃を防ぐ。

メタル・ライスト
拳装 越しに鋭い衝撃を感じたが、貫くほどの威力はない。

素早く防御を解くが、その一瞬で死角に飛び込まれていた。

「いー」

今のは少し危なかった。

毒液に濡れて鈍く輝く刃が首筋のすぐ傍を通り抜けていく。

「ガア——!?!」

その礼に、肘を鳩尾に叩き付ける。

それなりの感触だったが、無力化するにはまだ少し足りない。

「——!」

のけぞった襲撃者のつま先には、小さな刃が生えていた。

毒の蹴りが胸元すれすれを通り抜ける。まったく、飛び退くのが一瞬遅ければ当たっ

ていた。

つくづく抜け目がない事だ。

「シッ!」

右腕一本の連撃。

動きが絞り込まれたおかげで、隙はそこまで増えていないが……さしたる問題ではない。
い。

動きは遅い。攻撃の密度が減った分、付け入る隙は多い——

(と、思わせるのが狙いだろう?)

露骨に大ぶりな一撃を搔い潜り、あえて狙いに乗って間合いを詰めた。

(今の一撃は、間合いを詰めさせるのが狙いだ)

自棄になって——その演技と共に突き出される左の貫手。

右目を狙うそれを回避する。

と、そこまでが罠だ。

バチン!——と、何かが爆ぜるような音が響く。

それが本命。

回避した先に——そのはずの場所をダガーの切っ先が貫く。

柄の中に強力な発条が仕込まれているのだろう。

回避した直後の不意の一撃。普通であれば避けられるはずがない——

「なに!？」

が。私としてオラリオにも少ないLv. 5の一人。

その刃が放たれる早くその腕の内側にまで飛び込むくらいの真似はできる。

何も難しい事はない。来ると分かっている攻撃に対応しただけだ。

「その類の武器には、昔散々世話になった」

暗黒期の動乱の中で、その類の暗器相手に一体何度命を落としそうになった事か。

その言葉を告げるのと同時、拳を横腹に沈めていた。

「が——あ……ッ!？」

「そして、お前達とは別の形だが——」

辛うじて踏みとどまった襲撃者が最後の悪あがきとして掴みかかってくる。

その手を軽く振り払ってやる。それと同時に、がら空きになった脇へと肘を叩き付けた。

底は人体の急所の一つ。打ち込んだ衝撃はそのまま肺へと到達し、呼吸を阻害する。

「対人戦闘には慣れている。私達は、荒くれ揃いのオラリオの治安維持を受け持っているからな」

悲鳴もなく悶絶するその相手の鳩尾へと拳を埋めた。

「ふいー……。やっぱ火炎魔法が撃てないと調子でないぜ」

「室内で撃つな、馬鹿」

その頃には、モダーカとイブリも襲撃者を仕留めていた。

「団長。この二人、どうします?」

「連行したいのは山々だが——」

そう上手くはいかないだろう。そう思った矢先のことだ。

「ハ……!」

モダーカ達が打ち倒した襲撃者が、最後の力を振り絞って何かを投げつけてくる。ナイフの類ではない。弱々しいそれを反射的に受け止めていた。

「これは——!?!」

赤い何か。『火炎石』かと思い、とつさに外へと投げようとして——

「何ッ!?!」

それと目が合った。

瞳を思わせる罅の入った赤い宝玉。それは私を見据えると同時に碎け散って——

「シヤクティ団長!?!」

赤黒い燐光が渦を巻き、何かを象る。

いや、何かではない。それは人間の姿だ。

赤黒い燐光でできた人のようなもの。

「——!?!」

それは、有無を言わず攻撃を仕掛けてくる。

恐ろしく鋭い一撃を、辛うじて躲す。

いや、避け切れなかった。横腹を軽く斬り裂かれている。

だが、そんな事を気にしている暇もない。

その何かは、さらに続けて攻撃を仕掛けてくる。

左の拳メタル・フィスト装を盾代わりにそれを受けようとするが――

「くっ?!」

左腕に焼けるような痛み。腕の内側から切っ先が突き出している。

メタル・フィスト
拳装はあつさりと貫通されていた。

だが、そのおかげでようやく敵の得物が見える。

(短剣……。いや、刺剣か?)

小ぶりの剣程の長さの鋭い刃。

おそらく《鎧貫き》という代物だろう。……それにしても鋭すぎるが。

「サミラを連れて逃げろ!!」

丁寧な事に毒まで塗られていたらしい。

焼けつくような熱と痛みが絡みつく左腕に舌打ちしながら叫ぶ。

だが、一瞬たりともその敵から視線を離せない。

(マズい……!)

これはおそらく霊体……闇霊という存在に違いない。

詳しくは知らないが、クオン側の代物だ。

それだけでも厄介だが――

(これは、L.V. 6相当か……?)

相手の攻撃に反応が追い付かない。

メタル・フイスト

拳 装すら軽々と貫くその剣先に、少しづつ身体を啄まれていく。

流れる血は体力を消耗させるが、それ以上に――

(毒が……！)

刀身には毒が宿っているらしく、少しづつ身体が蝕まれていた。

今はまだ踏みとどまっているが、これ以上食らえば毒が回り始める。

そうなれば終わりだ。

毒で死ぬより先に、心臓を串刺しにされるだろう。

「ハアアッ！」

そうなる前に、決着をつける。

その覚悟と共に、一気に間合いを詰める。

だが――

「しま――!?!」

放った拳は、金属製の小さな円盾の表面を滑った。

と、同時その腕が払われる。

クオンが得意とする『受け流し』だ。

(死――！)

体勢を完全に崩され、無防備となった心臓に《鎧貫き》の鋭い切っ先が迫る。もはや防ぎようも避けようもない。

「うおおおおお！」

心臓を貫くより早く、モダーカの体当たりが炸裂した。

切っ先がそのまま戦闘衣バトルクロスの胸元を掠め、うっすらと右に斬り裂いていく——が、心臓には遙か遠い。ならば、何の問題もなかった。

「フ——ッ！」

身をかがめ、足払いを仕掛ける。

モダーカに注意を向けていたそれは反応が僅かに遅れた。

充分な感触と共に、敵の身体が揺らぐ。

「おおおおお！」

一瞬の隙。その瞬間に跳ね上がるようにして肩を叩き付ける。

敵の体勢はまだ立て直されていない。

「はああああっ！」

身体を回旋させ、その威力のままに蹴りを叩き付ける。

直撃の瞬間、後ろに跳ばれたせいで感触は浅い——が、今はそれでいい。

「一時撤退だ！」

「り、了解!」

ひとまず解毒し、左腕を治療しなくては。

両腕が揃っていても勝てるかどうか怪しい相手だ。片腕ではまず勝ち目がない。

「うお!? 追ってくるぞ?!」

サミラを抱えたイブリが首だけ振り返って叫んだ。

「そりや逃がしてはくれないだろ。というか、あれ何なんだよ?!」

「知らねえよ! いきなり湧いて出たしモンスターじゃねえの?!」

「なら、さつさと調教タイムでもしてこい!」

「生態の欠片も分からない相手に無茶言うなナントカ!」

「モダーカだ! わざとやってるだろ!? ……あ、いや待てよ?」

走りながらイブリと怒鳴りあっていたモダーカが、不意に言った。

「どうしたんだよ?」

「あれって噂の『太陽の戦士』に似てないか?」

「ダンジョンにたまに現れて助けてくれるって奴か? けど、そいつは黄金に輝いてる

んだろ?」

「黄金は味方で、赤は敵とか?」

「てか、赤い奴なんて今まで目撃例がねえだろうがおおおおおおつ?!」

「……一つ怖い話をしよう。目撃した奴は生きていない」

「この状況で不吉な事を言うなよおおおおおおおおい?!」

……まあ、おそらくモダーカの想像は概ね正しい。

正しくは白が味方で赤が敵だという。黄金はむしろ特殊な存在らしい。

(四年前にあのクオンを倒した相手、か……)

ダンジョンにはそういう脅威が存在すると、クオン本人から聞いている。

もしそれが事実なら、モダーカの言う通り遭遇した冒険者は生きてはいないだろう。

とはいえ――

(少なくとも、あれは同一人物ではないな)

もしクオンを倒したとするなら、私を仕留め損ねるなどありえない。

それどころか、先ほどの交戦から察するに――

(精々、私より一回り上という程度だ)

強敵である事には変わりはないが、全く勝算がないという訳でもない。

常に携行している解毒薬の栓を口で開け、一気に飲み干す。

幸い、充分に効果を発揮してくれたらしく、悪寒と疼痛、破滅的な怠さを伴う熱が消えていく。

続けてハイ・ポーションを煽ると、体中の傷が塞がり、左腕にも握力が戻った。

「それで、どうしますか？ イルタさんと合流しますか？」

今のところ、来た道を逆走している。

このまま戻ればそうなるが――

「いや、この先の広間で迎撃する」

それは必然的に、本陣間近まであの闇霊を案内する事になる。

「万が一私達が突破されたなら、保護している戦闘娼婦達まで危険に晒される」

……いや、必ずしもそうとは言えないか。

(おそらく、あの闇霊の狙いは私だ)

あの宝玉に見入られたのは私だけだ。

つまり、私を殺せばこれは消えるはずである。

……無論、死ぬつもりはないが――

「もし、私が追い詰められたなら――」

団長として、現場指揮官として、いざという時の指示は出しておかなくてはならない。

「その時は、私を置いてイルタのもとへ向かえ。あれの狙いは私だ」

イルタなら残る闇派閥構成員や、暗殺者達の迎撃も可能だ。

「その命令は聞けません」

しかし、モダーカはあつさりそう答えた。

「そうですよ！　ここで団長を置いて逃げたら、あとで俺達がイルタさんに殺されま
すって！」

イブリりまでがそう言つて笑う。

「それに、三人でやればまだ何とかなる範囲です。本陣の守りを考えるうえでも、全員で
迎撃するのが良いかと思いますが……」

「……そうだな」

確かに、少々弱気になりすぎていたか。

相手はたかがL・v・6相当だ。この程度の相手に動じていては、これから先オラリオ
を守る事はとてできない。

(デーモン……)

フィリア祭で対峙した偉業を思い浮かべる。

クオン曰く、あれはデーモンという存在の中ではずいぶんと未熟だったという。

それであの脅威。神ですら手を焼く厄災というのは伊達ではない。

そんなものが、ついに地上に姿を見せたのだ。

たつた一レベル差で動じていられるような猶予はもう残されていない。

「なあに。L・v・7とやりあえるL・v・0もいるんです。俺達だつてそれくらいの事は
しなけりや——」

「冒険者の名が廃るつてもんですよおおおおお！」

その通りだ。

確かに迫る脅威は深刻だ。だが、それに臆してはまさに冒険者の名折れ。

……そう。都市の警備を担っているとはいえ、私達も冒険者だ。

強大な敵。未知へと挑む事こそ誉れである。

「……よし。ならば、行くぞ！」

広間の少し前で足を止める。

「先に行け。サミラを安全な場所へ」

敵がクオン達と同じ存在なら、殺さずに止める必要はない。

いや、そんな事を考えていたらこちらが殺される。

「了解！」

槍を構えるのと闇霊が追い付いてくるのはほぼ同時だった。

「せいっ！」

心臓を狙った突きは、あっさりと円盾に弾かれた。

とはいえ、武器の間合いなら私が有利だ。

そして、この通路なら回り込まれる心配はほぼない。

サミラをどこかに隠す時間を稼ぐくらいは——

(……いいや)

油断などできるはずもない。慎重すぎても足りない。豪胆でなくては先に進めない。

そして――

(……)で倒す！)

苛烈さがなくては生き残れない。

完全にスイツチを入れた。背中の「ステイタス」がその瞬間、熱を帯びる。

「はああああッ！」

眉間。咽喉。心臓を狙った三段突き。

会心の連撃だった。ほぼ同時だったはずだ――が、やはり通じない。

この程度ではL.V.の差を貫けない。

(構うものか！)

己の限界に挑むように、槍の速さを上げていく。

階位の差はたった一つ。拒む物は小さな円盾一つ。

ならば、貫けぬはずがない――！

「――！」

……やはり、そう容易い相手ではない。

槍の穂先が闇霊の身体をいくらか啄んだ時、武器が切り替わる。

驚くことはない。【イレギュラー正体不明】クオンの代名詞とも言えるこの『スキル』は——しかし、彼らにとつてはできて当たり前の他愛ない技術でしかないのだから。

現れたのは分厚い刃を持った斧。

闇霊は、それを両手で握りしめる。

「——オ！」

裂帛の咆哮。直後に放たれたその重撃は、強引に槍の軌跡を捻じ曲げた。

「くっ!？」

槍に引きずられて、体勢が崩れた。

穂先が床に触れた一瞬、闇霊はそれを踏みつける。

そのせいで、引き戻す機微タイムリを完全に失った。

武器が再び《鎧貫き》に戻る。

しなる槍を踏切台代わりに、闇霊が跳躍した。

間合いが消滅する。

(なめるな——!)

声を上げている暇などない。

先ほどの仕返しのように咽喉を狙って繰り出される切っ先を辛うじて躲す。

正に首の皮一枚と言ったところか。もつとも、繋がったのではなく、断ち切られたの

が——だが。

「はあ！」

頸動脈の傍を掠めた刃にゾツとする暇もなく、その顔を狙って左の拳を放つ。

優先すべきはとにかく速さ。追撃を阻止する牽制の一撃だった。

視界を塞がれるのを嫌ったのか、闇霊はそれを回避して見せた。

その隙にこちらも後ろに跳ぶ。

とはいえ、槍の間合いとするには少々近い。

動きを制限されれば、L v. の差が顕在化してくる。

(やはり簡単にはいかないか！)

たちまち攻防が反転した。

メタル・フィスト

拳 装すら容易く貫く、鋭い切っ先が少しずつ迫ってくる。

それでも解毒剤の効果が残っているのか、まだ毒は回っていない。

ひとまず小さな負傷は無視する事に決め、相手の接近に逆らわず、素直に押されてい

く。

間合いの有利さを失った以上、この場所に留まる理由はない。

少しずつ、モダー力達が待ち構える広間へと後退する。

……言うほど容易い事ではない。撤退戦ほど難しい戦いはないのだから。

押しされていたとしても、押し潰されてはいけない。

敗北の一步手前で踏みとどまっているようなものだ。

あと三Mも廊下が長ければ、耐えきれなかっただろう。

「シヤクティ団長！」

廊下が途切れ、広間へと変わる。

その瞬間、モダーカが叫んだ。

「!?!」

なりふり構わず横に飛ぶ。

一瞬——いや、半瞬前まで私がいた場所を火炎が飲み込んだ。

「フハハハハッ! どうだ!?!」これが『喋る火炎魔法』こと「ファイアー・インフエルノ・フレイム火炎爆炎火炎」の火炎

魔法だあああああああ!」

「イブリうるせえ! てか、今ちよつと早すぎたぞ?」

高笑いするイブリに、大盾を構えるモダーカが叫び返した。

「油断するな!」

跳ね起きながら、櫓を飛ばす。

確かに並みの相手なら、今の一撃で終わっていただろう。

だが、相手は闇霊だ。

「うお!? 燃え残っただとおおおおおっ!?」

狙いをイブリに変えた闇霊に、横から槍を奔らせる。

(効いてはいるな——!)

無傷ではない。やはりこの闇霊は、神の域にも手を届かせるような怪物ではない。

とはいえ、

(クオン達と同じなら多少の傷はないも同然だな)

なるほど、不死人とはよく言ったものだ。

五体をバラバラにしたとしても殺し切れるとは限らないというのも、あながち嘘ではないのだろう。

「おおおおおおッ!」

会心の踏み込みからの一撃。

例えどんな防御でも貫通できる。その確信は、次の瞬間には現実となった。

「つしやあ! 流石はシャクティ団長!!」

盾を強引に押し分け、その体を貫通する。

思わず舌打ちしていた。

完全に貫通してしまつた以上、引き抜くのに一瞬以上の時間を要する。

……無論、通常なら反撃などありえない。確実な致命傷だ。

だが――

「なあにいいいいいいいい!!」

「つておい!! 詠唱中断するな!!」

この程度では死なない。だからこそその不死人だ。

再び両手に斧を構え、その闇霊はこちらに突進してくる。

槍を手放し、それを迎え撃つ。

「――!」

紙一重のところ、斧の一撃を躲す。

大ぶりの一撃は、その分だけ隙も大きい。

建て直される前に、右手を心臓の真上辺りに添える。

右指を軽く曲げるが、拳はまだ握らない。脱力しきった、最も自然な形のままだ。

「ふ――ッ!」

次の瞬間、全身の力を一気に流し込み腕を突き出す。同時、固く拳を握った。

これは衝撃を貫通させる特殊な打法。いかに堅牢な外皮を誇るモンスターでも、然るべき場所にあてれば、体内の魔石を粉碎できる文字通り必殺の一撃。

人間相手にはまず使わない。例え心臓を避けたとしても、臓器を破壊するだけで人を殺すには充分すぎるのだから。

……そう。相手がただの人間なら。

「まだ動くか——！」

心臓を破砕する感触が確かに伝わってくるというのに、閻霊は意も介さず再び《鎧貫き》を突き出してくる。

二つの完全なる致命傷を負っているというのに、動きはまるで鈍らない。

不死人。まさかこれ程とは。

(なるほど、クオンをして呪いと言うわけだ)

不死となる祝福を賜った——と、謳う英雄譚はいくつかあったはずだが……なるほど、実際に得た側にとっては呪いだろう。

いや、英雄譚に語られる不死身の英雄は、全員が何かしらの弱点を持っている。

そして、全員が死んでいるはずだ。

(その不完全さがあったからこそ祝福と呼ばれたのかも知れないな)

閻霊自身の手で引き抜かれ、投げつけられた槍を躲す刹那、ふとそんな事を考えていた。

「畳み掛けるぞー！」

「了解！」

槍を回収している暇はない。

拳を握り、接近戦を挑む。少し遅れて、モダーカが参戦した。

二対一。相手は確実に深手を負っている。精々がLv. 6程度。そして、イブリも詠唱を再開した。

勝敗はほぼ決している。次の火炎魔法が止めとなるはずだ。

——と、その時。

リン

——と、鈴が鳴った。

闇霊の左手には、まるで敬虔な信徒が使うような大型の鈴が握られている。

「
」
闇霊が物語を口ずさむ。

言葉は聞き取れない。だが、それは暗く悍ましい物語だった。

そして、その末尾にもう一度鈴が鳴る。

黒い塊が蠢いた。

距離が近すぎた。回避が間に合わず、その塊に包まれる。

「ぐ、ああああああ——ッ?!」

いや、塊ではない。これは群れだ。

異形の蟲の大量。

それがまとわりつくくと瞬く間に皮膚を裂き、次々と体に潜り込んでくる。尋常ならざる激痛に肺が締め上げられ、悲鳴すら途絶えた。

ゆっくりと体中の肉を啄まれ、掘り進まれる中、空気を求めて喘ぐ。体中が血で染まっていた。

「シャクティ団長！」

一人闇霊を迎え撃つモダーカの声が遠くに聞こえる。

「ええいクソ！ この蟲、離れろ！」

イブリがその大群から私を引っ張り出そうとしている。

詠唱を止めるな——と、言う叱咤は言葉にならなかった。

再び物語が聞こえてくる。

勇壮で荘嚴な物語。

(マズい——！)

朦朧とする意識の中で、悲鳴を上げた……ような気がする。

そして、再び鈴の音が響いた。

「が——あ——」

轟く雷鳴と共に、雷撃が周囲を蹂躪する。

そのうちのいくつかが私と、私を庇おうとしたイブリに直撃した。

「团长！ イブリ！ ……ぐあ!？」

私達に代わって悲鳴を上げたモダーカの肩に《鎧貫き》が突き刺さる。

「しま…つた…!…! 毒が——」

毒が回り始めているのか、モダーカの動きが鈍っていく。

まったく理不尽だ。相手は致死量不死人に至ってようやく影響が開始するというのに。

(いや、あれだけ致命傷を受けているのに動ける時点で理不尽か……)

雷撃に焼かれたのか、蟲は消えていた。

それでも挟られた傷は塞がらず、今も血を滴らせている。

一つ一つの傷は致命傷ではないが、止血しなければいずれ命に関わるだろう。

「ああ、クソ……。ハシャーナさんがいればなあ……」

雷撃に焼かれた身体を何とか床から引き剥がそうとしながら、イブリが呟いた。

(ああ、確かに)

タフなあいつなら、この状況でも踏ん張ってくれただろう。

……いや。

「泣き言を、言って…い、る場合か……」

無事だった最後のハイ・ポーションを半分飲み、残りをイブリにかけてやる。

回復には程遠い。だが、まだ戦える。

「私達は『群衆ガネーシヤの主』の眷属だ」

そう。私達は冒険者だ。

不死人には及ばないかもしれないが、しぶとさには自信がある。

「……行くぞー！」

「了、解いいー！」

壊れかけの体に鞭打って、最後の攻勢に出る。

どのみち、全員が限界だ。

あとは意地だけ。どちらがしぶといかだ。

「はああッー！」

モダーカに斬りかかっている闇霊の首筋を狙い、蹴りを放つ。

それ自体は、円盾に防がれたが――

「おあああー！」

私に注意を向けた一瞬、今度はモダーカが攻撃を繰り出す。

その一撃は届かなかったが、とある確信を得た。

(この辺りの事情は、私達と同じか)

この闇霊は自分自身の練度、いわゆる『技と駆け引き』にまだ未熟さが残っている。

冒険者で言うところの『「ステイタス」に振り回されている』傾向が見られるのだ。

……無論、それはごく僅かなものではある。

どちらかと言えば、ランクアップ直後の不調に近いのかも知れない。

だが、何であれそれこそがこちらにとって貴重な勝機だった。

「はあー！」

そして攻撃は効いている。

完全に殺せるかどうかはともかく、撃退する事は可能だ。

(そう。こいつらとて完全無欠ではない)

所詮はLv. 6相当。つまり、まだ人の域から外れていない。

少々特異な『スキル』を持ち、ほんの一步私の先を行く冒険者。極端に死にくいだけの人間だ。

ならば――

(勝てない道理などどこにもない！)

突き出される腕を掴み、渾身の力で振じ上げる。

もつとも初歩的な関節技が極まった。

「おおおッ！」

その瞬間、脚を振り上げてその腕――動かせない肘を蹴り砕く。

「――!」
強引に腕を引き抜き、後ろに下がろうとする闇霊の頭頂に、振り上げたままの脚――
金属靴メタルブーツに覆われた踵を叩き付けた。

ゴクツ――と、花瓶が割れるような鈍い音が響く。

流石に少しばかりふらついたが、闇霊はまだ生きていた。

「本当にしづとい奴だな?!」

折れているはずなのに平然と振り回される腕を見て、モダー力が悲鳴に似た罵声を上げた。

本当に最後の一撃以外は意味をなさないらしい。

(いや、意味をなさない訳ではない)

例え目に見えた影響はなくとも、全てはその一撃のための布石だ。

(もう数発だな)

もう数発、然るべき攻撃を加えれば、この闇霊は限界を迎える。

その手ごたえがあつた。

(焦つたな!)

斧に持ち替えての大ぶりの一撃。

それは、私の確信を証明するかのよう到大雑把な攻撃だった。

体一つ横にずれる。それで、その雑な一撃は完全に標的を見失った。

「はあああッ！」

身体を鞭のようにしなせられた蹴り。

それは狙い通り首筋に決まり、その芯をへし折った。

「——！」

闇霊が再び後退する。

「チィ！」

後を追おうとする私達を闇霊が放った投げナイフが足止めをした。

その間に、黄金に輝く瓶を取り出して——

「させるかっての！」

物陰から、誰かが飛び出してきた。

手には私の槍。それを闇霊の足の間に差し込んで、さらに彼女は駆け抜けた。

完全に不意を突かれたのだろう。足を払われて闇霊が大きく体をよろめかす。

「返すぜ」

一気に間合いを詰める私に、サミラが槍を投げ返してくる。

数の暴力に抗うのは流石に厄介だな——

いつだったか、クオンが言った言葉を思い出す頃には、すでに槍の間合いに相手を捕

らえていた。

「おおおおおッ!!」

防御を捨てた突撃。

槍の切つ先は、闇霊の心臓辺りを完全に貫き——それでも勢いが止まらない。

いや、あらかじめ闇霊が仰け反っていた分だけ、軌道が変わった。

仰向けに倒れこむ闇霊に引きずられて下方へ。

それに合わせて、こちらも体勢を整え——改めて踏み込む。

ズン!

床へ、杭のように槍を打ち込む。

遠い昔、まだ迷信が蔓延っていた頃、呪われた——少なくともそうだと噂される——

遺体の心臓には杭を打ち込んだと聞く。

いや、今でも行っている場所もあるらしい。何しろ、偏見の根絶とは神にもできない

難業なのだから。

まして、外には今もモンスターという脅威が現実として存在しているのだ。

その恐怖に偏見が混ざりこみ、オラリオでは考えられないような奇妙な——あるいは

残酷な——風習を生み出していると聞く。

それにまつわる数多の悲劇を嘲笑うつもりはないが……それでも、今だけは暴言を言

わせてもらおう。

(それで死んでくれるなら可愛いものだな！)

まだ闇霊は動いている。

体を貫き、心臓を破碎し、頭蓋を砕き、首を折り、さらに槍^銃まで打ち込んだというのに。

(これで足りないなら——！)

最後の方法だ。

「イブリ、やれ!!」

槍をその場に残し、飛び退く。

「よっしやあああああああつっ！」

火葬。彷徨う死体という迷信を消し去る唯一の方法だとされている方法。

実際、その埋葬法が定着している地方にはその類の迷信は残っていないという。

……代わりに、彷徨う悪霊の噂があるらしいが。

(今ここにあるのは迷信ではないがな)

彷徨う死体。彷徨う悪霊。

この先、オラリオにはそれが現実の脅威として襲い掛かってくるはずだ。

「あ……。いいところはみんな持ってかれたか」

ようやく闇霊が燃え尽きた頃、解毒剤を煽りながらモダーカが呻いた。「次の機会には期待している」

小さく笑ってから、モダーカがまだ持っていたハイポーションを煽る。

それに、彼が踏みとどまってくれなければ、回復する間もなく皆殺しにされてい
ただろう。

「勘弁してくださいよ、シヤクティ団長……。あんな化物、一度出会えば充分ですって」
それについては、心から同意するが。

(そうはいかないだろうな)

すでに事態は動き出していた。

少なくとも闇派閥イヴイルスはそれと繋がりを持ってしていると見ていい。

ならば、これから先、闇霊とは確実に敵対する。

(訓練内容の見直しが必要だな)

そして、可能なら鍛錬のための遠征にも赴かなくては。

とにかく、団員全員の能力の底上げが急務となる。

でなければ、一人二人の死人では済まない。

団員だけではない。その使者の中には、私達を守るべき民も含まれる。

「まさか、アレを倒すだと……！」

「殺せ！ 今の奴らなら殺せる！」

などと、先の事をあれこれ考えている暇もない。

まさに闇派閥イツイルスの構成員が複数名、姿を現した。

「おいおい……。さらに増援だと？」

「マジかよ。おい、モダーカ。まだやれるか？」

「だから——いや、あつてるか。やれるも何も、やるしかないだろ」

イブリとモダーカが構える——が、どちらも消耗が激しい。

もちろん、私自身もだ。

「マジかよ」

冷や汗を流しながらも毒づくサミラに、無言で槍を渡してやる。

そんなものを持ったところで今の彼女は満足に戦えないのは分かっている。

だが、それでもないよりはいいだろう。

「殺せ！」

闇派閥イツイルス達が一斉に動き出す。

が——

「撃てえええええ！」

その時、別の号令が響き渡った。

荒れ狂う氷結魔法。無論、かの【九魔姫】ナイン・ヘル程ではないが——少なくとも、『火炎石』の起爆を抑える程度の威力はあった。

「無事か姉者！」

「イルタ！ 何故ここに!?!」

いや、それは愚問だ。

「思いの他早く増援が到着したからな。こうして救援に来た」

ああ、そうだ。

あの氷結魔法を放ったのは、私が連れてきた一九名ではない。

ガネーシヤが寄こした増援だ。

（数時間にかかると思っていたが……）

まさかこれほど早く到着するとは。

いや、私達が出立してすぐに編成を開始していたのか。

「姉者達にエリクサーを！」

「はい！」

サポーター用の大型バックバックを背負っていた団員が、万能薬エリクサーを手渡してくる。

半分を煽り、残りを頭からかける。

全快とはいかないが、充分に戦闘可能だ。

「よっしやあああああ！ 復・活！」

「いや、本当に。一時はどうなるかと……」

すぐ近くで、イブリとモダーカも同様に回復している。

「状況は？」

「本館、別館共にこちらが優勢だ。もちろん、空中庭園の守りも万全だ」

イルタの言葉に、小さく頷く。

耳を澄ませば、各地で戦闘音らしきものが聞こえてきた。

「と、言っても。増援もあまり詳しい話は聞いていないようだが。精々敵は闇派閥残党だと聞かされているだけだな」

後の事は私シャクテイに訊け——と、そう指示されていたらしい。

……私とてそこまで全容を把握しているわけではないのだが。

いや、ぼやいている暇はない。今、戦いの流れは私達にある。この機を逃さず一気に片を付ける。

「これより闇派閥残党の殲滅および『女主の神娼殿』の確保を行う。この一戦はオラリオの安寧を左右すると心得ろ！」

サミラから槍を返してもらいながら、号令を下す。

「戦闘娼婦達はもちろん、神イシユタルの『遺産』は何一つ渡すな！」

「了解！」

凍り付いた闇派閥構成員から自決装備を解除していた団員達が一斉に応じる。

「行くぞー！ 『群衆の主』の名のもとに！」

『群衆の主』の名のもとに！」

それから、一時間と経たず私達は『女主の神娼殿』を制圧。

さらに、そこから数時間後には歓楽街全域の安全確保に成功した。

人的被害はない。闇派閥にはさらに数名の自爆を許したものの、都市機能にも——少なくとも、周辺の建築物への深刻な被害はなかった。

「よっしゃああああああ！ 完全勝利！」

「おー……。味方だと意外と頼りになるな、【ガネーシャ・ファミリア】って」

「なかなか格好良かったら？」

「そうだな。ちよつと安くしてもいいぜ？」

「よっしゃああああああ！」

「うおおおおおおお！」

「お前らは今日、夜警も担当しろ。この馬鹿どもが！」

サミラの言葉に、とある団員二人が雄たけびを上げ——即座に団長……を慕うアマ

ゾネスにしばき倒された。激闘を終え、歓楽街に安寧を齎した団員達はそれを見て一斉

に笑い声をあげる。

その騒ぎに、今まで青い顔をしていた他の娼婦達も小さく嘖き出して——いつしかちよつとしたお祭り騒ぎとなった。

ひとまず闇イウイルス派閥の脅威は去った。

誰もがそう思ったし、それは決して間違いいではない。

——が。

私達の奮闘むなしく、オラリオの安寧を揺るがす事態はこの頃すでに進行していたのだった。

第二節 傲慢なる者たち

1

「と、いう訳で！ 残念ながらイシユタルが生贄の儀式を行おうとしたのは間違いない！ そして！ 闇派閥イヴイルスと繋がりを持っていた事もだ！」

神蓋パベルの心臓部——『祈禱の間』に、神ガネーシヤの声が響く。

「今も【象神アンクウシヤの杖】達は戦闘中か？」

「うむ。襲撃者は闇派閥一派の【タナトス・ファミア】のようだな！」

現場にいる【象神アンクウシヤの杖】達は見事に数名の襲撃者を捕縛。自決装備を解除し

『開錠薬ステイタスシーフ』を用いて確認。その後、すぐに伝令を送ってきたという。

「それ以外に、『セメクト・ファミア』も関わってきている！」

「そちらは判断に困るところだな」

思わず呟いていた。

「うむ。あの派閥は元より暗殺者の育成、派遣を生業としている。報酬さえ払うなら、雇い主を選びはしないだろう」

つまり、闇派閥イヴイルスかどうか以前の問題だ。

いわゆる『暗黒期』以前から存在しており、今も商会や貴族と言った厄介な連中を顧客にオラリオで活動している。

「そういう意味では見事なプロ魂だな！」

「あまり褒められたものではないがな」

ある意味公平な神ガネーシャの言葉に、ウラノスが小さく肩をすくめた。

「【タナトス・ファミリア】。主神は『死の神』タナトスか」

顎を——顎骨を撫でながら呟く。

「正直、あれが天界から降りてくるとは思わなかった」

「うむ。タナトスは仕事中毒ワークホリックだったからな！」

と、ウラノスと神ガネーシャが口々に言った。

「そうなのですか？」

「例えて言えば、ウラノスが祈祷を放り出して歓楽街に入り浸り始めたようなものだな！！」

それは確かに色々な意味で驚天動地だが。

「……いや、あれは少々生真面目過ぎたのだろう」

とんでもない例え話にされたウラノスが、軽く目を伏せてから呟く。

「我らが下界に降りてきて千年、『神の恩恵ファールナ』を得た冒険者の登壇や、彼らが持ち帰る迷

宮資源から生み出される数々の道具や薬品、そして魔石製品が広がり、世界は安寧を得た」

無論、まだ世界の一部に過ぎないが——と、小さく付け足してからウラノスは続ける。「その結果、天寿を全うできる子供達にんげんが増えた。少なくとも、昔より長命となったと言つてよい」

それは『神の恩恵』を得た事で、老化が抑制されたという程度の意味ではない。

例えば「デメテル・ファミリア」や「ニヨルズ・ファミリア」と言った派閥によって、安定した食糧供給が成り立った。

他に「ティアンケヒト・ファミリア」をはじめとする医療系派閥が生み出す数々の医薬品は死病だったもののいくつかを克服している。

あるいは、軍事大国であるラキア王国など国家系派閥の台頭もまた、モンスターによる被害激減に貢献しているはずだ。

……まあ、こちらについては国家間戦争という厄災の種にもなっているが。

私が生まれた頃、死は世界にありふれていたが……今はその数をいくらか減らしていると言つていい。それこそが文明の発展であり、あるいは神の恩恵でもある。

もちろん、悲劇が消えたわけではない。消えた訳ではないが、僅かとはいえ確実に減っている。

それは、とても好ましい事だ。そのはずである。

あの神嫌いなクオンですら、それを認めている。

「日々に還る魂が減り、張り合いがなくなりでもしたか……」

「まさか、死者を増やすために下界に降りてきたとでも?」

「分かん。だが、そうだったとしても、私は驚かない」

これが人と神の価値観の違いという事か。

この時ばかりは、クオンの神嫌いに全面的に賛同できる気がした。

「件の少女は?」

しばしの沈黙の後、ウラノスが神ガネーシヤに問いかける。

「うむ。それに関しては問題ない。信頼できる相手に預けてあるからな! 俺達「ガネーシヤ・ファミリア」の団員ではないから、そう簡単にはたどり着けないはずだ!!」

やはり、クオンは『生贄の少女』を神ガネーシヤに託していたらしい。

まあ、他の選択肢など神ヘファイストスか、神ミアハくらいなものだろう。

……それでも私達より選択肢が多いと言えるが。

「ふむ……。まあ、お前が信頼する相手なら問題あるまい」

余計な事は訊かず、ウラノスは呟いた。

実際、生贄の少女について私やウラノスが知っている事は少ない。

分かっているのは、狐人ルナールの少女である事と――

「しかし、一時的かつ一人限定とは言え、『神ファールナの恩恵』の力を一段階昇華させる魔法とは……。これも人の可能性か」

目下最大の問題でもある超希少魔法の使い手という事だけだ。

いつになくしみじみとした声で言う神ガネーシャを見ながら、小さくため息を吐いた。

「確かに見事なものだが……」

ウラノスもまた小さくため息を吐く。

まあ、気持ちには分かる。今の状況では手放しには称賛しづらい。

その超希少魔法は、扱いを間違えれば彼女自身を殺す猛毒にもなりえる。

……いや、彼女自身を含めたオラリオ全てに影響する。

「彼女については！ 俺達が全力で守ろう！」

陰鬱な空気を、神ガネーシャの叫びが押し返す。

「神の力をも超える人の力！ それこそが必要なのだから!! 無論、そうでなくとも守るが！ 俺はガネーシャだからな!!」

「……ああ。その通りだ」

ウラノスが呻く。

「デーモンは地上にまで出現した。『アンデッド』……亡者もまた実在した。『火の時代』の脅威は確実にダンジョンに流れ着いている」

「そしてもう一つ！ シャクテイ達のもとに闇霊が現れたそうだ！」

「何だと?!」

思わず声を荒げていた。

闇霊と言え、四年前にクオンを殺した存在だ。

「心配無用！ シャクテイ達は撃退した！ そして、全員が無事だ！」

それは壮挙と言つていい。

だが……こう言つては何だが、アングークシヤ「象神の杖」に倒せたなら、その闇霊はクオンを殺した

闇霊ではないだろう。

「どういう経緯でその闇霊は出現したのだ？」

「シャクテイの報告によると、『赤い宝玉』が使われたようだ。おそらく、『ひび割れた赤

い瞳のオーブ』というマジックアイテム魔道具が使われたのだろう！」

「それを闇派閥イヴイルスが所有していたと？」

「実際に使ったのは「セメクト・ファミリア」だが、おそらくそう考えていいはずだ!!」

「何という事だ……」

殺戮を厭わない闇派閥イヴイルスと人の魂を求めて彷徨う闇霊。

およそ最悪の組み合わせだった。

「……その魔道具マジックアイテムの場合、召喚には条件が付くはずだな」

「あ、ああ。確かにその通りだ」

ウラノスの言葉で、どうにか冷静さを取り戻す。

確かに、彼女もそう言っていたはずだ。

「精々ニランク上まで、か……」

いや、L.V.の差が絶対とされる冒険者にとつて、それは絶望的な差である。

しかし、おそらくこの先、その程度は乗り越えられなくてはオラリオに未来はない。

「もつとも、それもある一定の域を超えるまでは、という話だが……」

「ああ。だが、それは今のクオンではまだ超えられない壁だとも聞いている」

色々と思う事はあるが……ここは幸運だと思っておこう。

あいつで越えられないなら、ひとまず今の冒険者には関係のない話だ。

ニランク上という壁は厚いが……それでも、本当に青天井よりはずつといい。

(問題は不死と言う特性。……いや、そのしぶとさか)

不死だから、ではない。

神々すら抗えなかった『世界の終わり』。神々に匹敵する脅威が隣り合わせにいた『時代』を生き抜いてきた彼らの強靱な精神力は、一千年の間に蓄積された知識を元に適正

階層が算出され、ある程度とはいえ安全性を保障された中で戦う現代の冒険者の比ではない。

(もちろん、『深層』領域を目指す「ロキ・ファミリア」クラスになれば、話はまた変わってくるが……)

とはいえ、それは決して両者の優劣を問うものではない。

この時代の方が豊かであり、穏やかで、平和で、何より人が人として生きている——と、他ならぬクオンがそう言っている。

殺し合いで俺達に劣るからと言って、一体何を恥じる必要がある？——とも。

それは事実だろう。話を聞く限りでも、彼らを嫉妬するなど筋違いだ。

誰もが納得する道理だった。

(……信じてもらえれば、な)

そう。仮に公表したところで『火の時代』など信じてもらえないはずもない。

それどころか——

(嫉妬は青い炎と言うが……)

クオンは目録者お前達よりずっと格上だ——そう取られかねない告知をしてしまえば、その嫉妬はどす黒い業火となってオラリオを包みかねない。

それもまた仕方がない事だった。

彼らとて命を賭して戦い抜き、築いてきた矜持がある。

だからこそ、クオンに嫉妬する冒険者は多い。あまりに多すぎる。

それもまた、どうしようもない現実だった。

(せめて、あいつがLv. 0でなければな)

どうせ神聖文字ヒエログリフを読める人間は多くないのだ。その背中に「ステイタス」が刻まれているなら、例えばLv. 1のままでもLv. 7だと言い張れたのだが。

それなら、ここまでの事態にはなっていないかつたかもしれない。

……もつとも、もはや詮無い事だが。

『ひび割れた赤い瞳のオーブ』。奴らは一体どこからそれを得た？」

自問するように、ウラノスが呟く。

確かに気になる事だ。

「可能性としては、四年前にクオンを殺した闇霊か……」

「あるいは私達がまだ知らない誰か、ないし何かとも考えられる」

それとも、その両方だろうか。

「リド達に頼んで早急に接触をとるよりあるまい」

「アン・デイルとか？」

異端児ゼノスを守護する、私達とは別の勢力。その首魁であり、クオンらと同じく『火の時

代』を生きた魔導士。この一件における黒幕であり——

(狂人、か)

あるいは、その宝玉を作り出せるかもしれない存在でもある。

「話を聞く限り、控えめに言つても一筋縄ではいかない相手のようだが……」

何しろ、あのクオンをして狂人と言わしめる相手だ。

「仕方あるまい。不測の事態が起こるのは避けられないにしても、それを起こす要因を取り除く努力だけは惜しむ訳にいかない」

もつとも、これは不測とも言い難いがな——と、ウラノス。

「アン・デイルの思惑は分からんが、異端児との共存を求めるなら、意見を交わしておきたい。そして、できればもう少し穏便な関係の構築もな」

確かにそれは急務だろう。

異端児^{ゼノス}だけでも深刻な爆弾となる。

「とはいえ、クオンがこの状態ではそれもままならんがな」

だが、クオンが——いや、『火の時代』はそれ以上の代物だ。

そして、その二つの爆弾は良くも悪くもこの『時代』を大きく動かすだけの威力を宿している。

それが意図せずして——少なくとも、私達が想定していない形で炸裂した日には

……。

「ウラノス！ ウラノス様!!」

と、そこで。

ノイマンの切羽詰まった声が祈祷の間に響き渡った。

ノイマンが様づけでウラノスを呼ぶ時は、大体ろくでもない事が起こっている。

「ガネーシャ、フェルズ」

「うむ！ こそつとその辺に隠れていよう!!」

何分、この謁見は非公式だ。

すべてのギルドに対して中立であることを標榜しているギルドの創設神が、派閥の主神と密会していたなど知られた日にはまた面倒な事になる。

大急ぎで神ガネーシャと共に近くの物陰に身を隠す。

幸い、ここは決して明るくない。

冒険者相手ならまだしも、ロイマンに気配を察知される心配はなかった。

「ウラノス様！ 一大事です。冒険者達がクオンを引き渡せとギルドに詰め掛けて——」

この時、とつさに神ガネーシャの口を塞いだのは、我ながら冴えた判断だったと思う。神が言うところの『ふあいんぶれい』というやつだろう。

2

【イレギュラー正体不明】クオンにより神イシユタルが殺害される。

「ついにやりおったか……」

その一報が届いた時、ガレスまでがそう呻いた。

だが、そこに驚きはない。僕自身も、驚きは感じなかった。

いくつか気になる事が出来ただけだ。

「ギルドの動きは？」

それを確かめるべく、リヴェリアにギルドに向かつてもらった。

副団長とはいえ、彼女がそこに顔を出すのはそこまで珍しい事ではない。

目立たず、ギルドにも顔が効き、この上なく口が堅い。そんな彼女以上の適任者はいなかった。

「ないな。少なくとも、表面上は」

「と言うと、水面下でなら動いている？」

「ああ。すでに『ガネーシャ・ファミリア』が動いているらしい。クオンが関わっている以上、ギルドも絡んでいるだろう。あるいは、これから絡むのかもしれないが」

確かに、彼らもまたクオンとは深い関係を築いている。

それにオラリオの治安維持を担う派閥でもある。この状況で動かないはずはない。はずはないが――

「もうかい？」

少しばかり動きが早すぎる。

まだ昼前。夜が明けてから――少なくとも、僕らの団員が情報を持ち帰ってから数時間しか経っていない。いくらなんでも早すぎる。

「ああ。さらに言えば、もう何事か起こっているようだ。歓楽街から烽火が上がっている。方角と距離からして、おそらく「イシユタル・ファミア」の本拠地^{ホト}辺りだろう」。先行隊に何かあったと見るべきだ――と、リヴェリア。

その見解に異論はない。何しろ、「イシユタル・ファミア」には敵が多いのだ。

そして、オラリオ有数の大派閥である。経済力という視点のみで見れば、あるいは僕らより上かも知れない。何しろ、三代欲求の一つを司る『街』の支配者だったのだから。その主神が死んだ。つまりその眷属達の「ステイタス」が封じられている今、襲撃を受ける理由には事欠かない。

……まあ、確かにそちらも少しばかり早すぎるが。

（夜明け前か）

団長の「象神の杖」^{アンクेशヤ}か主神であるガネーシヤが――あるいは、歓楽街を襲っている

者かも含めて——その情報を知ったのはその頃のはずである。

人員と装備を揃えて派遣する。言葉にすれば単純だが、人数が増えれば増えるだけ必要な時間が増える。

と、言つても——

(まあ、地上だからね。食糧や水の手配はいらないか)

あの派閥なら、各種兵装を持ち出す準備は常に整っているはず。ならば、僕が考えるよりずっと早く出撃できるのかもしれない。

だが、その場合——

(襲撃者の方が早く知っていた可能性もあるな)

僕らよりも遥かに緊急出動に慣れているであろう「ガネーシャ・ファミリア」ですら少数の先行隊を派遣できる程度の時間しかなかつたなら——だから、烽火を上げて増援を求めていると仮定するなら——それはもう、襲撃者の方が先に動き始めていたとしか考えられない。

それとも、単純にクオンへの対応として援軍を手配していたものが間に合わず、たまたま「ガネーシャ・ファミリア」と鉢合わせたのか。

だが、それなら素直に撤退すればいいだけだ。雇い主——あるいは同盟相手——である「イシユタル・ファミリア」はもう存在しない。義理立てするとして、それでも「ガ

ネーシャ・ファミリア」を襲撃する理由はない。……いや、情報が錯乱していて、敵を誤認したという可能性もあるが。

(シー……。気にはなるけど……)

下手に近づき、何かの弾みで襲撃者の一味だと思われた日には目も当てられない。

今のところ僕らがこの抗争に首を突っ込む大義名分はないし、何か都合のいい口実もすぐには思いつかなかった。

(そもそも、何故「イシユタル・ファミリア」の本拠地ホムムを優先しているんだ?)

いや、確かに先の理由から早急な保護が必要となる派閥ではある。

一方で、クオンを捕縛なり討伐なりするなら、それこそ『深層』に挑むような派閥を挙げての念入りな準備が必要となるだろう。

ならば、先に「イシユタル・ファミリア」の団員達の安全確保を優先するのは不自然ではない。

(いや、不自然だな)

あつさりとは否定した。

クオンを追わない理由はひとまず考えないとして、それでもとにかく動きが速すぎる。

「ガネーシャ・ファミリア」も。あるいは襲撃者達も。

「クオンのイシユタル殺しは、ギルドの意向……といふのは流石に考えすぎか」

「そうか？　五年前の事を思えば、まるでありえん話だとは思えんが……」

「どうやら、声に出していたらしい。」

ガレスの言葉で、それに気づいた。

「いや、流石にないやろ」

僕が何か言う前に、ロキが応じる。

「ギルド言うても、あれを動かせるんはウラノスだけや。がつつり賠償金とられたから言うて、ウラノスがイシユタルを殺させるとは思えん」

「まあ、ロイマンやったらやりかねんけどな——と、ロキはあながち冗談とも言い難い事を付け足す。」

「僕もそう思う。むしろこれは、リヴェリアが言っていた——」

「アン・デール、か」

リヴェリアが小さく呟く。

彼女とアイズが遭遇した正体不明の魔導士。おそらくはクオンの過去を知る何者か。

そして、「フレイヤ・ファミリア」の連続襲撃事件の黒幕であり、モンスターを生み出す邪法を知る狂人でもある。

「おそらくね。これが、その『試練』とやらなんだろう」

単身で「イシユタル・ファミリア」程の大派閥を攻め落とすなど、例え【おうじや猛者】であっても容易い事ではない。

「あ奴が攻め込んだなら、確かに急いで本拠地ホトを守らねばならんな。せつかく生き残つた者達も全滅しかねん」

「確かにな。敵やと認めたなら、女子供でも容赦せんからなあ、あれは」

「四年前、幼気いたいけなロリアイズたんをフルボッコにした鬼畜やで——と、ロキ。

……まあ、あの一件はアイズが有無を言わず斬りかかったのが事の始まりなので、一概にクオンだけを責められはしないが。

「ああ、そうか……」

ふと思いついた。

「四年前、僕らとクオンを敵対させたのも、そのアン・デイルなのかもね」

「あー……。そらありそうやな。どう考えても、そうなるように誰かに誘導されとつたっしか思えんし」

「僕らも【イシユタル・ファミリア】と同じ役回りにされかけとつたと?」

「リヴェリアがいなければ、間違いないかね」

眉間を指先で掻きながら呻く。

いくら何でも、あんなに都合よく誤解が重なるとは思えない。

(まあ、きつかけは僕らが作っただけ)

アイズ一人だったなら、毎日絡んでくる物騒な子どもというだけの話だった。

彼女は所属を明らかにしていなかったそうだし、クオンも気にしていなかっただろう。

それが「ロキ・ファミリア」全体へと波及したのは……まあ、ロキがいつもの調子で絡んだからだ。しかも、ご丁寧にベートを連れて。

いや、ロキ達にももちろん言い分はある。ロキは勿論、ベートも——本人は認めないかもしれないけど——アイズの事を気にかけていた。

(まあ、当時はまだ妹のように、だろうけどね)

と、野暮な指摘は置いておくとして。

そんなアイズが毎日ボロボロになって帰ってくれば、それは気にもなるだろう。

流星にそれを咎める言葉は持ち合わせていなかった。

とはいえ、ロキ達の接触と同時に急激に状況が悪化し、気づけば全面戦争寸前に陥っていた。

(アン・デイルに煽られたのは僕らの方だろうね)

クオンへの敵意は、瞬く間に派閥内に蔓延した。

まるで性質の悪い熱病のように、だ。

「ホンマ、リヴェリア様やなー」

……そして、それは今もまだ燻っていると見えよう。

クオンは——『灰色の悪夢』は僕らの矜持を無造作に踏み躪つていったのだから。

「ああ、感謝してくれ」

ロキの軽口に、リヴェリアは珍しく冗談——ではないのかもしれないが——を返す。

その姿を見ながら、胸中で嘆息した。

「しかし、これからどうする？ 事が神殺しとなれば、いよいよギルドも動くかもしれないぞ」

そうだ。今も燻るその反感は大義名分火種さえあれば一気に爆発するだろう。

そうなれば止められない。

いや、あの時の熱狂を思えば、止める気になれるかどうかと言うところから不安が募る。

「どうかな。ロイマンにクオン討伐を決断するだけの度胸があるとは思えないけど……」

どちらかと言えば神ウラノスの采配次第だろう。

かの老神にとって、この状況は想定通りなのかどうなのか。

(この一件で推し量れるかな?)

ギルド——いや、神ウラノスの思惑を。

「人間が直接手を下すのは確かに異例だが、それ以外は派閥抗争の範疇のようだ。精々ベナルテイ罰則があるかどうかではないか？」

胸中で呟いているとリヴェリアが言った。

確かに。例え下界で神が死んだとして、それは天界に還るだけの話だ。

下界における神と人の死生観の違いを考慮すれば、神ウラノスがクオンの弁護を優先する事もあり得るかもしれない。

そう。これがリヴェリアの言う通り単なる派閥抗争の範疇なら。

「そらどうやらな」

「ああ。これはもつと深刻な話だ」

いっぴになく険しい顔で唸るロキに同意する。

「リヴェリア、ガレス。君達は、気づいていたのかい？」

「何にじや？」

「もちろん、昨夜神イシユタルが殺された事にさ」

もし、どちらかが気づいているなら、あるいは僕やロキの考えすぎなのかもしれないが——

「……そうか。確かにおかしいな」

険しい顔で、リヴェリアが呟く。

「神が死んだなら、夜のうちに騒ぎになっていなくてはおかしい」

「そう。その通りだ」

下界で神が死ぬと天界への送還が始まる。

それは光の大柱と強大な力の波動を伴う荘厳な光景を生み出すものでもある。

暗黒期に暴虐の限りを尽くした闇派閥イヴェリスの主神……あの邪神達のものであっても、思わず見とれてしまうほど幻想的な光景。それを、オラリオの多くの住人が知っているはずだ。

特に暗黒期を経験している者達なら、一度も目撃した事がない人物を探す方が困難だろう。

無論、ガレスやリヴェリアが知らないはずがない。

暗黒期に幕を引く決定的な一打となった邪神の一斉送還は、彼らの助力なしにはとても成し遂げられなかったのだから。

だから、もしいつも通りの『神の死』なら、誰も気づかないはずがない。

「ならば、まだ神イシユタルは健在なのではないか？」

ガレスが顎鬚を撫でた。

確かに、本来ならそう考える状況である。

情報が錯綜しているだけ。それが、一番納得のいく話だ。

「いや、そらないな」

だが、それをロキが否定した。

「うちもちよいと調べてみた。具体的には昨日の夜、歓楽街におつた男神連中から話を聞いた」

重苦しい声で、ロキが続ける。

「連中、揃つてこう言いよつたで。『神の力』^{アルカナム}の発動を感じたつてな」

それは神々が下界で禁忌している行為だ。

かつて暴虐の限りを尽くした闇派閥^{イヴィルス}の邪神ですら、それには逆らわなかった。

いや、逆らいようがなかったのか。

許可なくそれを使用すれば、天界へと強制送還されるのだから。

さらに言えば、許可されるのは『神の鏡』のみだ。

……いや、もちろん『ステイタス』^{アルカナム}更新も『神の力』の一つだが。

「ロキの話が確かなら、神イシユタルはいずれにしても天界へと送還されていなくてはおかしい」

しかし、例えば強制送還であつても展開される光景は同じだ。

「となると、考えられるんは二つ。一つは、うちが担がれた」

「君の事だ。当然複数神ふくすうじんから聞いているだろう？」

「そらまあな。これでもし担がれとるんやったら、それこそイシユタル主導でドツキリを仕掛けられたんやろ」

「それだつたら、彼女達も誘つて祝杯でもあげようか？」

「そうやな。イシユタルんトコなら美人も多いやろし」

互いにどうにも切れの悪い軽口を叩き合つてから、

「もう一つはイシユタルは天界に還れなかつたいう場合やな」

ロキは結論を口にした。

「……念のため確認するが」

しばしの沈黙の後、リヴェリアが呻いた。

「それは、ガレスの言つたように神イシユタルがまだ健在だという意味ではないのか？」

「ちやうな。おそらく、イシユタルは文字通りに殺されたんやろ」

あの荘厳な光景は神が天界へと還るからこそ生じる。

逆に言えば、完全に死んだなら生じようがない。

「……そんな事が可能なのか？」

ガレスの疑問ももつともだ。

人類にんげんが超越かみ存在みを完全に殺すなどあり得ない。あり得てはいけない。

「デーモン」

だが、ロキは一言でそれに応じた。

「フィリア祭でリヴェリア達が戦ったあの怪物はうちの魂を喰らう存在らしい。まあ、間違いないやろ。あんなにはつきりと死を感じたのは久しぶりや。あのデーモンと同じく、うちの魂を喰らう事ができるなら……イシユタルも殺せるやろな。いくらうちらかて魂を喰われたら死ぬしかない」

「……クオンも、デーモンだど？」

もつとも、人間ではないと言われた方が遥かに納得できるが。

「まあ、デーモンというのがどういいう存在か分からんし、自分らの姿をした奴がおつても驚くほどの事やないのかもな」

ロキもまた、それを否定はしなかった。

「ただ、その場合分からは、何でウラノスがあれの肩を持つのか、言う事やな。うちらを完全に殺せるような存在なんて下界におつたらあかん。黒竜と同じかそれ以上の厄災や」

そんなもの、オラリオの全てを費やしても滅ぼさなあかん——と、ロキ。

「まあ、現実問題、まだオラリオにそれだけの力がないから何とか飼いやらして置く性能もあるけどな。ほれ、他にもあれと同じようなのがおるんやろ？」

「……そのようだね」

およそ一週間ほど前、ダンジョンを騒がせた二七階層におけるモンスターの大量発生。

謎の人物からその調査の冒険者依頼を受けたアイズと、その後ロキが派遣したベートとレフイーヤ、そして「デリオニユロス・ファミリア」団長の「白巫女」。さらに、アイズの依頼人が同時に派遣した「ヘルメス・ファミリア」の精鋭からなる大規模パーティを蹂躪した剣士。

アイズ達が告げられた話を信じるなら、その剣士は四年前にあのクオンを倒したと――それどころか、容易い相手だったと言い放ったという。

それだけでも最悪だが、よりにもよって例の赤髪の女調教師と組んでいるというのだから、悪夢と言わざるを得ない。

事実、その剣士によつて「ヘルメス・ファミリア」の精鋭パーティが半壊させられたと聞いている。

だが……彼女達には悪いが、全滅でなかったのは望外の幸運だろう。

アイズやベートですら死んでいておかしくない状況なのだから。

「クオンを含めて四人、か……。もしロキの予想通りなら、人型のデーモンは珍しくなさそうだ」

そう。四人だ。それが、アイズ達が生還できた理由である。

先に挙げたメンバー以外に、もう一人。パーティに加わつた冒険者がいる。

レフィーヤがリヴェエラの街で雇つた無所属フッリの冒険者。

その人物はクオンを知っており、アイズ達を追い詰めた剣士とも互角に渡り合つたといふ。

彼無くしてアイズ達の生還はあり得なかつた。

「他にモンスターと人間の混合種ハイブリッドもいる」

六年前に死んだはずの闇派閥幹部。【白髪鬼】ウエンテッタ ことオリヴァス・アクトは人と怪物モンスターの混合種として復活していたといふ。

加えて、例の赤髪の女も同様の存在らしい。

「怪人か……」

リヴェエリアが呟く。

「クオン達もその一人じゃと?」

「どうか。だとしても、彼女の仲間つて訳じやなさそうだけだ」

とはいへ、彼女もまたクオンを知つていた。

少なくとも、その二つ名らしきものを。

「その女はクオンを『亡者の王』と呼んだのだつたな」

リヴェリアが問いかけるでもなく呟く。

「……アン・デイルも、クオンを亡者と呼んだ。それに、クオン自身も『亡者の王』になるのも悪くなかったのかもな、と言っていた」

「亡者って。あれ、いつともうちらの事をそう呼ぶやん」

「どういこうつちや——と、ロキが毒づく。

「なるのも悪くなかった、というなら、実際にはなっていないんだろうね」

「おそらくな。それに、あいつは『アンデッド』の事も亡者と呼んだ」

「今一つ基準が分からんいう」

確かに。彷徨う死体を亡者と呼ぶのは分かるが、彼自身がそう呼ばれている事と、神々をそう呼ぶ理由がよく分からない。

まして、それら三つが亡者と一括りにされる理由も。

（それとも、それぞれ意味が違うのか？）

その可能性はあるかも知れないが……それなら、なおさらいくら考えても無駄だろう。

何の手がかりもない今の状況では精々予想しか立てられない。

「気になるのは、そちらではない」

リヴェリアが肩をすくめた。

「【闇の王】。アン・デイルはあいつをそう呼んだ」

まあ、他にも【薪の王】や【絶望を焚べる者】などとも呼んでいたが——と、付け足してから、

「その【闇の王】とやらはかつて神々の王ですら恐れた存在だという。もしあいつが完全なる神殺しを可能とするなら——」

その称号もまた真実たり得るのかもしれないな——と、彼女はそう言った。

「……ロキ。何か心当たりはあるかい？」

リヴェリアの推論は、おそらくかなりの真実を含んでいる。

その予感があつた。

しかし、実際にそんな事があり得るのか？——と、言う点にはまだ疑問がある。

……いや、単純に信じたくないだけか。

「んく……。ないなあ。そもそもうちの王言われてもピンとこんわ。『神の王』やなくて『神で王』なら、ラキアのアレス辺りが該当しそうやけど……」

「ラキアの王はあくまで人間だよ。国家系と言っても基本的な構造は僕らと同じさ」

国家系派閥の団長は王と呼ばれる。ただそれだけの話である。

「それそうやな。それに、アレスをビビらせるくらいでええなら、自分ら第一級冒険者は皆その【闇の王】とやらや」

一昔前——まだ『クロツゾの魔剣』が猛威を振るっていた頃ならまだしも、今のラキアならオラリオの敵ではない。何しろ、最強の騎士でも精々がLv. 3と言ったところだ。

一般的に一ランクの差でも絶対的と言われている。

ならば、二倍の差など絶望的という言葉でもまだ足りない。

「気になるのは、『かつて』という言葉だ」

ロキの軽口を聞き流し、リヴェリアはさらに言葉を続ける。

「今のあいつは力を失っているらしい。アン・デイルはそれを取り戻させるために、あいつを『イシユタル・ファミリア』に喚けたのだろう」

「あれでまだ足りんと?」

思わず、と言った様子でガレスが呻いた。

だが、気持ちは分かる。【**猛者**】おうしやと互角以上に渡り合い、単身で大派閥を攻め落としてなお足りないなど、悪夢という言葉すら生ぬるい。

「少なくとも、アン・デイルにとっては足りないのだろうか」

リヴェリアは肩をすくめてから、

「クオンも力を失っている事は否定しなかった。おそらく、本当なのだろう」

「何故そう思うんだい?」

と、問いかけた物の……彼女がそう見当をつけた理由は、実のところ分かっている。

「四年前の闘技場。【古王】^{スルト}との一戦だ」

やはりか——と、胸中で呟きながら、彼女の言葉に耳を傾ける。

「あの時、あいつは急激な成長を見せた」

ああ、よく覚えている。

それまでは——少なくとも、僕らと対峙した時は精々火球を放ち、あるいは掌に爆炎を生み出す程度の事しか出来なかつたはずだ。

だが、あの一戦の間に、巨大な火柱を生み出し、青白い極光を放ち、雷を操り、回復魔法まで使うようになっていった。もちろん、体の動きも洗練され、強靱にもなった。

まるで【古王】^{スルト}の戦い方をそのまま己のものにするかのように。

「あれは成長ではなく、元々持っていた力を取り戻していっただけ。そう言われた方がまだ納得がいく。そうは思わないか？」

「……ああ、そうだね」

あれは成長というにはあまりに早すぎる。

「かつてクオンは神々の王すら恐れた【闇の王】であり、何らかの理由でその力を失った。いや、封じられているだけかな。だから、アン・デールはそれを取り戻させようとしている、か」

だが、一体何故？

もしロキの仮説が正しい——完全なる神殺しが可能だとするならば、今のままでも過剰と言える力を持つている。

(下界の神々を一掃するためか？)

クオンが神嫌いなのはよく知っている。あり得ない話でもないが……。

「デーモン」

ロキを真似するかのように、リヴェリアも告げた。

「あれには『飼い主』がいるらしい」

「^{テイマー}調教師が？」

「そういう意味かは分からないが……あの怪物は何者かの思惑に従っている、あるいはその何者かが生み出している可能性は充分に考えられる」

事実、アン・デイルはモンスターを生み出せるらしい——と、小さく嘆息してから、

「クオンは今のところそれを追っている節がある。あるいは、ギルドの指示かも知れないが——」

「アン・デイルも、その『飼い主』を追っている？」

「可能性はあるだろう」

リヴェリアはあっさりと頷いたが——それが事実だとするならば事態はより深刻だ。

「その『飼い主』と対峙するには、それだけの力が必要という事か」

神々に匹敵する。あるいは超えるだけの力が。

だからこそ、そのアン・デイルは「闇の王」を求めている。

それなら、話としては筋が立つか。

「それほどの脅威が、ダンジョンに潜んでいると？」

ガレスが唸る。

肯定も否定もできない。言えるとしたら、別の可能性だけだ。

「あるいは、オラリオのどこかに、かも知れないね」

だとすれば、闇派閥イヴィルスどころの騒ぎではない。

オラリオどころか世界の終わりが近いという事だ。

(だから、神ウラノスはクオンを味方に引き込んでいる?)

毒を以て毒を制す。つまりはそういう事なのか。

「可能性の話だ。だが、それなら黒教会とやらが『暗い穴』なる呪詛カーズで強引に冒険者を強化している理由にもなるのではないか？」

「確かにね……」

その『暗い穴』は一つでLv.を一段階上昇させるという。

加えて、『不死』にもなる。その危険性は絶大だが、有益さを否定する事はできない。

「クオンの今を探るのもいいが……」

リヴェリアが呟いた。

「過去についても調べてみるべきかもしれないな」

「それは、四年前よりさらに過去という事かい？」

「ああ。あいつがどこから来たのか。一体何者なのか。……まあ、オラリオでどこまで

の事が調べられるかは分からないが」

「その割には、あてがありそうな顔をしているね？」

「まあな。手がかりの手がかりになりそうなものなら、いくつか心当たりがある」

おそらく、ここしばらくの間、彼女を悩ませている『何か』だろう。

(手がかりの手がかり、か)

おそらく、それは嘘だ。

彼女を悩ませる『何か』はそのまま真相に直結する。あるいは、すでにしているはずだ。

だからこそ、彼女をここまで悩ませている。

「ちなみに、その心当たりは？」

「たまには城じじょうに手紙を書いてみるだけだ」

「……いいのかい？」

確かに彼女は王族だが、出奔してここにいる。

王位継承権は下げられている——いや、下手をすると廃嫡されている可能性もあり得た。

「無論、父上に送る訳ではない」

この状況では何の役にも立たないからな——と、彼女はバツサリと言い切った。

「私の師だ。いや、私が勝手に師だと思っただけだが……」

珍しく曖昧に言葉を濁してから、

「ともかく、あの方はエルフの中でも古老だ。それに、大層な変わり者だからな。嘘か本当か定かではないおかしな話もよく知っている」

「……それは、あてにして大丈夫なのかい？」

「さてな。今のところ、私が確認できた範囲では嘘はなかった」

もつとも、確かめられたのは数える程度だが——と、小さく付け足された言葉は……まあ、この際聞こえなかったことにしておこう。

どのみち、初めから雲を掴むような話だ。

駄目で元々。

そのくらい覚悟で手を伸ばすところから始めなくては。

「なら、早飛脚を用意しよう。確か往復だと——」

リヴェリアの故郷の位置を思い浮かべ、ぎつと試算していると、彼女はため息を吐いた。

「往復の必要はない。というより、その場合おそらくは長く待たされる事になる」
「何故だい？」

「あの方は変わり者だからな。まず間違いなく森にはいない。昔から数年単位でいなくなる事があったが……風の噂では、私が出奔して以来戻っていないとも聞く」

「それ、ホンマに連絡取れるん？」

「別にあの方に直接手紙を書くわけではない」

ロキの言葉に、リヴェリアはあっさりと応じた。

【大賢人】ディア・アベル フレーキ。宮廷魔導士長であり、『古代』の英雄の血を継ぐお方に送る

「フレーキ・ハースト。エルフが誇る大英雄メタス・ハーストの息子、か……」

ダンジョン・オラトリア
迷宮神聖譚に名高い聖女セルディアと並び立つエルフ屈指の英雄。

「まだご健在なのかい？」

聖女セルディアの血は健在なのは知っている。

何しろ、その妹君であるリシエーナこそがリヴェリアらハイエルフ王族の祖先なのだから。

だが――

「ああ。今も私達ハイエルフ王族の師を務めている。もつとも、流石に高齢ゆえ直接教えを賜る機

会は少ないがな」

まさメタスの血は息子本人が生きていたとは。

「エルフにしても驚くべき長寿じやのう……」

と、いうか。果たしてそんな事が可能なのだろうか。

メタス・ハーストは『古代』の英雄だ。となると、フレイキが生まれたのもおよそ千年前となる。

「私達の中でも最長老だからな。父上はおろか、あの方もフレイキ様の言葉は無下にしない」

いかに長命なエルフとさえど、あまりに法外のように思えるが。

「君が当てにしているのは宮廷魔導士の一人なのかい？」

「いや、あの方は違う。フレイキ様から薫陶を受けているとは言っていたが……どちらかと言えば少し年の離れた可愛い弟分と言ったところだろう。まあ、あくまで私達の感覚で、だが」

フレイキ様曰く、今ではすっかり茶飲み友達らしい——と、リヴェリア。

「あの方も、フレイキ様にはこまめに旅の手紙を書いていっていると聞く。少々不敬だが、連絡をお願ひするよりない」

「……大賢者フレイキと少し年の離れた後輩で、今も旅から旅へとは、恐るべき壮健さだ

ね」

エルフの言う少しとはどれくらいなのだろうか。

十歳二十歳くらいの差なのだろうか。

「ほとんど人類にんげんやめとるのう……」

ガレスの言う通りだ。

それでも、すでに数百歳という超高齢なのは間違いない。

いくらエルフでも長寿すぎるのではないか。

(オラリオにいるエルフの最高齢は、おそらくロイマンだろうけど……)

確か一世紀以上もこのオラリオで生きているはずだ。

だが、それでもまだ一世紀。十分の一でしかない。

いや、『神フアルナの恩恵』を賜れば——そして、高Lv.になれば多くの場合、老化は著しく

抑制される。かくいう僕自身もそうだ。リヴェリアの師もそうなのかもしれない。

「返信がいつになるかは分からないが、やっておいて損はないだろう。どのみち、他にやれる事はいくらないからな」

「そうだね。任せるよ」

執務室を出ていくリヴェリアの背を見送つてから、僕も立ち上がる。

「ガレス、あとは頼むよ」

「うむ。任せておけ。……まあ、少しばかり余計な仕事が増えそうじゃがの」と、言っても大半の仕事はラウルに任せてある。

幸いと言うべきか。今日は元々外出する予定があつたからだ。

いや、そうでなくても最近、遠征準備の指揮はその多くを彼に任せているが。

「あれも遠征前に余計なことしよつて」

廊下を歩きながら毒づくロキに、小さく苦笑する。

「そうだね。正直、延期という事態は避けたいところだ」

何しろ、今度の遠征は例の『新種』対策として、幹部全員の『不壊属性』デユランダルの武具や数

多の魔剣の手配。さらには――

「元々無理を言つて「ヘファイストス・ファミリア」に同行してもらう訳だからね」

鍛冶系大派閥「ヘファイストス・ファミリア」の協力――数十名の上級鍛冶師ハイ・スミスの派遣

――を取り付けてある。こちらの都合で振り回す訳にはいかない。

……まあ、もつとも。人数についてはこれから具体的な話をしにいく訳だが。

それに――

「リヴェリアに丸投げしてばかり、というのも団長としてはちよつと冴えない話だからね」

神ヘファイストスと言えば、おそらくクオンと良好な関係にある神のひとり一柱のはずだ。

3

第二地区の中心にある「ヘファイストス・ファミリア」の工房にて。

そろそろ夕日へと移り変わる頃には、遠征前の打ち合わせは一通り終わっていた。

「ところで、神ヘファイストス」

出された紅茶を飲みながら、もう一つの本題を切り出す。

「クオンの過去について、何か知っている事はないだろうか？ いや、顧客の情報を簡単には教えられないのは承知している。ただ、今は状況が状況だ。万が一の時に備えて、少しでも情報を知っておきたい」

先日、五〇階層で彼の武器を借りている。フィリア祭ではアイズ達もだ。

その時の感覚からして、彼の持つ武器は第一等級武装を上回っているとしか言いようがない。

そんなものを手入れできるとしたら、ここか「ゴブニュ・ファミリア」のどちらかだろう。

「あら、どうして彼が私の顧客だと思うのかしら？」

「この街で、彼の武器を手入れできるとしたら、「ヘファイストス・ファミリア」か「ゴブニュ・ファミリア」くらいなものです。そして、彼の性格からすれば選ぶとしたらあ

なたかと」

と、言ってから慌てて付け足す。

このままだと、とんでもない誤解に繋がりがかねない。

「もちろん、あなたとクオンが男女の関係にあると勘ぐっている訳ではありませんが……」

「そうね。別に彼の事は嫌いじゃないけど、そういう関係になるのはちよつとね」

彼、気が多いから——と、神へファイストスは苦笑した。

「つてことは、ファイたん。ホンマにあれの武器手入れしとるん？」

「四年前に何回かね。ついこの前も顔を見せたけど、その時はちよつと世間話したくらいよ」

ロキの問いかけに、彼女はあつさりと肩をすくめて見せた。

「……訊いておいて何ですが、いいのですか？」

「いいわよ。私達に危害が及ぶかもしれないから黙っている方がいいとは言われたけど、別にあなた達はそんな事をしないでしよう？」

そう言われてしまえば、頷く以外の返事などありはしない。

まして、これから遠征で大いにお世話になる予定なのだからなおさらだ。

……いや、もちろん、そうでなくても危害など加えはしないが。

「それに、あなたが聞きに来たなら教えていいって言われてるしね」

「あれが？ 意外やな」

「ええ。あなた相手なら下手に隠すと余計面倒な事になるぞつて。まあ、本当はもつと酷い言われ方だったけど……聞きたい？」

「……遠慮しとくわ」

神へファイストスの言葉に、いつになくロキは素直に応じた。

どんな評価をされているのか若干気にはなる……が、ここは主神の意向に従うとしよう。

「椿、君も面識があるのかい？」

代わりに、傍らの最上級鍛冶師マスター・スミスに声をかける。

「受付嬢と間違えられて声をかけられた事はあるが、それだけだな」

後で主神様に教わって、あれが「正体不明」イレギュラーだとはじめて知った——と、椿。

「あと、あなたアマゾネスだと思われてたわよ」

「はははっ！ ハーフとは言えドワーフの手前をか？ 意外と女を見る目がないのう！」

主神のひやかしに、椿は豪快に笑って見せた……が、確かにその誤解は仕方ない。

ドワーフ——と、言っても彼女はハーフだが——らしからぬ、すらりと長い手足と一

七〇〇に届く背丈。秀麗な顔立ちに、健康的な褐色肌。そして、胸だけを隠すさらし一枚の姿で平然としている女性を見れば、クオンでなくともアマゾネスと誤認するだろう。

いや、そもそも初見で彼女をドワーフだと認識できる人間がどれだけいる事やら。

「あやつはここに来てもろくに武器を買わん。精々投げナイフか矢、ボルトくらいだな。それ以外にするとしたら手入れの依頼だけだ。それも主神様を指名する故、ほとんどの団員は何も知らんだろう」

「まあね。彼の武器を手入れできるのは、私か椿くらいなものだろうし」

下手に手入れさせたら、私達が補償金を払う羽目になるわ——と、神へファイストスのみならず椿までが肩をすくめて見せた。

「それほど物なのかい?」

「ええ。あまり詳しくは話せないけれど、彼が愛用する武器や防具はみんな『私の作品』並みよ。……天界で打った、ね」

その言葉に、ロキまでが目を見開く。

「マジでか?」

「大マジよ。初めて見た時は、私も我が目を疑ったもの。誰かが規則を破ったんじゃないかって」

それどころか、私自身が夢遊病にでもなつて、自分でも知らない間にやつちやつたんじやないかかつてつい不安になつたくらいよ——と、その美しき神匠は肩をすくめた。

「誰が打つたかご存知ですか？」

彼女の言葉は、あながち嘘ではないだろう。

リヴェラの街での戦闘で見せた『ドラゴンウエポン』なる武器。

確かにあれは既存の魔剣とは全く違スベリオルスく特殊兵装だつた。

それに、あの不壊属性デュランダルの槍も。少しばかり重さが気になつたが、それ以外は全く文句の言いようがなかつた。

「さあ。彼は大体拾い物だつて言つてたけど……」

「天界でファイタンが打つた武器なん、『深層』にだつて落ちとらんわ!!」

思わず、と言つた様子で口キが叫んだ。

その隣で、椿も腕を組んでは何度も頷いている。

……まあ、確かに落ちてないけど。少なくとも、今のところ発見した事はない。

「ただ、何人か鍛冶師の名前を口にしていたわね」

「参考までにお聞きしても？」

「ええ。レニガツツだとか、マツクタブだとか、バモスだとか……一番よく聞いたのはア
ンドレイという鍛冶師ね。彼が愛用するクレイモアを今の形に仕上げたのはこの人み

たい。アンドレイのおっさんがいてくれれば、つてよくぼやいてたわよ」

「まったく、手前どもの工房に来て他の鍛冶師の名を挙げるとは……」

神へファイストスの言葉に、最上級鍛冶師マスターミスの椿が呻く。

「心当たりはあるん？」

「残念ながら。私もぜひ一度会ってみたいと思うんだけどね」

「うむ。同じ名前の鍛冶師、という意味でなら心当たりがないわけではないが……とて
も主神様に匹敵する武器など打てまいな」

手前でもまだその域には届かんのだ——と、椿が捕捉した。

確かにアンドレイという名前には別にそこまで珍しいものではない。

同名の鍛冶師が一人や二人いたとしても何の不思議もありはしない。

(となると、クオンの言うアンドレイという鍛冶師は、オラリオには居ないという事か)
鍛冶師へファイストスが絶賛するほどの腕の持ち主なら、全くの無名というのはあり
得ない。

例えオラリオの外にいたとしても、噂の一つくらい届いていいはずだが……。

「オラリオに来る前の事を、何か聞いた事はありませんか？」

「ずいぶんと物騒な場所を旅してきたって話は聞いてるけど、それが本当かどうかは分
からないわね。少なくとも、オラリオで手に入る世界地図では、彼の口にした地名は確

認できないわ。……ああいえ、一切見当たらないわけじゃないけど、とてもそんなに物騒な場所ではないわね」

つまり、その場所——ないし街——もまた、単なる偶然の一致と見るべきか。分かつてはいたが、手掛かり一つ得るのも容易ではないらしい。

（オラリオで手に入る世界地図は世界最高峰だからね）

何しろ、オラリオは魔石製品を中心に世界中と交易を結んでいる。

各地から集まる交易商が持つ地図を重ね合わせるだけで、文字通りの世界地図を作れる程に。

世界の中心という謳い文句は伊達ではないのだ。

その地図に記されていないとするなら小さな寒村か、もしくは辺境や僻地となるだろう。

辺境などは一般的に危険な場所と言われている……が、クオンのような怪物を育て上げられる程に過酷な土地なのか？——と、問われれば首を傾げるしかない。

（所詮、と一概には言い切れないけど……）

辺境に居るのは、外のモンスターだ。母なる迷宮ダンジョンから離れ、己の魔石の力を削って子孫を残し——その結果、大幅に弱体化している。

とは言え、忌まわしき黒竜を筆頭に、今の僕らにとっても危険なモンスターもちらほ

らと存在が報告されている。されているが、個体数で言えば絶対的に少ない。

それでもなければ、流石に戦力流出が——などと暢気な事は言っていない。

世界各地から救援を求められる事になり、所謂『傭兵稼業』もオラリオの大きな経済基盤になっていただろう。

だが、現実にはオラリオの外に住まう神々の眷属だけで——あるいは、獣人やドワーフなど『神の恩恵』を持たずともモンスターとも戦える種族の奮闘によつて対応できている。

外のゴブリンなら、そこそこしつかりした体を持つヒューマンでもどうにかなる程度なのだから。

「急に彼について聞くなんて……。昨夜の騒ぎが原因かしら？」

流石はオラリオ有数の大派閥。耳が早い。

歓楽街で騒ぎがあつた事は街の噂になつているが、それにクオンが絡んでいるというのはまだほとんど知られていないはずだ。

もちろん、そこで何があつたのかも。

「まーそんなとこや」

と、ロキは肩をすくめてから、

「ファイたんはあれがイシユタルを殺した理由に心当たりはある？」

その問いかけに、椿が目を大きく見開く。

「……まあ、イシユタルが『美の神』だから、かしらね」

一報、神へファイストスは静かに応じた。

「フレイヤと同じいう事か？」

「ええ。フレイヤと同じように、彼を『魅了』しようとしたんじゃないかしら」

もつとも、それだけが原因とも思えないけど——と、神へファイストスは呟く。

「彼は何故そこまで『美の神』を嫌うのでしょうか？」

誠実とはとても言えないが……それでも、巷で噂されてるような、全く見境なしの女好きという訳ではない。それはリヴェリアやラウルの話から分かっている。

とはいえ、多くの男がそうであるように、見目麗しい女性を好むというのも確かだろう。

神へファイストス、リヴェリア、アンクレーシヤ「象神の杖」——いずれ劣らぬ美女である。

(いや、だから友好的関係にあるという訳でもないだろうけど)

神フレイヤや神イシユタルといった美の極致にいる存在とは相性最悪なのだから。

しかし、一体なぜ？

「これはあくまで私の主観だけど……彼は私達神々があなた達人間を良いように扱うのが許せないのよ」

別に『美の神』だから嫌っているわけではないわ——と、神へファイストス。

「少なくとも、下界にいる神は等しく嫌っていると云つていいんじゃないかしら。具体的に何をしたかは知らないけど、もし私がイシュタルと同じ事をしたなら迷わず殺しに来るでしょうね」

「ファイたんでも?」

「もちろん。私だろうがガネーシャだろうが同じよ。ロキ、あなただつてそういう傾向があるから嫌われてるんじゃない?」

「ぐ……。そら確かにまるつきり否定はできんけど……」

神へファイストスの指摘はなかなかの説得力があつた。

確かにロキは身内の悪ノリを他所の派閥の団員に向けてする時もある。

そうでなくとも、『トリックスター』を自称する神だ。心当たりが皆無とは流石に言えない。

……そして、間違いなくクオンから見た第一印象は最悪だろう。

「け、けど。最近はこれでもオラリオのために身を粉にしとるんやで?」

「私にそれを言われてもね」

それはそうだ。別に神へファイストスは彼の主神でも何でもないのだから。

鍛冶師と客。ただそれだけだ。あるいは、だからこそ成立している関係とも言える。

「子供達を唆したり、誑かしたり、狂わせたり、害したりする神を嫌っている。そういう認識さえ忘れなければ、それなりの関係は築けるわよ。基本的には別に気難しい性格ではないし」

なるほど。確かにそれなら『美の神』は危険か。

例え本神ほんにんにその気がなくとも、『魅了』してしまう可能性はある。

まして、神フレイヤや神イシユタルがその力を積極的に利用していたのは間違いない。

逆に神ヘファイストスや神ガネーシヤはオラリオ屈指の神格者として有名だ。

「まあ、別におかしな話でもないでしょ。そういう事をしながら、好かれようと思う方が無理があると思わない?」

「そ、それもまた容赦ない正論やけど……」

行動は苛烈極まるが、その基準は平凡と言える。

むしろ平凡すぎる程だ。

神ヘファイストスの見立てが間違っていないなら、クオンにとっては神も世界に存在する数多の種族の一つでしかないという事なのだろう。

……それを傲慢だと怒る神は、このオラリオにも多そうだが。

「うむ。主神様は時に厳しくもあるが、別に横暴ではない。手前どもが修羅場に陥るの

は主神様のせいではなく、顧客がいきなり無茶な要望をよこすせいだ。どこぞの狼ウエアウルフ人の小僧のようにな」

「それについては本当に感謝するとしか言いようがないな」

からかうような椿の言葉には苦笑するしかなかった。

僕ら全員分の不壞属性デユランダルの武具に加えて、ベートは愛用の特殊兵装スベリオルズ——二四階層での戦鬪で破損した《フロスヴィルト》まで打ち直してもらったのだから。

「あとは、最後の一線を越える理由があれば、それで充分なんでしょうね。彼にとって
は」

椿とのやり取りに苦笑してから、神へファイストスはそう呟いた。

「最後の線、か……」

あるいは、アン・デイルに唆されて神イシユタルはそれを超えてしまったのか。

それとも、単に自分で越えてしまい、アン・デイルはそれをクオンに伝えただけなのか。

「まあ、彼の神嫌いの原因はもつと根が深そうだけど、それが具体的にどんなものなのかは私も知らないわ。彼、滅多に身の上話はしないもの。こつちから聞いても適当にはぐらかすくらいだし」

それはよく分かる。リヴェリアやラウルもほとんど昔の話は聞きだせていない。

だからこそ、今さら改めて彼の過去を探り始めているわけだが。

……

工房をお暇してからしばらくして。

「結局空振りやったな」

第一地区に戻った辺りでロキがぼやいた。

「まあ、そう簡単に分かるとは思ってなかったけどね」

すでに夕刻。高級住宅街も隣接するこの区画には、夕食のいい匂いが漂い始めている。

普段なら僕もそろそろ一日の仕事納めとなる時間だ。

……まあ、遠征前ともなれば、そうも言っていられないが。

「そらそーやけど。……他に知ってそうな奴やと、ガネーシャかうラノスやな」

今回はそれに更なる厄介事の種が撒かれている。

いや、四年前から燻っていたものがついに火の粉を上げた——という程度だが。

「ああ、そうだね」

この二柱ふたりなら、確実にクオンの過去についても何か知っているはずだ。

「ウラノス、か……。この前はまんまとはぐらかされたしなあ」

「フィリア祭の時かい？」

「そうや。ディオニユソスの無茶ぶりに付き合つたはええけど、これと言つて収穫なしや」

頭の後ろで手を組み、夕焼け空を見上げながらロキは言った。

「まあ、僕としては神ウラノスと神ガネーシャがクオンと共謀してオラリオを滅ぼす、なんて話はちよつと現実感がなさすぎると思うよ」

何しろ、あの神ガネーシャが含まれている。

変わり者だが、それ以上に善良なあの象神が無辜の民を害する姿などまず想像できない。

「そらな。あのガネーシャがおるし」

それについては、ロキも異論はないようだ。

「それに、クオンがいるならあの新種を外に運び出す必要はない。今の状況からすればなおさらね」

大派閥である「イシュタル・ファミリア」を単独で壊滅させたのだ。

例え相手が僕らや「フレイヤ・ファミリア」でも同じ事をしてきただろう。

何より恐ろしいのは、彼ならそれでもなお達成しかねないという事だ。

極論で言えば、クオンは一人でオラリオを陥落させられる。

(この街に住まう神々を皆殺しにさえできれば、それで事は足りる)

何しろ、主神を失ってしまえば、あの【**猛者**】ですら満足に戦えなくなるのだから。「そーやな。他のモンスター逃がしたんはフレイヤやし、フィリア祭の騒ぎをウラノスが裏で糸ひいとるいう可能性は低いなあ」

もつとも、全くの無関係とも思えんけど——と、ロキ。
それもまた事実だ。

(おそらく彼らはあの『**新種**』を秘密裡に対処しようとしている)

思えばあの宝玉を探しに行ったのは【ガネーシャ・ファミア】の団員だ。

そして、クオンが神ウラノスの私兵なのはほぼ間違いない。

さらに【ガネーシャ・ファミア】が治安維持のため、中立中庸を標榜するギルドと例外的に提携を結んでいるのは誰もが知るところである。

もちろん、だからと言って【ガネーシャ・ファミア】がウラノスの完全なる私兵だとは思わないが。

「ウラノスとガネーシャとあれ。それに、極彩色の『**魔石**』や怪人クリーチャー。他にデーモンやら何やら。これがみんなどつかで繋がつとるんは間違いないんやけどなあ……」

「ああ。僕もそう思う」

現状を公平に見るなら、クオン、ウラノス、ガネーシャの勢力とそれ以外は対立関係があると見るべきだろう。

しかし、それなら——

「何故、神ウラノスはオラリオの危機を公表しない？ いや、オラリオ全域に公表したら混乱が起こるのは確かだ。それを避けるために避けているというのも分かる」

全てを公表すればいいわけではない。それは、団長としてよく分かる。

そもそも、ギルドが情報規制を敷いている有名な話だ。『下層』の最下層から『深層』領域にかけての情報については、相応の資格を示さなくては開示されない。

それに不満を抱く派閥は聞いた事がなかった。

……下手に知らせては冒険者の心が折れかねないという理由があるからだ。

ダンジョンに触れていれば、誰もがそれに実感を抱くだろう。抱けないなら、長生きはできない。

だが、今回はどうなのだろう。それと同じなのか。

「少なくとも僕らや『フレイヤ・ファミリア』には情報を流しておいて損はないはずだ。口止めされれば、あえてそれに逆らう理由もない訳だしね」

少なくとも、今のところは——と、小さく付け足してから、ふと思ひ至る。

(ああいや、だからか?)

僕らが神ウラノスを信用していないように、神ウラノスも僕らを信用していない。

だとするならば——まあ、あまり文句も言えないか。

「むむ。そら、まあ……。けど、こちらはオラリオ最大派閥やで？ 多少面倒でも味方にしといて損はないやろ？」

ふと思いついたそれを告げると、ロキが唖った。

「どうかな。人員の『ガネーシャ・ファミリア』。戦力のクオン。これは意外と隙のない布陣だと思うよ」

所属する第一級冒険者の数で見れば『ガネーシャ・ファミリア』が群を抜いている。個々の練度で見るともかく、動員できる人員の数は彼女達の方が一段上だ。

そして、クオンは最低でもオツタルと互角の戦力である。

構図としてはオツタルを絶対的な頂点に据え、さらに数多の第一級冒険者がその脇を固める『フレイヤ・ファミリア』に通じるものがあつた。

「欠点と言えば、『ガネーシャ・ファミリア』が動かしにくい事かな？」

公にできる理由がない限り、この派閥は動かせない。

少なくとも公的にはウラノスの私兵ではないのだから。

「それなりの理由がないとね。治安維持っていう重要な役割を担っているからこそ、ギルドとの連携が認められているわけだし」

すべての『ファミリア』に対して中立であるギルドと『ガネーシャ・ファミリア』の関係が黙認されている大きな理由だ。

まあ、逆に言えば「ガネーシャ・ファミリア」もギルドのような公平さが求められている訳だけど。

その原則に従うなら――

「あれのイシユタル殺しには公にできる理由があるんかな？」

と、言う事になりそうだけど……。

「さあ。僕としては、神ウラノスの思惑すら飛び越えた可能性の方が高いように思うけど」

もちろん、神ガネーシャにとつても想定外だったはずだ。

そして、この場合問題となるのはその原因だった。

ただ単にクオンが暴走しただけなら話は簡単……とは言えないか。

（その方が厄介だな）

最悪の場合、クオンとの全面抗争が始まりかねない。

そうなればオラリオ側の消耗は深刻なものとなるだろう。

どれほどの数になるかはさておき、神という代替不能な存在を失う事になるのは避けられないのだから。

「今のところ、ギルドからは何の通知もない。遠征の準備をしつつ、様子を見よう」
何しろ今度の遠征は、今までとは意味合いが違う。

未知に挑む冒険者の性。派閥としての名声——それだけではなかった。

「怪人クリーチャーと闇派閥残党が企むオラリオの破壊。これにクオンや神ウラノスがどう絡んでいるかは定かではないけど……」

オラリオに迫る脅威。それを知るためのものでもある。

「まあ、流石に無視はできんしなあ」

それに、それはオラリオだけではなくアイズにも絡んでくる。

少なくとも、あの極彩色の『魔石』に関してはもはや当事者と言つていい。

こちらはこちらで火急を要する。

「それに、この繋がりがクオン達の思惑に迫れる可能性は充分にある」

執務室でも触れた正体不明の剣士。彼は確実にクオンと同質の何かだ。

その繋がりを辿れば、神ウラノスの思惑にも行きつける。その予感があった。

そして、そこまで至れば、あちらも無視はできない。

僕らが交渉の席に着くことも可能だ。

しかし、それにしても——

(極彩色の『魔石』。怪人クリーチャー。デーモン。『アンデッド』。それにクオンと同質の何か)

今オラリオに迫っている脅威を列挙する。

大きな何か——『暗黒期』をも上回る途方もない何か動き出しているのが嫌でも分

かる。

ただし、その中心にいるのは神々でもなければ名だたる冒険者の誰でもない。

(クオン、か)

認めるのは少しだけ——そう、少しだけ癪だが。

再び動き出した歴史の中心にいるのは、ほぼ間違いなくあの【正体不明】^{イレギュラー}だ。

あるいは、彼の登場と共に全てが動き出したのかもしれない。

(アン・デイル。そして黒教会)

突如として現れた異分子。いや、これもまたクオンと同質の何かか。

何より、本当に黒教会が『アンデッド』を生み出しているなら、クオンが姿を見せる

前から存在していたはずだが——

「氣を揉んでいても仕方がない。『深層』は余計な事を考えながら攻略できる場所じやな

いからね」

ひとまずそれらは考えないでおく。

「そーやなあ。何にしろ、もう【イシユタル・ファミリア】はないし、ギルドの発表を待つくらいしかやれる事もないか」

あれへの対応で、ウラノスの思惑を測るとしよか——と、ロキが呟く頃には僕らの本拠地が見えてきていた。

「団長！ 報告つす！」

本拠地ホトムに入るや否や、留守を任せていたラウルが駆け寄ってくる。

「どうかしたのかい？」

遠征に関する何かであれば、最悪ガレスが対応する。

そうでないとなると――

「クオンさんの身柄引き渡しを求めて、いくつかの派閥が徒党を組んでギルドに詰めかけたそうつす！」

思わず、ロキと顔を見合わせていた。

「あれ、もうギルドに捕まっとるん？」

意外だった。

クオンはウラノスの私兵かもしれないが、ギルドそのものとは特に関わりがない。

特例として換金だけは自由にできるが、専属アドバイザーがいるわけではない。それどころか、ギルド公式の冒険者クエスト依頼クエストすら――少なくとも表向きは――受注できない。

とはいえ、これは別に何らおかしい話ではない。冒険者登録されていないのだから当然だ。

オラリオの公的な扱いでは、クオンはあくまで剣闘士であって冒険者ではない。

と、それはともかく。

「いえ、それがギルドが回答を渋ってて……。その派閥同盟も、お答えできませんの一押しで追い払ったそうっす」

「そうか……」

これはギルド側も混乱している……持て余していると見るべきか。

あのロイマンにクオンをどうこうする度胸があるとも思えないし、当然と言えば当然だが。

「まあ、すでにギルドの手の内にあるなら、僕らが介入する事はない」

ウラノスの筋書き通りの寸劇で終わるかも知れないが……この際、それならそれで構わない。

できれば今は、遠征に集中したかった。

「情報収集は継続するつもりだけど……今は遠征の準備に集中しよう」

「了解っすー！」

少々不本意だが——それでも、正直肩の荷が下りた。

と、そう思っていたのだが。

「フィン！ いるか!？」

そんな思いは翌朝、リッヱリア副団長の険しい声と共に打ち砕かれる事となる。

新たな凶報は、翌朝一番に飛び込んできた。

『イレギュラー【正体不明】クオンが『美の神』イシユタルを殺害した』

オラリオ全域に向けてそう発表したのは、昨日ラウルの報告にあつた派閥連合——『神罰同盟』と名乗る者達だった。

彼らはクオオンの蛮行、その大罪を痛烈に批判し、早急な肅清を訴えているという。

「連中、景気よく人数を動員しとるような」

「そのようだね」

各区画のメインストリートのおよそ八〇〇Mごとに一人という勢いで。

さらに朝市やバベル前、アムール広場など人目につく場所に宣伝者を配置し、果てはピラまでまき散らしているという。

実際、執務机の上にもロキが——すぐその通りで——拾ってきたピラが置かれている。

「各派閥は今再び正義を示す時である——か」

その末尾に描かれた文言を読み上げる。

まあ、要するに同盟に加われという勧誘だった。

「胡散臭いのう。参加する者などおるのか？」

顎鬚を撫でながら、ガレスがぼやく。

「いるようだな。すでに七派閥が参加を表明している。……まあ、出来の悪い寸劇だが」
弾みをつけるためのサクラだろう——と、リヴェリア。

おそらく、それは正しい。その七派閥は初めからそのつもりだったと見るべきだ。
それでもなければ、いきなりこれだけの人員を展開させられる訳がない。

「問題はそれ以外だな」

「そうやなあ……。あれがイシユタルを殺したという意味を正しく理解できる奴がどんだ
けおるかという気もするけど」

「それについても、一応このピラにも書かれているけど……」

安物の羊皮紙は、すでにインクがかすれ始めている。

そこには、これは天界への送還ではない——と、記されていた。

「ああ。何人が信じるか、だな」

リヴェリアが小さくため息を吐いた。

「……まあ、それを信じられるなら、これに乗せられる危険も分かりそうなものだけどね」
「そうやな。これに乗つかるんは理解できん奴らや」

この神殺しが従来のそれ——単に天界に還るだけだと思っっている……それ以外にあり得ないと思っっていない限り、簡単に賛同などできるはずがない。

「情報の共有か……。本当に急務だったね」

オツタルとの密談を思い出し、ため息を吐く。

あの時は情報を引き出すための方便でもあったが……。もはやそれどころの騒ぎではない。

「かといつて、これから言っても信じてもらえんやろな」

「まあね」

それどころか、弱腰だと非難されかねない。

ありもしない理由をでっちあげて、クオンの肩を持つのか——そう糾弾されるはずだ。

（選択肢は二つか）

糾弾覚悟で、クオンの『スキル』を暴露するか。

それとも、ここは沈黙を保つか。

前者を選べば、なし崩しにこの『神罰同盟』とやらに参加する羽目になる。

その危険性を訴えた以上、オラリオ最大派閥として対応する義務が生じるのだから。

（全戦力を投入すれば……）

如何にクオンと言えど、ロキを狙う余裕はないはずだ。

彼を戦場から逃がさないこと。それが彼を倒す絶対条件だ。

あとは——

(何人がそれを信じてくれるかだな)

必殺の覚悟と共に包圍し、討滅しなくてはいけない。

クオンを相手に、少しでも綻びがあれば容易く食い破られる。

そこまでの覚悟を持って挑む冒険者が一体どれだけ用意できるのか。

それとも一つ。

この『神罰同盟』が僕の指揮下に入るかどうか——と、いう問題もある。

彼を過小評価している指揮官ではまず勝ち目がない。もちろん、僕なら適切に評価できるとまでは言わないが、少なくともその恐ろしさは知っているつもりだ。

(欲を言えば、ロキ達の安全確保も必要だけど……)

包圍網が完全なら、そこまで重要ではないが……いや、念を入れておいて損はないか。

ともかく、彼と対峙するなら全力を費やし、それを余すことなく活用できなくてはならない。

さもなければ、『灰色の悪夢』^{アッシュ・オブ・シンダー}は容易くすべてを蹂躪するだろう。

「しっかし、正義言うてもなあ……」

ピラを見やり、ロキがため息を吐く。

「こいつらイシユタルの取り巻きやんか。しかも闇派閥イヴイルスに片足突っ込んだ悪党ばっか。

どこ捻つても正義いう柄やないなあ」

「単なる仇討ちつてことかな？」

だとすれば、後者——沈黙を保つという選択肢も選べない事はない。

当事者達にだけそつと伝え、あとは自己判断に任せる——と、それでいい。

彼らの目的が復讐ならば、そういう選択をしてもそこまで文句は言われぬ。

仇討ちにつきあう義理が僕らにあるはずがないのだから。

「そんなところやろ。イシユタルがおらんくなつた以上、オラリオの勢力図は大きく変わる。ここでええトコ見せて、イシユタルの後釜狙つたら——くらいの気分やろ、どうせ」

それは大いにあり得る。

「昨日の一件といい、ちよい動きが速すぎるんが気になるけど……このくらいのじやれあいなら四年前に何度もあつたし、このアホ共がボッコボコにされて終わり、言う可能性も充分あるやろ」

過去にクオンに喧嘩を売つた派閥はいくつかある。

僕らも他人事ではないし、「フレイヤ・ファミリア」だつてそうだ。

だが、本当に主神を殺された派閥は「イシユタル・ファミリア」を除いて存在しない。

そのはずだ。精々殺されかけただけのはずである。

一番危険だった僕らですら、リヴェリアが交渉するだけの余地があった。

(それを考えれば、むしろ神イシユタルこそが例外だったと言えるかな)

と、そんな甘い予想はたった数時間後にいとも容易く否定される事になった。

……

「はあ?! ホンマか?!」

新たな凶報は、もうじき正午になるといつた頃に届いた。

「ホンマにギルドが襲われた言うんやな?!」

ロキが語気も荒く、ギルドから戻ってきた団員——まだ入団して日の浅い駆け出し冒険者——を問い詰める。

「は、はい……」

「待つんだ、ロキ。まずは傷の手当をしないと」

まだ新しい装備から滴る血からして、決して浅い傷ではない。

「お、おう。そうやな」

頷くロキを見ながら、近くから様子を窺っていた団員に治療薬を持つてくるように指示を出す。

「念のため確認するけど、君達はまだダンジョンには潜っていない。そうだね?」

鎧を脱がし、近くのソファに寝かせてから、彼と一緒に戻ってきた団員へと問いかけ

る。

「はい。ギルドで冒険者依頼を見繕っている途中でしたので……」

彼女もまだ一軍には遠いが、彼よりは経験を積んだ冒険者だ。

しかし、その彼女もまた、決して少なくない手傷を負っている。

「君達を……ギルドを襲ったのは、クオンかい？」

「いえ、違います」

その頃には、団員が治療薬の入ったケースを持って戻ってきた。

ひとまず、手当てが終わるのを待つ。

「しっかし、こちら派手にやられたなあ」

確かに、彼の負っている傷は喧嘩や小競り合いの域ではない。

派閥抗争に巻き込まれたか、戦争遊戯ウォーゲームにでも参加したような有様だった。

「すみません、ロキ、フィン団長。私がついていながら……」

「ええつて。今のオラリオでギルドにいる時に襲撃されるなんて誰も思わんわ」

ギルドの命令に素直に従わない——それについては僕らも心当たりがないわけではないが——派閥は珍しいとは言いが、武装して襲撃する派閥など存在しない。

それこそ、かつての闇派閥イヴェルスを除いては。

「質問の続きだけど——」

ハイ・ポーションを煽り、すっかり回復した彼女に問いかける。

「ギルドを襲ったのは『神罰同盟』という事でいいかい？」

「はい。【イレギュラー正体不明】の身柄引き渡しを訴え、ギルド職員が断ると——」

一斉に武器を抜いて迫り、止めようとした周囲の冒険者達と乱戦になったという。

それどころか——

「ギルド職員にも負傷者、か……」

神罰同盟はギルド職員にすら容赦なく斬りかかったという。

「はい。一緒にダンジョンに向かう予定だった治療師ヒーラーと他のメンバーは治療と警備のため、まだギルドに残っています。彼は伝令として逃がそうとしたのですが、外にも神罰同盟が展開していて……」

「そう簡単に見逃してはくれなかった、か」

とはいえ、彼女の判断に大きな問題はない。僕も現場にいれば——そして、彼女と同じL.V. だったなら——似たような指示を出していた。

「よく無事やったなあ、自分ら」

「は、はい」

しみじみとしたロキの言葉に、少し躊躇ってから彼女は言った。

「その、【イレギュラー正体不明】が参戦したので……」

「クオンが？ 確かかい？」

「私は今日初めて姿を見たので、断言はできませんが……。黒衣にクレイモア、それに竜の紋章が施された盾を持ち、火炎魔法を使っていました。それと、武器をどこかから取り出す『スキル』も」

と、なるとほぼ間違いない。

「ギルドの様子は？」

「ギルド周辺での戦闘はすでに終わっているはずですが。【正体不明】^{イレギュラー}が神罰同盟の指導者に……。その、矢を放ったので」

指導者の眉間を弓で射ぬき、さらに取り巻きを斬り殺したらしい。

さらに、指導者の装備から派閥を示すエンブレムを奪い——重傷のギルド職員達を魔法で癒してから——どこかへと姿を消したという。

「フィン、こらアカンで……」

「ああ。彼は本気だ」

彼女も念のため医務室に向かわせてから、唸った。

「このままだと神罰同盟に所属する神は皆殺しにされる」

四年前のように、じゃれあいで終わらせる気はない。

「もうすでに殺されとるかもな」

「あり得るだろうね」

「ひとり柱では終わらない。

現時点で神罰同盟に加盟しているのは一〇派閥。

神殺しはまだ続く。

「こうなると、あとはギルド次第か」

「そうやな。ギルドがはよ動けば、犠牲者は減らせるかもしれない」

「この戦慄を、一体ギルド職員の何人が共有してくれているだろうか。

そして、オラリオ全域では？」

「動くかな」

「流石に動くやろ。下手するとまた暗黒期に逆戻りやからな」

冒険者が失われれば失われるだけ、オラリオの戦力は低下し、基幹産業は滞る。

さらにギルドはその求心力を失墜させるだろう。となれば、オラリオの内政は大いに乱れる。

そんな隙を見せれば、外部勢力——例えばラクシア王国辺りはここぞとばかりに攻め入ってくるだろう。他に^{サシリオベガ}娯楽都市のような強大な財力を持つ国もオラリオでの影響力拡大を狙ってくるはずだ。

場合によっては、前回の内乱とはまた違う形の暗黒期が訪れかねない。

「分かつとるんやろな、ウラノス。もう火遊びや済まんぞ！」
バベルがある方角を睨み、ロキは叫んだ。

……

ロキの予想通り、ギルドはロイマンギルド長名義ですぐに声明を出した。

もちろん、内容は『神罰同盟』を非難するものであり、ギルドへの重大な反逆行為を糾弾し、即時解体および責任者の出頭を命じている。

一方の神罰同盟はギルドの対応を痛烈に批判。『大逆者』クオンを庇いたてるのであれば、もはやオラリオの都市運営を担う資格はないと叫び、オラリオ中の派閥へクオン討伐への協力を求めている。

「今のところ、神罰同盟が少し優位、といった感じかな」

賛同を集めているのは神罰同盟側だった。

「そうやな。まあ、まだお祭り気分いうこっちゃ」

クオンに対する漠然とした敵愾心と、ギルドに対する慢性的な不満。それを未だ状況がつかめていない神々がいつもの調子で煽っている——と、言ったところか。

つまるところ、賛同しているのではなく無責任に担いでいるというだけの話でしかない。

「いうても、そこまでボンクラな神はそうおらん。逆転するんは時間の問題や」

それに、そのうち嫌でも思い知る——と、ロキ。
「だろうね」

先ほど調査から戻ってきた団員の顔を思い出す。

『神が、違いました……』

戻ってくるなり、彼女は青ざめた顔でそう報告した。

今街頭で演説しているのは、今朝方まで神罰同盟の盟主——主神だった神ではないという。

このあまりに唐突な主神交代の理由ははつきりしている。

「少なくとも、また一柱^{ひとり}殺されたか」

「そうやな」

やはり小競り合いで終わらせる気はないらしい。

もはや全面戦争が開戦していると見るべきだ。

「一柱^{ひとり}どころの騒ぎではない」

そう言って執務室に入ってきたのはリヴェリアだった。

「最初に同盟の主神だった派閥は、団長以下幹部全員が殺されたようだ。それも、【ステイタス】が封じられてからな」

彼女の報告は、その確信を肯定するものだった。

「何だった?」

それはもう戦闘ではない。一方的な虐殺だったはずだ。

「一人も見逃さない言うことか?」

「……いや」

それはおそらく違う。

(あまりに迅速な「ガネーシャ・ファミリア」の動き。それと彼女達を襲った襲撃者)

今までになく素直にギルドに身を寄せていたクオン。

そして――

『あとは、最後の一線を越える理由があれば、それで充分なんでしょうね。彼にとって
は』

「神イシュタルが超えた一線。神罰同盟の本当の狙いがその『何か』だとするなら説明は
つく」

女神ヘファイストスの言葉。その全ての情報を繋ぎ合わせれば、一つの可能性が浮か
び上がる。

「その『何か』に手を出したからこそ神イシュタルは殺された。そして、神罰同盟の幹部
達もそれを知っていたからこそ殺された」

ピクンと、リヴェリアが眉を動かした。

それには気づかなかつた事にして、言葉を続ける。

「[ガネーシャ・ファミリア]や彼女達を襲撃した勢力が迅速な動きを見せたのはその『何か』を回収するためだったとしたら説明はつく」

だとするなら、クオンが素直にギルドに身を寄せた理由も分かる。

要するに彼は神ウラノスに後始末を押し付けに行ったのだ。

「イシユタルの『遺産』、か……。そらまあ、それやったらウラノスが何も言わん理由にもなるっちゃなるけど」

全てはオラリオの危機を回避するために。

それなら、あの二柱の神は助力を惜しみはしない。

「ああ。あるいは、そこそがクオンの力の正体かもしれない」

関係者を皆殺しにしてもクオンが知られたくないもの——そう考えれば、これもまた充分に候補に挙がるはずだ。

が。途端に、リヴェリアの顔に焦りの色が浮かんだ。

(シー……。これは——)

やはり、彼女はこの一件の裏側について何か知っている。

というより、アン・デイルから何かを聞かされていると見るべきか。

「と、思うんだけど。どうかな、リヴェリア？」

「……それは誤解だな。神イシユタルの『遺産』はクオンの力の正体とは関係ない」
ロキが同席しているからだろう。

リヴェリアはあつさり肩をすくめて見せた。

「リヴェリア、何か知つとるん？」

「アン・デイルがどうやってクオンを神イシユタルに曠けたかなら」

ロキ^神に嘘はつけない。沈黙を保つか、正直に答えるか。

選べるのはそのどちらかだけだ。

「詳しい話ができない。クオンに秘密にすると約束しているからな。それも、アン・デイルの前で」

それに反する不義理が、私達にとっての致命傷にならない保証はない——と、リヴェリア。

現状を鑑みれば、考えすぎだと笑う事はとてもできそうにない。

「だが、この状況では完全に黙っているのも危険だろう」

肩をすくめてから、彼女は続けた。

「神イシユタルは『生贄の儀式』を企んでいたという。アン・デイルの言葉が正しいなら、それが全ての元凶だ」

ロキに視線を向けると、彼女は小さく頷いた。

嘘ではない、という事だ。いや、この状況でリヴェリアが嘘を吐くはずがないが。

「なるほどね……」

それは、神へファイストスの言葉を完全に肯定するものだった。流石は神の慧眼と言
うべきか。

「何故神イシユタルがそのような真似をしたかは分からない。その儀式によって何が得られるかは聞いていないからな。あいつを嫉めるには、その事実だけあればいいらしい」

「そーなると、ホンマにファイたんの言う通りちゆう事やなー」

ロキが露骨に肩を落として見せる。

「けど、こんだけ派手にうちら^神を喧嘩売ってタダで済むと思つとるんか？ あれがやなくて、ウラノスがや」

「……まあ、確かにそれも懸念事項だけどね」

派閥を左右するのは究極的には主神の意向である。

これが完全なる神殺しだと知れ渡れば、少なくとも神々は黙っていないはずだ。

このままクオンを野放しにすれば、ギルドと各派閥が対立する原因にもなり得てくる。

「それだけの価値がある、という可能性もあるな」

「クオンにかい？」

「あるいは『闇の王』に。ダンジョンに蠢く異変を迎え討つために、神ウラノスが黙認しているとも考えられる。実際、デーモンや『アンデッド』が今後も姿を見せるとすれば、あいつの力はこの上なく有益なものとなるだろう」

「そろそろやけど……」

実際に追い回されたロキが、げんなりとした様子で唸る。

「ほとんど丸腰だったアイズ達はともかく、杖を装備した君までが手を焼いた存在か」

第一級冒険者が四人。そして、第二級冒険者が一人。

だが、第二級冒険者は火力に限って言えば、第一級冒険者にも匹敵する。

彼女達が総出で挑みなお苦戦するとなると――

「第二級冒険者だけなら十数人から数十人規模でかかる必要があるね」

つまり、階層主と同等の対応が求められる訳だ。

そんなものがフィリア祭では七体も同時に現れたという。

(あのクオンですら同時には相手にできないと言ったそうだからね)

それはそうだろう。階層主を同時に七体など、僕らでも派閥の総力を挙げなくてはならない。

単独限定なら、あの【猛者】ですらおそらく不可能だ。

「せやけど、それやったらまだ代替も可能や。……そう考える神はきつと多いで」

まあ、実際に丸投げされるんはうちらやけど——と、ロキが嫌そうに呻く。

それもオラリオ最大派閥としての宿命と言えばそれだけの話だが……実際にそれを対応する僕らにとつては、全く頭の痛い話でもある。

「神ウラノスの思惑はともかく」

軽く腕を組み、リヴェリアがロキに問いかける。

「神ディオニュソスは相当にギルドを疑っていると聞く。もし、かの神が神罰同盟への参加を決めた場合……いや、私達をそれに巻き込もうとした場合はどうするつもりだ？」

「そら断る」

ロキはきつぱりと言い切った。

「ウラノスが何や隠しとるんは確かや。けど、このアホどもに正義があるか、言われたらない」

「そうだね。せめてギルド職員に危害を加えたりしていなければ、まだ悩む余地もあつただらうけど」

勢い余つてつい——と、いう次元の話ではない。クオンの介入がなければ死者が出た可能性すらあるのだ。

その情報が広まれば、神罰同盟への風当たりは確実に変わる。

さらにギルドが……いや、神ウラノスがリヴェリアの言う『生贄の儀式』を公表した場合、神罰同盟を擁護する事すら憚られる状況になるだろう。

「今この時にクオンを討てば、僕らの名声も上がるだろうけど」

それは色々な意味で魅力的だが、

「沈むと分かっている泥船に乗り込む気はないよ。これでも団長だからね」

神罰同盟と組むという選択肢だけはあり得ない。

その決断を掲示する時は、思いの外早く訪れた。

……

「『オラリオの安寧を乱す大罪人クオンを今こそ誅すべし。そのために我ら【神罰同盟】は貴公らの参戦を期待する。オラリオ最大派閥の義務を全うされたし』、か」

三代目の指導神からそんな書簡を使者が届けに来たのは夕食間際の事だった。

「ま、話がまとまった後で良かったわ。パパッと返答しとき」

リヴェリアが留守にしているせいも、早くも晩酌を始めたロキがあっさりと言う。

「ああ。そうだね」

死刑判決を待つ囚人のような顔色をしたその使者を前にすれば、少しばかり罪悪感にも似た感情を覚えはしたが――

「僕ら『ロキ・ファミリア』は君達『神罰同盟』へ一切の援助をしない」

書簡にも記した文言を告げる。

「クオンの肩を持つわけじゃない。もし、ギルドからクオンの捕縛ないし討伐の要望があれば、総力を挙げてでも応じよう」

卒倒しそうな顔で反論しようとする使者より先に言葉が続ける。

彼らの書簡に書かれている通り、クオンがオラリオの安寧を乱すならば彼の捕縛ないし討伐はオラリオを二分する大派閥の責務となる。

そこに勝ち目の有無は問題ではない。

「だが、無抵抗のギルド職員を襲った君達にも、もはや大義はない。それだけの話だ」

これは後で知った事だが、この頃ちようど「フレイヤ・ファミリア」も同様の声明を出していたという。

5

オツタルとの会談や、地下水路の調査。

それに遠征の準備やフレイキ様への手紙など諸々重なったせいですつかり遅くなつたが――

『遠い昔、未だ世界が闇に閉ざされていた頃……』

アイズに教わった『火の時代』にまつわる英雄譚は、そんな言葉から始まっていた。
(大筋としては、あいつの話と変わらないな)

昼頃から何度も目を通した頁を繰りながら呟く。

その物語は二部構成……いや、おそらくは三部構成となってる。

神々による邪竜討伐と、その後の繁栄。それを先導した三人の王。

第一部は、彼らの成し遂げた煌びやかな繁栄を紡ぐ物語だ。

神王、炎の魔女、死の神。そして、聖竜。

そこには御名こそ記されていないが——

(太陽の光の王グヴェイン、イザリスの魔女、最初の死者ニト、白竜シースと置き換えられ
そうだな)

少なくとも、クオンの言っていた神々と数字の上では合致する。

数々の描写を照らし合わせても、その置き換えはそこまで不自然とは思えない。

(『火継ぎの王』か……)

そして、第二部。

神の与えた『聖火』の下で繁栄を迎えた人間達の——例えて言うなら『旧神時代』と
でも呼ぶべき時代の物語だ。

もちろん、実際にそんな時代があったかどうかすら定かではないが。

ともあれ、その物語は以下のようなものだった。

ある時、その『聖火』が奪われ、世界を再び闇が覆う。

そんな中、神託を受け『聖火』奪還に向かう英雄の物語。

それは、いわれなき罪によって牢獄に囚われていた彼に神託が下るところから始まる。

神の大鴉の導きによって牢獄から抜け出したその英雄の行く手を阻むのは、かつて世界を席卷し神々によって滅ぼされた邪竜の生き残りや、『聖火』が奪われた事で具現化した厄災の化身、神への畏敬を忘れ、邪法に走った王国が生み出した異形達。

そのどれか一つでも偉業と称えられる程の試練を乗り越えた英雄は、ついに神々の都へと迎え入れられ、神王の娘より直々に『聖火』の在処を伝えられる。

かつて神王の相談役でありながら、それを裏切った世界蛇の片割れ。

それに唆された『火の篡奪者』^{ダークレイス}。

彼らが潜む闇の奥底に至るには、英雄は聖竜の叡智、魔女の炎、死の神の加護が必要であると、神の娘は英雄に伝えたのだ。

魔女が住まうのは劫火の都。死の神が住まうのは冥府の底。

どちらも人の身ではたどり着くことは叶わない。故に英雄はまず聖竜の叡智を求めた。

迎えた聖竜は彼に一つの試練を課す。

自らの英知が眠る呪われた大書庫の解放だった。

(真理とは必ずしも光ならず。蒙を啓くとは狂を発する事でもある、か……)

竜の二相——そう記されたこの逸話は、個人的に興味深い。

(私がやろうとしている事は、まさにそういう事なのかもしれない)

クオンが神殺しを繰り返す中、書庫に引きこもって古い英雄譚を読み耽っているなど、狂を発していると言われても仕方がない。

とはいえ、別に本当に発狂しているわけではない。これはあの男の力の正体を知るためだった。

(おそらく、それは『火の時代』に触れる事と同義なのだろうな)

少なくとも、現時点での手掛かりはその言葉しかない。

まさに雲を掴むような話だが……この英雄譚の原形となった何かがあったと信じるしかない。

しかし、

(真理とは必ずしも光ならず、か)

例えクオンの力の正体突き止めたとして——その先にこの『神時代』を揺るがす可能性がある以上、それは光とは言えまい。

(ここは一つ、この英雄にあやかってみるとしようか)

思ったよりも感情移入している自分に苦笑してから、物語を読み進める。

月光に導かれるまま大書庫に至った英雄は、かつて叡智を求め、その『呪い』に敗れた者達、何よりそこに眠る叡智と狂気の間で翻弄されながらも、ついに魂の真理へと至る。

生死の境界を乗り越えたと書かれているが……。

(まあ、人には辿り着けない場所に行くための資格ということか)

あるいは神の域に達したという意味なのか。

ともあれ、英雄はその叡智を以って、劫火の都への道を踏破し、そしてまた冥府の底へと至る。

魔女と死の神が課した試練をも乗り越えた英雄は、ついに闇の奥底へと向かう。

墮ちた世界蛇の甘言にも惑わされず、その闇を踏破した英雄は、ついに『火の篡奪者』と対峙する。

相手は『聖火』を篡奪した存在。いわば神そのものと言って過言ではない。その戦いは熾烈を極め、三日三晩続いたとされている。

しかし、魔女の炎が『聖火』の力を英雄に与え、竜の叡智は闇を退ける。そして、死の神の加護が、ついに『火の篡奪者』に死を与えた。

見事『聖火』を奪還した英雄は神王にその功績を認められ、人の身でありながら神の一柱として迎え入れられる。さらに地上に領土を与えられ、王となった。

その国は、神の都の名を冠する事すら許されたという。

ついに王となった英雄は、『聖火』の守り手としての責務を負うと共に、名君として世界を光で満たしていく。人々はその功績を讃え、いつしか英雄は『火継ぎの王』と呼ばれるようになる。

火継ぎの王クロウ。

名も知れぬ英雄は神の大鴉に導かれた事から、いつしかそう呼ばれるようになった。

そして――

「ふむ……」

一通り読み終えてから、小さく吐息をつく。

「やはり系統としてはフィオナ神話に通じるものがありそうだが……」

小人族達バルウムに栄光と衰退をもたらした架空の女神。

数々の偉業をなした騎士団の擬神化であり、フィンが目指すもの。

人の身で神に至るといふのは、それに通じそうではある。

しかし、『古代』の歴史書や他の民話や伝説、英雄譚を読み解いても他にそれらしい逸

話はない。

いや、類似点がある、という程度ならいくつかそれらしいものもあるが……その程度なら他の英雄譚や伝説でもよくある話だ。

それこそ、フィアナ神話を例に挙げたのも『類似点がある』からである。

だからと言つて、その神話がこの物語から派生した、あるいは逆にその神話を原典としてゐるなどと断定できるはずもない。そのためには、あまりに情報が少なすぎた。

「フィオナがどーしたん？」

「ロキか……」

気配に気づかないとは、自分で思つていた以上に集中していたらしい。

「何かあつたのか？」

「いんや。ただ、姿が見えんから探しとっただけや」

リヴェリア、アレのお気に入りの一人やから心配やねん——と、ロキ。

「あいつに靡くと思われているなら心外だな」

「いや、『力づくで押し倒されたらどうするんですか?!』ってレフィーヤが」

「……………」

【おうじや猛者】と斬りあえる時点で、腕力勝負では勝ち目がないのは認めるしかないが。

しかし、いくらあいつでも、複数派閥を相手にしている状況で、そんな事をするために忍び込んでくるほど暇ではないだろう。

無節操と言う以前にいくら何でも脈絡がなさすぎる。

こと戦闘中に限って、あいつはそういう無駄な事をしない。

「まあ、真面目な話、ようやくまともに情報が集まってきたから伝えに来たんや。こつから先、まだ何が起こるか分からんしな」

「そうだな。聞かせてくれ」

「まあ、おもしろい話やないけどな」

ロキの話を聞く限り、クオンは命令系統の上から切り崩しているらしい。初日の時点で最初の盟主だった神と二代目、さらに三代目までがすでに殺されているという。

今頃は次の盟主の押し付け合いが起きているのではないかと、フィンは予想しているという。

それに関しては私も同感だ。

今頃は指揮系統が大いに混乱している事だろう。

(しかし……こういう時は、つくづく合理化の化身のような奴だな)

無駄な戦闘は避け、主神と幹部に狙っているらしい。

今のところ、その策は見事に成果を上げている。

神罰同盟の総数は三〇〇人ほどだというが……そのうち一体何人が戦力として機能した事やら。

「んで、ギルド襲撃がバレたせいで評判も一気に悪化してる」

「それについては自業自得だろう」

「そうやな。今も治療院に入院してる職員がおる。そうでなくても【ガネーシャ・ファミリア】の団員が重装備で警備してるんや。目撃者もぎょうさんおるし、そもそもバレて当然やな」

「ここんとこガネーシャの子らは大忙しやな——と、ロキは笑う。

「歓楽街の様子は？」

「そこがこの動乱の始まりの場所だ。

「いつまで続くかはともかく、すつかり【ガネーシャ・ファミリア】の『島』やな。営業はまだ再開されとらんけど、再編の方は始まつてる。このまま【ガネーシャ・ファミリア】が一枚噛むなら、前よりは風通しもようなるやろ。どうやって口説いたかは知らんけど、結構な数の戦闘娼婦バーベラがガネーシャんとこに改宗コンバージョンしたようやし」

まあ、それはそれで好ましい事だろう。

何しろ、あの区画が麻薬や人身売買と言った犯罪の温床になっているのは公然の秘密だった。

だが、神ガネーシャが関与するならそのような行為は数を減らしていくはずだ。

「まあ、そうは言っても一時的なもんやろ。そのうちガネーシャが支持するイシユタル

の後釜が引き継ぐはずや」

「確かに、神ガネーシャに歓楽街の運営ができるとは思えないな」

祭り好きで派手好きで、陽気で快活な善神を思い浮かべる。

どれほど控えめに言っても、淫都と揶揄される歓楽街の主は似合わない。その評価が不敬に当たるとはまったく思えない程に。

「けど、ガネーシャントコがそんだけ早く動いたんは結構物騒な裏がありそうやで」

「裏だと?」

「いや、裏言うんはちよい違うかも知れんけど。ほれ、襲撃を受けたらしいという話はしたやろ?」

「先日の朝の話だな?」

「そう、それや。その襲撃者がどうも闇派閥残党っぽい」

「確かなのか?」

それは最悪、この動乱に闇派閥残党まで介入してきかねない。

下手をすれば、本当に暗黒期に逆戻りだ。

「おそらくな。戦闘娼婦達があつさり改宗したんはそのせい、と考えるなら信憑性も出てくるやろ?」

「ああ。いくら豪放なアマゾネス達でも、『恩恵』もなしに闇派閥と対峙したくはないだ

ろうからな」

眉間を指先で掻きながら呻く。

今さらながら、「ガネーシャ・ファミリア」内部の風紀が気になってきた。

別に私達のように男女比が偏っているとは聞いていない。

若い男が相応にいる場所に、歓楽街でならしたアマゾネスが一気に流入したとなると、派閥内の風紀維持には莫大な労力が必要になるのではないだろうか。

【象神の杖】が心労で倒れなければいいが……

彼女には微妙に共感を感じるといふか何というか……。

正直、派閥内での立ち位置に通じ合うものが多い気がしてならない。

(まあ、クオンから伝え聞く話だけが……)

他派閥の内情など、そうそう聞けるものではないが。

(団長と副団長と言う意味でも多少似通ってはいるか)

如何に他派閥と言えど、流石にそれくらいの事は知っている。おそらく、オラリオの大多数が。

だが、今言いたいのはそういう肩書ではなく、もっと……こう、心理的な面で。

いや、それはともかく。

「闇派閥も『遺産』を狙っているか？」

「その可能性もある。けど、やっぱちよい動きが早すぎるなあ。いや、全体的にそうなんやけど」

となると、

「神イシユタルは、あらかじめ闇派閥残党と繋がりがあつたと?」

そう考えれば、あまりに迅速すぎた動きにも納得がいく。

要は口封じだ。戦闘娼婦達バーベラから自分達の存在が露見しないようにするための。

「おそらくそつちやろな。……まあ、イシユタルはかなりフレイヤを目の敵にしとつたし、その辺が関係しとるんかもしれん」

「五年前の延長戦という事か」

あの時、神イシユタルは自らの派閥に「ステイタス」偽装の嫌疑をかけてきた——もちろん、以前から対立関係にあつた——派閥の全てを壊滅させている。

それこそ、主神を天界に送還するほど徹底的に。

「そういう事や。あの腐れおっぱいんとこが大派閥やなかつたら、五年前に一掃された連中に含まれとつたやろ」

それができなかったのは、そもそも神フレイヤが神イシユタルを齒牙にかけていなかったからだ。

もちろん、「イシユタル・ファミリア」もオラリオ有数の大派閥だが、「フレイヤ・ファ

ミリア」はさらに格が違う。特に戦力的な視点で見ればその差は圧倒的だ。

何しろオラリオ唯一のLv. 7である「わうじや猛者」を筆頭に、希少なLv. 6やLv. 5が多く所属しているのだ。こう言っては何だが、私達とて確実に勝てるなどとはとても言えない。

一方で「イシユタル・ファミリア」は最大でもLv. 5。まともに戦ってはまず勝ち目がない。

「神イシユタルの『遺産』はそれだけの差を埋められる程のもの、という事か？」

つまり、『殺生石』とやらの性能だが。

(……ああ、そちらについても調べておかなくてはならないか)

しかし、そんな書籍はあったらどうか。

この書庫にある魔法技術関連の本は一通り目を通してはいるが、心当たりがない。

「どーやろな。うちはいくつか用意した策の一つ、いう程度やと思うけど」

ちよい希望の観測いうやつかもしれない——と、ロキは肩をすくめて見せた。

確かに。『殺生石』一つでその差が覆せるなら、その価値は計り知れない。

「少なくとも神罰同盟はそう考えているという事か……」

あるいは誤解している、と言うべきかもしれないが。

「あり得るやろな。だとしたら、こんなに狂気じみた真似する人も納得や。もしリヴェ

リアの予想通りなら、うちかて飛び入り参加したくなる」

「手に入れる前に殺されそうだがな」

「分かっとなるって。冗談や。……少なくとも今んところは」

今後、クオンと敵対するなら、そして私の予想通りの力があるなら、その時は冗談ではなくなるという事か。

「正気か？」

「別に自分らの命をないがしろにする気はない。けど、あれがもし本当に手当たり次第に神殺しを始めたなら、オラリオどころか下界そのものの危機や。そうなったら、それも必要な犠牲、言う話になるかも知れん」

まあ、そんな事せんで済む事を本気で祈っとなるけど——と、ロキ。

神が一体何に祈るのか——と、そんな野暮なことはとても言えなかった。

「しかし、もし神イシユタルが閻派閥イヅイルスと繋がりがあつたとするなら、ますますクオンの正当性は高まるな」

「そーやな。閻派閥相手に情け無用、いう空気はまだ残っとなるやろし」

そして、神罰同盟はギルド襲撃という形でそれに火をつけている。

ロキの話が確かなら、ギルドの上層部がクオンに肩入れする可能性は大きく高まったと言えよう。

「あのクソジジイもその辺を知つとるから、沈黙を保つとるんやろ。ガネーシャンとこの子らが公表できる証拠を確保したらそれを理由に一気に幕引きを凶る。そんなところか」

「まあ、この際何事もなく、予定通りに遠征に向かえるならそれでいい」

赤髪の女——怪人達も、決して放置できない問題だ。

まして、これに関しては他人事ではない。

そちらに集中できるなら、この際良しとしておこう。

と、そこで——

(なるほど、闇派閥の効果か)

今も続いているであろう神殺しに対する忌避感が一気に薄まっている事に気づいた。

だが、それも仕方がない。どのような神意があつたとして、それでもあの時代を肯定する事にはできない。

それはおそらく、オラリオに住まう多くの者達も同様だろう。

……

闇派閥襲撃から一夜が明けて。

「派手にやっつてんなあ、おい」

仮初の支部となつた『女主の神娼殿』で、同じく一時的な同僚となつたサミラがぼや

いた。

「しかもこいつら全員イシユタル様の取り巻きじゃねえか。オレが言うのもなんだけど、正義つて柄じゃねえなあ」

朝食をとりながら、手にしたピラ——『神罰同盟』とやらがまき散らしたそれを覗き込み、彼女はため息を吐く。

「知っているのか？」

「そりゃ何人かは。つっても、あんまし表沙汰にできねえ連中だし、オレも全員は知らねえよ」

確かに——と、思わず納得していた。

麻薬をはじめとした違法物品の売買や密輸入。さらに人身売買。

分かつてはいた事だが、この歓楽街は犯罪行為の温床でもある。

たった一日歓楽街を調査しただけで、至る所からそれらの証拠が次々に見つかった。

その『神罰同盟』に属する派閥は辺りに関与していた連中なのだろう。

「まあ、イシユタル様が主になった時点でそこまで念入りに隠す必要がなくなったからな——」

加えて五年前からはギルドの査察も形式的なものになり果てていた。

その影響で証拠隠滅が疎かになっていたらしい。

もちろん、この区画の主だった戦闘娼婦達の協力がなければここまで素早く集める事はできなかつただろうが。

(その分、サミラ達には相応の恩赦が必要になるが……)

それもまた仕方がない事か。

サミラ達の協力により誘拐されて、あるいは騙されて身売りされてきた者達がいる事も分かつた。

彼女達の心の傷は深いだろう。

……だが、得体の知れない娼婦宿に売り払われるよりはいくらか幸運だったはずだ。神イシユタルは彼女達にも相応の待遇を保証し、また給与も公平に与えられていた。歓楽街の外にある怪しげな娼婦宿ではとてもこうはいかない。

(それがどの程度の慰めになるかは定かではないがな)

同じ女性として、その心情は想像する事も躊躇われるが……ともかく、こうして証拠がある以上はギルドからの犯罪被害者支援が受けられる。

本人達が望むなら、帰郷することもできる。

もちろん、名前を変えてオラリオで生活する事も可能だろう。

他にもオラリオと交易を結び、ギルド支店がある街への移住という選択肢もある。

いずれにせよ、彼女達の新たな人生に幸多からん事を心から祈ろう。

「しっかし、イシユタル様の『遺産』か。大事になつてるな」
それについても、ある程度はサミラから聞き出した。

(生贄の儀式か)

それが神イシユタルとクオンの敵対を決定づけた直接的な原因だという。

私達の本拠地にサミラ達を避難させた際にガネーシャに問いかけたが、どうやら事実らしい。そちらに関する資料はギルド——いや、創設神ウラノスの元に直接届けられていると見ていいだろう。

そのせいで、私もその全容は把握できていないが——

「つーか、主神も含めて幹部連中皆殺しつてのはマジなのか？」

「そのようだな」

あの男ならやつてのけるだろう。

驚きを感じないのは、私自身も閻霊と対峙したからか。

(ああいう脅威が当たり前前に存在していた場所を旅してきたと聞くが)

ならば、最大でもLv. 3が精々の中堅派閥同盟など、臆するに値しない。

……仮に申請していない者が多少いたとしても、それでどうなるものでもない。

「オレ、一応幹部の一人だったんだけどな。つーか、結局オレらには死人が出てねえけど

……」

「アイシヤに感謝しておけ」

サミラの言葉に肩をすくめて見せる。

「彼女が庇っていたお前達を殺す気にはならなかったのだろう」

とはいえ。正直、私も少し意外だった。

四年前のあいつなら、一般の団員すら皆殺しにしていたとしても驚かない。

「まあ、そのアイシヤからも口止めされてっけどな」

そのおかげで、私も情報を得るのにずいぶんと苦労した。

まあ、理由を聞けば納得だが。

「これから先も、素直に従っておく事だな」

「そうするぜ」

コーンスープを一気に飲み干すと、サミラは同僚数人を連れて見回りに出ていった。

あれから閩派閥イウイリスの襲撃はない。

私達が大隊を投入しているというのもあるだろうが……土地勘のある戦闘娼婦バーベラの多くが戦線に復帰しているというのも理由としては決して小さくはない。

ひとまず一年限りの仮改宗コンバージョン。

その条件のもと、サミラをはじめとした複数人の戦闘娼婦バーベラが「ガネーシヤ・ファミリア」に入団している。閩派閥イウイリスから襲撃を受けた以上、彼女達にとってもやむを得ない選

扱だつただろう。

足を見たようで少々座りが悪いが……しかし、私達としても背を腹には代えられない。

何しろ、非戦闘員の娼婦達だけでも相当数に上る。闇派閥の狙いが「イシュタル・ファミリア」関係者の口封じだとするなら、彼女達も保護しなくてはならない。

だが、流石の私達も、そこまでの人員を用意するのは簡単ではない。元よりこの区画の運営に携わっていたサミラ達の協力が取り付けられるなら、それに越した事はなかった。

イヴイルス
（闇派閥か……）

だが、話はそれだけでは取まらないかもしれない。

ポーチから、古びた首飾りペンダントを取り出す。

神イシュタルの神室に無造作に放置されていたそれは、他の装身具アクセサリと異なり、非常に質素なものだった。

だからこそ目に留まったのだが――

（この紋章は……）

施されたその紋章には見覚えがあった。

だからこそ、これを神イシュタルが持っていたというのはどうにも解せない。

(最悪は「九魔姫」^{ナイン・ヘル}の知恵を借りる事にもなるか)

食後の紅茶を飲み干してから、立ち上がる。

「イルタ。私はしばらく留守にする。その間の指揮を頼む」

「それは構わぬが……。神罰同盟絡みか？」

「それもある」

歓楽街と万神殿^{バンテオン}の警備に多くの団員が従事している今、さらに三〇〇人規模の派閥連合まで相手にするととなるとさすがに少々骨だ。

場合によっては大規模な人員配置の見直しも必要となるかも知れない。

(もつとも、もはや戦力も激減しているだろうがな……)

主神を失った時点で、その派閥は終わっている。

幹部まで皆殺しにしていると言うが……。もし、主神を失った後まで生き残った幹部がいたとするなら、彼らが感じたであろう絶望は想像に余りある。

そこだけを見れば完全なる虐殺行為だが――

(今のところ、市民への被害は確認されていない)

それこそ、初日のギルド職員達以外は。

主な戦場となっている第四、第五、第七、第八地区だが、そこですら少なくない数の市民が抗争が起こっている事を知らなかったらしい。

(あいつとは真逆だな)

盟友の姿を思い出し、小さく嘆息する。

容赦ない襲撃なのはどちらも同じだが、周囲への被害に大きな差がある。

(暗殺者の真似事までこなすとはな)

神出鬼没なのはいつもの事だが、今回はそれが特に顕著だ。

忽然と現れ、犠牲者を皆殺しにして消えていく——まるで、恐怖劇の花形である怪人か怪物の如き立ち回りをしているらしい。

(不死身の怪人と言う意味なら、あながち間違つてもいけないか)

あるいは『古代』において神域を冒した者を罰すると恐れられた伝説の怪物神獣だろうか。

もつとも、この怪物は神にこそ容赦しないが。

「とはいえ、神罰同盟への加担はしないとガネーシャは通達している。あとはギルドの采配次第だ」

神ウラノスにとつてもこの騒ぎは想定外だっただろうが……それでも、ギルドに討伐指令を出させる事はしないはずだ。

オラリオには、あるいは黒竜にも勝る脅威がすぐそこまで迫ってきている。

いずれ起こるその戦いにおいて、クオンは欠かせないのだから。

(それに、ギルド長にもそれだけの度胸はないだろうからな)

あの老エルフにクオン討伐の命を出すだけの度胸があるとは思えない。まして、職員達が救われていると言う事実もある。

ただの派閥抗争という事で幕引きをしたい——と言うのが本音だろう。

「それとは別に気になる事が出来た。その調査をしたい」

「それなら、誰か団員に——」

「いや、少し扱いの難しい問題だ。あまり口外したくない」

「……イッイッルス 閥派閥閥連ではなく？」

「ああ。ある意味、そちらより厄介かもしれない」

そう。下手に扱おうと国際問題——あるいは種族間紛争の引き金にもなりかねなかつた。

第三節 過去からの侵略者

1

書庫でロキとのやり取りを終えてから。

「神グヴェイン？ 聞き覚えがないねえ」

馴染みの魔導師——レノアの店に顔を出して問いかけるが、結果は芳しくなかった。

まあ、そこまで期待していたわけでもないが……それでも、落胆を感じずにはいられない。

「また何かおかしなことに首を突っ込んでるのかい？」

「かもしれない」

「いひひ、物好きだねえ……」

怪しげな薬をかき混ぜながらレノアが笑う。

「今話題の『イレギュラー正体不明』かい？」

「さてな。どこまで関係がある事やら」

どうにも前に進んでいる気がしない。

暗中模索もここまでくるとただの遭難だ。

「『古代』の歴史書か遺物を知らないか？」

「エルフの王女様の目に適うような歴史書なんて知らないねえ。うちは書店じゃないのさあ」

それはそうだが。

こうなると本当に城じつかの書庫が恋しくなってくる。

あそこなら何か一冊くらいは役立ちそうな本があるかもしれない。

「ああ、でも」

嘆息していると、不意にレノアが言った。

「こんなのはあるよ」

「これは？」

円形をしたそれは、見たところ護符の一種らしい。しかも、随分と古い。

そして、見覚えのない意匠だった。

「オラリオ郊外から出土した代物さあ。『デメテル・ファミア』の連中が開墾の時に見

つけたらしくてねえ。魔道具マジックアイテムの一種のようだってうちに持ってきたのさ」

ひよつとしたら『古代』の遺物かもねえ——と、レノア。

（神聖文字ヒエログリフ……？）

しかも、噂に聞く古字らしきものが刻まれている。

そのうえ掠れていてほとんど解読できないが……

(ロヴィット? いや、ロフィードか?)

それとも、ロイドだろうか。

はつきり解読できないものの、大体そのような文言が刻まれている。

人名か。それとも神名か。いずれにせよ高貴な身分だったのは間違いない。

断片的に読み解ける範囲から察するに、刻まれているのはこの何者かを讃える句らしい。

「効果は?」

解読は諦め、レノアに訊ねる。

マジックアイテム
魔道具だとするなら、何かしらの効果があるはずだ。

「さあね。私が見たところ、それは使い捨てだ。一個しかないのに確かめられるものかい」

それはまったくその通りだが。

「いくらだ?」

再び嘆息してから、言った。

効果を確かめるにしても、神聖文字ヒエログリフを読み解くにしても、ここでは限界がある。

いや、これが本当に古字なら、それこそロキの協力が必要だろう。

いずれにしても――

「いひひ。まいどあり」

今はレノアが提示した金額が適正なのかどうかすら判断できなかった。

……

（やれやれ。すつかり日が暮れてしまった）

オラリオ外から訪れた観光客や旅人達が集まる第三地区と、第五地区にある交易所。それぞれ数時間ほどかけて調査したものの、これと言った手掛かりは得られなかった。

（やはり一人では無理か）

空振りだったのは念のため素性を隠して調査した影響――と、言うのも考えられるが。

とはいえ、あまり派手に動き回れない。

事は非常に繊細な問題でもある。荒立てては思わぬ波紋を広げかねない。

（彼女の手助けを得られれば、あるいは――）

とも思うが。

しかし、そうすると今度は他派閥間のやり取りという名の厄介事をこなす必要が出てくる。

まして相手はあの——

「こんばんは。素敵な夜ね」

そこで、玲瓏な——だが、不思議と怖気を感じさせる女の声が出た。暗い路地の向こう側。幾分か欠けた月を背に、声の主は立っている。

(エルフか……)

ここは第五地区。いわば私達「ガネーシャ・ファミリア」のお膝元である。

オラリオの中でも有数の治安の良さだと自負しているが、それでも夜道——しかも、人目のない路地裏——に女性の一人歩きというのは少々不用心だった。

特に薄緑色の髪に、碧色の瞳。エルフらしく顔立ちは秀麗そのものといった彼女なら。

もつとも——

(同業者か)

私と同じなら、話は別だ。

何しろ、その女は腰には細身の剣を下げ、左腕にはバックラーを装備しているのだ。

一方で、身にまとっているのはゆつたりとした白い衣装だった。

薬師が着込む白衣のようだが……本人の顔立ちと相まって白いドレスのようにも見える。

しかし……、

バトルクロス
(戦闘衣の類だろうな)

よく見れば、然るべき場所には充分な動きやすさを保つ細工がなされている。

いや、おそらく防御も考えられているだろう。それこそプレート一枚や二枚、仕込まれているかもしれない。

L.V. と経験次第だが、無所属のゴロツキならず相手にもならないだろう。

……入団先を探している途中の冒険者見習いという可能性も皆無ではないが。

(いや、それはないか)

ただ立っているだけだというのに隙がない。

相応の経験を積んでいるのは明らかだ。

となると――

(油断はしない方がいいな)

闇討ちの類はよくある話だ。大派閥……名の知れた冒険者の宿命とすら言えた。

そこに加えて私達は治安維持を担う派閥だ。ガラの悪い連中に限って私達を目の敵にしている。

名うての暗殺者が派遣されてくる事も決して珍しくはなかった。

「ああ、そうだな」

念のため重心を整えながら応じる。

その女は、まるで血でも啜ったかのように赤い唇に小さな笑みを浮かべた。

並の人間では見えないだろう。だが、『神の恩恵』^{フルナ}によって強化された感覚なら、これだけ明るければまず問題ない。

「ええ。赤く染めたくなるような綺麗な月ね」

ただし、その一撃が見えたかと言われれば、返事に困るところだった。

迷いなく心臓を狙った一撃。

つい先日、似たような攻撃を受けていなければ完全な防御とはいかなかっただろう。

「くッ!?!」

速い。そして、文句なく鋭い一撃だった。

先日と違うのは使い手の性格だけだ。

(あの闇霊だったらまた貫かれているところだな)

感触からして、威力にそこまでの差はない。

あの闇霊の様に初撃から必殺を狙ってきたなら、この予備の拳^{メタル・フェイス}装まで壊されていたところだ。

いや、それとも単に武器の差だろうか。

「ふッ!」

しかし、その幸運——あるいは相手の慢心——に感謝している暇はない。護身用のナイフを抜き放ち、間合いを確保する。

とにかく数十秒は時間を稼がなくては。

連絡用の閃光弾をその女に向けて放つ。

「いっつー」

エストック

その女は刺剣で反射的に両断して——その瞬間、膨大な光量が路地を蹂躪した。閃光弾は光を放つ際に同時に熱を伴う。直撃したならただでは済まない。

とはいえ、

(あの程度ではどうにもならないだろうな)

L v. 6なら致命傷どころか、深手にもならない。

精々火傷を負うかどうか。

(だが、時間は稼いだ)

柄にある留め具を外し、横に振るう。

と、柄が伸びて槍となった。伸縮性を持たせた護身の代物だった。

長さは二Mほど。穂先の鋭さは愛用の槍にも負けない。

欠点としては、伸縮機構を組み込んだ分だけ脆い事か。『下層』や『深層』に巣食う怪物どもを相手にするには、少しばかり心もとない。

だが、街中でならこれで充分だった。

それこそ大派閥の主力陣とでも出くわさない限りは何の問題もない。それどころか、大体の相手は素手でも鎮圧できる。

——少なくとも、今までは。

「やってくれるわね!」

槍を構えると同時、エストックが振るわれた。

重量のある武器ではないが、それでも接続部分が小さく軋みをあげる。

(あの閻霊並みだと?)

伝わってくる力からして、この女はおそらくLv. 6。あるいはLv. 6相当なのか。またしても私より格上だが——

「一体何者だ?」

閻霊ではない。しかし、見覚えがなかった。

Lv. 6などオラリオにもごく一握り——いや、一摘みしかないというのに、だ。もちろん、その全員と面識があるとは言わないが……。

「さあ、何者かしら?」

その女には一切心当たりがない。所属する【ファミアリア】すらも見当がつかなかった。と、なるとやはりクオン側の存在なのか。

(まったく、次から次へと！)

これほどの強敵が姿を見せるとは、L.V. 5の座はずいぶんと安くなつたものだ。

(今さらか)

クオンの台頭と共に、オラリオの歴史は動いた。

先日も思ひ知つたはずだ。もはやL.V. 差が絶対などとは言つてられないのだと。

「おおおおおッ！」

刺剣と槍。互いの命を狙い、切つ先が交差する。

間合いの優位で言えば私が。

身体能力で言えば敵が一段上となる。

だが——

(甘いな！)

技と駆け引きなら、先日の闇霊の方が——そして、私の方が上だ。

あえて懐に踏み込ませ、刺突を誘う。

「はああッ！」

肋骨の隙間から内臓を狙うその切つ先が届くより僅かに早く、その刀身に左肘と左膝を同時に——打点を互いに少しだけずらして——叩き付けた

「あッッ！」

刀身がへし折れ、虚空を舞った。

流石に安物ではないが、そこまでの業物でもない。精々が第三等級武装。ならば、Lv. 5の力なら折れるという予測はこうして正鵠を射ていた。

「もらったッ!」

会心の踏み込みと共に槍を突き出す。

闇霊の体すら貫いた一撃だ。直撃さえすれば――

「ぎ・ん・ね・ん♡」

「何ッ!?!」

まるで右腕にも盾を装備しているかのように、硬質な何かに槍が逸らされる。

同時、何か仕掛けが動くような小さな音が確かにした。

「くっ……!」

避ける間もなくその右手に引つ搔かれる。

生半可なモンスターの爪なら容易く弾くはずの戦闘衣バトルクロウが容易く斬り裂かれた。焼けるような痛みに毒づく暇もなく、その女を蹴り飛ばす。

「それは『銀の腕』アガートラムか……?」

感触が浅い。自分で後ろに飛ばれたか。

「フフッ。そうよ」

破れた白衣の袖を引き千切り、手袋を脱ぎ捨てながら女が笑う。

剣と見紛う程滑らかな光沢を放ち、関節部分は寶石が埋め込まれている銀の義手。

主にはダンジョンで四肢を失った冒険者に提供される代物だが――

「私が作ったの。なかなか便利よ」

指先に獣の爪のようなナイフが仕込まれているなどと言う話は聞いた事がない。

「お前、『ディアンケヒト・ファミリア』の団員なのか？」

オラリオ広しと言えど、失われた身体を補うほどの叡智を有するのは医療系最大派閥の『ディアンケヒト・ファミリア』くらいなものだ。

「馬鹿にしないで欲しいわね」

その言葉には、明らかな侮蔑が宿っていた。

だが、気にすべき事はそこではない。

「あなた達神の奴隷が作り出せるのなら、私達が作れないはずないでしょう？」

「お前、まさか……」

迂闊だった。まさかこの程度の探りで動き始めるとは。

いや、当然か。閻派閥イツイルスですら口封じに動いているのだ。

彼女達が動いていたとしても不思議ではない。

オラリオには居ない。そう思っていた私の失策だ。

首飾りがあつたなら、持ち主もオラリオにいると考えるべきだった。

だが、問答や後悔などしている暇はない。

これは――

（クオンと同じ詠唱か……ッ！）

銀腕に組み込まれた宝玉が輝く。

どうやら『杖』としての属性を帯びているらしい。

「チッ！」

頭上に放たれた青白い光球から、閃光が降り注ぐ。

幸い、狙いはそこまで正確ではない。勘を頼りにそれを掻い潜る。

それでも数発掠めたが、ダメージはさほどではない。精々皮膚をいくらか削られただけだ。

「――」

さらに詠唱が続き、女の右手に見事な拵えの刺剣――いや、直剣だろうか――が……その幻影が浮かび上がる。

「それっ！」

いや、幻影でない。少なくとも、実際に切れ味を持っている。

一方で重さはないのかまるで小枝でも振り回すような気やすさで刃が虚空を斬り裂いていく。

「なめるなッ！」

だが、動き自体は決して洗練されていない。

掻い潜る隙は微かだが確かにある。

体中を浅く斬り裂かれながらも、感覚を研ぎ澄まし、槍を操る速度を上げていく。

格上殺しなら既に経験した。私の限界はまだここではない。

今の『器』でも極限にまで使いこなせば、決して届かない敵ではない——

「ッ!？」

苛烈を極めていく攻防の中で、唐突に膝から力が抜けた。

いや、それどころか体中の傷の痛みすら感じない。

これは——

「お薬が効いてきたみたいね」

麻痺毒。おそらく、あの爪に仕込まれていたのだろう。

「それだけ派手に動けば当然でしょう?」

いかにLv. 5の体とは言え、毒を全く受け付けない訳ではない。

あくまでも耐性であって、完全なる無効化ではないのだから。

体内で燻っている最中に、限界に迫る動きをすれば一気に回ってもおかしくはなかった。

……もちろん、それもこの毒が相応に強力だという事実があつてこそだが。「大丈夫よ。死にはしないから」

その言葉と共に、強烈な蹴りが鳩尾を抉った。

いや、直撃ではない。とつさにずらしはしたが、そのつま先は確実に内臓に届いている。

人形のように吹き飛び、近くの木箱に激突する。

毒のせいで痛みはほとんどない。ただ、いくら吸つても空気が足りない。

(読み違えた……！)

格上殺しをするには、よほどの幸運を味方にするか、相手の隙を部分を突くしかない。格上の隙とは、例えば慢心であり、技術の未熟である。

もちろん、この女が今まで見せてきたそれらが全て演技だったとは思わない。

だが、自らの急所を餌とし死地へと引きずり込む狡猾さと大胆さ。この女が持つ最も恐ろしい手札をついに見抜けないまま、偽りの活路に飛び込んでしまった。

優つていると考えた『駆け引き』で負けたという事だ。

「それにしてもL.V. 5のはずなのにずいぶんやるわね」

槍が掠めていた頬を撫でながら、女が笑う。

「神の血に溺れるだけ、という訳でもないのかしら？」

銀腕——その獣の爪が首筋から臍あたりまで戦闘衣バトルクロスを引き裂いた。

体に傷があるかは分からない。もはやあらゆる感覚が曖昧だ。

「綺麗な体。それによく鍛えているみたいね」

男色ならぬ女色——と、いう訳ではない。その視線に好色なものは読み取れなかった。

むしろ、品評だ。あるいは、狂気に侵された薬師が、実験動物に向ける無機質な視線だろうか。

「決めたわ。あなたを母体に使ってあげる」

光栄に思いなさい——と、その女が笑う。

神の奴隷。母体。女が口にした重要な言葉はその二つ。

「やはり、お前は……」

そして、彼女はエルフだ。

純血かどうかはともかく、それは間違いない。

「何故、ハハに……」

「何故？ おかしなことを訊くのね」

女が嗤う。

「ここは元々私達の街よ。神の血に酔い、裏切つたあなた達に篡奪されたこの街を奪還するのは、当然の権利だわ」

『我らが地を取り戻せ』

千年前、反逆の英雄達が遺した呪詛が脳裏に甞する。

「呪われた神の奴隷。あなたもその礎になりなさい」

ああ、その謳い文句も知っている。

「お前は、女だろう……？」

「あら。胎に子種を注ぐのなんて、漏斗一つあれば充分でしょう？ それとも、その前の運動がお好きなのかしら？ それなら、そうね。一度くらいは好きな胤たねを選ばせてあげな」

まるで家畜そのものの扱いに嫌悪感がこみ上げるが、体自体の感覚は未だ戻らない。もはや身動きすら取れない。辛うじて呼吸ができていただけだ。

言葉を発する事すら辛い。

「さあ、そろそろ眠りなさい。あまり騒ぐと手足を落とすしちゃうわよ？」

別に母体に必ずしも必要ってわけじゃないし——と、その女はあっさりと言った。

まったく。生粋の闇派閥イヴェイルスと並ぶ……あるいはそれすら上回る狂人だ。

「ああ、それでいいかしら。このまま運ぶの面倒だし」

冗談ではない。どこの誰とも分からない子を宿すのも手足を落とされるのもご免だ。呼吸を練り、体に力を込める。まずは指が動いた。

ならば、次は立ち上がらなくては。

「やれやれ。物騒な話をしているな」

絶望的な悪あがきをする最中、玲瓏な声を聞いた。

……

レノアの店を後にしてから。

(空振りか)

その足で交易所に向かい、目についた骨董屋や古美術商を一通り巡ってはみたが、結果は芳しくなかった。

いや、ほぼ徒労と違っていいだろう。

この区画にある店でダメなら、他の区画の店に向かっても成果は得られまい。

(あの類の店は、元より素人向きではないがな)

骨董品や古美術品は、買い手にも相応の知識が求められる。

例えば薬舗で五〇〇ヴァリスのポーションを一〇〇〇ヴァリスで売っていたなら暴利どころか詐欺として訴えられるだろう。

だが、骨董品、古美術品ではその程度は日常茶飯事だ。

倍どころか十倍以上の高値で売り付けられる事もある。最近はいくらかマシになったが、ロキが散々そういう手合いにしてやられてきた。

何故神が騙されるのか？——と、長年疑問だったが、最近そのカラクリを知った。知つてしまえば、手品の種は実に単純なものだった。

無知……いや、素直で弁が立つ店番を用意して、その『謂れ』を念入りに吹き込んでおけばいい。

少なくともその店番にとってはそれが真実なのだから、ロキ神も嘘とは見抜けない。

店番が店長に疑いを抱いていなければいけないだけ、露見しづらい。

そして、仮に露見したとしても——

(鑑定に誤りがありました。ただそれだけの話だ)

まさに魔法の言葉だった。

何しろ、いかに目の肥えた真つ当な鑑定士でも、そう言った誤りを犯す事はままあるのだ。

加えて言えば、そういう事もある——という暗黙の了解のもとで売買は行われている。

(ある意味、賭博に近いのかもしれない)

鑑定士の失敗は、何も高値を付ける事ばかりではない。

あまりに安く売ってしまう事もある。

いつだったかも、『古代』の有名な画家が描いた絵が、古物市で捨て値で売られていた——と、いった騒ぎがあった。

最終的には数百億ヴァリスもの値で買い取られ、今はオラリオ美術館に展示されている。

ロキに連れられて、人ごみの中を見に行ったのでよく覚えていた。

確に見事な絵だったが——

(私も教養としていくらか知識は持っているが)

その辺りについても、城でいくらか仕込まれている。

だが、少なくとも専門家ほどの目や知識は持っていない。

だから、まあ——おそらく、私とその古物市で見かけたとしても気にはなかつただろう。

そういう領域での商売だ。ドロップアイテムや迷宮資源の売買交渉とはまた勝手が違う。

飛び込みで成果を上げようとした私が、少しばかり浅はかだったのかもしれない。

(面白い話なら、それなりに聞けたが……)

いずれ——そう、レフィーヤが育った暁には、自分の目で確かめに行きたいものだ。そう思う話はいくらか聞いたが、どれも今回の本題からは外れている。

(戻るか)

すでに夕食の時間は過ぎている。

必要ない場合は事前に連絡を入れるように——と、普段からアイズ達に言っている手前、急いで戻らなくては。

(しかし、面倒なものだ)

本拠地のある第一区画ホームに戻るには中央広場セントラルバートクを通過するのが一番近い。近いが、そこはバベルが聳え立つ区画である。

それはつまり、オラリオ中の冒険者が集う場所を意味する。

当然ながら、今は神罰同盟が加盟者を求めて網を張っていた。

フィンが加盟を断ったが……それでも、もし私の正体が露見したなら、確実に面倒な事になる。

そのため、いつもの外套ではなく、もっと大きくフードもついたものを羽織ってきていた。

「うん……？」

念のため大通りを避けて歩いていると、不意に魔力の気配を感じた。

耳を澄ませば、戦闘音らしきものも聞こえる。

(クオンか?)

今のオラリオなら、その可能性が一番高い。

少し迷ってから、気配を消して音のする場所へと向かう。

私は『殺生石』についてすでに知っている。秘密にするという約束をあいづが信じているなら、殺されはしない。信じていないなら、あとは時間の問題だ。

ここで殺されるか、別の場所で殺されるの違いでしかない。ならば、躊躇う事はなかった。

(少しでも情報を得ておくべきだ)

と、それなりに悲壮な覚悟を決めていたのだが。

「あら。胎はらに子種を注ぐのなんて、漏斗一つあれば充分でしょう? それとも、その前の運動がお好きなのかしら? それなら、そうね。一度くらいは好きな胤たねを選ばせてあげる」

聞こえてきたのは、女の声だった。

それも、あまり品がいいとは言えない内容だ。

眉間に皺しわがよるのを自覚した。

(クオンもこの手の冗談を時折口にするが……)

いや、あいつもここまで悪趣味ではないか。

ともあれ、声の主はクオンではない。彼とともにいるハーフエルフ——霞のものでもない。

まったく無関係の喧嘩だろうか。

……だが、内容が内容だけだ。流石に無視はできまい。

気配を消したまま先の路地を覗き込み——その光景に首を傾げていた。

(あれは「象神アଙ୍କクレーシヤの杖」?)

すぐに確信を持たなかったのは、彼女が木箱の残骸に埋もれていたからだ。

どうにも解せない。彼女はオラリオにも数少ないLv. 5だ。

それをああまで追いつめられるとしたら、敵対する女エルフもまた最低でも同じLv.

v. 5。

だが——

(見覚えがないな……)

対峙している女エルフには見覚えがなかった。

と、なると——

(私も段々慣れてきたな)

クオン側の存在か——と、推測している自分に小さくため息を吐く。

昔から人外魔境だと言われているこの街だが、いよいよ極まってきたらしい。

「さあ、そろそろ眠りなさい。あまり騒ぐと手足を落とすちゃうわよ!」

と、暢気に嘆いている暇もなさそうだ。

愛用の杖を握り直し、その路地へと踏み込む。

「やれやれ。物騒な話をしているな」

フードは外してある。

あまり騒いで神罰同盟やクオンに乱入されても面倒だ。

できれば手早く済ませたい。そのためには、使えそうなものは何でも使おう。

……と、いうのは少々傲慢に過ぎたのかもしれない。

【ナイン・ヘル
アインクローシヤ九魔姫】……

【象神の杖】が呻いた。

どうやら立ち上がる事もままならない様子だった。

しかし、傷はそこまで深いようにも見えないが――

(となると、毒か)

それも麻痺毒の類だろう。

それなら安全とは言わないが、言葉を発せるとまだ呼吸できていると見ていい。

ならば、あとは心臓が動いている限り、死にはしないはずだ。

「深緑の長い髪に翡翠色の瞳。なるほど、あなたがリヴェリア・リヨス・アールヴね。裏切者セルディアの末裔」

「何……？」

聖女セルディア。迷宮神聖譚に語られるエルフの英雄が一人。ダンジョン・オラトリア

リシエーナ・リヨス・アールヴの姉——つまり、私達王族ハイエルヴと同じ血をひく永遠の乙女。少々訳ありなメタス・ハーストと違い、彼女の物語は全ての里に伝わっているとされる。

彼女の物語をまとめた書籍は聖書と称され、自分達こそがセルディアの血を継ぐ正当な王家だと主張する者まで現れる程だ。

ある意味において、王権の象徴と言ってもいいほどの大英雄である。

(裏切者だと……?)

その聖女を裏切者と呼ぶとなると——

「まあ、いいわ。正統な英雄の血に帰してあげる」

「生憎と、今は手のかかる娘が一人いてな。そんな余裕はない」

考え事をしている余裕はない。

そんな事をしていれば【象神の杖アングクレーシャ】の二の舞だ。

「血だけくれればいいわよ」

「そうはいかない」

距離にしておよそ八M。魔導士の間合いとしては少々近すぎるが――

――
右手に幻影の剣が生じる。

（あの拵えは……）

見覚えがあった。もちろん、私が知っているのは贋作だが……。

（やはり、そういう事なのか？）

いや、今は後回しだ。考え事をしながら戦える相手ではない。

（どうやら、あちらは近距離戦もお手の物らしいからな）

幻影の剣を生み出す――と。

その程度の魔法であるはずがない。あれはクオンのものと同じだ。

「【集え、大地の息吹――我が名はアールヴ】」

反射的に歌を紡いでいた。

相手は【象神アンクーンシャの杖】を圧倒できる手練れである。

慢心などできない。

「【ヴェール・ブレス】！」

詠唱の完結と共に緑光の加護が体を包んだ。

効果は物理、魔法両方に対する抵抗力の向上。一定時間持続し、僅かだが体の傷も癒やす。

「そおれ！」

同時、女との間合いが詰まる。

幻影の剣が青白い軌跡を描いて通り抜けた。

（厄介だな）

白銀の長杖と幻影がぶつかり合い、火花を散らす。

重さはないくせに、威力は本物だ。

「便利な魔法だな」

何度目かの激突は鏝迫り合いにもつれ込んだ。

精製金属ミスリルと聖皇鉱石ホーリーダイトの合金で作られた長杖が軋みを上げる。

「魔術よ」

そう言えば、クオンも自らの魔法をそう呼んでいたか。

いや、あいつのは他にもいくつか別の呼び方をしてきたが。

（これは一体……）

この女はクオンとは関係がないはず。

だが、これを果たして偶然の一致と簡単に片づけていい事なのか。

「まあいい。あとでゆつくり聞かせてもらおう」

相手の刺突を逸らし、石突を跳ね上げる。

狙いは鳩尾——だが、流石にそう容易く当てさせてはくれないか。

「あら、ずいぶんと余裕ね？」

「それでもない」

余裕があるかどうかと言われれば、あるはずもない。

私達の基準で言えば、おそらくL.V. 6相当。それも、私とほぼ同じだけの実力者だ。ならば、余裕などあるはずもない。

はずもないが——

(動きは見えている)

首筋を狙う青白い刃を逸らしながら、胸中で呟く。

うちのはねっ返りどもに比べればまだ動きは見やすい。

(性格は悪いがな)

毒蛇か蠍か毒蜘蛛か。

緩やかに密やかに迫り、毒の一撃で獲物をしとめる。そういう手合いだ。

(うちにはいないな。こういつた手合いは)

力ではない。強さでもない。そういうものにはこだわらない。

……ただ殺せさえすればそれでいい。

(ロキやフィンに興味でもない)

この思想は闇派閥イツイルズのそれに近いと言えよう。

(嘆かわしいな)

もつとも、かつて暗黒期においてもこう言った手合いの同胞エルフと対峙した事は幾度となくあるが。

「か……あ!？」

感傷は動きを鈍らせるものではない。

杖の石突が女の鳩尾を抉る。

「だが、私とて最低限の護身くらいは心得ているとも」

杖頭を一闪。こめかみを痛打され、女の体が大きくよろめく。

この女は本質的に前衛型ではない。いや、そもそも戦闘自体が本業ではない。

当然だ。

(この女は魔導師メイジだ)

いや、その呼び方が正しいかは分からないが……いわゆる研究者と呼ぶべき存在だ。

私の予想が確かならそう考えていい。

(それも、今はどうでもいい事だがな)

同じ魔導士。戦闘技能に大きな違いはない。

同じLv. 6。身体能力に顕著な差はない。
ならば――

「そして、これが経験の差だ」

最後に物を言うのはそれだ。

杖を用いて足を払う。

呆気なく体勢を崩す女に、さらに杖頭を叩き付けた。

「【終末の前触れよ、白き雪よ――】」

一撃。二撃。それでも打撃はやめない。

私と同じならこの程度では倒れない。

反撃は、必ず来る。

「この――」

幻影の剣の冴えが増す。

(やはりいくらか手を抜いていたらしいな)

刺突と斬撃が入り混じったそれを受け、胸中で眩く。

だが、それとて想定以上のものではない。

そう。この女なら、元よりこの程度の事ができないはずがない。

「黄昏を前に風を巻け——」

頬を掠める刃もまた心を乱す事はなかった。

女の蹴りを、後ろに飛び退いて躲す。

そこはもう魔導士の間合い。

幻影の剣が消え、四つの光球——いや、青白い結晶が浮かぶ。

(何っ!?)

直撃した四つの結晶は、私が纏う光の衣を貫通せんと迫る。

「チッ!」

いや、一発貫通を許した。

穴が開いた結晶では今まで通りには防げない——が、そもその狙いが甘い。

飛び退くだけで射線から逸れられる——

「くう……ッ!」

更なる結晶が肩を掠めた。

(追尾属性か……!)

だが、傷は浅い。戦闘続行に何の支障もありはしない。

「閉ざされる光、凍てつく大地——」

痛みは無視して、詠唱を続ける。

再び幻影の剣が右手に生じる。

だが、遅い。この女の攻撃の癖は掴んでいる。

「吹雪け、三度の嚴冬——」

予見できる攻撃など当たりはしない。

「この……ちよこまかと……ッ！」

剣を避け、あるいは杖で受け流しながら詠唱を続ける。

直撃さえさせなければいい。掠めた程度なら緑光の加護を破れはしない。

それを可能とするのが、並行詠唱。魔導士の奥義。

「——我が名はアールヴ！」

皮肉なものだ。この奥義を完成させた者こそが——

「チィ！」

女が、幻影の剣を突きぬきの形に構える。同時、その刺剣は更なる輝きに包まれていく。

その『剣』を使うなら、切り札はそれだと思っていた。

あとは私が、どこまで偉大な先人に近づけるか——あるいは、その女がその先人の絶技をどこまで再現できているかだ。

「ウイン・フィンブルヴェトル!!」

時すら凍てつかせる吹雪と、青の閃光群が激突する。

抵抗は一瞬。その猛吹雪は古き英雄の剣閃をも凍てつかせた。

だが――

「……逃げたか」

吹雪が散った後に残っていたのは、凍てついた路地だけだった。

女の姿はない。しばらく周囲を警戒したが、奇襲もなさそうだ。

「大丈夫か?」

「あ、ああ。助か、った。礼を、言うぞ……」

呻きながら、【象神アングクーシヤの杖】が体を捻るように動かした。

だが、それはまるで見えない縄にでも縛られているかのような緩慢でぎこちない。

やはり麻痺毒の類に侵されているようだ。

彼女の代わりにポーチから解毒薬とハイ・ポーションを取り出し飲ませてやる。

程なくして、【象神アングクーシヤの杖】が大きく息をついた。

「どうやら、無事に薬が効いたようだな」

それを見届けて、小さく呟いた。

身体から力が抜けたのは、毒によって弛緩したのではなく彼女自身が気を抜いたから

だろう。

そのまま数回、緩やかな呼吸をしてから彼女は体を起こした。

「ああ……。【九魔姫】^{ナイン・ヘル}。改めて礼を言うぞ」

「なに、気にする事はない。先日のフィリア祭ではお前達の世話になっている。その礼だ」

「……礼も何も、あれは私達の失態なのだが」

「馬鹿な事を。モンスター脱走に関してならともかく、デーモン襲撃はお前達の責ではない」

そして、私が深手を負わされた相手はデーモンだ。

流石にフィリア祭で調教^{テイム}されるようなモンスター相手なら今さら遅れを取りはしない。

「これは？」

ともあれ、羽織っていた外套を脱いで差し出すと、彼女は怪訝そうに首を傾げた。

「使うといい。服がだいぶ傷んでいるだろう」

胸元から臍にかけて戦闘衣^{バトルクロス}が引き裂かれ、素肌が晒されている。

幸い、今のところ他に人目はないが、それもいつまで続く事か。

「もう胸を見られて恥じるような歳でもないがな」

気まずさを誤魔化すように、彼女が嘔うそぶく。

「そういう台詞は私の半分も生きてから言え」

それに彼女はもうLv. 5だ。『器』は昇華され、同性から見ても美しい顔立ちやその肌は暗黒期の頃から何も変わっていない。ならば、若い男にとつては充分に目に毒だろう。

彼女もそれ以上は何も言わず、外套を受け取るときつちりと着込んだ。

そして、

「これは？」

「礼だ。受け取ってくれ」

彼女が差し出してきたのはハイ・ポジションだった。

首を傾げていると、彼女が自分の肩を軽く指さす。

そこで思い出した。

「ああ、そうだったな」

あの女の魔法——いや、魔術か——に、肩口辺りを貫かれていたか。

先に施した魔法によって治癒はすでに始まっていたし……何より、痛みにかまけている暇もなかったので、すっかり忘れていた。

その不満を訴えるかのように傷が痛み出す。

礼を言つてそれを受け取り。傷口にかけるとそれだけで完全に傷が塞がった。

フィリア祭でも思ったが、流石は「ガネーシャ・ファミリア」。良い物を使っている。

「しかし、あの女は何者だ？」

「それについて、少し相談がある」

互いに一息ついたところで、問いかけると彼女はこう言つた。

「もしよければ少し付き合つてもらえないだろうか？」

私達の派閥が疑われている——と、いう事はないだろう。

いや、私が到着する前に何か吹き込まれている可能性はあるが……

(そう言つた雰囲気ではないな)

彼女が得体の知れない情報に安易に流されるはずがない。

何より、すでに彼女が何を聞きたいかは見当がついていた。

それが正しいなら、なるほど、このオラリオで相談できるのは私だけか。

下手なところに持ち込めば、他派閥間のやり取りよりもさらに面倒な事になりかねない。

い。

もちろん、今の私にどれだけの事ができるかは定かではないが——

「ああ、もちろんだ」

無視する事も出来ない。

城からは出奔できても、生まれ持った血までは捨て去れないのだから。

2

密談の場所は「ガネーシャ・ファミア」の本拠地の一室だった。

基本的には、よほど親しい派閥でもない限り他派閥の団員を本拠地に招く事はないのだが……神ガネーシャは『神の宴』を自派閥の本拠地で開く事でも有名だった。

フィリア祭の少し前に開かれた宴にはロキも出席している。

主神を招く事に比べれば、副団長を招くなど容易い事という事だろう。

団員達は特に驚きを見せなかった。……いや、同族達は驚いていたが、それはいつもの事だ。こればかりはどうにもならないらしい。

(……まあ、私も少々躊躇ったがな)

出された紅茶に口をつけながら、小さくため息を吐く。

その……建物への入口を潜る時は。

もちろん、ロキから話は聞いていたが……まさか本当だったとは。

そこはいつもの冗談だと信じたかった。

「口に合わなかったか？」

「いや、そんな事はない」

対面に座る【象神アଙ୍କクーシヤの杖】に応じた。

芳醇な香りと甘く濃厚な味。これ程のミルクティーはなかなか味わえない。せめて茶葉の銘柄だけでも教わりたいものだ。

「それで、相談とは？」

心地よさに浸っていたいのは山々だが、そうも言っていない。

そろそろ本題に入らなくては。

「ああ」

頷きながら、【象神アଙ୍କクーシヤの杖】はポーチから何かを取り出し、テーブルに置いた。

「これは……」

質素な意匠ペンダントの首飾り。おそらく純金製だが、装飾品として見るなら質素でありそこま

での値打ちはつかないだろう。

問題はそれに施された紋章だ。

確かに見覚えがあった。そして、予想していたものでもある。

だが、それでも驚きと、ある種の嫌悪感を抱かずにはいらなかった。

「……これ（れ）を（ど）こ（で）？」

【イシユタル・ファミリア】の本拠地ホーム。より詳しく言えば、神イシユタルの神室だ」

「何だと？ 確かなのか？」

あり得ない。これが神の元にあるなど。

「ああ。……私も多少は知識がある。だから、我が目を疑ったものだ」

「だろうな。……今さらだが、私に話しても良かったのか？　【イシュタル・ファミリア】
 と言えば、クオン絡みでもあるだろう？」

「分からない。それも含めて、お前くらいしか相談できる相手がいないんだ」

……そう言われてしまえば、確かに反論の余地もないが。

とはいえ、私とてクオンについて特別何かを知っている訳ではない。だからこそ、こ
 うしてあちらこちらに足を運んでは調べ物をしているのだ。

「ただ、他言は無用に願いたい」

「分かっているとも。他の同族達エルフに知られでもしたらどんな騒ぎになるか」

想像するのも億劫だ。

それにしても――

（最近、主神ロキや团长フインにも話せない秘密が増えてきたな）

『火の時代』に『殺生石』。……ああ、どれもクオン絡みか。

まったく、相変わらず厄介な相手だ。

「何故、これを神イシュタルが持つていたと思う？」

「客の忘れ物……と言うのが、一番無難な答えだろうな」

いや、それでも場合によっては大事だが——この際、それで済むならまだいい。

「神イシユタルの客になつたと?」

「確かにあり得ないな」

自分で言つた言葉の荒唐無稽さに、思わず嘆息していた。

そんな事はあり得ない。クオンが客になつたようなものだ。

……いや、それを上回る異常事態だ。

「それより、まずは互いに答え合わせをしておこう。念のためな」

「ああ。この紋章は——」

私の言葉に「象神の杖」アインクレーシヤは頷き、こう切り出した。

「カインハースト家のものだ」

答えが重なつた。

「エルフの英雄、メタス・ハーストのもう一つの血統か」

正しく言えば、ハースト家の旧紋章。

フレッキー・ハーストが宮廷魔導士長として王家から家紋を下賜される前に用いていたものだ。

——が、その詳細を知る者はもはや少ない。

文字通り徹底して消されたからだ。

アールヴ家によってだけではない。神々すら巻き込んでいる。いや、神が先導した、と言うのが最も正しい。

『古代』の英雄が一人メタス・ハースト。

エルフ随一の剣士であり、並行詠唱を完成させた人物とも伝えられている。

攻撃、防御、移動、回避、詠唱。その五つの完全なる同時展開。

魔導士にとっての理想を完全に体现し、その稀代の絶技を以つて最前線で戦い続けたエルフの戦士であり――

「旧オラリオの開闢を成し遂げた『円卓の誓い』の一人、か」

神速の剣技と圧倒的な魔法火力によりモンスターの大群を貫き、オラリオへの道を開いたと語られる【閃穿の騎士】。

「そこまでだったら、聖女セルディアに匹敵する英雄だっただろうが……」

英雄同盟――『円卓の誓い』の盟主は「狼騎士」アルトリウス。

『古代』において並び立つ者はいないとも謳われた大英雄は、しかし今やその名を禁じられている。

降臨した神々への反逆。その咎によってだ。

オラリオ開闢を成し遂げた大英雄でありながら、神々公認の英雄譚――『迷宮神聖譚』にその名は一切記されていない。

だが、それでも完全にその名を消し切れないほど、彼の功績は大きい。

そして――

「メタス・ハーストはアルトリウスの腹心の一人だった」

数多の英雄が集った誉れ高き『円卓の誓い』の最初期構成員である四人――のちに『四騎士』と称された一人が『閃穿の騎士』メタス・ハーストである。

アルトリウスの反逆さえなければ、オラリオ開闢の大英雄として聖女セルディアと並び称されていた事だろう。実際、その反逆により失墜した後、アールヴ王家による名譽回復がなされるまでの間もパルシファルという名で語り継がれていたほどだ。

……とはいえ。

厳密に言えば、メタス・ハースト本人はアルトリウスの反逆に加わっていない。

神々が降臨する少し前、ダンジョンの深奥に斃れ天へと帰っていたからだ。

だが、その英雄の血が途絶えたわけではない。

彼の血をひく双子が、その後この世に生まれていた。

それが【大賢人】ディア・アベル フレーキ・ハーストであり――

「運命の双子の片割れ、ウルベイン・ハーストか」

そして【大罪人】ディアス・カイン ウルベイン・ハーストである。

「ああ。彼はアルトリウスに従い、神々へと反逆した」

と、言つても彼らが物心つく頃にはすでにアルトリウスはこの世に——少なくとも、オラリオに存在しなかつたはずだが。

神々によつて作り直されたオラリオで、フレーキと共に父親の弟子達から教えを受けた彼は、その才が充分に開花するや否や神々への反逆を開始したという。

オラリオ史に残る最初の『神殺し』。それこそがウルベイン・ハーストである。

「その後、彼はアルトリウスに従いオラリオを去つた反逆者の生き残り^{カイン}と合流したときれる。この頃にアールヴ家によつて『罪人』の烙印を捺されたとも」

そして、メタス・ハーストの完全なる名誉回復は不可能となつた。

だからこそ、今もその名前は聖女セルディアには及ばないのだ。

「その通りだ」

彼女の博識さに内心で舌を巻く。

何しろ、ウルベインの凶行はエルフの歴史の中でも屈指の汚点だ。

その名前はエルフの間で語る事すら憚られており、他種族に伝わる事は少ない。今となつてはその名前を知っている者ですら、いったい何人いる事か。

「私が聞きたいのは、わざわざ家名に烙印を押し^{罪深}した理由だ」

神を殺し、英雄の血を穢した『罪人』。カイン^{血統}ハースト。

「ウルベインの子孫達は、何を企んでいる?」

あえて血統そのものを罪とした理由。

彼女が聞いているのはそれだ。

「……………」

もちろん、^{ハイエルフ}王族であればそれを知っている。

(ああ、そうか……)

それを思い浮かべ、ふと気づいた。

今までは眉唾物、単なる狂人の絵空事だと思っていたが――

(あるいは、本当に可能なのかもしれいな)

その妄執は、すでに現実と繋がっていると見える。

「それは^{ハイエルフ}王族の秘事だ。口外できない」

クオン。あいつは、ある意味においてカインハースト家の理想の体現だ。

今まで意識してこなかったが……こうして冷静に思い返せば、この両者の思想はかなりの部分で通じ合うものがある。

ならば――

「だから、聞かなかつたにしてもらおう」

落胆した【^{アンクレーン}象神の杖】に、少し意地の悪い笑みを浮かべて見せる。

「分かった。感謝する」

彼女が頷くのを見届けてから、さっそく本題に入る。

「アルトリウスは神々の降臨に際して、『世界の終わりが訪れた』と叫んだとされる」
神々こそが世界の終わりと語ったアルトリウス。

すでに『神時代』は終わっていると語ったクオン。

終わつた時代の住民が、もし今もまだ地上を闊歩しているなら、それはあるいは『亡者』と呼べるのではないだろうか。

「その根拠は分からない。だが、彼に従つた数多の英雄はそれを信じたとされる」

だからこそ、彼らは神々へと戦いを挑んだ。

彼らに勝算はあつたのだろうか。

(あつたのだろうか)

人は神を殺せる。

「クオンの神殺し。その詳細は知っているか？」

ロキの話を信じるなら、クオンはそれを成し遂げている。

「……『完全なる神殺し』だとガネーシャは言っていたな」

やはりか。神ガネーシャがそう言ったなら、ロキの言葉もまた正しかったという事になる。

「私も確証がある訳ではないが、おそらく本当だろう」

内心で呟いていると、【象神アムクレーシャの杖】は続けた。

「クオンが神イシユタルを殺害したと思しき場所を調査したが、そこで奇妙な痕跡を見つけた」

「奇妙な痕跡だと?」

「ああ。そこに用意されていた神座の前に少し湾曲して何か削り取ったような跡があった。その場所から魔導士が魔法でも放ったかのようにだ」

紅茶で唇を湿らせてから、彼女はさらに続ける。

「当時歓楽街にいた神々の何柱からも証言を得ている。彼らは一様に『神アルカナムの力』を感じたそうだ」

真つ当に考えれば天界に還る際に発揮されたものだろうが——と、いう前置きと、

「だが……別に気が触れたわけではないのだが」

躊躇いを宿したうめき声の後に彼女は言った。

「クオンは神イシユタルに『神アルカナムの力』を使わせたのではないかと」

確かに普通であれば気が触れたと思うところだ。

だが——

「使わせたうえで、殺した。あの痕跡を見る限り、私にはそうとしか思えない」

今回ばかりは素直に受け入れられた。

「おそらく、アルトリウスも同様だろう」

アルトリウスもまた、クオンと同じ『力』を持っていたとするなら――

「オラリオ史による最初の『神殺し』はウルベインだが、旧オラリオ史を含めれば話は変わる。人類史最初の『神殺し』はアルトリウスをはじめとした『古代』の英雄達だ。まあ、これだけなら今さら言うまでもない話だろうが……」

「彼らの『神殺し』もまた天界への送還ではなく、完全なる殺害だったという事になる、か……」

あるいは、ウルベインの犯した『神殺し』もまた。

「ああ。アルトリウスの名が徹底して抹殺されたのはそのせいだろう」

だとすれば、神々にとってその英雄達は怨敵だ。

彼らの名を歴史から徹底して抹殺した理由も分かる。

「何故、そこまで神々を嫌ったのか。それは私にも分からない」

ダンジョンは封印されず、モンスターが野放しだった『古代』において神々の降臨は世界の終わりどころか希望だったはずだ。

（と、言うのは今の私達の感覚だな）

本当にクオンと同じ力を持っていたなら、不要だったとも言える。

だが、世界の終わりと言うほどのものではない。彼らは他種族共存を成し遂げていた

はずだ。

そこに新たな一つ種族が加わるだけの事ではないのか？

(まあ、神々がそれで納得するかはまた別の話だが)

神は私達人類に混じって生活している。だが、溶け込んでいるかと言われれば返事に困る。

何しろ世界の多くを動かしているのは神意だ。各地の王権はそれに及ばない。

それどころか――

(王権神授と言えば聞こえはいいが……)

ラキアをはじめとしたいくらかは傀儡と言つてもいい。

数多いる種族の一つ、と呼ぶには影響力が強すぎる。

下界とは神の遊び場。人間はただの遊具であり、遊戯ゲームの駒。

そう嘆く者もいると聞く。

「カインハースト家が望むのは『神殺し』だ。彼らは、今もアルトリウスの言葉を信じている」

少なくとも、ウルベインを突き動かしたのはそれへの怒りだとされる。

人の尊厳と矜持を捨て、大恩ある英雄達を裏切った薄汚い神の奴隷どもから、父祖の御霊が眠る地を奪還せよ。それが彼らの宿願だった。

『我らが地を取り戻せ』

(いや、違うか)

アルトリウスが遺したとも言われるその号令を思い出し、それを否定する。

これでは矮小化しすぎだ。

「そのために、『聖杯』と呼ばれる何かを継ぐ者を生み出す。彼らはその研究を続けると聞く。あの女がお前に子を、と言ったのはおそらくそのせいだろうな」

我らが地とはオラリオに限らない。この下界全てだ。

『下界から神々を一掃せよ』

この号令が真に意味する事はそれである。

「『聖杯』とは？」

「私も詳しい事は分からない。だが、来るべき神との決戦にはそれを持つ者が必要だと、アルトリウスは説いたらしい」

「血を重ねる事で、それが手に入ると？」

「分からん。だが、彼らはそのために『魂の真理』と呼ばれる邪法を用いていると聞く」

そう言えば、『火継ぎの王』の物語にも『魂の真理』という言葉が記されていたが……果たして関係があるのかなのか。

「それによって『聖杯』を得て、『継承者』を生みそうとしている——と、いう事なのだ

が……」

「正統なる王。新たな時代を告げるもの。すなわち『リア・ファル継承者』——と、そんな一節を耳にしたことがあるが、それだけだった。

それ以上の事は何も知らず、その言葉の意味も分からない。

「先にも言った通り、私も詳細は知らない。伝え聞く話から察するに、神を超える人間を生み出そうとしているようなのだが……」

いや、違うか——と、すぐにその言葉を訂正した。

「神を超えるエルフを生み出そうとしている、と言った方がいいな。こう言つては何だが、やはりウルベインもエルフの業からは逃げられないという事だ」

他の種族を見下し、自分達こそが至上であるとするその気質。オラリオのように他種族に囲まれて過ごし、充分に世慣れたエルフでも完全に捨てきれないその業。カルマ

むしろ、血を濃くすればするほど、その深みに嵌まっていくのかも知れなかった。

(もし、そうでないなら……)

おそらく、今頃はクオンと接触を持っているだろう。

あいつこそがカインハーストの理想だ。

神に依らずとも強大な力を有し、完全なる『神殺し』すら可能な人間。

これで種族がエルフだったなら文句など何もないだろう。

「強い血を生む、か。……もしや闘テルスキュラ国のようなものなのか？」

彼女が口にしたのは、オラリオから遙か東南に位置する半島に存在する血と闘争の国の名だ。

またの名を「カーリー・ファミリア」。国家系派閥の一つである。

その国は『より強い戦士を生み出す』ことを至上命題とし、日夜眷属同士を殺し合わせている。

「理念としては通じるものがあるかも知れないな。だが、相容れないだろう」

何しろ、テルスキュラの闘争は神が主導しているのだ。

……おそらく、だが。カインハーストにとってはオラリオに並び忌まわしい場所だろう。

(クオンが知れば、その日のうちに焼き払われそうだな)

一人を生贄にしようとしただけで派閥を潰しているのだ。

蠱毒のように殺し合わせているあの派閥を見逃すはずがない。

「ひとまずカインハースト家についてだ」

ため息を一つついてから、話を戻す事にした。

「もし彼らが成功したなら、神なき下界を統べるのはエルフという事になる。少なくとも王族ハイエルフの多くがそう考えている」

何故、ウルベインが……いや、カインハースト家が討滅されないのか。墮ちたとはいえ英雄の血だから——など、ただの詭弁に過ぎない。

神へとなり替われるかもしれない——彼らが示すその可能性。

誰もがそれに魅入られているのだ。

だが、一体どこの誰がそんな事を公になどできる？

「まさに魔性だ。その囁きは王族ハイエルクをとらえて離さない」

父上に——あるいは己の血に挑むような気分で、言葉を紡ぎ続ける。

自らを高潔で博識高い種族と謳うエルフの闇そのものを。

「だからこそ、散々忌避し咎人の烙印を捺しながらも、王族は彼らの討滅命令を出そうと

はしない。表立つては糾弾もするが……誰かが討伐を計画しても、別の誰かがうやむやにする」

だからこそ、カインハースト家は数百年の間存続している。

そして、『咎人』の烙印を捺されながら、『ハースト』の名を奪われない。

『大逆の英雄』

それこそが、私達エルフが抱える最も深い闇の名前だ。

「今も勢力を拡大していると聞く。すでにオラリオに手の者が潜んでいるとなると、計画は進行しているのだろうか」

かくしてオラリオに迫る脅威がまた一つ、という訳だ。

「俄かには信じがたいが……」

しばらくの沈黙の後、【象神の杖】アンクラーシャが呻いた。

「だが、否定はできないな。私も『神殺し』の実例を知ってしまった」

そんな彼女だからこそ、私もこうして話した訳だが。

「そのうえで、一つ訊きたい。クオンもカインハースト家の一員なのか？」

「いや、それは違う」

問われるだろうと思っていた。

そして、その答えもすでにある。

「少なくとも、クオンはエルフではない。先に言ったように、ウルベインはエルフの血にこだわっている。ヒューマンのあいつにその秘術を伝えるとは思えないな」

少しだけ言葉を切ってから、

「これは完全に私の推測だが……クオンが会得している『力』こそが『魂の真理』アスヴェンの原型なのだろう」

その推測を口にした。

「『古代』の英雄には二種類ある」

それは根拠のない推測だが、それでも目を瞑って射たわけではない。

「一つは精霊に導かれ、その加護を受けた英雄」

精霊——ひいてはそれを遣わした神によって生み出された英雄。

いわば冒険者の前身とも言える存在だ。

「もう一つはそう言った逸話を一切持たない英雄だ」

人より生まれた英雄。

しかし、彼らもまた常人離れた逸話を持つている。

「精霊との逸話が伝わっていないのではなく、別の『何か』を得ていたと？」

「ああ。その通りだ」

あるいは、だからこそ彼らの逸話はその多くが失われているのかもしれない。

精霊の加護に匹敵するその『何か』は、神殺しを可能とするものだったから。

「そして、その『何か』を今もその身に宿しているのが、クオンだ」

今に生きる『古代』——いや、人の英雄。

「あいつの神嫌い。それは、アルトリウスと同じなのかもしれない」

「神々の存在が、世界を終わらせると？」

「分からないな。私にも」

だが、仮にそうだとするなら、それこそが神意だ。

一体誰が抗えるというのか。

いや、抗える。あいつは今も抗っている。人は神を——…

「それなら、一応の納得がいく。ただそれだけの話だ」

内なる囁きは黙殺して、ひとまずの結論を結んだ。

いや、

「何やら、質問からずいぶんとかげ離れてしまったな」

残つてた紅茶を飲み干してから言った。

「これでは【象神アングクレーシヤの杖】の質問に答えられていない。

「真つ当なカインハースト家が神イシユタルに与するとはとても思えない」

その理由については、充分に語つたつもりだ。

「他の可能性としては、襲撃した際にクオンが落としていった——」

「いや、それはないな。あいつはあの神室に立ち入っていない」

まあ、予想はできていたが。

「ならば、先に言つた客の忘れ物か、もしくは代金か」

何しろ純金製だ。装飾品としてはともかく、それそのものにも相応の価値がある。

「神イシユタルの一夜を買うには、少々安すぎる気がするな」

「かもしれないな」

もつとも、相場など知らないが。

それに、質草を必要とするような相手を客にするか？——と、いう疑問もある。

「神の気まぐれ、という可能性はあるだろう」

軽く肩をすくめてから、それよりはいくらか確実性がある言葉を口にした。

「他に考えられるとしたら、カインハースト家に異端がいるという可能性だ」

神に与するという異端。カインハーストの理想に完全に対立する存在ないし勢力。

それとも、悲願成就のために手段を選ばないだけなのだろうか。

「この一件……いや、今のオラリオで蠢く何かは、今までとは訳が違う。暗黒期の様に単純な対立構造では済まないだろう」

もちろん、言うほど単純ではない。何しろ、オラリオの覇権をかけての群雄割拠だ。

だが、中核にあったのは闇派閥イヅイルスとの抗争である。

そして、彼らは実に分かりやすく悪徳を働き、私達はそれに抗った。

とはいえ、その対立を生み出したのも、究極的にはそれぞれの派閥の神意と言っていない。

もちろん、私達もそれに賛同した。闇派閥イヅイルスが悲劇の元凶であり、明確な『悪』である

以上、野放しになどしておけない。オラリオに住む神と人の利害は一致していた。

だが——

(今度の対立は人と神だ)

そして、もしアルトリウスの言葉に一欠けらでも真実が含まれているなら——
(その時は……)

神意に従い、『世界の終わり』を受け入れるのか。

それともその全てに抗うのか。

今度は人類が自ら決めなくてはならないという事になる。

——そう。今一度、それを選択しなくては。

「神ウラノスは一体何を考えている？」

「私も詳しい事は何も」

それもまた、予想できていた。

彼女は私よりクオンに近いかも知れないが……それでも、まだ真相には触れていない。
い。

「だが、これから先、オラリオを守るためにもクオンが必要となると言っていたそうだし、オラリオを守る、か……」

やはり、デーモンへの対抗策か。あるいは、その『飼い主』への。

「クオンについて、何か知っているか？」

「かつて世界を救った『薪の王』の一人。私はそう聞いている」

一体誰から？——とは訊ねなかった。

「本人と約束している故、詳しい話はできない」

そう訊く前に、彼女が言葉が続けていたからだ。

「だが、そいつはクオンを友と呼んだ。無二の親友だと」

そして——と、彼女は続けた。

「これから先、オラリオには過酷な『試練』が訪れる。先日現れたデーモンは、その尖兵に過ぎないとも言っていた。だから、自分達もクオンを追ってきたのだと」

「あれが尖兵だと?」

フィリア祭の日に猛威を振るつた厄災の化身。

私達が総出で挑み、なお苦戦を強いられたあの怪物ですら尖兵だと?

「あの女はL.V. 6と言ったところだろうな」

それには答えず、彼女は言った。

「ああ」

「私もまだ未熟だな」

と、己の手を見ながら【象神の杖】^{アンクーシヤ}が——オラリオでも少ないL.V. 5が自嘲する。

「L.V. 7を超えるL.V. 0が現れた。なら、私達もたった一レベル程度、軽く超えて見せなくては」

その手が固く握られる。

彼女が挑むように私を——いや、その先にいるオツタルを見据えた。

「さもなくば、これから先オラリオに未来はない。それは認められない」
それとも、それ以上の何かだろうか。

オラリオに迫りくる何か。クオンの友をして過酷と呼ぶ試練。

彼女の目には、それが映っているのかもしれない。

「私は『群衆の主』の眷属だからな」

それを読み解く前に、彼女は言った。

それはもはや神意ではない。彼女の意志だ。

私を見つめるその瞳には、透明な炎を宿っていた。

3

「？」

ふとした違和感が、微睡を乱した。

とはいえ、それが不快なものかと言われると返答に困る。

少なくとも、痛みではなかった。むしろ、少し心地よいくらいの——

「む。起きたか？」

眼を開くと、視界を埋め尽くしたのは人斬りの顔だった。

愛用の鎧兜は装備していないが、そんな事はどうでもいい。

「何をしている?」

いや、訊くまでもない事だった。

「うむ。夜這いだ」

愛用の戦闘衣バトルクロスは解かれ、臍下まで脱がされている。

違和感——開放感の正体はそれだった。

「——」

ひとまずあらん限りの力で蹴り飛ばしてから、体を起こす。

「つれない。つれないな。先日は身を挺してそなたを助けたというのに」

だが、大した痛撃を受けた様子もない。

舌打ちしながら、戦闘衣バトルクロスを着なおす。

「何が助けただ。勝手に盛ってただけだろう」

いつもなら感じないはずの違和感——胸元にだけ感じる微妙な圧迫感に舌打ちした。

「仕方なからう? そなたが相手をしてくれんから欲求不満なのだ。神の言うところの

『ふらすとれーしょん』というやつだな」

忌々しい。心底忌々しいが、今の私ではまだこの男を満足させる事はできないだろう。

その前に斬り殺されて終わる。

この人斬りもそれを分かっているから、酔狂にも私に女を求めているのだ。

「そんなにこの身体が欲しいなら、あの時に好きにすれば良かっただろう？」

初めて出会った時。なす術もなく——それどころか満足な反応もできないまま、斬り捨てられた後の事だ。

死の淵を彷徨い、しかし魔石の力で死ぬ事もままならず。しばらくの間、まるで人間のように甦られていた私を治療したのはこの人斬りだった。

記憶ははっきりしない。別に思い出す必要もない。

だが、治療のために服を脱がされたのは確かだった。

——目覚めた時に、何も着ていなかったのだから。

「はっはっは。怪我人を襲う趣味などないとも」

その人斬りは、柄にもなく快活に笑った。

「第一、獣でもあるまいに、無理やりに女子を襲うものか。そういう事は、やはり同意がなくてはな」

「寝込みを襲ってにおいて、一体どこに同意がある？」

こめかみ辺りが引きつるのを感じながら問いかける。

いや、あれほど接近されても気づかなかった私も私だが。

「事後承諾というやつだな。夜這いとはそういうもの。伝統というものよ」
「その伝統もろとも死ね」

臆面もなく言い切った人斬りに毒づく。

まったく、何故こんなものに付きまとわれているのか。

今さら幸運に期待するつもりもないが、この不運を毒づく権利くらいはあるはずだ。

「それで、何の用だ？」

「だから一夜を共にしよう」と――」

傍らに突き立てておいた剣に手を伸ばすと、人斬りは露骨に首をすくめて見せた。

忌々しい。どういう脅威も感じていないのは明らかだというのに。

いい加減、力の差は埋まってきているはずだが……そもそも、それがこの男の狙いなのだから恐れるはずもない。

むしろ、その時が来たら狂喜するのは目に見えている。

「客が見えられたぞ」

剣から手を離し、嘆息していると人斬りが言った。

「客だと？」

私を訪ねてくるなど、いずれにせよろくな相手ではない。

いや、それよりも――

「なら、さっきのはどういふつもりだ？」

「何、取り込み中ならこのまま帰ると言っているのではな」

……分かつている。

この人斬りにまともな気遣いなど、期待するだけ無駄だという事くらいは。うんざりした気分で人斬りの後を追うと、少し先にその客の姿があった。

「あら、Mrs. レヴィス。ごきげんよう」

「誰がミセスだ」

どいつもこいつも——血のように赤い唇を歪めた、その緑髪碧眼の女エルフに毒づく。

「失礼、Ms. レヴィス。お会いできて光栄です」

そして、その傍らには大仰な鎧を着込んだ金髪碧眼の大男。

普段は大兜で隠しているその作り物めいた顔に、今は薄ら笑いを浮かべている。

「何の用だ？」

この二人について、私が知っている事は少ない。

闇派閥の主神が鎧の大男の主君と繋がりを持っているらしいという事と、傍らの人斬りやいつぞやの黒衣の男と同じ『何か』——私とはまた違う怪物だという事くらいか。

ああ、それと。

おそらく、その主君とやらも、どうせ祿でもない化物なのだろうという事もか。

「いえ、貴女がたの主神と打ち合わせがありましたので、こうしてご挨拶に」

大男——その騎士はあくまで慇懃にそう言った。

「あの死神は私の主神ではない」

利用される代わりに利用しているだけだ。

「それより早く要件を言え」

そして、この騎士とも特別これと言った接点はない。

何しろ、闇派閥イツイルスはおろか『エニユオ』とも別の勢力だ。

一体何を企んでいるのか。……どうせ祿でもない事だろうが。

「では、お言葉に甘えて。地上の騒ぎはご存知ですか？」

「……イシユタルとかいう神が死んだ話か？」

その女神は闇派閥イツイルスどもに資金提供をしていたという。

情報……と、何より『鍵』の流出を恐れて死兵を送り、無様に失敗したという話なら

聞いているが。

「ええ。その神を殺した男について詳しくお聞きしたいのですが、よろしいですか？」

「そう言われてもな……」

そもそも、そのイシユタルとやらとも碌に関わっていない。

あの死神は資金源がどうこう言ってはしゃいでいたが、私の知った事ではなかった。

「黒衣を纏い、《竜紋章の盾》——失礼、竜の紋章が施されたブルーシールドとクレイモアを携えた男。それで間違いありませんか？」

「あいつがやったのか」

一八階層で対峙したあの男を思い出す。

装備品からするに、まず間違いはない。

「ならば、なおさら貴様らの方が詳しいだろう？」

あの死神に吹き込んだのは、おそらくこの連中のはずなのだが。

……それとも、あの死神は初めから知っていたのか。

「ええ、おそらくは。ですので、なおさら本人かどうかを早急に確かめたいのです」

何しろ、厄介な男と聞いていますから——と、呟いてから、

「貴女はリヴィラの街で直接出会っているとお聞きしたので」

「『アリア』より確実に強い。そして、その人斬りと同じ力を持つ。それくらいしか知らん」

そして、今の私よりも怪物じみていると言ってもいいだろう。

「もし、よろしいか？」

そこで人斬りが騎士に声をかけた。

「ええ、構いませんよ」

「その男。おそらく、私も四年ほど前に出会っている」

「何と。よくご無事でしたね」

騎士は、大仰に驚いて見せた。

……いや、あながち演技とも言い難いか。

「それよ。あの男、本当にそれほどの大物なのか？ つい先だっても軽く死合つたが、貴殿が気にかける程とはとても思えん」

「なるほど……」

ふむ——と、顎先に手を当て小さく唸つてから、

「あるいは、力を失っているという可能性もありますね」

「私達がか？ 冒険者とやらではあるまいに」

「それはその通りなのですが……。彼を召喚した者がいると聞きます」

「召喚？ 霊体召喚だと？ だが、あ奴は肉体を持っていたぞ？」

「もちろん、それはあくまで下地で実際にはもつと別の手法が用いられたのでしようね。肉体ごと召喚したという前例はいくらか知っています。それに、『転送』という手法もありますから」

「ふむ……。生憎と私は貴殿と違い魔術や奇跡にはほとんど疎い。真偽を論ずるほどの知

識など持ち合わせがないが……」

一体、何の話をしているのやら。

相変わらず得体のしれない連中だ。

「問題は誰が呼んだかです。仮に白霊召喚と同じ理屈だとするなら……そして、その男が我が主君の仰る者なら、生半な者では呼べるはずがない」

「ならば、人違いなのではないか？ ああの程度の使い手なら、さして珍しくもない。我らと同じく、知らぬ間に流れ着いただけの『同胞』かもしれん」

「無論、その可能性もありえます。ですが……」

少し躊躇うような仕草をしてから、大男はそのまま言葉を濁した。

「いえ、憶測で話すのはやめましょう。人違いであれ力を失っているのであれ、その方が我々にとつては都合がいいですからね」

「そうか？　せつかく死合える相手があれば張り合いがない。今の身の上では、流石に貴殿と死合う訳にもいかんからな」

「ええ。そうしていただけると助かります」

宮仕えとは息苦しいものよ——と、嘆く人斬りにその騎士は苦笑した。

「いずれにせよ、不安要素は早めに取り除きたいのです。件の男はギルドに肩入れしていると聞きますし。そうでなくとも、先日は貴方の手を焼かせるほどの同胞まで現れた

と聞きましたか?」

「うむ。おそらくファランの者だろうな。噂に違わぬ奇剣であった」

実に楽しそうに人斬りが嗤う。

「ファラン。不死の旅団ですか……。また厄介なものが現れましたね」

「【深淵の監視者】を自負していると聞き及んでいるが」

「ええ。それに、【薪の王】も輩出しています。……いえ、王と言っても少々特異な形なのですが」

「噂に聞く救世の王を? それは面白い」

「今の私達でも、まだ玉座は遠いですよ。見えてはいますがね。もしそのファランの剣士がそこに手を届かせているとするなら、できれば敵対せずに済ませたいものです」

「巡礼地とはそれほどか。『玉座』になど興味はないが、挑まなかった事が悔やまれるな」

……つくづく、この二人の会話は意味が分からない。

「新たな時代を導く資格があるかどうか。『継承者』リエンアルとなりえるのかどうかを言い合っているのよ」

ため息を吐いていると、女エルフが恍惚とした顔で言った。

「忌まわしき神を殺し、新たな時代を導く救世者であり『人の王』。私達が千年かけてたどり着けなかった……。いいえ、この二人ですらまだ至らない境地。本当に、我らが故郷

にいろのかしら?」

(ああ、この女もか……)

フアナティック

この女も狂信者か——と、ぎらついた目に小さく嘆息する。

もつとも、まともな者がこの薄暗い穴倉にいるはずもないが。

「件の男は、その巡礼を三度に渡り成し遂げた怪物です。もし本人なら、力を取り戻す前に退場していただきたいのですが……」

「そこまで手が回らんか?」

「残念ながら。M s. ハーストの助力で手勢は揃いましたが、まだ練度に難がありました。て」

「カインハーストよ。Mr.」

「失礼。そちらは忌み名だと聞いていたもので」

「神に忌まれていゝなら、この上ない名声だわ」

怒氣——いや、狂気すら宿したその言葉に、騎士が肩をすくめる。

「ともあれ、まだ戦況は膠着としています。騎士団長として恥じ入るばかりですが……」

「ほう。噂に聞く【ドラム騎士団】とはそれほどか?」

「ええ。まったく手を焼かされますよ、あの御仁には」

「やれやれ——と、芝居がかった仕草で騎士が大げさに嘆いて見せる。

「ふむ。そちらに助太刀してもよいが、あまり長く留守にもできんぞ?」

「別に構わん。好きにしろ」

むしろ、そのまま帰ってくるな。その方が清々する。

「つれない。つれないなあ。私がいなくては、一体誰が魔石を集めるというのだ?」

「食人花ワイオラスどもにやらせる」

わざとらしい人斬りの嘆きを、一言で切つて捨てた。

「まあ、女子が花と戯れる姿はそれだけで絵になるが」

……つくづく悪趣味な男だ。審美眼が腐り果てているらしい。

「いえ、今すぐご足労願うつもりはありません。私にもそれなりの矜持がありますからね。もちろん、貴方が入団してくれるというなら大歓迎ですが」

「流れ者の私が言うのも何だが……貴殿らはそう簡単に主君を鞍替えする者を欲するか?」

「ごもつとも。どうやら、私もまだ精進が足りませんね」

騎士は苦笑してから続けた。

「ひとまず今は件の男に関する、もしくは他の『同胞』の情報が手に入りましたら、私共にも伝えていただければと」

「斬つたという報告でも良いのなら、な」

「ええ。それならそれに越した事はありません。……まあ、可能であれば私達の同志になつていただきたいところですが」

「それは少々つまらんなあ」

露骨に肩を落とす人斬りに、騎士は再び苦笑を浮かべてから私へと視線を移した。

「ところでM s. レヴィス。そちらの進捗はいかがですか？」

「あの神から聞いたのではないのか？」

「ええ。ですが、実際に前線に立つ方にも話を聞いておきたいと思ひまして。あのオリヴァス殿が戦死されたとお聞きしましたが……」

「うむ。面白い——もとい、惜しい御仁を亡くしたものだ」

腕を組み、白々と人斬りが頷いた。

まあ、この人斬りを押し付けておくには都合のいい男だったが。

「それほどですか、地上を穢す神の眷属とは？」

「厄介なのは『アリア』とその取り巻き——【ロキ・ファミリア】とかいう連中だ。今のところ、な」

……

「——ッ！」

ズキン——と、突然首筋が痛んだ。

思わず手を添えるが、そこに傷はない。

……今は、もう。

(強かった)

まだ朝霧の匂いが残る風が、髪を撫でていく。

とあるギルド職員の頼みで一〇階層に向かったのは——そして、そこで出会った奇妙な魔導師メイジの冒険者依頼を受け、二四階層に向かったのはおよそ一〇日前のこと。

リヴィラの街で殺人事件が起こった頃からその兆候があつたモンスターの『大量発生』は深刻化しており、その原因調査と鎮圧が依頼内容だつた。

北の食糧庫パントリーが占拠された結果、餌を求めてモンスターが大移動していた。

これが真相だ。

そして、その食糧庫パントリーを占拠していたのが——

(怪人……)

リヴィラの街で対峙した赤髪の女調教師テイマー。

いや、食人花ヴァイオラスを率いる怪物モンスターとの混成体ハイブリッド。

あれから迷宮ウダイオスの孤王との死闘を経てL v. 6へと至つたものの——それでも、まだ互角。風を使わなくては圧倒できなかつた。

驚異的な成長速度。けれど、それも当然か。

怪人は混成体^{レイヴイス ハイブリッド}。モンスターと同じく、魔石を摂取する事で強化される。

事実、私達の目の前で同じく怪人^{クリーチャー}として蘇^{ウエンデッタ}っていた【白髮鬼】——オリヴァス・アクトの魔石を奪い、それを喰らう事で力を高めて見せた。

(まだ私の方が強い)

剣を交えた感触からして、それは間違いない。

だが、次に相まみえる時はどうだろう。

こうしている間にも彼女は魔石を取り込んでいるはず。

通常のモンスターであっても、魔石を五つも取り込めば能力の変化は顕著に現れるとされる。

最悪の場合、Lv. 7相当にまで——いや、それすら上回る可能性も充分にあり得る。

「——うー！」

再び、首筋が痛んだ。

分かっている。最悪の事態など、すでに起こっている。

(強かった……)

彼女の傍らにいた黒い鎧の剣士。

魔導師^{メイジ}が別途雇っていた協力者——【ヘルメス・ファミリア】の半数以上を斬殺し、Lv.

v. 4のアスフィさんやLv. 5のベートさんすら容易く斬り捨てた正体不明の剣士。

私も、もう少しで首を落とされているところだった。

(強かった……!)

L.v.6程度ではとても届かない程に。

それも当然か。

あの剣士——人斬りの話を信じるなら、

『無論斬つたとも』

彼は四年前に【正体不明】^{イレギュラー}クオンを退けている。

それも、ただ退けた訳ではない。

『多少は遊べたが……まあ、取るに足らぬ相手であつたな』

何て悪夢。

オラリオにいる全ての冒険者が『灰色^{アッシュ・オブ・シンダー}の悪夢』と恐れるあの人を取るに足らないと

言つてのける実力者が、よりによつて迷宮都市滅亡^{オラリオ}を目論む者達に与しているなんて。

(奪わせない。殺させない。死なせない)

未だ見ぬ五九階層——レヴィスが向かえと言つた……そこに私が知りたいものがあ
るといつたダンジョンの奥深くを見据える。

リヴェリアもいる。フィンもいる。ガレスもいる。他にも、テイオナやテイオネ、レ
フィーヤ達も。

皆、強い。けれど……。

『やれやれ。最強というからあれこれと用意してきたんだが……』

四年前、私の軽はずみな行動が原因となつて起こったクオンさんとの派閥抗争——いや、あの人は派閥になど所属していないのだから、そうとは言えないのかも知れないけれど。

『まさかこの程度だったとはな』

あの時——リヴェリア達と一緒に駆け付けた時には、もうフィンもガレスも倒れていた。

テイオネや他のみんなも。

もう少し遅かったら、ロキも含めて皆殺されていた。

(今の私達なら、あの人に勝てる?)

地上ここではなく、ダンジョンの奥底。

ロキ主神を狙えない状況下なら、私達はあの人に勝てるだろうか？

L v. 6が四人。L v. 5が三人。そして、レフイーヤたち、L v. 4も。

小さく首を横に振った。

きつと無理だ。『深層』を一人進み、カドモス強竜を単独で——しかも、あんなに容易く——討

伐するだけの力はまだない。少なくとも、私には。

ダンジョンの様に入り組んだ地形では、包囲を突破されて各個撃破されるだけ。

いや、三七階層の『闘技場』に誘導すれば——

「……………」

あそこでは私達も陣形を保てない。やはり突破され、各個撃破されるだろう。

いつそ大規模な『怪物進呈』でも——などと考え始めている自分に気づき、思わず慄然とした。

(闇派閥の真似事なんて正気じゃない)

モンスターに頼るなんて論外だった。

ああ、でも。それなら——

「う……………」

膝の上で兎の様に白い頭が小さく動いた。

火の粉を上げていた黒い炎が消えていく。

白いその髪を撫でながら、大きく息を吐いた。

この少年をようやく捕まえたのが六日前。謝罪を済ませ、預かっていた武器とプロテクターを返して——そのままこうして訓練の約束をした。

……善意ではない。

ただ、知りたかった。わずかな時間で——たった二〇日余りで一〇階層進出を可能とした、その異常なまでの成長の秘訣を。

……それに、ある程度の心当たりと打算もあった。

この少年はクオンさんが目にかけている唯一の冒険者だ。

あの人達の力の秘密——私達の知らない何かを伝えられているのではないか。

この少年を經由して、私もそれを知る事が出来たなら——と。

「……………」

結論から言うのであれば、それは空振りに終わった。

この少年は特別なことは何も教わってはいない。それを訓練初日の時点で確信した。

落胆を感じなかった、と言えば当然嘘になる。

ただ、それよりも疑問と興味が勝った。

私冒険者と同じ条件なら、何故これほどの『成長力』を有しているのか。

(教え方、かな)

たった一週間の約束とは言え、教導役を受け持った身としては少なからず気まずい結論だった。

とはいえ、クオンさんがこの少年に何を伝えたのかはあまりに明白だ。

生き残り方。

それ以外の何物でもない。

初日に、私はこの少年に臆病だと言ってしまった。

それは——多分間違いではないと思う。

ただ、あの人はそれを否定しなかった。むしろ、得難い個性として活かして——

「わあ!？」

と、そこで少年が目覚める。

「す、すみません! また気絶しちゃって……!」

「ううん。ずいぶん減ってきたよ」

理由はさておき、急成長は今も健在だった。

真つ白な純粹さ。純朴な素直さ。

冒険者らしからぬその性格は、一方で私の教えを愚直に身に着ける要因にもなっている。

教えを発展させていく。つまり私の思惑を超える——と、言う意味では今一つだけど、愚直に繰り返し、確実に自分の物としていくひたむきさは目を見張るものがある。

「そ、それじゃ……」

「うん。続けよう」

間合いを開き、鞆を構える。

「はああああつ！」

動きは悪くない。

一〇階層でも感じた通り、下級冒険者^Lの中では最上位に食い込むと思う。

魔法の扱いについては特別教えられる事がないので——それと、市壁の上とは言え街中なので——今回は使用禁止という事になっているけど……それでも変わらない。

何よりも——

(やっぱり、良い足を持つてる)

いや、それ以上に。

(この子、凄く敏感……)

堅実に固められた防御もそうだけど……それ以上に回避が上手い。

いや、もちろん動きにはまだまだ粗さが目立つ。

今も必要以上に飛び退いては、反撃の機会を見逃している。

ただ、とにかく当てづらい。力加減がうまくいかない理由の一つだと思うくらいには。

加えて、半端に捉えた程度では防がれる。もちろん、反応が間に合わず完全に受け止める形になっている。そうなると、互いのL.V.差から防御ごと押しつけられる結果になり、やはり反撃には繋げない訳だけだ。

危機を察知する感覚が驚くほど鋭いのだ。野兔が微かな足音すら聞き分けて逃げ出すように。

おそらくは少年が生来持っていたであろう『臆病さ』は、今や驚異的な『危機察知能力』へと昇華されつつあった。

そして、それを活かし切るだけの足もある。

単独で、しかもこの短時間に——あと、あまり高いポーションを買えない零細派閥だと聞いているのに——激烈な勢いで到達階層を伸ばしながら、今までそこまで大きな負傷がないのはこの二つのおかげだろう。

(むう……)

この子が、クオンさんを師匠と呼ぶ理由も分かる。

この驚異的な危機察知能力は、どう考えてもあの人譲りだとは思えない。

四年前。あの人にはとにかく奇襲が通じなかった。

背後や頭上から仕掛けようが、風を使って煙幕を張ろうが……それこそ姿の見えない相手とも戦い慣れていると言わんばかりに。

(まあ、あの人なら、そうだとしても驚かないかな)

あの驚異的な危機察知本能を前にすれば、むしろ納得すらできそうだった。ともあれ。

もし、この少年に特別な何かが伝えられているとしたらおそらくそれだけだ。悔やまれるのは、彼がクオンさんに師事を受けた期間が短すぎる事だろう。

先に言った通り、回避や防御から反撃へと繋げない。もつと言えば、反撃できないような場所へと回避を誘導できてしまう。

これは「ステイタス」と言うよりは経験——『技と駆け引き』の問題だった。

この辺りは、キャリア相応という事なのだろう。

(あとは……)

伝えられた生き残り方もまた、まだ完成していない。

その証拠に——

(防御力……ううん、耐久が低いのが問題かな)

一番低いのは耐久？——と、そう訊ねた時、この子は否定しなかった。

当然ながら、具体的な数値は訊いていない。けど、伝わってくる感覚からしてまず間違いない。

……もちろん、実際には多分成長が始まったばかりの魔力の方が低いだろうけど。

もちろん、一切攻撃があたらないというなら、それはどれほど堅牢な防御に勝るとは思う。

でも——

(これから先は、そうはいかない)

この子がこの調子で到達階層を増やしていくなら、いつか必ず回避しきれない事態に陥る。

今のままではその一撃がそのまま致命傷となりかねなかった。

従って、この少年の課題は二つ。

その敏捷さと危機察知能力を反撃へと繋げていくための『技と駆け引き』の習得。

そして、防御力……いや、耐久の向上。

一つ目は、それなりに形になっていると思う。格段に——とは言えないまでも、確実に動きが良くなっている。

問題は二つ目。

「うわっ!？」

回避するか防御するかの判断も悪くはない。

あまり手加減しては当たらない程だ。それこそ、一対一なら——あるいは、相応のパーティを組めるなら——『中層』上部のモンスターでもきつと問題ない。

ただ——

(防御の方は、もう少し……)

教えたのがクオンさんだからなのか、この子自身の装備と防御術が噛み合っていない

というのが気にはなる。

「くう!？」

今も真正面から鞆を受け止め——貫通した衝撃に顔をしかめている。

クオンさんのように頑丈な盾を持っていればいいけど、この子の装備ではそうはいかない。

その辺りは自覚しているのか——無意識に、なのかもしれないけど——あくまで防衛は緊急時の選択として割り切っている節があった。

(そういう戦い方を、否定はできないけど……)

知識や技術として、この子にもっと適切な防衛術を教えられるはずだ。

そして、冒険者なら、やはり「ステイタス」面も強化しておきたい。

目指すのは文字通りの耐久力——つまり、耐久アビリティの向上だ。

そのためには、攻撃を受けるのが一番の近道なのだけれど——

「うおわあ!？」

当たらない。

なかなか当たらない。

加減するのがもどかしいくらいに当たらない。

(これだけ成長してるのに、耐久だけが低い理由はよく分かったかな)

回避に特化させすぎた弊害だった。

いや、少年の性格と噛み合ってクオンさんの予想以上に伸びたからなのかもしれない。

いずれにしても、耐久アビリティの向上という課題は思った以上に困難だった。

(でも、これは——)

迂闊に指摘できない。

何しろ、この回避術には少年が生まれ持った性質が強く影響している。

技術的なものなら、伝えれば伝えるだけこの少年は物にするだろう。しかし、この回避は多分、本人も意識していない部分が大きく関係してきているのだ。

それが悪いとは思わない。むしろ、反射的に致命傷を逸らせるというのは、冒険者にとってそれだけでも価値のある能力だと言える。

だからこそ、悩ましい。

下手に指摘して、それが意識の範疇に入ってしまうと、逆に今のように動けなくなってしまう可能性がある。それでは本末転倒だ。

(でも、耐久の低さは見過ごせない)

どれほど強くなろうと。どれほど卓越した回避術を身に着けようと。

それでも、手痛い一撃を受ける時はいつか必ず訪れる。ダンジョンとはそういう場所

だ。

その一撃を受けたら終わり。そんな状況のまま先に進むのはあまりに危険すぎた。むむむつ——と、思いもしなかった難題に幼いアイズも唸り声を上げる。

とにかく惜しいのだ。攻撃を恐れて、反撃に転じられないでいる事が。

この少年がシルバーバックを討伐できた理由。

あの時、ミノタウロス相手に生き延び、さらには一矢報いていた理由。

それは間違いなく、この速さと生存能力のおかげだ。

この素晴らしい脚速さと誰よりも敏感な耳感覚を持った白兔は、おそらく鋭い牙をも秘めている。でも、この子自身がまだそれに気づいていない。それとも、信じ切れていないのか。

白兔の牙。

今はまだ眠ったままのそれがもし解放されたなら——

(圧倒的な速さと手数を武器とした凄い冒険者になる、かも)

双刀装備ダブルナイフを極めればなおいい。

攻防一体となる圧倒的な速さを誇り、相手の反撃すら許さない一方的な猛攻ラッシュを武器としたその白兔はオラリオに広くその名を馳せるかもしれない。

と、いつか来るかもしれない未来を夢想しながら、ぴよんぴよんと跳び回る白兔を追

い回して——ふと思いついた。

ここまで回避と防御が上手いなら、多少加減を誤ったところで平気なのではないだろうか。

実際、気絶している時間はかなり短くなっている。

咄嗟にダメージを受け流すなり、急所を逸らすなり出来ている証拠だ。

それなら――

(うん、当てちゃおう)

数日前の様に膝枕するためではない。

これは耐久を高めるために必要な事だ。

――

大きく飛び退いた少年をあえて追わず、呼吸を整えた。

感覚が今までよりも一回り鋭く研ぎ澄まされていく。

がんばれー！――と、鉢巻を巻いた幼いアイズも全力で応援してくれている。

ならば、心を鬼オウガにしても――！

「あ、あのアイズさん？ また目の色が――！」

危機察知能力を発揮した白兔が慌てた様子で何か言いかけたけれど――

「行くよ……！」

今までよりちよつと本気で当てに行く。

「ぎゃあー!？」

それからまたしばらくの間、少年の悲鳴が割と等間隔に響き渡るのだった。

4

「ハッ！ ハッ！ ハッ！」

肺が焼ける。

下界でこんなにも走った事はない。

天界なら、こんな無様に走る必要はない。

(クソツ！ クソツ！ クソツ!!)

この私が、汗まみれになって、よだれや鼻水さえ垂れ流しながら走るなど——!

(こんなことが!)

一〇の派閥連合による——『神罰同盟』も、もはや四派閥を残すのみ。

だが、他の三派閥は当てにならない。強引に従わせているだけのあの派閥なら、今の時に裏切つていても何ら不思議ではなかった。

「うげ」

傍らの眷属が、短い悲鳴と共に倒れる。

こめかみを矢が貫いていた。

即死。そして、その魂は天界には向かわない。

ああ。神だからこそ分かる。

あれは——

〔『魂喰らい』だと……!?〕

あり得ない。それは天界に伝わる怪談——ただの作り話のはずだ。

存在するはずがない。まして、私達の魂すら喰い尽くすなど、あつてはいけな
でたらめだ。人間たちを焼きつける単なる作り話のはずだ。

そう思っていたのに——!

「何故だ? 何故だ!? 何故だ!!」

何故ウラノスはこれを野放しにしている?!

こんな人間——こんなモノは下界にあつてはいけない。世界にあつてはいけない。

超越存在を殺す存在など——!

「我らが何をしたと言おう!」

人間の小娘一人生贄にしようとしただけで、何故私達が殺されなくてはならない!?

たかが玩具。駒の一つ。それが一体どれほどのものだといふのだ。

〔阻塞急げ!〕

死に物狂いで本拠地に駆け込むと同時、団長が指示を飛ばす。

家具から何から持ち込んで乱雑に積み上げていく。

いくつか壊れたかもしれないが、もはや気にする事はない。

窓の錠戸を落とし、さらに針金で縛りあげていく。普段なら指示を出すだけで済みますであろうその作業に、知らぬ間に加わっていた。

「これなら、簡単には入ってこれねえだろう」

「ああ。主神が生きてりやまだどうにかなる」

さらに食堂に立てこもる。

ここなら食糧もあった。三日か四日は耐えられるはずだ。

「ひい!？」

爆発音が複数回にわたって響く。

堅牢な造りだが、要塞という訳でもない。火力に物を言わせれば、突破も容易い。

「お、治まった?」

「諦めた、のか……?」

だが、程なくして爆発音は治まる。

眷属達に安堵の色が広がるが……それも、束の間の事だった。

「いや待て! 見ろ、煙だ!!」

「^{ホー}本拠地^ムごと焼き殺す気か!？」

「嘘でしょ?! 本気で私達を皆殺しにするつもりなの?!」

「いいから開けろ! 本気で焼き殺されるぞ!」

食堂の入口に積み上げた机をどかさうとして団員が殺到する。

それと同時に――

「なッ――!?!」

その扉が、バリケード 阻塞もろとも消滅した。

いや、傍にいた団員すらまとめて。

「ひ、ひい……!」

一瞬で蒸発した扉の向こうから、黒衣の化物が入ってくる。

槍と竜の紋章が施された盾を携えた悪夢の化身。

「こ、殺せ! 殺せええええ!」

檄を飛ばす。だが――

「もう嫌だああああああっ!」

「お前のために死にたくない!!」

「そこまでの義理はねええええつ!」

武器を投げ捨て、一斉に眷属達が逃げ出していく。

「ふ、ふぎげ――!」

罵声を吐き出す暇すらなかった。

「残念だが、もう遅い」

腐肉のような蔦が絡みついた薄気味悪い槍が閃き、出口を強行突破しようとした全ての眷属を瞬く間に串刺しにしていく。

「喋らない！ 誰にも言わないから!! だから、殺さないで！ 貴方の女にだってなる

——うげ！」

命乞いする眷属にも、その槍は無慈悲につきたてられた。

「ぎい、があ……ッ!？」

瞬く間に傷口は気味の悪い薄紫に変色していく。

血反吐を吐き、あるいは全身から血を吹き出しながら、苦悶の末に眷属達は絶命していく。

「ひっ、ひっ、ひっ……!？」

その凄惨な光景に、笑い声とも泣き声ともつかない何かを上げる眷属。

腰を抜かし、失禁している。いや、発狂しているのか。

「逃げろおおおおあああああああああつ！」

派閥随一の剛力を誇る眷属が、信じられない力を発揮して壁をぶち破った。

私を押しつけて、全員がそこに殺到する。

「Anima mea. Sive Quantum RMN」

そうは言つても小さな穴だ。

たちまちのうちに詰まり、そのまま怪物が放つた闇の塊に呑まれて消滅した。

「ひ、ひ、ひ……」

どこかでガチガチと音がする。

あり得ない。今のはあり得ない。あんな闇を私は知らない。あんな力はあつてはいけない。

「やれやれ。その逃げ足の速さは、まるで結晶トカゲだな」

団長も含めて幹部はほぼ全滅。生き残っているのは全員、気が触れてしまっている。

怪物と二人きり。

(あ、『^{アルカナム}神の力』だ……)

使え。使うしかない。天界に送還されるくらいで済めば安いものだ。
命には代えられない。

「お……」

封印を解いた。神威が辺りを支配する。

眷属たちまでが恐れ戦いているのが分かる。

そうだ。畏れよ、人間！ 私は神だぞ！

だというのに——

「何故だ！ 何故とまらない……!!」

その怪物は平然と近づいてくる。

いや、むしろ加速して——

「くるなああああああああ！」

掌に、今使えるだけの『神の力』^{アルカナム}を集めて——

「遅い」

放つより先に、その毒槍が心臓を貫いた。

（がががががががががががががががががががががががががが——ああ!!!）

毒に侵された身体が腐り落ちる。魂が貪られていく。

殺されている。私が。神が。人間風情に。

何故。どうして。何故私が殺されなくては——

「殺そうとしたんだ。殺されもするだろう」

「馬鹿、な——」

人間を、一人、殺そうとした、だけで——

「そのソウル。俺が貰い受ける」

私^神が、どうして殺されなくてはならない？

ついにそれを理解できないまま、私はその闇へと完全に飲み込まれた。

……

名も知れぬ神が消え去るのを見届けて。

仮にも自分達が仕えていた神の気迫に呑まれて呆けている眷属どもを皆殺しにしてから。

「これで、残り三派閥か」

数多の呪いを取り込み異形と化した『呪腹の大樹』。その腹にあつた呪いの一つ《アルスターの槍》の柄で肩を軽く叩き、呟いた。

自分でも驚くほどに一方的な虐殺となつたが……まあ、この槍の持ち主は「串刺し公」の異名で恐れられたアルスター公だと聞く。

ならば、この悍ましい殺戮劇にも満足してもらえるかもしれない。

何しろ、この毒槍は「薪の王」がひとり、クールラントのルドレスによつて改めて錬成されたものだ。

ならば持ち主のアルスター公のみならず、『呪腹の大樹』のソウルに宿っていた数多の陰惨な呪詛をも取り込んでいるに違いない。

「また派手にやったね」

嘆息を手向け代わりに、いよいよ本格的に炎に包まれる本拠地ホームから抜け出すと、近く

に身を潜めていたアイシヤが少し呆れたように言った。

「そろそろ愛想が尽きたか？」

「馬鹿言ってるんじゃないよ。納得づくだって言ってるだろう？」

と、派閥を一つ潰す度にこうして同じようなやり取りを繰り返しているわけだが。

神はおろか幹部どもまで皆殺しにしているのは、別に人間性が限界を迎えたわけではないし、ソウルや人間性を求めての事でもない。

この連中……『神罰同盟』とやらの本当の狙いが『殺生石』だという事は、最初に始末した派閥の主神に吐かせてある。

もちろん、その情報を知っているのが各派閥の主神と幹部のみという事も。

これは口封じ——と、何より見せしめだ。

この連中の狙いが『殺生石』——イシユタルの『遺産』だというのは、いずれ露見する。

いくら主神や幹部連中を皆殺しにしたとして、それでも人の口に戸は立てられない。だからこそ、関われば殺されるのだと知らしめておく必要がある。

もちろん、俺とアイシヤだけの秘密だ。フェルズやウラノスにすら話してはいない。

……まあ、あの二人ならそろそろ察しているだろうが。

「つたく、あのヘツポコ狐は……。最後まで世話がかかるね」

間違っても、あの少女——春姫と言う少女にだけは伝えられない。

無数の死の上に成り立つ安寧など、あの少女は耐えられない——と、アイシャからも聞いている。

単なる派閥抗争。表向きはそれで押し通す。ギルド連中やシャクテイ達が追つてきたとしても、だ。

つまるところが、完全なる汚れ仕事だった。

無論、敵対しているのは無辜の民などではないが……この有様では、そのうち青霊に襲われたとしても文句は言えそうにない。

(いや、暗月騎士なら普通に襲ってきそうだな)

それも仕方がない。まず間違いなく今の俺は『神の敵』なのだから。

「お前だつて無理に付き合う必要はないんだぞ？」

今さらながらに陰鬱な気分のため息を吐いてから、アイシャに告げた。

まあ、これもまた今までの繰り言でしかないが。

「あん？ 何か言つたかい、ご主人様？」

そして、どうやらこれも一夜限りの冗談ではなかつたらしい。

しかし、身請けも何も、代金を払うべき主人イシユタルはすでにいないのだが。

「それに、連中の言い分が本当なら今ので最後だろうか？」

「……まあな」

これでひとまず『殺生石』について知る派閥の殲滅は完了した。

残る三派閥は数合わせ。重要な事は何も知らず、ただ無理やり参加させられているだけらしい。

となれば、別に皆殺しにする必要はない。

むしろ、今感じている恐怖を少しでも広く語ってもらった方がありがたい。

(しかし、流石に食いつかないか……)

ある意味全ての元凶とも言えるあのクソ野郎ヘルメスの事だ。

今回は石はアン・デイルゲームが作り出した物だろうが……それでも、『殺生石』の存在を知っている事に変わりはない。イシユタルゲームがそれをを用いて何かを企んでいた事も。

そのうえで、平然と渡せるとするのなら、やはり生かしておくのは危険だった。

(ま、奴にとつて人間など遊戯ゲームの駒でしかないからな)

英雄の先導役を気取っているらしいが……実際にはカアスやフラムトと同じだ。

いや、神らしい神というべきか。

ここでまとめて始末したかったが——流石にそう簡単にはいかないか。

だが、手を緩める気はない。何しろ、気がかりならまだ他にもあるのだ。

「さて、と。それじゃ軽く驚かしにいくか」

そして、本当の標的は未だに誰も尻尾すら掴ませてくれないときた。

八つ当たりもかねて残りの連中も少し脅かすくらいは大目に見てもらいたいものだ。

「もう死ぬほどビビってると思うけどね」

嘆息しながら呻くと、アイシヤは呆れまじりにぼやくのだった。

……そして、女の勘とは相変わらず恐ろしいのだと思い知るのはこれから数時間後の事だった。

5

「残り三派閥……」

「め、盟主の座が巡ってきましたが……」

己の主神に告げる。

生きた心地がしなかった。

今まで七つの派閥は主神はおろか幹部まで皆殺しにされている。

「い、嫌だ。盟主なんて……」

「そ、そんな事を言われなくても——」

そもそも、俺達は閩派閥イギリスに片足をつ突っ込んでいた他の連中と違う。

自分達で言うのも何だが、単なるチンピラだ。

精々がリヴィラの街で管を巻き、阿漕な商売をする程度でしかない。

……その程度の勢力だったからこそ、こうして詳しい話も聞かされないまま、無理やりに参加させられているわけだが。

残り二派閥も事情は同じだ。

もはや士気は皆無。処刑の順番を待つ囚人と大差なかった。

「な、何でこんな事に……!」

あんたが安請け合いしたからだ——と、告げる事が出来たらどれだけ痛快だろう。

訳も分からず参戦させられ、訳も分からないまま殺されるのを待つ身だ。その程度の事は許されてしかるべきかもしれない。

「逃げ場はありません」

そう。もはや逃げ場はない。

ギルドは敵に回した。リヴィラ^{八階}程度、あの剣闘士なら散歩気分まで到達してくる。

あとは、オラリオの外に抜け出せるかどうか——

「に、逃げ場? 逃げ場か……!」

狂ったように、主神が呻く。

そして、顔を引き裂くような笑みを浮かべた。

「逃げ場か。あるだろう。あるに決まっている!」

げらげらと発狂したように笑いながら、主神が神威を解放した。

いや、違う。これは――

「追つてこれるはずがない！　いくらあの化物でも、天界までは!!」

圧倒的な力の奔流が嵐の如く室内を蹂躪する。

それなりに大きな机が枯葉のように舞い上がり、窓を突き破つては外へと吹き飛ぶ。

それが崩壊の始まりだった。

堤防が蟻の巣穴ひとつで決壊するように、窓を中心に壁が崩れ去り、ついには屋根ま

でが崩落し始める。

当然だ。大嵐を無理やり室内に閉じ込めたようなものなのだから。

「お、おやめくださいー!」

圧倒的な神威が生み出す畏怖に縛られ、碌に身動きもできない。

幸い、瓦礫もまた吹き荒れる力に弾かれて室内にまでは落ちてこないが――

「これで助かる!　私は死なない!」

神々の禁忌を破つた主神が、狂笑と共に天界へと送還されていく。

巨大な光の柱。いや、間近で見れば光の濁流だ。

瞼を閉じても意味をなさないほどに圧倒的な輝きは、消えてなお視界に焼き付いてい

だが、それを生み出した主神はそこにはいなかった。

「ふ——」

……俺達を見捨てて、一柱ひとり天界へと逃げていった。

「ふざけんなあああああああああつ!？」

それを理解して——その場にいた全員の絶叫が重なった。

これでオレ達は戦えない。抵抗もできない。逃げる事すらままならない。

いくら冒険者とは言え、「ステイタス」を封じられたなら常人と大差ないのだから。

「冗談じゃねえ! あのカソ野郎でめえだけ逃げ出したやがった!」

「黙って殺されろってのか!？」

「どうすんだよ! あの剣闘士は、「ステイタス」封じられてたつて殺しに来るぞ!？」

混乱が加速する。

囚人と大差ない——ではない。もはや、そのものだ。

「ギ、ギルドだ……!？」

誰かが叫いた。

いや、俺自身だったのだろうか。

「ギルドに逃げ込む! いくら罰則を科せられても、まさか殺されはしねえだろ!」

ギルド職員に死人は出ていない。

そもそも、俺達はその場にいただけで襲っていない！

その叫びが引き金となった。

「お、おい？ 一体何の騒ぎ——」

別室で待っていた残り二派閥が恐る恐る顔をのぞかせた。

「まさかあいつ、天界に戻ったのか!？」

「し、信じらんねえ！ 眷属見捨ててテメエだけ逃げやがった!？」

あちらの派閥の主神は、俺達の主神よりいくらかマシだったらしい。

だが、もうどうでもいいことだ。

「俺達は降りるぞ！ 神罰同盟なんて知った事か！」

「ふざけんな！ そんなの俺達だって同じだ！」

二派閥の連中が口々に怒鳴り返してくる。

そんな中で——

「やれやれ。一匹取り逃がすとは締まらない話だ」

冷めた灰のような声でした。

辺りが闇に閉ざされていくような錯覚。

この感じを知っている。ギルドを襲ったあの時と同じだ。

「い、【イレギュラー正体不明】……ッ!!」

あのクソ野郎が派手にやったせいで勘付かれた。

「逃げろおおおおおおおっ！」

その叫びが最後の一押しとなった。

全員が武器を投げ捨て、一斉に本拠地ホトから飛び出す。

恥も外聞もない。抜けかけた腰に鞭打つて走る。

いつもなら煩わしいくらいに近い万神殿バンテオンが遠い。

【ステイタス】を失った体はこんなにも重いものだったか。

「ひいひいひいひいひいっ！」

巨大な杭が次々に降り注ぐ。その衝撃だけで地面が揺れた。

当たったら、今のオレ達などバラバラに吹き飛ぶだろう。

止まったら殺される——その一念だけを頼りに笑う膝を動かし続けた。

狙撃は止まらない。その影響で、他の二派閥の連中もまだ周りを走っている。

一網打尽にするつもりなのか。生きた心地がしない。

「止まれ！」

それからどれだけ走ったか。ようやく万神殿バンテオンが見えてきた。

武装した【ガネーシャ・ファミリア】の団員が叫ぶが知った事か。

止まったら殺される。だが、この連中さえ突破できれば——

「助けて——」

一丸となつて雪崩れ込む。

象神の眷属に取り押さえられた者。入口から逸れて壁に激突したものの。勢いあまつて窓から中へと飛び込んだ者。誰が誰だか分からないし、自分がどこに所属しているのかも定かではない。

だが、

「助けてくれええええええええええッ?!」

騒然とするギルド本部の中で、確かにそう絶叫していた。

……

「ひとまず、終わったようだな」

「ああ」

祈祷の間で、ウラノスとため息を吐きあう。

神罰同盟の生き残りが駆け込んできてから数時間が経ち、凶行の記憶が冷めやらず大混乱を起こすギルド職員と、その彼らに発狂寸前の神罰同盟が縋りつくという、あるいは先日 of ギルド襲撃よりも混沌とした惨状も、どうにか静める事ができた。

「取り調べの様子はどうなんだ?」

「ガネーシャが受け持っている。だが、おそらく彼らは何も知らないだろう」

主神二柱ふたりが本当に知らないかは分からないが——と、ウラノスが小さく付け足す。

「この程度の騒ぎで済んで良かったというべきなのか……」

「今はそう思っておくでしょう。『殺生石』……いや、生贄の少女について露見したなら、この程度では済まなかったかもしれない」

しかし、神罰同盟の動きは少々解せない。

彼らは一体どこから『殺生石』や生贄の少女の話を知りつけたのか。

(神イシユタルから、とは考えづらい)

おそらく、アイシヤ・ベルカにとってもこの事態は想定外だったはずだ。

いや、今は仮に「ガネーシヤ・ファミリア」に身を寄せている戦闘娼婦達パベラ——その幹

部達にとつてすら。

(となると、消息不明の団長フリユネや副団長タンムズか?)

いや、それもどうか。

副団長はともかく、団長はそう言った小細工とは無縁だった。

「俺が！ 取り調べを終えたガネーシヤだつ！」

と、そこで快活な叫び声が祈祷の間に響き渡った。

それだけで、この祈祷の間がいくらか明るくなった気がするのだから不思議なものだ。

「終わったか？」

「うむ。一通り話を聞いてきた！」

ウラノスの問いかけに、ビシツとポーズを決めながら、神ガネーシャが応じた。

「結論から言つて、ギルドに逃げ込んできた者達は何も知らない！ 数合わせとして無理やり巻き込まれただけのようだ!!」

「確かか？」

「二柱の神については、流石に断言できん！ だが、眷属達は間違いない!!」

と、なると――

「クオンめ。わざと見逃したか」

ウラノスが呟いた。

「ああ。私もそう思う」

神罰同盟の本当の目的は、いずれオラリオの噂となるだろう。

これは、それを見越しての凶行――つまりは見せしめだ。

イシユタルの『遺産』に関われば殺される。

その認識を植え付けるためには、その恐怖を語り継ぐ何者かが必要だ。

生き残った者達は、黙つていてもその役割を担うだろう。

これでも長く生きている身だ。似たような手法が用いられた例はいくつか心当たり

がある。

(それでも少々やりすぎのように思えるが)

いや、出会ったばかりの事を思えば、ずいぶんと丸くなったと言うべきか。

「他に何か分かったか？」

「残念ながら、これといって新しい情報はない！」

「……と、なる。ある意味において神罰同盟も犠牲者と言えるのか」

何者かに唆されたという意味において。

……無論、だからと言ってギルド職員への凶行が許されるはずもないが。

「だが、一体誰が唆した？ 情報流出が早すぎる」

「イシユタルと繋がりにある何者か。そう見るのが妥当だが……」

それは具体的に何者なのか？——と、言うところで思考が行き詰まる。

「少し状況を整理してみるとしよう」

ウラノスの言葉に、神ガネーシャ共々頷く。

「まずイシユタルは件の少女を生贄に、『殺生石』を作り出そうとしていた。クオンの話

からすると、それを用いて「フレイヤ・ファミリア」に抗争を挑む算段だったのだろう」

「うむ。イシユタルがフレイヤに絡むのは、神会デイトゥスでもよく見る光景だった！」

「「フレイヤ・ファミリア」への派閥抗争を勝ち抜く策の一つとして、クオンを抱き込も

うと企んだという事か」

仮に成功していれば、「フレイヤ・ファミア」を壊滅させるどころか、オラリオそのものを手中に入れられたかもしれないが。

「だが、結果としてそこそがイシユタルの命取りとなつてしまった！」

「ああ。アイシヤ・ベルカという最高の切り札を持つていながら、ついにそれを活かせなかった」

神イシユタルは交渉方法を誤つた。

もしクオンを抱き込みたいなら、最低でも人間の味方であるべきだったのだ。

「イシユタルに『殺生石』を届けたのは？」

「決定的な物証はない！　だが、いくつかの状況証拠を照らし合わせるに、ほぼ間違いないくヘルメスだ！」

「となると、そちらもクオンの証言通りか」

「うむ！　他にも複数人の戦闘娼婦達もイシユタルがクオンと接触する数日前に、それらしき男が訪ねてきていたと証言している!!」

これと言って驚きはなかった。

そろそろ長い付き合いだが、どうにもあの男神は信用ならない。

獅子身中の虫。あの男神の顔を見ていると、その言葉が脳裏から離れない。

「……そうか」

やはり何か思うところがあるのか、ウラノスもまた苦々しく呻いた。

「経路はともかく、神イシユタルが持っていた『殺生石』を作ったのはアン・デイルと見て良い。おそらく【女神の戦車】以降の【フレイヤ・ファミリア】襲撃も彼の手の者だろう」

ともあれ、今はそれに拘泥している暇はない。

「となると、その何者かは異端児という事になるが……」

「人間に変身するモンスターなどいたか?！」

残念ながら、心当たりがない。

「何かの『強化種』か。あるいは、アン・デイルが何かしら施したか、だな」

「ああ。有力なのは魔術。あるいは『ソウルの業』といったところか」

それなら、【フレイヤ・ファミリア】の眷属達とも充分に渡り合えよう。

何しろ異端児達の多くはいわゆる『強化種』でもあるのだから。

「【フレイヤ・ファミリア】襲撃はイシユタルを焚きつけるためのものと見ていいだろうな」

「おそらくは。クオンと神イシユタルが接触して以降は、一件も報告されていない」

それより前に【フレイヤ・ファミリア】——それも、オツタル自身が動いたとも聞い

ているが……今さら理由にこだわることはないか。

何であれ、その何者かの目的は見事に果たされているのだから。

「シヤクテイ達の調査によれば、イシユタルが闇派閥イツイルス残党に資金提供をしていたのは間違いない！ 少なくとも、奇妙な金銭の動きがあるのは確かだ!!」

おそらく、違法な人身売買に用いられた分も混ざっているのだろう。

木を隠すには森の中——と、神イシユタルが企んだかどうかは定かではないが。

「となると、神イシユタルは闇派閥イツイルスと『殺生石』、さらにクオンを抱き込む事で「フレイヤ・ファミア」に決戦を挑むつもりだったという事になるな」

「うゝむ……。ひとまずクオンを外して考えるが、それで戦力は足りるのか?！」

なかなか難しい。「イシユタル・ファミア」の最大戦力はL.V. 5。『殺生石』で底上げしてL.V. 6となっても、L.V. 7おうじや「猛者」には及ばない。

それに、「フレイヤ・ファミア」には他に「女神の戦車」ヴァーナ・フレイアをはじめとしたL.V. 6が複数所属している。L.V. 6が一人いた程度ではまず戦いにならないだろう。

「さて……。だが、気になるのは闇派閥イツイルスだ。どうやら、彼らは私達が知らない『何か』と繋がりを持っている。あるいは、神罰同盟に『殺生石』の情報を流したのもここかもしれない」

「クオンに口封じを押し付けたと?！」

「ああ。あるいは、アン・デイルと同じくクオンへの『試練』に利用した、と見るべきか……」

今の状況を鑑みれば、どちらもありそうな話だ。

両方を兼ねていたとしても、驚くには値しない。

「『殺生石』は勿論だが、闇霊を召喚できる魔道具も無視はできん!!」

「『ひび割れた赤い瞳のオーブ』か……」

誰もが闇霊を召喚できる。

これは、考えようによつては『殺生石』よりも遥かに差し迫った脅威となるだろう。

「ああ。そのの出所も気になる。そして、二四階層の一件から、例の新種やそれを率いる

何者か……『都市の破壊者』を名乗る勢力とも繋がりを持っているのは明らかだ」

「神イシユタルはその辺りも戦力として期待していたのかもしれないな」

「なるほど。それなら、勝算も出てくるな! ガネーシャ納得!!」

リヴィラの街を襲撃した『新種』も、多くの冒険者にとつては充分過ぎる強敵だ。

……もつとも、かの女神の眷属はそれ以上の化物揃いだが。

「もう一つ二つ何か企んでいそうだが……。いずれにせよ、闇派閥と接点があったのは

事実だ。本拠地襲撃は、口封じと見て良い」

「よほど都合の悪い物があったか?」

「今のところ、それらしいものは発見できていない！　すでに持ち出された後なのではないか、というのがシャクティの推測だ!!」

「ふむ……。誰が持ち出したのか分かるか？」

「分からん！　が、状況的に行方不明のタナムズではないかと、サミラ達は予想している!!」

「……こう言つては何だが、今のところ確たる証拠があるものは少ないな」

確定的なのは神イシュタルが『殺生石』を作り出そうとしたという事くらいか。

他は状況証拠と予測、推論ばかりだ。

（あちらの手際がいいのか、それとも私達が後手に回りすぎているのか……）

あるいは、その両方なのかもしれない。

「闇派閥イウイルスとの接点は、もう少し調査すれば何とか確定させられるはずだ！」

「頼りにしている。……イシュタル達には悪いが、この事態を鎮静化するにはそれを全面に押し出すしかない」

闇派閥イウイルスの残党狩り。

この騒ぎをそう定義してしまえば、幕引きはさういふんと簡単になる。

「闇派閥イウイルスと言えば、二四階層での一件も重要だろう」

「レヴィスと呼ばれる赤髪の女。『怪人』クワイーチャーか……」

「ハシヤーナを殺したボンバーな美女だな!!」

「ああ。そして死んだと思われていた【白髮鬼】ヴェンデッタもだ」

「まさか生きていたとは！ ガネーシヤ驚愕!!」

彼女達の首魁と思しき『彼女』なる存在は、死の淵にいた【白髮鬼】ヴェンデッタに『極彩色の魔石』を移植する事で彼を怪物モンスターとの異種混成ハイブリッドとして再誕させた。

レヴィスと言う女性がそうなった経緯は不明だが、彼女もまた怪人クリーチャーなのは疑いない。人智はおろか、神智すら超えたその怪物はモンスターと同じく、魔石を取り込んで己の力を強化する。ダンジョンがある限り、彼女達は無限に強くなっていく可能性すらあるという事だ。

【白髮鬼】ヴェンデッタの発言から、『彼女』の望みはモンスターと同じく地上への進出と考えてよいだろう」

「ああ。そして、今までそれらしい目撃例がない事を合わせれば、『彼女』が棲息しているのは深層深部と見るべきだろうな」

『地中深くに眠る』

『空を見たい』

【白髮鬼】ヴェンデッタの発言から察すれば、概ね間違いではないはずだ。

もちろん、目撃者が全員口封じされている可能性もあるが。

「彼女らが口にした『エニユオ』は、我々^{神々}の言葉で『都市の破壊者』を意味する」
 「となると、彼らの狙いは明らかだ!!」

「オラリオの破壊か。確かに【白髪鬼】^{ヴエンデツタ}もそう叫んだと聞くが……」

「ともに暗躍している闇派閥は【タナトス・ファミア】と見ていい!! それがかは分らないが、【イシユタル・ファミア】の本拠地^{ホー}を襲ったのはこの派閥だ!!」

生け捕り——ではなくなったようだが……ひとまず自爆だけは阻止した構成員の【ステイタス】を暴いたところ、かの神の名が刻まれていたという。

暗黒期が終わってから五年もの間、彼らはオラリオに潜伏していたという事だ。

だが、一体どこに? 残党狩りは念には念を入れて行われたというのに。

「タナトス。そこまで子供達の死を望むか……」

蒼色の目を伏せ、ウラノスが呻いた。

「闇派閥^{イヴイルス}、都市^{エニユオ}の破壊者、闇霊。この三勢力が繋がっているのはほぼ間違いないというところか……」

「いや、それだけではない!」

「どういう意味だ?」

「これを見て欲しい!」

神ガネーシャが懐から首飾りを取り出した。

大鷹の紋章の上から別の刻印を付け足した歪な意匠。

「これは、カインハーストの紋章?」

オラリオ侵略を企むエルフの過激派集団。

世間一般では、知られていても精々その程度の物だ。

「フェルズよ。何か詳しい話は知らないか!」

「そう言われましても……」

およそ八〇〇年前——私がまだ真つ当な人間だった頃にも確かに存在していたが。

しかし、その頃はまだ組織の規模も小さく、英雄の名を騙る過激な狂信^{カルト}集団があるという程度の認識しかなかった。

そして、この一派が規模を拡大し本格的に暗躍し始めた頃には、私は今の体となっており、彼ら以上に人目を避けて過ごさねばならなくなっていた。

同じ時代を生き、同じ闇に潜みながらもすれ違い続けている——と。

私にとってはそうとしか言いようがない。

「それをどこで手に入れた?」

「ウラノスよ、聞いて驚け! 何とイシユタルの私室にあつたのだ! ガネーシャ驚愕

!!

「そんな馬鹿な!? カインハーストは『神々の全処刑』を掲げているはず。間違つても神

に与するわけが——！」

思わず声を荒げていた。

いかにすれ違っているとはいえ、噂の一つや二つは聞いている。

『我が地を取り戻せ』——と。

彼らが掲げるその標語の真意は、下界から神々を追放——全処刑する事である。

およそ千年に渡り執念を燃やしてきた彼らが、今さら神と与するとはとても思えないが……。

「カインハースト。『古代』の英雄メタス・ハーストの血統、か……」

神々の追放。それこそが反逆の英雄アルトリウスの遺志だとされている。

やはり、『古代』から『神時代』への転換期に何かがあったのだ。

神の降臨。それ自体に何か裏があるのか。

「彼らが私達神々に与する事はあり得ない」

私の考えを肯定するかのよう、ウラノスが断言した。

「おそらく、闇霊……『ひび割れた赤い瞳のオーブ』を闇派閥達イツイルスに渡した何者かと与しているのだろう。何しろ、目的は同じなのだからな」

「オラリオを滅ぼす……」

「その通りだ。カインハーストにとつても、現体制のオラリオは邪魔だろう。ひとまず

オラリオを滅ぼすところまでは協力し、その後は改めて取り分を争う。おそらくそんなところか」

「そんなパンケーキを切り分けるような気分で滅ぼされてはかなわないな……」

しかもこの『パンケーキ』はオラリオではなく、下界全土を示しそうだった。

「問題は、その切り分けに加わりたい勢力がいくつあるかだ」

「む？ 闇派閥イツイルスと都市エニユオの破壊者、それに闇霊とカインハーストだけではないのか?！」

いや、それでも四つもの勢力がオラリオの滅亡を望んでいることになる訳だが。

「まだ確証はない」

神ガネーシャの言葉に、そう前置きしてからウラノスは言った。

「だが、デーモンと『暗い穴』を穿つロンドールの黒教会という脅威も残っている。さらに邪推するなら、アン・デイルの思惑もはつきりとはしない」

「アン・デイルという魔導士は、異端児達ゼノスを保護しているのだろうか？ ならば、俺達とは友好な関係か築けるのではないか？」

「私もそう願いたいものだ」

瞑目し、ウラノスが呟いた。

「最悪の場合、七つもの勢力がオラリオの滅亡を望んでいると?！」

闇派閥イツイルス。『都市エニユオの破壊者』。闇霊。デーモン。黒教会。アン・デイル。カインハースト。

ト。

それら全てがオラリオを滅ぼそうとしているとすれば、私達の未来はまさに暗澹たるものとなる。

「ああ。どの程度のレベルで望んでいるかを別とすれば、な」

それはつまり、オラリオを根こそぎ消し飛ばさなくては満足できないか、それとも現体制を改変させるだけでいいのか——と、言ったところなのだろうか。

「変化は、起こる」

ウラノスが神託を下した。

「オラリオだけではない。下界……いや、世界の全てを巻き込んだ変化が」

「それは、一体……」

私の問いかけには応じず、ウラノスは続けた。

「いや、すでに起こったのだ。それを我らだけが認められずにいる」

その我らとは誰の事なのか。

いや、おそらくそれは——

「まずはアン・デールだ。彼と接触をとりたい。『神罰同盟』の一件が収まった以上、多少強引にでもクオオンの協力は取り付けられよう」

「やはりか！ その魔導士の真意はともかく、目指す場所は同じ……少なくとも大体は

同じ方向を向いている！ ならば、協力体制を築ける可能性は充分にあるはずだな!!」
 「現時点で断言はできない。だが、クオンはアン・デイルと面識がある。彼を介すれば、比較的安全に接触できるだろう。さらに言うのであれば——」

「デーモンや闇霊に関する情報を持つている可能性もある、か？」

「ああ。闇派閥や都市の破壊者なら、大派閥をあてがえば対応もできよう。だが、デーモンや闇霊、何よりそれらを束ねる『何か』はそうはいかない。オラリオの全てを使っても抗えるかどうか。これはそう言った脅威だ」

「まるで三大冒険者依頼だな……」

今も未達成の黒竜討伐。かつて精強を誇った「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」ですら敗れた下界最大の脅威。

かの偉大なる大神なき今のオラリオでは、その全てを投入しても討伐できるかどうか。

「最低でも黒竜と同程度。そう考えておく必要がある」

私の嘆息に、ウラノスは真剣に応じた。

「次に接触が取れるとしたら、黒教会とやらだが……」

「こちらはクオンにも思う事があるらしいな」

そう。仲介役となるであろうクオンがその調子では、真つ当な交渉は望めまい。

「それに『暗い穴』という呪詛カームズをばら撒くとあつては、協力はできないのではないか?!」
 「分かっている。だが、その思惑だけは知っておきたい」

「……それなら、クオンが何か知っていそうだが」

もつとも、今すぐにあいつをここに呼び出せるわけもないが。

「ああ。まずはこの騒ぎを終わらせる。全てはその後だな」

神座に深くもたれかかり、ウラノスが呻いた。

「……急ぐとしよう。今頃は彼らも気を揉んでいるだろうからな」

……

遠征予定日の二日前。

『緊急放送。緊急放送。これより、ギルドからオラリオの皆様にお伝えします』

その昼下がりが。大鐘楼の音と共に、ギルドからの緊急放送がオラリオに響いた。

「久しぶりじやのう」

よく聞こえるように執務室の窓を開けながら、ガレスが暢気に笑う。

「ああ。暗黒期が終わってからはずいぶんと出番も減ったからね」

ギルド本部に設置された魔石製品の大型拡声器を用いたものだが……何しろ、オラリ

オ全域に響き渡る『大声』である。あまり乱用すると、周辺住民から苦情が出るとか何

とか。

まあ、それが理由だと本気で思う訳ではない。そんな噂が立つことも含めて、暗黒期が終わり、それだけオラリオが平和になった証拠という訳だ。

と、それはともかく。

『今回の抗争の闇派閥イワイルス残党と手を組み、オラリオに致命的な混乱をもたらそうとした【イシユタル・ファミリア】および神罰同盟側に発端がある』

それがギルドの公式見解らしい。

『都市運営の観点から、以後はギルドが対処する。各【ファミリア】は軽拳妄動を慎むようお願いしたい。また、もし再びギルド職員に危害を加えるような事があれば、理由によらず厳罰に処すものと心得よ。繰り返します。今回の抗争は——』

街中のざわめきが聞こえてくるようだった。

だが、これで幕引きとなるのは間違いない。不満があつたとして、それでも今さら【イレギュラー正体不明】に戦いを挑むような命知らずは多くない。

「ギルドの連中も、今回ばかりは動きが速かつたのう。……いや、ギルド職員にも負傷者を出しておる。当然と言えば当然か」

顎髭を撫でながら、ガレスが呻いた。

「状況を見れば遅すぎるくらいだが……相応の証拠を揃えるにはこの程度の時間はかかるか」

ほっそりとした顎先に手を当てながら、リヴェリアがため息のように呟いた。

「けど、あのジジイ、やっぱアレを庇いよったな」

ギルドが対処する——と、なればクオンを捕縛などできるはずもない。

何しろ、ギルド職員は一切恩恵を受けていないのだ。

いや、L v. 0なのはクオンも同じだが……しかし、L v. 7と渡り合える存在を本
当にL v. 0に含めていいのかどうか。

「まあ、ここで懸賞金でも掛けたら、次に消えるんは【ソーマ・ファミリア】やったらう
けど」

思い止まってくれて良かったわ——と、酒好きのロキが冗談めかして言った。

ただ、少なくとも何割かは本気だっただろう。

「しかし、本当に闇派閥イヴイルスが息を吹き返していたとは……」

「別にアイズたん達の話の疑うところないけど……本気でまだ無駄に頑張るとるん
かいな、あのアホ共は。ゆーか、イシュタルも何でまたそんな馬鹿なことしたんやろ
なあ」

リヴェリアの呟きに、ロキが唸った。

「……確かに神イシュタルも馬鹿な事をしたとは思うけどね」

神イシュタルが何を思っイヴイルスて闇派閥と接触したかは定かではないが……そこを付け込

まれ、自らの『死』を呼び込む事になったのは確かだ。

「馬鹿な事と言えば神罰連合のアホ共もなあ」

クオン憎しで集まったにしても、彼らはあまりに性急かつ強硬にすぎた。

バンテオン
万神殿に詰め寄り、ギルド職員にまで手をかけるなどまともではない。

しかし、一体何故なのか？

(彼らを狂気に駆り立てる何かがあつたはずだ)

神イシユタルと懇意にしていた。クオンが憎かった。それだけでは理由としてあまりに弱い。

いや、彼らもまたアン・デイルに踊らされただけなのだろうか。

(だが、一体その『餌』は何だったんだ?)

どうにもまだ全容が見えてこない。

(……まあ、『餌』についてはリヴェリアが知っているようだけど)

それについては下手に探る事もないか。どうしても必要にならない限りは。
(下手に探ると後が怖いしね)

イウイリス
闇派閥にクオン。どちらもオラリオ屈指の厄ネタだ。

迂闊に関わるのは、破滅への近道でしかないだろう。

神罰連合の末路がそれを証明している。

（とはいえ、闇派閥イヴイルスの残党と事を構えるのはもう確定事項だ）

アイズ達が関わった『食糧庫』パントリーの一件を見るだけでも、もはや放置はできない。

敵は確実に勢力を取り戻しつつある。ならば、あとは早いか遅いかの話でしかない。

そして、敵を叩くなら早いに越した事はないのだ。

「まあ、終わってくれたならそれでいいさ」

小さく椅子を軋ませながら、宣言する。

「これで何の憂いもなく遠征に出立できる」

「では、予定通りに？」

「ああ。二日後に出立する。ガレス、悪いけどこれからギルドに本報告に行ってきたらいいかい？ 僕は「ヘファイストス・ファミリア」に行ってくる」

「任せておけ。ついでに、少し突いてみるとしよう。……まあ、受付の娘どもが詳しい話を知つとるとは思えんがな」

それからしばらくして、

「帰還をお待ちしております。どうかご武運を」

遠征の申請用紙にギルドの赤い印影が押され——僕ら「ロキ・ファミリア」の遠征が正式に決定された。

第四節 覚醒前夜

1

「平和ですなえ」

「うむ。のどかな景色であるな」

馬車の車輪が小さく軋む音と共に回る。

空は澄み渡り、爽やかな風も心地よい。幌も天蓋もない粗末な馬車だけど、こんな心地よい天気なら気にならなかつた。

ああ、何て平和な光景。

冒険者になつてから、こういう光景とは少し距離ができてしまつていたように思う。

こんないい日なら、干し草を寝台代わりに昼寝をしたら心地よさそうだと、まあ。実際のところ、そんな暢気な事を考えてもいられないんだけど。

「——はいっ！ リリを連れて行つてください！」

色々あつたけど改めてリリとパーティを組むようになってから今日で六日。

「それじゃあ……私が教えてあげようか？」

こつちも色々あつてヴァレンシユタインさん——アイズさんに戦い方を教わるようになって今日で四日目になる。

そして、クオンさんが「イシユタル・ファミリア」を壊滅させたのが三日前。それを恨んだ神罰同盟が、ギルドを襲ったのが昨日の事だった。

正直、クオンさんの事が気になる。めちやくちや気になる。気にならない訳がない。我が君の周りには近いうちに『嵐』が訪れます——と、いつかダンジョンで出会ったあの女の人が言っていたのは、きつとこの事なんだろうと思う。

今すぐにも駆け付けたい衝動に駆られるけど……

「いいかい、ベル君。厳しい事を言うようだけど、今の僕らじゃできる事なんて何も無いよ。下手に関わつて僕らが人質にでもされたら、その方がよっぽどクオン君にとっては困ったことになるぜ？」

「ええ、ヘスティア様の言う通りです。この神罰同盟に参加している一〇派閥はどれも中堅派閥。しかも、うち七派閥は武闘派で、何より闇派閥イツイルスに片足突っ込んだ……ええと、『ソーマ・ファミリア』がまともに見えるくらい口のクテナシ集団ですから。どんな形であれ下手に関わりを持つと、最悪骨の髄まで食い散らかされますよ？」

と、神様とリリに真剣に諭されてしまった。
いや、それどころか——

「ヴィルマ氏……ええと、『ガネーシャ・ファミリア』の人達の話だと、どうも『イシュタル・ファミリア』の方に問題があったみたいなんだ。オラリオそのものを大きく混乱させるような事を企んでいたとかなんとか……。それに、神罰同盟に加盟している派閥はどれもアーデ氏も言うようにあんまりいい噂のある派閥じゃないし。私達ギルドにとつては『イシュタル・ファミリア』つてちよつと因縁がある相手だし、この際その時の疑惑も改めて調査しようっていう動きがあるんだ」

本当はまだ秘密なんだけど、ベル君には教えておいた方がいいかなつて——と、その神罰同盟に襲われ、怪我をしたばかりのエイナさんにまで逆に心配されてしまった。

そして、ギルドから『青の薬舗』に向かう途中——

「ううん……。それはもちろん私だつて心配してない訳じゃないけど。……でも、この面子でアイツをどうにかできるとは思えないんだけど。ギルドにはいきなり喧嘩売っちゃうし、そのせいで『ロキ・ファミリア』とか『フレイヤ・ファミリア』も引き込めなかつたみたいだし。これからどうする気なのかしら？」

久しぶりに会った霞さんに至つては、むしろ相手の方を心配している節すらあつた。もちろん、それですつきり納得できた訳ではないけど……弱小派閥にも弱小派閥なりに差し迫つた問題があつた。

まあ、当然と言うか何と言うか。それは決して、オラリオの命運を左右するような大

げさなものではないんだけど。

事の始まりは昨日の朝早く。

「冒険者依頼。ちよつと頼まれてくれないかな……」

ミアア様の眷属であるナーザさんからそんなお願いをされたのは、アイズさんとの訓練を終え、ダンジョンへ向かっている途中だった。

冒険者依頼。

その言葉は、エイナさんから……それと、ファイリア祭の時にクオンさんからも少しだけ聞いている。

まあ、あのお使いをそう呼ぶのか？——と、言われると首を傾げるしかないし、結局うやむやなまま終わってしまったけど。

「冒険者依頼？」

ともあれ。いつもの噴水前で待ち合わせていたリリに相談すると、彼女はきよとんとした。

うん、と頷いてから事情を説明すると、リリは口をへの字にした。

まあ、この時の僕はその理由なんてさっぱり見当もつかなかったし、その辺りはリリも承知の上だったらしい。

「まずギルドに向かいますよう。後学のためにも、少し冒険者依頼のことを勉強した方

がいいと思います」

サポーター改めアドバイザーの指導の下、冒険者クエスト依頼の基礎知識について学んでから、これまた経験豊富なリリの手助けを受けて無事に依頼の品——『ブルー・パピロの翹』を手に入れたところまでは良かったんだけど……。

「——ふふっ、このポジションが五〇〇ヴァリスですか？　ぼろい商売ですなぁ、いやはや羨ましい限りです」

報酬を受け取る場所から、様子がちよつとおかしくなつてきて——

「ベルには、悪いことしたけど……それでも、このままじゃあ、借金は返せないで膨らんでいく一方……！」

急転直下。意外な真実なんか転がり出てきたりして、

「ふははははははははははっ、邪魔するぞおおおおお——」

その矢先に、何かとつても分かりやすい性格の神様も現れたりして、

「明日までに今月分の支払いを行わなければ、今度は貴様等を追い出し、このオンボロなホームを売り払ってやるからなあ！　覚悟しておけよ!!」

と、まあそんな感じで。

この上なく分かりやすい形で、「ミアハ・ファミリア」存亡の危機が告げられたのだつた。

「あ、ああー……りり。りり。さっきの話だけどさあー」

ミアハ様からもらったポーシオンには何度も助けられた。

リリを助けられたのはナーザさんが作って譲ってくれたマジック・ポーシオンがあつたおかげだ。

だから――

「もつと冒険者依頼受けたいと思わない？ あれだけじゃ物足りないし……あ、あと後学のためにも」

と、我ながら驚くべき大根役者ぶりを発揮して、僕は――

「そうですねえ、元気を持って余しているりり達に冒険者依頼を恵んでくださる方々はどこかにいらつしやらないでしょうか」

「というわけで、ミアハ。何か仕事はないかい？」

いや、僕らは目の前の危機に挑む事を決めたのだった。

そして、今日。

アイズさんとの訓練を少し早めに切り上げさせてもらって、僕らはオラリオから外へと出発したのだった。

「ナーザのその恰好、久しぶりに見たわね」

「うん。私も久しぶりに着たよ……」

ナアーザさんはいつものゆったりとした服装ではなく、動きやすそうな旅装——濃いベージュ色の長衣コートに、紺色のズボン。首筋には茶褐色のマフラーを纏っている。

おそらく、これがナアーザさんの冒険者としての恰好なんだろう。

「しかし、霞よ。ずいぶんいい馬を借りてきてくれたようだが……予算は平気なのか？」

手綱を握ったままミアハ様が言った。

穏やかな性格に加えて賢いらしく、素人の僕らでも安心して手綱を握る事が出来る。

なので、行き道は「ミアハ・ファミリア」と霞さん、帰り道は——入団予定のリリも含めた——「ヘスティア・ファミリア」が交代で御者を担当する事になっている。

それに——比較する対象が少ない僕にはよく分からないけど——体力があつて脚も速いらしい。

「ええ、ちゃんと予算以内に収めていますよ。そういう交渉にはそれなりに自信がありますから」

最初の御者役を務めながら、そう言って笑う霞さんも普段とは違う格好だった。

上着こそいつもの雰囲気に近いけど、ナアーザさんと同じくズボンを、靴もハイヒールではなく、頑丈そうなブーツを履いている。

ちなみに、トレードマークのソフト帽は今日も健在だった。

「まあ、欲を言えば御者も借りたかったんですけどね。もしくは幌付きの馬車を」

昨日のうちに、霞さんはどこかの商人からこの馬車一式を借り受けてきてくれた。

それだけじゃなく、僕らが都市を出るための煩雑な手続きもほとんど済ませてくれている。

おかげでナーザさんやミアハ様は、借金返済のための『秘策』の準備に集中できたらしい。

「いいんじゃないかな。今日は天気もいいし、まだ暑すぎるような季節でもないしきー！」
もちろん、神様も動きやすい恰好をしている。

紫を基調とした乗馬服——何でも、個別に馬に乗って行くと勘違いしていたらしい——で、いつもと違ってちよつと凛々しい雰囲気がある。

衣装替えをした三人を見て、何故だかりりがちよつと悔しそうな顔をしていた。

（まあ、僕らはいつも通りの恰好で充分だしね）

元々冒険者だし。ダンジョンで動ける格好なら、大体の場所で問題なく動けるはずだ。

まあ、軽鎧とはいえ鎧を着こんでいるのでぬかるんだ場所とか水の中だと辛いだろうけど。

……ちなみに、エイナさんから少し聞いた話だと、水中戦に適應する発展アビリティ

や護布があるらしい。

もつとも、水中戦への備えが必要になるのは、『下層』になつてかららしいのでまだ先は遠い。

と、それはともかく。

「うむ。ヘステイアの言う通りだ。あの予算でここまで用意してもらつたというのに、さらに文句を言つては罰が当たるといふもの」

確かに幌はない——というか、そもそも荷馬車なんだろうけど、僕ら四人と二柱が乗つても少しはくつろぐ余裕がある。貸してくれた商人が気を利かせてくれたのか、それともこれも霞さんの交渉手腕なのか、簡素な敷布も用意されていた。

「もう、誰が神様に罰を当てるんですか？」

ミアハ様の言葉に、霞さんが苦笑した。

それからしばらくして。

「せつかくの場だ。到着するまで、交流を深めるがよい」

と、新しく御者役となつたミアハ様の言葉に従つて、僕らは話の花を咲かせ——

「ん、私はL.V. 2だよ……」

何時しか話題はナーザさんが右腕を失つた——借金の理由でもある、『銀の腕』^{アガクトリズム}が必要となつた——経緯へと変わつていた。

中層。今の僕にとっては遙か遠い未知の領域。

「そこでモンスターに丸焼きにされて……両手と両足をぐちゃぐちゃに食い荒らされちゃったんだ」

両足と左腕は何とかなったけど、骨まで食べられた右腕はダメだった——と、ナアーザさん。

その凄惨な経験に、僕は思わず背筋を凍らせていた。

「それにしても、まさかそんな事になってたなんてね……」

ナアーザさんの右腕を見ながら、霞さんが小さく呻く。

「まあ、いきなり引越したからおかしいなどは思ってたけど……」

「あの、昨日から気になってたんですが、霞さんはナアーザさんとお知り合いだったんですか?」

いや、ミアハ様たちの店は薬舗だから、冒険者でなくても例えば風邪をひいた時とかにはお世話になる訳だけど。

「知り合いつていうか、命の恩人ね」

「あの時は本当に危なかった……」

霞さんの言葉に、深々とナアーザさんがため息を吐いた。

「な、何があつたんですか?」

というか、霞さん。確かクオンさんもそう呼んでたような。

「四年前に、ちよつとね」

「それってクオン君と出会う前かい？」

霞さんの言葉に、神様が首を傾げ――

「いや、あとだ」

ミアハ様がそれに応じた。

「え？ クオン君がいて死にかけるって一体何があつたのさ？」

「いえ、ちよつとドジを踏んで大怪我してしまいました……」

「もしや、『ブレス・ファミリア』との抗争の話ではありませんか？」

唇に指先を当て、少し記憶を探るようにしてリリが言った。

「まあね」

「抗争、ですか？」

「ええ。四年前のちよつと今頃、クオン様達は『ブレス・ファミリア』という派閥と抗争状態にあつたと聞いています。……いえ、ちよつと今と同じ状況と言うべきでしょうか」

「今と同じ？」

「はい。『ブレス・ファミリア』を壊滅させた後、その後釜を狙う派閥とも抗争状態に陥つ

たんです。いえ、正確にはそれだけではないですけど。その流れの中で「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」とも揉めていますから」

「そうねー。あの時は、日替わりで違う派閥に追い回されてたわよ」

霞さんはあつさりと言うけど、それって物凄く大事おわじとなんじゃないだろうか。

「その「ブレス・ファミリア」っていうのはどういう派閥なの？」

「表向きは探索系派閥の一つでしたが……その後の調査で闇派閥残党だったことが明らかになっていきます。まあ、元々各派閥で持て余した無法者達が最後に行きつく派閥として知られてましたから誰も驚きはしなかったと思いますよ」

そんなのぼつかりだから冒険者はならず者揃いだって言われるんですよーと、リリは朗らかに笑った。

「ええと……。昨日から何回か出てきたけど、その闇派閥イヅイルスって？」

どれだけ冒険者に対してぐれていたんだろう……と、改めて胸中に浮かんだ疑問はこの際黙殺する事にして、別の疑問を口にした。

「かつてオラリオに存在した過激派ファミリアの総称だ。主神達は邪神を名乗っているな、オラリオを混乱の渦中へと追いやったのだ」

そう教えてくださったのは、ミアハ様だった。

「邪神、ですか？」

「うむ。厳密な定義があるとも言い難いが……秩序を嫌い、混沌を良しとするあまり、最後の一線すら越えた極めて悪質な派閥と思っておけばまず間違いなからう」

ガタン、と大きめの石を乗り越えて馬車が揺れた。

その短い揺れが収まってから、ミアハ様が続ける。

「今からおよそ一五年前に台頭し始め、ギルドと各ファミアの連携によってようやく壊滅したのが五年前の事だ。その間は『暗黒期』と呼ばれている」

「まあ、リリルカちゃんじゃないけど、今の冒険者だつてならず者が多いんだけど……そういうのとは一線を画した連中よ。強請りに集りくらいならまだ可愛いもんで、強盗に殺人、麻薬や人身売買。他にも思いつく限りの犯罪行為に関わつてたわね。それに街中で派閥抗争を起こして、関係ない人たちを平然と巻き込んだり……まあ、とにかく酷い時代だったわ」

生まれも育ちもオラリオ——と、前にそう言っていた霞さんがため息を吐いた。
「そ、そんな事があつたんですね……」

世界の中心と謳われるオラリオでつい最近までそんな事が起こつていたなんて。

「別に派閥抗争を起こしたのは閩派閥イギリスだけじゃないけどね。群雄割拠つていうのかしら。あの混乱に乗じて勢力を拡大しようと企んだ普通の派閥同士もよく抗争を起こしてたし。路地裏に死体が転がっているなんてしょっちゅうだったわよ」

「うむ。……まさに狂乱の時代であったな」

げんなりとした様子で呻く霞さんに、ミアハ様が頷いた。

「昨日、霞様を手伝う合間に少し情報を集めてみたのですが……どうやら【イシユタル・ファミリア】はその闇派閥イツイルス残党との関与が疑われているみたいですね」

しばらくの沈黙の後で、改めてリリが言った。

「そうなの?! っていうか、残党がいるの?!」

「残念ながらな。噂はそれこそ五年前からずっとあるが……それが、本当に『暗黒期』を生き延びた残党なのか、新たに生まれた派閥なのかは分からぬ」

「まあ、悪い事を考える連中はいつの時代にもいるしね。『世に悪が栄えた試しなし』なんて言うそうだけど、途絶えた試しもないのよ」

「と、いうか。むしろ栄えてたからね、五年前まで」

しみじみとした様子で、霞さんとナーザさんが頷く。

「えつと……」

返事に困り、曖昧な笑みを顔に張り付けてから、

「そ、それじゃ霞さんもその闇派閥イツイルスの抗争に巻き込まれたんですか?」

「巻き込まれたっていうか……。まあ、姉さんの仇だったのよ【ブレス・ファミリア】の連中は。いえ、そいつらはまだ下っ端でもう少し厄介な相手が控えていたんだけど」

「仇、ですか？」

「『月夜叉』……澄香・アンジェリック様ですね。霞様がクオン様より前にマネージャーを務めていた剣闘士です。一六歳で上級剣闘士に名を連ねたと聞いていますが……」

「まあね。強かったわよー、姉さんは」

誇るように、霞さんは笑った。

「でも、ちよつと勝ち過ぎたのかしらね。ある闘技場の元締めに目をつけられて……」

そして、少し口ごもってから、

「ま、まあ、その辺の事はいいでしょ。それで、敵討の途中でドジ踏んで「ブレス・ファミリア」に捕まってね。ちよつと酷い目にあわされたってわけ。アイツが助けに来てくれるのもう少し遅かったらナーザー達に会う前に死んでたわね、きつと」

努めて明るく、そう言った。

——のだけど。

「いや、ちよつとつていうか……」

眉をしかめたのはナーザーさんだった。

「例えて言うなら、果汁ジュースに加工された後の果物みたいな感じだったけど……」

その言葉に、ミアハ様までが重々しい様子でうむ、と頷いた。

「う、うわあ……」

「な、何てストレートな例え……」

リリや神様が顔をひきつらせる。

多分、僕も同じような表情をしているに違いない。

「ま、まあ……。実際、アイツの情報をつかせるために生け捕りにされた訳だし……。そうじゃなきゃ、あつさりと殺されてたわよ」

何だか、霞さんにも思つた以上に過酷な過去があつたらしい。

方向性が違うだけでナーザさんにも負けないというか何というか……。

……いや、そもそも勝ち負けを競うような事じゃないけど。

「い、命の恩人つて、フィリア祭の時の話だと、もつと軽い雰囲気じゃなかつたかい？」

ゴロツキから助けてもらった——と、そういう話だつたような。

「あ、あれですか。あれも嘘じゃないですよ。姉さんが亡くなつた後、新しい剣闘士を探している時に闘技場の主の策に嵌まつて半ば強引に借金させられて……。それで取り立てにきたゴロツキに絡まれている時にアイツと出会つたので」

まあ、あのままだつたら散々慰み者にされた挙句、良くてその辺の怪しげな娼婦宿、悪ければログ湖かダンジョンの中にも捨てられてたでしょうけど——と、霞さん。

「充分に大ごとじゃないかああああああああつ!？」

それもまた少しも軽くない。命の恩人と呼ぶに値する深刻な事態だつた。

「いいんですよ。アイツのおかげで一括返済できましたから」

悲鳴を上げた神様に、霞さんはあっけらかんと笑って見せた。

なるほど、そういう調子だから神様も嘘とは思わなかったのか。

「あ！ それってデビュー戦の事ですね！」

と、今度はパンと手を合わせて、リリが目を輝かせる。

「知ってるの？」

「はい！ 闘技場『ライン・ハマト』の経営者^{オーナー}直属の剣闘士、『ワンダフルボディ』こと

ジャウザーとの一戦！ 推定Lv. 3と言われていたその剣闘士相手に圧倒的な強さ

を見せつけた事で、無名の新人だったクオン様は一夜にして名を馳せる事になるんです

！」

「そうそう。これが大穴もいいところでね、借金一括返済どころか一〇万ヴァリスの儲

けよ」

「そんなにですか?! リリもサポーターではなく、剣闘士のマネージャーになるべきで

した……！」

目を大きく見開き、リリが戦慄く。

「いい剣闘士が見つければ、なんだけどね。下手なの掴まされるとアイツに会う前の私

みたいに借金ばっかり増えるわよ」

「うっ?! やはり、そう美味しい話はないという事ですね……」

「つていうか、そんなに大金が動くのかい? 賭博剣闘つて確か違法行為だろう?」

一転して項垂れてしまったリリをよそに、今度は神様が訊ねた。

「まあ、だからこそつていう面もありますよ。それに、その闘技場は貴族の直営ですから、元々配当金が良かったんです。……その分、色々と危険ですけどね。掛け金は五〇〇〇ヴァリスからしたし、それなりの貯えがないと、負けた途端に身ぐるみ剥がされる事になります。私は元々後がなかったたので、気にしませんでしたけど」

「やはり堅気の世界ではないという事ですね」

「本当にあれは一世一代の賭けでした——と、苦笑する霞さんに、リリがしみじみと眩
き、

「さ、サバイバル過ぎる……ッ!」

神様もまた、慄然とした様子で結んだ黒髪を震わしている。

「今回もアイツがいてくれれば、一発ドカンと稼がせるんだけどねー」

「流石にそういう訳にもいくまい。これは我々の借金なのだから」

「それに。今まで焦げ付かせてた分は、あいつからもらった『カドモスの泉水』で支払ったし」

あの時の水か——と、思わず戦慄する。

エイナさん曰く、一瓶一千万ヴァリスはするらしい。

……あの、師匠。ちよつと期待値高すぎませんか？

「むしろ。何か当てがあると踏んだから、あの糞ジジイも出しやばつてきたのかも」

「……まあ、あり得る話ではあるな」

唸るナアーザさんとミアハ様の横で、僕はひとりガクガクと震えていた。

「そ、それはそうと。結局何で、クオン君がいながらミアハの世話になったんだい？」

先程とはまた違った陰鬱な空気に、神様が強引に話題を変えた。

「あの子だったら、よつぽど重傷でもすつきり治せちやいそうだけど……」

確かに気になる。だって、クオンさんだったら僕らの傷どころか傷んだ武器まで直せるわけだし。

「……いえ、その時はまだ使えなかつたのではないですか？」

霞さんが何か言うより先に、リリが呟いた。

「えっ？ リリ、それってどういう意味なの？」

「ええとですね。クオン様が本格的に魔法を使い始めたのは、【おつじや猛者】との決闘……いえ、

その途中で乱入してきた【古王スルト】との一騎打ちからなんです。リリは直接見ていませんが、その一戦で進化したと言われるくらい戦い方が洗練されていたと聞きます」

「ええ。リリルカちゃんの言う通りよ。アイツ、あの頃は精々火の玉を放つたり、掌で爆

発させるくらいに事しかでできなかったのよ。ほら、この前記憶を失っていたって言ったでしょ？ どうもその影響だったみたいね」

あの時、斬り合いながら思い出したんだって——と、霞さん。

それはそれでとんでもない話なんじゃないだろうか。

「まあ、もつと前から、それなりに記憶は取り戻してただけだね。そのせいで、まー荒れたこと荒れたこと。あの時ほど『剣の切っ先より死に近い』っていう謳い文句がしつくりきた時期はないわね」

一体どんなことを思い出したんだろう。

僕の記憶にあるクオンさんは、もちろん村を救ってくれた英雄でもあるけど……それでも、基本的には暢気で気ままな旅人でしかない。

この前の闇霊との一戦で、それだけではない苛烈さもあるって分かったけど。

「確かに荒れていたな」

ぼつりと、ミアハ様は呟いた。

「そうなのかい？」

「うむ。まさに手負いの獣と言った有様であった」

「……ちよつと想像つかないなあ」

やっぱり、神様もそうらしい。

「私だけだったなら、霞は救えなかったであろうな」

「? どういう意味さ?」

「おそらく、近づけさせなかったであろう。実際、霞にハイ・ポーションを浴びせたのはナーザだ」

「あの時。あいつ、ミアハ様に剣を突き付けましたからね」

「えっ? いきなり?」

「いきなりだ。……あの日は酷い土砂降りだな。そんな中、クオンは傷だらけで、同じく血塗れの霞を抱きかかえて路地に蹲っていた」

冷たい雨から庇うように。零れ逝く命を繋ぎとめるように。

ミアハ様は遠い過去を見るように、そう呟いた。

「あいつの事だ。このままでは霞が死ぬと分かっていたであろう。だが……」
「助けを求めなかった。オラリオの治療院は、まず間違いなく神がいるから」

ミアハ様の言葉を、ナーザさんが引き継ぐ。

「『神が人を救うだと? 笑わせるな』——って、あの時あいつはミアハ様にそう言ったよ」

「……そんなにかい?」

神嫌い——と、言うのは知っていたつもりだったけど。

「うむ。何とか説得を試みたが、取りつく島もなかったな。それで——」

「まあ、放つといたら死んじやうし。私が強引にハイ・ポーションを何本かぶっつけた」
それで、強引に治療院——当時の『青の薬舗』まで引きずっていったらしい。

あと、付きつきりで看病したのもナーザさんだという。

「ギリギリ、だったね。もう少し遅かったら、きつと死んでた」

「まあね。正直、死ぬと思つたし。つていうか、意識が戻つた時、ちよつと気恥ずかしかつたくらいよ」

「何でだい？」

「ま、まあ。遺言と言いますか……そんな感じで色々と」

神様が訊くと、霞さんは指先で頬を掻きながら小さな声で言つた。

「まあ、敵討ちも果たしたし。惚れた男の腕の中つていうなら、死に場所としては悪くないし。やつぱり……こう、色々。ね、リルルカちゃん。分かるでしょ？」

「ま、まあ。気持ちには、分からないでもない、ですけど……」

助けを求められたリリが、困つたように呻く。

「これこれ、二人とも滅多なこととは言うものではない。霞の言う事が間違つているとは言わぬが、それはもつと歳をとり、天寿を全うする時で良いであろう」

医神として、流石に見過ごせなかつたらしい。

ミアハ様が二人を窘める。

「それに、あの時もしお前が死んでいたら、オラリオには血の雨が降ったであろうな」
「うん。【ロキ・ファミリア】とかは絶対なくなってたよ」

ミアハ様の言葉に、ナーザーザさんが深々とため息を吐いた。

いや、確かに【ロキ・ファミリア】と揉めたっていう話は何度も聞いているわけだけ
ど……それって僕が思っているよりずっと深刻な出来事だったんじゃないだろうか。
「あー……なるほど。最初にちよっかい出したのが主神だったって聞きますし……」

アイズさんに訊いてみた方がいいのかな？——と、悩んでいると、リリが更なる爆弾
を投入した。

「下手をするといシユタル様より先に——と、いう事になっていたかもしれませんがねえ」
……否定できない。

いや、そのロキ様について何か詳しく知っている訳じゃないんだけど、ミアハ様でも
ダメだったなら、他のどんな神様でもダメだろうって予想くらいはできる。

「うむ。リリルカの言う通りだ。ロキも決して悪い神ではないのだが、あの頃のクオン
とは相性が悪すぎたと言うよりないな」

「そういうこと。霞がいなかったら、かなり危なかった。オラリオが、全体的に」

「そうかしら。その辺はむしろアイシャのおかげだと思うけど」

しみじみと呟くミアハ様とナーザさんに、霞さんはそうぼやいた。

「お前が生きていたから、クオンも彼女を受け入れる余裕があったのだと思うが」

「それは、否定できませんけど。アイシャもいきなり斬りかかってきた口ですし」

「あの、アイシャさんてどなたなんですか？」

新しく出てきた誰かの名前に、首を傾げる。

名前からして女の人みたいだけど。

「あー…。ひよつとして、噂のバーベラではないでしょうか」

「噂の？」

「ええ。クオン様は歓楽街で豪遊していた——と、いう類の噂が良く付きまっていますが、

それはおかしいんです」

「そうなのかい？」

「はい。賭博剣闘が盛んなのは歓楽街ではなく繁華街です。普通に考えると、歓楽街だ

と誤解される理由がありません。その後【九魔姫^{ナインヘル}】様や【象神の杖^{アンクेश}】様と交流を持つよ

うになったから、と考へても不自然です」

「そうねー。リヴェリア様はもちろん、シヤクティも身持ちが堅いし」

と、霞さんが苦笑した。

「ですが、噂になるのが霞様だけなら、やはり歓楽街と結びつける理由がありません。で

すが、バーベラが関わっているなら、それだけで充分です。実際、もう一人黒髪の女性が一緒だったという噂はよく聞きましたし」

あまり詳しくないけど、確か【九魔姫】——ハイエルフのリヴェリア・リヨス・アールヴは緑色の髪をしていると聞いています。

【象神の杖】君ってガネーシヤのところの団長だろ？ 藍色の髪の麗人って聞くし、その辺を見間違えたんじゃないのかい？」

「いえ、それもないでしょう。正しく言えば、黒髪で褐色肌の女性ですから」

「あー……。そうなるとヒューマンじゃないね。いや、日焼けしてる可能性もあるけど」

どちらかと言えば、アマゾネスの特徴だった。

「もちろん、可能性はありますが【象神の杖】様に限って言えば、そういう噂はありません。少なくともリリは聞いた事がないです」

「そうね。シャクティはどっちかと言えば色白美人よ」

リリの言葉に、霞さんも頷いた。

「はい。ですが、バーベラを侍らせていた、とするなら歓楽街と結びつけるのは簡単です。複数人いたとも聞きますが……」

「ああ、それはアイシヤが変装してたからね。ちよくちよく違う格好してたわよ」
「なるほど。それでですか」

というか——

「昨日からずっと思つてたけど。サポーター君、ずいぶんと詳しいね？」
うん。僕もそう思う。

「ひよつとして、剣闘士好きなの？」

それとも、賭博剣闘が好きなんだろうか。

「ほあ!?! い、いえ。そんな事はないですよー」

「ううん……。怪しいな。まるつきり嘘じゃないけど、本当でもないね」

僕ら^{人間}の嘘を見通す神様の目が光る。

「本当です！ 別に賭博剣闘に興味は……。まあ、まるでないわけでもないですが」

先程の話ではないですが、当たれば儲かりますし——と、小声かつ早口で言い添えてから、

「別に剣闘士が好きなのはありません！ どうせ中身は冒険者ですから!!」
と、きつぱりと言い切る。

「まあ、嘘じゃないみたいだけど」

神様が頷くと、ただ、とリリは小さく付け足した。

「クオン様はギルドも認めるLv. 0。冒険者ではありませんから」

リリが言いたい事は、分かった。

「普段から威張り散らしている冒険者が……それも、上級冒険者はおろか第一級冒険者までがL.V. 0に頭が上がらない。それどころか、大派閥までが揃って恐れていたんです。リリから見れば、こんなに痛快な光景はありません。なので——」
と、リリはうつむき、

「そういう意味で、ずつと応援者ファンなんです」

思わず調べてしまうほど——と、蚊が泣くような細かい声で言った。

そして——

「どうせ歪んでます！ ひねかれています！ 分かっていますから！」

ぷい、とそっぽを向き、リリがむくれる。

そんなリリの頭を、霞さんが撫でた。

「わぷ?! か、霞様!？」

「嬉しいこと言ってくれるわねー」

そう言つて笑う霞さんは、本当に嬉しそうだった。

「そ、そんな事は……」

「あら、嘘じゃないわよ？ だってほら、私達つて所詮は日の当たらないところに生きる身だし。賞賛とか憧れとか、そういうのとは無縁なのよ。応援者ファンがいない訳じゃないけど、大体は稼がせてくれるからって理由だし。刺激的な光景を見せてくれるから、なん

て言うのもいるし」

だからね、と霞さんは笑う。

「少しでも誰かの支えになつてたなら嬉しいわ。アイツが照れる顔が目には浮かぶわね」
「照れるつてクオン君がかい？」

「ええ。どう反応していいのか分かりません、つて顔をしますよ、きつと」

ああ、その様子を想像するのはとても簡単だった。

村を救つてくれた時も、そんな感じだったから。

「ええと、それでバーベラつて？」

しばらく、その穏やかな空気が続いてから。

ガタン——と、再び大きめの石を車輪が踏み越えたところで、僕は改めて問いかけた。
「えっ?! ええと、それはですね——」

リリがまた慌て始める。

「へ、ヘステイア様！」

「ぼ、ボクに説明しろつていうのかい?!」

「ええ、ここは主神保護者の出番です！」

何かいま、おかしい響きがあつたような気が……。

「そ、そういう事は君に任せるよ、サポーター君！」

「ハスティア様も派閥育兒を丸投げする運営を投げ出すダメ主神親父なんですかあ!？」

いや、うん、やつぱり何かおかしな響きがあるような。

「ふあ!？」　そ、そんな訳ないだろ！　ないけど……でも、ボクは処女神なんだぞお……」

「それ以前に寵の神、ひいては家庭の守護神なのではないのですか?!？」

そして、よく分からないけど、神様がめちやくちや圧されている。

「ええと、神様？　リリ?」

何か悪いこと聞いちゃったのかな……。

「ええとね。バーベラっていうのは、『戦闘娼婦』って書くの」

何故だか顔を赤くしながら言い合う神様たちに助け舟を出したのは、霞さんだった。

「戦闘娼婦……?」

「冒険者を兼業する娼婦と言うか、娼婦を兼業する冒険者と言うか……。まあ、そんな感

じね」

「つまり、『神ファルナの恩恵』を受けた娼婦ってことですか?」

「うむ。だが、元々はダンジョンへの遠征に同行したアマゾネス達の事をそう呼んだと

されているな」

無論、私もさして詳しいわけではないが——と、前置きをしてからミアハ様が言った。

「その当時にどう呼ばれていたかは私も寡聞にして知らないが、その原型となった存在

は『古代』からいたと聞く。他に剛胆かつ色欲に忠実なアマゾネスらの様子を『戦場に立つ娼婦』と書き現し、それがのちに誤訳されたことで生まれた言葉だという説もある」まるで歴史の講義を聞いているような気分だった。

「その後、オラリオの一面を占める『歓楽街』が生まれてからは、自分達の縄張りを守る衛兵と言う側面が強くなり、さらに歓楽街の高級志向が高まるほど、高級娼婦と同一視されていった——と、というのが今のところ定説となっている」

いや、実際にオラリオの歴史の一部なんだろう。

気づけば、エイナさんの講義を聞く時のように姿勢を正していた。

「そして、その傾向は『イシユタル・ファミリア』の台頭と共にさらに顕著化した」

そう言えば、そのエイナさんから「イシユタル・ファミリア」は当時敵対した派閥の主神をすべて天界に送還したって教わったっけ。

その結果として歓楽街は「イシユタル・ファミリア」のものとなったんだろう。

このオラリオの一面を支配した——改めてそう考えると、どれだけ強大な派閥だったかよく分かる。……いや、むしろ途方もなさ過ぎて逆にピンとこないくらいだけど。

「つていうか、ミアハ。何でそんなに詳しいのさ?」

「先にも言ったであろう。詳しいわけではない。……だが、何分そういう界限は昔から我ら医療者も無関係ではいられん。お世辞にも好ましい関係ではないが、な。特に暗黒

期の頃は様々な事情で私娼が氾濫したゆえ、そういう悲劇も多かった」

ミア様が言わんとしている事は……まあ、鈍い僕にも何となく分かった。

「何度でも言うけど、あの頃は本当にいろんな事が酷かった。基本的には真つ当な治療院じゃなくて、モグリの治療師が対応してたけど……そいつらが杜撰なこととしたせいで余計に体を壊した人がたくさんいる。それでも足りなかったのか、ダンジョンの中に捨て子が横行したって話も聞いてるよ」

と、ナーザさんまでが顔を曇らせる。

「ダンジョンの中って……」

「まあ、そうすれば骨も残りませんからね。一応、都市伝説という事にはなっていますが……」

いつそ怒りすら宿した神様に、霞さんが呟いた。

それはそうだろう。屈強なドワーフの戦士ですら、ダンジョンに斃れば遺体が見つからない事も珍しくはないと聞いている。いや、実際にダンジョンに潜れば嫌でも実感できる。

子ども——特に赤ちゃんなんて、骨どころか血の一滴すら残らないはずだ。

その時を誰かが目撃していないなら、そんな噂すら立ちようがない。

「うむ。本当に酷い時代であった。悲劇ばかりが折り重なり、救いの光が見えぬほどに。」

何をどうするべきだったのか。どうすればみなを救えたのか。仮に『神の力』アルカナムを使えたとして、そんな事が可能だったのか。今でも分からぬ」

当時の苦悶や苦悩、あるいは無力感を思い出したのか、ミアハ様が嘔み締めた声で呻いた。

それが、暗黒期。イツイルス闇派閥がもたらした狂乱の時代なんだろう。

「まあ、これらはその時の名残というやつだ。苦い思い出だが、知識に罪はなからう」
しばらくして。努めていつも通りの様子で、ミアハ様が言った。

「さて。余計な事を長々と話したが、戦闘娼婦バドベラとは「イシユタル・ファミリア」所属のアマゾネス、というのが今のオラリオで一般的な認識であろう」

「まあ、実際は他の種族もいるみたいだけどねー」

霞さんと言うには、何とエルフもいるのだとか。

清廉潔白なエルフが娼婦というのは何だか凄く不思議な感じだ。

「ええと、それじゃそのアイシャさんってというのは……」

アンティアーネイラ【麗 傑】様——アイシャ・ベルカ様の事だと思います」

「知ってるの？」

「はい。【イシユタル・ファミリア】幹部のLv. 3。Lv. 4へのランクアップ間近なのではないかと噂されるほど凄腕の冒険者でもあります。もちろん、種族はアマゾネス

です」

「ええ、そうよ」

「つていうか、サポーター君……」

リリに頷く霞さんと、半眼で見やる神様。

「違います！ これは当然の嗜みです！」

憤然とした様子でリリが言い返した。

「まあ、普通に考えればこんな大派閥とリリが関わる事なんてありえませんが……。ですが、「イシユタル・ファミリア」は色々と厄介な事で有名ですからね。何かのはずみで難癖を付けられたら、そのまま無理やり仲間姉妹にされかねませんし、冒険者相手に盗賊業をやっていたリリが警戒するのは当然なんです!!」

「アイシヤはいい奴なんだけど……派閥としては、色々黒い噂が絶えないわね」

力強く断言したリリに、霞さんが苦笑した。

「それで、そのアイシヤさんで……」

「ええ。リリルカちゃんの言う通り、馴染みの戦闘バトル娼婦よ」

「ええっ!? だ、だつて霞さん……」

その、恋人なのは……。

「まあ、色々とあつてね。つていうか、アイツ昔から寝言で別の女の名前を呼ぶような奴

だし」

「……それは控えめに言って最低なのではないですか？」

リリが半眼で呻いた。

「そうは言っても、元々記憶を失っているのは織り込み済みだったしね。そういう関係の相手がいたとしても文句は言えないでしょ」

「そ、それはそうなのでしようが……」

「まあ、毎回違う女の名前だったりするんだけどね」

「やはり最低ではないですかあ!？」

「ロードランとかドラングレイクとかロスリックとか……まあ、アイツが時々口にするその街だか国だかに現地妻がいるのは間違いないわね」

お、大らかすぎる……!？」

私達はオラリオ担当ね——と、あつけらかなと笑う霞さんに、思わず戦慄を覚えていた。

「め、女神ですか?! 霞様は女神なんですか!？」

「お、落ち着くんだサポーター君! むしろ女神って嫉妬深くて執念深いのが多いんだぞお!？」

「ええ、ヘステイア様のおかげでよおく分かってますよーだ!？」

「なにいい!? それはどー言う意味だいっ!?」

「か、神様あ!? リリいい!」

唐突に取っ組み合いを始めてしまった神様とリリにおろおろしていると、ナアーザさんががしみじみとした様子で唸った。

「不思議な関係。霞なら、相手には困らないのに」

「ナアーザまでシャクテイ達と同じこと言わないでよ」

「いや、多分みんな言うんじゃないかな」

「リリもそう思います」

取っ組み合った姿勢のまま、神様とリリまでが冷静に言う。

「いいの。そりや、この浮気者と思う事はあるけど……アイツがいなかったら、敵討ちなんて夢また夢の話だったし。それどころか、今頃良くて娼館行きだった訳だしね。それにまあ……多分、みんな私達と同じく訳アリだろうし」

「訳アリ、ですか?」

「例えば私は敵討ちに付き合ってもらった訳だし。そういう何か表沙汰にできない事情を抱えていたり、何かの理由で日の当たらない場所に追いやられた誰かを口説き落とすのがうまいのよ、アイツ」

と、いうよりあれね。むしろ私達の方が焼かれると分かかっていても誘われずにはいら

れない蛾みたいなもののかも——と、霞さんは笑う。

「で、ではそのアイシヤ様も?」

「ええ。……ええと、これ言ってもいいのかしら」

リリの問いかけに困った様子で、霞さんは口ごもってから——

「アイツが言うにはイシユタル様は人間を生贄にして何かしようとしてたらしくて——」

「えっ?!」

「で、アイシヤは二年位前にそれを止めようとして、ひとまず成功したはいいんだけどそのせいで拷問とかかされたみたいで——」

「ええっ!?!」

「しかも、イシユタル様って『美の神』でしょ? その時に骨の髄まで『魅了』されて、逆らえなくさせられてたみたいでね。それに、アイシヤって面倒見がいいから、他の戦闘娼婦パルベラにも慕われてたんだけど、その子達も人質みたいにされちゃって。で、近いうちにまたその生贄の儀式をしようとしてる、って状況だったみたいね」

「うえええええっ!?!」

生贄。拷問。人質。何だかまたしても壮絶な単語が続き、僕らは揃って悲鳴を上げていた。

「まあ、ちょうどそれくらい頃からアイシャはうちの店に顔出さなくなったし、多分本当なんでしようね。アイツがそんな嘘を吐く理由もないし。身請けで済めばそれでもいいとは言つてたけど……」

「そう上手くはいかなかった、ということか」

「ええ、そうみたいです。まあ、アイツだって別に本気で期待してた訳じゃないでしょうけど」

ミアア様の言葉に、霞さんが肩をすくめる。

「なるほど。この騒動には、そんな事情があつたんだね……」

「イシユタルよ。何故そのような愚かなことを……」

二柱ふたりの神様が、深々とため息をついた。

「ま、まあ。それはそうと」

どうにも重苦しい雰囲気が続くこの状況をどうにかしよう、霞さんが大きく話題を変えた。

「リリルカちゃんはどうなの？ やっぱり気になる人とかいる？」

それも、もの凄く強引に。

「ほあ!?! ええとですな——!」

「ほほう。それはボクも気になるな」

キラン——と、何故だか瞳を鋭く輝かせながら神様が迫る。

それからしばらくして——

「ミアハ様は私の気持ちに全く気付いてくれない——」

「あーわかるわかる。うちのベル君も察しが悪くてね——」

「……リリも妹こぶん扱いされている節があります」

「まったく、男どもはこれだから——」

——と、そんな感じで。

いつの間にか完全に打ち解けあい、何かを共有し合う女性陣神様たちと、訳も分からないまま肩身の狭い思いをする男性陣僕とミアハ様の姿がそこにあるのだった。

2

それからしばらくして。

太陽が上空に上り出す頃には、僕らも目的地へと到着していた。

「い、い、い」が……」

「へえ、密林と言うだけの事はあるなあ」

天界生まれの神様はもちろん、田舎育ちの僕ですら圧倒されるほどの光景がそこにあった。

僕らの目的地。その名前を『セオ口の密林』と言った。オラリオの東に連なるアルプ山脈の麓に大森林である。

いわゆる原生林というもので、聳え立つ樹木は総じて樹高が高く幹も太い。

地面にも野草や野花、苔に羊歯など様々な植物が所狭しとばかりに隆盛を極めてい

る。
(緑の王国……)

村の近くの森よりもさらに深いその密林の前に、思わずそんな言葉が浮かんだ。

「それでは、まず目的地の確認をしましょう」

ダンジョンにいる時と同じく真剣な表情を浮かべ、リリが地図を広げた。

鬱蒼としたこの密林は見晴らしが悪く、獣や野生のモンスターの他に、野盗や他国の密偵、あるいは話題の闇派閥残党イヴイルスなんかが潜伏する格好の場所でもあったらしい。

だから、定期的に『山狩り』が行われていた名残……それと、周辺の猟師たちが狩りに入る事もあるので、簡単な地図なら存在するらしい。

と、言っても沼地とか崖とか危険な場所を中心に大雑把な地形が書かれただけのものだけだ。

「うん。現在地はここ。それで、私が目をつけているのはここ」

手袋に覆われた右手の指先が、地図の一点を示した。

「大きな窪地がある。きつと、そこに巣もあるはず」

巣といつても、野生動物のものではない。

野生のモンスターの物だ。

「モンスターの『卵』か……」

ドロップアイテムではない、モンスターの『卵』。

それが、僕らが求めるものだ。

「ダンジョンの壁とか床から生まれてくるのを見慣れているリリ達にとっては、何だか凄く違和感ありますねえ」

何となく抱いていた違和感を、リリが見事に代弁してくれた。

遙か昔、まだ神蓋パベルの封印がなされていなかった頃。ダンジョンから外へと進出したモンスター達は世界各地に広がっていった。

僕らの村を襲ったコボルト……それに、小さい頃にボコボコにされたゴブリンなんかは、みんなその子孫だ。

母なるダンジョンから離れたモンスターの多くは、普通の動物と同じようにそれぞれ生殖行動をとっては、今も地上に繁栄している——と、いうのはもちろん僕だっけ知っていた。

そうやって繁殖しているなら、『卵』があるのも不思議じゃないんだけど……。

「そう？　むしろ壁から生き物が出てくる方が不気味じゃない？」

まあ、普通に考えればそうなのかも。

実際、ボクも冒険者になったばつかりの時は壁から生まれてくるその光景に驚いたはずなんだけど……慣れとは怖いもので、今や僕もリリと全く同じ気分だった。

「まあ、それはともかく」

と、リリが仕切りなおす。

『『卵』があるということは、モンスターそのものも棲息しているという事です。この先はあっても精々が獣道ですし、慎重に進まなくてはなりません』

「うん。分かっている」

すつかり手に馴染んだ《神様のナイフ》と、ミノタウロスに襲われた日に無くしたはずの——アイズさんが拾ってくれていたショートソードを改めて確認する。

もちろん、鎧の具合も問題ない。今日もしつくりと僕の体に噛み合ってくれる。

「何より、ヘスティア様とミアハ様、霞様を守りながら進む必要があります。ですが、このパーティーはちよつと後衛に偏り過ぎと言いますか……」

「ごめん。近づくと、動けなくなっちゃうから……」

耳と尻尾を落ち込ませながら、ナアーザさんが言った。

生きながらモンスターに四肢を食い散らかされる。その凄惨な経験は、ナアーザさん

の心に深い傷跡トラウマを残していた。

それこそが、冒険者から薬師に転職した大きな理由でもある。

「距離があれば、まだどうにかなると思うけど……」

自分の背丈ほどもある長弓ロングボウを握りながら、呻くナーザさん。

元々それが得物で、射撃の腕には何の不安もない——と、ミアハ様が捕捉した。

「そればかりは仕方ありません。なので、今回はリリが中衛を受け持ちます」

と、リリは僕が新しく借りていた方のショートソードを抜いて見せる。

まあ、小柄なリリが持つと普通のロングソードのように見えるけど。

「大丈夫なのかい？」

「まったく大丈夫ではありません」

神様の問いかけに、リリは剣を鞘に戻しながらあつさりと言い切った。

まあ、確かにリリがクロスボウ以外の武器を使っているところを見た事がない——いや、前に魔剣も使ってたけど。

「リリの剣なんて、ゴブリンやコボルトに何とか通じるかどうかのヘツポコぶりです。いくら外のモンスターでも過信されては困ります。あくまで念のため。最後の手段とお考え下さい」

繁殖のためには『魔石』の力を削る必要があるという。

その結果、外のモンスターはダンジョン内の同種より大きく弱体化しているのが常だ。

……それこそ、子どもだった僕がボコボコにされてもこうして生きていくくらいには。

とはいえ、危険だという事は何も変わらない。

「なので、ベル様は前衛を。いえ、先行しての遊撃を受け持つてもらいます」

つまり、神様たちにモンスターを——あと、野生の猛獣も——近づかせないよう立ち回る必要があるという事だ。

もちろん、今までもリリにモンスターが行かないように気を付けていたけど……リリの場合は、一匹や二匹くらいだったら自分で対応してくれる。

でも、神様たちはそうはいかない。

改めてそれを自覚した途端、いつもと違う緊張感が体を満たしていく。

（魔法も覚えたし、多少の距離があっても問題なく対応できるはずだけど……）

ダンジョンと同じく、モンスターが僕らの進行方向から現れてくれるとは限らない。

場合によっては、神様たちを挟んだ後方から攻撃を仕掛ける必要もあるだろう。

遊撃とリリが言い表したのはそういう事だ。

「今までになく負担が大きくなってしましますが……」

「大丈夫。任せて」

少し見栄を張って、トンと鎧の胸元を叩いて見せる。

責任は重大だけど、僕だって少しは成長しているはず。

「じゃあ。行くよ」

ナアーザさんの号令の下、僕らはその密林へと踏み込んでいった。

……

(凄いな……)

田舎育ちだし、森の中にはそれなりに慣れていてもりだったけど。

『^{ファールナ}神の恩恵』によって強化された『器』。それに流れ込んでくる情報量に圧倒されていた。

ひしひしと感じるモンスター……あるいは、獣の息吹。

木の葉を揺らす鳥の羽ばたき。

踏みしめる腐葉土の匂い。

強化された五感は、それらを丁寧に拾い上げていく。まるで獣人にでも生まれ変わった気分だ。

た気分だ。

ダンジョンで馴染みのある土石系——迷宮構造の階層ではこうはいかない。霧に包

まれた草原とが広がる八階層から一〇階層でも、だ。

未だ見ぬ『中層』。その中で最も深い一九階層からの二四階層にかけて広がる『大樹の

「迷宮」というのもこういう感じなんだろうか。

「あ、ヘステリア様。そこに苔の生えた岩がありますから、気を付けてくださいね」
少し後ろからリリの声が聞こえてくる。

申し訳ばかりの『道』——文字通りの獣道から外れて久しい。

ショートソードを鉦代わりに下草を払いながら進むその道のりは、僕冒やリリ者にも多少の困難さを感じさせるほどだ。

「いやあ……。これは思った以上にキツイね……」

「うむ。日頃の運動不足がたたるとな」

なるべく道を踏み固めながら進んでいるけど……。それでも、下界では常人と変わらぬい神様たちは僕らよりずっと険しく感じるだろう。

「それにしても……。これは、ちゃんとした靴を履いてきて良かったわ」

「そうだね。これでもし、いつものサンダルなんかできてたら、今頃悲惨な事になってたよ」

それぞれしつかりした作りのブーツを用意していた霞さんと神様が苦笑しあう。

「とうか。フィリア祭の時も思ったけど、霞君って結構体力あるね」

確かに。霞さんはまだ少し余裕がありそうな雰囲気だった。

「まあ、荒くれ揃いの剣闘士のマネージャーでしたし。それに、今は踊子ダンサーの真似事なんか

もしてますから。これ、結構全身運動なんですよ」

「なるほどねー」

水筒から水を飲みながら、神様が頷く。

と、その時――

「リリ！ 止まって！」

意識が認識する前に、体が叫んでいた。

モンスター。いわゆる『ダンジョンリザード』か。千年の間に、ダンジョンではなく密林に適応したその怪物が藪の中から飛び出してきた。

それを皮切りに、次々と野生のモンスターが襲い掛かってくる。

「フ――ッ！」

はつきり言って動きが遅い。

ここ数日、アイズさんの速さに必死に食いついてきた僕には止まって見える程だ。

ひとまずダンジョンリザードをショートソードで両断。フロッグ・シューターを蹴り

飛ばし、空中に浮かぶバットパットに飛び掛かり、《神様のナイフ》で一閃する。

(階層がデタラメだ……)

着地と同時にしやがみ込み、次のフロッグ・シューターの舌をやり過ぎしながら声にせず呻く。

引き戻される舌を切断。奇怪な悲鳴を上げる大蛙の脳天にナイフを突き立てる。

(いや、当然か)

ダンジョンとは違う。ここには階層なんて存在しない。

どのモンスターも等しくこの密林で生きている。それなら、ダンジョンと同じのはずがない。

「ベル！ 上！」

ナアーザさんの鋭い叫びに、頭上を見上げる。

大きな蜻蛉の姿がそこにあつた。

(これは……！)

見覚えのないモンスター。となると、『中層』以下に棲息する可能性も――

「『ガン・リベルラ』だよ！ でも、外のモンスターだから！」

対応できる。それは分かつていた。

相手の動きは充分に見えているのだから。

(それなら！)

攻撃が来る前に仕留める――と、一気に踏み込もうとして。

「しま――ッ！」

地面に埋まった――そして、苔が生した岩に足を滑らせる。

下草に完全に隠れていて今まで全く気づかなかった。

「うわっ!」

さらに、近くの茂みから一角兎アルミラージュが突撃してくる。

エイナさんからもらった《グリーン・サポーター》でやり過ごしたが、体勢は致命的に崩された。

『ギイイイイイ!』

ガン・リベルラの牙が目前にまで迫っている。

蜻蛉の牙というのは意外と鋭い。それがモンスターの物となればなおさらだろう。

「[フアイアボルト]!」

青臭い匂いに満ちた地面に転がる直前、右腕を突き付けて号砲する。

放たれた炎雷はあっけなくそれに直撃した――

「なっ!?!」

――はずだった。

だが、それより早く、ガン・リベルラもまた何かを放った。

「そいつは体内に取り込んだものを弾丸にする!」

なるほど。狙撃蜻蛉ガン・リベルラの名に偽りなしという事らしい。

だが、炎雷を完全に相殺するには威力が弱い。

これが、もしダンジョンに生まれたものだったなら、結果は変わっていただろうけど

「このっ！」

炎雷に焼かれながらも強引に突破してきたその蜻蛉を、こちらも強引に蹴り飛ばす。

そのせいで受け身を取り損ねた。肩の装甲が岩と激突して小さく火花を立てた。

貫通してきた衝撃に舌打ちする暇もない。

炎に焼かれ、火の粉を散らす翅。いくらも動いているように見えないのに、その蜻蛉

は空中を泳ぐように旋回して――

「当たれッ！」

鋭い叫びと共にリリが放ったボルトに翅を射抜かれ、そのまま墜落した。

一気に間合いを詰めて、その体にナイフを振り下ろす。

うまい具合に魔石に当たったのか、その大蜻蛉はあっさりと灰になって消えた。

「大丈夫ですか、ベル様！」

安全を確認しながら、リリ達が駆け寄ってくる。

「うん。リリのおかげだよ」

念のため体の具合を確かめながら、リリにお礼を言う。

身体も――うん、これと言ったダメージはなさそうだ。

しかし、それにしても――

『いいか、ベル。戦う時は周囲の様子にもしつかり気を配るんだぞ』

さもなくば、地形が殺しに来る――と、クオンさんの教えを今さらながらに思い出す。

「地形が殺しに来るってこういう事か……」

その時は、あまり意味が分からなかったけど……いつもよりずっと弱いモンスター相手に、思わぬ苦戦を強いられた今ならよく分かる。

（今まで、足場とかは特に問題なかったからなあ）

今の僕の到達階層だとその大半が土石系のしつかりした足場。あつても丈の短い下草のみだ。

いや、この前その一〇階層で落ちていた何かに足をとられて回避が遅れた事があったけど。

（あの時、アイズさんが通りかかってくれなかったら危なかったな）

霧で見えなかったけど、あの時通りかかった冒険者はアイズさんだったらしい。

リリを助けに行けたばかりか、無くしたと思っていた《グリーン・サポーター》も、こうして拾っていてくれた。

本当にアイズさんにはいくら感謝してもし切れない。

（いつか、追いつけるんだろうか……）

こんなところで苦戦しているようじゃ、先は長いな——と、つい自嘲してしまう。「どうしたんだい、ベル君。どこか怪我でもしてるんじゃない……」

「あ、いえ。大丈夫ですよ、神様。ちよつと反省してただけですから」

心に留めておかなくてはいけないのは自嘲ではない。油断大敵という言葉だ。今だつてリリがいなかったら大怪我をしたかもしれない。

「ところで、ナーザさん。さっきの蜻蛉つて……」

「うん。『中層』……『大樹の迷宮』つて呼ばれている一九階層から出てくるモンスターだよ」

「そんなモンスターまでいるんですね……。ちよつと甘く見ていました」

ナーザさんの言葉に、リリがげんなりとした様子で呻いた。

「まあ、『中層』生まれと言つても外のモンスターだから。上層の半ばぐらいまでいける冒険者なら、問題なく戦える」

「そうですね。足元にさえしつかり注意すれば、問題なく対応できそうです」
今の手ごたえだと、いつも通りに戦いさえすれば充分に対応できる。

「『中層』の予行訓練にいいかも知れませんか」

「どうか。『中層』のモンスターをこの程度だと思つちやう方が危ないよ」
う、さすがに上級冒険者の生の声は響く。

「ダンジョンって、つくづく怖いところなのね……」

霞さんが、深々としたため息を吐いた。

……

それから何度か、緑の王国の洗礼を受けたところで。

「ナアーザさん……」

「うん。……だ」

僕は巣があると当たりをつけていた窪地にたどり着いた。

こんなに深い森の中にあるとは思えないくらいに開けて平らな場所だ。

ただ、何か白い木の枝のようなものがそこら中に転がっているのが妙に気になるけど

……。

「それじゃ、さっそく準備するよ」

窪地から少し戻った場所で、ナアーザさんが言った。

「ミアハ様とヘスティア様、それと霞はここで待つてください。リルルカ、みんなをお

願い」

神様たちが頷くと、ナアーザさんはちよいちよいと、僕を手招きした。

そちらに向かうと、まずバックバックを渡される。

「あと、これ」

それを背負うと、次に渡されたのは古臭い大剣だった。

「な、何に使うんですか？」

いや、武器を渡されておいて何に使うも何もないんだらうけど。

「これくらいえものの武器じゃないと、あいつらはきついと思うから……」

嫌な予感が天井知らずに高まっていく。

そんな中で、ナーアザさんはクンクンと鼻を鳴らし、犬耳を起ここしては研ぎ澄ませて

。そして、その時はきた。

「うっ!？」

声もなく、ナーアザさんが背後に回り——妙に綿密に密閉されていた——バックパツクを一気に開け放つ。

同時、独特の刺激臭が鼻腔を刺激した。

生臭さと鉄錆のような匂いが入り混じったようなこの匂いには覚えがある。
トランプアイテム
血肉。

つい先日、リリが一〇階層で使ったあれだ。

「じゃあ、がんばって、ベル。ごめん」

しゅたつと手を上げると、それだけ言い残してナーアザさんは素早くその場から離脱

していく。

「えっ?」

流星はLv. 2。捕まえるどころか、ろくに反応すらできないでいるうちに、見事に心配を消し、音もたてずに木々の隙間を縫って消えていく。

「ええっ?!」

取り残された僕が今さらながらに驚いていると、

「……へっ?」

べちより、と。

粘つく——あと、やっぱりちよつと生臭い——何かが頭にかかった。

「」

クオンさんやアイズさんに鍛えられた危機察知本能が、今さら投げやりに警鐘を鳴らした。

長年修業し、俗世を超克した信徒のように静かな面持ちで後ろを振り返る。

『ウウウ……』

そこにいたのは、身の丈五Mはありそうな紅色の肉食恐竜^{モンスター}。

それは、立ち尽くす間拔けな獲物を前によだれを滴らせていた。

ああ、分かった。窪地に転がっていた白い枝っぼい何かは、このモンスターに餌にさ

れた何かの骨だ。熊とか猪みたいな大型の猛獣か、もしくは同じ大型級のモンスターの物かもしれない。

(よし——)

互いに見つめ合っていたのは——個人的にはずいぶん長い時間だった気もするけど——多分ほんの刹那の事だろう。

でも、そのおかげで心の準備はできた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツつ!!』

「ほあああああああああああつつ!!」

万感の思いと共に——そして、その恐竜の咆哮に負けない勢いで——僕は腹の底から悲鳴を上げるのだった。

2

「お、大型級のモンスターじゃないですかあああああああつつ!!」

密林に哀れな白兔の悲鳴が響き渡る。

「ちよ?!? ベ、ベルクーん?!?」

全力で逃げ回る白兔ベル君を追い回すのは赤い恐竜。

よっぽどお腹が空いているのか、大きな口からは滝のようによだれが垂れていた。

「あ、あれ知ってるわ。『ブラッドサウルス』よね？」

「うん。よく知ってるね」

「ああいう迫力のあるモンスターは人気なのよ。配当金もいいし」

それを見やってナアーザ君と霞君がそんな事を言い合った。

「つて、お待ちください！ 『ブラッドサウルス』つて確か三〇階層から出現する凶暴なモンスターなのでは?!」

三〇階層。いわゆる『下層』と言われる領域だったはずだ。

ボクだつて、それくらいの事は知っている。

「つて、三〇階層だつてえ?!」

ベル君の到達階層はちょうど一〇階層。

その三倍。つていうか、『下層』に行けるのつて、例えばガネーシャのところみたいに大派閥の、その中でも特に強い冒険者君達だけのはず！

「勝てる剣闘士、いるの?」

「ええ。まあ、外のだからね。そこそこ腕のある剣闘士にとっては見世物シヨウモノそのものよ」

「……いいけど。あんなの、どうやってオラリオに運び込んでるの?」

「さあ、流石にそこまでは……。どっかの派閥が受け持つって話は聞いたことあるけど、どこまで本当なんだか」

「聞いておくれよおおおおっ?!」

あくまで平然としている二人に、神の威厳とか乙女の慎ましさとかそういうのをかながら捨てて絶叫する。

「ベル君って確かシルバークを倒してるんですよね? となると、到達階層は一〇階層辺りじゃないですか?」

「え、うん。ついこの前一〇階層まで行っただけで言っただよ」

「なら、多分大丈夫かと。外のブラッドサウルスって、ダンジョンの中の基準だと精々『オーク』と同じかちよつと強いくらいですから」

「そ、そう言えばこの前もそんな事を言っただけど……」

フィリア祭の時にもそう言っていたはずだ。

「それ、本当に本当なんだろうね?」

いや、ボクだって神だし、霞君が嘘をついていない事なんて一目瞭然なんだけど。

「神様に嘘をつけるようなレアスキルは持っていませんよ」

霞君に苦笑されたところで、ミアハが言った。

「とはいえ、ベル一人では余裕もあるまい。急ぎ『卵』を集めるとしよう」

そりゃそうだ。だってベル君はまだ一〇階層に進出したばかりだし。

オークより強いなら、結構ギリギリのはずだ。

「うん。急いで窪地に。モンスター達の注意がベルに向いている今が好機」
チャンス

流石はL.V. 2。素早い動きで窪地へと近づいていく。

「もっと他の方法はなかったのですか!？」

「ない。群れを全部倒すにはこっちの戦力が足りない」

「それはそうですが!？」

「広域攻撃型の魔導士か、腕の立つ前衛がもう一人か二人いてくれるなら。あとは上質な魔剣とかあるなら、まだやりようもあるけど。今のままじゃ、群れを倒すどころかミアハ様たちを守りきれない」

「くっ！ それは分かりませんが……ッ！」

器用に小声で言い合いながら、サポーター君が後に続く。

すぐそこでモンスターが暴れているような場所に置いて行かれては困る。

「ごめんよおー！ ベルくーん！」

「すまん、ベルよ……」

ボクらも急いでナーザ君達の後を追うのだった。

「やった。大当たり」

窪地の一面には、数十からなる『卵』の一群があった。

ここがあの恐竜の巣なのは、もう明らかだ。

「いや、喜んでる場合じゃない！ 急いで集めるんだ！ じゃないとベル君が食べられる！」

「そうね。急ぎましょう」

それぞれが背負ってきたバックパックを下ろし、ふたを開ける。

サポーター君とナーザー君の物以外はほとんど空っぽだ。水と塩の塊、緊急時の携行食。

それと、『卵』を包む緩衝材くらいか。

「私と霞とリルルカで『卵』を集める。ミアハ様たちは包んで入れていって」

「任せよ」

「よし来た！ 梱包なら任せてくれよ！ 屋台やヘファイストスのところで慣れてるか

らさー！」

「ハスティア様、いくらモンスターの『卵』といえど鎧や兜よりは脆いと思いますよ？」

「分かってるって！」

半眼で見えてくるサポーター君に言い返してから、ボクらはそれぞれ仕事にかかる。

「つていうか、これ結構固いね？」

少し小さめのカボチャくらいの大きさと重さがある『卵』を軽く叩きながら呟く。

「うむ。モンスターの『卵』と言うだけの事はあるな」

もちろん、サポーター君の言うように兜とかに比べれば脆いんだろうけど、そこらの花瓶とかよりはずっと固そうな手ごたえだ。

「うわあああああああああああつ!?!」

と、そこでベル君の新たな悲鳴が響き渡る。

「つて! 何か増えますよ!?!」

「ううむ。やはり巣を荒らせばこうなるか……」

ベル君に群がる恐竜の数は明らかに増えていた。

いや、『卵』の数からそうだろうとは思ってたけど、ここはあの恐竜の群れの巣らしい。「マズいわねー。戦いの流れについていけてないわ」

ソフト帽を押さええながら、霞君が呻いた。

「動き自体は悪くないんだけど……。大型級だからって、ちよつと気迫負けしてるわ。このまま圧倒されっぱなしだと、ちよつとマズいかも」

う、さすがは剣闘士のマネージャー。ごく短い分析なのに、何だか凄く説得力があった。

「さ、サポーター君!」

「リリがオーク並みの相手に接近戦で戦えると思いますか?!」

そんな事できるなら、まだ普通に冒険者やってますよーだ!——と、サポーター君。

いや、そりやそうなんだろうけど。

「それにオークを基準に考えると、手持ちのボウガンでは一撃で仕留めきれません。群れがこちらを狙い始めたならそれこそおしまいです！」

「仕方ないわねー」

サポーター君の叫び声に、霞君が呻いた。

「一撃で仕留めればいいのよね？」

「え？ 霞様？」

「まあ、見てなさいって。私だって伊達にアイツの相棒はやつてないわよ？」

不敵に笑うと、霞君は右手をモンスターの方へと突き付けた。

「【始まりに炎を——】」

雰囲気が変わる。

「え、詠唱……!?!」

「【我が身に宿るは魂の真理。白き竜の叡智。黄金の国の遺産。狼王おおかみより受け継つらぬきし閃穿の剣——】」

「そ、そう言えば魔法を使えるって言ってたっけ」

しかも、長文詠唱だったとは。

いや、別に短文詠唱の方が楽という訳でもないはずだけど……。

「——甦れ、昔日の痛撃。世界の果てへの道を拓け！」

そうこうしているうちに、青白い輝きがその掌の前に膨れ上がり——

「ソウル・レイ!!」

青く輝く矢——いや、槍となつてモンスターを撃ち抜いた。

「い、一撃!?!」

その輝きに横腹——いや、横胸を貫かれた恐竜はそのまま絶命する。

「どう? 少しはエルフらしいところもあるでしょ?」

ぱちりと、霞君がサポーター君にウインクして見せた。

「ええ、リリもエルフに生まれたかったです……」

これが生来の魔法種族マジック・ユーズというものですか——と、サポーター君が呻いた。

まあ、多分『恩恵』フェアルナを持たない子が一〇階層辺りのモンスターを一撃というのは、相

当に驚くべき事なんだろうなあ——とは思うけど。

「リリルカ急いで。ヘスティア様も」

険しい声で、ナーザ君が言った。

その頃には、霞君は次の詠唱に移っていたけど——

「ちよつと数多すぎない!?!」

程なくして……確か五発くらい撃つたところでいよいよ悲鳴を上げた。

「ま、まだですかナーザ様!？」

「ごめん。もうちよつと……!」

「大丈夫よ、リリルカちゃん。そろそろ本気出すから」

「すでにめちやくちや息が切れているではないですかあ!？」

ぜー、ぜー、と肩で息をする霞君に向かって、サポーター君が叫ぶ。

「まあ、そりやそうだよね……」

エルフなら『ファルナ恩恵』なしでも魔法が使える。

うん、これは何の不思議もない。

遙か昔——神々降臨以前の『古代』から続く正統な魔法使いたち。エルフとはそういう種族だ。

でも、だからと言って——

『ファルナ恩恵』なしじゃ、そんなに続けて魔法が使えるわけないよね……」

冒険者のように『器』が強化されている訳じゃない。

マインド精神力の絶対量は、冒険者のそれに——それこそ今のサポーター君にだって遠く及ばないだろう。

それに、フィリア祭の時に確か全力で撃てばと、あえて言っていたはずだ。

全力で立て続けに五回も長文詠唱を行えば、それこそ冒険者でも息が上がりかねな

い。

「ああ、もう……」

ナアーザ君が駆け寄る。

「これ。飲んで」

差し出されたのは、柑橘色の液体が入った試験管。

マジック・ポーションだ。この前、ベル君が決死の覚悟で買ってきたから知ってる。

確か一本八七〇〇ヴァリスもする高級品だ。

「え？ いいの？」

「必要経費、だから」

ケチなのか気前がいいのか。

(やっぱり何だかんだ言って、ミアハの脊属こどもなんだよなあ)

脊属こどもは主神おやに似る、とよく言われるけど……あながち噂ではなさそうだ。

「それに。ここで倒れられたら困る」

確かに精神疲弊マインドダウンされたら、誰かが担いでいかなくちやいけない。

ボクらにその余裕がないのは割と明白だった。

「あとは、私が代わるから」

「……いいの？」

「まだ、何も返しちやいないしね」

「うん。じゃあ、任せるわね」

そのやり取りを最後に、ナアーザ君と霞君の役割が入れ替わった。

「ロングボウ長弓が引き絞られ、弓弦が震える。」

放たれた矢は、狙い違わずベル君に迫る恐竜を射抜いて見せた。

「……嬉しいな、そういうの」

それが反撃の合図となった。

「あれならもう問題ないわね」

ベル君の動きが変わる。

冷静さを取り戻したっていうのもあるけど、それ以上に背中を預けたんだっていうのが分かる。

「……ううむ、ちよつとジエラシー。下界にいる限り、ボクにはとても真似できない。いや、もともとそういうのにはまるつきり向いてないんだけど。」

と、それはさておき。

「さあ、神様。リリルカちゃん、急ぎましょう！」

それを見届けて、霞君が笑った。

「よし、やるぞー！　つていうか、急がないと本当にベル君が食べられるっ！」
……何て言うか。

いくら援護射撃があつたとしても、別に数が劇的に減つた訳じゃないし。
残念なことに、これでたちまち一網打尽——なんて都合よく事は進まないのだ。
本つ当に残念なことに。

……

クオンさんの魔法に似た蒼い閃光が、ブラッドサウルスを撃ち抜いた。
その光に、ちよつと冷静になる。

（大丈夫、落ち着け……）

フィリア祭の時に、霞さんが言つていたことを思い出せ。

これは迷宮外そとのブラッドサウルスだ。それなら——

（オークと同じか少し強いくらい）

もちろん、直撃を許せば危ないけど……それだけだ。

動きは遅く、的は大きい。

何よりあアリスさんとクオンさんの人達に比べれば、圧倒的に弱い。

「

呼吸を整え、大剣の柄を握りなおす。

固く握るな。余計な力はいらぬ。

この武器大の使い方は、誰よりも傍で見えてきてはずだ。

村の英雄の姿を思い起こす。

(確か、こう……！)

アイズさんの動きを必死に真似てきたこの数日間。その経験をもとに、思い描く英雄師匠の動きを自分の体に染み込ませる。

その間に、四条の閃光が続き――

「はあああああつー！」

それが矢へと変わる頃には、ひとまず様になった。……ような気がする。

いや、もちろん上を見だせば限りはないけど、ひとまず剣の重さに振り回されるような事態は脱したはず。

(よし！ いい感じだ！)

盾はないので両手で構え、一気に振り下ろす。

今までとは段違いの手ごたえだ。

いや、当然か。ナイフと同じ気分で振り回していれば使える武器も使えない。

(背中上級冒険者は気にしないでいい！)

何しろ、今はナアーザ上級冒険者さんの援護がある。

ここは窪地だし、足場は森の中よりずっといい。

それなら、見た目だけの大型級など何の問題にならないはずだ。

「おおおおおおつ！」

流れが変わった。いや、流れを変えた。

追い回されるのではなく追いつく。一体ずつ群れから押し出し、各個撃破する。

集団戦の基本。そのうちのひとつだ。

「ふっ！」

突出し、群れからはぐれた一体を両断する。

その肌は硬いが、それでもキラアアントよりいくらかマシなくらいだ。

「次っ！」

見た目こそ古ぼけているものの、丁寧に手入れされていたらしいこの大剣なら充分に通じる。

『オオオオオオオオッ！』

大口を開けて、次のブラッドサウルスが迫る。

焦る事はない。右手を突き付けて号砲した。

「【ファイアボルト】!!」

何よりも早い炎雷は、そのまま口蓋の中で炸裂する。

が、そこは弱体化したとはいえ大型級。苦悶の声を上げるが、致命傷には届かない。やはり、この魔法は一撃の重さに欠ける。

……その分、圧倒的に使い勝手はいいんだけど。

「うわあ!？」

三体目。その右目を、矢が射抜く。

いくら大型級とはいえ、動いている相手の目を狙うなんて驚くほどの射撃精度だ。

(これが上級冒険者！)

やはり、憧れの人への道は長く険しいということだ。

それに奮起したという訳でもないけど——

(ちよ、ちよつとやってみようかな……?)

戦闘中にそんな事をするなんて、リリやエイナさんにバレたら怒られそうだけど。

左肩を軽く落とし、右肩に大剣を担ぐ。

あの時——闇霊と戦った時に、クオンさんがやっていた構えだ。

人の姿をした狼の狩り。嵐の如く苛烈で鮮烈なあの剣技を模倣しようとして——

「ふぐぐ!？」

まんまと剣の重さに振り回された。流星にそう簡単にはいかないらしい。

「ふおおあ!？」

ガチン！——と、一瞬前まで転がっていたあたりを恐竜の牙が齧り取っていく。
(冒険者は冒険しない！)

信頼するアドバイザーの金言を、改めて胸へと刻み込む。

いくら何でもぶつつけ本番は無理がありすぎた。

「うわああああああっ！」

絶妙な機微マイミューブで放たれた矢に感謝しながら、基本に忠実に剣を振るう。

それでも充分に戦える。とはいえ、余裕がある訳じゃないんだから無茶は禁止。

「これで終わり！」

一氣に間合いを詰め、最後の一体の首筋を大剣で斬り裂く。

「ぶああ?!」

ちよつと勢いが良すぎた。着地に失敗する。

いつもよりずっと重い武器に、結局最後まで振り回されてしまった。

「お疲れ、ベル」

打ち付けた鼻をさすっていると、苦笑しながらナーザさんが近づいてくる。

その背中には膨れ上がったバックバック。

少し後ろにいる神様達やリリ、霞さんもそれぞれ同じだった。

「もう大丈夫ですか？」

一方で僕の背中のバックパックはずいぶん軽くなくていい。まあ、蓋を開けたまま散々飛び回ったんだから当然か。

「帰ろう。ベル」

僕の問いかけに頷くと、ナーザーさんが右手を貸してくれる。

手袋越しだったし、やっぱり金属の堅い感触だったけど——それでも、ほのかな温かさが伝わってきたような気がした。

3

——夢を見ている。

夢の中で、そう自覚するというのはなかなか奇妙な気分だった。

(ああ、これは夢だ)

目の前にいる男を見据えながら、まさに夢幻の淵で眩く。

背丈は一八〇Cの半ばを超えるかどうか。

身にまとうのは黒金くろがねの大鎧——そう、例えて言えば極東の鍛冶師スミスが作った大陸風の

鎧。あるいはその逆かもしれないが……そう言った風体の甲冑だ。

無論、それはその鎧が珍妙だという意味ではない。纏ったその男が発する武威も相まって、まさに威風堂々とした風情である。

腰に差されているのも極東の武器である刀だ。

こちらもまた少々奇妙であり、異様なまでに柄が長い。

いや、同じく極東には長巻と呼ばれる武器もあると聞くが——それともまた違う拵えだ。

確か、『強化種』を狩りに行ったのだったな

——と、夢の中で独り言ちる。

時は五年前。末期とは言え、まだ暗黒期の最中の出来事だ。

場所はダンジョン二七階層。

前年に起こった闇派閥の惨殺事件——俗にいう『二七階層の悪夢』が起こり、それを逆手に取った「勇者」が邪神どもの多くを天界に送還してから、「疾風」が「ルドラ・ファミリア」を壊滅させるまでの間だったと記憶している。

その『二七階層の悪夢』——大規模な『怪物進呈』^{パス・パレード}の最中に発生した強化種。

年をまたいでようやくその情報を把握したギルドが、早急に対処せよと寄こした『強制任務』^{ミッション}。それを終えて、帰還する途中だったはずだ。

「もし。貴公が、オツタルとやらか？」

それは、今にして思えばおかしな問いかけだった。

決して増長するつもりはないが……現実として、オラリオにおいて俺を知らぬ者など

いない。

冒険者もそうでないものも——果ては神までが俺を知っている。

『ぼあず』か。確かにその耳は猪のようだな。まったく、面妖な世界に迷い込んだものだ」

そもそも、この男は獣人そのものを珍しがっていた節がある。

確かに俺達獣人は他の種族と違い多種多様。獣人内に別種が存在すると言っても過言でない。

そして、その中には狐人ルナールのような少数種族もいる。

だが、猪人ポアズはそこまで珍しい種ではない。

田舎の村——あるいは『古代』ならまだしも、多種共存が定着したこのオラリオではなおさらだ。

さりとて、こちらを嘲笑うためにあえて言っているようには感じられなかった。

「何用だ？」

夢の中で、かつての俺が問いかける。

「何、貴公がオラリオ一の武芸者と聞いたのでな。一手ご教授願いたい」

ずいぶんと古臭い言い回しだった。

昔から用いられる立ち合いを求める——あるいは、派閥破りを宣言する——ための文

言である。

暗黒期となり、派閥抗争が横行する昨今、こんな馬鹿正直な申し入れは珍しい。まして、それをこの俺にするなど。

——いや。傲慢だったのは俺の方だな
夢の中で自嘲した。

今にして思えば、この頃の俺は知らぬ間に追われる——仰ぎ見られることに慣れていてたらしい。

過去に置き去りにしてきた、いくつもの壁を未だに超えられていないというのに。この時の俺が一体どんな表情を浮かべていたのかは分からない。

鏡を覗いた訳ではなく。知り得なかった過去を夢の中で確かめられる道理もない。「名を、聞いておこうか」

だが、この武人に興味を覚えていたのは確かだ。そして、俺は確かに聞いた。

「——と申す」

今に至るまで並び立つ者のいない強敵。

久しく忘れていた痛烈にして完膚なきまでの敗北。それを容赦なく刻み付けたその武人の名を。

『オオオオオオツッ!』

薄暗いダンジョンの中に、鈍い輝きが奔る。

僅かな微睡は終わりだ。

迫りくる刃を親指と人差し指の横腹で摘んで止める。

『オオオオオオオオ……!』

「フン……」

唸り上げるを上げる猛牛を前に、小さく鼻を鳴らす。

(あの時、俺とあの男の間にはこれだけの力量さがあつたという事か)

ごく短い時間で終わったあの立ち合い。

その始まりに、これとまったく同じ事をあの男はやってのけた。

(忌々しい話だ)

あの領域——今も仰ぎ見るばかりのあの高み。

遙か遠い武の頂を知らぬまま、最強などと驕っていたかつての自分を啜う。

まったく忌々しい。そして、それ以上に滑稽な話だった。

この程度の力を、自分の限界だと思っていたのだから。

『ガアアアア!?!』

何であれ、休憩は終わりだ。

立ち上がるついでに猛牛を蹴り飛ばし、間合いを開いた。

「さあ、続きだ」

猛牛が地面を転がっている隙に、近くに突き立てておいた大剣を引き抜く。

フレイヤ様の命によりこの猛牛——あの白髪の冒険者のトラウマであるミノタウロスを育て始めてそろそろ三日ほどが過ぎた。

ついに体力を使い切った猛牛が地に伏せている間、俺も微睡んでいたわけだ。

一〇分か、長くて二〇分程の事だろう。

ひとたびダンジョンに潜れば朝も夜もなくなる冒険者にとつては、それなりの休憩となる。

(ようやくまともに剣を握れるようになったか……)

初日に持たせた剣を杖代わりに立ち上がるミノタウロスを見やり、嘆息する。

もつとも、別に驚く事はない。ミノタウロスは元より天然武器ネイチャーウェポンを使う種だ。

道具を使う最低限の知恵は持ち合わせている。

『オオオオオッ!』

だが、それだけだ。

これなら、まだ鈍器を持たせておいた方がマシだろう。

(粗いな)

まったく刃を活かせていない。力任せの粗雑な動きだ。

これではまだ『斬る』にも届きはしない。

(流石に高望みが過ぎるか)

昔日の夢。あの武人がやってのけた一太刀。

その一撃を思い浮かべている事に、小さく苦笑した。

スツと刃が通り抜けた——あの一撃を例えるなら、そんなところか。

凡庸な者では斬られた事すら気づかぬうちに絶命してただろう。

(さて。今の俺に真似できるか……)

あの鋭さ。斬る事を徹底して追及したあの一撃を再現できるか。

(未だ、至らんな)

つい先日も憤怒に踊らされ、後れを取ったばかりだ。

あの時、あの一撃も至高のものと思ったが……頭を冷やせば、何のことはない。

あれでは、所詮『斬る』止まりだ。

心技体。その全てをただ斬る事に費やせないのなら、かの武人のように刃を『通す』よ
うな真似はできまい。

大振りに振りすぎて体勢を崩した猛牛の腕を劍の峰で打ちすえ、さらに蹴り飛ばす。

「立て。今しばらく付き合ってもらおうぞ」

相手の動きの未熟を指摘しながら、己の動きを一つ一つ念入りに確認する。

この猛牛と過ごした数日は、思いの外充実したものとなった。

『オオオオオオオオオオオオツ!!』

一つの到達点として思い描いているのは、あの男——因縁ある『アッシュ・オブ・シンダー灰色の悪夢』だった。

あの男の半分——いや、二割ほどまで育てられれば試練としては先ず先ずと言えよう。

それは、俺の二割とほぼ同じなのだから。

(体はその基準に達しているがな)

屈強なミノタウロスの中でも、特に強い個体を厳選している。

この猛牛に足りないのは技だ。剣を使う術。あるいはその力を無駄にしない方法。

そのどちらかを仕込むのが当面の課題だが——

「フン……」

いや、最低でもその両方を仕込む。

これはフレイヤ様の命だ。生半な事はできない。

(幸い、邪魔も入らんからな)

懸念されていた他派閥の横やりは、今のところほとんどない。

クオンの介入を避けるため、人目につき辛い場所を選んでいるというのもあるが……
 (少々静かすぎるな)

いつそ懸念すら抱くほどに。

とはいえ、全く人目についていないという訳でもない。

実際、それなりに「ステイタス」が高まり、気が大きくなつた駆け出し冒険者が何人か挑んできた。

無論、その程度であればさしたる手間ではない。大半が一睨みで済む。

(それでも挑んできた者は、少しは見込みがあるか)

仮にも師の真似事をしているせい、柄にもなくそんな事を思った。

ともあれ、連中は単に血気盛んなだけで、派閥として何か企んでいるわけではない。

通例であれば、ああいう連中以外にも「イシユタル・ファミリア」辺りが嗅ぎつけ、派閥を上げて絡んでくるはずだが……。

(地上で何か起こつたか?)

最大の懸念はクオンだが……この命を拝するにあたり、フレイヤ様にはくれぐれも不用意な真似をしないよう、念入りをお願い申し上げてもいる。

それに、この身から『^{フェルトナ}恩恵』が消えていない以上、あの方に何かあったという事は万に一つもあり得ない。

と、なると——

(あの寸劇に獲物が食いついたと言ったところか)

クオンとどこぞの派閥が争っている——と、いう可能性は充分にあり得る。

今頃、一つ二つ派閥が消えているかもしれない。

そう思えば、気にならない事はないが……。

(いや、構わん)

クオンは苛烈だが、それでも無意味に——理由もきっかけもなく、衝動的に殺して回るほどの狂人ではなかった。

もし、そういった手合いなら、俺達はとつくに決着をつけている。

フレイヤ様がこの騒動を静観する限り、あの男もまたあの方を襲いはしない。

考慮すべきはギルドに泣きつかれる可能性だが……、

(神ウラノスがあつた男と敵対するとは思えんな)

創設神の神意は分からないが……それでも、派閥が一つ二つ潰えた程度で敵対するとは思えない。その派閥が例え「ロキ・ファミア」であつたとして、果たしてそれが変わるかどうか。

(是非もない)

胸の内に浮かんだ雑念を追い払う。

「いよいよとなれば誰かが呼びに来るだろう。それまでは、今の務めに専念するのみだ。」

「さあ、こい。先は長いぞ」

三割。四割。いや、それ以上でも構わない。

（この獣をどこまでの戦士に育てられるか）

……ひとつだけ自白しよう。正直、少しばかり楽しくなってきたもいる。

「精々、追いついてきてもらおうか」

薄暗いダンジョンの中に、再び剣戟が鳴り響いた。

4

セオロの密林での大冒険を経て「ミアハ・ファミリア」逆転の秘策——モンスターの『卵』を使った新薬『デュアル・ポーション二属性回復薬』が誕生してから。

「何か困ったことがあったら、言つて。今日まで迷惑かけた分まで、ベルのこと、助けに行くから……」

ナアーザさん達と挑んだ長い冒険者クエスト依頼が終わつてから二日が過ぎた。

アイズさんと一日特訓したり、神様に特訓の事がバレたり、その日の夜にはどこかの派閥の闇討ちに巻き込まれたり——いや、これつてみんなその翌日の事だったんだけど——

—と、色々あつて……

「おら、さつさと働くニヤ、白髪頭」

「少年はシルに売られたニヤ。観念するニヤ」

今は『豊穡の女主人』の厨房で皿洗いをしていた。

「うう……」

アーニヤさんとクロエさんにこき使われ、釈然としない思いで呻く。

傍らにはまさに山とかした皿。それを一枚、また一枚と洗っていく。

終わりの見えない戦いがそこにあつた。

(ああ、何でこんなことに……?)

苦悩する英雄を真似るような気分で自問する。

いや、正答なき答えを求める英雄と違って、僕の場合はこの上なく明白なんだけど。

さて。

時はほんの数時間ほど前まで遡って。

「終わったみたいですねえ」

「うん」

一日の探索を終えた僕は、夕暮れのオラリオをリリと歩きながら頷きあつていた。

僕らがダンジョンに潜っている間に、クオンさんと『神罰同盟』の抗争は終了したら

しい。

神罰同盟はギルドへ保護を申し入れ、ギルドもそれを受諾した——と、そういう形で。

「まさか勝つとは……。いえ、負けるとは思ってませんでしたが」

何をどう驚いていいのか分かりません——と、リリが眉をひそめる。

「ひとまず終わったんだからそれでいいんじゃないかな」

苦笑と共に言った。

街の人達もホツとしたのか、いつもより活気があるような気がする。

「それはそうなのですが……。これから先、ギルドがどういう動きをするかが気になります
ます」

もし改めて捕縛しようとするなら、もう一波乱起こりますしね——と、リリが小さく
呟いた。

「まあ、そうは言っても、ギルドの上層部がクオン様と繋がりを持っている、というのは
公然の秘密ですし、滅多なことではないと思いますが……。それに「ガネーシャ・ファミ
リア」も動いているようですし」

「シャクテイさん、だったっけ？ クオンさんの知り合いの」
会ったことはないけど、綺麗な女の人が多い。

「ええ。「ガネーシャ・ファミリア」団長でL.V. 5。二つ名は「象神アンクレーシャの杖」。四年前から

クオン様と真つ当な関係を持つ数少ない冒険者ですな」

それに、お相手という噂もあります——と、リリは意地の悪い笑みを浮かべる。

「それ、霞さんが否定してたよ」

「時間の問題かもしれないですよ？」

……いや、それは確かにありそうだけど。

それにしても、まさか師匠が男の浪漫を達成していたとは。

「冗談はともかく。霞様が言っていた事もどうやら事実のようですし、このまま何事もなく幕引きになるのではないでしょうか」

つまり、闇派閥の残党と手を組んでいたことだ。

生贄云々というのはどうやら秘密らしく、僕らも絶対に誰にも言わないようにと頼まれている。

「まあ、リリとしてはどちら側が本当の理由のような気がしますけど」

「……まあね」

ミアハ様たちの様子からしても、神嫌いというのは思っている以上に深い理由があるらしい。

(そう言えば、クオンさんの事ってあんまり知らないなあ)

昔の事はあんまり話したがらない人だし。

いや、ロードランとかドラングレイクとかロスリックっていう場所でした冒険については、結構聞いているけど。

(あれ、本当なのかな……)

子供相手に少し大げさに話しているんだと思ってたけど、これまで見たり聞いたりした事からすると案外本当だったんじゃないだろうか。

……そうなると、竜退治とか巨人退治とか、英雄譚でお馴染みの事は一通りやっている事になる訳だけだ。

「すみません、ベル様。ちよつとお使いを頼まれているので、リリはここで」

「あ、うん」

「いいですか、ベル様。また女の方にホイホイとついて行ってはいけませんよ？ 例えそれが顔見知りの方でも、です」

「大丈夫だって。明日もよろしくね」

「はい、ベル様！」

いつもよりちよつと早くリリと別れる。

換金はたまたまバベルの換金所が空いていたので、すでに終わっていた。

それでも習慣で、ギルドに向かう。

掲示板の前には人ばかりが。ちよつと嫌な予感——クオンさんに関して何かあった

んじゃないかって気がして、慌ててそちらに駆け寄る。

結果から言えば、クオンさんは無関係だったんだけど……。

「Lv. 6……」

周囲の喧騒から取り残され、呆然と眩く。

張り出されていたのは、ランクアップした冒険者の名前。

その中に、アイズさんの名前も記されていた。

「本当に少し前だったかな。ヴァレンシユタイン氏のランクアップが公式発表されたのは。最近色々あったからちよつと公布が遅れて……。それに、今は明るい話題が欲しいしね」

慌てて駆け寄った——いや、ギルドが嘘の発表をするはずがないんだけど——エイナさんの言葉も耳を素通りするばかりだ。

「階層主……『深層』の階層主をひとりで倒しちゃったらしいんだ」

一体どうやって？——と、その疑問を読み解いたかのように、エイナさんが言った。

階層主。またの名を『モンスター・レックス迷宮の孤王』。

その名が示す通り、モンスター怪物の王。

一番浅い出現階層は一七階層だが、その階層主でさえ戦闘能力は凡百のモンスターの比ではないと教わっている。

討伐には数十人——もちろん、上級冒険者だ——規模のパーティが編成されるとも。
一七階層……『中層』でそれなら、『深層』領域に出没する階層主の力など想像するこ
とすらままならない。

(そんな相手を、一人で……?)

目指すべき場所のあまりの遠さに愕然とする。

「あの、ベル君？ 無理かもしれないけど、あんまり気にしない方がいいと思う。階層主
を一人で倒すなんて、他にオツタル氏かクオン氏くらい……あつ！」

エイナさんがしまったと言わんばかりに小さな悲鳴を上げた。

オラリオ唯一のLv. 7。今代最強の冒険者【おうじゃ猛者】オツタル。

四年前、それと互角に渡り合った【イレギュラー正体不明】クオン。

【劍姫】アイズ・ヴァレンシユタインはおおよそ最強と言えるその二人と、ついに並び
立ったのだ。

眩暈がするほどだった。

見上げるばかりの高みではなく、いつそ底の見えない断絶が横たわっているような気
さえる。

明日からまた頑張っていくます——と、エイナさんに形ばかりのお辞儀をして、ギル
ドを離れ——

「ベルさん、会いたかった……!」

まっすぐ帰らず、街中を彷徨っていると、シルさんに出会って。

前触れなく手を握られて、ついドギマギしていると――

「ごめんなさい! 私のお仕事手をわざわざ伝えてもらって!」

「わざわざ連れてこられてたんですよ!?!」

と、まあ。そんな訳で――

(ああ、リリの言う通りホイホイとついてくるんじゃないやなかった……)

簡単に言うのと、頼れる相棒リリの助言を聞き入れなかったばかりに起こった悲劇である。

……と、いうか。リリの助言が適切過ぎる。

ひよつとして予言者の素質があるんじゃないだろうか。

『いや、それは違うぞ、ベル。女の勘つてのは元々そういうものなんだ』

『うむ。千里眼とかそんな生ちよろいもんじゃ、断じてない。もつとえげつない何かじゃ』

嘆いていると、想像の中でお祖父ちゃんと師匠に両肩を叩かれた。

心が折れそうだ。

(ま、まあ色々とお世話になってるわけだし……)

今だってランチを作ってもらってるんだし、甘んじて受けよう。

何でか分からないけど、こう……焚火か、それとも海の見える街にある記念碑的な何かの傍で黄昏れたくなった自分を奮い立たせて、黙々と皿を洗う。

……それに、正直に言えば、今はちよūdよくもあつた。

こうして、皿洗いに集中していれば余計な事は考えないで済む。

「大丈夫ですか、クラネルさん」

「へ……？」

リユーさんが僕の隣に並び、手伝ってくれるまで、僕はひとり黙々と皿を洗い続けるのだった。

「おかえり、ベル君！ 今日遅かったねえ」

終わりの見えない戦いは、実際のところ数時間ほどで終わりを迎えた。

いや、リユーさんの援軍がなかったら閉店まで続いていた可能性もあり得るけど。

ふやけてシワシワなつた指先は、なんと今もまだ治っていない。

……これを毎日こなしているシルさん達つて、実は物凄く凄いなじやないだろうか。

「はい、更新終わったよ！ 今日もまたずいぶん伸びたねー」

アイズさんとの特訓の効果は、確かに出ていた。

(資格は、得てるはず……)

それからしばらくして。

明かりの落とされた室内で、寝台代わりのソファに寝転がりながら、胸に抱いたままの羊皮紙——いや、それに記された「ステイタス」に意識を向けた。

今日も上昇値は総合で三桁に達している。アビリティ評価は最低でもC。

アビリティ判定が六段階……Dに達して初めて「ランクアップ」する資格を得れる——と、リユーさんから教わった事を思い浮かべる。

（神様も、まだ「ランクアップ」っていう話はないし）

やはり足りないのは『偉業』だ。

（過去の英雄達が成し遂げてきた《偉業》の再現……）

例えば竜殺し。例えば巨人殺し。例えば万の大軍にも勝る武勇。

幼い頃から読んできた絵本、お祖父ちゃんから聞いてきた物語に登場する数多の英雄英傑が遺したその伝説の数々が次々に浮かんでは消える。

『人の数だけ、冒険には意味があります』

リユーさんの言葉を改めて胸中で呟く。

（冒険の意味。僕の冒険……）

それは、きつと。

きつと——

……

遠征は予定通りに決行される事になった。

元々、約束の期日は今日までだ。時間からしてこれが最後の手合わせになるだろう。

「はぁあッ！」

曙光に照らされ、漆黒のナイフが踊る。

その鋭さは、一週間前よりも明らかに増していた。

(結局、成長の秘訣は分からなかったな……)

残念ではある。けれど、思ったほどには落ち込んでいない。

それは、この少年が確かな成長を見せてくれたおかげだろう。

「——ッ！」

防御も、形になってきた。

私が一〇階層で拾った軽量プロテクターか、同じく軽鎧の手甲。もしくはナイフ。

この少年が防御に使えるのはそれだけだ。

盾として用いるには少し心許ない。

だからこそ、正面から受けるのではなく、側面にぶつけて逸らす技術を教えた。

素直に盾で受けるよりは高等な技術だが……果たして、この少年はすでに会得しつつ

ある。

もちろん、上を見ればまだ限りはないけど。

「うわッ!？」

回避の方は相変わらず。

敏感なまでの危機察知能力はさらに磨きがかかる一方で、余計な動きは減っている。

「くう……!？」

そして、耐久アビリティの向上も。

自覚があるのか、時にはあえて防御を優先する度胸もついてきていた。

それに、何発か鞘に打たれているけど、初日のように簡単には昏倒しない。

回避、防御、耐久。その三つは重なり合い、この白兎の生存能力をさらに一段押し上げている。

なら——

(その先——!)

猛牛に一矢報い、白猿に打ち勝ったその牙を——!

「——ッッ!」

愚直な気迫。それを迎え撃つはずの鞘が空を切った。

「……ッ!？」

いない。予測したその場所に。

(でも、まだ——!)

ほんの一步ずれただけ。

私も、もう少しだけ力を引き上げる。それで対応できる――

「はぁあッ！」

その一瞬前に存在した空白。

回避を得意とするこの子だからこそ見抜ける安全地帯に飛び込まれた。

決着が、さらに一瞬だけ先送りされる。

いや、これは――！

(しまった！)

鞘を振るう瞬間、小さく呻いていた。

この時間。この瞬間。

(市壁の向こう側には太陽がある――！)

白兔の背から差し込む白い輝きが一瞬だけその姿を霞ませる。

それが、この子の狙い。

(たった一日で、地形を味方につける戦い方を覚えてきていたなんて――！)

三日前。派閥の用事でセオロの密林に行くと言っていた。

具体的にどこで何をしていたかは分からないけど……いずれにしても、あそこはダン

ジョンの『上層』とは比較にならない程の悪路だ。

地形を敵に回せば、思わぬ窮地に陥りかねない。

でも、味方につけられるなら――

（何て『成長力』……！）

最後まで、驚かされる。

陽光の向こう側にいる白兔に、つい笑みがこぼれた。

そして、互いの武器が交差する。

拙いながらに、攻撃を受け流された。

白兔の動きはまだ止まらない。互いの瞳に姿が映りこむほどの接近。

それが、最後の激突となった。

「――ッ！」

今までで、一番の力を込めた一撃が白兔の牙を打ち負かす。

「これで、終わりだね……」

ついに反撃してきた少年に、万感の思いと共に伝えた。

太陽が昇ったなら、訓練は終わりだ。

はい……と、頷く少年を前に、少し名残惜しく思っている事を自覚した。

「今日まで、ありがとうございました」

少しだけ間合いを開き、少年が頭を下げる。

一週間。思えば、短いものだった。

「私も、ありがとう。……楽し、かったよ」

ダンジョンにいる時には常に付きまとう、焦燥感すら忘れていた程に。

と、何故か少年の顔が朱に染まったような気がした。

「……それじゃあ、頑張つてね」

感傷に浸つてばかりもいられない。

明日からは遠征。まだ見ぬ五九階層。待ち受けているのは怪人か、あの剣士か。

それとも、まだ知らない何かなのか……。

(私は、負けない)

少年に背を向けて、歩き出す。

消えたはずの黒い炎が、再び小さく火の粉を噴き上げた。

……

『オオオオオオオツ』

猛牛の雄たけびが、薄暗いダンジョンを揺らす。

咆哮ハウルだけはまともになってきた——と、身体を叩くその氣勢に、ひとまず満足した。

(問題は、それ以外だが……)

吼えるだけの獣を育てても意味がない。

必要なのは生贄の獣ではない。

超えるべき壁。死力を尽くすに値する戦士だ。

『オオオオオオオオオ!!』

何度目かの激突。その時、茶褐色の毛皮から火の粉が舞った。

いや、違う。変色したのだ。血を吸ったような赤へと。

無論、剣の間合い——鏢迫り合いするほどの近くで目を凝らさねば分からない程度の変化だ。

しかし——

『フウウウオオオオオオオッ!』

一回りとは言わないまでも力が増している。

それに、こちらの動きへ反応しつつあった。今までとは感触が違う。

(ほう……)

魔石を喰らってもいないのに、『強化種』となるとは。

思いもしなかった現象を前にしては、流石に驚きを禁じ得なかった。

「少々惜しいな」

壁を越えた——とは、まだ言えないが、確実にそこに迫っている。

(モンスターも、成長するか)

無論、そうするために時間をかけてきたわけだが、まさか本当に化けるとは。『ヴオオオオオオオツ!!』

斬ッ！——と、近くの石柱が両断される。

今までならただ碎けるだけだ。

「ようやくまともに使えるようになったか」

獣からの成長。目に見えて動きが変わった。

壁は超えていないにしても、殻を一枚破ったのは間違いない。

調教ティムもどきから、ようやく脱してきた。

「腕の力だけで振るな」

これでようやく、訓練が始められるというものだ。

「もつと足と腰を使え」

言葉を解しているとは思っていない。

だが、殻を破った今のこいつには伝わっているはずだ。

「腕、体、足。全てを使え。でなくては斬れん」

その証拠に、這うような遅さだが確実に戦士の動きへと変わっていく。

一撃ごとに鈍器の扱い方から剣術へと昇華されていく。

「そうだ。それでいい」

再び石柱が切断される。

もつとも、切断面はまだ粗い。ようやく斬れるようになった程度だ。

だが――

「ほう？」

その猛牛は、見よう見真似ながらも構えをとって見せた。

「構えとは斬る準備だ。型だけ真似ればいい訳ではない」

やって見せる。

「斬りやすい場所に剣を置き。それが型となる」

見て取る。ぎこちないながらも構えが少し様になり、切れ味が増す。

まだ、ここからだ。

あの男――【イレギュラー正体不明】にどこまで迫れるか。

(面白い)

不謹慎なのは承知の上だが……このモンスターがどこまで化けるか見届けてみたい気分になりつつあった。

(L v. 3。L v. 4。……いいや、まだ先までいけるか?)

L v. 5。L v. 6。それとも、俺に追いついてくるか。あの男に追いつくか。

この猛牛はそれほどの『器』を持っているのか。

(……そろそろ仕上げに入るか)

モンスターに情を移したところで、得るものなど何も無い。

馬鹿な妄想は払いのけ、劍戟の威力を少しだけ上げる。

『グ、オオオオオオッ!』

だが、ついてきた。初日のように、打ち負けるような無様は晒さない。

技術はまだ拙いが、力の方は見れるようになった。

(Lv. 1には過ぎた相手か?)

いや、あの方の寵愛を受けるならこの程度の洗礼は乗り越えてもらわねばならない。

束の間の疑念を、劍戟の音に溶かして消す。

「まだそこでは終わらないだろう?」

もう少しだけ、力を込めてやる。

多少後退したが……即座に踏みとどまり、押し返してきた。

「そうだ。それでいい」

こうでなくては、今日まで時間をかけた甲斐がない。

ギチギチと刃がこすれ合う。焼けた鉄の匂いが鼻先をくすぐった。

完成の時は近い。その手ごたえがあった。

…

気が付いたら、そこにいた。

「あれ?」

ぱちくりと目を瞬かせる。

見覚えのない場所だった。

住み慣れたボロい隠し部屋と同じくらいボロいけど、ずっと広い。

そして、何だか陰気で寂しい場所だった。

「つて、なんだこりゃああああああつ?!」

身体がなかった。いわゆる『霊体』の状態だ。

そりゃ、ボクだって神だし、天界でならこれくらいの事はできる。

ただ、下界だと無理だ。

そもそも、『神アルカナムの力』を使わない限り、こんな真似はできない。

「寝ぼけた?! 寝ぼけてやっちゃった?!」

マズいマズいマズい! このままだと天界に送還されてしまう!

そんな事になったらベル君は——!?

「あら? 貴女は……」

薄闇の向こう側から、静々と誰かが歩み出てくる。

「き、君は……?」

銀色の頭冠。緩やかに編まれた白金色の髪。

そして、まるで喪服を思わせる黒い衣装^{ドレス}。

頭冠のせいで目元は見えないけど、凄く上品で綺麗な子だった。

「ええと！　これはだね……っ！」

いや、この際この子が誰とかはどうでもいい。

どうでもいいけど、このことを言いふらされたら困る。すごく困る。

「ご心配には及びません、竈の方」

「ほあ!？」

そこまでお見通しなのかい!？」

「これは事故のようなものです。貴女方の規則には抵触しないかと」

「そ、そうなのかい?」

「はい。貴女はご自分の力を使つたわけではありません。私達が起こした『揺らぎ』に呼応しただけかと。おそらく、他の方に気づかれる事もないでしょう」

良かったー!——と、胸を撫でおろしてから、ふと首を傾げていた。

「『揺らぎ』?　ボク^神の霊体を引き寄せる程の?」

そんな事があり得るのか。

(いや、確かに揺らいでいる……)

今のボクでも分かる。世界そのものが、ここはとても不安定だ。

過去と未来とが混在し、神の魂ですらついうっかり迷い込んでしまうほど。

「ええ。灰の方と強い縁を持つ者達を、この地に集めねばなりません。……この地に蔓

延り絡み合う全ての因果が、この巡礼地に吹き溜まる前に」

その揺らぎすら、この子は見通しているのかもしれない。

それなら、この子は――

(人間、なのか……?)

分からない。見通せない。霊体だからだろうか。

いや――

「さもなければ、全てが飲み込まれるでしょう。一切の容赦なく」

この子は、この揺らいだ世界の先に一体何を見ている? 何を見通している? それ

は、ボクら神々にすら見通せないものなのか?

「灰の方が……あの方が下さったこの瞳が、この闇の向こう側にあるものを」

「何があるんだい?」

「闇よりもなお暗いもの。あるいは、深く澱んだ水底が。……それとも、まだ小さく燦る

ばかりの『残り火』が燃え上がるのでしょうか。あの方たちが遺したものが」

「一体、何を言つて……?」

「いずれ、誰もがそれを知るでしょう。残された時は、決して多くありません」

この子は、人と呼ぶにはあまりに浮世離れしすぎている。まるで超越存在かのようだ。

「いいえ、そのようなものではありません。私は、ただの背約者です」

「いや、そんなお見通しみたいに言われると説得力がないんだけど……」

呻くが、その子は微かな微笑みを浮かべるばかりだ。

「そ、それでどうしてボクはここに？」

何か本当にただ迷い込んだだけなのか不安なんだけど……。

「おそらく、これもまた因果の一つなのでしょう」

「もうちよつと分かりやすくお願いできるかな……」

あえてはぐらかしているのかもしれない。

それか、闖入者のボクには、それに触れる権利がないという事なのかも。

「貴女が炉の女神だからこそです。この場所とは相性が良いのでしょうか」

「炉の女神だから？」

でも、ここが炉のようには見えないけど……。

(いや、違う)

ここは炉だ。その一步手前だ。

でも、僕が司る竈ではない。もっとと哀しい場所だった。

「君は、どうしてこんな場所に？」

ここは世界の果てだ。過去からも未来からも隔離された、誰も辿り着けない場所だ。まるで誰からも忘れ去られた霊廟のように。

「あの方の寄る辺となるために。私はあの方の——」

その言葉を最後まで聞き届ける前に、帰還が始まった。

霊体が霧散する。いや、形を失って体に戻っていく。

明らかに不自然な形で召喚だ。体に戻った時に、一体どれだけの事を覚えているだろうか。

泡沫の夢よりもきつと曖昧だ。

「いずれ、またお会いしましょう。竈の方」

「会えるのかい？」

世界の終わり。この最果ての地で。

「貴女と、貴女と共にある小さな白い炎が潰えてしまわない限りは」

白い炎。それは——

……

「はれ？」

見慣れたボロい天井が目飛び込んできた。

どうやら、帰ってきたらしい。

(帰ってきた?)

胸中で眩いてから、はて——と、首を傾げた。

帰ってきたも何も、まだ出かけた覚えがない。

「んん……?」

何だか、大切なことを忘れてしまったような焦りが胸を焦がした。

しばらく天井と睨めっこするものの全く思い出せない。

それは、何かの前兆だったようにも思えるんだけど——

「うくん……。寝ちゃってたかな?」

寝つ転がっていたソファから体を起こす。

と、ヒラリと羊皮紙が舞い落ちた。

「あゝ……。写したはいいいけど、これどうしよう」

もちろん、そこに書かれているのはベル君の「ステイタス」だった。

不吉な予感に駆られ、朝一番で更新したはいいいものの、ベル君はそれを聞く前に飛び

出して行ってしまった。

改めてそれを見やり、やっぱり口元が引きつるのが分かった。

何しろ、そこに記されているのは前代未聞のものだ。

「何だよ、SSって……」

ベル・クラネル

Lv. 1

力 : SS1011

耐久 : S900

器用 : SS1018

敏捷 : SS1080

魔力 : B751

何か書き損じたんじゃないだろうか——と、あるはずもない事を思いながら、ボクはもう一度頭を抱えるのだった。

第五節 未完の英雄

1

ギイン——…！

鈍い音と共に、刀身が半ばから叩き斬られた。

「フン……」

今まで使っていた大剣は決して安物ではないが……それでも、鈍らと言わざるを得ない。

何しろ、うっかり直撃させて殺してしまつては元も子もないのだ。俺の使っていた物は、元よりわざと刃を潰してある。

それに。あれから結局、余計な邪魔はほとんどなかった。

おかげで相手が疲れ果て、動けなくなっている間以外は、ほぼ訓練——今や、何とかそう呼べる域に達していた——に時間を費やしている。

これだけの時間、ほぼ休みなく打ち合い続ければいかに頑強な大剣でも摩耗して当然だった。

だが——

『ヴオオオオオオッ!』

それでも、へし折られたのではなく、叩き斬られたとなれば——
「上出来だ」

まずまずの出来と言えよう。

さらに襲い掛かってきた猛牛の鼻面を、餓別代りに少し本気で殴り飛ばす。

流石に大きく仰け反つた猛牛を、そのまま用意しておいたカーゴへと放り込む。

「あとはゆつくり休め。すぐにお前にふさわしい敵がくる」

まさか言葉が通じたとは思えないが、猛牛は不思議とカーゴの中から出ようとはしなかつた。

与えた剣を抱え、俺の真似でもするようにじつとじている。

ただの獣から一端の戦士へと確実に近づいているようだ。

「餓別だ。受け取れ」

無傷の——そして、俺自身の愛剣を除き、手持ちの中で一番上等な大剣を放つてやる。

(少し肩入れが過ぎたか)

小さく呟きながら、カーゴの扉を閉ざした。

…

「そーいや、【ロキ・ファミリア】は今日から遠征らしいね」

その日の朝、アイシャが——どこで聞いてきたのか——思い出したように言った。「そりゃいい。面倒ごとが少なくとも一つは減る」

しばらくの間は、誰も頼みもしないのに俺達を追い回してくる事はない訳だ。

それに、あの何とかいいう金髪の小人が地上オウリヤを離れたという事は、これ以上俺たちを追い回しても旨味武功はないと判断したということだろう。

(となると、これでひとまず決着したと見ていいか)

ギルドの表向きの首魁なら、独断で何か面倒なことを仕掛けてくるだろうが……しかし、この街で敵対して面倒なのは、他にあの女フレイヤの派閥かシャクティ達のところくらいなものだ。

あの女フレイヤは自身の縄張りを荒らさない限り動き出す事はほぼない。

何でも、俺の偽物だかそっくりさんだかが暴れたらしいが……その報復をしてくるなら、とつづくに仕掛けてきているだろう。

今の時点で動きがないなら、この一件で動く気はないということだ。

シャクティ達は……まあ、ある意味一番危険だが。

(ウラノスとガネーシャ次第だな)

俺にまだ利用価値があるかどうか。全てはそれ次第だろう。

それぞれ俺の知らない切り札不死人を抱えている節はあるが……さて、どうなることか。

ただ、そこまで勝算の低い賭けだとは思えない。

そして、あの小子どもがダンジョンにこもったなら、ひとまず脅威はなくなつたと言えよう。

「ところで、お前。本当に知らなかったのか？」

「何をだい？」

「いや、俺が不死人だつてことをだ」

神罰同盟がギルドに駆け込んだ日。

拠点の館に引つ込んですぐに、お互い——四年越しに——身の上話を済ませている。

そこでアイシャにも不死人だと打ち明けたわけだ。

「当たり前だろ。霞の奴も何も言わなかったしね」

それはまあ、霞には口止めしてあるが。

「急にどうしたんだい？」

「いや……。知っていたから、俺に関わってきたのかと思っただけだ」

呻くと、アイシャはハツ、と鼻を鳴らした。

「あんたは誰もがあんたに誰かを殺させようとしてるでも思ってるのかい？」

「……いや、そういうわけでは、ないんだが……」

歯切れが悪くなるのを自覚していた。

ロードランでもドラングレイグでもロスリックでも、求められていたのはまさにそれだった。

大体、アイシャと出会ったのは中途半端に記憶を取り戻し、荒れていた頃だ。お世辞にも穏やかな出会いではない。

「そりゃまあ、ずいぶんと上品になつたもんだとは思うけどね」

露骨に体をすり寄せながら、アイシャが笑う。

……まあ、そういう事だ。特に最初の内は酷かつたと我ながら思う。

普通なら、二度目もないはずだが。

「まあ、理由は色々あるさ。やられっぱなしは性に合わないつてもその一つだしね」

ま、今も負け越してるけど——と、アイシャ。

「他にもあるのか?」

「そうだねえ……。まあ、優越感つてのはあつたね」

「優越感?」

まったく思いもしなかつた理由だった。

「そうさ。『灰色アッシュ・オブ・シンドラーの悪夢』……一切の熱を感じさせないまま、あらゆる冒険者の矜持を踏み躪っていく灰の男が、私の前じゃ獣みたいに盛り始めるんだ。悪い気はしないつてもんや」

だが、それは決して愛情ではない。

むしろ、正反対の感情。八つ当たりめいた——いや、八つ当たりそのものの憎悪だった。

初めてアイシャに抱いた感情はそれだ。彼女とて神の眷属冒険者なのだから。

……そんなことは、充分に伝わっていただろうに。

「……そーいうもんか？」

しかし、普段は、そんなに冷めていただろうか。

少なくとも戦闘中——いや、おかしな意味ではなく——ならば、いつでも大体ギリギリいっぱいのはずなんだが。

「今もある意味そうかもね」

「今も?」

両手で顔を包まれた。

琥珀色の瞳に自分の姿が映りこんでいる。

「男の獣性を鎮め、女は世界の安寧の柱となる」

「誰の言葉だ？」

それを、アイシャのものと考えerるのには微妙な違和感を覚えた。

「イシユタルの言葉だよ」

アイシャが、小さく笑う。

そこにはもう、憎悪はおろか嫌悪の色すら見られない。

やはり、この時代の人と神の関係は推し量れそうになかった。

「ま、今さら言うのもなんだけど。私達アマソネスだけの国で、私達アマソネスだけの神をやつていればそう

悪い女神じゃなかったのさ。雌雄が交わつて初めて新しい命が生まれ、豊穡に結び付

く。これもあいつの言葉だけど……私達アマソネスにとっては今さら論されるまでもない当然の

話だよ。ま、どこぞのヘツポコ狐はそれじゃ納得できなかつたようだけどね」

そういうものか。

いや、思えばグヴィンとて神にとつては優れた為政者であり、偉大な王だったはず。

すべては互いの価値観の違い。あるいは、互いの立ち位置の違いでしかない。

(……いや、俺だつて無関係じゃないか)

イシユタル自身を殺したところで——いや、殺したからこそ、その言葉からはもう逃

げられない。

否定すべき相手はすでになく、拒否すべき時は遠い過去となり果てて……そして、も

う手放せない。

「ただ、あの時のあんたと今のおあんた。その両方を知っている私はその言葉を否定でき

ないね」

あの時のあんたをそのまま放っておけば、オラリオ中に死体の山ができていたところさ——と、彼女が笑う。

だが……ああ、確かにそれは笑い話にもなりはしない。

あの時、アイシャと霞と出会っていなければ、今頃は亡者となり果てていただろう。

「自覚はあるようだね」

すっかり見透かされているらしい。

確かに、その自覚はあった。

何も不死人が亡者に堕ちるのは死んだからだけではない。心折られ、人間性を見失えばいつでもそうなりえるのだから。

「やれやれ、私と霞はギルド辺りから感謝状と金一封くらい貰ってていいんだけどねえ」
返す言葉もなかった。

「あの時ほどその言葉の正しさを実感した時はないってことさ。別に英雄を気取るつもりはないけど、世界を救っている実感があるってのは悪くないね」

案外、霞もそう思ってるかもね——と、彼女は冗談交じりに呟く。

いや、彼女にとっては実際冗談だったのだろう。

……俺にとっては冗談にもならないが。

どうやら、つくづく神の思惑からは逃れきれない運命らしい。

「ま、そんな小難しい事は考えなくても、単に強い雄おとしと食らいあうのはそれだけで体が熱くなるもんさ。他の同族アマゾネスに知られていないってのも悪くないね」

もつとも、どうやら他に何人も女がいるようだけどね——と、アイシャが目を細める。蛇に睨まれた蛙というか何というか……ここは沈黙を保つのが最適解だろう。

「だから、これからも末永く楽しませておくれよ、ご主人様」

「お前な……」

そもそも身請けの契約は成立していないんだが。

「強い雄おとしに抱かれるのも、強い奴と戦うのも同じことさ。何なら、あんたが強い奴と戦っているのを見るのもね。血が昂ってたまらないね」

瞳が熱を帯びる。実にアマゾネスらしい。

「まあ、しばらくは続くだろうな」

どうせまたウラノス辺りが妙な面倒ごごとを持ち込んでくるだろうしな——と、声にせず呟く。

アン・デイルか黒教会か。どうせ近いうちにその辺と渡りをつけると言ってくるに決まっている。

もちろん、俺としても連中が持っているであろう情報は欲しいが……。

(狂人と狂信者ならどちらがマシなんだろうな?)

もつとも、『火の時代』に未来を求めるならあれくらい振り切れなくてはやっていられないだろう。

かくいう俺自身、二度も世界を滅ぼしたくらいだ。

ともあれ、奴らと取っ組み合うまでの間くらいは平穩に過ごしたいところだ。それに、その時が来るまでに済ませておかなくてはならない事もある。

「なら、今のうちにお前の『移籍先』を考えないとな」

アイシャの新たな主神をどうにかしなくては。

「ま、あんたがいう『ソウルの業』とやらに乗り換えるのも悪くないと思うけどね」
確かに篝火がある今なら、そこまでの苦労はない。

だが、それならそれで、できれば火防女がいてほしいところだった。

(効率が悪いんだよな)

もちろん、篝火がなくとも多少の成長は可能だ。

だが、あつた方が圧倒的に効率がいい。

そして、そこに火防女がいてくれるなら最高だ。

(何しろ、ここじゃ大してソウルも手に入らないしな)

ソウルを無駄にしている、いつまでたっても成長できない。

とはいえ、火防女なんて巡礼地にも行かない限りはいないだろう。

(彼女達がいてくれたらな)

我が誓約主である白い蜘蛛姫様。

因果に囚われていた竜の娘である緑衣の巡礼。

そして、共犯者である最後の火防女。

いかに彼女達を支えられてきたのか、あらためて思い知る気分だ。

「もちろん、それも考慮に入れておくけどな。何しろ、いつまでその「ステイタス」が効果を発揮してくれるか分からないんだ」

「そりゃまあ、確かに今日まで封印されなかっただけでも幸運だけどね」

主神を失ったアイシヤだが、その「ステイタス」は今もまだ健在だった。

「しっかし、本当に何だかってまたこんなことになってんだか」

この数日間、何度目かの疑問をアイシヤが口にした。

実際のところ、明らかな異常事態だった。

少なくとも、他の戦闘娼婦達^{パレラ}は全て「ステイタス」が封印されていた。

アイシヤだけが例外だった理由として考えられるのは――

「それはまあ、やはり血を浴びた影響とみるべきだろうな」

この数日、あれこれと考えてみたが……やはり、これが一番可能性が高い。

あの時、アイシヤは俺とイシユタルの血をほぼ同時に浴びている。

そう、俺がイシユタルのソウルを喰らっている最中にだ。

その結果——

『改宗』に近い現象が起きたんだろう」

何しろ、『神の恩恵』の触媒は血だ。ソウルを取り込む途中の——あるいはソウルを喰らわれている途中の——血が何かしらの影響を及ぼしていたとしても不思議ではない。

(血とソウルには特別な関係があるはずだからな)

それこそ、狼血を酌み交わす事で『王の器』を得た「薪の王」もいる程なのだから。

「まあ、要するにあんたは今、真正銘私のご主人様つてわけだろ」

それはまた少し違う訳だが……。

(せいぜい保護しているだけだな)

いや、ただ単にまだイシユタルが生きっていると錯覚させているだけか。

いずれにしても不自然な状態だ。いつまで続くかは定かではない。

それまでに主神を見つけるか、『ソウルの業』に乗り換えるか——あるいは、その両方を成立させておかなくては、アイシヤはある日突然、完全な丸腰になりかねない。

(一番危険なのは、俺が死んだ時だろうな)

ダーキングの力を発動させるにしろ、そうでないにしろ、ソウルが大きく揺れ動き、あるいは体外に流出ないし消失する。その瞬間が、おそらく一番危ない。

それに、仮にこのまま永續するとして、それでも俺では成長させられない。それでは片手落ちだろう。

いや、問題——危険性はまだ他にある。そちらの方が、より深刻だ。

(まあ、今のところ影響は出ていないらしいが)

そちらは神罰同盟とやらを蹴散らしてすぐに、念入りに確認してある。

幸い、今のところこれといった影響は出ていないが——

「へフアイストスにでも頼むか。せめて「ステイタス」の更新だけでも」

何だったらミアハかガネーシャでも……いや、この際へステイアでもいい。

とにかく、この状態が続くのは避けたい。

いや、本当に恐れている事態が起こるかは分からないが……何であれ、異常事態が発生しているのは確かだ。

どんな形であれ、正常に戻す努力を惜しむべきではないだろう。

「ま、私の事はあとで考えるさ」

などと考えていると、アイシヤが改めてしなだれかかってきた。

「今はあんたを労ってやるよ、ご主人様？」

……因果は動き始めた。『火の時代』から『古代』、そして今この時。

すべてを通して降り積もった因果が、いずれこの地に吹き溜まる。

そうなれば、またうんざりするほど殺し合いが続くだろう。

それなら――

(今はもう少しだけ、こうしているとしようか……)

アイシャの体温を感じながら、ふと気になった。

今頃、ベルは何をしているのだろうか――と。

……

「何かありましたか？」

世界の果て。その一歩手前で、その方に問いかける。

いつも貞淑さと気品を放つ女性……我が君の従者は小さく微笑んでいる。

いや、いつも微笑を浮かべている方だが、今日はいつもよりずっと。

「ええ。『王たちの残り火』が、小さく火の粉を上げています」

『残り火』が？ あの方ではなく？」

だからこそ、アン・デール様は『試練』を科したというのに。

しかし、

「あの方の火は初めから消えていませんよ」

その女性は、何を気負うでもなく小さく微笑んでいる。

これが信頼というものなのだろうか。そう思えば、羨ましくもあった。

「蠢く因果の嵐の中で、この小さな火は燃え上がる事が出来るでしょうか……」

それとも、潰れて飲み込まれるのでしょうか——と、微かな憂いと共に彼女が呟く。

「新たな火が熾ったと？」

「いいえ。この火は、初めからこの世界に灯るはずだったもの。今までも何度となく火の粉を舞い上がらせては、その度に消されてきたものです」

千年の間、幾度となく熾っては消されてきた希望。

新たな時代——いや、この『時代』を正しい形に導くための篝火。

「では、また地上に蔓延る亡者共が……」

「それはどうでしょう」

私の悲鳴めいた声に、その方は緩やかに首を横に振った。

「古い神たちの末裔。その幾ばくかも、事態を察したようです」

「だとしたら、なおさら……」

「いいえ。この火が潰えたなら、その時こそあの方は殺すでしょう。地上に蔓延る古い神たちを」

この場所……いえ、この先に再び戻る事で——と、その方は告げた。

「ただ……。まだ、この『白い火』にとってここは遠すぎます。果たして、間に合うかどうか……」

神の枷に囚われた裏切者たちが、この場所につくのは容易ではない。

「その方……『白い火』は、神の枷に囚われていないのですか？」

その血は、奴らに一時の力を与えてはいる。だが、それもまた枷の一つだ。神どもが遊戯の駒に自分達を超える力など与えるはずがないのだから——と、アン・デイル様おっしゃっていた。

「さあ、どうでしょう」

私には、この方のように未来を見通す目などない。

……そもそも、あの方の従者たり得るような力など、何一つ持ち合わせていなかった。

「あら……」

と、そこで。その方は小さく呟いた。

頭冠で見えないものの、少しだけ眉をひそめているのが雰囲気分かる。

「まったく、困ったお方です」

ため息と共に、小さく肩をすくめた。

いつもの貞淑な姿とは違うその仕草も、見事に様になっているのだから少しずるい。

いえ、今はそんな事より——

「これは……」

玉座の守護者として顕在しているはずのあの方が、侵入者も訪れていないのに動き始

めていた。

実に四年ぶりの事だった。

「それほど、ですか。その『白い火』とは……」

「それを見定めるために向かったのでしょうか。五年前のようになるほど。間に合わないとはそういうことか。」

この四年間の間に訪れた何者か。

(いえ、もしかすると……)

新たな火とは、あの時傍らにいた少年なのだろうか。

とても荒事に向いているようには見えなかつたけれど……。

「しばらくの間、守りを固めねばなりません。セレン、お願いできますか？」

「はい、火防女様」

未だあの方の代わりを務められる程の力はない。

だが、それでも――

(同胞たちの未来を守らなくては……)

あるいは、人の時代も。

それを終わらせようとするモノはすぐそこまで近づいてきていた。

「敵対する積年の派閥かたきと一人、ダンジョンで相見えた……殺し合うには足りないか？」
何で、こんな時に——！

明滅する思考に、荒波のような波紋が広がる。

遠征初日。それも、まだほんの入り口で発生した異常事態イレギュラー。

再び上層にミノタウロスが出現した——いや。

白髪がガキが襲われているのを見て——

そんな目撃情報に、嫌な予感を感じ飛び出してから。

その予感を肯定するように、傷ついた小人族バルウムの少女を発見した。

「あの人を、ベル様を助けてさい……!!」

噂は聞いている。この子が、あの少年と行動を共にしているサポーター。

「場所は?!」

「正規ルートツ、E—16の広間ルーム……!!」

最後まで聞く必要はなかった。

担ぎ上げ、走り出す。

我が身を顧みず助けを求めに来たこの少女が遺した足跡血痕。

それが、あの少年の場所を教えてくれる。

そして、不気味に静まり返ったダンジョンに響く、あの子が抗う声と音が。
(もう少し——！)

目標地帯直前。^{エリア}最後の通路。

その先に——

「止まれ」

飛び込む前に、告げられたその一言があらゆる動きを止める。

決して大きな声ではない。怒声でもない。

でも、まるで咆哮^{ハウル}でも受けたかのように、足を止めていた。

分厚くも引き締まった胸板の上から軽鎧を着込んだ、巖のような巨躯。

竜の尾よりも強靱な筋肉で象られた四肢。

身の丈なら二Mを超える。

錆色の短髪からは、獣の耳——獣人の中でも特に獰猛と知られる猪人^{ポアズ}の証が覗く。

髪と同じ色の瞳に見入られただけで、咽喉を締め上げられたように呼吸が乱れた。

「……【猛^お者^{じや}】」

掠れた声で、その名を呼んでいた。

【フレイヤ・ファミリア】 団長、オツタル。

【ロキ・ファミリア】 対敵する第一級——いや、オラリオ最強の冒険者。

それは、モンスターが蠢くはずのダンジョンの一画。そこに生み出された無人の野に、ひとり悠然と立っていた。

「【劍姫】。手合わせ願おう」

背負っていた背囊を投げ捨て、静かに大剣を引き抜く。

「どうしてッ!？」

何でこんな時に——!

そこで、思考が一つの結論を導きだ出した。

『今後、一切の余計な真似をするな』

数日前の襲撃。あの時の『警告』の真意。

いや、神意は——

(ま、さか……!)

あの女神が企んでいる事は——!

あり得ない。あり得ない。あり得るはずがない。

でも。それでも。これは——

(そう言えば、あの時も……)

前兆は、確かにあった。

フィリア祭。あれだけ完全に『魅了』されたモンスターが、あの子だけ襲っていた。

それと同じこと。シルバーバックの次はミノタウロスを喚けている——
(今はあの人、いないから……！)

今まで手出ししなかったのは、あの子達の傍にクオンさんがいたからだろう。でも、今は神罰同盟との抗争が終わったばかりで傍にいない。

だから、ここぞとばかりに動き始めたのか。

問いかげながら——何一つ言葉を交わすまでもなく、確信を得ていた。

どういう意図かは定かではない。それでも、分かった。

神の気まぐれに翻弄されるあの少年を今助けられるのは、私しかないのだと。

「娘を下ろせ」

死ぬぞ——と、その双眸が細められる。

意識すらないまま、血で染まった手で必死に縋りついてくるその少女を、一瞬だけ抱きしめてから、そつと通路の隅に降ろし、《デスペレート》を引き抜いた。

選択の余地などない。

「来い、【剣姫】」

圧倒的な武威が、ダンジョンの薄闇すらも押し返す。

「【目覚めよ！】」

出し惜しみはしない。今は一刻一秒を争う。

風を纏い、劍を構えた。

相手はオラリオ唯一のLv. 7。やりすぎるといふ心配だけはしないでもいい。階位の壁もろとも、この強敵を撃ち抜く——考えるのはそれだけだ。

「リル・ラフアーガ！」

階層主さえ貫く風の閃光。

「オオオオオオオオオオオッ！」

迎え撃つのは猛者の鬨。

その激突は、ダンジョンを揺るがして——

「な——ッ!？」

神風は、猛者の一撃を前にしてついに両断された。

「ほう………」

いや、まったくの無意味ではない。

防具のいくつかを破壊し、その体にも傷を負わせている。

でも——

(浅い………!)

かすり傷だ。戦闘不能に迫りやるには程遠い。

「そうか。新たな高みに至ったか。だが——」

頬を伝う血を指先で払いのけ、【おうじゃ猛者】が小さく呟いた。

「——まだ温い」

反撃が、来る。

「くッ!?!」

その一撃を受けきれない。風を纏っているのに。

「——あ!?!」

もはや両手は用いていない。片腕での一撃だというのに——!

(重い………)

こちらは両手で構えてやつとだ。

いや、それでも後退させられていた。

絶対的な身体能力の差。昇華した『器』の違い。

通路の果てまでおよそ一〇M。普段なら一瞬で駆け抜け抜けるはずのそこが酷く遠かった。

「——あああああつっ!!」

委細構わず、強引に反撃に転じる。

咆哮と共に放つは神速の連撃。そのすべてが必殺の一撃。

これなら、例え『深層』のモンスターであつても瞬く間に斬り刻める——!

「——ツツ!？」

だというのに。目の前の武人は、そのすべてを弾き落とした。

(攻撃が通らない……!)

波一つない水面のように静かな双眸は、こちらの動きをすべて見透かしているかのようだ。

それどころか——

「——あ!？」

絶妙な角度に逸らされ、ほんの一瞬体勢を崩した私に、容赦なくその剛閃が迫る。

「【目覚めよ!】」
テンベスト

【エアリエル】に新たな精神力マインドを注ぎ込む。

威力を増した風が、すぐそこまで迫った死を押し返した。

(力押しはダメ!)

首の皮を一枚断ち切られながら、自分に言い聞かせる。

剣技だけ見ても、良くて互角。地力と経験の差は向こうが上。次に受け流されたら、その後に来る反撃を私は躲せない。

(速さ——!)

頼れるのは、この風だけ。

あらゆる敵を切り刻み、あらゆる攻撃を払いのける、私だけの風。
「はあああああああつ！」

剣速がさらに一段階跳ね上がった。

だというのに、その武人は僅かな揺らぎすら見せない。
巖どころか巨大な山脈の様だ。

「少し、本気を出そう」

「——ッ?!?!」

再び繰り出された両手での一撃。

気づいた時には、「おうじゃ猛者」が後ろに飛んでいた。

——いや、それは錯覚だ。

実際に飛ばされたのは私。

一瞬にして、一〇Mも後方に吹き飛ばされていた。

それどころか、踏みとどまれずに片膝をつく始末だ。

「そこを通してッ!!」

焦りが生まれていた。

このままでは間に合わない。

——行かなくては。

——助けなくては！

——死なせたたくない!!

「……ツツ！」

思い出したのは、少年と過ごした一週間。

それは自分でも驚くほどの糧となった。

立ち上がると同時に、再加速。再び間合いが零となる。

だが、それだけだ。

(斬り崩せない……！)

弾かれる。逸らされる。反応を上回れない。予測を振り切れない。

魔法エアリエルによつて、能力的には同等かそれ以上になっているはずなのに——！

(これが……！)

その手にある一振りの刃と、もう片腕にまとう手甲。

たったそれだけで、あらゆる攻撃を払いのける。

これが、オラリオ最強。そこにあるのは途方もない『技』と『駆け引き』。

(力の底が見えない！)

レヴィスより上。

それなら、あの人斬りと同等か。それとも、あの剣士と並び立つのか。

ああ、それ以前に——

〔イレギュラー〕
〔正体不明〕クオン

全ての冒険者が超えるべき壁。全ての冒険者にとつての悪夢。

あの人と、オラリオで唯一互角に渡り合える——まだ、『アッシュ・オブ・シンドラー灰色の悪夢』に囚われていない唯一の冒険者。それが〔おうじゃ猛者〕オツタルだった。

「ごんのおおおおおっ！」

たんつ、と——軽やかな跳躍音と、それに反する重い一撃が放たれた。

〔アマゾン大切断〕か……」

超重量武器のウルルガ大双刃の一撃すら押し返した〔おうじゃ猛者〕が小さく呟いた。

「どうなってるの、コレー!？」

叫びながら、テイオナが追いついてくる。

二人同時の連続攻撃だが——

(通じていない……?!)

連携がうまくいかない。互いの呼吸が微妙に乱されている。

これではまだ一対一。少しでも気を抜けば各個撃破されかねない。

「猪野郎ッ！」

さらに、地を這うような疾走が加わる。

いや、それだけではない。

ベートさんの一撃に続き、湾短刀ククリナイフが飛来する。

「どうなつてんのよ、コレ……!」

ティオナと同じセリフを口にしながら、ティオネも参戦した。

これで四対一。私達の波状攻撃に、ついにその山脈が揺らぎを見せる。

「ルオオオオオオッ!」

ベートさんの蹴りを避けた瞬間、防御に綻びが生じた。

(通った——!)

千載一遇の好機。その一瞬を、確実にものにした。

……そのつもりだった。

「今のは、なかなか悪くなかった」

足首を掴まれた。

「この猪やろ——ッ!」

そのまま追撃を仕掛けるベートさんに向かって振り下ろされた。

あまりの速さに悲鳴を上げる暇もない。

「うが——あ!?!」

うまく衝撃を逃がして受け止めてくれたものの、二人そろって後方に吹き飛ぶ。

「こんのおおお！」

「アイズに何てことするのよ！」

私達と入れ替ってアマゾネス姉妹が襲い掛かる。

「お前達は、まだ変わらんか」

「余計なお世話だよ!? っっていうか、これからまだ育つし?!」

「いつまでも自分だけがLv. 7だなんて思わないでよね！」

Lv. 5二人の猛攻を前にしても、その山脈は動じない。

荒れ狂う大双刃ウルガも、乱れ舞う湾短刀ククリナイフもその剣域を抜けられない。

そこに銀靴フロスウィルトが加わる——けど。

「邪魔だアマゾネスども！」

「はあ?! あんたが邪魔なのよ！」

何故、【猛者】おうじやがここに陣取っていたのか、その一瞬で理解した。

(狭い……!)

特に素早さを武器とする私やベートさんにとって、この通路は狭すぎた。

四人も並べば、お互いに動きを阻害されてしまう。

もちろん、凡百の相手ならその程度は何の問題にもならない。

でも、オツタル相手なら話は別だ。僅かな制限は著しい障害へと変貌する。

何より、「**【猛者】**」自身が連携を崩しにかかってくる。

同時に仕掛けられるのは二人まで。これでは、数の優位を活かしきれない。

「セコい真似しやがって、この猪野郎がア！」

それに勘付いたベートさんが毒づく——けど。

「貴様らが未熟なだけだ」

戦場での駆け引きに負けたのは私達の方だ。

予想される最大の敵とその人数。兵装。それを見定め、もつとも迎撃しやすい場所に陣を敷く。

「**【猛者】**」は初めからここで単身、私達「ロキ・ファミリア」を迎え撃つつもりだったのだから。

最初から全力で。一切の容赦なく、私達を敵と見定めている。

「まずはひとり」

「ヤバ——！」

乱れた陣形からはみ出たティオネに、「**【猛者】**」の閃斬が迫る——

「はああつ！」

それより一瞬だけ早く、黄金の閃光が奔った。

それを避けるべく、初めて「**【猛者】**」が後退する。

「団長！」

それを成し遂げたのは、フィンの槍だった。

「やれやれ。妙に親指が疼くと思つていたけど……まさかこれほどの大物とはね」

その言葉の最中、互いにいったん間合いを開く。

「やあ、オツタル」

「……フィンか」

旧友同士で交わされるかのような挨拶。

だが、場の空気はさらに張り詰めたものとなっている。

「今一つ状況が掴めていないんだが……何故この場所で、この時に僕達と矛を交えたのか。その理由を訊いてもいいかな？」

「敵を討つために時と場所を選ぶ必要があるか？」

「ごもつとも。では、それは派閥の総意、ひいては君の主の神意と受け取つていいのかな？ 神フレイヤは、僕達との全面戦争を望むと？」

「全面戦争か」

笑みを浮かべながら尋ねたフィンに、オツタルもまた小さく笑つて見せた。

「違うな。これは、俺の独断だ」

笑みは一瞬。あくまで平然と、その武人は言葉を続けた。

「四年前。あの男は単独でお前達の本拠地ホトに攻め込んだそうだな」

「……」

誰の事を指しているかなど、訪ねるまでもない。

あの人は——【イレギュラー正体不明】クオンは、確かに単独で攻め込んできた。

「繰り返すが、これは俺の独断だ」

覇気が膨れ上がる。

「あの男にできて、俺にできない道理はない」

その巨軀が、さらに一回り大きくなったような錯覚を覚えた。

「邪魔をするな。邪魔をするなら、ここで潰つぶえろ。【ロキ・ファミア】」

それ以上の言葉は、もはや無用だった。

「テメエがくたばれ猪野郎がア！」

再び戦端が開く。

「——未熟」

先程との違いは、【わっしや猛者】が攻勢に出てくる事だ。

「がア!?!」

ベートさんの蹴りより早く、拳が放たれる。

「こんのおおおおおっ！」

「まだ温い」

大双刃ウツルガよりも重厚な一撃が繰り出される。

「なめんじゃねえぞ、クソ猪があ！」

「雑な動きだ」

そして、烈火の如き狂奔にも動じない不動の心。

「その程度か」

狭い通路を活用され、動きを阻害されたところを、まとめて刃の暴風が薙ぎ払って行く。

圧倒的だった。

心技体。その全てが不足なく揃っている。

これが——これこそが、おうじゃ【猛者】。

今代の英雄たり得る『器』の持ち主。

「くっ！」

四年前の一騎打ちはおうじゃ【猛者】の敗北だと嗤う人がいると聞く。

確かに、その言葉は完全な間違いではないのかもしれない。

でも、だからどうした。

仮にクオンさんに敗れたとして、それでもこの武人が弱くなったわけではない。

オラリオ唯一のLv. 7であることも。積み重ねられた膨大な経験も。果ての無い鍛錬によって育てられた体も。徹底して磨き抜かれた技術も。何一つ損なわれていないのだから。

(ううん、それどころじゃない——ッ！)

敗北を知った——あるいは感じた——事で、「**猛者**」は更なる高みへ飛躍しつつある。

更なる高みを見据え、飽くなき飢えを取り戻したこの英傑は——！

「どうした、フィン。『**灰色の悪夢**』に心まで折られたか？」

ついに前衛——Lv. 5三人が蹂躪された。

「言ってくれる……ッ！」

Lv. 6
Lv. 7
フィンとオツタルの激突。

私よりずっと経験を重ね、「ステイタス」を育てているフィンにも余裕があるようには見えなかった。

最初から全力で、それでも少しずつ押されている。

でも——

(今が好機！)

フィンチャンスの動きに合わせ、一気に間合いを詰める。

二対一。何より、お互いに武器の相性がいい。

フィンの槍は言うに及ばず、《デスペレート》も刺突を主体として戦える剣だ。狭い通路でも動きをさほど制限されない。

「はあああああああつ！」

戦いは佳境へと突入しつつあった。

…

（さて、教えてもらおうか）

【ロキ・ファミリア】——地上で用意できる最大の敵を前にしても、心は動じない。

同じ失態は二度は晒さない。

（今の俺の力が、一体どの程度なのかを）

それを見定めるのには、適役と言えよう。

そう、特に——

（最初の一撃は悪くなかった）

流石は【剣姫】と称されるだけの事はある。

腕にはまだ、痺れに似た痛みが残っているほどだ。

余波によって負った傷も、単なるかすり傷というには少しばかり深い。

（魔法の上乗せがあったとはいえ、これほどか）

そろそろこの『器』の限界——上限が近い。

それは自覚していたが、まさかここまで迫られるとは。

まったく、驚くべき魔法だと言えよう。

『あの男にできて、俺にできない道理はない』

己の言葉を証明するべく、フィンの槍を真正面からはじき返す。

切れは良い。純粹に槍術の冴えで言えば、クオンにも勝るだろう。

だが、それではあの男には通じない。ならば、俺にも通じない。

(四年前。あの時のクオンと今の俺の力。そこに、それほどの差があるはずがない)

クオンは四年前に「ロキ・ファミリア」を破っている。ならば、今の俺にできないはずがない。

(次の場所へと至る。その糧の一つとなれ、「ロキ・ファミリア」)

次に破るべき壁。それは、すでに見えていた。

ここでこの派閥を潰せれば、その壁にまた一步近づける。

「舐めるな！」

速さを増したフィンの槍が、ついに体を掠める。

(流石に、そう簡単にはいかんか)

今のは対応できたはずだ。クオンなら防ぐか、下手をすれば受け流していた。

そして、あの男に受け流されるのは概ね死を意味する。
その一步がまだ詰められない。

(だが、これでいい)

今の俺に見えているのは『フェルト恩恵』の壁だけだ。

だが、それとは別にもう一つ――

(これで、こちらの正体も見定められるか?)

己の内。より深いところで胎動し始めた何か。

五年前から時折は感じていたそれは、四年前の……そして、先日のクオンとの一戦を
経てよりはつきりと感じるようになった。

青白い輝き。あるいは、あの時奴が放とうとした闇よりも暗い何か。

これが何なのか、それは分からない――

(いや……)

俺とクオンの差。いや、俺と奴らとの差。

それこそが、この何か。冷酷で、凶暴で、仄暗い。しかし、どこか生温かい何か。

これを己の物とした時こそ、俺は奴らと同じ場所に立てるはずだ。

(それとも、この狂気に吞まれて消えるか?)

さもありません。これは、少しでも扱いを誤ればたちまちのうちに俺を食い殺すだろ

う。

一切の容赦なく。

(だからどうした)

この身。この力は全てフレイヤ様のために。

あの方に仇成すクオンを超える。それはあの方の眷属として当然の義務だ。

(再び差を開かれたがな)

横腹——もう痕も残っていない傷が痛んだ。

今の俺を超えるとなると、奴はすでに階位の壁を越えている。

文字通り、一歩先を行かれた。

(忌々しいな、L.V. 0が)

まったく、一回りしていつそ清々しいほどだ。

だが——

(更なる高みへ。あの男など、その途中にある壁の一つにすぎん)

あの方に仇成すクオンを超える。それはあの方の眷属として当然の義務だ。

俺が真に求めるのはその先。その先にある神の領域。

神武と呼ぶに相応しいあの高みだ。

「はあああああああつー！」

「勇者」の槍が。【劍姫】の劍戟が。——死が、体を掠めていく。
「まだだ」

流石にLv. 6二人は手ごわい。

手ごわい？ 馬鹿な事を——！

(俺の限界はここではない……ッ！)

あの少年——いや、あの冒険者も今、限界に挑んでいる。

背中からその氣勢が伝わってくる。

ならば、先達として、俺もそれくらいはやってのけねばなるまい。

所詮格下Lv. 6と言えど、二人もいればあの猛牛戦士の代わりくらいは務まるだろう。

「まだ温い……ッ！」

閃刃の驟雨——立ちはだかる限界の壁……いや、その幻影へと踏み込む。

ここでは終わらない。

「オオオオオオオオオオッ！」

狙いは【勇者】。派閥の精神的支柱。

「——ッッ!?!」

これをへし折れば、この連中は烏合の衆に成り下がる。

だが——

「まだ、神域には至らんか……ッ！」

己の未熟さを呪う。

槍こそ断ち斬つたが、それだけだ。精々が薄皮一枚。その先には届いていない。

刃が通つていれば届いたはずだ。

それが『斬る』止まりだったが故に、敵に回避する余裕を与えてしまった。

「デメエ、このクソ猪があー！」

止めを刺すより先に、死角から飛び込んできたアマゾネス——【怒蛇】ヨルムガンドを裏拳で叩き

落す。おそらく、スキルか何かが発作用しているのだろう。狂奔すればするほどこのアマゾネス姉妹は強くなる。

だが、

(あの男にとってはいい鴨だろうな)

その圧倒的な暴力ですら押し切れない相手。それと敵対した際に冷静さを欠いている事の危険性は、つい先日嫌と言うほど味わっている。

「シッ！」

ともあれ。【怒蛇】ヨルムガンドが起死回生の隙を生み出したのは事実だ。

その一瞬をモノにし、フィンが攻撃を仕掛けてくる。

迫るのは、半分になった槍の穂先。それを払いのけるのは容易いが——

「ほう?」

追撃を手甲で受け止めていた。

左手に残るもう半分。槌代わりに振るわれたそれはガラクタだが——それでも、L
V. 6の脅力だ。

まともに受ければただでは済むまい。

「芸を増やしたか?」

繰り出される連撃は、いわば刺剣と槌の変則二刀流。

「そういう訳でもないんだけどねッ!」

左右の手に異なる武器を持ち、同時に併用する。

それは、言葉にするほど簡単な事ではない。いかに『フェアルナ恩恵』を宿した冒険者と言えど、
即興でやるには限度があった。

だが、フィンの動きには含蓄がある。

「僕だって四年前のままじゃいられない」

二刀流ならぬ二槍流を会得した、と言ったところか。

「それでこの程度か? いつまでそこで燻っている」

「言われなくとも、すぐに追いつくさ……ッ!」

わずかに動きが良くなった。

フィンもこの戦いで最後の誤差修正を行っているらしい。

だが――

「その程度で破れるほど容易い壁ではない」

「分かっているとも。もうずいぶんと長いこと睨んでいるからね」

「はああつ！」

次に迫りくるのは【劍姫】の一撃。

流石に拳ひとつで払いのけられるほど安くはない。

「ぬう……！」

手甲を使って受け流した――が、少し焦りがあつたか。

あの男がやってのける完全なそれよりは多少強引だった。

だが、目的は果たした。

「フンッ！」

「やらせるかよ、猪野郎がア！」

「ツアナルガン」の突進を受け、両断するはずだった一撃が空を切る。

「どちらが猪だ」

技など欠片もない。純粋な加速力だけを頼りにしたその突進は、それでも、この状況であれば確かに有益だったと言えよう。俺の狙いを狂わせるほどに。

しかし、それだけだ。

「ガ——ア!?」

ツアナルガンド

【凶狼】の弱点は、耐久アビリティの低さにある。

無論、凡百の冒険者に比べれば遙かな高みにいる。それは認めよう。

だが、この状況ではその僅かな未熟も致命的なものとなる。

組み付くがゆえに衝撃を逃せない今、Lv・7の蹴りは相応に響くだろう。そして、ほんの僅かでも拘束が緩めば、引きはがすのは容易い。

「こんのおおおおっ! ——つて、うわああ?!」

そのまま【大切断】へと叩き付ける。

「ベート邪魔ああああっ!」

残響を残して吹っ飛んでいく【大切断】を視界の片隅で見送る。

あのアマゾネスは、技も心も少しばかり真っ直ぐ過ぎる。

(……まあ、別にそれが悪いとは言わんが)

それとも、何かを自制しているのか。

(そういえば、この姉妹の生まれは確か——)

——いかん。どうやら、まだ師の気分が抜けていないらしい。

(俺自身もまだ道半ばなのだがな)

知らず、敵の欠点……言い換えれば、次の課題を思い浮かべている自分に気づき、自省する。

討つべき敵を前にして、それは流石に礼を欠く。

「離せ、この猪野郎！」

「そうだな」

元より、そのつもりだった。

「うお……ッ!？」

「返すぞ、リヴェリア」

通路の最奥に陣取り、詠唱を行っていたハイエルフへとその狼ウエアウルフ人を放り投げる。

「チィ！」

無論、都市最強の魔導士の並行詠唱を中断させるほどではない。

だが、完成を一瞬だけ遅らせるくらいはできた。

「やらせないよ」

やれやれ、流石にそう容易くはないか——と、改めてフィンと打ち合いながら苦笑していた。

「……笑うなんて余裕だね？」

「そうだな」

それは、この壁を破れるという手ごたえのせいだろう。容易くはないが、それだけだ。……いや、やはり俺もまだ未熟だということか。

「そろそろ、終わりにするとしよう」

得ていない勝利など、蜃気楼より実体がない。

むしろ、【九魔姫】^{ナインヘル}の魔法という敗北はまだすぐそこにあるというのに。

「オオオオオオオオオオ——ッ!!」

今の『器』の限界へ。

あるいは、まだ見ぬ何か——俺の奥底に封じられた何かへと手を伸ばす。

そして、最後の激突——

「……むっ?!」

——より、ほんの僅かに早く。

その気配に気づき、舌打ちしていた。

……そもそも【ロキ・ファミリア】の足止めなど、枝葉末節に過ぎない。

本題は、あの冒険者の最初の冒険を邪魔させない事だ。

(何故、今さら動き出した……ッ?!)

なればこそ、この気配は不味い。

「な……ッ!?!」

俺の勤が外れていないなら、もはや【ロキ・ファミリア】にかまけている暇はなかった。

……

「え？ 逃げた……？」

戻ってきたティオナが目を瞬かせる。

「いや、そんなはずが……」

フィンも、曖昧に言葉を濁した。

そもそも、【おうじや猛者】の向かった先は、あの少年がいる場所のはず——

「あ、アイズ!？」

今はそんな事はどうでもいい。

障害がなくなつたなら、すぐにでも駆け付けなくては。

「クソが！ 一体何が起こつてやがる!？」

「リヴェリアー！ その小人族バルウムちゃん助けてあげて——」

少し遅れて、ベートさんとティオナが追ってくる。

そして、目的地まであと数Mと言つたところで、【おうじや猛者】の背中が見えてくる。

何かに斬りかかろうとして——

「な——ッ!？」

思わず絶句していた。

逆に、その巨軀が崩れ落ちたからだ。

流石に膝をつくほどではない。でも、その寸前まで行った。

でも、本当に驚くべきはその先にいた。

「あれは——！」

身の丈なら、一八〇Cに届かないくらい。

とどころが溶けた骸のような全身鎧を着込んだその姿には見覚えがあった。

オラリオで名を馳せる冒険者なら、誰もが。

「古王^{スルト}」!?」

五年前、オラリオに出没した謎の怪人。

それが、ついに【猛者^{おうじゃ}】の前に——？

「え……？」

その怪人は、炎を纏ってはいない。

いや、剣すら構えていない。【猛者^{おうじゃ}】を揺るがしたのは拳での一撃らしい。

それどころか——

「フン……。どういうつもりだ？」

僅かにふらつきながらも立ち上がる【猛者^{おうじゃ}】を他所に、その怪人は広間^{ルーム}の奥へと踏み

入っていく。

その先に、あの少年もいた。

（間に合った！）

まだ生きている。急いで割って入る。

そのつもりだった。

「もう、アイズ・ヴァレンシユタインに助けられるわけにはいかないんだ……ッ！」
それを制止したのは、【おうじゃ猛者】でも【スルト古王】でもなかった。

静止したのは、あの少年自身——！

「待って……！」

傷ついた体で立ち上がり、両手に武器を構え、ミノタウロスを見据えている。

「——勝負だ」

ああ、もう止められない——と。

その時、全ての理屈を超えた場所で理解していた。

『——アイズ、そこにいなさい』

最後に見た、お父さんの背中と重なっていたから。

「今さら、俺が足止めする必要もないだろう」

【おうじゃ猛者】が小さく笑い——

「おおおおおッ！」

少年の——『冒険者』の咆哮産声がダンジョンに響きわたった。

3

「早く、行けええええええええつ!!」

リリの足音がようやく聞くこえなくなつた途端、

『ヴヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

僕は赤黒い濁流に蹂躪された。

(死んだ……)

昔、まだ泳げなかつた頃、川に落ちた時を思い出す。

あの時、大量の水に抱かれたその瞬間に、上も下も右も左も分からなくなつた。

今もそうだ。その一瞬、何が起こつたかすら理解できなかつた。

(死んだ……ッ!)

誰かがどこかで喚く。

ただひたすらに、重く暗い何か体が絡みつく。

呼吸すらできやしない。水流に翻弄され、水面に沈むその感覚は浮遊感にも似てい

た。

空を飛ぶとは、こんな感覚なのかもしれない——激痛から逃れるため、思考はそんな意味のない空想を繰り返すばかりだ。

息を止める。心臓を止める。そうすれば、この恐怖と激痛から逃げられる——！

（——わけ、ねーだろ……ッ！）

リリが離れて行って、まだ数秒。

僕が今ここで死んだら、リリまで道ずれにしてしまう。

コイツをこの広間ルームから出したら、リリが死ぬ。

その執念——あるいは恐怖——だけを頼りに跳ね起きた。

「が……あッ！」

苦い何かが口の中に広がる。

吐き出したいが、咽喉はすっかり乾ききっていた。

傷の度合いを確かめている余裕もない。

（前に——前に、出ろ！）

もう少しだけ、この場所に引き留めなくちやいけないのに——！

ミノタウロスの双眸が、僕を睨みつける。

ただそれだけで——

「畜生……ッ！」

前に——出れない……!!

頼りの綱だったショートソードは、どこかに落としてしまっている。体が竦む。膝が笑う。呼吸だつてろくにできない。

「ふ、ふあ——…」

こわい、怖い、怖くて仕方がない……!!

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオツ!!」

身動きできないまま右腕を突き出し、裏返った声で叫んだ。

あの時にはなかった力に継る——が、

『ウヴオオオオオオオオオツ!』

「うわあああああああああッ!」

叫びながら、魔法を乱射する。

でも、効いていない。後退させたのは初撃だけ。それも、たった一歩だけだ。

有効打を与えられない。その巨軀を押し返せない。それどころか——

(切り払われる!?)

その手にある大剣の一振りでまとめて薙ぎ払われる。

(どこのどいつだよ、この化け物に大剣なんて持たせた奴は——!?)

悲鳴を上げている暇もない。

炎雷の雨をものもしないその怪物は、もうすぐそこに迫っている。

「くッー」

容赦なく放たれる断頭台の一撃。

掠めでもしたら、それだけで体を持っていかれるのは間違いない。

生き残りたいたいなら、死角へ飛び込まなくては――

「――があ……ッ!?!」

その動きを読まれていた。

その脚が動く。自分の体に迫る蹄が、妙にゆつくりと見えた。

咄嗟に両手を交差させて、防御姿勢をとる。

そして、衝撃。その瞬間には、痛みすら感じなかった。

ただ、自分が多くの人に助けられたのだと。それだけを理解していた。

(神様)

この体に『神ファルナの恩恵』が宿っていないければ。

(クオンさん)

あの人に教えてもらった咄嗟の体捌き。アイズさんも褒めてくれたその動きがなければ。

(エイナさん)

信頼するアドバイザーが贈ってくれたそのプロテクターがなければ。

(ヴェルフさん)

まだ顔も知らない鍛冶師。この軽鎧を打ってくれたその人がいなければ。

(アイズさん)

憧憬と過ごした一週間。あの人が教えてくれた『技』と、育ててくれた耐久アビリティがなければ。

僕は——ベル・クラネルはここで死んでいただろう。

遠かったはずの壁に叩きつけられながら、ただそれだけを自覚していた。

「……………あ、ぎ……………いー！」

まだ致命傷じゃない。

これは死の先触れではなく、まだ生があることを伝える激痛だ。

だけど——

(どんだけ、派手に吹き飛ばせば気が済むんだ……………ッ!?)

最初の一撃でガタが来ていた軽鎧がついに崩落した。

贈ってもらったプロテクターは砕け散り、もう影も形もない。

残っているのは、縋りつくように握りしめている《神様のナイフ》だけ。

まだ生きてはいる。だが、死を退けたわけでもない。

まるで生殺しだ。怖くて仕方がない。発狂しそうだ。そうすれば楽になる——
「ひっ!？」

ひきつった悲鳴すら上げている暇はない。それすら断ち切るように、大剣が迫っていた。

なりふり構わず、地を這うようにしてそれを躲す。

『ウヴオオオオオオオオオオオオ!』

逃げるな!——と、そう一喝された気がした。

だけど——

(もう、無理……)

その咆哮ハウルに、心が折られていた。

あれだけ強張っていた体が弛緩する。『恩恵ファアルナ』を失ったかのように体が重い。

迫りくる大剣にもまるで現実感を感じない。

そして——

「——ッ!」

次の瞬間には、僕の意識は闇よりも暗いどこかへと落ちて行った。

……

世界の果てにいた。

朽ちかけたその建物は、世界の果てなのだと言わせた。誰かが囁いた。

『——オオオオオオ！』

目の前にいるのは身の丈一〇Mはありそうな醜悪な怪物。

■■■■■など目ではないほどの威圧感を放ち、岩とも大樹ともつかない何かでできた大槌を携えたそれは、英雄譚に出て来る伝説の怪物を連想させた。

でも、それと相対するのは、英雄などではない。

その身にまとうのは草臥れた——どこかで見た覚えのある——革製の旅装。

握りしめているのは、今にも折れそうな古びた曲剣のみ。

ならば、両者の激突など……その結果など、火を見るよりも明らかだった。

「があ……ッッ!」

信じられない力で振り回されるその大槌に、その人の体は枯葉のように吹き飛ばされる。

全身の骨が砕け、あらゆる内臓が破裂する感覚。即死していたはずだ。

さらに、驚くべき身軽さで跳躍した巨体が、その人を押しつぶす。

それでも、その人は死んでいなかった。

恐ろしい勢いで何かに蝕まれながら——あるいは、喪いながら——その人は、立ち上

がっては怪物へと挑む。

鎧の浮いたその剣だけを頼りに。

そんな一方的で絶望的な戦いが、どれだけ続いただろうか。

偶然にも、その体は近くの通路へと放り込まれる。

そして――

本当に世界の果てに迷い込んでしまったらしい。

崩れた壁。穴の開いた天井。瓦礫が散乱する通路。

嘆く死体。動く白骨。瓦礫の隙間を縫って逃げていく鼠すらも、その体が腐りかけて

いた。

この廃墟に生はない。全てが終わってしまっている。

終わりながら、こうして存在している。

「おお、君は■■■■じゃないんだな。よかった……」

その廃墟を他の出口を求めて彷徨って……その人は。己の運命を定める出会いを果
たす。

傷つき倒れたその騎士こそが、彼を解放してくれた恩人なのだ、何故か僕は知って
いた。

「君に、願いがある……」

託されたのは竜の紋章が施された――ああ、それを知っている――盾と、黄金に輝く

瓶。

「これで、希望も持って死ねるよ……」

そして、一つの使命。

「ありがとうな……」

それを胸に、末期の嘔きに見送られて、その人は歩き出した。たどり着いたのは、屋根の名残の上。

「――」

眼下にしているのは、獲物を見失ったあの怪物だった。

もとより、逃げ道などありはしない。

ならば、それを超えて先へと進むしかないのだ。

最初の壁を見据えて、剣を握りしめる。

一撃だ――

と、その人は、僕呟いていた。

この一撃に、全てを賭ける――

あの騎士の願いに応じる資格が、果たして俺僕にあるかどうか。それではつきりする。噛みしめるように呟き、地を蹴った。

『オオオオオオオオオオオッ！』

天から舞い落ちるその人と、天を睨む怪物と視線が入り交わる。

そして、激突。今にも折れそうなその曲剣が、怪物の体に深々と突き刺さった。

何かが蠢き、何かを喰らっていく。それこそが、資格呪い。

「——オ！」

この咆哮こそが、きつと産声だったのだろう。

この人は、この時この場所で、あの騎士の願いに応じて自らの資格を確かに示したのだ。

崩れ落ちた怪物が、光となって消える。

地面に転がったその人はやがて立ち上がり、その先にある大扉を押し開けた。

これが、その英雄譚の始まりだった。

数多の怪物。巨大な竜。鋼鉄の巨人。闇よりも暗い何かの主。騎士たち。そして、
王神。

尋常ならざる敵が、その人の行く手に次々と立ちはだかる。

星の数ほどの敗北を重ねながら、這うような早さでその人は先へと進んでいく。

煌びやかさとは無縁の、暗くて泥臭く、死に塗れた旅路だった。

神の都へ。遠い過去へ。貴壁の大国へ。王たちの故郷へ。そして、世界の果てへ。

魔境から魔境へと終わりの見えない旅を続けるその英雄。

黒衣を纏ったその人は――

その名前を呼ぶより先に、白くて何も無い世界に転がっていた。

「どうした、ベル。もう降参か？」

村の英雄が小さく笑う。

ここで領けば、きっと許してくれる。あの時のように、助けてくれるだろう。

「もうちよつとだけ頑張つて、向こうを見てみるといい」

指さす向こう側を、残った力を総動員して向いた気がした。

見えたのは、今まで見たこともないほど必死な顔をして、誰かと戦う女の人。

(あ、アイズさん……)

アイズ・ヴァレンシユタイン。黄金の憧憬。

「そこを通してッ!!」

その叫びの真意を、何の根拠もないまま正しく理解していた。

「どうする、ベル？」

ああ、本当に……。時々、この人は本当に意地の悪いことをする。

このまま転がっていれば、すぐにあの人が助けにきてくれる。それは分かっていた。

そう、分かっていた。だからこそ――

(この人に助けられるだけの弱い自分なんて、絶対につ、ご免だ!!)

消えかけた火が再び燃え上がった。

みじめな強がりなんて百も承知だ。

(立て。立てっ。立てよっ！)

とどまるところを知らない思いの丈。それだけを頼りに体を引きずり起こす。

「この意地っ張り」

そう言つて笑うクオンさんの手が、それでも無様にふらついた僕の体を引つ張り起こした。

「なら、思う存分に格好つけてこい——」

立ち上がると同時、白い世界が消え始める。

その最後の一瞬。

からかうように。冷やかすように。

「——あんな相手、お前なら楽勝だろう？」

そんな激励とともに、軽くその背を押された。

…

「——あっ!?!」

こひゆ——と、そんな音ともに呼吸が再開した。

不規則に脈打つ心臓が、今も生を伝える。

右手には《神様のナイフ》。左手には《呪術の火》。

場所は薄暗いダンジョン。その中空に灯るのは「ぬくもりの火」。

そして――

『ウヴオオオオオッ！』

なおも迫りくる猛牛の剣戟。

新たな死の気配に、まだ朦朧とする意識を捨ておいて体が勝手に対応していた。

（あの一瞬――）

転がっていた床から跳ね起き、飛び退きながら呻いていた。

（咄嗟に……）

全身を包む痛みの中で、なおジンジンと疼く右手。

このナイフで、あの大剣を防いでいたのだろう。だから、まだこの体は両断されていない。
ない。

そして、意識を失う前にあの呪術を放っていたからこそ、まだ生きている。

それとも、蘇生しただけか。

地面に転がっていたその瞬間、走馬燈のようなものを見ていた気がする。

（どっちでもいい）

口の中にたまっていた血と唾とを吐き捨てる。
今もこうして生きているなら、それが全てだ。

「フ……」

強張っていた肺がほぐれ、吐息が零れた。

柔らかな火は、まだ体を癒してくれている……が、それでも損傷は深刻だ。

プロテクターはすでになく、軽鎧はほぼ失われている。

(残っているのは……)

神様のナイフ。リリから貰ったバゼラト両刃短剣。呪術。魔法。

そして、壊れかけの体を突き動かす滑稽なまでの思い。

「」

それ以外のものは、すべて燃え尽きていた。

竦む体も。怯えも。恐怖も。すべて。

猛牛を——挑超えるむべき宿敵壁を見据える。

「もう、アイズ・ヴァレンシユタインに助けられるわけにはいかないんだ……ッ！」

だから——

「——勝負だ」

——冒険を、しよう。

左手に《神様のナイフ》を。右手には《シユワイザー^両デーゲン^{短剣}》を。それぞれ構えて、恐怖の鎖を引き千切るために地面を蹴る。

(死んだのか?)

そう思うほど、体が軽かった。

頭が冴えていた。

想いが燃えていた。

全てはこの壁を——ベル・クラネルにとって最初の冒険を乗り越えるために。

「——ッ!?!」

ゾンツ——と、恐ろしい音とともに、刃が振り下ろされる。

ギリギリのところ回避が間に合った。

決して早く動けるようになっていくわけではないのだと自覚した。

だが——

(見える……ッ!)

それがどうした。

動きなら見えていた。そして、読めてもいる。

この動きを知っていた。記憶にあるそれは、もっと、ずっと恐ろしい。

(凶体に騙されるなッ!)

直撃すれば、死は免れない。

掠めただけで戦闘不能に追いやられるだろう。

だが、それだけだ。この程度の動きなら当たるはずがない。

(もつと速い動きを知っているだろうッ！)

もう一人の師であるあの少女の剣はもつと速い。

当たり前だ。黄金の憧憬は、まさに剣の名を神々から拝しているのだから。

『ヴオオオオオオオッ！』

「おおおおおおおッ！」

咆哮が重なる。

今この時。目の前にいる敵だけが世界の全てだった。

(読めてるんだよ！)

先の読める攻撃を迎え撃つのは簡単だった。

大ぶりの一撃を掻い潜り、がら空きの横腹をバゼライト両刃短剣で撫でる。

だが、

(硬い……ッ！)

馬鹿みたいに分厚い筋肉は、ただそれだけで刃を押しつけてくる。

この両刃短剣もまた駆け出しの冒険者には充分すぎるほどの業物だ——が、今回ばかり

りは流石に相手が悪すぎた。

そして――

(力押しはできない――！)

体躯の差。……いや、前提となる力の差がありすぎる。

どうあつても力では勝てない。まともに受けたら、そのまま押しつぶされる。

(それがどうした！)

続く紫紺の剣閃が、猛牛の体を斬り裂き、揺るがせた。

この武器なら通じる。他ならぬこの猛牛自身の動きが、それを証明している。

紫紺の輝きを前に、不動だったはずの猛牛が回避を選択しているのだから。

ならば、あとは然るべき場所に確実に当てればいい。

それこそが『技』であり、それができる状況を生み出すことが『駆け引き』だ。

(甘いんだよ！)

見え透いた必殺を躲し、弾き、また逸らす。

狙うのは剣の側面。憧憬の少女から教わった防御術。

「あああああああッ!!」

燃え上がるほどの熱を帯びた背中に押されるように、さらに加速していく。

こここそが自分の間合い。ベル・クラネルが最も得意とする領域――！

『グオオオオオオッ!?!』

軋みを上げる両刃短剣で大剣を逸らし、再び紫紺の輝きが奔る。
神の刃は、確実に分厚い毛皮の向こう側に届いている。

しかし――

『ウヴオオオオッ!』

その程度では倒れないからこそその怪物。モンスター

互いの間に横たわる圧倒的な基礎の違いは、小手先の技など圧倒する。

肉を切らせて骨を断つ。

明らかに何者かの手ほどきを受けているこの猛牛なら、それを心得ているはずだ。

『オオオオオオオオッ!!』

横薙ぎに振り回される大剣。

竜巻めいたそれから、弾き出される。

加速が殺され、間合いが開いた。

仕切り直した。

【「ファイアボルト」!】

誰よりも速い己の炎雷を解き放つ。

「切り払いやがった!?!」

どこかで誰かが叫んだような気がした。

何を今さら。そんな事は、端から分かっている。

一発や二発では役にも立たない。精神力マインドの限界など完全に無視して連射する。

ついに弾幕に押され、切り払いが追い付かなくなった。

「軽い」

「ああ、決定打には届かない」

通らない。だから、どうした。

それもまた、端から分かっている。

（そのまま、来い！）

炎雷を押し切って迫る猛牛を見据え——左手に火を宿した。

連射性なら、圧倒的に魔法——「ファイアボルト」が有利だ。

だが——

「あああああああッ!!」

一撃の重さなら呪術——【発火】の方が上だ。

『ウヴオオオオ——』

炸裂する炎雷に目をくらまされ、敵の反応は明らかに遅れた。

猛牛の口元を引つ掴み、零距离から爆炎をお見舞いする。

口からいくらか体内へと届いたらしいその炎に焼かれ、ミノタウロスがぐぐもった悲鳴を上げる。

「おおおおおおおおおッ!!」

一撃で済ますものか。時間が許す限り、爆炎を叩き込む。

時間にすればほんの数秒ほどか。手を放し、猛牛の向こう側に転がり出る。

あのまま留まっていたら捕まっていた。そして、捕まったら終わりだ。

そのまま力づくで引き裂かれる。

(クソ——ッ!)

顔を焼かれたくせに、思ったほどのダメージはない。

でも、多少動きは鈍ったはず——

「はあ……ッ?!」

思わず、間の抜けた声を上げていた。

その猛牛は、明らかに剣を構えている。

『ヴヴヴオゴオオオオオオ!』

そして、猛牛の突進。

逸らす事など、とてもしできない。なりふり構わず、その場から転がり退いた。

(しま——っ!?)

結果として、敵を死角に入れてしまった。

今度は僕の反応が遅れる。

それでも、圧倒的な死がすぐそこまで迫っているのは分かっていた。直感にすべてを託して、剣を構える。

『ヴォオオオオオッ！』

ギーン——！

と、鈍い音を立てて、両刃短剣が半ばから切断された。

「——ツツ?!?!」

折られたわけじゃない。明らかに斬られた。

何度目かの戦慄が背筋を駆け抜けていく。

(ごめん、リリ！)

それと、ありがとう。おかげで、まだ生きている。

でも、これはマズい。

(こんなに剣を使いこなすとか、本当にモンスターかよ!?)

相手もまた、この戦いの中で剣の使い方をものに始めている。

万が一にも技術で並ばれたなら、もう勝ち目は無い。

(クソ、かまうもんか！)

こっちはもう体中がガタガタなんだ。

どのみち、そう長い事は戦えない。追いつかれる前に嫌でも決着がつく。

そんな事は分かつていた。

すぐそこに迫る限界死を振り切り切るべく、さらに加速する。

「はあああああアツッ！」

残る武器は《神様のナイフ》だけ。

精神力の限界もすで見えていた。

防具はない。

（——たい）

それらが失われた全ての場所で、僕自身が死んでいたとしてもおかしくはない。

（——に、なりたい）

武器を、防具を失い、気力すら擦り切れて——それでもまだ残っている。

まだこの体を突き動かしている。

（英雄に、なりたい！）

コイツを倒せるような、英雄になりたい！

その願望が。火の粉をあげて、まだこの胸の中で燃え盛っていた。

「ああああああアツッ!!」

決着に向けて加速する戦いの中で、いつの間にか握っていた大剣を振るう。剣劇が重なる。猛牛の一撃を、こちらも渾身の力で迎え撃つ。

一撃打ち合うごとに、体が軋みを上げる。

このまま打ち合っているのは、まず体がもたない。『器』の差は絶対的だ。

(大剣つてのは、こう使うんだよッ！)

攻撃を掻い潜り、声にならない声で叫ぶ。

思い描くのは、黒衣の英雄の剣技。それを、拙いながらも模倣する。

いっせ放り投げるようにして放った横薙ぎの一撃が分厚い胸板に赤い傷跡を刻み付ける。

再び、猛牛が体を崩した。だが、すぐに踏みとどまりさらに前へと出てくる。

だが、遅い。その頃には、もう跳躍していた

「んのおおおおおおおっ！」

上空で一回転し、そのまま再び剣の重さを威力へと替える。

『グヴヴォ——!?!』

通った。その一撃は、今までで最も深い。

「うあああああああッ！」

大剣を突き出す。狙いは、魔石のある胸——！

『ヴヴォオオオオオ——ツツ!!』

物理的な威力すら感じるほどの咆哮^{ハウル}。

それですら、もはや心は折られない。だが——

「が——あ!？」

打ち負けた。

技をかなぐり捨てた力任せの一撃が、こちらの必殺を叩き潰す。

(マズ——ツ!?)

悲鳴を上げる暇もなく、続く一撃に吹き飛ばされていた。

……

(最近のLv. 1は凄いなものだね)

などと、いまいちキレの悪い冗談を胸中で呟く。

ただ、他に言いようがない。

目の前の光景を前にすれば、他に一体どんな気のきいた台詞があるというのか。

「……一カ月前」

この一カ月程。クオンの動向を調べるうえで、知った事がある。

「ベートの目には、あの少年がい。かにも駆け出しに見えたんじゃないのかい?」

彼は「イシユタル・ファミリア」と事を構える直前まで、とある新人冒険者を気にか

け、そのサポーターに徹していたらしい。

もちろん、報告をくれた団員はおろか、幹部陣の誰もがそれを信じなかった。

本人も所属する派閥も完全に無名だったからだ。

ある種の信憑性が出てきたのは、リヴェラの街の殺人事件の後——正しくは、リヴェリアとアイズが帰還してきてからだ。

(知人の孫、か……)

その白髪の少年は、クオンの知人の孫だという。

確かに、あの時……『豊穡の女主人』でも、彼はそう言っていた。

そういう縁なら——と、納得したものだ。

(これは、まんまと騙されたかな)

小さな予感とともに、呻いた。

いや、知人の孫というのが嘘だとは思わないけど。

視線の先にいるのは、駆け出しの冒険者ではない。

確かな才覚を感じさせる、紛れもない新人冒険者だ。

いや、もはや新人などとは言えないかもしれない。

L v. 1 でありながら、L v. 2 相当のミノタウロスと互角に渡り合っている。

支えているのは、磨かれた『技』と『駆け引き』だった。

(よく仕込んだね)

もつとも、動きを見る限り、仕込んだのはクオンだけではなさそうだけど。

「切り払いやがった!？」

一方で、そのミノタウロスもまた只者ではない。

少年の超短分詠唱——それとも、まさか無詠唱だともいうのだろうか——魔法を、手にした大剣で切り払って見せた。

まだまだ拙く、力任せだが——あれは、明らかに剣術だ。

少なくとも、鱗片をその身に宿しつつある。

「軽い」

問題は他にもあった。

「ああ、決定打には届かない」

あの少年の魔法は威力が足りない——と、思ったのだけど。

「あああああああッ!!」

どうやら、まだ手札を隠し持っているらしい。

炎雷とその直後の爆炎に紛れていたけど、その左手は確かに『火』に包まれていた。そう、クオンが魔法を使う時と同じように。

「あれは君の仕業だろう、オツタル?」

そちらはともかく。

連続する爆発に紛れて、問いかける。

「……さてな」

気になるのは、ミノタウロスの動きだ。

あれはどう見ても――

(クオオンの動きだね)

もちろん、そのものではない。かなりの部分で我流が入っている。

ただ、その下地として、確かにそれが選ばれているのは疑いなかった。

それを仕込めるほど知っているのは、本人か、さもなければオツタルくらいなものだ。

そして、この二人が組むはずがないのだから、誰の仕業かは消去法的に明らかである。

(まったく、おかしなことになっているな)

まあ、オツタルの一連の奇行はどうせ神フレイヤの仕業だろう。

実に悪趣味だし、あの少年にとってはこの上ない災難だろうけど……今はいい。

問題は、僕達から少し離れた場所に座っている存在だ。

(古王)
スルト ……)

五年前に、オラリオ中の冒険者を次々に襲い、尽く打ちのめしたその怪人。

それが愛用の大剣を抱え、静かに座っている。

……いや、その少年の戦いを見守っているというべきか。そんな事もありえるか——と、そう思わなくもない。

『アルゴノウト』……』

ぼつりと、ティオナが呟いた。

『アルゴノウト』

それは、一つの物語。

英雄を夢見る青年が、人の悪意と数奇な運命に翻弄される御伽噺。

時に人に騙され。時に王に利用される、滑稽な男の物語。

そして——

精霊に愛され、友人に知恵を借り、なし崩しに王女まで救ってしまう英雄譚の名前だ。

「あたし、あの童話、好きだったなあ……」

万感の思いを込めるように、ティオナが呟く。

ああ、そうだ。

これは、きつと、おそらく、新たな英雄譚の最初の一頁なのだろう。

女神に翻弄され、王者に遊ばれ、そして——

「やりすぎじゃないかい？」

それにしても、少し仕込み過ぎだ。

まったく、弟子が欲しいなら、素直に人間を相手にすればいいだろうに。鼻を鳴らすオツタルに、小さく肩をすくめる。

〔おっじゃ猛者〕の手ほどきなら、僕だって少し受けてみたい気がするしね〕
などと思っていると――

「いかんー!」

リヴェリアが小さく悲鳴を上げた。

ミノタウロスの一撃で、少年が手にした剣が両断されていた。

「……………どうかな」

一方、オツタルは小さく笑った。

確かに。残った剣を投擲し強引に隙を生み出しては、少年はさらに果敢に挑みかかっていく。

……テイオネではないけど、彼は本当にLv. 1なのだろうか。

あの速さはすでにLv. 2の域に手を届かせつつある。

もちろん、その度胸も新米のそれではない。

「な——ツ!?!」

次に驚愕の声を上げたのは、一体誰だったのか。

アイズか、リヴェリアか、テイオネか、テイオナか、ベートか、オツタルか。

それとも、僕自身だっただろうか。

「古王^{スルト}」が……!?!」

その大剣を投げ渡していた。

受け取った少年はおそらく自覚していないだろう。

その剣がどこから来たのか。持ち主が誰か。そんな下らない事は、一切意識の範疇にない。

闘志に燃える赤い瞳には、目の前の敵しか映っていないかった。

「ベル様……」

あの少年の相棒らしき同胞^{バルウム}の少女が、放心したように呟く。

その声すら届きはしないだろう。

彼は今、僕達は言うに及ばず、この子がここにいる事にすら気づいていないだろうから。

「……彼も、なかなか厳しいね」

いや、彼女かもしれないけど。

渡されたその大剣は、今や炎を——いや、炎熱さえも帯びていない。

赤く捻じれているだけのその刀身は錆びているようにも見え、何とも頼りなく感じられる。

もちろん、実際には恐るべき切れ味を誇ることはよく知っている。知っているからこそその言葉だ。

「ずいぶんと威力が落ちている」

あの少年の手にある剣に、その切れ味は見る影もない。

刀身が死んでしまっている——後続にいる椿なら、きつとそう言い例えるだろう。

もつとも——

「だが、まだ通じている」

それでもまだ、そこいらの数打ちに比べればはるかに上等だ。

「ああ。あのナイフと同じくらいかな」

傷口の様子からして、今の切れ味はおそらく紫紺の輝きを宿すナイフと同程度といったところか。

確かにあれでもミノタウロスを倒し得る可能性は充分にある。

何より——

(あの動き……)

身体能力で圧倒的に劣る少年が、ああまで食い下がれた理由の一端に気づいた。

いや、予想していた。それが、証明されただけにすぎない。

(彼も知っていたのか)

少年が見せるのも、クオンの動きだ。

もちろん、拙い。それだけなら、おそらくミノタウロスの前には意味をなさない。

だが、あのミノタウロスに限れば話は別だ。

手の内を知っている。

その利点が紙一重の攻防を支える『技』と『駆け引き』をさらに一段先へと押し上げている。

攻撃の先読み。本来なら積み重ねた確かな戦闘経験があつて初めて可能となるそれを、疑似的にその少年は行っていた。

……もちろん、相手の未熟さにも大いに救われているだろうけど。

「うわっ、下手つくそ……!?!」

言うまでもなく、その少年の動きもまた拙い。

一見すれば、武器の重さに振り回されているようだ。

しかし――

「でも、通った……?」

横薙ぎの一撃は、確実にミノタウロスに傷を刻んだ。

そして――

「おい、あれは……!」

跳躍からの一撃。紛れもなく、それはクオンの一撃だった。

威力も動きも全く拙いが、それは間違いない。

(決着か……?)

剣の切れ味にも助けられ、今までで最も深い傷を負わせている。

再び、僅かに仰け反った猛牛。その少年の速さを前にすれば、致命的とも言える動きの停滞。

「うああああああッ！」

その一瞬を少年が見逃すはずもなく、切っ先が繰り出される——

『ヴヴォオオオオ——ツツ!!』

咆哮ハウル。僕Lv.6にすら、微かな衝撃を伝えてくるほどのそれが、ダンジョンを震わす。

Lv. 1なら強制停止リストレイトを起こす——などという凡庸な決着がこの場にあるはずもない。

少年の加速は止まらず、怪物も攻勢を緩めない。そのまま両者は激突した。

そして——

「が——あ!？」

少年が、打ち負けた。

勝敗を左右したのは、やはり基礎の差。

片やまだLv. 1の新人。片や圧倒的な肉体を生まれ持つ怪物。残酷なまでのその差が、最後の最後で全てを左右した。

だが――

「……よく凄いだ」

少年は、それでもまだ己の敗北を受け入れたわけではなかった。

続くとどめの一撃。

それを、咄嗟に左手から放った爆炎を盾代わりに辛うじて凌いで見せた。

(そろそろ終幕かな)

五Mほども吹き飛ばされ、その先でさらにふらつき、崩れ落ちかけ――それでも剣を杖代わりに辛うじて踏みとどまったその姿を見て、半ばから切断された槍を握りなおす。

これほどに見事な健闘を見せてくれたあの少年を失うのは――いかに他派閥に所属しているとはいえ――あまりに惜しい。

「いや、まだだ」

オツタルの言葉に応じるように、少年の体から火の粉が舞い上がった。

いや、違う。実際に火の粉を放っているのは、手にした大剣。

「あれは……ッ！」

何度目かの驚愕。

少年の持つ剣が燃え上がっていた。本来の持ち主の手にあるかのように。

「まさか!？」

この場にいる誰もが——あるいは同胞パルファムの少女すらも——知っている。

あの大剣は変わるのだと。

槍へ。曲剣へ。杖へ。両刃剣へ。特大剣へ。斧へ。槌へ。弓へ。

持ち主が望んだであろう、あらゆる武器へと。

果たして、その少年の手にあったのは——小剣ショートソードだった。

再び、炎は消えていた。しかし、剣は今も変化したままだ。

何より——

(火はまだ宿っている……!)

死んでいたはずの刀身は今や蘇り、赤熱を宿していた。小さく火の粉すら舞い上げて。

ほんの一瞬とはいえ、彼はその剣を己のものとしたでも言うのか。

「——」

無言のまま座している【古王スルト】からも、微かな驚きが伝わってきたような気がした。

いや、これは歓喜だろうか。

もちろん、文字通りに鉄仮面の怪人物から表情が読み解けるはずもない。

ただ、兜の向こう側で彼は小さく笑っているような――

『ヴオオオオオオッ!!』

憤怒とも歓喜ともつかぬ雄たけびが、ダンジョンに響く。

「おおおおおおッ！」

それに応じるように、少年もまた咆哮する。

その両手には小剣とナイフ。

そして、最後の激突が始まった。

……

手にはショートソード――いつどこで回収したんだったか――とナイフ。

何であれ、最も戦い慣れた状態に戻っている。

互いの距離はおよそ五M。どちらかといえば、向こうに有利な距離だろう。

（それなら――）

一気に詰める。

「おおおおおおッ！」

敵の咆哮を押しつけるように叫んだ。

そして、激突。

(こんのおおおおおっ！)

速度が足りない。もつと速く。

力が足りない。もつと強く。

一撃ごとに加速していく攻防の中、己を鼓舞する。

削つてはいる。確実に削つている。だが、まだそれだけだ。

もつと早く、もつと強く。

その一瞬一瞬に、持ちうる全てを注ぎ込む。

「[ファイアボルト]!!」

再び、嵐のような猛攻からはじき出される——その一瞬前に、雷炎を叩き込む。

攻撃直後の硬直を突かれ、切り払いはおろか防御すらできないままミノタウロスは仰け反った。

だが、それだけ。互いに食い下がる。もはや後退などしない。

「——あああああッ！」

擦り切れた咆哮とともに再度突貫する。

迎え撃つのは、容赦なく重い一撃。それで動きを止められた。

再び真つ向からの斬りあいが始まる。

だが、足を止めての攻防なら、明らかに僕の方が不利だった。

あつさりと優劣が逆転する。

逸らせ。弾け。受け流せ。まともに受けたらそのまま押し潰される——

飛び散る火花の中、じりじりと押し退けられながら自分自身に言い聞かせる。

憧憬から教わったその技術のおかげで、今この時まで生き延びてきたのだ。

すべてを託すのに何の不安もありはしない。

だが、

(このまま壁際に追い詰められたなら、確実に終わりだ)

速さを——ベル・クラネルの最大の武器を殺されたなら、もはや勝ち目はない。

(必ず隙ができる。その隙を見逃すな)

そして、壁まであと一Mと言ったところで、ついにその時が来た。

下段からの斬り上げ。その猛牛にとって、僕の体重などあつてないようなものだろう。

体が浮く。空中では次の攻撃を避けられない——

「——ッ！」

迫る剣に向けて渾身の「発火」。その反動で、強引に飛ぶ。

目指すのは壁。ナイフを突き立て、強引にそこに着地した。

反動の残りは、まだ膝にたまっている。

そして――

『ヴォオオオオオオ！』

劍を構えて突進してくる猛牛と目が合うと同時に、全ての力を込めて地面壁を蹴る。矢のような加速。交差は一瞬だった。

「――ッ！」

確かな手ごたえ。会心の一撃だった。

劍で地面を削り、強引に制動をかけながらそれを感じていた。

『ヴヴウ……』

振り返ると、右肩を大きく切り裂かれた猛牛の姿があつた。

あれなら、今まで通りには劍を振れない――いや。

いや、そんな容易い相手ではない。

現に、コイツをそんなものを無視してこちらに斬りかかってきている。

飛び退こうとする本能を黙らせ、ギリギリまでそれを引き付けて――

「――あ!!」

ついに声すら枯れ果てたか。

額から両断しようとするその大劍を、両手で構えたショートソードで受ける。

傷などものともしない圧倒的な重さに、そのまま押し潰されそうになった。

力も打たれ強さも——体の性能はあらゆる面で、このミノタウロスが上回っている。あるいは『技』でもすでに並び立たれているのかもしれない。

だとすれば、頼りになるのは——

(今——!)

——アイズ・ヴァレンシユタイン金色の憧憬から教わった、『駆け引き』のみ。

『オオオ!!』

全ての力を叩き込まれるその一瞬前に、武器の下から体を逸らし、そして剣を手放す。虚を突かれた——力を叩き込む先を失ったミノタウロスの巨体がガクンと、大きくつんのめった。

この猛牛はまだ未熟だ。

力押しで攻めることしか知らない。

一週間前、速さを頼りに突っ込むことしかしていなかった僕と同じ。

だからこそその隙。だからこそその停滞。

その一瞬に、無音の叫びとともにナイフを抜き放ち、その右腕に突き立てた。

グズリ——と、鈍い音とともに骨も筋肉も健もまとめてねじ切り、手首もろともに斬り

飛ばす。

『ゴ、オオオオオオオオオオオオッ!!』

血飛沫とともに、苦悶の声があたりを震わせた。

それに交じて、大剣が地面に突き立つ音も。

ようやく、相手が武器の一つを失った——と。

大槌と大差ない左の拳を躲しながら、そんな余計な事を一瞬だけ考えていた。

そして、僕に残る武器は再び《神様のナイフ》だけ。

『フウー……。フウー……』

互いの距離は、再び五Mほど。

失った右前脚すら用いて、猛牛は地面を踏みしめる。

頭は低く、代わりに臀部は上にあがる。後ろ脚には、相応の力が蓄えられているだろ

う。

それは、まさに猛牛の姿。暴力の具現だった。

大剣を失ったミノタウロスは、己に残る最大の武器——その片角に全てを賭けるつもりらしい。

最後の勝負。

最後の勝負。

その瞬間、互いの意思が確かに混じりあった。

眼光をぶつけ合いながら、しっかりと地面を踏みしめる。

『ヴヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

猛牛が動いた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

——と。果たして、ちゃんと叫べたかどうか。

燃え上がるほどの熱を帯びた背中に押され、迫りくるそれへと真正面から突っ込んだ。

「駄目です、ベル様あ?!」

渦巻く疾風の音に混じり、どこかでリリの悲鳴が聞こえたような気がした。

それすら振り切つて、最後の加速を行う。

狙うは猛牛——ではなく、その途中に突き立つ大剣。

引つ掴み、跳躍した。再びクオンさんを真似た上空からの一撃。

猛牛もまた、それを迎撃すべく跳躍してくる。

——だけど——

(こんなもの——)

どうせ使い慣れない武器だ

(——まともに使う必要は、ない!!)

師匠の真似をしたところで所詮は付け焼刃。

直撃する幸運が二度もあるとは初めから思っちゃいない。

それ以上に、あの時の手ごたえから分かっていた。

例え直撃させたとしても、致命傷にはならないと。その確信があった。一瞬だけ動きを止めてくれれば、それでいい。

下から突き上げられたその角が大剣を迎え撃つ——より、早く。再び、武器を手放した。

元より、そのつもりだった。真正面から打ち合えば負ける。

この突進を前に防御など役に立たない。

回避するにも限界があった。確実に、相手より先に僕が力尽きる。なら、残された方法はただ一つ。

この攻防で決着をつける。そのための隙を作りだすしかない。

悪手なのは分かっていた。同じハツタリを二度も使うのだから。

だが、勝算もあつた。この加速力なら、分かっているも対応が遅れるだろうと。

互いの手札を探り、勝敗の間で揺れる天秤を見定める。

これがおそらくは『駆け引き』というものなのだろう。

弾き飛ばされる大剣を置き去りに、体は地面へと激突していた。

同時、激痛が横腹に走る。避け切れなかった。

致命傷じゃない。けど、決して無視できるほど浅い傷でもない。

今の交差で勝敗が決まってもおかしくなかった。

——と、そんな余計なことを考えている暇などない。

(これが——)

でたらめな着地からの強引な跳躍。最後の加速。

(——最後の勝負だッ!!)

酷使し続けている膝が。引き裂かれた横腹が。体中が悲鳴を上げたが、そんなものは後回しだ。

深手を負ったこの体では、今までのようにはもう動けない。

死神の鎌はすでに首筋にかかっている。

この一撃に全てを賭けなくては。

そう。これは、初めから分かっていたことだ。

ミノタウロスの最後の武器がその角^カなら、ベル・クラネルの最後の武器はこの脚^速なのだ。

その切り札が完全に失われる前に、中空にあつてがら空きの胴体へと再度突撃した。

ナイフが猛牛の体に滑り込む——

『ヴォオオオオオオッ!』

——が、相手の加速分だけ、魔^急石からずれた。

だが、もう関係ない。これ以上の勝機は、用意できない。

あらゆる力を注ぎ込んで、ナイフを握りしめる。決して、手放さないように。

地面に激突し、さらに荒れ狂う猛牛に半ば縋りつき——その瞬間、枯れ果てたはずの
声に戻る。

「ファイアボルト！」

その号砲のためにだけに。

ナイフを伝った雷炎が、ミノタウロスの体内で炸裂した。

だが、まだ足りない。

振り払うことを諦めた猛牛の肘鉄がすぐそこに迫っているのが、視線を向けてもいないのにはつきりと見えた。

「ファイアボルトツ!!」

そのあがきを無視して——いや、ねじ伏せるためにさらに叫ぶ。

焼け焦げたミノタウロスの咆哮が鼓膜を揺さぶる。

それでも、死の気配はすぐそこまで近づいていた。

頭髮の先端に肘鉄死が触れた。はつきりとそれを感じながら、

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオツ!!」

あらゆるものを、その叫炎び雷声に託す。

爆炎が視界を覆った。炎に包まれている。あるいは、吹き飛ばされたのか。今、自分が一体どんな姿勢なのかすら分からない。

『オ!!』

そんな中で、猛牛の断末魔の叫びに叱咤されるようにして地面——だと思ふ場所に、爪を立て、最後の力で体を引きずり起こす。

もし、僕が勝者なら自分の足で立たなくては——と、それが最後の意地だった。

「ひゅー……、ひゅー……」

今度こそ枯れ果てた喉が奇妙な音を立てている。

朦朧とする意識の中で、確かに見た。

消し飛んだ上半身と、話に聞く火山のようになった猛牛の下半身を。

燃えながら降り注ぐ血肉の雨の中で、その屈強な下半身がぐらりと揺らぎ、崩れ落ちた。

そして、もう動かない。

(勝った……)

吹き飛ばされていた巨大な魔石が、薄暗いダンジョンの空で煌めいている。

それに手を伸ばそうとして——僕は意識を手放していた。

……

「勝ち、やがった……」

呆然と、ベートが呟く。

その少年は、文句なく勝者だった。

最後まで生き残り、傷ついた体で立ち上がり、そして今もまだ自らの足で立っている。

「……精神枯渇」

「た、立ったまま気絶しちゃってる……」

……意識すら失ってなお。

「見事だ」

いつになく感情の宿った声でオツタルが呟いた。

「それは、どつちに言っているんだい？」

あの少年か。それとも、あの猛牛か。

「さあな」

それは、本人にも分からなかったのかもしれない。

「それはそうと、ちよつとマズい相手に手を出したんじゃないかな？」

クオンの関係者らしいと伝えてやる。

あの少年がまだ生きているからまだ良いものの、下手をすれば本当に「イシユタル・ファミリア」の後を追う羽目になりかねない。

「そうらしいな」

まあ、あの動きを見れば教えるまでもなく察していただろうけど。

「急ぎ、地上に戻るとしよう」

あのミノタウロスが携えていた大剣を拾い上げ、オツタルは立ち去っていった。

……それが、諸々の疑問に対する何よりの答えだろう。

「おい、まだかよー！」

「待て、もう少しで読み終わ——」

オツタルの背中が見えなくなる頃には、ベートにせつつかれたリヴェリアが、少年の【ステイタス】を読み解いていた。

そして——

「……くっ、ふふ、はははっ」

珍しいことに、彼女が声をあげて笑い始めた。

一体、どんなことが書かれていたのやら。

悪態をつくベートに、リヴェリアが応じるより先に、同じく神聖文字ヒエログリフが読めるアイズが、小さく呟いた。

「オールS」

「ああ？」

「全アビリテイ、オールS」

「……何だと？」

流星に驚いた。いや、さつきから驚きっぱなしだけど。

これでも結構長い事冒険者をやっているけどオールSなんて初めて聞く。

「名前は？」

これで無名だというのだから——まったく、どこから驚けばいいのやら。

正直なところ、そういう規格外は一人いれば充分なんだけど。

（ああいや、これは……）

先ほど、ちらりと脳裏に浮かんだ可能性。

それが、いよいよ現実味を帯びてきていた。

「彼の名前は？」

「知らねえ……。聞いていない……」

まあ、確かに聞く機会もなかっただろう。

となると、頼りの綱は「ステイタス」を読み解けるリヴェリアなんだけど……。

「楽しそうなところ悪いんだけど、もう一仕事お願いできるかな？」

まだ笑っているリヴェリアに、改めて問いかけた。

「ああ、すまない。……それで、何だったか？」

よっぽどツボに入ったのか。

目尻に浮かんだ涙を拭いながら、リヴェリアが言った。

「彼の真名まなを読み取ってくれ」

「ああ、分かった。少し待て——」

と、リヴェリアが読み解くより先に、

「ベル」

アイズが、告げた。

「ベル・クラネル」

あるいは、恐るべき競争ライバル相手となりえる新たな冒険者の名前を。

……

「全アビリティ、オールS」

それは、嘘だった。

Sなのは、耐久アビリティだけ。

……そう。一週間の訓練の中で、私が最も低いと感じたアビリティだけだ。

それ以外は、SS。その表記を信じるなら、限界突破を果たしている。

(一体、どうやって……?)

改めて突き付けられた、異常な成長。

（その理由を知ることができたなら、私も——）

もつと強くなれる——と、その囁きがすべてを支配する。

再び力尽き、すぐそばに倒れている小人族バルウムの少女すら、この時は意識の外だった。大きく裂けた肌着インナー。その向こう側。

隠されている魔力アビリティから下。そこに記されている『スキル』を——

「——止せ。これ以上は道理に合わない」

——読み取ろうとしたその手を、リヴェリアが止めた。

リヴェリアの翡翠色の瞳に見つめられ、奇妙な興奮が静まっていく。

「ごめん……」

それは、誰に向けられるべき言葉だったのか。

いくつも入り乱れる感情を持って余し項垂れていると、ガシヤリ——と、鎧が軋む音がした。

咄嗟に視線を向けると「古王スルト」が、弾き飛ばされた小剣大剣を拾い上げているところだった。

本来の持ち主の手に戻った途端、その刀身はたちまち炎に包まれ大剣基本の形に戻る。

「——ッ！」

今さらになってその怪人物が己の得物を携えていることに危機感を覚えた。

せめて意識のないベル達だけでも守らなくては——と、知らず鞆に納めていた《テス
ペレート》に手をかける。

でも——

「——」

そもそも、その怪人物は私たちなど見ていなかった。

素顔のかけらも見えないその兜の向こう側。その視線は、ベルに向けられている。

そして、

「えっ?」

あつさりと、【古王】^{スルト}は背を向けた。

そして、そのまま立ち去る。

いや——

「ツ!?!」

途中で立ち止まり、何かを拾い上げてから、それを放って寄越した。

咄嗟に切り払わなかったのは奇跡に近い。

「これ、ベルの……」

鞆に納められていたそれは、ベルが本来使う——初めて出会ったあの日、私たちが逃
がしたミノタウロスに突き立てていた小^{ショートソード}剣だった。

そちらに気をとられていた隙に、今度こそ「古王」^{スルト}はダンジョンの奥へと消えていった。

「……結局、あいつは何しに来たのかしら？」

その足音すら完全に聞こえなくなったところで、ティオネが呟く。

「さあ。彼の戦いを見に来たんじゃないかな」

「まさか。それは、L・V・Iとは思えない戦いでしたけど……」

とはいえ、ティオネも途中で曖昧に言葉を濁した。

そんな事も、あるのかもしれない——

ベルの戦いは、そう思わせるだけの何かがあった。

もちろん、私たちの方がもつとうまく戦える。それは、間違いない。

でも、確かにあの戦いは——ベルの姿は、今もこの胸を焦がしていた。

全てを賭けた死闘。すべてを出し切り——そして、限界すら超えてみせた姿。

そう。おそらく、きっと、あれは——

（英雄譚の、一頁）

私達が忘れ去ってきたもの。

遠い昔から神々が愛し、見守ってきた【眷属の物語】^{ファミリア・ミイリス}。

少なくとも。

私は、もう二度と忘れる事はないだろう。

——ベル・クラネル

あらゆる万感と、過去の憧憬が胸を満たす。

父の背中すら思い出させたその少年——産声を上げた『冒険者』……あるいは、その先。『英雄』へと名乗りを上げた彼の名前を。

4

「——はあ……」

あの子の死闘——最初の『冒険』を見届けてから数時間。

今もまだ、その余韻が体を火照らせていた。

お気に入りの銘柄の葡萄酒ワインすら、水のようにしか感じられないほどに。

まさか、あれほどとは。

あれほどに光り輝きながら、それでもまだ穢れを知らない。

澄み渡った透明。真つ白な炎。

純粹な願望。抱きしめたくなるほどに愚直な想い。

あれこそが、人のうちにある——あの子のうちに芽吹いた可能性。

私神々達が愛し、称賛し、見守り、あるいは恐れすらしたもの。

神意
運命さえも超克する人の力。

「ふふ……っ」

思わず、笑みがこぼれた。とても堪えきれない。

あの子の輝きを見ただけでも満足だというのに。

ああ、それだけで天に還るほどの恍惚を感じたというのに。

まだ他にも、ここまで胸を高鳴らせるものが見られるなんて。

(そう。そういうことなのかしら……?)

四年前に答えを得られなかった未知^謎。

その正体に、指先が触れた確信がある。

まだ分からない。まだ全容は見えてこない。ただ、最も重要な欠片は手に入れた。

(ああ、困ってしまうわね……)

興奮が抑えきれない。

高鳴る胸の鼓動は、いつか限界を超えて止まってしまいそうなほどだ。

(古王^{スルト})……)

神々でも見通せない謎の存在。その名前を——仮初の呼び名を呟く。

何故、今さらになって姿を見せたのか。

何故、あの場所に姿を見せたのか。

(ええ、そうよ。そうなのでしょう?)

彼は、ただ探していたのだ。この五年間、ずっと。

自らと並び立つもの。あるいは後継者を。

それとも――

(貴方すら超えていくもの、かしら)

ああ、なんて幸運。まさに今、世界が変わろうとしている。

その時に、その中心にいるかもしれないこの子の最初の一言をこの目で見られたのだから。

「ああ、でも……」

少し控えめにした方がいいかしら――と、胸中で呟く。

何しろ、あの子は彼も目をかけている。

あまり意地悪をすると――

(イシユタルと同じ目に合っちゃうかしらね)

この先を見られないというのはとてもつまらない。

だから、少し。そう、少しだけ我慢しなくては。

「できるかしらね?」

これほどの興奮を知ってしまったというのに。

(ふふつ。オツタルもあんなにはしゃいじやつて)

可愛いわね——と、小さく呟く。

数年ほどの前から、オツタルにも荒々しさが戻っていた。

それでいて、揺るぎない巖のような落ち着きもそのまま。

いや、完全に凩いだ水面のような静けさと言うべきか。

(どんな秘密の相手と出会ったのかしらね?)

少し妬けるけれど……暴き立てるような野暮な真似はしない。

「ああ、本当に困ってしまうわね」

目移りしてしまいそう——と、小さく呟く。

何かが動き出していた。それはきつと、私達^{神々}すら巻き込む嵐のような何かだ。

その嵐の中で、彼らの魂はきつと誰よりも強く輝く。

(ああ、本当に……)

その時を想像するだけで、体の芯から火照るほどだった。

……

ダンジョン一八階層——リヴェラの街均衡。

第二班との合流地点に、鎚の音が鳴り響く。

「ええい！ おぬしの、武器は！——そもそも、手前どもが、打ったものではないと、い

うのにッ！」

「本当にすまない」

一見すると苛立ち混じりに——しかし、実際には常と変わらぬ見事な鎚さばきで——
 錬鉄していく樁の傍らで、肅々と反省の姿勢を見せる。

本来の予定であれば、合流が済み次第素通りする予定の場所だったが、ダンジョンに入つて早々に発生した『異常事態』^{イレギュラー}のおかげで、こうして滞在する羽目になっている。

(いや、むしろ『上層』でよかつた……)

あの少年——ベル・クラネルとその相棒を抱きかかえ、バベルの治療室へと向かつた
 リヴェリアとアイズに、ついでに両断された槍を直すための素材の手配を頼み……それ
 から居残り班の精鋭が、必要なもの集めて届けてくれたのは少し前のこと。

今は即席の鍛冶場で、オツタルに両断された愛槍が元の形へと戻つていくのを見守つ
 ているところだった。一八階層を過ぎてからは、こんな真似はできない。

もちろん、前回の経験から武器の破損は想定内だ。

それを見越してある程度の素材は持ち込んでるので、安全さえ確保できれば修理は
 可能だ。

ただ、こうして消費分を補給する事はできない。物資管理が重要となる遠征におい
 て、消費分を補えただけでもありがたい。

……ちなみに、これは完全な余談だけだ。

僕の槍——《ファルティア・スピア》は「ゴブニュ・ファミリア」製だった。

市場規模で見るともかく、質で見ると間違いなく樫たち〔ヘファイストス・ファミリア〕と並び立つ鍛冶系派閥である。

「見ておれ！ 従来より、もっと、良いものに、して、やる、から、の！」

研ぎ直しだけならともかく、ほぼ打ち直しとなれば、流星に思う事もあるだろう。

「期待しているよ」

とはいえ。

先ほどの樫の言葉は、果たして本当に僕に向けたものだったのか。

「

そうこうしているうちに、樫は己の作業へと没入していく。

無我の境地。

こうなつては、僕はおろかモンスターへの接近すら気に留めないだろう。

ただひたすらに神域へ迫らんとするこの姿に畏怖し、モンスターも近づいてこないかもしれない。

……もちろん、そんな夢想を確かめる気はないし、そもそも周囲には僕達〔ロキ・ファミリア〕が展開しているわけだから、近づけさせざるもないけど。

「まったく……。おぬしが『上層』で武器を失うなど、一体何があつたというのだ？」
それから、しばらくして。

僕の手にも最も合うように最後の微調整をする最中に、彼女が言う。

「いや、実はオツタルに絡まれてね」

向こうにしてみれば、僕らが突つかかかってきたんだらうけど——とは思うが、あえて言う事もない。

「ほう？」
【勇者】と【猛者】の一騎打ちか。そのような面白い立ち合いを見逃すとは、手前も運がないな」

「いや、アイズたちも参戦していたよ」

「それはますます惜しい」

四年前に起こつたという、例の一騎打ちを思わせるな！——と、剛毅な最上級鍛冶師は快活に笑つた。

「本当に見逃して惜しかったのは、その後の戦いだつたのかもね」

もちろん、僕たちにとってはずっと次元の低い闘争だつた。

それでも、彼の死闘は——その『冒険』と、成し遂げられた『偉業』は、まだ胸を高鳴らせている。

「ほう？」 『上層』でそれほどの戦いとは……。あやつらが殺気立っておるのも、そのせ

いか？」

椿の視線の先にいるティオネたちも、それは同じということだ。

「まあ、そんなところだよ」

あの戦いの意味は何だったのだろう。

いや、あの少年——ベル・クラネル自身にとつては、おそらく最初の『冒険』だ。それ以外の何物でもないのは、もちろん分かっている。

どこまでも純粹だったからこそ、僕達は見入っていたのだから。

だが——

【古王】^{スルト}……

クオンとの一騎打ちからおよそ三年間の沈黙を破り、何故今さら姿を見せたのか。

あの一戦を見定めに来た——と、するなら、あの死闘にはどんな意味があったのか。

分からない。分からないが——

（ベル・クラネルは『何か』を証明した）

あの炎に焼かれなれないという史上二人目の偉業を成し遂げた。

例えほんの一瞬とはいえその剣[※]を己のものとすること。

彼自身も全く知らないところで、何かが動き出している。

その手がたえがあった。

(これは、いよいよ可能性が高まってきたな)

知人の孫——と、その報告を受けた刹那。

彼が、クオンの剣技を真似た時。

ほんのわずかに脳裏に掠めたもの。

(彼こそが——)

「仕上がったぞ。ほれ」

最後の一研ぎを終えた椿が、蘇った愛槍を差し出してくる。

受け取るついでに、ひとまず結論は先送りにした。

僕もまだ熱にあてられている。結論を下すのは、もう少し頭が冷めてからだ。

ただ、いずれにしても——

(恐ろしい競争相手が名乗りを上げてきたのは間違いなさそうかな)

彼がこのまま無名で終わるといふ事はもうあり得ない。

最短なら、あと三日後。

まさかとは思うけど……ひよつとしたら、その日の夕方には、彼の名はオラリオに響き渡っているのかもしれない。

(遠征を成功させなくてはならない理由がひとつ増えたかもね)

もつとも、失敗に終わるなどとは考えていない。

主力陣の士気は天を衝くほどに高い。

アイズのランクアップの興奮冷めやらぬところに、あの一戦だ。それも当然だろう。ここまで士気が高まったのは「ロキ・ファミリア」の歴史を振り返っても、そうある事ではない。

これで届かないなら、あらゆる編成を一から見直さなくてはならない——と。
真剣にそう思うほどのだから。

(ベル・クラネル、か……)

槍の具合を確かめながら、改めてその名前を胸中で呟いていた。

……

——やあ、君。いい子を見つけたものだ

——確かに見事な戦ぶりであった。だが、あのような童にまで重き荷を背負わせるなど……

——所詮は呪いのようなもの。その『火』を継いでしまったなら、苦難からは逃れられない……

——そう、悲観したものでもあるまい。なあ、■■■■■■■■よ

——そう、だな。彼は私たちとも、また違うのかもしれない。だが——

——と。

王たちの驚嘆とも賞賛とも呪詛ともつかぬ声が次々に浮かんで消える。それもまた、仕方がない。

彼らを飲み込んだ欺瞞に満ちた巡礼の旅。その始まりに、確実にかわつていっているのだから。

再び繰り返しているだけだと——そう、罵られたとして反論できようはずがない。

だが——

——どうかな。あいつが俺たちと同じ末路を辿ると決まったわけじゃない
それでも、告げていた。

——神の枷とは存外簡単に壊れるものらしい

遙か昔——『火の時代』から続く『火の封』はともかく、新たに加えられた炉の女神の枷を、あいつはあっさりと越えて見せた。

馬鹿みたいな思いの丈。人の力一つで。

ならば。あるいは——

——貴公の言葉となれば、流石に説得力があるな

——ああ。神の枷、『火の封』が『闇のソウル』を、ひいては不死を封じるものだとするならば……

——この男の枷は意味をなしていない、か

——呪いすら飲み干す闇とは……。神が恐れたというのも分からないではない……少し待つてほしい。

流星に、散々に殺してくれたお前達に化け物扱いされる謂れなどない。

そもそも、死んでも死ねないのが俺たち不死人だろう。

——その際ののなさは真似できないとも。私達でもね

他の王たちが沈黙する中、彼が笑った。

——お前までそんな事を言うのか

思わず嘆息していた。

恨みつらみをぶつけられる事なら覚悟していたが……これでは何だか揶揄われた気分だ。

——あの少年なら、君の真似ができると？

——さあな。そもそも、真似をさせてどうする

真似して欲しいなら、あの少年をあてにする理由などない。

自ら赴けばいいだけの話なのだから。

今までそうしてきたように。

——願わくは、その先へ

火でも闇でもない新たな時代。まだ、誰も知らないその時代。

もし、それが訪れるなら、俺達が遺したのものにも何か意味があるのではないだろうか。

「——ッ」

久方ぶりに、鈍い頭痛のような眩暈を覚えていた。

「どうかしたかい？」

「……いや、何でもない」

軽く頭を振りながら、アイシャの言葉に応じる。

何だか呪詛のような……もしくは、どうしようもない馬鹿話を聞いたような。

例によって記憶は曖昧だ。

まあ、白昼夢をまともに覚えていろうという方が無理がある。

だが、それでも——

「やったな、ベル」

胸に残るその感慨を、小さく言葉にしていた。

……

それは、もう思い出せない記憶の欠片だった。

一番古く、一番思い焦がれた、いつかの願望。

『格好良かったぞ、ベル』

ゴブリンを蹴散らしたその老人は、その子供に大きな笑みを浮かべた。

——僕は、貴方のようになりたいです

——僕のことを助けてくれた、貴方のような強い人になりたいです

——貴方のような、僕だけの英雄になりたいです

夢の中の子どもと、それをどこから見守っている僕の声が、形だけを変えて重なった。

それが、はじまりの願望。

『小さい小さい。儂なんか目標にするくらいなら、もつとでかいものを目指せ』

それが、すべての始まり。

『男なら、女の尻を追いかけろ。男なら女子のために突つ走れ』

透いた瞳で、その人が言う。

『惚れた女子たちのためなら、英雄だろうが、何だろうがなれる。何だつてできる』

始まりの夢。それが、終わる。

黄金の光景と、鮮やかな夕日が遠のいていく。

その中で。遠のく光の奥で、

『何せ、お前は儂の自慢の孫だからな』

その人は、最後にその言葉を口にしてくれた。

…

「……色々と、言わなきやいけない事があつたはずなんだけどなあ」

夜の帳の降りた治療室で、小さく呟く。

今、この部屋にいるのはボクら三人だけ。

(サポーター君の方が大変だった……)

あのエルフ君の魔法がよつぽどよく効いたのか、意識を取り戻したはいいけど……。

(まあ、結構深い傷だったみたいだしね)

記憶が錯乱していてもおかしくないほどに。

実際、抱えてきてくれたエルフ君が寝台ベッドに下ろそうとした瞬間に、助けを求めて縋り付き始めるほどだ。あの時、まだサポーター君の心はダンジョンの中——ベル君を助けるべく必死に彷徨っていたのだろう。

そこから抜け出せるまで、あのエルフ君が根気良く付き合ってくれて本当に助かった。

今は魔法と薬と安堵とでぐっすり眠っている。

もちろん、激戦を終えたベル君も。

「何の夢を見ているんだい？」

ベル君の顔は、ただただ穏やかだった。

ただ、その目じりから一すじの涙滴が伝っている。

激闘の末に勝利をつかんだたった一人の眷属。今も深く眠ったままのその姿に、改めて万感の思いが胸を満たしていく。

周りを何度も見まわし、隣の寝台ベッドで寝ているサポーター君が起きていないかも、念入りに確かめてから――

「頑張ったね。……おめでどう」

白い前髪を静かにかき上げ、その額にそつと唇を落とす。

少し固いその感触に、かあ――と、頬が熱くなる。

「……これで、一頁目だ」

言いたいことは、いくらでもある。目が覚めたら、きつとお説教だ。

でも、今は。今だけは。

少年の背に刻まれているであろう新たな――もつとも新しい英雄譚。

その始まりに、ありつたけの祝福を贈ろう。

エピローグ そして、因果は動き出す

1

(やれやれ……。ひとまず、おかしな細工はされていないようだが)

日課——いや、生活の一幕となりつつある体の再点検を済ませ、小さく吐息をつく。
(ずいぶん縮んだものだ。……いや、元はこの程度だったな)

あれほどの巨軀となったのは、いつの頃だったか。

その変容を促したソウルの力は、まだ体に残っている。

で、あれば、体の大きさなどさしたる問題でもない。

むしろ、この『時代』においては、人並み程度の大きさの方が色々都合が良からう。

(もつとも、今のところ人前に出る機会などないがな)

そして、悲願さえ叶えばこの形にこだわる必要もなくなるやもしれない。

もつとも、何が起こるか分からないのが人生というものだ。

この姿に利点があるなら、大切にしておくべきだろう。

(オラリオ、か)

新たな神の都の名を呟く。

朽ちかけたアノール・ロンドとどれほどの差があるものか。

(少しは愉しませて欲しいものだ)

あの灰の手によつて燃え尽きたはずの野心は、こうして再び燃え上がっていた。新たな一步は、その神の都を陥落させることである。

——と、言葉にすれば簡単だが。

(あの灰に殺された私たちを蘇生させるほどの力、か)

恐ろしい事だ——と、小さく笑う。

流石は我らが秘儀。その具現と言ったところだろう。

なれば、私たちがその域にたどり着けないはずがない。

問題は、それにどれだけの時を必要とするかだ。

(今しばらくは素直に従うとしようか)

なかなかどうして、先は長い。

何しろ、私の『切り札』はまだ本来の力を取り戻しきれていない。

それどころか、手駒まであつた騎士団すら、一から再編している始末だ。

この様では、例え反旗を翻したところで容易く潰されるのは明らかである。

今は忍従の時——と。猛々しく燃え上がる野心の炎を手懐けるのもまた一興だった。

「失礼いたします、法王様」

古くからの忠臣——と、いつても私の配下ではないが——である、騎士団長が姿を見せた。

無論、あらかじめ予定されていた事だ。

「かまわん、楽にせよ」

執務机の前で跪くその騎士に告げると、もう一度礼をしてから彼は立ち上がった。

「件の件、いかがであった？」

「はつ。エニユオの者共が接触したのは間違いありません。ですが、あちらにいる同胞によれば、御身を仇なすほどの力はないはずとの事でした」

「ふむ……」

となれば、四年ほど前に我らが領土に侵入を企んだ不死人は、やはりあの男か。

「人違いということはあるまいよ。あれは、戦士としてみればせいぜい一流に届くかどうか。かつて私と対峙した時ですら、な」

事実、あれは凡庸な灰であった。

蹴散らすのは容易い。そう思っていた。

だが——

「しかし、あの男は幾たび殺そうと決して折れぬ。だからこそ、恐ろしい」

実際に勝ち抜けていったのは、あの男だ。

我が野心の炎すら、あの灰を飲み込むには届かなかつた。

「実は貴公とは別に、オラリオに探りを入れさせた」

「何と」

「許せ。別段、貴公の力を疑つたわけではない。ただ、いくらか思いついた趣向があつてな。それを、手の空いている者にやらせたにすぎん」

何しろ貴公には、前線指揮という大役があるのだから——と、言う。

無論、単なる詭弁ではない。まともな戦力——充分な力を持つ不死人はごく限られている。

目の前の騎士は、その限られた不死人の一人だ。

「趣向、ですか？」

「うむ。ひとまずは、野心を抱きながらも燻っている者たちに少しばかり『助言』を与えてみた」

思いの外、その炎は燃え上がつたらしい。

そして、あの灰に飲まれて消えたとも。

「いるぞ、あの男は。我らが宿敵である『王狩り』はな」

まったく、死してなお我らの前に立ちはだかるとは。

愉しくもあり、忌々しくもある。

「では、やはり件の男が？」

「間違いあるまい。力を失っている理由は……さて、召喚者が未熟であったのだろうか」

そのような半端者の言葉に応じ、力すら投げ打って応じるとは相変わらずお優しい事だ。

そして、その甘さこそが唯一の隙となろう。

「ならば、今のうちに……」

「うむ。とはいえ、万が一にもここで貴公を失う訳にもいかぬ。【ドラン騎士団】との戦いも続く故な」

アン・デール。

噂に聞く稀代の魔術士——【原罪の探究者】とこのような形で見えるとは、まったく面白い。

「あの者共も、なかなかによく粘る。流石はドラングレイグの王兄といったところか」
「古き巡礼の地。巨人の王国と相打った貴壁の大国、ですか……」

「うむ。もつとも、中身が違うのは我らと同じであろうがな」

我らが騎士団も、中身は全く別物だ。それに連なる者は、この騎士を含めていくらかもない。

（そして、そのどれもが役に立たん）

この騎士ではまずもつてあの男には勝てまい。

一度や二度は殺せるかもしれないが、それだけだ。

あの男を殺し切ることなどできようはずもない。

まだ精強を誇っていた頃の古い神どもにすらできなかったのだから。

「では、どのような？」

今しばらくは時が必要だ。

「ここはひとつ、我らが女王陛下に祝福を給うとしよう」

ここは無限に湧いて出る使い捨ての兵力。

そして、あの男の甘さを精々活用させてもらおうとしよう。

2

「ああ、やはり間違いないようだな」

神罰同盟とやらは、一週間と持たず潰えた。

当然か。凡夫どもがどれほど束になろうと、あの者に敵うはずもない。

とはいえ、

「あの様子では、一度や二度は殺されるかとも思ってたが……」

流石にそれは悔りすぎだったか。

しかし、そんな心配を抱くほど、我らが王もまた著しく力を封じられている。あれでは、ようやくと墓から這い出してきたばかりの灰のようだ。

(どうにも解せないな)

神の血に酔った呪われ人ならまだしも、私達が力を失うなどあり得るだろうか。

——とは思うが、あの男に関していえばそこまでおかしい事でもないのかもしれない。

ロスリックで目覚めた時ですら、彼は力を失っていたはずだ。

今回の理由は定かではないが、そういう事もありえるのだろう。

(少々投げやりかもしれないな)

胸中で結んだ結論に、小さく苦笑する。

(だが、そうなるか——)

ここしばらく暗躍している者共も、私たちと同じ時代を生きた者たちなのか。

「ユリア様」

「どうかしたか？」

と、そこで。腹心の部下——古参の同志が部屋へと入ってきた。

「神罰同盟の裏側にいた勢力が、多少は見えてまいりました」

「ほう？」

それはまた好都合だった。

「聞かせてくれ」

「はい。表向きは闇派閥イワイルス残党、「タナトス・ファミリア」の一員のようですが……」

「違うと？」

「ええ。どうやら闇派閥イワイルスのさらに背後にいる組織。その一つが関与しているようです」

「何者だ？」

「そこまではまだ。ですが、先日ファイリア祭で姿を見せた『新種』は、どうやらこの勢力が従えているとのことですよ」

「……その情報はどこから？」

「先だって同志に加わりましたシヤラン修道女から。……こちらへ」

呼びかけると、新たに一人誰かが入ってきた。

「お初にお目にかかります」

一礼したその女の瞳には黒い炎がちらついていた。

珍しくもない。我らが黒教会黒に加わる者達の多くが、こういう目をしている。

この『神時代』とやらにおいて、神やその下僕どもに恨みを抱く者たち……火の陰に追いやられた者達が身を寄せているのが、今この場所なのだから。

「私は、六年前より「タナトス・ファミリア」に所属しております。もつとも、死兵の

一人にすぎなかったため、詳しい内情までは知りませんが、そこで見聞きしたことをお伝えいたします——」

滔々と語られるのはかつての蛮行と、それすら利用する神の欺瞞。

そして——

「エニユオ、か……」

デーモンの前に暴れたという花とも蛇ともつかない『新種』——『食人花』ワイオラスを生み出す神のようなものの存在。

「どうやら、妙な事になっているな……」

シヤランが退室してから、呻く。

「『エニユオ・ファミア』といったところででしょうか？」

「さて。まだ分からないな」

気になるのは、レヴィスという名の怪人。クリーチャー

人と怪物モンスターの異種混成ハイブリッドというが……。

(それ自体は、驚くほどでもない)

元より、私たち人間はそういう可能性を秘めている。

求めるのなら、古竜にすらも至る。本来、人間小人とはそういうものだ。

問題は——

(神どもが、自らの手で枷を外すか?)

それだ。どうにも解せない。

我らを恐れるがあまり『ソウルの業』すら徹底して消し去ったあの連中が、今さら枷を外すか?

いや、そちらも気になるが――

(どうにも匂うな)

この一件、どうにも匂う。

(一人か二人はいるな)

今日まで集まった情報を精査する限り、そう結論付けるしかない。

(私以外にも、我らが王を知る者が……)

そう。その価値を知る者が。

(これは、地上ばかりに注意を向け過ぎたか)

おそらくは、ダンジョンの中に。

(巡礼を始める時が来たか……)

だが、その前に――

「テレジア」

呻くように、傍らにいる同志の名を呼んだ。

「はい、何でしょうか」

「そろそろ時期だったな？」

「^{デナトウス}神会ですか。ええ、予定通りなら三日後ですわ」

「準備をしておいてくれ」

あの忌々しい会合に顔を出しておくべきだろう。

情報を集める役にはそれなりに立つのだから。

3

ダンジョン一四階層。

正規ルートG—13。一五階層への連結路に向かうには大回りとなるが、程々の広さ^{ルーム}の広間が多いため、主に迷宮資源の採掘や自己鍛錬のために用いられるルートである。

そこからさらに外れ、誰からも忘れられた広間^{ルーム}にそれは生じた。

ほんの一滴。人であっても目を凝らさねば気づかないほど小さな染み。

広大なダンジョンから見れば、飛沫より小さなそれ。

だが——

『ギイイイイイイイ?!』

迂闊に触れた白兔が、たちまちのうちに飲み込まれていく。

自分の体より遥かに小さなその闇溜りの中へと。

『——イイイイイ……』

哀れな生贄の白兔を飲み込んだその闇溜りは黙して語らず。

ただ、静かにその染みを広げていくのだった。

——見る者が見れば、恐れ戦いただろう。

それは、かつて黄金の魔術の国を飲み込んだ厄災そのものだ。

静かに、染み込むようにゆつくりと。その闇溜りは広がっていく。

迫りくるその脅威を、まだ誰も知らない。

第二部：目覚めの鐘が鳴り響く

プロローグ 今はまだ、微睡の途中

1

「一カ月半で、L.V. 2~~~~~!!?」

ギルドに、とあるハーフェルフの絶叫が響き渡る少し前。
オラリオが朝日に満たされた頃。

「~~~~~」
すつと、意識が浮かび上がる。

目を開くとそろそろ見慣れてきた天井が見えた。

これまでの半生で見つめてきたものと比べればずっと質素なものだけれど……それでも、確かに安堵を感じさせる。

「……………」

寝具を整えてから、寝間着を着替える。

ちようど着物の帯を締めたところで扉がノックされた。

「おはよう、春姫さん」

入ってきたのは、白い女性だった。

華奢な体も煌めく髪も白く……瞳ですらも白灰色だった。

その白さは今は遠い故郷の冬——処女雪に覆われた世界を思い起こさせる。
雪の妖精……触れれば儂く溶けて消えてしまいそうな、そんな方だった。

「起こしてしまつたかしら？」

その足元から、ぴよこんと——犬ほどの大きさがある——白兔が顔を出す。

「いいえ、今起きたところでごさいます」

よかつた、と顔を綻ばせる。

それだけで雪の妖精は春の妖精へと変わったような気がする。

「さあ、座つて？」

質素な化粧台の前に案内される。

少し躊躇いながらも私が座ると、白兔が膝の上に飛び乗ってきた。

その柔らかな背を撫でていると、その方が櫛を片手に私の後ろに立つ。

「~~~~~♪」

オラリオではない、どこか遠い異国の旋律とともに櫛が動く。

今日も、本当に楽しそうにその方は私の髪を梳いている。

「あら、ごめんなさいね。少し嬉しくて……」

鏡越しに見つめていると、その方は少し照れたように微笑む。

「ずっと、世話を焼かれる側だったから。妹ができたみたいで……」

慈しむように丁寧^{ていねい}にその方は髪を梳いていく。

少し、気まずい。

あの満月の夜、凄惨な光景に耐え切れず気を失ってから。

目を覚ました時には、すでに色々な事が変わっていた。

「すまなかつたな。私たちの力が及ばないばかりに……」

目覚めた時に傍にいた藍色の髪をした麗人に案内され、この方たちの元に預けられ。

そのまま半月程を過^{すご}している。

「あの、あの方は……。その、本当に大丈夫なのでございますか？」

「義兄さんのこと？ もちろんよ」

黒衣の冒険者様——アイシヤさんのお知り合いの方の義妹に。

「あの人は、とつても強いんだから」

「ですが……」

覚えている限り、あの夜の最後の記憶。

その中で、あの方はアイシヤさんに——

「大丈夫よ。心配しないで」

ふわりと、その方に後ろから抱きしめられた。

少しだけ、罪悪感がある。

見習いとは言え、元娼婦の私が振れては、白いこの方を穢してしまいそうだった。

でも――

「義兄さんは、神様にだってできなかつたことをやり遂げたんだもの。あなた達を助けるくらい、なんてことないわ」

その方はその穢れすら赦すように私の体を包み込むのだった。

2

「やれやれ、ようやく『向こう側』にも篝火が灯つたらしい」

ずいぶんと時間がかかったものだ――と、小さくため息をつく。

もつとも、向こうでどれだけの時間が過ぎていいのかは定かではない。

何しろ――

「これでは、まだダメか」

因果の渦――『時代』の壁を越えているのだから。

だからこそ、篝火一つでは転送できない。

元より次元が歪んだこの巡礼地でも、その壁を超えるのはやはり容易な事ではないのだ。

揺らめく篝火を見つめながら、小さく嘆息する。

「あの馬鹿弟子め、何をやっている……」

まだ合流できないなど、あの子たちに何かあつたらどうするつもりだ——と、小さく呟く。

「ふふつ。感動の再会には、もう少しかかりそうだな？」

「姉さん……」

いつの間にか傍にいた姉が微笑んだ。

「まあ、そう焦るな。あ奴もついて行っていることだ。多少の事は危険にもならぬ」

「それは、そうですが……」

何しろあの義弟は、馬鹿弟子と一緒に最初の火の炉まで到達している。

凡百の亡者や異形どもでは相手にもなるまい。

ただ——

「あの子の体は、決して丈夫ではありません……」

馬鹿弟子の献身のおかげで『病』が癒えたとはいえ、末の妹の体は決して丈夫ではない。

心配を通り越して呆れるほど死んでなお、しぶとく蘇ってくるあの馬鹿弟子とは違うのだ。

それに――

(あの馬鹿弟子。駆け出しに戻っているそうじゃないか……)

因果を歪めてでも手勢を揃えねばならない――あの火防女がそう判断するほどの脅威が迫っているというのに。

いくら『不死』とは言え、限度というものがあるだろう。

今のままでは、いかにあいつと言えど、あっけなく飲み込まれかねない……。

「あの方たちなら、きつと大丈夫です」

「ええ」

さらに二人。これから巡礼の旅を共にする同行者が集まる。

「二人とも、本当にかまわないのか？」

おそらく、この旅路は片道だ。行けば最後、戻ってはこられまい。

「自らの信仰を確かめる旅に出る。それも白教徒の使命です」

「優しい世界から連れ出した責任を取ってもらわねばなりません」

聖女と白い竜の娘が何の躊躇いもなく微笑む。

(あの馬鹿弟子め……)

よくもまあ、誑し込んだものだ。

静かに燃える篝火を見やり、胸中で毒づく。

(まあ、人の事は言えないがな……)

我ながら性質の悪い火に魅入られたものだ——と何度目かの自嘲苦笑がこぼれた。

3

「時が満ちようとしています」

「そうか……」

新たな巡礼への誘い。

それが私たちの元に届いたのは、火継ぎの是非を巡り、世界蛇との抗争に敗れてから。無念の内に朽ちていくのかと思っていた矢先のことだった。

「まずは文句の一つも言ってやらねばならないな」

このような重責を残し、ひとり斃れたあの薄情者に。

そして、謝罪しなければならぬ。私たちの無力の後始末を押し付けてしまったことに。

「ええ。そうしましょう」

辛うじて見つけた篝火。私達の最後の寄る辺を見つめ、長らくともにある竜の娘が微

笑んだ。

出会った頃より、ずいぶんと表情が豊かになったと思う。

(それなら……)

最低限の役目は果たしただろうか。

この娘を、火の因果から解放する事はついに叶わなかったとしても。

ああ、それにしても……。

「どうかしましたか？」

「ああ、いや。……私は、元々生きるために騎士を目指していた」

主への忠節と剣の技。それがかつての私の全てだった。

元より恵まれた身分の生まれではない。

もし技を修められず、道半ばで屈していたなら――

「どこぞの金持ちの情婦にでもなっていただろう」

あるいは、騎士団の影として女であることすら武器にしていただろう。

それを思えば、まだ幸福かもしれないが――

「その因果からも、ついに抜け出せなかったかな」

気の多さなら、あの男も大概だ。

まったく、我ながらろくでもない相手に引つかかってしまった。

「後悔していただけますか？」

「さてな。……ただ、今にして思えば、呪われ人になった時点でまっとうな生など諦めていた気がするよ」

誰もがそうであるように。

しかし、それを受け入れられずに、ドラングレイグを彷徨っていたのも同じことだ。

「それを思えば、これは望外の幸運だ」

こうして親愛なる友と、ともに歩きたいと思う相手を見つけたのだから。

例え、今も呪いがこの体を蝕んでいようとも。

「オラリオ、か……。どのような場所なのか。楽しみにしておくでしょう」

篝火が静かに燃えていく。

「ええ、楽しみです。火でも闇でもない、その時代をこの目で見れるのですから」

微笑んだ彼女の背後に、巨大な影が舞い降りた。

第一章 未完の英雄譚

第一節 神会（デナトウス）。神の手の内、人の掌

1

やれやれ、相変わらずとんでもねえバケモンだぜ……

ああ、誰のことだつて？　んなもん決まつてんだろ？　【イレギュラー正体不明】だよ、【イレギュラー正体不明】。

テメエの情婦おんなに手え出されたからつて、たつた一〇日間で八つも派閥を潰しやがった。

大派閥の【イシユタル・ファミリア】まで含まれてるつてんだから、本気でどうかしてるぜ。

しかも、幹部どころか神まで皆殺しときたもんだ。つたく、おつかねえつたらねえぜ。

ああ？　神は死んでも天界に還るだけだろつて？　そりやそうだがよ……

ははあ……。お前さん、神罰同盟のピラを見たな？

完全なる神殺しつてやつを。

本当かつて？　んなもんオレが知るかよ。

気になるなら、天界まで行つて確かめてくりやいい。まあ、オレは帰つてくる方法を

知らねえからやらねえけどな。

うるせえよ、まだ迎えが来るにや早ええ。

枯れたジジイと侮るんじゃねえ。今だつて歓楽街に行きや戦闘娼婦どもを片っ端からヒイヒイ言わせて——何？ どうせ昔から言わされる側だろうつて？ うるせえよっ!!

ああ、クソ……。そういや、もう歓楽街もねえんだな。

なに、再編は進んでるだろうつて？

んなことあ知ってるよ。オレを誰だと思ってるんだ。

だがな、指揮を執ってるのは「ガネーシャ・ファミリア」。オラリオ屈指の神格者、『大衆の主』と名高いガネーシャ様の眷属だ。

なら、廃退と淫蕩渦巻く享楽の都、淫都と呼ばれた街にはまず戻らねえだろうよ。

やることは変わらねえにしても、今までよりずっと小奇麗で風通しのいい場所になるに決まってる。

まあ、オレたち情報屋にとつての聖地も今は昔つてわけだ。

つたく、やってくれたぜ……

つーか、あの野郎。歓楽街潰しときながら、今頃テメエはよろしくやってんだらうな……。

誰とだつて？

そりや、神を殺してまで搔つ攫つた娼婦おんなとだよ。

……いや、ただの娼婦じゃねえけどな。

戦闘娼婦だよ戦闘娼婦。

しかも、特に人気株だった【麗 傑】アンティアーネイラときたもんだ。

愛人も兼ねてるマネージャーだつて相当な上玉だつてのに……どうやって誑し込んだんだか。

いや、【麗 傑】アンティアーネイラの場合、どつちがどつちを誑し込んだかも分からねえけどな！

ああん？ それでも情報屋かつて？ ……おいおい、勘弁してくれよ。

そりや、お望みとありや麗しの女神、フレイヤ様のスリーサイズだつて手に入れて見せるけどよ。

あの剣闘士だけは勘弁だぜ。ありや、まさに神も恐れぬ不遜の輩つてやつだ。

……頼むから、イシユタル様の『遺産』に関する情報をくれとか言い出すなよ？
なに、興味ない？ そりやいい。お前さん、きつと長生きできるぞ。

どうも奴さん、それを知っている奴らを皆殺しにしたようだな……つと、深入りは厳禁だ。

オレあまだ命が惜しいんでね。

あの剣闘士みたいに、命を投げ捨てる……いや、投げつけるような真似はしねえよ。つたく、きつと奴は一度や二度は死んでも平気なんだろうぜ。

ああ、本当によくやるよ。【猛者】おうじやに喧嘩売った時点で大概イカレてると思ったが、まさか神どもにまで売るとはね。一回りして尊敬するぜ。

だから、真似はしねえつての。

つーか、お嬢さん。ずいぶんと【正体不明】イレギユラーにこだわるじゃねえか。

まさか、お前さんもあの剣闘士の愛人なのかい？

なに、それでも構わないつて？ おいおい……。

何だつて、あんな得体のしれない剣闘士がこんなにもてるんだか……。

ああ？ 正妻は誰だつて？

知らねえな。あつちこちで浮名を流してる……と、言われちやいるけどな。

ああ、他に【象神の杖】アングーシヤやら【九魔姫】ナイン・ヘルやら……。

実は年上趣味なのかね——つと。い、今のは聞かなかつたことにしてくれ。

頼むぜ。本気で殺されちまう。特にエルフども知られた日にや火炙りにされかねえ……。

ええと、何の話だつて？

ああ、【正体不明】イレギユラーの女関係か。

マネージャーが【麗傑】アンティアーネイラを囲っても文句言わねえところを見ると……つか、その二人の反応から察するに、他にもまだいるんだろうよ。

四年前、いきなりいなくなったのも、実は単に他所にいる現地妻に会いに行っただけなのかもな。

くくく……。このオラリオに全員集合なんて事になったら、面白い見世物が見れるかもしれないねえな。

なに、あり得ない？

そいつあ分かんねえぞ。何たってここは世界の中心、神々すら魅了する世界で一番熱い街だ。

迷宮都市オラリオ。何が起こるか神にだって分からねえのが最大の売りなんだからよ。

……とはいえ。

まあ、はじめの話、奴の命運もそろそろ風前の灯火なんじゃねえかな。

何でだつて？ おいおい、こんなの誰だつて分かるだろう。明日は神会デナトウスだぜ？

こんだけ盛大に神殺しなんぞすりゃ、ギルドが黙つても神どもが黙つてるわけがねえ。

……それとも、あいつを抱き込んでるつて噂のウラノス様には何か秘策でもあんのか

ね。

オレあ、オラリオがひっくり返るような事でも起こらなけりや誤魔化せねえと思うんだけどな。

2

「うん……」

身じろぎすると、素肌をシーツが撫でる。

その感覚で目が覚めた。

（朝か……）

すっかり馴染んだ寝台ベッドの上で寝返りを打ってから眩いた。

実際には朝というには少し遅く、昼というにはまだ早い。そんな中途半端な時間だ。

珍しい事に、私一人だった。寝台には私以外の体温も残っていない。

『何か食うものを買に行つてくる』

気だるい身体を起こすと、床頭台にご主人様クオオシからの伝言メッセージが残されていた。

（あ……。そりやそうか）

橙色に輝くその文字を見やり、内心で呟いた。

ちよくちよく霞が訪れるせいでつい忘れそうになるが、一応私達はギルドに追われて

いる身だ。

迂闊に買物にも行けやしない。

それに、どちらかといえれば私の方が顔を知られている。

買い出しはそれこそ霞に丸投げするか、さもなくばいろいろと隠し玉を持つあいつが行くのがここしばらくの常だった。

ともあれ、その伝言にはまだ続きがあった。

『それと、風呂が沸いているはず』

「そりや気の利いた事で」

呟いてから、タオルと愛用の大朴刀だけ持って浴室に向った。

「ふう……」

程よい湯加減の浴槽に身を沈めて、息を吐く。

湯に包まれる事で、腰のだる重い感覚がほぐれていく。

……まあ、それも決して不快な感覚ではなかったが。

(もう一〇日か。早いもんだねえ)

私の古巣——【イシユタル・ファミリア】が消滅してから、もう一〇日ほどが過ぎた。神罰同盟とかいう連中を返り討ちにしてからなら五日ほどか。

(つたく、大した怪物だよあいつは)

【正体不明（イレギュラー）】クオン。

仮にも大派閥の一つと数えられていた私達【イシユタル・ファミリア】を単独で壊滅させ、その後の一〇派閥からなる派閥連合すら、ほぼ一人で返り討ちにしたことになる。

驚くべきことに半月足らずで、だ。

（ま、そうじゃなきや今頃天界行きだけどね）

思つた以上に早く動いたギルドによつて抗争は調定され、イシユタルの悪行もまた認められた。

神罰同盟の連中がギルド職員にも手を出した事もあつて、今のところ【ガネーシャ・ファミリア】に追われるような事態にはなっていない。

まあ、クオンがギルドの創設神と面識がある、というのも大きな理由だろう。神殺しなんて派手な事をやった割には、ずいぶんと平穩な生活が続いていた。

湯船の中で体をほぐし、汗やら何やらをのんびりと洗い流せる程度には。

（しっかし、『ダイダロス通り』にこんな建物があるとはねえ）

さっぱりした気分で浴室を後にしてから。

クオンの拠点——この五日ばかりを過ごし、そろそろ馴染みつつある館を歩く。

年季こそ入っているが、なかなか上等な造りである。

『ダイダロス通り』の奥深くには区画整備が狂う前の名残りが残っている——なんて噂

は聞いた事があつたけど、まさか自分がそこに住む事になるとは思っていなかった。もつとも、落ち着くべき場所に落ち着いただけ、という気もするけど。

(この造りは、どう見てもね……)

似たような間取りの部屋が複数存在する。

クオンは宿だったのではないかと見当をつけているけど……

「よう。おはよう」

部屋に戻ると、クオンは戻ってきていた。

この数日間で見慣れた簡素なシャツにズボン姿。

まあ、この格好で出かけるはずもないから、戻って早々に『着替えた』のだろう。

(『ソウルの業』つてのは、相変わらず便利なもんだね)

実際、かなり羨ましい『スキル』だった。まあ、厳密にはスキルとも言い難いようだが。

「ああ。おはよう。買い出しご苦労さん」

テーブルの上には出来合いの食事のほかに、袋に入ったままの食材もあつた。

そつちはひとまず寝台ベッドの上に移してから、クオンの向かいに座る。

「へえ。マシなものを選ぶようになったじゃないか」

太いソーセージと、たつぷりの野菜が挟まれたホットドッグを齧り、添えられたサラ

ダをつついてから笑ってやる。

「口に合つたなら安心した。店員のオススメらしいしな」

この男の味覚は全くあてにならない。

何しろ――

「よくそんなもの食べられるねえ」

今齧っているのはじやが丸くん激辛ハバネ口味。何かもう、色からして引くほど赤い。

私だって別に辛い物は嫌いじゃないけど、流石に限度つてもんがある。

「これくらいじゃないと味が分からなくてな」

この数日の間に繰り返された、何度目かのやり取り。

（不死人、ねえ……）

仮にも死線を共にし、その後五日も一緒にいれば、お互いに身の上話くらいは済ませている。

不死人。クオンは、自分の事をそう言った。

（こうしてる分には普通のヒューマンにしか見えないけどね）

改めてその姿を見やる。

生まれは東国とやらだったそうだが、もうほとんど覚えていないという。

おそらく、極東なのだろう。黒髪、黒目。やや彫りの浅い顔はそこに生まれた人間の特徴だ。

彫りが浅いとはいえ、目鼻立ちの方は整っている。もちろん、絶世の美男子ではないけど、人並みよりはいくらか上の精悍な面構え。それなりに目が肥えていると自負している私が見ても、まずまずの男前と言つてやつていいだろう。

年の頃なら——見た目でいえば——私と大差ない。

精々が、二十歳はたちをいくらか超えたかどうかといった程か。

何でもその辺りで『ダークリング』とやらが浮かんだらしい。

けど——

(変わった痣にしか見えないんだけどね)

総評として言えば、その辺のヒューマンといくらも差があるようには見えない。

どこにでもいそうな、ごく普通の人間だった。

(ダークリングねえ……)

簡素なシャツ越しに胸元を見やる。

ちようど心臓の真上辺りに赤黒くいびつな円を描く——例えて言えば、羊皮紙に煙管の灰を落とした時に生じる火の輪のような——刻印が浮かんでいるのは四年前から知っていた。

知ってはいたが、特に気にしていなかったそれが、不死人の証だという。

（そんな大げさなものにはとても見えないんだけどねえ）

生を失い、死を見失った呪われ人。死んでも蘇り、なお彷徨う者。

——と、その刻印が浮かんだ奴は、そういう存在になるという。

何とも怪しいが、信じるよりない。

それに、私は確かにこの手でこの男の心臓を断ち切り、体そのものすら両断しかけたのだ。

だと言うのに、今もこうして平然としている。

少なくとも、呪いを持たず、『ソウルの業』とやらも知らない人間では特に殺しにくいというのは確かなのだろう。

（まあ、蘇ると言ってもそれは身体だけって話だけど）

少しずつ人間性とやらを——あるいは、人間らしさを失っていくという。

その果てに、理性を持たぬ亡者となり果てるそうだ。

実際にこの男は飢えもしない。乾きもしない。眠る必要もない。

味覚だってこの有様で、どれだけ強い酒を飲ませたところで酔いもしない。

記憶もだいぶ虫食い状態らしい。自分の故郷すら忘れる程度には。

「ところで、アイシヤ」

「何だい？」

「せめて下着くらい穿かないか？」

「はっ、今さら何言つてんだか」

風呂上がりだし、髪を乾かすために頭にはタオルを巻いてはいるけど、それ以外は全裸だった。

そもそもアマゾネスなんてのは生まれつき露出の高い服を好む……いや、裸を見られたところで気にしない種族だ。相手が強い雄ならむしろ望むところではかない。

それに――

「大体、この方が安心するだろう？」

見せつけるように胸を張り、その谷間を指先で撫でながら笑つて見せる。

「それは、まあ、否定しづらいが……」

クオンは、曖昧に頷いた。

――実際のところ。そもそもの始まりはこの男の一言にある。

あれは、ギルドの調停によつてひとまず抗争が終わり、密かにこの館に身を寄せた日。とりあえず一息つき、改めて――四年越しに――お互いの身の上話を済ませてからの事だ。

……

「そう言えば、お前の「ステイタス」は封じられているのか？」

ふと、クオンが口にしたその言葉が全ての始まりである。

「何言ってるんだい。いくらアマゾネスだって、『恩恵』フェアルテなしにここまで戦える奴はいない

さ。あんたじゃあるまいし……」

鼻で笑ってから、ようやく自分の体に異常事態が発生している事に気づいた。

（ステイタス能力が封印されていない……？）

ありえない。イシユタルは死んだ。それだけは確かだ。その場に立ち会ったのだから。

それなら、何故私は戦える？

主神を失って一〇日もたつてから、自分の身体に起こっている奇妙な現象を自覚した。

……奇妙と言うなら、主神を完全に殺された時点で前代未聞だが。

「い、いや。でも、他の連中は能力を封じられていただろう？」

クオンに殺された神の眷属は、全員「ステイタス」を封じられていた。

もちろん、サミラ達もだ。

「お前と他の連中の違い、か……」

「まさか骨の髄まで『魅了』されたせいだつて？」

今回の儀式で用いられるはずだった『殺生石』を手に入れる前のこと。

その前に手に入った『殺生石』を色々あつて破壊した私は、その咎であのヒキガエルに散々ボロクソにされ、その果てにイシユタルに徹底的に責め抜かれて骨の髄まで『魅了』された。

それこそ、自分で自分の首を刎ねるようになるほどに。

(まさか、あの女神の『魅了』は今も健在なのか……?)

そう思えば、さすがにゾツとした。

「ああいや、そつちじゃなくてだな」

しかし、クオンは首を振ってからこう言った。

「俺がああ女神を殺した時……というか、そのソウルを取り込んだ時、お前思いつきり返り血を浴びただろう? それと俺の血も」

「そりやね」

こいつの心臓ぶつた斬つたは私だし。しかも、そのまま抱きかかえられてもいる。

それどころか、こいつは左肩から胸にかけて吹き飛ばされてるし。

で、事が済んでからは半ば背負うようにして肩を貸しました。

そこまでやれば、そりやもう血だつて派手に浴びる事になる。

「さらに言えば、あの時イシユタルは奇跡……いや、『神の力』を使った。そこまでやれ

ば、血を触媒としている『神の恩恵』とやらにもさすがに影響が出るだろう」

浴びた血が神の力を焼きつかせたか、それともイシユタルのソウルを取り込んだ俺の血を彼女のものど錯覚させたのかもしれない。

それが、クオンの推論だった。

「つまり、あんた達の血を浴びた影響だつて？ そんなことがあり得るのかい？」

「可能性なら。血とソウルには特別な関係がある……と、思う。例えば【フアランの不死隊】——【深淵の監視者】達も、狼血を酌み交わすことでその力を得た訳だしな」

「深淵？」

いや、他の言葉の意味もさっぱりだったけど。

妙に気になったのはそれだった。

「ええと……。説明しだすと長くなるからざっくり言うが、普通は人だろうが神だろうが立ち入れない魔境の名前だ。過去にそこを歩いた英雄がいてな。本来なら彼が遺した『遺産』の力を借りない限りは立ち入れない。【深淵の監視者】達は数少ない例外だよ」
もつとも、彼らの耐性は完全なものとも言い難いが——と、クオン。

「ふうん……」

相変わらずよく分からないが……それはまたずいぶんと大仰なものだ。

こいつは本当にどんな人外魔境を旅してきたんだか。

「まあ、それはともかく。なら、あんたの血があれば『ステイタス』の更新もできるってことかい？」

「……いや、それはどうかな。少なくとも今すぐにはできない。何しろやり方が分からないから」

「イシユタルなんて血を垂らしたただけだったけどねえ」

「お前な。それは鳥はただ翼を羽ばたかせているだけだって言ってるようなものだぞ？」

「……そりやそうか」

この男は何だかんだ言っつて、基本的にはヒューマン人間である。

神が当たり前にやっているからと言っつて、簡単に真似できるわけではないか。

「しかし、そういう影響が出るとなると……。いや、『最初の火』がない今、『火の陰り』も起こりえないんだ。流石に可能性は低いだろうが……」

何やらぶつぶつと一人で呟いてから、

「悪い。何も言わず、服を脱いでくれ」

真剣な顔でそう言っつた。

「あいよ」

元より私はアマゾネスで、バトル戦闘娼婦だ。

大体、こいつにはもう裸なんて散々見せている。

「さあ、ご主人様。これでいいかい？」

それに、仮にも『身売り』したというのに求めてこないのは張り合いがないと思つていたところだ。

さつさと脱ぎ捨て、笑みを浮かべてやる。

で、それから。

全身隈なく——うなじやら胸の谷間やら乳房の下側やらまで確かめられた。

……まあ、要するにその『ダークリング』とやらが浮かんでいないかを。

「流石に、そこまで影響しないか。いや、だが……」

まだぶつぶつ言っていたが、ひとまず安心したらしい。

確認を終えると、クオンは私の服を渡してきた。

……正直な話、面白くなかった。

「あんたねえ。女に恥かかせるもんじやないよ」

久しぶりの『お誘い』だと思つていたらこの扱いだ。

そのまま押し倒した私を、一体誰が責められるというのか。

……例えばそれが、私から見ても爛れた生活の始まりだったとしても。

……

「……まあ、我ながらちよつとやり過ぎた気もするけどね」

いや、それくらい色々な理由で血が昂つているのも確かなんだけど。

「なんか言つたか？」

「囲われ女も板についてきたつて言つたのさ。……ああいや、娼館にいるんだからただの娼婦か」

「娼館つてお前な……」

あくまでクオンはこの館を元宿屋だと言い張っている。

言い張っているが――

「何言つてんだい。どう見たつて娼館の造りだろう？」

私から見れば、ほぼ間違いない。

ここは元娼館だ。それも、多分あまり性質の良くない手合いの。

まずは、同じような間取りの部屋が複数あるが……まあ、これは言うに及ばずか。確かに、それだけを見るなら宿屋と見てもいい。

注目すべきは、館を囲う壁。不自然なまでに高いどころか、内側に湾曲があつて登れないようになってる。これはもう、明らかに内部からの脱走防止のための造りと見て間違いない。

その門に設えられた堅牢な鉄柵。これは、私たちの本拠地ホームのそれに匹敵した。何よ

り、脇には見張りの詰め所まである。これもまた脱走防止を目的としたものだろう。

他に物干し台に使っている屋上は、かなり広く、簡素ながら空中庭園があつたらしい痕跡も残されている。その一方で、外からは見えない造りになっている。おそらく、脱走できないように日の光を浴びさせるための施設——娼婦^{おんな}たちの数少ない憩いの場所——だつたのだろう。

さらには——

「地下にはおあつらえ向きの『調教室』まであるしね」

「ぐ……」

地下倉庫——と、この男は言い張っているが……どう見ても牢獄めいた造りだ。

物が揃えば、あのヒキガエルの部屋にも劣りはしない。どれだけ控えめに言つても、真つ当な宿屋にあるような代物ではなかつた。

「つたく、本当に囲われ情婦^{おんな}も板についたもんだ」

ちなみに、この館に引つ込んでからの五日間。

私は概ね寝台^{ベッド}と浴室の往復しかしていかないといつて過言ではなかつた。

まあ、勘が鈍らないようこまめに手合わせしているが……これでも隠遁生活中だ。流石に庭でやる訳にもいかず、地下にある隠し部屋を使用している。

案外広いが、所詮室内。精々準備運動に毛が生えた程度の事しかできない。

食料の買い出しに行くのは——今日もそうだったように——色々と追手を巻く方法をもつクオンか、人目を忍んで訪ねてくる霞の仕事で、私は精々シャツやら何やらを干す時くらいしか外に出る事はない。その時だって、件の物干し台に行くだけだ。

そんな状況で、アマゾネスと強い雄おとこが一緒に過おとこせばやる事なんてもう一つしかない。

まあ、簡単に言えば、飯食つて、抱かれて、戦りあつて、抱かれて、風呂入つて、抱かれて——なんてそんな生活が続いているわけだ。

戦闘娼婦バーベラをやつてた時より確実に娼婦らしい日々だった。

しかも、それもまんざら悪くないと思つている辺り、我ながら危険なほど絆きんされてい

る。

と、それはともかく
それから食事を終え、寝台ベッドをソファ代わりにするクオンに身を預ける——前に、

「ほら、さつさと脱いじまいな」

ひとまずクオンの上着をひん剥く事にする。

どうせ着ているのは木綿のシャツ一枚だ。脱いだところで変わらない。

下は……まあ、状況に依じてか。どうせいつも通り投げナイフの類が仕込んであるだろうし。

いつでも好きなかだけ武器を出し入れできる『スキル』を持つていくせにマメなことだ。

もつとも、私は私で大朴刀だけは手に届く範囲においてあるが。

何しろ隠遁生活だ。いっどこから襲撃を受けるかは分からない。

「……たまには俺にも脱がせる楽しみを味わわせてくれていいと思わないか？」

ため息交じりに、クオンがぼやく。

「はいはい。今度表に出た時には好きなかだけ剥いとくれ」

観念したようにクオンが上着を脱いだ……いや、正しくはソウルとやらに取り込んだだけだが。

（やっぱ便利なもんだねえ）

すつかり馴染んだ身体に素肌を添わせ、声にせず呟く。

それだけでも割と心地よいと感じる辺り、やはり危険だった。

（つたく、初心なねんねじやあるまいし）

まあ、色々助けられた相手で、しかも強い雄おとこで、抱き心地もいい。

何より、仮にも身売りの『ご主人様』な訳だが。

などと胸中で呟きながら、クオンの胸元に浮かぶ『ダークリング』を指先で撫でる。

大して大きくもない。少しばかり奇妙な形をした痣。あるいは刺青。何度見てもそ

の程度のものにしか見えない。神々すら恐れた不死の呪い——そんな大げさな代物だとはとても思えなかった。

「何読んでるんだい？」

胸を撫でられているのは私も同じだった。

すっかり手慣れた様子で愛撫されている。

いや、愛撫というにも弱い。例えるなら仔猫の首をくすぐるようなものだ。

快樂と呼ぶにはあまりにもどかしく、しかし不思議と心地よい。そんな感触だった。

「うん？」

それはいいのだが、肝心のクオン本人は一枚の羊皮紙に目を落としたままだった。

しかも何だか随分と嬉しげなのが、そこはかとなく腹立たしい。

「ギルドの情報誌だ。少し気になる記事があったからな」

これで春画だったらどうしてやろうか——と、考えているとクオンはあつさりそう

言った。

「はあ？」

今のところギルドからは何の音沙汰もないが……さて、何か動きでもあったのか。

そんな事を思いながら、のぞき込むとそれは確かにギルドの情報誌……それも、冒険

者の公式昇格を知らせる記事だった。

冒険者にとっては見逃せない記事だが——当然といふべきか、ギルドお抱えの人相書きの手による似顔絵と名前、所属する「ファミリア」名。昇格前のLv.と昇格後のLv.。そして、昇格までの期間だけが書かれただけの短い代物でしかない。

大体、Lv. 1からLv. 2へのランクアップならそうは言つても珍しい話ではないのだ。

最初の関門と言えはその通りだが、本当に険しいのはそこから先である。加えて言えば、この男にとってはLv. 7だつてそこまで大した敵ではない。

一体何がそんなに嬉しいのやら——

「はあ?!」

ざつと流し読みして、ようやくその記事のとんでもなさ気づいた。

——所要期間一ヶ月半。

とある冒険者の、所要期間には確かにそう明記されていた。

所属は——

（「ヘステイア・ファミリア」……？）

聞き覚えがある。

こいつが嫌悪していない……かどうかはともかく、まつとうな関係——奇妙な状態が続く私の改宗コンバージョン先ジョンにあげる程度の関係を保っている神のひとり一柱だ。

いや、そもそもこの坊やを知っている。

「そうか。あの時の坊やか……」

白髪に深紅ルベライトの瞳。

フィリア祭で、シルバークを撃破して見せたL.V. 1のひよつこと同じ特徴だ。

「ああ」

あつさりとクオンは頷いた。

となると――

「あんた、やつぱり何かしたんだろ？」

具体的には『ソウルの業』とやらを仕込んだに違いない。

でなければ、L.V. 1がミノタウロスの単独撃破などできるはずがないのだから。

中層に出没するその怪物は、シルバークとは文字通り格が違う。

「いや、特に何も。生き残り方と、剣の振り方の基礎を教えたくらい……ああいや、他に

《呪術の火》を分け与えたが」

しかし、クオンはあつさりと首を横に振った。

その左手に宿る『火』は、魔導士が言うところの魔法の杖だとは聞いているけど……。

「なら、こいつも雷の槍やら劫火やらを使えるってことかい？」

それなら、まあ可能性はあるだろうか。

「いや、流石にそこまでは仕込んでいない。大体、《呪術の火》は本来なら奇跡の触媒にはならないしな」

これは師匠たちの手で生み出された特注品だ——と、クオンは笑う。愛用の黒衣と同じということか。つくづく面倒見のいい師匠らしい。

「なら、一体どうやって……。まさか春姫の力じゃないだろうね？」

「まさか。あいつが生贄の儀式なんてするものか」

そりゃ、そうか。

こいつはあのヘツポコ狐を守るために八つの派閥を潰し、うち七派閥は主神どころか幹部連中まで皆殺しにしたような奴だ。

そのクオンが気にかけている相手が、そんな真似をするとは流石に考えづらい。

「大体、ウラノスも知っているんだ。怪しいと思ったら調べているだろうよ」

しかし、そうなる——

「つてことは、本当に一カ月半でミノタウロスを倒したつて？」

「そうなるな」

どんなバケモンだい、そりゃ……と、内心で呻く。

フィリア祭で見かけたのは、雌おんなと見間違えそうな青臭い坊やだったのに。

「これはうかうかしていると追い抜かれるな……」

追いつかれるのはともかく、追い抜かれるのは冴えない話だ——と、クオンが呟く。そりや、むしろ私たちの台詞だ——と、言う前に。

(ま、今さらか)

L v. の壁は絶対——なんてのは、もう四年も前に終わった話だ。

L v. 7と互角以上に渡り合うL v. 0がここにいます。L v. 1がL v. 2相当のミノタウロスを倒したところで驚くような話じゃない。

(私も腹を括るとしようじゃないか)

神を気取るつもりはないが……近いうちに派手な喧嘩戦が起ころるのは間違いない。

その中で、これからもこの男については『神フアの恩恵ルナ』だけでは力不足だ。

「クオン」

もちろん、何年もかけて悠長おんに育てている暇などあるはずもない。

「どうした？」

だが。だからと言って——

「私にも寄越しな」

「……何をだ？」

「その《呪術の火》つてのをさ」

「このまま単なる情婦おんなに成り下がったら、戦闘バ娼婦ベラの……いや、アマゾネス戦士の名折れだ。

まったく冗談じゃない。

「……何だつて？」

家を守りながら無事を祈り、帰つてきたなら三つ指ついてお出迎え——なんて健気な役回りはエルフに任せておけばいい。

「大切な師匠からもらつた『火』は、娼婦には渡せないかい？」

だから、まずはその『火』を。

そして、その『ソウルの業』とやらも。

「別にそんな事はない……と、言うか。そもそもお前に分けるなら何の問題もないが……」

「なら、いいだろう？」

私のものとしてやろうじゃないか。

これから先、こいつが挑む『巡礼』とやらにとことんまで付き合うために。

3

と、言う訳で今日は神会デナトゥスだった。

そりやまあ、ボクだって晴れて派閥の主神となつたわけだし、いつかはこの末端に加わる日が来るかなー、とは思っていたけど。

(まさか半年もかからないなんてね……)

思わず遠い目をしてしまう。

この暇な神たちの退屈しのぎ——が、盛大に持ち上げられた末に生まれた諮問機関への参加資格は、L.v. 2以上の眷属が最低でも一人はいること。

で、ボクらがその資格を得るまでに費やした歳月は半年どころか、なんと一カ月半。大切な事なのでもう一度言うけど一カ月半。本当に大切なのもう一回言うけど、一カ月半だ。

費やしたのは歳月じゃなくて日々だった。

もちろん、ボクのベル君の努力の成果だ。本当なら、全力ではしゃいで力尽きるまでお祝いしてあげたい。何しろ、前代未聞の快挙だ。流星はボクのベル君！

本当に、ぎゅつと抱きしめて一緒に踊り回りたいくらいだ。

(娯楽に飢えたハイエナどもがいなければねっ!!)

開会までまだもうちよつと時間があるというのに、そろそろと集まっては馬鹿話に花を咲かせている馬鹿^{神々}たちを見渡して呻く。

(くっそ……)

こちらを見やる神達は、全員が嫌らしい笑みを浮かべている。

できたばかりの弱小派閥が見せた——自分で言うのもなんだけど——奇跡の躍進

劇をネタに遊び倒してやろうという魂胆が透けて見える……と、いか所も隠す気すらない。

とはいえ、それに付き合っているのは向こうの思うつぼだ。

「案外落ち着いてるわね？」

「緊張する理由もないだろ？」

一緒にここまで来たへフアイストスに応じる。

とりあえず、緊張する理由だけはない。

「もつと張りつめているかと思つたわ。いつもみたいにぐぬう、つて顔して」

「そんな顔したつて周りのやつ等を楽しませるだけだろ？」

それで何か変わるならいくらでもしてやるけど。

「違ういわね——と、苦笑してから、へフアイストスが表情を改める。

「言うまでもないでしょうけど、今回は荒れるわよ。くれぐれも用心しなさい。私も可能な限りフオーするけど、本格的に飛び火してきたら流石に底い切れないわ」

私自身も全く無関係じゃないしね——と、神友は小声で耳打ちした。

「うん。分かっているよ」

何を言わんとしているのかは、もちろん分かっている。

小さく頷き返す。

「ここに顔を出す神も増えたな……って、いつもなら言うところだけど」
「今回は減ったな、ごっつそりと。いやマジで」

初参加のボクには比較して判断する事はできない。

けど、この半月ばかりの出来事を鑑みれば、それは明らかだった。

確実に九派閥は姿を消している。残りに派閥も、派閥として存続できるかどうか。

「でもまあ、今回『ランクアップ』の方は豊作らしいぞ」

「ほほう！ それは愉しみですなあ。ぐへへ」

とはいえ、そこは気まぐれな神の集まり。

陰鬱な——あるいは不穏な——空気は漂っていなかった。……少なくとも、今のところは。

神々の気まぐれは本当に気まぐれなのだ。何が起こるか分かったもんじやない。

「ま、ひとまず適当に座りましょうか」

「席とか決まってるのかい？」

「ええ。だから円卓なのよ」

なるほど、上座も下座もないということか。

まあ、しいて言えば司会席の傍に座るのは、その司会役と親しい神というのが通例らしいけど。

別にそんなところに座るつもりもないので、ボクには関係ない話だ。

と、そんな時——

「もし、そなたがヘスティアか？」

その呼びかけに、振り返る。

「君は……う？」

そこにいたのは、青を基調とした衣装ドレスに身を包んだ女神だった。

ただ、見覚えがない。ガネーシヤと同じく——いや、デザインは違うけど——仮面で顔を覆っているせい、というのものもあるだろうけど。

仮面に覆われていないほっそりとした顎先と、薄く紅が引かれた唇だけでそれが誰かを見極めろというのは流石に難易度が高すぎる。

「私はクアト。今はそう名乗っている」

「クアト？」

はて、と首を傾げていた。

そんな女神はいただろうか。まあ、天界でも自分の領土に引きこもってたボクだし、知らない神がいても何の不思議もないけど。

「ふふっ。知らないのも無理はない。取るに足らない弱小派閥の主神故な」

そなたの眷属のような飛躍もあまり期待できそうにない——と、クアトは小さく苦笑

した。

「ええと、それでボクに何か用かい？」

「なに、一躍時の神ひととなつたそなたに軽く挨拶をと思つただけだ」
軽く口元に手を当てて、クスクスとクアトが笑う。

他の連中と違つて、別に嫌味な感じはしないけど……。

「いや、気を悪くしたなら謝罪しよう。そなたらを敵に回したくはない」
私も、まだ命は惜しいのでね——と、小声でクアトが付け足した。

思わぬ言葉に、ぱちくりと目を瞬かせる。

「大げさだなー。ボクもベル君もそんなに乱暴じゃないぜ？」

「ふふつ。それならば良かった」

そう言つて、クアトは少し離れた席へと向かつていく。

(あれ?)

彼女の背中を見送つてから、ふと思ひ至つた。

(今のつてひよつとしてクオン君のことだつたりするのかな?)

ボクらはクオン君とも仲良くやっている。ヘファイストスが気にかけているのも、まさにそれだ。

だから、だろうか。

自分で思うより過敏になってるだけなのかもしれないけど……命が惜しいという言い回しが、少し気になった。

いくら『神の力』^{アルカナム}を封じているとはいえ、ボくらにとつて『死』とは縁の遠い概念だ。……まあ、これから天界に戻れば死ぬほどき使われるのは明らかなので、送還Ⅱ死といつても過言じゃないのかもしれないけど。

いや、それにしても――

「えつと、今のは……？」

クアト。そういえば、どつかで聞いたことがあったようななかったような……

「ああ、彼女はああやってロールプレイしてるのよ」

「ロールプレイ？！」

「そう。確か『涙の神』、だったかしら。悼みの涙や哀しみの涙を司る女神。そういう架空の神を生み出して、演じているのよ。まだ誰にも素顔を知られていないんだから徹底してるわ」

「フィアナみたいな感じかな？」

それは、かつて小人族^{バルクム}君たちが信仰していた、世界で一番有名な架空の神だ。

「そうとも言えるわね。実在はしないけど、存在はしているから、小人族^{バルクム}の悲劇は起こらないかもしれないけど」

確かに。少なくとも彼女がその役割を演じているうちは存在しているといえよう。

……まあ、逆に言うといつ気まぐれを起こして消えるか分からないけど。

「()にいてるってことはやっぱり探索系派閥なのかい？」

いや、必ずしも探索系じゃなきゃ参加資格がないってわけじゃないんだけど。

そもそもヘファイストスのところは鍛冶系派閥なんだし。

「一応そうだけど……。眷属たちも『古代』の敬虔な信徒を真似て、説法したり、葬儀を受け持ったり、『ダイダロス通り』の住人達に寄進したり……。他にもいくつかの福祉活動に精を出しているわ。まあ、そういうのが面倒だからか、入団者も少なくて今も弱小派閥みたいね」

いや、デイトロス神会に参加できるんだから本当の弱小じゃないんじゃないかな——と、つい数日前まで本物の弱小派閥だったボクは声にせず呟く。

「ま、これもまた神の気まぐれってやつよ。どんな神でも、『神の力』アルカナムを封じているうちは、大したことができるわけじゃないし」

まあ、鍛冶神ヘファイストスや医神ミアハみたいに地上でも活かせる技能の持ち主なら、その肩書は特に重要になる。何しろ、その道を究めようと思う子供たちが集まってくるんだから。

一方で概念的なもの——例えば、『大衆の主』ガナーシヤみたいなのは……。まあ、そっちはそっちで充分に関係してくるけど。実際、治安維持に従事している訳だし。

（フレイヤ達……も、まるつきり関係ないわけじゃないか）

その神格美貌そのものが意味を持つてくるから、ちよつと違うような気もする。

ただ、マイナス方向の概念を司っているなら、むしろ架空の神を演じるほうが眷属を集めやすいということもあるのかもしれない。

……まあ、選ぶ子供たちにとっては不安材料にしかならないかもだけど。

何しろ、自分の在り方司るものを偽っているわけだし。

弱小派閥のままっていうのは、案外その不誠実さこそが原因なのかもしれない。

それにしても——

（んん……？）

さつきから架空の神——と、いう言葉が妙に意識を刺激していた。

いや、確かにそんな名前の神には覚えがない。覚えがないんだけど……。

（どつかで聞いたような気がするような、しないような……う？）

何だかもやもやする。

「うっし！ そろそろ始めるでー！ 全員はよ座れやあ!!」

「「へーい」」

その感覚を持て余している間に、いよいよ神会デナトゥスが始まろうとしていた。

「彼女には気をつけなさい」

嵐の前の静けさ——もとい、嵐の前のざわめきにまぎれて、ヘファイストスが囁いた。
「どうしてや〜」

「クアト・ファミリア」には裏の顔があるのよ」

「裏の顔だつて？」

「あくまで噂話だけど、『死の傍でこそ涙は美しい』。眷属たちに、そう説いてもいるみた
い」

「そりやまた物騒だね」

確かに誰かを想って流す涙は奇麗かもしれないけど……その涙は悲しいだけだろう。

「ええ。『人を絶望の運命へと導く悪神ともいわれる』つていう設定みたいね。で、それが極まった結果——」

「第^{デナトウス}ン千回神会開かせていただきます、今回の司会進行役はうちことロキや！ よろしくな——」

ヘファイストスの言葉を遮るように、開会が告げられる。

つていうか、何でロキが司会なんだよ！

「——復讐を請け負っているつていう噂があるのよ。主に冒険者を対象にしてね」

冒険者達に絶望の運命を——声にせず毒づくボクの耳に、ヘファイストスが呟いたその『教義』が絡みついた。

……
 そんなこんなで、いよいよ神会デナトゥスが始まったわけだけど。

そもそも神会デナトゥスとは何かといえ、暇な子どもが集まる歓談会——が、いつの間にか持ち上げられた結果生まれた諮問機関だった。

始まりがそんなだから実際のところ有名無実な集まりなんだけど、今では合同で催しを企画できるくらい悲劇の力を持つてしまっている。そのせいで諸々の喜劇騒動やイベントが生まれては消えて行っているわけだ。

ちなみに、今更だけど会場はバベル三〇階。

子供たちの立ち入りが制限されているその区画を丸々改装して作られたその広間には円卓が一つ置かれているのみ。周囲はガラス張り、さらに天井も異様に高い。

空中に浮かぶ神殿——と、子供たちならそう言い表すかもしれない。

そういえば、これが厳肅な雰囲気の中で進む神聖な会議なのだと思われる子供たち神会がいるとかいないとか……。

改装工事にはどこかの派閥の眷属が関わっているから、この会場に関する噂が流れ出ている可能性は充分にある。

ただ、実情は言えば——

『——決定。冒険者セティ・セルティ、称号は『バーニング・ファイティング・ファイター暁の聖竜騎士』』

「イテエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！」

ご覧の通りの惨劇有様だった。

……一応言い訳をさせてもらうと、基本的に——そう、基本的には神々ボクらと子供たちベル君たちの感性に大きな差はない。

だからこそ、こうして地上の生活を享受できているわけだ。

ただ、何故か命名の感覚センスだけは別だった。

神がおかしいのか。子が愚かなのか。

理由は定かではないが……現実として、子供たちが目を輝かせ、ボクらが悶えてしま
う——そんな『痛恨の名』が確かに存在する。

と、いうか。今、ボクの目の前で大量生産されていた。

「狂ってる……」

最初の情報交換の間は、結構まとも……と、いうかちよつと不穏な空気が流れたりし
ただ。

今や、それすらも見る影もない。

「あんたの気持ちはよくわかる……」

悄然としながら眩くと、ヘアアイストスもまた遠い目をした。

（世界とは悲劇なのか……）

世界とは何なのか。ボクらは何者なのか。どこからきて、どこへいくのか。

諸々思考を放棄して、訳も分からない哲学にふける。

（拝啓。親愛なるベル君へ。ボクは今、猛烈に君に会いたいよ……）

などと、現実逃避している場合ではない。

この惨劇は他神事（ひとしごと）ではないのだ。

一般に、下位派閥の眷属ほど酷い名前を付けられる。

大切な大切なベル君のために、何としても無難な名前を勝ち取らなくては——！

「……ん、次で最後やな」

などと、新たに決意を固め、闘志が燃え上がると同時——

（見てておくれ、ベル君！ 君に負けないように、きつと戦い抜いてみせるよ！）

ついに聖戦の時が来たのだった。

4

（相変わらず醜い事だ）

次々に馬鹿な字名をつけては笑い転げる神どもを見やり、吐き気にも似た感覚を持って

余す。

ランクアップとは、命を賭した果てにあるものである。

死線を掻い潜った先にあるものすら笑いものにするのだから、やはり神どもは度し難い。

まったくうんざりするが……しかし、足を運んだ甲斐はあったのも確かだ。無視できない情報がいくつか手に入ったのだから。

(リヴィラの街の殺人事件か。確かに、密偵達からも報告が上がっているな)

フィリア祭で暴れた『新種』と牛頭のデーモンの他に、見たこともないモンスターが現れたと。

悪神と象神の様子から察するに、闇派閥イウイルス残党が関与していると見るべきだ。なるほど、シャランの言葉とも合致する。

(伝手はまだ残っていただろうか……)

闇派閥イウイルス——いや、「タナトス・ファミリア」と。

シャランは駄目だ。彼女はいわば逃亡兵。接触など取らせれば殺される。

場合によっては危険な橋を渡してもらう事もあるだろうが、今はまだそこまでする必要はない。

……ないが、デーモンと接点があるとすれば完全に無視もできない。

(別の者に、念のため探りを入れさせるか)

まずはそのあたりをはつきりさせなくては。

（もつとも、今はまだそこまで急ぐこともないか）

いずれは殺す——が、オラリオを混乱させてくれるなら、もうしばらくの間は利用価値がある。

具体的には、今も炉の神に絡んでいる悪神とその下僕とぶつけ合わせてみるとう。う。

……まあ、火に誘われる蛾のように、すでに自ら飛び込んでいるようだが。

（問題は、むしろその裏側にいる者たちだな）

エニユオなる者ども。

地上にはそれなりの情報網を敷いたつもりだったが……まさかダンジョンの中にそんな勢力が存在していたとは。

（そろそろ、本腰を入れてダンジョンの攻略を行うべきか）

無論、ダンジョンこそが——より具体的には我らが王が到達したとされる七〇階層より先が、新たな巡礼地だと見当は付けていた。

いずれはそこを踏破し、玉座への道を拓かねばならないとも。

ただ、手駒が足りない。現時点でそこまで送り込める人員は、流石にごく僅かしかない。

そして、その者たちですら巡礼地を踏破するにはまだ力不足だ。

だからこそ、先送りにしていたが――

(いや、単なる異形どもの巢穴だと侮っていた訳ではないが……)

デーモンが存在している時点で無視などできるはずもない。

そして、そのデーモンを生み出している……あるいは、従えている何者かがいる可能性までは考慮していた。

だが、ここしばらくの動きを見るに、私が想定していたよりも遥かに複雑な勢力争いが起こっているようだ。

そちらに関しては、今の時点でも大きく出遅れてしまっていると言うよりない。

(仕方ない事だがな)

弱兵をいくら送り込んだところで、巡礼地はその全てを容易く飲み込む。

辿り着けるのは選ばれた者たちだけだ……が、神どもが『ソウルの業』やそれに連なる諸々の技術を抹殺して久しい。

火防女どころかまともな篝火すらない私達では、ソウルを育てるのも容易ではなかった。

我らが秘術『暗い穴』も、その力を受け入れられる『真なる人』ばかりとは限らない。有能な手駒は欲しいが……徒に亡者どもを生み出しては、我が王の偉業を穢してしま

なれば、使用には慎重であるべきだった。

この件については、帰ってじつくりと吟味すべきであろう。

（ラキアか……）

侵略戦争を繰り返す軍事国家が、オラリオへの遠征を開始したらしい。

正しくは国家系派閥——つまり、巨大な「ファミリア」だ。

神の下僕どもが殺しあう分には然したる問題はない。同志や民草の安全さえ確保できらば、あとは好きにさせておけばいい。

そもそも、彼我の戦力差を考えれば気に掛ける必要はない……と、神どもは思っている。そうだが。

（さて、どうなることやら）

何であれオラリオを混乱させてくれるなら、利用価値はあるといえよう。

ただ、その混乱が私達の動きまで邪魔するようでは困る。

どの程度の戦力を差し向けているかを把握しておく必要があるだろう。

……それに、こちらに関して多少々気になる噂を聞かないでもなかった。

（どこから手を付けるか。優先順位も定めておかななくてはな）

この不毛な歓談が終わってすぐに指示を出すために。

……とはいえ、実際のところ順位に関してはほぼ決まっている。

エニユオとやらだろうが、ラキアとやらだろうがオラリオを混乱させてくれるなら当面——やり過ぎない限り——は、歓迎していい。私達が本当に用があるのは、オラリオではないのだから。

目指すべきはダンジョン。いや、その最奥にあるはずの『玉座』だ。

(そこをを目指す者は他にもいるな、やはり)

私達と同じく、『火の時代』を生きた何者かが。

……いや、そのような曖昧なものではない。

(アン・デイル、か……)

ダンジョン内に存在する勢力の一角。それを担っているであろう人物の名を呟く。

……いや、もつと以前から私はその名を知っている。

古い巡礼地——貴壁の大国ドラングレイグの王兄。稀代の術者にして悪名高い狂人。

そして、記録に残る限り、初めて『火継ぎの儀』の是非と問うた【原罪の探究者】。

それと同一人物と見ていいだろう。

(地上にまで手を伸ばしてくるとは、あちらは再編が終わったか)

密偵達の報告では、【フレイヤ・ファミリア】を襲撃していたのはこの男の手下らしい。

デーモンを率いる何者かと抗争中だと思われるが……地上にまで手を伸ばしてくる

となると、手勢はそれなりに揃っているようだ。

巨人の国と相打った〔王国騎士団〕再び、といったところか。

……いや、王の目覚めを知ったが故に、多少の無理を押し通した可能性もあるが。

（と、なればダンジョンの中はもうしばらく放っておいてもいいか）

あちらとて、思惑は私達と概ね同じはずだ。

いずれは接触することになるだろうし、その結果次第では敵対する事もありえるだろうが……それも含めて、だ。

機が熟せば、あちらから接触をとってくる可能性もある。

交渉——あるいは抗争——を有利に進めるにはこちらも機を見定めることが大切だ。もちろん、事前の情報も欠かせない。情報収集だけはすぐにでも始めるべきだろう。

（ひとまず、リヴィラの街に配置する人員を増やすか）

そして、下層の安全階層セーフティポイントに拠点を築かせる。

それらは、いずれ情報収集以外にも使い道が出てくるはずだ。多少時間をかけてでも、やっておいて損はあるまい。

（エニユオに関しては……拠点への入り口ならある程度分かっているな）

何しろ、シヤランがいくつか把握しているのだから。

他の入り口も探しておいて損はないだろうが……それより、彼女が言う『鍵』をどうやって手に入れるかが問題だ。今のところ、まったく当てがない。

……いや、まったくくない訳でもないか。

〔ガネーシャ・ファミリア〕……〕

我らが王と関係を持つこの派閥が、「イシユタル・ファミリア」滅亡直後から動き始めている。

彼女たちが回収している可能性は決して低くあるまい。

もし回収していなくても、闇派閥イヴァイルスと接点があると知っている以上、その拠点を探そうとする^とと見ていい。であれば、いずれにせよ『鍵』を探すことになる。

ひとまず、そちらは専門家に任せておくとしよう。下手に関わつて、この派閥に目をつけられるような事になつても面倒だ。

（ラキアは意外と厄介だな……）

国家系派閥——国民の多くが神の下僕となれば、流石に密偵を忍び込ませるのも容易ではない。城下町までならともかく、軍部や国営の中枢に入り込ませるとなれば必要な時間も手間も莫大なものとなる。だが、それに見合うだけの価値があるかどうか。

かつては正攻法であつた各種の宣教師を装つて——と、いう方法がほぼ役に立たないというのも、この世界の厄介なところだつた。

（ただ、少々気になる噂がある。せめてそれだけは確かめておきたいところだが……）

しかし、これから仕込んでいてはまず間に合うまい。

ひとまず、あちらとも交易のある商会の連中を經由して情報を集めるとしよう。

（商人どもを動かすには、それなりの餌がいるな）

それに、根回しも。

（となると、すぐにできることは——）

ダンジョン内における拠点の確保。次いで、エニユオどもの拠点の入り口を搜索する事か。

どちらにしても、ダンジョン内の勢力争いに関わる事になる。

あちらの戦力が分からない今、ことは慎重に進めるべきだ。

だが——

（最優先は、それではない）

視線の先にとらえるのは、旅装を纏った神。薄ら笑いを浮かべている男の姿だった。

（奴を野放しにしておくのは、少々煩わしいな）

いや、違うか——と、胸中の呟きを訂正する。

（我が王の手を煩わさせる訳にはいかない）

王の手を煩わせるまでもない。あれは私が潰しておくべき羽虫だ。

つい先ほどのやり取りを思い起こし、小さく呟いた。

…

「ラキアもだけど、アレもそろそろどうにかした方がいいんじゃないか？」

ラキアの主神、アレスとやらへの対処を話しあう——と、言えるほど高尚なものではないが——神どもにそう言ったのが、この男……ヘルメスとやらだった。

【「正体不明」のことかよ？」

「そうさ。またずいぶんと好き勝手してくれたようじゃないか。イシユタルたちを殺すなんてさ」

自分達の蛮行を棚に上げて、よく言ったものである。

だが、呆れとともに聞き流せる発言ではなかった。

「いや、さすがにありやただのブラフだろ？ 完全なる神殺しなんてのは」

「そーそー。魂喰ソウルイーターらいなんて、御伽噺の中のでたらめだつて」

のんきな神どもが、愚かな事を口々に言いあう。

それを、相変わらずの薄ら笑いとともに見やつてから、言葉を続ける。

「ブラフかどうか。それは、確かに天界に戻りでもない限り分らない。けど、問題はそこじゃないだろう？ 俺達が天界から降りてきて一〇〇〇年。持ちつ持たれつ、仲良

く楽しくやつてる所にいきなり現れて、規則ルールも無視して好き勝手するよそ者を野放しにしておく理由はない。そうは思わないか？」

どよめきが起こった。

おそらく、その言葉はこの場にいる神の大部分の本音を代弁したものだうのうだろう。

……まったく、愚かな事だ。

——この『時代』において、最大のよそ者異物は貴様神そのものら自身だというのに。

「……それは、オラリオから追放しようという話か？」

口を開いたのは、司会役を務める神だった。

確か、オラリオ最大派閥「ロキ・ファミリア」の主神だったか。

この連中も、我らが王に因縁を抱く者たちだった。

「もう少し言うなら、この下界から、かな」

次に生じたどよめきは、二種類——いや、三種類に分かれた。

一つは、言うまでもなくこの男の言葉に賛同するもの。

もう一つは、その言葉に反発するものだ。

……もつとも、一番多いのは最後の一つ。つまり、ごく単純な動揺だが。

「……念のための確認なのだが」

ざわめきの中で口を開いたのは、金髪碧眼の優男——確か、ディオニュソスとかいう神だった。

「それはいつたい誰がやるのかな？ 彼は大派閥の「イシユタル・ファミリア」を壊滅させている。さらに、一〇派閥からなる派閥同盟すらも。何よりも恐ろしいのは、単独で成し遂げたという事実だ」

なるほど、その指摘はまさに正鵠を射ている。

神どもが本気を出すとすれば、今の状態では太刀打ちできないだろうが……しかし、この凡夫どもにそれだけの度胸があるかどうか。

「それはもちろん、「ロキ・ファミリア」と「フレイア・ファミリア」にお任せするさ」
やはり、ないらしい。

その男は、実にくだらけな結論を口にした。

「とはいえ、流石に丸投げにするんじゃないや誠実さに欠ける。お膳立てはしよう」

「お膳立てやて？」

「ああ、そうさ。まず、地上で対峙するのは危険すぎる。アレは俺達を容赦なく殺しに来るからね」

「……まあ、そらそうやな」

当然だろう。これほど分かりやすい弱点が無防備にうろついているのだ。

狙わない者の方がどうかしている。

「だから、やるならダンジョンの中さ。ギルドを巻き込めば、それらしい理由はでつち上

げられる。何、ウラノスが動かなくても問題はないさ。実際にギルドを運営しているのは別人だからね」

確かにあの俗物——ロイマンとやらなら、この男の甘言をまともに飲み込みかねない。

「あそこなら、俺達でも手助けできる。『恩恵』^{ファルネ}よりもっと直接的にね」

再び、会場にざわめきが起こる。

あくまで私の体感だが、賛同者がいくらか増えているように思えた。

……もつとも、逆に嫌悪感を深めたものもないではないが。

「いくらアレが化け物じみても限度があるだろう。あとは、歴史を担う英雄たちに任せるさ」

ああ、なるほど——と、納得する。

確かに、それなら一度や二度は殺せるかもしれない。

だが、それだけだ。我らが王——あの男の心をへし折れるものでない。

そんな事は分かり切っていた。

私が納得したのは、そこではない。

「英雄たちに打倒され、その偉業となりまた糧となる。それが怪物の役どころだ。そうだろうか？」

自分達を至上として、人間を駒と見下す。

これが我らが王が唾棄し、嫌悪し、あるいは憎悪すら抱いた神そのものなのだ。それを肯定するように、ぽつぽつと賛同の声が上がりはじめる。

だが――

「ずいぶんと盛り上がっているようだけれど……」

小さな微笑を浮かべながら、とある女神が呟いた。

オラリオ最大派閥「フレイア・ファミリア」が主神、『美の神』フレイヤ。

確かに、その名に恥じず声まで美しいといえよう。

ああ、その輝きに目が眩む凡夫がいたとしても致し方ない事か。

「私はやらないわよ?」

「え? ふ、フレイヤ様?」

よほど当てが外れたのか――それとも、演技がうまいのか――ヘルメスが驚愕の表情を顔に張り付かせた。

それどころか、他の神々もまた動揺を見せる。

「当然でしょう。彼のことは嫌いじゃないもの」

その中で、彼女はあくまで悠然と微笑を称えたままだった。

「い、いや。でも、フレイヤ様。アレはあなたの命だつて狙つてるんだぜ?」

「そうですね。ひよっとしたら、いつか殺しに来るかも知れないわね」

それがどうかしたかしら？——と、声にしていないその言葉が聞こえるようだった。

「刺激があるからこそ、下界での生活は楽しい。そうでしよう？」

「そりゃあ……だが、限度つてもものがあるだろう？」

「それはもちろんそうですね」

あつさりと言われ、ヘルメスはむしろ戸惑った様子だった。

そして、それですらその女神の微笑を揺るがすには値しない。

「でも、彼はその限度を超えるようなことをしたかしら？」

「当然だろう？」

「そうかしら」

あくまでも悠然と、艶然と、そして、超然としてその女王おんなは腕を組み微笑んだ。

「イシユタルは、閻イツイルス派閥の残党と繋がりがあった。そうよね、ガネーシャ？」

「そうだ！ 具体的な金額はまだ不明だが、相当額の資金提供を行っていた疑いもある

!!」

「なら、イシユタルは自業自得よね。それとも、閻イツイルス派閥残党への資金提供は些末な問題な

のかしら？」

返事を待たずして、フレイヤが続ける。

「なら、神罰同盟、だったかしら。彼らを退けたのが問題？ それもどうかしら。ギルドへの襲撃なんてまるで暗黒期だわ。むしろ、限度を超えたのは彼女たちの方ではなくて？」

我らが王がいなければ死者が出ていた可能性すらある。

この会議に参加する資格を持った神なら、その程度の情報は得ているだろう。

「いいいや、それは……」

やはり、この地において最も油断ならないのはこの女王か。

(完全なる神殺し。それが虚言ではないと理解しているだろうにな)

そのうえで笑って見せるとは、まったく大したものだ。

享楽主義なのは他の神どもと同じだが、この女王はどこか振り切れている。

文字通りに楽しんでるのだろう。この地で起こる全てを。

(まあ、少々偏つてはいるようだがな)

それは『美の神』とやらの性といったところか。

「だが、フレイヤ様。アレは俺たちの『恩恵』を持たないのに、あんな力を振るっている。

そんな事はあり得ない。あり得ちゃいけない」

あり得てはいけない。それが、現代の神の多くに共通する本音だろう。

何しろ、自らの特権——それどころか、存在価値に関わる問題だ。

人間たちが『^{ファルナ}恩恵』を持たずとも生きていけるなら、神どもの傲慢に付き合う必要もなくなるのだから。

（ああ、案外に気づいているのかもしれないな）

自分たちの時代など、もはや終わっているということに。

「だとすれば、ウラノスがアレに『^{ファルナ}恩恵』を与えている可能性がある。中立中庸の公約を破つて、だ。いや、それどころか『^{アルカナム}神の力』を用いているかもしれない。これは^{イグニルス}闇派閥と同じくらい不味いことだろう?」

「あら。彼は真正正銘のLv. 0よ。あれだけ大騒ぎして暴き立てて、もう忘れちゃつたのかしら?」

「だからこそ、さ。暴けなかったのは、ウラノスが『^{アルカナム}神の力』で何か細工をしたせいかもしれない。そうは思わないか?」

おそらく、その一言を待っていたのだろう。

その瞬間、フレイヤの目が小さく光つたような錯覚を覚えた。

あるいは、私と同じものを見定めたかったのかもしれない。

「つまり、あなたはウラノス、ひいてはギルドを疑っていると。そういうことでいいのかしら?」

その問いかけに頷けるはずがない。

無論、この女として面従腹背の輩だ。故あれば容易く裏切り、あるいは出し抜くであろう。

だが、守らねばならない建前というものも存在する。

「確かに、ここ最近おかしな出来事が続いているわね。フィリア祭で姿を見せた『新種』達に、リヴィラの街の殺人事件。私が聞いた話では、その犯人は例の『新種』の一種類を従えていたそうね。その直後には二四階層におけるモンスタアの大量発生。あとは、イウイルス闇派閥残党の暗躍、かしら。ええ、確かに面白くはないわね」

意地の悪い女だ。いや、実に女らしい女と言うべきか。

……まったく、男を弄ぶのに慣れているとしか言いようがない。

手綱を引くように言葉を転がすその姿に、思わずため息がこぼれそうになった。「それらすべて、ギルドが裏で糸を引いていると?」

つい先ほど、ロキがかけた『揺さぶり』よりもずいぶんと露骨に仕掛けている。

自白するなら、この女神がこの局面でこれほど積極的に動くとは意外であった。

(いや、そうでもないか)

あの凡夫に利用されるなど、失笑ものであろう。

(それとも、当てが外れたかな)

フレイヤが自分に賛同するとも思っていたのだろう。

だとしたら、つまらない男だ。その女神を、自分なら御しきれると思い上がったか。

「都市運営を担うギルドの創設神が、闇派閥残党を密かに匿い、リヴィラで殺人事件を起こし、どこからか『新種』を用意して街を襲わせ、さらにダンジョンに異常事態を起こさせた。それが事実なら、確かに大騒ぎね」

クスクスと、その女神が笑う。

さしあたっては、あの男は突かないでいい藪を突いて蛇を出したといったところだろう。

「さらに彼が……【イレギュラー正体不明】クオンが加わる。それなら、オラリオを揺るがすには充分でしょうけど——」

そして、彼女は言った。

「ウラノスが、それでいったい何をやるのかしら？ 私は失うものの方が多いと思うのだけれど。それとも、千年の祈禱に疲れ果て、破滅願望にでも捕らわれてしまったと？」

あり得ない。神どもの声が聞こえるようだった。

声にならないその賛同を得て、彼女は言葉が続けた。

「だとしたら、一大事だわ。せっかくの神会デナトゥスなのだし、詳しく話して欲しいわね。確か、あなたはウラノスとも懇意にしているでしょう？」

有名無実といえど、都市運営に影響力を持つこの場で、特に根拠もなく

都市運営キの中核ドを疑うというのは、まずもってその『守るべき建前』に背く事になる。賛同を得るところか、下手をすれば自分が孤立しかねない。

「まさか。別にそういう訳じゃないとも。……あくまで可能性の話さ」
さすがに、その辺りに対する嗅覚は鋭い。

あつさりと言いつつヘルメスに、ここぞとばかりにフレイヤはとびきりの笑みを贈る。

「もちろん、ウラノスやギルドを妄信するのも問題だけれど……あまり反発ばかりしていると貴方たちの方が限度を超えてしまうかもしれないわよ？」

その氷の微笑は、言葉よりも雄弁に告げていた。

私の愉しみを奪う事は許さない——と。

……

【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】。どちらの主神も食わせ物だが……こういつた駆け引きでは、こちらのほうが一枚も二枚も上手だな）

弁舌の冴えと駆け引きだけを見れば互角かもしれない。

最後に勝敗を左右するのは、神としての性質だ。

（悪神より『美の神』の方が聴衆を味方につけやすいのだろうな）

……無論、聴衆を扇動できるからこそその悪神。これが一騎打ちなら、結果は変わって

いたかもしれない。だが、少なくとも今回は『美の神』の勝利だといえよう。

実際、かの女神は今も八面六臂の活躍を見せている。

L v. 1 の身でありながらミノタウロスの単独撃破を果たした——さらに、ランクアップの最短記録とやらを大幅に更新して見せた少年——ベル・クラネルなる少年について、

「強引に推理をしていいのなら、このミノタウロスが因縁の相手だった場合、獲得できる【エクセリア経験値】は、この子にとって特別な意味を持つ……【ランクアップ】することだってありえるかもしれない……と、私は思うけれど？」

と、見事に丸め込んでいる。

ここはすでにフレイヤの独壇場だった。彼女の言葉に、誰も彼もが翻弄されている。双壁の片割れ、ロキですらその勢いを止める事ができないほどだ。

程なく、議場にはフレイヤに賛同する声が増えていき——それがそのまま結論となった。

普段の言動ほどには愚かではない神々を相手に、これほど完璧に扇動してみせるとは、見事な手腕だといわざるを得ない。

いや、これこそが『美の神』の真骨頂なのだろう。

ただ言葉を紡ぐだけで。

いや、ただ在るだけで人も神も——果ては怪物までも魅了せずにはいられない。「どうせなら、可愛い名前を付けてあげてね？」

いかなる気まぐれか、最後にその少年の弁護まで済ませると、颯爽と去って行つた女王の姿に、いつそある種尊敬めいた感情すら覚えるほどだった。

(今回ばかりは感謝しよう。おかげで、こちらも害虫を炙り出せた)

ヘルメス、ディオニュソス、そしてロキ。

この三名が手を組み、何かしら企んでいるのは間違いない。

象神の眷属の死を口実に『揺さぶり』を入れた時、ロキばかりでなくこの二人も視線を巡らせていた。そして、時々は——あるいは無意識にかもしれないが——視線でやり取りを交わしている。

無論、揃いも揃つてとんだ食わせ物だ。よほど注意していなければ勘づくまい。

私とて確証を得たとは言いい切れない。確認作業は必要となるだろう。

ただ——

(またおかしな組み合わせが出来上がったものだ)

これといつて接点が思いつかない。……が、その辺りの事情はどうでもいい。

この三名がギルドを——そして、この場にいる全員を疑っているのは明らかだった。

それだけなら放っておくが、奴らは不遜にも我らが王の排除をも企んでもいる。

で、あるなら——

（早々に退場してもらおうとしようか。この『時代』から、な）

ダンジョン攻略の憂いを絶つためにも、そろそろ地上の勢力を少し整理すべきだ——と。

決まったあ——と、歓声をあげる神どもを見やり、小さく呟いた。

5

「それにしてもあんのダアホ。余計な色気出しよって……」

デナトゥス 神会閉幕後、さっさといなくなつた優男ヘルメスに毒づく。

「確かにヘルメスらしからぬ迂闊さ、性急さだつたとは思うが……」

自らが司る葡萄酒……ではなく、紅茶——何しろ、これからちよいまじめな話をする訳だし、お互いに少しでも酔っぱらってはいられない——に口をつけながら、デイオニソス もう一人の優男が呟いた。

「だが、イレギュラー【正体不明】は無視できない要素だ。そして、例の剣士とも接点がある」

「『人斬り』か……」

ヘルメスの眷属——その精鋭たちを一人で斬殺し、アイズとベートすら歯が立たなかつたという謎の剣士。

何より厄介なのは――

「容易い相手言うならきつちりトドメを刺しとけ言いたいわ」

アレを容易い相手と言つてのける……そして、その言葉通りの力を持っているという事だ。

「それは確かに。だが、『イレギュラー正体不明』の方がまだ御しやすいのかもしれない」

「そらまあ、今んとこイヴィルス闇派閥寄りとも言えんしなあ……」

少なくとも、今回の騒ぎはアレの方に道理があると言わざるを得ない。

うちもあれこれ調べたけど、ギルドの公式発表を覆せそうな情報は何一つ手に入らなかった。

……まあ、フィンたちがいない今、イシユタルの『遺産』については手出ししなかったが。

(けど、そのピースをはめたところで、今見えかけとる『絵』が一転するとも思えんしなあ)

むしろ、補強されるだけだろう――と、悪神としての直感がそう囁いていた。

「ヘルメスについてだが……」

もう一度紅茶に口をつけてから、デイオニユソスが言う。

「割を食っているのかもしれないな」

「割やて？」

この優男らしからぬ粗野な言い回しに、つい眉間にしわがよる。

「ああ。【イレギュラー正体不明】がウラノスと接触したしわ寄せだ」

とはいえ、言わんとしている事は大体分かっていた。

「ウラノスと疎遠になりつつあるということか？」

あちらはあちらで一枚岩ではない、ということだ。

もつとも、それは別に驚くほどのことではない。

「元々ゼウスを裏切った前例がある。一度裏切るなら、二度目も裏切る。そうは思わないか？」

「ま、そら否定せんけど」

どの道、お世辞にも信用できるとは言えない相手だ。

ついさっきだって、危うく面倒ごごとを押し付けられるところだった。

「幸か不幸か、私は【イレギュラー正体不明】との接点はない。だから、教えてほしい。ヘルメスと彼

天界屈指のトリックスターである君の目から見ても、どちらが信用できる？」

なかなかの難問だった。

（いや、そーでもないか）

答えづらいのは、所詮心情的な問題でしかない。

それを無視すれば、答えは割と明白だった。言葉にするのはムカつくが。

「……それら、アレの方がまだ信用できるやろな」

扱いの難しい劇物だが……いわゆる獅子身中の虫にはならない。まともに取引さえ成立すれば、その期間は——こちらから裏切らない限り——おそらく裏切らないだろうと思う。

「いや、もちろん油断はできんけどな。それこそ、必要なら女子供でも躊躇いなく殺せる奴やろし」

少なくとも、アレは清濁併せ呑める手合いだ。

相手が誰であれ、背後から刺す必要ができたなら、それを実行してくるだろう。

ただ、それでも——

「けど、少なくとも今の時点ではうちらを殺す『必要性』はないんやろな。そーでないなら、リヴェリアのお相手なんて根も葉もない噂ができる訳ない」

四年前、リヴェリアが誤解を解き、和平を結んでから——自分から絡んだベート以外は——アレに何かされた子はいない。

立役者であるリヴェリアとはそういう噂が出るくらいには気さくなやり取りを交わしている。

それどころか、密偵として探りを入れさせた——そして、あっさりとバレて捕まった

——ラウルですら無事……というか、何だかんだ言つて飲み仲間に着いてる。

（いや、まあ、適度に『餌』を与えとるだけやろうけど）

付きまとわれるよりは、こちらから適度に刺激を与えてやった方がまだマシだ——と、まあアレが考えているのはそんなところだろう。

（リヴェリアが聞いた『暗い穴』いうんも、アレ自身が情報を求めとるだけやろうしな）
自分の代わりにこちらに探らせよう——と、そういう打算がありそうだった。

しかし、

（アレもアイズさんの『危うさ』は知つとるし、純粹に善意やった可能性もあるけどな）
打算と善意が全く矛盾なく組み込まれている辺りがムカつく。

いや、それはともかく。

こちらが何か『悪さ』をしない限り、あるいはその『必要性』が生じない限り、清濁入り混じつたこの関係は続くだろう。その手ごたえは、確かにある。

「不安材料は、その『必要性』が何をきっかけに生まれるか今一つ読み切れないことやな。けど、それもこちらみたいないな気まぐれによるものやない」

注意していれば、おそらく分かることだ。

……もつとも、分かつたとしても回避できるかどうかはまた別の話だが。

そして、認めるのはめっちゃムカつくが——

(なんやもう、いまいち相手にされてない感もあるしな)

アレにとつては、たまに絡んでくる面倒な相手、くらいなもののような気がしてならない。

それもまた、うちとしては心底ムカつくけど……前回の遠征や、リヴィラの街では特別敵視されていないおかげで助かっているの、文句も言いづらい。

いや、だから余計ムカつくんやけど。

「ならば、今の時点でこちらから敵対するのは得策ではない。もちろん、君たちにも事情はあるだろうが……」

「まあ、少なくとも手を組むんは無理やろな。アレはともかく、うちの子たちが納得せんやろし」

むしろ、心情的にはヘルメスの言葉に同意したいくらいだった。

もちろん、実際に仕掛けるつもりはないけど。……少なくとも、今のところは。

少なくとも今の時点では、心情以外の理由はほとんどないのだから。

「それと同じだろう。ヘルメスにとって、イレギュラー「正体不明」はよほど目障りな存在らしい」

「ま、それお互い様やろけどな」

アレにとつても、ヘルメスは目障りな存在のはずだ。

下手をすると、うちやフレイヤ以上に。

「零落したゼウスからウラノスへ鞍替えし、下界を楽しむうえで一番いい席を守ったと思つた矢先、突如として現れた人間に邪魔された、といったところだろう。ヘルメスにとつては」

「ま、そんなとこやろな」

そら、あの優男にとつてはさぞかしイラつく事態だろう。

柄にもなく、あんな迂闊な真似をしてしまうほどに。

（ま、そーなると……）

本気でウラノスはヘルメスよりアレを重用しているという事になるわけだが。

（その場合、考えるべきはそれが何を意味するかやな）

まあ、それこそヘルメスが信用できないというだけの話かのもかもしれない。

……割と本気でありそうなのだから、どうにも救いがなかった。

「つたく、自分の事情にうちらを巻き込むなっちゅうねん」

「まったくだ」

いずれ決着をつける日が来るかもしれないが、それはあの優男のためではない。

「それで、例の『未完の少年』^{リトル・ルーキー}についてだが……」

「未完の少年」——あのドチビの眷属で、うちのアイズたんの最短記録を大幅に塗り替えた新人。

名前は、確かベル・クラネルとか言ったか。

確かに、一カ月半でランクアップというのは異常だ。言葉にするのも馬鹿馬鹿しいほどに。

だが――

「自分、あのドチビとも領土が近いんやろ？　なら、そつちはうちに聞くまでもないやろ」

「……それは確かにそうだが」

あのドチビが閨派閥イヴイルスと関わりを持ち、例の『怪人』クリーチャーと同じ処置を眷属に施した――などと、そんな世迷い事を一体誰が本気で考えられるというのか。

それならまだ『神の力』アルカナムを使ってイカサマをしたと考えた方がいくらか現実味がある。いや、それでもまだまだその可能性を考えようと思うだけでぐったりするが。

「まあ、彼女にとつては初めての眷属だ。ずいぶんと入れ込んでいるらしいという噂は、デメテルからも聞いているよ。ただ――」

その辺は、猜疑心に捕らわれているディオニユスですら同様らしい。

ひとまず反論してくるものの、実際にはほとんど疑っていないのは明らかだった。

「分かつとる。まあ、やらんやろな」

あのドチビがんなイカサマをするとは思えん。

いや、恋は盲目言うけど……そんならそれで、わざわざ馬鹿正直にランクアップの報告をするとかアホすぎる。

「もしこれがイカサマだったら、露見した時点で彼の冒険者としての生命はほぼ断たれる。ほかの神ならまだしも、あのヘステイアがそんな真似をするとは思えないな」

「分かつとるやん。うちもそう思うで。これは本当に正攻法で成し遂げられたことや」とはいえ、いくらなんでも早すぎる。

おそらく、アビリティの成長を促進する『スキル』でも発現しとるんやろ——と、呟く。

「それはそれで前代未聞だがね」

「そーやな……。んで、問題の『偉業』の方は……まあ、あの腐れおっぱいの言うことも一理あつたんやろな。ドチビもろともご愁傷様としか言いようがないわ」

仮にうちの推測が正しかった場合、眷属自身が自分の成長速度についていけるかどうかという問題が出てくる。

下手をするると、「ステイタス」に振り回されるばかりの冒険者になりかねない。

いや、それは別に珍しくない。その手の上級冒険者は結構な数いる。

だが、あの眷属の場合、そうなってしまうと——

「……ああ。あの少年も、これから厄介なことに巻き込まれそうだね」

あの腐れおっぱいの横やりに対応できないであつさり死んでしまひそうだった。

「そーやな。あの女神おんながわざわざ庇つたんや。どうやって知つたかは分からんけど、とつくに目えつけとつたんやろ」

フィリア祭の朝のやり取りを思い出す。

「案外、そのミノタウロスとやらもあの女神おんなが用意したのかも知れん」

実際にシルバーバックを嗾けている。ほぼ間違ひなく、あの騒ぎはそれが狙いだ。

「まさか。いくら彼女でも、そこまではしないでらう」

「さてなあ。あの女神おんなやつたら、したとしてもうちはそこまで驚かん」

机に突つ伏して呻く。

別にあのドチビやその眷属を庇つてやる気もないけど……それでも、フレイヤに好き勝手されるんは我慢ならん。

（くつそー……。せつかくでつかい貸しを作れた思つたんやけどなあ）

フィリア祭の一件。命を救つた貸しは割とあつさり踏み倒された。

『あら。実際に助けてくれたのはガネーシヤのところの子供たちじゃないかしら？』
と、いうのがあの腐れおっぱいの言い分だった。

（いや、確かにアレはアレでどう見てもうちらごと魔法で吹っ飛ばす気やつたけど）

うちらがした事は、ガネーシヤの眷属が配置につくまでの時間稼ぎだ。

端役ではないにしても、主役とも言い難い。

『もちろん感謝してるわよ。だから、もう少し貸しておいてあげる』

鷹の羽衣。天界にいた時にいただいた——もとい、借りたうちのオキニの事だった。

そんな昔のことを引つ張り出すとは、あの性悪女神め。

「けどまあ、フレイヤが『極彩色の魔石』の黒幕、言うことはないやろな」

「……先にも言ったが、私にとってはこのオラリオにいるすべての神が容疑者だ」

「そら覚えとる。けど、本当にあの腐れおっぱいがやったんなら、そもそも手がかりを残すようなヘマはせんやろ」

遺体どころか、その手に『極彩色の魔石』なんて手がかりを残すなど、フレイヤとその眷属の仕事にしては雑過ぎる。

「しかし、彼女はウラノスを庇った——」

「いや、それもちやうな。あいつはアレを庇ったんや。……いや、庇った訳やないだろうけど」

あいつの趣味はつくづく分からん。

いつか自分を殺しに来るかもしれない相手に、何でああまで肩入れしているのか。

「まー、あの腐れおっぱいもヘルメスと同じや。自分の道楽最優先ってな」

「それを言い出せば、私たちはみんなそうだろう」

ディオニュソスが苦笑する。

「そらそらやな」

元々はそのために降りてきている。

そういう意味では、ヘルメスは初志貫徹しているのだろう。

あるいは、フレイヤも。

「だいたい、あのドアホ。やり方が露骨過ぎたんや。あの腐れおっぱい、やれ言われたらやりたくなくなるひねくれ者やで」

「なるほど、君が言うと言説力がある」

「うっさいわ!!」

そう言つて笑うディオニュソスが怒鳴り返す。

「しかし、解せないな」

「何がや?」

何しろ、うちらが追いかけているものは今のところ解せないことばかりだ。

「ウラノスの思惑、もしくはは【イレギュラー正体不明】の価値だ。あの男は享樂的に見えて、万事において抜け目がない。それでもなおヘルメスではなく、【イレギュラー正体不明】……その名の通り、得体の知れない人間の方を重用する理由は何だ?」

「そら、いくつかは思いつくけどな」

もちろん、今のうちらが知っている限りの情報を元にしているだけだが。

「まずは、戦力。自分も知つとるやろ？ フィリア祭で暴れた『デーモン』について」

「ああ。話は聞いているよ。やはりあれも『極彩色の魔石』だったのかい？」

「いんや。アイズたんの話やと、はじめつから魔石はなかったらしい」

「……何だつて？」

「やから、あのデーモンいうんは魔石を持つとらん」

「……念のため確認するが、それは「劍姫」が砕いた訳ではないという意味かな？」

「そうや。端つからその胸に魔石はない。逆説的に、あれはうちらが知っているモンス

ターやないいうことや」

あれに比べれば、フレイヤが逃がした他のモンスターなど可愛いものだ。

「んで、これは実際に追い回されたうちの感想やけど。デーモンいうんは魂喰ソウルイーターらしい。簡

単に言えば、うちらを完全に殺せる」

「……【イレギュラー正体不明】と同じだと？」

「そーなるな。で、それを踏まえると自分の言うアレの『価値』いうのも見えてくる」

「……なるほど。毒を以て毒を制すということか」

今のところ、もつとも筋の通つた説明がそれだった。

ただ――

「もうちよい裏がありな気がするけどな」

フィリア祭で暴れたデーモンくらいだったらまだ手に負える。

アイズたん達が苦戦した理由として、武器がなかったというのは決して単なる言い訳ではない。

充分に装備が整っていれば——いや、それでも苦戦はしたかもしれんけど——あの時より被害は少なくなっていたはずだ。

「アレはそれこそ「ヘルメス・ファミリア」くらいやつたら一人で潰せる。……いや、あそこは食わせ物が揃つとるからちよい厄介かもしれないけど」

アイズたん達の話からして、ランクアップの申請をまともにしていないのは明らかだ。

団長の「ベルセウス万能者」以外にもLv. 4を隠し持っているかもしれない。

(ゆーか、その団長が最大の隠し玉やけどな)

稀代の魔道具アイテムメイカー作成者だ。

どんなえげつない道具を持ち出してくるか分からない。

(いかにもあの優男らしい派閥やな)

掴みどころがない。と、いうより実態を掴ませない。

そして、そのまま良いように振り回され、あるいは使い捨てられる。

（油断しているとうちの子たちでも背後からグサリ、いう事もあるかもしれん）

あいつと手を組んでしまったうちとディオニュソスも、他神事（ひとごと）ではないが。

とはいえ、それにも限度がある。

その奇襲が通じない状況に追いやられた時が、あの派閥の最後だろう。

それこそ二四階層でそうだったように。

「いや、そつちはともかく。何であれ、純粹に戦力だけ見ても申し分ないやろ。何しろ、

【イシユタル・ファミリア】とその取り巻きどもを独りで潰すような怪物やで」

「……改めて言われると、ヘルメスの言い分にも多少の共感を覚えるな」

流石に今すぐ下界からの追放をとまでは言わないが——と、ディオニュソス。

「言うまでもないけど、デーモンかてその辺の派閥にとっては同じや。いや、モンスターと同じく手当たり次第に暴れる分だけ、あっちの方が厄介かもしれん」

アレは条件さえ整えば交渉にも応じてくる。

どのあたりに琴線があるのかいまひとつ読み切れていないものの……それでも、デーモンと比較すれば、まだマシだった。

「ひとまず、デーモンへの対策として抱え込んでいる、いうのはそれなりに筋が通るやろ

？」

「……確かにね。私としては少し面白くない考察だが」

わずかに顔をしかめるディオニュソスに、胸中でうめく。

確かにこの結論では、ウラノスの行動はあくまでオラリオの安寧を考えてのものとなる。

必然、『極彩色の魔石』とウラノスが繋がっている可能性は低くなるだろうが――

(何かちよいとおかしいな)

どうにもウラノスへの不信……何らかの悪感情が先行しすぎているように思える。

眷属子の仇と疑うにしても、だ。

(これといって因縁がある言う話は聞いたことないんやけどなあ)

こう言つては何だが、「ディオニュソス・ファミリア」はまだ有象無象の域を脱し切つていない。

仮にもギルドの主神であるウラノスと直接的にやり取りを交わすことなど、よほどの事情でもない限りはまずありえなかった。

そう、例えば個神的な接点でもない限りは。

(いや、確かに天界でも領土は近いっちゃ近いんやっただけ?)

ドチビや優男と近いなら、必然あのクソジジイとも近いはずだ。

なら、何かあつたのかもしれない。

それに巻き込まれているとするなら、とんだとばつちりだが。

「いずれにしても、厄介なことをしてくれた」

ディオニユソスのうめき声で、ひとまず考え事を打ち切る。

「ヘルメスか？」

「ああ。そうだ」

今の時点では、あの優男の方が厄介だ。

「ヘルメスの都合で【正体不明^{イレギュラー}】と戦わされてはかなわない」

「ま、そらそらやな」

完全なる神殺しを可能とするなら、野放しにはできない。

いずれその日が来る可能性があることくらいは覚悟している。

だが、今の時点で、あの優男の言い分を口実にしてフィンたちを戦わせる——と、いう気には流石になれなかった。

（確実に死人が出るからな）

ヘルメスが口にした作戦は、悪くないとは思う。だが、まったく無傷で勝てるわけではない。

うちらにも戦死者が出る可能性の方が圧倒的に高いだろう。

だからこそ、仕掛けるなら相応の覚悟と大義が必要だった。

「あの優男かて、そんなくらいは分かつとるやろ」

「どうか。奴はやるなと言われるとやらすにはいられないタイプだと思うが」
「あゝ……」

否定する言葉がまったく思いつかない。

あるいは、あの腐れおっぱいはそこまで見越していたのか。

(だとしたら、かなりヤバいな)

あの女神おんなは本気ということになる。

今企んでいる何かを邪魔するなら、本気で叩き潰すつもりなのだろう。

それこそ、うちらもろともに。

ただでさえイヴィルス闇派閥だの『エニユオ』だの怪人クリーチャーだのと厄介なことを抱え込んでいるとい

うのに、あの女神おんなの相手までしていられない。

まして、とばつちりでそんな目にあつたら、いくら温厚なうちでも流石にブチ切れる。

「ロキ。ここではつきりと言っておく」

表情を改めて、ディオニュソスが言った。

「以前にも言った通り、私は君の信頼が欲しい。逆に君のことも信頼したいと思つてい
る」

神など誰も彼も食わせ物だ。

特に下界では誰もが遊戯ゲームの対戦相手。たやすく信頼などできない。

しかし、それでも。今、この時。目の前の男神からは誠実さを感じた。

だからこそ――

「だが、ヘルメスは別だ。あれの背後にはウラノスがいる。私は信頼どころか信用もしない」

……この頑なさにはやはり違和感を覚えずにいられない。

とはいえ、今の時点では決して過剰とも言い難いのも確かだ。

ウラノスが疑わしいのは事実。何か重要な情報を独占しているのは確かなのだから。

まだ判じきれない。情報が足りない。

「いずれにしても、あれが突かないでいい藪を突いて『蛇』を出した時に備えておくべきではないかと思うのだが、どうだろうか？」

「そら全面的に同意するわ。【イレキユラー正体不明】は本気でその名の通りやからな。不用意に突い

たら火傷やすまん。まずはアレの情報を精査しとかなとな。ゆーても、今はフィンやりヴェリアどころかラウルもおらんから、あんま大したことができんけど」

うちが自分で動いたら逆効果だった。流星にそれは認めざるを得ない。

「ならば、ここは私が受け持つべきかな。先ほども言ったが、私たちはこれといった接点がない。君が関わるよりはいくらか安全だろう」

「やめとき。フィルヴィスたんが『傷物』にされるで。あの子、絶対に押しに弱いタイプ

やろし」

派閥内では控えめな方のレフィーヤにすら押し切られるくらいだし。

「……いや、別に馬鹿にするわけではないのだが」

少し躊躇つてから、ディオニュソスが言った。

「私が思うに、レフィーヤ・ウイリデイスが控えめなのではなく、他の眷属子の我が強すぎるだけなのではないかな？」

フィルヴィスの話を聞く限り、むしろなかなか積極的なタイプだと思えないのだが——と、ディオニュソスが付け足す。

「……あかん。返す言葉が思いつかん」

何というか、心当たりが多すぎた。

6

拠点としている館は『ダイダロス通り』にあるだけあって、至る所に妙な細工が施されている。

アイシャが言うところの『調教室』とやらに、万が一の時のために色々と貯め込んである『金庫』。

そして、今いる『祭祀場』も、全ては隠し部屋として存在している。

……もつとも、『祭祀場』と呼ぶのはいくら何でも大げさすぎると、自分でも思っているが。

何しろ、広い部屋の中心に篝火が一つ灯っているだけなのだから。

「とりあえず、『火』はこれで分けられたはずだが……」

久方ぶりに服を着こんだ——と、言ってもいつもの薄着だが——アイシャに告げる。

いや、ベルにも分け与えているのだ。それ自体には何の不安もない。

ただ——

「体の調子はどうだ？」

かなり不自然な状態にある『神の恩恵』^{ファールナ}へどんな影響を及ぼすか。

懸念はその一点だった。

何しろ、呪術は「ステイタス」に項目を追加するほどなのだから。

「問題ないね。まだ「ステイタス」は機能しているよ」

「それならよかった」

相変わらずの美麗な体捌きを見せるアイシャに、ホツと胸を撫でおろす。

「ふうん。やつぱり熱くはないね」

右手に灯した《呪術の火》に、左手をかざしながら彼女が呟く。

「ああ。揮発性が極めて高い、特殊な油にでも触らない限りは火傷もしない」

と、いうか。あの油はいったい何をどうすれば精製できるのか。

普段は陽炎と大差ない《呪術の火》を火種にできる原理が未だによく分からない。

「で、これが呪術か。あんたが四年前から使ってたやつだね」

元々魔法を発現していたからだろう。

特に教えるまでもなく【発火】を使いこなしながら、アイシャが呟いた。

「結構な威力じゃないか」

確かに。まだ『火』を育てていないにも関わらず、ベルより威力がありそうだった。

……いや、今のベルがどの程度の威力で使えるかは定かではないが。

「いいか。呪術師の心得だけは忘れないでくれよう？」

「『火を畏れろ』かい？ 火遊び好きのあんたに言われてもねえ……」

いや、確かにそれはもはや否定できることではないが。

「頼むからこれだけは真面目に聞いてくれ。本当に」

「分かってるよ。空中庭園であんたが派手にぶちかましているを見たからね」

あれはある意味において呪術の原型。あるいは、原光景の一つ。

魔女イザリスすら飲み込んだ『混沌の炎』の再現だった。

「それに加えて、最も基礎でもこの威力だ。甘く見るほど能天気じゃないつもりだよ」

真つ直ぐにこちらを見据えて、アイシャが言う。

「ああ、そうしてくれ。畏れを忘れれば、その火はたやすくお前を飲み込むだろう。そんなことになったら後悔してもしきれない」

「安心しな。私も焼け死ぬのはごめんさ」

アイシャが力強くうなづくのを見届けてから、俺もまた頷き返す。

「さて。それじゃあ、最初の呪術を伝えようか」

ソウルの中から、今まで手に入れてきた呪術書を取り出しながら告げる。

「お前なら、それなりの呪術でも修められるだろう。……何か、こういうものが欲しいっていう希望はあるか？」

「そうだねえ……」

ほっそりとした顎先を撫でてから、彼女が言う。

「とにかく、力不足を補いたいね。そりゃLv. 4に指先が届いてる手ごたえはあるけど、それだけじゃこれから先は足りないんだろう？」

「……まあ、心許ないな」

正直なところ、本物のデーモンが出てくるならシャクテイ^{v.}5やリヴェリア^{v.}6でもまだ足りない。いや、オツタル^{v.}7であつてもまだ心許ない。

（あいつは、もう一皮剥ければ、な……）

その場合、流石に少しばかり厄介なことになるだろうが。

……まあ、オラリオ最強というのはあながち単なる肩書ではないという事だ。

「力の底上げとなると、『内なる大力』か」

文字通りに身体能力を強化する呪術だ。

「へえ。春姫の魔法みたいなものかい？」

「いや、そこまで規格外じゃない」

話を聞く限りでも分かるほど、あの少女の魔法は規格外だった。

「お前たちの言う『L.V.の壁』とやらを越えられるかどうかは保証しかねるな」

何しろ、そちらの具合はまるで分らないからな——と、肩をすくめてか、続ける。

「もつとも、何であれ重ねがけすればその限りじゃないだろう。だが、お勧めはしない」

「何でさ？」

「体への反動があるからだよ。俺でも二分と持たない」

「持たない？」

「ああ、体が崩壊する。簡単に言えば、命を対価に力を買うようなものだ。これが禁術とも言われる所以だな」

命がけでやれば『L.V.の壁』とやらを越えられるかもしれない禁術。

一方で、あの春姫という少女の魔法は特別な代償もなしに一ランク上昇させる。

もちろん、相応に消耗するそうだが……それとて、普通の魔法の範疇を大きく超える

ものではないらしい。

「……もう、思い知っているつもりだったけど」

アイシャが大きく嘆息した。

「あのヘツポコ狐の魔法は、つくづくあれだね。神どもじゃないけど、『壊れてる』としか言いようがない」

「そうだな。実際とんでもない」

神罰同盟の連中が目の色を変えて追い求める訳だ。

正直、ガネーシャに預けたことすら不安な程だった。

……あの男すら魅了するのなら、いよいよオラリオ中の神と一戦交える事になるだろう。

誰も彼もが彼女の力を欲するのだと証明されるのだから。

（と、いつても。俺にはおそらく関係ない魔法なんだがな……）

階位昇華魔法。つまり、『神の恩恵』の力を強化する魔法だ。

逆に言えば、それを宿していない俺には毒にも薬にもならないと見ていい。

もし『ソウルの業』に影響するとして……それでも、深奥に至ったといわれる俺のソウルを強化できるかどうか。

できるとすれば、それこそ本当に『壊れている』と言えよう。

「他には？ 似たような魔法……呪術はないのかい？」

と、そちらはともかく。

「他だと、『カーサスの烽火』が似ているが……」

こちらはこちらで癖が強い。

「こいつは、攻撃を連続させるほど威力が上がる。【内なる大力】と違い、魔力……精神力マインド消費以外の体への反動もない。ただ、効果時間が三〇秒で固定だ。その間にどれだけ連撃が繰り出せるかどうかだな」

もう一つ欠点を挙げるなら、魔力の消耗もこちらの方が大きい。

「敏捷が高くないと意味がないってことか……」

「ああ。それと持久力だな」

「そつちは誰かさんのおかげでそこそこ自信があるよ」

……それはまあ、生者と不死人の違いというか何というか。

いや、それはともかく。

「とはいえ、私の得物とはちよつと相性が悪そうだね」

大曲剣というべきか特大剣というべきか。いずれにせよ、一撃の重さを重視した武器だ。

相性を考えるなら、やはり【内なる大力】の方が向いていると言えよう。

「そうだな。この呪術を使うなら軽量武器で、というのが定石だ」

例えばもう少し成長したベルが使えば、恐ろしく凶悪なものになりそうな気がする。次の機会があるなら、これを伝授してやるのもいいかもしれない。

「仕方ないね。なら、その「内なる大力」ってやつにしとくよ」

「そうか。……くれぐれも扱いに気をつけろよ。使い方を誤れば、本当に死ぬぞ」

最も無茶な使い方をした時は、二〇秒が限度だった。

あと一〇秒も継続していたなら確実に息絶えていただろう。

それでも果たしてアイシャ達の言う『ランクアップ』に匹敵するほどの強化だったかどうか。

仮にそれに届いたとして、割に合っているのかどうなのかも分からない。

「早速伝授しよう。そこに座って楽にしてくれ」

持ち込んだ敷布を指さすと、アイシャはそのうえで胡坐をかいた。

胸元——鎖骨の間隙より少し下あたりに指先を触れさせ、猛々しく獰猛な炎の憧憬——

——自分すらも焼き払う凶悪な炎熱を思い描く。

「くう……」

小さく、アイシャが喘いだ。

火を畏れる。それが呪術師だ。

だが、この呪術は、力の代償としてその恐れすらも受け入れる。そして、受け入れたならそれはもう畏れではない。

だからこそ、これは禁術と呼ばれるのだろう。

「よし、これでいい」

継承は完了した。

「ああ、なるほど。確かに使えるね。その手ごたえがある」

魔法が発現した時に似ているけど、変な気分だね——と、アイシャが小さく呟いた。

（確かに奇妙な感触だよな）

初めて自分が呪術を継いだ時のことを思い出す。

別に呪術に限らないのだろうが、『感覚』が一つ増えるというのは奇妙なものだ。

「少し試してみよう。そいつは特にぶつつけ本番で使うのは危険だから」

篝火にあたり、魔力を回復——と、言ってもそもそも消耗していないが——さらに念を入れて、回復薬の類が揃っているか確認する。

（あとは、【ぬくもりの火】だな。いや、これは危険だと判断してからでいいか）

どこまで維持できるか。その限界を把握しておくのもこの呪術を使う上では重要だ。

回復効果を一定時間持続させるこの呪術を併用しては、それを把握できない。

「やれやれ、ずいぶんと大げさじゃないかい？」

「そうでもないさ」

何しろ、一度や二度は死んでも平気な俺達とは違うのだ。
念には念を入れておくべきだろう。

……

「炎の憧憬を思い浮かべろ。今なら、意味が分かるはずだ」

クオンの言葉に従い、右手に《呪術の火》を灯し、『炎』を思い浮かべる。

魔法を行使する——詠唱中の精神によく似た状態へと至っているのを自覚していた。

右手に灯る『火』と、つい先ほど受け取った『熱』がその力を發揮しているのだろう。

（炎、か……）

荒々しく、猛々しい力の象徴。

この血を昂らせる何かか。

もしくは……そう、闇を彷徨う者にとっての寄る辺。

（ああ、そいつは——）

視界の片隅で、奇妙な火——篝火とやらが小さく揺らぐ。

それを背にして立つ黒衣の男——

——

右手の『火』が燃え上がった。

そこに宿る炎熱を、自分の胸へと押し当てる。

「——ッ!?!」

体が燃え上がる——と、そう錯覚するほどの熱が体を包んだ。

いや、実際に血のように赤い陽炎のようなものが体から立ち上っている。

「よし、無事に発動したらしいな」

「だろうね」

体が、熱い。

血が、滾る。

「少し動いてみるか?」

「当然だろうッ!」

とても堪えきれない——ッ!

地面を蹴り、一気に間合いを詰める。

力が増している今、相応に早さも上がっている。

能力に補正をかける『スキル』があるが、それを任意に発動させているようなものだろう。

効果のほどは……体感で言えば、充分に高域補正と言っている。

「やっぱ素手じゃ分が悪いか……ッ!」

「泣き言は聞かないよー！」

それなりに長い付き合いだ。

こいつに勝つ方法の一つくらいは分かっている。

（素手での喧嘩なら、私の方が一枚上だからね！）

確かに身体能力では負ける。だが、経験なら私の方が優っている。

もちろん、圧倒できるわけではないが――

「う、お……ッ!？」

――攻撃手段を素手だけに限定できる今なら、こうして付け入る隙も見えてくる。

その隙を狙って拳を、あるいは蹴りを放つ。

「このッ!？」

ついに十八番の『受け流し』が仕掛けられる。

だが、

「甘いねっ!」

来ると分かっているなら、引つかかってやるつもりはない。

相手の苦手とする間合い。そして、身体機能が上がっている今ならそれも可能だ。

「――ッ?!」

交差した腕を逆に絡めとる。

だが、流石にクオンのの方が早い。完全に捕らえるより先に、後ろに飛び退かれた。
(まだいける！)

呼吸はまだ続く。

なるほど、確かに持久力も高まっている――

(わけじゃないか……ッ！)

これは、強引に回復させているだけだ。

そのおかげで持久力が高まったように感じているに過ぎない。

そして、

(確かに、これは……ッ！)

キツイ。確実に体が蝕まれている。

「そろそろ実感してきた頃だろうか？」

クオンの言葉に舌打ちしていた。

まだ三〇秒ほどだというのに、体への反動は無視できなくなっている。

(冗談じゃないね……ッ！)

急速な勢いで、体が軋みを上げていく。

一撃ごとに自分の体を切り刻んでいるような錯覚すら覚えるほどだ。

「割に合わないんじゃないかい……ッ？」

口の中に溢れてきた血を吐き出すついでに毒づく。

「そいつはどうか。あの子の魔法がでたらめなだけって気もする」
まいった。つくづくとんでもない。

ついに自壊し始めた体を自覚して、改めて呻いた。

「そろそろ打ち止めにしてあげ」

「そうするよ……」

呪術の持続を打ち切る。

「くう……ッ！」

赤い陽炎が消えると同時、体が不満の声を上げた。

五〇秒経たずして、半死半生といった有様だ。

「

クオンが右手をかざし、聞き取れない言語で何かの物語を口ずさむ。

回復魔法——いや、クオンは奇跡と呼んでいたか。

ともあれ、黄金の輝きに包まれると同時、傷が癒えていく。

「だから言ったろ？ 重ねがけはお勧めしないって」

「ああ、よく分かったよ」

「こんなのを重ねがけしたら、本当に体がもたない。」

ああ、まったく。

「あのヘツポコ狐、つくづくとんでもない魔法を発現させたもんだ」

これ以上の効果を、何の代償もなくやってのけるとは。

「三〇秒だ。それを限度としておけ」

妥当な基準だろう。

確かに体の自壊を明確に感じたのは、おおよそそれくらいの間からだった。

「そうしておいた方が無難だね、こりゃ……」

ぐったりと頷く。

「どうする？ 別の呪術にするか？」

「そういや、書き換えられるんだっけ？」

これが魔法と呪術の最大の違いだった。

魔法は一人三つ。しかも、個々人に依存する……いわば『一点物』だ。

だが、呪術は代々受け継がれる代物で、必要なら書き換えることすら可能となるらしい。

「便利なもんだね」

「そうかもな」

そもそも基盤となっている『力』——『神ファールナの恩恵』と『ソウルの業』からして、似て

異なる代物だという。

ならば、この程度の差異はあって当然なのかもしれない。

「別に呪術にこだわる必要もないだろう？」

「そりやそうだけどね」

他に魔術やら奇跡やら……どうやら、その二つも魔法とは別物らしい。

「けど、そつちは『ステイタス』の問題が出てくるんだろう？」

「まあな。お前たちの場合、一括で『魔力』扱いされていそうだが……」

クオン——いや、『ソウルの業』の場合、理力と信仰に区分けされるらしい。

魔術には理力、奇跡には信仰が必要だとも。

（その『信仰』ってのは、別に神に対するものでなくてもいいらしいけど）

……少なくとも、クオンは『別のもの』を信じているらしい。

本人は『炎への憧憬』——呪術の基礎の応用だと言っているが。

「分からないものは仕方ない。覚えて使えないなんて馬鹿な事態に陥っても笑えないしね」

何であれ、実際に使えているんだから、可能なのだろうか……その真似を私ができるかどうかはまた別の問題だ。

ここはほぼ確実に使える呪術に絞り込むべきだろう。

「攻撃への補正がかかる『スキル』があるって話は聞いているけど……まあ、相手を選ばないのがこの呪術の強みかね」

「そうだな。その代わり持続させるには苦勞するが……。ああ、そうだ」

そう言つて、クオンは何かを取り出した。

「これをやる。少しはマシになるだろう」

掌には指輪が一つ乗っていた。

こいつの持つている指輪は冒険者用装身具マジックアイテムというより、魔道具に近いわけだけど

……。

「それは？」

「《再生の指輪》だ。身に着けている間は、ごく僅かだが傷が癒えていく。気休め程度の効果だが……まあ、ないよりはマシだろう」

「そりゃいいね」

どの程度回復するかは分からないが、この呪術を使うならあつて損はないだろう。で、その指輪。どの指にはめてくれるんだい？」

笑いながら、左手の薬指以外を曲げて差し出してやる。

もちろん、冗談だったわけだけど――

「ほらよ」

私が指を引っ込めりより早く、クオンはあっさりとその指にその指輪をはめて見せた。

……失敗だった。

こいつの場合、これが本気か、冗談か、天然かを悩む以前の問題……根本的に意味を知らない、もしくは本当に意味を完全に忘れているという事態があり得る。

基本的には世慣れているせいではしばしば忘れるが……こいつは遙か大昔、『火の時代』とやらの生まれなのだ。

必ずしもオラリオの——今の時代の習慣を知っているわけではない。

「……どうかしたか？」

とぼけたその面からは、本心を読み解く事はできなかつた。

「いいや、別に」

どうせ囲われ情婦おんなだし。

そもそもアマゾネスだし。

元より、まっとうに嫁ぐなんて事は想定していない。

……ただ、それでも——

「どうする？　もう少し試してみるか？」

何事もなかつたかのように平然としているクオンを見据えて、小さく呟く。

ひとまず、だが。

何であれ、冗談のネタ晴らしには、少しばかり時間がかかりすぎなのは確かだった。
なので――

(外れを引いたら覚えておきな)

その時は、とりあえずその面に拳をぶち込んでやるとしよう。

7

アイシヤに呪術を継承した翌日。

「そうそう、あの子の二つ名が決まったわよ」

三人で少し遅めの朝食を突いていると、仕事帰りの霞が言った。

「ベルのか?」

「ええ。【未完の少年】^{リトル・ルークィー}ですって。お客さんが言ってたわ」

ランクアップの最短記録を大幅に書き換えた世界最速兎^{レコードホルダー}として、ベルは今、オラリオ中の話題を搔つ攫っているらしい。

「ほう……」

割と無難な名前だった。少なくとも、俺はそう思う。

(子どもの命名感覚は今一つ理解が及ばないんだよな)

……いや、俺達も大概いい加減な名づけ方をしているが。

（何しろ、大体は持ってた奴の名前をそのまま使ってるだけだしな）

諸々の武具や防具を思い浮かべ、小さく嘆息した。

とはいえ、自分の名前すら忘れかねないような——そもそも、今名乗っている名前が本当に本名なのかどうかすら断言はできない——有様なのだから、それも止む無しだ
が。

「そーいや、デナトゥス神会は昨日だったね」

ミニトマトにフォークを刺しながら、アイシヤが呟く。

「つてことは、私達の沙汰も決まったつてことか」

「どうかしら。少なくともギルドには何の告知もなかったけど……」

「下手すりゃ水車小屋の脇にでも吊るされることになりそうだけどね」

絞首台は水車小屋の傍に。どうやら、この『時代』にもかつてそういう慣習があったらしい。

魔石製品が普及し、水車小屋の価値が激減した今のオラリオでも形式として残るほどには。

……まあ、流石にその周辺は関係者以外立ち入り禁止……つまり、娯楽の一部公開処刑ではなく
なつたようだが。

正直、この『時代』の神が娯楽を手放すとは驚きだった。と、それはともかく。

「馬鹿言え。ウラノスがどう出ようが、お前たちだけは生き残らせる」

最悪の場合は、それこそアン・デイルを頼るつもりだった。

フェルズたちの話からして、ダンジョンの中に第二のドラングレイグ——いや、今は何と呼ばれているか定かではないが——を『建国』している。

異端児^{ゼノス}たちが生きていけるなら、霞とアイシャでも生きていける環境が整っていると考えていいだろう。

(ま、ウラノスが今の状況で殺しに来るとも思えないがな)

今までで一番派手に暴れたのは確かだ。

何より、春姫という『切り札』の存在も示唆している。

だが——

(それでデーモンを迎え撃てると思っっているなら、ここまでだな)

例えばオツタルをLv. 8にしたところで、果たして本物のデーモン——フィリア祭やりヴィラの街で暴れた未熟な個体ではないデーモンを相手にできるかどうか。

(まあ、一度や二度は勝てるかもしれないが……)

だが、連中の新しい『飼い主』を見つけ出して仕留められるかどうか。

何しろ、奴は生者だ。ならば、挑める機会は一度だけ。

仮に、「ロキ・ファミリア」も巻き込むというなら——やはり、結論は変わらない。

あの春姫なる少女を生贄にするなら、ウラノスだろうがガネーシャだろうが殺す。

例えその結果、オラリオが混乱の渦中に沈もうとも、だ。

……どのみち、ウラノスとの関係が破綻すれば、あとは遅いか早いかの問題でしかないのだ。

イシユタルの時と同じく、『人助け』という名目は多少の気休めにはなってくれるだろう。

（いや、アン・デイルも喜ぶかもしれないな）

そして、世界のどこかにいるはずのあの男が再び姿を現すかもしれない。

……あるいは、黒教会も。

（奴らが『神なき時代』を想定していないはずがない）

どこまで異端児に肩入れしているかにもよるが……ほぼ間違いなく、アン・デイルは想定している。

オラリオの崩壊は冒険者社会——ひいては『神時代』の崩壊とほぼ同義だ。

それは異端児が地上で勢力を伸ばすにはこの上ない好機となるのは疑いない。

あの狂人がまだ俺に利用価値を見出しているなら、交渉の余地は残されている。

「問題は糸目の小僧どもが先走った時だ。あいつらが出張つてくると色々と面倒だ」
「そりやそうだろうね。何しろ都市最大派閥だ」

確かに、今更になつて数を軽視するような愚行は侵さないが——それでも、人員はそこまで問題にはならない。……少なくとも、四年前の手ごたえから考えれば。

「本当に鬱陶しいのは首魁の二人、金髪の小人と糸目の小僧そのものだ。あの扇動家どもがその気になれば、集まつてくる人数は神罰同盟とやらの比じゃない」

ついでに言えばどちらも策士だ。

基本的な対処法は変わらないにしても、その難易度は遥かに高まる。

「フレイヤ・ファミリア」はどうなの？」

「あいつらの基準はよく分からないな。あの女が号令を出さない限りは動かないだろうが……」

つまり、完全に神の気まぐれに左右される。

そんなもの、いくら何でも読み切れる訳もない。

「まあ、小人どもが遠征に行つてゐる間は、これといった動きはないだろう」

あの女とオツタルだけならまだ対処できる。

多少手こずるかもしれないが、小人どもが帰つてくる前に対処できればそれでいい。

小人どもはそのあとで相手にすればいいだけの話だ。こちらも、多少手こずるくらい

で済む。

今この時に双壁が崩ればオラリオは混乱するだろうが……まあ、その辺はウラノスとガネーシャがどうにかするか。もし、その算段がないな全力でこの二派閥を止めるはずだ。

（何しろ、共犯者だからな）

異端児たちの存在を隠蔽し、援助すらしているウラノス。

そして、神々にとつての——いや、この『神時代』とやらの天敵である俺。

オラリオ……いや、人間への背信はお互い様だ。

互いに利用価値がある間は、このまま仲良くやっていけるだろう。

……

デナトゥス
神会の翌日。

「エニユオ、か……」

ガネーシャの神室にて情報を交換する。

「うむ！ 組織名についてはウラノスからの情報だが、闇派閥残党や、例の『新種』、さらにハシャーナの仇はこの勢力の者と見てよさそうだ。例の大発生にも関わっているらしい！」

「気になることはいくらでもあるが……」

どこから質問していくべきか。

しばらく迷って、まず最も初歩的などころから問うことに決めた。

「まず、それは組織名なのか？ 敵は「エニユオ・ファミリア」だと？」

「いいや、「ファミリア」とは言い難い!! エニユオという神は天界には存在しなからな
い。」

「となると、架空の神か。あるいは、別の何かを意味するのかわ？」

「うむ！ エニユオとは、俺達の言葉で『都市の破壊者』を意味する！」

「……それはまた、いつになく分かりやすいな」

オラリオ
都市の破壊者といったところか。

なるほど、この上なく明確な宣戦布告だった。

「デーモン達の『飼い主』もこの勢力なのか？」

「それに関しては、まだ分からん!! クオンと接触できないからなっ！」

それはそうか。

(まったく、あいつめ……)

一体どこに雲隠れしたのか。

いや、霞なら知っているだろうが、彼女も彼女でなかなか抜け目がない。

四年前、試しに尾行させた事があるが、その時も早々に巻かれてしまった。

そのあとできつちりクオンから苦情も届いている。

今この時に同じことをすれば、今度は冗談では済まないだろう。

（まあ、この街で完全に足跡を消そうと思つたら、『ダイダロス通り』が最有力だろうがな）

霞は元々この区画で生まれ育っている。

そこに加えて、地上の迷宮の名は伊達ではないのだ。中に入られたら、私でも追いきれまい。

「神ロキはカインハーストの名を口にしなかったのだな？」

「うむ！ そちらは、下手をするとまだ【九魔姫】^{ナイン・ヘル}から情報が上がっていない可能性もある！」

可能性としては半々——より、少し偏っている程度か。

彼女にとつても扱いに困る存在なのは間違いないのだから。

「しかし、エニユオというのが神ではないとするなら、彼女達が参加している可能性もあるか……」

一週間ほど前に遭遇した女エルフを思い浮かべる。

彼女についても捜査はあまり進んでいない。何しろ、事は繊細な問題を含んでいるのだ。

下手に突いてエルフ達が暴走し始めては目も当てられない。

「カインハーストに関しては正直、【九魔姫】^{ナイン・ヘル}の声明が欲しいところなんだがな」
 出奔したとはいえ王族^{ハイエルフ}だ。

彼女の賛同を得られるのであれば、政治的な問題はいくらか封殺できる。
 少なくとも、オラリオにいるエルフ達の協力は得られるだろう。

「うむ。彼女に関しては、今は遠征から戻ってくるのを待つしかない！」

「五九階層か。私たちにとってはまだ未到達階層だが……」

最寄りの安全階層^{セーフティポイント}である五〇階層まででも一週間以上かかる。

その辺りは「ロキ・ファミリア」と言えどそう大きくは変わらないだろう。

差があっても精々数日といったところか。

（と、なればまだ向かっている途中か）

地上に帰還してくるのは、早くて来週以降。

何より、未到達階層に挑む以上、【九魔姫】^{ナイン・ヘル}が斃れる可能性も皆無ではない。
 （気を揉んでも仕方がないか）

精々、彼女達の武運長久を祈るくらいしかできる事はない。

今の状況では、カインハーストに関しては後回しにするしかなさそうだ。

「『アンデッド』……例の『暗い穴』に関しては？」

そちらに關しても、【九魔姫】^{ナイン・ヘル}は知っている。

「それについても同じだ！ それに、俺にもウラノスから黙っているように指示があった！ こちらも扱いが難しいからな！ ガネーシャ同感!!」

それもそうか。

春姫……例の『生贄の少女』の魔法と同じようなものだ。

いや、その代償さえ考えないならより魅力的なのかもしれない。

「当面は、俺達だけで調査するしかない！ だが!!」

「分かっている。人選には慎重を期す」

何であれ冒険者にとっては『甘い劇毒』のような代物だ。

迂闊に担当させて、木乃伊取りが木乃伊になつては元も子もない。

同じ危険性を神ロキが感じていないはずがない。ならば、黙っていたのも当然か。

「そして、ラキアか。……この忙しい時に」

ラキア侵攻。過去の例からすると、長ければ半月ほど時間を取られる事になりかねない。

い。

「そちらは仕方ない！ 何しろアレスだから!!」

『クロツゾの魔劍』がない今なら、そこまでの脅威にはならないとはいえ……。開戦はいつ頃になる見込みだ？」

「都市外との交易も盛んな商業系派閥の話を統括するに、おそらく二ヶ月後といったところだ！」

オラリオに到達する前にこちらから強襲でも仕掛けた方が早いのではないだろうか——と、思いはしたが……、

（ギルドの許可が出ないだろうな）

何しろ戦力の流出を嫌っている。

まあ、これについては致し方ない。何しろ、武力というのは外交において絶対不可欠の要素だ。

元より、巨万の富を抱くオラリオを狙う外部勢力は多い。例え一時でも戦力を落とせば、ここぞとばかりに攻め込んできかねない。

それに、出兵したとなると、他の周辺諸国から不必要に警戒され、外交的な軋轢を生み出すことにもなりかねない。

上級冒険者
私たちにはそれだけの影響力があるのだ。都市運営を担うギルドがその扱いに神経質になるのはむしろ当然だった。

「デーモンに『暗い穴』、エニユオ一派。それにカインハーストの暗躍か。……どれも二ヶ月で片付く問題ではないんだがな」

「まったくだ！」

俺が、最近過労気味のガネーシヤだ！——と、叫ぶ主神に、心の底から同意していた。あいつが戻ってきてからの二月ほど、深刻な事件ばかりが続いている。そして——

（神を気取るつもりではないが……まあ、その程度の未来なら私にも見える）
本番は、むしろこれからののだという事くらいは。

第二節 遠征。異常事態（イレギュラー）発生中

1

（なかなか剣を捨てられないな……）

生暖かさすら感じる血の香りを感じながら、小さく嘆息した。

遙か遠い昔。滅びゆく黄金の国で愛剣を手放してから幾星霜。

知らぬ間に迷い込んでいたこの世界でも戦いは続いた。

妙な異形どもに滅ぼされつつある世界で、数多の英雄たちを育て、まとめ世界の果てへと攻め入って。

平定まであと一步と言ったところで、焦燥にかられついに動き出した自らの末裔たちと敵対し。

末裔に唆された民に手酷い裏切りにあつて多くの戦友を失つて。

何とか落ち延びた戦友やその一族を引き連れ、末裔とその下僕どもの追撃を退けて。

そして、今はかつての仇敵——いや、それから派生したゼノスたちのために。

まったく、どんな因果なのやら。

「私の言葉がわかるな?」

見張りの喉をかき切ってから、救出対象の首輪を断ち切つてやる。

「あなたハ……」

「敵ではない。信じられないだろうが、ここで死にたくないのなら、どうか従つて欲しい」

言いながら、牢の鍵を開けてやる。

「傷は平気か？」

幸い暴れられることはなかった。

牢の中に踏み入り、可能な限り刺激しないよう静かに声をかける。

「え、ええ……」

その者が頷くのを見届けてから、はめられた枷を切断する。

かつての愛剣には及ばないまでも、それなりの業物だ。

この程度の真似はできる。

「あなたハ、人間なのデスか？」

「見ての通りさ」

人ではない。

人ではないが、もはや人間と関わっている時間の方が長くなりつつある。

「苦勞したな」

痛めつけられ、また汚されてもいるその体を静かに抱きしめる。

やはりこの姿人に恐怖を覚えるのだろう。しばらく体をこわばらせていたが……
背中をさすっているうちに体から力が抜け、小さな嗚咽が聞こえてきた。

まったく、愚かな事だ。

(いや、人ばかりを責められはしないか……)

おそらく、末裔たちも気づいていない。

この者たちが何者なのか。一体何故生まれたのか。

その誕生が何を意味するのか。

……もつとも、私たちとしてすべてを見通しているわけではないが。

(超越存在、か……。愚かな事だ)

在りし日の我らが王達ですら、全能でもなければ万能ですらなかつたというのに。

そして、今や火は潰えた。

ならば、我らもまた闇より生まれたただの一匹へと戻る時が来たのだろう。

「すまないな。そろそろ、ここを離れなくては」

「はい……」

いつまでもこうしてはいられない。

この者を連れだせば、いずれ騒ぎになる。

私一人なら物の数ではないが、傷ついたこの者を抱えていてはいつも通りには戦えない。
い。

「いたぞー！」

「逃がすな！」

地下牢から抜け出し、あと一步で脱出と言ったところで発見されてしまった。

どうにも運が悪い。舌打ちしながら、その者を抱えて外壁を飛び越える。

（流石に多いな……）

まあ、物の数ではないが。

予定された脱出経路に従って駆け抜ける。

合流地点まで駆け抜けければ、私の役目は終わりだ。

「あとは任せた。……すまない」

「ああ、心得ている。……よくやってくれた」

長年の戦友とすれ違う。

この男なら、あの程度の弱兵など何人いても問題ではない。

多少体は衰えたとはいえ、剣の冴えが曇ったわけではないのだから。

戦闘音はごく短い間に途絶えた。

ただ――

「ひいひいひいひい!?!」

船上から逃げ出した兵卒が、こちらに向かつてくる。

どうにも運が悪い。こちらに來なければ、死なずに済んだというのに。

「た、たすけ——」

悲鳴は、途中で途絶えた。

その哀れな兵卒は、左右に倒れていく。

「これで終わりだ」

「だろうな」

代わりに降り立った戦友に、肩をすくめて見せる。

本来、このような戦い——そう呼ぶ事もできない殺戮は、この男が好むものではない。

むしろ、その誇りを傷つけるだけだ。

何とか避けたかったが……最後の最後でドジを踏んでしまった。

私の勘が鈍ったのか、それとも『火』が潰えた結果なのか。

何であれ、嘆息せざるを得ない。

「あ、あの。あなたハ——」

それがごぼれ出るより少しだけ早く、救い出した彼女が小さく声を上げた。

この者が無事だったのが、せめてもの慰めになってくれればいい。

——と、思っていたのだが。

運命とやらは、まだ私達を弄ばねば気が済まないらしい。

これもまた因果応報ということか。人の運命を、散々に弄んできたが故の。

「クオンさんト、同じ剣技デスね……。お知合いなのデスか？」

思わず、顔を見合わせていた。

その名前にはどうしようもなく覚えがあつた。

加えて、我が戦友と同じ剣技を使えるとしたら——

（まさか、今再びこんなところでその名前を聞こうとはな）

どうやら、また『時代』が動こうとしているらしい。

今度は一体どんな事になるのやら。

（まったく、私たちが超越存在とは笑わせるな）

未来など見通せない。

私達とて所詮は運命とやらに翻弄される一匹でしかないのだから。

2

時は少しさかのぼり、デナトウス神会三日前。

とある少年が最初の冒険を成し遂げた翌日のことである。

(うくん……。予定よりちよつと遅れそうだね)

地上ではとつくに日が暮れてた頃、所謂『夕方』へと移り変わりつつある一八階層を見やり、胸中で呟いた。

ガレス率いる二班とは合流できたが、ベル・クラネルたちを地上に送っていつたりヴェリアとアイズは未だ戻ってこない。

もちろん、あの二人なら道中で何か異常事態イレギュラーが起こったところで乗り越えてくるだろうから、地上でのやり取りが難航しているのだろう。

それも仕方がない。何しろ、たった一ヶ月前にもミノタウロスが『上層』に出現している。その元凶である僕らが再びその報告に向かったのだ。ギルドからあらぬ疑いをかけられたとしても、仕方がないことだった。

まして、それを撃破したのがL.V. 1、しかも単独ソロで、となれば信じろという方に無理がある

と言わざるを得ない。

加えて言えば――

(確か彼の所属は「ヘステイア・ファミア」だったね)

つまり、主神は神ヘステイア――ロキが言うところの『ドチビ』ということになる。

その呼び方から分かるように、この二柱ふたりはあまり良好な関係とは言い難い。

あるいは、そちらでも揉めているかもしれない。

（……もつとも、神ヘステイアは神格者のようだし心配無用かな）

神ヘステイアと交流のある神ヘファイストス——の、眷属である椿の話からすると、神同土ロキの関係を、神と人の間リヴェリアに持ち込む手合いの神ではなさそうだ。

（とはいえ、もうこの時間だ。最悪、合流は明日の朝かな）

一八階層で足止めというのは想定外だったが、深刻な影響をもたらすようなものではない。

唯一の懸念は高騰しているテイオネたちの『士気』が下がることだが……今の様子なら、欲求不満で暴走し始めることを心配した方がよさそうだった。

と、なる——

（うん。ちようどいい機会だ）

一仕事できるかもしれない。

あまり期待できないが……うまくいけば、遠征の成功率を大きく高められるだろう。

「ガレス、少し留守にするよ。多分、リヴェリア達が追いつく前には帰ってこれると思うけど」

「うん？ まさかお主まで暴れだすのではないじやろうな？」

主力陣で唯一あの『冒険』を見ていないガレスは、合流してからずっとテイオネたち

の様子に首を傾げている。

「流石に僕がそれをやると收拾がつかなくなるなあ」

苦笑してから、野営地——と、言っても精々調理用の焚火くらいしかないが——を見回す。

幸い、探し人はすぐに見つかった。

「レフイーヤ。手伝ってほしい仕事があるんだ」

食材の入った籠を調理係に届けたところで、声をかける。

「は、はい！ ですが、まだリヴェリア様とアイズさんが……」

「いや、いいんだ。遠征とは直接関係ないからね。二人が合流する前に片付けておきたら」

もつとも、完全に無関係とも言い難い。

あるいは、今のオラリオに迫りつつある『何か』の真相。それに最も近い場所にいる一人かも知れないのだから。

「えっと、それで私は何をすれば……？」

「以前君も参加した二四階層における『モンスター的大量発生』の調査。それに加わった最後の一人と接触したい」

「は、はあ……。もちろん、私は顔を覚えてますけど……」

レフィーヤの反応は今一つ冴えない。

「向こうが覚えているかどうかは、ちよつと……」

……何というか。どこかで覚えのある光景だった。

ともあれ、彼女がいれば件の人物も探せる。

（ホークウッド、か……）

レフィーヤを連れてリヴィラの街に向かう途中、最後の一人の名前を胸中で呟く。

その人物についても、ある程度情報を集めている。

色々話を聞きたいというのものもあるけど……それ以前に、アイズやベート、レフィーヤ達が無事に生還できたのは、彼の助力あつてのことだ。

もつとも、互いに接点のない冒険者同士。その助力はあくまで取引によるものだ。

それはいい。むしろ当然の話だ。確かに結果論という側面もあるが……レフィーヤの判断は適切だったと言つていい。

唯一の問題は、その対価を充分に渡していないという事だ。

報酬を払う前に、彼は姿を消したという。

もちろん、無給ではない。道中で手にいれれば魔石やドロップアイテムのいくらかを持ち去っている。

だが、試算したところ、それだけでは当初の契約金には届いていないという。

(まあ、あれこれと探られるのを嫌がったんだらうけどね)

何しろ、その場所にはオラリオでも屈指の切れ者である【万能者】^{ベルセウス}までいた。

余裕を取り戻せばただでは返さなかつただろう。

それを見越し、崩落する食糧庫^{パントリー}からの脱出における混乱に乗じて、レフイーヤ達からも脱出したというところだろう。

それくらい真似は容易いはずだ。

何しろ――

(あの【正体不明】^{イレギュラー}を容易いと言つてのける相手とほぼ互角、か……)

たった一人で「ヘルメス・ファミア」の精鋭を半壊させ、アイズとベートの一太刀で下した男とほぼ互角に渡り合つたという。

それほどの実力者なら、混乱の中でアイズとベートの隙をついて離脱するくらいは造作もない。

だが、実力に反して聞き覚えのない名前だった。

今のオラリオにおいて、ほぼ無名ということだろう。

(……いや、それは違うか)

中小派閥――特に、第二級冒険者^{L.v.}以上がない、もしくはごく僅かな派閥の中ではそれなりに名が売れているようだ。

ただ、本人が所属する派閥は結局分らずじまいだった。

本人の話からすれば「エブラナ・ファミリア」らしいのだが……そもそもエブラナという神に心当たりが無い。それは僕だけではなくロキも同じだった。

それどころか、ギルドに問い合わせても該当なしとのことだ。

となると、

「あの、団長。無所属の冒険者って、本当にあり得るんですか？」

そういう事なのかもしれない。

「それはあり得るよ。例えば僕たちはロキから『神の恩恵』を授けられているわけだけど、だからといって必ずしも派閥に所属しなければならぬわけではないからね」

もちろん、派閥に所属するのが一般的ではあるが。

神は人に恩恵を与え、人はそれによって神を養う。派閥の最も基本的な構造はそれだ。

つまり、恩恵を与えてもその相手が養ってくれないなら神の方が損をしているという事になる。

ただ、そういう神がないわけではない。

それに――

「彼がやっていることは無所属のサポーターと同じようなものだからね」

例えば、無所属のサポーター。いわば所属する派閥が見つからない冒険者見習い。事情は色々あるだろうが……大雑把には概ね二つに分けられる。

日々の糧を得るため、頼み込んでとりあえず『恩恵』^{ファルナ}だけを授かる場合。

その場合は、所属する派閥が見つかったからそれまでの『代金』を支払うという形になる。

もう一つは『試用期間』だ。『恩恵』^{ファルナ}は与えられるが、書類の上では所属していない。どちらもギルドから見れば無所属となる。

「そういう事もあるんですね」

……問題はその『試用期間』がいつまで経っても終わらない事もある、という事だが。この辺りは同胞^{バルウム}がよく陥る事態なので、嫌でも知っている。

もつと言えば、運よく派閥に所属できても専門サポーターから脱却できない場合も多い。

「他に賞金稼ぎや旅人達と似たような方法をとっていることもある。そちらについては僕もあまり詳しいわけではないけどね」

ごく身近なところにそうやって旅をしてきた子たちがいるだけで。

あるいは、リヴェリアもいつかはそういう生活に戻るつもりなのだろう。

それこそ、傍らにいる少女が充分に育った頃には。

「ただ、彼の場合、ギルドにとっては悩みの種だろう。もちろん、把握していればの話だけど」

それもまた、単純にギルドの規則によるものだが。

ギルドが冒険者および迷宮の管理を担っているのは今更言うまでもないことが……冒険者の管理は原則として派閥単位となる。

確かに冒険者登録こそ個人で行っているが、その際にも派閥の記入は必須だ。

前述のような状態の場合のまま冒険者登録が可能だったか。さすがにその辺は覚えていない。

……ただ、少なくとも徴税に関しては大いに問題となるだろう。

言うまでもなく、ギルドへの税金もまた派閥単位で課せられている。

例え結成したばかりで眷属が一人しかいない派閥であっても同じだ。

先述のサポーター程度なら目を瞑るだろう。基本的に彼らが自分で魔石や迷宮資源を持ち帰ってくることはない。

いや、無所属のサポーターという名義でダンジョンに潜る冒険者もいるだろうが……彼らが挑めるのは『上層』のごく浅い部分だ。ギルドの収益にとってすれば微々たるものでしかない。

ただ、彼の場合は『下層』でも充分に戦える。つまり、莫大な価値を秘めた魔石や迷

宮資源を持ち帰ってこれるわけだ。ギルドにとつても、無視はできない。

(税率をどうやって算定するかだな。それと、どこに請求するか)

派閥の等級によつて税率は算定される。

そして、その等級を左右する要因には当然ながら団員のランクが含まれていた。

仮に眷属が一人しかない派閥でも、その眷属がLv. 2となれば等級は最低値のIからHへと格上げになるほど影響力を持った項目である。

等級とはその派閥の名声そのもの……信頼と実績の証だ。基本的に、高いに越した事はない。

だが、それを蹴つてまで、ランクアップの報告をしない派閥が存在する理由もここにある。

また、等級が上がると税金が高くなるばかりか定期的に遠征に赴かなくてはならなくなる。

厳密には遠征に限らないが……結果がどうであれ負担であることに変わりはない。

二重に——あるいは、その『成功』を妬む者たちの台頭を含めて三重に——課せられる負担を嫌がる派閥は決して少なくない。

だからこそ、仮に露見したところ——その結果罰則ペナルティを課せられても——ほとんど改善される事はなかった。

（オラリオにいたるLv. 2とLv. 3は、ギルドの公表より少し多いんじゃないかと睨んでるけど……）

あるいはLv. 4すらも。

もちろん、あくまで個人的な予想だが……それこそ「ヘルメス・ファミリア」という事例もある。

決してありえない話ではないはずだ。

「いずれにしてもその辺りはギルド側の問題だ。神との契約だけで見るなら充分に可能だよ」

もつとも、件の人物の場合、本当に神の恩恵を授かっているのかという疑問すらあるが。

と、それはともかく。

（『落穂拾い』か……）

件の人物は、巷ではそう呼ばれているらしい。

正式な二つ名ではなさそうだ。アイズの『戦姫』ないし『人形姫』、クオンの『灰色の悪夢』と同じく通り名なのだろう。

正式な二つ名は不明。そもそも存在しているかどうか。

レフィーヤ達の話からするとLv. 3らしいが……これはどうにも信じがたい。

(話を聞くだけでもLv. 3の戦闘能力じゃないのは明らかだからね)

そもそも本当に『冒険者』なのかどうなのかも不明だ。

……実際のところかの人物は『冒険者』というよりは『傭兵』に近い。

積極的にダンジョン探索を行うのではなく、手頃な冒険者を捕まえては臨時パーティを組み、その対価を経ているようだ。

商売相手は主に中小派閥。『中層』を探索するパーティとなる。

本人の到達階層もあまりはつきりしないが、同じくレフイーヤ達の話から推測するに二七階層辺り——つまり『下層』の上層部までといったところだろう。

(完全に生活のために冒険者をやっている手合いだね)

もちろん、手頃な階層で資金集めをすることを忌避するものではない。金策が必要な時というのは必ずある。『冒険』をするには元手も必要なのだ。

ただ、彼の行動はまさに冒険する気のない冒険者といったところだった。

到達階層を増やすでもなく、未知を求めるでもない。そして、おそらくは遠征の義務も負っていない。その気になればもつと深い階層まで足を運べるだろうにそれすらしない。

安全な階層で、手堅く日々の糧を稼いでいるだけ。

(それでついた通り名が『落穂拾い』か)

冒険者の取りこぼしたものを拾い集めるだけだから『落穂拾い』。

そういう事らしい。

（なるほど、ベートが嫌うわけだね）

達観した上に陰気。罵られても意に介さない。しかし、実際にはL.V. 詐欺を疑うほどの実力者。

レフィーヤの話を統括すれば、そういう人物像が浮かび上がる。

まずもって彼との相性は最悪だと言えよう。

（それを思えば、今この時に……っていうのは下策かな）

もつとも、今回の遠征はこれまでとは意味合いが違う。

オラリオに迫る脅威を知るためにも、成功させなくてはならない。

それを思えば、可能な限りの手を打つべきだろう。

「さあてお立合い！ 今日も懲りずに未知に挑んだ勇敢な冒険者どもにパッチ商会からの大感謝！ 今なら出血奉仕の特別価格。三割引きでの大安売りだ!!」

詐欺だの高すぎるだの、嫌なら買うなだのと罵声が飛び交う中に、景気のいい——そして、勢い任せのたためな——うたい文句が響き渡る。

確かに三割引きになっていようだし、大安売りと言っているいいだろう。

……リヴィラの街を基準とするなら、だが。

例えばポジションは、地上でなら同じ値段で三本は買える。

それでもゾロゾロを冒険者たちが群がっていくのだから、他の店の暴利が分かるというものだ。

殺人事件の陰りも、ワイオラス食人花の襲撃の痕跡もすでになく、今日もリヴィラの街は相変わらずのようだった。

「あ、あの酒場です」

その強かさに苦笑しながら雑踏を進むと、レフイーヤが一軒の建物を指さした。

「ボールスさんの話だと、あそこで客引きをしてるそうです」

ここから地上に戻る冒険者を待っている、ということだ。

気力、体力に加えて物資も充実している往路よりも、全てが消耗している復路の方が危険を感じる人が多い。

どの瞬間から復路と定義するかにもよるだろうが……新たな階層に進出して苦戦し、逃げ戻る途中中で半壊した——と、いうパーティはよく聞く。

(撤退時が一番危険だからね)

最悪なのは敗走した時だ。バラバラになって各個撃破される。

そうなれば、ほぼ全滅は確定したも同然だった。

その状況を復路——つまり、帰還中と言つていいものなのかどうなのか、という問題

にもなるが……まあ、その辺りはこの際置いておくとしよう。

実際、何とかリヴィラに辿り着いたはいいものの、酷く消耗し、しかし物資の補給もままならずここで立ち往生——と、いうパーティーは案外多い。

そういう場合は、リヴィラの住人よりは良心的な——それでも往々にして高くつくが——他の熟練。パーティに加えてもらうというのが一般的だ。

その辺りを客層にしているなら、少なくとも食いはぐれる心配はない。

「いらつしやい」

紫煙と安酒とすえた汗、そして微かな血の匂い。

いかにも冒険者向けの酒場といった空気の向こう側から不愛想な声が届く。

いまひとつ力不足な——あるいは、あえてそうしているのか——魔石灯が照らす店内は、まだ『昼間』だというのに薄暗かった。

「うくん……。いないみたいです」

その中を見回して、レフイーヤが呟いた。

「いつもはあのカウンター席の隅にいますみたいなんです……」

魔石灯の明かりが一番届いていない席を指さして、彼女が呟く。

確かに、そこは空席だった。もつとも、別に指定席というわけではないだろうけど。

「ちよつといいかな」

ひとまず店内を進み、店主に声をかけた。

「あ、【勇者】——と、いう呻き声は聞こえなかったことにする。」

「ホークウツドという冒険者がどこにいるか知っているかい？」

「ああ、『落穂拾い』の事なら、いつもの連中と出てつちまつたぜ。生きてりやそろそろ帰ってくるだろうが……いや、この時間ならそのまま地上に帰つちまつたかな」

グラスを磨く手を止めないまま時計を見やり、店主が言う。

なるほど、地上ならとつくに日が沈んでいる頃だ。

しかし、この時間ならというと、普段から常に地上に戻っているという事なのだろうか。

「いつもの、という馴染みのパーティがいるのかい？」

そちらも気になるが、まずはすぐに手の届くところからだ。

彼が本当にどこかの派閥に所属しているというなら、次にとる行動も変わってくる。

「そりゃ、うちみてえな安酒場でも常連客はいるんだ。奴にだっているだろうさ」

それが誰か——とは、流石にそう簡単には教えてくれないだろう。

ただでさえ、この街では他人の動向を探るのは好まれないのだから。

だが、この様子なら自派閥のパーティというわけではなさそうだ。

「地上に戻っていないとして、この店で待っていれば会えるかな？」

「ンなもん保証できるかよ。いつくたばるか分からねえのがこの商売だろうが」

それはそうだ——と、肩をすくめる。

（さて、どうしたものかな）

理由が何であれ、遠征中に団長が酒場に入り浸っているというのはよろしくない。

まして、待っていれば確実に出会えるという保証もないのだ。

加えて言えば、時間の余裕もない。流星にそろそろリヴェリア達も合流してくる頃だろ——

（これは出直しかな）

元よりそこまで期待していたわけでもない。

落胆を全く感じなかったと言えば、流星に嘘になるが……是が非でもというなら、もつと早くに接触を試みている。

……もつとも、件の『大量発生』から遠征予定日の直前まで、団長としてオラリオを離れられない状況が続いていたのも事実だが。

「そうか。邪魔したね」

「そう思うなら酒の一杯も注文ほしいもんだな」

「残念だけど遠征中だね。団長が酔っていると示しがつかないんだ」

フンと鼻を鳴らす店主に、せめてもの礼として幾ばくかの硬貨を渡して店を出る。

「悪かったね、レフィーヤ」

来た道を引き返ししながら、レフィーヤに声をかけた。

「いえ、そんな……」

せつかくついてきてもらったが……これでは、無駄足に終わったというよりない。

もつとも、別に待ち合わせをしていたわけでないのだ。それもまた致し方ないことだろう。

（手ぶらで帰るのも気まずいけどね）

だが、この街では何をかうにしても高くつく。

ちらりと視線を向けるが、先ほど威勢よく客引きしていた露天商はすでにいなかった。

品切れによる店じまい、といったところか。この街では驚くほどの安価なのだから当然だろう。

（まあ、ああやって短い時間だけで済ませなければ、他の店から苦情が来るだろうしね）
もちろん、短い時間で楽に稼ぐ、という意味でもあのやり方は合理的と言える。

「ガツハハツ！ いや、今日は儲けたぜえ！」

「ほんとよ。あんなに葉の茂った白大樹（ホワイト・ツリー）が見つかるとはなんてえ！」

「これで高騰している時だったら、なお良かったな」

入り口辺りに差し掛かると、ちようど四人一組フオーマンセルのパーティが戻つてくるところに出くわした。

全員がヒューマンの男。もちろん、知らない顔ばかりである。

ただ、リヴィラで燻っている『平凡』な上級冒険者たちと見ていいだろう。

「まったく、はしやぎすぎだ。おかげですっかり夜が更けちまった」

豪快に笑う一行の中で、ひとりだけ陰気な声で毒づく者がいた。

その言い回しが、妙に耳に残った。まるで、地上の時間を気にしているような――

「まあ、いいじゃねえか！ 一杯奢るぜえ？ お前、どうせいつも安酒エールばつかだらう？」

「フン。どのみち安酒エールだらう？」

「ハハハッ！ そりやちげえねえ！」

リーダー格と思しき大男にバシバシと背中を叩かれその陰気な男が嘆息する。

彼もまた一見すれば『平凡』な冒険者のようにも見えた。

身に着けているのは、今時珍しいほどに平凡なチエインヘルム。背負うのはこれもまた平凡なバスタードソード。左手には小盾。

「大体、この街の酒はどれも紛い物だらう？」

「馬鹿言っちゃいけねえ。地上で同じモンを飲もうとすりゃクソ高いんだぜ。立派な高級酒つてやつだ。それに、ものによっちゃ地上のやつより美味いしよ」

「フン。それでもソーマとやらよりは安いだろう?」

「あんなもん、そこらにいる冒険者の鎧か、それ以上するじゃねえか」
 そう。気になるのは鎧だ。彼が身にまとっている軽鎧。それは――

「あつ! あの人です!」

傍らのレフイーヤの叫びを聞いても、驚きは覚えなかった。

ああ、やつぱりか――と、そんな感情だけが胸を素通りしていく。

「げつ、【ロキ・ファミア】……」

ともあれ、彼女の叫び声はあちらにも聞こえたらしい。

こちらに視線を向けた途端、彼らは顔を引きつらせて一歩下がる。

「知り合いか?」

その中で、件の男だけが怪訝そうな目でこちらを見ていた。

「お前、知らねえのかよ? ありや【ロキ・ファミア】の【勇者】プレイヤーじゃねえか」

「ちなみに、隣にいるのは【千の妖精】サウザンド・エルフよ」

「と、いうか。【ロキ・ファミア】と言えばオラリオを二分する大派閥だぞ」

パーティメンバーの言葉にも、彼は肩をすくめるばかりだ。

「ああ、なるほど。知らないわけだな。そんな大物が俺の客になる訳がない」

えーと……と、レフイーヤが呻く。

この様子だと、完全に忘れられているらしい。

「あの、ホークウッドさん。お久しぶりです。二四階層ではお世話になりました」
意を決してレフイーヤが声をかけると、騒ぎはさらに加速する。

「つて、てめえの知り合いじゃねえか!？」

「これはまさか所謂『お礼参り』というやつなのでは……!？」

「あんた何やったのよおおおおお!？」

「揺さぶるな。鬱陶しい」

掴みかかる三人組を振り払い、ホークウッド——もはや間違いないだろう——が呻いた。

「何やったか知らねえが、俺達は関係ねえぞ。こいつはただの臨時メンバーだからな!？」

「そーよ! 所属も違うわ!」

「ああ。よく雇ってはいるが——ぐおっ!？」

「余計なこと言うんじゃない?！」

「……フン、薄情な連中だ」

全力で無関係だと訴えてくる三人組を他所に、さして気にした様子もなくホークウッドは肩をすくめた。

「それで、何の用だ?」

「えっと、この前の報酬ですけど。多分まだ足りなかったと思うんですが……」
「この前？」

「二四階層でモンスター的大量発生が起こった時です。あの時に私達は食糧庫パントリーに案内してもらいました。それに、そこにいた『元凶』と戦う時も」

「……ああ、あの時のお嬢さんか」

「そこまで言つて、ようやく思い出してもらえたようだ。」

「報酬なら気にするな。……そうだな。不足分は手切れ金と思つてくれ」

「て、手切れ金？」

「そんな大物に付きまとわれちゃ商売あがったりだ。何度となく背中を守つてやったあいつらですらあの様だからな」

うるせえよ!?!——と、三人組が叫ぶ。

「……フン、さつきまで次は寶石樹を探しに行こうなんて調子のいいことを言つていたんだがな」

それはまた後で話し合おうじゃねえか!!——とも。

……つまり、この三人があのお店主が言つていた『いつもの連中』なのだろう。

(この様子だと本当に『常連客』というだけみたいだけどね)

どう見ても同じ派閥に所属しているようには見えない。

例え彼らを問い詰めたところで、詳しい話は何も知らないだろう。

「話はそれだけか？　なら、もう行くぞ」

なるほど、これは予想通り手ごわそうだ——と、内心で嘆息してから声をかける。

「まあ、そう言わないでくれ。僕らとしても報酬を払わないなんて悪評がたつと困るんだ」

「……聞いていなかったのか小僧」

馬鹿!?!　そいつ団長だぞ?!——と、さらに若干離れたところで三人組が再び叫んだ。

「手切れ金だと言っただろう」

遠くからの仲間たち——と、言うべきなのかどうなのか——の忠告に、それなら話は早いと小さく笑ってから、彼は言葉が続ける。

「お前達が関わってこないなら、俺も今まで通り商売ができる。ここで端金をもらおうよりその方がありがたい。それとも、形だけでも金のやり取りでもしなければ気が済まないか?」

「別に君の商売を邪魔する気はないんだ。だから、そこまで毛嫌いしないで欲しいな」
他の同業者から畏怖されているという自覚なら、もちろんある。

派閥ないし団員が無用な騒ぎに巻き込まれないよう、場合によつては他派閥に睨みを利かせているという事も認めよう。

ただ、関わるだけで悪評が立つと思われるのは心外だった。

「報酬というのは、未払い分だけじゃない。君のおかげで団員達が無事だったんだ。相応の礼をしたいと思う」

「死屍累々としていたはずだがな」

そちらは「ヘルメス・ファミリア」の冒険者たちだろう。

文字通り半壊したと聞いている。

なるほど、彼にとつてはそこまで含めてパーティという事になるか。

「……まあ、いいだろう。それで、何をしてくれるんだ？」

「実は僕たちは今遠征中だね。手持ちは少ないんだ。だから、別の形でどうだろう」

もったいぶる必要はない。むしろ、話を長引かせるのは逆効果だろう。

初手から勝負を挑む。

「具体的には？」

何だかんだと心配しているのか——いや、それはそれで何だか釈然としないけど——遠くから様子を窺っていた三人組を追い払って。

さらに近くの路地に入り込んでから、彼が問いかけてくる。

「僕らの遠征に参加してほしい。場所は五九階層。もちろん、遠征の成否に関わらず、金銭としての報酬も払う。ただ——」

今用意できる最大の手札がそれだった。

「五九階層に到達したという実績は下手な現金よりもずっと価値のある報酬だと思うけど、どうかな？」

到達階層は実力の証明でもある。

そして、五九階層到達となれば「ゼウス・ファミリア」に次ぐ偉業だった。

理想で言えばそのまま「ロキ・ファミリア」に加わって欲しいところだが……しかし、その実績（名声）一つあればどの派閥でも好きなように選べる。

例え、過去に多少後ろ暗いことがあつても、だ。

オラリオで名（カ）を（示）上げるとはそういう事である。

「他を当たれ」

だが、彼は一切迷いもせずそう言った。

「不満かな？」

「ああ。五九階層だと？ そんなところまで潜ったら流石に日帰りできないだろうが」

一日の終わりに酒を飲むのが最近の楽しみなんだ——と、ホークウッド。

「その割には、その酒にはあまりこだわっていないようだけど」

「俺が何を飲もうが勝手だろう？」

それはもちろん、その通りだが。

「半月ほど我慢してもらえば、今よりずっといい酒を飲めると保証するよ」

「そいつはご親切に。だが、こんなところで燻っている冒険者風情が、そんな場所に行けるとでも思うのか？ お強い【ロキ・ファミリア】の団長様は」

「君なら可能だと判断しているから、こうして声をかけているんだ。それだけの力を、ここで腐らせていくつもりかい？」

「それで、ここにいる連中の代わりにお前たちのお守りをしろうと？」

ああ、この目を知っている。

「【勇者】^{ブレイバー}とか言ったか。憐れなことだな」

それを見透かしたように、彼は陰気に笑った。

「王だ、英雄だと、そんなものは呪いだよ。そんなものに踊らされ、神の飼犬になって飲む酒はそんなに美味いか？」

ああ、やはりそうか。

(彼はクオンと同じだ)

やはり、彼らの力を支えているのは『神の恩恵』^{フアルナ}ではない。

苛烈なまでの神嫌いはクオンの性格や個性によるものではなく、彼と同じ背景を持つ者たちにとっての共通認識なのではないだろうか。

だとすれば、彼らは一体どこから来たのか。一体何者なのか。

「それと同じことを口にした者がいるよ」

もちろん、言い回しから何から全く違う。しかし、言わんとしていることは同じだ。神の眷属という在り方への疑念。嫌悪。あるいは、憐れみ。

それとも同族嫌悪だろうか。

いずれにしても、クオンが時折見せるものとよく似ている。

「ほう。……そいつは、今お前たちのお守りをしているのか？」

答えを見透かしたまま、ホークウッドが問いかけてくる。

「フン、あの甘ちゃんならやるかもしれないな。あいつは結局、最後まで人間臭いままだった」

もつとも、俺が知る限りだがな——と、彼は小さく笑った。

それは、今までのように陰気なものではない。

まぎれもない賞賛。そして、憧憬と嫉妬……いや、羨望だろうか。

おおよそ、そのようなものが含まれているように感じた。

「それは【イレギュラー正体不明】のことかい？」

「生憎とそんな名前の知り合いはいないな」

素直に受け取ればクオンではないと、いう事だろうか……、

（彼らは神嫌いだからね）

【正体不明】^{イレギュラー}とは、オラリオでの呼び方でしかない。

しかも、名付けたのか神々だ。

僕達にとつて二つ名を与えられるとは名誉なことだが……クオンにとつてはどうだろうか。

ひとまずそれが自分を示す呼び方だとは認識しているのは確かだ。

ただ、これといった感慨があるようには思えない。

「それなら、一体誰なんだい？」

「ただの放浪者だとき。もつとも、『王の探索者』……いや、『王狩り』なんて御大層な呼ばれ方はしていたがな」

放浪者。それはクオンが自分を言い表す時に用いる肩書きだ。

と、なると――

(やはり、クオンか)

そもそも、彼にとつてクオンは『正体不明』などではないのだろう。

どこから来た何者なのか。そんな事は、とつくに知っているに違いない。

「彼と再会したら、どうするつもりだい？」

交渉から外れた言葉を口にする。

活路があるとすればそこだろうか……活路どころか奈落の底に繋がっている可能性

もあつた。

「さてな。お前には関係ない」

話はそれで終わりだな？——と、そう告げると彼は返事も待たず背を向けた。

奈落の底ではなかつたが、活路でもなかつたらしい。

（まいったな）

呼び止めるのは簡単だが、その先の展望がない。

やはり、彼も名声や富では釣れないらしい。

では、何を対価にすればいいのか。

（それが分かれば苦労してないか）

クオンと違い、互いに悪感情がない状態ならあるいは、と思っていたが……やはり、そう単純な問題ではないらしい。

予想していなかつたわけではない。むしろ、その可能性は充分に考慮していたつもりだ。

……ただ、それでもここまで鎧袖一触にされては流石に落胆の一つも覚える。

（そもそも、相手が何を欲しているか分からない状況での交渉なんて上手くいくはずがないか）

もちろん、それを探るところから始まる交渉も何度となく経験しているつもりだ。

ただ、彼らの場合全くと言っていいほど手ごたえがなかった。

金も権力も名声も、あるいは神々すら熱狂させる未知ですら、彼らを動かす理由にはならない。

(あとは、欲か野心か……)

例えばクオンに関して言えば、女をあてがえば——つまり、色欲を攻めれば——口説き落とせる可能性があるか一部では今も思われている。

だが、実際にはそう簡単な話ではない。その程度なら、とつくにどこかの派閥——それこそ、「フレイヤ・ファミリア」なり「イシユタル・ファミリア」なり——が籠絡している。

金欲を狙うのは無謀極まる。何しろ、単身で五一階層に到達し、『カドモスの泉』を樽で持ち帰れる相手だ。それを上回る対価を提供し続けるとなれば、それこそオラリオの年間予算に匹敵するだけの用意が必要となる。もちろん、一時のことなら、もつと安く済むだろうが……それでは今の関係といくらも変わりはない。

野心なら……もしクオンが野心家だとしたなら、今頃はオラリオの頂点に君臨しているだろう。四年前の時点で、彼はそれだけの力を持っていた。

(オラリオの『深奥』にはいるのかもしれないけどね)

ギルド——いや、神ウラノスの私兵、あるいは協力者として。

だが、何故あの神嫌いがそんな選択をしたのか。

神ウラノスに示された対価はそれほど魅力的だったのか。

それとも、そこにある『何か』がどうしても無視できないものだったのか。

（いずれにしても、今の僕には手出しできない場所だな）

となれば、もはや打つ手なし。

打開するための手立てが何も思いつかない。

完全に五里霧中だ。

「ああ、だが」

少し進んだところで、彼は足を止めてから言った。

「腐っている事への文句なら奴に言ってくれ。なりふり構わず、全てを賭けて挑むと決めた相手があんなに腑抜けてるんじや、俺だって腐っているしかないからな」

それだけ言い残すと、今度こそ彼は路地を後にする。

今のは野心と呼べるほどのものではない。かといって、欲とも言い難い。

ただの意地だ。あるいは執念だろうか。

いずれにせよ、それは他者が干渉できる類のものではない。

（やはり、クオンを中心とした何かの流れがあるね）

クオンが何かしたというより、オラリオ、あるいはダンジョンの中で息をひそめてい

たものが、彼の台頭とともに動き始めたのだろう。

(いや、まだ台頭したとは言えないのか?)

彼を知る誰もが、その力が失われていることに毒づいている。

動き出したのは、むしろそのせいなのかもしれない。

(だとしたら、最悪だな)

神ウラノスが警戒している、あるいは企んでいる『何か』はL.V.7と互角に渡り合う程度の方ではとても足りないという事だ。

その事実は、オラリオ中の冒険者の心を折りかねない。

(これは、腹を括っていかないとね)

赤髪の女——怪人レヴィスや『人斬り』が企む『何か』。五九階層に存在するという

『何か』が、クオン側の『何か』とどう絡んでいるのかは定かではない。

だが、まったくの無関係という事もあり得ない。

だとするならば——

(五九階層到達、か)

この程度は、まだ『冒険』とは言えないのかもしれない。

実際、クオンにとって五一階層到達など取るに足らないものだろう。

それでも八〇階層の壁を破れない。その先にある本当の『未知』に挑むには、L.V.7

でもまだ足りないという事だ。

僕達はまだ入り口にも達していない。

その事実を飲み干し、それでもなお――

（ここでは終われない）

先へ。まだ見ぬ世界へ。そこにあるはずの名声をこの手に。

胸を焦がす野心の火が消えることはなかった。

例え、犠牲を払うことになるとしても、だ。

3

不死の呪いは、故郷すら奪う。

それは、受け入れているかどうかを別として、誰もが知っていることだ。

何しろ、とある奇跡はその事実をこの上なく明確に突き付けてくるのだから。

我らが唯一の寄る辺は篝火のみ。火に焦がれることしか、呪われ人には許されない。

（ただ、それでも――）

郷愁というものは、どうやら不死人にも残っているらしい。

潮騒に耳を傾けながら、そんなことを思う。

いや、これは本当の意味で潮騒と言っているのかは定かではない。

何しろ、ここは湖。海ではないのだから。

(……いや、汽水湖だったな)

それなら、半分は正しいのかもしれない——と、微かな潮の匂いを感じながら呟く。とはいえ、今抱いている郷愁は、生まれ故郷に対するものでないのは分かっていた。今は遠いドラングレイグでの拠点。

マデューラ。

永遠の黄昏に染まる海を望むその街——正しくは、その名残に向けられたものだ。もちろん、今いるこの場所とあの廃墟は似ても似つかない。

港町メレン。

オラリオから南西に約3kmの場所にある港街。

楕円を描く巨大汽水湖——『ロゴ湖』の湖岸沿いに栄えるこの街は、オラリオの海の玄関口でもあり、輸出入の拠点としても莫大な利益を上げていた。

それに加えて、オラリオに出回る海産物の多くもここで水揚げされており、それだけでも結構な売り上げだと聞いている。

そして——

「白い砂浜に青い海か。最高だね」

近年では保養地としても頭角を現しつつあるのだとか。

まあ、俺が普通の放浪者だった頃に比べればずいぶんと旅も安全になっている訳だし、旅籠街が発展するのも分らないではないが……、

（それにしたって結構な数が来るものだな）

ここまでの道で見かけた人の多さに、内心で舌を巻いていた。

（いや、単純に立地がいいのか？）

オラリオの海の玄関口でもある以上、ギルドも支部を置いている。モンスターや野盗が姿を見せればすぐにギルド本部——つまり、オラリオに連絡が入るわけだ。

しかも、その距離はたったの3km。オラリオ内で別区画に移動するより近い場合もあるほどだ。

シャクティたちがその気になれば一時間とかからない。

常日頃から道中の安全を確保し、維持するための労力も少なくて済む。

（そりゃ、人も集まるだろうな）

3km程度の距離なら、普通の人間だって歩いて半日とかからない。

交易のため馬車道も整備され、道中の安全も概ね保証されている。

それなら、確かに来ない理由はないか。

と、煌めく水面と白い砂浜を見やり、小さくため息をついた。

「と、いうか、ここは海じゃないだろう？」

あくまで湖だ。名前からして『ログ湖』なのだから。

「汽水湖だろうか？　なら、半分は海みたいなもんさ」

それは否定しかねるが。

実際、外洋を脅かすモンスターはこの湖の底にある出入り口から出てきたものだと聞いている。

「ここが海に繋がっていないなら、そんな悲劇も起こらなかっただろう。

「さて。まずは泳ぐかね」

「水辺にはいい思い出がないんだよな……」

鎧さえ着込んでいないなら、別に泳げないわけではないが。

「あんたがいい思い出のある場所なんて、そっちの方が希少^{レア}だろう」

それもまた、否定しかねた。

「まあ、それはそうと……さあ、行きましょう？　あ・な・た」

言葉に詰まる俺を小さく笑ってから、露骨なまでの猫撫で声でアイシヤが甘えてくる。

さて、いったい何故こんな事態になっているのか。

事の始まりは、昨夜……いや、今日の黎明頃までさかのぼる。

…

ふと気づけば、死体蛆やなりそこないが蠢き、獄吏どもは徘徊する地下牢にいた。覚えがある。ここは、冷たい谷のイルシールと罪の都を繋ぐ場所だったはずだ。

夢の中で自分は、とある英雄の闇霊を弔い——そして、すぐ近くの牢獄の扉を開ける。「……ほう、久しいな。きつと忘れられたと思ってしたが、嬉しいよ」

そこに囚われていた黒衣の魔女は、微かに笑って見せた。

いや、それは違う。実際には、こちらを見てもしいなかったはずだ。そもそも英雄の闇霊と出会った場所も少しばかり違ったかもしれない。

「うん？ 貴公……どうやら、あ奴らとは違うようだな」

死体蛆やらなりそこないに間違えられるのは、流石に不本意だった。

そんな事を思ったような記憶がある。

「謝罪しよう。人を蛭と見紛うなど、失礼極まりないというものだ」

だが、ソウルが蠢いたのはそんな理由ではない。

彼女を知っている。いや、彼女と同じ存在を、と言うべきか。

「それで、貴公。こんな場所に何用かな？ ここは異形の住処。私とて、例外ではないのだぞ」

ああ、それはそうなのかもしれない。

彼女は深淵に連なるもの。いつか出会った闇の落とし子達。あの王妃デユナシャン

ドラと同じ存在だ。自身の中に宿る彼女たちの——何より、彼女たちを生み出した深淵の主のソウルがそれを伝えてくる。

しかし、

「私を助けると?」

それでも、今自分の目の前にいるのは、もはや自力で歩く事も……いや、立つ事すら覚束ない一人の女でしかなかった。

「私は罪人。人の深淵、その忌み子なのさ。貴公、それでも私を許せるのか?」

許すも何もない。忌み人ならお互い様だ。

「そうか。変わった男だな」

そう……確か。本来なら、ここで初めて彼女は微かに笑って見せたのだ。

「だが、まあよかろう。私も、囚われの身には倦んでいたところだ」

それはそうだろう。日の光も差さないここは、かつて自分が囚われていた不死院の牢獄よりも居心地が悪そうだ。

……もつとも、今や例えここから出たとしても日の光などほとんど消え果てているが。

その言葉に頷いて、自分は彼女の華奢な身体を抱き上げていた。

動くことも叶わない——彼女自身の言葉通り、ここから最寄りの篝火まで歩かせる事

すら困難だった。不運なことに、『帰還の骨片』も手持ちがない。

異形どもが蠢く中を進むには少なからず不安だが他にどういう方法もなかった。

「私はカルラ。貴公の申し出、受けさせてもらおうよ」

彼女の腕が首に回され——そして、突然首筋に噛みつかれた。

……

「いつてえ!」

目を開く。と、そろそろ見慣れてきた館の天井が。

それと、俺の首筋に噛みつくアイシヤの姿が見えた。

「おはよう」

やたら冷たい声で、彼女が言う。

「あ、ああ。……どうかしたか?」

「別に。アマゾネスが男を食っちゃまうのがそんなにおかしいかい?」

「お前らの『食っちゃまう』ってのはそう言う意味じゃないだろうが。ミルドレッド達じゃ

あるまいしあったあ!」

再び噛みつかれ、語尾が悲鳴に転じた。

いくら不死人でも痛いものは痛い。

……いや、戦闘中はしばしば忘れる程度のもではあるが。

「待て待て落ち着け!! 何を怒ってるんだ?!」

文字通りに食おうとしてくるのは、どこに行つても何故だか一人はいる人喰い共だけで充分だ。

……いや、確かにオラリオではまだその系統に出くわしてはいないが。

「別に。どうせ私は金で買われた単なる囲われ娼婦だしね。寝ながら別の女の名前を呟いたつて気にしやしないよ、ご主人様」

そういうえば、確かに夢で懐かしい顔を見たような見なかつたような。

……いずれにせよ、またやってしまったらしい。

四年前、記憶のほとんどを失つていた頃は大目に見てもらつていたが……流石に今となつては、申し開きもできやしない。

(これはクラীগに知られたらお説教だな)

女の扱いがなつていない——そう言われるのが目に浮かぶ。

などと、彼女の顔を思い浮かべたのが悪かつたのだろう。

「いっつうー!」

もう一度首筋に噛みつかれ、さらに背中に爪が立てられる。

この感触からして、確実に蚯蚓腫れを起こすだろう。

「それで、いったい今度はどこの女を思い出したんだい?」

……何というか。

女の勘とはつくづく恐ろしい代物だった。

「本当にお盛んのようにだねえ、ぶっ・主・人・様？」

細く鋭く光るアイシヤの瞳に見据えられ、いつだったか、どこかで豹に襲われ、押し倒された時のことを唐突に思い出していた。

いや、何というか……この際だ。

せめてそいつは雌ではなかったと思いたい。

……

と、まあ、そんなわけで。

ここ半月ばかりの礼と、諸々の詫び。

そして、ご機嫌取りを兼ねてこうしてメレンまで足を延ばすことになった。

もちろん、今の俺達はお尋ね者——ではないにしても、限りなくそれに近い場所にいる。

おかげで、市壁を超えるのは多少ならず手間だったが……、

（これで大目に見てもらえるんだからありがたい話だよな）

普通なら、良くて罵声と共に出て行かれているところだ。

それをこの程度で見逃してもらっているのだから、感謝こそすれ文句など言いようが

ない。

ちなみに、だが。

イシユタルたちとの一戦から今まで色々と迷惑をかけ続けている霞も誘ったのだが……、

「そんないきなり休みなんて取れるわけないでしょ、この馬鹿ー!!」

と、至極正論とともに脛を蹴られた。

すっかり拗ねられたので、後で何か埋め合わせをしなくてはならない。

(まったく、贅沢な悩みだよな)

どうしてこんな関係が続いているのか、自分でもよく分からない。

霞にしてもアイシヤにしても、もつといい相手……善良で誠実で、何より真つ当な生者の男を選べるだろうに——

「流石はメレン。魚料理に外れはないね」

——などと。

一通り泳ぎ回ったせいでよほど空腹なのか、大きめのサーモンステーキを切り分けては次々に口へと運んでいるアイシヤを見ながら、胸中で呟いていた。

「うん? 何だい、こつちを食べたいのかい?」

「いや、そういうわけでは——」

「ほら、あゝん」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながら、アイシャがフオークを差し出してくる。「遠慮しないでいいのよ、あ・な・た」

……本つ当に愉しんでいるようで何よりだ。

（そりやまあ、自業自得といえればそれまでだけどな）

茶褐色に染められた髪を掻きむしりながら呻く。

今のところ、どこぞの飲食店店員のようにギルド公認の『お尋ね者』ではない。

ないが、お尋ね者見習いくらいの立ち位置にいるのも事実だった。

そんな奴らが、オラリオから三kmしか離れていない——ついでに、きっちりギルドの支部もある——街を呑気に観光するとなれば、変装の一つもしておくのが礼儀だろう。

そんな訳で、今の俺はアイシャの手によって、極東人と大陸人の混血^{ハイブ}辺りに見えるよう変装させられている。

もちろん、アイシャ自身も同様だ。

黒く癖のない艶やかな髪は、緩やかに波打つ艶のない金髪に染められていた。

一方で野生を帯びた美貌は、その美しさはそのままに少しだけ柔和に見える。しかも、何か特別な魔道具^{マジックアイテム}を使った訳ではなく、化粧だけなのだから女というのは恐ろし

い。

着込んだ水着——この街では水着で出歩く人間も珍しくないらしい——は、アマゾネスにしては慎ましいものだが……その程度で彼女の色香を隠せるはずもない。

むしろ、色気は据え置きのまま普段より柔和に見えるせいか、ちよつと傍を離れると男どもが群がってくる始末だ。

いや、それ自体には文句など言えようはずもない。

俺だつて本来ならそちら側だ。いや、気後れして言い寄ることもままならないかもしれない。

ついでに言えば、傍にいる男に殺気を向けたくなる気分も分かる。

分かるが——

(もう少し自重しろよ)

——いや、本当に。イナゴじゃないんだから次から次へと群がってくるな。

まあ、アイシヤがこうして面白半分に煽っているので、連中もある意味被害者と言えるが。

ちなみに。

一番の被害者は、恋人なり嫁さんなりがいる男どもだろう。

ついでよそ見をしてしまったがために、自分の連れに湖に蹴り落されたり、急所に致命

の一撃を叩き込まれる様を何度も見ている。

「お前、そういう趣味だったのか？」

今も四方から放たれ続けている様な怨念には気づかなかったことにして。

ひとまず差し出されたフォークに口をつけてから、小声で呻く。

「疑われたら面倒だろう？ 新婚夫婦はそれらしくしないとね」

変装するにあたって、素性の方にも一ひねり加わっている。

……まあ、アイシヤが言う通り、新婚夫婦という『設定』である。一応偽名も考えているが……それは今はいいか。

見ての通り、意外なくらいアイシヤは乗り気なのだが、それについては——

『そういう設定にこだわる客は結構いたからね。神どもが言う『ろーるぶれい』ってやつ』

——と、いう事らしい。

まあ、確かにこういう演技にもずいぶんと慣れてるようだった。

(……本当に世の中には色々な性癖があるらしいな)

高級娼婦——いや、アイシヤ達の場合、厳密にはその定義から外れているはずだが——

——ともなると、芸達者でなくてはならないという事なのだろう。

「まあ、お前のおかげで今のところ疑われてはいないな」

「だろ？ こういうのはね、ちよつとやりすぎくらいがちょうどいいもんなのさ」
確かにいろんな意味でやりすぎだろうな——と、もう一つの『設定』を思い出し、胸
中で呻いた。

素性を語る上で避けては通れないのは、俺たちの生業だ。

こちらは、ある意味素直に冒険者だと名乗っているが……問題は、所属する派閥であ
る。

まさか馬鹿正直に「イシユタル・ファミア」とは名乗れない。

すでに壊滅しているからという理由はもちろん、今ではすっかり悪名が広まってし
まっている。

なので——

(これ、シヤクティに知られたらただじゃ済まないよな、絶対)

何とアイシヤは「ガネーシヤ・ファミア」だと錯覚するよう仕向けている。

いや、もちろんこれ見よがしに吹聴している訳ではない。

『今は完全に休業中だよ。仕事のことは忘れさせておくれ』

と、深く突っ込まれないように釘を刺しているくらいだ。

ただ、例えば今泊まっている宿——新婚旅行らしく結構値の張る高級宿を選んでい

——での受付の際に、

『本当はもう少し早く来る予定だったんだけど、ちょっと予定外の大騒動が起こってね。それも次々に。おかげで半月もお預けにされたよ』

と、そんな言葉を口にしてるだけである。

これだけなら、別にどうとでも解釈できる言葉だ。

だが、もはや一部といつても過言ではないほどオラリオに近く、双方の住人が頻繁に行き来するこの街であれば、フィリア祭から続く一連の騒動を真つ先に連想するのは想像に難くない。

その影響を受けたとなれば、この二人は「ガネーシャ・ファミリア」に所属する冒険者なのだろう——と、結構な高確率でそう誤解するわけだ。

……確かに冒険者がオラリオの外に出るのは難しいと聞いているがそこはそれ。

事実上それに近いとはいえ、本当に軟禁されているわけでもない。手続きの手間と時間さえ惜しまないなら、都市外に出るのは決して不可能ではない。

それに——

（それ以外の当事者だとは思わないだろうな、普通は）

それこそ、まともに生き残っているのは俺達だけなのだから。

その辺りの心理すら強かに利用しているのだろう。

とはいえ、極論を言えば相手が勝手に誤解しているだけの事だ。

俺たちは「ガネーシャ・ファミリア」だと明言している訳ではないし、派閥の証文を勝手に使っている訳でもない。

もちろん所属を偽ることで何かしら恩恵を得ているわけではない——とは流石に言い難いか。こうして信用させるのも『恩恵』といえるのだから。

だが、少なくともギルドから公的に罰則を受けるような違反行為は何もしていない。

「大した度胸だよな」

塩焼きにされたドドバスの切り身を突きながら、小さく呟く。

「別にこれといった嘘はついちやいないだろう？」

しいて言えば、メレンに來る予定があつたつてことくらいさ——と、アイシャ。

「それはそうだが」

もちろん、俺だつて根っからの放浪者だ。各地を彷徨う中でそれなりに酸いも甘いも噛み分けたつもりだし、清濁も併せ呑んできたつもりだが。

ただ、「ガネーシャ・ファミリア」はとにかく一般市民からの信頼が厚い。

知らない間にこつそりおまけとかしてもらつていたりするのではないだろうか——と、考えると流石にちよつと良心が痛む。

痛むので、その可能性については深く考えないことに決めていた。

「象神アンクレーシャの杖」とは顔見知りだし、ファイリア祭じや実際に最前線で働いたんだ。文句は言

わないだろうさ」

と、声を潜めてアイシヤが言った。

まあ、今まで何度か探りを入れられた——いや、そんなに大げさなものでもないが——のは、どれもフィリア祭の騒ぎに関してだ。

そちらは俺達も事情を知っているし、最前線で戦つてもいる。

従つて、いくらでも——と、言つても今のところその機会すらないが——受け答えできた。

もちろん、万が一「イシユタル・ファミリア」やら神罰同盟やらに関して聞かれたところで、機密情報なので——と、言えばそれで済む話だ。

それでも食いついてくるなら、深入りすると危険だと脅せばいい。

……これもまた何も嘘は言っていない。

何しろ、「イシユタル・ファミリア」や神罰同盟が起こした騒ぎについて、真つ当な住人が気にするのはまず間違いなく閩派閩殘党イツイルスが本当に関与しているかどうかだ。

これは何だかんだとかなりの回数聞かれたが……下手に肯定すると、本当に飛び火しかねない。実際にシヤクテイ達も、ギルドの公式発表以上の事はまず教えないはずだ。

もちろん、俺達もそれに準じた対応をとっている。

時点で言えば、歓楽街の営業再開について。

神罰同盟とやらを追い回している間も、歓楽街の動向には注意を払っていたが……早々にシヤクテイ達が占拠してから今に至るまで「ガネーシャ・ファミア」の管轄下に置かれている。

それがいつ解除されるかが一つの目安となるだろう。

(どのみちガネーシャに歓楽街の運営ができるとは思えないしな)

もしやるなら、性質が大きく変わる——それこそ、繁華街がもう一つ出来上がるだけだろう。

大体、これはもう治安維持というより都市運営の話となってくる。「ガネーシャ・ファミア」よりもギルドに問い合わせた方がいい。

問題は『殺生石』——いわゆるイシユタルの『遺産』について探りを入れてくる連中だが……それに関して本気で深入りしてくるなら、その時は俺自身が口封じするつもりだ。

いずれにしても危険であるというのは真実だった。

例え神に盗み聞きされてたとしても、恐らく問題はない。

もつとも、

(今のところいいないけどな)

幸か不幸か、ほんの少しでも怪しいと感じた奴すらいない。

そもそも新婚夫婦という設定が効いているのか、歓楽街云々について聞いてくる奴すらほとんどいない。アイシャの目を盗んでこそつと聞いてきた若い男どもが何人かいたくらいだ。

それ以外の問題は、今のところ何も起こっていない。

「何しろ住民からの信頼は何だか言つて全派閥の中でもぶつちぎりだからね。身元を保証してもらうならここが一番さ」

後ろ暗い連中が向こうから近づいてくることもないしね——と、アイシャ。

「リヴェリアのところじゃ駄目なのか？」

あの小子どもなら多少迷惑をかけたところで、まったく良心が痛まないで済むのだが。

むしろ、この程度ならあいつらから被った迷惑の埋め合わせにもならない。

「あそこは無駄に敵が多いからおすすめしないね」

それもそうか。

個人的な悪印象を差し引いたとして……それでも、主神からして品行方正とは言い難い。

ガネーシャやミアハ、ヘファイストス辺りと比較すれば、結構な数の賛同を得られると思う。

何より、リヴィラの街のボールスにも疎まれていた時点で所詮は山師の集団という気がしてならない。

……いや、やはり私情が混じってしまったているのかもしれないが。

(別に治安維持に関わっている訳でもないのにな)

リヴィラの街の連中は、だいたい脛に傷を持っている。

その彼らが、ギルド公認の元、常日頃から治安維持に従事しているシャクティ達を鬱陶しく思うのは当然の帰結だ。

ただ、あの小人もは違う。派閥の規模こそ巨大だが、本質的にはボールスたちと同じだけの冒険者にすぎない。

それでもなお、シャクティ達と同じかそれ以上に疎まれていとなると――

(いや、商売敵だからってのはあるんだろうが……)

とはいえ、それだけは説明がつかないように思える。

何しろ、自分たちは誰も頼みもしないのに嬉々として他人の事情に首を突っ込んで来る癖に、こちらに同じ事をされるのは蛇蝎のごとく嫌うのがあの連中だ。

脛に傷を持っているボールスたちにとってはやはり煩わしい存在となるだろう。

(ああ、なるほど。ヴェルヘイムが言ったとおりだ)

確かに、どこにでもいるものらしい。

逃げる者を追ひ、隠されたものを暴き、正義を誇る輩は。

いや、この『時代』ならそれこそが『冒険者の誉れ』だと笑うのか。

いずれにしても――

（その報いを受ける覚悟はあるんだが……）

少なくとも、ウラノスはないと踏んでいるのだろう。

情報交換も綿密に行っているガネーシャと違い、戦力以上のものを求めようには見えない。

ならば、共犯者として、俺も迂闊に関わるべきではないということだ。

（この前リヴェリアにたつぶり『餌』をやったばかりだし、まだ平気……だよな？）

亡者と『暗い穴』の関係について。他に『火の時代』についてもおまけに付けたか。

いや、俺がリヴェリア達に『暗い穴』についてあれこれ教えたのは一応純粋な善意からだが……その情報を実際にどんな目的で使うかは向こうの勝手としか言いようがない。

（俺に初めて絡んできた時の真似をすれば、あっさり消されるだけなんだが……その辺、ちゃんと分ってるんだろうな？）

いや、四年前、あれだけ痛い目を見たのだ。流石に懲りているとは思うが。

それに、扱いには気を付けるようにと、釘も刺している。最低限の義理は果たしてい

るはずだ。

(まあ、逆恨みさえしないならあとは好きにさせておくか)

今の時点で探られているのは俺の腹ではない。

それに、義憤に駆られて……いや、そのふりをしながら黒教会——かどうかは定かではないが——に喧嘩を売ったとしても。あるいは、その力を求めて亡者に堕ちたとしても。

どちらにしても、それは本人達が選択した結果だった。

派閥の運営に対して余所者の俺が何か言う権利はないだろうし、止めてやる義理もない。そもそも、何かしら特別な肩入れをするような関係ですらない。

何が起こったとして、その責任をこちらに丸投げしてこない限り、俺には関わりのない話だ。

奴等だつてその程度の覚悟は持って冒険者と名乗っているだろう。

(あく……。いや、後始末を押し付けられる可能性はあるか)

あの金髪小娘が亡者化した日には、周囲にもたらず被害は相当なものになるだろうし。

まあ、それはともかく。

アン・デイル相手に迂闊に探りを入れた場合も当然似たり寄つたりの結末を辿るだ

ろう。

どちらにしても俺が優しく見える程度には容赦ない相手だ。

下手に関われば相応の報いが待っている。

（それとも、まだあの赤髪の美人の尻を追いかけてるのかね？）

今のところ、これといった騒ぎは聞いていない。なら、その可能性も充分にあるだろう。

確かに追いかけたくなる尻だったが——と、思い浮かべた辺りで思考を打ち切った。

下手なことを考えて、またアイシヤの機嫌を損ねては本末転倒だろう。

……

それからしばらくして。

「さて、と。そろそろ宿に戻ろうか」

すっかり夜の帳が下りた頃、アイシヤが言った。

「そうだな。どのみち、この先にはこれといって見所もなさそうだ」

メレンの街は、楢円を描く湖岸に沿って広がっている。

その東半分は漁港や貿易港が、そこから少し南下すると遊泳に向いた砂浜がある。もちろん、諸々の観光施設もそこに密集していた。

おそらく、元々は水夫や商人を狙った旅籠が並んでいたのだろう。そこにオラリオか

らも富が流れ込み、観光地として整備されていった——と、いったところか。

その反対、残りの西半分はいきなり水深が深くなるらしく、停泊所から溢れた客船——それと、何とかいう大型船——が停泊する港や、造船所が立ち並んでいるようだ。

(それはそれで見ごたえがありそうな気もするが……)

外洋を航行できる大型船ともなれば、それを造るのも大仕事となる。

……まあ、それを見てアイシヤが喜ぶかと問われれば何とも返事に困るところだが。実際、観光客の受けはあまりよくないのだろう。

西側に近づけば近づくだけ、ひとけ 人気がなくなっていく。

いや、ごく普通の住宅地になっているだけの話なのだが……港周辺の活気と比較すれば、どうしても寂れて見える。

まあ、住人にとっては余計なお世話だろうが。

と、それはともかく。

「優雅に船の旅つてのも悪くないかもね」

夜の海——と、いうことにしておこう——を見やり、アイシヤが言った。

思えば、船旅にはほとんど縁がない。この三年間の放浪もその大半が陸路だった。

「遊覧船とやらがあるらしいな」

街の北南を結ぶ移動手段——と、いう側面が全くないわけでもなさそうだが……湖上か

ら街並みを眺めながら短い船旅を楽しむというのが主な目的のようだ。

「へえ。商人つてやつはどこでも遅いもんだね」

何でも商売にしちまう——と、アイシヤ。

まあ、確かに。そのためだけに船を一隻——いや、何隻あるかは知らないが——用意するのだから大したものだ。

しかし——

「船旅つてのは優雅なのか？」

あまりそういう印象はない。

と、いうより、むしろ陸路よりも危険な気がしてならないのだが。

何しろ、もし船底が抜かれたら、水底に真つ逆さま。それこそオラリオの地下水路に住んでいる程度のモンスターにすら餌食にされかねないのだから。

（板子一枚下は地獄、だったか？）

いつかどこかで聞いたことわざを思い出す。

もちろん、船の性能も上がってはいるのだろうが……しかし、先人が言い残した言葉は本質的に何も変わっていない。例えば巨大な帆船でも、暗礁に引つかかれば割と簡単に沈む訳だし。

「情けないねえ。そんなに不安なら『ウンディーネ水精霊の護布』でも着込んだきな」

「水中でも動けるようになる装備だったか?」

それは、隠し港をうろついている時に欲しかった。

そう。特に――

「そんな便利なものがあるなら、幽霊船に乗った時に欲しかったよ」

浸水する船底で『流罪の執行者』どもとやりあっている時に。

水に足を取られ、著しく動きを制限されたのを思い出しながら呻く。

いや、それにしても――

(……あれだけ浸水してよく沈まなかったよな、あの船)

船底で戦っている間だけでも腰まで浸水していたというのに。

まあ、真つ当な水夫など一人も乗っていない、文字通りの『幽霊船』だ。元よりまともな船であるはずもないが。

「……幽霊船に乗ったって。本気でとんでもない場所を旅してきたらしいね」

「まあな」

とはいえ、大鴉やデーモンにぶら下げられて空の旅よりは確かにいくらか快適だった。

(とも言い難いか?)

アノール・ロンドを一望した時は、流星に感動を覚えた。

……そこにどんな地獄が待っているかなんて思いもしないで。

（他に乗り物といえ、下男亡者の籠くらいか）

……つくづくまともな乗り物には縁がないらしい。

「ま、確かに海のモンスターはほとんど野放しだからね。「ポセイドン・ファミリア」の連中が始末して回つちやいるそうだけど、それこそ焼け石に水つてやつさ」

それはそうだろう。いくら何でも広大すぎる。

そして、この湖は海のモンスター達にとつての故郷と言っている。

飯屋で聞いた話だと、漁礁はほぼ壊滅状態というのが現実らしい。

（この五年で多少立て直したとも聞くが）

観光業に力を入れているのは、漁業に代わる飯のタネが必要だからなのかもしれない。

もつとも、そう簡単なことではない。この街で目玉となるのはやはりこの巨大な湖だろう。

水質もよく、泳ぐと心地よいが……やはり、どうしてもモンスターに注意する必要がある。

俺たちのように自衛できればいいが、そうではない人間では気楽に楽しむ事はできない。

漁場としても保養地としても、結局はモンスタアの存在が壁となるわけだ。

(しかし、だとするなら……)

先ほどから燻る疑問に、内心で首を傾げる。

道中でアイシヤに軽く教わっただけだが……どうやら、この街の統治構造はかなり複雑らしい。

この『時代』において、統治機関と聞けば、まず連想されるのはギルドだが……実際のところ、その強制力が及ぶのはオラリオに籍を置く派閥だけというのが原則だった。

つまり、オラリオの外に存在する派閥に対してギルドは強権を振るえない。

(ま、ギルドの影響力が少ないから、こうして安穩と遊び歩いていられるんだけどな)
遠目に見たギルド支部を思い出しながら呟く。

そもそも、ギルド支部は地域によって役割が異なる。

この三年間で見かけた中でいえば、周辺に棲息するモンスタアの情報を集め、商隊や旅人に危険地帯を教え、注意喚起を促し、あるいは経路の相談に応じるなど案内所のようになっていた支部や、モンスタアではなく普通の猪だの鹿だのが畑を荒らすからどうにかしてくれ、という冒険者依頼が貼りだされているような平和な支部もあった。

もちろん、ギルド本部と同じく、周辺の冒険者——というか半ば傭兵だが——を集め、種々の依頼を出している場所もあったが。

では、この街に存在する支部は、どういった役割を担っているのか。

それは、魔石製品の交易を中心とした、オラリオに関係する事項の管理だった。

この街がオラリオの海の玄関口なら、ギルド支部はその受付窓口というわけだ。

本部が司っている都市運営、冒険者およびダンジョンの管理、魔石や迷宮資源の売買の中で言えば、最後の売買だけにしか関与していない。

では、都市運営を担っているのはどこか。

そちらも、別に変ったことはない。多くの街と同じく、当主が統治しているというだけの話だ。

名前は……確かマードック家とか言ったか。街の開闢から今現在までモンスターの脅威に晒されながらも、ギルドに自治権を明け渡していない剛の者だ

とはいえ、気迫だけでモンスターどもを追い払えたら誰も苦労しない。自治を保つには、武力——少なくともモンスターに対抗するための戦力がどうしても必要となる。

それもまた、別に何もおかしなことはない。元より戦力——軍事は独立自治を保つための絶対条件なのだから。

この街においてそれを担っているのが、漁師たちを統括する【ニヨルズ・ファミリア】である。

水辺は彼らの縄張りだと思っておけばいい——とは、アイシヤの言だが……つまり

は、冒険者及びダンジョンの管理に相当する部分はここが受け持っている。

もちろん、ダンジョンがあるわけではないので、迷宮管理というのはあり得ない。モンスター対策とでも言い換えれば、少しは分かりやすくなるだろう。

モンスターが跋扈する湖や外洋で漁をするなら、『神の恩恵』^{ファールナ}はほぼ必須となる。海神であるニオルズとその眷属たちが勢力として頭角を現すのは、むしろ必然だった。

加えて、彼らは都市外の派閥であるため、原則的にギルドの制御を受ける必要がない。実際、歴代当主がよほどの人徳者なのか、それともギルドによほど人望がないのか、彼らは長年に渡ってマードック家に肩入れしている。マードック家以下この街の住人にとっては英雄同然。逆にギルドにとってこの派閥は目の上の瘤といったところか。

(まあ、港町で水夫や漁師が力を持つのは当然だろうな)

オラリオで冒険者が幅を利かしているのと、本質的には大差ない。

この街を最も潤しているのが船乗りたち、というだけの話なのだから。もつとも、彼らもまた実質的にはただの一派閥に過ぎない。

それも、オラリオで幅を利かせている派閥と違い、あくまで漁業に特化している。派閥というより、漁師たちの共同体といった方が適切だろう。

その性質上、所属する人数だけで見ればシャクテイ達にも迫る勢いらしいが、それだけだ。別にマードック家の私兵というわけではない。そもそも、戦闘自体が専門外とな

る。

まあ、もとより屈強な体を求められる船乗りたちが『神の恩恵』を得たなら、外のゴブリン——いや、この街ならレイダーフィツシュ辺りを例に挙げるべきか——を追い払うくらいは造作もないだろう。……群れでさえなければ。

（あとは、商人どもか……）

もつとも、これは特別視する必要もない。

何しろ文明圏において、こいつらが幅を利かせていない場所を探す方が難しいのだから。

だが、あえて言うならこちらも二分ないし三分割されているようだ。

何度でもいうが、この街はオラリオと諸外国の交易の拠点の一つだ。海路を使用する商会はほぼすべてこの街にも関係してくるといっていい。

その中には、ギルドの息がかかったものも存在するし、代々マードック家と友好関係にあるものも存在する。さらに、新規に参入した者たちも影響力を持つとうと画策しており、こちらはこちらで日々縄張り争いを繰り返している——と、いうわけだ。

まあ、聞きかじっただけの知識なので、多少ならず誤解している部分があるかもしれないが……要するにオラリオではギルドが一手に担っている都市運営、モンスター対策、魔石売買をそれぞれ別の勢力が担っていると考えておけば概ね間違いないだろう。

しかも——

(ま、反発されるだろうな)

三勢力の中で、ギルドだけが余所者だった。

しかも、この街を潤す『金』は魔石^{キルド}売買^ドだけがもたらしているわけではない。

マードック家と「ニヨルズ・ファミリア」だけでも、ある程度の収入は維持できる。

もちろん、昔から大幅に投資して云々と、ギルドにも言い分はあるようだが……それはギルド側の都合でもある。それを盾に強権を振るえば反発されるのは至極当然の結果だ。

(ウラノスが直接運営しているなら、また話は変わるんだろうが……)

実際には、ウラノスはほぼ組織運営に口を出さない。

ギルドを統括しているのはギルド長……何とかいう老エルフだが、こいつは権威主義、拜金主義、血統主義と三役揃えた清々しいまでの俗物だった。

いや、そのエルフ^{血統}からも『エルフの恥』呼ばわりされているのでより極まっている。(あのオッサン、冒険者じゃない俺まで支配できると思ってる節があるから……)

俺が取引を交わしているのはウラノスとガネーシャであって、ギルドではないというのに。

ウラノスが渡してくる報酬はギルドの金だから、まったく無関係とも言い難いが……

しかし、そもそも冒険者登録していない俺がギルドに従う理由はない。少なくとも、理屈の上では。

ダンジョンの出入りは——確かに特例扱いだが——ウラノスから直接許可が出ている。

それに伴い『特例』として魔石や迷宮資源の買取はしてもらっているが、それはむしろギルドからの要望に従っているに過ぎない。

（ソウルに放り込んでおけば没収される事もないしな）

最初の頃、そうやって持ち出した『下層』や『深層』由来の魔石や迷宮資源を闇市で叩き売りしていたのがよほど堪えたらしい。

ちなみに、それに関しては相応に罰金を科せられた。そして、すでに全額払い終えている。

と、それはともかく。

迷宮資源の売買に関しても『特例』として、冒険者と同等の権利と義務が課せられている。

つまり、魔石の換金はギルドで。それ以外についても、できればギルド。そうでなくても、信頼がおける正規の派閥での売却を——と、言うわけだ。

俺とギルドの繋がりはまだそれだけだ。それだけなのだが……、

(それからしつこく面倒な冒険者依頼^{クエスト}を押し付けようとしやがるし……)
もちろん、向こうにだって言い分はあるだろう。

だが、それを加味したところで押し付け方が実に嫌らしい。

直接依頼してくるなら突っぱねようもある。だが、向こうもそれは百も承知らしく、シャクティ達を経由してくる。彼女たちも一応仕分けしてくれているようだが……逆に言えば、届くのは彼女たちが必要と判断した依頼ということになる。

具体的に言えば、下手に突っぱねると何らかの被害ないし犠牲者が出かねない。

(まったく、失礼な話だ)

いくら俺だって、その類のものなら仮にあの老エルフが直接頼みに来たところで易々と無下にはしないというのに。……まあ、それでも多少余計に吹っ掛けはするだろうが。

(あいつら、実はグルなんじゃないだろうか?)

いい加減締め上げたいところだが……しかし、相手は都市運営に携わる権力者だ。いくらオラリオが腕っぷしがものを言う街だからと言って、そう簡単にメていい相手ではない。そんなことをしては本物の無法地帯になり果てるだろう。いや、暗黒期とやらが再来するというべきか。

それに、ウラノス公認とはいえ俺がダンジョンから利益を得ているのは事実である。

冒険者の真似事をして以上、を全く無視されては向こうの立場がないというのも確かだろう。

ギルドの権威失墜がオラリオの治安悪化に繋がるとなれば、こちらとしても問答無用で全てを突っぱねるのは躊躇われる。

つまるところ、これからもオラリオに留まる以上、程よく押んでおく必要があるわけだ。

……まあ、その辺をまんまと付け込まれている節もあるが、こればかりはどうしようもなかった。

閑話休題。

そんな奴が首魁をやっている以上、自分ギルドに服従しないこの街に対してあの手この手で嫌がらせをするのは火を見るより明らかだ。

今までちらほらと耳にした話からすると、一番痛いのが関税らしい。

（そりやそうだろうな）

ただでさえ漁獲量が減っているのに、最大の取引先に買い叩かれてはかなわない。

かくして、千年に渡りマードック家とギルドは犬猿の仲というわけだ。

いや、それはこの際どうでもいいのだが――

（こんな状況で、一体どうやって立て直したんだ？）

胸中に浮かんでいるのは、実に素朴な疑問だった。

この街の窮状は概ねモンスターが原因だ。改善するには、少なくともモンスターどもを減らすしかないが……この状況ではギルドが手助けをするはずもない。

オラリオの冒険者が外に出るのは容易ではないから、当主が個人的にどこぞの派閥に依頼した、という事もないだろう。

大体、ギルドないし派閥の協力を得たなら、そいつらがうろついていなければおかしい。仮に常駐していいにしても、多少ならず街の噂になるはずだ。この街に限らず、オラリオでもだ。

しかし、今のところ一切見かけないし、そういった話もついで聞いていない。
[しいて言えば「ポセイドン・ファミリア」がどうこう聞くが……]

それは、彼らが常駐してくれなくなったせいで悪化したという話でしかない。
状況の改善にこの派閥が関わっていないのは明らかだ。

と、するなら――

(まあ、弛まぬ努力つてやつかな)

ダンジョンの中と違って、壁や床から無尽蔵に湧いて出てくる訳ではない。

通常の動物と同じ形で繁殖するなら、それより早く狩り続ければ数も減るだろう。

普通の動物とは違うが……まあ、ロスリックではデーモンまでが滅びていたのだから

ら。

（……もつとも、あれは別に人間が乱獲した結果つて訳でもないはずだが）

いや、闇の子——その母体である深淵が『人の力』だというなら、あながち無関係でもない。

それに、最後の生き残り……『デーモンの老王』たちを殺したのは俺たち^間だ。

まあ、それはともかく。

そのニオルズという神がいつ下界に降りてきたかは知らないが……少なくともこの街は、開闢以来ずっとこの湖とともに生きてきたのだ。

余所者の俺には思いもつかない手段を用いたとしても驚かない——

——と、その瞬間。とっさにアイシヤを抱えて、その場を飛び退いていた。

その後を追うように特大の縄のような何か水面を突き破つて襲い掛かってくる。

「大海蛇……？ いや、違う——!？」

アイシヤが呻いた。

蛇ではない。これは巨大な植物だ。

「食人花^{ワイオラス}だど？」

怪物祭やリヴィラの街で姿を見せた仇花……どこぞの小人達が言うところの『新種』

だった。

そいつらが、暗い湖面から鎌首をもたげている。

数は三体。この程度なら、別に問題にはならないが――

着地を待たず、預かっていた大朴刀をソウルから取り出してアイシャに手渡す。

その頃には、彼女は腕をすり抜けて食人花ヴィオラスへと飛び掛かっていた。

「はああッ！」

まだ「ステイタス」が機能しているとはいえ、Lv. 3のアイシャ一人では少し手ごわい相手だ。

そうでなくとも、お互いに素性を誤魔化している身。誰かに見られるのは好ましくない。

手早く済ませるとしよう。

「アイシャの真似――と、いうわけではないが。」

カタリナの英雄たちも愛用した特大剣――ツヴァイヘンダーを取り出して両手で構える。

わざわざ間合いを詰める必要はない。アイシャにじゃれついている奴以外は、こちら

に向かつてきている。

まだ水中に伏兵がいては面倒だ。最も内陸側の一体に狙いを絞り、体ごと振り回すような横薙ぎの一撃を叩き込む。

『ウヴオオオ——！』

顔面——『花』を叩ききられ、割鐘の悲鳴を上げるその雑草に、素早く【大火球】を打ち込む。

大声など挙げられては人が寄ってくるかもしれない。そうならば、色々と面倒だ。

炎に包まれ悶える雑草を巻き込むように、もう一体が突撃してきた。

盾もないのにまともに迎え撃つ気はない。横に飛び退きやり過ぎしてから、無防備になった胴体——だか茎だか——に両手で構えた特大剣を振り下ろす。

鋭さと重量を兼ね備えたその刃は、薪まきを割るような容易さでその茎を両断した。

思い描くのは、炎の憧憬。偉大なる王を裏切った都が遺し、とある魔術師を魅了した炎。

すなわち【罪の炎】。

収束する劫火は、のたうつ食人花ヴァイオラスどもをたやすく飲み込み、断末魔の悲鳴すら許さず

に焼滅させた。

「さっさとくたばりなツ！」

その頃には、アイシヤもまた食人花との戦闘を終えようとしていた。

もちろん、今のアイシヤなら一対一で負けることはないとは思っていたが……思ったよりも戦闘の展開が早い。

(いきなり実戦投入とはね)

その理由もはつきりしている。

何しろ、アイシヤの体からは深紅の陽炎が立ち上っていた。

間違いなく「内なる大力」だ。

それを食人花相手にいきなり試すとは、相変わらず見事な度胸だ。

それこそ、少し心配になるほどに。

(ヤバくなったらすぐに援護に入るとしよう)

伏兵の気配に注意を払いながら、ひとまずソウルから万能薬を取り出しておく。

モンスターの攻撃を受ければ、当然ながら体の自壊はさらに加速する。

普段なら耐え凌げるはずの一撃が致命傷になったのは一度や二度ではなかった。

「つたく……」

幸いというべきか、当然というべきか。

ともあれ、アイシャの生命が燃え尽きる前に食人花（ワイオラス）が息絶えた。

……そして、伏兵の気配はない。

「これは本当に多用できないね」

放つてやった万能薬を一気に飲み干してから、アイシャが毒づく。

時間にして二八秒。定めた上限ギリギリといったところか。

「まあな。最後の切り札にするよりは、強襲して速攻で片をつけるために使うべきだろう」

防御は考慮しないどころか積極的に投げ捨てていくという、清々しいまでの攻撃特化。

どう考えても長期戦には向かない呪術だった。

とはいえ――

「焦ると別の意味で命に関わるけどな」

「だろうね。ただ突つ立つてるだけで体にガタが来るつてのに、攻撃まで喰らった日には最悪、そのまま死んじまいそうだ」

勝負を焦つて突つ込んで反撃を喰らった日には最悪、一撃で篝火（即死）送りだ。

それを実感したのか、アイシャも体の調子を確かめながら呻く。

「しかし、何だつてこいつら、こんなところにいるんだ？」

燃え残った食人花ヴイオラスの魔石を拾い上げて呟く。

似たような姿の別種——と、本気でそう思っていた訳ではないが……、
(もしそうだったなら、単なる土産話で済ませられたんだがな)

流石にこいつらとなると、無視もできない。

(また面倒なことになりそうだな)

まさか野生という事もあるまい。一体何故この街に巣くつているのか。
「へえ。本当に気味の悪い色をしてるね」

自分で仕留めた食人花ヴイオラスの魔石を摘出して、アイシャが言った。

「ああ。イシュタルは何も言わなかったのか?」

問いかける頃には、食人花ヴイオラスの体はすっかり灰となっていた。

石ころ一つ取り出すだけで灰になってくれるというのは、本当に楽でいい。

「少なくとも私は聞いた事がないね」

あつさりと肩をすくめてから、逆に訊ねてきた。

「闇派閥イヴイルスどもがああのモンスターの飼主だつてのかい?」

「今のところ、そう考えられてはいるが……」

しかし、それはそれで違和感がある。

四年前、シャクティ達に押し付けられて何度かその闇派閥イヴイルスとやらと殺しあった事があ

る。……あるが、どこぞの飲食店店員が大暴れしたのがとどめとなり、どいつもこいつも、もはや虫の息もいところだった。

実際、シヤクテイ達が討伐に乗り出したのも、現在の脅威を取り除くというより、過去の悪行のツケを支払わせるためだ。

もちろん、連中とて起死回生を企んでいただろうが……主力を軒並み失い、最盛期にはそれなりにあつたらしい連携も完全に失っていた連中など、まさに烏合の衆そのものの。

当時の俺にとつても、さほど脅威ではなかった。

（あいつらが、新種のモンスターを生み出せるとは思えないな）

ダンジョンで時折生じる『強化種』なら、まだ可能だろう。

だが、魔石そのものを変質させられるとは思えない。

と、なると――

（あの女……）

ハシャーナを殺した赤髪の女を思い出す。

ワイオラス
食人花を従えていた彼女は、どう考えても真つ当な人間ではない。

また、フェルズたちがいうところの『宝玉』の番人だと考えていいだろう。

そして、その『宝玉』がモンスターを変質させる……そう、例えば五九階層でさらな

る変容をしつつあったあの怪物を生み出すとするなら——

(上役がいるな)

イヴイルス 闇派閥残党は下つ端。連中に『新種』を提供している何者がいると見ていい。

例の赤髪の女はそちらの戦力だろう。

(だが、そうなると……)

あの闇霊もそこに与している可能性を考慮する必要がある。

そして、それはあまり喜ばしい事ではなかった。

イヴイルス (闇派閥関係はこの『時代』の脅威、とは言つていられなくなるな)

特にあの闇霊は、今の俺よりもはるかに手練れだ。

冒険者では、例えばオツタルでも一人では手に負えまい。

数で圧倒すればいいだろうが……はてさて、何人が道ずれにされることか。

(それに、一度や二度殺したくらいで墮ちるようなタマでもないだろうな)

もちろん、亡者化したから安全になるわけでもない。手当たり次第に襲つてくる亡者の方が、考え方によっては遥かに厄介だろう。

完全に殺しきるまで、一体どれだけの死人が出るか見当もつかない。

(やれやれ……)

この機会に少しこの街を調べてみるべきか。

いや、しかし——

「そういうや、噂の殺人犯ってのはいい女だったらしいね？」

……誰から聞いた。

いや、歓楽街の中核にいたアイシヤならどこで耳にしても驚きはしないが。

「あんたって奴は本当に……」

「いや、待て!？」

確かにいい女だったが。

別にだから探そうとしているわけでは断じてない。

「別にそういう理由で探しているわけでは——」

アイシヤの視線に負け、徐々に口ごもる。

……：我ながら、あまりの説得力のなさに驚きを隠せなかった。

「ええと……」

これは、別の機会を待つべきだろうか。

そこまで余裕があるわけでもないのは百も承知だが、割と本気でそれを検討している自分に気づいていた。

「冗談さ」

アイシヤが苦笑した。

「別に〔象神アンクーシヤの杖〕に毒されたわけじゃないけど……流石にあんな化け物を野放しにしておく趣味はないよ。それに、どうやらこれもイシユタルの『置き土産』の一つみたいだしね」

「あの女神がどこまで関わっているかは知れたものじゃないがな」

出資者の一人。

本人や取り巻きどもの様子から察するに精々その程度のもんだろう。

（結局、闇霊の一人も出て来やしなかったしな）

アイシヤ達の本拠地ホムに攻め込むに際して、あるいは神罰同盟とやらを追い回している時にも、一番警戒していたのは闇霊やあの赤髪の女の乱入だった。

だが、結局そのどちらもなかった。

となると、あの美人たちにとって、イシユタルとその取り巻きは切り捨ててもいい程度のものであったと推測できる。

（闇派閥端の金蔓だからな）

いや、あちらの組織図はまだはつきりとしなが。

だが、いずれにしてもイシユタルが中核に食い込んでいたとは考えづらい。

それどころか――

（むしろ、口封じに使われたか）

結局、神罰同盟とやらが『殺生石』をどこで知ったのかははつきりしなかった。

誰かが唆したのは間違いないが……しかし、それはいったい何者なのか。

（今のところ、アン・デイルが最有力だが……）

イシユタルとその取り巻きまで含めて『試練』だったというだけの話かもしれない。

だが、こう、何となく違和感がないでもなかった。

「そんなことは、調べていけば勝手に分かるさ」

「そりゃ、そうだ」

あまりの正論の前に、肩をすくめるくらいしかできる事はなかった。

「つと、流石に騒ぎすぎたね」

「そうだな」

騒ぎを察した漁師たちが、押っ取り刀で駆け寄ってくる。

見つかっては面倒だ。早々にこの場からお暇するとしよう。

……

幸い、それから漁師たちに捕まることも、ヴィオラス食人花の飼い主どもに襲われることもなく、

宿まで帰り着いた。

ここまでの道中でも可能な限り警戒してきたから、尾行の心配もないだろう。

「それにしても、奴らどつから出てきたんだらうね？」

部屋に戻り、戸締りを確認してからアイシャが言う。

「どう考えても迷宮外そとで生まれた奴らじゃない。ダンジョンで生まれた本物の怪物だ」
「そうだな」

いや、あの雑草どもはダンジョンが生み出したモンスターかどうかからして怪しいが。

「オラリオはダンジョンの真上にあるんだ。どうにかして連れ出せるかもしれないけど……いや、地上に連れ出す方が大変かね？」

「どちらかといえばそうだろうな。モンスターの売買には専門経路がある」
剣闘用のモンスターの半数は都市外そとから連れ込まれたものだ。

流石に詳しくは知らないが、専門の流通経路があるのは疑いない。

ならば、あとはいくら積むかの問題でしかないだろう。

ただ――

「何だつてこの街に運び込まれたんだ？」

「そりゃ……まあ、ここは交易の要だしね。どこぞの『怪物趣味』の奴向けに密輸しようとしたのが逃げ出したつてところじゃないかい？」

アイシャの言う『怪物趣味』というのは、簡単に言えばモンスターに欲情を感じる異常性癖だ。

その性質上、獣姦よりも忌避されている。

（相手による気もするけどな）

俺も——別に欲情を感じたりはしないが——例えば、一角獣^{ユニコーン}辺りは綺麗な獣だと思
う。他にドラゴンやグリフォンあたりはここでも紋章としてしばしば用いられている
はずだ。

それに——

（レイとかファイアとかラーニエとかはごく普通に美人だよな）

顔見知りのゼノスたちを思い浮かべる。

と、いうより。リド達と行動を共にしているゼノスは総じて美形だと思う。

少なくとも、モンスターらしい醜悪さは感じられない。

（そう思う俺も『怪物趣味』とやらなのか？）

声に出さないまま、笑い飛ばす。

少なくとも、彼女たちが嫌悪される理由など思いつかなかった。

そもそも、ここは獣の耳と尻尾を生やした獣人がごく当たり前前に存在する世界なの
だ。

それが鱗や翼に変わったから何だというのだろう。

と、それはともかく。

「いや、だが。いくらなんでもあいつらは狂暴すぎるだろう?」
「そんなこと、私に言われてもねえ」

窓辺に置かれた安楽椅子を軋ませながら、アイシャがあつさりと肩をすくめる。
まあ、それはそうだろうが。

言われてみれば、どこぞの金持ちが豹だの獅子だのを飼っていると聞いた事があつた
気もする。

「もう一つの可能性としては、湖底の封印が解けたか……」

ロログ湖の湖底には、ダンジョンに通じるもう一つの出入り口があるらしい。

ウラノスが祈禱を捧げる神蓋パベルから離れたこの場所の封印が完成したのは何とたった
一五年前のことらしい。

もちろん、それより前から封印はされていたらしいが——

(そりや、海中モンスターで溢れるだろうな)

千年間、ウラノスや他の冒険者連中が絶えず睨みを利かせていた地上オの出入り口リより
はいくらか抜け出しやすい場所だったというわけだ。

「流石にそんなことになっていけばウラノスが騒ぎそうだが……」

とは思いますが、実際のところどこまで『目』が届いているか定かではない。

案外感づいていない可能性もある。

とはいえ——

「だが、潜つて確かめにいく訳にもいかないしな」

別に金づちという訳でもないが、とても地上のようにには戦えない。

大体、鎧を着込んでいる人間にとつて、水中なんて死の世界とほぼ同義だ。

「そうだねえ。『潜水』の発展アビリティでもありやいいんだけど。もしくは、『水精霊の護布』^{ウンディネクロス}でも着込むか」

「本気で一枚くらい買つておけば良かったな」

とはいえ、水中戦など心得がない。ダンジョン内の水場——例えば、二五から二七階層辺り——に落ちれば、溺れなくてもほぼ間違ひなく殺される。

これまで通り、落ちないように気を付けるべきであり、それで済むならわざわざ護布を用意する必要もない。

「私は持つてるよ。『下層』の入り口だけじゃなくて水に関わる冒険者依頼^{クエスト}には必需品だからね」

ああ、それが本当の水商売か——と、あまりにつまらない冗談をつい思い浮かべてしまった。

「とはいえ、ここには持つてきてないけどね。流星にそこまで本格的な水遊び^{スイギ}は想定してなかった」

自責の念に責め苛まれていると、アイシヤが肩をすくめる。

「そうだろうな」

本拠地ホトムから逃げ出す際、アイシヤ達の私物もある程度持ち出している。

それらは今、俺が拠点としている館に用意したアイシヤの私室——と、言ってもほとんど使っていないが——にあるので、どのみちすぐには使えない。

「まあ、この街なら買って買えないことはないだろうけど……」

それはそうだろう。発展アビリティとやらが発現するのはL v. 2から。

L v. 1の漁師にとってはほぼ必需品。少なくとも、身に着けていて損はない代物だ。

探せば取り扱っている店の一つくらいは見つかるだろう。

ただ——

「……流石に悪目立ちしそうだな」

浅瀬で水遊びするにはどう考えても過分な代物だ。

羽振りの良い豪商ならまだしも、一介の旅行者が買うとなるといささか不自然な話となる。

ただでさえ身分を偽っている身だ。可能な限り目立つ真似はしたくない。

「それが駄目なら、それこそ『ニョルズ・ファミリア』の協力を仰ぐしかないだろうね。

連中なら、ウンディーネ・クロスか『潜水』の発展アビリティはほぼ必須だろうし」
 鍛冶師スミスが『鍛冶』の発展アビリティを持つてると同じさ——と、アイシャ。

「その方が無難かな」

もし何者かが食人花ワイオラスを持ち込んでいるなら、いくら『神の恩恵』ファルナを宿しているとはいへ、漁師たちでは荷が重い。……と、思う。

水夫というのは総じて屈強な体つきをしているので、いまひとつ自信がないが。

（何であれ、専門家の助けがあつた方が楽だろうしな）

その「ニヨルズ・ファミリア」なら、土地勘もあれば人脈もある。

俺たち二人でこそこそ嗅ぎまわるよりよほど効率的だろう。

ただ——

（問題は、俺達がその「ニヨルズ・ファミリア」への伝手がないんだよな）

いや、探せばアイシャの『客』だった奴もいるかも知れないが。

それだけでは協力を仰ぐことは流石にできない。

特に今の俺達は限りなく『お尋ね者』に近いのだから。

それに——

「いきなりそれを申し込みに行くのはお勧めしないね」

「ああ、分つてるよ」

水辺は彼らの縄張り——と、アイシャから教わったことを改めて思い出す。

もしあれが『密輸品』だったとするなら、「ニョルズ・ファミリア」が関与している可能性は極めて高くなる。のこのこと協力を仰ぎに行けば、そのまま湖底に沈められかねない。

（まあ、俺は別にそれでも困らないが）

篝火を確保している今なら、手段としては決して悪くはない。

何しろ、この上なく明確な証拠が得られるのだから。

もつとも、それを実行するなら、まずはアイシャの安全を確保してからだが。

「ま、その辺の判断は明日の街の様子を見てからでも遅くないだろうね」

「そうだな」

漁師町の朝というのは総じて早いと聞く。

明日の昼頃には、相応に街の話題になっているはずだ。

「さて、と。それじゃ今日はそろそろ寝るとしようか」

安楽椅子から立ち上がり、アイシャが言った。

「そうだな。流石に疲れた」

水浴びならともかく、泳ぐなんていったいいつ以来だろうか。

……いや、それを言うなら遊樂を楽しむこと自体が。

「慣れないことをするってのは疲れるものだな」

「はっ！ 何言ってるんだか。明日も連れまわしてやるから覚悟しな」

それは、今から覚悟しておかねばなるまい。

俺^{不死人}たちにとって生など持て余すばかりの代物だ。

それを謳歌する術など、もはや何一つ覚えていないのだから。

「さ、おいで。あなた」

そういえば、そういう『設定』だったか。

寝台^{ベッド}に座り、両手を広げて笑うアイシャにふと思いつく。

「たっぷり可愛がつてあげるよ？」

まあ、何というか……。

どんな設定であれ、攻めの姿勢を崩さない辺り、流星はアマゾネスと言うべきなのだろう。

3

灰に煙るダンジョンの広間^{ホールム}。

茫漠たる闇の中を剣閃が奔り、血飛沫とともに竜の首が落ちる。

それより早く翻り、黒犀の巨軀が左右に断ち切られた。

流れるような連撃。

いや、二の太刀要らずの劍戟が繰り広げる連殺には、得も言われぬ美しさすらあつた。「ああ、まったく。獣の血ばかりでは張り合いがない」

口では嘆きながらも、その人斬りの刃が止まることはない。

何かを斬ることに無上の歓びを感じる。この男はそういうものだ。

断末魔の叫びすら許さない死の刃は、血を吸うほどに切れ味を増していくようにすら見えた。

「嫌なら引つ込んでいろ」

忌々しいが、劍の扱いに関して言えば学ぶべきことがまだ多い。

その体捌きを真似るようにして、竜どもを屠っていく。

啼いては途絶え。啼いては途絶え。

……この人斬りのように、無言で殺すにはまだ至らない。

「いやいや。そうはいくまい。姫君に皮剥ぎ人の真似事をさせるなど、武人の名折れよ」
灰に埋もれた魔石を拾い上げては噛み砕いていると人斬りが笑う。

「誰が武人だ」

この人斬りはそんな気取つたものではない。

……もつとも、その武人とやらも所詮は殺しを鬻ぐ同類でしかないが。

「しかし、せめてもう少し活きのいいものを用意してもらいたいところよ。これではただの屠殺ではないか」

「なら、いつも通り狩りにいけばいいだろう」

いつもであれば、猫のような気まぐれきでいなくなつては、ダンジョンのどこかで活きのいい獲物を思う存分に斬り刻んでいるはずだ。

それがモンスターか、それとも冒険者か（間）は私が知つたことではないが。

「む？ そなたがここに留まるよう言つたのではないのか？」

「……何の話だ？」

本人は姫君などと呼ぶが、そんなものはただの戯言だ。

実際には別に私が従えているわけではない。……従えているわけではないが。

「近々出陣の下知があると聞いたのだが。先だつての『アリア』とかいう娘たちが近々五九階層にくるのであろう？」

しかし、私が指示しない限り、勝手気ままに動き回るといふのが現実だった。

「それはそうだが……」

逆に言うなら、私の名を出せばある程度動きを制御できるという事にもなるが――

「私はよく知らぬが、あの異形にとって貴重な『餌』なのだろう。邪魔な取り巻きを始末しつつ、娘だけは五九階層に導けとそういう事なのではないのか？」

それを誰から聞いた？——と、尋ねるより早く、

『ソウダ』

様々な肉声が重なり合った、薄気味悪い声が出た。

男のようでもあり、女のようでもあるその声が出た方へと視線を転じる。

紫紺の外フレッドローブ套を身にまとい、不気味な紋様が施された人影がいた。

『剣姫』達ハ既ニ『深層』ニ向カツタ。何故動カナイ』

苗床プラント——冒険者どもに合わせて言えば、食糧庫パントリーで対峙しておよそ半月ほどか。思った

より早い——とも感じるが、その一方でずいぶんと時間をかけたとも思う。

とはいえ。こちらの準備はまだ整っていない以上は、思ったより早いといふべきなの

だろう。

「お前も知っているだろう。この体は酷く燃費が悪い」

そこに加えて、苗床プラントでの一戦では、『アリア』のランクアップと人斬りの『同類』とい

う二つの要因から、想定を大きく上回るほどの消耗を強いられた。

『アリア』達から貰った傷も深い。私は休む」

散乱していた魔石を一通り平らげ、次の食事へと手を伸ばす。

あれからだいぶ魔石を喰らったが、まだ気怠さが抜けない。

「こや、面目なこ」

カラカラと声を上げて人斬りが言葉だけの謝罪をする。

「まさかこのような場所でファランの剣士と剣を交えられるとは思っておらなくてな。ついはしやいでした」

この人斬りと互角かそれ以上に渡り合えるのだから、あのファランの剣士とやらは厄介だ。

少なくとも、今の私では勝てまい。

（人間とは見た目によらないものだな）

見た目で言えば、草臥れて冴えない中年——リヴィラの街で管を巻いている凡百の冒険者どもと大差ないというのに。

「しかし、聞いての通り我が姫君はまだ不調の様子。無理強いをさせるとあれば、いかにエイン殿と言えど、黙ってはおれんな」

それは、いつも通りの口調だ。特別殺気立ったわけでもない。

だが、この人斬りはそのまま誰かを斬り殺せる相手である。

この男にとって、それは息をするようなものなのだから。

『……エニユオ神 エニユオ二逆ラウツモリカ』

エイン仮面がそれを知らないはずもない。

精一杯の負け惜しみを口にする。

「無論。別に私はそれに仕えているわけではないからな」

言うまでもないが、人斬りは最初から抜刀している。

あとはこの男が、その気になるかどうか。

そして、その気になった時点で仮面エイメンの命は終わりを迎える。

「それに協力なら既にしているであろう。そろそろ自ら動かれてはいかがかな？」

この人斬りの誓約とやらがもたらすあの赤い宝玉の事だろう。

確かに、話を聞くだけでも厄介な代物だった。

『ツ……………』

ほんの一瞬だけ、仮面エイメンが殺気にも似た怒気を放つ。

だが、そんなものは自分の死を呼び込むだけのものだと分かっているだろう。

即座に霧散させると、舌打ちを一つ残して立ち去る。

「ふむ…………。勝手に応じてしまったが、これでよかったか？」

充分に気配が遠のいてから、人斬りが問いかけてくる。

「構わん。奴等が私達を利用するのは勝手だ。その代わり、私達も勝手に動く」

「なれば良かった。ああ、好きに動けるといいうのは実に良い。彼奴等の思惑に従うまま

では、折角の死合もつまらんからなあ」

「別にお前を楽しませるためではない」

と、言っても無駄だろうが。

嘆息するより先に、ヴィオラス食人花どもが新たなモンスターを運んでくる。

「さて。では、気を取り直して我が姫君の慰安に努めるとしようか」

そして、再び人斬りの刃が闇に鈍く煌めいた。

……

「巡回兵より報告！ 五〇階層に侵入者です！」

その一言に、砦に緊張が走った。

「何者か？」

周りの者どもを鎮めるのは別の者に任せ、先を促す。

「ロキ・ファミア」の旗印を確認したとのことです！」

「また奴等か!？」

その報告に、宥め役の一人があっさりと憤激した。

どうにもこやつは、将らしい立ち振る舞いが身につかない。

「ええい！ 何度も何度も我らが領土を脅かしおつて！ またしばらく民草が安らかに

眠れぬ日々が続くではないか！」

武人としてみれば有能なのだが……何であれ、感情的すぎる。

もつとも、その激情こそが勇猛さを支えているとも言えるが。

「それで、彼奴らの動きは如何様か？」

その猛將を宥めてから、別の者が冷静に問いかけた。

「現在、五一階層へ続く道の途中に野営地を築いております」

「で、あれば今まで通りか」

「だが！ 着実に奴等はここに近づいておる！ ただでさえ数で劣るというのに、背後から襲われては流石にかなわんぞ！」

その言葉には一理ある。

騎士団など見栄を張っているが、その規模は辛うじて連隊と呼べるかどうか。

数の上では騎士団どころか大規模な野盜の群れにも劣りかねなかつた。

……もつとも、少数精銳が基本となるこの『時代』らしい編成とも言えるのだろうか。
(つくづく手勢が足りんな)

しかし、この広大な巡礼地を戦場とするなら、この程度の人数では全く足りない。

だが、ゼノスが誕生する確率はまだ決して高くはない。それらと生きて合流できる可能性まで含めれば、人員の確保は困難を極めるのは言うまでもない。

感情的なものとは全く無関係に、歩兵一人と言えど無駄死にはさせられないのが現状だ。

(あちらは兵力が整いつつあるというのに……)

少なくとも兵数で言えば、あちらが一枚上手だった。

今のところ質では辛うじて勝っているが……それとて、主力がほとんど出てこないからだ。

（もつとも、牛頭のデーモンだけでも難敵だがな）

だが、その程度なら、こちらはまだやりようがある。

人数に関しても対処法はあるが、その手法——生み出した異形どもに任せるといっては、とにかく汎用性がない。

それこそ、現状では拠点の守護を任せるか、デーモンにぶつけるくらいなものだろう。その結果、巡礼地の多くがモンスターどもに加えて、デーモンと異形が跋扈する魔境へと変貌しているが、それも致し方ないことだ。

無論、異形作成に関して改善の余地は思いつくが……そちらに避ける時間が限られている。

問題はいくつもあるが、何よりいわゆる『汚れ仕事』を任せられる人材が少なすぎた。……それもまた、らしくもない感傷に邪魔されている面があるのは自覚しているが。

（もし彼奴等に背後から刺されれば、ほぼ間違いなく私たちは壊滅する事になるう）
戦況は膠着状態。余裕などほばないに等しい。

この状況では、たかが冒険者と言えど決して無視できないが——

「ロキ・ファミリア」であれば捨て置き」

下知を下すと、辺りが騒然となった。

「彼奴等の今回の狙いは五九階層にいる異形と見てよい。アレを始末してくれるなら、私たちとしても助かる。そうであらう？」

二四階層の異変にも「ロキ・ファミリア」の者どもは関わっている。

そこで何かしらの情報を得ているのは間違いあるまい。

「それは、そうですが……」

「それに、彼奴等は飢狼の群れも同じ。迂闊に関われば、後々まで続く禍根となろう」
少なくともあの小人にとって、ゼノスの存在は都合が悪い。

遭遇すれば、まず間違いなく皆殺しにされる。私達ではなく、『ウラノス派』——つまり、私たちが庇護し切れていないゼノス達の者たちがだ。

そうなつては、私達も多方面作戦を展開せざるを得なくなる。

……少なくとも、彼奴等への報復が終わるまでは。

(蓄積した不満は限界に近いからな)

もし今度大規模な被害が出れば、まず間違いなく『ウラノス派』は暴走する。

それどころか、この場にいる将兵たちですら。

(しかし、その蛮行を黙認すれば、まず間違いなく士気が維持できまいな)

だが、多方面作戦を展開などすれば、今度は戦力不足が致命的なものとなる。その隙をあの子が見逃すはずがない。

であれば、よほどのことがない限り兵は動かせん。

「それよりも問題となるのは、あの者どもがどう動くかだ」

あの女の手下——いや、同盟者か。

何であれ、あちらにも切れ者がいるのはもはや疑いない。

（私より後の時代を生きたものだろうがな）

あの女と同盟関係にあると思しき連中の兵装には残念ながら見覚えがない。

だが、あちらはこちらが何者か察している節がある。

であれば、そう結論付けていいであろう。

（柄にもなく里心など出すべきではなかったな）

せめて軍旗の意匠だけでも変えておくべきだったのだ、と内心で嘆息する。

「動きますか？」

「私たちが察知している以上、あちらも勘づいているであろうな」

と、なれば全く無視をすることはあるまい。

あちらに戦力を割いてくれるなら、それはそれでいいが……、

（まさかそんな単純なこととはすまいな？）

まだ見ぬ『切れ者』の幻影に問いかける。

その程度の指し手であれば、恐れるに値しない。

(だが、手を打たねば)

彼奴等が不運にも我らの領土を嗅ぎつけてくるやもしれない。

その程度の嫌がらせなら、さしたる手間でもなからう。

「五〇階層領の警備を強化させろ。だが、極力交戦は避けること。そして、万が一交戦を避けられない場合は確実に殲滅することを徹底させろ」

現時点で人間どもと交戦するなら、間違つても目撃者を生かして返すわけにはいかな
い。

「交戦を避ける、ですか？」

「いかにも。今は我らの存在を知られないことが最優先となる」

「では、『ロキ・ファミリア』にはこのまま侵攻を許すと？」

「仕方あるまい」

と、肩をすくめてから続ける。

「貴様らの『悲願』を成就するには、相応の準備がある。忌々しいが、今冒険者どもを襲うのは好ましくない。物事には手順というものがある故な」

情報戦というものだ。

例え彼奴等の蛮行に抗うためであっても、こちらから手出しするのは悪手となる。

彼奴等は自分たちの蛮行を柵に上げ、こちらを糾弾するであろうし、地上の者どももそれを盲信するのは明白である。

「だが、このまま黙って見ている義理もない」

しかし、何かしら手を打たねばこの者たちも納得すまい。

『ウラノス派』の頭目は確かリドと言ったな。そやつと接触して警告するとともに、連携を密にできるような関係を強化せよ」

何であれ、当面の間は『ウラノス派』には今まで通り自衛してもらおうよりなかった。

だが、完全に放任しては互いに乖離していくばかりだ。

ただでさえ数で劣るゼノスたちが二分されている状況は好ましくない。

「また、並行して新たな拠点の発見と、王都の拡張を急ぐよう王に進言しよう。『ウラノス派』の者どもを迎え入れようにも、それができなければ始まらない」

しかし、現実問題として今の私達の領土では彼ら全てを迎え入れられるほど広くなかった。

無論、詰め込めば何とでもなるであろうが……それでは『国』とは言えん。

加えて、話は単純な居住地に限らない。必要な物資や食料にも波及する。

この穴倉の性質上、拡張するだけでも余計な手間がかかるが……拡張すればするだけ

冒険者どもに発見される危険まで高まっていく。

新たな領土を開拓するという手もあるが、充分な広さの場所を確保できるとすれば、近づく冒険者が少ない『深層』領域を最有力候補とするしかない。

開拓作業は困難を伴う。仮に成功したとして、今度はそこに移住させるために部隊を編成しなくてはならない。

いかにゼノスと言えど、全員が『深層』領域のモンスターをまともに相手にできる訳ではない。

領土に関していずれの選択を取るにしても、速やかに秘密裏に安全に移住を成功させる必要があることに変わりはない。であれば、『ウラノス派』の頭目との連携は必須となろう。

(しかし、移住に応じるかどうか……)

彼らが拠点としているのは『下層』から『中層』にかけて。

地上進出を夢見る彼らにとつて、『深層』への移住は悲願に逆行する行為でしかない。

……無論、心情的なものではある。だが、それを全く無視しては立ち行かないのも事実だった。

(意思の統一を図っておかねば、内乱が起こりかねん)

現状でそんな事になれば目も当てられない。

それが武力を伴うかどうかは別にしても、だ。

（だが、これもまた経験か）

少なくとも、ゼノスたちにはまだ本当の『外交』は任せられない。

だが、いずれは自らこなしてもらわなくてはならない。まだどうにか余裕があるうちに、同胞同士で経験を積んでもらうべきだった。

『ウラノス派』との関係強化ですか……。それは、地上との交渉のために？」

その胸の内を見透かしたかのように、伝令が立ち去つてから、とあるゼノスが問いかけてくる。

「いかにも。地上へ移住するには相応の準備が必要だからな」

「そのためにギルドと交渉する、というのは分かりますが……。しかし、認めるのですか？」

「認めさせるのが『外交』というものだ」

そして、今はそのための下準備を行っている段階だ。

……もつとも、そちらに関してはこの二〇年ばかりの間に、ある程度仕上がっている。あとは、仕掛ける機を見極めればいい。

「それに、『説得』するのはウラノスだけでよい。地上にいる他の者どもを納得させるのはウラノスの仕事よ」

ギルドがオラリオの管理支配者者なのは明白である。

で、あるならその頂点にいるウラノスこそがオラリオの『王』である。【ロキ・ファミア】は『有力諸侯』かもしれないが、それだけだ。

ウラノス王が指針覚悟を固めさえすれば、それに逆らうのは『謀反』でしかない。

……もし彼奴等がそれを選ぶなら、それならそれで打つ手はあるが。

「大人数を納得させるには、それができる相手を口説き落とせばよい。これもまた交渉の基本の一つだ。よく覚えておけ」

統括者とはそのためにいる。

それがまともにも機能しているなら、有象無象を個別に説得して回る必要などどこにもない。

機能していないなら――

(それこそ好機)

意思の不一致を起こした烏合の衆など敵ではない。

漬け込み、食い漁るなど容易いことだった。

(オラリオさえ従えれば、この者たちの『悲願』は達成されたも同然だからな)

それもまた、理屈は同じだ。

軍事、経済両面からオラリオは世界を支配している。そこを抑えたなら、逆らえる国

は多くない。

（そのためには、ここで『ロキ・ファミリア』に潰えられては困るのだがな）

何しろ、『ロキ・ファミリア』は『有力諸侯』だ。その影響力は侮れない。

で、あるなら——

（彼奴等は代替え不能な『手札』となる。いや、『糧』というべきか）

その『収穫』は然るべき時に、然るべき場所で、然るべき形で行うべきだった。

……

「ほう、地上の凡夫どもが近づいていると？」

伝令の報告に思わず声を上げていた。

「確認するが、『王狩り』ではないな？」

「はっ。旗印は『ロキ・ファミリア』のものです」

その名には覚えがあった。

地上に存在する最大戦力の片割れ。この『時代』にしては数も充実していると聞く。

「場所は？」

「現在は五〇階層に陣を敷いております」

「ふむ。いつもの『遠征』とやらか……」

地上に放った草からの報告では、その派閥の到達階層は五八階層。

となれば、目的地は五九階層と見るべきか。

(まだ入り口には遠いが……)

七〇階層まで到達するとなれば、無視はできなくなるが……現状ではどういふものでもない。

(さて、一働きしてもらうべきか?)

おそらく【ドラゴン騎士団】の拠点は——あるいは本拠地は——五〇階層辺りに存在する。

彼奴等を唆して、探らせるといふ手もあるが……。

(いや、今からでは仕込めん)

無論、方法が全くないわけでもないが……しかし、【ロキ・ファミリア】となると話は少し面倒だ。

「確か『エニユオ』一派が求めている『餌』が所属しているはずだな？」

「はい。そちらも存在を確認しております」

と、なればここで余計な手出しは『同盟関係』に傷をつける事になりかねない。

(地上の雑事に関わっているだけの余力はまだないな……)

カインハースト家の——と、言ってもその全てではないが——協力により、兵士の数は揃いつつある。

だが、まだ本当の意味で騎士団と呼べるほどの数ではない。

加えて、質もまだ弱兵ばかりと言わざるを得なかった。

（ここは、同盟の維持を優先すべきか）

そもそも地上に「王狩り」が居座っている今、下手に手出しするのは危険だ。

確かに、あの男は力を失っている。それはまず間違いないだろうが……だから安全と言える様な手合いではない。

おおよそ勝ち目などないはずの相手を、悉く討ち滅ぼしてきたが故の「王狩り」だ。

今のままでも、あるいはここまで到達するやもしれない。

そして、地上勢力への手出しはそのきつかけになりかねなかった。

（もっとも、件の派閥とはあまり良い関係ではないはずだがな）

しかし、あの男はしぶんとお優しい。可能性が皆無とまでは言い切れない。

現状でその危険を冒すだけの理由はなかった。

とはいえ、何もしないとあつてはそれこそ『同盟関係』に影響を及ぼしかねない。

と、なれば――

「ここはひとつ、エニユオ一派に恩でも売っておくか」

直接手を下すのは、蜥蜴の尻尾に任せるべきであろう。

無論、まだ『外征騎士』は用意できていないが……方法としては変わらない。

「それなりに育つた牛頭のデーモンを一匹放つておけ。場所は五八階層だ」
前回地上に送られた者どもを曲がりなりにも撃破している。

あの時と同程度のものなら、程よく消耗させる程度で済むと考えてよい。

「一体でよろしいのですか？」

「構わん。とどめは彼奴等に譲る。それもまた義理立てというものだ」

我らが王妃様が先走つたせいで、デーモンの存在はすでに露見している。

それにダンジョンの中で異形に襲われて壊滅しただけなら、あの男とて目の色を変えて飛び込んでくることはない。

不運にもデーモンと遭遇し、蹂躪される。

そんなことは、巡礼地ではよくある話なのだから。

第三節 慘劇。神々の戯れ

1

とある階層のとある未開拓領域。

幾度となく足を運んだその場所に、今日もまた赴いていた。

「よお、フェルズ！ 久しぶりだな！」

その『里』に入ると、陽気なリザードマンが声をかけてくる。

「ああ、リド。変わりないか？」

「おう。二四階層の騒ぎが収まってからはこれと言って何も無いな。例の『番人』にやられた傷も治ったし」

「それは良かった」

ハシャーナに回収を任せた『宝玉』の一件では、リド達——異端児たちにも負傷者が
出ている。今まで気がかりだったが、これで一安心といたところか。

「そーいやフェルズ。クオンが帰ってきてるんだってな？」

四年前、ダンジョンに挑んだ際にあいつはリド達とも遭遇している。

だから、彼らからその名前が出てきたとしても驚きはしない。

「ああ。会ったのか？」

「いや、二ヶ月くらい前にダンジョンにいたらしいけど、その頃オレたち達はちょうど新しい仲間と『里』を探しててな」

冒険者の目を掻い潜るべく、彼らはいくつかの『里』を転々としていた。

いや、それ以上に生まれたばかりの同胞を探して日々ダンジョンを探索している。

何より――

(偶然に遭遇できてしまつては困るか)

クオンならともかく、他の冒険者が相手では目も当てられない。

私が安定して彼らと出会えるのは、あらかじめ眼晶オルクスを使って事前に連絡を入れているからだ。

(それを思えば、あいつは変わり者だな)

四年前、まさに偶然に遭遇したのがクオンだった。

両者の話を聞く限り、互いに全く予期せぬ出会いだつたのは間違いない。

非公式記録樹立の帰りに道に異端児ゼノスとの遭遇するとは、まったく、あいつは本当に大層な大冒険をしてくれたものだ。

(本当に、あいつが変わり者で助かった)

クオンがその気になれば、いかにリド達と言えど壊滅は免れない。

だが、実際にはリド達との接触に限つて言えば平穩なものだったらしい。

『いや、そりやもう強ええの何のつて……。ありもしない肌に鳥肌が立ったぜ』

出会つた時のことを訪ねた際、鱗に覆われた腕をさすつてリドが笑つていたのを覚えて
 いる。

と、それはともかく。

「では、どこから？」

「ついこの前、ドランの連中と出会つてな。そいつから聞いたんだ。他にも……何だっ
 け、【ロキ・ファミリア】とかいうのが暴れ回つてるから気をつけろつてさ」

あいつらが気づく頃にはオレっち達の隠れ里なんてとつくに通り過ぎてるのになー、
 とリド。

「私も彼らと接触できるかな？」

「近いうちにできるかもな。もっと仲良くしようつてさ。あと今、『街』を広くしてるか
 ら、うまくいったら引つ越してきて欲しいつてよ」

でも、あいつらのところに引つ越すと地上が遠くなるしな——と、リドは呟いた。

やはり、ドランという隠れ里——いや、『国』はここより深い階層にあると見てよさそ
 うだ。

(アン・デイルの采配か……)

仲良くしよう——つまり、関係強化を持ち掛けてきたという事だ。

今のところ、結果として異端児^{ゼノス}たちは二分されてしまっている。

彼がその状況を嫌っているのは明らかだ。

（意思の統一を図ると同時に、リド達を持つ地上との繋がりを手中に収めたい、といったところか）

文明という視点で見ればまだ幼い——良くも悪くも純朴な異端児^{ゼノス}達とは全く違う感触。

まさに人間同士の駆け引きがそこにあつた。

（手ごわい相手だろうな）

何しろ、クオンの話では王兄として共に大国を興した実績の持ち主だという。

言うなれば本物の政治家。文句なく本職だ。

そんな大物が指揮を執っている以上、あちらは今の私達以上に明確な『地上への進出計画』を描いていると見るべきだろう。

（せめて、それがどんな内容なのか知りたいところだな）

何しろ、そのアン・デイルという人物はクオンをして狂人と呼ぶ相手でもある。

場合によってはオラリオを更地に変えてから——と、いう発想もあり得た。

（ウラノスではないが、なるべく穏便な関係を築いておきたいものだな）

求めているものは同じはずなのだ。

互いに協力できないとは思いたくなかった。

しかし、それはともかくとして――

（「ロキ・ファミア」だと？）

私の予想通りなら、確かにアン・デイル一派にとっては脅威だろう。

何しろ、彼らの『国』を脅かしうる数少ない勢力なのだ。

警戒するのは分かる。分かるが――

（あくまで『深層』領域に到達できるという視点で見れば、他にもいくつか派閥があるはずだ）

それこそ、同等の場所まで潜れる「フレイヤ・ファミア」も存在する。

たまたま「ロキ・ファミア」が遠征中だから、というだけの話かもしれないが……。

（何か、妙に気になるな……）

かの人物が、あえて名指しで挙げたというのがどうにも気になる。

これはあくまで予感だが、おそらくアン・デイルにとって「ロキ・ファミア」には何か期待している役割があるのではないだろうか。

それが何なのか、政治家ではない私にはまだ今一つ読み切れないが――

（嫌な予感がするな）

クオンが口にした『狂人』という警告を胸に留めておくべきだという事くらいは分かっていた。

2

生臭い風に満ちた、生臭い街の、湿った路地裏からそれを見ていた。

ソウルの気配に惹かれたのか、いきなり暴走し始めた金のなる木^{ツイオラス}どもを一蹴した二人組をだ。

つまらない仕事だと思っただが、なかなかどうして。

(いいねえ、切り刻みたいイイ女だ)

生意気にも呪術を使うアマゾネスを見やり、ほくそ笑む。

傍にいる不死人も、なかなか大量のソウルと人間性をため込んでいると見た。

(つーか、あれが『王狩り』って奴?)

地上にいる不死人となれば、それが最有力だ。

人相書きと少し違うが、それは変装しているからだ。

悪くない腕だが、オレの目は誤魔化せない。

(あの化け物どもがびじるような奴かあ?)

確かにオレよりは多少格上かも知れないが……それでも、そこまで大した奴だとは思

えない。

やり方次第では充分に殺せる。その確信があつた。

(だが、今ここで仕掛けるのは無謀だな)

これ以上近づいたら、確実に察知される。

先ほどの立ち回りから察するに、真正面からの斬り合いでは分が悪い。

今ここで仕掛ければ、まず間違ひなく返り討ちにあうだろう。

(大体、そんな下らねえこととしてられるかよ)

オレは殺し合いが好きなんじゃねえ。殺すのが好きなんだ。

華麗に鮮烈に。そして、一方的に。強え奴がなすすべもなく死んでいくのを見るのが

たまらない。

「ひひっ。楽しくなってきたなあ……」

街へと消えていった二人の背中を遠くから見つめ、小さく嗤つた。

……

メレン滞在四日目の朝。

「それで、どうするんだい?」

朝食を済ませ、いったん部屋に戻つたところでアイシャが言った。

昨夜襲われた食人花^{ヴィオラス}についてどうするのか。彼女が訊いているのはそれだ。

「できるなら、フェルズなりシヤクテイなりに丸投げしたいところだけどな」
 備え付けの小型魔石点火装置で湯を沸かし、これまた備え付けの茶葉を使って紅茶を淹れる。

例によって味はさっぱり分らないが、何となく香りが良いように思えた。

「生憎とお尋ね者もどきだ。そうも言っていられない」

今からオラリオに戻ってギルドないし『アイアム・ガネーシヤ』シヤクテイ達の本地に顔を出そうものなら、確実に面倒なことになる。

かといって、野放しにしておいて他の人間が襲われても寝覚めが悪い。

選択肢は多くない……が、どれを選んでも面倒だった。

(この街のギルドは当てにならない)

この街において、ギルドに与すると思われた時点で、漁師たちの協力を仰ぐのは絶望的となる。

だが、本当にあれが『密輸品』なら漁師たちこそが最有力の容疑者というよりない。つまるところ、ギルドも漁師も味方だとは断言できないのが現状である。

かといって、その双方を相手にこの街で孤軍奮闘するというのはあまりに阿呆な選択だ。

土地勘も伝手もない俺達に大したことができる訳もなく、ただ悪目立ちするだけ。

そして、目立てばそれこそオラリオからシャクテイ達が飛んでくるだろう。

彼女たちが乗り込んでくれば、俺達こそが逃げ回る側だ。

従って――

「詰んでるな」

「詰んでるね」

今の時点では何も打つ手なし。以上。

「なら、仕方ないね」

「そうだな」

嘆息してから、最後の結論を口にした。

「さあて。今日も遊び倒すでしょうか」

「ああ」

他にできる事がないなら、ひとまず当初の目的に立ち返るべきだろう。

「まあ、どこの誰だか知らないが、本当に俺達を狙っているならまた仕掛けてくるだろう」

次の動きがあれば、また新しい情報も手に入る。

情報が増えれば、敵の姿も少しは見えてくるかもしれない。

「だろうね。そうでなきゃ、偶発的なものかも知れない。……まあ、『新種』が絡んでるつ

てのがどうにも気になるけどね」

イシユタルが関わってるなら、私も他人事じゃなくなる——と、アイシャが肩をすくめた。

ひとまず、次の『刺客』が来た時には、なるべく周囲を巻き込まないように——と、指針を決めてから、俺達は今日も今日とて街に繰り出すのだった。

「つつても、流石に四日もいれば目ぼしいところはもうないね」

流石にいつどこで襲撃されるか分からない以上、水遊びは除外している。

装備も動きも著しく制限されるうえ、水中に引きずり込まればそれだけで命の危機だ。

しかし、この街で水遊びを除外するととなると、遊び場はかなり減る。

「そうだな。さすがにオラリオの繁華街のようにはいかない」

アイシャの言う通り、すでに一通り娯楽施設は冷やかしていた。

例外は酒場くらいか。

あくまで個人的な感覚だが、繁華街の音楽堂で奏でられる貴族たち向けの上品な音楽より、この街の酒場で海の荒くれ者たちに向けた軽快な音楽の方が耳に馴染む。

だが、この真昼間から酒場にこもっているというのは流石に躊躇われた。

……オラリオでの隠遁生活はずいぶん爛れたものになってしまったので、そろそろ

建て直さなくてはなるまい。

「繁華街ねえ……。探せば賭博場くらいはあるだろ」

「どうせモグリだろ？ 余所者なんてカモにされるだけじゃないか」

と、いうか。大体の賭博など、胴元が儲かるようにできているのだ。

あとはどれだけおこぼれに授かれるかどうか。

（普段は真つ当でも、余所者相手には容赦ない場所もあるしな）

それも仕方がない。何しろ、向こうにとっては稼ぎ時だ。

（情報収集という意味では有効かもしれないが……）

それも善し悪しだ。下手に探りを入れては金と一緒に情報まで渡す羽目になる。

最悪は湖の底へ一直線だ。

「なら、とりあえず、港でも冷やかしに行くか」

「港だと？」

まさかいきなり本陣に乗り込むつもりか。

いや、それもまた一つの手だろうが……。生者が打つには豪快すぎる一手だ。

「何か勘違いしてないかい？ 美味しい魚が食える店を聞きに行こうって話さ」

からかうように、アイシヤが笑う。

「そうだな……」

……まあ、そういう他愛ない話題から接点を持つのも一つの手法。

それも、真つ当で効果的で、何より安全性の高い最初の一手だった。

(ちよつどいい時間だったか)

アイシヤに連れられて向かつた港は、活気に満ちていた。

魚や貝が詰まつた木箱を受け渡す漁師の声や、それを競り落そうとする商人の声、分け前を狙っているらしい海鳥の声が至る所で聞こえてくる。

漁師たちの一日はかなり早いらしい。

あまり詳しくはないが……まだ日も昇らぬうちに船を出し、昼前には戻ってきてその日の成果を売りさばき、夕方ごろには寝てしまふと聞く。

「おー、別嬪さん！ この貝も食つてきな！」

「いい海老も採れたぜ！」

どこまで本当かは知らないが、港の活気から察するにあながち単なる噂ではないのだろう。

「ふふつ、ありがとう」

そして、つくづく芸達者というかなんとか……。

いつもの豪気な笑いではなく——例えばどこその酒場に務めている良質町娘とやらのような——パツと見では無邪気で愛らしく見える笑みを浮かべ、海産物を格安ないし

無料でかき集めていくアイシヤを見て嘆息する。

(まあ、売れっ子だしな。男を手玉に取るのは慣れてるんだろう)

いや、まず根本的に案外男という生き物は女には勝てないようにならなくていいか。

目の前で展開される玄人の技に思わずそんなことすら考えてしまう。

(そーいや、霞もこういうの得意だよな……)

男の俺にはどうやっても真似できる気がしない。

それこそ、例え相手が女でも。むしろ、その場合は余計に貢がされそうな気がする。

(ま、俺が愛想なんて振りまいたところで不気味なだけか)

それなら金貨の一枚も投げてやった方がよっぽど効果的だろう。

彼女の成果の分け前に与りながら、胸中で本末転倒な事を呻いた。

それからしばらくして――

「店を聞いたはいいいけど、さっぱり腹が減らないね」

「そりゃ、あれだけ食えばな」

港の端から端まで歩いたところで、アイシヤが言った。

今まで知らなかった店を何軒も教わったはいいいが、焼いた魚だの貝だのも同時に分けてもらったおかげで、ちょうど昼時だということにまったく空腹感がない。

……いや、確かに元々不死人には無縁の感覚ではあるのだが。

「しつかし、あれだね。本当に水辺は「ニヨルズ・ファミリア」の島ってわけだ」
「そうだな」

どうやらニヨルズという神はよほど人望に厚いらしい。

悪い噂はまったく出てこなかった。アイシヤをして聞き出せないなら、俺には到底無理だろう。

「完全に掌握しているか。それとも本当に無関係なのか……」

今のところの手ごたえからすれば後者のような気がする。

「食人花ヴィオラスの存在は、本来なら死活問題になっていておかしくない。それを知らないという事は、その脅威に晒されていないからに他ならない」

となると昨夜の襲撃は俺達を追ってきた何者かの差し金、という可能性もある。

その場合、この街そのものが巻き込まれただけの被害者という事になる。

「そりゃまあ、イシユタル絡みならその可能性もあるだろうけどね。タンムズ辺りだったらそれくらいの知恵は働かせるだろうし」

アイシヤが口にしたのは副団長の名前だった。

イシユタルの情夫おとこのひとり——要するにオツタルのようなものだったらしい。

俺に復讐を企むのは当然といえば当然だろう。仕掛けてくるなら付き合うしかない。

「そのタンムズとやらがここに落ち延びてきていますとすれば、今まで漁師たちが食人花ヴィオラスと遭遇していない理由にもなりそうだな」

「そりやね。あいつだって、無関係な漁師を襲わせるほどイカレちゃいないだろ」

「そいつはどうだろう。復讐に狂った人間など何をするか分からない。」

（とはいえ、食人花ヴィオラスに人間を食わせても意味がないだろうな）

「むしろ、奴らが必要とするのは魔石——」

「——」

「どうかしたかい？」

「ふと、思いついた。」

「この街の漁獲量は、この数年で急に回復してきているんだよな？」

「そうらしいね。それがどうかしたかい？」

「減っていた理由は、モンスターどもが漁礁を荒らしていたから。そう考えていいんだよな？」

「そうだろうね。つっても、私だって聞きかじった話しか知らないよ。急にどうしたってんだい？」

「いや、だからだな……」

「突拍子もない発想、なのかもしれない。」

だが、それならこの状況を一通り説明できる。

「漁礁を荒らしていたモンスターが減ったから、漁獲量が戻ったんじゃないかと思つたんだ」

「そりやそうかもしれないけど。だからどうしたつてんだい？」

「まあ、聞けつて。『極彩色の魔石』を持つモンスターは、魔石を集める性質がある。魔導士を狙うのはその性質が影響しているわけだが……まあ、それは今は良い。要するに奴らは他のモンスターを優先して襲う習性を持つているわけだ」

「……あんた、まさか」

「ワイオラス食人花が住み着いて、野良のモンスターどもが食い漁っている。そのおかげでモンスターどもの数が減り、その分だけ魚が増えた。漁獲量が増えた絡繰りつてのはそういう事なんじゃないか？」

だとすれば、もう五年はこの湖に巣くつているというわけだ。

しかし、そうなると――

「だが、何故漁師たちは襲わない？」

次に立ちほだかる疑問を呟く。

あの食人花ワイオラスとやらには、そこまで細かく指示が出せるものなのか。

それとも、あの赤髪の美人と同類の何者かがこの街に常駐しているとでもいうのか。

「そーいや、漁師ども。全員が妙なもん持ってたね」

「妙なもの？」

「ああ。モンスター除けの『魔法の粉』だつてさ」

「はあ？」

「気づかなかつたかい？ 漁師どもどころか、他の船乗りどもまで同じ布袋を提げてたのよ」

「そーいや、そんなものも身に着けていたような……」

「気もするが。正直、道具袋の類だと思つて気にしていなかつた。」

何しろ『ソウルの業』を持たぬ者なら、その類の何かを身に着けていない事の方が珍しい。

「もう一つ言うなら、その『粉』を作つたのはオラリオらしい」

「何だつて？」

「怪しいだろう？」

アイシヤの言葉に頷く。

「モンスター除けの魔法の粉なんてもんがありや、冒険者にも飛ぶように売れるよ。でも、オラリオじゃ聞いたことがない」

「ああ。少なくとも俺は呼び寄せる方しか知らないな」

もつとも、トランプアイテム血 肉でも、使い方によっては充分に『モンスター除け』になるが。

「となると、可能性は二つか。一つは、俺達が知らないうちに誰かが新しく作った」と、言うのは実際のところ考えづらい。

「ま、そりゃないだろうね。連中はあの『粉』はもう何年も使ってるんだ。その手のものを冒険者が何年も知らないなんてことはあり得ない」

それはそうだろう。もし、モンスターを近づけさせない道具があるなら、いざという時の生存率はかなり高まる。

いや、ことは冒険者に——オラリオに限らない。この街と同じく、モンスターに悩まされているあらゆる人間が買い求めるのは目に見えていた。

実在するとするなら、その価値は計り知れない。

(だから秘密にしている、という考え方もできるが……)

世界に売れば莫大な富をもたらす代物を独占できるほど、この港町の財源が豊かだとは流石に考えづらい。

この街ないし、マードック家のためだけに開発したものの好きなアイテムメイカー魔道具製作者がいる、と考えるのも少々苦しい。

と、なる——

「だからさ、あれも実は呼び寄せてるだけなんじゃないかい？」

「モンスターをか？」

「そうさ。野良のモンスターが集まっているなら、あの食人花ヴィオラスとやらはまずそつちを襲うんじゃないかい？」

野良のモンスターを敢えて集めて、食人花ヴィオラスに食わせ、その間に安全に漁をする。

アイシャの言わんとしていることはそういうことだ。

この場合、『粉』はごくありきたりなもので充分だ。未知の道具云々と考えるより、よほど現実的といえる。

しかし——

「と、なると『ニヨルズ・ファミリア』は闇派閥イヴィルスと繋がっていると見るべきか」

まあ、驚くほどでもないか。死体を遺棄する先として、外洋というのはなかなか魅力的だ。

うまく処理すれば、案外ダンジョンに捨てるより完全に隠し通せるかもしれない。いや、それはともかく。

この場合、むしろ肝要なのはその発想と、何より食人花《ヴィオラス》の出どころだ。何しろ、この方法は食人花ヴィオラスの性質を知っていなければ思いつかない。

いや、先に方法を思いつき、そういう性質を持つモンスターを探していたという可能性も否定はできないだろう。だが、それでもあれは都合よく見つけられるものでは

ないし、見つけたところで、簡単に捕まえて連れてこれるものでもない。

いずれにしても『飼い主』の協力が必要となる。

「さて、そこまでは。貧窮しているところを騙されてるって可能性もある」

「いや、そいつはどうだろうな。確か神は人間の嘘を見抜けるんだらう?」

この『時代』の人間は、また何とも面倒な『枷』をはめられているものだ。

そんな『枷』は『火の時代』にはなかった。

(そんなものはめられてりや、オーンスタイン達にはとても勝てないな)

銀騎士辺りならまだしも、あの戦神達相手にハツタリ一つ通じないなら、本当に打つ手がない。

……ああ、だからこそこの『枷』なのかもしれない。神どもが考えそうなことだ。

「そりや、そうか。もし神ニヨルズを騙すなら、向こうの神が出張ってくるしかない」

頷いてから、アイシャが続けた。

「けど、ここはオラリオに近い。神ニヨルズがかつて邪神と呼ばれた神を知らないとは思えないね」

「と、なるとニヨルズはほぼ間違いない黒だな。『粉』の出どころは聞いているか?」

「表向きはマードック家だね。オラリオから買い取って、この港によく出入りする船に無償で配つてるとか……。まあ、妥当な話といやそれまでだね」

となると、その『粉』は無償で配れる程度の物、という穿った見方もできそうだ。

そして、そう見ればなおさら未知の道具という可能性は低くなる。

「そうだな。ギルドが配つてりや、こんな事態にはなつてない」

もつとギルドの影響力が強まっていなければ不自然だ。

「いや、ギルドも一枚噛んでるんじゃないかい？」

「……ああ、なるほど。それもそうだな」

アイシヤの言葉に、頷いた。

「俺達の考えが正しいなら、モンスターどもと一緒に食人花ヴィオラスも呼び寄せなけりやならな

い。なら、血トラップアイテム肉トラップアイテムだけでは役者不足だ。他に必要なのは——」

「魔石トラップアイテムつてわけだ。血トラップアイテム肉トラップアイテムに魔石の粉末を混ぜるくらいなら、魔道具アイテムメイカー作成者じゃなくて

も楽勝さ。元さえ手に入るならね」

そして、魔石を取り扱っているのはこの街でもギルドだった。

その『粉』にどれ程の量が含まれているか定かではないが、魔石を安定して手に入れようと思えば冒険者ないしギルドの協力を取り付ける必要がある。

つまり、長年対立しているはずの三者は実はとつくに手を組んでいたわけだ。

「古株の住人ほど疑わないだろうな」

「だろうね」

「……やれやれ。街の権力者が揃い踏みとは、随分と大事になったものだ」

そして、いよいよ本格的に首を突つ込む必要もない気がしてきた。

ヴィオラス
（食人花がいなくなれば、また魚も減るだろうからな）

そうなればこの街がまた干上がっていくのは明白だ。

無関係の漁師たちを貧窮させてまで、この『企み』を暴き立てる必要が果たしてあるかどうか。

「ま、今のところ仕組みとしてはうまくいってるんだろぅしね」

その『魔法の粉』がもたらされてから、漁師が襲われる確率は目に見えて下がったらしい。

確かに、その『粉』を持たない船が襲われる危険はあるだろうが――

（そんなもの、他のモンスターに襲われるのと大差ないだろうしな）

確かに食人花ヴィオラスに襲われた場合、まず致命的な事になるだろうが……仮にそれで死人が出たとして、野良のモンスターに襲われて死ぬのと何が違うわけでもない。

およそ五年間、毎日海に出ている漁師たちがまったく知らずに過ごしてきた。それどころかモンスターの被害が減つたと感じていふという現状を考慮すれば、むしろ野良のモンスターよりもよりまだ有益だと言つていいだろう。

ヴィオラス
食人花を始末してみんなで仲良く飢えて死ぬか、誰かが食人花ヴィオラスに襲われて死ぬ危険を

考慮してでもこのまま共存するか。

それを選択する権利が自分にあると思うほど傲慢にはなれなかった。

ただ――

(問題は、あの『宝玉』がとりついた場合だな)

あの赤髪の美女一派が純粹な善意で提供しているとは思えない。

少なくとも彼女たちは、いずれそうするためにここで放牧しているのだろう。

そして、五九階層で今も育っているであろうあの異形と同種のものが地上で暴れた場合、その被害は深刻なものとなるのは明白だ。その場合、おそらくこの街だけの問題ではなくなる。

ニオルズたちがその危険性まで知って協力しているか否か。

(せめてそれだけは確認しないとマズいな)

それ次第で、取るべき行動も変わってくると言えよう。

だが、それこそどうやって調べたものか。

神の腹のうちが読めたなら、そもそも俺は今ここにいないはずだ。

3

今日も今日とて予定通りに遊び倒してから。

「しかし、これで晴れて状況は悪化したな」

夕暮れ時、港でアイシヤが教わった店の一つで少し早めの夕食——かなり遅い昼食も兼ねているが——を突きながら呻く。

この街を牛耳る三勢力が全て敵となれば、それこそ成す術もない。

「そうだねえ」

何とかしてシャクティ達を嚇けるとして……それでも、彼女たちを動かせるだけの根拠を用意しなくてはならない。

現状では、その時点からして手詰まりだ。

何しろ、ここはオラリオではないのだ。

放っておけば、オラリオにも悪影響を及ぼす。そう判断できるような情報が必要だった。

そんなものが簡単に手に入るはずもなく、俺達自身もあれこれと嗅ぎ回れる状況ではない。

「魔石が正規の手続きで受け渡されているかどうかだけでもはつきりすりや、また打つ手が見えてくるんだけどね」

「そうだな。これで正規の手続きを踏んでるんだったら、本当に俺達が首を突っ込む理由がない」

この街の統治者達が主導しているなら余所者の俺達が首を突つ込むのは基本的にお門違いと言わざるを得ない。加えて、モンスターを利用してはいけないという法はオラリオにだつてないはずだ。

(本当にそれ次第だな)

もつとも、仮に違法行為が行われていたとして、だからと言つて俺達にそれを暴き立てる権限がある訳ではない。その辺りをながしるにし、誰もが罪人を探し始めては、かつて流れの白教徒どもがしばしばやらかした異端狩りに発展しかねない。

とはいえ。

あの『新種』に関して言えば、この『時代』の脅威だ——などと言つていられるような状況にはないと見るべきだ。

(赤髪の女達と、デーモンの『飼い主』が手を組んでいる可能性があるからな)

リヴェラ襲撃時のデーモンどもの動きを見れば、その可能性は考慮しておいていい。

そして——

(深淵、か……)

今のところそちらは音沙汰ないが……しかし、それもいつまで続くことやら。できれば一つずつ片を付けたいところなのだが——

「お前たち、今日もご苦労！」

「うつつす！」

と、そこで。近くの席に陣取った漁師と思しき一団が乾杯を始めた。

まあ、店を教えてくれた張本人たちが来るのは何の不思議もない事だが――

「……神か」

その中に一人だけ、ソウルの質が違うものが混じっている。

後ろで適当にまとめられた茶髪。一八〇c m程度の背丈。ミアハよりはいくらか小柄だが、シャツ一枚身に着けていない上半身は引き締まっている。ガネーシャと同じく、かなり屈強な体つきと言えよう。

「この街にいる神か。なら、まず間違はなくあいつが神ニョルズだろうね」

なるほど、確かに海の男といった風体だった。

何であれ、その姿を記憶にとどめる。

「見たところ普通の漁師たちだねえ」

宴会――と、言うより仕事仲間同士の夕食会か。

いつかどこかで見た、海賊くずれの怪しげな商船員どもはおろか、酒場で飲んだくれているオラリオの冒険者どもよりよほど品があるように見えた。

「まあ、世の中いかにもな格好をした密輸業者ばかりじゃないだろう」

「そりやそうだ。そんな単純な連中だけだったら、^{アングレーシヤ}「象神の杖」たちはずいぶん楽ができ

るだろうね」

とはいえ、神はともかく周りにいる漁師たちが腹芸に長けているように見えるか、と問われれば首をひねるしかない。

(あくまで皮膚感覚だがな)

とはいえ、泊まろうとした郊外の安宿が実は盗賊のねぐら——なんて事も珍しくなかった。

そういう場所に引つかかってしまえば、金目の物をちよろまかされるくらいなら安いもので、命まで奪われる羽目になりかねない。

そういう中を旅してくれば、人相見の真似事くらいは嫌でもできるようになる。

(……はずだったんだが)

どこぞの禿丸には、何故通算四回も背後を取られたのか。

いや、あそこまで隠す気がない奴が相手では人相見もクソもないといえればその通りだが。

(……いや、そもそも不死人になって以来、そんなことを気にする機会も減っていたか) 真つ当な生者との接触そのものが危険だった。

それが、どれ程善良な者であったとしてもだ。いや、むしろ擦れていなければいけないほど危険だったと言っている。

基準を見失えば、感覚が狂ったとしても何の不思議もないか。

(今だつて変わらないんだけどな)

もし不死人だと露見すれば、どれだけ樂觀視したとして、今の生活は維持できまい。

(アン・デイルのところより、リド達の隠れ里の方がいいかな)

どちらにしても、地上にいるよりは気楽にやれるだろう。

ただ、同類相哀れむ——と、いうのはリド達に失礼かもしれない。

彼らはまだ共に生きるといふ事を諦めていないのだから。

そうこうしているうちに、漁師の一団は食事を終えた。別にせわしないなどとは言わ

ないが、特に時間をかけるでもなく、ごくあっさりとしたものだ。

やはり特別な宴会ではなく、本当に日常の食事だったのだろう。

「さて、尾行るか」

会話を終えて帰路につく一団を見やり、アイシヤがあっさりと言つた。

「……つけてどうするつもりだ?」

「ンなもん行きついた先で考えるに決まつてるだろ」

また行き当たりばったりなことを。

「うだうだ考えてても仕方ないだろう?」

「……ま、それもそうか」

今は行動の時だ。新しい情報が手に入れば、次の手も見えてくる。

不自然にならないよう、しかし標的を見失わない程度の時間をおいて、俺達も店を後にした。

「このままいくと、マードック家に行きつくね」

件の神——ニョルズとやらは、店からしばらく離れたところで他の漁師（音調）と別れ、一人

で夜道を歩いていて。

行先は、おそらくアイシャの言う通りだろう。

流石に四日も街中をぶらつけば、大体の位置関係は把握できている。

『『粉』の出どころを考えりや、別に不自然じゃないな』

「まあね」

神が一人で、というのは不自然なようにも思えるが……

（いや、取引相手が当主なら主神が出向くのはむしろ当然か）

下っ端の漁師を行かせては礼を失するという見方もある。

まったくの異常事態とはとても言えない。

「さて。これでこの街のギルド長でも訪ねてきてくれれば推理が盛り上がるねえ」

果たして、ニョルズはマードック家へと入っていった。

ここでアイシャの言う通り、ギルドの関係者が姿を見せればだいぶ面白い事になる。

「そう上手くいけばいいな」

もちろん、当主ともなればそちらと全く接点がないという事もあり得まい。

だが、あえて両者を同席させたとなれば、流石に少々怪しくなってくる。

「裏口も見張るべきかねえ」

「さて、コソコソすれば余計目立つだけのようにも思えるが」

そんな事をせずとも、出入りするときには嫌そうな顔の一つも浮かべていれば済む話だ。

この三者が手を組んでいるなど、事情を知らない者なら夢にも思うまい。

「それか、忍び込んでみるかい？」

「館にか？」

流石に当主の館というだけあり、それなりの広さがある。

もちろん、中には相応に使用人や衛兵の類もいるだろうが……しかし、お世辞にも嚴重な守りとは言えない。

（【見えない体】と【隠密】を重ねがけすれば事は足りそうだな）

とはいえ、

「今こゝで盗賊の真似事をしてもな」

仮にマードック家の中で件の『粉』を見つけたところで、だからどうしたという話だ。

「当主が無償提供しているのだから、その家にあるのは当然の事でしかない。

まさか食人花グイオラスを館の中で買い育てている訳もないだろう。

「裏帳簿くらいは一緒に置いてあるかもよ?」

「魔石の密売に関してか……」

それが見つかれば違法行為だという証拠にはなる。

だが――

「別に魔石の密売を咎めに来たわけでもないしな」

闇派閥イヴイルスやあの赤髪の美女と繋がりがなければなら、モンスターを手懐けていたところで

……極論で言えば密売でも密輸でも好きにしてくれていい。

いや――

(ゼノス絡みでも無視はできないか)

その辺りにさえ絡んでこないなら、と付け足しておこう。

それ以外の犯罪行為を暴き立て、裁くというのは俺の仕事ではない。やるとしたら、

精々がシャクテイ達に情報を流してやるかどうかだ。

(大体、冒険者風情が正義を語ってどうするんだって話だよな)

今ここにあるダンジョンにしても、かつて俺が放浪した荒野にしても人治の及ばぬ無

法地帯だ。

そこを生きる場所を選んだ時点で、冒険者放浪者など大なり小なり無法者となる。

その無法の荒野に法を敷く——と、いう高い志を抱いているなら、まず然るべき組織に身を置くべきだった。それこそ、シャクテイやリユーのように。

もつとも、あの「ガネーシャ・ファミリア」ですら、ダンジョンの中では闇討ちすら黙認しているのだから、道のりは険しいものになるだろうが。

(何しろ、取り締まろうと思う方が阿呆な話だからな)

モンスターに殺されようが、人間に殺されようが同じこと。誰を相手に、どんな過程を経てそうなったところで、死という結果が持つ意味は何も変わらない。

言うまでもなく、ただの生者にとつて覆しようのない絶対の結末だ。

そして、ダンジョンとはその結末がすぐそこに存在する場所である。

それを許容し、自ら対処できないというなら、冒険者など辞めて真つ当に生きるべきだろう。

幸い、この『時代』の人間は——少なくとも、現時点では——俺達不死人のように、そうあることを強制されているわけではない。そして、オラリオなら他の堅気な仕事も多く選べる。

……俺達がどうやっても戻れなかった、平穏な生へと戻れるのだから。

「つと、出てきたようだね」

近くの物陰——と、どうか身体能力ステータスに物を言わせて飛び乗った屋根の上——に潜んでいると、アイシヤが囁いた。

「思いの外早かったな」

時間なら一時間経ったかどうか、といったところか。

館から出てきたニョルズは、再び一人で夜道を歩きだした。

特別何かを持っている様子もない。それに、あの恰好では隠し持てる物も限られていた。

「茶をしばきながら、世間話ついでに打ち合わせつてところかね」

「そんなところだろう」

何か特別なやり取りがあつたとは考えづらい。

日常的なやり取り——それこそ、『粉』の補充の手続き程度だろう。

と、なると——

「昨夜の襲撃をまだ知らない可能性もあるな」

いや、魔石を摘出してても大量の灰は残っていたはずだが。

発見される前に水辺の強風が吹き散らしたか、それとも漁師たちが来る前に誰かが処理したか。

「ああ。あの時点で『ニョルズ・ファミリア』が私たちを襲う理由があつたとも思えない

しね」

「俺達からすれば、だけどな」

あの襲撃がなければ、この街の《舞台裏》をのぞき込もうとすら思わなかった。ただ、それを向こう側が信じるかどうかは別の話だ。

「ま、そりやそうか。誰かさんは派手に派閥を潰して回ったしね」

「まあな」

ニヨルズが過剰な反応を示したとして、文句は言えない。

ロスリックで世話になった元隠密——不世出の賢者に言わせれば、殺した報いというやつだ。

（みだりに殺したつもりはない、と言いたいところだが……）

だからどうなるというものでもない。

殺したなら、殺されもするだろう。

（第一、俺は神にとつては初めから不倶戴天の敵だからな）

奴らの時代火の時代を終わらせて、人間の時代闇の時代をもたらしたのだから。

……どうにもこの『世界』ではその切り替わりが上手くいっていないわけだが。（だから呼び出されたんだろう）

そして、また繰り返せ——と、そういう事だ。

神を殺し、王を殺し、時代を殺し……今度は何を殺せばいいのやら。

「んで、どうする?」

アイシャの言葉に、くだらない雑念を追い払う。

ただ殺しあつていればいい——とはいかないのが今回の巡礼の厄介なところだ。今とはかく敵の動きを把握しなくてはならない。

「接触してみるかい?」

それも一つの手ではある。

こちらは神を見抜けるが、この『時代』の神は俺をただの生者としか認識できない。

ウラノスも、ガネーシャも、ミアハも、ヘファイストスも、ヘステイアも。あのフレ

イヤですら。誰一人として、俺を不死人だと認識できなかった。

理由は明確だ。神もまた『ソウルの業』の大半を忘却している。

四年前ウラノスから聞いていた——が、正直なところ信じてはいなかった。

だが、イシュタルとの戦闘を経た今、認めざるを得ない。

確かに連中は『ソウルの業』を忘却していると。

(イシュタルの一撃は、ソウルまで届かなかった)

あの時の一戦は、互いに魂を奪い合う『火の時代』の闘争ではなかった。

死にかけはした。いや、【惜別の涙】がなければ死んでいただろう。

だが、あれは体の大半が崩壊した影響で、ソウルの流出が始まったからだ。イシユタルに奪われたわけではない。もしそうでなければ、先に力尽きたのは俺の方だ。

あの状況で出し惜しみするほど彼女が愚かでないのなら、まず間違いない。

(ああ、だから最初に降りてきた神どもは、『古代』の英雄たちを恐れたんだろう) 自分たちを完膚なきまでに殺しつくす未知の力を。

まったく馬鹿げた話だ。最初に『ソウルの業』を見出したのは神だというのに。

(ま、今はどうでもいいか)

天界とやらで何があったのか——と、想像を巡らせそうになったところで、思考を打ち切る。

あるいは、いつかそこに辿り着く必要に迫られることもあるかもしれないが……それは、少なくとも今この時ではない。

「神と腹の探り合いは分が悪いんじゃないか?」

「はっ、私を誰だと思ってるんだい? いくら神だつて雄おとこには変わりないんだ。跨いでヒイヒイ言わせてやりゃ口も軽くなるつてもんさ」

もちろん、彼女の生業はよく知っているつもりだ。

そして、今の状況において、有益な一手となるのも分かっている。

しかし——

「……いや、今回は別の方法にしよう」

何というか……今の状況でその光景を想像するのは何故だかやたらとムカついた。

自分でも知らないうちに『設定』にのめり込んでいた——と、いったところだろうか。
「切り札はまだとっておくべきだ」

——と、文字通りとってつけるものの、

「おやおや、まさか妬いてるのかい?」

ニヤニヤと笑いながら、アイシヤがあえて下から顔を覗き込んでくる。

つい視線を逸らしてしまった時点で、俺の負けだろう。

「つたく、自分は次々に女を誑し込むくせに」

おとこ雄つてのはつくづく勝手な生き物さ——と、大笑いするアイシヤに、返す言葉の一つ

も思いつきはしなかった。

……

さて。

神の枷はここに極まり、連中にハツタリをかけられるのは、今や『火の時代』に生まれた者の特権となり果てている。となれば、ここは俺の出番というわけだ。

この街に来てから、どういう類であれ情報収集はアイシヤに丸投げしていたので、そ

ろそろ役に立たなくてはなるまい。

とはいえ、その『枷』をはめられていない俺でも容易いことではなかった。何も嘘を見抜くのに必ずしも神の力が必要になるわけではないのだから。

「すみません、わざわざ案内してもらって……」

ともあれ、件の神との接触には成功していた。

「何、気にするなつて」

少なくとも、こうして並んで歩く程度には。

俺の少し後ろ、ニョルズから離れた場所にはもちろんアイシヤもいる。

……筋書きとしては、ごく単純だった。

酔っぱらつてはしやぐ妻といちやついていたら、偶然に目撃された——と、言うのが導入である。

あとは、そこまで特殊なものでもない。

素知らぬ顔で神と出会ったことを驚き、慌てて平伏し、それを宥められる。オラリオでは珍しくもないやり取りだ。

「この辺は暗いから危ないぞ」

と、半ば社交辞令的なその忠告を引き出せればもうこちらのものだ。

それにかこつけて、こうして同行している。

ちなみに、だが。

酔っぱらった云々は、アイシヤにあまり声をかけられないようにするための布石でもあった。

神に醜態を見られ恥じている——と、まあそんなところだ。

もつとも、本当にアイシヤが恥じるような醜態を晒したわけでもないが。

「それにしても、何故自ら夜回りなど？」

今のところ得られた情報は、どうやら俺達が噂になつてゐるらしいということだけだ
が。

もつとも、それだつて——

『すごい美人を妻にした幸せな男が遊びに来ている』

と、そういう話だが。

それが嘘かどうかはどうにも見抜けそうにない。

アイシヤが美人なのは今さら言うまでもない。その彼女が、あれだけ漁師たちに声をかけていれば噂にもなるだろう。

その美女の近くに凡庸な男が突つ立っていればやつかまれたところで文句は言えない。
い。

まして、そいつが夫ともなれば、噂の一つも立つだろう。

「ここ数年はともかく、昔は夜の間にモンスターの群れや大型モンスターが港に入り込んで、船が出てくるのを待ち構えているなんてこともよくあつてな。見回りの癖が抜けないんだ」

と、ニオルズは遠回りの理由を口にした。

実際、彼と接触する前から何人かの元船乗りと思しき老人の姿を見かけてはいた。

「老骨でもこれくらいは役に立てますし、こればかりはもう死ぬまで治りませんなあ」と、ニオルズが声をかけると誰もが苦笑する。

もちろん、追い払うのは簡単ではない。だが、いると分かっていたらばまだ対処の方法もある。

街の衛兵もやってくれているらしいが、監視の目は多いに越したことはない、そういう事だ。

これは本当に日常的一幕……先日『密輸品』を目撃した何者かを警戒して特別に実施している——と、言う印象は今のところ感じられない。

もしそうであるなら、怪しい余所者（他）の同行を許すはずもない。

あるいは、油断させて罠に誘い込む算段だろうか。

それならそれで是非もない。

「もちろん、ただの鯨が浅瀬に入ってくることもあるが……やっぱモンスターの方が多

いな。単に数が多いからなんだろうが」

モンスターの方がやり口に悪意を感じる。

ニョルズはそう言つて肩をすくめた。

(確かにな)

モンスターが人間を襲うのは、獣が人間を襲うのとは明らかに違う。

獣が人を襲うのは、縄張りに不用意に近づいたからか、子育て中だからか、あるいは単純に飢えているか。いずれにせよ、そこに悪意はない。

……もつとも、人間側がそこに悪意を感じることはあるだろうが。

いつかどこかで立ち寄つた冬の寒村が、巣籠に失敗した熊に襲われた時は俺も悪意を感じたような気がする。吹雪く夜。紫紺に煙る闇の向こう側に光る獣の目。人間の防衛策を踏み躪つては人を喰らう黒い巨体。今も記憶の片隅に残るあの狡猾さは、下手な異形やモンスターよりもよりよほど恐ろしかった。もはやすり切れた記憶の中で、その感情だけはまだ残っていた。

ただ――

(ま、向こうだつて命がけだろうからな)

人間からすれば残酷な行いも、向こうにとつては生き残るための行動でしかない――と、その熊を射殺した狩人は言つていたはずだ。それとも、別の場所では出会った猟師

だっただろうか。

だが、モンスターは違う。特にダンジョンで出くわす連中は、人間を殺すためなら命を投げ打つことすら厭わないように思える。

あるいは、同胞の『魔石』を喰らい、さらに力を高めることすらも。

ああ、それはまるで――

(亡者のようじゃないか)

生者を――まだそのふりをしている不死人俺達をなりふり構わず殺しに来る亡者の群れ。

もはや思い出すまでもないほど見慣れたそれと、モンスターどもにいったいどれほどの違いがあるというのか。

(なるほどな)

初めてリド達と出会った時、奇妙な懐かしさを覚えた理由もそれか。

普通のモンスターどもが亡者なら、リド達は不死人だ。

疎外と排斥。ただそうなってしまうただけで、同胞からも嫌悪され、追放される。

ああ、まったく。それはまさに俺達そのものじゃないか。

(そして、縋る先がウラノス神だからな)

本当に、笑えない話だ。

あるいは、アン・デールが肩入れしたのもそのせいか。

(……いや、しかし。あいつは確か排斥したい側だったんじゃないか?)

何をどうすれば、あの狂人をどうすれば心変わりさせられるんだか——と、内心で首を捻るころには、少し港から離れていた。

港の明かりと街の明かりの間にある暗黒地帯。

港町特有の湿った空気。遠昼間に下ろされた魚の内臓が放つ生臭い匂いと、それにつられてきた鼠や虫がざわめくかすかな音。なまじ視界が制限されるせいか、そういったものを急に感じる。

そして——

「なっ!?!」

向かいから歩いてきた水夫の恰好をした同類が放つ白々とした殺気も、だ。

こちらの首を掻くように振るわれたダガーを、護身のために身に着けていた短刀で迎撃する。

「な、なんだお前は!?! いったいどういうつもりだ!」

軌跡が交差し、火花が散る中で、ニョルズが叫ぶ。

が、構っている暇はない。さらに数度剣戟を鳴り響かせる。

「ちえ、勘づいてやがったかよ」

間合いを開いたところで、その襲撃者が毒づいた。

「殺気を消せるようになってから出直せ。素人が」

とはいえ、体捌きから察するに本職の刺客だろう。

そして――

「スカしてんじゃねえ！」

――俺以外に、初めて遭遇する不死人だ。

淡い燐光とともに、平凡な水夫服が刺客の鎧へと切り替わり、一振りのエストックが現れた。

もう一振りの短刀を引き抜き、それを迎撃する。

「――」

確かに不死人だが……今の俺から見ても、大した相手ではない。

まだ尻どころか頭にも殻を被ったままの未熟な巡礼者だ。

「おい、やめろ！」

「うるせえ、ニョルズ！ 今日のはてめえの相手をしに来たわけじゃねえ！」

――なるほど。

なら、生きたまま捕らえるなどといった無理難題に挑む必要はない。

口が聞ける奴は、一人生きていけば充分だ。

速攻で片を付けるべく、装備を切り替えた。

「チィ!!」

右手の短刀をロングソードへ。

左手の短刀は、目の前の刺客と同じく小盾へ。

「――」

盾を貫こうとする切っ先を、そのまま受け流し^パして、がら空きになった胸元に直剣の切っ先を突き立てる。

「がはっ?! て、てめえ……ッ!」

仮にも不死人。一度心臓を貫いた程度では死ぬはずもない。

揺らいだ体を蹴り飛ばし、さらに追撃する。

両手で構えた横なぎの一閃は、刺客の腹を斬り裂き臓物を吐き出させた。

敵からソウルの揺らぎが伝わってくる。

次の一撃がとどめとなる。その確信とともに、『ダークリング』が蠢き始めた。

だが、この程度で終わるような情弱は不死人^{巡礼者}には許されない。

殺されてでも殺す。死と引き換えにしても次の一手を。次は、自分が殺すために。

それこそが俺達の宿命なのだから。

「くそが! 地獄に堕ちやがれ!!」

今ここで、次の一手を仕掛けてこないはずがない。
そして、微かな月明かりの下でその一手が煌めいた。

「——ッ!?!」

まさか。そんな思いが、背筋を凍てつかせた。

「古臭いものを……ッ!」

その戦慄が、声となってこぼれ出た。

それは、はるか昔ロードランで見た呪物。

始まりの神。その一人に仕えし眷属の証。

『死の瞳』

墓王ニトと誓約を交わした【墓王の眷属】たちがもたらす厄災。

「この生臭え街もろともになあ!!」

見開かれたその場所に死の運命をばらまく呪いの具現だった。

(油断した……ッ!)

まさか、今この『時代』にこんな古臭い誓約をまだ保っている奴がいるとは。

なまじこの手でその主神を殺したからこそ、そんな事は思いもしなかった。

今この『時代』にも闇霊がいるというのに……『火の時代』の誓約は、主神を殺した

ところで消えてなくなるわけではないというのに。

そして、効果は劇的だった。

「何だい、こいつは!？」

赤黒い燐光が、人の形をとる。

闇霊が、アイシヤ達の背後に顕在していた。

「——ッ!？」

そちらに気を取られた一瞬。左肩に熱を感じた。

投げナイフ。いや、毒投げナイフか。今更一本程度で毒が回るはずもないが——

「おおい。その女あ、てめえは死ぬなよお！ オレが解体^{バラ}してえからよお！ 逝^ハつち
まうまで愉^ハしもうぜえ!!」

馬鹿笑いしながら、その刺客が逃走する。

いずれ殺すが、今は追いかけている暇がない。

「一人で勝手にイッてな、この変態が!」

毒づくアイシヤに、ひとまずロングソードを放つて渡す。

丸腰でなければ、そうたやすく殺されるはずがない。そして、一撃でも凌いでくれれ

ば——

『ッ?!?!』

肩から引き抜いた毒投げナイフを、その闇霊の眉間めがけて投げつけた。

微かにのけぞったその一瞬に、一気に間合いを詰める。
もはやなりふり構つてなどいられない。

手にはクレイモアを。欠けた月光を背に繰り出すのは『狼の剣技』。

英雄アルトリウスの一撃を模倣し、その闇霊を両断した。

赤黒い燐光が渦を巻いて消えるより早く、アイシャに大朴刀を投げ渡す。
もはや事態は一刻を争う。

「アイシャ、その神を連れて一緒に来い！」

装備を慣れ親しんだ一式へと切り替えて叫んだ。

「そりや言われなくたって行くけどね！ 何が起こつてるか説明しな！」

それは当然だが、いったい何をどこから説明したものか。

『死の瞳』が使われた！ 古臭いもの引つ張り出してきやがって……ッ！

柄にもなく、気が焦る。戦慄が静まらない。

当たり前だ。いくら俺だつて、こんな街中であれが使われた経験などない。

どんな惨劇が起こるか、まるで見当がつかなかった。

(どっ!? どっ!にある?!)

毒づきながら、走る——が、そもそも行く先が定まらない。

闇霊から逃げているのか、それとも眷属を追っているのか。それすら判然としない。

(解呪する方法は三つ)

焦燥を抑え込むため、胸中で呟く。

一つは時間経過。だが、これはあまりに現実的ではない。

まず間違いなく、瞳が閉ざされる前にこの街そのものが壊滅する。生きとし生けるもの全てが闇霊どもに蹂躪されるだけだ。

もう一つは、仕掛けた眷属を殺す。

だが、まだ充分な——観光地ではなく、戦場として見るための——土地勘がないこの街で、果たして逃げに徹した刺客を見つけ出せるのか。

アイシャにはああ言っていたが、本当にこの街に留まっているかすら定かではないのだ。

ならば、現実的なのは最後の一つ。

どこかにある赤い呪いのサインの支点を見つけ、呼び出した別の闇霊眷属を始末する。

動かない分だけ、まだ見つけやすいはずだ。

「だから、その『死の瞳』ってのは何なんだい!？」

「神謹製の厄災の種だ! ああの野郎、本当にこの街を地獄に変えていきやがった!」

いや、このままでは駄目だ。

どこかで一度、気を鎮め、呼吸を整えなくては。

冷静さを欠いた巡礼者など、巡礼地ではただの餌にしかならない。

そして、ここはもう巡礼地となり果てている。

近くの倉庫らしき建物の扉を開け——ようとしたが、鍵がかかったので蹴破つてから、目についた魔石灯を灯す。

小舟と漁道具が置かれたその倉庫に踏みいれ、その小舟のへりに腰掛ける。

「――」

半眼に伏せた視線の先に思い浮かべるのは火。

呪術のそれではなく、不死人の寄る辺である篝火を、そこに幻視する。

それでようやく、戦慄が去り、呼吸が整う。

「それで」

それを見届けてから、アイシャが改めて問いかけてくる。

「もう一度聞くけど『死の瞳』ってのは何なんだい？」

「最初の神の一人、墓王ニトの眷属に与えられる呪物だ。それが見開かれた場所に、死の

厄災をもたらす」

「さっきの赤い何かがその厄災だって？」

「ああ、闇霊もそのひとつだ。他にモンスターどもが凶暴になったり、手強くなったり

……とにかく、誰も死にやすくなる」

「死にやすくなる?」

「ああ。死をもたらず要因の力が強くなるってことだ」

もつとも、そこまで露骨な不運は起こらないが。

……おそらく、きつと、多分。

「なるほどね。……それで、有効範囲は?」

「この街全域と考えて損はない。何しろ、古竜すら殺せるほどの死の瘴気を操る神だからな。その力の一欠片だけでも、この街を死で包むくらいは簡単だろう」

「対処法は?」

「三つしかない。一つは時間切れを待つ。だが、それを選ばなければ確実にこの街の住人は皆殺しにされる」

「さっきの閻霊って奴に? だが、あいつはあんたが倒しただろう?」

「ああ。だが、解呪するまでは次々に来る。この街にふさわしい者が、この街にふさわしいだけ」

もつとも、閻霊に限ればその大半はさしたる脅威ではないはずだ。

……少なくとも、俺にとっては。

冒険者の半分はL v. 1。残りのもう半分がL v. 2——と、霞が言っていた。

流石に大雑把すぎる概算だろうが……オラリオでもそんなものだ。

この街なら、召喚の基準とされる者はほぼL.V. 1と見ていい。俺やニヨルズ、アイシャに呼び寄せられた闇霊でない限り、俺とってはまず脅威にならない。

だが、逆に言えば、俺達が呼び寄せた闇霊は他の誰も抗えないだろう。

そして、何よりも問題となるのは数だ。

生者しかいないこの街なら、呼び寄せられる闇霊はほぼ無制限となるに違いない。

例えL.V. 1でも数が揃えばただでは済まない。

それ以上に、今この時も無関係の人間が殺して回っている可能性があった。

たった一人——いや、アイシャと二人だとしても、この街の全てを守り切るなどできる訳がない。

「残り二つは？」

「さっきの変態を殺すか、どこかにある呪いの支点を潰すか。どちらにしても、まずはそれを探すことから始める必要がある。……まあ、基本的に動かない支点を優先して探すべきだろうな」

だが、間に合うか。

いや、間に合うはずがない。見つけ出すまでに出る死人は、一人二人では済むまい。

何をするにも手と時間が足りない。

「いや、待て！ 待ってくれ！ お前たち、さつきから何の話をしてるんだ?！」

そこで、アイシヤに引きずられるままに走り回り、息が上がり切っていたニヨルズが叫ぶ。

「最初の神? 墓王ニト? そんな神を俺は知らないぞ?！」

「それはそうだろうな。ずいぶん昔に俺が殺している。だから、まだ誓約者が残っているなんて思いもしなかった」

それとも、あの不死人はまさにその時代から今に流れ着いたのだろうか。

さもありません。ロードランは時空が乱れていた。いや、それをいうなら巡礼地は往々にしてそういう場所だった。可能性は否定できない。

(どうせ流れてくるなら——)

あの太陽の戦士でも来てくれれば——

「神を殺した……? お前、まさか【イレギュラー正体不明】か?！」

——と、それが言葉になる前に、ニヨルズが悲鳴のような声を上げた。

「そう呼ばれているらしいな」

今更隠しても仕方がない。投げやりに頷いてやる。

今度は絶句するニヨルズを押しやって、アイシヤが再び口を開いた。

「神が死んでも機能しているってことは、【ニト・ファミリア】とは違うんだろう?！」

「ああ。今この『時代』とは眷属のあり方が違うからな」

別に力を底上げしてくれるような都合のいいものではない。

信仰を高めれば、稀に奇跡を授かれるくらいだ。

誰と誓約をかわそうが、それは変わらない。

他には――

「スキルが一つ増える。お前の感覚に合わせるなら、多分その方が近い」

あるいは発展アビリティの方だろうか。

「スキル？ その『死の瞳』ってのはスキルなのかい？ 何か投げてたようだけど……」

「あれを使うには、『墓王の眷属』の誓約を交わしている必要があるんだ。道具としての

『死の瞳』なら俺も持つてはいるが、誓約を交わしていないから使えない」

ソウルから取り出したそれを放ってやる。

「そんな気味悪いもん投げてくるんじゃないよ」

アイシャは一瞥するとすぐに投げ返してきた。

それもそうか。肩をすくめて、再びソウルの奥底に放り込む。

今までは何となく捨てずにいただけだが……まだ使い手がいるとなれば、もはやその

辺に捨てることなどできる訳がない。

「で、その二トって神は何だってそんな物騒なもんをばら撒いたんだい？」

「神が何を考えてるかなんて俺が知るかよ」

げんなりしながら呻く。

「……まあ、あの『時代』なら死こそが唯一の救いだっただかもな」

地下墓地の最奥。墓王ニトの『石櫃』^{玉座}が存在する玄室の前で、亡者となることなく白骨化していた——祈ったままの姿で死を迎えていた信者たちを思い出す。

あるいは……玄室の中で息絶えていた偉大な聖騎士もまた、そう思い至ったのだろうか。

彼は墓王の力の前に力尽きたのではなく、それを受け入れた。

だからこそそのあの闇霊だったのではないか。

死こそが救済。

それが、彼が最後に啓いた悟りだったのでは——

「だが、もう時代錯誤だ」

その一言で、つまらない感傷を切つて捨てる。

仮に俺達^{不死人}にはそうだったとして、アイシヤ^生達には厄災以外の何物でもない。

「元凶を見つけて、殺す。それ以外の選択肢はない。そして、俺達がしくじれば、この街は終わりだ。文字通りに皆殺しにされる」

もちろん、すべてを見捨てて逃げるといふ選択肢もあるが。

(俺もどこぞの白髪頭に毒されたかな)

その選択肢を鼻で笑つて、倉庫内を物色する。

例え小舟であつても一緒に漁の道具が置かれているなら、必ずあるはずだ。

「それで、神ニヨルズ。あんたは連中とどんな関係なんだい？」

その間に、アイシヤがニヨルズを問い詰める。

「あの変態は、あんたを知っていた。いや、あんたと何か繋がりがあるだろうか？」

「……………」

「フィリア祭で暴れた『新種』。そいつが、この湖には潜んでいる。他ならぬ私達が、昨夜襲われたからね。で、あいつはモンスタを優先して襲う性質がある」

俺がアイシヤに伝えたその言葉に、ニヨルズの肩が僅かにはねた。

「そしてモンスタを追い払う『魔法の粉』だ」

それを見逃さなかつた彼女の言葉に、もはや容赦はない。

「しかも、出どころはオラリオだつて？ 馬鹿言つてんじやないよ。そんな便利なもんがあれば、私達冒険者が真つ先に聞きつけて使つてる。百歩譲つてあんたらの方が先に知つたつて、五年も知らないままのはずがないだろう？」

それらしい麻袋を見つけ、口をほどく。

血臭、あるいは腐臭にも似た刺激臭を放つ大量の粉。魔石灯の輝きにほんの微かに煌

めくこれが、手品の種と見ていいだろう。

「あれは、モンスターを追い払うなんて便利な代物じゃない。もつとありきたりなもん
ゃ」

やれやれ、ギリギリ準備は間に合った。

口を開いたまま、その麻袋を倉庫の外へと投げ飛ばす。

「――！」

近づいてきた闇霊の一体が、反射的にそれを斬って捨てた。

いかに闇霊と言えど、基本的な動きは生身と変わらない。

ばら撒かれた粉末はそのまま視界を遮る。

「チィー！ 本当にまた湧いて出やがった！」

粉塵を突破して、最初の一体を斬り捨てる。

「その神を殺すな！ まだ聞きたいことがある！」

やはり、弱い。アイシヤ達の基準に合わせるならL V. 1ないし、L V. 2相当だろ
う。

一体一体なら問題にはならない。

（だが、数が――）

多い。ここだけで一〇体もいる。

まともに組みつかれば、たちまち押し潰される。

常と同じく、慎重に、確実に分断して、迅速に各個撃破していかなくてはならない。

巡礼地——いや、『火の時代』の闘争とはソウルの奪い合い。

己の力を驕り、相手を格下などと侮れば、たちまち殺される。

例え神の如き力であつても所詮は砂上の楼閣。些細な事で容易く崩れ墮ちる。

それを忘れた者から淘汰されていく。

当然だ。例えどれほど未熟な巡礼者でも、その手にある刃は神すら殺せるのだから。

「あんたが神を守れだつて?! そろそろ世界でも滅びるのかいッ!」

世界の滅びなら、嫌というほど見てきた——と、言い返している暇もない。

アイシャが毒づく頃には、閻霊の残りは一三体になっていた。

処理が追いつかない。手が足りない。

(援軍はまだか?)

そろそろ来てもいい頃だろう——と、毒づくと同時に水柱が立ち上った。

まともに粉をかぶつたららしい閻霊が一体丸かじりにされる。

とはいえ、『死の瞳』に魅入られたこの街の中では、もうあの『粉』は『魔法の粉』ではない。

これ以上の助力を求めらるなら、もう一手必要だった。

「

左手に火を宿し、炎の憧憬を——親愛なる我が師の姿を思い描く。
すなわち【魅了】。

粉につられてやってきた食人花どもを片端から魅了し、闇霊どもを襲わせる。

「行くぞー！」

「つたくー！ あんたといると本当に退屈しないねッー！」

今ここに集まっている闇霊はL.V. 1かそこら。なら、食人花どもの方が強い。

蹂躪される闇霊どもをそのままに、その戦場から離脱する。

彷徨う闇霊をいくら潰しても意味がない。狙うのは呪いの主だけだ。

さもなくば、物量を前に本当に押し潰されるだけだ。

それより先に地獄死の窯燻を見つけ、閉ざすしか生き残る術はない。

4

港町には、すでに闇霊が溢れつつあった。

夜の闇を引き裂いて、赤黒い亡霊どもが方々を彷徨い歩いている。

「つたく、鬱陶しいねッー！」

大朴刀が唸り、行く手を遮る闇霊が三体まとめて両断された。

だが――

「チイ！ こいつもか!？」

一体は平然と踏みとどまる。

その顔をひつつかみ、【発火】を叩き込みながらアイシヤが毒づいた。

「あんだ、基準になるのはL v. 1 だって言つてなかつたかい!？」

その間に、大朴刀を腹に突き立て、振じつては強引に体を引き裂く。

「ああ。その通りだ」

右手に《アヴェリン》を。左手には《曙光の火》を。

それぞれ構え、迫る闇霊を狙う。

「L v. 3 に匹敵するのが混じつてるじゃないか!」

三本のボルトが眉間を、【炸裂火球】が別の闇霊を直撃し、それぞれを消滅させた。

所詮はいくらも常人の域を出ていないただの呪われ人だ。

巡礼地の入り口に辿り着けるかどうか。辿り着いたところで、そこを彷徨う亡者の一体になり果てるのが大半だろう。

「俺にだって、お前たちの基準はよく分からないんだ」

やはり、問題は数だ――と、突っ込んできた闇霊を、槍で盾もろともに貫き殺しながら、毒づく。

「なら、何で基準がL v. 1だなんて言ったんだい?!」

「この街の神の眷属は大体L v. 1だろう?」

「あ、ああ。荒事とは基本的に無縁だしな」

軽く息を弾ませたニョルズが、滴る汗をぬぐいながら頷く。

「この場所にふさわしいってのはそういう事かい」

「ああ。だから、怖いのは俺やその神、あるいはお前を基準にされた場合だ」

もちろん、食事花ヴィオラスも含まれる。

あのまま同士討ちになってくれていれば、多少は『当たり』を引く可能性も下がるだろうが。

「いずれにしても、この街の漁師では対応できない」

「お、俺も?」

「力を封じているだけだろう? 今この場で一番巨大なソウルを持ち主はお前だ」

もつとも、今の俺のように完全にソウルが凝っているなら話はまた変わるだろうが。

「L v. 1を基準にしてL v. 3並みのが出てくるって、振幅が広すぎやしないかい?!」

「この程度なら可愛いものだ。壁を越えれば、本当に容赦がなくなるからな」

巡礼者として——神どもが言う『不死の英雄』候補に名を連ねるために確かに存在す

る壁。

ソウルの方がそれを越えた途端、忍びよってくる闇霊もまた一切の容赦を捨ててくる。

場合によっては、【薪の王】と呼ぶにふさわしいような化け物とすら出くわしかねない。

……もちろん、その可能性は低いが。

「幸か不幸か、今の俺はまだその壁を越えていないからな。ニョルズが『当たり』を引かないなら、まだ何とかなるだろう」

武器を両刃剣へ。前後に迫っていた闇霊どもをまとめて叩き斬る。

絶対には言わないが、この程度の闇霊なら装備もお粗末なものばかりだ。

多少なら力押しだけでも対処できる。

「『当たり』？ 『外れ』の間違いだろうか？」

「かもな」

それにしても、まさかこれほどとは。

いや、生者の数だけ闇霊死が寄ってきているだけか。

「ひいひいひいひいっ！」

「何なんだよ、こいつらはああああああっ！」

……何であれ、いよいよ本格的な地獄絵図が広がりそうだ。

それとも、もう広がっているのか。

路地の向こうから飛び出してきた夫婦——いや、赤子を抱いた三人家族を狙う闇霊に

【大火球】を叩き込む。

「二、ニョルズ様!」

「無事か?!」

「な、何とか……」

そうこうしている間にも、さらに闇霊が迫ってくる。

そいつらをまとめて引つ掴んでは、なりふり構わず【炎の嵐】を解き放つ。

巻き込まれた闇霊は全て消滅したが——

「どうすんのさ。このままじゃジリ貧だよ?」

こんな事ばかり繰り返しては、魔力が底をついてしまう。

いや、乱戦になっていけばあんな大規模な呪術などとても使えやしない。

(師匠なら、巻き込まずに使えるのかもしれないが……)

お前の使い方には繊細さが足りない——と、師匠の声が聞こえるようだった。

「そんなことは分かっている」

これで漁師たちが寝静まっている夜だからまだこんなもので済んでいる。

日中だったらもはや收拾がつかなくなっていただろう。

だが、それとて時間の問題だった。全員が寝静まっていると限らないし、騒ぎが広がれば顔を出す人間犠牲者も増える。

大体、観光客にとつては夜はまだこれからだ。

どう考えても詰んでいる。

「……この街の衛兵の実力は？」

「オラリオが近くにあるおかげで、元冒険者もいる。『恩恵』ファルナも健在だ。もつとも、L.V. 1だが、それに……」

「年食って引退した奴らはまだしも、若くして引退した奴は基本的にダンジョンの中で心折れた奴だからね。この状況じゃ、何人役に立つか知れたもんじゃない」

ニオルズが濁した部分を、アイシヤがあっさりと言葉にした。

それもそうだろう。ダンジョンで心折れたなら、今のこの街にも耐えられまい。ましてニオルズの話からして余所者が多そうだ。

命を賭してでも街を守るといふ気概がそもそもあるかどうか。

「どのみち、L.V. 1では食人花ツイオラスには勝てないだろうな」

現状において、あれはもう街の守護者でも何でもない。

正しく厄災の使途へと戻っている。

「ギルドに立てこもる。あそこなら、観光客でも場所が分かるだろう」

「そりやそうだろうけど……。入りきるのかい？」

「無理だろうな」

街の住人を全て受け入れるなど、オラリオのギルド本部ですら無理だ。

「だが、一所に集まってくれなければ、守りようもない」

まったく。防衛など考える必要がない分、今までの方が遥かに楽だったかもしれない。

そして――

（守るのは下策だ）

衛兵と漁師たちをかき集めたところで、守り切れるはずがない。

それを蹂躪するに足りるだけの閻霊死が呼び寄せられているのだから。

（殺される前に殺すしかない）

今まで通りにだ。

やることは決まっている。だが、いったいどうやって？

（住民を、見捨てるなら――）

何の問題もない。今まで通り、全てを殺せばいい。

……殺すだけで、いい。

『何を躊躇う』

『我らの犠牲、その全てを踏みにじったのだ』

『今更、この街一つ見捨てたところで——』

『人の話を聞きなッ!』

『いつてえ!?!』

誰かの恨み言に耳を傾けていると、太腿にアイシャの横蹴りが炸裂した。

『避難所があるそうだよ』

『避難所?』

アイシャの言葉に首をかしげていると、ニョルズが言った。

「ああ。ここは汽水湖だからな。海が大時化になれば、無縁じやられない。高潮に乗って、モンスターたちが街中に入り込んできたこともある。それにさつきも言ったが、昔は大型級のモンスターが入り込んできて暴れるって事も珍しくなかった。そういう時、女子供を逃がしていた場所がある。あそこにも見えるだろう?」

ニョルズが指をさしたのは、大雑把にはオラリオの方向だった。

確かに、高床式の高層建築物が街の何ヶ所かにあったのは知っている。

(なるほど、そういう事か)

確かに港町や観光地にふさわしくないほど無骨で巨大な建物なので、貯蔵庫の類かと

思ったが、もつと重要な施設だったらしい。

「ここ数年、モンスターの襲撃がなかったのは本当だ。だが、時化までなくなるわけじゃないからな。手入れは今も怠ってない。鐘を鳴らせば、みんなそこに避難する。宿屋の主人たちとも、そういう取り決めになつてる」

「で、その鐘は？」

「港の灯台にある。鐘楼を作るのも手間だったからな」

それに、見張り台も兼用しているからその方が都合がいい——と、ニョルズ。

この街の経済事情は何となく掴めてきたのでそれは納得できる話だ。

問題としては——

（もつと早く言つて欲しかったな）

それが本音だった。

最初に逃げ込んだ倉庫で言つてくれたなら、ここよりはいくらか近かった。

「まあいい」

何であれ、指針が定まったのはありがたい。

「鐘を鳴らせばいいんだな？ 任せておけ。得意分野だ」

灯台の位置はもちろん確認している。

高さはそれなりだったが、だからと言ってハイデ灯台には遠く及ばない。

駆け上がるのもさほどの手間ではないはずだ。

「……あんた、鐘撞のバイトでもしてたのかい？」

「鐘守の方なら、誘われた事がある」

無言のまま眉間を指先でもみほぐし始めたアイシヤに告げる。

「アイシヤ、お前はその神を連れてギルドに行け。余力があるならマードック家にも

どのみち奴らの協力は必要だ」

「あんたは？」

「もちろん、鐘を鳴らしに行く」

「一人で？」

「手が足りない。何しろ、俺達を皆殺しにできるだけの数が集まっているからな」

一体のデーモンより、一〇体の凡庸な亡者どもの方がはるかに厄介だ。

そして、今この街に集まってきている闇霊どもが一〇体を上回るのは間違いない。

「……守りに入ったら負けってことか。上等だよ」

守ろうとしても守り切れるものではなかった。

殺される前に殺しつくす。俺達が生き残る手は他にない。

結局のところ、それだけは変わらない。

「話が早くて助かる」

だからこそ、まず打って出るための準備を整えなくてはならない。

「鐘が鳴ったら、その時にいる拠点から閃光弾を上げてくれ。そこで落ち合おう」

四年前にシヤクティに押し付けられ、携行するようになっていたそれをソウルから取り出し、アイシヤに放る。

「あいよ」

アイシヤに渡したポーチには閃光弾が三発入っている。

「だが、無理はするな。守り切れないと判断したなら、別の場所に拠点を移してくれ。その辺はお前の方が勘が効くだろう」

つまり、機会は三回。アイシヤなら上手い事やつてくれるだろう。

集団戦に関しては、俺などよりよほど経験豊富だ。だが、単身で敵中を突破した経験なら、おそらく俺の方が多い。

適材適所。これは、ただそれだけの話だった。

「死ぬんじゃないよ」

「当然だ」

今ここで死んだ場合、アイシヤの『フェルナ恩恵』が失われかねないのだ。

それだけは何としても避けなくてはならない。

…

「ぎゃあああああつ!」

行く手から、断末魔の悲鳴が聞こえてくる。

……この状況だ。犠牲者が出ないはずがない。

路地を飛び出せば、槍に胸元を刺され痙攣する男の姿が見えた。

位置からして心臓をやられている。奇跡を紡いだとしても、もはや手遅れだ。

だが、今まさに殺されんとしている生き残りならまだ間に合う。

古き竜の言葉で詠唱を行う。

曰く【降り注ぐソウル】。

範囲が広く、威力もあるが——上空から降り注ぐという性質上、どこに当たるか読み切れない。

盾を構えて突貫し、射程内で生き残っている漁師の襟首を引つ掴む。

さらに詠唱を続ける。

曰く【フアランの矢雨】。

ソウルの短矢を、連続してばら撒く魔術。

一発一発は軽いが、やはり範囲が広い。大雑把な狙いでも、ひとまず当たる。

(素人どもめ)

放射状に広がる弾幕にひるむ闇霊を見やり、内心で安堵する。

やはり、反応が甘い。場慣れした闇霊なら、あの程度のことでは動揺しない。

体勢を立て直される前に、その場にいた全ての闇霊を斬殺した。

「あ、あんたは……?」

「お前達、武器は何か使えるか?」

「ぶ、武器? そんなもの……精々、銚くらいしか……」

「構わない。あの赤黒いのは人間じゃない。近づいてきたら、突き刺してやれ。だが、一人でやるな。仲間を集って囲め。必ず一人ずつ狙うんだ。それと、一度では死なない。消えるまで刺せ」

「そ、そんなこと言われてもよ……ッ!」

それは、そうだろうが。

しかし、もはや是非もなかった。

「生き残りたいなら、選択の余地はない」

息絶えた仲間を前に、青い顔を引きつらせる漁師たちを見て胸中で嘆息する。

おそらく、これが普通の感覚なのだろう。

不死人とは言え、そして霊体とは言え、見た目なら概ね人間と同じだ。モンスターの

ように簡単に割り切れはしないのだろう。

……いくら仲間を殺されたとしても、だ。

「近所の者たちを起こして、避難所かギルドに迎え。ギルドならニョルズと……そうだな」

とはいえ、他にどうしようもない。

せめて何かの足しになればいい。そんな気分で、軽口を口にした。

「頼もしい戦乙女が待っているはずだ」

確か、イシユタルは戦の女神でもあったはずだ。

その眷属だったアイシヤをそう言い例えても、別に文句はないだろう。

……もつとも、乙女かどうかについては多少議論の余地があるかもしれないが。

そして。

それから、似たようなやり取りを繰り返すこと数回。

ひとまず、灯台を視界に捉えはしたが――

(やはり、素人ばかりとはいかないか)

灯台周りには、九体の闇霊が展開していた。

鐘の存在に気付いたと見るべきか。

流石に獲物を逃がさない知恵はあるらしい――と、騎士鎧を着込んだ闇霊と見やつて

毒づく。

もつとも、中身が本当に騎士かどうかは定かではないが。

(それにしても、ここまで闇霊が徘徊しているのも珍しいな)

どこぞの教会で『教会の槍』どもと乱闘して以来か。

もつとも、あれは闇霊ではなく誓約霊だったが。

(まあいい)

あの時は腐れ縁の禿丸がいてくれたからまだどうにかなったが、今回は一人だ。

乱闘になれば数に押し潰されかねない。

(まともに相手にする必要はない)

道中で譲ってもらった布袋を二袋。適当な舟屋から失敬してきた麻袋。そして見かけたジャガ丸くんの屋台——まさかオラリオの外にもあったとは——から失敬してきた廃棄油の詰まった壺をソウルから取り出す。ひとまず、これだけあればどうにかなるはずだ。

あとは、先ほどと同じくこの街の守護獣の助力を仰ぐとしよう。

まずは左手に『火』を宿して詠唱を。

行使するのは【見えない体】。そして【隠密】。

続いて布袋を短刀で一突きして、湖に投げ込む。

流石に、それを聞き漏らすほど素人ではなかった。たちまち警戒し、周囲の哨戒を始める。

それでいい。そうでなくては困る。

今、身を潜めている建物から灯台まで五〇〇mほど。道なりに進むならもう少し長くなるか。

屋根を伝い、ギリギリまで灯台に近づき、残った布袋を湖面に。

その音でこちらの位置を特定した闇霊どもの頭上に油壺の中身をぶちまけてやる。

別に特殊な油ではない。特別熱されてもいけないし、揮発性の高い代物でもない。

続けて「火球」を放ったところで、いかほどの効果もあるまい。

だが、それはべとつく。少なくとも、ただの水よりはずっと粘性が高い。

それでいい。それだけで充分だ。

(別に素揚げにしようってわけじゃないからな)

どちらかといえば、その油はつなぎだ。

油壺が飛んできた方向から、こちらの位置に見当をつけた闇霊どもの頭上に、今度は麻袋の中身をばらまく。

無論、風の強いこの場所ではその粉塵はいくらもたたずして霧散するだろう。

だから、別にこの粉末を目隠しの代わりにしたかったわけではない。

鎧にかかった油がそれをいくらか纏わりつかせてくれればそれでよかった。

『オオオオオオオッ!』

最初に投げ込んだ『魔法の粉』に引き寄せられ、水面から姿を見せた二体の食人花は、その性に抗うことなく、再び粉まみれの闇霊どもに喰らいついた。

そのまま、たちまちのうちに乱闘となる。

暴れる巨体が生み出す風と、体から飛び散る水飛沫が粉末を散らすのを見届けてから、屋根から飛び降りた。

灯台までおよそ三〇〇m。駆け抜けるなら、あつてないような距離だ。

のたうつ巨体を避けられず、二体の闇霊が湖に落ちる。鎧を着込んでいるなら浮き上がれない。

そのまま体に戻ってしまえ。ともあれ、闇霊は残り七体。

闇霊どもはひとまず邪魔になった食人花^{ワイオラス}どもから始末する事に決めたらしい。

動きからしてまだ尻の青い素人もだ。よほどの幸運でもない限り、よくて相打ちだろう。

そして、死に見入られた今の街でそんな幸運などあり得るはずもない。

灯台の入り口を火炎壺で吹き飛ばし、狭い階段を一気に駆け抜ける。

武器をクラブに切り替え、吊り下げられた鐘を——壊さない範囲で——思い切り殴る。

鳴らす調子リズムはニョルズから聞いている。それに従って、三回繰り返す。

緊急事態を告げる——安らかな眠りを妨げる『目覚めの鐘』が、夜の港町に響き渡った。

(これで一仕事終わりだな)

もつとも、ようやく一山超えただけ。狂乱の夜はまだこれからが本番だった。

「——ッ！」

黄金の輝きが、背後から頬を焼いた。

気配を察知し体を逸らしていなければ、そのまま首筋を穿たれていただろう。

おそらくは「雷の槍」。我が友が得意とした竜狩りの奇跡。

『——ッ！』

振り返るより早く闇霊——騎士然とした装備に身を包んだそいつが斬りかかってくる。

なるほど、これは少し厄介だった。身体能力という意味ではアイシャのそれに匹敵する。

この『時代』に合わせて言うなら、L.V. 3相当。

他の闇霊が消耗させていたなら、ヴァイオラス 食人花を二体撃破することも可能だろう。

何しろ、筋の良い巡礼者なら、大よその理想形を見据えてくる頃なのだから。

……もちろん、そこまでたどり着けるかは別の話だが。

槍の返礼に、クラブを投げつける——が、流石に反応は悪くない。盾に弾かれた。そのまま闇霊は素直に距離を取った。

』

再び、物語が紡がれる。

間違いない。それは【雷の槍】。竜狩りの神話の再現だった。

もつとも、まだ未熟。威力も狙いもまるでなつちやいな。それは、最初の一撃で把握していた。

もし信仰に特化しているのであれば多少厄介だったが、そうではない。

一対一。場所は狭く、そう何度も奇跡は使わずに済む。

で、あるなら。迫る槍を掻い潜り、一気に接近するのは実に容易いことだった。

武器は直剣——小 Rond で手に入れてから、何だかんだと愛用している《ダークソー
ド》へと。

闇霊を斬るには、この上ない剣だった。

(まったたく……)

しかし、本当に。

どこかにあの太陽の戦士のサインが記されていないものだろうか。

(あいつとなら、この程度はきつと窮地にもならないな)

これはロードランを離れてから今に至るまで、苦境に立たされる度に思う事だった。

そして、今のところ夢想するだけで終わっている事でもある。

だから、きつと今回もそうなのだろう。

5

惨劇、というのであれば。

もちろん、ダンジョンこそが本場である。

メレンが死に見入られた日も、それとは無関係に何人もの冒険者を飲み込んでいる。

特筆すべきことではない。ここはそういう場所なのだから。

だから、おそらく。

それが、本来ならこの『時代』にあり得るはずのない脅威だったとしても、やはり驚くことはないのだろう。

それもまたダンジョンに潜む未知の一つ。ただそれだけの話だった。

時はメレンにて『死の瞳』が見開かれるおよそ三日前に遡る。

「行くな、アイズ！」

ダンジョン五二階層で、パーティが二分される。

ヴァルガンク・ドラゴン

それは、別に想定外の出来事ではない。砲 竜による五八階層からの狙撃に晒さ

れるこの階層であれば、この事態はまだ問題にもならない。

まだ死者が出ていないなら、いくらでも挽回できた。

そのための指示を二つ。一つは主戦力のアイズを止める。

彼女の風は攻防の要となる。ラウルたちを守りながら突破しなくてはならない僕達

の方に留まってもらわなくては立ち往生しかねない。

そして、もう一つが――

「ガレス、ベート達を頼む！」

「おう！」

分隊――砲撃痕に落下したレフィーヤと、彼女を追ったティオネ、ティオナ、ベートの計四名のもとへ、最大戦力の一つを送り込む。

向こうに必要なのは純粹な戦闘力と、何より統括者。

ならば、ガレス以上の適任はいなかった。

とはいえ、決して安心はできない。

レフィーヤ達が行きつく先は五八階層。今の僕達が超えるべき壁そのものだ。

「ガレス、くれぐれも気を付けてくれ。どうにも狙撃がまばらすぎる」と、いうより砲撃の空白地帯があるように思えた。

何であれ、五八階層で何か異常が起きているのは間違いない。

そして、ダンジョンにおいて、僕達に有利な異常事態イレギュラーが起ころうことは稀だ。「分かつておるわ！」

ならば、この先にはさらなる過酷が待っていると見ていい。

大穴に飛び込むガレスを見送ることなく、隊列を再編する。

確かに階下からの狙撃はまばらだ。だが、皆無ではない。

この場で立ち止まっているなど、的にしてくれと言っているようなものだ。

「このまま正規ルートで五八階層を目指す！ 遅れるな！」

砲撃はまだ止まない。

二重の意味で足を止めている暇はなかった。

そして、異常事態イレギュラーが発生しているのは、何も五八階層だけとは限らない。

親指の疼きが、それを声高に告げていた。

「五三階層……！」

連結路を駆け抜ける中で、ラウルが唸った。

確かに、かなりの強行軍だ。が、そんなことは問題ではない。

どのみち、ここはそうせざるを得ない領域だ。

問題となるのは――

（『新種』。何故出てこない？）

今の進行速度を維持するためには、出し惜しみはしてられない。

ここまで温存してきた魔剣も、いよいよ本格的に投入している。

何より、アイズの「エアリエル」。先ほどから多用しているというのに、『魔力』に引き付けられるはずの『新種』がいまだに姿を見せないのはどういうことか。

（確かに楽だが……）

先行したガレスたちがうまくやってくれたのか、狙撃は途絶えていた。

視界にいるモンスターたちを蹴散らせば、ひとまずの余裕が生まれる。

素早く補給を行わせ、進行を開始した途端――

「し、『新種』っす！」

前線を維持するアイズの前に『新種』――芋虫型のそれが群れとなって姿を見せた。

やはり、楽などさせてはくれないらしい。

「いや、待て。あれは……！」

その群れを率いる一際巨大な芋虫。

その上には、紫紺の外フレイットローブ套を着込んだ人影が立っている。

「二四階層の……!」

アイズが呻くのが確かに聞こえた。

つまり、彼だか彼女だか、あの女調教師——テイマーレヴィスの仲間ということか。

「人、なのか……?」

右目を細める椿に、肩をすくめる。

四肢にはそれぞれ銀の拳メタル・フイスト装とブーツを装着している。

人型であるのは間違いない。だが、人間かどうかは——

(おそろく怪クリーチャー人だろう)

人と怪物の混成体ハイブリッド。それをどちらに分類するかという話になってくる。

今はそれを議論している暇はない。いや、余地もない気がするが。

(これは——)

マズい——と、その群れを見て確信した。

横並びになっているその群れは、その怪人の指示に従って頭を高さを揃える。

どう見ても、あれは陣形。そして、前回目撃した攻撃手段から察するに——

『殺レ』

「転進! 横穴へ飛び込め!」

腐食液の一斉射撃が行われたのは、最後尾のリヴェリアの撤退が終わった直後だつ

た。

まさに間一髪といったところだ。

火にかけられた鉄板に油をぶちまけたような音と、鼻を刺す刺激臭、そして得体のしれない煙が背後を追ってきた。

「い、一斉射撃……!?!」

通路は腐食液で満たされ、天井も床も壁も全てが溶け落ちている。

話に聞く鍾乳洞とはああいうものか——と、馬鹿な妄想を振り払う。

そこは神秘的で美しい場所だと聞く。ならば、今見ている光景とは真逆に違くない。

土石系の壁や天井だったものが滴り落ちるその様は、生の存在を許さない灼熱の溶岩地帯と見るべきだった。

……触ればただでは済まないという事も含めて、だ。

(あれでは大盾を何枚重ねたところで意味はないな)

これはもう、迫りくる溶岩流を盾で防げるか、という話だ。

盾どころか、アイズの『風』でも果たしてどこまで防げるか。

「立て、来るぞー!」

ともあれ、今は戦慄している暇もない。

しばらく直線が続くこの通路で同じことをされては今度こそ全滅しかねない。

なりふり構わず飛び込んだ姿勢のままのラウル達を叱咤する。隊列は乱れているが、ここは走りながら立て直すしかない。

「結局なんなのだ、あやつは？」

指示を出している間に、椿がリヴェリアに問いかけた。

そういえば、彼女には『新種』の話しかしていなかったか。

これも、遠征の直前までばたついていた弊害といったところだろう。

「早い話が調教師だ」

「なんと、あれほどの怪物を御するというのか！」

ぼつさりとしたリヴェリアの言葉に、椿が右目を大きく見開いた。

確かにあれだけの数を一人で統括できる調教師など、【ガネーシャ・ファミア】にもいないだろう。

つまりは、真つ当な調教師ではないということだ。

だが、今はそんなことはどうでもいい。

「待ち伏せ!？」

そうするだろう——と、ラウルたちの悲鳴を聞きながら、呻いた。

ここまで統率が取れているなら、むしろしない理由がない。

再びの一斉射撃を躲し、さらに転進。

「ま、また現れたつす?!」

「三時の方向からも来ます!!」

分かつている。今の僕達には戦場を選ぶ自由はない。

『逃ガスナ、巨蟲』
ヴィルガ

件の怪人は、さらに食人花^{ワイオラス}まで従えて背後に迫っている。

「誘導されている……!」

「まさかモンスターから戦術をくらうとはね」

リヴェリアの言葉に、肩をすくめた。

確実にどこかに追いこまれていた。今から包囲網を突破するのは不可能だろう。

向こうにとって都合のいい戦場で一戦交えるしかない。

……いや、まだ戦闘に持ち込めるだけの目があれば幸運だ。

退路のない場所で、四方から一斉射撃を受ければ成す術もなく全滅しかねない。

(いや、それはないか)

後方を一瞥する。

敵の指揮官の狙いは、察しがついた。

(アイズを探している)

つまり、あの怪人^{クリーチャー}……レヴィスと同じだ。

で、あれば少なくともアイズの死体も残らないようなやり方はしてこない。
(そう、最初の一齐掃射はあくまで脅しに過ぎない)

あれで決着をつけるつもりだったなら、もつと完全な奇襲を行えたはずだ。

二度はしかけてこない。必ずやりすぎない方法を選択する。

「フィン、このままでは追いつめられるぞ!」

で、あれば多少強引な仕切り直しも可能だ。

(反撃するなら今かな)

幸い、このルートは未知の区画ではない。現在地と、周辺情報は頭に入っていた。

「アイズ、左折しろ!」

本当に戦場を選べなくなる前に、決戦の地を決めた。

そこは巨大な一本道。この構造は、必ずしも相手だけに利するものではない。

「迎え撃つ! アイズ、準備しろ!」

敵が分散しないこの場所なら、こちらにも一撃で敵を殲滅するための手札があるのだから。

「盾三枚、並べろ!!」

それは防御のためではない。あの一斉射撃を防ぐことはできない。

「アイズ!」

それは、発射台だ。

僕の意図を正しく組んでくれたアイズがそこに着地——いや、着盾とでもいうべきか

——する。

【目覚めよ】
テンペスト

風が、蠢いた。

銀に輝く剣が、呼応するように震えた。

——

盾を構えたサポーターたちが、来るべき衝撃に備えて腰を落とす。

さらにラウルたちが後ろから彼らを支えた。

すべては一瞬のこと。

そして——

「リル・ラフアーガ」

風の螺旋矢が解き放たれる。

『巨蟲!!』
ヴィルガ

一斉射撃が行われるが、もう遅い。

水平に奔る巨大な竜巻を前にすれば、そんなものは飛沫と変わらない。

たちまち吹き飛ばされ、さらに巨蟲ヴィルガの群れを蹂躪し——

『チィ……!』

突如として現れ、怪人の前に立ちはだかった赤黒く輝く人影。

それが構える大盾に直撃した。

「なっ!?!」

相殺。その赤黒い『何か』は大きくのけぞったが、アイズもまた押し返された。

いや、あの技は体に負担がかかる。想定外の動きは彼女自身にダメージを追わせかねない。

単純に痛み分けとは言いづらいところだった。

『ヤレヤレ。厄介ナ風タ』

嘆息した怪人の背後に、同じような赤黒い人影が現れる。

』

それは、大盾を構えたもう一体と異なり、明らかな魔導士型だった。

杖を構え、聞き取れない言語を用いて詠唱を行う。

「アイズ、下がれ!」

確かに聞き取れないが、それをよく知っていた。

クオンのそれと同じだ。

「?!?!」

僕が叫ぶより先に、詠唱は完成した。

青白い極光の槍が複数解き放たれる。

それは、天井や床、壁にぶつかっては反射し、不規則な軌道を描いて殺到する。

「なっ?!」

向こうの狙いが良かったのか。

それとも、こちらが単に不運だったのか。

反射を繰り返したその槍は、構えた大盾を素通りした。

「【集え、大地の息吹——我が名はアールヴ】！」

そのままであれば、前衛は壊滅していただろう。

「【ヴェール・ブレス】!!」

だが、間一髪のところ、リヴェリアの魔法が完成した。

「ぐ……あ……ッ！」

緑光の加護は、見事に彼らを守り抜いた。

少なくとも、死神の鎌からは。だから、少なくともまだ死者は出ていない。

「くっ?!」

一方のアイズも、もう一人の赤黒い何かと交戦していた。

相手の得物は斧。盾の堅牢さは明らかで、しかも大鎧を着込んでいる。

(あれがクオン側の『何か』だとするなら……)

正攻法では、明らかに不利だ。

「来るぞ、フィン！」

「アイズ、交代しろ！ リヴェリア達を守れ！」

指揮ならリヴェリアが代行してくれる。だが、守りはアイズ以外に誰もできない。

だからこそ、迷うことはなかった。

槍を構え、前衛型の『何か』へと突撃する。

入れ替わる形で、アイズはリヴェリア達のもとへ。

「エアリエル！！」

風が荒れ狂うのと、一斉射撃が行われるのはほぼ同時だった。

「くう……！！」

先の一撃で数が減っていなければ、防ぎきれなかっただろう。

『蹂躪シロ、食人花！』
ワイオラス

波状攻撃。狙いは、起死回生の一撃を持つリヴェリアだった。

無論、彼女は並行詠唱を修めている。

その中でも詠唱を途絶えさせることはないだろう。

だが――

あちらの魔導士の方が早い。

乱反射する光の槍が再び解き放たれた。

「避ける！」

防御より回避を優先するしかない。

だが、そうすれば――

「ぎゃあああああ!?!」

「回復を急げ！」

隊列は崩れ、そこを腐食液に狙い撃ちされる。

この戦術なら、アイズだけを無傷でとらえることも可能だろう。

(やっつけてくれる!)

唸るが、逆転の糸口はまだ見出せていなかった。

この赤黒い『何か』は実に厄介だった。

「どけ、アイズ、フィン！」

そこで、リヴェリアの魔法が完成した。

「【ウイン・フィンブルヴェトル】！」

『』

時すら凍てつかせる極寒の猛吹雪と、青い光の奔流とが激突し――

「何だと……ッ!?!」

リヴエリアが撃ち負けた。
猛吹雪が打ち消された。

幸い直撃はしなかったが、パーティ全体に動揺が広がる。

(どちらもLv. 6。いや、それを超えるのか……?!)

目の前の戦士は、つい先日遭遇した「おろじや猛者」に見劣りしない剛力だ。

そして、魔導士の方もいくら第一階位のものとはいえ、リヴエリアの魔法を打ち破った。

と、なればそう考えるしかない。

(最悪だな……)

Lv. 7相当が二枚。

地形もろともに抹殺可能な腐食液を放つ『新種』と、『魔力』に反応し殺到する『新種』の群れ。

その統括者も怪人。クリーチャー

敵の手札を思い浮かべ、さらに付け足す。

いつ階下からの狙撃が再開するかも分からない。

劣勢だと認めるより他になかった。

そして、階下にいる部隊と連絡が取れない今、撤退もあり得ない。

(アイズの一撃を凌がれたのが痛かったな)

失敗したかもしれない——とは、考えない。

こと劣勢において、团长である自分が揺らぐのは致命的だ。

さらに言うのであれば、元より全ての作戦が一切の問題なく機能することはあり得ない。細やかな修正は常に必要だ。

ならば、今回だけが特殊ではない。

仮に失敗だったとして……それなら、なおさら揺らいでいる暇などない。

速やかに仕切りなおすべきだ。

だが、それは可能か？

(こちらの手札はまだ何も損なわれていない)

可能だ——と、次の刹那には結論を結ぶ。

なるほど、負傷者が出たのは事実だ。

だが、この深層で異常事態イレギュラーに見舞われたのだ。内容が何であれ、まったくの無傷で切り抜ける方が稀だった。負傷者が出た程度で動揺してはやっていられない。

逆転の切り札が二度に渡って相殺されたのも認めよう。

それとて、真正面からの力押しという最も単純な使い方が通じなかつただけだ。直撃

したのに意味をなさなかった——と、いうのであれば事態は深刻だが、そうではない。自分も、リヴェエリアも、アイズも、椿も、ラウルたちも健在。

物資はまだ充分に残っている。回復魔法の心得があるリヴェエリアも健在。ならば、負傷者の立て直しは可能だ。

狙撃が再開されていない以上、ガレス達もまだ生存している。

ガレスたちが無事なら、レフイーヤもほぼ間違いないで生きています。で、あれば別動隊を心配する理由などない。

つまり——

(深刻な問題はまだ何も起こっていない)

戦闘続行は可能——と、改めて結論を結ぶ。

とはいえ、現状においてこちらの主力となるのは、Lv. 6が三枚。次点でLv. 5だ。

リヴェエリアと同格だと見ても、Lv. 4では少しばかり荷が重い。

次に対応すべき問題を俯瞰する。時間はかけられない。思考が言葉すら置き去りにして駆ける。

前衛型の『何か』は僕が。『新種』——ヴイルガ巨蟲の掃射はアイズが。『新種』——ヴィオラス食人花の攻撃はラウルたちが防いでいるのが現状だ。

そして、最大の問題は――

(あの魔導士……)

あの魔法が厄介だ。今のところ確認できた魔法は二つ。

片方はリヴェリアの魔法より早く、その性質から防御も困難。回避するしかため、これが放たれる度に隊列が崩れて負傷者が出る。

もう片方はリヴェリアの「第ウイン・一フインブルヴェ魔トル法」を上回る。対応をしくじれば、ただそれだけで全滅しかねない。

そして、クオンと同じだとするなら、魔法が三つだけとは限らない。

さらなる切り札を隠していることも想定しておくべきだろう。

(守りを固めるのは下策だな)

あちらも、そろそろ程よい加減を掴むころだろう。

向こうが態勢を整え、再び一斉掃射を行えるようになったらもう防ぎきれない。

そうでなくとも、別動隊が背後に現れないとは限らない。

いずれに転んでも、壊滅は必至だ。そして、相手がそれを同時に仕掛けてこない理由もない。

守りに入れば入るだけ向こうが有利になる。

だからこそ、前衛型の『何か』はあえて積極的に仕掛けてはこないのだ。

そうでなくては、暫定Lv. 7を相手に一人で抑えられるはずもない。
(打って出るしかない、が……)

そのためには、Lv. 7を二枚抜かなくてはならない。
(さて。逆転の糸口はどこにある?)

時間は敵に与している。

速やかに見つけ出さなくては、全滅は必至だった。

……

ひよっこどもと合流してからしばらく、目につくドラゴンどもを一掃したと思った矢先。

五七階層に通じる通路から芋虫型の『新種』が湧いて出た。

「塞がれたか。まったく、次から次へと——」

——と、戦斧を担いで呻くより早く、

『——オ!!』

ドラゴンどもとは違う咆哮が響き渡った。

「ぬう?!」

頭上を影が——何より、圧倒的な威圧感が覆う。

見上げるより先に、体が反応していた。

「あ、あいつ………！」

「フィリア祭の時の新種——じゃなかった、デーモン!!」

テイオネとテイオナの叫びを聞き、さもありませんと納得する。

「なるほど、のう。あのリヴェリアが不覚を取るわけだ」

そして、狙撃がまばらだった理由も察した。

つまるところ、このデーモンとやらがヴォルガング・ドラゴンを殺して回っていたせいで。

『——オオ!!』

猛々しく——そして、それ以上に禍々しい咆哮が、それを肯定するかのように轟く。

「やれやれじゃわい」

今さらその程度のものに臆することはない。

そんなものより、今気になるのは芋虫どもの動きだ。

デーモンとやらと同調するように、包囲を狭めてくる。

(ふむ。やはりフィンの言う通りか)

リヴェラの街に現れた際にも、ワイオラス食人花とやらと連携を組んでいたと聞いている。

それが意味するところはそう多くはあるまい。

(この『新種』どもの飼い主と、デーモンの飼い主は繋がつとるようだ)

それが何を意味するのか——と、そこまで考えを巡らせている暇は流石にない。まずはここを生き残らねば意味がないのだから。

「デーモンだか何だか知らないけど牛は牛、よね？」

ギラリと、ティオネが目の色を変えた。

「ハッ、見りや分るだろうが。どつからどう見ても牛の化け物だ」

ベートが牙をむき出しにする。

「これが飛んで火にいる夏の牛ってやつだよね！」

ブン、と大双刃^{ウルガ}を振り回してティオナが笑う。

「夏だろうが冬だろうが、牛は火に飛び込まねエよ！」

「あんた、燻製豚肉^{ペーコン}でも作る気？」

「いや、火に飛び込んだら燻製にもならんわ」

それは単なる丸焼きという。

大体、ペーコンとはその名の通り燻製にされた豚肉のことだ。

牛肉で作ればそれはもう別の料理——と、言うべきかはともかく——だった。

「じゃが……まあ、この際どうでもいいわい」

何を——とむくれるティオナをなだめてから、ゴキリ、と首を鳴らす。

幸い、ひよつこどもの士気は高い。いや、高すぎるくらいだ。

「誰があいつの相手をする?——って、言いたいところだけど……」

よほどミノタウロスを単身撃破したという下級冒険者に充てられているらしい。放っておけば、誰が一騎打ちするかで揉めだしかねない。

念のため、釘を刺しておくべきだろう。

「流石にそれは自重せい。ここが目的地ではないからの」

無論、このデーモンが五九階層から上がってきた——と、言う可能性はもちろんある。だが、これはそれ以前の問題だ。

これは初見ではない。ならば、わざわざ五九階層まで来いとは言うまい。

(この先にあるのはもつと別のもんじゃろ)

いずれにしても、ここで力を使い尽くされてはこの先にいるであろう本命を相手にするのが骨だ。

「ハッ、関係ねエ!」

軽くぶち殺してやる——と、真つ先にベートが動き出す。

儂の忠告が届いているのかいないのか。

「ま、肩慣らしには充分すぎる相手よね」

「へっへー。大双刃ウルガがあればもう負けないもんね——!」

不安に思うより先に、それぞれが武器を構え、テイオネとテイオナが続いた。

「これも未知というやつじゃな」

その冒険者の戦いは見ていない——が、しかし。

これは長年の壁である五九階層到達。そして、そこにいる厄災との前哨戦だ。

相手は、あの【正体不明^{イレギュラー}】をして一目置く怪物である。

ならば——

「相手にとって不足なしじゃのう!!」

熱き戦いを前に血を猛らせているのは、何も若造どもだけではないという事だ。

6

「くっ……い」

赤黒い『何か』の重撃を逸らす。

ただそれだけで、不壊属性^{デュランダル}であるはずの槍——《スピア・ローラン》が悲鳴を上げる。

無論、最上級鍛冶師^{マスターミス}謹製のその槍が折れるはずもないだろうが——

(オツタルの一撃より重いだつて?)

あるいは——と。そう思わせるだけの脅力に背筋を強張らせながら毒づく。

オラリオ唯一のLv. 7。その一撃を受けたのは、つい数日前のことだ。

その時のオツタルはまず間違いなく本気だった。その一撃よりも重い。

防いでいるはずなのに、腕が痺れ、ともすればそのまま叩き切れそうになる。そこに加えて小人族バルウムの宿命であるこの矮躯。

例え一撃を防いだとしても、その剛力を前に容易く押し返されてしまう。

もちろん、それは今さらだ。今になって不利だなどとは言わない。

だが――

(攻めあぐねているのは事実かな)

今のところ戦況は膠着状態……より、やや劣勢か。

さらに、時間は向こうの味方だ。次の瞬間にも別動隊に背後を取られるかもしれない。

それを回避するためには、最低でも指揮官である外フレイアドローフ套を叩かねばならない。

(分かってはいるんだけどね……)

アイズは腐食液の防御。リヴェリアは向こうの魔導士型の『何か』の牽制と、防御で手一杯。

「椿さんを中心に迎撃！ 隊列を崩しちやダメっす！」

「分かってはいるが……！」

食人花ウイオラスは椿を中心に、ラウルたちでまだどうにか対処できているが――

「ぐあああああつ!?!」

「ええい！ 建て直した端から——ッ！」

何度目かの魔法。それが陣形をかき乱し、隊列から外れた団員が腐食液の狙撃を受ける。

無論、アイズの風もリヴェリアの魔法の加護も健在だ。その上でなお即死してしまうほど未熟な団員は連れてきていない。

「ハイ・ポーションの準備、急ぐつす！」

「大盾、次を並べろ！」

……が、このままでは物資が底をつく。

ここで干上がっては、本命の五九階層到達は困難となるだろう。

(遊ばれているな……)

腕の痺れが治まるまで、再び間合いを図る。

その間も、前衛型の『何か』は決して深追いしてこない。

まったく、その余裕に感謝すべきだろう。

もう二、三発連続で攻撃を喰らえば、防御を崩されているはずだ。

「？」

そう、崩されているはずだ。

ヒューマンの子供と大差ないこの矮躯では、そう何度も凌ぎ切れない。

もしここで僕が突破されたなら、戦況は一気に破滅に向かうだろう。

(何故それをしない?)

考えても見れば、無理に時間を稼ぐ理由はないはずだ。

ただの一撃で押しつけられるこの矮躯。いかにも非力で貧弱な敵。

間断なく攻め立てれば、それで瓦解できると分かっているはずだ。

なのに、何故?

(これはまさか……)

とんでもない勘違いをしているのではないか。

未到達階層を目前に、『新種』を引き連れた未知の存在——怪人クリーチャーと思しき存在。

それが呼び出した得体のしれない『何か』。

それもまたまぎ紛れもれもない強敵だと——

(本当に?)

仮にそうだとするなら、何故親指は疼いていないのか。

今まで、この勘は一度だって外れたことがないというのに。

……

無論、互いに知り及ぶところではないが。

勇者フイーンより早く、彼と同じ疑問を抱いたものがここにいた。

それは、

「おのれ……。あれだけ連射して、何故息切れを起こさないとは」

例えば名実ともにオラリオ最強の魔導士リヴェリアでもない。

「リヴェリア並みの魔法をこうも立て続けに撃つてくるとは、とんだ化け物よ」
最上級精鍛冶師でもなかった。

（あれだけの威力の魔法を連射して、マインドダウン精神疲弊を起こさない……？）

それは——自他ともに……それどころか神すら認める凡人だった。

「次の大盾急ぐつす！」

壁と言わず床と言わず乱反射して迫る魔法と、防御無効の腐食液。

団長たちですら手を焼くその脅威の前にすれば、自分など守りに徹するしかない。

とはいえ、これが下策だという事も分かっていた。

このままでは押し潰される。

（ヤバい！ ヤバいつす！）

せめてレフィーヤがいれば——と、考えてからさらに自責する。

そもそもレフィーヤが自分を庇って穴に落ちなければ、戦力が二分されることもなかったのだ。

「んん？」

レフィーヤ。その名前が、妙に記憶を刺激した。

いや、彼女個人に何か理由があるわけではない……と、思う。

そう。確か——

『こつて極振りがないよな』

——と、そういったのは確かクオンさんだったはず。

ずいぶんと角が取れていたから、多分【おかしや猛者】との決闘直前頃から、オラリオを出ていくまでの間のことだろう。

『いや、いるつすよ？』

内情について教えることはできないので——いや、多分ある程度は見抜かれていただろうけど——具体的な名前は挙げなかったはず。

ただ、例えば純前衛型のガレスさんやテイオナさんの顔を思い浮かべていたように思う。

この頃はまだレフィーヤは入団していなかったけど、今ならその中に彼女の顔も混ぜていたことだろう。

『リヴェリア辺りか？』だが、あいつはミノタウロス辺りは杖で撲殺できそうだからな』

この当時無関係だったレフィーヤの名前が記憶を刺激したのは、すぐ後にクオンさんがそう言ったからかもしれないし、そうではないのかもしれない。

だが、今はそんなことはどうでもよかった。

『こう、でたらめな威力の魔術をボカス力撃つてくるくせに、筋力がなくてロングソードすら満足に振り回せない奴とか、ここに來てからはまだ見ていない』

それは、『神の恩恵』の性質的には、ありえない話だった。

それこそ、レフイーヤは魔力特化型だが、それでもLv. 3にまで『器』が昇華された今なら、ミノタウロスを撲殺できる。それもお世辞にも打撃に向いた造りではない杖で、だ。

(いや、まさか……)

どう考えてもアレはクオンさん側の『何か』だ。

だとするなら、『神の恩恵』ではありえないその現象が起こっている可能性も――

(ある、かも、知れない……っすか?)

もちろん、普通にLv. 7相当かそれ以上の怪物という可能性の方が高い……: ような気がする。

決断できずにいると、団長の動きが変わった。

まるで何かを確かめるかのように――具体的には、今までより一手余計に動いている。

(例えば、クオンさんの言う通り、あの戦士が筋力に極振りしてたとするっす)

いつになく、冷静だった。自分でもそう思う。

その場合、例えば数回大斧を振るえば息が上がってしまう——なんてこともあり得るのでは？

団長もその可能性に思い至ったからこそ、あえて危険を冒しているのでは？

だとすれば、あの魔導士も——

「魔剣、一本貫うっす！」

——多分、二度はできない蛮行だったと思う。

バックパックから魔剣を一振り抜き出して、突貫していた。

「何?! おい、ラウル?!」

リヴェリアさんの声が、背中に聞こえた。

自分でも何をしているのかよく分かっていなかった。

ただ、食人花相手ヴィオラスに魔剣を振るい、強引に押し返す。

刀身にヒビが走る。使えるのはもう一回か二回。

「ラウル?!」

団長の横をすり抜ける。

もちろん、立ちはだかっていた戦士は素通りなどさせてくれなかった。

でも——

(お、遅いっす!?)

迫る大斧は明らかに遅くなっていた。少なくとも、自分にも^{し、4}躲せる程度には。

「うおおおおおおおっ!?!」

もつとも、かすめただけで肩の装甲を持っていかれたが。

だから、口からこぼれたのは、裂帛の気合と呼ぶにはあまりに情けないものだった。だが、通り抜けた。なら、後にやることは一つ。魔導士に向かって、魔剣を振るう。刀身が砕けた。使用限界だ。

でも、もう関係ない。愛用の長剣を抜き放つ。

狙いは爆炎の向こう側。自分の予想が外れていないなら、まだそこにいるはず――

『!?!』

そして、充分すぎるくらいの手ごたえが伝わってきた。

…

「ラウル?!」

リヴェリアの叫びに視線だけ振り返ると、確かに将来の副官候補が迫ってきていた。

恐怖にやられて発狂した――と、いう事はあり得ない。

確かに弱気で優柔不断な面はあるが、本当の意味での弱気ではない。

だからこそ、期待している。

そして――

(そうか！)

彼は、クオンと接触して情報を収集してもらっている。

可能な限り詳しく報告を挙げてもらっているが……それとて、十全ではなかった。

その時はさして重要とも思えなかった『何か』を今ここで思い出したとしても不思議ではない。

『!』

無論、前衛型の『何か』はラウルを素通りさせるようなことはしなかった。

だが――

(やはりか！)

その一撃は遅かった。

まるで息が上がっているかのように鈍重で大ぶりの一撃だ。

渾身の一撃を繰り返すような戦い方をするが……やはり、そのための体力が足りていない。

余裕を見せていたわけでない。逆だ。

余裕がなかったからこそ、今までこちらにとどめを刺せなかったに過ぎない。

『!?!』

それを証明するかのようには、魔導士型の『何か』がラウルの一撃のもとに深手を負う。
「なるほど」

改めて迫る大斧を見据え、息を整えた。

威力は充分。確実にオツタルの膂力を上回る。

だが、それだけだ。いや、ただそれだけというべきか。

ギリギリのところ、半歩ズレる。それと同時に、穂先を突き出した。

『?!』

それ自体は大盾に阻まれる。

だが、もはや動じることなど何もない。一気呵成に攻め立てる。

「どうやら、君の『ステイタス』には極端すぎる差があるようだね」

言葉が通じているかどうか。伝わったとして、こちらの言わんとすることが理解できているか。

それは定かではないが、相手からは動揺が伝わってきた。

なるほど、膂力はLv. 7を凌駕する。

だが、総合的に見れば、この『何か』は決して強すぎはしない。精々がLv. 5相当か。確かに力勝負ではまず勝ち目がないが、それだけだ。

ならば、勝敗を分けるのは『技と駆け引き』。

そして、何より――

「アイズ、こい！」

――仲間との連携だ。

「はああつ！」

魔導士の援護はすでに途絶えた。

ならば、アイズが足止めされる理由もなかった。

そして、

(この敵は遅い)

つまり、力押し以外の戦闘に持ち込めばいくらでも対処できる。

風を纏うアイズの瞬間速度は、「ロキ・ファミリア」最速のベートすらも凌駕するのだから。

だから、そちらはアイズに任せることにした。

「うわああああつ！」

『死ネ！』

突魔導士型の『何か』にひたすら剣を打ち込む――その隙に、フレッドローブ外套の指揮官に襲われかかっているラウルの援護に向かう。

『チィ!?!』

「だ、団長?!」

「よくやった、ラウル!」

返す槍で、魔導士型の『何か』の首を刎ねる。

それで、そちらは霧散した。

むしろ、あれだけ斬り刻まれながら、首を刎ねるまで健在だったことが驚きだが。

魔石はない。となると、やはりモンスターではないか。

しかし、それはさておくとして――

「安心したよ」

『何ダトツ?』

「君達の中でも、力の差は存在するようだね。……それも、随分と極端に」

『ツツ!!』

この怪人は、話に聞く『人斬り』より……そして、レヴィスより弱い。

あの赤髪の調教師――いや、怪人クリーチャーなら、こうも容易く圧倒できまい。

まして、アイズとベートを一撃で下した『人斬り』には及ぶはずもなかった。

『巨蟲!!』
ウィルガ

怪人が檄を飛ばすが、もはや手遅れだ。

「お前たち、散れ!」

リヴェリアの言葉に、ラウルを引つ掴み射線から撤退する。

「[ウイン・フィンブルヴェトル]!!」

再び、吹雪が吹き荒れた。今度はそれを迎え撃つ青い極光はない。

今この空間を席卷するのは、斜線から外れているというのに吐息は凍り、肺までが痛みだすほどの冷氣。斉射された腐食液など、たちまち凍てついて穢れた粉雪となるだけだ。

無論、巻き込まれた巨蟲ヴァイルガも食人花ヴァイオラスに成す術などものはやない。

おそらく、前衛型の『何か』もそれに巻き込まれたのだろう。

それとも、アイズが斬り捨てたのか。いずれにしても、すでに姿はない。

「——遅い」

吹雪の後を追うように間合いを詰めたのは椿。

鍛え抜かれたその白刃が煌めき——

『ギイ……!』

氷像もろとも、怪人の右腕を両断した。

『オノレ……!』

痛痒を見せるより先に、怪人は宙を舞う腕を掴み取る。

その素早さは目を見張るものがあつた。

『食人花!』
ヴィオラス

そして、やはり人の常識では測り切れない。

「何ッ!?!」

外套姿の怪人が打った次の一手を見れば、そう判断するしかない。

その怪人は食人花ヴィオラスに自分を丸のみにさせたのだから。

無論、本当に飲み込まれたわけではあるまい。

その巨大な口の中に隠れただけのはずだ。

だが、

(どれだ?!)

同じような外見の食人花ヴィオラスはたちまち入り乱れ、どれが怪人を隠しているのかとつきに

見極められない。

三つのカップと一枚の硬貨を使った賭け——無作為に並び替えて、どのカップに硬貨が入っているかを当てるそれ——なら、駆け出しの頃、ロキに付き合っただけで何度かやっ

たことがある。無論、当時から全勝できた。L v. 6となった今ならこちらから提案してもロキが嫌がるほどだ。

が、あれとは動かされる早さが圧倒的に違う。

加えて、全てが同時に動き出しているし、何より最初の食人花に今も硬貨が入っているという保証すらない。

これでは、流石に追いきれない。

(それなら、こちらも盤をひっくり返すしかないが……)

ラウルが構えていた魔剣はすでに砕けた。

今からでは、流石のリヴェリアも詠唱が間に合うまい。

僕の魔法は広域をまとめて薙ぎ払うには向かない。

と、なればやはり――

「アイズー」

「リル・ラファアーガー」

返答はその叫び。何よりも、水平に奔る大竜巻だった。

とはいえ、初撃と違って『発射台』を用意できていない。

発動が少し遅れたのは致しかたないことだ。

……おそらく、その刹那のズレがあちらの味方をしたのだろう。

「外套、ただだど？」

アイズの風に蹂躪された食人花の群れの残骸。

そこから回収できたのは引き裂かれた外フェイテッドローブ套だけだった。

「なんと。あの嵐の中を逃げ延びたというのか？」

なんとという早業。いや、逃げ足の速さだ——と、椿が波面を作る。

だが、彼女の言う通りだ。

まさかあの一撃で魔石を砕かれ消滅した——と、楽観する気にはとてもなれない。

「ごめん、フィン」

と、アイズは目を伏せ謝ってから。

「追いかける？」

そう、問いかけてきた。

これはこの場にいる全員の代弁だろう。

少し考えてから、首を横に振った。

「いや。このまま五八階層に向かい、ガレス達と合流する」

考えるまでもないことだった。

異常事態イレギュラーならば、まず間違はなく五八階層でも起こっている。

「あの怪人クワイチャーの襲撃以前から狙撃がまばらだった。おそらく、下でも何か起こっている。

このまま戦力を分散しておくのは危険だ」

戦力ならあちらの方が充実しているとすら言えるが……その分、物資に乏しい。

一方、サポーターを抱えているこちらは物資はともかく戦力に難ありと言わざるを得

ない。

このままあの怪クリーチャー人を深追いし、再びあの赤黒い『何か』に——それどころか、レヴィスや『人斬り』に襲撃されるようなことになれば、最悪は全滅もあり得た。

「分かった」

と、アイズが再び全員を代表して頷く。

その頃には、すでにリヴェリアが隊列を立て直していた。

(装備の消耗が少し激しいな)

腐食液を浴びたサポーターたちの鎧はいくらか欠落している。

さすがの樁でもここで修復作業は行えまい。

(ガレス達と合流して、連結路でなら何とかなるか?)

今の時点で階層すら無視してくるモンスターが出現している。

そして、五八階層から先は元から未知の領域だ。無論、情報収集は怠っていないが……しかし、充分ではない。安易な見通しなど、このダンジョンでは命取りにしかならないのだ。

「一気に駆ける。遅れるな!」

ならば、せめて戦力を整えておくべきだろう。

何が起こっても、それに対応できる……か、どうかは神——リヴェリアがいないのを

良いことに、今頃ホー^下ムで飲んだくれているであろう神^{ロキ}ではなく、今も天上から下界を眺めているであろう超越^か存在^み——のみぞ知るといったところだが。

第四節 激戦。結末はまだ遠く——

1

「ぬううううんツ!!」

そのデーモンとやらが振るうのは、岩石をそのまま削り出したかのような大斧。それを、真正面から迎え撃つ。

「ぬう!?!」

だが、打ち負けた。

純粹な力勝負で負けるなど、いつ以来か。

地を削りながら後退する中で、思わず舌を巻く。

もつとも——

「そうでなくてはな!」

——むしろ、血は昂るばかりだった。

四年前に突如として現れたあの若造——神々の度肝を抜くどころか、震え上がらせた

【イレギュラー正体不明】すら一目置く強敵。

そんなものを前に、奮い立たずして何が冒険者——否、ドワーフの戦士か。
「るおおおおおッ!!」

ベートの蹴りに、一瞬だけデーモンの意識が逸れた。

その隙を見逃すはずもない。

「ふんー」

大ぶりの一撃。単純だが、直撃すれば階層主として痛撃を与えられる。

半世紀かけて培った自負を宿す一撃だ。

「何じゃと?!」

だが、通じない。

否。巖のような表皮をかち割り、その下にある肉にまで届いている。

これが真つ当な階層主だったなら、最低でも揺らがすことくらいはできたはずだ。

それほどの傷を与えている。

だが——

(妙な感触じゃな……)

何かに届いていない。だから、見た目ほどの痛撃を与えられていない。

そんな感触だった。

無論、掌に伝わってきたわけではない。そちらで感じたのは、いつも通りの確かな手

ごたえだ。

それを感じたのは冒険者としての――あるいは、戦士としての勘だ。

そして、

(こいつは、ロキが言う通りかもしれない)

この感触には覚えがあった。

四年前。あの若造が本拠地ホトに乗り込んできた時と同じだ。

人型のデーモン。あの若造は、まさにそういうモノなので――

「はああああああつ！」

「てああああああつ！」

いったん間合いを開き、見定める。

アマゾネス姉妹の連携も、やはり見た目ほどには効いていないように思えた。

(ふむ……)

フィリア祭での苦戦。

それは、アイズ達が素手であったことに加えて――あるいは、それ以上に、その『何か』が足りなかったからではないか。

(そう考えれば、あの若造が一人でアイズたちより早く仕留めた理由にもなるの)

地力の違いもあるだろうが……それ以上に、その『何か』をあの若造は会得している。

だからこそ、デーモンも容易く仕留められ、完全なる神殺しなどといった真似もでき
る。

アイズとあの若造の違いは何か。それも、明白だった。

(魂喰らい、か……)

そもそも、あの若造自身が時々口にしていたではないか。

ソウル——すなわち魂がどうこうと。

あの若造が知っていて、儂らが知らない『何か』とはつまり、その術なのだろう。

それがあの若造が人型のデーモンである証拠——と、までは流石に断言できないが。

しかし、ロキやフィンの推測は大きく外れてはいない。その確信を得た。

「ねえ、何か前の奴より強くない?！」

「確かにそうね。『強化種』ってこと?」

暴風のごとく振り回される大斧を搔い潜りながら、戦闘経験のあるティオナとティオ

ネが、口々に言いあう。

流石にその言葉は軽視できない。

(強化種……。いや、強化か)

まばらだった狙撃。その原因がこのデーモンだとしよう。

それなら、残された魔石を喰らうことで強化——成長したと考えるのは筋が立つ。

(喰らったのは魔石ではないかもしれんがの)

デーモンとは神の魂を喰らうものだ――と、ロキの言葉を思い出す。

主神の言葉を信じるならドラゴンどもの魂を喰らい、己の力としたとも考えられる。となれば、あの若造の力もそうやって得たものなのだろう。

だとすれば。さて、あれほどの力を得るにはどれほどの魂が必要となるのか――

(まあ、それはいいじやろ)

少なくとも、今は余計なことだった。

あとでフィンとロキにでも話してやればそれでいい。

「やれやれ、こいつは意外と骨が折れそうじゃわい」

生憎と、相手の魂を喰らう術など持ち合わせていない。

だが、アイズたちはこれを倒している。

で、あれば。その術を知らなければどうにもならないという相手でもない。

「ま、こういう分かりやすい方が儂向きじやな」

必要なことは相手が倒れるまで斧を叩き込む。ただそれだけだ。

これは、何とも分かりやすい話だった。

今まで何度となく繰り返してきたことであり、ここを生き延びたなら、もうしばらくは繰り返していくつもりのことなのだから。

「早かったね」

鐘を鳴らしてから、ギルド支部に駆け込むと、アイシャがそう言って迎えてくれた。

「いや、遅すぎるくらいだ」

返答と共に肩をすくめる。

他になんと返せばいい。もはや、笑ってしまうほど後手に回っているというのに。

「街の様子は？」

次に声をかけてきたのは、神——確かニヨルズといったか——だった。

「港はもう闇霊どもの巣窟だ。死人も出ている」

言うまでもないことだ。耳をすませば今も断末魔の悲鳴が聞こえるのだから。

それとも、今聞こえているこれは残響なのだろうか。

だとするならば、俺も随分と繊細になったものだ。

「大体、情報ならずでに聞いているだろう？」

明かりを押さええられたギルドの中でも分かるほど顔を青ざめさせる、神に問いかける。

ギルドの中には、いかにも漁師といった風体の男達が、言いつけ通り銚を握りながら

詰めている。他にもその家族や知人と思しき老若男女がざつと一〇〇人ほど。

この全員が俺が見つつけてきた相手だとは思えない。アイシャが連れ帰ったか、自分たちで逃げ込んできたか。いずれにせよ、情報収集には困らないはずだが。

「あんたね。ただの漁師に何を期待してるんだい？」

いつそ呆れたように、アイシャがため息をつく。

「遠征中に野営地を急襲されりや、手馴れた冒険者だつて浮足立つんだ。住み慣れた街がいきなりこの有様なら、正気を保つてるだけまだ上等だよ」

「……そうか」

祭祀場に闇霊が侵入してきたようなものと考えれば、多少は納得できる。

……もつとも、仮にそんなことが起こったところで、最初に少し驚くだけだろうが。

あとはいつも通り。

どちらかが生き残り、どちらかが死ぬ。死んだ方がそのまま墮ちるかどうかは別の話。

——と、ただそれだけの事だろう。

「衛兵は？」

もつとも、ここまで大規模な侵入は流石に覚えがないが。

「そつちは多少はマシかね。ケツを蹴つ飛ばしてやったら、何とか持ち直したよ」

まったく、世話のかかる雄おとこばかりさ——と、アイシャが不敵に笑う。

……俺もつい最近霞かすみに蹴られたばかりなのだが、ひよつとして知られているのだろうか。

「どのみち、持ち直してくれなきゃどうにもならない。海でモンスターやら海賊を相手しているだけあって、漁師どもの何割かはそこらの下級冒険者よりマシだからね」

確かに、道中で助けた連中も思ったよりすぐに立て直していた。

「今は他の避難所に走らせてあるよ。流石に旅行者どもを見捨てるわけにもいかないからね」

「そりゃ、そうだが……」

ただでさえ手が足りないのに——と、毒づくことは自制した。

何かを守ること。それに関して、体を張ってあの春姫という少女や後輩たちを守ってきたアイシャには遠く及ばないのは明らかだ。

「五人一組で戦闘は極力避ける。どうしても避けられないなら、五人で一体を囲んで相手が確実に消えるまで攻撃の手は緩めない。完全な素人じゃないんだ。それだけ言っときゃ何とかなるだろうさ」

無論、心情的なものに限らず、実際の経験や知識からしても。

「んで、避難所に人が集まったら、まとめてメレンから脱出。オラリオまで逃げろって指

示を出してあるよ。呪われているのがこの場所なら、それでいいだろう？ それとも、まさかオラリオまで影響が及んでいるなんて言わないだろうね」

「ああ、流石にそこまでは届かないだろう」

場所と言つても、距離というより概念に依存するように思う。

メレンという場所まちが呪われているのだから、オラリオという場所まちまで逃げればおそらく振り切れる——とは思うが、道中の安全までは保障しかねた。

「気は進まないけど、オラリオにも連絡を入れた。ちようど信号機があつたからね。あとはあの腐れエルフが動くかどうかさ」

望遠鏡に似た魔石製品を軽く叩きながら、アイシヤが言う。

「動いて欲しいところだな。できれば、シヤクテイ達に」

何しろ、これほど大規模な侵入は経験がない。

巡礼地ではこれほどの生者が同じ場所に集まることなど稀だ。

加えて、時空が歪んでいる影響か、必ずしも全員にその影響が及ぶとは限らない。

そういう意味では、場所とは『特定の時空』なのかもしれない。

そして、仮にそうだとするならこの街でも、案外気づかずに今も呑気に眠りこけている者たちがいるのではないか――

(いや、それはないか)

この『時代』の時空は安定している。

目覚めてから一度もズレを感じたことはない。今この時も。

ならば、今この時もこの街の住人が殺され、ソウルを奪われている——と、楽観を捨てて現実的な思考を巡らせる。

「……防衛に關してはお前に一任したい。構わないか？」

L v. 3の豪胆なアマゾネス。加えて、あの歓楽街で衛兵役も務めていた彼女は適任と言えよう。

「守りに入ったアマゾネスなんざ、泡の抜けた麦酒エールみたいなもんなんだけどねえ」

まあ、いいさ——と、アイシヤは頷いた。

その際に、改めてギルド内を見回す。

おそらく彼女の指示だろう。窓やら何やらには木の板を打ち付け、入り口には柵やら何やらで簡単な阻塞が作られている。

闇霊に通じるかは微妙だが、ないよりはマシだろう。

何しろ、ここに残る本職の衛兵は少ない。戦力の大半は漁師。

残りは彼らが連れてきた家族たち。こちらは、むしろ庇護対象だ。

この比率は、メレンの縮図と見ていいだろう。やはり、オラリオのようにはいかない。それは仕方がないとして——

「ところで、あそこで簀巻きになつてるのは誰なんだ？」

視線の先に転がっているのは、簀巻きにされ丁寧な猿轡を嘯まされている人間——この『時代』でいうところのヒューマン——の男。

面長で痩せぎす。ひよろりとした身長で、何となく几帳面そうで……何より、どうみてもギルド職員らしき制服を着ているのだが。

「ああ、あいつは……何つたつたつね。とりあえず、このギルドの支部長だよ」
うるさかつたから黙らせた——と、あつさり言い放つアイシヤ。

さて、一体なんと返すべきか。

「……ここに闇霊が殺到したら、そいつ逃げられないんじゃないか？」

恨みがましい目で睨んでくるその支部長を見やり呻いた。

「その時は担いで逃げてやるよ」

「それはやめておけ。『当たり』を引いた時が怖い」

「なら、縄を斬るかね。それくらい時間は何とか稼げるはずさ」

あとは自己責任だね——と、アイシヤ。

「それは仕方がない。……どのみち、他に選択肢はないからな」

その支部長だけではなく、この場所にいる全員が。

(そういえば……)

今の俺は死ねないのだと、改めて胸に刻む。

何しろ、その死は俺のものではない。アイシヤの死だ。

(まったく、まだ経験していない殺し合いがあつたとはな)

文字通り、誰かの命を背負つて戦う。

飽きるほど殺しあつてきたつもりだったが、この状況は全く経験がない。

そもそも、自分の命の重さを忘れたような奴が、他の誰かの命など背負うものではないだろう。

それが、かけがえのない誰かの命ならなおさらだ。

「それで領主……マードック家だったか。そっちには？」

「あんたじゃないけど、手が足りない。ここに来るまでの大冒険を聞きたいかい？」

「……いや、大体見当がつく」

獵師達はおろか、アイシヤ自身までがいくつかの傷を負っていた。

ひとまず、負傷者を集めてから右手に『火』を宿し、物語を口ずさむ。

その名を【中回復】。見た限り、それで充分だろう。

「すまねえ」

黄金の輝きが消えると、一番重傷だった漁師が呻いた。

「気にするな」

領きながら、ソウルから回復薬や武器の類を取り出す。

武器は、あまり癖の強いものは除外した。

鋤と同じ使い方ができるスピア。

誰でも使いやすいロングソードとショートソード。

力任せに振って当てればひとまず効果があるクラブ。

あとは盾か。中盾をいくつかと、力自慢に大盾――《双竜の大盾》を預ける。

「安物だが、ないよりはマシだろう。回復薬は腰の道具入れに入れておけ」

無論、全てが楔石の欠片を刻んだかどうかの安物だ。

「ああ、そうするよ」

年かさ――あるいはどこかの船の船長なのだろうか――の男を中心に、分配が始まる。

「便利なもんだね」

「かもな」

実際、しばらく武器屋の真似事ができる程度にはため込んでいる。

使うあてもない代物だったが……まったく、いつどこで何が役に立つかわからないものだ。

「あんたの分のポーションはなくていいのかい？」

「ああ。まだ何とかなる」

エストも灰瓶も、まだ残っている。

とはいえ、流石にあれだけの数を相手に無傷では切り抜けられなかった。

双方とも三割減といったところか。

「そうだ。これを貸しておこう。もしシャクテイ達が来たなら、困るからな」

「何だい、そりゃ？」

取り出したのは《砂の呪術師のフード》。

「とある魔女たちが愛用するフードだよ。素顔を隠す効果がある」

「へえ、便利なもんだね」

眩きながら、アイシャがそれを被る。

と、よく見知った顔が霞がかったように曖昧になった。

どうやら、まともに機能してくれたらしい。

「けど、その魔女つてのはわざわざこんなもん作ってまで顔を隠さなけりやならなかったのかい？」

「いや、見えそうで見えないから、余計気になるんだろう」

実際、砂の魔女たちは轟惑的な容姿で知られていた。

……そして、実際に美人揃いだった。【炎の扇】片手に襲ってこなければ、仲良くやれた

だろうに。

「そんなもんか」

「そういや、下着だけ脱がせて喜んでる奴もいたつけ——と、アイシヤが呟く。

……つくづく、世の中には色々な性癖があるらしい。

「いや、それはともかく。

「それで――」

武器や回復薬の分配が終わったところで、神が何事か問いかけてくる。

「いや、待て」

だが、それより早く何かか聞こえた。

神の言葉を遮って、耳を澄ませる。

足音。それも、複数人。

「これは、闇霊……」

誰かが呟くと、支部内に動揺が走る。

だが、

「いや、違う」

聞こえてくるのは、足音だけではない。

罵声、怒声、悲鳴。それらが混在した人の声。

そこに混じって、硬質な何かがぶつかり合う音も混じっている。しかも、数が多い。

「これは戦闘音だ」

そして、戦っているというなら対立している何者かがいるという事だ。

片方を闇霊だとするなら、もう片方は――

「まさか、ボルグ達か?!」

――おそらく、そうだろう。

思っていた以上に人望があつたのか。それとも、兵力を隠していたのか。いずれにしても好都合だ。こちらには神の錦がある。

少々無理やりにも協力させられるだろう。

「俺が出る。出たらすぐに封鎖しろ」

告げると、大慌てで漁師達が入り口を塞ぐ柵や木箱の類をどかし始める。

扉を開けられるようになるまで少し時間がかかったが、まだ戦闘音は途絶えていない。

ならば、それなりの数は生き残っている。

……互いだ。

「――」

音源まで走り抜け、物陰に潜んで様子を伺う。

その先には初老の男を中心とした集団。総数はギルドに詰めている人数と大差あるまい。

うち三割ほどが武器を構えている。衛兵と漁師の混成部隊。比率としては半々か。

当主もまた銛を握りしめている。そのおかげなのか、死者が出ているの割にはまだ士気高く保たれている。

敵対しているのは、もちろん闇霊だ。数は二〇体ほどか。

幸運というべきか。食人花ヴィオラスがいればとづくに壊滅していただろう。

その合戦を横から眺めている。

衛兵と漁師の混成部隊と、闇霊の一団。力量は大差あるまい。

(まったく、闇霊は狙いやすくていい)

まずは左手に弓――《ファリスの黒弓》を。番える矢は毒矢。狙いは今まさに漁師を斬り捨てようとする闇霊。

放った矢は、狙い変わらずその闇霊のこめかみを射抜いた。

横にのけぞるそいつに、早さを優先してもう二射。

三本も突き立ててやれば、よほど念入りに対処していない限り毒は回る。

狙いを変えて、さらに三射。

「うおおおおおつ！ やれ、やれえ!! 押し返せええええッ！」

「いいか！ 相手は海賊……いや、モンスタードもだ。いつも通り思い切り刺しまくれえ!!」

それを数回繰り返す頃には、混成部隊が体勢を立て直し、反攻に打って出る。

よほど想定外だったのだろう。闇霊の一团には動揺が見て取れた。

(素人どもめ)

やはり侵入してくる闇霊の大半は、騎士や戦士のように『ダークリング』が浮かぶ前から荒事を専門としていた者ではない。

反応が遅く、呑気であり、何より稚拙すぎる。

それなりの装備と経験——漁師たちですら、海賊相手に対人戦闘の心得がある——を有する彼らが息を吹き返せば、そのまま押し返されるほどに。

一方で、反攻に浮足立った闇霊どもは伏兵の存在を知りながらも未だに柔らかな横腹をこちらに向けたままにいる。

まったく情けない。それでも巡礼者か。

武器を《グレート・ランス》へ。地面を蹴りつけ、一気に加速した。

『ッ?!?!?』

臆したのか、隊列から少し後退した闇霊の横腹を貫き、そのまま群れから押し出す。横腹から侵入し、内臓を貫いて反対側に飛び出した穂先が、さらに近くの壁に突き立つ。

同時、左手に《トゲ棍棒》を。その首筋を引き裂くようにして叩きつける。

喉の肉らしき光片が飛び散り……それで、一体が消滅した。

それを見届けたわけではない。体内に流れ込んでくるソウルの感触から判断しただけだ。

その頃には、視線は次の標的へ。振り向きざまに投げナイフを投擲する。

それはこの距離で呑気に詠唱していた闇霊の喉を穿ち、強引に詠唱を中断させた。

『……!?!?』

慌てて、その闇霊がナイフを抜こうとする。

微笑ましいものだ。喉をやらただけで詠唱できなくなるとまだ錯覚したままなのだから。

右手でその顔面を引っ掴み、『火』を一気に燃え上がらせる。

すなわち【発火】。

『!?!?』

三体目。

攻撃するか防御するかを迷ったそいつの脳天を、まだ構えていた《トゲ棍棒》で叩き割る。

四体目。

攻撃を選択した闇霊。携えているのは、ロングソードと中盾。実に堅実な装備だ。振り下ろされた剣を《トゲ棍棒》で払いのける。

と、その闇霊は後ろに跳び、盾を構えた。

悪くない判断だ。悔やまれるのは、その盾の性能が今一つなことか。

右手の武器を《バルデルの刺突直剣》に。

『!!』
構えられた木製の盾もろとも、強引に貫き通す。

せめて強化されていたなら、ここまで容易く防御を破ることはできなかつただろうが……まあ、無理もないか。

とはいえ、慈悲はかけない。引き抜き、返す一撃でその首を刎ねる。

「うおあわ?!」

闇霊の一撃に押し返され、尻餅をついた衛兵——いや、恰好からして漁師か——が、奇

妙な悲鳴を上げた。

武器を《古びた鞭》に。とっさにその闇霊の足を狙い放っていた。

絡みついた鞭を引き寄せ、強引に引きずり倒してやる。

「ううおおおおおおおっ!?!」

漁師を真似するように尻餅をついた闇霊を、周りの衛兵や漁師が滅多刺しにしていく。

が、隙ができたのは俺も同じだ。

「――ッ!」

他の闇霊の槍が、横腹を貫く。少し遅れて、メイスが側頭に直撃した。

まだ未熟な闇霊だ。この程度では死にはしない――が、それでもソウルは確実に揺らいだ。

だが、この程度なら無視できる。たじろいでなどいられない。

一体多数の状況では、僅かな動きの停滞も死を呼び込む要因だった。

強引に踏みとどまり、武器を《アヴェリン》に。引き金を二回引く。

それぞれ三発のボルトが、二体の闇霊の脳天をぶち抜く。

その頃には、劣勢を悟ったのか闇霊の一部が後退を始めた。

だが、その判断は愚かだ。

間合いが開くなら、混成部隊を巻き込まないで済むのだから。

武器を《グンタの斧槍》へ。二度対峙した鑄鉄の英雄を真似るように突撃する。

「——オオツ!!」

闇霊の一団の中央まで強引に斬り込み——そして、ウァークライ咆哮。

体中の力を注ぎこみ振り回した斧槍が周囲で立ち尽くす闇霊どもをまとめて薙ぎ払う。

『——!』

生き残った闇霊が、遮二無二組み付いてくる。

同時に他の闇霊が両手で槍を構えて、突撃してきていた。

その闇霊もろともに貫く気だろう——が、筋力が足りない。技量が足りない。

盾で背後に組み付いた闇霊の顔面を一撃。ふらついたところで、拘束を振り払い、槍を持つ闇霊に投げ飛ばす。

激突した際にその槍が闇霊を貫いたらしいが——関係ない。

斧槍で二体まとめて貫く。

その頃には、混成部隊に近い闇霊どもは全滅していた。

なるほど、日常的にモンスターの脅威に晒されつつも漁をしているだけはある。

俺が知っている漁師よりもさらに逞しいようだ。

背中側には誰もいない。なら、これで本当に誰も巻き込む心配はなかった。

左手に『火』を。思い描くのは鉄の古王に仕えた呪術師が遺した秘儀。

獲物に喰らいつく蛇にも似た業火。

すなわち【火蛇】。

前方に展開する闇霊どもを飲み込むように、火柱が連鎖して立ち上り夜空を焦がす。

それで、終わりだった。

ひとまず、周囲に存在していた闇霊は一掃した。何とか、凌ぎ切った。

「た、助かった……のか？」

「あ、ああ……」

漁師どころか衛兵たちまでが安堵しては武器を下げる。

それを年かきの――経験豊富そうな衛兵が叱咤したが、立て直すまでには時間が必要
そうだ。

……日常的にモンスターどもと殺しあっている冒険者のようにはいかないか。

「お前さん、何もんだ？」

高等回復薬を煽り、横腹の穴を塞いでいると初老の男が精一杯の虚勢と共に問いかけてくる。

「通りすがりの放浪者だ」

「馬鹿言え。そんな高ランクの冒険者なんぞオラリオ以外にそういるか。どこの回し者だ？ 何を企んでこんなバカげた騒ぎを起こしている？」

「それこそ馬鹿な話だな。この惨状を生み出したのは闇派閥イワイルスだよ。そちらにこそ心当たりがあるんじゃないか？」

「……ッ!？」

期待をはるかに上回る——露骨なまでの動揺が伝わってくる。

なるほど、俺達の推理素人考えもあながち的外れではなかったらしい。

もつとも、状況に救われた、という側面もある。

幸か不幸か、この状況で平静を保っていられるほどには凶太くないようだ。

「まあ、今はいい」

何であれ、ここで問い詰めている暇はない。話を早々に切り替える。

「別に恩を売る気もないがな。ここで立ち話は阿呆な話だろう？」

「それはそうだが……」

「すぐそのギルドにいくらか避難している。まずはそこまで移動する。それでいいか？」

「ギルドだと？」

「下種な勘繰りをするなよ。避難所として建物を利用しているだけだ。それこそ……ああ、なんと言ったか。この街の神は」

「神ニヨルズか？」

「そいつだ。その神も今はそこにいる。それでは――」

不満か？――と、問いかけるより早く、

「ニヨルズ様は無事なんだな?！」

若い男が、飛びつくように詰め寄ってくる。

「ああ。……お前は？」

「俺はロツド。「ニヨルズ・ファミリア」の団長だ」

黒髪黒目の逞しい若者はそう言った。

なるほど、いかにも未来有望な若頭といった風情がある。……ような気がする。

「いや、「ステイタス」が封印されてないから絶対に無事だとは思ってたけどよ……」

心から安心したといわんばかりに、その若者は大きく息をついた。

「それじゃ、みんなを連れて行かないと……」

凌ぎ切ったが……流石に、まったく被害者が出ていないわけではなかった。

息絶えている衛兵や漁師を、その家族や知人らしき者たちが取り囲み、抱きかかえている。

あるいは逆もだ。

だが――

「その心情は察するが……」

本当に、察しているのかは定かではない。それが本音だった。

俺達^{不死人}の死生観など、もはや生者^{ひと}のそれからは大きく乖離していた。

死が重みを失った時点で、生もまたその価値を失ったのだ。

「連れてはいけない。確かに、ギルド支部はすぐそこだが、そこに行けば何が変わるわけではないからな。無駄死にしたいなら、背負っていくのも留まるのも止めはしないが」

それをすれば、ほぼ確実に死体が増える――と、告げる。

それでは本末転倒だろう。

「……ッ!」

激昂したように、若い団長が眦を吊り上げる――が、思ったよりも冷静らしい。

同じく平静を取り繕うボルグに肩を叩かれると、すぐに感情を押さえて呻いた。

「分かっている。行くぞ、みんな」

血を吐くようなうめき声に、ゆっくりと周りの人間が動き始める。

無論、その動きは遅い。だが、流石に急かす事もできない。

とはいえ、不幸中の幸いというべきか。それから、ギルドまでひとまずの襲撃はな

かった。

なかつたが——

「つくづく大規模だな……ッ！」

そのギルド支部が襲撃を受けていた。生者が大量に詰めているのだから当然か。

まったく、油断も隙もありはしない。

「まだ生きているな?！」

入り口周辺で愛用の大曲剣——大朴刀と呼んでいたか——を振り回し、迫る闇霊を斬り散らしているアイシヤに叫ぶ。

「遅い!……どこで油売ってたんだい?!」

その声に応じている暇もない。

左手に『火』を灯し、物語を口ずさむ。

その名を「沈黙の禁則」。

自らも含めて、一定範囲内にいる全ての存在のスペル——魔力によつて生じるあらゆる現象を封じる奇跡。

『?!?!?!』

建物ごと抹殺しようとしていた魔術師や聖職者らしき闇霊どもに動揺が広がる。当然だろう。この力量なら、まだ剣とスペルを複合して使える者の方が少ない。

魔術師は魔術が、聖職者は奇跡が切り札であり、最も頼れる武器である。

この闇霊どもはそれを封じられて平静でいられるほどの経験も技量もまだ持ち合わせていない。

「だが、こちらもありふりをかまってはいられない。

切り札の一つを切る覚悟を決めた。

武器を《傭兵の双刀》——己が最も得意とする武器に近いその武器へと切り替える。そのまま棒立ちする術者の一団に突貫した。

『流石に黙って斬り殺されるほどには素人ではない。

ダガーやメイスを構える——が、それがどうした。

掻い潜り、すり抜けながら、左右の刃を振って闇霊たちを解体していく。

「かかれえ!!」

「うおおおおおっ!」

あの若い船頭の号令と共に、混成部隊が闇霊の背後を強襲した。

そうなれば、もはや勝敗は決まったも同然だった。

専門職でもなければ、乱戦は同士討ちの恐れがあつて危険。確かにそうだろう。

だが、相手は閻霊だ。

いくら人型であつたとしても、見間違えるはずがない。

『ソウルの業』を持たないこの『時代』の人間の攻撃は通じづらい。それもまた事実だ。

だが、まったくの無意味でもない。

注意を惹くか動きを止めてくれるなら、あとは俺がとどめを刺して回ればいいだけだ。

まったく、楽な話――

「ひいひいひいひいっ?!」

『オオオオオオオオッ!』

――など、死に見入られたこの街であるはずがない。

神の気配に勘づいたか、閻霊のソウルに釣られたか――それとも、単に死にやすくなつている影響だろうか。

割鐘の叫びと共に、サイオラス食人花が三体迫りくる。

せめて、俺が最前線にいたならまだ打つ手はあつただろう。

だが、状況はすでに乱戦状態だ。友軍だけを都合よく庇う手段などない。

呪術なり魔術でまとめて薙ぎ払う事すらできない。

「全員避けろ――」

無論、そんな言葉が間に合うはずもない。間に合ったとして、どれほどの意味があるのか。

自覚しながらも、右手に『火』を宿す。

思い描くのは炎の憧憬。かつて孤独な巨人の王が統べた国が遺した罪の一つ。

曰く【罪の炎】。

一点に収束する劫火が、迫る食人花ツイオラスの顔面花を一瞬にして焼滅させる。

だが、それだけだ。

「ぎゃあああああああああつ?!」

「ひいひいひいひいひい!?!」

残り二体は何の躊躇いもなく、こちらに突っ込んでくる。

ここには『神の恩恵』を持たぬ、ただの生者までがまだ外にいるのだ。

たちまち地獄絵図が出来上がった。

「やめ——ツツ?!」

「娘を食うな——……!」

「腕?!?! 俺の腕え!?!」

「ツ?!?!」

「ぐぐ?!! あ………! し、締め上げられ………あ」

「あ、ああ、あああああ……っ!?」

闇霊も神の眷属も生者もこの雑草どもには関係ないらしい。

伝説に語られる大海蛇のように人の海を泳ぎ、獲物を貪っていく。

俺の魔力や神のソウルの気配すら無視して、だ。これも『死の瞳』の影響なのだろうか。

若い船頭や当主、さらにはあの海神までが犠牲になったと思しき者たちの名前を叫んでいるが、だからどうなるものでもない。

せめて、この先も統括役を押し付けられるこの三人がまだ無事だという事に安堵するくらいか。

いや、安堵している暇などない。この元凶を速やかに始末しなくては被害が拡大する一方だ。

「フイオナ、左は任せた!」

この状況でなお、とっさにアイシヤを偽名で呼んだことに我ながら驚いた。

役作りというのが案外うまくいっていたのだろうか。

「残りは全員ギルドの中に下がれ! 崩れてもいいように頭だけは守っておけよ!」

まだ無事だった子どもを引つ掴み、若頭の方角へと放り投げる。同時に指示もだ。

死んでいないなら、後は何とか打つ手がある。……と、思う。

完全にただの生者を相手にした経験がないせいで断言はできないが。
「無茶を言う……!」

泣き言を言ったのは誰だったのか。

少なくともアイシャではないだろう。なら、ひとまずはそれでいい。こちらにも、そんなことを気にかけている余裕はない。

むせかえるほどに血と臓物の匂いが漂う中で、その元凶と激突する。時間はかけていられない。これ以上暴れ回らせるわけにもいかない。

武器を《月光の大剣》——神の如き白竜が遺した一振りへ。

「目覚めろッ!」

あの忌まわしい白竜が遺したとは思えないほど、蒼々と澄んだ刀身。

それが更なる月の輝き魔カを帯びる。

月光の銘に偽りなし。その輝きを前にして食人花ヴィオラスが魅入られないはずがない。

『アアアアアアアアアッ!!』

歓喜ともとれる叫びと共に、食人花ヴィオラスは真正面から突っ込んでくる。

「——」

そして、激突。その瞬間に昂っていた魔力もろともに大剣をその顔面に叩きつけた。

月の明かりが食人花ヴィオラスを飲み込み蹂躪する。

これこそが、『月光の奔流』。

『灰の時代』の王者たる古竜にして偉大なりし魔術の開祖、白竜シースの力の一端。ただの仇花程度が抗えるものではない。

見届けることはせず、地面を蹴る。まだ食人花グイオラスは残っている。

思い描くのは『灰の時代』の次。『火の時代』の英雄。

【狼騎士】——【深淵歩き】アルトリウス。神々最大の英雄の剣技を再び模倣する。

『グイイイイイイイイイイ!』

未だ拙劣なその一撃と言えど、雑草を刈るには充分だ。振り下ろした月光の刃はその首筋を半ばまで斬り裂く。

「人の獲物をとるんじゃないよー」

その頃には、アイシヤの詠唱が完成した。

紅い魔力の奔流が刀身に絡みつき――

【ヘル・カイオス】!!」

その斬撃が、食人花グイオラスを完膚なきまでに消し飛ばす。

……それで、ひとまず脅威は去った。去ったが……

「な、なんてこった……」

「お、お前たち……」

「あ、あ、あ……」

すり潰され、喰い千切られ、押し潰された人間だったものの残骸が辺りを朱く染めて
いる。

ダンジョンの中なら珍しくもないが……しかし、ここにいるのは冒険者たちではな
い。

その惨状は、海賊やモンスターを相手どった経験がある漁師達の心すらたやすく砕
く。

「すまん。お前たち、すまない……！」

無論、神——ニョルズもだ。

それが本心かどうかは、所詮人間の俺には見抜けやしない。

……それに、正直なところ疑うための気力を用意できない。

(クソが……ッ！)

ソウルの状態が万全だったなら——などと泣き言は言わない。

仮にそうだったとしても、あの状況で全く犠牲者を出さずに済ませられたはずがな
かった。

生憎と俺は都合よく万事を解決する物語の英雄などではない。ただの不死人だ。

……だが、惨劇を前に苛立ちを募らせる程度にはまだ人間性も残っている。

「これ以上は守り切れない。このまま一度、連中を連れてメレンを脱出するしかないね」
「……ああ、分かっている」

アイシャの言葉に唸る。

分かっている。おそらく、この場にいる誰もが。

だが、果たしてそんなことが可能か？

(マズいな)

分かる。嫌でも分かった。

この場にいる多くの人間は、心が折れてしまっている。

泣き出すことすらできず、放心して膝をつくその姿。

それと同じ顔をした者達を今まで散々見てきた。

もし、彼らなし彼女らが不死人なら、そう遠くないうちに亡者化するだろう。

自分からはソウルを求めて襲ってくることをせよ、茫然と佇むばかりの亡者となるはずだ。

俺やアイシャ、あるいは海神や若頭、当主が叱咤し、激励し、あるいは背中を蹴飛ばして。

それなら、この場所から彼らを動かすことはできるだろう。

しかし、それが一体何になる？ その歩みが遅いのは明白だ。

闇霊どもを——この街を包む『死』などとても振り切れはしない。

そして、犠牲が出れば出るだけ、歩みは遅くなり、いずれは途絶える。

そこが終焉の地だ。結局、死に場所がこのギルド支部からいくら動かだけの話ではない。

(だからって、一体誰が彼らを責められる?)

モンスターが跋扈する中で漁をする彼らだ。死者が出ることもあるだろう。

モンスターではなくとも、大時化でも起これば死者や行方不明者が出ることも珍しくあるまい。

悪意を持つて襲ってくるというなら、海賊という脅威もある。

死を見た、あるいは感じた経験はあるはずだ。

だが、それでも彼らは基本的に善良で真つ当な漁師のようだ。

ならば、訳も分からずこんな惨劇に巻き込まれ、成す術もなく仲間や身内を失い、それでも心が折れないなどと、どこの誰が言えるのか。

まして、それ以外の住人の心が折れないと思う方がどうかしている。

「マズいね」

「……ああ」

闇霊の気配。心折れた彼らを見てほくそ笑み、舌なめずりしている悪霊どもの足音が

迫る。

ひとまず、アイシヤに万能薬を渡す。

(あと何回戦える?)

無言で中身を煽り、瓶を投げ捨てる彼女を見て、声にせず呻いた。

闇霊……いや、『ソウルの業』を修めた相手では『神の恩恵』——正確にはそれが与える『耐久』も十全には効果を發揮しない。当然だ。それはソウルそのものを狙う一撃なのだから。

神を殺せる刃を、その眷属が耐え凌げる筈がない。

例えそれが格下相手であつたとしても、だ。

必然、彼女にとって通常の戦闘より遥かに厳しいものとなつてゐるはずだ。

いや、俺とて条件は同じ。闇霊の一撃は確実にソウルを揺るがす。

油断すれば容易く殺されるのは分かり切つていた。

「と、とにかく一度ギルドの中へ！ 手当てを——！」

「よ、よし！ 動けるな!？」

ギルド職員と海神までが飛び出してきて負傷者をギルド支部へと引きずり込む。

闇霊が迫つてゐる。

「薬持つてこい！」

迫る閻霊は、今の俺にとっても取るに足らない雑兵ばかりだ。侵入してくる大多数はそうだろう。

アイシャが基準となつたところで、おそらく負けはしない。

仮に『大当たり』をひいたとすれば……それでも、やり方次第だ。

勝ち目のない戦い。圧倒的に格上の化け物。そんなものは、今さら恐れるまでもない。

散々に繰り返し、その全てを踏み越えてきた。この程度、戦いと呼ぶまでもない。

「誰か布を寄越せ！　ひとまず止血だけでも——！」

襲ってくるのは素人ばかり。いつも通りにやれば、何の問題もない。恐れる事など何も無い。

……そう、いつも通りにやれるなら、だ。

「おい、死ぬんじゃねえぞ！　こんなのかすり傷だろ、なあ!？」

負傷者は多い。預けた万能薬だけでは足りない。

閻霊が迫ってくる。

「こいつは、もう一度ここで迎え撃つしかないね」

アイシャが、舌打ちしながら大朴刀を構える。

閻霊が来る。

「ここが城塞なら、いくらでもやるんだがな」

それなりに立派な造りだが、それだけだ。防壁もない。堀もない。満足な阻塞すらありはしない。

いるのは、心折れかけた漁師と衛兵。そして、抱えきれない非戦闘員と負傷者ばかり。青の教徒ではない俺に、青霊の庇護はあり得ない。

つまり、頼れるのは自分と傍らにいるアイシャだけだ。

しかし、その彼女とて疲労すれば動けなくなる。そして、動けなくなった時が死ぬ時だ。

疲れ果て体が動かなくなる――と、そんな人間らしきすら残っていない俺達とは違う。

自分ひとりが切り抜ければいいわけではない。いつも通りにはいかないのだ。

全ての状況が『未知』で構成されている。

(来たか)

弓弦が絞られる音が響く。一体や二体ではない。

赤黒い燐光以外に、火の輝きが見える。火矢だ。

一本、二本なら切り払える。うまく「フォース」を用いれば、二桁は防げるかもしれない。

だが、それだけだ。そもそも、狙いは俺ではあるまい。
狙いは、背後の支部。

(焼き討ちにする気か?)

さもありなん。どれほど危険だろうが、火が回れば外に逃げ出すしかない。

火に焼かれて死ぬか、闇霊に殺されるか。

このままでは、この場にいる大半の存在にとって許される選択肢はその二つしかない。
なる。

闇霊どもが、嗤う。

(こちらから仕掛けて、何体殺せる?)

向こうは、いつも通りだ。向こう側なら俺も気楽にやれただろう。

目につくすべてを殺せばいい。何の問題もない。

いや、俺も同じだ。

時間さえかけていいなら——そして、戦場を選べるなら、それでいい。

殲滅することも決して不可能ではない。そのための方法なら、いくらでも思いつく。

(だが、それが何の役に立つ?)

思いつく手段はこの状況を好転させてはくれない。どの選択肢を選んだところで、生き残れるのは自分と、あるいは同行者^{アイシヤ}だけだった。

(戦場は選べない)

いくら駆け出しの闇霊どもであっても、彼我の戦力差はもう把握しているはずだ。そもそも、奴らにとって俺は是が非でも斃さねばならない敵などではない。

大量のソウルと人間性が、ほぼ危険なく手に入る。向こうにすれば、これはそういう状況だ。

ここに集まってくるのは莫大なソウルの持ち主――しかも全くの無力である存在がいるから。

よほどの戦闘狂か、力に飢えた求道者でもない限り、俺は単に回避すべき障害でしかない。

ならば、戦場を変える術はなかった。

俺がここを離れた時点で、奴らは嬉々としてこの支部を襲うだろう。

相手が闇霊では【贖罪】を自分に施したところで大して意味はない。

(ニョルズを連れていけばあるいは……)

いや、それでもこの支部に詰まっているソウルと人間性を見逃す理由にはならない。

残された人間を撫で斬りにしてから追いかけてくればいいだけの話だ。

――

やるしかない。

腹を括ると同時、今まで関わり、語り合い、あるいは教わり、ともに死地を駆け抜け
——その『最期』を看取った者たちの顔がちらついた。

他に方法など知らない。今まで通り死ぬまで殺し続けて——もし、都合よく生き残
らせる事ができたなら、あの陽気なカタリナの戦士に倣って乾杯でもしよう。

(ああ、だが——…)

俺はあの戦士の『最期』すらも看取っているわけだが。

まったく、笑えてくる。他の奴がやると言い出したなら、大笑いしているところだ。

閻霊どもが迫る。閻霊どもが嗤っている。

死が、すぐそこに——

「かかれッ！」

——何だと？

3

時は少し遡って。

夕日がオラリオを染めるころ、入り口の看板を『開店中』に切り替える。

私が勤める『豊饒の女主人』は、オラリオでも名の知れた酒場だ。

実際に、毎日多くの客が訪れる。

オラリオに名を馳せる「ロキ・ファミリア」のような大派閥の団員でなくとも、仲間内のやり取りを聞くとともに耳にしている間に、何となく名前を覚えてしまった常連客も多い。

もちろん、覚えた途端に訪れなくなつた客——いや、派閥も多い。羽目を外しすぎてミア母さんに追い出された者や、何かが気に召さなかつたならまだいいが……おそろく、ダンジョンの闇に消えた者たちも少なくないだろう。

もちろん、別ればかりではない。

逆に……そう、懐かしい顔と再会することもあつた。

例えば、今日のように。

「リユーが嫉妬してるニヤ」

していません。アーニヤ、いい加減なことを言わないでください。

「あのヒューマンつて確か【ガネーシャ・ファミリア】の団長だつたっけ？」

シャクティ・ヴァルマ。オラリオにも数少ないLv. 5。

ルノアの言う通り、【ガネーシャ・ファミリア】の団長だつた。

「ソーニヤ」

「んで、あつちのエルフは……？」

カウンター席でシャクティと並んで座っているのは一人のエルフ。

見覚えがある。フィリア祭の日に、クラネルさんたちを探して訪ねてきた女性だった。

酒場で働いている私が言うのも何だが、最近は酒を嗜む同胞エルフも増えてきている。さらに、ここ数年の経験と照らし合わせるに、エルフにしては酒豪と言えよう。加えて、楽しく飲むコツを心得てるようでもある。シヤクテイも寛いでいるようだった。

……確かに、私には真似できない事だと認めるしかないが。
「しかし、彼女はいつたい……」

記憶にある限り、「ガネーシャ・ファミア」の団員ではなかったはずだが。

「ニヤ、知らないのかニヤ？ あれはイレギュラー「正体不明」のマネージャーニヤ」

ああ、なるほど。そういう繋がりでしたか。

シヤクテイはクオンさんとは四年前から付き合いがある。

……その、少々よくない噂も耳にする程度には。

(いえ、まさか彼女に限ってそのようなことあるはずありません)

彼女は聡明にして潔白、博識高いヒューマンなのだから。

……彼女と親しげなのは、あくまで友人としてでしょう。

まさか本当に褥を共にしているわけでは——

「あんた本当に賭博好きよね……」

ルノアが呻き声をあげた辺りで、馬鹿なことを考えるのは止めた。

「剣闘なら、あいつに賭けときや負けはないって聞いたニヤ」

それはそうでしょう。【おっじゃ猛者】と引き分けられるほどの実力者なのですから。

「それ、もう賭けじゃないでしょ……」

そんな実力を秘めた剣闘士が二人も三人もいては、それこそ冒険者に立つ瀬がない。

「で、クロエはどーしたニヤ？」

「さあ？」

見事なまでに気配を消しつつも耳を立て――尻尾の毛も逆立てて――シヤクテイの

一挙手一投足に気を配っているクロエを見やり、アーニヤとルノアが首を傾げた。

「……彼女にも色々と事情があるのでしよう」

彼女の前職からして――と、胸中で呟く。

それを付け足すまでもなく、少なくともルノアは察したらしい。

クロエについて、それ以上触れることはなかった。

「そんなに気になるなら、声をかけたらどうニヤ？」

和やかな様子で飲みかわす二人から目を離せないでいると、呆れたようにアーニヤが言った。

「……いえ、それは——」

もう、私には彼女と理想を共にする資格はない。

こうして、見逃してもらっているだけでも——

「し・ら・な・い・わ・よッ！」

——などと、思っている間に、何やら雲行きが怪しくなっていた。

グツとグラスを煽り、そのエルフは乱暴にテーブルに戻す。

「ちよつと待つて。あれ、ドワーフの火酒っほいんだけど……」

「マジかニヤ？」

戦慄するルノアとアーニヤが見守る中、彼女は二杯目を空にする。

やれやれと言わんばかりのミア母さんの手にあるのは、確かにドワーフの火酒の瓶ポトルだった。それも、生来の大酒飲みであるドワーフすら酔い潰すほど強烈な一品である。

それをエルフが飲めばどうなるか。酒を嗜まない私でも、それくらいは容易に想像がつく。

「……一体何が？」

遅ればせながらに彼女達と戦慄を共有する。

私が物思いに耽っている僅かな間に、何があつたというのか。

「いや、【イレギュラー正体不明】の居場所を聞いたみたいんだけど……」

「これはあれニヤ。ちじよーのもつれつてやつニヤ」

うんうん、とアーニヤがしたり顔で頷く。

……確かに、先だつての抗争中に戦闘娼婦（バーベラ）——（アンティアネイラ）「麗傑」を連れ去つたという噂は何度か耳にしている。

四年前から度々噂に上がっていたアマゾネスとは、彼女のことなのだろう。

恋人がいながら娼婦に誑かされて——と、いうのは残念ながらよく聞く話だが……、「最近はいシヤのことばかり！ たまには私にも構いなさいよバカー！」

……この三人の場合、そもそも前提として間違つている。

噂では三人で……その、褥を共にしているとか。

「お、落ち着け。分かつたから」

だからこそ、シヤクテイまでがそういう噂に巻き込まれてしまうわけだが。

ともあれ、ここ最近の騒動で彼女と（アンティアネイラ）「麗傑」の間で均衡が崩れたのだろう。

痴情のもつれというアーニヤの指摘が正鵠を射ている事には変わりなさそうだった。

「アンタがその気ならね、私だつてね！」

シヤクテイの声が届いているのかいないのか——いや、まず届いていないだろうが——

——その女エルフは気炎を上げて——

「こつちはこつちでよろしくやってやるんだから！」

完全に据わった目で、シャクティを押し倒した。

……もちろん、彼女はオラリオでも希少なLv. 5だ。例えスイッチを入れていなくとも、その身体能力は市井の女性とは一線を画す。

「落ち着け?!」

——が。しかし、いくら上級冒険者と言えど人間は人間。完全に気を抜いている時に不意を突かれれば、あのように押し倒されることもある。

「大丈夫よ、アナタとなら禁断の扉を開けてもいいもの!」

「私が良くない!」

……何より、酔っ払いに理屈を求めるのは間違っている。

往々にして恐れを知らず、その行動はダンジョンよりも未知にあふれているのだから。

そして——

「キマシタワー!?!」

——と、謎の呪文と共に、今日も開店直後から酒宴を繰り広げていた男神たちが目を見開き立ち上がった……

「()は歓楽街じゃないよ!」

「イエスマム!」

ミア母さんに一睨みされ、素直に席に戻る。

いえ、それはありふれた光景なのですが。

「ま……馬鹿、やめ——あつ」

その頃には、首筋にじゃれつかれるシャクティが不意に甘やかな吐息をこぼしていた。

(……このままではいけません)

彼女の名誉のためにも、そろそろ動かなくては。

例え大型の猫か何かにじゃれつかれているようにしか見えないとしても。

「……酔っ払いおそるべしニヤ」

いつの間にか背後に立っていたクロエが、戦慄した様子で呻く。

「いえ、感心している場合ではありません」

L v. 5と『神の恩恵』^{フェアルナ}を持たない人間では、まず勝負にならない。

……一部例外はあるものの、概ねそう考えていい。

振り払うのは簡単だ——と、言うのは理屈の上では全くその通りなのだが……。

(むしろ、その力の差が問題なのです)

何しろ差がありすぎて、ちよつと力を入れすぎただけでもやりすぎてしまう。

もちろん、あの女エルフが見知らぬ悪漢ないし酔漢なら、今頃問答無用で蹴り飛ばさ

れているだろう。その際に多少怪我を負ったとしても、それは自業自得だ。

ただ、それが知人——それも相応に親しい相手となれば躊躇いもする。

例えば、私が周りにいる同僚に同じことをされたなら——

「押し倒されたのがリユーじゃなくてよかつたニヤ」

「そうだねー。もしリユーだったら、今頃は天井まで蹴り飛ばされてるところだよ」

「そもそも押し倒す前に店の外まで吹っ飛ばされてるニヤ。今までお星さまになった奴らみたいに」

「……大半は関節を決めたただけのはずですが」

そして、あなた達がああいった状況になった場合でもそれは変わらないはずですよ。

いや、それはともかく。

「ひ、ひとまず救助を。なるべく穏便に」

「そうニヤ！ ルノア、トンってやるニヤ、トンって」

私の言葉に、アーニヤが言った。

「トン？ 何のこと？」

首筋を叩く彼女に、ルノアが首を傾げた。

「この前、街角でやってたお芝居で見たニヤ。うなじをトンってやると気絶するニヤ」
アーニヤが胸を張りながら怪しげな知識を披露する。

「……そもそも、それどーいう話なのニヤ？」

「私も詳しくは知りません。ただ、アーニヤが言っているのは、勝ち目のない戦場に向かう主人公が、止めようと縋りついたヒロインを置き去りにする場面です」

「何でリユーも知ってるのさ？」

「先日の買い出しの時の話なので」

そのお芝居をやっていたのが、だ。

アーニヤが梃子でも動かなくなつたせいで、一人で済ませる羽目になつたのは記憶に新しい。

ちなみに一通り買い物を終えて迎えに行つた際——どういう経緯かは見ていないので定かではないが——主人公は生き残っており、ヒロインと結ばれていた。

まさに王道の英雄譚といったところだ。それでもアーニヤは感動していた様子だったが。

「つていうか。お芝居にこんなこと言うのは無粋なんだろうけど、そもそも人間てそんなに簡単に気絶しないし」

「そーニヤそーニヤ。そんな簡単に気絶させられるなら、今頃ミャーはプリつとしたお尻の——」

「よし、つーほーするニヤ」

「象神アインクローシヤの杖」、犯人はこいつです」

「待—つ—ニヤ—?! 冗談ニヤ—?!」

まったくそうは聞こえませんでした。

「つていうか、その馬鹿力がそんなことやったら、トンじゃなくてゴキツてなるニヤ—!」

「はあ?! て、手加減くらいできるし! ……多分、悪くてもポキくらいで済むはず」

ルノア、おそらくそれでも充分に致命傷です。

「そんなことになったら、ミヤ—達ので—そ—が全滅しちゃうニヤ—!」

……それはまあ、彼女はクオンさんのマネ—ジャーですし、もちろんただでは済まないでしょう。

ですが——

「やっべ—。まったく笑えね—ニヤ—……」

「前に色々あつて潰した盗賊団に捕まつてた村娘を思い出すな—…」

戦慄する同僚たちに、嘆息とともに告げる。

「いえ、大丈夫でしょう」

「何がニヤ—?」

「あの人が殺すと決めたなら、そんな無駄な事はしないはず。ただ殺されるだけで済むかと」

神罰同盟との抗争において、彼は女幹部も殺害しているとされる。

しかし、一方で……その、アーニヤが言うような痕跡があつたという話は全く聞かない。

当然だろう。彼はそんな無駄なこととはしないのだ。

最後の一撃が緩慢なものとなることはあつても、反撃の目を残すことなどありはしない。

「何のふおろーにもなつてないニヤ?!」

「そーニヤそーニヤ! ミヤー達の首がポロリすることに変わりないニヤ! そんなポロリは誰も望んでねーニヤ!」

いえ、それは確かにその通りなのですが。

「つていうか。そもそも私やらないからね、そんな物騒なこと!」

大体、気絶させるなら鳩尾に拳打ち込んだ方が早いし確実だし——と、ルノア。

「状況次第とは思いますが、最悪その時点で敵対する事になるのでは?」

あくまで酒の席での噂ですが、彼が「イシユタル・ファミア」と決定的に対立したのは、何らかの理由で神イシユタルが「麗傑」アンティファネラに酷く危害を加えたからだ——と、聞きますし。

「えーと……」

もつとも、今回は緊急措置や正当防衛にあたるので、まだ安全だとは思いますが。基本的にはそこまで血気盛んな人ではないですし。

「いや、そもそも仮にもL v. 4が四人揃ってL v. 0相手に負ける前提で話してるってどうい(う)とよ(っ)〜」

「ですが【おっしや猛者】と互角となると、四人がかりでも……」

「そもそも、あの黒づくめをL v. 0とは認めないニヤ」

「アーニヤの言う通りだニヤ。神様が認めてもミヤーは認めねーニヤ」

「……まあ、そりやそうなんだけど(き)さ。でも——」

納得いかない——と、異口同音に同じ台詞を呻いていた。

もつとも、だからこそアツシユ・オブ・シンダーの『灰色の悪夢』なのですが。

と、馬鹿なやり取りを交わしている間にあちらの騒ぎも終息を迎えていた。

「まったく、いくら何でも無茶な飲み方をしすぎだ」

「うう〜」

結局のところ、ただの泣き上戸だったらしい。

抱きつき鼻を鳴らす彼女を抱えたまま、シャクティは何事もなかったかのように席に戻っていた。

ソファならまだしも椅子だ。女エルフの方に楽な姿勢を取らせようとすると、その分

だけシャクティに負荷がかかるが……そこはL.V. 5。その気になってしまえば、特に不都合は感じさせない。

「と、いうか。今更だが、そんなに酔いつぶれて大丈夫なのか？」

「へーきよ。今日はお休みだもの。定休日ってやつ」

そういえば、今の彼女は同業者でしたか——などと思っていると。

「大家， s Me?」

「TQB?」

「どこの世界の暗号ニヤ?」

クロエとアーニヤが何やら斬新な解釈をしていた。

「……あんた達、諦めろって。彼女は今日のシルと一緒にだよ」

「……ええ、まあ」

聞き覚えがないニヤー、さっぱりニヤー、と現実逃避をする二人についつい同意しそうになっている自分には気づかなかったことに決める。

ともあれ、そろそろ本格的に客足が増えてきた。いつまでも馬鹿な事をやっている暇はない。

ミア母さんに雷を落とされる前に解散した方がいいでしょう——と、各々が持ち場に戻ろうとしたところで、

「うう……。もうちよつと待つててくれたつていいじゃない。メレンなんてすぐそこなんだし……」

その微かな声は、いよいよ盛況となった店の中で誰の耳にも届かなかつただろう。

……こうして、その動向に注意を向けていた——そして、それぞれが三度に渡り偉業を成し遂げ、『器』を昇華した神の眷属である私たち以外には。

「……ミア母さん。私、有給とるから」

直後。クロエが、口調を改めて言った。

いや、返事を待たずしてすでに消えていた。

音も気配も。何も残さず。

「ニヤ?! クロエ、急にどうしたニヤ!?!」

「つていうか、あの馬鹿猫もういないし?! ミアお母さん——!」

「あのバカ娘が……」

深々とした嘆息とともに、いつの間にか傍に来ていたミア母さんが呻いた。

「止めなくていいの?」

「あんただつて、今この時にあいつが農園に姿を見せたなら気が気じゃないだろう?」

「……そりゃ、そうだけどさ」

嘆息交じりのミア母さんの言葉に、ルノアが言葉を濁らせた。

「ですが、神ニヨルズも神デメテルも神格者です。神イシユタルや……その、イウイリス闇派閥残党と接点があるとは思えないのですが」

自制に自制を重ねて、その言葉を口にする。

クロエにとつては、神ニヨルズが。ルノアにとつては神デメテルが『主神』となる。

双方ともオラリオの食を支える派閥の主神であり、神格者として知られていた。

（いえ、確かに神ニヨルズはあまり詳しく知らないのですが……）

何しろ、かの男神はオラリオに住んでいるわけではない。

たった今、彼女が呟いた街――港町メレンに住んでいる。

とはいえ、距離はオラリオからおよそ三K。

ミア母さんの買い出しに付き添って何度か足を運んでいるし、その際にかの男神と多少は言葉を交わしてもいる。

その時の感触から言えば、敬意を払うに値する善良な男神だった。

「さてね。けど、今のあいつはタガが外れちまつてるかも知れない」

四年前から外れ気味だったけど――と、ミア母さんが冗談ともつかない言葉を呟いた。

「心配するなつて方が無理な話さ」

「……それは、そうなのですが」

実際のところ、クオンさんとそこまで深い付き合いはない。

おそらく、彼はこの店の背後に誰がいるか——ミア母さんが誰の眷属かを知っているのだろう。

だから、言葉を交わした機会は決して多くはない。

どちらかといえば、クラネルさんから聞いたことの方が多くくらいだろうし……彼が語ってくれるクオンさんは、私達が知っている「イレギュラー正体不明」とは別人のように思えるほどだ。

彼について何を理解している訳でもない。

ただ、それでも全く分からない訳でもなかった。

(彼は……)

私と同じだ。違うのは、ただ標的だけでしかない。

ならば、きっと。ほんの些細なきっかけでもあれば——

「そんなことより、客が困ってるよ。早くなんとかしてやんな」

息が詰まるくらいの勢いで、背中が叩かれる。

反射的に視線を向けると、すっかり眠ってしまった女エルフを抱えたシャクティと目が合った。

「……その店員。少しいいだろうか」

見つめあっていたのは、ほんの数秒だろう。

シヤクティはただの店員として見てくれている。ならば、私も客の一人として彼女を見るべきだ。

「はい。ただいま」

……そう。今はそれでいい。

「あとで迎えを超越す。それまでは頼む」

すつかり眠ってしまった女エルフ——霞という名前らしい——を、私の私室の寝台に寝かせる。

彼女に毛布を掛けている間にも、シヤクティは愛用の拳メタル・ファイスト装の具合を念入りに確かめていた。

それが意味するのはただ一つだ。

「行くのですか?」

つい、そう訊ねてしまった。

「ああ。あの馬鹿が何をしでかすか分かったものではないからな」

霞ならまだしも「麗アンティアーネイラ傑」では歯止めにならないだろう——と、シヤクティはため息をついた。

剛胆かつ色欲に忠実——と、かの戦闘娼婦バーベラについてはそう聞いている。

少々偏見混じりかもしれないが、アマゾネスらしいアマゾネスということだ。少なくとも戦いを前にして臆することはないだろう。

「……それに、メレンというのが少し気になる」

「外交の拠点だから、ですか？」

多くの富が集まり、人の出入りが激しく、しかし人目につかない場所が多い。

そういった場所は、メレンに限らず悪の温床となる。

そうでなくとも、あの街はその性質上、多くの密輸業者が集まっているのだ。

しかし、その一方でギルドとの関係が長年こじれている事もあって、流石のシャクテイ達も介入しづらいというのが現状である。

いや、そもそもオラリオの一部ではないのだから、それも当然なのだが。

「それもあるが……。ここ数年、漁獲量が回復しているというのが気がかりだ。ここしばらくの間に集まった情報と照らし合わせると、な」

もう一線を退いた私では、その言葉の真意を読み解くことはできなかつた。

それが、少し寂しくもある。

「それに——」

感傷に捕らわれている隙に、シャクテイが何事か言いかけた。

「——いや、何でもない。忘れてくれ」

拳メタルファースト装メタルブーツに続き、金属靴の調子を確かめ終わった彼女が部屋を出ていく。

一介の店員としては、これ以上踏み込むことはできない。

他にできることがあるとするなら、それは――

「(イ)武運を」

見送る背中に、そう声をかけることくらいだろう。

4

オラリオからメレンまでの距離はたった三K。店から市壁までの方が遠いくらいだ。

L v. 4の身体能力なら、その程度の距離はあつてないに等しい。

厄介なのはオラリオを囲う市壁だが……初めて侵入した時ならまだしも、オラリオの内情にそれなりに通じた今なら、低ランクの団員が門番をやっている場所や、交代の間も把握している。それなら、門番の目を盗んで抜け出すくらいは何とかなる。

問題は、準備に費やせる時間が圧倒的に少なかつた事だが――

(二等級兵装をかき集めたつてどうせ意味ないニヤ)

最悪の形で予感的の中したなら、チャンス機会は一度きり。

意地でも背後を取って、一撃でその喉首を搔つ切るしかない。何ならついでに脾腹も抉ろう。

それこそが本領であり、基本であり——今まで散々繰り返してきたことだ。失敗したらそこまで、という事も含めて。

だから、準備に費やす時間は最小限に。

使い慣れた装備と道具を身に着け、愛用の暗剣を握りしめて飛び出してきた。

流儀に反するが、それにこだわって機を逃しては意味がない。

(この時間だと——)

月を見やり、胸中で呟く。

メレンの半分は寝静まった頃だろう。そして、あの気の良い男神もそちらに含まれている。

(いつまでも密輸なんてやってるからおかしなのに目を付けられるニヤ)

そこに付け込んで「ステイタス」の更新をやらせている自分のことは棚に上げておく。

(けど、あいつってそんな正義漢だったかニヤ?)

確かに密輸に手を染めているものの……あいつが潰した歓楽街で秘密裏に——あるいは公然の秘密として——行われている人身売買ではない。

……いや、詳しくは知らないけど。

基本的に、あの男神は善神だ。人に危害を加えるような悪事などするはずもない。

(まー、魔石か迷宮資源の密売ってとこニヤ)

モンスターのせいで漁礁が壊滅していると聞く。

干上がりつつあるメレンに必要なのはともかくお金で、手っ取り早く稼ぐにはこの方法が一番だろう――と、当たりをつけている。

ギルドからすれば大問題だが、あいつが気にするかと言われると首を傾げるしかない。

となると――

(アレ? ひよつとしてアーニヤの言う通り、マジで単なる痴情のもつれなのかニヤ?)

もしくは愛の逃避行。どっちにしても付き合つてられない。

だったら、いつそ豪遊して帰ろう――と、開き直つたところでメレンの街が視界に収まった。

もちろん、オラリオのように完全に市壁に囲まれているわけではない。

モンスター除けの壁はあるが、それでも侵入はたやすい。

正規の出入り口を避け、なるべく港に近い場所から忍び込み――

「うわあああああつ?!」

いきなり訳の分からない騒ぎに巻き込まれた。

「ニヤ?!」

忍び込んでいくらかないかないうちに、幼い悲鳴が聞こえてきた。

半ば条件反射的に——オラリオに流れ着く前に、義賊の真似事をしていた時期もある——そちらに向かうと、そこには幼い兄妹の姿が。

(あれ、何ニヤ?)

そして、その二人を今まさに殺そうとしている赤黒い人型の何か。

体が赤黒く輝く燐光でできていることを無視すれば人間のようにも見えるし、ウオーシャドウの亜種か何かのようにも見えなくもない。

ともあれ、考えるのは後回し。未来の漁師っぽい少年は、なかなかのお尻の持ち主だ。それを殺すなんて神が許してもミヤアが許さない。

「——シッ!」

間合いも動きも刃の軌跡も完璧だった。

日頃から同僚達とじゃれあっているおかげか、そこまで勘は鈍っていない。

その赤黒い何かが反応するより先に、喉を搔つ切っていた。

手ごたえも完璧。間違いない致命傷——

「あぶない!」

「ニヤニヤ?!」

幼い声が上がると体が反応するの。

いったいどちらが先だったかは定かではないものの、もう一瞬遅ければそのまま死ん

でいたのは間違いない。

(何で生きてるニヤ?!)

あの深さで喉を搔つ切られて平然としていられる人間はいない。

それが冒険者でも同じだ。Lv. 3だろうがLv. 4だろうが……いや、Lv. 7でも同じはずだ。

となれば、やはりモンスターの類か。

いくら怪物モンスターと言えど、喉をやられて平気だとは思えないが……首を落とされた鶏が半年かそこら生き続けたという話を聞いた事もある。

モンスターなら、もつと長生きしても決して不思議ではないか。

(それなら――)

狙う急所を変えるだけだ。

しぶといが潜在能力ポテンシャルは精々Lv. 3相当に届くかどうか。

装備を消費する必要はない。体術だけでまだ対応できる――

「フツ！」

攻撃を掻い潜り、装備と肋骨の隙間から刃を通して心臓を狙う。

正しくはそこにある魔石を、だが――

「ニヤ?!」

問題が二つ。

攻撃が外れた——なんてヘマはもちろんしていない。

一つは、感触からしてそこにあつたのは心臓だけ。

もう一つは、少なくともその心臓は抉ったはずなのにまったく平然としていることだ。

(どーなってるニヤ?!)

連撃を躲し、間合いを開きながら毒づく。

どちらか一方でも即死して然るべき急所を抉られながら、何故平然としているのか。

実体のない幻影——それこそミヤールの魔法のような——ではないのは、浅く斬り裂かれた頬の傷が伝えている。ならば、少なくとも実態はある。

だが、人間なら死なないはずがないし、モンスターなら魔石がないのはどういうことか。

分からない。分からないが——

(こいつ、ミヤールとは相性悪すぎニヤール)

一撃必殺が通じない相手だ。それだけは間違いない。

すれ違いざまに横つ腹を引き裂いてやりながら毒づく。

(これも【イレギュラー正体不明】の仲間かニヤール?)

いや、それはどうだろう。

あいつの噂はあれこれあるが、こういう妙なのを引きつれていたというのは全く聞かない。

どっちかというと――

（『太陽の騎士』に近いんじゃないかニヤ？）

ダンジョンに出るといふ謎のお助けキャラ。そういう噂は酒場で聞いたことがある。もつとも、噂ではその騎士は金ぴかに光っているらしいけど。

とはいえ、目の前にいるのとの関係性は定かではない。

分かっているのはお助けキャラではないという事だけだ。

「しつつかいニヤー」

刃に吸わせた毒も果たして効いているのかいないのか。

知っている急所を片っ端から斬り、抉り、最後に額に暗剣を叩きつけたところで、ようやくその何か変なのは霧散した。

しかし――

（魔石の一つも残さないとか、やってらんねーニヤ）

何であれ赤字は確定だ。

いや、今回は元から覚悟の上だったし、仮に落ちたところでギルドじゃ換金できない

けど。

ミヤーは冒険者登録してないし。

「つて、まさかまだ来るニヤ!?!」

嘆息する前に、さらに足音。

どう聞いても、鎧を着込んでいる。

オラリオならまだしも、この街ではかなり珍しい。

警戒して損はない——

「ちよつと静かにしてるニヤ」

まだ震えている兄妹を抱きかかえ、近くの屋根へと飛び上がる。

抱きしめ、口を塞いで息を潜めていると、さっきの変なのと同じようなのが二人——
もしくは二匹——通り過ぎて行つた。

(勘弁して欲しいニヤー)

普通の人間かモンスターならまだしも、あんな変なのをそう何体も相手にしていられない。

そもそも、真正面から斬りあうとか専門外もいいところだ。

今の感触からしてやってやれない相手ではないだろうが、とにかく面倒くさい。

大体、今はそんなことをしている暇もなかった。

「いったい何が起こっているのニヤ？」

ひとまず、腕の中にいる二人に問いかける。

がんばれミヤ。今は我慢の時。しりあすぱーとニヤ。お尻を愛でている場合ではないのニヤ。

……でも、ちよつとだけなら――

「わ、分かんないよ。あいつら、急に家に入ってきて……！」

「お、お父さん！ お父さんたちが斬られて！ 私たちだけ――」

「……場所はどこニヤ？」

「あそこ。あの赤い屋根」

あの二体が――あるいは、他にもいるのか――とどめを刺している可能性は充分にある。

無駄足になる公算の方がはるかに高い。まして、徘徊している敵は、私とは相性最悪。これが「イレギュラー正体不明」絡みかどうかはともかく、さっさとニオルズ様を見つけないならならぬことに変わりはない。

それを考慮して――

「ミヤが見てくるニヤ。二人はここでじつとしてる。できるかニヤ？」

そう言っていた。

本当に、いったい誰に毒されたのやら。

「う、うん！」

ともあれ、流石に足手まとい二人を抱えていては辿り着ける場所にもたどり着けない。

生存効率を最大限に高めるなら、ここに置いていくべきだ。

「いい子ニヤ」

お尻——と、行きたいところをグツと我慢して、頭を撫でてから屋根から舞い降りた。

……

「おお、シヤクティ！ ちょうどいいところに！ マズい事になったゾウ!!」

霞の迎えを頼みに本拠地ホトに戻ると、ガネーシヤがドタドタと駆け寄ってくる。

「今度は何が起こった？」

今までなら緊急事態だが……あいつが戻ってきてからこの二ヶ月ばかりですっかり慣れてしまった。

あまり良い状況ではないが、こうして冷静さを保っていられるのは利点と言えなくもない。

「ウラノスからの勅令だ！ 極秘任務というやつだな！ ガネーシヤ興奮!!」

「内容は？」

何故興奮するのか——などと、問いかけている暇も惜しい。

いくら慣れてきたとはいえ、それくらいの危機感は当然残っている。

「メレンからの緊急連絡があったらしい！ どうやら、件の『新種』と闇霊の大群に襲われているらしい!!」

「……何だと?」

【イシユタル・ファミリア】の本拠地ホトでの一戦を思い出す。

(あんなものが大群になって襲っているだど?)

ならば、すでに壊滅していてもおかしくない。

無論、あの『新種』も侮れない強敵だ。

メレンの漁師たちは精々がLv. 2。どちらにしても、抗えるはずが——

「闇霊というのは確かなのか?」

——いや、それ以前の問題だ。よりによって闇霊が、何故メレンに現れたのか。

「うむ! ウラノスの配下が確認したそうだ! ガネーシャ動揺!!」

その配下とやらも気になるが、今はそれどころではない。

「まさか……ッ!」

クオンは今メレンにいる。霞がそう言ったのだからまず間違いない。

(これは、本当に?)

リオンに言った通り、この一月ばかりの間に集めた情報から、とある可能性——メレン湖にあの『新種』が巣くってモンスターどもを喰らっているせいで、漁獲量が回復したのではないかという発想が、いよいよ現実味を帯びてきている。

神ニヨルズがそれに関与していると仮定すれば、クオンが襲撃する理由にはなるかもしれない。

いや、しかし——

(いくらあいつでも、無関係の人間を巻き込むような手段をとるか?)

クオンは単身で『女王の神娼殿』ペーレト・パベリを陥落させるような奴だ。

漁師たちの協同組合でしかない「ニヨルズ・ファミリア」を壊滅させるために、メレンそのものを犠牲にする必要があるのか。

それとも、メレン全体が閻イザイルス派閥に感化されているとでも?

(いや、違う。これは違うぞ)

状況はもつと悪い。

「つまり、クオンが助けを求めてきたと?」

ガネーシヤは閻霊と明記されていたと言った。

それはおかしい。メレン支部の職員が閻霊という名前を知っているはずがないのだから。

「うむ！ ……と、言っても。実際に書簡をしたためたのはアンティエイアネイラ「麗傑」だろうな！」
 「それでも、状況は変わらないな」

あの豪胆なアイシヤが、しかも今の状況でギルドに助けを求める時点で尋常ではない。

「だが、メレンは――」

ギルド支部があり、外交の窓口だが、オラリオの一部ではない。

そして、当主であるマードック家とギルドは決して良好な関係ではない。

私達が介入することも難しいはずだが。

「分かってはいる！ だから、極秘任務だ！」

「つまり、秘密裏に介入しろと？」

「そうだ！」

メレンまで距離はわずか三K。上級冒険者にとってはあつてないような距離だった。

また、市壁での入出国管理にも関与し、ギルド側との担当官ともそれなりの関係を築いている。

……何とか説得し、手続きを省略することは十分に可能だ。と、そう思える程度には。

だが、現時点ではギルドの許可は出ていない。露見すれば、職権濫用の誹りは免れまい。

そして、ギルド職員の協力を仰ぐ以上、露見しないことはあり得ない。

「心配するな！ 面倒なやり取りは俺とウラノスが行う！ お前達はいつも通り群衆を守ってくれ!!」

創設神ウラノスが関与しているなら——何より、主神がそこまでいうならもはや是非もない。

「分かった。すぐに向かう」

例えそこが世界の果てであっても向かうだけだ。

……だが、その前に。霞の迎えの手配だけは忘れないようにしなくては。

下手をすると、あの生真面目なエルフは迎えを受け入れるため、夜通し待機しかねない。

それからしばらくして。

オラリオとメレンを繋ぐ街道はおよそ三K。

恩恵を持たない者であっても、歩いて一時間かかるかどうか。

体力に多少の自信があれば、走っていくことも可能だろう。

無論、私達にとつてはあつてないような距離である。

「しかし、闇霊か。この前『女主の神娼殿』で出くわしたアレが、マジでまた出やがったのかよ……」

「うおおおおおっ！ アレの大群とか！ これは洒落になんねえぞおおおお！」

その街道を走りながら、すでに交戦経験を持つモダーカとイブリが言う。

総数はサポーターを含めて九〇名。

ここまで大量の上級冒険者が一度にオラリオの外に出ることは極めて稀だった。

また、『女主の神娼殿』ペイレト・パビリを制圧したメンバーは全員が参加している。

おかげで脅威を説明する手間はほぼない……どころか、若干浮足立っていた。

「姉者に深手を負わせたモノか。話には聞いているが……まったく、つくづくあの男は

厄介な騒ぎを起こしてくれる」

「今回の一件に、どこまで奴が関わっているかは定かではないがな」

あいつが引き起こしたなら、アイシヤが助けを求めてくるはずがない。

偶発的な遭遇なのか、それとも神罰同盟イザイルスか闇派閥の残党が動いているのか。

それとも――

（カインハースト家か？）

それ以外にも、オラリオで暗躍している勢力はまだあるようだが。

（闇派閥残党か……）

膨大な犠牲を支払って、暗黒期は終わった。

終わったはずだ。

だが、

(新たな暗黒期が、もう訪れているのかもしれない)

それともまだ続いていたのだろうか。終わったと、そう思っていたのはまやかしかつたか？

否定はできない。闇派閥イヴイルスは今もこうして死をまき散らしている。

ならば、支払われた犠牲は無駄だったのか――

「それにしても、ダンジョンと違って水と食料をさほど気にしないのはやはり助かる」

憂鬱になっている暇などない。イルタの軽口に、気を取り直す。

「ああ。その分、ポーションの類を持ち込める」

持ち込んでいる兵糧は最小限。その代わりにポーションの類を詰めてある。

住人をオラリオへ避難させることが最優先。長期戦は想定していない。

(闇霊……不死人相手に持久戦などできるものか)

相手は飢えもしない、乾きもしない、眠る必要もなく、疲労すらすぐに消え去る。そういう存在だ。

長期戦になればなるだけ、私達が不利となる。いずれにしても、短期決戦以外ありえない。

どうしても食料が必要になったなら、それこそ現地調達だ。

……そして、そうなった時点でメレンの放棄が現実を帯びてくるだろう。

「団長！ あれを！」

団員が鋭い声を上げた。前方に広がるメレンの街。その中から、件の『新種』が街中から鎌首をもたげているのが見えた。屋根には闇霊らしき赤黒い人影も見える。

「各員戦闘準備。これより、メレンに突入する」

その宣言と共に、全員の気配がより鋭くなる。

「状況は見ての通り。敵は件の『新種』、『食人花』^{サイオラス}と、『闇霊』と呼ばれる存在だ。闇霊への対処法は出撃前の打ち合わせで充分に伝えたな？」

と、言っても闇霊への対策など消滅するまで攻撃の手を緩めないことくらいだが。

速度を緩めることなく、街の正門を潜り抜ける。ここから先は戦場だった。

「住民および、神ニョルズの安全確保を最優先。【^{イレギュラー}正体不明】との接触に関しては、慎重を期すように。特に交戦は厳禁だ」

万が一神ニョルズが襲われていたなら、救出と同時に撤退——と、足を止めないまま最後の打ち合わせを終わらせた。

「了解！」

全員の返事を待っていたかのように、最初の闇霊達が姿を見せた。

「ああもう、さつきから見えちやいたが敢えて言わせてくれ！ 本当に複数いるのかよ!?」

「ええい、クソ！ 上等だあああああッ！」

気炎を上げるモダーカとイブリ。

それ二人より先に、接敵していた。

「はああッ！」

加速のままに、槍を繰り出す。

穂先は容易く闇霊の胸を貫いた。

「うわ?! 本当に生きてる!?!」

だが、その程度で闇霊を消滅させられるはずもない。

部下が悲鳴を上げる——が、もはや動揺することはない。

即座に引き抜き、勢いをそのままに石突でこめかみを打ち抜く。

頭蓋が砕ける感触を感じながらも、さらに槍を返して袈裟斬りする。

「シッ！」

続けてもう一体。槍で喉を貫き、足を払って転倒させて同じく頭蓋を踏み砕く。

「イブリ！」

「合点！」

命令を出すと、二つ名の由来にもなった爆炎が二体の闇霊を包み込む。

それで、二人の闇霊は消滅した。

「うえ……。団長の攻撃をあんなに耐えきるとか……」

そう。たつたそれだけでだ。

(これは……)

弱い。少なくとも、『ペーレト・パペリ女主の神娼殿』で遭遇したものよりははずっと。

今の闇霊、特に二体目はそれこそL v. 1相当というよりない。

幻影のような姿からははつきり見て取れないが、装備もかなり貧弱だった。

(……いや、そちらは当てにならないな)

クオンの持ついくつかの武器を思い浮かべ、訂正する。

見た目で判断すれば痛い目にあう。……いや、痛みを感じている暇もないかもしれない。

い。

噂では、あのヴァナルガンド【凶狼】までがその洗礼を浴びたという。

油断などできるはずもない――が、動きがまるでなっていない。それだけは確かだ。

「よしッ！ いけるぞ、こいつは！」

同じ手ごたえを得たのだろう。別の闇霊を相手取るモダーカが歓声を上げた。

いや、それどころか――

「あく良かった。いや、良くないけど。前みたいに強くないってのは不幸中の幸いだな」
他の団員達も、口々に安堵の声を上げるほどだ。

油断は禁物だが……実際のところ、私自身も多少の安堵を覚えていた。

もし、『女王^{ベレスト}の神娼殿』の時と同格の闇霊が大挙して襲撃しているなら、ここがオラリ
オであつてもただでは済まない。

(いや、当然か)

これは——具体的な比率はともかく——構造としては私達と同じというだけの話だ。

L v. 1よりもL v. 2。L v. 2よりもL v. 3の方が少ない。ただそれだけだ。

しかし、これはクオン側——話に聞く『火の時代』の脅威である。

ならば、今のこの街がダンジョンより安全であるはずがない。

楽観など許されるはずもなかった。

(そうだ。例えL v. 1相当であつても、充分に脅威となる)

特に今回のように数が揃っている場合は。

神々が降臨して以来——この『神時代』における戦闘、特に対人戦闘は『数より質』と
なつた。

冒険者に限らず、多くの者にとってそれは常識である。

「油断するな！ 数が多い！」

職務的に対人戦闘が多い私達は特にそう感じる機会が多いといえよう。

L v. 1百人より、L v. 5一人の方がはるかに厄介だ――と。

ただ、例外はある。

「打ち合わせでも言っただろう。『数より質』は通用しないと思えッ！」

例えば、武器の質によって「ステイタス」が補われた場合。

具多的には、闇派閥イグニルスが一派が用いる、あの忌まわしき自爆戦法だ。

深層由来のドロップアイテム『火炎石』を用いたそれは、第二級冒険者はおろか第一級冒険者にとっても無視できない脅威となる。

闇霊も、ある意味において同じだ。

（奴らの攻撃には、『耐久』のアビリティが充分に機能しない）

それが、前回の戦闘での感触だった。

無論、完全に意味をなさない訳ではない。常と同じくダメージは減弱される。

ただ、いつもよりもずっと響く。

例えば、今の私なら上層のモンスターの攻撃などいくら受けたところで致命傷にはならない。

だが、闇霊相手ではそうはいかない。

例えL v. 1相当の闇霊の攻撃でも、確かな損傷ダメージとなる。

一撃一撃は微々たるものであっても、蓄積すればいずれ致命傷となるだろう。いや、然るべき場所に然るべき一撃を当てられれば、それだけで殺されかねない。

(当然だな)

話に聞く限り、『火の時代』では格上殺しが日常茶飯事だ。

彼らはこの僅かな傷を積み上げて——あるいは、致命の一撃を狙って——圧倒的な怪物たちすら討伐していくのだろう。

(L v. 1相手にL v. 5が殺されることもある。これはそういう戦いだ)

魂にまで届く一撃。圧倒的な格上——超越存在殺しすら可能とする能力。ならば、『神の恩恵』を貫いてくるのも必然だ。

そこに数が増えれば、身体能力の差を補って余りある脅威となるだろう。だからこそ、クオンは一体多数という状況を徹底して忌避しているのだ。

そして、もう一つ問題がある。

「姉者の言う通りだ！ こいつらは異常に打たれ強いぞ！」

それを、別の闇霊を消滅させたイルタが指摘する。

闇霊はほぼ全員が不死人だと見ていい。その性質的に、打たれ強さは尋常ではない。

いや、打たれ強いのではなく、殺しても殺しきれない。あるいは致命傷という概念がかなり変質しているというべきだ。

「心臓を突くだけでも首を折るだけでも駄目だ。両方やつても倒しきれるとは限らん」

向こうの攻撃は容易く痛撃となるが、こちらの攻撃は通じ難い。

神の眷属わたしたちと不死人やみれい。互いの能力差——いや、在り方の差は、図らずもそういった状況を

を生み出している。

だが、埒外だと嘆いても仕方がない。そして、彼らを羨むのは筋違いだ。

「これが、闇霊だ」

彼らはそうなりたくてなった訳ではない。望みもしないのに『呪い』が発現し、訳も分からないままそういう在り方を強制された。そういう存在だ。

無論、だからと言つてこの凶行を見逃す理由にはならないが。

「決して油断するな。この戦場においてL.V.の差は絶対ではない」

そもそも、闇霊はオラリオの基準で言えば全員がL.V. 0だ。

クオンと同じなのだから、当然そうなる。

……もつとも、これは言わぬが花だろう。士気を下げるだけだ。

「これより、散開する」

静かに告げた。

無論、予定通りだ。三つの部隊へ三〇名ずつ分ける。

この状況下で、数を分散させるのは危険だが、速やかに住民を保護するなら他に手は

ない。

第一部隊の部隊長は私。第二部隊の部隊長はイルタ。

「うおおお……。部隊長とか、羨ましいぞナントカー……」

そして、第三部隊の部隊長は闇霊との交戦経験を重視して、モダーカに任せてある。同じく闇霊との戦闘経験があるイブリが呻いているが……。まあ、仕方がない。

適材適所。

イブリは二つ名の由来になるほどの火炎魔法の使い手だ。救助を最優先の第三部隊ではなく、クオンらと接触を図り、事態解決に向かう第一部隊に配置した方がいい。

「しかし、ここまで派手にやっつてはもはや秘密裏も何もないな」

思わず苦笑した。笑うしかない。

何しろ、突入してから今まで闇霊との交戦は断続的に続いている。

「そうですね」

その結果、ひとまず救助できた住人の数も多い。それ自体は喜ばしいことだが……。目撃者がいる時点で、もはや秘密裏とはいかない。

ギルドはともかく、嬉々として越権行為を指摘してくる派閥の一つや二つは現れるだろう。実際、その言い分は正しい。

正しいが――

「でも、見捨てるわけにはいかないでしょう?」

——そういうことだ。善悪も法も、全てはそこに生きる人間がいてこそ意味がある。今はそれで納得しておこう。

「当然だ」

新たに住民を襲う闇霊の姿を発見。距離が遠い。

とつさに、愛槍を投げつけていた。

『!?!?!』

直撃を許してのけぞる闇霊に一気に間合いを詰め、その横腹を貫手で穿つ。続けて膝を蹴り砕き、倒れたところで喉もろともに首の骨を踏み砕いた。

「無事か?」

「は、はい……」

住民はひとまず頷いたが、実際には傷を負っているようだった。

サポーターに手当ての指示を出す。

「それにしても、何か俺達らしくない戦いが続きますねえ……」

周囲を警戒していると、イブリが唸った。

「対人戦闘だと思うから、そう感じるんだ。モンスター相手だと思え」

もつとも、暗黒期には対人戦もこんな調子だったが。

「……うち、モンスターの調教にもだいぶ力を入れてますが」
 「……そうだな」

イブリの嘆きに、嘆息を返す。

……しかし、実際のところ助けた住民に怯えた視線を向けられるのは少々堪える。

(だが、ここまではなくては倒せない相手だからな)

何とか、それで自分を納得させる。

それに――

(まだこの程度で済んでいるとも言えるか)

今のところ、最も手ごわくてもLv. 3相当。いや、そろそろLv. 4に届くくらいか。

それでも消滅させるには手間だが……さて、動きの拙劣さを考えれば、^三深層の入り口^七口^階辺りに^層棲息するモンスターとどちらが手強いだろうか。

(いや、単純に比較はできないだろうか)

あくまで極論としてだが、それなりの力があれば誰にでもモンスターは殺せる。

それが『深層』のモンスターだろうが、階層主だろうが関係ない。

胸の魔石さえ砕けるなら、それでいい。

……無論、そのためには結局、相応の「ステイタス」が必要となる訳だが。

しかし、それを考えればやはり不死人闇靈の方が厄介だろう。

少なくとも、私達では一撃必殺とはいかない。

「しかし、これからどうします？ 【正体不明イレギュラー】を探すにしても、これじゃ……」

確かに、この状況でいつまでもギルド支部に留まっていたら限らない。

加えて言えば、出立間際にガネーシャから渡された『秘策』もまだ沈黙したままだ。

と、なる――

「予定通り、まずはギルド支部に向かう。あの男なら、例えそこを放棄したとしても手掛かりの一つも残していくだろう」

正しくは【麗傑アンティアーネイラ】ならば、だが。

ギルド本部に緊急連絡を入れたのは彼女と見て間違いない。

元【イシユタル・ファミリア】の幹部を当てにするのも少々癪だが……いや、今更か。

その幹部たちも、今や多くが同僚だった。

「と、いいですか。今更ですが、確かなんですか？ あの【正体不明イレギュラー】が助けを求めてるつ

て……」

イブリの懸念ももつともだ。

あいつは伊達に『灰色の悪夢アッシュ・オブ・シンダー』などと呼ばれていない。

あの【古王スルト】ほどではないにしても、オラリオに名だたる冒険者の多くを振り返りに

してきた怪物だ。

「さてな」

それが助けを求めているというのは、この場所にいてもまだ疑わしい。

おそらく、それはイブリ以外の団員も思っていることだろう。

だが――

（あいつにとつて、この状況は悪夢だろうな）

四年前、何度か肩を並べて戦った経験。そして、今まで団長を務めてきた経験。

それを併せての結論はそれだった。

あいつが最も得意とするのは、拠点に乗り込み、敵を殲滅する戦いだ。

過去は「ロキ・ファミア」の本拠地に攻め込み、最近では「イシユタル・ファミア

ア」および『神罰同盟』のことごとくを壊滅させた。

このメレンに自分と闇霊しかいないなら、同じく一人でどうにでもしただろう。

だが、実際には違う。

今この状況は、おそらくあいつが最も不得手とする状況だろう。

クオンの来歴から考えれば、そもそも経験があるかどうかすら怪しい。

共闘するのではなく、多くの者を守りながら戦うというこの状況は。

「団長……ッ！」

それは、すぐに証明された。

ギルド支部の前。血と臓物で染められた石畳で、闇霊の大群を前にして――いや、ギルド支部を背に庇いながら、いつになく悲壮な気配をまとっている。

(まったく、今日はずいぶんと可愛げがあるな)

不謹慎ながら、小さく笑いそうになった。

無論、それは一瞬のこと。その衝動はすぐに怒りの中へ溶けて消えた。

惨劇を止める事はできなかつた。あの惨状を見れば間違いない。

だが、それはここまで。ここで食い止める。

「かかれッ!」

ここから先は、反撃の時間だ。

……

「かかれッ!」

その号令と共にシヤクテイ以下、三〇名ほどの一団が戦場へと飛び込んできた。

「闇霊を近づけさせるな! 魔導師と弓兵を優先して狙え!」

流石に手馴れている。戦況は一気に好転した。

当然だ。元々騎士――ないし戦士や傭兵――でもない限り、合戦の経験などまずあるまい。

仮にあつたとして、その集団内に指揮系統が存在しないのであれば、さしたる意味はない。

片や経験豊富な部隊。片や寄せ集めの烏合の衆。連携という意味では、まったく勝負にならない。

「へえ、驚いた。本当に来るとはね」

アイシャが口笛を吹いて笑う。

俺達の立場を考えれば、シャクテイ達の登場は手放しに喜び難い。喜び難いが……。だが、ああ、しかし。これなら——

「——ッ！」

歓喜にも似た衝動と共に、浮足立つ闇霊の一団へと襲い掛かる。

これで守りは気にしないでもいい。

ならば、この程度の闇霊はさしたる問題ではなかった。

反応の遅れた間抜けを、一刀の元に斬り捨てる。

振り向きざまに投げナイフを投擲。眉間に喰らい仰け反ったその闇霊に大剣を突き立てる。

これで二体目。

『——ッ!?!』

つい数秒前とは比べ物にならないほど、体に力が満ちていた。

誰かを守る術など知らない。だが、殺し方なら充分に心得ている。

その勢いのまま、三体目の闇霊の顔面に盾を叩きつける。

無論、兜越しではそこまでの痛撃にはならないだろう。だが、視界を塞ぐと同時、文字通りに出鼻をくじける。

大剣を手放し、『火』を宿す。思い描く炎の憧憬は野蛮なる贖罪。

すなわち【浄火】。

体内で育った炎に、成す術もなくその闇霊は飲まれて消えた。

三体目。

「住民の守りを優先しろ！ 闇霊は散らすだけでいい！」

すぐさまシャクティの指示が飛ぶ。

是非そうしてくれ。一対一なら、まず負けない。

突き立てたままの《月光の大剣》はそのままに、使い慣れたクレイモアを取り出す。

そのまま、術者を守るかのように立ちはだかる闇霊を横なぎに。

『——ッ！』

放たれた【ソウルの太矢】を掻い潜り、術者の胸元を貫いた。

「Anima nostra vehementer resonante」

術者を先の闇霊の方へと蹴り飛ばし、詠唱を行う。

曰く【ソウルの大きな共鳴】。

この一夜でたまったソウルを注ぎ込んだ、凶悪な一撃が二体の闇霊をまとめて消し飛ばす。

これで四と五。

武器を《ハイデの槍》へ。

撤退か戦闘続行か。選択できず、盾を構えたまま棒立ちしている闇霊を狙う。

闇霊が反撃に転じる——が、遅い。

こと一対一なら互いの身体能力の差は決定的だ。

まるで蜜の海に沈んでいるかのように鈍重すぎる。

盾もろともに、その体を貫くのは実に容易かった。

だが、その闇霊もただでは消えない。がむしやらに腕を掴まれた。

そして、すぐ背後に新たな闇霊。六体目もろともに槍で貫こうと突貫してくる。

左の武器を《飛竜の直剣》——飛竜『ヘルカイト』から得たドラゴンウエポンへ。

「駆けるッ！」

破壊力を持った衝撃波が二体の闇霊をまとめて両断。六体目は消滅した。

自由になつた右腕の武器を《黒竜の大剣》へ。

七体の心臓当たりを貫き――

「吼えろ」

その刀身に、黒竜カラミッドの炎を纏わせる。

内側から焼かれ悶えるそいつの体を、刃を捻り強引に引き裂く。

それで、七体目も消滅した。

「うへー……。やっぱとんでもねー……。そして、容赦もねー……」

その頃には、シャクテイの部下たちがギルド支部の周辺を取り囲んでいた。

これで余計なものいのちなど背負わないで済む。

「――」

ならば、ここから先はいつも通りだ。

群れを分断し、各個撃破。何も難しいことはない。所詮、ここに集まっている闇霊の大半は巡礼地の入り口を彷徨う亡者どもと大差ないのだから。

そして、実際。

この支部を狙う凡庸な闇霊どもをなで斬りにするまで、さほどの時間は必要なかった。

支部を襲う闇霊どもをひとまず一掃してから。

「【ニョルズ・ファミリア】の団員はいるか？」

シヤクテイが真つ先に言ったのはそんな言葉だった。

屈強な体をした男どもが顔を見合わせる。

「あ、ああ。いるぞ」

最後に視線が集まったのは、当然ながら件の若頭だった。

「俺が、団長のロッドだ」

「団長か。ならば、なおさら好都合だ。指揮を頼む」

「し、指揮を？ そりゃ、襲ってきたモンスターや海賊相手になら戦った事もあるが

……」

シヤクテイの言葉に、その若頭は目を白黒させる。

それはそうだろう。【ガネーシヤ・ファミリア】は冒険者としても治安維持組織としても有名だ。

いきなりその代わりをやれと言われたなら、俺も困る。

……もちろん、彼女の真意はそうではないだろうが。

「いや、そちらは私達が受け持つ。お前は住民達をまとめて欲しい。それと、治療の手伝

いも。心配するな、こちらからも補佐官をつける」

「わ、分かった！ それなら、何とかする」

「お前達は彼と協力して傷の手当てを。物資は惜しむな」

若頭の返事に頷き返してから、今度は自分の部下たちに指示を出す。

「お前達は周囲を警戒。闇霊どもを近づけさせな。だが、深追いもするな。そして、一対一での戦闘は厳禁だ。最低でも三人一組で当たれ」

「了解！」

「よ、よし！ やるぞ、お前ら！」

「お、おう！」

それぞれの団長の指示に従い、団員が一斉に動き始める。

その姿を見て、住民達も多少は落ち着きを取り戻したらしい。動ける者は改めて負傷者の手当てを手伝い始めていた。

瞬く間にメレン支部は野戦病院へと変貌していく。

「さて、色々と聞きたいことがあるが……」

それを見届けてから、シャクティがこちらに視線を向けた。

「ああ、こつちもさ」

嘆息していると、アイシャが応じた。

その肩には、件の——簀巻きにされ、猿轡を噛まされた——支部長を担いでいる。俺は俺で、何故かバツク。パツクを一つ押し付けられていた。

別に重くはないが……さて、中身はいったい何なのか。

「その個室で話そうじゃないか。あんた達もついてきな」

シヤクテイ以外に、神と当主にも告げると、アイシヤは返事も待たずその個室——

まあ、応接間か何かだろう——へと歩いていく。

「まったく、今度はどんな騒ぎを起こしたんだ？」

「馬鹿言え。今度も巻き込まれただけだ」

そもそも、四年前から今に至るまで自分から仕掛けた事は決して多くない。……そのはずだ。

それこそ霞の仇打ちか、「イシユタル・ファミリア」の一件か。他に二、三件あつたかどうか。

「まあ、いい。今は時間が惜しい」

まだ小言を言い足りないようなシヤクテイにそれだけ告げて、アイシヤの後を追う。

実際、話し込んでいる暇はないのだ。

「なるほど……」

部屋に入つてすぐ、闇霊どもが大挙として押し寄せてくる理由を説明する。

当然、その中で当主や神も密輸に関して簡単には話すことになつたわけだが。

「密輸や『新種』を売り渡した何者か。聞きたい事は多いですが、今は後回しにしましう」

と、神たちに告げてからシャクティはこちらを見ていった。

「その『死の瞳』とやらを閉ざすには、サインを見つけるしかないのか？」

「もしくは、本人だな」

肩をすくめてから、念のため付け足しておく。

「俺も自分で使つたことがないから詳しい事は分からないが、サインは必須ではないらしい」

「おいおい、今さらそんなこと言いだすのかよ!？」

文句を言ったのは神だった。

「仕方ないだろう。俺だつて最後にこの『呪い』に関わつたのは大昔なんだ」

ロードランから今に至るまで、どれだけ時間が過ぎ去つたかすら定かではない。

「ただ、あの変態ならサインを残しているだろう。そうしないと、逃げられないからな」
神の言葉に嘆息を返してから呻く。

「つまり、呪いをかけた本人がその『場所』を離れば勝手に解呪されると?」

言つたのはシャクティだった。理解が早くて助かる。

「ああ。だから、奴がここで俺と決着をつけようと思っていない限り、サインを残すはずだ」

「そんな気はないだろうね。あの変態、何となく小物臭かったし」

思い出すのも嫌そうにアイシヤが吐き捨てる。

「享樂的な殺人鬼といったところだからな」

元は騎士であり、真正面からの正攻法でも相応に戦えたクレイトンとは違う。

加えて、ペイトのように最後の最後まで——あるいは今に至るまで——本性を隠し通せるほどの慎重さもない。

(もつとも、動き自体は悪くなかったがな)

おそらく、刺客としての素質はそれなりに持ち合わせているのだろう。

だが、今のあいつはうっかり力を入れてしまった——しかもそれに酔っぱらっている——だけの殺人鬼だ。おそらく、刺客としての矜持はさほど持ち合わせていない。

……まあ、持ち合わせているならいるで面倒だ。何しろ、その矜持にかけてどこまでもつけ狙って来るのから。

——と、それは暗殺者という存在に理想を抱きすぎなのかもしれないが。

しかし、いずれにしても。

「奴にそれほどの気骨があるとはとても思えない」

そもそも、あの路地での襲撃からして計画性など欠片も感じられなかった。

膨大なソウルの持ち主と――あるいは自分の好みの女と――偶発的に遭遇し、衝動的に殺しにかかったと見るべきだ。……おそらくは多くの殺人鬼がそうであるように。

「だが、気が変わる可能性は考慮しておくべきだな。俺達にとって、その神は実に美味しい相手だ。狙えるなら見逃すはずもない」

膨大なソウルを持ち、しかし戦う術を放棄している。

さらに言うなら、『特別なソウル』すら手に入る可能性まであるのだ。

俺達不死人にとって、これほど美味しい相手は他にいなかった。

(もつとも、この『時代』ではあまり使い道がないがな)

まだそのまま残っている『イシユタルのソウル』に意識を向けつつ、ため息を吐いた。何しろ、多くの技術の基本となる『ソウルの業』からして残っていないのだ。ならば、禁忌とされた『ソウル錬成』が残っているはずもない。

(いや、アン・デイルならできそうだな)

錬成炉の製造からできると言われたところで、驚きもしないだろう。

そして、俺以外にも迷い込んでいる不死人がいるのはもはや間違いない。ならば、他に使い手がないという保証はどこにもなかった。

「つまり、神ニョルズを最優先で逃がすべきだと？」

「それでもかまわない。この神がメレンを離れてくれれば『大当たり』はいなくなる」とはいえ、問題もある。

「だが、その場合、奴らはそちらを狙うだろうな。そうなると少しばかり面倒だ」

「だろうね。あの変態が標的以外を殺さないなんてお優しい美学を持っているとは思えない」

アイシャの言う通りだった。殺すためなら手段は選ぶまい。

もちろん、そのことに関して文句を言う訳ではない。そもそも言えるはずもない。

ただ、想定はしておくべきだろう。

そうでなくとも、闇霊がそちらを優先するのはほぼ間違いない。

「つまり、他の住民達に危険が及ぶというわけか」

「ああ。その神だけのために部隊を編成する余力がある訳ではないだろう?」

「それは否定しない。L v. 5どころか神々に匹敵するほどの闇霊が侵入してくるとあつてはな。まずL v. 7相当を引いた時点で、十人以下の部隊では全滅するだけだ」

これで本当に『大当たり』を引いたら、何人いたところで全滅だろうが——と、呻いてからシャクティが改めて問いかけてくる。

「それでは、どうするつもりだ?」

「一番無難なのは、俺に同行させる事だろう」

至つて真つ当な結論を口にした——つもりだったのだが、

「……それは、本当に無難なのか？」

「いや、そいつはただ単に鯨の傍にいれば鯨には襲われねえってだけだろ」

「……そりや言い得て妙だね」

シヤクティと当主のみならず、アイシヤまでが胡乱げな目でこちらを見てくる。

……なるほど、確かに当主の言う通りか——と、内心の囁きは黙殺することに決めた。
「俺だつて、神を守るといふのはあまり気が乗らないんだがな」

ひとまずため息を返してから、続ける。

「その神に釣られて奴が姿を現してくれたなら、それこそ幸運だ。その時は刺し違えてでも殺す。そうすれば、『死の瞳』は解呪できるからな」

解呪さえ済めば、仮にアイシヤの「ステイタス」が封印されたとしてもひとまず問題はな
はない。

もちろん、他に食人花ワイオラスが傍にいるなら話は変わるが……そうでないなら、避難民が一人増えるだけだ。街から闇霊が一掃された状態なら、シヤクティがどうにでも対処するだろう。

俺は俺で篝火を確保してある。一足先にオラリオに帰るだけの話でしかない。

残る懸念はアイシヤがそのまま拘束されることだが……まあ、その時はその時か。

ウラノスが俺と敵対する覚悟を決めていない限り、いきなり殺されはしないはずだ。生きているなら、まだ打つ手はある。

「ならば、お前と神ニョルズでサインを探すと?」

「いや、念のため彼女も連れていく」

今さらアイシヤの名前を隠す事に果たして意味があるのか。

ちらりとそんな疑問がよぎったが……まあ、あえて自分からバラすこともないか。

……いや、それなら神の前ですでに呼んでしまった気もするが。

「それは神ニョルズの護衛のために?」

「それもないわけではない。が、彼女も狙われている可能性が高いというのが主な理由だ」

あの眷属の人間性はそろそろ限界と見える。

神の持つ莫大なソウルや、そこかしこに点在する人間性など無視し、自分の道楽を最優先したとしても、驚くことではない。

そして、俺にとってはその方が都合だった。

「困が分散しては意味がない。ここはまとまって動くべきだろう」

どこにあるか……いや、本当にあるかどうかとも分からないサインを探して闇霊の巣を彷徨うよりはいくらか。

「この状況だ。ついていくさ」

と、言ったのは神だった。

「あの闇霊つてのは俺を狙うんだろう？ なら、ロット達と一緒にいるべきじゃない」

それに、と一息挟んでから、

「全部、あいつらと関わっちまった俺のせいだからな」

さて、どうだろう。向こうも自分達にとつて一番都合のいい相手を狙っただけだ。

闇派閥——^{イヴァルス}「イケロス・ファミリア」が関わっているなら、ゼノスの密売経路は必須

だ。この神や当主がなびかなかつたなら、首のすげ替えくらいしでかしたかもしれない。

もつとも、別にこの神を庇ってやる気もないし、義理もないが。

ただ――

「利用できるものは利用すべきだ」

そう。この神には、まだ利用価値がある。

「毒を以て毒を制すという発想は悪くない。そして、実際に有益だった」

正確には、この街が少なくとも五年間かけて積み上げてきた『実績』に。

「その発想は、今後に残すべきだろう」

「だが……」

むしろ当主達は困惑したようだった。

それはそうだろう。だが、この話をウラノスやガネーシャが聞けば喜ぶはずだ。モンスターが人にとって確かな利益をもたらした。

この『実績』は、あの二人にとって喉から手が出るほど欲しいものなのだから。

「頼るべき相手を変えればいい」

シャクティに視線を向け、告げる。

「ちようどそこに専門家がいる。話せば、相談に乗ってくれるだろう」

この場合、専門家というのは調教師テイマーという意味だ。

「ええ。おそらく、ガネーシャなら嫌とは言わないかと。例えあなた方が密輸に手を染めていたとして、メレンそのものを見捨てる理由にはなりません」

どこまで事情を察しているのか——そもそも彼女がゼノスについてどこまで知っているかも——定かではないが、シャクティは頷いた。

「い、いや。しかし、『ガネーシャ・ファミリア』の協力を仰ぐとなると、ギルドが……」
まあ、当主としては当然そちらも気にするだろう。

ひとつ悪事が露見したからと言って、街を他所の勢力に簡単に売り渡すようでは当主失格だ。

引退するとしても、引き渡すのは直系か、それとも他の有力者か。

いずれにせよ、メレンに生きる誰かを選ぶのが筋というものだ。

外から来た統治者が、従来の統治者より寛大という事はまずあり得ないのだから。

「……まあ、それに関してはまるで手が無いわけじゃない」

幸か不幸か、こちらにもギルドの首元に喰らいついている。

やり方次第ではギルドの影響力を押し返せる——いや、ほぼ完全に無力化できるはずだ。

無論、正攻法ではない。ないが、それなりの勝算はある。

「だが、まさか『ガネーシャ・ファミリア』の団長の前で悪だくみをする訳にもいかないだろう？」

小さく笑って見せる。

信頼を寄せる眷属に目を光らされているは、ガネーシャもやりづらかろう。

「何であれ、すべてはここを乗り切ってからだ。まずはそちらが手伝え」

もつとも、いくら思いついたところで、俺は貴族でもなければギルド職員でもない。

それどころか大派閥の団員ですらない。何をどうしたところで、俺一人の影響力などたかが知れている。

「あ、ああ。囿になら、いくらでも……」

どのみちウラノスやガネーシャ、ここにいる神と当主達が自分で動いてもらうしかな

いが。

「そうじゃない。いや、それもやってもらうが、今必要なのは情報だ」

……しかし、こうして名が挙がる奴らは相変わらず神ばかり。

つくづくここは『闇の時代』から遠いらしい。

「情報だつて？」

「そうだ。食人花の巣はどこにある？」
ワイオラス

さて、こんなところで一体何をしているのか。

今さらながらに沸き起こる疑問はひとまず棚上げにしておこう。

メレンの未来はともかく、『死の瞳』だけはどうかしなくてはなるまい。

「そりゃ、今さら隠しはしないが……何でそんなところに？」

何故も何も、その『巣』はあの変態がほぼ確実に立ち寄る場所の一つだ。

そして――

「最低限、容易くは人目につかない場所だろう？　ならば、サインを残すにもちようどいい」

それが、理由の一つ。とはいえ、そこにサインがある可能性はさほど高くあるまい。

「そして、奴にとつても放置できない場所だ。ほぼ間違いなく立ち寄っている。なら、もしそこにサインがなくとも、まだ打つ手はある。そうだろうか？」

「ああ。立ち寄った場所が分かるなら、そこから先の逃走経路を探る手掛かりになる」
視線を向けると、シヤクティは頷いた。

何しろ、専門家だ。暗殺者の相手も何度となくしていると聞いている。

「なるほど。闇雲に探し回るよりよほどいいな。ちよつと待つてくれ、街の見取り図を持つてくる」

「それなら、（ハハハ）」

と、シヤクティが折りたたまれた地図を取り出す。

用意の良いことだ。

「助かる。……よし、流石はオラリオ。地形どころか縮尺まで正確だな」

満足そうに海神が頷く。

まあ、冒険者にとつても漁師にとつても地図――海なら海図か――は命綱だ。精細であればあるだけ心強い。

もつとも、当主は顔をしかめているが。

当然だ。為政者にとつて、街の間取りなど外部に流出して欲しくない情報の最たるものだろう。

「（ハハ）だ。（ハハ）この海蝕洞。この奥に、檻が置いてある」

指さされたのは街はずれ。造船所がある方角だった。

なるほど、外部の人間はほぼ寄り付かないが、この海神がうろついていてもさほど不自然ではない場所と言えよう。

「ただ、中は結構広いし、入り組んでいる。ちよつとしたダンジョンと言つていいだろう」

「なるほどな……」

さて、それはなかなか面倒な話だ。

「どうする？ 私ならここに罠を張るけどね」

「俺もそう思う」

俺達がサインを探すのは分かっているだろう。

無論、この場所を調査することも。ならば、サインを残す理由がない。

「潜伏するには都合がいい。だが、逃走経路には向かないな」

言つたのはシャクティだった。

「もちろん、出入り口がいくつあるかにもよるが……最悪、袋の鼠だ」

「外まで繋がる穴つて意味ならいくつかあるが、人が出入りできる大きさは限られるな。もつとも、冒険者ならこじ開けられるだろうが」

次の問題は、破つた先がどこに繋がっているかだ。外に出れば問題解決とはいかない。

逃走経路の始点以上の意味はないと見るべきかどうか。

「さて、専門家はどう見る？」

神の言葉に頷いてから、シャクティに問いかける。

「お前がサインを探す事は分かっているはずだ。なら、あえてここにサインを残す理由はない。彼女の言う通り中には罠が張られているだけだろう。……それを仕掛ける余裕があれば、だがな」

なるほど、確かに。そして、時間も問題となるだろう。

奴が事前に襲撃の準備をしていたとは考えづらい。

俺達が奴と遭遇してからまだ数時間。闇霊どもは召喚主を襲わないだろうが、凶暴化した食人花はその限りではない。あちらとて、そう気楽に動き回れる状況ではないはずだ。

「罠を仕掛けるなら、そのサインとやらを餌に誘い込んで一網打尽とは考えねえか？」

白髭を撫でながら、当主がシャクティに問いかける。

「いや、仮にここで決着をつける気であっても結果は同じだ。確かにサインは餌になるだろうが、本当に残しておく必要はない。私達にあると思いつき込ませられればいいだけだ」

「なるほど、疑似餌で充分ってことか」

何とも漁師らしい例えだが……まあ、そういう事だ。

むしろ、奴にとつて闇霊どもは貴重な協力者だ。本気で決着をつける気なら、意地でもサインは隠し通すだろう。でなければ、追いついたつもりが袋叩きにあいかねない。「元凶が闇派閥残党だと仮定するなら、拠点はほぼ間違いない。オラリオ内にある。つまり、ここからオラリオに通じるルートは全て怪しいわけだが……」

「お前達は街道を使つてきたんだろう？　なら、そこは除外できるな」
「ああ。それらしいものは見かけなかった」

そして、今この時もその街道は避難経路となつている。つまり、団員達が展開しているはずだ。

(まあ、避難民に紛れ込まれる可能性は残るが……)

何しろ外から来た商人や水夫も多い。住民とて全員の人相など把握しきれまい。

まして、【ガネーシャ・ファミリア】の団員にどこまで把握できるものか。

「無論、避難民の中で身元のはつきりしない者は全員拘束するように指示してある。緊急の理由もなく隊列から抜け出そうとした者もな」

と、素人の俺が思いつく事を彼女が対応していないはずもないが。

「オラリオとメレンの間はほぼ平野。しかも、重要な交易路だ。モンスターや野盗対策のため、衛兵や私の部下が常に巡回している。それを避けるには、ベオル山脈近くまで

迂回し、そのままセオロの密林を經由するしかない」

あるいは、その衛兵達を皆殺しにするか。

もつとも、死体を隠している暇はない。となれば、すぐに露見するはずだ。

あまり現実的ではないか。

「まあ、あの辺は昔から野盗だの他所の国の斥候どもだのがうろついているからな。そつちはそつちでギルドの連中も手を打つてるんじやなかったか？」

当主の問いかけに、シャクティは肩をすくめた。

「定期的に冒険者依頼クエストを発行している。無論、効果については話せないが……」
機密事項だから答えられない——と、言うのは事実だ。

それ以上に、答えられるほどの効果はないというのが真相だろう。

野盗はともかく、斥候の類は捕まえたところで次が派遣されるだけだ。

市壁に近づき、あわよくば超えてやろうという気概を持った連中ならまだしも、遠目
にこそそ覗いてくる程度の輩まで潰して回れるほどギルドも暇ではないし、人手が
余っているわけでもない。

「地下水路つてのはどうだい？ さつきの話からすりや、オラリオに通じているんだら
う？」

この神が食人花の『飼い主』らしき人物と出会ったのが地下水路だという。

さらに言えば、オラリオの水路に棲みつくモンスターどもはここから遡上したものだ。そうだ。

——と、なれば、

「いや、そつちはどうか。俺が探索した後で、ギルドが新しくミスリル製の柵を設置しなおしたらしい。ずいぶん金をかけたみたいだし、簡単には破れないだろう」

もちろん、オラリオも金に糸目は付けないだろう。

ただでさえ、水路に棲みついたモンスターどもへの対策に頭を抱えているのだ。

「それに、そもそも地下水路つてのはオラリオでの話だ。そこから近くの河川に排水してる。メレンからオラリオまでは普通の河川敷だよ」

「つてことは、街道をのこのこ走るよりはいくらかマシつて程度か」

「そうなるな。経路となる可能性はあるだろうが……」

アイシャの言葉に、シャクティが唸る。

確かに最有力とは言い難いが——

「この街の地下はどうだ？」

人目が見つからない場所として、地下水路というのは定石と言つていい。

可能性はもう少し掘り返してみるべきか。

「ギルドにとつてこの街は上得意を迎え入れるための玄関口だ。なら、汚水垂れ流しと

はいくまい。そちらにも手を回しているだろうか？」

「ああ。何ヶ所かに浄水柱が設置されている。少なくとも、そこなら人間も出入りできるだろうぜ。浄水室の鍵もこのギルドに保管されているはずだ」

頷いたのは当主だった。

「何しろ、管理してんのはギルドだからな。保全費って名目で毎年搾り取られるが、ことが飲み水にも関わりとなりや、今さら切つても切り離せねえ。もちろん、こんだけ人が増えりゃ垂れ流しにして湖を汚す訳にもいかねえしな。ま、オラリオに対する弱みの一つってわけだ」

と、当主が唸る。

浄化柱は魔石製品だ。便利だが、整備や保全の費用も安くはないと聞いている。

さらに、実用に足る大きさの魔石は基本的にオラリオ——ダンジョンでしか手に入らない。

いくらで売るかは全てギルドの腹積もり一つというわけだ。難癖付けて通常より高く売っていたところで何も驚くことはない。

「簡単に入れねえようにはしてあるはずだが、それでもたまにどつかからレイダーフィッシュが入り込んじや齧りやがる。その分だけ余計に金もとられるからたまらねえ。……ギルドの連中がわざと放つてんじやねえかつてもつぱらの噂だぜ」

「いやあ、多分、稚魚の内に入り込むんだと思うがな。それなら、柵の目も超えられるだろうし」

毒づく当主の隣で海神が呟いたが……どうでもいい話か。

「この街の地下水路はどうなっている？」

今気にすべきは、その中にサインが施せるかどうかだ。

モンスターの生態や、浄化柱をめぐる陰謀の追及は後でしてもらおうとしよう。

「水路そのものなら、今じゃすつかり街中に張り巡らされている。だが、人が入れるほど広い場所は限られてるな。それこそ浄化柱が設置されてる浄水室周辺くらいか。他はちよいと広めの用水路くらいなものだ」

入れんことはないだろうが、小人族バルウムでもなきや相当窮屈だろうな——と、当主。

なるほど。と、なると——

「浄化室つてのは怪しそうだね。こりゃ、下水の大冒険は避けられないか？」

是非もない。俺達にとつては通いなれた場所だ。

鼠を追い回し、腐肉に襲われ、蜥蜴に呪われて——そうやって多くの者が一端の不死人に育っていく。いや、あの蜥蜴のせいで亡者に墜ちる者も少なくなかっただろうが。

「ああ。だが、当主の話なら範囲は広くなさそうだな。問題は——」

「逃走経路の一部に組み込めるかどうか、か……」

シヤクティが呟く。

彼女の地図にも、流石に地下水路までは記されていない。

「水つてのは、高いところから低いところに流れるもんだ」

と、当主が顎鬚を撫でながら言った。

「この街の水源はベオル山脈かアルブ山脈かのどつちかだ。当然、アルブ山脈からはオ
ラリオを經由する。なら、水路は必ず繋がってるはずだ。もつとも、詳しい話はギルド
の連中しか知らねえだろうが……」

とはいえ、足元に転がっている支部長の口を割らせるのは骨だ。

そもそも下手に猿轡を外そうものなら、有益な情報より先に罵詈雑言が吐き出される
のは想像に難くない。だが、そんなものに感づいていられるほど暇ではなかった。

スケープゴート
生贄の羊以上の役割は期待するべきではない。

「ギルド、か……」

ふと、シヤクティが呟いた。

「この街とギルドの確執は私も知っている。だが、ギルドとてこの街を乗っ取る事しか
考えていないわけではない。少なくとも、そうではない者もいる」

信じてはもらえないかもしれないがな——と、彼女は小さく肩をすくめた。

「何が言いてえんだ？」

「何、ギルドにもお人好しな働き者はいるということだ」

……なるほど、道理でシヤクテイ達の動きが早かったわけだ。

そういう事なら、一枚噛んでやるとしよう。

(攻めあぐねているのも事実だからな)

問題は、その対価に今度は何を押し付けられるか定かではない事だが……まあ、仕方がないか。不死人風情が他人の命など背負うものではない。

その代わりと思えば、大体のことは安いものだ。

いずれ後悔しそうだが……少なくとも、今はそう思う。

第五節 邂逅。死を超える者たち

1

「一体、何をどうすればこうなるというのだ……」

バベルの最奥——『祈祷の間』で、ウラノスと共にそれを見ながら呻く。

ガフィール——私の使い魔である梟の『眼』を介して映し出されるメレンは、至る所に閻霊が徘徊していた。

まるでそこだけが『火の時代』に回帰したかのよう——と、言うのは偏見かも知れないが。

しかし、いずれにしても真つ当な光景ではない。

「ひとまず、ガネーシャの子供たちを追え」

「ああ、そうしよう。これでは偵察もままならない」

実際、すでに何度か勘のいい閻霊と遭遇し、射落とされかけている。無事に戻ったら、好物の鼠を山ほど用意し労わってやらねばなるまい。

ともあれ、ウラノスの指示通り「象神の杖」アンクラーシャらの後を追わせる。

安全の確保もさることながら、クオンを見つけるうえでも効率的だった。

と、言ってもクオンを見つけること自体は決して難しくもなかったが。

「なるほど、あいつが音を上げるわけだ」

クオンと「麗アンティアナ傑」——魔道具らしきフードで顔を隠しているが、まず間違いあるま

い——は、メレン支部で足止めされていた。

理由はやはり明らかだ。負傷者を——いや、支部前の惨状からすれば明らかに死者も

出ている——含んだ大量の住民を抱えている。

これはあいつが最も苦手とする状況だった。

おそらくは格下であるはずの闇霊の前に、いつになく悲壮な顔をしている。

……もつとも、それも「象神アンクレーシャの杖」らが参戦するまでの間だが。

『『死の瞳』が使われた。敵は「墓王の眷属」。詳しい話は省くが、メレンを殺しつくせるだけの闇霊が来る。どこかにある起点を潰すか、元凶の変態を殺すかしない限り、侵入は止められない』

ともあれ、クオンと合流したことで、ようやく事態を把握できた。

「【墓王の眷属】に『死の瞳』か……」

いや、詳しい話はさっぱりだが、やはり『火の時代』の脅威らしい。

どうやら闇霊を呼び寄せる魔道具のようだが……こんなものをオラリオで使われたなら、いったいどれほどの惨劇が起こることか。

想像するだけでも恐ろしい。

「墓王という神に、聞き覚えはあるか？」

「……おそらく、原初の三神が一柱、墓王二トのことだろう。その名の通り、死を司った神だ」

唸るようにウラノスが続けた。

「天界に残る、極めて古い文献にもその名は残されていた。もつとも、この厄災については記載がなかったが。少なくとも、私が目を通した限りでは」

その書が酷く傷んでいたせいかもしれない——と、最後に小さく呻く。

「いずれにせよ、放置はできません。それにクオンではないが……私個神として、メレンとは関係を密にしていきたい」

「モンスターの有効活用とその実績か。……なるほど、盛況とはいえ、娯楽の域を出ないフィリア祭よりも説得力がある」

「そういうことだ。……私も、クオンに毒されたかな」

ウラノスが小さく苦笑した。

もつとも、今のオラリオは数多の厄災を抱え込んでいる。

ならば、あのしぶとさ、強かさは私達も大いに見習うべきだ。

何しろ、苦難に挑む事にかけてあいつの右に出るものなどいないのだから。

「まずは『死の瞳』を閉ざす。相手が何者であれ、これ以上の被害は許されん。このままクオン達を援護しろ」

「分かっている。だが、その元凶を探せるものか……」

単独行動となれば、また狙撃に晒されることになる。

それはこの際仕方がないとして、他に人相が分からないという問題もあった。

……もつとも、やるしかないわけだが。

(まったく、本当にあいつと関わりと退屈する暇がないな)

以前、刺激は人生を楽しくする隠し味スパイスだと、とある神が言っていたが……これは少々強烈すぎる。そもそも、辛味とは味覚ではなく痛覚なのだと訴えたい。

胸中で嘆息しながら、ガフィールに新たな指示を送った。

2

普段であれば潮騒だけが支配するメレンの夜も、今宵ばかりは随分とにぎやかだった。

金属音、破砕音、爆音、裂帛の氣勢……そして、断末魔の叫び。

そういったものが、潮騒を押しつけ、断続的に響きわたっている。

「ニョルズ様、くれぐれも気を付けてください！」

「ああ。きつちり片づけてくるからな！」

それが聞こえていないはずもないだろうが……空元気を絶やすことなく主神と団長が笑いあう。

(ま、頭が悲壮な顔をしてたんじゃまとまるものもまとまらないか)

平気だと見栄を張るのにも時には必要ということだ。

ともあれ。住民達とギルドで別れてから、闇霊どもと交戦すること数回。

ようやく辿り着いた地下水路への入り口は、ここ数日世話になった旅籠街から少し外れた場所にあった。

扉を開けると、ひやりとした空気が吹き出てくる。だが、それだけだ。悪臭の類は感じられない。

オラリオでも何度か見た事があるが、浄水柱の効果には驚かされる。

何しろ、下水の悪臭がすぐに消えるほどだ。

それは分かっているが、それでも仮にも汚水溜めをこんな場所に……とも思う。

とはいえ、この街でギルドが介入しやすい場所を、と考えれば致し方ない面もあるのだろうか。

もしくは、建設された当時、この周辺はただの更地だったのか。

「[E l u c i d a r e]」

ともあれ、暗い入り口を覗き込み、古き言葉を呟く。

その名を【照らす光】。その名の通り、ただ周囲を照らすためだけの光を生み出す魔術。

だが、これが意外と高等技術らしく、ついに竜の学院は己のものにできなかつた。

だからこそ魔術でありながらも竜の言葉ではなく、今も古き言葉が詠唱に用いられているとか。

……もつとも、どこまで本当だか知らないが。

(まあ、長時間持続させるのはそれなりに骨だがな)

一瞬の閃光を固定化したような光球が、湿った空気の向こう側を照らし出す。

シャクテイ達は自前の魔石灯を持ち込んでいるが、俺達はそうはいかない。

すでに忘れつつあったが、そもそもアイシャのご機嫌取りにきたただけだ。こんな事態は想定外もいところである。

いや、長年愛用している《頭蓋ランタン》なら今も持っているが、何故か不評だった。(不気味ってお前ら、毎日好き好んでダンジョンに潜って……)

いるわけでもないのか。

何しろ、彼女たちは冒険者ならず者の街で、物好きにも治安維持に心血を捧げる【ガネーシャ・ファミリア】だ。むしろ、ダンジョンなど金まで稼げる訓練場くらいの気分なのかもし

れない。

(……次からはソウルの中に魔石灯を常備しておくでしょう)

——と、それはともかくとして。

「ひとまず、この第一浄水室に出る」

支部で見つけた地下水路の地図を広げ、シャクティが告げる。

ここがメレンの下水を一手に処理する浄水槽だという。

もつとも、それ一つでは何かあつた時に困る。そこからいくつか予備のものもあるぞうだ。

この辺りは、オラリオ——ギルド本部の投資あつてのことだろう。

「そこから先は部隊を二つに分けるつもりだが……」

それぞれが、ある程度の広さを持った空間に設置されているとも聞いているが……。

「地図だけでは今一つ状況が掴み切れん。まずは現場を見てからだ」

何しろ、手に入れた地図は建設当時のものだ。

それから何度か大規模な改修工事を行っているという。

最新版はギルド本部に保管されている辺り、この街とオラリオの微妙な関係が感じられる。

「敵の本陣に乗り込むのに一〇人ちよいつてのはちよつと不安ですけどね……」

その指示を受け、団員の一人が不安そうに呻いた。

「仕方あるまい。住民の安全確保も私達の務めだ」

彼女たちの言う通り、今ここにいる「ガネーシャ・ファミリア」はシャクティ以下一〇名。

そこに俺とアイシャと神が加わり総勢一三名となる。

残り二〇名は当主や若頭たちと共に住民を護衛し、オラリオへと避難させている。

予定通りと言えば予定通りだ。

「向こうが海蝕洞。ベオル山脈はこの先か」

軽く首をひねり、大雑把に位置関係を把握する。

もちろん、ベオル山脈はともかく海蝕洞など見えるはずもないが。

「大雑把に見れば、直線上にあると言っているか。立地的にも都合がいいな」

もつとも、まだ頭の中にあるのは観光用の地図だ。

実際には思わぬ抜け道があるかもしれない。ないならないうで、屋根でも伝えれば何とでもなる。

——が、気にしていても始まらない。結局は怪しい場所をひとつずつ潰していくしかないのだ。

「ああ。……ここで決着をつけたいものだ」

シヤクテイの言葉に頷いてから、階段を下る。

一見すれば小さな小屋だが、中は案外広い——と、言うより深い。

螺旋構造とまでは言わないが、それに近い造りだ。万が一にもモンスターが侵入しない、侵出してこないよう、何ヶ所かに分厚い金属製の扉が設えられている。

この辺りは、オラリオの地下水路に通じるものがあつた。

そして、その全てがこじあけられているとなれば——

「当たりのようだね」

「ああ。少なくとも、その元凶はここに立ち寄っている」

アイシヤのシヤクテイのやり取りを聞きながら、何枚目かの扉を蹴破つた。

すぐに武器を構えるが……しかし、闇霊の襲撃はない。不自然なほどに。

（数が減つた影響か？）

無事に逃げ延びたか、はたまた道半ばで死んだか。

いずれにしても、この街の生者は数を減らしている。

侵入してくる闇霊も、その分だけ減っているはずだ。

ならば、遭遇する闇霊が減るといふのも必然ではあるが……。

（ネズミ一匹いやしないってのはどういうことだ？）

無論、散々追い回した大ネズミどもではない。オラリオの地下水路でも——いや、そ

れこそたまにヘスティアの廃教会でも見かけるただのネズミどもすらいない。

それはいくらか不自然に過ぎる。

胸中で呻きながら、最後の扉を蹴破ると――

「ハッ……」

――その先には、闇霊の一団。

その中心、薄暗い常夜灯の輝きに照らし出されるのは、いかにも騎士然とした鎧姿の闇霊。

手に持つのは苔生した《石の大剣》。

(また面倒なものを……)

あの黒い森の庭を守護する石の騎士が携えていたものだ。

かつてウーラシールが遺したその大剣には、当然ながら魔力が込められている。

その魔力自体が致命的な破壊力を持っているわけではないが、運用次第では下手な術スベルよりよほど恐ろしい。

問題は、武器だけではない。

『『大当たり』、だな……』

「何だっ?」

伝わってくるソウルの気配。

それは明らかに壁を破り、『玉座』を見据えた者のそれだ。

四年前とつい先日、ダンジョンで出くわしたあの閻霊とどちらが手練れか。

いずれにしても、今の俺などより圧倒的に格上の存在だ。

「ここに来ると予見していたな」

当然か。地上を生き延びられただけでそれなりの実力者——ソウルの持ち主と言えよう。

少なくとも、『火の時代』ではそうだ。

その地上を踏破し、サインを消しに来る者ならなおさら美味い。

そう判断しても不思議ではなかった。

そのうえで、万全の準備を整えて待ち構えるというのは……忌々しいが、あくまで勝ちにこだわるなら有効というよりない。

……まあ、ここで尻尾巻いて逃げるという選択肢を残しておいてくれるだけ、まだいくらか情け深いと言えなくもないが。

もつとも、すでに取り巻きの閻霊どもは動き出している。

全員が無事に撤退できるかと言われれば、不可能だろう。少なくとも、神は逃げきれない。

(まったく、何が悲しくて神を守ってやらなければならぬんだ?)

嘆息してから覚悟を決めた。

「二人とも——」

《石の大剣》を構える闇霊に投げナイフを一投。

もちろんそんなものが通じるはずもなく、あつさり振り払われた。

「——サインは任せた」

だが、先手は取った。一気に間合いを詰め、斬りかかる。

円形の区画は思つたより広い。お互いに大剣を振り回すには充分だ。

無論、英雄の剣を模倣するにも充分だが——

『』

そんな紛い物が容易く通じる相手でもない。

左手のタワーシールドにあつさりと防がれた。舌打ちをする暇もなく、間合いを開

く。

近距離を保ち続けるのは危険だ。一撃離脱を心掛けなくては、あの剣の餌食になる。

地力からして劣るこの状況で、そんな事になれば確実に殺されるだろう。

間合いを取りながら左手に『火』を宿し、炎の憧憬を思い描く。

出し惜しみはしない。思い描くのはイザリスの終焉。その一つの形。

その名を【混沌の大火球】。

炎の魔女イザリスですら抗いきれなかった劫火は狙い違わず闇霊に直撃。やや距離のあった鉄柵すらも鉛細工のように融解させ、周辺の石畳を溶岩に変える。

「——ツツ!？」

その劫火が内側から破られた。

溶岩を踏みしだき、闇霊が迫る。

(ハッ……ッ……ッ……ッ……ッ……ッ……)

単純な力量の差だけではない。その闇霊の体は白い輝きで包まれていた。

おそらくは、「岩のような」ハベルが遺し、のちの世ではミラの騎士団も口ずさんだ物語。

その名を「大魔力防御」。白竜シースを快く思わなかったハベルが生み出した奇跡。

後世にも頑強さの代名詞として知られた神の英傑が自ら編み出したとっておきだ。

生半可な攻撃など通じるはずもない。

それが、タワー^大シールド^盾越しではなおさらだった。

「」

左の武器を《アヴェリン》に切り替え、牽制する。

「」

が、それは衝撃波——【フォース】にあっさり弾かれた。

どうやら、信仰戦士と見て良さそうだ。かつて散々に叩き潰された、かの偉大な聖騎士ほどではないと思いたい——

「——ッ！」

——などと、余計なことは考えていられない。

剣戟は鋭く、そして重い。《竜紋章の盾》を砕くほどではないが、踏ん張れず押し返された。

筋力が足りない。なりふり構わず飛び退いて、続く攻撃を避ける。

攻撃する暇がない。あつけなく防戦に追いやられた。

「フ——……」

毒づきながら剣閃を掻い潜り、受け流し、弾き飛ばされ——何度かそれらを繰り返したところで、ようやく間合いが開く。

思わず息を吐いていた。力量の差は絶対的だ。

初めて黒騎士に出くわした時の絶望感を思い出す程度には。

……いや、あの時は絶望などしている暇もなかったか。気づいたら篝火の傍にいたのだから。

(だが、まだ何とでもなる)

俺もあの時よりは経験を積み、いくらかマシにはなっている。

だか、それだけだ。

一撃でも直撃を許せば、それだけでソウルを持つていかれかねない。

今の俺では、その逆は無理だろう。

そもそも、この闇霊相手に勝ちを拾えるかどうか……。

(いや——)

今は自分が死なない事を最優先にすべきだ。

この状況で俺が死ねば、最悪アイシャの「ステイタス」が封じられる。それだけはマズい。

だが、その一方でこの闇霊を仕留める必要はない。

アイシャ達がサインによって呼び出される眷属を仕留めてくれれば、それで充分だ。

(奴は大した相手じゃない)

あの眷属の実力は概ね把握している。

アイシャだけなら厳しいかもしれないが、シヤクテイがいるならまだ勝ち目もある。……まあ、少なくともオツタルよりは弱い。高く見積もって精々があの小人程度だ。

なら、サインから呼び出される闇霊もその程度のはず。

この闇霊が一分かそこら隙を見せてくれるなら、それで殺せるが……。

(そんな暇があればな……ッ！)

この闇霊がいる限り、隙を見せれば殺されるのは俺の方だ。それこそ、一分かそこらで充分すぎる。

胸中で呻きながら、武器を切り替える。

(奴は俺と同じただの不死人だ。必ず隙が生じる)

いつそ祈るような気分で自分に言い聞かせる。

勝負を仕掛ける一瞬。それが訪れるまでは防戦に徹するしかない。

ならば、装備もそれにふさわしいものを。

なけなしの緑花草を口に押し込み、《竜紋章の盾》を《ゲルムの大盾》へ。

まずは守りを固める。無論、盾で守るといふのは言うほど楽なものではない。

打ち込まれる衝撃は確実に体力を削っていく。

緑花草の後押しがあったとして、そういくらも耐えきれない。

——が、それでいい。防戦するしかないが……しかし、何も本当に守りに徹するだけではない。

右の武器は《アルスターの槍》。強力な呪毒の宿ったその穂先が、闇霊の体を啄む。

攻勢に転じたというにはあまりに無様だ——が、大盾を構えながら、好きともいえない隙を狙い続ける。

無論、どれも皮を裂いた程度の浅い傷ばかりだ。生者ですら致命傷には程遠い。

……傷そのものは。

ただし、その槍が孕んだ呪詛は毒となり、傷口から入り込んではいずれ闇霊の体を蝕む。

『——ッ！』

戦闘が始まって初めて、闇霊が退いた。

毒が回ったのだ。

とはいえ、それもいつまでも続くものではない。そして、反撃の隙をさらすこともない。

ならば、せめてこの隙にこの闇霊を少しでもサインから引き離さなくては。

『——』

しかし、その狙いは向こうも把握している。

間合いを開いた闇霊が、すぐさま物語を口ずさんだ。

これは、「生命湧き」か。聖職の騎士に広く普及する奇跡の一つ。

その名の通り、少しずつだが一定時間傷を癒し続ける奇跡。

これでは毒を相殺されたようなものだ。

『——』

さらに物語が紡がれる。

その左手に、雷が集まり槍を成した。と、なればこれはもう【雷の大槍】だろう。我が友ソールが旅の最中に開眼した奇跡。その威力はよく知っている。

「——ッ！」

盾を《金翼紋章の盾》へ。

特別な魔力を練り込まれたそれは魔力を弾く。

その力を最大限に發揮させられるその一瞬を見極め盾を払う。

狙いは完璧だった。古竜のウロコすら貫く雷槍は虚空を貫くにとどまる。

だが——

(しまった……ッ！)

動きた停滞した一瞬。意識が横に逸れたその刹那。

間合いに踏み込まれていた。

剣自体は、それでも何とか躲した。だが、それだけだ。

「——」

闇霊がその《石の大剣》を掲げる。

同時、秘められた力が、解放された。

その力。それと同質のものはこう呼ばれている。

【緩やかな平和の歩み】と。

体が重くなる。辛うじて歩けるが、それだけだ。飛び退くことなどできるはずもない。

無論、この剣がもたらす影響はごく短い間だけだ。

『
』
だが、その物語を口ずさむには充分すぎた。

その物語の名を【神の怒り】。

圧倒的な破壊力を宿す——大気を歪め放電させる程の衝撃が解き放たれる。

鉛の塊のように重くなった体が、まるで木の葉のように軽々と空を舞い——

「が——ッッ——」

壁にめり込んで止まる。

つかの間、意識が明滅した。まるで、生者のように。

視界を染める闇に恐怖したところで——思わず笑っていた。

まったく、たった四年かそこらでずいぶん腑抜けたらしい。

（ああ、まったくだな）

今さら死を恐れるなど、腑抜けているにもほどがある。

殺せ。

闇の刻印が蠢いた。

殺せ。

喰らつてきた数多のソウルが呪詛の呻きを上げる。

殺せッ!!

錆びついたソウルが、軋みを上げながら奔りだす。

「オオ!!」

ウオークライ
咆哮。

それが、この燃え滓の灰に一時熱を取り戻させる。

とどめを刺すべく突き出された《石の大剣》の切っ先が頬と耳を斬り裂いていく。

溢れた血が片耳を塞ぐ——が、関係ない。

そんなことが問題となるような人間性など、遙か昔に喪っている。

左手の武器を《骸骨車輪の盾》へ。

無数の鉄棘が打ち込まれた巨大な車輪。盾と呼ぶにはあまりに珍妙なそれは、数多の巡礼者を恐れ戦かせたとある亡者の遺物である。

そして、その真価はまさにその悪夢の再現だった。

「!」

振り下ろされる剣すら無視して闇霊に体当たりする。

触れてしまえば、こちらのものだ。

「廻れー！」

それは、車輪亡者と呼ばれる亡者の遺物。

本体であつたはずの骸骨はすでになくとも、その怨念は今も車輪に宿っている。

『——ツツ!!』

俺を含め、数多の巡礼者を轢殺した忌々しい車輪が、新たな生贄を求めて再び回りだす。

火花を散らし、軋ませながら敵の攻撃も防御も強引に削りとり——

「——アア!!」

右に構えた《アルスターの槍》の穂先を闇霊の体に抉り込む。

毒殺？ 馬鹿馬鹿しい。そんなものはただのおまけだ。

この手で直接殺す以上の方法などありはしない。

突き立てたままの槍を手放し『火』を灯す。

思い描くのは野蛮なる浄化。否——【浄火】。

完全に組み付いたまま、その儀式を執り行う。

『——ア!!?』

ほとんど自爆するようなものだった。

闇霊の内側から噴き出る炎に焼かれながら、いったん間合いを開く。

いくらか体が焦げたが……しかし、損傷は闇霊が上だ。

当然だろう。我が師イザリスのクラーナらによって作られたこの黒衣に生半可な炎など意味をなさないのだから。

とはいえ、今の俺の「浄火」程度ではあの闇霊を殺しきれない。

そして、生きているなら不死人の剣が鈍るはずがない。

未だ鎧の隙間から火の粉を散らしながら、闇霊が迫る。

「Ferrum, secare Meus amor」

右手に、漆黒の刃が生じる。

闇の忌み子とも言われた——闇術の師であるカルラより受け継いだ秘術。

その名を「闇の刃」。

直後、闇の刃と石の刃が激突する。筋力の差は圧倒的だが——

『——ツツ?!』

今も体に残る咆哮の残響と、人間性を宿す重い闇が足りない力を補った。

渾身の一撃が《石の大剣》を叩き落とす。

だが、それが限界だった。こちらの刃も霧散していく。

それでいい。一瞬だけ死を退ければ充分だ。戦闘とはつまりそういうものなのだか

ら。

完全に殺人間性を失わないされない限り、いずれ殺せる。

今までも、これからも。

遙か昔に死を失い、灰となつてなお蘇つてきた俺にも終わりがあるというなら、その時まで。

〔Hostile truces〕

咄嗟に飛び退こうとする闇霊を前に続けざまに詠唱を。

それは、闇霊が手にする剣と同じもの。

あるいは、かつてロードランに存在したとある奇跡と同一。

すなわち〔約束された平和の歩み〕。

』

飛び退けずに終わった闇霊が左手にタリスマンを握りしめる。

狙いは、分かっている。先ほどと同じく〔神の怒り〕を物語るつもりだろう。

先ほどと同じく、互いに動きが鈍っている。

状況は同じ。ならば、どちらに原因があるかなど些末なことだ。

（撃たせるものか）

もう一撃喰らえば、ほぼ間違いなく死ぬ。ならば、撃たせるわけにはいかない。

集中力はさらに研ぎ澄まされ、時間の流れすら支配し始める。

無論、それは単なる錯覚だろう。だが、憧憬を一つ思い浮かべるには充分だ。フツ——と、吐息を吐き出す。

『!!』

それは怨嗟を帯びて、黄土色の霧となった。

曰く【酸の噴出】。あらゆる武器防具を蝕む酸という名の呪詛。

まともに動けぬ闇霊はたちまちその霧に包まれる。

もつとも、《石の大剣》を完全に破壊するには、もう少し時間がかかるだろうが——

『ツツ!?!』

左手のタリスマンはその限りではない。

たちまち腐り果てていく。

『』

タリスマンの悲鳴を代弁するかのよう、短い物語が紡がれる。

その名を【フォース】。

放たれた衝撃波に破壊力こそ無いものの、こちらを強引に押しつけるには充分だった。

闇霊が術の効果範囲から外れる。だが、追撃の心配はない。

少なくとも、もう奇跡は使えまい。タリスマンは完全に破壊した。

右手の武器を《アヴェリン》へ。装填するのは《爆裂ボルト》。その名の通り爆裂する三連のボルトは足止めというには凶悪すぎる。

だが、敵として数多の死を超えてきた巡礼者。この程度で屈するはずもない。飛んできたのはモーニングスター。

およそ投擲に向いた武器ではないが、当たればそんなことは関係ない。何しろ、棘に覆われた鉄球だ。直撃した部位の肉があつさりと弾け飛んだ。もつとも、その程度なら問題にはならないが。

「
」
闇術の効果が消える。

互いに満身創痍。以前、俺の方が不利ではあるが……もはや関係ない。そう。関係などあるものか。

——殺せ

呪いが、体を突き動かす。

青々と輝くソウルと、仄暗く生暖かい人間性の気配。

互いが求めているのは、ただそれだけだ。

ああ、いや。

違う。

確か……そう。大切だと。そう思う誰かの命を背負っているはずだ。ならば、この『時代』。この世界のために戦うのではない。少なくとも、今この時だけは。

ならば、何を躊躇う事もない。迷う事など何も無い。

先に動いたのはどちらだったか。互いに間合いを詰め、切り結ぶ。

幾たびも剣が交差し、火花を散らす。

すでに失った死の気配が迫る。

これはいい。死の気配を感じるといふなら、それに抗っているというのなら。

俺はまだ生きている。火と共に消えたわけではない。

今この時に、確かに存在している。

刹那の感傷。それが何だったかはすでに忘れてしまったが。

ただ、その何かの残り火が体を満たす。

とはいえ、その程度では状況は好転しない。

筋力でも技量でも劣るのは分かっていた。そして、おそらく先に息が切れるのも俺の

方だ。

ならば、このまま真正面から切り結ぶのは下策だった。

だが、それがどうした。

目の前にいるのはたかが闇霊。今まで散々に殺しあつてきた同業者でしかない。この程度の相手に膝を屈していたなら、俺は『玉座』になど至っていない。

【Ebrius ad tenebras】

攻防の中で生じた一瞬の空白。その隙に、短い詠唱を済ませる。

その名を【闇の霧】。毒の霧を放つ闇術だ。

呪術にも同系統の術が存在するが、深淵を宿すその毒は呪術のそれより激烈だ。生半な耐性ではたちまち食い破られる。加えて、その暗い霧は視覚を阻害する。飛び退くか、踏み越えてくるか。伸るか反るか。選択肢は二つに一つ。

いや、わざわざ相手に選択肢を与える必要などない。

盾を構えながら霧の中へと踏み込む。

暗い霧を鈍い銀色の輝きが貫いた。

それは、文字通りに盾をすり抜けて首筋に迫る。

シヨーテル。かつて対峙した、とある騎士が得意とした曲剣。

当時は散々に切り刻まれたものだが……だからこそ、その経験は今も生きている。意識よりも早く、体がそれに反応した。

それに従って、腕を振るう。

まるで相手が合わせてくれたかのように敵の剣を盾が撫で、そのまま受け流す。

『——ツツ?!?』

いかに屈強な闇霊と言えど、こうなれば凡庸な亡者と変わりない。少なくともこの刹那だけは。

ならば、この一撃が勝敗を定めたとして、何らおかしいことはない。

3

「——サインは任せた」

上等だ。闇霊だか何だか知らないが、やってやろうじやないか。

駆け抜けていく黒い背中を見送りもせず、叫んだ。

「行くよ、【象神アンクレーンの杖】！」

この場にいる闇霊は、最低でもLv. 3相当。それがクオンの見立てだった。

(知ったことかッ！)

格上殺しの一つもまともにできないなら、どのみち先はない。

私も【象神アଙ୍କクーシヤの杖】も。いや、オラリオそのものにすら。

「言われるまでもないッ！」

少し遅れて——と、言ってもLv. 5だ。その程度は遅れは誤差にもならないが——

【象神アଙ୍କクーシヤの杖】が続く。

もちろん、他の闇霊どもも武器を構えて殺到する——が、どうでもいい。

いくらでも湧いてくるような取り巻きどもに用はない。

狙うはサイン。正しくは、それに触れることで出てくる闇霊のみ。

「邪魔なんだよッ！」

体ごと大朴刀を振り回す。とはいえ、粗雑な力押しなど通じない。

力では勝ち目がない。力だけではない。技も体力も——あらゆる『戦闘経験』が及ばない。

何よりも、『不死』というその特性。どう考えても不利だった。

剣が。槍が。魔術が。次々に放たれる。一人ならたちまちのうちに殺されていただろう。

「うおおおおおっ!!」

だが、今回は【ガネーシヤ・ファミリア】がいる。

攻撃は分散し、そこに隙が生じる。

基本的に闇霊どもは烏合の衆。一方の「ガネーシャ・ファミリア」は訓練されたパーティだ。

連携に関しては、圧倒的に有利である。

もつとも、その連携の中に私が組み込まれているか、と言われれば否定するしかないが。

結局のところ、「ガネーシャ・ファミリア」が闇霊を押さえつけている間に、サインに到達するのが、お互いにとって最も優れた連携だった。

それは、容易ではない。確かに、ここにいるのはどいつもこいつもLv. 3かそれ以上だ。

加えて、モンスターと違い一撃で斃す都合のいい方法などない。

そんなものが倒した端から湧いて出てくるとあれば、脅威は『深層』に匹敵する。

まったく、『深層』の単騎駆けなど、本来なら愚行もいところだ。

避けきれなかった槍に横腹を浅く斬り裂かれながら毒づいた。

「はああっ！」

槍の持ち主の闇霊。その脳天に「象神の杖」の槍が突き刺さる。

僅かにのけぞった際に、仕返しとばかりにその横腹に大朴刀を叩き込んでやった。

それでも、消滅しない。大朴刀の間合いの内側に入られると同時に、左の拳をお見舞い

してやる。

兜越しにも視界を塞ぐくらいはできる。その隙に、首筋を狙って蹴撃。

それを反対側から挟むように「象神の杖」^{アングリーシャ}もまた蹴りを放った。

首の骨が碎ける感触。気味が悪いほどに首が揺れ動く。

しかし、それを無視して闇霊はなおも槍を振るった。

「ハの——！」

化け物が、という叫びは飲み込んでいた。

惚れた……もとい、気に入っている雄。しかも、一億ヴァリスも積んで身請けしてくれたご主人様と同質の存在だ。それくらいの気は使っておくべきだろう。

代わりに、大朴刀を走らせる。狙いは当然、鎧と兜の隙間。

芯が碎けているなら、充分に通じるはずだ。

『——ッ!?!』

首が宙に舞う。それと同時に、「象神の杖」^{アングリーシャ}の槍が心臓を貫いた。

それではやく、その闇霊が赤い燐光となって消滅する。

まったく、本当に厄介だ。

（『冒険者は冒険してはいけない』か……）

誰か言い出したのかは知らないが……今や、冒険者たちの常識と言って過言ではな

い。

もつとも、ランクアップするためには『偉業』が必要だ。

そのためには命を賭して『冒険』しなくてはならない。

私自身、そう呼べるものを少なくとも二度は乗り越えてきた。だからこそそのL.V. 3だ。

ああ、だが、それでも……。

(確かに私達は安穩な戦いをしてたんだろうねッ！)

オラリオ成立から今に至るまで、ダンジョンは調査されてきた。

そして、^{バベル}神蓋の封印。

それは、モンスターどもの地上進出を防ぐと同時、その住処すらも固定した。

ランクに応じた『適正階層』が算出されたのはそのおかげだ。

もちろん、ダンジョンで死人の出ない日などあり得ない。

いつだってパーティが全滅することはあり得る。

それこそ『下層』に挑めるようなパーティが『中層』で全滅する、なんて事もないわけではない。

ギリギリのところまで戦っている？ ああ、もちろんそうだろう。

だが、それは多くの冒険者にとって、安全が保障された中でのギリギリだ。

文字通りに『死』を乗り超えて進むクオン達に比べれば、安穩としたものだろう。『それでいいと思うけどな』

不死ではない、ただの生者。一度きりの命。それを大切にしながら、富を築き、あるいは都市を発展させる。それは何も間違つてはいない——と、クオンは言っていた。

ただ一度死んだだけで終わるなら、俺はオツタルどころかお前ほどにもなれなかつただろうとも。

「通つた！」

闇霊の包围を文字通りに斬り抜け、サインに駆け寄る。

迷わず踏みつける。それでいいはずだ。ソウルを持つものが触れば機能する。

クオンはそう言っていた。

「来るぞー！」

槍を構えて、【象神の杖】^{アンクローシヤ}が叫ぶ。

言われるまでもない。これですよやく本命に会えるのだから。

「こいつはまた、分かりやすいのが出てきたね……」

頭在した闇霊。例によって赤黒い光に包まれた鎧の詳細はよく見えない。

ただ、その武器はあまりに明確だった。

巨木——いや、それに最低限の加工を施した巨大なクラブだ。

それを片手にぶら下げている。

となれば、その戦闘スタイルはこの上なく明白だろう。

「上等だよ。そういう単純な方が私の好みさッ!!」

すべてを力で薙ぎ払う。単純に純粹な暴力の化身。

つまりはそういうことだ。これは何とも分かりやすい話だった。

(問題は――)

こいつがどの程度の力かだ。

(こいつの実力は【墓王の眷属】……あの変態の力量が左右する)

クオンはそう言っていた。

つまり、こいつの力量からあの変態の力量も程度推し量れるわけだ。

「はあああッ!」

「おおおッ!」

もつとも、そんな悠長なことをする気もない。

相手が動くより先に、攻撃を仕掛ける。

左右から挟み込むように、【象神アンクシーシャの杖】と呼吸を合わせて仕掛ける。

その攻撃を大槌の一撃が、容易くはねのけた。

「くう……!?!」

攻撃の威力を相殺されるどころか、そのまま大きく押し返される。

大木刀が悲鳴を上げ、衝撃が両肩にまで突き抜ける。思わず武器を落としそうになるほどだ。

(なんて馬鹿力……!)

少なくとも『力』だけなら今のクオンを上回る。

「これは、マズいな……」

傍らで【象神の杖】^{アングリーシャ}が呻いた。

「この感触。おそらくは、L v. 6相当だ」

「はあ?!」

いや、私より上だとは思ったが。

「あいつが『イシユタル・ファミリア』を潰してから今まで、何度かこういう手合いと遭

遇していてな。まず間違いあるまい」

【象神の杖】^{アングリーシャ}は【象神の杖】^{アングリーシャ}で、一体何をやっているのか。

いや、そんなことはどうでもいい。

「待ちな。つてことはあの変態もL v. 6相当だったのかい?!」

「さてな。あとは振れ幅次第だろう」

確かに振れ幅は大きいらしい。

とはいえ、あの変態がL.V. 5であることは堅い。逆にL.V. 7だという可能性も皆無ではない。

「あんなチンピラがL.V. 5以上だつて？ 馬鹿言つてんじゃないよ！」

「そういう『時代』だつたという事だろう」

この程度の実力者は珍しくもない。そういうことだ。

今までのクオンの言動を見ていけば、そうとしか言いようがない。

オラリオでは押しも押されぬL.V. 6も、その巡礼地とやらでは取るに足りない雑兵という事だ。

（分かっちゃいたけどね！）

あの男は謙遜するような殊勝な性格ではない。

敵を甘く見るほど呑気でもない。

そのクオンが自分を平凡な不死人だというなら、まさにその通りなのだ。

事ここに至れば、認めるしかない。

（そりや何度も死ぬわけだ）

こんなのが当たり前について、しかもこいつらを楽々殺すような化け物どもが徘徊している。

そんな場所なら、それは誰だつて死ぬだろう。一度と言わず何度でも。

「神ですら抗えない滅びが迫る世界、か……」

まだ詳しい話は聞いていないが、クオン達の世界とはそういうものだったらしい。

それに抗おうとするなら、死を乗り越える程度の事はやってのけなくてはならないの
だろう。

「チツ、こりやあいつに付き合うつてのは並大抵のことじゃないね」

早くも上がり始めている息を強引に飲み干して毒づく。

生憎と、私は一度死んだら終わりだ。ならば、なおさら困難だろう。

「今日はずいぶんとしおらしいじゃないか」

「言つてな」

柄にもなく軽口を言う【象神アଙ୍କクレーシヤの杖】に言い返したところで、再び闇霊が迫る。

まるで枯れ枝でも振り回すように片手でグレートクラブが振るわれた。

それが掠めた手すりは飴細工より容易く千切れて宙を舞い、床や壁は粉塵となる。

直撃を許せば、L v. 5の体としてひき肉のようになり果てるだろう。まして、L v.

3では。

(くそつたれが……ッ！)

迫りくる死を一瞬先送りにすることに、背中の一「ステイタス」が燃え上がるように軋む。

「ここが今の『器』の限界だと。そう囁く。

(知ったことかッ！)

それに抗うように、感覚を研ぎ澄ましていく。

『神の恩恵』とは、人間の可能性の発掘だと言われる。

普段なら形にならないそれを、掘り返し記録する。その結果が「ステイタス」であり、ランクだ。

事実だとは思う。例えばLv3でも、常人には至れない領域だ。仮に至れるとして、それにどれだけの歳月と鍛錬を必要とするか、想像もつかない。

だが、その可能性は神の血がなければ意味を成しはしない。

いいや、そんなはずがない。それが人の可能性だというなら、神の血など呼び水でしかない。

それを浴びないなら、成長がないというなら。それは、ただの『枷』だ。

(超えてやるよ、イシユタル！)

もはや天界にすらいない、かつての主神に向けて告げる。

かつて、クオンがやったように。あるいは、この閻霊が今も挑んでいるように。

「おっとー！」

大ぶりの一撃が地面を叩き、粉塵を舞い上げる。その一瞬、その大槌の上を駆け上が

る。

私の体重などものもしないだろう。それどころか、あのヒキガエルだつて軽々持ち上げかねない。少なくとも、武器を手放すほどの負担ではない。

だが、その一瞬。その丸太は敵の急所に通じる道だった。

「来れ、蛮勇の覇者。雄々しき戦士よ——」

駆け上がりながら歌う。もつと早く、もつと正確に。

「——たくましき豪傑よ、欲深き非道の英傑よ」

そう。あのヘツポコ狐なら、もつとうまく歌い上げる。もつと早く歌い上げる。

大槌もろとも体が持ち上げられる。それより一瞬早く、脳天に大朴刀を叩きつけた。

当たりが浅い。並みの人間……普通の冒険者なら、それでも致命傷に近いはずだが。

現実には、まったく怯みもしない。

体が宙を舞う。私が着地だか落下だがする場所は、すでに見抜かれていた。

その瞬間を狙って、大槌が振るわれる。

無視して、歌を続けた。

「おおおおッ!!」

【象神の杖】の槍が——その連撃が、大槌の一撃を許さない。

【女帝の帝帯が欲しくば証明せよ】

一対一なら、死んでいた。だが、そうではない。ただそれだけだ。だから、何も気にすることは無い。生きているなら、それが全てだ。着地しながら、さらに詠唱を加速させる。

「我が身を満たし我が身を貫き、我が身を殺し証明せよ」
体を巡る魔力の流れは、あまりに猛々しい。

ともすれば、自分自身を斬り裂き、吹き飛ばしかねないほど。
致命的な魔力暴走がいつ起きても不思議ではない。

それほどの力を、まとめてねじ伏せる。

「飢える我が刃はヒツポリユテー」 ツ!!」

必要なのは、ランクの壁を三枚まとめてぶち抜けるだけの力だ。

一欠けらたりとも無駄には使えない。

今までないほど大量の魔力を、今までしたことがないほど繊細に扱う。

今までの限界。今までの最高の一撃。その先へ踏み込む。

『——— ツッ!?!』

闇霊が大槌を両手で構える。真正面から迎え撃つつもりらしい。
今さら狙いを変えている余裕はない。

「ヘル・カイオス!!」

紅い斬撃が炸裂した。

会心の出来だった。今まで幾たびとなく繰り出してきたどれよりも速く、鋭い。文句なく最高の一撃だった。

「くう……ッ!?!」

それでも、相殺された。

押し返された余波が体を浅く切り裂いていく。それは、闇霊も同じだろう。追撃はない。その余裕がないのは明らかだ。だが、それだけだ。

(最高の一撃程度じゃ——)

余力がないのは私も同じだ。

ならば、どちらが早く立て直すか。それは、おおよそ絶望的な勝負だった。(まだ足りないって!?)

これがランクの壁。『器』の差。

あるいは、管理されたダンジョンに挑む神の眷属と、滅びゆく世界に挑む巡礼者の違いか。

「シッ!」

やはり、一対一では勝ち目がない。

再び【象神の杖】^{アンクローシヤ}に救われながら、体勢を立て直す。

「おのれ……ッ！」

大槌を躲しながら、【象神アインクローシャの杖】が毒づく。

連携といえるほど動きを併せられない。

経験不足というのもあるだろうが、それ以上に相手が積極的にそれを分断しようとしてくる。

一体多数という状況を徹底して排除するその立ち回りは、確かにクオンに通じるものがあった。

『大丈夫だ。囲んで殴れば大体は殺せる』

あいつから教わった闇霊の対処法はそれだった。

確かに有益で、現実的な方法だと言えよう。

しかし——

(囲んで殴ってどうなるって?!)

あまりに無責任な助言に、今更いら立つ。

いや、今のあいつでも、『ソウルの業』の使い手が五人集まって一斉に襲ってくれば——
—そして、対処法をしくじれば——巡礼地に辿り着いたばかりの素人にも殺されかねないらしい。

その気になれば、神すら殺せる業だ。それはそうだろう。

一方で、その『ソウルの業』が未熟な奴が、不死人を殺そうと思うなら体をバラバラにしたうえで燃え続ける特殊な松脂で包み込み、焼き殺し続ける必要があるとも。

あるいは巨大な戦車チャリオットで轢殺し続けるか――

(そう言ったのは、あんただろうがッ!!)

全く冗談じゃない。そして、本当にそれが冗談ではないというのが何より最悪だ。

そこまで念入りに心を折らねば殺せない。

(さて、どうするか)

胸中で一通り罵声を吐き出してから、呻く。

精神力の消耗は深刻だ。使えてあと一回か二回。だが、威力は確実に劣る。

と、なれば――

(あとは、使いどころだね)

もう一つの『切り札』に託す。問題は、それをどう使うかだ。

維持できるのは三〇秒。しかも、その間に反撃を受けるわけにはいかない。

何より、持久戦には致命的に向かない。仕切り直しはできない。

使うのなら、今度こそ確実に仕留めなくては。

『オ!!』

先の一撃で、ようやくこちらを『敵』と認識したのだろう。

防禦を捨て、両手で大槌が振るわれる。掠めただけで骨まで碎かれるだろう。

「
今まで培った全ての戦闘経験をその一瞬に注ぎ込む。注ぎ込み続ける。
それでも足りない。それでは足りない。」

より速く。よりしなやかに。より強く。より豪胆に。より繊細に。

無骨な大槌を掻い潜り、いなし、逸らし、受け流す。

何も難しいことはない。いつも通りにやればいい。

相手の呼吸に合わせて。動きに合わせて。その反応に合わせて。相手がして欲しいことを見極め。嫌がることを見抜き。そのうえで、不意を突き。あとは——

(好きなように食らうだけってねッ！)

駆け引きなんてのは、つまるところそれだけの話だった。

寝台の上だろうが戦場だろうが、やることは変わらない。

悦ぶことをするか、嫌がることをするか。違いがあるとすれば、それだけだ。

とはいえ——

「くう——ツツ!!」

迫りくる死は、押し返すごとにその密度を増して加速する。

体が軋む。腕が痺れて、武器を取り落としそうになる。呼吸が滞り、肺が焼ける。

極限までに研ぎ澄まされた集中力が、その一瞬ごとにひび割れる。

(隙なんてものは自分で作るもんだろうが——ッ！)

強引に腕をねじ込んで【発火】をお見舞いする。

やはり当たりはしなかった。が、燃え上がる爆炎は一瞬だけその視界を封じた。その一瞬、炎熱を自分の体にねじ込む。

「——うッ！」

たちまち自壊が始まる。だが、それと同時に体が軽くなった。

感覚が鈍り始めた両腕で、大朴刀あいぼうを握りしめる。

「——おあああああああッ!!」

紅い陽炎を纏って疾走。その加速力のまま刃を叩きつける。

しかし、それですら力の差を補いきれない。容易く打ち返された。

お互い、細かな連撃には向かない武器だ。真つ向からの打ち合いになるのは仕方がない。

そして、その戦い方をする限り、私が負ける。地力の違いは絶対的だ。

命を削り、思いつく限りの小細工を弄して、それで辛うじて食い下がっている。

いずれにしても、単独では勝ち目がない。

「やらせんッ！」

しかし、今はその横腹を貫かんとする槍がある。

凡庸なモンスターどもなら、ただの一撃で灰に変える鋭い穂先。

それとて、この相手にとっては必殺とはいかない。行かないが、無視もできない。

その一瞬。そいつの注意は「象神の杖」に向く。

「くたばりなッ！」

まずは一太刀。確実に、それは闇霊を斬り裂いた。

ならば、止まる理由などない。

連撃とは言えないにしても、動きを途絶えさせない事ならできないはずがなかった。

(いちいち一振りごとに気合を入れなおすなんぞ、新人のやることさね)

武器の重さに振り回されるだけならただの間抜けだ。しかし、重さを利用するなら――

――自分の望む場所にその重量を導いてやれるなら、話は別だった。

重さは武器だ。剣の鋭さと大槌の重さ。それを兼ねたのがこの大朴刀なのだから。

ならば、その重さを使いこなすことができずして――自分の得物を満足に使いこなせ

ずして、何が女戦士か。

己の得物と呼吸を合わせ、互いに動きを併せる。

互いの重さが重なり合い、刃は活きたまま動き続ける。

ならば、あとは然るべき瞬間に力を込めれば、それは容易く必殺となるわけだ。

武器と共に踊る女——と、昔誰かに言われた気がする。あるいは、イシユタルにだつたか。

戦う様も麗しい女傑。故に麗傑。

確か、この二つ名は確かそんな由来だつたはずだ。

多くの神は間の抜けた真似も馬鹿な真似もするが……しかし、本当に馬鹿な神はまずいない。

神どもがそう呼んだなら、そこには一抹の真実があるはずだ。

(知ったことじゃないけどね！)

生憎と美しければ勝てる戦いばかりではない。

だが、この戦い方こそが自分の本質だとするなら、研ぎ澄ます事に意味はあるだろう。イシユタルの全てを肯定する気などないが、全てを否定する気もない。

剣の流れを殺さぬままの四太刀。普段なら、その辺りが息の限界だ。

『——ッッ!!』

そして、それでも殺し切れない。

充分すぎる手ごたえと、それでは足りないという手ごたえ。

矛盾する二つの感触が同時に伝わってくる。

(闇霊、不死人、亡者にデーモン！)

私がこれから飛び込む戦いとは、こういうものなのだ。
 (まったく、たまらないねッ！)

だからこそ、私も手札を増やなければりやならない。
 ひとまずは、この呪術だ。

「なめんじやないよッ！」

今なら、もう一呼吸持つ。

横薙ぎに振り回される大槌を飛び越えながら反転。まだ途絶えていない剣の流れをそのままに、中空でさらに回転する。

加速の乗った最後の一太刀は、狙いたがわず闇霊の脳天を叩き割った。

文句のない手ごたえ。脳天を叩き割られて生きている生き物などいない——

「が——あッッ?!?!」

白く暗い衝撃が体を貫いた。

「麗アンテイアネイラ傑」ツ!?!」

誰かが何かを言っている。その言葉の意味を理解できない。

激痛だ。痛みだ。そんな言葉すら、とっさに思い出せないほどの。

イツちまったかのように、視界も脳みその中も真っ白に染まる。

その中で、溺れているかのように、空気を求めて喘いだ。

（くそつたれが……ッ!!）

何度か足を運んだ『深層』の化け物どもと同じかそれ以上。

直撃。だが、まだ死んではない。

体が宙に浮いていたおかげで、多少衝撃が流せた。地上に立っていたら最悪即死だった。

（立ち上がれッ!!）

断片的に浮かんでは消えるその一切を、まだ白く染まつたままの思考の奥底にねじ込む。

強引にこじ開けた視界の中、【象神アングレーシャの杖】を振り払い、閻霊が迫る。

呪術の反動も深刻だ。維持できない。あと数秒も維持したら、そのまま死ぬ。

しかし、立ち上がるより早く、大槌が振り下ろされて——

「おい、背中ががら空きだぞ」

それより一瞬早く。閻霊の背後から、燃え尽きた灰のように冷たい声が響く。

閻霊が反射的に振り向く——より先に、刃が煌めいた。

『?!?!』

閻霊が反撃に移る暇も与えず、さらもう一撃。

それが、閻霊の首を斬り飛ばした。それを待っていたかのように、閻霊の体が霧散す

る。

それどころか、周りの闇霊どもも。

残っているのは、満身創痍と言った有様のクオンだった。

だが、それでも平然としている。

相変わらず聞き取れない奇妙な物語を口ずさむ。

黄金色の輝きが、私とクオンの壊れかけた体をたちまちのうちに立て直していく。

まったく、今度は【戦場の聖女】^{デア・セイント}の心でも折りに行くつもりかい——と。

今はそんな軽口も叩けやしない。

「終わった、のか……?」

「ああ。『死の瞳』は閉じた」

と、言いつつもクオンは怪訝そうな顔をして周囲を見回す。

「念のため確認するが」

「何だ?」

「お前たちが対峙していた闇霊が、サインから出てきた奴だな?」

「そうだ」

【象神の杖】^{アンクローシャ}が頷くも、クオンはまだ表情を変えない。

「……何か問題が？」

「いや、問題ではない……と思う」

少し言い淀んでから、クオンが肩をすくめる。

「ただ、今の感触からすると、誰かが本体を殺したとしか思えないんだが……」
思わず、「象神アンクシニヤの杖」と顔を見合わせていた。

「そりや、あれかい」

何とか体を起こしながら、呻く。

口の中にはまだ血の味と、それより苦い何かの味が残っている。それを、なんとか割れずに済んでいた最後のポーシヨンとともに飲み込んでから続けた。

「誰かがあの変態を殺したってことかい？」

「多分、な。もつとも、本当の意味で死んでいるとも思えないが」

もしどこかで亡者化しているなら、急いでドドメを刺しにいかないやならない。

クオンはそう言つて呻いた。

「他の団員が遭遇したと？」

「さあて。そいつは何とも」

「そりや、ここにいたって分らないだろうね」

つい先程までの狂奔が嘘のように、浄水槽は静まり返っている。

流れ込む水の音が妙に大きく聞こえるほどだ。

「……態勢を立て直す。少し待て」

「ああ。手伝おう」

いかに【ガネーシャ・ファミリア】の精鋭といえど、先程の一团を相手にすればただでは済まない。

人的被害がないわけでもない。おそらく、地上に展開している部隊も同じだ。

加えて、住民への被害も少なくはない。

悪夢のような一夜だったが、本当に夢と消えてはくれないわけだ。

「まだ何が起こるか分からない。お前もそこに混じっている」

「……そうさせてもらおうかねえ」

いくら治療魔法を受けたとはいえ、まだ体はガタガタだ。

そして、誰かがあの変態を殺したというなら、最悪はもう一波乱あってもおかしくない。

「ここで無駄に意地を張っては死ぬだけだ。」

「ちよいと邪魔するよ」

それなら、素直に手当てされる側に回るべきだろう。

胸中で呻きながら、クオンが中空に灯した火——【ぬくもりの火】とやらの下に集ま

る怪我人どもに混じることに決めた。

4

(ふうん。【イレギュラー正体不明】も案外甘いもんだニヤー)

【ガネーシャ・ファミリア】が暴れている隙に、避難民としてギルドに入り込んでから。そのざわめきを利用してさらに潜入し、その作戦会議に聞き耳を立てる。

「ただ、あの変態ならサインを残しているだろう。そうしないと、逃げられないからな」
いいや、違う。

闇霊だとか【墓王の眷属】だとかはよく分からないが、これが暗殺者の仕組んだことなら、もうすでにメレンにいないなんて事はあり得ない。

(ターゲット標的の死を確認しないなんて、どこのド素人だニヤ?)

暗殺者が殺すと決めたなら、それは必殺でなくてはならない。
姿を——いや、存在を知られた暗殺者など、ただの間抜けだ。

最低でも、その後の仕事がやりづらくなる。

(う……。自分に刺さったニヤ)

かくいう私もオラリオにきて早々にしくじり、『黒猫』などという通り名まで頂戴したわけだが。

ともあれ、それを徹底できるかどうか素人の殺人鬼と本職の暗殺者の違いだ。その変態とやらに、欠片でも暗殺者だという自覚があるなら——

(いや、なくてもか)

ニョルズ様達のやり取りだけではとても情報が足りない。判断などできない。

ただ……そのうえで、あの酒場に流れ着くまでに啜った血と泥の味が教えてくれる。

おそらく、だが。今回の標的は殺しが趣味の屑が、たまたま暗殺者の素質を持つてしまつていた結果生まれた真症のド屑だ。

衝動的に殺しにかかり、しかし、多くの場合が上手くやれてしまう。

同業者ではなく……そう、ここは玄人の殺人狂とでもいうべきか。

殺される側にとつては——そうでなくとも、所詮は同じ人殺しだが。

ともあれ、結論としては。

(そんな奴が、こんな面白い見世物を放つておくわけないわね)

その変態とやらは、そういう種類の変態だ。

となれば、居場所も自ずと絞り込まれていく。つまり、この街における特等席——

(いやいやいや)

脳裏に描いたメレンの地図にいくつかの印を打つてから首を左右に振る。

何故深入りする気になつていいのか。

この様子なら【正体不明】^{イレギュラー}がニオルズ様を殺すような事にはならないはずだ。それに、【象神の杖】^{アークシーヤ}もいる。

もちろん、たかかなどとは言わないが……密輸に関与していたからといって、神殺しを黙認するような手合いではない。

ニオルズ様の安全を確保できた——もちろん、密輸を見逃してくれるとも思えないが——なら、ひとまず問題は解決のはずだ。あとは事が済むまでニオルズ様を陰から護衛するだけでいい。

わざわざその変態を探し、この『呪い』とやらに関わる必要は——

「……………」

音を立てない程度に髪を掻きむしる。

最初の兄妹から始まって、ここにたどり着くまでに見かけたアレとかソレを思い出す。

死に顔を確認したわけでもないし、そもそもできそうにない状態のもいくつかあったが……。

(ひよつとしたら、ニオルズ様の船の船員とか……)

いたかもしれない。もしくは、馴染みの仕入れ先に魚を卸しに来る商人とかも。

それどころか、どうにか助けたあの兄妹の両親も、別のところであの変なのによられ

ているかも。

……いや、別に今さら正義の味方とか、義賊ごっこをする気もないのだけれど。

(そーいうのはどつかの暴走妖精がやればいいのニヤ)

でも、それは、そう、少し……少しだけムカついた。なら、仕方がない。

それに、ポツと出の新人に自分のシマを荒らされて黙っているようでは名が廃る。

もう足を洗ったつもりだが、それはそれとしてだ。

(落とし前をつけさせてやるわ)

……

「チツ、もう終わりかよ」

ギルド支部に比較的近い建物の屋上。ここは構造的に下からはもちろん、周囲からも見えない。ここは完全なる死角だった。そこに気配を消して潜むオレを、一体誰が見つけられようか。

文句のない最高の特等席から、遠眼鏡越しにその光景を見やる。

まったくたまらない。あのスカした不死人が死にそうな面をしてるのなんて最高だった。

まあ、想像以上に早く【ガネーシャ・ファミリア】とか言う連中に邪魔されたのがムカつくが……あの槍を持った女もなかなかそる顔をしている。

あのすました面が、恐怖に歪み、泣きじやくりながら死んでいくのを想像するだけで

「本当に、たまんねえんだがなあ……！」

つまらねえ『お使い』なんぞ押し付けられた時は、ぶち殺してやろうかと思つたが……
これは思わぬ幸運だった。

とはいえ――

(しっかし、なかなか上手いかねえな)

あの野郎、思つたよりやりやがる。

ようやく追い詰めたかと思いきや、「ガネーシャ・ファミア」の連中が援護に入った
途端に息を吹き返し、逆に閻霊どもを皆殺しにしやがった。

所詮はズブの素人どもとはいえ、あれほど容易く壊滅させられるのは想定外だ。

(使えねー閻霊どもだ)

殺せないにしても、もう少し消耗させられると思つたが。

不満だが、仕方がない。

(ま、まだほかに面白れえ見世物は続いているしな)

この場所からは少し動けば他の通りも覗ける。

ちようどそこでは、逃げ惑う誰かが閻霊にメツタ刺しにされていた。

結構美人のようだが、その最後の声は肉屋にめられる豚より品がなかった。もっとも、それを言うなら肉屋だって骨も腸もまとめて挽き潰しはしないだろうが。

生臭い風も今や心地良い血の香りに満ちている。

そう。世界はこうでなくては。

大昔、神どもが竜と殺しあつていた頃から、世界は新鮮な血と臓物で満たされていた。生き残った者の歓声と、殺された間抜けの断末魔の悲鳴。世界の音はそれだけでいい。

あのいけ好かない神と同意見というのは癪だが……こんな小奇麗な世界は間違っている。

世界は、もっと死で満ちているべきだ。

(オレがこの地に呼び出されたことこそが、天意つてやつだ)

あの薄暗い地下墓地を、化け物を掻き分け死に物狂いで駆け抜けた甲斐があつたというもの。

いや、そもそもあの玄室に辿り着けたことこそが、オレが墓王に認められた証というわけだ。

そして、認められ以上、こうして死をばら撒くのは義務であり当然の権利でしかない。(まったく、それを制限するあの神どもはどこかイカれているに違いねえぜ)

港が欲しけりやこの街の連中を皆殺しにして乗っ取れば済むというのに。

もつとも、オレと違って非法活動に勤しむ連中だ。狂っているのも仕方がない。

そいつらのせいでオレの神聖な勤めが滞るなど……まったく、世の中つてのはつくづく理不尽にできている。

あの女どもは、どうやら浄水場を目指しているらしい。あのスカした野郎の入れ知恵か。

好都合だった。わざわざ親切に神まで連れて行っている。

(消耗してくれりや、それでいい)

むしろ、全滅はして欲しくないところだった。

どうせなら、この手で殺したいのだ。となれば、適当に時間を潰してから後を追うのがいい。

いたるところで最高の見世物が続いているのだ。時間を潰すことなど何の苦もない。

そして、それからしばらくして。

「さて、そろそろオレもまじめに働きますか——」

流石にここから浄水場は見えないが……まあ、そろそろたどり着き、程よく消耗した頃だろう。

次のお楽しみは時間だ。

まずはあのスカした不死人をぶち殺す。

何も難しい事はない。背後さえ取れば、それでいい。

そのまま致命の**バックスタブ**の一撃でおしまい——

「おえ……ツツ?!」

唐突に口の中に血が溢れ出した。

背中——心臓のあたりに熱。いや、脾臓辺りもか。

振り返ると、闇が鈍く煌めいた。

「あ——?!」

声が出ない。喉がやられた。

目の前には、黒衣を着込んだ女。黒い尾が気楽そうに揺れている。

キヤットヒール
猫 人とかいう亜人だ。

(こんな奴、いたかあ……?)

この街には取るに足らない得物しかいなかったはずだ。

少なくともこのオレの背後をとれるような奴など——

「まさか本当にこんな分かりやすい場所に潜んでいるなんて」

奇妙に曲がった短剣が振り上げられる。

「予想以上のド素人ね」

その嘲笑とともに、刃が額を叩き割った。

……

(まさかここ)までお手本通りの場所に潜んでるなんてニヤ……)

死角に潜むのは基本中の基本。街にある死角は、例え僅かな場所でも把握しておくのは暗殺者にとって当然の嗜みだ。

そして、「イレギュラー正体不明」達の言葉が事実なら——あの「アンティエイアキアラ麗傑」を狙っているのなら、ギルドが見える場所にいるはず。

つまり、最初に目指すべきはギルドから死角であり、かつギルドが見える場所だった。

……確かにここは絶好のはしよ死角だが。だからこそ、あまりに定石過ぎる。

(暗黒期が終わって、「アンクレーシヤ象神の杖」も平和ボケしたかニヤ?)

それとも、先入観が悪さをしたか。

どうやらあの赤黒い何か変なのは、「イレギュラー正体不明」の知り合いか何からしい。

あいつの方が詳しい——と、思い込んだせいかな。

そう。先入観と言うのはいつだって厄介だ。

それが答えだ。そう思った瞬間にこそ隙というのは生じるものだった。

そして、隙とは暗殺者がわたしたち舌なめずりするほど欲するものだった。

「あう……ツツ?!」

その瞬間に、死神の嗤い声を聞いた。そうとしか言いようがない。だから、命拾いをした。

何度も仕事を手伝ってやった礼なのか、それとも仕事を増やした事への嫌がらせなのか。

理由はともかくとしてだ。

(ドジった……ッ！)

平和ボケしているのは私の方だ。

死体をきつちり確認まま呆けているなんて、とんだ間抜けだった。

「調子こいてんじゃねえぞ、この雌猫が!!」

その変態はひとまず無視。

左肩に突き刺さるナイフを引き抜き、もう一度舌打ちする。

(毒だニヤ……ッ！)

体が腐り落ちていく感触。それは、単なる錯覚とは言い難い。

毒に侵された肉が血を滴らせながら壊死しようとする。かなりヤバイ。

……が、これなら平気だ。少なくとも、まだ死なない。

(『耐異常』のアビリティ様々だニヤ)

子供の頃に散々飲まされた毒にとりあえず感謝しておく。

だが、当時の主神は地獄に堕ちろ。とつくに天界に還っているけど。

いや、今はそんな事を考えている暇はない。下手すると私が地獄行きだった。

(まあ、今はここが地獄みたいなもんだけどニヤー)

とりあえず、この変態を始末すればそれも解消される。……らしい。

嘘か本当かはどうでもいい。何しろ――

(コイツ、何かマジでやべー奴ニヤー！)

この変態、変態の癖に只者じゃない。

戦闘における技と駆け引きこそ素人の域をいくらかも出ていないが……。

(この感じ、「象神の杖」よりヤバくねーかニヤ?!)

早いし強い。それに、純粋な殺しには慣れてる。少なくとも、そのための技量は確かだ。

いわゆる『ステイタス』に振り回されている』手合いだから、まだ何とか食い下がれている。

しかし――

(「象神の杖」より、下手すると……)

もう一階位上かもしれない。

だとしたら、最悪だった。冒険者――神の眷属にとって、ランクの差は絶対だ。

ランクアップ間際のLv. 4であっても、ランクアップしたてのLv. 5に勝てるかどうかは運次第。

それもあまり勝算は高くない賭けとなる。

ランクの壁が二枚もあつた日には……。

(ヤバイヤバイヤバすぎるニヤー！)

避けたはずが黒衣の横腹を大きく斬られた。

素肌が外気に触れる感触に胸中で悲鳴を上げる。

正攻法は言うに及ばず、暗殺すらまともに通じない。

通じたなら、「象神アンクレーシャの杖」は今頃この世にいないし、ミヤーも『黒猫』なんて通り名で

呼ばれていないのだ。

(これはマジで死ぬっての！)

実際に悲鳴を上げている余裕などない。

少しでも呼吸が乱れば、その瞬間に心臓かどこかを抉られる。

そして、残念ながら私には心臓を抉られて生きていられる自信などなかった。

(どうする？ どうする?! どうするニヤ?!)

撤退——いや、無理。背中向けた瞬間にそのままグサリだ。

だいたい、暗殺者に——それに類するものに——背中を向けるとか、あり得ない。

つまりは——

(何とかしてこいつを殺らなきゃ私が殺されるってことかニヤ?!)

左肩からようやく引っこ抜けたナイフを投げ返しながら、自分の体の状態を確かめる。

(毒はまだ回りきってない。けど、左腕はしばらく使えねーニヤ)

毒を無視したとして、傷そのものも決して浅くはない。

傷をふさぐ……せめてまともにも止血を限り、戦闘には使えない。いや、銀の腕アガートラムになる事を覚悟するなら、盾にくらいは使えるだろうけど。

(そんな事したら毒で死ぬニヤ、きつと)

振るわれるダガーに毒が仕込まれていないという保証はどこにもない。

そして、いかに『耐異常』といえど万能ではなかった。

あくまでも耐性だ。常人よりも遥かに効きは悪いが、一切効かないという訳ではない。

そこまで便利なものではないのだ。

(つてか、ミャーの毒は全く効いてねーニヤ)

それはさつきから何度か始末している赤黒い変なものと同じだが。

時間がなかったので『毒妖蛆の毒液』ポイズン・ウェルミスは用意できなかつたが……それでも、そこま

で安物の毒を吸わせてきた訳ではない。

(ま、それはこの際どうでもいいわ)

迫りくる死刃を何とかして掻い潜りながら、とにかく思考を回し続ける。

臆したらその時点で殺される。思考を止めるな。意識を停滞させるな。

心臓と脾腹を抉り。喉をかき切つて。おまけに脳天までかち割つてやったというのに生きてるような怪物だ。毒が通じなかつたとしても何の不思議もない。

だから、改めてビビることは何にもない。そんな事よりも——

(問題は、どうやったら殺せるかね)

あの赤黒い変なのと同じなら、絶対に殺せないわけではないはずだ。

ただ単に、まだ足りないだけ。

(あと狙つてない急所はどこかしら?)

まあ、どこでもいいけど。えり好みせず、片っ端から狙つていくしかない。

(……暗殺者として、その殺り方はどうかって気もするけどニヤ)

それこそ、えり好みなどしていられない。

熱血など馬鹿な連中のする事だ——が、流星に自分の尻尾に火が灯っているなら、話は別だ。

(大丈夫、殺せないはずがない)

思い出せ。私は、とつくの昔にニランクの壁を超えている。

脱退条件——某帝国の上級騎士暗殺。あの時ですらV. 3をナイフ一本で暗殺できたのだ。

装備も技術も経験も充実している今の私に殺せないはずがない。

「フ——…！」

細く長く吐息を吐き出し、さらに一段感覚を研ぎ澄ます。

手には暗剣。空に月はない。暗殺者にとつて、条件は最高だ。

まったく、人ひとり殺すのにこれ以上の何が必要だというのか。

「お？ やるつてのなあ?！」

雑音に囚われているだけの余力はない。鼠の悲鳴に耳を傾ける猫がどこにいる。

左腕の痛みは——重さこそ残るが——もはや、意識から消えた。

地面を蹴る。今さら、足音など立てるものか。

夜の闇に溶け込む幻想^{イメージ}。闇^{それ}を味方にできない暗殺者などいるわけがない。

「へえ、なかなかやるじゃねえかよ！」

真正面から飛び込む——ように見せて、微かに軸を逸らす。

まさか本当に真つ向から斬り合うつもりなどない。それでは、間違つても勝機など見出せない。

目指すは、ほんの刹那生じる死角。そこへと体を滑り込ませる。

私は暗殺者だ。ならば、これは戦闘ではない。暗殺だ。

騙し、欺き、隙をつき、殺す。

結局のところ、私が頼れる唯一の手段はそれではないのだ。

「チィ、ちよこまかと……！」

すれ違いざまに横腹を一撫で。感触が浅い。あれでは急所はらわたに届いていない。

構うものか。

元より、人間と言うのは案外しぶとい。

冒険者ならなおさらで——この変態は、少なくともしぶとさならさらにその上をい

く。

懐から愛用の煙玉を取り出し、投げつける。

「てめえ!!」

反射的にそれを切断し——その結果、辺りを白い煙が包み込む。

とはいえ、屋外。しかも、水辺だ。風は強い。

元々それも想定して調合してあるとはいえ、普段より効果は低い。

なので、もうひと手間。自前の投げナイフを適当な方向に投げつける。

「そこかあ、雌猫！」

床か壁に当たったそれが、小さな音を立てる。

(やっぱり単純な奴ね)

その音の方向に、変態はダガーを突き出す。

隙だった。無防備な背中に、改めて暗剣を突き立てる――

「あぐ……ッ?!」

――そう突き立てた。だが、浅い。

そして――

「そこにいたかよ」

どこからか現れたエストックが、私の右太腿を完全に貫いていた。

早かったのは、この変態の方だった。「ステイタス」と武器の間合いの差が、必殺となるはずだった一撃を無意味なものへと貶めたのだ。

(これ……ッ!)

これは【イレギュラー正体不明】のもつ謎の『スキル』と同じだ。

身の丈ほどの特大剣や大槌をどこからともなく取り出し、どこかへとかき消す。

「つあ……ッ!!」

エストックは刺剣に分類される。分類されるが、しかしそれだけではない。

元々は鎧もろとも相手に相手突き殺すための武器だ。従って、その刀身はレイピアより

も硬い。

つまり、それは斬撃にも充分に対応する。

「まずは脚一本つてなあ!!」

「あつつ、うう……ツツ!?!」

そのまま右脚を半分ほど斬り裂かれた——と、いうより単純に裂かれた。

とつさに悲鳴すら出せないほどの激痛。無理矢理に引き裂かれる傷ほど痛いものはない。

だが、それにすらかまけている暇はなかった。

「おっとー！ 次は腕をくれるのかよー！」

続く刃を、左腕を盾にして防ぐ。

ひとまず死を防いだが……これで本当に左腕は使い物にならなくなった。

(こりや、死んだかニヤー……)

右脚も左腕も使えない。

煙幕も、もうすぐ風に紛れて消える。

それぞれ残った手足を使って、一回加速できるかどうか。

(我ながら酷い人生だったニヤー……)

もつとも、悠長に走馬燈を見ている暇もなさそうだった。

ああ、まったく。

まったく、ずいぶんと絆されたものだった。

……最期に思い浮かぶのが、あの馬鹿猫だったり、脳筋女だったり、暴走妖精だったりする辺り、つくづく本当に。

(ああもう！ マジでやってらんねーニヤー！)

これだけは。これだけは使いたくなかったのだが。本当に嫌だったのだけれど。

しかし、この状況で今にも暗殺者っぽい恰好をした奴が死んで、しかもその背中にニオルズ様の名前入りの『恩恵』^{フェルナ}が刻まれてたりした日には、絶対面倒な事になる。

選択肢は二つ。死んでも生き残るか、死んだら死体も残さないか。

そして……まあ、そのための備えもしているわけで。

【戯れよ】

超短分詠唱を口ずさむ。同時、私と全く同じ姿の幻影が現れる。

とっておきの幻惑魔法。

とはいえ、所詮はただの幻影。実体などなく、従って殺傷能力などない。

そして、上限は二体。

「インのお……ッ!!」

とりあえず、最初の一体を幻影を突貫させる。

「目晦ましかよ、くだらねえなあ!!」

変態がそれと戯れている間に、何とか這いずって位置を移動する。

まだ、煙幕は途絶えていない。ただ、ギリギリだろう。

メレンの夜風の強さは馬鹿にならない。

(これが最後の好機^{チャンス}——!)

位置は理想的。ちようど変態を前後で挟む形になっている。

最後の加速。千切れかけた手足が痛むが無視。視線が交差して——

「バあか! ちようど煙幕も晴れたんだよお!」

そして。案の定、その変態は背後から襲い掛かる幻影へと向き直った。

無防備にさらされる背中。

「なにい?!」

そこへと激突する。勢いあまって、屋根から転がり落ちる。

「てめえ、普通そこは死角を狙うだろうが!」

「ええ。狙ったでしょう?」

やはり、本質的にこの変態は暗殺者などではない。

定石などクソくらえの世界に生きる暗殺者が、予測されるような動きをしてどうする

というのか。

中空でもみ合いながら、適当な場所に『それ』をねじ込む。

「何入れやが——」

最後まで聞くつもりなどない。

ねじ込んで、すぐさま起爆させた。

それは、暗黒期に闇派閥イッパルスの連中が用いた自決装備。その中核となるもの。

あまりに危険であるため今も一般人には非売品。

ギルドに登録した鍛冶師スミス以外は購入できない。

……まあ、それを言うならそもそもそこまで大量に仕入れられない代物でもある。

何しろ『深層』にしかないモンスターのドロップアイテムだ。回収できる派閥の方が少ない。

その名前を『火炎石』と言った。効果は単純に激烈な燃焼作用。

……上級冒険者の体すら焼滅させるほどの、だ。

もつとも、流星に手持ちのそれでは数が足りないが——

「!?!」

次の瞬間、視界が白く染まる。

それはもはや爆炎ですらない。白い閃光だった。

それと熱。

咄嗟に息を止めていた——と、いか衝撃で詰まっていたのは幸運だったのか不運だったのか。

まともに吸い込んでいたなら、いくらL.V. 4といえど肺を焼かれていただろう。

(やつぱ死んだかニヤ)

奇妙なほど冷静に眩き——次の瞬間には意識もほとんど飛んでいた。

足場を失った時点で、離脱の方法も失っていたのだ。それも仕方がない。

「——公、しつかりしろ！ 貴公！」

燃え尽きかけた意識。完全に霞んだ視界に、最後に移ったのは——

(ニヤ……。そこは、プリツとしたお尻の少年とかじゃないのかニヤ……)

あまり、よく覚えていないけど……。

そう、確か。何だかバケツのような何かだった気がする。

(やり直しを要求するニヤ)

これが、天界に通じる門なのだろうか。

太陽のような黄金の輝きに包まれ、最後に思ったのはそんな事だった。

「——勝負だ」

因縁の相手——ミノタウロスとの死闘を経て、

「とうとうベル君もLv. 2かあ……なあんて普通は言うんだらうけど、君の場合、感慨を感じる暇もなかったね」

なんて、そんな神様の言葉とともに念願の「ランクアップ」を果たしてから。

「俺と直接契約をしないか、ベル・クラネル？」

破損してしまった装備を整えに行つた先で偶然出会つた恩人の一人であるヴェルフ——あの軽鎧を作つた鍛冶師であるヴェルフ・クロツゾと直接契約を交わしてから、今日で六日目。

「はあー、リリは悲しいです。とてもとても悲しいです。お買い物に行かただけなのに、見事リリの不安を裏切らず厄介事をお持ち帰りになるなんて……ベル様のご厚意にリリは涙が出てしまいます」

……まあ、リリとはそんなやり取りもあつたものの。

「来るぞ、ベル！」

「任せて、ヴェルフ！」

今はこうして、三人一組のパーティを組んでダンジョンを攻略している。

場所は一二階層。念願の『中層』進出まであと一步のところだ。

「ファイアボルト！」

迫りくるオークを炎雷で押しのと、その綻びをヴェルフの大刀が斬り決る。

「うおっ!？」

それを飛び越えて襲い掛かってくるのはシルバーバック。

「だけど——」

「遅いッ！」

フィリア祭ではあんなに苦労したその白猿も、『器』が昇華された今なら圧倒できる。

これが「ランクアップ」した『神の恩恵』^{フアルナ}の力。

まだ遠いけど、金色の憧憬へと確実に近づいている。

「うわ?!」

近づいているけど、油断は禁物だった。

シルバーバックの巨体の陰に迫っていた伏兵への反応が遅れた——

「当たれッ！」

——けれど、その伏兵……バットバットは次々にリリによって撃ち落されていく。

(うん、いい感じだ！)

パーティとしての連携も磨かれてきている。

これなら、いよいよ一三階層——『中層』へと進出できる。

(あとでエイナさんに相談してみよう)

幸い、神様の言う『成長期』は今も継続中。そのおかげで、もう少しでアビリティ評価も——敏捷だけけど——Fに届く。

変則的とはいえ、パーティも組んでいる。

進出の条件はギリギリだけど、達成しているはずだ。

「ふい……。パーティを組んでいるとはいえ、これだけ長いこと戦っていると流石に疲れな」

それからしばらくして、すっかりパーティの体力管理まで受け持つてくれるようになったリリの号令で、僕らは休憩をとっていた。

「少し働かせすぎじゃないか、リリスケ？」

ポーションを飲み終えたヴェルフが、魔石やドロップアイテムを拾うリリに声をかけた。

「馬鹿な事を言わないでください。あの人に比べれば、リリはずっと優しいです」

あの人、というのはもちろんクオンさんの事だ。

今の状況ではなるべく名前を出さない方がいい——と、いうのがリリの提案だった。

「ふふっ。今日も大猟です！」

それからしばらくして。

一仕事終わったリリは、僕らの傍に腰を下ろすとホクホクした笑顔で一気にポーシヨンを飲み干す。

「ですが、これは本当に『中層』が見えてきましたねえ」

まさか本当にリリが『中層』に行く日が来るなんて——と、感慨深そうに呟く。

「そうだね。連携も形になってきてる」

「ああ。さすがに三日目だしな」

しかし、今は風邪が流行ってるのか？——と、ヴェルフが首を傾げた。

「どうなんでしょうね。お爺さんの場合、元凶は過労ですけど……」

ヴェルフがパーティに加わった翌日には、リリがお世話になっているというお爺さんが、間に一日挟んで神様が風邪をひいて倒れていたりする。

「ヘステイア様の場合も、心労かもしれませんよ？」

ミノタウロスとの一戦を終えた僕は、文字通り精魂尽き果て三日も眠っていたらしい。

その間、神様は先に目覚めたりりと二人でずつと看病してくれていた。

そのおかげで、目覚めた時には体は充分に回復していて……そのまま半日ほど、僕は二人からは暖かいお説教を受けることになったわけだけど——

「うう……。もう勘弁してよ、リリ」

リリは、まだ言い足りないらしい。

……案外、神様もそうなのかもしれないけど。

「ま、リリスケの言葉にも一理あるだろ。L.V. 1が単独^ソでミノタウロスとなんてな」
普通は逃げる一択だし、それでも逃げ切れるかどうかだ——と、ヴェルフ。

それはよく分かる。何しろ、ついこの前——思えば、あの時からまだ一ヶ月くらいしかたっていない——散々追い回されたわけだし。

「しかし、何か最近ランクの壁が低くなってきた気がするな」

四年前、L.V. 0がL.V. 7と互角に渡り合ったくらいから——と、ヴェルフが笑う。
「俺もさっさとランクアップしたいもんだ」

それはもちろん——いや、多少は本心も混じっているだろうけど——冗談だった。

「ええ、リリもあやかりたいものです——……」

それにつられてリリも笑い——

「はっ、いけません！ これは罠ですっ!？」

何かの間違いである人に知られたら、本気で一ヶ月でランクアップしてしまうような目にあわされるに決まっています！——と、途中から本気の悲鳴を上げる。

「そこまでか？ 【^{イレギュラー}正体不明】の訓練つてのは……」

周りに誰もいないのを確認して——それでも声を潜めて、ヴェルフが問いかける。

「ふふっ……。ヴェルフ様は何故、ベル様が『レコードキーパー世界最速兎』などと呼ばれるようになったと思っっているのですか？」

小声でヴェルフが呟くと、リリはそう言っつて笑った。

……完全に座つた目で。

「そりゃ、一カ月半でLv. 2になつたからだろう？　しかもミノタウロスを単独撃破して」

若干引いた様子でヴェルフが呻くと、リリが纏う空気がさらに一段暗く重くなつた。

「そういうデタラメが出来る下地がどうやって作られたと思っつているのですか？　あ

の人の指導の下で一日中ずううつとキラアアントの大群を相手にしていたからなので

すよ?!　ええ、リリはあの日々を忘れません。帰つてからも夢に出てくるくらいでした

から!!」

むぎー!——と、気炎を上げてついにリリが叫んだ。ただし、器用な事に小声で。

クオンさんと過ごした短くも濃い日々はリリに奇妙な特技を習得させていたらしい。

……あと、若干のトラウマも残しているみたいだった。

「お、おう……。悪かつた」

あまりの気迫に押されたのか、ヴェルフは今までになく素直に頭を下げたのだった。

「ところで、ベル。手甲の調子はどうか？」

小さく咳払いをして、ヴェルフが話題を変える。

「うん、いい感じだよ」

リリが休んだ日、時間が余った僕はヴェルフに誘われて工房にお邪魔していた。

そこでこの新しい軽鎧——《兎鎧MKⅢ》ビョンキチを少し調整してもらったのだ。

具体的には左の手甲をエイナさんから貰った《グリーン・サポーター》のようにプロテクターとして機能するように改良してもらっている。

武器の格納機能を失った分、強度と耐衝撃性が強化されている。

重さはほぼ変わらないものの、盾としての性能はぐっと上がっているという実感があつた。

「しかし、そのショートソードはやっぱ凄えな」

最初にクオンさんから借りたショートソードを見つめ、ヴェルフが呻く。

「うん、おかげですごく助かってる。……まあ、師匠は安物だつて言つてたけどね」

「これをそんな風に言われると自信なくすぜ、まったく」

「それはもう、全ての冒険者たちの心をへし折りにかかる悪夢その人ですから。サポーターのささやかな矜持すら決して見逃しませんよー」

うふふ……と、リリが暗い目で笑う。

あの『スキル』がサポーター泣かせなのは僕にだって分かるけど。

リリが拗ねている理由はそこに加えて、意地悪にも追い打ちをかけたせいだろう。……もつとも、クオンさんはクオンさんでリリのスキルに驚愕していたけど。

「ところで、実際どれくらい代物なのですか？」

改めて、リリがヴェルフに問いかけた。

確かにちよつと気になる。

「間違いなく二等級兵装に匹敵するだろうな。しかも、炎属性効果付きとなりや……まあ、値段で話をするなら安くして二千万ヴァリスつてところか」

危うく飲みかけていた水を吹き出しそうになった。

「そ、そんなに?!」

いや、確かに二等級兵装つて言えば、第二級冒険者以上じゃないと持っていないくらいの高価な代物のはずだけど。

「ああ。これを『安物』つて言つてポンと渡しちゃうんだから、とんでもないな」

丁寧に鞘に戻してから、ヴェルフがため息をついた。

「まあ、ヘファイストス様が目を疑うような武器を平然と持ち歩いてるくらいだ。向こうにとつては本当に『安物』なんだろうが……」

今更だけど、ヴェルフもクオンさんを知っているらしい。

四年前、クオンさんがヘファイストス様に武器の手入れを依頼した時に遠目に見かけ

たのだとか。

あと、預かった武器をこっそり見せてもらったこともあるらしい。

「あの人の武器はそれほどなのですか？」

「ああ。椿……うちの団長ですら手入れするのがやつとだったらしい」

「椿様……。最上級鍛冶師と名高い『単眼の巨師』様までがですか？」

「実際とんでもない代物だぜ、あのクレイモアは。まず何より鉄が違う。どんな素材を使っているのか今も全く分からないな」

と、ヴェルフはどこか嬉しそうな様子で言った。

「それに、専用装備なんだろうな。当時の俺でも使い手の『癖』が何となく分かるくらい丁寧^{オーダーメイド}に細やかに調整されていたぜ」

ヘアアイストス様じゃないが、一度でいいからあれを打った鍛冶師と会って話してみたいもんだ——と、感慨深げに唸った。

「では、今リリがお借りしているこれは……」

次に借りたショートソード——ええと、最初に借りた《炎のショートソード》ではない方——を鞘越しに軽く叩きながら、リリが問いかける。

「そつちも俺たちにとつては『安物』じゃないぞ。見たところ、三等級兵装に相当するからな」

「うえ?! 上級鍛冶師が打ったものではないですか!？」

「ああ。それでもあのクレイモアに比べれば『安物』なんだから、堪ったもんじゃないな」
本場に『灰色の悪夢』とはよく言ったもんだぜ。

そう言つて、ヴェルフは大げさなくらいに肩を落として見せた。

…

「しかし、流石に一二階層ともなると同業者の数も減つてくるな」

「そうですね。この先は一三階層。『最初の死線』とも言われる階層ですから」

この辺りまで来る冒険者は、基本的に「ランクアップ」間近か直後だと考えていい。

オラリオの冒険者ですら半数がLv. 1のままだという事を考慮すれば、ランクの

『壁』がすでに影響を及ぼし始めていたとしても何の不思議もなかった。

「ですが、極端に人が減るのはちよつと不安ですね。何か異常事態が起こっている可能性

もありますし……」

「まあね。あの時も、結構前から予兆はあつたし……」

あの時はダンジョンの中が静かすぎた。

「やめろつて。お前らがいうとシャレにならない」

それはまあ……自分で言うのも何だけど、『上層』でミノタウロスと遭遇するという
異常事態を二度も経験している冒険者なんてそうそういるとは思えない。

(でも……)

今もちよつと嫌な静かさに包まれている気がしてならない。

それに、体が何かに備えて勝手に準備を始めているかのような妙な高揚もある。

「あれ……?」

嫌な予感を覚えつつ、少し先の広間に踏み込むと、明らかな異常が見つかった。

「誰か倒れてる!」

霧に包まれた灰色の草原に、鈍色の塊が転がっている。

慌てて駆け寄ると、それは無骨な鎧だった。

それを着込んだ誰かがうつ伏せに倒れている。

「騎士……?」

それは騎士鎧——おそらく、騎士そのものだった。

でも、英雄譚に出てくる華美な代物ではない。

「そうだな。戦場にいる騎士そのものだ」

血と泥と数多の傷とに彩られた、ただ純粹な武器であり防具だった。

お世辞にも美麗とは言えない。

だが、激戦を潜り抜けたと思しきそれには言い知れぬ凄みがあった。

(いや、見とれている場合じゃない!)

そんな感想は後回しだ。

「早く手当てをしないと——」

「待つてください、ベル様！ 迂闊に触れてはいけません！」

慌てて起こそうとして、リリに制止される。

「どんな傷か分かりません。それに、動かしている途中で意識を取り戻した場合、モンスターと誤認される危険もありますから」

確かに、リリの言う通りだ。

周りに他の仲間は見当たらない。この人は単独でここまで来た可能性は充分にあった。その状況で、いきなり何かに触れられたら反撃するのはむしろ当たり前だ。

助けようとしたつもりが同士討ち、なんて流石に情けない。

「聞こえていますか？ リリ達は敵ではありません。いいですか、動かしませうよ？」

慎重に体の具合を確かめてから、リリは——叫ぶほどではないものの——大きな声で呼びかけながらその人を仰向けにする。

「こいつは酷いな……」

胸元辺りに大きな裂傷があった。固まりかけているものの、今もまだ血が滴っている。

慌ててその傍に耳を当てると——

「でも、まだ生きてる!」

鎧越しに、微かな心臓の音が聞こえた。

「リリ、まだポーシヨン……ハイ・ポーシヨンは残ってるよね?!」

「はい、ベル様!」

リリがハイ・ポーシヨンを取り出している間に、左手に《呪術の火》を灯し、「ぬくもりの火」を空中に浮かべる。

「つと、血の匂いに惹かれて集まってきやがったな。間一髪つてところか」

ポツポツと集まってきたモンスターを睥睨し、ヴェルフが大刀を構える。

「こつちは任せろ! これくらいの数なら俺一人で何とかなる!」

「お願いします! ……いいですが、兜を動かしますよ!」

その火が灯る頃には、リリが改めて声をかけながら兜の面頬バイザーを押し上げていた。

その下にあつた顔は――

「女の人……?」

意外なことに女性のものであった。

いや、女性冒険者が珍しいとは言わないけど……鎧が無骨なものだったので、てつきり男の火とかと思っていた。

背格好と肌の色からして、種族はヒューマンかエルフだろう。いや、耳と尻尾が隠れ

ている可能性もないわけじゃないけど。

年齢は多分霞さんやリユースさん達と同じくらい。

「ベル様、これを！」

などと、一瞬だけ余計なことを考えている間に、栓を抜かれたボトルが差し出される。それを受け取って、胸の傷へとぶちまけた。

「飲めますか？ ポーションです！」

同時、リリが少し強引にもう一本のハイ・ポーションを飲ませる。

これで、ひとまず今の僕らにできる応急処置は済ませたわけだけど……。

「おい、これはちよつとマズいぞ」

モンスターを一掃したヴェルフが、少し強張った声で呻いた。

「戻ってきたのかもな」

……ああ、分かっていた。

多分、この人を打ち倒した何者か——さつきから微妙に神経を刺激していたこの静けさを生み出していた元凶が戻ってきたのだ。

「おいおい、希少種^{レアモンスター}じゃなかったのか？ ついこの前倒しただろう」

「……個体数が少ないというだけで、階層主と違って次産間隔^{インターバル}が明確に決まっているわけではありませんから」

戦闘音に紛れていた微かな地響きは、今やはつきりと鼓膜を揺さぶっていた。霧を押しつけて、そいつが姿を現す。

「こういう事もある。そう言うよりありません……ッ」

「ふざける……ッ！」

琥珀色の鱗。血のように赤い目。長い尾。鋭利な爪。無数の牙。

体高約一五〇M、体長は四Mを超える小竜。

『インフアント・ドラゴン』

上層における、事実上の階層主だった。

(マズい……ッ！)

初めてヴェルフとパーティを組んだ日にも遭遇したその怪物を前に、思わず呻いていた。た。

あの時、あっさり倒せたのは凶らずも『スキル』——『英雄願望』^{アルゴノウト}を発動させていたからだ。

(畜力^{チャージ}している時間がない！)

だが、今は接近されすぎた。

この状態では正攻法で真っ向から戦うしかない。

……この階層に到達できる下級冒険者の一団^{パーティ}をことごとく壊滅させている怪物と。

「来るぞ、ベル！」

ヴェルフの叫びに、インファント・ドラゴンの咆哮が重なる。

それは所謂『咆哮』^{ハウル}ではないが、圧倒するには充分な迫力がある。

「——ッッ!!」

それを押し返すように一気に加速した。

潜在能力^{ポテンシャル}は個体によつてはL v. 2に匹敵する。

だけど、

(あのミノタウロスほどじゃない！)

今更その程度の咆哮で心折られるわけがない。

むしろ、悲壮さすら糧として心が震えていた。

(リリ達を守らないと……！)

それがパーティー唯一のL v. 2——いや、仮にもパーティーのリーダーを務めている僕の責任だ。

あの時、エルフの冒険者を一撃で沈めた尾を掻い潜り、《神様のナイフ》を走らせる。

「よし——！」

攻撃は鱗を切り裂いて通じる。

その巨体のせいで、動きは決して早くない。

これといった特殊な攻撃手段——例えばブレス——は持っていないはず。それなら——

(このまま一撃離脱を繰り返す！)

相手が隙を——『魔石』を狙えるか、もしくは畜力チャージさせてくれるまで。

……いや、たとえその時が訪れなくとも、このまま削り切る覚悟を決める。

勝てないはずがない。この小竜は、それでもあの猛牛ほどの強敵ではないのだから。

ああ、だけど——

「きゃあああああああつ?!」

そんな樂觀を許してくれないのがダンジョンだった。

こんな時に、厄介なモンスター……『ハード・アーマード』が回転しながら突っ込んでくる。

しかも、身動きの取れないリリ達を狙って。

「リリ、逃げてッ!」

その叫びを詠唱代わりに、炎雷を放つ。

だが、流石は一一、一二階層で最硬を誇る甲羅チャージ。

畜力チャージされていない炎雷は、回転の威力に引き裂かれてほとんど通じていない。

「リリスケツ!」

直撃——!?

ヴェルフの悲鳴に似た叫びに、背筋が凍り付いた。

けど——

「えっ……?」

その回転突進は、リリには届かなかつた。

ごく単純に、構えられた大盾に阻まれて。

「はあああつ——」

ハルバート
斧槍が突撃槍へと変わる。

その『スキル』には、あまりに見覚えがある。

本来、突撃槍とは騎兵が用いる代物だ。

完全に刺突に特化したその槍の威力を發揮させるには、馬の加速力が必要だからだけ
ど……逆に言えば、その加速力さえ用意できるなら必ずしも馬は必要ない。

つまり、冒険者——特に上級冒険者以上なら問題なく使いこなせるというわけだ。

『ギィ——?!』

果たして、その穂先はあっさりとハード・アーマードの甲羅を貫き通した。

短い端末魔の声だけを残し、それは地面へと転がり落ちる。

それを見て、インフアント・ドラゴンが動いた。

『ガアアアアアアアッ!』

その騎士こそが最大の脅威だと判断したのだろう。

僕らを見殺しして、小竜が騎士へと突進する。

「こんなところに竜だと……?」

対する騎士が、怪訝そうに呟いたのがはつきりと聞こえた。

でも、本当の驚愕はそのあとに訪れる。

「――」

聞き取れない言語を用いた詠唱。

その物語が口ずさまれると同時に、騎士の左手に純白の光が渦を巻き――

『ガアアアアアアッ!』

放たれたその光輪は、インファント・ドラゴンの鱗をいともあっさりとは切り裂いた。

「脆いなッ!」

ロングソードを抜き放つと、騎士は一気に間合いを詰めた。

両手で構え、振り下ろされたその一撃が小竜の尾を両断。痛みに荒れ狂うインファン

ト・ドラゴンを無視し、その騎士は背中へと飛び乗って――

「死ねッ!」

その手に再び現れた突撃槍が、深々と突き立てられた。

『ガア——ア!?』

インフアント・ドラゴンの断末魔の絶叫が、ダンジョンに響き渡った。

魔石を砕かれたのだろう。その巨体がたちまちのうちに灰となつて散る。

「助かりましたあ……」

ぺたんとリリが座り込むと同時に、もう少し重い音が響く。

「だ、大丈夫ですか!？」

灰の山に倒れたのは、あの騎士だった。

当然だ。ナーザさんのような専門知識があるわけじゃないけど……それでも、ハイ・ポーション二本で全快するほど浅い傷には見えなかった。

「こいつはマズいな。おい、ベル」

「うん! 急いで地上に戻ろうっ!」

「よし、任せろ!」

「せめて取り込んでから気絶して欲しかったです……!」

ヴェルフが騎士を抱き上げながら。リリは突撃槍を担ぎながら。

それぞれそう言った。

「つと、結構重いな」

「女性に対して失礼ですよ、ヴェルフ様」

「鎧の話だ。思った以上にしっかりと作りをしてやがる」

半眼のリリにヴェルフは言い返してから、

「戦闘は全部お前に任せることになっちまうが……」

「大丈夫。任せて！」

初めからそのつもりだった。両手にショートソードと《神様のナイフ》をそれぞれ携える。

インファント・ドラゴンがいなくなったことで、他のモンスターが姿を見せつつあった。

「今は地上を指すのが最優先です。ちょっと惜しいですが……」

「うん、魔石狙いで一気に片付けるッ！」

リリに告げると同時、完全にスイッチを入れた。

今の僕の限界を確かめるつもりで、地面を蹴る。

まだ十分に数が揃っていないモンスターの群れを蹂躪するのに、時間は必要なかった。

……

バベル地下一階。

ダンジョン唯一の出入り口であるそこは、大体いつでも誰かいる。

もちろん、時間帯によってはほとんど誰もいないこともあるけど、完全に無人というのは今のところ見た事がなかった。

「とりあえず、ギルド職員が誰もいないのは幸運でした」

肩で息をしながらも、周囲を見回してリリが呟く。

ちなみに、僕とヴェルフも息が上がっていた。

一二階層から一気に——モンスターの群れをいくつも強引に切り抜けながら——駆け上がってきたんだから当然だけど。

「そうだね。今回ばかりは助かったよ」

それこそエイナさんとかは、本当にオラリオ中の冒険者の顔を知っているんじゃないかっていうくらい詳しい。だから、この人を見られたら冒険者ではない事がきつとバレてしまうだろう。

「確かにな。だが、問題はここからだ」

「ええ。ひとまず、バベルの治療室には運べません。あそこはギルドの施設ですから。名簿と照会されてすぐにバレてしまいます」

「……まあ、俺も別に詳しいわけじゃないが。さすがに今の状況でそれはヤバいだろうな」

どう考えてもこの人はクオンさんと知り合い……少なくとも、同じ力を宿している。

普段だったら、それでも治療室に運び込むのが一番いいとは思うけど——
「もちろん、ギルドに報告する、というのも選択肢ではありませんが……」

今のオラリオだと、ただそれだけであらぬ疑いをかけられるかもしれない。

「それは、ちよつと……」

いや、エイナさん達を悪く言うつもりは少しもないんだけど……事は『神殺し』だ。
慎重になっておいて損はないと思う。

「ですが、それ以外の選択肢は基本的に変わりません」

「まあな。街中を怪我人担いで走り抜けるつてのは、それなりに目立つ」

負傷者を担いで一気に地上を目指す——と、いうのはダンジョンの中では特別珍しい
光景ではない。実際に目撃するかどうかはともかく、毎日起こっている事と言ってい
い。

こうして片隅で手当てをしていたとしても、不審がられる事はなかった。

ただ、流石に街中を——と、なると話はちよつと変わってくる。

馴染みの治療院に運ぶ……と、言うのも完全に意識がない状態ではまずない。

バベルの治療室に運んでから、仲間が呼びに行くのが通例と言っている。……らしい。
い。

今のところ、運び込まれた経験しかないのでよく分からないけど。

「とはいえ、悩んでいる暇もありません。傷の具合はまだはつきりしていませんが、浅い傷ではないのは確かです。急いで治療しないと……」

「だな。なりふり構つてる場合じゃない」

それなら――

「ひとまず教会に運ぼう」

決断しなくては。その決意とともに、言った。

「そのあとで、ナアーザさんたちを呼びに行く」

あの二人なら、きつと力になってくれるはずだ。

「よし。それじゃ行くか！」

「え、ヴェルフ？」

再び騎士を抱き上げて、ヴェルフが立ち上がった。

「おいおい。ここまできて仲間外れないだろう？」

いや、それはそうだけど――

「ひよつとしたら何か危ない事になるかもしれないし……」

この人がどういう人なのかもよく分からない。

場合によっては、敵対することになるかも……。

「だったらなおさらだ。確かにまだLv. 1だが、いないよりはマシだろう？ それと

も邪魔か?」

「そんなことないよ!」

迷う暇もなく飛び出した言葉に、ヴェルフがにやりと笑った。

「なら、一蓮托生だ」

「ええ。では、急ぎましよう。ここで問答していて手遅れになったりしたら笑えませんがからね」

リリもまた、そう言つて立ち上がった。

「うん。……ありがとう、リリ、ヴェルフ」

二人に頷いてから、僕らは再び走り出した。

……

今日は特に忙しかった。

何といつても売り切れでいつもより少し早めに屋台が閉まるくらいなのだ。

(ううう……。今日は余り物も貰えなかつたし、何だか損した気がするぞお……)

フラフラしながら我が家に戻り、礼拝堂に残された長椅子に突つ伏す。

いや、もうちよつと頑張れば寝台ベッドが待っているんだけど……

「神様、ただいま戻りました!」

「ベル君!!」

おお、これが天啓というやつか。

きつとボクは君を待っていたんだね！——なんて、はしやく間もなく、さらに二人飛び込んでくる。

「つて、サポーター君も一緒か……」

あと、鎧を抱えた赤い髪の男の子も。

「ヴェルフ！ この鎧を脱がせられる?!」

「任せろ」

赤い髪の男の子——ヴェルフというと、ここ数日パーティを組んでいるヘファイストスの眷属ことどもだろう——は、抱えていた鎧を別の長椅子に降ろし、慣れた様子で鎧を脱がせていく。

「い、一体どうしたんだい?」

いきなりの大騒ぎに、思わず呻いていた。

「いつもの異常事態です!」

ああ、そろそろそういう時期か。

例の『スキル』が発動した頃から、大体一週間一回くらいは何か起こってるし。

——と、サポーター君の言葉についつい納得してしまっただから、

「いやいやいや! 具体的には?!」

もちろん、見れば何となく分かるけど。

「この人、ダンジョンで倒れてて……!」

回復魔法——いや、回復呪術といった方がいいのか——を使いながら、ベル君が言う。

「そりゃ大変だ! ……けど、それならここじゃなくて治療室に行つた方が良かったんじゃない?」

残念だけど、ボクはミアハのように傷を手当したり薬を調合してあげたりはできないし。

「いえ、それがちよつと訳ありません」

「……今度はいつたいどんな薄幸少女を捕まえてきたんだい?」

兜の下から出てきた顔は、明らかに女の子のものだった。

歳はこの前会つたアドバイザー君……いや、霞君と同じくらいだろうか。

「まだ詳しいことは分かりませんが、クオンさんと同じ——ツツ!」

「リリスケ、早くポーシオン寄越せ! ありつたけだ!」

なんて、呑気なことば言つていられそうになかった。

胴体部分の鎧を脱がせた途端、ボクにも分かるほどの血の匂いがした。

「いけません、ここまで傷が深いのは予想外です!!」

肌着の胸元は大きく裂かれ、血で黒く染まっている。

それどころか、横腹にも槍か何かで突かれたような傷跡がある。

「この傷であんな戦いをしたつてのによ……！」

「リリ、ちよつとお願ひ！ 僕は急いでナーザさん達を——危ないツ！」

ポジションをかけようとしたサポーター君に、ベル君が飛びつき、押し倒した。

いや、流石にこればかりは大目に見る。

だって、ベル君が後一瞬遅ければ、サポーター君の首と体が泣き別れになつてただろ
うし。

「何をするつもりだ、〔人喰らい〕の走狗イヌどもが……ッ！」

いつの間にか抜いた剣を片手に、祭壇辺りまで飛び退いて鋭い目でボクらを見据えて
いるその子を見ながら、思わずゾツとしていた。

「ま、待つんだ！ ベル君たちが君をここまで運んできたんだよ！」

絶対にこの子、何か勘違いしている。

「そうだろう。貴様らにとつて私たちなど『餌』でしかないだろうからなッ！」

それどころか、酷く興奮していた。

まずは落ち着けないと誤解を解くどころか、満足に話せそうにない。

「違つて！ 倒れていたのを助けたんだよ！」

違つとは言つたものの……実際のところ、何が何だか。

でも、ベル君たちが何か悪いことをするはずもないんだから、誤解なのは間違いない
「倒れていた? ……なら、ここはオーメルの森の近くのなか?」

「いや、その森には聞き覚えがないんだけど……」

「なら、『生贄の道』のどこかか?」

何だか、また物騒な名前が出てきた。

……それとも、ダンジョンのどこかの異名だろうか。

(うう、ボクもダンジョンについてちゃんと勉強した方がいいのかも……)

今度へファイストスに相談してみよう。

派閥秘伝の採掘ポイントとかじゃなければ、多分教えてくれるはず。

「いや、違うよ。ここはオラリオさ」

と、それはともかく。今はこの子の事だ。

「オラリオ? 聞き覚えがない。……お前たちは何者だ?」

「ボクラ【ヘステイア・ファミリア】さ。その【聖堂騎士団】っていうのとは、全く関わりがないよ」

そもそも、それが何なのかさっぱり分からないし。

騎士団っていうくらいだからどっかの国家系派閥なんだろうな、くらいしか。

(ラキアじゃないよね?)

どうやらそこが、ヴェルフ君の故郷みたいだし。

と、なると、まったくの無関係とは言えなくなってくるのがちよつと不安だった。

「ハスティア・ファミリア」……？ レジスタンスの一派か？」

「レジスタンス？ いや、普通に探索系派閥の一つだよ」

ついで一週間くらい前までは零細派閥もいいところだったけど。

いや、等級と一級ランクと一緒が上がった税金の額に目を回しそうになるくらいまだ零細だけど。

「探索系派閥？ 何のことだ？」

どうやら、それ以前の話のようだった。

(なるほど。これは確かに異常事態イレギュラーだね)

思わず嘆息しそうになる。

今時、「ファミリア」を知らない子なんて探す方が難しい。

まして、その子がダンジョンにいるなんて。

「えっと、まずは傷の手当てをしてから、詳しい話を聞かせてくれないかな？」

と、いうか、その傷でよく動けるね？——と、思わず本音が口から零れ落ちた。

ミノタウロスと戦った後のベル君よりずっと重傷なのに。

「——ッ！」

どうやら、それは触れて欲しくない事だったらしい。

傷を隠しながら、その子はさらに一步後ろに引いた。

「その前に聞く。ここはどこだ？」

「だからオラリオだつて。この教会のことなら、ボクらの本拠地だよ」

「この教会が本拠地？ なら、お前たちは白教徒なのか？」

「マズい。何だか少し下がった警戒値が元に戻っちゃった気がする。」

「違うつて！ 教徒も何も、ボクは神だからね！」

いつもよりほんのちよつとだけ余計に自己主張する。神威を発揮

もちろん、威嚇じゃない。そういう刺々しい感情は込めていない。

だつて、ボクは慈愛の女神でもあるからね！ ほーら、怖くないよー！

「神だと……？ なら、ここは噂に聞く神の都、アノール・ロンドなのか？」

うん、何となく予想はついていた。

その名前は、確かクオン君が前に言っていたような気がする。

「いや、それはおかしい。ここがアノール・ロンドなら、小人がいるはずがない」

サポーター君を見やり、その子は呟いた。

まあ、確かに獣人に変身しているけど、実際には小人族だ。それに、ローブを着込ん

だ今の姿では、背丈から判断するしかない。

小人族だと当たりをつけること、そのものは別に不自然でも何でもない。

「そりゃいるさ。オラリオは多民族共存の街だからね。小人族バルウムだって神だってみんな一緒に生活しているよ」

「バルウム？ 小人ではないのか？」

「どうやら、この子にとって小人と小人族は同じではないらしい。」

（これは、霞君を呼んできた方がいいのかなあ？）

確か『酒夢猫亭』シヤムネコっていう酒場で働いているはず。

いや、本当ならクオン君が来てくれると一番話が早そうだけど。

（流石に今は無理だよなあ……）

今のところギルド公式の賞金首にはなっていないものの、いつそうなってもおかしくない。

それに、非公式にはもうなっているという噂も聞く。

何しろ、イシユタルのところは商業系の派閥としても権勢を振るっていた。

そのため、消滅の煽りを受けた商会は決して少なくない。

「えっと、その辺も含めていろいろ話をしたいんだけど……」

と、ヘファイストスが言っていたけれど。実際のところはよく分からない。

「いえ、ヘステイア様！ それより傷の手当てが先です！」

そこで、サポーター君が叫んだ。

「そ、そうだった!」

あんまり元気に動き回るからついのおんびり話しかけてしまっていた。

「えつと! まずはこつちにおいで。早く手当てしないと死んじやうぞ!」

「……何を白々しい。お前が神なら、私がお前などどつくに気づいているだろうか?」
「えつ?」

いや、さっぱり分からないから困ってるんだけど。

首を傾げると、いよいよその子も怪訝そうな顔をしてから――

「お前は本当に神なのか? これだけの傷を負って平気だとしたら、それは……」
言葉を濁し、散々に躊躇ってから続けた。

「不死人に決まっているだろう」

「……不死人だって?」

何のことだろう。思わず、ベル君たちと顔を見合わせていた。

「からかっているのか?」

いつそ怒りすら宿した声で、その子が問いかけてくる。

「待った! 待って! 本当に何のことだか分からないんだって!」

慌てて両手を振って、からかかっていないのだと伝える。

「ま、まずは傷を手当てしてから、お互いにちゃんと話し合おう! ボク達も何が何だか

……」

「……いいだろう」

そう言うと、その子はどこからか質素なタリスマンを取り出して、クオン君と同じ詠唱——ヒエログリフ神聖文字を正しく発音しながら、物語を口ずさんだ。

すぐに黄金の魔方陣が浮かび上がり、傷が癒えていく。

……まあ、流石にクオン君の魔法ほどの効果はなさそうだったけど。

「ええとだね。それで、不死人って？」

念のためサポーター君が用意していたハイ・ポーションも飲んでもらって——結構疑われたので、まずボクが毒見をすることになったけど——から質問する。

「……『火の陰り』の影響で『闇の刻印』ダークリングが浮かんだ人間のことだ。この集落の規模がどの程度かは知らないが、この時世だ。一人や二人はいただろう？」

「……いや、聞いた事もないんだけど。少なくとも、この千年間くらい」と、いうか。まず『火の陰り』っていうのが何なのかも分からない。

「千年だと？ そんなはずがあるか。前の『火継ぎ』が行われて、まだ三百年と経っていない。もつとも、もう消えかかっているがな」

そして、今代の王候補はあの狂人だ——と、その子は呪詛のように吐き捨てた。

「『火継ぎ』だって？」

どうにも噛み合わない。

何だか根っこの部分から話がずれてしまっている。

「えつとだね。まず、このオラリオについて話すから、聞いてくれるかい？」

こうなつては、その辺りから説明しなくてはいけない。

なるべく簡潔に、それでいて誤解のないように説明するにはどうしたらいいのか。

それを考えながら、慎重に言葉を紡ぐ。

「——と、言うわけなんだけど……」

オラリオの成り立ち。

ボクらの降臨と冒険者の誕生。

そして始まった『神時代』。

オラリオを取り巻く歴史は、これで一通り説明した。

大枠での説明なら、これで特別何か足りないという事はない。……はずだ。

まあ、専門家が聞いたらまだ全然足りないというだろうけど。

「何か質問はあるかい？」

残念ながら、ボクは歴史きおくを司る神ではなかった。

「……それは何かの物語のあらすじではないのか？ さもなくば、私を担いでいるのか？」

「いや、そんなことはしていないよ。これはれっきとしたオラリオの歴史だ」
ボクの言葉に、ベル君たちも頷く。

それを見て、その子は途方に暮れたようだった。

「私は、悪い夢でも見ているのか？」

「えつと……。君の知っている歴史について聞かせてくれるかな？」

呻く彼女に、そう問いかける。

「それは構わないが……」

もう一度ため息をつけてから、その子は自分の知る『歴史』を語り始める。

「古い時代、世界はまだ分かたれず霧に覆われ、灰色の岩と大樹と、朽ちぬ古竜ばかりだった。しかし、ある時、『最初の火』が熾る。これによって、世界には差異がもたらされた——」

それは、驚くべきことにボクらの誕生から始まっていた。神々

「最初の死者ニト、イザリスの魔女と混沌の娘たち、太陽の光の王グヴィンと彼の騎士達。彼らは『王のソウル』を得て古竜に戦いを挑む」

そして、神がまさに神を名乗る資格を得る過程すらも。

「グヴィンの雷、魔女の炎、ニトの死の瘴気……そして、うろこのない白竜シースの裏切りの前に、ついに世界の覇者だった古竜たちは敗れた。これが『火の時代』の始まりだ」

もしこれが事実なら、これこそがまさに最古の英雄譚だろう。と、そこで。

「あれ？ それって、『火継ぎの王』の前篇ですよね？」

ベル君が首を傾げて言った。

「知っているのかい？」

「はい。もの凄く古い物語だってお祖父ちゃんが」

「どんな話なのですか？」

「ええと、最初は今のと大体同じなだけ……」

サポーター君の言葉に応じて、今度はベル君がその物語を語りだす。

確かに、前篇の流れは彼女の言葉をなぞるものだった。

「——そして、その英雄は『聖火』の守り手になりました。また、その偉業が神王に認められ、神の都の名を冠した国を与えらえ王様にも。それからは名君として優れた治世を行つたことで『火継ぎの王』と称えられるようになります」

そのまま一気に後篇についても語ってから、ベル君は言った。

「これが、後篇なんです……」

「確かに、前篇は『火の時代』の始まりそのものだが……」

その子は、そう言って眉をひそめる。

「後篇は、順番がでたらめだな。それに、そもそも『火継ぎの王』とはそういうものではない」

「順番がでたらめだって?」

「神の都の名を冠する国というのは、おそらく小ロンドのことだろう。だが、それが建国されたのは、まだ『火の陰り』が起こる前だ。グヴィンから特に覚えの良かった四人の小人が『王のソウル』とともに与えられた公国だからな」

そして、とその子は言葉が続ける。

「もしその国が本当に小ロンドなら、『邪法に走った王国』というのは黄金の魔術の国ウーラシールのことだろう。この国が『深淵』に沈んだとされるのも、『火の陰り』の前だ。諸説あるが、ウーラシール、イザリス、小ロンドの順番で滅んでいったとする説が主流のはずだ」

もつとも、私を知る範囲での話だが——と、その子は小さく付け足した。

「あの、さつきから気になっていたんですが……」

ベル君が、小さく手を挙げながら問いかけた。

「イザリスって、【炎の魔女】イザリスのことですか?」

「ああ。だが、この場合は彼女の治めた国のことだ。……知っているのか?」

どうやら、ようやく少しずつ会話がかみ合ってきたらしい。

だからってまったく事態がつかめないことには変わりないんだけど。

「えっと、クオンさん……僕がお世話になつていてる人から少しだけ。イザリスのクラナツって人を知ってますか？」

「呪術の開祖の名前だな。魔女イザリスの娘の一人だとされている。もちろん、直接会つたことはないが……」

思わずベル君と顔を見合わせていた。

色々と気になることはあるけど、まず何よりも――

「君も呪術を知っているのかい？」

「もちろんだ。もつとも、私は使えないが」

呪術――神ボクですら知らなかった未知の魔法を知っているとみると、明らかにこの子はクオン君と何らかの繋がりがあある。

「ベル君の話を、君が知っている順番に直してくれるかい？」

「構わない……と、言つても、今言つた先からはもうあまり変わらないな。その『英雄』は確かにニト、イザリス、シースのもとを訪ねている。もつとも、力を借りに行つたのではなく、そのソウルを奪いに行つたのだが……」

「ソウルを奪う？ それって――」

「ああ。殺しに行つたと言つた方が分かりやすいな」

となると、やはり——

「君は、この物語を知っているんだね？」

「おそらく、私たち不死人による『最初の火継ぎ』だろう。随分と脚色されているが、大筋は同じだ」

地域や時代によつて伝承に差異が出るのは仕方がない事だった。

エルフのように長命な種族であつても……ボクらですら、それは避けられない。

「投獄されていたというなら、おそらくそこは『不死院』だ。その後、神の都アノール・ロンドを経て、それぞれの『王のソウル』の持ち主の住処を巡つたとされている」

もつとも、この話だけでこの子の知っている『歴史』と、ベル君の知っている『物語』が同じだと断言はできないだろうけど……。

「……分からないな。『火継ぎの儀』について伝わっているのに、何故不死人を知らない？」

「えつと、どういう関係があるんだい？」

問いかけると、その子は小さくため息をついた。

「『最初の火継ぎ』……その少年が語つた物語が起こる千年以上前から『最初の火』は消えかけていた。その結果、人の世に陽光は届かず、夜ばかりが続き、私たちの中に『闇の刻印』^{ダークリング}が現れ始めた。『火継ぎの儀』とは、その呪いを解く唯一の手段だと言われ

ている」

「夜ばかりが続きつて……。そんなわけないだろう？ そりや、確かに今は夜だけど、朝になればちゃんと日が昇るよ」

「何だと？ ……いったい誰がいつ火を継いだ？」

今、玉座に最も近いのはあの狂人だったはずだが——と、彼女は呻く。

「別に誰もそんな特別なことはしていないって。むしろ、夜がずっと続くなんて聞いたことがない」

「……やはりここはアノール・ロンドなのか？」

神の都だけは今も日の光に満ちていると聞いているが……と、その子は呟いた。

「いや、そんなことはどうでもいい。亡者になっていないなら、まだ戦える」

その子の目に、暗い炎が宿るのが見えた。

「奴らを……あの【人喰らい】どもを殺す」

瞋恚。怨嗟。それとも憎悪か。

黒々と燃え上がるその炎に名前を付けるなら、そのどれかだろう。

「いや、待つんだ！」

その炎に、この子は自分の命すら投げ込むだろう。何の躊躇いもなく。

それは、嫌でも分かった。分かってしまった。

ただ――

「その【聖堂騎士団】っていうのも、「人喰らい」っていうのも、このオラリオにはいないー！」

止めなくちゃー！――その思いだけで、先走りすぎたのかもしれない。

「それがどうした。いずれこの集落にも奴らは手を伸ばしてくるだろう」

「だから！ その【聖堂騎士団】も【人喰らい】ってのも、『火継ぎの儀』も『火の陰り』も『闇の刻印』もないんだよ!! オラリオにじゃなくて、この『下界』のどこにも!!」

少なくとも、この千年間は存在していないはずだ。

そんなものがあれば、天界でも騒ぎになっておかしくないんだから。

ただ――

「……何だと?」

「だから、ここにはないんだよ。君がいう災いは何も」

少なくとも、ボクは大切なことを三つも見落としていた。

ひとつは、このオラリオに存在しないとしても……すでに存在しているものまで消えてなくなるわけではないという。

「だから、もうそんなに生き急がなくていいんだ」

もうひとつは、この子が知っているものは何も無いということ。

「……ならば。お前が言うことが正しいなら——」

それは、この子にとって大切だったであろう何かも存在していないということなのだと。

そして——

「ここには仲間も怨敵もない。『最初の火』もない。それなら、私はどうすればいい？

この『呪い』が体を完全に蝕む時をただ待っている？」

……その問いかけへの答えを、ボクは持ち合わせていないのだと。

第二章 鐘の音が聞こえるか？

第一節 火の陰にあるモノ

1

果たして、始まりはいつであつたのか。

今は遠い昔、無銘の妖刀を携え、故郷を離れた時か。

さらに遡り、兵法の途へと踏み込んだ日か。

もはや分からぬ。そして、分からずとも良い事であつた。

剣の道を志したこと。

己が剣をもつて遙か異国の地にも名を響かせんと海を渡つたこと。

我が武を認め、ともに天下を統べんと誓つた王の元を去つたことも。

すべては己が決めたこと。

ならば、私が私である限り、いずれここに行きつくであろう。

「いかな……」

未だ無念無想の境地には至らず。

その自覚と共に、静かに目を開いた。

「何やら近頃、血が逸つておる」

傍らの愛刀を携え。座していた洞窟を抜け出す。

外は、とうに失われたはずの光で満たされている。

(心地よいものだ)

と、胸中で賞賛した。

もつとも、今私が浴びているのは真なる陽光ではないのだが。

ここは『だんじょん』なる大穴の奥。地上より数えて、五〇ほど潜つた場所だった。

異形の獣どもにとつての憩いの地であるらしく、他の場所よりはいくらか大人しい。

庵を結び、身を休めるのはちやうど良い場所であった。

稽古の相手とするには獣どもが少々柔いことが玉に瑕といったところであろうか。

「貴公ら、我が言葉が通じんか？」

素振りでも——と、思った矢先、山羊の如き顔をした異形の獣どもが行く手に現れた。

かつて神々すらも手を焼いたというデーモン的一种——ではない。

何でも『ふおもーる』なる種族なのだそうだ。

『ア!!』

返答は、獣そのものの鳴き声であった。

で、あれば。もはや加減はいらぬ。

間合いを詰め、鏑鳴りを響かせる。

刃はその首をするりと通り抜け、最初の一匹を絶命させた。

返す太刀で、隣の山羊を逆八の字に。

そこでようやく、獣が攻撃に移った。

この獣ども、決して愚かではない。だが、人を見るやまるで亡者のように襲い来る。

ありがたい話だ。いかに狂暴な獣と言えど、後ろから斬るのは少々気が乗らない。

さて。

何故私は、このような見知らぬ獣の巣穴にいるのであろうか。

それもまた、分からぬことであつた。

王のもとを去つてから、どれほど時が流れたか。

それより先も極める道を他に知らず……より深きを求め己を鍛え続けた果て。

老境に至り、いよいよ死出の旅への誘いが聞こえるようになった頃のことだつたはずだ。

——我が武、ついに神域に至れり

ならば、我が生涯に悔いはなし。

と、微睡んでいた……ように思う。あるいは、その微睡こそが泡沫の夢であつたか。

今となつては分からぬ。

ただ、氣づけば……懐かしき城にいた。

かつて我が王や配下らと語らいあい、今は滅びた黒鉄の城。

その最奥。玉座の手前にある大広間に一人座していた。

やはり、夢であつたのだろう。

我が体にはソウルが満ち溢れ、常より一回りは肥大化していた。

不快ではあつた。

これほど急激な体の変化は、今まで積み上げてきた武を殺す。

——夢であるなら、醒めるまで待つとしよう

その若者が入ってきたのは、そんなことを考えていた時だつた。

見慣れぬ格好であつた。かつての配下……子弟ではない。

であれば——

——夢の中とはいえ、氏素性の知れぬ者を王の間に通すわけにもいくまい

そして、刀を抜き……すぐに斬り捨てた。

なかなか鍛えてはいたが、それだけだ。さしたる兵ではない。

その時は、そう思つた。そして、間違いではなかつたはずだ。

その若者が呪われ人……いわゆる不死人でなければ。

驚くほどに、その若者はしぶとかった。

幾たび斬り伏せ、斬り捨てても、ことごとく戻ってくる。

その男は、真に正しく不死人であつたのだ。

無数の死を超え、それでも朽ちることを知らぬ怪物。

そして――

――ぬう?!

その男は、少しずつ我が武に追いついてきた。

最初は大剣を用いていたはずが、いつしか私と同じく刀術を用いた。

元より、これこそがこの男の本領であつたのだろう。今までよりも動きに含蓄がある。

そして、その刀もまた我が妖刀に劣らぬ妖刀であつた。

否。それは、この男に対する侮蔑となろう。

確かに武器に救われていたと言えよう。

しかし、己の武器を知り、真に使いこなせることも含めての武だ。

刃を交えるごとに、その男は手練れの剣士となつていった。

そして、

――なんと!

ついには我が秘劍すら盗み、そのうえで破つて見せた。

——見事！

末期の夢としては、まったく面白い夢であった。

神域には至つたとは傲慢もいいところである。まだ見果てぬ深奥が広がっている。だからこそこの道は面白い。

ああ、だが——

——私も十全の体であれば

ふと、そのような世迷い事が思い浮かんだ。思い浮かべてしまった。

おそらくは、それが未練となつたのであろう。

気づけばこの大穴の中にいた。

いかなる理由か、肉体は望んだとおりに最盛期のものであつたが……。

(仕方あるまい)

我が胸にも、『闇の刻印』^{ダークリング}が浮かんでいた。

未練が妄念となり、文字通りの亡者と——いや、劍鬼となり果てたわけだ。

夢現の中での死合。名も知れぬ……実在するかも分からぬ劍士との再戦を焦がれるばかりに。

それ故に——いや、そうでなくともか。

今に至るまで他に求める道もなく、こうして刀を振り続けているのだった。

「こんなところか」

程なくして、全ての獣が息絶えた。

軽く血払いして、刀を鞘に戻し、小柄を用いて胸の魔石なるものを取り出す。

ほどなく、獣どもの骸が灰となった。

何でも、この紫紺の水晶こそがこの獣どもの命の源であるらしい。

結晶化したソウルと似て異なるそれを、己のソウルの内にひとまずしまい込む。

何であれ、死なばみな同じだ。

兵どもが入り乱れ、数多の骸が積み重なる合戦場でもなし、弔うのはさほどの手間では

ない。

あとで首塚——いや、『石塚』に供え、供養し……その後でいくらかを糧とさせてもらうとしよう。

あまり居心地はよくないが……それでも、時折は地上に足を運ぶこともある。

先立つものがあつて困ることはない。

「ふむ……」

やはり、どうにも血が逸る。

相手となるのが、獣ばかりだからだろうか。

決して弱くはないが……やはり獣は獣。そこにあるのは武ではない。もつとも、生まれ持った天性の勘というのは、それはそれで面白いが……。

「そろそろ、あの異形が育つ頃か……」

ここから九つほど下った先にいる、奇妙なソウルを持つ異形。

他の獣どもを喰らっているあれに、そろそろ脂が乗る頃であろう。

この無聊を慰めてくれる程度には。

2

『——ア!!』

「ぬるいわあ!!」

互いの咆哮は共鳴し、戦斧同士が激突しては火花を散らす。

砂塵を巻き上げ響く撃音。伝わる衝撃はどこまでも重く、骨を砕かんばかりだ。

(これが——)

ミノタウロスをさらに一回りは巨大化させたその怪物——デーモンは確かに手練れだった。

この階層に巣くうドラゴンどもの魂を食い漁っていただけのことはある。

僅かでも隙を見せればそのまま押し潰される。それほどの剛力だ。

(これこそが戦いよ!!)

痛みすら伴って軋む体。その隅々を熱い血潮が満たしていく。

これが戦いだ。これこそが戦いだった。

まったく、まだ見ぬ五九階層へ挑むその前哨戦にふさわしい。

「よそ見してんじゃねえ!!」

いつも以上に切れのいい動きで、ベートがその牛頭を蹴り飛ばす。

それはさながら銀の暴風だった。

「はあああつ!!」

「こんのおおつ!!」

続けざまに、ティオネとティオナの連撃が決まる。

並みのモンスターなら……いや、本来ならこの階層を闊歩するドラゴンどもですら、

息絶えていたことだろう。

だが――

『—————アア!!』

そのデーモンは、まだ健在だった。

「本ツ当にしぶとい奴ね!!」

「何でまだ倒れないのー!!」

攻撃が通じていないわけではない。傷口からは血が滴っている。

そして、実際に倒せるはずだ。実際、アマゾネス姉妹はフィリア祭の日に仕留めている。

しかし――

「……気に入らねえな。どうも奇妙な感覚がしやがる」

いったん距離を取りながら、ベートが呟く。

「ほう、お主も感じるか」

「当たり前だ」

そう。やはり、何かが足りない。

このデーモンなる怪物と対峙するうえで、何かが不足している。

「確かにこのデーモンって奴らはただの雑魚ってわけじゃねえ」

今頃、地上は土砂降りの大雨かも知れない。珍しくベートがそんなことを言った。

そのうえで、吐き捨てる。

「だが、強すぎはしねえはずだ」

その通りだった。少なくとも、バロール辺りと比べれば見劣りする。その手ごたえがあつた。

難敵ではあるが、それだけ。従来ならすでに決着がついている。

「いや、強えとか弱え以前だな」

そうならない理由は、単純にこのデーモンとやらが強靱だからだけではあるまい。

「こつちの攻撃が薄皮一枚何かに届いてねえ。だが、あの牛野郎の攻撃は逆にその薄皮一枚分余計に響く。そんな感触だ」

「同感じゃな」

テイオネたちを力ずくで振り払い、デーモンがこちらに突進してくる。

それを見定め、左右に散会した。

守りに入ったら負ける。一撃、二撃なら耐えしのげるがそれだけだ。

体力もろともに削り取られる。

ならば、素直に回避に徹せばいい。幸い、そこまで素早くはない。

何より如何に強かろうが一体だ。狙いを分散させてやれば、隙はいくらでも生み出せる。

繰り返すが、これはただ難敵というだけなのだから。

「ぬうううんっ!!」

ベートに意識を向けたその刹那、無防備となった横腹に斧を叩き込む。

渾身の一撃とはお世辞にも言えないが、硬い外皮を砕き、分厚い筋肉を断ち切った。

その手ごたえはある。が、やはり『薄皮』一枚届かない。

「ぐるああああアツ!!」

続けて、銀の暴風が首筋を抉る。しかし、やはりまだデーモンは健在だった。

フィリア祭で、あの若造はこの牛頭をさほど苦戦せずに仕留めたという。

「これは、やはり『魂喰らい』の術を知っているかどうかの差かの」

互いのランクの差——と、言っているものは定かではないが——は無論ある。だが、その術を知っているかいないか。それも大きく影響しているはずだ。

それを知らぬわしらの攻撃は、薄皮一枚急所に届かない。

その分だけ、この怪物をしぶとく感じる。そんなところか。

まだどうにかなっているが……さて、アイズたちを返り討ちにしたという『人斬り』もデーモン——少なくとも、あの若造と同じだとするなら、この違いは決して軽視できない。

(ランクアップとは別の課題だの)

L.V. 6の壁を越えたとして、こればかりはどうにもなるまい。

実際、オツタルもあの若造には手を焼いているわけだ。

デーモンどもと対峙するには、『神の恩恵』だけでは足りない。

じわりと、背中の「ステイタス」が熱を帯びる。あまり心地の良い熱ではなかった。

まるで烙印でも押されているような——

「ふん」

馬鹿げた妄想と共に、左右に構えていた斧の片方を投げ捨てる。

両手で握りしめるのは、手に馴染んだ愛斧《グランドアックス》。

一八階層で渡された《アックス・ローラン》も悪くはないが、少々軽すぎる。

別に『不壊属性』が必須という相手でもあるまい。

「どれ、もうひと勝負だ」

今必要なのは、その『薄皮』すら断ち割る重い一撃だ。

「雄雄雄雄雄雄ッ!!」

咆哮に応じて、改めて背中が熱を帯びる。

地面を踏み砕きながら突進。不転の覚悟と共に、渾身の一撃を叩き込む。

一度では済まさない。二度、三度。

再び激突する互いの斧。その中で、呼吸すら忘れていた。

そして、

「ぬおおおおおおおっ!!」

最後の息吹と共に、大戦斧を叩きつける。

通った。相手は防衛し損ねた。まったく威力が衰えていない一撃が、その横腹を深々

と抉る。

もはや、『薄皮』など関係ない。確実な痛撃だ。

「ぬう?!」

次の瞬間、その傷口が裂けた。

停滞する時間の中で、長年の経験が警鐘を鳴らす。それに従って飛び退いていた。どす黒く蠢く何かが、一瞬前にいた空間を蹂躪する。

「あー! これあれだ! あの時と同じやつ!!」

「どれだよ!」

ティオナの声に、ベートが怒鳴り返したころ、ようやく全貌が見えた。

デーモンの体から暗く蠢く『何か』が噴き出し、別の生き物のように蠢いている。

「これがデーモンの『変容』というやつか?」

デーモンがティオナとベートを追い回している隙に、呼吸を整える。

ついで、傍らにいたティオネに問いかけた。

「ええ。と、言っても私達もあんまりしつかり見たわけじゃないけど……」

リヴェラの街に出現した個体は、このような変化を遂げたとリヴェリアからも聞いている。

「フィリア祭の時は聞かんかったの」

「そうね。……多分、こつちの方が上位種ってことじゃない?」

殺人事件から始まったりヴィラの街の一戦。その原因となった『宝玉』は件の『新種』にとり憑いて、変化をもたらしたというが……。

「こいつは上位種というより、単に『寄生』されとるだけじゃろう」

のたうち回るそれは、今や何か生き物のような形を取り始めていた。

いや、実際に何か別のモノなのだろう。顔と思しき場所には赤い瞳が輝いていた。

「それもそうね」

デーモンという器の中に、『何か』が入り込んでいる。

そして今、その『何か』が食い破って姿を現した。

この光景は、そう見える。

「こいつはちと面倒だの」

この現象がどのような意味を持つかは知らない。だが、敵であることに変わりはない。

ただでさえ巨体だったデーモンはさらに一回りは大きくなっている。

そして、まだデーモン本体も生きているようだ。少なくとも、『何か』とは別に動き

回っている。

隙が減り、攻撃を掻い潜る手間が増えたのは間違いない。

となると――

「レフィーヤよ。芋虫どもを焼いた魔法だ。あの時のように派手にかましてやれい」
相手の間合いの外から攻撃を叩き込むのが手っ取り早かろう。

「で、ですが、デーモンに炎は……！」

確かにそう聞いている。だが、今はなるべく発動が早い魔法がよい。
かといって、もう一つの方では馬力が足りん。

「あの周りの妙なものが多少減ってくればそれでよい。思い切りいけ」
デーモン本体だけになれば、それでいいのだから。

「は、はい！」

「テイオネ、レフィーヤを任せたぞ」

「オーケー。任せて」

詠唱するレフィーヤの前で斧槍を構えながら、テイオネが頷く。

それを見届けてから、再び突貫した。

「ひよつこども！ そろそろ仕上げといくぞ!!」

「誰に言つてやがる！」

「任せてー!!」

デーモンと『何か』は互いに隙を補うように暴れ回る。

いわば首が二つに増えたようなものだ。……が、二首の怪物などつくに乗り越えて

いる。

今さら戸惑うようなことは何も無い。

「しやらくさいわっ！」

のたうつ『何か』をまとめて薙ぎ払う。

思つたよりも柔い。これならばレフイーヤの魔法を待たずとも決着となるか。

「ああもう、何なのこれー！ 気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪いー！」

「うるせエー！ いいからさっさとぶち殺せー！」

確かに、この飛び散る血とも肉片ともつかぬ何かはいくらか気味が悪いが。

浴びていると何故だか背中が焼け付くような悪寒が走る。

矛盾しているが、そうとしか言いようがない。

テイオネではないが、薄気味悪い感触だった。

「——雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え！！」

「あんたたち、派手なのが行くわ！ 巻き込まれんじやないわよ！」

言われるまでもない。返答の代わりに、全員が飛び退く。

「【ヒュゼレイド・フアラールカ】！！」

火の雨がまさに驟雨の如くデーモンに叩きつけられる。

「ほう？」

ファイリア祭のデーモンは、レフィーヤとリヴェリアの魔法すら耐え凌いだと聞いたが……。

「あのなんか変なのつてよく燃えるみたいだねー」

「そうみたいね……。これはもう、出る幕がないかしら？」

暗く蠢く『何か』は違うようだ。むしろ、よく燃えている。

デーモンの体内にまで炎が流れ込んでいくほどに。

「本当に魔石の一つも残さんとは……」

そして、そのまま燃え尽きた。後には何も残らない。

「割に合わんの」

「そうだね」

思わずぼやくと、聞きなれた声が出た。

「団長!!」

振り向くより先に、ティオネが歓声を上げる。

まあ、そうでなくともこの階層で人の声などそう聞けるものではない。

「やあ、みんな。無事で何よりだ」

「誰に言っておる」

振り向けば、案の定フィンたちの姿があった。

「ふむ。その様子では、件の『新種』と遭遇したようだね」

フィンやアイズたちはともかく、ラウルたちの装備がいくらか溶けていた。

こういう痕跡を残すのは、あの芋虫どもくらいなものだ。

「それだけだったら良かったんだけどね」

「何じゃ、おぬしらもデーモンとやりあったのか？」

「いや、それとはまた違う。件の怪人クリーチャーらしき相手と、赤黒い人影だ」

「何じゃと？」

怪人クリーチャーはともかく、赤黒い人影とはいつたい。

「詳しい話は後だ。まずは移動しよう」

確かに、この五八階層は構造が単純だ。見晴らしは良いが、長話には向かん。

「連結路の途中で休息をとる。それに、装備の手入れも必要だからね」

「そうだね」

無論、連結路とて安全ではない。

だが、この広い荒野に陣取るよりは、いくらかマシだった。

「こちらでも少しばかり面白そうな話があるわい」

「それは楽しみだ」

ああ、まったく。本当に、どこまでもおかしなことになってきたものだった。

鬱蒼とした森林が広がっていたはずの五九階層は、見る影もなかった。

酷く焼き払われ、荒廃したその光景は、いつそ懐かしいほどだ。

「ふむ……」

時折見かける面倒な芋虫ども——何しろこやつら体液は迂闊に斬つては刀を痛める——を斬り散らしながら、小さく唸っていた。

どうやら、先客がいるらしい。戦の音が聞こえてきた。

(いつぞやの猪武者か?)

獣どもの横やりが入り、決着をつけ損ねた武芸者を思い出す。

あれからもう数年が過ぎた。あちらもそろそろ脂が乗った頃ではないだろうか。

であれば、少し面白い見世物が見れるやもしれぬ。

少しの期待を抱きながら、戦場へと近づく。

だが——

(違うな……)

あの時の武芸者ではなかった。

小人に、『どわーふ』。人の娘、『えるふ』なる耳長娘ども。

薄着を好む褐色肌の娘らは『あまぞねす』というやつか。他に、獸人らしき若造。他に、後詰の者どもが幾人か。

おそらくは、『神の眷属』……冒険者なる者どもの軍勢であろう。

確か、『ふぁみりあ』といったか。

対峙するのはおそらく件の異形。禍々しくもどこか美しくもある娘のような姿へと変貌していた。

劣勢なのは小人数の軍勢だった。

それは、誰の目にも明らかであろう。

(そう長くは持つまいな)

陣は崩れ、士気は底を打っている。

後詰の者どもも、件の芋虫に囲まれ、まさに命運は風前の灯火であった。

そのような有様だ。この者達の所属を示す旗印は確認できない。

まさかすべてが燃え尽きているとは思えないが、掲げている余力も失っているようだ。

横やりを入れるべきか。それとも、入れぬことこそが情けであろうか。

「あの怪物を、討つ」
モンスター

思案していると、槍を携えた小人が氣勢を上げた。

少々驚きだった。この時代においても小人は冷遇されていると耳に挟んだことがあるからだ。

しかし、これは違う。間違いなく、あの小人こそがこの軍勢の長だった。

(さて、戦況が読めぬ愚か者か……)

見知らぬ者たちだが……多少、興味がわいてきた。

幸い、異形も芋虫も小人どもの軍勢にばかり注視しており、こちらには気づいていない。

しばし静観するとしよう。

(これは、なかなか……)

その小人は、なかなかの扇動家だった。

その激励に応じて、少しずつだが確かに士気が回復しつつある。

だが、まだ足りぬ。息を吹き返すには、もう一押しが必要であろう。

……果たして、その扇動家は、最後の一押しを用意していた。

「それとも、ベル・クラネルの真似事は、君達には荷が重いか？」

その問いかけの真意を、私は今一つ察し切れなかったが。

しかし、彼らにとっては、最大級の激励となつたらしい。

「——雑魚に負けてられっかつツ!!」

「……上等じゃない」

「あたし達も、『冒険』しなきゃね」

主力と思しき者どもは言うに及ばず、後詰の者どもまでが士気を取り戻していく。

「斧を寄越せえ！」

「お前達、私を守れ!!」

それどころか、すでに息絶えているとばかり思っていた『どわーふ』の男と『えるふ』の娘までが立ち上がるほどだった。

「なかなか面白い」

例えここで潰れるとて、彼らに横やりは必要はあるまい。

戦の邪魔にならぬ程度に距離を取り、手頃な岩に座す。

その頃には、最後の合戦が始まっていた。

小人どもの軍勢に、もはや余力はない。この突進が止められたなら、仕切り直しはできまい。

「——うおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

その小人はただの扇動家というだけではないらしい。

先陣を切つて敵へと襲い掛かり、双槍を用いては悪鬼羅刹の如く荒れ狂う。

あるいは、勇猛と伝え聞くファローザの獅子騎士団もあのようなものだったのか。

(先ほどの魔術の効果か)

自らの戦意を高揚させる。あるいは、己を狂奔させる。

そのようなものだったらしい。

(思い切ったことをする)

将が指揮を捨てて。まさに乾坤一擲の大博打。

だが、良い手だ。

最前線で奮戦する将を見て、士気が高揚せぬことなどあるものか。

しかし、兵士同士が斬り結ぶだけが戦ではない。

「火ヨ、来タレ——」

あの異形は、魔術師——否。攻城兵器というべきであろう。

直撃を許せば、私とてただでは済まぬ。それほどの魔力を、一点の淀みもなく束ね上げていく。

「——代行者ノ名ニオイテ命ジル与エラレシ我ガ名ハ火精^{サラマンダー}靈炎ノ化身^{ケシン}炎ノ女王^{オウ}」

その一撃が放たれば、それで終いだ。

息を吹き返した『えるふ』の娘もまた詠唱を行っているが、さて間に合うかどうか。

この世界の魔術は広大な範囲を焼き払える反面、とかく詠唱に時がかかりすぎる。

まさに一長一短といったところか。

もつとも、時間が必要なのは異形とて同じこと。

そして、この世界の将兵が、その弱点を把握していないはずもない。

「あああああああああああああああああああああッッッ!!」

狂奔しているとはいえ、完全に理性がないわけでもないらしい。

もつとも単純で、豪快で——しかし、合理的な選択を、その小人は選んで見せた。

渾身の投擲。放たれた槍は異形に何をする暇も与えず、その口腔を穿つ。

詠唱が中断されるどころか、魔力が暴走した。

あれほどの魔力だ。中断するのも容易ではないということか。

攻勢は止まらず。

だが、その異形もまた正しく怪物であった。

魔力を燃やし、すぐさま傷を癒していく。

いやはや……斬ればひとまず死ぬことには死ぬ不死人とはまた違う怪物であるらしい。

(いや、そうでもないか?)

不死人も大概にしごとく、『ソウルの業』が未熟なものでは一度殺すにも苦勞すると聞く。

実際、あの黒衣の剣士は脳天を叩き斬っても、それだけで息絶えることはなかった。

「突キ進メ雷鳴ノ槍代行者タル我が名ハ雷精靈トニトルスイカズチ雷ノ化身雷ノ女王オウウ」
 その異形も、すぐさま反撃に打って出た。

範囲よりも早さを優先させたらしく、比較的短い詠唱を行う。
 と、いつても。

「サンダー・レイ」

基本となるのは——砲身となるのは、その巨体だ。人にとっては充分に広域といえる。

「【ディオ・グレイル】！」

濁流の如き雷を迎え撃つのは、驚いたことに後詰の一人と思っていた『えるふ』の娘だった。

その娘は魔力によって作られた盾をかざし、その濁流の前に立ちほだかる。
 蛮勇であろうか。

否。その娘は二人の『あまぞねす』に支えられながらも見事その雷を相殺して見せた。
 流れは未だ小人数の軍勢にあり。

これは、思った以上に面白い。

「【焼きつくせ、スルトの剣——我が名はアールヴ】!!」

そして、もう一人の『えるふ』が詠唱を紡ぎ終えた。

「レア・ラーヴァテイン」!!

高らかなる宣言。

続けざまに立ち昇る巨大な火柱。その数は一〇。

呪術の奥義【炎の嵐】とてああはいくまい。

あるいは、その原型となった——伝説にのみ残る、開祖の秘儀にも並ぶだろうか。

そんな夢想が胸をよぎるほどの劫火が異形を飲み込み、その巨体をたやすく蹂躪する。

果たしてこの決定的に流れを変える——逆転の烽火となりえるか。

『——アアアアアアッ!!』

その異形の娘だけであれば、そうなっていたであろう。

だが、その異形は伏兵を用意していた。

否。この異形こそが先兵か。

ともあれ、地面を貫き夥しい数の緑槍が打ち出された。

それはたちまちに円陣となり、異形の娘を守る砦となる。

小人と獣人が突撃するが、破れない。見た目以上に堅牢であるらしい。

突撃が食い止められる。勢いが失われればあの小子どももの負けだ。

余力は残っていない。次に術が放たれば死ぬ。

勝ちを拾うには、もう一手必要であろう。

「何じゃあ、口だけかフィンツ!」

その一手を受け持ったのは『どわーふ』の古兵だった。

先の二人が手を焼いた緑槍の城壁を、いともたやすくかち割っていく。

驚くほどの剛力だ。

遠目にも重厚な拵えと分かる大戦斧の方が耐え切れず砕け、拳のみでさらに城壁を粉砕していくほどである。

いや、剛力ばかりではない。その生命力も驚くばかりだ。

城壁を砕かれ黙っているはずもなし。

下層にいる伏兵——あるいは将か——は、さらなる援護を行つた。

再び打ち上げられる緑槍。それは正しく槍袂となつて、その古兵を串刺しにする。

「温いわあああああああああああああああああああああああああッ!!」

しかし、それすら無視して、その古兵は城壁をこじ開けて見せた。

(案外と、あやつも不死人なのやもしれん)

もつとも、ここは誰も『火継ぎの儀』を知らず、しかし『火の陰り』はなく、不死人もいないという奇怪な世界なのだが。

しかし、私以外にもいくらかはいるようでもある。

あの古兵がその一人だとしても驚くことはあるまい。いずれにしても、城門は開かれた。三度槍袞が迫るが――

「焼けちまえええええええええええッ!!」

具足に炎を纏わせた獣人が飛び込み、それらを悉く叩き落す。

無論、小人の将も――おそらくはフィンという名なのだろう――また、手にした槍を振るって最後の敵兵を駆逐する。

敵の本陣へと踏み込んだ。ならば、後は敵の首級を落とすのみ。

その榮譽を給うのは、金髪の人の娘。

いや――

(これは違うな)

その娘が纏う風。そのいくらかは私のもとにも届いている。

それは、そう。奇妙な不快さを伴うものであった。

遠い昔、呪いを恐れるがあまりどこぞへと逃げだし、知らぬ間にこのこと戻ってきた凡夫かみどもの気配によく似ている。

だが、違う。

むしろ、これはあの異形の娘と同じものだ。

弱肉強食。獣の理。

殺し、奪い、己が糧とする。すなわち原始の欲求。

恐ろしく巧妙に隠されている……いや、あるいは本人すら自覚していないのかもしれないのかもしれぬが。

いずれにせよ、この『風』にもそれが宿っている。

いや——

(この気配、以前どこかで……)

違う。もつとよく似た何かをどこかで知っているはずだ。

獣の気配だけで、不快になるはずもない。別の理由がある。

目を伏せ、記憶をたどる。

(そう、これは……)

王のもとを去り、各地を彷徨う最中、偶さか出会った「闇潜り」なる者ども。

怪しき邪法を扱う彼らが信奉していた『深淵』なるもの。

あるいは、あの黒衣の剣士が扱った陰すら生まぬ暗い炎。

それらに、どこか似ていた。

そう。それほどに、暗い風だった。

「何故そこまで堕ちたかは知らぬが……憐れなものよ」

もつとも、私も今やあの娘と同じく剣鬼に堕ちた身だ。

(だからこそ分かるのやもしれぬな)

この『風』の本質は滅び。いかなる恵みも実りも運ばぬものだ。

そして、

「リル・ラフアーガ」

ついに凶風が解き放たれた。

『ライト・バースト』!!」

同時、異形の娘もまた閃光を解き放つ。

地に堕ちる凶風。天を目指す閃光。両者は真正面から激突する。

拮抗は一瞬。

凶風は、その白き閃光を蹂躪し、異形の娘の首を吹き飛ばす。

それでも勢いはやまず、地面へと激突した。

どうやら、あの異形の娘も魔石を有していたと見える。

その一撃と共に体は瞬く間に灰となり、凶風に霧散させられた。

「ふむ……」

あの娘が何者かは定かではないが……しかし、なかなか面白い戦ではあった。

「何とも危なっかしい戦ではあったが」

しかし、負け戦を覆すは戦場の花。

であれば、彼らの戦ぶりはこれは文句なく天晴なものである。

「見事だ」

勝鬨を上げる彼らに、心からの敬意をこめて眩く。

まったく、素性が知れぬのが悔やまれるほどだ。

(見事な戦ぶりであった)

胸中で、もう一度賞賛の声を上げる。

しかし――

(何と叫びたか……)

逆転の転機。反撃の烽火となった小人の激励。

『ベル・クラネルの真似事は、君達には荷が重いか?』

(ベル。ベル・クラネルか……)

あれほどの劣勢の中。あれほどの将兵たちを、その名だけで奮い立たせた何者か。

いったい、それはどのような者なのか。

(実に興味深い)

その者を探すべく、久方ぶりに地上に足を運んでみるとしうか。

思わず、そんなことを思うほどに。

血と灰の匂いに満ちた大聖堂の奥。

そこにある執務室にて、一枚の書簡に目を通す。

五八階層に送った草からの報告書だった。

「ふむ……」

私が送り込んだ牛頭のデーモンどころか、エニユオどもの先兵までが敗れたらしい。

なるほど、「ロキ・ファミリア」とは、思ったよりも手ごわい相手であるようだった。

「どうやら、少々慢心が過ぎたか」

自らの矜持を捨て、神の奴隷わもぢやとなり果てた愚者どもと思っていたが……奴隷には奴隷

なりの矜持とやらがあるらしい。

まったく、煩わしいことだ。

これでは、顔を立てるところか、泥を塗ったと誹られることになるやもしれん。

(いや、それほど愚かでもあるまい)

レヴィスなる女と、彼女に仕える同胞も動かなかつた。

慢心したのは彼奴等も同じ。あるいは、何か別の思惑があるのか。

それとも、ただ単にあちらも一枚岩ではないだけか。

いずれにせよ、自分たちを柵に上げ、文句を言うほど愚かでは――

「いや、やりかねんか」

あちらには神々が与している。自らの栄華のために我らを謀り、焼き殺すために偽りの救いを説き、死地へと誘った神々の生き残りが。

ならば、その程度のこととしてはしてこよう。奴らに恥などあるはずもないのだから。

「まあ、どうでもよい」

今一度、そして今度こそ奴らを焼き尽くし、喰い殺す機会を得たのだ。

今はただ深く、静かに、そのための準備を整える時だ。

それに、程よく肥えてからでなくては喰いでもない。豚と同じだ。

(ようやく安定してきたか……)

伝説に残るデーモンの母体。炎の魔女イザリスのなれの果て。

その名を『混沌の苗床』。

この大穴の性質と、かつてイルシールで見出した『罪の炎』。そして、我らが女王の力。それらを組み合わせさせて生み出したその『苗木』は、ようやく大穴に根を張ってくれた。(ああいや、エニユオどもも貴重な協力者だったな)

牛頭や山羊頭しか生み出せぬことに悩んでいた時、彼らからもたらされた『宝玉』は素晴らしく貴重な発想をもたらしてくれた。

食糧庫の支柱——英石に寄生させれば、生まれるモンスターを変化させ、モンスター

どもに寄生させればより強大なものに変容させる。

(まったく、蒙を啓かれるとはあの事だ)

私もまだまだ頭が固い。自戒の念も込め。この『苗木』にその性質を組み込ませた。そして、いよいよその『果実』も実り始めていた。

もつとも、ただ真似るだけでは名折れだ。多少は独自の発想を加えてある。

(我ながら、なかなか面白い趣向だと思うのだがね)

その『果実』を見ながら呟く。

そろそろ、こちらにも寄生以外の方法を試す時期であろう。

もつとも、仮に失敗していようと、戦力の供給という意味では問題ないのだが……。

(もし、真に私の理論通りの作用を持つならば……)

悪い癖が出ている。

私も元はといえば一介の魔術師に過ぎない。

そして、魔術師とは叡智を求めるものだ。

理論を構築しながら、その正しさを立証できないというのは何とももどかしい。

(これでは、我らが女王を笑えんな)

ゆるゆると首を横に振り、自嘲した。

しかし、気になる。こればかりはどうにもなるまい。

無事に立証された暁には、さらに利用価値が高まるのだ。

残念ながら最優先にはできないが、時を見つけては研究を進めるとしよう。

「しかし……」

気になるといえば、もう一つ。

何故、人の膿を宿した個体が生まれるのか？

（『女王』の力の影響か？）

可能性としてはそれが最も有力だ。

というより、現状では他にもう一つくらいしか思い浮かばない。

（まあ、好都合だが）

戦力増強という視点で見ればまったく問題はない。

もつとも、不満がないわけではない。欲を言うのであれば――

（もつと安定して宿ってくれるとなお良いのだが……）

何しろ、我らが宿敵である「王狩り」が再び目覚めたのだ。

戦力などいくらあっても余ることはない。

例え一〇〇度殺しても、それでもしぶとく這い上がってくるのがあの怪物だ。

他にも少々厄介な相手がいくらか存在している。

手を組まれるようなことがあれば厄介であり……そして、その可能性は高い。

少なくとも、我が軍門に下る可能性と比較すれば、圧倒的だ。

となれば、この大穴をデーモンで溢れさせるだけの気概が必要となろう。

「ふむ。まあ、暇ができたならもう少し探ってみるとしよう」

もつとも、生憎とやるべきことは多く、使える駒は少ない。

せめてもう少し知性を持った配下が増えない限り、暇などとてもできそうにないが。

5

大聖堂——と、この拠点をそう呼ぶには少々見栄を張りすぎだと我ながら思う。

とはいえ、ここがこの『時代』……この『世界』において私達【黒教会】の中心地だ
 というのは事実だった。

敬虔な信徒や迷い悩める民がいつ訪ねてきてもいいよう、それなりに体裁は整えてあ
 る。

しっかりとした文明が残っているこちらでは、その『それなり』の基準も高い。

内装だけを見るなら、かつての大聖堂とそこまで見劣りはしないはずだ。

……あるいは、人によっては上回っていると思うかもしれないが。

「ユリア様……」

かつて失われていた陽光が世界を照らし始める頃、メレンに派遣していた【白い影】の

一人が戻ってきた。

「どうだった？」

何者かが大量の闇霊を家の街に召喚したという報告は昨夜のうちに届いていた。布教のために赴いていた者たちに対応させたが……しかし、如何せん急なことだ。無辜の民を逃がすことで手一杯。とても原因追及まで手が及ばなかったという。

不本意だが……仕方のないことでもあった。

かつて【白い影】と名乗っていた者たちと比べればどうしても練度が足りない。

いかに『ソウルの業』を会得し、あるいは『暗い穴』を穿ち真なる人となったとして、肝心のソウルが足りない。『暗黒期』が終わってからは神を殺すことも難しくなった。

少数で目立たぬようにダンジョンに送り込んでいるが、神の犬ほうけんしやどもは鼻が利く。

それにあれで意外とギルドの職員も優秀であり、何度か怪しまれていた。

浄化活動を本格化させるには、今少し時間が必要と言わざるを得ない。

だからこそ、この騒ぎは軽視できなかつた。

（【ロキ・ファミア】が不在だったのは幸運だな）

リヴィラの街に滞在する信徒からはまだ帰還の報はない。

あの道化と雑兵どもは残っているだろうが……何とかいう小人の長はいない。

噂を耳にしたとして、さほど大規模な動きはとれまい。

問題は――

(ヘルメスと、ディオニユスといつたか)

特にヘルメスなる神は、歓楽街での一戦に関与しているという報告もある。

警戒を要するが……しかし、厄介なことにこの神の派閥は驚くほど隙が少ない。

一方的に利用されたのか、それとも何かを知っていてあえて利用されたのか。

それすらまだはつきりしない。

(仮に後者だった場合、思わぬ窮地に追いやられかねない)

もちろん、あのヘルメスとやらが何を知っているかにもよるが。

「表向きは、『ガネーシャ・ファミリア』の子どもが鎮圧したことになりました」

「そうだろうな」

およそ一〇〇名ほどが夜の闇に紛れて出立したと報告を受けている。

そも、メレンにはいわゆる『冒険者』は存在しない。

闇霊の一团を相手に、メレンの民だけで対応できるとは初めから考えていない。

解決したというなら、外部からの協力者がいたと見るのがむしろ自然だった。

「闇霊を召喚した者が誰かは分かったか？」

一、二体ならともかく、大量になると単なる闇霊の侵入ではない。

まず間違いない誓約霊だ。

「詳しくはまだ。ただ、【死の瞳】なるものが用いられたと象神の眷属どもは話しておりました」

「それは……」

思わず驚嘆の息を漏らしていた。

「誰だか知らないが、随分と古臭いものを持ち出してきたな」

その名前は、カアス様から聞いたことがある。

『王のソウル』を見出した最初の三人。「最初の死者」こと墓王ニトを主とする誓約である【墓王の眷属】に与えられるアイテムだったはずだ。

(確かに、墓王の名に恥じぬ誓約だったと聞いているが……)

その効果として、闇霊を無尽蔵に呼び寄せる効果があったはずだ。

状況的に、真実だったとみるべきか。

「ご存じなのですか?」

「名前だけはな」

残念ながら、私も詳しいことは知らない。

何しろ、誓約主である墓王ニトは我らが王が最初の巡礼を果たした時に殺されている。

「私が生まれた頃にはとうに廃れ、忘れられた代物だ」

「なんと……」

「おや、何に驚いたのかな？」

「い、いえ別に……」

慌てて言葉を濁すその『影』に苦笑して見せる。

もつとも、この者どもより遥かに長く生きているのは事実だ。

そして――

（この地には私の想像よりはるかに幅広い時代から同胞が流れ着いているようだな）

少なくとも三人は、私より古い時代に生まれたものがある。

我が王。アン・デイル。そして、その「墓王の眷属」だ。

（やれやれ、此度の巡礼も過酷なものとなるな）

もつとも、是非もないことだ。

いかなる時代であれ、『火の時代』に生きた者なら、この『世界』を許せるものか。

ならば、例え志を共にすることはなくとも――

（その者たちもまた、無為にはならない）

彼らの死ソウルもまた、悲願成就の糧となる。

あるいは、我らが斃れ糧となるのか。

無論、志半ばで斃れるつもりなど欠片もありはしない。

私の全ては、我らが王のためにあるのだから。

「そして、我らが王も今はメレンにおられる様子」

小さく咳払いをしてから、『影』が続ける。

「ほう？」

もつとも、驚くべきことではない。

オラリオにほど近く、しかしオラリオではない場所だ。

現状、ひとまず身をひそめるには都合がいい。

問題は――

「この騒ぎは我らが王を狙ったものだと？」

その【墓王の眷属】の狙いだ。

「そちらについても、まだ確かなことは」

恥じ入るように『影』が項垂れる。

そして、続けた。

「この一件と関係があるかは定かではありませんが、かの地にいる神とメレンの当主、そしてギルドの支部長は結託して密輸に手を染めていたようです」

「ふむ……」

驚きだが、意外性のない話だった。

元々、オラリオ——ダンジョンという無尽の宝物庫に近いメレンは密輸業者の集まる所だ。

ギルドに締めあげられている連中が手を出したとしても不思議はない。驚いたのは、そこにギルドまで絡んでいたことだが——

(長からして凡夫だったな)

権威を振りかざすばかりの老エルフを思い出し嘆息した。

醜く肥えた——オラリオの腐敗の象徴のような男の部下だ。

私腹を肥やそうとして何の不思議があるうか。

「加えて、フィリア祭で目撃された『新種』が襲撃したことも確かのようなです」

「あの変質した魔石を持つモンスターか」

「はい。魔石もいくつか回収しております」

その『影』は以前、リヴイラの街にいる『影』が送ってよこしたものと同じ魔石を差し出す。

「これは闇派閥残党イヴァイルスが関与しているはずだな」

誰に言うともなく呟くいた。

シャランの情報をもとに、今も調査は進めている。

もつとも、本当に『拠点』に引きこもっているらしく、新しい情報はほとんど集まら

ない。

集まった情報もどこまで正確なのだか。

(やはり、まだ練度が足りないか……)

内心で嘆息する。

不足しているのは、単純な戦闘能力ばかりではない。

だが、それも仕方がない。

今の信徒の多くは神やその下僕の暴虐さえなければ——そして、あの『穴』から『呪い』が噴き出さない限りは——何事もなく平穏な生を送れたやもしれぬ者達だ。

(いや、そうとも言い難いか……)

簡単に神どもを塵殺できない最大の理由は、ダンジョンがあるからだ。

あれへの対処法が完成しない限り、あまり積極的には動けない。

無限にモンスターを生み続ける大穴に「黒教会」のみで対応できるかと言われるば不可能だ。

当面は、少しずつ間引いていくのが限界であり……その構造がある限り、冒険者の存在も必要悪として黙認せざるを得ない。

奴らがいなくなれば、今度は多くの者がモンスターの暴虐に悩まされることになるのだから。

(さて、アン・デイルはどうするつもりかな)

あちらとて同じジレンマを抱えているはずだが。

「もしや、アン・デイルなる魔術師の仕業でしょうか？」

その呻きが聞こえたかのように、『影』が言った。

ふむ、と小さく唸る。

伝え聞いた限り、「狂人」アン・デイルは異形の怪物を生み出す邪法に通じているはずだ。

その術を用い、ダンジョンのモンスターを変容させ、あえて闇派閥イウィルスと通じては、王の覚醒を促すため、試練を課している。

その想像は、それなりに現実味があるように思えた。

(しかし、そうなると……)

エニユオなる存在は、アン・デイルないしその配下という可能性が高くなる。

この一派がオラリオの破壊を企んでいるというのはまず間違いあるまい。

おそらく、アン・デイルもまた同じようなことを考えているのは想像に難くない。

また、そのために神の眷属どもを利用するというのも理解できる。

(この場合、神亡き後にダンジョンを管理する術も完成していることになる)

だが、この理屈ではどうしても説明がつかないことがあった。

(闇派閥どもを間に噛ませたところで、それが何になる?)
イヴイルス

最初に『火継ぎの儀』に対する疑念を提示したのはそのアン・デイルだという。

そして、彼が歴史に初めて名を遺したのは貴壁の大国ドラングレイグの建国。

その大国は滅んで後、巡礼地となり……そこで『玉座』に至ったのは我らが王である。

火継ぎを終わらせた我らが王と、それに疑念を抱いたアン・デイル。

この両者が同じ時に生きていたというのは単なる偶然ではあるまい。

我らが王はアン・デイルの事をよく知っているはずだ。

ならば――

(そのような小細工をしたところで、すぐに看破されるだけだ)

アン・デイルが、それを理解できぬような愚か者であるはずがない。

それならば、この小細工にはいったいどんな意味があるというのか。

いったい誰に対する偽装だというのか。

それならむしろ――

(あの『新種』を生み出しているのは、アン・デイルではない)

そう考えた方がはるかに自然だった。

「今しばらく、メレンの動向を探れ」

黒幕の動向も気になるが……それとは別に把握しておきたいことがあった。

「それと、街の有力者にも信徒はいたはずだな？」

「いくらかは」

「ならば、すぐに新たな指示を伝えろ」

高い木ほど激しく倒れるともいう。

オラリオほどの『大木』を倒そうと思うなら、他にも色々と下準備が必要だった。

6

潮騒を煌めかせながら、朝日が昇る。

常と変わらぬ光が照らすのは、変わり果てたメレンの街並みだった。

駆け付けた「ガネーシャ・ファミリア」九〇名のうち、一〇名が命を落とし、一三名が瀕死の重傷。そのうち三名が再起不能の恐れありとの事だった。また、治療のため一時戦線離脱を余儀なくされた者なら二〇名に上る。

今メレンで活動している団員は半数ほど。無論、その団員達も決して無傷ではない。一方、住民の死傷者の数は今だ不明。

負傷者の数すらまだ正確には把握できていなかった。

今も当主とあの神、そして真っ先に戻ってきたあの若頭とギルド支部の有志達が確認のために駆け回っている。もちろん、残っている「ガネーシャ・ファミリア」の団員も

だ。

しかし、それでも確認作業は難航しているそうだ。

収容できた遺体の多くが酷く損傷している。そもそも、ヴィオラス 食人花に喰われてしまえば遺体すらろくに回収できない。

現時点で行方不明となっている住人の何割かは行方不明のまま弔われる事になるだろう。

もつとも、舞い込んでくるのは悲報ばかりではない。

モンスターの脅威をほぼ感じずに生きていける場所などオラリオくらいなものだ。

多くの集落は——例え充分ではないにしても——モンスターの襲撃に対する備えをしている。

もう一つの出口があるこのメレンが、数年の安寧の間もその備えを怠るはずもなかった。

自宅ないし、各種店舗や施設の一部に設えられた小規模な隠し部屋に身をひそめ、難を逃れていた住民は案外多い。

あるいは、闇霊どもがギルドや避難所にばかり集まった結果とも言えるだろう。

問題は、むしろ避難所まで逃げ切った者達だ。

……いや、彼らが無事に辿り着けた理由というべきか。

「どうやら、俺達以外にも物好きはいたらしいな」
 「そうらしいね」

呟くと、傍らでアイシャもまた肩をすくめた。

無事に避難所まで逃げ延びた者達の何人かは、誰かの手助けを受けたという。

もちろん、その中には俺達も含まれているが——

「キャットビープル猫 人の女に、おかしな格好をした一団」

前者はともかく、後者には心当たりがあった。

と、いうより。ようやく尻尾を掴むことができた。

(これは、どう見ても『死の娼婦』だな)

シヤクテイから貰った『似顔絵』を改めて見やり、呟く。

装束全体を見れば、オラリオ風に仕立て直されているが……この仮面は間違いない。

ロンドールの刺客たちが纏う金仮面。優しげな女の微笑を模ったそれは、《微笑の仮面》と呼ばれるものだった。

(やはり、いるのか……)

この前ダンジョンで仕留めたアンデッド——そいつに穿たれていた『暗い穴』といい、この仮面と言い……ロンドールに連なる者があるのはもはや疑いない。

となれば、まさかオラリオを前にして黙っているはずもなかった。

（いや、あいつらただの生者とも対立しているんだったか？）

もつとも、別に不自然な話ではない。

生者たちに忌み嫌われる不死人達の国だ。対立しないはずがない。

問題は、今この時代。最初の火はなく、不死人もいないこの世界において彼女達が何を思つて行動しているかだ。

（不死人こそが真なる人。その教義を今も忠実に守っているなら……）

だとするなら、手当たり次第に『暗い穴』をばら撒く可能性は充分に考えられる。

その場合は敵対せざるを得ないだろう。アンリ達を利用した事を差し引いてもだ。亡者まで氾濫したなら、何のために火を消したのか本当に分からなくなる。

「それと、女エルフにバケツ頭の戦士だっけ？」

「……ああ、そうだな」

内心の動揺は、果たして無事に隠し通せただろうか。

アイシヤの言つた戦士。その特徴はよく知っていた。

（これは、太陽の聖ホーリーシンボル印だ）

その戦士に助けられたという少年はなかなか絵心があつたらしい。

特別な力が宿っているわけでもないそれは、しかし遥かロスリックにまで残っていた。

今さら見間違えるはずもない。

再会を望んでいた。それは本当だ。

だが、その可能性を突き付けられた途端、躊躇いを覚えている。

ああ、まったく——

(本当に今さらだな)

そう。全ての巡礼者への背信だとするなら、当然そこにはあいつも含まれている。

そんな事は、今さら改めて思い至るまでもないことだった。

——私達を真実から遠ざけるため、奴らは嘘を吐いたのだ

——奴らの虚言に踊らされ、我らは悲劇を繰り返してきた

あの時、ロードランで『火継ぎの儀』を行ってしまつたが故に連鎖した悲劇。

それに巻き込まれた——そして、この手で殺した後輩たちの言葉は、今も耳に残っている。

俺は、火を継ぐことで彼らを騙し、その彼らをもう一度裏切つて火を消したのだ。

(つくづくままならないな)

そう。火は消した。無数の悲劇を生み続けてきた『火継ぎの儀』を終わらせたはずだ。だというのに、神どもは再び何かを企み、人を誑かしては新たな巡礼地へと追いやってる。

それを知りながら、俺は今もまだ地上で燻っている。

いや、それどころか——

(今頃、グヴィンはほくそ笑んでいるだろうな)

——いずれにせよ、今更どの面下げて会えばいいのやら。

アン・デイルは……因果に敗れた者同士だ。お互いに何を恥じ入ることもない。

ユリアとは、どうせかなりの確率で殺し合いになる。

あの名も知れぬ闇霊や変態ならなおさら。

だが、あいつとは……。

「とりあえず、優先して探すのは〔黒教会〕……この奇妙な集団と、その女エルフだ」

呻いていても仕方がない。ひとまずシヤクテイからの依頼をこなすでしょう。

ヴィオラス 食人花の生き残りを探しつつ、この『協力者』と接触を試みる。それと並行して生存

者の探索も任されていた。いや、それは手の空いている者は総出で行っているが。

(……ええい、相変わらず人を便利屋扱いしやがって)

とはいえ、彼女達の援軍がなければ昨日の夜は乗り越えられなかった。

それを思えば、この程度の対価は支払ってしかるべきだろう。

それに——

(そもそも俺自身も、まだどれだけの脅威が潜んでるか分からないからな)

あるいは、この巡礼の終着に向かうための『手順』というべきか。

若干言い訳臭いが、今も足元がふらついている理由の一つと言っている。

それに……また例によつて、いくつもの思惑が絡んでいるのは分かっていた。

（大雑把にでも関係図を把握しておかないと、俺も迂闊に身動きが取れないんだよな）
敵と味方で綺麗に二分できるとは思っていないが……せめてアタリをつけておきたい。

今回の巡礼は目につく敵を全て皆殺しにすればいいわけではない。

誰がどの程度信用できるか。あるいは、どういう範囲でなら当てにできるのか。

何より、どんな思惑を抱いて、この『巡礼』に加わっているのか。

そういう事前の調査を疎かにすれば、思わぬところで背中から刺されかねなかった。

「【黒教会】つてのは、確か『暗い穴』とかいう呪詛カウズをばら撒いてる連中だったね？」

「ああ。ついでに言えば、俺は少しばかり因縁がある」

「あんたが因縁のある相手なんて、別に珍しくないだろう？」

「……そうか？」

いや、そうかもしれない。

オラリオにある派閥のいくつかとは——あの糸目の小僧やらアバズレやら——とは因縁があると言っているわけだし。

「んで、何で女エルフも優先するんだい？」

「そりや素性が知れないからだよ」

「……素性が知れないのは猫キャットビープル 人もだろう？」

それは全くその通りなのだが。

(腕キャットビープルの立つ猫 人の女といえは……)

某飲食店の店員の顔が思い浮かぶ。

しかし、同僚の暴走妖精バーサーカーエルフでもあるまいし、わざわざ関わってくるだろうか。

(買い出しで来てたとか?)

いやいや、たかだか三Kmの距離だ。

あの絶対王者ミミアが泊まり込みで使いに出す訳がないし、実際あいつらには必要ない。

少なくとも給仕の四人娘たちには。まあ、最後の一人は、ちよつとよく分からないのだが。

最悪の場合、給仕五人衆最恐——もとい、最強という可能性も無きにしも非ずという

か……。

「……ところで、競りって何時からだったつけ？」

怖い想像を振り払ってから、念のため確認しておくことにした。

「はあ？ そんなこと私が知るわけないだろう」

そりやそうだ。メレンに滞在するのも今日で四日目だが……まあ、なんだ。……お互いに朝は遅く、競りなど見に行つたことがない。

「まあ、朝市っていうくらいだし、今より少し早いくらいじゃないかい？」

となると、朝日が昇る頃にオラリオを出れば余裕で間に合う。

少なくとも、彼女達なら。

(やはり違うのか?)

となると、その猫キヤットピープル人についても調べる必要が出てくるわけだが。

とはいえ……。

「まあ、正直な話、シャクティからそう言われてるんだ」

「なら、最初からそう言いな」

半眼で睨んでくるアイシヤに、小さく肩をすくめて見せる。

もつとも、彼女に言われずともエルフを優先していたが。

理由は色々である。

「それに、このエルフは目撃された区画がごく限られているからな。一番探しやすい」

その中で、もつとも無難な理由を口にした。

「それが……だつて？」

「シャクティが言うにはな」

「ま、エルフらしいといえばらしいかね」

「……あいつらつて、普通は森の中で生活してるんじゃないかなかったか？」

もつとも、アイシヤの言葉に思わず納得していたが。

俺達が今いるのは洒落た邸宅が立ち並ぶ区画だった。

当主たちによれば、これらの邸宅は昔からメレンを利用している豪商達の別荘や彼らが雇う一級船員たちの宿舎だという。

観光用の区画と比較しても見劣りしないほど上品な区画だ。至るところが破壊された今でも、どこか気品を感じる程度には。

と、それはさておき。

「この辺りは、隠れ家を用意するにはちょうどいい」

オラリオ内に居を構えるよりはずっと安く、しかも大切な商船から遠く離れずに済むということ、今もかなり栄えていると彼らからは聞いているし、実際に栄えていたのは間違いなさそうだ。

「そりやそうさ。常に大量の人間が出入りする区画だからね」

この街において身をひそめるなら、同じく水夫たちが出入りする倉庫街と並び理想的だった。

……もつとも、ここに居を構えられるほどの予算があるのなら、だが。

「それで、具体的にはどうする気なんだい？」

「本人たちと接触できるなら、それが理想的だが……」

いや、そうとも言い難いか。

凝ったままソウルではとてもユリアとは戦えない。

そして、正体不明の女エルフがユリアに劣ると断定するのはあまりに傲慢だろう。

「まずは正体に繋がりそうな手がかりだな。拠点が見つければ面白い」

正確には無人の拠点を、だが。

何しろ、まだアイシャの改コンバージョン宗が済んでいない。となると、いつものようにどのような

脅威があるかを『死んで覚える』というわけにもいかなかった。

「拠点ねえ……」

アイシャが、改めて壊れた街並みを見回す。

「まさか片っ端から扉を蹴破って踏み込むつもりかい？」

「それは後回しだな」

ソウルから新たな羊皮紙を取り出す。

「それは？」

「シャクティが寄越した怪しい物件一覧。当主やギルド支部の資料に基づいているらし

い」

夜通し闇霊どもと取っ組み合い、夜が明けてからは街の復興支援やら何やらを受け持つ片手間でよくこんな資料をまとめられたものだ。

「片っ端から踏み込むのは、この一覽を全部見回ってからだな」

「いいけど……」

何故だか、アイシヤが胡乱な目を向けてきた。

「それ、要するにガサ入れを押し付けられたってことだろう？」

「……ええと」

この街は昔から密輸業界にとっての聖地でもあるという。

神や当主までが手を染めているほどなのだから、あながち誇張とも限らない。

そんな街の怪しい物件に踏み込めば、その類のあれこれを見つけることもあるだろう。

（あく……。だが、ゼノス絡みって可能性もあるか）

帳簿だの何だのだけならまだしも、本人たちがいた場合は厄介なことになる。

それを見越しての采配だろうか。

もつとも、シャクティがゼノス達についてどこまで知っているかは定かではないのだが。

（……下手に聞いて知らなかった場合、自爆じゃすまないからな）

自分が死ぬだけでは済まないというのは、やはり厄介な話だと、改めて嘆息する。もつとも、アイシャにはゼノス達についても説明しなくてはと思つてたところだ。この一件は、ある意味好都合と言えないことも――

「……いつものことだろう？」

などと。あれこれと考えた末、言葉になつたのは最も説得力のある一言だつた。

と、そんなわけで。

つつがなくアイシャを説得してから。

「持ち主はエルフの名士のロマ・アウリエル。元々は祖父の保養地として用意したが、一度も訪ねることなく病死している」

苔生した高い壁。表面こそさびびているが堅牢な鉄柵。重厚な扉で閉鎖された正門。

それらに閉ざされて、屋敷そのものは屋根がいくらか見える程度。

「その後、他の連中と同じく交易時の別荘にする予定があるらしく、まだ手放してはいない」

これが一覽の一番上に書かれている屋敷だつた。何なら、住所の下に二重線が引かれている。

シャクティおすすめの怪しい物件というわけだ。

「もつとも、貿易に手を出すことには慎重であり、予定は未定。したがって管理は業者に

完全に委託中。その業者も数ヶ月に一度保全に訪れるだけ、と」

つまり、誰も住んでいないが、人が出入りしていてもあまり不自然ではない。

管理者は明白で、書類上の不備もなく、定期的に保全整備されているため、よほどの事がない限り、大きな問題も起こらない。

長年空き家のままというのも、持ち主が長命なエルフだとすればさほどの不思議はなかった。

実によくできている。シャクティ一押しというのも納得だ。

「よほどの事情がない限り介入しづらい物件だとシャクティは言っていたが……」

一覽表をソウルに戻しながら、呟く。

もつとも、あくまでも法に従うという前提での話だが。

「それで、今回は？」

ソウルの中から万能鍵を取り出し、鍵穴に差し込む。

どうやら、さほど凝った鍵ではなさそうだ。

何度か動かしていると、カチリと嵌まり込む手ごたえがあった。

「生存者および敵残党の探索って名前の大義がある」

そのまま捻ると、何事もなかったかのように錠が開く。

別にこの屋敷に限った話ではない。現時点では、〔ガネーシャ・ファミリア〕以下探索

活動に従事する全ての人員に対して、メレン中の建物への立ち入りが許可されている。メレン当主ボルグ・マードツクと、ギルドメレン支部長ルバート・ライアン——と、言ってもこちらはギルドが寄越した代理人によるものだが——の署名がなされた正規の命令書がそれを保証していた。

その命令書が発行された時点で、メレンにおいてシャクティ達が公的に活動するための状況は正式に整い、俺達は今こうしてそのおこぼれに与っているわけだ。

「そりゃいい。加えて賞金首候補に押し付けとけば万が一の時も安心してわけだ」
アイシャの辛口な冗談に小さく笑い返す。

その辺りは、シャクティの采配次第だろう。あるいは、見つけたモノ次第か。

……いや、それ以前の話だ。

（お尋ね者予備軍だからな）

それと接触を取っているというのは、いかに「ガネーシャ・ファミリア」と言えば都合が悪い。

俺達も変装は解いていないが……あれだけ暴れたのだ。いつまでも誤魔化せるものではない。

せめて、なるべく人のいない場所に追いやっておきたいと考えたとしても文句は言えなかった。

もつとも、俺としてもその方が助かるわけだが。

「さて、何が出るか……」

大扉を押し開けると、やっと屋敷が見えた。

かつては手入れされていたであろう庭はもう見る影もなく、野草の類が思うままに生を謳歌している。それでもまだ正門から玄関までを結ぶ石畳が辛うじて残つてるのは、時折人が行き来があるせめてもの痕跡といったところか。

その先に建つ屋敷は、この区画にふさわしく上品な造りだが……やはり廃墟というよりない。

壁は風雨で汚れ、あるいは蔦が絡みつく。窓にもガラスはなく板で塞がれている。

定期的に管理されているためか目立った破損こそない。ただゆつくりと緑に飲まれていく。

そんな建物だった。

廃墟には見慣れているつもりだが、これはどこか薄気味が悪い。

住人のいない家——死んだ建物だというのに、生を感じさせるせいだろうか。

「雰囲気は抜群だね」

アイシャが小さく口笛を吹いた。

「『ブラムス伯爵』の舞台みたいじゃないか」

「何だそりや?」

「あんたが戻ってくる少し前に流行った小説き。恐怖小説ホラーってやつだね」

恐ろしい話、悍ましい話など巡礼地ではいくらでも聞けた。

何なら、俺自身も闇霊とはまた違うゴーストや透明人間に襲われたり、砕いても砕いても蘇ってくる骸骨どもに囲まれた経験がある。

「どんな話なんだ?」

「簡単に言えば、大昔の怪人が夜な夜な処女を襲って血を啜るって話だよ」

生き血ではないが、ソウルを啜るダークレイスどもとは忘れるほど殺しあっていた。

(それをわざわざ演劇にしたり、本にして売り出すようになるとはね)

初めて知った時も思ったが……何とも時代の流れを感じる話だ。

そういう意味では、割と好きな分野だった。

しかし、それにしても——

「ユニコーン
二角獣みたいなやつだね」

いや、奴らはむしろ処女じゃないと襲われるんだったか。

いずれにせよ、男の俺には関係のない話だが。

ひとまず頷いてから、問いかける。

「お前もそういう話が好きだったのか?」

「身近なところで何人か読んでたから試しに読んだだけだよ。ったく、まどろっこしいつたらないね」

「どんな化け物だろうが、叩き斬ってやりや済むつてのに——と、彼女はそんなことを言った。

全く同意見だった。

透明人間はただ単に見えないだけだ。

装備さえ整えば、ゴーストだって斬り殺せる。

それでも殺せないなら、どこか別に本体か急所がある。落ち着いて、よく探すべきだ。

「興味があるなら霞にでも聞いてみな」

「あいつも持つてるのか」

彼女は豪快無双な英雄譚や、明朗快活な喜劇の類が好きだったはずだが。

「流行に釣られて買ったらしいよ」

なるほど。納得した。

「それなら、帰ったら借りてみるか」

「もう古本屋に売っちゃったかもしれないけどね」

何かあいつ、やたらとビビってたからね、とアイシヤ。

「恐怖劇なら当たり前じゃないか？」

「処女しか襲わない怪物なんて、私達には関係ないだろう?」

相槌に困り、曖昧に呻く俺を他所に彼女は続けた。

「あと、どつかのヘッポコ狐も。つたく、処女好きの怪人が娼館に来るわけないつてのに」

来るとすりや、客としてだろう。

そんなことを眩きながら、アイシヤが庭に踏み込んでいく。

客としてきたなら普通に相手をするつもりなのだろうか——と、そんな疑問は適当に追い払ってから後を追う。

「あの子はそういう話が好きなのか?」

物静かで儂げな印象だったあの狐人の少女を思い浮かべる。

言葉を交わした事はないが、血みどろの恐怖劇を好むようには見えなかったが。

「いいや、ただ単に本拠地ホムにあつたのを御伽噺と勘違いして読んだだけだよ」

それはなんというか……可愛そうに。

…

「こりや、ちよつと拍子抜けだね」

それから『ブラムス伯爵』の屋敷を一通り巡ったところでアイシヤが言った。

「どんな化け物が巣くってるかと思っただけど、何もありません」

その通りだった。

古の怪人はおろか、かつて見慣れた大ネズミや、そこらにいるモンスターもいない。それどころか、近所の悪ガキが入り込んだ痕跡すら残っていないかった。

備え付けの家具以外は何もない、ただただ空虚な空間だけがどこまでも広がっている。

いや、本当に——？

何かが神経を刺激する。

ごく小さな違和感だが……これを無視して、いったい何度痛い目にあつた事か。

「——」

しばらくの間、目を伏せて呼吸に意識を向ける。

そして、違和感に気づいた。

（埃……）

窓に打ち付けられた板の隙間から差し込む光に、宙を舞う埃が煌めく。

窓枠や据え付けの家具の上には相応に積もっている。

だが、床は……。

（何者かが出入りしているのは、まず間違いない）

一時手甲をソウルに戻し、素手で床板に触れる。

床には、あまり積もっていないように思えた。

空でも飛んでいない限り、床の埃は影響を受ける。

となると、やはり誰かが頻回に出入りしている。

積もった埃に足跡が残るのを気にする程度には慎重な——あるいは潔癖な——何者かが。

それとも、これも単なる気のせいだろうか。

いくら埃が積もろうと、別に足跡が残るとは限らない。

あるいは、つい最近に管理者が入っただけという可能性もある。

「もう一度、屋敷を見て回ろう。見落としがあるはずだ」

しばし迷い、自分の感覚を信じることに決めた。

確かに広い屋敷だが、記憶にあるいくつかの王城ほどには広大ではない。

そして、見た限りでは完全なる空き屋敷だ。見回った範囲では本当に何も無い。

つまり——

「どこかに隠し部屋でもあるってことかい？」

「おそろくな」

ついでに言うなら、それは地下室だろう。

建物の構造的に、それ以外の余白が思いつかない。

……巡礼地によくある、でたらめな構造の建築物ではないわけだし。

「だとして、どうやって探す気なのさ？」

「手当たり次第に壁やら床やらを撫でまわすしかないな」

「……本気で言ってるのかい？」

「いいや、冗談だ」

少なくとも、今の時点では。

「――」

半眼になるアイシヤに軽く笑い返してから、左手に『火』を灯す。

口ずさむ物語は【導きの言葉】。幻影なりメッセージなりが見えればそれでいい。

もし何も見えなかったなら……その時は冗談が冗談でなくなるだけだ。

（ま、メッセージはあまり鵜呑みにするのも危ないがな）

いったい何度、嘘のメッセージに騙され何でもないただの壁を殴り続けたことか。

しかも、そういうメッセージに限って念が強いものだから厄介だった。

（殺伐とした巡礼地の数少ない娯楽といえはそれまでなんだろうが……）

と、それはともかくとして。

「……何とかかなりそうだね」

薄暗い廃屋の中に、白く透けた人影が生じる。

あまりはつきりとは分からないが、背格好からしておそらく女だろう。

「ああ。人払いを徹底したのが失敗だったな」

浮かび上がった人影は一人分だけだった。

ありがたい話だ。幻影が見える時間はごく短い、これなら追いかけるのは難しくな
い。

「さて、と。ここからは地道な作業だが……」

幻影が消えたのは、とある部屋の一つだった。

もちろん、つい先ほど確認した場所であり、例によつてほとんど何も物がない。

そして、床には埃がほとんど溜まっていなかった。

「外れなら次を探せばいい話さ」

それもそうだ。アイシャの言葉に肩をすくめる。

何しろ、シャクティ印の一覧表は十ヶ所以上の住所が書かれているのだから。

「物が無い分、楽だろうしね」

ベルたちが生活する隠し部屋程度の広さはある。

物が無い分だけ、探すのは簡単そうだ。

問題は、見つかるかどうかだが――

「あった」

結局、一〇分とたたないうちにそのレバーは見つかった。

壁に空いた穴。かぎ爪か何かでもなければ入らないようなその奥に何かがあるように見える。

右手の武器をそのかぎ爪に切り替え、そつと差し込む。

「さて。何が起ころんだか」

アイシヤが呟くと同時、何かが作動する音が響き、床板が動き始める。

驚くほど精巧な隠し扉けだった。一見すれば、床板の隙間にしか見えない。

「地下階段……いや、地下室か」

薄暗い……目を凝らすとその先には、扉があるようだった。

「へえ、いよいよそれらしくなってきたねえ」

『『ブラムス伯爵』か?』

「そうさ。隠し通路から地下に向かってからが最大の見せ場つてやつだよ」

楽しみに笑うアイシヤ。この様子だと、案外楽しみながら読んでいたのかもしれない。

そんな彼女に、笑い返しながらいでにファルシオンを渡す。

見たところ、通路は狭い。大朴刀では動きが著しく制限されるだろう。

俺自身も《バルデルの刺突直剣》に武器を切り替える。

「開けるぞ」

短い階段を降り、その扉に手をかける。

軽くドアノブを動かす——と、予想に反して鍵はかかっていた。

武器を握りなおし、一息に捻る。

と、同時。鈍い音と共に床が抜けた。

(罨……!?)

浮遊感と共に、扉——のように見せかけたレバーが上に向かって飛ぶ。

もちろん、実際には自分が下に落ちているだけだが。

迂闊さに毒づいている暇もない。

(く——ッ!?)

幸いにして、穴はさほど深くなく、逆杭バイクの類もなかった。

と、なれば着地には問題ない。全身のばねを使って、衝撃を受け流す。

一瞬の停滞。それが隙となった。

薄闇の向こう側から、鈍い銀の輝きが奔る。

いつそ転がってしまえばよかったが、もう遅い。

反応が遅れた。回避が間に合わない。——が、それだけだ。

その一撃にはこの黒衣——いや、軽鎧を斬り裂くだけの威力はなかった。

金属が擦れ、ほんの一瞬だけ金臭い匂いが鼻腔をくすぐる。

その頃には、襲撃者に直剣を突き立てていた。

確かな手ごたえ。すぐさま引き抜き、そのまま半ば勘を頼りに首筋を斬り払う。

「本当にそれらしくなってきたじゃないか！」

アイシャの声が聞こえた。

「[Elucidare]！」

右手に『火』を灯し、詠唱する。

その名を「照らす光」。魔力によって生み出された光が、地下室を照らし出した。

「何だと……！」

そこにいたのは八体の亡者だった。

ぼろ切れ同然の粗末な貫頭衣を着込み、手には武器とも言えないガラクタを握りしめ

ている。

いや、もはやそれほどの理性も残っていないのか、素手の者もいた。

「しぶとい奴だね！」

だが、これはマズい。

俺はともかく、アイシャにとっては厄介な状況だった。

亡者はそう簡単には殺せない。だからこそその不死人だ。

先の亡者が握りしめていた小さなナイフをひつつかみ、振り向きざまに投げつける。放ったそれは、アイシヤを襲う亡者のこめかみ辺りを貫き仰け反らせた。

「邪魔だよー！」

動きを止めた亡者の顔面を掴むアイシヤの手に『火』が灯る。

そして、爆発した。【発火】だ。

幸い、それでその亡者は動きを止めた。

「つたく、闇霊どもと同じってことか」

それは仕方がない。何しろ、闇霊の本体なのだから。

とはいえ――

(やはりな)

先に仕留めた亡者も、大したソウルは持っていないかった。

巡礼地の入り口を彷徨っている亡者と同じか、下手をすればそれ以下。

結論を結ぶ頃には、二体目が迫っていた。

初撃を盾で弾く。得物はやはり短剣――小さなナイフだった。

小さくも鋭いそれは、冒険者が魔石を取り出す際に使うものによく似ていた。

「ッー！」

モンスターを捌けるなら、人間の体も捌ける。

それに、一〇cmあるかどうかの刃渡りでも、然るべき個所を狙えば人を殺せる。お互いに不死人もうちやならなおさらだ。

攻撃が逸らされ、がら空きになった胸を刃で貫く。

(二二)

それで終わりだった。

やはり、大したソウルの持ち主ではない。

「こいつが亡者つてやつか！ いよいよ恐怖劇ホラーしてみたね！」

動きは鈍く、装備は粗雑極まる。そして、力も弱い。

常ならアイシヤの脅威になどなるはずもない。

だが――

「気をつけろ！ こいつらはしぶとい――」

彼女はまだ『ソウルの業』を会得していない。

下手に囲まれば――

「足元がお留守だよ」

振り下ろされるコートハンガーを軽く身を逸らすことで躲し、そのまま足払いを。つんのめるその亡者を、反対側の脚で蹴り飛ばす。

「——アウ？」

間の抜けた——少なくとも、そう聞こえた——呻き声と共に亡者が吹き飛んだ先にあつたのは、大きな檻。おそらく、元々はこの亡者たちが閉じ込められていたのだろうが……。

「じゃあね」

アイシャの言葉に、錠が落ちる重い音が重なる。

それで、その亡者は無力化された。元々そこに閉じ込められていたのだから当然だ。「なんか言ったかい？」

続けて、二体目の足をすれ違いざまに斬り落としながら、アイシャが笑う。

「……いいや」

すっかり摩耗し、鍵もかかっている扉すら開けられなくなった亡者は珍しくもない。
い。

まして鍵までかけられればどうにもなるまい。

「頼もしいよ」

三体目にとどめを刺しながら肩をすくめた。

(そりゃ、凄腕の戦闘娼婦だからな)

これはもう、慎重ではない。単に臆病になっているだけだ。

まったく、これではアイシヤに対する侮辱でしかない。

「当然だろう?」

答えながら、彼女は這いずる亡者を別の檻に蹴り込む。

それを見届けることはせず、残りの亡者どもと向き合う。

背後は彼女に任せる。敵の数は多いが、それだけだ。

この亡者どもは奇妙な変容もしていなければ隠し技も持ち合わせていない。

巡礼地の入り口辺りを彷徨っている亡者と同じか、下手をすればそれ以下だ。

ならば、全滅させるなど大した手間ではない。

そして。

半分を仕留め、残りを檻に戻し、何とか室内の魔石灯を作動させてから。

「こいつらのどれかがあの変態……ってことはなさそうだね」

転がる死体や檻の中を一通り見やってから、アイシヤが呟いた。

「残念ながらな」

この亡者どもは、あの変態よりもはるかに未熟だ。

まったく。あいつがこの程度だったなら、最初の接触で確実に仕留められたものを。

「それにしても、色々と悪趣味な部屋だね」

ため息を吐くより先に、アイシヤが呻いた。

「……研究室つてところか」

彼女の言う通りだった。

ここは単なる落とし穴の底ではない。

長机の上や床には走り書きが施された無数の紙片が散らばる。

棚には怪しげが標本が。他にも用途不明の器具が至る所に置かれていた。

「で、怪人ならぬ『アンデッド』……亡者が巣くついているときたもんだ」

フン、と彼女は忌々しそうに鼻を鳴らす。

「【黒教会】とかいう連中が、ここで『暗い穴』つてのを研究していた。そんなところか

い？」

「……いや、そいつはどうかな」

アイシャの言う通り、何者かが『暗い穴』について研究していたのは間違いあるまい。

だが、今さらユリアたちが『暗い穴』について研究する必要などない。

何しろ、ロスリックの時点で十分に効果を発揮していたはずなのだから。

それとも、この『火のない時代』では従来のままでは使えないのだろうか。

(いや、違うな……)

ここを使っていたのは【黒教会】の連中ではない。

檻に戻された亡者たちを見やり、改めて胸中で呟いた。

亡者どもは誰も彼も干からびた顔つきだが……種族としての特徴は残っている。

人間。^{ヒューマン} 獣人。^{バルウム} 小人。^{ドワーフ}

そして、一番多いのはエルフ。転がる死体を含めればなおさら顕著だ。

「悪いが」

ため息を吐きながら、アイシャに声をかけた。

「シャクティを呼んできてくれるか？」

幸い、出口ははつきりしている。

というよりも、落とし穴と思つたあの穴は落とし戸だったらしい。

近くの壁には当たり前のように梯子が設えられていた。

ついでに言えば、それを登つた先には隠しレバーまであつた。

やはり、あの扉は罠だったわけだ。

そちらに気を取られ、正しい隠しレバーを見落とした間抜けはここで亡者の餌食にされる、とそんなところか。

研究所そのものを罠にするというのは、なかなかイカレた発想だが。

(いや、それもどうか)

もうここは破棄されたと見ていい。

走り書きの紙片こそ大量に残っているが、それらをまとめたであろう書簡やら何やら

は全く残されていない。昨夜の騒ぎの時点で、ここに調査の手が及ぶと判断したのでらう。

初めからこういう状況を想定した罟、といったところか。
亡者どもがもう少し手練れだったなら流石に危なかった。

「そりゃ構わないけど……」

もつとも、タネさえ分かれば大した罟ではない。肝心の亡者もすでに無力化している。

もはや脅威はなく、出入りは自由だ。

「あんたはどうするんだい？」

怪訝そうに彼女が言う。

「見張ってる」

肩をすくめて見せた。

「鍵が壊れて外に逃げ出されても面倒だろう？」

それは、別にまったくの嘘というわけではない。

亡者どもを閉じ込めておけるほど頑丈な造りだが……それとて限度がある。
ソウルの気配を感じているのだろう。亡者どもは興奮したままだ。

あるいはこのまま無理矢理外に出てくることもあり得る。

が、やはりそれは言い訳でしかなかった。

どうせ、この亡者どもが梯子の使い方を覚えていとは思えない。

万が一檻を破壊したところで、屋敷の外まで出れるはずもなかった。

本命は別にある。

これもまた、近いうちにアイシャには話さなくてはならないが……。

(いや……)

できれば、話さずに済ませたいところだ。

何しろ、肝心の本人ですらまだほとんど何も知らないのだから。

このまま誰にも知られずに済ませられるなら、それが一番だろう。

そのためには、シャクテイ達が来る前に一仕事終えておかなくてはならない。

7

アイシャに案内され、件の屋敷に辿り着いたのはそろそろ太陽が真上に昇る頃だった。

確かに、集まった情報の中で一番臭いと感じた物件だったが……。

(まさか一発で大当たりとはな)

運が悪いというべきか。それとも一周回って運がいいというべきか。

人間性にだけは割と自信がある——と、あいつ自身はそんなよく分からない事を言っていたが。

「何もないな」

書類上ではいかにも胡散臭い場所だったが、実際に立ち入れればそこは殺風景な……いや、単に空虚なだけの廃屋敷でしかなかった。

「()はね」

思わず呟くと、アイシヤが肩をすくめる。

「けど、この先は別だ。ちよつと覚悟しときな」

そして、玄関の扉を閉ざすや否やそう吐き捨てた。

まるで、万が一にも外に漏れては困るといわんばかりに。

「この先だよ」

空虚な廃墟の一室。地下室への入り口はその床に口を開けていた。

あまり広くない階段と通路を列になって進むと、扉の手前に下へと通じる穴が開いている。

何も言わずに飛び降りるアイシヤに続くと——

「遅かったな」

長机の前に座り、何かに読み耽っているクオンの姿があった。

それはいい。彼がここに居るのは、分かり切っていたことだ。そんなことよりも——
「何だ、これは……ッ!？」

異様な光景に絶句していた。

いくつもの檻が立ち並び、その中には干からびた死体。

何より、その死体は動き、言葉とも呪詛ともつかぬ何かを呻き続けている。

「リヴェリア辺りから情報が届いていないか?」

書類から目を上げず、クオンが言った。

「これが『アンデッド』……いや、亡者なのか?」

「ああ、そつちもか」

そこで、ようやくクオンがこちらを向く。

「いや、そもそもここは何なんだ?」

それを待つのももどかしく、言葉を重ねた。

「見ての通りだ」

「見ての通りだと……?」

語気が荒い。動揺していることを自覚した。

「研究室とでもいうつもりか?」

「ああ。俺にもそう見える」

その地下室を言い表す言葉で、これ以上に適切なものは思い浮かばない。しかし、だとするならここで研究されていたものは――

「ダンジョンで目撃された『アンデッド』はここで生み出されたという事か？」
「可能性としてはあり得るな」

クオンは、実に気楽な様子で――いや、常と変わらないだけだが――肩をすくめる。

「ここで閉じ込めておくより、ダンジョン内に破棄した方が安全だ」

怒りか。それとも嫌悪か。いずれにせよ、その言葉に激昂しそうになった。

それを知ってか知らずか、クオンは言葉が続ける。

「問題は、こいつを誰が作ったかだ」

「……【黒教会】の者ではないのか？」

つい先日、【九魔姫】^{ナイン・ヘル}がダンジョンで遭遇したと聞いている。

もちろん、その『アンデッド』を『殺した』張本人がクオンであり、彼から【黒教会】

――『暗い穴』と『アンデッド』との関係を聞いたとも。

「そいつはどうか」

クオンが椅子から立ちあがり、近くで『息絶えている』亡者の死体へと近づく。

「よく見ろ。こいつらはそれぞれ微妙に違う」

衣服をはがされた四体の遺体を示しながら、クオンが言った。

「これが『暗い穴』だ」

ちやうど横腹辺りに、渦を巻くような形の黒い『痣』。

干からびた体になお暗い、墨でも垂らしたようなその『痣』を示して、クオンが言う。

「だが、これは『暗い穴』じゃない。似ているが、別物だ」

残りの三体の『痣』は……確かに微妙に違う。

黒い『痣』の周りを、赤黒い何かが縁取りしている。

「どういふことだ？」

問いかけると、クオンは眉間を指先で搔いてから――

「おそろく、こいつは『闇の刻印』ダークリングに近いものだ」

見た目もな――と。自分の胸元……心臓の真上あたりを叩いた。

彼の場合、その辺りに『ダークリング』が刻まれているらしい。

……無論、直接見た事がある訳ではないが。

「待ちな。そいつは確か『火の陰り』とやらが起こらない限り発生しないじゃなかったのかい？」

その通りだ。少なくとも、私もそのように聞いている。

「それは全くその通りなんだが……」

ため息を吐いてから、クオンは手にしたいくつかの紙片を差し出した。

「それを読む限り、そうとしか思えない」

「言われるがままにぎつと目を通すが——」

「すまない。読めないんだが……」

そこに綴られている文字は、少なくとも共通語コイネーではない。

「ああ、そうか……」

フード越しに頭を掻きむしってから、クオンは言った。

「簡単に言えば、この研究所の主は『ソウルの業』の再現と強化を目指していたらしい。

その研究資料として『アンデッド』を拾ったと見るべきだろう」

「思わず、紙片を取り落としそうになった。

「……何故、『アンデッド』が『ソウルの業』と関わる？」

それでも、思ったよりも冷静であつたらしい。

「口から零れ落ちたのは、そんな疑問だった。

「その『ソウルの業』というのは、今の『時代』でいう『神の恩恵』ファアルナのようなものではないのか？」

不死人の方が強化に必要なソウル——今でいえば【エクセリア経験値】に相当するのだろう——を取り込みやすいとは聞いている。

だが、『ソウルの業』の習得自体は不死人でなくとも可能だとも聞いているのだが。

「不死人は『火の陰り』とともに生まれる」

クオンは、特に言葉に詰まることもなく先を続けた。

「では、何故火が陰ると不死人が生まれるのか」

「……そういう『呪い』だからではないのか？」

「そうなんだが……その『呪い』の正体は何かって話だよ」

思わず呻くと、クオンは苦笑した。

「お前には見当がついているのか？」

「かなり推論が混じるが、それでいいなら」

アイシヤと顔を——と、言っても彼女の素顔は見えないが——見合わせてから頷く。

何であれ『火の時代』については私達よりもはるかに詳しい。聞いておいて損はあるまい。

『火の陰り』は『王のソウル』……つまり、『神アルカナムの力』の弱体化をもたらす。だからこそ、グヴィン達はそれを恐れた。火が消えれば、自分達は超越か存在みではなくなるからだ」

それは、何とも反応に困る切り出しだった。

「もつとも、別に死ぬわけではなかったと思うがな。ただ力を失うだけで済んだんじゃないか？」

生憎とロスリックで目覚めた時には旧王家は滅亡していて確かめようがなかったが。

クオンはそう言つて肩をすくめた。

「神々の力が衰えたせいで『不死の呪い』が蔓延したというのか？」

「ある意味においては。ただ、そう単純な話ではない」

問題は、『呪い』の正体だ——と、クオンは続ける。

「『王のソウル』を見出したのは神々だけだ。グヴィンから下賜された奴らもいるがな。『火の陰り』が『王のソウル』の弱体化しかもたらさないなら、俺達にはさほどの影響はない」

確かに、理屈の上ではそうなる……ように思う。

「いや、だがお前は不死人なのだろう？ 影響を受けているではないか」

「そうだ。問題はそこにある」

再び、自分の胸元を指で叩きながらクオンは言った。

「俺達の祖先である小人は、神々に『火の封』を施されたという。その結果、小人は人間になった」

ひとまず信じるとして。それでも、疑問が一つ生じるだろう？——と、その問いかけに頷く。

「そもそも、その『火の封』とは何を封じるためのものだ？」

神々が封じなければならない何か人が人の中には存在していることになる。

それはいったい何なのか。

「俺達の祖先にあたる小人も『最初の火』からあるものを見つけ出していた」

「何だと？」

その『最初の火』というのが『神アルカナムの力』の源泉であるなら、私達の中にもそれに匹敵する何かが眠っているということなのか。

「だが、それは『王のソウル』と呼ばれることはなかった。似て異なるもの。あるいは相反するものというべきだったのか……」

いずれにせよ、その時神と人は決定的に袂を分かれたわけだ。

何て事もないように、クオンはそう言った。

「私達は……」

何だか妙に息苦しい。地面が揺れているような気がする。

「ガネー神々シヤ達の子どもではないと？」

「考え方次第だな。小人に『火の封』を施した結果、人間が生まれたとするなら、確かに『生みの親』と言えないことはない」

溜まらず問いかけるが……返ってきた言葉は、それらを払拭してくれるものではない。かかった。

眩暈が酷くなる。

きつと酷い顔をしているだろう。アイシャがしている顔の見えないフードが羨ましい。

「そんな御大層なものが私達の中にあるって？」

そのアイシャの声も、少し震えている気がした。

「でなければ、中途半端とはいえ、不死身になんてなれるものかよ」

クオン達は完全な不死身ではない。死を経るごとに精神が摩耗し、亡者に近づく。今、檻の向こう側で呻いている者たちはまさにその成れの果てだ。

彼らがまだ生きていけると言えるのかどうかは私には分からない。

しかし、少なくとも肉体的にはまだ動いている。それもまた事実だ。

確かに中途半端だが、不死身と言えないことはない。

『『ダークソウル』。それが、俺達の中に眠るもの。不死を生み出すものの名前だ』

「ダーク、ソウル……」

呆然と、その名前を繰り返していた。

そんなものが本当に私の中にもあるというのだろうか。

「じゃあ、そいつが『呪い』の正体ってことなのかい？」

「間違いではないが、正解とも言い難い」

「どういふことだ？」

「闇の中において、俺達は形を失うのだという」

俺も聞きかじった程度だが、と小さく付け足してから、クオンは言った。

「それが正しいかどうかは定かではない。だが、蛆になったり蛹になったり汚泥になったりしたりした奴らなら散々に見てきた。だから、まったくの見当はずれでもないだろう」

それに、俺自身も強引に体を結晶化させられて死んだことが何度もある。

心底嫌そうにクオンはそう吐き捨てた。

……それはそうだろう。体が結晶化していくなど、想像するだけでゾツとする。

「それが、どう関係する?」

「不死もまた、人間が獲得し得る形質の一つだってことだ」

あるいは、最初の小人は不死そのものだったのかもしれない。

小さく呟いたのは聞こえなかったことにした。

「それを神々は『火の封』で封じた。そして、不定形だった小人は人間という定形を獲得した」

ま、先に言った通りあくまで推論だ——と、クオンは肩をすくめる。

「それが正しいとして……」

干からびた喉から、何とか言葉を絞り出した。

「だから、お前は神を恨んでいるのか？」

人から不死を奪ったことを。

「さて。俺が生まれるずっと前のことだけで恨めるかと言われると何とも返事に困るな」

だが、クオンはあつさりと肩をすくめて見せた。

「確かに、神が十全に善意だけでその封を施したとは思わない。どちらかといえば悪意を疑うところだが……死すら飲み込んでどこまでも変容していく存在なんて、古竜より厄介だ。恐れるのはごく当たり前の反応だろう」

もつとも、不死人^{俺達}にとって死は糧でもあるが。

何てことはないように添えられたその一言に、改めて『時代』の差を感じた。

あるいは、在り方の差か。

「実際、不死人^{おれたち}はおそらく望むなら古竜にだってなれる」

クオンはその手に、微かに光る奇妙な石を取り出して言った。

「神々にとつて、小人は悪夢そのものだっただろう。ようやく滅ぼした古い時代の支配者が復活しかねないだからな」

そして、とその石を消しながら、クオンは続ける。

『『ダークソウル』は『王のソウル』と相反する力だ。後の世では、神々の英雄ですらそ

の闇には抗えず狂気に沈んだほどだからな。それだけでも厄介だというのに、小人たちはいいよいよその力を使いこなし始めた」

もしもその闇を帯びた新たな古竜が生まれるような事になれば、今度は自分達が滅ぼされる側になる。神々が恐れるのは当然だろう。

その言葉に、共感を覚える事は難しかった。

そもそも、超越存在が私達を恐れるという事が想像できない。

神々とは、遙か遠い『古代』の終わりから共にある良き隣人であり、血を分けた家族であり、主神でもある。

ずっとそう思っていた。程度の差はあれ、誰もがそうだろう。

「実は神蓋の封印は不完全だった。そう考えれば、当時の神々の恐怖も何となく共感できるとはならないか？」

それを見透かしたように、クオンが言う。

言うまでもなく、神蓋は下界平和の要だ。もしその封印が不完全なら、いずれ世界はモンスターどもが溢れかえる『古代』に逆戻りしかねない。

なるほど、それなら想像できる。

しかし――

「だから、神々は火によって人の闇を封じた。まあ、そんなところだろう」

「そんなところと言われてもだな……」

その例えに準じるなら、封印が不完全な原因こそが人間わたしたちとなる。

……それは、別の意味で想像したくないことだった。

曖昧に頷くと、クオンはほんの一瞬だけ意地の悪い笑みを浮かべた。

「だが、火が強まれば闇もまた濃くなる」

「だから不死になると？」

「本来なら、そうだったのかもしれないな」

「違うのか？」

「さて。さつきから言っているように憶測ばかりだ。断言はできない」

ただ、と。クオンは言葉を続けた。

「少なくとも俺達は『火の封』……『神アルカナムの力』による枷によって人間となった。それはも

う外せない。俺達の変化は必ずしも逆行できるものではないからな」

俺達は完全に人間という存在に変化している。枷を外したところで、少なくとも小人
そのものに戻ることはあり得ない。

「何故そう思う？」

クオンの言葉に問い返していた。

いや、それは愚問だったのだろう。答えは目の前にいる。

「『最初の火』が潰えてなお、俺は不死人のままだ」

いや、何かもう不死人かどうかも怪しいんだが……などと、何やら不穏な事を呟いてから。

「それに、俺が『火継ぎ』をした時に不死人だった奴は、その後の時代でも不死人のままだった」

もちろん、『火継ぎの儀』が『不死の呪い』に有効だと語らえている以上、『呪い』から解放された不死人もいたんだろうが……と、クオンは言葉を濁した。

「それと同じさ。少なくとも俺は、今さら小人に戻れるとは思わない。無理矢理に外せば、人間でも小人でもない何かに変化する羽目になるだろう」

遠い昔、神々が施した『火の封』という名の枷により小人は人間へと変化した。

今までの話からすればそういう事になる。

ならば、外せば人間ではなくなるというのも必然か。

「それはともかく」

呻いていると、やはりクオンはあっさりと言った。

「小人が人間となったこと。おそらく、それこそが『呪い』の始まりだ」

「何故だ？」

クオンの言葉に、問い返していた。

いや、分かる。分かるような気がする。理解したくはないだけだ。

「さつきも言ったが、神々は人間……いや、小人を恐れていたのさ。『火の時代』よりも前、『灰の時代』から今に至るまで、神々よりもはるかに弱くちつぽけな俺達を」

自分の娘を生贄に、小人の王たちを流刑地に隔離するほどにな——と。クオンが呟く。

「神々が恐れたもの。それが、変化し続ける力。古竜への道に挑めるほどの力だ」

神々是不変。私達は変化できる存在。

それは、今だって変わらない。誰もが知っていることだ。

分からないはずがない。

「神々はそれを火によって封じ込め、人は仮初の姿かたちを得た。それこそが世の理の始まりだ。かつて、そう俺に説いた奴がいた」

世界とは——私達の在り方は神々によって歪まされ、仮初の生を生きている。

その言葉が意味することは、つまりそういう事だった。

「待て、クオン。待ってくれ」

思わず、悲鳴でも上げるように呼び掛けていた。

「それは、『アンデッド』の誕生に関係があるのか？」

いや、あるのだ。あるはずだった。

だが、それでも――

「いや、あるのだろう。分かっている。分かっているが……」

喘ぐように、返事も待たず続けていた。

「すまない。少し……もう少しだけ時間をくれ」

例えそれが正しいとしても……いや、今さらクオンが嘘をついても仕方がない。

だが――

「今は、とても受け入れられない」

「……そうだな。悪かった」

私の泣き言を、クオンはあつさりを受け入れた。

「ええと……。とりあえず結論だけ言えば、この亡者どもを生み出した奴は、その『神の枷』を外すために、『ダークソウル』を意図的に刺激したんだ」

「つまり、人間を意図的に変化させようとした？」

「まあ、そうなる。人間性を刺激することで、肉体が変容するってのはまず間違いない。体が石化する『呪死』なんてのはその典型だ」

肩をすくめてから、クオンが続ける。

「俺もあまり詳しいわけじゃないが、『暗い穴』もおそらく理屈は同じだ。あれは意図的に『ダークソウル』を活性化させて、火の篡奪者たる【亡者の王】を生み出すためのも

のだからな」

だから、適性がないと滲みだす『呪い』に飲まれてただの亡者に墜ちることになる。クオンが肩をすくめると、アイシャが大げさなまでにため息を吐いて見せた。

「つてことは、まさかこいつらは事故で生まれたつて言うことかい？」

「まあ、そんなところだろう。元々『ソウルの業』を研究するため、人間をあれこれと弄り回していたみたいだからな」

「酷い話だな」

ここにいる『アンデッド』達がどういう身元——例え自ら望んで加わった者——だったにしてもだ。

「いや、この程度で済んだのは幸運だ」

しかし、クオンは深刻そうに呻いた。

「どういう意味だ？」

「弄られた本人が亡者化するだけで済んでいるからだよ」

「充分に性質が悪いだろう？」

「無理矢理に『ダークソウル』を掘り返して、亡者が生まれただけなら安いものだ。最悪はこの辺り一帯が滅んでいてもおかしくない」

「それほどか？」

「当たり前だ。迂闊に触れたせいで亡んだ国がいくつあると思っている？」

いや、そんなことを言われても困るのだが。

「暗き魂に近づくべきじゃないのさ」

どこことなく芝居がかった口調で、クオンは小さく笑った。

あるいは、それは他の誰かの言葉だったのかもしれない。

「……まあ、神々が恐れるってんだから、そのくらいはありえるのかもね」

何とも投げやりに、アイシャが肩をすくめるのだった。

「確かに、それはそうだな」

もし、本当にそれほどの者だったなら、すぐにこの屋敷の主を発見しなければならぬ。
い。

そうでなくとも、人体実験など許されるはずもない。

いずれにせよ発見し、身柄を確保しなくては。

厄介なことだが、慣れ親しんだことでもある。

今までのことを思えば、いつそ安堵すら覚えるほどだ——

「信じてないなら、証拠でも見に行くか？」

——と、思った矢先にこれだ。

つくづく厄介な男だった。いや、別にこれはクオンのせいというわけではないのだ

が。

「何かあるのか？」

「割と厄介そうな置き土産がな」

まったく、どこの誰だか知らない——いや、もう当たりは付いているのだが——が、尻尾を掴んだ時は覚えていろ。

柄にもなく呪詛の念など抱きながら、クオンの後を追った。

……

「それで、あれがそうだった？」

クオンの言う『厄介な置き土産』は、研究室の奥。ひと際堅牢な檻と、分厚い石壁に囲われた牢獄の中にいた。

「あれは、モンスターなのか？」

モンスター用の太く丈夫な鎖で四肢を拘束され、興奮防止のため鉄仮面すら被せられている。

こういつては何だが、見慣れた姿だった。

フィリア祭のために地上へと運び出すモンスターには概ねあのような処置を施す。

……もつとも、さすがに壁に固定したりはしないが。

「まず間違いなく亡者の一種だろう」

「……巨人って種族はオラリオにいたかい？」

アイシヤが呻いた。

オラリオどころか下界には存在しないはずだ。少なくともモンスターではない種は。

しかし、彼女の言う通りでもある。

何しろ、その亡者アデッドの背丈はどう見ても三M以上はあるのだ。

あれほど大柄の者は見た事がなかった。

「ソウルが変質したせいで背丈が伸びるつてのは別に珍しくない。と、いうより一般的なくらいだ」

「……そうか」

なるほど、これもまた変容のひとつということか。

モンスターのよう凶悪かつ屈強な体つきになっていることも含めて。

木や蛹、竜に変容することを考えれば、なるほど大したことではないのかもしれない。

「生きてるようだね。そう言っているのかは分からないけど」

こちらに気づいているのだろうか。その異形の巨人は先ほどから身じろぎを繰り返している。

「ああ。近づけば襲ってくるだろう。周辺の壁もそろそろ限界のようだしな」

鎖そのものともかく、周囲の壁にはひびが走っている。

その異形の力に負けたのか、それとも年月による劣化なのか。理由は定かではないが。

「メレンの騒ぎのせいで放棄したというより、あいつを抑え込めなくて放棄した可能性もあるか」

「渡りに船つてだけの気もするがな」

クオンの軽口に、思わず納得しそうにあった。確かに、それが一番可能性が高い。

もし見落としていたなら、メレンはどうなっていたことか。想像もしたくない。

「まったく、『フランケル博士』の屋敷か、ここは……」

陰惨な未来の代わりに、少し前に流行った神秘小説ゴシックを思い出していた。

元々は大衆の好みを知るために購読したものだが……なかなかどうして。

人間とは何か。生とは何か。叡智とはどのように扱うべきなのか。

何より。果たして人間が神の領域にどこまで踏み込んでいいのか。

そのような事を、色々と考えさせられるものだった。

「ああ、そつちの方があつてるか」

思わず呟くと、アイシャが頷いた。

「『ブラムス伯爵』つてのとは違うのか？」

それも流行った恐怖小説ホラーだが……まさかクオンまで知っているとは。

そちらはそちらで流行ったから、オラリオの外にまで広がっていて不思議ではないが。

……いや、どうせアイシャか霞に聞いただけか。

(この男が恐怖小説など読んだところだな)

何しろこの男は、亡者だの闇霊だのデーモンだのとは顔なじみだ。

どうせ今さら何の感慨も受けまい。

「簡単に言えば、死体を継ぎ接ぎして理想の人間を生み出そうとした馬鹿な賢者の話さ」

大雑把すぎる説明だが……まあ、あながち間違いとは言い難い。

「シースみたいな奴だな。いや、死体を使うだけまだマシか……」

そして、そのシースというのは何者なのか。

クオンは魔術師といえば人体実験は必修だと思ひ込んでいる節があるが……。

「それはそうと。お前って案外読書家なのか？」

クオンではないが、この豪胆な女傑が読書にふける姿はあまり想像できない。

「まさか」

そして、アイシャは実にあっさりとその疑問に答えて見せた。

「けど、少しくらいは齧つとかなないと客の話に合わせられないからね。嗜みつて奴だよ」

そういうものか。思わず、クオンと二人で納得していた。

と、雑談はその程度にして。

「それで、どうする？」

「もし、あれが外に出たらどうなる？」

問いかけてくるクオンに、逆に訊ねる。

意味のないやり取りだ。お互いに答えなど分かり切っている。

「奴の人間性がどの程度擦り切れているかにもよるが……ソウルの気配に惹かれて外を
目指すと見ていいだろう」

まあ、あの凶体で梯子を上れるかは微妙なところだが。クオンはそう言ったが……。
(いや、危険性は充分だな)

本当にこの屋敷に他の出入り口がないとは限らない。

今ここで手を打たず、結果としてこの亡者がメレンを襲った場合、被害はさらに深刻
になる。

私達がいながら犠牲者を増やすような事があつては、オラリオとメレンの関係そのも
のが本当に破綻してしまうかもしれない。

何より、この誰かをこのまま放っておきたくはなかった。

「ならば、やることは一つだ」

例えそれが偽善であるとしても、だ。

幸い、牢獄の中は広いようだ。あるいは、本来ならここが研究室だったのかもしれない。

その真偽は、もはや分かるまい。それに、どうでもいいことだ。今必要なことはたった一つ。

そこは三対一でも充分に戦える程度の広さがあるという事実だけだった。

「まったく。お前といると、潜らなくていい死線ばかり潜る羽目になる」

クオンは肩をすくめた。

「それはお互い様だ」

いったい何を言うのやら。言い返してやると、クオンはもう一度肩をすくめて――

「行くぞ」

左手に『火』を灯す。

赤々と燃え上がるそれは、たちまち巨大な火球となり、堅牢な鉄扉を蒸発させた。

『アア!!!』

異形の巨人が悲鳴を上げる。いや、これは歓喜の声か。

咆哮と共にでたらめに身もだえし……そして、ついに壁の一部を引き抜いた。

太い鎖に繋がったままの巨大な石材は、そのまま凶器へと変わる。

だが、遅い。

その頃には、もう黒い旋風は渦を巻き襲い掛かっていた。

石鎖を掻い潜り放たれた横薙ぎの一撃が、異形の巨人を抉る。

並みのモンスターなら灰になっているところだ。

『オオ!!』

だが、動く。やはり『アンデッド』——いや、亡者か。

「はあああッ!!」

やはり、理性と呼べるものはもう残っていないらしい。

その亡者は迷わずクオンに意識を向けて——あつさりと、こちらに背中をさらした。

無防備なその背中に背後バックからの一撃スタブを叩き込む。

確かに『ソウルの業』を会得していない私達の攻撃は通じづらい。だが、それだけだ。

「黙ってくたばりなッ!!」

さらなる追撃。アイシヤの大朴刀が鉄仮面もろとも脳天を叩き割った。

私達はこの名も知れぬ誰かを呪いから解放やる事はできないかもしれない。

だが、戦闘不能には追いやれる。

そして、少なくとも今この時ならそれで充分だった。

クオンならこの亡者も殺せるすくえる。

今回に限れば、その一撃を放てる隙さえ用意してやればいい。

その戦い方は、昨夜浄水槽に向かう道中で散々に繰り返している。

悪夢のような一夜だ。忘れろと言われても、そう簡単に忘れられるものではない。

「Soul Spear」

私とアイシャが飛び退くと同時、巨大な槍のような閃光が亡者の体を通つ。

上を見れば限りはないだろうが……連携としてはまずまずの練度に仕上がっている。

その亡者は驚くほどの剛力を見せるが、それでも戦いは終始私達が優勢だった。

そして、いよいよ決着の時が来た。

「」

クオンが天井すれすれまで跳躍。それを迎撃すべく、亡者は再び石鎖を振り回す。

だが、放たせるものか。

アイシャの大朴刀が鎖を断ち切り、石材がでたらめな方向に吹き飛んでいく。

同時、亡者の膝を刺し穿つ。狙いは膝裏の腱。

通常であれば、完全に戦闘不能に追いやれる。亡者として、ほんの一瞬は動きを止める。

それで充分だ。

あとは、断頭台の刃が如き一撃がその亡者を『不死の呪い』から解放するだけだった。きつとこれは偽善だ。だが、それでもその一撃こそが最期の救いだったと信じてい

る。

8

メレンの街を突如として未知のモンスタの大群が襲撃。

異変を察知し急遽駆けつけた「ガネーシャ・ファミリア」の奮闘により鎮圧される。

首謀者は闇派閥残党である「タナトス・ファミリア」。詳細は依然不明だが、未知の魔道具マジックアイテムが用いられたとの報告がある。加えて、フィリア祭で目撃された『新種』もまた確認された。

ギルドメレン支部長ルバート・ライアンが、オラリオ本部への緊急連絡を拒否したことがギルド支部に避難した複数の住人の証言から明らかになる。ギルド本部は早期連絡を怠ったことが被害拡大の一因と断定。同氏はそれを受け、本日付でギルドを引責辞任した。

『食人花』ウイオラスと命名された『新種』の搬入経路は未だ調査中だが、メレン内にはびこる密輸業者が介入している可能性が極めて濃厚である。

また、メレン当主をはじめとする有力者に、モンスタを追い払うという『魔法の粉』を提供し、言い寄った集団こそが「タナトス・ファミリア」であるとして、調査を継続中である――

——と。

ギルド本部とメレン当主が連名で発表したその『公式見解』により、『メレンの悪夢』と名付けられた惨劇の真実は肅々と闇に葬られる事となった。

「よくもまあ、柄にもなく大嘘を吐いたもんだ」

「……別に大嘘というわけでは」

小さく笑つてやると、歯切れ悪くシヤクテイが呻いた。

確かに大嘘とは言い難い。が、ヴィオラス 真実にも程遠い。

少なくとも食人花を運び込み、イツイルス 闇派閥との接点を作つたのはあの神自身だった。

「仕方あるまい」

ニオルズが関わつた密輸の全容はおおよそはつきりしてきたらしい。

問題の『商品』も……まあ、おおむね予想通りのようだ。

本人が知っていたかどうかは定かではないが……その辺りは、ガネーシヤが聞き出すだろう。

「今の状況で神ニオルズまで信頼を失つては困る」

いずれにしても、あの神がこの街の人心の支柱となつてゐることは明らかだった。

街中が動揺している今の状況で、それが失われればまた厄介な事になる。

それくらいは、ただの放浪者にも察せられることだ。

「大体、お前は唆した側だろうが」

「別に唆したわけじゃない」

騙したなら最後まで騙し通せと言っただけだ。

神が人間を謀る事に、今さら苛立つても仕方がない。

それよりも、その謀りが利用できるものなら、黙って利用すべきだ。

少なくとも、今回に限れば騙されたところで、薪にされる心配はない。

「それで、あの支部長は神に拾われた、と」

意地の悪い笑みと共に、アイシャが言った。

「今まで事務職だった奴がいきなり肉体労働者か。不幸な事故が起こらなきゃいいねえ」

外海で船から落ちた日には死体もあがりやしない——などと、何とも怖いことを言う。

もつとも、実際にあの支部長……もとい、元支部長の口さえ封じられるなら、真実が露見する可能性はかなり下がる。

何より、密輸云々が露見すればさらに恨みを買うことになるだろう。

いつ『事故』が起こったとしても何ら不思議ではない。

「ま、それを考えればあの神に預けておくのが一番安全かもね」

「それもそうか」

神が赦した相手を敢えて殺すだけの根性がある人間は、この『時代』にはまずいまい。それが良い事か悪い事かは何とも判断をつけ難いが。

「まあ、ひとまず一件落着か？」

「行方不明者の捜索はまだ続いているが、な……」

遺族には気の毒だが……おそらくは、食人花ワイオラスの犠牲者だ。

ならば、もう見つかるまい。

実際、解決という判断なのだろう。「ガネーシャ・ファミリア」の一部はすでに帰還している。

ただ、ロログ湖にはいまだ食人花ワイオラスが巣くつている危険があるため、定期的に「ガネーシャ・ファミリア」の団員が巡回に来回することで話はまとまつたらしい。

そして……

「水棲のモンスターを調教テイムするんだらう？」

件の『魔法の粉』の絡繰りについては、ひとまず関係者の一部にのみ公表された。

少なからぬ波乱を生んだが……「ガネーシャ・ファミリア」の協力の元、モンスターにモンスターを喰わせるという構造は活かす方針で決着したという。

背を腹には代えられないというのはもちろんあるだろうが、「ガネーシャ・ファミリ

ア」の信頼と実績のおかげといったところか。

とはいえ、すぐに効果が出るはずもない。

当面はオラリオ——ギルドと関税率に関して交渉していくことになる。

幸い、件の支部長は個人的に密輸に手を染めていたのは間違いないらしい。

そこに加えて今回の対応で下手を打ったとあれば、ギルド本部も強くは出れまい。

どの程度かはともかく、今現在よりは軽減されると見ていい……と、シャクティは言っていた。

「上手くいくかは分からんがな」

何しろ、初めての試みだ——と、そのシャクティが肩をすくめる。

もちろん、調教テイムの話だろう。

「孵化した翼竜を調教して移動手段に活用しようって計画があるんじゃないか？」

つまり、海路や陸路ではなく空路という新たな手段として。

上手く実現できたなら、その利用価値は計り知れない。

「詳しいな」

「そりゃ、放浪者だからな。旅に関わる情報には耳聡くもなるさ」

などと気取ってはみたものの……実際のところ、帰ってきて早々にウラノス達から聞いたというのが真相だったりする。

これはもしかして、実験体を押し付けられる前振りなのだろうか。

(空の旅は別に初めてではないが…)

鴉やデーモンより運ばれ心地……いや、乗り心地が良いことを祈っておこう。

あと、途中で落とされないことも。

「そりゃ、本当に上手く行くなら便利そうだけど」

アイシヤが肩をすくめる。

「こつちはどうするのさ。共食いさせると強化種が生まれちゃうんじゃないか?」

ヴィオオラス
食人花の時は、それが目的だった。

だが、タイム調教したモンスターを用いるなら、そうはいかない……らしい。

強化種は凶暴さも増しているというのが通例であり、その分だけタイム調教し辛いのだと

か。

……強化種と言われるとまずゼノス達が思い浮かぶ俺にはいまいちピンとこないが。

「それについては、一つ考えがある」

シヤクティはあつさりと言った。流星は本職という事か。

「どうするつもりだ?」

とはいえ、即答してくるとは思わなかった。純粹な好奇心から問いかける。

「極東出身の団員に聞いたのだが……。なんでも『鵜飼』という漁法があるらしい」

「ウカイ？」

「そうだ。鵜という鳥に魚を捕まえさせる方法だという」

「鳥の食いかじりなんて売れるのかい？」

「いや、違う。そもそも鵜という鳥は魚を丸のみにするそうだ」

アイシヤの言葉に、首を横に振ってからシャクティは続けた。

「その団員が言うには、鳥の首に縄を巻き、ある大きさ以上の魚は飲み込めないようにしておくらしい」

「……何だか面倒くさい方法だねえ」

「魚に傷がつかなくていいらしいがな。私も実際に見た事がある訳ではない」

だから、それ以上のことは分からない。シャクティはそう言っつて肩をすくめた。

まあ、その何とかいう漁法についてはともかくとして。

「なるほど。つまり、魔石だけ吐き出させるつもりか？」

今の状況に合わせるなら、そういうことになるはずだ。

「ああ。まあ、あまりに大雑把な方針だな。具体性はまだ何もない」

どのようなモンスターを調教テイムすれば実現できるすら分からないからな。

ため息とともに、彼女はそう言った。

とはいえ、先の竜と共に成功すれば、モンスターに対する評価も多少は変わるはずだ。

そうなれば、ゼノス達の悲願達成に一步近づく。

ぜひと形にして欲しいところだ。

「当面は今まで通りに『魔法の粉』を使ってもらうしかあるまい」

「補給は効くのかい？」

「まだ詳細は分からないが、さほど複雑なものではなさそうだ」

「いや、補給よりもあいつらが肥えたら厄介なんじゃ……」

奴らの飼い主……あの赤髪の美人の目的は知らないが、まさか慈善活動ではあるまい。

適度に肥えたところであの『宝玉』を寄生させ、五九階層にいるような異形を生み出す……と、言うのはあくまで手段でしかあるまい。

問題は、それを使って何をするつもりなのかだ。

（まさか芸を見せて終わりってわけでもないだろうしな）

わざわざ地上で生み出すのだ。狙いはオラリオ……と、言うところまでは予想がつく。

ただ――

（あんなのが一匹、二匹暴れたくらいでどうにかなる街でもないだろう）

もつとも、俺も五九階層にいる異形の力量を把握しているわけではないのだが。

だが、仮に階層主級と見積もつて……それでもオツタル一人でどうにでもなる。オツタルほどではないにしても、あの女や糸目の小僧とその手下たちも手練れだ。

(奴らだつて自分たちの庭先で暴れられたなら黙つちやいないだろうしな)

無論、シヤクテイ達もいる。他にも……そう、例えばどこぞの飲食店店員とか。

それに……きつと、あいつがいるなら黙つてはいまい。

もちろん、一般人を中心に深刻な被害が出るのは想像に難くない……が、それでもオ・ラリオそのものをどうにかするには、少しばかり馬力が足りないように思う。

「もちろん、適時間引いていくつもりだ。強化種になどなられてたまるか」

ただ、と彼女は続ける。

「程よく肥えれば『本命』が姿を見せるかも知れない。望みは薄いかな」

なるほど、闇派閥残党か。

シヤクテイ達が目を光らせているところに呑気に姿を見せるとも思えないが……しかし、リヴィラの街の時のように強硬な手段を用いる可能性もある。

罠を仕掛けておいて損はしないか。

「その辺りはこれから神ニョルズ達と相談しながらだな」

モンスターは倒したが、メレンが干上がったでは困る——と。

彼女の言葉に、ひとまず頷いておく。

まあ、ここまで肩入れしたのだ。できればうまくまとまって欲しい。

「とはいえ、『ニヨルズ・ファミリア』も少し揺らいでいる。何であれ、性急には進められない」

「何かあったのか？」

「いや……。なかなか優秀な団長だという話だ」

なるほど、あの若頭は密輸や食人花^{ワイオラス}について勘づいていたのか。

「ただ、悪いようにはなるまい。神ニヨルズが善神であることに変わりはないのだから」

それは……何とも返事に困る話だった。

丸く収まるならそれに越したことはない。ひとまずはそれで納得しておこう。

「ところで、『フランケルの館』の方はどうなった？」

ともあれ、そこでシャクティは話題を変えた。

「さて。残ってたのは走り書き程度だ。全容はよく分からない」

彼女が訊いているのは、もちろんあの研究室のことだ。

誰が最初に言い出したのか……気づけばそういう暗号が定着していた。

あれから、亡者の『介錯』やら残された走り書きの『解説』やらを仰せつかっている。

「ただ、あの様子から考えて、予想が大きく外れてるって事はないだろう」

まあ、解説と言わねばならないほど悪筆ではないが。

むしろ、読みやすい部類の字だろう。

「『ソウルの業』の復活か……」

別に不可能という事はない。『火の時代』であれば……それこそドラングレイグ時代であつても、自覚なく会得している者たちは多くいた。

ボンハルト然り、ルカティエル然り。

いや、あの時代に名を馳せた英傑たちは、おそらく独力で『ソウルの業』に開眼してははずだ。

この『時代』の人間に同じことができないとは思えない。

実際、あの屋敷の主が『ソウルの業』を会得しているのは疑いないことだった。

もつとも、問題はある。

「正確には強化だな」

あるいは、効率化というべきかもしれない。

この『時代』に篝火はなく、火防女もない。

これでは、例え『ソウルの業』に開眼しても成長させるのは難しい。それこそ、『ソウルの器』である不死人にとってすら容易なことではない。

この辺りは、それこそドラングレイグ時代と同じだ。

加えて、最も効率的にソウルを回収できるであろうダンジョンは神々に押さえられて

いる。

効率を上げようとするのは、むしろ必然であろう。

その一環として『暗い穴』に興味を持つのもまた自然な流れと言えよう。

何より——

(あの屋敷の主が目指していることも概ね同じだ)

不死人の行きつく果て。それを意図的に生み出そうとしている。

そうとしか思えない。だとすれば、あの亡者たちはさしずめ殉教者ともいえるべきなのだろう。

しかし、だとするなら。

「やはり、あの屋敷の主は【黒教会】とは別の組織と考えた方が良い」

「何故だ?」

「『暗い穴』はすでに完成された技術だからな」

かつてカアスが語った『闇の王』——火の篡奪者たる【亡者の王】を生み出せる。

ユリアたちがその確信を覚えるほどに『暗い穴』は完成されていたはずだ。

【薪の王】に並び立つ……あるいは、それ以上の王モを生み出せる。

その確信を抱かせるほどの力。『暗い穴』とは、そういったものだ。

「ユリア……【黒教会】の連中だとするなら、この『時代』に適応させるためとしても、

少々迷走しすぎている。これはまったく別の何者かが手探りで同じ場所を目指していると考えた方が良い」

まあ、この『時代』に迷い込んだのがユリアではなく【黒教会】の下っ端で、そいつが右往左往しながら復活を目指しているという可能性も全くないと言い切れないだろうが。

「【黒教会】とは別に亡者を生み出している者たちがいるだと……？」

心底嫌そうにシャクテイが呻いた。

まあ、それはそうだろうが。俺だってゾツとしない話だ。わざわざ自分達から『不死の呪い』を復活させようなどとは。

(ああ。それも必要なことなんだろう)

クソツたれが。胸中で吐き捨てた。

まったく、この『時代』の何もかもが気に入らない。

霞やアイシャと出会い、何とか忘れていたつもりの憎悪が再び火の粉を舞い上げた。「任せておいてなんだが……お前はあのメモを何故読める？」

シャクテイの言葉に、ため息とともにそれを吐き出した。

ここはまだ滅んでいない『時代』だ。

不死人が独りで暴れ回ったところでどうなるものでもない。

胸中で呟き、闇の奥底にその火を沈め込んだ。

「何故と言われてもだな……」

嘆息交じりに呻く。

そもその話として、別にあれは暗号文などではない。

確かに、少々この『時代』風に変形しているが……。

「あれはウーラシールで使われていた文字だ。それなりに魔術に通じている奴なら読める」

いや、正確には魔術というより闇術だが。

いずれにしても、ウーラシールに連なる何かを知っている者なら読めないはずもない。

「ウーラシール？」

そういう意味では不用心だが……博識なシャクティでも読めないなら、暗号のようなものか。

「黄金の魔術の国だ。俺が生まれた頃にはとつくに滅んでいたがな」

そして、滅び逝くその国を彷徨ったこともある。

まったく、我ながら何とも奇妙な経験をしているものだ。

「……何でこいつ、こんなに博識なんだろうね？」

「さてな」

アイシャとシャクティが顔を見合わせてため息を吐いた。

……それは『理力』や『集中力』をソウルで強化しているからとしか言いようがないわけだが。

でなければ、ただの放浪者が魔術など使えるものか。

「あの屋敷を漁つても、もう大したものはないだろう」

目ぼしい書籍だの冊子ノートだのは持ち出されている。あるいは、破棄されたのか。

残っているのは、亡者と走り書きされた紙片くらいか。

実験器具らしきものもいくらか残っているが……シャクティが確認したところ、さほど珍しいものではなかったらしい。その手の店に行けば、大半は誰でも購入できるのだとか。

「むしろ、本当の持ち主の所在を探った方がいいだろうな」

となれば、あの屋敷そのものを辿っていった方が持ち主を見つけやすかろう。

……まあ、それこそその辺りは本職のシャクティに丸投げするしかないのだが。

「とりあえず、分かったことは後でまとめて渡す。……ただ、そういうのは初めてだからな。分かりづらくても文句は言うなよ？」

「仕方あるまい。新人教育のつもりで付き合おう。これから先、機会も増えそうだから

な」

それは何というか……正直なところ、苛烈スバルタな予感がする。

(いや、それにしても……)

長年かけて机仕事一筋でのし上がってきた男が漁師になり、年季の入った不死人が今更机仕事を教え込まれるとは、世の中つくづく何が起るかわからないものだ。

これだから、『生』とは恐ろしく、そして面白い。

……

異変は、唐突に訪れた。

「ぬう……!?!」

否。すでに起こっていたのだ。

だが、巧妙に隠されていた。

否。それも違う。

覗き込めばこうなることが分かっていたから、あえて隠してくれていたのだ。

「どうしたのだ、ウラノス!?!」

フェルズに返事を返すだけの余力がない。

祈祷が……ダンジョンの封印を維持できない。

続けられ、墮ちる。この闇は、私かみには封じきれない。

だが、祈祷をやめれば、オラリオが陥落^{おち}する。

否。この『闇』を野放しにすれば、下界そのものが……天界すら墮^{おち}とされる。敵はただのモンスターなどではないのだから。

「ぐ……あ……があ!？」

脂汗がにじみ出る。悪寒が酷い。神座から転げ落ちそうだ。

このままでは――

『要の方。聞こえていますか?』

誰かが、祈祷に割り込んできた。互いの力が共鳴しあい、悪寒が治まる。

それどころか、千年背負ってきた重圧までがいくらか和らいでいた。

『しばらくの間、この『大穴』は私達が封じます』

大きく息を吐いている間にも、その声は響いていた。

おそらく、この声の主こそが今までこの闇が私に見えないようにしていた者だ。

だが、封じると……?」

(いや、可能だ。彼女と共にある者になら)

かの者であれば、今の私の真似事をするくらいは造作もあるまい。

現に、こうして祈祷――ダンジョンの封印を肩代わりしてくれている。

いや、あるいは元々そのために……。

『灰の方を。この『呪い』が爆ぜてしまう前に』

分かっている——と。その声に返すより先に、共鳴が途絶えた。

しかし、封印はまだ続いている。ダンジョンも、かつて我らが恐れたこの『闇』も。

少なくとも、今はもうあの『闇』に苛まれていない。

(時が満ちようとしている、か……)

回帰は許されず。運命は止まらない。

(お前の言う通りになったな……)

もはや、我々の思惑は破綻しつつある。かつて交わした『密約』は意味を失おうとしている。

しかし、ダンジョンが限界だという事実だけは変わらない。

私達が知らなかった……いや、忘れていた存在が目覚めた今、千年の封印が破られる

日もまた近い。

(アルトリウスよ……)

いや、その程度では済むまい。

約束された終わりになき終焉が近づいているのだ。

遠く『時代』すら超えて、あの王達を呼び寄せるほどに。

第二節 今一度、誰も知らない伝説を

1

メレンの街で何だかよく分からない騒ぎに巻き込まれ、最終的に自爆特攻かましてから、早いものでもう二日が過ぎたらしい。

「ニャー……。お休みも終わりかニャー」

絶対に死ぬと思つた傷も、もはや見る影もなかった。

流石は「ディアンケヒト・ファミリア」。流石は「デア・セイント戦場の聖女」。

伊達に高い金筆り取つてる訳じゃないニャ。

(いや、違うのかニャ?)

その彼女とのやり取りを思い出し、小首を傾げた。

それは目が覚めて、とりあえず生きていることを確認してからのこと。

(これ、一体いくらかかるんだニャー……)

真つ先に思い付いたのはそんなことだった辺り、我ながら世知辛い。

とりあえず、アガートラム銀の腕にはなっていないが……油断はならない。

最上級のエリクサーなら五〇万ヴァリスはくだらないのだ。

そこに治療師ヒーラーの魔法代まで加わるとなると……かなり本気でゾツとしない。

最悪、踏み倒して逃げるしか——と、そんな覚悟を決めていたのだが。

「いえ、そこまでの金額には」

回診にきた【戦場の聖女】デア・セイントは、あっさりと言った。

「単純な外傷はほぼ全て癒えていましたから。私が行ったのは解毒だけです」

それに関しても、もう【ガネーシャ・ファミア】から支払われています。

オラリオ最高の治療師ヒーラーはそう言ったのだった。

つまり、ミヤーの命の恩人は【戦場の聖女】デア・セイントではないという事なのか。

いや、毒が回っていても死んでいたから、まったく無関係とは言えないだろうけど。

で、それから——

「ですが、念のため、一晩はこちらで過ごしていただきます」

と、ミア母ちゃんを前にしても全く動じずにその聖女様は言い切ったのだった。

そりや、ミア母ちゃんも本物の鬼ではない。怪我人を無理やり連れだすことはせず、

もう一日お休みになったのだった。

と、いつても。

驚くことに、体はほとんど完璧に元通り。一番派手にやられた腕と足はまだちよつと引きつった感じがするけど、普通に生活する分には全く問題はなさそうだ。

そのうえで刺激のない病室で過ごす休日など実につまらないものだったのだけれど。「何だか損した気がするニャー」

そういうえば、結局誰が治療してくれたのだろう。

すっかり聞きそびれてしまった。……まあ、下手に近づいて治療費を請求されても困るので、遠くから感謝の念だけを送っておこう。

「それだけ元気なら、もう問題はないようですね」

そう決め込み、お日様の光を浴びながら背伸びをしていると、制服姿のリユーが言った。

実際のところ、完全に完治とは言いがらい。

まだちよつと体中が引きつっている気がする。おのれ、乙女の玉肌になんてことを。

(やった奴出てこいニャ)

いや、自爆だった。

それなら、全部あの変態が悪い。もういつペンぶち殺してやるから出てくるニャ。

(あ、やつば嘘ニャ)

あんな面倒なの、二度も相手にしたくない。

「ところで、シル。もしや体調が悪いのではないですか？」

今のナーシー——などと、自分で自分にツツコミを入れてみると、リユーが言った。

リユーにシルがくつついてきたのか。シルにリユーがついてきたのか。卵が先か鶏が先か。

とにもかくにも、二人揃って迎えに来てくれたのだが……。

「まさかこの短時間で風邪でもうつされたのかニヤ？」

確かに、シルの顔色は悪い。

いつも大体ニコニコしてゐるくせに、今はそれもなかった。

それなりに長い付き合いだが、こんな姿はほとんど見た事がない。

「念のため、シルも診てもらうかニヤ？」

風邪薬くらいなら、そこまでふっかけられないだろうしニヤ——と、他人事ゆえの樂觀視を決めつつ、提案する。

いや、実際のところ、ただの風邪じゃすまなそうな顔色をしているわけだけだ。

ってか、これって結構ヤバイ感じじゃないかニヤ？

「う、ううん！ 大丈夫、それより早く帰ろう？」

思わずリユーと顔を見合わせていた。

さて、シルはこれほど病院嫌いだったのだろうか。それとも薬が嫌い？

あまりそういう印象はなかったのだけだ。

と、いうより——

「何かあるのですか？」

「ううん！ 何も無いよ！」

今のシルは、まるで今すぐこの場所から離れたがっているような気がする。

しかし、何故？

(ここは「ディアンケヒト・ファミリア」でしょう？)

確かに主神は若干ならず守銭奴だと聞いているが……しかし、ここはオラリオ。日々生傷が絶えない冒険者の街だ。そんなところで治療院だの薬舗だのを敵に回すような間抜けはいない。

というか、いたとしてもどうせ長生きできない。

大体、主神はともかく「戦場の聖女」^{デア・セイント}は聖女の名に恥じず、住民からの信頼も厚いと聞いている。

とりあえず、店に来るゴロツキどももあんまり悪くは言わない。

時々やってきては痛飲して帰っていく犬^{シアンスローブ}人の女……は、まあ、愚痴を聞く限り多分商売敵とか恋敵とか何かそういう感じのだから大目に見ておくとして。

悪く言っているのは大体難癖付けて金を巻き上げようとか、安く買い叩こうとかしてまんまと失敗した奴らしくいか。

(そういう奴らは大体しばらくすると見なくなるしニヤ……)

……まあ、死んだかどうかは知らないが。一番多いのはミャーたちにまで難癖付けて出禁を喰らうってオチだし。

いや、それはともかく。

「やはり、誰かに診てもらった方が……」

柳眉を寄せて、リユーが言いかけた時、

「なっ?!」

すぐ背後——治療院の中から、破壊音と悲鳴が響き渡った。

（怪我人が錯乱して暴れてる？ それとも、ゴロツキかニヤ？）

いずれにしてもおかしい。動乱は収まるどころか激しくなっている。

扉一枚挟んだ先で、何かただならぬことが起きている。

おかしい話だ。あの聖女様はL.V. 2。

ダンジョンに挑むオラリオの冒険者ですら、その半数がL.V. 1だと言われている。

つまり、大体のゴロツキならあの聖女様一人ですらどうにでもなるわけだ。

手に負えないというのであれば、異常事態イレギュラーと言っている。

「クロエ」

と、なれば。この暴走妖精バースーカールが黙っているはずもない。

「少しの間、シルを頼みます」

何だかんだ言つて、このお人好しはこういう騒ぎを見逃せないのだ。
どこからかともなく、愛用の小太刀を引き抜く。

「仕方ないニヤ」

幸い、ミヤーも愛用の暗剣を身に着けている。

護衛など専門外もいいところだが……よつほどの化け物でも出てこない限り、シル一人くらいは守れるはずだ。

「行きます」

言うが早い、リユーはたった今出てきたばかりの扉に駆け寄り、躊躇いなく蹴破つた。

後で修理代請求されても知らねーニヤー——などと。呑気なことを言つてはいられなかつた。

「なツ?!」

店の中で暴れていたのは三匹のモンスターだった。

まったく訳が分からない。

「何で地上にモンスターがいるニヤ?!」

いや、この前のフィリア祭のように「ガネーシャ・ファミリア」から脱走したとして、何で治療院の中にいるのか。どこから入り込んだのか。

仮に裏口から入ったとして、何でここまで誰にも気づかれなかったのか。

と、いか所もそも——

「なんかあのモンスター気持ち悪くねーかニヤ?!」

元々モンスターというのは嫌悪感を抱かせる存在だ。

だが、アレは……いや、今抱いている感情はそれとは何かが違うような——

「知らない」

「ニヤ?」

リユーもまた無理矢理に絞り出したかのような声を上げた。

「あんなモンスター、私は知らない……!」

「何ですって?」

リユーは元々凄腕の冒険者だ。確か四〇階層かそこらまで潜っているほどの。

ちなみに、今のところ「ロキ・ファミリア」の到達階層が五八階層らしい。今は五九

階層を目指して遠征中だと、この前やってきたお得意様^キは言っていたけれど。

ダンジョンにはほとんど縁がないので、その一八階層分がどれくらい厚い壁なのかはよく分からないが……それでも、かなり上位の到達階層と考えていいはずだ。

そのリユーが見た事がないモンスターとなると——

(『深層』のさらに深部のモンスターなのかニヤ?)

それこそ、「ロキ・ファミア」とかその辺が相手するような奴なのか。だとしたら結構ヤバイ。下手をするとシルを抱えて全力で逃げるしか――

「ひ……………」

そのシルが、引きつったような悲鳴を上げた。

酔った冒険者に恫喝された時だってこんな反応はしないというのに。

「クロエ!!」

そちらに注意を向けたその一瞬が隙となった。

リユートの叫びより早く、モンスターが三匹ともこちらに向かって突進してくる。

「くッ!?!」

二匹はリユートが足止めしたものの、最後の二匹は突破してきた。

ただ、思ったよりは速くない。

化け物揃いの「ロキ・ファミア」でも死にかけるような怪物ではない――

(げ……………)

奇妙に長い腕を掻い潜り、その胸に暗剣を滑り込ませた途端、前言を撤回したくなつた。

(……………いつも魔石がねーニヤ?!)

となるとあれか。メレンで暴れてたなんか変なの親戚とかそーいう感じなのか。

(つーかマジで気持ち悪いニヤ?!)

モンスター顔の顔面が視界一杯に広がっている。

何かもう、本ツ当に気持ち悪い。

そもそも巨大な頭そのものが不気味だ。とげとげの頭にいくつも赤い目。

それだけでも不気味だというのに、大きく開いた口からは無数の手のようなもの生えている。

しかも手招くように蠢いている。

「こつち来るニヤア?!」

慌てて剣を引き抜き、思い切り蹴り飛ばす。

嫌悪感もさることながら、あのままでは押し倒されていたらどうだろう。

こんな怪物に押し倒されるとかゾツとしない。というか、押し倒されたりしたら最悪死んでいた。

「気を付けるニヤ! こいつ、魔石がないニヤ!」

兎にも角にも何とか間合いを確保し、体勢を立て直し——ついでにリユーに向かって叫ぶ。

その間にも、その不気味なモンスターは長い腕を振り回す。

動きは単調だが、威力の方は結構洒落ならない。

長い腕は鞭のようにしなり、破壊力を生み出している。

加えて連撃だ。下手をすると防御してもそのまま削り取られかねない。

(つていうか！ 何でこいつらシルを狙っているんだニヤ?!)

どう考えても、背後で完璧に震えあがっている——何だって今日に限ってこんな反応を——シルを狙っているようにしか思えない。

(やつべーニヤ!)

全く経験がないとまでは言わないものの……誰かを守りながら戦うというのは正直専門外だ。

この前の「イレギュラー正体不明」の気分がちよつとだけ分かった気がする。

これは確かに厄介だった。

「クロエ、避けなさい!」

「ニヤ?!」

リユウの鋭い叫びに従って飛び退く。

と、同時。闇の塊が石畳を粉碎した。

(魔法?!)

いや、そんな馬鹿な。

魔力を用いるモンスターならともかく、魔法そのものを使ってくるなんて聞いたこと

がない。

それだけでも不気味だつていうのに、この魔法はなんだか気味が悪かつた。炸裂する闇に、戦慄とは別の理由で尻尾の毛が逆立つ。

恐ろしいだけなら、まだ分かる。

しかし、何だか……

(ミヤーに被虐趣味はないはずなんだけどニヤー……)

その闇を浴びたい。その闇に溶けてしまいたい。

何故だかそんな誘惑が一瞬だけ沸き起こっていた。

まったく薄気味悪い魔法だった。

いや、今はそんなことよりも——

「やっべえ!?!」

やはり慣れないことはすべきではない。

とつさに飛び退いたせいで、その一瞬シルの守りが疎かになった。

その機を逃さず、最初の一匹がシルに襲いかかる。

(間に合うか——!?!)

自分の間抜けさに毒づいている暇もない。

ひとまず致命傷だけでも避けなくては。メレンで自爆した時と同じような覚悟を固

めて疾走する。

このまま体当たりする。それだけでいい。だから、もっと早く——！
そして、もう間に合わないのだと自覚した。

「逃げるニヤああああああ!!」

その絶叫は意味をなさない。

次の瞬間には振り回された腕が、シルを引き裂く——
はずだった。

「るあア——」

しかし、その一瞬が訪れるより早く、私より確実に一階位分は速い人影が、そのモンスターを蹴り飛ばしていた。

……
「凶狼」……?」

ヴァナルガンド

ロキ行きつけの酒場——『豊饒の女主人』の制服を着た猫キャットピートル人が呟く。

ついでに、同じ格好をした女がすぐ後ろで腰を抜かしていた。

店の中でもやはり同じ格好をしたエルフがモンスターを相手にしている。

まあ、そんなことはどうでもいい。

冒険者相手の酒場を女だけで切り盛りできている時点で、それなりの用心棒がいるの

は分かっていたことだ。……あの女将だけでも充分すぎるような気もするが。

いや、そんなことよりも——

(つたく、今度は何だつてんだ?)

五八階層でミノタウロス擬きを。五九階層でクソツたれな精霊擬きをぶち殺し。

地上に戻る途中で忌々しい毒妖ポイズン・ウエルネスの蛆の大群に出くわして。

フィンの命令で特效薬の買い出しにやってきたかと思えば、今度は地上で得体の知れない化け物と出くわすとは、まったくクソツたれな話だった。

(こいつらもただのモンスターじゃねえな)

元々不気味な面がさらに無残なことになっているというのに、その化け物はまだ生きていた。

この耐久力——と、いうよりあの独特の『感触』はこいつらがデーモン側の存在だと告げている。

(地上への一斉召喚つてのがもう始まってるとか言うんじゃねえだろうな)

敵の狙いは地上における『穢れた精霊』の一斉召喚。

赤い髪の化物女どもの計画シナリオを、フィンはそう仮定した。

あの『宝玉』の能力からして、不可能という事はない。というより、すでに地上で食人花ワイオラスが確認されている以上、計画は進行していると考えて動いた方が良い。

もしこいつらがその先兵だとするなら、厄介だ。

フィン達はまだ一八階層で足止めを食らっていて、肉体的にも物資的にも消耗しきつている。

もつとも——

(大した敵じゃねえな)

この化け物どもだけに限れば、別に大した相手ではない。

飛び掛かつてくるそいつの腕を下から蹴り上げ——その脚を降ろすついでに脳天を蹴り砕く。

続けて、もう片方の腕ごと首を蹴り折った。そのまま身をかがめ、念のため両足を砕く。

最後に仰向けにすつ転んだそいつの胸を思い切り踏み抜いた。

ひとまずのその辺りで、赤い目玉から光が消えた。

通常なら明らかにやりすぎだが……あの牛頭と同類なら、油断はならない。

もつとも、これだけ壊してやれば、万が一生きていたとしても今まで通りには動けない。

くたばった。そう判断して、そのまま加速する。

店の中で暴れられれば、特效薬の確保に影響を及ぼしかねない。

そして、仮にこれが『先兵』だとするならばあまりに都合が悪い。

「がるあああアー！」

今一つ聞き取れない声で詠唱していた二匹目の顔面に跳び蹴りを叩き込む。

とはいえ、そのまま店の奥に吹き飛ばしてしまえば本末転倒だ。

僅かに体を捻ってそのまま顔面を踏み潰す。

「邪魔するんじゃないエー！」

エルフに絡んでいる三匹目を、店の外まで蹴り飛ばす。

もちろん、外で暴れさせる気もない。

足元で暴れている方の腕を引っ掴み——そのまま最大限の加速。

まだ宙に浮いたままの三匹目に、そのまま叩きつける。

石畳が砕け、陥没するほどの衝撃。

だが、まだ生きている。予測はしていたことだ。

「るあああアー!!」

先に立ち上がった二匹目の頭部を下から蹴り上げる。

加速はまだ生きている。ならば【スキル】——【双狼追駆】^{ソルマニ}の効果は健在だ。

その効果は『加速時に『力』と『敏捷』のアビリティ強化』。

加速により強化されたその一撃は、二匹目の首を引き千切り、薄気味悪い頭を天へと

蹴り飛ばした。頭を失えば、さすがにくたばるらしい。

より一層不気味な面になった三匹目の面も同じように蹴り飛ばしてやろうとしたが……。

(失敗したか)

元々ぐずぐずに潰れていたそれは、千切れるのではなく、完全に飛び散った。

敵の耐久を高く見積もりすぎていた自分に思わず舌打ちする。

精々が『下層』の最下部辺りのモンスター程度といったところか。

(つうか、こいつらあのミノタウロス擬きと同じかよ)

飛び散った脳髓とも血ともつかない何か。それが僅かに体に届いた途端、背中が焼け付くような悪寒に襲われる。

我ながら矛盾しているとしか言いようがないこの感触は、あのミノタウロス擬き……

正確には、それに寄生していたらしいあの『汚泥』を浴びた時と同じだった。

「チツ、何だっつてんだ……」

落ちてきた二匹目の頭を軽く蹴り飛ばしながら毒づいてると――

「何てこと……」

悲鳴のような声で、一人の女が呻いた。

「……………おい、どうしたっつてんだ？」

その女……アミッド・テアサナーレに声をかける。

冷静沈着なこの治療師ヒーラーが取り乱すところなど見た事がない。

大体、彼女の二つ名——【戦場の聖女デアセイント】とは、たった一人で対階層主戦の戦線を維持したことを称えるものだ。

そんな雌おんながいくら本拠地ホームに侵入されたとはいえ、モンスター相手に自失呆然とするはずもない。

「ベートさん……」

呆然とこちらを見上げてくるその雌おんなの姿を改めて見やる。

白衣の何ヶ所かが裂け、血が滲んでいるところから、襲われたのは間違いない。

それだけでこうなるとは思えなかった。

この程度の戦闘は何度となく経験しているはずだ。

「あのモンスターどもは何だ？ どっから湧いて出た？」

「よく、分かりません。何故、どうして、こんな……」

どうにも要領を得ない。いつもの冷静沈着な治療師ヒーラーの姿はなかった。

「おい、そのエルフども」

「いえ、私達にも……。同僚を迎えに来ただけですのうで」

腰を抜かしていた同僚の無事が確認できたからか、今の【戦場の聖女デアセイント】よりはいくら

か落ち着いているエルフも、首を横に振るばかりだった。

「いいから、知ってることを話せ」

「知っている事と言われましても……」

少し困ったような顔をしてから、そのエルフは言った。

「先ほども言った通り、少々怪我をした同僚を迎えに来て、帰るところだったのです。治療院を出てすぐに中から破壊音が聞こえてきました」

そして、踏み込んだらこのモンスターが暴れていた——と。その女エルフは言った。

確かに訳が分からない。だが、それでもこの女は重要なことを言った。

「つてことは、てめえもこいつらには気づかなかつたつてことか？」

「そうなります。少なくとも私達が病室に向かい、同僚と共に治療院を出るまではこれといった異変はありませんでした。……少なくとも、私は何も感じませんでした」

そう。それだ。そこがどうしても解せない。

(このエルフどもが見落としただと?)

腰を抜かしていた女はともかく、この女エルフと猫女はこちら側の人間だ。

……と、言うより。こいつの匂いは昔どこかで嗅いだ覚えがある。

となれば、それなりに腕は立つはずだ。そいつらが、中に入つてなお見落としたとな

ると——

(まるで突然湧いて出たみてえじゃねえか……)

しかし、ダンジョンの中でもないというのにそんな事が起こりえるのか。

(いや、待てよ……?)

五九階層で遭遇した『穢れた精霊』。あれと同じような奴がリヴィラの街でも暴れたとあのバカゾネステイオナどもが言っていた。

変容した食糧庫フランチで見た——あの化け物女どもが飼っていた『宝玉』とやらがモンスターに寄生した結果だとか。

そのうえで、フィンはあるの化け物女どもの狙いを『穢れた精霊の地上召喚』だと予測した。

だとしたら、こいつらはその先兵のようなものなのか——

(あア?)

などと、思考に没入していた隙に、治療院の奥から冒険者らしき一団が飛び出している。

入り口辺りに立っていた俺を押し退けてだ。

それもまた珍しい事といえれば珍しい事だが……今はどうでもいい。

(気でも狂ってんのか?)

そいつらは、三匹のモンスターの死体に駆け寄って泣き言を言い始めた。

まるで、仲間を失ったかのように。

いや、それどころか「ディアンケヒト・ファミリア」の団員たちまでが駆け寄っていき、その冒険者どもを慰め始めた。誰も彼もが人間であるかのように悼んでいる。

余りに奇妙な光景だった。そんな言葉で言い表すのが馬鹿馬鹿しいほどに。

「あれはいつたい……?」

「どーいうことニヤ?」

困惑しているのは、女エルフと猫女も同じだった。

「凶狼」ウァナルガンド。それに、そちらのお二人も」

その奇行を問い詰めるより早く、神妙な顔をした治療師ヒーラーの一人が声をかけてきた。

「皆さんには感謝を。これ以上の被害を出さずに済みました」

「んなことはどうでもいい」

そいつの言葉を遮って、問いかける。

「いったい何があった? あの化け物どもはどこから出てきたってんだ?」

「それは……」

口もつてから――

「ところで、傷が開いているのではないですか?」

その治療師ヒーラーは露骨に話を逸らした。

「うげ。マジだニヤ……」

猫女の腕と足から血が滴っている。

感じる匂いからして、なかなかの出血量だ。

まさかその匂いに惹かれて——というわけではないだろうが。

「こちらへ。手当てをします」

近づいてきたのは、アミッドだった。

とりあえず、いつもの鉄仮面に戻っているようだ。

有無を言わず——ついでに呼び止める隙もなく——その猫女を治療院の奥に連れていく。

こちらを見て少し迷ったようなそぶりを見せてから……結局、女エルフももう一人の女と共に後を追っていった。

あの女ども何も知らないの明らかだ。呼び止める理由はない。

もちろん、アミッドは別だが……治療師としてスイッチが入ったあの女を呼び止めるのは、さすがに厄介だ。

「それで、結局何が——」

仕方なく、残った治療師ヒールに改めて問いかける——

「ベートさん!!」

——より先に、誰かが名前を呼ぶ。

振り返れば、他の薬舗に向かわせたはずの団員が駆け寄ってくるのが見えた。

「ロキからの伝言です！ 急いで戻ってくるようにと!!」

「あア？」

今度は何だつてんだ——と、胸中で毒づく。

「何の用か聞いてねエのか？」

「詳しくは。ただ、ダンジョンが完全に閉鎖された件だと思います」

「ダンジョンが閉鎖だと？」

何を馬鹿なことを。ついさつき出てきたばかりだというのに。

だが、この団員が俺を担いでいるようには見えなかった。

となると——

「……『強化種』でも生まれやがったか？」

可能性としては、それが一番高い……と、いうより他には考えづらい。

あるいは、この化け物どもも——とも思ったが。

(そいつはねえな)

通常の『強化種』なら——と、言うのも妙な話だが——ここまで劇的に姿は変化しない。

全く変化がないとは言わないが、何の『強化種』なのかは大体判断がつく程度の範囲だ。

だが、あの薄気味悪い化け物どもはそうではない。まったく見覚えのないモンスターだった。

いや、モンスターかどうかも怪しいところだ。

やはり『穢れた精霊』かデーモンの仲間と考えた方がしっくりくる。

「い、いえ。まだ自分も詳しいことは……」

情報が足りていない。と、いうよりダンジョンが封鎖されてまだ間もないということか。

（奴らならどうにでもするだろうが……）

仮に閉鎖の原因が『強化種』だったとして、アイズたちなら自力で切り抜ける——とは思うが。

しかし、毒を浴びて寝込んでいる雑魚どもを抱えているのも事実だ。

それに、フィン達もあの『穢れた精霊』との一戦で少なからず消耗している。

万が一『血塗れのトロール』級の『強化種』だった場合、さすがに無視できない。

何より——

（急に湧いて出るつてのが気に入らねえな……）

フィリア祭でもリヴィラの街でも、デーモンどもは急に現れたと聞いている。

俺が通り抜けた後でダンジョン内にいきなり姿を現したという可能性も否定できない。
い。

「チツ、仕方ねえ」

何であれ、今は本拠地ホームに戻るしかない。

舌打ちするその頃には、件の化け物を取り囲んでいた奴らも治療院に引き返し始めた。

あの薄気味悪いモンスターを、経帷子で丁寧に包み、ともに連れながら。

「治療師ヒーラーとしては、失格なのかもしれないが……」

それを見て、傍らにいた治療師ヒーラーもまたひと声残して戻っていく。

「どうかお気になさらず。あなた方の行いはきつと正しかったのだと思います」

それは、何とも奇妙な言い回しだった。

だが、呼び止めている暇はない。まずはダンジョンの封鎖についてだ。

……いや、この騒ぎもそれに絡んでいると見た方が良いのかもしれない。

あのモンスターどもを運んでいた連中の呻き声を声にせず反芻する。

『まさか、アミッドさんでも解呪できない『呪い』があるなんて……』

——と。奴らは確かにそう言ったのだ。

「おお、ベート！ 待ったで！！」

本拠地へと引き返すと、門のすぐ傍でロキが待機していた。

「おい、ダンジョンが閉鎖つてのはどういうことだ？」

「それがまだよー分からんのか。今さっき出てった子らから聞いたばかりでなあ」

ロキの視線を追うと、ここ最近入ってきたばかりの新人どもが何人かいた。

まだ『上層』から『中層』に進めるかどうかの雑魚どもだ。

こいつらが影響を受けたとなると、ダンジョンの完全閉鎖は単なる誇張ではなさそうだった。

「何でも、『異常事態』が発生したらしいんやけど」

そいつらから視線を戻す。

どうせ詳しい話とはとくにロキが聞き出している。

「何やいつもと様子がちやうねん。何人たりともダンジョンに入る事罷りならんってな感じや」

「ああ？ それだけか？」

仮に『強化種』が原因なら情報収集も兼ねて、手頃な派閥に冒険者依頼なり強制任務

なりを押し付けている頃だ。

何しろ『強化種』は積極的に他のモンスターどもを襲っては魔石を喰らい、自らを強化し続ける。

時間が奴らの味方をする以上、早期決戦こそが鉄則だ。

いくら腰の重いギルドでも、静観を決め込むはずがない。

時間をかければかけるだけ厄介になり、結果として俺達のような大派閥に泣きつく羽目になる。

ギルド長は余計な借りを作るような性格ではない。

仮に事態を甘く見ているとして、それなら今度は『ダンジョンの完全閉鎖』などと大それた真似をするはずもなかった。

「【ガネーシャ・ファミリア】の連中に押し付けるつもりか？」

街の憲兵でもあるあの連中は、ギルドにも近い。

結果として厄介事を押し付けられるというのも通例といえは通例だが……

「あー……。どうやらな。今はちよい難しいかもしれん」

ロキの反応は妙に歯切れが悪い。

「俺達が留守の間、何かあったのか？」

「あった。けど、オラリオやない。メレンでや」

「ああ?」

メレンといえはオラリオの海の玄関。交易における重要な拠点だ。

ついでに言えば、海産物を卸す漁業派閥「ニヨルズ・ファミリア」の縄張りでもある。

とはいえ、オラリオの一部ではなく、税金の話で定期的に揉めているらしい。

そういう話にはあまり興味のない俺でも耳にするほどなのだから、かなり根深いのだろう。

他に密輸業者の聖地だというのは『暗黒期』の頃からよく聞く。

「ガネーシャ・ファミリア」の連中が動いたなら、それ関係なのか――

「いや、密輸も無関係やなさそうやけど……」

しかし、ロキは首を横に振った。

「まだはつきりせんをやけど、自分らが『深層』で出くわしたいう『赤黒い人影』が絡んどるっぽい。しかもめっちゃ大量に」

「何だと?」

「それと『^{ヴィオラス}食人花』やな。ギルドが公式にあの新種をそう呼んだ」

「……それで、『ガネーシャ・ファミリア』の連中だけでどうにかなったのか?」

上級冒険者の数ならオラリオ随一だが、団員の練度という意味では俺達や「フレイヤ・ファミリア」に一步劣っていると云っていい。

もつとも、腐つても大派閥の一つ。団長を筆頭にLv. 5も在籍している以上はそう簡単に無様は晒さないだろうが……。

(あいつらの大群を相手にできるか?)

あの芋虫どもが混じっていたとはいえ、フィンやアイス達が苦戦を強いられた相手だ。

確かにフィン達が仮定した『弱点』が正しく、連中もそれに気づいたなら一匹二匹くらしいは何とでもなるだろうが。

(いや、奴らはあの灰野郎と接点があるからな)

あの『人影』の『弱点』もすでに知っていたとしても不思議ではないか。

いや、そもそも――

「表向きはそうなつとるけど……。まあ、十中八九アレが絡んどるやろな」
「だろうな」

オラリオに近く、しかしオラリオではない場所だ。

表向きはギルドの連中も強権を振るえない。それに、派閥の等級が高ければ高いだけ、オラリオの外に出ることは難しい。もちろん、例外はあるが。

ひとまず身をひそめておくにはちようどいい場所だ。

「だが、あの灰野郎は何でメレンで暴れたんだ？」

あの野郎は敵対したなら神でもぶち殺すような奴だが、それでも無関係の漁師どもまで殺して回るほどにはイカれていないはずだが。

それとも、漁師どもがトチ狂って喧嘩でも売ったのか。

「まだあんまりはつきりせんけど、例の『新種』が絡んどる以上は闇派閥イウイリス関連やろ。となると、密輸……つまり資金源の一つだったいうんはまず間違いない」

納得できる話だ。それこそ『暗黒期』の頃からそうだった。

「ただ、それを潰すためだったとしても、ちよいとやりすぎな気がせえへん？」

いや、と——こちらが返事を返すより先にロキは続けた。

「必要とあれば女子供でも殺せる。アレはそういう奴やとうちは思う。けど、アレの基準でも今回の騒ぎが『必要』やったかと言われるとなあ……」

そうは言っても今回の相手はただの漁師やで——と、ロキは首を捻った。

「そりやまあ……」

我ながら歯切れの悪い返事だった。

ロキの言葉を否定できるだけの理由はないが、同意するのも癪だ。

「もし仮にニョルズが邪神やった……そーでなくとも金欲しさに密輸以上のことに積極的に関わっていたとして、そんなもちよい派手すぎる。【イシユタル・ファミリア】を一人で潰せるアレが【ニョルズ・ファミリア】にそこまでこずると思えんし」

「案外、あの化物女みてえな怪人クリーチャーになっちまってたんじゃねえか？」

自問するように呻くロキに返したのは、結局そんな言葉だった。

くたばったはずの「白髮鬼」ヴェンデツタが強化されて蘇っていたのだ。

ただの漁師どもがそれなりの怪物になっていたとしても驚きはしない。

あるいは、あのスカした『人斬り』辺りがいたのか。

「ああいや、ニョルズが邪神云々はあくまでもものの例えや。実際、無事っぽいし。やから、アレの狙いはニョルズやない」

「なら、何でメレンで暴れたんだ？」

「さてなあ。……アレがどうこう言うより、闇派閥イウィルスの連中の内輪もめとか下っ端が暴走

したとかそんな気がする。あくまでうちの勘やけど」

神の勘ほど当てにならないものもない気がするが……しかし、この女神は天界屈指の『トリックスター』と呼ばれる悪神だった。

こと悪巧みに関しては、フィンの上を行くといっている。

(……毎回下らねえ騒ぎを起こしやがるしな)

それこそ、フィンやリヴェリアを出し抜いて。

ロキの無茶ぶりに応じるのは眷属の宿命——と、今では諦観し始めている。

せめて幹部で持ち回りに……などという寝言だけは何とか思い止まらせたいところ

だった。

いや、今はそんなことよりも――

「つーことは、あの『人影』も闇派閥イツイルスどもの手下つてことか？」

「まあ、闇派閥側にもアレと同じようなんがいてるのは間違いないやろな」

「そりゃ分かりきつてんだよ」

少なくとも一人。あのスカした『人斬り』野郎がいる。

そして――

「自分らが出会ったそのホークウッドいうのを引き込めたらええんやけどな」

達観と諦観が入り混じった陰気な男を思い出す。

あの『人斬り』と互角に斬りあえるだけの力を持ちながら、自らを雑魚はいしやだと定めていてる。自分など雑魚ほんようだと笑うあのクソ忌々しい灰野郎と同じだ。

全く気に食わない。身の程を知れ。

「メレンに関しては、ひとまずヘルメスを送つていたけどな。あいつはオラリオの出入りも割と自由やし」

波立つ感情を持って余していると、ロキが呟いた。

「……あの神、ぶち殺されねえか？」

確か灰野郎はロキやフレイヤ以上にあの胡散臭い男神を嫌っていたはずだが。

「バレなきや平気やろ。それに今はまだ【ガネーシャ・ファミリア】も留まつとるつばいし」

奴がその気になったなら【ガネーシャ・ファミリア】の連中でも止められやしないと
思うが。

しかし、なるほど……。

「だから、ギルドの連中も押し付けられねえってことか」

あの『人影』を相手にするなら、主力を引つ張り出して行つたのは想像に難くない。
ついでに言えば――

「どうせまだ歓楽街の方でも目を光らせているんだらう？」

「そーやな。あつちも闇派イツイルス閥絡みや。そう簡単に手は引かんやろ」

となれば、歓楽街にもまだ相応の戦力が配備されたままと見ていい。

いくら【ガネーシャ・ファミリア】でも、このうえさらにダンジョン内の異常事態に
対応できるほどの戦力はない。

「ロキー」

そこで、他の団員が駆け込んでくる。

「ギルドの様子はどうやった？」

「ひとまず有志を募って調査隊を編成するようです。また隊長は【ガネーシャ・ファミリ

「ア」の副団長が受け持つと」

「副団長？ イルタたん戻って来とるん？」

【ガネーシャ・ファミア】副団長……確かLv. 5のアマゾネスだったか。

「一部はすでに帰還しているようです。半数は負傷者のようですが」

それはそうだろう。

あの『人影』と『新種』の相手を下なら、負傷者が出ていても何ら不思議はない。

「シャクティたんの方は戻って来とらん？」

団長が戻っていないなら、戦力はまだメレンに留まったままという事になる。

「そこまでは。ギルドも対応に奔走していて、とても詳しく話をしていられる状況では

ありません」

「そらまあそーやろうけど」

うーん……と、ロキが唸る。

「他に何か気になったことはないか？ 何でもええよ」

「どういう関係があるのかは分かりませんが、閉鎖後にダンジョンから出てきた冒険者は全員が治療院に送られているようです」

「はあ？ 全員って例外なくなんか？」

「はい。怪我の有無は関係なく全員です。今のところ、外に出てきた冒険者はいないら

しいと噂している者もいましたが……」

それは、何とも奇妙な話だった。

出てこないというのが事実なら、どことなく不気味な話でもある。

「それと、オラリオ中の治療院にギルド職員が向かっているようです。大手に向かう際には【ガネーシャ・ファミリア】の団員も同行しているとか」

（治療院だと……？）

治療院といえ、あの見慣れないモンスターと遭遇した場所でもある。

そして、連中の素性を知っていきそうな奴らが見せたいくつかの奇妙な言動。

「どうもまた妙なことになってきてるみてえだな」

気になるのは、最後に聞いた独り言だった。

呪い。そう、確かに『呪い』と言ったのだ。

ならば――

呪われたのは『誰』で、その呪詛カースはどんな『結果』をもたらした？

「ちなみに、うちらについては？」

「協力の打診はありましたが、団長達が不在なので保留にしております」

引き受けてきた方が良かったでしょうかと……と、不安げな団員にロキが笑い返した。

「いや、かまへんよ。フィン達が遠征中なのはギルドも知つとる。無茶ぶりするにして

も、あの腐れおっぱいの方やろ。たまには働かせときやええ」

もつとも、そのフィン達はダンジョンの中一八階層で足止めを食らっているわけだが。

気づいたなら、何かしら手を打っているかもしれないが……。

「んで、どうすんだ？」

他の連中がいなくなつてから、ロキに問いかける。

「大体の異常事態イレギュラーなら、フィン達だけでどうにかなる……言いたいところやけど」

「デーモン絡みだとすりゃ、さすがに少しマズいぞ」

毒で寝込んだ連中を抱えている。それを無視したとして、フィン達自身がまだ消耗している。

物資も乏しく、魔剣ポイズン・ウエルネスも毒妖蛆ボイゾン・ウエルネスどものせいでもうほとんど残っていない。

「さつきも言ったように、いよいよとなればフレイヤんとこを動かすやろけど……間接的にでも借りを作ると面倒やなあ」

あくまでダンジョンの異常解決とはいえ、今の状況ではそう言つて恩を押し売りされかねない。

だが、事態は予想の一步上に行くことになる。

いや……あるいは、予想通りというべきだろうか。

もつとも。

どのみち、それを俺達が知るの是一夜が明けてからの事だったが。

2

「まったく、人使いが荒い……」

メレンで少くない犠牲を支払いながら、闇派閥イヴイルス残党の暗躍を阻止してから。

オラリオに帰ってきたと思ったら、今度は謎の呪詛カースの調査を任された。

すでに「デイアンケヒト・ファミリア」や「ミアハ・ファミリア」といった医療系派閥を中心に複数ヶ所から『被害報告』が寄せられている。

何より、その呪詛カースがもたらす『影響』はあまりに悍ましい。

時は一刻を争うのは分かっている。

術者を見つけ出し拘束、あるいは討伐する事に不満があるはずもない。

直ちにダンジョンに向かい、事態を収束させる。それこそが使命だ。

……が。しかし、私とて人間だ。

せめて愚痴をこぼすくらいは許して欲しいところだった。

何しろ、メレンでの戦闘は私にとっても過酷なものだったのだから。

せめて一日くらいは休暇が欲しいと思う程度には。

「まあまあ。ギルドも、手勢を用意してくれたことですし」

「それはそうだが……」

潜伏場所と目されているのは『中層』。その上部だ。

術者自身がそこまでしか潜れない程度の力量である——と、言う保証はないにしても、Lv. 2以上であればまず足手まといになることはない。

だが——

(他派閥と連盟を組むのは面倒が多い)

よほど親密は懇意派閥でもない限り、他派閥の冒険者など商売敵でしかない。

名声を譲ることなどあり得ない。後塵を拝してなるものか。

大なり小なりそういう感情を抱きあっている。

ギルドの指名と、何よりパーティ唯一のLv. 5ということもあって、私がリーダーを担う事に表立った反発はない。

とはいえ、それだけだ。

場所が『中層』なら、自分たちも手柄を立てる余地は充分にある。

ダンジョン閉鎖という異常事態イレギュラーの解決に一役買ったなら、自派閥の——何より自分自

身の名が上がる。

全員がそう言った野心を抱いているのは明らかであり……そして、冒険者である以上仕方がないことだった。

自派閥の団員以外は、隙あらば出し抜こうとする。

その前提の上で連中を統率しなければならない。

(それにしても……)

改めてギルドが用意した援軍を見やる。

私達【ガネーシャ・ファミリア】から六人。そして、いくつかの派閥から集まった二

〇名の有志者。

総勢二六人の上級冒険者によって編成された大部隊だ。

(初動にはずいぶんと思いつたな)

ロイマンの顔を思い出し、胸中で呟く。

容姿端麗と称されるエルフと言えど例外はある。

そんな世の非情を体現したような男で、概ね評判は悪く……そして、実際に善良とは

言い難い。

だが、決して無能ではない。

当たり前だ。

私利私欲にまみれた権威主義者。ただそれだけの者であるなら、ギルド長……いわば団長という重責を神ウラノスがいつまでも任せているものか。

あの【疾風】ですら、奴は白だと認めざるを得なかったのだ。

彼女は復讐を完遂した。しかし、それでも奴はまだ生きています。つまり、そういうことだ。

少なくとも、あのエルフが抱くオラリオへの思いは真摯なものなのだ。だからこそ、だろう。

微かな違和感を覚えているのは。

(これは、誰に対する見栄だ?)

そもそも、この部隊はギルド長の勅令により編成された。

個々人の人格はともかく、パーティとして見ればバランスはいい。

中層の調査とはいえ、少々豪華過ぎるメンバーだ。

これ以上の戦力を集めては、冒険者達に臆病すぎると笑われかねない。

そのギリギリに調整されている。

まず間違いなく、ロイマンが持ちうる知識の全てを注いで編成したものだ。

初動調査で確実に完全に決着をつける。

その覚悟が透けて見えた。

もちろん、ダンジョン内での『失敗』は私達の生死に直結するのだから、その覚悟は常に抱いていて欲しいものだが……。

「おい、いい加減行こうぜ」

「ああ。そうだな」

呼びかけてきたのは、最近加わった同士——と呼ぶにはまだ多少躊躇いがあるが——のサミラが言った。

何しろ今の我らは戦力が分散してしまっている。仕方なく、歓楽街から呼び出したのだった。

（考え込んでいても仕方がないか）

これ以上の犠牲者が出る前に、術者を止めなくては。

思考を切り替え、バベルの地下一階へと降る。

そして、いよいよダンジョンへと踏み入れるといったところで——

「あ、あの！ すみません!!」

駆け寄ってきたのは、一人の魔導士だった。少なくともそのように見える少年だ。

灰色のゆつたりとしたローブを着込み、今時珍しいほどに簡素な杖を携えている。

特徴といえば、ローブに付属するフードではなく、大きな三角帽子を被っていることか。

見覚えのない冒険者だった。

となると、新人だろう。質素な杖も納得というものだ。

——と、思ったのだが。

「えと、僕はヴァンハイム……じゃなかった。『イーリアス』のアリオナと言います。あなた達は？」

その店は確か、神ウラノスの指示で作られた店だったはずだ。

本来ならばバベル内に店舗を構える予定だったが……まあ、予算がつかなくなったらしい。

結局ダイダロス通りの近くに店を構えたのかなんとか。

「私達は、ギルドからの依頼で派遣された調査隊だ。これから、例の——いや、ダンジョン閉鎖の原因を調査に行く」

呪詛カースの存在は、まだ伏せられている。

どうやら施されてすぐに影響が出るものではないらしい。

ダンジョンから戻った者たちの安全確認が済むまで、秘しておかなくては疑心暗鬼に陥って余計な騒ぎが起こりかねない——と、言うのが神ウラノスの判断だった。

いくらギルド直営店の関係者とはいえ、迂闊に情報を流すわけにはいかない。

「……えつと、それなら噂の『深淵狩り』はどちらに？」

「いや、そんな二つ名の持ち主はいなかったはずだが」

団員以外の者たちは私を放ってさっさとダンジョンに入って行ってしまった。

まあ、上層であれば別に問題はないだろうが……しかし、あまり話し込んでいる暇も

ない。

「まさか皆さんだけで行くつもりですか？」

「……そのつもりだが？」

「えと、やめた方がいいですよ！」

心底慌てた様子で、その少年が言った。

「そうはいかん。ギルドの指示だ。それに、私達はガネーシャの眷属だからな」

「でも！」

「悪いが、話は後にしてくれ」

言い継るその少年を強引に振り払い、足早にダンジョンへと潜る。

少年の方は、ダンジョンの閉鎖を受け持つ職員に足止めされたようだ。

「なら、せめてこれを持って行ってください！」

バベルとダンジョンの境目を踏み越える瞬間、少年が何かを放り投げてきた。

反射的に受けとつたのは、掌大の小箱だった。

「中に『黒虫の丸薬』が入っています！ 必ず服用してください！ 短時間なら、それで

凌げるはずですから！」

遠のく地上の明かりの中から、少年の叫び声が聞こえた。

「それ、どうするんだ？」

充分に離れたところで、傍らにいたサミラが問いかけてくる。

「どうすると言われてもな」

ひとまず蓋を開けてみると、中には黒っぽい丸薬がいくつか入っていた。

独特の匂いが鼻を突く。嗅いだことのない匂いだった。

「まさか毒とかじやねえだろうな……？」

「あの少年が闇派閥残党とは思えんがな」

いかにも気の弱そうな顔立ちを思い浮かべる。

あれが演技だというなら大したものだが……そうでないなら、確実に毒牙にかけられる側だ。

とはいえ、得体の知れない薬だというのも事実。

「何かあったのか？」

唸っていると、先にいった他派閥のメンバーが怪訝そうな顔で戻ってきた。

流石に上級冒険者ともなれば、統率者が何時までも追いかけてこないという異常を見逃しはしないし、未知の脅威が潜む場所で隊列を見出すような愚行を犯すはずもない。

「いや、大したことではないのだが……」

簡単に経緯を説明すると――

「いや、んな怪しげな薬は飲みたくねえな」

「そうね。呪詛^{カース}を相手にする前にお腹下したりしたら格好つかないもの。概ね思った通りの反応が返ってきた。

とりあえず異常なしと判断した面々は、ひと声断つてから再び先行する。ひとまず『上層』での脅威は件の術者のみと考えていい。

ならば、あえて隙を見せて『釣る』というのは定石と言っているいいほどだ。「とはいえ、無下にもできんか」

事情は今ひとつ分らないが……少なくとも、あの少年は真摯だった。まるきり無視するのも気が咎める。

「……飲むだけ飲んでおくか」

ここは自分の『耐異常』のアビリティを信頼することに決めた。

「お人好しだねえ」

「お前も飲め。副団長命令だ」

「横暴だろ?!」

「まー『イーリアス』って確かギルド直営の道具屋だし?」

騒ぐサミラを他所に、他のメンバーが言った。

「そーいやそうだっけ。何か不思議なもんを色々売ってるって聞いたな」

「あの草が良いんだよ。あの草が。何だったっけ。緑花草?」

「ああ、あれ扱ってる店ね。なら、試しに飲んどく？ 悪いもんじやないでしょ」

あの少年——と、いうよりその店を知る幾人かも続けて手を伸ばして——

「ぎゃー」

誰からともなく謎の覚悟との共に、一口に飲み込んだのだった。

そして、それから……

3

調査隊がダンジョンに入ったのが夕暮れ時。

そして、そろそろ夜が明ける。

しかし、調査隊は未だに帰還しない。ただの一人も、だ。

「ロイマンよ」

ギルドの最奥。オラリオにおいて最も重要な空間。ダンジョン封印の要。

すなわち、ウラノスの祈祷の間。

そこには今、二人……いや、私を含めて三人の姿があった。

もつとも、私は姿を『消して』いるわけだが。

残りの二人。その片方は無論ウラノス。そして、もう一人がロイマンだった。

「何故、クオンの帰還を待たなかった？」

彼の独断専行は今に始まったことではないが……しかし、ギルド運営の決定権はギルド長である彼のものでもある。

そして、これでなかなか有能な男だ。

普段であれば、さほどの問題にはならない……が、今回は少々深刻だった。

冒険者が怪物へと変貌するという異常事態が多数確認された。

そして、その原因は『深淵』なる厄災。ウラノスの祈祷を喰い破るような『何か』だ。対応できるのはクオンのみ。

従って、ウラノスはクオンを招聘することを決めたわけだが——

「で、ですが、神ウラノス、奴は神殺しの大罪人！ オラリオの命運を託すなど……！」

ロイマンはクオンを招聘せず、独自に調査隊を編成。ダンジョンへと派遣した。

そして——調査隊二六名は未だ帰還せず。

最悪は、全員が『深淵』の餌食になったということだ。

「ロイマンよ」

「は、はい……！」

重々しく、ウラノスが声を上げた。

「お前がオラリオへそぞろ想いを、私はよく知っているつもりだ」

その一点に関して言えば、このエルフはオラリオ最高。その想いは誰よりも真摯で強

い。

買収から脅迫まで、あらゆる手を使った闇派閥相手にも屈しなかつたほどに。

「この百年近く、お前は数多の困難を切り抜けてくれた。……だが、それでも、今回はあの男の力が必要なのだ」

「何故です！ 何故、それほどまでにあの男を!? 一体、奴は何者だというのですか?!」

ロイマンの訴えは、いつそ悲痛ですらあつた。

正体不明。オラリオの大半にとつて、クオンは素上の知れぬ放浪者でしかないのだ。

そんな男に振り回されるなど、理不尽以外の何物でもない。

「……遠い昔」

しばしの沈黙ののち、ウラノスが静かに口を開いた。

「そう。遠い昔だ。『古代』よりも遙か昔。あるいは、私達すら生まれていないほどに遠い過去」

「い、いきなり何を……? 奴とどういう関係が……」

ロイマンがそんなうめき声を上げた。

さもありません。何しろ神々は数億年を生きても言われている。

人間が存在できるはずもない。私とて果たして千年後に『私』のまま存在しているかどうか。

「その『時代』に、三度に渡って人間を救った英雄だ」

「英雄……?」

「そうだ。少なくとも、お前達にとって、彼はそう呼ぶに値する存在だ。……もつとも、クオン自身は、決して認めないだろうがな」

確かにあいつは認めはしないだろう。

むしろ、うんざりとした顔をするのが目に浮かぶようだ。

「ならば、何故神々を殺すのです!？」

英雄とは神の寵愛を受けた者。『古代』ですらそうだった。

直接『神血』^{イコル}を賜るか、それとも精霊を介して力を与えられるか。違いはそれだけだ。

私達にとって神殺しの英雄など矛盾もいいところだった。

「悪行の報い、であろうな」

「悪行……?」

「始祖の神々が幾重にも張り巡らした欺瞞。あるいは今も続く背信」

だから、とウラノスは言った。

「彼は我らを殺すだろう。幾度でも何柱^{なんにん}でも。古い厄災が、二度と目覚めぬように」

「それが真実なら、奴こそが厄災ではありませんか?!」

「私達にとってはそう言えよう。だが、お前達にとっては私達こそが厄災となろう」

全ては遠い昔に定められたものだ——と。ウラノスは小さく呟いた。

「……ッ！　そ、そもそも！　そもそもでずぞ！　その古い厄災とは何なのですか?!」

『呪い』だ。今、ダンジョンに生じている『深淵』もまたその一つと言えよう」

「お、オラリオの！　オラリオの冒険者では、手に負えないとでも言うのですか!?
あなた達と私達^{人間}がともに育んできたこの街では!？」

「いずれは……」

継りつくようなロイマンの訴えに、ウラノスもまた論すように応じる。

主神^{おや}と職員^し。ギルドも構造的には他の派閥と変わらない。

「いずれは追いつく。いずれ必ず、彼らに負けぬ英雄が再びこの『時代』にも生まれる。

私はそう信じている」

だが、と。彼は首を横に振り呻いた。

「今はまだ時が足りぬ。英雄たる『器』はあっても、まだ満たされてはいない。彼らが継いだ『残り火』は、まだ消えかかったままだ」

そして——と、老神は続けた。

「今、私達が直面している厄災は我らにとって猛毒だ。始祖たちですら抗えず、封印するに留まったものだ。私達の『血』を力の源とする冒険者とはあまりに相性が悪すぎる」

「奴は違うと?」

「クオンは知つての通りLv. 0。彼は私達の『血』を寄る辺としてはいない」
「ぬ、むう……」

「そして、まず間違ひなく最高位と言える『耐性』を持つている」
「何故奴だけが？」

「後天的なものだ。スキルが発展アビリティのようなものと考えれば理解できよう」
「特殊な経験によつて『耐性』が生じたと？ 『耐異常』の発展アビリティのように」
「そうだ。そして、その『耐性』を得るに至つた『経験』。それを積むために必要だつたものをまだ所持しているはずだ。だが、今のオラリオにはどちらも存在しない」
「……………」

もはや反論の余地もないのだろう。項垂れるロイマンに、ウラノスが告げた。
「許せ。この一件、お前にはもう少し詳しく話をしておくべきだつた」

「い、いえ……。それは……」

「……そして、これ以上の被害は出せぬ。クオンを呼ぶ」
「ははっ！ 直ちに!!」

平伏して、ロイマンが言った。だが、彼は少しだけ勘違いをしている。
ウラノスは『呼べ』と言つたのではない。

彼は『呼ぶ』と言つたのだ。

指摘するだけなら些細な言葉遊びだが、実際に意味することは大きく変わる。

そして、ロイマンは己の言葉を違えず、直ちにウラノスの神意を形にした。

「ギルドよりお知らせします」

大型の魔石製品から、受付嬢の声がオラリオに響き渡る。

「イレギユラ【正体不明】クオンへ。神ウラノスはあなたを招聘します！ オラリオにいるのであれば、直ちに応じてください。またすべての派閥へ。彼の所在を知る方はギルドへ連絡をお願いします!!」

もつとも、反響はなかった。今のオラリオでクオンに関わろうとする冒険者は稀だ。

あくまでこれは免罪のための下準備。

そもそも、私達は奴の居場所を知っているし、伝手もあるのだから。

……

メレンで『死の瞳』などという古臭い呪いに振り回されてから、もう二日。

……いや、三日か——と。微睡の中、訂正する。

すでに夜は薄れ、太陽が昇りつつある。

朝と夜とが正しく移り変わる。かつて『火の時代』では奇跡のような光景。

それが当たり前に訪れる瞬間、確かに『火継ぎの儀』は終わったのだと感じる。

「ん——」

アイシヤが隙だらけの声を上げた。

彼女が掛布の大半を奪っていく。澄んだ朝の空気が肌に触れ、微睡がすっかり消えていく。

……こういう時、不死人は不便だ。何しろ、寝ぼけるなんて機能はほとんど残っていない。

仕方なく体を起こしてから、寝乱れた髪を掻きむしる。

寝泊まりしているのは、小洒落た旅籠——ではなく、『フランケルの館』と名付けられた廃屋敷。

その一室に遠征用の寝具を敷いて寝ている。

「何か悪いことしちゃったな……」

気分転換に——と思っていたのだが、気づけば結局血腥い事態に巻き込まれている。

これもまた殺した報いという事だろうか。

「朝の潮風つてのは結構冷えるもんだねえ」

ため息を吐いていると、不意にアイシヤに抱き寄せられた。

「そうだな」

冷たさを感じる機能くらいはまだ残っている。

まあ、魔力を宿す特殊な冷気でも浴びない限り凍傷にもならないが。

凍てついたエス・ロイエスすら難なく踏破できるほどだ。

……まあ、少なくとも寒さに関しては『難なく』と言つていいだろう。

ただ、今でも吹雪は嫌いだ。寒いし、何より視界を塞ぐ。

「悪いと思うなら、もう少し温めておくれよ」

クスクスと笑いながら、アイシャが囁く。

まだ朝日が昇るには早い。もう『一戦』くらいはできるだろう。

馴染んだその肌に、指を滑らせる。

程なく、アイシャの肌が熱を帯び、吐息までが湿り気を帯びていく。

楽士とはこういう気分なのかもしれない。そんなことを夢想する。

然るべき場所を然るべきように触れる。

そして『歌』と『舞踊』が生み出されるのだ——などと。

寝ぼけきつた事を考えていたのが悪かったのだ。そう、きつとそうに違いない。

だから、気づくのが遅れた。

「ゴボンッ!!」

「うおあ?!」

と、あまり露骨な咳払いに思わず変な声が漏れた。

「シャ、シャクテイ?!」

とりあえず掛布を引つ張り上げながら、ひっくり返りそうな声を押さえつける。

「取り込み中に済まないな。何度かノックをしたのだが」

その視線に、今は遠いエス・ロイエスの雪原を思い出した。

というか。古き混沌に通じる大穴に飛び込みたい気分だった。

……いや、とりあえず『前哨戦』の内で良かったと思っておこう。

「何の用だい？」

一方で全く動じず——というか、素直に不満に満ちた声と視線でアイシヤが問いかける。

「神ウラノスが呼んでいる。急ぎ、オラリオのギルドに向かうぞ」

「……ノコノコとついていつて殺されないだろうな？」

いや、俺は別に平気だがアイシヤはマズい。

まだ『改宗』とやらが終わっていない。この『時代』の改宗はつくづく手間が多すぎる。

「保証しよう」

果たして、シャクティはあつさりど、そして大真面目に頷いた。

「街中で奇妙なモンスターが暴れたらしい」

「あん？ そりゃ、この前の食人花ワイオラスとやらとは違うのかい？」

というか。食人花ヴィオラスくらいなら、オツタルとカリヴェリア辺りに押し付けておけば何とでもなりそうだが。……いや、ひよつとしてまだリヴェリア達は戻ってきていないのか。

「ああ。違う」

「また牛頭か山羊頭でも出たか？」

山羊だけなら別にそこまでの敵ではない。犬さえ……あの忌々しい犬さえいなければ。

「それとも違うようだ」

と、なると。また面倒ごとを押し付ける気らしい。

ゼノス以外のモンスター関連は冒険者どもに押し付けるといふ契約は、すでに忘れていられるかもしれない。

「急ぎか？」

「当たり前だ」

「一時間……いや、三〇分くらい……」

「さっさと水浴びでもして来い！」

取り付く島もない。いや、それ以前の問題だ。

明らかにいら立っている。

「何かあったのか？」

アイシャと顔を見合わせてから、改めて問いかえる。

「詳しくは分かん。だが、こういえばお前には分かると聞いた」

シャクティはこちらを見て、一言告げた。

「ダンジョンに『深淵』が発生した」

4

夜も明けきらぬうちに出されたギルドの——ウラノスからの勅令。

それを受けて、ギルドにはオラリオ中の派閥から人や神が集まっていた。

「勅令だと——」

「いったい誰が探しに行くって——」

「うちの主神はあいつと関わるのは厳禁だつて——」

「相手は、あの神殺し——」

もつとも、それはあの灰野郎の情報をもたらすものではない。

むしろ逆だ。その勅令の神意について問い詰めている。

……ついでに言えば、ロキも全く同じことをするためにここに詰め寄っているわけだ

が。

(あの灰野郎、今度は何しやがったんだ?)

ダンジョン閉鎖とあの薄気味悪い化け物ども。そして、この勅令。

すべてが繋がっているのは間違いない。そこまでは、俺にも分かるのだが……。

「落ち着いて! 落ち着いて下さあ〜い!」

今にもカウンターを乗り越えかねない雑魚どもに詰め寄られ、ギルド職員——確かうちの派閥の担当者——情けない声を上げている。

他に冷やかashi……無関係なくせに情報だけは欲しがる物好きどもまでギルドに詰め寄ってきたせいで、それなりに広いはずのギルドは人と神で文字通り溢れかえっている。

「こらあかんなあ……。さっぱり埒が明かんわ」

この暇神どもめ!——と、ロキが毒づく。

眷属が戻ってこない——と訴えている神もいるが……まあ、半分は冷やかしだろう。

ロキは派閥が遠征中……何より、团长^{フイン}達がダンジョン内に留まっている。そして、ダンジョン閉鎖の原因だとするなら、早急に情報が必要だ——と。そんな大義^リ名分^ウがある。

今回は当事者だ。もつとも、当事者でなくとも詰め寄っていたのは想像に難くないが。

「いつそアレの居場所知つとるふりして突貫するべきやろか……」

親指の爪を噛みながら、ロキがそんなことを言い出した時――

「うあ……ツ?!」

「ひい……ツ!?!」

不意にざわめきが静まり、人混みが割れた。

(あの野郎……!)

原因はあまりに明らかだった。

何をせずとも道をこじ開けたのは一人の男。

上等な黒衣。

その下には軽鎧。

目深く被つたフード。

背にはクレイモア。左手には竜の紋章が施された盾。

見間違えるはずもない。

灰野郎……【イレギユラ正体不明】クオンだった。

その傍らには【ア、ク、シ象神の杖】の姿もあるが……それに驚くような間抜けはいない。

ギルドや【ガネーシャ・ファミリア】がこの灰野郎と繋がっているのは有名な話だ。

群がる雑魚どもなど見えていないかのように、灰野郎はギルド内に踏み入ってくる。

「来たか。クオンよ」

再びざわめきが生じた。

何しろギルドの奥から姿を見せ、灰野郎に声をかけたのは大柄の老人——いや、老神だった。

ギルドの……いや、オラリオの創設神ウラノス。

滅多な事では姿を現さないギルドの主神が、わざわざ自ら出向いたらしい。流石に騒ぎにもなる。こうして直に姿を見るのは俺だって初めてだ。

「ああ、来たとも」

相変わらず熱のない声で、灰野郎が頷く。

「わざわざ出迎えてくれるとは、よほど追い詰められているようだな？」

「否定はしない」

厳かにウラノスは頷いた。

「状況を教えろ」

小さく舌打ちしてから、灰野郎が短く告げた。

「ああ。……ロイマンよ」

「ははっ！」

何時なく従順に豚エルフが頷くと、棺が乗った台車を引っ張り出した。

「お前であれば、説明は無用のはずだ」

促されるままに、灰野郎が棺の蓋を開ける。

「ベート、ジャンプやジャンプ！」

すかさずロキが裾を引つ張った。前後左右は詰まっているが上は別だ。

みつともない真似はしたくないが……今は情報が最優先か。

「クソツたれが」

舌打ちしてから、ロキを抱えて跳躍する。幸いというべきか、ギルドの天井は高い。

棺の中が見える高さまで跳ぶことも可能だ。

そして――

（おい、マジかよ）

棺の中に納まっていたのは、あの薄気味悪い化け物だった。

まるで人間の遺体であるかのように、胸の上で手が組まれ、葬儀用の花まで添えられている。

「……いつの話だ？」

蓋を閉じながら、灰野郎が問いかける。

「確認されたのは先日の昼頃。場所はまだはつきりしないが、おそらく一四階層前後だ。

調査隊を送ったが誰一人戻らん」

やはり、あの化け物とダンジョン閉鎖は繋がっている。

「調査隊を送っただと？」

そして、灰野郎は知っているのだ。その原因を。

「少なくとも、お前はこれが何だかもう分かっているはずだな？」

「……ああ」

「そのうえで調査隊を送ったと？」

「そうだ」

「毫碌したか？ それともやはり神は神ということか？」

多少はマシだと思っていたが、勘違いだったらしいな——と。

あくまで冷やややかに——しかし、明らか何かを糾弾するように灰野郎は言った。

「否定はしない。調査隊に関しては、全て私の責任だ」

一方で神ウラノスもまた、言い訳することもなく頷く。

うすら寒い闇がギルドを包んだような錯覚。

ウラノスの護衛役らしき「ガネーシャ・ファミリア」の団員たちは言うに及ばず。

周囲にひしめく冒険者たちがそれぞれ得物に手を伸ばす。が……その何割かは腰が引けている。矜持と、危険を嗅ぎ分ける本能のつり合いはその辺りで落ち着いたらしい。

そして、老神の隣では豚エルフが顔を青ざめさせている。ウラノスとロイマン。

ギルドの運営に大きく関わっているのがどちらかなのかは誰でも知っている話だった。

「危険だという事はよく分かったが……そこまでのものなのか。この『深淵』というものは？」

口をはさんだのは象の仮面をかぶった男——いや、男神。つまり、神ガネーシャだった。

その『深淵』という言葉にピンとこなかったのは、俺達だけらしい。

灰野郎はあっさりと言葉を頷いて見せた。

「場合によってはオラリオが消える……いや、それで済めばまだ安いものか。何しろ、ここにはダンジョンがあるからな」

あっさりと告げられたその言葉は、ギルド内に動揺を走らせた。

「え、それは本当に本当なのか？」

ぎよつとした声を出す——が、それでもあまり動じていないように感じられるあたり、その象神も神だけの事はあるのか。

「発生した深淵がどの程度の力を持っているか。全てはそれ次第だな」

灰野郎が動じないのは、別に今に始まったことではない。

「お前でも食い止められぬか？」

そして、調査隊を送り込んだのは神ウラノスではなく、やはり豚エルフのようだ。

主神の傍らで顔を赤くしたり青くしたりとせわしない。

それを知ってか知らずか、ウラノスは問いかける。

「お前、俺を何だと思ってるんだ？」

呆れたように灰野郎が肩をこけさせる。

「一応言っておくが、伝説の勇者とか何とか、そういう都合のいい何かじゃないぞ」

その仕草は気取ったものではなく素ものだ。……いや、ラウルの言葉を信じるな

ら、だが。

どうやら本気で呆れているらしい。

「深淵の主は殺せるかもしれないが……あとはダンジョンの復元力にでも期待しておけ」

そのまま呻いてから、小さく舌打ちをした。

「要するに、俺に深淵を狩れと？」

改めて気取った口調で、灰野郎は神ウラノスに尋ねて見せた。

どうせ答えなど分かり切っているだろうに。

「そうだ。その完遂をもって五件の神殺しの免罪とする」

それを聞いた全ての者がどよめき――

「ほう？　人助けに免罪が必要だとは知らなかったな」

灰野郎は大仰に驚いて見せた。

面白い冗談でも聞いた。そう言わんばかりだ。

……これが演技かどうかは、判断に困るところだが。

「確かギルド職員も殺されかけていたと思っただが……。相変わらず貴様ら神にとつ

て、人の命は軽いものだと思える」

灰野郎が、実に安っぽい殺気を放って見せる。

「大根役者どもが……」

「まったくやなあ」

その『深淵』とやらがダンジョン閉鎖の原因なのは間違いないだろう。

だが、今やっているのはただの寸劇だ。

ギルド――神ウラノスとは決して親密な関係ではない。そう見せかけているといっ

たところか。

呟くと、ロキが鼻を鳴らした。

「それもあるやろけど……。まあ、今の今まで碌な説明をしようとしなかったんはこの

ためやな」

ギルドに人を——免罪理由を知る証人の数を増やすためだと、彼女は吐き捨てた。なるほど、俺達は揃って踊らされていたという事か。

「そういえば、新人がいつ死ぬかで賭けをしているんだつたな。主神と同じような奴が集まるつてのはギルドも同じか」

……もつとも、灰野郎が苛立っているのはあながち演技ではなさそうだが。

その『深淵』とやらはかなり厄介な代物というわけだ。

「あの灰野郎、どこでああいう噂を集めてんだ？」

職員の何人かが露骨に狼狽え、怯えているところを見ると——そして、神ウラノスどころかロイマンまでが特に反論しないところを見ると——単なる皮肉でもなさそうだが……。

しかし、いくら老神どもと繋がっていたとして、それでも奴はギルド職員ではない。そして、ギルドの内情などどんな類であれそう簡単に流出するようなものではないと思うが。

「さあ。馴染みの戦闘娼婦とかやない？」

その歓楽街ももうないわけだが……いや、今はそんなことはどうでもいい。

「まあいい。どのみち深淵は放置できない」

ギルド職員の反応を充分に愉しんだのか。

露骨な殺気を消して、灰野郎は言った。

「この街はともかく、ダンジョンが取り込まれては本当に手に負えないからな」
「任せられるか？」

「ああ。精々賭けでもしながら待っている」

最後にもう一度皮肉を残して、灰野郎が背を向ける。

「おお、そうだった！」

その背中に、象神が声をかける。

「選別だ！ 持っていていけ！」

放り投げられたのは紙袋。

硬質な何かがぶつかる音がしたとなると、中身はポーションの類か。

「新製品だそうだ！ それと、伝言を預かっている！」

それは、ごく短いものだった。

『すまん、任せた』！

預かった伝言というのは、おそらく本当だろう。

だが、それは二柱の神の——あるいは事態を把握している全ての者の代弁だ。

「」

灰野郎は深々とため息を吐いてから、無言で再び歩き出す。

そのままギルドから外へと出る瞬間。

背を向けたまま右腕を横に広げると小さく拳を掲げて見せた。

そして、それから……

「なーんや面白うないなあ」

灰野郎の背中がすつかり遠くなつた頃、ロキが呟く。

苛立っているというよりは拗ねているようだ。

「まるで自分冒険者らは端役みたいやん。ここはオラリオ。うちの庭やのに」

気に入らん——と、ロキのその言葉に肩をすくめる。

確かに面白くはない。ああ、面白くねえ。

「どーせまだ解毒薬も出来上がらんやろし……。ベート、自分も一発かましたれ」

「当たり前だろうが」

ロキが言う通り、オラリオおれたちは冒険者の縄張りだ。

得体の知れない灰野郎に好き勝手させるつもりはない。

5

バベル地下一階。

人気がないその空間にダンジョンの入り口がぼっかりと口をあけていた。意外と明るいその大穴の先へと踏み込み……ふと記憶を手繰る。

最後にダンジョンに潜ったのはいつだったか。確か一ヶ月は前だろう。

そもそも、この『世界』で目覚めてからダンジョンに関わった時間はさほど多くない。精々一年かそこからか。

しかし、それでも……

(還ってきた。ああ、確かに還ってきた)

灰明るく、薄暗い闇。どこからともなく伝わる異形の気配。

血と死と、そして灰の臭い。

そういったものに、自分の体は確かに呼応している。

郷愁にも似た感覚。心は静まり、呼吸が整い、自分を形成する全てに過不足なく力が満ちる。

還ってきたのだ。死と灰の臭いに満ちたここが、いずれ還るべき場所なのだ。

そう囁くように。

「それで、その『深淵』ってやつを見つけて始末すりゃ私達は無罪放免ってことかい？」
「そうなる。だが、調査隊の救出も忘れるな」

奇妙な感慨に浸っていると、同行者が言った。

一人は念を入れてギルドには連れて行かなかったアイシャ。

変装は解き、染めた髪もすっかり艶やかな黒髪に戻っている。

もう一人はシャクティだ。

調査隊には彼女の同僚が……そして、彼女を姉者と慕うアマゾネスが含まれていると
いう。

なるほど、苛立っているのは仕方がないことだ。

「と、いうか……」

ため息を吐いてから、何度目かの質問を繰り返す。

「お前達、本当についてくるつもりか？」

「当然だろう」

異口同音。まったく乱れない返答も何度目だったか。

しかし、相手は深淵。あのアルトリウスですら抗えずに狂気に沈んだ闇だ。

ただの聖職者ではなく、神の眷属としてその血を浴びている……その血こそが力の源である彼女達との相性はまず間違いなく最悪だった。

（今回の『主』がマヌスに匹敵するような奴だったなら、今の俺で勝てるかどうか……）

つまり、篝火と深淵をこれから何往復する羽目になるか——という話だ。

とりあえず直近の危険はアイシャの「ステイタス」が封じられかねないこと。

まして、今回もまた地味に時間制限付きだった。

いやまあ、昔から最初の火が完全に消えるまで——という時間制限があったといえはあつたが。

今回は、それよりもずっと短いだろう。

(……まあ、月が昇るまでよりは余裕があるか)

とりあえず納得しておく。

「それで、二人については？」

「霞とあのドワーフになら、オラリオから逃げ出せる準備をしておけて伝えてきたよ」

「ああ。私も伝えてある」

もちろん、亡者に墜ちる気はないが……念のため霞達と、シャクティ達に任せてある春姫をオラリオから逃がす準備をしておきたかった。

というか。

「伝言じゃなくて、連れ出してくれと頼んだはずなんだが」

未練がましく呻くが、綺麗さっぱり聞き流された。

何だつて好き好んで死に行くような真似をするのか。

そういうのは、一度や二度死んでも平気な不死人に押し付けておけばいいものを。

「ひとまず、調査隊を見つけるまでだ。その先は、彼女達の状態と情報次第。それでいい

な？」

もし生き残りがいたとして。負傷者が大量にいた場合、とても一人では手に負えない。

これは深淵狩りだ。生命力も魔力も可能な限り温存しておきたい。

今はまだ完全に満たされている。自分の体も。エスト瓶と灰瓶も。

続けて、他の回復薬に意識を向ける。

ミアハからの餞別。回復薬用の瓶を満たす濃紺の液体は、ナーザの新作らしい。

曰く二属性回復薬。
デュエル・ボーション

生命力と魔力を同時に回復させるものだという。

ちやうど三本が入っていたので、それぞれ一本ずつ持っている。

（使いどころを考えなくてはな）

一息に両方を回復できるのはこの上ない利点だが……一方で、生命力と魔力を均等に消費していくことはあまりない。

回復薬だけで、あるいは精神回復薬だけで済む局面で使うのは惜しい。

まあ、だからと言って出し惜しみして篝火送りになるのも間抜けな話だ。

それに、女神の祝福のように完全回復ともいえない。過信は禁物だった。

（切り札ってのはそういうものだな）

幸い、補給は安定している。これから先、あれこれと試してみるのが良いだろう。今回はひとまず回復薬か精神回復薬の代わりと割り切っておく。

しかし、それはそうと――

(そうか、ナアーザに依頼すれば良かったんだな)

考えても見れば、ここには彼女のように『調合』できる人間が当たり前にいるのだ。

それなら――

「ああ。……イルタなら、きつと情報を持ち帰ってくれている」

祈るようにシヤクテイが呟いた。

……確かに「フアランの不死隊」や「闇潜り」のように、深淵に耐性を持つ人間はいる。

当然だ。『深淵』とは『ダークソウル』の形態の一つ。

つまり、人間であれば、生きている可能性は皆無ではないということだ。

ならば、今は野暮なことは言うまい。

「行くう」

シヤクテイに頷き、俺達は改めて深淵の探索を始めたのだった。

「さて、ここから先が『中層』だったな」

そこから一二階層まではこれといった異常はなかった。

いや、強いて言えばモンスター数が少なかったようにも思える。

ダンジョンに傷をつけると、その周辺ではしばらくモンスターが生まれ
ない。深淵のせいでそれと同じような現象が起こっているという可能性もあるか。

しかし、それにしても――

「今回は命がいくつあれば足りるんだか……」

連結路を覗き込み、思わず呻いていた。

深淵などソウルの状態が万全であつても飲み込まれかねない。

主を始末すれば解決するとして、本当に今の有様でどうやって勝つたものか。

「いくつあれば……。あの話は、本当に本当なんだね」

「そうだな。普通はいくつあつても足りないと言ふところだ」

途端、二人が怪訝そうな顔でこちらを見る。

いや、不死人同士の冗句など持ち出した俺が悪かつたのか。

「つたく、どいつもこいつも……。凡庸な巡礼者にいつたい何を期待してるんだが」

「謙遜も過ぎれば嫌味にしかならないぞ」

シャクテイの言葉に、もう一度ため息を吐く。

「謙遜なわけあるか。俺より強い奴なんてその辺にぎらにいたぞ」

それこそ、その辺を彷徨っている亡者相手に何度殺された事か。

彼女達のように命が一つしかないなら、巡礼地に辿り着くことすらままならなかっただろう。

（冒険者だったなら……）

ふと夢想にふける。

自分がこの『時代』に生まれたただの生者で、冒険者を志したとして。

果たしてどこまでたどり着けるだろうか。

ただの生者だった頃などもはやくに思い出せず、『神の恩恵』^{フェアルナ}とやらがどの程度の効果を持つものかは今一つはつきりしないが――

（『上層』の途中辺りで蟻に囲まれて死んでそうだな）

あのりりルカが四苦八苦していたのを思い出す。

彼女ほどの慎重さと機転と強かさが、果たしてその頃の俺にあっただろうか。

「……割と現実的だな」

いや、おそらくはない。ましてベルのような成長力など望むべくもない。と、いうか。

そんな高尚なものがあつたなら、たまたま拾った溶けかけのクレイモアだけを頼りに、何の勝算もなくヘルカイトに喧嘩を売ったりしなかつただろう。

なら、多分あの辺で後先考えずに蟻どもに喧嘩を売って――というのはかなり現実味

がある。

「何がだい？」

……いや、ただの生者なら一つしかない命を惜しむくらい知恵は働くと思いたいが。

そんなことを願いつつ、怪訝そうなアイシヤに応じる。

「いや、普通に冒険者をやったなら、『上層』で蟻にでも囲まれて死んでただろうなつて」

その瞬間。死角で燻っていた殺気が燃え上がり、吹き荒れる。

——そして、その陰でいくつかの闇が蠢き始めていた。

6

ダンジョンの封鎖を担当していたのは、ギルド職員と「ガネーシャ・ファミア」の二軍以下。

なら、その目を欺いてダンジョン内に忍び込むのは楽な話だった。

もつとも、灰野郎の匂いはダンジョン内だと妙に分かりづらい。

ダンジョン内を満たす灰の臭いに紛れているとしか思えないほどだが……それも問題はない。

傍らにいる女どもの匂いを追えば済む話だ。

『ええか。ひとまずは情報収集。合流するんは、早くても『中層』に入ってからや』
などと、ロキは言っていたが。

『アレもシャクティたんには気を許しているよろし、二人きり……いや、三人だけなら何や重要なことを喋るかもしれない』

確かに三人いた。そして、【象神の杖】アングレーシヤに気を許しているのも確かのようなのだ。

だが、ロキの読みもそこまでだった。

(あの灰野郎が戦闘中に無駄口叩くかって話だな)

女どもがいる分、口数は多いが……喋るのはクソの役にもたたねえような事ばかりだ。

フィンやロキなら何か価値を見出すのかもしれない——などと空想するのも虚しいほどに。

結局そのまま『中層』の入り口までたどり着く。

(こっからどうする?)

もつとも、連中が『中層』に至ってから、ロキから言付けを受けている。

『その『深淵』言うのが何なのかうちも良く分からん。やから、『中層』から先は事情を知つとるアレと一緒にいる方がええ。理由はギルドからの援軍とかなんとか適当言っ

とき。外に出るまでホントかどうかは分からんやろ。まあ、最後の判断はベートに任せ
るけど——…」

そこで、灰野郎どもがまたくだらない話を始める。

「今回は命がいくつあれば足りるんだか……」

「いくつあれば……。あの話は、本当に本当なんだね」

「そうだな。普通はいくつあっても足りないと言うところだ」

奴ら……と、言うより灰野郎の冗談はいまひとつ笑いだころが分からない。

稀に言うフィンの冗談よりなお難解だった。

「謙遜なわけあるか。俺より強い奴なんてその辺にぎらにいたぞ」

ああ、まったく笑えない。笑えない冗談程イラつくものはない。

牙が軋む。血が沸騰する。

分かる。灰野郎の言葉の意味が、今なら分かる。

分からないはずがない。

(クソツたれが……ッ！)

あの灰野郎が基準としているのは、あのクソ忌々しい陰気野郎ホークウツドであり、スカした『人斬り』であり、あのデーモンどもであり、フィン達が戦りあったという『赤黒い何か』であり——そして、何よりも神なのだ。

それも地上で腑抜けている神どもではない。『神アルカナムの力』を解放した超カ越存在ミだ。奴が見据えているのはそういう領域だ。端から冒険者おれたちなど視界に入っていない。ああ、そうだろうとも。奴の強さは四年前の時点でも図抜けていた。雑魚どもにかかずらう必要などこにもない。

そうだ。その通りだ。

だから――

「いや、普通に冒険者をやったなら、『上層』で蟻にでも囲まれて死んでただろうなって

その言葉だけは許されない。

ぼうけんしやこちら側の雑魚どもにも劣るなどと――！

激情が理性を焼き尽くした。赤く染まった視界の中で疾走する。

灰野郎は未だに背中を向けたまま。左右の女どもは反応すらしていない。

スキルの力を上乘せした蹴りは、しかし掲げられた盾の表面を滑った。

灰野郎お得意の受け流し。

だが、その技術は何よりも機微カイミンクこそがものをいう。

予見できない、対応できない攻撃には意味がない。

それどころか、自ら防御を捨てるだけの愚行に成り下がる。

そんな物騒な真似をしてきた理由はただ一つ。

とつくに接近を勘づかれていたわけだ。

「……ッ?!」

無造作に振り払われた腕に、飛び蹴りの射線があつさりそらされた。

まったく見当はずれの岩壁に半ば激突する……が、ダメージはない。

岩壁に爪を喰い込ませ、強引に立て直す――

「クソが……ッ!」

その時には、灰野郎はこちらを見てすらいなかった。

当然だ。あの技は自分の命を対価に隙を生み出すためのもの。

成功したなら、次の瞬間には確実に殺す。そうでなければ割に合わない。

「まさか猪にまで犬を嗾けられるとは思わなかったな」

止めを刺さなかった理由。それもまた明白だった。

「ぬかせ。その『犬』はフレイヤ様の眷属ではない」

視線の先にいるのは一人の猪人^{ポアス}。

言うまでもない【猛者^{おっじゃ}】オツタル。この灰野郎が視界に入れる唯一の冒険者。

奴はこの猪野郎に隙を見せるのを嫌ったのだ。

「どうでもいいさ。どのみち、お前と遊んでいられるほど暇じゃない」

「俺もそうだ。貴様の相手をしていられるほど暇ではない」

互いに剣を構えながら、二人の怪物が睨みあう。

そして――

――

一瞬の交差。断末魔の悲鳴もなく地に斃れたのは――

「これが『ディアンケヒト・ファミリア』で暴れたモンスターか」

治療院で見た……そして、ギルドで棺に収まっていたあのモンスターだった。

「それがどこかは知らないが、おそろくな」

剣と盾を構えながら、灰野郎が舌打ちした。

「お前のせいで囲まれただろうが……」

今までどこに潜んでいたのか、ダンジョンの薄闇の向こうから赤い眼光が蠢いている。

「物の数ではあるまい」

互いに背中を向けあつた怪物どもが言いあう。

「勇ましいことだ。……なら、後で泣き言を言うなよ。確かにお前が殺したんだ」

「……何？」

「来るぞ」

あの薄気味悪いモンスターどもが一斉に襲いかかる。数は一〇匹ほど。もつとも、それでどうにかなるような連中ではないが。

それから起こったのは、戦闘と呼べるようなものではない。すべてが斬り倒れるまで、数分とかからなかった。

「まったく、出る幕がなかったねえ……」

アマゾネス——【麗 傑】がぼやく。

実際、その二人だけで充分過ぎた。

「それで、こいつらは一体何だ？」

死体を一瞥して、【猛者】が灰野郎に問いかける。

「とりあえず、魔石でも取り出してみたらどうだ？」

「……いいだろう」

頷くと【猛者】が手頃なモンスターに専用のナイフを突き立てた。

モンスターの死体……と、いうより魔石は可能な限り砕くか回収するのが冒険者の鉄則だ。

下手に捨て置いて、『強化種』が生まれては面倒なことになる。

女どももそれに倣い始めて……仕方なく、それに加わる。

手近な一匹にナイフを突き立て――

「ぬ？」

「ああ？」

猪野郎と声が重なった。

魔石の位置は心臓部分というのが通例だ。

人や動物の形に近いモンスターなら間違いないそうなる。

だが――

「魔石がない、だと？」

その事例は、もう経験済みだ。デーモンどもにも魔石がない。

それだけなら、もう驚きはしない。

だが、猪野郎はすでに三匹を灰に変えている。

つまり、こいつらは魔石を持っている奴と持っていない奴が混じっているということだ。

「当たり前だな」

灰野郎は、何事もなかったように肩をすくめた。

そして、結局。三匹の死体がダンジョンに残った。

「これは一体どういうことだ？」

「シャクティ。調査隊は何人だった？」

「……二六人だ」

心なし青い顔をした【象神の杖】アンクローシャが短く答える。

「なら、生き残りは多くて二三人だな」

「やっぱり、そういう事かよ……」

灰野郎の言葉に、思わず吐き捨てていた。

今まで見聞きしたすべてが繋がる。

『『深淵』という呪詛カースが関わっていると聞いたが……』

「そうだ。深淵に飲まれた人間はよくて即死、そうでなければ異形化する。耐性がない限りな」

「つまり、この三匹……いや、この三人は調査隊だと？」

「あるいは、この階層を探索していた冒険者か。いずれにしても、元人間だ」
治療院で見た奇妙な行動。

実際のところ、あれは奇妙でも何でもない、ごく平凡な行動でしかなかったというわけだ。

死んだ仲間を悼む。人間が人間に対して行うごく当たり前の行動だ。

「クオン……」

猪野郎が小さく唸った隙に、「象神アインクレーシャの杖」が灰野郎の名を呼ぶ。

「本当に彼らを元に戻す術はないのか？」

「ない」

ごく簡潔に、灰野郎は言い切った。

「これはそういう厄災だ。もし生じたなら、国諸共に葬ることも珍しくない。放つておいたら、その国だけではすまないからな」

「……。では、調査隊はすでに全員がこうなっている？」

「さあな。これじゃ人相だつて検めようがない」

猪野郎の言葉に、灰野郎が小さく肩をすくめる。

人相どころか、背中の「ステイタス」すらまともに読み解けそうになかった。

「かつて、深淵の兆しを探り、生まれた異形どもと戦い続けた集団がいた」

不意に、灰野郎がそんなことを言った。

「彼らは一国ですら葬るほど優れた戦士たちだ。その力で、深淵から世界を救ってきた」

だが、と——灰野郎は続ける。

「彼らは衆人から忌み嫌われていたそうだ。不吉の前触れとして」

闇に落ちた人間を、救うのではなく殺す。そこに名誉や名声などあり得ない。

「それでも、殺すしかないのさ。調査隊や地上で暴れた冒険者達が、ただの被害者だとし

ても」

深淵狩りとはそういうことだ——と。灰野郎は最後にそう締めくくった。

「冒険者とはダンジョンに富と名声を求める者だと聞いたが……。そんなものはここに
はないぞで？」

【正体不明】クオン。
イレギュラー

神どもですら熱狂させるオラリオをただ一人冷め切った目で見やる何か。

冒険者から『灰アッシュ・オブ・シンダーの燃え滓』と忌み嫌われる得体の知れない男は、あくまで冷ややかに
そう言った。

もつとも、ここで退くことなどあり得ない。

「俺はフレイヤ様の命に従うのみ」

最初に応じたのは、猪野郎だった。

「あの方が深淵を狩れと仰るなら、俺はそれに応じよう」

それに、とそいつは続けた。

「俺がここに来たのは、ギルドからの正式な強制任務ミッシェンによるものだ」

「何だと？」

灰野郎の視線が鋭くなる。

「ウラノスの仕業か？」

「いや、ロイマンだ」

そう言つて、猪野郎は一枚の書状を「象神の杖」アンクレーシヤに手渡す。

すでに開封こそされているが、紛れもなくギルドの印璽インシールが施されている。

「これは確かにギルドの正式な命令書だ。ロイマン直筆の著名サイインもある」

「あの野郎……」

「まあ、待て。今のロイマンなら、多少凄まじければ著名サイインの一つくらい書くだろう」

毒づく灰野郎を「象神の杖」アンクレーシヤが嗜める。

「自分からそのミツシヨンとやらを受けたと？」

灰野郎は怪訝そうな顔をするが……この猪野郎なら、その程度の事はやりかねない。

「というか、それは本物なのか？」

「私相手にギルドの公文書を偽装する馬鹿がいるものか」

「いや、探せば一人か二人くらいは……」

「いるかもしれないが、それは神フレイヤや「猛者」わろじやではない」

「……モンスターを街中に放つような奴らだぞ。まさか忘れていないだろうな？」

灰野郎が半眼になつて呻く——が、当事者たちはそれを黙殺することに決めたらしい。

ギルドを介して主神同士が決着をつけた話を蒸し返すな——と。そんなところか。

「まあいい。説明はした。後は好きにしろ」

自分の不利を悟ったのだらう。舌打ちしてから、灰野郎は言った。

「どうせ深淵の中まで連れていけるのは一人だけだ」

何人いたところで、どうなるものでもない。

さつさと歩きだしながら、奴はそんなことを呟いた。

7

そして、『中層』へと踏みこむ。

一四階層前後というなら、この階層にあつたとしてもおかしくはない。

もつとも、見たところこれといった異変は感じられないが……。

「それで、どうやってその『深淵』つてのを探す気なんだい？」

言うまでもないが、ダンジョンは広い。例え『中層』でもだ。

オラリオが滅びかねないというなら、隅々まで探し回っている暇はない。

「近づけば近づくだけ、辺りが暗くなっていく。ウーラシールと同じなら、だがな」

そのウーラシールつてのがどこか分からねえが……。

「暗くなるだど？」

「そうだ。そして、暗い闇が地面に広がっていたなら当たりだ。何、見れば分かるさ」

「闇と言われてもな……」

怪訝そうに顔で【象神アインクローシャの杖】が呻いた。

「他に言いようがない。大体、名前からして『深淵』だぞ?」

「それはそうなのだろうが」

眉を潜めるその女を他所に、今度は猪野郎が言った。

「今のところ、これといった変化はないようだが」

暗いといえば薄暗いが、そんなことはいつものことだ。

一三階層は土石系の構造。

床も壁も岩盤でできたここは、一見すればその辺の天然洞窟にしか見えない。

それは入り口辺りと大差がないが……あそこよりは幾分か薄暗い。

より洞窟らしい、とでも言えればいいか。どことなく湿った空気が、それに拍車をかけ

ている。

「確認するが、それはこの階層でも分かる変化か?」

「おそらくな」

「つつても……」

改めて周りを見回してから、毒づく。

「『暗い場所』つてだけじゃ探しようがねえだろうが」

暗闇に匂いがある訳がない。

血臭も死臭も、人間の匂いもモンスターの匂いもダンジョンに満ちている。

その中に、奴らの匂いは感じられない。いないというより、匂いが薄すぎるのだろう。

「ひとまず、正規ルートから外れた場所だろう」

言ったのは【象神アンクレーシャの杖】だった。

「その『深淵』というのがいつ発生したかにもよるが……例えこの数日だとしても、被害者の数が少ない。人通りの多い正規ルートからは外れていると考えていいだろう」

「俺も【象神アンクレーシャの杖】の言葉に同意しよう」

猪野郎が頷く。

少し意外だったが……いや、あの女神の命令なら出し惜しみはしないか。

「『中層』ならば、まだそれなりの人通りがある。特に一四から一八階層にかけては」

「リヴィラの連中か……」

「そうだ。正規ルートにあるなら、ダンジョンと地上を行き来する者達に影響が出る。

だが、今のところ奴らがギルドに駆け込んだという事実はない」

無論、リヴィラの街でも変容した人間が出ているかもしれんが——と、猪野郎が付け

足す。

まさかフィン達もその『深淵』とやらに飲まれてはいないだろうが……。

「一八階層以下が完全に深淵に飲まれてるって可能性もないわけじゃないかな」
などと考えたのを見透かしたかのように、灰野郎があっさりと言う。

「もつとも、それなら異形の数が少なすぎる。まだそれほど広域ではないと考えていいか」

数といえば——と、そう言ったのは戦鬪娼婦^{バーベラ}だった。

「あの異形の中には、魔石を持つてる奴らがいただろう？」

確かにいた。むしろその方が多かつたくらいだ。

「つてことは、あの深淵つてのはモンスターも変容させるわけだ」

魔石を持つてるといふなら、そういう事になる。

それに、奴らから取り出せたのは通常の魔石だ。あの芋虫だの蛇もどきだのとは違う。

通常のモンスターが変容しているはずだ。

「近くにあるなら、それなりの数がうろついでるんじゃないかい？」

それに、調査隊の連中もだ。

仮にさっきの三人が調査隊だとするなら、奴らは深淵には辿り着いていることになる。

「正規ルートから外れて異形どもを探す、か」

「そうだ。そこが『暗い』なら近づいてるってことだろう」

それに、と続ける。

「匂いが濃くなりや、そつちでも追える」

犬の真似をするのは気が乗らないが……しかし、手掛かりは多いに越したことはない。
い。

「……よし。その案で行こう。闇雲に彷徨っている暇はない。それに、ダンジョンの事は冒険者の方が詳しいだろうからな」

灰野郎はそんなことを言った。

「何か、ちよつと薄暗くなつてきてないかい？」

しばらくして、戦闘娼婦パーベラが呟いた。

「言われてみれば……」

「気のせい、とは言い切れねえか……」

普段ならまだ気にならなかつたかもしれない。その程度の変化だ。

だが、確かに暗い。

もつとも、別に視界を塞ぐほどではない。少なくとも、今のところは。

「ああ。一四階層に近づくほどに暗くなっている」

「そうだな。……こいつは一三階層は軽く流して一四階層に進んだ方が良いか」

「あの異形どもも現れねえしな」

今のところ、普通のモンスターでもしか見かけない。

いや、そいつらですら普段より少ない。まるで何かに怯えて息を潜めているかのよう
だ。

「この階層は床が抜けるんだったか」

この階層の特色……迷宮ダンジョンギミックの陥穽はその名の通り『崩落』だ。

床にいきなり大穴が開く。

ただそれだけといえればそれだけだ。前兆もないわけではない。

よほどノロマな奴以外は引っかけかりはしないだろう。……それだけなら。

だが、『中層』は『上層』よりモンスターどもが生まれてくるのが早い。そちらにばかり
気を取られ、足を疎かにしている間抜けはその『落とし穴』に落ちる羽目になる。

進出したばかりの雑魚どもがくたばる理由の一つだろう。
伊達に『最初の死線』ファーストラインなどと言われてはいない。

もつとも——

「ああ。都合よく空いていけばいいんだが……」

「見かけたら適当に飛び込めばいいさ。どうせ正規ルートの外に用があるんだからね」
女どもが言うように、慣れてしまえば近道ショートカットに使える程度のものだ。

よほど間拔けな落ち方をしない限り、冒険者なら何とでもなる。

もちろん、下からドラゴンどもが狙撃してくるはずもない。

もつとも、今回に限って言うなら——

「飛び込んだ先が『深淵』ってオチが怖いな」

小ロンドの時はそんな感じだった——と、灰野郎が肩をすくめる。

さつきから聞き覚えのない地名ばかり口にする。

俺自身も元はオラリオの外から来たクチだ。

親がオラリオの冒険者で、生まれた時から派閥に所属しているような奴らよりは外のことを知っているつもりだ。

だが、聞き覚えがない。大体、ダンジョンもねえような場所でどうやって……

「だが、時間が惜しいのは確かだ。見かけたら飛び込もう」

胸中で自問していると、灰野郎は言った。

「俺が先に飛び降りる。安全だったら、合図するさ」

ひとまず、そういう事になった。

なつたはいいが……。

「お前達、日頃の行いが悪いんじゃないか？」

「うるせえ！ てめえが言うな!!」

わらわらと寄ってくる——というか、視界を白く染めるほどいるアルミラージ。その先頭にいる何匹かを群れに蹴り返しながら怒鳴り返す。

「ヤつきまでは静かだったんだけどねえ！」

出くわした迷宮ダンジョンの悪意は崩落ではなく、怪物モンスターの宴パーティ。

戦闘バトル娼婦ベラが言うように、今まで息をひそめていた分を取り戻すかのような大群だ。

具体的に言えば——

「おおおッー！」

猪野郎が手にした大剣を一閃。魔石が砕かれたモンスターどもが灰になり——その剣風によって灰を残す事すらも許されずに消し飛ぶ。

立て続けに繰り返される蹂躪。しかし、それでもまだ終わりが見えないほどだった。

この前の『大発生』よりも多い……いや、あれは『大移動』だ。

集まった奴らを始末すればしばらくは収まる。

だが、今回は始末した端から補われているとしか思えない。

「つたく、キリがないねえ。どっかで怪物モンスターの宴パーティが起こってるのかい?!

戦闘バトル娼婦ベラの言う事は間違っていないだろう。

だが、正確でもないはずだ。おそらく、散発的に続いている。これこそが正しく『大

発生』だ。

實際、すぐその壁が崩れ、驚くほどの量が湧いて出やがった。

これも、『深淵』という異物がダンジョンにもたらしている影響といったところか。
(今はどうでもいいがな！)

一匹一匹は敵ではないが、とにかく煩わしい。本気で面倒くせえ。

死角から飛んできた石斧トマホークを掴み取り、適当な方向に投げ返しながらかぶく。

「うお!!」

モンスターどもが返してよこしたのは炎だった。

ヘルハウンドどもの一斉放火。

火元の数が多すぎた。実際の威力はともかく、見た目の派手さだけなら『深層』にも通じる。

「雑魚どもが! うざってえんだよ!!」

その火の海を飛び越えて当たるを幸い、端から蹴り殺す。

それでも全く減った気がしないのだから、つくづくイカれてやがる。

「ダンジョンは閉鎖されている。今は突破して振り払う事を優先しよう」

放置しても、今なら他の冒険者を巻き込む可能性は低い——と。

同じようにヘルハウンドどもを刺し殺しながら「象神アンクシヤの杖」が言う。

「仕方あるまい。今は時間が惜しい」

まったくくだ。こんな雑魚どもにかかずらつていて、万が一にもオラリオが滅ぶようなことにあつたら笑い話にもならない。

「クオン！ 道を拓け！」

「魔力は温存したいんだがな……！」

【象神ア、ク、シー、シヤの杖】の指示に、「灰野郎が左手に『火』を灯す。

詠唱は聞こえなかった。炎系の魔法を行使する際、こいつは詠唱を行わない。

代わりに、その『火』が膨れ上がり——そして、火柱が連続した。

蛇のように連なる業火が行く手を塞ぐモンスターどもを飲み込滅滅させる。

その貪欲さはまさに蛇そのものだ。

「突破する。はぐれるな！」

「てめえが仕切るじゃねえ！」

未だ火の粉が舞うその『道』にもすぐにモンスターどもが殺到する。

獣がことさらに火を恐れるというのは、ただの迷信でしかない。

「いいから早く行け！ 取り残されても面倒は見ないぞ！」

それがモンスターなら言うまでもないことだ。

馬鹿なやり取りを交わしている暇はない。

「ようやく振り切ったか……」

最低でもLv. 3——自称Lv. 0は無視する——のパーティーだ。

包围さえ突破すれば、後は加速で振り切れる。

もつとも、それでも一四階層の連結路を駆け下り、正規ルートからまでは追い回され続けたが。

「これは帰りが面倒だねえ」

「言うな……」

女どもが言いあう。

だが、確かに面倒だった。

何しろ、ダンジョンが閉鎖されている以上、あのモンスターどもは帰りもそのまま残っている。

「獲物がいなくれば少しは散るだろう」

「そう願いたいものだ」

肩を落とす【象神アंकウシヤの杖】。

「……なるほど、確かに暗くなつたな」

それを他所に猪野郎が呟いた。

「そっぴやそっぴや」

一三階層との差は明らかだった。まだ明かりが必要になるほどではないが——

「フーン！」

猪野郎が、死角から飛び出してきた異形を叩き斬った。

当然、仕留め損ねるような無様をさらす訳がない。ないが――

「なるほど、ここからが本番ってわけか」

戦闘娼婦が、得物で肩を叩きながら毒づく。

そいつを皮切りに、ダンジョンの奥からまたぞろぞろと異形どもが集まってくる。

「どうやら、ヘルハウンドだったモノも混じってるようだな」

明らかに四足で移動してくる異形が混じっている。

若干小柄なのは、まさかアルミラージどもか。

「……あまり犬にはいい思い出がないんだがな」

「あんた、どれだけトラウマ抱えてるんだい？」

灰野郎が戦闘娼婦と馬鹿なことを言い合う。

「来るぞ。集中しろ」

【象神の杖】の言葉に応じるように、異形どもが一斉に動き始める。

真つ先に飛び込んだのは、灰野郎だった。

武器を斧槍に切り替え、ヘルハウンドだったらしい異形どもをまとめて薙ぎ払う。

「変わってるのは見た目だけだな」

「そのようだね」

女どももそれぞれ異形を貫き、叩き斬りながら言いあう。

実際のところ、原形が分からないほどの変化に反して、力の方はほとんど変わっていない。

多少は強化されているが、俺達にとっては誤差の範囲でしかない。

「ならば、物の数ではない」

猪野郎の言う通りだった。

文字通りに数が足りない。これなら、全滅させるのは大した手間ではない。

問題は――

「五人、か……」

魔石のない――元人間は五人混じっていた。

これで、調査隊の生き残りは一八人。……いや、調査隊とは関係ない冒険者かもしれないが。

「本当に胸糞悪い代物だねえ……」

「ああ。……早く始末しなくてはな」

女どもがそれぞれ呻く。

「思ったより、人間の数は増えていない」

「ああ。ならば、一四階層以下が全滅というわけではなるまい」

「そう願いたいものだな」

一方で、灰野郎と猪野郎はそんなことを言い合っていた。

「しかし、モンスターまで変容させるとは……」

「おかしいのか？」

猪野郎の問いかけに、灰野郎は軽く首を横に振る。

「いや、そこまでは言わない。だが、少し気味が悪いな」

振ったが、続けて奇妙なことを言った。

「ああ？」

「まあいい。先を急ぐぞ」

こっちの声が聞こえなかったのか、それとも単に無視しただけか。

灰野郎はさっさとダンジョンの奥——より暗いその領域へと踏み込んでいった。

そして、先に進むごとにダンジョンは暗くなっていた。

通常のモンスターはもう見かけず、襲ってくるのは全て異形ども。

深淵に近づいていることは疑いない。

「人の匂いがする」

そんな中で、ようやく探し求めていた匂いを感じた。

「調査隊か？」

「多分な。もうだいぶ散つちまつてるが、結構な人数だったはずだ」

調査隊が踏み込んだのが昨日の夜。

ダンジョンが閉鎖されていなければ、もっと分かりづらくなっていただろう。

「そいつらが進んだ方向は分かるか？」

予想通り、正規ルートからは外れている。

そのせいで——とは言わないが、道も多少は入り組んでいて面倒だ。

「ああ。こつちだ」

もつとも、匂いはもう捕まえた。迷うことはない。

その道標を辿っていった先にあつたのは、そこその広間。ホール

そして——

「これはまた大群だな」

「まつたくだな」

異形どもの群れ。

「そろそろ面倒になつてきたぜ……」

薄気味悪い面にも見慣れてきた。

それに、今ならもう元人間の見極めもつく。

最も人型に近く、何より元モンスターと比較して格段に強い個体がそれだ。元々の能力の違いか、それとも何か別の理由があるのか……。

それは分からないが、それが人間だとあらかじめ分かるなら……

(……下らねえ)

どのみち、あの女——【戦場の聖女】ですら解呪できない『呪い』なら、他に方法などありはしないのだ。

殺す。それが雑魚どもに対する最初で最後の手向けだ。

「まずは散らす。あとは各個撃破。それでいいな?」

「ああ」

短く【象神の杖】が頷くと、灰野郎は再び左手に『火』を灯した。

杖の代わりだ。本人に聞いたわけではないが、その程度の予想はできる。

そして、灰野郎ではないが……いい思い出のない代物だった。

【Soul Shower】

その『火』が青白い輝きを帯び、そして放たれる。

狙いは天井。いや、違う。

その光弾はいわば『雲』だ。本命は、そのあとで降り注ぐ『雨』。

無作為に降り注ぐそれは異形どもの何匹かを射殺し、群れをたちまち浮足立たせる。
「るあああッ!!」

群れからはぐれた間拔けな羊。その末路など決まり切っている。

最初の一匹を蹴り殺す。弱くて脆い。ただのモンスターだ。

「はあああッ!」

化け物になつても本能は失つていないのか、時折群れて襲つてくる奴らがいる。

おそらくは、元アルミラージ。そいつらを戦闘娼婦の大朴刀がまとめて薙ぎ払う。

「シッ!」

元ヘルハウンドが火を吐き出す——より早く、アンクレーシヤ「象神の杖」の槍が貫いた。

フィンほどではないにしても鋭く速い。

「温い」

「——」

そして、猪野郎と灰野郎が飛び込む。

それで終わりだった。

いや……

「うざつてえ奴らだ!」

増援。もつとも、大した数では——

「Tenebris dispersens」

女の声と共に『闇』が飛び散り、その異形どもを抉り飛ばした。

「貴公、こんなところに何用かな？」

どこか掠れたような声。それと共に、闇の向こうから誰かが近づいてくる。

黒いローブ。奇妙に節くれた枯れ枝のような杖。仮装用のようなとんがり帽子。

いかにも『魔女』といった風体の……そして、見覚えはない女だ。

「ここは異形の住処。私とて、例外ではないのだぞ」

その言葉に「象神アଙ୍କローシヤの杖」が身構えたところを見ると、調査隊でもなさそうだ。

と、なれば。こいつが『深淵』とやらを生み出している元凶か、もしくは……

「カルラ……」

この灰野郎の関係者だ。

「きつと忘れられたと思っていたが、嬉しいよ」

絞り出すかのように灰野郎が呟くと、その女はクスクスと笑った。

枯れた、陰気な笑い声だ。

そのまま、その女はこちらに近づいてくる。

「——ッ」

灰野郎が一步退く。まるで怯えたかのように。

怯えたかのように？ ありえない。

こいつは猪野郎だろうがデーモンだろうが——神すら恐れぬ雄だ。おとし

この枯れた女が、いったいどれほどのものかというのか。

「相変わらず酷い男だな。今さら怯えることはないだろう。私と貴公の仲ではないか」
それを見て、女は露骨に嘆いて見せた。

「カルラ、なのか？」

「ああ、そうだとも。弟子の癖に師の顔を忘れたか？」

この女、今弟子と言ったか。

「まったく、何をそんなに怯える。まさか、私が貴公を糾弾するでも思っているのか？」

「……………」

思っているのだろう。

まさか痴情のもつれ——なんて話ではないだろうが。

「貴公が迷っていたのは知っている。あの選択が、その果てのものだったのだということも」

責めるものか——と、その女はいつそ呆れたように笑った。

「貴公が例え何を選んだとしても、私が貴公に感謝し、抱く想いに、何の変わりもありは

しないよ」

その女が、灰野郎に抱き着く。

あのクソババアが、昔——ひよつとした今もか——アイズにしていたかのように。

「ああ……」

そして、灰野郎もまたその女の細い体を抱き返した。

まあ、こいつがそこらで女をひっかけるのは珍しい話ではないはずだが。

「コホン」

と、それからしばらく——多分、一分くらいだろう——して、女どもが露骨に咳ばらいをした。

そういや、アマゾネスだけじゃなく「象神アングレーシャの杖」とも噂があるんだったか。

ラウルの奴は否定していた気したが。

ともあれ、灰野郎は慌ててその女から離れる。

一方で、その魔女は二人の女を見やり……ゆるゆると首を横に振った。

「やれやれ、相変わらぬ酷い男だ。手の早さは変わっていないと見える」

「バツ！ シャクテイは違う！」

「……『は』？」

聞き返され、灰野郎が絶句する。

時々思うんだが、こいつ実はバカなんじゃねえだろうか。

「ふうん……。あんたがカルラって女かい」

「おや。貴公、私の名前を知っているのか？」

「そいつがたまに寝ぼけて呼んでたからね」

「……相変わらず酷い男だ」

「ひよつとして、昔からそういう奴だったのかい？」

一方で、女どもは慣れたものらしく揃ってため息を吐くばかりだ。

（何つーか……。こいつ、あのバカソネスより脳みそが蕩けてんじやねえのか？）

あのアマゾネスは歯止めがぶつ壊れているが、それでも間違いない一途だ。

……そして、俺が言うのも何だが、これ結構最低な話なんじゃねえだろうか。

アレの腐れおっぱい嫌いはただの同族嫌悪やー！——と、以前酔っぱらったロキが叫

んでいたが……。案外慧眼だったのかもしれない。

呆れるべきか。笑い出すべきか。それとも苛立つのが正しいのか。

自分の感情を持って余す羽目になり、深々とため息を吐く。

「しかし、シヤクティとは。もしか、シヤクティ・ヴァルマ？」

ため息を吐き切る前に、魔女がそんなことを言った。

「何とிட்டか、確か……」

「【象神アଙ୍କクレーシヤの杖】か？」

「ああ、そうだ。貴公がそうなのか？」

「ああ。私がシャクテイ・ヴァルマだ。神々からは【象神アଙ୍କクレーシヤの杖】の名を賜っている」
領いてから、彼女は逆に問いかけた。

「何故私の名前を？」

それは、奇妙な質問だった。

何しろ、その女はL.V. 5。第一級冒険者であり、大派閥【ガネーシヤ・ファミア】の団長だ。

オラリオの連中なら、知らないはずがない。

「少し前に保護した者たちから聞いただけさ。確か、イルタといったか」

「生きているのか?！」

魔女が呟くと、【象神アଙ୍କクレーシヤの杖】がその肩に掴みかかる。

「ああ。だから落ち着きたまえ」

悠然と、その魔女は頷く。

「ただ、全員ではない。何人かは深淵に飲まれたようだ」

「ああ……。それは分かっている。何人かと出会ったからな」

小さく嘆息してから、【象神アଙ୍କクレーシヤの杖】は言った。

「保護したといったな。案内してくれるか？」

「もちろんだとも。そのために、ここで待っていたのだからな」

「おい、調査隊の奴らが無事なら、何でさっさと追い返さなかったんだ？」

明らかに暗くなったダンジョンの中を歩きながら、その魔女に問いかける。

「別に深い理由はない。ただ、あの異形どもに囲まれて難儀していただけさ」

「ハッ、だから今まで震えてたつてのかわ？」

「私の弟子がいずれ来るのは分かりきっていたからな。食料が尽きる前に来てくれて助

かったよ」

当然のようにその魔女が言う。

皮肉が通じないのは、灰野郎と同じか。

「あの数を突破できないほどに消耗しているのか？」

調査隊にもそれなりの奴らが集められたと聞いている。

まさか『中層』のモンスターどもに苦戦するような戦力ではないはずだが。

「負傷者は多い。生憎と私は奇跡……癒しの術とは縁がなくてね」

「そうなる、地上に返すのも難しいねえ。あの大量のモンスターがいる限り」

「それはまあ、方法がまるでないわけでもないが……」

灰野郎は何事か呟いてから、

「ところで、カルラ。体の調子、ずいぶん良さそうだな」
「ああ。おかげさまでね」

魔女は杖を振りかざし、短く詠唱を囁いた。

「Tenebrae, punctura」

放たれた闇の塊は、死角から飛び掛かろうとしていた異形を数匹まとめて飲み込んだ。

素性は知れないが、腕の立つ魔導士なのは間違いない。

「立って歩くくらいはどうにかなったよ」

「何よりだ。深淵もたまには役に立つらしいな」

灰野郎が呟いた頃、ダンジョンの奥に明かりが見えた。

微かなものだ。携行用の魔石灯だろう。

「イルター！」

連中が潜んでいたのは袋小路だった。

魔石灯を灯し、それでも足りずに火を焚いている。

その前に、大盾をいくつか並べた簡素な阻塞が築かれていた。

「姉者!？」

その遠くから飛び出してきたのは、赤髪のアマゾネスだ。

「無事だったか!」

「ああ。だが、他の者達は……」

そこにいたのは一二人だけ。まさに半壊といった有様だ。

「アイシヤ?!」

続けて灰色の髪のアマゾネスが叫ぶ。

「サミラ?! あんたこんなところで何やってるんだい?」

「お前が他の連中の世話を押し付けたんだろうが……」

「そうだけど……。まさか「ガネーシヤ・ファミリア」に加わったつてのはマジだったのかい?」

「仕方ねえだろ。『恩恵』もねえのに、いきなり闇派閥イザイルスどもに襲われたんだぞ」

半眼で毒づくそのアマゾネスに、戦闘娼婦バーベトラが問いかける。

「他の連中は?」

「調査隊に参加してんのはオレだけだ。歓楽街が無事なら無事だろ」

「そうかい……。ま、あんたが無事でよかったよ」

「そちらも知り合いだったか。すまないな」

アマゾネスたちを見て、魔女が小さく頭を下げた。

「いや、気にしないでくれ。むしろ、よく彼女達を救ってくれた」

その言葉に、魔女は小さく首を横に振った。

「私はほとんど何もしていない。彼女達の備えが良かったただけだよ」

「備え？」

「この薬のことだ。もつとも、もう中身が残っていないが」

魔女の言葉に、赤毛のアマゾネスがポーチから小さな箱を取り出す。

蓋を開けると嗅いだことのない奇妙な匂いがした。

「飲まなかった者は、もうほとんど生きていない」

「もしかして『黒虫の丸薬』か？」

一番後ろから、灰野郎が呟いた。

「こんなものをどこで？」

「『イーリアス』という店の店員が届けてくれたものだ。今にして思えば、彼はこうなる

ことが分かっていたのだろう」

「『イーリアス』……。そういうえば、この前ウラノス達が言っていたな」

「どういう薬なのだ？」

「さっき言った深淵狩りを使命としていた集団の常備薬だ。深淵への耐性を高める効果がある。……もつとも、気休め程度だがな」

言いながら、灰野郎は古びた小箱を『スキル』を用いて取り出した。

「確かに、飲んでおいた方が安全か。どうやらまだ残っていたようだし……」
「持っていたなら早く飲ませてやれ……」

その小箱を振り、中身を確認しながら灰野郎が呟くと、魔女が呆れたようにため息を吐いた。

ともあれ、その黒い丸薬を受け取る。

「これ、本当に効くのかい？」

「だから気休めだ。それを飲んだところで深淵に落ちたら多分死ぬぞ」

「だが、イルタたちが生き延びたのはこれのお陰なのだろう？」

「そりゃまあ、だからファランの連中の常備薬だったわけだしな。深淵そのものを直接浴びない限りは何とかなる。それこそ、短い間なら闇術への耐性も上がるくらいだ」

灰野郎はあつさりとそのことを言う。

おそらく、こいつ自身には他愛のない話だったのだろうが。

(ファランだと?)

あの忌々しい陰気野郎はファランの剣士と呼ばれていた。

その『ファラン』が『深淵』とやらを殺して回った集団だというなら、やはり只者ではない。

だが……

(聞いた覚えがねえな)

ほの黒い丸薬を見るともなく見やりながら、胸中で眩く。

国を滅ぼすほどの集団だ。

もし実在するなら、まったく聞き覚えがないというのはあまりに奇妙だった。

知らないのが俺だけなら、それでもまだ納得がいく。

しかし、フィンもリヴェリアも……ロキですら知らないとなれば、奇妙どころの騒ぎではない。

毒づきながら、それを口に放り込もうとして――

「ちなみに、素材は聞くな」

「なら、余計なこと言うんじゃないよ!？」

余計なことを言い出した灰野郎にひとまず怒鳴り返しておいた。

……いや、飲んだが。結局、灰野郎と魔女以外の全員が飲んだが。

そして――

「確かに、奇妙な感覚が消えたな」

「ああ。これが効果なのか……」

効果らしきものは、すぐに実感した。

それはいいだろう。だが、

「ところで、何であんた達は飲まないんだい？」

「深淵に立ち入るだけなら別に問題がないからな、俺は。でなけりや、わざわざウラノスが名指しで押し付けてくるか」

「私も縁まででは問題なく近づけるのでね。でなければ、彼女達を止められるものか」
「それに、手持ちも限られている。俺達を使うより、お前達に回した方がいいだろう」
納得だが、どうにも釈然としない話だった。

「これでいいだろう。即効性はないが、しばらく効果は続く。俺が離れてもな」

胸中で毒づいている間に、灰野郎が奇妙な『火』を中空に灯す。

何でも、治癒魔法らしい。赤毛と灰色のアマゾネスの傷も確かに癒え始めている。

「ここでもう少し待っている。すぐにガネーシャが援軍を寄越す」

その明かりの下で、灰野郎が言った。

「助かるが……どうやってガネーシャに連絡を入れたのだ？」

「その辺は、蛇の道は蛇とだけ言っておこうか」

当然の疑問だが、まともに取り合う気はないらしい。

もつとも、アマゾネスも慣れたものらしい。

「まったく、相変わらず喰えん雄だ」

ただため息を吐くだけだった。

「そりやそうさ。私だって『喰われる側』だからね」

「それマジなのかよ。なら、今度オレも……」

「そういう意味ではない！」

アマゾネス同士の冗談——面倒だからそういう事にしておく——を他所に、魔女が首を傾げた。

「彼女達は救援隊ではないのか？」

「俺としてはそのつもりなんだが……」

「そうはいかない。深淵への対応はギルドからの正式な強制任務だからな」

灰野郎の言葉に、【象神アングクレーシャの杖】が言った。

正式ではないが、俺も同じだ。これ以上なめられてたまるか。

「しかし、貴公。一人しか連れていけないだろう？」

「ああ。『指輪』は一つしかないからな」

灰野郎の手に青い小さな宝石がはめられただけの質素な指輪が現れる。

「その指輪一つありや入れるようなもんなのかよ？」

別に派手ならいいとは言わないが……正直なところ、それほどの力が宿っているようにはとても見えない。

「ああ。偉大なる神の英雄が命がけで遺したものだからな」

「あア？」

今、こいつは何と言った。まさか偉大な神と言ったか。この神嫌いが？

「こりや、そろそろ本気で世界が滅びるのかもね」

「ああ、かもしれないな……」

女どもが冗談とも本気ともつかない呻きを漏らす。

「まあ、それもいいか。少なくとも深淵にたどり着くまでは人手があるに越したことはない」

魔女が肩をすくめた。

「どういう意味だ？」

「私と今の貴公だけで深淵に近づくのは少し難しいという事だよ」

もう分かっているだろうが、今回も一筋縄ではいかないようだぞ。

魔女は灰野郎を見て小さく笑ってみせた。

第三節 其れは闇よりも暗く

1

この地へと導かれたのは、今から二年ほど前になる。

遙かな未来からの呼びかけに応じ、さらに遠い未来——否、新たな『時代』に至るなど、色々なものがズレていたロードランを旅してな思いもよらなかつた。

まして、それが親友が成し遂げた偉業の先に拓かれた『時代』とは。

まったく、これだから人生は面白い。

そして、先陣として『到達』して。

すぐに、親友を知る者達と接触をもち、協力を取り付けたはいいのだが。

肝心の親友はこの街を離れていた。

いや、この地こそが新たな巡礼地。いずれ戻るのは分かり切っていた。

問題はそこではないし、事実こうして戻ってきた。

ただ——…

「むう………」

未だ出会えずにいる。

炉の女神の元に身を寄せていると聞き、とある教会を訪ねたはいいが不在だった。

これですでに四回ほどになるか。

「やはり、時間を変えた方が良いか」

今日も大きく輝く太陽を見つめ、小さく呟く。

やはり太陽は偉大だ——いや、偉大だが、今はそうではなく。

すでに街は朝を迎えている。街は目覚め、すでに新たな一日が始まっている頃だった。

「うむ。やはり次は夕刻に訪ねるとしよう」

聞けばまだ結成されて間もない派閥だという。炉の女神もまた仕事に励んでいるのだろう。

となれば、朝ではなく夜に訪ねてきた方が失礼にはならないのではないだろうか。

遅まきながらにそんなことを思う。

(なかなか難しいものだ)

長らく太陽のある生活から——何より、人里を離れて生き続けてきた身だ。

その後、縁あつて小さな村を興して身を寄せたが……そこもやはり生者のみの街とは違う。

この街で過ごした二年にしても、ダンジョンに入ってしまったえばやはり同じこと。

結局、人の世の機微は未だ忘却の彼方だった。

(本来なら伝言^{メッセージ}を残していくのが一番なのだろうが……)

しかし、親友はすでにいくつかの派閥に目をつけられているという。

迂闊な真似をしてはこの焔神の派閥にも迷惑が及びかねない。

それでは本末転倒だろう。

しかし、こうも出会えないとなると、そろそろ別の方法も模索しなくては……。

(彼女らに取り次いでもらうか。……いや、俺達を知る者は限られている。あまり世話にはなれん)

それに、先日のフィリア祭から色々と問題を抱えている。

普段からあれこれと世話になっている身としては、あまり手を煩わせたくない。

そして、あまり派手に彼らと関わるのは、それはそれで問題だった。

俺達は異邦人。何より、不死人だ。

神々のみならず人々に注視されては、色々と不都合が生じる。

そして……少しは傷も癒えたとはいえ、神への不信はまだ完全に拭い切れたとは言いがたい。

アノール・ロンドで知った太陽の真実。焦がれ続け、探し続けた太陽の正体。

友が……そして、彼女がいなければ、俺はあのまま心折れ、亡者となり果てていただ

ろう。

しかし、他に何か良い手があるかと言われれば——…

「ううくむ、悩ましい……」

気づけば、かのカタリナの英雄を真似るように腕組をして、唸っていた。

これはまだ春先のこと。

今はまだ無名の少年が、サポーターの少女と出会ったばかりのころ。

彼の元に、とある少女が預けられる少し前。

親友ともが夜の都に挑む前日の事だった。

2

「深淵とは何か？」

その魔女は、枯れた声で訊き返してきた。

「そうだ。実のところ、私達は未だによく分かっていない。詳しく教えてはもらえないか？」

頷いてから、もう一度槍女がその魔女に問いかける。

明らかに暗いダンジョンの中を、その魔女の案内に従って進んでいる。

一三階層での大量発生から一転して、異形どもの襲撃はほとんど止まっていた。

「闇よりも暗い闇。神々ですら抗えない厄災。忌まわしき呪い。概ねそのように言われている」

だから、こうして無駄話ができているわけだが。

「いや、そういう抽象的な話ではなくてだな……」

眉をひそめて、槍女がため息を吐く。

「もう少し具体的は話だ。『深淵』という呪詛^{カース}は一体どんなものなのか。これほどの規模で展開できる術者はどの程度の力量なのか。そう言ったことを訊きたい」

「なかなか難しいことを訊く娘だ」

魔女は苦笑したようだった。

「ごく小規模なものなら誰でも使える。人でさえあれば、な」

「何?」

「私が使う術がそれだ。闇術という名前は、もう忘れられて久しいかな」

「闇術だと?」

「ああ。忌むべき闇の魔術だが……その罰当たりは、まったく気にしなかったな」

小さく咳き込むように、その魔女が笑う。

言うまでもないことだが、視線の先にいるのは灰野郎だ。

「では、やはり術者がいると?」

「自然に発生するものではない。発生した原因を術者と呼ぶなら、もちろんいるだろう」
 「もう少し分かりやすく言いやがれ」

持って回ったような言い回しに、つい毒づく。

あの陰気野郎といい、この魔女といい、灰野郎の知り合いはこんな奴らばかりなのか。
 「さて……。暴走した闇術といえ、少しは分かりやすくなるだろうか」

「暴走だと？」

「もつとも、暴走しているのは『術』ではないがな」

「では、何が暴走している？」

「力の源というのが、もつとも無難な答えだろう」

イグニス・ファトゥス
 「魔力暴発イグニス・ファトゥスのようなものか……」

「それにしちや派手すぎるだろうが」

猪野郎の呟きに舌打ちを返す。

とんだ間抜け……いや、意図的にそれを起こす奴もいると聞く。今回は後者だろう。
 「神々ですら抗えないとは、どういう意味だ？」

それが聞こえたのかどうなのか、今度は猪野郎が問いかけた。

「言葉の通りだよ。遠い昔に湧き出た深淵を、神々は封印するのがやっとだった。……
 いや、それよりずっと前から、神々はその闇を恐れていたのさ。枷を嵌め、流刑に処し、

封を施し、姦計を巡らして。どうやら、それでもまだ安心できなかったようだな」

それも仕方がない事か、灰野郎を見て再び魔女が笑う。

相変わらず、何を言いたいのかさっぱり分からない。

「封印したけど？ ダンジョンみてえにか？」

分かったのは、それだけだった。

「いいや。この『大穴』よりももう少し直接的だ」

首を横に振ってから、魔女は言う。

「国」と深い水底に沈めたのさ。そのうえで、三人の魔術師が封印者に抜擢された。永遠にその国を封じるためにね。それから数百年、神々はついに深淵を滅ぼすことができなかつた」

いや、そもそも——と。さらに続けた。

「その三人の封印者はどうやら人間だつたらしい。神々には封印すらできなかつた、とも言えるか」

「では、クオンが言う神の英雄とはどういう存在だ？」

猪野郎が、再び問いかける。確かにそれは気になるところだ。

もつとも、この深淵騒ぎにどこまで関係しているかは分からないが。

「それも言葉通りだよ。偉大なる太陽の光の王。かの大王に仕えしは誉れ高き四騎士。

その中の一人がかの英雄だ。……もつとも、その名も忘れられて久しいがね」

「待て。そいつは冒険者じゃなくて、神そのものだったのか？」

「ああ、そうだと。神々最大の英雄といえど、闇を持たぬ者。深淵には抗えない」

だからこそ、その闇は忌み嫌われるのさ。

何が楽しいのか、その魔女は咳き込むように喉を鳴らす。

「ならば、クオンの持つ『指輪』は、その神が遺したということか？」

「ああ、その通りだよ。もつとも、後世に伝えたのは別の者だが」

騎士は終に倒れ、使命と狼血を遺した——芝居の台詞のような言葉を口にしてから、

「先ほど少し触れたフアランの不死隊とは、かの騎士の後継者たらんとした者たちさ」

「そんな『指輪』、何であんたが持つてるんだい？」

「……色々と事情があったんだ」

戦闘娼婦バーベラの言葉に、灰野郎がため息と共に呻く。

はぐらかすのはいつもの事だが——

「小ロンドに立ち入るために必要だったのだろうか？」

魔女がからかうように笑う。

「小ロンド？」

「水底に封印された国の名だ。少し用があつてね。水門を開けて水を抜いたはいいいんだ

が……」

「つまり、お前が封印を破ったと？」

いや、あんまり驚かねえけど。この神嫌いなら、神の封印くらいは平気で破るだろう。世界を滅ぼしかねない封印を解く『必要性』というのが何だったのかは知らないが。

「そう責めてないでやってくれ」

半眼になる槍女に、再び魔女が笑った。

「その国で深淵を生んだ者達は、私の弟子が倒したのだから。『指輪』がなくとも深淵に立ち入れるのは、それが理由なのさ」

「深淵を生み出した術者を殺したから？」

「理屈はよく分からねえが……。それが理由なら、今湧いてる深淵の原因をぶち殺せば、俺達も耐性が得られるってわけか」

「それはどうだろうな。何しろ、その主は少し特殊だった。でなければ、その馬鹿弟子とて乗り込みはしなかっただろう」

「そもそも、そこで深淵を発生させたのは誰だったんだい？」

「その国の王……公王と呼ばれてたやつらだ。どつかの蛇に騙された馬鹿な連中さ。

「……まあ、俺も人の事は笑えないがな」

戦闘結婚の問いかけに、灰野郎が小さく鼻を鳴らす。

「連中って……。その国、いったい何人王様がいたつてのさ？」

「大体四人。……そう、確か四人だったはずなんだ」

「……何でそんなに曖昧なんだい？」

「聞くな、頼むから」

当然の問いかけに、何故だか灰野郎は深々とため息を吐いた。

つくづくこいつの考えていることはよく分らない。

「それに、私の弟子は、真に正しく『深淵の主』と言える存在を殺している。この先に生じた深淵の『主』がそれほどの存在かどうか……」

灰野郎といい、陰気野郎といい、この魔女といい、揃って持って回ったようにしか話せねえのか。

「その『深淵の主』とは？」

「深淵の主マヌス。ウーラシールに生じた最初の深淵。神の英雄すら抗えなかった厄災の化身。……いや、違うか。ただ己の墓を暴かれ、安らかな眠りを邪魔された憐れな小人さ」

「ああ？ ……それじゃあ話が合わねえだろうが」

つじつまが合わないどころの話ではない。時系列が完全に破綻している。

「灰野郎の持つてる『指輪』を作ったのがその神の英雄とやらだろ？ で、その『指輪』

を使って灰野郎は小ロンドの公王とやらをぶち殺した。てめえが自分でそう言ったじゃねえか」

しかも、小ロンドとやらが封印され、灰野郎がそれを解くまで数百年だ。

最初の深淵が発生したのは当然、封印される前の話。だというなら――

「どうして最初の深淵の主を灰野郎がぶち殺せる？」

「さて、その辺りは本人に聞くのが良いだろう？」

それは全くその通りだった。

魔女に話を振られ、灰野郎が嫌そうに舌打ちする。

「ロードラン……その当時、俺が彷徨っていた場所は色々なものがズレていた。時間の流れもな。百年は前にその地に挑んだはずの英雄の白霊……亡霊だか生霊だかに手助けしてもらおう事なんてざらだった」

「どんな魔境を彷徨ってるんだい、あんたは……」

半信半疑といった様子で戦闘娼婦パベラが呻く。

いや、半分でも信じようとしているのだから、色ボケした女つてのは分からない。

「まあ、今はそういう場所だったと思うっておけ。それで、色々と事情があつてその頃の俺は魔術や奇跡の知識を集めてたんだ」

それを言えば、いつになく素直に話し出す灰野郎も同類か。

俺や猪野郎がいることを忘れていないかとすら思う。

「ウーラシールつてのは、滅びる前は『黄金の魔術の国』と呼ばれていてな。何か残つていればと思つたんだが……」

「深淵が残つていたと？」

「いや、流石にそうじゃない。それだと深淵歩きの伝説が成立しないだろう」

「なら、何があつたんだ？」

「あつたというか……。ウーラシールの宵闇……まあ、ウーラシール最後のお姫様を拾っただけだ」

「だから時間の流れがいい加減すぎるだろうが!？」

「俺に言われても困るな。少なくとも、倒したゴーレムから彼女が出てきたのは事実だ」
「で、そのお姫様を届けに行つたってことかい？」

「そうだ……と、ここで領けたら、少しは格好がつくんだろうが」

灰野郎は小さく笑つてから続けた。

「実際はむしろ一緒にさらわれたようなものだな」

「あんたねえ……」

「まあ、聞けつて。宵闇は助け出したら勝手に自分の時代に戻つていったんだ。彼女が自分で何かしたつてよりは元々そういうものだったんだろう」

「それが本当なら、つくづくとんでもない場所だな……」

【象神の杖】のため息を聞き流し、灰野郎は続ける。

「ただ、互いに縁が結ばれたのは間違いない。それこそ過去の英雄と同じだ」
「理屈の上では、理解できないことはないが……」

過去の英雄と出会えるなら、過去に滅んだ国の王女とも出会えるだろう。

何とも投げやりに槍女が呻く。

「その出会いが、マヌスに目をつけられたきつかけの一つにはなるだろう。彼女のサイン……彼女との縁が残った場所の近くで、俺もさらわれた」

「どこに?」

「そりやもちろん、今まさに深淵に飲まれつつあるウーラシールに」

「はあ?」

魔女以外の声が重なった。

猪野郎までが怪訝そうな顔をしている。

「まさか、過去の時代に引きずり込まれたとも言うつもりか?」

「そのまさかだ」

猪野郎の問いかけに、灰野郎はあっさりと頷いた。

「深淵とはそれほどの力か……」

未来の人間を自分のいる時代へと引きずり込む。

元々そういう場所だったこと——その話が本当だったとして——を差し引いても、どれほどの力が必要になるのか。

今ばかりはあのババアリッヱリアがいないことが悔やまれる。

「最初は俺も何が何だか分からなかったが、近くにエリザベス……宵闇の乳母がいてね。彼女が攫われた事も含めて、色々と事情を教えてもらったんだ。言われてみりや、確かに見覚えのある地形だった」

あとは、教わった通りその英雄を追ってウーラシールの市街地から深淵に向かったわけだ。

胸中で呻いていると、灰野郎が肩をすくめた。

「そのまま深淵の奥底で、マヌスをもう一度眠りにつかせてから元の時代に戻ったんだ」
「なら、あんたも伝説に名前が残ってるってことじゃないのかい？」

「いいや。何しろ、宵闇は助けた時は寝てたからな。俺がいたことは知らないだろう」
「……気絶じゃなくて？」

「どうかな。割と気持ちよさそうな寝息を立ててたんだが……」

あ、そう——と、戦闘ババベラ媚婦がいつになく気のない返事を返した。

「そのマヌスという者は、何故自らの国を犠牲にしてまで深淵など生み出した？」

「マヌスはその闇を見出したただけだ。さつきカルラも言っただろう。深淵が発生したのは、ウーラシールの連中が彼の墓を暴いたからだ」

「確かに言っていたが……。何のために墓を暴いた？」

「カアスに唆されたから……と、言っても通じないか。簡単に言えば、その力が欲しかったんだ」

「一国を飲み込むほどの力。確かに欲しがらぬ奴は多そうだ。」

「そして失敗して国ごと自滅したと？」

「そういうことだ。まあ、よくある話だな」

灰野郎が肩をすくめるころには、ダンジョンは一段とその闇の濃度を増していた。

「深淵か……」

ふと、猪野郎が呟く。

「もうすぐそこまで近づいているようだな」

「ほう……。貴公、もしかや分かるのか？」

「ああ。……なるほど、これは怖い闇だ」

魔女の言葉に頷いてから、猪野郎はそんなことを言った。

「幾度となく挑み、叩き潰してきたダンジョンの闇ではない。どちらかといえば、遠い昔、幼き日に恐れた夜の闇に近いように思える」

ふむ……と、自分の感情を改めて確かめるように唸つてから、続ける。

「これは郷愁、か？ どこか誘われているように感じる。お前は、こちら側だと」

そして、俺の中にそれに呼応するものがある。抗う意志を挫かれかねないほどに。

猪野郎はそんなことを呟いた。

（郷愁だと？）

さつきから背中がざわつくような感覚が続いているのは確かだが……。

「これは驚いた。そこまで分かるのか」

しかし、どうやらその言葉は正しいらしい。

言葉通りに驚きを隠しもせず、その魔女は言う。

「ああ、分かる」

「見事だ。どこかの馬鹿弟子にも見習わせたいものだな」

クスクスと笑う魔女に、灰野郎が舌打ちする。

「そうだとも。嚴重に封印されているが、人の内には闇がある。それは貴公とて同じこ

と。そして、貴公らはこれからそれを覗きに行く」

覚えておくことだ——魔女は歌うようにそう告げた。

「その闇に恐怖し足元を顧みるか、それとも郷愁に胸を焦がすかは貴公ら次第だ。そして、そのどちらかが許されるだろう」

それは、むしろ闇に誘い込むかのようにその魔女は囁く。

「郷愁を感じているのは認める」

対して、猪野郎は短く言い切った。

「だが、俺が帰るのはフレイヤ様の御許のみだ」

「フフツ……。見た目通り一途なのだ。私の弟子も少しは見習ってくればいい」

んなこと、今さら無理だろ。

「そりゃ、今さら無理ってものさ」

「ああ、分かっているよ。言ってみただけだ」

まったく同じことを戦闘娼婦バレーブラが言い、魔女は小さく肩をすくめた。

本当に、こいつら一体どういう関係性で繋がっているのか。

猪野郎とも違って別に魅了されているわけでもないだろうに。

「さて、この先だ」

魔女が、小さく囁く。

問題の広間ルームは、思ったより広く、また一段低い場所に広がっていた。

その構造自体は珍しくもない。

昔一度や二度は来た事があったような気もするが、はつきりと確信は持てない。そんな場所だ。

例外はたった一つ。

「ああ、どうやら浸食は進んでいるようだな……」

視線の先。その地面には確かに『闇』があった。

薄暗いダンジョンの中で、なお分かるほど暗い『闇』。そうとしか表現ができない『大穴』だ。

暗夜の湖でも、あれほど暗くは見えない。

そして……なるほど、確かにこれは郷愁といえるか。

その『闇』に飛び込んでしまいたくなる強い衝動を、その刹那確かに感じた。

(チツ、こりや確かに怖え闇だな)

無数の蟲が這い寄ってくるかのような恐怖と、ほの温かい郷愁が混じった奇妙な感情。

その悍ましさに狂うか、それとも郷愁に焦がれるまま飛び込むか。

どちらを選んでもいいだろう。深淵に飲まれるという結末は変わらない。

抗うための意志が挫かれるというよりは、抗おうという発想そのものが鈍っていく。

調査隊の連中とて危険は承知していたはずだ。それが揃って深淵に飲まれた理由はこれか。

何よりもそれこそが厄介だった。

意思を挫くという意味では、モンスターどもの咆哮ハウルのようなものか。

(いや、これはむしろ……)

まず抵抗するという発想を抱かせない。そして、感じるのは恐怖だけではない。そういう状況には覚えがある。

(灰野郎が『美の神』を特に嫌う理由はこの辺にあるのかもな)

咆哮ハウルではなく、『美の神』を見た時。奴らに『魅了』されかけた時に似ている。

オラリオの人間にこの感覚を伝えるなら、おそらくそう教えるのが一番伝わりやすい。

猪野郎が敏感に嗅ぎ分けた理由は、普段からそういう状況にあるせいだろう。

「何だ、あいつら……」

しかし、それとはまったく別の意味で呻いていた。

その薄気味悪い『大穴』の周りには異形どもの他にモンスターらしき姿が見られる。

「まさかアルミラージュとヘルハウンドか？」

どちらもこの階層ではよく見られる……主力と言つていいモンスターだ。

今までの異形の大半もこいつらだったはず。

だが――

「今までの異形とは雰囲気が違うな」

目の前にいる奴らは醜悪な様相となつてこそいるが、原形の面影が見て取れる。

四本足で動くか、両足で動き回るか。その違いから見分けていた今までとはわけが違
う。

「ああ。それよりも洗練されているように見える。……いや、むしろ安定というべきか」
猪野郎の言葉に、槍女が頷く。

安定というのは言い得て妙だった。

実際、外からもたらされた強引な変化ではなく、初めからそういう存在かたちとして生まれ
たように感じる。

「深みは本来、静寂にして神聖。故に悍ましい者達の寢床となる、か」

灰野郎が呟いた。

「澱もうが暴走しようが、結果は同じというわけだ」

「……何が言いたい？」

「深淵がモンスターに影響を及ぼすなら、当然その母体にも影響を及ぼすんじゃないか。
そう思っただけだ。あくまで推論だがな」

「あア？ 影響だと」

「深淵ではないが、それと祖を同じくする代物は蟲どもの苗床になる。ある意味におい
て、ダンジョンとは相性がいい。……そういえば、『世界の底』だと呼んだ奴もいたらし

いな」

見ろ——と。灰野郎はその暗い穴を指さした。

その先では闇が波立ち、何かが這いだしてくる。

それは、確かに穴の周りにいる奇妙なモンスターだった。

「モンスターを生み出す力に干渉しているとでもいうのか。それとも——」

「ダンジョンと融合しようとしている。あるいは、乗っ取ろうとしているのか……」

「マジかよ……」

生まれるモンスターを変化させるという意味ではあの『宝玉』とやらも同じだ。

だが、それ以外にも余計な効果を持つている分だけ、深淵の方が性質が悪いといえる。

「放っておけば、この先ずっと『強化種』が生み出されるようになるってわけだ」

戦闘娼婦バーベラが呻く。

「いや、あれはもう『深淵種』とでも呼ぶべきかね」

呼び方は何でもいいが……いずれにしても放っておけば厄介なことになる。

「ま、さつきみたいに見た目だけの变化だったらいんだけどね」

横目で戦闘娼婦バーベラが魔女に問いかける。

「さて。先ほどの娘らを助けた時は、まだ普通の異形だけだった。それでも辟易するほどの数だったからな。……一筋縄ではいかない、か。この短時間で変化するとは、私も

まだ読みが甘かった」

「つまり、敵の強さは未知数というわけだな」

魔女の言葉に、今度は槍女が呟いた。

「だが、ここで退くという選択肢はあり得ん」

言うまでもないことを、猪野郎が口にする。

「時は一刻を争う」

「その通りだ。……やはり、一晚遅れたのが痛かったかな」

「らしいな」

いつ発生したか知らないが、僅かな時間で驚くほど脅威を増している。

創設神自らが動くのも納得だった。こんなもの、『強化種』よりも性質が悪い。

「ここから深淵まで大体八〇〇Mってどこか」

戦闘娼婦^{バーベラ}が呟く。

「あの異形どもがいなければ、滑り降りて飛び込むだけだが……」

そうはいかない。

さっきの『大発生』には遠く及ばないにしても、数えるのが面倒な程度には『深淵種』

どもがうごめいている。

アルミラージュとヘルハウンドがいる以上、遠距離攻撃も仕掛けてくるのは明らかだ。

相手の潜在能力ポテンシャルが分からない以上、跳躍中に狙い撃ちされるのは避けたい。とはいえ――

「奇襲を仕掛けるのは、少し難しいか」

身を潜められるのは、俺達が今いるこの高台が最後だ。

距離は戦闘娼婦バトルベラが言った通り。滑り降りたら、遮蔽物はない。

姿を消しでもしない限り、勘づかれずに近づくのは流石に不可能だった。

構造的には回廊のようなものだ。

正規のルート……と、いう訳でもないが、段差を滑り降りるのでなければ、迂回するように通る階段さかみちを利用するのが一般的だろう。

そして、そこを使えば確かに群れの横腹に喰いつける。

繰り返すが、それまで勘づかれないなら、だ。

「二手に分けてもたかが知れている」

「ああ。よつぽど上手く注意をひかなければ」

移動中に敵に気づかれないなら、だが。

だが、トラップアイテム血トランプアイテム肉トランプアイテムを使ったところで……。

「時に、もう一人は誰を連れて行く気だ？」

そこで、魔女が言った。

その問いかけに、全員が灰野郎に視線を向ける。

確かに、飛び込んだ先で揉めるのは間の抜けた話だろう。

「そりや、お前だろう。一番慣れてるだろうし」

「構わんが……。奴らに闇術は効果が薄い。今さら言うまでもないだろうがな」

正論だったが、他ならぬ魔女自身が懸念を口にする。

「ならば、順当に【猛者】おっしやだろう。私達の中で最も手練れだ」

「問題の『主』を放つて殺し合いにならなきゃいいけどね」

続けて女どもがそんなことを言い合った。

だが、それは充分にあり得る話だ。

「なら、そちらの……」

「いや、むしろそれは——」

「——余計危険だね」

「……そうだったか」

「……うるせえぞ、女ども」

いちいち指摘するんじゃないやねえ。魔女も露骨にため息を吐くな。

「なら、やっぱり私か」

次に言ったのは戦鬪娼婦^{バトル}だった。

「あれが『深淵種』を生み出すなら、飛び込んで終わりとはいかないだろう？」
「それはそうだが……」

「なら、ここに残つて雄どもの手綱を握る相手も必要になるじゃないか」

「……まさかそれを私に押し付ける気か？」

「他に誰がやるつていうんだい？」

「俺に、この犬共々貴様の指揮下に入れと？」

猪野郎が不快感をむき出しにして吐き捨てる。

「ああ？ 誰が犬だ。この猪野郎が」

だが、それは俺の台詞だ。

「そういうところなんだろ。アイシヤが気にしているのは」

女どもがため息を吐き、灰野郎が呆れたように言った。

反射的に怒鳴り返しそうになったが、何とか飲み込む。

この距離だ。下手に騒いでは、勘づかれる。そんな素人じみた真似は流石にできない。
い。

「別に一人で飛び込んでもいいが……」

「今の有様で、一人で深淵に挑む気か？」

咎めるように魔女が鋭い声で問いかける。

それはまた何とも奇妙な言い回しだったが、拘泥するものはいなかった。

「なに、不利なのはいつも事だ。……残念ながら」

灰野郎は自嘲とも苦笑ともつかない吐息を零してから――…

「ところで、奇襲する気なら一つ手があるぞ」

「あア?」

「これを貸してやろう」

不意に腕を取られると同時に、俺の指に何かが絡みついた。

例の『スキル』の仕業だろう。

そして、それもまた指輪だった。モンスターか何かの目玉を模したような悪趣味な造

形の。

「ついでにちよつとしたお呪いまじなもサービスだ」

「はア?!」

そつちに気を取られている間に、灰野郎が左手に『火』を灯して何かの物語を口ずさんだ。

途端、何か奇妙な黒い靄が俺の周りを取り巻く。

それは、ごく微かなものだったが――…

「てめえ、何しやがった!?!」

「その指輪は『赤眼の指輪』という」

「今使った奇跡は【贖罪】か……」

灰野郎と魔女がそれぞれ言った。

「ちなみに、どちらも効果は同じだ」

「ああ。敵対者に狙われやすくなる。……相変わらず、酷い男だ」

「つまり、『呪い』^{カース}って意味か?!

今回ばかりは、何を言わんとしているかよおく分かった。

「おい、後は任せただぞ」

「仕方あるまい。……【凶狼】^{ヴァナルガンド}。貴様なら問題なからう」

要するに囀の役目を押し付けられたのだ。

「若人よ、苦難を求めたまえ。呪われた旅にも、いつか終わりがあると信じて」

灰野郎が何だか無駄に意味深な発言をして――

「てめえが求めてろ、このクソ野郎どもがああああああああッ!!」

それに反論する暇もなく、猪野郎が無駄に馬鹿力を発揮して俺を放り投げやがった。

兎野郎の時と同じく、景気よく景色が飛んでいく。

だが、そこはオラリオ唯一のLv. 7。力の制御はおよそ完璧だった。

高台の縁辺りでちょうど減速し、脚が地面に届く。

「ここで完全に踏みとどまるのは流石に難しいが、体勢を立て直すには充分だった。クソツたれが!!」

加速を殺さぬまま自ら地を蹴り、広間^{ルーム}へと飛び降りる。

真つ先に飛び掛かつてきたのはアルミラージ深淵種。

顔面を蹴り抜き、まずは一匹仕留めるつもりだったが……

(「……いつ……」)

硬い。どう考えても通常のアルミラージよりも——いや、さっきの異形どもより遙かに。

少なくとも、死ぬ途中で最期に噛みついてくる程度には。

「ギィ——!」

そして、思った以上に速い。

着地と同時に、攻撃を仕掛けるはずが間に合わず、回避する羽目になった。

次々に繰り出される石斧や火炎を躲して蹴り落としながら呻く。

もちろん、あのデーモンほどではない。

その辺に湧いて出る通常のモンスターの範疇だが……

(マジで脇目も振らねえな!?)

灰野郎どもが一斉に回廊を走っている。

その音や気配はモンスターどもも感じているはずだが、全く気にせずこちらに突っ込んでくる。

それを片つ端から蹴り飛ばしながら毒づいた。

(この潜在能力は、『下層』……いや、『深層』上部でも通じるか)

そう。通常のモンスターの範疇だ。その辺で普通に湧いて出るモンスターでしかない。

……ただ、その『その辺』に辿り着ける奴らが少ないというだけで。

(クソが、指輪を外して暇がねえ)

その一瞬を絞り出すには数が多すぎた。

もう少し数が減るまで攻防に専念しなければ、思わぬ無様をさらす羽目になりかねない。

半瞬で呼吸を整え、意識を切り替える。

魔法と指輪の効果か、相手は殺気立っている。

途切れることなく襲い掛かってくるその群れを迎え撃つには、まず手数を用意しなくては。

引き抜くのは指輪ではなく、双剣《デュアル・ローラン》。

深淵種だろう何だろうが、基本的にモンスターであることに変わりはない。

つまり、魔石まいしを貫いてやればそれで済む。

そして、冷静さ。

一手の失敗も命取りとなる一対多数の乱戦ではそれも必要となる——：

「あの色ボケクソ野郎どもがあああああああア!!」

そう。冷静に。あくまで冷静に、目につく怪物どもを端から手早くぶち殺していく。

流石にこの数だ。迂闊に守りに入つてはそのまま押し潰されかねない。

モンスターどもの勢いに飲まれるなんざ間抜けのすることだ。

敵が『数』で挑んでくるなら、こちらはそれを上回る『質』を見せつけてやる。

「——飢える我が刃なはヒツポリユテー!」

それから、何匹ぶち殺したか。

不意に群れの向こう側から裂帛の咆哮が聞こえた。

「ヘル・カイオス!!」

それが呪文の末尾だと気づいた時には、群れを斬り裂き紅色に染まった斬撃が迫っていた。

舌打ちしながら射線から飛び退く。

「このまま叩き潰すぞ」

「誰に言っている」

その傷跡を、さらに三人の人影が抉り取る。
言うまでもなく、色ボケクソ野郎どもと槍女だ。

「Tenebris disperdens」]

群れからはぐた間抜けは、魔女が放った『闇』に射抜かれ悉く灰となっていく。
それは制御された深淵だという。ならば、帰るべき場所に帰ったとも言えはいいの
だろう。

いずれにせよ、群れはもう総崩れだった。

霧散したことで『数』の利は失われ、『質』も精々が戦闘娼婦が多少手を焼く程度。

「

そんな状況で灰野郎と猪野郎を相手になど、いったい誰ができるものか。
フィンだつて撤退を選択するだろう。

あえて戦闘続行を選択したのは、獣の愚かさか。それとも一端の矜持か。
最後の一匹までくたばつた今となつては、どうでもいいことだが……

「よし。連携の勝利だな」

「喧嘩売つてんだな、てめえ……！」

白々しくそんな世迷い事を言い出したこの灰野郎を一体どうしてやろうか。

「落ち着け、【凶狼】ヴァナルガンド。……本当に目の色を変えるな」

「あア?!」

訳の分からねえことを——と、槍女に視線を向けると、そいつは槍の刃を……正確には、その『腹』の部分をこちらに向けた。

「あん……?」

咄嗟に目元を指先で触れる。

確かに目の色が変わっていた。赤い光が宿っている。

「ああ、それは気にするな。指輪の効果だ」

「……まあ、んなことだろうと思っただけどよ」

指輪を外すと、その赤い光も消えた。

「こりや何なんだ?」

「『赤眼の指輪』。デーモンの瞳を模したものらしい。効果はさつき説明した通りだ」

つまり魔道具マジックアイテムの類というわけだ。

「どこの誰だか知らねえが……何だってんなモン作つたんだ?」

いや、前衛壁役ウォールが装備するなら、それなりに使い道はありそうだった。

つまり……認めるのは癪だが、今回のように。

「さあな。安寧のみを求めるなら、初めから旅などするべきではないと言っていたが……」

至言と言えば至言かもしれないが、しかし――

「そりやそうだが、限度つてもんがあんだろ」

外すまで効果が続くなど面倒極まりない。

「ああ。俺もそう思う」

だからこの状況で自分で使うのは躊躇うな――などと。

その灰野郎はあつさり言い切りやがった。

「やっぱ喧嘩売ってんだな……?」

「適材適所という話だ。お前がオツタルの不意を突けるなら、別に逆でも良かったがな」
俺も深淵に挑む前に余計な消耗はしたくない――と。灰野郎の言葉はいちいち癪に障る。

(そりや、俺かその槍女のどっちかだろうがよ)

前衛型のLv. 5は二人しかいない。

そして、俺達が手を組めば猪野郎をぶん投げられるのか?――と、そう問われるならば流石に否定するしかなかった。

あとは意地の問題だ。槍女に任せるのを良しとするか否か……だが。

「つーか、困が必要なら素直にそう言いやがれ!」

「その話はまたあとにしよう」

ため息を吐いたのは魔女だった。

そして、それは単なる仲裁のための言葉ではなかったらしい。

「……どうやら、この深淵は随分と積極的のようだからな」

「そのようだ」

灰野郎と魔女の視線の先では深淵が再び沸き立ち、さらに『深淵種』を生み出す。

まるでこちらを警戒しているかのよう。あるいは、確実に殲滅するためか。

「無駄話が過ぎたかな」

「かも知れんな」

一匹一匹は大したことがない。最弱のLv. 3でもまだ通用する範囲だ。

だが、この調子で次々に生み出されるなら、先に息が上がるのは俺達だ。

もつとも——

「だが、元よりダンジョンとはこういうものだ」

無限のモンスターを生み出す。

そんなものは、どの階層でも待ち構える最低限の脅威だった。

「言われるまでもねえ!!」

深淵ダンジョンが無限にモンスターどもを生み出すなら、生まれるより早くぶち殺してやればい

い。それができねえような数でも速さでも強さでもない。

「るあああああッ!!」

見た目どころか威力も伴い始めた大火炎を掻い潜り、ヘルハウンドの延髄を蹴り砕く。

必要なのは速さ。そして、加速はそのまま『力』となる。

「まだ、温い」

こちらの処理速度は、モンスターの産出速度を超えていた。

モンスターどもの数は減り、深淵は確実に近くなっている。

それどころか、モンスターの発生速度自体が鈍り始めた。

思えば、あの『宝玉』も決して無尽蔵にモンスターを生み出せたわけではない。

『生み続ける!! 枯れ果てるまで、力を絞り尽くせ!』

あの化け物女の言葉を信じるなら、だが。

(力尽きやがったか……?)

もつとも、しばらくして再び産出が止まったのは事実だった。

だが――

「むっ?!」

そんな樂觀を叩き潰してこそダンジョンだ。

次の瞬間にはさらなる変化が起こった。深淵が波打ち、新たなモンスターを生み出

す。

気になるのは、生まれてきた個体が少なすぎるといふことだ。

何しろ――

「あれはオーク？」

より醜悪な面になった豚頭の化物。

「それにシルバーバック……」

白猿の名を投げ捨て、黒い毛皮へと変貌した大猿。

「ハード・アーマードのように見えるね……」

そして、装甲アーマードの名に恥じず重甲冑のような甲羅を背負いこんだモンスター。

どいつも随分とでかくなっているが……どいつもこいつも『上層』のモンスターどもだった。

言うまでもないことだが、今まで相手にしてきた『中層』のモンスターどもに劣る。

「追い詰められ、自棄にでもなりやがったか……？」

自分でも信じていないことを呟く。

あり得ない。そんな軟弱なことを言うわけがない。

現に頂の毛が逆立ち、体には今まで以上に力が満ちていく。

目の前にいるのは、明らかにそれは警戒すべき存在だ。

「なッ?!」

最初に動いたのはどれだったか。

それは分からないが、真っ先に突っ込んできたのはシルバーバックだった。ミノタウロスよりも大柄になったくせに、素早さまで増している。

もちろん、力もだ。

——下手をすれば階層主ゴライアスよりも速くて強い。

「何で『中層』のモンスターどもより強くなってるんだい?!」

「知るかよ、ンなこと!!」

「取り込みやすかった分、改良も進んだんじゃないか?」

「その理屈だと、ゴブリン辺りは酷いことになりそうだな……」

「笑えん冗談だ」

それぞれが飛び退きながら、毒づきあう。

しかし、その理屈はあながち間違いではないのかもしれない。

「全員、散れ!!」

「うお?!」

地面を削り取りながら、何かが鼻先を通過していった。

いや、あれはハード・アーマードだ。

普通の奴らもやる攻撃だが、やはり速度が違う。加えて重量も増えたせいで破壊力が増していた。

粉塵となつて舞い上がる地面と、深々と残る轍の後に思わず舌打ちしていた。

「こりや、下手すると【エルガラム重傑】でも防ぎきれないんじゃないかい？」

戦闘娼婦パーベラの軽口に、思わず領きそうになる。

少なくとも盾で防ぐという発想は棄てた方がいい相手だ。

あの威力なら、盾もろともに削り殺される。

「ぬう?!」

続けて、重く鈍い音が響き渡った。

見ればオーク深淵種が猪野郎と互角に打ち合っている。

それどころか、何発か剣に斬られてもなお平然としている。

もちろん、奴が本気を出しているかは知らないが、それでもありえない光景だ。

動きは鈍重だが力と耐久は『下層』以下のモンスター……いや、階層主に匹敵すると見ている。

「やれやれ、本当に積極的なことだ……」

そして、そこに加えて数の暴力までが復活しつつあった。

再びアルミラーズやヘルハウンドの『深淵種』どもが湧き出てきている。

分散したままでは面倒だ。それぞれ攻撃を掻い潜りながら、全員が再び一ヶ所に集まる。

『上層』のモンスターという考えは棄てるべきだな」

槍を構えながら、分かり切ったことを「象神アンクレーンヤの杖」が呟いた。

言われるまでもなかった。相手の力量を下らねえ事で測り損ねるような無様をさらす気はない。

「ところで。何でも駆け出しの冒険者にあの猿を嚇けた外道がいるらしいんだが……。その因果が戻ってきたか？」

「俺が聞いた話では、その駆け出しにミノタウロスを嚇けた者がいるらしいがな」

「そりやてめえもだろうが!？」

「どっちにしても酷い話だねえ。それに、私達にとつちやとぼつちりもいいところだよ」

「ふむ……。噂に聞く新人狩りというものだな。どこも事情は同じという事か……」

「……ところでその話、後で詳しく聞かせてもらおうぞ」

一通り無駄口を叩き終わったところで、モンスターどもが再び動き始めた。

二度目の激突が始まる。

今度の先鋒はハード・アーマードだった。

「Tenebris dispersens」

魔女が放つ小さな闇の飛礫は、しかしその装甲に容易く削り散らされる。そのまま減速することもなく、巨塊はこちらに突つ込んできた。

「まさか無傷とは……。流石に少し落ち込むな」

どこまで本気なのか、帽子を押さえて飛び退きながら魔女が嘆いて見せた。魔導士としては手練れだが、やはり灰野郎側だ。

フィンが指摘したように、「ステイタス」のばらつきが激しいらしい。

まず間違いなく、『耐久』と『敏捷』は低い。どっかのノロマと同じ魔力バカと見るべきか。

いや——

「Illa potestas omnis frustra」

この女は正しく向こう側だった。それを不利とするような情弱は残っていない。その瞬間、周囲の景色が歪んだ。

生じた歪みに阻まれ、ハード・アーマードの攻撃が逸れる。

「Sacrificium ibi」

続けざま、まったく淀みなく紡がれる詠唱。

生じた暗い闇の塊が、高速で転げまわるハード・アーマードに食らいつく。

追尾属性ホーミング。それにしても、驚くべき執念深さだ。

あれなら敏捷で劣る相手にも充分に当てられる。

だが――

「クソツたれが!」

問題は、当たったからどうなるかという話だった。

銀靴の一撃は、その分厚い装甲に阻まれる。

このモンスターに攻撃を防がれるなどいつ以来か。

やはり、これはもう別物だ。『上層』のモンスターなどではない。

だが――

(まったく効いてねえわけじゃねえ!)

装甲は欠け、いくらかヒビも入っている。

同じ場所にまともに数発叩き込めれば、間違いなく装甲を破壊できる。

とはいえ――…

(油断はできねえか……)

この攻撃は危険だ。回転に巻き込まれたら抜け出せずに、そのまますり潰されかねない。

――

灰野郎はシルバーバックを、猪野郎がオークを押しさえている。

他の雑魚どもは女どもが受け持っていた。

別に狙ったわけではないが、うまい具合に二対一。攻略法もすでに見えてる。

速さで攪乱し、隙について装甲を抜く。魔法で狙うより、直接蹴り碎いた方が楽だ。

決して難しい戦いではない。むしろ、俺向きの戦いだ。

そして、こいつをぶち殺せば流れは一気に優勢に傾く。

——そう。モンスターが三匹だけなら。

「しまった!?!」

少し遅れて、そのモンスターは飛び出してきた。

同じく巨体。黒く醜悪に変化した姿。しかし、原形もまた分かる。

ライガーファング。『中層』の……しかも、もう少し深い階層に棲息するモンスターの深淵種。

『上層』の三匹ほど強化が進んでいるかは知らないが、地力で言えばこいつの方が上だ。

切り札は切る機微タイムリこそが命だ。

「避ける、アイシャ!」

アルミラージの大群を押し返しながら、槍女が叫ぶ。

その声すら振り払い、その大虎は疾走した。

狙いは戦闘娼婦バトルベラ。唯一のLv. 3。最も柔らかい部分を狙うのは、肉食獣の性か。

「だが、その虎の横腹めがけて旋風が吹き荒れた。

言うまでもなく灰野郎。手には突撃槍。加速を殺さぬまま、一直線に大虎の横腹に激突する。

しかし。大虎もまた魔石を外した。いや、分厚い毛皮は見た目以上の防御力を有している。

浅い傷ではないにしても、致命傷には程遠い。

(クソが！)

そして、今まで相手にしていたシルバーバックがその隙を見逃すはずがない。

「?!」

背後から迫る一撃を、灰野郎は盾で受け止める。

横薙ぎの張手は確かに手に阻まれた——が、それは猿だ。

その手は、普通の獣より器用にできている。それは、この白猿とて変わりはない。

「クオン！」

盾を掴まれた灰野郎が、そのまま地面へと放り投げられる。

その程度で死ぬような奴ではない——が、動きが止まり、無防備になっている。

「チッ！」

そこに、ヘルハウンドどもが一斉に炎を吐き出す。

「Quod verbum omnis non perveniant!」

それ自体は、魔女の障壁によつて弾かれたが――

「――ッ!」

その頃には本命が動き出していた。

床から壁へ。さらに天井へと駆け抜けたハード・アーマードがその頭上めがけて突撃する。

すべてを粉碎するその巨塊が直撃すれば、流石にただでは済まない。

あの灰野郎が死ねば、深淵に対抗する手段が失われる。

……いや、だからこそか。元から奴こそが狙いだつたのだ。

「邪魔だ!」

アルミラージュどもを蹴散らす一瞬。その一瞬が惜しい。

戦闘娼婦もまた、同じようにヘルハウンドの群れにじやれつかれている。

あと一手足りない。もう一瞬だけ時間が――

「何ッ?!」

その時。深淵の闇を、太陽の如く輝く槍が斬り裂いた。

「何とか間に合ったようだな」

我が目を疑っていた。

ついに人間性が限界を迎えたか。

それとも、ソウルが凝っているせいで深淵への耐性を失ったか。

メレンの街で聞いた情報を含めてなお、自分の正気が信じられなかった。

「……ッ」

赤い羽根が飾られた大兜。グレートヘルム
ホーリーシンボル

後の世にも聖印として伝わる太陽が描かれた白のサーコート。

左手にはサーコートと同じ紋章が描かれた円盾。右手には一見すると平凡な直剣。

見間違えるものか。

「ソラール……」

立ち上がることすら忘れて、呆然と眩く。

遙かロスリックの時代にも、その象徴として知られていた偉大なる【太陽の騎士】。

「久しぶりだな、親友よ」

「あ、ああ……」

カルラと再会した時と同じ、得体の知れない恐怖が呼吸を阻害する。

呼吸など不要のはずの体が、空気を求めて喘ぐ。

「積もる話は、いくらでもあるが」

兜の向こうで、ソラールが笑うのが分かった。

「まずはこれを伝えねばならないな」

あの頃と同じ、愚直なまでの誠実さと共に彼は言った。

「よくぞ約束を果たしてくれた」

「やく、そく……?」

まるで未知の言葉を聞いたようだった。

「ロードランの地で交わした約束だ」

それは……そう。忘れていない。

その約束は、忘れていない。例えば亡者になり果てたとて忘れるものか。

「不死の、呪いを……」

かすれた声で、その約束を口にした。

不死の呪いを、この世界から祓い。

全てが幻だったあの『時代』に、偽りの太陽ではなく本当の太陽を取り戻し。

——そして、太陽なき時代に、今一度光をもたらすのだと。

それが、俺達が交わした約束。

しかし、それなら俺は——…

「そうだ。親友よ、よくやってくれた!!」

だが、ソラールは声を震わせてまでそう言った。

「空には偉大な本物の太陽が輝き、人に呪いはない。遠き日の約束を、よくぞ果たしてくれた!」

そうだろうか。自分に続いた数多の犠牲を裏切つて火を消し、『闇の時代』を拓き……しかし。

天には今も古き火が燦り、大地には陰が穿たれた。

そして神は変わらず人を謀り、人はその思惑のままに使い潰されている。

消したはずの火が……古い因果が、今も静かに人を蝕んでいる。

何も変わらなかった。それでも、まだ、無意味ではないと——…。

「この『時代』にも、いずれ必ず小さな火たちが現れる。貴公らが遺した『残り火』たちが」

「そうだ。世界が暗闇に飲まれる中、確かに彼女はそう言った。

「貴公はそれに導かれ、俺達もまたそれを守るためにここに来た」

差し出された手へと、手を伸ばす。

「さあ、立て親友よ! 随分と遅くなつてしまったが、ここからはまた共に行こう!」

力強い手に半ば引きずられるように立ち上がる。

ああ、この感触はとても懐かしい。遠いロードランの地で、幾度こうして立ち上がったことか。

例え全てが偽りでも。例え本人が認めずとも。

太陽は確かにここにある。

ならば……

「行くぞ——ッ！」

灰の燃え滓に、再び熱が戻る。

「そうだ、それでいい。……忘れるなよ、馬鹿弟子。道に迷う者は、道をゆく者に他ならないと」

カルラが、小さく笑っていた。

凝りがほんの少しだけ解消される。

錆びついていたソウルが、軋みながらも再び巡りだしたのが分かった。

「ギィギィ！」

アルミラーズの深淵種どもが一斉にわめきたてる。

動き出したのは、ヘルハウンドの深淵種ども。狙いは、察せられた。

左手に『火』を灯し、一気に加速する。

回避は間に合わない——いや、必要ない。

思い描く炎の憧憬。ロードランの地で俺を支えてくれた魔女たち。

親愛なる我が師。イザリスのクラーナより受け継いだ呪術の奥義——！

「ギイ——…」

立ち上り、荒れ狂う火柱が深淵種を飲み込み、魔石すら残さず灰に変える。

これこそが【炎の大嵐】。

「クラーナ殿の奥義、見事にものにしたようだな！」

炎が霧散すると同時、ソラールが斬り込んでくる。

その剣が巻き込めなかった大猿を真正面から斬り伏せた。

「馬鹿言え。この程度でものにしたなんて言った日には師匠にどやされる」

思い描く憧憬は、この程度のものではない。

「ウワツハツハツ！ それもそうか！」

だが、やはりなかなかしぶとい。

まだ仕留めきれしていない。だが、だからどうした。

ソラールの死角を補いながら、さらに一步踏み込む。

アルトリウス
狼の剣技。

我ながら出来の悪い猿真似だが……しかし、本物の猿に負けるわけにはいかない。

「ガアアアアアアアッ!!」

未だ舞い散る火の粉もろともに分厚い毛皮を斬り裂き、盛大に血が噴き出してくる。その奥に、紫紺の輝き。もう一撃といったところか。

「ルウアアアアアアアアッ!!」

その一撃を防ぐかのように、ライガーフアング深淵種が突進してくる。

(虎は苦手だな……)

凍てついたエス・ロイエスでは散々な目にあつた。

(そういえば、あの時も深淵絡みだったか)

正確には主たる脅威は混沌の炎だったが……まあ、何であれ姿が見えるだけ奴よりは随分と可愛げがある。

半歩飛び退き、武器を《大竜牙》へと切り替えた。

「

両手で構え、渾身の力で横薙ぎに。

回避など間に合うものか。

減速すらできないまま、その大虎は顔面から《大竜牙》に激突する。

顔面の骨が碎ける手ごたえ。

「ぬううん!!」

声もなく身もだえるライガーファンクに、ソラールがさらに斬りかかる。愚直に磨き上げられたその剛剣が、分厚い毛皮をたやすく斬り開いた。それでも、最後の力を振り絞るようにライガーファンクが荒れ狂う。

飛び退きながら、ソラールが物語を口ずさむ。

勇壮なる竜狩りの物語。その序章。

その名を【雷の槍】。

しかし、強固な信仰信念に支えられたその威力は絶大だ。

「ふんっ！」

投げつけられた槍は、ライガーファンクの顔面から尾までを穿ち貫いた。見届けるまでもない。

「オオ!!」

ウオーゾライ 咆哮と共に体を捻り、背後に迫っていたシルバーバックの腕を斬り落とす。まだ駆け出しの頃のベルが勝ったのだ。

多少強化された個体とはいえ、俺が負けるわけにはいかない。

加速は殺さず跳躍。上空でさらに回旋し——全ての加速を刃に託す。

まったく、ウーラシールではこの一撃に何度斬り殺された事か。

その鋭さは嫌というほどよく知っている。いや、あれとて最盛期には程遠いのだらう。

正気を失い、片腕を失い、それでもあの強さだ。それを、拙いながらに再現する。

「俺達を倒したいなら……」

そう。再現できるならば……

「最盛期のグヴィンでも連れてこいッ！」

半端な放浪者のものとはいえ、猿を一匹叩き斬るのに何の不足もあるはずがない。

……

「ありや、いったい何者だい？」

突然やってきた——そして、灰野郎と驚くほどの連携を見せるバケツ頭に、パ戦闘ベ娼婦ラが呻いた。

「ソラール。【太陽の戦士】の代名詞として知られる男だ」

当然というべきか。それに応じたのは魔女。

『太陽の戦士』って、この二年くらいで噂になった奴かい？」

ダンジョンで窮地に陥っても諦めてはいけない。よく周りを見るといい。運が良ければ黄金のサインが見つかるかもしれない——確かそんな噂だったはずだ。

そのサインに触れれば、光り輝く『太陽の戦士』が助けてくれる——そんな、雑魚どもが喜びそうな下らねえ話だった。

「そちらは分からないが……太陽の光の長子と誓約を交わした戦士たちだ。苦難に挑む者たちへの輝ける協力者。彼らを勝利へと導くことを使命とし、分かち合った勝利こそ何よりの誉れとする。そういうた者たちのことだよ」

「ケツ、下らねえ……」

噂通りの話だった。

「確かに、例外はある。人とはそういうものだ」

吐き捨てると、魔女は小さく笑った。

「ソラールとはその『太陽の戦士』の代名詞さ。それどころか、かの者こそが太陽の光の長子。世を忍び、人に身をやつした姿だと噂する者もいたというが……」

私の弟子は大笑いしていたがね——と。魔女はそんなことを言った。

「神の眷属を、奴が友と呼ぶだと？」

「おや、意外かな。ロスリックでは、私の弟子も『太陽の戦士』の一員だったのだが」

「はあ?!」

あの灰野郎が神の眷属だったなど、いったい誰が信じるというのか。

「もつとも、最後にはその主神を見つけだして、戦いを挑みに行ったがね」

「ああ……。何かこう、妙に安心したよ」

「……確かにな」

おい、女ども。てめえらまでそこで安心するのもどうなんだ。

「私の弟子について、どの程度知っているかは分からないが……」

呻きあう女どもを他所に、魔女はまた妙なことを言った。

「彼は、私の弟子と共に『最初の火の炉』に辿り着いた戦士だ。あるいは、彼こそが人類最初の【薪の王】となっていたかもしれない。そう言った男さ」

その言葉の真意を理解できたのは、やはり女どもだけだったらしい。

「ふうん……。なるほどねえ」

「やはり、本当だったのか。……彼が嘘を吐くとは思っていなかったが、何に対して頷いているのはまるで分からない。」

だが、あのバケツ頭も向こう側で——あの陰気野郎ホークウッドや『人斬り』と同じく、灰野郎が認める強者だという事くらいは分かった。

「気に食わねえな」

それはまったく気に食わねえ話だった。

そういう事なら、なおさらこんなところで無駄話をしている暇はない。

奴らに好き勝手させないために、今ここにいるのだから。

「フン……」

猪野郎が鼻を鳴らす。

まだ深淵種の大物は二匹残っている。ひとまず、奴らをぶち殺すとしようじゃねえか。

「るあああああッ！」

回転し迫るハード・アーマード深淵種へ真正面から突っ込む。

もつとも、こいつを真正面から迎え撃つ気などない。

(いくらでかくなろうが、車輪と同じだろうが)

激突する直前、横へ跳ぶ。

加速は殺さず、その横腹に回し蹴りを叩きこむ。

真正面からの力はよほどのものでもない限り粉碎するだろうが、横からの力は別だ。

むしろ、脆い。実際、あっさりとその巨塊はふらつき、でたらめな方向に激突する。

「がああああああッ!!」

体勢を立て直すべく、体を伸ばすハード・アーマード深淵種へと一気に接近する。

もそもそとした動きは全く鈍重なものだった。

「グイイイイ?!」

叩き込んだ拳は、思った以上に容易く腹の薄い装甲をぶち抜いた。

「ノロマが！ 当たるかよッ！」

慌てたように短い前足を振り回す。

当たる訳もない。掻い潜りながら、さらに数発拳を叩き込む。

拳がついに腸へと届いた。そのまま抉り、引つ張り出す——が、流石に完全には無理だった。

なりふり構わぬ大暴れに舌打ちをしながら、後ろへと飛び退く。

内臓にあれだけ傷を負わせたのだ。放っておいても死ぬかもしれないが——しかし、死ぬまでは暴れ続けるだろう。それは面倒だ。

「来やがれッ！」

血をまき散らしながら、再びハード・アーマード深淵種が転がりだす。

見えているのか、それとも匂いか何かを追っているのか。

そいつはいっそしつこいほどに俺を狙ってくる。

まったく、所詮化け物は化け物だ。

「そらよー！」

猪野郎が抑え込んでいた——いや、誘導してきたオーク深淵種のすぐそばで跳躍する。

加速すれば急に止まれないのも車輪と同じだ。

いつそ笑えるほど馬鹿正直にハード・アーマード深淵種は豚頭に直撃した。
「ヒギイイイイイ!!」

もつとも、そのオークも深淵種。

体を削られながらも、ハード・アーマード深淵種を放り投げる。

ハード・アーマード深淵種が装甲なら、その豚頭は分厚い筋肉を纏っている。

散々に抉られながら、まだ内臓までは届いていない。猪野郎の剣を耐え凌いだけはある。

だが、好機だった。

豚頭へと接敵。力任せに振り回される腕を躲し、まずはその肘を蹴り砕く。

「グルウ?!」

逆に曲がった肘に引きずられ、豚頭の巨体が僅かに揺らぐ。

狙うはその首筋。粉碎すべく横薙ぎに蹴りを叩き込む。

もつとも、首周りの筋肉もまた分厚い。軋みはしたが、折るには足りない。

(構うかよ!)

そのまま膝を曲げ、首に足を巻き付ける。

殴る蹴るだけが能ではない。こういう戦い方も心得ている。

(確かにモンスターどもには使えずれえがな!!)

いわゆる関節技だ。サブミッション

絡めた脚もろとも体を捻って、その豚頭の首を振じり折る。

「グエゲ——!?!」

踏み潰された蛙のような悲鳴と共に豚頭の首がおかしな方向にねじ曲がる。

だが、まだ生きている。なかなかしぶとい。

一足先に着地し、近くにあつた右ひざを真正面から蹴り砕く。

仰向けに倒れ込んでくる巨体の下敷きに——なんて間抜けをさらすのはノロマだけだ。

「あばよー!」

すり抜けるついでに、その延髄へと踵を叩きつけ、そのまま踏みにじる。

それで終わりだった。

最後に一度大きく痙攣して、ようやくオーク深淵種がくたばる。

一方で投げられたハード・アーマード深淵種もまた回転突進をやめなかった。

壁や天井をえぐり取りながら突進を続けているのは音だけで分かる。

「フン……」

だが、もはや無駄な抵抗だ。

その先に待ち構えるのは猪野郎。オラリオ唯一のLv. 7。

忌々しいが、名実ともにオラリオ最強。

灰野郎もまた視野に入れるたった一人の冒険者^{れいがい}。

その雄^{むすこ}は、未だ成長を続けている。それを、遠征時の小競り合いで実感した。一方、鎧というものはどれほどの業物であれ、必ず弱点を孕んでいる。

着て動かなくてはならない以上、当然そこには遊び——隙間があるのだから。

それは、このモンスターの装甲も同じことだった。

「温いッー」

剛剣一閃。

振るわれたその刃は、驚くほどの正確さで装甲の可動部へと滑り込み、そのまま通り抜ける。

転がり続ける巨塊が、ズレた。

噴き出る血に混じって、紫紺の輝きが宙に舞う。

その『深淵種』は、文字通り最期まで突進を続け、灰となって消えた。

「やはり、まだ神域には至らんか」

猪野郎がもう一度、つまらなそうに鼻を鳴らす。

その頃には、灰野郎が柄にもなくはしゃいだ声を上げるのが聞こえてきた。

…

「つたく、雄おとこどもめ。柄にもなくはしゃいでるねえ」

消耗したくないと言っていたのは、一体どこの誰だったか。

というか。あんなに楽しそうなクオンは初めて見るような気がする。

……いや、メレンでぶらついている間もそれはそれで結構楽しそうだったけど。

「馬鹿め。そんなもの、今の貴公に勝てるわけがないだろうが」

呻いていると、カルラとかいう魔導士が呆れたようにため息を吐く。

「何か、あんたと再会した時より嬉しそうじゃないか？」

「フン……」

からかってやると、思ったより素直にその魔女は拗ねて見せた。

まったく、可愛らしいものだ。

「あいつの女たちは、みんなあんな化け物揃いなのかい？」

少しだけ笑ってから、改めて問いかける。

ソラールという雄おとこは、間違いなく手練れだ。

力を封じられているという今のクオンよりも遥かに。

……いや。あれこそがクオンの言う『俺より強い奴ら』の一人なのだろう。

「いや、全員が戦いの術を心得ているわけではないよ。もつとも、私もほとんど面識めんしきがないが」

むしろ、私は他に一人しか知らない。カルラはそう言っただけで苦笑した。

「どうやら本当に他にもまだいて……そして、どうやら全員がオラリオに向かってきて
いるらしい。」

「私が言うのも何だけど、あんたも物好きだねえ」

「いや、分かっていたことだが。」

「フフツ……。まあ、私も所詮は闇の子の一人という事さ。王たる器に惹かれる。どう
やら、その性からは逃げられなかったようだ。……もつとも、それだけが理由ではないつ
もりだが」

その闇の子というのが何だか分からないが……言いたいことは何となく分かる。

強い雄おとこに惹かれるというアマゾネスの性。それが始まりだったのは間違いない。

そして、それだけが理由かと言われたなら……。

「こりや、本気で気合入れて鍛えなおさないとね」

そうでなければ、本当にただの情婦になってしまう。

そんなことは女戦士アマゾネスの矜持にかけて許さない。許すものか。

「あのバケツ頭……いや、まずは【猛者おっしや】だね」

冒険者の最高峰。最初の目標としては手頃だ。

強暴なまでの闘争ほんのう心が、体を震わせる。

それは決して見果てぬ高みなどではない。

「まだ神域には至らんか」

他ならぬ【おうじや猛者】自身が、その先を見据えているのだから。

……それにしても、神の領域とは大きく出たもんだが。

「なら、まずはその一歩だ。立て直される前に道を拓くぞ」

「言われるまでもないね!!」

大物はいなくなつたが、まだアルミラージやヘルハウンドの深淵種は残っている。

そして、乱れかけていた呼吸はすでに整つた。

なら、これ以上呆けている暇はない。

4

程なく、深淵種どもの数は目に見えて減つた。

(ポテンシャル潜在能力の強化と、思考の狂化といったところか)

ひとまず、深淵種に共通する性質としてその二つは間違いない。

元よりダンジョンのモンスターは凶暴だ。冒険者を見れば有無を言わさず襲い掛

かってくる。

……が、例えば『深層』に棲息するモンスターであれば不利を悟つて退くくらいの知

恵をつける。

この『深淵種』は、先ほどクオンを狙ったように戦いの機微を嗅ぎ分ける知恵があると見ていい。

だが、そのうえで劣勢も気にせず塵殺を狙ってくる。

確固たる理性の元にある狂気。かつて闇派閥イッツェルスが用いた死兵と同じようなものだ。

しかし、本当にダンジョンの力を取り込みつつあるというなら……。

(いくらでも使い捨てが効く死兵か)

場合によっては、そういう戦法をとれるということだ。

何しろ、ダンジョンとは無限にモンスターを生み出す母体なのだから。

「よし！ 行け、親友ともよ！」

見慣れぬ戦士——ソラールが、クオンに向けて叫ぶ。

「受け取れ！」

その返事の代わりに、クオンはソラールに何かを投げ渡す。

言うまでもない。件の『指輪』だ。

深淵に踏み込むために必要なそれが戦士の手に収まる前に、クオンは疾走した。

振り返るところか、一切の迷いなく、奴は深淵へと身を投げ入れる。

「すまんがカルラ殿、ここはお任せする！」

「ああ。前衛がすっかりしている。これなら、私でもなんとかなるだろう」

カルラという魔導士の言葉に頷き、その戦士が走り出す――

「ぬー！」

いや、そう容易くは行くまい。

ここがダンジョンで、あの闇が神々すら手を焼く厄災だというなら。

これ以上の進撃を易々と許すはずがない。

「深淵の様子が……」

変わった。これまでは完全なる闇だったそれが、今は煮詰めた汚泥のように泡立っている。

まさか実体を持ったとでもいうのか。それとも侵入を拒む保護膜のようなものなのか。

しかし、異変はそれだけではなかった。

「マズいね、こんな時に崩落だよー！」

足場が大きく揺れた。間違いなく、これは崩落の前兆。

いや、おそらく事態はもつと悪い。周りの高台が揃って崩落し始めた。

「いかん！ 全員後退しろ!!」

【象神の杖】アンクローシヤが叫ぶ。

ひび割れた地面の向こう側に、暗い闇が覗いている。

間違いない深淵。このまま投げ出されたなら、最悪は全滅となる。

「気をつけな！ 何か出てくるよ！」

次の瞬間、俺もろともに地面の一部が上に吹き飛んだ。

「何だい、あれは……!?!」

「ミノタウロスのように見えるが……」

破片から破片へと飛び移りながら、アンティアンエイラ【麗 傑】らが呻く。

言うまでもなく深淵の影響を受けている——が、確かにそう見える。

だが——

「でかすぎんだろ！ ゴライアス以上だぞ!?!」

半身を深淵に沈めたままでも、見上げるほどの巨体だ。

だが、

「臆するな。無理矢理生み出しただけにすぎん」

巨体ではあるが、表面はどこか蕩け、まるで熱せられた蠟人形のようなだ。

深淵種とも異形とも言い難いその有様を見れば、出来損ないなのは明らかだ。

いや、だからこそそのような巨体にできたのか。

「その通りだが、しかし……!?!」

問題は足場だった。ひとまず全員が概ね同じような場所の足場に着地している。だが、これがいつまで持つか。いつ復元が始まるか。

いや、そもそも――

「やべえ!!」

その巨大なミノタウロスは腕を振り上げ――そして、何の芸もなく叩きつけた。効果はあまりに劇的だった。

「むう?!、これはいかん!」

そんな無様な一撃に当たるような未熟者はこの場にはいない。

いや、あの程度なら新人でも避けられよう。それほどに単調な一撃だ。

だが、威力だけは強烈だ。特に、ひび割れた地面にとつて。

地面が砕け、あるいは分裂し、いくらかが深淵に沈んでいく。

今の俺達は凍った水面に立っているようなものだ。

いかに上級冒険者とはいえ、翼を持つ訳ではない。足場がなくなれば落ちるしかない。

そして、下にひろがっているのは凍てつく水よりも遥かに危険な代物だった。

「あそこの足場に――!」

比較的大きく、まだしつかりとした足場に向けて「象神アシラシヤの杖」が走り出す。

それしか方法はないが……しかし、それを許してくれるほど愚かでも寛大でもあるまい。

迎え撃てないような速さではないが……迎え撃ったところで足場がなくては意味がない。

「クソ、間に合わない……！」

いかに俺達といえど、そのミノタウロスがもう一度腕を振り上げ叩きつけるより速く、その足場まで走り抜けられるかと言われれば……

「止まるんじゃねエぞッ！」

動いたのは「凶狼」ウァナルガンドだった。

アレンに次ぐ『敏捷』の持ち主。あるいは、「劍姫」と同じかそれ以上の速さをためらわずに発揮し、その狼は巨牛へと駆ける。

構図はごく単純だ。「凶狼」ウァナルガンドにとって足場よりはそのミノタウロスの方が近い。

ミノタウロスにとっては地面を粉碎するための腕で「凶狼」ウァナルガンドを振り払っただけ。ひと手間増えた程度の事だったに違いない。

しかし、そのひと手間こそが俺達の命運を繋いだことに変わりはない。そして、あの凶狼が自己犠牲などと殊勝な真似をするはずがなかった。

「受け取れ、貴公！」

「寄越せ、バケツ頭！」

二人の声が交差し、微かな青い輝き宙を奔る。

払いのけられ深淵に墮ちゆく【凶^{ツアナルガンド}狼】に、その『指輪』は確かに届いた。

……いや。

(さてはそこまで織り込み済みか?)

さもありません。気位ばかりは高い男だ。

クオンに頼らねばならない自分など許せるはずもない。

「忌々しい奴め」

まんまと先を越されたというわけだ。

「ううむ……。【深淵歩き】の伝説に挑めると思ったが……」

俺とは別の意味で、無念そうにソラールなる戦士が肩を落としていた。

「だが、仕方あるまい！ 深淵は親友^{とも}とあの若者に任せるとしよう！」

もつとも、その後に続いた実にさっぱりとした言葉だった。

「私達も撤退とはいかないな……」

飛び散った破片が、この広間に通じる唯一の入り口を潰していた。

さらに言えば、高台が崩落した影響で足場もない。

もつとも、例えそうでなくとも撤退などという選択はあり得んが。

「当然だねッ!!」

大朴刀を両手で構え、アンテイアネイラ【麗 傑】が気炎を上げる。

「確かに、あれを放っておけば深淵の拡大が早まるだけだろう」

カルラという奇妙な魔導士もまた、杖を構えた。

「分かっている。ダンジョンの修復力がどこまで通じるかは分からん以上、拡大はできるだけ食い止めなくては……」

最後に【象神の杖】アングレーシヤも槍を構えその巨牛を見据えた。

「言われるまでもない。ここで奴を討つ」

俺も、つまらぬ私情はここに捨て置くとしよう。

「そうだともし、クオン達が深淵の主を討つまで、俺達がここで食い止める!」

ソラールという戦士が、剣と盾を構え――

「行くぞ!!」

咆哮を上げる巨牛との激突が始まった。

……

ぶつりと。落ちた先に広がっていた汚泥の膜は思ったよりもあっさりと破れた。

いや、単に受け入れられただけか。

落ちればそれだけで即死なのだから、わざわざ受け止めてやる義理もないだろう。

その先に広がっていた闇は深く、そして重い。

一切の光を宿さない原初の闇。その中を落下していく。

それは、奇妙な感覚だった。

速さは分からない。ずいぶん長い間そうしていたようにも思えたし、一瞬だった気もする。

あるいは、沈み込むと言った方が正確なのかもしれない。

いずれにしても、その完全な闇の先には、それよりは少しだけ明るい空間が広がっていた。

「つと」

あまりに軽い着地の感触に、逆に躓きそうになる。

というより、感覚がおかしい気がする。それに、背中が妙に熱い。指輪をはめた指もだ。

「うん？ ソラールはどうした？」

先に飛び込んだ灰野郎が怪訝そうな顔でこちらを見ていた。

「あとで本人に聞け。大体、ダンジョンの中で予定通り事が進む訳ねえだろ」

「それもそうだな」

深々と灰野郎がため息を吐く。

来るならせめてあの魔女にして欲しかった——と、そんなところだろう。

「ま、仕方がないか。深淵狩りのお供は狼と昔から相場が決まっている」

「あア？」

聞き返すが、灰野郎は気にしなかった。

それどころか、もう一度まじまじと俺を頭から足先まで見やり——

「まあ、そうだな……」

もう一度ため息を吐いて歩き出した。

「伝説の騎士じゃなくてただの放浪者だしな。相方がならず者だって、そりや仕方ない

話か」

「てめえ、本気で喧嘩売ってんだな……？」

殺気が滲む——が、その程度で動じるような奴ではない。

振り向きもせず先に進む灰野郎に舌打ちしてから、俺も深淵の奥へと歩き出した。

神々ですら恐れた厄災。ダンジョンの力すら取り込んだ闇。『深淵種』の母体。

道中で見聞きした話から、その中では見渡す限りに深淵種や異形どもが蠢く魔境——

と。

そんなことを考えていたのだが。

予想に反して、異形どもの襲撃は予想より格段に少ない。

そして、深淵の中は驚くほどに静かだった。静謐とすら言える。

（これが深淵つてやつか……）

むしろ、この静けさこそが厄介だ。

背中が焼け付くような悪寒。それを押しのけるような郷愁。

この『指輪』がなければ、俺も調査隊の連中と同じ末路を辿ることは今さら否定しようがない。

油断すれば、今すぐに『指輪』を外して投げ捨てたくなるような、そんな気さえする。

（薄気味悪いところだ……）

そこは暗い場所だった。だが、それでも見える。

どこにも光源が見当たらないというのに、自分たちの周囲だけが明るくなっている。

いや……それとも避けられているだけか。この闇に溶け込まない異物として。

「おい、灰野郎」

いつもの大剣は鞘に納め、斧槍を携えた灰野郎に問いかける。

「ここはどこだ？」

「深淵の中だが」

それはまったくその通りなんだが。

「聞きてえのはそういうことじゃねえ」

「分かつてるよ。……少なくとも、従来の一五階層ではなさそうだ」

近くの崖を適当に滑り降りてから、灰野郎が肩をすくめる。

もちろん、先ほどの広間ルムのように各階層の中にも高低差はある。

高低差すらろくないのは、『上層』の浅い部分くらいなものだ。

そして、高低差をはじめとした地形の差異は現在位置を把握するための重要な手掛かりとなる。

しかし、この場所はどこを見回しても記憶にある一五階層ないし一六階層とは合致しない。

「まさか過去のどっかとか言うんじゃないやねえだろうか？」

ダンジョンの地形が変化する。そういう事も起こりえるのだと、五九階層で経験してきた。

もつとも、あの精霊擬きがくたばった今、本来の氷河に戻り始めているかもしれないが。

「それはないだろう。この辺りの時空は安定している」

「なら、ここはどこだっただけ？」

灰野郎は小さく唸ってから、

「ダンジョンが、どこまで深淵を許容しているかだろうか？」

「あア?」

「見ろ」

灰野郎が指さしたのは、何の変哲もない壁だった。

そこが崩れ落ち、中からモンスターが這いだしてきたとしても、何らおかしくない。ただ――

「『深淵種』……と、通常種か?」

生れ出てきたアルミラージどもは、深淵種と通常種が混じっていた。

さらに言えば――

「変容しやがった」

通常種は生まれ落ちてすぐに変容を開始する。

意味が分からない。どうせ変容させるならそのまま生み落とせばいいものを。

「ギイイイ!!」

とりあえず、話はいつらをぶち殺してからだ。

どうせ数は少ない。大した時間は必要なかった。

「で、これはどういうことだ?」

飛び込み、蹂躪してから問いかける。

「さあ。あくまで予想だが、やはり主導権争いの最中なんだろう」

「主導権争いだア？」

「互いの力は欲しいが、相手に飲み込まれることは良しとしない。と、そんなところか」
「ダンジョンと深淵が、つてことか？」

だから『深淵種』とそうでないのが混じって生まれる。

そう考えれば、目の前の現象も一応は納得がいく。

別にその後の変容は主権争いとは全く関係ない。他と同じく深淵に飲まれただけだ。

「多分な。もつとも、仮にそうだとするならダンジョンにも深淵にも意思があるつて話にもなるが」

「ダンジョンの悪意なら、嫌でも感じるがな」

「それもそうか」

灰野郎は小さく笑った。

「何であれ、ありがたい話だ。準備万端整っているところに飛び込むより、いくらか楽だろう」

鼻を鳴らす。

その通りだが、同意するのも癪だった。

「で、それとこの場所とどういう関係がある？」

「虫こぶというものを知っているか？」

「あん？ ……確か枝や葉っぱにできる虫の巣みてえな奴だろ」

「ああ。俺もさほど詳しいわけじゃないが、あれはお前が言うように虫に巣くわれた場所が異常に発達した結果らしい」

それが何だつてんだ——と、問いかけようとして、その直前に意味を理解した。

「つまり、ここはその『虫こぶ』の中ってことか？」

ダンジョンに巣くう深淵。その周辺が異常変化している。

とすれば、見慣れない構造が出来上がっているのは納得だが。

「ダンジョンの地形まで変化させたってことか……」

「ここは本当に別の空間かもしれないがな」

過去には戻れなくとも、それくらいはできるだろう——などと。

灰野郎は相変わらずイカれた事を言いやがる。

「んなことまでできるのかよ？」

「ゴライアスと同じか、それよりでかい巨大骸骨が暴れられるくらいの空間が、髑髏杯の中に広がっていたからな。それともその空間もろとも封印されていただけだったのか……」

「……色々面倒くせえ話は抜きにして、純粹にてめえの過去が気になってきたぞ」

俺ですらそんなことを思うのだ。

ただそれを聞き出しただけで、ロキも含めて神どもは大喜びしそうが気がしてならぬい。

「別に聞いていて面白い話はないと思うが」

本気かこいつ。いや、間違いなく本気だろう。

いつそ眩暈にも似た感情を、ため息とともに吐き出す。

「……どうやら、調査隊は優秀だったらしいな」

「ああ？」

不意に、灰野郎がそんなことを呟いた。

「見ろ」

指さした先にいたのは人影のようなものだった。

この奇妙な闇の中でもはつきりと分かる。

手も足もないぼんやりとした……それこそ、ガキどもが描く『お化け』の絵に似た何

かが、そこに三匹佇んでいた。

「深淵湧き。おそらく、深淵に飲まれた人間が行きつく形の一つだ」

「……あれが、人間だと？」

「ああ。深淵に飲まれ、それでも最深部を目指したといつたところか」

まあ、他の冒険者が迷い込んだだけかもしれないが。

灰野郎はそんなことを呟いてから、

「気をつけることだ。その指輪を手放せば、お前も仲間入りだぞ」

ここまできれば、流石に反論の言葉は思いつかなかつた。

忌々しい気分です打ちしてから、問いかける。

「あれは異形の仲間……見たところ、ウオーシヤドウみてえなもんか？」

「近づけば襲ってくる。だが、あれは魔力の塊のようなものだ」

「物理的なダメージじゃねえってことか。こつちも魔法以外通じねえとか言わねえだろうな」

「いや、殴れば殺せるはずだ。それを『死』と呼ぶかは知らないが」

俺も言葉遊びに興味はない。蹴散らせるなら、それで充分だ。

「ただ、意外と動きは速い。気をつける」

「誰に言つてやがる」

その辺りで、向こうも気づいたらしい。

宙を滑るようにして、こちらに近づいてくる。確かに、意外と速い。

だが、驚くような速さでもなかつた。

「るああッ！」

先手を奪い返し、先頭の一匹——いや、一人の顔面らしき場所に蹴りを叩き込む。

確かに攻撃は通じる。思った以上に確かな感触が伝わってきた。

魔力型のウォーシヤドウ擬き。ひとまずそういう認識で良いだろう。

つまり、殴れば殺せる相手だ。

灰野郎は容赦なく別の一体に斧槍を突き立てている。

そのまま押し潰すように地面に縫い付けると、淡い燐光と共にそれは消えた。

魔石は残らない。確かに人間だったらしい。

「チッー」

一方で、俺が蹴り飛ばした奴は、まだ生きていた。

それどころか、するりとこちらに巻き付くように蠢く。

だが、もはやこいつらはデーモンと同じだ。俺の攻撃は、薄皮一枚何かに届いていない。

その動きを追って体を捻りながら、人間であればこめかみがある辺りに肘を叩き込む。

もつとも、そこが急所として機能しているとは思えない。

多少動きが鈍った気もするが、実際はどうだか。

ただ、魔力の塊という意味もよく分かった。

引き戻す一瞬前、触れていた肘に焼けたような痛みが走る。攻撃に転じたという事だ。

(手も足もねえなら、そうなるか)

例え攻撃手段が体当たりであっても、その威力の正体は魔力。

加速がなくとも、それなりのダメージを与えられるとみていい。

……もつとも、こうして触れられる『体』があるのだから、それだけではないだろうが。

(大した問題じゃねえ)

常にそういう状態なら、多少は面倒だがそうではない。

攻撃と防御が同時にできないなら、戦いの機微はいつもと同じだ。二度は喰らわな
い。

「くたばりやがれッ!」

そのまま蹴り抜く。銀靴を貫くほどの威力はまだない。

元々中空に浮かんだままの奴らだ。吹き飛ばすこともなく、転倒することもない。

好都合だった。下手に動かれないだけ、追撃しやすい。

そのまま脚を振り上げ、脳天に踵を叩き込む。それでようやく、その一体が霧散した。

「どうも効きが悪いな……」

舌打ちする。その頃には、灰野郎が最後の一体を仕留めていた。

やはり『魂喰らい』の術を知っているかどうかの差は大きいというよりない。

「そうかもしれないな」

あつさりと頷く灰野郎の掌に、何かが浮かんでいた。

この『深淵湧き』とかいうものをごく小さくしたような、小さな黒い何か。

「何だそりゃ？」

『人間性』。カルラが言っていただろうか？ 人の内には闇があると。その欠片だ」

そんなことを言うと、灰野郎はその『人間性』とやらをいつもの『スキル』で取り込んだ。

「ここで手に入ったのは幸運だった」

「ンなもんが何かの役に立つのか？」

「ああ。何が起こるか分からないからな」

相変わらず得体の知れない奴だった。

何度目かの舌打ちをしてから、灰野郎を追って歩き出す。

(ま、今さらか)

どうせこんな得体の知れない空間にいるのだ。

そこに関わりの深い奴らの得体が知れないのも当然だろう。

5

結論から言えば。

そのミノタウロス擬きそのものは確かに大した『強さ』ではなかった。

力は通常よりもいくらかありそうだがそれだけだ。

巨体ゆえに動きは鈍く、深淵に半身を漬けたまま出てこようともしない。

あるいは、脚がないのかもしれないが。

攻撃も単調だった。ただその巨腕を振り回すだけ。

今のところ、厄介な咆哮^{ハウル}すら使わない。

それでも駆け出しか、Lv. 2になつたばかりの連中なら苦戦するだろうが——この場にいる連中にそんな未熟さはない。

そう。強さに関して言えば、決して大したことはない。

ただ、それでも——

「チッ！ 厄介だねえ……！」

通り抜けていく巨腕を横目に、舌打ちする。

状況としては劣勢だった。

そして、このままの状況が続けば、確実に全滅する。

理由は、ごく単純だった。

「いかな。このままでは足場が……」

近くの足場に着地した【象神の杖】が呻く。

「ああ。分かっている」

それどころか【猛者】までが苦々しく吐き捨てた。

足場が足りない。そして、落ちたら終わり。

ごく単純なその状況は、どこまでも私達に不利だった。

「いずれにせよ、このまま逃げ回っているだけでは罅が明かん」

こちらに見向きもせず壁を破壊するその巨牛を見やり、【猛者】が吐き捨てる。

壁を破壊している理由など、一つしかない。深淵の領域を拡大させるためだ。

深淵がダンジョンの力を取り込みつつある以上、これ以上の侵喰は見過ごせない。

「あの『深淵種』は、やはり出来損ないだ。潜在能力だけで言えば、通常のミノタウロス

とそういくらも変わらん」

問題は巨体ゆえの重量と、何よりも足場が脆くなっていること。

おそらく、実体を持ったらしい深淵の上に浮かんでいるだけなのだから、それは仕方がない。

凍った湖の上に立っているようなものだ。体重で沈まないだけまだマシだろう。

「そして、もう一つ」

「分かっている。この状況で自己再生をされるのは厄介だな」

そう。再生能力だ。

「あれを『再生』と言っているか？ 分かんないが」

まあ、それはその通りなのだ。

そいつの巨体はヘドロのようなもので包まれ、したたり落ちている。

もはやミノタウロスの面影などほとんどない。

蕩けた蠟人形どこか出来損ないの泥人形といった有様だ。

自己再生……というより、体が融解しているせいだった。

「実際、泥人形を斬りつけてるとしか思えないけどね」

いくら傷を与えても、その傷口まで溶けてしまう。

あのまま自壊しないのがいっそ不思議なほどだ。

流石の【おうじや猛者】の剣も十分な効果を発揮していない。

「分かっている。……だが、例の薬が切れても終わりだ」

時間制限という意味なら、足場に限らない。

小箱は渡されているが、肝心のもう中身がもうほとんど残っていない。

あと一回分だ。それでも、全員分あるだけまだマシだろう。

「いずれにせよ、時間はかけられん」

結ばれた結論はまったく無駄がない。無駄がなく、どうしようもなく分かりきったことだった。

「いつそ本体に飛び乗るか……」

「いや、それはそれであまり良くないな」

【象神アングクレーシヤの杖】の言葉に、カルラが首を横に振る。

「まあ、見た目からしてよく滑りそうだけどね」

それとも底なし沼のように飲み込まれるだけか。

それもそうだが——と、私の軽口に苦笑してからカルラが続ける。

「闇術の効きが悪い。おそらく、あの蕩けた部分は深淵に戻りつつあるのだろう。いや、汚泥こそがあの『深淵種』そのものなのかもしれない」

そのおかげで、足場を失わないで済んでいるわけだが——と、カルラは小さく呟いた。「それが結果として保護膜のようになっていると?」

「ああ。そして、あれが深淵かそれに近いものだとするなら、直接触れるのはあまり良くない」

特に貴公らにとっては——と、小さく付け足してから

「いずれにせよ、近づいて戦うのもあまり現実的ではない。闇術以外の術で狙うのがい

いだろう」

「そいつは分かっているんだけどね……」

問題は巨体だという事だ。そして、あの『保護膜』とやらは魔法も減弱させる。

然るべき場所に当てなくては意味がない。

「ああ、任せておけ！ 貫くまで何度でも撃ち続けるのみだ！」

確かに、こいつも雷を『槍』にして投げつけている。

そして、その『槍』こそが今のところ、一番深くまで抉っているのは間違いない。

それでも滴る汚泥に飲まれてまだ魔石までは届かない。

「要は胸元をぶち抜いてやればいいだけだろう？ 楽な話さ」

深淵種だろうが、泥人形だろうが、モンスターはモンスターだ。

胸には魔石きゆうしよがある。あの亡者や闇霊よりはずっと楽で、何より慣れた相手だった。

そして、的はでかく、動きは遅い。

「さしあたり、必要なのは水月を斬る術か」

「極東で言う禅問答というものだな。珍しいことを言う」

面白い——と。【猛者おっしや】どころか【象神アンクーンシャの杖】までが笑う。

「期待しているよ」

作戦会議はここまでだ。思い出したように、その泥人形はこちらを向く。

どうも行動に一貫性がないというか曖昧というか……。いや、そこまで含めて『出来損ない』ということか。

もはやミノタウロスですらなくなったそれを見やり、最後のポジション——「ミアハ・ファミリア」とやらが作った『新作』を煽る。

最初の異形どもとの戦闘で負ったかすり傷も含めて、消耗した精神力が回復する。

もちろん、完全には言い難いが……。

「誰に言ってるんだいッ！」

空瓶を投げ捨て、最後の突撃を開始する。

「来れ、蛮勇の覇者。雄々しき戦士よ、たくましき豪傑よ——」

泥人形は、その両腕を左右に大きく広げる。どうせ大した知恵もない。

そのまま単純に打ち合わせる気だろう。蚊でも潰すように。

「はああアッ!!」

「おおおおッ!!」

槍と剣。研ぎ澄まされた一撃が汚泥でできた腕を斬り飛ばし、あるいは穿ち飛ばした。た。

それでも傷口から汚泥が滴り、再び腕のようなものを生み出そうとし始める。

「——女帝《おう》の帝帯が欲しくば証明せよ——」

だが、遅い。詠唱はもう二節。

いや、まだ二節か。どこかのヘツポコ狐なら、とつくに歌い上げている。

『オオオ!!』

ここにきて、その泥人形が吼えた。

おそらく咆哮^{ハウル}。だが、効果は全く違う。

辺りの深淵が波立つ。このままでは振り落とされる――

「Anima nostra vehementer resonante」

だが、その叫びを押し返すように闇の塊が奔り、その顔面を吹き飛ばした。

もはやミノタウロスの面影もない汚泥の塊だが、まだそういう機能くらいは残ってい

たらしい。

それで咆哮^{ハウル}は途絶え、波立つ深淵も静まる。

「――!」

ソラールが聞き取れない言語で勇壮な物語を口ずさむ。

左手に、雷が宿り渦巻いては再び『槍』を生み出す。

だが、それは今まで投げつけていたものより一回り大きい。

「――我が身を満たし我が身を貫き、我が身を殺し証明せよ。飢える我が刃^なはヒツポ

リユテー!」

それに合わせて、私も一気に歌い上げた。

「ヘル・カイオス!!」

紅色に染まった斬撃は、狙い違わずがら空きの胸元に激突する。

だが、あと少し威力が足りない。

汚泥を引き裂き、蒸発させ、魔石をむき出しにしたところで霧散した。

舌打ちをしたが——もつとも、勝敗は決まった。

いくら汚泥がしたたり落ちようともう遅い。魔石の正確な位置ははっきりした。

「うおおおおおッ!」

そして、投擲されるのは雷の大槍。

汚泥越しにも魔石に迫りつつあったその『槍』よりもさらに強力な一撃だ。

滴る汚泥もろとも魔石を貫くなどたやすい話だっただろう。

ただ——

「いかん! 全員下がれ!!」

やはり、そのでかさが問題だった。

魔石を失ったら素直に灰になればいいものを、くずくずに蕩け落ち始める。

もちろん、足場にも落ちて広がっていく。それどころか、重さに負けて足場が沈み始

めている。

「[Anima nostra resonante]！」

カルラが魔法——いや、闇術とか言ったか——で、通路を塞いでいた瓦礫を吹き飛ばす。

まったく、あの泥人形に通じなかったのが悔やまれる威力だ。

「まったく！ 最後の最後まで面倒な奴だね!!」

すぐ後ろに迫っているその汚泥が深淵そのものかは分からないが……わざわざ浴びて確かめる気などない。

残っている足場を駆け抜け、飛び移っては広間ルームの外を目指す。

(間に合うか!?)

一番接敵した私とソラールが一番出口から遠いのは当たり前だ。

このままでは足場を失うより先に汚泥に追いつかれかねない。

「二人とも跳べ！」

出入り口で「象神アଙ୍କーシヤの杖」と「猛者おうじや」がそれぞれ手を伸ばしている。

沈みゆく足場を、最後に全力で蹴りつけて跳躍。

一か八かだった……辛うじてお互いの手首に手が届く。

そのままつれ合うようにして、通路の奥まで転がり込んで……

「あとは、あいつら次第ってわけだ」

広間を覗けば、そこには相変わらず底の見えない『大穴』だけが残っている。

汚泥も足場を道連れにして、すっかり深淵に戻っていた。

いや……案外、本当に汚泥こそがあのミノタウロス擬きの『脚』だったのかもしれない。

深淵は今も、果ての見えない闇として静かにそこにあつた。

今のところ、そこから新しい深淵種がわいてくる様子もない。

ただ、少しずつ広がっている。私達のいる場所も、いつまで持つことやら。

最悪は、葉が切れる前に撤退することも視野に入れなくてはならない。

「甚だ心配だが、そういう事になる」

カルラが小さくため息を吐いた。

「おや、惚れた雄を信じれないのかい？」

「いや。どれほどの怪物がいようと、最後に勝つのは私の弟子だ」

何の疑問も抱かず、彼女は言い切った。

「ただ、あの若者は……」

鼻を鳴らしたのは……意外にも【おっしや猛者】だった。

「心配はいらん。気位だけは高い男だ。これ以上奴に頼るなど矜持が許さないだろう」

「オツタル。それは、お前の事だろう？」

珍しく【象神アンクローシヤの杖】が軽口を叩くと、【猛者おうじや】はもう一度鼻を慣らす。小さな笑いが起こったのは仕方がないことだ。

何しろ、私達がやれることは全て終わった。後は結末を見届けるだけでいい。

【猪人ポアズの冒険者でオツタルとは、もしや【猛者おうじや】とは貴公の事か?】

少しだけ弛緩した空気の中で、今さらそんなことを言い出したのは、ソラールだった。

「そう呼ばれている」

「おお、やはりか! オラリオ最強と謳われる冒険者と共に戦えるとは光栄だ!」

ウワツハツハツハハ——と、快活に笑うソラールに、これまた珍しく【猛者おうじや】が困惑したような表情を浮かべる。

「奴に言われたなら、皮肉だと思ふところだが……」

そのため息もまた、快活な笑い声に溶けて消えるのだった。

6

今回の深淵歩きは、存外早く終わりそうだった。

その『霧』に触れて、そう確信した。

「この先にこの深淵の主がいる」

「何で分かる?」

「この『霧』がかかっているからだ」

触れても霧散しない。つまり、この先には何かが待ち構えている。

「まずこの『霧』は何なんだ？ ただの霧じゃねえだろ」

「俺達にもよく分らない。『霧』だとか『光』だとか、適当に呼んではいたがな」

歪んだ時空か、あるいは因果を正すもの——なのかもしれないが。

もつとも、それとて完全なものとは言い難い。

「この先は一方通行だ。勝ち抜けた者か、敗れた者か。外に出られるのは、そのどちらからだ」

もつとも、敗者となった時点でただの生者であるこの同行者は死ぬだろう。

つまりは、入ったら最後、勝つしかないわけだ。

「上等じゃねエか」

そここのところ、本当に分かっているのか？——と。

問いかげようとしてやめた。

命の重さなど、俺達よりもよほど知っているだろう。

それが、どれほど貴く重く——しかし、どれほど軽々と吹き飛ぶものなのか。

暗く澱み、何をどうしても手放せなくなった俺達とどちらがマシかは知らないが。

「それなら、行くとしようか」

改めて、その『霧』へと手を差し込む。

慣れ親しんだ、導かれるような感触。あるいは、引きずり込まれているだけか。それとて過ぎてしまえば一瞬の事。

その先にあつたのは、広大な空間。光を宿さぬ深淵の底。

「ハッ、どうやら一方通行つてのはマジみてえだな」

物珍しそうに『霧』をつま先で小突きながら、同行者が小さく呟いた。

「それで、深淵の主つてのはどこだ？」

同行者の問いかけに応じるように、深淵の奥から何かが近づいてくる。

それは……

「貪食ドラゴン……？」

いや、違う。明らかに形状が違う。

「インファント・ドラゴンの『深淵種』つてところか？」

そうだ。『上層』における事実上の階層主。本来なら四mほどの小柄な竜。

もつとも、少なくとも大ききだけ見ても、もはや一端のドラゴンそのものだったが。

「そのようだな」

暗い鱗を着込んだそのドラゴンが、闇を振るわせて咆哮する。

貪食ドラゴンを連想したのは、その胸元に大きな『顎』があるからだ。

……もつとも、半身が裂けて見えるほどの『大顎』に比べれば遥かに慎ましいものだが。

とはいえ——

「まさかこの蜥蜴が闇の子ってわけじゃないだろう」

今までと明らかに異なる深淵の発生。

深淵とは暴走した人間性。人間性とはすなわちダークソウルの欠片。

闇術がその闇を御する術だとするなら……敵は深淵を統べるほどの圧倒的な存在だ。

「やはり、『主』は別にいるか……」

まさかこの蜥蜴にそれほどの力があるとは思えない。

それだけの力を宿しているなら在りし日のマヌスと同格か、それ以上の術者。

最も可能性が高いのは——

（深淵の落とし子。マヌスの『娘』たちか……）

しかし、だとするなら。

（寄る辺となつている『王』は誰だ？）

それとも、まだそれを見出していないのか。

いや、カルラのように『王』を求めない闇の子もいる。必ずしも必要という訳でもないのか……。

(カルラは『闇の子』としては変わり種らしいがな)

もつとも、それを言えば『闇の子』そのものが変わり種なのだが……。

「何を言つてやがる?」

いずれにしても、今は関係のない話だ。

まずこの蠍の王様を始末しなくては。

「なに、今の俺でも勝てそうな相手だと言つただけだよ」

体内にソウルを奔らせる。

確かに、ほんの少しだけ凝りが解消されている。

(存外、人の枷も簡単に外れるものらしいな)

自分の単純さに苦笑してから、何度目かの深淵狩りを始めた。

——…

(チツ、あの野郎……!!)

広間^{ルーム}での戦闘でも薄々感じていたが、灰野郎はまた一段強くなっている。

四年前とは比較にならない。おそらくは、猪野郎すらも置き去りにしている。

まるで枷でも外れたかのような……

(マジで外れたのかも知れねえな)

あの魔女とバケツ頭と再会したことで。いや、奴らが何かを救ったことで、だろうか。

つまり、フィン達の予測は正しいとみるべきだ。

……これは成長ではない。ただ枷を外し本来の力を取り戻しつつあるだけだと。

「ツツ!!」

背中を焦がす熱よりも……いや、満月の光よりもなお狂暴な熱が体を駆け巡る。

血の一滴。髪の一筋まで力が満ちていく。

「ルウアアアアアアアアアアアアアアアアアア——ツツ!!」

自身の枷を外すように吼えた。

意図したものではない。抑えきれぬ激情が、長く尾を引いて深淵を震わせる。

肉が爆ぜたような……獣化よりももっと深く、本物の獣にでもなったかのような錯

覚。

その衝動のままに地を蹴る。真正面から迫るのは、インファント・ドラゴン深淵種の

牙。

激突する直前に跳躍。加速を殺さぬよう、中空で轉身。その威力のすべてを踵に託

す。

「オオオオオオオオオオオツツ!!」

会心の一撃だった。記憶にあるどの一撃よりも重い。

その一撃が開きかけたドラゴンの顎を強引に閉じさせ、さらに仰け反らせる。

通常のインファント・ドラゴンなら頭を消滅させ、そのまま地面を砕いていただろう。それが、少し仰け反るだけとは。やはり、『魂喰らい』^{ソウルイーター}の術がない影響か。それとも、純粋に硬いだけか。

(これが深淵か……ッ！)

神どもさえ恐れる厄災。今さらだが、まったく冗談にもならない事態だ。だが、そんなことは気にもならない。それほどに血が猛っていた。

あの猪野郎は、どうやら本気で『神の領域』を見据え始めたらしい。ならば、この闇に怯えている暇などある訳がない。

大体――

(この『親玉』を灰野郎はぶち殺してるんだろうがッッ!!)

初めて深淵を生み出した存在。神ですら届かなかった相手を、この灰野郎はぶち殺している。

こいつが……こいつらが今まで繰り返してきた戦いとはそういうものだ。
(こいつらに出来て、俺にできねえわけがねエ!!)

例え『魂喰らい』^{ソウルイーター}の能力がなかるうが関係ない。

相変わらず薄皮一枚届かないが……まったく通じていないわけでもない。いつもより余計な手間がかかるだけだ。その程度、一体何の問題がある？

「くたばりやがれえええええッ!!」

必ず。必ずその領域に到達するのだと。

焼かれ軋むように熱を発する背中を振り払うように咆哮かつぼうした。

…

名も知らぬ同行者は、思ったより頼りになりそうだった。

望外の幸運に、内心で感謝しておく……が、しかし。敵は仮にも深淵の主だ。

(やはり、そう簡単にはいかないか……!)

エストを煽りながら、内心で毒づく。

多少凝りが解れたところで、まだ『玉座』はるか遠く——それどころか、最初の『壁』

すら破れていない。

紛い物と言えど『深淵の主』を相手取るには、まだ力不足だった。

濁流のように迫る尾を盾で辛うじて受けながら、内心で舌打ちする。

劣勢だ。いつものように劣勢だった。今回も楽には勝たせてもらえそうにない。

無論、今さらそれを厭うことはないが。

「何?」

今まで蠢くばかりだった胸元の『大顎』から黒炎が吐き出される。

「インファント・ドラゴンが息吹だと……ッ!」

同行者が毒づく。

確かに息吹ブレスなのだろうが……しかし、そう呼ぶことに少し違和感を覚えなくもない。文字通りに『吐瀉』されたそれは、竜を中心にして広がっていく。

「面倒くせえ奴だぜ!!」

まったくだった。舌打ちしながらそれぞれ飛び退く。

直線にすれば大したものではないが……同行者は前衛型だ。もちろん、俺も基本的には。

お互いに近づかないことには話が始まらない以上、この攻撃は厄介だった。

「Soul Spear」

古き竜の言葉に導かれ、「ソウルの槍」が発現する。

青白い『槍』は狙い違わずその竜に直撃した——が、鱗に阻まれて致命傷には程遠い。不死の要たる『岩の鱗』ほどではないだろうが……いや、それとて時間の問題か。

シースが何故人間を……まして、グヴィネヴィアに仕えていた聖女たちを……おそらく、最上級の聖職者たちを実験材料にしたのか。

俺達が不死人へと転じる理由。あるいは、竜体化できる理由。

それらも含めて考えれば、シースが見出した理論もある程度は推測できる。

もつとも、この状況で立証してみる気など欠片もないが。

(距離を取るか? いや、それはそれで面倒だな……)

余計な思考は打ち切り、攻略に専念する。

周りは深淵の闇に包まれている。構造は小ロンドではなくウーラシールのそれだ。ある程度の視界は確保されるが、それを超えれば途端に無明の闇に閉ざされる。もつとも……それが桎梏になるかと言われれば、そうでもない。

足場はかなり良好だ。多少派手に飛び回っても滑落するような事にはならない。この竜がこちらを振り払って闇の奥にでも向かわない限りは視界も塞がれない。

竜の動きのみに専念できる。状況としては文句なく最高だ。

もつとも、この階層の迷宮ダンジョンギミックの陥穽が発動しないという保証はないが――

「ッ!?!」

とつさに『火』を《ゲルムの大盾》に切り替えていた。

同時、通常の顎が開かれ、今度こそ正しく息吹ブレスが吐き出される。

深淵の炎は酷く重い。

少しでも気を抜けばその重さに負け、盾もろともに押し流されることは分かっていた。

何しろ、それには物理的な打撃すら宿っているのだから。

「クッ!」

暗い火の粉を引き裂いて、再び強靱な尾が唸る。

流石に凌ぎ切れず、構えた盾を崩された。

遮るものがなくなつた空間。その先で、竜の眼に姿が映り込んだ。

唾液の滴る牙が迫る。完全な回避はとても望めない。

┌

右手に『火』を灯す。思い描くのは、今は遠きウーラシールの闇。

我が師クラーナには体得できぬ……人のみが会得できる暗い炎。

陰すら生まぬその炎を一息の内に燃え上がらせる。

その名を〔黒炎〕。

ウーラシールにて開眼したその炎は、迫る顎をわずかに押し返した。

不満そうな唸り声と共に、長い首がしなる。

痛撃を凌いだ一瞬で、なりふり構わず地面に体を投げ出してその場を離れる。

不死人にとつて疲労など錯覚のようなものだ。

乱れた呼吸さえ整えれば、すぐに忘れるようなものでしかない。

「るあああッ!!」

その一瞬を、図らずも同行者が確保してくれた。

行きずりの同行者とまともな連携などできる訳もない。

だが、灰瓶の中身を一口煽るくらいの余裕は与えてくれた。
とはいえ——

(どうしたものか……)

当然ながら、あの竜はもう『火の時代』の存在へと回帰している。

『火の時代』の闘争とは魂の喰らい合い——と、そう言ったのはウラノスだが……あながち間違いいではない。

何しろ俺達にとつては『ソウルの業』こそが全ての戦闘技術の基本となる。

原初の闘争の最中に見出された朽ちぬ古竜に『死』をもたらす術。

(やはり、あまり効いていない……)

その有無の差は、思った以上に大きい。

同行者の様子を見やり、改めて呻く。

無論、その同行者は悪くない。シャクテイと同じか少し上といったところだ。

つまり、この『時代』においては類まれな実力者と言つていい。

それでも、あのドラゴンに対しては攻撃が十全に通つていない。

深淵を帯びた鱗を貫くにはまだ足りない。

だが、それも当然か。あれはある意味古竜へと回帰しつつある。

全盛期のグヴェイン達ですら死闘の末にやっと討滅した『灰の時代』の王者たち。

本来ならば、人間がまともに戦える相手ではない。

竜狩りの物語……【雷の槍】の物語を口ずさみながら胸中で呻く。

今は早さが最優先。一瞬でも注意を惹いてやれば、あとは自力でどうにかするはずだ。

「クソが!!」

期待通りに顎を掻い潜ってから、同行者が吐き捨てる。

やはり、まだ若いというべきか。多少焦れてきている。

それも仕方がない。

自分の攻撃が減弱しているのは理解できているだろう。

一方で相手の攻撃は余計に響いているはずだ。

かなりの劣勢を強いられているのは想像に難くない。

焦れて苛立っているくらいならまだいいが、それが高じて無謀な突貫でもして返り討

ちされては、少しばかり都合が悪かった。

(狙いが分散してくれなければ……)

今のベルを遥かに上回る素早い身のこなしは、囹としてもかなり優秀だった。

それがなくなれば、攻撃する隙を見つけ出すだけでも一苦労だろう。

……それどころか、最悪は連撃を喰らってそのまま押し潰されかねない。

同行者が生きているうちに、何とか流れをこちらのものにしないで……

「は……？」

その竜の背中に突如として翼が生えた。

巨体に不釣り合いな小さなものだが、確かに翼だ。

飾り——の、はずがない。深淵の静寂を破る豪快な羽搏きがそれを告げている。

巨体が、浮かんだ。

「逃げろ!!」

それは、本能というより単純な経験則だった。

まず間違いなく厄介な攻撃が来る。場合によつては、それだけで即死しかねないほどに。

胸元の『大顎』が開き、そして——

「クソつたれがッ！」

再び、膨大な量の黒炎が頭上から吐瀉される。

避けられるはずもなかった。

従つて、取るべき行動は防御。そして、ここで同行者に斃れられては困る。

つまりは——…

「が——…ッッ!？」

同行者に駆け寄り、体当たりでもするような気分で諸共に《ゲルムの大盾》の陰に隠れる。

結果として、構え方が不十分なものになった。

いくら炎に対する絶対の耐性をもつその大盾と言えど、十全に扱えないなら意味がない。

濁流の如き重さに耐えきれず、盾が押し退けられ、そのまま黒炎に飲み込まれる。

いかに炎耐性に優れたこの黒衣といえど限度があつた。

左腕の皮膚が焼け剥がれ肉が焼け血が沸騰し、その重さに骨までが砕かれる。

「つつ……ッ」

お互い、即死でなかつたのは幸運だつたのかどうなのか。

もつとも、俺の方は左半身が黒焦げだ。出会つたばかりの頃の霞の料理より酷い。痛覚が完全に失われているのは、いつそ幸運だろう。

同行者の方は、もう少しだけマシだつた。結果として、俺が盾になっていたらしい。

とはいえ……

(こいつは詰んだか……?)

状況としては全滅を一手先送りにしただけでしかない。

まだ致命傷でこそないが、ソウルの流出はすでに始まっている。エストを煽るが、回復が間に合わない。一口では足りない。

だが、今はこれが限界だ。

三度放たれる息吹^{ブレス}を迎え撃つべく、炎の憧憬を思い描く。

我が親愛なる師、イザリスのクラーナが奥義。

曰く【炎の大嵐】。

立ち昇る紅蓮の劫火は、止めとなるはずだった息吹^{ブレス}の盾になってくれた。

「クソ……がア……ッツ!!」

その一瞬の間に、息を吹き返した同行者が回復薬だか万能薬だかを一息に飲み干す。

当然というべきか。全快とはいかないが……ともあれ、それでお互いに死に損なったわけだ。

ならば、まだ戦闘は続行できる。

もつれそうになる脚に鞭打って、ひとまず息吹^{ブレス}——いや、その後が続く突進の進路から離脱した。

可能な限り早く、【大回復】の物語を口ずさむ。

それで、何とか同行者も立て直したが……しかし、ここからどうしたものか。続く連撃から辛うじて逃げ延びながら自問する。

(攻撃が激しくなったな)

単に激高しただけか。それとも、余裕がないか。

見た限り、まず間違いなく後者。向こうもソウルの流出が始まっているのが分かる。

獲物を前に、ダークリングが蠢く。

——守りに入った■■■■なんぎ、泡の抜けた麦酒エールみたいなもんだけどねえ
 そう言ったのは、誰だったか。

ソウルを求め荒れ狂う本能のろいに邪魔され咄嗟に思い出せない。

だが、その彼女のために、ここでは死ねないことだけは思い出した。

今はそれでいい。それだけ分かれば充分だ。何をどうやってでも、ここは生き延びる。

だから……

「おい」

「何だ？」

そのために。ここで、あのドラゴンを殺す。あらゆる手段を使ってでもだ。

「一撃で良い。あいつの息吹を凌ブレスげるか？」

「誰に言つてやがる……ッ!!」

同行者が、牙をむき出しにする。

とはいえ、こちらもソウルの流出は深刻だ。無論、俺自身も。

お互いにもう一撃でも耐えきれまい。

だが、構うものか。長期戦など初めから論外だった。

「上等だ。なら、お前の命を俺に預けろ」

「ふざけんな。てめえが俺に預けろ……ッ!」

死する定めを生者と、死を忘れた不死人。『死』の持つ意味は互いに相容れないが……

しかし、少なくとも今は運命共同体だ。

お互いに限界を迎える前に、多少強引にでも勝負に出るしかない。

「るウあああああああッ!!」

咆哮と共に疾走する同行者の背を見送ることなどしない。

まずは武器を《グレートランス》へ。

「

さらに、左手に『火』を灯して、とある剣士の物語を口ずさむ。

その名を【雷の剣】。

竜狩りに連なる物語の一つ。あるいは、あの戦神を後を継いだ者達の物語か。いずれにしても、それが竜である限りこの力には抗えない。

深淵に染まったあのミディールですら、耐性を獲得するには至らなかつたのだ。あの竜に通じないはずがない。

あとは、機を待つのみ。その程度には、あの同行者は当てにできる。

「喰らいやがれえええええええッ!!」

同行者が装備する足甲——そこに埋め込まれた赤い宝珠が輝く。

その輝きに導かれるように、黒炎がそこに集い——…

「なめんじゃねえ!!」

黒炎を喰らっていく。

この光景をここ最近の間に見た事があるような気もしたが——…

「——オオッ!!」

いずれにせよ待ち望んでいた好機だった。

先ほど同行者がそうしたように、咆哮ウオークライと共に疾走する。

「重てえ……!?!」

ふらつきながらも、同行者が横に飛び退く。

それに釣られ、竜が首を巡らせる。

進路が開いた。さらに地面を蹴りつけ加速。狙いはまだ開いたままの口。危険を察知した竜が、今さらこちらに向く。だが、遅すぎる。

『ガ——アアッ!?!』

すべての力を託した突撃は、雷を宿した穂先は喉奥まで抉り、首筋から飛び出した。もつとも、それとて致命の一撃にはまだ届かない。

だが、それすらもう関係ない。一瞬だけ動きを止められたなら、それでいい。槍を手放し、さらに走る。

行く手を遮るのは、鞭の如く撓る強靱な尾。

だが、狙いが逸れた。

「いい加減くたばりやがれッ!!」

同行者が、ドラゴンの頭上に踵を叩き込んだせいだ。

土壇場で強くなった——などと都合のいいことが起こる訳がない。

おそらく、黒炎を『取り込んだ』影響だろう。

敵の攻撃術を強引に付エンチャント加に変える。そういつた特殊武装といったところか。

まったく、望外の幸運だった。その尾を足場にして、竜の背中へと飛び移る。

右手に『火』を。口ずさむのは、失われた竜狩りの物語。

今ならば、忘れられた竜狩りの姿を——あるいは、竜狩りの真理を再演できる。

そう。思い出せ、あの時の戦いを。

(竜の鱗を貫きたければ——…ッ！)

雷を投げてはならぬ。

(その手で直接突き立てろッ!!)

物語に記されたように——そして、あの戦神がそうしたように。

右手に生じた雷を『杭』としてその竜の背中に叩きつける。

本来なら広域に拡散するはずの雷撃はそのまま体内へと叩き込まれ、内側から爆ぜる。

戯画では雷に打たれた様子を骨が透けるように描くことがあるらしいが……最初にその描写をした誰かは、案外とこの「雷の杭」を見た事があったのかもしれない。

内圧に耐え切れず、ついに鱗もろともに肉が焼け飛ぶ。

その瞬間。確かに骨格だけがむき出しになるのを見た。

無論、それも一瞬の事だ。骨もまた雷撃に粉碎されて散る。

叩き込んだ『杭』はついに竜の巨体を貫通し、そして世界の底をすら打ち抜いたらしい。

「は………っ?」

唐突な浮遊感。それは深淵に飛び込む時とは違い、あまりに急激だった。

成す術もなく、竜の体高よりもずっと長い距離を落下する。

この期に及んで落下死は流石に間抜けすぎる——などと、思う暇もありません。た。

地面に叩きつけられたせい、ではない。落ちてしまえば、さほどの距離ではなかったからだ。

「ま、助かったんだ。何でもいいか」

地面に寝転がったまま左手に『火』を灯し、炎の憧憬を思い描く。

つい先日、ベルへと伝えた「ぬくもりの火」。

虚空に浮かぶその炎に照らされ、互いの傷が少しずつ癒えていく。

「チツ、クソツたれが」

近くで同行者も手足を投げ出して寝転がったまま舌打ちした。

「しかし、マジで『虫こぶ』だったとはな」

視線の先には大穴。そして、その周りを取り巻くのは急速に風化していく岩の壁がある。

抜けた『底』だったものの残骸だろう。

おそらく、外から見れば巨大な柱のように見えていたはずだ。

「俺達は今までの『石柱』の中をうろついていたってわけだ」

それを見据え、同行者が眩く。

通常であればこの階層にあんな『石柱』は存在しない。

「ああ。そのようだな」

あれはダンジョンが生み出した異常な造形物。まさに『虫こぶ』といったところだ。あくまでも例えだったが……自分でも思った以上に適切だったらしい。

それにしても、深淵が消えた途端、『虫こぶ』——『石柱』を破棄し、正しい形に修復を開始するとは、ダンジョンというのは大したものだった。

いや……それとも、余力がないからこそだろうか。

「床下ならぬ石柱の中の大冒険と言ったところか」

「それにしちゃ、少し広すぎた気もするが……まあ、今さらか」

確かそんなおとぎ話か童話だかがあったような気がする。

そんなことを思い出しながら言った冗句に、同行者は小さく鼻を鳴らしてから体を起こした。

流星にダンジョンの中だ。いつまでも寝転がってはいられない。

「さて、と……」

起き上がってから、辺りを見回す。

探しものは——いや、予想とは少し違ったが——すぐに見つかった。

「これが深淵の主だったもののなれの果てか……」

もちろんそれは『主』のソウル……ではなく、かなり大きな魔石だった。

「それも普通の魔石じゃねえな」

ただ、同行者が言うようにただの魔石ではない。かといって、あの雑草どもとも違う。ひたすらに暗い——深淵をそのまま凍り付かせたかのような黒い魔石だった。

「これ、触つて大丈夫なんだろうな？」

「俺が知るかよ」

それはそうだろうが。

仕方なく、適当な槍を取り出して軽く突く。

割れた途端に……いや、いつぞやの罽毬杯のように触れただけでも再び深淵が湧くかもしれないので慎重に。

数回突くが、ひとまず変化はない。

覚悟を決めて近づき、指先で突く……が、やはり変化はなかった。

ひとまず問題はない。結晶化したソウルと概ね同じ代物と見てよさそうだ。

「ところで、そっちは大丈夫なのか？」

その魔石をソウルに取り込みながら、問いかける。

「ああ？」

「その足甲。確か銀色だったと思っただが」

「なッ!?!」

同行者が装備していた足甲もまた似たような有様だった。

銀色だったその足甲は黒銀に染まっている。

「まだ効果が切れてねえ……いや、まさか変質してやがるのか!?!」

「多分な。……少し動くな」

肩をすくめてから、そちらにも触れてやる。

魔石と同じく安定している。本来の機能として取り込んだからだろうか。

「体に影響はないか?」

そちらはまだ『指輪』を装備している影響かもしれない。

「今のところな。だが、重くなってるってのはどういう理屈だ?」

具合を確かめるように何度か足踏みしながら、同行者が問いかけてくる。

「深淵の炎は重い。感じなかったか?」

思った以上に安定しているようだ。どうやら、よほどまい具合に取り込んだらしい。

誰が作ったか知らないがなかなかのものだ。

今度へファイストスに教えてやろう——…

(いや、やめた方が良いか)

何しろ深淵の武器だ。まず間違いなく、歓声ではなく悲鳴を上げる。

「確かにあれは明らかに物理的な衝撃を伴ってやがったが……。どういうことだ？」

「仮定ならいくつか立てられるが……。そういう講釈に興味はないだろう？」

「そりゃ、あるとは言わねえが……」

「なら、簡単にそういうものだと思っておけ」

などと言いついておくと、上から何か落ちてきた。

「あん？ 魔石……。じゃねえな」

「それは『七色石』だな。ソラールたちも無事らしい」

弓を取り出し、火矢を上へと放つ。

矢が上まで届いたかどうかは怪しいところだが……。まあ、光だけなら見えたはずだ。

「『七色石』だア？」

「見ての通り光る石だ。目印代わりに使われることが多い」

ロードランでもドラングレイグでもロスリックでも割とありふれたものだったが。

「そういえば、この辺じゃ見ないな」

ないとなると、案外不便……。なのかもしれない。

「何か少し熱を持つてるぞ……」

「確かに不思議と暖かい石だが……欲しいのか？」

拾い上げ、胡散臭そうな顔で匂いを嗅いでいる——獸人特有の行動だと言えよう——同行者に問いかける。

「そういうえば昔から割と子ども受けがいい代物だったような……。」

「いらねえよー！」

投げつけられたそれを受け取り、そのままソウルに回収しておく。

補給が効かないとするなら、お互いに無駄にはできない。後で返してやろう。

「どうやら、ここは一五階層らしいな」

その間に改めて辺りを見回していた同行者が言った。

「そのようだな」

「ここは通常のダンジョンで……地形から察するに一五階層だ。」

ついでに言えば、一四階層から下に落ちたことは間違いない。『七色石』を落として寄越したのがソラールたちだとするなら、やはり結論は同じことになる。

「見たところ、異変はない。深淵は本当に『石柱』の中に閉じ込められていたらしいな」

地面を何度か蹴るが、そこに深淵の気配は全く見られない。

「つてことは、ここから下は問題ねえってことか？」

「多分な。……まあ、『深淵種』や異形がないという保証はしないが」

奴らにウラノスの祈祷とやらが通じるかどうかは微妙なところだ。

仮に通じてこの階層に留まっていたとして……それでも、『中層』に到達したばかりの冒険者には少々荷が重かろう。

「少し遠回りして確認してみるか」

「チツ、面倒くせエな……」

……まあ、確かに。

正直に言えば、俺も早くカルラ達と合流して篝火の傍で一休みしたいというのが本音だった。

俺自身の消耗もかなりのものだが、シャクテイと、何よりアイシャの無事を確かめなくては。

（二度も命を救われちゃったな……）

今さらアイシャの強さなど真似できまいが……それでも、たまには生者のように命に固執するのも悪くないのかもしれない——などと、柄にもなくそんなことを考えてから苦笑した。

（それに、ソラールやカルラとは積もる話がいくらでもある）

眩いてから。

改めて、本当に再会したのだと——その実感が湧いてきた。

そう。話したいことは、いくらでもある。ただ、そのどれもが言葉にならない。本人たちがいないというのにこの体たらく。

まったく、あれだけ死んだというのにまだ随分と人間臭いものだ。

「さあ、帰るとしようか」

小さく苦笑してから、歩き始めた。

……

「どうやら、終わったようだな」

そろそろ安全圏まで撤退を——と、そんな言葉がカルラの口から出た頃。

不意に【おうじや猛者】が眩いた。

視線を向けると、その『大穴』を満たしていた『闇』が音もなく消えていくところだった。

まるで栓でも抜けたかのような光景について見入っていると、ダンジョンまでが明るくなった。

「驚いた。ダンジョンの中つてのはこんなに明るかったっけね？」

もちろん、相変わらず薄暗いが……それでも、今までに比べれば明るくなったと感ずる。

一瞬風を感じたほどだ。

もちろん、それは錯覚だったが……それほどの早さで変化が起こっている。

「先ほど助けた娘らに聞いたが、もう少し下の方はもっと明るく綺麗なのだろうか？」

ふと、カルラが呟いた。

「そうだね。初めて一八階層に行った時は、流石の私も少し感動したよ」

「確かに。そこからしばらくは風光明媚だと言っている。……モンスターさえいなければな」

頷くと、【象神の杖】^{アングクレーシヤ}までがそんなことを言った。

実際のところ、一八階層から『大樹の迷宮』。そこを抜けた先の『水の楽園』は、私が知る限りダンジョンの中で最も綺麗な領域だった。あれでモンスターどもがいなければいい行楽地になる。

「なるほど。……一度見てみたいものだ」

まったく、何をそんな奥手なことを言っているのやら。

「あんた、あいつの女なんだろう？　なら、これから先嫌でも通るさ」

まず間違いなく、クオンはダンジョンの『最下層』を目的地と定めている。

なら、一八階層なんて浅いところは何の問題にもならない。

「あまり、戦いは得意ではないのだがね。……だが、まあそれもそうか」

小さく笑ってから、カルラは別の事を言った。

「その弟子たちは無事か？」

「問題はなさそうだ。いざとなれば飛び降りる覚悟だったが……」

頷いたのはソラールだった。

光る何かをいくつつか『大穴』——見慣れた崩落痕に投げ落としてから、しばらくその先を見つめていたが……まあ、返事があつたのだろう。

「少なくとも、火矢か何かを撃ち返せる誰かがいる。もつとも、【凶狼】ヴァナルガンドが持ち歩いてるとは思えんがな」

「やはり、あの若者には荷が重かつたか……」

「確かに奴は未熟だが」

カルラが小さく呟くと、【猛者】おうしやが小さく鼻を鳴らす。

「そこまで捨てたものでもない」

そして、その雄は珍しく冗談のような事を口にした。

「ソラールと言つたな。迎えに行くのはもう少し待て。あの狼はすぐにへそを曲げるかならな」

「そこは畳みかけるところじゃないのかい？」

あのいけ好かない狼ウエケル人がへそを曲げるなら、軋む体を押しでも飛び降りるだけの価値はあるような気がする。

「フン……。流石に今は、俺も面倒な事をしたくはない」

それこそ冗談だったのだろう。

私と【象神の杖】^{アンクシーシャ}ならともかく、この雄がこの程度の戦闘で音を上げるはずもないのだから。

「よくやってくれた、友よ！」

そこで、ソラールが叫び――

「太陽万歳!!」

――そして、何だか奇妙な格好をした。

足を揃え、両腕は指までまっすぐに伸ばして斜め上にして、空を仰ぎ見るような……。
「ああ、気にすることはない。あれは、太陽賛美……。【太陽の戦士】たちの聖印のようなものだ」

「聖印って……」

いや、そういうのはまだ残っているけど。

思わず、【象神の杖】^{アンクシーシャ}と顔を見合わせる。

「クオンも、その【太陽の戦士】の一員だと言ったな。なら、あいつもやるのか?」

「……? もちろん、必要な時にはやるだろう」

押し付け合いに負けた【象神の杖】^{アンクシーシャ}が問いかけると、戸惑ったようにカルラが頷く。

何故そんなことを訊くのか——と、その顔にははつきり書いてあった。

(……なるほど、これが神の言うところの『じえねれーしょんぎやつぶ』ってやつか) などと内心で呻いていると——

「……そうか」

あの【おうじや猛者】までが人知れず、愕然とした様子で小さく呟いたのだった。

7

「お、おい……」

「も、戻ってきたぞ……」

ギルドが再びざわめき始めたのは、夕日の最後の残光が消えるかといった頃だった。近づいてくる人影は五人。

一人はもちろんアレ。他に【アンクアーシヤ象神の杖】と【アンテイアネイラ麗傑】。

あと、何でか【おうじや猛者】もいた。

それはこの際どうでもいいとして……ベートも無事だった。そのことに、素直に安堵する。

調査隊の惨状は、既に報告が届いていた。

文字通りの半壊。犠牲者は成す術もなく『深淵』とかいう呪詛カースに飲み込まれたという。

そして、つい先日二四階層で発生した『大発生』を凌駕する『モンスターの発生』も……それをどうやってガネーシヤに——あるいは、ギルドに——伝えたのかは分からないが。

もつとも、そちらへの対策部隊の編成は思った以上にあつさり編成された。

アレへの敵愾心というか反発心というか……ともあれ、そう言ったものを抱いているのはうちらだけではないらしい。

ここぞとばかりに多くの冒険者が参加を表明し——つい先ほど、出立した。

ただし、深淵が発生している一四階層への侵入は厳禁とされたが。

(マジでヤバいもんっばいしなあ)

あれからウラノスはギルドに留まっていた。

おそらく、ダンジョン封印の『祈祷』を投げ出したままだ。この千年の間、初めての事だった。

件の『大発生』はその影響かもしれないが……一方でモンスターの地上進出は確認されない。

普通に考えれば、誰かが封印を代行していることになるが……。

「戻ったか」

「ああ」

ウラノスの言葉に、あつさりと頷く。

あの「おうじゃ猛者」ですら多少の消耗が伺えるというのに、アレにはそういう様子がない。まったく可愛げのない話だった。

「首尾はどうだ？」

「受け取れ。落とすなよ」

ウラノスの問いかけに、アレはあの奇妙な力で何かを取り出し、そのまま放り渡す。

「ぬう……ッ?!」

それは、原初の闇を凍り付かせたかのような魔石だった。

大分距離があるというのに、体中に鳥肌が立つ。それどころか、小さな悲鳴を上げている神すらいる始末だ。直接触れたウラノスが投げ出さなかったのは驚愕に値する。

「これは……これが深淵の源か？」

もつとも、すぐにロイマンに渡したのは仕方がない事だろう。

渡されたロイマンも悲壮な顔でおっかなびっくりそれを抱えている。

「ああ。とりあえず今回の『深淵の主』が遺した魔石だ」

「今回の、とは？」

「言葉の通りだ。あれは誰かが生み出した仮初の主でしかない」

詳しい話は、あとでシャクティにでも聞け——と、アレは投げやりにそう言った。

出し惜しみしたのではない。多分、普通に説明するのが面倒臭かつただけだ。丸投げされたシャクテイたんが深々とため息を吐いている。

「まだ深淵の発生は続く？」

「向こうがその気ならな」

次に深いため息を吐いたのはウラノスだった。

「ひとまず一四階層の深淵は消滅した。これで文句はないな？」

「……いいだろう。これにて五件の神殺しを免罪とする」

どよめきは、朝方よりも随分と小さかった。

特に、こちら神は納得せざるを得ない。この『闇』は絶対にヤバイ。

「だが、本体が残っているというなら、深淵狩りは継続してもらおう」

「……その時は連絡を超越せ。面倒を見てやる」

嫌そうに舌打ちしてから、アレが頷く。

「ダンジョンの様子は？」

「クオオンの言った通り、深淵そのものは消滅しました」

ガネーシャの問いかけに応じたのはシャクテイたんだった。

「ただ、異形と『深淵種』……深淵から発生した『強化種』が残っている可能性があります
す」

再びどよめきが生じる。

異形についてはともかく、『深淵種』とやらは調査隊どころか負傷して戻ってきた対策班からも何の報告もなかった。

「異形……。調査隊か？」

まだ未帰還者がいる。そして、話を聞く限り、生存は絶望的だ。

いや、ある意味『生存』はしているのかもしれないが……。

「それだけとは限らねえな。普通のモンスターでも影響を受けて変化しやがる」

言ったのはベートだった。それについては、後で詳しく聞こう。

「ただ、そいつらの変化はほとんど見た^ガ目^ツだけだ。よっほどの雑魚じゃなけりや逃げる

くらいはできるだろうよ」

「では『深淵種』は？」

「個体によって強化の度合いが異なるゆえ、一概には言い難い」

その問いかけに応じたのは、オツタルだった。

「『中層』のモンスターも『下層』級に。『上層』のモンスターが『深層』級にまで強化されて産み落とされた。原因は不明だが、『主』の采配次第ということかもしれない」

「『深層』のモンスターが『中層』にいると？」

「あれは多分、『深淵種』の中でも特別な個体だったと思うけどね」

肩をすくめたのは【麗傑】アンテイアネイラだった。

「ただ、異形が残っているのは間違いない。帰り道にも何匹か出くわしたからね。あと、『下層』並みの『深淵種』ならまだいるんじゃないか？」

こいつらは、私達が辿り着く前に結構な数産み落とされたみたいだからね——と。

その言葉に呻き声を上げたのは、冒険者達だった。

簡単に『下層』などというが——というか、お陰様で近頃はうちも時々忘れそうになるけど——そこに進出できる子供たちなど本来ごく僅かだ。

そんな領域のモンスターが一四階層……『中層』の入り口辺りにいるなどまったく笑えない。

となれば——…

「クオンよ。一つ『冒険者依頼』を受けてほしい！」

言ったのはガネーシャだった。

「大体分かるが……言ってみろ」

その『冒険者依頼』の内容など、誰だって分かる。

嫌そうな顔をしながらアレが促す。

「異形と『深淵種』の搜索および討伐に参加して欲しい！」

「だと思ったよ、クソつたれ」

まあ、他にあるはずもない。そんな分かり切ったオチよりももっと重大なことがあった。

(深淵、か……。こら確かにヤバそうやなあ……。)

あれは確かに神殺しの免罪に値する。

皮肉にも、うちに神こそがそれをよく分かっている。分かっちゃいまい。

(マジで何が起こつとんねん。こんなんどう考えても想定外やで……)

今起こつている事態は、ダンジョンが限界だと示しているだけではない。

どう考えても、もっと別の……。うちらも全く知らない要因が絡みついていた。

……

「それにしても、吹っ掛けたねえ」

「何を言っている。相手は深淵の異形だぞ。まだ安すぎるくらいだ」

篝火で休息と補給を済ませてから、俺達は再びダンジョンへと戻ってきていた。

今度こそアイシャとシャクティを置いてこようと思っただが……。結果はこの有様だ。

「というか、お前達。体は平気なのか？」

一息つけばすっかり疲労も忘れるような不死人おれたちとは違うはずだが。

「このところ毎晩あんたに鍛えられてるからね」

ええと……。それはともかくとして――

『外』はそれでもまだ楽だったからな。最後の泥人形も含めて」
シヤクテイが肩をすくめた。

「どうやら『外』は『外』で大分大変だったらしい。

もつとも、ソラールとカルラが……。あと、オツタルもいたのだから、確かに戦力的には充分だったはずだ。

何しろ、彼女たち自身もまた類稀な実力者なのだから。

「ひとまず、調査隊の発見は団長である私の役目だ。全員が見つかるまで、休んではいられん」

その発見は九割方殺害と同義なわけだが――まあ、今さら野暮な指摘か。

いずれにせよ、放つては置けないことに変わりはないのだ。

「それに、いつまでもダンジョンを閉鎖するわけにもいかない」

「そりゃね。駆け出しにとつちや死活問題だ」

「それどころか、万が一長期化すれば、オラリオ全体の問題となる」

まあ、それはそうだろうが。何しろ、ダンジョンはオラリオの飯のタネだ。

実際、すでに『上層』への立ち入りは解禁されている。

理由はいくらかあるが……。まあ、主だった理由はベルとヘステイアのところのよう

な、できたばかりの小さな派閥への救済措置だ。生者の世界もなかなか世知辛いらしい。

「ま、あんたの所に加えて「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」までが揃って『上層』を見回ってるんだ。下手すりゃ、この千年で一番安全な状態なんじゃないか？」

「それはそうかもしれないが……」

もつとも、シャクティ達はメレンと歓楽街にも手を回しているし、糸目の小僧の方は遠征中で主力は不在だった。

唯一の例外はオツタル。奴は自分の手下を連れて、俺達とは別に『中層』を巡回している。

奴の心配はするだけ無駄だろう。本物のデーモンと出くわすか、また深淵が湧かない限り。

「あの若者なら、問題ないだろう」

カルラが小さく笑う。

「それに、異形どもを任せられる相手がいる方が都合がよいのだろうか？」

「ま、そりゃそうなんだけどな」

ガネーシャから渡された依頼書の裏側には、無視できない伝言メッセージが書かれていた。

「それにしても、噂の少年と知り合いだったとは……世間とは狭いものだな」
ソラールがしみじみと呟く。

噂の少年というのはベルの事だ。

何でも『レコードホルダー世界最速兎』とかなんとか言われているらしい。

霞が言っていた「リトルルキー未完の少年」とやらとはまた違うらしいが……。

「妙な騒ぎに巻き込まれやすいのはお前譲りか……」

「俺はあいつほど酷くない」

シャクテイの言葉にひとまず言い返していく。

まあ、それはともかく。

要するに……またベルは何か厄介事に巻き込まれたらしい。

まったく、相変わらず忙しないことだ。

第四節 最初の死線

1

「それにしても、ちよつと妬けるな。その恰好」

ヴェルフが、僕の装備を見て言った。

「誰の真似をしているか、一目瞭然ですからねえ」

一方で、リリは何だか微笑ましいものでも見つめるような生暖かい——もとい、優しい笑みを浮かべている。

「ええと……」

二人が誰の姿を連想しているかは分かる。

「長衣の下には軽鎧を着込んでいますし、まさにその通りでは」

「そうだな。もつとも、俺のはまだあの鎧には届かないが……」

そして、その連想は全く間違っていないのだった。

「ヘファイストス様が言うには、あの長衣は特に『火の耐性』が高いらしいからな
ある意味オリジナル原典に忠実だ——と、一転してヴェルフまでが笑う。

『パーティ分の『サラマンダー・ウール』を用意すること』

晴れてLv. 2となり、またリリとヴェルフとパーティを組めるようになったことについて『中層』への進出が現実味を帯びてきた。

その手ごたえの元で、エイナさんに相談したところ出された条件がそれだった。

エイナさんから貰った割引クーポンを使ってもゼロが五つくらい並んだけど……まあ、それはともかくとして。

この『サラマンダー・ウール』というのはいわゆる『精霊の護布』——精霊が自らの魔力を練り込んで編み上げた特別な布地によって作られた装備品だ。

あくまで護布なので、形状は色々ある。

例えばヴェルフは装備の下に身に着ける着流し型で、リリは逆に装備の上から羽織るローブ型だった。

そして、僕と言えば……リリ達が言う通り長衣型だった。

それをクオンさんと同じようにヴェルフの鎧の上から着込んでいる。

(まあ、自分でもちよつと派手かなとは思うけど……)

何しろ、『精霊の護布』は火の精霊サラマンダーの力を宿している。

そのため、色も炎を思わせる鮮やかな赤。

込められた魔力の表れなのか、表面にはきらきらきと光の粒まで散っている。

ちよつと派手すぎるかなとは思ったけど……よく似ていたのでつい手を伸ばしてし

まったのだ。

神様たちは似合ってるって言ってくれたけど、自分ではよく分からない。

「ま、そうは言っても『最初の死線』フエアーストライクに挑むわけだしな。オラリ才有数の実力者にあやかっただけの悪くないじゃないか？」

「それは、逆に何だか色々折られそうな気もしますが……」

「まあ、確かにな」

リリがげんなりとして呻くと、ヴェルフも苦笑した。

「ところでベル様。さきほどの首飾りはどうされたのですか？」

リリが僕の胸元を見て言った。

「え？ ああ、これは霞さんから借りた物なんだ」

万が一にも壊さないように鎧の下にしまっておいたそれを、そつと引つ張り出す。

ダンジョンに入る前に一度だけ取り出したのをリリに見られていたらしい。

「霞様から？ そういえば確かに……。ですが、急にどうして？」

『中層』に進出するって言ったら、お守りに貸してくれたんだ。何でも……。その、お姉さんとお揃いのものなんだって」

ちなみに僕が貸したのは、霞さん自身のものだ。

「ちやんとみんなで返しに来なさいって」

「なるほど。それでは、必ず果たさなくてはなりませんね」

霞さんの事情を知っているリリが、ことさらに真剣な顔で頷いた。

もちろん、僕だつてそのつもりだ。

「なあ、その霞つてのは誰なんだ？」

逆に、そう問いかけてきたのはヴェルフだった。

「えっと、クオンさんのマネージャーなんだ」

「ああ、なるほど。噂のか」

どんな噂かは聞かないでおこう。

……多分、ただの噂ではないだろうし。

「ま、最愛のマネージャーを泣かせた日には、流石のヘファイストス様もただじゃ済まないかもしれないからな。これはなおさら気合が入るつてもんだ」

ヴェルフの軽口に、小さく笑いあう。

「……それじゃ、そろそろ行こうか」

そして、静かに先を見据えて宣言した。

「はいー！」

「おうー！」

視線の先にあるのは、一三階層——『中層』へと続く連結路。

こうして僕らは新たな領域ステージへと踏み入れたのだった。

——この後すぐ、ダンジョンが閉鎖されたことを知らないまま。

2

(ううーん……。本当にどうしたものかなあ?)

そろそろ勤務時間も終わりが近づき。

帰宅前の掃除の一環として飾られた盾を磨きながら、しみじみと唸る。

ボクを悩ませるのはもちろん、愛しいベル君に決まっている……。と、言いたいところだけ。

(もちろん、ベル君たちも気になるけどねー)

何しろ、今日はいよいよ『中層』に挑むらしい。

心配にならないはずもないのだけれど……。これはそれとは別だ。

そもそも、厳密にはその子はボクの眷属ですらない。

……。まあ、それを言えばサポーター君もそうなのだけど、あの子の問題はとりあえず解決方法が分かっている。

ただ、これからもベル君と一緒に冒険に行ってもらえばいいわけだ。

問題は、つい最近ベル君がダンジョンで出会った女の子……。アンジェという奇妙な子

だった。

(多分嘘はついていないと思うけど……)

そう。まずそこからして大問題だった。

あの子が嘘にんげんをついているかどうか、神ゴッドが分からないなんて。

しかも——

『ですが、ヘステイア様。神様なら、嘘かどうかすぐにお分かりなるのではないですか？』

と、サポーター君に指摘されるまで、そのことに全く違和感を覚えていなかった。

まるで神同士で話している時のように、そういうものだと思えていた。しか思えない。

そして、それはおそらくクオン君も同じだった。

(はぐらかされているって時点で気づくべきだったんだよな……)

大体、仮にも全知全能——いや、地上にいる間は全能とは言い難いけど——であるはずのボクらが『正体不明』なんて呼んでる時点で割とおかしい。

(あ……。でも、アンジェ君の言うとおりだったら、案外クオン君も嘘はついていないのかも?)

竜殺しとか巨人殺しとか。武器とかは大体拾い物だとか。

……実際、ロードランとかドラングレイグとかロスリックは実在したみたいだし。

(いやいや！ そんなことはこの際どうでもいいんだって！)

つい脱線したくなる自分を戒める。

とりあえず、過去のことは今はどうでもいいのだ。

『ここには仲間も怨敵もない。『最初の火』もない。それなら、私はどうすればいい？』

この『呪い』が体を完全に蝕む時をただ待っている？』

迂闊な慰めに対して返された言葉は、今もはつきりと思い出せる。

不死の呪い。あの子を蝕む……ボクらも知らないそれを、いったいどうしてあげたらいいのか。

(『最初の火』って言われてもなあ……)

その火が陰ると、子供達にんげんが不死の呪いにかかる……と、そういうことらしい。

何でも、遠い昔、神々は小人——いわゆる小人族パルツムとは違う種族のようだ——に『火の封』を施し、その結果小人は人間になったとかなんとか……。

それで、『最初の火』というのが弱まると、その『火の封』の力も弱まって、『呪い』が発生する……という理屈らしい。

少なくとも、あの子の話を要約するとそんな感じだった。

だとするなら——

(話を聞く限り、聖火と同じかそれ以上の力があると思えない)

その火こそが世界の根源。下手をすると『神の力』アルカナムの源とすら言えるわけだ。

なるほど、文句なく聖火と呼んでいい。

そして、聖火だつていうならまさにボクの管轄だつた。

消えないように維持するなんて、ボクがやらないで誰がやるんだつてくらいに。

(でもな……)

消えかけてるわけないんだよな……と。天井を——その先にある天上を見上げて呻く。

もし本当に消えかけているなら何が起こるかすら予想できないレベルで大惨事だけど……それなら、ボクが気づかないわけがない。

例えば下界において、『神の力』アルカナムを封じていたとしてもだ。

つまり——というか、当然ながらというべきか——アンジェ君たちを苦しめている『火』は天界にある聖火ではないわけで……。

(そうなるよ、今度は一体何のことだかさっぱりつてことになるよなあ)

それは微妙に、沽券にかかわってくる気がしてならない。

だって、寵の女神だし。聖火の守り手だし。

そーいう特別な火ならボクに任せとけ！——つて言えないのはマズい気がしないで

もない。

しかし、あえて言うまでもなくさっぱり心当たりが……。

『いずれ、またお会いしましょう。竈の方』

ずくん——と。

頭の奥の方が痛んだ。いや、もつと奥だったかもしれない。

ただ、何か大切な出会いがあつて、それを忘れてしまつてゐる。

あるいは、その縁こそがアンジエ君をボクのところへと導いたのかも……。

「ヘステイア！ いる?!」

白昼夢めいた頭痛に、つい顔をしかめてしまう。

血相を変えたヘファイストスが店に駆け込んできたのは、ちようどそんな時だった。

「ほあ?! ベ、別に今日は何もやってないぞお……!?!」

多分。値札を間違えたのは、先週の話だし。落つことしたくらいで壊れるようなものじゃないし。

「……正直に言いなさい。怒らないから」

「嘘だ! それ、絶対嘘だあああああああつ!!」

この世には絶対に信じてはいけない言葉がいくつもある。

怒らないから——と、いうのは、その中で常に上位争いをしているワードの一つだつ

た。

「いえ、今はそれも後回しよ。あなたのところの眷属ことどもは、今日もダンジョンに行っているのよね？ ヴェルフも一緒に」

「え？ うん、そうだよ。今日は『中層』に進出するって……」

よく分からないまま頷くと、ヘファイストスはさらに顔色を青ざめさせた。

「ちよつとついてきなさい。もう仕事上がりでしょう？」

「は、はい。そうですけど……」

社長に問われ——と、いうより常ならぬその気配に圧されて——店長が戸惑ったように頷く。

「え？ ちよつとヘファイストス?！」

せめて着替えさせて!——と、そんなことを言う暇もなく、ボクはヘファイストスにバベルの外へと引きずり出されたのだった。

「急にどうしたってのさ?!」

「実は今日の昼頃、ダンジョンが閉鎖されたのよ」

「はあ?!」

いや、なるほど。だから、今日は妙にお客さんが少なかったのか。

あと、バベルの出入り口の周りにたくさんギルドの職員がいたのもそのせいなのだろう

う。

(何だか冒険者君たちともめているなと思っただけ……)

道中で見かけた光景を思い出し、ひとまず納得する。

納得はしたけれど……そもそも、何でダンジョンが閉鎖されたのか。

「それと、何だかヤバイ呪詛カースがまき散らされてるみたい。私もまだよく分からないんだけど、ミアハも怪我をしたって……」

そんなことを考える暇もなく、ヘファイストスは新たな爆弾を投下した。

「な、なんだってえ?! 大丈夫なのかい?!」

「幸い、傷は大したことがないみたい。ただ、その原因が……」

呪詛カースによるものなのか。

……その、子供たちをモンスターへと変えてしまうという残酷な。

「で、でも。それとダンジョンの閉鎖とどういう関係があるんだい?」

「原因はダンジョンにあるみたいね」

それが何だか分からないけど——と、ヘファイストスは険しい顔のまま言った。

「だから閉鎖された?」

「ええ。そして、今まで集まった情報からすると一番危険なのは中層みたいね。そして、ギルドが送った調査隊二六人はまだ一人も帰還していない」

……何だつてそんな狙いすましたように。

何に毒づけばいいかもよく分からないまま、呻く。

「ミアハ・ファミリア」からも情報が——」

「念のため、確認を急がせる。『青の薬舗』だけじゃない。オラリオ中の治療院と、薬舗をだ！」

「【ディアンケヒト・ファミリア】など大手には警備員を——」

「【^{デア・セイント}戦場の聖女】なら、もうバベルの治療室に——」

「彼女だけじゃない。解呪師をかき集めてこい！」

その間にもギルド職員達と、多分ガネーシャのところの眷属達こどもとが夕暮れに染まる街の中を、必死の形相で指示を飛ばし、あるいは走り回っている姿を何度も見かける。

「アドバイザー君！」

「か、神ヘステティア?!」

一番混雑しているのは、当然ながらギルドだった。

人と神とをかき分けて、何とかアドバイザー君に声を届かせる。

「ベル君は……ベル君たちは戻ってきているかい?!」

「い、いえ。私のところにはまだ……」

悲痛な顔で、アドバイザー君が首を横に振った。

それは、分かつていた。ベル君たちが帰還するにはまだ少し早い。

危険を感じて戻ってきてくれていれば——と。一縷の希望をかけたのだけれど……。

「まさか、ベル君たちも?!」

人目のある所では、クラネル氏と呼ぶはずが——それも忘れてアドバイザー君が言う。

「か、換金所と連絡を取ります!」

頷くと、半ば叫ぶように換金所の職員に問いかける。

「【未完の少年】?! あいつらならまだ来てねえぞ! こっちにはな!!」

換金所の職員もその分厚いドアを開けっぱなしで叫び返してきた。

今まで見た事のない光景は、ギルドの混乱ぶりが現れている。

「い、一体何が起こってるんだい?」

「それが、私達にもまだ——」

「——おい! うちの眷属達もまだ帰ってこない! 治療室にいるのか?!」

「す、すみません。神へスティア! ええと、あなたの眷属は——」

そのアドバイザー君もまた、次々に詰め寄る神や冒険者たちの対応に追われている。

これ以上の話はとでもできそうにない。

それどころか、さつきかき分けた神と人に今度は押し出され、そのまま受付から引き

はがされてしまった。

「ぐぬう……」

「ちよつと、大丈夫？」

神や冒険者君たちにもみくちやにされて唸つているところを、ヘファイストスが引つ張つて少し空いた場所まで連れ出してくれた。

「……ほ、本当に何が起こつてるんだい？」

「さあ。私にもさつぱり。ロキもよく分かつてないみたいね」

ロキの名前に思わず眉間にしわが寄つたところで、ふと思ひ出した。

「そういえば、ヘファイストスのところの眷属こどもたちも『遠征』についていつてるんだっけ？」

確か団長以下、腕の立つ上級鍛冶師達ハイ・スミスが総出でついて行つてるとかなんとか。

「ええ。それで、ポイズン・ウエルネス妖毒蛆の毒にやられて一八階層で足止めされてるわ」

万が一のことがあつたら、私の派閥も駆け出しからやり直しね——と。

ヘファイストスは、らしくもない冗談を口にした。

「ヘファイストス……」

「大丈夫よ。椿はそんなに簡単に死ぬような子じゃないもの。他の子もね。それに、ロキのところの眷属達こどもも一緒だし。私の事よりも——」

「うん。ベル君たちの搜索の冒険者依頼を発注したところだけど……」

「普通でも一時間はかかるわね。今ならもつとかかるでしょ」

混乱の極みにあるギルドを見やり、二柱揃ってため息を吐く。

「それに、ダンジョンは閉鎖されたまま。仮に発注できても、実際に搜索隊が派遣されるのはいつになるか……」

その間に、最悪の結末を迎えてしまう可能性は充分にあり得る。あるいは、すでに——と。

ヘファイストスはそう言った。

「ベル君は、まだ生きてる。少なくとも、ボクの『恩恵』はまだ消えていない……けど」
気になるのはその『呪詛』だった。

ボクの『恩恵』を宿しているそれが、本当にベル君と呼べる存在なのかどうなのか……。

おそらく、ヘファイストスも同じ不安を抱いているはずだ。

「私はここで冒険者依頼の発注ができるようになるまで待つてるから、あんたはちよつとミアハのところに行って話を聞いてきなさい」

「いいのかい?」

「いいもなにも」

思わず問いかけると、ヘファイストスが肩をすくめた。

「これでも一応大派閥の主神だしね。もう少し混乱が治まれば、多少無理してでも発注できるでしょ。それに、私にとっても他神事ひとごとじゃないし」

まあ、そうなのかも。少なくともボクよりはずっとその可能性が高い。

「うちの子も戦力になりそうなのは皆で払っちゃつてるしね。最悪はロキのところにも声をかけるけど……あんたはあんたで、何とか人手を集めてきなさい」

まあ、ロキも今なら嫌とは言わないでしょうけど——と、ヘファイストス。

……気は進まないけど、それこそ今はそんなことを言っていられない。

「ただ、ダンジョンを閉鎖するほどの異常事態イレギュラーなら、ロキのところはその対策に駆り出される可能性が高いもの。準備はしておかないと」

「うん、分かってるよ」

頷いてから、ギルドを飛び出した。

そして……

「おお、ヘステイア。血相を変えてどうしたのだ?」

そのまま『青の薬舗』に向かうと、いつもの調子で出迎えてくれた。

「どうしたのだ、じゃないやああああい!!」

……店の中はまだガラス片が散乱したままだし、何だか血もついたままだし、ミアハ

自身も頭に包帯を巻いたまま姿の癖に。

思わず涙目になりながら叫んでいた。

「い、いや。これはナアーザが少し大げさに……」

ガラス片を掃き集めていた箒を盾のように掲げながら、ミアハが歯切れ悪く言う。
ちなみに、袖から覗いた腕にもぼつちり包帯が巻かれていた。

「そーいうこと言うのは、その青白い顔色を何とかしてからにしろってばー」

「むう……」

ミアハが唸った辺りで、ボクも大きく息を吐く。

少し落ち着かないと。怪我神けがにんを怒鳴りつけに来たわけじゃないのだ。

「それで、一体何があったんだい？」

「……私にもよく分からぬ」

深いため息とともに、ミアハが首を横に振る。

「『中層』から戻ってきた仲間がおかしいと、運び込まれてきてな」

ここは薬舗で、治療院ではないのだが……まあ、それで追い出すミアハではない。

「うちではできることも限られる。治療院に運び込むか、あるいは迎えに来てもらうまでの間は、安静に過ごさせるようにと思ったのだが……」

何しろ、ミアハとはそういう神格なのだから。

ただ、その症状は、ミアハ 医神をして初めて見るものだったという。
「呪詛カリスがどうか聞いたけど……」

「おそらくは。最初は、毒か何かだと思ったのだがな」

一般的なものから、少々特殊なものまで。

店にある解毒薬と呪詛薬を一通り試したが、どれも効果がなかったという。

「そうこうしているうちに、急に奇妙な魂のようなものを纏い、そのまま見知らぬモンスターへと変貌してしまった」

それは、何とも奇妙な言い回しだった。魔力ではなく、あえて魂と表現するなど……。
「いや、私も何故そう感じたのは分からぬのだがな」

ボクが問いかける前に、ミアハは首を横に振った。

「それで、その怪我かい？」

「うむ。ナーザが無理を押し庇ってくれたから、この程度で済んだが……」

「そういえば、そのナーザ君は？」

「かなり嫌がったがディアン……と、いうよりアミッドの元に連れて行つた。酷く傷を負っていたこともあるし、あれは薬師ハバリストではなく、解呪に長けた治療師ヒーラーの出番であろう」
あちらにも運び込まれているやも知れぬし、私達の見立ても多少の役には立つかもしれん。

そう言いいつつも、ミアハは妙に言葉を濁した。

「どうかしたのかい?」

「うむ……。あれは、本当に『呪詛』^{カクス}と言ってよい代物だったのかと思つてな」

「え?」

「いや、毒ではない。病ではない。分類するのであれば、間違いなく『呪詛』^{カクス}であろう」

ただ、とミアハは呻いた。

「その『呪詛』^{カクス}は何に対して作用していたのか……」

「んん?」

「一口に呪詛^{カクス}と言っても効果は千差万別だ。有名どころで言えば、『装備したら外れなくなる呪い』であろうか。まあ、最近はあまり見かけなくなってきたが」

「あく……。うん。暇を持て余した主神^{バカ}が眷属に作らせてるつて、前にヘファイストスが言つてた気がするよ」

確か割と本気で怒つていたと思う。怒り指数六八%といったところだ。

……多分、ヘファイストスの子が作つた装備にも、その『呪い』をかけられたことがあるんだろう。

ひよつとしたら、見かけなくなつた理由の一つになるのかもしれない。

……まあ、一番大きな理由はただ単にその主神^{バカ}たちが飽きたからだろうけど。

「あの結果からして、『呪詛』^{カース}は体を蝕んでいた……と、いう事になるのだが」

結果から察するに、まず間違いない——と、多分本神が一番信じていない結論を、小さく呟いた。

「違うと思っっているだろうか？」

「確証はまだない。だが、あの『呪い』は、もつと本質的な何かに作用していたのではないかと……」

そんな気がする。ミアハは険しい表情でそう言った。

「本質的なもの？」

ぞわり、と。訳も分からず背筋が凍てついた。

そう。これとよく似た話を……子供^{にんげん}の在り方を致命的に変えてしまう『呪い』を、つい最近、ボクは聞いたばかりじゃないか……

「ああ。そして、もし私の仮説が正しいなら、こんな呪いはあつてはならない」

「どういう意味だい？」

乾いた喉から、何とか声を絞り出す。

「仮にそうだとするなら、その『呪詛』^{カース}は何人にも……例え、我ら神の力をもってしても、解呪することはかなわん」

「……何でだい？」

いや、分かる。そんなことは、言われなくても分かっている。

「その者の『本質』を歪められた結果があの変容なら、何を基準に元に戻せというのだ？」
 その『元』そのものが歪んでしまっているというのに。

ああ、それは……。その『呪い』の影響で変容してしまったなら、もう……

「いや、事態はもつと深刻だ。その場合、解呪とは本質の否定となる。そのようなことはできない。できたとしたなら、それはその者自身の抹殺にしかなるまい」

「それは……」

「もし仮に、『神の力』アルカナムを用いたところで、封じ込める事が可能かどうか……」

遠い昔、神々は小人に『火の封』を施した……

(これは、本当に、無関係だつて言えるのか……?)

奇妙なまでに合致する符号に、悪寒は強まる一方だった。

「ヘスティアよ、そなたも顔色が悪いぞ。まさか、先日の風邪をぶり返したのではないだろうか？」

「そうじゃないよ！ そうじゃないけど……」

その懸念を言い出せず、とつさに話をそらしてしまった。

「そ、それで、その運び込まれた子たちはどうしたのさ？」

「うむ。たまたま通りかかった子供が……いや、案外とあの『呪い』の犠牲者を探してい

たのかもしれないが。ともあれ……その、何だ。その者が解放してくれたのだ」
解呪とは本人の抹殺に等しい。

たつた今告げられた言葉から、その結末を察する。

「そっか……」

気の利いた言葉がすぐに出てこないのが齒がゆい。

そして、自分がそれだけ動揺しているのだと、嫌でも思い知った。

「ヘステイアよ……」

「ミアハ様！ ナアーザ！ 大丈夫!？」

微かな沈黙を破り、ミアハが何か言いかけたところで、新しい誰かが飛び込んできた。

「か、霞君!？」

「ヘステイア様?!」

飛び込んできたのは、霞君だった。

エルフにしては結構大胆なその格好は、フィリア祭で見かけた時と同じだ。

「ヘステイア様も大丈夫ですか?!」というか、ベル君は……」

「あ、うん。ええと……」

「霞よ。ベルがどうかしたのか?」

「どうもこうも……。何か、妙な『呪詛』^{カース}のせいでダンジョンまで閉鎖されたんですよ」

「ダンジョンが閉鎖……？ では、まさかベルは？」

「うん。まだ、ダンジョンから戻ってこないんだ」

先ほどと同じくらい葛藤を飲み込んで、その先を続けた。

「今日、ちょうどその『中層』に進出している……」

「何と……ッ!!」

「やっぱり……!」

ミアハと霞君が目を見開き、絶句した。

「あ、でも！ ついさつきギルドが編成した調査隊が向かったそうなので、きっと大丈夫ですよ！」

なんて。霞君の精一杯の励ましを嘲笑うように、夕刻を過ぎてもその調査隊はただの一人も帰還しなかった。……もちろん、ベル君たちも。

ただ——

「ヘスティア、いるか!？」

三人目の乱入者は神友のタケ——タケミカツチだった。

本当に珍しく、息を切らしている。

「タケ?! どうしたんだい、そんな血相変えて——……」

後ろには、眷属らしい六人の子供達の姿も。ただ、それぞれが負傷していて——……。

「すまん、ヘスティア！ お前の子が帰ってこないのは俺達が原因だ!!」

ボクの言葉を遮るように、タケが真剣な顔でそう言つて――

「え？」

ボクらは、思わず顔を見合わせたのだった。

3

「おいおい！ いくら何でもモンスターが寄つてくるのが早すぎるだろ?！」

「分かつています！ ですから、無駄口を叩いている暇はありません!!」

「これが、『中層』……?？」

でたらめすぎる。と、内心で毒づいていた。

『各個人の能力の問題ではなく、ソロでは処理しきれなくなる。中層とはそういう場所です』

ランクアップのお祝いの席でリユーさんが言った言葉が脳裏に飴する。

忘れていない。忘れていないけど……。

「また来ます！ 三時の方向。ヘルハウンド!!」

焦りを宿した声に、思わず舌打ちする。

（いくらなんでも数が多すぎる!）

以前経験した怪物モンスター・パーティーの宴がずっと続いているような錯覚を覚えていた。いや、案外錯覚ではないのかもしれない。

嫌な予感は一とまず飲み込んで、行く手を阻むアルミラージュの大群に斬り込む。

もつとも、一対集団戦は敵に慎め——と、師匠の教えは忘れていない。

まずは解体する……のが定石だが。

「うおおおおおッ!!」

状況は相変わらずだ。なら、やっぱり危険な方法を選択せざるを得ない。

両手でしっかりと構えた大剣——ヴェルフが打った一振りだ——を渾身の力で横薙ぎにした。

一撃で複数の相手を巻き込み、一気に殲滅する。

本来なら、乱戦中に活路を見出すための緊急処置だと言われたが……。

「はあああああッ!!」

攻撃が途切れ、モンスターの物量に押し潰される直前、鋭い剣閃がその隙を補ってくれた。

「ありがとうございます!」

その感謝を呪文代わりに、ファイアボルトを放つ。

狙いは、今まさに一斉放火しようとするヘルハウンドの群れ。

「しまった!？」

だが、数が多すぎる。倒しきれない。炎が放たれる——!

「うおおおおおおおッ!!」

一九〇〇はありそうな大柄の人影が疾走。

そのヘルハウンドの群れを手にした剛斧でまとめて薙ぎ払う。

だが、それでも足りない。まだ生き残っている。

「そこだッ!」

とつさに足元に転がっていた石斧——アルミラージの遺物だ——を蹴り上げ、投擲する。

狙い違わずそれは生き残ったヘルハウンドの一匹の眉間を叩き割り絶命させた。

ほんの一瞬。ヘルハウンドが狙いを迷った。

その男の人を狙うか。それとも、僕を狙うか。その結論を出す前に砲声をあげる。

「ファイアボルト!!」

放たれた炎雷は今度こそその黒犬の群れを飲み込み焼き払った。

「流星は噂の【未完の少年】^{リトルルキー}。頼もしいな」

「ふざける。俺達を囷にする気だったんだろが」

「そうです。ただ逃げ切れなかっただけではないですか」

その人が笑い、ヴェルフとリリが険しい声で吐き捨てた。

……まあ、多分二人の言う通りなんだと思う。

負傷者を抱えたその六人一組のパーティが駆け寄ってきたのは、つい先ほどのはずだ。

「いけません！ 押し付けられました——」

と、リリが悲鳴を上げるより早く、そのパーティは足を止めていた。

理由は単純で、彼らの行く手にも大量のモンスターが現れたからだ。

「……ツツ!!」

リーダーと思しき大男の背中から憤怒の気配が伝わってくる。

「ふざけろ！」

そして、彼らがやってきた方向からも驚くほどのモンスターが迫りくる。

「右の通路へ！ 撤退します!!」

圧倒的な劣勢を前に、それでも動きを止めなかったのはリリだけだった。

弾かれたように全員が——僕らだけではなく、そのパーティまでが走り出す。

そこからは、もう一蓮托生だった。

「どうする気だリリスケ?!」

「どうもこうも、あんな数を相手にはできません！ 何としても、このまま逃げ切ります

!!

他に手はない。手はないけど……。

「待って、リリ！ あの人達が追いつかれる……！」

僕達三人だけならまだしも、負傷者を抱えたパーティーは逃げ切れない。

「リリ達には関係ありません！ どうせ押し付ける気だったんですから!!」

それは、確かにそうなのだろうけど……。

「ごめん、リリ！」

それでも。

『追いついてきた奴らから各個撃破する。これを繰り返すのも一つの手だぞ』

クオンさんから教わった、一人で集団を相手にする方法の一つを思い出す。

そう。思い出した。なら、まだ何も諦める必要はない。

「はああッ!!」

まずは横に反転。

体に残る加速力を無駄にしないため、続けてバク転を決めてから、再び加速する。

「ああもう！ 絶対にそうすると思いましたが!!」

リリの涙混じりの叫びを振り切って、飛び掛かったのは一番近くにいたアルミラー
ジ。

狙うのは魔石のみ。猶予は一撃か二撃。それ以上は後続に追いつかれ、囲まれて蹂躪される可能性が高くなる。

その教え通り、一撃で正確に魔石を貫く。

もちろん、その隙を補うようにリリが援護射撃をしてくれる。

おかげで、ひとまず先頭集団は一掃できた。

「フアイアボルト!!」

次の先頭集団が追いついてくるまでの僅かな時間。その隙を利用して叫ぶ。

狙いは近くの壁と天井。完全に崩落させられればいいのだが、僕の魔法は重さが足りない。

それでも、落ちてきた瓦礫はいくらかモンスター足を止めてくれるはずだ。

結果を見届けることもなく、リリ達を追って再び走りだした。

そして。

そんな戦闘を、それから何度か繰り返してきた。

「すみません……!」

ともあれ。言ったのは、黒髪黒目の女の人。

どうやら全員が極東生まれという、オラリオでは割と珍しい——と、思う——派閥だった。

「話は後です！」

「だが、地上に戻ったら、きつちり落とし前をつけてもらうからな！」

落とし前はともかく……多少遠回りしたとはいえ、そろそろ一二階層への連結路が見えてきてもいいはず。

『上層』にさえ戻れば、負傷者の手当てもできるし、状況は大分好転するはずだ。

連結路まで、あと一息——

「また来ます！」

今まで通りその女の人が警告の声を上げた。

よく分からないけど……多分、『スキル』なんだと思う。特定の条件下でモンスターの接近を把握するとか、そんな感じの。

少なくとも、今までそれが外れたことはない。

「前方にアルミラージ……ッ?!」

そう。今この瞬間までは。

「おい、どう見てもアルミラージじゃないぞ！」

現れたのは三匹の……何とも不気味なモンスターだった。

見た途端、背中に焼け付くような悪寒が駆け抜けた。

矛盾しているその感覚に訝しむ暇も惜しみ、そのモンスターを観察した。

大きく肥大した頭。赤く光る複数の眼。不自然に長く歪んだ腕。

口と思しき場所からは何か詰まっついて、さらに何本かの手のようなものが手招きしている。

「ベル様?!」

「ごめん、分からない!!」

こんな不気味なモンスター、エイナさんから聞いたことがない。

『ギギギギギギ!!』

笑い声——何でそんなことを思ったんだろう——を上げながら、その見覚えのないモンスターたちが襲い掛かってくる。

「命! ベル・クラネル!」

「承知!」

「はい!」

幸い、数はまだ少なく、僕らも足を止めてはいられない。

そして、いずれにしてもあれが『中層』のモンスターなのは間違いない。

階層を無視するモンスターなど中層にはいないのだから。

ならば、ここは先手必勝。Lv. 2 三人で速攻を仕掛け、一気に殲滅する——…

「何……ッ!」

つもりだった。

……もちろん、神ならぬ彼らが知る由もないことだが。

『ほとんど見た目だけだ』

と。ほんの少し先の未来で、とある冒険者達は異形化したモンスターの潜在能力^{ポテンシャル}を結論付けた。

それ自体は決して間違いではない。ただ、万人にとって常に正しいかと言われればそれも違う。

何しろ、彼らは最低でもLv. 3。「ステイタス」は言うに及ばず、超えてきた死線の数が違う。

しかも、同じように数多の死線を超えた者たちが多く集まる大派閥に所属しながら、それぞれが第一線で活躍する精鋭たちだ。

その彼らにとつてすれば、所詮は微々たる差でしかなかった。

だが、今日初めて『中層』に進出した彼ら……まだ小さな派閥の新人達^{ルーキー}にとつて、それは決して軽視できない差となる。

まして、ここまで連戦を何とか切り抜け、相応に消耗した状態ならなおさらだ。

これは、ただそれだけの話でしかない。

無論、だからと言って彼らでは決して倒せない敵などではない。

あくまで『通常種』より少し強い程度だ。彼らに倒せない敵であるはずがないが——
…。

「何だと……ッ?!」

「桜花殿、危ない!!」

しかし、その異形を一撃で確実に斃すにはまだ少しばかり力が足りていなかった。

「ぐお……ッ?!」

それどころか、即座に反撃してくる程度の余力を残してしまう。

そして、その事実に対して速やかに対応するには、まだ僕らには経験が足りなかった。動揺が僕らの攻撃の手をほんの少しだけ鈍らせてしまう。

「いけません! 追いつかれます!!」

速攻が失敗した。

例え一手でも無駄には打てないこの状況では、ただそれだけで危険だった。

まして、主力であるLv. 2が全員押さえられるなど、おおよそ最悪の状況と言える。

「ファイアボルト!!」

その状況を否定するつもりで叫ぶ。

続けざまに放たれた誰よりも早いその炎雷が、今度こそその異形たちを焼き尽くす。もつとも、状況としてはあまり好転していない。

リリが警告した通り、後方からモンスタの大群が迫ってきていた。

「多いぞ?!」

「ま、前にも来ています!!」

通路を埋め尽くすほどのモンスタの群れ。

全員あわせて十人に満たないパーティ。

まして、負傷者を抱えたままではとても切り抜けられない。

「いや……」

『君のスキルは、逆転の力だ』

「まだだ。」

「」

神様の言葉を思い出しながら、チャージ畜力を開始する。

これは、どんな窮地も覆す可能性。そのためのだ。

リン、リン——と。チャイム鐘の音を聞きながら、その大群を睥睨する。

あまり、時間はない。その群れが動き始める一瞬——いや、半瞬前に砲声を上げた。

「ファイアボルトオオオオオオオオッ!!」

白い炎雷が、行く手を塞ぐモンスタを悉く飲み込み、消滅させる。

「走って!!」

その火の粉が消えないうちに叫んだ。

まだ、背後にはモンスターの群れが残っている。

黒髪の女の人——確か命と呼ばれていた——と共に、後方の敵を迎え撃つ……。

「え？」

その直前。不意に、その群れが動きを止めた。

この状況で、モンスターが追撃の手を緩める？

その理由は、すぐに分かった。

「下……ッ?!」

ダンジョンギミック
迷宮の陥穽——地面の崩落だ。

足場に、蜘蛛の巣のような亀裂が走る。

「止まるな！ 走れえッ!!」

大柄の男の人——多分、桜花さん——が叫び、それより早く一斉に走り出す。

でも、間に合わない。崩落に追いつかれ、足場を失う。

どれ程の俊足でも、蹴りつける地面がなくては意味がない。

内臓が浮き上がるような感覚に吐き気を覚えたのも束の間のこと。

「ベル様——あッ!?!」

「リリースケ、止まるな——ッッ?!」

リリとヴェルフの悲鳴が聞こえる中、僕にできたことはたった一つだった。

「何を?！」

すぐ近くにいる命さんの腕を掴み、全力で上へと放り投げる。

文字通り、自分の手の届く範囲でできたのはそれだけだった。

そして、反動で加速する世界の中で。

最後に、桜花さんが確かに命さんを受け止めるのを確かに見届けた。

3

ひとまず、場所をボクの教会に移してから。

「それは……何ともベルらしい話であるな」

改めてタケたちの話を聞き、ミアハが小さく呟いた。

まあ、そうだろうな——と。ボクも声にしないまま、呟いた。

「すまん。こいつらも必死だったとはいえ……」

タケのところの眷属ことども達も、たまたま今日初めて『中層』に進出し——そして、手痛い洗礼を受けたらしい。

モンスターに追われつつ、何とか地上への帰還中、これまた偶然見かけたベル君たちのパーティにその追手を押し付けようとして——まあ、失敗して、みんなで逃げる羽目

になったのだとか。

それで、もう少しで『上層』というところで迷宮ダンジョンギミックの陥穽に巻き込まれ、ベル君たちはさらに下に落ちたのだと。

最後に、タケの眷属こどもの一人を……一緒に落ちかけた命君を助けて。

「ベル君達が帰ってこなかったら、君達の事を死ぬほど恨む」

そう。それは、どこまでもベル君らしい話だった。

なら、ボクが言えることなんて、そう多くはなかった。

「でも、憎みはしない。約束する」

そうだと。絶対に、ベル君だつて憎みはしないはずだ。

あの子は、ボクの大切な——何よりも自慢の眷属こどもなんだから。

「今は、ボクに力を貸してくれないかい？」

そして、ベル君達は絶対に今も必死に戦っている。

ボクが与えた『恩恵』は、まだ消えちやいない。

だから、ボクが助けてあげなくちや。

「——仰せのままに」

片膝についてそう言ってくれた子供たちに感謝していると、ヘファイストスが言った。

「確認するけど、確かにもう一つ下まで落ちたのよね？」

「はい。ベル殿に投げられた時、その先にもう一つ崩落が見えました」

頷いたのは、命君だった。

「となると、ベル達がいるのは一五階層ということになるな……」

「ええ。普段なら最悪だけど……今回は、最悪よりは少しだけ幸運かもね」

へフアイストスが呻く。

「例の『呪詛』の元凶は、一四階層に存在しているみたい。そのまま一五階層で救援を待ってくれていた方が、ひよつとしたら安全かもね」

「ギルドが派遣した調査隊は、未だ一人も帰還しないんだったか……」

タケもまた、重苦しい声で唸る。

「時に、タケミカヅチよ。そなたの眷属達は無事か？」

「はい。少なくとも件の『呪詛』に関しては、全員問題ありません。【戦場の聖女】からも墨付きをもらっています。……だから、少々強引に治療室から抜け出すことができました」

その問いかけに、団長の桜花君がしっかりと頷いた。

「それは何よりだが……やはり、あれはアミッドでも手に負えぬか」

ミアハが少し微笑んでから、小さく首を横に振った。

そっちはそっちですごく気になるけど……。

「当面の問題は、ダンジョンが閉鎖されたままだつてことね」

「ああ。それと、単純に戦力が足りん」

ヘファイストスとタケが、それぞれ唸る。

「うちから出せると言ったら、桜花と命……それと、千草もサポーターとしていけるな？」

「は、はい！ 連れて行つてください！」

大人しそうな女の子が、真剣な顔で頷いた。

「他は……すまんが『中層』だと足を引つ張りかねん。まず何より足の速さが必要な救助隊ではなおさらな」

力を封じているとはいえ、タケは武神。

戦いのことなら、間違いなくこの場にいる誰よりも熟知している。

「ヘファイストス。お前のところはどうか？ 確かLv. 5が一人いるんじゃないか？」

「それが、戦える子たちは今、ロキのところの遠征についてってるのよ。もちろん、椿もね」

「ロキの？ それは凄いな……」

「ありがとう。……でも、残っている子だけだと『中層』は厳しいわね」
ふむ……と、そこでミアハが小さく唸った。

「時に霞よ。クオンは今、どこで何をしておるのだ？」

その言葉にギョツとしたのはタケ達だけだった。

そういえば、まだタケ達には霞君についてちゃんと紹介していなかったつけ。

「ええと……。あえて詳しくは言いませんけど、今あいつはオラリオにいないですよ」
困ったように、霞君が言った。

でも、オラリオにいないとするなら……

「メレンか」

「メレンね」

「メレンだね」

ますます困ったように、霞君が苦笑した。

うん。間違いない。何かもう、『神の力』アルカナムとかそんなの使わなくても分かる。

「『メレンの悪夢』か……」

メレンの街に、フィリア祭で暴れた——らしい——新種イグイルスと闇派閥残党が現れ、大被害を出した……と、いう話ならボクだって知っていた。

「確か、ガネーシャのところの子供たちが鎮圧したんだよね」

「うむ。彼女らが尽力したことは疑いない。そして、少なくとも犠牲者を出している」
「……まあ、でも。間違いなく彼も関わってるでしょうね」

三柱さんじゆんで顔を見合わせてため息を吐く。

となると。ひよつとしてメレンは噂よりも酷いことになってるんじゃないや……。

「しかし、そうなるはまだオラリオには戻ってきておらぬだろうな」

「でしょうね。ここにいるよりは多少なりと安全でしょうし」

あるいは、逃げるにもちようどいい立地だと、ヘファイストスが呟く。

「戻ってきますよ。今日明日中に、とは言いませんが」

しかし、霞君はあつさりと言いきった。

「そうね。あなたが残っているものね」

「そうだったらいいですけどね」

からかうようなヘファイストスに、霞君は肩をすくめた。

「オラリオにダンジョンがある限り、あいつは戻ってきますよ」

諦観——いや、達観だろうか。とにかく悲しそうな顔で、霞君は小さく呟いた。

帰ってきたら、まずとつちめてやろうと静かに心に決める。

「すまん、ヘステイア。私は力になれぬ。ナーザはダンジョンに潜れんからな」

ほんの少しの沈黙の後で、ミアハが言った。

「うん。分かっている」

ナアーザ君の事情は、つい先日聞いたばかりだ。

流石に無理強いはいできない。

「となると、やはり戦力が足りん。特に今は『異常事態』イレギュラーが起こっているからな。閉鎖が解除されたとしても、完全に普段通りとは限らん。念入りに準備しておいた方が良いでしょう」

「ええ。できることなら、二級冒険者が二人くらいいてくれると心強いんだけど……」

「今の状況では、ガネーシヤに相談してもな」

「そうね……。私のところと同じでしょうね」

今、ガネーシヤは歓楽街とメレンに大勢の眷属を派遣している。

どちらも閥派閥イヴイルスが絡んでいる以上、相当な戦力を送っているだろう。

そこに加えて、ダンジョン閉鎖イレギュラーという異常事態ときたなら、余力はないだろう。

そんなことを、ヘファイストスとタケが言った。

（つていうか、それどっちもクオン君絡みじゃないかー！）

——と、胸中で叫んでおく。

まあ、それどころかなる訳もないけど。

「あく……。具体的なランクは分かりませんけど——」

と、そこで霞君が言った。

「強くて、ベル君を助けてくれそうな冒険者なら少しだけ心当たりがありますよ。いえ、あいつから聞いただけですけど……」

もし留守中に何かあったら、そいつらのところに行け。

クオン君が、そんなことを言っていたらしい。

「ちよつと行つて、相談してみますね」

「あ、待つて。ボクもついて行くよ——」

と、霞君を追つて走りだそうとしたところで、隠し部屋から声が出た。

「戦力がどうか聞こえたが、何かあったのか？」

紫紺の瞳。色白の肌。灰色の髪は襟首辺りで切り揃えられている。

「アンジェ君……」

半ば無理やり引き留めていた——自らを不死人のろわれびとと呼ぶ女の子だった。

今は鎧ではなく、白を基調としたゆつたりとした仕立ての上着とズボンを身に着けている。

何となく、ボクらが降りてくる前に存在した聖職者を思わせる……というか、実際に一応そういう系統の血筋に生まれたいらしい。

まだあまり詳しくは聞いていないけど……何でも聖職の騎士だったんだとか。

「あら、ヘスティア。あなた、新しい眷属ができたの?」

「い、いや。そーいうわけじゃないんだけど……」

返事に困っていると、アンジエ君が改めて問いかけてくる。

「戦力が必要なのか?」

「う、うん。ベル君達が、ダンジョンから帰ってこないんだ……」

「あの少年たちが?」

頷くと、アンジエ君は感情を感じさせない声で言った。

「なら、私が行こう。ダンジョンというのは、あのドラゴンがいた場所なのだろう?」

「ドラゴン?」

その言葉に、ヘファイストスが小さく呟いた。

「あまりよく覚えていないが、小さな竜だった」

「……まさか、インファント・ドラゴンのこと?」

「名前は知らん。だが、見掛け倒しだったな」

怪訝そうな顔をしているのは、やはりタケたちだけだった。

「ヘスティア……」

あつさりと言いきったアンジエ君に、ヘファイストスがボクへと視線を向けた。

「うん。それでいいと思う」

「……そう」

霞君は言うに及ばず。ヘファイストスもミアハもクオン君をよく知っているのだ。ボクらの血を寄る辺としないまま、ダンジョンに挑む——挑める力を持った子供にんげんを。なら、推測するのは簡単だろう。

「い、いや！ でも、君の鎧はまだ壊れたままじゃないか！」

「あれくらいなら、まだ役に立つ。それに、どうせお互い朽ちるのを待つだけだ」

この子が死に場所を探しているのは分かっている。

それに、この子の体質からして、ダンジョンこそが理想的な場所だと考えていることも。

「安心しろ。あの少年たちは生還させる」

やはり、自分は含めていない。

でも、この子の協力が必要なのも事実だった。

（だからって……）

この子を犠牲にして助けるといふのは間違っているはずだ。

『例え、我ら神の力をもってしても、解呪することはかなわん』

絶対に、間違っているはずだ。

「……一つだけ、お願いがあるんだ」

だとして。ボクに何ができるだろうか。

「ボクの眷属になつておくれ」

……いや、地上にいる間なんて、できることはごく限られてしまう。

「もちろん、君の信仰を捨てろとは言わない」

この子は、いわば『古代』の聖職者そのものだ。

かつて信仰を奪われた小人族バルウムがどうなったかを思えば、これは酷い冒瀆なのかもしれない。

「ただ、君に助けてもらおう代わりに、ボクにも少しだけ助けさせて欲しい」

それでも。地上にいる神ボクがこの子の力になる方法はそれしかなかった。

「よく分からないが……あの少年と同じようになれということか?」

頷くと、彼女は小さくため息を吐いた。

「いいだろう。どうせ、私の信仰などたかが知れている」

言うが早いのか、彼女はためらいもなく上着を消した。

もちろん、クオン君と同じ『スキル』だ。

「うわあ!?! タケ、ミアハ! むこう向けえ!?!」

意外と大きな胸が無造作に晒された辺りで、叫んでいた。

「お、おう?!」

「う、うむ?!」

「とうか!」【ステイタス】更新なら、自分たちがいてはまずいでしよう! すぐ表に出ます! そうですね、桜花殿?!」

「そうだよ、桜花?!」

「分かつている。分かつてるからその手を下げろ?!」

今すぐにも目潰しかましそうな命君に背中を押され、千草君に手を引かれタケたちが礼拝堂から出ていく。

……あと、霞君はすでにいなかった。しまった、置いていかれてしまった。

「……で、私はいいいわけ?」

「えっと……」

そして、思わずヘファイストスの服のすそを掴んでいた。

い、いや、だつて。……ちやんと『フェルナ恩恵』が刻めるか少し不安だし。

(確かクオン君、自分には刻めないみたいなのを言つてたしなあ)

ええい、ヘタレつていうな! これこそパーフェクトに『未知』つて奴なんだい!

——と。どこから届いた伝言メッセージに反論の念を送つておく。

「よし。それじゃ、いくよ……」

ともかく、いつもの針を取り出し、指先に小さな血玉を作る。そして、それをその白い背中に垂らして――

「ほあ?!」

その血が完全に染み込んだ。

(ええ?! まさか弾かれた?!)

まさか、それほどに強固な信仰……いや、違う。これは――

(足りてないんだ……っ!!)

もつと単純な話だ。

血なんて所詮は触媒でしかない。

本当に「ステイタス」を綴るのは、そこに込められた『神の力』アルカナム。

それが、逆に取り込まれた。彼女の『器』を包みきれず、逆に中に納まってしまった。

つまり、単純にボクの力が足りていない。

(ど、どうするっ?)

一滴の血に宿せる『神の力』アルカナムは一定だ。

元々がそういうものなのだ。その法則ルルルに逆らつては天界に送還されかねない。

でも、一滴では足りないというのも事実だった。

それなら――…

(ええい！一滴じゃ足りないっていうなら!!)

とつきに思い付いた。

「ちよつと待つてておくれ！」

「あ、ちよつとヘスティア?!」

アンジェ君とヘファイストスをおいて、いったん隠し部屋に飛び込む。

そして、それを片手に掴むともう一度戻つて――

「いくぞおおおおおおつ!!」

覚悟を決めて、持つてきた包丁で指先を思いつきり切る。

ぼたぼたと垂れ落ちる血は、いつもの何倍になるのだろうか。

ようやく、慣れ親しんだ感触が伝わってきた。

L v. 1

力 : I 0

耐久 : I 0

器用 : I 0

敏捷 : I 0

魔力 : I 0

その背中に、彼女の物語が記され始める。

もつとも、例え歴戦の戦士であっても最初は全員がLv. 1。オールI0からのスタートだ。

誰でも同じ。ここまでは。

《魔法》

〔 〕

〔 〕

〔 〕

魔法の発現はないけど、スロットは三つ存在する。

魔導士としては最高の資質だ。

ただ……予感だけど。これで驚いては身が持たないだろう。

《奇跡》

ほら、やっぱり。

ベル君と同じだ。いや、同じじゃないけど。同じように項目が増えた。

『奇跡とは、神々の物語を学びその恩恵を祈り受ける業である。その威力は術者の信仰に依存する』

——と。その【奇跡】というのが何なのかがボクの知識にも追加される。

ベル君の「呪術」とは違う。彼女は確かに『古代』の聖職者と同じなのだと思
う。

《奇跡》

【回復】

- ・ 聖職者の初歩的な奇跡
- ・ 自身や他者の体力を回復する

記されたのは、詠唱文ではなかった。

その『物語』の概要。これもまた、ベル君の「呪術」と同じような感じだ。

【フオース】

- ・ 武器を持つ聖職者の初歩的な奇跡で、衝撃波を発生させる
- ・ 直接的なダメージを与えるものではないが、周囲の敵を吹き飛ばしよろめかせる
- ・ 飛来する矢を防ぐ効果もある
- ・ 聖職の騎士は、これを頼りに単騎敵中に突撃するのだ

【導きの言葉】

- ・ 迷える者たちの奇跡
- ・ 聖職者の道標は信仰の中にあり、故知らぬ導きなど知る必要はない
- ・ だが、この奇跡は語り継がれ迷える者たちの微かな望みとなり続けた

【武器の祝福】

- ・ 武器に祝福を施す。
- ・ 祝福は攻撃力を高め、僅かずつ体力を回復する。
- ・ 死して彷徨う亡霊や骸に対しては特に脅威となるだろう。

【白教の輪】

- ・ 白い光輪は敵を斬り裂き、やがて術者の元に戻る
- ・ かつて、神々の名残が濃い時代には白教の奇跡は光輪と共にあったという
- ・ そして、それを偲ぶ者達はいつの日かそれが戻ると信じていた

「?!」

かつて、神々の名残が濃い時代には——
いつの日かそれが戻ると信じていた——

最後に綴られたその『物語』において、『神時代』は何故か過去形で……いや、もう終
わってしまったものとして語られていた。

けど、それに驚いている暇すらなかった。

本当の衝撃は、その直後に叩き込まれたのだから。

《スキル》

【闇の刻印】

ダークリング

- ・ 不死の証。死亡しても蘇生可能。しかし、その度に人間性を喪失する。
- ・ ソウルの器の証。ソウルを奪い己のものとして取り込める。
- ・ ソウルを代償に最後に休息した篝火に帰還できる。篝火こそが不死人の寄る辺である。

・ 人間性の減少により亡者化が進行。心折れば、完全なる亡者となり果てる。

確かに、その背にはそう記された。

(スキル。スキルだつて……?!)

ゾツとした。血が凍つたのかと思うほどだ。

そう。それは、まさにミアハが言っていたように……

『その者の『本質』を歪められた結果があの変容なら、何を基準に元に戻せというのだ?』
ありえない。こんな『呪い』はあり得ない。あつてはいけない。あつてはいけないはずなのに……っ!

そのあり得ない『呪い』は、止める間もなくそこに具現化した。

いや、止められるはずもない。

そもそも、『ファルナ恩恵』とは、何かを打ち消すものではない。経験を発掘していくものだ。

あえて埋もれたままにしておく事は可能だけど、すでにあるものを埋めなおす事はま
ずできない。

「終わったよ……」

たつた今「ステイタス」が綴られたばかりの背中に額を押し当てて眩く。
眷属かぞくが増えたんだ。嬉しくないはずがない。でも、今はなんだか泣きたい気分だった。

「ヘステイア。あなた、大丈夫なの？」

しばらくそうしていると、ヘファイストスが静かに尋ねてきた。

「何とかね……。何だか、すごく疲れたけど」

これ、一体何回分の「ステイタス」更新を同時にやったことになるんだろう。

流石に疲れた。体がじゃなくて、精神が。この辺はベル君達と同じだ。

まあ、まだ流石に精神疲弊マインドダウンを起こすほどじゃないけど。

「いや、そつちもだけど。指は？」

「えっ？」

ダバダバと、まだ豪快に血が滴っていた。

それを見た途端、忘れられていた恨みでも晴らすかのように指が痛みだす。

つていうか、本当に痛い?! 火傷したみたいに痛い?!

「いたたたた?! 痛いよおおおおおっ?!」

「当たり前でしょ、このバカ! ちよつとミアハ——」

へファイストスがミアハを呼ぶより先に、誰かがボクの手を取った。
いや、誰かなんて分かりきっていた。

その物語を口ずさむのは、ボクの新しい眷属^{かぞく}。

黄金の輝きが、その傷を優しく包んで消していく。

これは【回復】の物語か。前にクオン君も口ずさんでいた気がする。

「ありがとう」

見れば、アンジエ君の体には生気が戻っていた。

今までの燃え尽きた灰のような白さではなく、人間のぬくもりが感じられる。

……それならきつと、少しはボクの血にも意味があつたんだろう。

ホツとしてると、アンジエ君はそのままそこに跪いて――

「これより私は、炉の神ヘスティアの陰となり、貴女を守護し、神の敵を狩る剣となりましょう」

——そんな宣誓を口にしたのだった。

いや、だから信仰は棄てなくなつたって——と。

そう言おうとして、やめた。

「なら、約束しておくれ」

今、ボクが伝えなくちゃならない言葉は別だった。だから、少しだけズルをさせてもらおう。

「生き急いだりしないで。これで、ボクらは家族になったんだ」

その『呪い』を解くことは、ひよっとしたら本当にできないのかもしれない。でも、

「ボクはずっと君の傍にいる。約束する。だから、亡者になんてなるんじゃないぞ」
ボくらだって不老不変の存在だ。時の最果てまでだって付き合える。

「……神命、拝受しました」

「ああ。約束だ。忘れないでおくれ」

4

あれからしばらくして。

何とかして辿り着いたその小広間ルームの中に、僕達は身を潜めていた。

通じる道は酷く狭い。身を潜めるには都合がいいけど、勘づかれたら逃げることもま
まならない。

そういう意味では、決して安心できる状況ではなかった。

「ヴェルフ、脚はもう大丈夫？」

「ああ。……いつも通りとはいかないが、何とか戦えそうだ」

間違っても勘づかれないよう息を潜めたまま問いかけると、少しだけ苦痛を宿した声でヴェルフが頷く。

「……何よりです。今のダンジョンで、戦力の欠落は致命的すぎますからね」

小さく呟くりりの声もまた、酷く固い。

理由は、もちろん一つしかない。

(落ちた……)

一二階層まであと僅かというところから一転して、ダンジョンのさらに奥へと。

それだけでも最悪だが、すでに現在地を見失っている。

ダンジョンの中で迷子。最悪過ぎて、いつそ笑い出したくなる。

ただ、それも仕方がないことだった。

(エイナさん……)

真紅の長衣を握りしめ、信頼するアドバイザーの顔を思い浮かべる。

落ちた先——ようやく、何とか、体勢を立て直した直後に遭遇したのはヘルハウンドの一团だった。迫りくる炎は、あまりに絶望的だったが……

(この『サラマンダー・ウール』がなければ全滅していた)

そう。エイナさんの助言のお陰で何とか命拾いできた。

長衣の胸元を握りしめながら、小さく感謝の言葉を口にする。

これを着ていなかったら、爆炎に紛れて逃げ出すどころか、あの場所で消し墨になっていたのは間違いない。

「いくら何でも、モンスターの方が多すぎる……」

今立てこもっているこの小さな広間——入り口が一つしかないこの場所に逃げ込めたのは、多大な『幸運』に恵まれたからだろう。

あのヘルハウンドの大量に限らず、道中で見かけたモンスターはあまりに多すぎた。

「多いが……何か、妙に怯えているようにも感じるな」

「ええ。明らかに何か異常事態が起こっています……」

イレギュラー。その言葉は、別の存在を思い起こさせた。

「ごめん、ヴェルフ。ちゃんと治してあげられなくて……」

ヴェルフの脚は瓦礫に挟まれ、骨が折れていた。

何とか、「ぬくもりの火」で癒しはしたけれど……。

「クオンさんだったら、きつと完全に治せるのに……」

今の僕では、完全に癒しきれない。それより先に、『火』は消えるか使えなくなつた。気にするなつて。何とか戦えるようになっただけで充分だ」

「ええ。ヴェルフ様には負担をかけますが、今は少しでも精神力を温存しないと。それ

に——……」

「うん、分かつてる」

その『火』の明かりは、モンスターを呼び寄せる目印にもなってしまう。

だから、今まで灯した【ぬくもりの火】はいくつか途中で破棄することになってしまった。

「ここで、もう少し休憩レストを取りましょう」

リリの言葉に頷く。

とはいえ、ダンジョンの中だ。十分に休めるはずもない。

特に精神的な疲労はなかなか抜けない。文字通り、気を休められないのだから当然だが。

「念のため、もう一度壁に傷を。なるべく音をたてないように」

傷をつければ、ダンジョンはその修復を優先する。その間は、モンスターが生まれな
い。

ダンジョン内で最低限の安全を確保する方法だった。

……今にして思えば、クオンさんがこまめに採掘していたのは、僕達の背後でモンスターが生まれないようにするためでもあったのかもしれない。

「うん……」

そんなことを思いつつ、壁に傷をつける。

これで、もうしばらくこの辺りではモンスターが産出されないはずだ。もつとも、岩の壁に音もなく傷などつけられない。

今はモンスターの耳に届いていないのを祈るしかなかった。

何しろ、ここで襲われたならもう逃げ道がないのだから。

「……装備の、確認をしましょう」

それから、しばらくして。新しくつけた傷が、あまり目立たなくなってきた頃。リリが言った。

「まずは治療用のアイテムです。リリは、回復薬が四、解毒剤が二」

半ば燃え尽きたバックパックを探りながら、リリが告げた。

「俺は何も残っちゃいない」

落ちた時に、全部割れた——と、ヴェルフが苦々しく呻く。

「僕は、レッグホルダーにいくつか……」

中身を確認しながら、答える。

特にとっておきの二属性回復薬は、まだ割れずに残っている。

「でも、精神回復薬は、もう……」

つい先ほど、最後の一本を飲んでしまった。

「ここまでのように魔法と呪術に頼った強行軍はできそうにない。

「次に武器です」

弱気になりそうな僕を叱咤するように、リリが言葉を続けた。

「リリのボウガンは……」

まだリリの手元にあるものの、落下した時に酷く叩きつけたらしく破損してしまっている。

「悪いな、ボウガンの機構には詳しくないんだ。それに、道具も材料もない」

それでも、ヴェルフの手で簡単な応急処置は施されている。

もつとも、いざという時に一回か二回撃てるかどうか……と、言ったところらしいけど。

もちろん、威力もいつも通りとはいかない。本当に、気休め程度だとも。

「ですが、ベル様からお借りしているショートソードは無事です。……使い手がリリでは、これも気休め程度ですが」

「僕は、大剣をなくしただけ」

やっと手に馴染んできたところだったけど、知らないうちに手放してしまっていたらしい。

（多分、落ちてすぐの一斉放火から逃げ出す途中だと思うけど……）

もつとも、今さら回収に戻るはずもない。

モンスターから逃げるのに必死で、どこをどう逃げたのか分からない。

……と、いうか。それが分かっていたら、今いる場所も少しは見当がつくんだけど。

「ナイフとショートソードは無事」

もちろん、手甲と一体化している小盾も。

「俺の大刀も無事だ」

つまり、武器に関して言えば消耗は決して深刻というわけではない。

『サラマンダー・ウール』も、無事だな」

「うん。焦げてもない」

念のため、お互いに確認し合うが、これといった問題は見当たらない。

これで、ひとまずヘルハウンドの攻撃もまだ耐えられる。

「まだ、ギリギリ命運は途切れてない、ですな……」

「うん、そうだね」

「ああ、その通りだ」

三人で何とか笑いあう。

もつとも、リリもヴェルフも笑顔とは言い難いような引きつった顔だった。多分、僕もそうだろう。

「だが、これからどうする？　現在地が分からないうえ、モンスターの大量発生ときて
る」

少しして、表情を改めたヴェルフが切り出した。

「現在位置、ですか……」

「どうしたの、リリ？」

まさか、見当がつくのだろうか。

「いえ、あくまでリリの主観での話です」

なのでどうか、お二人とも取り乱さずに聞いてください——と。

リリは真剣な顔で念を押し、僕らが頷くの見届けから、後を続けた。

「今いるこの階層は、一五階層かもしれません」

「——」

呼吸が止まる。取り乱さなかったのは、多分奇跡に近い。

……いや。それとも——

「落ちてから、地面につくまでの時間を顧みると、二階層分の距離を落下した可能性は充
分あります」

——そう。予想していたからだろう。

リリの言葉に納得するほど、あの落下は酷く長く感じた。

「一五、階層……」

ひとまずの安全階層となる一二階層まで、三階層も踏破しなくてはならない。

万全の状態ですら困難だというのに、今の状態で本当に踏破できるのか……。

「二つの選択として、ですが。あえて、上層うえを目指すのではなく、さらに下を目指すという方法もあります」

「さらに、下……？」

「はい。一八階層は安全階層……セーフティポイントモンスターの生まれない階層です。ほら、ベル様。覚えていませんか？ あの変な女の方と、赤い幽霊と出会った時のことを」

「女の人と、幽霊……」

それは、覚えていた。

僕が初めて——多分、本当の意味で「イレギュラー正体不明」クオンの姿を見た日の事だ。

「そのあと、クオン様はどうされました？」

「えっと、ダンジョンの中にももるって……」

『一八階層までたどり着ければ、お前にも意味が分かるさ』

「あ……」

そう。確かにそう言っていた。

一八階層。セーフティポイント安全階層。モンスターの生まれない階層だからなのか。

「はい。一八階層までたどり着ければ、そこまで自力でたどり着ける冒険者たちが必ずいます。何しろ、『下層』に挑むための重要な拠点でもありますからね」

「拠点……」

「ええ。クオン様がしばらく滞在できる程度には栄えていると聞いたことがありますよ」

野営地のようなもの、ということなのだろう。

「辿りつけさえすれば、あとはそこから地上に戻る連中に合流させてもらえるってわけか」

ヴェルフもまた、小さく唸った。

「だが、階層主はどうする？ 確か一七階層だろ、産出されるのは」

一七階層——ダンジョンで最初に遭遇する階層主。その名を『ゴライアス』といった。もちろん、見た事などある訳もない。エイナさんから、名前を聞いたことがあるだけだ。

「今なら、ギリギリ素通りできるかもしれません」

しかし、リリは澱むことなく言った。

「どうして？」

『ゴライアス』が産出されるのは一八階層への連結路の手前だと聞きます。そして、

インターバル
次産期間は約二週間。そして、「ロキ・ファミリア」が遠征に向かったのもおおよそ二週間前ですから」

「ロキ・ファミリア」が討伐しているなら、確かに間に合うかもしれないが……」

「それはまず間違いなく仕留めていると思います」

「何でだ？」

「ロキ・ファミリア」の遠征先は五九階層。必然、用意する物資の量も多く、それを運ぶためのサポーターも多く連れて行きます。それほどの大人数を引き連れて、階層主を素通りするのは難しいはずです。少なくとも、彼らにとっては仕留めた方が遥かに楽でしょう」

(そういえば……)

アイズさんは、単独で階層主を——ゴライアスよりさらに深いところにいる怪物を倒したのだと。

その事実を思い出す。

そして、そう言った実力者が集まっているのが「ロキ・ファミリア」だ。

なるほど、確かに倒してしまった方が楽で安全なのか。

「……………」

憧憬との距離を、改めて思い知った気分だけど……今は落ち込んでいる暇もない。

「そういや、今回はうちの団長達もついて行ってるんだったか」

「ええ。ですから、なおさら安全優先で攻略を進めると思っています」

「そいつは納得だが……正気ほんきか？」

「現在地が不明の今、一つしかない上への階段を見つけるよりは、確実に複数ヶ所にある縦穴の方が見つけやすいと、リリは考えます。それに……」

少し口ごもってから、リリは続けた。

「ダンジョン内では何か深刻な『異常事態』イレギュラーが発生しています。それも、おそらくリリ達がいるこの階層より上で」

「何でそう思うんだ？」

「下なら、ギルドが派遣した調査隊なり一八階層の冒険者なりが探索しておかしくありません。ですが、今のダンジョンはあまりに静かすぎます」

つまり、今のダンジョンには——この階層には冒険者がいない。もつと上の階層で足止めされている。

そういう可能性が高い。

「もちろん、まだ調査の手が届いていないだけの可能性もあります。もしくは、『異常事態』イレギュラーなんて起こっていないのかもしれませんが、その場合は、上を目指した方が安全なのは間違いないでしょう。連結路とは言わずとも、正規ルートにさえ近づけば他の

パーティーと出会える可能性が高まりますから」

ただ、仮に上で『異常事態』^{イレギュラー}が発生しているなら、自分からそれに飛び込むことになる。

そこまで言ってから、リリは告げた。

「このパーティーのリーダーは、ベル様です。ご判断は、ベル様にお任せします」

息が止まり、心臓だけが跳ねた。首筋辺りが凍えたように震えだす。

ダンジョンの薄闇が、質量を持ったように肩へのしかかってくる。

「いい、決めろ。どっちを選んだって、俺はお前を恨んだりしない」

それは、信頼と絆の言葉だった。

しかし、同時に僕から逃げ道を奪うものでもある。

乾いた喉が痛みすら発する。

これからする選択は、まず間違はなくパーティーの……リリとヴェルフの生死を決定づける。僕一人が死ぬだけでは絶対に済まされない。

今まで感じた事のない恐怖だった。ミノタウロスに襲われた時も——二度目の対峙の時とも違う。

他者の……大切な人達の命の重さ。それが、心臓を押し潰しそうだった。

だが——これこそが、パーティーの頭目の役目なのだ……そう理解してもいた。

リリとヴェルフの信頼の応えるなら、それは今だ。

(階段を探すか、縦穴を探すか……)

いずれにしても、モンスターとの接触は最小限にしなければならぬ。

その前提の上で、どちらを見つける方が現実的か。

どちらにしても、相応の『幸運』に恵まれなければならぬだろうけど……

「――」

それでも。最大限、自らの手で帰還への道を切り拓くならば――やはり、冒険をするしかない。

決断を、下した。

「進もう」

そう。前進ぼうけんをするのだと。

5

そして、眠れぬ一夜が明けて。

イレギュラー

「【正体不明】クオンへ。神ウラノスはあなたを招聘します！ オラリオにいたのであれば、直ちに応じてください。またすべての派閥へ。彼の所在を知る方はギルドへ連絡をお願いします!!」

事態は、大きく動き出した。

「ハスティアよ。ダンジョンの閉鎖が解除されたぞ」

ヘファイストスのお店に、ミアハが駆け込んできたのはその日の夕方過ぎだった。クオン君が戻ってきてから、およそ半日といったところか。

「本当かい?！」

「うむ。確かだ」

「ごめん、店長！ ボクこれで上がるよ!!」

ミアハの言葉に頷くより先に、店の奥へと叫ぶ。

もうヘファイストスが話を通してきているので、これで充分だ。

「タケ達は?」

「準備は整っている。傷もすっかり癒えた。そなたの子の装備も直ったようだぞ」

バベルのエレベーターの中で、そんなやり取りを交わす。

「今回だけは、特別にただでやってあげる」

アンジェ君の鎧を見ただけで——いやまあ、その前に最初の誓約の様子を見てるけど

——ヘファイストスは大体の事情を察してくれたらしい。

そう言つて、アンジェ君の装備一式を持ち帰つて……本当に一夜で仕上げてくれたら

しい。

「みんな！」

バベル前の広場から少し外れ、なるべく人目につかないその場所に、タケたちが集まっていた。

「おお、ヘステイア！ やつと閉鎖が解除されたぞ！」

「第三次調査隊も派遣されたわ。結構な人数がね」

「だが、彼らはベル達を積極的に探してくれるわけではあるまい。やはり自ら探すしかないだろう」

「うん！ 分かっている！」

頷いてから、皆を見回す。

「改めて。みんな、ボクに力を貸しておくれ！」

「仰せのままに」

頷くのは、タケの眷属こどもたち。

そして――

「微力を尽くしましょう」

霞君の隣にいる、覆面をつけた女冒険者。

「えっと、君は？」

「助っ人ですよ。あいつ一押し」

「……そうなります」

あいつとはクオン君の事だろう。つまり、超強いつてわけだ。

「ちなみに、素性の詮索は禁止ですよ？」

剣闘士の礼儀マナです——と。霞君が冗談交じりに笑う。

冗談交じりだけ……実際、本当にそうなんだろう。

「……まあ、私が言っても説得力がないかもしれないかもしれませんが」

「いえ、お気になさらず」

あれは無理です——と、覆面君がため息を吐いた。

そりやまあ、クオン君を隠し通すなんて、それこそウラノスギルドでも無理だろう。

「それより、そちらの方は？」

アンジェ君を見て、覆面君が問いかけてくる。

「ボクの新しい眷属だよ」

「新しい？ では、ランクは……」

「あく……。そつちは問題ないよ」

「そう仰るのでしたら」

お互いに詮索なし——と。そんな暗黙の約束を結んでから。

「ヘファイストス！ 直してくれてありがとう！」

そのアンジエ君はすっかり全身鎧を着込んでいて、顔も見えない。

「いいわよ。今回は特別。それに、やっぱり楽しかったし」

それより——と。ヘファイストスが白い布に包まれた何かを差し出してくる。

「これは？」

「あの子……ヴェルフの作品よ。今まで私が預かっていた」

ずしりとした感触。多分、剣……いや、魔剣だろう。

「危なくなったら使ってもいいけど……ヴェルフを見つけたら渡してちょうだい。あと、『意地と仲間を天秤にかけるのはやめなさい』とも伝えておいて」

「う、うん？」

よく意味は分からないものの……多分、ヘファイストスとヴェルフ君の間ではそれで通じるのだ。

しっかりとその言伝を記憶に書き留めておく。

「閉鎖は解かれたとはいえ、まだギルドやガネーシャの子らの監視の目がある。……ヘスティアよ。本当について行くつもりか？」

「うん。そのつもりだ」

ミアハの問いかけに、しっかりと頷く。

「諦めなさい。この子、最近妙に頑固なのよ」

へファイストスが小さく肩をすくめた。

「では、予定通り一芝居うってもらうしかあるまい」

「その代わり。頼むぞ、ヘスティア。無事に帰ってこい」

「もちろんだとも！ みんな揃って帰ってくるさ！」

しつかりと頷く。

「それと、まだクオンはダンジョンの中にいるみたい。多分、『中層』にいるはずよ」

「可能であれば、合流するとよい」

それは、朗報だった。合流できるなら、それだけでかなり心強い。

「それでは、へファイストスよ。名演技を期待するぞ」

「私は芸能の女神じゃないんだけどね」

まあ、でも。完全に演技つてわけでもないか——と、ため息を吐いてから、

「ごめんなさい。今の状況について、少し話を聞いてもいいかしら？ 実は私の子供達

がまだダンジョンの中にいて——」

へファイストスが、入り口で監視しているギルドやガネーシャの子供達に声をかけ

た。

そのまま、少し込み入った話をはじめて——

「少々お待ちください。確認してみます」

少しだけ、監視が緩んだ。

「よし、行け！」

小さくも鋭い声で、タケが言った。

頷いてから、足早に——ではなく。普段通りの足取りで、他の冒険者に紛れて入り口に近づく。

解除されただけあって……あと、安全調査を請け負ったパーティがいるので、それなりの数が入りしている。

そこに紛れてしまえば——

「あれ？ あのパーティは「タケミカツチ・ファミリア」ですね」

「治療室から脱走したってところか？」

ヤバイ。全員の顔が引きつりかけた時——

「あ、でも。そっちはテアサナーレ氏が問題なしって判断したそうですよ？」

ナイスだ、ピンク君！——と、ピンク色の髪をした女のギルド職員君に喝采を上げる。

「あれれ？ でも、あのマントを着た女の子、ヘステイア様に似てるような……」

しかし、裏切られた。そーいう余計なことには気づかないでいいんだよ?!

「ごめーん！ お待たせ!!」

と、そこで。素知らぬ顔で霞君が駆け寄ってくる。

「さあ、行きましょう！」

「え、ええ？」

「ほーら新入り！ そんな緊張した顔しない！」

「ふぎや?!」

状況について行けずに戸惑っていると、びろーんと霞君が頬を左右に引つ張った。

「ひたいひたい?!」

いや、それなりに加減はされてるけども！

あまりに急なことだったので、思わず悲鳴を上げていた。

「まる一日稼ぎがなかったんだから、気合入れてかないと！」

「お、おう！ ま、任せておけ!」

こっ所りと肘で小突かれた桜花君が、実に不器用に不自然に胸を叩き、頷いて見せた。

マズい。これ絶対にバレる流れ……

「さあ、行くわよ！ 折角助っ人も捕まえたんだし！ ほら、早く！」

しかし、霞君が勢いで押し切った。

全員を引きずるようにして、ダンジョンの中へと突進していく。

そして――

「大変失礼しました、ヘスティア様」

それなりに置くまで踏み込んだところで、ぺたりと最終奥義^{ドゲザ}を披露した。

「うわあ!?! 別にいいって!! 気にしないでおくれよお?!」

おかげで助かったし。

(というか、万が一クオン君に知られたら後が怖いよーな気がしてならない!)

想像の中で、クオン君が爽やかに笑う。

……その手に、赤熱した焼き鏝を持ちながら。

「しかし、困りましたね」

ガクブルしていると、覆面君が小さく唸る。

「ここから彼女だけを地上に帰すのは、少々不安です。それに、あまりに不自然だ。特に今は地上とも密に情報のやり取りを交わしていますから……」

不審人物として目をつけられると、各地に散会している調査隊全てを振り切る羽目になる。

その言葉に、全員が顔をひきつらせた。

「そして、第三次調査隊の中核を担っているのは「フレイヤ・ファミリア」です」
加えて言えば、団長である「猛者^{おっじゃ}」が直々に陣頭指揮を執っている。

あのクオンさんと組んで『深淵』の討伐に赴いていることも併せて、主神^{フレイヤ}の神意が働いているのは疑いない。

であれば、彼らは一切の容赦をしない。振り切ろうとしたところで、とても振り切れるものではない。

——と、追い打ちをかけるように、覆面君は続けた。

「えっと、つまり——」

「ええ。このままついてきてもらうしかありません」

不審な行動さえとらなければ、フレイアの子供達の注意を惹くことはない。

ダンジョンの閉鎖は解かれている。調査隊以外のパーティがいたとして、不自然ではないのだ。

「ですよねー……」

ちよつと泣きそうな顔で、霞君が呻く。

「ま、まあ。一応はエルフだし。魔法の心得もあるから少しくらいなら」

念のため動きやすい服に着替えておいて良かった——と。

すぐさまそんなことを呟けるあたり、やっぱりクオン君の関係者だと思う。

ちなみに、今日の霞君の服は卵を取りに行った時と同じだった。

「幸い、予定は大きく変わりません。あなた達は、神ヘステイアたちの護衛を優先してください」

「ああ、分かっている」

「前衛は私が。あなたは中衛を。今の後衛はサポーターより脆いということを忘れないように」

「そのつもりだ」

「モンスターの異常発生が確認されていると聞きます。あなた達も警戒を怠らないように」

覆面君が、桜花君とアンジエ君にそれぞれ声をかける。

そして、最後に――

「あなたがいるなら、クオンさんの協力を取り付けやすい。それは大きな利点です」

と、霞君を見ながらそんなことを言った。

果たして本気だったのかどうか……。

「それでは、行きましょう」

全員が頷くのを見届けてから、覆面君は改めてダンジョンの奥へと向かって歩き始めた。

7

(なるほど、妙なことに巻き込まれやすいのは主神も同じですか)

中層――彼らが落ちたはずの一五階層に至ったところで、そう結論付けた。

「はああッ！」

斧槍を巧みに扱い、アルミラージュ白兔を一掃する女騎士。

彼女は、驚くことにクオンさんと同じ『スキル』の使い手だった。

ただ、明らかに彼女はダンジョンという場所に慣れていない。

そして……

（彼よりは、まだ甘いか）

もつとも、今見せているのが本気かどうかはまだ分からないが。

加えて言えば、

（それでも、私より強い）

その力量はLv. 5以上と見ていい。

ヘステイア様は自分の眷属だと言ったが……下手をすれば、彼女もまたLv. 0なの

だろうか。

（ランクの壁は、随分と低くなったものだ）

覆面の内側で、人知れず苦笑した。

思えば、クラネルさんの『飛躍』もまた、ある意味ランクの壁を揺るがす壮挙だと言

える。

「」

ふと、クオンさんが戻ってきた日——正確には、私がそれを知った日の事を思い出す。確か、あの時クオンさんは後継者を探しに行つたと。そして、見つけたから戻つてきたとも——…。

(いえ、まさか)

流石に結論を急ぎすぎだ。

自制しつつ、行く手を阻むアルミラージの群れを駆逐する。

それにしても——…

「死ね」

蹴り倒したアルミラージに、その斧ハルバート槍を無造作に突き立てて抉る。

騎士然とした装備に反して、その戦い方は案外と粗野ダーティだ。

……もつとも、前線で戦う騎士が全て物語のように高潔だとは思っているわけではないが。

「どうかしたか？」

「いえ……」

視線に気づいたのだろう。問われて、思わず言葉を濁した。

まさか本人に言えるはずもない。……随分と血の匂いのある戦い方をするなどと。

(今となつては私も同じか)

自嘲してから、別の事を呻く。

「モンスターの異常発生というのは確かなようですね」

この階層は今までも何度となく通ったが、これほど大量のモンスターを見かけた経験は少ない。

あつたとしても、それは『怪物の宴』モンスター・パーティーによるものだ。

だが、今は恒常的に多すぎる。

唯一の救いは、感じる殺気に対して襲ってくる数が少ないことか。

もつとも、それとて安心していいことではないが。

(まるで、まだ何かを警戒しているような……)

しかし、ダンジョンから生まれた存在を、同じくダンジョンから生まれたモンスターがここまで警戒するだろうか。

(共食いに手を出した『強化種』なら……)

いや、確かに『強化種』のようなものは発生しているのか。

何でも『深淵種』と呼称されたのだとか。

仮にモンスターが警戒しているのがそれなら、この近くにも潜んでいる可能性がある。
る。

異形とも違う、未知の存在が。

「そうなのかい?」

思考を巡らせていると、「タケミカツチ・ファミリア」に守られたヘステイア様が言った。

その隣には霞さんの姿もある。

……正直、彼女達の同行を許可したのは失敗だったと言わざるを得ない。

後衛は思った以上に優秀だが、それを差し引いても戦力的にはギリギリと見積もった方がよい。

このまま何事もなくクラネルさん達を見つけ出せればいいが……。

(やはり、クオンさんと合流するべきでしょうか……)

もつとも、それも現実的とは言い難い。

何しろ、彼らが今どこを探索しているか全く分からず——そして、合流できたなら、高確率で彼らが追いかけている異常事態イレギュラーに巻き込まれることになる。

「ええ。……クラネルさんの『恩恵』はまだ無事ですか?」

そもそも、この状況だ。最悪の事態がすでに起こってしまったことも考えられた。

「大丈夫。途切れてないよ」

なるほど、私が思っているよりずっと彼は成長しているようだ。

「しかし、生きているとして。例の『呪詛』^{カーズ}に巻き込まれているのでは？」

確かカシマ・桜花と言ったか。「タケミカツチ・ファミリア」の団長が唸る。

「昨日、ミアハ様たちが言つてたけど、やっぱり一五階層は安全みたいよ」
言つたのはアンジェリックさんだった。

「ミアハ様がね。情報を集めてきてくれたの。ナアーズがお手伝いに行つてるしね」
それによると、件の『呪詛』^{カーズ}——『深淵』なるものは、一四階層に発生していたらしい。

そして、その『深淵』自体はクオンさん達によつて、すでに消滅させられているとも。彼らが——第三次調査隊が行つているのはあくまで残党狩りというわけだ。

もつとも、それとて彼女たちを連れた状態で遭遇すれば充分に危険だが。

「いや、それは分かっている。俺達もそれなりに情報は集めた」

傷の手当てを優先したから、そこまではないが——と、小さく付け足してから、
「だが、地上への帰還を目指すならやはり一四階層を通るだろう？」

懸念しているのはそれだ——と、彼は言つた。

確かに正論だと言つていい。言つていいが……

「彼らが本当に一五階層まで落ちたとするなら」

その言葉を聞きながら……ひとまずの指針を打ち出すことにした。

「おそらく、現在位置を見失っているとみていい。そして、彼らもまたこの異常発生の影響を受けているでしょう」

その状態で、闇雲に地上への道を探し回る——と、言うのは下策だった。

「ならば、地上への帰還を諦め、一八階層を目指しているのではないかと」

一つしかない地上への連結路を探すより、無数にある縦穴の方が遥かに見つけやすい。

そして、一七階層までたどり着いたなら、あとは進むか戻るかの選択だ。

いや、時間との勝負というべきだろうか。

「あえて、下に進む……。そんなことを本当に実行するのか？」

だとしたら、正気じゃない——と。桜花が唸る。

確かに、未知の階層に挑むことは恐ろしい。特に彼らはその洗礼を受けたばかりだ。

だが——

「私なら、そうする」

この状況なら、その恐怖に挑むことこそが、最も生存確率の高い選択となる。

そして——

「一度冒険を超えた彼なら、振り返らず前に進むと思います」

視線をヘステイア様へと向ける。

「うん……。ボクも、ベル君は下にいる、ような気がする……」

左右に結つた黒髪を波打たせながら、彼女もまた頷く。

いくら『恩恵』を与えているとはいえ、その位置が正確に分かる訳ではない。

まして、地上にいる限り神と言えど人智を超えられない。

それでも、結ばれた絆を必死に手繰っているようだった。

「ヘステイア様……」

そこで、今まで沈黙を保っていた女騎士——アンジエさんが声を上げた。

片膝をつくその先には、焼け焦げ、溶解し、半ばから折れた大剣の残骸が転がって

る。

「あの少年たちが、ここを通つたのは間違いないかと」

「うん。……確かにこれはベル君の大剣だね」

鍛冶師君から貰つたつて喜んでいた——と、ヘステイア様が呟く。

クラネルさん達が落下した場所と照らし合わせても、彼らの装備の残骸と見ていい

か。

(ここでヘルハウンドの一斉放火を受け、全滅という可能性もありますが……)

道中で見かけたモンスターの量を考えれば、文字通り灰も残さずに焼き尽くされた

しても驚くには値しない。

……もつとも、神ヘステイアがまだ生きているというのだから、その可能性は低いが。

「雑念に気を取られている間に、アンジェさんが聞き取れない言語を用いて何か物語を口ずさむ。」

「ひゃ?! 幽霊?!」

程なくして、半透明の——まさに幽霊のような人影が……その幻影が周囲に現れた。

「【導きの言葉】。大した奇跡ではない。迷える者たちに僅かばかりの導となるくらいか」

「奇跡……?」

魔法ではなく?——と、問いかけそうになつたが……。

(いえ、詮索は無用ですね)

ハラハラとしている神ヘステイアを見て、自省する。

素性を探られたくないのはお互い様だ。私だけが問うのは道義に反する。

それに、今はその時間も惜しい。

「あのパーティは……」

所詮は幻影。はつきり見えないが……装備や背格好からして、クラネルさん達のように見える。

三人がお互いを引きずるようにして、必死に走り抜けていく。

ここでヘルハウンドに襲われ、それでも何とか逃げ延びたと言ったところか。

「どうやら、ここでは死んでいない。いえ、主の言葉を疑ったわけではありませんが……」

行きましょう。そう言つて、彼女はその幻影を追つて走り出した。

「仕方ありません。なるべくはぐれないようお願いします」

「分かったよ！」

と、いつても。冒険者の脚に、恩恵を持たないヘステイア様とアンジェリックさんが追いつけるはずもない。となれば、前衛と後衛の距離が開くのは必然だった。

あまり好ましい陣形ではないが……

「ヘステイア様、ご無礼を！」

「し、失礼します！」

ヤマトさんとヒタチさんが、それぞれ抱き上げた。

まあ、これなら追走は可能か。護衛が二人封じられたが、パーティを伸ばすよりはいくらか安全だと言える。

「行きましょう」

それに、今は巧遅よりも拙速を貴ぶべき局面だった。

そして——…

『進もう』

やや幅の狭い道を超えた先。さらに細い小道の奥にひっそりとあつた小さな広間^{ルーム}。

そこに残されていた橙色の文字のようなものに触れた瞬間。

確かにそんな伝言^{メッセージ}を聞いた。

「今のは……今のはベル君だよ！ 絶対に間違いない!!」

感極まつたように、ヘステイア様が叫ぶ。

生憎と神ならぬ私には、そこまでの確信は持てなかつたが……。

「行く先は決まつたようだな」

「ええ。……そうでなくては」

しかし、疑う余地もまたないように思えた。

アンジェさんの言葉に、私も奇妙な感慨と共に頷く。

(本当に強くなつたのですね、クラネルさん……)

ミノタウロスの単独撃破が街で囁かれているようなもの——偶然だの、おこぼれに授かつただけだのというような——ではないのだと、改めて確信を抱く。

「ベル・クラネル達は、本当に一八階層を目指しているというのか……」

一方で、「タケミカツチ・ファミリア」の驚愕も理解できる。

何しろ、彼らはクラネルさん達を襲った苛酷の目撃者であり、ある意味においては当事者でもあるのだ。

この状況下で更なる未知の階層に挑むなど、正気を疑う行為に感じられるだろう。

「自分たちと同じく『中層』に進出したばかりのパーティが、この状況でさらに下を目指すとは……」

「あの子、思ったより度胸あるわねえ……。それとも、リリルカちゃんかしら？」

畏れすら宿すヤマトさんの呻き声に、アンジェリックさんは素直に感心した様子で頷いた。

「……もつとも、度胸というなら、この中で唯一の常人でありながら、これといって大きな恐慌も混乱も見せず、ここまでついてこられる彼女も大概のように思うが。

(まあ、荒事には慣れているのでしょうが……)

これまで荒くれの剣闘士を相手にしてきたているせいだろうか。

その立ち振る舞いは、不思議と全くの素人には見えなかった。

ありがたい話だった。ここで錯乱などされては、流石に手におえない。

「……では、ここからは俺達も縦穴を利用するの？」

これまでは、クラネルさん達が自力での帰還を選択した可能性も考慮し、正規ルートを利用してきた。

彼らが一八階層に向かったとはつきりした今、その必要はなくなったと言えるが……。

「いえ。それはこれまで通り正規ルートを利用します」

首を振って、その問いかけを否定する。

「理由は大きく二つ。まず、ヘステイア様とアンジェリックさんの安全確保。正規ルートであれば異常事態にも気づきやすい」

それに、縦穴の移動中はどうしても無防備な姿をさらさざるを得ない。

加えてそれなりの高さを降りることになる。常人では、足を滑らせただけでも命取りとなりかねない。

「もう一つは、結局のところ、それが一八階層までの最短ルートになるからです」

もちろん、危険地帯を避けた上での。いくら『中層』とはいえ、今の状況でわざわざ困難な個所を通る必要はない。

特に一八階層までのルートは、長い時間、多くの上級冒険者達によって吟味され続けてきたものだ。

安全面と効率の両方を見ても、文句はない。

「それが良いだろう。救援隊が迷子というのは少々情けない話だからな」

アンジェさんが初めて冗談のような事を言った。

いや、本気だったのか。やはり、彼女はダンジョンに慣れていないとみていい。だとするのであれば……」

「モンスターが来ます！ ヘルハウンドが二……」

ヤマトさんが警戒の声を上げる。

その声に応じるように、ヘルハウンドらしからぬ重い足音が聞こえてきた。

「もう一つは分かりません！」

どうやら彼女は、索敵系のスキルを保有しているらしい。

スカウト
斥候なら喉から手が出るほど欲しい希少スキルといえよう。

もつとも、無条件ではない。識別には何かしらの条件がある。

（おそらくは、交戦経験の有無といったところでしょう）

あるいは、そのモンスターから経験値エクセリアを得たかどうかだろうか。

いずれにしても、彼女がまだ遭遇していないモンスターが迫っているらしい。

「少々マズいですね」

ここから小広間ルームまでは概ね一直線。しかも、決して広いとは言えない。

退路はなく、サポーターよりも脆い人員がふたり存在している。

「そうだな。こちらから仕掛けるしかない」

アンジェさんの言葉に頷く。

もう少し前方——小広間ルームに通じる小道より先の通路だ。

そこも広いとは言い難いが、戦闘可能な空間ではある。

「ヒタチさんは、神ヘステイアたちを。お二人は、小道を塞いでください」

選択の余地はなかった。接敵される前に、こちらから打って出るしかない。

「迎撃は私達で行います。よろしいですか？」

「ああ、構わん。上手く使ってくれ」

その返事を聞くより早く、小道を駆け抜ける。

この小道の中でヘルハウンドに炎を吐かれては流石に危険だ。

何しろ、こちらには誰も『サラマンダー・ウール』を装備していない。

私はともかく、「タケミカツチ・ファミリア」の団員と……何より、神ヘステイアとアンジェリックさんは間違いない致命的なことになる。

速やかに接近し、初手で必殺を仕掛ける。懸念は足音の主だが——…

「やれやれ。どうやら、まだ異常事態イレギュラーは収まっていないようだ」

足音の主は、すぐに分かった。

おそらくミノタウロス。出現階層はもう少し下だが……問題はそんなことではない。

「これが、噂の『深淵種』というものですか……」

階層を無視して姿を見せたミノタウロスは、明らかに一回りは大きかった。

そして、全身は暗く染まり、眼は赤く輝いている。

手にはいつもの大石斧ではなく、大石鉞とでも呼ぶべき凶器を携えている。それも、左右の手にそれぞれ。

『オオ——ツツ!!』

こちらを見据え、ミノタウロス深淵種が吼えた。

L v. 4 の？精神が、その咆哮ハウルを前に、瞬間微かだが確かに揺らゆいだ。

いや、それどころかすでに物理的な衝撃すら宿り始めている。

(いや、違う)

これは、ただの恐怖ではない。

恐怖に震えたわけではない。もっと別の何かだ。

例えていうなら、共感……いや、もっと深くて近い——

「——ツ!？」

余計なことを考えている暇もない。続けて放たれた黒い炎から飛び退く。

「——ふっ!!」

同時、その炎を飛び越えて仕掛けてきたもう一匹を《アルヴス・ルミナ》で叩き落す。

だが——…

(浅かった?)

相手の加速すら味方につけた一撃だ。

例え『下層』のモンスターであれ痛撃となる。あるいは、致命傷を負わせられたはずだ。

しかし、地面に叩きつけられたそのヘルハウンド深淵種は、平然と跳ね上がり再び牙を向く。

中空では身動きが取れない。呻く暇もなく、その牙の隙間から黒い火の粉が舞い上がって……

「死ねッ!!」

炎を放つべく開かれたその口に、無造作に突撃槍の穂先が突き立てられた。

驚くべきことに、それでもヘルハウンド深淵種は絶命していない。

が、それだけだ。そのヘルハウンドはちょうど私の足元にいる。

落下の速度と体重を《アルヴス・ルミナ》の切っ先に託してその体を穿った。

狙いは魔石。例え『深淵種』であろうとモンスターはモンスター。

ならば、その急所は絶対だ。

「はああッッ!!」

落下距離が短く、また硬い毛皮に阻まれたせいで切っ先はさほど深く潜り込まなかった。

が、関係ない。狙い通りの位置に刺さっている。ならば、強引に貫き通すのみ。
「グルウ……」

魔石が砕ける感触が、はつきりと伝わってくる。

それでも反撃を警戒し、速やかに間合いを開く——が、黒く染まり、変容したその巨体はすぐさま色を失い、灰となって崩れ落ちた。

舞い上がる灰燼が視界を塞いだその一瞬。

「——ッッ!!」

即座に飛び退いていた。

一瞬前まで立っていた場所を、二振りの大鉈が薙ぎ払っていく。

まったく、驚くべき脅力だ。これでは思ったよりも錆びついていない勘に感謝する暇もない。

「ふっっ!!」

仕返しとばかりに振ったは《アルヴス・ルミナ》は、しかし弾き返された。通常のミノタウロスより一回りは大きい体。纏っている筋肉もまた分厚い。

(……いや、この通じづらさはそれだけが理由ではない?)

微かな違和感。だが、それが何に対してなのかはつきりしない。

そして、考えている暇もない。

壁や地面すら軽々削り取る重撃を避ける方が先だった。

(なるほど、これが『深淵種』ですか……)

軽々と抉り取られたダンジョンの壁や床を見やり、胸中で呻いた。

元がミノタウロスとはいえ、この膂力……いや、潜在能力ポテンシャルは異常だ。

まず間違いなく『下層』域に……下手をすれば『深層』域に届く。

それ以上に恐ろしいのは、件の『呪詛』カースが発生してまだ数日だという事実だ。

通常の『強化種』の成長速度の比ではない。そして、冒険者の成長速度は『強化種』に

すら劣るといのが現実だ。

こんな怪物を放置しておけば、すぐにでも手に負えなくなってしまう。

ギルドがなりふり構わず、徹底した殲滅作戦を展開するのも納得だった。

……もつとも、『深淵種』とは深淵から発生した存在だと聞く。

つまり、これはまだ強化種ではないとも言える。この上さらにモンスターとして成長する可能性もあるという訳だ。

そこまで大きく考えずとも、『中層』に『下層』域のモンスターが生まれる時点で多くの冒険者にとっては致命的だが。

「だが、まだこれなら……」

両手で構えた《アルヴス・ルミナ》が今度こそ深淵種の横腹を抉る。

微妙な違和感こそあるが、攻撃が通じないわけではない。
所詮というのも何だが、その潜在能力は『下層』域止まり。単なる難敵というだけで
しかない。

……そう。ミノタウロス一体だけなら。

「避けるッ！」

その叫びが終わるより先に、再び黒い炎が襲い掛かる。

……しかも頭上から。

「ツツ?!」

ヘルハウンド深淵種がそこから放火してきたのだ。

壁にある僅かな凹凸を足場に、天井へと駆け上がりながら。

こちらとて通常種より一回りは大きくなっているというのに、驚くべき素早さだ。

「無事か？」

「すみません。助かりました」

無事だったのは。ひとえにアンジェさんが斧槍でヘルハウンド深淵種を薙ぎ払って
くれたおかげだ。

それで狙いが逸れた。

でなければ、直撃を受けていただろう。

「チイ!？」

もつとも、礼を言っている暇もない。

ヘルハウンド深淵種はまだ健在。壁すら足場にして、素早く追撃を仕掛けてきた。

「くうツ!？」

そちらに気を取られている隙に、ミノタウロス深淵種の重撃が襲い掛かった。

辛うじて防御は間に合ったが、衝撃を受け流すことまでは出来なかった。

その威力に負け、《アルヴス・ルミナ》が弾きとばされる。

「伏せろ!」

言われるまでもない。……が、実際にはほとんど尻餅でもつくような有様だった。

ともあれ、その空いた空間を斧ハルバート槍が断ち割った。

斧槍の名の通り、『斧』の刃はミノタウロス深淵の脳天を直撃したが——…

「チツ、硬い……ッ!!」

しかし、致命傷ではない。

ヘルハウンド同様に硬い毛皮と、それ以上の硬度を持つ頭蓋骨がそれ以上の傷を許さない。

そして、私達の動きがそれぞれ停滞した瞬間。

「くツ……!!」

アンジェさんの肩に、ヘルハウンド深淵種が食らいついた。そのまま肩もろとも腕を喰いちぎろうとする——が、しかし。

「ギャン!?!」

柄の悪い酔っ払いに蹴られた犬のような悲鳴と共に、地面に転がり落ちた。その直前に聞こえたのは風切り音。

視線だけ向ければ、そこにいたのは「タケミカツチ・ファミリア」の二人。いや、違う。もつと奥だ。

「見事な腕です」

小広間^{ルーム}で最後の守りを受け持っているヒタチさん。

ヘルハウンド深淵種の片目を貫いた矢を放ったのは彼女だ。

「うおおおおおおおおッ!!」

思わず賞賛の言葉を零していると、さらなる雄叫びが響き渡った。

一気呵成に突進してくるのは、桜花さん。

手にしているのは、先ほどアンジェさんが使った突撃槍だった。

「グルウウ——!?!」

跳ね起きたヘルハウンド深淵種は、なりふり構わぬ跳躍を見せた。が、それこそが彼の狙いだったらしい。

その先にいたのは、ヤマトさん。

「はああつ!!」

理想的な太刀筋を描く白刃が、ヘルハウンド深淵種の毛皮を深く断ち切った。

もつとも、それでもまだ致命傷というには浅い——が。

「貫ったあ!!」

悲鳴を上げて地面に転がるヘルハウンド深淵種。それを桜花さんが手にした槍で地面へと縫い付ける。

ひとまず、それで動きは封じた。

「いい槍だな……」

見事な誘導……いや、連携だった。

深追いせず、冷静に小道の防衛に戻るというのも素晴らしい。将来有望な冒険者だと言えよう。

であれば、私もいつまでも座り込んでいる場合ではない。

「——ふッッ!」

友から貫い受けた《双葉》を抜刀。

その友の技を真似して、迫る石錠を——正確にはそれを握る腕を狙って迎撃する。もつとも、流石に硬い。切断とはいかなかった。

とはいえ、相手の攻撃の軌道は変わった。そして、この小太刀は一对二振りのものだ。生み出した隙を逃さずその片割れを抜刀。魔石を狙い、突き出す――

『ガア!!』

――が。しかし、流石にそう簡単に勝負を決めさせてはくれなかった。

左腕を盾として胸を守り、ミノタウロス深淵はなりふり構わず後方へと飛び退いていった。

その途中で左の石鉈を落としていったが……しかし、私も筋肉に締め上げられた小太刀を抜いている暇がなかった。

武器の片割れを手放したのはお互い様。もともと、向こうは素手でも私を殺すくらいはできるだろうが。

――
それ以上に問題なのは、咆哮^{ハウル}だ。

Lv. 4の私でも揺らいだとなると、Lv. 2の「タケミカツチ・ファミリア」は全員が強制停止させられかねない。

反射的に、残されていた大石鉈へと手を伸ばしていた。

思った以上に重いが、だからどうという事もない。大体の狙いを定め、そこに投げ飛ばせばいいのだから。

「おおおおおッッ！」

背負い投げでもするような気分で、その大石鉞を投擲する。

「ヴオオオオ——ウオ?!」

珍しく私の勤が当たつたらしい。

投げつけたそれが、咆哮ハウルを強引に打ち切つた。

「くたばれッ！」

やはり、彼女は意外と口が悪い。いや、それとも戦闘中だからだろうか。

その叫びと共に、アンジエさんが斧槍ハルバート——いや、『槍』を突き出した。

狙いは魔石まきいしよを捉えている……が、あと少しのところまでミノタウロス深淵がその柄を握

りしめ食い止めている。

「馬鹿力が……ッ！」

ミノタウロスは力に長けた種だ。まして相手は『深淵種』。力比べでは流石に分が悪いらしい。

だが、充分だ。力で勝てないなら、別のものを使って勝てばいい。

先ほどのヘルハウンドと同じく、壁と床を蹴つて跳躍。私とて神々から【疾風】の名を賜つた者。

素早い身のこなしにはそれなりの自負を持っている。

「これで終わりです」

ミノタウロス深淵種の背後に着地。

小太刀を両手で構え、背後から魔石しんぞうを狙う。

反応などできるはずもなかった。手を離せば、その瞬間に斧槍が魔石を貫くのだから。

ヘルハウンドは「タケミカツチ・ファミリア」の二人が見張っている。ならば、横やりもない。

そして。突き出したその切っ先は、狙い違わず分厚い毛皮と筋肉を貫いて魔石を粉碎した。

「こちらも終わった」

再び舞い上がる灰燼の向こう側から、アンジエさんの声がする。

灰の霧が散る頃には、彼女の足元——突撃槍の周りにも灰の山ができていた。

「肩の傷は平気ですか？」

「ああ。この傷薬はよく効く」

先ほど食いつかれた肩にポーシオンをかけながら、アンジエさんは兜の向こうで小さく笑ったらしい。

その姿に、私も安堵する。彼女が無事なのはもちろんだが、この状況下で怪我人を抱

えるというのはあまり好ましくない。

まして、それが彼女ほどの戦力を欠くならなおさらだ。

「それにしても、これが『深淵種』ですか……」

ここまでのモンスターを相手にしたのは久しぶりだった。

もちろん、主に私事わたくしごとでダンジョンには定期的に潜っているものの……その場合は概ね一八階層まで。

それも、異常事態イレギュラーが起こっていない状況だ。今と簡単に比較はできない。

言うまでもなく、酔った冒険者を相手にするのはわけが違う。

ある種の昂扬感がまだ体に残っている。久しぶりに、正しく『戦闘』と呼ぶに値する戦いだった証拠だ。

それほどの敵だった。

(他にもまだ『深淵種』が残っているととなると……)

しかし、一方で寒気も覚えていた。

これほどのモンスターがまだ他にもダンジョン内に——しかもこんな浅い階層に存在しているなど、まったく悪い冗談だった。

神ウラノスが直接指示を出すだけの事はある。

「お前達は無事か？」

胸中で呻いている間に、アンジェさんが問いかけた。

「ああ。……いい槍だな」

ひとまず「タケミカツチ・ファミリア」の二人は無傷だったらしい。

武神から直接手ほどきを受けているだけあって、こと技量に関してはL v. 2の中でも上位に食い込んでいるだろう。

それでも……。

（彼らだけで、果たして『深淵種』を相手にできるか……）

かなり厳しい。そう言わざるを得なかった。

特に、あのミノタウロスは危険だ。L v. 4の精神ですら揺らぐ咆哮ハウルなど、L v. 2では耐えられない。

まして、クラネルさんのパーティは残り二人がL v. 1となる。普通のミノタウロスでも充分すぎる脅威だ。

「みんな、大丈夫かい？」

ヒタチさんに先導され、神ヘステイアとアンジェリックさんが小道から出てくる。

「神ヘステイア。一つ確認をさせてください」

最悪の事態は、常に想定しておくべきだ。

そして……

「クラネルさんは、本当に無事なのですか？」

目を逸らさず問いかけた。

だが、今のダンジョンは普段よりも遥かに危険だった。

もし、その事態が起こってしまっているならすぐにでも帰還する必要がある。

でなければ、さらなる悲劇が起こりかねない。

「ああ、無事だ。絶対に嘘は言っていない。聖火とベル君に誓う」

神ヘステイアもまた、目をそらさず静かな面持ちで頷いた。

人が神を量ろうとするのは、不敬かもしれないが……この女神は嘘を言っていない。

「分かりました」

かつて友に叩き込まれた技術と、自らの司る事象、そして眷属への誓いを信じることに決めた。

「では、急ぎましょう。彼らが『深淵種』と出会ってしまう前に合流しなくては」
いずれにしても、少し行軍の速さを上げなくてはならない。

それは、常人と変わらない神ヘステイアと、常人のアンジェリックさんにとっては大きな負担となる。

「もちろんだよ！」

「ええ！」

それでもかまいませんか？——と。

その問いかけに、彼女達は迷いなく頷いたのだった。

8

彼は、生まれつき他の個体より少しだけ大きく、そして力が強かった。

それだけであれば、良い群れの長になれただろう。

実際、それなりの間、群れからは頼りにされてきた。

しかし、悲しいかな彼は何よりも貪欲だった。

その貪欲さゆえに、ついに群れから追放されることになる。

生まれつきの力も、群れを相手にするには非力だった。

本来であれば、すぐにでも侵入者ぼうけんしゃに殺され、魔石しんごうを抉られていただろう。

ただ、そうはならなかった。

彼が追放されてすぐ、侵入者の数が減ったからだ。

理由は、彼の知るところではなかったし、興味もなかった。

考えることは、他にあつたからだ。

ひとりで生きていくには、力が足りない。

それをどうするか。

まずは、武器か。母なる迷宮が生み出すものでは限界がある。ならば、侵入者から奪う？

いいや、と彼は必死に頭を働かせた。

ひとりでは無理だ。ひとりで返り討ちにできる相手が持っている武器など奪つても意味がない。

考えて考えて——ふと思ひ出した。

驚くほど強い侵入者たちでさえ、自分たちの魔石しんぞうをかき集めていくことを。

なるほど、これが奴らの力の源に違いない。短絡的に、彼はそう結論付けた。となれば、まず適当に同胞の死体でも探してみよう。

その望みは、思った以上に容易く叶った。

かなりの数の死体が、連なつて転がっている。

とりあえず一つ拾い上げ、やはり短絡的に彼はそれを口の中へと放り込んだ。

噛み砕き、飲み干す。

彼の考えは見当外れだったが……しかし、正解でもあった。

その魔石は、彼ら自身の力の源になる。

とり憑かれたように彼はその死体の列を追いかけ、魔石を拾つては噛み砕き、飲み干していく。

何故か今日は、至る所に死体が放置されていた。

見渡す限りに同胞の死体が放置されている広間があったのだ。

今の彼には、もはやご馳走の山にしか見えなかった。

狂笑と共に、端から貪り喰う。喰らって、喰らって、喰らいつくした。

——無論、彼が知ることはないが。

モンスターの異常発生と、それから逃走する冒険者たちが放置していった大量の魔石および予備の武装。その後の、ダンジョンの完全閉鎖。

状況は、最悪なまでにこの『強化種』に味方していた。

オラリオ開闢より千年。彼よりも早く成長した『強化種』はおそらく存在しない。

そこに、さらなる災悪が絡みついた。

彼が、その奇妙な存在と出会ったのは、魔石を平らげた頃。

体が大きく、強くなり、毛皮も分厚くなり——そして、妙に上質な武器をいくつか拾った時だった。

それは侵入者にんげんのように見えた。ただ、何か奇妙な『闇』にとり憑かれてもいた。

しかし、そんなことはどうでもいい。侵入者にんげんは侵入者にんげん。

やはり襲い掛かってきた。

例によってかなり強い侵入者だった。

何とか殺せたのは大量の魔石しんせうを喰らったおかげだろう。

……それと、何だか闇雲に暴れ回るばかりで隙が多かったというのもあるか。

いや、それどころか——：

これは、本当に侵入者にんげんだったのか？

その死体を見て、首をひねる。

何だか同胞のような姿に変わりつつあるようだが……などと、考えていた時。

その死体から何か^が彼の中に入り込んできた。

暗く、ほの温かい何か。

それが自分に宿った瞬間、大量の魔石しんせうを喰らい、体を満たしていた万能感が反転した。

まだ足りない。全然満たされない。

もつと。もつとこの暗い何かを——！！

……そう。あの、侵入者はどこにいる？

母なる迷宮の外……今までそれを試そうとしなかったのが不思議なほど軽々と、階段を駆け上げる。

「うひひ……。こいつあいいぜ」

そして、見つけた。その暗く、ほの温かい何かを持った存在じんげんを。

「マジでやべえな。深淵とかいう呪詛カクズ様々だぜ！」

「だろう？　しかも、今は「フレイヤ・ファミリア」までがこんな『上層』にいやがる。この千年で一番安全ってわけだ」

「つまり、ヤバくなりや押し付けりやいいってかあ？」

「ばあか！　積極的に押し付けんだよ！　今なら、何があつたって異常事態イレギュラーのせいイでレきるからなあ!!」

「んで、魔石だけはいただくってか？」

「運が良けりや、武器やアイテムも手に入るぜえ？　調査隊に参加してんのは、お強い

「フレイヤ・ファミリア」の連中ばつかじやねえからなあ!!」

「カヌウ、てめえ天才か——あげえ……つつ?!」

まず一匹。もはや手に馴染まなくなった石斧を投げつける。

それは、狙い違わず後ろから頭へとめり込んだ。

「あ?」

二匹目。心臓の位置は、音を聞けばすぐに分かった。今更外すものか。

先ほど拾った剣を正確に滑り込ませた。

「な、なんだア?!　てめえ、何なんだよ?!」

最後の一匹が喚きながら、何かを取り出した。

小さな、赤い剣。本能が悲鳴を上げた。

「くたばりやがれ!？」

その剣が、炎を吐いた。まだ持っていない武器だった。
魔石しんせうを喰らう前なら、そのまま焼かれていただろう。

だが、遅すぎる。容易く掻い潜り、そして……

……

ダンジョンに潜つてから、どれだけ時間が過ぎただろうか。

「……探そうと思うと、案外見つからないもんだな」

すっかりその感覚がなくなった頃、滲む汗を拭いながらヴェルフが呻いた。

「うん……」

場所は、多分一六階層。一七階層へ通じる縦穴は、未だ見つかっていない。

「ですが、できれば、もう少しペースを上げたいところです」

一番つらそうなりりが、それでもそんなことを言った。

「……手持品ストックには限りがありますからね」

相変わらず、モンスターの数は多い。

そんな中で、僕らが何とか無事に探索を続けていられるのは、ナーアザさんが作った

『新製品』のお陰だった。

「しかし、本当にこの匂いはどうにかならないのか？」

「なりません。諦めてください。」

その新製品の名前を『強臭袋』^{モルプル}といった。

名前の通り、超強烈な悪臭を放つアイテムだ。

何でも、試しに匂いを直接嗅いだナアーザさんはリリの前でひっくり返り、床をのたうち回ったのだとか。

元より嗅覚が敏感な犬^{シヤンスロープ} 人なうえ、『器』を昇華させているナアーザさんがこの匂いを直接嗅いだなら……まあ、納得かなと思う。

それほどの悪臭だ。モンスターもほとんど近づいてこない。というか、遭遇したのは全部、逃げそこなった不運なモンスターだったのかもしれない。

もちろん、その臭いはこうして僕達も苦しめているわけだけど……それでも、これが僕達の命綱だ。

リリの言う通り、なくなる前に一八階層に到達したい。

「え?」

その時、リリの耳が——少しでも聴覚を研ぎ澄ませるため、泣く泣く獣人に変身したままだ——ピクリと動いた。

「どうかしたか?」

即座に周囲を警戒しながら、ヴェルフが問いかける。

「いえ、今何か、妙な気配が——…」

リリの声が、不自然に途絶えた。

代わりに聞こえてくるのは、引きつった声。

……理由は、分かっていた。

そう。本来、このモンスターの出現階層はまさにこの辺りだ。

ミノタウロス。

何かと因縁のある怪物は、こんな時にまで僕の前に立ちほだかるつもりらしい。

「ありえねえ……」

ヴェルフが、噛み締められた呻き声を上げる。

(マズい——!?)

ミノタウロスはマズい。この状況で、こいつだけは絶対に——…

『ヴォオオオオオオオオオ!!』

その悪寒を肯定するように、ミノタウロスが咆哮ハウルを上げた。

誰よりもよく知っている。その恐怖は本能すら……死の恐怖すらも容易く凍てつかせるのだと。

リリとヴェルフが、そのまま強制停止リストレイトへと追いやられた。

これ以上、一歩でも二人に近づけさせたら、死ぬ。

それは恐怖を超えた激情となり、瞬く間に体を満たした。

「——ッ!!」

雷霆より早く。世界を置き去りにして——少なくとも、そう錯覚するほどに加速する。

手にはナイフ。そして、ショートソード。あの時と同じだ。

それなら、勝てない理由なんて何もない——!

(反撃の隙を、与えるな……ッ!)

ランクアップを果たしてから今まで、体に絡みついていた微妙な違和感——神様の言っていたランクアップ直後の誤差が完全に消える。

同時、体はさらに加速した。

紫紺の斬光が奔り、炎の円弧が闇を払う。

最後に、その胸にナイフを突き立てて——…それで、ひとまず仕留めた。

魔石からは外れたが、もうミノタウロスは動かない。

……少なくとも、その一匹は。

その一瞬で呼吸を整え、続けて現れた、もう一匹のミノタウロスへと再び連撃^{ラッシュ}を仕掛ける——…

「なッ?!」

より早く、そのミノタウロスの胸から剣が生えた。

それは何となく、初めて憧憬アイスさんと出会った時のようでもある。

——が、決定的に違う。感じるのは単なる悪寒。さらなる厄災の気配でしかなかった。

『ヴォオ?!』

その剣は容易く振じられ、器用にミノタウロスの魔石を抉り取る。

巨軀がたちまち灰になり、一瞬だけ視界を塞ぐ。

(冒険者……じゃない!)

灰燼の向こうから、硬質な何かを噛み砕くような音がした。

『魔石は可能な限り回収するか、粉碎すること』

それは、冒険者の鉄則の一つだ。

もちろん、回収しなければ収入にならないというだけか理由ではない。

魔石はモンスターを強化する。五つも取り込めば、その違いは明確になるとエイナさんから教わっていた。

魔石を捕食し強化されたモンスターはそのまま『強化種』と呼ばれるようになる。

だから、回収できないなら粉碎しなくてはならないのだ。

そして、灰燼の向こう側にいる何かは、今、ミノタウロスの魔石を食べた。

間違いなく、そこにいるのはモンスター。それも『強化種』だ。

そこまでは、予想が立てられた。そして、その予想を超えるのがダンジョンだった。

「あれは、アルミラージ……う。」

リストレイト 強制停止から復帰したりリリが呻いた。

黒く湿った毛皮。赤く暗く輝く瞳。長く伸び、いつそ角のようにも見える耳。

兎と言えば、兎だろう。そう言えないことは、多分ない。

しかし——…

「馬鹿言え。デカすぎる……」

そう。通常のアルミラージなら、リリと同じくらい……一〇〇Cを少し超えるくらいだ。

目の前にいるのは、僕と同じくらい。大体、一六五C前後ある。耳の長さを足せば一七〇Cほどか。

手には、大剣。明らかに冒険者の遺物らしきものを握りしめている。

あれほど容易くミノタウロスの胸を貫いたのだ。三等級兵装以下という事はあり得ない。

(まさか、一二級冒険者まで返り討ちにあつたんじゃ……)

確か、エイナさんも……上級冒険者が五〇人以上殺されたことがあつたと言ってい

た。

目の前にいるソレはそう言う次元の怪物なのでは……

「来る……ッ!!」

その可能性にはあえて気づかなかったことにした。

どのみち、退路などない。相手が何であれ、乗り越えていくしかなかった。

……もちろん、彼らが知る由もない。

それは、迷宮より生まれ、闇を宿したもの。

デーモンではなく。深淵の異形ではなく。しかし、もはやモンスターとも言い難い。

『闇の時代』……否、『神時代』と『火の時代』。いずれ異なる『時代』の因果。その狭間に生まれ落ちたもの。

世界の終わりを旅した不死人達。『深層』にすら至った冒険者達。

数多の脅威を乗り越えてきた彼らですら未だに出会ったことのない、最も新しい『未知』であることなど。

第五節 未知へと挑め

1

「『中層』のモンスター程度に逃げを打つたと聞いた時は、てめえもついに焼きが回ったと思っただがな」

白霧と見紛うほどの灰が立ち込める中、アレンが忌々しそうに舌打ちした。

「あの時は、この程度ではなかった」

場所は、例によって一三階層。

まず間違いなく、深淵に向かう途中で遭遇したモンスターの大部群の一部だろう。

その言葉に、アレンが積もった灰の山を蹴り散らす。

(さて、どうしたものか)

その姿を見やりながら、小さく自問した。

今の俺は自派閥のみならず、第三次調査隊全体の前線指揮を請け負っている。

いつものように身軽には動けなかった。

(ロイマンめ。よほど懲りたと見える)

いつになく殊勝な態度で、応援を求めてきたギルド長を思い出す。

……もつとも、この期に及んで出し洩られたなら、その方が遥かに面倒だが。

(やはり、上手くはいかんか)

【ロキ・ファミリア】は遠征中で団長以下主力陣は全員——いや、【凶^{ヴァナルガンド}狼】はまだ地上にいるはずだが——が出払っている。

【ガネーシャ・ファミリア】も団員が各地に派遣されており、戦力は大幅に低下している。

つまり、第三次調査隊の中核が俺達となるのは自明の理だ。

加えて言えば、団長である俺が総指揮を任せられることもだ。

そこまでは、何の問題もないのだが……。

さて。

その第三次調査隊の目的は大きく分けて四つ。

一つは、言うまでもなく異形及び『深淵種』の殲滅だ。

異形や『深淵種』がいつまでも『中層』に居座られては、多くの中小派閥が干上がることになる。

冒険者のみならず、ギルドとしても放置できない問題だった。

もう一つは閉鎖前にダンジョンに潜り、未だ安否確認ができていない者たちの搜索。

無論、第一次調査隊の未帰還者も含まれている。

これに関しては、ほぼ殺害と同義となるため第一目的の一部と言ってもいいだろう。

もう一つは、異常発生したモンスターの駆除。

もちろん、ダンジョンが無限に生み出す以上、全滅させることなどできるはずもない。おおよそ普段通りの数にまで間引きするというだけの話だ。

感覚以外の基準がないため、一番厄介な作業だが……手に入った魔石は各自で持ち帰っていいとギルドからも通達が出ている。

調査隊に参加しているパーティの何割かはこの魔石が狙いと見ていい。

そして、それを咎める気もない。

(『中層』のモンスター。その大群に対応できる冒険者はさほど多くないからな)

そして、大規模となると、一人当たりの報酬が減るというのは仕方がない話だ。

いくらギルドと言えど、予算を無限に組めるわけではない。

だが、実利もないのに集まる冒険者など、よほど名声に飢えているか、それとも底抜けのお人好しか……いずれにせよ稀だった。

だからこそその条件だ。他の目的を忘れないなら満足するまで好きにさせておくしかない。

もつとも、伝令班の安全も確保しなければならぬことを考えれば、むしろ好都合と言えるが……。

最後の一つは、おそらく発生しているであろう『強化種』の駆除だ。

今回に限らず、大規模な怪物モンスター・パーティの宴の後は、多くの場合において『強化種』の発生が確認されている。

特に今回は『深淵』とダンジョンの完全閉鎖という二つの異状事態が重なっているのだ。

初めから『強化種』の発生は想定されている。

ただ……

「さっきのあれが『深淵種』ってやつか？」

想定よりも少しだけ早かった。

何しろ、遭遇したのは一二階層。まだ『上層』だ。

そこで奴は三人一組スリーマンセルのパーティを皆殺しにし、装備や魔石を奪っていた。

エンブレムからして殺害されたのは「ソーマ・ファミリア」の団員だ。

放置された魔石か、武装を目当てにダンジョンに潜っていたらしい。

もつとも、表沙汰になることはないが、異常事態発生後の遺品泥棒——戦場稼ぎ自体

はさほど珍しいことではない。

加えて言えば、その異常事態イレギュラーの残滓に巻き込まれて木乃伊取りが木乃伊になることも

だ。

(そもそも、連中に『中層』の手前まで潜れるほどの実力があつたかどうか)

件の「ソーマ・ファミリア」は飲んだくれの集まる派閥だと聞くが……。いや、それはいいだろう。

「おそろくな」

もつとも、今まで遭遇したものは少し勝手が違うようにも思えたが。

いずれにせよ、あの『深淵種』か『強化種』らしきもののせいで、すでに数名の犠牲者が出てしまった。

もつとも、調査隊にはまだ死者は出ていない。負傷者もそこまで深刻な傷を負ったわけではない。

一方、その『深淵種』は、俺達の追撃を振り切り、塞がりつつある縦穴に飛び込んでいった。

「あれは元はアルミラー^白ジ^兎か……。チツ、気に食わねえな」

道中でいくらか足止めを受けたとはいえ、オラリオ最速を誇るアレンを振り切るとは。

都合よく助けが入り、縦穴まで見つけるとは、なかなかの強運の持ち主と言えよう。

(運も実力の内といったところか)

胸中で呟いていると、アレンが言った。

「それで、どうする。このまま追いかけるか？」

いつもなら、頷くところだが。

「いや、まずは予定通り包囲網を展開する」

今回ばかりは首を横に振った。

「ああ？」

「お前の言う通りあれはアルミラージュが原型だ。それが一二階層とは言え、『上層』にいた。神蓋バベルの封印は『深淵種』には通じないと考えた方が良い」

それもまた、別段驚くようなことではない。

神蓋バベルの封印が『深淵種』には通じない。それもまた、予測されたことだ。

封印の要たる神ウラノスがつい先ほどまで塔を離れていたこと。

そして、『深淵』自体が神々ですら封じきれない厄災であるらしいこと。

この二つを考慮すれば、想定しない方が馬鹿げた話だ。

「あれをフレイヤの御前に出すわけにはいかん」

そして、生き残りの『深淵種』があれだけとは限らない。

まずは奴らを地上に出さないことこそが肝要だった。

もちろん、これは単なる私情に留まらない。

全ての冒険者にとつての至上命題だ。

——モンスターの地上侵出。それを防げずして何が神の眷属か。

「当たり前だ。あんな薄汚ねえもんをあの方に見せられるかよ」
吐き捨ててから、アレンが言った。

「だから、なおさらな呑気なことを言っつて良いのかよ?」

『『中層』に逃げ戻っただけだ。何の問題がある』

上に向かったならまだしも、下にいるなら状況は何も変わらない。

むしろ、正常な状態に戻ったと言えよう。

このまま包囲網を構築し、追い詰めていくだけだ。

それに……、

(奴の潜在能力^{ポテンシャル}を完全に把握したとは言い切れんが……)

しかし、アレは決して本物の冒険者の敵ではない。その確信があった。

強敵を前に臆して逃げる程度の存在だ。

確かに力は得たかもしれない。だが、あれはただそれだけの存在でしかない。

地上に出たなら、それでもオラリオ史に悪名を残しただろう。

だが、奴は上に向かわず、下に逃げた。

ならば、後は人知れずダンジョンの闇に還るだけだった。

「一五階層には、すでに奴らが向かっている」

クオン達——俺と「凶狼」^{ヴァナルガード}を除く第二次調査隊は、こちらとは別に『中層』を行軍中

だ。

目的は基本的に俺達と同じだが、連中にはそれ以外の目的もある。というより、調査隊と名乗るのは、奴らこそが適切だろう。

何しろ、目的の一つは深淵跡地の調査。

本当にダンジョンは——あの区域エリアは深淵の影響から脱したのか。

カルラという女魔導師が言うには、状態によつては今後も時間をかけて監視していく必要が生じるらしい。

もう一つはリヴィラの調査だ。

どれ程の被害が出ているのか。最悪、リヴィラの街が異形の巣窟となっている可能性も皆無ではない。

その場合、リヴィラそのものが殲滅対象となる。

「そして、プレイヤー【勇者】……【ロキ・ファミリア】も今は一八階層に滞在している」

……場合によつては、一八階層に留まっている【ロキ・ファミリア】すらも殲滅対象となるわけだが。

一方で、奴らが無事なら頼まずとも首を突っ込んでくるだろう。

飽くなき野心。名声への渴望こそがあの小人族バルグムの強さの源なのだ。

相対する俺達に黙って庇われているはずがない。

つまるところ、オラリオ有数の戦力は一二階層から一八階層に集まっている。よほどの異常事態イレギュラーでも起こらない限り、このまま挟撃できる。

この状況で、奴が『中層』から生きて出るとはまずあり得まい。いや、違う。

「このまま確実に追い詰める。殲滅こそが使命だからな」

奴も含めて『深淵種』も異形どももダンジョン……いや、この『中層』から出すものか。

そのために、俺達はここにいます。

「殲滅するなら、道中の雑魚どもを放っておけば良かっただろうが」

道中で俺達を邪魔したのは、モンスターの大量ばかりではない。

貧窮した弱小派閥の団員や、あるいは「ソーマ・ファミリア」の同類。

そう言った者たちが助けを求めて殺到してきた。

想定外というなら、その人数が多すぎた事だ。

人間の欲望か、それとも弱小派閥の財政事情か。その辺りを読み違えたらしい。

もつとも、アレンの言う通り、本来なら命を賭して冒険に挑む者こそが冒険者だ。力及ばず斃れたとして、それは誰の責任でもない。

「今回ばかりはそうもいかん」

……が、今回はオラリオ中が注目している事態だ。

加えて、第三次調査隊は「フレイヤ・ファミリア」を中核とすると大々的に報じられてもいる。

そんな中で下手に被害を出しては、フレイヤ様の名に傷をつけることになる。

例えそれが調査隊とは無関係の冒険者であっても、まるで無視するわけにはいかない。

何しろ、未帰還者の保護も役目の一つ。そして、あの中に未帰還者がいないと断言はできなかった。

（思った以上に面倒な話だ）

確かに第三次調査隊の人員は豊富だ。

それは間違いない。だが、その分だけ未熟な者もまた多く、いつも通りの采配では立ち行かない。

加えて、団長としての力量……指揮官としての手腕なら「勇者」の方が上だろうという自覚があった。

（統率か。縁が遠い言葉だな……）

事あるごとに絡んでくる団員たちを思い出し、小さくため息を吐く。

俺達の派閥では、互いが最大の競争相手だということは誰もが理解している。

団長という称号は統率者の肩書ではなく、剣闘士の王者に与えられる黄金杯のようなもの。

俺達の派閥に統率者がいるとすれば、それはフレイヤ様だけだ。それでも、普段なら全く問題はない。

自慢ではないが、殲滅戦は得意とするところだった。

フレイヤ様の命があれば、例え一国でも攻め滅してみせよう。

それが可能だという自負はある。

(……だが、今回ばかりは状況が悪い)

まだ浅い階層とはいえ、ダンジョンは広大であり、かつ入り組んでいる。

敵はその中に分散していて、どこにどれだけいるかすら不明。

加えて、早期決着が求められている。

この状況が必要となるのは、個々人の武勇よりも連携の取れた包囲網だった。

そして、それこそが俺達にとって最も苦手とする領域だった。

いつも通りに好き勝手動き出す団員に、相変わらず数だけが多いモンスターどもが襲い掛かり——殲滅されるまでの一瞬に『強化種』は脇目もふらず走り出した。

あれこそ、まさに脱兎の如く……いや、脱兎そのものか。

無論、この程度のこととは問題と呼ぶにも値しないが……しかし、少しばかり幸先が悪

い。

何しろ……

(今頃、「赤戦バルイーザの豹」も頭を抱えているかもしれない)

向こうも向こうで、取り込んだばかりの「イシユタル・ファミリア」の元団員を投入している。

派閥内の連携に乱れが出ていないとはとても思えない。

(……なかなかの状況だな)

自派閥の団員に手を焼く団長と副団長が、パーティ全体の指揮官と副官というわけだ。

このパーティは連携に問題がある——と。漠然と抱いていた懸念が正しいと証明されてしまった。

もつとも、流石にパーティが機能不全に陥るほどではない。

言うまでもなく、パーティの損害も軽微だ。

状況的にも作戦を変更する必要は一切存在しない。

このまま包囲網を構築し、追い詰めて殲滅する。

そして、その中にあの『深淵種』も含まれる。

ただそれだけの話だった。

問題など、何ら存在していない。

「そりゃ分かつてるがな」

槍で肩を叩きながら、アレンが吐き捨てた。

「ところで、例の兎野郎も『中層』から帰還してねえんだろう。そつちはどうするんだ？」
確かに、未帰還者の一覧表にその名は記されていた。

ランクアップから十日で『中層』進出とは流石に驚きを禁じ得ない。

……しかし、あのランクアップしたばかりであの『強化種』に勝てるものか。

「放っておけ」

それについても、一つの予感があった。

「奴は死なん。少なくとも、あの程度の相手に殺されることはない」

何もせず逃げたあの『深淵種』と、仮にも戦士となったミノタウロス。

どちらが強いかと問われたなら……

「随分と高く買つてるじゃねえか。ありや、潜在能力ポテンシャルだけ見りや『下層』でも通じるぜ？」
分かっている。そうでなければ、いくら俺達が足止めを受け、また幸運が奴に味方にしたとしても逃げ延びられるわけがない。

それは分かっている。分かっているが……。

(馬鹿げた話だな)

実際に多少ならず欲目は混じっているだろう。

それでも、あの『深淵種』は紅い猛牛ほどの壁にはなるまい。

(もつとも、重要な経験にはなるだろうがな)

不思議と、そんな予感があつた。

2

苛立ちまぎれに、魔石しんぞうをかみ砕く。

実際、彼は苛立っていた。

もつといい武器と、もつと多くの、この暗い何かを求めて『外』を目指していた。

決して不可能ではない。そう思っていたが……。

しかし、もう少しのところで思わぬ壁にぶち当たった。

自分たちと似たような耳をはやした侵入者にんげん。

それを見るのは初めてではなかったが……あの大男は危険だ。

逃げ切れたのはひとえに馬鹿な同胞たちのお陰だった。

勝ち目もないのに、よくもまあ飛び込んでいくものだ。数を揃えて気が大きくなつて

いたのだろう。

もつとも、その馬鹿どもがいなければ、あの場で殺されていたのは認めざるを得ない。

何とか生き延びたが……万能感も渴望もまとめて吹き飛ばされた気分だった。

全く忌々しい。忌々しいが、あれを殺して暗い何かを奪うには、もう少し力を高め、まともな武器を手になくしてはならない。

——しかし、どこから？

必死に頭を働かせていると、ふと思い出した。

もう少し下の方に、侵入者にんげんの巣がある。そこに行けばいい。

少しでもまともな武器を得て、多くの魔石しんせうを喰らわなくては地上には出れない。

そう決めて、降りてきて——その途中で、この白い毛並みの侵入者にんげんと出くわした。

大した武器も、あの暗い何かも持つていなさそうだが……探れば、魔石しんせうをいくらか隠し持っているかもしれない。

どうせ大した手間ではない。どこから見てもくたばり損ないどもだ。

あの大男を見かける直前にいた侵入者にんげんどもと同じように、さっさと殺してしまおう。

奴らは自分が、武器を使うなど夢にも思っていないのだ。不意を突くには楽でいい。偶然拾ったその大きな剣を握りしめ、一気に跳躍した。

……

ここにきて、まさかの『強化種』との最初ファースト・コンタクトの遭遇。

最悪をさらに下回るその事態を前に——しかし、思ったよりも動揺は大きくなかつ

た。

いや、最初の遭遇ではない。『強化種』というなら、あのミノタウロスだってそうだったはずだ。

「くツ!？」

ただ、速い。少なくとも、敏捷に関してはあのミノタウロスを遥かに上回る。

僕だつてLv. 2へと昇華されているのに、反応が追いつかない。リリ達を狙わせないようにするので精一杯だ。

小盾の表面から火花が散り、鎧の表面が少しづつ削り取られていく。

潜在能力ポテンシャルの差が大きすぎる。まったく成す術がない……

(本当に?)

最悪を極めたような状況の中で、その奇妙な疑問が膨れ上がっていく。

確かに潜在能力ポテンシャルの差は絶対だ。

もし仮にモンスターにも「ステイタス」のような一覧があるなら、全ての項目でひよつとしたら、『魔力』は違うかもしれないけど——負けているだろう。

だから、おかしい。

(何で、まだ生きてるんだ?)

傷ならもう数えきれないほど負っている。けど、それだけだ。

本当に深刻な傷はまだ一つだって負っていない。

繰り返すが、潜在能力ポテンシャルの差は絶対。おそらく、Lv. 2の——しかも、ランクアップしたばかりの——冒険者が遭遇していいモンスターではない。

……その潜在能力ポテンシャルだけを見るなら。

それでも、まだ何とか食い下がっていられる。食いついていける。

『冒険者には「ステイタス」に振り回されている人が多いって、よく言う』
アイズ・ヴァレンシユタイン
 金色の憧憬の聲が鮮明に蘇った。

(そっだ……！)

こいつは『強化種』。いつ発生したかは分からないけど……『中層』進出のため、慎重に念入りに情報を集めてくれていたリリが知らなかった以上、そんなに前じゃない。

ひよっとしたら上で発生している異常事態イレギュラーの一部なのかもしれない。

いずれにしても、冒険者に例えるならランクアップしたばかりの存在と見ていい。

(こいつは、『恩恵』……『魔石の力』に寄りかかりすぎている！)

それとも、酔っているのか。

どっちにしても、自分の力に振り回されていることに変わりはない。

(よく見ろ！ こいつの動きはまるでなつちやいないだろうッ！)

そのせいで、圧倒的に格下であるはずの僕を殺せないでいる。

そして、それを理解できていない。それとも理解したくないのか。

「ギィイイ!!」

苛立ちが、動きをさらに粗雑にした。

その瞬間。意識の中で時間の流れが鈍化する。

(今ッ!!)

無限に続く一瞬の中で、その言葉だけが稲妻のように弾けて飛んだ。

「——ッ!」

雑に繰り出された大剣——剣の重さに少し振り回されている——が、手甲と一体化した小盾の表面を撫でていく。

受け流し。クオンさんがやってのけるあの妙技。

……もつとも、流石にぶつつけ本番では受け流すだけで精一杯だったけど。

「うおおおおおおッ!!」

それでも、好機だった。

反撃へと転じる。

間違いない。こいつはあのミノタウロスとは比較にならないほど未熟だ。

どれ程の力も、当たらないなら意味がない。

予測さえできるなら、対応できない速さではない。

そして――…

「ギイイイ!？」

その暗く湿った毛皮も、攻撃が通じないほど分厚いわけじゃない。

紫紺の輝きも、炎の軌跡も。その毛皮を斬り裂くには充分だ。

(食らいつけッ！)

こいつは、自分が攻められることに慣れていない。

多分、今までは全て奇襲で片をつけてきたんだろう。

折角の速さと力も、全く噛み合っていない。動きがあまりにでたらめすぎる。

……もつとも、それでも直撃すればひとたまりもない。

その瞬間、まず間違いなく戦闘不能に陥る。

そして、次の瞬間には殺される。

僕だけじゃない。リリとヴェルフもだ。

それでも……いや、だからこそ。

この至近距離こそが、最も安全な場所。真正面からの斬り合いこそが唯一の活路だ。

それを証明するように、次第に目が慣れてくる。動きが読めてくる。

反応が、何とか追いついてくる。

(怯えるな！ 前に出る!!)

もちろん、だからと言って全て避けられるはずもない。

体はすでに何ヶ所も斬り裂かれているけど、どの傷も浅い。この程度で臆してはいられない。

(あのミノタウロスは、こいつよりもっとずっと怖かっただろうッ?)

初めての冒険だ。少し美化しているのかもしれない。

ただ、感じる。いくら強かろうと、こいつはあの猛牛とは違う。畏怖こわくはない——!

「ギューー!」

ますます苛立ちながら、その『強化種』が後ろへと跳ぶ。

「ファイアボルト!!」

あの猛牛なら、退くことなどあり得ない。

この程度の連撃ラッシュなど力で粉碎して退けたはずだ。

(引き剥がされてたまるか!)

自ら放った炎雷に追いつくように加速。意地でも近接戦インファイトを続行する。

どれ程の言葉で鼓舞しようと、力の差は絶対的だ。二度も受け流しが成功するとは思えない。

仕切り直しは効かない。こいつが自分の力をものにする前に押し切るしかない。

懲りずに間合いを取ろうとするその『強化種』に、死に物狂いで食らいつき続ける。

「ギイイイイイ!!」

空中からの、力任せの超大振りの一撃。

単純極まる力技は……しかし、彼我の力量差を明確にした。

どうあつても回避に徹するしかない。相手の敏捷を考えれば、その一瞬は痛い。

……もつとも、まだ致命的ではない。

開いた間合いを補う術まほうなら、あるのだ。

ナイフを握ったままの左手を翳して狙いを定め――

「ファイア……ッ?!」

大剣が槍へと変わった。

間合いが変わる。すでに穂先が体に届く距離だった。

反応できたのは、単純に見慣れていたからだ。

魔法を中断し、慌てて飛び退く。それでも間に合わず、手首から肘にかけてを軽く切り裂かれた。

(マズい!?)

交差は一瞬。着地と同時に、棒切れでも振り回すように、アルミライズが槍を振り回す。

流れを取り戻された。

(いや、まだだ!)

穂先の先端にうつすらと脚を斬り裂かれながら、それでも少しだけ安堵していた。武器を変えてくれたのは、せめてもの幸運だと言える。

何しろ、槍の動きは剣の動きよりさらに粗雑なのだ。これなら、まだ何とかなる。

限界を超えて白熱する集中力。その中で、自分に言い聞かせる……が。状況はさらに悪化している。

それを認めざるを得なかった。

(間合いが広い……ッ！)

もう一度近づかない限り、こちらの攻撃は届かない。

あるいは、もう少し間合いを開いて魔法で狙うか。

それに気づいたのか、今度は僕に間合いを取らせようとしない。

「ぐうッ?!」

まっすぐ振り下ろされた槍が、肩の装甲に直撃する。

その衝撃で装甲が歪み、肩の骨が悲鳴を上げた。

骨が折れたり外れたりしなかったのはヴェルフのお陰か。それとも、幸運だったのか。

あるいは、その両方かもしれないけど。

「あああああッッ!?!」

押さえつけられ、動きが止まった。
たちまち猛攻に晒された。

細長い棍棒——確か棍つていう武器があつたはず——でも扱うように、文字通り滅多打ちにされる。

とつさに頭だけは守つたけど……それでどうなるものでもない。

体中が悲鳴を上げる。多分骨にはヒビが入り始めたはずだ。このまま続けば、砕けるのは時間の問題だった。

「おい」

その声が響いたのは、ちょうどそんな時だった。

「その槍、さては安物だな」

「え？」

重厚な大刀がその槍に叩きつけられた。

「ギィ?!」

槍の柄が、半ばから切断される。

無防備になつたその瞬間、ヴェルフがその強化種に蹴りを叩き込んだ。

「ベルの攻撃を防ぐ度に、槍には傷がついてたんだ。それか、単に手入れが悪かつたか」
だから、俺の一撃でも簡単に折れた——と、彼は小さく笑う。

その一瞬、『強化種』が石斧——本来アルミラージが使う天然武器——ナイチャーウエボンを取り出して

……

「もう驚きませんよ！」

投擲するより先に、リリの放ったボルトがその目を射抜いた。

通常のアルミラージより大きいということは、その分だけ——止まっただけ——で済んでくれるなら——当てやすいのだ。

何より、このモンスターはアルミラージだ。

ミノタウロスのように咆哮ハウルは使ってこない。

なら、Lv. 1のリリとヴェルフも強制停止リストレイトさせられることはない——！

「行け、ベル！」

「おおおおおおおおおッ！！」

一気に加速。ナイフを握る左手に、そのまま《呪術の火》を灯す。

そして、一気に燃え上がらせた。

最も基礎となる【発火】。

ただ掌に爆炎を生み出すだけのそれは、単純ながらも充分に凶悪だ。

その爆発力に、加速が乗った拳が加わる。

確かな手ごたえがあった。

「ギイ——！！」

だが、それでも致命傷には届かない。

通常のアルミラージの『耐久』を遥かに上回っている。

(これが、『強化種』……!!)

仕返しとばかりに思い切り蹴り飛ばされ、胃液を地面を転がる。

その最中に毒づいていた。

(いや、本当に?)

これは本当に単なる『強化種』なのか?

ヤケクソのように思い浮かんだ疑問は、血が混じった胃液と共に吐き捨てた。

そんなことに感いている余裕など、どこをひねっても出て来やしないのだ。

「悪い、ベル！ 前衛は任せる！ 俺じゃ反応できねえ！」

「分かってる！」

ヴェルフの声に、跳ね起きる。

やることは今までと同じだ。槍を破壊されたせいとか、武器も大剣に戻っている。

とにかく、食らいつく。そして、ヴェルフ達を狙わせない。

……ああ、それと。なるべくなら時間をかけないで何とかしたい。

それは流石に贅沢過ぎるけど。

「そらよー！」

ただ、攻撃の手は二つに増えた。

動きさえ鈍らせてやれば、ひとまずは何とかなる。

「ギイイイ!!」

ヴェルフの攻撃に反応して、そちらを狙うならその瞬間こそが好機だ。

「はああツ!!」

ヴェルフが戦線に加わってくれたおかげで、攻撃の機会チャンスはかなり増えた。

とはいえ、余裕などない。

前提として、Lv. 1の攻撃は通じない。ヴェルフが悪いのではなく、単純に「ステイタス」の差が大きすぎる。

辛うじてダメージを与えられるのは、Lv. 2以上。つまり僕だけだ。

特にヴェルフはまだ脚を痛めたまま。いつも通りには動けない。

さらにはランクの差。仮にもLv. 2の僕でもギリギリ食い下がるかどうかだ。

少しでも連携が乱れたら、そのまま共倒れしかねない。

まったく、綱渡りもいいところだ。

「こいつはキツイな……ツツ！」

そして、今の状態でもより多く手傷を負っているのは僕らの方だった。

血が混じった汗を——いや、汗が混じった血を乱暴に拭いながら、ヴェルフが呻く。流れ落ちる血は、そのまま体力を奪っていく。

(焦るな……！)

そして、今こうしている間にも、時間は進んでいる。

時間の感覚なんて、もうすっかり失われている。それが……そう、焦燥をさらに煽る。

(階層主の次産期間インターバルはおよそ二週間……)

アイズさん……「ロキ・ファミリア」が一七階層を通過したのは、おそらく僕がミノタウロスと戦った日。

ダンジョンに潜ってから、どれだけ経ったか分からないけど……潜った日から数えるなら猶予は二日。

まだ一日もたつてないような気もするし、とつくに二日を過ぎてしまった気もする。分からないことこそが恐怖であり、一方で救いでもある。

もし仮に二日を過ぎていて、それが分かっしまえば、その瞬間に心が折れる。(でも、時間はかけられない)

階層主の産出以前の問題だ。

このまま戦い続ければ、先に力尽きるのは間違いない僕達なのだから。

(一撃だ)

取れる手段は、多くない。

いや、むしろ一つしかないと言っているほどだ。

例えこいつが『強化種』でも……それどころか、階層主であっても、その一撃には耐えられない。

つまり、魔石の破壊だ。

シルバーバックの時と同じく、捨て身の一撃を敢行する覚悟を決めた。

(けど、どうやって?)

覚悟があれば何とでもなる——と。そんな都合のいい状況ではない。

まともに斬り込むことすら難しいのだ。

無暗に突撃などした日には、そのまま天界まで突つ走る羽目になる。

それに、今は大剣だけど……クオンさん達と同じ『スキル』の使い手なら、他にどんな武器を隠し持っているか分かったものじゃない。

今までは、便利そうでもいいなとしか思わなかったけど……。

(この『スキル』、敵に回すと凄く怖い……!)

どんな武器が飛び出してくるかまるで分らない。

相手の手が読めない。予想しきれない。

迂闊に近づいたばかりに、突如として現れた重量武器で防御もろともに叩き潰される

——なんてこともありえるのだ。

「ファイアボルト！」

僅かな恐れが、動きを鈍らせた。

開きかけた間合いを、慌てて魔法で埋め合わせる。

「貰ったッ!!」

その炎雷の陰から放たれたのは、ヴェルフの横薙ぎの一撃。

完全にヴェルフの間合いだった。

まだLv. 1とはいえ、ランクアップは見えている。その一撃は、充分に痛撃を与えているはず——…

「何ッ!?!」

その一撃が弾かれた。

理由はごく当たり前だった。大盾で防がれただけだ。

取り出されるのは、武器ばかりではない。

「ギギッ!!」

大盾をそのままに、『強化種』が跳躍する。

手に持っているのは、赤い刀身をもつ短剣。

(どっ)かで、見たような……)

記憶が刺激されたのは、その刀身が炎に包まれたからだ。

思い出した。リリが持っていた魔剣によく似ている——！

「燃えつきろ、外法の業」！

反応は、僕よりもヴェルフの方が速かった。

鋭い叫びがそのまま世界を揺るがす。

「ウィル・オ・ウイスプ」！！

空間を伝播するその陽炎にそんな錯覚すら覚えた。

そう。放たれたのは、炎でも雷でもない。一見すれば、ただの陽炎だ。

ただそれだけを浴びたなら、何の効果もない。

しかし——…

「ギギヤ?!」

僕達を襲うはずだった炎が、その瞬間破裂した。

正確には、爆発したのはその魔剣だ。

この現象は魔力暴発イグニス・ファトウスと呼ばれる。

その名の通り『魔力』を制御できず暴走させてしまう事故現象だ。

神様たちが降臨する以前——『古代』において、魔法種族達マジックユーズが自らの手で魔法を編み

出していた頃には多発したらしいけど……『神の恩恵ファルナ』によって自分専用の魔法が発現

し、魔力の調節コントロールが円滑化した現代ではほとんど発生しなくなった。

もちろん、魔法を誰でも簡単に扱えるようにした魔剣が暴発なんてするはずがない。
……本来なら。

「魔剣にも効くんですね……」

「ヘルハウンドのブレスよりも『魔法』に近いからな」

リリの言葉に、ヴェルフがあつさりと応じた。

アンチ・マジック・ファイア
対魔力魔法。

強制的に魔力暴発を引き起こし、対象を自爆させる『魔法封じ』の魔法。

これこそが、ヴェルフの魔法。

外法まほうではなく正道はくへいせんで戦うべし——と。武器職人らしい魔法だった。

もしくは、その血筋に対する感情によるものだろうか。

「おいおい、その魔剣も安物か？ 火種かたまりが弱すぎる」

そう。その効果はあくまで自爆だ。威力は対象の威力、魔力の量に依存する。

あの魔剣に込められていた——残っていた魔力ではあの強化種を仕留めきれなかつたらしい。

魔剣そのものは粉々に砕け散ったが、アルミラージはまだ健在だ。

爆発に巻き込まれ、至る所から血を流しているが致命傷には程遠い。

ただし、動きは止まった。

「——ッッ!!」

ダイダロス通りでシルバーバックと戦った時と同じように、全力で地面を蹴りつける。

両手でショートソードを構えての突撃。加速はあの時の比じゃない。

ただし、敵の強さもあの時の比ではない。

ベネトレインジョン
突撃槍。

出し惜しみはしない。ありつたけをただその一瞬にだけ注ぎ込む。

そして。

放たれたその一撃は確かに分厚い毛皮を貫き、その奥の魔石まで届いた——…

——…

「しかし、この魔石をどうしたものか……」

クオンが回収してきた魔石……原始の闇をそのまま凍てつかせたかのような、その暗い魔石を前にして呻く。

今は安定しているが、それでも通常の魔石と違い、奇妙な気配がする。

少なくとも、神々が小さく悲鳴を上げる程度には。

「まさか、売り払う訳にはいかないな」

当たり前のことを呟く。

『深淵を発生させる装置くらいは作れるかもしれないな』

などと、クオンの奴は言っていたが……多分、あれは冗談ではない。

目的が何であれ、下手に弄れば結果としてそうなる。

(となれば、砕いて終わりともいえないだろう)

というより、砕いた時点で深淵が発生しかねない。

つまり、倉庫の奥深くにしまい込んでおしまい——と、いう訳にもいかないわけだ。

ついうっかり誰かが蹴飛ばした途端オラリオが……最悪は世界が滅びる——と、そん

なのは笑い話にもならない。

(安全を期すなら、祈祷の間に安置しておくのが一番だろうが……)

しかし、そんなことをすればウラノスが尋常ならざる心的負担を負う事になる。

あの老神にこれ以上の心労をかけるのは憚られた。

(ならば、私の隠れ家か……)

隠れ家は、そろそろ私自身の居場所すら圧迫するほど者が増えてきた。

下手に置いておけば、その世界を滅ぼす『うっかり』を私自身がやりかねない。

(やはり、どこか別に魔工房デトリエを用意しなくてはならないな……)

もつとも、生憎とこの体だ。

通常の物件に、通常の手続きを踏んで入居するのはかなり難しい。

手頃な廃墟を見つけ、書類上の手続きだけで終わらせなくてはならない。

……しかし、仮に見つけたとして。私の私物には魔力を帯びた代物がいくらでもある。

お互いに干渉しあつて妙なことにならないという保証はない。

となると、やはり——…

(素直に専門の保管庫を用意するしかないか)

折しも闇派閥残党が……そして、エニユオなる謎の存在が暗躍している。

さすがに、すでにそちらに毒された職員がいるとは考えたくないが、先日の『神罰同盟』のような場合もあり得た。

適当な空き部屋に保管庫の看板をぶら下げるだけでは意味がない。

必要なのは、相応の強度を持った本物の『保管庫』だ。

今なら、ロイマンも予算を惜しまず動き出すだろう。

だが、それでも数日で作れるようなものではないし、作れるようなものでは意味がない。

場所を確保し、信頼できる業者を選び、素材を吟味し……もちろん、そこには予算の問題が絡んでくる。工事が始まるのはその後だ。

一ヶ月や二ヶ月など、すぐにも過ぎてしまおうだろう。

その間、この危険物をどうするか。

(本当なら、あいつに押し付けてしまうのが一番いいのだがな)

クオンの持っている『底のない木箱』なる魔道具マジックアイテムに封印してもらおう。

それが、思いつく限り最善の手段だが……。

(しかし、その場合は偽物ダミーを用意しなくては)

ギルドが回収したのは周知の事実だ。

そして、都市運営を担っている者として、適切に保管管理する義務がある。

あいつに預けるのが一番安全だとして……肝心のクオン自身を危険視する者が多いというのが現実だった。

せめて、ギルドが保管しているという名目だけでも立つようにしておかなくては。

(しかし、魔石に深淵が宿るとは……)

発生した深淵は消えたのではなく、ここに封じ込められているのではないか。

一度発生した深淵が、あれほどあつけなく消滅することなど本来ならあり得ない。

カルラという魔導士はそんなことを言った。

もちろん、彼女もクオンと共に第三次調査隊に組み込まれている。

従って、言葉を交わした時間は決して長くはない。

クオンとウラノスがギルドで帰還報告を交わしている間のことだ。

『この魔石というものについて、生憎と私は詳しくなくてね。まだ確かなことは何も言えないが……』

しかし、モンスターは——あるいは、ダンジョンそのものが深淵の影響を受けることは間違いない。

深淵種という新たな『種』すら生み出すほどに。

(魔石は、深淵を宿せる?)

それが何を意味するのか。

分からない。深淵という存在に対する知識が圧倒的に不足している。

(しかし、『深淵の主』はダンジョンが生み出したものではないだろうか?)

それなら、ダンジョンと深淵が対立している理由が分からない。

とはいえ、原形はインファント・ドラゴン。つまり、ダンジョンより生まれたモンスターだ。

(これは一体……?)

何となくすつきりとしない。

だが、根本的な問題として、その深淵というものに対して知識が足りない。

(やはり、彼女とは互いの知識を交換しなくてはならん)

それ自体は、吝かではない。むしろ、願ってもないことだ。

彼女達の魔法——いや、魔術は誰でも習得可能な技術であり、何人もの先人によって磨き抜かれてきた学問だ。

そこにあるのは探究の歴史。積み重ねられた叡智の結晶と言っている。

私とて、かつて『賢者』などと呼ばれていた身。純粹に好奇心が刺激される。されな
いはずがない。

(いけないな。平常心を保たねば)

その叡智は、容易く狂気へと導く呪いでもある。挑むのであれば、それに対する恐れ
を失ってはならない。

もはや人とは言えないが……だからこそ、これ以上の呪いを身に宿すつもりはない。

それに、今は深淵への対応こそが最優先事項だ。

情報交換はクオン達が帰還してから。それまでに、冷静さを取り戻しておかなくて
は。

私個人としても、彼らと敵対するような事態は避けたいところだ。

(……私の場合には単なる自業自得だがね)

それでも、折角出会えた同胞のような存在なのだから。

「ああ、しかし、だとするなら……」

ひよっとして、他の魔石にも影響が出ていたりするのだろうか。

だとするなら、しばらくの間、鑑定士たちには過酷が待っているだろう。

問題なしと判断されるまで、持ち込まれる全ての魔石の安全確認をする必要がある。

少なくとも、第三次調査隊が持ち帰ってくる……あの【おうじや猛者】をして、異常発生と言わしめるほどのモンスター達が遺す魔石の全てを。

(……いや、まあ、多分、私も巻き込まれるだろうが。その鑑定作業に)

待ち受ける過酷を前に、もうないはずの胃がキリキリと痛み出した。

……

一四階層。深淵が広がっていたその広間も、今やすっかり修復されていた。

もつとも、完全に元通りとは言い難い。

それに気づいたのは偶然だった。

「これは魔石……？ お前が持ち帰ったあの漆黒の魔石か？」

僅かに煌めいた地面を、短刀で軽く削ってやるとそれが姿を見せた。

「ああ。確かに似ているな」

シヤクテイの言葉に、小さく頷いた。

「しかし、何故魔石だけが埋まっている？」

鉱石の類と同じように、そこには魔石の塊が埋まっているようだった。

まあ、モンスターを生み出すダンジョンが、魔石を生み出したところで驚くことはないだろう。

しかし……

(これは、どちらかというところ……)

魔石というよりも、『楔石』……正確には『闇の貴石』にどこか似ている。

(主な人間性に宿るもの、か……)

それが本当かはよく分からないが……いずれにせよ、変質した楔石の一種ということ
は確かだ。

さしあたり、楔石と人間性が結びついた代物といったところか。

何が原因でそれが起こるのかまでは分からないが。

(もしかして、深淵を魔石に押し付けた?)

仮にそういう事が可能なのだとするなら……

(呪いを逸らすには、人ないし人であったものでなければならぬ……)

その条件に、魔石が合致するだけでも?

いや、極彩色の魔石という存在もある。あれは間違いなく何かしらの影響を受けた結
果だ。

あれが精霊……つまり神の力の影響だと仮定して。

一方で深淵……人間の力にまで影響まで受けるとは。

(純粋なソウルと同じようなものなのか?)

ソウルとは人にも神にも同じように宿るものだ。

グウィン、イザリス、ニトたちのソウルは、炎のような輝きを宿していた。

一方、マヌスやゲールのソウルは黒く変質していた。

それと同じか。あるいは……

(火でも闇でもないもの)

それ故に、どちらにでもなれる。どちらをも取り込み、どちらにも溶け込める。

魔石ないしダンジョンとはそういうものなのだろうか。

(ダンジョンか……。そういや、神どもは千年前から何か企んでるんだよな)

あるいはもつと前——『古代』と呼ばれている時代からか。

いずれにせよ、それに関してはウラノスやガネーシャまでが言葉を濁すばかりだ。

誓約がどうこう言っているが……いずれにしても、この大穴は神どもが何かやらかした結果生まれたものだと思っていたのだが。

しかし、そのダンジョンに深淵——ダークソウル人間性が宿るとなると、話はまたややこしくなる。

というよりも、昔から『王のソウル』と『闇のソウル』が混ざってろくなことになつ

た試しがない。

(出所は同じ癖にな)

しかし、実際には不死人なんて中途半端な存在を……あるいは、それ以上によく分からない代物すら生み出す始末だ。

いや、それはともかくとして……

(こいつは、ダンジョンの正体について、どうにかして情報を得ないとマズいな……) 例によって、何が起きているのかさっぱりだった。

この状況で、ひとまず奴らに従って最下層を目指す——と、いう気にはならない。

(それじゃロードランでの火継ぎと同じだからな)

げんなりとしながら呻く。

だが、力づくでウラノス達の口を割らせるのも現実的とは言い難い。

締め上げたところで本当のことを言うとは限らないし、今の時点であいつらと敵対するのはただの愚行だ。

そもそも、本当に今のダンジョンで起きていることの全容を把握しているかどうか。

少なくとも、俺達『火の時代』の亡霊が介入してくることは想定していなかったはずだ。

奴らの計画は、例によって既に狂い始めていると見ていい。

(つたく、全知全能を謳うなら、もう少し頑張れよな)

いや、頑張った結果こそが『火継ぎの儀』だと言えるのか。

それなら、今のままでちよいどのいいのかもしれない。

「どうする。採掘しておくか？」

いずれにせよ、この魔石擬きだか貴石擬きだかを持ち帰って調べた方が良いだろう。

……ただ、案外大きそうだ。掘り出すには少々手間がかかる。

「当然だ。今は少しでも情報が欲しい」

問いかけると、シャクティが頷いた。

なら、是非もない。彼女が言う通り、思わぬ手掛かりになるかもしれないわけだし。

フェルズ辺りは苦勞するかもしれないが……

(こういう訳が分からない代物は、あいつの担当だ)

この際だ。全て丸投げしてしまおう。

あれこれスペルは使えるが、基本的に使えるだけだ。弄り回したり研究した経験はほ

ぼない。

「悪い、ソラール。ちよつと手伝ってくれ」

フェルズには悪いが……まあ、餅は餅屋という言葉もある。

ここは諦めて頑張ってもらおうでしょう。

「ああ、任せておけ！」

頷くソラールに愛用のつるはしを一本渡す。

（ああ、だが……これが『闇の貴石』のようなものなら、何かの役に立つかもしれない）
可能性の問題だが……もし使えるなら、能力的な不利を補えるかもしれない。

……深淵絡みのこれを加工できる鍛冶師がこの時代にいるかどうかという問題もあるが。

（へフアイストスは無理だな）

悲鳴を上げるだけでは済むまい。

とはいえ……生憎と他に良い鍛冶師を知らないのだが。

（ああ、いや。……何て言ったっけ。へフアイストスの商売敵）

もつとも、そちらも神であることに変わりはない。なら、結果は同じか。

（ま、いいか。地上に戻ってからゆっくり考えるところか）

具体的には、オレックの爺さんにでも相談してみるところか。

……多分、フェルズはそれどころじゃなくなるだろうし。

3

……そう。

ダンジョンはただ深淵に飲みこまれるだけの存在ではない。

この先どのような事が起こるかはともかく……少なくとも、今の時点では拮抗していると言っている。

だからこそ、ダンジョンにとつても『深淵』は野放しにはできないものだった。

長年かけて少しずつ適応してきたとはいえ、まだ異物であることに変わりはない。

まして、ここは『神の柵』の力が強い領域。影響は深刻だ。

……もつとも、今科せられている『柵』は、この千年科せられてきたものより少しだけ融通が利く。

お陰で、異物が生み出した『要』の消滅に合わせて大部分は吐き出した。

——が、それでも充分とはいかない。まだ無視できない程度には残っている。だからこそ。

今は偶然に生まれた、その『強化種』を……正確には、その体内にある『魔石』を無駄にすることはできなかった。

……おそらく、今のそれにならまだ燻るこの異物を逸らせるはずなのだから。

「ベル、離れろッ!」

ヴェルフの叫びに、とつさに飛び退く。

同時、暗い靄——いや、『闇』がその『強化種』を取り巻いた。

ショートソードを引き抜こうとしていたなら、僕もその『闇』に巻き込まれていただろう。

いや、そもそも引き抜く必要がある時点でおかしい。

「なん、で?! 魔石は砕いたはず……?!」

確かに砕いた。その手ごたえは、まだ手に残ってる。

なら、何で灰にならない。どうして、こんな妙な力を……

「え?」

まったく訳が分からない。

理解を超えた現象に戦慄していると、リリが小さく呟いた。

それに応じるように、突如として天井が崩落。降り注ぐ大量の瓦礫が、その『強化種』を直撃した。

「助かった……?」

思わぬ事態に、つい気の抜けた声が漏れる。

もちろん、そんなはずがない。ここはダンジョンだ。こんな幸運はあり得ない。

なら、一体何が……。

「いや、違うぞ……。何だ、何が起こってる?」

降り注いだ瓦礫が、そのまま結合していく。

ダンジョンの自己修復と同じ光景だった。

あの『強化種』を封じ込めるように、そこに巨大な岩塊が生まれつつある。

「もしかして、あれは蛹のようなものでは……？」

まだ残っている微かな隙間から、紫紺の輝きがこぼれ出ている。

あの中で、何かが起こっている。明らかに異常事態だ。イレギュラー

それも、エイナさんからも教わっていない……いや。もしかしたら、エイナさん自身も知らないような。

「ベル様……ッ！」

「分かっている！ 行こう!!」

階層主が産出される前に一七階層を突破しなくてはならない——と。

それはとても重要なことだったけど……今は、このよく分からない何かから少しでも遠ざかりたかった。

「クソッ……。頼むから、大人しくしてくれよ、モンスターども」

脂汗を滲ませながら、ヴェルフが呟いた。

痛めた脚での戦闘は、間違いなく傷を悪化させている。

「いや、いい。それより迎撃を優先してくれ」

肩を貸すために近づくと、ヴェルフが首を横に振った。

「今襲われるのはマズい」

奥歯を噛み締めながら、それでもヴェルフは走る速さを落とさない。

その少し後ろで、リリも息を切らせながら頷いた。

「……ええ。階層主の事もありますが、あの奇妙な『強化種』から少しでも離れなくては……っ！」

ダンジョンで異常を見かけたらすぐにその場から離れる——と。それが、多くの場合の定石セオリーだという。

冒険者は冒険してはいけないというエイナさんの教えにも通じる。

何より、今の僕達にとつては、それ以外の選択肢なんてあり得ない。

(マズい。絶対にマズい……ッ！)

悪寒が止まらない。背中を伝う汗が、酷く冷たい。

あの『強化種』はもちろんそうだけど、あの『闇』はそれ以上に危険だった。

あれが何だかは分からない。でも、あれに触れてはいけない。飲み込まれたなら、もう戻ってこれない——！

(縦穴……！ 縦穴はどこだ……ッ？)

本当に見つからない。あと一つ降りれば、一七階層だつていうのに。

今なら足元がまた崩れ落ちても許せる気分だった。

……そして。

その時、確かに何かにヒビが入る音を聞いた。

「——っつ!?!」

この決死行が始まって最大の悪寒が、背筋を舐め上げた。

幻聴だ。そんなものは単なる幻聴でしかない。だって、あの岩塊からはもうずいぶんと離れている。

だから、ここまで音が聞こえるはずがない。

……例えばそこから何かが孵化したとしてもだ。

「走って——!」

それは、無茶な注文だった。

仮にもLv. 2となった僕も、すでに体力が底を打ちつつある。その自覚がある。

でも、それでも、言わざるを得ない。

(早く、一八階層に辿り着かないと……!)

それに追いつかれる前に。

「ギイイイイイイイイ——!!」

しかし、無情にもダンジョンに新たなる災厄の産声が響き渡った。

「今度は何だつてんだ?」

「知りません！ 少なくともろくでもないことです！」
「ふざける……………」

不気味な産声を背に、お互いに引きずり合うようにして逃げ出す。
その間にも、悪寒は酷くなるばかりだ。

(追ってくる…………ツ！)

追跡者の気配が…………死神の足音がすぐそこまで迫っている。

(ダメだ！)

振り切れない。もうすぐにでも追いつかれる。その確信が、背筋を貫く。

こんな時、あの人達なら一体どうする。

…………考えるまでもないことだ。

「ファイアボルトツツ!!」

加速に逆らって、強引に体を反転。そのまま砲声をあげた。

虚空を斬り裂く炎雷が、不自然に拡散する。何かに直撃した証拠だ。

先手はとつたが、致命傷ではない。それどころか、痛痒を与えられたかどうか。

「おいおい、何だっただあれは…………」

襲ってきたのは、さっきの『強化種』…………アルミラーズだったはずのものだ。

でも、もう原形の面影を探す方が難しい。

「まさか、魔石……?」

紫紺……いや、紫黒しじくの結晶が体中に生えている。

まるで鎧のようだ。

「おい、リリースケ。魔石の塊だ。倒せば大儲けだぞ」

「もちろん、喜びますよ。無事に倒せたなら」

交わされるいつもの軽口すら、乾ききっていた。

赤い瞳が……今や、唯一と言つていいほど白アルビノーシ兔の痕跡が、薄闇の向こうで燃え上がる。

(来る……ッ!)

その言葉と、紫黒の輝きが爆ぜるのはほぼ同時だった。

「があ……ッツ?!」

そして、反応は圧倒的に遅れた。

直撃——いや、まだ生きているのだから、そうとは言い難いが。

それでも、あつけなく意識が碎け散りそうになった。

「ベル様——!?!」

「よそ見するな、死ぬぞ!」

その意識を、仲間の声が繋ぎとめる。

ここで倒れるわけにはいかない。

苦い血を吐き捨て、体を地面から引き剥がす。体が悲鳴を上げる。だが、まだ立ち上がった。なら、それで充分だ。

「おおおお……おおおおっつ!!」

途切れかけた咆哮を、強引に繋げなおして疾走する。だから、辛うじて間に合った。

「危ねえ?!」

加速のままに、ヴェルフを突きとばす。

そこに紫黒の塊が激突するのはほとんど同時だった。

「クソツ。どこに跳んでくるか分からねえ……!」

敵は自分の速さと力に完全に振り回されている。

突進しては、壁や天井に激突。そこでやつと方向転換をする。そんな有様だ。「気にすることはありません。分かっても、多分リリ達では避けられませんから」ただ、その速さも力も圧倒的だ。

僕自身も、紫黒の残光を追いかけるだけで精いっぱい。

そして……

「そして、ついうっかりでも当たってしまえばそこまでです……！」
リリの言う通りだ。

間違っても『中層』にいていいモンスターじゃない。

Lv. 2程度ではまったく成す術がなかった。

攻撃が通じるかどうか以前に、攻撃をしようにもその速さに追いつけない。

それは、撤退も不可能だという意味でもある。

背中を向ければ、そのまま轢殺されるのは間違いない。

だからといって、いつまでも避け続けていられるわけではない。

先に息が上がるのは僕達だ。

撃破も撤退も不可能。つまり——…

(いいや、まだだ)

神様のナイフを握りしめる。

(状況は、変わっちゃいない……！)

一撃喰らった。でも、まだ生きている。まだ戦えている。

それが意味することは、たった一つだった。

相変わらず、この『強化種』は自分の力に振り回されている。

いや、新たな力を得た結果、さらに悪化したと言っている。

あの距離で狙いを外すなんて、よっぽどのことだ。振り回されているどころか、ま
るつきり制御できていない。

だから、活路はそこにある。

(動きをよく見ろ！)

制御できていないとしても、本当にでたらめに飛び回っているわけでもない。

少なくとも、あの『強化種』自身は僕達を狙って攻撃を仕掛けてきている。

でも、細かな制御ができないせいで攻撃は酷く直線的だ。

なら、攻撃の初動。その瞬間に込められる意図。それさえ見落とさなければ、実際の
動きは見えなくたって何とか避けられる。

「L.V. 1に無茶を言ってくれませ……！」

「それができたなら、リリもサポーターを卒業ですね……！」

自分に言い聞かせていたつもりだったけど……どうやら、声になっていたらしい。

ヴェルフとリリの軽口を引き裂くように、紫黒の輝きが奔る。

狙いは……

「リリ、左!!」

弾かれたようにリリが飛び退き、紫黒の塊がそこに激突する。

「ファイアボルト！」

激突する先が分かるなら、魔法で狙える。

——と。そんな簡単な話ではなかった。

(速い!?)

誰よりも早いはずの炎雷は、しかし直撃しなかった。

魔石——鎧のような結晶の表面をいくらか焼いたかもしれないが、まともな傷一つ負わせられない。

「あの魔石、丈夫すぎるだろ。素直に砕けて灰になれって……」

ヴェルフの言う通りだ。だけど——…

(魔石なら、もう砕いたはずだ……)

あの時——あの不自然すぎる崩落が起こる前に、確かに砕いた。

なのに、この『強化種』はまだ生きている。

(『強化種』ってこういうものなのか?)

いや、そんなはずがない。

『こればかりは、どこで遭遇するか分からないから』

と、エイナさんからも『強化種』については、ある程度教わっている。

魔石が砕かれても平気なんて危険な特性があるなら、真っ先に教えてくれるはずだ。

でも、聞いたことがない。

(やっぱり、こいつはただの『強化種』じゃない)

もつとも、今はこいつの正体が何かなんでどうでもいいことだった。

そんなことよりも、この過酷をどうやって乗り越えるか。考えなくちゃいけないのはそれだけだ。

「ベル様……!!」

思考の海に沈む直前、リリの悲鳴が聞こえた。

反射的に視線を巡らせる。それが危険な行為だとは分かっていたけど……。

「嘘だろ……」

近づいてくるのは、大石斧を手にしたミノタウロス。

しかも、三匹もいる。

どうやら、ダンジョンは意地でも僕達を殲り殺しにしたいらしい。

……もつとも、ミノタウロスは本来この階層こそが住処なのだから、文句を言うほうが筋違いかもしれないけど。

『いいか、ベル。敵を利用するってのも一つの手だぞ』

鈍化する時間の流れの中で、クオンさんの言葉が蘇る。

『例えば、ブレスのような広域攻撃だ。うまく立ち回って巻き込めば、自分が消耗するこ
となく敵を減らせる』

そのまま相討ちに持ち込めるなら理想だがな——なんて、聞いた時は正直ちよつと狡いんじゃないかと思ったりしたけど。

それでも、仲間の命には代えられない。

迷いと呼ぶには短すぎる思考の末に、決断した。

「ファイアボルト！」

なけなしの精神力マインドを注ぎこみ、幾度目かの砲声を上げる。

狙いはもちろん、あの『強化種』。

（掠めるだけで良い……ッ！）

注意さえ僕に向けられるなら、今はそれで充分だった。

「ギイイ!!」

そうだ。それでいい。

（そのまま飛び掛かってこい……!）

背後に迫るミノタウロス達の殺気を無視して、ただその『強化種』の動きを読むことだけに専念する。

機会チャンスは一回。間違っても咆哮ハウルなど使わせるわけにはいかない。

「ベルキ——」

そして、紫黒の破壊が吹き荒れる。

「くッ……！」

反応が遅れた。狙いすぎたせいだ……が、幸い左肩の装甲を持つていかれるだけで済んだ。

しびれる左腕は無視して——多分、骨は無事だ——振り向く。

(よしー)

紫黒の塊は、容易くミノタウロスの一体を轢殺し、残った二体……仲間を殺され怒り狂ったミノタウロスと乱闘を始める。

このまま相討ちを——と、それはとても望めそうにないけど。

「おいおい、ミノタウロスといえ『中層』の看板モンスターだろうが……」

完全にながった息を何とか整えながら、ヴェルフが呻く。

逃げる時間はない。精々、呼吸を整えるくらいの時間があるかどうか。

二体のミノタウロスが息絶えるまでに、だ。

いや、そうでなくとも背中など向けられない。向けた瞬間、間違ひなく轢殺される。

「あり得ません！ あんな、あんなモンスターが『中層』にいるなんて……！」

「だから『強化種』なんだろうよ……」

「それでもです！ あんな『強化種』なんて聞いたことが……！」

でたらめな動きでも、ミノタウロスを圧倒できる。

どう考えても『下層』級……いや、最悪は『深層』級。

もし、自分の力を使いこなせるようになったなら、その時が僕達の最期だ。

いや、その前に——…

「フアイアボルト！」

これ以上、少しだつて魔石を喰わせるわけにはいかない。

ミノタウロスの死体を狙い、魔法を放つ。

一撃ですべて碎けるとは思えないけど……捕食する隙を奪うくらいはできるはずだ。

「ベル様!? ダメです——…」

同時、逃走経路を予測して走る。

(よしー！)

やはり、この『強化種』は経験が圧倒的に足りない。『技と駆け引き』なら負けることはない。

読み通りの場所に飛び込んでくる姿に、改めて確信した。

活路があるとするなら、やはり近接戦。それ以外にはない。

例え、一度でも直撃すれば即死という綱渡りすぎる状況だとしてもだ。

(速さでも勝てない)

それがどうした。そんな戦いは、あの朝日が差し込む市壁の上で、いくらでも経験し

てきた。

(相手の動きにはついて行けない)

ありつたけの速さを費やしても、追いきれない。

それなら、どうする。足りない頭を必死に巡らせる。

(狙えるとしたら、相手が動きを止める一瞬)

それはいつか？ 決まっている。

攻撃後の硬直だ。体勢を入れ替え、狙いを定めるその瞬間だけだ唯一の好機。チャンス

ただ——…

(硬い……！)

体表を覆う紫黒の魔石は、酷く硬かった。

さつきまでの毛皮と違って、まるで金属か……酷く固い硝子でも斬りつけているよう

な気分だった。

ただでさえ当てづらいというのに、下手に当てると今度はそのまま刃が滑りそうになる。

(でも、確かに削れている……！)

ダンジョンの中を、煌めく光の粉が舞い踊る。

攻撃は、例え僅かでも効いている。なら、やることは何も変わらない。

ただ——…

(体力が……)

下手に攻撃の手を緩めては、リリ達が狙われる。

それを避けるためにも、自分より早い敵を常に追い回さなくてはならない。

体力の温存など、初めから不可能だった。

何よりここまでの疲労と、何よりこの『強化種』から受けた攻撃が体を深刻に蝕んでいる。

しかし、ここで逃げるといふ選択肢はない。

だから——…

「うおおおおおおおおツツ!!」

今すぐにも自壊が始まる。これ以上は戦えない。

そんな体の悲鳴を無視し、代わりにさらなる加速を命じた。

4

「『中層』とは、これほどに早くモンスターが生まれるのか……?」

ようやく途切れたモンスターの襲撃。

おそらく、さほど長くはならない休息の中で、桜花さんが血の混じった汗を拭う。

「確かに、『中層』は『上層』よりもモンスター^{モンスター}の産出が早いですが……」

私もまた、再び乱れかけた呼吸を整えながら答える。

「おそらく、これも異常事態^{イレギュラー}の影響でしょう」

第二次調査隊——シャクティやクオンさんのみならず、**【猛者^{おっしや}】**や**【凶狼^{ヴァナルガンド}】**までが参戦している——が、撤退を選択するほどの数が出現したと聞く。

実際には時間や体力の消費を嫌い強行突破したようだが……それでも、伊達にモンスター^{モンスター}の異常発生などと言われているわけではない。

先ほどから行く手を遮っているのはその残党といったところか。産出される数そのものは通常に戻っているように思える。

少なくとも、怪物^{モンスター・パーティー}の宴のような大発生とは今のところ遭遇していない。

「それに、どうやら第三次調査隊の先行隊を追い抜いてしまったらしい」

意図して距離を保っていたため、確信はないが……今の一五階層には、どうにも同業者の気配を感じない。

もちろん、『中層』に進出できる冒険者自体が少ないのは百も承知だが……。

(あちらも、何か別の異常事態^{イレギュラー}に対応しているという事か……)

どちらかと言えば、その可能性を疑った方が良い。

いつになくギルドの動きが機敏……つまり、あのエルフの恥が、まともに働きだす程

度には厄介な状況なのだから。

そんな中で、先行隊を追い抜いてしまったのが痛い。

侵攻速度を上げると宣言し、神ヘステイアとアンジェリックさんも必死についてきてくれているが……それでも、速度はむしろ遅くなってしまうている。

理由は簡単だ。モンスターの襲撃を立て続けに受けている。その影響だ。

「お二人は無事ですか？」

ため息を飲み込んでから、問いかけた。

「う、うん。君たちのお陰で、今のところ無事だよ」

「ええ、私も同じよ」

神ヘステイアもアンジェリックさんも、ひとまず傷を負ってはいないらしい。

安堵してから、「タケミカツチ・ファミリア」の奮闘を賞賛する。

冒険者ならかすり傷で済むようなことでも、彼女達にとっては重傷を負う事になりかねない。

「い、今さらだけど。本当に大丈夫なのかしら？ そりゃ、一四階層は通り過ぎたけど

……」

そんな中で、ふとアンジェリックさんが呟いた。

「クオンさんが対応済みですから、おそらく」

「そう？ あいつ、あれで結構いい加減なところがあるんだけど……」
それは別段驚きもしませんが。

ただ、こういう状況では驚くほど慎重だとも思う。
彼が殺したというなら、本当に殺したと考えていい。

「残党が残っているのは確かでしょう」

しかし。それはそれとして、警戒は必須だった。

「でなければ、事後処理にこれほどの人員が動員されるはずがない」

オラリオの歴史を見ても、これほど大規模な冒険者依頼は稀なのだから。

まして、【猛者】……いや、「フレイア・ファミリア」の精鋭が揃って参戦している。

「まだ呪術師の一部が残っていると？」

元凶はいないにしても、残滓は残っていると考えた方が良い。

「そこまでは何とも。ただ、仮に残っているならこの警戒態勢も納得がいきます」

もつとも、奇妙だというなら、魔石を変質させるほどの呪術師が今まで埋もれていたこと自体が奇妙な話だ。

あの暗黒期の動乱ですら、まったく噂にならなかつた。

(かなりの暗部にまで踏み込んでいたつもりでしたが……)

この数年の間に台頭してきたのか。それとも、単に私の自惚れだったのか。

「ならば、俺達が遭遇する可能性もあるというわけか」

「警戒して損はないでしょう」

雑念を振り払って言葉が続ける。

「決して油断はできません。ですが、【戦場の聖女】デア・セイントがすでに把握しています」

警戒は必要だが、そこまで悲観した物でもない。

彼女ほどの治療師ヒラーもまた、この千年を見てもごく僅かだ。

「あれから三日。あるいはすでに解呪法を確立させているかも……」

今すぐとはいかないまでも、近いうちに解決する問題だ。

「いや、それは不可能だ」

と、その考えをアンジエさんが否定した。

「その何某というのが、どれほどの力量かは知らないが、それでも、深淵には抗えない」

「深淵という呪詛カーズを知っているのですか？」

それなりに情報を集めたつもりだが、結局詳細は不明のままだ。

私だけではなく、ギルドまでもが同じらしい。

「そのものではないがな」

吐き捨てられたその言葉こそ、まるで呪詛のようだった。

(ああ、なるほど)

見ず知らずの彼女相手に、奇妙な共感を覚えていた理由。それをようやく理解した。

「あの人喰らいどもが拜んでいたものと同じような代物だ」

彼女は、復讐者だ。今も瞋恚の炎に身を焼かれている。

その暗い輝きに。底冷えするような熱に。私自身が勝手に呼応しているだけだ。

「いずれにしても、その呪いに対して人は無力だ。精々逸らす事ができるかどうか……」
嘆息する暇もなく、彼女は言葉を続けていた。

「逸らす？」

「そうだ。そして、逸らせるとしたらそれは人か、人であった何かだろう」

「人であった何か……」

何とも不吉な響きだった。

「しかし、そのクオンとは何者だ？　そもそも深淵に立ち入る自体がそう容易いことではない」

「そうなのですか？」

「ああ。まさか【深淵歩き】アルトリウスでもあるまいし」

「アルトリウス……？」

それは、『古代』における大英雄にして大逆者。旧バベル——旧オラリオを建設した

【狼騎士】の名だが……。

「古いお伽噺だ。かつてとある国に深淵が発生した時、その元凶たる魔物から最後の王女を救い出したとされる神々の英雄」

私が育ったあの聖堂は、古臭い書物だけは多く持っていた——と、彼女は小さく苦笑する。

「魔物から姫を救ったその騎士は、人知れず去っていった。まあ、よくある話といえばそれまでだがな」

私もあまり英雄譚には明るくないものの……そういった物語なら、いくつか思い浮かぶ。

しかし、アルトリウスという名は一種の禁忌と言っている。

実際に、完全な形で残っている彼の逸話は存在しない。正確には、彼自身の逸話は残っていない。

それほどに徹底して消されているのだ。間違っても『神の英雄』などと称されるはずがなかった。

「だが、まったくのお伽噺とも思えん。深淵による災いは、その後も幾度となく起こっている」

「その時はどのような？」

「場所や時代にもよるが、ファランの者たちの活躍を耳にすることが多いな」
「ファラン？」

「かの英雄の後継者……。少なくとも、そうならんとする者たちだと聞く」
私も詳しいわけではないが、とアンジエさんが小さく付け足した。

「クオンさんも、その一員なのでしようか？」

「それは分からん。その男とも面識がないからな」

だが、と彼女は言葉が続けた。

「奴らにしては、やり方が手緩い」

「かなり異例尽くしの冒険者依頼ですが……」

創設神ウラノスが人前に姿を見せること自体が異例の事態だと言える。

少なくとも、私を知る限りでは初めての事だ。

「方向性の違いだ。ファランの者たちなら、この街ごと焼いていてもおかしくない」

……クオンさんがその気になれば、やりかねないようにも思うが。

「街を焼くだと……」

呪詛のように、桜花さんが呻いた。

彼だけではない。ヤマトさんや、ヒタチさんまでが怒りを滲ませている。

……いや、それともこれは嫌悪だろうか。あるいは、恐怖かもしれない。

もちろん、私とてあまりいい気分ではない。

ただ、そこまでしななければならぬほどの脅威だ——と、それだけは心に止めておく必要がある。

もつとも、今さらといえは今さらだが。

「ああ。だから、彼らは英雄の後継者でありながら忌み嫌われている」

……それだけが理由ではないだろうがな——と。

そんなことを呟いてから、

「もつとも、この洞窟……ダンジョンと言ったか。ここも奇妙な場所だ。単に攻めあぐねているという可能性もあるか」

壁から生き物が生まれるとは、何とも不気味な話だ。

彼女の呟きは、駆け出しの——まだ本当に慣れていない冒険者が時々口にする言葉そのものだった。

(彼女は一体……)

私達の知らない知識を持ち、私達にとって常識ともいえる知識に疎い。

オラリオに來たばかりの異邦人——いや、それにしても何か大きな隔たりがあるように感じられる。

「不死隊は頭頂が尖った独特の兜を愛用すると聞くが、その男はどうだ？」

「いえ、そういった格好をしているのは見た事がありません」

もつとも、あの人の『スキル』を考えれば、見た事がないからと言って安心はできないが。

「なら、武器はどうだ？」

「大剣……クレイモアをよく使っているようですね。それ以外にも色々」と

それこそ、Lv. 5をおたまで返り討ちにしたこともある。

……いや、あれは本当におたまだったのだろうか。その形をした魔剣と言われた方がまだ納得がいく。

（いえ、そんな奇天烈な鍛冶師がいたとは思えません……）

……鍛冶師には変わり者が多いらしい——と。そんな噂など、私は知らない。

試し斬りを繰り返した結果、Lv. 5に至った最上級鍛冶師がいるなんて、そんな話は聞いたこともない。

「ならば、やはりフアランとは無関係だろう」

彼女が、あつさりと肩をすくめてから。

「深淵を知っていてなおこれとは……誰だか知らないが、随分と甘い男のようだな」などと、オラリオの住人が聞いたら目を剥くようなことを呟いた。

実際に桜花さんたちは驚愕の表情を浮かべている。

「各々方、警戒を！」

そんな中で、ヤマトさんが鋭い声を上げた。

「前方、数は一三。『ダンジョン・ワーム』です！」

全員が身構える中、彼女はさらに続けた。

「そして、速い！ 先ほどよりもずっと！ 散開して——！」

つまり、『深淵種』と見るべきか。

(特異な存在だという割には、遭遇する数が多い)

もつとも、文句を言っても始まらない。

そして、文句を言っている暇もなかった。

「来ます！」

その叫びと共に、上下左右全ての方向から黒く湿り一層醜悪となった蚯蚓が飛び出してきた。

(やはり『深淵種』！)

初撃は全て凌いだ——が、厄介だった。

穿孔する速さが違う。

さらに、暗い湿りは刃を滑らせ、蚯蚓のように柔らかな体は打撃を吸収する。

加えて、千切れた部位も、蚯蚓と同じくまだ蠢いていた。

結局、初撃で仕留められた個体は、一体いるかどうか。

「円陣を！ 中央には神へスティアとアンジェリツクさん。ヤマトさんも中央で索敵に専念しなさい！」

指示を出しながら武器を小太刀に持ち替える。

この方が手数を増やせる。それに、この相手なら刃の方が有効だ。

「任せろ！」

「承知！」

「はい！」

打てば響くこの感触は、何とも頼もしい。

彼らはいずれ、一角の冒険者となるだろう。

……もちろん、この先も生き残ることができれば、だが。

(さて、どうするか)

ダンジョン・ワームを相手にする時は、基本的に反撃狙いとなる。カウンター

もちろん、それだけならいくらでも手はある。

だが、今回ばかりはあまり悠長に構えていられないのも事実だった。

何しろ、こちらにはサポーターよりもはるかに脆い存在がふたりもいる。

彼女達に常に注意を向けていなければならない。

もちろん、「タケミカヅチ・ファミリア」も同じだ。

（油断すれば、私達も足元をすくわれる）

先ほどのミノタウロス深淵種は、確かな強敵だった。

ここが『中層』であることは忘れた方が良い。

（……どうやら、ランクの壁が低くなったのは、ダンジョンも同じようですね）

冒険者はこれからさらなる精進が求められそうだ——と、他人事のように思っている場合ではない。

千切れたまましつこく喰らいつきにくるダンジョン・ワームの残骸を踏みつぶし、また適当な方向に蹴り飛ばす。

断面に牙を生み出すなど、まさに怪物じみている。

それに、数が多い。

「面倒な相手だ……」

足元を潜り抜けようとするダンジョン・ワームを斧槍で迎撃しながら、アンジェさんが吐き捨てる。

「全くです」

今さらダンジョン・ワームに手を焼くとは……少し勘が鈍ったのかもしれない。

嘆息しながら、死角から飛び出してきた一匹を、縦に両断する。

たちまち二匹に分裂する——と、流石にそこまでの事にはならなそうだが。

それでも、未だにガチガチと牙を鳴らしているその姿には、流石に嫌悪感を覚えた。

「魔石を砕かない限り即死しないとは……」

続けて、もう一匹の体に小太刀を突き立てる。

魔石からは外れたが、別に問題はない。そのまま力づくで壁から引きずり出す。

そうなれば、もうさほどの脅威ではない。地面に落ちてのたうつそのダンジョン・

ワームの急所——魔石のある辺りに思い切り踏みつける。

柔らかな体は瞬間的な力には強いかもしれないが、この状況なら関係ない。

魔石が砕ける感触と同時に、灰となって崩れ落ちた。

「敵数残り九！」

ヤマトさんの声に、内心で舌打ちする。

「このままでは、凌ぎきれん。先に陣形を喰い破られる」

胸中をよぎった言葉を、アンジェさんが口にした。

何しろ、とっさに組んだ円陣だ。前衛だった私とアンジェさんはそのまま並んでい

る。

後ろを受け持つのは、桜花さんとヒタチさん。

視線だけ振り返れば、二人ともすでに少なくとも手傷を負っているのが見えた。

理由は単純だった。

(このモンスターたちは、今この時も成長している)

こちらの動きを理解し、そのうえで対処法を探っている。

つまりは『技と駆け引き』を身に付けつつあった。

呻きながらも、まだ若い冒険者たちの研鑽に心からの賞賛を送る。

凡庸なLv. 2ならずで瓦解していておかしくない。

そうならないのは、各々が確かな技を身に着けているからだ。

それどころか……

「はあああッ!!」

戦斧一閃。桜花さんの一撃が、ついにダンジョン・ワームを捉えた。

成長しているのは、こちらと同じことだ。

武神の教えが、この状況の中で彼ら自身の血肉となっていく。

すべては、彼らの研鑽によるもの。長い時間をかけて磨かれてきたそれが、さらなる

輝きを放とうとしている。

——だが、それすらも無慈悲に蹂躪するのがダンジョンだった。

「え?」

斬り飛ばされた肉片。それは、新たに攻撃を仕掛けてきた個体の体に当たり、軌道を

反転させた。

意図されたものか、それとも単なる偶然なのか。

いずれにせよ、その小さな肉片は、私達の警戒をすり抜けていた。

「あうう……つつ?!」

気づいた時には、すでにヒタチさんが悲鳴を上げていた。

「千草殿!」

「いけない。集中を乱しては——!」

司令塔だったヤマトさんの意識が乱れた一瞬。いや、それにすら満たない刹那。

ダンジョンは——そして、醜悪な捕喰者たちは、満を持してその牙をむき出しにした。

「迂闊……!」

続けて悲鳴を上げたのは、ヤマトさん。

視線だけ振り向けば、ふくらはぎの一部を食い千切られているのが見えた。

「やらせるか!」

続けて、首を食いちぎらんと新たな個体が地面から飛び出す。

それを斬り払おうと、アンジエさんが剣を振るう——が。

「しま——ツ?!」

その個体は、あつさりと狙いを変え……あるいは、本当の狙い通りにその腕へと絡み

ついた。

ダンジョンの薄闇の中で、勝敗の天秤は容易く傾く。

「くツ?!」

引きずり倒される彼女を援護している暇もない。

それどころか、そちらに気を取られた事すら失敗だったと言わざるを得なかった。

新たなダンジョン・ワームが、まずは左足に絡みつく。

続けて、それを斬り払おうとした右腕に。少し遅れて右足に。最後に左腕へと絡みつく。

「おのれ……!」

毒づきながら、息を吸い込む。

こうなつては、魔法で吹き飛ばすしかない……

「今は遠き森の——!?!」

しかし、詠唱はあっけなく潰された。

勢いよく飛び出してきた五匹目。それが、鳩尾に強烈な頭突きを叩き込む。

衝撃が肺を締め上げ、空気を強引に押し出す。

その一瞬の間に、五匹目と入れ替わるように姿を見せたのは六匹目。

頭上から垂れ下がってきたそれは、首へと絡みつき締め上げる。

(マズい……!)

これでは詠唱ができない。

L v. 4 と言えども、永遠に呼吸を止めていられるわけではない。

……何より、動きを止めてしまっている。

「うわあ?!」

「やらせん!」

神ヘステイアとアンジェリックさんの守りは、桜花さん一人。

自由に動けるダンジョン・ワームは三匹。

一匹は凄いだが……いや、違う。

「何だと……!?!」

それは、捨て身の特攻だった。

命と引き換えに、その個体は桜花さんに絡みつき、その動きを止める。

「ヘステイア様!」

その瞬間、アンジェさんが走った。

思わず目を見開く。

振りほどいたのではない。彼女は、自分の腕を斬り飛ばしていた。

狂気の特攻を凌ぐのは、さらなる狂気。

しかし——…

「ツツ!？」

元より無茶な姿勢。しかも、片腕を失い体の均衡バランスも乱れている。

「霞く——」

神ヘステイアこそ半ば体当たりするようにして庇ったが、伸ばした指先は、僅かにア
ンジェリックさんに届かない——…

「——ん、わあ?!？」

神ヘステイアの叫びが、途中で悲鳴に変わった。

理由は滲む視界の中でも明白だった。

アンジェリックさんを狙った個体。その頭部が収束する炎に飲まれて焼滅したから
だ。

「ひゅ——…!？」

唐突に呼吸が回復する。

急に流れ込んできた空気に、声ともつかない奇妙な音が漏れた。

とっさに喉に手を伸ばして——四肢もまた解放されていることに気づく。

「無事か？」

その声には、聞き覚えがあった。

かつての友や、今の同僚にも負けぬほどに耳にしてきた。
「シャクテイ……？」

シャクテイ・ヴァルマ。

迷宮都市の憲兵とも呼ばれる「ガネーシャ・ファミリー」の団長にして、オラリオでも少ないLv. 5の一人。

私が心から尊敬する人物だった。

「ああ。無事なようだな」

「ええ……！」

頭部を失いながら、それでもしぶとく地面に潜ろうとするダンジョン・ワームを素手で捕まえる。

あまり気分はよくないが……そのためのグローブだ。

力任せに引きずり出し、その魔石に小太刀を突き立てた。

「お陰様で」

その頃には、すでに戦いは終わっていた。

それもそうだろう。シャクテイが一人でここにいるわけがない。

「くたばりなッ！」

アンジェリックさんを狙った——そして、今や頭部を失っているその個体を引きずり

出すのは、アマゾネス。

そのまま地面に叩きつけ、無造作に魔石を踏み砕いた。

「それが最後か？」

そのアマゾネスに声をかけたのは、黒衣を纏った一人の男。

言うまでもなく、クオンさんだった。

「おそろくね」

「まったく、面倒な奴らだ。……つと！」

肩をすくめ合うクオンさんに、アンジエリックさんが飛びついた。

「あーもう！ あーもうっ！！ 何でアナタ達は肝心な時にいないよー！！」

「何の話……いや、悪かった！ 悪かったから揺さぶるな?！」

その声が微妙にぶれて聞こえるくらいに速さで揺さぶられるクオンさん。

やはり、相応に精神的負担^{ストレス}を感じていたらしい。

アンジエリックさんは、少し涙目だった。

(……それも当然でしょう)

もつとも、責める気はない。

むしろ、ここまで気丈にふるまってくれたことに感謝しているくらいだ。

「ここはもう『中層』。

偉業を乗り越え、『器』を昇華した冒険者ですら容易く命を落とす魔境だ。常人が恐怖を感じないはずがなかった。

「何でそういうことするんだよおおおおおつ?!」

と、そこでさらなる悲鳴がダンジョンに響き渡った。

そういうえば、アンジエさんは腕を――…

「ですが……」

視線を向ければ、確かに彼女の右腕は切り落とされていた。

「ですがもかすがもあるもんか！ ええい、クオンくん!!」

「何でお前まで揺さぶる?!」

「何とかしておくれよおつ!!」

「何をだ?!」

今も全力で前後左右に揺さぶられるクオンさんは、アンジエさんに気づいていないらしい。

……まあ、それはそうでしょうけど。

「あんたたち、少し落ち着きな!」

いずれにせよ、騒いでいる暇はない。

私が仲裁に向かうより早く、アマゾネス――

アンティエネイラ
【麗 傑】

が二人の頭上に拳を落とした。

「きゃ?!」

「あいたあ!」

悲鳴と共に頭を押さえる二人と、その隙に抜け出すクオンさん。

彼らを他所に、言葉を交わすのは見知らぬ二人だった。

「彼女は、貴公の知り合いかな?」

一人は、いかにも魔女といった風体の女性。

「いや、俺ではない」

もう一人は、今時珍しいほど型の古い大兜グレートヘルムを被った男だった。

(いえ、彼の格好は……)

大兜グレートヘルムに、太陽が描かれたサーコート。

手には同じく太陽が描かれた円盾。腰には直剣。

これは、時々酒場で話題に上る『太陽の戦士』なる存在と同じ特徴では……。

その彼はタリスマンを握りしめ、クオンさんと同じ奇妙な詠唱を紡ぐ。

と、金色の魔方陣のようなものが現れ、「タケミカヅチ・ファミリア」の傷を癒していった。

「まだ痛むところはあるか?」

「い、いえ。問題ありません。ありがとうございます」

「どうやら、治療魔法だったらしい。」

「それも、治療師ヒールラに見劣りしない見事なものだ。」

「一方で、魔女はと言えば……」

「となると、またか……」

「何が、とは。あえて聞きませんが。」

「ゆるゆると首を振る姿を見て、彼女とクオンさんの関係は大体予想がついた。」

「……」一応言っておくが、俺の知り合いでもないからな」

「嘆く彼女に、クオンさんもまた呻いてから。」

「おい、ヘステイア。そいつは誰だ？」

「決まってるだろ。ボクの新しい眷属さ！」

「眷属にしただと？」

「それは、どこか動揺を宿しているように聞こえた。」

「いや、実際に何かしら心を乱したのだろう。」

「そんなことよりも、何とかしておくれよ！」

「神ヘステイアの訴えに、彼は舌打ちをしてから言った。」

「……眷属にしたなら、もう分かっているだろう。あの程度なら騒ぐことは何もない」

言葉を失う神へステイア。いや、それは私達も同じか。

「ああ。そうだな」

最も気楽な様子で肩をすくめたのは、アンジエさん本人だった。

「エスト瓶は持っていないのか？」

「持っているが、中身がない」

「それもそうか」

頷くと、クオンさんが炎でも入っているかのように橙色に輝く瓶を取り出した。

「使え」

「助かる」

アンジエさんが、その瓶の中身を呷ると同時、彼女の体が燃え上がった。

いや、それは錯覚だろう。どちらかと言えば陽炎のように揺らいだというべきだ。

そして――…

「何だと……」

斬り落とされた腕が、復元していた。

驚愕の声が重なる。

「エスト瓶にこれほどの力があつたのか……」

ただ、やはり彼女だけはその意味がズレていた。

「まあ、長いこと使っているからな」

そして、その言葉の意味を介するのでもまたクオンさんだけだった。

……いや、見慣れぬ二人も分かっているのか。

「……やはり、巡礼者か」

「その様子だと、お前は違うようだな」

「ああ。巡礼地に赴いたことはない」

彼らのやり取りが何を意味しているのか、まるで分からない。

「だが、巡礼者に出会えたのは幸運だ」

彼女の声は、今までになく弾んでいる。

一筋の救いでも見出したかのように、彼女は言った。

「いつか私を殺してくれ。選ばれた者なら、それほどの手間ではないだろう?」

「覚えておくさ。俺が殺される側に回るかもしれないからな」

よく分からない返事を、クオンさんが返したあたりで。

「こらああああああああつ!! 勝手なこと言うなあああああ!!」

神ヘステイアが再度突貫。大きく跳躍すると、そのままドロップキックを放つ。

「あいたたたたつ?!」

そして、あっさりと避けられ、代わりに関節を決められて悲鳴を上げた。

「そこは当たるところだろお?!」

「知るか、ンなこと」

「ああああ!! ギブギブギブ!!」

ぺちぺちと腕を叩かれ、面倒くさそうな顔をするクオンさん。

……若干機嫌を損ねているのは間違いない。

「ベルくうん……。クオン君が苛めるんだよお……」

一方で、ぽいと投げ捨てられ、ベそをかくのは神へステイア。

「こ、これが神殺し……」

そして、その姿に「タケミカツチ・ファミリア」が戦慄の声を上げる。

何だかとても混沌カオスな光景だった。

(……いえ、この人が本気ならこの程度では済まないと思いますが)

となると、これは友愛に満ちたやり取りなのかもしれない。

自分で出したその結論に、頭痛を覚えた。

「とうか、お前。彼女をどこで拾ってきたんだよ?」

「べーだ! 教えてやるもんか」

まだ涙目のまま、思いつきり舌を出して――

「そうかそうか。ところで、こんなところに何故か《イバラムチ》があったりするんだ

が……」

「ベル君達がダンジョンから連れてきたんだよ！」

どこからか取り出されたその鞭を見て、そのまま即座に答える。

……賢明な判断です、神ヘステイア。

「いつの話だ？」

「ええと……。うん、四日くらい前かな」

「……ちようど深淵が発生した頃か」

再び不穏な空気が漂いだした。

クオンさんとアンジェさんの視線が正面からぶつかり合う。

「別に殺されるのは構わないが」

そんな中で、彼女は不快そうに言った。

「あの人喰らいどもと一緒にするな。深み……深淵になど誰が手を出すか」

「ほう？」

声を上げたのは、見知らぬ魔女だった。

「深み。それに『人喰らい』ときたか」

「知っているのか？」

「ああ。だが、落ち着きたまえ。私達が聖堂騎士に見えるか？」

「深淵に対応できるなら、可能性はある」

「対応できなかったからこそその、深みの大聖堂ではないかな？」

「……」

よく分からないやり取りだったけど……どうやら、魔女の方が上手だったらしい。

不満そうに、アンジェさんが鼻を鳴らす。

「エルドリツチが火継ぎをする前。白教の内輪もめに決着がついた頃の生まれか……」

そんな中で、クオンさんが小さく呟いた。

「白教の内輪もめとは？」

首を傾げたのは、大兜の戦士だった。

「ん？ ああ。俺もよく知らないが、どうやら主神が入れ替わったらしい」

「主神？ 主神ロイドが？」

「ああ。ロイドは傍系に過ぎず、主神を僭称したんだとき」

「……かの神は、大王グウインの叔父にあたるはずだが」

「それを俺に言われてもな……」

例によってよく分からない会話が続く。

（主神？ 【ロイド・ファミリア】という事でしょうか……）

しかし、聞き覚えのない名前だった。

もつとも、オラリオにある派閥ですらその全てを知っているわけではない。

そして、派閥は何もオラリオの中だけに存在しているわけではないのだ。

心当たりがないとしても、何ら不思議ではない。

ただ、『外の派閥』という言葉から、一つの可能性が思い浮かんだ。

(もしや、内輪もめとは……)

国家系派閥の場合、一柱では『恩恵』フェルトを与えきれないため、『従属神』というものを抱えるという話は聞いたことがある。

ロイドという神が、自分の『従属神』とその眷属に反乱を起こされ、敗北した——と、言う意味なのだろうか。

「それでは、主神は誰になったのだ？」

「クアトつて女神だ。だが、多分その後で彼女の言う『深み』に——」

「それだああああああつ!!」

「……今度は何だよ？」

再び叫ぶ神へスティアに、クオンさんが胡乱な目を向けた。

「やっぱりクアトつて神を、知ってるのかい?!」

「うん? まあ、一応は……」

詳しいわけじゃないが——と、付け足された言葉が聞こえたのかどうか。

神へスティアがさらに問いかけた。

「それってどういう神なんだい？」

「涙の神。哀しみに寄り添う慈愛の女神というのが一般的だな。だが、一部では人を絶望の運命に導く悪神とも言われるらしい」

それはまた、随分と両極端な神だった。

「それがどうかしたか？」

「今、オラリオにいるんだけど……」

「何だと……？」

クオンさんと魔女、そして大兜の戦士が顔を見合わせる。

それどころか、アンジエさんまでが視線を鋭くした。

「確かか？」

「うん。神会デナトウスで会ったんだ。どつかで聞いた名前だったなつて」

「女神クアトが実在した……いや、まだ神として存在しているだと？」

「あ、待って。実在はしてないんだよ。どつかの女神がロールプレイ……ええと、そういう役割を演じているみたいで……」

このやり取りから察するに、私の勘はやはり外れたらしい。

しかし、そうなるやと本当に、一体何の話をしているやら。

流石に気になるが……しかし、互いに詮索は無用というのが条件だ。何とか好奇心を抑え込んでいると――

「話の途中で済まないが」

シヤクテイが、その会話に割って入った。

……何というか。非常に嫌な予感がする。

いや、大丈夫だ。

（私の勘はよく外れる）

もつとも、今回ばかりは外す自信の方がなかったが。

「ひとつ確認をさせてもらいます。あなたは、神ヘステイアですね？」

……今さらだが、神のダンジョン立ち入りは固く禁じられている。

「神がダンジョンに立ち入るのは、硬く禁じられているのは、ご承知だと思いますが

……」

「えつとお……」

もちろん、ギルドの規則にもしつかりと明記されていた。

「そうなのか？」

あるはずもない言い訳を探して視線を泳がせる神ヘステイアを他所に、クオンさんが小さく問いかけてくる。

「そうでなきや、あの道楽馬鹿どもが一柱ひとりもリヴィラに住みつかないわけないだろう？」

肩をすくめたのは、アンテイアネイラ「麗傑」だった。

言い方はともかく……実際のところ、その通りだ。

「確かにな」

しつかりと頷いてから、クオンさんがアンジェリックさんに何かしら目配せをして――

……

「まあ、落ち着けシヤクテイ」

そして、言った。

「一見すると、そいつはジャガ丸くんの女神によく似ているが……」

「違うとでも？」

いえ、違うと思いますが。

そもそも、神ヘステイア。今の発言を流してよろしいのですか？

「ああ。彼女達は、霞の妹でな」

……『達』？

「ヘスとテイアっていうんだ」

「そーよ。妹たちよ」

アンジェリックさんまでが胸を張って言い切る。

「正気か、お前達?!

まさか私を巻き込む気ですか?!——などと、慌てている暇もない。

「わ、わーい! おねーちゃん!」

見事なまでの棒読みとともに、神へステイアがアンジェリックさんに抱き着く。

(す、縋るような目で私を見ないでください……!)

しかし、今の私は神へステイアに雇われている身だ。その神意に逆うわけには——!

「ね……ねえさん……」

蚊が鳴くような微かな声を何とか絞り出し、指先でアンジェリックさんの上着の裾を少し摘まむ。

クオンさん。よく頑張った——とでも言いたげな顔で私を見ないでください。

「お、お前まで?!

シヤクテイ。違うんです。今は雇われの身なのです。だからこれは仕方がないことなのです。

だから、そんな顔で私を見ないでください……!」

「どう。可愛いでしょ?」

……アンジェリックさん。あなたのその自信はどこから来るのですか。

「ところで、私も一つ聞いていいか?」

ああ、そうだな——と。投げやりな返事を返すシャクティを他所に、アンジェさんが言った。

『最初の火』がないというのは本当か？』

例によって、何のことだか分からない。

その言葉の意味を理解したのは、やはり彼……彼らだけだった。

「ん……。まあ、多分、そのはずなんだが……」

神へスティアを見やつてから、クオンさんは肩を落とす。

「正直、自信を失いつつある」

「何でボクを見ていうんだーっ?!」

三度目の叫びがダンジョンに響き——

『ヴォオオオオオオオオ!!』

そして、モンスターの咆哮が帰ってきた。

「とりあえず、話はここまでだな」

新たに姿を見せたモンスターの大群——幸い、通常種ばかりのようだが——を見やりクオンさんが告げる。

「まずはあのモンスターどもを突破。ベル達を拾って一八階層に向かう。話の続きはその後。それでいいか？」

もちろん、全員が領いたのは言うまでもない。

5

「くそつたれが……」

紫紺——いや、紫黒の輝きが奔るごとに、ベルの体から血が舞う。

何が起こっているのか。未だL v. 1の俺には、まともに見えもしない。ついでに言えば、勝ち筋すら見えなかった。

(ふざけろ……！)

丹田に力を込め、弱気になった自分を叱咤する。

こんなところでくたばっていられるほど暇ではない。

(落ち着け。よく考えろ……)

初めての客……いや、リリースも含めて初めてのパーティだ。

まだ一週間をようやく超えた程度の付き合いだが……だからどうした。

俺達はパーティだ。

(俺は、こいつらのために何ができる?)

まだL v. 1の……一山いくらの冒険者もどきが、あの『強化種』相手に何ができる。

(いや、違う。そうじゃない)

俺は鍛冶師だ。……ああクソツたれ。だから、そうじゃない。

(鎚もない火もない。炉床どころか砥石の欠片もねえ)

そんな有様で、何ができる？ ヴェルフ・クロツゾに、今何ができる——？

(ベルの攻撃まで通じない)

ランクアップしたばかりとはいえ、L.V. 2だ。それでダメなら、L.V. 1の出る幕などない。

いや、本当に——？

(あれは……？)

何かが、感覚に引つかかった。

だが、一体なんだ。何が引つかかった？

(よく見ろ。鍛冶師だろう)

終えるはずのない戦いを。見えるはずのない『強化種』の一挙手一投足にすべての集中力を注ぎ込む。

(奴の装備に目を向ける。その性能を余すことなく把握しろ)

それができないで、どうやって至高の武器など打つというのか。

目の前にあるものすら理解できないなら、至高の武器など夢想することすらできない。

(見えない癖に、鍛治師おれの感覚は一体何をひっかけた?)

ここがどこか。隣にいるのは誰か。目の前で戦っているのは誰か。それすらも意識の外に追いやられた時、確かに見えた。

「そうか!」

思わず笑いだしそうになった。

答えが分かってしまえば、大したこともない。

むしろ、必死になっていた自分の未熟さに呆れるくらいだ。

ならば、次に必要なのは……

(当てるはあるのか?)

繰り返すが、ここには鎚も火もない。

それでも、当てるはあるのか?

(ある)

その言葉が爆ぜると同時、足の痛みすら消えていた。

「ヴェルフ様!」

迷わず走る。

「まさか一人で逃げる気ですか!」

「ふざける! いいからお前も来い!」

リリスケの見当はずれな罵声に怒鳴り返す。

「ベルに武器を届けるのはお前の仕事だろうが！」

「武器？ そんなものどこに……！」

とはいえ、文句の音がすぐ傍で聞こえる以上、ついでには来ているのだろう。そして、目的地もさほど遠くはない。

「頼むぞ。残っていてくれよ……！」

蹂躪され、焼け焦げたミノタウロスの死体が転がり、灰が積もるその一角。

探していたそれは、確かに転がっていた。

完全な形ではないが……なに、むしろベルならこの方が使いやすい。

持ち上げ、念入りに確認する。

（柄が少し折れているだけだ。それ以外に問題はねえ）

他の二つは、完全に砕かれてしまっているが……これは、まだ武器として生きている。

「こんなものでどうしようって言うんですか?!」

無言で放り渡すと、リリスケが叫んだ。

「いいから聞け」

俺自身も、それを——ミノタウロスの持っていた大石斧を握りしめて告げた。

「あの魔石みたいなやつ。あれは、ベルの攻撃が効かないくらい硬い」

「それは分かっています！」

「だから聞けつて！　そして、よく見ろ。あいつが壁に激突した直後だ。目を凝らせば、お前にだつて見えるはずだ」

「何を……？」

　ゴム玉のように跳ね回る紫黒の輝き。

　例によつて勢いよく壁に激突して……

「え？」

「見えたな？」

「少し、欠けた……？」

　そう。ほんの小さな破片。

　塵と大差ない程度だが、それが宙を舞う。

　ベルの攻撃の影響ではない。あれは——…

「見たままだ。あれは衝撃……打撃に弱い」

　あの魔石は硬い。硬いが、韌性がない。

　生半な刃物では傷一つつけられない金剛石も、そこらにある金槌で叩けば容易く割れる。
　ダイヤモンド

　おそらくは、それと同じことだ。

「で、ですが……」

「割れなくてもいい。衝撃は貫通する」

次の攻撃に移るのが妙に遅い時がある。あれは、おそらく衝撃が体にまで伝わっているからだ。

自分の力——自分の加速に耐え切れず、その衝撃が痛撃となっている。

「甲虫みたいなものだ。殻が固いだけで、中身はそこまでもない」

……いや、それは少なからぬ希望的観測が混じっているが。

いずれにせよ、打撃武器の方が有効だというのは間違いない。

もし読み違えていたなら、真剣に鍛冶師スミスとしてもう一度一からやり直さなくてはならなくなる。

（下手すりや来世の話だがな）

何しろ、勝ち筋というにはあまりにも頼りなさすぎる。

胸中のうめき声を何とか無視して、腹を括った。

手札を選んでいる余裕など、どこを探ってもありはしない。

いや、そもそも選べる手札が全く足りていないのだ。

「問題はどうかやって渡す……？」

迂闊にベルの注意を逸らすのは危険だ。

「もう一回、たぶん撃てます……」

リリスケが、《リトルバリスタ》の調子を確かめながら呟いた。

「当てる必要はありません。一瞬だけ、注意を惹ければ……」

「だが、避けれるのか？」

あの『強化種』は単純だ。

攻撃を仕掛ければ、そのままリリスケを狙ってくる。

お互いにLv. 1。ベルですらついて行けない『強化種』の攻撃には反応することすら容易ではない。

「手は、あります……」

地面を見やり、リリスケが呻いた。

それは、まるで自分に言い聞かせているかのように。

「なら、やるぞ……」

リリスケが、何を考えているかは分かった。

「はいー」

リリスケが、《リトルバリスタ》の狙いを定める。

打ち合わせは必要ない。お互いに狙えるとしたら『強化種』が動きを止めた時。

つまり、攻撃後の硬直だけだ。

そのなかで、可能な限りベルがこちらに近づいた時に仕掛ける。

「撃ちますー！」

「ベル、受け取れ!!」

リリスケが《リトルバリスタ》を放つのと、俺が叫ぶのはほぼ同時だった。

我ながら、いいパーティーになっていたもんだ——と。感慨に浸りながら、石斧を放り投げる。

そして、すぐさま地面を蹴りつけた。

正しくは、地面にまだ積もっていた灰——ミノタウロスの死体だったものだ。

巻きあがる灰は、ほんのわずかに視界を防ぐ。

あいつの狙いはいい加減だ。ほんの少しでも目測を狂わせてやれば、生き残れる確率は高まる。

もつとも、それだけでは不十分だった。あれは、アルミラージだ。

問題は、視覚よりもむしろ聴覚。目測を狂わせたいなら、そちらにも手を打たなくてはならない。

実際、灰燼などものともせず、その『強化種』は突進してきて——：

「あぶねえ……！」

リリスケを押し倒しながら、放り投げた石斧の残骸。

それが激突した音に釣られて、俺達から少し離れた場所へと突っ込んできた。もちろん、完全に避けられたわけではない。掠めた部分はごっそりと抉られている。だが、痛みに悶えている暇はない。

まだ距離が近い。加えて、俺達はまだ地面に倒れたままだ。

追撃を受ければ、確実に避けきれない——…

「させるかッ!!」

紫黒の塊を追って、白兔が飛び込んできた。

その加速のままに、手にした石斧を叩きつける。

「やった……!?!」

今までとは響く音が違う。

その中で、いつそ戸惑うようなベルの音が聞こえた。

「そいつは打撃に弱い! 思い切りぶっ飛ばしてやれ!」

「分かった!」

言葉すら置き去りにして、再び二匹の兔が激突する。

そして、何かの天秤が揺れ動くのを幻視した。

「……動きが変わった?」

「ああ。あの野郎、ビビってやがる……!」

それとも、焦れているのか。

いずれにしても、『強化種』の攻撃からいくらか苛烈さが失われている。思った以上に、効果は劇的だった。

これなら、あるいは……

「すまねえ。頼むぞ、ベル……!」

この過酷を、ベル一人に任せなければならぬ自分の不甲斐なさ。

それを噛み締めながら、呻いていた。

……

(行ける……!)

手ごたえが変わった。

確かに、この紫黒は堅い。でも、それだけだ。

この石斧なら、叩き割れる。微かだが、確かにその手ごたえがあった。

それ以上に……

(やっぱり、こいつは臆病だ……!)

痛みを恐れ、必要以上に距離を取ろうとする。

そのせいで、ただでさえ制御できていない動きがさらにでたらめになった。

(なら、こうだ……!)

露骨なまでに、石斧を振りかぶり、振り下ろす——フリをした。いわゆるフェイント。

アイズさん達に比べれば遥かに拙いそれに、その『強化種』はあつさり引つかつた。

(視えたぞ……！)

相手の動き。飛び退く先。

それが分かるなら、確実に追いつける。

一つの行動を終えるごとに、こいつは一瞬以上動きを止めるのだから——！

「おおおおおおおッッ！」

壁と挟むようにして、石斧を叩きつける。

『ギィィィ——!!』

初めて——じゃないけど。

この異形になってから、初めて苦悶の悲鳴を上げる。

「やらせるかッッ！」

振り回されるのは右腕。もはや、武器は持っていない。

だが、紫黒の結晶がいくつも生えた腕は、それぞれが凶悪な棍棒のようだ。

当たれば、ただでは済まない。

それを左手で払いのける。もちろん、素手ではダメだ。

思い描くのは、荒れ狂う炎。

つまりは「発火」。

掌で炸裂するその爆炎が、盾となってその腕を払いのけた。

「はあああああッ!!」

さらに追撃。

片腕で振るう分、威力は低い。ただ、その代わりに少しだけ振りが早くなる。

狙うのは『強化種』が盾代わりに構えた左腕。

そこに生じている紫黒の結晶に、はつきりと罅が入った。

『ヒギイイイイ!!』

それは、いつそ泣き声にすら聞こえた。

圧倒的に格下であるはずの僕に、ここまで痛撃を受けること。

その理不尽を嘆いているのかもしれない。

「く……ッ!？」

ただ、それでも互いの力量の差は圧倒的だ。

闇雲に振り回された四肢が掠めただけでも、肌が裂け、下手をすると肉まで持つていかれる。

相手の未熟に救われ、ギリギリのところまで食い下がっているだけ。

状況は何も変わっていない。変わっていないはずだけど……。

(何だ……?)

一秒ごとに鋭化していく意識と本能。それについて行けず、取り残された思考がただ空廻る。

意味もなく回り続け、最後に残ったのは奇妙な感慨だった。

共感。共鳴。同調。同情。……それとも、単純な恐怖だろうか。

そんなことを考えている暇などないにも関わらず、一瞬ごとにそんな感情が強くなっていく。

——おそらく、この『強化種』は発生したばかり

——冒険者になって、まだ一ヶ月半の新人ルイキ

自分の声のようでもあるし、別の誰かの囁きのようにも思える。

——どういう理由なのか、前例にないほどの早さで成長した

——エイナさんどころか、神様まで驚くほどの成長期が続いている

(ああ、それは……)

他ならぬ僕自身の現身のようにだ。

鏡に映る、左右が反転した自分。

冒険者と怪物——モンスターではない。

違うのは、そんなことじゃない。

『ギイイイ!!』

目の前にいるそれは、やはり臆病だった。

どれ程の力を得たとしても、冒険には挑めない。

そう。ここにいるのは……目の前にいるのは、あの時、冒険に挑めなかつた僕だ。

臆病なままで。仲間もいなくて。ただ力ばかりが膨れ上がり続け、ついにはそれに振

り回されている僕。

——これは、お前の末路。いつか来る、すぐ傍にある未来だ……

熱病のように。呪詛のように。あるいは警告のように。

体に。そして心に。暗く絡みつくその言葉を振り払うように加速する。

(リリ、ヴェルフ……)

その言葉に惑う時は、少なくとも今じゃない。

今この瞬間において、それは唯の雑音でしかない。

「おおおおおおツツ!!」

追いかけるべき憧憬が燃えている。冒険に挑む意思がこの胸にある。一緒に進みたい仲間がいる。

それら全てが、今も壊れかけの体を突き動かしている。だから、まだ戦える。まだ、鏡の向こう側を恐れる理由はない。

——リン、リン

鼓舞するように、チャイム鐘が鳴り始める。

力が白く輝いて、石斧へと収束する。

(一撃だ……)

時間をかければ、先に削り取られるのは僕だった。

それどころか、これ以上の戦闘は自分自身の体が耐えられない。だから。

この一撃で、紫黒の鎧ごと、この弱くて恐ろしい怪物を打ち砕く。臍を決して、真正面からその敵を見据えた。

(来る……!)

四肢を撓ませ、紅い瞳に殺意を宿して。

紫黒の砲弾が放たれる。

紫黒の軌跡に、白光の軌跡を重ね合わせて——…

「があ……!?!」

そして、激突。

反動を押さえきれなかった体が近くの壁に叩きつけられた。

だが、その中でも確かな手ごたえを覚えていた。

白い燐光の中に消えていく石斧は、間違いないくその怪物を叩き割ったのだと。

「やった……?」

リリの声につられるように、視線を背後に向ける。

あの怪物は、地面を抉り、それでも足りずに近くの壁に激突していた。

もはや原形をとどめていない。

激突した頭は胴体に潜り込み、そのまま体の半分を押し潰されている。

今の僕のみ力だけで、あれほどの破壊力は生み出せない。

多分、半分以上はあの『強化種』自身の力によるものだろう。

「……………」

すっかり干からびた喉から、吐息が零れる。

強敵を倒した安堵も高揚もない。ただ、物悲しい。

結局、あの怪物は最後の最後まで自分の力を制御できず、ついにその重さに押し潰されたのだ。

そして……。

「ベル様!!」

「ベル！」

駆け寄ってくるリリとヴェルフの声で、それに気づいた。

「しま——!?!」

足元。亀裂。崩落。広い……!

単語だけが意識の中で爆ぜ——そして、再びの浮遊感。

「うわあああああつ?!」

ただ、限界まで研ぎ澄まされていた感覚にとつて、それは窮地というほどではなかった。

崩落する直前に、リリ達と合流。砕けた足場を蹴つて、巻き込まれない辺りまで何とか跳ぶ。

「いたたた……」

まあ、着地まではできなかつたわけだけど。

「二人とも、大丈夫？」

地面にぶつけた肩を押さえながら、二人に問いかける。

ありきたりなその痛みは、いつそ奇妙な安心すら感じさせた。

「ああ……。何っ—か、まだ生きてることを実感してる」

「ええ……。ホント、何でまだリリ達は生きてるんでしょうね？」

ぶついたらしい頭とお尻を撫でながら、二人も軽く笑う。

笑うというか、顔の筋肉から力が抜けたみたいだ。多分、僕も同じ顔をしている。そして、その弛緩した筋肉が急激に引き締まった。

「ベル様……」

声が出ない。あり得ない。本当に何だっというんだ？

「おいおい、ふざけろよ……!」

崩落に巻き込まれた『強化種』の死体。

地面に叩きつけられ、瓦礫に押し潰され、さらに悲惨なことになったそれが、動き出していた。

いや、違う。動いているのは死体じゃない。

(何かが、染み出している……?)

腐った乾溜液ターブルのような何かが、砕けた結晶から溢れ出しては蠢いている。

それは、自らの力に押し潰されてなお、誰かの思惑に使い潰される――

「行きましょう! ここは一七階層です……!」

呪詛のような言葉を、リリの叫びがかき消した。

慌てて立ち上がろうとして……

「つつ……?!」

膝から力が抜けた。膝どころか全身に力が入らない。

体が鉛に漬けられたかのようにだ。体力も精神もすっかり体から抜け落ちていた。地面への墜落は、さほどの痛痒ダメシツではない。

なら、心当たりは一つしかなかった。

【英雄願望】

あんな凄まじい力に、何の代償もないなんてことはあり得なかった。

「行くぞ、ベル……！」

ヴェルフが僕の体を引きずり上げる。

その肩もまた挟られていた。度重なる魔法の行使に加えて、今も治まらない出血。

青ざめた顔。その体は冷たく、そして小さく震えていた。

「ええ！……ここまで来たなら、もう一息です……！」

支えてくれるリリこそ、今にも倒れそうだった。

僕らの中で最も低い「ステイタス」。それでいて、回復薬は優先的に僕達に回してくれ
た。

今もまだ意識を保っているのが、むしろ奇跡のようだ。

もう、全員が限界だった。それでも、まだ諦めていない。

それなら、泣き言なんて言っていられない。

(みんなで、地上に帰るんだ……！)

首に下げたペンダントの感触を思い出し、自分を叱咤する。

みんなで約束した。ここまで来て諦めてたまるか。

まずは一步。足を地面から引きはがす。

「行こう……！」

お互いの体を引きずり合うようにして、さらにダンジョンの奥へと進む。

迷路は途絶え、全てが一本の道へと合流してはさらに広く、そして天井は高くなつていった。

それに従つて進むのが正しい道だと、リリが言っていたのはいつだったか。

(モンスターが……)

襲つてこない。気配は感じるけど、それだけだ。

今の状況で襲われるのは危険だった。けど、それ以上にこの静寂が怖い。

そして、やっとそこに辿り着いた。

「……」

呆然としたまま、自然と声が漏れた。

ごつごつとした壁や天井の中で、それはいつそ美しくさえあった。

大勢の石工たちが、丹念に磨き上げたような石壁。そこには、僅かな継ぎ目すら見当

たらない。

「『嘆きの大壁』……!」

かつてこの階層に到達し、何とか生還した冒険者たちによって名付けられた一七階層最後の障壁^{かべ}。

たった一体。特定のモンスターしか生み出さないその巨大壁は、ただただ圧巻だった。

状況も忘れ、思わず足を止めてしまうほどに。

「ギリギリ、間に合ったみたいだな」

「ええ……。もう一息……」

今にも倒れそうなヴェルフの言葉に、半ば意識を失ったままりりが頷いた。

「急ごう……!」

体の震えが止まらない。これは、単に圧倒されているだけじゃない。

何かの予感。いや、何かなんて誤魔化しはやめよう。

心臓を締め上げるこれは、さらなる過酷への予感だ。

一心不乱に。最後の体力を絞り出して。床に根を張りそうな足を引きはがし続ける。

一八階層への連結路は……この決死行の出口はもう見えている。

でも、遠い。広大なその主の間を、まだ半分しか進んでいない。

(急げ、急げ、急げ……！)

それは僕の声か。それとも、リリとヴェルフだろうか。

分からない。ただ、いつそ祈るようにその言葉を繰り返していた。

そして、ダンジョンはその脆弱を嘲笑う。

バキリ――

鳴った。

音が。

確かに、聞こえた。

僕らの真横で。

「ふざける……！」

磨かれた壁面に、立ち尽くす僕らの陰が映り込んでいる。

そこに、大きな亀裂が走った。

「走れえ!!」

不吉な暗示をかき消すように叫ぶ。

威勢が良かったのは、その叫びだけだった。

力の入らない体をお互いに支え合い、引きずり合って、這いずるように走る。

体が重い。何で。こんなにも遠い……？

空気が焼けるように熱い。喉も肺もすっかり焼かれてしまっている。辛い。意識を手放してしまいたい。

その誘惑はとて甘く……そして、屈した瞬間に間違いなく死ぬ。

「クソツ……！」

ヴェルフが、大刀を投げ捨てた。

「……………」

同じく壊れた《リトルバリスト》を放り捨てたりりが、そのままバックパックの背負い紐を切ろうとする。

その手を支え、一息に紐を斬り落としたのは僕だったか。それともヴェルフだろうか。

嘆きの壁は、破滅を告げるように叫喚する。

——少しでも身軽に。少しでも早く。もっと急いで……！

遠い昔。階層主という言葉すらなかった頃から今に至るまで。

ここに辿り着き、そして斃れた冒険者たちの声が聞こえるようだった。

そして、ついに破滅が顕現する。

巨大な何かが大地に降り立ったような、一際大きな、着地音。

よせ。やめろ。見るな——！

ありつただけの体力を。もう搾りかすすら残っていない体からそれをひねり出す。そして、駆け出した。

「走れ、走れ、走れ、走れ走れ走れ走れ走れ!!」

誰かが叫んでいる。

僕らの後ろで、風が渦巻く。

巨人が、その拳を振りかざしていた。

見えないはずのその光景が見えたのは、何故だろう。

分からない。ただ、それが振り下ろされた瞬間。僕らはあっけなく打ち砕かれる。

(あと、あと少しなのに……!)

見えている。連結路は見えている。その先には、光すら感じられる。

それなのに——!

拳が、振り下ろされる。

『ギイイイイ』

あまりに鈍く、ひたすらに重い打撃音。

それに混じって、そろそろ耳に馴染んだ悲鳴が聞こえた。

(追いかけてきた……!?)

あの奇妙な『強化種』の死体。いや、それにとり憑いた何か。

それが、巨人の拳に打ちのめされ、いよいよ原形を失つていく。

「走れええええええええッ!!」

最後の……本当に、掛け値なしに最後の力を注ぎ込んで、その通路に飛び込む。

同時、巨人の拳が今度こそ僕らを狙って放たれた。

「があ……?!」

直撃ではなかった。拳そのものは掠りもしていない。

ただ、その衝撃が逃げ場のない連結路の中を満たし、蹂躪していく。

その暴風の中で、僕らにはもう成す術がなかった。

「ぎっ、づう、が……?!」

叩きつけられているのは壁なのか床なのか。それとも天井なのか。

打ち据えられ、削り取られながら、その通路の中をでたらめに転がり進む。

「……………」

半ば砕け散った意識。赤い視界の中で草原を見た。

柔らかな草の感触が、傷ついた体を優しく受け止めている。

暗かった世界が、妙に明るくて暖かい。

もしかして、ここが天界——と、そんな馬鹿な考えを体の痛みが否定した。

(リリ……。ヴェルフ……)

呼びかけたつもりが、かすれ声すら出なかった。

もう一〇たりとも体が動かない。意識が霧散していく。

(駄目だ……)

まだ、意識を手放せない。ここで意識を失ったなら、もう目覚められない。

唇を噛み切つて……多分、噛み切つたと思う。もう、痛みは感じないし、口の中は血の味しかない。

とにかく、薄れつつある意識を何とか鼓舞する。

(二人を、治療しなくちや)

あるいは、僕自身も。

だから、手に『火』を灯せ。炎への憧憬を抱け。

(せめて、「ぬくもりの火」を灯さなくちや……)

でも、もう火の粉すら起こせない。

それでも、手をかざそうとして……

かさ、かさ、と。

草を踏み分けて、誰かが近づいてくる。

一人じゃない。もつと多い。多分、どこかのパーティなんだと思う。

その誰かは、ちょうど僕らの真正面で脚を止めたらしい。

何か呼びかけられているような気もするけど、よく聞こえない。

ただ、動かないはずの体が、動いた。

一番近くにいる誰か。その細い足首を掴む。

動揺の気配が、掌に伝わってきた。

「仲間を……助けてください……っ！」

ようやくのことで、その言葉を絞り出す。

その懇願が届いたかどうか。

確かめるより先に、暗い浮遊感に意識が包まれた。

暗転していく視界。消えていく意識。

その中で、煌めく金色の髪を、幻視したような気がした。

第三章 嵐だけが大樹を倒す

第一節 火の粉を集めよ

1

「やれやれ。今度は一体何が起こってるんだか……」

最後まで異常事態イレギュラーに振り回された『遠征』も、何とか山場を越えた。

そう思い、一息ついていたらリヴィラの住人が血相を変えて飛び込んできて。

よく分からないまま彼らに連れられ、街へと出向けば、見慣れない不気味な怪物が数体暴れていた。

巨大な頭部。赤く発行するいくつもの眼。奇怪な腕。極めつけは、口と思しき場所から無数に生え、手招きする手。

状況をつかめなまま討伐したら、今度は思わぬ真相を聞く羽目になった。「ろくでもないことなのは確かだのう」

豪放磊落なガレスも、流石に今回ばかりは顔をしかめている。

何しろ、足元に倒れているこの怪物はモンスターではない。

それどころか冒険者のなれの果てだという。

「ボールスたちの言うように、呪詛カースと見ていいとは思うけど……」
 地上からこの一八階層までの間、どこかの階層でその呪詛カースを受けたのではないかと。

それが、ボールス……というより、この街に定住する治療師達ヒーラーの見立てだった。
 「だが、こんな悍ましい呪詛カースは聞いたことがない」

死体……いや、遺体を見分しながら、リヴェリアが呻く。

「例の『暗い穴』でもなさそうだ。……亡者とは姿が違いすぎる」

アンデッドなら、僕らも遭遇している。

あれの見た目はあくまでも干からびた死体だ。少なくとも、人間としての原型は保っている。

こんな、どこからどう見てもモンスターにしか見えないような有様にはならない。

例によって異常事態イレギュラーと判断するしかない。

(さて、どうしたものか……)

五二階層では怪人クリーチャーおよび奇妙な人影。

五八階層ではデーモン。

五九階層では穢れた精霊。

そして、帰り道では妖毒ポイズン・ウェルネスの大量発生。

立て続けに起こった異常事態によって、消耗かかなり深刻だった。

特に妖毒蛆ホイスン・ウエルネス。これに遠征隊の三分の一以上が侵され、今も寝込んでいる。

その結果、部隊は機能停止。

主力の一人であるベートは、毒に対する特効薬を買い集めるため、つい先ほど地上に向かったばかりだ。

現状で動ける人員を数えていると、ガレスが言った。

「どうする、フィン。調査に行くか？」

行くとしても、今すぐは無理だ——と。そう言つて首を振るより早く。

「いいえ、それはいけません」

たおやかな声が、僕達を引き留めた。

視線を向けると、そこにいたのは白い装束に身を包んだ女冒険が立っていた。

……いや、彼女は本当に冒険者なのだろうか。

その装束は上等な仕立てで、衣服として見ればなかなかのものだと思う。

ただ、戦装束バトルクロスとして見るなら、少々心許ない。

「これは、古い王がもたらす災い。かの王の怒りが静まるまで、人に成す術はありません」

その衣装のせいだろうか。

彼女の姿は古代に神託を伝えた巫女のようにも感じられた。

「この呪詛カースについて、何か知っているのかい？」

「あまり、詳しいことは」

彼女は小さく首を振ってから、続けた。

「ただ、私の生家わたくしには、古代の書物がいくらか残っております」

「その中に、この呪詛カースについての記述があったと？」

リヴェリアの問いかけに、彼女は小さく頷いた。

「神々の天敵たる【闇の王】。かの王は深淵と異形を従者に現れる」

「【闇の王】だと……？」

リヴェリアが小さく呟いた。

それは、確かクオンを意味する二つ名だったはずだけど……。

「それでは、この異形は……」

「断言はできません。ですが、この方たちには、その書に記されている特徴がいくつも見られます」

冒険者たちの亡骸を視線で示し、彼女はそう言った。

「では、その深淵とやらを消すにはどうすればいい？」

「深淵が従うのはただ【闇の王】のみ。生じるも消えるもかの王の御心一つと」

人に成す術がないとはそういう事か。

「その闇に、みだりに近づいてはなりません。いかに強い信仰であれ、いずれ飲まれてしまうでしょう」

それだけを言い残すと、彼女は立ち去って行った。

「彼女は何者だい?」

「詳しくは知らねえよ」

胡散臭そうな目で彼女を見ていた、ボールスに問いかける。

何だかんだ言つて彼こそがこの大頭だ。知らないはずがない。

「だが、時々姿を見せちや、ああやつて胡散くせえ話をしてきやがる。しかも、何をトチ狂ったか無料タダで怪我人の手当てまでしやがって」

商売あがったりだ——と、ボールスが呻く。

とはいえ、貴重な治療師ヒーラーを追い出す気にもなれないらしい。

「『施し』というものか」

リヴェリアが、小さく呟いた。

「ああん?」

「『古代』の聖職者たちが、自らの慈悲や慈愛を示すために行っていた寄付だ。……実際には布教の手段だったようだがな」

私も、さほど詳しいわけではない。そう言ってから、リヴェリアは続ける。

「魔法が私達魔法種族^{マジックユーザー}だけの物だった頃。傷病治癒は呪い師^{シャーマン}か聖職者の領分だったという」

傷や病を癒すことで、自らの神の力を示し、帰依すれば更なる救いがあると説く。かつて存在した聖職者たちはそう言った手法を用いたらしい。

——と、概ねそのようなことを彼女は説明した。

「今さら布教もクソもねえだろ。神どもなら地上にいくらでもいる」

リヴェリアの講義にしては簡潔だったものの……それでもポールスは辟易したらしい。

げんなりとした顔で、そう吐き捨てた。

「ああ。だから廃れた」

気にした様子もなく、リヴェリアもまたきっぱりと頷く。

曖昧に笑うしかないのは僕だけだった。

……個人的に、これは本当に相槌に困る話題だ。

何しろ、僕達小人族^{バルウム}の凋落は、神々の降臨こそがきっかけなのだから。

降臨した神々の中にファイアナが存在しなかったこと。

いわば信仰を否定された結果が、今日の有様だ。

「ところで、彼女はどこの派閥なんだい？」

興味というべきか。それとも素直にやつかみというべきか。

少し意地の悪い気分で、ボールスに問いかける。

「本人から聞いたわけじゃねえが、『クアト・ファミア』だって話をよく聞くな。……奴らはそういうものの好きな集団だからな。多分、間違いねえだろ」

「ああ、そんな話を聞くね」

その派閥には覚えがある。

もちろん付き合いがある訳でもないし、特別に目立った功績を持つ派閥でもない。

精々がよくある中堅派閥でしかない。……少なくとも、ギルドの査定ではそうなっている。

ただ、主神がわざわざ架空の神を『ろーるぷれい』しているという物珍しさから時折話題に上る派閥だった。

ダイダロス通りを中心に、炊き出しや傷病者の手当て、冠婚葬祭などの儀式を受け持っているとかいないとか。

……それは別に、少々きな臭い噂を耳にすることもあるけど。

「それで、フィンよ。どうするつもりじゃ？」

改めて問いかけてくるガレスに、肩をすくめて見せる。

「行くとしても、今すぐは無理だね」

答えは先ほどと変わらない。

「攻撃を仕掛けるならまだしも、探索となると人手が足りない」

未知の呪詛カースを使う呪術師ヘクサーを相手にするには、もう少し態勢を立て直す必要がある。

あるが、そのためにはまず妖毒ポイズン・ウェルネスの毒をどうにかしなくてはならない。

「一応、この街にいた冒険者が何組か調査には向かつてるぜ」

告げると、ガレスより先にボールスが返事を寄越した。

「奴らも素人じゃねえ。もうしばらくすりゃ、戻ってくるだろ」

やべえ事が起こってるのは分かっているだろうし、油断はしねえだろ——と、ボールス。

確かに、リヴィラにいる時点で、最低でもLv. 2以上。

住人の中で最高ランクはLv. 3のボールスだが……『下層』以降に挑む二級冒険者

以上が滞在していることも珍しくはない。

それに……

「ここは一八階層だ。冒険者の往来もそれなりにある」

その通りだ。調査に行った冒険者か、地上から新たに冒険者が訪れれば、情報も手

に入る。

情報が手に入れば、もう少し状況も見えてくる。

（態勢を立て直しつつ、情報を待つか……）

消耗が深刻な今のパーティを考えれば、それ以外の選択は思い浮かばない。

（エニユオか闇派閥イヴイルス残党の仕業の可能性は充分にある）

少なくとも、呪詛カースを用いる誰かが関与していると考えていい。

では、呪術師ヘクサーがいると仮定して、その狙いは一帯何か。

これほどの呪詛カースだ。存在が露見したなら、ギルドが黙っていない。

すぐにも「ガネーシヤ・ファミリア」に調査を命じる。

それどころか……

（変容した冒険者たちに共通点はない）

変容していた冒険者は九人。それぞれが別のパーティで、もちろん派閥も違う。

それらの派閥ないし冒険者同士を結び付ける何かがあるとは思えないというのが、

ボールの見立てだ。

つまり、彼らは無差別に呪詛カースをかけられたということになる。

手当たり次第に襲われるなら、他の派閥とて黙ってはいない。

（もう準備は最終段階に入っている？）

もはや、隠し立てする必要がない。

計画がその段階に入っているなら、事態は極めて深刻だ。

また、その仮定が正しいなら、障害となる僕達をダンジョンに閉じ込めておくために仕掛けてきたという可能性も出てくる。

(それとも……)

クオンがいよいよ本気になったのか。

素性の怪しい派閥の一団員の言葉をどこまで当てにしているかは分からない。

しかし、今までオラリオで確認された事のない脅威には、概ね彼の影がちらつくのも事実だった。

(仮にこの呪詛カリスがクオンによるものだとして)

そのうえでギルドが動かないとするなら、一連の事件をウラノスが裏で操っている可能性も一気に現実味を帯びてくる。

「何かあったら、また知らせてくれ。それと、念のためリヴィラも守りを固めておいた方が良い」

もつとも、今の時点では判断に足りる情報はない。

それよりも、目の前の状況に対する術を考えた方が有益だろう。

「またこの前みてえに、新種でも襲ってくるってか?」

「ああ。それに、調査に行った冒険者が異形になって戻ってくるかもしれない」

頷いてから、告げるとボールスは舌打ちした。

「なら、てめえらもここに泊まりや良いだろうが」

「宿泊料金の面倒を見てくれるならね」

「よし！ リヴィラの外の守りは任せませい！」

あつさりと手の平を返すボールス。

もつとも、ここは分散しておいた方が良い。

基本的に最大戦力がL v. 3のリヴィラと消耗したとはいえ、L v. 6やL v. 5が複数存在する僕達の野営地。

この二つを天秤にかけ、無差別に狙うならリヴィラの方が狙いやすい。そして、リヴィラが狙われたなら、こちらでも背後から奇襲できる。

逆に、あえて僕達を狙うならエニユオ絡みという可能性が高まってくる。

(防衛は少々厳しいけど……)

最悪は負傷者だけでもリヴィラに撤退させるという手を打てないわけでもない。

ベートが戻ってこない限り、完全な回復は望めないが……リヴェリアを含む治療師^{ヒィラ}達の活躍で、多少は毒も緩和されていた。

それくらいは無理は何とかなる。

もちろん、両方が同時に襲われることも考えられるが……その時はお互いに戦力が分散した幸運に感謝するでしょう。

「やれやれ、相変わらず現金な男だ」

肩をすくめるリヴェリアに苦笑してから、ひとまずリヴェラの街を後にした。

「それで、どうするつもりじゃ？」

「ひとまず、野營地の防衛強化かな」

振り返り、リヴェラの街を囲う防衛壁を眺める。

自己修復するダンジョンでは基本的に『地表に置く』という方法しか取れない。

従つて、リヴェラの防壁も決して堅牢とは言い難い。

だが、一方で時間さえあれば無限に資材が入るといふ利点もあつた。

今動ける人員だけでも、バリケード 阻塞……簡単な馬防柵のようなものなら作れるはずだ。

「椿とも相談しよう」

武具といえば武具だ。何か良い知恵を貸してくれるかもしれない。

そして、それから。

「ううむ……。やはりまいち……。やはり手前が一から……。いや、材料が足りんか」

多少ならず本人は不満そうにしていたが……。ひとまず椿監修の元で野營地には堅牢な防壁が設置された。

元々人員が足りていない状況での作業だ。

地上の時間でも一日近くの費やしたわけだが――…

ちようど一八階層にも『夜』が訪れた頃。

「誰も戻ってこない？」

再びボールスに状況を聞きに行ったところ、思わぬ返答が返ってきた。

「いや、戻ってこねえわけじゃねえんだが……」

がりがりと頭を掻きむしりながら、曖昧に呻いてから。

「戻ってきた奴らは、全員これといった異常を見つけてられてねえ」

「呪術師^{ヘクサー}と遭遇した冒険者は全滅した？」

「それなんだが……ちよいと妙だな」

言葉を探すように、多少迷ってから、ボールスが続けた。

「地上に戻って情報を集めてくる。そう言った奴らが軒並み戻ってこねえ。ギルドに伝えたらすぐ戻るって言った奴らもな」

「かなり浅い階層に潜んでいると？」

「俺もそう思ったんだが……一階層への連結路前で別れた奴らまで戻ってきてねえらしい」

「それは、妙は話だね」

「だろう？」

ボールスの——あるいは、その冒険者たちの証言が確かなら、呪術師^{ヘクサー}が潜んでいるの

は一階層ということになる。

あるいは……

(すでに地上で行動を起こしている?)

地上の住民がああ異形に変えられている。

それは、我ながらゾツとしない考えだったが……流星にそれはあり得ない。

(ロキは無事のはずだ)

この身にはまだ『フェルナ恩恵』が宿っている。

正確には、まだ「ステイタス」が機能している。

なら、ロキは無事だ。ポールの主神も。もちろん、神へファイストス同様に。

「地上で足止めをされているということか……」

「ギルドにか?」

「ああ」

「……本気かよ?」

「正直、少し自信がないかな」

この場合、ダンジョンが完全に閉鎖されたということだ。

イレギュラー異常事態が発生し、特定の階層以下への立ち入りが制限されることなら時々ある事だ

が……

「何しろ、完全閉鎖なんて前例がない」

調査隊なり討伐隊が派遣されるまでの短時間ならともかくとして、現時点でほぼ一日が経過している。

これほどの長時間となると前例がない。少なくとも、僕が知る限りでは。

遙か昔から厄災の根源、怪物の母体と恐れられてきたダンジョンだが……今や、オラリオの大切な財源でもある。

冒険者達が持ち帰る魔石や迷宮資源こそがオラリオを潤すものだ。

長期化すれば、中小派閥どころかギルド自体にも……いや、オラリオ全体にまで影響が及びかねない。

「……こりゃ、ちよいとマジで警戒しといた方がよさそうだな」

「同感だ」

通常なら、あのロイマンが下すような決断ではない。

もつと上が動いたか。それとも、ロイマンをしてその決断をせざるを得なかったか。いずれにしても、予想が当たっているなら、僕らは前例のない危機に晒されていることになる。

「ひとまず、一七階層と結ぶ連結路周辺に簡単な監視所を構築しよう」

とはいえ、お互いのできることは決して多くはない。

その中で、できることからやっけていくよりないだろう。

「監視所だあ？」

「何かが来るとしたら、それは上からだ。件の呪詛カースに侵された冒険者もね」

リヴィラの街中で暴れられるよりは被害が少なく済む。

「ダンジョンの中に立てこもるってか？」

「少なくとも、明後日までは」

ボールの言葉に頷く。

「今、ベートが地上に向かっている。帰還予定日は明後日だ。……いや、もう一日前後するかもしれないが」

何しろ、必要な特效薬は希少品だ。

一日か二日は間違いなく……三日以上かかってもさほど不思議ではない。

「三日待つて変化がないなら次の手を打つ。ただ、その間に状況が悪化する可能性もある」

「だろうな。何があっても良いように、子分どもに準備させておくれ」

「そうしてくれ」

リヴィラの街から野営地へ戻る途中、今手元にある物資をざっと思い浮かべる。

建築資材は、まだ少し余裕がある。

それに、切り出すのはさほどの手間ではない。

(監視所の建設と並行して食料を確保する必要があるか)

元々手持ちの食糧は底が見えてきている。

事態が動く前に蓄えておかねば、足元をすくわれかねない。

(仮に余ったなら、リヴィラで売ればいい)

食料だけではなく、用済みとなった阻塞も、リヴィラの街にとつては使い道がある。
デュランダル
不壊属性の武器に大量の魔劍。

協力してくれた「ヘファイストス・ファミリア」への報酬。

そこに加えて妖^{ポイズン}毒^{・ウエルネス} 蛆の毒に対する特效薬の買い占めだ。

下手をすると、この遠征は赤字決算ということにもなりかねない。

例え小銭でも稼いでおきたいというのは、団長として偽らざる本音だった。

(それに、地上の様子。何より、ギルドの動きが気になるけど……)

それ次第で、神ウラノスが黒幕だ^{エニユオ}という可能性も出てくる。

場合によっては、リヴィラこそが最後の拠点となるかもしれない。

……モンスターの真似事をするのは少々複雑だが。

(次の手を打つのは、ベートが戻ってきた時だ)

明日がベートの帰還予定日。その翌日を基準に設定する。

予定日を過ぎても戻ってこないなら、何らかの深刻な異常事態イレギュラーが発生しているのは間違いない。

戻ってきたのなら、何かしらの情報が手に入るはずだ。

2

ヘステイアたちがダンジョンに向かってからしばらく。

見るともなく、欠けた月を見やりながら、ただ静かに時が過ぎるの待つ。

どのみち、下界では大したことができない。こうして、無事を祈っているしかないのだ。

神が何に祈るのか——と。

それを真正面から聞いてきた男が、一人いたのを思い出す。

「あいつがいてくれたなら、もう少し安心できたんだが……」

もつとも、あいつは俺の眷属ではない。

誰の眷属かすら知らない。

いや……。

おそらく、だが。彼は例の【イレギュラー正体不明】と同じ——…。

「武神が憂い顔とは、今宵は血の雨でも降るか？」

不意に、背後に気配が生じた。

……腑抜けている。いくら下界とはいえ、ここまで接近を許すとは。

いや、この男相手なら、それも止む無しか。

振り向いた先にいるのは、一八〇〇を超える体を大陸の鍛冶師が作ったような極東風の
大鎧で覆った男。

無論、腰には刀を……それも、随分と物騒な妖気を放つ刀を帯びている。

俺自身を知る限り、彼こそが下界最強の武人だと言っている。

彼こそが「劍聖」だと。そう呼んで差し支えないと、心からそう思う。

子供ひとがこれほどの境地に至れるとは……と、感動と安堵を覚えたほどだ。

「久しぶりだな。戻ってきたのか？」

「うむ。今日は妙に警備が固くてな。少々難儀した」

もつとも、彼について詳しいことは何も知らない。

長く剣の道に生き、とある国に仕え、出奔し、その後であった剣士を探している。

知っているのはそれだけだった。

「探し人でも見つかったか？」

ただ、その声がどこか弾んでいることくらいは分かる。

何が良い事でもあったのだろうか。

……まさか、本当に血の雨が降ることを望んでいるわけでもあるまい。

「いや、残念ながらそうではない」

彼は、首を横に振った。

「だが、少々面白い戦を見てな。武神殿と般若湯でも酌み交わしながら、語り合うのも悪くないと思うたのよ」

一体どこで手に入れたのか。大徳利を片手に下げて、彼は言った。

酒など飲めば太刀筋が鈍る——などと謙遜を言う癖に、実のところ大層な？兵衛だ。

……いや、飲むのは酒ではなくあくまで般若湯だが。

「いや、すまん。今は飲んでいられないんだ」

「そのようだな。何かあったのか？」

気遣い……ではない。

戦の気配に、ほんの僅かばかり高揚しているらしい。

未だ無念無想の境地とはいかないようだが……こればかりは武人の性か。

「実はな……」

簡単に事情を説明するが……やはりというべきか。

彼の反応は鈍かった。

「確かにあまり褒められたことではないが……。しかし、戦場ではよくある事であろう

「？」

「それは、まあ、そうなんだが……」

常在戦場を体現するこの男に言われてしまえば、反論の余地などない。

武神として、確かにそうだと納得する自分を自覚していた。

ただ、その一方で、その声が遠くて小さいことに、不思議な感慨を覚えてもいた。

「時にお前はダンジョンの中を通ってきたんだろう？ それらしいものは見なかったか？」

「？」

見かけたなら、流石に見殺しにはしない。……と、思う。

「白髪で赤い瞳の少年で……名前は、ベル・クラネルと言うんだが」

あわよくば連れてきてくれていたりしないものか。

それくらい気分だったのだが……。

「何だと？」

珍しく、彼は驚いたようだった。

「詳しく聞かせよ」

「お、おう」

不覚。ぎらつく気配に、ほんの少しだけ気圧された。

(いかんいかん。武神が狼狽えてどうする)

その気配に負けたのではない。俺の心が元から乱れていたせいだった。

打てる手はすべて打った。後はどっしりと構え、天運を待つのみ。

それに、主神たる俺が命たちを信じてやれずしてどうする。

「詳しくといつても……」

整息し、心身を正してから、改めてその問いかけと向き合う。

ベル・クラネルという子供を、いつたいどれほど知っているか。

記憶を辿るが……当然ながら、大したことは知らない。

「俺の眷属こどもではないからな。ほとんど何も知らん」

主神のヘステイアとは親交があるが……眷属同士の面識はない。

あつたなら、こんなことにはならなかっただろう。

「ただ、一ヶ月半という驚くべき速さでランクアップを果たした新人だルーキー」

「新人？ まだ新兵だと？」

「ああ。冒険者になって、まだ一ヶ月半だ」

……いや、しかし。

僅か一ヶ月半で『器』を昇華するとは、自分で言っているも俄かには信じられない話

だ。

無事に戻ってきて、謝罪を済ませたなら、ぜひ言葉を交わしてみたいところだった。

「ふうむ……」

珍しく困惑した様子で、その武人は唸った。

「どうかしたか？」

「いや、おそらくそれは壮拳なのだろうが……」

……やはり、この男は【イレギュラー正体不明】や、ヘステイアの新しい眷属こどもと同じらしい。

この様子なら、案外と他にも何人かいるのかもしれない。

「五九階層までたどり着ける者どもが賞賛するほどののか？」

「……お前、一体どこに住んでいるんだ？」

単独で五九階層まで行けるとは、まさに【イレギュラー正体不明】にも見劣りしない。

(ダンジョンの中に住んでいると聞いているが……)

まさか、五〇階層とは言わんだろうな——と、呻いてから。

(いかん。ありそうな気がしてきた……)

むしろ、この男の立ち振る舞いからしてできない理由を探す方が難しい。

武神としてのそんな見識は……この際、錯覚だと思っておくことにしよう。

「気になるなら、会いに行ってみたらどうだ？」

「ほう。私を駒として使おうとは……」

流石は武神。抜け目がない——と、その男は喉を鳴らした。

「……いや、別にそういう訳ではないんだが」

もつとも、そんな思惑が全くなかったといえればそれもまた嘘になるが。

地上に最も近い安全階層セーフティ・ポイントは一八階層。

仮にそこに住んでいるとしても、ベル・クラネル達がいる階層は通過しているわけだ。援軍として、心強いことこの上ない。

「しかし、その通りだな。その神託は有り難く受け取っておくでしょう」

「ここで死なれてもつまらぬ——などと。」

なかなか不吉なことを言いながら、その武人は手にした大徳利を差し出した。

「預かっておいてくれ。ついでに、あのひよっ子どもも拾ってこよう」

それだけ言うと、その武人は再びバベルへ向かい歩き出した。

……

ダンジョンの異常は、まだ完全に収まったわけではないらしい。

「すみません、ありがとうございます！」

「おう、気をつけな、嬢ちゃんたち」

……いやまあ、キラアアントは対応をしくじると、普段から普通に面倒なことになるが。

いかにも新人といった風体——つまり、擦れていなければやさぐれてもいない。何よ

り狂暴になつていない——の、しかも女ばかりのパーティーに軽く手を振りながら、見送る。

ここが酒場なら……そうでなくても、地上なら酌の一つも頼んでいただろうが、生憎とダンジョンの中だ。

それに、今は「ガネーシャ・ファミア」の連中が目を光らせている。ついでに、かなり殺気立つてもいる。

……主力の「フレイヤ・ファミア」がどういう反応を返すかは微妙なところだが、まかり間違つて睨まれたらそれこそ終わりだ。

惜しいが、ここは大人しくしておくべきだろう。

冒険者たるもの、危険には敏感でなくてはならない。

「あの牛人の子、胸カウズデカかったよなあ」

「あのピンクの子もなかなか可愛かったわねえ……」

確かに。やっぱ酌くらいさせておくべきか……。

「……お前達。不埒なこと考えていると、また返り討ちにされるぞ?」

スコットとガイルの言葉に内心で頷いていると、『落穂拾い』——ホークウッドの野郎が露骨にため息を吐いた。

「されるわけねえだろ?! ありや、どう見てもまだLv. 1だぞ?!」

槍持った嬢ちゃんとはかく、他の二人はマジものの素人だった。

ダンジョンが閉鎖されていた間、ずっと稼ぎがなくて貧窮し、やむにやまれず調査隊の後をつけて深入りしてきたクチだ。

何故なら、そういう内容の会話が向こうからまだ微かに聞こえてくる。

……ちよいと不用心すぎるだろ、あの嬢ちゃんたち。

(オイオイ……。ンなこととしてっと、マジでカモられるぞ)

もう少し警戒しろ。モンスターだけじゃなくて、同業者にも。

どつかのクソ生意気な新人と違つて初々しい……というか、初々しすぎる。

おかげで、つい柄にもないことを考えてしまった。

「この前、酒場の給仕に泣かされて帰ってきたのはどこの誰だったかな」

相変わらず一言多い奴だな、この野郎。

「そもそもだ。お前達みたいな荒くれ相手に、女だけで切り盛りできている時点で少しは警戒しろ。危険には敏感になれ」

「うるせえよ!」

確かにその通りだけどな!

(くっそ……。やべえのはあの女将だけだと思つてたんだがなあ)

適当に切り揃えた髪を片手で掻きむしっていると、ホークウッドの野郎が言った。

「しかし、ダンジョンに行くと言った時は、調査隊とやらに参加するのかわかっていたが……」

それなりに長い付き合いだ。んな殊勝な性格じゃねえことくらいわかってんだろ
うが——と。

そんな言葉を返す前に、奴が続けた。

「閉鎖が解放された途端、リヴィラの街とは。……お前も可愛い奴だな。そんなにあの街が心配か？」

「かわ……っ?! 不気味なこと言うんじゃない!!」

しかも、その陰気な顔と声で……あと、陰気に笑いながら。

「っーか、誘つといてなんだがよ」

舌打ちしてから、さっさと薄気味悪い話題を変えることにした。

「何だ？」

「もう夜だつてのに、ついてくるのかよ？」

あの【イレギュラー正体不明】が朝から呼び出されて対処に向かったのだ。

昼過ぎには解除されると思っていたのが……予想に反してこの有様だ。

そんなことを愚痴ったら、こいつにはやたらと呆れられたが。

「……今回だけは特別だ」

不機嫌そうに、ホークウツドは吐き捨てた。

相変わらず、よく分からない野郎だ。

ダンジョンが閉鎖される直前……たまたま地上に戻っていた俺達が、例の奇妙な呪詛カースの噂を耳にした頃。

何時になく真剣な顔で決してダンジョンに立ち入るなと言いに来たかと思えば、今度はこれだ。

(まあ、つつても。それを言うなら、そもそも何を知ってんだって話だがな)

無精髭を一本引き抜きながら、胸中で呻く。

出会ったのは、ダンジョンの中。よくある鉄火場の最中だった。

そんなだから、詳しいことは忘れたが……確かちよいと欲をかいいて深く入りすぎただったか。

スコツトいっつもとガイルのふたりとなりふり構わず逃げている途中、ついうっかり囲まれて、こりやいよいよ年貢の納め時かと呻いていた時だった。

「ああ、お前達。どうやら、まだあがいているみたいだな」

確かそんなような台詞だったような気がする。

どんな言葉を返したのだったか。……どうせ罵詈雑言だったはずだ。

それに手伝えだとか助けるだとか、泣き言が混じった気もする。……というか、それ

は間違いない。

飛び込んできたそいつは、奇妙な身のこなしと、驚くほどの剛剣でたちまちモンスタードモを全滅させた。

リヴィラの街で傭兵まがいの事をしていると知ったのは、その後の事だ。

何故なら、きつちりと料金を請求されたからだが……それから、ちよくちよく声をかけてはこうしてパーティを組んでいる。

馬があつたとしても言えばいいか。なんやかんやあつて、今ではすっかりお得意様だ。

とはいえ、他所の派閥……少なくとも、主神が違う事に変わりはないが。

つっても、これだけの実力者だ。

一度だけ、俺らの派閥への改宗コンバージョンを持ち掛けた事がある。

「確かに、俺は逃げ出した身だがな。それでも、あいつらと酌み交わしたこの血だけは手放せないらしい」

全てが偽りでも。それでも、あの時交わした誓いは俺達の誇りだったんだ——と。返ってきたその言葉の意味など分かるはずもない。

だが、それは決して無理強いしてはならないものだという事くらいは分かった。

……そして、知っているのはその程度の事だった。

(主神は狩獵エブラナの神だったか。うちの主神は知らねえとかぬかしやがったが……)

訳アリなのは察している。だから、それ以上のことは探ってもいないが。

エブラナとかいう神を主神とするLv. 3の冒険者。

知っているのはその程度で、その辺りならリヴィラの連中なら大体知っている。

そして、本当かどうか怪しいことだった。

ただ、それなりに長い付き合いだ。

「まあ、美人らしいからなあ。悪い虫が突いちや困るってか？」

肩に腕を回し、笑ってやる。

「そういう訳じゃないがな」

リヴィラの連中の知らなそうなことの一つくらいは知っている。

「……はた迷惑な女さ。やっと思死ねると思ったんだがな」

鬱陶しそうに押し退けながら、ホークウツドが囁く。

ふとした弾みで零したことだが……オラリオで行き倒れていた時に、何とかいう女エルフに拾われたらしい。

ついでに言えば、今も世話になっているようだ。

顔どころか後ろ姿すら見た事がないが……エルフとは美人の別名だと言っている。

まったく、羨ましい話だ。くたばっちまえ。

……とはいえ。どうやら、そっちの美人は美人で何やら訳アリらしいが。

結構稼いでいるはずのこいつが安酒ばかり啜っているのも、夜には地上に降りたがるのも、その辺に理由があるに違いない。

もちろん、細かい事情なんぞ一つとして知らねえが……やっぱ、くたばっちゃまえ。

「まあ、いいや」

何であれ、余計な詮索などするもんじゃねえ。

世界の中心。神々すら魅了する熱い街——などと云ったところで、全員がその榮譽に授かれるわけではない。

むしろ、そんな奴らはごく一摘まみ。大体は俺達のように、英雄になり損ねた日陰者だ。

日陰者同士、わざわざ傷を抉りあうこたあねえ。

「どうやら、まだ祭りは続いているらしい」

確かに目的地はリヴィラだが……どうやら、先行隊が何かしら異常事態イレギュラーに巻き込まれたようだ。

なら、一四階層以下に進むのはまだ少しばかり危険か。

「せっかくだ。ガッツリ稼がせてもらおうとしようぜ、相棒」

それとは別に、まだ一三階層の異常発生の後始末もまだ続いているらしい。

そりゃ、あの【猛者おウシヤ】ですら殲滅できなかった数だ。そう簡単にどうにかなるはずも

ない。

油断はできねえが……なに、今なら最悪は調査隊の奴らを巻き込めばいい。

「誰が相棒だ、誰が」

大体、こいつは腕だけは立つ。それに、どつかでパーティでも組んでいたのか、意外といい指揮をする。

腕が立ち、頭が切れる奴がいれば儲けが多くなる。そして、今の稼ぎ場はいい感じに温まつている。

それだけ分かってりや、それでいい。

このよく分からねえ奴の過去だとか、ダンジョンの中で起こっている何かだとか。そんなのはしがない冒険者にとつちや、どうでもいい話だった。

3

バベル前の大広場。その隅に置かれたベンチを一人で占拠する。

ほら、うちは神様やし。……それに今は夜だ。利用する奴は、もうほとんどおらん。

(こらもうしやらないことなんやけどなあ)

次々とダンジョンに潜っていく第三次調査隊を遠目に見やり、内心でぼやく。

今度の調査隊の中核を担うのがあの腐れおっぱいの眷属がいうのは、やっぱ少し面白

くない。

というか、ぶつちやけ、フィン達がおらん今、うちらに投げられたなら結構本気で困る。

ガネーシャもあつちこつちに戦力を分散させとるせいで、うちらと大差ない。んでもって、放置できんヤバイ状況いうことも認めるしかない。

あの腐れおっぱいのところは話が行くのは、こらもう完全に仕方がないことだった。ただ、間接的にははいえフィン達を助けてもらう形になるのがちよいム力つく。

……もちろん、うちからも団員を派遣してはいるけど。

(でも、残つとる子らだとなあ)

流星に【おうじや猛者】をはじめとする「フレイヤ・ファミア」の精鋭を差し置いて、調査隊の中核には食い込めない。

(ベートもおるけど……)

地上にはベートも残っているが……愛用の《フロスヴィルト》がおかしなことになっっている。

もちろん、普段ならフィンが用意した双剣だけで充分だろう。

ただ、流星に今の状況だとちよい不安だった。

(それに、特効薬を届けてもらわなあかん)

もつとも、今は例の呪詛対策でオラリオ中の治療師や薬師がギルドに集っている。

依頼した分は何とか都合をつけてくれそうやけど、ちよい遅れるかも知れんらしい。

ベートは他の心当たりを当たるとか言って出ていったけども……。

(ま、この状況ならうちの子だけを使い潰すような真似はせんやろ)

今はオラリオ中が注目しとる。

そんな中で被害を出しては、自派閥の名に傷をつけるだけだ。

あの【猛者】が、わざわざフレイヤの顔に泥を塗るわけがない。

(フィン達と引き換え、言うなら少しは可能性もあるやろけどな)

とはいえ、これ以上気を揉んでも仕方がない。

全てはフレイヤの采配一つ。そして、あの女神の気まぐれは本気で気まぐれだ。

いくら天界屈指のトリックスターなどと呼ばれたところで、元から理屈も道理もない

ものは流石に読み切れない。

ベンチから立ち上がり、行先を決めることなく路地を歩く。

街の中は、まだちよつとだけピリついた空気が残っていた。

それも仕方がない。

例の呪詛の犠牲になった子らが、街の何ヶ所かで確認されたそうだ。

すでに全員討伐——と、言うのは少し気分が悪いが——済みだが……しばらくはこん

な調子だろう。

いつもなら？兵衛どもが屯しているはずの道も、今日はほとんど人気がない。

(どうしよかなあ)

流石のうちも酒を飲む気にはなれんかった。

かと言つて、フィン達がいけないのでは、エニユオやら怪人クリーチャーやらの調査もできん。

本拠地ホームに帰つても、どうせ管を巻くくらいしかやることがない。

時間を持て余したまま、ざわめく街を当てもなくぶらつく。

「あら、ロキ」

そして、ある意味、今一番会いたくない奴と出くわしてしまった。

「どうしたの、こんなところで？」

道の先にいるのは、フレイヤだった。

フィリア祭の時と同じく、全身をローブで覆っている。

まあ、これは『美の神』の宿命といえは宿命だが……。

「そういう自分こそ、こんなところで何しとるんや？」

重心を落とし、何が起こつてもいいように警戒する。

何しろ、この腐れおっぱいは前科が多すぎた。

「今、ブーメラン乙——とか言つて笑つた奴一步前に出ろや。奥歯ガタガタ言させた

る」

そもそも、うちはここんどこ真面目に普通の神様やつとるわ！

……少なくとも、オラリオでの『まともな神判定』なら、合格ラインより上におるはずや。

「……急にどうしたの？」

割と本気で心配した様子で、フレイヤがうちの顔をうかがってくる。

急に訳分からんこと言いだしたなら、そらそうやる。

「いや、気にせんどいて」

何か突然におかしな伝言メッセージを受信してもうた。

悔恨の念と共に片手で顔を覆い、一息ついてから。

「んで、真面目に自分はこんな時間に何しとるん？」

「見て分からない？ 街をぶらついているのよ」

「ずいぶんと呑気やないか」

「あなただって、私のことは言えないでしょう？」

……冷静にここまでの自分の行動を俯瞰し、反論の余地が全くないことに愕然とする。

「それに、今はみんな仲良くダンジョンに潜っているもの。今日は人通りも少ないし、羽

を伸ばすいい機会だわ」

「そーやってお供もつげんと歩き回って、危うくうちらと全面抗争が始まりそうになつたことは忘れんで欲しいけどな」

確かにうちらも警戒して団員を派遣したのは事実やけど、先に誤爆したんはこの腐れおっぱいの眷属の方だった。

「そんなこともあつたかしらね♪」

その時の焼き直しのように、笑って誤魔化すフレイヤ。

(この女神^{アマ}。もう一度拳ぶち込んだら……！)

今にも『禁断^{テヘベ}の業^ロ』をぶちかましそうな気配に、うちもあの時と同じく硬く拳を握りしめる。

オラリオの一角で、今まさに二大派閥の最終決戦^{ラグナロク}が始まろうとしていた——

ポーヘー！

——が、鳴り響いたのは角^{ギヤラドホルン} 笛ではなく、どつかの屋台の客引き用のラツパだった。

(そら、向こうだつて商売やからな！ 特に今日は客入りも悪いやろし、仕方ないことやけども!!)

気の抜けた……そのくせ、微妙に切羽詰まったその音に、一柱^{ひとり}で勝手に力尽きてから。

「いや、でも。真面目な話、ちよい不用心すぎん？ うちも言えた義理やないけど」

あの呪詛カースの影響を受けた子供が、他にもいないとは限らない。

お互いに、ついうっかりで天界に還れるほど身軽ではないし……あの異形に殺されれば、天界に還れない可能性も充分にある。

「大丈夫でしょ。珍しく彼が本気になっているもの」

「彼？」

「クオンよ。あの『闇』がよほど危険なのか……それとも、何か良いことでもあったのかしらね？」

ベートの話からすれば、多分両方正解だろう。

(アレはいつも独りやと思つとつたんやけどなあ)

ソラールとカルラとか言つたか。ギルドには姿を見せなかつたけど……。

いや、それはともかくとして。

「なあ、フレイヤ。ちよいとここらで、うちと腹割つて話さん？」

「あら、珍しいわね。どんな話かしら？」

「退屈しているのはお互い様——とは言ひ切れないが。」

ただ、食いついてはいる。

「アレ……。【イレギュラー正体不明】クオンについてや」

あとは、話題が気に入るかどうか。

「いつうちらを殺しに来てもおかしくない。それは分かつとるやろ?」
下手をすれば、うちよりもフレイヤの方がより目の敵にされている。

「真面目な話、自分はアレをどう見とるんや?」

その割に、この女神はアレを気にかけているように感じられた。

……もつとも、いつものようにちよつかいを出してはいないようだが。

まさか自重するようなタマでもないだろうに。

「いや、自分の目には、アレがどう見えとるんや?」

「そうね……。どこか美味しい葡萄酒ワインのあるお店に行きましよう」

思いのほかあっさり、フレイヤは頷いた。

「話の続きはそこで。いいでしょう?」

どうやら、ひとまず釣り上げることには成功したらしい。

んで、それから。

この腐れおっぱいがお気に召すほどの葡萄酒ワインを出す店は、流石のオラリオでも限られる。

そこに加えて、個室があり、店員の口が堅い店を選ばなくてはならない。

結構な無理難題だが……うちの酒飲みの端くれ。日々の情報収集は怠っていない。

「あら。こんなお店があったのね」

表通りから少し外れた場所にあるこの店は、どうやら合格だったらしい。

出された葡萄酒ワインに口をつけてから、フレイヤは素直に言った。

「そうやる。これも日々の努力の賜物や」

もちろん、フレイヤの事だ。

酒の味だけではなく、建物の内装にもこだわるだろう。

その点においても、この店なら問題はない。

足りない光量は、揺らめく蠟燭の火が補うことで、部屋全体が柔らかな雰囲気で包まれている。

真っ白い上質な布地のテーブルクロス。

上物の花瓶には邪魔にならない程度に薔薇が飾られ、よい香りがほのかに漂う。

あえて光量が抑えられた魔石灯。

椅子もまた良い意味で時を重ねた上品なものだ。

部屋の片隅には、名工の手で作られた大洋琴グランドピアノ。

今は無人だが、手配すればその音色を堪能できる。

もちろん、主役は酒であり、また料理であり——そして、何よりそれに舌鼓を打つうちらだ。

すべてはそれを引き立てるために。何より、心地よい時を送れるように。

一本筋が通つたものは、それだけで美しさが宿る。

この店は、その中でもさらに洗練されている。

ましてその主役が『美の神』たるフレイヤがならば、おおよそ完璧だった。

いや、全てがフレイヤの配下となり完成させるのだ。

彼女の引き立て役が務まる時点で、この店の内装は見事だと言っている。

「努力はいいけれど……。酔つたまま路地で寝るといふのは、私よりもずっと不用心じゃないかしら」

それを一体誰から聞いた。

「文句がないなら、そろそろ本題に入るか」

余計な弱みをさらけ出す前に、さっさと本題に入ることに決めた。

「いいけれど。彼について知っている事なんて、多分あなたとそんなに変わらないわよ？」

「ホンマにか？ 自分かて独自に何か探らせとるやろ？」

「それはもちろん。神なら誰だつて気になるでしょう？ 『未知』の塊だもの」

「アレに関しては、そーいう呑気なことは言つてられんと思うけどな」

クスクスと笑うフレイヤに、思わず毒づく。

「それはとりあえず置いとく。んで、自分の目にはアレの魂がどう見えとるん？」

魂の色を見抜く能力に関して、フレイヤは一流だ。

得体の知れないあの存在の魂を、どのように見ているのか。

「黄金か。それとも宝石か？」

この女神おんなが気にかかるような何かが、本当に見えているのか。

「そうね……」

手に持ったグラスの中の葡萄酒ワインを回してから、フレイヤは言った。

「例えるなら、黒曜石かしら」

少なくとも、黄金ではない。彼女はそう言い切った。

「黒曜石？」

確かに磨いて装飾品にされることはある。

宝石といえば宝石だが……。

「また随分と平凡やな。何でそんなものを自分が気に掛ける？」

しかし、そこまで珍しいものでもない。

火山の傍か、かつて火山だった場所の傍に行けば、それなりに転がっている石だ。

「確かに、どこにでもありそうな魂よ。実際、元々は平凡なものだったのでしょね」

「今は違ういうんか？」

「ええ。冷たくて、どこまでも暗くて……でも、何故か目を離せない。不思議と、手を伸

ばしてみたくなる」

その時のフレイヤは、今まで見た事がないような表情をしていた。

恍惚ではない。興奮でもない。静かで……例えるなら、暖炉の前で微睡む幼子のよう
な表情だった。

「そして、もちろん今にも砕けそうなほどに鋭い」

もつとも、それは一瞬の事だった。だから、単なる錯覚だったのかもしれない。

「触れば切れてしまいそう。それとも、その前に彼の方が砕けてしまうかしら？」

……それは何となく分かる。

(アレは、酷く危うい)

今にも擦り切れ果てそうな……あるいは、何か爆ぜてしまいそうな気配が常に付き
まわっている。

そして、爆ぜた先に何が起こるのか、それが見えない。

「元々は、多分どこにでもあつた魂。でも、彼はそれを丹念に磨き上げた。それも、私達
を殺せるほどに鋭く」

あの暗くて穏やかな『魂』は何なのかしら？——今度こそ恍惚とした様子で、フレイ
ヤが呟く。

「うちらを殺せる言うのが問題なんやけどな」

「あら。あなたもヘルメスと同じことを言うのね」

……それは、何か若干ムカつく。

「それに、私もまだ彼の真価が見えないの。彼は、一体何者なのかしら？」

正体不明。誰が最初に呼んだかは覚えていないけれど、いい二つ名^{なまえ}ね——と。

フレイヤは小さく笑った。

「真価やて？」

「彼は、何かとんでもないものを隠している。それが何かが、まだはつきりとは見えないけれど、ね」

「……まあ、まだ力を隠しとるはずとは、うちの子らも言つとつたけど」

その辺は、多分【おうじゃ猛者】こそが勘づいているはずだ。

なら、隠し立てする必要はどこにもない。

うちの相槌が聞こえているのかいないのか——

「いえ、それとも迷っているのかしら」

あるいは、躊躇っているのかも——と、フレイヤは言った。

「あの魂が燃え上がったところを見てみたいのだけれど……なかなかいい方法が思いつかなくてね」

「そーいう火遊びはやめとけ。いや、マジで」

下手すると本気でオラリオそのものが炎上しかねん。

「大丈夫よ。イシュタルの二の舞にならないように気を付けているもの」

「まっつったく安心できんわ!？」

「いかん。この女神おんなを放っておくと、マジでオラリオが大炎上するかもしれん。

「でも、私のちよっかいなんて控えめな方よ」

「ああん?」

「私の眷属こども達に悪戯をしていた誰かがいたのは知っているでしょう?」

「リヴェリアを呼び出した時の話やな」

あれは、『歓楽街』が焼け落ちる少し前の事だ。

内容的にも、無関係であるはずがない。

「確か、アン・デイルとかいう奴やったか」

「ええ。今なら分かるわ。彼の狙いは初めからイシュタルだった」

「アレが自分らと決着をつける気になった。イシュタルにそう錯覚させたいうことや

な」

この女神おんなとイシュタルの確執は、随分と長い間続いている。

オラリオ中の神どころか、ギルドですら知るところだ。

「んで、イシュタルはそこに一枚噛もうとしたいうわけや」

それこそが狙いだと、イシユタルは最期まで気づかなかつたに違いない。

「ええ。私達はあくまでも餌。そして、襲撃者はきつと真面目な子ね」

「真面目やて？」

「私達と騒ぎを起こして、イシユタルを焚きつけろ。出された指示は、きつとそんなところでしょうね」

「何でそう思うんや？」

「だから、私の眷属こどもを誰一人として殺さなかつた。それどころか、何人かは自分で治療院に届けている」

どんな子なのかしら。素直なのか。融通が利かないのか。優しいのか。甘いのか。

いつそ惑わすように、フレイヤは自問した。

「それとも、いつでも殺せるといふ自信の表れかしら」

……多分、さほど気にかけていないのだ。

アレがうちのことを、もうあまり気にしていないのと同じように。

「何であれ、イシユタルがもう少し上手くやれたなら、お互いに危なかつたわね？」

「……そうやな」

何しろ、イシユタルは【麗 傑アンテイアホイラ】というとびきりの切り札を持っていた。

やり方次第では、ギルドを出し抜いて抱え込むことすら不可能ではなかつたはずだ。

そして、自重を知らないのはイシユタルも同じこと。

アレを手に入れたイシユタルが、その後で何を企むかなど想像もしたくない。

「んで。んな危険な火遊びをしないでかしたアン・デイルは何者や？ 当然調べとるやろ」

「あら。知っていたとして、教えると思う？」

「はいそうですかと引き下がれる状況やない」

神々の王すら恐れた【闇の王】だの、デーモンの『飼い主』だの……。

うちらすら置き去りにして、何やとんでもないことが起こりつつある。

「その中心にいるのが神わとその眷属たでないのが気に入らない？」

内心の呻きを見透かしたように、フレイヤが笑った。

今蠢いているでつかい何か。その中心にいるのは、多分アレだ。

……それは、認めざるを得ない。そんなことは、分かっているつもりだ。

「何でそう思う？」

「さつきも言ったでしょう。ヘルメスと同じ顔をしているんだもの」

訳も分からず、顔を覆いたくなる衝動にかられた。

その衝動に抗えたことは良かったのか悪かったのか。

(そらまあ……面白くはないなあ)

面白くはない。……ような気がする。

ただ、それが何に対する感情なのかは分かりかねた。

フレイヤの言う通りなのか。あの胡散臭い優男と同じと言われた事か。それとも、何か別の理由なのか。

……そもそも、その感情の表現は『面白くない』であっているのかどうなのか。「彼が何者かはともかく、私と同じことを考えているのでしょね。四年前から、ずっと」

「……アレの力を取り戻させようとしているということやな」

アレは力を隠しているのではなく、何らかの理由で発揮できないでいる。

「あら、気づいていたの？」

「当たり前や」

……リヴェリアの話からするとそれしか考えられないだけだが。

「いったい何が彼の魂を陰らせているのかしら……」

それは、完全にフレイヤ自身に向けられた眩きだった。

「あの淀み。念入りに施された枷。芯すら蝕み、砕きかねないほどの何か。どうすれば取り除けるのかしら……」

つまり、そう言った陰りがアレの魂には見られるという訳だ。

そして、その陰りが【闇の王】とかいう大仰なもんを封じ込めている。

「トラウマっちゆうやつかな？」

だとしたら、随分と可愛いらしいものだ。

（うちの子らが聞いたら、ブチ切れそうやけどな）

どんな過去だか知らないが……それに縛られ、折角の力を失うなど。

（少しはうちの子らを見習えっちゆうねん）

……いや、見習われても困るか。今でも好き勝手やりすぎだというのに。

反撃の手が見つかるまで、もう少し大人しくしてもらおう。

「それはどうかしらね」

しかし、こゝら本当に過去こそがアレの弱みになるかもしれないなあ——と。

思わぬ情報に胸中でほくそ笑んでいると、フレイヤが言った。

まさか吠きぎが聞こえていたとは。流石に少し驚いた。

「隠すまでもなく、いくつものトラウマを抱えているみたいだけれど……」

……いや、確かに。

何かそういう話はリヴェリアとかラウルからよく聞くけども。

（犬が嫌いとか、カエルはあかんとか、車輪は怖いとか、何やよう分からんトラウマ抱えとるらしいなあ）

犬とカエルはともかく、車輪って何や。そこはせめて馬車とかやないんかい。

「でも、それは彼の魂を陰らせるほどかしら。私にはそうは思えないわ」
彼はもう、そんな子供らしい繊細さなど捨て去っている。

それを理由に足を止めることはあり得ない。

フレイヤはそんなことを呟いた。

「むしろ、『枷』を嵌めているのはウラノスの方じゃないかしらね……」

「何でそう思う？」

「四年前、もう少しで爆ぜそうだったあの子の魂から、すっかり火が消えてしまったのはウラノスと接触を持ってからだもの」

……まあ、イシユタルの眷属達にたくさん愛されたからかもしれないけれど。

と、フレイヤは特に気にした様子もなく付け足した。

「意外やな。自分が興味持った男にそんな態度をとるんは」

「流石にあの子たちに手を出したなら、その日のうちに殺しに来るでしょうね」

フレイヤは、実にあっさりと言をすくめる。

もつとも、それに関しては全く同意だった。

というか、イシユタルの奴が犯した最大のミスは絶対にその辺にある。

(いや、でも生贄言われてもなあ……)

アマゾネス絡みでそういう呪詛の類がないか簡単に調べてみたものの、まったく手ご

たえなしだった。

大体、アマゾネスは種族的にどちらかという**強い雄**と生贄を求める側だ。

(あ……。逆も成り立つんかな?)

自分を返り討ちにした強い雄にベタ惚れしているアマゾネスには心当たりがあった。アレの方もそういう感じなのかもしれない。

「それに、さつきも言ったけれど、彼の真価を見定めきれてないっていうのもあるわね。今はまだ『未知』に対する純粋な興味でしかないわ」

神なら誰もが抱えているものでしかない——と。

フレイヤはそう言った。

「そら分かるけど……。自分なら、『魅了』して吐かせられるんちゃうか?」

これほど執着している相手に、この女神おんながいつまでも堪えていられるかどうか……。

いや、流石にそんな無粋な真似はしないか。

何故だか不満そうなフレイヤの顔に、そんなことを思っていると——

「効かなかったのよ」

「はあ?」

「だから、『魅了』できなかつたの」

「……それ、本気で言つとるん?」

フレイヤは文字通りの意味で『傾国の美女』だ。詳しくは知らないが、その実績を持っている。

つい最近も、近くの砂漠の国で大暴れしてきたらしい。

例え同性であろうと関係ない。

生きとし生きるものなら、魅了されずにいられない。

例え『神の力』^{アルカナム}など使わずとも。

それがフレイヤ——『美の神』という存在だ。

「『美人なんだろうが、俺の好みじゃない』ですつて。失礼しちゃうわ」

その渾身の『魅了』を前に、アレは真正面からそう言い放つたらしい。

「あ……」

完璧に拗ねているフレイヤを前に、意味のない言葉だけが零れ落ちる。

何だろう。間違いなく驚天動地と言っている出来事のはずなのだが……何でか、あんまり驚けない。

ただ、何でフレイヤの眷属が上から下まで揃って殺気立っているのかはよく分かった。

「何が気に入らないのかしら……」

「……貞淑さが足りんちゃう？」

不貞腐れるフレイヤに、思わず呟いていた。

「なら、イシユタルの眷属ことはどうなるのよ？」

「いや、それをうちに聞かれても……」

アレの好みになんぞ欠片も興味あらへん——と。

ますます不貞腐れるフレイヤに、ため息を飲み込んでから呻いた。

ただのアマゾネスならまだしも、戦闘バトル媚婦メドだ。

流石に貞淑とは言い難いと思うが……。

「なら、単純にうちらが神だからやろ」

我ながらかなり投げやりな返事だったが……他に理由が思い浮かばない。

と、いうか。真面目な話、他にいったい何があるというのか。

「それも、少し疑問が残るのよね」

「はあ？」

アレとそういう意味で噂になってる神はおらんはずやけど。

(ファイたんはちゃうしなあ……)

アレがどう思っているかはともかく、ああいう不誠実なのはファイたんの好みではな
いらしい。

他は……イシユタルは殺されたし、ガネーシャとウラノスは男だ。

さて、アレとまともな接点のある神は他に誰がいたか……。

「彼が大切にしている『火』があるでしょう？」

「火？」

「多分、魔法の触媒になっている『火』よ」

「ああ、あれか」

魔法を行使する際に、アレは手に『火』を纏わせる。

その『火』のことらしい。

「あれは、多分、私達の力が関わっているわ。それも、女神がね」

神創武器と呼ぶには、彼の体にすっかり馴染み切っている。

ファルナ
恩恵のようできて、そうではない。

「何でそう思うんや？」

「もちろん、女神おんなの勘よ」

……絶妙に説得力がなさそうでありそうな理由だった。

「少なくとも、神なら問答無用で皆殺しにするという訳でもないはずなのよ」

でなければ、ウラノスやガネーシャが無事なわけがない。

フレイヤの言葉に、別の女神の言葉を思い出した。

「かみがみがにんげんが子供達を良いように扱うのが許せない、か……」

「急にどうしたの？」

「ん。ファイたんが言つてたことや。そういう事をしないのが、アレと上手くやるコツらしいで」

「そう……。ヘファイストスが……」

知り得る限りのアレの行動を振り返つてみても、その指針はブレていないように思える。

多分【麗アンティアーネイラ傑】が関係する『ドでかいミス』を何とかやり過ごしたとして。

それでも、『生贄』という方法を良しとした時点で、イシユタルが上手くやれる可能性は皆無だったわけだ。

だからこそ、イシユタルが選ばれたのかもしれない。

（うちが目の敵にされとる理由はまた少し違う気もするけどな）

別に難しい話ではない。

うちらの場合は、ド直球にこちらから一方的に喧嘩を売ったせいだった。

色々事情があつたとはいえ、結果的にそういう事になってしまったのは、認めざるを得ない。

（それもアン・デイルの思惑通り言うんがマジでムカつく）

まんまと『利用』される。

それは、全知全能を標榜する神にとって、どうしても我慢ならない恥辱だった。しかも、これは化かしあいですらない。

アン・デイルという魔導士にとっては、別にうちらでなくてもよかったのだ。

その役割さえ演じてくれるなら。あるいは何かの条件を満たすなら、どこの誰でも良かったに違いない。

たまたまちょうどいいところにうちらがいただけ。そのせいで、危うく使い潰されるところだった。

これほど腹立たしいことはない。

(……その条件というのがよく分からんのやけどな)

神々が云々というのがアレ個人の信条なら、うちらが満たした条件はそれ以外の何かだ。

アレ個人がどう思おうが敵対する以外の選択肢はあり得ない。

おそらくはそんな条件が整ってしまっている。……多分、今も。

(まあ、アレ自身にとって、普通に迷惑いうことも、ないとは、言い切れん、ような……) 事の始まりに関わっている眷属……本人たちの名誉のため、具体的な名前を上げるのは避けるが……。

例えばツンデレ狼は当時から喧嘩売って歩くのが日課だったし。

知らんうちに辻斬り常習犯になっていた金髪幼女（当時）は今も若干狂戦士気質だし。
狂戦士気質なら、何だか他にも色々いるし……。

「変な顔して、どうかしたの？」

不都合な真実から目をそらしていると、怪訝そうな顔でフレイヤが言った。

「べーつーにー。ただ、自分がフラれたのはやつぱ貞淑さが足りんからやと思っただけや」

その台詞は単なる八つ当たりだった。

別に根拠もないし、さほど本気でもない。

「ふんだ」

グラスを一息に空にしてから、新しい葡萄酒ワインを手酌で豪快に注ぐ。

何だか居酒屋の方が似合いそうな……『美の神』にあるまじき蛮行を前に背筋に冷たい汗が伝った。

（あかん。これは、あかんヤツや……っつ!!）

今すぐに逃げるべきだ——が、しかし。

完全に据わった——もとい、拗ねた目に射抜かれ、それもままならない。

「ねえ、ロキ。せつかくだもの。今夜はゆつくり語り合いますよう？ もっと楽しい話が良いわ」

夜は長いものね——と。

その返事に許された答えは『はい』か『YES』だけだった。
 というか、それ以外の返答は意味がない。

(う、迂闊やった……)

フレイヤは『美の女神』だ。

その女神にとつて、寵愛とは向けられて然るべきもの——というより。

寵愛を向けられてナンボの存在が『美の神』たちだと言えよう。

大いに与え、また大いに与えられる寵愛こそが彼女達の存在意義。レインテール

それをアレの一言がその矜持をどれだけ傷つけたことか。

まして、その古傷を抉ろうものなら……。

YOU DEAD

(おのれ、『灰色の悪夢』！アッシュ・オブ・シンダー 眷属達どころか、うちの矜持まで簡単に踏みにじりよつ

てからにいいいいいい!!)

何かそんな空耳さえ聞こえてくる状況に、内心で絶叫していた。

そして、それから。

何というか……不貞腐れた女神というのはつくづく面倒臭く、そこに酒が入れば完全無敵だという事を改めて思い知らされたのだった。

一晩かけて、念入りに。丹念に。……いや、うちかて女神のひとつり一柱やけども！
(これからは、酔いに任せた無茶ぶりは少し控えよう思いました、まる)
完全に燃え尽きた心身を引きずって愛しの我が家に向かう途中。
すっかり白んだ空を見上げ、そんなことを誓ってしまうほどに。

4

一八階層の『夜』が明けた頃。

即席の阻塞バリケードを並べた臨時の監視所は完成していた。

ポールスが人員を回してくれたおかげでもある。

(ベートは戻ってこないか……)

完成した監視所を見回しながら呟く。

帰還の予定日だが、ベートはまだ戻らない。

ギルドに足止めをされたか、それとも単に特效薬が集まらないのか。

(もしくは件の呪詛カースにやられたか)

今の時点では、それもまた可能性の一つとして考慮せざるを得なかった。

「フィン……」

「ああ、分かっている」

いずれにしても、次の手を打つ必要がある。

(リヴェイラに動きはない)

とはいえ、地上に向かった同胞が帰還しないことや、新しく冒険者が来ないことを訝しんでいる。

もう一押しあれば、全面的な協力関係を結べる可能性も出てくるが……。

(そのためには、脅威の存在を確認しなければならぬ)

想定するのは、件の『人斬り』ないし『赤黒い人影』だ。

情報を持ち帰るには、それらと遭遇しても生還できる者を送らなければならない。となると、流石に人選はごく限られてくる。

(僕とリヴェリア。ガレス。アイズにティオネ、そしてティオナか……)

ランクだけ見るなら、樁も候補に挙がるが……彼女は「ヘファイストス・ファミリア」の団長だ。

この状況下で斥候を依頼できるわけもない。

(僕達としても団長と副団長を揃って失うのは流石に避けたい)

それとは別に、毒に苦しむ団員がいる。

リヴェリアにはここで治療を続けてもらう必要があった。

仮に僕が帰還できなかった場合、そこに加えて全軍の指揮を執り、イレギュラー異常事態に対応し

てもらおうことになる。

(流石に厳しいか)

できないとは言わない。

だが、それは緊急事態と言っている。

ほとんど状況が見えない今の時点で、それを前提として動くのは悪手にすぎる。

(動かせるのは、ガレス、アイズ、ティオネ、ティオナの四人だな)

この四人から二人を選び、二人一組ツーマンセルのパーティーを編成する。

人的な余裕もない。索敵はこの一回で確実に成し遂げる必要がある。

……最悪は、どちらか片方が犠牲になってもだ。

「なら、順当にまずは儂じゃな」

顎鬚を撫でながら、気楽な様子で言ったのはガレスだった。

「ようやく育ってきた若造どもに万が一の事があつては困るからの」

「引退するにはまだ早いと、遠征前に伝えたと思つたけど……」

「なあに、死ぬ気などないわ。それに、どこぞの小人族バルウムが言うには、身体だけは頑丈なよ

うだからの」

不敵に笑うガレスに、頷き笑い返す。

実際、今のオラリオにおいて最硬の『耐久』を持つ冒険者はガレスだと言えよう。

確かに『敏捷』は高いとは言えないが、それでもLv. 6だ。
よほどの事態にならない限り、問題にはならない。

唯一の懸念は——…

(『魂喰らい』か……)

あの人影もまず間違いなく、魂喰らい。

魂そのものに影響する力を前にしては、『神の恩恵』とて十全に機能しない。
まったく無意味だとは思わないが、いつもよりは確実に脆くなる。
前衛壁^{ウォール}役殺しの能力と言っていていいだろう。

(……それを理解していないガレスではないけど)

彼は鈍重な壁ではない。数多の死線を超えてきた熟練の戦士だ。
弱点を突く攻撃だとして、そうたやすく敗れることはない。

「なら、私も」

次に名乗りを上げたのは、アイズだった。

リヴェリアの眉間のしわが深くなる。多分、僕自身もそうだろう。

……少なくとも、眉間にしわが寄っているのは自覚している。

「脚の速さには、自信があるから」

それに気づいているのかいないのか、アイズは重ねて言った。

それもまた、間違いではない。

『エアリエル風』を纏ったアイズは、瞬間速度においては派閥最速であるベートをも上回る。

そうでなくとも、ベートに次ぐ素早さを誇っていた。

……いや、L.v. 6となった今なら素の状態でもベートより速いかもしれない。

斥候は脚が速ければ速いほどいい。そして、ガレスとL.v. 6なら、戦力的にも何の

問題もない。

条件だけ見れば、この上なく理想的な人員なのだが……。

(性格が向いていないんだよね)

ダンジョン内——戦場において、アイズの行動の基本原則は『サーチアンドテストロイ必見必殺』の一言に

尽きる。

幹部に抜擢してから、多少は堪えてくれるようになったが……あくまで多少だ。

息をひそめ、気配を殺し、状況によっては感情を押し殺して——今回で言うなら、例

え冒険者が目の前で件の異形へと変えられたとしても——情報収集に徹する。

斥候に求められる行動とは見事なまでに真逆だった。

ガレスとリヴェリアと視線だけでやり取りを交わし、ため息を吐いた。

「なら、条件を一つ。ガレスの指示には、絶対に従う事。いいね？」

直情径行にあるのは、ティオネとティオナも変わらない。

なら、その中で最も脚の速いアイズがやはり適任だ。

「分かった」

素直に頷くアイズ。

だからと言って、不安が完全に払拭できたとかと言われると返事に困るけど……。

「さて、それじゃ次はゴライアスをどうするかだけ……」

遠征出発からすでに二週間が過ぎている。

そろそろ新たに産出されている頃だった。

「どうせ帰り道の邪魔になるからの。いつそ儂らだけで討伐するか」

いかに階層主といえど、L v. 6が四人。L v. 5が二人いればそこまで手間ではな

い。

「そうだね。今日のうちに仕留めてしまおう」

一度仕留めば二週間は産出されない。

今日のうちに仕留めておけば、充分な休息を取ったうえで素敵に向かえる。

問題は往路に続き、二軍に経験値エクセリアが回らないことだが……こればかりは仕方がない

か。

ゴライアスとの戦闘中に異常事態イレキユラが起こらないとも限らない。

「テイオネたちと……あとはレフィーヤを呼んで、速攻を仕掛けよう」

野営地に伝令を向かわせようとしたその時――

『オオオオオ!!』

――連結路の向こうから、そのゴライアスの咆哮が届いた。

鈍くて重い振動が怒涛の如く響き渡る。

それが何を意味するのか、分からないはずもない。

(誰だ。いや、何だ……?)

冒険者か、あるいは他の『何か』が一七階層に侵入し、ゴライアスと遭遇、交戦している。

いや、交戦とは言い難い。

(おそらく、強行突破している)

ゴライアスの攻撃音は、徐々に近づいてきている。

その誰かはほぼ間違いなく、この連結路を目指していた。

ベートかもしれないし、そうではないかもしれない。

いずれにせよ、たった今炸裂したゴライアスの一撃さえ無事に乗り切っているなら――
……。

(情報が手に入るか……)

そして、正気であるなら間違いなく何か情報を持っているはずだが。

祈るような気分半分、警戒半分で連結路の出入り口を見つめる。

果たして、その何者かは最後の鉄槌を免れていたらしい。

とはいえ、それだけだ。決して無事とは言い難い。

衝撃波に翻弄され、連結路の中から文字通り転がり出てくる。

「え？」

地に倒れて動かないその三人スリーマンセル一組のパーティを見た瞬間、アイズが走り出した。

「アイズ?!」

止めている暇もない。急いで、その後を追って走り出す。

「彼は……」

倒れているのはヒューマンの男が二人。同胞バルウムの少女が一人。

その中の一人に、見覚えがあった。

(ベル・クラネル……?)

L.V. 1でありながら、単独でミノタウロスを撃破して見せた新人ルーキー。

(ランクアップしているだろうとは思ったけど……)

この惨状から察するに、何かしら異常事態イレギュラーに巻き込まれた結果だとは思う。

だが、それでもランクアップから二週間足らずで一八階層に到達するなど――。

(この二人が、L.V. 3なら……)

充分に可能だろうが……しかし、どう見てもこの二人の方が重傷だった。大体、Lv. 3の同胞がいるなら知らないはずがない。

だが、この少女には見覚えがなかった。

「仲間を……助けてください……っ！」

こちらに気づいたのか、彼は最後の力を振り絞りアイズの足首を掴んだ。

それも当然だろう。彼もまた、半死半生といった有様だ。

割れた額から流れ出る血が、草原を赤く染めている。

「フィン……」

アイズの問いかけに頷く。

「ああ。保護しよう」

彼には間接的とはいえ、五九階層の戦いで助けられている。

何より、地上から一七階層にかけての情報を持っているはずだ。

……それに、個人的にも少し興味がある。

「ただ、しばらくは野営地から少しだけ離れた場所に隔離する」

件の呪詛カースに侵されていないと判明するまでは、そうせざるを得ない。

本当なら、この監視所で周辺で隔離したいが……彼らの傷は深い。

そして、元々少ない治療師ヒーラーをここに野営地で二分するのは厳しい。

「アイズ、先に野營地に戻って指示を出してくれ。調査に向くのは彼らから話を聞いてからでいい」

「うん、分かった！」

走っていくアイズを見送るまでもなく、リヴェリアに指示を出す。

「あの天幕で、まず簡単な確認と治療をする。任せられるか？」

「やってみよう。少なくとも『暗い穴』なら、見れば分かる」

その頃には、ラウルが天幕の中の物資を運び出していた。

「覗くなよ」

リヴェリアが簡単な仕切りを作り、その向こうに同胞の少女を運び入れた。

「分かっているよ」

その手前にベル・クラネルと赤髪の男冒険者を寝かせ、ひとまず装備を外す。

（さてと……）

やはりというか、どうやら彼の派閥は「ステイタス」に鍵ロックをかけないらしい。

黒いインナーをまくり上げると、そこには神聖文字ヒエログリフが刻まれたままだった。

だからこそ、それが読めちゃうアイズを先に帰したわけだけど——…

（ナー……。もう少し真面目に神聖文字ヒエログリフを学んでおくべきだったかな）

そのうえで、思わず呟いていた。

幸か不幸か、僕自身はそれを解読できない。

スキルが発現しているらしいことは——位置的に見て——何となく察せられるが、それだけだ。

倫理違反は承知の上だが、少し惜しく感じてしまうのは仕方ない事だった。

「傷以外の異常は特にないみたいだけど……」

「うむ。こつちの若造も同じじや。傷は深いが、呪詛の予兆らしきものは見当たらん。少なくとも儂には分かんらん」

「こちらも同じだ。傷だけでなく、疲労も深刻だがな」

垂れ幕の向こう側から、リヴェリアの声がする。

(ひとまず、問題なしか)

万が一に備え天幕の外を取り囲む団員達に、ひとまず合図を送る。

まだ断言はできないが……あの呪詛に侵されていないなら、彼らは客人だ。

それも、多少なりと情報を持っているであろう大切な。

「アイズが戻ってくる前に、特に目立つ傷だけは癒しておこう」

「ああ、任せるよ」

杖をかざし、詠唱を紡ぐリヴェリアを見ながら、小さく息を吐いた。

多分、安堵だろう。

情報が手に入りそうなことと、あとは未来有望な新人が無事だったことに対する。

(それにしても……)

まさか二週間弱で一八階層進出とは。

(君はつくづく驚かせてくれるね)

テイオネたちが知つたら、また興奮しそうだ——と。

自身もまた高揚しているのを感じながら、苦笑した。

……

天幕の中に、静かな寝息が重なる。

穏やかとは言えないにしても、特に苦しんでいるようには聞こえない。

その静かな響きは、油断すると膨れ上がる不安を鎮めてくれていた。

(大丈夫、だよね……)

リヴェイラの街で暴れていたモンスター……あの異形の正体は、すでにフィンから聞いていた。

元凶の呪術師^{ヘクサー}が潜んでいるのは、地上から一七階層の間。

彼らが遭遇していないと、今の時点では断言できない。

(リヴェリアは、大丈夫だと言ってた)

それでも、傍らに置いた愛^{デスベレット}剣を握る手に力が入るのは止められない。

決して、今ここでそれを抜くことを望んでいるわけではない。ただ、こんな時に縫れるものを他に知らなかった。

(もう、半日は過ぎた)

リヴィラで変容した冒険者たちは、その頃には異常を見せていたという。

その前例に従うなら、今も平静を保っている彼らは呪詛カキズの影響下にはいはずだ。

……眠っていて話ができない今、本当に問題がないとも言い難いけれど。

(傷の方も、大丈夫だよな)

白い髪に隠された額。そこには、真新しい包帯が巻かれていた。

真つ先に目を惹いた傷はそれだったけど、実際にはそれと大差ない傷が体中にあつた。

とはいえ、それらはほぼ完治している。

正確な手当てと、リヴェリア達の強力な治癒魔法のお陰だ。

残っている傷は、元々軽傷だったもので、そちらも余っていた軟膏や包帯で治療してある。

あとは、十分に休めば目を覚ますはずだ。

前髪を梳くように撫でながら、しつこくざわつく心を宥めていると――。

「……………」

「！」

静かに閉ざされていた瞼が、僅かに震えた。

息をのみ見守る中で、その向こう側から深紅の瞳ルベライトが現れて——

「リリ!? ヴェルフ!?」

——しばらくの覚醒していない様子で、ぼんやりと天井を見つめてから。

目に確かな意思の光が宿ると同時、彼は仲間の名前を呼びながら勢いよく体を跳ね起こした。

(あつ、そんな急に動いたら……)

なんて、そんな心配をしていると、少年はそのまま体を丸めて悲鳴をかみ殺し始めた。案の定とか何というか……激痛に身もだえるその姿に思わず声をかけることを躊躇ってしまふ。

「大丈夫?」

とはいえ、いつまでも躊躇ってはいられない。

意を決して、声をかけると——

「え?」

時間でも止まったように、少年の体が停止する。

そして、一拍置くと再びがばつ、とばかりに体を起こした。

手を伸ばせば触れられる距離。深紅ルベライトの瞳に、私の姿が映り込んでいた。

「え、はっ、ええっ……?!」

「……平気?」

目が合った途端、奇声と共に百面相を始めるその姿は……まあ、見慣れていないとは言わないけれど。

でも、どこことなく正気を失っているその様子は不安を煽る。

何故だか自分の手を見ながら、顔を赤くしたり青くしたりしているのではなさう。

「ど、どうしてここに……?!」

ただ、とりあえずちゃんとした言葉が返ってきた。

ホッとしながら、一つ頷く。

「今は、『遠征』の帰りで……少し問題が起こって、この一八階層にとどまって……」

こういう時、口下手な自分が恨めしい。

リヴェリアならもつと簡潔に説明できただろう。

そんなことを思いながら、大切な質問を口にした。

「体は、平気? 気分が悪かったり、何か変な感じはしない?」

「は、はい……。あちこち痛いですけど、それだけです」

治癒魔法と言っても、決して万能ではない。

傷が塞がっても痛みが残るのは、よくある話だった。

「えっと、なら、ダンジョンの中で何か——」

「僕の仲間はい!?」

言葉を重ねる前に、不意に表情を引き締めた少年が身を乗り出してきた。

ようやく、動揺が抜け切ったのだ。

ただ、体はやはりまだ本調子には程遠かった。

床についた手に体を支えるだけの力がまだなく、肘が折れる。

急激な動きの変化に、傷つき疲弊しきった体は全く無力だった。

前のめりに倒れ込んでくる少年を前に、反射的に体が動いていた。

「……」

「……」

両手を伸ばし、そのまま抱きとめる。

ぽふ——と、小さな音と共に少年の顔が胸元にぶつかる。

もちろん、衝撃を逃すことも忘れていない。

だから、痛みはなかったはずだけれど……。

(もしかして、胸当てが……)

鼻にぶつかったのだろうか。

またしても動かなくなってしまうた少年に、少し焦っていると——
「スイマセンっツ!？」

奇声と共に、少年が体を大きく後ろにのけぞらせた。

「あ、急に動くと——」

と、言っている暇もない。

今度は後ろにひっくり返り、そのまま後頭部を床にぶつけた。

その勢いで体に残る痛みまでがぶり返したのか、声にならない悲鳴と共に少年は全力でのたうち回っている。

こうなつては、もう成す術がない。

無力なまま、ただ見守っていると——

「あ……ヴェルフ」

少年は、背後に眠っている仲間に気づいた。

痛みを我慢しながら、彼が体を起こす。

「リリも……」

ヴェルフと呼ばれた青年の隣に眠る小人族バルクムの少女の名を呟く。

二人が確かに呼吸をしている姿を見届けて、少年は安堵したように脱力した。

「二人とも、大丈夫」

まずは、この言葉から始めたら良かったのではないか。

「リヴェリア達が、治療してくれたから」

今まで見聞きしてきた少年の姿を思い出し、今さらながらにそんなことを思う。

「二人の傷も酷かったけど、君の傷も危なかったよ……」

憑き物でも落ちたように、落ち着きを取り戻した少年の額に触れる。

労わるように、包帯の上からおでこを撫でる。

少年は顔を赤くしたけれど、もう奇声を上たり逃げようとしたりはしなかった。

「平気？」

改めて、問いかける。

とうとう耳や首までが真っ赤になっているけれど……。

「あつ、ありがとう、ごさいます……。助けて、いただいて……。本当に……」

「ううん」

良かった——と。

少年は相変わらず白いままだという事に、心から安心した。

……

運び込まれた少年——ベル・クラネルとその仲間たちの治療を終えてから、およそ半

日。

細々とした用事を済ませて、天幕に戻ってからのことだ。

(しかし、またおかしなことになってきたものだ……)

ダンジョン内では異常事態が起こるものだとはいえ……いい加減、今回は打ち止めにしてもらいたいところだ。

ため息を吐きながら、懐からひとつの首飾りを取り出す。

大粒の紅玉らしきものに飾られてこそいるが、華美ではない。

装飾品というより『お守り』のような雰囲気がある。

それはいい。縁起を担ぐ冒険者は別に珍しくもないことだ。

あの少年がそうだったとして、何がおかしいわけでもない。

……それに、その首飾りそのものに見覚えがあったからだ。

仮に本来の持ち主がああ娘だとするなら、この少年と知り合いでも特別おかしいとは思わない。

そこまでなら、さしたる問題はない。

(この紋章は……)

問題は、ペンダントトップの裏側に施されたその紋章だ。

見覚えがあった。忘れるはずもない。

これと同質のものを、つい先日、別の相手から見せられている。

(まず、前提として)

少なからず、動揺している。

魔導士としてあるまじきことだが……急激に放り込まれた情報の塊が、心に波紋を生んでしまっている。

ならば、その情報の塊を解体するだけだ。

(あの少年、ベル・クラネルはエルフではない。間違いなくヒューマンだ)

額に深い傷があつたため、念入りに頭部は確認している。

彼は間違いなくヒューマンだ。ハーフエルフですらない。

それは、絶対に間違いはない。

つまり、あの少年は本来の持ち主ではない。

持ち主だったとするなら、まず間違いなく意味を知らないまま持っている。

(いや、本当に?)

一つだけ気になることがある。

この少年が転げ落ちてきた時。アイズが駆け寄る前。

彼は、その手にほんの一瞬だけ『火』を宿していた。

ミノタウロスとの戦いでもだ。

あれは、間違いなくクオンが魔法を行使する際に手に宿す『火』と同じものだった。

(しかし、それは特別に驚くほどの事か?)

いいや、違う。

そう結論するのは簡単だった。

(確か、恩人の孫だと言っていたか)

いずれにせよ、クオンはあの少年を気にかけていた。

ならば、あの少年に何かしら教えを施していたとしても何の不思議もない。

他に驚くようなことがあるとするなら、それは——…

(奴の魔法は、他者に伝えることができるのか?)

今の時代、魔法は『ファルナ恩恵』……『イコル神の血』によつて発現する。

それが『エクセリア経験値』を糧とする以上、それぞれの魔法はそれぞれの術者だけのものだ。

……もちろん、レフィーヤという例外もある。

だが、あの少年がレフィーヤと同じかと言われるなら——…

(違つたらうな)

あの少年が特別なのではない。

大体、奴自身が時々口にしていたことだ。

師に教わつたと。

あれが、私がレフィーヤに施しているような教えではなく、文字通りの意味だつたと

するなら。

(奴の魔法は継承可能と結論してよきそうだな)

それは、何人ものエルフ達が研鑽し、形とした『古代』の魔法と同質ということだ。だが、それとて驚くほどの事ではない。

奴は『恩恵』^{ファルナ}を施されていない。いわば『古代』の英雄の再来だ。

なら、その魔法が『古代』と同じだったとして、何を驚くことがある。

……いや、驚くべきことだが。それ以上に興味深くもある。

ただ、それは私情の部類だ。今は置いておこう。

(そう。『古代』の英雄の技術に触れる機会があつたはずだ)

彼自身がその意味や価値を理解しているかはともかく。

確実に、彼はクオンを介して私達の知らない『何か』に触れている。

あの少年は、その程度に深い関係をクオンと結んでいる。

(これが事実『お守り』^{アミュレット}だとするなら……)

あの少年が持っている理由は、まさに『お守り』としてではないだろうか。時間的に考えても、彼らが『中層』に挑むのは今回が初めてだったはずだ。

その安全を祈願して、あの娘から借りていたとしても不思議ではない。

(さて、この首飾りの本当の持ち主は誰だ?)

懸念が形となる。

どういふ経緯を経てこの少年……あるいは、あの娘の手に渡ったのか。

それとも、よく似ているだけで全く別物なのか。

(まずはあの少年に訊けばいい)

それで、誰から借りたのかははつきりするはずだ。

次はその誰かに接触を取るなり調査するなりすればいい。

(問いかけるべき事柄は概ね整理がついたか)

それに伴い、精神の動揺も静まる。

落ち着いて考えれば、願ってもない好機だった。

上手く行けば、抱えているいくつかの厄介事に解決の糸口が見えてくる。

(幸い、あの少年は腹の探り合いが得意そうには見えないからな)

彼には悪いが、探りを入れることは難しくあるまい。

少なくとも、クオオンの口を割らせるよりはずつと楽だ。

(その結果、何が出てくるかの方が問題だな)

何であれ、心の準備だけは念入りにしておく必要がある。

躊躇いもなく、とんでもない劇薬を投げかけてくる可能性は充分にあるのだから。

もちろん、彼には何の悪気もないとしても。

「リヴェリア様。団長がお呼びです」

自分に言い聞かせていると、外から団員の声がした。

「分かった。すぐにいく」

おそらく、あの少年が目を覚ましたのだろう。

思ったよりも早い。おかげで、首飾りペンダントを返しそこなつてしまった。

(適当に言い訳を考えておくか)

もちろん、別件かもしれないが——これ以上予定外の何かが起こられても困る。

できれば、それくらいは順当に事が進んで欲しいところだった。

……

「こつ、こつ、この度は助けて頂いてっ、ほほほ本当にありがとうございまして……っ
!?!」

文字通りに平伏し、完全に上ずった声で少年が言った。

「そう畏まらないで、どうか楽にしてくれ。冒険者とはいえ、こんな時くらいは助け合おう」

その先で、フィンが肩をすくめて苦笑している。

あれから、しばらくして。

何とか動けるようになった少年を連れて、私はフィン達の天幕へとやってきていた。

それは、元々言いつけられていたことだし、少年にも理由を説明してある。

それでも、少年がすっかり委縮してしまっているのは、多分その途中の光景のせいだ。
(分かつてても、ちよつと嫌かも……)

少年の少し後ろに座りながら、小さく呟く。

天幕を出た途端、目に入ったのは物々しい阻^{バリケード}塞の群れ。

でも、その理由は一応簡単に説明してある。

……私も、まだよく分かつていないから充分ではなかったかもしれないけど。

(大丈夫だって合図したのに……)

周りで警戒していた皆に大丈夫だと頷いて見せたのだ。

念のため、少年と手を——それも利き手を繋ぎながら。

……なのに、何故だか、みんな余計に殺気立ってしまった。

(ひよつとして、あんまり信用されてない……!?)

何だか、急に不安になってきた。

そして、その不安を煽るように——

『アイズさんは、ポーカーフェイスできへんもんなんー』

何故だか急に、この前やらされたババ抜きで大惨敗した時にロキに言われた言葉を思い出した。

もしかして、あのせいで私はこの少年にも騙されてしまうほど頼りなく思われてしまったのだろうか——!

ガーン!——と。衝撃の事実^{アイズ}に幼いアイズが、少年を真似るように地面に突っ伏す。

「それに、アイズの知り合いと聞いておきながら見殺しになんてしたら、彼女に恨まれてしまう。夜を安心して過ごすためにも、君は何としてでも助けておかないと」

「何だか酷いことを言われている気もするけど……ここぞとばかりにポーカーフエイスを決めて見せる。」

……何だか、二人とも笑っていた。

(ど、どうして……?!)

昔は『人形姫』とまで言われていたのに……!

別に愛着のある呼び方ではないけど、それはそれとして何だか納得いかない。

「別に宿代という訳ではないんだけど——」

苦悩する私を他所に、フィンがいよいよ本題を切り出した。

「少し、情報交換をしたいんだけど、いいかな?」

「あ、はい」

肩の力が抜けたらしい少年が、再び居住まいを正しながら頷く。

「ひよつとしたら、アイズから少し話を聞いているかな？」

「ええと……。悪い呪術師ヘクサーがダンジョンの中にいるんですよね？」

「多分ね。僕達が足止めをされているのは、帰り道でモンスターにもらった厄介な『毒』のせいなんだけど」

それには、専用の特効薬がいるんだ——と、その前置きをしてから。

「その薬を求めてベート……【ファミリア】の中でも足の速い団員が地上に向かってい
る」

予定では二日ないし三日。そういう見積もりを立てていたらしい。

「でも、まだ戻ってこない。元々希少な薬だから、必要量を集めるためにもう一日くらいかかるかもしれないが……」

そちらの影響かもしれない——と、その言葉に少年は首を傾げた。

「でも、【ロキ・ファミリア】の方の障害になるような冒険者なんて……」

「ひよつとしたら、そういう事態が起こっているんじゃないかと警戒しているところなんだ。それに相手が冒険者とは限らない」

確かなことはまだ言えないけどね、と。

フィンの言葉に、少年は音を立ててつばを飲み込んだ。

「僕達がいた天幕の周りに阻塞があったのも……」

「ああ。念のため警戒させてもらった。ただ、見たところ君は正常のようだ。安心したよ」

「リヴェイラの被害者は、半日と待たず言動がおかしくなったという。だが、フィンの言う通り、お前にはその兆候が見られない。おそらく、他の二人も問題はあるまい」

フィンの言葉に、リヴェイアも頷いて見せた。

「その呪詛カキズの影響なのか、どうやら地上の出入り口が封鎖されているようなんだ。少なくとも、この数日の間に地上から訪れる冒険者は君たち以外にいない」

「そんな……。ダンジョンが、閉鎖……?」

愕然とした表情で呻いてから、

「あ、でも、それなら……」

何かを納得したように、小さく呟いた。

「何か、心当たりがあるのかい?」

「いえ、心当たりではないんですけど。リリが……僕の仲間が、多分一五階層より上で何か起こってるんじゃないかって」

ダンジョンの中が静かすぎる——と。

あの小人族バルムムの子がそう言ったらしい。

「他に何か妙なことはなかったかな?」

「中層は初めてだったので、あまりよく分からないんですけど……」
モンスターとの交戦中に、縦穴おしあなに落ち、現在地を見失い、地上への帰還が困難になっ
た。

少年から聞いた話ではそういう事だった。

大筋で言えば、私の予想通りでもある。

よく耳にする事態だし……多分、誰にも伝えることができなかった冒険者はもつと
ずつと多い。

少年たちが陥ったのは幾度となく繰り返し返され、その多くを飲み込んできた過酷だ。

だから、少なくとも、この呪詛カースとは無関係のはず——…。

「アルミラージュの『強化種』に襲われました」

……それ、私も聞いてない。

呪詛カースとは無関係とはいえ、予想外の言葉に思わぬ衝撃シヨツクを受けた。

「あ、いえ。多分、『強化種』だったと思うんですけど……」

躊躇うように、少しだけ言い淀んでから、少年は妙なことを訊いてきた。

「『強化種』は胸の魔石を砕かれても平気なんですか？」

「……何だつて？」

「そんなはずない……と、思うけど」

フィン達が顔を見合わせる中で、思わず口に出していた。魔石はモンスターにとって絶対の急所。それを砕かれたなら、それが階層主であつても即死する。

ただ、その少年がそんな嘘を言うはずもないとも思う。

やっぱり、極限状況で何かを勘違いしたとか……。

「確かに砕いたのかい？」

「ええ、そのはずなんです。でも、なんだか妙な黒い靄みたいなものを纏い始めて……」

慌てて飛びのいたのだと、少年は言った。

「君はそれに触れたかい？」

「いいえ、触れていません。僕も、僕の仲間たちも」

多分、それこそが呪詛^{カーズ}。

となると、その『強化種』こそが全ての元凶だったのだろうか。

……何だか、いよいよ話が不穏な感じになってきた。

「それで、その後すぐに、まるで『強化種』を狙ったようにダンジョンの天井が崩落して

……」

「その『強化種』を押し潰したと？」

「いえ、それが……。何ていうのか、まるで蛹みたいな感じでその『強化種』を包み込ん

で——」

何でこの子の周りでは、そんなよく分からない異常事態イレギュラーばかり発生するのか。

今までは大体あの女神様の仕業だったのだと思っていたけど、何だか違う気がしてきた。

「それは、一五階層にあるのかい？」

「いえ、その後すぐに孵化して追いかけてきました」

何でも、紫黒しじくの魔石のようなものを鎧のように体中から生やしていたらしい。

「紫黒しじくというのは、間違いないかい？」

「はい。いつもの魔石より、黒っぽかったです。それに、ずっと硬くて……」

フィンが念を押すけど、どうやら『極彩色』ではないらしい。

硬さは……どうなんだろう。多分、『極彩色の魔石』はそこまで変化していないと思うけど。

「その『強化種』は、まだダンジョンを彷徨っているのかな？」

「いるとしたら、多分一七階層の……階層主フロアのいる空間だと思えます」

「何故、そこまで細かく特定できる？」

「どうしても振り切れなくて、また戦闘になったんです」

その時は、相手の加速を利用して完全に頭を潰したらしい。

……その『強化種』尋常ならざる素早さを持つていたのは、少年のたどたどしい説明からも明らかだ。

「それで、仲間に助けられながら、何とか倒したと思っただけですけど……」

もちろん、敵の特性を見抜き、ミノタウロスの石斧を手渡した仲間たちの機転も見事だけど……。

動きを読み切り、タイミン機微を合わせられるとは。

（本当に、強くなったんだね）

何だか誇らしいような、何故かむず痒いような。そして、ちよつとだけ寂しいような。

不思議な気分^ルに身を委ねていると――

「でも、今度は妙な乾溜液ターみたいなのが体から出てきて……」

その少年は、またしてもとんでもないことを言いだした。

「待って！ リヴェリア、それってひよつとして……！」

リヴェリアの街に現れた牛頭のデーモン。

その体から生えてきた……多分、あのデーモンに寄生していた『汚泥』。

五八階層で、ガレスたちも同じ存在と遭遇したと聞いている。

「ああ。可能性はあるな」

「農らが出くわしたデーモンからも出てきた奴じやな」

フィンやリヴェリアどこか、ガレスまでが険しい顔で唸る。

「というか。そんなものが寄生していたとなると、そのアルミラージュはひよつとして……。」

「あの、デーモンって、もしかしてフィリア祭で暴れたつていう……?」
今さらながらに顔を引きつらせて、少年が呻く。

確かに、彼はあの時デーモンとは遭遇していない。

全く予想外だっただろう。

……それは、私達もだけだ。

「ああ。……今更だけど、君の質問に答えておこう。魔石を砕かれてなお生きていられるモンスターは存在しない。少なくとも、僕達が把握している限りはね」

それどころか、本当にこの呪詛カースの原因だったのでは……。

「君たちが遭遇したのは、ただの『強化種』じゃない」

「それどころか、モンスターと呼んでいい存在かも怪しいところだ」

「中層に進出した日に一八階層到達。しかも、階層主どころかデーモン擬きのおまけつき。なるほど、確かにこの未熟者わかぞうは面白い!!」

フィンがため息を吐き、リヴェリアは眉間を押さえ——そして、ガレスは豪快に笑い飛ばした。

一方で、少年は青ざめた顔を盛大に引きつらせている。

私は……何だかこのまま床に突っ伏したい気分だった。

「では、一七階層にいるというのは——」

「はい。その後で、そこまで追いかけてきたんです」

その時はもう、逃げるのがやっとでした……と。

まるで恥じ入るように、少年は小さく付け足した。

「なるほど……。あの時ゴライアスが狙っていたのは、それか」

「はい。多分、僕達を狙ったのは連結路前の一発だけだと思います」

一つの疑問が氷解した。

少年たちは、どう見てもゴライアスの攻撃を連続して避けられるような状態にはなかった。

攻撃音が複数回響いてきたのはどうしてなのか、ずっと不思議だったけど……。

「恥じることはない。むしろ、よく生き延びた」

「いえ、そんな……」

リヴェリアの言葉に、少年はますます体を縮めてしまう。

「いや、リヴェリアの言う通りだ。君たちが生き延びてくれたおかげで、僕達も助かった」

「うむ。今の状態でデーモンとやりあうのは、流石に少ししんどいからの」
特に今度のデーモンは今までと違って魔法を使つてきそうだ。

二人だけでは、流石に厳しい戦いになる。

「……あの『強化種』みたいなのは、フィンさん達のいう呪詛カクズのせいで生まれたんですか？」

「多分ね。少なくとも、元凶そのものではないと思う」

まだランクアップしたばかりのL.V. 2でも対峙できる相手。

それが元凶なら、流石にダンジョンそのものを閉鎖するとは考えづらい。

……地上には、あの【おうじや猛者】がいるんだし。

「じゃあ、あの変なモンスターも、ただの『希少種』じゃなかったのかな……」

思わずと言った様子で呟かれたその独り言に、流石のフィンも少しだけ口元を引きつらせた。

(……まだ何かあるの!?)

この子たち、実はとんでもない大冒険をしてきたのではないだろうか……!

幼いアイズなんて、もう隅つこの方でガタガタ震えている。

「……その『希少種』についても、念のため聞かせてもらえるかな?」

遭遇した場所と、外見の特徴を——と、フィンの言葉に頷いてから、

「ええと、遭遇したのは一三階層で、何か凄く不気味な外見でした。大きな頭に、紅い眼がいっぱいあつて、口からは何か手みたいなのが生えてて……」

フィンが天を仰ぎ、リヴェリアが眉間を押さえ、ガレスまでが口元を引きつらせている。

何だか昔から凄く見覚えのある光景だった。

つい最近も見たような見なかつたような……。

「あの、ひよつとして……」

「話を聞く限り、呪詛カースの被害者の変容によく似ているね」

「じゃあ、あれは……あれは、人間……だったんですか？」

「……だとしても、あまり気に病まないことだ。ああなつては、私でもどうにもできん」人を殺したかもしれない。その真実に怯える少年に、リヴェリアが静かな声で諭す。

対人戦闘……『人殺し』を経験する冒険者ばかりではない。

かつての『暗黒期』ならまだしも、それが終わったこの数年の間はなおさら。

特に、この少年には最も向いていない戦闘だと言つていい。

「あれほどの変容だ。【戦場の聖女デア・セイント】ですら元に戻せるかは分からん。呪詛から解放してやるというのも一つの救いだ。誇れないにしても、負い目を感じることもない」

私達も、リヴェリアの被害者をそうした。

リヴェリアの言葉にも、少年は曖昧に頷くばかりだった。

「それに、君の話からするとモンスターも影響を受けるとみていい。何か、他に気になることはなかったかな？」

落ち着いて思い出してごらん——と、フィンが促す。

「……あまり詳しいことは分からないんですが」

少年もまた、その言葉に素直に応じた。

記憶を探るように、ゆっくりと話し始めた。

「その時一緒にいた別のパーティの冒険者が、それを見てアルミラージだって言ったんです」

それだけでは、何だかよく分からなかった。

それを察したのだろう。少年も少し慌てた様子で、すぐに後を続けた。

「ええと……その人は、それまでずっと近づいてくるモンスターを正確に教えてくれていたんです」

他所の派閥の方なので、詳しいことは分からないんですが……。

少年は改めて、そう付け足した。

「……なるほどね」

フィンが頷く。

私にも彼の言いたいことが、今度こそ分かった。

(魔法。それともスキルかな)

いずれにしても、その冒険者は索敵系の能力を持っていたのだ。

そして、その能力者が現れた異形をアルミラージュと呼んだなら……。

「ならば、それは本当にアルミラージュだったモノだろう」

「ああ。どうやら、今回の冒険はよくよくアルミラージュと縁があったようだね」

「そう、なんでしようか……」

曖昧に呻く少年に、つい声をかけていた。

「フィンの言葉は、気休めじゃないよ?」

フィンが気休めを言葉を口にするのではない。特にこういう状況では。

「リヴィラの街で暴れていた異形と、私も戦ったけど……」

彼らは元々Lv. 2の冒険者だったらしい。

ただ、実際に交戦した感触からすると、Lv. 3以上の力量だった。

仮に彼らが『中層』で遭遇した異形がそれと同格だったなら、彼らの冒険はそこで終わっていたかもしれない。

少なくとも、多少の苦戦では済まないのは間違いないことだ。

そんなことを、拙いながらも精一杯説明する。

「ああ、アイズの言う通りだ」

私の言葉に、リヴェリアもまた頷いた。

「お前が遭遇した異形は、どの程度の力量だった？」

「普通のアルミラージュより、少し強い、くらいだったと思います……」

「なら、間違いあるまい。どういう理屈かは分からないが、人間が変異した方がより強化されるらしい」

例外もあるようだが、とりヴェリアは付け足すけど……。

リヴェラの異形は、魔石を持っていなかった。これは、絶対に間違いない。

魔石があつたなら、それは間違いなく元々モンスターだった存在だ。

「それが元冒険者なら、その程度の力量ではない。そして、人間が変異した個体は魔石を持ってはいない。それは保証する。信じる」

「は、はい」

少し強引に、リヴェリアが言い聞かせた。

ひとまずは納得してくれたのだろう。

「あの……すみません。ありがとうございます」

恥じ入るように——でも、さつきとはまた違う感じだけ——少年が頭を下げた。

「なに、これくらいは慣れたものだ。それに、ウチのはねつかえりどもと違って素直でい

い」

少しは見習わせたいものだど、リヴェリアは笑った。

……私を見る目は全く笑っていなかったけど。

幼いアイズはすでに近くの木箱の中に籠城を決め込んでいた。ずるい。

「それにしても、本当に助かったよ。貴重な情報をありがとう。改めて礼を言わせてもらおう」

「そんな……」

「本当さ。おかげで、元凶がいる場所にも大体見当がついた」

「そうなんですか?」

目を瞬かせる少年に、フィン小さく笑って見せた。

「簡単な話だよ。君たちが一二階層……上層最下部まで進む間、ダンジョンはいつも通りだった。そうだね?」

少年が頷くのを見届けてから、フィンが続ける。

「その後一三階層で件の異形化したアルミラージと遭遇。一五階層に落下してからはアルミラージの『変異種』——仮にそう呼ぶけど——と交戦した」

ただ、そのどちらも元凶とは言い難い。

あくまで、元凶から生み出されたものでしかないはずだ。

「二三階層ないし一五階層からここまでの区間、君たちは運よくその元凶と遭遇しなかったのか」

暗中模索の状態で、さらにその幸運に恵まれる可能性はどの程度か。

「ないとは言い切れない。でも、ただ単に素通りしただけだと僕は考えている」

「素通り……。じゃあ、フィンさんは……」

「ああ。一四階層に元凶がいると見ている。それも多分正規ルートから少し外れた……
いわゆる『穴場』かな」

モンスターと戦いやすく、あまり知られてない空間^{ホール}。

「正規ルートからかけ離れたところだとするなら、犠牲者が多すぎる。逆に正規ルート上に存在するなら少なすぎるからね」

おそらく、『一四階層の正規ルートから程よく離れた距離』に元凶は存在する。

フィンはそう結論を結んだ。

「敵の所在や能力が見えてきた。特に場所はかなり絞り込めたと言える。全く何も分からない状態から一転してね。礼を言わないわけにはいかないよ」

「あ、ありがとうございます……」

天幕に入った時と同じような感じで、少年が頷いた。

それ見て、フィンももう一度苦笑してから。

「地上に戻れるまでに間、君たちを客人としてもてなそう。……まあ、そうは言っても配分できる物資には限りがあるけどね」

「い、いえ！　むしろ恵んでいただけただけで充分です！」

「周囲ともめ事を起こさないなら、君たちのいる天幕は好きに使ってくれていい。団員達には僕の口から伝えておくよ」

うん。それは急いだ方が良く思う。

そして、地上に戻ったらロキに復讐を挑まなくては……！

幼いアイズが勢いよくトランプを切り出し……そして、手を滑らせて盛大にばら撒いた。

(ま、負けられない……！)

信用を取り戻すためにも、絶対に——！

不吉な光景から全力で目をそらし、心に誓う。

「取り囲んでいる阻塞は、二人の正気が確認出来たらすぐに撤去させるよ」

「すみません……。何から何まで……」

「なに、これでお互いに貸し借りなし。そういうことにしておいてくれ」

フィン、最後にそういつて笑った。

「あ、あれ?!」

フィンさん達の天幕からの帰り道、アマゾネスの姉妹……ティオネさんとティオナさんと出会ってから。

まだ眠っているリリ達の看病を……というか、その真似事をしながら、念のため自分達の装備を確認する。

いくら恵んでもらえるとは言っても、「ロキ・ファミリア」は遠征の帰り道。

ここよりずっと先にある『深層』。さらに奥深くでの冒険を終えた後だ。

やっぱり物凄い激闘があったらしく、物資は残り少ないとフィンさんも言っていた。

できる限り、分けてもらう物は少なくしておきたい。

そう思って、天幕の片隅に置かれていた僕達の装備を一つ一つ点検していたのだけだ
ど……。

「ない?!」

霞さんから借りた首飾ペンダントがない。

反射的に胸元に触れるけど、当然ながらそこにもない。

ズボンのポケットを漁っても、辛うじて残っていたレッグホルダーをひっくり返してもない。

「そ、そんな!？」

い、いや。落ち着こう。

ひよつとしたら、アイズさん達が預かってくれているかも……!

「すみません、リリ達のこと、お願いします!」

天幕の出入り口を遮る垂れ幕を跳ね上げて、外へと飛び出す。

「え? どうしたつすかあ!？」

入り口の傍にいた黒髪の優しそうな男の人にひと声かけてから、とりあえずアイズさんを探す。

目覚めた時に傍にいたのがアイズさんという事もある。

何より、大派閥である「ロキ・ファミリア」の中で、知り合いと言えるのもアイズさんくらいしかない。

(た、多分いいよね!?) 知り合いだと思ってくらいなら……!)

恐れ多いような気もするけど、ここは全力で無視しておく。

じゃないと、誰にもまともに話しかけられそうにない。

何故だか殺気じみた威圧感をひしひしと感じながら、野営地の中を適当に走り回っている……

「そんなに慌てて、一体どうした?」

落ち着いた、そして玲瓏な声に呼び止められた。

別に鋭い声ではなかったけど、自然と足を止めていた。

それどころか、動揺していた思考までが不思議と落ち着きを取り戻してきたような

……。

「まさか、件の呪詛カーズの影響でも出たか？」

「あっ?!」

鋭い死線に、今さらながらに周りの殺気の原因を理解した。

(そりやそうだって!)

今の僕達は、あの黒い霧——が、呪詛カーズの正体だとするなら——の影響がないと言い切れない状態なのだ。

変なことをすると、僕どころかリリ達まで危ない。

「いえ、違います! 平気です!!」

大慌てで、周りにも聞こえるように叫ぶ。

……いや、これも挙動不審なのかも?!

「なら、少し落ち着け。深呼吸をしろ」

言われるがままに、大きく息を吸い込み——

「吸ったら吐け。まったく……!」

肺が限界を超えて、げほっ！——と、思い切り咳き込んだ。

咳き込みながら、呆れたようなリヴェリアさんの声に頷く。

……うう。さつきから醜態ばかり晒している気がする。

「それで、何があつた？」

「ぼ、僕！……ここに来た時に首飾りをつけていませんでしたか?!」

そう言えば、治療してくれたのはリヴェリアさんだ。

ひよつとしたら、知っているかも——!

「ああ、していた。そう言えば、先ほど返せばよかつたな」

ローブのポケットから、リヴェリアさんは僕の……というか、霞さんの首飾りを取り

出した。

「冒険者用装身具ではないようだったから、傷つかないように布か何かで包んでおこう

と思つたんだが……」

すまない、色々と立て込んでいてうっかりしていた。

そう言つてリヴェリアさんが小さく頭を下げた。

「あ、いえ、そんな……!」

リヴェリアさんはさつきフィンさんから副団長だと紹介されている。

もちろん、それくらいならまだ駆け出しの僕でも聞いたことがある。

遠征中なら、特に忙しいだろう。

「すみません、ありがとうございます！」

リヴェリアさんから首飾りペンダントを受け取り、首から下げてしっかりとインナーの内側に入れる。

首に感じる微かな重さに安心し、首飾りペンダントごと胸を撫でおろした。

「ずいぶんと大切なもののような」

リヴェリアさんが、小さく笑う。

「なるほど。……なかなかどうして、隅に置けないらしい」

「え？」

「それは、女性物だろう？ 良い人でも貰ったか」

「ち、違います！ 違いますから?!」

何だか一番誤解されちゃいけない人に誤解された気がする！

謎の危機感に慌てて否定する。

「そう照れることはないだろう」

「いえ、だから違うんです。話を聞いてください!?!」

慌てるあまり、何を話せばいいのかすら分からなったりするわけだけでも！

「なら、お前たちの天幕の中で聞くとしよう」

「ええ?!」

何でそんな大げさに?!

「なに、ただのついでだ」

リヴェリアさんは肩をすくめると、周りの団員に手を振って何かの合図を送った。

「団員に安全だと納得させるには、私が直接確認するのが一番楽だ」

今のお前達が挙動不審な動きを見せたとあつてはな——と、少し咎めるように横目で睨まれた。

「あ、そうですね……。本当にすみません……」

またしても迷惑をかけてしまった。

「そこまで気にすることもない。元々様子を見に行こうと思つていたところだ」

身を縮め項垂れる僕に苦笑してから、リヴェリアさんは天幕に向かって歩き出した。

その背中を追つて、僕も借りている天幕に戻る。

結構走り回つた気がしたけど、まっすぐ帰ればそこまでは離れていなかった。

特にエルフの団員の方が不審そうな目を向けてくるけど、それは仕方がないことだ。

「ふむ。特に問題はないようだ」

天幕に入つてすぐ。

慣れた手つきで、リリとヴェルフの傷を確認したりヴェリアさんが言った。

「さて、それでは話を聞かせてもらおうか？」

少し後ろで正座している僕に、リヴェリアさんが小さく笑う。

「え？」

「のろけ話を聞いて欲しいのだろうか？」

「だから違うんです?！」

少し意地の悪いその笑みに、リリ達が寝ているのも忘れて叫んでいた。

「これは、霞さんが貸してくれたんです。『中層』に進出する前に、『お守り』だからって

——…」

と、そこまで言ってから、ふと思いつく。

（あ、ひよつとしてクオンさんの名前を出したらマズいんじゃない?！」）

理由はともかく『神殺し』だ。

リリからもあまり名前を出さないようにと言われていた。

「霞? もしや、クオンのマネージャーか?」

「ええと……」

曖昧に呻くものの……その翡翠色の瞳の前に、隠し事などとてもできそうにない。

まるで神様に見定られているかのようだ。

これが、^{ハイエル}王族の威厳というものなのだろうか。

「別に気にすることは無い。奴とは、それなりに因縁がある」

今さら奴が『神殺し』を犯したところで、驚く気にはなれん。

零れ落ちた深いため息は、演技でも何でもなさそうだった。

それこそ相槌に困り、曖昧に顔を引きつらせる。

「ああ、だが。君が耳にしているかもしれない私と奴の関係は、明確に否定しておく」

「はい！」

掛け値なしの本気。

L v. 6にして王族たる威厳を前に、背筋を伸ばして全力で返事を返す。

「それに、彼女とは私も何度か言葉を交わしている。直近で言えば、今年のファイリア祭で
な」

モンスターやデーモンが暴れるまでは一緒にいた。

思わぬ言葉に、目を瞬かせる。

「よく似ていると思ったが、本当にあの娘のものだったか」

リヴェリアさんは、小さく肩をすくめてから、

「私としてはむしろ、お前が奴と関りがある方が驚きだな。何があつた？」

「村の……僕の故郷の恩人なんです」

「恩人？」

「はい。二年位前なんですけど、僕達の村にコボルトの大群が攻めてきたことがあつて
——」
「いつだったか、神様に話したようにクオンさんとの出会いをリヴェリアさんに説明する。」

「なるほど。……まあ、外のコボルトなどいくら集めても奴の敵にはなるまい」

「それで、お祖父ちゃんが、お礼にしばらく泊まっていくといいつて……」

「恩人の孫というのは、そういう意味か」

「ええ。助けてもらったのは僕達の方なんですけどね」

「宿一飯の恩義だと、クオンさんは笑っていたけど。」

「もしや、その『火』はその時に？」

「ええと……」

間違いない、《呪術の火》の事だと思っただけ……。

「いや、すまない。少々不作法だったな。他派閥の冒険者の【ステイタス】を問うなど……」

そう言えば、治療の際に背中を見られてはいないだろうか。

リヴェリアさんも神聖文字ヒエログリフは読めるだろうし……。

「ミノタウロスと戦っていた時に、奴と同じ魔法を使っていたからな。気になっていた

んだ」

「村で、ではないです。村では簡単な剣の振り方と、『冒険の仕方』を教えてもらっただけで……」

それに、もう物凄くお世話になっている。

今回だけじゃなくて、ミノタウロスの時も、僕とリリの傷を癒し、地上まで運んでくれたのがリヴェリアさんだと神様から聞いています。

なら、僕に答えられるだけのことは答えるべきだ。

「冒険の仕方？」

「水を手に入れる方法とか、火を熾す方法とか、危険を見落とさないコツとか、とつさの時に身を守る方法を。あと、少しだけ剣の扱い方も……簡単にですけど」

その中で、猪に追い回されたり、蜂に追い回されたりしたけど。

「……あいつにしては、随分とまともだな」

「そうなんですか？」

「アイズの時もそうなら、私達の……【ロキ・ファミリア】との関係ももう少し違っただろう」

もつとも、それに関しては自業自得なのだが——と。

眉間を揉みながら、リヴェリアさんが呻く。

「まあ、今さらではあるが。三割はアイズのせいだ。残り二割はロキとベートだな」
残り半分がクオンさんのせいなんだろうな……とは思ったけど。

流石に口には出せず、それについては沈黙を守ってから、

『火』はオラリオで、冒険者になってからです」

「やはり、奴と同じ魔法だったか」

奴の魔法は、他者に教えられるのか……。

僅かな驚きを宿した声で、リヴェリアさんが小さく呟いた。

「時に、お前はそれを誰かに伝えられるのか？」

「え？」

問われて、思わず目を瞬かせていた。

クオンさんが僕にこの《呪術の火》を分けてくれたんだから、僕だって誰かに分けられる。

そして、【ぬくもりの火】だって誰かに教えられるはずだ。

……と、思うけど。

「えつと……。すみません、そのやり方までは教わってなくて……」

まだ火を育てろとしか言われていない。

「なるほど。あいつらしい」

その言葉の真意は分からなかったけど。

やっぱり、クオンさんとリヴェリアさん達は、あまりいい関係にないのだろうか。

「あの……」

少し迷ってから、意を決して問いかける。

「リヴェリアさん達は、クオンさんの事が嫌いなんですか？」

そして、クオンさんも嫌っているのだろうか。

……それは、ちよつと嫌だなと思う。

あくまでも僕の事情だけ……どちらにも、僕にとっては大切な恩人なのだから。

「なかなか答えにくいことを訊く」

リヴェリアさんは苦笑したようだった。

「『達』という言葉に、どこまでを含めるかにもよるが……。私個人としては、特別嫌い

という訳でもない。もちろん、好きという訳でもないが」

顔を見れば会話くらいはするが、噂にあるような関係になろうとは思わない。

個人的な話なら、知人の一人。そういうことらしい。

「派閥としても、明確な恨みや憎しみがある訳ではない。……いや、アイズの傷を見た時

に憎しみを抱かなかったと言え、嘘になるが」

それは個人的な話だと、リヴェリアさんは付け足した。

ああ、この人は本当にアイズさんの事を大切に思っているんだと。

ほんの一瞬だけその目に宿った険しさに、改めてそんなことを思う。

「だが、それとて事の真相を知れば、お門違いというのも分かる」

「そうなんですか？」

「ああ。あれはアイズから戦いを挑んでいたせいだからな。殴りかかったせいで、殴り返された。それでなお恨むというのは、逆恨みでしかない。派閥としても、個人として
も」

それでも、心情的にはなかなか納得しづらい事だが……と、こめかみ辺りを指で掻きながら、彼女が呟く。

「戦いを挑んだって……」

「あの子は、あれでなかなか負けん気が強い。階層主に一人で戦いを挑む程度にはな」

困ったものだ——と。本当に困り切った様子で、リヴェリアさんがため息を吐く。

(まるでアイズさんのお母さんみたいだ……)

さっきの表情も含めて、そんな考えがちらりと脳裏をかすめていく。

「急に名を挙げ始めた奴に興味を持ったのも不思議ではない」

「でも、訓練に付き合ってほしいなら、何だかんだ言って付き合ってくれと思うんです

けど……」

「というか、初めてお願いした時も少し困ったような顔をしたくらいで普通に教えてくれたし。」

そんなことを思い返していると、その記憶を再演するようにリヴェリアさんが困ったような顔をした。

「奴の本職は剣闘士だという話は聞いているか？」

「え、ええ。それで、霞さんがマネージャーなんですよね」

「ああ。なら、奴の謳い文句はどうだ？」

「ええと……」

この前ミアハ様たちとセオロの密林に行った時に、行きの馬車で聞いたような……。

確か——…

『『剣の切つ先より死に近い』、ですか？』

「そうだ。お前は、きつとピンとこないだろう？」

「……はい」

他に返事が思いつかず、素直に頷く。

「ダンジョンの中ならともかく、普段は呑気な人ですよ。時々、神様と取っ組み合ってますけど……」

「というか、割と容赦なく締め上げているけど。」

「……どうやら、神ヘスティアは相当な神格者のようだ。何が理由かは知らないが、口キならそのまま殺されている」

柳眉をひそめ、リヴェリアさんがため息を吐いた。

「そ、そこまでですか……？」

理由つて、ジャガ丸くんは何味を選ぶかだったりしたこともあるんですが。

思わず呻くと、リヴェリアさんはあくまで大真面目に、

「口キならそれでも殺されかねん」

と、重々しく呻く。

「ええー……」

真剣な話なのは分かっているけど……思わず気の抜けた声を漏らしてしまう。

何だか、僕の知っているクオンさんは同名の別人なんじゃないかって気がしてきた。

「四年前、私達が初めて出会ったときの奴は、それほど荒れていたという事だ」

肩をすくめて言うリヴェリアさんに、表情を引き締めて頷く。

四年前は荒れていたというのは、ミアハ様やナーザさんも言ってたし。

「当時は幼かったからまだ良かったものの……。今のアイズが真似をしたなら、本当に殺されかねん」

四年前なら、一二歳になったかどうかくらいだろうか。

ちやうど、僕が初めてクオンさんと出会ったくらいの年頃だ。

「まあ、その辺りの事は良いだろう。私達としても、あまり口外したくはない」

敗北の記憶だからな、と。リヴェリアさんは確かにそう言った。

「とはいえ、私達の派閥で奴に殺された者は一人もいない。殺されかけた者なら、他にも何人かいるがな」

だから、憎しみと言えほどの感情を抱く明確な理由はない。

「大体、奴と直接接点がある団員の方が少ないからな。派閥を上げて奴と対峙する理由は、精々が感情論くらいしかない。……もつとも、今の奴は『神殺し』だ。ギルドから強制任務が出されたならその限りではないがな」

それを考慮しないなら、オラリオの冒険者全体を見回しても同じことだ。

リヴェリアさんの言葉に首を傾げた。

「なら、どうして……」

「だから、答えにくいことを訊くと言ったのだ」

肩をすくめながら、リヴェリアさんが続ける。

「見栄か。嫉妬か。やつかみか。概ねそんなところだろう」

「見栄、ですか？」

「L v. 0……冒険者ではない奴が、冒険者より強い。それが気に入らない。言葉にし

てしまえば、多分その程度の事だ。多くの者にとつてはな」

思考が追いつかず、ただ意味もなく目を瞬かせていた。

目の前にいるエルフは、聡明で、思慮深く、公正な人物だ。

短いやり取りでも、それは充分に分かる。

だから、その答えの短落さがとても奇妙に感じられた。

というより、彼女自身がその短落さに——どれくらいかは分からないけど——理解を示していることが。

「馬鹿げた理由だと、私も思う。だが、奴の存在が冒険者の沽券を揺るがすというもの、分らないではない」

「はあ……」

「神々が降臨してより千年。先人たちが、そして仲間たちが重ねてきた犠牲。今ある名声や栄光はそう言ったものの上にある。それを軽々と越えていかれてはな」

認めるわけにはいかない。そんなつまらない意地こそが、多くの冒険者がクオンさんと対立する原因なのだ。

リヴェリアさんはそう言った。

「ロキを含めた多くの神々にとつては、案外それが一番の理由かもしれない」

自分たちの娯楽に水を差す存在。まして、それが容赦なく自分たちを殺しに来るとな

れば。

言葉を失ったままの僕に、リヴェリアさんはもう一度だけ肩をすくめて。

「ロキ・ファミリア」の首脳陣というなら……。そうだな、得体が知れないからと
いうのが大きい」

伊達に奴は「イレギュラー正体不明」などと呼ばれているわけではない——と。

それは、少しだけ分かる気がした。

『未知』というのは、必ずしも胸が躍るものばかりではない。

ほとんど手探りで進んできた『中層』は……そして、あの『強化種』との遭遇は、高揚ではなく、単純に恐怖を呼び起こすものだったから。

「お前も巻き込まれた件の呪詛カース。もしくは、デーモン擬き。フィリア祭で現れたデーモンもだが。そういった異常事態イレギュラーの多くに、奴は関わっている」

もちろん、今の時点では奴こそが元凶だと言い切ることはとてもできないが。

「今回の遠征でも、デーモンにはずいぶんと手を焼かされた。幸い、犠牲者は出なかったが、次もそうだと樂觀する気にはなれない」

犠牲が出る前に、手を打ちたい。

それは、切実な言葉だった。

「手を打つには、情報が足りん。だが、奴は肝心な部分を明かさない。決して、ではない

がな」

翡翠の瞳は、僕の手を……そこに宿せる《呪術の火》を見つめていた。

「オラリオで何だかよく分からないことが起こっていて。何だかよく分からない奴が深く関わっている。警戒するなという方が無理がある」

「それは……」

いや、でも。確かに、僕だってクオンさんについて、特別詳しく知っているわけではない。確かに、僕だってクオンさんについて、特別詳しく知っているわけではない。

それに、昔の話をあまりしたがらないのは僕も知っていた。

(昔の話……)

アンジェさんを……神様も知らないような、奇妙な世界の話をしてくれたあの人を思い浮かべる。

多分、クオンさんはアンジェさんと『同郷』なんだと思う。

それ以上の事は、さっぱりだけど……せめて、そこだけでも話した方が……。

『いいかい、ベル君。アンジェ君の事は、絶対に誰にも話したらいけないよ』

そこで、神様の言葉を思い出した。

『特に他の神には。あの子の事を知ったら、絶対にろくなことを考えないからね』

無遠慮に傷を抉りに来るに決まってるぞ。

神様の真剣な瞳が、形になりかけていた言葉を霧散させる。

「まあ、私達と奴の関係はそういうことだ」

そして、奴にとつても、私達は情報を渡したくない存在だと考えていい。

リヴェリアさんは肩をすくめた。

「言い訳にも聞こえるだろうが、派閥間の横の繋がりというのは基本的に希薄だ。それどころか、抗争状態になることも珍しくはない。あるいは、それを想定して探り合う事もだ」

無論、奴は派閥ではないが——と、付け足す。

そういえば、アイズさんとの特訓中——と、いうか。神様にバレた日の夜に、どこかの派閥に襲われたけど……。

「奴との関係性そのものは、決して珍しいことではない」

他派閥の冒険者間だとするならよくあることだ。

リヴェリアさんはにそう結論してから、

「最後に、一人の冒険者としては……奴が冒険者の栄光を灰で埋めるなら、それを払い除けねばならないとは思っている」

灰に埋もれたままではいられない。お前もそうは思わないか?——と。

少し悪戯っぽくりヴェリアさんは笑った。

思わぬ仕草にドキドキしながら……少しだけ、安心もした。

認めたくないというのは、自分たちの敗北を認めたくない……諦めたくないという意味でもあるようだ。

それなら、僕だつて分らないことはない。

多分、そういう諦めの悪い人種が、冒険者と呼ばれているのだと思うから。

「それにしても……話を聞くつもりが、すっかり話す側に回ってしまったな」

案外と、お前は人誑しのようだ。

「そ、そうですか？」

リヴェリアさんの言葉に、首を傾げる。

「自覚がないのが厄介……いや、だからこそか」

呆れたような、それでいて何となく微笑ましそうにリヴェリアさんが笑う。

何だか凄く気恥ずかしくなって、思わず視線を逸らしてしまった。

僕のそんな様子にもう一度笑うと、

「もうしばらくしたら、夕食になる。その頃には、彼女達も目覚めるだろう。それまでは、ゆっくり体を休めていると良い」

そんな言葉を残して、リヴェリアさんは天幕を出ていった。

「あ、ありがとうございます！」

その背中にお礼を言つて——足音が遠ざかるまで、頭を下げる。

「んっ……」

ヴェルフとリリが、ほとんど同時に小さく身じろぎしたのはそのすぐ後の出来事だった。

……

(まさかあれまでがクオンと繋がるとは……)

そろそろ夕餉の支度が始まる野営地を歩きながら、胸中でうめく。

どういうわけだか、今オラリオに燻っている厄介事の火種は概ね奴の傍に集まっている。

これはいいよ、奴の素性を暴くしかなさそうだった。

(ベル・クラネルも、何かしらクオンの素性について知っている)

それは、間違いない。実際に何かしら言いかけていた。

思いとどまったのは、奴自身に口止めされているから……。

(いや、違うな)

あの少年がその言いつけを守れると、果たして奴が考えているかどうか。

おそらく、考えてはいないだろう。

(となると、口止めたのは神へステイアか)

ロキから聞く評判は、明らかに私怨が混じっていて当てにならない。

それより、あのクオンがそれなりの関係を築いているらしい事実注目すべきだろう。

と、なると……。

(神へファイストスや、神ガネーシヤのような神格者ということになるか)

その女神が話すなど念を押したとするなら……それが露見すればベル・クラネルにも不都合が生じる。

いや、無関係なあの少年すら巻き込まれかねない何かが起こるといふ事になる。

(この場合、誰がその騒ぎを起こすかだな)

あの少年が私に話そうとしたことから察するに、神へスティアが知られなくないのは他の神々だ。

……まあ、それは想定して然るべきことだろう。

仮にロキがそれを知ったなら、彼の口を割らそうとするのは想像に難くない。

(その場合、神へスティアではなくクオンが黙っていないさそうだな)

そういった事態は、どう考えてもお互いのためにならない。

それよりもまずはベル・クラネルとの繋がりを保つておくべきだ。

このまま良好な関係が保たれるなら、いずれは仲介役を務めてくれるかもしれない。

——とはいえ、早く情報が欲しいというのも偽らざる本心だった。

(やはり、「クアト・ファミリア」……あの治療師ヒューラーと接触を取るしかないか)
名も知れぬ奇妙な女冒険者。

だが、彼女はクオン……というより、「闇の王」なる存在に関して何かしらの情報を持つているとみていい。

それだけを鵜呑みにするのは危険だろうが、調査の指針くらいにはなる。

(それは後でフィンに相談するとして……)

もう一つの懸念を胸中でうめいた。

(ベル・クラネルに、あの首飾りを持たせておいて平気だろうか)

いや、霞が普段から身に着けているのだから、気にするのもおかしな話だが……。

(彼はとんだトラブル体質のようだからな)

大体は神フレイヤのせいだと思っていた……いや、ミノタウロスに関しては私達のせいでもあるが。

まさか、それ以外にも何だかよく分からない事態に巻き込まれているとは。何というか……アイズとはまた別の意味で危なっかしい冒険者のようだ。

そんな彼が、さらなる爆弾を抱えているというのは、どうにも落ち着かない。

(とはいえ、彼がエルフと接触しない限りはさほどの問題はないか)

昨今ではそれが何を意味するか知らない同胞エルフが増えてきていると聞く。

特に、オラリオ生まれオラリオ育ちの同胞エルフの間ではほぼ完全に失伝しているとも。

(単に霞もそうだという、それだけの話かもしれない)

あの娘について、さほど詳しいわけではないが……可能性としては、その方が高いようにも思える。

別に彼女が悪い訳ではなく、元々その情報は抹消する方向で事態が進んでいるだけの話だ。

このまま計画通りに進むなら、いずれ全ての同胞エルフの中から忘れられていくのだろう。しかし、今の時点ならまだ厄介事の火種となる。

この野営地にいる同胞エルフなら、それが何なのか分からないはずがないのだから。(レフイーヤは問題あるまい。……何故か彼を目の敵にしているようだから)

あの娘が悪印象を抱くようなヒューマンには思えなかったが。……まあ、人間関係などいつだって奇妙なものか。

(私達とて、これほど長い付き合いになるとは思わなかったからな) フィンとガレス、そしてロキの顔を思い浮かべて独り言ちる。

自分たちを鑑みれば、そこまで不思議とも言い難いか。

派閥内での悪関係なら憂慮すべきことだが、お互いに派閥が違う。

休息中に騒ぎさえ起こさないなら、そこまでの問題にはなるまい。

(他に危ないのはアリシア辺りだが……)

それこそベル・クラネルとは接点がない。

ペンダントトップの裏側などそう見せるものではないし、何かの弾みで裏返つたとしても、よほど傍で注視していない限りは気づくまい。

念のため監視を任せているラウルやアキは、そもそも意味を知らない。

(やはり、そこまで神経質になることはないか)

よほどの事がない限り、あの火種が燃え上がることはあるまい。

ひとまず、そう結論を結んだ。

(それにしても、少し無駄話が過ぎたかもしれん)

おおよそ冒険者らしからぬ少年を思い出し、小さく嘆息する。

まだキャリアが短いというのもあるだろうが……仮にも上級冒険者の仲間入りをしたというのに、まったく擦れたところを感じない。

王宮に生まれ育ち、出奔してからも長らく冒険者をやっている私ですら、つい警戒心が緩んでしまった。

あれを演技でやっているなら、オラリオ史に名を遺す大人物か大悪党になれるだろう。

だが、天然なら……あんなにも無垢なままこの先も冒険者をやっていけるのか。思わずそんな不安すら覚えるほどだ。

(なるほど、エイナが入れ込む訳だな)

つい先日、ホームを訪ねてきた昔馴染みを思い出す。

物覚えが良いかどうかは、流石に判じ切れなかったが……しかし、素直さと真摯さを兼ね備えているのは間違いない。

教えたことは少しでも物にしようとする。その努力を怠る手合いではなさそうだ。

エイナも、さぞかし指導のし甲斐があるだろう。

(……まあ、この飛躍まで想定できていたとは思えないが)

中層に進出したその日のうちに一八階層到達。

しかも、道中でデーモンらしき存在と交戦、撃退して全員が生存。流石に撃破とはいかなかったようだが、十分な壮挙だ。

ただ、そんな話をエイナが聞いたなら……頭を抱えて机に突っ伏す姿が目に見えよう。うだ。

そして、次からはそんな事態をも想定してあれこれと教え込むようになる。

(さて、私ならどう教えるか……)

戯れに、そんな想像を巡らせてみる。

まずは『中層』域全て……念のため『下層』についての基礎知識。

今回の実績を踏まえるなら、当然ながら『下層』も『安全階層』……二八階層辺りまで仕込んでおかなければなるまい。

だが、あの階層には拠点がない。救援隊が到着するまで生き残るための手段も一通り教えておく必要がある。

もちろん、それ以外の階層についても同じだ。

地形的な特徴。危険性。出現モンスターとその対処法。

また、まだ冒険者になって一ヶ月半の駆け出しだという事も考慮する必要がある。

先ほどの『強化種』に関する質問は、異例中の異例に遭遇したせいだとして。

それでも、基礎的な知識が不足しているのは否めない。

本来なら、まだ『上層』を探索しながらそういった基礎知識を身に付けている段階だ。

上級冒険者としての知見と、駆け出しとしての知識。これからは、それを同時に身に付けていく必要がある。

しかも、彼がもしこのままの速さで成長し続けるなら、それに合わせて短時間に教え込まなければならぬ。

(やりがいはあるそうだな)

すぐに思いつく範囲でも、相当な資料を用意する必要がある。

そのうえで、効率よく組み合わせ、まとめて覚えさせていかなければ間に合わない。想像の中で次々と積み上がっていく種々の文献や資料書。

それを前にして、少年が机に突つ伏して頭から煙を立ち昇らせ……何故だか隣のアイズとレフイーヤまでが目を回して倒れていた。

(まったく、困った娘たちだ)

アイズとレフイーヤはともかくとして。

彼に関して言えば、そう遠くないうちにこの想像が現実のものとなるだろう。

もちろん、教鞭を振るっているのは私ではなくエイナだろうが。

(精々励むと良い。きっとそれはお前の血肉となる)

真剣な面持ちで教鞭を振るうエイナと、必死に食いついて行こうとする少年。

ああ、ガレスではないが……

「なかなか面白い少年だ」

その二人の姿を想像すると、思わず笑みがこぼれた。

第二節 深淵を覗く時——…

1

一六階層でヘステイア……もとい、ヘスとテイアとその仲間たちを拾ってからしばらく。

「さて、あちらに見えますが一七階層の名所。『嘆きの絶壁』となります」

俺達は一八階層へと通じる連結路前……正確にはそれよりもう一つ前までたどり着いていた。

迷子の搜索もかねていつもより余計に回り道をしてきたせいで、想定より少し遅くなったが……。

「えっ、名所？」

「絶壁って……。ロキの奴、こんなところで何してるんだい？」

適当なことを言いつつ進路先を示すと、霞とヘス——いや、テイアだったか？——が、ひよこんと覗き込んで——

「ほああああああつ!? ロキの癖に何かでつかいぞおおおおおつ!?」

ティアが絶叫するので、その口を塞ぎつつ、霞を連れて通路の陰に引っ込んだ。気づかれたら流石に少し面倒なことになる。

「あれが階層主ってやつなの？ 本当でつかいわねえ……」

「ああ。やはり、ゴライアスはもう産出されていたか」

霞の問いかけに、シャクティが少しだけ肩をすくめた。

別に遠回りしたせいだとは思わないが……。いずれにせよ、面倒なことになりはしない。

何故だかいつもより豪快にベチベチと腕を叩いてくるティア——と、いう事にしておこう——を抱えながらぼやいていた。

「まあ、ベル達が素通りできていれば、この際それでいいか」

通行人が来ないせいか、大人しくしている灰色^{ゴライアス}巨人の足とも辺りを見ながら、肩をすくめる。

「ところで、クオン。そろそろ手を放してやれ」

「うん？」

シャクティの言葉に、よく分からないまま両手を放す。

当然ながら、ヘスダかティアだかはそのまま地面に落ちるわけだが……

「鼻まで塞ぐなあ！ あと、両手とも離すなあ!？」

意外と元気そうに顔を上げ、そのまま叫んで見せた。

「あ……悪い」

いかん。一山超えたことで、少しばかり気が抜けているのかもしれない。場合によっては一八階層こそが本番だというのに。

「それと、『嘆きの絶壁』ではない。『嘆きの大壁』だ」

「……いや、それは別にどっちでもいいだろう？」

どちらにしても、大して変わらないだろうに。

「前回討伐したのは、おそらく『ロキ・ファミリア』だと思えますが……」

何故だかため息を吐いてから、リユ……もとい、ヘスが呟く。

「ああ。次産期間インターバルは二週間。順当に考えれば、今日だな」

シヤクティが頷いてから、小さく呟いた。

「産出されているのは仕方がないとして、彼らは間に合ったのか……」

「とりあえず、ベル達らしき死体は落ちていない」

遠眼鏡を使つて見回すが、それらしいものはない。

骨が欠片も残さず貪られ、血痕まで消え失せるほどの時間差があるとは思えない。

大体、ヘスティアが平然としているのだ。ベルの生存はまず間違いなかった。

「確かにL v. 2なら強引に突破できる可能性もあるが……」

「あのベルに、リリルカ達を置いていけるほどの度胸があるとは思えないな」

「ええ。私もそう思います」

「当然だろ！」

シヤクテイの言葉に肩をすくめると、リユートヘステイアヘスとテイアまでが頷いた。

「となると、三人とも突破したか。大したものだ」

「うむ。やはり、人の噂というのは当てにならないものだな」

シヤクテイの言葉に、ソラールまでが感心したように頷く。

「噂？」

「一ヶ月半でランクアップって前代未聞でしょ。だから、何かインチキしたんじゃないかって噂があるのよ」

首を傾げると、霞が呆れたように言った。

「あいつがそんな器用な真似できるとは思えないがな」

特に、俺が思いつくインチキを実行できるとはとても思えない。

大体、あれはあくまで一時的なものだ。どうせすぐにバレる。

今ではウラノスギルドのボスの知るところでもある訳だし。

「あまり気にすることはありません。名を挙げた冒険者の宿命のようなものです」

「そうだな。……だが、正直に言えば疑う気持ちも分からないではない。同じ冒険者と

してはな」

「ま、よりによって一ヶ月半だからね。私も思わず目を疑ったよ」

「そういうものか」

リユー達の言葉に、まとめて頷いておく。

今まで次から次に現れる格上の化け物どもと殺し合い、転げ落ちるようにソウルの力を高めてきたせいとか、正直あまりピンとこないが……。

「それにしても、あれが階層主ですか……」

「凄い威圧感……」

黒髪を結った娘と目元を隠した娘……確か、命と千草と言ったか。

見事に気配を断ちながら、通路の先を眺めていた三人のうちの二人が、畏怖すら宿った声を上げた。

確かに、このダンジョンにおける最初の尋常ならざる敵だ。

圧倒されても何ら不思議ではない。

見たところ、まだ新人のようだし……何より、生者だ。

俺達のように、死んだら篝火からやり直せばいいとはいかない。

強敵の前に、慎重になるのはむしろ必然だ。

「どうするつもりだ？」

ヘスティア一行の中で唯一の男——確か桜花と呼ばれていたか。彼が険しい面持ちで問いかけてくる。

「見ての通り一本道だからな。ここを突破しないことには一八階層に到達できない」
わき道を作ろうにも、この大穴は勝手に塞がっていく。

……まず間違いなく、どこかに抜け道があるはずだが、生憎と場所が分からない。
現時点では、是が非でもここを突破するしかないわけだ。

「その娘たちを守りながら駆け抜けるというのは、少々危険ではないか？」
霞たちを見ながら、カルラが言う。

同意見だった。常人と変わらないヘスティアの体力を考慮すれば、全力で広間を駆けるのは少なからぬ危険を伴う。

この場所を安全に進もうと思うなら……

「やはり倒すしかないか」

「ああ。その方が安全だろう」

少し面倒だが、仕方がない。

肩をすくめると、ソラールが頷いた。

「……階層主と戦うのか？ この人数で」

「いや、流石に全員で突っ込む気はない。背後から『深淵種』に襲われては面倒だからな」

折角、これだけ人数がいるのだ。ここは役割分担をしておきたい。

その方が、お互いに楽ができるはずだ。

「そいつが言いたいのは、そういう事じゃないと思うけどねえ……」

何故だかアイシヤが肩をすくめてから、

「具体的には、どうするつもりだい？」

ふむ——と、小さく唸る。

先ほど、オルクス眼晶經由でフェルズから連絡があつたが、どうやらギルドが『保護』していた冒険者の中にリヴィラの住民が複数混ざっていたらしい。

何でも、引き留めるギルド職員に食つて掛かり、興奮状態——つまり、『要警戒』と判断され、今まで隔離されていたそうだ。

(あの街の連中は、基本的に柄と口が悪いからな)

……いや、オラリオの冒険者も大差ないような気もするが。

何であれ、緊急時だ。ギルド職員もいちいち相手にしきれなかったのだろう。

それはともかくとして。

彼らの証言からするとリヴィラの街そのものが『深淵』の影響を受けているわけではなさそうだ。

正直、その情報はもつと早く欲しかったが……まあ、今さら言っても仕方がない。

ベル達がいるなら、まったくの無駄足という訳でもない。
ただ、問題は……

（あの小人どもがまだいるなら……）

包囲網を敷き、上から来る何かを待ち構えているとみていい。

……いや、正直に言えばここまでの道中で遭遇しなかったのが不思議なくらいだが。

（ベル達をどう扱うにしているかだな）

生きてはいるだろう。それは間違いない。

だが、どんな待遇を受けているかは不明だ。

最悪は実力で奪還する必要があるかもしれない。

もつとも、こちらにもシャクティが……何より主神たるヘステイアがいるので、いき

なり敵対することにはまずならないと思うが……。

……いや、状況次第ではヘステイアの号令の下で開戦する可能性もあるか。

「ここは短期決戦だな」

しかし、今の時点で優先して警戒するのはやはり背後だ。

霞とヘステイアがいる以上、対応が僅かに遅れただけでも致命的なことになりかねない。
い。

「アイシャ、シャクティ。リュ……ええと、ヘス。あと、そっちの三人も。悪いが、背中

は任せた」

正確には、霞とヘステイアを任せたい。

「え？ 覆面君の方がお姉さんなのかい？」

どこからか聞こえてきたそんな問いかけを、どこへとも聞き流してから、

「お前は どうする？ あれは一応、ここまでの間では一番まともなソウルの持ち主だが

……」

もし残るなら、代わりにアイシヤかシャクテイを連れて行こうか。

そんなことを思いながら、問いかけた。

「あーうー……」

その不死人——確かアンジエとか呼ばれていたか——ではなく。

彼女に視線を向けられたヘステイアがしばらく呻いてから。

「無理しちゃダメだぜ？」

「承知いたしました」

どうやら、決まったようだ。

「ソラール。カルラ。お前達もそれでいいか？」

「ああ、任せておけ！」

「仕方がない。もう少し体をほぐすでしょうか」

「よし。なら、手早く済ませよう」

素早く、しかし音をたてぬように通路を移動する。

「ほ、本当に四人で行くおつもりなのですか?!」

「落ち着け、【絶†影】」

「ええ。それよりも、覚悟を決めておいた方が良くと……」

「あの……。覚悟って、どういうことですか?」

「下手すると心を折られかねないってことさ。『アッシュ・オウ・シンダー灰色の悪夢』って呼び名は伊達じゃな

いよ」

……何だか、後ろで酷いことを言われている気がしてならないが。

何でわざわざ同行者の心を折らなければならぬのか。

大体、道中の動きからして、その三人の方が俺よりもずっと才能に溢れているだろう

に。

「三分もあればなんとかなるだろう」

何となく釈然としないまま、ゴライアスを見やる。

「おや、ずいぶんと大人しいことを言うようになった。やつと落ち着きというものを身

に付けたか?」

クスクスとカルラが喉を鳴らす。

「なら、一分で片を付けてやる」

大体、ソラールとカルラがいるのだ。

気合を入れていかないと、センの古城のアイアンゴーレムと同じように、ほとんど見ているだけで終わりがかねない。

普段ならそれでもいいが……今は後ろに霞とアイシャがいる。

流石に、あまりみつともない真似はしたくなかった。

シヤラゴアには笑われそうだが……幸か不幸か、まだ見栄という感情も少しくらいは残っている。

「ウワツハハハッ！ それでこそ我が友だ！」

いつも通り快活に笑いながら、ソラールがタリスマンを握りしめる。

「やれやれ、余計なことを言ってしまったかな」

苦笑しながら、カルラが杖を構え——

「これが巡礼者か。豪気なことだ」

最後の同胞……アンジェもまた、タリスマンを握りしめた。

「どうせなら、魔術師も欲しかったな」

手に『火』を宿しながら、肩をすくめる。

「うん？」

「まだ闇術という言葉がなかった時代のソラールが首を傾げ、
「ああ、なるほど。確かに」

そして、カルラが小さく笑った。

まあ、ロスリックでも闇術という言葉は忘れられていたのだ。
すべての系統が揃っていると書いてもいいか。

「奇襲を仕掛けて、そのまま押し切る。いいな？」

「もちろんだ」

我らが姫君……イザリスの娘らから下賜された混沌の炎。

かつて古竜を討ち、『霧の時代』に太陽の光をもたらした雷。

黄金の魔術の国の最後の遺産。名も知れぬ小人が見出した闇。

(これはまた、随分と珍しい奇跡を使う)

そして、かつて神々の時代を偲んだ者たちが用いた光輪が開戦を告げる烽火となつた。

……

「うわあ……。でっかいロキがもうボロボロになつてる……」

神ヘステイアが目を丸くして言う。

……いえ、相手は神ロキではなく階層主ゴライアスですが。

「相変わらず容赦というものを知らない男だ」

「ええ。ですが、相手は階層主です。手加減は無用かと」

「それに、アイツだつて手加減くらいはできるわよ？」

「そうなのかい？ ……いや、できなきや剣闘士なんてやってられないか」

一方で、【象神の杖】アレンクーンヤたちは周囲を警戒しながら、ため息交じりに言いあっている。

「な、なるほど……。これは、覚悟が……」

「いる、かも……」

「そうだな……」

俺達とはいえば……もはや言葉もなく立ち尽くすしかなかった。

あれほどの威容。あれほどに圧倒的な存在感を放っていた階層主が今や片膝をつき、瀕死の有様だ。

もちろん、ゴライアスは冒険者たちが最初に経験する階層主である。

二週間前にも、おそらくは「ロキ・ファミリア」たちが討滅していったはずだ。

とはいえ……

(戦闘の展開が早すぎる)

いや、オラリオに名を馳せるかの英傑たちならば、やはりこれほど早く追い詰められるのかもしれない。

しかし……少なくとも【イレギュラー正体不明】はギルド公認のLv. 0だ。

他の二人は分からないが、アンジェという女騎士はおそらくLv. 1。

(これは確かに、心が折られかねんな)

彼我の力量差を思い知るばかりだ。

無論、俺はまだLv. 2。武神たるタケミカツチ様どころか、オラリオ最強のLv.

7にすら遠く及ばない身だ。

我が身の未熟さは承知の上。

同じ冒険者なら素直に賞賛し、憧憬を抱く……あるいは、精々が嫉妬するくらいで済む。

だが、『ファルナ神の恩恵』をその身に宿さない存在がこれとは。

オラリオで紡がれてきた英雄神話。輝ける栄光を灰色に染める悪夢。

目の前にある光景は、確かにそう言ったものだった。

(なるほど、『アッシュ・オブ・シンドラー灰色の悪夢』とはよく言ったものだ)

呻く俺の目の前でついに巨人は地に伏し、その首を容赦なく『アッシュ・オブ・シンドラー灰色の悪夢』が斬り飛

ばした。

さらに返す刃で胸を搔つ捌き、今まで見た事もないほど巨大な魔石を回収している。

「終わったな。……時に、どれくらいかかった？」

「測つてはいませんが、およそ一分といたったところでしよう」

「そんなところだろうね。……分かつちやいたけど、本当に可愛げのない奴らだよ」

魔石を失つた巨体が、本物の灰となつて霧散していく。

その灰によつて、異様な戦士たちの姿がかき消された頃。

「どう、私自慢の剣闘士は。凄いでしょ?」

ある意味異様なその光景を、まったく恐れもせず……むしろ、誇らしそうに霞という女エルフが胸を張つた。

やはり、彼女もまたイレキユラー「正体不明」の関係者という事なのだろう。

「はいはい。凄い凄い」

投げやりに拍手を送るアンテイエアネイラ「麗アムクーシヤ傑」。

それを真似て拍手する「象神の杖」と覆面の女冒険者。

適応できるとは、やはり彼女達もただものではないのだ——…。

「あんた達もそのうち慣れるよ」

「ああ。人間とは、どうやら慣れていく生き物らしい」

「……慣れるなら、もう少し別のことに慣れたいのですが」

俺達の視線に気づいたのか、彼女達がそれぞれ肩をすくめた。

彼女達は呆れている。ただ、別に恐れてはいない。

「もしや、俺達はとんでもないところに足を踏み入れてしまったのでは……」
 何だか意味もなく弱気になり、思わず呻くと。

「あんだ達、ここをどこだと思つてたんだい？」

アンティアンネイラ
 【麗 傑】が呆れたように笑つた。

「ああ。ここはオラリオ。神々すら熱狂する『未知』が集い、数多の英雄が生まれる。そういつた場所だ」

「ええ。……私はもう第一線を退いた身ですが、最近姿を見せたいいくつかの『未知』には多少思う事がある」

そして、『未知』に挑むことこそ冒険者の誉れだ——と。

三人の女傑はそう言つて肩をすくめると、終わったと手招きする『未知』イレギュラー達の元へと歩き出すのだった。

「……やはり、険しい道が続きそうだな」

まったく……冗談交じりのつもりが、強烈な発破をかけられてしまった。その背を見送つて、改めて呻く。

奇妙な男によつて、冒険者の栄光は灰に埋まりつつある。

だが、冒険者の歴史とはそもそもそういうものではないか。

灰に埋もれ、その中から這い上がつては更なる栄光を紡ぐ。

それを繰り返すことこそが冒険者であり、その集大成こそがオラリオではないか。

ふと、柄にもなくそんなことが脳裏をよぎった。

(とんでもない時に、オラリオに来てしまったが……)

今積もっている灰はずいぶんと分厚そうだが……あの三人はその灰の中から今まさに這い上がっている途中なのだ。

彼女達にすら劣る俺とて遙かな高み、武神の背中を追っている。

「ええ、我らもますます精進しなくては」

ならば、この灰とて一つの関門に過ぎない。

「うん……」

遙かな頂を目指そうと思うなら、このまま灰に埋もれたままではいられない。

2

アイズさん達の言う通り、一八階層に『夜』が訪れてから。

キャンブファイア

営 火のように積み重ねられた魔石灯を中心に、大きく輪を描くように座る何人もの冒険者たち。

その中に、フィンさんの声が響き渡る。

「——彼らは仲間のために身命をなげうち、この一八階層まで辿り着いた勇氣ある冒

険者だ。仲良くしろとまで言うつもりはない。けれど同じ冒険者として、欠片でもいい、敬意をもって接してくれ。……それじゃあ、仕切り直そう」

フィンさんが手にした杯を掲げる。

もちろん、周りの冒険者にも……そして、その中に混ぜてもらっている僕達のも同様の杯が配られている。

『乾杯！』

合唱と共に、ささやかな宴が始まった。

杯に注がれているのは、魔導士たちが氷結魔法で作り出した氷水。

この一八階層には清涼な水が豊富にあるらしく、まだ疲労が残る体に染み渡っていく。

並べられた料理も、何と一八階層に自生するキノコや果実フルーツが使われているらしい。

そして、一人につき二つか三つ、赤い果実が配られる。

ひとつは瓢箪の形をした赤い漿果。

もう一つは、琥珀色で甘そうな蜜をたつぷり滴らせるふわふわの綿花に似た果実。

およそ地上では見た事がないこの果実も、やはり一八階層で採れたものなんだとか。

まずは、琥珀色の果実——雲菓子ハニークラウドの方を一口齧ってみる。

「?!?!?!」

甘い。めちやくちや甘い。甘すぎる……！

実は甘い物が苦手な僕にとつては致死量とも言えそうな糖分に、思わず吐きそうになった。

(これ、クオンさんは好きそうだなあ)

涙に滲む視界の中で、そんなことを考えては吐き出したい衝動を抑え込む。

(あの人の味覚は、本当にどうかしてるし……)

これくらい強烈な味じゃないと分からないんじゃないかな——と。

内心で苦笑しようとして、今さらながらに思い至った。

(いや、それは、クオンさんだけじゃない……)

アンジエさんだって、もう味覚など忘れてしまったと……。

(不死の、呪い……)

繰り返される死の中で、少しずつ人間性を失い——いずれは亡者になり果てる。

もしかして、クオンさんの味覚も、それと同じことなのでは……。

「あの、ベル様。大丈夫ですか？」

「顔色、少し良くないよ？」

気づけば、左右に座るリリとアイズさんがそれぞれ顔を覗き込んでいた。

「え？ あ、うん」

咄嗟に返事をしてから、果肉を飲み込んでいることに気づく。甘味は、それでもまだ口の中に残っているけど、それだけだ。

「甘い物、実は苦手で……」

言い訳のように——いや、嘘じゃないんだけど——そんな言葉を口にしていた。

それにしても、実際にどうしよう。

（食料は貴重だつて言ってたし……）

流石に残すのはもつたない。

掌にある強敵を前に、割と真剣な覚悟を決めようとして——

「あ、それでしたらリリが頂きましょうか？」

何故だか少し目を輝かせて、リリが言った。

……そう言えば、「ロキ・ファミア」の女性団員達もとろけるような顔で雲菓子ハニークラウドを

齧っている。

『不機嫌な女には甘い物を捧げるといい。ひよつとしたら、首の皮一枚繋がるかもしれない』

クオンさんがリリと初めてダンジョンに潜った後

拗ねたりりのご機嫌を取るためにクレープ屋さんに向かっていった時に零していた

台詞が蘇る。

ああ、確かにそうなのかもしれないなあ——なんて。そんなことを思いつつ、
「う、うん、あげる」

リリの申し出に、ありがたく頷く。

「でっ、ではっ——あーんっ」

わざわざ僕の前に移動し、小鳥のように口を開けるリリ。

何となく微笑ましく思いながら、その口に果実を入れようとして——

「ああ、任せろ。俺が全部食ってやる」

ひよいと、ヴェルフが手を伸ばし、そのまま綺麗に強奪しよりする。

「こりや確かに甘すぎるな」

眉を寄せ、胸焼けに耐えるように喉を押さえながらヴェルフ。

真っ赤になり、涙目でそのヴェルフを蹴るリリ。

そして、その二人を見てきよんとするアイズさん。

（ま、まあ、これはこれで、微笑ましい光景のような……）

少なくとも、リリとヴェルフはすっかりいつも通りだった。

まず問題はないとフィンさんもリヴェリアさんも言っていたけど……例の呪詛カースの話
を聞いた後だ。

なおさら、安心する。

「それにしても、噂には聞いていたが……不思議な階層だな、ここはすつかり飲み干したのだろうか。」

胸焼けから立ち直ったヴェルフが、周囲を見回して言った。

例えば『空』は、『太陽』の代わりだった白水晶はすつかり沈黙し、青水晶だけが僅かな光を放っている。

暗い天井に煌めくそれは、まるで星空のようだ。

野営地が森の中にあるので、周りからは木々のざわめきが聞こえてくる。

その向こう側からは獣の——いや、潜んでいるのはモンスターだけ——息吹が感じられる。

ともすれば危険の前触れでもあるけど……田舎育ちの僕にはそれすらどこか懐かしい。

「珍奇な実があつて、空があつて、空には星まである。……リリスケの話からすると、

『街』もあるんだつたな」

「あ、そう言えば！」

英雄譚えいゆうたんの一幕のような野営地にばかり目を惹かれていたけど……リリは『街』——『拠点』があるって。

思わずアイズさんの方を見ると、ブロック状の携行食に口をつけていた彼女は、小さ

く頷いた。

「……明日、行ってみる?」

「ぜひ!」

即答で何度も頷く。

まだ本調子とは言い難い体が不満の声を上げたけど、それもちつとも気にならない。

ダンジョンの中にある『街』だなんて!

どんなところなのか、誰がどんなことをしているのか……想像するだけでわくわくが止まらない。

興奮を抑えきれずにいる僕の顔を、アイズさんは横から見つめ……小さく、笑ったよ
うな気がした。

「アルゴノウトくーん!」

と、そこでそんな声が聞こえた。

スキルがバレた——のではなく、童話の『アルゴノウト』からとつた渾名らしい。

ちなみに、僕をそう呼ぶのはティオナ・ヒリユテさん。

アマゾネスのヒリユテ姉妹といえ、アイズさんに並ぶ有名な第一級冒険者である。

それだけでも恐れ多いというか……とにかく緊張してしまうのだけだ。

アマゾネスらしく薄着なので、目のやり場にも困ってしまう。

「話、色々聞かせなさいよ。一宿一飯の恩よ、構わないでしょ？」
「うん、聞きたい聞きたーい」

その双子のアマゾネスは、どかつ、と僕の左右に腰を下ろす。

テイオネさんに押し退けられたリリがぎよつとし、アイズさんが小首を傾げた。

僕は……多分、顔が赤くなっている。耳がめちやくちや熱い。

「どうやったら能力値アビリティオールSにできるの？」

最初の衝撃から立ち直ったリリが、眉を逆立て剣呑な空気を放つ中。

爛漫な笑顔と共に聞いてくるテイオネさん。

その言葉に、顔が引きつるのが分かった。

能力値をバラされたこととか、そもそも何で知っているのかとか、とにかく焦る気持

ちが盛大に燃え上がる。

救いか逃げ道か……自分でもよく分からない何かを探して視線を彷徨わせると、テイ

オネさんが薄く笑っていた。

話すまでは逃がさない。そんな声が聞こえたのは……できれば、幻聴だと思いたい。

それに、一体何と答えればいいのか。

僕はとにかく憧憬もくひょうを追い続けたただけだ。

でも、「努力デス」と正直に言ったところで、果たして信じてもらえるのだろうか……

?

ちなみに、その憧憬もくひょうの人はというと。

膝を抱え、何でもない風を装いながら聞き耳を立てている。全力で。全神経を集中して。

憧憬あこがれは時に残酷だ。

(ええと……)

救いを求めて、テイオネさんのさらに向こう側に視線を向ける。

そこには、最後の希望ウエルフがいるはず……

「なんじゃヴェル吉、我々の後を追ってきたのか。フフ、愛々あいあいしい奴め」

「おい、止せ、てめえ、来るな?！」

あ、駄目だ。ヴェルフも冒険中ピンチだった。

先輩の鍛冶師スミスらしき女の人——アマゾネスかな。『ドワーフの火酒』を持つてるけど

——に絡まれ、割と本気の悲鳴を上げている。

孤立無援。

できることなら、今すぐに意識を手放したい。

(何か、前にもこんなこと考えた事があつたな……)

あの時は確か(記憶の中の)ミノタウロスに縋りついた気がする。

今回もお願いしてしまおうか……。

ピイ——！

その時、鋭い警笛の音が鳴り響いた。

一七階層に通じる連結路前。そこに、異形対策として監視所があるとは聞いていたけど……。

「総員準備！」

フィンさんの号令が飛ぶ。

「全幹部およびレファイヤーは監視所へ！ アキ、負傷者テントの防衛班を指揮しろ！」

その指揮をかき消すように……

『ほあああああああつっ?!』

いきなりだった。

いきなり、誰よりも聞きなれた声が響き渡る。

でも、間違つても迷宮まごで聞こえる声じゃないはず——！

半ば反射的にリリの方を向くと、目を丸くしながらも肯定するように頷いた。

「すみません、先に行きます！」

「あ、アルゴノウトくん?!」

フィンさん達の返事も待たず、一気に走り出す。

少し遅れて、リリとヴェルフが追いかけてくる気配がする。連結路の正確な方向を知っているわけではない。

音だけ頼りに森の中を走り抜ける。

すぐに森は切れ切れになり、高く聳える岩壁が見えてきた。

近くには魔石灯と、炎の光がいくつも。

そこが監視所なのは間違いない。

「俺はアストラのソラール！ 貴公らはまだ人か?!」

聞こえたのは、誰何の声だった。

いや、誰何ではない。

まだ正気なのか。呪詛カースにやられていないのか。

それを確かめる問いかけだ。

「アストラ……? いや、自分は「ロキ・ファミリア」のラウルです！ そちらこそ正気つ

すか?!」

阻塞を挟み、一人の青年が叫び返す。

「【超凡夫】か！ 【勇者】……フィン達は無事だな？」

続けて、女の人の声。

「今の声は【象神の杖】か……」

「どうやら、地上^{うえ}で何か動きがあったようだね」

気づけば、すぐ後ろにフィンさん達がいた。

流石は第一級冒険者。こんなにあっさり追いつかれてしまった。

「やあ、シャクテイ。久しぶりだね。正気のように安心してしまったよ」

僕達を仕草だけで制すると、フィンさんは先頭に立ち声をかける。

「ああ。……どうやら、お前達も正気のようにだな」

「その様子だと、君達は情報を持っているようだ。それとも、もう対処済みかな？」

「ああ。ひとまず片はついている」

その言葉に、周りから安堵の吐息が零れた。

「それは何より。なら、何が起こっていたのか、説明してもらえるかな？」

「歓迎してもらえないならな」

「もちろん。これはあくまで異形対策だからね」

フィンさんが背中越しに手を振ると、全員が武器をしまう。

「色々話すことはあるが、まずはこれを渡しておこう。すぐに目を通してくれ」

それを見届けてから、シャクテイと呼ばれた女の人——確か、霞さんが言っていた人

だ——が、フィンさんに近づいてくる。

フィンさんもまた、槍を置いて歩き出し——ちょうど真ん中あたりで、二人が向き合

う。

そこでシャクテイさんが何かの書簡を手渡し、フィンさんもまた言われた通りすぐに開封し目を通して……。

「何だつて？」

——何故だか、険しい声を上げた。

「……これは、本物か？」

それを、フィンさんの後ろからその書簡を読み取ったりヴェリアさんまでが、少し険しい声で問いかける。

「私がギルドの書類を偽装すると思うか？」

「超越したのがお前でなければ、偽物だと断定しているところだ」

背中を向けているので表情は見えないけど……どうやら、本当に困惑しているようだ。

「ねー、フィン！ リヴェリアー！ どうしたのー!？」

「クオンが免罪されたらしい」

テイオナさんの問いかけに、リヴェリアさんが短く応じた。

「はあ?!」

驚きの声が重なる。

そこには、僕やりり、ヴェルフの声も混じっていた。

「七件の神殺しを全て不問にする。闇派閥残党が相手だったとしても、俄かには信じがたいな……」

「だが、事実だ。見ての通り、創設神ウラノスの著名もある」

「ああ、確かに」

フィンさんがため息を吐いてから、

「免罪理由はあの呪詛かな？」

「その呪詛が、人間やモンスターを異形に変えるもの事なら、まさにその通りだ」

その問いかけに、シヤクテイさんもしつかりと頷いた。

「あの呪詛はそれほど？」

「ああ。実際、かなり厄介な代物だった。そして、犠牲者も多い。こちらはどうか？」

「少ないとは、とても言えないね。僕達ではなく、リヴィラの住人に、だけど」

フィンさんの返答に、シヤクテイが深くため息を吐いた。

「詳しく聞かせてもらえるかな？」

「ああ。……だが、その様子ならまだ【凶狼】は戻っていないようだな」

「ベート？ 確かに戻ってないけど……。関わっているのかい？」

「ああ。『深淵』……呪詛の元凶の奥底まで入り込んでいる」

飛び入り参加の癖に、私よりよほど深く関わっているぞ——と。

シヤクテイさんはそんなことを言った。

「ところでパルウム君！ ベル君を知らないかい?! ここに来ているはずなんだ！」

「君……いや、あなたはまさか——」

やっぱり!——と。

そう思う頃には、再び走り出していた。

「神様!」

阻塞を飛び越え、一気に駆けよる。

「ベル君!!」

神様もまた走り出し——そのまま跳躍。

「おふう?!」

一直線に飛び掛かってきた神様の頭が、ちょうど鳩尾に直撃した。

思わずそこでひっくり返る。

「ベル君! ベル君!! 本物かい!? 何か口から手が生えてきたりとかしてないかい

?!」

「かみひやま……?!」

完全に押し倒された形で、体中をべたべたと触られ、頬をぐにぐにと引つ張られる。

「ふえいきです。ひゃいじょうぶですよ、かみひやま」

何とか体をひねって、上体を起こす。

それより、どうしてこんなところに——と。

問いかけるより早く、安堵したように神様の体から力が抜ける。

そのまま、神様は縋りつくように僕のお腹に顔をうずめた。

熱い吐息が肌を震わせ、今度は僕の体に緊張が走り抜ける。

意味もなく口をぱくぱくさせていると——

「良かったあ……」

今にも消えそうな声が、耳朶に触れた。

強張っていた体から余計な力が抜け、冷静さが戻る。

どうして、なんて聞く必要はない。

僕達のことを心配して、体裁なんて放り投げて、ここまで探しに来てくれたのだ。

細い腕で僕の体を抱き寄せる神様の体は、幼い子どものように震えていた。

ぐすり、なんて。何かをすすする音まで聞こえてくる。

それでも意気地のない僕は散々迷ってから、意を決してその背中を抱き返すために手を持ち上げて……あと一步のところ、周囲の視線に気づいてしまった。

フィンさん達は流石にシャクテイさんと話でいるけど……それでも、結構な数の冒険

者に見守られている。

途端に羞恥が復活し、中途半端に持ち上げた腕をわたわたと彷徨せっていると、
「いい加減にしてください、ヘステイア様！」

代わりに伸びてきた腕が、神様の襟首を掴んだ。

「あ、コラ！ 感動の再会に水を差すんじゃない?！」

神様もじたばたと抵抗するけど……そこは下界の定めというか何というか。
やつぱり『フェルナ恩恵』があるリリの方が力が強かったりするわけ。

「ほわあー?!」

幼女リリに引きずられていく幼女かみさまを、冷や汗と共に見送っていると——

「ベル君！ 良かった！」

「わあ?!」

ひよいと、今度は別の誰かに抱き上げられた。

力いっぱい抱きしめられたみたいで、二つの柔らかい感触の間に顔が埋まる。

これはまさか——！

「ああー?!」

神様とリリの悲鳴と同時、パツと解放された。

ちよつとさんね……いやいや、助かったんだって！

「リリルカちゃんも平気?! 何か口から手とか生えてきてない?!」
「ふあ?! 平気ですつ?!」

地面に座り込んだまま、ぶんぶんと首を振って邪念を払っていると、続けて——やっぱりというか何というか——霞さんはリリを抱き上げ、思いつき抱きしめる。

「良かったあ!」

「ほああ?!」

感極まったのか、リリのおでこに軽く口づけして、その勢いでヴェルフに向き合つて

「ええと、アナタが噂の三人目?」

「……いや、まあ、多分そうなる」

——二人の間に、じりつ、と謎の緊張感が漂う。

そう言えばこの二人は初対面だった。

「ええと……」

まずは霞さんにヴェルフを紹介しよう。

まだ色々な動揺が抜けきらない頭で、何とかそんなことを考えついた。

よし!——と、何となく気合を入れて立ち上がろうとして……

「わあ?!」

直前。またしても誰かに抱き上げられた。

背中越しに持ち上げられ、思わず悲鳴を上げる……頃には、くるりと身体を反転させられていた。

抱き上げた誰かと、至近距離で視線が交わる。

「へえ、よく見ればなかなかそそる顔をしてるじゃないか」

艶やかな長い黒髪。紫水晶色アメジストの瞳。蠱惑的な笑みを浮かべる潤った赤い唇。

一言でいうなら、凄く綺麗な女の人だった。

それに……肉感的というか。今まで出会ったことのないタイプの人だった。思わず視線を逸らした先にあつたのは、踊り子のような衣装に包まれた体。

胸の深い谷間が見えて、慌てて視線を戻す。

「あんたが、噂の「リトル・ルーキー」だね？」

「ええと、多分……」

噂って、どんな噂になつてるんだろう……？

なんて、そんなことを考えている暇もない。

「今から、私の一晚を買わないかい？」

温かい吐息に頬と首筋を犯され、卒倒しそうになった。

「……」

「何言ってるんですかあああああつ?!」

神様とリリの怒声が響く。

というか、多分飛びつこうとしたんだと思う。

ただ、その人は僕を抱えたまま、あつさりとそれを避けて見せた。

「ぶあ?!」

「ふぎぢゃ?!」

標的を失った神様とリリが、そのまま地面に激突ダイブするのが視界の隅に見えたような

……。

風邪でも引いたようにぼんやりとする頭に、何とかそんなことだけが思い浮かぶ。

「もう」

動きが止まった瞬間、横から手が伸びてきて――

「アイシャったら、戦闘娼婦バトルベラは引退したんじゃないの?」

――そのまま、ひょいと奪いとられる。

(僕はぬいぐるみとかじゃやないんですけどー!?)

なんて。そんなことを叫んでいる暇もない。

「まさか。ただ単に困われただけさ」

「またそんなこと言って……」

素直じゃないわよねー?——と、霞さん。

ええと、何が何だかよく分からないので、同意を求められても困るんですが……。曖昧に呻いていると、とりあえず霞さんはそのまま地面に降ろしてくれた。

何だか凄く久しぶりに自分の足で地面に立った気がする。

「ええと、霞さん……」

バクバクと暴れ回る心臓を押さえつつ、霞さんの方を向く。

「ああ、彼女がこの前話したアイシャよ」

「ええ?! この人がもう一人の——」

何といえれば良いのか。よく分からなくなつて、そこで唐突に言葉が途切れる。

というか、師匠!? 霞さんの他に、こんな綺麗な人を?!

「もう一人で済めばいいけどねえ」

「ねえ」

「それはすまないことをしたな」

揃つてため息を吐く霞さんとアイシャさんに声をかけたのは、見知らぬ女の人だった。

大きな三角帽子に、節くれだった奇妙な杖。

まるで、本当に童話の世界から抜け出てきたような魔女だった。

「いいさ。むしろあんたの方が先約なんだろう？」

アイシャさんがそう言うのと、その人は小さく肩をすくめたらしい。「ところで、この少年達が探し人かな？」

落ち着いていて、どこか少し掠れたような声でその人が言った。

「ええ、そうよ」

「そうか。無事なようで、安心したよ」

クスクスと笑いながら、ゆっくりと手が伸びてくる。

冷たくて柔らかい指先が、優しく頬を撫でた。

何だかちよつと照れ臭い。

「なかなかいい目をしている。私の弟子よりも筋がいいかもしれないな」

「弟子……？」

さっきの霞さん達の様子からして、クオンさんの事だろうか。

となると、

「ひよつとして、呪術師の……？」

この《呪術の火》を、クオンさんに分け与えたというクラーナさん。

と、そう思ったんだけど。

「……フン、相変わらず酷い男だ」

マズい。違ったみたいだ。というか、何かやらかした気がする……!!

「……どうせ私は罪人。忌み子だ。仕方ない事か」

(クオンさあん!?)

完全に拗ねてしまったらしいその魔女を前に、冷や汗が背中を伝う。

少し気になる内容だったけど、これ以上の深入りは危険すぎる。

というか、クオンさんは今どこに……!?!

「クラネル様。ご無事で何よりです」

救いを求めて視線を巡らせていると、傍らに見覚えのある姿……というか、鎧姿が近づいてきた。

小さな金属音と共に、その人は僕の傍に跪く。

「え? アンジエさん?!」

この鎧は間違いない。一二階層で僕達を助けてくれたアンジエさんだ。

急に片膝を着くなんて、やっぱりまだ傷が治ってないんじゃないや……!

「女神ヘステイアより恩恵を授けられ、眷族となることを許されました。これよりは、この身朽ち果てるまで御身の剣となりまた盾となりましょう」

「えつと……」

まるで騎士の誓いのような言葉に、思わず目を瞬かせる。

「あの、神様……?」

「ええと、堅苦しいのは後で何とかするとして」

困ったような顔で言ってから、

「……そうさ、ベル君!」【ヘステイア・ファミリア】二人目の眷属だぜ!

咳払いをすると、神様は、ぐつ、と親指を立てて見せた。

「本当ですか、アンジエさん?!」

というか、新しい眷属かぞくができたんですね?!

思わず踊りだしたくなる僕の横で、不意にリリが顔を曇らせた。

「そ、そうなんですね……」

「もちろん、サポーター君も待ってるぜ?」

「ですが、その方がいるならリリは……ふぎや?!」

鈍い僕は、そこまで聞いてやつと、リリが何を気に病んでいるのかに思い至る。

クオンさんやアンジエさんの『スキル』は、確かにサポーター泣かせなのだ。

でも、そんなのは気にしなくていいのに。

「まーたいじけてるのかい?」

僕が何か言う前に、神様がリリのほつぺたを左右に引つ張った。

「ひたたた!?! ひたいですう!!」

「一人より二人。二人より三人の方がいいと思わないかい？」

「そ、そうだよリリ！」

僕は荷物持ちだから欲しいんじゃないかと……リリと一緒に冒険がしたいんだから。

と、心からの本心を迷うことなく伝える。

「ベル様………いったあ?！」

何とか元氣を取り戻してくれたのか顔をほころばせるリリ。

「神様?!」

途端、何故だか神様がリリの頬を思い切りつねった。

「……なかなかよく仕込んだと見える」

「あいつはあんな歯の浮くようなセリフは言えないと思うけどねぇ」

「や、やればできるわよ、アイツだって。……多分」

あの、ところで霞さん達は何の話をしてるんですか？

「何するんですかあ!？」

「うるさい！ いつもいつもサポーター君ばかり！ズルいぞー!!」

いや、それはともかくとして。

何故か唐突に取っ組み合いが始まってしまった。

おろおろとしている僕の傍に、さらに誰かが近づいてくる。

「クラネルさん、無事でしたか」

「え？　り、リユーさん?!」

覆面で顔を隠しているけど、間違いない。

目が覚めるほど澄んだ空色の瞳。ケープ越しに僅かに覗く整った相貌。

豊饒の女主人に務める、美しいエルフの彼女だ。

「ど、どうしてここに……」

「霞さんと神ヘスティアに冒険者依頼を申し込まれました」

「そうだったんですね……」

まさかりリユーさんまで助けに来てくれるなんて。

改めて、僕はいろんな人に支えられ、助けられているのだと実感する。

「ありがとうございます」

「構いません。公式ではありませんが、正式な契約ですから」

これで無事に達成できそうだ——と。

リユーさんが少しだけ微笑んだような気がした。

「貴公が噂の少年か」

最後に声をかけてきたのは、大兜を被り、太陽の絵が描かれた白いサーコートを羽

織った男の人だった。

「見覚えはないけれど……鎧越しにも、すごく鍛えられた体をしているのが分かる。
「あなただけ？」

「俺はアストララのソラール。かつて友と……クオンと共に旅をしたものだ」
友が世話になつていているようだな。

「そう言つて差し出された手を握り返す。」

「い、いえ！ 僕の方こそ……！」

大きくて硬く、力強いその手は、それでもどこか柔らかいぬくもりが宿っていた。
「どうやら、そちらの話も終わったようだね」

ソラールさんとの握手を終えると、フィンさんが言った。

「すぐ傍にはリヴェリアさんと、シヤクテイさんもいる。」

「もう少し後ろには、アイズさん達も。」

「事情は大体聞かせてもらったけど……クオン本人はどうしたんだい？」

「む、そう言えば」

「後ろからモンスタードもが来たんで、その相手をしていただけだね。ほんの数匹、しかも通常種だ」

「それにしても、妙に時間がかかっているな」

と、ソラールさんとアイシャさんと魔女さん——そう言えば、まだ名前を聞いてない——が首を傾げて、

「各々方、避けてください！」

どこかで聞き覚えのある声が連結路の方から響き渡った。

その場にいる全員が、一斉に武器を構えるなか、飛び出してきたのは二つの黒い影だった。

「クオンさん?!」

その黒衣も、竜の紋章が施された盾も。

今さら見間違えるはずもない。それはクオンさんだった。

続けて、音もなく誰かが連結路から飛び出してくる。

四方から向けられる魔石灯の明かりを反射して、鈍く光る軌跡。

飛び散る火花と激しい激突音。

「チツ……!」

そして、クオンさんの体が近くの水晶柱に叩きつけられた。

「……え?」

それは、いったい誰がこぼした言葉だろうか。

クオンさんが押し返された。いや、打ち負けた?

でも、そんなことに驚いている暇もなかった。
戦いはまだ続いているのだから。

……
「終わったぞ」

ゴライアスの遺灰がある程度霧散したところで、アイシャ達に合図を送る。

幸い、モンスターを呼び寄せられる前に片が付いた。

が……階層主がいなくなった以上、しばらくの間はこの広間も他のモンスターの縄張りとなる。

と、いうより。一八階層は本来、モンスターたちにとつての楽土だ。

そこに向かうモンスターが途絶えることはない。

階層主がいようがいまいが関係なく、この広間への長居は無用だった。

「魔石もこんなに大きいとは」

「これだけあれば、タケミカツチ様に少しは楽を……いや、仕送りも増やせるか」

「うん……」

新人三人が目丸くしている。

彼らの事情は分からないが、なかなか健気なことを言う。

「本当にでっかい魔石だねえ……くくり」

ヘスティア……お前という奴は。

少しは欲望を隠せ。露骨につばを飲み込むな。

「あとで折半……と、言いたいところだが」

新人と神の視線を前に、肩をすくめてから続ける。

「多分、残らないだろうな」

「残らないとは？」

怪訝そうな顔をする黒一点おおとこに、頷いてから。

「宿代と治療代だ。ベル達がリヴィラに身を寄せているなら、別の意味で足止めを食らっているかもしれない」

「リヴィラとは？」

髪を結った少女が首を傾げた。

「一八階層に存在する拠点。街の名前だ」

「ダンジョンの中に、街があるんですか……？」

何となく気弱そうな少女が前髪に隠れた目を大きく見開いた。

「ああ。ならず者の、ならず者による、ならず者のための街だ」

小さく笑うと、シャクテイも頷く。

「あの街は、厳密にはギルドの管轄にない。だから、彼らは好きなようにそこで生活して

いる」

「領主気取りの奴はいるけど、行儀のいい規則ルールなんてないからね。値段だつて吊り上げ放題さ」

私達パベラだつて、あそこまで露骨な真似はしないよ——と、アイシャまでが肩をすくめた。「ま、なるべく弱い冒険者の店を狙うのが高く売つて安く買う基本だな。あとは弱みを見せないことだ」

つまるところ、商品の売買までもが腕つぶしがものを言うのである。

マフミュランですら、あれほど露骨にふっかけてくるような真似はしなかったような気がするが。

「恐ろしいところだな」

呆れた様子で、大男が嘆息する。

まあ、その認識は全く間違いではないのだが——…

「別に彼らの肩を持つわけではないが」

そう言つて肩をすくめたのはシャクティだった。

「ダンジョンの中で補給ができるというのは、その実かなり助かる。一概に無法だとは言ひ難い」

「水辺の街ではただ同然の水も、砂漠の街では貴重品扱になる。理屈としてはそれと同

じだ」

「ま、奴らはそれを承知の上で、全力で足元を見てくるけどね」

シヤクテイの言葉を引き継ぐと、アイシヤまでがそう言つて肩をすくめた。

「だから、残らないんですね……」

「ああ。買取価格が地上の半額以下になることも珍しくないからな」

もちろん、それも交渉次第だが。

ボールの顔をちよつと凹ませられるくらいの腕があれば、多分定価で買い取つてもらえる。

「道中でも魔石が大量に手に入ったから、足りなくなることは流石にないだろうが……」

あのオツタルまでが異常発生などと呼ぶ始末だ。

多少は分散しようだが、それでもそれなりの数と対峙する羽目になった。

もつとも、それほど魔石として油断すると底をつきかねないのが、あの街の恐ろしいところだ。

「ま、とりあえず先に進むとしよう。ここで立ち尽くすのは少し危険だ」

ヘスティア一行を引き連れて、先に進む。

「これが『嘆きの大壁』ですか。自分も、噂だけなら耳にしていますが……」

「まるで誰かが磨き上げたみたい。見て、私達の姿が映つてるよ」

「ああ、『壁』とはよく言ったものだ。いや、関門という意味でもあるのか？」

広大な広間も、今は静かなものだ。

新人たちが息をのみ、興味深そうに石壁に見入っている。

こんなに素直に驚いてくれるなら、連れてきた甲斐もあるというものだ。

(ベル達には、そんな余裕もなかっただろうな)

念のため周りを見回すが、やはりそれらしい『血痕』は残っていない。

ベル達が到達してから俺達が訪れるまで、ソウルが完全に霧散するほどの時間があつたとは考えづらい。

素通りしたか、必死に逃げ回ったか。どちらかは分からないが、いずれにせよここを突破している。

しかし、それにしても——

「ようやく一八階層か」

何だかんだと、いつもの倍以上の時間がかかっている。

目前に迫る連結路を見て、思わずぼやいていた。

「これでリヴィラの連中がいつもの悪党面を晒していたなら、祝杯でも挙げるとしよう」

まあ、フェルズの話からしてほぼ間違いない晒しているだろうが。

「祝杯にはまだ少し早いぞ」

せめて地上に戻ってからだ——と。

真面目なシャクティがすかさず釘を刺してくる頃には、連結路がのぞき込めるところまで来ていた。

「念のため、陣形を立て直す。一八階層に深淵の影響がないとは断言できないからな」
ほの暗い通路の向こう側を見据えて、シャクティが告げる。

「それに、おそらくまだ『ロキ・ファミリア』が逗留している。リヴィラの街に異形が運び込まれていたなら、フィンが警戒しないはずがない」

向こうの状況次第では、降りた途端に攻撃を仕掛けられん——と。

シャクティの言葉に、ヘステイアが小さく呻いた。

まあ、ここまで来て人間相手に殺されるなど笑い話にもなるまい。

……不死人同士なら大笑いしているだろうが。

「まずは私が先頭に行く。クオン、アイシヤ、お前達は一番最後だ。見えないところで、しばらく待機している」

免罪されたことを先に伝えておかなければ、お前達のせいで攻撃されることになる。

その言葉に肩をすくめた。

……向こうにとつては千載一遇の好機だ。誤解を承知で殺しに来たところで何の不思議もない。

「ロキ・ファミリア」とは別に、モンスターの異常発生の影響も懸念される。ソラール、すまないが私と一緒に降りてくれるか？」

「ああ、任せておけ！」

続けて、ソラールが大きく頷く。

彼がついて行くなら、多少の事では問題になるまい。

「リオ……お前とアンジエは、かみ……霞たちの護衛を任せる。私とソラールの後ろについてきてくれ」

「はい」

「分かっている」

リュウ……確かヘスだったか？——と、アンジエがそれぞれ首肯した。

この二人は、なるべくなら目立たない方が良い。

いや、それを言うならヘステイアもだが。

「お前達三人は、中間で待機。私が合図したらクオン達を呼んでやってくれ」

「承知した」

三人を代表して大男が頷く。

どうやら彼が団長らしい。

もしこの三人だけなら、ヘステイアと大差ない小さな派閥といえよう。

仕送り云々というのもその辺が影響しているのかもしれない。

「では、行くぞ」

打ち合わせが終わり、改めてシャクテイが連結路に踏み込もうとしたその時――

「ほあ?!」

反射的に、ヘスティアを突き飛ばしていた。

同時に掲げた盾に、何かが激突する。

「人の膿……?」

弾きとばしたのは、蠢く汚泥……『人の膿』のような何かだった。

「あああああああああああ?!」

ただ、それにしても妙に小さく、動きが素早い。

……それはそれとして、何かヘスティアの悲鳴が長いような。

「ヘスティア様!」

「待てアンジエ! まず私達が先に行く!」

視線だけ振り返ると……何故かヘスティアがいなかった。

どうやら、そのまま連結路を転がり落ちているらしい。

誰かにぶつかって止まると思ったのだが……何というか、運がない奴だ。

「俺はアストラのソラー!」

舌打ちするより先に、連結路の向こうから、警笛とソラールの声が響いてきた。

シヤクティがアンジエを引き留めている間に追いついたらしい。

……警笛を吹いたのは小人もか、それともボールスカ。

いずれにせよ、その先に誰かいるようだ。

「アンジェリックさん、行きましょう」

「ええ！」

続けて、霞たちが駆け降りていく。

「貴公らも先に行くといい。近づいてきたものを撃ち落とすくらいなら、私にもできる」
「いや、それなら俺が前衛盾役ウオーを務めよう。それくらい役には立たねば、ついてきた意味がない」

「なら、その言葉に甘えるのでしょうか」

最後に、カルラ達が連結路の中へと滑り込んだ。

向こうの準備が整うまで、連結路前の防衛を優先する。

「ちっ！ すばしっこい奴だね！」

その間に、アイシヤがその『汚泥』に斬りかかっていく。が、当たらない。僅かなところで避けられた。

もつとも、彼女が太刀打ちできないほどの速さではない。

アイシヤなら、すぐにでも順応する。それは間違いない。

問題は——…

(あれはいつたいたい何だ……?)

素早い動きからして、まさかベルか……いや、ヘスティアが何の反応もしなかった。それに、汚泥の中に魔石の欠片のようなものが混じっている。

元々はモンスター。となると、『深淵種』のなれの果てか。

(なら、大した問題じゃない)

右手に『火』を灯す。

思い描くのは、天より降り注ぎ一つの都を——そこに住む人間だけを焼き尽くした

【罪の炎】。

その標的だけを書き換える。

「横に跳べ！」

アイシヤが飛び退くと同時、その憧憬を解き放つ。

収束する炎は、その汚泥を飲み込み完全に焼滅させた。

アイシヤに任せておいても問題はなかっただろうが……何しろ、得体の知れない相手だ。

下手に斬りつけて、鬱血亡者のように破裂されても困る。

「何だい、これは。魔石つてわけじゃなさそうだけど」

「何だろうな？」

見たままを言うなら、結晶化したソウルに魔石の破片が大量に刺さっている。

いや、逆か。砕けた魔石を結晶化しかけたソウルが繋ぎ合わせている。

魔石かソウルで言えば……多分、魔石寄りの代物だとは思う。

気になるのは、色が紫紺ではなく紫黒《しこく》ということだろうか。

何か、また妙なものと出くわしてしまつたらしい。

想像の中で、フェルズが両手で頭を抱えている。

(よし、あいつに押し付けよう)

その肩をポンと叩いて、それを押し付けた。

もちろん、実際にはまだ手元にある。……が、心情的にはもうこれはあいつの案件だ。

というか、こんなものを投げられても俺にいったいどうしろと。

(いや、まずはカルラに相談してみるか)

彼女は闇術以外の術にも理解のある類まれな魔女だ。

何かいい知恵を貸してくれるかもしれない。

「二人とも、『象神アシケルシヤの杖』が呼んでいるぞ！」

そこで、大男が叫んだ。

「思ったより早く済んだね」

「ああ。もう少し揉めると思ったが」

あの小人にとっては、名を挙げる絶好の好機だったはずだ。

それを失った割には、随分とあっさりして……いや、元から思い切りの良い手合いだったか。

自分の目的に沿わないものは全て、容赦なく切り捨てられるその思い切りは、俺も見習った方が良いのかもしれない。

そうすれば、いつまでも腐っていなくて済む。

……もつとも、今の状況でそんなことをすれば、同時に亡者へと墜ちるだろうが。

「降りた途端に襲い掛かってきたりしてね」

「かもな」

仮にそうだとして、ソラールとカルラがいるなら、さほどの問題にはならない。

霞たちを守りながらも、何とか突破できるはずだ。

現時点で彼女達が拘束されていないなら、だが。

(いや、そこそソラールがいるしな)

あの小人どもに後れを取るはずもない。

戦闘音が聞こえてこない以上、今の時点では拘束されてはいまい。

「うん？」

アイシャと共に連結路を降りようとした時、またしても後ろから足音が迫ってきた。それなりに重い、鎧は着込んでいない。

振り返ればミノタウロスが三体。

どこかの猪がベルに喉けたような特殊な個体ではない。

外見から、初めて見た時は面食らったが……動きが把握できた今なら、何を恐れることもなかった。

「何というか……運のない奴らだな」

モンスターの上士

「一八階層で優雅に過ごすつもりなのだろうか。」

「まったくだね」

もう少し遅く来てくれたなら、お互いに一八階層でのんびりできただろうに。

「先に行つててくれ」

すぐそこに小人どもがいるのは間違いない。

長話に付き合わされている間に後ろからどつかれても面倒だ。

それに、冷静に考えても見れば。

ここで見逃したところで、どうせすぐそこにいる小人……というか、あの金髪小娘に斬殺されるのは目に見えている。

「ん、まあ、二人がかりでやるまでもないか」

こちらに気づいたミノタウロスが、咆哮を上げて突進してくる。

その姿をあつさり無視して、アイシヤが背中を向ける。

相変わらず豪気なことだ。……いや、ここは信頼されていると自惚れておくか。

ひらひらと背中越しに手を振りながら連結路を降りていくアイシヤを横目に見送つ

てから、ミノタウロスを見据える。

武器は《グンタの斧槍》。

ああいう、でかくて分厚い装甲けがわの持ち主を叩き斬るにはちようどいい。

先頭の一体にそのまま突撃。突き出した切っ先はあつかりと魔石を粉碎した。

当然、すぐさまミノタウロスの体は色彩を失い、灰となって散る。

その灰に紛れて二体目の背後に回り、致命バックスターブの一撃。

今回は魔石を挟りだして回収しておく。

リヴィラに行く以上、先立つものが多いに越したことはない。

砕こうが挟りだそうが同じこと。体内から魔石が失われたモンスターの体は灰とな

るのみ。

さらに濃度を増す灰燼のなか、最後の一体を——…

「ッ?！」

慣れ親しんだ悪寒に従い、なりふり構わず離脱する。

同時、ミノタウロスの巨体もろとも灰燼の霧が両断された。

立ち込めていた血の灰の匂いが断ち切られ、場違いに清涼な空気へと変わる。

しかし、すぐさまそこに鉄の焼けるすえた匂いが混ざり込んだ。

盾の表面を刃が削り、火花を咲かせる。

防御は間に合ったが……だが、それだけだ。

中空に浮いた状態ではぶんばりようがない。

直撃した剣閃の衝撃に、さらに突き飛ばされる。

着地の姿勢が、致命的に乱れた。

強引に身を投げて、地面を転がる。

追撃を凌げれば、ひとまずそれでいい——…

「ああ、何という僥倖。流石は武神の導きよ」

追撃はなかった。

代わりにそんな声がする。

「お前は……」

視線の先にいるのは、東国風の大鎧を着込んだ剣士。

携えているのは、異様に柄の長い刀——いや、妖刀。どちらも見覚えがあつた。

「騎士アーロン？」

今は遠いドラングレイグ……と、言つていいかは分からないが。

そこに存在した黒霧の塔。

飾られていた大鎧に触れた先、取り込まれた『記憶の世界』にて対峙した東国生まれの剣士。

溶鉄城で散々に世話になつた『アーロン騎士』を束ね、育て上げた鉄の古王の懐刀。かつての時代、まず間違いなく英雄と呼ばれていたであろう武人。

「随分と縮んだようだな」

縮んだといつても、偉丈夫であることに変わりはない。

身の丈は、一八〇cm……ミアと同じか少し大きいくらいか。

ただ、記憶にあるよりも体が細い。正確には、無駄なく引き締まっているように見えた。

「この姿を見てそう言うという事は、やはり貴公はあの時の剣士か」

夢幻の中、この私を破つた不死の英雄。

いつそ恍惚とした様子で、その剣士が眩く。

「何の用だ？」

やはり、彼は……いや、彼こそが本物のアーンなのだろ

再現された——あるいは、加工された記憶ではなく。

「なに、恥を忍んでもう一戦挑みに来たのよ」

あのまま破れては騎士の名折れ。

刀を構えながら、その武人が言った。

「あのように無理矢理に膨れ上がった体では、武が死ぬ。騎士アーンも所詮あの程度と思われたままでは、死んでも死に切れん」

故に剣鬼となつて舞い戻つた。

その宣言とともに、ソウルの気配が膨れ上がる。

(余計な心配を……)

あの時の彼は……あの時の彼ですら、俺にとっては尋常ならざる敵だったというのに。

声にしないまま毒づくと同時に——

「いぎ、再戦を」

アーンンの巨体が消えた。

いや、違う。単に視界を振り切られたただけだ。

「?!」

防御が間に合ったのは、単なる幸運だ。

なるほど。体が縮んだ分だけ、あるいはあの時より筋力は落ちているのかもしれない。

だが、そんなことは何の救いにもならない。

その一撃は記憶にあるよりも遙かに重く、深く、何よりも鋭く響く。速さも鋭さも段違いだ。まったく、冗談じゃない。冗談にもなりはしない。

こちらはソウルが凝って、あの時よりも弱体化しているというのに。

「ちえああッー」

無駄のない動き。滑らかに奔る刃を前に、反撃の隙が見いだせない。

記憶にある剣士より、遙かに早い。

あの時ですら、尋常ならざる剣士だったというのに。

刃圈から逃れるべく後ろに跳び——己の失策を悟った。

この剣士の刃は、後ろに跳んだところで逃れられない。

「破ッー」

まだ僅かに漂う灰が、空間すら斬り裂くその剣閃を垣間見せる

今度こそ防御が間に合わなかった。

左胸から肩にかけて深く斬り裂かれる。

噴き出る血に混じり、ソウルの流出が始まった。

(クソつたれ……ッ！)

返す太刀が盾の表面を削る。

その衝撃の中、声にもできず毒づく。

記憶にある動きと違いすぎる。まったく成す術がない。

(いや、そんなはずがない)

諦観を無理矢理に押し込める。

この騎士がああの時のア—ロンと同一なら、根底にある思考や癖もまた同じだ。

ならば、動きが読めないはずがない。

必ず見慣れた動きがどこかに混じり込んでいる。

速さが変わったところで関係ない。

動きさえ読めるなら、対応できる。

でなければ、俺ごときがここまでたどり着けるものか。

「かあああッ!!」

そのまま地面まで両断しそうな斬り下ろし。

辛うじて受けたが——

(な——?!)

ガクン、と。

地面が本当に斬り落とされた。

いや、違う。そんな馬鹿げた話であるものか。

(しま——!?)

連結路。その入口にまで追い詰められている。

その傾斜に足を取られ、身体が傾くいただけだ。

(この間抜け……ッ！)

こんな無様は、ソウルがどうこうとは全く関係ない。

自分を罵りながら、仕方なく地面を蹴る。

このまま転げ落ちるより、自分で跳んだ方がいくらかマシだ。

左手に『火』を。

思い描く憧憬はごく単純に【大火球】。

とにかく少しでも牽制になればいい。

半ば滑り落ちるようにして薄暗い連結路から飛び出す。

そこには『星』の明かりが……そして、おそらく魔石灯の光が広がっていた。

そんなものに気を取られている暇はない。

即座に武器を大剣クレイモアに切り替え——しかし、体勢を立て直す前に、真正面から打ち込まれる。

「チツ……！」

飛び退いた先には水晶柱。

背中をぶつけ、思ったより距離が開けなかった。

後ろに下がれないなら仕方がない。

打つて出るしかない。

アルトリウスの剣技を模倣する。

俺が知る限り、二番目にマシな戦い方だ。

跳躍し回旋。全ての加速を刀身に宿す——

「その見戲は見飽きた」

膝を曲げた右脚、その脛から大腿へと熱が突き抜けた。

アーロンの刀がそこを貫通している。

動きを合わせられた。加速が失われ、威力が霧散する。

何より、致命的な隙を晒していた。

「——！」

体を捻り、無理矢理にその側頭を狙って蹴りを放つ。

だが、そんないい加減な攻撃が当たるはずもない。刀身が翻り、右脚を斬り開きながら自由になる。

それをただ見ている訳もない。

左手に『火』を灯し、苛烈な物語を口ずさむ。

その名を【神の怒り】。

空間すら歪めて奔るその衝撃波が、追撃を強引に押しつけた。

同時、地面に激突する。

お世辞にも着地とは言えない。

だが、その頃には痛みは忘却の淵に沈んで消えた。

傷は深いが、不死人には関係ない話だ。

脚が繋がっているなら、それでいい。

立ち上がり、間合いを開く。

「まだ抜かんのか？」

「……抜かせてみろよ」

彼が何を言っているのか、分からないはずがない。

俺が最も得意とする武器。最も信頼するその刃。

それを使わずして勝てる相手ではないし、それを使ったところで勝てるとは限らない。
い。

(そんなことは分かっている)

だが、不死人にとつては死もまた糧。

自らの屍を積みあげながら、相手の手札を暴いていく。

だからこそ、最後の切り札を使うなら、その時は必殺でなければならぬ。
仮にそれに対応されたなら、本当に正攻法では勝ち目がなくなるのだから。
……もつとも、それを言うならア—ロンにはすでに知られているわけだが。

「強情なことだな」

まったくだ——と、内心で呻く。

(ここが人目のない一七階層ならな)

迷わず武器を切り替えているところだが。

視線の片隅に、小人どもの姿を認めて舌打ちする。

相変わらず、嫌な時に姿を見せる奴らだ。

「しかし、これも敗者の習いか」

再び間合いが消滅する。

特別に早く動いているようには見えないというのに、反応が追いつかない。

徹底して磨き上げられ、一切の無駄が失われた動き。

それが圧倒的な速さを生み出していた。

そして、無駄がないということは隙が無いという事だ。

(ないなら、作るだけだ)

剣の切っ先で地面をひっかき、飛礫つぶてを飛ばす。

ほんの一瞬でも動きが止まってくれたならそれでいい。

左手に『火』を。

思い描くのは我らが姫君に長らく仕えていた偏屈な爺さん。

元々は大沼生まれの呪術師が得意としたその業を、吐息に乗せて吐き出す。

曰く【毒の霧】。

見るからに毒々しい紫の霧が互いの姿をかき消した。

「またつまらぬ小細工を」

「当然だ」

彼我の技量差は圧倒的。

加えて、ソウルは今もまだ至る所で凝ったまま。

大体、一介の放浪者が本物の武人を相手にしているのだ。

小細工の一つも弄さないで、一体どうしろと言うのやら。

(ああ、まったく——!)

いつも通りの劣勢に、思わず笑えてきた。

ああ、まったく。こうでなくては調子が狂う。

ぐだぐだとつまらないことは削ぎ落され、目の前のソウルを喰らうために必要なものだけが然るべき場所に整っていく。

軋みを上げながら、ソウルが体の中を奔りだす。

極上の獲物を前に、刻まれた闇の刻印が蠢いた。

「危ない!」

誰かの叫び。

それが耳に届くより先に、互いに動いていた。

俺達の鼻先をかすめるように、闇の塊が通過する。

【闇の玉】……!?)

目だけで術者を確認する。

カルラではない。いや、むしろ——

(深淵の異形!)

闇術——元は魔法かもしれないが——を使ってきた以上、原形は人間。

その一瞬で判断できたのは、そこまでだった。

そして、それ以上は必要がなくなつた。

「なっ?!」

誰かが零したその叫びも含めて、それはいつかの光景の焼き直しだった。その異形は、連結路から飛び降りてきた剣士に背中から串刺しにされる。

「ホークウッド……」

それは、ファランの不死隊——【深淵の監視者】。

象徴たる兜こそ被っていないが……俺が知る限り、彼こそが唯一の生き残りだ。真正正銘のファランの不死隊。

……いや、兜だけではなく手にしている剣もまた、バスタードソードに戻っているが。やはりお前だったな」

なおも蠢く異形に、さらに深々に大剣を抉り込みながらホークウッドが言った。

「王狩りの次は深淵狩りとは、勤勉なことだな」

「まったくだ。本職がいるなら、任せておけば良かったよ」

半ば反射的に言い返してから、

「まさか生きて——」

「生きていたのか、なんてのはお互いに陳腐な台詞だと思わないか?」

その通りだった。

死に方など、お互いにとつくに忘れてしまっている。

それどころか、灰になってなお墓場から叩き起こされる始末だ。

「何の用だ、とも聞いてくれるなよ」

それもまた。聞くまでもない事だった

気は進まないが、彼が再び俺の前に姿を見せたなら。

「さあ、続きだ。認めてもらうぞ。ただ俺こそが竜なのだ」と

俺で良ければ、いくらでも認めてやるが。

もつとも、盗むつもりもないという。

どうしても俺は、フアランの不死隊と——あの狼の血統と殺しあわなくてはならない

宿命らしい。

まったく……今さら呪う相手もいやしないというのに。

「チイツー！」

天を仰ぎたいところだが、そんな暇すらもやはりはしなかった。

ホークウッドが剣を振り回し、死体を投げ飛ばしてくる。

向こうは知らないだろうが……まさにウーラシールの再現だった。

「ハアアッ!!」

飛び退いた先に、すでにホークウッドは入り込んでいた。

回避は諦め、素直に防御に徹する。

「とはいえ、防御も容易なことではない。」

本来の得物特大剣ではないとして、それでも剛剣は健在だ。

だが、ファランの剣技の神髄は、むしろその独特な体捌きから繰り出される狼の剣。彼らは、卓越した技量を誇る剣士たちなのだ。

(速い……！)

盾を構えた一瞬の停滞。その隙に死角に潜り込まれた。

当然だ。ファランの不死隊とは、かの英雄アルトリウスの後継者。

目の前にいるのはその一員であり……あるいは、この時代に遺る【薪の王】とすらいえる存在だった。

生半な巡礼者では、成す術もなく敗れ去る。

まして、凄腕の剣士が今はもう一人いるのだ。

「無粋な御仁だ。一騎討ちに水を差すとは」

「悪いな。だが、俺が先約だ」

「私の方が先だと思うがな」

「夢の中の話なんだろう」

一体いつから聞いていたのやら。

言い合い、時に互いに斬り結びながらもアールンとホークウツドは攻撃の手を緩めない。

つくづく冗談じゃない。

ソウルが凝った今の様では、まともに反応することすらままならなかった。

文字通り骨身に刻まれている相手の動きから何とか先読みしているが……そんなものはただの勘でしかない。

まだ辛うじて凌げているが、いつまでもこんな幸運が続くものか。

(こいつらをまとめて相手になどできるか)

だが、どうする。

いったいどうやってこの二人を分断したものか……いや、分断できたとして、それどうなる相手でもないが。

「二つ提案があるんだが」

ホークウツドに思い切り蹴り飛ばされ、また別の水晶柱に叩きつけられてから。

口に溢れてきた血を吐き捨てて言った。

今は、少しでも思考を巡らせる時間が欲しい。

「お前たち二人で頂上決戦、つてのは駄目か？」

二人が顔を見合わせる。

破れかぶれだったが、これはひよつとして――

「さあ、続きだ」

二人の声と動きが重なった。

やはり、駄目らしい。

しかし、一対一でも成す術がないというのに、一体どうしろと。

「く……ッ！」

呻いている間に、防御を破られ、いよいよ体に刃が届く。

アーロンとホークウッド。いずれ劣らぬ……あるいは「薪の王」になっていたかもしれない戦士たち。

その一撃を前に、いつまでも体内にソウルを留めておけるはずもない。

(これはいよいよ篝火が見えてきたな……)

小人どもの前でそうなるのは、極めて厄介だが……しかし、人間性を消費して戦闘続行をしたところで、結果はさほど変わらない。

奴らは『アンデッド』、つまりは亡者を知っている。

また余計な勘繰りをしてくるのは目に見えていた。

「まさか、本当に腑抜けているのか？」

どうやって死を誤魔化すか。

その一点に傾きかけた思考の中で、ホークウッドが毒づいた。

「この程度の相手に殺されたなど、あいつらも浮かばれないな」

フアランの不死隊。誇り高い狼血の英雄。

この手で殺した、偉大なる後輩たち。

「——ッ！」

左手に『火』が宿る。

思い浮かぶのは、ただ炎だけだった。

こんな使い方をすれば、師匠にどやされる……いや、それだけでは済まないだろうが。

この『時代』で目覚めてから初めて。

——火を畏れよ

その教えを忘れて炎を——【炎の大嵐】を世界に解き放った。

莫大な炎によって蹂躪される世界。制御し損ねた炎が黒衣越しに腕を炙る。

——が、それら一切を無視して疾走した。

左右の手に装備するのは、《傭兵の双刀》。

「チィ——ッ！」

ホークウッドの剣を、左手のシミターで払い除け——右の切っ先をその胸に突き立て

た。

——そのつもりだったが。

流星は不死隊。精々が左肩を抉るにとどまった。

構うものか。左手のシミターを切り替える。

拳にまとうのは《骨の拳》。

所詮は喧嘩殺法の域を出ないが……それで何の問題がある。

今度こそその腹に拳をめり込ませてやる。

(誰が腑抜けてるって?)

その拳を基点に。異形の骨を触媒として。

呪術の要領で、荒れ狂うソウルをそのまま放射する。

手ごたえからして、胸の骨に輝くくらいは入ったはずだ。

お互いに、そんなものはかすり傷にもならないが。

「どうした、ホークウッド。抜かないのか?」

左手に再びシミターを握りながら、どこかで聞いたような言葉を投げかける。

偉大なる後輩。確かに存在したその英雄たち。

例え愚かで凡庸な放浪者と言えど、彼らの名誉を穢すわけにはいくまい。

「抜かせてみやがれ」

が、どうやら余計な世話だったらしい。
それも当然か。

「ふむ。……そういう趣向なら、仕方あるまい。今しばらく付き合おうでしょうか」

アーロンまでが妖刀を鞘に納め、代わりに大弓を取り出した。

《鬼討ちの大弓》——いや、あれこそが正しく《アーロンの大弓》か。

好都合だ。相手が本気でないなら、こちらにもやりようがある。

もう一度抜かれる前に決着をつけるとしよう——

「!？」

などと、そんな容易い相手ではないか。

半ば勘だけで、その大矢を斬り払う。

流石に鷹の目の目ゴうほどではないだろうが……それでも、恐ろしく精密に眉間を狙ってきた。

「呵々！ 弓は武芸者の嗜みよ！」

驚くことはない。

狙撃してきたアーロン騎士たちも、元は彼の薫陶を受けているはずだ。

「少しは張り合いが出てきたじゃないか」

迫るのは英雄の剣撃。

得物を変え、多少は劣化しているとはいえまともに受けられるものではない。

左右に構えた双刀で斬り払い、受け流し、逸らす。

少しでも体勢が崩せればいい。それが反撃の隙となる。

「ぬっ?!」

ホークウツドを、アーロンの射線上に引きずり込む。

射抜いてくれるならそれでよし。躊躇つてくれるならそれでもいい。

果たして、矢は放たれなかった。

ホークウツドの足首を蹴り抜き、体勢を崩す。

隙と言えるほどではない。だが、その体を飛び越えるくらいはできる。

狙いはアーロン。双剣を交差させ、「王の黒い手」と呼ばれたとある剣士の妙技を再演

する。

「ほう……!」

大矢が横腹を浅く切り裂き——そして、交差する刃もまたアーロンの喉首を掠めた。

交差は一瞬。先ほどとは逆に、アーロンが間合いを開こうと後退する。

逃がすつもりはなかった——が。

「フッ!!」

その横腹に、孤狼の剣（きりばた）が迫る。

追撃のための時間を回避に費やす。

分かつてはいたが……なかなかうまくはいかないものだ。

「やはりこうでなくてはな！」

「違ういな」

こちらには舌打ちしている余裕もないというのに、向こうはいかにも余裕たっぷりといった有様だ。

……ああ、まったく。

(面白くなってきたじゃないか)

二つの嵐から弾き出される様にして、間合いを開く。

かつて、戦いこそが呪いに抗う手段だと考えられていた時代があつたのだ——と。

どこかで出会った誰かが、そんな話をしていたような気がする。

本当かどうかとも怪しい話だ……が、一理あるのかもしれない。

死が迫るごとに、生を実感する。

……今殺しあつている全員が、どうせ死に方など覚えていない癖に。

密度を増していく殺気。むせ返るほどの生の匂い。

まだ俺は生きている。亡者になり果ててはいない。

その昂揚が烈火の如く体を熱していく。

その熱に呼応して、軋みを上げながらソウルが奔り——…
「いい加減にしろおおおおおおおおおおおつっ!!」

同時、背後から炸裂した『神の怒り』には……まあ、とりあえず殺気だけはなかった。
完全に反応が遅れたのはそのせいだ。

…

「い、いったい何事なんですかあ?!」

ほとんど錯乱した様子で、リリが叫ぶ。

「分からないよー!」

僕自身も、同じような有様だった。

いきなり戦いが始まったのもそうだけど……。

「クオンが押されているだと……!」

リヴェリアさんが呻く。

どう見てもそうとしか見えなかった。

一対二という事を差し引いても、クオンさんが劣勢なのは間違いない。

「むう……。見事な使い手だが、何者だ?」

「一人はファランの不死隊。【深淵の監視者】の最後の生き残りだな。……まさか生きていたとは思わなかったが」

ソラールさんの問いかけに、魔女さんが応じた。

「大剣を持つている方だ。刀を持つている方は私にも分からん。しかし、貴公も私も知らないなら、ドラングレイグの時代を生きた者と見てよかろう」

「そうなるか。過去の英雄となら俺も何度か出会ったことがあるが……未来の英傑に出くわすとは。これからは、こういう事もあるのだなあ」

この地はロードランと違い、ズレているわけではないというのに。

その言葉の意味は、よく分からなかったけど。

「アーロン殿！ 急にどうされたのです!？」

叫んだのは、あの時の女の人の人だった。

それどころか、僕達に怪物進呈^{パス・パレード}を仕掛けようとしたパーティの三人が揃っている。

「お、お前らー!」

表情を険しくするヴェルフ。

それを他所に、魔女さんがああ、と小さく呟いた。

「貴公。今、アーロンと言ったな。もしや、騎士アーロンのことか？」

少し離れたところにいる三人に問いを投げかけた。

「い、いえ。あの方は自分たちの派閥^{ファミリア}ではないので、詳しいことは」

「あ、でも、どこかの国に仕えていたことがあるって……」

「ああ。以前タケミカツチ様と酒……般若湯を酌み交わしている時に、そんなことを零していた」

三人が投げ返してきた答えに、魔女さんが小さく頷く。

「やはりか」

「知り合いなのかい？」

「直接の面識はない。ただ、多少の縁くらいはあるかも知れないな」

アイシャさんの問いかけに、魔女さんは首を横に振ってから、

「騎士アーン。煤のナドドラ……寄る辺を見つけられなかった憐れな同類がとり憑いた遺跡。その国が栄えていた頃、王に仕えていた騎士だ」

魔女さんが小さく肩をすくめる。

「かの騎士こそが栄光をもたらし、その出奔と共に栄光は陰り、ついには滅びた。だが、彼が育てた騎士団の名は、国が滅び、その名すら忘れられてなお語り継がれていたという」

もつとも、私がああ弟子と出会った頃には、それも忘れられていたがね。

その言葉に、アイシャさんが問いかけた。

「その割にはずいぶんと詳しいね」

「ああ。私の弟子から聞いた。ずいぶんと手を焼いたらしい」

別に珍しくもない話だが——と。彼女は小さく笑つてから、

「さて、どうしたものか。今の馬鹿弟子に勝ち目はなさそうだが」

「しかし、勝ち目のない相手に勝ち抜けてきたのが我が友だ」

ふうむ——と、ソラールさんが唸る。

「それに、決闘というのであれば余計な手出しは……」

「そんな呑気なこと言つてる場合じゃないだらろおおおおつ!？」

神様が叫んだ。

「あれ、ひよつとしなくてもガチの殺しあいつて奴じゃないかあ?!」

それは間違いないと思う。

この前、夜の路地裏での襲撃よりもずっと危険だ。

「早く止めないと!! 早く早く!」

「神命、拝受しました。この身朽ちても必ずや」

「それじゃ意味ないんだってばあああつ!!」

何だか物騒なことを言いだしたアンジェさんに抱き着き、神様が絶叫する。

「ベル様も絶対にダメですからね!!」

死んでも離さない。そんな覚悟を目に宿して、リリが全力で抱き着いてくる。

というか、押し倒された。

「でも、リリ。誰かが止めないと……!」

別の意味で慌てながら、何とか座り込むまでに体勢を立て直す。

その途中で、偶然にソラールさんと目が合った。

「う、うむ。では、俺が止めに——」

そのソラールさんが頷きかけて、

「それでは、余計に混沌とするだけだ。貴公とて、三人まとめて打ち倒せる訳ではあるまい?」

三つ巴が四つ巴になったところで意味がなからう——と。

魔女さんが、ゆるゆると首を横に振った。

「なら、私も——」

「お前が加わったところで何も変わらん」

続けて名乗り出たアイズさんを、リヴェリアさんが制止する。

「いや、むしろ悪化する。お前はただ単に彼らと戦いたいだけだろう」

あの、アイズさん。何でそこで目を逸らすんですか。

「なら、どうするんだよおおおおおっ!!」

「さて……。あの戦いに割って入るなら、僕達も全力で、ありつたけをぶつける必要がある」

でも、それじゃ四つ巴どころか大乱戦になるだけだと、フィンさんが肩をすくめた。

「うむ。……いつそ、リヴェリアにまとめて氷漬けにしてもらうか？ あやつらなら死にはすまい」

「それでは、やはり貴公らに飛び火するだけではないか？」

ガレスさんの言葉に、魔女さんが改めて小さくため息を吐く。

「だが、バケツの水をぶちまけた程度で止まるとも思えんが——」

リヴェリアさんが肩をすくめた時、

「この程度の相手に殺されたなど、あいつらも浮かばれないな」

(……え?)

不意に聞こえてきた言葉に、思考が止まった。

殺した。いや、それは、でも……。

「いかん！ 全員下がれ！」

今さらながらに、動揺している。

でも、そんな暇すらありはしなかった。

ソラールさんが叫ぶと同時、見ている世界が焼け落ちたのだから。

いや、違う。これはクオンさんの呪術だ。

今まで見た事がない規模で、それが解き放たれただけで。

「あちあちあち!」

一番薄着のテイオナさんが、小さく悲鳴を上げながら、全身を手でバタバタ叩く。インナーの上から火精霊サラムンダーケールの護布を身に着けている僕だけ……大きく裂けた肩から熱が入り込んできた。

とつさに神様とリリを庇ったのは大正解だったらしい。

ソラールさんも盾を掲げて、霞さんたちを守っている。

「どうした、ホークウツド。抜かないのか?」

「抜かせてみやがれ」

つい先ほど、アールンさんと交わした会話が、役者を変えて繰り返されて――

「ふむ。……そういう趣向なら、仕方あるまい。今しばらく付き合おうとしようか」

そのアールンさんもまた刀を鞘に納め、代わりに大弓を取り出した。

……もう、だんだんと驚かなくなってきた。

多分、クオンさんやアンジェさん達にとつて、それはできて当たり前の事なんだろう。

「どうやら、あの馬鹿もやっとその気になったらしいねえ」

どこことなく恍惚とした様子で、アイシャさんが微笑を浮かべる。

「ホント……。相変わらず、変なところで意地っ張りよねえ、アイツは」

一方で、霞さんは帽子のつばを指先で少し引き下げ、小さく肩をすくめている。

「ああ。それに、相変わらず無茶な使い方をする……」

魔女さんまでが、呆れ半分に嘆息した。

「それに、火がついてしまったなら、いよいよ止まらん」

「そうね。時々面倒くさいくらい負けず嫌いになるし」

L v. 2 となった僕でも、もうほとんど追いきれない。

途切れることなく打ち鳴らされる剣戟の音だけが、その苛烈さを伝えてくる。

それに、何だか妙に寒くて息苦しい。

「あーもー!」

そんな空気を押し返すように。

タシタシと地面を蹴りつけてから、神様が叫んだ。

「こうなったら、最後の手段だ。ボクが——」

「もし神の力を使おうとしているなら、やめておきたまえ」

それより先に、魔女さんが肩をすくめる。

「あの三人がまとめて襲ってきたなら、私程度ではとても庇いきれん」

もつとも、ドラングレイグの時代には、神の存在などほとんど忘れられていたようだ

が——と。

やっぱり、魔女さんの言葉には気になることが多いけど……。

「それなら、こうだ！」

「あ、神様?!」

クオンさん達の動きが止まった一瞬、神様が走り出した。

「いい加減にしろおおおおおおおおおおおつ!!」

とりやー!——と、神様が跳び蹴りを放つ。

最悪の事態を想定して、思わず背筋が凍り付くが——…

「ううむ……。あれほど殺気がなければ、やはり反応できんか」

その蹴りは、思った以上にあっさりとかクオンさんの膝裏あたりに直撃した。

「だっ?!」

完全に不意を突かれたのか、カクンと、その体が大きく揺れる。

「ヘスティア、お前!? さてはここぞとばかりに殺しに来たな!」

「ちがわーい!! ボクを何だと思ってるんだ?!」

振り返り、割と本気で怒鳴ったクオンさんに、最大級の気迫で神様が怒鳴り返す。

それどころか、下から突き上げるようにその顎辺りに頭突きまで叩き込んでいた。

「だいたい、何でいきなり殺し合いをはじめるとだよおおおおおつ!!」

「いや、だってあいつらが……」

ホークウッドさん達を指さして、クオンさんが言い訳するけど——

「だってもあさつてもなああああいつつ!!」

——やっぱりというか、火に油を注ぐだけだった。

ああ、でも。さつきまでの張りつめた空気がもうすっかり弛緩しきっている。

流石です、神様!

「やあ、貴公。ずいぶんと元気そうじゃないか。安心したよ」

「……カルラか」

「貴公の事情は分からぬが、ここは剣を引け。無関係の者を巻き込むのは本意ではないだろう」

「ふうむ……」

それを好機と見たのか、魔女さんとソラールさんが二人の間に立ちはだかった。

というか、魔女さんはホークウッドさんと知り合いらしい。

「というか、君たちはタケが寄越した援軍とかじゃないのかい?!」

二人がため息とともに武器を降ろしたところで、僕達も傍に駆け寄る。

それより先に、神様が叫んだ。

「いや、人違いだろう。そのタケって奴には心当たりがない」

「うむ。私も精々迷い子の搜索しか頼まれておらん」

「ボク^神の言葉には『はい』か『YES』で答えろおおおつ!!」

がおー!——と、神様が吼える。

あの、神様。ホークウッドさんは多分、本当に関係ないんじゃないや……。

「これだから神って奴は……」

そのホークウッドさんとクオンさんの舌打ちが見事に重^ハな^モつた。

「今回は絶対に君たちのせいだろう?! そんな悪態ついても騙^ハされ^モないぞお!」

左右に結った黒髪を逆立たせ、神様も一步も引かない。

「今日は負けないからなああああああああ?!」

「よし分かった。覚悟しろ。今の俺はちよつとソウルに飢えているぞ」

いつも通りの取っ組み合いに、何だかちよつと安心した。

……それに、確かにいつもよりちよつとだけいい勝負になっている。

あつさり関節を極められても、まだ降^{ギラアツツ}参してない。

あの、神様。あまり無理しないで。クオンさんも程々のところでやめてあげてください

いね。

「さて、どうする?」

「流石に興が削がれた。貴公はどうだ?」

「同感だ。それに、このまま続けても意味がない」

「無念だが、そのようだ。何やら、妙なことになっておる」

アーロンさんとホークウッドさんが揃って肩をすくめる。

「ソウルが凝っておるようだ。失つてまではないが、意味を成しておらん」
何をどうすれば、あのようなことになるのか。

アーロンさんが兜の向こう側から、怪訝そうな視線を向けて——

「それにすつかり腑抜けていやがる。墓場から這い出してきたばかりの方がまだマシな面ツラをしていたな」

一方で、ホークウッドさんは小さく舌打ちして——

「放っておいてくれ。こつちにも色々事情があるんだ」

クオンさんが苦々しい声で呻いた。

「フン……。どこかにバシリスクの新種でもいるのか？」

「今のところ見かけてはおらんがなあ」

いずれにせよ、と彼らは嘆いた。

「今のそいつに勝つても意味がない。ソウル云々より腑抜けていることが問題だ」

「うむ。同感だ」

「つくづく放っておいてくれ。一応自覚だけはしているんだ」

クオンさんまでが、片手で顔を覆つてはため息を吐く。

それは、つまり、本当に本来の力を発揮できていない——？

「フン……」

ホークウッドさんとアールンさんが、それぞれ武器を納めた。

……事情はよく分からないけど、とりあえず戦いが終わったのは間違いなさそうだ。衝撃を飲み込めないまま、何とか無理矢理に納得する。

「行くのか？」

「ここにいっても仕方がない。あんたは？」

「ふむ。貴公と死合うのも愉しそうではあるが……」

アールンさんは肩をすくめて言った。

「物事には順番がある。まずは宿願が叶う時を待つとしよう。……互いにな」

フン、と。最後に鼻を鳴らすとホークウッドさんはそのままどこかに向かって歩き出す。

「ああ、そうだ。我が名はアールン。これも何かの縁だ。貴公の名を覚えてもらえるか？」

「ホークウッドだ」

それだけ言い残すと、今度こそホークウッドさんは歩き去っていった。

……多分、リリ達と言う『街』に向かっていったのだろう。

「では、私もまずはひよっこどもの世話でも焼いてくるとしようか」

そうやって、アーロンさんは、この前の……ええと、確か命さん達の方へと歩いていった。

「流石に疲れた……」

それを見届けてから、クオンさんが剣を杖代わりにして地面に膝をつく。

「相変わらずで安心したよ。この未熟者め」

「それ、絶対に褒めてないだろう」

「なに、まだ貴公の師を名乗っていられそうだと思っただけさ」

クスクス笑う魔女さんに、クオンさんがぐったりした様子で呻いた。

確かに、ここまで疲れ切った姿は初めて見る。

「あの、クオンさん……」

それどころか、こうして会うことすら随分と久しぶりのような気がする。

何だか、妙に緊張してきた。

「あー……。ええと、何だ……」

クオンさんも困惑しているらしい。

しばらく言葉を探ってから、

「何か、思ったより元気そうで安心したぞ」

「いや、それはまあ、今のクオンさんに比べれば……」

クオンさんは、それこそ初めて見るくらいボロボロになっているし。

「……そりやそうだな」

ため息とともに、右手に『火』が灯る。

聞き取れない言葉で物語が紡がれ、金色の魔方陣が浮かび上がり、その光に包まれてクオンさんの傷が消えていった。

……これで力が発揮できていないって言われても全く信じられないけど。

「やあ、クオン。久しぶりだね」

フィンさんが声をかけてきた。

「ああ。……シャクティから聞いているだろう。今さら寝首を掻いても一ヴァリスにもならないぞ」

「残念だけど、そのようだね」

再び険悪な空気が漂い出す。

……ああ、やっぱり安心したのは間違いだっただのかもしれない。

「まあ、それはともかく。例の呪詛……『深淵』と言ったね。それについて教えてもらおうか」

「ああ。分かった」

何だか、リヴェリアさんが言っていた言葉が嘘のようにクオンさんはあっさり頷いて

から。

よつぼど驚いたのか、目を丸くするフィンさんとリヴェリアさんに向かって言った。

「シヤクテイに聞け」

「私に丸投げするな」

色々と気になることはあるけど……でも、うん、まあ。

(やつぱり、クオンさんだよなあ)

変わっていない姿に。

あと、何だか慣れた様子で肩をすくめるリヴェリアさん達を見て、奇妙な安堵を覚えていた。

3

それから、すぐに。

フィンさん達が言っていた呪詛^{カーズ}——『深淵』というものについて、情報交換が行われることになった。

「もはや地上の冒険者の多くが知ることだ」

話の邪魔にならないよう、僕達は辞退しようと思ったんだけど……シヤクテイさんに引き止められた。

「むしろ、聞いておいた方が良い」

これからは全ての冒険者が最大限の警戒を要する異常事態として認識しておく必要がある。イレギュラー

シヤクテイの言葉に、思わず唾を飲み込んだ。

「とはいえ、僕達の方は全員参加とはいかないかな。人数が多いし、まだ寝込んでいる者もいる」

「人数と言えば、リヴィラの方にも声をかけておいた方が良いだろうな」

「そうだね。……となると、やっぱり全員参加とはいかないか。幹部と幹部候補を招集。残りは後で僕達が説明しよう」

フィンさんとリヴェリアさんが揃って肩をすくめた。

「急いで会場を用意する。すまないが、少し待っていてくれ」

その指示に従って、今は待機中なだけ……。

「あれは俺が出した指示だ。そして俺は、今でもあの指示が間違っていたとは思っていない」

「……それをよく俺達の前で口にできるな、大男」

「まったくです。しかも、その団員を最後に助けたのはベル様ではありませんか」

僕達は僕達で、解決しないといけない問題があった。

まあ、問題と言っても……『怪物進呈』^{パス・パレード}は、ダンジョンの中では日常茶飯事だ。

ダンジョンで生き延びるための手段の一つでもあり……それとは別に、まったく意図せず仕掛けてしまう事もある。

例えば、初めてアイズさんと出会ったあの日……まあ、つまり初めてミノタウロスと遭遇した日だけだ。

あの一件も、不測の事態だったらしい。大量発生したミノタウロスが一斉に逃走するという。

(あのミノタウロスが群れで逃げ出すって……)

やつぱり、アイズさん達って凄いなーと、少しだけ現実逃避してから。

理由は何であれ、全ての冒険者はいつ加害者側しかけるになるか分からない。

明日は我が身ではないけど……だからこそ、『怪物進呈』^{パス・パレード}には一定の理解を示さなくては行けない。

そこに悪意がない限りは。

——と、エイナさんから教わったことがある。

悪意。

あの時のこの人達……桜花さんたちにエイナさんの言うような悪意があったかどうか。

僕達から見れば『悪意』はあつたと言えるけど……本質的には仲間を守り生還するための行為だ。

とはいえ、そのせいで僕達が文字通りに死線を彷徨う羽目になったのも事実。

それに、あれは果たして『怪物進呈』と呼べるのか。

あの時、桜花さんたちと合流できなければ、背後から現れたモンスターの大群に襲われていたかもしれない。

(連結路前で崩落させ起こらなければ……)

いや、そんなことを言いだしたら切りがなくなる。

まずは一種即発のこの空気をどうにかしないと……っ！

「クオンさん……」

天幕の隅つこの方で胡坐をかき、成り行きを見守っているクオンさんへと振り返る。

「あく……。いや、大体事情は分かったし、心情的にはお前達の味方のつもりだが……」

困った様子で眉間を指先で搔いてから、

「シャクティ」

「だから、何でも私に振るな」

同じ天幕の中に、シャクティさんたちもいる。

……結構な人数なので、中にいるのはシャクティさんの他にアイシャさんだけだけ

ど。

まだ免罪が周知されていないので、クオンさん達が外にいと余計な騒ぎが起こりかねないんだとか。

「これに関しては、冒険者こそ専門だろう？」

「……それは、そうだが」

ため息を吐いてから、

「ダンジョンの中では不測の事態が起こるものだ」

改めて僕達を見回して言った。

モンスター・パーティー、ダンジョンギミック、怪物の宴や迷宮の陥穽。

武器やアイテムを失う。

現在地を見失う。

強化種の発生。

淀むことなく、いくつもの危険性をシャクティさんを指摘した。

それは悉く、今回の僕らが経験してきたことでもある。

「他に他派閥に抗争を仕掛けられるということもある。悪意を持った『怪物進呈』はその

一つだ」

もちろん、今回はそうではないことは承知しているが——と。

不満そうな桜花さんを制してから、

「ダンジョンとはそういう場所であり、また不用意に他派閥と関わるのは基本的に危険な行為だ」

暗黒期よりはマシになったが、今も悪名を誇る派閥には事欠かない。

シヤクテイさんがため息とともに肩をすくめる。

「だから、常に備えておけ。今回で言うなら、目の前にいるパーティーがどういうものかを知っておくだけでも少しは違ったはずだ」

具体的には助けを求めたなら、法外な報酬を請求してくる相手か。

逆に怪物進呈を仕掛けてくる相手か。

「もしくは、連携を組んだところで諸共に全滅するだけか。……警戒したのは、そんなところだろうか?」

「……違うとは言わない」

桜花さんが唸る。

実際、あの時の僕達に余裕はあったかと言われれば……。

(ちよつと厳しかったかな)

桜花さんたちを追っていたモンスターの群れが加わったなら、逃げ出すしかなかった。

ただ、連携さえ組めたなら、もう少し状況が違ったとも思う。

なし崩しに協力し合った撤退戦。ギリギリだったけど……それでも、まだ何とかなっていた。

崩落さえ起こらなければ——と、今さらそれを言っても仕方ないけど。

それに、例え崩落が起こらなくても、絶対に大丈夫だったとはとても言えない。

「せめて自分たちと実力の近い派閥については情報を集めておくことだ」

なるほど、と。声にせず頷いた。

ランクについては公表されているんだし、大体の到達階層は予想できる。

「大よその力量と雰囲気くらいなら、ギルドのアドバイザー達が教えてくれる。それだけ信じるのも危険だがな」

それでも、やらないよりはずっといい。

シャクティさんの言葉を聞きながら、ふと思いついた。

（そういえば、パーティの斡旋なんかもしてくれらんだっけ）

リリと会う前に、僕もサポーターについてエイナさんに相談したことがある。

ヴェルフも空きのあるパーティがないか相談したことがあるんだとか。

つまり、ギルドはある程度のパーティ事情を把握しているということだ。

「他にも、思いつく限りの想定をしておけ。何があっても乗り越えられるように。それ

が冒険者というものだ」

偉大な先達からの助言に、全員が真剣な顔で頷いた。

シヤクテイさんもそれに頷き返してから、

「もつとも、彼に関する情報はほとんど出回っていないからな。今回ばかりは仕方がないとも言えるか。何しろ、前代未聞の大躍進だ」

全くの無名からいきなり上級冒険者の仲間入り。噂になる暇もなかった。

少しだけ口調を柔らかくし、シヤクテイさんは冗談めかして言った。

「情報を集めるのは難しかったのは確かだな。実を言えば、私達も大した情報は持っていない」

「やっぱり」

——と、リリとヴェルフ……それどころか、アイシャさんまでが頷く。

あ、あれ。何だか凄く気まずい……っ!?

「他には……そうだな。冒険者らしく言うなら、大きな貸しを作ったと思っておけ」

少しだけ空気が軽くなったところで、小さく笑ってシヤクテイさんが続ける。

「いざという時に返してもらえばいい。少なくとも、彼女は踏み倒すことはしない。そうだろう?」

「ええ。勿論です」

「……そういう、ことでしたら」

すぐに力強く頷いた命さんを見て、リリも少し躊躇いがちに頷いた。

「それと、念のため伝えておくが。彼らを連れてきたのは私達ではない。偶然にダンジョンの中で出会っただけだ」

私達はギルドからの強制^{ミツシヨシ}任務で、一四階層から一八階層の調査中だった。

その言葉に、クオンさんとアイシャさんが肩をすくめる。

「彼らがお前達を窮地に追いやったのは確かだろう。だが、助けに来たこともまた彼らの意思だ」

その言葉に、神様もまた頷いた。

「あとは、お前達が決めるといい。どうしても許せないというなら、それも仕方がないことだ」

私から言えるのはそれくらいだな——と、シャクテイさんは肩をすくめる。

その言葉を最後に、しばらくの間沈黙が続く。

「……割り切ってはやる。だが、納得はしないからな」

「ああ……それでいい」

ヴェルフの言葉に、桜花さんも神妙な顔で頷く。

それで、とりあえず不穏な空気は取り払われた。

……まだちょっとぎこちないけど、それは仕方ないことか。

「話はまとまったか？」

「リヴェリアさん……」

気づけば、天幕の入り口にリヴェリアさんが立っていた。

「ちようどな。そちらも終わったか？」

「ああ。ようやくお前が持つてきた書簡が本物だと納得させられた」

眉間を押さえながら、リヴェリアさんが疲れた様子でため息を吐く。

……会場の準備というのには、あの書簡を伝えることも含めているのか。

なんて、今更ながらにそんなことに気づく。

「では、行くか」

「ああ。説明、頑張つてな」

「今度は間違いなくお前が専門だ！」

座ったまま無責任にひらひらと手を振るクオンさんに、シャクテイさんが叫んだ。

……

リヴェリアさんに案内された天幕には、フィンさんとガレスさんがすでに待っていた。
た。

他にもアイズさんやテイオナさん、テイオネさん。他にも何人か。

多分、噂の『街』の人もいるんだろう。見覚えのない、強面の冒険者が何人か混じっている。

そこにクオンさんとシャクテイさん。

僕とリリとヴェルフ。もちろん神様と……他に桜花さん達もいる。

免罪されたことは全員が知っているのか、敵意のようなものはない。

……思っていたよりはずつと。

「——と、まあ。大体『深淵』というのはそういうものだ」

説明もまた思ったよりも短かった。

と、いうか。短すぎてよく分からない。

(闇よりも暗い闇。神々ですら抗えない厄災。忌まわしき呪い……?)

いや、忌まわしい呪いっていうのは納得だけど。

「それでは抽象的すぎてよく分からない。もう少し詳しく話してくれ」

僕の心境を代弁するかのよう……と、いうよりその場にいる全員を代表して、リ

ヴェリアさんが言った。

「そう言われてもな……」

クオンさんも困ったように呻いてから、

「要点だけをまとめるなら、性質の悪い『呪い』だから近づくなつて話だ。異形や『深淵

種』がいたなら、間違いなくどこか近くに『深淵』が発生している。異形どもがいなくとも、周りが不自然に暗くなつたら要注意だ。もしくは、『虫こぶ』……ダンジョンの中に巨大な石柱か、それに似た不自然な造形物があつても同じだな。間違つても突いて破壊させるなよ」

虫こぶ……不自然な造形物。

その言葉に思い出すのは、やつぱりあの『変異種』をさらに変化させた『蛹』だ。

となると、フィンさん達が言うように、あれはその『深淵』というものの影響で生まれたのだろう。

「あと、さっきも言ったが、念のためこの薬は常備しておけ。決して過信はできないが、それでもないよりはずっといい」

最後に小箱に入つた黒い丸薬を示して、クオンさんが言う。

「それはどこで手に入るんだい？」

「オラリオでは『イーリアス』って店に売ってるらしい。詳しい場所はギルドに問い合わせろ。実は俺もまだ行つたことがない」

ウラノスからの情報だから間違いはないはずだが——と。

クオンさんの言葉に、シャクテイさんが付け足した。

「イルタ……第一次調査隊が、その店員から薬を受け取っている。それを服用した者は

ほとんど生還した。私達もな」

「なるほど。地上に戻り次第、手配しよう」

『イーリアス』に売っている『黒虫の丸薬』ですか……。リリもすぐに買いに行かないと……」

きつとすぐに品薄になる——と。

フィンさんの言葉に合わせて、隣のリリまでがため息を吐いた。

「だが、あまり過信するな。『深淵』そのものに落ちたなら、大体の奴は良くても死は免れない」

「悪ければ、あの異形の仲間入りか？」

「そういうことだ」

あつさりとした肯定に、リヴェリアさんが嘆息した。

もちろん、嘆息したのはリヴェリアさんだけではないけれど。

「対処法は？」

「とりあえず、正気のまま地上に戻ってギルドに知らせろ。あとは、こちらで何とかする」

「それについてだが、一つ訊きたい」

リヴェリアさんが鋭い視線を向けて言った。

「何故お前だけがその『深淵』に入ることができる?」

「別に俺だけってわけでもないんだが……」

肩をすくめてから、クオンさんは続けた。

「大昔に『深淵』を生み出した公王ども……簡単に言えば『深淵の主』を殺したからだ。その時に耐性ができたらしい」

『耐異常』のようなものか」

「おそらくな」

「それなら、次に出現した『深淵の主』を討伐すれば、僕達にも耐性ができると?」

フィンさんの問いかけに、何故かクオンさんは首を横に振った。

「可能性がないとは言わない。だが、極めて低いだろうな」

「何故だい?」

「お前達が、『神の血』を寄る辺にしているからだよ。言っただろう。神々ですら抗えない厄災だと」

その言葉に、ざわめきが起こる。

「これはもう単純に相性の問題だ。何とかしろと言われても困る」

冒険者だからこそ、それには対応できない。

クオンさんが言っているのはそういうことだった。

ざわめきが起こらないはずがない。

「ベートが君について行つたと【象神アングレーシヤの杖】から聞いたけど、それはどういう絡繰りなんだい？」

「まったく方法がないなら、まず俺自身が公王どものところに辿り着けるはずがないだろう」

クオンさんが取り出したのは、一つの指輪だった。

【深淵歩き】……神々の英雄が命がけで残した代物だ。こいつの力があれば、何とかなる。外さない限りな」

「神々……。まさか神創武器の一種だと？」

フィンさんの言葉に、先ほどとは別のざわめきが満たしていく。

ほうー！——と、どこかで歓声にも似た声まで上がり……。何故かヴェルフがため息を吐いた。

「おそろくな。もつとも、俺も実際にどうやって作られたのかまでは知らないが、だが、その神が遺したものだという事はまず間違いない」

彼の墓に安置されていたものだからな。

クオンさんは、何故か嘆息しながら言った。

「となると、そちらを量産するのは、ほぼ不可能か……」

「待て、フィン！ それは早計というものだ。まずは手前どもに見せてみよ！」
興奮した様子で言ったのは、ヴェルフに絡んでいた女の人……「ヘファイストス・ファミリア」の団長、椿さんだった。

「落ち着け。あれは武具というより魔道具マジックアイテムだろう」

リヴェリアさんがため息を吐く。

「ここは鍛冶師スミスではなく、魔道具アイテム作製者の出番だ」

「むむ……」

一転して、無念そうな唸り声を上げてから、小首を傾げて。

「しかし、ベルセウス「万能者」が所属するのは——……」

「頼む。何も言うな。話が進まなくなる」

リヴェリアさんが遮るように……そして、まるで懇願するように言った。

「『耐性』に関してだが」

さらに畳みかけるように、シャクテイさんが続ける。

「その指輪を使い、ヴァナルガンド「凶狼」が『深淵』内部に侵入。いわゆる『深淵の主』を討伐している」

「ベートに耐性が発生しているかもしれない。そういうことかい？」

「だが、『耐異常』と同じく発展アビリティだとすれば、ランクアップを待つしかない」

確かめられるのは、いつになることか……。

リヴェリアさんが柳眉を寄せる。

「その通りだが……もし『スキル』であれば、いつ発現してもおかしくはない。賭けではあるが」

「ああ。……これは倍率オッズの高い賭けになりそうだ」

オラリオに名を馳せる大派閥の団長や幹部たちが揃って深々と嘆息した。

ひよつとしたら、物凄く貴重な光景かもしれない。

……いや、そんな呑気な話じゃない。それほどに深刻な事態なのだ。

「そもそも話、何故『深淵』は発生する？ 過去に発生例はないはずだ。少なくとも、ダンジョン内では」

「誰かが発生させていると見ていい。今のところは、だがな」

「では、その誰かを止めれば？」

「新しく発生することはない。ダンジョンがその呪いを取り込まない限りは」

「なら、術者の搜索を優先……いや、それこそが急務だね。心当たりは？」

「あつたらまずそつちを潰しに行っている」

「それもそうか」

今のところ、対処する以外の方法がない。

でも、このまま放っておいてダンジョンの至る所にそんな呪いが発生するようになったら、それこそ終わりだ。

探索することもままならず、ダンジョンからは『変異種』——『深淵種』が溢れ出てくることになりかねない。

本当に神々ですら封じきれないなら、神蓋パベルの封印もまた意味を失いかねないのでは……？

そんなささやきが天幕の中を満たしていく。

「何というか……。こりや、俺達も本気で他人事じゃないな」

『中層』どころか『上層』に発生してもおかしくないということですからね……」

深刻な空気にげんなりとした様子で、ヴェルフとリリが呻いている。

それは僕も同じ気分だったけど……。

(本当にモンスターも変容するんだ……)

安心する、と言うのも変な話だけど……それでも、やつぱり——…

「やつぱり、連結路近くで遭遇した変なモンスターは……」

「ええ。あれはアルミラージです」

胸つかに悶えていた不安を呟くと、近くにいた命さんが頷く。

『深淵種』と言われる状態にならない限り、自分の『スキル』は元のモンスターと認識

するようです。ここまでの道中でもそうでした」

その言葉に、改めてホツとする。

もちろん、リヴェリアさん達の言葉を疑っていたわけじゃないけど……。

「最後に念を押しておくが」

そんな僕の安穩とした考えを見透かしたようにクオンさんは言った。

「異形化したなら、後は殺すしかない。殺されるのが嫌なら、その闇には近づかないことだ」

その言葉を最後に、その説明会は幕を下ろした。

……

それからいくつか、質問が飛び交ってから……。

「ところで、ベル。お前達はずっとここにいたのか？」

最後まで天幕の中に残っていた僕達に、説明を終えたクオンさんが問いかけた。

「え？ はい、ずっとアイズさん達にお世話になってました」

「そうか……」

「あの、どうかしましたか？」

何かを考えこむようなその表情に、少し不安を覚えつつ問いかける。

「いや、宿代が高くついたので、それとも安く済んだのか考えてただけだ」

肩をすくめ、ため息を吐いてから、

「おい」

「何だい」

「受け取れ」

何事か打ち合わせをしていたフィンさんが振り返ると、クオンさんは結構大きな何かを投げ渡した。

「おつと！……これは？」

バルウム
小人族のフィンさんが両手で抱えなくてはならないほど大きな魔石だった。

ファルナ
恩恵を宿した冒険者でなければ、平然と受け止めることはできないんじゃないかと思うくらいに。

「ベル達の宿代と治療費だ。お前達はもう地上に帰るんだろう？ 地上価格で売れば、

それ一つで充分だと思うが」

「ああ、確かに。でも、ここじゃお釣りは出せないよ？」

「気にするな。初めから期待してない」

その言葉に苦笑して、フィンさんがそれを傍にいた黒髪の優しそうな男の人に渡した。

「あんなに大きな魔石があるんだ……」

「あれは、ゴライアスの魔石だね」

目を丸くしていると、アイズさんが言った。

「え？ ゴライアスの？」

「うん。何度か、見た事があるから」

……それは、そうだろう。

二週間前にあの巨人を倒して、アイズさん達は『深層』へと向かっていったんだから。

(それに……)

逃げるのがやつとだったあの巨人。

それよりももっと強大な階層主を、アイズさんは一人で倒している。

二週間以上前に聞いた話を……成し遂げられた『偉業』の過酷さを改めて思い知る。

憧憬はまだ遙か先にいるということも。

「何だったら、帰りの護衛代も出るけど……」

「それは本人達に聞いてくれ。とりあえず、俺達はもうしばらく一八階層にいるからな」

「ここに残る。ああ、リヴィラの住人の安否確認だね」

「ああ。さつき何人か見かけたが、念のためな」

「僕達の把握している範囲では、何人か異形化したただけだけど……。それと、地上に向かった冒険者が帰って来ない」

でも、そちらはギルドに『保護』されているんだらう？

フィンさんの問いかけに、クオンさんが小さく笑う。

「ああ。あいつらは口も人相も柄も悪いからな。どうせ『要警戒』扱いになつてるんだらう」

「違う——と。今度はフィンさんが笑った。

「あの様子なら、本当に単なるリヴィラ観光で終わりそうだな」

祝杯はシャクティに止められているが——と、小さく呟くのが聞こえた。

「だらうね」

「だが、顔だけは出しておかないと、後でギルドに文句を言われる。それは面倒だ」

頷くフィンさんに肩をすくめて見せてから、クオンさんは天幕を出ていった。

「ええと……」

「ああ、気にせず泊まって行ってくれていいよ。もちろん、帰路に同行してくれていい」
困惑していると、フィンさんが苦笑した。

「と、いうより。帰還はともかく、リヴィラに泊まらせるのは色々と不安がある」

あの、何で僕を見て言うんでしょうか……。

何かどことなく幼子でも見守るような目でリヴェリアさんに見つめられ、困惑する。

あと、性懲りもなくちよつとドキドキした。

「でも、クオン君がいるだろ？ あの子がいるなら——」

「それだけなら、問題ないが……」

首を傾げる神様に、リヴェリアさんが少し視線を泳がせてから言った。

「今は、その……霞やアンティアーネイラ【麗 傑】が同行している」

「はっ！ 確かにっ!?!」

「ベル様、ここは素直にお世話になりました！ ええ、折角のご厚意ですから!!」

「ええ?! き、急にどうしたの?!」

目の色を変えて、神様とリリが迫る。

「こ、これはまさか『はい』か『YES』で答えなくちやいけないやつなんだろうか……っ

!

「あの、すみません。お世話になります」

「ああ、ゆっくりしていつてくれ」

それで結局。

頭を下げる僕に、フィンさんは苦笑しながら頷いてくれたのだった。

そして、それから。

「ところで、シャクテイ。君はどうするんだい?」

「クオンと共にリヴェイラに向かう。お前を疑う訳ではないが、直接この目で見て……念

のため、他の住民からも話を聞いておきたい。それに、私もロイマンに文句を言われるのはごめんだからな」

リヴィラの安否確認も強制任務ミッションの一部だからな。できる限りの情報を集めておきたい。

シヤクテイさんはそこで、僕達の方に視線を向けてから、

「宿は別にとるさ。奴は、わざわざ寝込みを襲ってくることはないからな。それよりも、お前達に貸しを作る方が怖い」

「酷いな。困っている同業者に手を貸すくらいは僕達だつてする。……まあ、君達のような大派閥になら、流石に少しくらい見返りを求めるか知れないけどね」

フフツ……と。小さな笑い声。

うん、これは第一級冒険者同士が交わす一流の冗談に違いない。

何となく微妙に漂っている気がする緊張感は単なる錯覚だという事にしておく。

「……ところで、『象神アンクーシャの杖』。一つ気になっているのだが」

実際、その一言でその変な空気はあっさり霧散していった。

「どうした？」

「彼女は、神ヘステイアだろう。……私の記憶が確かなら、神々がダンジョンに立ち入ることは禁止されていたはずだが」

「ええ?!」

悲鳴を上げながら神様を見ると、何故か神様はぐつ、と親指を立てていった。

「大丈夫だぜ、ベル君! 今のボクは霞君の妹のヘスだからね!」

「……はい?」

「あれ、ティアだったかな?」

問題はそこじゃないです!

可愛らしく首を傾げる神様に、思わず突っ込みそうになった。

「何も言うな」

「分かった。何も言わない」

頭を抱えて呻くシャクテイさんに、リヴェリアさんが沈痛そうな顔で頷いた。

あの、何だか本当にすみません……。

「よく分かりませんが……グダグダなことになっている気配がします」

そもそも、ここでネタバレしてどうするんですか——と。

半眼のリリマだが、呆れた様子でため息を零している。

「……だが、どのみちひとり地上に帰せるわけもない。詳しい話は地上に戻ってからだ」

「な、何だつてー!?!」

神様の悲鳴を聞き流し、シャクテイさんは何故か僕に視線を向けた。

「ベル・クラネル」

「は、はい！」

第一級冒険者に名前を呼ばれ、つい背筋が伸びる。

「本来なら、真っ先にするべきことだったが……すまない。フィリア祭では、私達の落ち度で迷惑をかけた」

どうか神ヘスティアにも伝えておいて欲しい。

わざわざそう付け足してくれるシャクテイさん。やっぱり、色んな意味で良い人に違いない。

いや、今はそんなことよりも……。

「い、いえ、そんな……！」

フィリア祭の裏側であったことは、何となくだけど分かっている。

僕達が巻き込まれたのは、多分ちよつと運が悪かっただけの事だ。

別にシャクテイさん達が悪い訳じゃない。

「それなら、少しだけボクの相談に乗ってくれるかい？」

一方、神様は妙に真剣な顔でそんなことを言いだした。

「……いくら『ガネーシャ・ファミリア』の団長でも、ギルドの規則は曲げられないと思

いますよ?。」

とうか、曲げられたならそっちの方が問題です。

まだ半眼のままのリリが言う。

「ち、ちがわーい! それに今のボクは霞君の妹だし!」

『今の』と言っている時点でアウトではないですか?」

「……それで、相談とは?」

シヤクテイさんが何事もなかったかのように問いかける。

リリとのやり取りは、鋼の精神力でなかったことにしてくれたいらしい。

「うん、それなんだけど……」

ちよいちよい、と神様は手招きをする。

シヤクテイさんが軽く身をかめると、

「いえ、それは……」

「頼むよ。多分、もうボクも——」

聞き取れたのは、それだけだった。

色々なことがあったせいだろうか。何だかちよつと不安だ。

「分かりました。私からもクオンに相談してみましよう」

「うん。よろしく頼むよ」

神様の言葉に頷くと、シャクティさんも天幕を出ていった。

4

「わざわざ呼び止めて、今度は何のようだ？」

先ほどとは別の天幕の中で、クオンが問いかけてくる。

不機嫌そうなのはいつもの事だけ……今回は、それに加えて警戒の色がある。

「ソラール達どころか、わざわざアーロンまで呼びつけて……」

ソラール——彼の友人だという戦士と、カルラという女魔導士。

彼女とクオンの関係については、特に深掘りする気もないけど。

それとは他に、「タケミカツチ・ファミリア」と関わりのあるらしい、アーロンという

剣士も招いていた。

他にいるのは、リヴェリアとガレス、それにアイズ。

もちろん、クオンへの言伝を頼んだ【象神の杖】アンクローシャもいる。

「勧誘したいなら、本人に直接交渉しろ。俺に仲介を期待するだけ無駄だぞ」

「その助言は有り難く受け取っておくけど、今回はそうじゃない」

肩をすくめて見せるが……それで機嫌が直る訳でもない。

これ以上悪化する前に、本題に入ることにした。

「彼の名前をアーロンと言ったね。そして、彼女はその名を冠した騎士団が存在したとも」

「ああ。アーロン騎士団と言えば、当時は精鋭で鳴らした存在だった」
クオンに続いて、アーロンもまた頷く。

「もつとも、栄枯盛衰は世の常。私が出奔してさほどの時を置かず、デーモン一匹に滅ぼされたと聞くが……」

未熟者どもめ。その言葉から、感情を読み解くことはできなかつた。

口調の通り呆れているのか。それとも、単なるありきたりな演技なのか。

「実は以前、ホークウッドと共にとある冒険者依頼^{クエスト}に赴いたことがある。もつとも、僕じゃなくてアイズとベート、そしてレフイーヤ^{レフイーヤ}だけだけど」

正確には、他に「ヘルメス・ファミリア」も加わっているのだが……あの男神とクオンとの関係性は僕達より遙かに悪い。

迂闊に名前を上げては、まとまる話もまとまらなくなる。

もつとも、

（おそらく黒ローブの男は神ウラノスの私兵だ）

ならば、すでにクオンの耳にも入っていたとして、何ら不思議はない。

……いや、神ウラノスもまた同じことを考え、あえて伏せている可能性もあるか。

「それがどうかしたか？」

「その時に、奇妙な人物と敵対することになった」

もつとも、それが本当に人間だったかどうか。

「さては、こういう鎧を着たやみれ……赤黒い人影だな」

クオンの体が青白い燐光に包まれる。

いつもの『スキル』だ。

そして、光が消えたのち、纏っているのは見慣れた黒衣ではなく、紫黒の鎧。

「その鎧……！」

それを見て、アイズが少しだけ声を荒げる。

「アイズ、間違いないかい？」

「うん。あの人が来ていた鎧と同じ」

「ふむ……。確かにそれは、我らがアーン騎士団の鎧だが……」

唸るアーンに、クオンがあっさりと言った。

「中身は多分、アーン騎士じゃないだろうな」

「うむ。まず得物が違う」

「ああ。それに、太刀筋もだ」

アーン騎士には、俺も散々世話になったからな。

クオンはそう言つて肩をすくめる。

「あの刀は《人斬り》だ。こいつと同質の代物だな」

クオンの手には、赤錆び、刃毀れすら見られる刀が握られていた。

一見すると、ロクに斬れそうにないけど……。

「ほう、これはまた珍しい物を持っている」

「知つているのかい？」

「うむ。多くの命を奪つた刀は、時にああいった代物に転じると聞く」

「刃に染みついた血は呪詛となり、毒となつて新たな死者を招く。……と、まあそういう伝説だな」

これだけ錆びて欠けた刀で斬られたら、傷口が腐るのは当たり前だが——と。

クオンは苦笑してから、

「だが、こいつには確かに毒が宿っている。それに、奴の長刀にもな」

「うん。斬られてすぐに毒が回つた。化膿とかじゃない」

その言葉に、アイズが力強く頷く。

「それに、赤黒い人影じゃ、なかったよ。見た目は、普通の人間みたいだった」

「ほう」

少しだけ驚いた……いや、違う。

何かを納得したように、クオンは呟いた。

「やはり本体がいるか……」

「何か知っているのかい？」

「四年前に振り返り討ちにあつた。まあ、元々消耗してたつてのもあるが」
特に気にした様子もなく、クオンは言う。

（……まさか本当だったとはね）

悪い冗談か。さもなければ人違いであつて欲しかったけど。

……もつとも、そういうこともあるのだろう。

黒金の鎧を着込んだ剣士を横目に見やり、内心で呻く。

（あのまま続けていたら、クオンは負けていた）

監視所前での戦闘を思い出す。

三つ巴であつたことを差し引いても、劣勢だったのはクオンだけだ。

——俺など、別に大したことはない

事あるごとにクオンが口にするその言葉は、最悪なことに真実だったらしい。

（……いや、それはどうかな）

彼を圧倒していた二人。

しかし、その言動からして、彼らこそがクオンに敗れている。

だからこそその再戦だ。

そして……

「あと、赤黒い人影とも、会ったよ」

「何だと。どこでだ？」

アイズに問いかけたのは、【象神の杖】^{アンクローシャ}だった。

「ダンジョンの中。今回の『遠征』で……」

【象神の杖】。やはり、君も知っているのかい？」

彼女に視線だけで問いかけられたクオンが肩をすくめる。

「詳しいことは言えませんが、メレンで少しな」

「メレンだって？」

「ああ。地上に戻れば、おそらく耳にするはずだ。ただ、これに関しては私達が預かっている案件でもある。繰り返すが、お前達にも詳しいことは言えん」

メレンは自治権を持った街である。

ギルド支部は存在するが、オラリオと違い都市運営には関わらず、魔石交易の窓口を務めているだけだ。

少なくとも、建前上はそう言う事になっている。

従って、あくまでオラリオの憲兵である【ガネーシャ・ファミア】はメレンないし

ギルド支部からの要請がない限り介入できない。

介入したということは、何かしら異常事態イレギュラーが発生していて……おそらくは、メレンとの外交問題も絡んでいる。

となれば、メレンの住民からの信頼も厚い【ガネーシャ・ファミリア】の独壇場……いや、彼女たち以外には任せられない案件だ。

他に、『女主人ペーレト・バビリの神娼殿』でもな」

「待て。それは俺も初耳だぞ」

「お前達の後始末に行った時の話だ。感謝しておけ。おかげで闇派閥残党との繋がりがはつきりした」

少し焦った様子アンクローシャのクオンに、「象神の杖」がため息を吐いて見せた。

「こちらはまだ調査中で、あまり確かなことは言えんが……首謀者は【タナトス・ファミリア】だな。他に死兵を用いてきた」

「なるほど」

二四階層の一件でも、死兵が用いられている。

となると、今の闇派閥派の中核は【タナトス・ファミリア】と見ていい。

暗黒期から今にかけて、壊滅したという話は確かに耳にしていないが……。

(それほどに人員が豊富なのか……)

言葉を選ばずに言うなら、死兵とは使い捨ての駒だ。

補給の目途が立たない状況で、その戦術を使い続けることはできない。

暗黒期が終わって久しい今、一体どうやってそれだけの人数を集めているのやら。

「なら、せめてその『赤黒い人影』についてだけでも教えてもらえないか？」

いや、そこまで人員が多いわけではないのかもしれない。

だから、ああいった奇妙な存在を利用しているという可能性もある。

「闇霊』と呼ばれる存在だ」

応じたのは、やはりクオンだった。

気づけばすでに、いつもの黒衣に戻っている。

まったく、相変わらず便利な『スキル』だ。

「召喚のされ方はいくつかあるが、基本的に誰かのソウルを求めて侵入してくる霊体だ。

過去からか未来からか。……例の『人斬り』はどこか別の場所からだろうか」

「魂を奪うために人を殺すと？」

まるで御伽噺に描かれる死神のようだ。

「別におかしな事はないだろう。お前達が魔石や経験値エクセリアとやらを求めてダンジョンに潜るのと同じだ」

「僕達の相手はモンスターだよ」

「選んで殺すのが、そんなに上等か？」

……どうにも彼とは価値観が噛み合わないらしい。

(案外、彼にとつては神もモンスターも変わらないのかもね)

だとすれば、やはりいずれは決着をつけることになるのだろう。

冒険者以前に、地上に生きる人間の一人として避けては通れない。

「呼ばれてくる奴は、基本的に『瞳』^{オクリ}に見入られた奴の力量と大差がない。赤いサインを踏んだ場合はその限りじゃないがな」

「金色のサイン云々の噂なら、僕も聞いたことがあるけど……」

「それは多分、ソラールのことだろう」

「おそらくな。ダンジョンの何ヶ所かに、時々サインを書き残してある」

クオンの言葉に、ソラールという戦士が頷いた。

「俺は『太陽の戦士』の一員だからな。苦難に挑む者たちを勝利へと導くことこそが使命。分かち合った勝利こそ何よりの誉れだ」

「その【太陽の戦士】とは？」

「『太陽の光の長子』を主神とする古くからの誓約だ」

答えたのはクオンだった。

「ファミリアのことかい？」

「それとは少し違う」

「その神の真名は何だ？」

「さあな。伝わっていない」

「何？」

「竜狩りの戦神。父である『太陽の光の王』グヴェインに劣らぬ武勇の持ち主。そして、神々に背を向け、宿敵たる古竜に与した愚か者。だからこそ、その名はすでに失われている」

「追放された神だと？」

「ま、そう思っておけ。だが、それでも多くの信徒がいる。大王グヴェインの名が忘れられた後にもな」

グヴェインより人望があつたんだろう。

小さく笑うクオンの言葉に、ソラールが困つたように身じろぎした。

……まあ、彼にとつては返事に困る話題だろうけど。

「古い信仰か。それなら、僕も分らないことはないな」

僕ら小人族バルクムの心の拠り所だったフィオナ信仰。

神々の降臨と共に、その幻想は打ち碎かれ、今や廃れた。

しかし、廃れ果てなおも、今も手放せない。半ば呪いのようなものだ。

(まあ、彼の信仰はまた違うみたいだけどね)

神の座から追放されていると知っていてなお信仰が続いている。

理由は分からないけど……なるほど、確かに人望があるのだろう。

(いや、滅びゆくその古竜を憐れんだとかそんなところかな?)

苦難に挑む者たちを勝利へと導くことこそが使命。それがその無名の神の神意なら。

それに従い、神の名を捨ててまで滅びゆく古竜モンスターに手を差し伸べたのかもしれない。

神の道楽とはいえ、酷く愚かな行為だと……

(いや、これ以上考えるのはよそう)

思考をそこで打ち切った。

「知っているようだが、俺のサインはよく目立つ。見かけたら遠慮なく呼んでくれ」

「できれば、あんまりこいつらとは関わらない方が良いと思うが……」

ソラールの言葉の陰で、クオンが小さく呻く。

「その時は頼りにさせてもらおうよ」

それは聞こえなかったことにして、ソラールの言葉に頷いた。

魂喰ソウルイーターらしい相手には攻撃が通じづらく、また対策がないというのが現状だ。

ならば、例え一時的にとはいえ、クオン側の存在を味方につけられるのは心強い。

「話はそれで終わりか? なら、俺達はそろそろ行くぞ」

返事を待たず、クオンは天幕を出ていった。

つき従うように、カルラという魔導士も。

「それでは、失礼する。いずれまた会う事もあるだろう」

一礼して、ソラールが。

「おそらく『闇霊』に関しても、近いうちにギルドが公表するはずだ。これから、私達にとつても『深淵』と同じく共通の脅威となる存在だからな」

続けて、【象神デングクレーシヤの杖】が出ていく。

そして——

「……では、私も失礼するでしょう」

最後にアーロンもまたそう言った。

「もつとも……ベル・クラネルと言ったか。あの子どもを連れて戻るのが、武神殿の頼み。彼らが貴公らに同行するのであれば、また会う事もあるだろうが」

天幕を出ていこうとする彼を呼び止める。

「すまない。一つ……いや、二つだけ教えてもらえるだろうか？」

「私に答えられる事であれば」

思いのほか、あつさり承諾の言葉が返ってくる。

これは、二つと言わずもう少し欲をかいしておくべきだったか……。

(いや、ここは慎重に行こう)

三度目の正直とは言わないが。

クオンやホークウッドでの失敗を少しは活かしておくべきだ。

特にクオンとの関係性を改善するのはおおよそ絶望的だ。

彼が持っているであろう情報は、誰か別の相手から手に入れるしかない。

これ以上の伝手を失う訳にはいかなかった。

「クオンが力を失っているというのは本当なのか？」

「何を以つてあ奴の力と言うかにもよる。経験や技量であれば、私が知るより上だ。

……もつとも、大剣の扱いは相変わらず含蓄がないがな」

なるほど。どうやら、クオンが本当に得意とする武器は大剣ではないらしい。

力を失い、さらに武器まで制限してあれとは……。

内心で、深々とため息を吐く。

「確か貴公らは『らんく』だの『ふあるな』だのを基準としているのだったな」

ふうむ……と、アーロンもまた少し唸つてから言った。

「我らにとつてそれに類似するもので例えるなら、確かに衰えておる。ソウルが完全に凝つておるわ」

ソウル……つまり魂こそが、彼らの力の源であるらしい。

それについても気になるが、今ここで深入りするのは避けておこう。

だが、やはり、クオンもまた『魂喰ソウルイーターらい』だと結論してよさそうだ。

あるいは、このアーンという剣士や『人斬り』達も同じだろう。

「では、あなたの記憶にあるクオンと今のクオンを比較して、いったいどれほどそのソウルの力は衰えているんだい？」

「ふむ……。まあ、おおよそ四割といったところか」

思わず声が上がらずにそうになった。

それを何とか宥めすかしてから、呻く。

「四割も失ってあれか……」

それだけでも驚愕すべきことだった。

だというのに。

「いや、違う。言い方が悪かったな。残っているのが四割だ。六割ほどが失われておる」

その言葉が理解できなかった。いや、理解するのを体が拒んでいた。

今度こそ、完全に言葉を失う。

「今ある力は、半分以下だと？」

かすれた声でリヴェリアまでが呻く。

アイズが絶句し、豪胆なガレスまでが目を剥いている。

「だが、そう言った強きは、我らにとつて……特にあ奴にとつて絶対的な問題ではない」
嘆くようにして、アールンが肩を落とす。

「今のあ奴が私に勝てない道理はない。例えばあのベル・クラネル程度の力しかなかろうと……あるいは常人のそれと変わらずともな。我らの戦とはそういうものだ」

そして、あ奴は必ず勝ち目を見出す。あれはそういう怪物だ。

「あ奴の『強さ』とはソウルの力とはまた違う場所にあるからな」

あの時のあ奴は、実に恐ろしかった。

呵々と上機嫌に笑つてから……一転して、しかし、と彼は肩を落とした。

「何があつたかは知らんが、今やそれが折れそうになつてゐる」

嘆かわしいことだ。

肩を落としたまま、彼は嘆息と共に首を左右に振る。

「あれでは見たままに、只の凡庸な剣士ではない。今のあ奴を打ち負かしたとて、我が未練は晴れんなあ」

もしか、それが二つ目か？

その問いかけに、何とか頷いた。……おそらく、頷いたはずだ。

「では、今度こそ失礼しよう」

未だ言葉は失われたまま。

ただ、天幕を出ていくその背中を見送るばかりだった。

……

「あれで、四割だと……?」

「仮に本当だとするなら、推定ランクはいくつになるかの?」

「今の時点でL v. 7以上は堅いからね」

単純に考えて一七ないし一八。前代未聞もいいところだ。

「彼一流の冗談だと思いたいな」

そんな者は、かの大神ゼウスやヘラの眷属にもいなかった。

あくまで僕が知る限りだが、人類の最高到達ランクはL v. 9なのだから。

その倍など悪夢という言葉すら生ぬるい。

(どうりで、僕達を歯牙にもかけないわけだ)

半分以上の力を失った自分にすら劣る相手だ。

相手をするだけでも馬鹿馬鹿しいだろう。

……まったく、笑えない話だ。こんな馬鹿げた話はない。

「……アイズ、くれぐれも早まった真似をするなよ」

「……うん」

リヴェリアの心配も、今回ばかりは早計だろう。

今のアイズはほとんど茫然自失と言った有様だ。

僕だって、まるで足元が崩れ落ちそうな感覚に苛まれている。

「問題は、クオンじゃない」

今まで何度となく感じてきた死の気配。

それがすぐ背後にまで忍び寄ってきているせいだ。

「その力を取り戻さなくては太刀打ちできない何か、今オラリオに迫っているという
ことだ」

だから、彼を知る誰もがその力を取り戻させようとしている。

……まあ、アーロン達ももっと個人的な理由だろうけど。

「それは黒竜と同格か、下手をすればそれ以上の脅威になる」

ゼウス、ヘラの二大派閥すらも打ち破った最悪の怪物。

クオンとは、それでもまだ何とか平穏な関係を築くこともできるだろう。

実際にそれを成し遂げている神は何柱なんにんかいる。

だが、その『何か』はどうだろうか。

それとも……

「もしくは、彼こそがその厄災そのものかもしれないけどね」

神々の天敵たる【闇の王】。

あの治療師^{ヒーラー}の言葉を信じるなら本物の『深淵の主』。

その言葉を全く否定できるだけの情報もない。

クオンこそが全ての元凶。その可能性もまた完全に否定できてはいなかった。

何しろ、彼は前例のない異常事態^{イレギュラー}に關わりすぎている。

『深淵』というものに立ち入れるのは真実と見ていい。力を失っていることも。そこに加えて苛烈な神嫌いだ」

神々の天敵たる力……その失われた一部が『深淵』という形で出現しているのではないか。

その可能性もまだ無視はできない。

「やはり、「クアト・ファミリア」……あの治療師^{ヒーラー}にもう少し詳しい話を聞いた方が良かったか」

とはいえ……もし四年前に戻れるなら、もつと冷静になれと自分自身を諭したいところだ。

こんな薄氷の上に成り立つ小康状態でなければ、もう少し他のやりようもあつたかもしれない。

少なくとも、もう少し積極的に腹の探り合いをしかけられたはずだ。

だが、今となつては、探ろうとした途端、その腕ごと斬り捨てられかねない。

それに、今回のように素直に情報を渡してくれたとして……果たして、本当に信じていいものなのか。

疑念を捨てきれずにいるのは、リヴェリア達も同じだろう。

そう思ってしまう程度には、関係が拗れている。

(……だが、そう言った心情的なものだけなら、まだ何とかなる)

本当に必要なら、飲み込めないことはない。

しかし——

(あの女魔導師……)

カルラと言ったか。

彼女に近づくと微妙に……ともすれば錯覚だと思っただけだが、背中に焼けつくような悪寒を感じる。

その矛盾した感覚は、デーモン——正確には、そこから生じた『汚泥』と対峙した時に感じるものと同じはずだ。

少なくとも、ガレスたちも『焼け付くような悪寒』と表現していた。

(シヤクテイの話からすると、彼女もまた耐性を持っている)

そして、その彼女は……まあ、間違いなくクオンと深い関係にある。

クオンが神々の天敵たる「闇の王」であり、『深淵の主』だとするなら……あの魔女も

それに連なる存在なのではないか。

あるいは、彼女こそが一四階層に深淵を生み出した元凶と言う可能性も充分にあり得る。

だとするならば、クオンから情報を得たところで果たしてどれほどの意味があるのか。それとも、これは単なる私情か。今も燦る敵愾心が見せている幻なのか。

それもまた、否定できるものではない。それくらいの自覚はある。

(本当に厄介な相手だ……)

クオンと言う人間。その人物像を描くために、何かが決定的に足りていない。そのせいで、どうにか描いたそれすらもすぐにズレてしまう。

彼だけの話ではない。

オラリオで起こっているいくつかの異常事態^{イレギュラー}。

それを伝っていくと、その多くがクオンという闇に迷い込む。

クオンは敵なのか。それとも味方になりえる存在なのか。

……いや。

誰が敵で、誰が味方なのか。

それすらも曖昧にするほどの暗い闇がそこにあつた。

ならば、方法は何であれ、まずはその闇に火を灯さないことには始まらない。

黒竜と同格の脅威に不意など打たれては、それこそ成す術がないのだ。敵の正体を照らし出す『火』。それが必要だった。

「折角の手がかりだからね。しばらくの間はリヴィラに網を張ろう」

本人からその『火』を得られないなら、本人の預かり知らないところから手に入れるしかない。

「今度こそ、神々までが『正体不明』と呼ぶ男の正体を暴く」

オラリオに迫る得体の知れない脅威の正体を知りたいなら、その闇へと踏み込むしかないのだから。

第三節 …——深淵もまた、汝を見つめる

1

執務室に、蠟燭の溶けるほの甘い匂いが漂う。

この『時代』には魔石灯という便利な代物があることは承知している。

無論、この大聖堂の——執務室を含む——至る所に設置されているが……結局、手間をかけて、『蠟燭』を再現してしまった。

瞑想や祈祷の際には必要だ——と。尤もらしい理由を口にしたような気もするが、さて。

存外にこれもまた『火に焦がれている』という事なのかもしれない。

(経過はまづまづといったところか)

ともあれ、その揺らぐ小さな火を横目に見ながら胸中で呟く。

一四階層に発生させた『深淵』により、ダンジョンは一時的に閉鎖。

無事に件の部隊……いや、派閥を足止めしたという。

(それにしても、流星は悪名高き【墓王の眷属】といったところか)

メレンの街における殺戮劇に関しては、すでに報告が上がってきている。概ね想定通りと言ったところだろう。

オラリオ、メレン間の離間工作はまずまずの成果を上げている。

無論、これだけでオラリオの力を削ぐことなど出来まいが……しかし、憲兵隊——確か【ガネーシャ・ファミリア】と言ったか——の戦力はいくらかメレンに割かれた。

先だつての……何と言ったか。イシユタルとやらの取り巻きの『後始末』もまだ続いている。

そこに加えて、今回の『深淵』でも調査を押し付けられたそうさ。

相応の人的損耗を被っているのは疑いない。

憲兵がその勢力を落とせば、こちらとしても色々動きやすくなるというものだ。

(奴らとて文句は言えまい)

メレンが【ガネーシャ・ファミリア】の監視下に入ったとなれば、あの『死の神』も——あるいは、『エニユオ』とやらも、資金源のいくらかを損なつたといえよう。

オラリオとあの『死の神』どもの戦況が膠着し、互いが泥沼の抗争に陥れば占めたものだ。

しかも、今あの【墓王の眷属】は『死の神』に預けてある。

この一件で、奴らが我らの何を咎められようか。

(まったたく、ここまで策が的中しては、むしろ張り合いがないというものだ)

長らく我が宿敵であったあの「暗月の神」であれば、こう容易くことを進めることはできなかったであろう。

……もつとも、火が陰り、大王を失い、その権勢を大きく削がれたとはいえあの地は
アノール・ロンド
 神の都。

神々の名が忘れられた後も、歴史の陰から我らを謀り、『火継ぎ』を繰り返させてきたあの蛇と、すべてを忘れ呆けた今の神どもを比較しては酷というものか。

(いや、それとも畏か?)

あの『死の神』はともかく、『エニユオ』なる存在は未だに読めない。

上手くいった。出し抜けた。

そう思い込まされているだけと警戒しておいて損はない。

「五九階層の尖兵が撃破されたことについて、何か言っていたか?」

おそらくは『エニユオ』も神の末裔。

火も王も失った亡者どもとはいえ、決して油断などできる相手ではない。

「いいえ、これと言って何も」

部下の言葉に、再び唸っていた。

(つまり、あれの撃破は『エニユオ』にとって予定通りという事か……)

それはそれでありそんな話だった。

(連中が求める『餌』……『アリア』と言ったか。それを捕獲するための駒というだけではなさそうだ)

件の……そう。確か「ロキ・ファミリア」と言ったか。

その首脳陣の人相書きを横目に見やりながら、胸中で呟く。

(享樂的で、自己顕示が強い。狡猾だが自信家。そして、傲慢だ)

もつとも、最後のそれは別にそれは『エニユオ』に限った話ではないが。

自戒しながら、顔の見えない共犯者の素顔を思い描こうとする。

(奴は決して無意味なことではない)

あの駒には、必ず何か別の意味がある。

多少は趣味的かもしれないが、確実に実利のある意味が。

と、いうより。一つの駒に複数の意味を持たせているといったところか。

そこまでは推測が及ぶ。だが、その先に踏み込む手掛かりがまだない。

(奴にとつて、全ては捨て駒か)

向こうとて、決して手札が豊富だという訳ではないはずだが。

そして、それなりに上質な——少なくともそのように自負している——手札である私達にすら、満足に情報を寄越さない。

とはいえ、別に何を驚くことがあるうか。

奴も、そしてあの死神も——否。

否。

あらゆる神がそのように思っている。

だからこそ……

(まあ、良い)

思考を、あの『駒』が持たされた意味の探究へと戻す。

それは『アリア』とやらの確保と『宣戦布告』だけではあるまい。

(案外と我らが女王陛下と同じことを考えているのではないか?)

女王陛下は「王狩り」をオラリオに釘付けにするため、デーモンの存在を見せつけたのだと言った。

そうであるなら、私にも前もって説明して欲しかったところだが……まあ、今の私な
どどの陣営から見てもただの使い走りに過ぎない。

全くもって面倒だが、この待遇も致し方ないことだった。

それに、私としてもまだ準備は整っていない。

今しばらくは忍従の時——と。そんなことはとうの昔に心得ている。

(『エニユオ』もまた、あの駒を見せつけた事で「ロキ・ファミリア」を自分に注目させ

た、といったところか)

故に、今は準備が整った時に向けて、淡々と備えておけばよい。

今となつては、時は私の敵ではないのだから。

……もつとも、だからといって無尽蔵に費やせるわけでもないが。

(不死が現れ、王たちが目覚め、あの「王狩り」までが呼び覚まされた)

我らが揃つて呼び出されたとあれば、この『世界』もまた滅びに曝されているということであろう。

——だが。

(だが、かつてと違い、まだ終わつてはいない)

これほどの幸運などあるものか。

神どもが再び『呪い』を呼び覚ます前に、今度こそ『時代』を人の手に。

そして、願わくはその礎が我が野心であればよい。

(撃破したとはいえ、連中にとつては容易い相手ではなかったであろう)

小さく苦笑してから、今度こそ思考を切り替える。

連中はもう『エニユオ』どもを無視はできない。

あの派閥にとつてはなおおさらに。

地上に送った『草』が寄越した人相書きの一枚を取り上げる。

それは「ロキ・ファミリア」の首魁——と言つていいものか——である小人のものだ。

どうやら、大層な野心家であるらしい。

(なるほど。悪い手ではないな)

どこまでも名声を渴望し、そのためだけに全てを捧げている。

満たされることのない、身の丈を超えた渴望こそが全ての原動力。

この男は、まさに『小人』そのものだった。

であればこそ。

(これほど美しい状況は無視できまい)

オラリオを滅ぼさんとする巨悪の企てを暴き、打ち滅ぼす。

いつそ滑稽なほどに分かりやすい武勇譚。いや、今の時代に合わせるなら『英雄譚』と

言うべきか。

自らの力を誇示するためと考えれば、いつそ舌なめずりしたくなるほどであろう。

例え相手の思惑に気づいたとして。それでも踊らされずにはいられまい。

(いや、違うな。そうではない)

踊らされているという真実。それすら飲み込み、糧として、さらなる渴望を募らせる。

この男はそういうものだ。

であれば——…

(先達として、少し手を貸してやるとしようか)

消えぬ野心の炎に身を焦がしているのはお互い様だ。

(この穴倉の中でいくら殺しあつたところで、大衆の耳にはその半分と届くまい) ならば。

誰もが身を焦がすほどの距離で。

目を晦ませるほどの鮮烈と共に。

その『偉業』とやらを見せつけてやればいい。

今の『時代』——あの『吹き溜まり』ならばそれが可能だった。

どうせ、ただそれだけが今の『時代』の全てなのだから。

真実などどうでもいい。

神どもをより愉しませた者たちが『勝者』だ。

実に忌々しく、憐れなほどに滑稽ではあるが……しかし、他ならぬ我らがそれを笑う事などできはしない。

(そして、貴公もまたそれを良しとしたのであろう?)

であれば、もはや互いに言葉は不要であろう。

仮にそれが無知によるものであつたとしてもだ。

(フィン・ディムナ、か)

この『時代』に名を馳せ、この『時代』の象徴足らんとして——『時代』に順応したが故に、資格を失った。

そんな憐れな小人の名を口ずさみ、記憶の片隅に留め置く。

(あの『王狩り』について嗅ぎまわっているのだったな)

ふふん——と。小さな笑みがこぼれた。

ああ、まったく。これ笑わずにいられるか。

(実に健気でいじらしいものだな)

名声のためなら部下の命どころか、自らの命すらも投げ打つ。自分が何をしているか

も知らず、また知ろうともしないまま。

そうまでして名声を渴望する理由が、自分のためではなく落ちぶれた小人たちのため

だとは。

「リヴィラの『草』に、急ぎこの指示を届けよ」

「承知いたしました」

幸いにして、私と彼の野心は今しばらくの間は合致している。

計画に変更はない。

彼にはこのまま人々を誑かし、裏切り、滅びへと誘う『邪悪』の正体と手札を暴いて

もらう。

そして、その対価として。

我らが歴史を動かすその瞬間。

その舞台の中央に『英雄』として招待するでしょう。

「私が英雄にしてやろう。この『時代』を彩る『英雄』に、な」

部下が出ていき、再び一人きりになった執務室で小さく囁く。

もはや『王』たる資格を持たぬ者とはいえ、このまま時代の波に飲まれて消えるのは本望ではあるまい。

精々、彼らにとって相応しい敵を用意してやるとしよう。

……

欲しいものは何ですか？——と。

その問いかけに對すこまる答えはいくらでもある。

あるが、今現在何よりも必要なものは解毒薬だった。それも、ポイズン・ウェルネス 妖毒蛆の解毒薬だ。もちろん、『深淵』とかいう呪詛カクスに関する情報やら何やらも色々欲しいが……それらは全て、フィン達が無事に戻ってこないことには意味がない。

「ちッ、やつぱり集まり切らねえか」

傍らのベートが舌打ちした。

「そらまあ、ポイズン・ウエルネス 妖毒 蛆の解毒薬やしなあ……」

元々妖毒ポイズン・ウエルネス 蛆は下層域の中でも産出数が少ない『稀レアモンスター少種』寄りの種族だ。

同モンスターの体ドロップアイテム液から作られる解毒薬の製造数は限りがある。

つまり、数を揃えるだけで一苦労というのは、分かりきった話だった。

(この大発生イレギュラーも、『深淵』いうやつの影響なんかなー?)

清々しいほどの青空を見上げながら、胸中でぼやく。

可能性はある。

影響している可能性も。無関係である可能性も。

今さら追及しようがないし、仮に答えが分かったところでどうにもならないが。

「そもそも、今は製薬作業が止まっとるやろからなあ」

それに加えて、解毒薬やら解呪薬の類はギルドが徴収しているときた。

そもそも在庫がないなら、いくら地上に残っている団員を総動員したところでどうなるものでもない。

「あんなもん、解毒薬じゃどうにもならねえぞ」

「分かっとるけど、ここでうちに言われてもなー……」

その『深淵』の中にまで飛び込んできたベートの言葉に肩をすくめる。

実際、あんなものはうちらが『神の力』^{アルカナム}を使っても果たしてどうにかできるかどうか。
(ディアンケヒトの奴なら分かるんやろけどな)

黒く変質したベートの銀靴^{フロスワイルト}を思い浮かべて身震いする。

……まあ、ベートの言う通り、どうせ効果がないだろうし、大半は返却ないしギルド名義で販売されることになると思う。

治療薬には高価なものも多い。仮にギルドが買いあげたとして、出費を補完する必要がある。

どういう形かとはともかく、市場に戻ってくるのは間違いない。

ただ、その返却作業が始まるまで、もう少し時間がかかることもまた想像に難くなかった。

「こうなると、解毒薬の予備を確保してそうな「ファミリア」に交渉するしかねえか……」
「そーやけど……。正直に頼んでも、ここぞとばかりに足元見られてふんだくられるか、嫌がらせでわざと出し渡られるかのどっちかやな」

こういう時、都市最大派閥という肩書は面倒だ。

嬉々として足を引っ張りに来る派閥には事欠かない。

それに、商人たちもそろそろ嗅ぎつけてくる頃だ。

ギルドの対応も影響するだろうが、今の状況ではまず間違いなく特効薬の高騰が起き

る。

こんな状況だ。金に糸目をつけないが……このままでは、特效薬確保は泥沼の様相を呈することになる。

そうなれば、さらに多くの時間を無駄に浪費する羽目になる。

「何かこう、他派閥や商人に顔が広がって、後は穏便に譲るよう交渉できる相手がおればええんやけど」

そんな都合のいい相手が都合よくいるなら、誰も苦労しないわけで……

「……ロキ、お前は戻って団員達ロッグスと合流しろ。適当にまとめとけ」

ピクツ——と、頭上の耳を動かしてから、ベートが言った。

「おっ、何か思いついたん？」

もしかして、いい伝手でもあるのだろうか。

そんな人脈を築くなんて、知らないうちに立派になったなあ——と。

「いいから行け」

割と真剣に感動するうちを他所に、ベートはどこかに向かつて走っていった。

んで、それから。

「まあ、そんなことやろーとは思ったけど」

何とか必要なだけの解毒薬が集まり、ダンジョンの方の『後始末』も一山超えたらし

いという連絡が届いた頃。

それなら、そろそろベートを見送ろうかと思っていた矢先のことだった。

「いやー……。はっはっ。いや、俺の眷属達ことどもを助けてくれた事には、本当に感謝してるんだぜ？」

……げっそりとした眷属アスフライを引き連れた優男ヘルメスがやってきたのは。

他派閥や商人に顔が広くて、後は穩便に譲るよう交渉できる相手。

まあ、確かに大体は当てはまるか。……このツンデレ狼に『穩便な交渉』ができるかはさておき。

「先に言っとくけど、うちも切羽詰まってるんや。この解毒薬は渡さんで？」

透き通るほど青い大空を見上げ、そこはかたなく下界の無常さを嘯み締めてから呻く。

「いや、それは本当にいいんだ。さっきも言っただろう？ 感謝してるんだ」

……実際のところ、ヘルメスにうちらを咎める気はなさそうだった。

と、言っても。この食わせ物がそう簡単に腹の内を探らせるはずもない。

警戒指数を大幅に上方修正しておく。

「なら、何の用や？」

そもそも、この優男はメレンの調査に向かったはずだ。

一日か二日で調べ上げられるような事態だとは思えないが……。

「まずは依頼の結果……いや、結論から言おう。今のメレンには手出しできない」

「はあ？」

「まず燻っていたギルド……いや、オラリオに対する不満が、最悪の形で噴き出している。ギルド寄りの商会や商船はかなり肩身の狭い思いをしていてね。少なくとも、事態の中枢からはほぼ完全に締め出されている」

「……まあ、そらしゃーないやろ」

メレンは名目上は自治権を持った都市だ。

——が、その一方でオラリオの海の玄関として、巨額の投資を受けている。

この辺は色々な連中の思惑が絡み合っていてややこしいのだが……それをオラリオの侵略と取ったのが当主のマードック家だ。

実際にどれほどの敵意を抱いているかまでは分からないが、ごく大雑把に言えばそういう事になる。

んで。ニョルズの奴はマードック家側についたわけだ。

それはつまり、元々港を管理していた漁師たちがマードック家についたという事に他ならない。

とはいえ、巨額の投資をしたギルドも簡単に引き下がれるものではない。

色々と言葉を飾つてはいるものの……まあ、報復として海産物にクソ高い関税をかけたわけだ。

それで関係が好転する訳もなく、当然のように貿易摩擦が続いていたところに今回の事件だ。

「ま、関税の大幅減額は避けられんやろな」

「ああ。そして、しばらくの間、メレン支部の職員たちは針の筵つて奴だろうね」

肩をすくめると、ヘルメスも苦笑する。

「さらに言えば、さつき言った商会や商船もだ。そして、俺の顔が利くのも、当然ながらギルド寄りのところが多い。流石の俺も、密偵するには時期が悪いと言わざるを得ないな」

「そらそうやろな」

もはや肩をすくめる気にもならない。

マードック家に親しいという事は、ニヨルズにも近しいという事だ。

先と同じく大雑把に言うなら、マードック家と懇意にしている商会や商船はニヨルズ派という事になる。

もちろん、実際にはその『ニヨルズ派』の中にも色々な思惑が渦巻いているだろうが……。

いずれにせよ、ヘルメス……オラリオに所属する派閥では、そう簡単にすり寄ることはできない。

敵の敵は味方——と、暗躍したんだか、本末を転倒させたんだか分らん類のアホが出てくるにしても、それはもう少し先の話だろう。

「しっかし、メレンはそんなにヤバいん？」

オラリオはオラリオで大騒ぎだったせいで、今もまだ充分な情報が入ってきていない。

……いや、入ってきてはいるのだろうが、『深淵』騒ぎに紛れてしまっている。

「被害は極めて深刻です。未だに行方不明者が複数いますから」

申いたのはアスファイヴィオラスたった。

「あの新種……食人花ヴィオラスが暴れた事もありますから、おそらくもう遺体は見つからないでしょう」

それなりに長い時間を下界で過ごしているが、こういう時どう反応していいのかは未だに迷う。

もちろん、メレンの子供達と面識などほとんどないのだが……。

「そか……」

少なからず気分が滅入り、短いため息だけを返す。

「その片棒を担いだとまでは言いませんが……。神ニヨルズの保護下から外れるようなことになれば、元支部長の命はないでしょう」

下手をすれば、近いうちに不慮の事故が起こるかもしれないかもしれません——と。アスファイたんもまた小さくため息を吐いた。

「ま、今回の一件でギルドはメレンでの影響力を大きく失ったってわけさ」ただ——と、ヘルメスはいつもの調子で肩をすくめてから続けた。

「ニヨルズ達だつて、何もオラリオと戦争したいわけじゃない」
「そらまあ、そうやろな」

ヘルメスの言葉に頷き——そして、もう一度頷いた。

「なるほど、それでガネーシヤの奴どがうちり手を組みよつたか」

「そうしておけば、オラリオとメレン間の関係は今も健在だと内外にアピールできる。」

それは、メレンだけではなく、オラリオにとつても有益だった。

何しろ、あの港町はオラリオの海の玄関。万が一にでも閉鎖されたなら、都市運営にも影響が出る。

ロイマンでなくとも、頭と胃を抱えているのは想像に難くない。

「そういうことさ。分かりやすく友好の証を示しておく必要がある。形だけでもね」
ヘルメスは大げさに肩をすくめて見せた。

「これはあくまで俺の所感だが、この一件はニョルズにも泣き所がある」

「まあ、どうせ密輸にでも手を出しとったんやろな。……案外、支部長もグルやつたんかもしれん」

この辺で一番高値で取引できるものは、やはり魔石か迷宮資源が用いられた物品だ。ギルドの協力があれば横流しできるだろうし……だからこそ、支部長を今も庇護下に置いてみると見ていい。

口封じと……何より、ニョルズの罪滅ぼしと言ったところか。

「俺もそう思う。それなら、あの新種がいた理由も自ずと説明がつくからね」

「どつかで『闇派閥』^{イウイリス}に目えつけられたわけや。やつば悪い事はできんもんやな」

もつとも、あのニョルズはまず間違いない善神の類だ。今さらになって邪神に堕ちるとは思えない。

ギルドに締め上げられ、貧窮しているところを付け込まれた——と。

おそらくはそんなところだろう。

「いずれにせよ、これで歓楽街に続き、メレンもガネーシャに押さええられたってわけさ」
「ガネーシャいうより、ウラノスのジジイにやろ」

これが単純に闇派閥絡みだったなら、そのうち嫌でも話が回ってくるはずだ。

だが、もし違うなら……

「んで、やっぱメレンもアレ絡みか？」

それくらいは分かったやろ？——と、その問いかけにヘルメスも頷いた。

「ああ。それに関しては、ほぼ間違いない。黒衣に大剣。竜の紋章が施された盾を携えた『冒険者』の姿が多く目撃されているからね」

驚くほどの事でもないし、驚く必要もない。

気になることはたった一つだ。

『メレンの悪夢』を起こしたんはアレか？」

「そうだ……と、俺としてはここで頷きたいところだけど」

ヘルメスは、大きく肩を落としてから言った。

「どうやら違うようだ。……俺達が集められた情報と真摯に向き合えば、そういう事になる」

「情報？」

『『死の瞳』という魔道具マジックアイテムが用いられたようです」

答えたのは、アスフィたんだった。

「私も寡聞にして知らないのですが、それがメレンを蹂躪した『赤黒い人影』を呼び寄せたのだとか」

「呼び寄せた？」

「詳しくは、分かりません。ただ、【イレキユラー正体不明】はそれを『闇霊』と呼んだそうです」
 「う〜ん……。『霊』言われてもなあ……」

死んだ子供達の魂は天界に戻り、浄化され、新たな命として下界に戻ってくる。

……まあ、簡単に言えば、魂とは巡るものだというのが世界の理だ。

そして、寄る辺を持たぬ魂は、世界に干渉することはできない。

……まあ。逆に言うなら、何かしらの寄る辺があれば話は変わっているわけで。

彷徨う魂の欠片と言うか……いわゆる『無念』だとか『未練』だとかを精霊……自我が薄く、定まった形を持たない下級精霊が取り込んでしまう事がある。

つまり、その下級精霊が寄る辺となるわけだ。

そして、取り込んだモノに影響され何かしらの『騒ぎ』を起こすようになった下級精霊が時に『騒霊』とか『悪霊』とか呼ばれる。

だが、それは別に死んだ人間が蘇ってきているわけではない。

あくまで遺っていた『何か』の欠片を精霊が取り込んだだけだ。

だから、寄る辺となった精霊が持つ力以上のことはできないし、その『何か』を本当の意味で完全に果せるわけでもない。

気まぐれな精霊の性質さが通り、所詮は曖昧なものでしかないのだ。

「流石の俺も、あれを『精霊の悪戯』で済ませる気にはならないな」

……まあ、そこは気まぐれな精霊のこと。

そう言う騒ぎを絶対に起こさないと断言もできないのだが。

「まあ、普通に別モンやろ」

しかし、メレンを襲ったその『闇霊』とやらは、うちの知る理ルからは外れた何かと
言う可能性の方がはるかに高い。

そして、そんな異常事態であれば、まず間違いないくアレとは繋がりがあるはずだ。

はずだが、しかし。

(敵対しとるゆうんはどういうこっちゃ?)

今一つ、アレにとつての敵味方が分からない。

(アレがその闇霊いうんを呼び寄せたんなら、話は早いっちゃ早いんやけどなあ……)
手を組んでいるというなら、話はごく単純だ。

しかし、アレを嫌っているヘルメスですら——少なくとも今回は——違うと結論付ける
しかなかった。

それに、仮にヘルメスが騙されたただだと仮定したところで、問題は解決しない。

今度は、何故そんなものをウラノスが庇うのか。その理由が分からなくなる。

神罰同盟の一件と云い、アレは明らかに都市機能に悪影響を及ぼす存在のはずだ。

(いや、それがそもそも勘違いなんかな?)

ただ、フィリア祭のデーモンや、メレンの闇霊。

何より、今回の『深淵』に関して、アレは一貫してオラリオの味方だった。

特に『深淵』絡みは、アレがないとどうにもならないような予感がする。

(イシユタルも神罰同盟も……それに、うちやフレイヤも自業自得つちやその通りやしな)

若干ならず結果論だが、アレと敵対した理由はうちらの方から喧嘩を売ったせいだ。

アレは苛烈な神嫌いだが、だからと言ってそれだけでオラリオを滅ぼすほどには狂っていない。……と、思う。

少なくとも、今のところは。

実際に、どうやらニョルズの『悪行』については目を瞑ったつばいし。

(ゆーことは、やっぱウラノスの深淵対策なんかかな?)

それはそれで、いまひとつしっくりこない。

『少なくとも、お前はこれが何だかもう分かっているはずだな?』

——と。アレの言葉を素直に理解するなら、『深淵』の発生は想定外だったはずだ。

とはいえ。ウラノスが、アレなら『深淵』とやらに対応できると知っていた事もまた

真実だろう。

でなければ、あの状況下で自ら呼び戻すはずがない。

(やつぱああれやな。ピースが足りへんのや)

重々分かってたことだが、アレの正体を見定めるうえで重要な情報が足りていない。

それが嵌まれば、あとは連鎖的に情報が繋がり、状況が見えてくる——と、そんな直感がある。

(問題は、それをどーやって手に入れるかやなあ)

あの様子なら、ファイたんも詳しい事情は知らないと考えてよさそうだ。

知っているとしたら、やはりウラノスカガネーシャだが……

(どっちが相手でも、力尽くというのは悪手やな)

片やギルドの主神。片や憲兵の主神。

いくらうちが都市最大派閥の主神だといっても、気軽に喧嘩を売っていい相手ではなかった。

派閥抗争になっても勝てる——とか、そういう問題ではない。

勝ったところで、都市機能に極めて深刻な悪影響を及ぼす。

しかも、結果が白だったなら——あるいは、これといった確証が得られなかったなら最悪だ。

大義もクソもなくなるどころか、イギリス派閥の仲間と誹られたところで文句も言えやしな

い。

仕掛けるなら、何か確固たる証拠を得たうえで、ある程度の根回しを済ませておく必要がある。

天界で『やんちゃ』してた頃ならともかく、今はそれくらいの分別は身に着けているのだ。

……まあ、そのせいで現状では完全に手詰まり、と。そんな事態に陥っているわけだが。

(あとは、リヴェリアが送った手紙の返事次第かなあ……?)

そつちも、正直どこまで当てになるものやら。

確かにエルフは長命だし、歴史関係の四方山話よもやまはしこたま貯め込んでいるとは思うが

……。

(歴史、か……)

リヴェリアが頼ろうとしている相手を——そのエルフが秘匿としている『歴史』を思
い出す。

(『魂喰らい』ソウルイーターなあ……)

下界で初めて『魂喰らい』ソウルイーターが確認されたのは、今からおよそ千年前のことだ。

(何て名前やったっけ?)

旧オラリオを開闢したあの『狂犬』とそのシンパ。

初めて下界に降り立った神々うちらをずいぶんと盛大に歓迎してくれた連中だ。

(魂喰ソウルイーターらいなんておとぎ話の中の存在か……)

神会ディナトックスにいた、腑抜けたどこぞの神の言葉を思い出す。

あの神が腑抜けているのではなく、その話を信じている神——知っている神は少ない。

それに関してはどうちも同じだ。

当時は色々とあつてあんまり下界に注目していなかったせいで、詳しい話までは知らない。

知らないのだが……。

(あくまで仮説やけど、あの連中もまた『完全なる神殺し』をやつてのけたんやないか?)
勢力争いに敗れ、気づけばオラリオからいなくなっている神は決して珍しくもない。

ただ、それを考慮しても。

(古参の連中はあんま残つとらん)

古参——最初期に下界に降りていった最古参の連中で、今オラリオに残っているのはそれこそウラノスクらいのように思える。

それどころか——…

(ウラノスやゼウスは『魂喰らい』^{ソウルイーター}が現れたから、慌てて下界に飛び降りていったんやないか?)

旧バベルを粉碎し、旧オラリオの痕跡を……いや、あの『狂犬』の痕跡を徹底して抹殺した理由。

もし連中が『魂喰らい』^{ソウルイーター}であり……『完全なる神殺し』であつたからではないか。

それなら、ここまで念入りに情報を抹消した理由も分かるといふものだ。

(……どうにも全部の秘密をあのクソジジイどもが握つとる気がするな)

何かの『秘密』を中心とする繋がり。

それは、今のアレとウラノスの関係にも似ている。

(こら、ホンマにリヴェリアの返事待ちかもしれない)

その辺の情報が他に残っている可能性は他にない。

(まあ、あの『狂犬』の最後のシンパの『片割れ』いうんがちと不安やけど)

成長すると同時、いきなり『神殺し』をやらかしたウルベイン・ハースト——いや、カインハーストか。

その結果、^{デイス・カイン}【大罪人】などと呼ばれるようになり、どこかへと姿を消した兄と違い、弟の方はこの千年の間、^{ディアアアベル}真面目にこの『神時代』へと溶け込んでいる。

……ひとまず、^{ディアアアベル}【大賢人】と呼び称される程度には。

「これはもう、アレを『正体不明』なんて呼んでいる場合じゃなさそうだ」
「そうやな」

あの『狂犬』との繋がりとはともかく、アレ以外にも『魂喰らい』ソウルイーターが何人かオラリオに存在している。

放つておけば、何が起こるか分かったものではない。

「アレと同類と言えは……メレンには前の『人斬り』はいなかったんかな？」

「おそらくは。あの『人斬り』なら、まず自分が先頭に立って襲ってくるでしょう」
だが、メレンでそれらしい目撃例はなかったらしい。

もちろん、遭遇した全員が殺されている可能性もあるだろうが……。

「もう一人、俺達が今まで全く知らなかった存在がいる」

「何やて？」

「メレンではなくダンジョンでの話ですが。何でも第一次調査隊の生還者は、全員が『イーリアス』とかいう店の薬を服用していたそうです」

「あく……。そういや、ベートもその薬飲んだんやつけ？」

「ああ。灰野郎は『黒虫の丸薬』とか呼んでいたな」

足止めをされているせい、苛立ちの混じった声でベートが領いた。

「つまり、その薬ハイバリスト師もまた『深淵』を知っていて、対処法も理解しているわけだ」

「……だが、あの薬は精々が気休め程度だぞ」

少なくとも『深淵』絡みについて、現時点ではベートの情報は他の誰より信憑性が高い。

何しろ、アレと一緒に最深部まで踏み込んでいるのだ。

とはいえ、気休め程度の薬でも作れるという事も無視はできない。

「今んとこ、狙い目はその薬師ハクスリストやろなあ」

他にアレについて何か知っていそうなのは、まずアン・デイルとかいう魔導士。

けど、こいつはそもそもどこにいるかも定かではない。それに、どうやら一番危険な相手らしい。

件の『人斬り』と、今回メレンで暴れた馬鹿も同じこと。

残る二人、カルラとかいう魔導士とソラルとかいう戦士はアレの関係者だ。

情報収集どころか接触することすら慎重さを求められる。

(いや、そつちはもうフィン達が接触しとるかな)

今は全員がダンジョンにいて……多分、アレは一八階層の安否確認も請け負っているはずだ。

一方で、今のところフィン達の『恩恵』ファルは失われていない。

なら、少なくとも死んではいない。あとは、できればうまく情報を引き出してくれる

いたらラッキーといったところか。

「俺も同意見なんだが……」

「流石に、今すぐは無理でしょう」

「あゝ……。そらそうやなあ」

ヘルメスとアスファイタんの言葉に、うちもため息を吐いた。

丸薬の製作者とあれば、確実にギルドに呼び出されている。

ひと段落着いたら、そのまま丸薬の増産体制に移行するのは明白だ。

その薬師がどういう人物かは分からないが……。何のコネもないうちら相手に、そう簡単に時間を割いてくれるかどうか。

(下手すりゃあのジジイに邪魔されるやろしな)

それに、うちらとしても現状では唯一最後の手がかりだ。

無理矢理に接触して心証を悪くするのは避けたい。

情報が手に入らないだけならまだしも、万が一その丸薬まで手に入らなくなったら目も当てられないことになる。

(いや、それ以前の問題やな)

その丸薬は、これからは需要が一気に高まる。

それに応じるため、今頃は死に物狂いで増産している事だろう。

そんな中に、ウラノスの時と同じような気分で乗り込めば、薬師^{ハープリスト}どころかオラリオ中の冒険者から響感を買う羽目にもなりかねない。

(やっぱ真つ当な手順を踏むしかないかなあ)

それなりの理由をでつちあげて書簡でも送り、薬師^{ハープリスト}の予定を聞き、都合のよい時間に——と。

手間はかかるが仕方がない。

(こら、いつそメレンに乗り込んだ方が早いかもしれんなあ)

ニオルズなら天界の領土も近いし、昔から少しくらいは付き合いもある。

まずオラリオからの外出許可だが……これは、交渉相手がロイマンかうラノスだ。

アレが関与してくる可能性は低い。

天界からの付き合いがあるニオルズの見舞いを名目にすれば——…

(別にそこまでの付き合いでもないし、流石に少し弱いなあ)

それくらいいの自覚はあるが……毎回高い税金を払つとるし、多少の強権を振るつても文句は言うまい。

繰り返すが、神同士のやり取りならアレが介入してくる危険性は低い。

そして、オラリオから出れたなら、後は何とでもなる。

(ガネーシヤにバレんように……少なくともニオルズと一対^{サシ}一で向き合えればなあ)

それなりの交渉を持ち掛けることも不可能ではない。

(まあ、潮目を読むことに關しては、向こうも得意やろけど)

だが、腹の探り合いならばうちの方が有利だ。

……問題は、ニョルズもそれは理解していることだが。

しかし、分かっているれば対処できるという訳でもない。疑っている相手を騙せずし

て、何がトリックスターか。

(騙される方も悪い、なんてしたり顔で言ってるアホどもに限って、ええカモヤから

なあ)

騙される奴が間抜けだ。自分は騙されない。きつちり見抜ける。

そう声高に叫んでいる奴こそが一番の間抜けだ。

何しろ、過信と慢心が大盛になると、自分から教えてくれているのだから。

(それとも、もいっぺんあのジジイを揺さぶってみるべきか)

何だかんだ言ったところで、あのジジイの口を割らすのが一番手っ取り早いことに変

わりはない。

というより、あのジジイが情報の隠匿を止めれば話は半分すつきりするはずだが。

(ゆーても、前回から手札はさっぱり増えとらんからなあ……)

例の『深淵』とやらは新たな要素だが、交渉を有利に進める材料たりえなかった。

五九階層にいた『穢れた精霊』については……存在自体はアレから聞いていても驚かない。

(アレに討伐させんかった理由はよく分らんけどな)

分からないといえば、怪人^{クリーチャー}がわざわざ誘い込んだ理由も同じことだが。

(結局のところ、立ち位置がはつきりせんのか)

敵だとするならば、ウラノスどころかガネーシャまでが肩入れしすぎだ。

それに、アレはアレでデーモンだの深淵だのに対しては、オラリオの味方のように振舞っている。

しかし、味方だとするならば、こちらに対していくら何でも敵意をむき出しにしすぎだ。

(もう充分に分かつとつたけど、ホンマに『正体不明』なんやなあ)

分かっているのは『魂喰らい』^{ソウルイーター}だという事だけ。

どこから来た何者なのか。

誰の敵で、誰の味方か。

そんなところから曖昧だった。

(……いや、どこから来たかは分かるかもしれない)

あの『狂犬』とそのシンパの生き残り。

『魂喰らい』という性質に着目するならば、その可能性が高い。

だが、それなら何故ウラノスに従っているのか。

少なくとも、あの『狂犬』達にとつては、まさに怨敵そのもののはずだが……。

「んで。結局、自分はそれを言いに来たんか?」

「どうやって【正体不明】^{イレギュラー}という名の闇の中から抜け出せない。

嘆息してから、まず目の前の面倒事^{ヘルメス}をどうにかすることに決めた。

「もちろん、それもあるが」

大きく頷いてから、当然のようにヘルメスは面倒なことを言います。

「実は、一つお願いがあつてね」

「……内容はまだ分からないが、何であれ面倒なことには変わりあるまい。

警戒指数をさらに急上昇させてから、呻くように尋ねた。

「言つてみい」

「だからそんなに警戒しないでくれ。ただ、俺を一八階層まで連れて行つて欲しいんだ」

「はあ?」

いや、まあ、確かにこれからベートが向かうわけだし。

ベートとアスファイタンとで二人一組^{ツーマンセル}のパーティを組めば、この優男^{ひとり}一柱^{ひとり}くらいは守り

切れるだろうけども。

「……念のため確認するけど、うちらがダンジョンに入るとどうなるか知つとるやろな

？」

「もちろん。だから、バレないようにするさ」

やるなど言われるとやりたくなる性格——と。そう評価したのはディオニユロスだったか。

（いや、あん時から同感やったけど）

それでも、少しくらいは頭痛を覚えるというものだ。

「よーするに、護衛と口止め料が解毒薬の代金いうことか？」

「そう思ってくれて構わないよ」

さて、割に合うかどうか。

その計算を始めてしまった時点で、うちの負けだった。

「いや、報酬なら別に用意しよう」

「何やて？」

『『神殺し』の集団。ロキ、君ならこの言葉に引っかかるものがあるはずだ』

ベートに聞こえないように、小声でヘルメスが耳打ちした。

「……」

思考を見透かされたようで、気分が悪い。

（けど、この優男は元々あのゼウスに仕えていた訳やしな）

千年前の一件について、何かしら知っている可能性もある。
(と、思い込むのは危険か?)

同盟などと耳触りのいい言葉で言い寄ってくるが……信用できる神などでは決してない。

もちろん、あの『人斬り』のせいで何人もの眷属ことどもを失ったのは確かだ。

それについて、まったく何にも思っていないとまでは言わない。

だが、純粋に『仇討』なんて理由だけで動き回るほどお優しい神だとはとても思えない。
い。

(割を食っているのかもしれない、か……)

ディオニュソスの言葉を思い出す。

ヘルメスはオラリオにいる神の中で、アレの排除に最も積極的な神のひとり一柱だ。

とはいえ、神罰同盟のアホどもと違って、自分の派閥だけではとても手に負えないことも冷静に理解している。

(だから、うちらを当てにする言うんも現実的な話やな)

だからこそ、だ。

アレが閹派閥残党や『エニユオ』と繋がっているかどうか。

どうしても敵対しなければならぬ相手か否かは冷静に考え、判断しなくてはならぬ

い。

もしヘルメスに思考を誘導され、少しでも見誤ったなら。たとえそれでも、アレは容赦なく迎撃してくる。

となれば、うちらも少くない犠牲を払う羽目になる。

さらに言うなら……

(こいつ、あの腐れおっぱいと同じくらいには嫌われとるやるからな)

このヘルメスは、ファイたん基準に照らせば確実にアウトだ。

……この二柱ふたりとうちが同列なんは少し面白くないけど、こればかりは流石に自業自得だと認めるしかない。

いや、それはともかくとして。

(さあて、どうしたもんかな)

優先順位として、現時点で最優先は治療薬の確保だ。

感謝しているなどと殊勝なことを言っているが、それを素直に信じていい相手ではない。

ここで突つ撥ねたところで、薬を返せとは言わないだろう。

だが、あとで必ず対価を回収しにくる。それも、何倍にも利子をつけて。

それを思えば、ここで領いておいた方が安く上がる。

(けど、ダンジョンなあ……)

神々がダンジョンに入ると……正確には、それがバレるとロクでもないことが起こる。

つまり、例えばダンジョンにバレずとも、ギルドにバレればただでは済まない。

加えて言えば、アレは今、一八階層までのどこかにいる。

(連帯責任を負わされなけりやええか)

あくまでヘルメスの独断。

その体裁を整えておく必要があるだろう。

一番の問題は、アレとの遭遇だが——…

(それは今さらつちや今さらやしな)

アレと遭遇した時点で自分の命に関わるなど、ヘルメスとて理解しているはずだ。

そこまですらに責任を押し付けられても困る。

(んで、こいつはひよつとしたら、千年前の一件について何や知つとるかもしれん)

もちろん、どこまで当てるかには分からない。

どちらかと言えば、そのうちリヴェリアに届く——はずの——情報と照らし合わせるための叩き台程度に考えておいた方が良い。

ただ、それでも。今の状況なら、ないよりはマシだ。

そして、何より——…

「あんな、ヘルメス。うちもこれで大派閥の主神やねん」

提供された情報次第で、ヘルメスがどの程度信用できるかも測れる。

何しろ、食わせ物揃いの神の中でも、こいつは飛び切りの部類だ。

どういう場所にとどの程度のブラフをぶち込んでくるか。

早いうちにそれを把握しておきたい。

「だから、自分が規則を破ってダンジョンに行く言うなら止めるしかない」

その辺りで、アスフィたんがため息を吐いた。

……流石のうちも、少しばかり罪悪感が疼くけど、ここはぐっと飲み込んでおくとして。

「でもまあ、もし自分が規則を破ってダンジョンに入ったとして、それでも流石に見殺しにもできへん。そうやろ、ベート？」

つまり、勝手についてくなら止めはしない。

「分かったよ、ロキ。君の言葉に従おう」

羽根つき帽子を押し下げ表情を隠したまま、ヘルメスがため息を吐き——…

「クソツたれどもが」

「同感です」

忌々しそうに舌打ちするベートに、アスファイたんもまた深々と頷くのだった。

2

「さあて！ 何か色々あったせいで遅くなっただけ、ボク達も大切な話をしようじゃないか！」

借りている天幕に戻ると、神様が胸を張って言った。

「……他に何かありましたっけ？」

その色々があったせいで、かなり混乱しています——と。

ぐったりした様子でリリが呻く。

「できれば、早めに休みたいのですが……」

ちなみに。人数が予定の倍以上になってしまったので、全員が天幕の中で寝るのは難しくなった。

神様もいるので、男性陣は外で見張りも兼ねて寝ることで話はまとまっている。

桜花さんたちは、そのための準備をするために——それと、多分気を使ってくれて——今は天幕にいない。

「そんなの決まってるだろう！ まずは！」

アンジエさんを指さして、神様が言った。

「アレを出してくれたまえ！」

「こちらに」

跪き、両手を掲げる。

その掌に、細長い何かを包んだ白い布が現れる。

多分、武器……大ききからして、剣かな。

それを、神様が意外と慣れた様子で持ち上げる。

ちよつと驚いてから思い出した。

そう言えば、今は何故かヘファイストス様のお店でもアルバイトしているんだった。

理由は今も頑なに話してくれないけど。

「ヘステイア様、それは……」

首を傾げていると、ヴェルフが目を剥いた。

「うん、ヘファイストスから預かってきたんだよ。君に渡してくれてね」

「俺に、ですか……」

「あと、伝言もある。ええと……『意地と仲間を天秤にかけるのは止めなさい』だったかな」

その白い布を、ヴェルフは何か苦悩するかのようには険しい顔で握りしめる。

「ヴェルフ？」

「……いや、何でもない。気にしないでくれ」

とてもそうは見えないけど……。

「そしてもちろん！ ボクの『ファミリア』待望の新・眷・属だん いん！ 二人目？ 三人目？
とにかくそんな感じのアンジエ君だ！」

いやっほー！——と。何だか凄く興奮した様子で神様が歓声を上げる。

アンジエさんは強いし、これで少しは神様にも楽をさせてあげられるかも。

「……えっと、もっと楽にしてくれていいんだぜ？」

「我が神の御前なれば」

一方、アンジエさんは跪き首を垂れたまま微動だにしない。

「あく……、うん！ まだ、入ったばかりだからね！ これから歓迎会とか懇親会とかして
ゆっくり打ち解けていけばいいさ！」

「そうですね！」

僕だって、神様と出会ったばかりの頃は緊張しっぱなしだったし。

「……………」

……アンジエさんの場合は、緊張とはちょっと違う気がしてならないけど。

本物の騎士像のような不動さに、変な汗が背筋を伝った。

「ええと……。アンジエ君、何かこう、話とか……」

流石の神様も多少、怯んだらしい。

少しだけ笑顔を引きつらせながら声をかけると――

「では、僭越ながら」

あくまで姿勢は崩さないまま、アンジエさんが言った。

「まだ確証を得たとは言えません。ですが、あの男。クオンという巡礼者が何者なのか。それについて、一つ思い至ったことがございます」

何だかとてもない爆弾の予感……！

その予感に震えながら、僕達はお互いの顔を見合わせる。

「え、ええと……。うん、それなら気楽に話してみてくれたまえ！」

空元気を絞り出して、神様が言う。

どうか。どうかアンジエさんと出会った時のようなとてもない話が出てきませんように……！

「あの男は、『深淵の主』を殺したことで深淵を歩けるようになったと言っております」

「うん、そうだね」

それは、フィンさん達が言っていたように、多分冒険者ほくたちにとつての『耐異常』脆弱アビリティみたいなものなんだろう。

もちろん、クオンさんの力の源について、詳しいことは僕もよく知らないけど……で

も、そんなにおかしな話ではないように思う。

「その前に、公王とも」

「ええ、言ってみましたね。階層主を『迷宮の孤王』モンスターレックスと呼ぶようなものでしょうか……」

コクンと、神様に続いてリリも頷いた。

「いえ、おそらくあれは言葉の通り、小ロンドの公王のことかと」

「小ロンドの公王？」

「というか、小ロンドって確か……」

「確かその国は『深淵』によって滅んだって言ったな」

「はい。その小ロンドで深淵を続けていたのが、公王たちなのです」

「ってことは、その公王ってのはリリスケの言うようにモンスターの別名じゃなくて、

元々は人間だったのか？」

「それについては、意見が分かれるかと」

ヴェルフの言葉に、アンジエさんはわずかに首を横に振った。

「人間であつたか。あるいは、その祖たる小人であつたか」

「小人が人間の祖先……？」

小人族バルウムのリリが、不思議そうな顔で首を傾げる。

「いずれかは分かりかねます。ですが、その者たちが『太陽の光の王』より己の力の一部、

つまり『王のソウル』の一部を下賜された存在であつたことに変わりありません」

その小さな声は聞こえなかつたのか。

だからこそ、彼らは公王と名乗ることを許されたのです——と、アンジェさんは続けた。

「あの、『王のソウル』って確か……」

その言葉にも、聞き覚えがあつた。

「『火継ぎの王』の……『最初の火継ぎ』の『英雄』が集めたものですよね？」

「その通りです、我が主」

そ、その呼び方はちよつと慣れないというか落ち着かないというか……。

「そして、もう一つ。あの男の傍にソラールという戦士がいたのを覚えておられますか？」

「クオンさんの友達ですよね」

「あのソラール君がどうかしたのかい？」

神様と顔を見合わせてから、問いかける。

「はい。あの男のサーコートに描かれていた聖ホーリーシンボル印。あれは、かつて存在した、とある騎

士の象徴として知られているものです」

「騎士の象徴ですか？」

リリが首を傾げてから、

「はい。『太陽の騎士』。そう呼ばれた一人の『太陽の戦士』です」

「はあ……」

「これはあくまで風説ですが、その騎士こそが『太陽の光の長子』本人。世を忍ぶ仮の姿だったという者もいます」

「いや、悪い。話がいまいち見えてこないんだが……」

ヴェルフの言葉に、みんなが頷く。

「申し訳ございません。ですが、何故そのような風説が語られるようになったのか。最後にその説明をさせていただきます」

それを聞けば、分かるという事なのだろうか。

「その騎士は我が主のおっしゃった『英雄』と共にあったから。正確にはその『英雄』と共に『玉座』に至ったと伝わるからです」

「え……？」

確かに、話が一気に繋がった感触があった。

改めて、みんなと顔を突き合わせる。

「ええと……。『火継ぎの王』は、『王のソウル』を集めていたんですよね」

「うん。そして、『深淵』って奴のせいで滅んだ小ロンドって国にもそれはあった」

リリの言葉に、神様が頷く。

「それで、ソラールさんはクオンさんの友達……」

クオンさんと一緒に旅をした。ソラールさんは確かにそう言っていた。

「小ロンドの公王つてのが本当に『深淵の主』だったなら、そいつを殺した奴こそがあの
イレギュラー

【正体不明】つてわけだ」

今までの話が全部繋がつてるとするのなら——と、ヴェルフが呟く。

「はい。あの男の深淵狩りが『王のソウル』収集の一環だったとするならば。そして、あのソラールという戦士が、伝説に語られる「太陽の騎士」だとするなら」

最後に、アンジエさんは結論した。

「クオンという男こそが、不死人最初の「薪の王」。かつて世界から『不死の呪い』を一掃した英雄の一人ということになるかと」

「な、ん……?!」

クオンさんが、『火継ぎの王』本人……!?

そう言えば、その王の名前はクロウ。似ていると言えば、似ているような気もするけど……。

「ですが、仮にそうだとするなら、いくつか疑問が残ります」

「そうなのかい？」

「はい。もしあの男が真実【薪の王】だとするなら、そもそも今ここに存在しているはずがないのです」

「え？ どうしてだい？」

いや、何か多分凄く大昔の話みたいだから、生きているのは不思議と言えば不思議な
んだけど……。

『火継ぎの儀』とは、消えかけた『最初の火』の薪となること。再び『最初の火』を燃え上からせることだけが、『不死の呪い』を退ける唯一の方法なのですから」

その『王』が燃え尽きるまでの間のみ、人は安寧を得ることができる。

アンジェさんはあっさりと言った。

「それは、つまり……」

「人身御供。完全に生贄って奴だな」

リリとヴェルフが顔をしかめる。

それは、英雄譚と呼ぶにはあまりに救いが無い。その道のりが過酷であればあるほどに。

いや、確かに英雄の死をもって終わる英雄譚が他にないわけじゃないけど……。

「ですから、あの男が【薪の王】だとするなら、ただそれだけで矛盾が起きます。彼が火継ぎを行ったのは、私が生まれる遙か前。そして、その間にも何度か他の【薪の王】が

火を継いだと言われています」

つまり、あの男が最初の「薪の王」だとするのなら、とうの昔に燃え尽きているはず。万が一に燃え残っていたとして、生者の姿そのまままで平然と存在しているはずがない。

アンジェさんはそう言った。

「……もちろん、『火継ぎの儀』に関して私の知らない何かがあるのかもしれないが」
なら、きつと、これはアンジェさんの思い違いというか……。

「そうか……。もしかして、だから、あんなに……」
顔を蒼白にして、神様が何かを呟いた。

「神様？」

「ほあ!? な、何だいベル君？」

「か、顔色が悪いですよ？」

「そ、そんなことないさ！ ボクは元気一杯だよ!!」

それは、鈍い僕から見ても空元気だと分かる。

アンジェさんの話を聞いた時よりも、ずっと動揺しているように感じられた。

「さあ、今日はもう寝ようぜ、ベル君！ 明日は噂の街に行くんだろう？」

「神様……」

「心配なら、一緒に寝てくれてもいいんだぜ？」

「ええと……」

どこまでが本気なのか掴み切れず、曖昧に呻く。

「あ、そうそう。改めて言うけど、アンジェ君達に關係することは全部他言無用だぜ？」
そんな僕を他所に、神様は一転して真剣な様子で念を押しした。

「それは、まあ……」

「言われるまでもないんですが……」

神様の言葉に、リリとヴェルフが呻きながらもしつかりと頷く。

もちろん、僕も頷いていた。

「そもそも、何を話せばいいんだって気もするしな」

「ええ。ですが、あの様子なら、そのまま一泊していくつもりだと思いますし、何でしたら明日にでも直接クオン様に聞くこともできるのでは？」

「それは、そうだろうけど……」

クオンさんは、話してくれるだろうか。

それに……その話は、果たして聞いていいものなんだろうか。

(何だか、とんでもないことを知っちゃいそうだ……)

思わず息をのむほど綺麗な一八階層の『星空』も、胸を焦がす小さな不安を消し去つ

てはくれなかつた。

……のだけど。

一八階層の一夜が明けてからしばらく。

「この先が『リヴェラの街』だよ、アルゴノウト君！」

約束通り、僕達は一八階層にある『街』へ案内してもらっていた。

「ずいぶんと打ち解けられたようですね、ベル様」

半眼で睨んでくるリリ。

「ボク達を放つて、昨日の夜から一体何してたんかい？」

野営地からここまで、結構な距離を歩き、最後に待ち構えていたのは急な坂道。

お陰ですつかり息も絶え絶えになっていたはずの神様まで、謎の威圧感を放ちながら僕を睨んでいる。

「え、英雄譚の話をしてただけですつて！」

本当にやましいことは何もない。まして、アンジェさん達の事なんて少しだつて話していない。

ただ、朝食を済ませてから野営地を出るまでの間、テイオナさんと、アイズさんの三人で色々な『英雄譚』について色々話してこんでいたのは神様の言う通りだった。

アイズさんはもちろん、テイオナさんは凄く詳しくて、気づけばすっかり盛り上がっ

ていて……おかげで、うん。ちよつと己惚れるなら、打ち解けられたと思う。お陰で、昨日よりは緊張しない。……素肌が触れない限りは。

それに、アンジェさんの話を聞いてからのもやもやも忘れられている。

(アルバートとアリアの子どもか……)

改めて、昨日投げかけられた奇妙な質問を思い返す。

ダンジョン・オラトリア

迷宮神聖譚に名高い大英雄アルバートに子どもがいたらしいという話は聞いたことがあるし、その母親がアリアだとしても不思議ではない。

——アリアが精霊でなければ、だけど。

彼の生涯に寄り添った大精霊。それこそがアリアと呼ばれる女性だ。

残念ながら、神と人の間に子どもはできない。神の力の一部である精霊ともまた同じことだ。

ただ、つい最近例外があるという事を知った。

遠い昔、精霊を助け、その血を分け与えられたクロツゾの末裔。

今もその血を受け継ぐヴェルフがいる。

(英雄譚の中に記述はないはずだけど……)

一晩考えても、やっぱり結論は変わらない。

少なくとも、僕はそういう記述を読んだことがなかった。

ただ、アルバートの子どもにアリアが血を分け与えていたとしても、不思議ではないとも思う。

……まあ、あくまで僕の想像でしかないわけだけど。

(でも、何で急にそんなことを訊かれたんだらう?)

先にヴェルフが連れていかれた事といい、テイオナさんたちは精霊の『子ども』が存在するかどうかを探っていたんだと思う。

休息中の余暇を潰すため……にしては、ずいぶんと真剣だったような気がするけど……。

「到着！ ほらほら、アルゴノウト君も早く早く！」

と、そこで。坂の上から、テイオナさんが呼ぶ。

見上げれば、急な坂道も本当にもう少しだった。

(まあ、あんまり探るのは良くないよね)

お互いに他派閥同士なのだ。

事情を詮索するのはご法度だって、エイナさんからも教わっている。

それに、例えばアンジエさんについて探られたら僕達も凄く困るわけだし。

「さ、さあ、行きましよう神様！」

他派閥同士と言えば、アイズさん達と話し込んでいる間、神様たちをほったらかしに

していた。

ひよつとしたら、それで神様は怒っているのかも。

「わあ……！」

「おお……！」

ともあれ、神様の背中を押して坂道を登りきり——思わず、息をのんでいた。

出迎えてくれたのは木製のゲート門。

そこには共通語コイネーで『ようこそ同業者、リヴィラの街へ！』と書かれている。

（大きな天幕が立ち並ぶ野营地なのかなって思ってたけど……）

漠然と思い描いていた想像よりずっと凄い——本当に『街』がそこにあった。

「見惚れるのはいいけど、気をつけなさいよ。ここは冒険者の街なんだから」

見惚れていると、テイオネさんが忠告を口にした。

確かに門の向こう側にいる誰もが完全武装で出歩いている。

当然と言えばそれまでだけど……オラリオの『冒険者通り』よりももつと物々しい。

ただ、テイオネさんが言いたいのはそう言う事ではなさそうだった。

「そう言えば、ずいぶんとぼつたくられると聞いたが……」

「ええ。だから、私達もわざわざキャンプしてるわけ」

「あたし達が全員で泊まろうと思ったなら、値段が凄いことになるよね、絶対」

桜花さんの言葉に、ティオネさんが肩をすくめ、ティオナさんまでが苦笑した。

「確かに、これはヤバいな……」

門をくぐつてすぐ。口元をひきつらせたヴェルフが近くのお店を指さす。

「どうやら、薬舗らしいけど……」

「うえあ?!」

提示された値段を見て、変な声が零れた。

最安値のポーションが一本三〇〇〇ヴァリス。『青の薬舗』で一番安いポーションと比較して六倍のお値段だった。

「い、いや、でも。ほら、上級冒険者向けの良い物だろうし……」

「ごく普通に地上で売ってる安物のポーションよ」

希望的観測は、ティオネさんの一言であっさりと粉々になつて儂く散る。

「だから油断するなつて言つてるでしょ?」

「なるほど……。『砂漠の水』とはこういうことか」

ティオネさんの呆れ声と桜花さんの呻き声に、僕達は揃つて唾を飲み込むのだった。

「で、でも、クオン君達はこの泊まつてるんだろ?」

「あく……。まあ、あいつらはそうは言つても一〇人もいませんから、まだ何とか……」

「よっぽどの命知らずでもない限りは」

流石に問いかけたのが神様だったからか、テイオネさんが応じてくれた。

……まあ、それでも少し嫌そうな顔をしていたけど。

(クオンさんか……)

忘れたふりをしていて、アンジエさんの話を思い出す。

もはや忘れられた英雄譚『火継ぎの王』。

クオンさんはその主人公かもしれない。そして、アンジエさんと同じ『呪い』を宿しているかも。

(会ったら、どうすればいいんだろう?)

凄く気になる。凄く気になるけど……果たして、それは聞いていい事なのか。

「じゃあな、ボールス」

「おう、今度はしっかりと金を落とすとしてけよ」

「シヤクテイがいなければな」

そんなことを考えていると、少し前の店から見慣れた姿が出てきた。

不意打ちだったとはとても言えないけど……心構えができていたかと言われれば、できていなかった。

だからこそ。

色んな疑問とか、もやもやしたものが一斉に燃え上がり、葛藤をあつさり焼き尽くし

た。

「クオンさああああああああああああああああああんっつ!!」

「ベル?」

「クオンさんが『火継ぎの王』の英雄って本当——:」

ほとんど飛びつくようにして、そう叫び——:

「せい!」

「ばうっつ?!」

……かけた瞬間、鼻先に手刀が炸裂した。

「いたたたたたたたたたつ?!」

そして、いつも神様がされているような感じで関節が決められる。

っていうか、これ結構本気で痛いですけど!?

「はははっ。往來で叫ぶのは愛の告白だけにした方が良いで、ベル」

そして、一体どこで聞いたんですかその話!

「愛の告白だってえ?!」

「ベル様、その話詳しくお聞かせください!!」

「ぎゃー!!」 神様、リリ、引つ張らないでええええええっつ!!」

千切れる! 腕とか肩とか千切れるから!?

痛みに錯乱する視界では誰の腕だか分からないけど、とにかく神様を真似てそれを叩き続けるのだった。

それからしばらくして。

「で、朝っぱらから何でおかしなことを言いだしてるんだ？」

ようやく解放され、地面に崩れ落ちる僕にクオンさんが改めて問いかけてきた。

「まさか、何か適当に拾って食ったんじゃないだろうな。ここだって食べれる植物ばかりじゃないぞ」

「そ、そういうわけじゃ……」

「特にキノコはここでも変わらず上級者向けだぞ。食べられないどころか、食べられかねない奴もいるし」

「どんなキノコですか?！」

クオンさんの言葉に、がばつと地面から体を引きはがす。

「え、いるよっ」

「うん、いる」

と、当然のようにテイオナさんとアイズさんまでが頷いた。

「ええ?!」

「『ダーク・ファンガス』ってモンスターね。見た目は歩く毒キノコなのよ」

「あ、モンスターなんですネ」

変な話だけど、ティオネさんの言葉にちよつと安心していた。

モンスターなら、僕の方が食べられかけられるのも分かる……いや、分かりたくないけど。

「ああ。あのキノコを見た時は流石に焦った。また拳でぶち抜かれるかと……」

そして、何故だか深刻に陰鬱な顔をして呻くクオンさん。

「キノコにどういふトラウマを持っているんだ、お前は？」

その隣で呆れたようにため息を吐いているのは、藍色の髪をした綺麗な女の人。

大派閥「ガネーシャ・ファミリア」の団長を務めるシャクティさんだ。

「ところで、何であんたたち二人だけなの？」

「他の者達は各々好きに街を見回っている。私達は仕事からだ」

「何で俺を巻き込むかな……」

気怠そうに首を傾げながら、クオンさんがぼやいた。

「お前が免罪されたのだと証明するには、これが一番手っ取り早い」

「……ま、あんたが傍にいりや納得もするでしょうけど」

ティオネさんが、そこで少し首を傾げた。

「でも、ついに籠絡されたって話になるだけじゃないの？」

「それに関しては、何度でも全力で否定させてもらおう」

どこまでも真剣に、シャクテイさんが言いきった。

「お前達、俺を一体何だと……」

そのうめき声を、テイオネさんはあつさりとは無視した。

「それは頑張つてとしか言いようがないけど……。ずいぶんとのんびりしてるわね？」

「地上^{うえ}から連絡があつてな。掃討戦は概ね終わったらしい」

テイオネさんの問いかけに、舌打ちしていたクオンさんが応じる。

「これから、最後の仕上げとして、一八階層への追い込みを始めるらしい」

続けて、シャクテイさんも頷いた。

「そうなの？　じゃあ、あんた達は——」

「ああ。最後の壁役だな。お前たちが構築した監視所を使わせてもらう。フィンにも許可を取ったからな」

手勢を借りるのは少々難しそうだが……と、呟いてからシャクテイさんが苦笑する。

「それ以前に、追い込みを行うのが『フレイヤ・ファミリア』だ。私達に出番があるか？　まず怪しいな」

「何か、それはそれでちよつと面白くないわね……」

今の状態で巻き込まれても面倒だけど——と、テイオネさんが眉をひそめて複雑そうな表情を浮かべた。

やつぱり、競合相手同士なんだなあと、感慨にも似た思いを抱いていると……

「なに、次は期待しているとも」

「……まあ、昨日の話だと本当にありそうね。次が」

軽い口調で続けられたそのやり取りに、口端が引きつる。

アルミラージ『変異種』——いや、『深淵種』か。

魔石を砕いても復活してくるようなとんでもない相手と、また遭遇するかもしれないのだ。

「もつとも、まだ第一次調査隊が全員『帰還』したかははっきりしないが……」

「あれじゃ身元を確かめるのも難しいでしょうね」

フィンさん達の話からして、その冒険者たちは僕達が出会ったアルミラージと大体同じ姿に変容している。

あれではもう顔だつて分からない。

「ひよつとして、次つてそういうこと？」

必要なのは分かるけど、さすがに気分が悪いわね——と、テイオネさんが呻く。

「いや、ひとまずは『深淵』跡地の経過観察だ。お前達が一枚噛まされるのは、まず間違いない」

「どつして……」

首を傾げるティオナさんにクオンさんが肩をすくめて見せた。

「お前達のところの狼男が一人、第二次調査隊に加わっていらしいからな」

「あ、そつか。ベート！」

「名前は知らないが……何であれ、事情を知ってる奴がいた方が話が早いし、少しは安全だ。彼は最深部にまで踏み込んでいるし……それに、狼なら鼻も効くだろうからな」

「確かにねー！」

冗談交じりの言葉に、ティオナさんが笑った。

「つていうか、あいつがちつとも戻ってこないのはそのせいかしら？」

「いや……。おそらく、特效薬が集まらないのだろう」

先に薬だけでも届けに来いっての——と、小さく毒づくティオネさんにシヤクティさんが言った。

「【ディアンケヒト・ファミリア】をはじめ、複数の治療院や薬舗で件の異形……運び込まれた冒険者達が暴れている」

「ミアハのところでも暴れたんだよね」

と、続けて神様までが呻く。

「ええ?! ミアハ様たちは大丈夫なんですか!?!」

人が変化した方が、より強力になる。

リヴェリアさんの言葉を思い出し、思わず叫んでいた。

「うん、ふたりともちよつとだけ怪我してたけどね。通りかかった誰かがやつつけてくれたんだって」

「良かったあ……」

いや、決して良くはないんだけど。

名前も知らない冒険者が一人、そこで命を落としているんだから。

「それに加え、ギルドが街中の治療師ヒールラーをかき集めたからな。調薬作業が滞っている可能性は高い」

「あー……。じゃあ、アミッドも？」

「当然だ。今のオラリオに彼女以上の治療師ヒールラーはいない」

「こりゃ、本当にそのせいかもね」

「ああ。念のため、フィンとリヴェリアには昨夜のうちに伝えておいた。『壁』についての話と合わせてな」

「なるほど、どうりでリヴェリアが頭を抱えてたわけね」

もうしばらく、魔導師や治療師ヒールラーは休めそうにないわねー…と、テイオネさんが肩をすくめる。

「そういうことだ。だが、運が良ければ『フレイヤ・ファミリア』に貸しが作れるかもし

れんぞ」

「どう考えても望み薄でしょ。向こうだって、私達に借りを作るの嫌だろうし」

肩をすくめるティオネさんに、シャクテイさんが小さく笑って頷いた。

「つていうか、こっちは消耗しているし、私達の方が貸しを押し付けられかねないわよ。帰り道の掃除をしてやったつて」

「かもしれないな」

つかの間、微笑を苦笑に変えてから、シャクテイさんが表情を改める。

「だが、何であれ油断はするなよ。『中層』とはいえ、ダンジョンは広いからな。いくら『フレイヤ・ファミリア』とて本当に討ち漏らしが出ないとは限らん」

「それこそ、言われるまでもないわ」

「うんうん。遠征は本拠地ホトキムに帰るまでってロキも言ってたしね！」

ティオネさんとティオナさんの言葉に、思わず頷いていた。

これから地上に戻る僕達も、決して他人事ではないのだ。

いくらアイズさん達について行くとはいえ、完全におんぶにだつことはいかない。

……それに、個人的にもそんな真似はしたくなかった。

(やつぱり武器がある。それにアイテムも)

手持ちの武器は《神様のナイフ》と、クオンさんから借りている普通のショートソー

ドだけ。

僕がナイフを使い、ヴェルフにショートソードを使ってもらえば最低限の体裁を整えられはする。

でも、それで『中層』突破はかなり無謀だ。何より、それではリリが丸腰になってしまふ。

防具は兎鎧の右肩の装甲が欠損しているくらいか。

サラマンダー・ウールは何か無事だ。

とはいえ、所々が裂けてしまっているのです、その分だけ不安もある。

アイテムに至っては一つも残っていない。

でも、果たして買えるんだろうか。

極限の決死行を切り抜けてきた僕達は、魔石すらもほとんど未回収なままなのに……。

「ところでアルゴノウト君。さっき言いかけたのって何の話なの？」

「え？ ええと……」

ティオナさんなら、多分『火継ぎの王』の物語も知っているとと思う。

だから、説明するだけならそこまで難しくはないけど……。

(これは、多分、ティオナさんにも教えられない話だ)

少なくとも、アンジェさんに関しては神様に口止めされている。それに、多分クオンさん自身が知られたくないんだと思う。

何故テイオナさんたち……【ロキ・ファミリア】に知られたくないのかまでは分からないけど。

「いつまでも店の前で話し込んでんじやねえ。商売の邪魔だ」

「あ、す、すみません！」

店の中から顔をのぞかせた強面の男の人に、思わず頭を下げる。

「しかも、また【ロキ・ファミリア】かよ。まったく、いつも余計な騒ぎ起こしやがって「はあ?」この前の事なら助けてあげたんじやない」

テイオネさんに睨まれ、それでもその人は豪胆にも舌打ちした。

やつぱり、この人も上級冒険者なんだろうか。

……いや、『中層』にいるんだからもちろんそうだろうけど。

「つうか、てめえら。見ねえ顔だな?」

「ああ、この少年が噂の【リトル・ルーキー】だ」

隻眼でじろりと睨まれ、思わず委縮していると、代わりにクオンさんが言った。

「世界最速兎のか?」

「そーいや霞がそんなようなこと言ってたな……。まあ、折角だ。サインでも貰ってお

いたらどうだ?」

「今さらL.V. 2のサイン貰ってどうしろってんだ?!」

「案外売れるかもしれないぞ。時の人って奴だし」

「……」

「おい、考え込むな」

顎に手を当て思案顔をするその冒険者に、頭痛でも堪えるような顔でシャクティさんが呻いた。

「ええと、師匠。その人は?」

「俺か? 俺様はポールス。泣く子も黙るリヴィラの——」

「この街の町長さんだ」

「おiiiiiiiiっ!」

きつぱりと言い切ったクオンさんに、ポールスさんが絶叫してから、

「何だよ?」

「何で何だよとか言えるんだ、てめえは?!」

不思議そうな顔をするクオンさんに、そのまま食って掛かる。

「人の事を『あつとほーむ』な感じに紹介するんじゃないぞ!!」

「いいじゃないか。親しみを感じて」

「ならず者街の大頭が親しみ感じさせてどうするってんだ?!」

「そう、それだよ」

ぴっ、とクオンさんが人差し指を立てた。

「この前、あの美人絡みの事件で聞いた時から考えてたんだが、ここって本当にならず者街なのか?」

「ああん?」

「見ろ」

ボールスさんのみならず、テイオナさん達までが怪訝そうな顔をする。

そんな中でクオンさんは立てた指で、近くの細い路地を示した。

「綺麗なものだろう?」

「そ、そうですか……?」

お酒らしき空き瓶とか、何かの食べ残しとか、紙くずとか、何か色々ゴミが落ちてるんですが……。

「本当のならず者街ってのは、ああいう路地には身ぐるみはがされた死体の一つや二つ転がってるもんだぞ」

「ええっ?!」

「ついでに言うと、身ぐるみはがした奴が、別の路地でやっぱり身ぐるみはがされた死体

になつてたり……何だつたらそいつを殺した奴とぼつたり出くわして襲われたりもする」

「いや、待て……!」

「さらに言うなら宿。宿代は確かに高いが、寝てる間に荷物を抜き取られたり、命ごと奪われたりすることもない。もちろん、寝込みを襲われたこともない」

この辺は俺が男だつてこともあるだろうが。

そんなことを言うクオンさんに、テイオネさんが頷いた。

「あく……。言われてみれば確かに。その辺は案外しつかりしてるわね」

「うん。オラリオに来る前に寄つた街とか、その辺はもつと酷いところがあつたもんね……」

「テイオナさん達もオラリオの外から来られた方なんです」

「そうだよー」

「ただ、その辺はあんまりいい思い出じやないから詳しく聞かないでね。とりあえず全員物理的に返り討ちにしたいけど」

「あ、すみません」

それはそうか。

いくら強いつて言つても女の人だし、思い出したくないのは当然だった。

「むしろ、流石だと思えます」

「今日も絶好調みたいだねー……」

「なるほど、本領発揮というやつか」

「【正体不明】おそろるべし……！」

「そうなのかなあ……？」

何だか、桜花さんたちとも打ち解けてきたみたいだ。

理由はともかくとして……うん、良い事には違いない。きつと、多分。

「ちよつと……。ひよつとして、あいつつていつもは本気であんな感じなわけ？ 動く

奴はとりあえず撫で斬りにする系じゃなくて」

「軽口を叩くのはいつもの事だろう？ 【猛者】おうじやを相手にしている時でも変わらない」

「ええと……。あの、はい。割とあんな感じです」

ため息交じりのシャクティさん。僕も苦笑を浮かべるしかない。

「ええー……？」

一方でテイオナさんは心から疑わしそうな顔をしている。

そんな顔をされても、僕も困るんですが……。

……まあ、今日は特に饒舌な気もするけど。

「ええと……。つまり、ポールスさんって凄い人なんですね？」

いや、それは当たり前か。

ここにいる以上は、リヴィラの街にいる人達のほとんどがLv. 2以上。

その街を束ねているなら、この人は第三等級冒険者なのかもしれない。

「まあ、この街の荒くれどもをまとめ上げ、それなりの秩序を保ち続けているんだから、
凄いい奴なのは確かだろうよ」

あつさりと同くクオンさんに、ボールスさんが大きく目を見開いた。

「て、てめえ、今度は何企んでやがる……？」

「褒めてるだけだろ。遠慮せず、素直に受け取れ」

一方で、クオンさんが半眼になったのは……まあ、無理もない事か。

「それで、ベル。お前達はどうしたんだ？」

「ええと……」

「多分、その金髪小娘どもから聞いてると思うが、ここでの買い物は初心者にはお勧め
できないぞ」

「あー……。はい、それは、もう、何となく……」

ポーションの値段が六倍。その衝撃はまだ体の中を反響していた。

「武器とアイテムなら、多少融通できるが……」

「おいこら【イレギュラー正体不明】。俺達の客を取るんじゃねえ！ ただでさえろくに金を落として

行かねえ癖に！」

「そうは言つても、もうここで魔石やら迷宮資源を売る必要があまりなくてな」
持ち運べなくなることはあまりない——と。

クオンさんは肩をすくめる。

「大体、シヤクティと一緒にだつてのに、この街で『買い物』なんてできるかよ。されたら、お前だつて困るだろう？」

「……そりゃあそうだな」

どこまでも力強く頷くボールスさんに、シヤクティさんがため息を吐いた。

「ああ、そうだ。こいつの分厚い面の皮を少しでも凹ませられるくらいの腕つぶしがあれば、大体の物は定価で買えるぞ」

親指でボールスさんを示し、何だかささらに物騒なことを言いだした。

「あ、なるほど。そういうや、その手があつたわね」

「ああ。腕つぶしで他の店を黙らせられる奴が、一番高く売れる。それがこの街の掟ルールらしいからな」

ポンと手を打つティオネさんに、クオンさんがあつさりと言つて見せた。

「てめえ、ふざけんな！ 余計なことを吹き込むじゃねえよ!! 主にそいつらにつ!!」
「気安く指ささないでよね」

かなり必死な形相でクオンさんに詰め寄るポールスさん。

一方で、指さされたティオネさんは心底嫌そうな顔で毒づいていた。

な、何となくだけどこの街の規則ルール的なものが分かってきたような……。

「つまり、商談まで腕つぶしが全てってわけか……」

「多分、ここが本当の意味で『冒険者の街』なのでしようね……」

目頭を揉みながらヴェルフが呻き、リリは遠い目をしている。

「あの、ところでポールスさん」

引きつった笑いを浮かべてから……ふと気になったことを質問してみることにした。

「この街って、どうしてモンスターに襲われないんですか？」

いくら安全階層セーフティポイントとはいえ、ダンジョンの中。

それに、あれだけ周りにモンスターがいるのにどうやって街を守っているんだろう。

「ああん？ 何言ってるやがる。襲われねえわけねえだろ」

「うん、襲われるよ」

「一ヶ月くらい前には食人花ガイオラス……怪物祭で暴れた新種とその進化系。さらにはデーモン

まで襲ってきたからな」

「あれ危なかったよね〜！ あたし達もたまたまその時ここにいたんだけどさ〜」

ポールスさんはもちろん、アイズさんとティオナさんが……それどころかクオンさん

までがあっさりと言いきった。

「この者たちは逃げ足が速いからな。壊されては作り、作つては壊され……。彼らはそれをずっと繰り返している」

口端を引きつらせていると、シャクテイさんが続けた。

いくら第三等級冒険者たちが常に留まっているとはいえ、一度異常事態イレギュラーが起これば、守り切れるものではない。

その度に街は破壊され……。そして、戻ってきた冒険者たちによつて復活してきたのだという。

「看板に三三何代目つて看板に書いてあったの、気づかなかつた？」

「そ、そんなに何度も……」

テイオネさんの言葉に、慌ててゲート門の方を振り返る。

もちろん、ここからだとその看板は見えないけど……。

でも、そのしぶとさこそが何よりも冒険者の街らしいと言えるのかもしれない。

「そうだ。話は変わるが、収入が必要なら、その辺の水晶をいくらか持つて帰ると良い」
「水晶をですか？」

視線を戻してから、改めて周りを見回す。

それなら、いろんな場所にたくさん生えているけど……。

「ああ。この街では売れないが、地上なら全て換金できる」

リヴィラで唯一売れない迷宮資源なんだよな、この水晶——と。

近くに生えていた小さな青水晶をつま先で軽く小突くクオンさんに、ボールスさんも肩をすくめた。

「むしろ、ここで生活してつと邪魔なくらいだぜ。時々、妙なところから生えてきやがる」

何でも、たまに床板を破って生えてくることもあるんだとか。

ダンジョンの修理にもばらつきがある……というより、多分、迷宮資源扱いなんだろう。

昨日から食べているこの階層の『果物』と同じだ。

同じ場所に行っても、豊作の時もあれば、逆にほとんど見かけないこともあるらしい。

鉱脈も似たような感じで、毎回必ず同じ場所にあるのではなく、少しずれるんだとか。

まあ、それでも大体は同じ場所にあるらしいけど……。

「——ベル様！ あとで山ほど採取しておきましょう！ クオン様にも手伝ってもらって！」

と、言いつつリリはアンジェさんにも視線を向けた。

クオンさんとアンジェさんがいるなら、かなりの量が持ち運べそうだけど……。

「……一応言っておくが、俺達が運べる量にも限度があるからな？」

加減するように——と。釘を刺すように、クオンさんが言った。

「つーか、てめえが妙なこと言いだすから俺まで参加しちまつてるが……」

がりがりと頭を搔いてから、改めてポールズさんが言った。

「そろそろマジでどっか行け。さもなきや何か買え。商売の邪魔だ」

2

と、そんなわけで。

今度こそポールズさんのお店から少し離れてから。

「まあ、何事も経験だ。ひとまず、店を見て回つてくると良い」

割とあっさりとかオンさんが言った。

「ただ、そつちの三人か、最低でもリリルカとははぐれるなよ」

特にお前は——と、念を押される。

(でも、クオンさんの言う通り、はぐれたら大変なことになりそうな……)

街のあちこちから聞こえる罵声……いや、『値切り交渉』に思わず怯んでしまった。

ランクアップしたとはいえ、やつぱりまだ冒険者になって一ヶ月半の未熟者ノビなんだ

なあ……と、改めて思い知る気分だ。

「俺達もまだ適当にぶらついている。それか、最悪はシャクティにでも泣きつけ。大体の問題は解決してくれる」

「あまり過信されても困るんだが……」

「す、すみません。もしもの時はお願いします」

シャクティさんはため息を吐いているけど……ここは素直に頼っておこうと思う。

やっぱり専門家だし、心強いというか何というか……。

(そういえば、あの人は元気かな?)

オラリオに来た時、初めて出会った冒険者を思い出す。

確かハシャーナさんだったか。

身に着けていたのは象を模ったエンブレムで、ギルド職員と一緒に門衛をしていた。

なら、所属は「ガネーシャ・ファミリア」以外には考えづらい。

「あの、ところでシャクティさん」

「どうした?」

「ハシャーナさんって冒険者は、『ガネーシャ・ファミリア』の方ですよね?」

「そうだが……その名前をどこで?」

急に名前を上げたせいとか、警戒されてしまったらしい。

その目に、少しだけ鋭い輝きが宿ったような気がした。

「あ、いえ。初めてオラリオに来た時に、市壁の門衛をされていたので……」

その時に、オラリオについていくつか教えてくれたのだ。

そして、何よりも冒険者にとって必要なことも。

「教えていただいた通り、いい神様に出会えました。そう伝えてくれますか？」

「……ああ。伝えておこう」

シヤクテイさんは小さく微笑んで頷いた。

……

「世間は狭いな」

ベル達の背中を見送ってから、小さく肩をすくめる。

「ああ。まさかあいつが「リトル・ルーキー」と知り合っていたとは……」

ハシャーナと言う名前には、俺も覚えがあった。

一ヶ月ほど前、この街で出会った——と、言うには少し語弊があるか。

件の美人に殺された冒険者で……遺体を背負い、地上に連れて戻ったのが俺だ。

加えて言うなら……

「連れ帰る途中、ベル達とすれ違っている」

「それは……奇妙な縁だな」

「そうかもな」

偶然以外の何物でもないが……まあ、どこかの狂人ならそれも因果だということかもしれない。

何が因でどんな果を生むかは知らないが。

「いい神様か。確かに眷属思いなのは間違いない」

困ったものだ、シャクテイが肩をすくめた。

「そういや、聞き忘れていたが、結局何で神はダンジョンに潜れないんだ？」

「私も詳しくは知らない。個人的には、単に危険だからと言うだけではないと思うがな」
同感だった。

自分たちが何に焦がれているかも忘れ果てたあの亡者どもが、ただその程度の理由で自粛するはずがない。

「それにしても、いい神ねえ……」

いや、ヘスティアが善良な存在だというのは事実だろう。

今までの言動を見る限り、流石の俺とてそれは否定しがたい。

ただ、改めてそう言われると、何となく据わりが悪いのも事実だった。

「だが、実際に大切なことだ。アイシャを見れば分かるだろう」

「アマゾネスだけの神だったなら、そこまで悪くなかったとも言っていたがな」

取り合わせ……相性というのは、どこにでもあるということだろう。

それは人同士でも同じことだ。

「ところで、彼らを行かせて本当に良かったのか？」

「ああ。俺が肩入れしてると思われるのはベル達のためにもならない」

ランクアップにもイカサマをしたという噂があると、霞の言葉を思い出す。

別に俺との接点知られたから、そう言われているわけではないだろう。

しかし、アイシヤ絡みの一件で俺の悪名はオラリオ中に響いているのは間違いない。

その辺が絡み合つて、余計な面倒ごとを引き起こさないとはい難かった。

「もし余裕があるなら、俺の代わりに手を貸してやつてくれ」

「それは難しいな。私達は職務上、ギルドと同じように公平性が求められる」

シャクティは首を横に振った。

「そりゃそうか」

彼女達はオラリオの憲兵だ。

公平でなければ、その職務は全うできまい。

……もつとも、過去から今に至るまで、本当に公平無私で清廉潔白な憲兵が存在したとは思わないが。

(そう言う意味じゃ、カリムの連中は真面目だったよな)

ロードランやドラングレイグで出会った胡散臭い宣教師を思い出す。

言動こそ怪しかったが、結局はそれだけだ。

ある意味、巡礼地で出会った中で最も真つ当な聖職者たちだと言える。

(許されぬ罪はない、か)

当時は胡散臭く感じたものだが……案外と本物の至言だったのかもしれない。

——ならば、■もいつかは赦されるのだろうか

滅んだ世界。

砂に埋もれた都。

朽ちた寝所。

そこで眠る——

「どうした？」

「いや、何でもない」

頭痛に似た眩暈。それを首を振って追い払う。

そうか、とシャクティは生真面目に頷いてから、

「……だが、彼には少し負い目もある。表立って手を貸すのは難しいが、気にかけるくらいはしておこう」

やはり大真面目にそんなことを言った。

しかし、本当に大丈夫か？

あの様子では、狼の群れに迷い込んだ兎のようなものだ

思うが……」

「まあ、リリルカに期待かな。ランクとやらはともかく、経験やら知識面ではあの子の方が圧倒的に上だ」

実際のところ、冒険者とはならず者とほぼ同義だ。

迂闊に背中を向けたなら、そのまま蹴落とされても文句は言えない。

「はあ!?」んなに高えわけねえだろうが!」

「んじゃあ、別の店で買やいいんじゃねえか?」

……それを肯定するように、リヴィラ流の交渉が始まる。

最後に物を言うのは腕つぶし。

それは、リヴィラに限らず多くの冒険者が共有する価値観であり、暗黙の了解だ。

それでも、地上で暴れば面倒なことになるだろうが……ダンジョン内ならそんな制限もない。

他の派閥の冒険者のせいで命を落とした者は決して少なくないと聞く。

あれこそが英雄だと。そう言っては誉めそやされる冒険者の暗部。

それこそをリリルカは熟知している。

その闇に潜み、その淀みを吸って生きざるを得なかったのがあの少女だ。

だから、その味を知っている彼女が本当にベルの味方になってくれるなら、これほど

心強いことはない。

実際、ベルが上手いこと口説き落としているのを見た時は安堵したものだ——：

(忘れてた——！)

そこで、さつきから妙に引つかかっている『何か』の正体に思い至った。

酔っ払いどもから取り戻したりリルカのバックパックをまだ預かったままだ。

あれから色々あったせいで、綺麗さっぱり忘れていた。

「悪い、シヤクテイ！　ちよつと急用を思い出した。すぐ戻る！」

短く言い残すと、急いできた道に戻る。

手助け云々は関係ない。

預かっている物を返す。これは、ただそれだけの話だった。

(リルカならまず、バックパックを買いに行く)

上層ならまだしも、中層で彼女が前衛に立つのは流石に危険だ。

それは誰よりも彼女自身が分かっている。

間違いなくサポーターに徹する。

そして、サポーターにとつての商売道具こそがバックパックだ。

例えあの不死人がいるとしても、自身の分を買い求めないはずがない。

なら、そう言った類を取り扱っていて、かつポールの店に近い店。

そこに向かえば合流できるはずだ。

ただ、時間的な余裕はあまりない。

リルルカが買ってしまう前に追いつかなくては意味がないのだから。

…

「本つ当にあり得ません！」

いえ、物価が異常なのは分かっていますけど！

それにしたつて、バックバック一つであの値段はありえない。

「バックバックが一〇万ヴアリスとか！ 高額をポンと払えるサポーターがどこにいるというのですか?！」

ああ、でも。ここまでに到達できる、あるいは『中層』以降にもついて行けるサポーターなら、それくらいは……?」

(いえ、駄目ですね……)

柄にもない樂觀的な思考を嘲笑う。

この先に進むサポーターとは、単なる荷物運びではない。

今世話になっている「ロキ・ファミリア」を見れば嫌でも理解する。

彼らは単なる荷物持ちなどではない。予備選力ないし、次期戦力と目される人材だと。

おそらく、彼らは最低でもL.V.3。

その辺の派閥に改^{コンバージョン}宗すれば、第一線で活躍できる。つまりは、オラリオにおいても一握りの精鋭たちだ。

才能のない小人族^{バルツム}のL.V. 1とは訳が違う。

ああ、でも……。

(ベル様と、一緒なら……)

もしかしたら、リリも——。

あの日。五階層で助けてもらったあの時から胸の中で微かに抱いた希望が、僅かに火の粉を舞い上げる。

「あ、リリ。安めのバックパックがあつたよ！」

そんなリリを、近くの露店を覗いていたベル様が嬉しそうな声と共に手招く。

「え？ 本当ですか?！」

その先にあるのは、地面に敷き布を引いただけの簡素な露天。

これなら、案外本当に安かつたり……

「うん！ ……まあ、それでも二万ヴァリスもするけど」

……するわけもないのですが。

一瞬だけ呻いたものの——それでも、まだ何とか手が届く範囲だ。

クオン様が言った通り、水晶は——少なくとも、今のリリ達にとつては——結構な値段で売れるらしい。

充分に回収していきさえすれば、赤字だつて免れることができるかも……。

「つて、ああ?!」

その露天商の顔を見た瞬間、思わず叫んでいた。

「ああん?」

黒革の鎧。鷲鼻。何より特徴的なその禿頭。

「パッチ様?!」

およそ二年に渡る盗賊稼業の中で、たった一度だけ。

完全に出し抜かれた挙句、情けまでかけられた相手だった。

「うん……? ああ、あん時の小栗鼠か。こんな掃き溜めにまで落ちてくるとは、相変わらず運のねえ奴だ」

「余計なお世話です!」

というか。何でこの小悪党が、こんな深い階層にいるんですか?!

「あれ、リリの知り合いなの?」

「違います! そんな高尚なものでは断じてありません!」

「へえ……。もしかして、そいつはひよつとして噂の兎野郎か」

にやりと、その口元が歪む。

「パツとしねえガキだな。大したお宝は持ってそうにねえ。勘でも鈍ったか？」

「違います！ それに、リリはもう盗賊稼業からは足を洗ったんです!!」

「おっと、心配するなつて、駆け出しの獲物を横取りするほど落ちぶれちゃいねえよ」
まったく信じていない。

自業自得とはいえ、焦燥だけが募っていく。

「そうそう。あつちの森の方にすつげえお宝があるんだ。興味があるなら行ってみろつて」

そんな中で、その禿げ頭は一八階層の南東部を指さして言った。

「そ、その手には乗りません！ 行きますよ、ベル様！」

ベル様の手を引きその場から立ち去る。

「おいおい、疑うなよハニー。俺とお前の仲じゃないか」

そんなリリ達を回り込むようにして、その小悪党が囁いてくる。

「誰と誰の仲ですか?!」

慌てて距離を取りながら、全力で怒鳴り返す。

……とはいえ。真面目な話、少しでも稼いでおきたいのは事実だった。

何だったらクオン様を誘って……

「なあに、心配するなって。この辺にいる限り、モンスターどもも少しは腑抜けてるからな。お前なら出し抜ける。それでも心配なら、そっちの腕の立ちそうな嬢ちゃんたちを連れてきやいい」

「へ？ あたしたち？」

コテン、と首を傾げたのはティオナ様だった。

「お宝かー。ちよつと興味あるかもー」

「そんな胡散臭い話信じてどうするのよ」

肩をすくめたのは、ティオネ様だった。

ど、どちらかと言えば、ティオネ様に同意したいところですが……。

（でも、この人、基本的に嘘はつかないような……）

と、いうか。何故だか嘘は下手だ。バレバレの嘘しかつけない。

となると、実際にあの森には何かがあるという事に……。

まだ見ぬお宝に心が揺らぐ。

「必殺☆アンドレイキック」

とても投げやりで、凄く面倒くさそうな声したのは、ちようどそんな時だった。

「どうわあ!？」

鈍くて重い激突音。

ポーンと景気よく吹っ飛んでいく小悪党。

その通りの突き当りにあったのは、女性冒険者向けの防具屋で――

「きやあああああつ！ のぞきいいいいいいつ！！」

「いふつ！！」

と、すかさず店から蹴り出される禿頭の異物。おとこ

「てめえ、なに恐ろしいことしやる!!」

ゴロゴロゴロゴロ、と地面を転がって帰ってきた覗き魔が叫ぶ。

……その間に、スタツと身軽な様子で着地していたクオン様に向かつて。

「周りは女ばかりだっただろう。むしろ男の本望じゃないか」

「ドワーフ女の裸なんぞ見て何が楽し――おぶああ?!!」

失礼極まりない発言をする不埒者に分厚い大盾が飛んできて、見事直撃した。

天誅です。

「ついてねえ、ついてねえよ……」

「いや、少なくとも最後のは完全に自業自得だろう」

大盾に押し潰されたまま呻く変態に、きつちり射線から逃れていたクオン様が呆れたように肩をすくめる。

「……というか。お前、まさか本当にパツチなのか」

「あの、クオンさんも知り合いなんですか？」

「あー…。知り合っちゃまったことに關しては、別に俺の責任ではないと思うんだが……」
ベル様の問いかけに、指先で眉間を搔いてから、

「何だかんだ、通算で四回は殺されかけてる」

「ええ?!」

いえ、ベル様。全然驚くことじゃないと思います。

「生きてるんだからノーカウントだろうが!」

基本的に、こういう奴なんですから。

やつぱり、南東の森には近づかないことにしましょう。

「い、いや違った。間違えた。待ちな。確か俺とあなたは初対面のはずだぜ」

大盾の下から這い出し叫んだパッチ様が、今さらながらに白々しく言った。

悪事がバレた時の誤魔化し方はさつぱり参考にならないのは相変わらずだ。

「ほー…。そうだったか」

まったく本気にしていない様子でクオン様が頷く。

次の瞬間、纏っている鎧が変わった。

「嬉しいよ、こんな吹き溜まりでも、どうして出会はあるものだ」

見るからに重そうで、まったく素肌の露出がない堅牢な鎧へと。

「さあ、友よ。祝杯を上げようじゃないか」

それを着込みクオン様は両手を広げて笑う。

「うおおあああああつっ!? 消える俺の黒歴史いいいいいい!」

そして、それを見て何故か頭を抱えてのたうち回るハ……もとい、パッチ様。

「やつぱりパッチじゃないか。しかも最終形態の」

悶えるその姿を冷静に観察してから、クオン様はきつぱりと頷いた。

「誰が最終形態だコラア!」

いやもう、本当に何が何だか。

すつかり置き去りにされている気がする。

いえ、それならそれでまっつたく問題ないですが。

生じているかもしれない誤解さえ解いていってくれるなら。

「そんなことより、お前までこんなところで何してんだよ?」

「ああん? 肥溜めの糞どもがうろついでる地上より、この掃き溜めの方がいくらかマシだろうが」

「そういうことじゃなくてだな」

てめえだつてそう思うだろ?——と、その問いかけにはきつちり頷いてから、クオン

様は妙なことを訊いた。

「お前は、別に火防女達に召喚されたわけじゃないだろう？」

「生身だつてのが、見て分かんねえか……。いや、さてはお前、陰気野郎と出くわしてるな？」

「ああ。昨日の夜な。本当に決着をつけたらしい」

「そりゃご苦労さん」

飽きもせず物好きなきこつたと、パツチ様が鼻を鳴らす。

「他にも何人かいるようだが、何か知らないか？」

「【太陽の戦士】が一人いるって噂なら聞いたぜ。しかも、お前もよく知ってる——」

「ソラールか？」

「何だ、そつちとももう出会つてやがったのか。つうか、マジで本人かよ」

あの変人、まだ変人やつてたのか——なんて。

こつちはこつちで顎を撫でながら妙なことを呟く。

（いえ、違います。これは——）

つい先日、やはり奇妙な女冒険者……女騎士から聞いた言葉を思い出す。

（不死の呪い）

この場合の不死は、死なないことではない。

何度でも死ねる。

死してなお死にきれず。いずれ再び動き出すが故に。

アンジェ様がその身に宿す『不死』とは、そういったものだという。

そして、その代償として人間性——記憶や人間らしさを……もつと簡潔に言えば、正気を失っていくのだという。

ただ誰かの魂を求める『亡者』となり……あるいは動くことすら忘れ果てるまで。

(変人のまま……。逆に言えば、まだ変人程度でしかない)

まあ、あのソラール様と言う戦士の人柄はまだ把握できていないのだけれど。

でも、今までの立ち振る舞いからして、正気と呼べる範疇に留まっているのはまず間違いがない。

……その『正気』という基準が、果たしてリリ達と同じなのかは、今は考えないでおく。

(と、いうことは)

ソラール様もまた、『不死の呪い』を宿す存在——不死人だと考えていい。

それはこの際どうでもいいのだ。

問題は……

(ソラール様が『太陽の戦士』なる存在で、クオン様と一緒に旅をしていたというなら

……)

クオン様が、『火継ぎの王』本人というのは……まあ、驚きはするものの、納得できないわけではない。

一七階層連結路前——そして、監視所で目撃したあの苛烈な戦いからすれば。

(……まあ、リリにはほとんど見えなかったのですが)

とはいえ、あの【おっじゃ猛者】とも一騎討ちした間柄だ。

リリから見れば、英雄と名乗る権利はただそれだけで充分に持っていると思う。

そして……それはこの際、割とどうでも良かった。

(ええ……。パッチ様も向こう側なんですかあ……?)

ベル様が教えてくれた華々しい英雄譚は言うに及ばず。

アンジエ様が話してくれた『火継ぎ』と『呪い』をめぐる陰鬱で悲壮な物語まで、一
気に俗っぽくなってしまったような……。

(あ……。でも、実際こんなものかも知れませんね)

英雄譚の元になっている出来事を紡いだのはやはりリリ達と同じ人間だ。

それなら、物語に描かれる華々しい場面の裏側で、馬鹿なことを言つて、馬鹿なことをやっていたとしても何もおかしくはない。

おかしくはないけど……。

(そうなる、アンジエ様の話はまた一段と信憑性を増したことになると思います)

ごくり、と。今更になって唾を飲み込む。

目の前にいるのは暢気な旅人ではなく、忘れられたとはいえ、かつて世界を救った本物の『英雄』という事に……。

「あの、クオン様——」

いや、違う。この人は、暢気なようできて慎重だ。

人目の多い場所で話を聞こうとしても、さっきのようにはぐらかされる。

まずは人目のない場所に移動しなくては。

そう。おそらくは他の誰よりもまず「ロキ・ファミリア」の目のないところへ。

「つーか、兄弟。お前、ンなちんちくりんにも興味あんのか？」

……余計なお世話です。

半眼で毒づいていると、クオン様が鼻で笑った。

……何だかとっても嫌な予感——!!

「お前な、この方をどなたと心得る？ 今代の『フルハベル』様だぞ」

「何でここでその話題を引つ張り出すんですかあ?!」

本つ当に不安を裏切らない人ですね!?

「……おい、嘘だろうか？」

「そんな不謹慎な嘘をつくものか。彼女が本気になったらあの『仮面巨人』どころの騒ぎ

「じゃない」

「なんだと……」

張り詰めた空気の中で、無駄に戦慄する馬鹿二人。

「お待ちください！ 何で二人ともそんな本気なのですかあ?!」

リリどころか周りの野次馬すら置き去りにして、唐突に『しりあすぱーと』が始まっていた。

「なあ、ベル。『フルハベル』ってのは何なんだ？」

「ええと……」

やっぱり置き去りにされているヴェルフ様に問われ、ベル様は口端を引きつらせて――

「おそらく『岩のようなハベル』と呼ばれた神。あるいは、その神に仕えた『ハベルの戦士』達のことではないかと」

——そして、アンジェ様が容赦なくぶちまけた。

やっぱり知っていたのですね!!

「極めて堅牢な鎧と大盾。そして、大槌を携えた重戦士たち。その全てが非常に重く、常人では手甲すら持ち上げられないのだとか」

「ちなみに現物はこれだ」

ドン！——と、地面を揺るがして、あの忌々しい岩のような装備一式をクオン様がり出した。

こうしてリリの前に姿を現すのは、クオン様にリリの『スキル』がバレた時以来ですね！

「うわあ……」

普段から重量武器を愛用しているはずのテイオナ様までがドン引きした様子で呻く。鎧の造りとしては、無骨ながらもどこか騎士然としたもので……もちろん、見た目通りに硬い。

そして、何よりドン引きするほど重い。

「おい、この盾。下手な鎧一式よりずっと重いぞ。使えるのか、こんなの……」

どうにかその大盾を持ち上げたヴェルフ様に、ベル様は曖昧に頷いてから、「あと、この鎧に噛みついたキラアアントがいたんだけど……」

「折れましたね、牙が。その後で、衝撃で転げ落ちた兜が頭を直撃して……」
「灰になりました——と、沈痛な面持ちで伝える。

色々要因縁のあるモンスターが相手とはいえ、今思い出しても何だか居た堪れない。

「だが、彼女が本気になれば得物はダガーのみなんてケチなことと言わない」

などと、暢気に感傷に浸る余裕などあるわけもないのだった。

「きゃあああああああつっ!!」

全力で叫ぶ——けど、そんなことを気にするような人ではない。
分かってましたけどね!!

「うお……?!」

ズン!——と、地面を揺らしながら突き立つのは一振りの剣。

いいえ、それは剣と呼ぶにはあまりに大きすぎた。

大きく、分厚く、そして大雑把すぎ……まあ、だいたいそんな感じの代物だった。

「け、《煙の特大剣》……! おい、まさか……!」

「そうだ。彼女はフルハベル着込んだ上で、軽快に走り回った挙句、こいつを片手でぶん回しかねない逸材だぞ」

「そんなことはできませんから!」

「もちろん、隙を見せれば背後からダガーで一突きだ。それどころか、結晶ハルバも余裕で行ける」

「そんなこともしません!」

「ちなみに、これは余談だが。今の俺だとその剣は両手でやっと振り回せるくらいだな。鎧まで着た日にはそもそもそろくに動けない」

「リリだって同じですよ!!」

徐々に大きくなる野次馬ひまじんのざわめきをかき消すように叫ぶ。
 つていうか、何でこんなに集まってくるんですか?!

——と、そこで。

「うわ、重た……?!」

「あ、危ないですよ!」

その剣つぽい何かを引き抜き、振り回そうとしたテイオナ様がふらつき、とつさに助けに入ったベル様を巻き込んで転びそうになった。

なので、つい——。

「いけません!」

ひよい、と。

……【アーテル・アシスト縁下力持】は、こんな時にもきつちりと仕事をした。

「あ……」

このスキルがある限り、この剣に見えなくもない物とはいえ持ち上げるだけならそこまで問題にならない。

そう。それが例えオラリオ有数のLv. 5がふらつき、【イレギュラー正体不明】をして片手じゃ無理とか言いだすようなおバカな代物でも。

それでも、充分に重いんですけどね!

「お？ おお……っ?!?!」

「あの【^{アマゾン}大切断】がふらついたような剣を軽々と?!」

「やべえ、あの幼女やべえよ……」

「こ、これが『ハベルの戦士』ってやつなのか……!」

スキルのせいで持ち上げてしまったリリに、周りの野次馬の視線が集まり――

「すごい！ ねえ、見てみて！ この子すごいよ!!」

とどめでも刺すかのように、テイオナ様が目を輝かせる。

というか、わざわざ呼び寄せないでください!?

「ち、違うんですううううううううううううううう!!」

そのスキルの効果は『一定以上の装備過重時における補正』。

簡単に言えば、『重い物を持ち運べるだけ』のへっぽこスキルだ。

とはいえ、スキルはスキル。

そして、スキルは冒険者の命綱。いくら専属サポーターだってそこは同じだ。

まさかこんなところで打ち明けられるはずもない。

「見ての通りだ、お前達。無礼を働くと挽肉より酷いことになるぞ」

「無責任に煽らないでください!」

厳かな口調で無責任に煽り立てるクオン様。

いつその劍とは違う何かを投げつけてやろうかと……。
できないんですけどね！ 持ち上げるところまでしか！ 本つつ当に!!

なので、代わりに地面に叩きつけて——！

「者ども頭が高けえ。小栗鼠様がお怒りだぞ」

ドスン——と、地面が微かに揺れる中、ハゲ……もとい、パツチ様まで煽り始めた。
確かにお怒りですけど、それはあなた達に対してです!!

あと、この何か妙な塊を打ち上げたどっかの変態鍛冶師にも!!

「だから何で——」

「はは——っ！」

「——何で全員揃って悪ノリするんですかあ?!」

伊達にオラリオで名を挙げ、神の悪ノリと無茶振りに鍛えられてはいないという事なのか。

こんな時に限って無駄に素直に、バタバタと平伏していく上級冒険者たち。
……まあ、この光景を今まで一度も夢に見た事がないとは言いませんが。

(でも、こういうのはちよつと違いますう!!)

何かもう、普通に泣きそうだった。

心なし、何か本気で信じてそうなのが混じってる気がするせいで。

そして、何故ベル様たちまで参加しているのですか?!

「リリルカちゃん。どうしたの?」

「……こりや、何かの儀式かい?」

霞様たちが姿を見せたのは、ちょうどそんな時だった。

もちろん、いかにも魔女らしい恰好をした『三人目』も一緒だ。

三人揃ってサンドイツチらしきものを食べ歩きしていたらしい。

あと、これは儀式なんかじゃなくて単に馬鹿達が悪ノリしているだけです。

「リリルカ、と言うのは貴公で良かったかな?」

「え? はい、そうですが……」

その魔女様の問いかけに頷くと、彼女もまたそうか、と頷いてから——

「私の弟子からの伝言がある。『バックパックを買うのは少し待っている』だそうだ」

「へ?」

何でバックパック……いえ、そんなことより!

「い、いない?!」

気づけばクオン様が——あと、ついでにハゲ様も——いない。

とりあえず、あの忌々しい鎧だけはなくなっていたけど。

「な……」

ワナワナと震えながら、今日最大の叫び声を放つ。

「投げっぱなしのまま、勝手にいなくならないでくださいッ!?」

しかも、この剣とは認められない何かまで置きっぱなしにして!

「おいおい、さつきから何の騒ぎだあ?」

強面で大柄の冒険者が近づいてきたのは、ちょうどそんな時だった。

あれ、どこかで見たことがあるような……?」

「てめえ、まさか……!」

「間違いねえ! モルド、こいつ、あの時のガキだ!」

その名前——と、いうよりも『あの時の』という言葉が記憶を刺激した。

ベル様がいかにも柄の悪そうな冒険者と関わった時と言えば……。

(あ、思い出しました)

ついこの前、ベル様の昇ランクアップ格祝いの席で絡んできて、リユー様に返り討ちにあつた冒険

者たちだった。

「何でてめえがここに……っ!」

あの時のことをまだ根に持っているのか、いつそ殺気すら滲ませてベル様に掴みかか

る——

「何かあつたのか?」

「てめえは【象神の杖】……………!」

その手がベル様に届く直前、向こうから藍色の髪の麗人がやってきた。

「クオン達は何やら走っていったが……………」

何だか変なものを見たような顔で、【象神の杖】様がリリ達に尋ねてくる。

「あく…。多分、そっちは気にしないでいいわよ。血の雨とかはまだ降らないと思うし」

「……………そうか」

何だか物騒な霞様の言葉に、諦めたように肩をすくめてから、

「それで、そちらはどうした?」

咎めるでもなく、手を伸ばしかけた姿勢のまま固まっている冒険者に視線を向けた。

「お、おい。モルド……………」

そこで、顔に戦化粧を施した大男が呻いた。

「げっ、【劍姫】……………」

遅まきながらに、自分たちが【ロキ・ファミリア】の精鋭に囲まれていることに気づ

いたらしい。

「何でもねえよ」

忌々しそうに舌打ちし、【象神の杖】様に吐き捨てると、足取りも荒く立ち去って行

た。

3

「いったい何をしているのだ？」

「……いや、すまん。聞かないでくれ」

間髪入れずに訪れた二度目の危機。

それを、貴い犠牲を払いつつも何とか誤魔化して、

「ふむ……。ところで、もしや貴公はパッチか？」

「げっ、本気のマジで変人ソラールかよ」

呆れた様子の子のソラールと合流してからのことだ。

そのまま逃げ込んだ酒場で通された個室。

底に用意された小さな丸テーブルに両肘をつき、項垂れる。

視界に映る天板は表面にニスか何かを塗って古めかしさを演出しているが、実際には

案外と新しい物のようだった。

荒くれが集まる酒場であり、ましてダンジョンの中にある。何だかんだと入れ替わり

が激しいということだ。

微かに立ち込める紫煙らしき匂いも、案外と雰囲気づくりのためにわざと焚いている

のかもしれない。

……だがまあ、実際に店内はそれらしくなっている。

ならば、わざわざ暴くのは野暮というものだろう。

「すまない、リリルカ。許してくれ……」

そんなことを思いながら、ひとまずリリルカに懺悔する。——と。

「面倒くせえ奴だな。へこむくらいならやらなきや良かっただろうが」

隣に座るパッチが、パラパラと品書きを流し読みしながら鼻を鳴らした。

「……だが、まあ、バレると面倒なことになるもの確かだからな。誤魔化す方法はともかくとして」

俺を挟んで反対側に座るソラールもまた、困ったような声で呻く。

ベル達だけならまだしも、あの金髪小娘どもがいた。

あんな状況で素性がバレようものなら……どう考えてもろくなことにならない。

今さら素直に『不死院』送りにされる気などないし、どうせ『不死院』などありはしない。

まして今さら素直に『埋葬』されるつもりなど、あるはずもなかった。

ないのだが……それでも素性が流出した場合、最悪はあの小娘どもないしオラリオの冒険者全てを殺し尽くすしかなくなる。

その結末は避けたい。……少なくとも今の時点では。

(ウラノスと敵対する訳にはいかないからな)

その一点に関して言えば、話はごく単純なのだ。

今の時点で地上から神々を一掃したなら、後に残るのは枷を失ったダンジョンだけ。無限にモンスターどもを産み落とすような代物を置いて逝かれても困る。

なら、最低でもウラノスだけは残しておかなくてはならない。

……いや、ウラノスがいればいいという訳ではない。彼が祈祷とやらを続けてくれなくては意味がなかった。

へそを曲げられないよう、適度に拝み、顔を立てておく必要があるというわけだ。少なくとも、このダンジョンをどうにかする方法が見つかるまでは。

(……まあ、そもそもそんな都合のいい方法があるかどうかも分からないだが)

それはともかくとして。

何であれ、今は余計な殺し合いが始まらないように努力するしかない。

不死人らしからぬ……と思わないでもないが、しかし。

(おそらく、亡者化とは肉体の変容ではなく精神の変質の果てに起こるものだ)

随分と長く不死人をやっているせいかな、そんなことを思う。

繰り返される死の中で肉体が朽ち果て、干乾び、亡者と変わらぬ形なりとなっても……人間性さえ残っているなら、戻ってこれる。

呪いから解放されることなくとも、生者にんげんのふりくらはしていられる。

だが、先に人間性を失ったなら。その時は、例え肉体が無事であろうと……

「ところで、パッチ。お前、本当に俺より先に召喚されたのか？」

無理は承知の上だが……できることなら、俺もまだもうしばらくは生者にんげんのふりをして
いたい。

そんなことを思いつつ、改めて問いかけた。

「そもそも召喚なのかねえ。あのクソツたれな『輪の都』を抜け出して、気づいたらここにいたんだが……」

糞溜めから別の糞溜めに迷い込むとはついてねえ。

そう吐き捨てるパッチは、大体五年ほど前に迷い込んでいたという。

つまり、俺が召喚された時にはすでにオラリオかりヴィラにいたということか。

まったく気づかなかったが……さて、それは良かったのか悪かったのか。

「ふうむ……。さては『時代』の壁を越えた際にズレたか」

それは、多分間違いないと思う。

だが、何故。パッチ達が『時代』のズレを超えてここに流れ着いたのだろうか。

「この『時代』に篝火を灯したせい……ではないと思うが」

灯したのは、オラリオに戻ってきてから。

まだ一ヶ月半程度しか経っていないのだが……。

「いや、俺達はその篝火が灯るのを待っていた。ロスリックの火防女殿は、それを縁として俺達を呼び集めている」

つまり、あの瞬間を目指して、ソラールはやってきたわけだ。

だが、実際には二年前にオラリオに到着している。

時間などあつてないような巡礼地なら、それでもさしたる問題にはならないが……

「二年先に飛ばされなくて良かった。間に合わなくては本末転倒だからな」

ソラールの言葉に、小さく頷いてから、

「……やはり、お前達を呼んだのは彼女か」

いや、それは当たり前だ。

■^た忘れて^しいる記憶が微かな頭痛を呼び起こした。

——偽りの安寧が、いつまでも続くものか

(……おそらく、盤面は整いつつある)

俺達が呼び起こされた時点で詰んでいないだけまだマシというものだ。

それとも、やはりいつものように詰んでいるのだろうか。

ウラノスはそれを知って嘲笑しているのか。

それとも、かつてのグヴェインのように悪あがきをしているのか。

いや、そもそも……

『貴公ら人が、すべて忘れ、呆け、闇の王が生まれぬように——』

(自分たちが忘れ呆けてりや世話ないな)

世界蛇カアスの言葉を思い出し、小さく嘆息した。

おそらく、本当に今の神々は『火の時代』そのものを忘れ去っているのだろう。

もつとも、『すべて』かどうかは分からないが。

……だが、忘れようが、呆けようが、『天界』とやらに引きこもり、そこで大人しくしていたなら、概ね済んだ話だ。

もしかすれば、ダンジョンすら生まれていなかったかもしれない。

「それなら、やっぱ俺は関係ねえな。あの火防女にはあれつきり会ってもいいねえ」

「それにあの……アンジェといったか。あの娘は、貴公も知らなかったのだろう?」

「ああ。ついでに言うなら、生身のアーロンとも会ったことがない」

そして、ホークウッドは決闘の末にこの手で殺したはずだ。

……もちろん、お互いに不死なのだから、生きていたとしても不思議ということはないが。

「【薪の王】たりえる存在が集まっているのか?」

ソラールは——元々別口だが——かつて、『火の炉』にまで辿り着いている。

パッチだつてその気になればほぼ単独で『輪の都』を踏破し、デーモンの王子と殴り合えるくらいの実力者だ。

ホークウッドは言うまでもなく。

アールオンだつて、その気になれば『玉座』に至れたらう。

だが――…

「だが、アンジエと言つたか。あの娘は……」

言葉を濁すソラールに、小さく頷く。

筋は俺などよりもよほどいいだろうが。

しかし、今の彼女では『玉座』など遥かに遠く、見えもしない。

それどころか、オツタルと比較してもまだ一歩及ばない程度だ。

「確かに、彼女ではまだ届かないな」

同胞のよしみで過大評価したとして……それでも【薪の王】候補とはとても言えない。

(いやまあ、それを言うなら……)

ソラールに頷いてから、重要なことを一つ告げた。

「もう一人、【墓王の眷属】がいる」

「やはりか……!」

同じくメレンの夜を駆け抜けていたソラールが呻いた。

「マジかよ。また古くせえもん引つ張り出してきやがって……」

それどころか、パッチまでが嫌そうな顔をする。

パッチにとつて【墓王の眷属】が聖職者に分類されているかは知らないが……いずれにせよ、奴らがまき散らす『呪い』は厄介極まりない。

あれを相手にするくらいなら、パッチに崖下に蹴落とされていた方がまだマシというものだ。

「放つておくと面倒だが……奴も『玉座』には程遠いな」

それこそ、アンジェと大差ない。それに、彼女よりも人間性の限界が近いと見える。

「ここが巡礼地なら今頃は亡者になり果てているはずだが……」

「それにしても、パッチ。お前は何でこんなダンジョンの中にいるんだ？」

「はあ？　ンなもん決まってるんだろ。地上よりはいくらかマシだからだよ。さつきも言つたじゃねえか」

「そりやそうだな」

この聖職者嫌いが地上になどいたら、また亡者化しかねない。

……俺も、人の事は言えないが。

「どいつもこいつも名誉だ金だどこ苦労なこつた。無欲な俺にはとんと分らんね」
「まったくだな」

いつの頃からか大地に穿たれた呪いの大穴。

その周りを彩るのは、神々とその眷属が描く『栄光』という名の火の輝き。

その輝きに目を晦ませた者達が我先にと踏み入り——そして、その多くが死んでいく。

そして、その死が……新たな『薪』が焚べれば焚べられるほど神々はその威光を取り戻すわけだ。

神々の力なくば世界は成り立たないと。

……少なくとも、そう錯覚させるには充分だった。

——なるほど。ここは真に正しく巡礼地と言えよう

だが……炎が燃えるほどに闇もまた深くなる。

この大穴に蓄えられた『呪い』は、いずれ深みを増し、悍ましい何かの寢床となるだろう。

何より、古い因果が再び目覚めるなら——

(燃え尽きた薪に火を灯そうとしたところで)

思い出すのはロスリックで見た最初の火の炉。

ロードラン時代の威光は見る影もなく、もはや小さな燻りでしかなかったあの火。

あんなものをもう一度燃え上がらせたところで、蘇るのは悲劇しかない。

だというのに——…

「俺達と違い、限りある命だというのにな」

「まったくくだ」

ぼつりと呟かれたソラールの言葉に、小さく唸る。

(確かにダンジョンは放っておけないだろうがな)

そもそも、その発生には神々が関与しているはずだ。

ならば、今も繰り返し返されているこれは新たな『巡礼』と見ている。

つまるところ『火継ぎ』は形を変え、この『火のない時代』でも繰り返し返され続けているわけだ。

まったくクソツつたれな話だった。

だが——…

「俺達の他にも。何かの弾みで流れ着いてくる者たちがいるかも知れないのか……」

何であれ、『火が陰る』というのなら、俺達不死人がやってくることもまた必然と言えるよう。

ならば、あまり気にしても仕方がないか。

「ああ。さつきは言いそびれたが、他にもロンドールのクソ尼がいるっばいぜ。俺は直接見かけちゃいないがな」

ソラールの呻き声に、パッチが鼻を鳴らした。

「やはり、ユリアもか」

今さら驚きもしないが……しかし、面倒ごとが増えそうな気配にげんなりとする。

少なくとも、『暗い穴』の『出所』の一つは彼女だとみて間違いない。

もう一つの『出所』との関係性は分からないが……場合によっては限りなく厄介なこ

とになる。

「他には？」

「あとはあの陰気野郎くらいしか俺は知らねえよ。奴あこの街によく来るんでね」

ふむ——と。小さく唸る。

「あの『深淵』を発生させそうな奴に心当たりはないか？」

「それこそ知るかよ。あと、一応言つとくが、俺じゃねえぞ」

「そりやそうだろうな」

この男は悪党だが、邪悪とは言い難い。

それに『呪い』——ダークソウルに対して、あるいは誰よりも真摯に向き合ってきた

男だ。

今さら暴走などさせはすまい。

「では、小ロンドの生き残りがいると？」

「まあ、〔墓王の眷属〕がいるなら、小ロンドの関係者がいたって驚きはしねえが……」
ソラールの言葉に、パッチが禿頭を掻いた。

「小ロンドの系譜だつてんなら、それこそロンドールの連中だろ」

「まあ、建国にカアスが一枚噛んでるのは間違いないだろうがな」

亡者こそが人の本当の姿だ——と。

あの思想はカアスの言葉に通ずるものだし、自ら『呪い』を深めていくのは『深淵』に手を出した公王どもと大差ないように思う。

とはいえ、あのカアスに亡者や老人の寄る辺を築き上げるほどの健気さがあるかどうか。

(そもそも、アイツらがどこに消えたのかもよく分からないけどな)

ドラングレイグ時代には見る影もなく。

ロスリックにおいては、奴ららしき痕跡こそ、至る所——それこそユリア達を含めて——で見かけたものの、再会することはなかった。

「だが、『深淵』なら、むしろ『深みの大聖堂』だろう？」

「それとも間違いないな。つたく、これだからクソ坊主どもはよ」

迷惑なことこの上ねえ——と。

パッチが吐き捨てる。

「その『深みの大聖堂』というのは、白教のなれの果てだったか？」

「ああ。……そいつから聞いたのか？」

「そうだ。俄かには信じられんが……」

「ハツ、何言つてやがる。クソ坊主どもには似合いの末路だろうが」

むう……と、ソラールが唸るのを聞きながら、胸中で繰り返した。

（深みの大聖堂。深みの大聖堂か……）

『深淵』を封ずることを使命としながら、最後は『深み』を崇めるようになった者達。

『深淵』と『深み』は似て異なるものだが……しかし、大本は同じだ。

封じる術を知る者達なら、逆に呼び起こす術を知っていたとしてもさほどの不思議でもあるまい。

——最後に蘇った王たちの一人

——悍ましい人喰らい。だが……

——ああ。彼は……あるいは、彼だけが

（蘇った【薪の王】達の中で、唯一未来を見据えていた存在か）

少なくとも、『深海の時代』なる明確な指針を打ち立てていた唯一の存在だ。

あるいは、火防女の言葉だけを寄る辺に火を消した俺よりも遥かに。

「奴らがいるのか？ 俺はてつきり……」

いや、だが。確かに言われてみれば奴の気配だけは感じられない——…
「ああ、そうだ。話は変わるんだが」

——と。パッチが続けた。

「お前を目の敵にしてる金髪の子ビがホークウッドの野郎を勧誘してたぜ」
「なに？」

俺を目の敵にしている金髪の子ビとなると……多分、すぐそこで野営しているあの小人の事だろう。

だとするならば……まあ、結果は聞くまでもないが。

「決裂したんだろう？」

「そりやな。神どもに仕え、媚び売って英雄になりませんかって、今さら何の冗談だよ。なあ？」

まったくその通りだった。

まして、ホークウッドは「薪の王」たる「深淵の監視者」の最後の生き残り。
神どもの甘言を信じ、その果てに『英雄』となっていたかもしれない男だ。

そして、「灰となって蘇り、その先に名誉など何もなかったことすらも知っている。

「しかも、よりによってあの陰気野郎に持ち掛けるなんざ、流石の俺も笑い死ぬかと思っ

たぜ」

あぶねえあぶねえ——と、割と本気でパッチが肩をすくめる。

だが、今は……今もまたそういう『時代』なのだ。

あの小人は、その先に栄光があると本当に信じているのだろう。

だとしても、それは仕方がないことだ。

そして、俺達が——他ならぬ俺がいつたいどの面下げてそれを嘲笑えるというのか。

神どもの謀りに乗って、真つ先に火に飛び込んだ大間抜けが。

「懲りない男だ」

俺達にも、ああいう時期があつた。それは認めざるを得ない。

そして、認めたならば咎められるはずもない。

嘲笑うなどできるものか。

しかし、それでも。あるいは、だからこそ——…

(大昔の、愚かだった自分を見せつけられているようなものだからな)

できることなら、自分諸共に焼き滅ぼしたくなる。

(四年前に言われていたなら、そこまでだったろうな)

あの頃にそんなことを言われたなら、衝動的に塵殺しているところだ。

我ながら、かなり真剣にそう思う。

今なら……まあ、この前小娘に言われた時のように苛立つくらいで済むはずだが。

「……どうやら、俺の人間性はまだもう少しは持ちそうだな」

少々怪しい気もするが……とりあえずは今はまだ良しとしておこう。

「あとは、お前についてあれこれ探っているらしいぜ」

「……そうらしいな」

「つたく、迷惑な奴らだ」

肩をすくめると、パッチが吐き捨てた。

まったくだった。

何度でも言うが、俺達にとって素性を暴かれるのは厄介ごと以外の何物でもない。

一人二人なら『口封じ』すれば何とかなるだろうが、奴らほどの集団となるとそれすらままならない。

加えて、奴らの性格からして、バレたなら最後の最後までとことん殺しあう羽目になるのは想像に難くなかった。

かなりの手間だが……まあ、精々が『手間』止まりだ。

問題は、その後。

殺戮の後始末は大いに厄介なことになる。

イシユタルはともかく、その手下のゴロツキどもを始末しただけであの騒ぎだった。

都市が誇る大派閥を潰した日には、一体どんな騒ぎになることやら。そこに加えて、ベルの想い人までいる。

(……今の時点でベルと敵対するというのは、あまりに好ましくないからな) せめてもう少し力をつけてからなら……オツタルくらいなら軽くひねれるようになっていというなら、それもまた選択肢の一つだろうが。

(やはり、四年前に始末しておくべきだったか)

そうすれば、面倒ごとが一つ減った。

……あの小娘とベルが会わなかったなら、その分だけは減るはずだが。

(いや、全体を見れば結局変わらないか)

残念なことに、あの小人も……あの小僧とフレイヤこそが現体制の支柱だ。

後先考えずにへし折つたなら、一体何が起こることやら。

あの『輪の都』で、フィリアノールの眠りを醒ました時とは訳が違う。

かつて散々に彷徨った『死んだ世界』ならともかく、ここは『生きた世界』なのだから。

……おそらく、そのはずだ。

(もし躊躇わずにできるようなったなら、俺も立派な亡者だな)

自分の目的のために他の一切を利用し、蹂躪し、その程度の犠牲など安いものだど嘲

笑する。

今まで散々に忌避してきた神の姿を、わざわざ自分で真似ることはない。

無論、神に限らず誰もが……例えそれが生者にんげんであろうと、一皮剥けば変わりはない。

それどころか、むしろ人間こそがその最たる存在とすら言えよう。

それは分かっている。

だが、せめてそれくらい筋を通さなければ、グヴィンに憤ることもできやしない。

(もつとも、俺と奴らと殺しあうのは初めから……)

——そう。結局のところ

——然り。■が本当に忘れていたことはたった一つ

——それを思い出した時、この偽りの安寧は終わる

——あの都のように

「どうかしたか？」

「……いや、今頃グヴィンの奴がほくそ笑んでいるだろうなと思っただけだ」

いや。それはそれで、まったく笑えない話なのだが。

「まあ、何でもいいけどよ。お前ももう少し考えて動けての。もう『不死院』行きで済

む時代じゃねえんだぞ」

「あ……。いや、本当に悪かった」

ドラングレイクの『不死刑場』やロスリックの『不死街』にあつた焚火や『籠蜘蛛』を
考えれば、ロードランの『不死院』など天国のようなものだ。

(ここだって扱いは変わらないだろうな)

少なくともオツタルやあの小人、金髪小娘とその仲間たち辺りはここぞとばかりに
嬉々として殺しに来る。

その観点から見ても、ウラノスに喧嘩を売るのはなるべく避けた方が良さそうだ。

他にも同胞ふしびとがいるならなおさら。

「言い訳だが、まさか俺以外にいるとは思わなかったんだ」

実際、火防女に呼ばれたソラール達はともかく、まったく無関係な奴らがいるとは思
わなかった。

これからは、別の意味で慎重に行動した方が良いのかもしれない。

(他の連中が何を思つて行動しているかは分からないがな)

何であれ、せつかく『火のない時代』に迷い込んだのだ。

別に全員仲良く苦難の道を進むことはないだろう。

……何かの弾みで『堕ちた』時のために、所在くらいは把握しておいた方が良いだろ
うが。

そして、アンジエと言つたか。念のため、彼女にも口止めをしておかなくてはなるま

い。

(……何より、ベルとそろそろ真面目に向き合う必要がある)

内心で呻く。

正直なところ気は進まないが……あいつは本当に資格を示してしまった。

そこに加えて、向こうもすでに不死人と言う存在を知ってしまった。

ヘスティアが自分の眷属として迎え入れたなら、もはや隠す必要もないだろう。

皮肉なことに、現時点で最も『王』に近いのはあの少年なのだから。

「ケツ、相変わらず詰め甘い奴だぜ」

「否定できないが……。それはそれとして、お前に言われるのは何か微妙に心外だな」

もつとも、こいつの詰めが甘くなかったら、多分ロスリックで再会する……少なくとも

も『輪の都』で出会うことはなかったかもしれないが。

ともあれ、その頃には注文した酒が届いたらしい。

天然洞窟にきつちりと隙間なくはめ込まれた枠に据え付けられた分厚い扉が乱雑に

叩かれる。

まあ、この辺はならず者街ということなのか。

然るべき報酬を払えば、こうして秘密の飲み会の会場を用意してくれる酒場もあるのだ。

「そら、注文の酒だ。それと肴もな」

扉をあけると、不愛想な店員がぶつきらぼうに盆を突き出してきた。

上に載っているのは少しばかり高額な安酒^{エール}……というと、何だか矛盾した気がするが。

実際のところ、リヴィラ特産の酒は、地上だとそれなりの値段がする。

酔い方など忘れた不死人にとっては、贅沢品にもほどがある。

だが、『ジークの酒』などもはや手に入らないのだから仕方がない。

作り方を聞いておけば良かったとは思うが……あの味は、彼でなければ作れないだろうとも思う。

俺が作ったところで、ただの安酒が精々だ。

「さて、それじゃ何に乾杯する?」

戸締りをし、席に戻ってから問いかけた。

「無論、時を超えた再会だろう」

「どうせなら、素晴らしくもクソツタれたなこの世界でもいいかもな」

「違うない」

ソラールとパッチの言葉に頷いてから、杯を掲げる。

「再会と」

「相変わらずクソツタれたな世界に」

続けて、ソラールとパッチも杯を掲げ――

「炎の導きがあらんことを！」

「太陽万歳！」

「暗い魂あれ！」

見事に全員がばらばらだった。

思わず、三人揃って嘔き出す。

ああ、まったく……。

「どうやら、俺達の人間性はまだもう少し持ちそうだな」

「そのようだ」

「違いねえ」

これでこそ、私の強さだけが頼りの不死人というものだ。

第四節 跳んで火にいる兎と妖精

1

「うう……。あんまりです」

クオン様とハゲ様のせいだとんだ風評被害を受けてから。

「ま、まあまあ。た、多分きつと分かってくれた……と思う、けど……」

「そ、そうだけ、サポーター君！ 多分きつと大丈夫さ!!」

「本当にそう思いますか、ベル様、ヘスティア様。リリの目を見て言えますか？」

「ええと……」

「ごめん」

……何とか誤解は解けたと信じて、帰路につくことになった。

結局、買い物らしい買い物はしていない。

しいて言えばヘスティア様……ええと、ヘス様だったか、ティア様だったかが香水を買ったくらいか。

(何でこんなところで……)

とは思うもの……。

「初めて嗅ぐ匂いだけ……いい香りね」

「そりや、地上じゃほとんど出回らないからね。冒険者と繋がりでもなけりや、そう簡単には手に入らないよ。『歓楽街』もまだ復興中だろうしね」

どうやら霞様も一瓶購入したらしく、リリ達とは少し離れたところから、そんなやり取りが聞こえてきた。

この『中層』で採取できる迷宮資源から抽出したものとなると……もしかしなくとも、地上ならもつと高いのだろう。

仕入れ値に利益を上乗せするのが料金設定の基本だ。

卸元のリヴィラが高値を付けるなら、小売店の値段はさらに上がるのは必然と言える。

(リリも何本か買って行って、地上で転売でもしましょうか……?)

その考えをため息とともに却下した。

いくら希少なものと言えど、買い手がいなくては意味がない。

買い手がつき、利益の出る価格に設定するしかないが……残念なことに、地上における一般価格が分からない。

こんな状態では、暴利を吹っ掛けられても見抜けなかった。

それに、元手も少なすぎる。

ただでさえ今回の探索は大赤字間違いなしだというのに、そんな賭けには出られない。

そんな賭けに出るくらいなら、ポーションでも買い集めておいた方がずつといい。

……例えば天までヴァリスを積みあげたところで、失った命までは買い戻せないのだから。

「何だか、狸か狐に化かされた気分だ」

「ええ……」

嘆息すると、リリ達と霞様達の中間辺りに立っている桜花様と命様のため息が重なった。

「その気持ちは、リリも分かります」

やはり霞様は荒くれ相手のマネージャーだったということか。

リヴィラの商人を前にして躊躇いのない弁舌で……あと、おだてて、乗せて、ほんのちよつとの色仕掛けまで駆使して、いくらかの『おまけ』まで勝ち取っていた。

「そう？ ああいうやりとりも面白い物の楽しみの一つじゃない？」

「この人達はみんな乗ってくれるし——と、霞様はあっさり言うのだけれど……」

（いえ、もちろん乗ってはくれるでしょうけど……）

真似ができるかと言われると、何とも怪しいところだった。

……交渉事は、リリもそれなりの場数を踏んでいるつもりなのですが。

「そりゃ別に否定しないけどね」

アイシヤ様が小さく肩をすくめた。

「実は『魅了』でもしてるんじゃないかと思う時があるよ」

「あら、それって私が女神様に負けないほど綺麗ってこと？ アイシヤにそこまで言ってもらえるなんて光荣ね」

「はいはい。それでいいよ」

ため息をつくアイシヤ様を他所に、霞様はあっけらかんと笑って見せた。

「ところで、さっきから何だか面白そうな話をしてるじゃない」

「まさかまだあの話題を引っ張るおつもりなのですかっ?!」

「いや、違っ?! な、泣くことないでしょ!」

「あー! ティオネが泣かしたー!」

「はあ!?! あんたはちよつと黙って——」

「いじめちゃ、だめ」

「アイズまで?!」

ちよつと待って、つていうか待ちなさい!——と、ティオネ様が慌てた様子で叫ぶ声

を聞いた。

「その子が何とかの戦士って話なら、あいつらの悪ふざけだつてちゃんと分かつてるか?!」

「ええと……。ほら、サポーター君も泣くなつて。この子たちが分かつてるのは、本当に本当だからさ」

……よしよし、とヘステイア様に頭を撫でられながら。

——…

「ええとね。いい、そつちじゃないのよ。聞きたいのは、そつちじゃなくて……」

と、ティオネ様は念を押してから。

『火継ぎの王』がどうか、ハベ……あいつらの『悪ふざけ』の元ネタとか、面白そうな話してるじゃない?」

ティオネ様……いえ、【怒^{ヨルムガインド}蛇】様に見つめられ、先ほどとは別の意味で呻きそうになつた。

(う、迂闊でした……!)

まさに獲物を狙う蛇の目に見据えられ、やつと思考に冷静さが戻る。

それと同時に、背中を嫌な汗が伝つていく。

今さら言うまでもないことだが、クオン様と【ロキ・ファミリア】の関係は極めて危

うい。

抗争を開始する理由が感情論以外ないというだけの小康状態。

それこそ「九魔姫」^{ナイン・ヘル}様がいる分、「フレイヤ・ファミリア」よりはいくらかマシという程度だろう。

しかし、理由ができたなら、今すぐにでも抗争が始まってもおかしくない状況であることに変わりない……と。多分、そういう認識で良いはずだ。

「よければ、私達も混ぜてくれるかしら？」

そんな相手……しかも、神々にすら『正体不明』と呼ばれている存在に関する情報をまさか見逃すはずがない。

（ですが、絶対、口が裂けても言えません！）

まさか『不死』であるなどと。そんな爆弾が炸裂したなら、一体どんな騒ぎになるか想像もできない。

それでも、クオン様たちだけなら、まだ自力でどうにでもしそうな気がする。

でも、アンジエ様が「ヘステティア・ファミリア」に所属した今となっては、そうはいかなかった。

迂闊に情報を流出させては、ベル様たちまでが巻き込まれてしまう。

（さ、流石に拷問されたりはしないはず……）

いきなり湧いて出た弱気を、何とか叩き潰した。

クオン様との繋がりは、決して悪い事ばかりではない。

ここでリリ……いえ、ベル様に危害を加えたなら、それが火種となることは分かっているはず。

……うん。多分、ヨルムガンド【怒蛇】様だつて分かっているはず。

時折耳にする『物騒な噂』については、全力で知らないことに決めた。

(つまり、警戒すべきは搦め手ですね……)

とはいえ、むしろそれが最大の問題だった。

主神であるロキ様は天界屈指のトリックスターとして有名だ。

さらに一族の英雄たるフレイジャー【勇者】と都市最強の魔導士として名高いナイン・ヘル【九魔姫】が両脇を

固めている。

そんな存在を相手に弁舌で勝ち抜けるなど、ゴライアスと殴り合うより無謀かもしれない。

もつとも、大派閥としての強権を振るうのは、この場合では危険を伴うように思う。というか、思いたい。

なら、金銭か。それとも、救援の恩か。あるいは、情に訴えてくるか。

すべての合わせ技かもしれないし、リリ程度では想像もつかない手段を使ってくる可

能性すらも充分すぎるほどにある。

(ですが、ここは何としても……!)

悲壮な覚悟と共に黙秘を貫くことを誓う。

「ところでさ、帰ったらみんなと一緒に水浴びに行かない？ すつごくいい場所があるんだ!!」

——と、その時。

何かそういう駆け引きとか陰謀とか拷問とかを全く感じさせない——ついでに、何の脈絡もない声が響き渡った。

「裸の付き合いつてやつ！ ね、アルゴノウト君も行こうよ！」

「僕も?! いえ、流石にそれは……っ?!」

「いいじゃん！ 一緒に行こうよ！」

何か別の意味で新たに深刻な危険ピンチ到来です?!

「ま、待つんだアマゾネス君!? 混浴なんて——」

「ヘステイア様も一緒に行こう！」

「へ? ほあー!?!」

颯爽と現れた救いの女神も、そのままの勢いで颯爽と敗れ去った。

「ボ、ボクはヘスだつてば——」

「ティアアって言ってますんでしたか、神様?!」

「どっちでもいいから、早く行こーよ!」

流星はL v. 5。ベル様もヘスティア様もまったく成すすべなく街の外へと向かって引きずられていく。

(天真爛漫なアマゾネスとは、もしかして最強の存在なのでは……?!)

ヘスティア様を軽々といなし、ティオネ様が駆け引きを繰り返す暇も与えないその姿に戦慄する。

(そ、それなら!)

縫りつくような気分で——あと、ついでに少しだけ自棄になりつつ——叫んだ。

「そ、それなら! 霞様達も一緒にいかがですか!」

「え?」

さすがに、少しだけ場が止まった。

霞様とティオネ様の視線が交わり、お互いに何事かを探り合う。

「あたしは別にいいよー。あんまりゆっくり話したことかないし!」

その話というのが、果たしてティオネ様の考えていることなのか。

それとも、単純に言葉通りなのか。

天真爛漫なその顔からは、いまひとつ読み取れない。

「あく……。それなら、シヤクテイも一緒に行かない？　せつかくだし」

テイオネ様がため息をついたところで、霞様が隣の【象神の杖】アングクイシヤ様に声をかけた。

自分で巻き込んでおいてなんですが……。クオン様と【ロキ・ファミリア】の関係性を考えれば当然のことだった。

「残念だが、私はこれでもまだ仕事……。…」

「ぜ、ぜびご一緒しましょう！」

「ここで【象神の杖】様がいなくなれば、たぶん霞様も辞退する。

それはそれで、ちょっと困る。いえ、ものすごく困る。」

「頼むから、そんな目で私を見るな。しかも継りつきながら……。…」

「いいえ、やめません離しません!!」

どの程度かはともかく、シヤクテイ様はクオン様の事情を知っているはず。

その情報がどれだけ取り扱いに注意が必要となるかもだ。

【麗傑】アンテイアネイラや魔女様もぜび!!」

そしてもちろん、霞様やアイシヤ様や魔女様に危害を加えられるようなことになればどうなるかも。

「そりゃ、私は構わないけどね」

「……。何とも断りづらい状況だ。色々とな」

「ええと……。まあ、アイシヤやシャクティ達がいるなら安全、かしら？」
よし、これで何とか危機は回避できるはず。

少なくともその可能性は十分に確保できたはずです!!

「……ひとまず、いったん野営地に戻ってからね。ここに置いて行くと危なそうだし」
「ええ、それは本当によくお願いします」

ひとまずここでの尋問を諦めてくれた様子の子のテイオネ様に、リリもひとまずは全力で
領いていた。

主にクオン様のせいで、あの謎の塊を背負ったまま帰らなくてはいけないのだ。
ヘツポコで非力なLv. 1のリリを守ってくれる人は多いに越したことはない。

……まあ、実際のところ、これくらいなら背負っていても普通に動けるのですが。

（あ、でも。「ロキ・ファミリア」の目がなければアンジエ様をお願いできるのでは……
？）

その方がずっと楽だという内心の囁きは、何とか聞こえなかったことにした。

3

「うう……。最近、怒られてばかりです」

さめざめと泣きながら、汲んできた小川の水で手ぬぐいを洗う。

あのヒューマンを連れて、リヴェラの街に向かったアイズさんに追いつこうと意気込み……見事に空回ってしまった。

(空回りと言えば、昨日も……)

思い出すのは、昨日の『夕方』頃のことだった。

……

「アルゴノウト君、大丈夫かなー?」

夕方と言っても、夕日など見える訳もなく……『夜』が訪れる少し前の時間帯というだけの事だけ。

「大丈夫でしょ、団長達とはしつかり受け答えできてたみたいだし」

担ぎ込まれたあのヒューマンが奇妙な動きを見せたというのは、それなりの緊張を野営地にもたらした。

なので、私も杖を手に、こうしてティオナさんやティオネさん達と、負傷者のいる天幕を守っていたのだけ……。

「首飾りがどうこう言ってたみたいだし、何か大切なものだったんでしょ」

「お守りみたいなの?」

「かもね」

本当に念のためといった感じで、ティオネさんもティオナさんも平然としていた。

それに、冷静に考えるならその通りだと思う。

(そうですね)

担ぎ込まれてきた時は、それなりに心配して……ええと、他派閥とはいえ、目の前で同業者に死なれては寝覚めが悪いですし？

ちつとも目覚めないのも流石にちよつと心配で……いえ、野营地の中でモンスターになつて暴れられても困りますし？

大体、あのヒューマンは逃げ足の速さだけならLv. 1の頃から三級冒険者並みなんだから、そう簡単に……。

「それか、惚れた雌から貰ったとか……」

「んなー!？」

あ、あれだけアイズさんのお世話になつておきながら他の女の人から……?!

(さつきだつてずつと付きつ切りで看病してもらつていたくせに!?)

いやいや、他派閥ですし。下級冒険者……ではなくなつたかもしれないけど、まだLv. 2ですし。

むしろ、これこそが自然な流れなのでは……。

「いいえ、^{ギルテイ}有罪です!!」

暴走する頭脳の中にほんの少しだけ残っていた、^{無駄に}理^面論^倒的^つほ^くか^さつ^いたものを全

部放り投げて叫ぶ。

全部、あのヒューマンが悪い！　そういうことにしてしまおう！！

「……急にどうしたの？」

何だか、テイオネさんが何か言ってたような気もしたけど。

「あんなに！　あんなにアイズさんにお世話になっておきながらー！！」

私だって、私だって怒るときは怒るんです！！

「がおおおおー！——と、気炎を上げていると、向こうからリヴェリア様が歩いてこられて……。」

（わ、笑ってます?!）

しかも、面白い少年って?!　一体天幕の中でナニが……?。

（まさか……?!）

強烈な悪寒が……あの五九階層で感じたそれに劣らない危機感が背筋を凍らせる。

（まさかりヴェリア様までが毒牙に——?!）

いけない。イケナイ。これ以上の狼藉はユルサレない。

これはもうロキ・ファミリア、いやオラリオ……それとも、全エルフ？

いいえ、これは——

「全人類に対する挑戦です?!」

兎討つべし慈悲はない。これも世界平和のため——！

「出てきなさいこのヒューマン！」

「ひいひい!?!」

「な、何だ?!」

「何事ですかあー!?!」

その覚悟と共に天幕に突撃して——…

「ええい、何を血迷っているこの馬鹿者！ 彼らは怪我人だぞ！」

「ほあー!?!」

……と、そんな感じで。

ガクブルと震えている白兎に一步届かず。

リヴェリア様から雷（物理打撃属性）を頂いてから、天幕の外へと連れ出されてしまっ

たのだった。

（さ、逆恨みだつてことは、分かってますけど……）

己の失態を猛省する一方で……それもこれも、あの少年のせいだつ——と、そんな憤

りを抑えられない。

それに、気になってしょうがないのだ。

アイズさんが世話を焼こうとするあの白髪の少年が。

単なる親近感なのか。それとも、あの目を見張るほどの『急成長』が理由なのかは分からない。

ただ、ひたすらに強さを求めてきたあの「劍姫」が、兎を追いかける少女よろしく彼に興味を抱き、どこか変わりつつあることは確かだった。

アイズさんをずっと慕ってきた私からすれば、やっぱり、それは面白くない。

近くにいれば意識を割いて、抵抗心を抱いてしまうくらいには。

勝手に宿敵ライバルに見立て、特訓に励んだあの時のように。

（こんなことで競い合うとかそういうわけじゃないんですけど……！　いえ、そもそも別の派閥なんですから——…）

別の派閥。その言葉がきっかけになった……と、いう訳でもないですけど。

（それに、あの「イレギュラー正体不明」イレギュラーとも随分と親しいみたいですし……）

それは、一種の不信感……と、いうより、素直に不安だった。

リヴェリア様に不名誉な噂が立つ原因でもあるし……何より、免罪されたとはいえ『神殺し』だ。

嫌悪感がないとはとても言えない。

あのヒーローマンが平然と関わっているのが不思議でならなかった。

（まあ、私は特別関わったことがある訳ではないんですけど……）

前回の遠征と……そのすぐ後のフィリア祭で、食人花の不意打ちを受けかけた際に庇われたことがある。

庇われたと言つても、ただのついでだったのは間違いない。

向こうは多分、助けた事すら覚えていないだろう。

あの人……ホークウッドさんと同じように……

「……っ！」

思い出すのは、『昨夜』の鮮烈極まる殺し合い。

あんなものを見せられてしまえば、納得するしかない。

【イレギュラー正体不明】は、確かにオラリオ最強の【おうじや猛者】とだつて戦えるのだと。

そして、ホークウッドさん達はそれすら上回りかねない……

(いいえ！ そんなはずがありません！)

一体何を否定したのか、自分でもよく分からないまま首を大きく左右に振る。

ただ……【イレギュラー正体不明】もまた、あの少年を気にかけているのは確かだった。

もちろん、例の『カーズ呪詛』……『深淵深淵』の影響を調査しに来たのは、多分嘘じゃない。

でも、それとは別にあの少年の安否を確かめに来たのも本当だと思う。

オラリオ有数の実力者は、揃つてあの少年を気にかけている……

(い、今はお仕事です！)

不満なのか何なのか。

とにかく、またしても暴走しそうな思考を強引に断ち切った。

そして、集中さえしてしまえば時間が流れるのはあつという間だ。

負傷者の手当てをし、女団員の体を拭き、飲料や調理、洗濯や清拭用の水を汲みに行き——

「レフィーヤ、交代です。あとは、私達が」

「あ、はい！」

そんな感じでせつせと働いていると、アリシアさんが声をかけてきた。

振り返ると、次の当番達がすでに天幕の入り口に集まっている。

他の皆さんと一緒に、彼女達に場所を譲り——…

(これで心置きなくアイズさん達を追いかけられます！)

意気揚々と、リヴィラの街に向けて歩き出して——…

「レフィーヤ、客だ」

野営地の中頃まで来たところで、シアンスロープ犬人のクルスさんに呼び止められた。

「エルフの女……多分、お前の知り合いだ。随分と血相変えて飛び込んできた」

例の『深淵』とかいうやつの影響を受けていないか、ずいぶんと心配しているようだ——と。

クルスさんは肩をすくめてから、

「そうは言っても、他派閥の者だからな。野营地前で止めている。早く行ってやれ」
それだけ言うと、そのまま持ち場へと戻っていった。

「あ、ありがとうございます」

その背中に頭を下げながら、首を傾げた。

(同胞の客……。一体誰でしょうか?)

小走りをしながら、思い浮かべる。

一八階層まで単独で到達できる、他派閥の女エルフとなると……。

結論が出る頃には、野营地前までたどり着いていた。

そこで佇んでいたのは、純白の戦闘衣バトルウロスで身を包んだ、黒髪の女エルフ。

「フィルヴィスさん！」

フィルヴィス・シヤリア。

最近同盟を結んだ「ディオニュソス・ファミリア」の団長を務める第二級冒険者だ。

私自身も同盟を結んだ直後——二四階層食糧庫パントリーの事件から交流があつて……並行詠唱を何とか自分のものにできたのも、フィルヴィスさんのお陰だった。

それに、五九階層でアイズさん達を守った魔法を託してくれたのも。

久しぶり——と、言っても二週間くらいですが——の再会に顔がほころぶ。

「レフィーヤー！」

「ふあ?!」

赤緋の視線が煌めくと同時、間合いが一瞬で消滅する。

フィルヴィスさんは上級中衛職である『魔法戦士』だ。

だからこそ『並行詠唱』はお手の物で、剣を使った近接戦だつてバリバリこなせちゃう凄いい人だった。

同じLv. 3でも、純魔導士の私より身体能力……というか『体の動かし方』はずっと上手い。

なので……

「大丈夫か？ 口から手が生えたりはしていないな?！」

「ふあ、ふあいじようふでしゅー！」

たかだか数Mの距離なんて、あつてないようなものなのだ。

頬を引つ張られながら、改めてその凄さを実感する。

「良かった……。本当に、無事だったか……」

フィルヴィスさんの体から力が抜け、その手が頬を撫でていった。

「はい！ 私もアイズさん達もみんな無事です！ ……ま、まあ、帰り道でちよつと毒を受けちゃいましたけど」

「そのようだな。……だが、今回ばかりはそれで良かったのかもしれない」

そのおかげで、ここに滞在していたのだろうか？——と。

その問いかけに、曖昧に頷く。

今まで気づかなかったけど……もし毒を受けずに帰還していたなら、その『深淵』という『呪詛』に巻き込まれていたかもしれない。

もちろん、だからといって幸運だったとは言いがたいけれど。

「フィルヴィスさんは、どうしてここに？」

「ようやくダンジョンへの立ち入り制限が解除されたからな。ディオニユス様から暇をもらってきた」

第三次調査隊は早くも異形と『深淵種』の掃討をほぼ終了させたらしい。

何でも、中核として「フレイヤ・ファミリア」の主力陣が総動員されたのだとか。

それでも、まだ完全には制限が解除されたわけではないようだけれど……。

「リヴィラは無事だという事がはつきりしたからな。少し無理を言つて、ここまで通してもらった」

「そうだったんですね……。つて、あれ？ まだシャクテイさん達は地上に戻っていないんじゃない？」

シャクテイさん達は、リヴィラ……というより、一八階層に逗留する冒険者たちの安

否確認のために来たと言っていた。

彼女達が帰還しない限り、情報は届かないはず。

誰かを伝令に出したのか。それとも、知らない間に全員が地上に戻っていたのか。

「ギルドが隔離していた冒険者の中にリヴィラの住人が混じっていてな。彼らが揃ってリヴィラの無事を証言したそうだ」

首を傾げると、フィルヴィスさんはどこか呆れたように肩をすくめてみせた。

「ギルドが隔離、ですか？」

「ああ。リヴィラには特に粗暴な輩が多いからな。発狂か錯乱しているということになっただけらしい」

「ああ、なるほど……」

つまり、面倒だったからまとめて閉じ込めておいたということなのだろう。

「それより、本当に何の影響もなかったのか？」

「私達には何も。ただ……その、リヴィラの街の方は、何人か、ですけど」

「そうか。……地上も似たようなものだ」

フィルヴィスさんが小さく嘆息してから、

「レフィーヤ。お前が無事に生きて帰ってきてくれて、良かった。また会えて、嬉しい」
優しいその眼差しに、何だか胸の奥が温かくなった。

フィルヴィスさんは……自分の言葉にはっとした様子で、慌ててそっぽを向く。「と、とにかく勇健なようで何よりだ」

わざとらしく咳き込んで取り繕うものの……処女雪のように白いその肌に、赤く染まった頬はよく映えた。

「えーと、私達がダンジョンにいる間、地上は何かありましたか？ 『深淵』以外で」

「メレンで何か起こったらしい。詳細はまだはつきりしないが、『メレンの悪夢』などと呼ばれている」

悪夢という言葉を、まるで怨念のようにフィルヴィスさんは吐き捨てた。

二四階層食糧庫バントリーで起こった事件の首謀者。

それは、かつて「白髪鬼」ヴェンデッタと呼ばれた冒険者……いいえ、闇派閥幹部イヴィルス。

オリヴァス・アクト。

六年前、自分すら巻き込んだ大規模な『怪物進呈』バスバレードを敢行し、フィルヴィスさんの仲間を含む多くの冒険者を道連れにして死亡したとされていた。

そのオリヴァスは、怪人クリーチャーとして蘇っていたのだ。

彼が起こしたその惨劇は、『二七階層の悪夢』として今に伝わっている。

そして、フィルヴィスさんはその惨劇の数少ない生き残りだという。

「そちらも、『正体不明』イレギュラーが関与しているらしい。詳しくはヘルメス派が調査しに行って

いるが……」

フィルヴィスさんがしかめっ面で言った。

「今のところ、分かったことといえばメレン支部の支部長が密輸に手を染めてたことくらいだ。その発覚を恐れ、オラリオへの連絡を躊躇ったのが被害拡大の要因だと、ギルドは発表した」

しばらくの間、メレンとの関係は冷え込むだろう——と。

フィルヴィスさんは小さくため息をついた。

「ただでさえオラリオの外。しかも、「正体不明」^{イレギュラー}が関与するなら、ギルド……創設神ウラノスの妨害も想定される。何を隠しているのか、それを探るのは難しそうだ」

「私達では、オラリオの外に出るのも難しいですし……」

探索系の派閥は周辺諸国への影響も考慮して、オラリオからの出国にはギルドの許可が必要となる。

私達「ロキ・ファミリア」の場合、よほどの理由がない限り、おおよそ困難だ。

少なくとも、地上に戻ってすぐに——とは、行かないだろう。……少なくとも、普通の方法では無理だ。

「ああ。その点で言えば、ヘルメス派は適任だな。何しろ、表向きは商業系派閥だ」

商業派閥なら……というより、探索系以外の派閥なら、そこまでの制限はかからない。

周辺諸国が恐れ、ギルドが嫌っているのは戦力の流出。端的に言えば、上級冒険者^L以上が外に出ることだ。

商業系ないし農業系は——耕地はオラリオの外にあるのだから——ほとんど自由に出入りできる。

メレンの調査には、うってつけの派閥だった。

「余計な介入をしてきたのだ。せめてまともな情報を手に入れてくることを期待しよう」

そんなことを思う私を他所に、フィルヴィスさんはどこことなく皮肉気に言っているから、
「……『遠征』はどうだった？」

真剣な顔で、言った。

「犠牲者は出ませんでした。やっぱり大変でしたけど……色々分かったこともありません」

クリチャ 怪人。穢れた精霊。デーモンと、それに寄生する『汚泥』。

アイズさん達が交戦したという赤黒い人影——『闇霊』と言う存在について。

そして、

「ひよっとしたら、『イレギュラー正体不明』達の力の特徴なんかも」

少なくとも、リヴェリア様たちは、ある程度の予測を立てているようだった。

……

リリ達が野営地につく頃には一八階層にも『昼』が訪れていた。

「うわあ、急に明るくなりましたね」

地上のそれとは違い、ものの十分程度のことだ。

魔石灯の光量を調整したような急激な変化に、少し目が眩んだような錯覚すらも覚える。

北の遠方からモンスターの遠吠えが聞こえてくるのは驚いたから……

(いえ、むしろこの恵みに感謝しているのかもしれないですね)

少なくとも、今さら驚きはしないような気がする。

多分、リリよりもずっとこの環境に慣れているはずだ。

ダンジョンの中で、モンスターがどれくらい長く生きているかは知りませんが。

「よーし！ それじゃ、レフィーヤ達も誘って、さっそく水浴びに行こう！」

「ぼ、僕はちよつとヴェルフに装備の相談があるので！」

先ほどの経験を活かして、ベル様が素早くパーティから離脱していく。

「あー！ アルゴノウトくん!？」

……まあ、そのヴェルフ様はまだリリ達の傍にいます。

「ま、まあまあ！ 落ち着きたまえアマゾネス君！ 君だつて装備は大切だろう？」

「それはそうだけど……」

「うん。手入れは、大切」

こくりと、【劍姫】様が頷いた。

……ここ、今回ばかりは支援に感謝いたします！

「ああ——つ!?!」

何とかティオナ様をなだめてホツとしたのも束の間。

今度は野营地の方から悲鳴が聞こえてきた。

「あ、レフィーヤー！」

そこで燃え尽きているのは、昨日リリ達の本幕に突撃してきた謎の暴走妖精だった。

【ロキ・ファミアリア】のレフィーヤー……。ええと、ひよつとして【千の妖精】サウザンド・エルフでしょう

か?」

新進気鋭の魔力馬鹿。あと、何か超希少魔法チートの使い手だとか。

それくらい噂なら、リリも聞いたことがある。

（関わり合うことなんて絶対ないと思っていたんですけどね……）

何やら狼狽えて、落ち込み、涙目になっているそのエルフを見ながら内心でため息を

吐く。

「うお!? ヴェル吉! 何だその剣は?!」

と、そこで新たな乱入者が現れた。

「げっ、椿……」

眼帯をつけた褐色肌の女性。アマゾネス……ではなく、ハーフトワーフなのだとか。

椿・コルブランド。二つ名は「キョク単眼の巨師」。

鍛冶系最大派閥である「ヘファイストス・ファミリア」に所属するLv. 5にして
最上級鍛冶師。

……まあ、簡単に言えばヴェルフ様の団長じょうしだった。

「その娘！ 手前にもその剣を見せてみよ！」

「え？ えええっ?!」

「うお、重い!? 何なのだ、この狂気の産物は?! まともに使える者がいるのか?!」

リリの体ごとその狂気の産物を持ち上げた「キョク単眼の巨師」様が、隻眼をキラキラと輝かせる。

ちなみに、クオン様でも片手じや無理って言っていましたよ。持ち主の癖に。

「おい、椿。勝手なことをするな」

ともあれ。

まるでぬいぐるみのように持ち上げられ途方に暮れていると。

重々しく声をかけてきたのは、ヴェルフ様だった。

「む、どういう意味だ」

「それは【イレギュラー正体不明】からの預かり物だ」

勝手に置いていっただけですけどね！

リリがそう叫ぶより先に、だから——と、ヴェルフ様が続けた。

「見せて欲しければ、砥石を貸してくれ。というか、鍛冶道具一式を」

「よし、分かった好きなものを持っていけ！」

「ヴェルフ様あ?!」

「リリスケ。……俺も、背を腹には代えられないんだ。それに、ない袖も振れない」

ヴェルフ様がとても沈痛な面持ちで呻く。

いえ、それはよおく分かりますけど！ 砥石一つにあの値段とかありえませんし!!

「あと、リリスケは返してくれ。そいつは対象外だ」

「む。そこを何とか」

「……何でリリスケにまでこだわるんだよ?」

流星にその返事は想定外だったのか、怪訝そうに——それにどこか戸惑いながら——

ヴェルフ様は首を傾げる。

「いや、長い事ダンジョンにこもっていたからな。正直、人肌の温もりが恋しいのだ」

ひ、人肌のぬくもり?! まさかそう言う趣味の方なのですか?!

「……なら、仕方ないな」

「ヴェルフ様ツツ!!」

お、乙女の純潔を何だと思っているのですかあ?!

「いや、大丈夫だぞ。どうせ、ただ抱き枕にされるだけだ」

「ああ、それなら……」

何とか身の安全は確保されそうだ——と。

ついうっかり頷きかけてから、

「そういう問題ではありません!!」

本日二度目の咆哮を上げる羽目になったのだった。

……この狂気の産物、絶対に何か性質の悪い呪詛カーズが施されているに違いありません。

4

始まりがいつであったのか。

一体いつから、この牢獄に捕らわれているのか。

それは、もはや思い出せない。

「——あつ?!」

赤熱した焼き鰻。

押し付けられたそれは、肉体よりもソウルを焦がし蝕む。

その感觸とて慣れたものだ。

真に激痛に晒された時、人とはまともに悲鳴を上げることすらできないらしい。人とは言い難い私とてそうなのだから。

仮面の奥から響く、くぐもつた笑い声を聞きながら、そんなことを考えていられる程度には。

「ヒヒ……ッ」

獄吏どもが立ち去れば次には牢名主が。それが去れば別の蛭どもがやってくる。

抗う力など、残ってはいなかった。

悪趣味な焼き鏝と獄吏の邪法によつて、もはや立つこともままならないのだから。

冷たく湿つた薄闇の中。

ただ慰み者にされるだけの時間。

その時ですら、衣服に染みついた異臭だけが伝えてくる。

こんなものを記憶しておくことに、いかほどの意味があるうか。

——だから、その時も。ただ繰り返し返されるのだと思つていた。

「暗く枯れた体とて、下種の慰みくらいにはなるようだな」

近づいてきた気配を前に、いつも通り嘲笑する。

もはや、それくらいしかできることなどないのだ。

「……何の話だ？」

ただ、返ってきた返事は、いつもと違った。

朽ちた体に鞭打って、視線を上げる。

そこにいたのは、見慣れた獄吏や牢名主どもではなかった。

「貴公、こんなところに何用かな？」

それは、おそらく問うまでもないものだった。

少なくとも、この時はそう思った。

「ここは異形の住処。私とて、例外ではないのだぞ」

目の前の存在は、私がどういうモノかを知っている。

「私は罪人。人の深淵、その忌み子なのさ」

言うまでもないことだ。

その男のソウルには、私の同胞のソウルがいくつか混ざり込んでいたのだから。

「貴公、それでも私を許せるのか？」

「ああ」

許すも許さないもない。

その男は、あっさりと頷いて私の体を抱き上げた。

——この牢で過ごした時間。

それを記憶しておかなかったことを、少しだけ後悔した。

(いったいいつ以来だったか……)

壊れ物でも扱うように慎重に、その男は私を抱えて歩く。

硬く冷えた鎧も気にならない。

こんな風に誰かに触れたのは、これが初めてだった。

少なくとも、はつきりと記憶に残っている中では。

ただ……いつかどこかで。

遙か遠い昔、鎧を着た誰かにこうしてもらったような気も、ほんの少しだけした。

それに、この冷たく優しい闇ソウルにも、いつかどこかで出会ったような気がした。

——それらの感触が、何故か郷愁を誘うほどに懐かしかったから。

……

「これがあの馬鹿弟子の馴れ初めだ」

改めて言葉にするととなると、なかなか気恥ずかしいものだな——と。

その魔女……カルラ様は小さく苦笑した。

「え、ええと……」

一方で、超重量級の話をぶちかまされた霞様たち——というか、リリもそうですけど

——は表情を引きつらせている。

例外は、アンジエ様くらいでしょうか。
さて。

今の状況を簡単に説明するなら。

唐突に訪れた貞節の危機——と、言っても抱き枕にされるだけなら、実は初めてではないのですが——を乗り切り、ティオナ様に連れられてこの泉に来てから。

「ふんっつ！ ボクの圧勝だな」

「うぐっつ?!」

胸を見て、胸を張るヘステイア様に何故か——いえ、何となくは察せませんが——ティオナ様が精神的に致命の一撃を喰らって。

「相変わらず大きいわねー」

「勝手に触るんじゃないよ」

一方で、ヘステイア様に負けずとも劣らないアイシャ様のそれを、霞様が後ろから驚掴みにしたり。

「いいじゃない、減るもんじゃないんだし」

「あんだねえ。これを揉むために雄どもがいくら積むと思ってるんだい?」

「うん?」

生々しい会話に、カルラ様が首を傾げたり。

「私は戦闘娼婦だからね。ま、今はあいつの囲われ情婦^{おんな}だけど」

「ほう？　もしや、あの馬鹿弟子が自分から？　……これは、思わぬ強敵がいたものだ」
何故か割と真剣に、カルラ様が慄いたり。

「あの、ところで、モンスターとかは……？」

「もちろん、見張りを立てますよ。近づいてくる不届き者はモンスターだけではありません
せんから」

千草様の言葉に、エルフの……確かアリシア様が武器の調子を確かめながら優しく微笑んだり。

「あ、でも。相手は【^{イレギュラー}正体不明】だし、かなり気をつけないと……」

「え？　何で？」

「あいつが？　どうしてだい？」

ヒューマンの魔導士——確かエルフイ様の言葉に、霞様たちが揃って不思議そうに首を傾げてたり。

「あく……。言われてみれば確かに？」

「確かにつて……ほあ?!」

「そつ、それはつまり……?!」

「はいしいしゅーりよー！　この話はここまでだよ!!」

その様子から色々察したらしく、動揺したレフィーヤ様達を庇うようにヘステイア様が叫んだりと。

他にもいくつかの出来事イベントをこなしてから。

「ところで、アナタはクオンとどうやって知り合ったの？」

「あ、もしかして恋バナって奴ね。私達も混ぜてくれるかしら？」

霞様の何気ない問いかけに、クオン様の情報を欲するティオネ様たちがここぞとばかりに便乗してきて……

それで、結局。

「あ……。ええと……」

「あの、ティオネさん。無理に聞くのは良くなかったんじゃ……」

「その、ごめんなさい」

こうして、全員仲良く轟沈させられているのだった。

馴れ初めを聞いただけで、リリのスキルも歯が立たないくらい重量級の返事が返ってくるのか予想外もいところなのですが。

(いえ、これはむしろ予測できなかったリリ達の失敗だったのでは……?)

波立たなければ、水底まで見えるほどに澄んだ柔らかな水。

その中に沈みこみ、ブクブクと泡立てながら呻く。

カルラ様はクオン様の……ええと、その関係者なのだ。

ひよつとしなくても、普通の惚気話が返ってくると思つていたりり達の方が暢気すぎたのではないだろうか。

今さらながらに思い至つたそれに、内心で頭を抱える。

「とうか!」

ひとと、カルラ様に抱き着き、霞様が気炎を上げ、

「ア・イ・ツは! どうして! そんなことまで! 忘れちゃうわけ?!」

「ま、記憶喪失だったつてのは知つてるけどね」

肩をすくめてから、呆れたようにアイシャ様が呻く。

「しっかし、あの馬鹿。牢獄破りまでしてたとはねえ」

「なに、街としてはとつくに滅んでいたからな。連れ出したとて咎める者も残つてはいない。まともな者は、な」

「……いや、そもそも何故投獄などされていた?」

気楽に肩をすくめるカルラ様に、シャクティ様が少し躊躇いがちに問いかけた。

「私が人の『深淵』、その忌み子だからさ。罪人と呼ぶにはそれで充分だろうか?」

「……もしか、『深淵』というのはあの『深淵』のことなのか?」

一四階層に発生したという悍ましい『呪詛』カース。

リリ達が遭遇したあの『変異種』も、どうやらその影響を受けた存在だったらしい。
「ああ。その通りだとも」

「じゃあ、あんたも『深淵種』だったのかい?」

「さて、どうだろうな。似たようなものかもしれない」

あつさりとした肯定に、シャクティ様どころかアイシヤ様までが表情を険しくした。
アリシヤ様達はすでに武器に手を伸ばしてすらいる。

「ただ、かつて私達のような存在は『闇の子』などと呼ばれていたよ」

それに気づいているのかいないのか、カルラ様は小さく笑うばかりだった。

「その『闇の子』ってのは何なの? それに、私達って……」

「私の弟子が『深淵の主』を打ち倒したという話はしただろう?」

少なからず険のこもったティオネ様の問いかけにも、やはりカルラ様は躊躇いなく応じて見せる。

「『深淵の主』は私の弟子の手で滅ぼされた。それは確かだ。だが、世界にはその断片が遺されていたのさ」

そのソウルがあまりに強大過ぎたのだろう——と、カルラ様が小さく付け足す。

「それが『闇の子』だと?」

「ああ。【孤独】のナドラ。【憤怒】のエレナ。【恐怖】のアルシユナ。そして、【渴望】の

デユナシヤンドラ。それが、私の弟子がかって出会った同類の名だ」

特に【渴望】の使徒にはずいぶん苦勞させられたらしい——と。

カルラ様は小さく苦笑した。

「だからこそ、私の弟子は、私が何なのかすぐに分かったはずだがな。何の躊躇いもなく連れ出すのだから、やはり変わった男だよ、あれは」

「孤独に憤怒。恐怖に、渴望……ですか？」

すぐ近くの岸に座るレフィーヤ様が、小さく首を傾げる。

「どうかしたの？」

「い、いえ。カルラさんの言う通り、それが『深淵の主』の断片だっていうなら、それは……」

レフィーヤ様は少し言い淀んでから、

「『深淵の主』には、まるで私達みたいに感情があつたつてことなんじゃ……」

そ、そんなわけないですよね——と、レフィーヤ様が渴いた笑い声を上げる。

……何だか、少しだけ水温が下がったような。そんな錯覚を覚えた。

「ええと……。なら、あんたは人間なの？ それとも精霊みたいな感じ？」

その悪寒を取り繕うように、テイオネ様が改めて問いかける。

「さて、どうだろうか」

はぐらかすように笑ってから、カルラ様は奇妙な答えを返した。

「人間とは何か。それに対する答え次第だろう」

「はあ……？」

テイオネ様が困惑したように呻く。

ただ、カルラ様はそれ以上、何も言うことはなかった。

「それに、私はそもそも『闇の子』と名乗れるかどうかも怪しいのだが……まあ、それはいいだろう。自分が何者か。それを正しく答えられる者が果たしてどれだけいるのやら」

「いえ、だからってそんな意味深な言葉を自己完結されても困るんですが……」

思わずと言った様子でレフイーヤ様が呻く。

「あくまで私自身の主観だが、『渴望』や『恐怖』のように明確な『残滓』を継いでいるようには感じない。『闇の子』とは言い難いとはそういうことだ」

ただ、とカルラ様は苦笑した。

「『闇の子』の宿命……性は継いでいるのかもしれない」

霞様とアイシヤ様を見て、肩をすくめた。

「どっとうい意味よ……」

「『闇の子』など、所詮はか弱く小さな断片にすぎん。少なくとも、『深淵の主』に比べれ

ばな」

「……そういうものなの？」

「ああ。だからこそ、憑代を求める。強い力……それこそ、王たる器を持つ誰かを」
その言葉に、背筋がゾクリと泡立つ。

(王の器……)

世界を遍く照らす『最初の火』の『薪』になれるほどの力を宿せる誰か。

それだけの力を宿す『薪』のことを「薪の王」と呼ぶ。

そして、強い力に引き寄せられる『闇の子』であるカルラ様が選んだ憑代がクオン様
だというなら——…

(これはもう、ほとんど確定したようなものですね)

全てが真実なら……少なくとも、その一部が含まれているなら。

もはや、クオン様が『火継ぎの英雄』なのは——少なくとも、その原型となった存在
なのは間違いない。

(あーうー……。こんなもん一体どうしろっていうんですか?)

再び内心で頭を抱える。

何だかとてもない情報に触れつつあることだけは分かった。

というか、それしか分からない。

それしか分からないけど、とにかくこれは絶対にヤバイ。

深入りすべきではない。深入りすれば、きつと戻ってこれなくなる。

これはもう、間違いなくそういう領域の話だ。

今すぐにも手を引くべきだが……その当事者^オとはすでに深く関わっている。

それどころか、同じ背景を持つアンジェ様に至ってはヘステイア様の眷属となっていた。

事ここに至っては、もはや関わらないという選択肢など選びようがない。

「……」

視線だけをシャクテイ様に向けると、彼女はごく小さく頷いて見せた。

(ある程度は知っている、という事ですな)

もつとも、それを見込んでここまで無理矢理に連れてきたわけだし、そうでなくてはむしろ困る。

それはそれとして……。

(まあ、『死んでも平気』というところだけを聞けば、とんでもない特権のような気もしますけどね)

特にダンジョンに挑む冒険者であれば。

死んでも蘇ることができる。それなら、次はもつとうまくできる。

それは、冒険者を続けるうえで、どこまでも有利に作用するのは間違いない。

……死んでも死にきれない。そのまま朽ちて『亡者』なるものへと墮ちる以外の終わりはなく、それとて本当の意味での『終わり』^死ではない。

そんな代償にさえ目を瞑るなら。

そして、その『代償』こそがさらにこの情報を厄介なものとしている。

(明らかに誤魔化そうとしていましたからね)

あのポールスとかいう大頭の時も。リリの時も。

おそらく過去を知られたくないのではなく——もしくはそれ以上に——『不死の呪い』について知られたくないのだろう。

その理由くらいは分かる。

(いつか亡者となって人を襲うようになるかもしれない)

ただでさえクオン様を目の敵にする冒険者には事欠かないのだ。

そんなことを知られた日には、すぐにでも全面抗争に突入しかねない。

(そりやもう、全力で誤魔化そうとする訳です)

クオン様自身だけではなく、ギルド上層部も。

一度や二度殺したくらいでは止まらないL.V. 7——下手をするとそれ以上——の

不死人……いや、不死身の英雄が相手だ。

どこかの血気盛んなお馬鹿が抗争でも仕掛けようものなら、本当にオラリオ中に死体の山が出来上がる。

その途中でクオン様も一度くらいは命を落とすかもしれないし……その一度で亡者になる可能性が皆無という訳でもない——のではないだろうか。

正直なところ、あまり想像できないのですが。

加えて言えば、その時にはアンジエ様が所属する「ヘステイア・ファミア」も間違いないく巻き込まれるだろう。

つまり、何をどうしてもこの情報を外に漏らす訳にはいかないわけだ。

（あーもー……。ホントにこんな厄ネタ知りたくなかったですよー……）

などと。今さら嘆いてもどうにもならないし、そんな暇もありはしない。

すでに少なからず知ってしまったのだ。今からできることは、クオン様のように沈黙を守ることだけ。

例え、相手が「ロキ・ファミア」であってもだ。

それを考えただけで全てを投げ出したくなる思考を、何とか回転させた。

（ベル様は腹の探り合いには致命的に向いていませんからね）

何かいい『嘘』をでつちあげ、ヘステイア様やヴェルフ様とも口裏を合わせておく必要がある。

そして、万が一の時に備えてシャクティ様とも何とか協力関係を築いておきたい。
……せめて『嘘』を用意するための助言だけでも貰いたいところだ。

(相手が誰であれ、神相手に嘘を吐こうって時点でも無理もいところですけどね……)
神の相手はヘステイア様に全部ぶん投げることを固く誓った。

というか。アンジエ様——と、多分クオン様たち——じやあるまいし、神相手に嘘など吐けるはずもない。

まずはそういつた状況に陥らない事を最優先にしなくては。

(今はともかく、余計なことを喋らないようにしなくては……)

リリ一人でいくら考えたところで、さほどいい案が思いつくわけでもないし、大したことができない訳でもない。

今すぐできることといえば、秘密を守るために、基本的な部分をきっちり抑えておくくらいか。

「よく分かんないけど……。つまり、あんたも強い雄に惹かれるってこと?」

胸中で呟くりりを他所に、話は先に進んでいた。

「まあ、そう言ってしまうてもいいだろう」

「……そう言われちゃうと、私としては人間だって言うしかないんだけど」

あつさりと頷かれ、テイオネ様が眉間を指先で押さえる。

……まあ、それはそれでしよう。それはアマゾネスの性さがでもあるわけですし。

「まあ、私のことはともかくとして」

ティオネ様の言葉を肯定も否定もせず、カルラ様は言った。

「私の弟子は間違ひなく人間だよ。他の何者でもない。あれほど人間臭く在れることに、誰もが驚くほどにね」

それは、つまり。不死の呪いに苛まれながらも、『亡者』ではなく人間であるという意味だろう。

……あるいは。

(何度も死を経験しながら、でしようか)

クオン様の力は、自分の死体を積みあげた結果だと。

それほどに『死』を経験しながら、それでもまだあの方は人間だと。

「だから、あまり邪険にしないでやってくれ」

カルラ様はそう言っているのだろうか。

「と、ところで。【イレギュラー正体不明】が弟子というのは……」

おつかなびつくり……それでも、好奇心を隠しきれない様子で、レフィーヤ様が問いかけた。

「ああ。魔術の手ほどきをしている。……なかなかどうして、手を焼いているがね」

「魔術……?」

「正確には、『闇術』と呼ばれるものだ。もつとも、もはやその区分も曖昧だが」
節くれだつた奇妙な杖を取り出して、カルラ様は何事か口ずさんだ。

途端、暗い闇がその杖を覆つて——そして、そのまま消えた。

多分、魔法を発動させずに霧散させたのだろう。

「私があいつに報いるには、魔術しかない。忌むべき闇の魔術だけがな。あるいは、この枯れた体くらいか……——ツツ?!」

「ひゃ?!」

まだ抱き着いたままの霞様が悲鳴を上げ、カルラ様が背筋を伸ばす。

理由はその後から伸びてきた腕で……

「あ、あたしより全然あるじゃん!」

「て、ティオナさん?! ひあ……」

「ちよ!?! レフィーヤ危ない!」

慌てて止めようとしたレフィーヤ様が、そのまま足を滑らせて泉に落つこちそうになり、エルフィー様に慌てて引つ張り戻された。

「この馬鹿ティオナ!?! ゴ、ごめんなさい。ちよつと、持病の発作みたいなもので……」

いえ、それはそれでなんか酷いことを言つてませんか?!

「そ、そうか。……お大事にな」

「余計なお世話だよ!?——じゃなくて!」

ともあれ、ティオナ様はカルラ様の体を——胸以外も——ペタペタと触りながら言った。

「『闇の子』とか言っても……やっぱり、あたし達と変わらない気がするけどな」

まあ、見た目ではヒューマンの女性にしか見せませんけど。

……何だか、妙に懐かしいような気分になるのが不思議と言えば不思議ですが。

「その『闇術』っていうのは、どうして良くないの?」

「『深淵』に連なるもの。そう言えば、一番分かりやすいだろう」

「はあ?!」

悲鳴を上げたのは、ティオネ様たちだった。

身をよじったせいだろう。澄んだ水面に、再び大きな波紋が生まれる。

「『闇術』の力の源が暴走すると、『深淵』を生み出す。確かそう言っていたな」

冷静に応じたのはシャクティ様だった。

やはりというべきか。他にアイシャ様も平然としている。

おそらく、『深淵狩り』の際に、多少なりと情報を交換しているのだろう。

「ああ。概ねその認識で間違いはない。もっとも、『深淵』を生み出すには相応の力を求

められるだろうが」

出廻らしの私には、とても無理な話だ——と。

カルラ様は小さく肩をすくめた。

「だが、この『闇』が神々にとつても猛毒だということは変わりない。あの罰当たりは気にしなかつたがな」

「そりやまあ、むしろ喜んで覚えそうな気はするけどね」

テイオネ様がぐったりとした様子で呻く。

「でも、本当に神々にも手に負えないなんてことがあるんですか？」

レフィーヤ様の問いかけに、カルラ様は水中からその細い腕を持ち上げた。

「あの娘ら。神に連なる者たちは、私に近づこうともしないだろう？」

水滴が滑り落ちる細腕。その細い指に示されるのは——

「う……」

当然というべきか。ヘステイア様だった。

何故か犬猿の仲らしき【剣姫】様の隣……というより。

可能な限り、カルラ様から離れた場所にいる。思い返せば、ここまでの道中でもずつと。

そう。あのヘステイア様がだ。

「——!」
そこで、突如としてアンジェ様が激しく舌打ちしながら何かの物語を口ずさんだ。その手に生じたのは白光の輪。

放たれたそれは、頭上にまで枝を伸ばしていた一本の木を切断して——

「——いいいいいいいいいっ?!」

ザボンと。何か落ちてきた。

「げぼっ、ごぼっ、ごぶっ?!」

バシヤバシヤと水をかき分けて現れたのは——：

「アルゴノウト君!」

「ベル君?!」

「ベル様あ?!」

よおく見慣れた一匹の兎でした。

「な、何をなさっているんですかあ?!」

静かな泉が今までで一番騒然となる。

乙女的には『深淵』とか『闇の子』よりもずっと一大事なのだった。

「なになに! 水浴びしに来たの?!」

「大人しそうな顔して、やるわねえ」

「よくもまあ、この大げさな包围を突破できたもんだ」

……まあ、アマゾネスの方々は平然としていますけど。

いえ、アマゾネス以外にも、アンジエ様やカルラ様も同じですが。

「あ、アンジエ君！ 体を隠すんだ——」

ベル様の一番近いところで、平然と裸体を晒している……どころか、自分から近づいていくアンジエ様にヘステイア様が叫び——

「伏せてください」

「え？！」

水中に押し込むように、アンジエ様がベル様を押し倒した。

「こらー?!」

ヘステイア様の悲鳴が響く中、放たれた光輪がアンジエ様の手元に戻ってくる。

あのままベル様が立っていたなら、首と胴体が泣き別れだったかもしれない。

「外した……!」

続けて吐き出すはずだった叫びを飲み込み、目を白黒させているヘステイア様を他所にアンジエ様が鋭く舌打ちした。

「……へ？」

ここでん、とヘステイア様と一緒に首を傾げていると、アンジエ様は体がかがめてベル

様に深く——と言っても、水中に沈まない程度ですが——頭を下げた。

「大変失礼致しました」

……もちろん、今も一糸まとわないまま。

いえ、それはともかくとして。

「あ——あなたはあああああああああああああああああッ!?」

此方、地を蹴つて襲い掛かるレフィーヤ様。

「ご——ごめんなさあああああああああああああいつ!?」

彼方、決河の勢いで飛び出すベル様。

両者の間にはまだ一階位の差があるはず……というか、レフィーヤ様の咆哮に我を取り戻した他の団員までが全方位から襲い掛かる。

「すつごーいー!」

「本当にいい脚持つてるわね」

だというのに、誰もベル様を捕らえることはできなかった。

いえ、Lv. 5が揃って静観を決め込み、Lv. 6が顔を真っ赤にして機能停止しているという事もあるとは思いますが。

「と、と、と、と。外したってどういふことだい?」

ヘステイア様が、アンジエ様に問いかける。

すっかり見えなくなってしまうたベル様はひとまず置いておくことに決めたらしい。

「申し訳ありません」

「いや、責めてるわけじゃなくて！ 他に誰がいたんだい?!」

「名前は分からんが、貴公と同じく神に連なる者だな。沐浴を覗きに来るとは……やれやれ、『火』も『王』も失えばあんなものか。嘆かわしいことだ」

カルラ様がゆるゆると首を振って嘆いた。

気になることは色々とあるのですが……！

「神い?! どんな奴だい?!」

「旅装束を着込み、羽根つき帽を被った男にございます」

片膝を着き、首を垂れてアンジエ様が応じる。

こんな時にもブレないその姿勢はある意味凄いのでしょうか……。

「旅装束で」

「帽子を被っていて」

「こんなところに来てまで覗きをするような神……」

そして、何故だかティオネ様やシャクティ様たちまでが頭を抱え始めた。

「さては！ もしかしなくてもヘルメスだな!」

へステイア様が叫ぶのと同時、新たに水中から飛び出す音が響く。

「すまん、テイオネ！ フィン達に場所を借りると伝えておいてくれ！」

水気を拭うのもそこそこに、素早く装備を身に着けたシャクティ様が森の奥……というか、野営地の方向へと走っていった。

「あく……うん。分かったわ。伝えとく……」

テイオネ様の返事が聞こえたかどうか。

まさに緊急事態といった形相だった。

「テイオナ、アイズ。そんなわけで私はちよつと抜けるから、見張りはよろしくね」

一方、言伝を頼まれたテイオネ様はというと。

心底嫌そうな顔で水から上がり、のろのろと身体を拭いて装備を身に着け始めた。

「えーと……?」

「あいつが特に嫌っている神つてのは何柱なんにんかいるわけだけど」

置き去りにされたリリが首を傾げていると、アイシャ様が肩をすくめた。

「その中でも、神ヘルメスは致命的にヤバいのよ」

装備を身に着け終わったテイオネ様までがため息を吐く。

「そ、そうなのですか？」

「ええ。一応、具体的な名前は避けるけどオラリオで一番有名な二つの派閥の主神で、胸

がない方を軽く超え、胸がある方を下に聞くところね」

最後に投げやりな結論を結んでから、のろのろとした足取りで——しかし、L.V. 5に恥じぬ速さで——テイオネ様も野営地に向かっていった。

……それにしても、これではもう伏せる意味がないのではないのでしょうか。

「あゝ……。でも、そっか。イシユタルの他に、フレイヤとヘルメスか」

何となく状況に置き去りにされたまま、どうでもいいことを思いついたりりを他所に。

改めて、ベル様が落ちてきた辺りを見上げてから。

「クオン君がボクらの何を嫌っているか。いい加減、分かってきたかも……」

ヘスティア様は、ため息とともにそう呻いた。

その神意は分からないけれど……

「それにしても。あいつ、本当にこんなところで何してるんだ？ ……いや、ボクが言うのも何だけどさ」

ともあれ、新たな招かれざる客が登場したのは間違いなさそうだった。

……

縦横無尽に森を駆け抜けた。

巨木が立ちはだかれば直角に進路を変え。

岩があれば飛び越えて。

頭がおかしくなった兎のように走って走って走り続けて。

とにかく疾走して。とにかく逃走して。

そして、唐突に気付いた。

「ま、迷った……」

火の粉が舞い上がりそうなほどに赤熱していた体が、一転して冷え込む。

冷静になったふりをしながら周囲を見回すと、案の定見覚えのない景色に囲まれていた。

まだ裂け目が白い、倒されたばかりの太木。

見覚えのない水晶の畑。

空を……頭上を覆う枝葉の屋根は、野営地の周りより少し疎らで、白い光の帯が幾筋も見える。

改めて見ても、一八階層は綺麗な階層だと思う。思うけど……。

(マズい……！)

まるで絵画の世界に迷い込んだようなその風景も、今は焦りを誘うだけだった。

(ここは森の南部？ それとも東部？)

それとも南東だろうか。

リヴィラの街から見渡した大森林を思い描きながら四方八方を見回しても、まったくピンとこない。

そもそもピンとくるだけの土地勘がない。

完全に、迷子だ。ダンジョンの中で、またしても。

しかも、今度は単独ソロでだった。

(お、落ち着こう)

嫌な汗が背中を伝うのを自覚しながら、口の中で呪文のように呟く。

まずは冷静に。もう一度落ち着いて地形の確認を——…

「ツツ?!」

気づけば近くの木陰に飛び込み、身を潜めていた。

ちようど僕の後を追うように、何かが向こうからやってくる。

(バ、『バクベアー』……!)

のっそりと姿を見せたのは、巨大な熊だった。

もちろん、普通の熊ではない。バグベアーと呼ばれるモンスターだ。

こうして姿を見るのももちろん初めて。

当然だ。このモンスターの出現階層は一九階層からなのだから。

(ええと、確かバグベアーは……)

そんなモンスターだから、エイナさんからまだ詳しい話は聞いていない。ただ、まったく知らないわけでもなかった。

確か——：

（『力』や『耐久』はミノタウロスに少し劣るけど、『敏捷』は高い）
そして、見ての通り体格も見劣りしない。

一言で簡単に言うなら、素早いミノタウロスということになる。

（あ、悪夢すぎる……！）

いくらランクアップしたとはいえ、まだミノタウロスが強敵であることは変わらない。
い。

そして、今は僕一人しかない。決死行の途中のようになりふり構わずスキルを使用して、身動きが取れなくなったらそれこそおしまいだ。

……ついでに言えば、鎧はまだ整備中で、身に着けている防具は長衣型のサラマンダー・ウールのみ。

武器も同じく神様のナイフだけだった。

（う、迂闊すぎる……！）

頭の代わりに鼻と口を両手で押さえながら呻く。

心臓がバクバクとうるさい。

この音に気付かれるかもしれない。そんな妄想がよぎるほどだ。

ただ、幸いにしてバグベアーはお腹が空いているのか、それとも好物なのか、雲菓子ハニークラウドが実る木に縋りつき、その実を片っ端から貪ることに夢中になっている。

とはいえ、迂闊に音を立てればその限りではない。

このまま満足してどこかに行くのを待つしかなさそうだった。

(うう……。どうしてこんなことに……。?)

天を仰ぐ余裕もないままに自問する。

……答えは結構分かりやすかった。

「君が、ベル・クラネルかい？」

——と。

【ロキ・ファミア】の野営地で声をかけられたのは、ヴェルフが鎧の修繕を始めた頃。

念のための採寸を終え、借りている天幕に戻る途中のことだった。

「は、はいっ」

半ば反射的に返事をしながら振り返ると、そこには旅装束を着こなした長身の男の人が立っていた。

……かなり着慣れた感じの旅装束だけど、冒険者用の戦闘バトル衣クロスではないようだった。

いやまあ、僕も駆け出しの頃はギルドで買った胸プレストアーマー鎧プレートだけを頼りにダンジョンに潜っ

ていた訳だけど……。

(あれ? この感じつてもしかして……)

そこでやつと微妙な違和感を覚えた。

今の神ヘステイア様と同じように、神威を抑えているんじや……。

「オレはヘルメス。『旅の神』なんて呼ばれている。今はあまり大きな声では名乗れないけどね」

どうかお見知りおきを——と。

羽根つき帽子を外し、優雅に一礼するヘルメス様に、僕もあわてて頭を下げた。

「ええと……。それで、ヘルメス様はどうしてこんなところにな？」

どうやら神様はダンジョンに潜ってはいけないらしいんだけど……。

「ああ、さつきも言ったがオレは『旅の神』でね。オラリオの外をよくふらついているのよ」

「は、はあ……」

曖昧に頷く。

でも、全てのファミリアはオラリオから出る際には許可がいるって前にエイナさんから聞いたような……。

「オレ達がオラリオの外に出れるのが不思議かな。でも、そう難しいことじゃない」

僕の困惑を見通したように、ヘルメス様は小さく笑った。

「うちは一応商業系の派閥だね。派閥や農業系の派閥は、オラリオの外出制限が緩いさ。オレ達は交易も仕事のうちだし、耕地があるのはオラリオの外だろう?」

「あ、なるほど」

言われてみれば納得だった。

魔石製品の輸出は、オラリオの大きな収入源だつてクオンさんも言っていた。

「まあ、うちの眷属^{カニ}達はダンジョンで稼ぐこともあるんだが。何しろ、外は物騒だからね」

旅をするなら、腕が立つに越したことはない——と、その言葉に頷く。

実際にそれは本当のことだった。

むしろ、日々の生活の中でモンスターの脅威を全く感じないで済むのはオラリオくらいなものだろう。

大体のモンスターは魔石の力を衰えさせているけど……一方でまだ力を失っていないモンスターが存在すると聞いている。

いくら頑丈な市壁を用意できたとしても、ずっとモンスターの攻撃に耐えられるはずもない。追い払うか倒す必要がある。

堅牢な市壁と、モンスターを倒せるだけの冒険者。

その両方が充分に揃っている場所が、オラリオの他にそういくつもあるわけではない。

そんな中を旅するなら、やっぱり強いに越したことはないのだ。

「それに、オラリオに住まう神としてして、ダンジョンを無視するなんてできるわけもないだろう?」

パチリと片目を瞑られたなら、やはり頷くしかなかった。

そのダンジョンに出会いを求めてオラリオにやってきたのが、他ならぬ僕自身なわけだし。

「それでだ。実は少し前にドジを踏んでね。危ないところを、君のお祖父さんに助けてもらったことがあるのさ」

「お祖父ちゃんに……?」

「ああ。オレとしては、あの爺さんは殺しても死なないタイプだと……。いや、それはともかく」

小さく肩をすくめてから、

「まあ、その恩に報いられないようじゃ神の名折れだからね。せめて孫の君の窮地には手を貸そうと思ったわけだけ……」

ロキのところの眷属こども達がいるんじや、うちの眷属こには出る幕がなさそうだ。

ヘルメス様はそう言つて苦笑した。

「い、いえそんな……」

まさか神様が……ええと、ヘステイア様以外の神様までがダンジョンの中にまで来てくれるなんて。

（お祖父ちゃんつてやっぱり凄かつたんだなあ……）

僕もいつかはお祖父ちゃんのようになれるだろうか。

誇らしいようなむず痒いような……そして、どことない寂寥感とともにそんなことを考えていると。

「ところで、ベル君。せっかくだから、少し付き合わないか？」

と、ヘルメス様が言ったのだった。

それで……まあ、それから色々あつて、こうなっている。

「……………っ！」

頭を抱えていると、ついうっかり転げ落ちたらくえ……ええと、あの泉の光景まで思い出してしまい、顔が燃えそうなほど熱くなった。

ええい、煩惱退散！ こんな時にこんなことを考えてたら本当に死ぬって！

（……このままじゃ本当に不味い……！）

リヴィラの街に行く途中、高台から見た絶景——これは文字通りの意味で——を思い

出す。

広大な草原地帯に点在していたのはモンスターの群れだ。

あの距離ならそれもまた牧歌的な光景だったけど、この距離ならそんな暢気なことは言っていられない。

土地勘の全くないこの場所で、ろくな装備もなく、たった一人でモンスターの群れの中に迷い込んでいるようなものだから。

……自分で結んだ結論に、少しだけ卒倒しそうになった。

（よ、『夜』が訪れる前に何とか森を抜けないと……！）

闇はモンスターの味方だ。

冒険者になってから、僕も夜目はずっと利くようになってきたけど……それでも、モンスターの方がまだ上手だった。

それ以前に土地勘がないような場所で、視界まで闇に閉ざされるなんて全く笑えない。

満腹になったのか、そのまま地面に丸くなり暢気に寝息を立て始めたバグベアーを起さないよう細心の注意を払いながら、僕はその場所を離れた。

とはいえ……

（どっちに向かえばいいんだろう？）

野営地の場所など分かるはずもない。
それどころか、方角すら曖昧だった。

(風向きくらいは分かるけど……)

小さな頃から野山で遊んでいたおかげで、風下の方角くらいなら分かる。

(ええと……。確か風って温かい方から冷たい方に吹くんだったっけ?)

村にいた時に、クオンさんからそんな話を聞いたことがある。

日中は水辺から陸地に。夜はその逆に吹くんとか。

もちろん、実際には他にも地形とか季節とか色々な要因が絡んでくるとも言っていたけど。

何より……

(あくまで地上の話だし……)

ダンジョンの中でも通用するかは未知数だった。

とはいえ、他に何か当てがあるわけでもない。

(あ……水の音?)

迷いながらも風上を目指していると、水の音が聞こえてきた。

それも、せせらぎとは違う。まるで、誰かが水をすくっては落としているような……。

(モ、モンスター?)

自然に鳴るような音ではない……と思う。

なら、まずはモンスターが存在を疑うべきだけど……。

(よ、よし……！)

散々迷った挙句、僕はその音の方へと足を向けた。

息をひそめ、できるだけ足音を立てないように慎重に。

モンスターかもしれないけど、例えば「ロキ・ファミリア」の誰かが水汲みに来ているのかもしれない。

だとすれば、案外と野営地には近いということになる。

それに……正直なところ、緊張続きで喉がカラカラだった。

(それにしても……)

田舎育ちなので、森の中を歩くのはそれなりに慣れているつもりだった。

つい最近なら、セオ口の密林の中でちよつとした冒険——というか、主に大乱闘？——をしてきたばかりでもある。

とはいえ、やぱり油断は大敵。油断をすれば苔に足を取られそうになる。

ひやりとしながらも、周りを見回し、改めて胸中で呟いた。

(本当に物語の中に迷い込んだみたいだ)

頭上を覆う緑の天蓋は水晶の日差しを退け、薄暗く、藍色を帯びている。

その中で淡く光るのは地面に生えた大小の水晶柱。

まるで英雄を誘う精霊の灯のように幻想的な光に導かれるように足を進めていくと

森が開け、泉が現れた。

その瞬間、僕は言葉すら忘れ去っていた。

妖精が、いた。

一糸纏わない姿で、処女雪のように白い素肌を——華奢な背中をこちらに向け、沐浴している。

両手で水をすくっては、こぼさないようゆっくりと、自分の髪へ塗り込むようにして洗っていた。

ああ、やっぱりお伽噺の中に迷い込んでいるのかもしれない。

静止した時間の中で、そんなことを思う。

精霊の水浴び。森の中をさまよった先で偶然出会う、泉の美しい乙女。

物語の筋書き通りだった。

木に手をついたまま、その光景に魅了される。

だからと言って、浅ましい感情が生まれる余地などない。

そう、そして、確かこの後お伽噺では――

(妖精の水浴びを覗いたその人は、問答無用で矢を射かけられたような……)

冒険者としてそれなりに培ってきた……というか、主にクオンさんだったり、金色の憧憬アイズさんだったり、あと正体不明の誰かだったりに叩き込まれた危機察知本能が悲鳴を上げる。

「――何者だれ!」

瞬間、光が走った。

反射的に顔をそらしたけど――それより先に、その小太刀は僕の顔の真横に突き立っていた。

当たらなかつたのは幸運だったのか、それともその妖精――空色の瞳を吊り上げ、僕を見据えるリユーさんのせめてもの慈悲だったのか。

「クラネルさん?」

結論が出るより先に、怪訝そうに眉をひそめた。

その頃には僕の時間もやっと動き出す。

ならば、やることは一つ。

「……す、すみませんでしたああああああああ!!」

二度目のこうう――もとい、過ちを前にして。

飛び跳ねるようにして土下座し、その非礼を詫びるように地面に額を叩きつけるのだった。

5

それからしばらくして。

「すまん、リヴェリア。迷惑をかける」

「まったくだ」

幹部用の天幕の中で、『招かれざる客』を捕縛し、連行してきたシャクティに対して肩をすくめる。

もちろん、別に彼女が悪いわけではない。どちらかと言えば、被害者同士……いや、彼女こそが正当な被害者だろう。

実際にあの『客』をこの一八階層まで連れてきたのはベートなのだ。

だとするのなら、私がいっただい何の文句を言えようか。

完全な八つ当たりであることを改めて自覚して、さらに気が滅入ってくる。

「よりによってこんな時に……」

つい今しがた——主に眷属デスファイの手によって——地面に額を叩きつけていった男神を思い出し、深いため息をつく。

物好きな神が押し掛けてきた程度のこと、今さらため息など零れもしないが……。

「神ヘルメスとはな」

それがあの男神だというなら、話は別だった。

「ああ。……何もクオンがいる時に来なくてもいいだろうに」

と、今度はシャクテイが深くため息をつく番だった。

何しろあの神嫌い……いや、あの『神殺し』がオラリオで最も嫌悪しているのがヘルメスという神だ。

もつとも、あの男神は男神でオラリオで最もクオンを嫌悪している神なのだからある意味つり合いが取れているのだろうが。

「おのれロキめ。私たちが負傷者を抱えていると知ってこの仕打ちとは……」
もつとも、別に単なる嫌がらせというわけでもなさそうだった。

（メレンか。あの人影……『閻霊』とやらが暴れたのは本当のようだが）
そして、ロキがその調査を「ヘルメス・ファミリア」に依頼していたらしく、その代金代わりにここまで護衛を押し付けられた——と。

ベートの投げやりな説明を解説すると、概ねそういうことになる。

「すまないが、協力して欲しい」

「分かっているとも。さすがに神殺しを黙認するわけにはいかないからな」

それに、神ヘルメスは同盟派閥の主神だ。見捨てるわけにもいくまい。

……まだ「ガネーシャ・ファミリア」への疑いが完全に晴れたとは言い難い今、その団長にはとても告げられないが。

「ところで、話は変わるが」

最後にもう一度だけため息をついてから、話題を変えた。

もつとも、それとて決して心安らぐような話題ではないが。

「先だつての『アンデッド』の身元は分かつたのか？」

リヴィラの街の殺人事件——赤毛の怪人クリーチャーと初めて遭遇し、その追跡を行った帰り道。

クオンと合流してから遭遇したアンデッドの『遺体』は、ギルドが收容したと連絡があつた。

そのすぐ後にクオンが神イシュタルを殺害したため、冒険者の中でもほとんど話題にならなかつたが……噂の『アンデッド』が実在し、その遺体が收容されたという事実は、ギルドに少なくない衝撃を与えたという。

それはともかくとして。

連絡をよこしたギルド職員は身元調査には「ガネーシャ・ファミリア」の協力を仰ぐと言っていた。

あれからもう一ヶ月近くが過ぎている。そろそろ、情報が集まっていはずだ。

「ああ。ヘンリック・ガスコイン。〔アポロン・ファミリア〕に所属していたL.V. 1の冒険者だ」

私の推測を肯定するように、シャクティは頷いて言った。

「〔アポロン・ファミリア〕だと？」

これはまた思わぬ名前が出てきたものだ。

「ああ。行方不明になったのはおよそ五年前。入団して三年目のことだったらしい」
胸中で呟いている間にも、シャクティは説明を続けた。

「三年目でL.V. 1か……」

本当の力を引き出してやる——と。それが勧誘の言葉であるらしい。

三年目ともなれば「ステイタス」の成長も頭打ちになり、同期の中にはランクアップする者たちが現れる。

あるいは、才気溢れる後輩に追い抜かれることもあるだろう。

誘惑に負けたとて不思議ではない時期だが……。

（今回は、もつと別の理由かもしれないな）

あの『暗い穴』を穿つ者たちが、クオンと同じ背景を持つ——つまり、『神嫌い』だとするなら、別の可能性が浮かんでくる。

「どうやら、いつもの『訳アリ』らしい。あの男神は『美の神』ほどではないが、な……」

その予感を肯定するように、シャクティが肩をすくめた。

「確か、『悲恋』^{ファルス}などと呼ばれているのだったな」

いつだったか、ロキがそんなことを言っていたのを思い出す。

神々の間で何と呼ばれているかはともかく、神アポロンは『気に入った人類ことどもに『強引な勧誘』を仕掛けることで有名だった。

そして……その、何だ。相手は男でも構わないのだとか。

つまり……

「例の『暗い穴』を求めたのは「アポロン・ファミリア」から抜けるためか……」

「おそらくな。かなり恨んでいる様子だったと、彼の冒険者登録を受け持ったギルド職員が証言した。何でも『勧誘』されたのは、結婚間際だったとか……」

「……そうか」

クオンの『神嫌い』も少しは理解できる——と、そう思うのは毒されている証拠だろうか。

内心で天を仰ぐ。

「脱走ではなく、復讐したかったのかもしれないな」

その隙に、シャクティが小さく呟いた。

「復讐だと？」「アポロン・ファミリア」にか？」

「あるいは、神アポロンに」

とつきに否定する言葉が出てこなかった。

やはり、奴に毒されているのだろうか。……おそらくはお互いに。

「何故そう思う?」

「何であれ、行方不明者が『発見』されたことに変わりはない。すぐに遺体を引き渡すのは難しいにしても、所属派閥には一報が入っている」

別におかしな話ではない。というより、通常の手続きだといえよう。

私もこれまで何度か——そもそも、行方不明者の遺体が収容されることは稀だが——その連絡を受け、団員を迎えに行ったことがある。

「だが、『アポロン・ファミリア』が迎えに来る前に何者かが遺体を盗み出したようだ」

「何だと?」

遺体の窃盗など、それだけでも猟奇的な話だ。

しかも、それが亡者化した者の遺体となれば、本来なら大事件だが——…

「クオオンの『神殺し』があつたせいか……」

「そうだ。さらに、その後『神罰同盟』の一件や、『メレンの悪夢』。そして、『深淵』の発生が続いた」

加えて、シャクティ達にとっては『歓楽街』でも一戦もあつたというわけだ。

ギルドにも【ガネーシャ・ファミリア】にも、果たして充分に対処できるだけの余力があつたかどうか。

それに、話題の衝撃も、さすがに『神殺し』には劣る。あるいは、今回の『深淵』禍にも。

「それで、それが何故復讐という話になる？」

「お前なら、噂くらいは耳にしているだろう」

「……【クアト・ファミリア】に関してか？」

つい先日、ほんの少しだけ関わった派閥の噂。

ボールスが語ったものとは違う、少なからずきな臭い噂を思い出す。

「復讐代行のことか」

冒険者に対する復讐を請け負っている。

かの派閥にはそんな噂が付きまどっていた。

いつの頃からかは定かではないが……私が知る限りではこの数年。

クオンが現れる少し前。【疾風】の手で最後の残党狩りが果たされ、『暗黒期』が終わつ

たばかりの頃だったはずだ。

（【アストレア・ファミリア】と入れ替わるように現れた。そう考えるのは少々穿ちすぎか）

正義の使途が復讐者に堕ちたように。

オラリオからも正義が失われ、復讐だけが残った——と。

「そうだ。その噂は、『暗黒期』の最中からあった」

そんな想像を否定するように、シヤクテイが言った。

「それは初耳だな」

私達も、『暗黒期』においてはいわゆる『正義の派閥』の中核にいたつもりだったが。

「あの頃は冒険者どころか派閥が潰えることすら別に珍しくもなかったからな。私達も、残党狩りの最中に耳にしなければ」

なるほど。あの頃なら、確かに噂にならずとも何の不思議もないか。

暗黒期に繰り返されたいくつもの惨劇は、今でも時折、悪夢となって姿を見せるほどだ。

「それに、その噂が「クアト・ファミリア」と結びついたのはもつと最近だ」

「この数年の話だな」

つまり、私が噂を耳にした頃のことだろう。

「ギルドに確認したが、「クアト・ファミリア」がオラリオを訪れたのは、今からおよそ八年前のことになる」

「『暗黒期』の最中……。いや、最盛期の直前か」

別にそれだけを見て異常だなどというつもりは欠片もない。

それどころか、当時ですら混乱に乗じて名を上げようとたくらむ神と眷属がオラリオを訪れることは珍しくなかった。

無論、その思惑が上手くいったかどうかはまた別の話だが。

(そういえば、『アンデッド』の存在が噂され始めたのも概ねその頃だな)

二年のズレを誤差ととるか、それとも準備期間ととるか。

もちろん、単なる偶然という可能性もある。

ただ、あの派閥は私達が——オラリオが知らない何かを知っている節があるのは確かだ。

それが何か……それどころか、真実であるかどうかすら、まだ分からないが。

「ああ。当時から炊き出しや負傷者の支援を主に活動していたのは私も知っている」

「ふむ……」

だとすれば、どこかで少しくらいは関わったことがあるのかもしれない。

共闘した……と、そんな表現が適切かは分からないが。

「そして、まだ調査中だが最近ではいくつかの商いにも手を出しているようだ」

「ほう？」

少し意外だった。

勝手な印象だというのは百も承知だが、いわゆる『清貧』というものを尊ぶ派閥だとばかり思っていたのだが。

「それ自体も、『暗黒期』から準備が始まっていたらしい。動乱の中で心身に大きな楷^{ハシゲ}桎^ヂを負った住民達の就労支援という訳だな」

「なるほど」

生まれ持った肉体とほぼ変わらない——ダンジョンの中での戦闘にも耐えうる義肢が、オラリオには存在する。

存在するが、そういった義肢は非常に高価だ。それこそ、中堅派閥辺りなら一気に財政が傾きかねないほどに。

冒険者ではない住民であれば、裕福な貴族かそれに匹敵するほどの豪商でもなければまず手は出せない。

「それなりに軌道に乗ってきたらしくてな。最近では魔石製品の製造。他に輸出にも手を出そうとしているようだ」

「オラリオで商売をするなら、特別珍しいことではないだろう？ それとも、何か違法行為でもしているのか？」

「いや、今のところは確認されていない」

「されていないが……と、妙に歯切れ悪く口ごもつてから、

「その成功にも『暗黒期』に築いた人脈が少なからず関わっているらしい。……いや、そのために熟成させていったのか」

どれほどの規模になっているか分からん——と。

彼女はやはり奇妙なまでに苦々しい顔で呟いた。

「お前たちは、『クアト・ファミリア』を疑っているのか？」

だとすれば、かの派閥が復讐を代行しているという確証を——少なくとも、それに近いものを掴んでいることになるが。

「……まだ何とも言えないな」

嘘だった。その確信がある。

(いったい何を掴んでいるのやら)

彼女は明らかに動揺ないし困惑していた。それとも、焦っているのだろうか。

私に嘘だと読み取らせてしまう程度には。

(例によってクオンからの情報か?)

もつとも、それを問いかけてどうなるものでもなかった。

尋ねたところで情報を私に伝えてくれるとは思えない。

今のシャクティが相手なら、クオンが関係しているかどうか程度なら見抜けるだろう。

だが、それを見抜いたところで何も解決はしない。

「話が変わるが、例の一件……カインハーストの件はどうなった？」

ため息を飲み込んでから、別の話題に切り替えた。

個人的には、そちらも無視できるものではない。

王族ハイエルフだからというだけではない。オラリオに住まう一人の冒険者としてだ。

かの一族が……『呪われた血族』が本当に動き出しているというなら、事態は差し迫っている考えていい。

「そちらはお前の協力がなければどうにもならないな」

シヤクティは肩をすくめた。

「今の状態では、まず派閥内のエルフ達が暴走するかもしれない」

「……そうか」

容姿端麗にして誇り高く、そして潔癖である——と。

私たちエルフはそう称されることが多い。

私とて別にその全てを否定するつもりはない。が、それ故に傲慢さを——あるいは醜悪さをもたらししている事もまた否定できない。

……きつと、私自身にもそういった面はあるのだろう。認めるのは面白くないが、ガレス辺りに訪ねればいくらかでも指摘してくるのは想像に難くない。

だから、分かる。

その『誇り』を否定され、穢されることを何よりも嫌うのだ。あるいは、恐れていると言つてもいいのかもしれない。

だからこそ、『ハースト』の血筋に触れることは忌避される。

エルフの戦士の誉れである『並行詠唱』を完成させ、その絶技をもつて暗黒の時代に光をもたらした一族屈指の大英雄。

一方で『神殺し』を犯し、またアルトリウスに従つて神への反逆を企むウルベイン・ハーストの父親もある。

千年経つても嘯み砕けないほど巨大な両義性を持つ存在がメタス・ハーストというエルフだ。

その血筋がオラリオにいととなれば、同胞たちも心中穏やかではいられない。

場合によつては、それこそ根絶やしにするべく暴走しかねなかつた。

そうなれば、オラリオ全体にとっては好ましい結果とはなるまい。

そして、結果としてエルフの名を貶めることにも繋がる。

何故なら、この世で最も厄介で醜悪なものの一つは暴走した『正義』なのだから。

「【ロキ・ファミリア】の【九魔姫^{ナインヘル}】ではなく、『リヴェリア・リヨス・アールヴ』という名の王族^{ハイエルフ}の協力がいると？」

それを食い止めるのは、確かに王族ハイエルフの務めかもしれない。

「その二つを分けて考える必要があるとは思えないが……まあ、そういうことだ」
「やれやれ……」

血統というのは、つくづく厄介だった。

ここまでくれば、いつそ呪いのようですらある。

いくら城を抜け出し、里を離れ、王族として扱われることを忌避しようと。

それでも、生まれ持った血からは……その血が持つ宿命からは逃れられないということだろうか。

(だが、果たして私でも抑えきれるかどうか……)

ひとまずその宿命は受け入れるとして。

その確信を持つことは、どうしてもできそうになかったが。

「ところでシャクティ」

「何だ？」

「あの娘……霞とは親しいのか？」

その問いかけに、シャクティは何故だか少し困ったような顔をした。

「霞も賭博剣闘に携わる者だからな。親しいと答えてしまうのは、少々問題がある」
「なるほど」

真正面から言われてしまえば、もはや頷くしかない。

それに、改めて思えばかげた質問だった。

例え顔見知りであつても賭博剣闘は違法行為。それを、情にほだされ見逃すというのは彼女らしくない。

「だが、霞の場合、今の時点ではさほどの問題にはならない」

「ほう？」

「意外か？」

「ああ」

特別隠していたわけでもなければ、その必要もない。

あつさり頷くと、シヤクティは肩をすくめた。

「単純な話だ。霞はもう、ほとんど足を洗っている。新しい剣闘士でも雇わない限りな」
「なるほどな」

確かに単純な話だった。

四年前ならまだしも、今やクオンの名を知らない者はこのオラリオにいない。

今さら対戦を申し込む物好きも、対戦を受け入れる命知らずも簡単には見つかるまい。

「対戦相手など現れないさ。お前達や『フレイヤ・ファミリア』の幹部が申込みでもしな

い限りはな」

半分は冗談だろう。だが、もう半分は本気で釘を刺しているのも明らかだった。

……実際、それが一番現実的な対戦カードとなるだろう。

賭博剣闘どころか派閥抗争になりかねないが。

降参だ——と。そう告げる代わりに、改めて大きく肩をすくめて見せる。

「それに、彼女に対しても手出し無用。その通知はギルド……いや、おそらくは神ウラノスからも届いている」

今度は一転して少しばかり不満そうではあったが、それとてため息一つで流せる範囲だったらしい。

それもまた、分からないではない。

確かに賭博剣闘は違法だが、血の気を持って余した冒険者たちが『腕試し』の名目でその真似事を行っているのは公然の秘密だった。

特にこのリヴィラの周辺では多いと聞く。

加えて、今のオラリオで大規模な闘技場が残っているのは『繁華街』。その中でも特に『大賭博場内部』となる。

そこは多くの外国資本が入り込み、魔石産業に次ぐ経済規模を有し——その結果『治外法権』が敷かれた区画である。

何かあれば外交問題も絡んでくるため、ギルドも運営に口を挟みにくいというわけだ。

……それどころか、そのギルドの指示により「ガネーシャ・ファミリア」がその『賭博場』の警備を受け持っていることもまた周知の事実だった。

形骸化したとまでは言わないにしても、『オラリオの憲兵』の長である彼女にはさぞかし頭の痛い問題だろう。

「それにしても、剣闘士のマナージャーらしくない娘だな」

もつとも、他に知り合いがいるわけでもないのだが。

オラリオの暗部とまでは言わないにしても、それに近い領域で生きてきたのは間違いあるまい。

だというのに、擦れたところがほとんど感じられない。

それこそ、リヴィラの街にいる一般的な上級冒険者ゴロツキよりよほど真つ当だった。

……それを言うなら、つい先ほど、神ヘルメスの『騒ぎ』に巻き込まれ、五体投地して額を地面にぶつけていった上級冒険者など市井の——生意気盛りの——子どももより素直かもしれないが。

「それは否定しないがな」

シャクティは小さく苦笑してから、少しだけその瞳に鋭い光を宿し言った。

「油断はしないことだ。あの娘はあれでなかなか強かだぞ」

「よく知っているとも」

それでもなければ、クオンのマネージャーなど務まるまい。

それに、四年前の一件でもその鱗片を見せられている。

お互いに頷きあつてから、

「さて、私はそろそろリヴィラに戻る。お前達がここを引き払うまで、できればクオンをあの街に引き留めておきたいからな」

「そうしてくれ。それと、念のためアンティアンイラ【麗 傑】達の口止めも頼む」

「そのつもりだ。……被害者の彼女たちには悪いがな」

今度の『神殺し』は窃視が理由ということになつては色々と困る——と、シャクティは最後にため息を残して天幕を出て行つた。

……それには全く同意見だった。

冗談にもならないが……奴が絡むなら本当に冗談では済まないかもしれないのだ。

今頃は、ベルセウス【万能者】も気が気ではないことだろう。

……

「馬鹿なんですかアホなんですか死にたいんですか?！」

一通りのお詫び行脚が終わり、貸し与えられた——拘留と見るべきか、それとも素直

に保護してもらったと見るべきか——天幕に戻ったところで主神ヘルメスに問い詰める。

大體、確実に「正体不明」イレギュラーがいる今の一八階層に向かおうとする時点で正気とは思えない。

さらにはこんなに目立つ真似をするなど……。

「い、いや落ち着けてアスファイ」

「落ち着けるわけないでしょう?!」

あれはもうただの神嫌いでは済まされない。

本物の『神殺し』だ。

今までは何だかんだと言って、まさか本当に殺しはしないだろうと高を括っていたが、もうそんな暢気なことは言っていられない。

「だからだよ」

私の焦燥を見透かしたのだろう。

ヘルメス様は表情を改めて言った。

「アレはもう放っておいていい存在じゃない」

「……だからと言って、私達だけではどうにもなりませんよ」

不意を突けば何とか——と、樂觀視することすら憚られた。

彼を敵に回せば、派閥抗争では済まない。

まずは主神を殺し、無力化してから皆殺しだ。私達なら敵意に感づかれた時点で、間違ひなくそうなる。

何故なら……

「神イシユタルに何かを吹き込んだのもそのためですか？」

アレが『神殺し』をする直前、ヘルメス様は神イシユタルの元を訪ねている。

それだけなら眉を顰める程度の話だが……さらにその少し前に、私達にすら内密に何かを仕入れていた。

「いやあ、あれはただ単に前から頼まれていたものを届けただけさ。偶然に手に入ったからね」

無関係を装うが……しかし、そう簡単に信じられるものではない。

アレが——イレギュラー【正体不明】が絡んでいる限りは。

「……まあ、正直なところ、あれだけの騒ぎを起こしてまだウラノスが黙認を決め込むとは思わなかったけどね」

それは確かに。神ウラノスどころか神ガネーシャすら沈黙を保っていた。

それどころか、まさか『神殺し』の大罪を免罪するとは。

(いえ、確かにあの深淵というのは危険ですが……)

そして、あれに対応できるのが彼一人だというなら、全く理解不能な判断だとは言ひ

難い。

「そして、今度はベル・クラネルを嚇けるつもりですか？」

あの少年が尋常ならざる急成長をしていることは確かのようなだ。

そして、「イレギュラー正体不明」が気にかけているのも。

しかし、刺客とするにはいくら何でも力不足すぎる。

「まさか。彼のことはまた別件さ」

別件ということは、この期に及んでなお、何かを企んでいるというわけだ。

「そんな目で見るなって。ただ、彼の自称育ての親からの依頼でもあるからね」

「ベル・クラネルの力を直接見ることがですか？」

「ま、そっちはオレ自身の娯楽も多少は入っているけどね」

嘘は言っていないだろう。

……『多少』という言葉に関して、まったく信じていないが。

ともあれ、分かったことはたった一つ。

「見届けて、どうするおつもりですか？」

「依頼人が心変わりしてくれればそれでいい。あるいは、この際ウラノスでもいいけどね」

やはり、私は少なくとももう一度は危険すぎる橋を渡らされる羽目になるわけだ。

当然ながら、装備はほとんど変わらない。借りていた魔石灯がある——というか、持つてきてしまっただけけど——だけでも幸運だった。

「言っておきますけど、水晶クリスタル・ドロップ飴はすごく貴重なんですから、しつかり味わって食べなきゃ駄目ですからね!」 地上だと三万ヴァリスはするんですから!」

「へ、これ一粒で三万ヴァリス……!?!」

僕の装備より高い夜食——というか、行動食——を採ってから。

「ここで取り乱してはいけません! いいですか、これから私の指示に従ってください!」

「わ、分かりました!」

そのエルフの方……レフィーヤさんの誘導の元で、野営地に戻ることになった。

やはり「ロキ・ファミリア」の一員ということだろう。

昼間と違い、お互いに現在地が分からない状態ながらも、砕いた水晶を通った道に。

大きく迂回したときはその原因となった大樹の幹に×印を刻み。

時にはモンスターの気配を察知し、明かりを消して近くの茂みに身を潜めながら、何とかここまで進んできた。

「なれませんよ」

もつとも、こんな状況だし、会話が弾んだりはしなかったけど。

「例え何もかもできるとなっても、それでも、全然……あの人達には追いつけません」

そんな言葉を最後に、会話は途絶えて久しい。

それからどれくらい経っただろうか。

夜の闇の中、モンスターを警戒し、息を潜めながらの行軍は、ただそれだけで時間の流れを鈍くする。

体感的には随分と長く続いた沈黙を破つたのはレフィーヤさんだった。

「あなたはあの【イレギュラー正体不明】とはどういう関係なんですか？」

……

「あなたはあの【イレギュラー正体不明】とはどういう関係なんですか？」

と。そう尋ねたのは、別に沈黙に耐えかねたわけではない。

そもそも、暢気に仲良くお話をするような仲では断じてないのだから。

あの【イレギュラー正体不明】と関係がある中で、まず間違いない一番口が軽い——というか、単純に一番隠し事が下手なのはこの少年だろうと思いつたからだだった。

……それに、アイズさん達について色々と聞かれた事への仕返しという意味もあったかもしれない。

「クオンさんですか？」

もつとも、当の少年はそういう後ろめたい感情には全く気付かなかったようだ。むしろ、心から不思議そうな顔をしているのが何となく腹立たしい。

「別に『ロキ・ファミリア』の皆さんが知りたそうなことは……」

そこで、何かを思い出したらしい。

この闇の中でも分かるほどはつきりと、焦ったような顔をした。

「え、ええと！ 僕の村の恩人なんです！」

それに気づかなかったと思われているなら心外ですが。

もし誤魔化せると思っているなら、いつそ心配になるといかなんというか……。

「二年位前に、僕の故郷の村を救ってくれたんです。まあ、襲ってきたのはコボルトの群れなんです……」

少年の話は、特別に驚くことは何もなかった。

コボルト……まして、『魔石』の力を弱体化させた『外』のコボルトなんて何匹集めても脅威にはならないと思う。

「それで、僕のお祖父ちゃんがしばらく泊まって行って欲しいって……」

それも、まあ、分からない事はなかった。

村の恩人な訳だし、泊っていくように言うのはある意味当然だった。

それくらいなら、エルフだつてする。……多分。少なくともウィーシエの里なら。

ただ——…

「それで、その時に色々冒険の仕方を教わって——…」

どうしても、その辺りから想像力に限界が来るのだった。

（まあ、直接の面識なんてほとんどないんですけど……）

私が「イレギュラー正体不明」について知っていることなんて、基本的に誰かから聞いた話でしかない。

直接見たのは、前回の遠征の時と、『豊穰の女主人』での一件。そのすぐ後のフィリア祭と……。

（昨日の、ホークウッドさん達との……）

あの戦いまで見せられれば、噂が単なる噂ではないことを認めるしかなかった。

だからこそ、この少年が語る「イレギュラー正体不明」の姿がうまく思い描けない。

私を知る「イレギュラー正体不明」は、大派閥にも迷いなく喧嘩を売るような命知らずで、神すら殺す大罪人で、女の敵で、血と灰の匂いが染みついた怪物だった。

（なのに、それじゃまるで普通の人みたいじゃないですか）

この少年は、今一四歳だといさつき聞いたばかり。

二年前なら、まだ一二歳。まだ幼いといつていい頃だ。

そんな子どもを相手にする姿なんて、全くと言っていいほど想像が——…

(いえ、でも……)

あの魔導士……カルラさんも、イレギュラー【正体不明】はただの人間だって……。

(そんなはずありません！)

だってイレギュラー【正体不明】は『神殺し』なのだ。

下界で考えられる中で最大の罪を犯したのだ。それも、五柱も。

人間であつたとしても、正気であるはずがない。

「でも、あの人は。イレギュラー【正体不明】は『神殺し』なんですよ？」

少年から返事が返ってくるより先に、一本の大木が眼前に聳え立っていた。

間が悪いのか。それとも良かったのか。

その木を見上げ、ため息を一つついてから思考を切り替える。

今は、ここから生還することが最優先だった。

(この木に登れば……)

予想通り、この木はこの辺りで特に高い。

多分、階層の中央に聳える巨大樹を見つけたこともできるはずだ。

そうすれば、現在地や野営地の方向も分かる。

「絶対に上を見ないでくださいね！」

魔導士の衣装のスカートを抑えて念を押す。

登る直前に、それに気づけたのは……きつとりヴェリア様に教わった『大樹の心』のおかげに違いない。

「見たらもうぜつつつたいに許しませんから!!」

「は、はいい?!」

さらにもう一度しっかりと念を押ししてから、私はその大木の幹を蹴ってその天辺を指したのだった。

もちろん、これでも私はL v. 3。登るのは大した手間ではなかったし、予定通り中央の巨大樹も見つけた。

そして……

……

「でも、あの人は。【イレギュラー正体不明】は『神殺し』なんですよ?」

それは、今までずっと考えずにいたことだった。

言うまでもなく、『神殺し』とは下界で最大の罪だ。

(神様や、ミアハ様は平然とされていただけ……)

それに甘えるような形で、今までは深く考えることがなかった。

いや、深く考えなかっただけだ。

まともに受け止めたなら、消化しきれないと分かっていたから。

(クオンさん……)

アンジェさんと同じく『不死の呪い』に侵されていて。

僕たちと違って『神フアルナの恩恵』を力の寄る辺としていなくて。

あのアルミラージを生み出した『深淵』の主を倒していて。

きつと、僕たちが知らない『冒険』を乗り越えていて。

そして、その果てに……

(『火継ぎの王』……)

それとも、『薪の王』と呼ぶべきなのだろうか。

多分、英雄と呼ばれる存在に至ったのだ。

(クオンさん、あなたは、いったい……)

何者なのか——と。

想像の中の後ろ姿に問いかけようとして、ようやく思い至った。

【イレギュラー正体不明】

神様たちですらそう呼び表すしかなかったのだと。

ただの人間でしかない僕がいくら考えたところで、その答えに行き当たる事はきつとできないだろう。

だから——…

(ちゃんとして、向き合わない……)

神様は、アンジェさんをファミリアに迎え入れた。

なら、きつともう『深淵』や『闇霊』のような神様ですら知らないような異常事態イレギュラーとも無関係ではいられない。

そんなことは、鈍い僕にだって分かっている。分かっていたつもりだ。

ただ、レフィーヤさんに指摘されるまで、分かっていたくないふりをしていただけ。

「明かりを消してください！」

物思いに沈む直前、空からレフィーヤさんが降ってきた。

「えっ、えっ?」

「早く!」

その剣幕に——それと、考え事からうまく頭を切り替えきれずに——目を白黒させていると、レフィーヤさんはさらに表情を険しくして叫んだ。

「は、はい!」

頷くより早く、魔石灯を消灯する。

唯一の明かりが消えれば、後に残るのは夜の闇だけだ。

何が何だかよく分からないけど……レフィーヤさんが苦悩するような事態が差し迫っているらしい。

「すみません……私についできてください」

困惑していると、決意を固めた様子でレフィーヤさんが言った。

(あれは……?)

深い闇の中、目を凝らしながらレフィーヤさんの後を追って歩く。

程なく、黒衣をまとった二人の人影が少し先を歩いていることに気付いた。

どうやら、その二人を尾行しているらしいけど……。

「だ、誰なんですか、あの人達？」

いくら夜目でも、モンスターのようにには見えなかった。

もちろん、この前の赤黒い幽霊——多分、『闇霊』とも違う。

「……簡単に言ってしまうと、私達と敵対している組織です」

「口、【ロキ・ファミリア】とっ？」

もしかして、この前、アイズさんとの特訓の帰り道に襲い掛かってきた人たちの仲間

だった……。

(確か、あの人達も黒づくめだったっけ)

だとしたら、かなり危険だ。

あの襲撃者達は——その主力らしき人物はアイズさんと互角に戦っていたのだから

「あまり詮索しないでください」

「ご、ごめんなさい」

一人戦慄していると、ひそめた声で器用に怒鳴られたのだった。

そして、それからしばらくして。

(もしかして、ここって……)

二人組の索敵を潜り抜けながら尾行を続けていると、切り立った岩壁が近づいてきた。

方向は分からないものの、階層の隅にまで到達しつつある。

別にだからという訳ではないだろうけど、森は拓けつつあった。

今まで身を潜めていた樹や茂みどころか脇道すらない。

頭上を覆っていた枝葉も薄くなり、飛び上がって隠れることもできそうになかった。

それらと入れ替わるように現れたのは、大きな青水晶の柱。

高さは一番低くて二Mはある。

村にいた頃、クオンさんが話してくれた『古代』の遺跡——環状列石ストーンサークルというのは、こ

ういう感じなのかもしれない。

ただ、それらは身を隠すにはさほど役には立ちそうになかった。

黒衣の二人組はその水晶林の中を通り抜け、さらに岩壁へと向かっていく。

この追跡劇の終着が近いことは、嫌でも分かる。

同じく緊張をにじませたレフイーヤさんが、視線だけで追跡続行を告げる。それに頷いてから。

ひりつくような緊張感に、体がわずかに強張ってしまっていることを自覚した。

——これから教えることが、どれだけ冒険者の役に立つかは分からないが

二人組を追って、水晶林に踏み込んだ時。

——誰かを追跡する時は、周囲に注意しろよ

今さらになって、クオンさんの言葉を思い出した。

——わざと追跡させて、罠に誘い込む手合いもいるからな

その教えを、今の今まで忘れていた僕を咎めるように。

「えっ?」

がばつ、と。

何の前触れもなく、地面が割れたのだった。

……

再会の酒宴が終わった頃には、一八階層に『夜』が訪れていた。

「なーんかさつきからベルが面白いことになっていそうな気配がするんだよなあ」

道中で偶然に見つけた水クリスタル・ドロップ晶飴を口の中で転がしながら、自分でもよく分からない予

感を口にする。

といつても、つい先日——いや、本当に——この階層までの決死行を敢行したばかりなのだ。

流石に今週分の予定は消化しているはずだが。

「どんな気配だ？」

傍らのシャクティが律義に突っ込んでくる。

……まあ、酒宴が終わったのは彼女が嗅ぎつけてきたからだが。

さすがにリヴィラの酒場も「ガネーシャ・ファミア」の団長様からは匿ってくれないらしい。

それでも、予想よりも随分と遅かったのだから良しとしておこう。

何故かあんまり小言も言われなかったし。

見つけた水クリスタル・ドロップ晶飴を一つ捧げたのが、そんなに効果的だったのだろうか？

「……いや、それよりも何故こんな場所にいる？」

「酔い覚ましついでの宝探し、かな」

いや、残念ながらすでに『酔う』なんて人間性は残っていないが。

「宝探しだど？」

怪訝そうな顔でシャクティが訪ねてくる。

「こんな森に何かがある？」

「今舐めてるだろ？」

霞から聞いた話だと、確か一瓶で三万ヴァリス程するらしい。

貴族御用達の嗜好品だとか何とか……。

(あゝ……。それくらいなら、大派閥の団長にとつては大したものでもないのか?)

実のところ、その辺の懐具合は今もよく分からない。

とりあえず、睨まれたので肩をすくめてから、

「真面目な話。それが分かったら、『宝探し』にならないだろう？」

今俺たちがいるのは、リヴィラから見て南東に広がる森だった。

「ある前提なのか？」

「ああ。この近くに『何か』はあるはずだ」

もちろん、それが何かまではまだ分からないが。

「何故そう思う？」

シャクティに重ねて問われ束の間、空を——いや、見えても精々が一八階層の天井だ

が——を見上げてから。

「パッチ……お前の顔見た途端、さっさと逃げた奴のことだが。あいつが、ここに『お宝』

があるって言ってたからな」

パッチはシャクティが踏み込んできた瞬間、速攻で逃げやがった。

流石にいつものノリで誤魔化せる相手ではないと踏んでいるのだろう。

そういうところは抜け目がない男だ。

(ま、相変わらずで何よりといったところか)

あの禿頭——と、そう思う感情が全くないわけでもないが。

何しろ、どさくさに紛れてきつちり会計を押し付けられているわけだし。

……いや、違った。間違えた。問題はそつちじゃない。

あの野郎、俺はあのノリで誤魔化せると思ってたやがるらしい。

「あいつが、ああいうことを言った時は実際に何かあるんだよ」

レアの時も。ロザリアの時も。そして、もちろん『輪の都』でも。

いやまあ、あの『火防女の魂』の時は若干怪しいし……地下墓地の橋に至っては、単

に本気で殺しに来ただけのような気もするが。

「ずいぶんと信用しているんだな」

素直に驚いた口調でシャクティに言われ、思わず返事と表情に困る。

「いや、今だつてあいつに背中を向けるのは躊躇うぞ？ あと、あいつが傍にいる橋を渡

るのも」

ちなみに、今も足元にはいつも以上に警戒している。水晶クリスタルドロンブ館を見つけたのはその

おかげだ。

それはともかく。

理由は何であれ、あいつの言葉に従ってノコノコとこんなところまで来てしまったことは事実だった。

それは認めるとして、だからと言って信用しているとされて頷く気になるかという
と……。

「……けど、まあ、いい加減腐れ縁だからな」

何だかんだと、一番付き合いが長いのがあの禿丸である辺り、我ながら業が深いというか何というか。

「お前とそのパッチという男の関係は分からないが……」

納得してくれたのか、ため息をついてから、シャクティは話題を変えた。

「知り合いからの情報というには、随分と念入りに霞たちについてこないよう言い聞かせていたな？」

「当たり前だろう」

今一緒にいるのは、ソラールとシャクティの二人だけだ。

間違つても霞を連れてくる訳にはいかない。

万が一に備えて、カルラとアイシャにも霞の護衛を頼み込んできている。

何故なら——…

「この先、絶対にろくでもない事が起こるぞ」

何しろ、あのパッチが『お宝』があると云ったのだ。

何があるにしても、それより先に厄介事が待っている。何だつたら古竜がいても驚かない。

それに関して言えば、全幅の信頼を置いているといつても過言ではなかった。

……真剣な話、今の俺一人では対応しきれない『何か』ということは充分にあり得る。いくら手練れとはいえ、ただの生者であるシャクティにもできればついてきて欲しくはなかったのだが。

「それに、ベル・クラネルが巻き込まれていると？」

「あく……。あいつなら、巻き込まれていても不思議じゃないな」

ははっ——と。気楽に笑い飛ばそうとしたその瞬間。

ゴ——ツツ!!

まさに俺たちが目指す先から、天を穿たんばかりに光の柱が立ち上つたのだった。

ソウルの気配は感じられない。なら、ヘステイアがどうにかなつたというわけではないはずだ。

つまり、

(どうやら、あの廃教会に帰るまでが今週分というわけか)
そんな結論を導き出してから、肩をすくめた。

「ほらな」

いや、別にあれをベルが撃つたとは限らないわけだが。

……まあ、可能性で論ずるなら、皆無ではないはずだ。少なくとも、俺はあんな大火力を仕込んだ覚えがないし。

(それとも、ランクアップってやつ之恩恵なのか?)

ランクアップとは感覚が狂うほど急激な成長のことだと、アイシャが言っていたような気がする。

もしあれがいきなり撃てるようになるなら、それもそうだろう。

なんて、そんなことを考えていると。

「言っている場合か?!

ソラールとシャクテイの叫びが、実に綺麗に重なって響き渡った。

確かに。

あれにパッチの言う『お宝』なにかが関与しているなら、安穩としている暇はない。口の中に残るひんやりとした塊を噛み砕いてから、夜の森の中を走りだした。

……

「やれやれ。あいつの人脈つてのは、よく分かんねえな」

昔っから手の早ええ奴だとは知っていたが……まさかマジで憲兵長の女ともよろしくやつてやがったとは。

掃き溜めの中——その中でも少し小高い区画——を歩きながら、軽く首を振って嘆息して……ふと思いつく。

（あ……。けど、あの甘ちゃんにはむしろお似合いなのかねえ？）

あのクソツたれな巡礼地で、あの変人と同じか、それ以上に人間臭くあり続けた変わり者だ。

英雄気取りでもなければ聖人氣取りでもなく。

人並みに欲があつて——と、というか、かなり女にはだらしなく——怒りもすりや笑いもする。

まるで普通の生者のような『人間性』を保ったまま、二度も『玉座』に辿り着きやがった英雄様だ。

冒険者の街でわざわざ憲兵をやるうという変わり者どもとは馬が合うのかもしれない。

「あん？」

小さく鼻を鳴らしたちようどその時。

南東の方向。森の奥から魔術——いや、魔法と思しき光の柱が立ち昇った。
(おーおー。相変わらず欲深い奴はいるもんだ)

あの小栗鼠をからかった時に盗み聞きをしていた奴でもいたのだろう。
それとも、一緒にいたアマゾネスどもが飛び込んだか。

(ま、どうせあのちんちくりんにはあんな火力は出せねえだろうしな)
いずれにしても、あの様子ならくたばった訳ではないだろう。

ついでにあの【墓王の眷属】もどき——確か闇派閥イザイルスとかいうんだったか——どもの鼻でも明かしてやればいい。

(ま、あのクソどもが何をやってるかまでは知らねえけどな)

俺の知る聖職者とは意味合いが少し違うようだが、やっていることはさほど変わりない。
い。

まったく、どいつもこいつもクソツたればかりだ。

(チツ、飲み直すか)

どうせ酔えもしないくせにそんなことを思い、小さく苦笑した。

そもそも、酒を飲むという習慣ができたのは、この掃き溜めに流れ着いてからだった
ような気がする。

酔えもしない酒を飲むようになったのは……まあ、あのたまねぎ親父が寄越した酒の

味が案外と悪くなかったからだろう。

もちろん、そんなことは間違つても言葉にする気はないが。肩をすくめてから、進路を変える。

(さて、どこに行くかね?)

変えたといつても、行先までは定まっていな。

と言つても、悩むほどでもなかつた。

この掃き溜めもならず者街のくせに、酒場の数はそう多くはないのだ。

すつかり『夜』になつた街の中を適当にぶらつき、見えてきたのは掘つ立て小屋と大差がない……というか、天幕そのものの安酒場だつた。

もつとも、今さらそれが気になるはずもない。

屋根があつて壁があるなら上等というものだ。

……普段であれば、その通りなのだ。

(屑野郎が……)

さして旨くもない酒をグラスの中で弄びながら小さく舌打ちする。

安酒場の居心地はきつぱりと最悪だつた。

理由の方も、はつきりしている。

「オレを楽しませてくれる、面白い見世物シヨウにしてくれ」

一丁前に旅装束なんぞ着込んだクソ野郎のせいだ。

店に入った時から、今誑かされているゴロツキどもが騒いでいたので距離をとつておいたのが幸いしたのか、こちらには気づいていないの。

いや、気づいていても気にしていないのか。

(どうでもいいがな)

早くいなくならねえものかと毒づいていると、ようやくそのクソ野郎が外に出て行った。

少し遅れて青い髪の女も、おそらく、あの腐れの眷属だろう。

(上品ぶつた善人面しやがって、ど腐れ尼が……)

私も振り回されている被害者です。そう言わんばかりにため息を残して去つていったクソ尼を罵る。

まったく忌々しい。てめえらは自分から好き好んでクソどもの手先になつたんだらうが。

この掃き溜めの連中と同じく素直に悪党面をしてりや少しは可愛げがあるものを。

(あの甘ちゃんを普通にブチ切れさせるわけだ)

そういう噂を聞いたことがある。

不死になつてもお盛んなあの馬鹿が『歓楽街』を攻め落として……その流れで他にも

いくつか派閥を潰していた頃。

何とかいいうお強い二大派閥に並んでヤバいと言われていたのがあの連中だった。

その時は欠片も興味がなかったが……まあ、アレなら納得というものだ。

あの屑からはロードランで出くわしたあの蛇と同じ臭いがする。

(そういうことなら、遺品はありがたくいただくとするかな)

商人たるもの、常に商品の吟味を怠ってはならないのだ。

道具だつて人知れず朽ちていくよりは、誰かに売り払われた方が本望だろう。

さて、それなら具体的にどこで何をどうやって仕掛けるか……

「お前達、本当にあの神の戯言に従うつもりか？」

思考の海に沈む直前、そこそこ聞き覚えのある陰気な声が出た。

視線を向けると、俺と同じく店の奥隅——俺から見てちょうど正反対の方——に、

ホークウツドの野郎が座っていた。

(珍しいことがあるもんだ)

相変わらずの不景気そうな面を横目で見やり、小さく唸る。

あの野郎はどういう訳だか地上に留まり、さらにはその時間に合わせて生活してい

るらしい。

何でも、誰かを探しているらしいが……。

「自分の半分も生きちゃいない小僧を寄つてたかつてという方がみつともないと思うがな」

ダラダラと意味のないことを考えていると、ホークウッドは相変わらずの不景氣そうな顔でぞろぞろと出ていこうとするゴロツキどもに告げた。

ほとんど聞き流していたので、よく分からないが……標的はあの白髪のカギ——どこぞの甘ちゃんよりさらに間抜けそうな顔をした小僧らしい。

あの白兎がゴロツキに喧嘩を売るとも思えないし、どうせ単なる逆恨みだろう。

つまり——…

(そいつあ正論だがねえ)

妬むだけで何もせず、ありもしない罪咎ざいきゅうを大仰に喚きたてる。

自尊心だけを肥え太らせたクソどもに正論など突き付けたところで、どうせ見ないふりをするだけだ。

他者を貶めれば、それだけで自分が偉くなれると思ひ込みたがつて……それすらも、てめえに危険が及ぶようなことはしたくない。

そんな連中なのだから。

「てめえには」

提案者らしき大男は、齒を噛みしめ拳を握りながら、ギロリとホークウッドを睨む。

「てめえには分からねえよ。あの【正体不明】^{イレギュラー}よりもお強いてめえにはな……い」
 やべえ。空気も読まずに吹き出すところだった。

（いやいや、あいつは何でまだ亡者になってねえのか分からねえようなポンコツ野郎だぞ）

ロスリックの祭祀場で、何やら大仰な儀式を受けていたようだし、流石に単なる雑魚とは言えないだろうが。

しかし、例えばリロイだのタルカスだの歴史に名を遺すような『英雄様』とは比べ物にもならないほど凡庸な奴だった。

それこそ、凡庸度合いならこのゴロツキどもと大差ないはずだが。

（つーか、あんなに方々で死にまくってるのに、なんでまだ正気を保ってるんだろうな？）

逃げ足の速さと強かさにはそれなりの自負があった俺ですら、危うく亡者になりかけたつてのに。

何の手違いか『玉座』に辿り着いたのは本当らしいが……しかし、歴代【薪の王】の中では下から数えた方が早そうな気がする。

真つ先に火に飛び込んだ癖に、【薪の王】としてではなく、『火のない灰』として蘇ってくるような奴だし。

その癖、もう一度『玉座』にまで辿り着いてやがるんだから割と本気で訳が分からない。
い。

(世の中つてのは不思議なことが起こるもんだな)

まあ、神どもが作ったクソツたれな儀式だ。欠陥だらけだったところで、驚くに値しないが。

——などと。何とか真面目なことを考えて、笑いの衝動をそらし切った頃には、ゴロツキどもは店を出て行った。

「そうか。……そうかもな」

コツンと。ホークウツドがジョツキをテーブルに戻す音だけが人気の亡くなった酒場に虚しく響く。

(やっぱ人間関係つーのは奇妙なもんだな)

あの様子なら、案外と本気で除け者にされたことに凹んでいるのかもしれない。

(あく……。奇妙つてわけでもねえのか?)

奴はどちらかと言えば、あのゴロツキども寄りだ。……いや、それを言うなら『火のない灰』は総じてゴロツキ寄りだが。

何しろ、『火のない灰』とは名もなく、薪にもなれなかった——その癖なお、まだ『英雄』^火に焦がれ続ける不死なのだから。

「よお、兄弟」

まあ、それはともかくとして。

俺たち二人を除き、無人となった酒場の中をジョッキを片手に、奴のいるテーブルに近づく。

「……何の用だ？」

「なあに。たまには旧交でも温めようと思っただけさ」

「温めるような仲もないだろうが」

全くつれないことだ。

「そっちは随分と仲良くやってたらしいな」

同胞のよしみとして、からかいに……もとい、愚痴くらいは聞いてやろうと思ったつてのに。

「……お前には関係ない話だろう」

こいつは思った以上にマジだったらしい。

割と本気で驚きを覚えていた。

「そりやそうだがな。……けど、このままだと奴ら死ぬぜ？」

勝手に対面に座ってから、言ってる。

「何しろ、連中が狙ってる子兎はあの甘ちゃんのお気に入りだからな」

もつとも、そうは言ったところで。

あの甘ちゃんも、あれで古くから巡礼地をウロウロしている年季の入った不死人だ。ゴロツキに絡まれ、多少焼きを入れられたくらいでは別に気にもしないだろうが。

あの甘ちゃんは元々旅から旅の放浪者だったと聞いているし、世渡りの術——郷に入つては郷に従う程度の知恵は持っているわけだ。

ただし——…

「……うれしいな」

それでも、奴は伊達に「王狩り」などと呼ばれているわけではない。

必要とあれば、相手が誰であれ、何であれ必ず殺す。

あの甘ちゃんは、ついには『火の時代』そのものすら殺して見せた生粹の殺戮者でもあるのだから。

加えて、今回はその『火の時代』の亡霊——生粹の亡者^{かみ}が相手だ。

小奇麗な道理など端から投げ捨て、踏みこむだろう。

「あの屑野郎が裏で糸引いてると知れば、皆殺し待ったなしだな」

まず間違いなく、あのゴロツキどもは殺したという自覚すら与えられないうちに殺される。

それを覆せるほどの『器』を持っているなら、この『時代』にこんなところで腐っちゃ

いないだろう。

「……何が言いたいんだ？」

「別に？ 先に話を通しておきや良いんじやねえのとか思つてねえよ」

「……解せないな。お前が首を突つ込んだところで、特に得るものはないだろう？」

まあ、馬鹿が馬鹿やるだけなら、好きにさせときやいいと思うが。

それでくたばつたとしても自業自得というやつだ。

それこそ、この掃き溜め——何よりも、この穴倉は元からそういう場所なのだから。

いわゆる常識という奴だ。あの甘ちゃんだつていちいち噛みついたりはしないだろう。

あのクソツたれな巡礼地でも当たり前のことだったのだから。

「いやいや、それでもねえって」

軽く肩をすくめて見せる。

「奴らは大事な力モ……いや、違う。間違えた。大切な常連様だからな」

それに、あの屑野郎とど腐れ尼の思い通りに事が進むのを黙って見ているのも面白くねえ。

いつも通り、その背中を後ろから蹴り飛ばして……。

ついでに、折角だ。ちよいと小遣いでも稼がせてもらおうとしよう。

「アルクス・レイ」!!

「ファイアボルト」!!

「図らずもベル・クラネルとの共闘の末、韃蔓のような『新種』を撃破して。」

「はあ、はあ……っ！ ちよつと、大丈夫ですか!？」

「……は、はい……」

あの純白の砲撃の代償を支払ったかのように、ぐったりとしたベル・クラネルを担ぎ、溶解液に満ちた『落とし穴』からやっと脱出できたと思つたら。

「何だ、これは!？」

今度は、闇派閥イヴィルスの残党が戻ってきていた。

騒ぎすぎたのだと自戒するが……しかし、それでもしなければ、今頃は二人仲良く骨になつていたのも事実だった。

たつた今飛び出してきた『落とし穴』の底に眠っていた他の冒険者のように。

「千の妖精」……「ロキ・ファミリア」!？」

「巨韃蔓を倒したのか!？」

「おのれ、食人花を出せ!？」

布の上からでも分かるほど顔を歪め、忌々しいといわんばかりに歯ぎしりする三人。でも、歯噛みしたいのは私達も同じだった。

言うまでもなく、消耗は深刻。そして、相手はあの『新種』だ。

パントリー食糧庫の時とは違い、私も『並行詠唱』を身に着けている。

とはいえ、『魔力』に反応する食人花を——しかも、まず間違いなく複数体——相手にしながら、歌いきれるかどうか……。

「く……っ！」

状況を察した少年が、歯を食いしばりながら黒いナイフを構える。

ただ、その姿は今にもナイフを取り落としそうなほどに頼りない。

もし振り回せば、そのままどこかへすっぽ抜けて行ってしまいそうだ。

先ほどのように前衛として期待はできない。

大体、食人花はLv. 2——しかも、ランクアップしたばかり——には荷が重い相手

だった。

まして——…

(数が多い……！)

どこかから檻が明けられる音が響き、残党たちが消えていった茂みから次々と現れてくる。

その数、一〇体。数だけ見れば食糧庫パントリーの時には遠く及ばない。

ただ、こちらはたつた二人。しかも、揃って消耗しきっている。

絶体絶命という意味では今も全く同じだった。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

破鐘われがねの吠声ほえこえが一八階層の『夜』を震わせる。

その直後。

『ガッツ?!』

「——えっ?」

「不穏な騒ぎを聞きつけてくれば……新種のモンスター、ですか」

一陣の風が、凄まじい勢いで戦場に介入した。

……

一方その頃。

疾風が戦場を蹂躪する陰で、一つの戦いが終わりを迎えていた。

「やれやれ。破裂亡者を相手にする時は、殺られる前に殺るのが鉄則なんだがな」

腕力にものを言わせて強引にむしり取った『自爆装置』をぶら下げながら嘆息した。

足元には闇派閥の残党が三人ほど転がっている。

その傍ではソラールが同じく『自爆装置』をむしり取ってソウルに取り込んでいた。

シャクティが剥ぎ取った『自爆装置』は、少し離れた場所に転がっている。

投げ捨てる前に起爆装置部分は破壊していたのを見た。あれなら、そう簡単には爆発すまい。

「これなら、巡礼地の方が気楽だったかもな」

今回はソウルよりも情報の方が圧倒的に優先度が高い。

必然、殺していい敵かどうかをよく吟味する必要があるわけだ。

まったく、面倒なことこの上ない。

「向こうは問題ないようだな」

俺のぼやきに苦笑してから、ソラールが少し背後を振り返った。

「ああ」

後方の騒動は、すでに終息しつつある。

どちらが勝ったかは……まあ、ベルの方にはリユーが——ええと、確かティアの方だったか？——が向かっている。

あの『雑草』くらいならどうにでも料理するに決まっていた。

「さて、お前達には聞きたいことがある」

そんな中で、シャクティはまだ意識を保っている一人——つまりは、彼女自身が上手く無力化した者——への尋問を始めていた。

両肩、肘、手首の骨が綺麗に外されている。

一方で両膝を力業で蹴り砕いている辺りに、絶対に逃がさないという執念が滲んでいるといえよう。

(それにしても、器用なものだな)

素手でもそれなりに戦えるつもりだが、ああいった技術に関してはアイシャやシャクティに遠く及ばない。

……いや、膝を蹴り砕くくらいなら俺やソラルにだってできるが。

「あの『新種』を操っているのは、お前達か？　そして、ここで何をしている？」

そのシャクティは、いつになく冷めた声で問いかけていた。

(……そういや、何か因縁があるんだったか？)

この連中は、つい数年前まで随分と大暴れしていたという。

憲兵の長として因縁がないはずもないが、それとは別に確か——…

(確か妹を失ったとかなんとか……)

当然というべきか。【ガネーシャ・ファミリア】そのものとは特別に付き合いが深いわけではないが。

四年前に誰かがそんな話をしていたように思う。

そして、それは別に珍しい話ではなかったとも。

(人間って奴はこれだから……)

パッチではないが、いつの世も変わらないものだ。

嘆息してから、ひとまずシャクティに助け舟を出してやることにした。

シャクティやガネーシャから面倒ごとを押し付けられていた頃——と、言っても今もさほど変わらないが——オレック爺さんからいくらか情報を買っている。

あの爺さんは、この『自爆装置』を身に着けた死兵どもは「タナトス・ファミア」だと言っていた。

七年前の『死の七日間』とやらを生き延び、とあるエルフの復讐の刃すら届かなかった闇派閥イウイリスの一派だとか。

さらに言えば、その神がどうやって人間を集めているかも。

「イ、イレギユラー【正体不明】……」

近づくと、その男——声からすると、おそらく男だろう——が呻いた。

「何だ。お前達も俺をそう呼ぶんだな」

あの赤毛の美人は俺のことを『亡者の王』などと呼んだが。

……あれはあれで奇妙な話だ。

その呼び方で俺を呼ぶとすれば、向こうにはロンドールの関係者がいることになる。しかし、もしユリアがああ美人と行動を共にしているなら、俺たちのことを知らなす

ぎる。

もちろん、ユリアが情報を出し渋っている可能性もあるが……。

「まあ、いい」

全く気にならないとまでは言わないが、だからと言って特別に優先度の高い情報でもない。

それに、呼び方ひとつとって想像を巡らせたところでどこまでの意味があることやら。

「別の質問をしようか」

多少なりと知識があるなら、ありがたく利用させてもらおうとしよう。

まずは挨拶代わりに、ソウルから《肉断ち包丁》を取り出し、倒れているそいつの鼻先に突き立ててやる。

人間とは知恵を持つ生き物であり、それ以上に想像力からは逃げられない生き物だ。

目の前の道具が何であるかは知識として知っているだろうし、この異様な大きさが何のために必要なのかを想像するのはさほど難しくはあるまい。

健気なまでの精神力ですぐさま押し殺したが……それでも、その瞳に一瞬だけ怯えの色が宿った。

それに満足してから、続ける。

「俺が神を完全に殺せるという話は聞いているか？」

何と言ったか。あのイシユタルの取り巻きどもは、誰かにそんなことを吹き込まれたらしい。

完全な神殺しという表現はともかく……実際のところ、ソウルを奪われては古竜とてただでは済まないのだ。

唯一の例外と言っているのは、不死人おれたちくらいなものだが……だからといって、全く無事で済むわけでもない。

まして、火を失った神など。

「どうやるか、教えてやろうか？」

襲撃者達が、フードの向こうで怪訝な顔をするのが心配として伝わってくる。

『ソウルの業』……『魂喰らい』の術を知っているからだ」

アイシャに身の上話をした時、彼女は『ソウルの業』をそのように言い表した。

別に取り込むだけが能ではないと思うが……その認識が全くの間違いということもないはずだ。

それに、今は詳細などどうでもいい。

「そして、俺はお前たちの願いも知っている」

務めて無表情に——いや、つまらないものでも見るような表情を意識して。

淡々と言葉を続ける。

「それを踏まえて、最後に一度だけ訊こう。俺に魂を喰われてなお、そんな安穩が許されると思うか？」

先に逝った誰かとの再会。

それこそが、この連中にとって文字通り己の命を賭してでも叶えたい悲願だという。

俺とて元々は人間だ。その気持ち分からない事はないが……まあ、今回は残念ながら敵同士だ。

精々利用させてもらおうとしよう。

「どうせ三人もいるんだ。誰かで実演でもしてみせようか？」

右手に《ダークハンド》を顕在させる。

小ロンドでは散々世話になった邪法だが……気づけば自分でもできるようになっていた。

案外と、ユリアたちに目をつけられたのはそのせいだったりするのかもしれない。

「ひい……っ?!」

無論、『ソウルの業』と『吸精の業』は別物だ——が、最後の結果だけを見るなら些末な問題でしかない。

鈍い紫色の輝きを宿すその掌を近づけると、地に伏した男の腰辺りの地面に染みが広

がった。

別に無様だとは思わない。

死の恐怖すら相克する渴望を永遠に否定される。

その恐怖に耐えられる者を見つけてくる方が難しいだろう。

効果は充分そうだ——と。ただそれだけ。冷めた感慨だけが胸中に浮かんで消えた。

「わ、私は……！ 私達は！」「タナトス・ファミリア」だ！」

碎かれた足と、封じられた腕をばたつかせながら、シヤクテイに縋りつくかのように

……いや、実際にそうだったのだろう。

どうにかまだ動く体をねじり、必死に縋りつきながら男が叫んだ。

「あの『新種』で、一体何を企んでいる？」

「詳しいことは知らない！ 本当には知らないんだ！」

「知っている範囲で話せ」

さて。シヤクテイの手助けはこれで充分だろう。

そろそろ本命を迎える用意するのでしょうか。

(向こうも、いい加減焦れた頃だろうからなッ！)

左右の装備を大盾——《大扉の盾》に切り替え、固く閉ざす。

直後、その表面を火炎が直撃した。

（魔法……いや、『魔剣』の方か？）

どちらでもいいが、何分この大盾の大半は木製なのだ。

流石に少々相性が悪い……と、それは確かなことだが。

今はそれもさほどの問題にはならない。

充分に耐え凌げる。その確信があつた。

『チィ?!』

爆炎が消滅すると同時、構えを解いて横に跳ぶ。

それと同時に、『雷の槍』が『夜』の闇を引き裂き奔つた。

特別申し合わせてはいないが……まあ、そこはどこの竜狩り様と処刑人に散々にし

ごかれた身だ。

この程度の連携なら造作もない。

「

とはいえ、相手も只者でない。その雷槍は空を穿つに留まつた。

もつとも、こちらもそれを見送るほど暢気ではないのだ。

向こうが飛び退く方向を推測し、素早く炎の憧憬を思い描く。

曰く【大火球】。

単純だが強力。何より使い勝手がいい。

その呪術は狙い変わらず飛び退いた襲撃者の左腕を吹き飛ばした。

『クウ……ッ!?!』

片腕を失い、体の均衡を失った襲撃者が地面に激突して転がる。

仕留めきれなかったというのは、少しばかり危険だが……動きを止めたなら、ひとまず満足しておくべきか。

「俺達の背後を取るには、ちと殺気の消し方が甘かったな」

「そのようだ」

軽口を叩きながら、ソラールと二人で左右を固める。

その襲撃者は、仮面にローブを着込んでいた。素顔どころか、体格すら分からない。

(さて。この何者かから情報を引き出せるか?)

誰に問うまでもなく、望み薄なのは分かっていた。

せめて、後ろの情報源を封じられないようにすべきだろう。

『オノレ、イレギュラー【正体不明】……!』

「ほう? お前は俺をそう呼ぶんだな」

男と女の声が混じりあった奇怪な呻き声に、思わず応じていた。

この仮面は、てっきりあの赤毛の美人と同じ呼び方をすると思っていたのだが。

本当に少しだけ驚きを覚えてから、ふと思いつく。

「もしかしてお前、本体はこいつらと同じ真つ当な人間なのか？」

いや、『真つ当な』という表現が適切なのかは少々悩むところだが。

あの美人と違い、普段は普通の冒険者に紛れているのではないだろうか。少なくとも、とつさにそちらの呼び方が出てしまう程度には。

『……ッ?!』

詳しい理由はともかくとして、実際に仮面自身にとつても失言の類だったらしい。

呪詛とも憤怒ともつかぬ気配が皮膚を叩く錯覚を覚えた。——が、我を忘れて飛び掛かってくる程には頭に血が上っていない。

むしろ、仕切り直しでも目論んでいるのか、じりじりと後退していく。

確かに、森の中に潜り込まれては面倒だが——…

「これは善意からの助言だが。あまり下がらない方がいい」

『何ダト?』

存外と素直に、その仮面が口を開いた。

別にだからという訳でもないが、軽く肩をすくめて見せる。

「気づいていないのか? 俺達よりよほど加減を知らない奴が背後まで迫っているぞ」

『ナ——…ッ!?!』

訝しむ言葉すらも最後まで言わせてもらえない辺り、本当に容赦がない。

悲鳴すら置き去りにして、仮面がこちらに吹っ飛んでくる。

「自覚がないとは言いませんが……。それでも、貴方にまで言われるのは心外だ」

そして、吹っ飛ばした張本人——どこその飲食店店員は、心から本気でそんなことを言った。

「……よく言うよ、全く」

ともあれ、これで——半ばなし崩しだが——左右に加えて後方も抑えた。

残る道は馬鹿正直に正面突破くらいか。

とはいえ、そこにも三人組を尋問中のシャクティが陣取っている。

今の状況で三人——もしくははシャクティを含めて四人——をまとめて皆殺しにできるかと言われれば……。まあ、魔法でも使わない限りは無理だろう。

だが、『魔法』とは一般的に魔術や奇跡より長い詠唱を必要とする。

発動前に潰すことは可能だろうが……

(いや、奴は『魔剣』を持っていたな)

使い方にもよるらしいが、一発撃ち切りというわけではないと聞いている。

当然だ。使い捨てなら火炎壺や魔力壺の方で充分なのだから。

つまり、最低でもあと二度か三度は使えろと見積もっておくべきだ。

(それに、是が非でも連中の口を塞ぎたいはずだ)

でなければ、今この時に、劣勢覚悟で姿を見せる理由がない。

この仮面にとつての勝利条件とはつまり、俺達を出し抜き、連中の口を塞ぐことと見積もっている。

さて、この状況でその条件を満たす手があるとしたら、それは何か——？

『闇派閥ノ残り滓イグイリスメ……。足ヲ引ツ張ルダケノ無能トモ』

「残り滓はお互い様だろう？」

呪詛の言葉を鼻で笑ってやる。

その仮面の正体が分かった訳ではないが……どちらと言えば、生者ひとではなく亡者に近いように感じる。

いや、違う。より正確に言い表すなら、もつと別の言葉がある。

「いや、お前は差し当たり燃え滓とでも言った方がいいか？」

そう。目の前のそれはむしろ霊体に近い。

(驚くことではない)

この『時代』にサイン石だのオーブだのが……あるいはそれに類似する魔道具マジックアイテムが存在するという話は今のところ聞いていない。

聞いてはいないが、しかし闇派閥どもに『潰れた赤い瞳のオーブ』を出回っていることはもはや疑いない。不死人が参加していることもだ。

つまり、この仮面は『火の時代』の燃え滓の一人ということに……

(なるなら、少しは気が楽だな)

少なくとも、慣れ親しんだ相手なのだから。

だが、実際にはおそらく違う。

腕を吹き飛ばした時、ソウルが流れてくる感触が全くなかった。

目の前のそれが、俺の知る『霊体』ではないとして。

加えて、あくまで『冒険者』寄りの存在であると仮定するなら。

それなら、何が考えられるか。

(『魔法』か『スキル』)

もう一つ『発展アビリティ』とやらもあるらしいが……そちらは、例えば俺で言えば『深淵歩き』の能力のようなものらしい。

あれば心強いが、あくまで補助的なもの——と。まあ、大体そんなところか。

(どちらかで再現したか)

結晶の古老や法王も似たような魔術——だろう。おそらく——を用いてきた。

この『時代』に似たような魔術——魔法の使い手がいたとして、別に驚くには値しないだろう。

『黙レツツ!!』

どうやら、相手の逆鱗に触れたらしい。

燃え滓という言葉が気に召さなかったのか、それとも闇派閥と同類扱いされたのが気に入らなかつたのか。

(どうでもいいがな)

どのみち目の前にいるそれは本体ではない。ならば、生け捕りにしようとすること自体に意味がなかった。

ならば、やることは至って単純。もっとも慣れ親しんだ一つの方法。

(ここ)で殺す)

ただそれだけでいい。できないはずがあるものか。

かつて気が遠くなるほどの時をそれに費やし、おそらくはこの先もそのために時を費やしていくのだ。

ただの幻影ひとつ、ころせな消せない訳がない。

『ココデ消エロイレギユラー【正体不明】!!』

仮面の叫びに咆ウキクライ哮を重ねる。

投擲された四本の投げナイフ。うち一本が頬をかすめ、一本が肩の装甲に弾かれた。それらを無視して、一步踏みこむ。

「オオ！」

次の瞬間互いの間合いが重なる。この距離なら相手が何を策そうとも関係ない。何より、相手の動きは遅すぎた。

いや……。』

ソラールが「雷の槍」の物語を口ずさむ。

その声には、少なからぬ焦りが宿っていた。

だが、もう間に合わない。目の前の仮面を迎撃しなくては。

霞の型に構えたクレイモア。その切っ先を下段から跳ね上げる。

交差は一瞬。互いに半歩ずつずれたおかげで、激突することもなくすれ違う。

振り上げ、降りぬいた剣はそのまま弧を描き切っ先は再び地面に向かって落ちていく。

手首を捻り、流れはそのままに軌道だけを書き換えて——同時、体を反転させる。

『オノレ——』

逆袈裟に斬り裂かれ、もはや虫の息の仮面。

そいつの体を、さらに横薙ぎに切断して——同時、ソラールが「雷の槍」を投擲する。

狙いは当然、その仮面ではなかった。

「チッ！」

微かな舌打ち。だが、姿が見えない。

さらに言えば、ほんの少しの音も聞こえなかった。

〔見えない体〕と〔隠密〕か)

と、なれば敵は不死人^{どらふい}。

……いや、アイシヤやベルが呪術を習得できたなら、他の奴らだって魔術を習得できるだろうが。

「いかん！」

今度こそ焦りを宿したソラールの叫び。

それより早く、シヤクテイが投げ捨てた自爆装置が宙に浮いた。

だが、起爆装置は破壊されている。いくら発火剤だとは言え、改めて火でもつけない限りは——…

「——」
一瞬だけ、そちらに意識を向けたこと。それ自体が狙いなのだ、僅かに遅れて気づく。

その隙に渦巻く炎が、白装束どもの周りに現れては収束した。

〔罪の炎〕!?)

毒づいている暇もなかった。

悲鳴すら残さず、白装束どもが焼滅する。

そして、その時に生じた爆炎が投げつけられた自爆装置を起爆させた。その一瞬でできたことなど《竜紋章の盾》を掲げるくらいのことだ。

白く焼かれた視界の中で、追撃を警戒する――が。

「逃げた、のか？」

「おそろく」

同じく盾を構えて爆炎を防いでいたソラールが呻いた。

念のため神経を研ぎ澄ますが、やはり追撃の気配はない。

最後の最後で出し抜かれたというわけだ。

それにしても、目的だけ果して即座に撤退とは、随分と控えめな不死人どうほうもいたものだ。

嘆息ついでに一息つこうとして――…

「しまった、シヤクテイ?!」

あの白装束に一番近いところにいた彼女はどうなった。

「大丈夫ですか？」

「ああ。お前こそ」

慌てて周囲を見回すと、シヤクテイ――と、リユウが地面から体を起こすのが見えた。

「ええ。……今度は間に合ってよかった」

「馬鹿なことを……」

そのやり取りの真意は分からないが……まあ、二人とも無事で何よりだ。

もつとも、流石に無傷ではなく、二人とも程よく焼け焦げているが。

それでも、生きているならまだやりようがある。

安堵の息をこぼしていると、ソラールが近づき、愛用のタリスマンを握りしめて物語

を口ずさみ始めた。

もちろん、物語の名は【大回復】だ。

「回復魔法を使えたのですね」

「ああ。俺もまだ未熟者だからな。傷を癒す術は多いに越したことはない」

よく言うよ——と。ソラールの言葉に、内心で苦笑しながら、爆心地へと近づく。

当然というべきか。白装束どもの死体は残っていない。それどころか、文字通り草一

本残っていないかった。

ただ……

「うん？」

森の中。そして『夜』ではあるが。

先ほどの爆炎と爆風が周囲の枝を薙ぎ払ったおかげで、多少多めに光が地面に届いている。

その光に何かが煌めいた。

地面に何かがめり込んでいる。

片膝をつき、軽く掘り返す。——と、同時少し焦った。

(赤い瞳のオーブ?!)

——の、ようなものだった。

だが、見慣れた『赤い瞳のオーブ』ではない。

ホツと一息ついてから、改めて観察する。

別にあのオーブが破損し、変形しているわけではなさそうだ。

炎熱で多少溶けていたが、これはまだ本来の形を保っている。

「それは？」

すっかり回復した様子のリユーが声をかけてきた。

「さあて……」

手のひら大——大体一〇cm程度だろうか——の球体。

その内部には赤い瞳……眼球のようなものが埋め込まれている。

表面には共通語や神聖文字とは異なる書体で『D』という記号が刻まれていた。

「魔道具の類だろうか……」

実際、それからは微妙に魔力を感じる。

しかし、別に『闇霊』が——もしくは『狂霊』が——侵入してくる様子はない。
「何だと？ 見せてみる」

俺が返事を返すより先に、シャクテイがその『瞳』を半ば奪い取る。

「この大きさ。この形状。間違いあるまい」

「どうかしたか？」

食い入るようにつめるシャクテイに多少面喰いながら問いかけた。

「いや……。『イシユタル・ファミリア』の本拠地を調査した時にな」

あの女神——イシユタルの私室にあった隠し金庫から持ち出された『何か』。

台座に残っていた痕跡から、その『何か』の大きさはちょうどこの程度のものらしい。

「では、つまりこれが」

険しい声で……そして、どこか薄暗い声で、リユーが呟く。

ベル……というより、リユーから逃げてきた白装束どもが、ここからどこに向かうつもりだったのか。

その選択肢は決して多くない。

「連中の隠れ家か、もしくは本拠地。あるいは……」

「地上と繋がる隠し通路、だろうな」

正確には、それら全てを兼ねた場所と考えるべきだろう。

何であれ、奴らの仲間こちら側に不死人がいるのは間違まちがいなかつた。

なら、もはや全く無視はできまい。まして、『赤い瞳』のお誘よびいとあればなおさらだ。
やれやれ、全く――…

「面白くなってきたな」

つい口元が小さく歪むのを自覚していた。

第五節 無法者たちの宴

1

一八階層の『夜』が明けて。

忙しないことに、俺達は次の一仕事に駆り出されていた。

次の一仕事とはもちろん、闇派閥残党の本拠地襲撃——ではなく、オツタル達がこの階層に追いやってくる『深淵種』の始末だった。

俺達とシャクティ。小人とその手下どもその他に、「ヘステイア・ファミリア」を代表してアンジエが参戦することになったそうさ。

もちろん、別にベル達が参戦する義理も義務もないのだが……まあ、何だ。

ダンジョンに突撃してきたヘステイアの罰則を軽減するために、恩を売ることに決めたそうさ。

何でも、彼女が自分からシャクティに交渉したのだとか。

ちなみに、その前段階としてリルルカを味方に引き入れ、彼女共に主神ヘステイアを説得してから、团长ベルへの言伝を頼んだらしい。

何というか……実に冴えたやり方だと思ふ。

少なくともベルに直接言っていたら、まず間違ひなくついてきただろうし。

「よう、アイシャ。【イレギュラー正体不明】も。久しぶり……って程でもねえか」

声をかけてきたのは灰色髪のアマゾネス。

先日【パーベラ神の怒り】を耐え凌いだ戦闘娼婦だった。

名前は確かサミラと言ったか。

アイシャの友人の一人だと聞いている。

確かに、その名前なら四年前から時々は耳にしていた。

「精々二日つてところだろう」

そのアイシャが、肩をすくめてから言った。

まあ、おそらくその位だろう。ダンジョンの中では、どうにも地上の時間感覚を忘れ

がちだが。

「それにしても、サミラ。あんたがそんな恰好をするとはねえ」

「うるせえ、半分はお前のせいだろうが」

上は胸元で交差した帯のような短衣だけ。下も下着同然の格好は、実にアマゾネスら

しい。

——のだが、今は背中と左胸辺りにシヤクテイの所属する【ガネーシャ・ファミリア】

の紋章が刺繍された上着を羽織っている。

元が美人ということもあって問題なく着こなしているが……まあ、『歓楽街』が自治区であり、彼女たちこそがその支配者だった事を考えれば、確かに奇妙な気がしないでもない。

本当に、自分の手で潰しておいて言うのもなんだが。

「全員揃ったようだな」

次に声をかけてきたのはシャクテイだった。

見慣れた橙色の装束に、愛用の槍を携えている。

「ああ。それで、今回の作戦は？」

「残念だが、それほど大げさなものは立てようがない」

それはそうだろう。

何しろ、三派閥の合同任務。しかも、一つは飛び入り参加ときたものだ。

……いや、ヘスティアのところも一枚噛んでいるから、四派閥で半分が飛び入り参加といった方がいいのか。

そんな有様では、まず誰が統率を採るかで揉めるらしい。

まったく、人間って奴はすぐこれだ——と。そんな感情が浮かんでは消えた。

「陣形を整え、追いやられてきたモンスターを迎撃する。『深淵種』もしくは異形を優先。

通常種は最悪取り逃がしても構わないが極力殲滅、といったところだ」

案の定というべきか。

通達された作戦はその程度のものであった。

通常種——つまり、普通のモンスターは無視してもよさそうなものだが、まだ変異していないだけの可能性を警戒しているらしい。

まあ、確かに可能性はあるだろうし、警戒して損はないか。

それとは別に、単純に増えすぎて放置できないという理由もあるのだとか。

(まあ、あれだけいるとさすがにな)

いくら『中層』のモンスターとはいえ、あの数は脅威だ。

多少なりと間引いておかなくては色々と問題が生じることくらい、俺にも分かる。

嘆息しながら陣地を見回すと、小人も自分の手下と同じようなやり取りを交わしているのが見えた。

参戦しているのは、リヴェリアと金髪小娘、あとドワーフのおっさんに、アマゾネスが二人。そして、狼男が一人。

もちろん他にも、ラウルが何人かを集めてはやはり同じような打ち合わせをしている。

彼らは冒険者風に言えばサポーターたちである。とはいえ、リヴェリア達ほどの派閥

となれば、もはや単なる『荷物持ち』を意味しない。

いわゆる後詰。後方支援を受け持つつきとした戦力だ。

その中には昨日のエルフのお嬢さんも混じっている。昨日の今日で元気なことだ。「やれやれ。ここまできると、ちよつとした合戦だな」

大体の配置につき、念のため装備の確認をしていると、傍らでカルラがため息をつく。「確かにそうだな」

彼女の言葉に、ソラールまでが小さく頷いた。

とはいえ、そこはお互い慣れたもの。別段緊張するわけでもない……どころか、天気の話でもするような気楽さだった。

「それで、いったい何のつもりだ？」

一通り装備の確認を済ませてから、最後にシャクティに問いかける。

「何の話だ？」

「昨日からずつと監視している理由だ」

リヴェリア達が監視してくるのはともかくとして、シャクティやリユーまでが監視してくる理由がよく分からない。

特にシャクティ。だれよりも免罪されたことを知っているはずだが。

(リユーは……そういや、リヴェリアはエルフのお姫様だったな)

なら、あの堅物エルフがその意向に従うのは仕方がないことか。

しかし、シヤクティについてはよく分からない。

まあ、リユーと旧知の仲だと聞くし、彼女に付き合っているという考えもありといえ
ばありだろうが。

「別に今さら一人で突貫する気はないぞ?」

念のため言い添えておく。

何処にかと言えば、もちろん闇派閥の本拠地だ。

奴らも俺達に感づかれたのは承知している。

ならば、時間を与えれば与えるだけ、向こうに守りを固められるだけだ……。が、だ
からと言って一人で飛び込んでどうにかなるかは微妙なところだった。

少なくとも、あの『人斬り』は片手間に相手できるような存在ではない。あの赤毛の
美人と組まれれば、さらに厄介だろう。

そして、他にも隠し玉がないとは言いつれなかつた。

アイシャの命を背負っている現状で、一人突貫するのは明らかに下策だろう。

いくらソラール達がいるとはいえ、俺自身がドジを踏んで即死したならそこまでだ。
普段なら呆れられるくらいで済むが、今ばかりはそうはいかない。

少なくとも彼女を地上に戻してから。あるいは、今この場でヘステイアに改宗^{コンバージョン}とや

らをしてもらうか。

(改宗か……)

ソラール達と……厳密にはソラールと再会する前だったなら、特に悩むことはなかった。

それどころか、渡りに船とばかりに頼んでいただろう。

だが、今は別の選択肢が脳裏にちらついている。

そのせいで結局、大人しくしているというシヤクテイに説得されてしまった。

選択肢がなければ絶望するしかないが、あるなら今度は取捨選択に懊悩する羽目になる。

なかなかどうして、生きるというのはままならないものだ……が、それでも選択肢がないよりはずっとマシか。

「別にそこまで深い理由ではない」

ともあれ。そのシヤクテイは、今日の前で肩をすくめている。

「ただ、あの少年たちを死地に追いやったのが【タケミカツチ・ファミリア】であることに変わりはないからな」

「うん？」

「将来有望な冒険者を殺されてはかなわない。そういうことだ」

「アホか」

眉間にしわが寄るのを自覚した……が、ここまでくるとため息すら出やしない。

「何で俺があの人を殺さなければならぬんだ？」

気だるさを取り繕う気も起らないまま呻く。

確かに、もはや数えることなど不可能なほどに死を巡らせてきた。それは、否定のしようがない。

しかし、だからと言って無意味に殺すほど人間性を擦り切らせているわけではない。……と思う。

「しかしお前は『リトル・ルーキー』……ベル・クラネルを気にかけているだろう？」

「そりゃ確かに、心情的にはベル達の味方だけだな」

肩をすくめてから、逆に問いかけた。

「だが、そもそも話として、彼らの何が罪なんだ？」

「何？」

「怪物モンスター・パーティーの宴と、今回の……怪物進呈パス・パレードとか言うんだったか。その二つのいったい何が違う

？」

違いなどあるはずもない。それが、個人的な結論だった。

「自然に発生したモンスターに殺されることと、誰かに押し付けられたモンスターに殺

されること。そこに一体何の違いがある？」

見つけ出して復讐でもするか。

なるほど、殺されてなお『命』があればそれも可能だ。

その前提なら、確かに多少の意味はあるかもしれない。感情のままに復讐に走るのも一興と言えよう。

一度や二度死んでも問題ない俺達なら、向こうも概ね覚悟の上だ。さらに言えば、どこぞの禿丸のように懲りない奴だっている。

だが、ベル達はただの生者だった。

死という結果はただの生者にとつては絶対であり、覆すことのできない終焉となる。

復讐という言葉の重みも変わってくるだろう。

それに、だ。

「それに、自慢にはならないが、同じ状況なら多分俺も同じ選択をするぞ」

残念ながら——少なくとも俺自身は——いついかなる状況でも、万事都合よく解決できるとは『物語の英雄』ではない。

取捨選択が求められるのが常だ。劣勢であればなおさら。

「お前達だって似たような経験はあるだろう？」

その辺りは不死人^{俺たち}だろうが、神の眷属^{ベルたち}であろうが大して変わるまい。

「それは、否定しないが……」

シヤクテイのように素質にも恵まれ、経験を積み重ねた冒険者であっても——いや、まだ駆け出しだった頃の話かもしれないが——そうなのだ。

ならば、まだ未熟なあの三人に例外を求めるのは酷というものだろう。

「だろう」

頷いてから、続けた。

「自分の能力。仲間の状態。取り巻く状況。それらを俯瞰して、最も有効だと考えられる選択をする」

他者を犠牲にした以上、非情な選択だと糾弾されることはあるだろう。

心情的にはベルの味方というのも、その辺りが理由の一つだ。それは認める。

しかし、だからと言って頭目らしいあの青年が特別に非情だとは思わない。

何故なら、

「そんなことは、ダンジョンに限らず、戦場と呼ばれる場所に身を置く者なら誰もがしていることだ。なら、彼らがそれをしてはいけない理由は何だ？」

ベルだってそれをしなければならなかったのだ。

ダンジョン内に正しいことがあるとすれば、それはあらゆる困難に勝ち抜き、生還すること以外にはありえないのだから。

(それとも、判断した結果かもしれないな)

それなら、なおさら仕方がない。仮に命を落としたとして、それはベル達の判断が甘かったというだけの話だ。

残念ながら、ここはそういう場所だった。

もし彼らの選択を咎められる者がいるとすれば武芸百般極め、神算鬼謀に長けた稀代の戦上手か。さもなければ全盛期のグヴェイン達と同じかそれ以上に全知全能を誇る何か。

あるいは、単なる阿呆ということもあり得るだろう。

それはともかくとして。

「迷宮での被害、損失に関してギルドは一切の責任を負わない。冒険者登録の時、ギルド職員は必ずそう告げるらしいな？」

ダンジョン内での被害、損失の最たるものは『死』となる。

それすら自業自得というならば、例え殺されたとて同じことだろう。

そして、この洞うらには暗月の光すら届きはしないのだ。

「ああ。そうだ」

「なら、どこにどんな問題がある？」

冒険者になるということは、その条件に同意するということだ。

ならば、暗月の光が届いたところでどうなるものでもあるまい。

そして、それが許容できないというなら、冒険者など続けるべきではないし、ダンジョンに関わるべきでもない。

人々から『英雄』様と呼び称される対価として、その程度の覚悟は安いものだろう。自分で望んだことを踏まえるならなおさらに。

……まあ、俺にはどうにもその価値が見出せないのだが。

「もちろん、ベルがまだの農民だった頃……神の眷属ではなかった頃に、地上で仕掛けたつてんなら話はまた変わるがな」

オラリオ内に限らず他派閥は基本的に競争相手である。それはいわゆる『冒険者』だけに限った話ではない。

神の駒となった時点で逃れられない宿命だ。

それもまた、誰もが認識していることだろう。……その意味まで理解しているかは知らないが。

加えて、この場合の競争とは、競技場で公平に行われるようなものではない。

多くの場合において、無頼者同士の『抗争』に近い——いや、そのものと言つていいだろう。

つまり、冒険者同士のやり取りとして考えれば、彼らの対応には全く問題がない。

問題はないわけなのだが……

「ああ、他に仕掛けたのが普段からふんぞり返ってるどっかの小人どもだったなら、多少の仕返し位はするかもしれないがな」

まあ、そこに個人的な心情を踏まえると、やはり話は変わってくる。

それこそ、そこにいる小人ども——もしくはどこぞの猪ども——なら、確かにシヤクティの懸念も大げさとは言い難いだろう。控えめに言っても。

幸か不幸か、俺の人間性もまだそこまで擦り減っていないというわけだ。

(あゝ……。だが、その場合はどうせベル自身が全力で庇うだろうな)

何しろ、小人の方にはあの金髪小娘がいるわけだし。

深く考えると色々面倒なことになりそうだったので、思考はそこで打ち切ってから。

「ま、何だ」

気を取り直すついでに、肩をすくめて見せる。

そして、ものついでにふと思いついた。

何でも五年だが六年だか前に、二七階層で騒ぎが起こった時に他所の派閥をいくつか囿にして丸々壊滅させた派閥があるらしい。

しかも自分たちは名声を独り占めにしたとか何とか。

……街で見かけた酔っ払いの言葉の言葉が耳に入っただけなので、どこまで信じられるかは怪しいのだが。

「憎まれ口を叩きなからでも、助けに戻ってきただけ可愛いものだろう?」

それなら、彼らの行動はむしろ上等だろう。

「そうだな」

あのベルは——良いことか悪いことかはともかく——今も底抜けのお人よしのままだった。

彼らは——お人よしというほどではないにしろ——頭からケツまで堅物で大真面目な冒険者のようである。

「彼らの選択に、ベルは納得した。リリルカ達も一応は。当事者同士が納得したなら、俺が口をはさむ理由は何もない」

それなら、昨日のシャクテイではないが、借りは返してくれるだろう。おそらくは利子をつけて。

ならば、いったいそれ以上の何を望めばいいのやら。

少なくとも、この場所の道理を力づくで蹂躪する必要性は感じられない。

……と、言うようなことを、今さら俺が熟練の冒険者相手に説明しなければならぬ必要性からして、そもそも全く感じられないわけだが。

「いったい何を誤魔化そうとして——」

明らかに怪しい。絶対に何か隠している。

いい加減、それなりに長い付き合いだ。こんな馬鹿げた心配を本気でするとは思えない。

「話はそこまでにしときな。そろそろ来るよ」

その確信とともに問い詰めようとしたところで、アイシャに止められた。

「ああ。そのようだ」

アイシャが言う通り、連結路の向こう側が随分と騒がしくなっていた。

原因は言うまでもない。明らかにモンスターどもの唸り声であり、咆哮であり……そして、悲鳴だ。

残念だが、これ以上は話し込んでいられそうにない。

「ピイ——ッ！」

それをかき分けるように、合図の笛の音がかすかに聞こえて。

「総員戦闘準備！」

「間違つても友軍を攻撃するな！」

それぞれの団長が檄を飛ばす中、モンスターどもが雪崩を打って飛び出してきた。

……

「始まったみたいですね」

一七階層との連結路がある方角から、戦闘の喧騒が伝わってくる。

リリ達がいるのは、当然ながらそこから少し離れた「ロキ・ファミリア」の野営地だ。この一八階層で、最も安全が保障された場所と言っていいだろう。

もつとも、すでに撤収準備が進んでおり、天幕の数は随分と疎らになっているけれど。「らしいな」

ベル様の鎧の微調整を終えたばかりのヴェルフ様が頷く。

「どうだ、ベル。鎧の調子は」

「うん。相変わらず体に上手く噛み合ってるよ」

「肩の方はどうだ？」

もちろん、ベル様の鎧は見慣れた軽鎧なのですが……完全に欠損した肩の装甲だけは、新しく別の装甲に付け替えられていた。

「それも大丈夫かな」

その肩を回しながら、ベル様が頷く。

「そうか。破損品ジャンクとはいえ、元は上級冒険者向けの装備ってだけのことはあるな」
鍛冶道具は無料で借りられても、材料まではもらえなかったらしい。

別にいじわるされたとかそういう

結局、リヴィラで念のため買ってきた破損品ジャンクを調整して装着したのだとか。

少し無念そうなのは、自分で打ったものではないせいだろう。

「お前達も、早く寄越せ。撤収作業が終わる前にこの道具も返さないとならない」
「ああ、助かる」

ヴェルフ様は「タケミカツチ・ファミリア」の武具の整備も受け持つらしい。
仕事においては遺憾なく、という辺りはさすが専門職[□]といったところか。

「つと、そうだ。リリスケ、そっちはどうだ？」

「問題ありません。というより、リリには過分すぎるくらいです」

リリも破損したボウガンの代わりにクオン様から《ライトクロスボウ》を譲り受けていた。

間に合わせ——と。クオン様は言っていたけれど……。

「どう考えても上級鍛冶師^{ハイスミス}の作品並みですよ」

もつとも、さすがに三等級兵装とはいかないでしょうけど。

それに、譲り受けたのはボウガン本体だけではない。

「しかし、ボルトに魔力を込めるとはな。思い切ったことを考える奴もいたもんだ」
準備の手を止めないまま、ヴェルフ様が呻いた。

「ええ。全くです」

通常のボルトとは別に、《魔法のボルト》なるものを数十本ほど譲り受けていた。
使い方も簡単で、いつも通り番えて撃てばいいのだとか。

これはなかなか便利だと思う。ただ、当然ながら一発使いきりとなる。なので、値段がいくらくらいになるのか……。

(これ一本が使い捨ての魔剣みたいなものですかからね)

いや、そうとも言い難いか。

先ほど試し撃ちしてみた感触で言えば、魔剣といえるほど強力ではなさそうだった。あくまで威力が底上げされているだけで、本質的にはただのボルトと考えた方がいい。

このボウガンと併せて使えば、普段より少し強いモンスターにもとどめを刺せる。ただそれだけ。決して過信はできない。

そのうえで、こうも思うのだ。

(でも、上手く使えばベル様たちの力にはなれる)

——と。

つまり、大切なのは使いどころ。いつも通りの話だった。

「それにしても、『ロキ・ファミリア』に『フレイヤ・ファミリア』。それに『ガネーシャ・ファミリア』の精鋭が揃い踏みですか……」

「今ばかりは野次馬根性というやつを理解できそうだな」

連結路の方を見ながら、命様と桜花様が呟くのが聞こえた。

「そおですかあ？」

思わず疑問を隠すこともせずには呟いてしまった。

「えつと……。興味、ないんですか？」

「ないとは言いませんが……」

千草様の問いかけに、ため息を一つ。

「ですが、その【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】と一緒にいるのはクオン様……。あの【イレギュラー正体不明】なのですよ？」

この三者の関係性など、今さら言うまでもない。

今のオラリオにおいて最大の火種といってもいいくらいだ。

「ついうっかり抗争が始まったなら、リリではとても逃げ切れません……」

ついでに言えば、一七階層の連結路前が戦場ではダンジョンの外に逃げることもままならない。

……いえ、誰かがリリ達についてきてくれなければどのみち帰還できないのですが。

「な、なるほど……」

「確かに、俺達でも自分の身を守れるかどうか……」

リリの嘆きに、命様たちの表情も凍り付く。

L v. 1とL v. 2の間には大きな壁があるのは嫌というほど分かっている。

ただ、この場合はそれすらあつてないような差だった。

「ええと……。と、ところで！ リリ、バックパックはどう？」

「はい。問題ありません」

改めて馴染んだバックパックを漁りながら、露骨に話題を変えようとするベル様に応じる。

中身の大半が『上層』向けの安物揃いなのは仕方がない。

いくらかでも補填してもらえているだけでも大助かりだった。

『すまない。すっかり遅くなった』

——と。クオン様がリリを訪ねてきたのは、今朝方のことだった。

ほとんど言葉を交わす暇もなかったけれど……説明はあまり必要なかった。

そう。差し出されたのは、あの日……ベル様に助けられたあの日に奪い取られたリリのバックパックそのものだったのだから。

「なら、その鍵は……」

「こちらは、地上に戻ってみないとさすがに分かりません」

その中には、退団資金を預けてある貸金庫までが含まれていた。

ダンジョン内で取り返したということなので、荒らされてはないと思うけれど。

（ベル様と改めてパーティを組んでからの稼ぎと併せれば、そろそろ本当に手が届くか

も……！)

真鍮製の鍵を握りつぶしてしまいそうなほどに胸が高鳴っている。

それを自制するつもりで、小さく嘆息して見せた。

「まあ、一番高価だった魔剣がなくなっていますか……」

この鍵を除けば、リリの手持ちの中で一番——単価として——高価だったのがあの魔剣だった。

もちろん、下級冒険者向け——つまりは、文句なく安物ではあったのだけれど。

「本当にアイツったら詰めが甘いんだから」

「いえ！ 取り戻していただけただけで充分です！」

本当に嘆息する霞様を前に、慌てて両手と首を振る。

「見捨てられていてもおかしくなかったですし……」

「いやー……。それはどうかしらね」

小さく付け足すと、霞様が苦笑した。

「アイツ、リリルカちゃんのことを結構高く買ってるもの」

「え？」

それは、意外な話だった。

自分が盗賊だと見抜かれている可能性は考えていたけれど……。

「あいつつてその辺結構禁欲的なのよね」
ストイック

「禁欲的？」

「もしくは冷淡なのかも」
ドライ

「はあ……」

よく分からず、首を傾げた。

どちらの言葉も、今まで見てきた姿とはあまり合致しないような……。

「自分にとつて有益だと思ふ相手なら、多少のおいたは黙つて見逃すつて意味よ」

「それは単にお人好しなだけでは？」

いや、違うか。

本物のお人好しというのは、自分に不利益をもたらず相手でも助けに来る。来てしま
 う。

どこかの白兔のように。

「そうかもね」

ともあれ、霞様はあつさりと苦笑した。

「まあ、言い方はいろいろあるけど……。簡単に言えば、自分の代わりに安心してベル君
 を任せられる相手を見つけたつて喜んでたわよ」

自分の代わりに。それは、あの赤黒い人影——多分、『闇霊』と呼ばれる存在と、それ

を呼び出したあの奇妙な女性と出会ったからだろうか。

それとも、何か別の理由を想定しているのか。

いえ、今はそんな事よりも……！

(リリがクオン様の代わり?)

いえ、あのクオン様がそんなに深い意味を持たせていたとは限らない。

でも、それでもベル様の事を気にかけているのは間違いない。

そんなクオン様が安心して任せられると言ったのだとすれば。

「~~~~~」

歓喜だろうか。それとも、緊張？

自分でもよく分からない興奮が全身を駆け抜けていく。

この上ない激励だった。少なくとも、リリにとっては。

「お任せください！」

やっぱり人の噂なんて当てにならないものね——と。

そんなことを言って苦笑する霞様を前に、その衝動のまま、声高にそう叫んでいた。

……

ベル・クラネル

L v . 2

力 : G 2 6 7 ↓ F 3 6 8

耐久 : H 1 4 4 ↓ G 2 7 3

器用 : G 2 2 8 ↓ F 3 5 2

敏捷 : F 3 7 5 ↓ 4 6 9

魔力 : H 1 8 9 ↓ G 2 7 2

幸運 : I

《魔法》

【ファイアボルト】

・ 速攻魔法。

《呪術》

【ぬくもりの火】

・ 害意のない柔らかな火を生み出し、それに触れたものの傷を癒す。

・ 火は力の証であると共に、知恵と暖かさの象徴でもある。

・ 炎はそれを扱う者が求めるものをもたらすのだ。

・ 家族を求めるものが熾すなら、それは団欒の火ともなろう。

《スキル》

【英雄願望^{アルゴノット}】

・能動的行動に対するチャージ実行権。

テントの中で「ステイタス」の更新を受けてから。

「うーん……、久しぶりに一気に上がったなあ」

内容を僕に——書き写す紙もないので——口頭で告げてから神様が唸った。

「そ、そうですね……」

理由は色々と思ひ浮かぶ。

一三階層からこの一八階層までの強行軍。

ゴライアス
階層主の追走。

昨夜の『新種』との戦闘。

そして、あの『深淵種』の遭遇戦。

どれをとつても、【エクセリア経験値】を積むには充分だったらしい。

「それに、より上位の【エクセリア経験値】も溜まっていたよ」

「え?」

「ステイタス偉業つてやつさ。君の器は昇華にまた一步近づいたってことさ」

今さつき思い浮かべた全て……一連の決死行は、偉業の一端として評価されたという
ことらしい。

つまり、ランクアップの条件は必ずしも格上のモンスターを討伐することとは限らな

いということなのだろうか。

いや、あの『深淵種』は格上だった。単純にステイタスだけを比較するなら、きつと。「ところで、神様」

少し首を傾げてから、別のことを問いかけることにした。

「アンジェさんは大丈夫なんですか？」

気づけばクオンさん達と一緒に連結路前の『監視所』に行ってしまった。

多分、体の方はすっかり治ったってことだと思うけど……。

「あ……。うん、多分ね。とりあえず、傷はすっかり治ってるみたいだよ。あと何だか生氣も戻ったように見えるけど……」

「いえ、それもそうですけど……」

アンジェさんはいきなり全く見ず知らずの世界に放り込まれたようなものだ。

きつと、僕がオラリオに来て神様と出会うまでの間に感じていた不安や孤独の比ではないと思う。

「それに、『人喰らい』がどうか言っていましたし……」

復讐、なのだろう。

それでも、アンジェさんにとってはきつと大切だった誓いのはずだ。

「その辺は、また例によってクオン君が何となく事情を知ってそうなんだよなあ……」

小さく呟くと、神様が肩を落とした。

そういうえば、クオンさんもアンジェさんの指輪を見て少し驚いていたというか何というか……。

「それで、ベル君。ベル君はクオン君と話せたのかい？」

「いえ、まだです……」

リヴィラの街で別れてから、次に会ったのは今朝方のこと。

リリにバックパックを返しに来た時だった。

例の『深淵』絡みの後始末に向かう途中に寄ってくれただけだし……何より、周りに
【ロキ・ファミリア】の人たちがいる状態ではさすがに詳しい話を聞くわけにはいかな
い。

それくらいのこととは、僕にももう分かっていた。

「クオン君といえは、カルラ君にも悪いことしちゃったしなあ」

「そうなんですか？」

神様が誰かに悪いことをするなんて想像もできないけど……。

「うん、ちよつとねー……」

神様が結構本気で落ち込んでいる。

何をしたのか気になるけど、聞いちゃっていいものなのか。

(あ、もしかして……)

水浴びを覗いてしまった時、そういえば何か話していたような……。

思いつくとして、慌ててやめた。深く思いつくのは別の意味でマズい。かなりマズい。

「ま、まあ、その辺のこと全部ひっくるめて、地上に戻ったらゆっくり話してもらおうぜ！」

僕の動揺には気づかなかったのか。それとも気づかないほど落ち込んでいるのか。

大きく嘆息してから、神様がぐつと指を立てて言った。

「ほら、シヤクテイ君だったつけ。ガネーシヤの眷属ことどもにも伝言を頼んであるからね！」

「シヤクテイさんは、クオンさんについて知っているんでしょうか？」

一緒に行動している分だけ、何となくリヴェリアさんよりも付き合いが深いような印象があるけど。

「ボクもよく分からないんだよね……」

あの子にまで話しているかどうか。神様はそう言っただけで肩をすくめる。

「いくら嘘を見抜けるといっても、今回はあんまり役に立たないしさ」

「そうなんですか？」

「ボク達より知っているのは本当だし、ボクらが知りたいことを全部知っているかどうか」

かは分からないからね」

「はあ……」

その言葉の意味を理解できないまま曖昧に頷く。

「だからさ。あの子が嘘を言つて隠したとして、単にボクらより少しだけ多く知つてい
るだけのことかもしれないんだ」

「ああ、なるほど」

今僕たちが抱えている疑問の答えを——もしくは、その手掛かりを——知っていると
は限らないというわけだ。

「それに、別に心が読めるわけじゃないしね。誤魔化す方法つて実はそれなりにあるん
だよ」

簡単に言えば『嘘』でさえなければいいんだから——と。神様は肩をすくめた。

「ただ、あの子の主神のガネーシャとかウラノスなら何か知つているのは間違いないと
思うんだ」

「ウラノス様つて確か……」

「そうだよ。ギルドの主神……創設神さ」

ギルドにも主神がいるという話は、エイナさんからも聞いたことがある。

ただ、『中立中庸』を示すため眷属、つまりギルド職員には『恩恵』を与えていないと

いうことも。

「ウラノスは知っているから、あの『深淵』ってやつをどうにかするためにクオン君を呼び出したんだと思う」

と、言ってから神様は自信なさげに付け足した。

「まあ、普通にクオン君から聞いたことがあるだけって可能性もあるけど」

それでも、クオンさんがウラノス様に何か話をしていることには変わりない。

「その辺も全部地上に戻ってからさ！ 今はこのテントをささっと片付けちゃおうぜ！」

「そうですね。アイズさん達は、今の戦闘が終わったらその足で一気に地上に戻るつもりみたいですし」

つまり、「フレイヤ・ファミリア」が追い集めているモンスター群を強行突破するといふわけだ。

何でも『深淵種』や異形の他に、モンスターの『異常発生』も問題になっているらしく、この際一緒に殲滅……というか、数を可能な限り減らしていくつもりらしい。

もつとも、流石の「ロキ・ファミリア」も遠征帰り。

やはり消耗は大きく、『中層』といえど油断はできない。特に今の『中層』は。

そのため、主力の一人であるアイズさんはもちろん先行隊に組み込まれている。

僕たちがお邪魔するのは後発隊。

わざわざ二手に分かれるのはモンスターの大群がどうこう言う以前に、遠征に赴く大規模パーティが一七階層以上をまとまって動くのは窮屈だかららしい。

(あの『中層』が狭いって……)

決死行の最中は無限に広がっているような気すらしたんだけど。

とは思いつつも、畳まれカーゴに積まれたいくつもの天幕や大量の物資。何よりその周りにいる団員の人たちを見ると確かにそんな気もしてくる。

いや、実際は単純に通路の話みたいだけ。

「だろう？　置いていかれたらまた困ったことになるしさ」

「ですね」

後発隊は僕たちの他に負傷者や「ヘファイストス・ファミリア」の人たちも組み込まれている。

動きを阻害しないギリギリの人数や物資が配置されているので、先行隊よりも足は遅くなる……と、いうのは仕方ないんだけど。

先行隊と離れすぎでは危険なので、それを補うために相応の強行軍になるらしい。

「さあ、サポーター君も呼んで片付けようぜ。アンジェ君が戻ってくる前にさー」

確かに。戦いが終わって戻ってきたアンジェさんに、片付けまで手伝わせるわけには

いかなかった。

そして、それから。

「思ったよりも量がありますねえ」

「そうだね」

リリと神様がそんなことを言い合う。

寝具とか魔石灯とか簡単な治療道具とか……借りたものを集めると思ったより量があつた。

……と、言つても中くらいの木箱ひと箱くらいなものだけ。

「神様。とりあえず、この畳んだ天幕を届けてきますね」

元々携行を想定された天幕は、畳むのも運ぶものそこまで難しくはない。

——んだけど。元々の重量自体はどうしようもなかった。

むしろ、しっかりした造りなので結構重い。

となると、どうしたつて神様や霞さんには任せられない。……いや、もちろん元々任せるつもりもないんだけど。

「じゃあ、リリはこの木箱を届けてきます」

「うん。お願い」

リリと並んで野営地のにぎやかな方へと向かつて歩く。

さすがに手馴れているのか、あんなに広がった野営地が今はもうほとんどただの平野へと戻っている。

「おっと、その天幕はこつちだ。ついてこい」

「あ、はい！」

指示を出している人に訪ねるより先に、同じく畳んだ天幕を担いだ犬シアンスロープの男の人が言った。

「その木箱はこつちよ」

「分かりました」

リリは別の誰かに呼ばれて少し離れた場所に向かつて。

「ああ！ 二人ともいいところに!! ちよつと手伝ってもらえる!?!」

「はい！ 支えていればよろしいですか?」

「ごめんねー! なんかモンスターに引つ? かれてたみたいで急に切れちゃってさ!」

急にロープが切れたのか、悲鳴を上げる女の人に頼まれるままりり達が崩れそうな木箱を支えている。

助けに行こうと思っただけど……やっぱり手馴れているのか、すぐに切れた部分を縛り直し、固定し始めている。

下手に手を出すと逆に邪魔をしそうだ。

「向こうは気にするな。自分の準備を進めておけ」

表情に出っていたのが、シアンスローフ犬 人の男の人が肩をすくめた。

「はっ」

リリもすぐに戻れそうだし、その方がよさそうだ。

頷くと、僕は神様のいる天幕……正確にはその跡地に向かつて歩き出した。

そして、

『リトル・ルーキー』。女神は預かった。無事に返してほしかったら一人で中央樹の真東、一本水晶までこい』

——と。そんな伝言を発見したのだった。

2

「こいつが最後か」

「そうらしいね」

忌まわしいヘルハウンド——犬の上に火まで吐きやがる——にとどめを刺してから
 呟くと、アイシヤが肩をすくめた。

実際、もはや戦闘音は聞こえない。

『深淵種』や異形どもは思ったよりいかなかったね」

「ああ。まあ、おかげで少しは楽ができた」

「うんざりするほど数はいたけどね」

それは全くその通り。

辺りに残る夥しい量の遺灰と、山をなすほどの魔石が敵の数を今も伝えている。

「()までくると、取り分で揉めそうだな」

「まったくさ」

塵も積もれば何とやら。

いかに『中層』の魔石やドロップアイテムとはいえ、これだけの数が揃えば相応の額に化ける。

具体的な金額は分からないが……まあ、大派閥でも無視できなくなるのは間違いあるまい。

「まとめて換金し、総額を参加した派閥数で割る。その先は各派閥で好きにしろ。……異論はあるか？」

果たして、総責任者らしいオツタルは極めて大雑把にそんな提案をした。

「いいや。そうしてもらえると助かるね」

一方で、小人の方もいつになく素直に頷く。

「私もそれで構わない。三分分……いや、四分分か」

「四？」

「クオンたちは、ひとまずお前達〔ヘスティア・ファミリア〕扱いで計算させてくれ。人数的にはまだそれでも充分だろう」

「なるほど。確かにな」

シヤクテイの言葉に、アンジエが頷くのが見えた。

「お前達もそれで構わないな？」

「私は構わないよ」

アイシヤの言葉に、ソラールやカルラも頷いた。俺にも、特に異論はなかった。

ベルにリリ、あの赤毛の鍛冶師にアンジエ。そこに俺とソラール、カルラとアイシヤが加わったところで一〇人には届かない。

参戦している中では明らかに最少だ。つまり、均等に分けるとするなら一人頭の取り分は最大になる。

「姉者……」

まとめて派閥分を受け取るためシヤクテイ達に近づくと、神妙な顔つきで一人のアマゾネスが声をかけてきた。

確か【ガネーシヤ・ファミリア】の副団長だったか。

「行方不明の第一次調査隊全員分の遺体を確認した。あくまで数だけは、だが」

「そうか……」

視線を巡らせると、経帷子で包まれた遺体がいくつか並んでいるのが見えた。

「地上に運び、葬儀を済ませてから『霊廟』に『安置』する。それが手筈だったな？」

「地上までの運搬は僕らが引き受けよう。幸いというのも何だけど、空いているカーゴがあるからね」

「ああ。よろしく頼む」

オツタルと小人の言葉に、シャクテイが頷いた。

ちなみにだが。

オツタルの言う『霊廟』というのは簡単に言えば異形化した人間専用の死体置き場のことだ。

これはまだ秘密だが、リヴィラの街にいた亡者どもの死体もそこに安置されている。……いや、『封印』といった方が正確だろう。

突貫でそんなものを用意させた理由はいたって簡単。また動き出す可能性があるからだ。

例え俺やソラールが『殺した』相手だとしても油断はできない。

当然ながら、メレンの亡者たちもここに運び込まれる予定となっている。

……と、言っても。それはあくまで今後の予定だ。

今は廃業した貸金庫屋を徴収し、残っていた金庫を突貫で改修しただけの仮置き場なのだが。

(何か自分で面倒ごとの種を蒔いちまった気もするけどな)

……名前から分かる通り、一応『不死刑場』ではなく『不死廟』側での設計をフェルズに頼み込んである。

もつとも、『不死廟』を再現するなら『管理人』が必要になる。

それはそれで厄介な話だった。

アガドウランはもちろん、ミルファニト達もいない。……いや、彼女たちのような存在がもういないのは喜ばしいことともいえるが。

嘆息していると、簡単な葬儀が始まった。

といつても、当然ながら埋葬をするわけでも茶毘に臥すわけでもない。

ただ、アンジェが跪き、胸元で手を組んだまま古い祈りの言葉を口ずさんでいるだけだ。

それは久しぶりを見る、真つ当な白教徒の祈りの姿だった。

それに従い、ソラールとともに片膝をついて祈りの形をとる。

俺もこれで白教の聖女様直々に手ほどきを受けた身だ。聖職者としての作法も一応は教わっている。

とりあえず、祈りの真似事くらいはできるつもりだ。

少なくとも、数合わせくらいにはなる。……多分、おそらく、きつと。

「炎の導きがあらんことを……」

誰もが口にする——かつては誰もが口にした言葉こそが、聖句の結びでもあった。

ほう……と、思わず吐息がこぼれる。

やはり慣れないことはすべきではない。

「意外だな」

本職がいるのだから、素直に任せておけばよかった。

胸中でぼやくながら強張った肩を軽く回してほぐしていると、シャクティが啞然とした顔で言った。

……いや、それを言うならオツタルや小人もも似たような顔でこちらを見ているが。

「何がだ？」

「神嫌いのお前が信徒のように振舞うことがだ」

「別に死者を悼むのに信仰は必要ないだろう？」

「それは、そうかもしれないが……」

もちろん、シャクティが何を言わんとしているかは分かる……ような気がする。

「俺にとつて師と呼べる存在は、カルラの他にも何人かいるわけだが——」
嘆息してから、付け足した。

「その中には、本職の聖女様がいたからな」

加えて言えば、イザリスの魔女たちは祈祷師でもあったと聞く。

本当に呪術を極めようと思うなら信仰も求められるのはその辺りにも理由があるの
だろう。

「お望みなら、簡単な説教でもしてみせようか？」

中身が伴うかはともかく、その真似事くらいはまだできるはずだ。

間違えたところで、どうせソラールかアンジエくらいしか分からないだろうし。

「いや、いい。調子が狂う」

酷い言われようだった。しかも即答ときたものだ。

肩をすくめてから、取り分を数え始めた連中から距離を置く。

小人の手下どもには隠す努力が感じられるが、オツタルと手下は殺意だの敵意だのを
隠そうともしない。

別に今さら気にもならないし、それ以上に乗る気にもならないが……しかし、金品の
やり取りなど元から殺気立つのが相場というものだ。

こんな状態でノコノコと近づいたなら、下手をすると本当に殺し合いに巻き込まれか

ねない。

(金を巡って殺しあうなんて、まるで生者にんげんのようじゃないか)

まったくこんな笑い話はない。何しろ、何を笑えばいいのか誰にも分からないのだから。

ただただ笑えてくる。笑うしかない。……他にどうしろというのか。

「よお、兄弟」

「パッチ?」

喧騒から離れたところで、大袋にドロップアイテムや魔石を放り込む小人の手下連中や、カーゴに遺体を積み込むソラール達を眺めていると突然背後にパッチが現れた。

慌てて四方に視線を巡らす。

「何探してんだよ?」

「高台に決まってるだろうが」

もしくは回転する橋とか、下降する渡り廊下とか、閉じ込められそうな鉄格子とか……いや、流石にあるわけもないのだが。

「今回はそーいうんじゃないよ。いや、マジで」

何故お前が半眼になるのか。

そういう顔をしたのはむしろ俺の方である。

「まあ、高台つてのはある意味辺りかもしれないねえけどな」

「はあ?」

聞き返しながら、全身に神経を行き渡らせる。

少なくとも真正面から蹴り落されることはない……とは思うが。

(いや、今の俺だと普通に戦ってもこいつには勝てないんじゃないか?)

この小悪党は見た目によらず、重装備に身を固めて輪の都を彷徨い歩き、二体のデーモンを同時に相手取つてから、復活した『デーモン王子』と対峙し、【教会の槍】どもとも渡り合えるような凄腕の戦士でもある。

……いや、長い時と旅路とを越えてその域に達したというべきなのか。

いずれにせよ『輪の都』の時の力量を有しているならば、まだソウルが凝ったままの俺では戦いになるかどうかからして怪しい気がしてきた。

「ホークウッドの野郎からの届け物だぜ」

驚愕の真実に戦慄していると、パッチがそんなことを言った。

「何だと……?」

渡されたのは血の付いた剣草の葉だった。

微かに残るソウルの気配からして、血の主は確かにホークウッドのようだ。

(そもそも、こんな習慣を知っている奴はもう他にいないからな)

これはかつて不死隊が連絡に用いた符牒であり、あるいは承認と感謝の証。そして、覚悟ある伝言——例えば決闘の申し込みといったような——の古いやり方でもある。

「あいつは何を考えてるんだ？」

「さあ。行ってみりゃ分かるんじゃないか？　今回俺が関わるのは本当にその伝言を届けるだけだぜ」

言うだけ言うと、パッチは背中越しにヒラヒラと手を振りながら立ち去って行った。

「……まあ、そりゃ確かにそうだろうが」

しかし、微妙に不安を叩る内容だった。

何しろ、そこに添えられた伝言にはこのように書かれているのだから。

『高台へ向かえ。元凶はそこにいる』

元凶というのが何だか分からないが、パッチと高台が結びついてロクなことになった試しがない。ただ一度を除いて。

だから、ただそれだけで気が滅入ってくるのは仕方がないことだろう。

(というか、そもそもどこの高台なんだ？)

大半は森林と草原だが……それでも、それなりの高低差がある地形だ。

高台などあちらこちらにあるわけだが、さて……。

(とりあえずリヴィラに向かつてみるか)

ホークウッドがいるならあの街だろうし。

最悪は本人に場所を聞けばいい話だ。

(この文なら、いきなりホークウッドに斬りかかれるってことだけはないだろうかな)

もつとも、パッチが絡んでいることに変わりはない。

ホークウッドではないにしても、巨人とまた殴り合う羽目になるくらいのは覚悟しておいた方がいいだろう。

(それなら、万が一に備えアイシャはこのままソラール達と行動してもらった方がいいよな)

勝手に決めてから——また後でアイシャに怒られそうだと思いつつ——こっそりと陣地を抜け出した。

こちらに気付いたカルラに仕草だけで見逃してくれと頼みながら。

……

詰めが甘かったのだと。

それに気づいたのは、「ロキ・ファミリア」の後発隊が出立してからのことだった。

「おお、【象神の杖】」

正確には出立間際。

後発隊に組み込まれていた【キョククロブス単眼の巨師】によって告げられた。

「実はヴェル吉たちが戻っておらん。すまんが、良ければ面倒を見てやってくれぬか？」

「それは、かまわないが……」

今の時点において、ダンジョンでの未帰還者の收容は『ミツシヨ強制任務』の一部である。

その程度の融通はいくらでも利かせよう。

それに、見たところ【タケミカツチ・ファミリア】の団員達も後発隊に加わっていない。

あの少年らと行動を共にしているとすれば、それだけでLv. 2が三人いることになる。

例えばLv. 1が二人とLv. 0……そして、神ヘステイアを抱えていたとして『中層』から帰還するだけなら、今の状況でもまず問題は起こるまい。

これから【フレイヤ・ファミリア】と【ロキ・ファミリア】が最後の掃除を受け持つてくれるならなおさら。

他にリオンやクオン達も……。

「いや、待て」

そういえば、クオンの姿が見えない。

アイシヤやカルラ、ソラール達の姿があるから油断していた。

「ソラール！ クオンはどこだ?!」

「む？ そういえば……」

ソラールが首をひねる。

とはいえ、それは仕方がない。

先発隊が——正確には、それより先に「フレイヤ・ファミア」が——出立してから今まで、愚直に『監視所』から連結路を見張っていたのだから。

今もその他の派閥……ダンジョンの閉鎖により、今まで一八階層に拘留されていた複数のパーティを見送っている。

「カルラ殿。何か知らないか？」

「ああ、それなら先ほどパッチから何か受け取っていたよ」

ソラールの問いかけに、カルラはあっさりと頷いた。

「また何か厄介事にでも巻き込まれたのではないか？」

「なら、何故止めない……!」

毒づく暇も惜しい。言い切るより先に走り出していた。

目的地はひとまずリヴィラ。

パッチの言うのはあの禿頭の冒険者——ではないかもしれないが——だったはずだ。

(急ぎ見つけなければ……!)

この階層に残された厄介事など、一柱くらいしか思いつかない。もしクオンが感づいたなら、また厄介なことになる。

……

「んで、オレたちはどうすんだ?」

「……私は急ぎ地上に戻る」

走り去る姉者を止める間もなく見送ってから。

サミラの問いかけに少し迷ってから応じた。

「場合によっては援軍が必要になるかもしれない」

「ま、あの男神とは相性最悪だからね」

気楽に肩をすくめて見せるのは「麗アンティイアネイラ傑」だった。

全くその通り。このまま放っておけば、また『神殺し』が発生するかもしれない。

それは看過できないことだった。今の状況ではなおさらに。

(だが、これ以上動かせる戦力はあるか?)

メレンでの戦闘で主力部隊はかなり消耗している。

具体的には四三名が戦線離脱。うち少なくとも一〇名は永遠に復帰してくることはない。

また、メレンにはまだ例の『新種』が残っているうえ、それを売りつけた闇派閥イウイルス残党の報復も想定される。

闇派閥イウイルスと言えば『歓楽街』での一件から今に至るまで、その活動が活発になっているのは明らかであった。

メレン及び『歓楽街』にはもうしばらくは精銳を集めておくしかない。

加えてこの『深淵』禍により、オラリオ内もまだ動揺が残っている。

そうでなくとも、まだ数日は『深淵』に侵された者がいないか目を光らせておく必要がある。

つまり、警邏隊や市壁の防衛班から人員を割くにも限界がある。

「援軍つっても、オレ達はこれ以上手を回せねえぜ？ まだ危なっかしくて『歓楽街』を空っぽにはできねえからな」

「分かっている」

サミラ達……つまり、元「イシユタル・ファミリア」も『歓楽街』から動かせない。

彼女たち自身に歓楽街全体を守ってもらう必要があるからだ。闇派閥イウイルス残党だけではなく、神イシユタルに恨みを持つ派閥からも。

何しろ『歓楽街』に居るのは戦闘娼婦だけではない。戦う術を持たない普通の娼婦もいる。

少なくとも、戦闘娼婦達には今まで通り彼女たちを守ってもらわなくてはならない。建物の損壊ならまだしも、人的被害はどうやっても埋め合わせられないのだから。加えて言えば、今参戦してもらっている戦闘娼婦達もあまり長くここに留めてはおけないという訳だ。

「……お前達だけはもう少し手伝ってもらおう。残つて姉者と合流しろ」

今この場にいる戦闘娼婦の中で最も腕の立つサミラ——いや、戦闘娼婦という括りで見ると「麗傑」も該当するが、彼女は「ガネーシャ・ファミア」の一員ではない——と、他に熟練者の団員を何人か残す。

実際のところ、地上に戻り、人員を集めて部隊を編成し、戻ってくるだけの時間があるかと言われれば極めて怪しい。

それに『深淵種』との……いや、厳密に言えば異形との戦闘は精神的な負荷が強い。相手は変異してしまつた人間かもしれない。そんな思ひは、ただそれだけで剣を鈍らせる。

もはや他にどうしようもない。仕方がないことだ——と。そう割り切るのは難しい。私とて本当に割り切れているかは怪しいところだ。

目の前で変異していく者たちをただ見ているしかなかつた。

それどころかあの店員が例の丸薬を届けてくれなければ、私自身も間違いなく仲間入

りしていたのだから。

「……………」

ただひたすらに苦々しい感情を、どうにか飲み干す。

中堅に手が届いたばかりの団員ではなおさら。

もちろん、全員が『偉業』を成し遂げた冒険者だ。ただそれだけで折れてしまうなどあり得ない。

そんなことを考えるのは団員に対する侮辱でしかない。それは分かっている。

だが、精神の疲弊が肉体の疲労を加速させ、集中力を削り取っていることもまた否定できない事実だ。

少なくとも、しばしの休憩レストが必要だろう。おそらく、本人たちが思っている以上に。

この一八階層でとればいい話なのだが……今の状況下では最悪の場合、足を引っ張るかねない。

連れて戻るのが無難だろう。

「そりゃいいけどよ」

サミラがため息とともに言った。

「アイシヤ、お前も手伝えよ」

「仕方ないね。どうせあの男神が相手だ。あんただけだとまとめて殺されかねない」

英断だろう。さすがに【麗傑】アンティアーネイラまで殺すほどには狂っていない。……と思うが。報告された『神罰同盟』の末路を思い出せば断言など出来るものではなかった。

「んじやまあ、行くか」

「ああ。気をつけろ」

「あんた達もね」

そんなやり取りを交わしてから、私も急ぎ地上への帰還を開始した。

真剣に。切実に。可能な限り迅速に次の部隊を編成しなければならぬのだから。

……

無数の悪意と打撃に曝される中で。

『いいか、ベル』

記憶の中のクオンさんが告げる。

『言うまでもないことだが、視界を阻害されるような事態は極力避けなけりやならない』
確かこの時は、はあ——と、曖昧な返事を返したような気がする。

流石にそんなことは言われるまでもないことだと思つたから。

『ただし、そういう目にあうことは割とよくある。深い霧に包まれるとか、単純に辺りが暗いとか』

もしくは透明人間に襲われることもあるかも——なんて、クオンさんは言った。

その時は冗談だと思っただけ……ひよっとしたら、本当に襲われたことがあったのか
もしれない。

今の僕のように。

そう、だから。

『だから、そんな時は落ち着いて耳を澄ませ』

きつと、この助言には意味がある。

(そうだ。落ち着け……！)

悪意に囲まれる恐怖は、何とか薄れていた。

もしくは、それを薄れさせるために思考を回し続けているおかげだろうか。

(装備は見ただろう?!)

モルドさんは鎧を着込んでいた。

つまり……

『音を立てずに動くつてのは案外難しい。鎧を着込んでいればなおさらな』

装備同士がこすれ、あるいは揺れ動く微かな音。

砂利を踏みしめる足音。

それらが、モルドさんの大まかな位置を教えてくれている。

加えて、アイズさんやクオンさんの見えない——正確には見切れない——斬撃に対応

するべく磨かれた勘も、ようやく動き始めてくれた。

……あと、何故か結構な頻度で感じる誰かの無遠慮な視線のせいで感覚が敏感になっているせいもあるけど。

それら全てが、一つの形を結ぼうとしている。その手ごたえが確かにあった。

今なら、近くの高台から誰かが見ていることも何となく分かる。

「てっ、てめえっ、見えてんのかあああああああああああ?!」
全く見えない。

でも、攻撃はもう当たらない。踏み込みの音が、それより早くこの耳に届くから。

回避とはいかないが、防御するには充分だ。

ただ、そこまでだった。反撃に転じるには、まだ足りない。

『殺気つてのは白く見えることがある。俺にも偶にな』

なんて、クオンさんはそんなことを言っていたけど。

『その白い軌跡から身を逸らしてやれば、相手の攻撃は一瞬遅れて勝手にすり抜けていく』

とも。

……残念ながら、それは今の僕にはまだ理解できない領域の話なんだけど。

(もう少しはつきりと姿をとらえないと……)

だから、今の自分でもできそうな方法を考えなくては。

(でも、どうやって?)

魔法なら、いつかは効果が切れるはずだ。

ただ、これが魔法かと言われればとてもそうは思えない。

(多分、あの兜が魔道具……!)

姿が消える直前、黒い兜のようなものを被った……ように見えた。

多分、アレを外すか破壊すればいいはずだ。

(どうやって?)

思考を次の段階へ。

狙える場所は、決して広くはない。

畜力チャージしている余裕もない。

大体、相手の『耐久』や兜の強度が分からない状況ではとても使えない。

正確に兜を狙うには、少しでも姿を見る必要があった。

(どうやって?)

三度目の自問。

「くそが、くそが、くそがああつ!」

それに抜剣の音が重なった。

明確な生命の危機に、集中力が頂点に至る。

見えている——と。そう錯覚するほどに、相手の位置が分かった。もちろん、実際には全く見えていない。

ただ、自分の勘にすべてを託して思い切り前へと体を投げ出した。すれ違うのは一瞬。

地面を転がり——そして、半ば本能的にそれをつかみ取っていた。

「こいつでブッタ斬ってやるッ!？」

吹き付ける殺気に正対し、渾身の力でそれを握り砕く。

その感触が伝わってくると同時に、迷わず手の内の破片を投げつけた。

「なッ?!」

場違いなほど煌めくそれは、青水晶の破片。

それは相手の体に付着して、その輪郭を浮かび上がらせた。

(見えた……ッ!)

迷わず加速する。

払い落されれば、また勘を頼りに立ち回るしかない。

相手は自分より経験豊富な冒険者だ。同じ手は二度通じない。

この好機を逃すわけにはいかない——!

「う、うおおおおおおあああああああッ!!」

「ふッッ!」

動揺がはつきりと宿ったその剣筋は、あまりに遅すぎた。

軌跡に合わせて《神様のナイフ》を一閃。その剣を根元から切断する。

まだ青水晶の輝きは健在。だから、相手の体勢が崩れるのがはつきりと見えた。

ナイフを振りぬいた加速を殺さぬまま、体を反転。アイズさん憧憬に——文字通りの意味で——

叩き込まれた回し蹴りを繰り出す。

狙いは頭部。正確には右側頭部。兜さえ蹴り飛ばせばそれでいい——!

「がああッ!」

手ごたえ——というか、足ごたえ?——は思った以上に鮮明だった。

バキッ——と、そんな破壊音が周囲の喧騒に交じって微かに聞こえる。

「ぎッ、ぐがあ……」

それと同時に、相手の『インビジビリティ透明状態』が解除される。

「く、クソガキがあああああッ……!」

血走った目と視線が交差する。

僕自身のダメージも決して軽いわけではない。少なくとも、息が切れ始めているのを

自覚していた。

拳を握る。

いつの間にか追いかけてきてくれたヴェルフや桜花さん達が周囲を囲んでいた冒険者たちと戦っている。

そちらの状況を把握するほどの余裕はない……けど、ここでモルドさんを倒せば少しは優勢に傾くはずだ。

「くたばりやがれええええッ！」

なりふり構わず、モルドさんが突撃してくる。

見えない動きではない。見切れない動きではない。

（迎撃できる——！）

その覚悟とともに、地面を蹴って——

「ツツツツ！」

殺意にも似た強烈な神威が辺りを席卷した。

……

「なあ、今何が起こってるんだよ!？」

と、木に括りつけられたまま絶叫する。

何が何だかよく分からないまま、こんな目に合ってるボクだけど、こんなところで遊

んでいる場合ではないことくらいは分かった。

何かもう、森の奥から剣戟の音とか叫喚とか咆哮とかヤバい音がずっと聞こえているし！

あのモルドとかいう子の言つてたベル君への『指導』とか不安しか感じない！

「——おい、コラッ！ 神を無視するんじゃない！」

うがー！——と、吠えたところで反応があつた。

左右にいる二人からではなく、もう少し遠いところから。

具体的には——

『危ないですよ!!』

「うお?!」

白い光輪がちようど二人の首筋を狙つたかのように通り抜けて行つた。

「てめえ、何モ——ッ!」

続いて飛び込んできたのは、鈍く光る銀色の鎧。

つまり、アンジエ君は全く容赦なく冒険者君の片方を殴り飛ばした。

手にした斧ハルバードで。……石突きの方だったけど。

そちらに気を取られていた隙に、ぴよんぴよんと近づいてくる影があつた。

「べ、ベルくん?!」

「違えよ——ブあッ?!」

律義にツツコミを入れた隙に、もう一人の冒険者君も盾で顔面を殴られて鼻血を流す。

「ぐ、おおおおお……つつ」

そりやもう、ドバドバと景気よく。

ちなみに、このでつかい白兔は確かアルミラージって名前のモンスターだ。

『——【響く十二時のお告げ】』

いや、違う。この解呪式は——

「サポーター君!」

灰色の光膜が白い毛皮を包み、溶かすように消し去る。

残っていたのは小人族バルウムのサポーター君だった。

「はいヘステイア様無事ですか? 無事ですすね!」

「雑!? 扱いが雑すぎるだろお!」

「いいから早く! お仕事の時間です!」

サポーター君がザックザックとナイフで縄を雑に切断する。

「へ? 仕事って……?」

まさかダンジョンのなかでジャガ丸くんを揚げろと——!?

「死人が出る前にアンジエ様を止めてください！ 何か滅茶苦茶怒つてますよ！」

前代未聞の大偉業に打ち震える暇もなく、サポーター君が叫んだ。

「ほへ?!」

慌てて視線をそちらに戻す。

すでにそこでの戦闘は終わっていた。というか、そもそも始まってすらいない感じだった。

「神に仇名す不敬者ども。貴様らの大罪、万死に値——」

「しな—いっ!!」

とりや—!——と、アンジエ君の腰に後ろから抱き着く。

鎧に直撃したのでちよつと痛かった。

「ヘスティア様。今しばらくお待ちください。この者どもを裁き、耳を削いで御身に捧げます」

それで動じるような子じゃないのは分かっていたけども!

「ひ、人殺しいいいいいいいっ!?!」

本気度一〇〇%。一切の迷いのない言葉に、ゴロツキ君たちが本気の悲鳴を上げる。

「いらないよっ?!」

それに負けず、すかさず叫び返した。というか、叫び返すしかない。じゃないとやる。

この子はマジでやる。

ボクの悲壮な思いが通じたのか、アンジェ君はほんの少し沈黙してから。

「では、瞳を……」

「そうじやなああああああああああいつ!?」

「まさか舌を? いけません、ヘステイア様。それは貴女様にはふさわしくない」

「絶対いらない!! と、いうかそもそもどういう基準で言ってるんだい!」

「では、椎骨だと。いえ、ですが、それは……」

「それもいらないからっ!」

どうしてことごとく物騒な代物を捧げようとするんだ?!

そしてサポーター君! 『やつぱりクオン様の関係者なんですねえ。何だか安心しました』とか言つてひとり寛いでいるんじゃない!

「お、おい。今気づいたんだがよ……」

そんな中で、ゴロツキ君の片割れが震える指でサポーター君を指さして呻いた。

「あそこで悠然と構えている小人族バルツム。ありやもしかして、古の『ハベルの戦士』つて奴な

んじや……」

「な、何だと……ッ!」

もう一人のゴロツキ君が戦慄したまま叫ぶ。

「あの【大切断】^{アマツン}ですら持ち上げられない伝説の剣を片手で軽々振り回すって奴かッ!?」
 「そうだぜ! しかも一度身に着けたら【猛者】^{おうじゃ}ですら身動きが取れなくなる呪いの鎧を着込んで平然としたままだつて噂だ!」

「それどころか【正体不明】^{イレギュラー}だつて片手で一捻りだとか聞いたぞ?!」

何だかすごい噂になつてる。

何が辛いつて、二人ともガチで信じてるつてことだ。嫌でも分かつてしまう。女神だから。

「他にも山ほどの水晶柱をバリバリかみ砕ける強靱な顎も持つてるとか……!」

「あのクソツたれな黒竜も腹を見せて降参するつてたな!」

「ああ! 力の源は生きた処女のエルフの魂で、ハルバードで刺してこんがり焼いてダガーで切り分けて丸齧りに……!」

いや、それももう絶対途中で死んでるし丸齧りでもないだろ——と。

何だかグロいうえにワケワカメな領域に突入していく二人の会話に、何とかツツコミを入れようとした瞬間。

プツツ☆

そんな音を確かに聞いた。

「アンジエ様」

ポンと手のひらを打ち合わせ、向日葵のような笑顔を浮かべながらサポーター君が言った。

「ハンバーグにしちやいましょう♪」

「どわあああああああああッ?!」

ゴロツキ君たちと一緒に叫ぶ。

「おおおおおおお落ち着くんだサポーター君！ 君までそつち側ダークサイドに行かないでくれえ?!」

行かれると、深刻にツツコミが間に合わない！

なんて、ツツコミを入れている暇もなかった。

何故なら——…

「——ツツ?!」

敵意に満ちた神威が、唐突に森の向こうから吹きつけてくる。

半ば押し倒すようにサポーター君へと抱き着き、自分の神威で包み込む。

(これ、ヘルメス……?!)

多分、それは間違いない。そして、尋常なことじゃない。

よりによってダンジョンの中でこんな神威を解き放つなんて。

(まさかクオン君にバレた?!)

いや、問題はそれだけじゃない。

これだけ派手にやれば絶対にダンジョンにもバレる。

「みんな、大丈夫かい？」

幸いにして、神威の嵐はすぐに収まった。

いや、まあ、クオン君が絡んでいるなら幸いかどうかは微妙なところだけど。

「な、何とか……」

青い顔をしたサポーター君がまだ少し震える声で頷く。

「ヘステイア様……」

一方で、アンジエ君は——やはりというべきなのか、それとも表面上の話に過ぎないのか——臆することなく、ただ険しい顔で『空』を見上げている。

「急ぎ、クラネル様達と合流すべきかと」

「ああ。分かっているよ」

ついさつきまで聞こえていた喧騒はもう聞こえてこない。

ベル君がいるんだし、まさかクオン君に全員斬られたりはしてないと思うけど……。

「君たちも着いて……」

何が起こってもいいようにゴロツキ君たちも連れて行った方がいいだろう。

心の中で呟きながら、二人に視線を向けると。

「こらああああああっ?! 今のはシリアスパートだぞおおおっ?!」

何だかカニのようにブクブク泡を吹いてひっくり返っていた。

まったく、こんな時だっていうのに! 緊張感が足りてないっ!!

「いえ、真面目に真剣に卒倒してるのだと思いますよ?」

起つきろおおおっ!——と。

ゴロツキ君たちを蹴つ飛ばしていると、ポツリとサポーター君が呟いた。

……

(なるほど。元凶は高台に、か)

リヴィラに戻るまでもなく、元凶——最後の標的を発見した。

そう。そいつらこそがあの女神^{イシユタル}が遺した最後の標的だ。

ヘルメス。そしてその眷属の女。

ホークウツドの言う元凶はこの二人だと考えてよかろう。

そうでなくとも、別に構わない。

この亡者^{かみ}どもはあの少女の魔法——いや、アイシャは妖術と呼んでいたか——の詳細と、『殺生石』の利用法を知っている最後の派閥。

であれば、どのみち一人残らず塵殺する必要がある。

今回の『殺生石』を渡したのはアン・デイルだとしても、そんなことはただ時間を

前倒しにしなければ過ぎないのだから。

「こんな愛、堪ったものじゃありません」

女の視線の先——その高台から一望できる広場では、ならず者どもに囲まれたベルが見知らぬ冒険者と取っ組み合っている。

この喧騒に釣られてきたのは正解だった。

完全に場の空気に飲まれているのか、今はベルの方が劣勢だが……まあ、逆転は時間の問題だろう。

ベルはあの戦いからさらに経験を積んでいる。ならば、その程度には仕上がっているはずだ。

あのならず者どもを何故ホークウッドが庇おうとしているのか。詳しいことは分からない。

ただ、ある程度の察しならついた。

「そう言うなつて」

ベルと対峙する誰かの姿が見えないのはこの女の仕業と見ていい。

全体的な構図で言えば、神に誑かされたといったところだろう。

よくある話だ。忌々しいことに。

【Corpus New】

だがまあ、この際どうでもいいか。向こうが終わる前に、こちらも終わせた方がいい。少し距離を置いたところで詠唱する。

間違つてもその声は届くまい。

指にはオーベックから譲り受けた『静かに眠る竜印の指輪』を——ヴァンハイムの隠密の『とつておき』を嵌めているのだから。

「知つて欲しかったのさ。彼に人の一面を」

標的を間合いにとらえた。

ならばお望み通り教えてやるとしよう。

俺達の呪いを。

「万能者」警戒しろ!!」

「えっ——ツ!？」

思わず舌打ちした。

背後からの声にはではない。もう一人の女が標的と俺の間に飛び込んできたことにだ。女の勘とでもいうつもりか。

だが、それでもいい。この距離なら。ひと手間増えるだけだ。

……今の状況では、そのひと手間こそが厄介だが。

手にしたダガーを——《闇のダガー》を割つて入ってきたその女の横腹に突き立て

る。

「——あ」

耳障りな断末魔の悲鳴など誰が許すものか。

そんな暇も与えず、刀身に宿った闇の力がその女の体を駆け巡る。

神の血に酔い、適性しかくを失った冒険者どもにはよく効くだろう。

「アスファイ!?!」

魔術——【見えない体】はまだ健在。音も完全に消されている。

腑抜けた亡者かみに、俺の姿はとらえられない。

——が。それも、もうあまり意味はなさそうだ。

「やめろ、クオン!!」

シヤクテイが叫びながら槍を構え突撃してくる。

さすがに彼女は俺の位置をある程度予測できているらしい。

刺した女のソウルはまだ流れてこないが、生者ならまず動けまい。

ならば、とどめは後でいい。今はその時間も惜しかった。

白目をむくその女を適当に蹴飛ばして、刃を自由にする。

とはいえ、あまり時間はない。少なくとも、仕切り直してから、改めて急所を狙えるほど暇ではない。

内心で舌打ちしながら、武器を切り替えた。

無理に背後を取る必要はない。

一撃で殺せる。然るべきところに、適切な強さで当てられるなら。

それは、イシユタル達を相手に確認済みだ。

それどころか標的はまだこちらを見てすらいない。

「
」
手にする武器は、愛用のクレイモア。それを横薙ぎに一閃する。

それで終わり——のはずだったが。

次の瞬間、僅かに火花が散る。

「つう……!?!」

確かにふるった大剣はあっさりと両断した。

標的ではなく、なりふり構わず飛び込んできたシャクテイの槍を。

その刹那、魔術を維持する冷静さが吹き飛んだ。

毒づく暇もなく、自身の感覚しかくの中でも半透明になっていたはずの体が実体を取り戻す。

「命を懸けるほどの相手かッ?!」

戦闘中に激昂など出来る身分ではない。

そんな余計なことをしている余裕など、この非才の身にあるものか。
だが、思わず叫んでいた。

剣先は槍どころか確実に彼女の体を斬り裂いている。その手ごたえを確かに感じたからだ。

致命傷には届かない。だが、決して浅くもあるまい。

「命を懸ける状況だともッ!!」

が、彼女はそれを無視して叫び返してきた。

「お前にオラリオと敵対されては困るからなッ!」

「勝手なこと……!」

毒づく……が、彼女が言わんとしていることは分かる。

ダンジョン内に『深淵』を発生させられるような何者かが存在しているのは明らかだ。果たして、オツタル無意味やその手下なこどもと殺しあてっている暇があるかどうか……。

戦闘中に余計な意識が浮かんだ。浮かべてしまった。そのせいで必要な一手がわずかに遅れる。

「——ッツ?!」

その瞬間、膨大な神の気配が解き放たれた。

声にならない悲鳴とともにシャクテイの動きが止まる。

問題はない。予測外の行動ではない——いや、予想通りの行動だった。

今の生者にんげんなど、それだけで支配できる。奴らは本気でそう信じているのだから。投げナイフを投擲。狙いは亡者かみの手。

正確には投げつけようとしてきた小瓶のようなものだった。

……のだが。

狙いが逸れた。俺が下手を打つたのではなく、亡者かみが焦りすぎた。

慌てて駆け寄り、抱き上げ、何かを抜き出し、投げつけようとした。

だが、その女の血で濡れたその手はよく滑ぬめつたらしい。

結局、投擲された小瓶はでたらめな場所へと飛んで行き——そして、起爆した。

果たしてこれは俺の『人間性』が手繰り寄せた幸運なのか。それとも単純に奴が間抜けなだけか。

……まあ、この際どちらでもいいが。

それより一瞬早く、投擲をやめてシャクテイの体を抱き寄せ盾の内側に庇う。

伝わってくる衝撃はなかなかのものだった。愛用の《竜紋章の盾》でなければ、もう少し痛い目を見ただろう。

「ぐおお……っっっ!!」

一方で自爆した亡者かみ自身は半身が焼け爛れ——盾になったのか、それとも盾にされた

のかは知らないが——背中一面が焼け焦げた女の方はいよいよ痙攣を始めていた。

……いや、冒険者は存外にしぶとい。それが死の痙攣とは限らない。

「——ッ!？」

好機を逃さず仕留める。この手で確実に殺すまで、油断などすべきではないのだから。

……いや、この有様なら一思いにとどめを刺してやるのがいつそ慈悲ですらあるだろう。

それはそれで癪だ——と。そんな戯言諸共に刃を振り下ろす。

だが、直撃するより早く背後からシヤクテイに体当たりされた。

そのせいで、狙いが逸れる。精々切っ先が軽く亡者^{かみ}を掠めた程度だ。

本人は大げさすぎる悲鳴を上げているが。

「お前……!？」

「言っただろう。お前にオラリオの敵になってもらつては困る!」

まだどこか上擦った声のシヤクテイともつれ合い、地面を転がりながら言い合う。

傍から見れば酷く滑稽なやり取りにしか見えまい。

近くの水晶体に映り込む自分たちの姿に舌打ちするより先に次の異変が生じた。

「何だ?」

体を跳ね起こすより先に、ダンジョンの『空』が赤黒く染まる。それどころか、ダンジョンそのものが小さく鳴動していた。

「く……ッ！　これが『厄災』か！」

「何だと？」

疑問への返答は、思いのほか速やかに返ってきた。

シャクテイからではなく、ダンジョンそのものから、だ。

……

「な、何だ……？」

神威の嵐は、一瞬で収まった。……と、思う。

ただ、異変はまだ続いている。

ダンジョンが揺れていた。

「大丈夫か、ベル！」

「遅くなり、申し訳ありません！」

「ヴェルフ！　命さん達も！」

戦意を喪失した冒険者たちを飛び越え、ヴェルフ達が駆け寄ってくる。

他に命さん達に、リユースさん……

「ふうむ……」

一昨日、クオンさんと戦っていたアーロンさんの姿もあった。

「揺れが強くなっておる。さて、何が起こることやら……」

そのアーロンさんは兜越しに顎を撫で、『空』を見上げていた。

その間にもダンジョンの揺れは強くなり、木々のざわめきが斉唱となつて響き渡る。

「……これはあの時と同じ。『厄災』が来る前触れ」

見たこともないほど険しい顔で、リユースさんが呻いた。

「リユースさん……?」

「ほう?」

困惑する僕達——と、何だか楽しそうなアーロンさんを——が束の間立ち尽くしている。

「やはりそうなるか」

「シヤクテイ……」

いつの間にかシヤクテイさんとクオンさんが近くまでやってきていた。

「その傷は、まさか……っ!」

シヤクテイさんの戦闘衣バトルクロスの胸元には剣で斬られたような傷がある。

血の染みからすると、決して浅い傷ではない。

何かあったのは明白だった。

「その『厄災』ってのは何だ？」

さっきの神威の原因はもしかして——と、僕が視線を動かしたちようどその時、クオンさんが言った。

「いえ、その前に……」

「安心しろ。最悪の事態だけは回避できた。【万能者】^{ベルセウス}も一命をとりとめたからな。……すぐに戦線へ復帰することは難しいかもしれないが」

「それは、確かに不幸中の幸いですが……」

「何が幸いなものか」

リューさんの言葉にクオンさんがかなり不機嫌そうに毒づく。

つまりというか、やっぱり……!!

「やっぱり君のせいかなぁああああああああああつっ!!」

とりや——と、神様がドロップキックをクオンさんにお見舞いする。

「どわあああああああつ!!」

「神様あつ?!」

……けど、クオンさんがあつさり避けたのでそのまま向こうまで飛んで行き、着地に失敗して地面を転がっていった。

「ベル様、ご無事ですか?!」

そつちに気を取られていると、後ろからリリの声が聞こえた。

「リリ！ アンジェさんも！」

神様を助けてくれたのはリリ達なのだろう。

「ご事情はわかりますが、お一人で行ってしまわないでください!! リリ達に相談するだけでもやりようはいくらでもあつた筈です！」

安心したように笑いかけてから、キツと眼を鋭くしたりりに怒られてしまった。

「ごめん、ありがとう」

素直に頭を下げる。

リリだけではなく、みんなに向かつて。

「……それで、『厄災』つてのはあいつのことでもいいのか？」

僕が頭を上げるより先に、クオンさんが言った。

慌てて頭を上げ、クオンさんの視線の先を追う。

クオンさんが見ているのはこの一八階層で太陽の役割を果たす最も巨大な白水晶。

正確には、その中身だ。

「……え？」

その水晶の中から黒い何かが蠢いていた。

それを認めると同時、ダンジョンが一際大きく震動する。

「わあああつ?!」

「きやああつ?!」

「神様! リリ!」

一八階層全体を揺るがすその威力に、誰もが周囲にある幹や水晶柱に手を伸ばし踏み止まろうとする。

そして——バキリツ、と。

走った。

未だ巨大な何かが蠢く白水晶に、深く歪な線が。

「亀裂……!?!」

「まさか、モンスターが生まれるのか?!」

「ありえませんか! ここは安全階層セーフティポイントですよ!?!」

リリの悲鳴を嘲笑うように、亀裂はより大きく、より深くなつていく。

あの黒い塊が生れ落ちるまで、そう時間は必要ない。それは、誰の目にも明らかだった。

「クオン! 貴公らも無事か!?!」

戦慄が深まる中、駆け寄ってきたのはソラールさん達だった。

「いったい何が起こってるんだい?」

「それが俺もよく分からなくなってな」

アイシヤさんの問いかけに、クオンさんが肩をすくめて見せた。

「『厄災』がどうこう言ってるんだが……」

「おい、【象神の杖】。『厄災』ってまさか七年前のあれのことか？」

呻いたのは、灰色の髪をしたアマゾネスだった。

「おそろくな」

「本気で言ってるのかい？」

シャクテイさんが頷くと、アイシヤさんまでが舌打ちする。

「昔話で盛り上がっていると悪いが、誰でもいいから説明してくれ」

「ダンジョンは憎んでいるんだよ。こんな地下ところろに閉じ込めている、神々ボクたちをね」

クオンさんの問いかけに応じたのは、神様だった。

「多分、『深淵』ってやつのせいで元々神経質になってたんだと思う。そこにさつきみに強烈な神威が吹き荒れたなら間違いない暴走する」

「神様……？」

観念したように——もしくは、懺悔でもするように——呻く神様に、茫然と声をかける。

「あのモンスターは多分、ヘルメスを……いや、神々ボクたちを抹殺するために送られてきた刺客

だ

そんな僕を他所に、神様は続けた。

よく分からない。よく分からないままに大切なことだけは理解した。

ダンジョンは神様たちを殺すために、あの黒い何かを生み出そうとしているのだと。

「神を憎んでいる、か。なるほど」

カルラさんが苦笑とも嘆息ともつかない吐息を漏らした。

「カルラさん？」

「どうやら、あちらは少しも堪える必要がないようだな？」

「……ああ、そうらしいな。羨ましい限りだ」

クオンさんの舌打ちは、ダンジョンに響く轟音に紛れて消えた。

……

迷宮は憎悪に身を任せ、猛り狂っていた。

——神が己のうちにいる！

身悶えし、憤怒し、慟哭し、狂笑し——…

何を想い、何を欲し、何を成さんとしているのか。

ともすれば、それすらも見失いかねない程の衝動。

耐えがたい渴きにも似て——…

そう。

迷宮が抱くソレは確かに渴望と呼べるものだった。

ドクン——と。

それに呼応して、何かが脈打った。

脈打ち始めた。

人が迷宮に踏み込んでから今に至るまで。

愚かな侵入者がその命尽きる度に、ほんの少しずつ迷宮に溜まり始めていた『何か』。

ついには怪物であつて怪物でない何かを生み出すに至った『何か』。

暗く生温かいその『何か』が、その衝動に共鳴した。

ドクン——と。

それはつい先日、迷宮を飲み込まんとし。

そして、迷宮もまた飲み干そうとしたあの『異物』。

それは、あの暗い『深淵』に、とてもよく似ている。

あの『毒』を飲み干さんとした今だからこそ、それが解った。

で、あれば。

忌々しい『女王』の真似事くらいならできるだろう。

あの『異物』を定着させるための『要』。

それは元々、迷宮の力を利用して生み出されたモノなのだから。そして、迷宮は。

ありつただけの寵愛のあいを込めて——その恐ろしさなど顧みることなく——その怪物を解き放った。

……

『オオ!!』

生れ落ちた『厄災』。

その黒いゴライアスは、鮮血よりも赤い瞳を見開き咆哮する。

ダンジョンが鳴動して、そして——…

「やられた……!」

呼応するように、突如として中央樹と南端の外壁が崩れ落ちた。

さらに、その傷口を覆うように無数の水晶が——そして、不気味な『赤水晶』までが生じた。

決して逃がさないのだと。そう宣言するように。

「ああ。これで退路は断たれたというわけだ」

「そうなりますね」

シャクティさんが苦々しく呻き、クオンさんが小さく肩をすくめ、リユーさんはいつ

も通り冷静な声で頷いた。

「いや、もつとヤベえぞ?!」

灰色髪のアマゾネスが焦りを宿した声で言った。

「何だ? なんか来るぞ……!」

黒いゴライアスは大きく息を吸い、そして――…

『オオッ!!』

そして、『咆哮』した。

「は……っ?!」

帯電する不可視の衝撃に飲まれ地面が崩れ落ちる。

何が何だかよく分からないまま、それだけを理解していた。

「おい! 全員生きているか?! 主にヘスティアとリルカ!」

気づけば、崩落する高台を転がるように滑り落ちていて。

そのまま何とか地面に着地し、瓦礫の雨を掻い潜ってから――僕を肩に担いだまま――

クオンさんが辺りに向けて叫んだ。

「いいいいいい生きてる! よーな気がする?!」

「たぶん平気ですう!?!」

森の中に突き立つ大きな瓦礫の影から、それぞれアンジェさんとソラールさんに抱え

られた神様とリリが叫び返してくる。

その瓦礫の影で神様たちと合流し、ひとまず安堵してから……改めて血の気が引いた。

他のみんなはどこに……!?

「いてて……。クソ、ふざけんよ……。ッ!」

最初に瓦礫の影に飛び込んできたのは、灰色髪のアマゾネスだった。

片手で耳を抑え、もう片腕で千草さんを抱えている。

「物理的な衝撃を伴う『咆哮』^{ハウル}だって……。!？」

その少し後ろで、こちらに向かってくる——もしくは避難してくる——モンスターの群れを斬り散らしていたアイシャさんが毒づく。

「ヘルハウンドと同じく、魔力を利用した攻撃のようですが……」

「威力が尋常じゃないぞ」

同じくモンスターの群れを殲滅していたリユースさんの言葉に、同行していたヴェルフが呻いた。

「ああ。本当に高台全てが消し飛んだかと思っただ」

「うむ。流石に少し肝が冷えたわ」

険しい顔で桜花さんが頷き、アーロンさんが呵々と楽しそうに笑う。

改めて見ると、確かに高台の全てが消し飛んだわけではなさそうだった。

もしそうだったら、流石にクオンさん達でも避け切れなかっただろう。

高台そのものはまだ原形は残っている。

僕たちがいた辺りがここから見ても分かる程度に抉られているだけで。

「狙いが甘くて助かった」

「まったくだ」

ソラールさんの言葉に、カルラさんが頷く。

実際、直撃していたらあんな風に滑り落ちるだけでは済むはずもない。

それどころか、全滅していただろう。少なくとも、僕達は。

「全員無事か？」

「皆さんご無事ですか?!」

最後に駆け寄ってきたのはシャクティさんと命さんだった。

「多分な。他のゴロツキどもがどうなったかは知らないが」

高台の上やすぐ近くの森の中から悲鳴のようなものが聞こえてくる。

多分、戦闘になっている——撤退戦かもしれないけど——のは間違いないと思うけど

……。

「今からでもあの神を殺せば帰ってくれるんじゃないか？」

「神ヘステイアがいるだろう」

シヤクテイさんの言葉に、アンジエさんが盾を構えて神様の前に立ちはだかる。それを見たクオンさんが、それもそうだな——と、もう一度肩をすくめた。

「ヘステイア。これで貸し二つだからな」

「……やはりやる気かな？」

杖を携え、明らかに答えを理解している様子のカルラさん。

「ああ。流石に神どもものどばつちりで殺されちゃかなわない」

愛用のクレイモアを引き抜きながら、クオンさんが宣言した。

「……半分はお前のせいだがな」

シヤクテイさんのため息は聞こえなかったことにしたらしい。

その代わりに、いつもの『スキル』で一振りの槍を取り出す。

「やる。さっきの詫びだ。お前なら多分使えるだろう」

クオンさんが投げ渡したのは、立派な拵えの十字槍だった。

何となく《神様のナイフ》に雰囲気似ているような……。

「それで、どうするつもりだ？」

敵意はないと判断したのだろう。

改めて巨人を見据えながら、アンジエさんが言った。

「まずはリヴィラを死守する」

その問いかけに、クオンさんは即答する。

「霞がいるからね」

そんなクオンさんをからかうように——でも、真剣に——アイシャさんが言う。

当然だろう。この一八階層で、それでも一番安全なのはあの街だから。

「それももちろんだが、ついでにヘスティアも預かってもらわねけりやならない。それに——」

「あの街が陥落すれば私達は完全に補給先を失うことになる」

槍の具合を確かめながら、シャクテイさんが呟いた。

「後詰や補給を蔑ろにしては、勝てる戦にも勝てんな」

刀を抜きながら、アーロンさんが笑う。

「うむ。だが、この『中層』にいるのは誰もが偉業を成し遂げた戦士たちだと聞く。そう容易く陥落するとは思えん」

俺達はただ前を見て進めばいい——と、ソラールさんが剣と盾を構えた。

「ああ。どのみち退路もないしな。奴らもそのうち腹をくくるだろうさ」

できれば早めに決めて欲しいが——と、クオンさんは小さくため息をこぼしてから。

「何であれ、時間が惜しい。始めるぞ」

何の気負いもなく、瓦礫の影から飛び出して行った。

ほぼ同時に、ソラールさんとアーロンさんが。そして、その後にカルラさんも続く。

「サミラ、お前は神ヘステイアを連れてリヴィラに向かえ」

「何だよ。オレは仲間はずれってか？」

「いや、違う。リヴィラにいたら、ボールスの尻を蹴飛ばしてでもいい、援軍を用意させろ。お前向きの仕事だと思うが？」

その後は好きにしてい——と、シャクテイさんも言い残して走り出す。

「チツ、物は言いようだな」

「ああ、サミラ。リヴィラに行くなら、ついでにこれを霞に渡してくれるかい？」

舌打ちする灰色髪のアマゾネス……サミラさんに、アイシャさんが何かを手渡した。

「そりや構わねえけど……。こんなもん何に使うんだ？」

「流石にあいつは冒険者じゃないからね。それくらいの小道具は必要だろうさ」

「はあ？ ……まあ、いいけどよ。ほら行くぜ女神様」

「ほあ?! 急に担ぐんじやない!?!」

さっきの僕のように小麦の袋のように肩に担がれて、神様が叫ぶ。

「それで、坊や。あんた達はどうするんだい？」

アイシャさんだけでなく、リユーさんやサミラさんの視線が集まる。

それだけではない。神様も、リリも、ヴェルフも、アンジエさんも、命さん達までが僕を見ていた。

仮にもパーティ全員の命を預かるリーダーとして、選択が求められている。

相手の力は未知数。ただ、元がゴライアスであるならLv. 4以上は絶対だ。

一方で僕たちは上級冒険者^{Lv. 2}が五人にも満たない。

先ほど見せつけられた通り、彼我の実力差は絶対。

「行きます」

それでも、迷いは一瞬だった。

リヴィラの援軍と言っても、主となるのは僕と同じLv. 2だ。

それなら、僕だって戦わなくては。

「そういうと思ったぜ、相棒」

「パンツ！——と、拳を掌に打ち付けてヴェルフがにやりと笑った。

「仕方ありませんね。階層主が相手でも、サポーターは必要でしょう」

大きなため息をつけて見せてからリリが言う。

「我が主の命のままに」

アンジエさんが一礼し、桜花さん達も無言で大きく頷いてくれた。

「上等だよ」

不敵に笑うと、アイシヤさんもまた戦場に向かって走り出した。

「貴方はパーティのリーダー失格だ」

ため息交じりに、言つたのはリユースさんだった。

他の誰でもない彼女の非難の言葉と目に、胸がひび割れる。

そして、鋭い痛みに打ちのめられそうになった次の瞬間——彼女は笑った。

「だが、間違つていない」

目を丸くする僕を置き去りに、リユースさんも瓦礫の影から飛び出して行つた。

「つと、ヤベエ、オレも急いで仕事済ませねえと喧嘩に遅れちまう！」

「どわあ!？」

「行くぞ！」

「おおおおおっ!？」

喋ると舌噛んじまうぜ、女神様！」

驚くほどの速さで走り出したサミラさんに、担がれたままの神様が悲鳴を上げた。

「み、みんな無理するんじゃないぞおおおおおおおおおっ!？」

奇妙に尾を引いて聞こえる神様の声に背中を押され、

「行くう！」

僕達も、巨人の猛る戦場へと飛び込んでいった。

4

草木と水晶に彩られ、精霊郷のようですらあった一八階層。

そこが今は、正しく怪物の園と化していた。

「フツ——ツ！」

アンジェさんが眼前に立ちはだかるバグベアーを斬り捨てる。

続けて、ハルバードに切り替え迫りくるリザードマンの群れを薙ぎ払った。

「ファイアポルトツ！」

でも、まだ足りない。

それを飛び越えて迫るライガーファングを撃ち落とす。

「覚悟しちやいたが、こいつはマジで洒落にならねえな……ツ！」

「ああ。モンスターどもめ、どいつもこいつも殺気立っている」

火の粉を纏いながら地に落ちたライガーファングにすかさずとどめを刺しながら、ヴェルフと桜花さんが毒づく。

瓦礫の陰を飛び出してからここまで——クオンさん達やリユーさん達が先行しているのに——交戦回数はすでに三回。

クオンさん達がモンスターを放置していったのではなく、単純に倒した端から殺到してきているだけだ。

「乱戦の中に飛び込んだと見ていいでしょう」

さらに続けて飛び出してきたガン・リベルラをハルバードで叩き落としながらアンジェさんが言った。

その推測はきつと正しい。今も周りのあちらこちらから戦闘音が途絶えることなく聞こえてくる。

「どこから敵が襲ってくるか分かりません。油断なさらぬように」

僕だけではなく、ヴェルフ達もその言葉に頷いた。

「ひとまず先行隊に追いついた方がよいかと。この状況下で戦力の分散は好ましくありません」

幸い、目指す場所をはっきりしています——と。その言葉に頷く。

木々の隙間から、咆哮を上げる巨人の姿は見えていた。

「リユーと言いましたね。彼女も、おそらく同じことを考えているかと」

少し先にいるはずのリユーさんにもまだ追いつけていない。

ただ、木々の隙間を縫うように疾走する緑のケープや時々視界の隅に見えていたし、その先で凍とした声が響くのも聞こえていた。

何より、その鼓舞に冒険者と思しき声が集まりつつあることも感じる。

そして、すぐに森が途切れた。

いや、違う。巨人によつて蹂躪された森の跡地。つまり、戦場へと到達したのだ。

「クオンさん！」

最前線にいたのは、当然というべきかクオンさん達だった。

「よう、遅かったな」

斧槍でミノタウロスの群れをまとめて一掃しながらクオンさんが言う。

「すみませんッ！」

すぐ背後に迫っていたリザードマンの胸元——魔石へとナイフを突き立てながら叫

び返す。

その間にパーティを一瞥したクオンさんが叫んだ。

「リリルカ！ 俺たちの死角を補え！」

「ええ?! ど、どうすればいいんですか?!」

「シャクテイの補佐でいい！ いつも通りやれ！」

「無茶ぶりが過ぎませんか!?!」

「何、そのうち慣れるッ！」

リリの悲鳴を、一突きでミノタウロスを仕留めながらシャクテイさんが笑い飛ばし

た。

「そういうあんたは、何だか調子が悪そうじゃないか？」

「この槍、なかなか重くてな。慣れるまでもう少しかかりそうだ」

切れ味に文句はないがな——と。

大朴刀を振り回し、周囲のモンスターをまとめて薙ぎ払い笑うアイシャさんに、シャクテイさんが応じた。

「うむ。使いこなせれば、古竜のウロコすら貫ける名槍だからな」

「そうか。……ならば、期待に応えてみせよう」

貴公になら、きつと応じてくれるはずだ——なんて。

ソラールさんの言葉は何となく奇妙な気もしたけど。

「千草、お主はその娘を守ってやれ。命はその娘らとともに我らに指図せよ」

「はい！」

「お任せください！」

「桜花。お主は我らと共に来い。このまま敵中を突破するぞ」

「承知！ 押し通るッ！」

桜花さん達が、アーロンさんを中心にして陣形を組む。

元々顔見知りということもあって——何より、アーロンさんもシャクテイさんに負け

ないくらい凄く指揮に慣れていて——二人の間にはすぐに連携が生まれた。

「おおおおおッッ！」

同じLv. 2とは思えないほど、モンスターへの対応力が上がっていく。

僕も負けていけない——と。

「ベル様、上です！」

そんな中で、リリの悲鳴が聞こえた。

——頭上に羽音。

——ガン・リベラル。

——射撃が来る！

（回避……いや、無理。防御を——ッ！）

その刹那。脳裏に言葉が爆ぜ、選択を迫られる。

「フッ！」

しかし、発射されるより先に緑色の疾風がそれを叩き落とす。

「クラネルさん。油断はいけない」

リューさんは着地と同時に、気づかないうちに僕の背後に迫っていたライガーファング

まで撃破して見せた。

「すみません！」

改めて精神を研ぎ澄ます。

クオンさん達が周りにいるとはいえ、決して手数に余裕があるわけじゃない。

最低限自分の身は自分で守れないのであれば、ただの足手まといでしかなかった。

「あまり力みすぎるとなよベル。俺達もいつも通りやるぞ」

「そうです、ベル様。いつも通り落ち着いていきましよう」

「ええ、焦ってはいけません。意識を広く向けてください」

「うん！ みんな、ありがとう！」

——と、そんな焦りを見透かしたようにヴェルフやりり、アンジエさんがそれぞれ助言をくれた。

集中力はそのままに、余計な気負いが抜け、狭くなっていた意識が広がっていく。体が軽く、そして柔らかく動く。

(行ける……！)

モンスターは狂暴になっているせいか、動きまで荒くなっている。

あの『変異種』ほどではないにしても隙が多い。

なら、臆するな。飛び込め。

このモンスターたちに直撃を許せば僕はすぐにでも行動不能に追いやれるだろうけど。

僕だつて一撃でモンスターを灰にできるのだから。

「そう、それでいい」

妖精の囁きと仲間たちの声に背中を押され、さらに加速する。

狙いは魔石。だけど、最悪は一撃で仕留めきれなくてもいい。

マッドピートル
大甲虫の外殻の隙間にナイフを滑り込ませ、四肢を解体する。

「よっしゃあ、いただきー！」

背後にはヴェルフ達がいる。

戦闘能力を奪えば……動きさえ止めれば、とどめは任せられる。

「ヴェルフ殿、右から来ます！」

「うおつと?!」

「フツ！」

「悪い、助かった！」

「いいえ。大型と言え、動きが鈍重とは限りません。油断なさらぬように」

桜花さん達やリューさんとも手を取り合い、新たな連携が組みあがつていく。

「スコット、ガイル、どこだ!?! 助けろっ! 助けてくれえええっ!?!」

「前方に冒険者! 数は五……いえ、八!」

前方から悲鳴が聞こえる。

鬱蒼とした森の中でモンスターと入り乱れる冒険者たちの数を、命さんが正確に読み取り告げた。

「いかん！ 『咆哮』^{ハウル}が来るぞ！ 避ける！」

でも、シャクテイさんの指示は今まさに狙われているその冒険者たちには届かない。というより、届いていたとしても、対応ができない。

モンスターの大量に襲われている状態ではとても。

「カルラ！」

「任された」

クオンさんとカルラさんの詠唱が重なる。

「——ッ！」

クオンさんが突き出した両掌から、不可視の衝撃波——衝撃の塊がモンスターの群れに直撃し、そして炸裂した。

【Retorta Barricade】

強引にこじ開けられた空白地帯にカルラさんが飛び込み、杖を掲げる。

『——オオ!!』

同時、咆哮^{ハウル}が放たれて——

「まあ、ほんなところか」

空間を暗く歪ませる障壁に弾き返された。

行き場を失った衝撃は周りのモンスターを飲み込み爆ぜる。

とはいえ、全部のモンスターではない。それに、次から次に集まってくる。

「救助は任せたッ！」

「はいっ！」

背後から軽々と僕達を追い抜いていくシャクテイさん。

その背中を追うように、僕も疾走した。

「はあッ！」

尻もちをついた冒険者を飛び越え、彼を喰らおうとしていたバグベア—の首を一閃。

その人の救助はリリと千草さんに任せて、さらに加速する。

先ほどの『咆哮』^{ハウル}の余波で、だいぶ森が拓けてしまっている。

クオンさん達はともかく、僕達には戦力的に余裕がない。

神時代の戦いは数より質だ——なんて言われるけど、質が拮抗するなら数の猛威は健

在だ。

まして遮るものもないこの先の荒野であればなおさら。

気圧されないよう、しっかりと奥歯を噛みしめた。

動きを止めるな。止まればそのまま飲み込まれる。

(それより速く駆け抜けろ——ッ！)

呪文のように念じながら、止めることなくナイフを振るう。
もつと速く。もつと強く。

先を行く先達のように。遙か遠い憧憬のように。

あるいは、英雄たちのように。

「アイシヤ、用意しろ！ 奴の足元まで道を開くッ！」

「任せなッ！」

クオンさんの声に、アイシヤさんもた大朴刀を構えて魔力を纏う。

「来れ、蛮勇の覇者。雄々しき戦士よ——」

詠唱……いや、これは並行詠唱。魔導士たちの極意にして奥義。

「では、私も。この数だ。火力は多い方がいいでしょう」

そして、リユーさんもまた溢れんばかりの魔力を集め練り始めた。

「【今は遠き森の空。無窮むきゆうの夜天に鏤ちりばむ無限の星々——】

近接戦闘を続行しながら、リユーさんとアイシヤさんは詠唱うたを歌い続ける。

「——ッ！」

その歌を背に受け、クオンさんは左手に『火』を灯す。

何をしようとしているのか、理性ではなく本能が察する。

「全員下がれ！ 巻き込まれるなよ！」

シヤクテイさんの声に応じるように、無数の火柱が乱立する。

間違いなく、これはホークウッドさん達との戦闘で使っていたあの呪術——！

大嵐の如く吹き荒れる劫火が、モンスターの群れをまとめて飲み干し、その包囲を強引にこじ開けた。

「ヘル・カイオス」ツツ!!」

「ルミノス・ウインド」ツツ!!」

未だ火の粉舞う空白地帯の中心。

そこにいたクオンさんが飛びのくと同時、紅色の斬撃と緑の星々がさらに深くモンスターの群れを切り拓く。

「一番槍は任せた」

その『道』を真つ先にアロンさんが疾走する。

「おう！」

そして、ソラールさんが勇壮な物語を口ずさむ。

掲げられたその手には雷が集まり、一本の槍となる。

そして、放たれたその槍は再び『咆哮』^{ハウル}を放つべく開かれた巨人の口蓋を貫き——：

「破ッ！」

崩れ落ちた巨体を駆け上がったアーロンさんが一太刀でその首を刎ねてみせた。

「やった——！」

口蓋に溜まっていた魔力はたちまち暴走し、その首が地面に落ちるより先に炸裂する。

後に残るのは首を失った巨体のみ。

集まり始めていた冒険者たちが——もちろん僕達も——歓声を上げようとして。

「いや、これはいかん」

血肉の雨とともに地に降り立ったアーロンさんが呟く。

「な……………?!」

その呟きを肯定するように。

赤黒い……………いや、どこことなく赤みを帯びた黒い粒子がその首元から発生。

そして、すぐに失われたはずの頭部が完全に復元された。

いや、違う。完全にはない。

「自己再生……………。いや、それどころではないな」

少し変容している。顔だけではなく全身が。

ギシギシ、ミチミチと。肉体が蠢く音が聞こえるほどだった。

「これが『厄災』ってわけかい？」

「ええ。あの時と素体は違いますが」

アイシャさんの問いかけに、リユースさんが険しい顔で応じた。

歴戦の彼女たちですらそんな有様なのだ。

「おいおい、冗談じゃねえぞ……っ！」

周囲の冒険者の心が折れる音を……少なくとも、ひびが入る音を確かに聞いた。

下手をすれば、このまま瓦解しかねない。

追い打ちをかけるように……

『オオ!!』

その雄たけびに應じるように、地面からモンスターの大群が……

(いや、違う！)

そのモンスターの『大軍』が生まれ出てくる。

『モンスター・パーティー怪物の宴……!!』

「やれやれ、まさに迷宮の孤王ってわけだ」

「この数だ。もう『孤』とは言えない」

シャクテイさん達までが、険しい表情を浮かべている。

『オオ』

そう、それはもはや『孤王』などではない。

その『王』は無数の怪物を従者に、愚かな冒険者たちを睥睨している。

「……フン、獣を率いて王様気取りか？」

さらなる激戦が始まる直前。ほんの刹那の静寂。

「いいだろう、クソツたれが」

そんな中で傍らのクオンさんと『迷宮の巨王』の視線が交わるのが分かった。

「【王狩り】の名が伊達じゃないってことを教えてやる」

5

「おいコラボールス！ 面貸しやがれツ！」

「【乱土^{バイト}】?! 何の用だ?!」

あの高台——というか、その跡地——から、ゴライアスを避けつつも最短距離でヴィラの街まで駆け抜けてから。

「ほああああつ?!」

これからリヴィラ流の『交渉』が始まる。

流石に危ない——まあ、この大頭に女神に手を上げるほどの根性^{ガッツ}があるとは思えないが——ので、担いできた女神様をその辺に放つてから詰め寄る。

「ンなこと、アレ見りや言うまでもねえだろうがッ！」

黒いゴライアスの巨軀は、このリヴィラからでもよく見えた。

破壊力を伴う『咆哮』^{ハウル}を乱射し、森を荒野に変えながら何かを探しているようにも見える。

「こらー！ 君まで神を投げるんじゃない!!」

多分この女神と、もう一人の男神^{ヘステイア}だろう。

その女神様は、女神つてだけのことはあるのか、やたら慣れた様子で受け身をとつてから跳ね起き叫んでいる。

舌噛んで悶絶していた時はどうなるかと思つたけど、思つた以上に元気そうなので安心した。

「あのクソツたれな階層主をぶちのめすから、ありつたけの人と武器を用意しろッ！」
これで心置きなく、あのゴライアスに集中できる。

「はあ?! 討伐するだとう?! 馬鹿なこと言つてんじゃない!!」

「うるせえ! 面倒だから先に言つとくが、逃げ道なんざもうどこにもねえぞッ!」
崩落しただけでも厄介だつてのに、水晶でガチガチに固められている。

ちよつと場所はずれているが何か見慣れねえ『赤水晶』まで生えてくる始末だ。
仮に全員で掘り返しに行つても、どれだけ時間が必要か分かつたもんじゃねえ。

「そ、それなら【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】の連中も——…」

「そいつらはちよつと前に帰った。あと、「ガネーシャ・ファミリア」の大半もな！」
 というか、元からリヴィラに住んでいる奴ら以外は全員地上に戻ったと見ていい。
 ……まあ、その代わり地上からいくらか戻ってきているので、そこまで極端に人がい
 なくなっているわけでもないだろうが。

それに、戦力的にはそこまで致命的な劣勢というわけでもないはずだった。

うちの団長——と、呼ぶのはまだ何となく据わりが悪いが——はLv. 5。

オレとアイシャ……あと、ついでにこの大頭もLv. 3。

ついでに言えば、一八階層にいる奴らは基本的にLv. 2。

ああいや、「リトル・ルーキー」のパーティメンバーはLv. 1らしいけど……。

(生きてここまで辿り着けたなら、そう簡単に死にはしねえだろ)

ランクアップして半月も経たないで『中層』進出とかどうすりやできるんだか。

それは後で訊くとして、とりあえず戦力には……少なくともサポーターくらいにはな
 る。

そして、何よりもオレ達【イシユタル・ファミリア】をたつた一人で消滅させたあの
イレギュラー【正体不明】もいる。

というか、何かよく分からねえけどあいつと同じくらいの奴らが四人くらいいる。

案外、そう苦労なくカタがつくかも……

(おいコラ、雄に縋るなんざどういう了見だ)

ダセエことを考えた自分を戒めていると、誰かが小さく叫んだ。

「あ……っ!」

視線をやると雷が黒いゴライアスの口腔を貫き、駆け上がった誰がその首を両断するのが見えた。

あの『咆哮』^{ハウル}を放とうとしていた……そのために集まっていた魔力が暴発し、その首は地面に落ちるより先に破裂する。

「な、なんだ。もう終わっちゃまったじゃあねえか」

「本気でバケモノだな、【正体不明】^{イレギュラー}の奴……ッ?!」

出番がとられちゃったぜ——と、虚勢を張って見せる大頭^{ボイルス}がすぐさま表情を凍り付かせる。

「おい、嘘だろ。首やったんだぞ……ッ?!」

多分オレも同じような面をしてるだろう。

そんなオレ達を嘲笑するように切断された首元から、赤黒い粒子が立ち上り……。

「再生しやがっただとお?!」

何事もなかったかのように、黒いゴライアスは雄たけびを上げて見せた。

階層主が、あんなにも強力な再生能力を持っているなんて冗談じゃない。

だが、問題はそれだけじゃねえ。

(フザケンなよ……ッ！)

その雄たけびに従うように、ここから見ても分かるほど大量にモンスターが湧いて出やがった。

いったいどのどいつだ。階層主を『迷宮の孤王』なんて呼んだ大嘘つきは。

これこそがダンジョン。無限の怪物を生み出す俺たちの縄張りだ——と。

忌々しいほどに見せつけてきやがるじゃねえか。

(どうする……！)

数は力だ——なんてことを言えば、前時代的だと、地上のマヌケどもは笑うかもしれない。

だが、そんな奴らはここに来ればいい。

無限にモンスターを生み出すダンジョンが、その脅威を全開にすればどうなるか。それをてめえの目に焼き付けてみる。

いくら【イレギュラ正体不明】つつても一人だ。ダンジョンそのものを相手にはできねえだろ) 質を蹂躪するほどの数の暴力。

それに抗うには、こちららも数を揃える必要があつた。

つまり、リヴィラの連中を何としても戦場まで引きずり出すしかない。

あの『王』さえ始末すりや、奴に付き従うモンスターどもも大人しくなる……はずだ。そうに決まってる。

「見ただろ、てめえら！ あいつをぶち殺して魔石をえぐり取るしか選択肢はねえんだ！」

奴の狙いはこのリヴィラの街だ。

……正確には、さつき担いできた女神様と別動隊が担ぎ込んだ男神ヘルメスだ。

アイシヤ達が足止めしてくれているが、それでもゆつくりとこちらに向かつてきている。

「ふざけんな！ あんなもんまともな階層主じゃねえ！ ここは逃げるが勝ちだろうが！？」

「うるせえ、んなことできねえつつただだろうが！ つべこべ言うならてめえらの

『武勇伝』片っ端からぶちまけるぞ!!」

「んなつ?!」

「ちよ、それだけは……ツツ！」

「守秘義務とかねえのか、てめえら!」

「それが人類じんげんのすることかよお!」

リヴィラの雄どもが喚きたてる中で、何とか冷静さを取り戻そうとする。

(クソ、オレこーいう仕事向いてねえんだけどなあ!)

頭使つて説得するなんざ、どう考えてもオレ向きの仕事じゃねえ。

つーか、アマゾネスにやらせんな。ンなこと。

(ああ、クソ! こういうのは団長の仕事だろうが!)

いや、うちの元団長フリユネにはそれこそ絶対に無理だが。

内心で頭を掻き筆つてから、思いつく限りの??ぼせ叱激励いを吐き出そうとして……

「いい加減にしなさいッ!!」

それより先に、誰かが一喝した。

視線を向ければ、そこにいたのは一人の耳長エルフ。

確か【正体不明イレギュラー】のマネージャーだとか言つてたか。

「アンタ達ねえ! あそこで誰が戦つてるか知つてる?!」

「そりやあ……!」

あの【正体不明イレギュラー】だろ——と。

ボールス達が答えるより先に、そのエルフは続けた。

「ベル君たちよ! ベル・クラネル! 冒険者になつてまだ一ヶ月ちよつとの子が戦つてるつてのに熟練者ベテランのアンタたちはいつまでもグチグチと! ホントにタマついでるのっ!?!」

……何つーか、素直に驚いた。

特に最後の言葉。自分から好き好んで『歓楽街』にやってきたエルフどもでも、なかなか言えないような気がする。

「いつつも偉そうに威張り散らして行くせに！ ここで逃げたら一生笑い話にしてやるわよ！」

基本的に長命なエルフに言われると結構洒落にならない。

そうでなくとも、荒くれ揃いのリヴィラの住民——いや、冒険者どもだ。

「てめえ……」

ただの雌に言われたとあつちやさすがに黙っていらねえか。

殺気にも似た怒気が漂い始める。

だが、そのエルフは意にも介さないどころか、逆に鼻で笑って見せた。

「何、悔しいの？ なら、早く行って『巨人殺し』になつてきなさい！」

「そうは言うがなあ……」

ここまで言われて燻っているようなら、そもそもLv. 2にすらなれない。

だが、あの黒いゴライアスはやはり真つ当な存在ではなかった。それを察せられないなら、やはりLv. 2になるまで生き残れない。

焚きつけるにはもう一押しいる。

「いい。このままだと、私達はみんな死ぬの」

そのエルフは、一転して落ち着いた口調で言った。

それは、そう。まさに言い聞かせるように。

「見て。崩れた洞窟は水晶で完全に固められる。もう一つの方も多分。それに、下に逃げてでも仕方ないでしょう?」

そりやそうだった。この一八階層は、オレたち人類にんげんがいる最後の領域だ。

この下にも安全階層セーフティポイントはあるが、拠点があるわけではない。

もちろん、そこに辿り着くまでにモンスタードもはどんどん手強くなる。

地上からの援軍がああ黒いゴライアスを仕留めるまで立てこもるだけでも、かなりの危険を伴う。

そもそも、掘り返すだけでどれだけの被害が出るのか。

「やるしかないのよ。死にたくないなら、戦うしか」

決然と宣言してから続けた。

「だから、アンタ達の命、全部まとめて私に賭けなさい!」

「はあ?!」

「タダでは言わないわ。代わりに、アンタ達を巨人殺しの英雄にしてあげるから」

「いや、お前に何ができるってんだ?」

誰かの問いかけに、その雌おんなは不敵に笑い——…

「あら、さつき自分で言ったじゃない。あそこには私の剣闘士もいるの。アイツを貸してあげる。これ以上の勝算は必要かしら？」

本当に。ふてぶてしいまでにそいつは言い切った。

「……ちくしょうめ」

ポールスが項垂れてから、その凶悪な人相に狂暴な笑みを浮かべた。

よりによつて【イレギュラー「正体不明」】の……『灰色の悪夢』の名を出されれば、やるしかないのだ。

冒険者としての意地がある限り。

とはいえ、

「話は聞いてたな、てめえ等ア！　これからあの化物と一戦やるぞお！　今から逃げ出した奴は二度とこの街の立ち入りを許さねえ！」

実際のところ、あいつらが潰れる前に合流するのが唯一の勝ち筋だといつてもいい。

それが分からないなら、冒険者などやっていられない。

リヴィラに住み着いてる奴らはもちろん、宿泊していた奴らまでが武器を携えて走り出す。

腕に覚えのねえ奴らも、武具やポジションをかき集め始める。

にわかに騒然となるリヴィラを見やり、女エルフは腕組みして満足そうに頷いていた。

その姿を見てから、アイシャの奇妙な届け物の意味を理解した。
(つたく、そういうことかよ)

手渡されたのは、アイシャが愛用している口紅だった。

それは今、その女エルフの唇に塗られている。

何故か。そんなことは簡単だ。オレにだって分かる。

青ざめた唇を誤魔化すために決まっている。

腕組みをしているのも同じだ。

震える体を誤魔化しているだけ。

当然だろう。

リヴィラでたった一人。この女エルフは冒険者——恩恵を宿す神の眷属でもイレギユラーでもでもないのだから。

今この時、この場で誰よりもあの巨人に怯えていたとして、いったい誰が咎められるというのか。

「大丈夫かい……?」

「ええ。もちろんですよ」

氣遣うように寄り添う女神様にも、その女エルフは氣丈に笑つて見せる。

この雌が戦場に出ることはない。どこかで指揮を執ることすらあり得ないだろう。精々、傷の手当てを手伝うサポーターの一人でしかない。

だが、それでも。

もしこの雌おんなが折れれば、その影響は決して小さくない。

(雄おとこを勇士に変えるのも雌おんなの嗜み、か)

いつだったか、イシユタル様がそんなことを言っていたのを思い出す。

雄に守られるだけの雌なんて願ひ下げだと、その時は鼻で笑つた気がするが。

ただ、なるほど。さすがは神の慧眼ということだったのだろう。

(こういう戦い方もあるつてわけかよ)

さすがに「正体不明」イレギュラー達もあの数を相手にするには手数てすうが足りていない。

ここでリヴィラが動かなければ、いずれ奴らも共倒れする。……と、思う。

だから、この雌おんなはリヴィラの雄どもを勇士に変えて見せた。自分の雄のために。

おそらくこの場で最も無力なこの雌は、それでも守られているだけのか弱い存在ではない。

あの「正体不明」イレギュラーを救い、巨人殺しの一端を担っている。

(アイシヤが氣に入るわけだな)

自分の雄を共有するほどには。

「おい」

「どうしたの？」

「名前、教えてくれよ」

「私の？ 霞よ。霞・アンジエリック。アナタは？」

「サミラってんだ」

返事をしながら、その雌おんなの名前をしつかりと覚えておく。

「生きて戻ったら、飲みに行こうぜ。アイシャも誘つてよ」

いや、エルフどもは酒飲まねえんだっけ？——なんて。

そんな杞憂はあっさりと笑い飛ばされた。

「神様の言う『女子会』つてやつかしら？ いいわよ、楽しみにしてるわ！」

その返事に笑い返し——集まった武器の中で一番まともな斧槍を引つ掴み、手斧を腰にぶら下げる。

ひとまずこれでいい。

あとはあのクソツたれな巨人を始末するだけだ。

…

『——アア!!』

放たれる『咆哮』と、巻き込まれて吹き飛ぶモンスターを掻い潜り、ゴライアスの足元まで肉薄する。

近づくごとに、その巨大さに圧倒されそうになる。

その巨体は一〇Mを超えている。足元に立てばきつと顔なんて見えない。

ともすれば沸き起こりそうになる弱気を、強引にかみ砕く。

手にしているのはいつものナイフ——ではなく。

クオンさんから借りたバスタードソードだった。

直剣というには少し長く、大剣というには少しだけ小さいそれは取り回しやすく、思った以上に僕の手に馴染んだ。

「はあああつー！」

大剣を一閃。行く手を阻むモンスターはまとめて両断できた。

(よしッ！)

切れ味なら、なくしてしまった《炎のショートソード》と同じ程度。

武器に頼っているようで情けないけど、今回は大目に見てもらおう。反省も後回し。

これなら格上のモンスター相手でも充分に戦える。今はそれでいい。

「タケミカツチ・ファミリア」は周りのモンスターを叩け！ 「ヘステイア・ファミリア」

は『咆哮』の迎撃と指揮の補佐。そして、遊撃だ！」

「燃えつきろ、外法の業！」

シヤクテイさんの指示に、ヴェルフが詠唱で応じる。

「ウイル・オ・ウイスプ！！」

『オ……!?!』

魔力がゴライアスの口腔内で再び炸裂する。

下顎が外れ、唇がはじけ飛び、歯が碎け散り――…

「やっぱ治るのかよ……!」

そして、再生しながら変容していく。

ただ、さすがにすぐさま傷がなくなるわけでもない。

「オ！」

無防備となった口腔をソラールさんの雷槍がより深くえぐり、貫き通す。

「Orbe Novo Tenebris」

続けて、カルラさんの放った闇の塊がその顔面に直撃。

頭部の大半を失った巨人が微かにふらつき、動きを止める。

わずかな隙に、アロンさんとクオンさんが疾走した。

「合わせいッ！」

「やってみよう」

クオンさんが両手で構えるのは、鉄塊のような特大剣。

熔鉄をそのまま固めたかのようなその剣には、青い炎が今も燻っている。

いや……

「——ッ!!」

渾身の一撃が放たれると同時に、その炎が青々と燃え上がった。

その炎刃が、大樹のような巨人の右脚を焼き斬り——：

「吻ッ!」

出会い頭にその首を断ち切ったアロンさんの一撃が反対の脚を切断する。

「桜花様、命様、下がってくださいッ!」

『——ガア!?!』

リリの叫びが消える頃、両脚を失ったゴライアスが成すすべもなく地面に転倒した。

「畳みかけるよッ!」

その叫びすら置き去りに、アイシャさんが大朴刀を振りかざして突撃。

「来れ、蛮勇の覇者。雄々しき戦士よ——」

詠唱^{うた}を紡ぎながら、振り回される腕を掻い潜り、逆に斬り裂いていく。

攻撃を仕掛けるのは、アイシャさんだけではない。

「今は遠き森の空。無窮^{むきゆう}の夜天に鏤^{ちりば}む無限の星々——」

リユーさんもまた疾風の如く駆け、蹂躪していく。

身動きの取れない巨体は、ただの的でしかない——と。そう言わんばかりに。

「はああああッ!!」

頭蓋骨の再生が済んだばかりの頭部を、シャクテイさんの槍が穿ち、

「くたばれッ!」

肉に覆われていない頸骨を、アンジエさんの斧槍が強引に叩き切った。

再生させるわけにはいかない。倒せないにしても、頭部がなければ動きが止まるのだから。

いや、動かなくなるというのは少し違う。

「きゃああッ!?!」

「前に出すぎるな! まぐれでも当たれば致命傷になるぞ! 千草もだ!」

「うん!」

リリに向かって飛んで行った石塊を弾きながら、桜花さんが叫ぶ。

打ち上げられた魚のように、その四肢は今もでたらめに動き回っている。

狙っているわけではない。周りのモンスターすら巻き込んで磨り潰している。

先ほどのように巻き上げられ、飛び散る石片ですら充分な凶器となるだろう。

「ガン・リベルラ、前方上空から来ます! 数はおよそ五〇!」

「ソラール！」

「おう！」

命さんの声に、クオンさんがソラールさんに大盾を一枚投げ渡す。

ガン・リベルラの一斉掃射が始まったのはその直後だった。

とはいえ、その堅牢な守りを貫くことは叶わない。

「Ave Tenebris」！

カルラさんの魔法に合わせて砲声する。

「ファイアボルト！！」

飛び散る闇の飛沫と、乱射した炎雷がひとまずガン・リベルラの大群を消し飛ばした。

「ヘル・カイオス」ツ！！

「ルミノス・ウインド」ツ！！

紅色の斬撃と緑風を纏った大光玉が、ようやく立ち上がったゴライアスを再び地面へと押し倒す。

自己再生は今もまだ続いているけど、刻まれた傷は深い。

これだけダメージを与えれば、再生のために燃烧させている魔力だっていつまでも持つはずがない。

（行けるッ！）

リユーさん達の後に続き、ゴライアスへの突撃を敢行しながら叫ぶ。自己再生能力は確かに厄介だ。でも、僕たちの攻撃が全く通じていないわけではない。

確かに痛手を負わせているはずだ。

だって、ゴライアスは後退しようとしているのだから。

「やはり、これはいかん」

そんな樂觀を否定するかのように、アールンが呟くのが聞こえた。

「ああ。このままでは、先に彼らが息切れしてしまう。俺達も魔力切れは避けられまい」
迫りくるモンスターの群れを切り倒しながら、ソラールさんもその言葉に苦々しく頷く。

「うむ。一騎討ちならまだどうにでもなるが……ま、そのような泣き言を言っても始まるんか」

「そうだな。今できることをやるしかない」

「だが、どうする？ 回復速度が異常だ。これでは、いくら傷を負わせても全く意味がない」

頷きあうソラールさんたちに、アンジエさんが問いかけた。

「相手の魔力が枯渇するまで削り切る……と、言いたいところですが」

「残念だが、それは無理だろう。魔力が外から供給されているのだから」
「やはりですか」

カルラさんの言葉に、リユーさんまでが小さく舌打ちをした。

「魔力が外から供給されているだど？」

想像もしてしていなかった言葉に、桜花さんが呻く。

僕も——多分、リリやヴェルフ達も——同じ気分だった。

それは、限りなく絶望的な事実なのだから。

「心配しなくても、対処法は見当がついた」

絶句する僕達に、クオンさんが告げる。

「本当ですか?!」

一転して歓声を上げる僕達に、続けてクオンさんはあつさり肩をすくめて見せた。

「ああ。ただ、手を打つには人手が足りない」

「……そうだな」

苦々しく頷いたのはシャクティさんだった。

「ここでゴライアスの足止めをしてくれる誰かが必要だと言いたいのだろうか？」

「ああ。……狙われているのがヘステイアじゃなければ放っておくんだがな」

クオンさんの何気ない一言に、今さらになつてゴライアスがどこに向かっているのか

を理解した。

いや、落ち着いて考えれば分かりきったことだった。

神様自身が言ったのだから。

あれは、神々を殺すための刺客なのだ。

(あいつは後退しているんじゃない……！)

ゴライアスは後退しているんじゃない。神様たちがいるリヴィラの街へ向かおうと
しているだけ。

僕たちは今、その背中を追っているだけに過ぎないんだ。

当たり前のことじゃないか。今さら気づくなんて暢気すぎる。

場所はもう中央樹の近く。リヴィラのある島だって、もう見えている。

万が一にでも僕達が引き離されれば、リヴィラの街が襲われる。そして、神様が死んでしまう。

背筋を強張らせる悪寒を、さらに奮起する血潮が強引に押し返す。

「……クオン、ソラール、アンジエ。お前達だけで何とかなるか？」

「それはこちらの台詞だ」

シヤクテイさんの問いかけに、クオンさんが応じた。

「お前達だけで足止めできるのか？」

「それは……」

「ひよつこどもだけでは少々荷が重かろうな」

言葉を濁すシヤクテイさんに代わって、アーロンさんが応じた。

……耳が痛い。

周りのモンスターならともかく、あのゴライアスを足止めするには、L V. 2 だけでは力不足だ。

今、クオンさん達がいなくなれば、間違はなく突破される。

僕達だけでは、足止めになるほどのダメージを与えるのは難しいのだから。

「しかし、だからといって彼らに抜けられても困るだろう?」

無力さに歯噛みしていると、カルラさんが言った。

「何しろ、この数だ。手が足りていないのではないか?」

「ま、この前よりはマシだけどね」

カルラさんもアイシヤさんも、話しながら行く手を阻むモンスターの群を斬り散らしている。

もちろん、二人だけではない。

全員が剣だけは止めていない。初めからそんな余裕はない。

ゴライアスが地に倒れている今この時に畳みかけなければならぬのだから。

「人手もそうだが、時間も無い。これ以上変容させては、いよいよ厄介なことになるぞ」
焦りを宿した声で、ソラールさんが言う。

そのゴライアスは、もうすぐにでも動き出しそうだった。
そうならば、またしばらくの間は話し合っている余裕すらなくなる。

「サミラ、早く来い……！」

いつそ祈るようにシャクテイさんが唸ったその時、

「うおおおおおおおおおおッ!!」

前方——ゴライアスの進路方向から、何人もの叫び声が聞こえてきた。

すぐに、行く手を阻むモンスターの圧力が減る。

「よう、待たせたか?」

残りのモンスターを強引に斬り倒して駆け抜けると、斧槍を振り回していた一人のア
マゾネスがにやりと笑った。

その周りにはリヴィイラの冒険者たちの姿もある。

「遅かったじゃないか」

「ああ。だが、よくやってくれた!」

アイシャさんとシャクテイさんがそれぞれ笑い返す頃、少し先でボールスさんが叫ぶ
のが聞こえた。

「武器も盾もいくらでもあるからなあ、畜生！ 潰れたらさっさと交換しろ！」

「ベル様、ヴェルフ様！ 命様たちも！ 武器が潰れたらすぐに言ってください！ ポーションもありますよ！」

「リリ！」

ヤケクソの叫びを肯定するように、山ほど武器や盾を背負ったリリが駆け寄ってくる。

「どうやら、他のサポーターから譲り受けたらしい。」

ひとまず攻撃はリヴィラの冒険者たちに任せ、リリの周りに集合する。

「助かった」

「礼ならお前の女に言いな」

「……霞のことか？」

「何だ。やつぱり、あいつが尻を蹴っ飛ばしたのかい？」

「ああ。エルフにしとくにやもつたいねえな、あいつ」

「そいつは言えてるね」

受け取ったポーションを一息で飲み干していると、そんなやり取りが聞こえる。

「……何となく。何となくだけど納得していた。」

「よし、これなら人手は充分であろう」

アーロンさんの言葉に、全員が頷く。

これで、人手は充分に集まった。

数が多いとはいえ、相手はそれでも精々が二四階層辺りまでのモンスターだ……:と思う。実はまだエイナさんからもほとんど教わってないんだけど。

リヴィラの冒険者じゆうみんが総出で当たるなら、押し返せないことはない。

「ああ。次は奴の再生力を奪う」

「具体的にどうするおつもりなのですか?」

そう宣言したクオンさんに、リリが問いかける。

「一八階層全体に魔法マジックサークルの円のようなものが形成されています」

リリの問いかけに応じたのは、リユーさんだった。

「それが燃焼された魔力を再吸収し、再びゴライアスに還元していると考えます」

つまり、魔力そのものも超回復しているという訳だ。

「そんなの、いったいどうするんですか……?」

次々にやってくる冒険者たちに武器やアイテムを配りながら、ひきつった声でリリが呻く。

相手は無限の魔力を持っていて、その魔力が傷を癒し続ける。

そんなもの、どうやって倒せばいいのか。

こうしている間にも、あの巨人はさらに危険な何かに変化しつつあるというのに。

「魔法円マジックサークルを破壊すればいい」

対して、リユーさんはあくまで冷静に応じた。

「二七階層連結路前に生じた『赤水晶』。あくまで私が確認できた範囲ですが、あれと同じものが北部、北東部と南西部、南東部の四カ所にも生じています。それが起点と見て間違いないでしょう」

「ああ、それならリヴィラに向かう途中にオレも見ただ。南部の森を抜けた先にも一個あった」

となると、南西部だろうか。

リヴィラの街から一望した一八階層の全景を思い浮かべながら内心で呟く。

「全部で五つ。……いえ、この配置なら」

「北西部にも一つありそうだな」

確かに。配置の間隔からして、そこにも一つあると考えた方が自然だった。

「ええ。全部で六つあると考えていいでしょう」

「では、あの『赤水晶』をすべて破壊すれば！」

「あれほど馬鹿げた再生はできなくなる。多分な」

クオンさんの言葉に、リリが少し表情を緩める。

桜花さん達も……多分、僕自身も。

決して油断はできないけど、攻略法が見えたのだから。

「とはいえ、戦力が足りないことに変わりはない。できれば水晶の破壊に向かう人数は最小に留めたい」

少しだけ気が緩んだのを見透かしたように、シャクテイさんが言った。

「ああ。俺が北側二つを受け持つ。ソラール、南側を任せていいか？」

「任せておけ！　すぐに戻ってくる！」

クオンさんの言葉に、ソラールが頷く。

「後方の二つはどうする？」

「アーロン……を、そちらに回すのは悪手か」

「何だ。私では役者不足とでもいうつもりか？」

「まさか。伝説の騎士様には、ぜひ陣頭指揮を任せたいっただけだ」

「言いよるわ」

「だが、そうしてもらえると助かる。情けない話だが、私だけでは少々荷が重い」

シャクテイさんの視線の先では、リヴィラの冒険者たちが思い思いに波状攻撃を仕掛けている。

ただ、そこは荒くれ者たちによる急造の共同戦線。連携という意味では粗削りすぎ

た。

「やれやれ、それはそれで骨が折れそうだ」

アロンさんが、大げさに肩をすくめて見せる。

「ならば、私に南部の二つを任せて欲しい」

「アンジエさん？」

「そりゃ構わないが、急にどうした？」

「ヘステイア様の護衛に戻る。万が一の時に備え、守りが必要だろう」

「別に止めはしないが……」

クオンさんが肩をすくめた。

「もしベル達を連れて行こうと考えているなら諦めろ。相当な苦勞を伴うが、そのための時間がない」

……それは、否定できない。

その『赤水晶』を破壊しなければならぬのは分かっている。

そして、Lv. 2になったばかりの僕にできることは少ないとしても。

それでも、ここから離れる気になるかという……。

「いえ、それならリリだけでもお供させてください」

凶星を指されたのか沈黙するアンジエさんと、その言葉に躊躇う僕を他所に言ったの

はリリだった。

「リヴィラに戻って補給を続けなければなりません。想像以上の消耗率ですから」
気づけば、リリのバックパックはすっかり空になっている。

あれだけあつた武器は、前線に行き渡り……そして、次々に刃こぼれし、半ばから折れて地面に打ち捨てられている。

「リヴィラから戻ってくる時は、他のサポーターに混ぜてもらえます。ですが、今の状況でここからリヴィラまで戻るとなると、リリ一人では難しいです」

確かに、周囲では乱戦が始まっている。

人対モンスターだから同士討ちの心配はいらないにしても、突破は簡単ではない。

それに、リヴィラのサポーターたちはすでに戻ってしまっているようだ。

「人選はお前に任せる。話し合っている時間が惜しい」

リリの言葉に頷き、クオンさんが告げた。

「分かった」

頷くアンジェさんに、クオンさんも頷き返してから。

「いいか、ベル。この先どこで戦うかはお前の自由だが、あの『赤水晶』がある限り、勝ち目は薄いつてことだけは忘れるなよ?」

とにかく、今は連携が必要だ。

クオンさんは最後にそう言い残して、北に向かって走り出した。

「では、俺は東部に向かう。カルラ殿、しばしこの少年たちを任せていいか？」

「ああ。精々守ってもらおうとするさ」

カルラさんの返事を待たず、ソラールさんが後方——一八階層東部へ走り出した。

僕自身も、どこで何をするか決めなくては——：

「話はまとまったね」

いや、そんな悠長なこととはしてられない。

ついにゴライアスが立ち上がり、まどわりつく冒険者を振り払いながら『咆哮』^{ハウル}を乱射し始めた。

「ヤベエ?! 一旦下がれ!」

ボールスさんの叫びを待たずして、冒険者の包围網が霧散して——：

「来るよッ!」

ゴライアスの赤い瞳と、確かに視線が交差する。

「【ウイル・オ・ウイスプ】!!」

直後に放たれた『咆哮』^{ハウル}は、しかし僕達に届くことなく炸裂する。

「一つ覚えで助かるぜ。おかげでコツがつかめた」

「なら、頼りにさせてもらおうぞ!」

不敵に笑うヴェルフに言い残し、シャクテイさんがまず疾走した。
「行きます」

「ああ、やってやろうじゃないかッ！」

リユーさんとアイシャさんがその後続く。

乱射された『咆哮』は冒険者の包囲網を蹴散らした。

そして、同じようにモンスターの群れも吹き散らしている。

三人の女傑の行く手を遮るものは何もなかった。

「よおしー！【象神アଙ୍କクレーシャの杖】たちが囿になる！今のうちに詠唱を始めろお！」

ここにいるのは、誰もが偉業を成し遂げた熟練の冒険者たちだ。

立て直しは迅速だった。

すぐさま武器を構え戦場に向けて転身する。

「前衛はもう一度突っ込む！　ビビってんじやねえぞッ！」

再構築される包囲網の最前線で鼓舞するのは、サミラさんだった。

『おいっ、兎い！　突っ立ってるならこっちに来い、それとも怖えかあ?!』

その後ろに続く冒険者たちが半ば面白そうに笑うのが聞こえた。

挑発……いや、冒険者流のお誘い。

「……行って来いよ。階層主を張り倒した相棒アイツは俺が契約した冒険者だって威張らせて

くれ」

笑みを浮かべ、背中を押してくれるヴェルフにしっかりと頷く。

「アンジェさん、リリをお願いしますー！」

もう迷うことはなかった。

クオンさん達を信じて、リユーさん達と一緒にゴライアスを足止めする。

決意を胸に走り出す。

「よお、【リトル・ルーキー】！ 本当に来るとは、いい度胸してんじやんかよ！」

「つーか、いい剣持ってんじやねえか！」

「どこで手に入れたんだ？」

「リヴィラにやねえだろ、そんな値打ちモン」

サミラさんがにやりと笑うと、他の冒険者——兄弟らしき獣人や男勝りなアマゾネス

が口々にはやし立てる。

合計五人。即席のパーティは、そのままゴライアスまで驀進して——：

「「「やべえ！」「」」」

「え？」

ゴライアスと視線が合った瞬間、文字通りに四散する。

新人にはとても及ばない危機察知能力だった。

ゴライアスの間合いに取り残されたのは僕一人——…
「上等！」

いや、サミラさんもいる。

重圧をものともせず、さらに前へと加速している。

残された一瞬。脳裏に金色の憧憬が思い浮かぶ。

目の前の敵と同じ階層主を一人で打倒した少女。自分より——そして、きっと先を行く女戦士よりも——先にいる憧憬の剣士。

「——」
瞳が吊り上がるのを自覚した。

血が猛っていた。

その衝動のまま、地面を蹴る。

『オオオオオオオオオオオオオツ!!』

眼前に迫るのは、大気を貫く巨腕。

(逃げるな、戦えッ！)

左右への回避など捨てていた。

僅かでもそんなことを思えば、確実に叩き潰されていただろう。

必要なのは駆け引き。

自らの速さと相手の速さを比較して——わずかに体を前傾させた。

そして、衝撃が背中に叩きつけられる。

間一髪、敵の拳を——その通過点を駆け抜けていた。

地面を砕くその衝撃に背中を押され、さらに疾走。

ついに、ゴライアスの懐へと侵入した。

「ふッ！」

会心の踏み込みとともに、手にした大剣を叩きつける。

生半可な攻撃ではびくともしない硬質な体皮が、それでもわずかに裂けた。

(やっぱり、硬くなってる！)

その感触に、内心で呻いていた。

転倒したゴライアスに何度か斬りつけている。

その時の感触より、明らかに硬い。

「ハハハッ！ やるじゃねえか「リトル・ルーキー」！」

止まっただけでは狙い撃ちされるか、モンスターに囲まれる。

距離を取りすぎないように走っていると、そう遠くないどこからサミラさんの笑い

声が聞こえた。

ただ、場所を確認している余裕がない。先ほどの四人ともう一度合流できるかは運任

せだ。

「クラネルさん、今のは危なかった」

移動しながら追撃の間——か、もしくはサミラさん達——を探っていると、リユーさんが並走しながら言った。

「リ、リユーさん」

「あんなことを繰り返しては命がいくらあっても足りません」

フードの向こうから厳しい眼差しが見据えてくる。

「でも……」

それに気圧されながらも、何とか言葉をひねり出そうとする。

変容はただ見た目が変わるだけではなく、体皮の強度を上げている。

このままでは、そう遠くないうちにL.V. 2の膂力では通じなくなるだろう。

「そうがつつくもんじゃないよ、坊や」

「ああ、今は足止めに専念しろ。討伐は『赤水晶』が破壊されてからだ」

合流してきたアイシャさんとシャクテイさんまでが咎めるように言った。

「疾風リオンの指示に従え」

「あんななら、そのエルフにもついていけるだろうからね」

とはいえ、それはごく僅かなこと。まとまっていれば狙われる。

シャクテイさんもアイシャさんも、ゴライアスには警戒されているのだから。狙い撃ちされるより先に、二人はそれぞれ散会していく。

「合図をします。攻撃の際のみ私に続きなさい」

最後に残ったリユーさんが告げた。

「貴方の敏捷あしならついてくれる」

「はいっ！」

大きく頷き、必死になってリユーさんの背中を追う。

「やれやれ、あれじゃまるで姉弟きょうだいだね」

「そこはせめて師弟と言ってやれ」

どこかでアイシャさんとシャクテイさんが笑うのが聞こえたような気がした。

第六節 巨人殺し（ジャイアントキリング）

1

「しッー」

モンスターどもの追撃を掻い潜りながら、クオンから渡された十字槍をふるう。

流石に切れ味は悪くない——と、とてもそんなことは言えなかった。

（悪くなさすぎるな）

愛用の槍よりも遥かに鋭い。

明らかに通常種よりも硬度の高いゴライアスの体皮すら容易く斬り裂けるほどだ。

驚くほどの名槍だった。今まで振るったどんな槍よりも優れている。

手に馴染まない程に。

（値踏みされているような気がする）

果たして自らの使い手にふさわしい存在なのかを。

この槍そのものを探られているように感じる。

（悪いが、もう少し付き合ってくれ）

どこの誰とも知れぬ、本来の持ち主に頼み込むような気分で呟いた。

認めてくれようがくれまいが、今はこの槍に命を預けるよりないのだから。

「ちえあぁッ！」

もつとも、ゴライアスの足止めという意味は概ね成功していた。

「うお……！　またやりやがった」

アールンという騎士が、ゴライアスの巨脚を一刀のもとに両断する。

これで何度目になるだろうか。

おかげで文字通りに足止めができる。

「よおうし！　ちようどいい！　前衛はいったん下がれえ!!」

片足を失い、ゴライアスの巨体が再び地面に片膝をつく。

その轟音をもともせず、ボールスが吠えた。

魔導士たちの詠唱が終わったらしい。

「いい加減、こいつの面も見飽きたぜ。景気よく吹き飛ばしてやれ！」

「当然だ。いい加減、終わらせてやるッ！」

ドワーフたちの激励に、エルフを中心とする魔導士たちもまた豪気な言葉で応じ――

…

「放て！」

次の瞬間、何度目かの一斉射撃が始まった。

周りのモンスターどもを巻き込んで、火炎弾と氷柱が雨の如く降り注ぎ、風の槌と雷の槍が打ちつけられる。

そして、今まで通り削られた端から魔力が噴き出し、傷をふさいでは変容させていく。傷は決して浅くないはずだが、ゴライアスの猛威は今も健在だった。

「よし、魔導士どもは次の詠唱を始めやがれ！」

落胆など抱かせる暇を与えず、ポールスが声を張り上げる。

「前衛はこのまま一気に畳みかけるッ！ 遅れるなッ！」

ポールスの怒鳴り声に、さらに続けて指示を重ねる。

「回復なんざさせねえよ！」

私より先に、サミラ達の一団を先頭した前衛たちが再びゴライアスの巨体にとりつく。

一方で魔法の嵐に巻き込まれゴライアスを取り巻くモンスターは確実にその数を減らしていた。

流石に灰にはなっていないものの、死骸の数の方が多くなっている。

クオン達が『赤水晶』を破壊するまで攻撃の手を止めず、地面に縫い付ける。このまま倒せればさらにいい。

不可能ではないはずだ。

すでに北部と南部、そして北東部の『赤水晶』は破壊されている。

魔法円マジックサークルこそまだ健在だが、すでにその効果は減弱していると見ていい。

ゴライアスは変容こそ続けているが、自己再生は鈍りつつある。

「サポーターはマインド・ポーションをよこせ！ 出し惜しみするなッ！」
それを実感しているのだろう。

前衛の士気は高く、魔導士たちもまたポーションを煽りながら、臆することなく次の詠唱を開始する。

決して油断はできないが、こちらがやや優勢。

おそらく、誰もがそんな手ごたえを覚えていたはずだ。

「いかん！」

そんな中で、カルラの悲鳴を聞いた。

『ルアア!!』

異形の巨人が何かを叫ぶ。

咆哮ハウルではない。どちらかと言えば歌声のように聞こえた。

（歌声？）

それは、もしかや詠唱なのではないか。

何でそんなことを思ったのか、自分でもよく分からない。

だが、モンスターが魔法を使ってくることもあり得るのだと、今は知っていた。アレが神を殺すための『厄災』だとすればなおさらだ。

「[Vehementer fortior]——!」

「全員その魔女の傍に集まれいッ!!」

鋭く、焦りを宿したカルラの詠唱と、アーロンの有無を言わさぬ号令が重なる。

お互いに引きずりあうようにして、冒険者たちがその場所に殺到する。

そして、その防御障壁が展開されると同時——…

「[Retorta Barricade]!!」

モンスターの死骸が一斉に起爆した。

逃げ場などなかった。死骸など至る所に転がっているのだから。

暗く歪んだ空間を挟んでなお、白熱する爆炎が視界に影を残す。

「~~~~~つつ!?!」

轟音に混じって、周りの冒険者たちの悲鳴が響き渡って——…

「くっ……」

肩で息をしたカルラが、両膝をつく。

杖がなければそのまま崩れ落ちていただろう。

「大丈夫か？」

すぐさま彼女を庇いながら、背中越しに訊ねる。

「ああ。……だが、この範囲を覆うのは、流石に辛いな」

「助かった」

砂塵の燻る荒野に残っているのは、私達とゴライアスだけ。

犠牲者が出ていないか分からないが……出ていたとしても、一目では分からない程度だ。

リオンやアイシャ、サミラは無事。ベル・クラネルのパーティも同じく。

アールンは言うに及ばず。「タケミカツチ・ファミリア」も健在だ。

ボールス達の姿もある。

後衛——魔導士とその護衛は元から距離を取っている。多少ならず余波は届いただろうが、致命傷には至るまい。

ならば、壊滅には程遠い。少なくとも、数の上では。

むしろ爆炎を跳ね返され、ゴライアスの方がふらついているくらいだ。

「野郎、今度は何しやがった……？」

冷や汗を拭いながらボールスが呻く。

「【死者の活性】。闇術においてさらに悍ましい一つ、か」

呟いたのはカルラだった。

「どんな魔法だ？」

「死体を爆弾へと変える禁術だよ。もっとも、そのものではないだろうがね」

弾む息を宥めながら、カルラが肩をすくめた。

いや、ただ単に肩で息をしているだけだろうか。

「おそらくは、貴公らが集めているあの貴石……魔石を起爆させているのだろう」

「魔石をだど？」

「不思議か。だが、この時代では、あの貴石の力を使って様々な道具を生み出しているの

だろう？」

角灯から昇降機まで。エレベーター
ランタンオラリオの多くの機器は魔石によって動いている。

つまり、それだけの力を内容しているという訳だ。

「それがあれだけ集まっていた。となれば、この威力も納得と思わないか？」

「クソツたれがッ！」

カルラの言葉にボールスが焼けた地面を蹴飛ばした。

「つまり魔石を正確に砕き続けろってことか？」

言うまでもなく、魔石を粉碎するのはモンスターを最も効率的に討伐する方法だ。

だが……

「そいつあ確かに鉄則の一つだがな。だからって、いつもそう上手くいくもんでもねえ

ぞー！」

それが容易いのであれば、ダンジョンの中で命を落とす冒険者の数はもう少し減るだろう。

私達が『力』をつけ、『器用』さを磨き、『魔力』を高め——各々が魔石を破壊せずに済む方法を身に着けているのは、何も魔石を回収するためだけではない。

一撃必殺など容易いことではない。ただそれだけの話だ。

だが、あの魔法がある限り、選択肢は二つしかない。

魔石を正確に粉碎し続けるか。それとも、魔石を破壊するひと手間をかけるか。

どちらを選ぶにせよ厄介だ。

モンスターとて、そこが己の急所だと理解している。

戦闘中に急所を正確に狙い続けるなど、相当な実力を求められる。

この状況でそれができるかと言われれば、私とて不可能だ。

ならば、討伐後に魔石を砕く手間をかけるか。

しかし、この数を相手にする上ではそのひと手間が命取りとなりかねない。

無論。だからといって、生きたモンスターをすべて無視してゴライアスと戦えるわけ

もなかった。

先ほどと一転して、冒険者の中に動揺が広がっていく。

「ふざける……ッ！」

ベル・クラネルが奥歯を噛みしめ、赤毛の青年——確かヴェルフと呼ばれていたか——が悪態をつく。

「こんなもん、どうすんだよ……」

本体の再生能力はいまだ健在。敵戦力は無限。

そして、その倒せば屍までが脅威となる。

そんな状況の中で、ついに誰かが小さく呻いた。

返事はない。

だが、恐怖という名の小波さざなみは確実に冒険者の中に広がり始めている。

それは遠からず、すべてを飲み込む大波へと変わるはずだ。

（何人踏み止まれる……？）

敵の潜在能力ポテンシャルはまだ未知数。

その真価が明らかになった時、こちらにどれだけの戦力が残るか。

……いや、そもそもその真価を引き出すことすらできるかどうか。

それに、いくら『赤水晶』を破壊したところで、それだけでゴライアスが倒れるわけ

でもあるまい。

こちらはこちらで討伐できるだけの余力を残しておく必要がある。

だが、果たしてそれは可能か？

笑い続ける巨人を前に、その答えを見出すことはできなかった。

……

最初に北東部の『赤水晶』を目指したことに特別深い意味はなかった。

ただ、モンスターの包囲が薄く、突破しやすい場所がそこに通じていただけだ。

「む……？」

時間が惜しかったが故の判断だ……が、もう少し熟考すべきだったのかもしれない。

「いったい誰が……？」

俺が到達した時、すでにその『赤水晶』は破壊されていたのだから。

残された残骸を軽く撫でる。

それは砕かれたというよりは、どうやら切断されたらしい。

しかし、この強度の水晶を切断するとなると生半な腕ではない。

リヴィラの冒険者たちはまだ道半ば。まだこの域には届かない者が多いと思っ
たが……。

「俺としたことが、知らぬ間に慢心していたのかもしれない」

彼らもまた試練を乗り越えた者たちだ。

このように鋭い斬撃を身に着けた者もいるのだろう。

「誰かは知らぬが、礼を言うぞー！」

だが、反省後回しだ。

今は一刻を争う。そして、この助力を無駄にするわけにはいかない。

誰とも知れぬ相手に礼を告げてから、素早く踵を返し、南東部を目指して走り出した。

……

「こんなことならメイスの一本も用意しておけば良かった」

森の中を駆けながら、思わず毒づいていた。

当然ながら、本来あの巨人が住まう空間への通路前の『赤水晶』の破壊は終わった。

それはいい。ただ、思った以上に硬く、時間が必要となった。

「かもしれないね」

私の声が聞こえたのだろう。少し後ろを走るアーデ様が苦笑するのが分かった。

「アーデ様、体の方は大事ありませんか？」

「大丈夫です。泣き言を言っている暇もありませんから」

幼く小さな体で、彼女は気丈に笑って見せた。

……いや、幼いということはないのかもしれない。

驚くべきことに、彼女は小人なのだから。

「もうそろそろ次の『赤水晶』があるはず——ッ!？」

アーデ様の言葉を遮って、その小さな体を押し倒していた。少し前まで私達がいた空間を、青白いソウルの輝くが射抜いていく。

〔ソウルの矢〕!?)

はつきりとは見えなかったが、その系統のどれかだろう。

となると、襲撃者は同郷の何者かということになる。

内心で毒づきながら、抱えたまま地面を転がり跳ね起きた。

「貴様……ッ！」

そこにいたのは二人の——おそらくは——同類だった。

一人はどことなく優美な拵えの鎧を着込み、手には火の灯った斧槍とも杖とも見える

得物を携えた騎士。

もう一人は大兜グレートヘルムをはじめとする重鎧。

携えた大盾には天を仰ぐ大鳥の紋章が描かれている。

肩に担ぐようにして構えているのは《グレートメイス》。

その姿は間違いなく……

「聖堂騎士……ッ！」

忌まわしき『深みの大聖堂』に……いや、あの『人喰らい』に仕える騎士だった。

「——」

見慣れぬ鎧の何者かが、聖堂騎士に何事か囁く。

すると、その騎士は肩をすくめて、一歩前に出た。

何故こんなところにいるのかは知らないが、戦闘は避けられまい。

「アーデ様。申し訳ありませんが、私がお供できるのはここまでのようです」

そして、避ける気などなかった。

「アンジエ様……！」

「ご心配には及びません。すぐに後を追いかけます」

もう片方は、魔術の心得がある。二対一は不利だが……

「ですが、今は一刻を争います。あの街の者どもに水晶を破壊させるようお願いいたします」

「ます」

そんなことは、知ったことではない。

奴らは殺す。最後の一人まで必ず。

「必ず……。必ず追いかけてきてくださいね……。っ！」

あの子は聡明だ。私の助けなどなくとも、ここからリヴィラまでなら何とか辿り着けるはずだ。

「殺してやる……。っ！」

少女を危険にさらしたこと。小さな女神様の護衛に向かえないこと。

そんな悔恨も、怨嗟の炎の中ですぐに燃え尽きてしまった。顔どころか名前すらも思い出せない程に。

……

主戦場から離れてしまえば、モンスターのは数はそこまでではなかった。モンスターの産出はいうほど活発になっているわけでもないのかもしれない。

(いや、ただ単にゴライアスの周りに集中しているだけか?)

さほどの問題もなく一つ目の『赤水晶』を破壊してから、内心で呟く。いずれにしても、俺にとっては好都合だった。

(不用心さならシースといい勝負だな)

あんなに脆い原始結晶をそのまま置いてあったあの禿竜を思い出す。何しろ、硬さで言えばこの水晶の方が遥かに硬い。

……道中の厄介さで言えば、向こうの方が遥かに上だったが。

「まあ、い、」

無駄口を叩いている余裕も暇もない。

このまま北西部の『赤水晶』を破壊してから、リヴィラに向かう。

足止めさえしてやれば、後は巨人の傍にいるカルラやアイシャ達がかするだろう。

（ソラールも合流するだろうからな）

ついでに、アーンもいる。

つまるところ、再生能力さえ奪ってやれば後は何とでもなるわけだ。

大口を叩いた割には地味な役回りだが、世の中得てしてそういう仕事こそが重要な
だった。

そう。戦局を左右する程度には。

『何やら面白いことになっていると覗いてみれば』

となれば、やはりそう容易く完遂することはできないのも必然といえるだろう。

肉声ではない声。不吉の先触れに、小さく舌打ちする。

『懐かしい顔と再会できるとは。これこそまさに僥倖というものよなあ』

「こっちは不運の極みだがな」

アーン騎士の鎧に身を包み、長刀の《人斬り》を携えたその闇霊には見覚えがあつた。
た。

四年前、『深層』で遭遇し、地上まで逃げ帰る羽目になった……その原因の一つになつた存在だ。

「今度は何の用だ？」

『闇霊を前に何の用もなからう？』

同じ問答を確か四年前にもやった気がする。

なら、今回も結論は変わるまい。こちらの都合を斟酌してくれる閻霊というのはあまりいないのだから。

『さあ、死合おうではないか！』

四年前と違いがあるとするれば、撤退という選択肢はあり得ないということくらいか。もちろん、先に一人で篝火に戻るなど論外だった。

……

下草を踏み潰しながら、森の中を疾走する。

「チツ………！」

青い閃光が肩を掠めていく。

あの慣れぬその騎士は手練れの魔術師だった。

(あの燃える鉄塊が杖の代わりだったのか?)

まず間違いない。そして、あれは炎を操る触媒でもあるらしい。

虚空から突如として炎が撒かれ、あるいは足元から立ち上る。

炎を操るなど、まるで呪術師のようだ。

(厄介な奴め………！)

もつとも、立ち振る舞いは明らかに魔術師のそれだった。

姿を消したまま音もなく魔術で狙撃してくる。

ヴァインハイムの隠密の恐ろしさは幾度となく耳にしてきたが、なるほど確かにこれは厄介だった。

まして、この遮るものの多い森林地帯では。

（これは「強いソウルの太矢」か……）

詠唱速度がさほど早くないのがせめてもの救いだらう。

それとも、ただ単に遊んでいるだけか。

木陰に飛び込みながら、こちらでも物語を口ずさむ。

その名を「白教の輪」。

名前が示す通り、白い光輪が木々を斬り裂いて飛ぶ。

姿が見えないとなると、狙いなどまともにつけられない。

そして、向こうは手練れだ。そんな攻撃に当たるような無様は晒すはずもなかった。

（こんなところで遊んでいる場合ではないというのに）

聖堂騎士は■■■■■を追っていった。

■■■では、あの忌々しい狂信者を殺すことはできまい。

最悪は、あの街にいる■■■■■まで狙われる事になりかねない。

擦り切れた人間性。怨嗟の炎の陰で、何かが囁いている。

そのせいで、気が焦っているのは自覚していた。

戦闘に邪魔にしかならない雑音だ。……そのはずだが、何故か無視できない。

(自分を困にするしかないかッ！)

この奇跡は一度放つても、術者の手元に戻ってくる性質がある。

射線上に立ち、相手を私と光輪の間に誘い込めば、背後から一撃喰らわせられるはずだ。

一撃喰らうことを覚悟して、盾を掲げる。

例えば光輪が当たらずとも、魔術が放たれる瞬間が見えればいい。そうすれば、奴の位置が分かる。

(耐えられないことはないはずだ)

あくまで建前として。

聖職者と敵対するよりは魔術師と敵対する可能性の方が高い。

それこそ、魔術の聖地ヴァインハイム。その中枢と言える竜の学院が抱える『隠密』は有名すぎるほどだ。

だから、騎士たちに広く愛用されるこの盾は、それなりに魔力への耐性がある——…。

「があ……っ?!」

そう。それなりの耐性はある。

だから、命拾いした。

……背筋を舐めあげた悪寒に従い、最後の最後で僅かに身を捻ったからというのも理由の一つかもしれないが。

（貫か、れ……ツツ!!?）

気づいた時には、横腹をゴツゴツと抉り取られていた。

地面に転がり、身もだえる。

擦り切れた人間性の中では、ともすれば痛みなど他人事のようにしか感じない——

が。
今感じる激痛は、それでも神経を苛んでいる。

（何が……?）

目に焼き付いているのは、半ば実体化した……結晶化した魔力の光だった。

——彼女が知らないのは無理もない。

それは結晶魔術。

かの【ビッグハット】ローガンが遺した魔術の神髄。

あるいは、魔術の祖たる白竜シースの狂気の結晶。

つまりは魔術の秘奥である。

『魔術とは才能である』

——と、ヴィンハイムが誇る竜の学院は嘯く。

その言葉に準ずるなら、その域に至る才能の持ち主はごく限られるのだ。かの巡礼地にすら、それを修めた者は限られるほどに。

彼女が出会ったことがないとしても、それは仕方がないことだった。

だからこそ——…

(ク、ソ……ッ！)

分かったことはたった一つ。

相手は今まで対峙してきたどんな魔術師たちよりも手練れだということだ。

地面に爪を立てて、近くの水晶の陰までどうにか這いずる。

「」

その水晶柱に身を預け、喉をふさぐ血を飲み込んで物語を口ずさんだ。

ただの生者なら——いや、不死人ですら即死していてもおかしくない傷だ。こんな状態ではとても戦えない。

だが——…

(ダメか……！)

悠長に回復を許してくれる相手ではない。

水晶柱が容易く撃ちぬかれる。

舌打ちする暇もなく、もう一度地面を転がってから走り出した。

……

「はっ、はっ、はっ、は……っ！」

逃げるのには慣れていた。

ダンジョンの中を。オラリオの街中を。

命がけで逃げ回るのは慣れっこだった。

我ながら酷い人生だったと今でも思う。

でも、だからまだ体は怯え竦まずに走ってくれているのかもしれない。

……そのおかげとは、口が裂けても言いたくないけれど。

「っ?!」

余計なことを考えたのは失敗だった。

枝を避け切れず、フードが外れる。額も少しだけ切れたかもしれない。

それでもいい。滴る血が視界を塞がない限りは何の問題もない。

「きゃあ?!」

盾にするつもりだった大木が、いともあっさり粉砕させられ、背後から倒れてくる。衝撃に押され、前に転んだのが幸いだった。

そうでなければ、押しつぶされていたかもしれない。

(なんて馬鹿力……ッ！)

慌てて跳ね起きながら、内心で毒づく。

どう考えても尋常な腕力ではなかった。

あくまで体感だが、これでは「おっしや猛者」どころかクオン様すら上回りかねない。

……もちろん、力比べなんてしたことがあるわけもないのだけど。

(もしかして、これが『ハベルの戦士』でしょうか?)

鎧の形状は全く違うが、尋常ならざるその剛腕であれば本当にあの馬鹿げた大槌だの大盾だの特大剣だのを使いこなせるかもしれない。

……だからと言ってしまうのは流石に乱暴すぎますが。

(ですが、アンジェ様が知っていたとなるともう間違いありません)

今リリを追っているのは、クオン様側の存在——つまりは不死の英雄ないしその候補者——と考えていい。

「——ッ！」

今さら恐怖と戯れている暇はない。

竦みそうになる足を強引に回転させる。

疲労もたまりつつある膝は今にも抜けそうなほど頼りない。

（負けるものですか……ッ！）

単に遊ばれているだけなのは分かっていた。

この追跡者は、リリなんていつでも殺せる。

その確信のもとで、遊んでいるのだ。

子猫がとらえた鼠を弄ぶように。

それもまた、慣れっこだった。

いつものことだ。ベル様たちと出会う前なら。

（リヴィラまで逃げ切れれば……）

今はとにかく、リヴィラまでたどり着くことだけに意識を集中させる。

そのすべてを何とか出し抜いてきたから、今ここにいる。

それだけ覚えているのなら、怒りも諦観も恐怖も全部どうでもいい。

（それで、どうにかなるでしょうか……？）

ただ、疑念だけは消せなかった。

今のリヴィラに待機しているのは、サポーター役に徹するよりない、もしくはあのゴライアスとの戦いで心折れた冒険者たちだ。

この追跡者を相手にできるかと言われれば……。

（クオン様がリヴィラに辿り着いていることに賭けるしかありません）

向こうの残酷さがリヴィラにつくまで途絶えないように祈るしかない。思いつく限りの手を考えてなお、結論はそこから微動だにしなかった。

……
戦況は最悪だった。

無数の武器が壊れ果て、至るところに散乱している。

使い手もまた同じ。前衛攻役も前衛壁役も倒れ伏していた。

今はまだ無事な冒険者が必死に応戦し、彼らを庇っている。

彼らが元々護衛していた魔導士たちもまた、すでに散り散りになっていた。

「来るぞおおおっ!?!」

冒険者の悲鳴をかき消すように、ゴライアスがその両拳を天高く掲げ……そして、何の技もなく地面に叩きつける。

それだけで充分だった。

叩きつけられた拳は大草原——普段はそう呼ばれている大荒野を叩き割り、地割れと衝撃波を生み出す。

放射状に広がる破壊の津波は、散発的に抵抗を続ける冒険者を容易く呑み込んでいく。

「避けろおおおおおッ!」

そのまま両手で地面を掴み、ゴライアスが走る。

四つ足の獣の如き疾走。巨体が繰り出すそれは、あのミノタウロスの突撃よりもさらに凶悪だった。

お互いに引きずりあうようにして、冒険者たちは命からがら射線から逃げ伸びる。それでどうなるものでもない。

「ひい、また跳び——！」

ゴライアスの巨体が空高く跳んだ。

そして、四肢を投げ出した姿勢で、ただ地面に落下してくる。

ただそれだけのこと。

ただそれだけの動きで、あのゴライアスは冒険者の包囲網を壊滅させていた。

……あの一瞬で。

「ま、魔導士ども！ ビビってんじゃねえ！ 詠唱を続けろお！」

ポールスさんの叫びに応じて、魔導士たちが詠唱を始める。

ゴライアスが初めて跳んだのはその時だった。

「なん……ッ?!」

七Mを超えようかという巨体が軽々と宙を舞う。

それは、およそ現実離れた光景だった。

もしここを生き残れたなら、しばらく夢に出そうだと真剣に思う。

「撃てえ?!」

詠唱を終えていた何人かの魔導師が魔法を放つ。

それは確実に傷を負わせたが……ただそれだけだった。

その巨体を消し去るには程遠く、残された質量はただそれだけで破壊力を帯びる。

いかに屈強な前衛壁役ウオーと言えど、どうしようもなかった。

盾で防げるような次元ではない。

むしろそれを投げ出し、代わりに詠唱中の魔導士たちを担ぎあげて逃げるしかなかった。

そして、着弾。

圧倒的な衝撃波アが前衛攻役タツも前衛壁役カも魔導士ウオーも、モンスタールの群れさえも飲み込んで蹂躪した。

「Retorta Barricade」——!」

あの時と同じく、カルラさんの防御障壁がなければ全滅すらあり得ただろう。

ただ、避けられたのは全滅だけ。

曲がりなりにも存在していた連携や陣形は、その一瞬、たった一撃で完全に崩壊していた。

それでも、戦闘自体はまだ続いている。でも、相手はゴライアスではない。周りのモンスターが中心となりつつあった。

「私はゴライアスの足止めをします」

リユーさんはその後、僕に自分のパーティに戻るように言い残すと一人で最前線に。

「はあああああッ！」

「おおおおおッ！」

シヤクティと驚くほどに息の合った連携を見せ、最前線でゴライアスに攻撃を続けている。

「行くよあんた達！ 遅れるんじゃないよッ！」

「女戦士アマゾネスの意地を見せやがれッ！」

それに続くのは、アイシャさんとサミラさんを中心とした僅かなアマゾネスたち。

「破ッ！」

単身でゴライアスを翻弄するアローンさん。

そして、そして……。

「クソツたれ、があ！」

半ば自棄になりながら、散発的な攻撃を繰り返すいくつかの小パーティだけしかない。

「止められない……!」

その中に、まだ辛うじて僕達も混じっていた。

「クソツ、このままだと本気でマズいぞ……!」

「分かっている。だが……!」

リユーさんと別れてすぐ、何とか合流できたヴェルフと桜花さんが呻く。

本人も武器ももう傷だらけだ。

それどころか武器は補給がままならず、比較的まともな武器を何本か拾い集めては、使い捨てている。

そんな有様じゃ、階層主相手に足止めなんてできるわけもなかった。

問題はそれだけじゃない。

「モンスターの数が多い!」

戦意を保つていても、周りのモンスターへの対応で手一杯になっているパーティーなら他にもいくつもある。

このままでは、僕らもその仲間入りをすることになりかねなかった。

「カルラ殿……!」

「あの水晶がある限り削り切れそうにない。あの馬鹿弟子め。どこで遊んでいる?」

いつそ懇願するような命さんの言葉に、息を切らしながらカルラさんが首を横に振

る。

もう足止めなんて、できていないも同然だった。

戦場はすでに中央樹を通り過ぎている。

『咆哮^{ハウル}』の射程はすでに湿地帯を捉え、もうすぐリヴィラのある湖にも届くだろう。

（神様……！）

握りしめた右手が、小さく音を奏でた。

粉雪のような白い光が収斂する。

「——！」

それを見つめて、覚悟を決めた。

【英雄願望^{アルゴノウクト}】

神様に与えられた起死回生の『スキル』。

だけど、この力は体力も精神^{マインド}力も大きく削り取る諸刃の剣だ。

使えば最後、この先の戦いには参加できなくなる可能性が高い。

あの『赤水晶』が破壊されるまで温存していたのはそのためだ。

——もし、足止めにもならなかったら

——戦えなくなったら

「カルラさん」

次々に沸き起こる迷いを、すべて振り払った。

「もう少しだけ、ゴライアスの足止めをしてください」

「ああ、やってみよう」

カルラさんの詠唱を聞きながら、チャージ畜力を開始する。

「時間はどれだけ必要だ？」

「三分」

ヴェルフの問いかけに短く答えた。

それが、現状における最大チャージ畜力時間だった。

「よし、分かった。『咆哮』ハウルなら俺が全部弾き返してやるから安心しろ」

「ならば、迫るモンスターは自分たちが」

「ああ。一匹たりとも通しはしない」

ヴェルフ達もそれぞれが武器を構える。

みんなの姿と、周りから聞こえる悲鳴にも似た叫び声につい泣きそうになった。

歯を食いしばり、それを堪える。

三分。今の状況では恐ろしく長い時間だ。

でも、三分あれば残り三つの『赤水晶』が破壊される可能性も充分にある。

そうでなくとも、泣き言は言っていられない。

足止め、時間稼ぎなどと消極的な考えはやめる。

求めるのは一撃必殺。

魔石ごと吹き飛ばすために必要なのは最大出力の一撃だ。

（早く、早く……！）

焦る気持ち在必死に自制する。

半端な畜力チャージは許されなかった。

——：

逆袈裟に走る剣閃が翻り、脳天へと流れ落ちる。

手にした大剣で迎え撃つ——が、その動きを見せた時にはするりと轉身し、首を刈る

一撃へと変貌していた。

ヒュ——と。斬り裂かれた喉から空気が漏れる。まったく、生者ならそれだけで致命

傷だ。

内心で毒づきながら、後方に跳ぶ——が、やはり間合いが広い。刺突が肩をかすめる。

長刀が生み出す圧倒的な間合いと、命を刈り取るためだけに生み出される美しいままで

の太刀筋。

四年前に味わったその技の冴えは、さらに磨きがかかっているように感じられた。

『ほう？ 確かに四年前よりは腕を上げたようだ。我が姫君が追い詰められたのも納得

『というもの』

充分に間合いを開きエストを一口煽る。

闇霊は追撃してこなかった。その代わり戯言が耳に届く。

……いや、戯言とも言い切れないか。多少なりと気になることもある。

「姫君？」

女に剣を向けたことがないわけもない。

今まで殺してきた亡者や闇霊には女もいただろうし……襲ってきた同胞にも当然いた。

オラリオでいえば、それこそアイシャのところは女の方が圧倒的に多かっただろう。

……彼女たちは、殺してはいないはずだが。

そして、誰より有力なのは……

「あの赤毛の美人のことか？」

戯言に付き合う義理はない——と、言いたいところだが。

（解毒まで時間が欲しい）

すでに毒が回り始めている。

もう少して致死量に到達するだろう。そうなれば、流石の不死人おれたちも無視できなくなる。

……それに、こういう化け物に付きまとわれていそうな美人は彼女が最有力だろう。何となくそんな気がする。

『いかにも。美人であろう？』

「ああ。あの気だるそうな顔には何とも言えない色気があるな」

相手の惚気に付き合う義理など、それこそ全くない訳だが……。

（駄目か。やはり握力が戻ってこない）

切斷されていた左腕は、エストの力で復元した。

だが、一口分では力が足りず——加えて呪毒の影響もあつて——握力がまだ充分に戻ってこない。

無論、不死人の体だ。繋がっている限りは動く。凡庸な相手なら、この手でも充分だ。

——が、この『人斬り』相手に盾を扱うとなると少々心許ない。

とはいえ、もう一口飲ませてくれるほど親切ではあるまい。

相手に油断など欠片もなく、何か動きを見せれば迷わず斬りかかってくる。

……つまり、ほぼ片腕の状態でこの闇霊を始末しなければならぬわけだ。

『美貌もさることながら、それにあの体！』

なら、せめて毒が抜けるまで、もう少し時間を稼がせてもらおうとしよう。

『いくら切り刻んでも飽き足りなからう？』

……まあ、確かに。

丈夫な体だったのは俺としても全く否定のしようがないが。

「……………」

どうやら、あの美人は男運がとことんまで悪いらしい。

毒とは別の原因で眩暈を感じたような気もしたが、それはともかくとして。

『アレは私の獲物だ。貴殿にはやらぬよ』

……これもいわゆる『犬も食わない』話なのだろうか。

どうでもいい疑問が浮かぶ頃には、ひとまず解毒だけは終わった。

盾を構えるのは諦め、両手で武器を構える。

もつとも、今の握力ではさほどの意味はないだろうが。

『さあ、続きといこうか！』

巨人の喘い声は徐々に近づき、しかしリヴィラにはまだ遠い。

冒険者の声はあまり聞こえなくなってきた。

終わりを迎えつつある戦場はすぐそこまで来ているというのに。

この中途半端で無意味な場所で、もうしばらく足止めされる羽目になりそうだった。

……

「リオン、無茶をするな！」

「そうは言っていられないでしょう」

巨人の懐にあえて留まり、『匣』を務めながらシャクティの声に応じる。

そうしている間にも、圧倒的な拳圧にケーブが引き裂かれていく。

直撃すれば、いくらLv. 4といえどただでは済まない。

（思った以上に『赤水晶』の破壊に時間がかかっている）

クオンさん達も何かしらの異常事態イレギュラーに巻き込まれていると見ていい。

守護者の類でもいたのか。それとも、別の何かか。

いずれにせよ、すでに状況は変化した。

（もはや消耗を惜しんでいられる局面ではない）

冒険者の包囲網は瓦解し、ゴライアスの行く手を阻むものはないに等しい。

もしこのままりヴィラを襲われ、神ヘステイアと神ヘルメスが送還されるようなこと

になれば。

その時に放出される神威に反応して、今度はどんな怪物が出てくるか想像もしたくな

い。

いや、それ以前に……

（変化速度が上がったか。攻撃も通りになくなっていく）

ゴライアスの体皮は確実にその強度を増していた。

動きの素早さは今さら言うに及ばず、また力も増している。

今のゴライアスを相手にするには、L.V. 3以上は欲しい。

だが、そんな冒険者など、オラリオ全域を見回しても限られてくる。

今この場にいるとすれば——純粋な冒険者に限れば——片手で足りた。

(私も死力を尽くさなくては)

その中の一人として。

それに、一線を退いたとはいえ私にも冒険者としての意地がある。

クオンさんは言うに及ばず、アンジエさんやアロンさんの後塵を拝してばかりはいられない。

「シヤクテイ、ゴライアスの魔石は狙えますか？」

時間がかかっているとはいえ、要である『赤水晶』はその数を半分にまで減らしている。

再生能力は変わりないが、再生頻度は低下していた。

魔力を惜しむ知恵があるのか、それとも単純に供給が鈍ったのか。

どちらかは分からないが、いずれにしても自己再生が止まったわけではない。

しいて言えば『咆哮^{ハウル}』の頻度が下がったようにも感じるが、その分物理的な攻撃が激しさを増した。

どちらが厄介かは意見が分かれるかもしれないが、それを論じている余裕は誰にもない。

「まだ難しいな。先ほどから試しているが、やはり体皮が硬すぎる」

見慣れない十字槍を振り回しながら、シヤクテイが首を横に振った。

今のところ——冒険者の中では——シヤクテイの攻撃が最も効果的のように見える。

現状で唯一のLv. 5ということもあるだろうが……。

「一撃でなくていいなら、届かせる自信はある。だが、それならお前も同じだろう」

「ええ。一撃でなくていいなら」

攻撃を胸部に集中させ、体皮を削る。そして、後は魔法による一点突破。

つまりは正攻法だ。

本来ならそれを狙いたいところだが……。

「ですが、こころも素早く再生されては」

削った端から再生されるのでは、そうもいかない。再生速度を上回れるほど攻撃に集中させてくれるほど容易い相手でもない。

加えて言えば、向こころも魔石を守ろうとしているのか、胸部の体皮は特に硬くなっている。

斬り裂くにはより苛烈な攻撃を繰り返す必要があるが……結局のところ自己再生が

厄介であり、それを封じるには『赤水晶』の破壊が不可欠というわけだ。

現状では足止め以外に打つ手がない。だが――…

「このまま戦力を失えば、とどめを刺すこともままならなくなる」

例え『赤水晶』を破壊したとして、失われるのは魔力の循環のみ。

自前の魔力が枯渇するまで自己再生は続くと考えた方がいい。

そうでなくとも、しばらく暴れまわるのはまず間違いない。

つまり、私達が討伐するしかなく、そのためには相応の火力が必要だった。

(だが、私と「麗 傑」アンティアーネイラの魔法だけで足りるか?)

いや、他にあのカルラさんという魔導師とソラールさんという戦士の魔法。

アーロンさんという剣士と、何よりクオンさんが戻ってくれば最低限の火力は確保で

きるはずだが……。

(確実に倒すなら、やはりリヴィイラの火力も必要か)

もつとも、今やリヴィイラの冒険者の大半が戦線を離脱している。

完全に離脱していないまでも、かなり後方まで下がり、何とか体勢を立て直そうとし

ている。

どこまで復帰できるかは不明だが……ともかく、今は魔導士たちの護衛に専念しても

らった方がいい。

どのみち、階層主を討伐するには火力はいくらあっても困らないのだから。

「ッ?!」

ほんの一瞬、思考に意識を割きすぎた。

地面を砕くゴライアスの腕を駆け上がり、肘辺りから飛び降り——ついでに、そこに群がっていたモンスターの群れを強襲する。

魔石を砕かれ、「灰と化すモンスターの向こう側を白い光が疾走して行く。

「クラネルさん?!」

白い燐光に包まれた少年の姿の背中。

彼への反応が遅れたのはそのせいだった。

「くッ! シャクテイ!」

そして、今からその背中に追いつくには、行く手を阻むモンスターがまだ少し多すぎた。

——…

白光の粒子の収束が終わった。

「溜まった……!」

小刻みになる鐘チャイムの音はそのまま、発光状態を維持するその右手に、いつそ安堵にも似

た感情が吹き荒れる。

その衝動のまま手を握りしめ、地面を蹴った。
放たれた矢のように荒野を疾走。

万が一にも射程圏外なんてことは許されない。十分な距離に近づかなくては。

「クラネルさん?!」

ゴライアスに肉薄した瞬間、近くからリユーさんの声が聞こえたような気もしたけど
……。

（捕まえた……!）

やっとゴライアスに並んだ。

その赤く光る双眸が自分をとらえるのを肌で感じる。

「サミラ、ベル・クラネルを援護しろッ!」

「【リトル・ルーキー】のだと!」

「坊やだつて?!」

シャクテイさん達の声が聞こえ、ほんの一瞬だけゴライアスの動きが鈍った。

地面を蹴りつけ、その巨体を追い抜く。

そして、その先にはもうリヴィラの街が見えてきていた。

（神様……!）

リヴィラの遠景を背中に庇い、ゴライアスの前に立ちはだかる。

この戦いが始まって初めて正対したような、そんな気さえする。

巨人にとつてはあつてないような距離。でも、まだ拳が届く距離ではない。跳躍するなら、いつそ望むところだ。

『「オオ」』

眈を決し、右手を突き付ける。

狙いは胸。その奥にある魔石のみ。それ以外の場所では意味がない。

『「オオ!!」』

ゴライアスが今までで最大の『咆哮^{ハウル}』を上げる。

『「ファイアボルト」 ツツ!!』

それをかき消すように、あらん限りに咆哮した。

放たれた大炎雷。その反動に、自分が撃ち負けないよう腰を落とし、歯を食いしばる。

踏みしめる両の足が地面を抉り、粉塵を巻き上げた。

そして。

帯電する魔力の塊を、その大炎雷が撃ち貫いた。

そう、確かに撃ち貫きはした。でも、それだけだ。

『「ツツ!!」』

狙いが、逸れた。

胸部を狙ったはずの一撃は大きく逸れ、ゴライアスの頭部の大半を消滅させる。だが、それだけだ。その程度では意味がない。

その程度の一撃では、この巨人は倒せないのだから。

頭部を失ったゴライアスは、まだ動いている。

両手で地面を握りしめ、突貫して来る。

「ベル、逃げなさい！」

いつもの平静さをかなぐり捨てたりユーさんの叫び声を確かに聞いた。

ただ、反応は致命的に遅れた。

『スキル』の反動に体を苛まれているせいだ。

今までの戦闘で蓄積された疲労も無関係ではないだろう。

もしかしたら必殺の——起死回生の一撃が空振りに終わったという事実も。

それらがすべて重なりあい、飛び退くための力が膝から抜け落ちた。

(間に合わない——！)

射線から逃れられない。

その確信があつた。

死を覚悟するその一瞬。

「伏せろッ！」

鋭い叫び声とともに、大きな何かが飛び込んできた。

……

「おおおッ！」

ベル・クラネルを追って走り出したのは、単なる勘だった。

何の根拠もない衝動。

ただ、武神様タケミカヅチから武芸の手ほどきを受けるようになってから今日まで、こういう感覚を覚えることは間々あった。

簡単に言えば危険に対する勘と言えればいいだろう。

根拠も理屈もすつ飛ばし、迫りくる危険をかぎ分ける勘。

無論、それはただの勘だ。ことごとく的中できるなら、そもそもベル・クラネル達を窮地に追いやることなどなかった。

だが、それでも。今この時、この勘はきつと外れない。

半ば地面に埋まっていた大盾を拾い上げる。

元の持ち主が放棄して行ったのだろう。奇跡的なまでに無傷に近かった。

「ベル、逃げなさい！」

覆面の女エルフの悲鳴を確かに聞いた。

ベル・クラネルの一撃は——とても同じLv. 2とは思えない威力だったが——空振

りに終わっている。

いや、痛撃は与えている。だが、魔石は外した。なら、あの巨人は倒せない。それどころか、あの一撃の反動が明らかに動きが鈍っている。

巨人の突貫はかわし切れない。

(いや、違う！)

まだ手はある。

あの突貫は凶悪だが、それでもどうしようもない死の具現などではない。

必ず、どこかに活路がある。

その信念をもつてしても、巨人の突貫に飛び込むには足がすくみそうになった。

(俺は口だけのいけ好かない男にはなりたくない！)

支えるのは、ささやかな意地だった。

冒険者としての、ではない。下らない男の意地だ。

(他人を犠牲にしておきながら、体も張れない男にはなりたくない！)

巨人の突貫が始まる。

少しでも足が鈍れば、色々な意味で間に合わなくなる。

「俺はタケミカツチ様の眷属だ！」
ファミリア

感情のままに叫ぶ。

ただ、意識だけは冴えわたっていた。

そして、武神の名を穢すことなく、死中に活路を見出した。

「伏せろッ！」

ベル・クラネルの体——そのどこかを——引っ掴み、その活路……わずかな窪みに身を投げ出す。

凄まじい威圧感がその上を音を立てて通り過ぎていく。

だが、凄い。少なくとも、一撃は。

死に物狂いで、やっと一瞬命を繋ぎ——そして、それはただそれだけのことだった。

「ツッ!？」

標的を見失い——そもそも頭がないのに見えているかは不明だが——地面に転がるゴライアスが、そのまま地面の一部を握り取った。

そのままであらめに投げつけてくる。

子どもの癩癩のような行動だが、掌の大きさと力が違いすぎる。

跳んでくるのは石礫ではなく岩礫だ。

「ぐ、お……!？」

大盾を拾っていたことに安堵している暇はなかった。

ましてや受け流しなど、そんな余裕も時間もなく、ただ直撃を許した。

盾を構えていた腕の骨が折れ、肩が外れる。

支えきれなくなった大盾の向こう側で、ゴライアスはやはりでたらめに手を振り回して……

「桜花さ——…ツツ?!」

そのでたらめな一撃が、今度こそ俺とベル・クラネルの体を容易く宙へと舞い上げた。

……

ならず者の街は、今日も変わらず不景気な面をした奴らで溢れていた。

何しろ、心折られて項垂れた野郎どもがいつもより多い。まさに満員御礼って奴だ。

(あー……。これからどうするかな)

その中に紛れ込みながら、内心でぼやく。

とりあえず適当にモンスターどもを蹴散らしてきた。

あのがめつい大頭への義理立てとしてはこれで充分だろう。

問題はただ一つ。

甘ちゃんや変人がいつも通り張り切っている割には、巨人がやたらと元気だというこ

とだ。

(やっぱあの『赤水晶』が悪さしてんな)

遠目に見れば、それは明らかだった。

まあ、連中ならその手の小細工ギミックにも慣れてるだろうし、そのうち気づいて破壊しに行くだろうが。

（ま、ケリがつきそうになったら、商品でも拾いに行くかな）

ぺちと、頭を叩きながら結論した。

何しろ、街を空にする勢いで武器を持ち出している。

全部が全部使い潰されガラクタになっているとは思えない。

拾ってちよいと研いでやれば充分に売り物になるはずだ。

——と。暢気に構えていたのだが。

（まーだやってんのかよ）

それから結構な時間がたっても、例の『赤水晶』もまだ三つほど残っていた。

この際それはいいのだが、相変わらずゴロツキどもは無駄な攻撃を繰り返している。

破壊されたなら建て直せばいい。

それがこの街の基本的発想だ。

なら、あのがめついい大頭がそこまで真面目に戦い続けているというのはいったいどう
いう訳か……。

「ベル君、アンジェ君、クオン君……」

昨日からあの甘ちゃんの周りをちよろちよろしていたもう一人のチビ。

今日もちよこまか走り回って怪我人の手当てをしていた女神が茫然と呟く。

まさか天啓なんて世迷い事は言わないが……そこで、ふと気づいた。

(あ……なるほど。アイツら、コイツのためにわざわざ足止めしてんのか。ご苦労なこつた)

考えてもみれば、この街にはまずあの気の強い女エルフがいる。

となると、この街を潰されるわけにはいかない。

あの憲兵長の女とか、美人のアマゾネスとか、あの白髪の小僧辺りに足止めを頼み込んだりしたのでらう。

……いや、あの白髪のガキなら頼まれずとも自分から飛び込みそうだ。そんな感じの面構えをしている。

(んで、甘ちゃんと変人が二手に分かれてるってところだな)

北側と南側で。なら、変人が北側を受け持っているのらう。

一方、あの甘ちゃんは例によって苦戦しているようだ。

(ま、放つとしても死にやしねえだろ)

というか、死んでもどうせケロつとした顔で蘇ってくるだろう。

まあ、ここに戻ってくる前にこの街は破壊されるかもしれないが……

—

思わず、頭を抱える。

しばらく大人しくしてたつてのに、また『呪い』が喚きだしやがった。

『俺はあんたの友だ。何を思い出そうとも、何者であつても』

眼前に立っているのは、鉄塊のような鎧を着込む誰かだラッブつた。

もちろん、ただの幻だ。

『あんたが許してくれる限り、あんたの友でいさせてくれ』

あの『呪いの碑』に押しつけ損なつたクソツたれな『呪い』が見せる下らねえ幻ではない。

そんなことは分かり切っている——が。

「ああ、クソツたれ。あの粗悪品が……！」

全く持つて忌々しい話だが……やはり『呪い』に翻弄されるのが、不死人の宿命らしい。

いくら碑に押し付けようと。例え『時代』が変わろうと。

……

「ベル様?!」

リヴィラの街まであと少し。

そこまで走り抜けた時、疎らになつた木々の隙間からそれが見えた。

マジックサークル
魔法円の起点である『赤水晶』と。

そして、空を舞う白髪の冒険者。

遠目でも見間違えたりはしない。それは、間違いなくベル様だった。

(まさかゴライアスに……！)

まさかも何も、他に考えられなかった。

生きている？ 生きているに決まっている！

なら、早く助けに行かないと！

それとも、何とかしてあの『赤水晶』を壊すのが先？

「ぎっ!？」

唐突に突きつけられた無視できない選択肢。

それに気を取られ、つい動きを止めた……止めてしまったその瞬間。

大槌が直撃した。

いや、違う。直撃だったら間違いなく即死している。

当たったのは、砕けた地面や水晶の破片だけだ。そして、衝撃波。

破片さんだんが体を引き裂き、あるいは突き刺さる。

地面を転がり、激痛に立ち上がれずにいると、音もなくその不死人が近づいてくる。

「あ……っ!」

無骨な鉄塊を見せつけるように振り上げた。

実際見せつけているのだろう。

結局、何もできずに死んでいくのか。

（ベル様、ヘステイア様、すみません……）

せめて悲鳴だけは上げてやるものかと、最期の意地を絞り出して――

――そして、それは無造作に振り下ろされた。

2

「クラネルさん！」

血をまき散らしながら、ベル・クラネルとカシマ・桜花が近くの森林地帯に落下する。生きているかは分からない。今生きていたとして、いつまで生きているかも分からない。かかった。

「落ち着け、リオン！」

悲鳴を上げるリオンに叫びながら、私自身も内心の焦燥を殺せなくなってきた。冒険者になってから今まで何度となく感じた死神の気配が迫っている。

状況は絶望的だった。

例え『深層』攻略中でも……あるいは『暗黒期』でも、これほどの絶望感を経験した

ことは稀だ。

「いつまでも笑っていられると思うな……!」

「まったくだぜ、クソツたれが……!」

アイシャとサミラの悪態ですらその威勢が随分と鈍っている。

「臆するな! 再生能力は下がっている! もう一押しだ!」

——と。檄を飛ばすが、果たして誰が聞いていることか。

それに、再生能力が下がったというのは多少の語弊がある。

マジックサークル魔法円の起点が半減したせいか、頻度こそ下がった。

だが、ひとたび魔力を燃焼させたならたちまち完治していく。

(いや、違うな。これは再生ではない。変化だ)

傷つけることに体皮が硬くなり、力が増し、素早くなっていく。

(まるで、『深淵種』を相手にしているようだ)

ダンジョンと『深淵』が互いに主権争いをしている。喰らいあっているのかもしれない。

ふと、クオンがそんなことを言っていたのを思い出す。

(まさか……)

ダンジョンの力を取り込んだ『深淵』が『深淵種』を生み出したなら、その逆もあり

得るのでは……。

（考えるのは後だ）

本当にダンジョンも『深淵』の力を取り込んだのかもしれない。

そんな恐ろしい想像はひとまず意識の奥底にねじ込んでおく。

ただ、それでも……

（むしろ、変化の速度自体は上がっているような……）

あの『赤水晶』が破壊されるごとに、何かの封印が解けているようにも感じる。

それは意識の片隅に留めながら、戦場を俯瞰する。

（ボールス達は……まだ戦場にはいるか）

かなり後方、まだ残っている森林地帯を最終防衛線に定めたい。

そこに集まり、何とか体勢を立て直している。

もつとも、そこでは遅すぎる。

ゴライアスがそこに到達すれば『咆哮』^{ハウル}の射程圏にリヴィラが入る。

リヴィラが破壊されれば、例え神ヘスティアと神ヘルメスが無事でも、補給が断たれる。

（……もう空になっているかもしれないがな）

リヴィラの総資産については、ギルドも把握していない。あるいはボールスですら把

握していないだろう。

従つて、武器やポーションをどれだけ溜め込んでいるかも不明だ。

ただ、景気よく消費しているのは疑いなかった。

(補給が断たれたら、もう勝ち目などない)

その時は、決死の覚悟を決めて撤退戦に移行しなくてはならない。

連結路を塞ぐ分厚い水晶の蓋を砕き、人が通れるようになるまでに、いったいどれだけの被害が出るか想像もつかないが。

「喝ッッ!!」

弱気になった私を一喝するように、覇気に満ちた声が戦場に響き渡る。

アーンだった。

そこはゴライアスとボールス達の中間。互いの真正面。

鞘に納めた妖刀を右で逆手に持ち、地に突き立て。

柄頭に左の手をのせて仁王立ちしている。

「飲べ者ども! これは負け戦ぞ!」

誰もが意識していた事実を、彼は言い切った。

実に楽しそうに。

「それを覆す事こそ武人の誉れ! 戦場の華よ! その栄誉が今まさに我らの眼前にあ

るッ!!」

その姿はまさに威風堂々。物語に描かれる英雄そのもの。

「鬨の声を上げよ! 武器を取れ! 見よ、敵将は臆しておる!」

確かに、ゴライアスは今までと異なり、自らの周りにモンスターの群れを展開させている。

魔力の補給が滞っているせいか、それとも単なる偶然か。

真相は分からないが……見方によつては確かに臆しているともとれる。

「我らが狙うは敵将の首級きよじんくびただ一つッ!!」

冒険者たちの視線を集め。睥睨する巨人に臆することもなく。

アーンは刀を抜き放ち、切っ先を突き付け宣言する。

ただ、それでも。まだ折れかけた士気を取り戻すには足りない——…

「それとも、女子どもに庇われねば怖くて戦えんか?」

それを見透かしたように、アーンは肩越しに振り向き笑つて見せた。

もちろん、兜越した。見えるはずもない——が、誰もがそれを理解しただろう。

「……舐めたことを言つてんじゃあねえぞっ!!」

わずかな間を置き、ボールスの罵声が返つてきた。

「こちとらゴライアスなんぞ今まで何匹もぶち殺してんだ。今さら誰がビビるかよッ

！」

大頭の啖呵に周りにいるリヴィラの住民が口々に奮起する。

それはすぐに他の冒険者にも伝播していった。

誰もが武器を構え、巨人を睨み返す。

大半は空元気。残りは自棄だろう。

だが、それでも。それは士気という皮を被り、再び火の粉を舞い上げる。

「その意気や良しッ！ 者ども続けいッ！」

その機を逃さず、アーロンが最後の号令を下した。

「うおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

単騎駆けする勢いのアーロンに冒険者たちが森から飛び出し、突撃を開始する。

「アマゾネスどもに負けんじゃねえぞ!!」

「ハッ、上等だよ！」

「精々オレ達の尻を追ってきな！」

それに先行するのは、前線に残っていたアイシヤ達だ。

「すまない、よくやってくれた」

アーロンに追いつき礼を言う。

「何、気にするでない。満足に槍も握れん農民どもを悪鬼にも修羅にも変えるのが将の

宿命よ」

……なるほど、騎士という名はどうかやら文字通りの意味らしい。

そして、残念なことに団長わたしにとつても全く無関係の宿痾ではない。

「軍を離れて久しいが……まだあの小人の真似くらいはできたようであんまり安心したわ」

「小人？ 何の話だ」

「呵々と笑うアーロンに問いかける——が、今はそんなことを言っている場合ではない。」

「まずは善し。さて、次はどうするか」

「この突撃を止められるわけにはいかん」

「この勢いが断たれれば、今度こそ士気は底を打つ。」

「ふむ。敵は鶴翼か……」

もちろん、モンスターの群れに統率があるわけではない。

それはこちらも概ね同じだが……だが、少なくとも意志の統一だけは図られている。

一点突破。あとは、我々が接敵するまでに残り三つの『赤水晶』が破壊されるのを祈るばかりだ。

『ガ————アアア?!』

まさかその祈りが通じたわけでもないだろうが、唐突にゴライアスが苦悶の声を上げ

た。

「へっ！ マジでビビってやがる！」

「今度こそブチかますぞお!!」

冒険者たちがさらに気炎を上げて突撃する。

まさか本気で信じているわけでもないだろうが——あるいは、本気で信じこもうとしているのか。

いや……あなたがち間違いでもないだろう。

「やってくれたか！」

東部の『赤水晶』が二つとも破壊された。

残りは二つ。今までのように潤沢な魔力の使い方はできまい。

いよいよ向こうも追い詰められている……はずだ。

だが、こちらでも消耗が激しい。火力という意味ではもう一手欲しい。

例えば、想定外の威力を見せたあの白い閃光のような。

「リオン、行ってくれ！」

どこに、とはあえて言う必要もあるまい。

お互い長い付き合いだ。

それに、どうやらあの少年は彼女にも気に入られているらしい。

「すみません、すぐ戻ります！」

ベル・クラネル。

彼が生きているか否か。

戦線に復帰できるかどうかは、戦局に少なくない影響を及ぼすだろう。

……

「底抜けにお人好しなベル様に感謝してくださいいね！」

べつ、と舌を出して走り去ったあの小生意気な小人族バルウムに助けられてから。

「くそ、くそ、くそ……！」

遠くにゴライアスの叫び声を聞きながら、当てもなく森の中を駆けまわりながら毒づく。

逃げているわけではない……と、思う。

自分でもよく分からない衝動が体を突き動かしていた。

「スコット、ガイル！ 何処だあ!？」

とりあえず、パーティメンバーを探しているというのは確かだ。

何をするにしても、奴らと合流する必要がある。

「クソ……！」

何度目ともつかない舌打ちをしてから、近くで一番高い大樹をよじ登る。

予想通り、そこからは辺りが見まわせた。

(リヴィラに向かつてやがる、のか?)

【象神の杖】や【正体不明】達の攻撃に晒されながら、それでもゴライアスはリヴィラの街に向かつているようだった。

(つーか、何だよ。あのゴライアスは)

ゴライアスとの戦闘経験などないに等しいが。

それでも、自己再生ができるなんて話は聞いたことがない。

怖気に駆られる中……それでも、冒険者の勘が何かを囁いた。

それに従い、落ち着いて観察する。

そんな事ができたのは、単純に主戦場から遠く離れ、ひとまずは安全な場所で眺めているおかげだ。

「あの光の帯みてえなのは……」

見ていたのはゴライアスではない。

階層の何ヶ所かにある見慣れない『赤水晶』だった。

見える限りで三つ。それらはよく見ると赤い光の粒子の帯で繋がっているようだった。

「まさか、魔法円なのか？」

別に魔法について語れるほどの学があるわけではない。

ただ、魔導士として大成するために必要なものが三つあるというのは知っていた。技量と経験。そして、運だ。

運とはそれにふさわしい魔法が発現すること。

小難しいことを言う奴エルフもいるが、結局は運だろうというのが個人的な結論だった。

技量というのは、言うまでもなく『並行詠唱』を取得できているかどうか。

……まあ、こいつはなくても何とかなるっちゃ何とかなるが。

そして、経験。

つまりは、『魔導』の発展アビリティが発現するかどうか。

こいつを持っている奴と持っていない奴とでは魔法の威力が違う。

そして、持っている奴を見分けるために最も分かりやすい基準が、魔法円マジックサークルの有無だ。

こいつを描ける奴とは仲良くしておくに限る。……モンスターが相手ならそうもいってられないが。

「あの『赤水晶』が魔法円マジックサークルを描いてるってのか？」

ンは話は聞いたことがない……が、前代未聞の異常事態がちよくちよく起こるのはダ

ンジョンって奴だ。

大体からして、この一八階層セフティポイントによりにもよって階層主ゴライアスが産出された挙句、自己再生な

んぞしてやがるんだ。

そんなイカれた事だつて起こるだろう。理屈とか理論とかではなく、捨て鉢な気分任せて結論した。

そして、もしそうだとするなら、だ。

『もう戦えないなら、身を隠すなりなんなりしてください。ベル様が助けてくださった命を無駄にしないように』

——確かに、本来なら迷わず逃げ出してる状況だった。

いつもなら、間違いなくそうしていただろう。

「うるせえ！ 熟練者ベテランをなめてんじやねーぞ、素人ルーキーども！」

クソ生意気なルーキーどもに怒鳴り返し、枝から飛び降りる。

目指すべき場所は決まった。

光の帯は後方——北東部にも繋がっている。

そこにもあの『赤水晶』があつて……俺がいる位置からして、そこが一番近い。それをぶち壊してやれば、あのゴライアスに一泡吹かせることもできるはずだ。

モンスターの数は、ゴライアスから離れるほどに少なくなっていく。

蹴散らすのは楽なもんだった。

そして——…

「どうした、血相変えて」

「ホークウツド！」

飛び込んだ先にいたのは『落穂拾い』だった。

粉々に切り刻まれた『赤水晶』の前で、相変わらず冴えねえ面を曝してやがる。喉が渴いていた。

飲み込む唾液も出て来やしねえ。

だが、それでも。

「これからあのゴライアスをぶちのめしに行くからよ」

熟練者^{ベテラン}らしく、ふてぶてしく笑え。

こつちにだつて意地がある。

「ちよいと手え貸してくれや」

そして、いつも通りに告げた。

生き汚く、強かに。使えるものは何でも使つて。

そうやって生き延びていくのが冒険者つてもんだ。

……

無骨極まる死神の鎌———というか槌———が、新たな火花を散らす。

リリに届く僅か前で、だ。

「…………え？」

代わりに降り注いだポーションの雨を浴びながら、茫然と呟く。
理由は分かっていた。

リリの背後から振り抜かれた特^{ツツァイヘンダー}大剣がそれを弾き返したからだ。
すぐ傍にいて、こういう事ができそうな方と言えば……。

「アンジエさ……ま？」

心からの歓声はすぐさま疑念に染まる。

そこにいたのは、騎士甲冑を着込んだ女騎士ではなかった。

鈍い銀ではなく、色の薄い金色。

全体的に丸く、何となくアンジエ様の鎧より重そうにも見える。

と、いうか。もつと端的に言うなら……

「玉ねぎ?!」

人型玉ねぎだった。

「まさかダークファンガスの親戚ですか?!」

「玉ねぎでもキノコでもねえ!!」

「しかも喋りました?!」

「聞けよ、てめえ!!」

何か多分中身は人みたいですけど。

一応、人の武器も持っていますし。

（……というか、この声どこかで？）

聞いたことがあるような気がするのですが。

「もしかして、中身はクオン様だったりしますか？」

あの人、時々変なことですし。

それに、あの騎士——確かアンジエ様は聖堂騎士と呼んでいた——は明らかにこの玉ねぎを警戒している。

つまり、正体はともかくとして、中身は相応の実力者ということだ。

「ちげえよ！ 俺はカタリナの……ええと」

そこで、その玉ねぎは露骨に口ごもってから。

「そう！ 私はカタリナのジークラップ！ 貴公の勇氣に感動し、助太刀に参った！」
明らかに嘘を高らかに叫んだ。

ええ。根拠とか抜きにして、絶対嘘だと思えます。

「カタリナ騎士だと？」

リリを殺そうとした騎士っぽい人ですら、怪訝そうな声で呟いている。

聞き覚えのない名前だった。

いえ、確かにオラリオの外についてさほどの知識があるわけではないのですが。
「あの！」

そして、今はそんなことはどうでもよかった。

「すみません！　そこにある『赤水晶』の破壊をお願いします！　あれがあるとゴライアスを倒せないんです！」

「んなことあ分かつてる。お前はさっさと街に戻りな」

「お願いします！」

ここに留まっている暇はない。

これから起こるのは、リリが役に立てる戦闘ではない。残ったところで単なる足手まといだ。

それなら、リヴィラに戻った方がずっといい。

リヴィラにさえ戻れば、ポジションをかき集めて、ベル様を助けに行けるのだから。

その一念だけを頼りに、全力でリヴィラまで駆け抜ける。

「ヘステイア様！」

門を潜り、最寄りの広場へと向かう。

迷うことはない。そこはもう野戦病院と化している。

「サポーター君！」

ヘステイア様と、その護衛らしき千草様と行き違いにならなかつたのは幸いだろう。何故なら、ヘステイア様は貴重なポジションを握りしめている。どこに向かおうとしているかは明らかだった。

「リリルカちゃん、いいところに！」

「霞様！」

ヘステイア様達より先に声をかけてきたのは、霞様だった。

「ごめんね。ヘステイア様と千草ちゃんだけじゃ運ばなくて。これも誰かに届けてくれる？」

「これは……」

白い布に包まれた大型の剣。

黒いその剣身は、爪か牙か……いずれにせよ、明らかに武器部位ドロップアイテムを利用している。

こんな部位を持つモンスターには見覚えがない。となると、『中層』以下。

いいや、違う。これは、おそらく……

（『深層域』……ッ！）

少なくとも、強大なモンスターの一部だったのは間違いない。

（これと、ベル様のあの光の攻撃と組み合わせれば——！）

ゴライアスの魔石ごと吹き飛ばせるはずだ。

「分かりました！」

確かな勝機が見えた。

今が好機だ。この感覚は外れたことがない。

ずつとこれを頼りに冒険者たちを相手取ってきたのだから。

だから——…

「行きましょう、ヘスティア様、千草様！」

きつと、ベル様だってまだ生きている。

だから、急いで助けに戻らなくてはならない。

リリは、ベル様のサポーターなのだから。

…

「追っかけねえのか？」

「行かせてくれないだろうか？」

聖堂騎士に問いかけると、返ってきたのは女の声だった。

……全く驚かなかったといえ、そりゃ嘘になるだろう。

何しろ、かなりの剛腕の持ち主だ。攻撃を弾いた腕にまだ痺れが残っている程度には。

(ま、今さら女もクソもねえけどな)

不死人——というか主に亡者だが——に男も女もありやしない。
ンなこと気にするのはどこぞの甘ちゃんくらいなもんだらう。

今一つ手に馴染まないツヴァイヘンダーを弄びながら内心で毒づく。

「それに感謝してるのさ」

「ああん？」

いつそ気さくさを感じるほど軽い調子で、その怪力女が言った。

「おかげであんな子どもを叩き潰さないで済む」

「……ありや子ども一つか小人らしいぞ」

いやまあ、どのみちガキつてことには変わりねえが。

その呻き声を無視して、怪力女が笑う。

「カタリナ騎士に足止めされたとなれば、そこまで文句は言われないだらう」

兜のせいで素顔なんぞ欠片も見えないが……ふてぶてしく笑っているのは容易く想像できた。

ついでに言えば、俺がカタリナ騎士ではないことは百も承知だということも。

「チツ、聖職者つて奴らはこれだから……」

いつもの呪詛を、控えめに口にする。

もちろん、罵声ならいくらでも思いつく……が、しかし。

目の前のクソ尼は——クソツたれな『玉座』にはまだ遠いにしても——そう容易い相手ではない。

少なくとも、筋力だけ見ればその域に手が届いていると考えた方がいい。つまりは手練れと呼べる存在だ。

一方の俺はと言えば、ここしばらく安穩な生活に浸っていた訳で。

勘の方は多少なりと鈍っているだろう。

となると、余計なことを考えていては足元をすくわれかねない。

まして得物は使い慣れない特ツヴァイヘンダー大剣と、いまいち頼りない中ヒアスシールド盾だ。

……いや、こっちは最悪切り替えればいいだけだが。

「奇遇だな」

「ああん？」

それでもしつこく沸き起こる苛立ちを、苦心して何とか飲み込んでいると、そのクソ尼が吐き捨てた。

「私も聖職者は気に食わない」

なら、何で聖堂騎士なんぞやってんだよ——と。

繰り返される大槌の一撃を前にして、そんな間の抜けた問答をしている余裕は流石になかった。

「こんなところでどうするんだ？」

一八階層の北側。

ちようどゴライアスやモンスタードもの横腹を眺める場所で、ホークウッドに問いかける。

「柔らかな横腹を食い破るに決まっているだろう」

「ああん？」

「んなことが……まあ、できるんならそれに越したことはねえけど。」

「俺達だけであのゴライアスをぶち殺せるつてのか？」

俺の疑問を他の誰かが代弁した。

名前は忘れたが、リヴィラの冒険者で……どうやら、俺達とは別の『お得意さん』らしい。

「というか、そういう奴らが集まっている。どいつもこいつも、考えることあ同じつてわけだ。」

もちろん、スコットとガイルの奴も合流している。というか、俺より先に合流していた。この薄情者どもめ。

他に、前線から一度は逃げ出し、どうにか戦意を取り戻した奴らもいくらか加わって

いる。

んで、気づけば三〇人ちよい。普通のゴライアスとなら、何とか一戦やれるくらいの戦力にまで膨れ上がっていた。

(ま、そりやそうだろうな)

そういう奴らまで加わっているのは、単純にホークウツドの野郎がいるからだ。

元々腕が立つのはリヴィラのほとんどの奴が知っていたことだ。

……もつとも、まさかあの【イレギュラー正体不明】に片膝つかせるほどの化け物だとは思わなかったが。

それに、どういう訳だか指揮を執るにも慣れている。少なくとも、どこかで経験を積んだか、あるいは訓練を受けているはずだ。

(あんまり詳しいわけじゃねえけどな)

冒険者というよりは、どこぞの国家系派閥の『軍人』に近いような気がする。

ただ、いわゆる『騎士』とは言い難い。騎士よりは俺達に近く、だが全く同じでもない。

……まあ、自分で言ってもよく分からないが。

とにかく、こういう鉄火場で生き残るならこいつにくっついていくのが一番いい。

散り散りになって隠れていた連中が一転して強気になったのは、その辺に理由があ

る。

……逆に言うと、そんな連中がいくら集まったところであの階層主をぶち殺せるかは正直微妙なところだが。

「さすがにそいつは無理だな」

そして、ホークウッドの野郎はあっさりそれを肯定しやがった。

つつても、それでいちいち苛立つてちゃこいつとは組めねえ。

「だが、取り巻きのモンスターどもならどうにでもなる」

「そりゃまあ……」

「そうは言っても、この辺のモンスターだしな」

狂暴さこそ増しているが、だからと言って『強化種』になつてゐるわけじゃねえ。

さつきみてえに群れに囲まれてもしなけりやどうにでもなる。

「だが、取り巻きどもを相手にするだけじゃ、どうしようもねえだろ？」

「ああ。そつから先はどうするんだ？」

「やることは連中の援護だ。瓦解寸前とはいえ、それでも俺達より数は揃っている」

ゴライアスと死闘を演じるボールスや【象神の杖】アンクシーヤ達を指さし、ホークウッドが言う。

「反撃に転じるのは、例の『赤水晶』が全て破壊されてからだ。それまでは消耗を抑える。

お互いにな」

「どうやって？ 俺らが援軍に向かったところでそう変わらねえだろ？」

向こうにやぎつと見てまだ百人くらいは残っている。しかも、L v. 5の【象神アシエンクローシヤの杖】の他にL v. 3が何人かいる。

一方で俺らと言えば、数も少なかりやランクもL v. 2ばかりときた。

自分で言うのもなんだが、援軍というにはちと頼りない。

「言っただろう？ 横腹を食い破ってやると」

だが、ホークウツドは珍しくにやりと不敵に笑って見せた。

「騎兵隊の真似事をするのさ」

……

「……………」

鈍く歪み、明滅する意識と視界の中で呻いていた。

視界より先に戻ってきたのは痛み。腕を動かすだけで全身が軋む。

ひきつる肺が、それでも空気を求めて動き出し——灰と血と、焼けた土の匂いが吹き込んでくる。

(立ち上がれ……………！)

そこで、ようやく思考が目覚めた。

強引に体を地面から引きはがし、跳ね起きる。

武器はまだ手放していなかった。

その勢いで、寝込みを襲おうとしていたモンスターに切っ先を突き立ててやる。

「はあ、はあ、はあ……っ！」

引き抜こうとして、逆に引きずり倒される。

露骨なまでに息が上がっていた。

魔石をえぐり、モンスターは灰にしたが……残った大朴刀が酷く重い。

その重さに負けてすぐに立ち上がれない程度には。

（ドジを踏んだ……！）

あの巨人、だんだんと芸が増えてきている。

まさかモンスターを投げつけてくるとは。

（一匹で助かった）

それ自体は回避したが、地面に叩きつけられたモンスター……肉塊の起爆までは対応しきれなかった。

もう少し数が揃っていたら、今頃は目覚めることもままならなかっただろう。

「早く立て、アンティアーネイラ【麗傑】！」

毒づいていると前線に張り付いているアンクレーンヤ【象神の杖】が叫んだ。

「言われるまでもないね……っ！」

負傷が深刻なのは向こうも同じだ。

お互い『メレンの悪夢』に『深淵狩り』。そしてこの『厄災』と激戦が続いている。そうでなくとも、すでにもう満身創痍といった有様だ。私だけではなく、全員が。

「があ……つつ!?」

私が立ち上がるのと入れ替わるように、今度はサミラが地面に倒れた。

ゴライアスの拳……正確にはそれが巻き起こす衝撃波と石弾を避け切れなかったのだ。

ゴライアスの動きが速くなる一方で、こちらは疲労が蓄積して動きが鈍ってきている。

「クソが。やっぱ逃げとくんだったぜっ!」

まだ立ち上がれずにいるサミラの援護に回ったのは、意外にもリヴィラの大頭だった。

トレードマークの眼帯はもうない。

その代わりと言わんばかりに全身を血と返り血で染めている。

「クソツたれ……。オレも焼きが回ったな……!」

地面をひっかきながら、サミラが毒づく。

実際のところ——私達と同じLv. 3とはいえ——まだ逃げていないのは正直驚き

だ。

……もつとも、こいつが逃げ出した時は、今度こそ全てが総崩れになる時だが。

何だかんだ言っても今もボールスが前線で氣勢を上げているから、他の連中も周りのモンスターども相手に奮闘してくれているようなものだ。

「あのエルフを下げたのは失敗だったんじゃないか？」

【象神アシクレーンヤの杖】に追いつき、ゴライアスに一撃くれてやるついでに問いかけた。

何しろ、あのエルフは貴重なLv. 4だ。

この状況で抜けられたとなると、その穴はかなり大きい。

「だが、あのゴライアスを討伐するにはベル・クラネルの火力が必要だ」

「……そりゃ否定しないけどね」

リヴィラの魔導士たちは、今もまだ健在だ。

だが、開戦時のような一斉掃射は望めない。

今の状況では守り切れないどころか、彼らの援護がなければまず前線が維持できないのだ。

カルラも同じだ。どちらかと言えば守りに徹している。

彼女のおかげで致命的な破局は食い止められている。だが、そろそろ精神力マインドが限界だろう。

どっかで油を売ってる馬鹿が戻ってくればまた話は変わるが、待てど暮らせどその氣配がない。

「ちえあああッ!」

ア—ロンとかいう劍士の——魔法でもなくせに飛ぶ——斬撃が、モンスターの群れをまとめて両断する。

そのまま刃はゴライアスの左腕にも届くが——…

「む? いかなな、刃が通らんかったか」

完全に切断とはいかなかった。

モンスターども越しだった影響だと思いたいところだが……。

「やはり、『赤水晶』がある限り討伐は不可能か……」

残りはあと二つ……いや。

『ガアアアアアッ!』

ゴライアスが露骨に悶え始めた。

「まさか!」

左腕がそのまま千切れて地に落ちる。

自己再生の速度が大幅に鈍ったのだ。

つまり——…

「よおし！ 残りはあと一つ！ 北西の奴だけだあ！！」

どこかで誰かが叫んだ。

やはり、『赤水晶』が破壊されたらしい。

「聞こえたな、てめえら！ 力あ振り絞りやがれえっ！！」

ボールスが大声で叫ぶ。

それはいいのだが……。

「北西だつて？ あの馬鹿、いつまでかかってんだい？」

残りはクオンが向かっているはずの場所だけだった。

「どうせまた何か妙なことに巻き込まれているのだろう」

「……ま、そうだろうね」

あいつのことだ。あの赤黒い人影……『闇霊』とやうに絡まれているにも驚くには値しない。

「ヤベエ！ モンスターがまとめて突っ込んでくるぞお！」

言われるまでもなかった。

ゴライアスの雄叫びに従い、モンスターどもが一丸となって突っ込んでくる。

「いかん！ 総員集合！ 迎撃するぞ！」

「簡単に言うんじゃねえ!？」

とはいえ、散会しては勝ち目がない。

全員が転がるように集まっては、同じように戦力を一点集中して迎え撃つ。

だが、この陣形は――…

「こいつはまずいよー！」

「分かっているッ！」

こんな状態でゴライアスが跳躍でもしようものなら、それだけで壊滅させられかねない。

いや、それすら必要ない。こんな状況では、魔石を完全に破壊しきれないのだ。

実際、私達の足元にはモンスターどもの死骸が次々に積みあがっていく。

『ルウ――…』

これを全て起爆させられたならそれまでだ。

「ヤベエ！ また歌い出しやがった!!」

サミラが叫ぶ中、何かが私達の隣を駆け抜けていった。

「ぬううん！」

投げつけられるのは雷槍。

それが、ゴライアスの口蓋を貫き、強引に詠唱を断ち切る。

「ソラール！ 戻ってきてくれたか！」

「ああ！ すまん、遅くなった！」

屈強な体に快活な声。

「さあ、行くぞ！ 貴公らと共に勝利を掴みに！」

両手に剣と盾とを携え、ゴライアスから視線を逸らさぬまま、その戦士は叫んだ。

「うおおおおお！ 噂の『太陽の戦士』様の帰還だぞ！」

「勝てる！ 勝てるぞお!!」

こいつはこいつで有名ならしい。何人が空元気を振り絞って雄たけびを上げる。

ただ、効果はあった。継ぎ接ぎだらけの士気が、危ういところでまた繋ぎとめられる。

「早く魔石を砕け！ 急げ！」

「クソツたれ！ 勿体ねえにも程があるぜ！」

「惜しくなるから余計なこと言うんじゃないやねえよ！」

それと並行して、モンスターどもの死骸が次々に灰へと変えられていく。

怯え竦み、動けなくなつたならそれまでだ。そうなる前に何かをやらせておくのがいいだろう。

い

その間にも、戦況の変化は続いていた。

「いよいよ向こうも枷が外れたか」

「そうかもね」

頬を伝う血を拭いながら【象神の杖】アンクローシャが言った。

ゴライアスの体は今や火の粉を上げて燻る薪のような有様だ。

魔力を惜しむどころか、後先を考えずに燃やし尽くしているとしか思えない。

そして、その燃焼が生み出す過剰な再生は肉体の変容を加速させていた。

それどころか、過剰な魔力によって治そうとした部位が爆ぜる様子も見られた。

おそらく、イグニス・フアトックス魔力暴発のようなものだろう。

「しつこく大暴れしやがって！」

体が燃え尽きる前に敵を倒しつくそうとしているのか、ゴライアスの攻撃はさらに苛烈さを増していた。

その癖して嗤い声が絶えないというのは流石に薄気味悪い。

狂笑……狂嗤とでも言うべきか。

「ハッ、最後の悪あがきって奴さー！」

だが、狙いが甘い。動きが雑になっている。

奴の余力も決して多くはない。もう一押しなのは間違いなかった。

「まだもう一押しいるってのか、ちくしようめ」

ボールスが血の混じった唾を吐き捨てる。

……確かに、そのもう一押しが厄介だったのも確かだが。

「ほう。まだ逃げていなかったか。思ったよりも気骨がある男だ」

そこでソラールと入れ替わりに、前線から一時後退してきたアーロンが言った。

「ふざけんな。ここで俺様が先に退いちゃあ、子分どもがためえになびいちゃうだろうが」

やるしかねえんだよ——と、心から不本意そうに、ボールスが毒づいた。

なるほど、そういう理由だったか。

「その意気や良し。では、この先も大いに頼りにさせてもらおうか。大頭殿」

「げっ……！」

呵々と笑うアーロンに、ボールスが顔をしかめる。

まあ、それはいいとして。

「ゴライアスの動き、ひとまず緩急だけははつきりしてきたな」

残り少ないポーションを煽りながら、「象神アンクシーシャの杖」が言った。

「ああ。あんたの言う通りだ」

何をしでかすかは今も分からない。

だが、一通り暴れまくると、しばらくの間動かなくなる。

おそらくは魔力の再吸収に専念しているのだろう。

忌々しい『赤水晶』も残るはたった一つ。

今までのように魔法^{マジックサークル}円からの魔力供給を前提とした戦い方はもうできなくなっているわけだ。

つまり、動きを止めた瞬間が攻撃の好機というわけだが……。

「モンスターどもめ。陣形なんぞ組みやがって、生意気な」

向こうもそれを承知しているのか、モンスターどもは一転して守りを固めている。

そのせいで、ソラールやアロンですらまだゴライアスに接敵できずにいた。

といつても、別にゴライアスの守りに徹しているわけではない。

広域に展開したまま、でたために襲い掛かってくる。対する私達は、その群れの一点を狙って進撃している。

全体としてみれば一進一退の膠着状態。

ただ、それは現状の話だ。このまま持久戦に持ち込まれば確実に負ける。

「来やがるぞッ！ 『咆哮』^{ハウル}だ！」

「燃えつきろ、外法の業」 あ！」

『——オオ!!』

「【ウィル・オ・ウイスプ】!!」

赤毛の鍛冶師の魔法が再びゴライアスの『咆哮』^{ハウル}を強引に暴発させた。

口蓋が吹き飛ばせば、しばらく遠距離攻撃の心配はなくなる。

だが——…

「クソ……。いい加減燃料マインドが持たないぞ」

その赤毛の鍛冶師は肩で息をし、顎まで滴る大粒の汗を乱暴に拭っている。そろそろこちらも限界が近い。

何人ものLv. 2が離脱する中、ここまで食いついてきただけ大したものだ。

「正直、もう一手欲しいところだな」

「それは否定せぬが……」

【象神アンクシーヤの杖】の言葉に頷いたアーロンが小さく喉を鳴らした。

「どうかしたか？」

「私としたことが、そういうばあ奴がいるのをすっかり忘れておったわ」

「何？」

そこで、モンスターどもの吠え声の向こうから何かか聞こえてきた。

それは軽快な口笛だったり、妙に洒落た草笛だったり、濁声の雄たけびだったり、あるいは調子はずれの歌声すら混じっている。

方向は北部。

「うおおおおおおおおおおおおおおつっ!!」

モンスターどもの群れの横腹を貫くように、そいつらは突撃してきた。

およそ三〇人程度の一団。ただ、その先頭にいるのは——…
「呵々！ 遅かったではないか！」

クオンと互角に渡り合った、あの冴えない男だった。

ホークウッド。確か【深淵の監視者】とやらの最後の生き残り。

そいつらは私達より少し先を横切り、敵の前線を耕しては、そのまま駆け抜けていった。

「騎兵隊の援護がある！ 者ども進めい!!」

すかさずアーロンが一喝。それと同時に、今まで通り自ら先頭を切って飛び込んでいく。

まあ、確かに騎兵隊と言えるだろう。当然、馬なんていないわけだが。

……もしかして最初の調子はずれの合奏は突撃ラツパの代わりだったのだろうか。

まあ、それはともかくとして。

連中のおかげで、膠着状態はわずかに揺らいだ。

「おうッ！」

真つ先に後に続いたのはソラールだった。

ほんの少し脆くなった前線を、二人の雄が——『古代』よりも遙か前の英傑たちがさらに抉り取る。

「もう一押しだ、てめえら！ 根性見せやがれえ!!」

「うおおおおおッ!」

その傷口に向けて、ボールスを先頭にリヴィラの連中が突撃する。

どいつもこいつも血塗れで、いつになく根性を振り絞っている。

「おっと、先を越されちまったね」

眺めている余裕はない。

リヴィラの街までもう距離がない。あと少しで『咆哮^{ハウル}』の射程に入る。

あの馬鹿が最後の一つを破壊するまでに、少しでも押し返す必要があった

……なんて、そんな行儀のいいことはもはや考えていられない。

頬を滴る血を拭いとして、唇を歪める。

「私達もいくよッ!」

「当然だぜッ!」

もはや作戦もクソもあつたもんじやない。

ここまですれば、やることは一つ。

戦え。体を焦がす闘争本能のままに。

……

「全員無事か?」

「おうよー」

とりあえず一度目の突撃は終わった。見たところ、脱落者は一人もいねえ。

モンスターどもの群れから充分に距離を取ったところで反転し、二度目の突撃のために素早く陣形を立て直す。

複数派閥の寄せ集めだが、お互い伊達に長いこと冒険者をやっているわけではない。それくらい連携なら即興で充分とれる。

そもそも、ホークウッドの奴が示した作戦はごく単純だった。

——全員で突撃し、モンスターどもの群れを耕す。

——別に倒す必要はない。攻撃はついででいい。

——足を止めるな。とにかく真つすぐに駆け抜けることだけに専念しろ。

——はぐれたなら、無理に追いかけてくるな。素直に大頭ポルダスどもと合流すればいい。

道はホークウッドの野郎が文字通りに切り拓く。んで、その傷口を思いつき抉つてやるのが俺たちの役目だった。

何も難しいことはねえ。前だけ見て、ただ全力で駆け抜けりゃいい。

そして、効果は思った以上だった。

膠着していた前線が息を吹き返し、少しずつだが確実に前進している。

「よし。陣形が整ったら、もう一度行くぞ」

「任せとけー！」

となりや、こつちの士気も落ちるわけがねえ。

方々から威勢のいい返事が戻ってくる。

……もつとも、流石に無傷とはいかない。ホークウッド以外は多少ならず手傷を追っている。

そういう俺も肩を引つ搔かれた。

結構派手にやられちまったが、だからと言って戦えねえほどでもねえ。

瓶の中頃までポーシヨンを煽り、半分を飲み込み、残りをその傷に吹きかける。

この程度じゃ薄皮が張つたのと大差ないだろうが、こつちは向こう程にもポーシヨンの補給が効かねえ。

となりや、今は命の次くらいには惜しんでおく必要がある。

とりあえず今は剣が振れるくらいに動いてくれりや良い。

「これをずっと繰り返すのか？」

「可能ならちはな」

「可能ならちつて？」

ガイルとスコットの問いかけに、ホークウッドが頷いた。

「この手の突撃は、数が揃ってなけりやどうしようもない。この人数なら、三割も抜けられ

ばそこまでだな」

「三割？ つーことは、一〇人も抜けたらそこまでつて訳かよ」

実際には一〇人抜けるより先に限界が来るだろう。

流石に無傷で切り抜かれると考えるほど楽天的ではない。

それに、やってみて分かったがこりや確かに勢いこそが肝。足回りが鈍ったらそこま
でだ。

ビビって動けなくなるつてのは考えないとして、疲労だの負傷だのが蓄積すりやそれ
だけで命取りになる。

下手すりや足手まといになっちまう。そうなる前に次の身の振り方を考えなけりや
ならない。

つまりは、とんずらするかボールスたちと合流するかを。

となると、案外と余裕はない。

……まあ、この状況だ。元より余裕なんぞどこを見回してもねえ訳だが。

「なら、三割切つちまったら、その後はどうするんだ？」

「全員で大頭どもと合流して、真正面から斬りあうしかないな」

「げっ……」

誰かが呻くと、ホークウッドがいつもの調子で陰気に笑った。

「脱落者が出なければ問題はなし。……^{ベテラン}熟練者の意地を見せてくれるんだろう？」
「けつ、当然だろうが」

こちとらただの冒険者だ。どこぞのお強い派閥の英雄様とは違う。

だが、それでも試練を超えた上級冒険者だ。そう簡単に負ける気はねえ。
小生意気なルーキーどもにも、得体のしれない『灰色の悪夢』にも、だ。

……

状況は相変わらず劣勢だった。

もつとも、私にとって劣勢でなかつた戦いなどほぼ記憶にない。

特に聖堂騎士団との戦いでは、常に負け続けていたと言つて過言ではない。

「——ッ——」

怨嗟の炎が腹の底から噴き出してくる。

そんなことだから、私はみんなを守れなかつたのだ。

挙句、私一人だけがこうして生き恥を晒している。

奥歯を噛みしめ、兜越しにその狂信者を睨みつける。

こいつだけでも——などと、軟弱なことは言わない。

この身が亡者となり果てるまで、一人でも多く見つけて狩り出してやる。

だが——……

「があ——ッ?!」

殺意だけでそれを成し遂げられるなら、誰も苦勞はしない。

虚空から放たれた——そのように見える——青い閃光が再び体を貫いていく。

見えない敵から逃げているのか、それとも追っているのか。

自分でもよく分からなくなってきた。

(ここまでののか……?)

水晶の陰に潜り込み、【回復】の物語を口ずさみながら呻く。

と、その時。何か空から降ってきた。

近くに転がっているのは、血に染まった白い何か。

それは——…

(この少年は……)

そう。確か、あの小さな女神の——…。

「——」

改めて。何度も繰り返してきた物語を口ずさんでいた。

この距離なら、彼も——そして、ここまでの道中で行動を共にした青年も——効果範

囲に入る。

拙い奇跡だが、死の淵に立つ彼らを、少しだけでもこちら側に連れ戻す程度のこと

できるはずだ。

（そうだったな）

……まだ、守るべき仲間がいた。

彼らだけは地上に連れ戻さなくてはならない。

それまでは、亡者に堕ちるわけにはいかなかった。

朽ちかけの体は、それでもまだ戦える。

ならば、それで充分だ。

（落ち着け。焦りは禁物だ）

術の撃ちあいでは不利だった。

脚も奴の方が少し上。

だが、力と……何より技量なら私が上だ。

……つまり、活路があるとすればそれは近接戦。

魔術の射線を見極め、奴の位置を探る。

非才の身だが、剣の扱いに関してはそれなりに自信がある。

鎧の隙間に刃を滑り込ませるなど造作もない。

そして、もう一つ。勝機と言えるほどではないが、利点はある。

(やはり、これはヘステイア様との誓約の影響だろう)

この奇怪な大穴に潜つてからずつと奇妙な感覚が付きまどつていた。今もそうだ。一振りごとに体の動きが滑らかになつていく。

(ソウルの方が増幅されている)

総量としてはおそらく変動していない。

ただ、明らかに活性化している。まるで火でも灯されたかのように。

まだ届かなかつたはずの領域に手が届くようになっていく。

……今まで自分が育ててこなかつた能力までが。

それが逆に感覚を狂わせていた。

「そっ……」

武器をハルバードに切り替える。

肩を掠めていく閃光を無視して突撃。大体の勘で横薙ぎに振り回した。

手ごたえあり。

相変わらず姿は見え、音すら聞こえないが……それでも確かに手ごたえがあつた。

「……ッ！」

反射的に盾を掲げた。

何かが直撃し、火花を巻き上げる。

……いや、火花ではない。おそらく炎そのものだ。
奴の杖だか斧槍だかだろう。

先端に燃えていた超常の炎が、盾と手甲越しに腕を焦がす。

やはり脅力なら私が有利だ。……ほんの僅かな差ではあるが。

武器を《グレートランス》に切り替え、強引に突撃する。

悲鳴ひとつ聞こえないが……それでも、切っ先は確かに奴の体を貫いている。確かに手ごたえがあつた。

「貴、様——ッ！」

多少なりと追い詰められたのだろうか。

ようやく、その声を聞くことができた。

苦悶と呪詛を宿したその声は女のものだった。

「舐めるなッ！」

体を捻り、蹴り飛ばされた。

見えたわけではないが、感覚からしてそんなところだろう。

その動きにあえて逆らわず、槍を自由にする。

と、同時。相手から見て右側へと跳ぶ。

「この！ 目障りな奴め！」

予想通り、この魔女は近接戦には長けていない。焦って斧槍を片手で振り回した。

両手で振るより早く、そして広い——が、軽い。

盾で強引に払いのけられる程度には。

武器を最も手に馴染んだ直剣に。

大体の勘を頼りに、無防備となった筈の体に切っ先を突き立てた。

「舐めるなど言ったでしようッ！」

今度こそ両手で横薙ぎに振り回される斧槍を、身をかがめて躲す。

「Spap Frieze」!

その空間に、突如として霧が生じた。

ただの霧ではない。

「くッ……?!」

極低温の霧だ。

たちまち鎧の表面が凍結して白く染まり、さらに肉体までを蝕む。

じつとしてはずぐにでも氷漬けにされてしまう。

反撃は諦めて離脱する。

——と。

「……Crystal Soul——…」

微妙に途切れた詠唱が聞こえる。

何であれ、距離を開かれては不利だ。

間合いを詰めようと前方に跳ぶ——が。

「しま……ッ?!」

この魔術は「追尾するソウルの塊」——いや、違う。

同系統ではあるだろう。だが、先ほどの槍と同じく結晶化している。

慌てて横に跳ぶが、完全には回避しきれない。

そして、威力は相変わらず凶悪だった。

（速さではダメだ。勝算が薄い）

挙動の速さは向こうが上手だ。

立て直しの速さも同じく。

そもそも持久力が違う。

（焦るな……）

だが、焦らざるを得なかった。

あの少年たちの傷は深く、そしてただの生者だ。

彼らを癒したらあのリリルカという少女も追いかけてはならない。

よりによつて聖堂騎士に追われているはずなのだから。

この魔女といつまでも遊んでいる暇などあるはずもない。

とはいえ……いや、だからこそ勝負を急ぐわけにはいかない。

(もう一手欲しいところだが……)

しかし、あの小人の少女なら、逃げ切つてくれているならそれでいい。それ以上は期待できない。

少なくとも、援軍は期待できない。彼女が悪いのではなく、そもそもそんな余裕がないのだから。

大体、あの街のゴロツキどもでは何人集めてもあまり意味がない。

「右へー！」

凜とした声を、確かに聞いた。

それが誰か。そもそも、この『時代』に私の知己などいない。

だが、それでも。私はその声に従っていた。

「ルミノス・ウインド」ッ！」

緑風を纏つた大光玉が、流星の如く地上に降り注ぐ。

半ば奇襲であり、加えてこの広範囲だ。

回避はほぼ不可能。少なくとも、数発の被弾は避けられない。

防御に徹するのが定石だろう。

動きを止めてくれるなら好都合だった。

物語を口ずさむ。

今までよりも遥かに深く——あるいは高く——没我できる。

元より捧げる当てのない信仰とて、これならば充分以上に意味を成すだろう。

白光が剣を包み込む。感じる力は、やはり今までより一回りは強い。

流星の雨が途絶える。

その瞬間、地面を蹴った。

同時。

ずれていた歯車が、ようやく噛み合う。

体を包むこの感触を例えるなら、そんなところだろう。

その感触を、確かに感じた。

「フッ！」

同時、頭上から緑の疾風が吹き付ける。

この大穴で共に戦った娘だ。

偏りのないその力は、ともすれば器用貧乏に陥るだろうが……少なくとも、彼女は違

う。

見えないはずの敵を正確に捉え、容易く一撃入れている。

一撃の重さからすると流石に痛撃とはい難い——が、注意が逸れるならそれで充分だった。

「はああッ！」

今度こそ会心の手ごたえだった。

これなら、相手が不死人であろうと確実に痛撃となった筈だ。

「もらったッ！」

緑の娘の木刀が魔女の頭部——おそらくこめかみ辺り——直撃した。

いくら兜越しとはいえ、打撃による衝撃は貫通する。

そうなれば、不死人と言えど、その動きは鈍る。……ほんの一瞬ではあるが。

いや——…

「くたばれ……ッ！」

魔術が維持できなくなったらしい。ようやく、その姿が見えた。

その隙に三連撃。

斜め下からの斬り上げ。横薙ぎの一撃。そして、手首を返して喉を突く。

ゴボツ——と。罵声だか悲鳴だかの代わりにくぐもった粘性の水音が返ってきた。

それでも、当然ながらまだ動く。

「なるほど。……よく分かりませんが、正直少しだけ安心しました」
緑の娘が奇妙な言葉を口にした。

「あなたが相手なら、やりすぎてしまう心配はしなくていい」
疾風がよいよ暴風へと変貌する。

単純な速さなら、それでも私にすら劣るだろう。

だが、とにかく戦い慣れていて隙が無い。

この『時代』の戦士たちは怪物退治が本業だとばかり思っていたが……

（この娘は違うな）

対人戦闘の機微を熟知している。

むしろ、そちらが本職なのではと思うほどに。

「このまま押し切ります」

まったく、頼もしい限りだった。

……

（やれやれ、また厄介な相手だ）

その一瞬、意識は七年前に飛んでいた。

七年前。私は——私達は、人類の頂点に限りなく近づいていた一人の英雄と戦った。

他ならぬ、この一八階層で。

ああ、そういうえばあの時も神を殺す「厄災」が傍で暴れていたか。

こんな時だというのに、奇妙な郷愁が胸を焦がす。

(彼女が今の私を見たら……)

雑念を切り捨て、意識を現在に回帰させる。

過去を振り返る余裕などどこにもないのだ。

今対峙しているのは、ある意味その彼女よりも人間離れしている。

(彼女として喉を貫かれたなら死んでいたはずだ)

だが、目の前の騎士——少なくともその鎧姿はその呼び方を連想させる——は平然として動いている。

魔法の威力も見劣りしない。いや、一点に対する破壊力ならこちらが上と見ていい。

……せめてもの救いは隙が大きいことだろう。

(近接戦の技量が拙劣だ)

おそらく『力』で多少劣り、『器用』でも向こうが上。

ただし、その『器用』さを充分に使いこなせているかは別だった。

(魔法戦士ではない！)

その刹那で結論した。

先の優劣はあくまで「ステイタス」における話だ。

近接戦でなら、打ち合えない相手ではない。

いや、活路があるとすれば、それは近接戦闘以外にあり得ない。

近接戦の練度に限れば、彼女には遠く及ばないのだから。

（距離など取らせるものか）

相手は今も露骨なまでに間合いを開こうとしている。

おそらく詠唱のため。つまり——：

（並行詠唱を体得していない）

それは間違いではなかった。

——そして、これは彼リユー・リオン女が知る由もないことだが。

彼女たち『神時代』の冒険者が扱う魔法には長文詠唱、あるいは超長文詠唱までが存

在する。

ならば、詠唱が完成するまでの隙を補う事こそが優先される。

一方の『火の時代』。その魔術は超短文詠唱、精々が短文詠唱となる。

それでも、詠唱の時間は隙となる……が、立ち回り次第で充分に補える。

であれば、特別な技法はそこまで重要視されない。

彼女たちの言う並行詠唱という技法。

単独で会得していた者たちはいただろう。

だが、それが確立した技術として語り継がれてはいなかった。

むしろ、あえて詠唱を長くすることで威力の増幅を目指すことの方が一般的ですらあった。

それは『時代』の差であり、魔法と魔術との間にある微妙な差異であり……

「今は遠き森の空。無窮むぎゆうの夜天に鏤ちりばむ無限の星々——…」

そして、今は戦局を左右する要因となりつつあった。

「愚かな我が声に応じ、今一度星火せいかの加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を」
攻撃の手を緩めないまま、詠唱を続ける。

この距離なら、外すことはあり得ない。完成すれば、こちらの勝ちだ。

千年前に確立された最新の技術が、古き時代の魔女に牙を向く。

「小癩な真似を……」

とはいえ、その魔女もまた『火の時代』を生きた者。

その程度で劣勢に追いやられる脆弱さは許されない。

……もちろん、それもまた彼リョーリオン女が知るところではないが。

「くッ！」

手にした鉄塊。その先端に燃える炎が膨れ上がり、周囲を焼き焦がす。

超常の炎を前にして、追撃の手を緩めざるを得なかった。

そして、距離を離されればそこまでだ。

一撃の重さと詠唱の速さなら向こうが上なのだから。

「はああッ！」

だが、それはあくまで私一人の場合だった。

生まれかけた隙を女騎士アンジェが補う。

炎を掻い潜り振り抜かれた刃。その白い輝きが、魔女の体にさらなる深手を負わせる。

その動きは、ダンジョン内を共に探索していた時よりもさらに速い。

（まさか……）

この短期間で明らかな「ステイタス」など——少なくとも通常は——起こりえない。

ただし、まるで「ステイタス」が向上したように見える現象ならありえた。

一度でも『昇格ランクアップ』を経験した冒険者なら、経験しているはずだ。

昇華された『器からだ』と精神のズレ。

それが矯正された時、まるで「ステイタス」が向上したように見える。

ズレが大きければ大きいほど、より明確に。

（元々彼女の中にL.V. 2以上の潜在値があったとすれば）

L v. 1 になっただけで、ズレが生じてしまうこともあり得るだろう。

……だとしたら、やはり異常事態イレギュラーだということしかないが。

「来れきた、さすらう風、流浪の旅人ともがら」

驚愕とも恐れとも……あるいは、呆れとも言えそうな感情を置き去りに、さらに詠唱を加速させる。

この魔導士に時間をかけていられる状況ではない。

「空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾とく走れ。星屑の光を宿し敵を討て」ツ！」
急ぎクラネルさん達を治療し、シヤクテイ達と合流しなくては。

「アンジエさん！」

「分かっている！」

アンジエさんが短く物語を口ずさんだ。

やはり、上手く聞き取れない——が、それでもいい。

効果は確かなのだから。

「くう……!?!」

放たれた衝撃波が、その魔女を大きくよろめかせる。

「ルミノス・ウインド」ツツ！」

その瞬間。全力で魔法を解き放っていた。

すべての光弾を一点に収束。至近距離で炸裂した緑風はたやすくその魔女を飲み込む。

そして……

「どうにかなったようですね」

後には何も残っていないかった。

念のためしばらく警戒するが、もはや何の気配も感じられない。

……もちろん、すぐそばにいるゴライアスやモンスター以外の群れ以外は、という話ですが。

「これで、道中での借りは返しました」

彼女にもミノタウロス深淵種との一戦をはじめ、何度か庇われている。

一線を退いた身とはいえ、借りを作ったままというのは冒険者として据わりが悪いものだ。

「……そもそも貸しなんて作った覚えがないけど」

きよとんとした様子で、アンジェさんが呟く。

それは、戦闘中の荒々しいものでもなく、神へステイアに傳いでいる時とも違う。

おそらくは、彼女の本当の素のままの言葉だったのだろう。

果たしてクラネルさん達ですら聞いたことがあるかどうか。

思わず、くすりと笑みがこぼれた。

「アンジエ様！」

そこで、アーデさんが駆け寄ってくる。

「アーデ様、ご無事でしたか」

「ええ。正体不明の玉ねぎに助けられました」

「……はあ」

まだ気が抜けているのか、いつになく気のない返事を返すアンジエさんに引き締めようとした頬がまた緩んでしまう。

「アンジエ君！ 覆面君も無事かい!?!」

次に駆け寄ってきたのは、神ヘステイアとヒタチさんだった。

「ヘステイア様！ 何故このような場所に……」

「無事なら、急いでベル君と桜花君の手当てをしてあげてくれ！」

「お願いします！ 桜花とクラネルさんを助けてください！」

「ええ、分かっています。すぐに治療しましょう」

今にも泣きだしそうなふたりの言葉に頷く。

私達としても、ここで彼らを失う訳にはいかない。

もつとも、残念ながら私の手持ちのポジションはすでに空だ。

ちらりと見えたあの傷を魔法で癒すととなると、かなりの時間が必要となる。

それまでクラネルさん達の命が持つかどうかは、まさに天上の神のみぞ知るだ。ただ、そこまで不思議と悲観はしていなかった。

……それはあくまで私の魔法での話なのだから。

3

夢を見ている。

……多分、夢だと思う。

そこは、見知らぬ場所だった。

宝物と燻る何かが、ガラクタ無数に打ち捨てられた広大な広間。したい

その最奥。置かれた玉座に君臨するのは一人の巨人。

あの黒い ■■■ ■■■ ■■■ ではない。

体に鎖帷子を纏い。

手には大鉞を。

そして、頭には王冠を被っている。

それは神超越存在の如き者なのだ。

何の疑問もなく、納得していた。

それと対峙するのは二人の人間だった。

一人はまるで……そう。玉ねぎのように身も見える鎧を着込んだ戦士。

「■■■■、古い友よ」

その戦士が剣を構えて告げた。

「カタリナ騎士■■■■■■■■■■、約束を果たしに来たぞ」

固く決められた決意とともに。

「【薪の王】に太陽あれ」

彼は宣言したのだった。

——【薪の王】……？

それは、確か■■■■さんが……

そう呼ばれていたはずだ。

誰に？

いや、そもそも僕は何でこんなところに……

「すまない。……だが」

玉座の傍らにいるのは。

あの黒衣を纏ったその■■■は……

「その首、俺が貰い受ける」

そう。あの人こそが——…

「クオンさん！」

——と。自分の悲鳴で目が覚めた。

（え？）

いや、本当に目が覚めたのだろうか。そんな疑問が浮かぶ。

そこは見覚えのない場所だったからだ。……いや、それを言うなら元々どこにいたか
思いつけないんだけど。

天から見下ろすのは黒く染まった太陽……だと思ふ。赤い陽光は、血のように地面に
滴り落ちていく。

その滴りを追って視線を地面に向ける。

そこに広がっているのは、朽ちかけた数多の武器が墓標のように突き立ち、それらを
慰めるように赤い花が咲き乱れる灰色の荒野……いや、灰の大地。

そう。足元に広がっているのは、真っ白に燃え尽きた灰だった。

まるで世界の果てのようだった。

世界に終わりがあつたのなら、それはきつとこんな光景になるに違いない。

……それとも、始まりの場所だろうか。

咲き乱れる花は、それでも生命を繋いでいる。

終わり逝く世界に抗うように。犠牲となった誰かを悼むように。何かの始まりを祝福するように。

「クオンさん！」

墓標と花を眺めていると、その先に誰かが座っているのが見えた。

こちらに背を向けているその■に、半ば無意識のまま呟く。

……何故そんなことを思ったのだろう。

背中を向けたままのその誰かは所々が溶け、骸のようになった全身鎧を着込んでいるのに。

(でも、あの人前にどこかで……)

見たような気がする。

でも、思い出そうとした途端、鈍い頭痛がそれを邪魔する。

その痛みの中で思い浮かんだのは、やっぱりクオンさんと、先ほど見た——ような気がする——巨人の王。

そして、何故かお祖父ちゃんの姿だった。

「な……ッ!？」

駆け寄ろうとして、体が薄れていく。

同時、砕け散りそうな激痛が蘇った。

巨人。そう、
■黒 ■い ■巨 ■人
だ。

僕は確か——…

「お目覚めになられましたか？」

落ち着いた、優しい声でした。

気づけば、薄暗い廃墟の中で横たわっている。

正確にはその声の主に膝枕してもらっていた。

蘇った筈の痛みも、また感じなくなっている。

「す、すみません?！」

反射的に跳ね起きようとして……でも、体が動かなかった。

「まだ無理をしてはいけません」

優しい指先が、額を軽く撫でる。

精緻な彫刻が施された銀の頭冠が目元を覆っているけど、それでも分かるほど綺麗な女の人だった。

着ているのは、高価そうな黒いドレス。白金の髪は後ろで緩く編まれている。

お姫様というか貴族の娘というか……とにかく、気品がある人だった。

瓦礫の地面に座らせていることが申し訳なくなるくらいに。

「あなたは……?！」

「火防女とお呼びください」

その名前——どうか呼び方はどこかで聞いたことがある。

確か……。そう、確かクオンさんが……。:

「ええ。私はあの方の火防女です」

口元に微笑を浮かべながら、火防女さんが頷いた。

(クオンさあん!?)

まさか本当に。本当に男の夢を達成しているんですか?!

霞さん、アイシャさん、カルラさんに続く綺麗な女の人の出現に思わず叫びそうになった。

というか、本当に戻ったらその辺のことも確認して——:

「ここはどこなんですか?」

そう。まずはここから戻らなくてはならない。

まだ戦いは続いているはずなんだから。

そのためにも、まずこの場所を確認しないと。

……でも、こんな場所が■■■■にあっただろうか?

ダメだ。どこにいたのかも思い出せない。

■■■■の■■■■。……ですが、今はまだ伝わらないでしょう」

確かに。肝心の名前だけが聞き取れなかった。

「残り火の方。貴方は選ばなくてはなりません」

「選ぶって、何をですか？」

「資格を示すか。それとも、ここで足を止めるのか」

「資格？」

「示すのであれば、貴方の先には苦難の道が続くでしょう。かつて、数多の英雄達を飲み込んできた苦難が」

「ジリツ——と。いつか垣間見たクオンさんの旅路が蘇った。

「資格はすでに貴方の中に。残り火は貴方の中で火の粉を上げています。……ですが」

「火防女さんの言っていることは、よく分からなかった。

「きつと、あの方はそれを望まないでしょう。それは、貴方にとっては呪いとなるものです」

「冒険者になりたい。村でそう告げた時、あの人は決して止めようとはしなかったけど。ど。」

それでも、一瞬だけ表情を曇らせていたような気がした。

「僕がその資格を示さなかったら、どうなるんですか？」

別に臆したわけではない……と、思う。

それはただ純粋な疑問だった。

「『時代』の流れが定まることになるでしょう。かつて交わされ、今再び結ばれた約定の通りに」

「約定？」

「闇ですらなくなつた、新たな者が残る。人が残れるかは……いえ。彼女たちがいるなら、問題はないでしょう」

どこか少しだけ拗ねたように、火防女さんは最後に呟いた。

彼女たちというのは大体分かるような気がする。

「勘違いをされてはいけません」

それを見透かされたかのように、火防女さんが言った。

思わずドキリとしていると、彼女は続ける。

「火の……貴方方の言う『神時代』の終わりには、すでに定まったこと。それに抗うことは、ただ『呪い』を呼び覚ますだけ」

呪い。クオンさん達が関わる『呪い』ということとは、つまり……

「貴方がすべき事はあらゆる因果が絡み合い、吹き荒れる中で、継いだ火を絶やさぬこと。そして、そのうえで新たな導を示すことなのです」

「僕が、継いだ火？」

何のことだか分からない。

まさか《呪術の火》のことじゃないだろう。

「ええ。あの方たちが継いできた『残り火』。ですが、今はそれも……」

淡く微笑んで、火防女さんは僕の額を軽く撫でた。

「——ッ!?!」

思い、出した……!!

僕は、一八階層で、神様を狙う黒いゴライアスと——!

『目を覚ますんだ、ベル君!』

神様!——と、その叫びは言葉にならなかつた。

そもそも体がないのだから。

「これ……?!」

ようやく持ち上げた右腕。その手のひら越しに、火防女さんが見える。

体が半透明になっているのだ。

「まだ死んではいません。そうなる前に、霊体としてここにお呼びしました。そして、体は今、新たな灰達によって治療されています」

眩暈とともに、見えている景色が切り替わった。

血塗れで倒れる僕と桜花さんの体を、アンジエさんの魔法が癒してくれている。

リユーさんはすでに戦場に戻っている。

アイシャさんやシャクテイさんも傷だらけになりながら戦い続けている。

ソラールさんもアーロンさんも。

ホークウッドさんやモルドさん達も。

リリやヴェルフ達だつて。

『もし、英雄と呼ばれる資格があるとすれば——』

明滅し、闇に染まる視界の中。誰かの声が聞こえた。

その言葉を知っていた。その響きを覚えていた。

『剣を執った者ではなく、盾をかざした者でもなく、癒しをもたらした者でもない』

それは遙か遠い日の記憶^{おもいで}。

幼い憧憬の日々に訪れた、原初^{はじまり}の言葉^{ひとつ}。

『己を賭した者こそが、英雄と呼ばれるのだ』

祖父^{かこ}からの言葉が、消えそうな魂に火を灯す。

『仲間を守れ。女を救え。己を賭けろ』

雷霆^{ひかり}が闇を引き裂いて疾る。

『折れても構わん、挫けても良い、大いに泣け』

その雷の中に。知りうるはずのない、他の誰かの記憶が混ざりこんだ。

誰の記憶かは分からない。でも、記憶にあるその姿は知っていた。

誰よりも負け続けた黒衣の英雄の姿だけは。

『勝者は常に敗者の中にいる』

そう。奴は敗者だった。間違いない。

だが、おおよそにはふさわしくない、その貧弱な■■■■を——しかし、ついに打ち滅ぼすことができなかった。

朽ちぬ古竜どもを滅ぼした我らが、誰一人として奴を止められなかった。

傍らにいた■■■■のおかげではない。朽ちた我が身を言い訳にはすまい。

『願いを貫き、想いを叫ぶのだ』

何故なら、火に消えてなお蘇り、ついに我らを超えていったのだから。

我らの枷も策略も踏み砕き。あらゆる苦難を超え。遙かな時を超えて、ついに自らの望みを叶えて見せた。

『さすれば——』

覚えていて。覚えていた。

笑みを浮かべる祖父が続ける言葉。その先を、思い出していた。

『——それが一番格好い英雄だ』

「ツツ!!」

黒衣の英雄の背中を追うように、どこかで小さな残り火が火の粉を舞い上げた。同時、背中に刻まれた不滅ヘステイアの炎が燃え上がる。

——相反する二つの火。いや、違う。そんなはずはない。

——だって、それらは元々一つの■だったのだから。

だから、きつと新しいこの■でも……

「それが、貴方の選択ですか」

火防女さんが呟く。

その姿が、急速に遠のいていく。

「いつてらっしやい、残り火の方。貴方に寄る辺が……いいえ」

火防女さんは、小さく微笑んだ。

「貴方に炎の導きがあらんことを」

その言葉に見送られ、覚醒した。

「ベルく、ん……」

神様の肉声こえがすぐ傍で聞こえる。

痛む体は、それでもまだ動ける。アンジエさんのおかげで、また戦える。

だから起きろ、もう一度剣を執れ。あの人に——あの人達に恥じないように。

そして、大切な仲間達を救うために。

限界まで——限界を超えて、己を賭せ。

「クラネル様」

傍らで、アンジェさんが何かを捧げている。

白い布に包まれた、長大な剣。

「アーデ様から預かっております」

そこに刻まれた紋章は「ロキ・ファミリア」のもの。

もちろん、それは錯覚だ。

でも、その剣に触れた瞬間。

アイズ・ウアレンジュタイン
金の憧憬と、ウダイオス黒剣の主の死闘を垣間見た気がした。

憧憬を燃やせ。

願望を吠えろ。

もとより他者に勝る唯一があるとするれば、それは、愚かで、幼く、かけがえのない——
—その一途な想いしかないのだから。

「ツツ！」

チャージ
畜力を開始する。

同時、神によって刻まれた背中の刻印が灼熱の色に燃え上がった。

リミット・オフ
限界突破。

『神フアルナの恩恵』をも超越する思いの丈が、境界■を突破■し、英雄願望スキルの力を一時的に昇華させる。

戦局を動かすとLv. 5の冒険者が見抜いたように。巨人殺しの刃を顕在させるために。

白い火の粉が舞い上がり、白光を収束させる畜力チャージの力が跳ね上がる。

リン、リンという鐘チャイムが、ゴオン、ゴオンという大鐘楼グランドベルの音へと成り変わる。

荘厳な鐘の音が、新たな始まりを告げようとしていた。

……

(間に合わなかったか)

それとも、わざと間に合わせなかったのか。

新たな鐘の音を聞きながら、内心で呻く。

ともあれ、鐘の音が鳴ったならいよいよ巡礼の始まりだ。

『もう終いか?』

この程度の相手と遊んでいる暇はない。

思い描くのはあの偏屈な爺さんの奥義。つまりは【猛毒の霧】。

『小細工を』

そう馬鹿にしたものでもない——が、確かに今は視界を塞ぐのが目的だった。

一つの切り札を切る。

思い描くのは『輪の都』の入り口。吹き溜まりの底。

遠い日の始まりの地。ロードランの祭祀場の成れの果て。

うろ底にて遭遇した最後のデーモン。

デーモンの王子。

そのソウルを取り込んだことで、師から授かった《曙光の火》はさらに変容していった。

《デーモンの爪痕》

デーモンの王子が最後に灯した炎。

彼らの生きた証は、今ここに残っている。

『さらばだッ！』

火が揺らぎ、曲剣の如き形へと変わる。

振り下ろされる長刀を、体を回転させながら回避。

同時、左手に躰在したその『爪痕』を——秘められた力を開放した。

振るうのに力はいらない。それは炎そのものだ。重さなどないに等しい。

そして、デーモンの灯す炎とはつまり『混沌の炎』だ。

その熱波は、容易く周囲を熔解させていく。

だから、力はいらない。まだ握力の戻らない左手でも何の問題もない。

回転の勢いのまま跳躍し、さらに頭上へとその爪痕を刻み付ける。

『ぐ……う?!』

辺りは文字通りに火の海となる——が。

『小癩な——ッ?!』

しかし、相手が纏っているのは黒鉄の鎧だ。

いかに『混沌の炎』と云えど、そう容易く打ち崩せるものではない。

別の一手が必要となるだろう。

死角に飛び込み、その爪痕を突き立ててやる。

『なめるな、雑兵!』

回避が間に合わず、蹴り飛ばされた。

鎧越しにあばらが軋む——が、もはや関係ない。

『死ねい!!』

「お前がな」

振り下ろされる刃は、もう届かないのだから。

『が——…ッ?!』

「いかに黒鉄の鎧と言えど、体内で育つ炎には無力だろう」
爪痕を突き立てると同時に、別の呪術を仕込んでおいた。

曰く【浄火】。

蛮族の呪術師が行った野蛮な儀式。

それは、今新たな生贄の穢れを焼き祓う。

『——お?!』

鎧の隙間から炎を吹き出し、崩れ落ちる人斬り。

それを見ながら、エストをもう一口飲み込んだ。

ソウルはまだ流れてこない。流石にまだ生きているらしい。

だが、それももうさほどの問題ではなかった。

武器を切り替える。

銘を《ボルドの大槌》。

冷気を纏うその鉄塊を、握力の戻った両手で構える。

まずは横薙ぎに一撃。

目的地はすでに目の前だった。

『おの、れ……!』

吹き飛んだ人斬りの体が『赤水晶』に激突して蜘蛛の巣のようなヒビを入れる。

恨み言を聞いてやる義理もない。

……ああ、だが。闇霊として現れてくれたことには感謝していいだろう。

「じゃあな」

大上段からの渾身の一撃。

それが、『赤水晶』ごと闇霊を粉碎した。

……もつとも。

生身より脆い霊体でなければ、これでもまだとどめにはならなかつただろうが。そういう意味では、感謝の一つもしてやっていいのかもしれない。

……

荘厳な鐘の音が鳴り響く中、いよいよ決着の時が近づいてきていた。

「やったぞ！ 『赤水晶』は全部壊れた！」

あの馬鹿、やっと辿り着いたらしい。

だが、残念ながら歓声を上げている余裕はほとんどない。

『キヒ、ヒヒキヒッ！』

未だ嗤つてるゴライアスも——まあ、余裕があるとは思えない。

すべての『赤水晶』が破壊されたことで、魔力の循環は断たれた。

今までのように馬鹿食いしながら自己修復とはいかない。

むしろ、自壊しつつある——が、それでも攻撃の手は緩まない。
燃え尽きるように、大暴れしやがる。

「——ッ！」

自壊しているのは、私も同じだ。

やはり【内なる大力】は負担がデカい。

その癖、春姫の妖術ほど強化してくれない。

割に合わない——が。

（なめんじゃないよ！）

構うものか。そして、この程度の敵に負ける気などない。

「来れ、蛮勇の覇者。雄々しき戦士よ——」！

剛腕を掻い潜り、跳んでくる岩礫を飛び越え、行く手を阻むモンスターどもをまとめて叩き斬る。

ソラールとかいう戦士も、アーンという騎士も、この程度のことは造作もなくやつてのけている。

遅れなど、誰がとるものか。

「今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々——」

あの女エルフが、同じ猛攻に晒されながら涼しい顔で並行詠唱を行っている。

「愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を。汝を見捨てし者に光の慈悲を」
速い。それは認めるしかなかった。

ランクの差があるのは疑いなく、そして向こうの方が歌い慣れている。

「来れ、さすらう風、流浪の旅人。空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ。星屑の光を宿し敵を討て！」

「たくましき豪傑よ、欲深き非道の英傑よ。女帝の帝帯が欲しくば証明せよ——！」
追い抜かれた。

内心で舌打ちする——が、関係ない。

「ルミノス・ウインド」ツ!!」

自分の魔法に集中する。今必要なのは見栄でも意地でもなく、奴の首を刈り取る確実な一撃だ。

「我が身を満たし我が身を貫き、我が身を殺し証明せよ。飢える我が刃はヒツポリユテ——！」

緑風を纏う光弾が炸裂する中、より深く魔力を練り上げる。

「避ける、アイシヤー！」

サミラと「象神の杖」の警告を無視する。

というより、頭まで届いていなかった。

没我。凧いだ世界の中で、自分の魔力の鼓動だけが響いている。

「いけないー！」

粉塵を引き裂き、傷だらけの巨拳が迫る。

その瞬間、全ての力が爆ぜた。

「ヘル・カイオス」 ツツ!!」

緋色の刃が黒い拳と激突する。

拮抗は一瞬。炸裂する衝撃波が、肌を浅く斬り裂いていく。

一方で相手の力すら利用した渾身の一撃は、その拳から肘までを一撃で両断した。

「どんなもんだい、え？」

右腕の左半分を失い、ようやく耳障りな嗤い声をひっこめたゴライアスを嗤ってやる。

「見ろ、再生はしない！」

「やれる！ やれるぞ！」

傷口に赤い燐光が集まる——が、再生しない。

再生しては崩れ落ちている。

もちろん、全く再生していないわけでもないが。

確かな痛撃となった。

とはいえ、だ。

(こりや、流石に無茶が過ぎたか……)

軋む体に舌打ちする。

全く忌々しい。

ア—ロンなんて気楽に腕や足を切り落としているつてのに、私は死力を尽くして腕の半分がやつとだ。

あの程度では致命傷には届かない。それは、嫌というほど分かっていた。

踏み止まることができず、その場に膝をつく。

鐘の音は鳴りやまず。しかし、まだそれ以上の意味を成さない。

ゴライアスもまた健在だった。

肘を破壊された右腕はしばらく使えないだろう。

だが、それだけだ。

一步踏み出そうとして、そのまま片膝をつく羽目になる。

(クソツッ！ さっさと立ちな、アイシャ・ベルカ！)

まだ戦いは終わっていないのだ。

クソツたれなゴライアスは言うに及ばず、モンスターどももまだうようよいる。

だが——…

「あとは自分が！」

私の隣を新たな影が走り抜けていった。

わざわざ残り僅かなハイ・ポーションを残して。

「は、生意気な奴らだよ、最近の新人どもは……！」

もつとも、そうでもなければ冒険者などやっていられないだろうが。

……

（何て高い……！）

エルフの戦士も。そして、あの女戦士も。

己を律する強靱な精神と胆力。それに伴う白兵戦と詠唱の技量。

その高みに未だ至らない己の不甲斐なさを実感する。

「掛けまくも畏かしき、いかなるものも打ち破る我が武神かみよ——」

自分も必ずその高みに。一冒険者として闘志がかき立てられる。

その衝動のまま魔力を練り上げた。

「尊たき天よりの導みちきよ。卑小のこの身に巍然ぎぜんたる御身の神力しんりよくを——」

全ての精神マインド力をこの一撃に。

「救え浄化の光、破邪の刃。払え平定の太刀、征伐の靈劍れいおう。今ここに、我が命なにおいて

招来する。天より降り、地を統すべよ！」

地に縫い付けたはずの巨人が、再び動き出す。

単純な力負け。ゴライアスの圧倒的な能力に、ステイタス歯が立たない。

そして……

（いけない……！）

ゴライアスの周囲に、再び大量のモンスターが生み出される。

超重力に巻き込まれ、少なくとも数があるまま圧死したが——それでも、かなりの数が生き残っている。

一方で、こちらの前衛はまだ後方で補給中。

前衛がいないということは、モンスターを食い止めてくれる誰かもいない。

エルフの戦士も、アマゾネスも、アークリーシャ「象神の杖」にもそんな余裕はない。

（やられる——！）

飛び掛かってくるライガーファングの前に、それでも魔法の維持を諦めず——

「よし、そのままもう少し踏ん張れ」

飛び込んできた狼の刃がそれを両断した。

「あなた、は……！」

あのイレギュラー「正体不明」殿と互角に渡り合った戦士。

「おい、ホークウッド。作戦変更かよ？」

声をかけたのは顔に傷跡の残る壮年の男だった。

こちらも知っている。ベル殿を呼び出したあの無法者とその仲間達だ。

「あの魔術……魔法に巻き込まれたいなら好きにしろ」

「へっ、冗談じゃねえ。……なら、しばらくはこの嬢ちゃんを守りやいいんだな？」

「ああ、お前達が突撃するより効果的だ」

「言いやがる」

バシツ——と。拳を掌に叩きつけ、その無法者たちが不敵に笑う。

いや、違う——…

「やるぞ、てめえら！ 生意気な新人どもルーキーにもベテランに熟練者の戦いを見せてやれ！」

百戦錬磨の冒険者たちとモンスターの群れが激突した。

……

「体勢を立て直せ！ 急げ！」

部隊はゴライアスからやや後方に移動していた。

それは仕方がない。【絶影】の魔法は範囲が広く、下手に近づけば巻き込まれてしま

う。

「無茶ばつか言ってるじゃねえぞ、【象神の杖】アンクゥーシヤ！」

「うるせえぞ、ポールス！ Lv. 2が踏ん張ってるぞ！ オレ達が先に逃げられん

のかッ?!」

「ええい、クソツたれ! てめえら、いつまでへばってんだ! 根性見せやがれえ!!」
ボールスとサミラが怒鳴りあいながらそれぞれに指示を飛ばす。

【絶影】の護衛は、ホークウッドが率いる別動隊が受け持つてくれている。
今しばらくは体勢を立て直すことに専念できるはずだ。

もつとも、それでもギリギリの状態に変わりはないが……しかし、戦えない冒険者は死んだ冒険者だけだ。

生きているなら戦える。戦えるなら、後は勝つだけのこと。

……我ながら、精神論に偏りすぎだという自覚はある。だが、だからと言って他の選
択肢などなかった。

物資も武器も、もはや限界なのだから。

「あの魔法が破られた時が、決戦の時だな」

怪我人を集め、回復魔法を行使していたソラールが、その合間にふと呟いた。
全く同意見だった。お互いにもう余力などない。

「うむ。……あの小娘め、あんな隠し玉を持っていたとはな」

流石は武神の娘よ——と、アーロンは笑ってから、

「とはいえ、あまり長くはもつまない」

「仕方ない。地力が違いすぎる」

標準的なゴライアスですらLv. 4相当。

だが、あのゴライアスは訳が違う。

ポテンシャル
潜在能力はおそらくLv. 5を超える。

クオンやソラール、アーンといったイレギュラーがいなければすでに全滅していておかしくない。

そんな怪物をLv. 2が足止めできるなら、それだけで称賛に値する。例え数分と持たなくともだ。

アイシャが片腕を奪っていないければ、もっと短い時間で破られていただろう。

「おい、アイシャ。大丈夫かよ?」

「見ての通りさ」

リオンに肩を借りながら、そのアイシャが戻ってくる。

「待ちな。私はいい。このエルフに回復してもらったからね」

「しかし……」

近づき、治療ようとしたソラールをアイシャが遮る。

確かにリオンは回復魔法も使える。使えるが、この即効性はソラールの魔法——いや、奇跡と呼ぶべきなのか——には及ばない。

アイシヤはまだ満身創痕といった有様だ。

「それに、そんな余裕はなさそうだよ」

自らの足だけで立ち、アイシヤがゴライアスへと向き直る。

「や…破、られ……!」

超重力の檻は、今まさに破られようとしていた。

「クソツたれが! こつちの準備にはもう少しかかるつてのに……!」

あと一分。それで部隊は息を吹き返す。

だが、その一分が足りない。

「破られます……!」

【絶+影】の苦悶の声をかき消すように、黒いゴライアスの右腕が爆裂した。

「ありや、まさか魔力暴発かよ……!?!」

「いや、違う。何だ、アレは……!?!」

蠢く汚泥のようなものが、従来よりさらに一回りは長大な腕のようなものとなつてい
る。

いや、腕と言うよりそれ自体がまるで生物のようにも……

「ありや、この前のデーモンとかいう化け物から生えてきた奴じゃあねえか!?!」

「デーモンだと?」

ボールスの悲鳴に、背筋が強張る。

この前の、というのはおそらくハシャーナを殺した赤毛の女たちの襲撃の事だろう。新種に混ざり、デーモンの襲撃があつたとクオンからも聞いている。

つまり、あれは――

(人の膿という奴か?)

その時は具体的にどんなのかは分からなかったが……しかし、今なら分かる。

あれは、深淵に類するものだ。

(となると、あのゴライアスはデーモン化しているとでもいうのか?)

いよいよ本当にダンジョンも深淵を取り込んだ可能性が高まってきた。

全く最悪だ。どれだけ厄介か想像もつかない程に。

――否。あれはデーモンではない

「おいおい、また何かヤベエぞ……!」

誰かに否定されたような気がした……が、サミラの悲鳴に意識が現実を引きずり戻される。

幻聴に感じている時間などどこにもなかった。

「『腕』が……」

「モンスターを喰らってやがるのか?」

異形の『腕』が周囲のモンスターに襲い掛かっている。

……いや、ボールスの言う通り喰らっているのだろう。

くぐもつた悲鳴と、湿った咀嚼音が聞こえてくる。

「そうか……。魔石を取り込んでいるのか」

生理的な嫌悪感が喉を刺激する中で、カルラが呟いた。

「何？」

「起爆させるのではなく、その魔力を取り込んでいるのだろう。見るといい、傷が癒え始めている」

あくまでも向こうの補給が途絶えることはないという訳だ。

モンスターの数は無限だ。比喻でもなんでもなく、ダンジョンがある限り無尽蔵に生み出される。

「……なるほどな」

共食いとも言いがたい、何とも悍ましい光景だが……

「ようやく向こうの底が見えたな」

そこに、確かに勝機を見出していた。

自己修復の速度は『赤水晶』があつた時と比較して大きく下がっている。

であれば、あとは単純な話だ。

「ええ。ここからはこちらが攻勢です」

傷が癒えるより先に討伐すればいい。

できない速さではない。そして、行く手を阻むモンスターは他ならぬゴライアスが減らしている。

残ったモンスターもまた、一斉にゴライアスから逃げ出そうとしていた。途中にいる私達を無視して、だ。

「やつとあの耳障りな嗤い声も消えたことだしね」

そう。ゴライアスはもう嗤っていない。

いや、嗤っているつもりかもしれないが、もはやそれは咳き込むような音にしか聞こえなかった。

「周囲のモンスターを討伐しろッ！ 奴に餌を与えてやる義理はない！」

「そりや違いねえ!!」

モンスターたちは私達に見向きもしていない。サミラに殴り倒されてもだ。

生み出された端から喰われ、運よく状況を把握したモンスターたちは我先に逃げ出していく。

もはや迷宮の王は迷宮の孤王に戻っていた。

「火属性の魔法を使える魔導士は詠唱を開始しろ！ あの『腕』はよく燃える！」

殺到するモンスターを薙ぎ払いながら指示を飛ばす。

「言われるまでもねえ！ もうやらせてる！」

デーモンがリヴィラを襲撃したなら、ボールスが知っているのも当然か。

あるいは、カルラが助言したのかもしれないが。

「逃げた奴はほつとけ！ ゴライアスに喰われなきやい！」

逃げたモンスターたちがすぐに正気を取り戻して戻ってくるとは考えづらい。

もちろん、ゴライアスがまだ何か特殊能力を隠し持っている可能性はあるが――…

（いや、ここは前進あるのみッ！）

後方の警戒は最小限でいい。ここで攻めきれないなら、私達に勝ちはない。

……少なくとも、私達冒険者はここで敗れる。

別にクオンヤソラル達に敵愾心があるわけではない。

だが、黙って敗北を受け入れるほど腑抜けているつもりもなかった。

「ちッ！ うねうねと面倒な腕だね！」

「まったくだぜ！」

新たなその『腕』は尋常な腕ではない。

というより、根本的に腕ではなかった。

肘や手首といった当たり前の関節はなく、大蛇のようにのたうち、貪欲に魔石を取り

込もうとしている。

「お前から前に出すぎて喰われんじゃねえぞ！」

「誰に言っただよ、モルド！」

ホークウッド率いる別動隊と合流することに、さほどの苦勞はなかった。

私達が追いついたと言うより、彼らが『腕』から後退してきたといった方が正しい。

「おい、誰か手え空いてる奴はこの嬢ちゃん後ろに下げてやれ！」

【絶+影】を庇うように立ちはだかっている傷面の大男——確か【オグマ・ファミリア】の冒険者だったはずだ——が、誰に向けるでもなく怒鳴る。

「チッ！ ホークウッドの野郎、急に目の色変えて突っ込んでいきやがって……ッ！」

確かにホークウッドはさらに前線に飛び込んでいるようだった。

「仕方ない。彼にとつて、深淵は宿敵だろうからな」

あの馬鹿弟子に絆されたままか——と、カルラが小さく笑う。

「ああん？」

怪訝そうな顔をする傷面の大男には答えず、彼女は【絶+影】に肩を貸した。

「この娘は私が連れ帰ろう。ああなった以上、私の魔術は効きが悪い」

「……ああ、分かった。任せる」

やはり、あの『腕』——『膿』は深淵に近しいものという訳だ。

「シャクティ殿、ここは任せた。俺はあの剣士の援護に向かう！」

「では、私も付き合おう。もはや陣頭指揮もいらぬだろう」

言うが早いのか、ソラールとアールンが荒れ狂う『腕』を物ともせず突貫していく。

「モンスターどもめ。次から次へと！」

「キリがねえな！」

地面からモンスターが産出される速度は相変わらず速い。

それは、モンスター達にとっては不運だろう。

生まれた端から『腕』に喰われるか、私達に討伐されるかの生存競争に放り込まれることになる。

今やこの荒野は深層の『闘技場』コロシウムと大差ない有様だった。

「仕方あるまい。ダンジョンだからな」

「ええ。その通りです」

小さく肩をすくめると、リオンまでが苦笑した。

「ですが、やるしかないでしょう」

「当然だ。……ついてきてくれるか？」

「ええ。だいたい勘も戻ってきたところですよ」

「なら、存分に頼りにさせてもらおうッ！」

リオンとともに、ソラールたちの後を追う。

モンスターの討伐は、アイシヤやサミラ、ボールス達に任せておけばいい。

（『腕』を引き付ける囷はいくつあってもいいだろう）

ゴライアスの動きとは半ば独立している。

厄介と言えど厄介だが、好都合でもあった。

（『腕』に振り回されているからな）

貪欲に魔石を追いかける『腕』にゴライアス自身の動きが阻害されている。

予期せぬ動きに警戒は必要だろうが……それ以上に隙が大きい。

そして、その『腕』が反応するのはもう一つ。

「呵々々… もはや傷を癒せんか！」

ゴライアスは、アールンとソラール、そしてホークウツドの攻撃を露骨なまでに警戒している。

理由はアールンの言う通りだろう。

となれば、やることは一つ。

「やるぞ、リオン！」

「ええ！」

三人に気を取られている隙に、私達がゴライアスを削る。

できないことはないはずだ。

特にこの槍なら、今のゴライアスの体皮を貫くことも容易だ。

『ガアアアア!!』

その証拠に、ゴライアスがこちらを睨み吠える。

だが……

「女の尻に気を取られている余裕があるのか？」

私達に注意を向けようものなら、たちまち『火の時代』の英傑たちの刃が襲い掛かる。

その一撃は、確実になけなしの魔力を消耗させていく。

「いかん！」

ゴライアスが両腕を天高く掲げ——そして、そのまま全力で地面に叩きつけた。

先ほどこちらの陣形を粉碎した一撃だ。

直撃はしなくとも、まき散らされる衝撃波だけでかなりの威力となる。

『コオ——…!』

全員が一度散開したその瞬間、ゴライアスが大きく息を——いや、魔力を吸い込んだ。

同時、塞がりかかった傷口が開き、新しく血が噴き出す。

（魔力を、『咆哮』^{ハウル}に回している……!）

呻く暇もない。

ゴライアスは両脚のみならず、叩きつけたばかりの両手で地面を握りしめた。
狙いは——！

「いかん！ 『咆哮』^{ハウル}を撃たせるな！！」

狙いは、リヴィラの街。そこにいる神ヘステイアと神ヘルメスだ。

もし神ヘステイアが送還されることになれば、こちらの切り札が失われる。

……いや、それ以前に放たれるアルカナムは更なる『厄災』を呼び寄せるだろう。

そうなつては終わりだ。

私達だけの話ではない。きつと神蓋^{パベル}の封印も破られる。

七年前、あの『絶対悪』が目論んだように。

『ガア——…ッ?!?!』

収束するその魔力が解き放たれる直前。

荒れ狂う嵐の如き刃が、その巨体をいともたやすく吹き飛ばした。

……

あの『赤水晶』を砕き、戦場に帰還する。

その道半ばで、その魔剣が覚醒したことを自覚した。

「力を貸してくれるのか？」

こちらの意思とは関係なく、自らソウルの外へと現出したその魔剣に問いかける。

無論、答えが返ってくることはない。

ただ、その刀身に微かに風が渦巻いているだけだ。

「すまない、礼を言うぞ」

それで充分だった。

地面から引き抜き、構える。

同時、周囲の森を蹂躪して風が顕現する。

だが、それも一瞬のこと。

生じた風は、その猛威を保ったまま光すら巻き込んで刀身に絡みついていく。

「さあ、決着をつけようか？」

《ストームルーラー》

偉大なるカタリナ騎士とその友である孤高の王。

彼らの間で交わされた約束の証であり、巨人殺しの魔剣の銘だった。

『コオ——…』

一方の巨人は渾身の一撃を放つべく四肢を地面に踏ん張っている。

恰好の的だった。

「——風だけが大樹を倒す」

煌めく風が、白刃となって疾る。

その嵐刃は無防備な巨人へいともたやすく直撃した……が。少し加減が過ぎたかもしれない。

「……まあ、もう巨人とも言い難いか」

それとも、『人の膿』に蝕まれ『巨人』という存在から乖離しつつあったのか。偉大なる王ですら膝をつくその一撃を受けてな、お両断されず。

しかし、その代償として四肢——と、言っても元々片腕は失われていたが——を失った巨人の体から、いよいよ盛大に『人の膿』が噴き出してのたうち回る。

厄介ではあるが……呪術師にとつてはいいカモだ。

何しろ、あれは火に弱い。距離を取って連射すればそれだけで……

「いや……」

手に生じていた『火』を霧散させる。

「俺の出番はここまで、かな」

さて。産声を上げた次代の巡礼者たちは無事に『ジャイアントキリング巨人殺し』となれるかどうか。……できないなら、あの少年たちの巡礼はここまでだろう。

例えば、墓場で目覚めて早々、かつての英雄に剪定された無数の『灰』達のように。

……

「くそッ、ベル、あの大男……!」

パーティの編成は何とか間に合いそうだった。

曖昧なのは、俺自身が前線からとつくに外されているからだ。

もはやLv. 1の攻撃など通じない。それが理由だった。

確かに、俺があのだゴライアスにダメージを与えられるとすれば『咆哮』^{ハウル}に対する迎撃^{カウンター}しかない。

後方に下げ、魔導士たちの護衛を任せるとするのは理に適った判断だ。文句など言えない。

何しろ、近接戦ではこの階層のモンスターどもにすら手を焼くのだから。

だが、それでも……

「ちくしょう……！」

巨人からベルを守り、諸共に吹き飛ばされた桜花の姿が脳裏から離れない。

いい感情を抱いていなかったはずの偉丈夫が大切な相棒を守り——そして、その仲間が今はゴライアスを足止めしている。

一方の俺は、こうして後方に下げられ、何もできずに立ち尽くしていた。

あまりにも滑稽で惨めな己の姿が、胸で渦巻く後悔の念に拍車をかける。

「ヘファイストス様、俺は……！」

手ならあるはずだった。あの巨人にも通じる一撃ならある。

主神の女神から届けられた白布の武器。自ら手放したあの魔剣があれば、あの魔剣は、主神に命じられて打った眷属として初めての作品。

自らの力を証明してから、そのまま主神に押し付けた代物だった。

俺は二度と同じ武器を打ちません——と、その言葉とともに。

今はそれでいい——と、その時彼女は言った。

しかし、何かを得た時、その力を使わなかったことを後悔するとも。

——意地と仲間を秤はかりにかけるのはやめなさい

紅眼紅髪の女神の言葉が、全て今の自分に巡り返ってきている。

自分は『魔剣鍛冶師』にならないという矜ひとりよがり持。己は魔剣など扱わないという誓い。

それさえ捨てていれば、あるいは——…

「ヴェルフ様！」

「リリスケ……」

「これを！ アンジェ様から預かってきました！」

リリスケが差し出してくるのは、ヘスティア様から受け取ってすぐ、アンジェに預けておいた魔剣だった。

何も聞かずに預かってくれた彼女は、だからこそこちらの思いなど気にもせず送り返してきたのだろう。

「急いでください！… もう結界が……！」

超重力の檻が断末魔の悲鳴を上げている。

「俺は……ッ！」

それでも葛藤を振り切れないまま、その柄を握る。

俺は『魔剣』が嫌いだ。

持つだけで強者を倒しうる安易な力。使い手に驕りを与えてしまう魔法の武器。とりわけ一族の『魔剣』は使い手も、鍛冶師も、何もかもを腐らせる。

そして、何より。

使い手を残して、『魔剣』は絶対に砕けていく。

使い手と苦楽を共にすることもできず。育つていく姿を見届けることもできず。死が互いを分かつまでもなく。

だから、俺は『魔剣』が大っ嫌いだった。使い手を残して逝く武器たちが。

（だが、それは……）

つい先日、噂を聞いた。【イレギュラー正体不明】の持つ『壊れない魔剣』の噂を。

そして今、おそらくそれに類する武器が振るわれる様を見ている。

（ちくしょう……！）

下らない、ただの感傷だ。

それに感けて、その先を見ようとしなかった。その先があるなど、夢想だにしなかった。

(虫のいい話だ。分かつてる。散々逃げ回っておきながら今さら力を貸してくれなんてな！)

魔剣を担ぎ、走り出す。

四肢を失ったゴライアスは、それでもまだあの汚泥をまき散らして暴れようとしていく。

魔剣の柄が——あるいは、この血に宿る精霊の力が——熱を帯びたような気がした。「すまねえ。でも、助きたい友やつがいるんだ！ 頼む——お前を砕かせてくれッ!!」

その衝動のまま、走り出す

荒れ狂う嵐の刃。あれほどの力を発揮してなお、きつとあの魔剣は砕けていない。

あの域に届かない、あの域に届かせてやれない己の無力を詫び。

そして——：

「火月かづきいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

ただ一撃。そのためだけの真名を叫んだ。

……

その瞬間、誰もが炎の色に目を焼かれる中。

誰に知られることもなく、その火は歓喜していた。

遙かな時の中で、その名は眨められ、呪いにすらなつた。

しかし、今この時。まさにこの瞬間、その炎はあるべき場所へと回帰したのだ。

込められた力が。繋がれた血が。あるいは、確かに受け継がれた意志が。

かつて始まりの時にそこにあり、そして今再び新たな始まりを知らせる。

英雄の誕生を告げる烽火として。

『クロッゾの魔剣』

それはかつて、始まりの英雄の手にあつたもう一つの剣。

暗黒の時代に灯され、その終わりを告げたもう一つの導。

始祖から末裔へ。

その伝説もまた受け継がれようとしていた。

…

古い嵐が道を拓き。

継がれた火が始まりを告げる。

全ては、その鐘の音のもとで。

（———三分）

時が満ちたことを、静かに悟つた。

片時も逸らさず見据えていた漆黒の巨人。いや、その姿はもはや巨人とも言い難い。完全なる異形。それは、あの弱くも恐ろしい深淵アルミラージの怪物に似ていた。そして、今。ヴェルフの炎に焼かれ、深淵の異形はその傷を癒せずにいる。これが最後の勝機だろう。僕たち冒険者にとつては。

「——」
決して知りえない記憶を思い出す。

黒衣の英雄の物語。

巨人も竜もデーモンも騎士も王も。■ですら。

あらゆる超越存在と戦い、乗り越えてきたその旅路を。

(あのゴライアスを倒せないなら……)

きつと、冒険者ほくちはかつての英雄オンさんたちには追いつけない。

奥歯を噛みしめ、眦を決する。

【英雄願望スキル】の引金トリガ、思い浮かべる憧憬の存在は『英雄ダヴィド』。
強大な敵との一騎打ちを経て、万の大軍に立ち向かい打ち勝った、古国の覇者。
偉大なる英雄の姿を幻想し、白光が収束する黒大剣を構える。

「——みんな、道を開けろおおおおお!!」

神様の声を背に発走する。

収束する光剣に己の全てを賭して、その一撃を解き放った。

……

白い閃光と澱んだ魔力が激突、炸裂した。

色が意味を失うほどの光が階層を満たし、その場にいる全員の視界が白く染まる。

「誰もが目を腕で覆う中、聞こえるのはゴライアスの雄叫びと、それをかき消すベル・クラネルの咆哮。」

そして、それら全てが無色の轟音に飲まれて消える。

聴覚……五感が意味を失う空白の時間が終わり、最後に残ったのは決着の静けさだった。

黒大剣は剣身が消滅し、断面から白い煙を上げている。

それを振り抜いたままの姿勢で固まっているベルだ。

彼だけが戦場に立っている。

ゴライアスの姿は、ない。

「消し飛ばし、やがった……」

茫然とした眩きが零れ落ちる。

それが契機だったかのように、静止していた時間が再び流れ出す。

赤く染まっていた一八階層に、本来の光が降り注ぐ。

遮る巨大な何か。それは『ゴライアスの硬皮』——いや、『ゴライアスの黒皮』とでも言うべきか。

それが静かに地面に舞い落ちた。

『——うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお』

その瞬間、大歓声が巻き起こった。

周囲の冒険者が——いや、今一八階層に存在する全ての冒険者達が諸手を挙げ、あるいは隣の者と肩を組み、涙さえ浮かべながら、喉が張り裂けんばかりに声を上げる。

彼らの持つ刃毀れた武器が、ひび割れ欠けた盾が、あるいは荒野に突き立つ武具の全てが、まるで自らの凱歌を上げるように銀に輝く。

ダンジョンの鳴動はすでになく、新たにモンスターが生まれる気配ももはやない。

「ベルー！」

「ベル君！」

「ベル様！」

衝動のまま叫んだ相棒の名前に、聞きなれた声が重なる。

最初に走り出したのはヘスティア様。そのすぐ後ろをリリスケが追いかけている。それどころか、アンジェと覆面のエルフ——あの女冒険者^命までが走り出していた。遅れまいと走り出す俺の後ろで、さらに他の連中までがベルの元へと殺到する。

今までは質の違う狂奔を、天井の青水晶が素知らぬ顔で照らす。途切れることのない喜びの声、一八階層を包み込んでいた。

4

辛うじて残った森の中をかさかさとして駆け抜けるのは、魔石を思わせる紫紺の結晶を背負ったどこか蟹に似た汚泥の塊。

それを「罪の火」が包み込み、あつけなく焼滅させた。

「これにて今回の王狩りは完了だな」

何ともあつけないものだ。『王狩り』などと呼ぶまでもない。

それにしても……

「今の葉『彷徨^ペう人間性^イの精霊^グ』のようなものだったのか？」

稀に宿り手を失った『人間性』があのような存在に転じたことがある。

……もつとも、昔見た可愛げのある姿とはだいぶ変わっていたが。

これも『時代』の変化によるものだろうか。

それとも、全くの別物か。

（いや、全くとは言い難いな）

あの巨人もどきが『深淵』と繋がるものであることはまず間違いない。

何故なら……

「人の獲物を横取りするとはな」

偉大なる「フアランの不死隊」が、それを見逃そうとはしないのだから。

「そうだな。本職がいるんだから、任せておけば良かった」

音もなく姿を見せたのはホークウッドだった。

それも当然か。一度『深淵』がそう容易く消滅するなど「フアランの不死隊」——【深

淵の監視者】が考えるはずもない。

「……だが、今回の深淵禍はこれで終いだな」

「そりゃいい。専門家のお墨付きがあるなら、俺も枕を高くして寝れる」

やはり一四階層で発生した『深淵』の最後の残り滓といったところか。

これでもうやく今回の『深淵狩り』は終わりという訳だ。

それにしても、まさか残滓だけであれほどの化け物を生み出すとは。

（やはりダンジョンは『深淵』と相性がいいらしいな）

それとも純粹に『人間性』を蓄積できるのだろうか。

(それはありそうだな)

心当たりがない訳でもない。

内心で嘆息していると、ホークウッドがあっさりと背を向けた。

「帰るのか？」

「ああ。今のお前と決着をつけても意味がない」

言い残すと、さっさとホークウッドは歩き去っていった。

いつぞやとは立場が逆転しているような気がしないまでもない。

肩をすくめていると、別の足音が近づいてきた。

……誰のものかは大体分かる。つまり、それくらいの付き合いがあるという訳だ。

「遅かったじゃないか」

「何かあったか？」

やはりと言うべきか当然というべきか。

姿を見せたのはカルラとソラールだった。

「悪かった。言い訳だが、闇霊に絡まれてたんだ」

「そんな事だろうと思っただよ」

カルラがクスクスと笑う。

「やはり、あの少年が後継者か？」

「多分な」

ベルは資格を示した。そして、こうして選定も超えた。

全て俺達の目論見通りであり、期待通りだった。……忌々しいことに。

「悦べ、グウィン。これで俺もお前達と同類だ」

胸中の悔恨は、吐き出すには重く澱んでいた。

「何か言ったか？」

「いいや。……今頃グウインの奴がほくそ笑んでいるだろうと思っただけだ」

誤魔化すつもりの本音が、つい零れ出てしまう程度には。

「それが嫌なら、あの少年と腹を割って話すべきだろう」

「そうだな。……それがいいんだろう」

グウインたちとは少し違う対応になる。……と、思いたいが。

さて。それは結局のところ自己満足でしかないようにも思う。

「一つ訊くが……」

呻いていると、カルラが言った。

「あの少年は、道を行くものではないのかな？」

「え？」

「であれば、道に迷うものでもある。貴公がそうであるように」

「……………」

反論はいくらでも思いつく……ような気がしたが、言葉として残るものは結局一つもなかった。

「道を示すことは、別に罪ではない。惑わすためでないならな」

「そうだ。あの少年に期待するのは『道を選ぶこと』だろうか？」

カルラの言葉を、ソラールが引き継ぐ。

「……そうだな」

あいつが道を選ばなければ、俺も今は動けない。

そして、道を選ぶ程度にはまだ余裕もある……と思う。

「一つの末路くらいは伝えてやるか」

先達として、今ならそれくらいのこととはしてやれるだろう。

ああ、だが、それより先に……

『ああ、この地に降りてきて良かった！』

あの耳障りな笑い声をかき消してやった方がいいだろうか。

(ウラノスとの賭けがなけりや、今すぐにも黙らせられるんだがな)

だが、それはできない。ウラノスを失えば、ダンジョンの封印ができない——と、言

う事とは別に。

■喚■であるぜ■達にとっても、少なからずマズいことになる。

忌々しいその笑い声に、■した■憶までが蠢いたような気がした。

——そろそろ、思い出すべき時も近いのではないかな？

おそらくは最も多く耳にしたであろう後輩の声とともに。

第四章 太陽を撃ち落とす日

第一節 夕日に染まる帰り道

1

照明を抑えられた薄暗く、そして決して広くもない室内。

分厚い檜の一枚板で作られた堅牢な扉。

置かれた円卓は、部屋に対してやや大きく、余計な圧迫感を醸し出している。

扉の向こうの廊下はさらに暗く、すれ違うだけでは顔も見えないほどだ。

(いかにも密談いう感じやなあ)

水割り——しかも、酔わないようにめっちゃ薄い——の入ったグラスを揺らしながらぼやく。

実際、それを売りにした店ではある。……もちろん、馬鹿正直に看板に書かれているわけではないが。

他の部屋も片っ端から暴いていけば、オラリオで噂される陰謀の一つくらいは暴けるかもしれない。

(いや、本当に後ろ暗い連中がこんな場所使うわけないか)

——と、いう心理的な死角を突いてくる輩もいないとは限らないが。

「それじゃ、まずはお互い生きて再会できたことに乾杯でもしようじゃないか」

うちがしよーもない戯言を弄んでいると、ヘルメスがいつもの軽薄な声で言った。

いや、今回ばかりは『いつもの』とは言い切れないか。

何しろ、ヘルメスは未だ右腕を魔道具マジックアイテム——治療用の補助具サポーターで覆ったままだ。

というか、普通に治療院から抜け出してきている。しばらく安静にしているよう言われていくせに。

ちなみに、同じく入院中のアスフイたんは同行していなかった。

……あの生真面目なアスフイたんが主神の護衛を休むとなると、よほど傷は深いらしい。

(アレを避けて通るくらいの分別はあると思つとつたんやけどなあ)

まさか、全力でちよっかいを出しに行くとは。

しかも返り討ちに合った挙句にこの調子とは、凶太いというか何というか……。

「まー、ホンマによう生きとつたとは思うけどな」

もつとも、流石に直接本人に手を出したわけではないようだが。

……まあ、それでも殺されかけた事には何の変わりもない。

あと、とぼつちりで殺されかけたアスフイたんにとっては災難以外の何物でもないだ

ろう。

「ああ。驚くべき幸運だな」

内心で呻くと、ディオニユソスまでが嘆息した。……いや、一週回って驚嘆の吐息かもしれない。

「はっはっは！　そう褒めないでくれ！」

褒めてはいない——と、ディオニユソスが口の中だけで呟くのが聞こえた。

いや、単なる幻聴かもしれない。うちも同じ事を呟いたから。

とはいえ、実際によく生きていたものだとは思う。

（相変わらず容赦ない奴やな）

ヘルメスに傷を負わせたのは、いつものアレだった。

別口で手に入れた情報によると、リヴィラの冒険者を唆してドチビの子供——噂の『世界最速兎』^{レコードホルダー}に嫉けたらしい。

保護していたフィン達——つまり、幹部^{主力}達——が帰還した直後に仕掛ける辺り、流石と言わざるを得ない。

と、それはそれとして。

（ファイたん基準^{スケール}でもアウトやな）

適当な造語を生み出しながら……まあ、納得する。納得するしかなかった。

まして、ドチビの子供はアレもだいぶ気にかけているらしいし。

……まあ、この男の場合は今さら改めて原因など追加する必要もないと思うが。

「ヘルメスは自業自得だとして」

「おいおい、それはあんまりじゃないか？」

バツサリと切り捨てようとしたディオニュソスにヘルメスが絡む。

「……【リトル・ルーキー】の探索に出向くなら、私に話を持ってきても良かっただろう」
面倒くさそうな顔をしたディオニュソスが、もう一度ため息をついた。

無視するよりは相手にした方が面倒が少ないと判断したらしい。

「私もヘステシアとは知らぬ仲ではない。それに、ダンジョンの閉鎖が解かれてすぐ、
フィルヴィスがダンジョンに向かったからな」

「そーいや、レフィーヤが喜んでったなあ」

何でも心配して会いに来てくれたんだとか。

「そのついでに彼らを保護するくらいは……いや、確かにフィルヴィス一人で三人を連れ帰るのは少し荷が重いかもしれないが。まして、あの時のダンジョンでは」

多少言いよんどから、肩をすくめる。

「しかし、そもそもロキの子供たちが保護していたのだ。あとはお前が余計なことをしなければ『神災』など生じるはずがない」

ディオニソスの言う通りだった。

そもそも、ダンジョン内に神が入らなければ——正確に言えば、ダンジョン内で『神威』を放たなければ、だが——例の『厄災』は生まれ出ない。

モンスターにビビったドチビがやらかした可能性も皆無ではないやろ——と、思わないでもないが。

(でも、ドチビはドチビで意外とガッツあるからなあ)

たった一人しかいないとはいえ、眷属のためにダンジョンに突貫していく程度には。それで天界に送還されていたら色々な意味で笑い話にしかないが。

天界に送還される時に発生する『神威』は、多分ヘルメスがばら撒いた量に勝るとも劣らないのだから。

「手厳しいなあ。オレだって必死だったんだぜ？」

「そら否定せんけど。そんなら巻き込まれた子供達も同じやろ」

もつとも、ヘルメスを止めなかったという意味では、うちも無関係ではない。(ギルドにその辺のことをゲロってなければええけど)

とはいえ、うちらはうちらであんまり選択の余地がなかったわけやけど。

何にしても、この神については色々と過小評価していたことを認めざる得ない。

(まさか、本気でやるとは……)

いや、確かに『神会』^{デナトウス}でも、『厄災』を利用してアレを抹殺するという提案をしていたが。

（大体、アレが素直に生まれ出た『厄災』と刺し違える保証がどこにあんねん）

冷静に考えれば、アレがオラリオのために命を懸けるかどうかからしてまず怪しい。

と、いうか。下手をすれば、『厄災』と一緒に神蓋^{パベル}を破壊するかもしれない。

「いや、ロキ。そんな目で見ないでくれ。オレとしても、今回の一件は不本意な結果……

アレを退場させるためじゃなくて、オレ自身が生き残るための苦肉の策だったんだ」

そのツケを子供らに支払わせとれば世話ないわ——と、内心で吐き捨てる。

^{ウラノス}ギルドが緘口令を出したせいで、詳細は不明だ。

ただ、それでも、第一報を届けに来た子供らの話からすると、七年前の『厄災』と類似した何かが暴れまわったのは間違いなかった。

せめてもの救いは、産出されたのが一八階層とあの時よりは浅いことだろう。

「それで、ヘスティアはどうなったんだ？」

薄い水割りに顔をしかめながら、ディオニユスが訊ねた。

香草や果汁で味を調えているため、飲めない味ではない。だからと言って、美味しい訳でもないけど。

ただ、それでも酒の神のお眼鏡には到底及ばない代物だった。

ちなみに、うちが聞いた話だと昼頃にダンジョンから戻ってきて、そのままギルドに連行されたらしい。

「ヘスティアかい？ オレと同じく、嚴重注意と罰金刑だよ。ま、金額はオレよりだいぶ安いけどね」

「まあ、聞く限りあのドチビがやらかしたんはダンジョン入ったことだけやしな」

金額の差は当然だろう。まず派閥の規模からして違う……と、言う以前に。

「そら、ドチビは居合わせただけやしな。罰金も『居合わせた分』だけやろ」

「おいおい、ヘスティアの肩を持つなんて珍しいじゃないか」

「そういう問題やないわ、このドアホ」

大げさに驚いた顔をするヘルメスを睨み返す。

そら、あのドチビがギルドに絞られたことはいいい気味やと思うが……しかし、話を聞く限り、神威をばらまいたのはヘルメスだけだ。

つまり、『厄災』が産出されたのもコイツのせいということになる。

単にダンジョンへ立ち入っただけのドチビとはやらかしたことのヤバさが違う。

それに、少しでもタイミングがズレていたら、普通にうちの子らも巻き込まれているところだ。

……いやまあ、それに関してはうちも共犯つちや共犯になるけども。

(ただでさえリヴェリアにガチ目に怒られたいうのに)

ボイス・ウエルネス

妖毒 蛆の毒だけでも手一杯だというのに追い打ちをかけてくるとはどういう見
かと。

(けど、その特效薬を買うためだったんやけどなあ)

それに、この優男の派閥から買うおうのはうちの発想やない。ベートの発案や。

と、いうことはベートも悪い。おのれ、あのツンデレ狼。あとで覚えとれ。

——と、ベートを巻き込んで心の安定を図ったところで、思考を真面目に働かせる。

(『神殺し』の集団か)

ヘルメスの持ち込んだ情報は、決して目新しくはなかった……が、だからこそ有益で
もあつた。

特に、リヴェリアがいるうちの派閥にとっては。

「ま、ええわ」

水割りを煽ってから、本題に入った。

「ほな、情報交換といこか。それぞれ成果はあるようやしな」

こちらは例の『新種』について。ヘルメスはメレンについて。

そして、ディオニユスは……

「ああ。もつとも、私の方はさほど派手さはないが」

「けど、そつちも無視できんくなってきとる」

ディオニユスには、例の『落穂拾い』と『太陽の戦士』とやらについて情報を集めてもらっていた。

『落穂拾い』——ホークウッドは今さら言うに及ばず。

『太陽の戦士』はメレンで暴れた『赤黒い人影』——ついにギルドから正式に『闇霊』と呼称された存在に似ているからだった……が。

「どうやら、噂の『太陽の戦士』こそアレの関係者っぽいしな」

本人——というか、生身の状態——と共闘したベートが言うのだからまず間違いない。

名前はソラールとか言ったか。

「ああ。……結論から言えば、どちらも地上で生活している。ホークウッドに関しては、おそらく第四区画のどこか。もう少し絞るなら、『歓楽街』近郊に拠点を持っているようだ」

「『歓楽街』やて?」

つい最近まで【ガネーシャ・ファミリア】——いや、ギルドが介入しづらい地域だった。

一方で、近郊となると【イシユタル・ファミリア】の方も充分にその力を振るうこと

はできない。

そういう意味では、オラリオの『死角』と言ってもいいだろう。

「ああ。ちなみに、『エブラナ・ファミリア』なる派閥は存在しない。少なくとも、ギルドには登録されていない」

「まあ、そーやろな。そもそもエブラナなんて神はうちも知らんし」

今さら驚くまでもない。そのホークウッドという奴もアレと同じくうちの血を寄る辺にはしていないというだけの話だ。

予想通り。ただそれだけの事だった。

「ホンマにLv. 3 いうなら『神会』デイトゥスでも普通に名前が挙がつとるやろ」

もつとも、ギルドにランクアップを申請していないというのであればどこぞの優男も同じことだが。

「ソラールの方はよく分からない。時折は第三区画で目撃されているようだが……」

「第三区画か。まあ、あそこも人の出入りは多いからね。多少変わり者がいても噂にないにいい」

ふむ——と、顎先に手を当てながらヘルメスが呟いた。

ヘルメスの言う通り、第三区画は催しのための観光客や旅人用の区画だ。

例えば『怪物際』モンスターフェアの会場である闘技場なんかもここにがある。

他にも外からきた商人が屋台を広げる市場マーケットも有名だ。他に旅の演劇団とかがいることもある。

そして、そういった商人や観光客、旅人が泊める宿も多数存在しているわけだ。

もちろん、定住するための家もあるが……まあ、顔見知りを作りづらい場所ではあるだろう。

「他にもギルド管轄の施設が多数存在する。念のためね」

「ま、そうやな」

露骨に釘を刺してくるディオニユソスに肩をすくめて見せる。

ギルド云々というなら、そもそも闘技場自体がギルド管理だったような気もする。

……いや、その割にガネーシャの趣味が随所に見られるけども。

(そーいや、「ガネーシャ・ファミリア」のお膝元でもあるな)

まあ、単純に本拠ホームがそこにあるという意味だが。

「彼にもギルドが関与しているのかい?」

「可能性はある。どうやら【ガネーシャ・ファミリア】が手を回しているらしい」

「何やて?」

……どうやら、ガネーシャも無関係ではなさそうだった。

「彼の拠点を探ろうとすると、必ずと言っていいほど【ガネーシャ・ファミリア】の団員

に邪魔をされる。もちろん、露骨なものではないが」

「なら、その団員に訊いてみればええやろ」

何しろ、神に嘘はつけないのだから。

「無論、試してみたとも。だが、末端の団員はその意味を知らされていないようですね。これといった成果はなかったよ」

そこまで含めてガネーシャの仕業だろう——と、ディオニユスが肩を落とした。

「正確には、彼というよりは特定の場所に他派閥の団員や主神が近づくと警戒するよう命じられているようだ。もつとも、ブラフも混じっていて、どこが本命かはまだ分からないが」

「動員できる人員はぶつちぎりやからなあ」

あそこは人数だけで見ればオラリオ最大派閥と言っている。

強硬な手に出るならまだしも、そうでないなら人手はただいだけで脅威だった。

(いや、脅威いうんはちよつとアレやけど)

別に「ガネーシャ・ファミリア」と敵対する気はないんやし。

ただ、今の状況だと障害であることも確かだった。

(と、いうか。そのソラールいう奴の居場所を隠すのはウラノスの命令いうことか?)

ウラノスとガネーシャが手を組んでいるのは周知の事実だ。

というか、別に隠されてもいない。むしろ、当然の話だ。

都市運営を担うギルドと憲兵の連携ができていないなら、その方が問題だろう。

(けど、こゝも密約が多いとなると……)

いや、それも必然か。

仮にも憲兵を担っている派閥とギルドのやり取りが筒抜けだったら、その方が問題だった。

うちらでも簡単には情報を手に入れられないのは、両者が真面目に危機管理をしている何よりの証拠といえる。

問題は、アレやその関係者の情報の秘匿は、本当に都市の管理運営に必要なことなのかどうか。

オラリオを守るための英断なのか、それともウラノス自身の思惑によるものなのかだ。

「私としては、ホークウッドの方が渡りはつけやすいと思うが……」
それは間違いない。

何しろ、たとえ地上で出会えずとも、リヴィラの街に出向けば概ね決まった場所にいる。

それに、ディオニュソスの話を聞く限り、ギルドとの接点も少ない。

とはいえ。

「ホークウツドの方とはほぼ没交渉っぽいしなあ」

テーブルに突っ伏しながらぼやく。

これ以上突っ込めば、最悪敵対しかねないらしい。

とはいえ、ソラールはソラールでアレの関係者だ。仮に居場所を特定できたとしても、迂闊に手は出せない。

手詰まりという状況は少しも好転していなかった。

(やっぱ、ガネーシャが手を回しているうんはちよい気になるな)

もつとも、それを言うならガネーシャはアレも一応は抱え込んでいるわけやけど。

(他にアーロンとかいう奴もおるんやったな)

そっちはどうもタケミカヅチの奴がよく知つとるっぽいけど。

正直、タケミカヅチというのは盲点——というか、まったくの想定外だった。

(でもまあ、武人肌いうやつっぽいし、妥当っちゃ妥当やな)

落ち着くところに落ち着いていたと言ってもいいだろう。

しかし、そうなる結構強固な繋がりの可能性が出てくる。

迂闊にタケミカヅチを突くのはマズい。

(アレと同類なら、神嫌いかもしれんけど……)

しかし、ソラールは『太陽の光の長子』なる神を信仰しているらしい。そつちと同じだった場合はかなり悲惨なことになりかねない。

例によつて、接触は慎重に行うべきだろう。

(うちらはただ情報が欲しいだけやのになあ)

敵対するとかしないとかはその後の話だった。

そもそも、別に悪だくみをしていないわけではない。

むしろオラリオのためを思って動いているのに、何故ここまで苦労しているのか。

「それで、ロキ。君の方はどうだった？」

「おいおい、そつちはメインディッシュじゃないか。先に俺の話聞いてくれよ」

「それは間違いではないが……どういう売り込みをしてくるんだ、お前は？」

謎の絡まれ方をするディオニュソスを横目に見ながら、フィン達からの報告を思い出す。

(いよいよ面倒なことになってきとる)

何しろ、フィン達からの報告——その後の会議も含めて——は、頭痛のタネしかなかったのだから。

……

時は遡つて今日の昼下がりに。

遠征後のあれこれ——例えば「ステイタス」更新とか——がそれなりに終わった後。多分、ドチビが帰ってきたか来ないかくらいの頃の話だ。

「さて、それじゃあ、例の『闇霊』について少し分析してみようか」

フィンを筆頭とする幹部と幹部候補が食堂に集まっていた。もちろん、うちも同席している。

フィンの言葉から分かる通り、残念ながら打ち上げではない。

ごく真面目な帰還報告だった。あるいは、普通に会議ミーティングといふべきか。

まあ、遠征明けで疲れとるのも分かるし、一応珈琲や紅茶くらいは用意してあるけども。

「僕達が実際に交戦した『闇霊』は前衛型と魔導士型の二体。まず前衛型と交戦した僕の所感を伝えようと思う」

全員が頷くのを見てから、フィンは続ける。

「力だけを見れば、オツタルと互角かそれ以上。一対一、真正面からの打ち合いなら、僕ははずれ打ち負けていただろう」

その言葉に、全員が戸惑いの表情を浮かべた。

理由は単純で、告げた内容に反してフィンの小さく笑っていたからだ。

「あくまでも、真正面から足を止めて打ち合った場合なら、だ。そうでなくても、それな

りに苦勞はしただらうけどね」

「どういう意味ですか？」

代表して問いかけたのはレフィーヤだった。

「そのままの意味さ。力だけを見ればオツタル^{L.V.7}級と云っていい。でも、全体をみれば精々がL.V. 5つてところかな」

「どういうことなの？」

続けて、テイオナが首を傾げる。

実際、フィンが言っていることはおかしい。……冒険者の感覚で言うなら。

もちろん、それぞれアビリティには偏りが生じるのが普通だ。ただ、そこまで極端に差が出るわけでもない。

「ラウル。あの時、強行突破を決断した理由を簡単に説明してくれるかな？」

「は、はいっすー！」

その闇霊との戦闘で転機となったのは、ラウルの突貫だったらしい。

普段の様子を考えれば、確かに珍しいくらい思い切りだった。

「例の『闇霊』は、団長の防御を崩すギリギリまで攻めていたにも関わらず、最後の一押しをしようとしなかったのはみんなも気づいたと思うっす」

その言葉にしつかりと頷いたのは、実はリヴェリアだけだったりする。

まあ、他に例の怪人^{クリーチャー}らしき『仮面』とか、芋虫型の『新種』とかに囲まれててかなり危なかったと聞いている。

余裕なんてなかったのは想像に難くなく……そんな中でも、ちゃんと見て考えられるから、ラウルは幹部候補の筆頭になっているのだ。

(その凄さに本人が一番気付いてない言うんがな……)

その辺で一皮剥けてくれるええんやけど——なんて、主神としての親心はさておき。

「その理由は何かを考えた時、クオンさんが昔言っていたことを思い出したんです」

ラウルがアレと繋がりを保っているのは、派閥内では公然の秘密だった。

そもそもラウルとアレの関係の始まりはフィンの命令によるものだ。

(当時はちよつと無謀すぎると思ったんやけどなあ)

うちの心配を他所に、何だかんだとそれなりの関係を維持し続けている。

安心していいのかはちよい微妙なところだけど。

「何を言ってたのよ?」

「『極振り』ってというのがいないって言ってたんです」

「『極振り』……?」

ラウルの回答に、問いかけたティオネが首を傾げた。

「ええと、でたらめな『魔力』を持つている反面、『力』がなくて普通の剣もまともに振

れない人って意味みたいっす」

「いや、そりやいないでしょ。普通に考えて」

ティオネがさらに困惑したように呻く。

もちろん、困惑しているのはティオネだけではない。同席する誰もが首を傾げている。

「そう。僕達冒険者にはいない」

そんな中で、フィンが頷く。

「どれだけ『力』のアビリティを伸ばさなかったとして、一度でもランクアップしていればその力は常人のそれより遥かに上になる。だから、ラウルが……クオンが言うような現象は起こりえない」

視線が再び集まる中、冒険者にとつての『常識』を改めて言葉にする。

そのうえで、でも——と、フィンは言った。

「闇霊……おそらく、クオン達にとつては起こりうることだと考えていい。実際、あの闇霊はその傾向が見られたからね」

「『力』だけを高めたってことか？」

「ああ。ベートの言う通りだ」

頷いてから、フィンが続ける。

「一撃は重かった。だが、それだけだ。それを充分には使いこなせていなかった。おそらく、僕らの「ステイタス」とは内訳からして異なるんだろう」

「何でそう思うの？」

「あの闇霊が足りていなかったのは、おそらく『持久力』。それが足りなかったがために、武器を振るい続けることができなかった」

もつとも、本当の意味で『疲労』が蓄積しているようにも見えなかったけど——と、アイズの問いかけに答えてからフィン肩をすくめた。

「あとは武器の選択が甘かったのが幸いしたね。もう少し取り回しやすい武器で間断なく攻められていれば、流石にしなぎ切れなかった」

それはそうだろう。『力』の差に押し切られていたはずだ。

「んな雑魚がLv. 5相当だったのか？」

「あくまで僕の間感だけだね。それに、ラウルの参戦がなければ僕も攻めきれなかった。決して侮れる相手じゃない」

下手に深入りして、直撃を許せば確実に戦闘不能になっていた——と。

フィンの言葉に、ベートが舌打ちした。

とはいえ、それもまた当然の話だろう。

その闇霊は一撃の重さにすべてをかけていたということになる。

ならば、その一撃を喰らえば、流石のフィンでもただでは済まない。

「おそらく、闇霊やクオン達は自分が求めるアビリティを狙って高められるんだと思う。僕らよりもずつと効率的にね」

フィンと対峙した闇霊は『力』を優先的に高めていたということだろう。

今のところ、その推測を否定する要因は特に思いつかなかった。

「でも、私達だって得意なアビリティはあるでしょ。それと同じことじゃないの？」

ティオナが素直に首を傾げた。

別にその疑問を抱いているのは彼女だけではあるまい。他の幹部候補たちの何人かも領いている。

「そうだね。例えばティオナ。君に魔法が……分かりやすく、攻撃魔法が発現したとしよう」

小さく笑ってから、フィンがその質問に応じる。

うん、と素直に頷くティオナに頷き返してから、彼は続けた。

「君の場合、今まで『魔力』のアビリティは全く育っていない。でも、『中層』……いや、『下層』のモンスターには問題なく通じるだろう」

「えーと……。うん、それは、多分通じると思うけど……」

ティオナが曖昧に頷く。

これはうちの勘やけど、フィンの質問が難解と言うより、単に魔法を使っている自分が上手く想像できていないだけっぽい。

「じゃあ、それは何故か分かるかい？」

「え？ ええと……L v. 6だから？」

つい今しがたランクアップしたばかりのティオナが首を傾げる。

正解だった。……まあ、ティオナ本人はダメ元で言っただけっぽいけども。

ちなみに。

今回の『遠征』では、ティオナの他にティオネとベートがL v. 6にランクアップしている。

僕らは残念ながらL v. 7になれなかったが……それでも、これでL v. 6が七人集まった。

それだけ見ても、有意義な遠征だったと言っている。

もちろん、その分だけ過酷なものでもあったが。

「そう。君の中には『魔力』のアビリティにも貯金がたまっているからだ」

L v. 6として最低限の『魔力』がティオナの中にはある。

肝心の魔法が発現しないうちは活用できないとしても。

「では、その『魔力』の貯金をそっくり『力』に回せたらどうなるかな？」

「え？ えーと……。それは『力』だけ凄く強くなる……。あつー！」

「そうだ。君ならアビリティ評価S以上……。それこそ、ランクの壁を越えるかもしれない」

「チツ、そういう事かよ……」

フィンの言葉に、ベートが舌打ちした。

「仮に同ランクだったとしても、奴らの得意な『間合い』で戦う限り俺達が不利になるってわけか？」

「そうだ。例えば『力』に『極振り』した……。近接戦特化型の闇霊と対峙した場合、オツタル以上の『力』を秘めている可能性は常にあると考えていい。仮に格下でもね」

幹部候補たちのみならず、アイズたちまでが表情をこわばらせた。

「ただ、この場合は『魔力』は全く育っていない。つまり……」

「距離を取って魔法で狙撃すれば簡単に勝てる。そういうことですか？」

「ああ。とはいえ、相手も織り込み済みだろうからね。精々が有利になる程度だと思っ
ておいた方がいい。それに、相手の弓や飛び道具にも注意が必要だ」

レフィーヤの言葉に、フィンが頷いた。

「だが、あの灰野郎にそういう『穴』があるようには思えねえぞ？」

「それに関しては僕も同意見だ」

ベートの言葉にも、フィンは頷く。

「彼は自分たちの力の性質を逆手に取ったんだと僕は考えている」
「どういうこと？」

「常に相手にとつて不利な間合いで戦う。それが彼の戦略だろう」
「魔導士には近接戦を挑み、前衛攻役には距離を取つて魔法で攻める、かの。確かにあいつの立ち回りはその傾向があるな」

フィンからアイズへの回答に、リヴェリアが頷いた。

「様々な手を使える。それが奴の強みだ。……色々な意味でだが」

それは剣とか魔法とかに限つた話ではない。

文字通りに『何でもしてくる』わけだ……と、げんなりとしながら呻く。

「彼が自分など凡庸だという理由もそこにあるのかもしれないね」

「万能と器用貧乏は紙一重じゃからの」

フィンの言葉に、ガレスもまた頷いた。

「でも、団長。それってあいつや例の『人斬り』の苦手な『間合い』が分かれば私達が有利に立てるつてことですよ？」

一方でテイオネが目を輝かせる。

「それは何とも言えないな。今言つた通り、テイオナが『魔力』をそれ以外に回したなら、

生じる利点は欠点を上回る」

まあ、確かに。冒険者の強さとは別にランクやアビリティだけの話ではない。いや、ランクは確かに大きな壁ではあるが。

ティオナは元から近接特化型だ。『魔力』のアビリティが喪失したところで今までの立ち回りに何か変化が出るわけでもない。

それよりも、それ以外のアビリティが強化されたことの方がより強い意味を持つだろう。

「それにさつきベートが言った通り、クオンは『上級中衛職』ハイバランサーだと言っている。『穴』はあるかもしれないけど、それは決して大きくはないだろう。実際、彼は近接戦でオツタルとも充分以上に戦えるからね」

ティオナが何とも言えない唸り声をあげた。

フィンの言葉を疑うつもりはないけど、素直に納得もしきれない。まあ、そんなところか。

「闇霊たちの『ステイタス』は僕らよりも偏りが大きい可能性がある。それくらいで割り切っておいた方がいい。……それこそ、クオンのように偏りの少ないタイプだっているだろうからね」

今回の結論として、アレはうちの『恩恵』とは全く別の理によって力を得ているの

は間違いないという訳だ。

もつとも、別にそんな結論で、はいおしまいとはいかない。

「とはいえ、ティオネの言葉も正しい」

他にも考えないといけないことは色々あるのだから。

「闇霊に関して、『象神の杖』^{アンクリースヤ}から別の情報がある」

紅茶で唇を湿らせてから、フィンは言葉が続けた。

『『ひび割れた赤い瞳のオーブ』……あの時、仮面^{クリリズター}が使った魔道具^{マジックアイテム}の名前だけど。それが用いられた場合、その『瞳』に魅入られた存在と同程度の力の持ち主が呼び出される
そうだ」

「でも、フィン。それならあの時の闇霊は……」

首を傾げたのはアイズだった。

実際、フィン達が交戦した闇霊は、アイズを基準に呼び出されているはず。

なら、L.V. 6相当と考えるのは別におかしくない。

「どうやらこちらもバラつきがあるようだね。『象神の杖』^{アンクリースヤ}の時はL.V. 6相当だったらしい。そういう意味で、僕らは幸運だった」

「まあ、アイズたんがランクアップしたばっかだったのも良かったんかもしれんなあ」

簡単に言えば、まだL.V. 5寄りだったといえる。

逆にシャクティはL v. 5でも上位の存在だ。

もちろん、「ステイタス」の詳細は分からないが、ランクアップが見えていたとしても不思議ではない。

「ただ、同ランクが呼び出されるとするなら、今まで話してきた情報は極めて重要だ」
「呼び出された闇霊の得意な間合いで戦えば、それだけで不利になる。そういう事ですね？」

険しい顔で、アキが問いかけた。

もつとも、距離によって有利不利が生じるのは冒険者同士でも変わらない。

例えば同ランクの前衛攻役と魔導士アタッカーがいたとして。

この二人が戦う際に、剣の間合いであればアタッカーが。詠唱できる距離があれば魔導士が有利なのは想像に難くない。

だからこそ、彼女は危機感を覚えたのだろう。

そこにランクの壁を超えるほどの偏りがあれば、間合いが勝敗に直結しかねない。

「そうだ。今回は近接戦においてはランクの壁を超越していたといつていい。魔導士型も同様だろう」

「そうだな。あの威力なら、L v. 7と言つていい」

フィンの言葉に、リヴェリアも同意する。

アキの表情がさらに強張る。ラウルなんて落ち着くために飲むとしたコーヒーをひっくり返しかけていた。

「ただ、そう悲観することもない。対処法も示唆されているからね」

「……灰野郎は俺達寄りだつてことだな」

毒づくようにして、ベートが呻いた。

「ああ。クオンの【ステイタス】は偏りが少ない。僕らに近い形だと考えていい。つまり、彼の戦略は僕らも真似しやすい」

「相手の不利な間合いで戦う、か。なるほど、私達にとつてはそこまで難しくもない」

剣には魔法で。魔法には剣で。簡単に言えば、そういうことだ。

……もつとも、向こうだつて自分の苦手な間合いは分かっているだろうし、言うほど簡単なことではないだろうが。

「ええっ?! それならあたしはどうすればいいの?」

アイズの言葉に、ティオナが声を上げた。

その問いかけに苦笑してから、フィンが続ける。

「僕らは仲間だ。いざとなればリヴェリアやレフィーヤを頼ればいい。その代わり、彼女たちが苦手とする闇霊が出た時は君が彼女たちを守るんだ」

「あ、そっか! そうだよね!!」

ばあつとテイオナが顔を輝かせた。

実際のところ、それこそが冒険者最大フイン達の強みとなるだろう。

「それに、おそらく闇霊側に連携はない。あつても即席のものだ。まず間違いなく私達の方が有利だろう」

「そうやな。今んとこ、呼び出された先で初めて顔合わせいう感じになつとるとしか思えんし」

なんかこう、相手の力に合わせて無作為に呼ばれているだけ……つまり、仲間内で集まるとかは難しそうな印象がある。

うちとしては、リヴェリアの意見に賛成やけど——…

「それに関しては、あまり樂觀視したくないな」

どうやら、フインはうちとは違う見解を持っているらしい。

「どうして?」

「ベート。君はおそらく、今回の『深淵狩り』で初めて彼と連携を組んだと思うけど、感想はどうかかな?」

アイズの問いかけには答えず、フインは少し意地の悪い笑みを浮かべてベートに話を振った。

「……確かに即興で俺や猪野郎に合わせてきやがったな」

忌々しそうな言葉に頷いてから、フィンはさらに付け足した。

「ホークウッドやソラールも出会ったばかりの冒険者と即席のパーティを組んでいるよだからね。彼らは即興で連携を組むことに馴れている可能性は充分にある」

なるほど、元々そういう状況がよくあることなら、対応の一つも身に着けていておかしくないか。

「つてことは、あいつも闇霊つてのになれるつてことですか？」

「さて、そこまでは何とも。ただ、やろうと思えばできるんじゃないかな」

「あのバケツ頭……ソラールつて野郎と同じ『太陽の戦士』つて奴らしいけどな」

何か、やたら微妙な顔でベートが呻いた。

まあ、その『太陽の戦士』いう噂はうちも聞いたことあるし、ベートが嫌いそうな話だと思っけども。

「確かにそれは反応に困る話ね……」

「今んとこ金ぴかのアレに助けられた言う話は聞かんけどなあ」

まあ、アレに助けられたという話を冒険者が好き好んでするかと言われると、それはそれで微妙だったりするが。

「クオンが闇霊になれるかどうかはともかく」

苦笑してから、フィンが話を戻した。

「闇霊の対応策はこんなところかな。もったも、これだけで例の『人斬り』に対応できるとは思えないけど」

チツ——と、ベートが忌々しそうに舌打ちする。

「けど、そいつが闇派閥と手え組んだら無視はできんしなあ」

「ロキの言う通りだ。それに、デーモンについてもまだ詳細不明だからね」

『『深淵』という呪詛も無視できんの』

「ああ。せめて神ウラノスがもう少し情報を公開してくれると助かるのだが……」
最後に、リヴェリアが深々とため息をついた。

……

（それな。ホンマに）

——と。改めて、リヴェリアの言葉に同意してから。

「なあ、ヘルメス。自分、ウラノスのクソジジイとも繋がつとるやろ。そつちの情報も少し吐けや」

「おいおい、まだメレンの話の途中だぜ？」

「ンなもん、結局手出しできんいうだけのことやろ」

実際のところ、他の結論は考えられない。

現時点で、オラリオの勢力はメレンからほぼ締め出されている。

例外は「ガネーシャ・ファミリア」だけだ。

「確かにガネーシャとニョルズの間の密約は気になるけど、どうせそつちは探れんのかな？」

「まあね。とはいえ、大体想像はつく。ロキ、君だって同じだろう？」

「……まあ、例の『新種』をしばらくログ湖で飼う気やろな」

メレンの苦境は、根本的にログ湖の漁獲量低下にある。ギルドからの関税すら、そこから派生している問題と言える程に。

んで、その原因がモンスターだということも否定しようがない。

ここにあの『新種』に他のモンスターを襲う習性があることを加えて考えれば……まあ、大体その辺りに着地する。

「モンスターにモンスターを駆除させるいうんは、悪くない考えやと思うけどな。『強化種』さえ生まれぬなら」

「では、ウラノスは「ガネーシャ・ファミリア」にあの『新種』を調教テイムさせるつもりだか？」

「いや、流石にそら無理やろ。代行できるモンスターが見つかるまでの繋ぎくらいやないかな」

「オレもそう思う。そして、そうだとするならまさにガネーシャ達の独壇場つてわけさ」

「思い切りが良すぎる方法だが……本当にそんなことができるなら、確かにメレンにとつては朗報だろう。それどころか、オラリオにとつても悪い話ではないな」

白身魚は白ワインによく合う——と、ディオニユスが笑う。

(まあ、そら悪い話やないけども)

干しイカは麦酒エールはもちろん、極東の酒にもよく合うし。

それに、真面目な話、オラリオ外の派閥のおかげで小康状態にある地上と違い、海洋のモンスターはほぼ野放しだ。

ウラノスたちの策略は、その状態に一石を投じることになるかもしれない。

(んー……。でも、何かこう、ちよつと思いい切りが良すぎんか?)

ギルド——というか、ウラノスも、ガネーシャも。あるいはニオルズすら。

モンスターを……まして、得体のしれない『新種』を相手への対応としてはやたら寛大というか……。

(まあ、ニオルズにある程度の信頼があるんは分からんでもないけど)

いや、それを信頼と呼ぶかはともかく。

ただ、どうやってかは知らないが、あの『新種』に襲われない——もしくは、襲われにくい——方法を知っているのだろう。

メレンの漁獲量が回復してきたのはここ数年の話だ。つまり、その間はうまく手懐け

られていた実績はあると言える。

それに、何も例の調教師テイマー一派を眷属の仇と考えているのはディオニユスだけではない。

ガネーシャもまた眷属を失っている。あの『新種』を餌に連中を釣り出そうとしている可能性も充分にある。

(けど……何か微妙に腑に落ちんなあ)

ガネーシャが眷属の仇がどうこうというだけの理由でメレンを危険に晒すというのがまず考えにくい。

仮にウラノスが言い出したとしても、それを拒否するのがガネーシャだろう。

……まあ、メレンの状況自体がそう簡単に割り切れないというのも確かだろうが。

(どういう手を使つとるかは知らんけど、外から来た船が『新種』に襲われる可能性は常にある)

が、いなくなつたならまたメレンの漁礁は壊滅の危機に晒されるだろう。

外の船の安全を優先するか。それとも、メレンの漁師が干上がるのを防ぐか。

どちらが正しいかは、正直何とも言いがたい。

(かといつて、アレが脅して無理やりそうさせたいうのもなあ)

それはそれで、どうだろうか。

何でアレがメレンの懐具合を気にするとか何とか……とにかく、疑問しか残らない。「その『悪夢』の最中に、例の『新種』も目撃されたんやろ？ そいつらの出所は分かったんか？」

「【ガネーシャ・ファミリア】の動きを見る限り、密輸品と同じルートが使われたようだ」「つまり、オラリオから陸路で運ばれたと？」

「『陸路』と断言はできないな。何しろ、その密輸ルートが分からない」

「メレン……せめて、ニョルズたちの協力は得られないのか？」

「無理だ。今はオラリオそのものに対して風当たりが強い。ニョルズでもオラリオの肩は持てないだろう。ついでに言えば、持つ気があるかどうかも分からない」

もどかしそうに、ディオニユスが爪を噛む。

(けど、こればかりは仕方ないなあ)

メレンでは前回の一件でかなりの死者が出ているらしい。

被害拡大の一端をギルドが担っていることは疑いなく……さらに、元々重い関税を課して苦しめてもいる。

関税それもまた原因の一端だとすれば、恨むなという方が無理な話だ。

まして、まだ件の『悪夢』から覚めて日が浅い。オラリオうちがメレンに冷静な対応を期待することの方が傲慢だろう。

(おのれ、ロイマンめえ……)

思わず呪詛の念を送る……が、ロイマン——と、いかギルドにも言い分はあるわけ。

実際、ギルドがメレンに巨額の投資をしているのは事実だ。それによつて、メレンも多くの恩恵を受けていることも。

だから、オラリオとしてはせめて投資した分だけは元を取らせろと言うのが正直なところだろう。

メレンが悪いのかオラリオが悪いのか。そんなものは、判断した本人の立ち位置の差でしかない。

(本気のマジで面倒な話になってきたな……)

だから、面倒なのだ。

元々微妙な均衡で保たれていた場所を盛大に蹴りつけられ……さらに余計な追い打ちがかかるかもしれない。

それは、最悪は致命的な破綻に繋がりがかねない。そして、破綻すれば双方に被害しか残らないのだ。

とはいえ、メレンを全く無視できるかと言えば……

「あくまでギルドを……ウラノスを疑うというのであれば、ロ・ロ・グ湖という場所は極め

て重要になる」

そうはいかないのだった。

「もう一つの『大穴』か」

言うまでもなく、海にもモンスターは跋扈している。

それは誰もが知っている事だが……しかし、かつてその事実は大いなる謎でもあった。

何故なら、当時はダンジョンの出入り口はオラリオ……バベル直下の『大穴』しかないと思われていたからだ。

だが、違った。

ダンジョンに繋がる『大穴』はもう一つあったのだ。

そう。ログ湖の湖底に。

そして、それが封印されたのは一五年前に過ぎない。

「ウラノスとガネーシャとニョルズが組んでいるなら、その封印を破るのも不可能とは言えないだろう」

あくまで、ディオニユススだけを見てヘルメスは肩をすくめる。

「もつとも、オレとしてはいくら何でも現実性がないと思うけどね」

「……………」

不快そうに唸ってから、ディオニュソスは薄い水割りを一息飲み干す。

考えても見れば、ヘルメスはウラノス寄りの存在だ。

もちろん、完全なる弁護者ではないだろうが……。

(まあ、バランスはええかもしれんなあ)

もつとも。そうなると、うちは中立を保つしかないわけだが。

確証と言えるものがない現時点で、思考や思想が偏るとロクなことにならない。

それでは、見えないものを見つけるところか、見えているものすら見落とすことになる。

認めるのは癪だが……四年前には、それで痛い目にあっているわけだし。

「ま、うちもどつちか言ううとヘルメスに同意やけど……」

とはいえ、だ。

「けど、閻イヅイルス派閥にも厄介な連中が参加しとるっほいしな」

「あの『人斬り』か……」

今度はヘルメスが険しい顔をする番だった。

今の閻イヅイルス派閥なら、ウラノスたちを出し抜いて封印を破ることができるかもしれない。

それこそ例の『悪夢』はそのための陽動だった可能性すら考えられる。

「確認くらいはしといた方がええかもしれんな」

「どうやって?」

「ンなもん、正攻法で行くに決まっとる」

ウラノスに直接告げる。

「やましいことがないなら、文句は言わんやろ」

もつとも、秘密に対して必ずしもやましさが伴う訳ではないのだが。

3

数日ぶりに地上に戻った時、太陽は一番高い位置を過ぎていた。

それでも、久しぶりに感じる陽の光はとても眩しい。

もちろん一八階層も明るくて綺麗だったけど、やっぱり本物の太陽の光とは何かが違う。

「太陽万歳!」

なんて、ソラールさんは太陽に向かって変わったポーズ——というか、聖印らしい——を取っていたけど。

うん。でも、その気持ちは分かるかも。

「これからどうする?」

バベル前の大広場の片隅。あまり人がいないその場所で、手のひら越しに太陽を眺め

ているとクオンさんが言った。

「彼らには悪いが、このままギルドに向かう」

「報告か？　だが、それならベル達は関係ないだろう？」

「いや、例の一件について神ヘステシアには話を聞かねばならん」

シヤクテイさんの言葉に、うぐ——と、神様が呻く。

ちなみに、例の一件というのはあの黒いゴライアスの事だった。

「あ、あれはヘルメスのせいだし……！」

「それは否定しませんが」

シヤクテイさんはため息をついてから、続けた。

「そもそも、神のダンジョンへの立ち入り自体が禁止事項ですから」

「ぎゃふん!？」

まあ、うん。そういうことらしい。

「お前達はどうする？」

項垂れる神様を慰めていると、クオンさんがヴェルフやりり、桜花さん達に問いかけた。

「ベルには悪いが、俺もヘファイストス様に報告しにいかないとならない」

気まずそうに頬を掻きながら、ヴェルフが言った。

「僕達は大丈夫。それより、ヴェルフは早くヘファイストス様を安心させてあげて」というか、ヘファイストス様は少し離れたところでこちらを見ている。

少しソワソワしているように見えるのは、僕の気のせいではないと思う。

「すみません、ベル様。リリはそろそろ限界です……」

すまん——と、頭を下げるヴェルフの隣でリリもそう言った。

地上に戻ったことで、最後の緊張が切れたのかもしれない。何となく、目がとろんとしているような気がする。

それも仕方がない。何しろ、今回の探索では負担ばかりかけてしまっている訳だし。

「大丈夫。ゆっくり休んでね」

「ありがとうございます、ベル様……。お言葉に甘えさせていただきます」

リリが力の抜けた笑顔を浮かべる。

「クラネルさん、アンジェリックさん。申し訳ありませんが、私もここで失礼させていただきます。……ギルドに近づくのは少々問題がありますので」

その言葉に、シャクテイさんが少しだけ表情を曇らせたような気がした。

リユースさんの事情は、少しだけ教わっている。そして、シャクテイさんはオラリオの憲兵とも言われる「ガネーシャ・ファミリア」の団長だ。

昔は交流が……もしかしたら、そんな言葉じゃ全然足りなくらいの関係だったとし

ても、何も不思議じゃない。

もちろん、詳しいことは分からないんだけど。

「分かりました。ありがとうございます」

だから、僕も深くは聞かずに領いた。

「先日も言いましたが、これは正当な取り引きですから。『お支払い』を楽しみに待っています」

そういつて、リユーさんは小さく笑ってくれた。

ちなみに、その『お支払い』というのは『豊穰の女主人』を貸し切りで宴会する事だったりする。

霞さんがリユーさん……というか、ミアさんと結んだ契約らしく、支払いは——クオンさんに払わせるので——気にしないでいいと言っていたけど。

(さすがにそういう訳には……)

いかないので、みんなで何とか折半することにした。

……と、言ってもお店はあの『豊穰の女主人』だ。

いくらかかるか想像したくないし……色々と事情があつてお金が必要なりりはもちろん、ヴェルフにだってそんなお金はない。

何より、率先して支払うべき僕達「ヘステイア・ファミリア」は、団員が一人しかい

ない弱小派閥だし……ギルドから罰金を課せられるのは避けられない状況だった。

……なので、結局のところはクオンさんに大半を支払ってもらおうという情けないことになっている。

「すまんが、俺達もここで失礼する」

ヴェルフと同じく、気まずそうな表情で桜花さんが言った。

「実は治療院から無理やり抜け出していてな。そのこのエルフではないが、ギルドに近づくこと面倒なことになりかねん」

その言葉に、やれやれと言わんばかりにシヤクテイさんが首を振る。

桜花さんの言う治療院というのは、『深淵』の影響がないか調査する——というか、隔離していた場所の事らしい。

『深淵』に関しては、ギルドも各派閥も神経質になっているからな。そういう事であれば、しばらくは大人しくしている方がいいだろう。その様子なら、特別に不安視する必要もない」

ちなみに、クオンさんも直接触れたわけでもないうえに半日も経っていれば何の問題はないだろうと言っていた。

「治療院に隔離されていた者たちもすでに解放されている。私からギルドに話を通しておこう」

「すまん、恩に着る」

シャクティさんの言葉に、桜花さんが改めて頭を下げた。

「すみません、ありがとうございます」

慌てて僕も頭を下げた。

桜花さん達がそういう無茶をすることになったのは、僕達のためだし……。

「まったく、そこでお前まで頭を下げるか……」

僕が頭を下げると、何故かシャクティさんが苦笑した。

「私は先にミアハ様のところに行ってるわね」

最後に言ったのは、霞さんだった。

「まあ、今はお店にいないかもしれないけど……」

「そうだな。まだ、医療系の派閥は忙しいかもしれない」

できれば、治療法を確立してもらいたいところだが——と、シャクティさんが小さく呟いた。

「というか、ベル。お前自身はどうするんだ？」

「僕は神様についていきます。神様がダンジョンに入っちゃったのは僕のせいですし

……」

「いやいや！ ベル君は早く帰ってゆつくり休むんだ！」

「そんな！ 神様が頑張ってるのに僕だけ休むなんてできませんよ！」

「それを言うなら、ベル君は今まで頑張ってただろう!？」

「主様」

神様と言い合いみたいになっちやったところで、アンジエさんが言った。

「僭越ながら、主様は教会に戻り、休息をとられた方がよろしいかと」

「アンジエさん……」

「神へステイアの護衛は、私にお任せください」
わたくし

ちなみに、呼び方については何とか説得して砕けたものにしてもらった。

……うん。多分、最初よりは少し砕けたものになっているはずだ。

「護衛というが、別にそう危険はないはずだが。……精々罰金を課せられる程度で」

「いえ、それはそれで死活問題になりかねないのですが」

ため息混じりにシャクテイさんが呟くと、リリが深々とため息をついた。

そして、神様の顔も強張っている。きっと僕も同じだろう。

(い、いやでも。あの騒ぎで、それだけで済むなら……!)

と、言っても。別に神様が何かしたせいであの黒いゴライアスが生まれたわけじゃないはずなんです。

「その辺りも一応は配慮されるはずだ。特に神へステイアはダンジョンにいただけだか

らな」

実際は、リリ達を庇うためにちよつと神威を發揮しちやつてるみたいだけど。

それでも、ヘルメス様が發揮した量に比べれば大したことがないらしい。

「あのクソ野郎を天界に送還するなら、俺がやってやるぞ」

「馬鹿を言え。お前にやらせたら天界への送還では済まないだろうが」

……うん、ヘルメス様はヘルメス様でかなり危険だったみたいだし。

「ふんだ。ヘルメスの奴は自業自得じゃないか」

クオンさんとシャクテイさんのやり取りは完全に聞き流してから、神様が頬を膨らませた。

何でも、クオンさんが言うにはモルドさん達を唆したのがヘルメス様らしい。

何でそんなことをしたのか、その理由は分からない。ただ、神様が——あと、多分ク

オンさんも——怒っているのはそのせいだった。

「そうだろうそうだろう。だから、次は邪魔するな」

「君は君でもうちよつと加減しろお!?!」

……クオンさんの『神殺し』——いや、『火継ぎの儀』との関係については、まだ聞いていない。

『リユーへの『支払い』の前にするか後にするか、好きな方を選んでいい』

クオンさんはそう言った。

ただ、今は冷静に話を聞ける程度には体力を回復させておけ、とも。

(聞かないわけには、行かないけど)

それでも……休むことに、どこか少し躊躇いがあるのはそのせいかもしれなかった。何となく憂鬱な気分になってしまい、もう一度太陽を見上げようとして――…

「義兄さん!」

ともすれば泣き声にも聞こえてしまいそうな程に潤んだ喜びの声を聞いた。

……

彼女がいることは、道中ソラールから聞いていた。

本来なら二度とあり得ない再会に、胸が躍らなかつたといえば嘘になる。

「義兄さん!」

ただ、この不意打ちは少し想定外だった。

感動に浸る暇も、再会を躊躇う隙も与えられないとは。

「いつ?」

白い娘が、真正面から抱き着いてくる。

さほど人目を惹かなかつたのは、その姿が人と変わりないからだろう。

「ああ、本当に……!」

その病的な白さも、今はいくらか改善されているように思えた。

……もつとも、その瞳は相変わらず闇を見つめたままのようだが。

「……やあ、姫様。ごきげんよう」

大体いつもこんな台詞とともに会いに行っていたような気がする。

「もう！　またそんなことを言つて……！」

白く小さな手が鎧を叩く。

折れてしまわないか気がでない……が、伝わってくる感触は想像よりも力強い。

少なくとも見た目相応……華奢な娘らしい力を感じる。

それなら。

それだけでも。

あの時、火を継いだ甲斐があるというものだ。

「それより、他所の男にいつまでも抱き着いたら旦那ソラールが気を悪くするぞ？」

俺が火を継いでから、彼女たちがどのように過ごしていたかはソラールから少しだけ

聞いている。

一番の驚きと言えば、ソラールと彼女の関係だが……しかし、冷静に考えれば落ち着

くところに落ち着いた気もする。

彼女はソラールにとってすれば命の恩人でもある。それに、

(太陽に憧れた男と、始まりの火を生み出そうとした娘だからな)

ある意味、二人の願いは叶った……互いが叶えあつたとも言えよう。

……もつとも、ロスリックで見た光景からすれば、それとて一時の事でしかなかったのだろうが。

(彼女には本当に頭が上がらないな)

ロスリックの火防女——たった一人の共犯者の姿を思い描く。

彼女がソラール達を呼び寄せたのはまず間違いない。

そして、そのおかげで、本来であればあり得なかつた未来が紡がれている。

……それとも、これとて因果からは逃れられないのか。

「もう、何を言ってるんですか」

だとしても、抗おうとするのが俺達の性さがだろう。

運命に従つて行儀よく死んでいるなら、俺は今ここにいない。

「コホン」

と、そこで。露骨に霞が咳払いをした。

もつとも、今回は何ひとつ動じる必要はない。……そのはずなんだが。

「それで、その子は誰なのかしら？」

こう、微妙に意味もなく後ろめたい気分になるのは……まあ、自業自得か。残念なが

ら。

「彼女は——…」

紹介しようとして、言葉に詰まった。

そういうえば、まだ彼女の真名を聞いたことがない。

「クラーンと。今はそうお呼びください」

居住まいを正し、姫様が一礼した。

しかし、今はとききたか。つまり、真名ではないということだが……まあ、いいか。

今の姿では流石に蜘蛛姫様とは呼びにくい——と。

俺から離れ、霞と向き合った彼女の姿を見ながら、胸中で呟いた。

(……もつとも、無理やり抑え込んでいるだけだろうがな)

今も体を焦がす混沌の炎の力を。だから、辛うじて人の——と、いうか魔女の——姿

を保っていられる。

そう。実際のところ、本当に彼女は人の姿をしていた。

我が師クラーナと同じ——と、言っても色は白だが——ローブを着込み、手には長い

杖……《イザリスの杖》を携えている。

とはいえ、今の彼女にイザリスの魔術が使えとは思えないが。

師と違ってフードは被っていない。走ってきたから脱げたのか、普段からつけていな

いのかはまだ分からないが……多分、後者だろう。

彼女の姉であるクラীগも、その姿を取り戻してからはそうだった。

「魔女イザリスの末の娘で、俺の主神ってところかな」

「はあ?!」

と、何故か驚愕の声が重なった。

……リユーをはじめ、訳アリが多いこともあって人目のつかない場所にいたのは幸いだった。

おかげで悪目立ちしないで済む。

「あ、いや、でも、待って。確かに、彼女はボクと同じだ。何か、ボクと違って別の形で力を封じられてる気もするけど……」

「……お前、時々凄いな。そこまで分かるのか?」

おそらく、ヘステイアは彼女が混沌の炎を自分の力で抑え込んでいる事を言っているのだろう。

「だから、ボクは女神! しかも火を司る女神だって言ってるからお?!」

「あら、そうなのですねっ!」

ヘステイアの叫び声に、姫様が嬉しそうに笑った。

まあ、彼女たちにとっては遠い子孫な訳だし、色々な感慨もあるのだろう。

ましてそれが火に纏わる女神ならば。

「とうか、驚くことか？ イザリス達についてはアンジェから聞いてるんだろ？」

「ええと、イザリス様は古い時代の女神様だつて話は聞いてますけど……」

「なら、その娘が女神だつて別におかしくないだろうが」

「それはそうなのですが……」

「そもそも、女神に子供がいるつてのがな……」

何だか釈然としていなさそうな顔で、リリとヴェルフが曖昧に頷く。

「じゃあ、クラーナさん……いえ、クラーナ様も女神なんですか？」

「当り前だろ」

「……つまり、あなたは女神にも手を出したつてことかい？」

ベルの言葉に頷くと、アイシャが言った。

「いや、まあ、そうなるか」

否定はできない。実際、師匠もクラークも女神の一人であることに違いはないのだから。

「つていうか、主神つてどういうことなの？」

「そつちは説明しだすとちよつと長くなるから、またあとでな」

霞の問いかけに肩をすくめる。

實際、彼女が主神となった経緯を説明するにはそれなりに時間が必要だった。

それに、俺達【混沌の従者】は通常の誓約と微妙に成り立ちが違ったりもする。

何しろ、主神……つまり、姫様はそんな集団が出来上がっていることを知らなかったわけだし。

(ずっと自分の傍に居るのはクラグとエンジーだけだと思つてたらしいからな)

カークの奴も、どうせならもう少し自己主張すれば良かったのに。

……まあ、あいつの場合、あの鎧のせいで近づくだけでもかなりマズいことになりかねないが。

「あの、シャクティさん。あちらの方々は……？」

と、そんなやり取りをする俺達の後ろで、姫様はシャクティに訊ねていた。

「いえ、何と申しますか……」

困ったような顔でシャクティが呻く。

……どうやら、彼女は姫様については知っているようだった。

「その、貴女にとつて義理の姉になるのではないかと」

待て、シャクティ。その説明はどうなんだ。……いや、別に間違っているとさえ言えないが。

「まあ！」

と、姫様は姫様で顔を輝かせているし。

「では、貴女がアイシヤさんですね！」

「そうだけど……。あんた、私を知ってるのかい？」

凄く嬉しそうに姫様が両手で、同じくアイシヤの両手を包み抱き寄せる。

全力で歓迎する様子の姫様に、アイシヤはむしろ戸惑った様子だった。

戸惑っているのはカルラや霞も同じだが。……いや、まあ、俺自身も若干驚いているが。

「ええ！ とても素敵な方だと伺っております！」

誰に——と、問いかけるほどアイシヤは鈍くない。

一瞬だけシヤクテイに視線を向ける辺り、姫様は姫様で古竜との闘争を勝ち抜けた魔法の一人ということだろう。

間違いなく、二人の間で共通の人物が結ばれたはずだ。

そう……。例えば、儂い風貌の少女の姿が。

(そういうえば、ソラールはシヤクテイと面識があつたらしいしな)

やはり、あの少女を預かっているのはソラール達なのだろう。

……何というか、本間に世間という奴は狭いもののようにだ。

(まあ、おかげで安心できたけどな)

ソラールが傍にいるなら、よほどのことがない限り彼女の身は安全だった。「へえ、そんなに高く買ってくれているのかい？」

アイシャもまた、それに合わせて一瞬だけシャクテイに視線を向けた。シャクテイはシャクテイでアイシャの視線を受けて肩をすくめている。

これでまず間違いなくベル達は——少なくとも、ベルはシャクテイから聞いたと誤解したはずだ。

問題はヘスティアだが……そもそも『シャクテイから聞いた』と明言していないのだから、嘘にはなるまい。

「この方がアイシャさんなら、貴女が霞さんですね！」

「え、ええ。その通りですわ、女神様」

「まあ！ どうぞクローンとお呼びくださいいな」

霞の手を取りながらコロコロと笑う姫様に、改めて感慨が湧きおこる。

生贄にされた巫女のような儂さは影を潜め、その代わり本当によく笑うようになった。

涙によって信仰を集めたのが彼女だった。が……しかし、ありきたりだが、笑顔の方がなお魅力的だと思う。

(ん……?)

今、何かが意識に引っかけかけたような……。

(まあ、いいか)

根拠なく不吉さを伴うその感覚を、首を振って追い払う。

今だけは不吉なことは考えたくない。

「そして、カルラ様。こうしてお会いするのは初めてですね」

「私は貴公に様付けされる身分ではないよ。……それに、平気なのか。私に触れて」

「あら、姉さんや義兄さんたちが私をどうやって助けてくれたかご存じでしょう？」

「それは聞いているが……」

姫様の病を癒す……とはいかずとも、緩和させていたのは捧げられた『人間性』だ。

人間性とはダークソウルの一端。

であれば、姫様にとって闇の子の一人であるカルラは決して忌避すべき存在ではある

まい。

(ま、デユナシヤンドラ辺りだったらそうはいかないだろうがな)

あれはまさに呪いの塊だった。その姿を……かが似姿を見ただけでも危険なほどに。

ただし……

「大丈夫。貴女からはとても優しい気配が伝わってくるもの」

カルラからはそういう気配は全く感じない。

「義兄さんを支えて下さったこと、改めてお礼申し上げます」

「それは買ひ被りすぎだよ。助けられたというのであれば、それは私の方だ」

いや、姫様の言う通りだった。

彼女は『火のない灰』だとか【王狩り】だとかそういった言葉は口にしなかった。

旅の終わりに『火継ぎ』を終わらせるべきかを迷っている時ですら、そつと背中を押してくれただけ。

だから、彼女という時だけは使命の重さを忘れられたのだ。

それにどれだけ救われていた事か。

何より――…

「ところで姫様」

喪失の痛みを思い出しながら、姫様に声をかけた。

「一つ訊きたいことがあるんだが」

「あら、なあに？」

「お前は、ヘステイア達がやっている【ステイタス】の更新つてのはできるのか？」

「へ？」

と、間の抜けた声を上げたのはヘステイアだった。

「何だい、クオン君。ボクらの『恩恵』に興味あるのかい？」

「いや、俺がつていうか……」

一応本人の許可を求めて、アイシヤに視線を向ける。

と、彼女は肩をすくめて見せた。

「もしできるなら、アイシヤの『改宗』とやらを任せたいんだが」

「え？」

と、今度はベル達の声までがそれに重なった。

『改宗』つてどういうことですか？」

「というか、クオン君。一度『改宗』したら、一年は無理なんだぜ？」

それはそれで困った話だが……しかし、今の状況は『改宗』しているとは言い切れな

い。

……そう思いたいところだ。

「ええ！ それなら、もちろん喜んで！ こんなこともあろうかと、ガネーシヤさんから教わっています！」

……まあ、女神だし。魔女だし。加えて火防女の素質もあるんだから、そう難しいことではなかったんだろう。

「と、いうか。何であれ、まずガネーシヤから許可があるんじゃないかい？」

「……いや、何でガネーシヤの許可があるんだ？」

ヘステイアの言葉に、首を傾げる。

ギルドの主神であるウラノスならまだ分かるが。

「何でつて……。アイシャ君の今の主神つてガネーシャだろ？」

「……そうじゃないから困ってるんだよ」

「というか、下手すると今の私の主神はこいつだからね」

嘆息すると、アイシャまでが肩をすくめる。

「はい？」

「正式な『改宗』コンバージョンつて奴をまだやってないんだよ。そんな暇はなかったからな」

「いやいやいや!? じゃあ何で『恩恵』が封印されてないのさ?!」

騒ぐヘステイアを他所に、姫様がアイシャの背中——いや、そこに刻まれた『恩恵』とやらに触れた。

「なるほど……。義兄さんの『血』が触媒になっているのね。それが本来の契約主の代わりにこの『奇跡』を機能させているみたい」

「分かるのかい？」

「ええ。これでもイザリスの娘の一人ですから」

アイシャの言葉に、姫様が相変わらず薄い胸を張って見せる。

「フフツ……。義兄さんったら、とても信用しているのね」

それどころか、俺を見て何とも意味深な言葉と共に笑った。
やれやれ。いったいどういう意味なんだか。

「……詳しい話は、またあとで聞かせてもらおう。そういう約束だからね」

狼狽えているベル達を制して、ヘスティアが言った。

この辺りは流石女神と言ったところか。

「それより、これからボク達はギルドに行けばいいのかい？」

「多分な。どうせ俺達も報告しにいかないといけない」

一応は公式の冒険者依頼クエスト——いや、強制任務ミッションだったか？——である。

報告の義務はあるし……何より、『深淵』跡地で回収したあの貴石擬きをフェルズに押しつけに……もとい、届けに行かなくてはならなかった。

「じゃあ、私はミアハ様のところに……」

「それなら、まず先に姫様たちを館に案内してやってくれないか？」

「ええ、いいわよ。任せておいて」

ミアハのところに行こうとする霞に、姫様の案内を頼む。

「では、まずその少年たちを送ってから……」

「いえ、流石に大丈夫ですよ。一人で帰れますから」

「そうですね。地上に戻ったわけですし……」

「ああ。流石に誰かに襲われるってことはないだろ」

ソラールの言葉を、ベル達が丁寧に分断した。

「ふむ……。私は私で少し情報でも交換しておくか」

誰と、とはあえて訊く必要はない。まず間違いないフェルズだろう。

「では、我らも戻るとするか」

「そうですね」

アーロンの言葉に、桜花が頷いた。

「うん。またあとで改めてお礼に行くよ。みんな、今回は本当にありがとう」

ヘスティアの言葉を最後に、第三次調査隊——と、言うか「ヘスティア・ファミリア

(仮) 捜索隊——は無事にその役目を果たし、解散となった。

で、それから。

「では、もう問題ない?」

「多分な。少なくとも、専門家のお墨付きだ」

「専門家だと?」

ウラノスに一通りの事後報告を済ませ。

「じゃ、後はよろしくな」

「おい、馬鹿やめろ?!」

何か大量の魔石を鑑別中の——何でも、『深淵』の影響を受けていないか、換金された全ての魔石を総点検しているらしい——フェルズに、例の貴石擬きを押し付け。

「相変わらず酷い男だ」

その代わりに、カルラと合流して。

「ふ、ふふふ、あはは、あはははは……」

がつつりと罰金を取られ、燃え尽きていたヘステイアを拾って教会に戻ったところ
で。

「何？」

ヘステイアとともに魔教会に入ろうとするアンジエに一つ提案をした。

「だから、『篝火』にあたりに来ないか？」

「凶らずも、主従揃って怪訝な顔をしている。」

「とはいえ、その理由までは同一ではあるまい。」

「……私にそれが見えるのと思うのか？」

「そう。あの『火』は資格を示した巡礼者にしか見えない。」

「とはいえ、例外もある。」

「見えるさ。本体……少なくとも実体があるからな」

俺の館にあるのは放浪中に受け取った『螺旋の剣』を用いて作り出したものだ。

いわば、祭祀場にあつたものと同じである。

……と、言つても。本来あるべき場所になく、また火防女も傍にはいない、本当に小さな燻りでしかないが。

それでも、おれたち不死人にとつては大切な寄る辺だ。

少なくとも、自身や武具の消耗を癒し、エストの補給もできる。

いや——…

「それに、姫様……。昼に会つたイザリスの娘は火防女の素質もあるからな」

つまり、あの燻りでも主なきソウルを定着させることが充分に可能という訳だ。

「何だと……?」

アンジエの表情が驚愕で染まる。

「縁を結んでおいて損はないぞ?」

ぐ……と、アンジエが唸ると、何とか復活したヘステイアが言った。

「何を心配してるんだい? もう本拠ホームに帰つてるんだぜ」

「ですが……」

流石にベルは寝ているようだが……あとは、扉を開けて中に入り、しつかり戸締りをすれば、概ね問題はないはずだ。

ベルは今、色々な意味で時の人だが——だからといって、所詮は団員一人の弱小派閥。

噂に聞く『暗黒期』とやらであれば、いいカモだっただろう。

だが、今のオラリオで問答無用で本拠ホームを強襲するような馬鹿がそうそういるとは思えない。

「それに、多分神ボクには知られたくないんだらう？」

「……まあな」

特に否定する言葉は持ち合わせていなかった。

ため息だけを返せば、当然アンジエは難色を示す。

「あ……。うん、その辺もまたあとで聞くとして。アンジエ君に大切なことなら、行つておいで」

しかし、彼女が断りの言葉を口にするより先に、ヘステイアが言った。

「その『篝火』つてやつは、ボクにも心当たりがあるからね」

「何だと？」

思わず呻くと、ふふん！——と、ヘステイア様はやたらと見事な造形の胸をここぞとばかりに張つて見せた。

「当然だろ！ ボ・ク・は・神！ だからねっ!!」

……おそらく、だが。アンジエに刻まれた『恩恵』——【ステイタス】に何かしらの記載があるのだろう。

ベルの「ステイタス」に、呪術について記載が追加されたように。

(問題は、何をどこまで知られているかだがな)

アンジエが「家路」を使えるというだけなら、ひとまずは安心——とも言い難いが。

(だが、今さらか)

どのみち、彼女が……俺達が不死人だということは露見している。

それ以上に隠さなければならぬことなど、他にそういくつもありはしないのだから。

4

結局、家に着いたのは夕暮れになってからの事だった。

「ああ、本当に篝火が……」

そして、陽の光の届かぬ館の地下室——仮初の祭祀場で、姫様が小さく呟く。

彼女たちが来ると分かっていたら、もう少し違う場所に設置したのだが……。

(まあ、今からでも動かせないことはないとは思いますが……)

胸中で呻いていると、アンジエもまた驚嘆の吐息をこぼす。

「これが、篝火か」

俺達にとって、『篝火』は見慣れたもので……だからこそ、彼女の反応は新鮮だった。

もつとも、難所を超えた先で、篝火を見つけた時ほど安堵する瞬間はないが。「ええ。これで、私も使命を果たせます」

姫様が、手にしたナイフでその白い髪を一房切り落とす。

彼女がそれを焚べると、絶えず揺らめく篝火の火が大きく燃え上がった。

その揺らぎは、どちらかと言えば姫様を拒絶しているようにも見える。

(一つの篝火に、二人の火防女か)

確かに、本来であればありえないことだった。

まして、ここは正当な祭祀場ではない。

だから——と、言っているものか。火は勢いを増し、大きく広がっていく。

「随分と派手に燃えているけど、大丈夫なのかい？」

「ええ。……お待たせしました」

アイシャの言葉に応じたのは、姫様だった。

彼女の言葉に従うように、広がった火が篝火へと戻っていった。

いや、違う。どこかから別の力が流れ込んできているような……。

いずれにせよ、その大火はそう長く続かなかった。

相容れなかった力が入り混じりあうようにして、炎が篝火へと戻っていく。

「お待ちしております。貴女に感謝を」

まだ微かに揺らぐ篝火の向こう側。姫様を挟んだ反対側に、見慣れた姿が——その幻影が浮かんでいた。

ロスリックで世話になった火防女。共に『火』を看取った最後の火防女……たった一人の共犯者の姿だった。

「いいえ。私達こそ、望外の奇跡に感謝いたします」

姫様の言葉に——そして、俺の方を少しだけ向いて、彼女は一礼する。

それを最後に、その幻影はあっさり霧散した。

言葉をかける暇もない。

「やはり、彼女のおかげだったか」

南東の果てで出会った老婆から受け取った『螺旋の剣』。

だが、それだけで『篝火』が完全に再現できるわけではない。

何しろ、ここは祭祀場などではない。ただの宿屋跡地だ。

そこを仮初にでも祭祀場に変えるなど、ただの不死人に出来るはずがなかった。

まったく、彼女にはつくづく頭が上がらない。

「さつき、一瞬だけ見えた女は何者だい？」

アイシャの問いかけに答えたのは、カルラだった。

「あの馬鹿弟子の火防女だ。そして唯一の……いや、貴公らにとっては強力な競争相手

といったところかな」

「あんたにとつても、だろう?」

「ああ、そうだな。その通りだ」

アイシャの言葉に、カルラが小さく笑う。

俺としては、平伏して彼女たちの温情に感謝する以外に出来ることは何も無い。

「……それで、私はどうすればいい?」

あくまで冷静なアンジェの言葉に、思わず声が上がらずそうになった。

「あ、ああ。篝火に手をかざしてみればいい。お前くらいの力量なら、応じてくれるはずだ」

「だといいいがな」

そんなことを言いながら、彼女が篝火に近づいていく。

手をかざせば——彼女の姿が一瞬揺らいだ。

もつとも、目立った変化と言えば鎧の傷が概ね消えたことくらいだが。

「なるほど。……どうやら、受け入れてもらえたようだ」

彼女が黄金に輝く瓶を——つまり、エスト瓶を取り出した。

「不死の秘宝か。……これからは、ある程度頼りに出来そうだ」

ダンジョンでは中身がないと言っていたが……今はすっかり満たされている。

もつとも、どの程度の力が宿っているかは分からないが。

「主なきソウルを、貴女の力としていけますか？」

「いや、折角だがそれは後日に頼みたい」

今は急ぎ教会に戻らせてもらう。

それだけ言うと、アンジエは素早く踵を返して祭祀場から出ていく。

その足音を聞きながら、カルラが小さく笑った。

「見事な忠臣といったところか」

「ただ堅物なだけだろう」

アイシヤはそう言つて鼻を鳴らす……が、個人的には若干狂信者寄りの気がしてならない。

(まあ、それでも対象がヘステイアならそう悪いことにはならないだろうが……)

あいつの思いつく悪事ならヘファイストスを呼び出せば何とでもなりそうだし。

それに、わざわざあいつを狙うような物好きもそういないだろう。

……まあ、そんな物好きがいた場合、血を見るくらいじゃ済まないだろうが。

「それでは、義姉さんの改宗を行いますでしょうか」

アンジエの足音が聞こえなくなった頃、姫様が言った。

「ああ。頼む」

と、特別に深く考えもせず頷いてから、

(ん?)

何かが、意識を刺激した。

嫌な感覚だった。そして、慣れ親しんだ間隔でもある。

迅速に対応しなくては、致命的な事態を引き起こす。その前兆だった。

上着を躊躇いなく——と、言っても俺以外には女しかないが——脱ぎ捨てるアイ
シヤを見ながら、自問する。

「では、行きますね」

姫様が、銀色の針を取り出す。

そう、確かヘステイアは「ステイタス」を更新する時に、自分の指を針で刺していた
——！

「やめろ馬鹿死ぬぞツ!!」

触れば溶けてしまいそうな雪の結晶。

いや、触れただけで死に絶えてしまいそうなほど病的な白さを今さら思い出す。

そんな彼女が、針で指先を突こうものなら——！

「も、もう大丈夫なんですっ!!」

とんでもないことを忘れていた自分を罵っていると、今までで一番元気な声で姫様が

叫び返してきた。

しかし、そんなことを言われても安心できるはずもない。万が一のことがあつたら師匠達やソラールに顔向けできない。

で。それからしばらくして……

「それで、いつまであんた達の痴話喧嘩に付き合えばいいんだい？」

呆れたようにアイシャが嘆息したところで、お互いにハツとする。

……まあ、これだけ元気に叫べるなら、あの頃よりは丈夫になつたのだろう。

ひとまず納得してから、まだ残っていた万能薬を何本か取り出して栓を抜いておく。

「それだと血が出ないでしょう？」

ついでに《ぬくもりの火》も灯しておこうと思つたが、姫様に止められた。

効果の説明をするんじゃないやなかつたとしみじみ思う……が、しかし彼女の言うことにも

一理あつた。

「それでは、行きますね」

緊張した面持ちで、姫様が宣言する。

彼女の白い細指に針が近づき、そして突き刺さる。

もう、その瞬間に万能薬をぶちまけそうになつた。

が、姫様は何事もなかつたかのように、その血の一滴をアイシャの背中に注いだ。

アイシャの背中に「ステイタス」が浮かび上がり、さらに輝きだす。

中空に浮かび上がった数値が動き出して……

「あ、あら？」

姫様が困惑したような声を上げた。

「どうかしたかい？」

まさか、上手く改宗とやらができなかったのだろうか。

先ほどとは別の意味で、俺も緊張する。

「いえ、これはひよつとして、ランクアップというものかしら……？」

——が、どうやら悪い話ではなかったらしい。

なら、一安心といったところか。

「へえ、そうかい」

当事者であるアイシャの反応は、ずいぶん軽いものだった。

あまり詳しくはないが……確か、冒険者にとつては一大事のはずなのだが。

それこそ、ギルドが大々的に発表する程度には。

「別に昨日今日Lv. 3になっただけだからってわけじゃないんだ。あれだけ暴れりや流石にランクアップもするさ」

……まあ、確かに。

イシユタルの取り巻きどもから始まり、メレンで『死の瞳』、帰ってきてすぐに『深淵』狩り。さらには一八階層である黒いゴライアスときたものだ。

もつと言え、俺が帰ってきてすぐの頃にデーモンともやりあっている。

あれだけやれば『基礎アビリティ』もそれなりに上がるだろうし、『偉業』とやらも何とかなる……と、いうことなのだろう。

比較できる相手がベルしかないので、何とも言い難いのだが。

「え？ アイシヤ、ランクアップしたの!？」

と、そこで霞が祭祀場に入ってきた。

彼女には館で合流してからもう一仕事頼んでいたのだが……この様子なら、何事もなかったのだろう。

「ああ。そうみたいだね」

「おめでとう！ じゃあ、今日は宴会ね！」

「あんたの店でかい？」

「もちろん……と、言いたいんだけど、今日はやめておいた方がいいかしらね？」

霞の後ろでおずおずとしているのは赤い着物を纏い、フードで顔を隠した一人の少女だった。

ちなみに、その後ろ——祭祀場の入り口から慌てて飛び出すソラールの後ろ姿も見え

た。

霞はちゃんと二人とも案内してきてくれたらしい。後は招かれざる客が来なければ上等だろう。

「アイシヤさん……」

そんなことを考えていると、少女がフードを脱いだ。

金色の髪に狐の耳。毛並みのいい尾は、今は不安そうに丸まっている。

あの生贄の少女——確か、サンジョウウノ・春姫と言ったか。

予想通り、ガネーシヤの判断によってソラール達に預けられていたらしい。

ソラール達とガネーシヤ達が繋がりを持つていたことを初めて聞いた時は多少驚き

はした……が、ある意味落ち着くところに落ち着いたようにも思う。

そして、デーモンについてガネーシヤに伝えたのはソラール達のようなうだ。

もつとも、『黒虫の丸薬』を作った誰かがいる以上、ウラノス——もしくはガネーシヤ

——が抱えている不死人はソラールだけではなさそうだが。

それにしても……

(シヤクテイに一杯食わされたな)

ついでに、フェルズやガネーシヤ、ウラノスにも。

帰ってきた時点でソラール達がいることを教えてくれていても良かっただろうに。

ソラールは俺を探していると伝えていたようだし。揃いも揃って全く。……もつとも、隠し事が多いのはお互い様だが。

「あ、あの。おめでとうございます」

「ああ」

アイシヤと少女が、どことなくぎこちないやり取りを交わす。

……正直、俺も少しばかり困惑している。

具体的にどうとは言わないが、もう少し劇的な再会になるかと思っていたのだが。

「あく……。ソラールさんから聞いたんだけど、あの子ね、元々良家の子女ってやつだったみたいなの」

「ほう……」

言われてみれば、その立ち振る舞いにはどことなく気品が漂う。

かつて白教徒の名門に生まれたレアや……それこそ、師匠たちを思い出させる程度には。

それが何で歓楽街で娼婦見習いなどやっているのやら——…

「ああ、そういうことか」

霞が何を言わんとしているか、そこで理解した。

「つまり、俺のせいってわけだな？」

このオラリオ——いや、今の『時代』において神殺しは絶対の禁忌となる。

(ま、どこぞのエルフですら神殺しはしなかったらしいしな)

フェルズの小言を思い出す。

そのエルフは精々天界に追いつき返すだけで、俺達のように完全に殺せるわけではない。しかし、それですら禁忌となるのだ。

一方で目の前の少女は少なくとも一歳までは最高位の教育を受けていたと考えていいだろう。

何より、彼女が善良な人間性の持ち主であることは疑いない。

そんな少女の目に、『神殺し』がどのように映るかは想像に難くなかった。

「クラーン様たちが色々気を回してくれているみたいだけだね」

確かに姫様はあの少女とだいぶ打ち解けているらしい。

まるで妹か、さもなれば娘のようだ。

「まあ、これから何とか頑張って打ち解けていけば——…」

霞がなかなか難易度の高そうなことを言いかけた時、

「では、アイシャさんはクラーン様の眷属になられたのですね」

「ええ！ これでもう触ったら死んじやう系火防女とは言わせませんっ！」

春姫の言葉に、ふんすと姫様が薄い胸を張った。

確かに針で刺しても平気そうだし、思った以上に体は回復しているようだ。それはいい。とても好ましいことだ。

好ましいことだが——！

「待て！ 誰だ、そんな酷いこと言った奴は?!」

聞き流せない台詞に思わず叫んでいた。

我らが姫君にそんな暴言を吐くなど、ことと次第によつては全面戦争も辞さないところである。

「いや、まずあんたが似たようなこと言ったじゃないか」

……そして、アイシャの言葉は聞こえなかったことにした。

……

一方その頃。

再会した義兄妹しゅじゅうが呑気にわちやわちやする祭祀場（仮）から少し西側。

夕日に染まる巨像の股間——もとい、本拠ほんきょの入り口を潜る一人の女性の姿があった。

「シャクティ団長！ おかえりなさい！」

「ああ。こちらは変わりないか？」

「はい！ 特別な異常の発生は確認されていません！」

ということとは、普段通りの騒ぎ——例えば冒険者同士の喧嘩や、どこかの神が起こす

騒動——は起こっているという事だ。

もつとも、『深淵』の犠牲者が増えていない証拠と言えよう。
ならば、今は感謝してもいいくらいだった。

(さすがに堪えるな)

住み慣れた本拠ホームに入った途端、どつと疲労を自覚する。

帰路で望外の休息をとれたとはいえ、癒しきるには少々足りなかつたらしい。

(仕方がないことか)

歓楽街での闇派閥イッパリス——そして、闇霊——との抗争。

メレンでの『悪夢』……『死の瞳』がもたらした厄災。

ダンジョン内に発生した『深淵』。

そして、あの『厄災』。

まったく、改めて思い返しても近年稀にみる凶悪な連戦だった。

加えて言えば、ギルドでの報告——と、『神災』に対する証言——も、相応の気苦労を伴ったことは否定できない。

主にロイマンとのやり取りを思い出し、手にした槍——切断された愛槍ではなく、クオンから譲り受けたもの——で、肩を叩きそうになつた。

(そういえば、この槍について詳しい話を聞くのを忘れていたな)

今は沈黙しているが、あのゴライアスとの戦闘中には確かに何者かの意思——あるいは遺志だろうか——を感じた。

詳しいことはともかくとして、そういった扱いをしていい代物ではないことくらいは分かっている。

もちろん詳細についても気にはなるが、近日中にクオンとは顔を合わせるだろうし、その時に訊けばいいか——と、ひとまずそれで結論しておく。

「すまないが、少し——」

休む——と、団員に告げるより先に廊下の向こうから豪快な足音が迫ってくる。

その足音だけで、誰が近づいてくるかは分かった。

(そういうえば、戻ってきてからふたりで話をする暇はなかったか)

ギルドで顔こそ合わせたが……お互いに仕事があり、帰還の報告すらロクにしていな
い。

「シャクテイ、無事で安心したゾオオオオオオオオオオオオウツ?!?!」
駆け寄ってきたガネーシャが、私の手前で急制動をかけたつっ奇妙な恰好をした。
ホース

……いや、それはいつものことなのだが。

「そ、そその槍はどうしたのだ?!」

しかし、今回はどうやらいつもの奇行とは違うらしい。

そう言えば、ギルドでは槍を持ち歩いてはいなかったか。当然と言えばそれまでの事だが。

(できれば今はこれ以上の面倒事は勘弁してほしいが……)

覚悟を決めて、ガネーシヤに問いかける。

「クオンから譲り受けたものだが……」

「そ、そうか。うむ、クオンなら持っていて不思議ではないが……」

「この槍がどうかしたのか？」

うむ——と、ガネーシヤは重々しく頷いてから。

「と、いつでもガネーシヤも専門外だからな！　ヘファイストスに訊けば何かわかるか

もしれんが」

「神ヘファイストスに？」

「そうだ！　何しろそれは神創武器だからな！」

「何だと……？」

どうやら、まだ厄介事からは解放されていないらしい。

嘆息する私を慰めるように——もしくは咎めるように——その槍からほんの小さな

雷が爆ぜた。

……

そもそもの話。

厄介事のタネがこのオラリオから消えてなくなるわけがないのだ。

狭い店内が夕日で染まる頃。

訪ねてきた霞から全員の無事と、この後の『予定』についてを聞いてからしばらくして。

「いらつしやいま……」

色々と物思いに耽っていると、店の扉の鐘が来客を伝えた。

半ば反射的に出迎えの言葉を言いかけ……しかし、言い切る前に勢いを失った。

「ふはははははははっ！ 邪魔するぞおおおっ！！」

入ってくるなり無駄に高笑いするその男に見覚えがありすぎたからだ。

「ディアン、いったい何の用だ？」

ディアンケヒト。私と同じ医神で……まあ、別にだからとは言わないが決して折り合
いの良い相手ではなかった。

……付き合い自体は、決して短いものではないのだが。

「支払いであれば、つい先日行ったであろう？」

いや、それ以前の問題だった。

何しろ、ディアンケヒトはオラリオ最大の医療系派閥の主神だ。

まだ『深淵』禍の収まらぬ……犠牲者の全容や、何より重要な対策や治療法が見えぬ今の状況でこんな場末の葉舗に足を運んでいる暇があるとは考えにくい。

「ふん、それとは別の用があるに決まっておろう。でなければ、こんな埃臭い店に誰が来るか馬鹿め」

相変わらずの悪態だが……今日はどこか覇気がないようにも思える。

まだ肩に——あるいは下腹に——力が入っている自分を煩わしく感じる程度には。

しかし、嘆息する暇を与えてくれるほどこの男神は親切ではない。

「貴様の書いた報告書レポートを読んだ」

パサツ——と、カウンターに羊皮紙の束が投げ置かれた。

見覚えがある。と、言う以前の問題である。

何しろそれは、ナーアザに持たせた、例の『深淵』に対する考察を書き殴った紙束なのだから。

もつとも、ロクに推敲もしていない、レポートとは呼べない散文に過ぎないが……。

「言いたいことは色々とあるが……しかし、今はそんな暇はない」

「であれば、何故こんなところに？」

「貴様が、例の【イレギュラー正体不明】と繋がりがあるからだ」

……返答に困ったのは否定できない。

何しろ、今のクオンの立場はまだ微妙すぎた。

例の『深淵』禍に対応できる存在として、ウラノスから正式に免罪を受けている。

その甲斐あつて、表立って反発する神々や人間ことごとたちはいない。……まあ、つい先日と比べれば遙かに。

しかし、だからといって樂觀できる状況でもなかった。

返事よりも先に、霞が帰った後で良かったとそんなことが脳裏を掠めていく。

「ああ。クオンとはそれなりの交流がある」

とはいえ。ディアンケヒトの言葉に、それを咎めるような響きはなかった。

頷いたのは、その確信があつたからだつた。

……付き合ひの長さというのは、こういう時にはそれなりに役に立つ。

「ふん。もう少し前なら、利率を引き上げていたところだが」

それは間違いなく本気だろう。少なからぬ動揺が、胸中で渦巻いたのは否定できない。

「だが、今は好都合だ」

「何？ どういう意味だ？」

「ついてこい。ここで話すより手間が省ける」

返事も待たず、ディアンケヒトが店を出ていく。

追わずに見送るという選択肢は、おそらくあつただろう。

だが、結果として私はその背中を追っていた。

〔クオンの『身の上話』、か……〕

近日中にヘスティアやベル達にクオンは『身の上話』をするつもりらしい。私もそれに誘われている。出欠の返事はまだ返していないが……。

（これも神の娯楽、か）

だとするなら、我が事ながら業が深い。

とはいえ、この先にあるのは間違いない『未知』の何かだろう。

足取りは決して軽くはならなかったが……それでも、止まることはなかった。

——それを神々わたしたちが『未知』と呼ぶのが、どれほど罪深いことか。

私がそれを知るにはもう数日の時間が必要だった。

それから、しばらくして。

「はいはっ。」

ディアンケヒトについていくと、たどり着いたのはギルドのある第八区画。

……いや、第一区画との境目といった方が正しいか。

薬舗わがやからは少し距離があるため途中馬車マクシを使ったが……珍しいことに、その代金は

ディアンケヒトが持ってくれた。

明日と言わず、今すぐに『深淵』が雨となって降り注がなければいいが。
「見れば分かるであろう」

「それは、な」

——などと。その冗談があまりに不謹慎だと思ふ程度には。

もちろん、目の前の建物に覚えはない。覚えはないが、この空気はよく知っている。

「墓所か」

もつとも、見た目はただの貸倉庫だ。少なくとも、遠目ではそのように見えた。

ただし、こうして近づけばその印象も大きく変わる。

何しろ、窓と言わず扉と言わず突貫で補強されているのも見て取れるのだから。

ただの補強ではない。

専門家ではない故断言はできないが、窓にはめられた柵も半ば無理やりに設置された

鉄扉も、おそらく超硬金属アダマンタイト製。

まるで即席の砦か、さもなければ建築途中の監獄のようですらある。

それでも。そのうえで、口にした印象が変わることはなかった。

「そうだ」

いつになく険しい——いや、真剣な顔でディアンケヒトが頷く。

「ギルドが管理する『靈廟』だ。……ふん、名前だけは立派だな」

不快そうに鼻を鳴らしながら、たった一つしかない入り口に向かう。

衛兵は「ガネーシャ・ファミリア」の団員らしい。ただし、その装束は常のものとう。

喪章を身に着けていた。それが……それだけが、この建物が事実『霊廟』であることを示していた。

その団員はディアンケヒトの姿を見るとただ一礼して、その物々しい大扉の錠を開けた。

「私も入ってよいのか？」

もつとも、もうすでに中に踏み込み、重々しい音と共に大扉が外から閉められた後だけが。

魔石灯の微かな明かりが、呼び鈴とその傍の覗き窓を照らしている。

それを見ながら、ディアンケヒトに問いかける。

「馬鹿め。今さらであるうが」

全く持つて返す言葉がない。

肩をすくめ、その薄暗い廊下を進む。

「ふん、相変わらず陰気なところだ」

「『霊廟』であれば当然であろう」

死者の眠りを妨げぬためか、『靈廟』の中は暗かった。

僅かな魔石灯——常夜灯だけが導となつて、私達を闇の奥へと誘っている。いや、誘つてなどいない。むしろ、拒んでいるようにすら見えた。

何しろ、その先にも入り口に似た扉がいくつか立ち並んでいたのだから。

「……は何なのさ?」

「言われねば分かんのか、馬鹿め!」

「……『深淵』の犠牲者の眠る場所だな?」

私の問いかけに、デイアンケヒトは不快そうに鼻を鳴らした。

なるほど、監獄というのはあなたがち間違ひではないのだろう。

この物々しきは、中で眠る死者が迷い出ぬようにするためのものだ。

「死してなお、あの呪詛カウスからは解放されていないということか」

「うむ。……だが、それだけではない」

「何?」

「貴様とて『メレンの悪夢』くらいは話に聞いているだろう?」

「ああ。それは無論だ」

「その後始末でな、あの『正体不明』イレキユラーが厄介なものを見つけ出した」

「クオンが?」

あいつ絡みの厄介事なら、それはさぞかし厄介な代物なのだろう。

思わず嘆息する。

「ああ。……だが、もう少し早い段階で『ロキ・ファミリア』の連中が運び込んできた。似たものをな」

「ロキの眷属こしも達が?」

「正確には『九魔姫ナインヘル』がだ。……ふん、となれば奴が絡んでいても不思議ではないな!」
返事に困り、曖昧に唸る。

かの王族ハイエルグとクオンが、いわゆる男女の関係にあるかと言われれば否定できる。

もし下世話な噂が真実なら、ロキが発狂しているだろうし……クオンも否定はしないだろう。

とはいえ、彼女が『ロキ・ファミリア』の一員としてクオンの『目付け役』を担っているのも事実だった。

「それで、何を見つけた?」

『『アンデッド』だ』

「何?」

「噂くらいは聞いたことがあるだろう? ダンジョンを彷徨う生ける死者だ」

「都市伝説であれば、私も聞いたことがあるが……」

「伝説ではなかった。見ろ」

最後の扉を、ディアンケヒトは自らの手で押し開けた。

零れてくる光に、微かに目が眩む。

どうやら、その室内は十分な光量で満たされているようだ。

「ミアハ様？」

そこにいたのは、憔悴しきった顔のアミッドだった。

彼女の周りにはいくつかの鉄柵が並び、その中には……

「『アンデッド』だと……？」

確かに、干からびた——しかし、その姿のまま動き喚く死者がいた。

「どういふことだ、ディアン！ アミッドに何をさせている?!」

「解呪法を探させているに決まっているだろうが、馬鹿め!!」

思わず放った怒声を、ディアンケヒトの怒号がかき消した。

「はい。『暗い穴』と『ダークリング』。そう呼ばれている呪詛カーズによるものと、リヴェリ

アさんとシャクテイさんからはお聞きしています。ですが、解呪法はまだ……」

座っていた椅子から立ち上がり、ふらつきながらアミッドが言った。

「ふん、あの二人に誰がそれを吹き込んだかは貴様にも分かるだろう？」

「クオン、か……」

この街で霞やアイシャ達の次にクオンと関係が深い二人だ。

……もつとも、実際には他にも霞の店の店長をはじめ何人か交友を持っている者はいるはずだが。

「ミアハ様、お願いいたします。どうかあの方と直接話をさせてはいただけませんか？」
縋りつくように——いや、実際に縋りついてくるアミッドを抱きとめる。

そうでもなければ、このまま崩れ落ちてしまうのは分かり切っていた。

明らかに体に力が入っていない。今の彼女はL・V・2の治療師ではなく、市井の娘よりも弱々しい。

「これが私をここまで連れてきた理由か？——と、視線だけで問うと、いつになく素直にディアンケヒトが頷いた。

「例の『深淵』について、貴様は『人間の本質に作用する呪詛』だと結論づけたな？」

「ああ」

「儂とアミッドの見解も概ね同じだ。そして、それはこの『アンデッド』どもにも同じことと言える」

「何だと？」

「発現する形態こそ多少異なるが、先ほどアミッドが言った二つの呪詛は『深淵』の性質に近い」

「本質を歪めていると?」

「だからこそ、アミッドにも解呪できん。今の時点では解呪は死と同義だ。『本質』の否定なのだから当然だな」

「やはりか……」

唸ると、だが——と、ディアンケヒトは自問するように呻いた。

「この場合の『本質』とは何だ?」

「何?」

「何をもって人間の『本質』と呼ぶ? 記憶か。人格か。それとも経歴か」

「確かに、人間の何がこの変化を呼び起こすかは、まだ分からんな」

いや、だが。その答えは問われるまでもない、ような気がする。

何故なら、私達はそれに。今やそれこそに焦がれて……

「というより、『深淵』、『暗い穴』、『ダークリング』は全て同じ『何か』に対して作用しておる。発現の仕方が違うだけでな」

「何に作用しているのか。それが分かれば、もしかしたら」

解呪の糸口が見つかるかもしれない。

アミッドが謔言のように訴えてくる。

(すまん、クオン。許せ)

あいつは、きつと見知らぬ少女にまで己の話をすることを嫌がるだろう。

だが、ここでその手を払いのければ、この少女が壊れてしまう。

そのような選択を医神わたしにはできそうになかった。

「分かった。……実は近いうちに、クオンから『身の上話』を聞くことになっている。そこにお前を招待しよう。だが……」

「ふん、儂は邪魔という訳だな」

「そうなる。知つての通り、神嫌いだからな。あいつは」

言葉を飾つても仕方がない。

それは、アミッドに対しても同じことだった。

「だが……」

彼女の手を取つたところで懸念が消えるわけではない。

むしろ、性質を変えただけで何も好転はしないと見える。

「だが、クオンの言葉が糸口になるとは限らん。それどころか、より深い絶望をお前に与えるかもしれぬ」

クオンとはまさに『正体不明』。私達ですら知らない未知なのだから。

「故に、今はゆっくり休め。よく眠り、よく食べ、英気を養つてから、改めて答えを聞かせてくれ。今のお前は、まるで死人のようだぞ？」

「ですが……」

「二、三日お前が休んだところで何も変わらん。ずっとそう言っておるだろうが」

「それに、結果はどうあれクオンの話は相当に刺激が強いはずだ。今のままでは途中で倒れてしまうぞ?」

それはほぼ間違いないと思う。

神の勘……というより、それなりに長い時間、あいつと関わっている者の勘だった。

「……わかり、ました」

アミッドが躊躇いがちに小さく頷いた。

やれやれと、ディアンケヒトが肩をすくめるところを見ると、この数日はロクに寝てもないのだろう。

「ところでだな」

ともあれ。アミッドが頷くのを見届けたところで、ディアンケヒトが言った。

「もしアミッドを傷物にしたらどうなるか分かっておるだろうな、ミアハアアアアアアアアアアアアアアアツ!」

「何を言っているのです、ディアンケヒト様! もしこの呪いの解呪法が分かるなら、私の純潔など少しも惜しくはありませんツ!!」

「お前……何を言っているのだ、アミッドお前お前お前お前お前お前?! 儂は認めんぞお

おおおおおおお?!」

そして、何やらおかしな方向にまで覚悟を決めているアミッド。

まあ、一般的にクオンとは好色多情で知られているわけだが。

……それに、霞たちのことを思えば全く否定もできない。

しかし、だからと言ってクオンが色欲だけでアミッドに手を出すかと言えば、まずそんなことはあり得ないと思う。

「いや……それを私に言われてもだな。それに、あいつにも一応、それなりの分別が——」

盛り上がる主従おやこを前にして、力なく訴える。

だが、どう考えてもふたりには届いていない。まったく、これっぽっちも。

(恨むぞ、クオンよ……)

天井を見上げて嘆息する。

しかし、不思議と今回ばかりはディアンケヒトの気持ちも分からないではなかった。

嘆息してから、さらなる盛り上がりを見せる二人の傍をそつと離れる。

落ち着くまでの間、アミッドがまとめた資料でも読ませてもらうとしよう。

解呪法について考えようにも、今の私には情報が足りない。

無論、私として手元の資料だけで都合よく思いつくとは思っていない。

ただ、それでも。

彼女とは別の視点で何か助言できれば、多少は彼女の心労を軽くしてやることができるかもしれないのだから。

5

そして、世界に夜が訪れる。

いずれは明ける夜だ。

であれば、今はその優しさに身をゆだねるべきであろう。

夜の闇とは本来静謐であり、そして安息をもたらすものなのだから。

……少なくとも、寄る辺さえあるのなら。

もつとも、闇とはそれ故に悍まじきモノの寢床ともなる。

そして、そういった場所に追いやられた者たちがいることも忘れてはならないが……。

夜の帳が下りた執務室の中を、魔石灯が照らし出す。

奇妙な懐かしさを覚えるのは、どこことなくソウルの輝きに似ているせいだろうか。

ペン先にたつぷりとインクを含ませ、書面に文字をしたためながら、ふとそんなことを思う。

その程度の雑念は、今さら特別に問題にはならなかった。

机上に積み重なる書類は、別に特別な何かではない。

日々の雑務は言うに及ばず。定期報告の確認であり、陳情や提案への応答であり――

：

団長と『主神』とを兼務していれば――というより、何かしらの組織の長ともなれば

――この類の仕事からは逃れられないものだ。

こればかりは、不死人も生者も変わらなかつた。

思えば、私も随分と長い間、こういった職務を担っている。

気を抜けば痛い目に合うが、だからと言って今さら特別に気を張っておく必要もな

い。

加えて言えば、この手の仕事を厭うというわけでもなかつた。

かつて今も、【黒教会】の設立当初は刀を手放し、ペンに持ち替えているだけの時間を捻出することにすら苦心したものだ。

それを思えば、この時間に何の不満があるうか。

……もつとも、私とて人である。面倒だという感情が全くないというわけでもないが。

そして、こういった仕事はあまり向いていないという自覚もあつた。

私だけではなく姉もそうだった。

国に残ったのが結局リリアーネだけという事実と併せれば、全く否定のしようがない。

「ユリア様」

執務室の扉が軽く叩かれ、修道服に身を包んだ一人の若い女性が入ってきた。

……若いといつても、付き合いとしては、もう一〇年以上にもなる。

見た目がほとんど変わらないのは『ソウルの業』と『暗い穴』によるものだ。

他に生まれ持った体質——と、呼ぶほど大げさなものでもないのだろう——も、多少は影響しているかもしれないが。

「テレジアか」

亜麻色の髪に茶色の瞳。

柔和な顔つきによく似あつた少したれ目がちの目元。

その左側には小さな泣き黒子がある。

女性らしく丸みを帯びた柔らかい肢体は……この時代に準えるなら、地母神か豊穰神を思わせる。

もつとも、本人に言おうものならかなり痛い目に合わされるだろう。

そんな目に合うくらいなら、素直に母性を感じさせるといった方が無難だ。

……それとて、状況によっては危険なのだが。

「メレンからの報告なのですが、少々よろしいですか？」

いずれにせよ、私には縁がないものだ——と。

そんな雑念は適当にどこへとも霧散させてから呟いた。

「メレン？ 何か新しい動きがあつたか？」

ダンジョン内の『深淵』は我らが王により抹殺された。

発生した理由が不明である以上、決して油断はできない。

そちらでまた何かあつたのかと思つたが、まさかメレンとは。

「いえ、動きではありません。ただ、ようやく情報が手に入りましたので」

「何の情報だ？」

「例の『カインハースト家』についてですわ」

「……そうか」

今の下界を跋扈する神のろわれびとの眷属ではなく、それらに抹殺された『古代』の英雄の血脈。

その一派は『ダークリング』を再現することに成功しているらしい。

不死人の再誕は私としては好ましいといえるが……しかし、王の偉業を穢す行いでも

ある。

故に、かの者たちに対する対応は、未だ決めかねているというのが正直なところだつ

た。

「やはり『ダークリング』の再現に成功している様子。ですが——」

「亡者に堕ち、正気を失ったか」

「ええ。亡者が複数体発見されたそうです」

「誰が対応した？」

「我らが王が」

「なるほど」

であれば、まず間違いなく『死んで』いるだろう。

よほどの『器』の持ち主でなければ、もう動き出すことはない。

だからこそその【薪の王】——否、【闇ひとの王】だ。

問題はそこではなく——…

「念のため確認するが、死骸は誰が回収した？」

「【ガネーシャ・ファミリア】ですわ」

「やはりか……」

メレンを押さえているのはあの象神の眷属どもだ。

それに、かの派閥は我らが王とも親密だった。妥当と言えば妥当であり……何より、現状では最適だった。

「亡者どもはすでに例の『霊廟』に運び込まれたようですね。ですから、おそらくは——
……」

「医療系派閥……」
「ディアンケヒト・ファミリア」辺りには情報が流れたという訳だな」
かの派閥にはオラリオ最高と謡われる治療師がいる。

もつとも、その小娘には『ダークリング』はおろか『暗い穴』を消し去ることすらできまいが。

「そして、もう一つ。いえ、一つとは言い切れませんわね」

そんなことを言ってから、テレジアは続けた。

「例の『イシユタル・ファミリア』の残党が、メレンに集まっている様子」

「ほう、『恩恵』もないのにまだ何か企んでいるのか？」

「おそらくは我らが王への復讐かと」

「だらうな」

しかし、『恩恵』もなく挑むなど愚行でしかない。

無論、あつたところで勝ち目などありはしないが。

「彼らの狙いは、おそらく『カーリー・ファミリア』との合流かと思われます」

「『カーリー・ファミリア』だと？」

またの名を闘テラスキユラ国。外界との交流はなく、詳細は不明だ……が、まったく情報がない訳

でもない。

端的に言えば、神の命で人間が殺しあい続ける穢れた地だ。

「ええ。大型船に乗り、オラリオに向かっているとの報がありました。数日中にメレンに到着するのは、まず間違いないかと」

「なるほど。イシユタルの置き土産といったところか」

オラリオの外にある一大勢力。

いわば盤外の駒だ。引き入れることができれば、この遊戯盤オラリオの均衡を崩すこともできよう。

……無論、指し方次第だが。

「おそらくは。【カーリー・ファミリア】の者どもは、まだあの神が討たれたことを知らないと思われませう」

もつとも、どう指すつもりだったかはもはや誰にも知りようがない。

だが、敗残兵はそれに縋っていると考えていい。

しかし、奇妙だった。

「その残党どもは新しい神についたのか？」

「そこまでは何とも。大部分は【ガネーシャ・ファミリア】が引き取った筈ですが……」
かの派閥に所属した元【イシユタル・ファミリア】の団員たちは、そのまま歓楽街で

生活している。

とはいえ、「ガネーシャ・ファミリア」の監視が緩んでいるわけでもない。

その手の暗躍を見逃すほど、あの女団長も象神も甘くはないのだから。

(となると、まったくの別勢力か)

闇派閥に下った。それが現状では最も可能性が高い。

高い、が……

「しばらく留守にする。雑事は任せた」

団長として用意したそこそこの業物を携え、椅子から立ち上がる。

無論、長らくの愛刀は今もソウルのごく浅い部分に留めてある——が、アレは今の『時

代』には少々目立つ。

それに、この『時代』の敵など概ねこの刀で充分であろう。

「ダンジョンに行かれるのですか?」

「いや、メレンだ」

修道服もまた、久方ぶりに鎧へと切り替える。

「メレンの現状をこの目で直接見ておきたい。それに、できれば連中の拠点もな」

「お一人で?」

「……いや」

領こうとして、それより先に首を横に振っていた。

「あのじゃじゃ馬娘どもを連れていく。どうせ退屈しているだろうからな」

ここしばらくダンジョンへの立ち入りを禁じている。

そのせいでいぶ拗ねていると聞いていた。

海——ではないが、まあ似たようなものだ——にでも連れて行ってやれば、多少の気晴らしにはなるだろう。

何が起こるかとは分からないが……それまでは年相応に遊ばせてやっていい。

どうせあの二人に調査や情報収集といった繊細な仕事は向いていないのだから。

「相変わらずお優しいですこと」

見透かしたように、テレジアが笑う。

「からかうな、馬鹿」

もつとも、かつての黒教会を率いていた時よりも随分と丸くなったという自覚ならあるが。

……

このオラリオで目が覚めてから今に至るまで。

良くも悪くも驚いたことは色々あるが。

「じゃあ、折角だし一緒に寝ましよう！」

霞の社交性の高さはその中の一つだ……というか、毎回驚かされ続けている。

何しろ、速攻で霞は姫様……についてはまあ、驚くことではないが。

例の生贄の少女——春姫とまで打ち解けていた。

ついには提案をする彼女を……そして、割と笑顔で頷く二人の姫君の姿を見ながらそんなことを考える。

ちなみに、俺の方はさっぱりだった。踏み込む隙が全く見当たらない。

永い巡礼の旅は真つ当な人間と会話する術を根こそぎ壊滅させてくれていたらしい。

「まあ、もう夜も更けてきたからな」

食堂の魔石灯に煌めくグラスを片手に、ソラールが頷く。

霞の提案通り、アイシヤのランクアップと再会を祝って簡単な酒宴が開かれている訳だが……それにしたってあいつの攻略速度は尋常ではない。

ついでに言えば……

「うちの姫様は随分とあの子に懐いているみたいだな」

姫様は姫様で何かと春姫の世話を焼こうとしている。

春姫も同じく姫様の世話をしようとするので……まあ、何だか微笑ましいやり取りが続いていた。

「懐いているとは……いや、否定はしないが」

ソラールが曖昧に呻く。

「まあ、何だ……。元々孤独な娘であつたらしい」

決して寡黙でも口下手でもないのだが……肝心な時に要点しか言わないのが、ソラールの昔からの癖だった。

おかげでいまいち意図がつかめず——だから、しばしば変人扱いされているのだらう。

もつとも、今回は分かりやすい方だが。

「そりやまあ、訳アリでもなければ良家の子女が娼婦見習いなんてやってないだろうな」
いや、高級娼婦だったことを考えれば可能性が皆無とは言いがたいが。

それに、三年にわたる放浪の間、娼婦という生業が女性が独り立ちするための数少ない手段となっている国をいくつか見た。

そして、下手な良家の子女よりも博識であり多才であり、為政者や有力者に重用されている娼婦も同じく。

とはいえ、だ。

だからと言って、あの少女にその手の仕事に対する適性があるとはとても思えない。
……まあ、根っからの放浪者である俺が言うのもなんだが。

「不和があつた……。いや、一方的に不和にさせられたところか」

「まあ、そんなところだ。よく聞く悲劇と言えば、確かにそれまでだが……」
よく聞く悲劇か。

それは例えば、あの子が生まれてすぐに旦那が他の女と逃げたとか。

あるいは、母親が自らの命と引き換えに彼女の命をこの世に送り出したとか。
おそらくそんなところだろう。いずれにせよ、深く踏み込むことではない。

「妹ができたようだと喜んでいたよ」

「そうか」

言われてみれば、姫様は末っ子だ。

……今も生き残っているという意味では、間違いない。

「助かったよ」

「気にするな。慣れないことだったが……その、何だ。俺も楽しかった」

彼女がどう思っているかは分からないが——と、ソラールは小さく付け足した。

「それより、この宴もお開きのようだな」

「そうらしい」

霞がアイシャの背を押し、姫様が少女の手を引いて食堂から出ていく。

どちらの私室に向かうかは知らないが……まあ、いいか。

「ま、仕方ない。今夜はお互いに再会を祝おうじゃないか」

扉を閉める直前、アイシヤが意味ありげな言葉を残していったのはいくらか気になるところだが。

「では、俺もお暇しよう。適当に部屋を借りるぞ」

「あ、ああ」

ソラールまでが、いつになく意味ありげな笑い声を残すとやけに足早に部屋を出ていく。

呼び止める暇を見失い、何となく途方に暮れた気分になっていると――…

「んんっ」

微かな咳払いと共に、長衣の裾が引つ張られる感覚がした。

振り返ると、そこにはカルラの姿が。

「この馬鹿弟子。私とて女なのだぞ。あまり恥をかかせるな」

「あ、ああ……」

彼女が何を言わんとしているかは、流石に分かる。

ただ、改めてとなると、妙に気恥しい。

窓から差し込む月明かりが、彼女の黒髪をしつとりと煌めいていて。

どこか儂げが顔が、今は熱を帯びたように潤んでいる。

思えば、明るい場所で彼女を見ることは少なかつた。

そもそも、あの『時代』は陽光も月光も虚ろだったのだから。だから、だろうか。

奇妙な緊張感と共に華奢な手を引き寄せて――…

後のことは月夜だけが知る、と。

まあ、そんなところだ。

――…

そう、全ては暗い月のみがあることである。

神の敵も。人の罪も。あるいは神の罪ですら。

遙か昔から、そうだったのだ。

「ソラール？ それが噂の『太陽の戦士』とやらの名前か」

『ソウダ』

生臭く生温い空気に満ちた廃倉庫。

明かりを絞られた魔石灯の微かな明かりの中で、元「イシユタル・ファミリア」残党

――取るに足りない残り滓の首魁に領いて見せる。

『貴様ラノ仇ノ友人。ソシテ、貴様ラガ継グベキ『遺産』ノ篡奪者ダ』

もつとも、確証が得られたわけではない。

未だあの怪物の手の中か……あるいは順当に「ガネーシャ・ファミリア」が保管して

いるかもしれない。

だが、知ったことか。

『貴様ラハ一ツ勘違イヲシテイル』

「何だと？」

『コソコソト逃ゲ回ル必要ガアルノハ、貴様ラデハナイ』

とも言い難いが。

何しろ「イシユタル・ファミリア」は闇派閥との関係が疑われている。

ましてこの首魁は、最重要参考人だ。

見つければ捕縛される——が、しかし、そこまで強硬な手も打てない。

『奴ハ神殺シダ。イツマデモ庇イキレルモノデハナイ』

確かに『深淵』に対応できる希少な存在ではある。あの『厄災』がある限り、奴が処断されることはあるまい。

だが、それだけだ。元よりあの男は危うい均衡の上にいた。そんな男が『神殺し』などすればどうなるか。

実際、あの『神災』をもたらした男神の神意——『厄災』を用いてあの怪物を抹殺する計画を知つても、創設神はそれを咎めることができなかつた。

その神意を闇に葬り、故意に起こされた事件ではなく、ただの軽率な事故として片を

付けた。

それは、何も創設神の思惑ではない。

あの男に重きを置くことを良しとしないのは、むしろオラリオの神意であり、あるいは民意である。

いかに都市運営を担うギルドと言えど……いや、都市運営を担うギルドだからこそ、それらを無視できない。

『アノ暗黒期デスラ、神殺シヲ行ツタモノハイナイ。ギルドノ対応ハ不自然ダト感ジテイル者モイル』

例の『深淵』なる呪詛は、一般人にもその恐怖を刻みはした。

事実、アレは危険だ。現時点では、ギルドの発表通りあの「正体不明」にしか対応できないと見えていい。

だが……

『闇派閥殘党ノ濡レ衣ヲ着セラレタ今デモ、貴様ラニ同情スル声ガナイ訳デハナイ』

いや、本質的には「正体不明」はやりすぎだと糾弾するものであり、この連中への同情とは言い難いが。

皮肉にも、神々の降臨より千年続く『英雄神話』が、危険度を見誤らせている。

だからこそ、奴の免罪についても人類は神々程には納得していない。

特に神の眷属たちは。

(コレハコレデ奇妙ナ話ダガ……)

ギルドと冒険者。神と人。神の眷属とそうでない者たち。

それらの間で、意識に微妙な差異が——あるいは捻じれのようなものが生じている。

(ダカラコソ、好都合ダ)

エニユオはそれを利用するつもりだった。

奴が暴れば暴れるだけ、各派閥とギルド、各主神と創設神の間に対立と摩擦が生じる。

さらにそれらを他所の各派閥の思惑が……いや、オラリオ中の神々の思惑がかき乱すのは火を見るよりも明らかだ。

ならば、いずれ全ては『狂乱』に至るのは必然とすらいえよう。

(モットモ、アノ男ノ真意モ分カラナイガナ)

だが、それこそ知ったことではない。

私はエニユオの神意に従うのみである。

そして、その意に従ってオラリオを滅ぼすのだ。

『仕掛ケルナラ、急ゲ。近イウチニ「ロキ・ファミア」ガコノ街ニ来ル』

そのために、おそらくはあの怪物イレギュラーは有効な手駒となる。

そして、ちょうど同じ頃。

「あ、明日は都市の外に行くでー」

オラリオのどこかで、とある道化神もまた己の眷属たちに向かって告げたのだった。

第二節 いつか陽の当たる場所へ

1

「うあーっ！ 久しぶりに来たー！」

目が痛くなるほどの青空にティオナの興奮した声が響き渡る。

「本当、何年ぶりかしら？」

「ダンジョンに入るようになってから、全然来てなかったよねー！」

港街の景色に微笑をもらすティオネに、ティオナが笑い返す。

この街を介してオラリオに来るのは何も交易品ばかりではない。

海国や極東のような島国——つまり、海路を用いる人間は、まずメレンにやってくる。

ティオネとティオナはその中の一人だ。

もちろん、他にもこの街を通った者はいる。

アイズをはじめ、僅かな者たちは周囲の景観に目を奪われているが、大半の者は懐かしそうにしている。

私自身も、昂揚を感じていないと言えば？になる。

あの窮屈な里にはない、この青い景色を目の当たりにした時に感じた感動は、時を経

た今も忘れていないのだから。

「思ったよりも復興が進んでいるようだな」

「そやな。流石はガネーシャいうことか」

「それ以上に、メレンの民の力だろう」

石造りの建物が並ぶ通りは異国の人々、商人、漁師らによつて活況を呈している。

道に脇で絨毯を広げ、珍しい工芸品を露天商、魚や巻貝など採れたての海産物を並べた天幕小屋、商談とばかりに値切りをせがむ声々。

異国市場バザールのような喧騒に包まれるその街並みは記憶にあるものと比べても遜色ない。

……少なくとも、思っていたよりはずっと。

「はい、私も少しだけ安心しちゃいました」

ホツと胸をなでおろすのは、レフィーヤだった。

「レフィーヤも海から来たの?」

「はい、そうです。学生の時は、友達と一緒によくこの港町を散策していました」

アイズの問いかけに、レフィーヤが懐かしそうな表情のまま頷く。

「じゃあ、料理が美味しいお店とか知ってる?! あとで連れてってよー!」

それを目ざとく……いや、耳ざとく聞きつけたテイオナがそのままレフィーヤに抱き着いた。

その強襲に対応しきれずふらついたレフイーヤを、アイズが背後から抱き留める。

二人に抱き着かれ、心底慌てるレフイーヤだったが……しかし、彼女も心が踊っているようだった。

「それで、これからどうする気だ？」

テイオナに引きずられていくアイズとレフイーヤを見送りながら、傍らのロキに問いかける。

「まずはロログ湖の『封印』の確認やな。一応、それがギルド……いうか、ウラノスへの申請理由やしな」

「一五年前に施された『封印』か」

「そや。その穴は『下層』……多分『水の迷都』のどつかと繋がつとる。いや、そこだけとは限らんけども。ともかく、水棲のモンスターはその穴から出てきたわけやな」

そして、ゼウスとヘラが「ポセイドン・ファミア」の協力を得て封印した。

それが一五年前の話である。それまでは、海のモンスターは全くの野放しだった。

今も水中という最上級の難地形に守られていることも併せれば、モンスタアの浸食は海こそ深刻だと言って過言ではない。

とはいえ、だ。

「その封印が本当に破られたと思うか？」

私達が追っている事件に関与してくるかどうかは、また別の話だった。

「いんや。正直、可能性はない思つとる。実際にメレンの様子を見たしな」

あつさりと言われた言葉に、しかし苛立ちや驚きは生じなかつた。

「だろうな」

何故なら予見していたことだからだ。

例の『悪夢』の情報収集がてら、メレンについてもいくらか情報に目を通してきた。

「メレンはここ近年漁獲量が回復している。私達が集めた情報が間違っていないならな」

むしろ、まともに漁に出ることすらままなるまい。

「そや。もし『封印』が破れたなら、そんなことになるはずがない。この様子なら『悪夢』の時に破られたいうこともないやろ」

湖面にはいくつもの漁船が見える。

確かに「ガネーシヤ・ファミリア」の団員が漁に出ていたと思しき漁師たちに湖の様子を訊ねている。

だが、それはあくまで確認だけだ。

封印が破られたとするなら——その疑いがあるなら——どう考えても切迫感が足りない。

「けど『悪夢』の際に、あの『新種』の姿も確認されとる」

「オラリオからメレンに運び出されたということか。それとも、逆か」

「それは分からんけど……。いずれにせよ、オラリオの『大穴』ともメレンの『大穴』とも違う、第三の出入り口があるはずや」

「それを探するのが真の目的か？」

「ま、そうなるな。今は可能性を一つ一つ潰していくしかない」

ロキの言葉に、肩をすくめる。

言われるまでもなく、事態の全容は見えていない。尻尾を掴むどころか、ロクに影すら見せない。

手間だが、他に方法がなかった。

「何故、フィン達を残してきた？」

「理由は昨日話したやろ」

「……本気か？」

……確かにその理由も聞いているわけだが。

「あ、明日は都市の外に行くでー」

と、その唐突な宣言の後。

「あ、でも。フィン達男組は留守番なー」

と、ロキは続けたのだった。

『はあ?!』

ベートを筆頭とする男性陣——と、ティオネ——が声を荒げる中、ロキは露骨に真剣な表情を作つて言った。

「確かにうちらにとつては慰安旅行やけど。それだけやとギルドの許可が下りん」

それはまあ、そうだろう。

渋々と男性陣も頷いた。

「で、だ。自分らももう知つとるやろけど、メレンは今大変なことになつとる」

いわゆる『メレンの悪夢』については、ダンジョンの中でシャクティからある程度聞いている。

もちろん、地上に残っていた団員は言うまでもないことだろう。

「やから、表向きはメレンの慰問と復興のお手伝いっちゅうわけや」

「それで、何で団長……いや、私達だけで行くのよ?」

「誰が男の水着なんぞ見て喜ぶんや」

ティオネの言葉に、ロキはきつぱりと言い切つた。

その勢いに二の句が継げないでいるティオネにロキがさらに畳みかける。

「それに、メレンの子らは今とつても弱つとるねん。そんなところに、超上級者向けツン

デレ、ほぼほぼツン成分しかないどつかの狼を連れていくというのはどうなんや?」

「ないわね」

「うん、ない」

「流石にないかなあ……」

「そうですね……」

ティオネのみならず、ティオナやアナキテイ達までが即答する。

「せやろ。そんな泣きつ面に蜂……いや、泣きつ面にブラツデーハイヴを投げ込つけるような非道、うちにはできん!」

「喧嘩売ってんだな、てめえら……ッ!」

熱弁を振るうロキに、全力で頷くティオネ達。

そして、ベートが子どもが見たらトラウマ間違いなしといった表情で獰猛に唸った。

そういうところだぞ、お前は。

「ま、あとはお手伝いをしながら『メレンの悪夢』について情報を集める」
『閻霊』って奴らが絡んでいるから?」

「せや。できればギルドの息がかかってない生の情報が欲しい」

むむ……と、ティオネが唸った。

ロキの言い分は、概ね筋が通っている。

「あと、もちろん自分ら自身が遊ぶのも忘れたらあかんでー！ ほな、しつかり準備しててな！」

反論できない——というか、勢いに押し切られた——ティオネを他所に、ロキはそう宣言したのだった。

……と、言うようなことが昨夜あつた訳だ。

「あとは監視やな。一応、こつそりフィンには頼んである」

「監視？ クオンをか？」

「半分正解。もう半分はヘルメスとディオニユソスをや。特にヘルメス。こそこそ動き回つてばつかで信用できんし」

頭の後ろで手を組み、はしやくティオナ達を眺めながらロキは暢気な口調で物騒なことを言った。

とはいえ、確かに必要だろう。

神ヘルメスはわざわざダンジョンの中に乗り込んでまで、クオンに手を出したらしい。

いくつかの意味で、警戒が必要だった。

「そんなことより、まずは湖や！ 湖がうちらを呼んどるでえ!!」

嘆息していると、堪えきれないと言わんばかりにロキまでが走り出す。

「まあ、今は観光客の振りに徹するか」

荷物を解き、少し遊び、街の惨状を見て手伝いを申し出る。ロキの脚本は大体そんな流れだ。

妥当なところだ。

何しろ、「ガネーシャ・ファミリア」どころかメレンの住人にすら警戒されている節がある。

いや、伝え聞く惨劇を思えばそれも仕方がないといえるが……。

何であれ、いきなり復興支援を言い出しても、余計に警戒されるだけだろう。

「やれやれ、そううまくいけばいいがな」

フィンではないが、何となく落ち着かない。

何か厄介事が近づいているような、そんな気分だった。

そして、湖岸——白い砂浜に辿り着いてから、

「あ、これリヴェリアの水着な」

「なん、だと……」

それからしばらく、今一つ記憶が曖昧になるのだった。

……

メレンの拠点につくなり、連れてきたじゃじゃ馬娘どもは飛び出して行った。

「ユリア様……」

やれやれと、その背中を見送っていると、「白い影」の一人が近づいてきて首を垂れる。「どうかしたか?」

ついて早々に厄介事だというなら、あの二人を呼び戻さざるを得ない。

「【ロキ・ファミリア】がメレンに姿を見せました。いかがいたしましたでしょうか?」

束の間——いや、見栄を張るのはやめよう。

しばらくの間、返答に困った。

(まさかここで【ロキ・ファミリア】と鉢合わせるとはな)

不遜にも我が王に敵意を抱いている派閥ではある……が、その王自身が不敬を黙認してもいる。

まったく、あの男の真意は相変わらず分からない。

だからこそ、現時点であの派閥と全面抗争に陥るといふのは少々危険だ。

下手を打ち、今一度不評を買うのは避けたい。

何しろ、あの男こそは唯一真なる【闇の王】。

神や【薪の王】達ですら殺しきれなかつた真なる不死人であり、『火の時代』そのものすら殺した英雄である。

一度や二度は殺せるだろうが……それは勝算とは言えない。私自身、あの男を殺しき

れると自信をもって言うことなどできない。

だが——そうなると、あのじゃじゃ馬娘を連れてきたのは失敗だったかもしれない。
「今はどうしている?」

結局。絞り出されたのは、そんな問いかけだった。

「はっ。水辺で遊興に耽っている様子です」

「なら、あの二人を奴らがいない水辺に誘導しろ。間違っても遭遇させるな」

我ながら何とも馬鹿げた指示である。

「承知いたしました」

そんな指示にも大真面目に、全く動じず一礼する「白い影」。

せめてもの礼として、その真名を記憶にとどめておくことにした。

在りし日に比べれば練度の低い「白い影」達だが……この者はいつか重用する日が来るかもしれない。

「それで、例の血族の情報はどうなっている?」

その背を見送ってから、別の「白い影」に問いかける。

「今は【ガネーシャ・ファミリア】が拠点、資料、そして『回収物』のすべてを抑えておられます。ですが団長、副団長は不在。また、元【イシユタル・ファミリア】の団員が多数動員され、指揮系統に乱れが生じております。また、街の有力者にも信者はおります

故……」

「拠点に踏み入るくらいはできる、か」

「おそらくは」

もつとも、すでに調査され尽くした拠点などいくら調べても何も出て来はしないだろう。

あの憲兵長はそれほど愚かではない。そして、その彼女が見落とした何かを私が都合よく発見できるかと言われれば少々返事に困る。

「他に怪しい拠点は？」

同じ幸運を期待するのであれば、実りのない抜け殻を探すのではなく、まだ荒らされていない拠点を探した方がまだ有益だろう。

「今のところは。ですが、廃倉庫街に『イシユタル・ファミリア』残党が出入りしております」

「『カーリー・ファミリア』と合流する手はずか？」

「そこまでは。ですが、可能性は高いかと思われまます」

やはり、流石に海洋にいる相手の動向を探ることはできないか。

となれば、地上にいる者どもから情報を得るしかない。

「『イシユタル・ファミリア』残党の動向を調査しろ。ただし、そちらも『ロキ・ファミ

リア」に気取られるな」

奴らの狙いは定かではないが、残党どもを捕縛され噂される『遺産』が露見するよう
なことになったら手間だ。

ほぼ間違いなく、我らが王の手を煩わせることになる。

「もしそれが難しいようであれば、『ロキ・ファミア』の口を封じろ」

「承知いたしました」

今の【白い影】では幹部の相手をするのは少々困難かもしれないが……しかし、奴らは闇から見放された者どもだ。

方法はいくらかでもある。

「ところでユリア様」

今後の予定を思い描いていると、三人目の【白い影】が呼び掛けてくる。

「折角メレンに來られたのです。水遊びなどいかがですか？ 僭越ながら、水着など用意させていただいておりますが……」

「そ、そうか」

どこからか取り出されたトルソーが着ているのは、いささか布地が不足していると思われる水着だった。

それこそかつての【白い影】にはなかった反応に、束の間思考が静止する。

その私を、「白い影」が臆することなく——何よりも仮面越しとはいえ大真面目に見つめてくる。

下心は感じられなかった。……少なくとも、特別露骨には。

「すまないが、やるのが立って込んでいる。気持ちだけでもらっておこう」

何よりも神こそが俗塗れの生活を送る——それを隠そうともしないこの『時代』において、かつてのような『信仰』を求めるのは困難なのかもしれない。

それに、我らが王もその辺りは非常に盛んである。であれば、それもやむなしと言ったところ……なのかもしれない。

何だか絶望的な気分で、内心天を仰いでから——…

(今代の「白い影」も磨けば光るかもしれん)

諸々の感情を、その一言でどうにか美化することにした。

……

「ご無沙汰をしております、神へファイストス。本日は早朝より時間を割いていただき、感謝いたします」

男装の麗人——いや、麗神の前で跪く。

鍛冶神へファイストス。

天界屈指の名匠ということは今さら語るまでもなく。

暗黒期においては、鍛冶系派閥でありながら私達を大いに支えてくれたオラリオ有数の善神である。

「ええ、久しぶりね」

楽にしてちょうだい——と、その言葉に礼を言いながら立ち上がる。

「こんな風に、のんびりと挨拶を交わせる日がきて何よりだわ」

「ええ、本当に」

そう。この神匠との交流は、あの暗黒期から続いている。

支払った犠牲は大きく、失ったものは計り知れない……が、それでも得たものや遺されたものがない訳ではない。

他派閥の主神の神室に、どこか感じる懐かしさはその一つだろう。

「それで、ガネーシャから急ぎの用だと聞いたけれど……。まさか例の『深淵』絡みで何かあるのかしら？」

「いえ、そちらは今はまだ。あるいは、近いうちにお願いに上がるかもしれないんですが」
深淵跡地で回収した例の『魔石』——いや、まだ結論は出ていないが、現時点では魔石ではないと結論されている。

むしろ、クオンの見立てが正しいようだ。

確か『貴石』と言っていたか。魔石とは性質の違う特殊鉱石らしい。

「そう。楽しみにしているわ……と、言うのは流石に不謹慎かしらね？」

「さあ、どうでしょう。ですが、あなた達を満足させる『未知』ではあるかと」

ともすれば批判されかねない、そんな辛口の冗談を言い合うには相応の信頼が必要となる。

お互いに小さく笑いあつてから、

「それで。今日の要件は？」

「ええ。……失礼します」

傍らに置いてあつた槍——白布に包んだそれを持ち上げる。

神室……まして他派閥の主神の神室に武器を持ち込むことは滅多にない。

加えて今は一対一。人払いがされ、私と神へファイストス以外の気配がないような状況ではなおさらだ。

そんな中で、鞆代わりの白布を引きはがすのは、奇妙な緊張感を伴った。

「この槍について、何かご存じでしょうか」

「それは……！」

赤い瞳が見開かれる。

「あなた、これをどこで？」

「クオンから譲り受けました」

驚愕に満ちた言葉に、やはりこれはガネーシヤが言う通りの代物なのだろうと覚悟する。

「そう。彼が……。見せてもらえる？」

「はい。もちろんです」

整頓された執務机に、その槍を置く。

すぐさま槍を持ち上げ、見分し始めた神へファイストスの見開かれた瞳が、先ほどと一転して鋭くなる。

「これは、まさか……」

「ご存じなのですか？」

「ええ。でも、現物を見たのはこれが初めて」

それは、どこことなく奇妙な言い回しだった。

もちろん、天界に住まう神々の生活など、まったくと言っていいほど知らないのだが。

「《竜狩りの槍》。古き神が振るつたとされる失われた名槍。まさか実在していたとわね」

「《竜狩りの槍》ですか？」

「簡単に言えば、私達にとつての『神話』に出てくる武器、といったところね。まさかこの目で見る日が来るなんて……」

「そんなものを、何故あいつが……」

「さあ……。それは、直接聞くしかないわね」

槍を机に戻すと、微かに椅子を軋ませ、神へファイストスがため息のように呟く。

「近いうちに、その機会があるでしょう?」

「ええ。……あなたも誘われているのですか?」

いや、それは愚問だろう。

目の前の女神は、このオラリオでクオンとまともな交流のある数少ない神の石柱だ。

「彼にじゃなくて、ヘステイアにだけどね」

なるほど、かの女神こそあいつと親しいといえる。

「それに、ヴェルフも誘われているみたい」

「ヴェルフ……。あの赤毛の鍛冶師ですね」

噂に聞くクロツゾの一族。唯一『クロツゾの魔剣』を受け継いだ魔剣鍛冶師。

もつとも、彼はその血をずいぶん助けられました。

「例の一件では、彼にもずいぶん助けられました」

「あの子の魔剣の力に?」

確かに、あのゴライアスを包んだ炎は伝説に違わぬ業炎だった。

「いいえ、それだけではありません」

しかし、彼に助けられたのは最後の一撃だけではない。

何しろあの魔剣は一撃で砕けたのだ。とどめの一撃以上のことは期待できなかつた。

それよりも……

「彼自身の力に。彼がいなければもつと苦戦を強いられたでしょう」

あの魔法がなければ、もつと多くの被害が出ていたはずだ。

「そう。【象神デアンクレーシヤの杖】に褒められるなんて、私も鼻が高いわ」

神へファイストスが浮かべた微笑の神意は凶り切れなかつたが……

「これで鍛冶師としても一皮むけてくれるといいんだけど」

ただ、相変わらず我が子を思う善神の姿がそこにはあつた。

「それで、この槍ですが……」

「こういつては何だけど、今のあなたには過ぎた武器よ。だから、これは私が……」

預かる——と、おそらくは続けようとしたのだろう。

言葉と共に神へファイストスが改めて机上の槍に手を伸ばしたその時。

パチリ——と。その手を拒絶するように、槍が小さく雷を纏つた。

「ご無事ですか?!」

今の雷の威力は分らないが、その槍は神創武器だという。

となれば、いかに超越デウスデア存在であつても最悪の事態は起こりえる。

思わず血が凍った——が、どうやら杞憂で済みそうだった。

「ええ。静電気程度のものだったし」

素早く手を引き戻した神へファイストスは、ほら——と、つけたままの手袋を外した。鎚を扱い、鉄を打っているとは思えない程白いその手には火傷のあと一つない。

私がホツと一息をついていると、それよりも——と、女神は槍を一瞥する。

「……そう。自分で見定めると、そう言いたいわけね」

呆れとも嘆息ともつかない吐息と共に、神へファイストスは机上の槍を少しこちらに押し出した。

持つて帰れということだろう。

しかし、だ。

これは神創武器——つまりは神殺しの武器である。

天界への送還ではなく、完全なる殺害を可能とする武器。

人の手に余る代物であり……実際、それを知った今では恐れ多くて触れることすら躊躇われる。

そもそも、こんなものは下界にあつていいものではない。

やはり、この槍は天界の名匠である神へファイストスに預け、嚴重に封印してもらわべきだろう。

——と、そう思う自分がある。

元より自分には過ぎたものだと判断する自分も。

しかし、そのうえで……

「よろしいのですか?」

それらすべてを【象神の杖】^{アンクラーシヤ}としての自分が棄却した。

これから——いや、すでにオラリオが曝されている脅威に対してはこれでも足りないのだ。

例えばそれが神殺しの武器であつても、使いこなすしかない。

私では生涯この槍の真価を引き出すことはできないかもしれないが……。

「それはその堅物の槍に訊ねなさい」

その鍛冶神はその迷いを見透かしたうえで言った。

「……………」

その通り、なのだろう。

見定められているのは、ゴライアスとの戦いの間にも感じていたことだ。

改めてその槍に手を伸ばす。

指先が触れたその時、神ヘファイストスの時のように雷が爆ぜたような気がした。

——が、それは幻聴だ。

その神槍は黙して語らず、ただ静かにそこに在る。

神匠に見守られながら、改めて持ち上げる。

やはり、どこか手に馴染まない。だが、雷が爆ぜることはなかった。

「どうせなら、その槍が後悔するくらい振り回してやりなさい」

神ヘファイストスが小さく微笑む。

やれるものならやってみろ——と。そう言わんばかりに。

窓から差し込む陽光に照らされ、その槍が鈍く煌めいた。

……

ヘファイストス
主 神が一仕事済ませている頃。

その眷族にして団長たる彼女もまた、久方ぶりの大仕事に着手しようとしていた。

場所は当然、彼女の城であり聖域である工房——ではなかった。

故に辺りに響くのは鎚の音ではなく、周囲に舞うのは鍛鉄の火花ではない。

響いているのは瀑布の音。舞い散るのは、白銀の水しぶき。

そこは彼女の聖地からいくらか下に離れた場所。

有体に言えば、ダンジョン一八階層にいくつかある水場の一カ所だった。

滝下にある巨石。眼前に自ら打ち上げた《紅時雨》を突き立て、彼女はそこに座して
いた。

身に着けているのは下帯のみと無防備すぎる姿だが、白刃の如きその気配を前に不埒なことを考える輩はいまい。

それどころか、モンスターすら近づいてくる様子はなかった。

「——」
そして、彼女自身はそんな事すら意識の内でない。

水滴に彩られる白刃。今の己が打てる最高の刃金に己の裡を映し出す。あるいは、その逆か。

至高の武器。鋼の真実。神の境地。

そういった情熱——あるいは渴望ですら、今の彼女の中にはない……と、言いたいところなのだが。

「いかなあ……。これはいよいよいかな」

滝に打たれたまま、腕を組んで唸っていた。

それでひとまず、意識が現世に戻ってくる。

「手前が目指しているのは、そういった魔道ではないというのに……」

ほう……と、零れた吐息は柄にもなく悩まし気で、得体のしれない熱を帯びていた。滝に打たれ、冷え切っている体だが、その芯にも同様の熱が渦巻いている。

常にとり憑かれている渴望^もではない。

つい先日まで参加していた『遠征』の名残——と、そういえばその通りなのだが。

「創作意欲が燃え上がっているというのに、これでは鎚を持つこともままならん」

初めて見る『深層』。待ち構えていた怪物。見届けた偉業。

それらすべてが、彼女の情熱を掻き立てている。

常であれば、工房に籠り寝食を忘れて鎚を振るっているところだ。

それをしない理由。いや、できない理由。

それもまた、『遠征』にあつた。

少なくともその片方は。

「」

おおよその勘で視線を動かす。

方向は一七階層との連結路。

思い浮かぶのは『遠征』の帰り道、思わぬ足止めが終わる前夜のこと。

かの【イレギュラー正体不明】と互角に渡り合った剣士の姿だった。

正確にはその片割れ。先にあの男と対峙していた剣豪。

その姿を思い出すだけで、体に熱が宿る。胸が高鳴る。何か熱いものが体を満たして

いく。

そう——…

「何とも恐ろしいものだ」

あの妖刀を思い出すと、今でも。

神の領域に至ること。至高の武器をこの手で生み出すこと。

それが己の渴望だった。初めてあの怪物めいた神匠が打ち上げた剣を見た時から、ずつととり憑かれている。

しかし、誰に言われるまでもないことであり、どのような綺麗事で言い飾ろうとも隠しきれない真理が存在する。

つまり、武器とは何かを傷つけ、その命を奪うためのものである。

無論、例外がないわけではない。命を奪うことを主眼に置かない武器も存在する。

だが、例外とは少数であるからこそ例外と言われるのだ。

ならば、至高の武器を求めるとは、いかに効率的に何かを傷つけ、その命を奪うかを模索することにも近い。

寝食を惜しみ、心血を注ぎ、魂を分け与えるようにして、何かの命を奪うモノを生み出す。

もつとも、そんなものは鍛冶師——武具を打つ鍛冶師であれば、誰もが背負う業である。

そのうえで、何か別の意味を己の作品に持たせてやれるかどうか。それもまた、鍛冶

師の使命の一つと言えよう。

しかし。しかし、だ。

心血を注ぎ、魂を込めるが故に、百に一振り——あるいは千に一振りか——その宿業に堕ちたモノが打ち上がってしまふことがある。

それはいわゆる『魔剣』と異なりただの武器だ。少なくとも振り回したところで魔法が発動するわけではない。

だが、その多くが文句のない業物であり——それだけでは説明がつかぬ、奇妙な魅力を放つ。

だからこそ、人を狂わせる。その果てに邪剣だの妖刀だのと呼ばれ、もたらした悲劇と共に語り継がれている。

自分自身も、最上級鍛冶師マスター・スミスなどと呼ばれる技術わざ——あるいは業——の全てを注ぎ、そういうた代物を生み出してしまったことがある。

無論、そのような魔道を望むわけではない。

すぐにへし折るのが常だが……しかし、どうしても躊躇われて嚴重に封印してあるものも何振りかある。

そういうた代物と比較しても、あの男——アーンと名乗ったあの剣士が携えていた妖刀は極まっていた。

しかし——…

「アーロン、か。恐ろしき男よ」

それが妖刀であると気づいたのは、実のところ「イレギュラー正体不明」との戦闘中ではない。

その時は、ただの名刀……自分の目にも眩い大業物にしか見えなかった。

だから興奮のまま——不用意に——見せてくれとねだったのだ。

「どれ。何なら抜いてみるか、娘」

存外簡単に投げ渡され、興奮のままに鞘から引き抜いて——…

「あ……」

とろん、と。意識が蕩けた。

魔石灯の輝きに照らされた乱波紋。妖しく光る刃金。

だが、足りない。そうだ。足りない。赤い色が足りない。

それにこれでは足りない。鋭さも足りない。

そう。その刃金を染める血が、まったく足りていなかった——…

「し——…?!?!?!」

気づけば、その妖刀を目の前の男に向かって振るっていた。

横薙ぎの一撃。狙いは首筋。当たっていれば、容易く首を刎ねていただろう。

その動きを途中で強引に静止できたのは、我ながら幸運だったとしか言いようがない。

い。

……もつとも、振り切っていたところでどうせ当たりはしなかつただろう。

「ほう、正気に戻ったか。しかし——…」

首を断つより先に、その劍士につかみ取られていたはずだ。

「やはり、生娘にはちと刺激が強すぎたか?」

「誰が生娘か?!」

慌てて鞘に叩き戻し、ついでにその勢いのまま叫び返す。

「何と恐ろしいものを……」

この時になつてようやくそれが妖刀だと気づいた。

血を吸えば吸うほど鋭くなり——それ故に人を狂わせる代物だと。

「いったいどここの馬鹿者だ。このようなものを生み出すとは」

手前を狂わせた妖気が、男の手に戻った途端に霧散する。

それは、その妖刀が男の武威に屈服し、使い手と認めている何よりの証拠だった。

目の前の光景に驚愕しながら、声を絞り出す。

「知らぬ。茎なかしにも銘が刻まれておらん故な」

「知らぬだと……?」

もはやあきれ返るばかりだった。

「うむ。故郷の社に祀られておったものだ。旅立ちの駄賃に頂戴してきた」

「封じられていたの間違いであろう」

「かもしれない」

「呵々——と。アーロンは暢気に笑って見せる。」

「だが、あのような場所で朽ちさせるには惜しい業物であろう？」

「それは否定せぬが……」

胸の高鳴りはまだ収まっていない。

だからこそ厄介だった。

「そのようなものをよく平然と扱えるな」

まあ、あの『一正体不明イレギュラー』と互角に斬り結べるなら、この程度は当然なのかもしれないが。

「己が刀に喰われる程度であれば、我が武は神域に至らぬであろうよ」

平然と言いつ放たれた言葉に、共感する部分があったと言えよ——それは、やはり嘘になるだろう。

血であろうが何であろうが、あるもの全てつき込まねば神の領域になど届かない。

それは、手前自身が口にした言葉でもあるのだから。

「——」

その言葉の体現を見せつけられ、思わず喉を鳴らしていた。

目の前の男は、あれほどの妖気を自らの意思で完全にねじ伏せているのだ。

この剣士の手にある限り、あの妖刀は稀代の名刀であり続けるだろう。

「どれ、娘。主の刀も見せてみよ。なかなかの業物と見た」

手酌で『ドワーフの火酒』を器に注ぎ、一息に呷ってからアールロンが言った。

「よいとも。正道の名刀を見せてやろう」

「ほう。それは大きく出たな」

気付け代わりとして、同じく酒を飲み干してから《紅時雨》を鞘ごと抜いて差し出したのだった。

……と、まあ。

概ねそのようなことがあったわけだ。

「……………」

ほう……と、やはり熱っぽい吐息を吐き出す。

今思い出してもあの妖刀は恐ろしい……が、しかし良いものを見せてもらったという思いもある。

あの妖刀だけであれば、むしろ創作意欲を掻き立てられるだけで済んだであろう。

だが……同じような刺激を重ねられるとなると、確かに少々強すぎたと言わざるを得

ない。

刺激が重なったのは『遠征』から戻った翌日——つまりは、昨日の事だった。

たつぷりと寝て、目覚め、適当に朝餉を済ませ、そろそろ炉に火でも入れて鍛冶を始めようかと準備を始めた頃。

「ほおう？　それで、もう一度言つてはくれんか？」

遠目にもガラの悪い狼ウエアウルフ人の小僧が訪ねてきたのは、ちょうどそんな時だった。

いつも悪態しかつかないその口元は若干引き攣り——それどころか、全体的にバツが悪そうにそこに突っ立っている。

明日はおそらく土砂降りの大雨が降るに違いない。

「だから、もう一度《フロスヴィルト》を打ってくれつつてんだよ」

「ああん？」

目の前の小僧——ベート・ローガのいう《銀靴》とは、無茶な注文の末に生まれた特殊兵装である。スベリオルズ

遠征直前に粉々に砕いて帰ってきて、ひいひい言いながら打ち直したばかりだった。

それをもう壊したというのか、この小僧は。

「……いや、今度は壊れてねえ。多分。だから、直せるってんならそれでいい」

「見せてみよ」

促すと、ベート・ローガは背負い袋からソレを取り出した。

確かに、基本的な造形は手前が打った銀靴のそれと同じだった。

だが——…

「これは何だ？」

それは、もはや銀靴とは言えない。

濡れたような黒。それを見た途端、背中が焼け付くような悪寒を感じた。

『深淵の主』つて奴の息吹……黒い炎を取り込んだらそうなった。それから戻らねえ」

「……………」

世俗に疎い自覚がある手前と言えど、流石に『深淵』という呪詛カウスは知っている。

それが頭上に広がっている間、ずっとダンジョンに籠っていたわけだし……その被害も目の当たりにしてもいる。

だから触れる際には、流石に多少の緊張を伴った。

「完全に変質してしまっているな」

それに、少したが重量も増えている。

じつとベート・ローガの全身を眺めてから、肩をすくめる。

増えた重量が、今の小僧の動きに悪い影響を及ぼすことはあるまい。それについて、特別な調整は不要だった。

次に構造的な問題について。こちらも物理的な破損や動きを阻害するような変形はどこにもない。

武器としては、まだ生きている。壊れていないというベート・ローガの言葉は概ね正しい。

だが、分かるのはそこまでだ。

もはや手前が打った銀靴とは別物になり果てている。

「直せそうか？」

首を振って、その言葉を否定した。

「無理だな。これはもう、手前の理解の外にある」

何をどうすればこのようなことになるのか。

確かに魔力を吸収する機構は組み込んだ。だが、永続するようなものではなかった。

「これが『深淵』か？」

「その影響だと、あの灰野郎は言ってやがったな」

ベート・ローガの言葉に腕を組み唸る。

(『深淵』とはモノを変質させる呪詛カクズなのか?)

魔剣を打つにあたって、多少は魔法に関する知識も得てはいる。

それに、一八階層で『変質』した冒険者と対峙したこともある。

しかし、この変質を説明するには、それではとても足りない。

何が足りないかは皆目見当がつかないが、モノを変質させる程度のものではないことは間違いあるまい。

それに……

(何だ、この感覚は……?)

背筋を焦がす悪寒ではない。

あの妖刀を見た時の感覚とも違う。

それは、そう……例えて言うなら郷愁に近い。

あるいは、天啓か。

その曖昧な感覚を無理に言語化するのであれば……

そう。これこそがかつて■■が生み出した武器に近い……

「……!」

「どうかしたか?」

いつになく気遣うような——何となくどことなくそこはかとなんかそんな風に見えるくもない顔でベート・ローガが声をかけてくる。

それで、白昼夢から覚めた。

掴みかけた……あるいはとり憑かれかけた何かはするりと手前の手から抜け落ちていき、二度と捕まえることはできそうにない。

安堵すべきか、それとも落胆すべきか。それすら分からないまま、嘆息する。

「仕方あるまい。また打ち直す。少し待て」

「ああ。ひとまずそいつの分の代金かねは払う。新しいやつのは……」

ドチャ——と、重い音がする布袋を近くの机に置く。

一括返済とは、『遠征』明けとはいえずいぶん羽振りがいい。

……いや、そういうえば例の『深淵』狩りに参加しているのだったか。その報酬も含まれているのだろうか。

「また借金ローンだな」

だが、もう一足となると全く足りない。

「すぐに返すから待ってろ」

「期待しよう」

冒険者相手に金を貸すのは馬鹿のすること——と、そんなことを言う輩もいるが。

しかし、それができずしてどうやって冒険者から鍛冶仕事を引き受けられようか。

「それで、コイツはどうすりゃいい?」

黒く染まった銀靴を見やり、ベート・ローガが訊ねてくる。

「うゝむ……」

流石に『深淵』絡みとなると、迂闊なこととはできまい。

順当に考えれば、ギルドに届けるのが妥当となる。

そうすれば、上手いこと処理してくれるだろう。……多分、きつと。

ただ、先ほどつかみ損ねた『何か』が気になっっているのも事実。

もはや影も形もないが、それでもこの胸をざわめかせていた。

その手掛かりになるのは、やはりこの変容した銀靴であろう。

となると、手放すのも惜しい。

「ひとまず手前が預かっておく。それでよいか？」

そもそも話として、所有権はベート・ローガにある。

彼が手放すことに同意しない限りは、手前も自由には扱えない。

「いらんというなら、このまま下取りするが……」

もつとも、値のつけ方も分らんが。

「とりあえず預かっつけ。で、何でそうなったかとか原因の『深淵』について何か分かったら教えろ」

「ふむ……」

無茶と言えば無茶苦茶だ……が、妥当な話であるように思えた。

「分かった」

しばし考えてから頷く。

「『正体不明イレギュラー』」の説明を聞く限り、手前どもも無関係ではいられない。

探っておいて損はない。……まあ、この銀靴に眠る『呪い』が目覚めないよう加減は必要だろうが。

「とはいえ、手前は魔導師^{メイジ}ではない。保証はせぬぞ?」

「構わねえよ。何か分かりや儲けモンつただけだ」

それだけ言い残すと、ベート・ローガはさつきと工房から出て行つた。

「ふむ……。ひとまず主神様に相談すべきか。いや、しかしなあ……」

その背を見送つてから、一人になった工房で三度唸る。

ぬらりと黒く濡れた銀靴——今となつては黒靴か——は、ただ妖しげな気配だけを漂わせていた。

……

「……やはり、あまり良いものではないのだろうかなあ」

水を吸い、重くなつた前髪を手櫛でかきあげる。

もつとも、あの惨状を見て『深淵』を良いものとする考える輩がいれば、それこそ狂つていると言うよりないが。

しかし、だからこそ恐ろしい。

良くないものと分かつていて、それでも魅入られそうになる。

短時間で目の当たりにした二つの『魔性』。

それらに、手前自身の業が共鳴してしまっている。

今の手前が武器を打てば、それはあれらと同じ代物になり果てるだろう。

そうならぬよう、こうして水垢離をし、邪念を洗い流しているわけだが。

「もう少し、時間がかかりそうだのう」

まったく、早く創作に移りたいというのに。

未だ未熟な己に毒づいてから、再び白刃を——そこに移る己を観る。

邪念なき境地に戻ることに。それが、今日一番の大仕事となるだろう。

……

鍛冶師が水垢離を再開したちようどその頃。

ダンジョン……いや、大地から少し離れた海原で。

正確にはそこを走る一隻の帆船にて。

「やあ、お嬢様方。明日にはメレンにつくぞ」

甲板に出ると、陽気な水夫が忙しく動きながらも声をかけてきた。

「そうか」

忙しくしているのは、入港が近いからだろう。

目を凝らせば、水平線の向こう側に久方ぶりの大地が見える。

「もうじきつきますね、ルカ」

傍らに立つ緑衣の娘が小さく呟いた。

「ああ。そうだな」

まだ遠目にも見えぬその大地——いや、そこに口を開ける『大穴』こそが、新たな巡礼地である。

私達をこの地に導いた火防女も、そしてあの古き竜もそのように言っていた。

そこが巡礼地であり——

「あの方は、息災でしようか」

「心配することはない。あの男がそう簡単に膝を屈するものか」

得体のしれない仮面の人物にも、無警戒に声をかけてきたあの男を思い浮かべる。

暢気というか何というか……。

消えぬ呪いと消えゆく己に絶望し、人を避けていた私とは随意と異なるその在り方は

今でも記憶に焼き付いている。

だからこそ、だろう。

妙に気にかけてしまったのは。

「どうせまた女の尻でも追いかけているだろう」

「ええ。強敵が揃っているようですね？ ルカ」

「それはお前にとつてもだろう、シヤナ」

お互いに、つくづくロクでもない男に引つかかってしまった。

何が楽しいのかクスクス笑う緑衣の娘——シヤナロットを横目に、小さくため息をつく。

そのつもりだった。

だが、本当に零れたのは、苦笑だったかもしれない。あるいはただの笑い声だろうか。「オラリオ、か。……私の剣が通じる場所であればいいのだがな」

風は良好。波は静か。空は青く、海も青い。

初めてこの『時代』に來た時は我が目を疑った美しい景色は、今も何も変わっていない。

永遠に続くように思える水平線を眺めながら、軽く腰の剣に手を触れる。

私があつた男に捧げられる最たるものは、やはりそれしかない。

そして、どうせあつた男の事だ。それが必要な状況に、自分から首を突っ込んでいる事だろう。

ならば、私とて少しは役に立てるはずだ。

「ええ。頼りにしています、ルカ」

緑衣の娘は、潮風にいつかのように潮風に衣を揺らす。

だが、あの時と違い今は微かにそれでも確かに微笑んでいるのだった。

…

海から遠く離れ、しかし同じように青く澄んだ空と、眩い太陽に抱かれたその場所で。

「ああ、それにしても。何もかもが懐かしいな」

篝火に——末の妹に導かれ、たどり着いたのはどこかの山間だった。

むせかえるほどの木々の匂い。水のせせらぎ。

何より、どこまでも続く木漏れ日。

遠い昔に確かにあり、そして『最初の火』の陰りとともに失われた光景がそこに広がっていた。

「ええ。……よくやったな、馬鹿弟子め」

もう二度とは見れぬと思っていたその眩しさに、目が眩んだのだろう。

不意に滲んだ視界を閉ざし、震える胸から吐息をゆつくりと吐き出す。

「お主は大事なかい？」

「え、ええ。……まだ、少しだけ圧倒されています」

恥じ入るように、聖女などと呼ばれていたその娘は眩いた。

「これが『闇の時代』、なのですか？」

「さて、どうだろうな。そうだともいえるし、そうではないともいえる」

姉が空を見上げながら、娘の問いかけに応じる。

『最初の火』は、確かに消えているようだ。だが、どうやら我らが末裔もなかなかしぶといらしい」

いくらかおかしな気配がする——と、姉が呟く。

確かにその通りだった。

「しかし、二人とも思ったより傍にいて良かった」

空から視線を戻し、姉がやれやれと首を振る。

「ええ、そうですね」

流石に『時代』の断絶すら飛び越えての転送は不安定すぎたらしい。

目が覚めた時は一人きりで、流石に少々焦ったものだ。

(呪術師の開祖とはまだ名乗っていられそうだな)

手に『火』を灯して、小さく安堵の息を吐く。

幸いにして呪術の制御は問題ない。予想に反して、威力の衰えも感じない。

もつとも、それを言えば襲ってきた異形——モンスターとやらも大したものではなかったが。

「あのお方も、近くにいるといいのですが……」

「うむ……。この『時代』ではなおさら人目につかぬ方がよいか」

何しろあの方は『半竜』だ。

いや、あの方を先ほどの異形どもと同列に考えるなど不敬なのだが……しかし、それを今の人間に求めるのもまた愚かなことだった。

それどころか、末裔たちですら忘れている可能性が高い。

「あちらから竜の気配がする。あの方よりは随分と荒々しいが……まずはそちらに向かうでしょう」

言うが早い、姉はいつものように迷いなく歩き始めた。

その背を追って歩く。ただそれだけのことが、今は何故か酷く懐かしい。

それすらあの日、母や姉妹が『炎』に消えてからは二度と望めぬと思っていたのだ。

(我ながら、欲深いことだ)

まだ、求めてしまう。

これでは、まだ足りないのだ。

妹が傍にいないこと。それももちろんの話だ。

そして、あの世話のかかる……そして、誰よりも世話をかけてしまったあの馬鹿弟子が傍にいない。

「
」
心臓が跳ねる。

見て見ぬふりをしていた不安を、急に思い出してしまった。

恨んではないだろうか。憎んではないだろうか。

オラリオが近づくほどに、足がすくむ。

ああ、まったく……

(浅ましいな)

あんなものに巻き込んだのだ。

ならば神まじよのひとりである私が恨まれたとしても、仕方がないというのに。

「どうした、クラーナ」

姉の言葉に、自分の足が止まっていたことに気付く。

「心配するな、大丈夫だ」

姉として同じ不安を抱えているはずだ。

だが、それでも姉は笑って手を差し伸べる。

「そんな顔をしていたら、それこそあ奴が心配するぞ？」

師ならば今まで通り胸を張っている——と。

「ええ。……そうしましょう」

姉の言葉に従い、その手を借りずに歩き出す。

彷徨うのもう辞めだ。

胸を張ってあの馬鹿弟子と再会しよう思うなら、それくらいのこととはしなくてはならないだろう。

……

姫様と再会した翌朝……いや、どちらかというともう昼に近いが。

「あの坊やたちから連絡があつたよ」

遅い朝飯を食っていると、隣に——と、行つても机の上のだが——座つたアイシヤが言つた。

いやまあ、実際には朝食というには少々遅い時間だが。

食堂にいるのはアイシヤだけ。

姫様たちは一度自宅に戻っている。

霞は俺達が始めてくる前に朝食を済ませて眠りについてた。

『私はもう少し寝るわ。流石に今日は休めないし』

そんな伝言が食卓に残っていた。

もつとも、アルドラの店は半ば趣味でやっているものなので、労働規約もさほど厳しくはないらしいが。

ちなみに、カルラもまだ寝ている。

……まあ、色々と疲れているだろうし、しばらくそつとしておこう。

「ベル……いや、アンジェが来ていたのか？」

ベルも一度はこの館に連れてきている。

だが、あの時は死にかけていたし、帰るときは半ば眠りこけていた。道を覚えているということはあり得ないだろう。

「ああ。明日の昼頃に、だつてさ」

「そうか」

アイシヤの言葉に頷く……が、気乗りしないというのが本音だった。

とはいえ、これ以上先送りにもできない。

胃に重いものが詰まったような感覚。

まるで生者のようだな——と、自嘲しながら食いちぎったトーストを珈琲で流し込む。

もちろん、今さら俺にそんなものは必要ないのだが。

「つまり、今日一日は暇つてわけだ」

テーブルに座るアイシヤが、すらりとしたその美脚を組みなおす。

「まあ、そうなるな」

シャクティかフェルズがまた面倒事でも持ち込んでこない限り、特にやることはない。
い。

怠惰に過ごしても、誰に文句を言われることはないはずだ。

自分で適当に焼いた——オラリオで目覚めてすぐ、霞のおかげで思い出した——エツグトーストをもそもそと齧りながら頷く。

「なら、好都合だ」

ことさらに胸元を強調するようにして、彼女が体をこちらに倒してくる。

俺も座っているの、ちやうど視線が胸の谷間辺りにある。

ついそこに視線が向いてしまうのは仕方がないことで……何より、アイシャの狙い通りだろう。

何とかその狙いを崩そうと、視線を引きはがそうとする——が、それすら彼女の掌だったらしい。

くい、と顎をその指先が持ち上げる。

紫水晶アメシストのような瞳に見つめられ、体の血に熱がこもる。

「なら、ちよつと付きあいな」

蠱惑的な囁きが鼓膜を弄った。

一つ一つの仕草が、男の性を刺激する。

「あ、ああ」

熱に驚されたように曖昧に頷く。反論するという発想がまず思い浮かばなかった。それを見届けて、彼女が満足そうに唇に笑みを宿した。

「よし、じゃあ行くよ」

するりと、こちらの間合いから抜け出して——というか、立ち上がり彼女が食堂を出ていく。

「行くつてどこに?」

「ダンジョンに決まってるだろう?」

「あ……」

納得した。

つまり、アイシヤはランクアップした自分の力を試しに行きたいのだ。

そして、そのお供をせよと仰られているのである。

からかわれていたことを理解して、体から力が——あるいは熱が——抜ける。

「こんな朝っぱらから何を期待してたんだい、ご主人様?」

昨日もカルラと散々愉しんだ癖に——と、大笑いするアイシヤに天を仰ぐ。

まったく、男を手玉に取るのが上手いにも程がある。

それとも、俺が単純なだけだろうか。

(つたく、どこがご主人様なんだか)

内心で毒づく……が、だからと言って、当然ながら返す言葉など何も思いつきはしない。

「降参だよ、女王様」

トーストの最後の一欠けを口に放り込んでからアイシャの背を追って歩き出すのだった。

……と。

彼らの一日は概ねそのようにして始まりを迎えたのだった。

2

すっかり平穩を取り戻した一八階層。

「シッ——！」

木漏れ日を浴びながら、手にした槍を振るう。

基本に忠実に。

型を——自分の体の動きを一つ一つ確認するように丁寧に。

ひたすら愚直にそれを繰り返す。

もつとも基礎的な訓練だが……しかし、奥義とは基礎にこそ宿るものだ。

「フ——…」

それからさらに繰り返すこと数回。

神へファイストスの元を辞し、この階層に到着してから初めて動きを止める。

汗の伝う体。その火照りを吐き出すようにして整息する。

上着——バトルクロス橙色の戦闘衣——を脱いでおいたのは正解だった。

(やはり、そう簡単には手に馴染まないか)

改めてその槍を——《竜狩りの槍》を見つめる。

ゴライアスとの戦いの時ほど露骨に値踏みをされているような気配はない。

だが、それでもまだ手には馴染まなかった。

(水場にでも行くか)

喉の渴きを覚えていた。

ついでに水浴びでもして、心身共にさっぱりするのも悪くはあるまい。

バトルクロス戦闘衣を掴むと、近くの滝に向けて歩き出す。

この辺りは私達の庭——と、いう訳でもないが。

別に決まっているわけでもないが……私達が鍛錬をする際にはこの辺りを使用する

ことが多い。

そこそこの広さがあり、その分だけモンスターの奇襲を受けにくく、そして水場も近

い。

遠征時の大規模パーティで使用するには少々狭いが、鍛錬や金策を主目的とした小遠征程度なら野営地にも使える。

一七階層と一九階層双方の連結路から少々離れているのが玉に瑕だが、そのお陰で同業者と場所の取り合いになることも少ないのも好条件と言えよう。

と、言っても。もちろん、独占しているわけでもなければ、仕切りや目印があるわけでもない。

私達にとって便利ということは、他の冒険者達にとつても便利ということだ。

先客がいたところで、驚くには値しないが……

「樁？」

それが顔見知りで、しかも朝方世話になった派閥の団長となると少々話が変わる。

しかも……

(いくら何でも無防備すぎないか?)

さらしも巻かずに水浴び——いや、滝行か——しているとみると、なおさらに。

加えて、相変わらずの集中力だ。

水音を差し引いても、私が近づいていることに全く気付いてない。

……もつとも、彼女もLv. 5だ。生半可な悪漢では襲おうとしたところで返り討ち

だろうが。

目の前に武器を突き立てているわけだし。

「仕方がない……」

いずれにせよ、このまま見て見ぬふりをするとするのは妙に後ろめたい。

いや、もちろん滝行も理由があつてしている事だとは思うが。

とはいえ、声をかけるのにも相応の危険を伴う。

何しろ、目の前に武器がある。

ということとは、下手をするとそのまま斬りかかられないという意味だ。

「おい、樁。樁！ 聞こえているか?！」

声をかけながら慎重に傍まで近づき、肩を揺さぶろうとした瞬間。

「——ッ！ ……おお、何だ【象神の杖】アଙ୍କクレーシヤではないか」

私の手が肩に届くより早く、樁の手が武器に届いた。

伸ばしかけた手を引き戻し、防御を固め……

「ああ。踏み止まってくれて何よりだ」

岩から引き抜かれた白刃が振るわれる直前、樁はこちらを認識してくれたらしい。

「手前に何か用か?」

構えていた刃を下げながら、何事もなかったように樁が言う。

「用という訳ではないが……少々不用心すぎると思つてな。滝行ならさらしくらいは巻いておけ」

もつとも、不用心と言えば一人で水浴びすること自体が不用心と言つてもいいが。

「はははっ！ 実は替えを忘れてしまつてな！」

今さら濡れたままでも風邪などひかないだろうに。

などと、そんな呻きは快活な笑い声を前にすれば言葉にもならない。

「ぬお!？」

「な、なんだ？」

全裸でなかったただけマシか——と、自分を納得させていると、椿がその隻眼を見開いた。

「その槍は何だ?!」

失敗したかもしれない。

椿には悪いが、思わず内心で呻いていた。

とはいえ、今さら誤魔化しようがない。あるのであれば、失敗したなどと思う必要もないのだから。

「いや、これはだな……」

ガネーシャからも神へファイストスからも、これが神創武器であることは黙っておく

よう言われている。

言われるまでもなく、取り扱いに慎重さが求められるのは分かっていた。

しかし、だ。

この最上級鍛冶師を相手に誤魔化せるような真似ができるかどうかは別問題だった。

「まさか、神創武器をこの目で見れる日が来るとは……！」

そして、結局誤魔化すことができなかつたわけだが。

「頼むから他言無用だぞ」

いつそ懇願するような気分で呻く。

「分かっている。ましてあの『正体不明』イレギュラー絡みではなあ……」

何しろ、あいつは本物の『神殺し』だ。

そんなクオンが神創武器を持っているというのは、どう考えてもロクな発想に繋がらない。

「それにしても、『象神の杖』アングクシーヤ。お主、それを主神様に見せたといったな？」

「ああ。だから、神創武器ということとは間違いない」

「いや、そうではなく」

珍しいことに、少し言いづらそうにしてから椿は言った。

「こう言つては何だが、それはお主にとつてもまだ過ぎた武器であろう？　よく主神様

がそれを使うことを許したな」

いやまあ、確かに主神様が打ったものではないと言われればそれまでだが——と、椿が付け足す。

「私に過ぎた武器かは、この槍自身が見極めるそうだな」

「ほう？」

愉快そうに、椿が目を細める。

「流石は神々の武器。使い手も自ら選ぶか。なるほど、それでは主神様とて出る幕がないな——」

「お前も試してみるか？」

「折角だがやめておこう。それはいつか手前が自ら作り出すものだからな」

だが、善いものを見せてもらった——と、椿は子供のように無邪気に笑ってから。

「無論、詳しく見てみたいのは山々だが……しかし、今はまだ己の力だけでその高みを目指してきたいのだ」

まるでこの槍に誓うかのように、いつになく真剣な顔でそう告げてから。

「手前が持つものであれば、手に入れられるものであれば、あらゆるものを注ぎ込もう。だが、答えを盗み見ることはでは良しとせん」

もつとも、手前の隻眼ではその答えすら読み取れぬかもしれんがな——と、最後に椿

は快活に笑った。

……

ちようどその頃、とある館にて。

「まったく！ 信じらんない。自分だけ食べてどっか行くなんで！」

あの薄情者は、カルラさんの分を用意せず——あまつさえ、食べた皿をそのままにして——アイシャとどこかに出かけたらしい。

……まあ、その皿のおかげでカルラさんがまだ朝食を食べていないことに気付いたのだけだ。

「気にすることはない。寝過ぎしたのは私だからな」

もつとも、アイツと同じで食事は必ずしも必要なものではないのかもしれないけれど。ど。

ちよこんと椅子に座り、申し訳なさそうにしているカルラさんを横目に見ながら、内心で呟く。

「それも半分はアイツのせいでしょ？」

「それは、まあ……」

視線を逸らしながら、気恥ずかしそうに体を揺らしてから、

「それより、すまないな。仕事前だというのに、起こしてしまったようだ」

咳払いをしてから、そんなことを言った。

「気にしないで。どうせあの馬鹿に気づかないを期待するだけ無駄だし」

コポコポと音を立てるドリッブケトルを持ち上げ、ドリッパーにお湯を注ぐ。挽きたての珈琲の香りが鼻腔をくすぐった。

マスターに教わったものだけど、我ながら結構様になってきたと思う。

その頃には、トースターも焼きあがった。あと、ベーコンエッグも。

せっかくなので全て二人分用意してある。

「いただきます」

サク、サクとトーストを齧る音が重なる。

静かな午後の食堂を彩るのはマスターおススメの珈琲の香り。

ちなみに、パンもマスターおススメのお店の人気商品だった。

酒場を切り盛りしているだけあるのか、料理も得意だし、美味しいものにも詳しい。

「ねえ、カルラさん」

ささやかながらも満たされた午後のひと時。

どこか気だるいくらいの心地よさに任せて、質問した。

「何だ？」

「オラリオに来る前の、アイツのことを教えてくれる？」

「明日の昼には、彼らを交えてするそうだが……」

確かにそういう伝言がテーブルの上に置きっぱなしになっていたけど。

「そうじゃなくて、もうちよつとこう……戦つたりしていい時のこと。少しくらいはあるでしょう?」

「それは、まるでない訳でもないが……」

「どんな感じだったの?」

「変わり者だったよ。得体のしれない異形を迷わず牢から連れ出す程度にはな」

「それは前も聞いたけど……。うん、その辺は今と変わらないのね……」

行きずりの女の復讐に、ロクに事情も聞かないまま付き合ってくれるような奴だし。

「そういう貴公は、あの馬鹿弟子とどうやって出会ったんだ?」

「第五地区の路地裏で、ゴロツキどもに絡まれてる時にふらつと近づいてきて……」

もしかして、そいつら追っ払ったら、いくつか質問させてもらえたりするか?——なんて、そんなことを言ったのだ。

で、藁にも縋る思いで領いたら、あつという間に全員叩き伏せてくれた。

「L v. 2も混じってただけどね……」

まあ、今思えばだからどうしたって話だけど。

何しろL v. 7とだつて直角以上に斬りあえる奴だし。

「でも、アイツだったらすっかり自分のことは忘れちゃつてて……。それこそ自分の名前すら思い出せなかったのよ？」

フィフスという偽名は、もう私くらいしか覚えていないだろうけど。

そういうえば、名前と言えば……

「そうそう。ルカティエルっていう人は知っている？」

「何？」

「出会った時に、アイツが覚えていた自分じゃない誰かの名前。まあ、自分の名前を思い出す頃には、アナタたちの名前も思い出していただけ」

というか、自分の名前を思い出す前から私やそのルカティエルさん以外の名前を夢現に呼んでいた気がするけど。

「なるほど。……律義な奴め」

「あ、やっぱり知っているんだ？」

「ああ。あの馬鹿弟子に、名前を……。自分を覚えておいて欲しいと、そう願ひ託した女騎士の名前だよ」

それを今でも律義に守っているという訳さ——と、カルラさんは小さく笑ってから、珈琲に口をつける。

「女騎士、ねえ……」

「そういえば。女騎士という響きは男を狂わせると、誰かが言っていたような……。」

「その人も、『闇の子』なの？ それとも、不死人？」

「不死人だと聞いているよ。人間性の限界が……自分を保っていられなくなっていた時の話らしい」

「そう……。本当に、変なところで真面目な奴よね」

死を超えるごとに、『人間性』——自分というものが擦り減っていくのだと。

アイツはそう言っていた。

なら、多分。その人も同じだったんだと思う。

「それで、その人はどうなったの？」

「何とか立て直したとは聞いている。……そのために、あいつは随分と大冒険をしたよ
うだがな」

「そういう奴よね、アイツは」

珈琲に口をつけてから、訊ねる。

「じゃあ、近いうちに会えるのかしら？」

「かもしれないな。まあ、貴公にとっては強敵という事さ」

「アナタにとっても、でしょう？」

「違ういな」

まあ、こんな話を笑いながらしている私達も——例えばシャクティやナーザーザが言うように——変わり者なんだろうけど。

(やれやれ、我ながら本当に変な男に引つかかっちゃったわねー)

それも悪くないかと思っている辺り、本当に。

……

「おめでどう、ヴェルフ。ランクアップよ。もちろん、『鍛冶』のアビリティも発現したわ」

「っしやあー！」

よく頑張ったわね——と、ヘファイストス様の言葉に、歓喜の声を堪えることができなかつた。

何しろ、これでようやく上級鍛冶師ハイスマスの仲間入り。

つまり、やっとスタート地点に立てたのだから。

「ところでヴェルフ」

さつそく試しに剣を打ちたくなつた俺に、ヘファイストス様が言った。

「明日、あなたも出席するのかしら？」

何に——と、あえて問いかける必要はなかつた。

あの「イレギュラー正体不明」の『身の上話』を聞きに行くかどうかだ。

「もちろん、行きますよ」

興奮に任せての無責任な答えではない。

昨日一日しっかりと考えた末の結論だ。

「こうして無事にランクアップできたのはベル達のおかげだ。それに、あいつとは専属契約も結んでいる。もちろん、話を聞いた後、あいつがどうするかは分かりませんが……」

あの少年は、おそらく止まらないだろうと思う。

明日聞く話には、あの『深淵』の他に、モンスターファイアで暴れたというデーモンとか言う怪物や、『メレンの悪夢』とやらで暴れた『闇霊』とかいう連中も絡んでくる。

どれか一つでも、オラリオに——あるいは世界に——とって未曾有の危機で……それなら、あの少年は逃げ出したりはしないだろう。

「あいつがこれからどんな冒険をするのか。それが分からないんじや、満足のいく武器も鎧も打てやしない」

生半可なものでは、役に立たない。

それだけは今の俺にも分かっている。

だから、ここで聞かないなんて選択肢は絶対にありえなかった。

俺の言葉にそう、とヘファイストス様は小さく頷いてから、

「それなら、覚悟しておきなさい。彼の話は、ベル・クラネルだけではなくあなた自身の運命も変えることになるかもしれないわよ？」

「それでもです。それに——」

俺の運命なんてもう決まっている。

「それに、何が起ころうが、俺がやることは貴方に認められる武器を打つ。それだけです」

そう。ただそれだけのことだった。

……

そして、今日も夜が来る。

「チツ、やつぱりまだズレたままだね」

あれからずっと一日かけて『中層』でミノタウロスどもを追い回したのだがアイシャはそれでも満足いかなかったらしい。

「そういうもんなのか？」

ランクアップ後のズレ、という感覚は俺には分からないが……それだけ急激な変化が起ころうということなのだろう。

「もう少し早く出かければ良かったねえ」

「あく……。でも、お互いに朝は遅いしな」

ベルなんかはそれこそ夜明けくらいには動き出しているわけだが。

一方で俺達とは言えば、基本的に朝は遅い。

アイシャは言うに及ばず、霞もどちらかと言えば夜型の仕事だ。それを言えば賭博剣闘も朝っぱらからやるようなことじゃない。

だから、俺達が昼頃動き出して真夜中過ぎに寝る——という生活になるのはむしろ必然だろう。

まあ、俺自身は別に睡眠など必要もない。

だから、ベルの生活についていくために特別苦勞することはないが。

「ま、明日話が終わったらまた付き合おうさ」

結構な確率で俺も暴れたい気分になっているような気がする。

「そんな時間がありやいいけどね」

そんなやり取りを交わしながら、そろそろ住み慣れた館に向かう。

彼らの一日は、概ねこのようにして終わりを迎えるのだった。

……

「イシユタルがおらんとはこういうことじゃああああああつ?!」

ちようどそんな時、メレンの街のどこかでそんな叫び声が聞こえたそうだが……。

少なくとも、今の彼らには何の関係のない話だった。

3

朝と昼の境目くらい。

そんな日差しを浴びながら歩くオラリオの街は、何だか妙に新鮮だった。

……まあ、この時間だったらいつもは大体ダンジョンにいるせいかもしれない。

「いやー…。シャクティ君がバイトのおばちゃんにも話を通して助かったよ。おかげで安心して休める」

隣を歩く神様が青空に向かって大きく伸びをしてから言った。

「ま、まあ、この前の事情説明ですし」

そう。表向きは例のアルミラージ深淵種についての事情説明だった。

実際にはそれはもう終わっている。

というか、ダンジョンにいる間にクオンさんにもシャクティさんにも話している。

ただ、それを名目に僕達は「ガネーシャ・ファミリア」に『協力要請』を受けているのだ。

……もちろん、本当の目的はクオンさんの話を聞くことなんだけど。

「ここ、いいのかな？」

「はい。地図を見る限り、この『詰め所』かと」

神様の言葉に、アンジエさんが静かに頷く。

今日は鎧姿ではなく、私服姿だった。……まあ、僕もそうなんだけど。

「それにしても、こんな支部を持つてる辺り、本当に『オラリオの憲兵』なんだなあ……。ガネーシヤの眷族達^{こと}つて」

そんな僕らが見上げているのは「ガネーシヤ・ファミリア」の支部だった。

今さら言うまでもないことだけど、オラリオは大きな都市だ。

何かあつた時、いちいち本拠^{ホーム}から出発していたのではいくら冒険者でも時間がかかる。

それに、何かあつたと伝えに行く側もギルドや本拠^{ホーム}まで行くのは大変だ。

だから、こういう支部——『詰め所』が都市の何ヶ所かにあるらしい。

「……まあ、ヘファイストスのトコだつてお店と鍛冶場^{ホム}は別だし。それと同じようなものかな」

しばらくその支部を見上げてから、納得したように神様が呟いた。

なるほど。「ヘファイストス・ファミリア」でいう支店だと思えば、少しは緊張しなくて済むような……

「うう……。ついにリリもここのお世話になるのですね」

さめざめと——結構本気で——泣き始めるリリを隣に感じながら、何とか自分に言い

聞かせる。

「いや、大丈夫だから!? 落ち着くんだサ……ええと、ミニエルフ君!」

急に泣き出したリリに、神様までが叫んだ。

ちなみに、だけど。

リリの設定は僕らが道中で保護した迷子——ちなみにエルフの女の子——だったりする。

なので、リリが心配するようなことは何も無い。……と、思う。

「じゃ、じゃあ入りましょうか。神様、それに、リ……ええと、アンジエさん達も」

とはいえ、僕自身も妙に威圧感というか緊張感を感じてしまっている。

うっかりリリの名前を呼びそうになるくらいに。

そんな調子で、主にリリと二人でおっかなびつくり入ると……中は意外と人であふれていた。

「何だか、ギルドみたいですね」

ギルドのようにカウンター越しに「ガネーシャ・ファミリア」の団員と、他の人たちがやり取りを交わしている。

何となく耳を澄ますと、落とし物の相談とか道に迷ったとか、そういう話が多かった。何となく慣れた雰囲気、感じていた威圧感が消えていく。

少し余裕ができて、周りを見回すと——…

「ええ、シャクティ・ヴァルマは今こちらの詰め所におります。少々お待ちください」
カウンター越しに団員とやり取りを交わす、赤い髪の見慣れた姿を見つけた。

「ヴェルフ！」

「ヘファイストス！」

神様と叫び声が重なった。

「よ、ベル。それにヘステイア様達も。何か久しぶりだな」

「あなたたちも今来たところなの、ヘステイア」

数日振り——と、言っても実際に会わなかったのは昨日だけなんだけど。

一八階層から戻るまでの一週間はずっと一緒だったからか、何だか凄く久しぶりにあつた気がする。

「神ヘファイストス、お待たせしました……ああ、神ヘステイアもご一緒でしたか。それに、ベル・クラネル達も」

再会を喜んでいると、シャクティさんが降りてきた。

「は、はい！ お世話になります！」

「そう緊張するな。別に取って食つたりはしない」

シャクティさんは苦笑してから、僕達を先導して歩き出す。

「結構広いんですね……」

外からだとよく分からなかったけど、中に入るとかなり広い。

それこそそこらの宿よりも広いだろう。

「ああ。ここは拘置所や取調室もあるからな。……それにここは【ガネーシャ・ファミリア】設立当初の本拠^{ホーム}だった」

「設立当初でこんなに大きな本拠^{ホーム}だったのかい?!」

シヤクテイさんの言葉に、神様が驚愕する。

……うん、まあ、確かに。僕らの廃教会^{ホーム}なんて比べ物にならないわけだけど。

「なあに? 何か不満なわけ?」

「い、いや。そんなことはないよ、へファイストス!」

その教会を幹旋してくれたへファイストス様が大げさに神様に問いかける。

一見する喧嘩でもしているようなやり取りだけど、漂う空気はどこか温かい。

本当に仲が良いんだなあ、なんて。何だかちよつと羨ましさすら感じてしまうくらいには。

……まあ、でも。神様が慌てているのも本当だと思うけど。

ちなみに、今の広さになったのは拡張を繰り返したかららしい。

所々変わった間取りになっているのはそのせいだとか。

……まあ、それがどこの事かは僕にはよく分からないんだけど。

「来たか、ベル。お前達の方が遅いとは思わなかったな」

案内された部屋ではすでにクオンさんが待っていた。

他にクオンさんの近くにはアイシヤさんと霞さん。

テーブルから一番遠い場所にはカルラさんも静かに座っていた。

「す、すみません」

リリやヴェルフと合流し、少しだけ緩んでいた緊張感が蘇ってくる。

そんな僕を他所に、クオンさんはヘファイストス様に声をかけていた。

「いや、気にするな。約束の時間よりはまだ少し早い。……それより、まさかお前が来るとはな。こういうのには興味がないと思っていた」

「おあいにく様。私も神の一柱よ。未知に興味を示さないわけがないでしょう。それに、あんなものを見せられちゃね」

ヘファイストス様の視線は、シャクテイさんが持っている槍——確か、あの黒いゴライアス戦で使っていたもの——に向けられている。

「……まあ、ミアハまで来るしな。今さらと言えば今さらか」

「当然でしょ。ずっとお世話になってるもの。いい加減話しなさいって」
どうやら、ミアハ様は霞さんが誘ったらしい。

でも、今のところミアハ様の姿は見えないんだけど……。

部屋の中を見回して、首を傾げる。

部屋は広いけど、物は少ない。

中央にはテーブル。その三方を囲うようにソファが置かれている。

多分、元々この部屋にあったのはそれだけだろう。

霞さん達が座っている椅子は、どこか別の部屋から持ち込まれたものだと思う。

少なくとも、長身のミアハ様の姿を隠すようなものはない。

ともあれ、僕たちも空いているソファに腰を下ろす。

クオンさんの真正面に位置するソファに、僕を真ん中に神様とリリが座った。

僕から見て右側にヴェルフとヘファイストス様が座る。

アンジェさんは、神様のすぐ横に立っている。シャクティさんはソファを挟んでアン

ジェさんの反対側に立っている。

「すまん。遅くなった」

と、ちょうどそこで扉が開き、ミアハ様が入ってきた。

正確にはもう一人。その後ろに小柄な人影がある。

続いて入ってきたのは、銀色の髪に透けるような白い肌。華奢な体の綺麗な女の人で

……

「あー!!」

神様と霞さんの声が重なった。

それぞれ立ち上がり、ビシツと指を突き付けて叫ぶ。

「アナタはこの前の借金取り!」

「君はこの前の借金取り君じゃないか!」

「ご、誤解です! いえ、確かに誤解とも言い切れないのですが……!」

その人はその人で、ふたりの叫び声に大分衝撃ショックを受けたようだった。

すぐに否定して——でも、否定しきれないことに気付いたのか、さらに落ち込んでく。

「いえ、違いますよ、お二人とも!」

「そ、そうですよ! ええと、確かこの人は……」

「確かに二人が言う通りミアハ様のお店に来た借金取りなんだけど……その後も会っている。」

あのミノタウロスとの戦いの後、お世話になった筈だ。

その時は意識が朦朧としていたのであんまりはつきりと覚えてないんだけど、確か——
……

「これこれ、ヘステイア。それに、霞も。アミッドを責めるな。あれは滞納した私にも非

があるのだから」

そう。アミッド・テアサナーレさんだ。

所属は「ディアンケヒト・ファミリア」で、オラリオ最高の治療師ヒールだって、確かエィナさんとリリが言っていたような……。

「お久しぶりです、クオンさん。私を覚えていらつしやいますか？」

「ああ。確か『カドモスの泉水』をまとめて売りさばいたところの店員だろ」

え？——と、思わず眩きそうになった。

いや、だって。あの『泉水』をまとめて買い取れるって……

（大手の派閥ってやつぱり凄いなんだなあ）

ひよつとしてヴェルフ達「ヘファイストス・ファミリア」も似たようなことができるのだろうか。

恐れ戦きながら、ついついそんなことを考えてしまった。

「ええ。……お役に立てなかつたようで無念です」

「いや、向こうが交渉を蹴つただけだ。お前が気にすることはないだろ」

ひよつとして、「イシュタル・ファミリア」との抗争の時の話だろうか。

身請けつていうのが何なのかはよく分からなかつたけど……お金がかかるんだってことだけは何となくわかつたし。

「では、改めて紹介しよう」

咳払いをしてから、ミアハ様が言った。

「彼女はアミッド・テアサナーレという。デイアンのところの……【デイアンケヒト・フアミリア】に所属する治療師だ」

「二つ名は【戦場の聖女】。今のオラリオで最高の治療師となる。今回の『深淵』禍においても対応を依頼してあった」

そういつて補足したのはシャクテイさんだった。

「なるほど、な。そいつはご愁傷様」

やれやれ、とクオンさんが肩をすくめた。

「何でその子を手を連れてきたかよく分かった」

「話が早くて助かる」

ミアハ様の言葉に、もう一度クオンさんは肩をすくめてから、

「まあ、いいか。もったいぶるものでもなし、全員揃ったならさっさと始めよう」

ミアハ様とアミッドさんが残りのソファに座ると同時、いつも通りの口調で、あっさりと言った。

ドクン——と、心臓が爆ぜる。

「それで、何が訊きたいんだ？」

その問いかけに、とつさに答えを返せなかつた。

聞きたいことは色々あつた筈なんだけど……。

「よし、じゃあ訊くぞ。君は一体何なんだ？ 何を知っている？」

「――」

神様の問いかけに、クオンさんは真剣な顔をして、

「前略中略後略。以上、解散」

「こらあああああつ！ 全部略されてるじゃないかあああああつ！！」

「ならふわつとした訊き方してくるな！ 的を絞れ！ 的を！！」

立ちあがつて叫ぶ神様に、クオンさんも怒鳴り返す。

「それが面倒だから一番手つ取り早い質問を投げたのに……！！」

「この期に及んで手抜きしようとするな、この駄女神が」

「だ……?! そこまで言うことないだろお?!」

うん。何かいつも調子だった。

なんかこう、不思議と故郷の村に帰つたような安心感に包まれ、思わず肩から力が抜けていく。

「なあ、リリスケ。もしかして、いつもこんな調子なのか？」

「非つ常に残念ですが、いっつもこんな調子です。ホントに仲いいですよね」

困惑した様子のヴェルフに、リリがきつぱりと返す。

……まあ、うん。実際にそうなんだけど。

「イシュタル様は、一体何をどうしてあんなことになっちゃまったんだ？ いや、直接の面識なんてないが……」

「まあ、多分だけど。彼女たちに何かしようとしたんじゃないかしら」

腕を組み苦悩するヴェルフに、ヘファイストス様がアイシャさん達を——いや、アイシャさんを見て囁く。

流石、神様。鋭い……と、言っても僕もそこまで詳しい話は知らないんだけど。

「では、教えてください。『深淵』とは何なのですか？ 何故あのような変化をもたらすのです？ そして……どうして解呪出来ないのですか？」

焦れたように……いや、むしろ焦がれるようにアミッドさんが問いかけた。

その問いかけと共に、すっかり緩んだ空気がもう一度引き締まる。

「それに付け加えさせてくれ。不死人っていうのは、いったい何なんだい？」
表情を改めて、神様も訊ねる。

でも、それに付け加えて……？

「お前、本当に時々鋭いよな」

「時々は余計だよ」

小さく笑うクオンさんに、少しか神様がむっとした顔をする。

でも、神様の言う通り『深淵』というのと不死人というのは繋がりがああるみたいだった。

「不死人というのは、例の『アンデッド』……いや、亡者と同じものということで良いか？」

いつになく険しい声で、ミアハ様が問いかける。

「お前も知っているのか？」

「ああ。……と、言っても私も知ったのはつい先日だが」

「お前達がダンジョンから回収してきた者と、リヴィラで収容した者たちを彼女に見てもらった」

シヤクテイさんがアミッドさんを見ながら付け足した。

「そいつは本当に災難だったな」

クオンさんはため息をついてから、改めて問いかけてくる。

「他に何かあるか？」

「あの、クオンさんが『火継ぎの王』だっていうのは本当なんですか？」

アミッドさんに比べると本当に個人的で、暢気な質問だとは思うんだけど……。

「やっぱり、お前は知っていたか」

クオンさんが困ったような、苦笑するような曖昧は表情で呟く。

「それで、後はアレか。シヤクティの持っている槍についてか？」

「ま、そうなるわね」

クオンさんの問いかけに、ヘアアイスロス様が肩をすくめる。

やつぱり、あの槍はただの槍じゃなさそうだ。

「これで質問は概ね出揃ったか？」

「おそらくな」

クオンさんの問いかけに、シヤクティさんが頷く。

「ま、足りなければまたその都度訊いてくれ」

「そうさせてもらうよ」

今度は神様が頷いた。

「さて。それじゃ、まずベルの質問から答えていくか。それが一番話を繋げやすい」

不満は出なかった。

代わりに、部屋の空気が硬くなり……それこそ、心臓の音が響いてしまいそうな静寂に包まれる。

「確かにあのお伽噺の原型はロードランでの『火継ぎの儀』だろう。順番はでたらめだがな」

「では、本当にお前が不死人最初の【薪の王】なのか？」

問いかけたのは、アンジエさんだった。

クオンさんが頷くと、さらに彼女は質問を重ねる。

「ならば【深淵の主】とは小ロンドの公王のことだな。大王グウィンから『王のソウル』を下賜されたという」

「概ね間違っではないないが、【深淵の主】と呼べる存在なら別にいる。ウーラシールは知っているか？」

「古い黄金の魔術の国のことだな？」

「そうだ。ウーラシールは『深淵』に飲まれて滅びた。その『深淵』のそこにいたのが【深淵の主】マヌスだ。……もつとも、俺が『深淵』を歩けるようになった理由なら、確かに公王どもを殺したからだがな」

「だが、それでは時間の流れがおかしい。お前が【薪の王】なら、『王のソウル』の収集は魔女の国イザリスが滅んだ後であるはずだ。いや、それには諸説あるだろうが……いずれにせよ、最初の『火継ぎの儀』が行われる頃にはもうウーラシールは存在していない」

「それはこの前シャクテイ達にも聞かれたんだが……まあ、マヌスに過去のウーラシールに引きずり込まれたんだよ。簡単に言えば」

「え……?」

僕たちの声が重なった。

「それってまさか——」

「過去に戻ったってことですか? って聞きたいなら、その通り。詳しくは後でシャクティに訊くように」

「だから、なんでも私に押し付けるな」

やれやれと、シャクティさんが小さく首を振る。

「つていうか! そんなに軽く流していいことじゃないだろお?!」

「やかましい。その説明はもう二度目なんだよ」

……いえ、でも。僕らは初めてですし、今もこうして驚きを持って余しているんですけど。

そんな僕らの視線も、神様の抗議も完全に受け流して、クオンさんは話を進める。

「まあ、それはいい。だが、それならお前は どうしてここにいる?」

「その辺は長くなるから後回しだ。というか、ひよつとしてお前ならこの辺りまでは説明できたんじゃないか?」

「私の育った聖堂はこういう古臭い伝承ばかりはよく残っていたからな」

「はい、アンジエさんからも話を聞かせてもらいましたけど……」

アンジェさんが頷くのに合わせて、僕も頷いた。

「ちなみに、どんな風に聞いている？」

その言葉に、アンジェさんの言葉を思い出しながら、繰り返す。

「ええと、古い時代、世界はまだ分かたれず霧に覆われ、灰色の岩と大樹と、朽ちぬ古竜ばかりだった。しかし、ある時、『最初の火』が熾る。これによって、世界には差異がもたらされた——」

その後をリリが引き継いでくれた。

「最初の死者ニト、イザリスの魔女と混沌の娘たち、太陽の光の王グウインと彼の騎士達。彼らは『王のソウル』を得て古竜に戦いを挑む、でしたっけ？」

そして、最後にヴェルフが結ぶ。

「グウインの雷、魔女の炎、ニトの死の瘴気……そして、うろこのない白竜シースの裏切りの前に、ついに世界の覇者だった古竜たちは敗れた。これが『火の時代』ってやつ始まり、とか何とか。確か話だったな」

ええと、それでこの先は——と、僕が続けようとするとクオンさんがそれを制した。

「ひとまず、そこまでいい。重要なことは概ね回収されているからな」

「じゃあ、この『王のソウル』ってのは何なのさ？」

神様の問いかけに、クオンさんは肩を落とした。

「それすら忘れているのか? ……それこそがお前達を超越^か存在^みにした代物だ」

神様たちが息をのむのが分かった。

多分、だけど。それは僕が思っている以上にとんでもない話なのだろう。

「クオン。お前、まさか……」

「今回は先送りなしだぞ。というか、そこに触れないとこれ以上先に進められない」

「……そうか」

溶けた鉛でも飲み込むような声で、シヤクテイさんが唸る。

何とも言えない重苦しい気配に、いよいよ心臓の拍動が強くなる。何だか呼吸までが苦しい。

「何の話だい?」

「俺達人間がどこから来たかについてだ」

「……何だつて?」

ヴェルフが首を傾げた。

もちろん、ヴェルフだけじゃない。僕自身はもちろん、リリやアミッドさんまで首を傾げている。

「どこからつて、そりゃヘファイストス様達が……」

「いや、違う。……まあ、お前達に関してはある意味間違っではないかもしれないが」その言葉をクオンさんははつきりと否定して見せる。

息をのむのは、今度は僕達にんげんの番だった。

「この時、グウィンたちの他にもう一人、『最初の火』からソウルを見出した者がいる」覚悟を決めたように、シャクテイさんが小さく吐息をこぼした。

少しだけ羨ましい。

僕たちはまだ心の準備ができていない。

どんな準備をしておけばいいのかも分からない。

「名もなき小人。それもまた、火の陰からソウルを見出した。そして、この小人こそが俺達人間の祖先だ」

「何だって……っ？」

その一言で。

何故シャクテイさんが躊躇ったのかを。

そして、どんな準備をしていたところで意味がなかったことを思い知らされた。

「僕たちが、神様たちと同じ時に生まれたって言うんですか？　僕たちは神様たちの子供じゃなくて……」

それは、この『神時代』の最も根本的な常識を致命的なまでに否定するものだった。

「考え方次第だな。少なくとも今のお前達を生み出したのは、確かに神々といえるかも知れない」

「どういう意味なのだ？」

動揺する僕らを庇うように、ミアハ様が問いかけた。

「その小人達は、のちに神々によって『火の封』を施されて人となった。まあ、それについてはこの前シャクティには説明したんだが……」

「……まあな」

シャクティさんが小さく頷くと、クオンさんは肩をすくめる。

「その説明だと、少し不足がある。おそらくだが、『火の封』の前にもう一つ枷が施されているはずだ」

「……まさか、お前はあの狂人どもの話を真に受けているのか？」

そう言ったのは——当然と言うべきか——アンジエさんだった。

僕らはアンジエさんがいう狂人が誰のことかすらよく分からないけど。

「まあ、聞けて。一応根拠はあるんだ」

「何だと？」

「その鍵はマヌスだ。彼だか彼女だかは、かつてウーラシールに生きた『古人』らしい」
その言葉は、アンジエさんでも分からなかったらしい。

「これが、マヌスの残した杖なんだがな」

クオンさんがいつものスキルで、巨大な——それこそ槌のようにも見える——杖を取り出す。

「これは俺達だとその力を使いこなせないんだ。その理由は、俺達が『今人』だかららしい」

そして、もう一つ——と、怪訝そうな顔をするアンジエさんに告げた。

「これは輪の騎士達……遠い昔、グウインによって『輪の都』に追放された者たちの鎧だ」
次に取り出されたのは、黒い鎧だった。

どこか禍々しく……何より目を引くのは胴体に空いている『火の輪』のようなものだろう。

それを見て、神様が小さく悲鳴をかみ殺す。

ミアハ様も……鎧を見慣れているはずのヘファイストス様ですら、どこか怯えたような顔をしていた。

「それは、『ダークリング』か……？」

「ああ。そしてこれこそがマヌスと同じ『古い人』が生み出した、『深淵』によって鍛えられた鎧だ」

「何だと？」

ヴェルフが驚愕と困惑が入り混じった声を上げる。

あの『深淵』を——もつとも、僕たちが見たのはそれに飲まれたモンスターだけだ
ど——使つて鎧を鍛える。

そんなことを言われても、意味が分からない。

「だからこそ、これは持ち主もろともに『火の封』が施されたんだよ」

『古い人』に『火の封』が施された結果、『今人』……つまり、私達になつたと言いた
いわけか？」

「そうだ。そして、小人を古人に変えた『枷』つてのは、案外本当にあの椎骨かもしれな
いな」

アンジエさんが小さく唸る。

唸つたけど、それ以上は何も言わなかつた。

多分、それなりに納得できる話だつたんだろう。

「で、だ。今度は俺とベルの話になる」

「え？ 僕ですか？」

「いや、別にシャクティでもいいんだが……。まあ、今の『時代』に一般的にヒューマン
と呼ばれている奴らだと分かりやすいってだけだ」

「分かりやすい？」

今の時点でよく分からないんですが……。

首を傾げる僕たちに、そんなに難しく考えるな——と、クオンさんは苦笑してから、「今この部屋には、他にエルフとアマゾネスと小人族バルウムがいるわけだが。俺はどこに分類されると思う?」

「え? それはもちろんヒューマンですよね?」

「リリもそう思います。少なくとも見た目的には」

「ええ。私もそう思います。少なくとも、身体的な特徴は明らかにヒューマンのものです」

質問の意図を掴み切れず、思わず周りを見回すとリリとアミッドさんがそういつて頷いてくれた。

「そうだな。基本的に俺もそう考えている。ただし、世代が違う」

「主様たちは『今人』ではないと?」

問いかけたのは、アンジェさんだった。

やっぱり、今一番話を理解できているのはアンジェさんなのだろう。

「そうだ。今この場で明らかに『今人』と言えるのは俺とお前だけ。ベル達は……そうだな、『新人』とも呼ぶか」

「どういうことですか?」

「お前達は俺達よりも『枷』が増えている。ほぼ間違ひなくな
「え？」

そんなことを言われてもピンとこないんですが……。

思わずお互いに顔を見合わせ、その『枷』を探してしまう。
もちろん、見つかるわけもないんだけど。

「ヘスティア。今日も美人だな」

「……急に何言ってるんだい？」

半眼になった神様が、凄く胡散臭そうに応じた。

「さあ、今のはお世辞か。それとも本心か。どっちだと思う？」

「どーせお世辞だろ？」

「何でどうせなんだ？」

「……え？」

きよとんとした顔で、神様が首を傾げてから――

「そうか！ そういう事なのか……!？」

「い、いったいどうしたんですか、ヘスティア様?!」

愕然として立ち尽くす神様。

ただならぬ様子を前に、リリがその肩を揺さぶった。

「君がお世辞を……君やアンジエ君が嘘を言っているかどうか分からない。それが『枷』があるかどうかの違いってことなのかい？」

「ああ、『枷』の表出の一つだと考えている。少なくとも、俺達にはない『枷』だ。……ハツタリ一つ通じないんじゃない、俺程度がオーンスタイン達に勝てるわけないからな」

あるいは、と絶句する僕たちを他所にクオンさんは小さく付け足した。

「そして、その『枷』こそが、いわゆる亜人を生み出したり、あるいは小人への先祖返りを引き起こしたのかもしれないな」

だからこそ。そういう意味では、確かにお前達は『新人』^{ベルたち}の親だともいえる——と。その言葉がいったい何の慰めになっただろうか。

眩暈がする。今にも地面が崩れそうだった。

分からない。この感情を何と言い表せばいいのか分からない。

でも、それじゃあ。だって、何で、どうして。僕たちは、神様たちの……

「……『深淵』で鎧を鍛えたってのはどういう意味なんだ？」

ぐらつく世界の中で、ヴェルフの声が聞こえた。

「何でそんなことができる？」

一本芯が通ったその声に支えられ、ひとまず意識が今に戻ってきた。戻ってきてくれた。

まだ渦巻く無名の感情から逃げ出すようにして、クオンさんの答えを待つ。

ただ、そのクオンさんはヴェルフの質問に満足そうに笑ってから、

「その前に、不死人とは何かという質問に答えるのでしょうか」

そんなことを言った。

ヴェルフが不満そうに唸る中、気を取り直したらしいアミッドさんがクオンさんを見つめる。

一言たりとも聞き漏らさない。そんな気迫が声になって聞こえるようだった。

「不死人とは、『不死の呪い』に囚われ、死んでも死にきれなくなった人間だ。簡単に言えばな」

それは、確かにアンジエさんも言っていたけど……。

「そのようなことが、本当にあり得るのですか？」

「ああ」

アミッドさんの問いかけに頷くと、クオンさんは上着を質素なシャツへと切り替えた。

そのままシャツの裾を大きくたくし上げると、胸元——心臓の上あたりに、あの鎧にあつた『火の輪』に似た痣が浮かんでいるのが見えた。

「これが『ダークリング』だ。浮かぶ場所は人によつて異なるがな」

それに気づいたのか、その痣を指先で軽く叩きながらクオンさんが苦笑する。

そして、そのまま一振りのダガーを取り出して――…

「なッ?!」

ドン——と。何の気負いもなく、自分の心臓に向けて突き立てた。

「何を……?!?」

「慌てるんじゃないよ【デア・セイント戦場の聖女】」

絶句する暇も惜しいとばかりに立ち上がり、詠唱を始めようとするアミッドさんを止めたのはアイシャさんだった。

ちよつとした出窓になっている窓辺に座り、すらりとした脚を組んで頬杖をついたまま、小さく笑って見せる。

「そいつは、それくらいじゃ死なないさ。私もそいつの心臓をぶつた斬つたことがあるからね」

「……あの時は割と本気で死ぬかと思つたけどな」

何事もなかったかのようにダガーを引き抜きながら、クオンさんが呻く。

抜いた瞬間に血が噴き出たけど……それもすぐに収まった。

それだけだった。あとは、何事もなかったように平然としている。

「ま、ほんなどころだ」

「……どういふことなのです?」

「『致命傷』って概念がお前達生者とズレているんだよ」

アミッドさんの問いかけに、クオンさんが応じる。

「ソウル……まあ、分かりやすく『生命力』とでも言っておくか。それが体内に留まっている限り、死ぬことはない。心臓を貫かれようが、眉間を射抜かれようが、な」

「そんなことが……」

いつそ怒りすら宿した声でアミッドさんが言いかけ——しかし、途中で力を失って首を横に振った。

そんなことが、今実際に目の前で起こっているのだ。

「そして、死んでもそのうち蘇る。だから、不死人と呼ばれるんだ。もつとも、そう呼ばれるのは『人間性』が残っている間の話……いや、そんな境界をいちいち気にするのは俺たち自身だけかもしれないな」

「……『人間性』とは?」

「いくつかの意味がある。一つは、記憶だとか人格だとか五感だとか……そうだな、大雑把に『自分』というものと言ってもいいかもしれない。亡者の体は見たことがあるんだろ?」

「ええ。……確かにあの姿はお伽噺の『亡者』を連想させます。干からびた死体のよう

で、人相どころか男女の判別すら苦労しました」

「どうしてだい？」

「性器の痕跡しか残っていませんでしたから。ですので、骨盤の形状から判断するしかありませんでした」

「せい……?!」

ごく自然に真顔でそういつたアミッドさんに、神様の方が狼狽える。

「ええ。貴方の言う通り、あれではもう『個人』というものを判別できない。まして記憶も人格もないのではなおさら……」

「ま、そういうわけだ。『人間性』を失い、肉体の亡者化が進むとそうなる。ただ、理性が残ってる限りは生身に戻ることもできる」

「そうだね。少なくとも今のそいつは違うってことは私たちが保証してやるよ」

アイシャさんが妖艶に笑うと、流石のアミッドさんも少し頬を染めた。

神様やりり、霞さんも顔を赤くしているし、カルラさんは小さく肩をすくめている。そして、クオンさんは気まずそうに視線をそらしていた。

「では、もう一つの意味とは？」

咳払いをしてから、何事もなかったようにアミッドさんが言った。

「さつきも言った通り、亡者化は『人間性』を失うことで進行していく」

「つまり、先ほどおっしゃった記憶などの他に、『人間性』と呼ばれる何かがあるか？」
「ああ。まあ、これのことだ」

クオンさんの掌に、黒く揺らめく何かが浮かび上がった。

「これが『人間性』。こいつを使えば亡者化した体を元に戻せる」

篝火に焚べるのが一番効率がいいが……なんてことを小さく呟いたけど、やっぱり意味がよく分からなかった。

多分。その篝火っていうのも、普通の意味ではないだろうし。

「ああ、ミアハの質問に答えていなかったな。実際のところ、不死人と亡者の間に明確な違いはない。というよりは、不死人が死を繰り返すことで近づいていく存在。簡単に言えば、亡者とは不死人の一部だな」

個人的には、あまり同一だとは思いたくないが——と、呟いてからクオンさんは神様に問いかけた。

「では、この『人間性』とはそもそも何か。ヘスティア、分かるか？」

「ええ?! そんなことボクに訊かれても……」

「おいおい、しつかりしろよ全知全能」

「うゝ……。そんなこと言われたってえ……」

何とか答えようと唸りはじめた神様に苦笑してから、

「『深淵』とは何か。何故『深淵』を用いて武具の鍛錬ができるか。そして、何故不死人が生まれるか。それは全てここに繋がってくる」

クオンさんは、いよいよ核心部分に触れるつもりのようにだった。

「まずは結論から行こう。この『人間性』とは、小人が『最初の火』から見つけたもう一つのソウル。『ダークリング』の欠片だ」

「……何だって？」

「分かりにくかったか。なら、言い直そう。お前達を神とした『王のソウル』と起源を同じくする特別なソウル。それが俺達の中に在る証拠だ」

何度目かの沈黙が——絶句が部屋を満たす。

その中で溺れているようだった。

呼吸ができず、浮き上がることもできない。

「そんなものが、僕たちの中にも……？」

「ああ、ある。今さら切り分けられるものではないからな」

あつさりとクオンさんが言いきった。

「い、いえ、でも……」

「詳しい話をする前に。ミアハ、悪いが一つ答えてくれ」

何か——自分でもよく分からないけれど——言い募ろうとした僕を無視して、クオン

さんはミアハ様に問いかけた。

「何だ？」

「『深淵』に堕ちた者たちの異形化。あれをお前はどうか見た？」

「そうだな……。お前達の『本質』を歪める呪詛カースではないかと、私は考えている」

「はい。私も、そして私の主神であるディアンケヒト様もそう考えています」

「そうか。やはりお前……。いや、お前達でもそう考えるか」

クオンさんは、ミアハ様を見たまま小さく嘆息した。

「どういう意味だ？」

「概ねその考えでいい。だが、前提が違う」

「前提？」

「本質が変化したんじゃない。俺達の本質が変化する事なんだ。闇の中にあつて、俺達

は不定形なんだよ。永久不変というお前達とは逆だな」

「何……？？」

「ハスティアが言う通り、深淵の異形も亡者化も根は同じ。もちろん不死人の誕生も。

全ては人が変化する形質の一つでしかない」

もつとも、これはあくまで俺の推論だが——と、前置きを一つしてからクオンさんが続ける。

「始まりの小人はその性質が顕著だったんだろう。だから、神々は『枷』を施し、人という定型へと変化させる必要があった」

「だが、その性質は消えなかった？」

「ああ。その通りだ。それが『ダークソウル』の力……まあ、少なくともその一部だと考えておけ」

「いや、そんなことを言われても……。しかも、それがまだベル君たちの中にあるだって？」

困惑したように神様が唸る。

「じゃあ、ヘスティア。一つ訊くが、お前達は下界に何を求めてきた？ 一番簡単に答えなしてくれ」

「え？ そりゃ、娯楽とか下界の『未知』とかだけど……」

「その『未知』ってのはどこにある？ ダンジョンか？」

「いや、ダンジョンもそうだけどさ。どっちかっていうと子供達ベル君が……」

神様が瞳が零れ落ちそうな程に大きく目を見開いて絶句した。

「そう。お前達が言うところの人間の可能性……つまり『未知』と呼んで喜ぶそれを、かつてグウィン達は『闇』と呼んで恐れたのさ」

クオンさんが、まるで笑みを浮かべるかのように口元を歪めた。

「いずれにせよ、全知全能おまえたちにすら見通せない代物であることに変わりはないだろう？」
成長し続ける……変化し続けるのが僕達だ。

神様たちの『恩恵』はあくまでもその推進剤でしかない。

そして、僕たちが見せる『未知』こそが、神様たちが下界に求めているもの。

だから、クオンさんが言っていることは、何も間違つてはいない。

それどころか、今さら言われるまでもないことでしかないのだ。

ただ少しだけ言葉を変えただけで……そう。まさに『本質』は変わっていない。

『深淵』とは俺達の中の『人間性』を暴走させる。致命的に、不可逆的な」

不可逆的——つまり、『解呪』は不可能だとクオンさんは告げた。

「では、亡者は……不死人は何故生まれるのです？」

務めて冷静に、アミッドさんが訊ねる。

「不死人はもう生まれえない。少なくとも、今の時点では生まれるはずがない」

「何故ですか？」

「不死人は、『最初の火』が陰ることと生じる。理由は分からない。推測はいくつか立てられるが……まあ、それは後回しにしておこうか」

それは、アンジェさんから聞いている話だった。

もつとも、クオンさんのいう推測についてはそのアンジェさんも首を傾げているけ

ど。

「先ほどから口にされる『火継ぎの儀』というものを行ったからでしょうか？」

「いいや、それは違う。ここはあえて否定させてもらう」

アミツドさんの問いかけに、クオンさんがはつきりと首を横に振った。

「確かに『火継ぎ』を行えば、不死人は生まれなくなる。火の力が戻るといふことは、神の力も戻る。つまり、『火の封』の力も戻るからな。だが、それはまた火が陰るまでの間の話だ」

「……では、その『火継ぎの儀』とはどういうものなのですか？」

「『火継ぎの儀』ってのは、陰った『最初の火』に薪を焚べるための儀式だ。だから、アンジエはさつき俺に何でここにいるか聞いたんだよ」

「……その薪というのが、あなた自身のことだと？」

「俺だけじゃないがな。【薪の王】ってのはその名の通りなんだよ」

「それではただの生贄ではないですか！ 何故そのようなことを——!?!」

「誰が仕組んだかというなら、それこそ決まってる。火が消えて最も困るのは誰だ？」

「それは……」

神様たちだ。今までのクオンさんの話からすれば、他に考えられない。

「もつとも、ロードランの時代ではまだ『火継ぎ』という言葉は広く知られていなかった。

当時の不死の使命つてのは『目覚ましの鐘』を二つ鳴らすことだけだったんだ」

「鐘を鳴らす？」

「それが合図になつて、アノールロンド……神の都への道が開けるつてわけさ。ただ、二つの鐘を鳴らせた者ですらロクにいなかったそうだがな」

ついでに言えば、まだもう一つ厄介な関門が待つていたが——と、凄く嫌そうな顔でクオンさんが呟いた。

「ともあれ、鐘を鳴らして初めて、『火継ぎ』について聞くのさ。グウィンと同じく火を継ぐこと。それが世界から『不死の呪い』を一掃する方法だと。そんなことを言われれば、継がなけりやいけない気にもなる」

だが、それは結局偽りでしかなかった——と。

クオンさんははつきりと言い切った。

「確かに一時は不死が生まれなくなる。あるいは生者に戻れる不死人もいただろう。だが、それは再び火が陰るまでだ。本当に呪いが一掃できるわけじゃない。それに、本来なら『最初の火』はもう役割を終えていたんだろう。『火継ぎ』を繰り返したところで、その力は徐々に衰えていった」

「そ、それは……！」

アミッドさんが何かを否定しようとして……続く言葉が思いつかなかったのか、齒噛

みするように言葉を止めた。

「ロスリックで俺が見た『最初の火』は、ロードランで見たそれとは比べ物にならない程小さな燻りだったよ。『最初の火』を絶やさないようにすること自体に無理があったんだ。おそらくな」

火はいつか消えるもので……そして、消えるべきだったのだ。

クオンさんが小さく呟く。

「だが、神々は火が陰ることに『火継ぎ』を繰り返させた。俺達も、『不死の呪い』から逃れるためにそれに縋るしかなかった。お前と同じように、どうにかして世界からその呪いを消し去りたいと思っていた俺達に示された唯一の方法が『火継ぎの儀』だったというわけだ」

まあ、まず何より自分が解放されたいって奴も多かっただろうが——と、アミツドさんを見ながらクオンさんが苦笑した。

「神々は『枷』を嵌めてその力を奪い、『火の封』を持つて俺達を闇から遠ざけ、封じきれなくなり、不死人が生まれてからは『薪』として利用した。そして、火が陰る度に生まれた不死人達は『呪い』からの解放を信じて巡礼に挑み……そして、大半は亡者となり果て、何人かは『薪』となって火に消えた。ああ、他に白教なんてものを作り出して、不死人を弾圧した理由の一つかもな。そうすれば『呪い』を恐れ、それからの解放を求

める者が増えるだろう」

冷ややかに告げられたその言葉に、ぞわりと体中の産毛が逆立つ。

殺意によく似た凍てつく怒りがそこにあつたからだ。

「それが救界を謡つた『火継ぎの儀』の真相だ。どこかの馬鹿が火に飛び込んでから、ずっと繰り返されてきた、な」

クオンさんが神殺しを厭わない理由はこれだ。

かつて存在した、『火』をめぐる神と人の物語。

全てはそこから始まっている。

「まあ、それはいいだろう。少なくともグウインは筋を通したともいえるからな」

「どういうこと？」

「さつきからアンジェが俺のことを不死人最初の【薪の王】と呼んだだろう？ 俺が初め

てなら素直に最初の、だけでいいと思わないか？」

「それはまあ、そうだけど……」

クオンさんの答えに、ヘファイストス様が頷く。

確かに、それだと人じゃない誰かが先にその【薪の王】になっていたような……。

「最初の【薪の王】はグウインだ。仕組んだ奴らの親玉が先に薪になってるんじゃないや恨み言も言いようがない」

思い浮かんだそれを肯定するように、クオンさんが小さく鼻を鳴らして言った。

「もつとも、奴が何を考え、どういう経緯で火を継いだかは知らないがな。ま、神々の王が薪になっても消えそうになつたんだ。俺達が何人飛び込んだところで結果は同じだろうさ」

茫然として言葉を失うアミッドさん……いや、僕たち全員を前にクオンさんは告げた。

「やがて火は消え闇だけが残る。かつて神々が下した予言は、ついに成就したというわけだ」

それは、もう本当にどうしようもないのだと。

どうやっても火の陰りは防げない……何をどうやっても『不死の呪い』は消せないのだと。

何よりも明確に伝える事実だった。

「では何故火が陰ると不死人が生まれるのか。……まあ、これも俺の推測だが、『火の封』の力が弱まるからだろう。封に穴が開いて、そこから『呪い』がにじみ出るのさ」

とんとんと胸元——ダークリングを叩きながら、クオンさんが続ける。

「……でも、もうその『呪い』はないんですよね？」

そうだ。火の陰りも『不死の呪い』も本当にどうにもならなかったわけじゃない。

だって、この千年——いや、それより昔の『古代』ですらクオンさんの言う『火の陰り』なんてなかったんだから。

きつと、最後の最後は残った神様たちが何とかしてくれただけ——：

「そうだな。この『時代』に『不死の呪い』は存在しない。少なくとも、今の時点では」
「何故そう言い切れるのかしら？」

「へファイストス様の問いかけに、やっぱりクオンさんは躊躇いなく答えた。

「決まっている。俺が『最初の火』を消したからだ」

「……え？」

「『火継ぎ』は終わった。『火の時代』は俺が終わらせた」

神様たちが都合よく何とかしてくれたのではないのだと。

僕の浅はかな考えを、クオンさんはあっさりとは否定して見せた。

「『不死の呪い』を一掃する方法はそれしかない。『火』が完全に消えたなら、結局はその一部でしかない『人間性』ダークソウルも力を十分に発揮できないからな」

まあ、だからと言ってその力が完全に消えてなくなっただけでもないが——と、クオンさんが何故か僕を見ながら肩をすくめる。

でも、それは——おかしいと思う。

だって、それだと……『最初の火』がないと『ダークソウル』っていうのが力を発揮

できないなら。

それと同じものだって、当然その力を失ってしまうのでは……

「それと同じことがお前達神々にも起こっていないければ矛盾する。俺が今気になっているのは、その矛盾をどうやって補っているかだ」

お前達を神としている『火』はどこにあるのか。そして、それには何を焚たべているのか。

「何故『闇ひとの時代』に神が超越存在かみとして残っているのか。その矛盾は『不死の呪い』を再び呼び覚ますかもしれないからな」

終わった筈の『火』をめぐる神と人の物語ひげき。それはまだ終わっていないのだと。

クオンさんは神様たちを見やり、確かにそう告げたのだった。

誰も何も言わなかった。誰も何も言えなかった。

「少し話がずれたな」

心音すら響いてしまいそんな沈黙の中で、何事もなかったようにクオンさんは続けた。

「ええと。そうだ、『深淵』を用いて武器を打てる理由だったな。簡単に言えば元々それが俺達の力だからだよ。今まで説明した通りにな」

「あ、ああ……」

納得してもらえたか?——と、その問いかけに、ヴェルフが曖昧に頷く。

「で、だ。『不死の呪い』の解説方法は『火継ぎの儀』か『火継ぎの終わり』だけだ。そいつを経験してなお不死人のままって奴らはもうどうしようもない。例えば俺とかソラールとかはな。最初に言った通り、俺達の変化は残念ながら必ずしも可逆的なものじゃないんだ」

「では、『深淵』による異形化も同じということか?」

「ああ。理屈は概ね同じだと考えていい。俺達は『呪い』に対して無力なんだよ。消し去ることなどできない。逸らすのが精々だ」

ミアハ様の問いかけに、クオンさんは頷いた。

「逸らす? どこにですか?」

「人か、人であったものにだ。いずれにせよ人の力だ。受け取れるのはやはり人しかない」

「それでは意味がないのです!」

アミツドさんが声を荒げた。

「だが、他に方法があれば、とつくに誰かが見つけているだろうな。『呪い』と付き合っている時間は俺達の方がずっと長い」

アミツドさんが言葉に詰まる。

クオンさんが生きた『時代』では、神様たちも『神の力』アルカナムを当たり前に使っていたと
考えていいと思う。

そんな『時代』ですら、その『呪い』を解呪することはできなかつた。
なら、いくらアミッドさんが凄^{ヒラ}い治療師でも、『解呪』できるとはとても……。

「そもそも、何故『暗い穴』など生み出されたのだ？」

言葉を失うアミッドさんの代わりにという訳ではないだろうけど。

問いかけたのは、ミアハ様だつた。

「お前たち自身もその『呪い』を恐れているのだろうか？ 『不死の呪い』に囚われなかつた者が、わざわざそれを求めるとは思えぬのだが……」

「俺も詳しい訳じゃないが、『暗い穴』つてのは『ダークリング』の力を強化するための代物らしい。つまり、本来は俺達不死人のためのものという訳だな」

「何故そのようなことを？」

「簡単に力を得るためというのが一つの答えだ。少なくとも、俺はそういう風に勧誘された。本当の力を引き出してやるってな」

「これは話が終わった後に告げるつもりだつたが、『暗い穴』の存在を知る者に対してはギルドから緘口令が敷かれることになる。存在を知ってしまった以上、お前達も従つてもらおうぞ」

あつさりと答えるクオンさんにため息をついてから、シャクテイさんが僕らを見回して告げた。

「緘口令ですか？」

「ああ。穴ひとつにつきランクが一つ上がるらしい」

「……………へ？」

あつさりと告げられたその言葉に、リリがポカンとした顔のまま、コテンと首を傾げた。

「だから、『暗い穴』を開けるごとにお手軽にランクアップできるってわけだ」

「あ、あれ？　じゃあ、もしかしてシャクテイさんが温泉で僕のことを見てた理由って……………」

一八階層からの帰り道に、皆で温泉に入る機会があつたんだけど…………。

その時に妙にシャクテイさんの視線を感じたのはそういう事なのだろうか。

「そうだな。その『暗い穴』が開いていないことを確認していた。疑つてすまなかつたな」

「あ、いえ。それはいいんですが…………」

神様が驚くくらい成長みたいだし、何だつたら前にエイナさんにもちよつとだけ疑われたことがあつた。

だから、僕たちより先にその『暗い穴』っていう呪詛カースを知っていたシヤクテイさんが疑うのは仕方がないことだと思う。

あの時に説明できなかつた理由も、よく分かつたつもりだ。

それに……もし別の形でその『暗い穴』の存在を知つたなら、僕だつて求めていたかもしれないし。

「重ねてすまないが、場合によつてはガネーシヤ達の前で宣誓してもらうことになる。幸い、私達は神々に嘘はつけないからな」

それだけで充分な証拠となる。

そういつて、シヤクテイさんは小さく笑つた。

きつと、少しだけ安心していたんだと思う。

僕も同じ気分だつた。

「な、なるほど。ギルドが緘口令を敷くわけですね……。今までの話を聞いていたのに、それでも心が少し揺らいでしまいました」

そこで、息を吹き返したりリリが少し恥じるように呻いた。

「強くなりたいたなら呪術でも何でも、俺が教えられる限りの事を教えてやる。だから、あれに手を出すのだけはやめておけ」

「ええ、分かっています。……それにしても、やつぱり美味しい話には裏があるというこ

とですわね」

本当に気を付けないと。

そう言つて、リリは大きく肩を落としてから……ふと気づいたように首を傾げた。

「一つの答えということは、他にも何か理由があるのでですか？」

「ああ。【亡者の王】を生み出すことが本当の目的となる。そのために、ユリア……【黒教会】は『暗い穴』という禁呪を編み出した」

「【亡者の王】？」

「亡者の国であるロンドールを統べる王。あるいは『火の篡奪者』つてところかな」

「『火の篡奪者』？」

いや、その火つて言うのは『最初の火』のことなんだろうつてことは想像できるけど……。

「『最初の火』を神々から奪い取る。それがロンドールの悲願だったんだ」

「じゃあ、今もその【黒教会】は『最初の火』の篡奪を企んでいるという事かしら？」

問いかけたのはヘファイストス様だった。

「どうかな。ユリアがいるなら、俺が『火』を消したことに気付いていると思うが……」

クオンさんの言葉を、シャクテイさんが補足した。

「メレンの一件でも【黒教会】と思しき者たちの介入があつた。もつとも、その際には闇

霊を迎撃していたようだが……」

「それはどういうことなのですか？」

リリの問いかけに僕も頷く。

メレンを襲ったのは、時々話題になる——あと多分一八階層でレフイーヤさんと一緒に戦った——闇派閥イヴァイルスの残党の仕業だと思っていたんだけど……。

「【黒教会】と【墓王の眷族】は別にも同盟関係にあるわけじゃないってことだ。ま、だからと言ってユリアがオラリオの味方だとは思わないがな」

クオンさんが小さく笑う中、僕たちの呻き声が重なった。

確かに、今までの話からしてその【黒教会】の人たちが『神ほくたちの眷族』の味方になってくれるとは考えにくい。

「……【墓王の眷族】とは？」

「始まりの神の一人である墓王ニトを主神とする誓約だ。随分と古臭い連中が流れ着いたらしいな」

「【ニト・ファミリア】ってことですか？」

「いや、『火の時代』の誓約はお前達のそれとは違う。お前達でいう【ステイタス】の更新は篝火で自分でやるか、火防女に手伝ってもらうか……いずれにせよ、神の介入は必要ないからな」

何と言えがいいか——と、眩いてから、クオンさんがしばらく黙考する。

「そうだな。簡単に言えば誓約とは『信仰』なんだ。その主神ないし誓約主の思想に共感できる誓約を交わす。……もつと単純に結んでおくと安全だからって誓約もあるが」

「いや、それなら俺達も基本的には同じだぞ。例えば、ヘファイストス様のところには鍛冶師が集まるって話だろ？」

「そうなんだが……。抜けるのも簡単なんだよ。何だったら掛け持ちもできる」

ヴェルフの言葉に、リリを見ながらクオンさんが肩をすくめた。

確かにリリは抜け出せなくて苦勞しているわけだけど……。

「え？ そんなものなのかい？」

「例えばソラールのように一心にその道を進む奴だつてもちろんいる。アンジエがどう思っているかは後で本人に直接訊け」

「放任主義というか……少なくとも、あまりギブアンドテイクって感じではなさそうね」
「ま、あまり釣り合いは取れていないかもな」

ヘファイストス様の言葉に、クオンさんが苦笑した。

「じゃあ、クオンさんはクローン様を信仰しているってことですか？」

いや、それともクローン様『も』といった方が正しいのだろうか。

「あく……。それはもちろん、していないなんてことは言わないが……。前も言った通り、

俺達はちよつと特殊な集まりなんだよ」

僕の質問に、クオンさんは困つたように眉間を搔いた。

「魔女イザリスがどうなつたかは聞いているか？ ああ、俺が殺す前の話だ」

「えつと……。確か、ウーラシルが滅んだあとに滅びたつて……」

確かアンジェさんはそう言っていたはずだけど。

あ、でも。順番は諸説あつてはつきりしないとも言つていたつけ。

というか、そもそも……

「でも、それは国の話ですよね？」

「いや、イザリス本人もそこで死んでいる。……まあ、少なくとも魔女としてはな。魔女

イザリスは国ごと滅んだのさ」

「どういうことだい？」

「魔女イザリスとその娘たちは自分たちの手で『最初の火』を熾そうとしたんだ」

「ええつと……。それつて、消えるなら新しく熾せばいいつて考えたつてことかな？」

「おそろくな。そして、失敗した」

神様の言葉に頷いてから、クオンさんは短く告げた。

「生まれたのは『混沌の炎』と呼ばれる代物だった。魔女イザリスとその娘たちはその炎

に飲まれて、デーモンとなつた」

「デーモンとは、フィリア祭で暴れたというあれか？」

ミアハ様の問いかけに、クオンさんが再び頷く。

「ああ。魔女イザリスは『混沌の苗床』……デーモンたちの母体となった。無事だったのは師匠……イザリスのクラーナだけだ」

「え？　じゃあ、クラーン様も……？」

「もちろん、例外じゃない。それに彼女は病み村……いや、本当の名前は知らないんだが。ともかく、そこにいた人の『病』を癒すために『病の膿』を飲み込んだらしい」

「『病の膿』を飲み込む……？」

想像はつかない——けど、それがきつと悍ましいことだとは分かった。

それを躊躇わなかったクラーン様は、凄く優しい女神様だということも。

「『混沌の炎』に焼かれ半身がデーモン化し、さらに病に侵されていた彼女の苦痛を癒すために『人間性』を捧げていたのが俺達だ。目の見えない姫様は自分たちに気付いていないことを知っていたのにな。『混沌の従者』つてのは、そういう馬鹿な奴らの集まりだ」

ああ、でも……うん、それはクオンさんらしいと思う。

「では、クラーン様がああ姿に戻ったのはその『人間性』というもののおかげなのですかね？」

「え？ あく……。うん、まあ、なんだ。そういう事にしておけ」
うん、嘘だった。僕でも分かる。

いや、完全に嘘ではないと思うけど……。絶対に何か別のことをしている。
凄く言いたくなさそうに、視線を泳がせるクオンさんを見て確信していた。

（あれ、別のこと？）

それは、例えば神様の力を高めるようなことなのでは……

「ま、まあ、何だ。そうは言っても、今も抑え込んでいるだけだからな。この前へステイアが自分とはちよつと違う封印をしているつてのはそれが理由だろう」

「あく……。なるほど、『神の力』^{アルカナム}を全部その『混沌の炎』つてのを封印するのに使っちゃつてるんだね」

「ああ。それに、さつき言った通り姫様の方が重症だからな。クラーグはまだ少し魔女としての力が残ったんだが……」

「クラーグ？」

「あの姫様の姉だよ」

首を傾げる神様に、答えたのはアイシャさんだった。

「クラーナ様のお姉さんでもあるわ」

付け足したのは霞さんだった。

「魔女イザリスの娘を二人も籠絡するとは、まったく大した弟子だよ」

そして、カルラさんも露骨に肩をすくめる。

「うん。ごめん」

最後に神様が頭を下げた。

無言でクオンさんに蹴りを入れてから、アイシャヤさん達に。

「あれ？ そういえば『深淵』が君たちの力つていうのはどういことなんだい？」

「ああ、言われてみれば確かに。何となく納得しちまつてたが、どう繋がっているんだ？」

席に戻ったふと神様が首を傾げ、それにヴェルフも頷いた。

「そうか。『深淵』とは何かの説明を忘れていたな」

一方で——珍しく素直に蹴られた——クオンさんも何事のなかったかのようにそれに応じた。

「最も単純に答えるなら一言で済む。『深淵』とは暴走した『人間性』だ」

「……なるほど。闇術の力の源が暴走したものが『深淵』だというのも同じ理由か？」

「ああ、その通りだよ」

シャクテイさんの言葉に、カルラさんが頷いた。

「闇術とはウーラシール最後の遺産ともいわれる。私にも断言はできないが、おそらく

生前のマヌスが生み出したものなのではないかな？」

「それを求める者に墓を暴かれたって訳か……」

「え？ 墓を暴かれたって、それじゃマヌスっていう『深淵の主』はもともと人間——」
「いや、だから。『ダークソウル』は人間の力なんだよ。確かに俺が見たマヌスは化物そのものだったけどな」

……その通りだった。

ずっとそういう話をしているのに、やっぱりどこか受け入れ切れていないと言うか、受け入れたくないと言うか……。

でも……言い訳がましいけど、きっとそれは僕だけではないと思う。

この場にいる全員が今も何とか今までの話を飲み込もうとしているはずだ。

「その闇術というものを知るために、何故墓まで暴く必要があったのですか？」

再び沈黙を破ったのは、アミッドさんだった。

「いえ、仮にそうだとして。例えば墓を暴いたところで、その闇術というものを必ず発現できるとは限らないのでは？」

確かに、僕たちの魔法は個人の想いや経験によつて発現するものだった。

だから、そのマヌスって人が闇術というものを発現させたところで、他の人が発現できるとは限らない。

……そう。僕たちの知っている魔法なら。

(でも、クオンさん達の『魔法』なら……)

受け継いだ『呪術』——【ぬくもりの火】を思い浮かべながら、胸中で呟く。

クオンさん達の『時代』の魔法スベルはいくつかの体系がある。

例えば、僕が教えてもらった呪術や、アンジェさんが使える奇跡だとか。

……クオンさんは一通り全部使えるとかとんでもないことを言っているけど。

「俺達の使う術は、他者への継承が可能……というより、それぞれが体系立った技術であり、あるいは学問ともいえる」

「では、魔導書や【ステイタス】に頼らずとも、望む魔法が発現できると?」

アミツドさんが今までは違う……純粋な驚きと好奇で目を丸くする。

「ああ。とはいえ、高位の術を使おうと思えば相応の能力を求められるぞ?」

「いえ、それでもその価値は計り知れません。それは、回復魔法も含まれますか?」

「ああ。その辺は基本的に奇跡の領分だ。俺も一通りは使えるが、人に教えられるほどの理解があるわけじゃない」

「奇跡?」

「ああ。神々の物語を学び、その恩恵を祈り受ける業だ。その威力は術者の信仰に依存する」

「神々の、物語を……？ それに、信仰とは……」

そんなものをあなたが何故使えるのですか？——アミッドさんの表情を言葉で表すなら、多分そうなる。

「詳しく知りたいなら、そのこのアンジェに聞け。俺よりもずっとまともな説法をしてくれるだろう」

「私程度では他者に奇跡を伝えることはできないのだが……」

聖典があつても基礎的な奇跡を語れるかどうか——と、アンジェさんがため息をついた。

「聖典、聖典か……」

「私が持っているアレをその娘に読ませようなどと考えるなよ」

「分かっている。当然だろう」

カルラさんの言葉に、クオンさんがいつになく真剣に頷いた。

……まあ、その話はダンジョンからの帰り道でも少しだけ聞いているんだけど。

「あなたも奇跡を使えるのですか？」

「どこかの馬鹿弟子が、嫌がる私に無理やり読ませたのさ。しかも二冊も」

「悪かったって。他に頼れる相手がいなかったんだよ」

「ああ、そうだろうとも。あのような暗く悍ましい物語など、私のような忌み子でもなけ

れば発狂しかねない」

やれやれ、とカルラさんが首を横に振る。

「暗く、悍ましい？ 神々の物語が、ですか？」

「いいや。あれはどちらかと言えば人の物語だろうな。『奇跡』という術式を利用した術だよ」

クオンさんが何事が答えるより先に、カルラさんが応じた。

「そんなことができるのか？」

と。聞き返したのは、意外にもアンジエさんだった。

何となく、その辺りのことは全部知っていると思っていたんだけど……。

「ウーラシールの遺産となれば、魔術に近い形をしていると思っていたが……」

「ああ、魔術に近いもの無論あるとも。元々私が得意としていたのはそちら側だ。そして、呪術にも存在する」

カルラさんがクオンさんを見ながら、小さく笑った。

「え？ 呪術にもあるんですか？」

「ああ。私の弟子から聞いていないか？」

頷くと、クオンさんが何故か気まずそうに視線を逸らした。

「その黒い炎は、ウーラシールに迷い込んだとある呪術師が、深淵の闇に見出したとされ

る」

「ほう？　なるほど、確かにそれは興味深いな」

小さく笑うカルラさんに、アンジエさんまでが笑った。

「どうしてなんだい？」

「呪術とは、イザリスのクラーナを開祖とする術式なのです」

神様の問いかけに、アンジエさんが応じる。

「そして、歴史的には彼女の弟子は一人しかいないとされておりまして。無論、それはあの

男ではありません」

「え？　そうなんですか？」

「……俺にとつて、弟子と言えるのは精々お前だけだよ」

つまらなそうに、クオンさんが言った。

「だから、呪術師は基本的に全員がザラマンの火の血縁と言っていい」

「火の血縁？」

「前に言っただろう。呪術師にとつて『火』は半身なんだ。だから、その繋がりは火の血縁と言われる。……ま、古い慣習さ。もう忘れられて久しい」

む……と、何故か今度は神様が不満そうに唸っている。

「というか、何で僕の足を抓るんですか、神様!？」

「じゃあ、そのザラマンって奴が、表向きはクラーナ様のたった一人の弟子ってことか？」

「ええ。【呪術王】ザラマン。彼こそが、始まりの呪術師です。ですが——」

ヴェルフの問いかけに、アンジエさんが小さく笑った。

珍しい。僕たちに対しては何だか凄く真面目過ぎて、滅多に笑ったりしないのに。

「かの呪術師が生まれたのは、『火の陰り』が生じて八〇〇年ほどが過ぎてからとされています。いえ、そもそもイザリスのクラーナが呪術を生み出したのは、イザリスが混沌の炎に消えてからだとされています」

「え？ そうなのかい？」

「ええ。元々魔女イザリスが用いたのは『炎の魔術』と呼ばれるものだったそうです。ですが、それは魔女たちとともに歴史から消え、もはや誰も知らぬものとなりました」

「一応、それらしいものなら見たことがあるけどな。」

アンジエさんの言葉に、クオンさんが小さく呟いた。

それには気づかなかったのか、それとも気づいていて聞き流したのか、アンジエさんは僕らを見て再び微笑んだ。

それも、どこか少し意地が悪そうに。そして、内緒話でもするかのように。

「ザラマンより以前に呪術師はなく、ザラマンが生まれた頃にはすでにウーラシールは

存在しません。では、ウーラシールに迷い込めた呪術師とは、いったい何者だったのでしようね？」

あ……。と、神様が声をこぼす。

鈍い僕でも流石に分かった。

クオンさんは気まずそうに視線を逸らしていた。

「もつとも、闇術とは禁忌とされるものだ。例えば奇跡の形をとつていようと、その娘が知らないのは当然だろう」

「それが本当に私達の力だというなら、何故そこまで封じる必要があるのですか？」

クオンさんが、アミッドさんの問いかけに応じた。

「何であれ、その暗い魂には触れるべきじゃないのさ。それが呪いであることに変わりはないのだから」

「……人であることが呪いだと？」

「そう聞こえたか？」

クオンさんの問いかけには答えず……。でも、アミッドさんは険しい目で見つめている。

いや、睨みつけているのだろう。

『『人間性』』とは何か。今までいくつかの説明をしたが、それが真実とは限らないし、そ

れだけが真実ということもない」

一方のクオンさんは、むしろ満足げな様子ですらあった。

ただ、楽しんでいるかというところもまた違うような気がする。

「ただ、虚偽を口にしたと思つてほしくはない。『人間性』とは何かとは、人とは何かという問いかけに近い。おそろくな」

「人とは何か……」

「この街で治療師ヒールラーなどやっていれば、ロクでもない光景はいくらでも見るだろう」

小さく身じろぎをしたのはミアハ様だった。

その姿に、いつか馬車の上で聞かせてもらった話を思い出す。

きつと、それはクオンさんの言うようにろくでもない光景だったんだと思う。

「そして、闇術とは人の歪みの現れだともいわれる。別に驚くことじゃない。人とは往々にして他者を傷つけるものだろう」

「それは……」

だから、アミッドさんはその言葉を否定できないのだ。

あるいは僕自身も。

「人を蝕む『深淵』の呪いも、あるいはそれに近い。多くの人間が、よく他者を蝕むようにな」

「だから、解呪出来ないか？ 解呪とは人の本質の否定だから」

まるで禁忌を口にするように、アミッドさんは躊躇つてから。

やがて意を決したように——もしくはいつそ挑むようして続けた。

「他者を害する事が私達の本質。だから……だから、決して救われることはないか？」

対して、クオンさんは落ち着いた……静かな声でそれに応じる。

「闇こそが人の内に宿る真実だ。それを封じられて得たものが今だとするなら、人は皆偽りの生の中にある。いかに美しく、優しくとも嘘は所詮嘘にすぎない」

だが——と、クオンさんは続けた。

「『枷』により作り変えられた生だとして、今ここにある世界は例えようもなく優しく、甘やかだ。ならば、それは果たして悪なのか」

「それは……」

答えは、分からない。

何と答えればいいのか、僕には分からなかった。

ヴェルフも、リリも。アミッドさんやシャクテイさんも。

「なんてな。こいつは受け売りの言葉だし、答えは俺もよく分からないんだ。まだ探している途中だからな」

それどころかクオンさんまでが、小さく笑った。

「……………」

困惑半分、不満半分といった様子でアミッドさんが眉を顰める。

「そんな顔で見るな。……そうだな。じゃあ、一つ訊こう。『呪い』とは何だ？」

「え？」

「例えば『不死の呪い』の本質はどこにあるんだろうな」

今度こそ困惑するアミッドさんを他所に、クオンさんは自問するように言った。

「まあ、確かに亡者に堕ち正気を失った奴ははた迷惑だしな。『深淵』も同じだ」

だが——と、クオンさんは続ける。

「不死となることこそが呪いか。ああ、それはそうだろうとも。焼かれ、斬られ、磨り潰

され、幾たび殺されようと俺達に終わりはない。正気を手放したところで、死には遠い。

だが、それならそこにいる者たちはどうなる？」

クオンさんが示したのは、ヘステイア様であり、ヘファイストス様であり、ミアハ様

だった。

「俺達よりはまだ死を覚えているようだが。だが、永遠を彷徨い、しかし変化みらいがない。ま

してや、渴望故に自ら偽りの生へと手を伸ばすなど。それは俺達と……或いは彷徨う亡

者たちと何が違う？」

それは叡智を囁く賢者のようであり、狂気をもたらず魔性の囁きのようでもあった。

「それとも、人の内にある闇こそが呪いか？ 尽きぬ渴望をもたらし、憤怒を抱かせ、恐怖の源泉となり、いずれは悍ましいものの寢床となる。しかし、それすら顧みることなく、目的を追い続けるその性さがこそが呪いだど？」

アミッドさんの答えを待たずして、クオンさんは続けた。

「だが、それを手放してどうなる？ それこそ亡者と変わりない。いや、亡者として渴望を抱く。自分が何者かすら忘れ果て、それでもなおソウルを求めて彷徨うのだからな」

「何が、言いたいのですか？」

「何も難しいことは言っていない。お前にとっての『呪い』とは何か。それを問うているだけだ」

「健やかな生を犯し、蝕むもの。……ええ、それが『呪い』です。だから、私はきつとその『呪い』を殺すでしょう」

「ならば、敵を見誤るべきではない。必ずしもその闇を覗き込む必要はない」

「……『深淵』の呪いは見て見ぬふりをしろとおっしゃるのですか？」

「俺達の内にある闇は必ずしも『呪い』とは限らないということだよ」

「呪いではない？」

さらに険しい顔をするアミッドさんに、クオンさんが肩をすくめる。

「呪いではなく、原罪だと考えた男がいた」

クオンさんが言葉を探している間に、カルラさんがそんなことを言った。

「原罪、ですか？」

聞き覚えのない言葉に、つい聞き返していた。

「そうだな。人であるが故の罪、とでも言っておこうか」

「その闇を見出したことが罪だと？」

「おそらくな。大王グウィンたちが『王のソウル』を見つけたことで、『霧の時代』は終わったわけだが……案外とそれすら罪だと言いたいのかもしれない」

耳の痛い話だ——と、クオンさんが……一つの『時代』を終わらせた英雄が、どこか苦々しく笑った。

それがアミッドさんに届いたかどうかは分からないけど。

「狂人？」

「貴公と同じく、この『呪い』を消し去ろうとした一人。狂気の実験に手を染め、自らに付き従った学徒たちすら手につけ、最後には自らも異形となり果てた。そんな男だ」

「……………」

「気を付けたまえよ、貴公。狂相が浮かんでいるぞ。どこかの馬鹿弟子が心配する程度にはな」

クオンさんが気まずそうに頬を搔いた。

そして、自覚があつたのかアミッドさんも恥じたようにうつむく。

「……まあ、何だ。もし『深淵』や『闇術』についてもっと詳しく知りたいなら、カルラに相談すると良い」

「まあ、それもいいだろう。……始祖の直系といえないこともないからな」

クオンさんの言葉に、カルラさんがクスクスと笑った。

「始祖の直系？ それはどういう意味なのですか？」

アミッドさんの問いかけは、僕たちの代弁でもあつた……と、思うんだけど。

何故だか神様やりり、シャクテイさん達は困つたような顔をしている。

「その娘らには話したことだが……私の弟子によつて滅ぼされた『深淵の主』の断片が世界には遺されていたのさ」

「『深淵の主』の断片？」

「ああ。それはいつしか私達のような『闇の子』を生み出した」

「『闇の子』？」

「ああ。私は人の深淵、その忌み子なのさ」

「人ではないと？」

困惑するアミッドさんの隣では、ミアハ様が。

同じくヴェルフの隣にいるヘファイストス様も。

それぞれが何か納得したような顔をしていた。

「それは人間とは何かという問いかけに等しいよ。……もつとも、私はどこかの馬鹿弟子と出会うまで、長い間、罪人として虜囚の憂き目にあっていたが」

急に神様とリリが……あと、霞さんまでがそわそわとし始めた。

何だろう、今の話以外にも何かマズいことがあるんだらうか……。

「あなたに近づくと、妙な感覚がするのはそのせいか？」

「ああ、そうだろうな。貴公も常人よりはいくらかその娘らに近いようだ」

カルラさんが神ハスティア様やヘファイストス様を見ながら頷く。

「……まあな」

ヴェルフの中の精霊の血が、カルラさんに反応しているつてことなんだろうか。

「嘘と思うなら、こちらに来るとよい。私がそちらに近づくと、神に連なるものは嫌がるだろうからな」

む……と、不満そうに唸るのは神様だけ。

ミアハ様とヘファイストス様は険しい顔をするばかりで、否定しようとはしなかった。

たくさんの神様が住むこのオラリオで、特に優しい神様であるこの二柱が。

「……ええ。微妙ですが背中に焼きつくような悪寒が……。この感覚は、あの『深淵』の

異形を前にした時と同じ……」

素直に部屋の片隅まで——カルラさんの前まで移動したアミッドさんが小さく呟くのが聞こえた。

「そうだろうとも」

頷くカルラさんを見て、ふと思い出した。

『クオン君といえば、カルラ君にも悪いことしちゃったしなあ』

一八階層で神様が嘆いていたのは、ひよつとしてカルラさんに関係していたんじゃないだろうか。

あまりよく覚えていないけど……一八階層にいる間は神様がカルラさんと話しているところを見ていないような気がする。

帰り道では、ちよつとした暇さえあれば——むしろ、その暇を無理やり作る勢いで——話しかけていたけど……。

「まあ、ね……」

視線だけで問いかけると、神様は気まずそうに頬を掻いた。

横目で見れば、反対に座るリリも気まずそうにしている。

ということは、カルラさんが今言ったことは本当だという事なのだろう。

……シャクテイさんとアンジエさんはともかく、何でリリまで知っているかは分から

ないけど。

「さあ、貴公。どうする?」

「何をでしょうか」

そんな僕らを他所に、カルラさんがアミッドさんに問いかけた。

「ここにいるのは『深淵』の忌み子。いわば『呪い』から生まれ出た異形だ。貴公にとつては憎い仇なのではないか?」

「それは……!」

今までとは全く質の違う緊張感が部屋を満たす。

僕も落ち着かない気分だった。

一方で、クオンさんは特に慌てた様子もなく、成り行きを見守っている。

「……貴女は、このオラリオで何をしようと考えているのですか?」

しばらくして、アミッドさんが絞り出したのはそんな問いかけだった。

一步踏み込んだとも言えるし、話を逸らしたとも言えるかもしれない。

「フフツ……。残念ながら、私は貴公らと違って道を行くものではないよ。しいて言えば、あの馬鹿弟子の世話を焼くこと、といったところかな」

もつとも、余計な世話だったかもしれないが——と、カルラさんは霞さんとアイシャさんを見ながら苦笑する。

『闇の子』など、所詮はか弱く小さな断片でしかない。だから、寄る辺を求めのさ。選ばれた依り代にとつて、それが『呪い』となるとしてもね」

呪いという言葉に、アミッドさんの肩に力が入るのが見えた。

表情は見えない。その代わり……と、いう訳ではないけれど、霞さんとアイシャさんが肩をすくめるのが見えた。

クオンさんは——…

「まあ、ヴァンクラッド王にとつては『呪い』だったかもな」

何て言うか、完全に他人事として納得している。

それは独り言だっただろうけど……外の喧騒から隔離されたこの部屋ではそれでも僕らの場所まで届いていた。

もちろん、僕にはヴァンクラッド王やその人の傍にいた『闇の子』というのがどんな人たちだったのかは分からないけど……。

「……………」

クオンさんの言葉は——僕にも聞こえたくらいだし——聞こえただろうし、多分霞さん達の様子にも気づいているだろう。

しばらくの沈黙の後、アミッドさんの肩からも力が抜けた。

「貴公が選んだ道は、かつて多くの者が挑んだ貴い願いであり、その全てを飲み込んだ

『呪い』でもある。その闇は深く、暗く、果てを知らず、故にどれほどの信仰も役には立たない」

俯いたアミッドさんの頬に指先で触れながら、カルラさんが続ける。

「だからこそ、忘れてはならない。闇がもたらすものは暗い。だが、それは静謐で穏やかな何かでもあるはずだ」

そう。例えば一日の終わり。今日を振り返り、明日を夢見て眠る時のような。

それは、決して『呪い』なんてものではない。

……明日が来ることを怯えて過ごす夜は、確かに『呪い』と言えるかもしれないけれど。

でも、だとして。その夜が全て邪悪な何かに変わってしまったということは、多分ないはずだ。

「それとも、貴公らがこれまで歩んできた道は、余すことなく、ただ悍ましいものでしかなかったと、そう思うかな？」

「……いいえ。そんなことはない、私は信じています」

「ああ。そうだとも。貴公らの中に在るのは、神ですら御しきれぬものだ。殺すなど出来はしない。だが、殺す必要もない。ただ、正しく畏れるといい。それは必ずしも『呪い』ばかりではないのだから」

「正しく、畏れる……」

噛みしめるように、アミッドさんがその言葉を呟いた。

「まあ、何だ」

しばらくして、クオンさんが言った。

「俺は、カルラのように気の利いた台詞は言えないが……。先達として、無理はするなどだけ言っておく。何しろ、グウインたちですら手に負えなかった代物だからな」

「人である私には、元から分不相応な願いだど？」

「さてな。だが、仮にそうだとしても、求めずにはいられない。俺たちとはそういうものだ。なら、お前を笑うことは自分達を嘲笑することと同じだろう」

かつて、誰もがそれを求めたのだから——と、クオンさんはどこか力のない笑みを浮かべた。

「それに、その探求はまったく意味をなさなかったわけでもない」

そういつて、クオンさんは何かを取り出してアミッドさんに投げ渡した。

「これは……」

それは、掌より少し小さいくらいで暗い色をした何か。

どことなく繭のようにも見えた。

「『人の像』と呼ばれていた。亡者が人に戻るための導のようなものだ」

「導?」

「ああ。じつと見ていると、人の姿が浮かんでくる。……まあ、自分の姿が浮かぶと言っているのか」

「つまり、亡者化を癒す魔道具マジックアイテムということですね！」

思いがけぬ『解呪』の手掛かりにアミッドさんが嬉しそうな声を上げながら、真剣な顔でそれを見つめる。

試しているのではなく、解析しているのだろう。

「ああ。もつとも、それとて『人間性』が残っていないなら……亡者と化し、正気を失ったなら戻ってこれないがな」

「『人間性』を失えば、どうしようもないと?」

「そうだ。まあ、不死人にとつての寿命だとも思っておけ。それなら、少しは納得もいくだろう?」

「それは、そう、ですが……」

アミッドさんが納得できたのかは分からない。

でも、険しい顔が少しだけ和らいだのは確かだった。

「あとは……まあ『暗い穴』だけなら塞ぐことはできる」

「本当ですか?!」

「ああ。俺も昔、あの『穴』をあけられたことがあつてな。だが、それはもう癒してもらつた」

「誰に？　どのような方法で？」

「ロスリックで世話になつた火防女に。方法は……まあ、これが一番問題かな。かなり危険を伴う」

「構いません。教えてください」

詰め寄らんばかりの熱意に根負けしたのか、クオンさんは肩をすくめて言つた。

「深淵から戻つた火防女の魂を彼女が宿した。その力で治療できるようになつた」

「他者の魂を己に宿したと？」

「まあ、俺達の『ソウルの業』も理屈は同じだしな。それを手伝つてくれる火防女同士ならそう難しいことでもないらしい」

だから、火防女ではないお前に出来るかと言われると返事に困る。

クオンさんの言葉に、アミッドさんが肩を落とす。

「火防女になりたいとは言ふなよ。彼女たちは不死人とはまた異なる形で『最初の火』に囚われた存在だ。『火』のない今じゃ、なろうつたつて無理な話だ」

それに——と、クオンさんは付け足した。

「『穴』を塞ぐには、相応のソウルがいる。その量は穴をあけられた本人のソウルの強さ

と、穴の数によって変化するが……まあ、かなり莫大な量になるな。そっちは死ぬほどモンスターを追い回せば何とかなるだろうが」

「と、いうか。ソウル？……というのを集めるのは、簡単にできることなのですか？」

「ああ。……いや、簡単ではないが、『ソウルの業』とはそういう技術だ。それに、不死人は『ソウルの器』とも呼ばれる」

リリの質問に、クオンさんはそんな言葉で応じた。

『ソウルの業』自体は『呪い』を持たない生者でも習得できる。だが、主なきソウルを回収する効率は不死人の方が圧倒的に上というのが通例だ。というより、より効率的に回収できる『器』を持っていることが「薪の王」……巡礼者と呼ばれるための資格でもある」

「では、アンジェ様ならできのですか？」

「いいえ、リリルカ様。おそらく私には無理かと」

小首を傾げるリリに、アンジェさんが言った。

「私は不死人ではありませんが、巡礼者ではありませんから。それほどの『器』は——」
「いや、お前くらいの力があれば普通に巡礼地でもやっていけるだろう」

アンジェさんの言葉を、クオンさんが否定した。

「篝火も見えた訳だし、資格は充分だ。……もつとも、『玉座』は遠いがな」

「だろぅな」

リリへの態度から一転して不愛想にアンジエさんが頷く。

でも、ちよつとだけ嬉しそうにしている気もする。

……うん、まあ、認められたことには変わりない訳だし。

「まあ、話は戻すが、『暗い穴』しか持たない不死人なら、全部塞げば案外とただの生者に戻れるんじゃないか？ もちろん、あくまで理屈の上での話だが。ああ、それと本人が自前の『ダークリング』を持っていないことと、亡者になり果てていないというのが大前提になるな」

「そうなる前に見つけ出し、解呪する必要があると言うことですね」

「本人にその気があるならな。ある意味、それが一番の問題かもしれない。何しろ、塞いだ後も力が残るか分からないからな」

それは、何となくわかる気もする。

せつかく得た力を手放すというのは、やっぱり簡単なことじゃないと思うし。

その辺のことは、僕より長く冒険者と関わっているアミッドさんの方がよく分かっているのだろう。

「いや、それを言うなら生きていられるかどうかからして怪しいな。何しろ、あの『穴』は呪いを溜めるためのものだ。場合によっては『穴』を塞ぐ前に、まず溜まった『呪い』

をどうにかする必要が出てくるかもしれない。……まあ、前例がないからな。他にも何か問題が生じる可能性はある」

「それは……そうなのでしようが……」

納得いかない様子で——でも、納得するしかなく、無念そうにアミッドさんが唸る。

とはいえ、その『暗い穴』に関してはクオンさんもこれ以上のことは答えられないようだった。

「その溜まった『呪い』すら、私では殺せないか?」

「それだけならもしかしたら何とかなるかもしれない。あくまで可能性の上ではというだけだが」

「本当ですか?!」

アミッドさんが目を輝かせる。

「お前達生者にも同様の効果を發揮するという保証はしない。ただ、不死人おれたちにとっては方法がない訳じゃない。例えばこの『解呪石』だ」

クオンさんが投げ渡したのは、何だか灰色の不気味な石だった。

何だか人の頭蓋骨みたいな模様が見える。

「これは?」

「カリム伯アルスターが生み出したとされる秘法だ。さつき言った呪いを逸らすための

代物だな」

「ということとは、あの頭蓋骨みたいな模様は、ひよつとして本物なのでは……。アミツドさんもどこか恐ろし気に手の上にある石を見つめている。

「あるいは、罪の女神ベルカの秘術かもしれないな」

もつとも、オズワルドはそんなこと一言も言わなかったが——と、クオンさんが呟いた。

「罪の女神、ベルカ？」

神様がアイシャさん——アイシャ・ベルカさんを見ながら、首を傾げた。

「罪の女神ベルカ。罪を定義し、罰を執行する女神。一方で古今あらゆる秘術に通じており、神々の中でも強い影響力を持つと言われた存在さ。彼女であれば、解呪の秘術にも通じていたかもしれないな」

「フツ——と、カルラさんが小さな笑みをこぼしてから続ける。

「そう、確か黒髪の魔女という異名もあったかな」

「なるほど。初めて名乗った時に妙な反応をした理由がやっと分かったよ」

艶やかな黒髪を手櫛で軽く梳りながら、アイシャさんが大げさにため息をついた。

「ああ、そうだろうとも。私と再会した時の様子からすれば、さぞかし驚いただろう。黒髪で、同じ名を持つ、女神と見紛う娘が自分の前に現れたとあってはな」

クククツ——と、本当に楽しそうにカルラさんが喉を鳴らし、

「二人揃って、随分と持ち上げてくれるじゃないか」

アイシャさんも苦笑とも微笑ともとれる吐息をこぼす。

「えーと……。これは爆発しろってやつかな？」

「素直にこちそうさまって言っておけばいいんじゃない」

神様とヘフアイストス様が温かい——というにはちよつと温めぬるの——視線をクオンさんに向ける。

何となく意味が分かるような、分からないような……。

「あ、あく……。ええと、それでだ。ベルカ信仰が盛んだったのはカリムって国だったんだ。アルスター伯がそんなものを作れたのはそういう理由からかもしれない」

クオンさんが露骨に咳払いしてから、説明を続ける。

「では、私にも作れる可能性がある？」

「ああ。もつとも、まともな製法じゃなと思うがな」

「どういう意味ですか？」

「さつき言った通り、『呪い』を逸せるとしたらそれは人か、人であったものかだ。そして、アルスター伯は「串刺し公」という異名で呼ばれていたという。……ついでに、だ。これが彼が使っていたとされる槍だ」

取り出されたのは、蔦のような何かが絡みついた槍だった。

「確かにロクなものじゃないわね……」

「ええ、同感です」

それを見て、ヘファイストス様までが顔をしかめて呻いた。

「もう一つの問題は、他にその製法を知っている国がロンドールだつてことだな」

「……つまり、【黒教会】だど？」

「ああ。素直に教えてくれるといいけどな」

それは、ひよつとしなくてもかなり難しいんじゃないだろうか。

「さっきのヘステイアの様子からすれば、女神ベルカが天界とやらにいるわけでもなさそうだな。あとは、輪の都で見た『解呪の碑』のようなものがどこかにあればそれが一番だろうが……」

「望みは薄いと？」

「残念ながら。結局のところ一度『不死の呪い』に手を伸ばしたなら、そう簡単に開放はされないつてことだ。言っただろう？ その暗い魂に迂闊に近づくべきではないと」

その結論を前にいよいよ項垂れてしまったアミッドさんから視線を逸らし、クオオンさんはヘファイストス様に問いかける。

「あとはあれか。オーンスタインの槍についてだったか？」

「ええ。……まあ、もう何となく分かってきたけれどね」

問われたヘフアイストス様はと言えば、シャクティさんの持つ槍を見ながら嘆息した。

「あれは「竜狩り」オーンスタインの槍だ。グウインに仕えた四騎士の長……まあ、神の英雄の一人だな。そして、ロードランでの『火継ぎ』の試練の一つだった」

「そんなものとまでやりあったってのか、あんたは……?!」

「ああ。ソラールと二人で散々串刺しにされたよ。何度殺されたか分からない。……我ながらよく勝てたものだとも今でも思う」

それはつまり、神アルカナムの力を全開にした神々との戦いということなのだろうか。

ましてやそれに勝ったなんて……

(それって、ひよつとして神様の領域に踏み込んだってことなんじゃ……?)

それなら、確かに都市最強のLv. 7だつてクオンさん達の相手にはならないのかも
しれない。

恐怖も羨望も浮かばない。まず現実感がない。

明確な感情を抱くには想像力が圧倒的に足りていなかった。

どこまでも果てのない大空を見上げるような、或いはそこに投げ出されたような。

名前のない、衝動にも感情のうねりだけがそこにあった。

「そして、奪った？」

「悪く思うなよ。さつきも言ったが、試練の一つだったんだ。それに、あの槍はその後、ロスリックでの巡礼の時に拾ったものだ。最後はどうやら元々の主の元に向かったらしいな」

「元の主？」

「太陽の光の長子。グウインの息子で、神を裏切り古竜にいたが故に名前を奪われた無名の王だよ。元々は彼に仕えていたらしい。俺も詳しい話は知らないが。もちろん、彼の最期も」

あれ？ でもそれって、つまりあの槍は……

「じゃあ、あの槍は神様の武器なんですか？」

ひよっとしなくても、物凄いものなんじゃないだろうか。

「そうなるな。その中でも特に業物だよ」

マジか！——と、ヴェルフが立ち上がって目を輝かせてから、少しバツの悪そうな顔で座り直す。

その隣で、ヘファイストス様はため息とも苦笑ともつかない吐息をこぼしてから、
「……その言い方だと、他にも持っているわけね？」

鋭い視線とともに、問いかけた。

「そりやまあ、いくつかは」

そういつてクオンさんはいくつかの武器を取り出して机とその周りに並べていく。「グウインの近衛である『銀騎士』達の武器と鎧。その中でもさらに精鋭である『黒騎士』のものもある」

直剣に大剣。特大剣に槍。大斧に盾。

「これなんかは長いこと使っているな。手によく馴染んだし、デーモンを相手にする時には特に心強い」

そして、斧槍。

……ああ、うん。確かにあの斧槍は見覚えがある。

というか、ダンジョンの中でもよく使っているけども。

「そ、そんなものをキラーアント相手に使っていたのですか……?!」

同じく、その斧槍に見覚えがあるリリがドン引きしている。

僕も眩暈がしてきた。

……いや、だって。何だったら、僕もちよつとだけ使わせてもらったこともあるし。

全然使いこなせなかったけど。

(か、神様の武器を使っちゃったのか……)

しかもそれで——使いこなせなかったせいで——キラーアントに苦戦したとなると、

何だか凄く複雑な気分……！

「というか、その鎧は……！」

ドスン、と。最後に置かれたのは《ハベルの鎧》だった。

床が音を立てて軋む。何となく危険な響きに聞こえたのは、気のせいだと思いたい。

「まさかそれも神創武器……じゃないですけど！　そういう系なのですか!?!」

うんまあ、武器って言うか鎧だけだ。

神創鎧……それとも神創防具といった方がいいのだろうか。

「あく……。正直断言しかねる。ハベル本人の遺物なのか、単に彼を信奉したハベルの戦士達の装備なのか意見が割れるだろうな」

「……まあ、そういうやハベルってのは神の名前だつてアンジエも言つてたしな」

「ちなみに、オーンスタインの鎧もあるぞ」

そういつて、クオンさんは獅子を模した黄金の鎧を取り出した。

「すげえ……」

ヴェルフどころか頭を抱えていたはずのりりまでがその鎧に見惚れる。

もちろん、僕も同じだ。

「黄金獅子の鎧に十字槍、か。なるほど、確かに『竜狩りの騎士』の伝承通りだわ」

へフアイストス様ですら、感嘆を宿した吐息をこぼしている。

「それに、この黒騎士の武具はさしずめ『デーモン狩り』の武具と言ったところかしら。特殊な付エンチャント加が施されているみたいね」

「分かるのか？」

「当り前でしょ。いくら下界にいても、それくらいは分かるわ」

「まったく——と、ヘファイストス様が唸った。

「よくも今まで隠していたわね」

「流石に面倒なことになると思ってたからな」

「あつさりと応じるクオンさんに、もう一度ヘファイストス様はため息をこぼす。

「それで、どうして『火継ぎの儀』を経験しながらお前はここにいる？」

「武具を片付けているクオンさんに、アンジエさんが改めて問いかけた。

「ああ、そういやそうだな。不死人って奴はその『火継ぎ』つてのをしても蘇れるのか？」

「いや、まあ、蘇れないとも言切れないが……」

「ヴェルフの問いかけに、クオンさんが手にした斧槍の柄で肩を叩きながら曖昧に呻

く。

「今までの話からして、あなたは何度も『火継ぎの儀』に関わっているように聞こえるわ

ね」

「ヘファイストス様にまで追い打ちを受けて、クオンさんはがっくりと項垂れた。

「その辺の話は面倒だから省きたかったんだが……」

「だが、それが分からないなら、お前が本当に『火継ぎ』をした【薪の王】なのか疑問が残るだろう?」

「そりやそうだな」

アンジエさんの言葉に、クオンさんは斧槍を取り込んでから肩をすくめた。

「確かに俺は火を継いだんだが……まあ、簡単に言えば歴史は繰り返したんだよ」

「何?」

「ロードランでの『火継ぎの儀』……つまり、不死人による最初の『火継ぎの儀』が終わってから、神々はどこかに引っ込んでな。どうせ裏側で暗躍していたんだろうが、表向きはしばらく人間の時代と言える期間があったんだ。ついでに言えば、その間にいろんな国が生まれたり滅んだりもした」

「そりやまあ、何となく分かるが……」

ヴェルフが嫌そうな顔で頷いた。

まあ、国が滅びるとかとかあんまり考えたくないことだけど。

「そんな時、何かの弾みでグウィンたちのソウルが世界に零れ落ちたんだ。理由は分からない。あるいは誰かがまた『最初の火』を引っ掻き回したのかもしれないな」

「もしかして……」

「ああ。その時に俺のソウルも一緒にこぼれ出たか掻き出されたかしたらしい。それで、そのソウルを拾ったどこかの狂人が適当な亡者の体にねじ込んだんだよ。まあ、俺も気づいたのはだいぶ後になってからだが」

「うわあ……。つて、あれ？ それじゃ今のクオン君つて……」

体は別の誰かのものつてことなのだろうか。

「心配しなくても今使っているのは自分の体だよ。多分だけだな」

「どういうことさ？」

「ベル。アイシャから聞いたんだが、ランクアップすると体と精神にズレが生じるんだよな？」

「えっ？ はい、僕もそれで結構苦労しました」

それこそ『中層』での決死行まで完全に矯正しきれなかったような気もする。

「俺も多分理屈は同じだよ。そしてお前達よりもずっと重症だった」

「どういうことだい？」

「だから、ズレが深刻になりすぎて体が崩壊したんだ。別人なんだから当然だな。そして、体の方が持たなくなつて『死んだ』。……まあ、そう言つていいだろう」

「なら、なおさら何でここにいるのさ!？」

何だかまた凄い話になってきたんだけど……なんて呻く僕の隣で、神様が叫んだ。

「先ほど、火継ぎの真相が広がったと、その馬鹿弟子は話しただろう？」

「え？ うん、覚えているよ」

「その真相を知って、それでも火を継ぎたがる者がいるかな？」

「えーと……。いないんじゃないなあ」

躊躇うような小声で神様が呟く。

「そう。その通り。いなかっただのさ」

「ですが、それではクオン様が何もせずとも火は消えてしまったのでは？」

「継ぎ火が絶えるとき。鐘が響きわたり、古い薪の王たちが棺より呼び起こされるだろう」

リリの問いかけに、カルラさんは物語の一節のような言葉をお口にしました。

「はい？」

「つまり、かつて火を継いだ【薪の王】達が蘇ったのさ。もう一度火を継ぐためにね」

「つくづくとんでもないな。……いや、そうか。つまりあんたも？」

「いや。それは違う」

ヴェルフの問いかけにクオンが応じるより早く、カルラさんが首を横に振った。

『火は陰り、王たちに玉座なし』

「え？」

「ロスリックの時代に、いつからか語られるようになった予言だよ。虜囚となった私ですら耳にしたことがある」

「よく分からないが……。それは、蘇った連中は火を継がなかったって意味なのか？」

「そういうことさ。だから、予言は続く。『そして、火の無き灰たちがやってくる。名もなく、薪にもなれなんだ、呪われた不死』とね」

「どういうことだ？」

「『火のない灰』。今の馬鹿弟子はそういう存在だ。もつとも、ロスリックの時とはまた少し変化しているようだが」

「その『火のない灰』ってというのは、不死人と何が違うんだい？」

「とりあえず、死んでも体の亡者化が生じない。結構便利だぞ」

「いや、便利って……」

きっぱりと言い切ったクオンさんに、神様だけではなくみんな揃って呻いていた。

「あとは『残り火』の力を宿せたんだが……。今はできないな。その代わり『人間性』を取り込むと生身に戻る。ちなみに、死ぬと『火のない灰』になる。もちろん、『残り火』を宿していない状態だが」

何でこんなことになってるんだか——と、クオンさんは他人事のように苦笑する。

というか、それ以前に。

「死んだことあるんですか!？」

いや、それは馬鹿げた質問なのかもしれないけど。

でも、オラリオで目覚めてからクオンさんを殺せる相手がいたなんて……。

「四年前にダンジョン潜った時に、闇霊と遭遇してな」

「ええっ!？」

「そういや、あの金髪小娘もどつかで出くわしたとか言ってたな。正直、よく生きてるなとは思う」

「アイズさんが?! っていうか、よく生きてると思うって?!」

いや、もう本当にどこにどう驚けばいいのかよく分からなくなってきたんですけど

!

何かもう衝撃シヨックの波状攻撃で、僕らの理性はすでに限界を迎えつつある気がしてならぬい。

「ちなみに、だが。ゴライアスとやりあっている時にも遭遇したぞ」

「……赤水晶の破壊に時間がかかったのはそのせいかな?」

「らしいね」

ヴェルフの問いかけに、アイシャさんが肩をすくめた。

何てことのないような肯定だけど、それが意味することは深刻だ。

あのアイズさん達が苦戦するような……クオンさんを『殺せる』ような相手が今もオ
ラリオの——もしくははダンジョンの——どこかにいるなんて、全く笑えない。

今までの『火継ぎ』とか『ダークソウル』とか、そういう話とはまた別で……冒険者
としてはかなり身近で切実な危機感がある。

「ええと……。でも、クオン君は【薪の王】って奴なんだろう？　なんでその『火のない
灰』になっちゃったんだい？」

「いや、まあ、薪として燃え尽きる前に掻き出されたせいだろうな。『玉座』を篡奪され
た王ってところか」

薪になりきれなかったという意味なら、まさにその通りだろう。

クオンさんはそう言って苦笑した。

「だが、おかげで自由に動けた。火を消すこともできたしな。その代わり蘇った後輩達
を殺しまわる羽目になったが」

「……何故そんなことを？」

「資格を失ったからだだよ。それを取り戻すには、彼らの火を継ぐしかなかった」

「じゃあ、もしかして、ホークウッドさん達とも……」

「彼ら【ファランの不死隊】……【深淵の監視者】は少々変わった【薪の王】だったのさ」

クオンさんが頷く前に、カルラさんが言った。

「彼ら自身ではなく、酌み交わした『狼血』にこそ資格があった。彼らは個人ではなく『不死隊』として王なのさ。だから、全て殺すしかなかった」

「……では、何故あの男だけ蘇った？ 不死人だからというだけではないだろう」
シヤクテイさんの問いかけに、クオンさんは困ったように呻く。

答えがないのではなく、答えづらいつてもいいように。

「彼は脱走者だったからだよ。だから王になり損ね、私の弟子と同じく『火のない灰』として呼び起こされた」

「……ま、そういうことだ」

「あの人が、脱走者……?!」

ある意味、この話の中で一番の衝撃だったかもしれない。

あんなに強い人でも心が折れるような過酷な世界だったことに改めて戦慄しながら、ふとそんなことを思う。

「そして、私の弟子に中てられて再起し……最後は一騎討ちをしたと聞いている」
「まあな。世界の終わりに何やってんだかって話だが」

しかも、お互いに死に損なってるんだから世話ないな——と、クオンさんは苦笑する。ただ、その裏側でどことなく安堵しているようにも感じられた。

もちろん、それは僕の勝手な想像なのかもしれないけど。

「一つよろしいですか」

アミッドさんが小さく手を挙げた。

「何だ？」

「他人の体に宿ることで蘇ったとおっしゃいましたが、それでは外見の違いからすぐ分かったのでは？」

クオンさんは肩をすくめてから、答えた。

「体の亡者化がかなり進んでいたんだ。それに、意識も記憶も混濁していた」

あれじゃ誰が誰だか分からないだろう？——と、その問いかけにアミッドさんが頷く。

そのうえで、彼女は質問を重ねた。

「ですが、自我がはつきりしている間は人の姿に戻れるでしょう？ 自分の姿が分からない状態でも、これを使えば戻ってこられるのですか？ それとも戻らなかつたのですか？」

「あく……。それはおそらく戻り方の問題だな」

クオンさんは呻いてから、アミッドさんを……。正確にはその手にあるものを指さして言った。

「それな。人に戻るための導つて言つただらう？」

「ええ。もちろん覚えています」

大切そうにその『人の像』を両手で持ちながら、アミッドさんが頷く。

「導かれたのは、俺の方だったらしい。……まあ、俺の『人間性』の方がまだ強く残っていたんだろう」

「本来の姿ではない形で再生されたと？」

「ああ。それは生身への逆行ではなく、生身への再変化を促す代物ではないかと考えている。『自分の名』が答えられる……自分を思い出せるなら、ならまだ戻れるはずだと、初めてそれを俺にくれた奴らは言っていたな」

いや、そんなに素直に教えてくれたわけじゃないが——と、クオンさんは呻いてから、
「まあ、ここにいるのはそんなわけだ。これが何かの証明になるかは知らないが」

「……では、最後に一つ教えてくれ。『人喰らい』のエルドリツチを知っているか？」

「ああ。『深みの聖者』あるいは『神喰らい』のエルドリツチ。奴も蘇ってきた『薪の王』の一人だ。だから、殺した」

「確かか？」

「正直に言えば、今は少し自信がなくなっている」

「どういう意味だ？」

クオンさんの言葉に、アンジエさんが視線を鋭くした。

「ロスリックで殺したのは確かだ。奴の首も確かに玉座に連れ戻した。だが、『深淵』が湧いたとなるとな」

「再び復活しているか?」

「可能性は否定できないな。多少なりと『深淵』を扱えそんな奴は俺が知りうる限りそう多くない。マヌスカ、デユナシヤンドラか。それとも——…」

「あの【人喰らい】というわけか」

「ああ。お前も深みの聖堂騎士と遭遇したんだろう。なら、少なくとも関係者がいるのは間違いない。その中で奴ら自身が蘇っているというのは最悪の部類だろうな」

「奴ら?」

「法王サリヴァーン。ロスリック時代に暗躍した稀代の策略家であり、野心家だ。冷たい谷のイルシールを治め、エルドリツチより先にアノールロンドを攻め落とし、旧王家を事実上滅ぼした。火が陰り、エルドリツチが蘇ってからはアノールロンドこそ明け渡したが、他の司祭たちを差し置いて、深みの大聖堂の法王の座にまで上り詰めている。確証はないが、ロスリック王家の内部対立を煽ったのもこの男かもしれないな」

「詳しいことはよく分からないけど……とにかく、凄い人だということだけは分かった。」

そんな人が、もし本当に『深淵』の力まで操っているなら……そんなことは考えるだ

けでも恐ろしい。

いや、それ以前に——…

「あの、【人喰らい】とか【神喰らい】ってどういうことですか？」

「言葉の通りだ。奴は人間を喰らうことで【薪の王】となり、蘇ってからは神を喰らった」
胃から酸味の強い何かがせりあがってくる。

強引に飲み込むと、喉が焼けるような痛みが残った。

「別に深くは聞かないが、お前と奴の因縁はその辺……『人喰らい』に始まりがあるんだろ？」

「……ああ」

アンジェさんが、短い言葉だけで頷いた。

「じゃあ、そのエルドリツチって奴は本当に……その、喰ったつての？ 文字通りの意味で。しかも、人だけじゃなく神まで」

ヴェルフが躊躇いながらも確認する。

「ああ。【暗月の神】グウインドリン。大王グウインの子を喰らうことで、奴らは旧王家を完全に滅ぼした」

「【暗月の神】って、月を司る神様ってことかい？」

神様が今までで一番険しい顔で問いかけた。

「ああ。……知っているのか？」

「いや、そのグウインドリンって神は知らないよ。……ただ、ちよつと——！」

「月の女神とは付き合ひがあつてね。ヘステイアとは特に仲がいいのよ」

凄く躊躇つた様子の神様に代わつて、ヘファイストス様が言った。

「そうか」

と、クオンさんはお二柱ふたりの言葉に頷いてから、

「ちなみに、特に他意はないんだが。その月の女神つてのも弓を使うのか？」

「え？ ええ、もちろん。狩りの女神でもあるし。天界屈指の弓取りよ」

「そうか……。極力出会わないようにしましょう」

何故だかすつごく嫌そうに呻いた。

「こらあああああああッ!! 敵対する前提で考えるんじやなあああああい!？」

「いえ、でも。彼女から見ても、彼はちよつと……」

「ああ!?! 確かに!?!」

ヘファイストス様の言葉に、神様が頭を抱えて叫んだ。

「あの、ヘファイストス様。どういうことですか？」

ヴェルフの問いかけに、ヘファイストス様が肩をすくめて言った。

「狩りと月の他に、貞潔も司る女神なのよ」

「あ、はい」

この話が始まってから、全員が速やかに理解して納得した唯一のことだったと思う。

「……だが、それならベルとミアには何も言われたくないな」

「何でですか?!」

「何故だ?」

その問いかけに、何故だか神様とリリがため息をつく。

「……まあ、何だ。もし本当に奴がいるなら精々気を付けることだ。力を封じた今のお

前たちなど、蕩けた粥のようなものだろうからな」

少しだけ緩んだ空気の中で、クオンさんが神様たちに向けて言った。

「……その一言で、再び部屋の中の空気が重くなる。

「その二人は、本当に蘇っていると思うか?」

「今のところは何とも言い難いな。奴の存在を直接匂わせる何かがあるわけでもない」

シヤクテイさんの問いかけに、クオンさんが肩をすくめる。

「だが、蘇っているなら厄介だな。腐っても——…」

何故か、クオンさんはそこで小さく吹き出してから、

「ああ、腐っても奴は【薪の王】の一人だからな」

それがどれだけの力を持っているのか、想像もできない。

ただ、世界を——そして、神様たちの力を維持するための『火』の薪だ。

それなら、文字通りに神のような力の持ち主だと考えていい。

「あなたは どうして今さらになつてオラリオにやつてきたの？」

問いかけたのは、ヘファイストス様だった。

「今の話からすると、そのエルドリツヂつて子を追いかけてきたわけではないでしょう？」

「どうか、今までどこで何してたんだい？」

ヘファイストス様の問いかけに、神様が付け足す。

「そういわれてみれば確かに。」

不死だというなら『古代』の頃にも生きていたはずだし、もつと逸話が残つていそうな気がするけど……。

『火継ぎ』を終わらせてから、ずっと『火の炉』で眠りについていたのさ」

答えたのは、カルラさんだった。

「使命を終えた『灰』とはそういうものだ。どうか責めてやらないでくれ。永い旅の終わりには、相応の休息が必要だろう？」

……そう。まるで僕の考えを見透かしたように。

(でも、そうか……)

死すら終わりではない長い旅路。

その最後にやっと訪れた眠りを、誰が責められるだろうか。

「でも、それなら何で今になって目覚めたんだ？ やっぱり他の「薪の王」が蘇った影響なのか？」

「それとも。今度こそ私達を滅ぼしにきたのかしら？」

へファイストス様の問いかけに、思わず身構えていた。

僕だけではなく、アンジエさんも。最初に問いかけたヴェルフも。

へファイストス様の問いかけは、あるいは核心をつくものだったからだ。

「それは——…」

ヴェルフとへファイストス様の問いかけに、クオンさんが答えようとして——…

「」

それは、何だか奇妙な様子だった。

急な頭痛に顔をしかめているような。それとも、白昼夢に迷い込み放心しているような。

あるいはまるで誰かが無理やりに止めたような。

とにかく、唐突で奇妙な空白だった。

「何で今さら目覚めたのかはよく分からなくてな」

そんな奇妙な瞬間を経て、何事もなかったかのようにクオンさんは言った。

「はあ？」

「記憶がまだ戻りきってないんだよ」

「そういえば、霞もそんなことを言っていたが……」

「ええ。まだ続いているみたいですよ」

ミアハ様が視線を向けると、霞さんが苦笑しながら頷いた。

「お前達が本当に俺達と共存する気があるなら、俺だって別に文句は言わないさ。だが

まあ……」

クオンさんは肩をすくめてから、

「叩き起こされたならやることはひとつだ。もし『火』がまだ残っているなら、今度こそ完全に消す。『不死の呪い』が目覚める前にな。それが、いつか交わした約束でもある」
いつか、世界から『不死の呪い』を消し去り、太陽の光を取り戻すのだと。

「何より、『火継ぎの儀』なんてものを完成させた挙句、蘇ってからは後に続いた後輩たちを殺してまで終わらせた俺の役目だろう」

——と。神様たちを前にして、そう告げたのだった。

「だが、そのうえでベル。お前に……お前達にあえて問おう」

「な、なんですか？」

「お前達にこの『時代』を支えられるか？ 火は消え、しかし闇は訪れなかった。火でもなく闇でもなく、二つの因果が絡みあう。あるいは最も歪んだこの『時代』を」

「それは、どういう意味なんだい？」

問いかけたのは神様だった。

それに対して、クオンさんは感情を感じさせない視線を向ける。

「そのままの意味だ。もう薄々気づいているだろう。お前達の予定は狂い始めていると」

「……………」

神様たちは何も言わない。

でも、それは。きつと、その沈黙こそが何よりの答えなのだろう。

「それは俺も同じ事だ。あの時『火の時代』は終わり『闇の時代』が訪れるはずだったが、そうはならなかった」

それ以上追及することはせず、クオンさんは僕たちに向けて言葉を続ける。

「今もどこかで『火』が燻っている。だから『火の時代』の厄災が。そして、俺達のような過去の亡霊がこの『時代』に現れた。そして、その因果が吹き溜まるとしたら、それは間違いなくこの地だ」

ダンジョン。そこが新しい『巡礼地』だと。

クオンさんが言っているのはそういう事だった。

そして、そのうえで……

「神々の思惑から外れ、だからと言って俺達の時代ともいえない。だからこそ、いずれ数多の厄災がこの地に吹き溜まる。誰にも先が見通せないこの『時代』くらやみで、それでもお前は火を灯せるか？」

それは、遠い昔、神々に——あるいは世界の終わりに抗った不死の英雄から神の眷族たる冒険者への問いかけだった。

お前達は本当に俺達の後継者たりえるのか？——と。